傭兵の国盗り物語

ドラキュラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
傭兵の国盗り物語

【Ｎコード】
Ｎ７７２２Ｏ

【作者名】
ドラキュラ

【あらすじ】
２年前に崩御した王の生きた証を書いてくれ、と病床に伏せる女王から頼まれた将軍補佐官ランドルフ。
女王が頼んだ王は、傭兵王と謳われた男。
５大陸を全て統一した男は傭兵だったのだ。
ランドルフは史書を書きながら、王と出会った場面を思い出した。

まるで、過去に戻ったような気になりながら・・・・・・・・・・

悪魔な男爵に続いて長編シリーズを書きます。

まだ途中ですが、書いては更新しますのでお付き合い下さい。

序章：傭兵王の史書（前書き）

作者がお気に入りにしているブレイズさんの作品と若干、重なる面もあると思いますが勘弁して下さい。

ちなみに、これはストロング・ホールドをやって思い付いた作品です。（爆）

序章：傭兵王の史書

『ここに載せる内容はサルバーナ王国国防軍、将軍補佐官ランドルフ・クリフ中将の体験を元に書かれた内容である』

私は最初にこれを書き記した。

そしてこう付け足した。

『史書に登場する４人の人物を纏める者は傭兵王と謳われた男で別名を“不死身の王”と言う』

ボール・ペンで紙に文字を書きながら私は外を見た。

窓からは盛大な花火が上がっては、綺麗な光を放っている。

今日は５大陸が全て統一された日であり、悪名高い暴君が死んだ日でもある。

そして、５大陸を統一した伝説の王である鷹見徹夜様が亡くなった日。

９５歳にして崩御したあの方の顔は眠るような顔だったのを２年が過ぎた今でも鮮明に覚えている。

まるで、一仕事を終えたような顔だった。

その顔を見て私は「お役目御苦労でした」と心の中で呟いて不覚にも涙を流してしまった。

当時、何の特徴も無い少年騎士だった私を鍛え上げ、ここまで導いてくれた方の死を私は涙を流して受け止めた。

あの方はこう言っていた。

『男が涙を流して良い時は、親か女が死んだ時だ』

それ以外では人前で泣いてはならない、と常に言っていた。

だが、私には父親が早くに亡くなったから、あの方が父親だった。

だから、涙を人前で見せてもお怒りにはならないだろう。

あの方を超える王は恐らく現れないだろう。

常に先頭に立ち、民衆や臣下の声を聞き入れ善政を敷き、他国とも対等に渡り合ったあの方にお仕えした事を私は一生の誇りとしている。

私が少年騎士だった時サルバーナ王国は、存亡の危機に曝されていた。

当時サルバーナ王国を治めていたのは第１２代目、ガルバー様の奥方であったサラ様だ。

ガルバー様は人生の殆どを戦場で過ごしたような方で、サラ様とも余り仲が良い訳ではなかった。

ガルバー様亡き後はサラ様が女王として国を治めていたが、それに

反発する者が出て来た。

ガルバー様の側室が産んだリカルド様だ。

幼い頃から乱暴な性格であり、残酷な性格だったリカルド様はガルバー様の血筋をよく受け継いでいると指摘されていた。

そして何時かは自分が王になるとも考えていたようだ。

これを察知したサラ様は先手を打ち、リカルド様を辺境の地に幽閉した。

だが、これがリカルド様の逆鱗に触れて、それに弁上するように反乱が起きた。

サラ様をあくまで王として固持する側と、リカルド様を新たな王として祭り上げる者に別れ毎日のように血が出た。

いわゆる内戦だ。

これに目を付けた巨大な帝国、ムガリム帝国はリカルド様を援護した。

別に義理や人情からではない。

国がこんな事をするのは、一つだけ。

自国の利益に繋げる為だ。

ムガリム帝国はこの内戦を利用して領地を広げようとした。

いや、サルバーナ王国だけではなく引いては5大陸全てを我が物にしようと他国に密偵を送り込んで内部から浸食していたのだ。

これに対抗してサルバーナ王国と同盟を結んでいた国も援軍を送り戦いは激化した。

だが、圧倒的に力を持つムガリム帝国の前に押された。

歩兵、魔術師、ドラゴン、船、全てが圧倒的に不利だった。

もうこれで私たちは終わるのか？と絶望視していた。

そこへ現れたのが、伝説の王となる鷹見徹夜様と４人の仲間達だ。

僅か４名という少ない人数だったが、サルバーナ王国の内乱を終結させ連合軍を作り上げてムガリム帝国と戦いこれを見事に打ち破った。

そして今、私が書いているのはこの国の歴史を書いた史書だ。

徹夜様が崩御した日に、病床に着いていた奥方様の一人でもあり正后でもあるサラ様に呼ばれた。

徹夜様が身体の具合が悪くなる前からサラ様もまた体調を崩していたのだ。

部屋に着いた私にサラ様は綺麗な声である頼みを言ってきた。

『あの方の・・・あの方たちの生きた証を後世に残して下さい』

徹夜様自身は歴史に自分の名が残る事を嫌がっていた。

これも徹夜様が生前に言い残した言葉だ。

『傭兵ってのは決して表に出てはいけないんだ。闇に生きて闇に死ぬ。これが傭兵だ。だから、俺らの事は表に出てはいけないんだ』

傭兵と言う職業を私は徹夜様と出会う前まで「金で動く一匹狼」という印象を受けていた。

徹夜様と出会ってからは認識を改めている。

『表で主役を務める者を支える影の立役者』

それが傭兵なのだ。

だからこそご自分が崩御する時も「俺の事は何も書くな」と言い残したんだ。

だが、サラ様は夫の勇姿を何時までも後世に残したいと思っていたに違いない。

あの方が居なければ死んでいただろうし、ここまで頑張ってくれた徹夜様の事を闇に葬るのは酷過ぎる。

サラ様の心境を私はそう取って承諾した。

それを聞いたサラ様は翌日に亡くなられた。

徹夜様には悪いが、貴方の名前を皆に覚えて置いてもいたい。

息子の代にも、孫の代にも、曾孫の代にも・・・・・・ずっと、
ずっと、覚えてもらいたい。

この史書を書けば私の務めも終わる。

もう歳だし、息子たちが居る事も理由の一つだ。

もうあの時、共に生きて来た者達は居ない。

未だに生きているのは、私と妻達くらいなものだ。

これを書き終えた後は徹夜様達が迎えに来てくれるのを妻達と共に
待つ。

あの方の事だからきっと笑顔で私を迎えに来て・・・こう言うに違
いない。

『よぉ、迎えに来たぜ?ランドルフ』

私はそれに笑顔で答えるだろう。

『待っていましたよ。テツヤ殿』

第一章：傭兵王との出会い（前書き）

またもや更新です！！

第一章：傭兵王との出会い

史書を書いていると誰かが近付いてくる気配を感じた。

習慣なのだろう。

どうも人が背後に立つと反射的に身構えてしまう。

私は徹夜様の指揮する軍では狙撃も担当していた。

『狙撃手は誰よりも怯えていなくてはならない』

徹夜様と彼の仲間の一人、ミーシャ大尉から言われた言葉だ。

狙撃手は単独での行動もあるから、常に怯えるほど警戒心を持たなくてはならない。

だから、私も臆病だ。

それが長い間、続いたからかこんな状況になっているのだ。

私は気付かない振りをして史書を書き続ける。

すると、手が回る気配を感じて振り返った。

「あーん！！また見つかっちゃった！！」

目の前には赤毛が混ざった幼い娘が立っていた。

可愛らしい頬は膨れている。

「ふふふふ。まだまだ甘いね。ヴァレリー」

私と一人目の妻の間に出来た娘が産んだ子供ヴァレリー。

可愛くて妻の面影があり元気に満ち溢れている。

「ねぇ、お爺様。またお話を聞かせてー」

「傭兵王のかい？」

「うんっ」

ヴァレリーは私の膝に飛び乗った。

ヴァレリーはよく私に徹夜様との話を聞きたがる。

私はそれを毎日のように話している。

これが老後の私にとっての楽しみだ。

「よしよし。じゃあ、また最初から話そうか？」

「うん。お爺様と傭兵王が出会った所から」

「じゃあ話そう。そう・・・あれは、今でも鮮明に覚えている・・・・・・・」

当時まだ見習い騎士だった私は初めての任務を受けて緊張していた。

初めての任務が王女の護衛だった。

王女の名はエリーナ様。

サラ様の長女であり、リカルド様の妹に当たる方だ。

その日、エリーナ様は貴族の屋敷に遊びに行っており、その帰りの護衛を私が所属していた聖騎士団がしていた。

辺りは暗く森林の静けさが不気味だったのをよく覚えている。

「すっかり遅くなりましたね」

私は隣を白馬に跨り純白の色をした鎧を纏った先輩騎士に話し掛けた。

護衛の時は出来る限り私語はしないのだが、こんな夜でおまけに森林地帯では話したくなる。

「あぁ。こんなに遅くなるなら領主の申し出を受けていた方が良かったな」

「ですね。この辺は山賊が多いと言いますし」

私は先輩騎士の言葉に同意した。

今日は泊っては？と貴族に言われたのだが、直ぐに帰れるだろうと高を括り断った。

それが大きく裏切られたのが現状だ。

明かりは月だけで頼りない。

だが、その月だけが頼りだった。

殆ど明かりが無い為、進む馬車の足取りは遅い。

左右と後ろを護衛するのは私を含めて４人だけだ。

教会の祝福を受けた武具を纏う聖騎士団は庶民の憧れだ。

尤も見習い騎士である私は青銅の鎧を着て馬も頼りない。

まだ騎士に入隊して僅か数か月だから仕方がないが、早く一人前の聖騎士になりたいと思う。

余りの暗さに溜め息を漏らした時だった。

何処からともなく闇の中から複数の矢が飛来してきた。

狙われたのは私たちが護衛する主人が乗っていた馬車だった。

矢は馬車を引いていた馬の一頭に当たった。

眼球に先が鋭く尖り逆三角形をした矢が刺さって馬は暴れ出した。

残りの３頭も釣られるように暴れ私たちは止めるのに必死になって背後を見せてしまった。

矢が続け様に飛んできた。

私たちは振り向いて必死に矢を叩き落とした。

馬たちは暴れるのを止めず、ついには馬車が横に倒れてしまった。

「姫様ッ。ご無事で?!」

後ろを護っていた聖騎士が矢を必死に剣で叩き落としながら倒れた場所に問い掛けた。

私も必死に矢を落とそうとしたが空振りしている。

叩き落とせても4本に1本の割合でしか落とせず、おまけに落馬してしまうという情けない姿を曝してしまった。

「ランドルフ!」

隣を護っていた聖騎士が声を荒げた。

「大丈夫です!!」

私は答えて姫様が乗る馬車に近づいた。

横に倒れた馬車を登り無事のドアを開けて王女の無事を確認しようとした。

「ぎゃあ!!」

悲鳴を聞き振り返ると後ろを護っていた聖騎士の一人が矢を胸に喰

らって落馬するのを目撃した。

騎士は痙攣をして動かなくなってしまった。

急に怖くなった。

今まで戦に出るために勉強をしてきたのに怖くなった。

逃げたいと思った。

だが、仲間を置いて逃げたくない。

何より主人を置いて逃げるなど生き恥を曝す事はしたくなかった。

「ランドルフ！ここは我らに任せて、お前は姫を連れて逃げろ！？」

聖騎士の一人が森林から現われた人相の悪い男たちを斬りながら言った。

手に持つのは手斧や山刀だった。

山賊だ。

四方から出てきた山賊が私の方に襲ってきた。

敵の狙いは姫様に違いない。

「させん！！」

私は剣を両手で握り山賊に斬りかかった。

山賊は私を子供と見て薄らと笑い弄ぶようにして斬り結んできた。
剣を振るう手が訓練の時より重く感じた。
だが、決して離さずに持つ。
離せば殺される。
身体が叫んでいた。
人数と経験から言っても私達が明らかに不利だ。
そして一人一人、先輩の聖騎士が殺されていく。
やがて最後の聖騎士が倒れて私だけが残された。
「残ったのはてめぇだけだぞ。餓鬼」
山賊達は私を取り囲むようにして笑った。
「くそっ」
息を荒げながら私はどうすれば良いか考えたが、まったく良い案は浮かばなかった。
こんな時の訓練など受けていないし、今日が最初の任務だからどうしようも出来ない。
人数は３０人。

こいつ等を残らず倒し尚且つ姫を安全な場所まで連れて逃げるのは不可能だ。

「きゃあ！！」

はっと振り返ると山賊の一人が馬車の中から姫の腕を掴んで引き摺り上げた。

今年で１５歳になるエリーナ・ロクシャーナ王女だ。

腰まで伸ばした金糸の髪は月明かりで更に綺麗に輝いている。

海の様に青い瞳は恐怖で歪んでいる・・・・・・

「姫様っ」

私は助けようとしたが後ろから棍棒で殴られた。

前のめりになった所で、更に棍棒で身体を叩かれて山刀で鎧の隙間を刺されて地面に倒れた。

「ランドルフっ！！」

姫様の叫び声が森林に響く。

地面に赤い色の液体が広がるのを見て、私は自分は死ぬのか？と思った。

「女は頂いて行くぜ。てめぇは、神様の国にでも行きな」

山賊達は私に止めを刺そうと山刀を高く振り上げた。
月の明かりで血を吸った山刀の刃が光った。
『助けてっ』
私は神に助けを求めた。
ガガガガガン！！
まるで雷が連続で落ちたような音がした。
それと同時に山賊達が倒れるのを私は見た。
「音がするから来てみれば、大の男が子供を二人も虐めている状況とは・・・・・・・・・・」
私の視線に移ったのは一人の男。
鑿で削られたような荒い造りで美男子には程遠いが、騎士などの顔としては申し分ない。
見た事もない鎧を着て右手にも変な剣を持っていた。
何者だ？
しかし、私たちを助けてくれたのは事実であった。
「誰だ？てめぇは？！」

山賊の一人が問う。

「俺か？俺はただの傭兵だ」

男の声は酷く枯れており、鉄が錆びたような声だった。

それでいて刃物を首筋に当てられたような寒気を感じさせる声でもあった。

「おい。そこの坊主。まだ生きてるか？」

私の事を言っているのだろう。

「い、生きてます」

頭がガンガンして肩が痛いが生きている。

「おい。そこの糞。お嬢ちゃんを放しな」

男は妙な剣で姫様を捕らえていた山賊を指して命令した。

「うるせぇ！この女を連れて帰ればたんまりと報酬が貰えるんだ。誰が放すか！！」

「なら、その手を破壊するまでだ」

妙な剣が光って再び雷のような音が連続でした。

私は見た。

剣から火が出ていたのだ。

無数に出る火は山賊の腕を破壊し私を囲んでいた山賊達も殺した。

「に、逃げろ！化物だ！？」

山賊の一人が悲鳴を上げると残りも散り散りに逃げて行った。

王女は放り出されていた。

「戦局を見て撤退か。案外、頭が良い奴らだな」

男は喉で嗤うと何やら細い物を取り出して口に銜えた。

何だ？あれは？

そして今度は小型の箱を取り出して蓋を開けた。

また私は驚いた。

箱から火が出たのだ！！

細い物に火が点くと蓋を閉めて仕舞ってしまった。

男はゆっくりと私と姫に歩み寄ってきた。

姫は茫然としている。

私は必死に動こうとしたが、動けなかった。

男は姫を一瞥すると私の前まで来て屈んだ。

「頭にデカイ瘤が出来てるぞ。肩の方は血止めさえすれば問題ないな。立てるか？」

「た、立ててません」

私が答えると男は私に肩を貸してくれた。

私より遥かに逞しく身長も大きい。

そして姫様の元に行った。

「姫様っ。ご無事で？」

私が聞くと姫は茫然としていたが、我を取り戻して大袈裟に頷いた。

「ランドルフ。怪我は大丈夫なの？」

姫様の気遣いが嬉しかった。

一階の騎士見習いにも優しい方だ。

「安心しな。嬢ちゃん。この坊主の傷なら死なねぇ」

私の代わりに男が姫様の質問に答えてくれた。

姫様は男に一礼した。

「あ、危ない所を助けて頂いてありがとうございました」

「礼を言うなら金でも寄こしてくれた方が嬉しいぜ」

まぁ、今回はボランティアだが、と言う男を私は睨んだ。

「助けて頂いて感謝するが、先ほどから貴殿の態度は姫様に対して有るまじき態度です」

「生憎と礼儀知らずでね」

私の睨みも風のように受け流す男。

「所で悪いが、ここは何処だ？アマゾン・・・・・・な訳ないよな。ボリビアでもナルニアでもないし一体どこだ？」

アマゾン？ボリビア？ナルニア？

私と姫様は男が言う言葉が解らなかった。

「ここはサルバーナ王国の辺境です。騎士様」

王女が王国の名を言う。

「サルバーナ王国？聞いた事もない国だな。それと騎士って言うのは俺か？」

男は首を傾げながら騎士という言葉に眉を顰めた。

「騎士ではないのですか？」

「言っただろ?俺は傭兵。金を貰って人を殺す最高にイカレタ人種だ。ＯＫ?」

姫は多少の混乱を期しているのか、はぁと答えた。

「で、あんた等は誰だ?さっきから横の小僧が姫様って言ってるが」

「私はサルバーナ王国の王女、エリーナ・ロクシャーナです。こちらは騎士見習いのランドルフ」

私は騎士という事で思い出し仲間の聖騎士の方に行こうしたが身体が痛くて動かない。

「何だ?あの死体に用があるのか?」

男が顎で聖騎士を指す。

姫様も沈痛な顔をする。

私は頷くと男は聖騎士の方に行ってくれた。

「隊長!しっかりして下さい!?」

斜め上から斬られて血を流す隊長を抱き起こして叫ぶ。

「ら、ランドルフ・・・・・姫様は無事、か・・・・・・・・?」

隊長の質問に頷く。

「そ、そう、か。お前が生きているだけでも良い。そ、その方は・・・・・・・・？」

隊長は男を見た。

「通り縋りの傭兵だ。何か、最後に言い残す事はあるか？」

男は平静な声で訊ねた。

人が死にそうなのに、まるで関係ないような声に聞こえた。

「頼む・・・・・姫、を・・・・・・・・・」

「この嬢ちゃんを無事に届ければ良いんだな？」

「あ、あぁ・・・た、たのむ・・・・ひめを・・・・・・」

最後まで言う前に隊長は息を引き取った。

「隊長！隊長！？」

私は泣いた。

姫様も泣いていた。

聖騎士が3人も死んでしまい私だけが生き残ってしまった。

「・・・・・・・・・」

男は黙って細い物を銜えていたが、地面に吐いて捨てた。

そして私から隊長を奪った。

「何をする?!」

私が涙声で叫ぶ。

「死んだ奴に何時まで構っている気だ?早い所こいつを埋めて行くぞ」

「ここにか?!」

「死体を連れて歩くほど俺は悪趣味じゃない。それに早くしないと血の臭いを嗅ぎ付けて狼が来るぞ?」

男は平然としている。

それが私には我慢できなかった。

「こっの!!」

反射的に拳を打ち込んでいた。

「そんなパンチじゃ俺を殺せないぜ?」

男はあっさり避けると私の頬を握り拳で殴った。

頬に鈍い痛みと同時に口の中から血の味が広がった。

そして地面に倒れる私。

「お前だけが生き残ったんだぞ？お前が自暴自棄になったら、嬢ちゃんはどうするんだ？」

男は、なおも平静な声で私に語り掛けてきた。

その通りだ。

だが、私は涙を流した。

身体も痛い。

だけど、それより痛いのは先輩が死んだ事だ。

「う、ううううう・・・・・・・・・うわあああああ！！」

私は大声で泣いた。

騎士として有るまじき行為だが、泣かずにはいられなかった。

姫様も泣いた。

静かに泣ていた。

王女として気丈な姿を見せようとしていたが、私が泣きだして泣いてしまったのだ。

男だけが泣きもせずにいた。

やがて私は意識を手放した。

どのくらい泣いたのか分からない。

気が付いてみたら焚火のすぐ横で姫様と一緒に眠っていた。

「・・・気が付いたか」

男の声に反応して振り返ると男が例の細い物を銜えていた。

「まったく。さんざん泣いて眠るとはな。感謝しろよ?あそこに置いて行かなかったんだからよ」

細い物を人差指と中指で挟んで口から煙を吐いた。

「先輩の聖騎士たちは?」

幾分か落ち着いてから聞いてみた。

辺りはまだ夜だったが、もう直ぐ日が昇りそうな気がした。

「埋めた」

俺流でなと言う男。

「あの、どういう・・・・・・」

「ただ土を掘って死体を埋めて剣を埋めた地面に刺しただけだ」

本来なら教会で盛大に葬儀を上げなければならないのに。

「その眼だと俺のやり方に不満らしいな」

男に図星を指されて黙る。

「別にいいぜ。俺を憎もうが。いつだって傭兵は嫌われ者だからな」
男は気にもせず再び細い物を銜えた。
答えた声には何処か悲しさが宿っていたのだが私はそれに気付かなかった。
「あの、名前は？」
何だか居心地が悪くて聞いてみた。
「他人に名を訊ねる前に自分の名を先に名乗れ。そうママに教えられなかったか？」
「ランドルフです。ランドルフ・クリフです」
「俺は鷹見徹夜。さっきも答えた通りの傭兵だ」
「タカミ・テツヤ？テツヤが名前ですか？」
「そうだ」
細い物を銜えながら男、テツヤ殿は答えてくれた。
「あの、ここは？」
「さぁ？ただ馬車が向かおうとしていた方向へ走らさせただけだ」
テツヤ殿が指さす方向を見ると緑色の大蜥蜴のような物がいた。

「か、怪物！」

私は思わず腰を抜かした。

「ジープを知らないのか？」

テツヤ殿はどういう国だと言った。

「じ、ジープ？」

「４ＷＤの軍用車だ。まぁ、馬車みたいなものだ」

テツヤ殿はジープと言う馬車のような乗り物に手を突っ込むと何やら袋を取り出して投げてきた。

「飯だ。お姫さんも起こして食え」

「貴方は？」

「とっくに食べた」

私は姫様を起こした。

「ら、ランドルフ。ここは天国ですか？それとも地獄？」

「いいえ。天国でも地獄でもありません」

姫様の質問に答えながら私はテツヤ殿に渡された袋を開けた。

「何ですの？これは？」

「食糧だそうです」

出してみても何が何なのか分からない。

見た事もない代物だ。

こんな物は5大陸の中でもない。

「それは軍用飯と言って俺らが食うものだ」

不味くても食えよ、とテツヤ殿は言った。

「あの、どうやって食べるんですか?」

食べ方が分からずに聞く。

「お前らは赤ん坊だな」

テツヤ殿は文句を言いながら軍用飯という食べ物の食べ方を教えてくれた。

密封された袋を切り中の物を手掴みで食べるらしい。

「ナイフとフォークみたいな上品な物はないから我慢しろよ」

嫌なら袋で代わりにしろと言いそれでも嫌なら食べるなと言った。

王女は戸惑いながら袋で包みながら食べた。

私は手掴みだ。

初めて食べる味がした。

甘いが辛い味だった。

姫様も初めて食べる品の味に戸惑っている様子だった。

１５分ほどで食べ終えた。

「食べたなら乗れ」

私と王女はジープと呼ばれる乗物に乗った。

ゴツゴツしていて尻が痛い。

馬に乗るより痛い。

「乗り心地は我慢しろよ。これは悪路でも走れる車だからな」

テツヤ殿は火を消しながら言った。

やがて朝日が昇ってくる。

「おい。ランドルフ。これから何処に行けば良いんだ？」

「し、城へ。エスカータ城へ」

「方角は？」

周りを見ても森林で分からないが、前に書物で太陽が昇る方向に城があると書いてあったのを思い出した。

「あ、朝日が出る方向へ」

「了解した」

「あの、どうして貴方はここまでして」

王女がためらいがちに聞いてくる。

「お前らみたいな餓鬼二人を見過ごすのは大人として情けないからだ。それに死んだ奴にも頼まれたからな」

ぶっきら棒に答えたテツヤ殿は何やら操作し始めた。

すると獣の雄叫びのような音を立ててジープが揺れた。

「揺れるから掴まってろ」

言われた通りにした。

ジープは勢いよく走り出す。

馬より早く道を進む。

「も、もっとゆっくり走れないのですか?」

こんな乗り方では姫様がお気を害すると思い言ってみた。

「また野宿したいのか？」

これを言われると黙るしかない。

何より今、私と姫様の命はテツヤ殿が握っていると言っても過言ではない。

私は姫様だけは何としてもお守りせねばと思い腰の剣に・・・・・・・・剣が無い！！

鞘しかなかった事に初めて気付いた。

「わ、私の剣は？！」

「知らん。諦めろ」

私は茫然とするしかなかった。

初めて騎士となった時に送られた剣なのに・・・・・・・・・・・・・・・・

第二章：首都と女王（前書き）

誤字の指摘がありましたので、直しました。

第二章：首都と女王

私と王女を乗せたジープは凄い勢いでサルバーナ王国の首都、ヴァエリエに到着した。

ここヴァエリエは2回目の首都移動で新たな首都になった場所で王国の中心地でもある。

馬車で数時間も掛るのに、このジープは僅か1時間で着いてしまった。

「ここがサルバーナ王国の首都、ヴァエリエです」

王女は無事に着いた事に涙を流していて私も涙を流した。

「・・・・・・見た事もない街、そして騎士と王女・・・・・・・・・これは・・・・・・・・・・」

テツヤ殿は何かを呟いていた。

しかし、そんな言葉は耳に入らなかった。

ヴァエリエに入る門前で聖騎士団が私たちを足止めした。

「姫様！ご無事で！！」

一人の聖騎士が駆け寄ってきた。

「危ない所を、この御武人が助けてくれました」

姫様はテツヤ殿を見た。

「貴殿は何者だ?」

聖騎士は油断ならない目つきでテツヤ殿を見た。

「鷹見徹夜だ。あんたは?」

「私は聖騎士の団長を務めるワイド・リブロだ」

「ワイド。この方を城までお連れします。護衛しなさい」

姫様の命令にワイド様は敬礼で答えると部下達に命令してジープを囲んだ。

「前を開けろ。邪魔で進めない」

テツヤ殿は大柄な態度で言った。

「貴様。姫様を助けたからと言ってその態度は何だ?無礼だぞ!!」

「俺に礼儀を求めるなら諦めろ。俺は礼儀知らずで通っているんだ」

ワイド様は今にも剣を抜きそうだったが、姫様が言う通りにしてと言うと大人しくなった。

「ありがとよ。お姫さん」

テツヤ殿は礼を言うとジープを勢いよく飛ばして聖騎士団を置いて

行った。

「ありゃ他人を見下すタイプだな」

テツヤ殿はワイド様を馬鹿にするように言った。

「ワイドは聖騎士団の団長ですから、どうしてもああ云った態度を取ってしまうんです」

姫様が謝罪する。

「あんたが謝る必要は何処にもない」

テツヤ殿は一言だけ言うと何も言わずに城を目指して飛ばした。

5分で城に到着した。

門番は何者だと槍を構えたが姫様の姿を見て直ぐに正した。

「私が帰ったと女王に・・・母様に伝えて下さい」

門番は頷くと直ぐに城の中へと消えた。

門番は直ぐに戻ってきた。

後からは長い裾のドレスを着た金髪のロングヘアーを惜しげもなく曝したサルバーナ王国の女王、サラ・ロクシャーナ様が来た。

前国王のガルバー様を亡くしてからは未亡人にして女王としてサルバーナ王国を治めるサラ様は絶大な支持を受けていた。

御歳２９歳で、一子を儲けながら未だに女性としての色気を感じる。

私と姫様はジープから降りた。

サラ様は近付くと姫様を抱き締めた。

「エリーナッ。大丈夫でしたか？」

「はい。母様。私は大丈夫です」

親子の包容に私は涙ぐんだ。

門番と後から追い付いてきた聖騎士団もそうだった。

ただテツヤ殿は細い物に火を点けて吸っていた。

何でも煙草と呼ばれる物らしく、一種の娯楽製品らしい。

「山賊に襲われていたのをテツヤ殿が助けて下さいました」

サラ様は姫様からジープに乗ったテツヤ殿に視線を向けた。

テツヤ殿の格好を見てもサラ様は何も言わなかった。

「サルバーナ王国の女王、サラです。この度は我が王国の姫を助けて頂いて何とお礼を申し上げたら良いやら・・・・・・・・・」

テツヤ殿の奇怪な格好に驚かずに優雅に礼を述べるサラ様。

「別に通り掛かったから助けただけだ」

女王が相手でもぶっきら棒に答えるテツヤ殿にワイド様は剣を抜こうとした。

いや、もう抜いていた。

「女王に対して無礼な態度・・・許さん!!」

背後から剣を振り下ろそうとするワイド様にテツヤ殿は腰にぶら下げていた黒い物を抜いた。

バアッン

またもや雷のような音と火が出た。

ワイド様が持っていた剣は真っ二つに折れてしまった。

「なっ!!」

剣を折られてワイド様は茫然としていた。

いや、サラ様達も突然の事で驚いていた。

「背後から斬り付けるか・・・騎士団長としては恥だが殺し合いでなら有効だな」

煙草を吸いながらテツヤ殿は黒い物体を構えた。

「俺を殺そうとしたんだ。死ぬ気はあるんだろうな?」

テツヤ殿は昨夜の冷たい刃の声を出す。

ワイド様はテツヤ殿の声に顔を青白くさせた。

テツヤ殿は右手に持った黒い物の後ろの部分を親指で起こしワイド様に言い放った。

「じゃあな。聖騎士団長。今度生まれ変わる時は・・・もう少し利口になるんだな」

また物体から火を放とうとしたがサラ様が止めた。

「お待ちになって下さい。騎士様。どうかワイドを許して上げてください。彼の行動も私を思ってこそなんです」

テツヤ殿はワイド様からサラ様に視線を移した。

「美人の言う事は何時も正しい。黙って従おう」

黒い物を腰に仕舞うテツヤ殿。

ワイド様は腰を抜かしていたがサラ様の叱咤で直ぐに立った。

「ワイド。貴方の行為は聖騎士団を束ねる長として有るまじき態度です。改めなさい」

ワイド様は女王の言葉に何も言えず敬礼をした。

「騎士様。これでワイドを許してくれませんか?」

「二度も言うつもりはないが美人の言葉には黙って従う」

それから、とテツヤ殿は続けた。

「俺は騎士なんて偉い職業の人間じゃない。傭兵だ」

傭兵と聞いてもサラ様は態度を変えなかった。

「傭兵も戦う戦士。戦に傭兵も騎士もありません」

「あんたが聖母に見えてきたぜ」

テツヤ殿は愉快そうに笑った。

「娘を助けて頂いたテツヤ殿には最高の礼を持ってお返しします。何とぞ今宵はこの城で休んで下さい」

「それはありがたい。生憎と右も左も分からない状態なので、出来るなら地図も拝見したい」

畏まりましたとサラ様は一礼した。

一国の王が見ず知らずの男に頭を下げるなど前代未聞だが、相手がテツヤ殿となると納得が出来た。

この方には人を従わせる力がある。

それを感じた。

ジープに乗って城の中に入りサラ様と王女は王室に行き私は案内役としてテツヤ様と馬小屋に向かった。

先ずジープを休ませるためだ。

「暫く待ってろよ」

テツヤ殿はジープを軽く撫でると食料が入った袋と昨夜の奇妙な剣を持った。

「そ、その奇妙な剣は何だ?」

ワイド様が怯えた様子で聞いてきた。

「これはＡＫＭアサルトライフルだ。ＡＫ４７の改良版で、安くて丈夫だから傭兵は誰だって使う」

ＡＫＭ?アサルトライフル?

また意味不明な言語が出て来て私は混乱する。

ワイド様も首を傾げていた。

「で、あんたの剣を折ったのが、俺のもう一つの相棒でコルト・ガバメントだ」

これまた不明な言語だ。

「それより早く案内してくれ。女を待たせるのは性に会わん」

ワイド様と私は頷くと先導して歩きだした。

「ランドルフよ。あの者は何者だ?それなりに戦を駆け巡ったのは顔を見るだけで解るのだが、見た事もない鎧に武器と乗り物は何だ?」

小声で私に聞いてくるワイド様に私も小声で答える。

「私も解りません。ただ、あの人は見た目より優しい方だと思います」

打たれた頬に痛みが戻ってきたが、今にして思えばテツヤ殿の行動は正しかった。

騎士なのに自暴自棄となった私を捨てもせずに城まで連れて行ってくれたし、死んだ3人の聖騎士の遺体も埋めてくれた。

その事をワイド様に話す。

「うーむ。どう見ても山賊にしか見えないがな」

「誰が山賊だ。俺は傭兵だ」

聞こえていたのかテツヤ殿が少し怒った声色で言ってきた。

ワイド様はビクリと身体を震わせた。

これが聖騎士として名を馳せた方と思うと情けなくなるし、その相手を尊敬していた自分も情けない。

女王と王女がいる謁見の間に入る。

中央の玉座にサラ様が座り左隣に王女のエメリー様が座っていた。

ワイド様と私は片膝を着いた。

王室に入るのは2度目だ。

初めて入ったのは騎士になった時で2度目でも緊張してしまう。

「おい。お前もやらんか」

ここでは強気に発言するワイド様。

女王と王女の前だからだろう。

「俺はこの国の礼儀作法を知らない。何よりいつ敵が来るかもしれないから立ったままで良いかな？女王様」

「構いませんよ。テツヤ殿は娘を助けてくれた恩人ですから」

サラ様は歳を取って熟れた女の笑みを浮かべた。

それを見て私は軽く赤面してしまう。

美しかったからだ。

「そりゃどうも」

テツヤ殿は立ったままで礼を言う。

「では、改めまして。この度は我がサルバーナ王国の女王である私の娘を山賊から助けて頂いて誠にありがとうございます」

サラ様とエメリー様が座ったまま礼を述べて頭を下げた。

「美人から礼を言われると嬉しいぜ」

テツヤ殿は笑った。

笑うと少し尖っている歯が見えて何だか獣を連想させるが、お二人はまったく気にしていない様子だった。

流石は王族。

「それではテツヤ殿。この国の状況を教えて欲しいと言っていたので説明します」

女王が合図すると布を持った文官が来て布を広げた。

「・・・・・・・・・」

テツヤ殿は黙って地図を見つめた。

「この赤い点が今いる場所、つまりサルバーナ王国です。このサルバーナ王国は5大陸の中でも平凡な地です。残りの4大陸にも王国はあります。中でも強大なムガリム帝国は5大陸を征服しようとしています」

サラ様が立ち上がって説明するのをテツヤ殿は黙って聞く。

「お解り頂けましたか？」

「・・・・だいたいの所は」

テツヤ殿は何処か納得している様子だった。

「それではこちらかも幾つか質問しても良いでしょうか？」

「どうぞ。まぁ、大体の検討は着いているけどな」

「先ず一つ貴方は何者ですか？見た事もない鎧や武器、更に乗り物。あれは何ですか？」

「この聖騎士にも教えたが、いま手に持っているのがＡＫＭアサルトライフル。頑丈で低価だから傭兵は好んで使っている」

ＡＫＭライフルをテツヤ殿は掲げてみせた。

「次に城で見せたのはコルト・ガバメントＭ１９１１Ａ１という拳銃だ。こっちはＡＫＭに比べれば威力は弱いが携帯性には秀でている」

サラ様は近くで見ても良いかと聞いた。

「どうぞ。ただし無闇に弄らないでくれよ。こいつは飯の種だ」

テツヤ殿は近づいてきたサラ様にＡＫＭライフルを持たせた。

「変わった武器ですね。剣ほど重くないですし・・・・・・」

ワイド様も興味津々でエリーナ様も興味深げに見ていた。

「他に質問は？」

「あ、はい。出身国は何処ですか？」

「地図を見たんだが、ここは俺の知らない世界・・・異世界だと考えた。つまり俺は異界の者だ」

異世界から来たと聞いて私たちは茫然としたが納得も出来た。

見た事もない武器も乗り物も異世界の物なら知らない訳だ。

「どうして異世界の人間である貴方様がここへ？」

サラ様の質問にテツヤ殿はぶっきら棒に答えた。

「さぁな。元いた世界では俺は死んだからな」

「死んだ？」

「あぁ。中東っていう地方でゲリラに待ち伏せされて蜂の巣にされたからな」

意識が遠退いたが・・・目覚めた時にはここに居たと答えたテツヤ殿はサラ様に訊ねた。

「で、どうする？」

「どうとは？」

「俺を殺すか？それとも国外追放にでもするか？」

異世界から来たなど男など厄介者でしかないだろ？とテツヤ殿は訊ねる。

その声には仮に殺しても構わないという自暴自棄的な響きがあったと私は感じた。

皆はサラ様が答えるのを待った。

「・・・殺しもしませんし追放もしません。貴方が異世界から来た方でも私の娘を助けた事は事実です」

サラ様は真摯な眼差しでテツヤ殿を見た。

「じゃあ、どうするんだ？」

「貴方を客人として王宮に招きたいと思います。どうでしょうか？」

「俺みたいな男を客人として招くとは本当にあんたは聖母だな。女王様」

テツヤ殿は愉快そうに喉で笑った。

「構わないぜ。ただ、他の奴らがどう反応するかな？」

「私はテツヤ様を客人として招いて良いと思います」

エリーナ様がサラ様の発言に賛成した。

「命を救ってくれた方に何もしないなど人として恥です」

ランドルフもそうでしょ？と訊いてきたので私は思わず頷いてしまった。

「しかし、女王様。こいつが本当に異世界から来たという確証がありません。それに敵の間者かもしれません」

ワイド様が反対の意見を言ってきた。

「油断させているのかもしれません。ここはもう少し考えてから・・・・・・」

「確かに言えてるな。あんた思っていた以上に頭が冴えるな」

テツヤ殿はワイド様の発言を聞いて笑った。

それに対してワイド様は、憮然とした態度で続けた。

「ここは大臣などと話し合って決めるのが良いかと・・・それまでは牢にでも入れておくのが・・・・」

「ワイド。貴方は女王である私に意見するのですか？」

サラ様の鋭い声でワイド様は首を横に振った。

「め、滅相もありませんっ。ただ私は女王と王女の為を思いまして」

「そいつが言う事も正しいぜ」

テツヤ殿はワイド様を弁護するような発言をした。

何で自分に不利な言い方をするのだろう?

「こいつは心からあんた等を心配しているんだ。まさに騎士の鑑だな」

ワイド様は疑っている人物に弁護された上に誉められて複雑そうな表情を浮かべた。

「ここで案を出したいんだが、良いか?」

テツヤ殿が言った。

「俺を監視するってのはどうだ?それで疑いが晴れたら改めて客人として迎えるっていうのは」

「テツヤ殿は良いのですか?ご自分を監視させるなど」

「嫌に決まってるだろ?ただ、こいつが言う事も一理あるから案を出しただけだ」

サラ様の質問に肩を竦めながら答える。

「・・・・分かりました。それでは貴方に監視を付けます」

サラ様は出来るならしたくない顔を浮かべたがテツヤ殿はそれで良いと言った。

「監視役はワイドとランドルフにします」

『私ですか？』

ワイド様と言葉が重なった。

「ワイドが言い出したことですよ。ランドルフはテツヤ殿に助けられたなら助け返しなさい」

まるで母親に説教された気分だと不謹慎ながら思ってしまった。

「し、しかし私は聖騎士の仕事が・・・・・」

「私から司教に話しておきます」

ワイド様の反論を途中で切るサラ様には女王としての威厳が見えた。

「これは女王として命令です」

これを言われては従わざるえない。

『謹んでお受けいたします』

私とワイド様は文句を言えずに従うしかなかった。

それからテツヤ殿は王宮の客室へと通されて私とワイド様も3日間は王宮住みになった。

部屋は王宮とあって広く3人でも十分位に広い部屋だ。

「今日から三日間はこの部屋で3人一緒に暮らせとの事です。テツヤ殿には窮屈でしょうが我慢して下さいと女王並びに王女からの伝言です」

部屋まで案内した使用人がテツヤ殿に言った。

「では何かありましたらお呼び下さい」

使用人は一礼すると部屋から出て行った。

改めて部屋を見回す。

三人分のベッドと家具などが置かれている。

「家具とかはそんなに変わらないな」

テツヤ殿は部屋を見回した。

それから横に並べられたベッドの中でドアに近い一番目のベッドに荷物を放り投げた。

「ふぅー。久し振りに安息のベッドに座れたぜ」

何だか信じられない。

普通、異世界から来たとなれば不安になるのに平然としているのが信じられなかった。

「不安はないのですか？」

私はテツヤ殿に訊いた。

「不安？何がだ？」

「この世界はテツヤ殿がいた世界とは違う世界なのですよ？普通は不安じゃないんですか？」

「生憎と不安なんて物とは縁が遠くてな。まぁ、一度死んだからかな。第二の人生を歩む気持ちでいるんだが」

「貴様の神経はどういう神経をしているんだ」

ワイド様も呆れ返っている。

「どうって言われてもな。この世界は割と住み易そうだし今の所は寝床も確保できる。問題ないだろ？」

『・・・・・・・・・』

私たちはテツヤ殿の言動に何も言えなかった。

「さて、俺は一眠りさせてもらうぜ」

テツヤ殿は欠伸をしてベッドに寝転がると直ぐに寝てしまった。

しかし、ＡＫＭアサルトライフルは横に置かれていた。

「ランドルフ。この男と初めて会った事を聞かせてくれ」

ワイド様が私に詰め寄ってきた。
私は昨夜の事を打ち明けた。
「そうか・・・・お前の言う通りかもしれないな」
ワイド様は頷いてから眠っているテツヤ殿を見た。
「まだ信用は出来ないが・・・これからの行動で判断する」
お前も気を抜くなと言われて頷く。
それから夜になって使用人が夕食を持って来てくれた。
「俺のいた世界と似たような料理だな」
テツヤ殿は目を覚まして並べられた料理を見て呟く。
「テツヤ殿の国はどんな所だったのですか？」
ワイド様から少しでも相手の情報を聞き出すように言われた事から聞いてみた。
「俺の国か。まぁ、余程でない限りは寝床も食い物も困らなかったが退屈な国だった」
それで傭兵になったと言う。
「傭兵になって世界中を飛び回ったのですね」

テツヤ殿は鳥の骨付き肉を素手で丸齧りしながら頷く。
その仕草が様になっていた。
「主はどのような傭兵だったのだ?」
ワイド様が質問する。
「どうって言ってもな。ただ金を貰って人を殺すだけだった。特別誇れるようなもんじゃない」
「傭兵をやっていてどんな目に遭いました?」
私の質問にテツヤ殿は少し考えてから答えた。
「捕まって拷問された事だな」
拷問と聞いて身の毛に寒気がきた。
騎士などは捕まっても拷問されるような事はないが、傭兵となるとそうはいかない。
「焼いた鉄を腹に刺されたり地中深く埋められた時もある」
その上から汚物などを撒き散らされたり毒蛇や毒虫を放り込まれたらしい・・・・・・
私は唾を飲み込みワイド様も少し青ざめていた。
「時には味方に裏切られた事もあったな」

ワイド様は怪しからん奴だ、と怒っていた。
私も仲間を売る行為には腹が立った。
「あいつにはあいつの筋があったから仕方ねぇよ」
テツヤ殿は笑いながら食事を終えると煙草を銜えた。
「その細い物は何だ？」
「これは煙草。火を点けて煙を吸う大人の娯楽だ」
小さな箱で火を点けながらテツヤ殿は答えた。
「そ、それは何だ？」
ワイド様はまた新しい物を見て驚いた。
「これはジッポ・ライター。頑丈で弾も通さない代物だ」
テツヤ殿は笑いながらワイド様にジッポ・ライターなる物を渡した。
「蓋を開けて丸いのを回せば火が点く」
言われた通りにワイド様はすると火が点いた。
「そしてこれを口に銜えて火を点けて少し吸う」
煙草を出されてワイド様は戸惑いながら口に銜えて吸ってみた。

「ごほっ・・・何だか変な味だな」

軽く咳き込みながらワイド様は煙草を吸いライターをテツヤ殿に返した。

「慣れれば問題ない。これを吸うと多少の気分転換にはなる」

テツヤ殿は笑いながら煙草を吸う。

慣れているだけあってワイド様より様になっていた。

「それでこれからの事だが」

テツヤ殿の言葉にワイド様と私は気を引き締めた。

「俺はこの世界に関して無知識だ。だから、色々と教えてくれ」

「それは構わんが、こちらも条件がある」

ワイド様は何を言う気なのだ?

「お前の学んできた事をこちらにも教えて欲しい。間者でないなら出来るだろ?」

構わないとテツヤ殿は答えた。

「どんな事を教えたら良い?俺は“戦い”じゃなくて、相手を“確実に殺す”方法しか分からんぞ」

「あの具体的には？」

「相手の背後を取ってナイフで頸動脈を切ったりする事だ」

それは騎士の戦い方にはない方法だ。

本来、騎士は正々堂々と戦うのが基本で不意打ちは卑怯とされている。

「他にはブービー・トラップの設置とか銃の分解、後はサバイバル術だ」

「ブービー・トラップとは何だ？サバイバル術とは何だ？」

ワイド様が聞く。

「ゲリラが使う罠だ。直訳するなら“間抜けな罠”だ。サバイバル術はジャングルや森林地帯で一人だけになった時に行き残る為の術だ。」

ワイド様はサバイバル術に興味を抱いたようで詳しく聞かせろとテツヤ殿に詰め寄るがテツヤ殿は苦笑して言った。

「まぁ、この話は明日だな」

テツヤ殿は煙草を素手で揉み消した。

「熱くないのか？」

「これ位は慣れた」

煙草を鉄の箱に入れるとテツヤ殿はベッドに寝転んだ。

私たちも習いベッドに入り眠った。

何だか疲れる一日だと思う。

第三章：親衛騎士団ＶＳ傭兵（前書き）

４話目を更新します。

第三章：親衛騎士団ＶＳ傭兵

翌日、私は何時もより早く目を覚ました。

何か物音がしたからだ。

寝ぼけた眼差しを送るとテツヤ殿がＡＫＭアサルトライフルを手入れしていた。

「起こしたか？」

テツヤ殿が聞く。

「いえ。違います」

「なら、良い」

テツヤ殿はライフルの手入れを続けた。

ワイド様はまだ眠っていた。

「手入れをしているのですか？」

「あぁ。Ｍ１６みたくデリケートじゃないんだが、命を預けるからには常に手入れを怠らないとな」

お前も剣の手入れを怠らないだろ？と聞いてくるテツヤ殿。

「確かに」

私は頷く。

「よぉし。これでＯＫだな」

手入れを終えたテツヤ殿はＡＫＭアサルトライフルを両手で持つと黒く細い部分を指で引いた。

「うむ。問題ないな」

テツヤ殿は満足気に頷く。

その時、ワイド様も目を覚ました。

「おはようございます。ワイド様」

私は上司に挨拶をした。

「うむ。おはよう」

ワイド様は挨拶を返しながらテツヤ殿を見た。

テツヤ殿は腰に差したガヴァメントを抜く動作を繰り返していた。

「あの、何をしているんですか？」

「少しでも勘を鈍らせない為の訓練だ」

テツヤ殿は素早くガバメントを抜いては仕舞う動作を繰り返していた。

その動作に無駄はなく少し見惚れてしまった。

「飯は何時くるんだ？」

「あと1時間ほど、ですかね」

「随分とあるな。それまで俺と戦ってみるか？」

ガバメントを仕舞ったテツヤ殿の発言に私とワイド様は驚いた。

「別に殺し合いをする訳じゃない。ただ此処の奴らはどう戦うか知りたい。お前らも俺の殺し方を知りたいだろ？」

コクリと頷く。

「よぉし。決まりだ。幸い広いから問題はない筈だ」

テツヤ殿はベッドから立ち上がった。

「さぁ、来な」

拳を握って右拳を胸の前で構え左手を腰に当てた。

見た事もない構えだ。

「さぁ掛って来な」

私は戸惑った。

「どうした？来ないのか」

「あの、素手で戦う術を習ってないんですけど」

「はぁ？じゃあ何で戦うんだ」

「剣が殆どです。後は魔術などです」

「魔術？手から火を出したりするのか？」

「基本はそうだが、召喚術などを使うのが殆どだ」

ワイド様の説明を聞いて驚くテツヤ殿。

「貴様の国では違うのか？」

「俺の国だと魔術より科学が発達しているからな。召喚術ね、興味があるな」

そう言うテツヤ殿。

ワイド様はテツヤ殿の構えを見て訊ねた。

「それで貴様の構えは何だ？」

「この構えは俺が独自に編み出した」

「独自に・・・ランドルフ。戦ってみろ」

ワイド様の命令に従うしかなかった。

「お手柔らかに頼みます」

「骨が一本くらい折られるかもしれないが、我慢しろよ」

手加減して下さいと言ったのに骨を折ろうとしないで下さい！！

私は見よう見真似で拳を握り打ち込んだ。

テツヤ殿は交わすと真っ直ぐに私の顔に拳を入れた。

しかし、寸での所で止まった。

「拳の握り方がなってない。これだと突き指するぞ」

拳を離しながら言うテツヤ殿。

私は寸での所で止まった拳の感覚で腰を抜かした。

「あの、あのまま打ち込んでいたらどうなりました？」

「よくて歯が折れていたな。悪ければグシャグシャになっていた」

「そ、そうですか・・・・・・」

良かった・・・顔がグシャグシャにならず、歯も折れずに。

「次はあんたがやるか？」

私から視線をワイド様に移し尋ねるテツヤ殿。

うむ、と言ってワイド様は立ち上がった。
私と違い拳の握り方がしっかりしていた。
「あんたはこいつより出来そうだな」
「まぁ、な」
テツヤ殿はさっきと同じ構え方をした。
「いつでも来い」
テツヤ殿は頷くと拳を打ち込んだ。
ワイド様はそれを交わすと拳を打ち返したが、テツヤ殿は避けて蹴りを放った。
予想外の攻撃にワイド様は焦った。
テツヤ殿は蹴りを連続で打ち込んできた。
ワイド様は防戦一方だ。
次第にワイド様は息を荒くして動きも鈍ってきた。
一瞬だけ見せた隙をテツヤ殿は見逃さず拳を顔に打ち込んだ。
私の時と同じく寸での所で止めてあった。

「ここで終わりだな」

テツヤ殿はベッドへと戻り煙草を銜えた。

ワイド様は床に腰を下ろし荒い息を吐いた。

「テツヤ殿は疲れないのですか？」

「あれくらいでヘバッテたら死んでる」

煙を吐きながらテツヤ殿は答えた。

それから少しして朝食が運ばれてきた。

朝食を頂いてからテツヤ殿が外出を希望してきた。

「別に外出禁止は言われてないから良いだろ？少し外を見てみたい」

ワイド様は少し悩んだが、良いと言った。

食事を終えて準備をしてから外に出る。

「はー。外は良いぜ」

テツヤ殿は城の中に儲けた鍛練場に着くと腕を伸ばした。

鍛練場では多くの兵士が剣の稽古や馬術などをしている。

その中でも一際目立っていたのは王女を警護する親衛騎士団だ。

聖騎士団とは別に作られた騎士団で実力はサルバーナ王国一とも言われていて多くの騎士が憧れている。

元はガルバー様の傍を護る騎士団だったが、今はサラ様を護るのが役目だ。

団長は歴代で初めての女性騎士、フィーナ様だ。

私より七つ年上の２４歳で凛とした態度に艶のある髪と鍛えられた肉体と女らしい身体が男たちの的だ。

フィーナ様は剣術の稽古をしていて相手の騎士を圧倒していた。

白銀の鎧に身を包み両手剣を握り騎士を圧倒するフィーナ様。

「・・・・格好良いな」

私は惚れ惚れとした表情を浮かべてフィーナ様を見る。

ワイド様も惚れ惚れとしていた。

テツヤ殿はまったく無関心の顔だった。

この人はフィーナ様を見ても何も感じないのか？

その時、フィーナ様が私たちの方を見て剣を抜いたまま近づいてきた。

凛とした金色の瞳でこちらを見てくる。

いや見るというより睨んでいると言った方が良いかも知れない。

「・・・何しに来た。剣を無くして一人だけ生き残った騎士が」

フィーナ様は私を睨んで言ってきて私は何も言えなかった。

騎士の命とも言える剣を無くして更に一人だけ生き残った私。

だから何を言われても仕方ないが、憧れの人に言われると傷つく。

「死んだ聖騎士もそうだ。3人もいたのに全員が犬死にとは情けない」

鼻で笑うフィーナ様にワイド様は眉間に皺を寄せた。

自分が指揮する騎士団を馬鹿にされて怒っているのだ。

聖騎士団とは別に作られた親衛騎士団は憧れの的でもあるが、自分たちは特別だという意識があるのか他の騎士団を馬鹿にしている。

「私たち親衛騎士団が居れば他所から来た得体の知れない傭兵などという輩に助けられずに済んだものを」

私は拳を握った。

悔しくて怒りが湧き上がる。

そんな偉そうな事を言うなら、自分たちで行けば良かったんだ。

そして無事に姫様を護れるなら護ってみせろと言いたかった。

「おい。お嬢ちゃん。その辺で口を閉じな」

私の前に出たテツヤ殿が口を開いた。

「貴様か。異世界から来た傭兵とは」

今頃、気付いたかのようにフィーナ様はテツヤ殿を見た。

明らかに侮蔑を含んだ眼差しで、金で雇われる忠義など無縁の兵としてフィーナ様はテツヤ殿を見ていた。

「あぁ」

テツヤ殿は無関心を装っているのか、感情の波風が無い口調で頷いた。

「・・・なるほど。見るからに傭兵らしい格好だな」

冷笑を浮かべるフィーナ様に対してテツヤ殿は、無感情な声と顔で喋り出した。

「ご感想ありがとう。あんたも見た目通り傲慢で高飛車な小娘だな」

テツヤ殿の言葉にフィーナ様は怒りを感情に表した。

「貴様・・・・・・・・」

「あの場に居なかったくせに偉そうに言うな。こいつと死んだ騎士は必死に王女を護り抜いた」

「・・・テツヤ殿」

私は自分より身長が上のテツヤ殿を見上げた。

「任務を全うして死んだ奴を愚弄するのは兵として失格だ。ましてその兵を束ねる将校がそのような事を言うとは・・・あんたは騎士としても軍人としても落第点だ」

「・・・・・・・・」

フィーナ様は両手剣を持ち上げてテツヤ殿の顔面に切っ先を当てた。

あと少しでも進んでいればテツヤ殿の顔に刺さるのに、まるで怖がった様子を見せないテツヤ殿に私たちは息を飲んだ。

「それ以上、私を愚弄すると・・・斬る」

「やれるもんならやってみろ。逆に俺が殺してやるよ」

「・・・よかろう。貴様に決闘を申し込む」

ワイド様と私、更に他の騎士たちは目を見張った。

「フィーナ殿。この男は女王が客人として招いた。決闘を申し込むのは失礼だぞ」

「こいつは騎士としての名誉を汚した。殺しても問題ない」

「随分と強気な小娘だな。いやはや、大した性格だ」

テツヤ殿は黒い瞳を狼のように光らせてフィーナ様を睨んだ。

「ランドルフ。これ持ってろ」

私にＡＫＭアサルトライフルを渡すテツヤ殿。

「え？使わないんですか？」

「こんな小娘には素手で十分だ。何より、それは余り人前で使う物じゃない」

フィーナ様は小娘と言われて武器も使わないでも勝てる、と言ったテツヤ殿に今にも斬り掛らんとしていた。

周りは突然、始まった決闘に騒いでいたが止めようとする者は誰も居ない。

「さぁ、来な」

テツヤ殿は部屋で見せた構えを取り手の平でフィーナ様を挑発してきた。

「覚悟！！」

挑発に乗ったフィーナ様は剣を振り上げて距離を縮めてきた。

振り降ろされた剣を軽く横に動いて避けたテツヤ殿は距離を取ったが構えは変わらない。

「そんな大ぶりじゃネズミ一匹殺せないぞ」

嘲笑を浮かべるテツヤ殿にフィーナ殿は再び剣を振り上げて斬り掛った。

「馬鹿の一つ覚えが」

テツヤ殿は再び避けると無防備な顔に唾を吐いた。

フィーナ殿は咄嗟に手で覆う。

それを見逃さずテツヤ殿は背後を取ると両手でフィーナ様の首を絞めた。

「ぐっ・・・・・・」

「少し力を入れたら首の骨が折れるぞ」

テツヤ殿は平坦な声で言う。

「つ、唾を吐くなど・・・・ひ、卑怯者・・・・・・ッ！！」

「戦いに卑怯も糞もない。あるのは勝利か敗北。生か死だけだ」

フィーナ様は腕から逃げようとしたが、更に自分を苦しめるだけだった。

「死んだ奴とランドルフに謝れ。そうすれば解放してやる」

テツヤ殿は命じた。

「だ、誰がっ」

「なら、このまま殺すだけだ」

腕に力を込めるテツヤ殿。

「何をしているのですかっ」

鍛練場に凛とした声が聞こえた。

女王、サラ様だ。

「女王陛下！！」

皆は突然現れた女王に驚きながら臣下の礼をする。

テツヤ殿もフィーナ様を解放した。

「何の騒ぎですか？」

サラ様が歩み寄りながら聞いてきた。

「はっ。親衛騎士団のフィーナ殿がテツヤ殿に決闘を申し込みました」

ワイド様がサラ様の質問に答える。

「どういう事ですか？」

「この嬢ちゃんが死んだ奴を愚弄したから絞めただけだ」

テツヤ殿が地面に唾を吐きながら言う。

「王女を護り死んだ奴を犬死にと言ったんだよ」

「本当ですか？」

サラ様は皆を見て訊いた。

皆は女王の質問に素直に頷く事で答えるしかなかった。

「・・・・フィーナ」

サラ様は地面に両手を着くフィーナ様に歩み寄った。

「貴方は私の娘を警護して死んだ聖騎士を愚弄したばかりか私が招いた客人を傷つけようとしたのですか？」

フィーナ様は俯きながらも答える。

「この男が私の名誉を汚しました。だから・・・・・・・・・」

「だから決闘を申し込んだのですか？」

「・・・・はい」

サラ様は静かに怒っていた。

「フィーナ。貴方の行為は騎士として恥ずべき行為です。聖騎士団

へ謝罪しなさい」

フィーナ様は俯いていたが、渋々と言った様子で謝罪を始めた。

「・・・・軽率な発言。どうぞ許して下さい」

ワイド様と私は胸が軽くなった。

更にサラ様はテツヤ殿にも謝罪するように言った。

「テツヤ殿にも謝りなさい」

「いや。俺に謝る必要はない」

テツヤ殿は断った。

「傷め付けたからもう良い」

「貴様ッ」

フィーナ様はテツヤ殿を睨んだ。

「何だ?まだ傷め足りないか?なら、今度は腕の一本くらい折ってやろう」

バキバキと拳を鳴らしフィーナ様を睨むテツヤ殿の眼は本気だった。

テツヤ殿の視線に寒気がした。

恐らくテツヤ殿は本気でフィーナ様の腕を折ろうとしていると肌で

感じ取れた。

フィーナ殿はテツヤ殿を睨んだままだ。

しかし、眼を逸らすと立ち上がった。

「今日の屈辱・・・・・必ず晴らす」

鍛練場を後にするフィーナ様。

周りの兵も散り散りになって私たちだけとなった。

「申し訳ありませんでした。テツヤ殿。フィーナは我が王族を護る親衛騎士団の長であるため自分は特別だと思う気持ちが強いのです」

「別にあんたが謝る事はないさ。俺の世界でもああいう輩は大勢いたからな」

サラ様は申し訳なさそうに顔を上げたがテツヤ殿はどこ吹く風のような態度を取った。

「それで、どうしてこんな男臭い場所に来たんだい？」

男臭いとは些か傷つくが皆は同感だったのか口を封じたままだ。

「テツヤ殿に城を案内しようと思いまして探しておりました」

「女王自ら城を案内するのかい？」

「はい」

サラ様の発言に私たちは目を見張ったが同時に納得もした。
娘を救った男なら母親自ら恩を返す方だ。
「俺は構わないけど、あんたは忙しくないのか？仮にも女王だろ」
「今日の公務は大したものじゃありません。どうでしょうか？これから」
「別に俺は構わない。元からワイドとランドルフに案内をしてもらっていたからな」
私とワイド様は頷いて同意する。
「それは好都合です。それでは行きましょう」
サラ様が先導して歩きだし後からテツヤ殿、ワイド様、私が着いて行く。
「では、テツヤ殿の国には国王は居ないのですか？」
「いや、言い方が違うだけだ。まぁ、名前だけの王だが」
「名前だけの王？」
「政治に関する力は一切ない。言うなれば飾りだ」
飾りだけの王。

何とも言えないと私は思った。

「だが、他国を訪れたりして互いに尊重し合い分かち合う」

「王に忠誠を誓う筈の兵士は誰に忠誠を誓うのだ？」

サラ様の間にワイド様が入り訊いた。

「国に忠誠を誓うんだよ」

テツヤ殿の答えを聞いてなるほど、とワイド様は納得する。

現在、私たちはサラ様が案内して城の中を回っている。

その間、サラ様はテツヤ殿にあれこれ質問をする。

「テツヤ殿は今までどういう人生を歩んで来たのですか？」

「俺の人生なんて金を貰って人を殺すだけの人生さ」

サラ様の質問にぶっきら棒な返事をするテツヤ殿にワイド様は眉間に皺を寄せた。

「私にはそんな人生を送っていたとは思えません。貴方は娘を助けてくれました。それは貴方が非情な人ではないという事です」

「あれはあれだ。もしも、仕事だったら見殺しにしていた」

「そうですか。仕事中ではなかった事に感謝します」

テツヤ殿の返事にサラ様は微笑んで返す。
流石は女王で諸国の王と対等に渡り合っているだけの事はある。
テツヤ殿の答えにもちゃんと受け流しをしている。
「それで、テツヤ殿の身の振り方と言いますか・・・・これからどうなさいますか？」
「出来るなら働きたいな。何もせずに暮らせるほど人生は甘くない」
「そうですか」
「あぁ。と言っても俺に騎士になれとか庭の清掃員とかは無理だぞ。俺は傭兵で飯を食って来たんだ。他の仕事は出来ない」
「では、ランドルフと一緒に兵として働いてくれませんか？ランドルフはまだ聖騎士ではないので兵として分類されるので」
「どんな仕事をすれば良いんだ？」
「具体的に言えば市内の巡回警備です。それ以外は主に民の頼みを聞くのですが、宜しいでしょうか？」
「別に良い。市内を周れるのは好都合だ。勉強させてもらう」
「では決まりですね」
サラ様はニコリと微笑む。

その笑顔に私とワイド様は溜め息を吐くがテツヤ殿は無関心のような顔だった。

第四章：謎の宅配人

サラ様が城の案内役をしてから小一時間が経過して大体の案内は終わった。

「ところで俺のジープはどうなっているか気になるんだが」

テツヤ殿が乗っていたジープは確か馬小屋にある筈だ。

「ジープと言うのですか？あの乗り物は」

「あぁ。何かしたか？」

「いいえ。ですが、丸一日なにも口にしておりませんが？」

「一日ちょっとじゃ、あいつは腹が減らねぇよ」

テツヤ殿は笑いながら答えた。

４人で馬小屋に行く。

馬小屋に行くと馬たちの中でズングリとした身体のジープが異様に目立っていた。

テツヤ殿はジープに乗ると点検をしてみた。

「よし。何も問題ないな」

満足気に言うとテツヤ殿はサラ様を見つめた。

降りようとした所で何かを見つけるテツヤ殿。

「何だこれは・・・・・・」

手に取ったのは一枚の手紙だった。

「何て書いてあるんですか？」

私が訊くとテツヤ殿は紙を見せた。

「えーと・・・・ダッシュ・ボードの中に携帯が入っている？」

携帯？

何だそれは？

テツヤ殿は運転席と呼ばれる席の横に備え付けられている戸を開けてみた。

そこには長細い物があった。

「何ですかそれ？」

「携帯と言って遠い場所に居る相手と話ができる代物だ。だが、俺の居た所では無い筈だ」

何であるんだ？とテツヤ殿は首を傾げた。

その時、携帯から奇怪な音がした。

「な、何だっ！！」

ワイド様はサラ様を護るようにして立ち、携帯を見た。

「・・・・・・・」

テツヤ殿は携帯を耳に当てた。

「誰だ？」

『はーい、こちら頼まれたら何処へでも運ぶ宅配人でーす！！」

元気な声が私の耳にも入って来た。

「誰だ？お前は」

『申し訳ありませんがプライベートなご質問にはお答えできませーん』

『じゃあ言い方を変える。俺をこの世界に連れて来たのは・・・お前か？』

『それもお答えできませーん！！』

「じゃあ何でこれを置いた？」

『何か頼めば何でも届けますので置いておきました』

「何でも、か。それに大きさや数は限度があるのか？」

『いいえ。特にありません』

「金は幾らだ？」

『お金は要りません』

「随分と気前が良いな」

テツヤ殿は煙草を取り出して銜えるとライターで火を点けた。

『貴方様にはこれからたくさん働いてもらいますので』

「働くねぇ・・・・・・・・・』

テツヤ殿は何か胡散臭い目であった。

『はい。これから様々な面で働いて貰います。その報酬は何らかの面で支払われると思います』

「そうか。ただし、肝に銘じておけ。俺を裏切るような真似をしたら・・・何処に逃げようと見つけ出して殺すからな」

煙を吐きながらテツヤ殿は背筋が凍るような声で断言した。

『ご忠告ありがとうございます。肝に銘じておきまーす。それで何か届けて欲しい物はありますか？』

「早速で悪いが、食い物と武器を頼む。武器は・・・そうだな。拳銃とライフルが良い」

『どのような物が良いですか？』

「９ｍｍ口径で弾数は、多い方が良いな」

『それなら最新式の“ベレッタ”は如何ですか？』

「あぁ、あれか。１５発も撃てる優れ物だな。それに初心者でも扱い易い。よし、それで良い。ライフルは・・・初心者でも扱い易い“ＳＫＳ”で良い。後は閃光筒、煙幕筒、手榴弾を頼む」

『了解しました。では、直ぐに届けまーす！！』

周りが光に包まれた。

眩しさに目を細めた。

光が無くなり、目を開けるとジープの直ぐ隣に大きな木箱が置かれていた。

『届きましたか？』

「あぁ」

木箱の中身を見てテツヤ殿は頷く。

『それでは、また何かあればご連絡下さい。ただし、注文を受ける時間は午後の６時までとさせていただきますのでご了承ください』

「分かった。では、また電話する」

テツヤ殿は携帯を耳から離した。
そして木箱からガバメントと同じ位の大きさを持つ物を取り出して私に投げた。
「こ、これは・・・・・・」
「“ベレッタM92FS”。イタリアのベレッタ社が作り上げたダブルアクションの拳銃だ」
「拳銃とは、ガバメントと同じですか」
「あぁ。だが、色々と違う」
「色々と言いますと？」
「弾数も違うし、弾の種類も違う。更に言えば採用した方式も違う」
「そうなんですか」
「あぁ。剣の代わりに持っておけ」
「良いんですか？」
「あぁ。それとこれもだ」
今度はAKMより少し長めの物を渡してきた。
「これは？」

「“ＳＫＳカービン”と呼ばれる自動小銃だ」

「じどうしょうじゅう？かーびん？」

また意味不明な言語が出て来て私は混乱する。

「簡単に言ってしまえば、俺のＡＫＭがフルオート一一一全弾を発射できるのに対して、そいつは１発ずつ撃つ奴だ。カービンってのは騎兵隊。つまりお前らみたいに馬に乗る奴等が使う銃を意味する」

なるほど、と頷きながら私は渡された物を前に出した。

「どうして私に・・・・・」

「剣の代わりだ。それにいざ、という時に役立つ」

どういう時に役立つのだろう、と思いながら私はＳＫＳと呼ばれたライフルとベレッタＭ９２ＦＳを見た。

どちらもテツヤ殿の武器に比べて芸術的な面が強い気がした。

特にベレッタはガバメントより外見が綺麗な気がするし握り易い。

「撃ってみるか？」

「これをですか？」

「他に何がある」

これまたぶっきら棒に言われて私は困惑した。

「女王陛下、これらを撃てる場所はあるかい？」

出来るなら人目が無い所で、とテツヤ殿は付け足した。

「それなら今は使われていない。弓の鍛錬嬢があります」

城の中にあり、北側に存在するらしい。

「そこへ案内してくれるかい？」

「もちろんです。では、こちらへ」

サラ様は率先して歩き出した。

私はテツヤ殿と一緒に木箱を持って歩く。

「いけね。忘れてた」

「何がですか？」

「ホルスターだ」

「ほるすたー？」

「鞘だ」

簡潔に説明してくれるテツヤ殿。

テツヤ殿の腰を見ると、確かに拳銃を収める鞘があった。

「それがホルスターですか？」

「あぁ。こいつはヒップ・ホルスターと言って、腰に付けるんだ」

他にも腋下や、背後、足首など色々な種類があるらしい。

「色々とあるんですね」

「あぁ。まぁ、明日にでも電話して取り寄せよう」

流石に今またやるのは、どうかと思ったのだろう。

テツヤ殿なら相手に関係なく直ぐにやりそうだ、と失礼にも思ってしまったが。

鍛錬場に着いたが、私は息も絶え絶えだった。

二人掛りとは言え重いのだ。

何よりテツヤ殿に「この箱が落ちたら死ぬぞ」なんて言われたら余計に緊張して重みが増すものだ。

「それ位で息切れか？情けないな」

「す、すいません・・・・・・」

「ワイド。もう少しこいつを鍛えろよ。さもないと死ぬぞ」

「うむ。そうしよう」

テツヤ殿に指摘されてワイド様は情けない表情で頷いた。

部下である私がここまで情けない事に哀しんでいるのだろうか？

「それはそうと、ランドルフ。早くやるぞ」

テツヤ殿に促されて私は既に壊れかかっている的に立った。

「先ず両手で構えろ」

テツヤ殿がガバメントを抜くと両手で構えた。

肘を真っ直ぐに伸ばし、眼の位置にガバメントを構えている。

私も見よう見まねでテツヤ殿のように構えた。

「構えたら撃鉄・・・ここの部分を親指で起こす」

撃鉄と呼ばれる後ろの出っ張った部分を親指で起こした。

「そいつは引き金を引くだけで撃てる。だが、命中率を上げたいなら撃鉄を起こせ」

ガバメントの場合は最初、この撃鉄と呼ばれる部分を起こさないと撃てないらしい。

だが、ベレッタは引き金を引くだけで撃てると言う。

「そして照準を定める」

撃鉄の少し上に小さな溝があり、そこで狙えと言われた。

片眼を瞑りやってみる。

何とか見えるが、難しいと感じた。

「後は引き金を引け」

言われるままに私は引き金を引いた。

目の前にオレンジ色の火花が見えて、何か丸い物が出る所まで見えた。

それが弾だと解かった。

弾は回転して進み、的から外れた。

「続け様に撃て」

言われるままに引き金を引き続けると、立て続けに弾が出ては的外れな所に当たる。

そこの部分は削れたりした。

「どうだ? 感想は」

「難しいです」

テツヤ殿は片手で当てているが、私は全く駄目だ。

「まぁ、そいつを自在に操れるようになるにはトラック一個分・・・ここ一杯の弾を必要とするからな」

最初から的に当てられる事は出来ない、とテツヤ殿は説明した。

「それに最初は２２ＬＲ弾と言われる小さな弾で練習するんだ」

お前の場合は、９ｍｍという大きな弾を使用するから尚更無理と言った。

「だが、使い慣れればライフルの次に命を預けられる」

これなら小型で室内でも容易に使えるとテツヤ殿は言い煙草を銜えた。

「そうですか・・・・」

私はそれでも落ち込みを隠せなかった。

「そう落ち込むな。これから俺が徹底的に鍛えてやる」

「て、テツヤ殿が？」

「あぁ。お前さんを見ているとどうも癇に障る」

私のような奴は徹底的に鍛え上げてやりたいと要らぬ節介を焼きたがるらしい。

「まぁ、それは置いておいて。今度はＳＫＳだ」

今度はライフルを撃てと言われた。

こちらはＡＫＭアサルトライフルより長い。

「こいつはＡＫより前に作られた」

「そうなんですか」

「あぁ。ＡＫの長所を上げるなら頑丈な事と手入れがし易い事だ」

そしてそれはこれも同じらしい。

どんな環境でも正確に作動するし、手入れも楽だから訓練する時間を大幅に減らす事が出来るらしい。

そして弾が補給し易い。

「こいつは世界中で使われている。だから、弾が補充し易いんだ」

それから安価。

「どれ位なんですか？」

「それは国によって違うが、ここで貨幣は何だ？」

「ここではサルジという貨幣で金貨、銀貨、銅貨、青銅貨となります」

それが無ければ物々交換だ。

「なるほどな。となれば青銅貨から銅貨辺りで買える」

「そんなに安いんですか？」

青銅貨から銅貨だと安物のそれこそ屑鉄で作られた剣しか買えない。

それ位の値打ちでありながら、こんなに良いのだから大した物だと私は感動を覚えた。

「あぁ。だから、色々な国がコピー品ーーー模倣品を作るんだ」

テツヤ殿が使用しているのは最初に作った国の物つまりは純粋性という所だ。

「それだけ凄いライフルなんですね」

私の言葉にテツヤ殿は頷き、ワイド様とサラ様も興味津津だった。

「まぁな。そしてお前さんの持っているＳＫＳカービンは命中率が高い」

その他にも色々とＡＫには無い点があるらしい。

「例えば、俺のＡＫＭには小型の剣ーーー銃剣を取り付けるがそっちの場合は既に付いているだろ」

言われて見てみると、確かに短剣サイズの物が下に取り付けられている。

「そいつを前に出して、銃口を丸い部分に入れてみろ」

言われた通りやってみた。

短剣が前に出て槍のようになった。

「それなら一々出すよりも便利だろ？」

「はい」

「それから俺の場合は弾を撃ち尽くせばマガジンを交換するが、こいつの場合はクリップ装填という方法を取っている」

「どんな方法ですか？」

「１０発ほど弾を纏めて入れるんだ。まぁ、１発ずつ入れる事も出来る」

これにより嵩張らない長所があると言った。

「それとＡＫと同じく簡素な作りだ。だから、砂が入ろうが泥が入ろうが作動する」

Ｍ１６の場合はちょっとした異物が入った時点で駄目だ、と言う。

だが、私の場合はテツヤ殿と同じく頑丈なようだ。

「いいか？そいつを使いこなせればお前の命を護ってくれる」

そして周りを全て支配できるとも言った。

「しかし、覚えておけ。それを使うと言う事は命を危険に曝すという事だ」

常に手入れを怠らず、常に警戒し、常に手放すな。

そうテツヤ殿は言った。

言葉に重みがある。

「テツヤ殿も経験したのですか？」

「あぁ。まぁ、昔の事は覚えてないが痛い目に遭った事はある」

そうなりたくないならしっかりと手入れをしろ、とテツヤ殿は言い火を点けた煙草から煙を吐いた。

そしてＡＫＭを構えて私もＳＫＳカービンを見よう見まねで構えた。

「そいつの場合はレシーバーと呼ばれる一一一弾を装填する部分が横にある」

見るれば、出っ張った部分があった。

「それを後ろに引けば弾が装填される」

後ろに引っ張った。

「後はストック少し下に出張った所を肩に当てて狙いを定めて引け」

テツヤ殿と同じように構えて撃った。
拳銃では当たらなかった的に当たった。

「拳銃より扱い易いですね」

「長いから照準を合わせやすいんだ」

更にカービンと呼ばれる短めの物だから狭い場所でも使い易いようだ。

「手入れを怠らず常に身体に馴染ませれば剣と同じく、お前の頼れる恋人になる」

「恋人ですか？」

「そうだ。剣が騎士の相棒なら、ライフルは恋人だ。恋人を決して手放すな。そうすれば恋人はお前を護ってくれる」

私はそれに頷いた。

その後、夕食の時間まで私とテツヤ殿は射撃を続けた。

第五章：傭兵王の過去

夜になった私たちは部屋へと戻った。

そこにはサラ様とエリーナ様も同席している。

部屋に戻る途中でエリーナ様と鉢合わせしてサラ様が「皆で食事を取りましょう」と言い出した。

最初、ワイド様は「女王陛下と食事など」と慌てていたがサラ様は「テツヤ殿と食事がしたいの」とある意味ではワイド様は参加しなくても良いと言った。

それがワイド様には通じたのか「ならば、私も」と言い直したのだ。

テツヤ殿は「美人と食事、か。悪くねぇな」と言い快諾した。

そして現在、私たちが居る部屋でサラ様、エリーナ様、テツヤ殿、私、ワイド様の5人で食事をしている。

テツヤ殿は昨日と同じく手づかみで食べている。

骨ごと食べて噛み砕くその姿は、まさしく野人だった。

だが、滓などは落とさないので綺麗な食べ方とも言えた。

今、食べているのはテツヤ殿が注文した食べ物で「戦闘食」と呼ばれる物だ。

湯を少し入れて軽く上下に振れば食べられる、という優れ物で味も美味い。

「随分と美味しいな。これは」

ワイド様は戦闘食をガツガツ食べながら感想を述べた。

「戦場では飯が唯一の娯楽だからな」

「唯一の娯楽ですか？」

私は戦闘食に添え付けられていた“コーヒー”と呼ばれる物を飲みながら訊いた。

「お前は戦に出た事が無いから分からないだろうが、戦場では全てが抑制される」

女を抱く事も、本を読む事も、風呂に入る事も全て・・・・・・・・・・

「確かにその通りだ」

ワイド様は、うんうんと頷く。

口の周りにべっとりと汁などが付いているから失笑物だった。

「まぁ、俺が立った戦場の後方では指揮官が女を抱いていたがな」

だが、前線の兵はそうではない。

そのため唯一の娯楽が食事らしい。

「俺が居た国だけでなく何処の国も兵の士気を下げない為に飯には格別に力が込められている」

国によって違う面があるのだが、逆にそこが魅力的らしい。

お互いに飯を交換し合っている、など微笑ましい面もあると聞いた。

「テツヤ殿がいた国はどうだったんですか？」

サラ様が綺麗に食べた戦闘食に付いていたスプーンを置いてナプキンで拭きながら訊ねた。

「俺が居た国の飯は結構な評価を受けていたな」

今、食べているのは別の物らしいが、こんど用意すると言った。

「その時は、恥ずかしながらお呼び下さい」

どうやらサラ様はこの戦闘食が気に入ったようだ。

「美人の頼みなら喜んで聞いてやるよ」

テツヤ殿は煙草を銜えながら快諾し、サラ様を喜ばせた。

食事の後、腹を痛めないように薬を飲まされた。

何でもとある国の人間にこの戦闘食を食べさせた所、腹痛などを起こしたらしい。

理由として食べ慣れない物を食べた事が原因のようで、サラ様が腹痛などを起こしては自分の首が飛んでしまう、と言うから薬を念の為に飲ませたらしい。

薬を飲んだ後、サラ様とエリーナ様はテツヤ殿にあれこれ聞き始めた。

それに対してテツヤ殿は何でも答えた。

それを聞いては二人は満足する。

やがて帰る時間となった。

「とても楽しい時間でした」

「お話を聞かせて下さってありがとうございます」

二人はドレスの裾を摘んで優雅に一礼した。

それだけで画になる。

「なぁに俺もむさ苦しい男二人に囲まれて嫌になっていたから良かったぜ」

「むさ苦しくて悪かったな」

ワイド様は拗ねた声で言ってきた。

それをテツヤ殿は無視しサラ様とエリーナ様を送り出した。

「さて、風呂に入るか」

テツヤ殿と私とワイド様は3人で風呂へと向かった。

風呂は城の中にある大浴場だ。

もっとも私たちが使用するのは使用人たちが入る風呂だ。

「すいませんね。使用人の風呂で」

「お前が謝る事じゃない。それに幾ら俺が王女を助けた男でも一介の傭兵に王族が使用する風呂を使わせるなんて無いだろ」

「それはそうですけど・・・・・・」

これは食事中にサラ様から聞いた事だが、テツヤ殿は城の中でかなり浮いた存在らしい。

もちろん王女を助けた客人、という形である。

だが、身分は傭兵で身元も知れない。

そうなると嫌でも浮いてしまう。

幸い使用人たちはテツヤ殿を見ても何も言わないが。

ただし、臣下の者は明らかにテツヤ殿に対して侮蔑の眼差しを送っている。

それをテツヤ殿は飄々と受け流しているが。

前を歩いていると臣下の者が来た。

宰相に仕える大臣の一人だった筈だ。

「ふん。みすぼらしい傭兵が」

「よく言われる」

臣下はテツヤ殿を見て侮蔑の眼差しを送り、鼻を摘んだ。

「臭い。臭い。まるで野犬のような臭いがするぞ」

「そうかい？あんたからは化粧の臭いがするぜ」

誰かを抱いたのか？と訊くテツヤ殿。

臣下は明らかに図星を指されたのか顔を赤くした。

「さっさと行け」

テツヤ殿に言われた臣下は屈辱にまみれた顔をして走り去った。

「おい。言い過ぎだぞ」

ワイド様が窘める口調で話し掛けてくる。

「本当の事を言ったまでだ」

テツヤ殿は素っ気なく返して歩きを再開した。
ワイド様は溜め息を吐きながらテツヤ殿の後を追った。
短いがテツヤ殿の性格は何となく私も理解したから歩き出した。
風呂へと着いたテツヤ殿は衣服を脱ぎ始めた。
幸いなのか、誰も居なかった。
身体は傷だらけで以前、話した拷問の痕もある。
素っ裸になったテツヤ殿は腰にタオルを巻いてＡＫＭアサルトライフルを持った。
私にはコルト・ガバメントを持たせる。
「行くか」
「これを持ったままですか？」
「そうだ。お前も落とすなよ？」
「は、はぁ・・・・・・・」
何とも言えないまま私とワイド様はテツヤ殿に付いて行く。
湯で身体を軽く洗ってから入った。
「はー。一週間ぶりの風呂は格別だな」

「い、一週間ぶりって」

どれだけ風呂に入ってないんだと思ってしまった。

「前に言っただろ？戦場に居たと」

ＡＫＭアサルトライフルを湯に入れながらテツヤ殿は答えた。

「でも、風呂ぐらいは用意されているんじゃ」

「傭兵は正規の部隊に比べて金も安いし、最前線に送られる。損な仕事ばかり任される」

武器なども在り合わせの物か、敵から奪い取って使用するのが殆どだとテツヤ殿は答えた。

浴場に居た騎士や兵たちは興味深そうに話を聞いていた。

「本当に損な仕事ですね」

「だが、便利な事もある」

「どんな事が？」

「正規軍には無い戦術や情報、人脈が出来るし、利口になる」

「狡猾の間違いではないのか？」

真顔で言うワイド様にテツヤ殿は苦笑した。

「それにお前は正規軍は国の為に忠誠を誓い戦うと言っていた」

「あぁ。言ったな」

「では傭兵は何の為に戦う?金の為か?」

「金の為なら正規軍として戦った方が良い。仮に死んでも葬式に出される」

傭兵の場合は死んでもただ土の上に埋められるだけだ。

そして金は殆ど無いに等しい。

だから金の為に戦うのは余り無いらしい。

「まぁ、資産家の私兵とか大金を持つ国に雇われたら別だが」

「それでは何のために戦うんですか?」

「人によって様々だ」

ある者は究極の状況を楽しむ為。

ある者は自分の力を試す為。

ある者は虐げられた人々を護る為。

ある者は戦う事でしか生きる道を見つけられない為。

その他にも様々な理由で傭兵は戦うようだ。

「お前の場合は何だ？」

「俺の場合は・・・1番目と4番目だな」

「つまり、究極の状況を楽しむ為と戦う事でしか生きる道を見つけられない為、ですか？」

「あぁ。俺は学が無い」

身に着いたのは強靭な肉体だけ。

そして戦う術。

「それらを活かせるのは、傭兵になる事だけだ。まぁ、格闘家になるのも手だが本当の格闘家なんて片手で数える程しか居ないな」

そう言ってテツヤ殿は天井を見上げた。

「もしも、人生をやり直せる・・・何て事があっても俺はたぶん傭兵になるだろう」

あるのは契約の名の元にある任務だけ。

そんな仕事しか自分は見つけられないし、それ以外の仕事は恐らく出来ない。

テツヤ殿は言い切った。

その声には何処か哀しさが含まれていた気がした。

「所で、お前さんはどうして騎士になったんだ？」

ワイド様に訊ねるテツヤ殿。

「私の家系は元から聖騎士が多くてな。私の父も聖騎士だった」

「つまり親父の背中を見て自分もなりたい、と思ったか」

「あぁ。お前の父はどうだったんだ？」

「俺に父親も母親も居ない」

「どういう事だ？」

「俺が産まれた場所は、公園だった」

雨が降る中、産声を上げて泣いていたらしい。

つまり・・・・・・・・・・・・

「捨て子だったんですか？」

「あぁ。恐らく俺を孕んで男は逃げて、女も俺を捨てたんだろう」

「何と言う親だ」

ワイド様は怒りを露わにした。

私も少なからず怒りを覚えた。

子を作る事は神聖な物だ。

そして女を厭らしい言葉だが、孕ませたなら男はその責任を取らなければならない。

それなのに逃げるなど言語道断だ。

しかし、怒りを抑えて私は別の事を質問した。

「では、誰が育てたのですか？」

「孤児院さ。まぁ、他の奴等は何らかの理由で親と離れて暮らしている奴等でな。餓鬼の頃は、周りが両親と抱き合っているのを見ては指を銜えたもんだ」

だが、決して両親が欲しいとは思わなかったらしい。

「どうしてですか？」

「今さら両親を持った所でどうなるか、と思ってな。それに一々他人に指図されるのも嫌だったんだ」

その他にも子供の頃から暴れん坊だった自分を誰も引き取ろうとしなかったらしい。

「お陰で15歳になった時は手の付けられない悪餓鬼になったんだ」

だが、それでも生きていく為には何かをしなければならない。

「15歳で孤児院を出て、それから夜間学校に通った」

夜間学校で取り敢えず何らかの資格を得たかったらしい。

そこを卒業後、18歳で軍隊に入ったらしい。

「そこで戦う術を学んだ。だが、それでもまだ足りなかった」

一人で何でもこなせるようになりたい。

そう思い海外の軍隊に入隊したらしい。

「そこには5年間いた」

そこで更に様々な資格を取り、経験を積み傭兵になったらしい。

「まぁ、俺のしみったれた話は終わりだ。さぁ、上がろうぜ」

テツヤ殿は話を打ち切ると湯から上がった。

私たちもそれに続く。

私はテツヤ殿の背中を見て、何となくだが哀しい背中で弱々しい印象を受けた。

部屋に戻った私たちは明日の事について話あった。

「明日、城の外に出たい」

「城の外に？」

「あぁ。俺が目覚めた場所に行きたい」

そこに何かあるかもしれない。

ワイド様は暫し考えてから解かった、と頷いた。

「サンキュ」

「さ、さんきゅ？」

「ありがとうと言う意味だ」

「そ、そうか・・・・・・」

ワイド様は解からない言語に戸惑いながら礼の意味と言われて、微笑んだ。

「男のくせに笑顔は可愛いな」

「お、お前、そっちの気があったのか？」

私も少なからずテツヤ殿に対して失礼な眼差しを向けた。

「馬鹿言うな。俺は男色家じゃない」

何で私たち二人が当たり障りのない言葉で表現したのに、そう露骨に言うんですか！！

私は思わず大声で言いたかった。

だが、夜という事もあり駄目だ。

そんなこんなで眠る事になった。

終始、私とワイド様は神経を尖らせる事になったのは聞かなかった事にして欲しい。

サルバーナ王国（前書き）

ここでサルバーナ王国の説明をします。

下手くそな説明でしょうが、勘弁して下さい。（汗）

サルバーナ王国

名前：サルバーナ王国

首都：ヴァイガー→ヴァエリエに転居→再びヴァイガーに転居する

本城：エスカータ城→リブリーブス城→ヴァルハラに改名

紋章：赤い布に獅子と剣が描かれている→赤色・藍色・緑色・水色の布に鷹が描かれている

政治：君主制

土地：内陸国

王族：ロクシャーナ家→鷹見家

概要：流浪の民とされているフォン・ベルトが家族や付いて来た者達と共にこのサルバーナ王国を築き上げたと言われている。

フォン・ベルトに関しては記録が殆ど無いが、流浪の民である事は確かであるという事は確認されている。

先ず最初に周辺を山に囲まれたヴァイガーという土地に城を建て群として誕生したと書かれている。

やがて人々が増え始めた事を機に安定した更に奥の内陸部のへと移動した。

そこが公式的には第二の首都と専門家たちの間では言われているが、ヴァイガーは首都ではないと言う者もいる。

フォン・ベルトの子息が後を継ぎ、内陸部などを切り開き周辺の部族ないし森林を開拓または併合して現在のサルバーナ王国の基礎を築き上げた。

周りが陸に囲まれている事から貿易などに関しては他国に遅れている面があり、海などがある場所を見つけては遠征を続けていたとされている。

４代目までは遠征なども順調だったらしいが、５代目以降は遠征などをしたせいで起きた人民の信頼などを回復させる事になった。

１２代目国王、ガルバーが国王になってからは再び遠征などをする事になり、親交のあった国にも戦を仕掛けるなどして国内外共に信頼を落とす結果となった。

しかし、ガルバーの正妃であるサラが女王になり、ガルバーの犯した罪を謝罪し多額の謝罪金などを払った事で円満な関係に戻った。

全体的に山と陸に囲まれた内陸国なので海外の情報も伝わり難いとされているが、天然資源などは豊富とされている。

後に反乱が勃発し、内乱になり一度は国内が二分になったが１３代目国王となる鷹見徹夜の活躍により一つになったと正史には書かれている。

また首都が再びヴァイガーへと戻ったとも書かれている。

政治は国王を主にした君主制を取っているが、ガルバーなどの事もあり絶対君主制から制限君主制に変わったとされている。

主な内容として国王が国や人民に対して何かしら災いになる事をしようものなら、力のある貴族がそれを止められる事。

または臣下が力づくで国王を止める事も出来るとされた。

しかし、これが本当に制限とされているのかは疑問視される声が当初から出ていたとされている。

その他にも、これが逆に悪用される元になるとも言われており、サルバーナ王国の内乱もこの制限君主制が悪用されたからとも言われている。

鷹見徹夜が国王になると人民などからも代表者を選び出し政治に参加させる事を始め、国際社会に人民の声を聞き届かせるようにしたと言われている。

本城はエスカータ城で城下町を囲んだ造りとされており、水堀なども設けられており敵に対しての備えはあるとされていた。

だが、他国からは「無防備な城」と渾名されてその名の通りあっさりと内乱が勃発した時は攻め落とされた。

ヴァイガーに首都が移されると山などに囲まれた天然の要塞となり、攻めるには5倍の兵が必要であると言われるほど頑強な城へと生まれ変わったと記事されている。

ランドルフの史記では「ヴァル ハラ」と改名されている理由が書か

れており、「兵共が集いし栄光の城」と書かれている。

第六章：目覚めた場所

翌日、目覚めた私は目の下に隈を作っていた。

昨夜の事もあり、どうも安眠できなかった。

それが無駄だと解かったから何とも無駄な行動だと思わざるえない。

ワイド様も同じである。

その元凶を作り上げたテツヤ殿は憎らしくも、すっきりした顔をして煙草を蒸かしている。

「飯はまだかねー」

などと暢気な事を言っているテツヤ殿に僅かな殺気を抱いてしまった時だった。

ドアが叩かれる音がした。

テツヤ殿は反射的とも言えるように拳銃を抜いて壁に張り付いていた。

「・・・誰だ？」

重く、鋭い声で訊ねるテツヤ殿に私とワイド様は唖然とした。

「私です」

「そ、その声は・・・・・・！！」

ワイド様は慌ててドアに走り寄り開けた。

外に居たのは、私より僅かに年上２０代後半くらいの男性で白いローブを被った彼の瞳は蒼い瞳で温和な光を宿していた。

サルバーナ王国の聖教を司る司教様のエドリアス・モンド様だ。

若年３０歳にして司教の地位に登り詰めた方でサラ様の信頼も厚い方だ。

「誰だ？あんた。見るからに聖職者という所か？」

テツヤ殿はガバメントをホルスターに収めながら訊ねた。

「はい。司教を務めるエドリアス・モンドと申します。貴方がタカミ・テツヤ殿ですね？」

「あぁ。そうだ」

「初めまして。貴方とは一度お会いしたいと思っておりました」

「俺と？」

「はい。立話もなんですし、中に入れて貰えますか？」

「良いだろう」

テツヤ殿は頷いてガバメントを握り締めながら背を向けて壁へと背

中を傾けた。

ワイド様はエドリアス様を中に入れて椅子を引いた。

聖騎士団は教会に忠誠を誓う。

その司教ともなれば、どんな無礼も許されない。

私は慌てて司教様の為に椅子を引いた。

「ありがとう」

エドリアス様は礼を言って椅子に腰を降ろした。

「ほら、コーヒーだ」

テツヤ殿はコーヒーを差し出した。

「ありがとうございます。これは何と言う飲物ですか？」

コーヒーは黒く見るからに得体のしれない感じだが、香りは良い。

「コーヒーと言う飲物だ。眠気覚ましにはちょうど良い」

「そうですか。では、頂きます」

エドリアス様は一礼してからコーヒーを口にした。

「香りも良いですが、味も良いですね。濃くのある味が舌に残り音楽を聞いたように余韻が残ります」

「インスタントのコーヒーをよくもまぁ、そこまで褒められるものだ」

「いんすたんと？」

「簡単に言っちまえば、湯を掛けて食べられる保存食だ」

「便利な物ですね」

エドリアス様は興味津々でコーヒーを見た。

「あんた等の国では珍しいだろうな」

そう言ってテツヤ殿は煙草を吸った。

「その細長い物は？」

「煙草だ。娯楽性だが、身体には悪い」

「そうですか。それは残念です」

どうやら吸いたかったようだ。

「何なら吸ってみるか？」

「宜しいのですか？」

明らかに目を輝かせるエドリアス様にワイド様は、また出たという顔を浮かべた。

この方は何か新しい物などを見ると興味を持つ。
それこそ遠い所にあろうと自分の足で行く程だ。
だから、仕事を放り出す・・・もとい出来ない時もある。
だが、それでも仕事はやる所が信頼されている要因だろう。
テツヤ殿に渡された煙草をエドリアス様は興味津々で見ていた。
「速く吸わないと無くなるぞ？」
そう言われて慌てて口に当てるエドリアス様。
「少し吸って肺に入れろ。そうしたら口から出せ」
言われるままにエドリアス様はやった。
煙を吐く姿は、何故か凄くテツヤ殿に似ていた。
「美味しいですね」
「あんた本当に司教かよ？」
テツヤ殿は呆れた顔をした。
「貴様っ。司教様に無礼だぞ！！」
ワイド様は大声を上げた。

耳が痛い。

「うるせぇな。少しは加減しろ」

「テツヤ殿の言う通りですね」

エドリアス様にまで言われたワイド様は沈黙した。

何だか憐れだ。

「それで、何の用だ？」

テツヤ殿はエドリアス様に渡した煙草とは別に新しい煙草を銜えた。

「一言で言うなら、興味ですね」

「興味？」

「はい」

異世界から来た者に対する純粋な興味とエドリアス様は話した。

「司教の身でありますが、これでも若い頃は学者を目指していましたから」

だから、新しい物などに興味があるのか、と私は今更に納得した。

「なるほどねぇ。ところで、あんた学者を目指していたと言うが、今でも知識は衰えてないのかい？」

「まぁ、仕事の傍らで趣味として書物を読んでいますので」

「だったら、俺にこの国の歴史や文化を教えてくれ」

「と言うと？」

「ここに住む以上は、歴史や文化を知りたいんだ」

「分かりました。教えましょう」

「すまない。礼と言っては何だが、俺に出来る事があるなら言ってくれ」

「では、貴方の国の事や世界の事について教えてくれませんか？」

互いに教え合えば、効率が良いと言うエドリアス様にテツヤ殿は頷いた。

「構わない。それで、何時から？」

「そうですね。では、今日の夜からにでも」

「了解した」

二人は交渉を終えた。

エドリアス様は、煙草をテツヤ殿が用意した灰皿に捨てた。

そして用を済ませたのか帰って行った。

「司教様が、あんなに楽しそうに話す所は初めてだ」

ワイド様は少し茫然としていた。

「何だ。いつもは違うのか？」

「何時もは司教と言う事もあるのか、威厳に満ちた態度を取っていた」

「まぁ、仕事上の顔かもしれないな」

「そういうものか？」

「たぶんな」

テツヤ殿は、もう一度、煙を吐いた。

それから食事を済ませた私たちはジープがある馬小屋に向かった。

「女王陛下じゃねぇか」

テツヤ殿はここでも煙草を銜えていたが、危うく落としそうになっていた。

「来ましたね。テツヤ殿」

サラ様の格好を見て、私たち二人も唖然とした。

サラ様の格好は城下町の格好で質素な服装だった。

だが、品格があり傍から見れば「貴族のお忍び」だと直ぐに判る。

「そんな格好でどうしたんだい？」

「テツヤ殿が出掛けると聞いたので」

テツヤ殿は直ぐに私とワイド様を見たが、私たちも首を傾げるしかない。

これは誰も聞いていない筈だ。

「女の勘とでも言っておきましょうか」

何かある、とサラ様は直感で感づいたらしい。

「女の勘、か。それなら納得だ」

女の勘は神よりも優れている、とテツヤ殿は言った。

「そうなんですか？」

「そうでないと説明できないだろ？神様だってまだ昼寝している時間だぞ」

そう言われて私は頷くしかなかった。

「それで俺らに付いて行きたい、という事か」

「はい。駄目、ですか？」

「いいや。俺らの傍から離れない、と言うなら構わない」

「ありがとうございます」

「私は反対です」

そこへワイド様が割って入って来た。

「仮にも女王陛下ともあろう方が、そのような格好で城の外に出るなど・・・・・・・・・・」

「ワイド。私は貴方に許可を頂く積りはありません」

テツヤ殿に許可を貰った、とサラ様は言い返した。

「し、しかし、テツヤが行く場所は山賊が居るのですよっ」

「テツヤ殿が居れば問題ないでしょ？」

「随分と俺を買っているな」

「貴方様なら大丈夫、と私の勘が言っているので」

「なるほど。だが、ワイドの言う事も一理ある」

それなりに覚悟しろ、とテツヤ殿は言った。

遊びではない、と暗に言い確認するかのように聞こえた。

「これでも女王です。山賊に捕まるなら潔く死ぬ覚悟です」

サラ様は懐から懐剣を取り出した。

「・・・良い覚悟だ。なら、俺もお前さんを死なせないように最大限の努力をしよう」

「ありがとうございます」

では参りましょう、とサラ様は言った。

「あぁ」

テツヤ殿とサラ様はジープに乗り込む。

それを私とワイド様も慌てて追いかけて乗る。

「何だか座り心地が悪いな」

「悪路でも走れるから座り心地は二の次だ」

ワイド様の苦言を避けるとテツヤ殿は出発すると言った。

「それじゃ、行くぞ」

鍵を回すと唸り声が上がった。

「主人が乗ったから嬉しがっているのかしら?」

サラ様の質問にテツヤ殿は苦笑した。

「こいつはそれ位で喜ぶほど淑女じゃねぇよ」

ゆっくりと走り出したジープは門を潜った。

門を出ると親衛騎士団が馬に乗っていた。

その中にはフィーナ様もいた。

フィーナ様が馬から降りた。

「女王陛下。外出ならどうか我々も御同行させて下さい」

「どうなさいますか？テツヤ殿」

「女王陛下。こんな傭兵ごときに何故、意見を訊くのですか」

フィーナ様は堅い声で言い続けた。

「フィーナ。貴方は少し態度を改めなさい。そうすれば連れて行くのを許しましょう」

「そ、それは・・・・・・・・・」

「テツヤ殿。出して下さい」

「あいよ」

テツヤ殿はサラ様に促されてジープで走り去った。

「て、テツヤ殿。いいんですか？」

「付いてくる積もりなら付いて来る。待ってやる義理もなければ義務もない」

サラ様は初めて乗るジープにはしゃいでおりフィーナ様を見ていなかった。

「何だか哀れですね」

親衛騎士団を思うと私とワイド様は少し同情せずにはいられなかった。

フィーナ様は直ぐに馬に乗ると親衛騎士団を率いて後ろから追いかけてきた。

テツヤ殿は無視して走り続けた。

その間に距離は縮む所か離れて行き最後には親衛騎士団が見えなくなってしまった。

一時間ほどで私たちが襲われた場所まで着いた。

一度、テツヤ殿はジープを停めた。

「テツヤ殿が眼を覚ました場所は何処ですか？」

サラ様が当たりを見ながら聞く。

「もう少し先に行った所だ」

テツヤ殿は前を見たまま答えた。

馬の蹄が聞こえて来て振り返ると親衛騎士団が追い付いてきた。

馬たちは荒い息をしていた。

「やっと来たか」

溜め息を吐きながらテツヤ殿は言うと再びジープを走らせた。

暫く行く。

そこは何の変哲もない場所だった。

「ここが俺の目覚めた場所だ」

ここで目を覚まし、私たちの音を聞いて来たらしい。

「さて、次に行くか」

「え?ここに何かあると思ったのではないのですか?」

「俺、そんな事を言ったか?」

「言いましたよっ」

何んだこの人は、と私は思った。

テツヤ殿が次に向かった先は・・・・・・・・私の先輩が埋葬され

た場所だった。

土が被せられたそこには剣が突き刺さっていた。

3人分。

「・・・・・・・・・」

私は無性に自分が無力だと思い知らされた気分になり落ち込んだ。

ワイド様も墓を見て、鎮痛の表情を浮かべた。

テツヤ殿は墓に近付くと何時の間に用意したのか酒を持っていた。

墓の前まで行き止まった。

「あんた等に伝言だ。ランドルフは王女を無事に城へと連れて帰った。今日は女王自ら・・・あんた等を労いに来たぞ」

私とワイド様はテツヤ殿が突然言った事に眼を見張ったが、サラ様は自然とした動きで墓まで近付いた。

「我が娘であるエリーナを命懸けで護ったそなた達の行動には感謝の念が絶えません。・・・女王として礼を言います」

サラ様は墓に深く一礼してくれた。

私は無意識に涙を流していた。

サラ様が、女王が先輩達に頭を下げて礼を述べてくれた。

それが嬉しかった。

フィーナ様に犬死したと言われた時は悔しかったが、テツヤ殿の言う通り任務を全うして死んだと分かった気がした。

「これは、女王陛下からの弔い酒だ。冥途で飲んでくれ」

テツヤ殿は酒の瓶の蓋を開けて墓に掛けた。

音を立てて剣から下へと落ちる酒。

それが私には幻想的に映った。

「俺はただの傭兵だ。あんた等みたいに個人に忠誠を誓う事は無い」

だが、あんた等には敬意を表する。

どうか、安らかに眠ってくれ。

テツヤ殿は被っていた帽子を取り胸の位置に当てると小さく一礼した。

これがテツヤ殿の弔いなのだろうと感じる。

「・・・ランドルフ。私たちも行くぞ」

ワイド様を見ると、ワイド様も涙を流していた。

普段、泣かないワイド様だが、やはり女王が弔ってくれたのが嬉し

いのだろう。

私とワイド様も墓に歩み寄り言葉を紡いだ。

「聖騎士団の長として貴殿らのような勇敢な部下を持って共に戦えた事を光栄に思っている。安らかに眠ってくれ」

『・・・・先輩。頑張ってこれからも王国を護って見せます』

私は眼を瞑り、眠っている先輩達に誓った。

必ず王国を守り抜くと。

短い時間だったが、私には長い時間に感じられた。

それを親衛騎士団は黙って見ていた。

そして帰ろうとした時だった。

テツヤ殿は何かを察したのか周りを見始めた。

「どうなさいました？」

サラ様が隣から訊く。

「・・・誰か居る」

低い声でテツヤ殿は言うとＡＫＭアサルトライフルを構えた。

「おい。小娘。女王を護れ。敵がいる」

フィーナ様は敵という言葉に剣を抜き親衛騎士団でサラ様の周りを固めワイド様も剣を抜いた。

剣が無い私は、ベレッタを構えた。

皆が気を張り巡らせていると不意に複数の矢が飛んできた。

あの時の同じだ。

「来たぞ！」

テツヤ殿は矢をＡＫＭで撃ち落としていく。

その動きをワイド様やフィーナ様は眼を見張る。

「おい。女王をジープの横に移動させろ。ジープを盾にするんだ」

テツヤ殿に言われるままにフィーナ様はサラ様をジープに移動させる。

その間にも矢は飛んできた。

私もテツヤ殿のように矢を狙ったが、まったく当たらない。

「弾を無駄遣いするな」

テツヤ殿は私を後ろに下がらせると矢を撃ち落として行く。

「おい。ランドルフ。この光景・・・思い出さないか？」

テツヤ殿はこんな時でさえ煙草を吸いながら私に話し掛けてきた。

「山賊・・・ですね」

私は場所と言い攻撃の仕方と言い数日前の山賊を思い浮かべる。

「おい。姿を見せたらどうだ?」

テツヤ殿は森林の中に向かって声を上げた。

すると矢の雨が止まり、森林から数十人の山賊達が出てきた。

「・・・あんたか。俺の可愛い子分を倒したのは」

頭領と思われる大柄な男が山賊達の中から出てきたテツヤ殿を睨んできた。

「可愛いは別だがお前らの部下を叩いたのは俺だ」

テツヤ殿は頷いた。

「それで俺にお礼参りでもしに来たのか?」

「それもある。だが、女王が自ら俺らの縄張りに来たんだ。これを見逃さない手はない」

頭領は人の悪い笑みを浮かべた。

「身代金でも要求するのか?」

「当然だ。一国の女王なら一生遊べる金が手に入るからな」

それに・・・・・・、と続けた。

頭領はサラ様を好色な眼で舐め回すように全身を見てから呟いた。

「こんなに良い女だ。たっぷりと可愛がらないと男が廃る」

「それは残念だな。生憎と女王は渡さない」

テツヤ殿はサラ様を護るように立つと言い続けた。

「墓の奴らに言ったんだよ。女王を城まで無事に帰すと」

何よりこの女は・・・お前みたいな男には勿体ない、とテツヤ殿は言った。

「言ってくれるぜ。しかし馬鹿か？お前」

この状況で勝てるのか？と頭領は訊く。

確かに周りを見る限り数では圧倒的に不利だ。

しかし、テツヤ殿はまるで意に関しない様子で笑いながら断言した。

「勝てるさ」

テツヤ殿は左手でポン、と何か丸い物を投げた。

丸い物は空中を回る。

「眼を塞げっ」

テツヤ殿はＡＫＭを構えながら私たちに叫んだ。

私たちは慌てて眼を瞑った。

山賊の頭領達も眼を瞑ろうとしたが、ピカッ、と何か光った感じが眼を瞑った上からも感じた。

「ぎゃあ!?眼が見えない!?」

「閃光筒だ。どうだ?感想は?」

テツヤ殿の笑い声が聞こえる。

テツヤ殿は眼が見えるのか?

それと同時にＡＫＭアサルトライフルの音が連続音で雷のように森の中に響き渡る。

ぎゃあ、ひぃ、痛ッ、次々と悲鳴が聞こえてくる。

その中で私は、うっすらと眼を開けるとテツヤ殿が一人で山賊達を相手に戦っていた。

テツヤ殿は一人で敵を一掃してしまった。

しかし、殆ど腕か足を狙うだけで殺しはしなかった。

サラ様の手前、無益な殺生は犯さないようにしているのかもしれないと思う。

「もう開けていいぞ」

言われて眼を開けると、盗賊達は頭領だけを残して倒れていた。

「さぁ、残りはお前だけだ。どうする？」

テツヤ殿はＡＫＭアサルトライフルを向けて尋ねた。

「て、てめぇは、悪魔かっ」

「悪魔・・・ねぇ。よく言われるし、お前から見たらそうかもしれないな。それでどうする？死ぬか、それとも逃げるか？」

「お、覚えておけよ！？」

頭領は一人、慌ただしく藪の中に消えた。

「覚えておけよ、か。今時、三下の悪党も言わない捨て台詞だぞ」

テツヤ殿は冷めた口調で言うとＡＫＭを肩に当て向き直った。

「大丈夫か？」

「は、はいっ」

私が頷くとテツヤ殿はサラ様達にも訊いた。

「はい。大丈夫です。所で、先ほど光った気を感じたのですが？」

「あぁ。あれは閃光筒だ」

「閃光筒？」

「光で相手の視覚を一時的だが、麻痺させる。その間に攻撃した」

「テツヤ殿は大丈夫だったのですか？」

「俺は、耳栓とサングラスをしていたからな」

目に掛けていた黒い物を外すテツヤ殿。

「これはサングラスと言って、在る程度だが光を防止する事が出来る。それで防いだ」

「便利な物ですね」

「まぁな。本来なら全員を殺しても良かった。殺した方が良いんだが、あんたの手前の事もあり殺さなかった」

やっぱりサラ様の手前だったらしい。

「それは感謝します。・・・例え山賊でも法の裁きを下さなければなりませんから」

「あんな野郎にまで法の慈悲をお前さんは与えるか。やっぱりあんたは聖母だな」

テツヤ殿は煙草を地面に捨て靴底で揉み消した。

それに対してサラ様は感謝の言葉を述べて一礼した。

「こいつ等は放っておくとして俺らは帰ろう」

テツヤ殿は未だに呻き声を上げる山賊達を一瞥するとサラ様を促してジープの助手席に乗らせた。

私とワイド様は後ろに乗り込むとテツヤ殿自身は運転席に乗り込んだ。

「それじゃ行くか」

テツヤ殿はエンジンを掛けて、ジープを走らせた。

この時も親衛騎士団は置いてけぼりを喰らった。

何だか憐れだ。

第七章：射撃訓練

城に着いたのは正午になっていた。

テツヤ殿は馬小屋に入れてから私たちを下した。

「テツヤ様には何と礼を言ったらよいか分かりません」

サラ様はジープから降りるとテツヤ殿に深く一礼をした。

「さっき言っただろ？何度も礼を言わないでくれと」

対してテツヤ殿は困ったような口調で言う。

この人にも困る事があるのかと不謹慎にも思った。

「それでも礼を言わせて下さい」

テツヤ殿はサラ様の態度に困惑しながらも受けてくれた。

その後、サラ様は臣下の者達に仕事があると言われて去って行った。

「やれやれ。女王陛下も大変だな」

テツヤ殿は煙草を銜えてまた火を点けた。

「テツヤ殿って煙草を吸わない時が無いですよね？」

「あぁ。俺は死ぬまで酒と煙草は離さないだろうな」

そう言いながらテツヤ殿は煙を吐いた。

それから部屋へと戻るとエドリアス様が椅子に座っていた。

「司教様じゃねぇか。何か用か？」

テツヤ殿が訊ねると司教様はこう言った。

「貴方様と食事をしたいと思いまして」

「女みたいな事を言う司教様だな」

笑いながらテツヤ殿は椅子に座り、私たちも椅子に腰を降ろした。

それから直ぐに食事は運ばれてきた。

食事を開始するとテツヤ殿は、手づかみで食事をする。

食事をしている間、エドリアス様はテツヤ殿と夜の事について話していた。

「今日は取り敢えずですが、サルバーナ王国の事について説明します」

「俺も女王陛下から教えられただけじゃ、どうも解からない点があるから頼む」

「分かりました」

エドリアス様は頷きながらスプーンでスープを掬って口に運んだ。

午後になるとエドリアス様は去って行き、私たちは弓を練習する場へと移動した。

「じゃあ、またやってみろ」

私は言われるままにベレッタを両手で構えて撃つ。

しかし、やはり外れてしまう。

テツヤ殿はここ一杯に弾丸を使用すると言っていた。

それを考えるとまだまだ先は長いと思う。

何発か撃っているとテツヤ殿が待った、と言ってきた。

「どうしました?」

私が訊くとテツヤ殿はベレッタを貸せ、と言った。

言われるままに渡すとテツヤ殿は慣れた手つきで弄り始めた。

そして長細い物を下から取り出した。

「何ですか?それは」

「マガジンと言って弾を入れるんだが・・・・・可笑しいな」

テツヤ殿は渋面を浮かべた。

「何がですか？」

「いや、こいつの弾数は全部で１５発だ。だが、お前さんは森とここで既に全弾を撃ち尽くしている」

テツヤ殿のＡＫＭもそうだ。

テツヤ殿は携帯を取り出して耳に当てた。

『はーい。こちら宅配人でーす！！』

この前と同じく元気のある声が聞こえてくる。

「俺だ。少し聞きたい事がある」

『プライベートな質問は受け付けませんよ？』

「違う。ベレッタとかの事だ。弾が減らないんだが、どうしてだ？」

『それは簡単です。貴方様の武器も届ける武器も弾を無限にさせてもらいました』

「随分とサービスが良いな」

『お客様の気持ちを考えて宅配するのが我が社のモットーですので』

「殊勝な心がけだ。まぁ、今日はまだ注文はしない。だが、今度する」

『では、また何かあればご連絡下さいー』

そう言って声は途切れた。

「という訳だ。ランドルフ。弾数なんて気にせず撃ち続けろ」

私は言われるままに撃ち続ける事にした。

これを扱えるようになれば剣が無くなった代わりになる。

しかし、幾ら撃っても全く的を掠りもしない。

これには落ち込む。

見かねたテツヤ殿は私に助言した。

「肩に力が入り過ぎている。もっと肩の力を抜いて神経を集中させろ」

私は肩の力を抜き、心を集中させた。

「的をイメージしろ。奴の的に頭に狙いを定めて、撃て」

テツヤ殿の言葉を聞きながら私は的を敵と見て、頭に狙いを定めた。

「相手は兜を被っている。しかし、顔面は何もない。何処を狙えば良い？」

相手は兜で防御している。

しかし、顔は何もしていない。

そうなれば、狙うは・・・・・・・・・

眼だ！！

私は引き金を引いた。

弾は真っ直ぐに飛んで相手の眼に当たった。

「どうだ?当たっただろ?」

「は、はい」

私は、初めて当たった事に喜びを感じた。

「剣とかは体格によって左右されるが、銃に体格は関係ない。ようは腕だ」

腕で全てが決まる。

そうテツヤ殿は言った。

私はこれなら剣では遅れを取るが、負けないという気持ちになった。

まだまだ先は長い。

だが、頑張ってテツヤ殿くらいに上手くなれば私も強くなれる。

そう思った。

「さぁ、今の感覚を忘れないでやってみな」

「は、はいっ」

私は銃を構えて、先ほどの感覚を忘れないように撃ち続けた。

テツヤ殿は私から離れた。

私は構わず撃ち続けた。

弾は当たったり、掠ったりした。

さっきが嘘のようだ。

「コツを掴んだようだな」

テツヤ殿は煙草に火を点けながら私に言った。

「本来なら簡単にコツを掴めたりしないもんだが、お前には才能があるようだな」

「剣の才能が無いのは、騎士として情けないがな」

ワイド様の言葉に私は消沈した。

そう私は騎士。

騎士が剣の才能に欠けるのは、痛い。

「何言っているんだ。剣が駄目でも、銃の才能があるならそれを伸ばせば良い。まぁ、剣も覚えて置いて損は無いだろうな」

テツヤ殿は煙を吐きながら言った。

「お前は剣を使えるのか？」

「まぁな。ただ、お前さん方の剣術とは違うが」

これを聞いてワイド様は興味を示した。

「今度、やってみるか？」

「望む所だ」

「よし。決まりだ。互いに剣術を学べる事は良い事だ」

そして、とテツヤ殿は続けた。

「お前さんにも銃の使い方を教えてやる」

「良いのか？」

「あぁ。お前も興味があるんだろ？」

ランドルフを見ていた時、羨ましい顔をしていたと指摘するテツヤ殿。

ワイド様は、実はそうだと言った。

テツヤ殿は笑いながら、ワイド様にも銃をやると言った。

2人が笑い合うのを聞きながら私は練習を続けた。

この時、私はこの銃の練習で命拾いするのをまだ知らない。

それから2時間ほど立ち続けて銃を撃っているとテツヤ殿が休憩しろ、と言ってきた。

私は直ぐに休憩をした。

2時間の練習で先ず先ずと言えるほど弾が的に当たるようになった。

使われなくなり苔などが生えた椅子に腰を下すとテツヤ殿が私に煙草を勧めてくる。

「どうだ?」

「じゃあ・・・貰います」

少し考えてから煙草を貰う事にした。

口に銜えるとテツヤ殿がジッポー・ライターと呼ばれる物で火を点けてくれた。

ゆっくりと口の中に煙を入れて、吐き出した。

何だか、気が緩むと言うか、気が楽になる。

テツヤ殿が娯楽と称したのも解かる気がした。

「どうだ？」

「何だか気が緩むというか、楽になります」

張り詰めた気を和らげるにはちょうど良いかもしれない。

「ワイドと違って、煙草の味が分かる奴だな」

テツヤ殿は立ったまま煙草を吸い続けていた。

ワイド様は何処か一人だけ仲間外れにされた気分でいるのか憮然としていた。

そんなワイド様を知らないのか、テツヤ殿は私に話を続けた。

「お前の射撃を見ていると、やはり才能があるな」

「そうなんですか？」

「あぁ。これなら十分に護身できる」

「護身、ですか？」

「あぁ。拳銃ってのは元からそういうものだ。まぁ、両手持ちだから、今度は片手で早撃ちを練習しろ」

「片手で、しかも早撃ちですか？」

「そうだ。もしも、片手が怪我をしたら、両手では出来ないだろ？」

確かに。

「それに片手で、味方を引き摺らなければならない時もある」

なるほど、と私は納得した。

「まぁ、拳銃の次はライフルだな」

「はい」

「まぁ、あっちの方は初心者でも扱い易いから直ぐにコツを掴めるさ」

それに手入れが簡単とまた言った。

「どれ位ですか？」

「そうだな。俺の奴が１５分位でお前の方は俺より簡素な作りだから・・・１０分くらいか？」

「そんなに短いんですか？」

「そうだ。これなら戦場でも直ぐに手入れができるだろ？」

テツヤ殿の言葉に私は頷いた。

第八章：国内の火種

その後、休憩を終えた私は射撃の練習を再開した。

射撃をしている時は、何だか楽しい気分だった。

剣術は嫌な時間だと感じる時もあったのに射撃はまるで感じない。

その間、テツヤ殿はワイド様と何やら話をしている。

ワイド様は煙草を強請り、二度目の喫煙に挑戦した。

どうやら私に対抗意識を持ったのか、または自分だけが仲間外れにされて嫌なのか？

私は後ろで二人のやり取りを感じながら片手撃ちに挑戦してみた。

両手で構えるのと違って、思うように当たらない。

片手撃ちがこんなに難しいとは・・・・・・・・

私は片手撃ちの難しさに戸惑いながら、練習を続けた。

むぅ、難しい。

「中々、コツが掴めないようだな」

テツヤ殿は私の後姿を見て声を出して笑った。

「片手撃ちがこんなに難しいとは思いませんでした」

私は泣き事を言いながら撃ち続けるが、まるで当たらない。

「まぁ、そう言うな。練習を続ければ当たるようになる」

テツヤ殿は続けろと言いながら、煙草を揉み消して新しい煙草を銜えたのを後ろで感じた。

私は言われるままに、また撃ち続けた。

— —

―――――――――――――――

「どうした？ワイド」

テツヤは、私の様子を不審に思ったのか声を掛けてきた。

「・・・いや」

私は首を横に振った。

ランドルフの姿が、何処か楽しい様子に見えたのが印象的だった。

ランドルフはまだ騎士としては未熟者だ。

しかし、剣術から馬術、それ以外にも騎士としての心構えなど覚えるのに必死で私も眼を掛けていた。

それを今はテツヤが鍛えている。

その姿が何処か楽しげでランドルフが遠くに行ってしまった感じに襲われた。

違うのだが、やはりそう思ってしまう。

テツヤは私をチラリと見て、煙草を勧めてきた。

「一本、吸って気を楽にしな」

私はテツヤに勧められるままに煙草を貰い、火を点けてもらった。

「お前さん、ランドルフが何処か遠くに行ったと感じたんだろ？」

唐突に言われた言葉に私は、驚いたがランドルフに聞こえていないのを知り、静かに頷いた。

「あぁ。正直、ランドルフは手の掛る弟みたいな存在だった」

ひたむきに私たちの後を付いてくる姿は弟のような息子のような目に見えた。

だからランドルフは我が聖騎士団の中では可愛がられている。

それが何処か遠くに行った感じだと答える。

「お前さんの事を見て、そう思った」

こいつは人の心を読むことが出来るのかと思ったが、直ぐに否定した。

恐らく数多の死線を潜り抜けた者が得られる洞察力で推測したのだろう。

「大した男だな。お前は」

煙草を吸いながら素直に述べる。

変な味だが、心は誰かに抱き締められた気分になるような味であり感覚だ。

「何を言ってるんだよ。俺はただの傭兵。それ以上の存在ではない」

テツヤは私の言葉に苦笑しながら煙草を吸い、ランドルフを見た。

私も釣られて見た。

ランドルフは片手撃ちを繰り返しているが、未だに的には当たらない。

テツヤはまだまだ、と言っているが楽しそうに顔を綻ばせていた。

煙草を吸い続けると肺が少し痛むが大した事ではない。

テツヤは私に腰のガバメントという物を取り出して渡して来た。

「お前さんも撃ってみるか？」

「私が？」

撃ってみたいという気持ちはあった。

それをテツヤは指摘して私に新たな武器を用意すると言ってきた。

この男の指摘通りテツヤの使う武器に興味はあった。

この男がどんな武器で、どのように扱うかは見てきたが、やはり自分の肌で感じて見たい。

これも騎士として、戦う者として生まれた者の性分なのかもしれない。

「どうする？」

「撃たせてくれ」

やはり撃ってみたい。

そう自分の心が言っていて、抑えられなかった。

ガバメントは、剣に比べれば軽くて少し違和感がある。

ただ、握りは手に吸いつく感じだ。

いや、吸い付くというより食い付くという感じの方が正しい。

テツヤやランドルフの扱いを見て、一通りは分かるからトリガーと呼ばれる所に一指し指を入れた。

そして撃鉄と呼ばれる部分を親指で起こし、地面に向かい引いた。

一瞬、先がオレンジ色に光って激しい音がすると同時に地面に穴が空いた。

恐らく敵は何が起きたのか分からないだろう。

その時には、傷が付いている。

恐ろしい武器と思うと同時に鼻に微かに焦げ臭い香りがする。

何の匂いだ?

分からないが、何故か心地よい香りとも感じ取れる。

「どうだ?初めての感想は?」

テツヤに話し掛けられて我に戻り、質問に答える。

「恐ろしい武器だな。これが相手では私の剣も折られる訳だ」

テツヤに折られた剣は修理中で今は代わりの剣を差している。

「まぁ、そいつはランドルフが使っている弾より強力だ」

どうやらランドルフが使用しているベレッタという銃より、これは強力な武器だと理解した。

「しかも頑丈な造りだから、確実に作動する」

剣がちゃんと相手を斬れる剣と同じだとテツヤは説明してくれて解かり易かった。

「なるほど。それで、そっちはどうだ?」

テツヤの右側に置かれているＡＫＭアサルトライフルを指差す。

「こいつも同じさ。しかも安いから俺らみたいな傭兵には愛用されるんだ」

なるほど、と私は納得した。

まぁ、前に説明されたが改めて聞いて納得する。

「こいつも撃ってみるか?」

「良いのか?」

これは俗に言う剣だ。

剣は騎士の魂。

こいつからその魂とも言える物を取っても良いのか?

「そんな深刻に考えるなよ。こいつは戦う道具。あんたも万が一、使うかもしれないだろ?」

「・・・・・・・・・・・・」

私は、考えてからＡＫＭアサルトライフルを手に取った。

こっちは剣と同じ位の長さで、ガバメントに比べれば重いが、逆に安定した感覚を得られる。

「地面に撃ってみな。ただし、間違っても自分の足を撃ったりするなよ？」

テツヤに言われて肝を冷やした。

これで撃たれた者の身体を見たが、まるで獣に食い千切られたように身体が破られていた。

恐らく治すのに１年以上は掛るだろう。

私は自分の足を撃たないように気を付けながらトリガーを引いた。

こっちは連続で音と光がして地面に数個もの穴が空いた。

「貸してみな」

テツヤは私からライフルを取り上げて、ランドルフを横にずらすとＡＫＭを撃った。

慣れた手つきで撃つテツヤ。

人型の的は、あられもなく挽肉になった。

「凄い」

私は思わず言葉を出した。

もしも、この男が敵だったら私は死んでいるだろう。

敵かどうか判断する為の監視だが、私はもう確信していた。

この男は敵では無いと。

部下の墓で、あいつは酒を掛け、そして労いの言葉を掛けた。

敵ならそんな事はしない。

仮に敵だとしても、こいつは尊敬できる敵だと思う。

姑息で狡猾な傭兵だと思っていたが、こいつは間違いなく今まで会って来た男の中でも上位にある男だ。

この男は敵では無い。

味方かと問われれば答えに困るが、敵では無いという事は確信できるし断言できる。

「・・・・テツヤ」

私は奴の名を初めて呼んだ。

「何だ?」

テツヤは振り返った。

「この国で我らと一緒に仕えないか？」

テツヤは最初、何を言っているんだ？と顔をしたが、直ぐに苦笑した。

ランドルフの方は驚いていたが。

「どうしたんだ？行き成り」

「今日で3日だ」

「それで？」

「お前を見ていて、確信した。お前は敵じゃない」

「随分と早い確信だな」

「そうかもしれないな。だが、お前は敵じゃない」

「だが、傭兵だぜ？」

「そうだ。敵では無い。しかし、傭兵。そうなると色々と面倒な事になる」

現王であるサラ様は前王ガルバー様の妻で前王亡き後は、サルバーナ王国を切り盛りしている。

しかし、女の身である事から色々と陰謀の的にされたりもする。

現に今も、サルバーナ王国は内部では反乱の火種が燻っている。

サラ様とは腹違いの御子息で王子であるリカルド様。

この方はガルバー様の側室が産み落とした方でガルバー様に容姿が似ており性格も似ている。

野心家で無類の戦好きであり、好色家であり乱暴狼藉を働く。

その野心はサラ様を亡き者にして自分が王になろうとしている。

元々ガルバー様が戦で死んだ後は本来ならリカルド様が男子だから継ぐ筈だ。

だが、それは国として良い事ではない。

現に臣下たちはリカルド様を毛嫌いしていた。

そしてサラ様に女王として国を治めてくれと懇願したのだ。

最初はサラ様も嫌がっていたが、何度も説得されて承諾した。

これにリカルド様は怒り謀反を起こそうとした。

それを先に察知したサラ様は、リカルド様を辺境の地に追いやった。

本当は殺した方が良かった。

しかし、そんな事をすれば王国が乱れていると周辺諸国に知れ渡り不味い状況になる。

だからこそ辺境の地に追い遣ったが、またいつ牙を剥くか分からない。

そういった事を考えるとテツヤのような男を自陣に入れるのが得策だ。

所が、肝心のテツヤは非常にあやふやな立場に居る。

女王の客人ではあるから下手な真似はしないが、テツヤの話は既に広がっている。

それを考えると、どうしてもこの男には正式に何かしらの職に付いて貰わないと困る。

「あんたの言わんとしている事は分かった」

テツヤは私の眼を見て頷いた。

「良いだろう。この国に仕えよう」

ただし内部の者から信頼されないと駄目だな、とテツヤは言った。

恐らくかなり厳しいだろう。

傭兵となれば金で動き、裏切るという考えがサルバーナ王国でもあるし、残りの国でも同じ事だ。

それを払拭させるには何とか手柄や信頼を勝ち取らなければならない。

「私も出来る限り力は貸す。お前の力は必要となる」

何れ、この国は戦乱に包まれるだろう。

「と言う事は、この国も国内外を問わず、火種が在る訳か」

「・・・あぁ」

何処の国に行こうと、必ず小さな火種はある。

それを上手く起こさずに消火させるか、またはそれを起こさせて、消化させるかの違いだ。

サルバーナ王国は、まだその状態にはなっていないが、何れそうなる事は否定できない。

「それで、俺をどのようにする？」

「私個人の考えでは、先ず聖騎士団の一員としてランドルフと一緒に行動させる」

それで下手な真似は出来ないように、と表向きはする。

「なるほどな。しかし、あの小娘たちはどう思うかな？」

「フィーナ殿なら安心しろ。女王を始め司教様も居る。あの方を抑えるのは簡単だ」

親衛騎士団の長であり有力な貴族の出ではあるが、それだけであり抑えるのは簡単である。

しかし、残りの方を抑えるのは骨が折れる。
時間を掛けていかなければならないが、そんなに時間があるとは私自身、思っていない。

「まぁ、気長にとは言えないだろうが、俺個人としても出来る限りはする」

テツヤは煙草を蒸かしながら言い、私を見た。

「何はともあれ、宜しくな。聖騎士団長様」

「そうだな」

テツヤの態度は何処か状況を面白がっているように見えた。

しかし、その余裕とも言える態度が私には何処か頼りな印象を受けた。

第九章：嫌な胸騒ぎ（前書き）

またもや誤字の指摘がありましたので、直しました。（汗）

第九章：嫌な胸騒ぎ

訓練を終えた私とテツヤ殿、ワイド様は部屋へと戻り3人で煙草を蒸かした。

「今日の訓練はどうだった？」

テツヤ殿に訊かれて私は不謹慎と思ったが、楽しかったと話す。

「そいつは良かった」

テツヤ殿は笑いながら煙草を吸い、素手で揉み消した。

私たちも煙草を吸い終えると、水が入った桶に煙草を入れて火を消した。

「さて、風呂にでも入るか」

テツヤ殿に促されて食事まで時間があるから風呂に入ろうと結論に到り、浴室場に向かった。

テツヤ殿はＡＫＭアサルトライフルとコルト・ガバメントを持ち、私もＳＫＳカービンとベレッタＭ９２Ｆを持った。

浴室場に行く途中でフィーナ様と鉢合わせした。

フィーナ様の後ろには親衛騎士団のメンバーも何人かいた。

「よぉ。小娘」

テツヤ殿は、フィーナ様を見ても微動だにせず笑った。
対してフィーナ様は炎を宿した瞳でテツヤ殿を見た。

「傭兵が・・・・・・・・」

あの時の護衛で親衛騎士団として、まるで活躍しなかったのを根に持っているように思えた。

「あぁ。傭兵さ。それで今日は、護衛でも付けて来たのか？」

馬鹿にするように笑うテツヤ殿。

「テツヤ。余り気を高ぶらせるな」

ワイド様がテツヤ殿を戒めた。

「これは失礼した。どうぞ、許して下さい。親衛騎士団団長殿」

テツヤ殿は見るからにわざとらしい態度で謝る。

しかし、フィーナ様は気を良くしたのか、機嫌が良くなっていた。
単純な人だと思ってしまった。

「ふんっ。最初からそのような態度で居れば良いのだ」

笑いながらフィーナ様は去って行った。

「あの小娘、煽てると簡単に転がるな」

テツヤ殿はフィーナ様が居なくなってから呟いた。

「まぁ、育ちのせいもあるから、自分が崇められると嬉しいのさ」

フィーナ様は王国でも指折りの家柄の娘。

だから、幼い頃から崇められてきた所がある。

ワイド様はそこを指摘した。

「ああいうお嬢様育ちは操るのが簡単だ」

確かに、それは言えている。

そう私は思った。

「まぁ、俺らは風呂に入ろうぜ」

テツヤ殿に促されて、私とワイド様は浴場へと向かった。

浴室に行くと、私たち以外は誰も居なかった。

私たちが入る時は皆は嫌がっているのか？と思ってしまった。

「ランドルフ。ベレッタを持って行けよ？」

私は了承して、ベレッタを持ちながら手拭いで、前を隠した。

浴室に入り、テツヤ殿は先に頭から湯を被った。
その間も銃を傍に置いてある。
「テツヤ殿は用心深いですね」
「傭兵ってのは、何時も狙われているもんだ。そう思っておかないと、気が付いたら死んでいる」
何とも重い言葉だと感じた。
「俺がまだ新兵の頃、先輩の傭兵が風呂に入っている時、銃を忘れたんだ」
そこを襲われて死んだ、とテツヤ殿は言い以後は風呂場にも銃を持って行くようにしたらしい。
「テツヤ殿は経験を大事にしているんですね」
「経験を大事にしない奴は、直ぐに死ぬし足手纏いだ」
テツヤ殿はそう答えて、風呂のドアを開けた。
テツヤ殿はＡＫＭを持ったまま風呂の中に入った。
「さて、明日からテツヤとお前はコンビを組んでもらうぞ」
ワイド様は私に向かって言った。
「分かりました」

私は頷いた。

「よし。それでは、テツヤ。明日から頼むぞ？」

「了解。聖騎士団長殿」

テツヤ殿は笑いながらワイド様に向かって頷いた。

風呂から上がった私たちは食事を取った。

そこへエドリアス様が書物を山のように持って現れた。

「仕事ご苦労だな」

「いえいえ。実は、楽しみにしていたんですよ」

貴方様から聞かされる知識を得られる事が。

「それなら早速、始めるか」

「はい」

司教様は机に書物の山をテーブルの上に置いて一冊の書物を取り上げた。

「それでは先ずこの国の歴史についてお話しましょう」

「あぁ」

「この国は、初代国王フォン・ベルト陛下が創設しました」

それまでは何も無い荒地であったが、初代国王であったフォン・ベルト様が人民と共に切り開いて作り上げたらしい。

このフォン・ベルト陛下は元は流浪の民らしく何人もの家族や仲間たちと一緒に旅を続けて自分達の暮らす土地を探していたらしい。

「まるで開拓者だな」

「開拓者とは？」

「俺が居た世界でアメリカという国があった。そこはまだ未知の領域とも言われていてな。そこへ新天地を目指して開拓しようとした奴等がいた」

彼等を開拓者と呼んだらしい。

「確かに意味的には同じですね」

エドリアス様は頷いて続きを説明した。

「最初の首都は、ここから東にある土地であるヴァイガーにありました。しかし、ここでは政などにも支障が来たすという意見が出ました」

「そこから移動して今の首都になったのか？」

煙草を吸いながら訊ねるテツヤ殿にエドリアス様は頷いた。

「はい。そのヴァイガーですが、今は誰も住んでおらず荒れ城となっています」

既に城の原型は留めておらず、殆ど何も無いと言って良いかもしれない。

「なるほど。それでその国王が国の地盤を築き、2代目から地盤を更に固めたのか？」

「察しが良いですね。2代目国王から少しずつ地盤を固めつつ、領土を広げ、国を発展させたのです」

ですが、と司教様はそこで一度、途切れさせた。

「5代目から陰りが見え始めたのです」

「まぁ、栄枯があってこその国だからな」

どんな国も何れは衰え、新たな国が栄えるとテツヤ殿は言った。

「仰る通りです。この国も、5代目から少しずつ陰りを見せ始めました。更に周辺の国も同じ事です」

5大大陸の中でも強大な力を持つムガリム帝国が以前から見せ始めていた牙を向けようとしている。

元々は小国だったが、少しずつ力を付け始めて今では大陸の覇者とも言われるようになった。

「なるほどな。これは、ワイドから聞いた事だが、女王には腹違い

の息子が居るらしいな？」

「・・・えぇ。しかし、リカルド様は辺境の地に封じられております」

「女王に反逆の意を示したからか？」

「あぁ。そうだ」

ワイド様が頷いた。

「どうせ、あれだろ？幼い頃から妙に攻撃的で、周りを全て支配しないと気が済まない性質で、自分は偉大だとか誇大妄想的な考えがあるんだろ？」

「何故それを知っているんだ？」

「昔、雇われた国の王子がそんな性格だった」

どうやら、その国も私たちの国と似たような場所だったらしい。

「なぜ、血縁も良く裕福な家庭で・・・あのような性格が生まれるのだろうな」

ワイド様は信じられないという顔だった。

「そういった家には、反逆者が出るもんだ」

そして必ずしも血縁も良く裕福な家庭だから良い者だけが輩出される訳ではないとも言った。

「確かに。テツヤ殿が言っている事は、正しいです」

司教様も同意した。

「聖書にもこう書かれております」

『汝、如何に良い家を築こうと、やがては内部から朽ちるだろう。それは家に住む者達であり内部に掬う害虫共だ。故に心して気を付けろ』

「大した聖書だ。この国を表しているような言葉だな」

テツヤ殿は短くなった煙草を銜えながら喋った。

「えぇ。しかし、今の所は、サラ様の力もありますし他の国とも友好関係です」

「以前は違うのか？」

「サラ様の夫であったガルバー様は戦好きでして・・・・・・・・・・」

このガルバー様は元サルバーナ王国の軍人でその働きぶりから王に認められて養子になりサラ様を娶ったのだ。

しかし、性格はかなり気難しく戦の事以外はまるで頭に無い方だった。

戦が無い時つまり平和な期間と言うのものは耐えがたかったらしく、

この戦間期はガルバー様やその家族にとっては大変難しい時期になってしまったようだ。

サラ様の親友でもあった侍女に手を付けたり、頻繁に癇癪を起こしたり、酒に溺れたり、度を過ぎた甘党になったりと明らかにその情熱を持て余しているような行為が多かったらしい。

「しかし、戦が近くなると落ち着きを見せて活躍してはその名を轟かせたんだろ？」

「はい。どうしてそれを？」

「俺が居た世界で“ジョージ・パットン”という軍人が居てな。そいつも似たような性格だったのさ」

随分と似たような方が居るものだと私たちは思った。

「で、そのガルバーとか言う王の最後はどうなったんだ？」

「狩猟中に馬から転落して死にました」

最後にこう言ったらしい。

『軍人の死に方ではない』

「最後の言葉までパットンと同じだな」

テツヤ殿は不謹慎にも笑った。

「おい、テツヤ。仮にも前王を笑うな」

ワイド様が軽く叱りつけた。

最初に比べれば柔らかくなったと思う。

それに対してテツヤ殿は平謝りながらも謝った。

「ガルバー様が亡き後はサラ様が後を継ぎました」

ガルバー様に比べてサラ様は今は亡き１１代目の王、つまりサラ様の父君の娘である。

そのため周辺諸国も温かく迎えてくれた。

サラ様はガルバー様が起こした事を謝罪し様々な事で罪滅ぼしをした。

「それでどうしたんだ？」

「はい。現在サルバーナ王国はムガリム帝国を除いて他の国と友好的な関係を保つ事に成功しました」

だから、ムガリム帝国も変な真似をしないのだ。

「しかし、どうかな？国なんて結局は自分の身が一番と思う物だ。それだから、成り立つ」

幾ら同盟関係を結ぼうと何時裏切るか、裏切られるか分からない状況だとテツヤ殿は言った。

「貴方様の言葉は経験上から出ているのですね？」

「あぁ。同盟や停戦協定を結んでいたが、その国が弱くなったりまたは敵対国から何らかの形で圧力や取引があった」

それで一方的に破棄され攻撃された。

「その国はもちろん憤った。だが、他の国では称賛された」

「何故ですか？」

「裏切りや先駆けは称賛されて当たり前だからだ」

世の中、勝った方が正義であり負けた方は悪なのだ。

「幾ら正しかろうと、力が無ければ何も出来ない。負ければ、負け犬の遠吠えとして取られるだけだ」

短くなった煙草を灰皿に押し付けてテツヤ殿は言い切った。

「まぁ、それより今は続きを聞かせてくれ」

「そうでしたね。それでは・・・・・・・・・・」

司教様は苦笑して話を戻した。

私は何故か強い胸騒ぎを覚えた。

どうしてか分からない。

だが、この胸騒ぎが後々に起こる事だと今は気付かなかった。

第十章：臣下たちに謁見

嫌な胸騒ぎがした翌日。

私とワイド様、テツヤ殿は、サラ様と宰相、将軍達の前に来ていた。

場所は謁見の間で、玉座にサラ様が座り隣に将軍と宰相様が立っている。

私たちは臣下の礼を取っているが、テツヤ殿だけは相変わらず立ったまま。

何でここに居るのかと言えば、テツヤ殿を聖騎士団に入れる旨を伝える為だ。

「テツヤ殿は、我が聖騎士団に入隊させます」

ワイド様が膝を降りながらサラ様に旨を伝えた。

「本当に大丈夫なのか？ワイド。こやつは傭兵であろう？」

宰相様であるゲンハルト様がテツヤ殿を汚い物でも見るような視線を向けて来た。

御歳４５歳で痩せ型な体格は一見、骸骨にも見えなくない。

だが、このゲンハルト様はサルバーナ王国の宰相で外交などを主に担当している方だ。

汚物を見る眼差しを向けるゲンハルト様に対してテツヤ殿は、憮然として受け流した。

「確かに、彼は傭兵です。しかし、彼の性格は3日で分かりました」

ワイド様がゲンハルト様の言葉に静かな声で返した。

「たったの3日で分かるのか？」

ゲンハルト様はワイド様を責めるような口調で言ってきた。

「宰相閣下。貴方は軍事の事をよく知らないから、そのような言葉を吐けるのだ」

将軍であるプロイセン様がワイド様を擁護するように喋り出した。

プロイセン様はゲンハルト様と同い歳だが、こちらは軍事関係の仕事を担当している。

ガルバー様の片腕として戦ってきたが、ガルバー様より兵たちに慕われていたと言われている。

そしてサラ様とは親戚関係でもあり、サラ様の信頼も厚い方だ。

体格は如何にも武人という体格で何度も戦で敵将を打ち倒したと言われており、立派な髭も特徴的だ。

「軍人とは一目見れば相手がどんな奴かを見分けられる。3日もあれば全てを知ったと言っても過言ではない」

「では、貴方様はこの傭兵が信じられるのですか？」

「信じるか信じないはまだです。ただ、彼は異世界から来た。更に見た事も無い武器や装備を持っている。それを鑑みれば、我が国に絶大な力を与えてくれると思うのは確かだ」

「これだから軍人は困る！！」

ゲンハルト様は高飛車な声を出した。

「何かと貴方は戦、戦、戦と・・・・貴方達の起こす戦でどれだけ国費が嵩むと思っているんですか！？」

ゲンハルト様はガルバー様が起こした戦のせいで国費が嵩んだ事を根に持っているようだ。

「これは異なことを仰る。私は軍人ですよ？軍人は国を護るのが任務。その任務を放り出し、敵が攻めて来ても攻撃するな？と言うのか」

「そうです。戦をする前に先ず外交を通すのが筋と言う物。それを無視して戦をするのが問題なのです！！」

「では訊くが、外交で解決できずに敵が攻めてきたら白旗を上げて待てと言うのか？」

「そこまでは言っていない！！」

「私にはそう聞こえましたがね」

売り言葉に買い言葉とも言える口喧嘩を始める二人。

「二人とも。喧嘩は止めなさい」

サラ様が凛とした声で二人を止めた。

「貴方達の言い分は納得できます。しかし、ここで喧嘩をする事は許しません」

サラ様の言葉に二人は鼻を鳴らして顔を背けあった。

「・・・犬猿の仲だな」

ポツリとテツヤ殿が漏らした。

「何ですか?その言葉は」

私は小声で訊ねた。

「どうしようもない仲の二人を言う言葉だ」

何だか、ゲンハルト様とプロイセン様を表現しているような言葉だな。

「時にランドルフ」

サラ様が私に話し掛けて来た。

「は、はいっ」

私は硬直しながらも、声を発した。

「そなたはテツヤ殿と組む事になるが、異論はありますか？」

「い、いいえ。テツヤ殿からは色々な事を学べると思いますし・・・・亡くなった先輩たちを庇ってくれた事もありますので、力になりたいと思います」

「そうですか。プロイセン」

「はっ」

プロイセン様は、直ぐに臣下の礼を取った。

流石に将軍と言う事もあり、身動きに無駄が無いし速い。

「貴方は、テツヤ殿をどう思いますか？」

「そうですね・・・見た目と格好は傭兵その者ですが、口先だけでなく修羅場を潜り抜けて来た男というのは分かります」

「貴方としては、テツヤ殿が聖騎士団に入隊するのに異存はありますか？」

「いいえ。女王陛下もこの男を買っている事ですし、私は従います」

「ゲンハルトは？」

「・・・・正直、言って何か問題を起こすか心配です」

ゲンハルト様はテツヤ殿を見た。

「傭兵。貴様、もしも他国と問題でも起こしてみろ。貴様を殺すからな」

「それは脅しとしてか？それとも忠告か？」

テツヤ殿は煙草を銜えながら訊ねた。

ここでも煙草を吸うのだから、凄いとしか言えないと私は思った。

「どちらもだ」

「まぁ、頭の片隅にでも置いておく」

テツヤ殿は火を点けながら煙を吐いた。

「先ほどから貴様の態度は無礼だな」

確かに無礼としか言えないと私とワイド様も思った。

しかし、テツヤ殿は直す気も無いと解かる。

「生憎と地なんでね。俺も言わせてもらうが、あんたもそこの軍人さんと喧嘩をしただろ？女王の前で無礼なのはどちらも同じだと思うが？」

うわぁ、初対面なのにここまで毒を吐くなんて・・・・・・・・・・・・

しかも、相手はこの国の宰相なのに。

案の定というかゲンハルト様は眉を顰めていた。
この人は相手を挑発する事でしか接触できないのか？と思う。
ゲンハルト様が怒りを露わにしているのに対してプロイセン様は声を上げて笑っていた。
「ははははっ。随分と正直に答える男だな」
プロイセン様は、テツヤ殿に近付いてきた。
テツヤ様より少し身長が上なので見下げる感じだった。
「タカミ・テツヤ、だったか？」
「あぁ。あんたは、プロイセン様だろ？」
「あぁ。プロイセン・マクシリアンだ。この国の将軍をしている」
「俺は鷹見徹夜。フリーの傭兵だ」
「そなたの口にあるのは何だ？」
「煙草と言って、気分転換にする奴だ」
「その手に在るのは？」
「ジッポ・ライターと言って火を起こす物だ」

テツヤ殿は左手に持った鈍い色を放つジッポ・ライターを見せた。

「むーん。どれも見た事もない代物だな」

「まぁな」

テツヤ殿は煙を吐きながら答えた。

「私にくれないか？」

「どうぞ」

テツヤ殿は煙草を一本、渡した。

プロイセン様はそれを口に銜えた。

「火だ」

テツヤ殿がライターで火を点けた。

「後は少し吸って吐くんだ」

プロイセン様は言われた通り、やって煙を吐いた。

「なるほど、気分転換にはちょうど良いな」

「まぁな。だが、臭いが付くから気を付けな」

特に女は嫌う、と言った。

「ご忠告痛み入る。さて、そなたが聖騎士団に入隊する事に私は異存ない」

「あぁ。ありがとう」

「そこで提案だ。そなた聖騎士団に入隊する訳だが、暇な時で良い。私の軍で話を聞かせてくれないか？」

「俺の話？」

「そなたが体験した戦場などを聞かせて欲しい。それで戦の利用に役立てたいのだ」

それなら宰相殿が仰った国費は嵩まない、とプロイセン様は皮肉気に言った。

「なるほどな。いいぜ」

「ありがとう。そなたとは仲良く出来そうだ」

プロイセン様はテツヤ殿に手を差し出した。

「あぁ。俺もあんたとは仲良く出来そうだぜ」

テツヤ殿も手を差し出し握手をした。

それをサラ様は優しそうな眼差しで見ていたが、ゲンハルト様は憎悪に近い眼差しで見ていた。

ガルバー様の問題以前にこの方は暴力沙汰やそれを起こし得る者を

全部、嫌っているのかもしれないと私は思った。

謁見の間を後にした私たちだが、テツヤ殿は煙草を吸いながらこう洩らした。

「あのプロイセンとかいうおっさん。握手して俺の実力を確かめやがった」

「そうなんですか？」

私にはただの握手にしか見えなかった。

「プロは他人と握手して大抵、相手の力量を知る事ができる」

「テツヤ殿はプロイセン様の実力は分かったんですか？」

「個人戦なら上位に食い込むな。体格も良いし、将軍ともなれば一種のカリスマ性とも言える、相手を引き込む力にも長けているだろう」

「確かに、プロイセン様は兵士からも好かれているな」

ワイド様は、テツヤ殿の指摘に頷いた。

プロイセン様はガルバー様の右腕として活躍していたが、ガルバー様が些か無頼な性格に対してプロイセン様は公平で良い上司というのが兵の見方らしい。

兵たちからは「我が父」と言われているのが良い証拠だ。

「やはりな。しかし、あの宰相は何だ?随分と高飛車だが・・・・・・・」

「あの方はフィーナ殿と同格に位置する名門の出だ」

ゲンハルト様の家計は代々、宰相や財政家など主に政治の面で活躍する家柄で色々と顔が効く。

ガルバー様からは毛嫌いされていたが。

「あの方が外交の全てを握っているんだ」

だから自分は凄いと思いこんでいるのだ、とワイド様は答えた。

「傲慢だな。ああいった奴は、何れ自分で全て片付けられると思って墓穴を掘る」

テツヤ殿は辛辣な言葉を言いながら、煙草を吸い続けた。

「それで俺はどうすれば良いんだ?」

「先ず聖騎士団の者たちに紹介する。それから、寮に入ってもらう」

「了解。それじゃ先ずは荷物を部屋から出すか」

私たちは部屋へと戻り、木箱に荷物を入れた。

と言っても、テツヤ殿から渡された物だけだが。

箱をテツヤ殿と二人で持ち、ジープのある馬小屋へと行き乗り込ん

だ。

それから城の外に建つ騎士団の寮へと向かった。

寮は城の外の直ぐ近くに立っている。

親衛騎士団が城の中に駐屯しているのに対して聖騎士団は城の外に駐屯している。

これには市民が接し易いようにと考えての結果だ。

寮に入ると先輩たちが私とワイド様、そしてテツヤ殿に眼をやった。

「後で私から話があると皆に伝えてくれ。場所は集会所だ」

先輩達はワイド様からの事付けを受け取り頷いた。

私とテツヤ殿は、私の部屋へと向かった。

部屋はそれほど大きくないし、ベッドも粗末だ。

2段ベッドであったが、生憎と私は同部屋が居ない。

だが、これからはテツヤ殿が同部屋だ。

「ここが俺とお前の部屋か？」

テツヤ殿は部屋を見回した。

「えぇ。私の場合、同期が全員、親衛騎士団の方に行ったので」

「何でお前は聖騎士団に行ったんだ？」

「聖騎士団の方が私には合うと思ったんです」

親衛騎士団は一握りの者だけが入隊を許される。

家柄から始まり、全てに秀でた者だけが入隊を許される。

とてもじゃないが私には無理だ。

「聖騎士団は違うのか？」

「聖騎士団は身分を問わん」

ワイド様が私の代わりに答えた。

実力は問われるが、神の前では皆が平等。

それを訓令にしているので、誰でも入隊できるのだ。

「なるほど。まぁ良い。荷物を置くぞ」

木箱を置いた。

「では、行くぞ」

ワイド様に促されて、私は部屋を出ようとしたが、直ぐに引き返してＳＫＳカービンとベレッタを持って来た。

いつも持っておけ、とテツヤ殿に言われたからだ。
テツヤ殿もＡＫＭとコルトを持っている。
ワイド様に連れられて、私とテツヤ殿は、皆が集まる集会所に向かった。
集会所には既に先輩たちが揃っていた。
「皆、集まったな？」
ワイド様は中央に立つと辺りを見回して確認した。
「今日、集めたのはこいつを紹介する為だ」
ワイド様はテツヤ殿を指で差した。
「知っている者も居るかもしれないが、こいつはタカミ・テツヤ。異世界から来た傭兵だ」
先輩達はテツヤ殿の格好を見ていた。
「女王と話し合った結果、こいつを我が聖騎士団に入団させる」
「一つ宜しいですか？」
先輩の一人が挙手した。
「何だ？」

「ランドルフが持っている、それは何ですか？」

「こいつはＳＫＳカービンという自動式小銃で、俺の世界で造られた武器だ」

テツヤ殿がワイド様に代わり説明を開始した。

「この黒い部分を引けば、弾が出る。まぁ、弓矢なんかを思い浮かべてくれれば良い」

テツヤ殿は具体的な道具を出して、説明した。

「あんたの持っているのは？」

「これはＡＫＭアサルトライフル。アサルトライフルってのは、突撃銃を意味する」

連射でき、尚且つ泥や水などにも強く悪環境でも作動し、威力も高く安い。

そのため傭兵に愛用されている。

そうテツヤ殿は説明した。

「あんたは傭兵になってどれ位になるんだ？」

「そうだな・・・・１８で軍隊に入り、３年で除隊。それからまた別の軍に入り５年いて、それから傭兵なったから７年位だ」

「どれくらい戦場を駆けたんだ？」

「さぁな。まぁ、大体２０回から３０回くらいか？」

随分と戦場に出たんだな、と私は思った。

「まぁ、詳しい話は今度する。今は飯を食いたい」

テツヤ殿の言葉に皆は笑い出した。

「では、今日はテツヤを祝う歓迎会だ」

ワイド様はそう言って盛り上げた。

それから私たちはテツヤ殿の歓迎会を開き酒を飲んだ。

途中からはテツヤ殿と飲み比べまで始まった。

しかし、テツヤ殿は強く殆どが沈んだ。

宴が終わったのは真夜中になった位だ。

「久し振りに美味い酒を飲めた」

テツヤ殿は、まったく赤くない顔で私に話し掛けた。

現在は部屋で煙草を吸い合っている。

「それは良かったです」

「始めは、馴染めるか心配だったぜ」

「そうなんですか？」

テツヤ殿の事だから、一人でも大丈夫だと思っていたから驚いた。

「あぁ。軍隊ってのは、ある程度の結束力なんかも必要だからな」

そう言ってテツヤ殿は、煙草を揉み消した。

「さて、寝るか」

「はい」

私は2階の方にあるベッドで、テツヤ殿は下のベッドで寝た。

「それじゃ、お休みなさい」

「おう」

蝋燭の火を消して私は眠りに着いた。

酒の事もあり、直ぐに眠れた。

第十一章：煙草の名前

私は膝の上で眠ったヴァレリーを優しく抱き上げると使用人を呼んだ。

あれから傭兵王の話をしていたが、ヴァレリーは何時の間にか寝てしまった。

可愛らしい寝顔だ。

この寝顔を見ていると娘や息子たちが幼い頃を思い出す。

娘や息子たちも傭兵王の話を聞いている内に寝てしまい、私が抱き上げたものだ。

ドアが叩かれる音がしたので私はヴァレリーを抱き上げてドアを開けた。

ドアの前には使用人が立っていた。

「寝室で眠らせてくれ」

「やはり旦那様の部屋に居りましたか」

使用人は苦笑しつつ私からヴァレリーを受け取った。

「また傭兵王のお話ですか？」

「あぁ。この子は私を英雄として見ているらしい」

ヴァレリーは何時も私を英雄と称している。

「旦那様は現に傭兵王の片腕として活躍したではありませんか」

「私はただ徹夜様の後を追っただけさ。私は英雄ではない」

現に私は、徹夜様の後を追い掛けて共に戦い続けただけで大した功績は残していないと思っている。

徹夜様も自分は英雄ではない、と言っていた。

『俺は英雄じゃない。英雄ってのは一人で何でも片付けられる奴を言うんだ。皆が俺に力を貸してくれたお陰で成功する事が出来たんだ』

だが、それで良いとあの方は言った。

『皆が英雄なんだ。死んだ奴等も含めてな。一人が英雄なんて嘘っぱちだし反吐が出る』

この言葉があの方の性格をよく表していると思う。

あの方は大義名分や建て前、そしてこういった所謂、賛美などを事の他嫌っていた。

それはあの方の生い立ちや人生で得た経験から来ているのだと思っている。

だから、英雄などと言う言葉も嫌いなのだ。

「ですが、奥方様達は旦那様が英雄だと思っている事でしょう」

「そうだと良いが」

私は苦笑を浮かべた。

「きっとそうですよ」

後で茶を持って来る、と使用人は言いヴァレリーを抱えて消えた。

私は机に戻り書き始めた。

書くのが随分と遅れたが、続きを書く事にしよう。

まだまだ続くのだ。

徹夜様が聖騎士団になってからの話だ。

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

翌日、私はテツヤ殿がＡＫＭアサルトライフルとコルト・ガバメントを手入れする音で目を覚ました。

「よぉ、起きたか」

テツヤ殿は煙草を吸いながら手入れを続けた。

「テツヤ殿は、頭が痛くないんですか？」

私は程々に飲んだつもりだが少し頭が痛い。

それに対してテツヤ殿はまるで平気な様子だった。

「酒には強いんだ」

そう答えてテツヤ殿は手入れを終えた。

「手入れを教えてやる」

お前も用意しろ、と言うのでＳＫＳカービンとベレッタを用意した。

先ずＳＫＳカービンの手入れを始めた。

テツヤ殿に渡された物を使用して綺麗に内部などを掃除する。

内部を掃除する事で弾が正確に発射出来るようにするらしい。

「外部は壊れても大した問題ではない」

だが、内部はそうじゃないと言い、念入りにしろと言った。

言われた通り内部を念入りに掃除する。

続いてベレッタだ。

渡されたブラシで汚れを綺麗に落とす。

結構な汚れが内部に付着していた。

これらが溜まる事で弾が出ない。

通称ジャム――弾詰まりだ。

それが原因で死ぬ者も居たらしい。

「戦場でジャムを起こして死んだら運が無かったんじゃない。そいつが手入れを怠ったから死んだ。言わば自業自得だ」

そして死にたくないなら抱く女より銃を知れ、とテツヤ殿は言ってから煙草を灰皿に捨てた。

灰皿には既に10本も捨てられているから、かなり前から吸っていたと解かった。

手入れを終えて元に戻していると、テツヤ殿の足元に黒い物がある事に目が行った。

「もしかして、剣ですか？」

テツヤ殿に訊いてみた。

「ああ、これか」

テツヤ殿は足で黒い物を上に蹴り上げて左手で取った。

何とも大した動きだ。

「これは刀と言う物だ」

「カタナ？」

「あぁ。お前等の方では剣と同じだ」

違う点は片刃で切れ味が並外れているという所だ。

それとカタナは斬る事にも突く事にも長けているらしい。

「お前等の剣は昨日みせてもらったが、鉄を叩いて引き延ばした感じだな」

斬ると言うより、重さで相手を叩くという感じだと言った。

「まぁ、確かにそうですね」

では、カタナは違うのか？

テツヤ殿はカタナを鞘から抜いた。

鋭い刃で綺麗な波紋が見えて芸術性が高い。

「綺麗な刃ですね・・・・・・」

「だろ？お前が寝ている最中に電話をしたんだ」

「あの宅配人に？」

「あぁ。切れ味が良い刀をくれと言ったんだ」

「名前は何です？」

剣にも幾つか種類があり、名前がある。

「同田貫だ」

「どうだぬき？」

「あぁ。実戦本位の目的で造られた物で、鎧も切れる」

鎧も切れるとは・・・・凄い。

何でも鎧ごと叩き斬れるため通常よりも重い上に刀身も厚いらしい。

だが、実戦向きである為か多くの戦士から好まれたようだ。

そしてドウタヌキを届けると同時に「では、ついでに魔法も使えるようにしますねー」と言ったらしい。

「まったく、要らぬ節介だ」

「そんな事を言ったら駄目ですよ」

私は窘めながらも魔法剣とは羨ましいと思った。

魔法剣は通常の剣とは違う。

魔法を放てるし、魔法を斬る事も可能だ。

だが、この剣を持てるのは極僅かだ。
その理由として高額な上に、数が少ない事。
だから欲しくても手に入らない。
「私も欲しいです・・・・・」
「なら、後で連絡してやる」
テツヤ殿の言葉に私は飛び上がる勢いだった、と言っておこう。
「所でテツヤ殿の魔法剣は、どんな属性ですか？」
「さぁな。電話では「オール・マイティーでーす！！」とか言ってたな」
「おーる・まいてぃー？」
「平たく言えば何でもあり、だ」
何でもありとは羨ましい。
「まぁ、何でもありなら良いさ」
テツヤ殿はドウタヌキを鞘に収めた。
「使うんですか？」

「まぁワイドと戦うと約束したからな」

だが、通常は使わないと言った。

「どうしてですか？」

「邪魔だからな。それに俺が念じれば直ぐに出るとも言った」

そこまで便利だとある意味では憎いとさえ思った。

「お前さんに渡す奴も恐らく念じれば出るだろうな」

あの宅配人の事だから私が望まなくてもやる事だろう、とテツヤ殿は言い煙草を勧めてきた。

それを受け取りテツヤ殿が煙草に火を点けてくれた。

「これ名前はあるんですか？」

見た事もない字で書かれている部分があるので訊いてみた。

「あるさ」

「どんな名前ですか？」

「俺の国で言えば“女神の抱擁”だ」

「女神の抱擁・・・・・・・・・」

「あぁ。女神に抱き締められるような気分になる事から名付けられ

た」

何処で造られたのかは不明らしい。

だが、どういう訳か自分が行く所には必ずあるらしい。

「縁があるんですね」

「あぁ。差し詰め戦女神だな」

「戦の女神、ですか？」

「あぁ。俺の居た世界では“ワルキューレ”と呼ばれる神が居たとされている」

その女性に見染められた者は、戦場で死ぬと迎えが来て神々が居る宮殿へと連れて行かれるらしい。

「そこには戦いで勇敢に死んだ者達だけが集まる場所なんだ」

だから戦で死んで彼女達に迎えに来てもらうのが夢らしい。

「俺は神なんて信じないが、もしも抱かれるなら美女が良いな」

聖騎士団に所属しながら神を信じないとは言語道断が、テツヤ殿の言う事も一理ある。

誰だって美女に抱かれて迎えられたい。

「さて、腹も減ったし飯を食いに行こうぜ」

「そうですね」

私は頷いてベレッタをテツヤ殿から渡されたホルスターに入れた。

「腰の部分に回して前で止めるんだ」

言われた通りにした。

確かにこれなら運び易いと思う。

「それからこれはＳＫＳカービンを肩に吊るしたりする時に使え」

今度は布のような物を渡された。

上と下に取り付けて肩に掛ける。

確かにこれなら何時も手で持たなくても良い。

テツヤ殿も同じだった。

準備を終えて部屋を出た。

食堂に行くが誰も居なかった。

「おや、ランドルフが一番か」

食堂を切り盛りするおばさんが私に笑顔を見せた。

「おはようございます」

「おはよう。そっちの兄さんもね」

「おはよう。綺麗なお嬢さん」

「まぁ、随分と世辞が上手いね」

「なぁに、本当の事を言ったまでさ」

テツヤ殿は笑顔で答えて席に着いた。

「今日は肉のシチューとパンだよ」

おばさんは既に出来上がった料理を渡してくれた。

「では頂こうか」

「はい」

私とテツヤ殿は料理を食べ始めた。

食事を取っていると先輩達も続々と集まって来た。

「よぉ、テツヤ」

「おう。どうだい？調子は」

「頭がガンガンするぜ。だが、久し振りに美味い酒が飲めたぜ」

「俺もだ」

先輩たちとテツヤ殿は笑いあった。
何だか私以上に溶け込んでいる気がした。
そこへワイド様が来てテツヤ殿が剣の勝負をしようと言った。
「今日、剣を届けさせた。この前の約束を果たそうぜ」
「望む所だ」
剣では負けない、とワイド様は言った。
それをテツヤ殿は笑いながら受け止めた。
『テツヤ殿の事だから、変則な真似もするだろうな』
などと私は失敬にも考えてしまった。
まぁ、実際の所・・・そうだったのだが。
食事をしてテツヤ殿と一服してからワイド様と一緒に外に出た。
寮の直ぐ傍にある鍛錬場だ。
ワイド様は両刃剣を鞘から抜いた。
「剣では負けんぞ」
「剣では、ね」

ああ、もうこの時点で変則な技を使うと私には理解できてしまった。

ワイド様は両手で剣を頭の上で構えた。

本来、騎士は盾を用いるがワイド様は体格に合わせた剣なので両手で構えないと無理なのだ。

テツヤ殿はドウタヌキを出した。

「それが主の剣か」

「あぁ。俺の国では刀と言うんだ」

テツヤ殿は鞘に収まったドウタヌキをベルトに入れて右手を柄に当てた。

右足を前に出し、左足をやや後ろにしている。

何の構えだろう？

私を始め先輩たちは訳が解からない顔をしていた。

「何だ。その構えは」

「さぁ・・・知りたいなら掛って来な」

「では・・・行くぞ!!」

甲高い声を上げてワイド様はテツヤ殿に突っ込んだ。

一気に振り上げられる剣。

剣は真っ直ぐにテツヤ殿の頭上に振り降ろされた。

だが、それはテツヤ殿には当たらなかった。

テツヤ殿がどうやったのか知らないが、鞘に収まっていたドウタヌキは抜かれて既ワイド様の喉元に当てられていた。

「うっ・・・・・・」

「どうだい？自分より速い剣に襲われた気分は？」

テツヤ殿はニヤリ、と笑った。

「な、何だ。その技は・・・・・・・・・」

「居合と言う技さ」

『イアイ？』

私たちは声を重ねて訊いた。

「鞘に収めた状態から一気に抜いて、相手を斬り倒す技だ。若しくは相手の攻撃を受け流して、第二の一撃で倒す」

テツヤ殿はドウタヌキを鞘に収めて説明した。

元々、居合とは座っている時に襲われた時の回避法や逆に襲う時に

使われる為に考えられた技術らしい。

書物などでは「身に付けないより身に付けた方が良い」や「下手な飛び道具より恐怖」と称されるなど様々な意見があるらしい。

「テツヤ殿としてはどうですか？」

「少なくとも身につけて損は無いし、下手な飛び道具よりも恐ろしい」

つまり身につけておいた方が為になるという事か。

「だが、これには弱点がある」

「弱点？」

「後手の先だ」

「と言うと、相手が仕掛けてくるのを待つ、事ですか？」

「そうだ。お前は相手が剣を振り降ろす時、鞘に剣を収めた状態で居られるか？」

「無理です」

私は思わず即答してしまった。

「だろ？だから、だ。それに一度、抜いてから直ぐに次の攻撃、つまり二撃に移れない」

要は一撃必殺であり、奇襲攻撃であり、回避方法なのだ。

「さっきはどうやったんですか？」

「ワイドから見てどうだった？」

「お前が避ける所までは見えた」

だが、そこからは見えなかった。

「説明に付け足すと、こいつの剣を避けて鞘から抜いて喉に当てただけだ」

まぁ、その前にちょっと細工をした、とテツヤ殿は言った。

「その細工とは？」

「それは言えないな」

意地悪そうに笑うテツヤ殿を見て私は確信した。

やっぱり・・・変則な技を使ったんだ。

騎士との戦いで奇襲など変則でしかない。

しかし、テツヤ殿の哲学ではこうなるのだろう。

“勝てば良し。手段は問わない”

ワイド様はドウタヌキの切っ先が離れた事で息を吐いた。

僅かに汗が滲んでいた。

「そのカタナに喉元を当てられた時は、冷や汗を掻いたぞ」

自分達の使う剣とは違い、氷のように冷たい印象を受けたとワイド様は話した。

「だろうな。だが、お前さん達の剣術では盾を用いるだろ？」

「あぁ。剣と盾で攻撃をするな」

「俺の剣術に盾は無い」

「じゃあ、どうするんだ？」

「避けるか相討ちに持ち込むかだ」

そして一瞬の隙を突いた攻撃が主体だ、とも言った。

「うーむ。実に興味深い剣術だな」

「まぁな。俺の場合は最初に入った軍隊で知り合いから学んだ」

「そうなんですか？」

「あぁ。何でも餓鬼の頃から武道を教えられていたらしくてな」

様々な技を教えられたらしい。

「そこで剣術を学んだんですね」

「あぁ。と言っても俺の場合は我流も含まれるがな」

「・・・変則技、ですね」

「そういう事だ」

テツヤ殿は笑いながら煙草を銜えた。

「俺から言わせれば戦いに卑怯も糞も無い」

勝てば良いのだ。

だから、ドウタヌキを捨て首を絞めて勝てるならそれで良いと言い切った。

それを聞いた先輩たちは唖然としたが、テツヤ殿の言い分も尤もであると何処か納得しているように見えた。

その後、私とテツヤ殿は鍛錬をしてから城下町の警備へ向かった。

初めて二人で行う任務だった。

鷹見徹夜（前書き）

ここで主人公を軽く紹介します。

また色々と載せたりするので、ご勘弁下さい。

鷹見徹夜

名前：鷹見徹夜

身長：１８５ｃｍ

体重：７５ｋｇ

年齢：３３歳→享年９５歳

職業：陸上自衛隊東部方面隊第１空挺団→フランス外人部隊第二落下傘連隊ＧＣＰ→傭兵→サルバーナ王国の武将→サルバーナ王国国王

階級：少佐→大佐→元帥

衣服：迷彩服にバンダナとブーニー・ハットにジャングル・ブーツ

装備：ＡＫＭアサルトライフル、コルトＭ１９１１Ａ１、同田貫

特技：暗殺、格闘技、ブービー・トラップ、武道

異名：不死身の男、傭兵王、隻眼の鷹、醜男、卑怯者、下種な傭兵、戦争の犬

嗜好：煙草、酒、女

座右の銘：作戦は奇を以てよしとすべし

要約：異世界に迷い込んだ日本人の傭兵で上から下まで傷だらけで

無頼者に見えるが、何処か愛嬌がある人物。

ひょんな事からサルバーナ王国の王女を助けて女王の客人として王宮に住み着く結果となり聖騎士団の一員になる。

皮肉屋の天の邪鬼で、勝つ為なら手段は問わないという性格の持ち主で騎士などからは「犬」、「卑怯者」、「薄汚い傭兵」などと渾名されている。

更に顔も決して美男子とは言えず貴族などからは「醜悪な顔立ちで見るのも憚る」と言われていたらしく勝利の宴に置いても彼に近づく者は居らず、敵側の将に集まっていたと言われている。

また極度のヘビー・スモーカーで煙草を吸わない日はなく常に煙草を口にしている。

傭兵になった理由は「極限状態のスリルを楽しむためであり、それ以外の道を選べない」からと言っているが、別の理由もあるらしい。

武器はＡＫＭアサルトライフルとコルト・ガバメントで風呂に入る時も寝る時も傍から離さないなど用心深い性格でもある。

また武道にも精通しているが、ランドルフ曰く「変則技を必ず使う」と言われるほど卑怯な手を使っていたらしい。

これは戦争にも当て嵌まるようで奇襲戦法や錯乱戦などとにかく相手を混乱させる手段が多いと歴史研究家の間では知られている。

内乱を終結した後は一時的にだが、行方不明と言う事になったが後に発見されてサルバーナ王国の武将に戻る。

その時、片目を失った事から隻眼の鷹などと言われるようにもなったが、銅像などでは両目が入れられている。

ムガリム帝国の毒牙から抵抗する為に４ヶ国を指揮する連合軍の長となり、攻撃を仕掛けてきたムガリム帝国を打ち倒し５大陸を統一した。

後にサラと結婚してサルバーナ王国の新王として担ぎ上げられる事になったが、その他にも大勢の王妃達と暮らしたと言われている。

王になってからも常にお忍びで城下に出ては民達の生活などを詳しく調べて、地方の声を聞いて政治を行い民達からは慕われていた。

９５歳で崩御するが、ランドルフが書いた史書により後々の世まで名君であり名武将と謳われ「傭兵王」として後世に名前を残す事になる。

ランドルフの史記によると「皮肉屋で挑発的おまけに残酷な所もある」と書かれているが「それを補うだけの魅力に溢れており、特に歳若い者たちからは父や兄のように慕われていた」と書かれている。

更に周りからは「勇敢で情に厚いが情に流されない。極度な程にロマンチストで臆病」とも言われていたと書かれているが、ランドルフ自身は「ロマンチストで臆病な所は分からなかった」と付け足している。

これは４ヶ国でも同じ事で彼に対する性格は魅力に溢れていると書かれており、必ずロマンチストで臆病と書かれている。

またこの魅力は敵側にも通じたようでムガリム帝国から連合軍に鞍替えする者が続発するほどであったとされている。

彼に対する逸話は数多くあり、一度は死んだと言われていたが別の国で見つかったなどと言う逸話がある。

海では怪物と死闘を演じた、魔物を虜にした、素手で１０人の敵を倒したなど伝説的な逸話が多くありランドルフの書いた史記でもそれが幾つか載せられている。

第十二章：親衛騎士団ＶＳ傭兵２（前書き）

誤字脱字を見付けたので訂正します。

色々と探してはいるんですが・・・見つけ難いですね。（汗）

第十二章：親衛騎士団ＶＳ傭兵２

私とテツヤ殿は二人で城下町を馬に乗り巡回していた。

市民に危険が無いか調べて回るのも我々聖騎士団の役目だ。

それと同時にテツヤ殿に城下町を案内する面もある。

テツヤ殿は馬に揺られながら煙草を吸っている。

この人は煙草を吸う間は無いのか？と思うほどよく吸う人だ。

かく言う私もテツヤ殿から渡された煙草を吸っているが。

町を馬に揺られながら進んでいると、周りから視線を感じる。

好奇心の眼だ。

テツヤ殿の格好は「迷彩服」と言われる服で、茂みなどに上手く溶け込めるようにデザインされている。

頭にはこれも同じ迷彩色がされたブーニー・ハットと呼ばれる帽子を被っている。

肩にはＡＫＭアサルトライフルを吊るし、腰にはガバメントがある。

これを市民達が好奇心の眼で見るのも仕方が無い。

「随分と見られてますね？」

「まぁ、仕方ないさ」

テツヤ殿は煙草を蒸かしながら周りの建物などを見ている。

市民たちの視線は好奇心の眼でテツヤ殿に対して害悪の眼はなかった。

「所でランドルフ」

「何ですか？」

「ここに売春宿はあるのか？」

「ぶっ！！」

私は煙草を勢いよく吸いこんで咳き込んでしまった。

「何をやっているんだ？」

「あ、貴方は何を言っているんですか！！」

私は思わず大声を上げてしまった。

「何だよ。俺はただ、女を抱ける場所は無いかと訊いただけだぞ」

「あ、貴方は、聖騎士団として恥ずかしくないのですか？」

「まだ入ったばかりで羞恥心なんてあると思うか？」

何でも昨日の席で先輩から売春宿（言いたくない嫌な言葉だ）の存在を教えられたらしい。

「もう半年も抱いてないんだ。少しは俺も安らぎを求めたいんだが」

「・・・後で教えます」

私は煙草を銜え直して答えた。

「そう怒るな。餓鬼を孕ませるような真似はしない」

その言葉には自分を捨てた両親に対する当てつけに聞こえた。

私は気を取り直して、テツヤ殿と巡回を続けた。

私が取り敢えず必要そうな場所を教えているとテツヤ殿は、その度にメモを取っている。

見た事もないペンで。

「そのペンは何ですか？」

「ボールペンと言って、インクが最初から付いているペンだ」

これで一々インクを付けずに書けるらしい。

「便利な代物ですね」

「まぁな」

テツヤ殿はメモを取りながら馬の手綱を握っている。
何でも傭兵時代に乗馬は習得したらしい。
暫く進んでいたが、途中で休憩を挟む事にした。
近くの店に馬を停めて降りた。
「いらっしゃいませ」
休憩する事にした店で、男の店主が私とテツヤ殿に挨拶をした。
「お茶をお願いします」
「そちらの方には？」
「あー、俺は初めて何で、あんたのお勧めで頼む」
「分かりました」
店主は頷いて消えた。
「しかし、平和な所だな」
外に設けられた椅子に座りテツヤ殿は煙草を吸いながら、何処か遠い眼をした。
「テツヤ殿は、こういった場所が懐かしいんですか？」
「まぁな。殆ど砂漠か密林、町でも戦場だった。だから、こんな平

和な場所には居なかったからな」

「そうですか」

「あぁ。久し振りに平和という空気を味わえて嬉しいぜ」

テツヤ殿はジッポ・ライターで火を点けながら答えた。

空は青く、まるでサルバーナ王国が平和だと表しているように見えた。

茶が運ばれた時だった。

「ほぉう。誰かと思えば、薄汚い犬ではないか」

馬に乗り颯爽と現れたのは親衛騎士団のフィーナ様だった。

護衛が5人も居た。

「よぉ。お嬢ちゃん。相変わらず高圧的な態度だな」

テツヤ殿は煙草を吸いながらフィーナ様を見上げた。

「聞いたぞ。聖騎士団に入団したとか？」

「あぁ。それで何の用だ？」

「貴様などに用は無い。ただ、町を巡回していただけだ」

「そうかい。それはお勤めご苦労な事だ」

「貴様などに労いの言葉を掛けられる覚えは無い！！」

明らかに馬鹿にしたような口調のテツヤ殿にフィーナ様は怒鳴った。

「短気な娘だな」

テツヤ殿は出された茶を飲みながら、挑発的に言った。

「貴様・・・・・・・」

フィーナ様から憤怒の気が出て来た。

町の人たちは、怯えていた。

「そんなに怒るな。町の住民が怯える」

テツヤ殿は民を見てフィーナ様を窘めるように言った。

「ふんっ。民は我らが居るからこそ平和に暮らせるのだ。これ位は良いんだ」

「相変わらず高飛車な女だ。まぁ、お前さんの言葉に一理ある」

だがな、とテツヤ殿は続けた。

「あんた等が食べているのは、こいつら民が汗水垂らして耕した物だ。それに感謝の念を抱かないのはどうかと思うぞ」

「傭兵ごときが偉そうに」

「そんなんだと一生を独身で過ごすぞ？」

あんたの性格に好き好んで付き合う物好きは居ない。

そう断言したテツヤ殿。

後ろでは5人の護衛が僅かに口を震わせていた。

この人たちもそう感じていたんだ、と思いながら私もばれないように茶を飲んだ。

「貴様・・・・・・・」

「怒るな怒るな。怒ると皺が増えて、早く婆になるぞ？」

私は不覚にも茶を吹き出した。

「どうやら貴様とは決着を着けなければならないようだな・・・・・・・・・・」

「決着？勝負なら前に着いただろ？お前さんの首を折りそうになった」

「・・・・・・・・」

フィーナ様は騎乗したまま腰の剣を抜いて、テツヤ殿の首筋に当てた。

「ここで殺してやろうか？」

「ここは公共の場だぞ？そんな事をすれば、女王が何と言うかな？」
煙草を吸い終えたテツヤ殿は素手で揉み消してポケットに捨てた。
「サラ様は、貴様を恩人と言っているが、私から言わせれば貴様などに恩を感じるのに理解できん」
「誰もあんたに理解を求めていないから安心しろ」
これにフィーナ様は完全に怒ったのか、馬から降りた。
「勝負しろ。傭兵」
「俺の名は鷹見徹夜だ。傭兵なんて名前じゃない」
「黙れ。今度こそ、貴様の首を刎ねてやる」
「・・・仕方無い」
テツヤ殿は立ち上がった。
「ランドルフ。少し暴れる」
皆を下がらせろ、と言った。
私は直ぐに皆を下がらせた。
フィーナ様は剣を構えた。

対してテツヤ殿は、ＡＫＭを私に渡して前に見せた構えを取る。

「今度は油断しない」

「戦場では一度の油断で命を落とすんだ。そんな言葉は初心者が言う台詞だぞ？」

その言葉を無視したフィーナ様が剣を振り降ろして来た。

それを避けるテツヤ殿。

続け様にフィーナ様の剣が繰り出される。

しかし、それも避けたテツヤ殿はフィーナ様に足払いをした。

足を払われたフィーナ様は尻餅を着いた。

「おおお、デカイ尻は邪魔だな？」

テツヤ殿は、煙草を新たに銜えた。

「貴様っ！！」

直ぐに立ち上ったフィーナ様は、再び剣を構えて振り降ろした。

「馬鹿の一つ覚えだな」

テツヤ殿は素早く身を縮めて、後ろに回り込むとフィーナ様の右腕を掴んだ。

「悪いが、今度は手加減しないぞ」

そう断ってフィーナ様の腕を捻った。

「ぐわっ！！」

嫌な音と共にフィーナ様は悲鳴を上げて剣を落とした。

そこへ続け様にテツヤ殿は尻を蹴った。

前のめりになり、倒れるフィーナ様。

「腕の関節を外した。早く医者に見せないと、治らないぞ？」

ジッポ・ライターで火を点けるテツヤ殿をフィーナ様は、憎悪の眼差しで睨んできた。

「薄汚い犬ごときに、この私が・・・・・・・・・・」

「文句を言うよりも早く行け。もっとやられたいのか？」

煙を吐きテツヤ殿は、鋭い視線をフィーナ様に向けた。

「・・・覚えていろ」

フィーナ様は自力で馬に乗ると、走り去った。

「やれやれ。とんだ巡回だな」

テツヤ殿は元居た場所に行き残っていた茶を飲んだ。

その後、茶を飲んだ私たちは巡回を再開した。
テツヤ殿は何か視線に入るなり、私に質問を浴びせた。
「今の内に覚えられる事は覚えておかなければならない」
随分と勉強熱心だと私は感心してしまった。
見た目は乱暴者に見えるのだが。
昼になり私とテツヤ殿は城へと戻った。
これから巡回を交代し後は訓練などをする予定だ。
「それじゃ俺とお前は銃の訓練だ」
テツヤ殿に私は頷いた。
聖騎士団の寮を出て、また弓矢の練習所に行った。
そこで私はＳＫＳカービンとベレッタを何度も撃つ練習をした。
立ったままの状態から膝を地面に付けて撃つ方法。
または伏せた状態で狙い撃つ方法。
様々な態勢で撃つ練習をした。
「お前さん、狙撃手になれる素質があるな」

テツヤ殿は私に呟いた。

「狙撃手？」

「そのライフルなどを使って遠くから相手を狙い撃つんだ」

それは便利だ、と思ったがテツヤ殿はこう続けた。

「ただし、敵に捕まれば想像も絶する殺され方をするぞ」

遠くから姿を見せずに相手を殺すから、とテツヤ殿は言い私は寒気を感じた。

その言葉には経験が含まれている気がした。

「あのテツヤ殿も・・・・・・」

「経験した。標的を狙撃する事に成功したが捕まって拷問された。まぁ、命からがら脱出したが」

「味方に助けられたりはしなかったのですか？」

「無い。狙撃手は味方からも問題ごとを持って来る厄病神として忌み嫌われているんだ」

特に傭兵だと、使い捨てだから下手に助けるより見捨てた方が良い、と言った。

「厳しいですね」

「まぁな。だからこそ、隊長を選ぶ時も気に入らなければ、追い出すし気に入れば命がけで護るんだ」

傭兵の世界を垣間見えた気がした。

それからテツヤ殿に教えられるままに私は、ライフルの射撃を覚えた。

夕方になり、私とテツヤ殿は寮へと戻った。

「よぉ。テツヤ」

先輩の一人がテツヤ殿に挨拶をした。

「よぉ」

「聞いたぜ？城下町で親衛騎士団のフィーナ様を倒したんだって？」

「まぁな」

「大した奴だ。親衛騎士団に歯向かうなんてな」

「無知なだけさ。悪い事をしたか？」

「いいや。前々からあいつ等は鼻もちならない連中だった。鼻を開かせて嬉しいぜ」

「そいつは助かった。実はワイドに怒られるんじゃないかと心配だったんだ」

「団長はそこまで度量が狭くない。まぁ、多少の小言はあるだろうが気にするな」

先輩はテツヤ殿の肩を叩いて寮から出た。

テツヤ殿は、煙草を取り出して銜えた。

エドリアス様は出張中で帰るのは夜遅いと聞いたが、テツヤ殿は来ると予測していた。

私もエドリアス様なら知識を得る為なら遅かろうと来ると思い、別の事を質問した。

「テツヤ殿は、それを吸わないといられないんですか?」

「まぁな。お前もどうだ?」

勧められるままに私は銜えた。

「司教が来るまでは風呂とかに入って待つとしよう」

私の煙草に火を点けてくれたテツヤ殿は煙を吐きながらこれからの事を話し、私はそれに頷いた。

ＡＫＭアサルトライフル（前書き）

昨夜、更新した部分に画像を挿入します。

ＡＫＭアサルトライフル

製造年：１９５９年

製造国：旧ソ連

全長：８７６ｍｍ

重量：３．４０ｋｇ

口径：７．６２ｍｍ×３９

装弾数：３０連発

１９４７年に開発されたＡＫ４７の改良型で、鷹見徹夜の愛銃の一つでもある。

鷹見徹夜曰く「田舎育ちの女」らしく大変な愛情を注いでいるライフルとして知られている。

４人の仲間、通称「４獣」からもその評価を受けており、サルバーナ王国では「王国を救った奇跡の剣」と渾名されており徹夜の異名でもある「雷光」の名を与えられている。

鷹見徹夜の正后でもあるサラが出陣前に渡したとされている赤い布が銃身に巻かれており、擦り切れた今でもそれは繋がっている。

鷹見徹夜亡きあとはその子孫が受け継いで、継承の時に授けられる事にされたが通常は民達が自由に見る事が出来るようにされている。

コルトM1911A1（前書き）

AKMと同じく画像を載せます。

コルトM1911A1

製造年：１９１１年

製造国：アメリカ

全長：２１６ｍｍ

重量：１０７７ｇ

口径：４５Ａ．Ｃ．Ｐ、３８スーパー

装弾数：７＋１（４５）、９＋１（３８）

鷹見徹夜が扱っていた拳銃で頑丈であり尚且つ強力な威力を誇る弾を使う事で知られている。

後に指揮官などにはこれが贈呈され、兵士たちからは「栄光の証」として羨望の眼差しで見られる事になった。

ＡＫＭアサルトライフル同様に鷹見徹夜のもう一つの異名「業火」と言う名前を与えられた。

欠点として重い事が上げられるが、鷹見徹夜曰く「重い分、それだけ命を預けられる」と言う。

鷹見徹夜が亡き後はＡＫＭアサルトライフルと共に継承者に受け継がれ、民達が見られるようにされた。

第十三章：不吉な予言（前書き）

ここでハンニバルの予言を書かせて頂きます。

第十三章：不吉な予言

夕食を食べ終えて部屋に戻った所でエドリアス様が入って来た。

「よぉ。司教」

「こんばんは。テツヤ殿。聞きましたよ？フィーナ様の骨を折ったとか？」

「いいや、関節を外しただけだ。直ぐに治せば、１ヶ月位で元通りになるさ」

そういう風に外した、とテツヤ殿は言った。

つまり手加減したという事か。

「手加減なし、だとどうしていました？」

「そうだな・・・腕を二度と使えないように粉々に砕いているな」

この人を敵に回してはいけない、と私は新たに思った。

「左様ですか。それは何よりです」

エドリアス様は温和な顔のまま笑い腰を降ろした。

「あの司教様の耳にも入っていたのですか？」

私の質問に司教様は頷いた。

「えぇ。巷では親衛騎士団の長が聖騎士団に負けた、と持ち切りですよ」

「ワイドが何か言ったか？」

「多少の小言は言っておりましたが、それ以外は何も」

「そうか」

テツヤ殿は、ただ頷いた。

「それで今日は何を教えてくれるんだ？」

「今日は、周りの事と隣国の事も教えましょう」

「それなら俺も自分の国を話そう」

「それは有り難いです。では、先ず隣国の事を説明しましょう」

司教様は、テーブルの上に地図を開いた。

「先ず、この地図の赤い点と赤い線で囲まれた所を見て下さい。ここが我がサルバーナ王国です」

赤い点がサルバーナ王国で、赤い線で囲まれた所までが王国の領土だ。

東西南北に領土はあるが、他の国に比べれば少ないし狭い。

それに内陸国なので、山々に囲まれ情報収集などは余り得意な方ではないし隣国との交流も大変なのだ。

「周りを山に囲まれているな。これなら護りには向いている」

テツヤ殿は煙草を吸いながら、地図を見下していた。

「そうなのですが、実は問題がありまして」

「何だ？国内の火種か？」

「左様です」

エドリアスは、重々しい顔で頷いた。

「サルバーナ王国の中にある黒い線で囲まれた紋章を見て下さい」

テツヤ殿と私は北の方角を地図上に見た。

狼、豚、蛇、鼠の紋章が描かれていた。

「何だ？この紋章は？」

「サルバーナ王国に仕える貴族の紋章です」

狼がヴィクター公爵、豚がモリスン侯爵、蛇がライアンナル伯爵、鼠がフィリップ男爵だと司教様は教えた。

「その４人がどうしたんだ？」

「この貴族たちは、以前より良からぬ噂がありまして」

「良からぬ噂？と言うと、反乱か？」

「まぁ、掻い摘んで言えば、そうです」

サラ様の腹違いの御子息、リカルド様を擁して王国を乗っ取ろうと考えているのだ。

エドリアス様は断言した。

「なるほど。それで、わざと遠く離れた場所に置いた訳か」

「はい。都から離せば、滅多に来る事もありませんし、兵を起こしても来るのに時間が掛るとサラ様は考えたのです」

「良い考えだが、内部にも通じていればそれは無駄に終わるぞ」

「内部に裏切り者が居ると言うのですか？」

私の問いにテツヤ殿は、まだ分からないと言った。

「だが、こういった反乱を考える奴等は長い年月を掛けて、内部から侵食して行く」

そして、それをどうにかするのは難しいとも言った。

「俺の世界でハンニバルという武将が居た。そいつはこんな言葉を言い残している」

『いかなる超大国といえども、長期にわたって安泰であり続けることは出来ない。国外に敵を持たなくなっても、国内に敵を持つようになる。外からの敵は寄せ付けない頑健そのものの肉体でも身体の内部の疾患に苦しまされることがあるのと似ている』

「・・・まるで、我が国を表しているような言葉ですね」

エドリアス様の言葉に私も賛成だ。

まさしく我が王国を言っているような言葉だ。

今の状況も山に囲まれた国ゆえに頑健な肉体で国外の敵は防いでいる。

だが、内部には反乱分子が存在している。

そしてそれを防ぐ術は殆ど無い。

「ここで質問だ。その反乱分子を根絶やしにするのは、どうしたら良いと思う？」

「・・・暗殺ですね」

エドリアス様の言葉に私は耳を疑った。

聖職者がそのような言葉を言うとは思っていなかったからだ。

「正解だ。人知れず殺してしまえば良い。だが、あの女王の事だ。腹違いの息子だろうと、息子は息子だ」

そんな子を殺せないだろ？

テツヤ殿の指摘にエドリアス様は重々しく頷いた。

「サラ様は・・・お優しい方ですから」

「だろうな。俺みたいな傭兵も信用して恩に思っている程な」

お人好し過ぎる、とテツヤ殿は言った。

「人間、ある程度の疑心暗鬼は必要だ」

サラ様にはそれが欠けている。

これは国を治める者にとっては致命的とも言った。

余りな言葉だが、言っている事は正しい。

「仰る通りです。サラ様は、心優しき方。だから、暗殺などは思ってもいないし考えもしません」

エドリアス様は何処か苦しそうな顔で言った。

この方自身、国の行く末を案じているんだ、と私は思った。

「だろうな。まぁ、それが出来ないならそいつらを定期的に呼び出して、腹を探るか間者をやって探らせるか、だな」

まぁ、俺らの中で話しても仕方が無い、とテツヤ殿は言って話を終わらせた。

「それで、周りの国はどうなんだ？」

司教様は地図で描かれた場所を指差した。

こちらは海に囲まれた小さな島が幾つかある。

青色の線で囲まれていた。

「ここが同盟国を結んでいるシャインス公国です」

「公国？という事は、何処かの国から独立でもしたのか？」

「はい。正確に言うならサルバーナ王国の領土でした」

ガルバー様が遠征をして手に入れた場所であったが、民達は暴動を起こして抵抗を続けた。

そこでサルバーナ王国の貴族、公爵が治めると民達を沈めた。

ガルバー様に比べて良好的で民達の声をよく聞いたから出来たらしい。

その見返りに公国として認めさせたのだ。

「女王の夫はよく認めたな」

「その貴族がサラ様の父君の信頼も厚かったので」

だから、ガルバー様も認めたらしい。

地形は周りを海に囲まれ、小さな島国で形勢されている。
海軍が強く軍艦などでの海戦ではどの国にも引けを取らないし、また情報収集能力にも長けている。

「もしも、ここを攻めるとなれば・・・3倍の兵は必要だな」

「どういう事です？」

「“攻勢3倍の法則”という言葉がある」

侵略する敵は護る側の3倍も兵を必要とする。

「特にこういった海に囲まれた国など水際の戦闘で相手を食い止めるんだ」

俺の国が似たような地形で、その戦法を取っているとテツヤ殿は言った。

「テツヤ殿の国は、シャインス公国と似たような地形なのですか？」

「あぁ。だから、そう言ったんだ」

司教様は新たな知識が手に入ったと喜んだが、司教がこんな戦術を知って何になるんだ？と私は思ってしまった。

「それで、女王の話だと後3つの国があるんじゃないのか？」

「はい」

次にエドリアス様が指差したのはサルバーナ王国から少し離れた所に描かれた黄色い線。

「ここはアガリスタ共和国と言って砂漠の国です」

この国は何十もの部族がおり代表者が集まっては国を治めていた。

だが、ここ最近は代表者の中から更に絞って共和将という者が国を治めるようになった。

全体的に砂漠地帯なので水などの貴重品は皆の物とされている国だ。

「我が国とは同盟は結んでおりませんが友好的です」

それから碧色の線を指差した。

「こちらは草原の国でクリーズ皇国です」

「今度は皇帝が支配する国か」

「左様です。こちらはアガリスタ公国とは逆に緑が溢れた国です。サルバーナ王国とは親戚関係とも言えるでしょう」

「前に話した初代国王と関係があるのか？」

「はい。初代国王と血筋の面で親戚です」

クリーズ皇国とは同盟を結んでいる。

エドリアス様が言った通りアガリスタ共和国とは同盟こそ結んでいないが、隣接しているから共に友好的な関係を築き合っている。

こちらも主に貿易などの面で友好的な関係を築いている。

「それで最後の国は？」

「はい。この４つの内、強大な力を誇るのが昨夜お話したムガリム帝国はここです」

エドリアス様が指差したのは、北の端で黒い線で覆われた所だ。

周辺の国を飲み込むような混沌とした色だ。

広大な土地と軍事力を誇るムガリム帝国。

この国が大陸の覇者になる可能性が極めて高く、危険極まりない。

その証拠に以前まで別の国の土地だった所を「自分の土地」と言って併合した程だ。

当然、他の国は抗議したが聞き入れる訳もなく寧ろ戦う姿勢も見せてきたムガリム帝国に二の足を踏んだ。

「山、海、平地・・・全ての土地を奪うような形だな」

地図で描かれているムガリム帝国は、海、山、平地などを飲み込む形で囲まれている。

他の国の領土を奪う形で広げている。

「この国は危険です。その為、他の国も同盟を結んだりするなどして対抗しているのです」

「なるほど」

テツヤ殿は頷いたが、何故か妙に渋面を浮かべていた。

私はその理由が分からなかった。

その後、話はテツヤ殿の世界へと変わった。

「俺の世界では、共和制と似たような物を採用している国だった」

国王はあくまで国の象徴として、政治には口出ししない。

あくまで国民が政治をするのだ。

「だが、国民自身が政治に無関心でいる所があるんだ。それは駄目だった」

更に長い間、戦争を経験していなかったから、平和気味で少し危機管理が欠如しているらしい。

「お前さんに渡したベレッタの弾は９ｍｍパラベラム弾と言う」

テツヤ殿は私のベレッタに使われている弾の名前を出した。

どう言う事だ？

「その弾のパラベラムには、こういう意味がある」

『汝、平和を欲するならば戦争に備えよ』

「つまり平和が欲しいならば、常に起こり得る最悪の状況に備えておけという事ですね？」

エドリアス様が同意を求めるとテツヤ殿は頷いた。

「その通り。俺の国でも軍を持っているが、それでも国民自身にその自覚が足りない」

これは由々しき状況だ、と言った。

戦が起これば戦うのは軍であり騎士だ。

だが、国民も戦に出ずとも巻き込まれるという事に気付いていないし、何の準備もしていない。

これでは最悪な事態になってもどうしようもない。

確かに、国民自身がそのような感覚では万が一の事を考えれば少し不味いだろう。

「俺も傭兵になるまでは、その弾の意味がよく解からなかった。だが傭兵になってその弾の意味がよく解かった」

そうテツヤ殿は言い、私に煙草を勧めてきた。

私はそれを受け取り銜えた。

火を点けてもらい少し吸った。

「テツヤ殿もランドルフもよく吸いますね」

エドリアス様の仰る通りだ。

現在、灰皿と呼ばれる場所には、吸殻が山のように積んであるし、煙で部屋が充満している。

それでも窓を開けているから、煙で部屋が曇ったりはしない。

「酒と煙草は男の嗜み、と俺の世界ではよく言うんでな」

「そうですか。では、明日は酒を持って来ましょう」

「頼む。実は、酒を飲みたいと思っていたんだ」

テツヤ殿は笑いながら煙草を灰皿に捨てた。

その翌日、ワイド様から小言をテツヤ殿は幾つか言われたが、風のように受け流した。

第十三章：不吉な予言（後書き）

このハンニバルの予言は恐ろしい程に当たり、ローマは覇権的な性格を強くしました。

しかし、その広大な領地を治める兵たちの性質が悪くなり、５帝の時代が来るまで続いたようです。

第十四章：獅子頭軍団

私とテツヤ殿はプロイセン様に呼ばれて軍の演習場に来ていた。

プロイセン様が最初に会った時、テツヤ殿に暇を見つけてテツヤ殿の経験などを話してくれ、と言われたので来ているのだ。

プロイセン様が指揮する軍団は「獅子軍団」と言われる軍隊で、獅子のような鬣をモチーフにした鎧と兜を見に纏い戦うからだ。

一兵が数十人の兵隊に及ぶと言われるほど一兵が優れている。

構成されている兵は重装備した歩兵ーーー重装歩兵で、速さはからっきし望めないが連携技は随一だ。

更に魔術師なども抱えており、王国内でも最強と名高い。

その強靭な兵たちが一同集まる中でテツヤ殿と私は、講義をしていた。

講義と言うか、ただテツヤ殿が話して私は隣で立っているだけだが。

今はテツヤ殿が経験した事を話している。

「ある戦の時だ」

テツヤ殿は以前、参加した戦の事を話し始めた。

「俺は一人、敵と交戦中に仲間と逸れた。周りは敵に囲まれたが何

とか逃げる事に成功した」

「どうやって逃げたんだ？」

一人の兵が挙手して質問を浴びせた。

「夜が来るのを待って、敵の包囲網が緩んだ所を見て逃げたんだ」

だが、足を撃たれて怪我をしたらしい。

テツヤ殿は、もはや日常とも習慣とも取れるように煙草を吸いながら話している。

「周りは鬱蒼とした森で光も届かなかった。だが、それは俺にとって良かった」

「どうしてだ？」

「先ず昼間でも暗いから追手から見つからなかった。それと森だった事で、薬草などが見つかった」

薬草を傷口に入れて、癒しつつ奥へと進んだらしい。

「出来る限り、人が通りそうな場所は通らないし避けるべきだ」

そして草木なども折ったりせずに物音を立てずに進む。

「一番、良いのは匍匐前進だ」

身体を地面に伏せて進むのが音も最小限で足音なども残さないから

良いらしい。

薬草を塗り、匍匐前進していたが傷口から蛆虫がわいて来たとテツヤ殿は続けた。

「蛆虫と聞けば、不潔な印象を受けるだろうが俺らみたいに満足な治療も出来なかったり、一人の時は良い」

「どうしてだ？」

「蛆虫は膿や腐敗した部分を食べることで傷口が清潔にする事が出来る」

だから、自身の傷口に蛆虫をやって傷口を綺麗にしたらしい。

「お陰で翌日には綺麗になった」

そして腐食した部分などを別方角に投げて、犬などの探索を誤魔化したらしい。

兵たちはテツヤ殿の話を興味深そうに聞いた。

プロイセン様も同じだった。

「傷の問題は解決した。だが、今度は食べ物だ」

携帯食料などは底を尽き、水も無かった。

「そこで喉と腹を満たしてくれるのが蛇だ」

「へ、蛇、ですか・・・・・」

私は思わずゴクリと生唾を飲み込んだ。

蛇を食するなど信じられない。

それは他の者たちも同じだった。

だが、テツヤ殿は煙草を吸いながら続けた。

「蛇は森や山の中でも簡単に捕まえられる。それに栄養価値が極めて高いんだ」

「毒蛇とかだったらどうするんですか？」

「毒蛇も食べられる。毒は胃の中に入れば、壊れるんだ」

だから、血が水の代わりだったらしい。

「俺が最初に居た軍隊でも訓練の一環として蛇を食していた」

味は鳥肉で美味しい、とテツヤ殿は言った。

私たちは蛇を食べる、という事に顔を青ざめた。

だが、テツヤ殿は平然と喋り続けた。

「質問しても良いか？」

プロイセン様が座りながら訊いてきた。

「何かな？」

「どう調理するんだ？」

「火を起こすと敵に見つかるから、皮を剥いだら後は生で食べた」

「な、生ですか？」

私は思わず訊いた。

「そうだ。先ず頭を切り落とし、滴り落ちる血で喉を潤す」

その後で、皮を剥いで肉を食べるとテツヤ殿は言った。

私たちはそれを想像して顔を青ざめて、出来るならそんな状況に陥りたくないと思った。

それを見通したようにテツヤ殿はこう言った。

「別に腹を壊したりしない。それに生きたいという考えが強いと、何でも食べるし何でもするぞ？」

説得力のある言葉に私達は曖昧に頷くしか出来なかった。

「流石は傭兵だ。考えが違う」

プロイセン様は、手を叩いて笑った。

「“元”が最初に付くんだが」

「これは失礼した。だが、聖騎士団にお前を入れた事、今では後悔している」

是非とも我が軍に入れたかった、とプロイセン様は話した。

「そりゃどうも」

それに対してテツヤ殿は余り興味が無いような返事で答えた。

「時にテツヤよ。主の持つ武器とランドルフが持つ武器は、どの程度の力を有している？」

プロイセン様は私とテツヤ殿の武器を見ながら訊いてきた。

「そうだな・・・射程距離はランドルフの方が上だが、連射性で言うなら俺の方が上だ」

「そうか。それでそちらの拳銃だったか？そちらはどうだ」

「こっちだと俺が使用している弾の方が弾速が遅い分、相手の人体を貫通する時間も掛る」

だから、こちらの方が人体に与える影響は大きいらしい。

「逆にベレッタは反動が小さいし、初心者でも扱い易い」

初心者でしかも、反動が小さいから女にも扱えるし好まれると付け足した。

「だが、コルトの場合サプレッサーと呼ばれる物を使用すると音がベレッタより小さくなる」

何でも弾の相性が良い事からベレッタの弾よりも音が小さくできるようだ。

「完全には消せないのか？」

「消せない。もし、音を消したいならナイフか縄で相手を殺す事だ」

ナイフで殺すなら頸動脈か脇腹を狙えとテツヤ殿は言い、左腰に差していた短剣を抜くと私の背後に回り込み、左手で口を抑えて刃を首筋に当てた。

いきなりの事で私が気が動転したが、プロイセン様達はその速さに驚いていた。

「これで相手の声を封じ、一瞬で殺せる」

脇腹なら左から貫けば、心臓部に近いから良いと言った。

解放された私は怖さで身も縮む思いだった。

それなのにテツヤ殿は見向きもしないから酷過ぎる。

「どれもこれも我が軍には無い物であり、技術だな」

「だろうな。だが、俺らの軍には無い物や技術がそちらにはある」

言わば、五分と五分だと言うテツヤ殿。

「そう言ってもらえると嬉しいぞ」

「そりゃどうも。さて、次は少し外に出てライフルなどを撃つか」

あんた等の内、何人かにも撃たせるとテツヤ殿は言い、プロイセン様を始め軍人たちは目を輝かせた。

こんな目をするから、ゲンハルト様は毛嫌いしているのだろうと私は思ってしまった。

部屋を出て、鍛錬場に行った。

獅子軍団の鍛錬場はもう一つの鍛錬場に比べて大きくて広い。

魔術師などを抱えているからである。

鍛錬場に着いた私とテツヤ殿は弓矢の練習をする場所に移動した。

「先ず、俺のＡＫＭアサルトライフルを見せる」

テツヤ殿はＡＫＭアサルトライフルを構え、引き金を引いた。

立て続けに轟音が鳴り、人の形をした的はあられも無く微塵に化した。

「凄いな・・・・・」

プロイセン様はＡＫＭの威力に目を見張った。

「続いてランドルフのＳＫＳカービンだ」

やれ、と言われて私は直ぐに肩に掛けていたＳＫＳカービンを構えた。

肩にストックを当て、照準を人型の頭に定めて引き金を引いた。

１発の弾が人型の顔に命中した。

「ヘッド・ショット。頭撃ちだ」

スナイパーは頭か心臓を狙う、とテツヤ殿は説明をした。

「確実に相手を殺すなら頭だ。だが、兜を被っているかもしれないし、外す可能性もある」

だから、通常は胴体を狙うとも付け足した。

「こいつの場合は、狙いが頭より、目に付いている」

確かに私の撃った弾は頭から少し下で目の部分に命中している。

「兜を被っている。だが、顔面は何もしていない事が多い」

仮にしていたとしても、目の部分などは隠せない。

だから・・・・・・

「目を狙えば、そこから貫通して殺せる。もしも、相手が兜と鎧で防御しているなら、目を狙え」

それも右目が良い。

何故なら大半の者が右利きであり、右目が利き目であるからだ。

テツヤ殿の説明を聞いた兵たちは納得している。

「さて、では撃ってみようか」

テツヤ殿は誰か撃ちたい者は？と訊いた。

すると、我先にと兵たちが挙手して大声を上げる。

鍛錬場に居た兵たちもそうだった。

「流石に全員に撃たせるのは出来ない。だから、何とかして決めてくれ」

余りの多さにテツヤ殿は迷ったのか、いや・・・面倒臭くなったに違いない。

自分達で誰が撃つか決めろ、と半ば放棄した。

そこへプロイセン様がこう言った。

「全員で殴り合いをして勝ち残った者が撃たせてもらえ」

それを聞いた兵たちは殴り合いを始めた。

大乱闘と言える程の凄まじさで砂煙まで上がる程だ。

「さぁ、テツヤ。私に撃たせてくれ」

兵達が殴り合いをしている間にプロイセン様がテツヤ殿にＡＫＭを撃たせてくれ、と頼みこんできた。

「お前さんも悪だな。部下達に殴り合いをさせている間に自分が撃とうとは」

確かにそれは言えている。

「何を言う。隙を突くのは戦いの基本ではないか」

これまた正論を言って来るプロイセン様。

「まぁな。どっちを撃つ？」

「そうだな・・・先ずはお前のＡＫＭだったか？それを撃たせてくれ」

「あいよ」

テツヤ殿はプロイセン様にＡＫＭを渡した。

「剣より軽いな。しかし、適度な重さだし短い。これなら取り回しも楽だな」

「大した男だな。初めて触っただけで、それだけ解かるとは」

「戦場で生活した時間の方が長いからな」

プロイセン様は笑いながら、テツヤ殿に撃つ方法を教えてもらった。

ＡＫＭを構えてプロイセン様は引き金を引いた。

轟音が鳴ると同時に兵たちの動きも一瞬で止まる。

プロイセン様は引き金から指を離した。

白い煙がＡＫＭから出て前を塞ぐ。

「余り立て続けに撃たない方が良い。煙で前が見えない」

しかし、逃げる時などは弾幕を張る時に使えるとも言った。

「なるほどな。では次は・・・・・・・・」

『軍団長！！』

顔を腫れさせ、おまけに土などで汚れた顔に怒りを露わす兵隊達。

『我々を戦わせておいて、自分だけ撃つなんて酷いです』

「虚を突くのが戦の心構えだ」

兵たちの怒りをプロイセン様は風のように受け流し、笑った。

プロイセン様がテツヤ殿と仲良く出来る、と言ったのはこれが理由かもしれない。

そんな失礼な事を私はつい思ってしまった。

第十五章：ギルドからの依頼

私とテツヤ殿は獅子軍団の講習を終えた。

あれからプロイセン様は兵たちに怨み事を言われながらも、射撃をして満足した。

それを見てテツヤ殿は「悪党になれるな」と皮肉を込めて言った。

軍の将軍であり、サラ様の親戚関係の方に対してよく言えるな、と感心してしまった程だ。

それをプロイセン様は笑いながら受け止めて、また来てくれと頼んだ。

この二人にとってこんな会話は普通なのだろうと思った私。

講習を終えて寮へと戻ると、ワイド様が出迎えてくれた。

「テツヤ、ランドルフ。すまないが話がある」

何時になく真剣で眉間に皺を寄せたワイド様を見てテツヤ殿は煙草を噛んで少し上に上げた。

私もワイド様の並々ならぬ様子に何かある、と自ずと感じ取った。

「何だ？話とは」

「ここでは話し難い。ひとまずお前たちの部屋に行こう」

ワイド様は背を向けて歩き出した。

「何だか変ですね。ワイド様」

「何か嫌な仕事でも来たんだろう」

テツヤ殿は煙草を吸いながら呟いた。

「嫌な仕事？」

「勘だが、本来なら引き受けたくない仕事だろうな」

あいつの声と表情でそれに感づいたらしい。

そして悪い予感ほどよく当たる物だ、とテツヤ殿は言った。

悪い予感ほど当たる。

それが本当なら、嫌な仕事だ。

部屋に着いた私はワイド様にコーヒーを淹れた。

テツヤ殿が用意したインスタント・コーヒーに湯を注いで渡す。

それをワイド様は受け取り、一息ついてから話し始めた。

「明日、東に向かってくれ」

「東というとヴァイガーか？」

「そうだ。そのヴァイガーで退治してもらいたい奴がいる」

「誰だ？」

「人ではない。・・・ドラゴンだ」

「ど、ドラゴンっ！！」

私は、つい大声を上げてしまった。

ドラゴンは竜の中の竜。

ワイバーンなどよりも強靭な身体と国一つを滅ぼす事も出来る破壊力、そして人間をも越えるとされる優れた頭脳を持つと言われている。

ドラゴンの仲間としてはワイバーンが居るが、単純に比べてもワイバーンはドラゴンの足元にも及ばない。

どの怪物よりも強く王者と言われる生き物だ。

「ドラゴンねぇ・・・何で俺に？」

テツヤ殿はドラゴンと聞いても驚かずに訊ねた。

「ギルドがお前を指名したんだ」

「ギルド？」

「複数の商店または集団が集まった組織だ」

テツヤ殿に簡潔にギルドを説明するワイド様は眉間に皺を寄せたままだ。

サルバーナ王国を始めギルドは5大陸に幾つも存在する。

そのギルドは東の地で暴れるドラゴンに悩まされているようだ。

最初はギルドが集めた騎士が退治しに行ったが、全員が死んだ。

それを重く見て、王国の騎士団に退治を依頼したらしい。

「そのギルドが何で俺に依頼したんだ？」

「それは解からん。ただ、お前を元傭兵だと知っていた」

「まぁ、どうせ噂で嗅ぎ付けたんだろう」

そして元傭兵なら仮に死んでも、後腐れが無い事から選んだのかもしれない。

「どうする？」

「どうもこうも俺はあんたの部下だぞ。やれと言うならやるだけだ」

「一応お前の意見を尊重する積りだ」

「優しい上司だな。それでドラゴンの特徴は？」

「色は黒。瞳はダイヤかガーネットのような色の瞳だ。蝙蝠の翼を持っている」

そして角を頭に2本生やしており、4本の足は鷲のように鋭い鉤爪で尻尾には毒があるらしい。

「俺の想像通りだな。それで弱点は？」

「・・・・・ドラゴンに弱点は、無い」

ワイド様は沈痛な声で答えた。

ドラゴンに弱点は無い。

身体に付いている鱗は剣や槍、矢も通さない。

更に魔法も効かない。

だから、ドラゴンを殺す事は出来ないのだ。

「それでどうやって退治しろと言うんだ？」

「・・・分からん」

答えになっていない答えをワイド様は出した。

何せドラゴンを見た者も居ないし、退治した者は大抵ワイバーンをドラゴンと偽り倒したと言っているだけなのだから。

だから、この答えになっていない答えもある意味では正しい。

「つまり、弱点が無く更に倒した奴も居ないそいつを倒せと？」

余りに無茶な要求だ。

しかも、死ぬ確率が高過ぎる。

「・・・あぁ。だが、断る訳にもいかん」

ギルドとは言え、民は民だ。

その民からの願いを聞き入れない訳にはいかない。

ワイド様は苦渋の顔を浮かべた。

「まぁ、良いか。ランドルフ。直ぐに行く準備をしろ」

「て、テツヤ殿。本気ですか？」

「当たり前だろ？」

テツヤ殿は何とも無い様子で返してきた。

「だ、誰も倒した事の無い生き物を倒すんですよ？」

「だから何だ。依頼が来た以上は誰かがやらなきゃならん」

それにドラゴンという生き物を見た事が無いから、一度だけでも見てみたい。

とテツヤ殿は言った。

まるで恐怖を感じない。

馬鹿なのか、楽しんでいるのか。

恐らく両方だろう、と私は頭の中で思いながらもテツヤ殿が行くなら行くしかないと思った。

この方とコンビを組んでいる以上は私も行かなければならない。

まさか、私だけ残る訳にもいかない。

「テツヤ。本当に良いのか？」

「勿論だ。仮に俺が死んでもこいつだけは生きて帰すから安心しろ」

それが年上の役目だとテツヤ殿は答えて、煙草を吸った。

その様子をワイド様は苦渋に満ちた表情で見つめていた。

— — — — — — — — — —

―　―

私は、テツヤの答えを聞いて何とも言えなかった。

ドラゴンを退治しろ、とギルドから依頼された時は驚きを隠せなかった。

ドラゴンを退治した者など居ないからだ。

よくて追い出す事くらいが関の山だ。

しかも、その代償に何万もの命と年月を要する。

それを退治しろ、と言うのだから無理にも程がある。

最初、ギルドから依頼された時は耳を疑うと同時に何かある、と感じた。

依頼をしてきたギルド自体が前々から良からぬ噂を持つ一味で、仲間内からも嫌われていたからだ。

断る事も出来た。

だが、それを見越したように奴等は言ってきた。

『ドラゴンが棲んでいる所は・・・・・ヴァイガーの城です』

ドラゴンが棲んでいる場所が元首都のヴァイガーで、荒れ城なのだ。

元首都であり、その城にドラゴンが住んでいる。

『仮にも首都だった場所に、その城にドラゴンが棲んでいるのを野放しにするのですか？』

奴等は明らかに我がサルバーナ王国を侮辱している口調で言ってきた。

私は思わず腰の剣に手を掛けた。

だが、奴等はこうも続けた。

『貴方様の下に傭兵が居りますね。そ奴を使えば良いではないですか』

元傭兵なら仮に死んでも後腐れが無いし、まだ入隊したばかりなら大して親しくないだろ？と奴等は煽ってきた。

それを聞かされて思わず依頼を引き受けてしまった私だが、今では後悔している。

死ぬと解かっている任務に部下を行かせるなど、上司として失格だ。

それにあんな露骨な挑発に載せられて引き受けるなど騎士としても失格だ。

だが、引き受けたからにはテツヤを行かせるしかない。

出来るならテツヤには断って欲しかった。

何故、奴等がテツヤの事を知っているかは解からない。

どうせテツヤの言う通り噂で嗅ぎ付けたと思うが。

私が話し終えるとテツヤは怖がった様子も見せずにあっさりと了承した。

断って欲しかったが、こいつは引き受けてしまった。

その一方でランドルフの方は慌てていた。

私だって、きっと合い方が引き受けると言えば慌てた事だろう。

だが、テツヤは私に言った。

『仮に俺が死んでも、こいつだけは生かして帰すから安心しろ』

こいつは自分が死ぬ事になろうと素直に受け入れる覚悟がある、と私は感じ取った。

前の世界では死んだ、と聞かされた。

きっと、ここで死んでもそれが自分の人生だとこいつは受け入れられるのだろう。

それを聞いて私は思わず拳を握り締めた。

ランドルフだけは生きて帰す。

否。

お前も生きて帰って来い。

お前の力が何れはこの国を助けるのだ。

それを私は確信していた。

テツヤは私に煙草を勧めて来た。

「少しはそのしかめっ面を直せ。そんな貌じゃ女が来ないぜ?」

「・・・この顔は生まれつきだ」

テツヤから奪う様に煙草を取り上げて銜えた。

人の心配を余所に平気でいられるこの男に幾分か怒りが込み上げてくるのが態度に出てしまった。

だが、こいつは気にしていなかった。

私が銜えると火が点いたジッポ・ライターをテツヤは近づけてきた。

煙草に火を点けて吸った。

軽く痛みが肺に来るが、そんな痛みより胸が痛い。

この男とランドルフを死にに行かせなければならない。

それを知っていながら命令を下さなければならない事を思うと、胸が痛いのだ。

私の様子を見てテツヤは話し掛けてきた。

「そんな貌をするなら、少し手伝ってくれ」

「手伝う？」

「あぁ」

テツヤは煙草を吸いながら話し始めた。

最後まで聞き終えた私は、煙草を灰皿に捨てて頷いた。

「・・・分かった」

「サンキュ。きっと何か裏がある」

その裏を暴け。

仮に俺が死んだら、それが俺に対する弔いだ。

そうテツヤは言った。

「・・・生きて戻って来い」

私は心から願って口にした。

「女みたいな言葉を吐くなよ。気持ち悪いな」

テツヤは何処か茶化した口調で言い返してきた。

それが私には良い薬になったのか、僅かに胸の痛みが引いて行く。

「・・・放っておいてくれ」

私は微かに笑えた気がした。

それを見てランドルフも微かに笑った。

ランドルフ・クリフ（前書き）

ここでランドルフの紹介を載せます。

ランドルフ・クリフ

名前：ランドルフ・クリフ

身長：１７５ｃｍ

体重：５０ｋｇ

年齢：１７歳→享年９５歳

職業：聖騎士団の見習い騎士→サルバーナ王国の武将→将軍補佐官

階級：見習い騎士→２等兵→１等兵→少尉→中将

衣服：青銅の鎧と両刃の剣→迷彩服にバンダナとブーニー・ハットにジャングル・ブーツ

装備：ＳＫＳカービン、ベレッタＭ９２Ｆ、モーゼルｋａｒ９８ｋ、ＡＫＳ－７４Ｕ

特技：剣術、狙撃、射撃

異名：坊や、坊ちゃん、リンクス、傭兵王の片腕、変化自在の死神、災いを呼ぶ悪魔、白い翼を持つ悪魔、守護神、女殺し、天然たらし、鈍感男、鈍感王

嗜好：煙草、酒、読書、家族サービス

座右の銘：一撃必殺

要約：サルバーナ王国に仕える聖騎士団に所属する見習い騎士で王女を護衛中に山賊で襲われた所を鷹見徹夜に助けられた。

その後、聖騎士団に入隊した鷹見徹夜とコンビを組み様々な体験をして成長して行く事になる。

後にサルバーナ王国の内戦に巻き込まれて、鷹見徹夜と共に内戦を生き抜いて正式に騎士になり鷹見徹夜と一緒に５大陸統一の任務に当たった。

５大陸統一後は若干１９歳という異例の若さで中将に出世して、長年連れ添った娘達と結婚して5児の父親となり徹夜とサラの結婚式の時には仲人役になった。

鷹見徹夜が９５歳で崩御した後、正后であるサラから史書を書く事を頼まれて最後の任務として史書を書き上げた。

鷹見徹夜と同じく９５歳で死亡するが、その死に様は座ったまま往生するという死に方で今でも語り草となっている。

鷹見徹夜達と同様に「サルバーナ王国を救った英雄」として歴史に名を残す事になる。

彼が使用した武器は家族たちに受け継がれて鷹見徹夜の武器などと同様に民達が見られるようにされた。

彼をよく知る人物たちの間では「一見もやしのような男だが、戦の事になれば鋭い目つきとなり背筋が凍りつく」と言われている。

更に彼が受けてきた任務はどれも無理に近いと言えるような任務が多かったとされているが彼はそれを一つもミスをせずにこなしてきたと言われている。

その中には殿もあり、味方からは「守護神」という異名を頂戴したと言われている。

彼に対する逸話は戦場を駆け巡った二人の妻が彼と共に戦で見た出来事である。

特に狙撃に対する逸話が多い。

ある任務で1週間ほど水だけで敵奥地まで進み、敵をスコープ無しで一撃で仕留めた。

任務から帰ると、糞尿などがズボンに垂れ流しされていたらしい。

またある任務では敵兵のスコープを狙い、スコープを貫いて殺したとも言われている。

最終的な戦果は１０００人以上とも言われており、場所に因んだギリー・スーツを着込み、スコープ無しで相手を狙う事から「変化自在の死神」と渾名された。

射撃の腕は超が付く一流で７００m以内なら確実に相手の胸を、５００m以内なら頭を撃ち抜ける程の腕前だったらしい。

座右の銘である一撃必殺は、狙撃手に求められる事であるため狙撃手達にはこれを目標としている。

またブーニー・ハットに白い翼を一枚だけ取り付けており、彼が活躍したアガリスタ共和国では「勇者」という意味合いから彼の銅像には必ず白い翼を色で付けられている。

こと恋愛に関しては恐ろしいほど鈍感だったらしく、一人目の妻に首ったけで残り妻たちの想いは周りから指摘されるまでまるで気付かなかったと言われている。

その為か周りからは「鈍感王」などという有り難くも無い名前を頂戴したらしく、また天然の女たらしであったとも言われている。

ランドルフ・クリフ（後書き）

後で彼の使用する武器も載せます。

ＳＫＳカービン

製造年：１９４５年

製造国：旧ソ連

全長：１０２０ｍｍ

重量：３，９００ｇ

口径：７．６２ｍｍ×３９

装弾数：１０連発、２０発、３０発

１９４５年に開発された自動小銃でランドルフの愛銃の一つでもある。

鷹見徹夜から剣の代わりに与えられたライフルでランドルフ曰く「我が人生に置いて最愛の恋人」と称している。

なお、銃剣が最初から取り付けられている為に白兵戦では有利に立てたとランドルフは後に語っており後に観測手を務める妻が使用する事になる。

その妻もまた「銃剣が付いている為、時間が節約できて助かった」と語っているとされている。

主にこれを使用して狙撃をしていた事から敵の間では「卑怯者」と渾名されているが、彼は「狙撃手は嫌われ者だ」と言って一心にそ

の言葉を受け止めている。

このライフルでランドルフは一躍大陸に「傭兵王の片腕」と称される力を得たと民衆の間では囁かれており「栄光」という名前を与えられた。

ランドルフ亡き後はベレッタ同様に家族に受け継がれて民達の目に出来るようにされた。

ベレッタM92FS

製造年：１９７５年

製造国：イタリア

全長：２１７ｍｍ

重量：９７５ｇ

口径：９ｍｍ×１９

装弾数：１５＋１

ランドルフ・クリフが鷹見徹夜からＳＫＳカービンと共に与えられた拳銃で女性にも扱い易い事から後に女性兵士にも愛用された。

鷹見徹夜の４人の仲間、通称「４獣」の中の何人かもこの銃を愛用していた者が居ると言われている。

芸術的な見た目からも「戦う芸術品」と言われており、コルトよりも芸術品として一級品と謳われている。

鷹見徹夜の使用するコルトに比べて反動が弱い点が上げられるとランドルフは語っておりベレッタを大変気に入っていた様子である。

後にＳＫＳカービンと共に家族に受け継がれて、民達に見られるように配慮された。

第十六章：東の地へ（前書き）

ここで、少しランドルフと妻となるキャラの話を載せる事にしました。

第十六章：東の地へ

史書を書いていた私は一息いれる事にした。

使用人が淹れたコーヒーを飲みながら、あの時の事を思い出す。

徹夜様が跨ったドラゴン・・・・・メジュリーヌ。

メジュリーヌとは徹夜様が名付けた名前で半人半蛇の女性である「メリュジーヌ」から取っているらしい。

とは言ってもただリュとジを前後左右に変えただけだ。

これはあの方が「自分だけの名にしたい」という事で新たな名前を考えるのも嫌だから左右に文字を入れ替えただけという理由がある。

話を戻すとこのメリュジーヌは背中に翼が生えており額にはガーネットの額当てがあると言う。

人間姿になった彼女を見て徹夜様はそう名付けたのだ。

彼女は徹夜様を乗せて戦場を翔けた戦友だ。

その彼女も・・・この世に居ない。

徹夜様が崩御したその日、自ら命を断ったからだ。

今にして思えば、彼女が一番・・・徹夜様の崩御に哀しみを覚えたのかもしれない。

他の方も哀しんでいたが彼女が一番だったと私は思う。

周りから迫害され追われ続けた彼女に手を差し伸べたのが徹夜様だった。

徹夜様を愛し護り抜いたのもそれに対する答えであり恩返しと言える。

彼女にとっては徹夜様だけが、生きる糧であり、希望であり、全てなのだ。

だから、徹夜様が亡き後の人生を過ごしたくないと思い自ら命を断ったのも頷ける。

自ら命を断った彼女だが、その死に顔は徹夜様同様に眠るような死に顔だったのを今でも覚えている。

きっとあちらでも徹夜様を背中に乗せて空を飛んでいるに違いない。

そして徹夜様達を乗せて私と妻達を迎えに来るだろう。

コーヒーを机の上に置いて煙草を取り出す。

銘柄は、徹夜様の居た世界で「女神の抱擁」という名前の煙草だ。

私もこれを愛喫してから既に数十年になる。

煙草を銜えてジッポ・ライターで火を点ける。

これも徹夜様から与えられた品物だ。

私と妻の結婚記念日の時に送られた物で、徹夜様の形見としている。

火を点けながら煙を吐いた。

「休憩？」

声がして振り返る。

私の妻の一人が立っていた。

私の妻は同い歳で共に徹夜殿に仕えて苦楽を共にして来た。

結婚してから既に数十年になるが今でも私は妻を愛している。

「あぁ。少し疲れた」

私は煙を吐きながら、肩を叩いた。

「さっきからずっと書いてたものね？」

妻は笑いながら、私の肩に手を置いてくれた。

「あぁ。徹夜様と初めて会ったのが昨日のような感じで手が止まらなかったんだ」

「・・・あの方が亡くなってもう2年も経つのね」

妻は何処か哀しそうに呟いた。

「・・・あぁ。だけど、私達も何れはあの方たちの居る場所に行くんだ」

そう、行きとし生きる者は必ず死ぬ。

死ねば、私たちも土に還るだろう。

だが、きっとその時は徹夜殿とまた再会出来る。

それが老いた今では楽しみとなっている。

「えぇ。そしたら、また皆で楽しくやりましょうね？」

昔のように酒を飲んで馬鹿騒ぎをしようではないか。

「もちろんだ」

あんなに楽しい事は無い。

だから、またやりたいと思う。

「で、何処まで書いたの？」

「君と初めて会う場所に行くまで書いた」

「あの時は貴方まだ本当に騎士に成り立ての歳だったわね？」

「君もやんちゃな娘だったね」

「えぇ。あの時は貴方と結婚して子供を作るなんて思わなかったわ」
妻は草原色の瞳を綻ばせて笑った。
「私もだよ。だけど今は夫婦だ」
「えぇ。不思議な物ね？」
「あぁ。だが、君と出会えてこうして共に生きていけるのは嬉しいよ」
実際、彼女と残りの妻たち以外の者と結婚しようと思った事は一度も無い。
「私もよ」
妻も私と同じ考えを言ってくれ私の肩を抱いてくれた。
私も両手で妻の手を包みながら、煙を吐いた。
「さて、後もう少し頑張るか」
私は煙草を灰皿に捨てた。
「頑張って」
妻に促されて、私は直ぐに史書を書き始めた。
これを書く事が、私の最後の任務であり、徹夜様の生涯を書き残すのだ。

あの方の一生を最後まで見届けた私にしか出来ない任務なのだ。

―――――――

私とテツヤ殿はジープに乗り、東の地へと向かっている。

ヴァイガーはエスカータ城から馬に乗っておよそ１０日ほどの距離だ。

ジープだと恐らくその半分で着くとテツヤ殿は言っていた。

ドラゴン退治・・・・・・考えるだけで足が震える。

どんな武器も魔法も効かない相手にどうやって挑み、退治するか。

考えるだけで頭が痛くなる。

だが、テツヤ殿は口笛を吹く余裕さを見せている。

「そんな顔をするな」

テツヤ殿は口笛を吹くのを止めて私に語り掛けて来た。

「ドラゴンなんて、翼の生えた蜥蜴だと思えば良いんだよ」

「無茶言わないで下さい」

最強の怪物であるドラゴンを翼の生えた蜥蜴と思え何て無茶だ。

「ドラゴンは最強なんですよ？」

「だから何だ。俺らは言われた仕事を片付けるだけだ」

「テツヤ殿は、怖くないんですか？」

「会った事も無いから恐怖は感じない。いや、感じないようにしている」

「感じないように？」

「そうだ。どんな奴か会った事も無い敵と戦う」

これはかなり恐怖を感じる。

それはスナイパーと同じである。

「だが、恐怖を感じるとミスを犯し易い」

逆に何も恐怖を感じないのも問題だ。

「じゃあ、どうすれば良いか？適度な恐怖を保て」

死の恐怖。

これが戦場で生き残れる方法であり、上手く付き合えるコツらしい。

「まぁ、まだ着くまで2、3日は掛るんだ。もう少し気を楽にしろ」

そうしないと、いざと言う時にまともに動けないぞ、と言われた。

そして女神の抱擁をテツヤ殿は勧めてきた。

それを銜えた。

これを吸うと気分が落ち着く。

名前の通り女神に抱き締められている感覚がするからかもしれない。

煙を吐きながら、私は出来る限りドラゴンの事を頭から切り離して別の事を考える事にした。

やがて夜となった。

焚き火を起こしながらテツヤ殿はＡＫＭアサルトライフルとドウタヌキの手入れをしていた。

「先ずドラゴンの特徴は分かっている。尻尾に毒がある事と空を飛べる事だ」

テツヤ殿はＡＫＭアサルトライフルを手入れしながら相手の特徴を言い始めた。

「空を飛べるとなると・・・かなり厳しいですね」

私とテツヤ殿だけでドラゴンを退治する時点で厳しいのだが、敢えてそれは考えない事にした。

「あぁ。空をどれ位の速さで飛べるのか・・・それが分かるだけでも作戦を立て易いんだがな」

「噂によると雷より速いと聞いております」

「雷より速い、か。そうなると、こいつでは無理だな」

テツヤ殿はジープに置いてある物を見た。

“ＲＰＧ－７”と呼ばれる代物で、対戦車兵器と呼ばれる物らしい。

これもＡＫＭなどを作り上げた国の物で、もはやこの国の十八番とも言える安価で頑丈。

その為、テツヤ殿が居た世界では様々な国がこれらを使用していたと聞いた。

ドラゴンを退治する為、ＲＰＧの他にも幾つか武器を宅配人に頼みこんで取り寄せた。

ＲＰＧもそれの一つだ。

「それではドラゴンを仕留められませんか？」

取り寄せた武器がドラゴンに通用するか、気になって質問した。

「こいつは遅い。しかも射程距離が余り長くない」

そして一度でも撃てば直ぐに見つかる。

「もしも、ドラゴンにこれを使うとなれば・・・・少なくともギリギリの距離まで近づいて撃たないと駄目だな」

「難しいですね」

近付けば鉤爪で切り裂かれるし、遠くでは当たらない可能性が高い。

「あぁ。だが、どんな奴にも弱点は必ずある筈だ」

幾らドラゴンが堅い鱗に覆われていようと、弱い部分は必ずあるとテツヤ殿は言った。

そこを突けば必ず勝てる。

それを聞いて私はその弱点が果たして何処にあるのか?と考え込んだ。

翌日、私たちは更に進んだ。

東の地は辺境だが、誰も住んでいないと聞くし、山が多いから交通から何もかも不便だ。

その為、獣や魔物から言わせれば天国かもしれない。

だが、今の所は誰も来ないから幸いと言える。

ここでテツヤ殿が宅配人に頼んだ武器などを思い出してみる。

“ＲＰＧ－７”

“ＦＮ　ＦＡＬ”
“Ｍ１８クレイモア”
“Ｍ２２双眼鏡”
などなどだ。

どれも見た事もない武器であり装備だ。

そして私も鎧を脱いで今はテツヤ殿が着ている迷彩服を着ている。

これで茂みなどに隠れてドラゴンをやり過ごすと言っているが、臭いなどを嗅がれたら終わり、と思う。

テツヤ殿は「ドラゴンが最強なら重たい鎧より軽い物を着ていろ」と言われた。

確かに鎧は重くて俊敏な動きが難しいのは否めない。

私の青銅鎧などはそれこそ安価だが、重い上に更に俊敏な動きが出来ないと言う酷い物だ。

だから、この迷彩服を着ると実に動き易いと思う。

ジープを運転しているテツヤ殿はこの土地を見ている。

「ここならゲリラ戦には打って付けだな」

「ゲリラ戦？」

「まぁ、簡単に言うなら民兵や大規模な戦いが出来ない奴等が使う戦法だ」

罠を仕掛けたり、茂みなどから出て来て相手を殺す戦法らしい。

その他にも敵の兵站を狙う、敵陣地の放火などが上げられるらしく少人数で行動するのも特徴と言える。

「テツヤ殿も経験したのですか？」

「そうだな。まぁ、俺の場合は市街より砂漠や森林が多かった。そこでやるとするならゲリラ戦か狙撃だ」

そうすれば最小限の被害で済み、相手を精神的にも追い詰める事が出来ると言った。

「万が一、国内の火種が燃え出して城が攻め落とされたらここ等に逃げ込むのが上策だ」

「ですが城を落とすのは並大抵の事ではないですよ？」

「だろうな。だが、あの城は・・・・簡単に落とせるぞ」

先ず水掘があるのは土を埋めれば良いだけだ。

エスカータ城は、水堀がそんなに深くないから直ぐに埋められる。

「その他にも塔が少ない。それに城自体の守りが無い」

「確かに、城壁さえ越えてしまえば、後は門を壊して中に入れますね」

「だろ?それに獅子軍団だが、あれは重装歩兵だから動きが鈍い」

迎え撃つのになら適している。

しかし、守りとなれば俊敏な動きも求められる。

そうなると・・・・・・・・

「想像したくないです」

自分が居る城が炎を出して燃える所など見たくないに決まっている。

「だろうな。まぁ、今は今の仕事に全力を出すぞ」

「はい」

私はＳＫＳカービンを強く握り締めた。

剣の代わりがこれだ。

『頼むよ』

私は心の中でＳＫＳカービンに願いを込めた。

第十六章：東の地へ（後書き）

ちょっと無理やりとも後付けとも言える感じで直しました。（汗）

それから前書きで書いたキャラ人気投票ですが、男女ともに1票ずつで理由も教えて下さい。

かさねがさね申し訳ありません！！

第十七章：東の地を護る者（前書き）

２２，５７７アクセス達成しました！！

皆様、何とお礼を言えば良いか分からずにいる、この私をどうか許して下さい。

これからも、励みとして頑張って行こうと思いますので宜しくお願いします。

第十七章：東の地を護る者

ジープを走らせていたが山道であり悪路などもある事からか余り良く進めなかった。

そのせいか気が付いて見たら夜になっていたのだ。

「今日も野宿だな」

テツヤ殿はジープを停めて降りようとしたが、直ぐにＡＫＭアサルトライフルを茂みの中に向けた。

「誰だ？」

私もテツヤ殿に倣い、直ぐにＳＫＳカービンを向けた。

しかし、私には何も感じないし誰か居るのか分からない。

ただテツヤ殿がやるのだから、誰か居ると言う事は確かだ。

「素直に出てくれれば、命は助けてやる」

テツヤ殿が引き金に指を掛けて、冷たい声で囁いた。

すると茂みから一人の老人が出て来た。

長い髭が特徴的で、テツヤ殿と私が着ている迷彩服に近い色をした服装をしていた。

腰には短剣と弓矢がある。
都で使われる弓よりも太い弓だった。

「誰だい？あんたは」

「この近くに住む者だ。あんた等は？」

「都から来た者だ」

「都？すると、この前に来た荒れくれ者の仲間か？」

「ギルドから派遣された騎士の事ですか？」

私が問うと老人は鼻で笑った。

「あんな奴等は騎士じゃない。わしにさえ勝てない弱者だ」

勝てない、という事は戦ったのだろうか？

「爺さん。あんた、この近くに住んでいると言ったが、ここを元首都ヴァルガーのあった場所だと知っているのか？」

「知っているとも。何せこの土地に住む者達は何百、何千年も前から代々ここを守り抜いている者達だからな」

「何千年も前から・・・・・・・」

私は誰も住んでいないと言われていた東の地に住んでいる者が居ると知り、驚きを隠せなかった。

「どうやら知らんようだな?まぁ良い。お二人さん。見た事もない格好をしているが、中身は悪くなさそうだ」

付いて来い、と言われた。

「何処に?」

「わしが治める村だ」

「それならこいつに乗れ」

テツヤ殿は乗っていたジープのハンドルを撫でた。

「それは?」

「ジープという乗り物さ」

「動物のように見えるな。だが、鳴きもしないし微動だにしない。随分と大人しいな」

「いいや。とんだじゃじゃ馬さ」

テツヤ殿の言葉に老人は笑いながらジープに乗り込んだ。

そしてジープを走らせた。

「なるほど。じゃじゃ馬とはよく言ったものだ。痛たたた」

老人はジープに揺られて呻いた。

「我慢しな。悪路も走る為の代償だ」

老人にジープの説明をしてからテツヤ殿は自己紹介を始めた。

「俺は鷹見徹夜。こっちはランドルフ・クリフだ。爺さんの名は？」

「ロンガームだ。あんた等は都から何しに来たんだ？」

「聖騎士団の命令で、ドラゴンを倒しに」

「ドラゴン？すると、あの城に棲む“怪我人”か」

「怪我人？」

「あの者、どうしたのかだいぶ前から居てな。最初は皆が恐れたが、何もしてこないから今では放っておいている」

ただ、傷の具合からしてもう長くない、と言った。

「怪我をしているのか？」

「うむ。翼と腹に大きな杭が刺さっている。どうやら魔法を掛けられた杭らしくてな。鋼鉄より堅いと言うドラゴンの鱗を突き破っている」

「話と違うな」

「はい。ドラゴンはどんな武器も魔法も通用しないと・・・・・・・・・」

「若いの。それは違うぞ」

老人ことロンガーム殿は私を見て、こう言った。

「どんな者にも必ず死は訪れる。ドラゴンの場合は、他の生きる者に比べて頑丈なだけだ」

だから、何れは死ぬ。

それが遅いか速いか。

また病死か殺されるか、老衰か。

「見ているこちらが憐れなほどに衰弱を始めている。だが、気位が高いドラゴンでな」

誰も近づけさせない、と言った。

「で、話は変わるがその荒れくれ者はどうしたんだ?」

「ドラゴンに燃やされた。まぁ、初めて見た時から胡散臭い奴らだったから死んで清々したわ」

騎士の格好をしているが、眼を見れば如何にも山賊から騎士になった輩だ、と推測したらしい。

「わしらを見ると、こんな辺境の寂れた場所に人が居るのか?と言ってきたわ」

「まぁ、辺境で寂れた場所に変わりはないが、仮にも首都だった場所をそんな風に言うのはどうだかな」

「その通りじゃ。わしらは、この地に生まれた事を誇りにしている」

初代国王から先祖が言われたらしい。

『何時の日か、またこの地に王国は戻って来る。それまで、この土地を護り訪れた者たちの力になってくれ』

「それを未だに守っていたのですか？」

「ランドルフ。“守っていた”じゃなくて“守っている”だ」

テツヤ殿は私の発言を訂正した。

「その通り。わしらは、国王から命を受けた。言わば親衛隊だ」

「それも影の親衛隊だな」

何千年も歴史と言う名の闇に隠れながらも忠実に命令を守り抜いている誇り高き影の親衛隊。

「ははははははは。そちらの兄さんは詩人だな」

「生憎と元傭兵だ」

「そうか。だが、金の為や自分の為には一度も戦って来た者ではないな」

「・・・・・・・」

テツヤ殿は無言になった。

確か、前は究極の状況を楽しむ為と傭兵でしか生きる道が無いと言っていたが、その他にも理由があるのか？

「図星のようだな。あんたを見て分かった」

金の為や自分の為に戦う傭兵ではなく、別の理由・・・それも傍から見れば物好きな理由で戦っている傭兵だと。

「・・・さぁ、どうだろうな」

テツヤ殿はお茶を濁すように運転に集中した。

それから暫くジープを走らせていると、明かりが見えた。

「見えたぞ。あそこがわしが治める村・・・・ヴィルップだ」

ロンガーム殿は誇らし気に自分の住んでいる村の名を言った。

「その声からして何かあるな？」

テツヤ殿がロンガームに訊いた。

「勿論だ。初代国王陛下より授かった名前だ。意味は・・・衰退から栄光へ」

元首都で今は寂れた場所だが、何れは栄光の首都へと戻る。

そういう意味が込められているようだ。

「大した国王だ。後で女王に話しておくか」

「サラ様を知っているのか？」

「まぁな。ちょっとした仲だ」

「あの、どうして今の国王の名を知っているんですか？」

幾ら王国の領土とは言え、流石にここまで名前が知られているとは私には考えられなかった。

「山に住む者達には、山の情報手段がある」

鳥や獣が魔物、様々な者達が教えてくれる、とテツヤ殿は説明した。

「その通りだ。都の者は海に住む者達の方が優れていると思っているが、山に住む者達も負けてはおらん」

私はロンガーム殿の言葉にただ頷いた。

明かりが近付いて来た。

よく見ると松明を持った男達だった。

手には鉈や斧、弓矢で武装していた。

何だか雰囲気が妙にピリピリしている所を見ると、私たちを先に訪

れた騎士たちの仲間と思っているのだろうか？

「皆の者。こちらは都から来た方々だ。この前のような荒れくれ者ではない」

ロンガーム殿はジープから降りて男達に説明した。

「先ず、こちらの武骨な方がタカミ・テツヤ。そちらの若いのがラン・・・・・ランダルフ？いや違うな。ランパード？ドルフター？ん？どうも思い出せん」

「ランドルフ・クリフ・・・です」

何でテツヤ殿の名前だけ覚えて、私の方は駄目なんだ？

そんな事を思いながら自分で名乗った。

その様子を男達は同情する眼差しで見てきた。

「今宵は我が家にお泊めする。大家族だが、勘弁してくれ」

「大勢の方が賑やかで良いさ。それと家に入る前に礼を言わせてくれ」

テツヤ殿はジープから降りた。

私もそれに倣う。

すると、テツヤ殿は礼の言葉を言い始めた。

「見ず知らずの俺達に対して一食一膳の宿を貸してくれて、ありがとう」

テツヤ殿は帽子を取り、一礼した。

私も一礼する。

「なぁに気にするな。都から来た、しかも女王陛下と知り合いの方を野宿させるなど我等の恥だ」

ロンガーム殿は笑いながらも礼の言葉を受け取ってくれた。

そして一番、大きな家・・・屋敷とも言えなくない大きさの建物に招き入れられた。

ジープは家の前に停めさせてもらった。

中に入ると大人数の男女が私とテツヤ殿を迎えてくれた。

「紹介しよう。わしの家族だ」

ロンガーム殿は私とテツヤ殿に家族を紹介した。

上から下まで全員で１０人という大家族だ。

「こちらがわしのこの世で愛して止まない女、レイリアだ」

ロンガーム殿はとても温和で優しそうな老女・・・いや淑女であるレイリア殿を紹介した。

「初めまして。ロンガームの妻、レイリアと言います」

「初めまして。俺は、いや私の名は鷹見徹夜と言います。元は傭兵ですが、今は聖騎士団に入隊しております」

今夜はこちらのロンガーム殿に一食一膳の宿を貸してもらい助かりました。

とテツヤ殿は礼儀正しい口調で喋った。

この人もこんな丁寧な言葉遣いが出来るのか、と失礼にも思ってしまった。

サラ様に対しても何処か尊大な言い方をするのに、レイリア殿に対してはどうしてこんな言葉使いなのか疑問に思った。

「ご親切にありがとうございます。で、そちらの方は？」

「あ、し、失礼しました。ら、ランドルフ・クリフと言います。同じく聖騎士団に入隊しております」

私はレイリア殿を見ていて、慌てて自己紹介をした。

「お二人とも何もない家ですが、どうぞ身体を休ませて下さい」

「ありがとうございます。それと何も無いなどとんでもないですよ」

テツヤ殿はこう付け加えた。

こんなに優しさと温もりがある素敵な家です。

そう付け加えた。

「ありがとうございます」

レイリア様はスカートの裾を持ち上げて一礼した。

それだけでも画になり品があり、貴族の方と言われても私は信じてしまうだろう。

「では、次はわしの息子夫婦を紹介しよう」

続いてロンガーム殿は息子夫婦を紹介した。

そして次に孫達を紹介してくれた。

先ず最初に前に出たのは私と同い年くらいの娘だった。

赤銅色の頭髪は癖っ毛で、それを額に付けた鷲色の布で止めている。

肌の色は健康的な小麦色で森林を思わせる緑の色は活き活きと輝いて私の胸を時めかせた。

な、何だ?この時めきは?

「長女のガリシャだ。宜しくね?坊ちゃん」

「ぼ、坊ちゃん?」

私は時めきも忘れて、訊き返した。

「だって、あんたあたしより年下でしょ？」

「失礼だけど、君は？」

「あたし？あたしは１７歳だけど」

「私も１７歳だ」

「うっそ！！見るからに１５歳くらいに見えるよ？」

「・・・放っておいて下さい」

私は明らかに傷ついた声で言い返した。

「お嬢ちゃん。男の心は繊細なんだ。こいつ位の歳だとそれが余計にな」

だから、傷つくような言葉は止めてくれとテツヤ殿は言ってくれた。

「そりゃ悪かったね」

ガリシャは私に謝ったが、まるで誠意が込められていない。

「これ、ガリシャ。騎士様に失礼だろ？」

ロンガーム殿が私の余りに情けない所を見て叱りつけた。

「謝ったじゃない？」

「お前の謝りには誠意が込められておらん」

「なぁに、これ位の事で気にしていたら女に愛想を尽かされる」

こいつはそんなに心が狭くない、とテツヤ殿は勝手に言った。

だが、ある意味では私の為にそう言ったのかもしれない。

「気にしてないよ」

「へー、優しいね。さっきは悪かったよ。これはお詫びの品だよ」

そう言ってガリシャは私の頬に口付けをしてきた。

温かい感覚がして、私は気絶した。

第十八章：傭兵のスキル

私とテツヤ殿はロンガーム殿達と共に食事を食べている。

メニューはガリシャが仕留めた猪の肉と村で取れた野菜などを合わせた猪鍋だ。

ガリシャに口付けをされて気絶した私だが、直ぐにテツヤ殿に１０発も平手打ちをされて強制的に目を覚まされた。

お陰で両頬が痛くて堪らない。

赤く腫れ上がった両頬を見ては小さな子どもたちは笑っている。

酷い子供たちだ。

ロンガーム殿はここでの生活環境などを私たちに教えてくれた。

「ここでは女も大切な人手でな」

誰もが何かしらの仕事をしているらしい。

小さな子どもたちも木の実を取ったり、魚を釣ったり、薪を拾って来たりなどしては大人たちを助けているようだ。

特に長女のガリシャは弓矢の名手らしく何時も狩りをして来ては食材を調達して来ていると説明された。

そして村一番の狩人として有名なようだ。

「弓矢が上手いか。大したお嬢ちゃんだ」

テツヤ殿は猪の肉を頬張りながらガリシャを褒めた。

ガリシャの傍らには弓矢がある。

通常の弓より大きく、そして太い。

弦も倍以上太い。

これを女の身で引き絞るなど到底想像できない。

「ありがとう。旦那は弓矢が扱えるの？」

「出来るさ。よく狩りに使用するし、敵を殺すのに役に立つ」

「そう言えば、傭兵だっけ？」

「あぁ。金で雇われる兵隊だ」

「ねぇ、今までどんな所を周ったの？」

ガリシャは興味津々で訊いてきた。

「砂漠、密林、荒野、が主だな。市街地での戦闘もあったが、俺の場合は辺境が多かった」

そちらの方が戦い易かった、とテツヤ殿は答えた。

それをロンガーム殿達は聞いていた。

「横に置いてあるのが旦那の商売道具？」

「あぁ。ＡＫＭアサルトライフルと言って、俺らみたいな貧乏人には最高の女房なんだ」

テツヤ殿はＡＫＭアサルトライフルを見せた。

「初めて見る武器だけね」

「まぁな」

「そっちの坊ちゃんが持っているのは？」

ガリシャは森林の瞳を私に向けてきた。

見られるだけで頬が熱くなる。

「わ、私には、ランドルフという名前が・・・・・・・・・・・・・・・」

「ランドルフ。答えてやれ」

テツヤ殿に促されて、仕方なく答える事にした。

「こ、これは・・・ＳＫＳカービンと言って、その、狙撃に使うんだ」

「カービン？」

「騎兵という意味だ。全長が短いから馬に乗っても扱い易いんだ」

テツヤ殿がカービンの意味を教えた。

「ふーん。ねぇ、明日にでも撃たせてくれない？」

「別に構わないさ。まぁ、仕事の方もあるがな」

「あの、テツヤ殿。ドラゴンをどうするんですか？」

私は気になっていたので訊ねた。

ドラゴンは傷を負い、長くないとロンガーム殿は言った。

もしも、それが本当なら自然に死ぬのを待った方が良い、と私は思った。

「ロンガーム爺さんの話を聞いていると、あのギルドの依頼は臭い」

だから、ワイド様に調べて置いてくれと頼んだのだ。

だが、これで疑惑は確信へとなった。

「取り敢えずドラゴンの様子を見に行く。それから決める。どうだ？」

「分かりました」

私はテツヤ殿の意見に頷いた。

食事を終えた後、私とテツヤ殿は風呂に案内された。

屋敷の中にあるが、夜空を一望できる造りとなっている。

「星が綺麗ですね・・・・・・・」

私は風呂に肩まで浸かりながら、空に浮かぶ星を眺めた。

都で見る時より素晴らしい景色だ。

「だな。しかし、ここが何れ首都に戻る、か。どうも初代国王は、予想していたのかもしれないな」

「と言うと？」

「国ってのは栄枯があってこそだ。だから、この国も何れは衰退する」

国内の火種が原因で。

「それからここに首都が戻り、また栄光になる」

だから、この村の名をそういう意味合いで名付けたのだろうとテツヤ殿は推測した。

「だとすると、国内の火種が・・・・・・・・・」

「あぁ。起こる、という事だ」

私は未だに実感が沸かなかった。

だが、テツヤ殿の推測を聞くと、本当に起こりそうで怖かった。

「もしも、国内の火種が起こったらどうなるんでしょうか？」

「俺の経験上、内戦が起こると国は二つになる」

１つは反乱軍に付く側、１つは国王軍に付く側。

そして互いにぶつかり合い次第に泥沼化して他国に干渉され易くなる。

「他国に干渉されると更に面倒になる」

他国から軍やその力が及んだ組織が武器と兵隊を持って来て更に泥沼化し、それを口実に産業や土地を奪ったり恩を売るのだ。

「そして最終的には取り返しのつかない事になる」

何年、何十年も続いてやっと国が統一される。

だが、そこからまた問題が起きて元の状態に戻ってしまう。

「では、どうすれば良いんですか？」

「迅速に事を治めるしかない」

反乱軍を草の根残さず根絶やしにするしかない。

それも迅速で確実に。

「反乱を企てている輩は４人の貴族が今の所、明白だろ？」

「はい」

「そいつらにどれだけ従う者が居るか、そして反乱の準備がどれ位まで出来ているか、また他国と通じているかも問題だ」

ムガリム帝国以外の国も要注意だとテツヤ殿は言った。

「・・・・・・・・」

私は何とも言えなかった。

一階の見習い騎士である私には、これらの事をどうやって処理するか対処するか皆目見当がつかない。

「まぁ、俺らは所詮は“駒”だ」

ただ打ち手が動かすのを待つしかない。

そうテツヤ殿は言い、湯で顔を洗った。

風呂から上がり、部屋に案内された。

「では、何かあれば呼んで下さい」

レイリア様は一礼して部屋を出て行った。

「ああいうのを、“淑女の鑑”と言うんだろうな」

テツヤ殿は女神の抱擁を銜えながら呟いた。

「ですね」

私も受け取り銜える。

「お前も嫁さんを持つならああいう女を持ちな。まぁ、あのお嬢ちゃんも中々の物だが」

お嬢ちゃんとはガリシャの事だろう。

テツヤ殿はガリシャを身体付きも良いが、質素な生活にも耐えられると付け加えた。

「確かに、ここの村人たちなら質素な生活には耐えられそうですよね」

失礼な言い方だが、こんな辺境の地で泣き事を言わずに暮らしていけるのだから大した物だ。

「嫁を持つなら辛抱強い女、それか自分の意志を持てる女を選べ」

「それ以外の女性は？」

「余り勧められないな。まぁ、俺の経験上だがな」

テツヤ殿はどれだけ女性遍歴があるのか、と思った。

「今、俺がどれだけ女と寝たかと思っただろ？」

「ど、どうして分かったんですか？」

「お前さんの考える事くらいは解かる」

火を点けながらテツヤ殿は笑った。

「大抵、俺は商売女としか寝ない」

こんな生活をしているから普通の生活を送る女とは暮らせないらしい。

「それに1年の大半を戦場で暮らしてたからな」

だから、無理だと言った。

「1年の大半を戦場ですか」

「あぁ。傭兵のスキルとして、質素な生活に耐えられるかも重要だ」

毎日のように熱い場所や寒い場所でも生活できるか、女を抱けなくても我慢できるか、食事が満足に取れなくても良いか、数えれば切りが無いほど質素な生活が求められるらしい。

「これに耐えられないなら傭兵にはなれない。なれても直ぐに死ぬか帰るだけだ」

テツヤ殿は煙を吐きながら何処か遠い目をした。

「テツヤ殿は、傭兵になって質素な生活には耐えられるんですね」

「あぁ。餓鬼の頃から孤独だからな。だから、その辺は何とかなる」

お前の方は？と訊かれた。

「私の場合、父が3歳の時に死んだんです」

死因は病死だった。

それからは母親が女手一つ育ててくれた。

決して裕福な生活ではない。

寧ろ貧しい生活だったが、温もりが溢れていた。

「元気なのか？」

「私が聖騎士団に入って直ぐに病死しました」

長年の無理が祟ったのだ。

「そうか。兄弟は居るのか？」

テツヤ殿は淡々とした口調で訊いてきた。

戦場で生きてきたから恐らく人の死が日常と化して、何ともなくなったのかもしれない。

だが、口調とは裏腹に何処か哀しそうな瞳もしていた。

「居ます。ですが、独立して殆ど会っていません」

兄弟姉妹はそれぞれ奉公に出て、生活しており手紙のやり取りもしていない。

私も聖騎士団に居るから満足に会う事もままならないのが理由だ。

「兄弟姉妹が居るなら、手紙の一つ位は出しておけ。いつ死に別れになるか分からんぞ」

特に騎士だろうと傭兵だろうと、命のやり取りをする者たちは尚更だと言った。

「では、今度、手紙でも書きます」

「そうしろ。家族が居るならそいつらを大事にしろ」

それは良い男になれる秘訣とも言った。

「テツヤ殿はまるで司教様ですね」

「生憎だが、俺は神を信じていない」

いや、信じてはいるが決して願いや救いを求めたりはしない。

「何故です？」

「願った所で助けたりはしないだろ？」

確かに、そうだ。

神を信じているからと言って、助けたりはしない。

ただ、傍観しているだけだ。

その神に願いや祈りを捧げるのは良い事だ。

だが、助けを求めたりはしない。

寧ろその誰かに願う所が自分の弱さを示している、と言われた。

「神に忠誠を誓い、愛するのは良い事だろう。だが、自分で何もしないで他力本願するのは止めた方が良い」

それをするだけ自分が駄目になる、とテツヤ殿は言い切り煙草を吸い続けた。

「そして神にもたれかかり過ぎるな」

人生とは己自身が築き上げていく物であり、決して誰かにもたれ掛り行ける物ではない。

だから、神に頼り過ぎるな。

自分の人生は自分で決めろ。

そして迷惑を掛けるな。

テツヤ殿の言葉に私はそれに頷いて煙を吐いた。

ドアが叩かれる音がした。

「誰だ？」

テツヤ殿はＡＫＭアサルトライフルを持ち、壁に張り付いた。

私はベレッタを両手で構える。

「ガリシャだよ」

「・・・・・・」

テツヤ殿に目で合図されて、ドアを開けた。

ドアの前にはガリシャが立っていた。

手には瓶と陶器の器があった。

「酒でも飲まない？」

「酒か。良いぜ」

テツヤ殿は壁から離れた。

「用心深いんだね」

ガリシャはテツヤ殿の様子を見て呟いた。

「因果な商売をしているんでね」

テツヤ殿は煙草を携帯灰皿に捨ててベッドに腰を降ろした。

「まぁ良いや」

ガリシャは肩を落として、器に赤い液体を注いだ。

「村で取れた果実酒だよ」

「ほぉう。中々の匂いだな」

テツヤ殿は器に入っている液体を見ながら、匂いを嗅いでいた。

「別に毒何か入ってないよ」

あんた、食事の時も決して先に手を付けていなかったでしょ?とガリシャは指摘した。

確かに言われてみれば、テツヤ殿は皆が手を付けてから食事を開始した。

「大した洞察力だな」

「まぁね」

ガリシャは器を口にした。

それを見てからテツヤ殿も口にした。

私も渡されているので口にする。

口の中に甘い味が伝わって来る。

「美味いでしょ？」

ガリシャが私を見て、訊ねてきた。

「あ、う、うん」

私は曖昧に頷いて器を再び口にする。

「ねぇ、ドラゴンの事なんだけど、あたしも行って良い？」

「何しにだ」

「興味本位」

「下手な好奇心は身を滅ぼすぞ」

テツヤ殿は酒を飲み干して断言した。

「大丈夫だよ。足手まといにはならないって」

「ロンガーム爺さんと親父さんの許可を取れ。二人の許しが出れば連れて行く」

「テツヤ殿、良いんですか？」

「あの二人が許すならそれで良い。仮に死んでも俺らは責任を負わない」

無責任とも言えるが、それ位の覚悟を持てとも聞こえる。

「分かった。それじゃあたしは風呂に入るわ。酒は二人で飲んで良いよ」

そう言ってガリシャは部屋を出て行った。

私とテツヤ殿は酒を飲み干してから眠りに着いた。

第十九章：一食一膳の恩

翌日、私は再びテツヤ殿がＡＫＭアサルトライフルを掃除する物音で目を覚ました。

「おはよう」

テツヤ殿は煙草を吸いながら私に挨拶をした。

灰皿を見れば、やはり数十本も吸い殻がある。

この人はどれだけ起きていたのか何となくだが分かる。

「おはようございます」

挨拶を返して私は今日、行くのか？と訊いた。

「そうだな、天気がどうこうなのも問題だ」

外を見れば余り良い天気ではなかった。

「山の天気は変わり易い。甘く見て行くと墓穴を掘る」

それに今日はガリシャにＡＫＭアサルトライフルを撃たせる約束だ、とテツヤ殿は言い煙を吐いた。

「そうでしたね」

「忘れていたのか？」

「いえ、覚えていましたよ」

慌てて答えた。

「そうかい？まぁ良い」

「それよりお前も手入れをしておけ」

「はい」

私は頷いてＳＫＳカービンとベレッタの掃除を始めた。

毎日やる作業となってか既に勝手に手が動く。

「テツヤ殿はＡＫＭをどれだけ使っているんですか？」

前々から気になっていた事を訊いてみた。

「傭兵になって初めて・・・人を殺した時からだ」

これは敵が持っていた純ソ連製で、闇市では模倣品などより高値らしい。

「それからずっとこいつが俺の恋人だ」

しかし、偶に帰る時があったらしくその時は戦友に預かってもらっていたらしい。

「何故、戦友に預けたんです？」

「俺の国では武器を持つのは許されていない」

武器を持てば要らぬ争い事が起きるからだ、と言う考えのようだ。

「だが、武器が無くとも争いなんてのは起きる物だ」

争いと言うのは、ほんの些細な思い違いや行き違いで起こる物だからだ。

確かにそれは言えてると思った。

それとは別に傭兵に休みと言うのがあるのだ、と気になり質問した。

「傭兵に休みなんて無いんだが、仲間内から少し戦場から離れろと言われたんだ」

どうやらテツヤ殿は中々の腕前だったらしく、失うのが怖かったようだ。

「だが、故郷に帰った所で俺が居る場所は無い」

だから、外国を放浪していた。

「まぁ金は無いから盗みをしたり、日雇いで金を稼いだ」

金を貯めたらまた戦場に行くの繰り返しだったようだ。

「そこでの戦いが終わり、一度はＡＫＭも手放した」

それから次の戦場でまた出会うか、買ったらしい。

「こいつが俺にとっては最高の恋人だ。まぁ、ＦＡＬも良いが」

テツヤ殿はＦＮ　ＦＡＬを見た。

ＦＡＬはＡＫと同じく傭兵達に扱われる品らしい。

「こっちは金額が高いんだ。だが、それだけの実力がある」

ＡＫに比べれば全長が長く取り回しも良くない。

更にこれの使う7．６２ｍｍ×５１弾という大きな弾のせいでフルオート射撃での反動が強く素人では扱えないという欠点がある。

砂にも弱くジャムを起こし易い。

これらを先に聞くとＡＫに比べて欠点だらけに聞こえる。

しかし、命中率などはＡＫ以上だ。

更に7．６２ｍｍ弾は、大きな弾ーーー大口径（と表現される）で遠くの相手も一撃で殺せると言う。

工具が無くても分解可能な面も捨て難い。

「ローデシアと言う国ではこいつを操る事がスキルだった」

だから、面接をする時には必ず「ＦＡＬは使えるか？」と聞いたらしい。

エドリアス様が聞けば、飛び上がるほどに聞いた事も無い話ばかりだ。

「こいつを持って来たのもいざ、という時の為だ」

「そうですか」

私はＳＫＳとベレッタの掃除を終えてから煙草を貰い吸った。

ドアが叩かれる音がしてガリシャの声が聞こえてきた。

「朝飯だよ」

「行くか」

「はい」

私とテツヤ殿はライフルを片手にドアを開けて下へと向かった。

下に向かうと既にロンガーム殿達は席に着いていた。

「おはよう。テツヤ殿にランダロフ君」

「・・・ランドルフです」

昨日と言い今日も名前を呼び間違えられて、私は傷つきながら名前を言い直した。

「ごめんなさい。この人、よく物忘れが激しいの」

レイリア殿がロンガーム殿を叱りながら謝罪してくれた。

「いえ、大丈夫です」

私は大丈夫と笑顔で言って席に着いた。

「では、頂こう。皆、今日も一日を健やかな日であるように」

『健やかな日であるように』

その言葉を言ってから食事は開始された。

「お嬢ちゃん。ロンガーム爺さんと親父さんには言ったのかい？」

「大丈夫だって」

仮に死んでもそれは自己責任だ、と二人は口を揃えて言ったらしい。

親として祖父としてどうなのか？と思いながらも、ここではそれ位の覚悟が無いと駄目なのかもしれないと勝手に私は推測した。

「それなら良い。今日は天気も余り良くないから、様子見だ」

「そう。それじゃ、昨日の事だけど」

「あぁ。撃たせてやる」

ガリシャはそれを聞くとやった！！と大声を上げた。

「姉ちゃん。煩いよ」

弟の一人が言うと他の兄弟達も一斉にガリシャを叱った。

何とも・・・・姉が弟達に叱られるとは・・・・・・・

「元気があり過ぎるな。お嬢ちゃんは」

テツヤ殿は軽く笑いながら食事を続けた。

食事を終えた後、ガリシャの父君とロンガーム殿は狩りに出かけ、弟達もそれぞれ仕事を始めた。

そしてガリシャは私とテツヤ殿を弓矢を鍛錬する場所に連れて行った。

「何時でも戦に臨めるようにここで弓矢の練習をするんだ」

「大した事だ。まぁ、ここにまた来る事があったら、その時は俺が徹底的に扱いてやる」

「旦那って教育も出来るの？」

「まぁ、仕事の一環としてな」

「傭兵ってただ戦うしか出来ないと思ってたよ」

「ここならそうだろうが、俺の国では戦うだけでなく、新兵の教育も任される時もある」

テツヤ殿の説明にまた傭兵の新たな所を発見した気がした。
弓矢を鍛錬する場所に行くと、何人かの男と女までもが弓矢の稽古をしていた。
「いざ戦いとなれば村人全員が戦えるようにするんだ」
驚く私にガリシャが説明してくれた。
「なるほど。大した物だ」
テツヤ殿は感心ながら、練習している人たちに大きな音が出ると前置きをした。
「先ずこいつを肩に当て、レシーバーを引く」
テツヤ殿はＡＫＭを構えて説明を開始した。
「後は狙いを定めて、引き金を引くだけだ」
テツヤ殿は引き金に指を掛けた。
そして轟音が鳴り響き、人型の的を木っ端微塵にした。
その轟音に皆は耳を手で塞いだ。
私は慣れた物でじっとしている。
白い煙が辺りを占める。

煙が消えた後には微塵になった人型の的があるだけだった。

「す、凄い武器だね・・・・・・」

ガリシャはＡＫＭを見て呟いた。

「これで撃たれたら、大抵は出血多量で死ぬ」

だから傭兵達には愛用されているテツヤ殿は説明した。

そしてガリシャに渡した。

「俺のやったようにやれ。間違っても自分の足を撃つなよ？」

「わ、分かった」

ガリシャは緊張した顔で頷いてＡＫＭアサルトライフルを構えた。

「後は好きなように撃て」

そう言ってテツヤ殿は煙草を銜えた。

ガリシャは息を吸いこんで引き金を引いた。

微塵となった的が更に微塵と化す。

また轟音と白煙が出て耳を傷める。

ガリシャが引き金を離す。

「どうだ?感想は」

「凄い武器だね・・・・あたしの弓なんて、役に立たないかも・・・・・」

「弓矢の方が原始的で効率が良い」

こいつは音が煩過ぎると言い、周りを見ろと言えば村人たちが何事だ、と来ている所だった。

「確かに。そっちの坊やの方は?」

また私は坊や呼ばわりか。

私は早くも諦めの極致でガリシャにＳＫＳカービンを渡した。

「そいつも同じように撃て」

ガリシャは私から受け取ったＳＫＳカービンを構えて引き金を引いた。

こちらはＡＫＭに比べて、静かで線がピン、と張られたような音だった。

「こっちは、旦那のより反動も弱いし音が静かだね」

「俺のも音が小さく出来る。だが、お前さんみたいに弓矢を使うならこっちがお勧めだな」

「ねぇ、あたしもこれが欲しい。似たようなものでも良いんだけど・

・・・・・・・・・」

「残念だが、おいそれと渡せないな」

テツヤ殿の言葉は尤もだった。

だが、ここで私はある言葉を放った。

「でも、テツヤ殿。一食一膳の恩がありますよ」

きっとテツヤ殿なら恩を感じて、ガリシャに渡す。

何故、1日しか付き合っていない私が彼女を擁護する言葉を言ったのか私自身が解からない。

しかし、彼女になら渡しても大丈夫と自分の心が言っていたのだ。

「だな。まぁ、仕方無いか」

テツヤ殿は私を見て肩を落とした。

「一食一膳の恩は返さないといけないし・・・お嬢ちゃんにもくれてやる」

ただし、間違っても犯罪などには使うな、とテツヤ殿は釘を刺した。

「そいつは、この国に無い物だ。だから下手な奴等に使わせるな。妄りに出すな。使うな」

これらを守れるか?とテツヤ殿はガリシャの目を見て訊ねた。

「約束するわ」

「・・・OK。良いだろう」

テツヤ殿は携帯を取り出して、例の宅配人に掛けた。

『はーい、呼ばれたら何処にでもお届けする宅配人のお姉さんでーす！！』

「相変わらず煩い声だ」

『元気な声と言って下さいよー。これから長い付き合いなんですから』

「まぁ良い。サブマシンガンをくれ。イングラムかウージーで頼む」

『それでは私の方で、選んで良いでしょうか？』

「頼む。お前さんなら客のニーズに合わせて届けてくれるだろ？」

『勿論です。他には？』

「もう一振り刀を頼む」

『了解でーす。では、直ぐにお持ちしまーす！！』

携帯を戻すテツヤ殿にガリシャはそれは何？と訊ねた。

「携帯と言って、俺の使う武器を届けてくれる奴さ」

会った事も無いが、とテツヤ殿は言った。
そして光が出て、木箱が置かれた。
「イングラムの方か」
テツヤ殿はイングラムと言った銃を取り出した。
拳銃と同じ位の大きさだ。
「それがサブマシンガンですか？」
「そうだ。名前はイングラムＭ１０。小型で犯罪者にも使われている。俺もよく使った」
「・・・犯罪に、ですか？」
「いや、その犯罪に巻き込まれてそいつから奪い取って使っただけだ」
私はそれから先の事は訊かずにサブマシンガンとは何か、と訊ねた。
「俺やお前のはライフル弾を使用する。だが、サブマシンガンは拳銃の弾を使う」
「コルトやベレッタのですか？」
「そうだ。こいつは俺のコルトと同じ弾を使う」

そして、先っぽに丸い線が彫り込まれていた。

「こいつを使う為だ」

今度は黒くて長い棒を取り出した。

「それは？」

「サプレッサーだ」

「前に話した音を小さくする物でしたっけ？」

「そうだ。イングラムの場合、全長が小型で扱うのに腕が必要だ」

それでも完全には扱えない。

だから、これを使い、扱うらしい。

「こいつをこの線に回して入れるんだ」

テツヤ殿はサプレッサーをイングラムの銃口に回しながら入れていく。

そして出来上がった。

「ほれ」

テツヤ殿は無造作にガリシャにイングラムＭ１０を投げ渡した。

「そいつをやる。お前にはこっちだ」

こんどは私にカタナを投げてきた。
黒い鞘に収まったカタナを抜いてみた。
綺麗な刃で小刻みに波線が見える。
「綺麗ですね・・・・・・・・・」
私はカタナの美しさに見惚れてしまった。
「そいつも女のようなものだ。しっかりと手入れをしろよ?」
「はい」
私はカタナを鞘に収めて頷いた。
「ねぇ、旦那。これはどうやって使うの?」
ガリシャがイングラムを弄りながら訊いた。
「上にあるレシーバーを引けば撃てる。気を付けろよ?」
「分かった」
ガリシャは頷いてレシーバーを引いた。
「サプレッサーの部分を持って腰だめに構えろ」
言われた通りガリシャはサプレッサーの部分を持ち、腰だめに構え

て引き金を引いた。

サプレッサーを付け、４５口径の弾を使用している為か音が極めて小さい。

しかし、ＡＫＭに比べて弾にばらつきがあるように見えた。

「何だか弾の当たる場所がバラバラだね」

「まぁな。だが、音が小さい上に小型だから持ち運びには便利だ」

確かに。

ガリシャはイングラムＭ１０の引き金から離した。

「じゃあ、これ貰うね」

「あぁ。俺が言った事を守れば良い。ただ、それは対人用で獣とかには無理だからな」

「分かったよ」

ガリシャは頷いた。

ふと頬に冷たい感覚が来たので上を見上げると雨が降り始めた。

「やれやれ。今日は駄目だな」

テツヤ殿は仕方無いと言い、煙を吐いた。

第二十章：ドラゴンの治療

私とテツヤ殿、それからガリシャの3人は坂道の森林の中を進んでいる最中だ。

昨夜は雨が降り行けなかったが、今日は雨が止んでいたので行く事にした。

雨で抜かるんでいるが、歩けない訳ではない。

それでも辛いが。

ガリシャが先頭を歩いている。

右肩にはテツヤ殿が昨日、渡したイングラムＭ１０がライフルスリングと呼ばれる物を付けて肩から吊るしている。

ただし、金属部分には布などを捲いて音がしないようにしている。

何でも敵は音で反応するらしいので、それがしないようにテツヤ殿はしたのだ。

私とテツヤ殿もしている。

先頭を歩くガリシャはイングラムと弓矢、そして鉈を持っている。

「この山を行けば、リブリーブス城だよ」

「どれ位で着くんだ？」

ガリシャの後ろを歩くテツヤ殿が訊ねた。
テツヤ殿の背中にはＲＰＧ－７がある。
私はＦＡＬを背負っている。
「そうだね、大体２時間くらいかな」
「そうか。ランドルフ。平気か？」
「は、はい」
私は頷いたが慣れない山道で実は疲れている。
ただし、二人がまったく疲れていないのに休みたいなどとは言えずに我慢していた。
「嘘吐け。顔が疲れているぞ」
テツヤ殿は私の嘘を見抜いた。
「情けないね。これ位で疲れるなんて」
「山道なんて・・・初めてだから」
私は苦しい言い訳をした。
「まったく男なら身体を鍛えな」

ガリシャに叱られて私は項垂れた。

「そう言うな。少し休憩だ」

テツヤ殿は近くの石に腰を降ろした。

私たちも腰を降ろす。

テツヤ殿から煙草を貰い、火を点けようとした時だ。

GURA!!!

巨大で力がある獣の遠吠えが聞こえてきた。

「・・・蜥蜴が吠えたか」

テツヤ殿は煙草に火を点けながら呟いた。

「い、今のは・・・・・」

「ドラゴンの鳴き声だよ・・・・・」

ガリシャの声が何時もより低い声で言った。

微かに怯えていると解かる。

「お嬢ちゃん。怖いのか?」

テツヤ殿が煙を吐きながら訊ねるとガリシャは頷いた。

「そりゃ怖いよ。だけど、ここまで来たからには引き返せないよ」

「・・・もう一度だけ言っておく。死んでも責任は取らないからな」

「分かってるよ」

ガリシャは真剣な顔で頷いた。

テツヤ殿は煙草を何時もより長く吸い、灰皿に捨てた。

「行くぞ」

テツヤ殿は腰を上げてＡＫＭのレシーバーを引いた。

そして歩き出した。

ガリシャは先頭から後ろに下がった。

この山の上にドラゴンが居る・・・・・・・・・

どんな奴なのか、私は好奇心が出てきた。

怖いが、見てみたいという気持ちがある。

それにテツヤ殿が居れば、大丈夫という気持ちもあった。

２時間ほど歩き続けて城に到着した。

城の名はリブリーブス。

山の頂上に作られた城で、敵からの侵入を阻止する為に背後を谷にしている。

かつては大陸にその城ありと言われていた城も既に見る影もなく申し訳程度に城壁跡があるだけだ。

城の跡だった場所に巨大な黒い物体が見えた。

それは動いており血の臭いがする。

「あれか」

テツヤ殿は、その物体に近付いて行く。

「て、テツヤ殿っ」

「俺にもしも何かあったら直ぐに逃げろ」

テツヤ殿はそう言って前に進んだ。

私とガリシャは足が震えてきた。

だが、私は前に進んだ。

この人に最後まで付き合う、と私は既に決めていた。

ガリシャは私の腕にしがみ付いて来た。

ゴクリ

生唾を飲む音が妙に聞こえる。

城が建っていた場所に行くと、そこには血を出しながら荒い息をする一匹のドラゴンが居た。

ドラゴンはこちらをダイヤモンドとガーネットが嵌め込まれた瞳で睨んできた。

睨まれているのに吸い込まれそうな気持ちになる。

テツヤ殿はドラゴンの目の前で止まった。

「お前さんがドラゴンか。本当に蜥蜴に翼が生えた感じだな」

テツヤ殿は面白そうに笑った。

『・・・貴様、この我を蜥蜴ごときと一緒にするか?』

ドラゴンが口を開いていないのに声を発した。

地を這う如く、身の気もよだつ声だ。

それなのにテツヤ殿はまったく怯えていない。

「実際そうだろ?所で、ここに騎士が来ただろ?」

『あの下種共の仲間か?』

「いいや。まぁ、荒れくれって言う点では俺は同じだが」

『・・・傭兵か？』

「あぁ。今は違うが」

『その者が何の用だ。まぁ、どうせ我を殺せと言われて来たのだろ？』

ドラゴンは他人事のように言った。

「最初はな。だが、村人の話を聞くと、そうでもないと解かった」

『それで？・・・・・グゥゥ』

ドラゴンは唸り声を上げた。

身体全体を見れば、翼と腹の部分に太くて大きな杭が打ち込まれており血が滴り落ちていた。

「・・・それほど長くないとは本当だな」

テツヤ殿はドラゴンの身体を見て呟いた。

『ふ、ん。この程度の傷・・・・我の力なら・・・・・グァアウ』

ドラゴンは強がりを言いながらも、呻き続けた。

「・・・・・・」

テツヤ殿は携帯を取り出した。

『はーい。何か御用ですか？』

相変わらず煩い程の元気な声が聞こえてくる。

「大型獣の治療具を一式と説明書をくれ」

『ドラゴンにするんですね？わっかりましたー！！』

何でドラゴンが相手だと解かったのか、と私は疑問に思ったがテツヤ殿は何も言わずに携帯を切った。

『どういう・・・つもりだ？』

「お前さんを殺せ、と依頼されたが依頼人は嘘を吐いた」

よって依頼は無しだとテツヤ殿は言った。

「何より筋が通っていない。俺は・・・筋が通らない事が嫌いなんだよ」

テツヤ殿は何か思い入れがあるのか、苦々しい顔を浮かべた。

直ぐに届け物は来た。

見た事も無い道具と書類がある。

それを手に取ったテツヤ殿はドラゴンに近付いた。

『我を治療する気か？』

「そうだ。あんたを殺せ、と言う依頼は無しだ。それなら生かした方が目覚めが良い」

『生憎だが・・・我は人間ごときに身体を触らせる気は、ないぞ』

「その身体で俺を殺せるのか？」

現に口も開けられないだろ？とテツヤ殿は聞き返した。

『・・・好きにしろ』

ドラゴンは投げ槍的な口調で言った。

「分かった。ランドルフ。杭を抜くぞ」

「で、でも、テツヤ殿。どうしてこのドラゴンを助けるんですか？」

「言った筈だ。筋が通らない事が嫌いなんだよ」

早くしろ、とテツヤ殿は急かした。

私とガリシャは眼を合わせて頷いた。

この人の言葉に従おう。

それが私たち二人の答えだった。

「痛いと思うが我慢しろよ」

『さっさとやれ』

ドラゴンは眼を閉じたまま命令口調で喋った。
テツヤ殿は先に腹に刺さった杭を掴み私たちも掴んだ。
「行くぞ」
一気に杭を抜いた。
GURAAAAAAAAA!!
ドラゴンが大きな声で唸り声を上げた。
だが、身体は動かない。
それだけ力が無いという証拠なのだろう。
杭を抜いた腹から大量の血が吹き出る。
テツヤ殿は素早くそこを布で覆い力を込めて血を止めた。
「お嬢ちゃん。こいつに包帯を巻け」
ガリシャは震える身体を叱咤させて包帯をドラゴンの腹に巻いた。
完全には止まっていない為か血が包帯を赤く染める。
だが、先ほどに比べればまだマシな方になった。
「次は翼だ」

テツヤ殿は今度は翼の杭を引き抜いた。

こちらはそんなに血が出ない。

そこへ布をやり包帯を巻いてやる。

終わると私たちの両手は血で染まっていた。

「終わったぞ・・・気絶したのか」

テツヤ殿はドラゴンを見るが・・・ドラゴンは気絶していた。

「今日はここで寝るぞ」

全身、血まみれのテツヤ殿が放った言葉に私は思わず聞き返してしまった。

「こ、ここで、ですか?」

「そうだ。ここで寝る。薪を持って来い」

私とガリシャは仕方無いと頷いて薪を探しに出た。

この人に従うと決めたのだから、泊るしかない。

何より血まみれのテツヤ殿に命令されては断れない気持ちがあった。

— — —

俺は気絶したドラゴンを見ながら血の付いた両手を見た。

まるで初めて人を殺したような感じだった。

初めて人を殺した時も、やり方が分からず・・・忘れてしまってただ、滅茶苦茶に相手の身体にナイフを突き立てたのを覚えている。

相手は口から赤い液体をボコボコと出して眼を見開き息絶えていた。

それを見た俺は嘔吐した。

最初に人を殺すと必ず吐く、と言ったが正しくそれだ。

ドラゴンの血で俺は衣服ごと血まみれだ。

・・・あの時と同じだ。

筋が通らない仕事をしたばっかりにあんな目に遭い大勢の仲間たちが息絶えた。

僅かな生き残りの中に俺はいた。

仲間は消えて行ったが俺は落とし前を付ける為に依頼人を探した。

逃げて逃げて逃げ続ける依頼人だが落とし前を付けないと死んだ奴等に申し訳がない。

誰もそんなことを考えていない。

ただ、俺がそう思っていただけだ。

そして依頼人を見つけ出して殺した。

初めて殺した時のようにナイフを何度も突き刺して。

その時も全身が血まみれとなった。

その時と同じ光景だ。

ドラゴンは気絶して起きる気配も無い。

何でこいつを助けるのか？

ランドルフは俺にそう訊ねた。

確かに助ける義理は無い。

ただ、筋が通っていないという俺の考えで助けただけだ。

妙な仏心なんてのは、俺には無いと思っている。

・・・・こいつの瞳が、俺と似ているから、何てのは無い。

何があっても無い。

俺は俺だ。

他人と同じなんて有り得ない。

俺は血まみれの手で女神の抱擁を取り出して銜えた。

それをジッポーで火を点ける。

口の中に軽く辛さが伝わるが、慣れた味だ。

嗚呼、これを吸うと抱き締められる気分になる。

こんな身体を抱き締めてくれる女が居るんだ、と変に思ってしまった。

煙を吐きながら俺は、気絶したドラゴンを見た。

第二十一章：伝説の傭兵（前書き）

ここで伝説の傭兵と謳われるマイク・ホアーの言葉を載せさて頂きます。

毎度毎度、お読み下さっている読者の方には深く感謝の念を抱きます。

これからも宜しくお願い致します。

第二十一章：伝説の傭兵

私とガリシャは集めてきた薪を燃える炎の中に入れて火を絶やさなかった。

テツヤ殿はガリシャの持って来た弓矢を持って狩りに出かけている。

ドラゴンが食べる物を取りに行ったのだ。

そのドラゴンは宝石の瞳で私とガリシャを覗き込んでいるが、何も話さない。

血は既に止まっている。

回復力が人間よりあると思う。

「・・・ねぇ、何であたし達を見ているのかな？」

小声でガリシャが私に訊いてきた。

「分からないよ」

私は何とも言えずに答えた。

ドラゴンは私たちを見ているが、ふいに口を開いた。

黄色く濁った牙が見えて、寒気がする。

『あの男の名は、何だ？』

「た、タカミ・テツヤ殿ですが」

私は怯えながらも答えた。

『タカミ・テツヤ、か。異国の者か？』

「本人は、異世界から来たと言っております」

私は一瞬だけ迷ったが、素直に答えた。

ガリシャは異世界から来たという事に驚いたが、ドラゴンは驚かなかった。

『そうか』

「あの、驚かないんですか？」

『我は主らより長生きだ。この国が出来た時から生きている』

だから、色々な経験などをしているし、伝説と言われている人物などとも会った事があるらしい。

『異世界から来た男・・・この国を作り上げた王と同じだな』

「フォン・ベルトが異世界から来たのですか？」

私は初代国王が異世界から来たと言う事に驚きを隠せなかった。

しかし、流浪の民だとしか書かれていないのも頷けた。

異世界から来たなどと言うよりは流浪の民と言った方が誰にでも納得できるからだ。

『あぁ。会った事はないが、そいつも異世界から来た男だと聞いた』

ドラゴンは一息つくように口を閉じた。

「あの、苦しいのですか？」

『あぁ。血は止まっているがな。それでも苦しいな』

我の鱗を貫いた杭は、危うい所で心臓に達しそうだったからな、とドラゴンは言った。

「どうして、そんな目に・・・・・・」

『簡単だ。我を殺し、この両の眼と名声を得たいが為だ』

ドラゴンを殺せば国一つを買えると言われるほどの名声が手に入る。名声が手に入れば、金なども自然と後から付いて来るものだ、とドラゴンは他人事のように説明した。

何をしなくとも居るだけで、襲われたらしい。

『お陰で何処でも人里離れた洞窟などに隠れて住んでおった』

他の者たちと最初は居たが、皆殺しにされたらしい。

『現に我の同族なども・・・・殺された。まだ赤子の者は、見世物にされた挙句に殺された』

「そんな・・・・・・・・・・」

私とガリシャは酷過ぎると思った。

『何を驚く。主らの同族がした事ではないか?』

「私は、少なくとも罪も無い人を殺してまで名声を得たいと思いません」

幾ら同じ人間でも、私は罪もない者を殺して名声を得たいとは思わない。

『青臭い事を言うな』

ドラゴンは私の言葉を鼻で嘲笑った。

『我から言わせれば、人間ほど欲の皮が突っ撥ねた者は居ない』

欲しい物があれば、どんな手を使おうと手に入れて後先を顧みない。

実に狡猾で自分勝手で救い様のない生き物。

それが人間だとドラゴンは断言した。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

私とガリシャは何も言えなかった。

このドラゴンの瞳が余りにそれを真実だと物語っているからだ。

とても哀しそうで憎悪が溢れている瞳だ。

「何を辛気臭い顔してるんだよ」

テツヤ殿の声がして振り向くと猪を担いで立っていた。

腰には数頭の兎がぶら下がっている。

「こっちはお前の。こっちは俺らのだ」

兎を私たちの前に落とし、猪をドラゴンの目の前に差し出した。

『・・・若い猪だな』

「その傷で堅い肉をした爺を食えないだろ?」

『・・・味な真似をしおって』

ドラゴンはテツヤ殿を見ながら、猪を一口で平らげた。

「さて、俺らも飯にするか」

テツヤ殿は仕留めてきた兎をナイフで捌き始めた。

『・・・タカミ・テツヤよ』

「何だ？」

テツヤ殿は兎の皮を剥ぎながら背中越しに訊ねた。

血を噴き出す兎を見て、私は軽く嘔吐感に見舞われたが、目を離さずに見続けた。

『主、異世界から来たらしいな』

「あぁ。向こうの世界では、死んだからな」

『戦争でか？』

「そうだ。いや、戦争と言うよりは、“消費活動”だな」

「消費活動、ですか？」

私は気になって質問した。

「俺の世界でマイク・ホアーという伝説の傭兵が居た。そいつは戦争をこう言った」

戦争は現在における最大の消費行為であろう。

「まさにそうだと俺は思った」

人間や兵器などを消費する。

まさに最大の消費行為だ。

「そしてあいつは、その消費活動を効率よく実行する事、能率を重視した」

能率の権化だ、とテツヤ殿は更に言った。

『権化とは、大した言い方だな』

ドラゴンは骨を砕きながら言った。

「実際そうだ。奴と一緒に仕事をした傭兵から聞いた話だ」

ある作戦で集まった傭兵達にそのマイク・ホアーはこう言ったらしい。

もし、重症だと判断したらその場で殺す。

「それを聞いて作戦から抜ける奴等も居た。だが、残る奴等も居た」

そいつらは単なる冗談だと思っていたらしいが、それは事実だった。

敵に不意を突かれて、１０人の傭兵が傷ついた。

１０人のうち８人が重傷で身動きできない。

残り２人は何とか動ける様子だったらしく、マイク・ホアーは２人を残し８人を殺せと言ったらしい。

「重傷者を伴うと時間がかかる上に危うい目に遭う。それに最初の内に宣言した」

そう彼は言って部下に殺させたらしい。

「権化と言うより狂っているのではないですか？」

幾ら何でもそれは、能率とかを越えて狂っていると私には思えた。

ガリシャも同感だと

「それは当たっているな。何にせあいつの渾名は“マッド・マイク”だ」

マッドとは気違いという意味らしい。

更にコンゴという国では占領した場所に住む住民に見せしめの為に何万という者達を殺したらしい。

「まさしく気違いですね・・・・・・・」

何とも恐ろしい傭兵だと私は思った。

「あぁ。だが、気違いと言われているが、指揮能力は高かった。僅か５００人の兵士を指揮して３０００人の住む国を一時的だが占領した」

彼の働きは各国からも絶賛されたらしい。

伝説の傭兵と謳われるのも頷ける。

「だが、最後の作戦で失敗した」

それで傭兵の経歴は全て無くなったらしい。

「たった一度の失敗で、ですか？」

「俺らの世界で失敗は許されない。結果が全てだ」

半点などという甘い物は存在しない。

厳しい世界だ、とテツヤ殿は呟いて煙草を銜えた。

『主は、その世界で生きて来た割には甘いな』

その手の仕事に付く者なら筋が通っていなかろうと、言われた仕事を黙って完遂する筈だとドラゴンは言った。

「甘い、か。前に一度、言われた」

お前は甘い。何れその甘さが命取りになる。

「誰に言われたんですか？」

「俺の前に傭兵部隊を指揮していた指揮官だ」

何でもテツヤ殿の前に部隊を指揮していた指揮官は、能力はあるのだが人望は無かったらしい。

「何処の世界でも能力は大事だ。だが、人望が無いのも問題だ」

能力があろうと人望が無いと部下は付いて来ない。

逆に人望があっても能力が無くては部下を指揮できない。

「俺がそいつの代わりに指揮した」

それで見事に作戦は成功したらしい。

そして去るその指揮官がテツヤ殿に先ほどの言葉を言った。

「その人はどうなったんですか？」

「噂だと、別の仕事が来てアフリカに向かった」

その国でゲリラに食べられたらしい

「た、食べられたんですか？」

まさか人間が人間の肉を食べるなど・・・・・・・・・

『見せしめの為だな。それと、その者の力を欲したのだろう』

ドラゴンはテツヤ殿の言葉を聞いて推測した。

その者を食べる事で、この国で行動すればこうなる。

そしてその者の肉を食べる事で、その者の持つ力を己の力にしようとした。

「当たりだ。そいつを食べたと聞いた傭兵部隊は、直ぐにその国から消えた」

テツヤ殿は煙草に火を点けて、解体して串を刺して焼いていた兎の肉を私とガリシャに渡してきた。

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

私とガリシャは、程良く焼けた兎の肉を見て食べる気が一気に失せてしまった。

そんな話の後に食べろ、と言われても無理がある。

「食べないのか？」

テツヤ殿は煙草を吸いながら兎の肉を齧った。

よくもまぁ、自分で食べる気を失せる話をして食べられるものだ。

『主が先ほど話したのを聞いて食べる気が失せたようだな』

「そんなに食欲が失せる話をしたか？」

『この二人にとっては、食欲を失わせる話だったのだろう』

ドラゴンは食べないなら我に寄こせ、と言って来た。

どうやら猪一頭では腹が満たされなかったようだ。

「傷に障らないのか？」

『血を増やすには肉が一番だ』

「尤もだ。だが、食べ過ぎるなよ？」

『まったく主と言う男は面白いな。我にそんな言葉を言うとは』

ドラゴンは私とガリシャから兎の肉を器用に取ると一口で食べてしまった。

「別に。ただ事実を言っただけだ」

テツヤ殿は煙草を吸いながら火を見つめた。

「お前等、腹が減ったら、バック・パックの中に飯があるからそれを食え」

俺は少し眠る、と言ってテツヤ殿はＡＫＭを横に置いて丸くなった。

直ぐに寝息が聞こえてきた。

『我も寝る。主ら、火を絶やすでないぞ』

ドラゴンもまた眠ると言って瞳を閉じた。

私とガリシャは食欲が無いまま、火の番をする事になった。

名言の人物：ハンニバル・バルカ（前書き）

鷹見徹夜のモデルの一人でもあり、敵側のモデルにもなった人物の説明と名言を載せておきます。

名言の人物：ハンニバル・バルカ

＞ｉ１４７０２―１６２３＜

名前：ハンニバル・バルカ

職業：カルタゴの将軍

要約：世界でも5本の指に入ると思われる天才的な戦術家。

バルカとは「雷光」という意味でハンニバルとは「バアルの恵み」、「慈悲深きバアル」、「バアルは我が主」という意味。

第二次ポエム戦争を起こした人物として知られ、ローマ史上最大の敵とされており、古代の評価では「残忍無比で冷酷非情」が決まり文句。

かなりの皮肉屋でもあったらしい。

カルタゴでは傭兵を軍にするのが主流だったらしく、ハンニバルの軍ももちろん傭兵で構成されている。

だが、アレクサンドロスやカエサルなどが軍のストライキや離反に悩まされているのに対して彼の軍では離反やストライキが無かったとされている。

従軍拒否されなかった人物はハンニバルとスッラの二人位、とある歴史家は言ったほど傭兵達を掌握していたのだ。

この理由を彼を調べている歴史家では「畏敬の念を抱きつつ同時に憐みを抱いていた」と考えられている模様である。

また残酷無比で冷酷非情と言われているが、ある戦争で戦死した敵の遺体を家族の下へ届けさせたり、遺灰を渡した、とも書かれているので決してそんな性格ではないと思われる。

寧ろ敵対していた者まで魅了したと言われているのだから、恐らく当てつけなどと思われる。

ピュロスやアレクサンドロスなどの騎兵と歩兵を連動させることによる完璧な包囲殲滅を完成させた人物でもある。

現在では師匠筋の彼らよりもハンニバルの方が上とされており、現代でも研究されているのが良い証拠と言える。

その他にも政治に関しても一級でカルタゴに課せられた賠償金を返済するするなどした。

だが、武断政治が仇となり国内に反ハンニバル派を産み出してしまう事になった上にローマに脅威さを改めて認識させる事になった。

そして反ハンニバル派の密通によりシリアへと亡命したが、そこから更にクレタ島、黒海沿岸のビテュニア王国へと逃亡したが、同国において自殺した。

奴隷に首を絞めさせたとも毒杯を煽ったとも言われている。

彼が言い残した言葉として以下の言葉が残されている。

『いかなる超大国といえども、長期にわたって安泰であり続けることは出来ない。国外に敵を持たなくなっても、国内に敵を持つようになる。外からの敵は寄せ付けない頑健そのものの肉体でも、身体の内部の疾患に苦しまされることがあるのと似ている』

『このあたりでローマを不安から解放してやろう』

『一つの眼で見れば不可能も複数の眼で見れば可能となる』

『道は、見つけるか、それとも、作るかだ』

『自分はただローマに対して戦っているのである。ローマとの同盟を強制されたイタリア人と戦っているのではない』

『そんな事はスキピオに任せておけ』

『君は大事なことを見逃している。あれほどたくさんの人がいたって、あの中にギスコという人はいないのだから』

『最も重要なことをなし遂げるため、二番目に重要なことを無視する』

彼は現在でも恐怖の代名詞として知られているらしく「戸口にハンニバル＝危険が迫っている」、「ハンニバルが来てあなたを連れて行ってしまうよ」などがある。

名言の人物2：マイク・ホアー（前書き）

続いて2人目を紹介します。

名言の人物2：マイク・ホアー

＞ｉ１４７０３―１６２３＜

名前：マイク・ホアー

職業：第5コマンド「ワイルド・ギース」の隊長

要約：２０世紀でも特に名の知れた伝説的な傭兵の隊長。

彼は通称、「マッド・マイク」と言われる程の恐ろしい一面を持っていたと言われており「人ではなく悪魔」などとも言われたらしい。

ちなみにワイルド・ギースとはアイルランド人の貴族から出来た傭兵部隊の名で戦場から戦場へと移る姿が渡り雁（渡り鳥の一種）に似ている事から自身達で名乗っていた模様。

コンゴでは類い稀なる実力を発揮し「彼がいなければコンゴ及び周辺諸国は共産化されただろう」と言われた程。

１９８１年１１月２５日観光客を装い４３名の傭兵と共にセイシェルの共産政府転覆を図るが、１７歳の青年隊員の失敗により空港の税関で銃撃戦になり、インド航空ボーイング機をハイジャックし南アフリカに逃げ帰る羽目になった。

この経緯は無能と思っていたロベール・ディナールがコモロでクーデターを成功させた事に刺激されたからと言われている。

これが原因となり、今まで積み上げてきた傭兵としての実歴が全て

無くなったと言っても過言では無いだろう。

彼が言ったと言われている言葉は以下の通り。

「傭兵の真の実力は、服装と携行する武器で大体分かる。それでその男の性格も判断できる。過去の経験からすると、ナイフ、手榴弾、弾帯などで身をゴテゴテ飾り付けたがる男は、支給された武器で満足する地味なものより兵として劣るようだった」

「戦争は現在における最大の消費行為であろう」

「イギリス人は今でも第二次大戦中の日本軍の捕虜虐待を許せないでいる。だが日本兵が捕虜となった英国の兵士を虐待したのは無理ではない。彼らは敵の捕虜となるのは最大の恥辱と教えられていたのだからね。ビルマにいる間に私の所属師団が捕虜に取った日本兵はたった二人しかいなかった。捕虜になるより死を選ぶことは敵ながら見上げた忠誠心だった。また上からの命令に絶対服従する態度は、欧米人の理解をはるかに越えるものだった。ああいう兵士の揃っていた日本軍は世界最強の軍隊だったといっても過言ではないだろう」

ちなみに映画、「ワイルド・ギース」の監修を務め、出演者の一人だったハーディ・クリューガーとは馬が妙に合ったとも言われている。

現在もまだ生存中である。

第二十二章：報復と捕縛

翌日、私は目を覚ました。

あれからテツヤ殿が火の番をすると言って、私とガリシャは朝まで眠りに着いた。

起きると既に朝日が昇っており、ドラゴンが大きな身体を起こしていた。

「傷は治ったのか？」

テツヤ殿はドラゴンを見て訊いた。

『うむ。礼を言うぞ』

「別に良い。しかし、昨日は、下種な人間と言っていたのにどういう態度の変わりだ？」

『主は他の人間と違うと思っただけだ。それに傷の手当てをしてくれたのだ。礼を言うのは当然と思うが』

「随分とご立派な言葉だな」

テツヤ殿は煙草を吸いながら私に煙草を差し出してきた。

「ガリシャは？」

「飯を取りに行った」

ジッポーで火を点けてくれながらテツヤ殿はガリシャの行方を教えてくれた。

『所で、主よ。依頼人にはどう言うのだ？』

「その点に抜かりはない。都に居る俺の上司に頼んでおいたからな」

『手回しが良い事だ』

「そりゃどうも」

テツヤ殿は煙草を火の中に捨てた。

『タカミ・テツヤよ』

「何だ」

『主、妻は居るのか？』

「何だ。突然」

テツヤ殿は些か驚きながら訊き返した。

『そのままの意味だ。主は妻が居るのか？』

「こんな商売をしているんだ。居ない」

『そうか』

ドラゴンは質問しておきながら淡泊な答えで頷くだけだった。
それをテツヤ殿は黙って見ていた。
それから数十分ほどしてガリシャが兎を仕留めてきた。
昨夜はあれから肉などを食べられなかったが、今日は食べられそうだ。
兎をまたテツヤ殿は捌く。
その様子を私とガリシャは見ていた。
ドラゴンは城の周りを見ては何かを考え込んでいた。
気にはなったが、敢えて訊かない事にした。
兎が焼けるのを待っている間、テツヤ殿は飯を食べたら直ぐに帰ると言った。
「もう帰るのかい？」
ガリシャが幾分か残念そうな声を出した。
「あぁ。俺らも仕事があるし、こいつも治ったんだ」
ドラゴンを見ながらテツヤ殿は言った。
「また、来る？」

「さぁな。ただ、初代国王の予言が正しければ、何れここに来るだろうな」

「・・・・・・」

私は何とも言えずに、黙っていた。

国内の火種がいつ燃えるか分からない。

そうなると、ここに来る可能性も高い。

だが、出来るならここには来たくない。

別に、この土地が嫌な訳ではないのだ。

ただ、この土地で血生臭い事をしたくないだけだ。

『タカミ・テツヤよ。先ほど、主は初代国王の予言が正しければ、と言ったな？』

ドラゴンが城の周りを見ながら喋り出した。

「あぁ。それが？」

『断言する。主らはここに来る』

「どういう根拠で？」

『長年の勘だ。この国を始めどの国でも火種は燻っている。それに・・・この国の火種が燃えるのも時間の問題だ、と風が言っている』

「・・・・・・・」

私は何も言えなかった。

ドラゴンの言葉は近い内に反乱が起こる、と言っているようなものだ。

出来るなら内乱にはなって欲しくないがドラゴンの言葉を聞くと本当にそうなりそうで怖い。

「まぁ、その時はその時で世話になるだけだ」

『主らが来た暁には、我も力を貸そう』

傷の礼だ、とドラゴンは言った。

「あんがとよ」

テツヤ殿は煙草を火の中に入れて、焼けた兎の肉を私たちに別けてくれた。

食事を終えた後、私たちは山を降りてロンガーム殿の屋敷を訪れた。

「世話になったな」

ロンガーム殿に礼を言ってジープに乗り込む私とテツヤ殿を村人総出が送り出してくれた。

「なぁに、こちらも中々楽しかったぞ。それから、女王陛下には我

等の事は言わないでくれ」

「あぁ」

「あの、なぜ教えてはいけないのですか？」

私は解からずに訊ねた。

彼等は数千年にも及び、この国を守り通してきた。

そんな彼等の存在をまた闇の中に隠すなど、どうしてか理解できない。

「こいつ等は、時が来るまで姿を見せてはいけないんだよ」

知られたら、面倒な事になるとテツヤ殿は言った。

「もしも、城が落ちたら女王は逃げるだろう。それなら逃げる場所は知られない方が良いだろ？」

下手に知られると、面倒事が増えるだけだとテツヤ殿は続けた。

「その通り。我等はその時が来るまでは影に隠れて生きていくのが良いのだ」

ロンガーム殿はテツヤ殿の説明に頷いた。

「では、何れまたな」

「あぁ。あんた等も元気でな」

テツヤ殿はジープのエンジンを掛けて発進させた。
村人たちは手を振って送り出してくれた。
荒れた道を走りながらテツヤ殿は私に煙草を勧めてきた。
「さて、都に帰ったらワイドに報告して依頼人を締め上げるか」
「締め上げるんですか？」
テツヤ殿が言うと本当に首を締め上げるように聞こえてしまう。
「俺らに嘘の内容を話したんだ。それなりの報復は覚悟してもらわないとな」
それなりの報復と言ったが、テツヤ殿のそれなりは私から見ればそれ以上の、苛烈な報復なのだと思った。
「さぁて、ワイドに頼んでおいた内容がどんな物か楽しみだぜ」
テツヤ殿は笑いながらジープを走らせ続けた。
ジープを走らせて3日後に都に到着した。
聖騎士団の寮に戻り、ワイド様の元へと向かった。
「よぉ、ワイド」
テツヤ殿はワイド様に軽く帰還の挨拶をした。

「無事だったか」

ワイド様は私たちの様子を見て、安堵の息を吐いてくれた。

「あぁ。それで頼んでおいた件はどうだった？」

「ちゃんと調べておいた。どうやら奴等はドラゴンの瞳が欲しかったようだ」

ドラゴンの瞳は純粋な鉱石よりも高値で取引されるようで、あのドラゴンの瞳は希少価値が更に高いらしい。

そしてドラゴンに刺さっていた杭はどうやら彼等の仲間がやった事らしい。

「それで俺らにドラゴンを殺させて、瞳を得ようとしたって訳か」

「そうだ。まったく、酷い話だ」

「そうだな。で、そいつ等はどうしている？」

「都にある店で私からの報告を待っているが？」

「そうか。じゃあ、報告しに行こうじゃねぇか」

報告ではなく、報復の間違いではないだろうか？

「・・・ランドルフ。テツヤは報告ではなく、何をしようとしてい

るんだ」

ワイド様は私の様子を見て、何かを感づいた様子だった。

「・・・・報復です」

私はテツヤ殿にドラゴンの事を話しても良いか？と眼で訊き、了承を得てから話し始めた。

「・・・・なるほど」

ワイド様は最後まで聞き終えると渋面を浮かべた。

「・・・ランドルフ。直ぐに騎士達を連れて来い」

ギルドを捕まえる、とワイド様は言った。

「え？つ、捕まえるんですか？」

「ギルドは正式な理由もない限り魔物などを狩っては駄目だ、と通達されている」

それを己が欲望の為に狩るなど言語道断であり、自分達を利用した事も我慢できない。

「話が解かる奴だな」

「お前に当てられたかもな。まぁ、どちらにせよ前々からあいつ等は気に食わないと思っていた」

ここで叩いた方が良いとワイド様は言った。
以前ならこんな事を言わなかったのに。
これもテツヤ殿と付き合ったからだろう。
私は言われるままに先輩達を呼びに向かった。
何だかんだ私もテツヤ殿に当てられたんだと今では思う。
先輩達を呼び、ワイド様の元へ戻ると鎧姿のワイド様と傍らで煙草を吸うテツヤ殿が居た。
「皆、これよりギルドを逮捕しに向かう」
理由を話し終えたワイド様に先輩たちは、待っていたとばかりに準備をしに戻って行った。
「先輩達もやる気だったんですね」
「だろうな。まぁ、それならそれで良いだろ」
テツヤ殿は煙草を吸いながら私にも武器の準備をしろと言った。
私は頷いて持っていたＳＫＳカービンのレシーバーを引いた。
「そいつは止めとけ。カタナを使え」
下手に使うな、とテツヤ殿は言い、ドウタヌキを取り出した。

私もカタナに出ろ、と念じて取り出した。

そして私たちはギルドの店へと向かった。

ギルドの店に到着したワイド様は先輩たちに周囲を固めるように命令した。

私とテツヤ殿を引き連れてワイド様は店の中に入った。

店の中には人相の悪そうな連中がゴロゴロしており、私は些か怖気づいた。

「こいつ等は見かけ倒しだ。ちゃんとしていろ」

テツヤ殿は前を向いたまま喋った。

店の奥から小太りの男が出てきた。

この店の主だ。

「これは騎士様。御依頼した仕事を片付けてくれたのですか?」

「その逆だ。嘘の依頼内容を話した貴様を捕えに来た」

ワイド様は主に逮捕すると宣言した。

「何の証拠を元に・・・・・・・・」

「証拠ならあるぞ」

ワイド様は懐から紙を取り出した。
内容は主とドラゴンの瞳を買う予定の貴族の契約書だった。
「貴様は嘘の依頼をした。よって逮捕する」
「参りましたな。私自身、逮捕されたくないので・・・・・・・・・・
やってしまえ！！」
主は笑みを浮かべていたが、直ぐに大声を上げて男達に命令した。
「テツヤ、ランドルフ。手加減は要らん。全員を捕縛しろ！！」
「了解。ランドルフ。やるぞ」
「は、はいっ」
私とテツヤ殿はカタナを抜いた。
ワイド様も剣を抜いて男達と切り結んだ。
私は慣れない武器に戸惑いながら、男達と戦った。
テツヤ殿はドウタヌキを振いながら・・・やはり変則技を使っていた。
相手の足を踏んだり、唾を吐いたり・・・・やる事が汚すぎる。
相手からも汚い、と言われる始末だ。

だが、テツヤ殿は気にせず変則技を使い男達を叩き伏せていった。

何人か外に出たが、先輩達に取り押さえられて主も御用となった。

その後、主はギルドの資格をはく奪された上で牢に入れられ男達は国外追放の処分に処された。

サラ・ロクシャーナ（前書き）

ここで鷹見徹夜の妻の1人になる予定のサラについて簡単に説明します。

サラ・ロクシャーナ

名前：サラ・ロクシャーナ

身長：１６８ｃｍ

体重：４５ｋｇ

年齢：２９歳→享年９１歳

職業：サルバーナ王国の女王→サルバーナ王国国王の第一王妃

衣服：青を主体にしたドレス

装備：ワルサーＰＰ

特技：歌、裁縫

異名：聖母、傭兵王の最も愛した妻、お人好し、賢母

嗜好：読書、遠乗り、お忍び

座右の銘：常に民の事を考える

要約：サルバーナ王国第１２代目国王、ガルバーの妻にして先代王の娘。

ガルバーと１４歳の時に結婚して翌年に長女、エリーナを儲けるがそれ以外で男女の関係は無いとされており、夫婦仲も悪かったと言

われている。

ガルバーが戦で領土を広める事を余り快く思わなかった面があり、尚且つ側室の虐めになどにもあっていたと後に語っている。

ガルバー亡き後は臣下たちからの強い勧めで女王として王国を統治し、側室の子であるリカルドにも愛情を掛けた積りだが、謀反の疑いがあると知り辺境の地へ幽閉した。

国民からは愛されていた模様で、内乱の折りに首都を脱出して戻って来ると国民から歓声で迎えられた事が何よりの証拠。

鷹見徹夜を内乱の折りに負傷したプロイセンに代わる戦闘指揮官に任命し、内乱を治めた後はプロイセンからの進言もあり武将へと任命している。

５大陸を統一後に鷹見徹夜と正式に結婚し正后の地位になった。

戦には一切出ず、口を出さないで常に影で夫を支える事にあくまで徹していたが主に政治的な面で力を発揮した。

それは内乱の時もそうであったらしく「全て貴方にお任せします」と無責任とも取れる言い方をしたらしいが、人を見る目に長けていたらしい。

ランドルフの書いた史記では「傭兵王に最も愛された妻」と書かれており周囲からもその様子が窺われた様子。

鷹見徹夜が崩御する前から身体を壊していたが、鷹見徹夜が崩御して更にそれは悪化したと言われている。

ランドルフに史記を書くように頼み、それを聞き終えてから夫の後を追う様にして病没したとも言われているが、鷹見徹夜から渡された拳銃で自殺したとも言われており定かではない。

ガルバーとの間に儲けた娘のエリーナとは仲の良い関係で一見、姉妹に見られるほど美貌の持ち主であったと言われている。

また人を疑わない性格と包容力から「聖母」と鷹見徹夜からは呼ばれたらしい。

だが、人を疑わない点が仇となり内乱を起こす事になったと指摘されている。

後に彼女が書いた日記が発見された。

内容は日常生活からガルバーとの結婚生活、そして鷹見徹夜との出会い、内乱などが詳しく書かれていた。

そこで内乱が起きた事を後悔している、書かれており自分の責任であるとも指摘していた。

日記では鷹見徹夜の人柄や夫婦生活などが鮮明に書かれおり彼に対する熱烈な想いまで書かれていた。

その中には双子の姉の件や臣下が勝手に鷹見徹夜を国外追放に処した事、鷹見徹夜が行方不明になった事に関する事が事細かく書かれており、特に鷹見徹夜が行方不明になった所は所々が滲んでおり涙を流していたと思われる。

結婚後の部分は「幸せな時間」と表記されており、夫婦円満と見受けられる。

その半面で1番目の夫であるガルバーとの生活は「不幸」とだけ書かれており詳しい内容は何一つ書かれていなかった。

第二十三章：プロイセンの娘（前書き）

此処の所、些かネタ切れになっておりましたが、やっと本編を更新します。

と言っても、また人物紹介をしますが・・・・

勘弁して下さい！！

第二十三章：プロイセンの娘

「えいっ、えいっ、えいっ、えいっ」

「踏み込みが甘い。それから変な声を出すな。ペナルティとして素振り１００本追加だ」

「そ、そんなー」

テツヤ殿の非情な言葉に私は泣きそうな声を上げた。

ギルドの事件から1週間が経った。

あれから私はテツヤ殿に毎日のように扱かれている。

ＳＫＳカービンとベレッタＭ９２ＦＳの射撃訓練、それからカタナの指南、格闘技の指南、など様々な訓練を受けさせられている。

その間にも聖騎士団の仕事もやらなければならないから身体が持たない。

今も聖騎士団の仕事を終えて、直ぐにカタナの指南を始めさせられたのだ。

テツヤ殿は煙草を吸いながら私を叱咤している。

しかし、余りに過酷すぎる。

変な声を出しただけで素振り１００本も追加など酷い話だ。

そんな事を思いながらも私は素振りを続ける。

そして気を紛らわそうとカタナの事を考えた。

カタナは私が使用していた剣に比べて細身だが、切れ味は鋭くて斬るのにも突くのにも優れていると改めて実感する。

私が使用しているカタナもテツヤ殿と同じくドウタヌキだ。

剣よりは比較的に軽い方だが重い事に変わりはない。

ギルドの店でテツヤ殿はこれを片手で器用に相手の手首などを狙って斬ったり、突いたりしていた。

私もやってみたが、まだ出来ない。

テツヤ殿から言わせれば「剣も片手で振るえないのだから、出来る訳ない」と断言されてしまった。

今はカタナを中段で構えて素振りをしている。

テツヤ殿の世界では、この構えを「正眼」と呼んでいるらしく、基本的な構えであり臨機応変に対応できる構えと教えられた。

テツヤ殿の居た国では5つの構えが基本で、その中でもこの正眼はしつこいようだが、基本的な構えらしい。

「良いか?正眼をマスターすれば、ある程度の奴には対応できるんだ。しっかりやれ」

テツヤ殿は煙草を吸いながら私の腰を鞘で叩いた。

「もっと腰に力を入れてやれ。素振りを後５００回増やすぞ」

これ以上、増やされては堪らないので私は必死に腰に力を入れて振った。

「ほぉう。それが噂に聞くカタナと言う奴か」

ふと声がして私は動きを止めたが、テツヤ殿に続けろと言われて再開した。

一瞬だけの休みは辛い。

声を掛けてきたのはプロイセン様だった。

相変わらず整えられた髭が特徴的な方だ。

「何か用かい？」

「そなたとランドルフが使用したカタナという物を見に来た」

「暇なのか？」

テツヤ殿はプロイセン様に煙草を勧めながら訊ねた。

「いいや。職務の合間を縫って来た」

それに対してプロイセン様は何気なく言い、煙草を銜えた。

だったら、来なければ良いではないですか。
などと私は思いながら素振りを続けた。

「あんたを上司に持つと大変だな」

テツヤ殿はプロイセン様の煙草に火を点けてやりながら、肩を落とした。

「そう言うな。所でそのカタナは、我々が使用する物とは違うようだな？」

「一目で解かるとは流石だな」

「これでも現役だからな」

プロイセン様は得意気に笑いながら、テツヤ殿に見せてくれと頼んだ。

「ほい」

ぶっきら棒とも言える仕草でドウタヌキをプロイセン様に渡した。
鞘からドウタヌキを抜いたプロイセン様は真剣な顔でドウタヌキを見た。

「・・・素晴らしい剣だな。これなら鎧も切れよう」

「まぁ、使い手次第だ」

「だろうな。しかし、私が使用する剣より切れ味と言い、重さと言い、造りと言い、全てが上だ」

欲しい。

実に欲しい、とプロイセン様は呪いの言葉を吐くように言う。

傍から見れば恐ろしい以外の何でもない。

「素直に欲しいと言えよ。気色悪いぞ」

「では、言う。私にもくれ」

テツヤ殿に指摘されたプロイセン様は、素直に欲しいと言った。

「別に良いぜ。俺と同じので良いのか？」

「うむ。他の物も見てみたいが、これが良い」

「根っからの軍人だな。あんたは」

「その言葉から察して、このカタナは余り良い評価を受けていないのか？」

「まぁ、周りからは鉈を剣の長さまで叩いて引き延ばしただけ、と言われているからな」

何でも作柄の出来と見栄えなどが乏しい事から、余り評価されていないようだ。

「何を馬鹿な事を。剣と言うのは、作柄や見栄えなどより切れ味と耐久力が求められる」

作柄や見栄えなどは二の次、三の次だとプロイセン様は煙草を吸いながら言い続けた。

「俺も同感だ。まぁ良い。ちょっと待ってな」

テツヤ殿は携帯を取り出して、例の宅配人にドウタヌキをもうひと振り頼んだ。

そして直ぐにドウタヌキは届けられた。

「ほれ」

「おぉ、さっそく来たか」

プロイセン様は新しいおもちゃでも与えられたように嬉しそうに笑いながらドウタヌキを抱き締めた。

あの顔で、あんな仕草をするとは・・・・・・良い歳した大人がする仕草ではないな。

などと考えているとテツヤ殿から「ぼさっとするな。ペナルティーで１００本追加だ」と言われてしまった。

ひ、酷過ぎる！！

私の心の悲鳴を無視するようにテツヤ殿とプロイセン様は煙草を吸

い合った。

「所でテツヤよ。主に会わせたい者が居る」

「誰だ？」

テツヤ殿は煙を吐きながら訊ねた。

「私の娘だ」

「娘？あんた結婚していたのか」

テツヤ殿は些か驚いた声を上げた。

私もプロイセン様が結婚しているとは初耳で驚いた。

ちなみにゲンハルト様は独身で愛人も居ないらしい。

何でも、あの高圧的な態度が災いして誰も嫁に行きたくないのが理由らしい。

ゲンハルト様のように独身で過ごしたくないから気を付けよう。

「あぁ。まぁ、妻とは既に死別しているがな」

「その娘をどうして俺に会わせたいんだ？」

「私の軍に所属し、尚且つ指揮する立場に居るからだ」

「へぇ、どんな部隊を指揮しているんだ？」

「天馬騎士団だ」

「天馬騎士団？」

テツヤ殿は聞き慣れない名前に首を傾げた。

「今は他国へ軍事視察に行っているから知らないのも無理はない」

近い内に会わせるから、その時は会ってくれとプロイセン様は頼んだ。

「別に構わないが、その天馬騎士団ってのはなんだ？」

「その名の通り天馬に乗る騎士団だ」

「天馬っって言うと、翼の生えた馬か？」

「あぁ。どちらかと言えば女性騎士が主になる」

「何で女性なんだ？」

「身体の重さが軽いからだ」

プロイセン様は天馬騎士について詳しく説明してくれた。

天馬騎士は機動性が重視される騎士である為、体重が軽い女性が選ばれ武器や鎧も軽量な物が好まれる。

主な任務は偵察か連絡係だが、奇襲なども得意とされている。

その半面で弓矢などの攻撃に弱い所があると言う。

「その騎士団を娘さんが指揮している訳か」

「あぁ。そなたの事は手紙で話してな。興味があるらしく是非とも会いたいと手紙に書かれていた」

「まぁ、会っても良いが、何時かえって来るんだ?」

「そうだな・・・3日後位だな」

「そうか。それじゃ、その日は予定を開けておく」

「頼む。では、私は失礼する」

プロイセン様は煙草を捨てて、ドウタヌキを片手に持ち悠々と去って行った。

「あのおっさんに娘ね・・・母親似である事を願うぜ」

「テツヤ殿、それはあんまりな言い方ですよ」

素振りをしながら私は窘めるように言った。

「じゃあ訊くが、お前はあのおっさん似の女に会いたいのか?」

プロイセン様似の女性に・・・・・・・・・・・・

「・・・会いたくはないです」

失礼だと思ったが、プロイセン様に似た女性など想像できない。

それに想像もしたくなかった。

「だろ？だったら、言うな」

こう言い返されては何も言い返せない。

私は黙って頷いて素振りを続けた。

そして夕食の時間になる頃に、素振りは終了した。

お陰で腕が鉛のように重くて、まともに両手が使えなかった。

プロイセン・マクシリアン

名前：プロイセン・マクシリアン

身長：１８７ｃｍ

体重：７０ｋｇ

年齢：４５歳→享年８０歳

職業：サルバーナ王国の武将

衣服：鋼と赤を主体にした鎧

装備：同田貫、コルト・コンバットコマンダー

特技：剣術、馬術、戦術

異名：サルバーナ王国の老獅子、大陸一の剣士

嗜好：鍛錬、戦史研究

座右の銘：侵略すること火の如く動かざること山の如く

要約：サルバーナ王国の軍団を指揮する総司令官で女王サラとは従兄弟の関係でもある。

サラの夫であるガルバーと共に遠征などを繰り返したが、余りガルバーの行いを良いとは考えておらずシャインス公国の独立を認めさ

せるように裏で手を回したと言われている。

またガルバーより兵たちからは慕われており、「我らが親父」と言われて敬愛された模様。

宰相のゲンハルトとは何かと喧嘩をして鷹見徹夜からは「犬猿の仲」と指摘されているが、彼の腕前は買っている。

年々、軍の予算が減る事に対して些か不平不満を漏らしており内乱が起こる事もある程度の予想はしており何かしらの手を打とうとしていた。

既婚者だったが、妻を亡くしてからは独身を貫いて一人娘のリーザを男で一つで育て上げた。

相手が身内だろうと決して贔屓しないなど公平をあくまで貫き、亡き妻を想い独身を貫いている姿が兵たちには慕われた要因と言われている。

鷹見徹夜を「我が息子」と称しており、リーザと結婚するように頼んだ言われており後に現実と化した。

内乱が勃発して、初戦で多くの兵を失うと共に敵の矢を5本ほど撃たれたが、死なずに居るという驚異的な体力を持ち合わせている。

しかし、傷が元で満足に指揮が執れない事から鷹見徹夜を戦闘指揮官に任命して退却した。

その後、サラ達と東の地へと逃げ込み傷の治療に当たると同時に作戦を立てるなどしてリカルド側をけん制した。

内乱が終結後は軍の再編と改革に乗り出し、ゲンハルトと共に他国と連合してムガリム帝国と戦う事になる。

鷹見徹夜の養父となると徹夜に前線などは任せて後方支援と後継者育てに一身を捧げた。

また晩年は孫などに囲まれて幸せな老後を過ごしたとされている。

ランドルフの史記によると「髭が立派で体格も獅子のように逞しい」と書かれていた。

剣の腕前は大層な物で、大陸一の剣士という異名を持っている。

ある戦では敵兵を１０人ほど斬り殺した、両腕で魔物を絞め殺したなど、伝説的な逸話が多く残されており鷹見徹夜と並び後世からの人気は極めて高い。

第二十四章：天馬騎士

私とテツヤ殿は馬に乗り、町を巡回していた。

プロイセン様にドウタヌキを渡して3日が経っており今日、プロイセン様の娘と会う予定だ。

午後には帰って来ると言うので、それまでは聖騎士団の仕事をしている。

テツヤ殿は迷彩服に身を包み、ＡＫＭアサルトライフルを背中に背負い、ドウタヌキを腰にぶら下げている。

どう見ても無頼の者にしか見えない。

だが、私もそれは同じかもしれない。

何せ私も迷彩服に身を包み、ＳＫＳカービンを背中に背負っているのだから。

ドラゴン退治の時に着ていた迷彩服だが、気に入ってしまい今ではこれを着ている。

馬に乗り町を巡回して民達に何か困った事があるか訊ねた。

民達の困り事を解決するのも聖騎士団の仕事であるからだ。

テツヤ殿は馬に乗りながら煙草を吸っている。

暫く町を巡回していると人ごみが集まっている事に気付いた。

「何ですかね？」

「さぁな。だが、様子からして余り良い人ごみではないらしい」

テツヤ殿は煙草を吸いながら人ごみを見ていた。

私も釣られて見てみると、確かに雰囲気が余り良い方ではない。

進んで行くと、民の一人が駆け寄ってきた。

「お願いです。あいつを助けて下さいっ」

「どうしたんだ？」

テツヤ殿は馬に乗りながら訊ねた。

「親衛騎士団の奴らが鎧を汚したと言って男を殴っているんです」

「・・・ランドルフ。行くぞ」

テツヤ殿の言葉に私は頷いた。

人ごみの手前で馬から降りて、別けて進んで行くと一人の男が親衛騎士団の面々によってたかって殴られているのが見えた。

親衛騎士団の中にはフィーナ様も居た。

「おい、馬鹿娘」

テツヤ殿はフィーナ様を馬鹿娘と呼んだ。

「貴様っ」

フィーナ様はテツヤ殿を見ると、憎悪を込めた眼差しで睨んできた。

腕を見ると、既に完治しているように見えた。

「何をしているんだ？大人数で一人を虐めるなんて悪趣味だぜ」

「この男は私の、親衛騎士団の鎧を汚した。だから、罰を与えている」

フィーナ様は、傷だらけの顔をした男を一瞥してテツヤ殿に説明した。

「鎧を汚した位で、それほど殴るのか？」

「貴様のような傭兵上がりには我が親衛騎士団が着る鎧の意味が解かるまい」

フィーナ様は馬鹿にするように笑いながら説明した。

「この鎧は代々、国王陛下より与えられた鎧。それを汚す者は王国に反逆するという意味だ」

「・・・大した屁理屈だな」

「何だとっ？」

「そんな大事な鎧なら着なきゃ良いだろ。それにそれだけ殴ったんだ。もう充分に罪は償った」

それ以上やるなら、お前さんの腕をもう一度、折るぞとテツヤ殿は宣言した。

「そうだったな。貴様には借りがあった」

ここでその借りを返してやろう、とフィーナ様は言い腰の剣を抜いた。

「ランドルフ。あの男をこっちへ連れて来い」

「分かりました」

私は頷いて、傷ついた男をこちらへ引き寄せた。

「傭兵。貴様の首を跳ね飛ばしてやる」

「やれるものならやってみな」

テツヤ殿は、腰からドウタヌキを抜いた。

「ほぉう。今回は剣を使うか」

フィーナ様はドウタヌキを一瞥して、如何にも傭兵が好みそうな剣だと嘲笑った。

「御託は良いから掛って来な」

テツヤ殿は早くしろ、と言い正眼に構えた。

「・・・覚悟！！」

剣を振り上げてフィーナ様は突っ込んだ。

そして剣を振り降ろすが、テツヤ殿はそれを軽快な動きで躱してみせた。

「はあっ！！」

最初の攻撃を躱されたが、フィーナ様は直ぐに突きを繰り出した。

しかし、それも躱したテツヤ殿がお返しとばかりに突きを繰り出してきた。

「ちぃ！！」

フィーナ様は舌打ちをして防御しようとしたが、頭から地面に向かい倒れた。

見ればテツヤ殿が足払いをしていた。

もはやこの人の十八番とも言える。

変則技だ。

頭から地面に倒れるフィーナ様の首筋にドウタヌキの刃を当てるテツヤ殿。

「どうした?俺の首を刎ねるんじゃなかったのか?」

テツヤ殿は愉快そうにフィーナ様を見て笑ってみせた。

「ぐっ・・・・・おのれ」

歯軋りをしながらフィーナ様はテツヤ殿を睨んだ。

「さぁ、どうしてやろうか?」

テツヤ殿は網に掛った魚をどう料理しようか、悩んでいるような口調だった。

だが、そこへ男を殴っていた親衛騎士団の兵たちが剣を抜いてフィーナ様を助けんばかりにテツヤ殿に襲い掛かった。

「団長を離せ!!」

テツヤ殿はフィーナ様から離れ、ドウタヌキを右手側に寄せ、左足を前に出して構えた。

5つの構えの一つである「八双」という構えだ。

あれは大人数で戦う時に使用する構えだと教えられた。

親衛騎士団は全員で5人。

それを考えて八双の構えを取ったのだろう。

親衛騎士団はテツヤ殿の構えを見て、油断できないと言う顔を浮かべた。

だが、数で勝っているのを解かっているのか取り囲むようにして距離を縮めていく。

私も行こうとしたが、テツヤ殿が一人で十分だと言ってきた。

「親衛騎士団を5人相手に勝てる気か？」

フィーナ様は身体を起こしてテツヤ殿に勝ち目はないぞ、と言ってきた。

「負けたくせに偉そうな口を叩くな」

対してテツヤ殿は鼻で嘲笑った。

それが合図となったのか、一気に5人が襲い掛かる。

テツヤ殿は刃を後ろにした。

カタナは片刃で、片方は切れない。

つまり、峰打ちにするという事か。

先ず右から斬り掛って来た親衛騎士団の腕を攻撃して足払いをした。

そして続け様に隣の男に体当たりをして、もう一人の男の首筋に峰打ちをする。

あっと言う間に3人を倒してしまった。

その様子を民達は唖然とした様子で見ている。

残り2人は少し怖気づいた顔を浮かべた。

「お前等、ここで引き下がるなら痛い思いをしなくて済むぞ」

テツヤ殿は起き上ろうとする親衛騎士団の顔面を踏ん付けて消えろと言った。

本当に悪役が似合う人だと失礼にも思ってしまった。

その声には本当に痛い思いをするぞ、と言っていたが、それを打ち消すように大声を上げて親衛騎士団の者たちは突っ込んだ。

「中々の忠誠心だな」

テツヤ殿は犬歯を見せて笑い、ドウタヌキを構えた。

後もう少しという所で、親衛騎士団とテツヤ殿の間に槍が刺さり動きを止められた。

「・・・・・・・・」

テツヤ殿が片眼で空を見上げているので、私も上を見上げる。

上には数頭の天馬が居た。

馬上には鎧を着た騎士たちが乗っており、弓矢や槍で武装していた。

あれは・・・・・・・・・・

「親衛騎士団の者よ。速やかに剣を退けなさい。その方を斬るのは、この私が許しません」

先頭の天馬に跨った騎士が威厳ある、しかし、綺麗な声で親衛騎士団に剣を鞘に収めろと命令した。

羽の付いた兜を被り白銀の鎧を身に纏った騎士は、テツヤ殿から以前聞いたワルキューレに見えた。

『彼女達は羽の付いた兜と鎧を身に付け、槍などで武装し天馬に跨り勇敢なる戦士を迎えに来る』

空に居る騎士たちは、まさしくワルキューレだった。

「だ、誰だっ。貴様はっ」

親衛騎士団の一人が空に向かい訊ねた。

「私はリーザ。天馬騎士団団長、リーザ・マクシリアン。プロイセン・マクシリアンの娘です」

えっ？

プロイセン様の娘様?!

私は思わず似ていないと思ってしまった。

どう見ても、母親似だ。

それは女としては良い事だろう、などとも思ってしまったのだから私は意外に酷い奴なのだろうか？と自問自答してしまった。

「その方は女王陛下の客人です。そして先ほどから貴方達の所業を見ておりましたが、騎士として目に余る行為。直ぐに退きなさい」

さもないと実力行使で訴える、とリーザ様は続けた。

「お言葉ですが、リーザ殿」

フィーナ様はリーザ様を見上げて、こう言った。

「この鎧を汚すという事は王国に対して反逆を意味する事ですよ」

「故意にやれば反逆でしょう。しかし、その民は故意ではありません。それに何度も謝りました」

それを許さずに殴る蹴るの暴行をするなど言語道断である。

「フィーナ殿。貴方は親衛騎士団を汚す気ですか？」

国王を護り抜く精鋭である親衛騎士団の歴史に泥を塗る方が王国に反逆するのではないか？とリーザ様は指摘した。

「上のお嬢ちゃんが言う通りだな」

テツヤ殿はドウタヌキを構えながら頷いた。

「まぁ、俺としてはあんた等の顔に泥が塗られようが知った事じゃない。もしも、俺とまだ戦うつもりなら本当に地べたに這い蹲らせるぞ？」

「・・・・覚えていろよ。下劣な野良犬が」

「覚えていたらな」

フィーナ様の捨て台詞に対してテツヤ殿は挑発的な口調で言い返した。

そんな事を言うから、余計に相手を怒らせるのだ。

私は嘆息しながらフィーナ様達が立ち去って行くのを見届けた。

天馬騎士団が地上へと降り立った。

リーザ様が馬上から降りて、テツヤ殿に近付いた。

テツヤ殿は既にドウタヌキを鞘に収めており口には煙草が銜えられていた。

「初めまして。タカミ・テツヤ様。私はリーザ・マクシリアン。プロイセンの娘です」

リーザ様は兜を取ると一礼した。

灰銀の髪が腰まで一気に落ちて、艶が光で輝いた。

テツヤ殿を見つめる赤い瞳も綺麗で宝石を思わせる。

「こちらこそ。俺は鷹見徹夜。元傭兵で今は聖騎士団に所属している」

「ご親切にありがとうございます。しかし、噂通り強いですね」

「プロイセンのおっさんから聞いていたんだっけか？」

「はい。貴方様の事を是非とも部下に欲しいと言っておりました」

「部下にね・・・」

テツヤ殿は何か考えているような眼をしながら、煙草にジッポー・ライターで火を点けた。

「所で、先ほどから見ていたと言っていたが何処から見ていたんだ？」

「貴方様が来た時からです」

という事は最初から見ていたという事ではないか。

「なるほど・・・俺の実力を確かめる為か」

「はい。御気分を悪くさせたら申し訳ありません」

「いいや。別に悪くなっていない」

煙を吐きながらテツヤ殿は答えて、私が保護した民に近付いた。

「大丈夫だったか？」

「は、はいっ。いっつぅ・・・・」

民は頷こうとしたが唇を切っているのか手で抑えた。

「ランドルフ。直ぐに医者に見せるぞ」

「はい」

私は頷いてテツヤ殿と一緒に民を医者の下へと連れて行った。

それをリーザ様が見ている事に私は気付かなかったが。

第二十五章：夕食の約束

医者の所へ民を連れて行った私とテツヤ殿は再び巡回を始めて、夕方に寮へと戻った。

しかし、寮の前に一頭の天馬が居る事に気付いた。

「あの天馬は・・・・・・・」

私とテツヤ殿が天馬を見ていると、寮のドアを開けてリーザ様が出てきた。

そして、「お帰りなさいませ」と言ってきた。

「何であんたがここに？」

テツヤ殿はリーザ様に訊ねた。

「貴方様を待っておりました」

「俺を？」

リーザ様の言葉にテツヤ殿は首を傾げた。

「はい。今夜はお暇ですか？」

「今夜は生憎と先客が居る」

今夜もまた司教様のエドリアス様と話すのだ。

「そうですか。では、明日はどうですか？」

「その前に何の用か教えてくれ」

「これは失礼しました。実は、貴方様と食事をしたいと思いまして」

これには私も驚いた。

テツヤ殿に食事を誘う気だったなどとは考えてもみなかったのだから。

「俺と食事ね。何でだ？」

「単純に答えるなら父から貴方様の事を聞いており興味がありました」

何よりプロイセン様自身がテツヤ殿とじっくりと酒でも飲みながら話し合いたいそうなのだ。

「それでか。まぁ、明日なら良いかもな」

確実とは言えないが、と付け足したがリーザ様はそれでも良いと言った。

「では、時間が空いた時に軍団へお越し下さい」

「分かった」

「では失礼します」

リーザ様は一礼して天馬に跨ると天へと飛び上がって消えた。

「さて、風呂に入るか」

テツヤ殿はリーザ様を見送って寮へと入る。

私もそれを追い掛けて、部屋へと戻り風呂場へと向かって汗を流した。

夕食を済ませた後はエドリアス様が来るのを待った。

エドリアス様が到着すると話は開始された。

今日はサルバーナ王国の軍団の事だ。

「先ずサルバーナ王国を護る軍団は獅子頭軍団です」

「プロイセンのおっさんが指揮する軍団だな？」

「はい。重装歩兵と魔術師、弓兵などで構成されております」

重装歩兵で攻守を、弓兵と魔術師でその援護をするのが基本的なやり方だ。

その傘下として聖騎士団と親衛騎士団がある。

「親衛騎士団はガルバー様の頃は一つの軍団として存在しておりましたが、ガルバー様亡き後は予算の都合などで獅子頭軍団に吸収される形となりました」

聖騎士団は元から獅子頭軍団の傘下に居る。

「なるほどな。それで獅子頭軍団には天馬騎士団が居るのか？」

「はい。お会いしたのですか？」

「あぁ。プロイセンのおっさんに似ないで美人だ」

「リーザ様の事ですか」

エドリアス様はリーザ様の名を言い、母親似だと付け足した。

「プロイセン様は男でなくとも後継ぎにはなれるという考えの持ち主でして、リーザ様を幼い頃から鍛えておりました」

そしてリーザ様もそれに答えて実力で天馬騎士団の長に治まったらしい。

「だろうな。あのおっさんなら相手が身内だろうと、贔屓したりしない筈だ」

「はい。リーザ様を見てどうですか？」

「そうだな・・・プロイセンのおっさんにはやはり経験の差から劣る。だが、女の身でもやり手だ」

あの空から槍を投げた上で制止させる。

簡単なようで難しい事をやってのけた。

それをやるのだから、やはり強いらしい。
更に声だけで相手を黙らせるのも良い。

「そのリーザ様からお食事の誘いを受けたそうですね？」

「知っているのか？」

「もう聖騎士団の間では持ち切りですよ」

テツヤ殿がリーザ様のハートを射止めた、と。

「ハートを射止めたかは別だが、人気があるようだな」

「それはもう大人気ですよ」

特に女性から、とエドリアス様は言った。

「まぁ、女から見れば強くて頼もしいお姉様タイプだろうからな」

テツヤ殿はリーザ様を一目見てそう感じたらしい。

「左様です。それに天馬騎士団は女性騎士が比較的ですが多いのも理由ですね」

「確か・・・体重が軽い乗り手が好まれるからだったか？」

「はい。それとリーザ様の魅力も手伝って、人気があるのです」

「なるほどね」

「それでリーザ様とのお食事はどうなさるんですか？」

エドリアス様は興味深気な瞳でテツヤ殿を見た。

「まぁ、別に断る理由もないから受ける積りだ」

「そうですか。では、明日の代わりに今日はその分お話をしましょう」

「あぁ。俺もお前さんの気になる事を話そう」

二人は頷き合い、エドリアス様が用意した酒を出した。

私は3人分の杯を用意し酒を注いだ。

酒を飲みながらエドリアス様は、テツヤ殿の国について質問した。

「テツヤ殿の国ではどのような軍隊があったのですか？」

「陸海空の3つだ。他国によっては沿岸警備、“殴り込み部隊”なんかも入れて5つの軍もある」

「その殴り込み部隊とは？」

「海兵隊の事だ」

「海軍の一部ですか？」

エドリアス様は酒を飲みながら訊ねた。

「大半はそうだ。だが、一部だが独立している所もあるし中には陸軍の一部もある」

それは他国によってマチマチなようだ。

テツヤ殿の国では海兵隊が無いらしい。

この海兵隊とは主に海戦での接舷戦闘、敵陣への乗り込みである地上戦が任務のようで先ほどの「殴り込み部隊」とはこれから名付けられたらしい。

その他には島国などでは敵に奪われた島を奪回する為にも活躍すると言う。

テツヤ殿の国は島国なのに海兵隊が無いのは、可笑しな話だ。

「なるほど。それでテツヤ殿はどの軍に居たのですか？」

「俺が居たのは陸軍だ。詳しく言えば“陸上自衛隊東部方面隊隷下第1空挺団”に所属していた」

そこに2年ほど在籍していたらしい。

「その第1空挺団とはどんな所なんですか？」

「空から降下して敵の後ろを突いたり、重要拠点を破壊するのが任務だ」

正面から突撃する海兵隊に対してテツヤ殿の居た空挺団は背後から攻撃するらしい。

「空から降下と言いましたが、天馬騎士団と似たような物でしょうか？」

「まぁ、そう思って良いだろう」

テツヤ殿は酒を飲み干して頷いた。

そこで蛇を食べる訓練を受けていたらしい。

「そこでの経験が2度目の軍隊でも活かされて空挺部隊に配属された」

空から降下する隊の事を一般的に空挺部隊などと言うらしい。

「なるほど。その2度目の部隊の名は何と言うのですか？」

「“フランス外人部隊第2落下傘連隊”だ」

「外人部隊？」

私とエドリアス様は聞き慣れない言葉に首を傾げた。

「元々、この外人部隊は自国民の血を流したくない王の考えから出来た」

他国の者達を金で雇い戦わせた。

言わば傭兵だ。

だが、時が経つに連れて傭兵から正規軍へ変わったらしい。

「俺は“ＧＣＰ”と言われる空挺コマンドに居た」

外人部隊の中でも最強と名高く、即応能力にも長けていると教えられた。

「どれくらい速いんですか？」

「２日もあればどんな状況にも対応できる」

「たったの２日で、ですか？」

どんなに速い軍でも２日で動くなど到底できない。

それなのにそこは出来ると言うから驚きを通り越して感心する。

「そうだ。命令が出れば数分で準備などをして出発する」

その他にも他国に駐屯している為に速いのも理由のようだ。

「そこでの任務はどんな内容なんです？」

私の次にエドリアス様が質問した。

「例えば敵軍の陣地に深く侵入して頭を暗殺ないし拉致する。もしくは敵基地の破壊をサポート、兵站を奪取・・・・まぁ、余り表沙汰には出来ない任務を任されるんだ」

私たちはテツヤ殿の説明に頷いた。

エドリアス様はその空挺部隊はどれくらい強いのか？と訊いた。

「何処の国でも空挺部隊は精鋭と言われているし、それだけの高い実力を求められる」

だから、他の隊以上に入隊条件なども厳しい上に訓練も苛烈らしい。

「俺が2度目に入った第2落下傘連隊は厳しい事で知られていてな。特にジャングル戦と砂漠戦では右に出る者が居ない、と言われている」

他国の軍からも指導を仰がれるようで、その実力が窺える。

「まぁ、訓練で死人が出た時もあるんだが」

つまりそれだけ厳しい訓練なのだ、と私は確信した。

「そうですか。プロイセン様が聞けば、きっとどんな物か詳しく追及する事でしょう」

「まぁ、明日にでも追及されるだろうな」

テツヤ殿は肩を落として煙草を銜えた。

そして私とエドリアス様にも勧めて、3人で煙草を吸い合った。

第二十六章：天馬騎士団の講習

私とテツヤ殿は翌日になってから獅子頭軍団の方へと向かった。

獅子頭軍団の所へ行くと兵たちは直ぐに通してくれたが、テツヤ殿に女神の抱擁をせがんできた。

「ほれ」

テツヤ殿は女神の抱擁を1本ずつ渡して火を点けてやった。

二人の兵はそれを美味そうに吸った。

そして中に入る。

中に入り、プロイセン様の部屋へ行くと何やら中で話し声が聞こえてきた。

「鷹見徹夜だ。入っても良いか？」

テツヤ殿がドア越しに声を掛けると、プロイセン様が入って良いと返してきた。

ドアを開けて中に入ると、リーザ様がプロイセン様と一緒に話しあっている姿が眼に入った。

リーザ様は、ここでも鎧姿だった。

「これはテツヤ様にランドルフ殿。おはようございます」

リーザ様は私たち二人に優雅な立ち振る舞いで一礼してくれた。

「おはよう。それとプロイセンのおっさんもな」

「あぁ。おはよう。それで昨夜の返事かな？」

「あぁ。今夜、良いんだが」

「本当ですかっ」

リーザ様は眼を輝かせて訊き返してきた。

「そんなに喜んでくれると男冥利に尽きるな」

テツヤ殿は面白そうに笑いながら煙草を銜えた。

「テツヤよ。どうだ？リーシャは」

「リーシャ？」

「私の愛称です」

リーザ様は眼を輝かせたまま答えると、テツヤ殿にリーシャと呼んで下さいと頼んだ。

「会って間もない男に愛称を呼ばせてはいけないぜ」

男に妙な期待を沸かせてしまう、とテツヤ殿は言い壁に背中を預けてジッポーで火を点けた。

「テツヤ殿なら構いませんわ。どうか、リーシャとお呼び下さい」

「そこまで言うならリーシャと呼ばせてもらう。それで何時に行けば良いんだ？」

「夕方に頼む。私の屋敷は目立つから直ぐに解かる筈だ」

「解かった。じゃあ、俺らは帰る。行くぞ、ランドルフ」

「あ、はい」

私は頷いて二人に一礼して部屋を出ようとした。

「お待ちになって下さい」

リーザ様が呼び止めてきた。

「何だ？」

「あの、この後、お時間はありますか？」

「この後か？この後はこいつを鍛える所だが、何かあるのか？」

「もし宜しければ、是非とも私の騎士団で講義をして欲しいのですが」

「講義か・・・まぁ良いか」

私はそれを聞いて、少しは楽できると思ってしまった。

だが、それは甘かった。

「講義が終わり次第、お前を鍛え上げる。短い時間だから、いつも以上に厳しいからな」

覚悟しろ、と言われた私は解かる程に肩を落とした。

「ははははは。若いのう」

プロイセン様は笑いながら私を見た。

リーザ様はテツヤ殿の講義を聞けると知り、大喜びだった。

私とは対照的で、更に私は落ち込む事になったのは言うまでもない。

リーザ様に案内されながら私とテツヤ殿は天馬騎士団が講義を受ける部屋へと入った。

そこは・・・・一言で言い表すなら男の夢が現実化した場所だ。

何せ全員が女だけというのだから、男の夢が現実化したと言っても過言ではないと思う。

「話に聞いていたが、まさか全員が女とは」

テツヤ殿は些か面食らった顔をしたが、直ぐに「ハーレムだな」と言って笑った。

「さぁ、お入り下さい」

私とテツヤ殿は中へと入った。

リーザ様が騎士たちの前で私たちを紹介した。

「皆も知っていると思いますが、こちらはタカミ・テツヤ様。元傭兵ですが、決して蔑むような真似はしないように」

もしもしたら私が許しません、とリーザ様は断言した。

「鷹見徹夜だ。元傭兵だ。宜しく。そして、こっちのもやしみたいな坊主はランドルフ・クリフだ。今日は講義をするが、決して堅苦しくならないでくれ」

堅苦しいとあんた等の魅力が半減する、とテツヤ殿は言い、騎士たちは楽しそうに微笑んだ。

「それではテツヤ様。講義をお願いします」

「何を話せば良いんだ?」

「先ず貴方様がいた軍について聞きたいのですが」

「じゃあ、最初に居た軍について話すか」

テツヤ殿は講義をするテーブルに手を置いて話し始めた。

「先ず俺が居た軍だが、俺の居た国では自衛隊と言われている」

「自衛、隊ですか・・・」

リーザ様を始めとした騎士たちは聞き慣れない言葉に首を傾げた。

「俺の居た国は、前の戦いで負けた。そして一度は軍を解散させられた」

だが、隣国などの状況が緊迫化した事により再び作られたらしいのだが、前の戦いの事もあり軍隊ではなくしたかったようだ。

あくまで自国を護る為の存在。

つまり自衛。

「だから、自衛隊なのですね」

リーザ様が確認するように言うとテツヤ殿は頷いた。

「そうだ。まぁ、そのせいで色々と鎖で縛られている。それで、いざというときに迅速に動けるかと聞かれたら無理だな」

しかも、装備する武器なども実戦を経験していない事から欠点があるにも関わらず直せない。

その上に追い打ちをかけるように、かつての戦で起こした非道が原因で最初は民から嫌われたらしい。

「・・・随分と憐れな組織ですね」

「あぁ。だが、隊員はそれでも国を護りたいという気持ちがある」

テツヤ殿の国は志願制で、徴兵制は取っていないようだ。

テツヤ殿の話では豊かな国と聞いているから、軍にわざわざ志願する必要など無い。

それなのに志願して軍に入るのだから、隊員の士気は高いと考えて良いだろう。

「まぁ、兵は一流だが士官は二流と言われているがな」

「それを考えると更に憐れな気がします」

兵が一流でもそれを指揮する者が二流では勝てる戦いにも勝てないのだから。

「まぁな。まぁ、そんな軍が最初に居た軍だ」

「テツヤ様はどんな任務を行う騎士団に居たのですか？」

「俺のいたのは騎士団ではない。まぁ、団であるのは同じだが」

「名前は何です？」

「陸上自衛隊東部方面隊隷下第１空挺団だ」

「空挺？という事は、空と何かしらの関係があるんですか？」

「空挺は飛行機と呼ばれる物から飛び降りて敵の後方地帯などに降りる」

昨夜、私とエドリアス様に説明した内容をテツヤ殿は言い始めた。
次にフランス外人部隊の事も話して騎士団を大いに満足させた。

「テツヤ様は、我が天馬騎士団と似ておりますね」

「だろうな。だが、あんた等の所では蛇を食べたりしないだろ？」

「いいえ。食べますよ」

私はそれを聞いて唖然としたが、テツヤ殿は眉ひとつ変えずにそうなのか？と訊き返した。

「はい。私の騎士団は一見、偵察や連絡と言う軽んじられる任務ですが危険です」

「そうなんですか？」

私は思わず訊き返した。

「ランドルフ。偵察や連絡ってのは敵にはもっとも厄介な存在だ」

偵察により自分達の居場所や兵力などが知られる為。

そしてそれを味方に知らされる。

これは戦をする者にとっては厄介以外の何でもない。

「だから、私たちは敵から常に狙われます」

リーザ様自身、何度も敵に天馬をやられて危機に陥った事があると言う。

「ある山に私は天馬と共に落ちました。そこで食べ物を探して、何も見つかりませんでした」

そこへ蛇が現れて思わず食べたらしい。

「なるほどな。あんた等なら俺の訓練を受けても耐えられそうだ」

「失礼ですが、父、プロイセンの軍では駄目ですか？」

「駄目じゃない。だが、あんた等の方が素質があると思ったんだ」

天馬騎士団の任務がテツヤ殿が居た部隊と同じである事が理由のようだ。

「嬉しいです。では、今度にでも基本的な事で良いので教えて下さいませんか？」

「美人の頼みだ。喜んでお引き受け致しましょう」

テツヤ殿は茶目た感じで一礼してみせた。

それをリーザ様は微笑んで受け止めた。

傍から見れば仲の良い男女にしか見えなかった。

これは私のあくまで眼から見た物だが、テツヤ殿とリーザ様なら仲の良い夫婦になれるのではないだろうか、と思った。

第二十七章：階級と軍歌

天馬騎士団で午前中の講義を終えた私とテツヤ殿は直ぐにその足で聖騎士団の寮へと戻り、訓練を開始した。

まぁ、何時もの通りＳＫＳカービンとベレッタＭ９２ＦＳ、ドウタヌキを撃つ斬るの繰り返しだ。

しかし、ベレッタの片手撃ちは未だに当てるのが難しい。

コツを掴んだが、それでもテツヤ殿のように狙った所に当てるのはまだ難しく、未だに苦難している。

「そいつを毎日のように撃ち続ければ、ちゃんと物になるからしっかりやれよ？」

「はい」

テツヤ殿は私の横で煙草を蒸かしながら自身もコルトＭ１９１１Ａ１を片手撃ちしている。

「そう言えば、テツヤ殿はコルトを使用していますが、それも闇市で手に入れたんですか？」

「いいや。こいつは先輩から譲り受けた」

その先輩は傭兵から足を洗い、故郷で牧場をしているらしい。

「俺をよく鍛えてくれてな。それで傭兵から足を洗う時に、記念の

品としてくれたんだ」

「思い出深い銃なんですね」

私はそう言いながらベレッタを撃ち続けた。

だが、急に動きが止まった。

よく見ればスライドの部分に弾が挟まっていた。

「それがジャムだ」

「これが・・・・」

私は初めてジャムという物を見て興味津々だった。

「良かったな。戦場でジャムらなくて」

もしも、ジャムっていたら私は死んでいたのだから。

それを言われると背筋が凍りつく。

「だが、良い教訓になったろ？」

「はい。確か、スライドを一度引いて弾を出すんですよね？」

「そうだ。それはもう撃つな。一度解体して掃除しろ」

「分かりました」

私はベレッタのスライドを引いて、弾を排出してからホルスターに戻した。

もちろん安全装置は掛けてだ。

この前、安全装置を掛けずに仕舞って、自分の足を撃ち抜きそうになった。

これも良い教訓と言えるだろう。

ベレッタの次は既にコツも掴んで、ある程度は私の言う事を聞いてくれるようになった「恋人」のＳＫＳカービンだ。

ＳＫＳカービンのレシーバーを引いて狙いを定めて引き金を引く。

弾は的の眼がある所に当たった。

「ワン・ショット・キルだな」

「何ですか？その言葉は」

突然、言われた言葉に私は思わず聞き返した。

「ワンは１、ショットは射撃、キルは殺すだ」

そしてその言葉を繋ぎ合せると一撃必殺という言葉になるらしい。

「スナイパー達の目標だ」

一撃、つまり一発で相手を仕留めるのがスナイパーの目標と教えて

くれた。

「何で１発なんですか？」

「前にも話したが、スナイパーとは極めて難しい」

狙撃自体が極端な程に難しく、それを専門にする者も少ない。

更に言えば、１撃で仕留めないと自分の居場所を知られると同時に帰る道が断たれる危険性があるからだ。

「だから、スナイパーは一撃必殺を旨としている」

お前にはその才能があるのだから、常に相手を一撃で仕留める事を旨としろと言われた。

それに私は頷き、ＳＫＳカービンの射撃を再開した。

テツヤ殿はコルトＭ１９１１Ａ１の射撃をしながら煙草を吸っていた。

「明日はこれよりもっと離れた場所でやる。そして的もこれより小さくするぞ」

ある程度、これに慣れたから今度は逆に小さい的を使用して、離れた場所で狙撃するようだ。

「どれ位ですか？」

「５００位はスナイパーは出来て当然。出来なければ失格だ」

つまり明日は５００ほど離れた場所からやる、という事か。

だったら、そう言えば良いのに何で、こうも湾曲した言い方をするのだろう、と私はつい思ってしまった。

何時もなら馬鹿正直とも言えるほど辛辣な言葉も言うのに、なんでこういう時は湾曲した言い方をするのか気になった。

だが、今は狙撃に集中する事にした。

ＳＫＳカービンを撃ち終えた後はドウタヌキで素振りをしたのだが、ドウタヌキを持つと昨日の事が思い出されて、腕が急に重くなった錯覚を覚える。

本当に重くなった訳じゃないのに、何故か重くなったと感じる。

それでも素振りをしたが、やはり重く感じてしまう。

テツヤ殿はそれを鋭く指摘して私は出来るだけドウタヌキが重いと考えずに素振りを続ける事にした。

何時の間にか夕方となっていた。

「おっと、もう時間か。どれどれ」

テツヤ殿は携帯を取り出すと徐に例の宅配人に掛けた。

『はーい。こちら宅配人でーす。何か御用ですか？』

「軍服を二人分ほどくれ。フランス外人部隊のだ」

『りょうかーい。1分ほどオーバーしましたが、お客様の為にお届けしまーす！！』

「ありがとよ」

そう言ってテツヤ殿は携帯を仕舞った。

「軍服を何で頼んだんですか？」

「俺とお前のだ。まさか迷彩服を着て屋敷に行く訳にはいかないだろ？」

確かに、この格好で行くのは些か問題があるな。

軍服は直ぐに届いた。

上の服は白で両肩には肩章が付けられていた。

全体は緑で周りが赤だ。

「よし部屋に戻って着替えるぞ」

私とテツヤ殿は軍服を持って部屋へと戻った。

部屋へと戻り迷彩服などを脱いで下着姿になる。

そして上の服を着る。

次に青い胴巻きを捲いた。

「何だか抑制された気がします」

何となくだが、青色の胴巻きはそんな気がしたのだ。

「俺もそうだ。先輩は外人だから仕方ない、と言っていたがな」

テツヤ殿は胴巻きをしながら答えてくれた。

ズボンは少し茶色が入ったズボンだった。

それを履いてから靴を履き紐で結んだ。

テツヤ殿の服の胸には様々な勲章が付けられていた。

「あの野郎・・・また要らぬ世話をしたな」

テツヤ殿は面倒くさそうに呟いて、勲章を見下した。

「テツヤ殿は勲章が多いですね」

それに対して私は何もない。

「まぁな。後これも付けろ」

渡されたのは白い帽子だった。

円筒形の帽子で色は白だ。

「何ですか？この帽子は」

「“ケピ・ブラン”という帽子で、外人部隊のシンボルだ。通称、ケピ帽と呼ばれている」

何でも元は茶色だったが、照りつける太陽により色が変化して、汚れを落とす為に洗浄の繰り返しによりしだいに白っぽくなったらしい。

そして、汚れ一つ無い白い外見は、古参の外人部隊兵たちの誇りとなっているらしい。

だが、テツヤ殿のケピ帽は黒く、前に見せてもらった手榴弾が描かれていた。

「何でテツヤ殿の帽子は黒なんですか？」

「俺の階級が下士官以上だからだ」

「下士官？テツヤ殿の居た世界での階級ですか？」

「そうだ。下士官は兵から叩き上げで、新兵たちには鬼みたいに怖がられているし、作戦を直接指導する立場でもある」

「テツヤ殿の階級は何だったんですか？」

「少佐と言って、下士官より更に３つほど上の左官の階級だ」

つまりテツヤ殿はかなり上の階級者という事か。

「その少佐は具体的にどんな事をするんですか？」

「一つの作戦単位を任される」

だから、それなりに高い教育もされ、実力なども求められるらしい。

だが、外人部隊では殆どの下士官は純フランス人だと言う。

それでも狭い門だが、兵から叩き上げでなれる者も居るというから絶対に駄目、と言う訳ではないようだ。

その下士官の更に3つ上の階級に行くとは、それだけ優秀と言う事なのだろう。

「まぁ、俺の場合は教育を受けたと言うよりは、作戦に何度か出てそこで培って少佐にされたな」

「つまり実戦で教育された、という事ですか？」

「そうだな。まったく、何で俺の階級から勲章まであの宅配人は知ってるんだよ」

テツヤ殿は愚痴を零しながらも黒いケピ帽を被り、コルトをベルトに巻いた。

黒髪を後ろに纏めており、顔は・・・お世辞にも2枚目とは言えないが魅力的に見えるのは確かだ。

そしてＡＫＭアサルトライフルを持った。

私もベレッタとSKSカービンを持ち、部屋を出た。
部屋を出るとワイド様と聖騎士団の先輩たちと鉢合わせした。
「何だ?その格好は」
ワイド様達は私とテツヤ殿の格好を見て、首を傾げていた。
「俺が居た軍の服だ」
「それがお前の居た軍の服か。随分と勲章があるな」
それにランドルフと違う帽子からもそれなりの地位に居たという事が解かる、とワイド様は付け足した。
「テツヤ殿は階級が少佐だったらしいです」
「少佐?どれくらい偉いんだ?」
「作戦一つを任される程だ」
簡潔に説明したテツヤ殿だが、一つの作戦を任されるという事はそれだけの地位にある、という事をワイド様は解かるのが些か驚愕していた。
「部下を持っているとは聞いていたが、そこまで階級が高いとは知らなかった」
「教えてないからな」

「まぁ良い。それで何処に行くんだ？」

「プロイセンのおっさんの家に飯を食いに来る」

「プロイセン様の？解かった。楽しんで来い」

ワイド様は後で訊くのか短い会話で切り上げた。

「あいよ。それじゃランドルフ。行くぞ？」

「はい」

私はワイド様達に一礼してテツヤ殿の後を追った。

ジープに乗り込むと運転席に小さな物が置かれていた。

何か文字が書かれている。

「何ですか？それ」

「カセット・テープと言って、音楽や音声を録音する物だ」

「何が入っているんですか？」

「俺の居た軍の歌だ」

「つまり軍歌ですか」

軍歌は、その軍の歴史や特徴、思想などが表現された歌の事で、聖騎士団、親衛騎士団、天馬騎士団、獅子頭軍団、それぞれ別の軍歌

がある。

「そうだ。名前は“ル・ブタン”と言って、円筒形リュックサックをブタンと呼んでいた」

それを当時の音楽隊のリーダーであったウイレム氏という方により、”ル・ブダン”が外人部隊行進曲として確立されていったと言う。

テツヤ殿はカセット・テープを黒い箱に入れた。

すると、音楽が聞こえてきた。

「これを聞きながら行くか」

テツヤ殿は私に煙草を勧めながらエンジンを掛けた。

「はい」

私は火を点けてもらった女神の抱擁を吸いながら頷いた。

そしてプロイセン様の屋敷へと向かった。

第二十八章：獅子の館（前書き）

誤字脱字が多いと指摘されたので、誰か誤字脱字があったら教えて下さい。（汗）

第二十八章：獅子の館

私はテツヤ殿が運転するジープに揺られながら、ル・ブランを聞いていた。

力強い音楽で力が漲る様な気がする。

テツヤ殿の話によると外人部隊にとって歌はとても大事な事らしい。

他国の者たちで構成された部隊の為か団結力を強くしようと考えられていたらしく、野営時または行軍中、歌を歌うことによって団結力を強くさせたと聞いた。

プロイセン様の屋敷はエスカータ城から少し離れた場所にある。

他の貴族の屋敷が華美な印象を受けるのに対して、プロイセン様の屋敷は武骨な印象が強いのも特徴と言える。

まぁ、本人が人生の殆どを戦場で生きて来た、と言う程なので屋敷にもそれが顕著に出ていると思う。

現に屋敷には水堀と空堀、更には見張り台まであるのだ。

お陰で目立つ事で案内が無くても自力で辿り着ける。

プロイセン様の屋敷に到着すると槍を抱えた2人の兵が私とテツヤ殿の前で止まった。

「失礼ですが、お名前を」

堅い声で兵はテツヤ殿に訊ねた。

「聖騎士団に所属する鷹見徹夜とランドルフだ。プロイセン様のご息女、リーザ様から夕食の招待を受けて参った」

ここでテツヤ殿は丁寧語を話した。

それが出来るなら普段もやれば、変に波風を立てないで済むのにと思ってしまう。

兵たちはテツヤ殿の名を聞いて直ぐに門を開けてくれた。

鋼鉄製の門は大きな音を立て、開いた。

ジープで中に入り、更に走らせること１０分。

やっと屋敷に到着した。

「歩きで来たら、ここに来るのに２０分は掛るな」

「ですね」

私はジープで行けて良かった、と頷いて降りた。

屋敷の前には黒い服を着たプロイセン様と綺麗な蒼いドレスを身に纏ったリーザ様が居た。

「ようこそ。我が屋敷へ」

プロイセン様はテツヤ殿と私の格好を見て、些か驚いたが直ぐに笑顔で迎えてくれた。

「今日はあんたのような屋敷に招待してくれてありがとよ」

「なぁに愛娘の頼みでもあるしな。所で、そなた達が着ている服は何だ？」

「俺が居た軍の服だ」

「そうか。しかし、主はやはり私の睨んだ通り修羅場を潜り抜けてきたようだな」

プロイセン様はテツヤ殿の勲章を見て自分の眼が正しかったと知り、円満な顔をした。

「別に勲章なんて欲しくない。こんな物を身に付けて戦場に行けば良い的だ」

テツヤ殿は重たいし、嵩張ると勲章を貶し続けた。

「そう言うな。勲章と言うのは戦いに身を置く者にとっては宝であろう」

「まぁ、否定しない。それはそうと・・・・美しい娘さんだ」

テツヤ殿はリーザ様に眼をやった。

リーザ様は蒼いドレスを着ており、髪を櫛で梳かしたのか午前中よりも艶がある。

それに薄く化粧をした上で口紅を塗っており、口紅が妖しく見えてしまう。

ドレスは夜などに着るイブニングドレスで胸元と肩が大きく露出している。

スカートの裾は長いが、地面に着くほどではなく足元が辛うじて見える程度の長さだ。

袖の部分は無い為、白い腕が丸見えだ。

装飾品は銀の腕輪や指輪などだが、決して見栄を張らない程度になっているが、リーザ様の美しさをあくまで映えさせる部品の一部でしかない。

「お褒めの言葉を預かり光栄です。テツヤ様も見惚れる程に着飾っておりますわ」

リーザ様は裾を摘んで一礼してからテツヤ殿の服装を褒めた。

「最初は別の服にしようと考えたが、軍服が一番だと思ってこれにしたんだ。褒めてくれて嬉しいぜ」

テツヤ殿は微笑み返した。

「では、中に入ってくれ」

プロイセン様は私とテツヤ殿を屋敷の中へ招き入れてくれた。

屋敷の中は貴族らしい面が何一つ無い質素な造りだった。
使用人たちの数も少ないが、少人数で全てをやっているように見えた。
食事をする場所に案内されたが、寮の食堂並みに広い場所であるが質素な造りである事に変わりは無かった。
「驚いたか？質素な造りで」
プロイセン様は私を見て、心を読んだように笑った。
「え、まぁ・・・・・・」
「質実剛健が私の旨でな」
無駄な事はしない主義者だ、とプロイセン様は説明した。
「良い事だ。俺も無駄に着飾るのは嫌いなんだ」
テツヤ殿は堅苦しそうに肩を叩きながら言い、使用人が引いた席に腰を降ろした。
「主を見ているとそう思う。さて、テツヤよ。改めて紹介しよう。我が娘、リーザだ。天馬騎士団の隊長を務める」
「初めまして。テツヤ様。私はリーザ。天馬騎士団の隊長を務めております」
「鷹見徹夜だ。元傭兵で現在は聖騎士団に所属している」

「失礼ですが、階級は何でした？」

リーザ様は腰を降ろしながらテツヤ様の顔を真っ直ぐに見て訊ねた。

「少佐だ」

「しょうさ？どの程度、偉いんですか？」

「まぁ、作戦の一つを任される位だから、それなりに偉いな」

改めて私は、テツヤ殿が本当にそれだけ偉い階級に居るのに驚いてしまう。

どう見ても荒れくれ者を束ねる人物にしか見えないのに、一つの作戦を任される程の階級に居るとは驚きだ。

「テツヤ殿は偉いんですね」

「まぁな。少佐になるのは、出世の壁とも言われているからな」

テツヤ殿自身はなりたい訳ではなく、ただ気が付いたらなっていたらしい。

何でもその少佐は、作戦の一つを任される程の階級の為、指揮官を育てる専用の学校が在るほどだ。

その為か少佐の1階級下の大尉で除隊する者が大半らしく「出世の壁」と言われているらしい。

「だから、テツヤ殿は博識なのですね」

リーザ様はテツヤ殿を尊敬するような眼差しで見つめた。

「少佐なんて堅苦しいだけだ。それに部下が大勢いたかと聞かれたら居なかった」

殆ど気心が知れた仲間が数人だけだったらしい。

「ですが、前は部隊を任されたと」

「あぁ。だが、その前の指揮官が指揮した戦いで４人を残して全員が死んだ」

その後に任されたから事実的に４人が部下だったらしい。

「あいつ等はどうしているかな？」

テツヤ殿は出された料理に手を出さずに天井を見上げた。

「どんな方達だったんですか？」

リーザ様は興味津々な眼でテツヤ殿を見て訊ねた。

「４人とも個性あふれる奴らだ。二人は俺の居た軍の部下で、残り二人は傭兵の時に出会った」

「会ってみたかったです」

「運が良ければ会えるさ」

テツヤ殿は注がれたワインを見ながら呟いた。

「では、今宵は我が屋敷に招かれた二人に乾杯しよう」

プロイセン様はグラスを持ち上げて宣言した。

私たちもグラスを持つ。

「乾杯」

『乾杯』

４人でグラスを合わせて飲む。

まろやかな味で口の中に余韻が残る。

私たちが飲んでいる酒よりも格の高い味だと直ぐに解かった。

「時にテツヤよ」

プロイセン様はグラスを煽りながらテツヤ殿に話しかけた。

「何だ？」

「リーシャから聞いたが、天馬騎士団に主が受けてきた訓練を施すそうだな？」

「まぁな。それがどうかしたか？」

「我が軍の何人かを選んで受けさせてくれないか？」

「あんたの兵は、確か重装歩兵だよな？」

「そうだ。そなたが言いたい事は解かる。連携が大事な重装歩兵を減らして良いのか、と言いたいのだろ？」

「あぁ。良いのか？」

「あぁ。そなたに預けられる者は少ないが、それでも得られる物が多いと思った。どうだ？」

「それなら良い。ただし、訓練で死ぬ可能性もあるぞ？」

それは覚悟できるか？とテツヤ殿は訊いた。

「無論だ」

だが、本心を言えば可愛い息子たちが死なない事を願う、とプロイセン様は続けた。

「可愛い息子か。あんたは良い指揮官だな」

テツヤ殿は屈託のない笑みを浮かべてワインを飲み干した。

「分かった。だが、先に天馬騎士団を鍛える事にするが良いか？」

「あぁ。私からも明日にでも言っておこう」

「頼む。さて、飯を食べるか」

テツヤ殿はナイフとフォークを器用に使用して用意された肉を平らげ始めた。

「テツヤ殿、ナイフとフォーク使えたんですね」

思わず呟いてしまった私。

「一応、礼儀作法は独学で学んだからな」

「だったら、何で手掴みで食べてたんですか？」

「面倒だからだ」

そんな単純な答えを聞いて私は思わず溜め息を吐かずにいられなかった。

私を傍目にリーザ様がテツヤ殿に熱い視線を向けているのを私は知らなかった。

第二十九章：地獄の訓練

「立て！！貴様は死にたいのか？死にたいなら敵と戦って死ね！！」

「おい、貴様。誰が休んで良いと言った？休まずに走り続けろ！？」

「貴様の○○は無能か？男を満足に出来ないのか？出来ないなら貴様は女じゃない。○○○だ！！」

炎天下の中で、思う限りの罵詈雑言が嵐のように飛び舞う。

現在、私と天馬騎士団はテツヤ殿の訓練を受けている。

いや、訓練などと言うのは人間に対して行う内容であって、これの場合は・・・・・・・・・

「こら、もやし。何をボーとしているんだ？さっさと走れ！！」

あいた！！

私は尻を蹴られて前のめりになったが、走り続けた。

これの場合は、人以下・・・獣の調教だ。

人を人として思わない内容と言動。

テツヤ殿はそこではまさしく、獣であり悪魔だ。

現在、私たちは鎧５つ分もある重りを持たされた上に足と両腕に重

りを付けさせられ、ライフルを持ち走っている。

ライフルだが、テツヤ殿の国が使用している“６４式自動小銃”と言う物を持たされている。

これが重い事この上ない。

ＳＫＳカービンやＡＫＭアサルトライフルよりも重い。

その重いライフルを両手で支えながら、時節だが上下に振う。

それを走り続けながらやるから、厳しい。

目標地点は無い。

ただ延々と走らせ続けられているのだ。

テツヤ殿は、後ろから私たちの尻を蹴ったり、罵声を浴びせてながら走っている。

よくもまぁ、体力が続くなと思う。

テツヤ殿も同じ物を付けているのに、まるで疲れを見せていないのだから。

「よぉし。休憩だ」

テツヤ殿の言葉に私たちはその場に崩れ落ちた。

皆、汗を掻き、息も絶え絶えだ。

私などはそれが極端な程だ。

「情けないな。この程度で息切れするとは」

テツヤ殿は立ったまま煙草を蒸かしていた。

今いる場所は王国の訓練所だが誰も居ない。

今日は私たちだけで使っているのだ。

他の者たちには休めて嬉しいだろうが、私たちにとっては地獄だ。

「て、テツ・・・少佐は疲れないのですか？」

私はテツヤ殿と言おうとしたが、少佐と言い直した。

これをやっている間は少佐と呼べ、と命令されたからだ。

「この程度で疲れる程、軟じゃない。５分経過。さぁ、続けるぞ」

私たちは鉛のように重い身体を引き摺りながら走りを再開した。

嗚呼、何で私までこんな目に遭うんだろう・・・・・・・・・・

それは今から数時間前に遡る。

３日が経過して、獅子頭と天馬騎士団の面々が集まった。

テツヤ殿の訓練を受ける為だ。

「先ずこれを着ろ」

テツヤ殿が渡したのは迷彩服だ。

皆はそれを部屋で着替えて来る。

そして皆が来るとテツヤ殿は昨夜の内に用意して置いたライフルを皆に持たせて、バック・パックを背負わせた。

私もやらされた。

最初に感じたのは重いだ。

何でこんなに重いかと訊かれたらテツヤ殿は「鎧５つ分の重りを入れたからな」と冗談みたいに言った。

鎧５つ分も背負わされたんだから重いに違いない。

更に手と足に重しを付けさせられて、重さは倍になった。

「これから移動する。駆け足だ。続け！！」

テツヤ殿もバック・パックを背負うと走り出した。

私たちも後を追うが、追い付けない。

中には速くも疲れを見せる者も居た。

「止まった奴は、直ぐに帰れ。使えない奴は消えろ」

前を見たままテツヤ殿は言い、それを聞いて皆は踏ん張った。

ここで帰った方が良かったと皆は後で思う。

私も、だが。

そして訓練場に到着するとテツヤ殿は私たちを一列に整列させた。

「良いか?これからは俺を少佐と呼べ。口応えは一切許さん。俺が走れと言えば走れ。休めと言えば休め。糞をしろと言ったら糞をしろ」

返事はＹｅｓでもＮｏでも“レンジャー”だと言われた。

「あの、テツヤ殿・・・・・・」

「貴様、さっき少佐と呼べと言っただろ?それに質問を許可した覚えは無い。ちゃんと聞け!!」

鋭い目つきと叫び声に私は怖気づきながら、レンジャーと言った。

「少佐。質問をしても宜しいでしょうか?」

リーザ様が挙手してテツヤ殿・・・もとい少佐に話し掛けた。

「何だ?発言を許可する」

「レンジャーとは、どういう意味なのでしょうか?」

「レンジャーは特殊技能を身に付けた少数精鋭の奴等を例えて言う。俺が居た自衛隊では、レンジャー勲章という物がある」

それを身に付ける事は隊員にとっては畏敬の念を持たれるらしい。

「今から2週間かけてお前等を鍛える」

仲間は決して見捨てるな。

バディ（相棒と言う意味らしい）を組んだ者とは一心同体。

もしもバディがヘマをしたら、それは自分のせいでもある。

ヘマをしたら連帯責任で全員が罰を受ける。

それを忘れるな、とテツヤ殿は言った。

「先ず、ここを俺が止めろと言うまで走り続けろ。バディが倒れそうになったら支えろ。支えない者は腕立て伏せを５００回だ」

これを聞いて顔を青くした者が続出した。

「貴様等、誰が顔を青くして良いと言った？顔を蒼くした者、腕立て伏せ５００回だ。始めッ！！」

私たちは言われた通りやった。

そうしないと、何をするか解からない気がテツヤ殿・・・少佐から感じたからだ。

それにしても顔を青くしただけで、腕立て伏せ５００回は酷過ぎると思う。

重りを背負ったまま腕立て伏せをするのは辛い。

しかも、ライフルを粗末に扱うと更に腕立てが１００回も＋される。

天馬騎士団は必死にやるが、それでも辛そうだ。

「辛いか？辛くてもやれ。おい、もやし。もっとしっかりやれ！！」

私は、もやしと罵倒されて頭を踏み付けられた。

「ぎゃあ！！」

「誰が悲鳴を上げて良いと言った？罰だ。腕立て１００回＋だ」

少佐は腕立て伏せを始めた。

「俺がお前のバディだ。お前の責任は俺の責任だ。ほれ、しっかりやれ！！」

少佐は腕立て伏せをやりながら怒鳴った。

それを見て私も再開する。

少佐がバディ。

私がヘマをすれば、少佐も罰を受ける。

それは駄目だ。

そんな気持ちに襲われて私は腕立て伏せを続けた。

腕立て伏せをした後は、先ほどの通り延々と走らせ続けている。

それが2時間も続いた。

しかも、炎天下で暑い。

昼の時間になって、やっと止めろと言われた。

私たちは、もう立つ事も出来ない状態だった。

「1時間後にまた始める。それまで各々で飯を取れ」

少佐は私を置いて何処かへ消えた。

「つ、辛い・・・・・・」

天馬騎士団の一人が息切れしながら漏らした。

「こ、こんなに辛いなんて思いもしなかったわ・・・・・・」

中には泣き出す者も居た。

しかし、リーザ様は憮然として天馬騎士団を励ました。

流石は団長だ。

これだけの事にも耐え続けているのだから。
そんな事を思っていると少佐が戻ってきた。
後ろには数人の使用人が温かい食事を持って来ていた。
「飯だ。食べろ」
私たちは食べる気も無かったが、命令だと思い「レンジャー」と返事をした。
食事は美味い。
あれだけの運動と言えば良いのか？
行動をしたからか、貪欲な程に腹に入る。
食べ終えると少佐は、時計を見た。
「後３０分だ」
それまで皆は休めるだけ休んだ。
そして時間になった。
「今度はラペリングをする」
少佐が指差した方向には木の塔があり、一本のロープが垂れていた。
私たちは重い身体を引き摺りながら少佐の後に続いた。

「先ず俺が手本を見せる」

少佐はロープを身体に巻いて、鉄の輪を通した。

そして身体を前に向けた。

「レンジャー！！」

叫びながらテツヤ殿は、塔から降りた。

ロープを伝いながら塔の壁を足で蹴り下へと降りていく姿を私たちは黙って見ていた。

下はクッションとなっているのか着地すると僅かに揺れた。

「もやし、やれ！！」

「え？私ですか？」

思わず声を上げてしまった。

「貴様ッ。上官に逆らう気か！！」

少佐は６４式自動小銃のレシーバーを引いて、私に向けて発砲してきた！！

頭を僅かに掠めた。

「ひぃ！！」

「さぁ、やれ。さもないとお前の頭をポップコーンみたいに弾けさせるぞ！！」

少佐はまた６４式自動小銃を構えた。

私は慌てて少佐がやったようにした。

そして落ちる怖さと少佐に狙撃される怖さの両方を身に染みながら降りた。

怖くて一歩前に出すだけでも足が竦むのだが、それでも辿り着いた。

「１０分だ。高があれ位の高さから降下するのに１０分も掛るだと？貴様は、俺を殺す気か！！」

少佐は凄い剣幕で私を怒鳴り、腕立て伏せをやるぞと言ってきた。

私は泣く泣く腕立て伏せをやる。

嗚呼、もう嫌だ。

しかし、そんな地獄のような訓練も終わり夜となった。

本来なら寮へ帰るのだが、今日から2週間はこの訓練場で寝泊まりする事になっているから帰れない。

テントを張り、そこの周りを円形で囲み焚き火をして身体を温めている。

皆、表情は疲れ切った顔だった。

テツヤ殿はその中で煙草を燻らせながら私たちに今日の訓練を訊ねた。

今は訓練中ではないので、テツヤ殿と呼べる。

「辛かったです。それに・・・テツヤ殿が私を狙った時が凄く怖かったです」

「あれか？あれはちゃんと狙いを外していたさ」

「外すなんて事は考えなかったのですか？」

「無いな。あれは命中率“だけ”は良いんだ」

「だけとは？」

「それ以外で長点が無いんだよ」

部品点数が多過ぎて素人が分解すれば二度と組み立ては出来ないとさえ言われているらしい。

その上、撃つ間の時間が長く、撃っている最中に部品が落ちるなど様々な欠点が多いと言う。

「そして重いし、純国産で他国に売る事が出来ないから高価だ」

普通のライフル、ＡＫなら青銅貨か銅貨で買えるし、Ｍ１６などでも銅貨から銀貨で買える。

だが、このライフルだと金貨でしか買えないと言う。

「他国に売る事が出来ないのですか？」

リーザ様がテツヤ殿に訊くとテツヤ殿は頷いた。

「あぁ。武器輸出三原則という条約があってな」

その条約で、武器が輸出できずに自国でしか買えないらしい。

それのせいで高価な上、欠点なども現場で出来る範囲で「応急手当」しか出来ない。

「そんな国に仕える兵たちは、憐れですね」

リーザ様はまたしても自衛隊を憐れんだ。

他の兵たちも同じだった。

高価な武器を買わされる上に欠点があっても直せない。

そしてもし、実戦になれば皆殺しにされる可能性も捨て切れない。

そんな武器を持たされるのだから、酷い話だ。

「まぁな。だが、それでも隊員の血と汗が染み込んだ誇りだ」

悪いのはそう言った状況を作り上げた者たちにあるとテツヤ殿は言った。

煙草を火の中に放り込んだテツヤ殿は、明日の事について話した。

「明日は机上で勉強をする。武器の事、作戦の事だ。そして午後は運動だ」

楽しみにしていろ、とテツヤ殿は言ったが、何だかそれが酷く私たちを不安にさせた。

第三十章：女の戦い

「先ず、このライフルの名を答えろ。もやし」

「はい。それはＡＫＭアサルトライフルです。３０連発でフルオートとセミオートが可能な突撃銃で頑丈な上に強力で安い事が特徴です」

私は体育座りから起立して、少佐殿が腕に持つＡＫＭアサルトライフルを見て答えた。

翌日になっても訓練は続いている。

今は食事を終えて、訓練場の庭でテツヤ殿の講習を受けている。

テツヤ殿が見せる武器の名と特徴、作戦などを学んでいる所だ。

「お前等が持っている６４式よりこいつは軽いし丈夫だ。だが、それを持っていれば重い物でも容易に扱えし、分解が困難な物でも出来る」

だから、敢えてそれを持たせたらしい。

「俺ともやしが使用しているストックは木製だ。この木製なら相手を殴る事が出来る。だが、お前等は空挺部隊と言う特殊な任務を帯びている」

空挺部隊だと木製よりは折り畳み式のストックなど比較的、小型に抑える武器が望ましいようだ。

「だが、普通に地上戦をやるなら木製にしろ。寒冷地帯だとストックが凍って、ひび割れを起こすし肌に張り付いて剥がすのに苦労する」

つまり普通は木製のストックが良いという事だ。

天馬騎士団は少佐の説明に頷いて、メモを取った。

「それから2週間の訓練が終わったら、最後の締めとして任務を与える。実戦だ」

2週間と言う短い期間で教えた事を守って実行すれば生き残れる。

出来なければ死ぬだけ。

何とも恐ろしい締めだ。

しかし、天馬騎士団の面々はそれに頷いた。

「それから訓練が終わり次第、俺からお前等にプレゼントがある。そこのもやしには既に渡してあるライフルと拳銃。更に装備一式だ」

これを聞いて天馬騎士団の面々は瞳を輝かせた。

特にリーザ様は涎を垂らす勢いだった。

せっかくの美人もあれでは台無しとなるのに。

だが、それを見るとやはりプロイセン様の娘であると言う事を痛感

させられる気がした。

「まぁ、欲しくないならやらないが、な」

『いえ。欲しいです』

私を覗いた面々が口を揃えて断言した。

「そうか。なら、頑張って訓練に耐えろ。そうすればご褒美をやる」

それを聞いて俄然とやる気を出す面々。

飴と鞭を上手く使いこなしている気がした。

ＡＫＭの次はコルトＭ１９１１Ａ１を説明した。

「先ずこのコルトＭ１９１１Ａ１は、もやしが使用しているベレッタと同じく拳銃に分類される」

拳銃はその名の通り拳程度の大きさで、携帯性に優れている事が特徴だ。

「これはあくまで護身ないし室内戦でライフルが使用できない時に使う。それ以外では殆ど使用しない」

更に言えばこれを使いこなすのにはかなりの時間が必要だ、とも付け足した。

「少佐。具体的にどれほどの時間が必要なのですか？」

天馬騎士団の一人が挙手して質問した。

「そうだな・・・この訓練場の半分の広さ位の弾丸を消費すれば上手くなる」

「そ、そんなに・・・・・」

余りの鍛錬に驚く天馬騎士団の面々。

「そうだ。だが、使いこなせれば最高の相棒となる。これから拳銃の扱いも教えるから覚悟しておけ」

そして次は６４式自動小銃の分解を開始したのだが、こんなに部品が多いとは思わなかった。

少佐は慣れた手つきで組み立てたが、私たちは悪戦苦闘して３時間も掛った。

「３時間が平均か。まぁ、素人にしては上出来だ」

少佐は煙草を燻らせながら良くやった、と褒めてくれた。

午後になり、今度は作戦の事について講習を受けた。

「先ず森林地帯などを進む時は、１列縦隊が望ましい」

前線と後線には強い者を置く事が望ましいと少佐は付け加えた。

「少佐。質問してもよろしいでしょうか？」

「何だ。もやし」

「はい、どうして前線と後線に強い者を置くのですか？」

「前線は敵に遭遇し易い。後線は敵が追って来る時がある」

だから、それを回避する為に力のある者を置くのが望ましいと答えてくれた。

「特に森林地帯は余り視界が効かない。だから、遭遇戦が多い」

進んでいたら突然、敵と会ったなんて事もあるらしい。

「そう言う時に力を発揮するのが散弾銃だ」

散弾銃？

どういう物だろう。

私は頭に？を浮かべた。

また質問しようとしたが、私より先にリーザ様が散弾銃とはどういう物か？と質問した。

「散弾銃は小さな粒が幾つもある弾を発射する銃でライフルとは違う」

しかし、近接戦でなら間違いなくライフルよりも相手に傷を負わせる事が出来るらしい。

「弾が飛び散るから至近距離では威力は絶大だ。だが、距離が長くなるほど威力も下がるのが欠点だ。まぁ、スラッグ弾という弾もあるが、それでも１５０メートルが関の山だ」

それでも遭遇線でなら間違いなく散弾銃に勝る物は無い、と少佐は言い切った。

「もし、散弾銃を撃たれたら・・・生きられるのは奇跡に近い」

仮に生きていたとしても直に死ぬ可能性が高いと言い切った。

「散弾銃で撃たれるとライフルで撃たれるより悲惨だ」

だから、一度は禁止されたが使い勝手が良く威力が高い事から補助的な面で使われているようだ。

更に民間では護身用ないし狩猟用として使われているらしい。

元々狩猟用だったのを軍事で使用したと言う。

「では次だ」

少佐は次の話をした。

それを暫く続けてから運動を始めた。

今日の訓練は昨日と違い、ボールを持って上下にある白い線に置く運動だ。

ただし、ただ走ってボールを置く訳ではない。

殴る蹴るは当たり前。

取っ組み合いなどもありという何でもありだ。

要は「どんな手を使おうと相手より得点を稼いだ者の勝ち」という内容だ。

二手に分かれてボールを奪い合うのだが、これがまた凄い。

情け容赦なく殴る蹴る。

いや、私は男性だから女を殴ったりするのに抵抗がある。

しかし、女性は抵抗がまるで無い。

今も私の横でボールを持ち走っている敵対している天馬騎士団の者を殴り倒してボールを奪った程だ。

女性は大胆と聞くが、まさしくそれだ。

その女性は別の女性に殴られてボールを奪われた。

そしてボールは私に渡された。

「もやしっ!!ボールを寄こせ!!」

少佐が私に走り寄って来た。

私は慌てて走り出したが、飛び蹴りを喰らい前に倒れた。

そこへ少佐が圧し掛かってボールを奪い取り、走り去って行くのを感じた。

こ、腰が・・・・・・・

私は腰を抑えたが、無理やり立たされた。

見れば天馬騎士団の一員だった。

「何してんのよ!!速くボールを奪いに行きなさい!?」

痛い腰をまた蹴られて、私は悲鳴を上げながらボールを追い掛けた。

しかし、そんな戦いも何時しか殴り合いに発展した。

もうボールはそっちの気で髪を毟り取るは、頬を抓るは、殴り倒すは・・・・とにかく女の戦いと言うのは余りに生々し過ぎて見てられない。

「もやし。お前は参加しないのか?」

少佐が私の横に立ち、訊ねてきた。

現在、私は被害を避ける為に隅っこに移動している。

「あの状況に入り込める勇気がありません」

目の前では未だに女と女の熾烈で生々しい戦いが繰り広げられている。

そんな場所に好き好んで行くほど私は物好きじゃない。
仮に行ったとしても袋叩きにされるのが関の山だ。

「まぁ、それならそれで良い。終わるまで休め」

「そうします」

私は少佐と共に殴り合いが終わるまでひたすら待つ事にした。
女同士の戦いは・・・・3時間にも及んだ。
終わった頃には全員が地面に倒れて立っている者は居ない、という激戦区のような場所になっていた。
少佐はそれを見て、これでは駄目だな、と呟いた。
その日はそれで終わった。
と言うか、終わるしかなかったと言った方が正しいのか?
それと同時に何だか昨日よりも痛い目に遭った気がするのは気のせいだろうか?と私は疑問を頭に浮かべずにはいられなかった。

第三十一章：こちら逃亡中（前書き）

痛たた！！石を投げないで下さい！！

そうです。「逃亡中」をタイトルにしました！！

すいません！！だけど、付き合って下さい！？

――――――――

ここでまた鷹見徹夜の独白を入れさせて頂きます。

それと同時にここまで付き合って下さる方には頭を下げる以外の礼の仕方を知らない私をお許し下さい。

これからも頑張って書きたいので、宜しくお願い致します。

第三十一章：こちら逃亡中

私は息を殺しながら気配を隠した。

「居た？」

「駄目。そっちは？」

「駄目だったわ。まったく可愛い顔してよく逃げてるわね」

「同感だわ。見つけたらたっぷりと可愛がって上げるんだから」

私の頭上で二人の天馬騎士団の荒い声が聞こえてくる。

それを聞いて思わず悲鳴を上げそうになった。

私は現在、逃亡中だ。

場所はサルバーナ王国の中で城の中から出ない事にされた。

何でこんな事をしているのかと問われたら訓練の一環としか答えようがない。

今朝も少佐の罵声と銃声で起こされた私たちだが、今日は何時もとは違い少佐は何処か楽しそうな瞳をしていた。

それを見て直感だが嫌な事が起こると感じた。

それは現実となるのだが。

少佐は私たちを集めてこう切り出した。

『今日は少し鬼ごっこをする』

最初に言われた言葉に私たちは首を傾げた。

何で鬼ごっこを?

『お前等が疑問に思うのは解かる。だが、これも訓練だ』

敵からどれだけ逃げられるか・・・そしてどれだけ巧みに隠れられるか。

それが試されると少佐は言った。

『時間は今から昼まで。逃げるのは一人。逃げ切ればそいつは1日の休みを取れる。だが、捕まれば罰として捕まえた奴の言う事を聞く』

そして武器は使用しないで相手を取り押さえて連れて来る事が条件だった。

更に逃げる者はバックパックを背負って逃げるのがハンデーとされた。

『逃げるのは・・・もやしだ』

私は嫌な予感が的中してしまった、と嘆いた。

それを少佐は面白そうな眼差しで見ていた。

あの笑みはこれだったんだ、と私は感じて怨めしい眼差しを送ったがまるで意に返さない。

それがまた心憎かった。

『もやし。今から5分後に俺以外の奴らがお前を追う。速く逃げた方が良いぞ?』

少佐は煙草を蒸かしながら私に告げた。

チラリと天馬騎士団を見れば、血眼の眼差しになっており怖い。

私は悲鳴を上げてバックパックを背負うと一目散に逃げた。

そして今の状況に到る。

私は城の中にある壺の下に隠れているのだが、ここも見つかるのは時間の問題だ。

そうなると不味い。

だから、直ぐにでも別の場所に逃げたかった。

天馬騎士団の二人が消えたのを確認してから直ぐに走り出した。

壁に張り付いたりして色々な所に隠れるが、直ぐに見つかりそうで別の場所へと行く。

まだ昼まで時間がある。

何処に隠れたら良いのやら・・・・・・・・・・

「居たわよ!!」

大声で私を見つけたと叫ぶ天馬騎士団。

慌てて私は逃げた。

だが、少しずつだが距離が縮まっていく。

「待ちなさい!!大人しく捕まったら優しくして上げるから!!」

何を優しくするんですか?!

私はそう言いたかったが、今は逃げるのが先決だ。

横を曲がろうとしたが別の天馬騎士団が現れた。

そしてタックルしてきた。

「うわっ!!」

私は避けられずにタックルをやられて地面に押し倒された。

必死に逃げようとするが、バックパックが重くて身動きが取れない。

そこへ追い付いたもう一人に取り押さえられてしまった。

「さぁ、大人しくしなさい」

血走った眼で言われて大人しく出来る者がいるなら会ってみたい、と思いながら私は抵抗を続けた。

しかし、軍人と見習い騎士では力の差は歴然で勝てる見込みなど無く、連行された。

「さぁて、何を願おうかしら？」

私を縛った綱を握り前を歩く天馬騎士団が鼻歌交じりに何を願うか考えた。

「私はもう決めてるわ」

後ろを歩くもう一人が私を自分好みに“調教”そう、調教すると断言した。

調教・・・考えるだけで何をされるか想像できるが、したくないしされたくもない。

「この子みたいな男を一度で良いから調教してみたかったのよね」

「それなら私もしようかな？」

私はそれを聞いて青ざめて、何とかして逃げないと思った。

そうしないと私の貞操が危ないと身体全体が警報を鳴らしているからだ。

壁を曲がろうとすると、エリーナ様が侍女を連れて現れた。

エリーナ様は相変わらずサラ様と姉妹に見える程に似ている美貌の持ち主だった。

「まぁ、ランドルフ。どうしたのですか？」

エリーナ様が私を見て驚きの声を上げる。

その仕草だけで画になるのだから、女性から見れば羨ましい事この上ないだろう。

「これはエリーナ様っ」

二人はエリーナ様を見て、臣下の礼を取った。

その時、縄が少し緩んだのを私は見逃さなかった。

今だ！！

私は縄が緩んだ隙に全速力で走り出した。

「あ、こら！！」

「待ちなさい！！」

二人の天馬騎士団の大声が聞こえるが構わず走り続けた。

「エリーナ様。感謝します！！」

走りながら大声で礼を述べて私は逃げ出した。

それを追い掛けようとする天馬騎士団だが、エリーナ様に何をしているのか問われて答えている。

エリーナ様、貴方様は私の命の恩人です!!

そう心の中で言いながら私は距離を開けて、何としてでも昼まで逃げ切らないと、と心に誓った。

そして昼を知らせる鐘の音がなった。

やった!!

これで私の貞操は守られた!!

私は歓喜の声を上げた。

そして訓練所に戻ると少佐が煙草を蒸かして待っていた。

「12時ジャスト・・・その様子だと逃げ切れたようだな?」

「危うく連行されそうになりましたが、逃げ切れました」

「運を味方に付けたか。・・・戦場で運は当てに出来ないが、運もまた実力の内だ」

つまり私の実力で逃げ切れたと少佐は言いたいようだ。

「お前の勝利だ。よって1日の休みをくれてやる」

「ありがとうございます」

私は久し振りの休みが貰えると事が出来て嬉しかった。

「ただし、買い出し何かをしてもらうから完全な休みではないぞ」

そ、そんなー！！

詐欺だ！！

私は声に出して言いたかった。

だが、上官である少佐に意見する事も出来ずに頭を垂れた。

それを尻目に少佐は煙草を蒸かし続けていた。

無性にこの人を殴りたいと思ったが、縄で縛られた状態では何も出来ない。

ああ、口惜しい・・・・・・！！

実に口惜しいし、背後から来る視線が針のように背中に突き刺さって怖い！！

そんな午前を過ごした後は訓練だった。

今日は格闘技の訓練だ。

二人に別れて、相手を戦闘不能にするのがメインで武器を使用する。

ちゃんとした刃物で切れるし刺せる。

私は午前中、運を使い果たしたのか少佐と戦う事になった。

「おら、どうした?そんなんだと死ぬぞ!!」

少佐は胸に収めていた短剣ーーーナイフを抜いて私に突きを繰り出してきた。

それを避けようとしたが服を切られて血がにじみ出た。

怯む私を少佐は更に追い詰めて行く。

私はそれを避けようとするが、やはり駄目で徹底的に叩き伏せられる。

まさに虐められっ子と言えば良いだろうか?

そのせいで訓練が終わった頃には服が傷だらけで目も向けられない状態にされてしまった。

「新しい服はやるから着替えて来い。・・・お前を狙うお嬢さん方が涎を垂らして見ているぞ?」

少佐は低い声で私に囁いた。

チラリと、後ろを見れば天馬騎士団の面々が涎を垂らして・・・まるで獲物を見つけた肉食獣のような眼差しを浮かべていた。

私はそれに悲鳴を上げて一目散に逃げたのは言うまでもない。

――――――――――――――――――――――――――――――――

俺は走り去る、というか逃げるランドルフを尻目に煙草を蒸かした。

お嬢さん方はランドルフの後ろ姿を見ては涎を拭き取っている。

どうやらお嬢さん方にはランドルフが余程、美味そうな料理に見えるようだ。

あいつも憐れな奴だ。

だが、ある意味では羨ましいと思う男も居る事だろう。

俺は御免だが。

煙草を1本、灰にしてから明日の事について説明を始めた。

「明日はお前等に射撃訓練と銃剣術、サバイバル術などを教える」

「少佐。質問をしても宜しいでしょうか？」

リーシャが挙手してから質問してきた。

「何だ？」

「はっ。この６４式自動小銃を使用するのですか？」

「いや。これ以外のライフル、サブマシンガン、ショットガン、ピストルなど様々な物を撃たせる」

それを身体に馴染め込ませる。

傭兵は正規兵のように全て同じ武器で固める訳じゃない。

俺の場合はＡＫがよく回されたが、それ以外の奴等はコピー品かＭ１６、ＦＡＬ、もしくはボルトアクション式ライフルだったな。

とにかく敵から分捕った物、闇市で購入した物なんかで全員が全て同じ物であると言うのは余り無かったな。

まぁ、あの４人はそれぞれ自分の使っていた物をそのまま使用していたけどな。

あの国に比べて何処の国も危機感があるからな。

俺の国とは豪い違いだ。

そしてこのサルバーナ王国に関してはどうかと思う。

プロイセンのおっさんは危機感がある。

そこはやはり修羅場を潜り抜けてきた軍人としての直感だろうな。

ワイドも同じだし、司教も同じだ。

だが、女王やあの骸骨なんかはどうかな？

女王に関しては、他人を疑わない点があるからそれを考えると些か危ない。

まぁ、それだけ温和な性格であると思うし、俺みたいな下種な男には輝かしい程に羨ましいが。

骸骨に到ってはどうせ外交で片付けると言うだろう。

そりゃ外交で片付けられるなら苦労しないが、それで事が済めば俺らみたいな“戦争の犬”は要らないし、軍も要らない。

外交で片付けられそうにない時の為に俺らが存在するんだ。

あのドラゴンの言葉、そして現状を考えると近い内に内乱は起こる。

こちらから何か手を打てれば良いが、俺が言った所で何が出来るか・

・・・・・・・・・

前みたいに何も出来ずに、ただ逃げるだけか？

・・・まぁ、その時はその時で何とかするしかないな。

人生なんて物は行き当たりばったりなんだからよ。

第三十二章：射撃訓練２

私は立ったまま狙い撃つ方法、立射の状態からＦＮ　ＦＡＬを使用していた。

これはフルオートが可能なモデルで一度、撃ったが反動が強過ぎてコントロールできずに空に向かって撃ったりした。

少佐からはセミオートで撃て、と言われて撃ってみたが素晴らしいライフルだと思った。

ＳＫＳカービンに比べて反動も強い上に長いのだが、命中率ではこちらの方が上だと思うし威力も上だと思った。

以前、少佐から聞かされていたが改めて自分で撃ってみると確かに強力なライフルであると同時に扱うのには熟練した腕が必要だと思う。

だから、アフリカという国では「ＦＡＬを扱えるか？」と訊く傭兵の言葉が納得できた。

私の横では少佐が同じくＦＡＬをフルオートで射撃しているが、反動に負けずにしっかりとコントロールしていた。

「少佐はＦＡＬを使えるんですね」

「アフリカ以外の国でも使用されていてな。俺もこれを何度か使用した」

そのため扱いには慣れていると言った。

「だが長い分、接近戦やジャングル戦などでは余り向かない」

「確かにＳＫＳカービンに比べて長いから取り回しが不便ですよね」

「だろ？だが、狙撃には向いているし扱えればＡＫと同じ位に頼れる恋人だ」

「そうですか」

私は納得した。

少佐の横ではリーザ様達、天馬騎士団がアサルトライフルやサブマシンガン、ショットガンなどを撃っている。

リーザ様は少佐が渡したベレッタＭ９３Ｒを撃っている。

これは私が持っているベレッタＭ９２ＦＳをベースに改造した拳銃で通称、マシンピストルと呼ばれている。

何でもフルオートで撃てる拳銃の事らしいのだが、とてもじゃないが素人では扱えない代物で玄人でも殆ど無理なようだ。

リーザ様が使っているベレッタＭ９３Ｒはフルオートではなく、３点バーストを採用している。

３点バーストとは３発を一気に撃てるらしい。

弾は無制限なのだが、拳銃でフルオートを撃つとコントロールが望

めない事から宅配人は「敢えて3点バーストを残しましたー」と言っていた。

そして銃身の下にフォアグリップと呼ばれる物を持つ事で安定性を高めている。

しかし、それでも弾にばらつきがあるのは仕方が無い、と少佐は言いあくまで“サブマシンガンもどき”でありあくまでハッタリと言った。

リーザ様はベレッタM93Rを愛馬のように見事に扱っていたから驚きだ。

初めて使用する物をここまで扱いこなせるのは、やはりプロイセン様の娘であるからとしか言えない。

「大した娘だ。そいつをよく使いこなしているな」

少佐はリーザ様を見て褒めた。

「ありがとうございます。少佐」

リーザ様は一礼してから3点バーストで撃っていたベレッタM93Rをセミオートにして撃ち始めた。

セミオートで撃つと3点バーストで撃った時より命中率と集弾率が高い。

現に3点バーストで撃った弾より、セミオートで撃った方が集弾率がある。

リーザ様の隣では他の騎士たちがサブマシンガン、ショットガン、アサルトライフルを撃っていた。

サブマシンガンは“ＵＺＩサブマシンガン”、“ＭＡＴ－４９”と言う二つのサブマシンガンを撃っている。

サブマシンガンは拳銃弾を使用する事から互換性があり、携帯性が高い事が上げられるようだ。

だが、アサルトライフルに比べれば威力が弱いし射程距離も短い。

更に言えば弾の入手し易さと携帯性が便利である事から犯罪に使われる事が多いらしい。

少佐も以前、ガリシャに渡したイングラムＭ１０を犯罪者が使用していた、と言うからそれが窺えた。

サブマシンガンの隣ではショットガンとアサルトライフルが撃たれていた。

ショットガンは“モスバーグＭ５９０”という物を使用している。

これはポンプアクションと言う作動方式を採用しており、手動で銃身の下にあるスライドを引いて弾を排出するらしい。

ショットガンの弾には種類があるようで今、使われているのは１２ゲージと言う散弾で小粒の弾が発射される。

あれを至近距離から撃たれれば、確かに命の保証は無いと思った。

あんなに小さな弾でも至近距離から撃たれれば身体の何処かに必ず当たるし、何発も撃たれたら死んでしまう。

『・・・出来るなら、あれに撃たれたくないな』

私はそう思いながらＦＮ　ＦＡＬを撃った。

アサルトライフルは少佐が使用するＡＫＭアサルトライフルとは別の口径を使用している“ＡＫＳ－７４Ｕ”だ。

こちらはＡＫＭアサルトライフルより小さい弾を使用した“ＡＫ－７４”というライフルをギリギリまで切り詰めた上にストックを折り畳み式ストックを採用した事でかなり小型になった。

だが、小型にしたせいなのかコントロールが相当難しいと見ていると解かる。

それでも天馬騎士団のような小型の武器などを愛用する者たちにとってＡＫＳ－７４Ｕは好ましい武器なのかもしれない。

そんな事を思いながら私はＦＡＬをフルオートで撃ったが、やはり扱い辛く引き金から指を離すと前のめりになってしまった。

「良し、昼飯にするぞ。全員、安全装置を掛けろ」

少佐は私たちに安全装置を掛けるように命令した。

この安全装置を掛ける事で弾が出ないようにされるらしい。

安全装置を掛けて、少佐が用意した戦闘食を食べようとした時だった。

「昼食を食べる所だったか」

聞き慣れた声がしてそちらを向くと、プロイセン様とワイド様が立っていた。

「何だ。あんた等か」

少佐は煙草を蒸かしながら二人を見て何しに来たんだ?と訊ねた。

「どんな訓練をしているのか気になってな。迷惑だったかな?」

「別に見られて困る訳ではない。飯でも食うかい?」

「おぉ、それは良い。是非とも頂こう」

ワイドもそうしろ、とプロイセン様は言いワイド様は頷いた。

「どうだ?ランドルフ。訓練の方は?」

ワイド様は私の隣に腰を降ろして、訓練の事について訊ねた。

「地獄です・・・・・・」

私は正直に答えた。

ワイド様は些か驚いたが私の顔を見て頷き、肩を叩いてくれた。

それだけで何だか心が救われた気がした。

プロイセン様は少佐と話していた。

何を話しているのかは分からないが、何となく嫌な予感がした。

嫌な予感ほど当たると言うから当たるだろう。

私は無性に煙草が吸いたくなった。

少佐はそれを感づいたのか近づいて煙草を渡してくれた。

「ありがとうございます」

私は礼を言ってから煙草を銜えた。

「嫌な予感は当たるぞ」

少佐は火を点けながら断言した。

ああ、もう嫌な予感は確定した。

私はどうしようもない脱力感に襲われた。

それでもやるしかない、という非情な現実に直面したからかもしれない。

煙を吐きながら出来るなら優しいもので欲しいと願わずにはいられなかった。

食事の後は再び射撃訓練を始めた。
そこにはプロイセン様とワイド様が見ている。
しかも、真剣な顔で。
その隣には少佐が立って二人で話し合いをしている。
何を話しているのかは、銃声で聞こえない。
少佐が私を手招きしたので、ＦＡＬに安全装置を掛けて走り寄った。
「何でしょうか？少佐」
私は足を揃えてから訊ねた。
「二人が射撃をしたいそうだ。先ずお前のライフルを撃たせてやれ」
「レンジャー」
私は既に慣れた口調で返事をした。
「テツヤよ。レンジャーとは何だ？」
プロイセン様が少佐の渡した女神の抱擁を銜えながら訊ねた。
「特殊訓練を受けた少数精鋭の部隊の事だ。夕食の時に話した第一空挺団はそのレンジャー達で構成されている」
そしてＹｅｓでもＮＯでもレンジャーとしか返事をしてはいけない

とも付け足した。

「それ以外の答えは？」

「認めない」

「そうか。では、モットーは何だ？」

「第一空挺団のモットーは風林火山の下・・・・・・・・・」

いかなる犠牲があろうとも、任務遂行のため命令どおりに指示を続行し例え最後の一員となっても任務の達成に邁進（まいしん）しなければならない。

「風林火山とは何だ？」

「俺の国に居た“武田信玄”という武将が軍旗に書いていた言葉だ」

この武田信玄という人物は実の父親を領土から追い出し家督を襲名したという人物で、これだけ聞けばかなり悪い人物と言えるが政治や戦では父親以上と言われていたらしい。

そのためこの人物を「戦国一の戦上手」と言う者も居たというからその実力が窺える。

そして風林火山という言葉だが、以下の通りになる。

『疾きこと風の如く、徐かなること林の如し、侵掠すること火の如く、動かざること山の如し』

「とまぁ、これが一般的には知られている」

だが、続きがあるらしい。

「知りがたきこと陰の如く、動くこと雷霆（らいてい）の如し」

それらを合わせるとこうなる。

移動するときは風のように速く、静止するのは林のように静かに、攻撃するのは火のように、防御は山のように、隠れるには陰のように、出現は雷のように突然に。

「うーむ。実に良い言葉だ。是非とも我が軍に欲しい所だ」

「どれがだ？」

「風と火と山はある」

それ以外だと林、陰、雷だ。

「風は天馬騎士団で火と山は獅子頭軍団か？」

「その通り」

天馬騎士団は速い。

獅子頭軍団の攻撃と防御はピカイチだ。

それを考えれば風と火、そして山が当たっている。

「テツヤよ。訓練はどれ位で終わる？」

「2週間の予定だから、まだ先だな」

「そうか」

「どうかしたのか？」

「うむ。実はな。我が息子たちが速くやらせろと煩いのだ」

更に言えば聖騎士団の間でも是非とも訓練を受けたい、と言う者が出て来たらしい。

「・・・・・・・」

私は無言だった。

もし、この訓練を見れば誰もがやりたくないと思う事だろう。

そんな気がしたからだ。

「まぁ、もう少し我慢させろ。それが出来ないなら訓練を受けさせないと釘を刺して置け」

短気を起こして迷惑をかけるような奴は、部隊に要らないと言い切る少佐。

「分かった」

「承知した」

二人はそれに頷いた。

そして早速プロイセン様が私のＦＮ　ＦＡＬを射撃した。

私以上にＦＡＬを扱えるのを見て、私は落ち込んだが少佐は「良い傭兵になれる」と言った。

何だかそれが無性に哀しい気がした。

第三十三章：黒い鷹

凄まじい音が耳元で鳴り響いている。

現在、私と天馬騎士団は空の上に居る。

天馬に乗っている訳ではない。

テツヤ殿の世界で使用されているヘリコプターと言う乗り物に乗っているのだ。

名前は“ＵＨ－６０ブラックホーク”と言う。

このブラックホークとは、アメリカ先住民の中でも勇猛果敢だった酋長から名付けられたらしい。

ブラックは黒でホークは鷹だ。

その名の通り黒く巨大な鷹のような外見を持ち合せている。

このヘリコプターは多様性に優れており、ジープなどを釣り上げて運んだりする事も出来るし救護者を運んだりするなど多岐に渡り活躍しているようだ。

しかし、よくこんな巨大な物が空を飛んでいると思わずにはいられない。

そして現在、そのブラックホークに乗り込んでヘリボーンを始める所だ。

私以外に１０人ほど乗っている。

１１人程これには乗れて降下が可能なのだ。

既に降下した者たちは下で待っている。

武器はＡＫ７４－Ｕを装備して、頭には少佐が被っている帽子を被っており、顔にはフェイス・ペイントと言う物を塗り素顔を隠している。

このヘリボーンは前に少佐から教えられた通り、ヘリコプターからロープを垂らして降下する事だ。

上空に黒いロープが垂らされており、私は自分の番を待っている。

既に天馬騎士団の何人かはロープから降下して地上に居る。

「よし、もやし。やれ」

「れ、レンジャー」

私は、ついに自分の出番が来たと言う緊張感から手が震えている事に気付いた。

それを証拠に肩に胸に抑える形で掛けているＡＫＳ７４－Ｕが震えている。

何度も落ち付けと心で呟きながらロープを掴んだ。

「落ち着け。さもないと落ちるぞ」

少佐は私を落ち着かせるように言ってくれた。

それを聞いて私は直ぐに落ち着く気分になった。

何でかは解からないが。

私はロープにしがみ付いて、下を見ないように降下した。

手袋をした手がロープ越しに感じる。

スルスルと降下していると地面に足が着いた。

そして直ぐにロープから離れてＡＫＳ７４－Ｕを構えて降下した天馬騎士団と共に周囲を警戒し安全を確認した。

確認を終えてからブラックホークに降りるように合図した。

するとブラックホークが降りた。

回転するプロペラがゆっくりと止まった。

そして少佐がブラックホークの操縦席からから降りた。

「見事だ。今日で訓練は終了する。皆、合格だ」

少佐が言い終えると皆は歓喜の声を上げた。

私もやっと訓練が終了したと溜め息を吐いた。

地獄の2週間がやっと終了したんだ、と私は改めて思う。

2週間の間に私は幾度となく傷ついた。

殴られたし、蹴られたし・・・貞操を失いかけた。

しかし、やっと終わったんだと感じるのだが、何か不に落ちない。

何か大事な事を忘れていないか？

「訓練は終わったが、まだ最後にやる事が残っている」

あ、そうだ。

「・・・実戦ですね」

リーザ様が少佐に言った。

「その通り。実戦だ」

少佐は煙草を銜えながら頷いた。

「相手は誰ですか？」

「もやしが酷い目に遭わされた山賊だ」

「あの・・・山賊ですか・・・・・」

私は堅い声で喋った。

サルバーナ王国には山賊が横行している。

王国周辺ではないが、少しでも森の中に入ればそこはもう奴等の縄張りだ。

何度も聖騎士団などが一網打尽にしようとしたが、森の中に逃げ込まれては何も出来ない。

だから、今まで手を拱いているしか出来なかった。

それをワイド様もプロイセン様も知っており、何も出来ない事に歯軋りしていた。

だが、今回の訓練を受けた私たちを見て、これは使えると思ったのか山賊を一網打尽にする作戦になったらしい。

「お前らには俺が仕込んだ技術がある」

それを活かせば山賊を一網打尽にする事が出来る。

「もやし。いや、ランドルフ。これはお前の問題でもある」

先輩たちがやられる中で、私は何も出来ずにいた。

少佐、いやテツヤ殿の時もそうだ。

テツヤ殿が一人で山賊達を追い払い私は何も出来なかった。

だが、今回は違う。

今回は奴等を逆に私が追い掛けて捕まえてやる。

「・・・過去にケリを着けます」

「よく言った。では、これより作戦会議を開く」

テツヤ殿は皆を集めて作戦会議を開いた。

内容はブラックホークで山賊が居る所まで行く。

そしてワイド様が指揮する聖騎士団で山賊達を指定する場所へ追い出す。

山賊だから森林を熟知しているだろうが、そこへ獅子頭軍団も投入する事で道を一つしかないようにするのだ。

そこへブラックホークから降下させた天馬騎士団と挟み打ちにする算段となった。

「良いか？これは実戦だ。殺られる前に殺れ」

躊躇わずに引き金を引け。

そうすれば生きられる。

そうテツヤ殿は言い続け、私たちは頷いた。

武器は訓練で使用していたアサルトライフル、散弾銃、サブマシンガンだった。

私も今回は既に装備しているＡＫＳ７４－Ｕを使用する。
そして拳銃は皆、それぞれの拳銃を使用し私はベレッタＭ９２ＦＳを使う。
テツヤ殿は私たちを一列に並ばせて告げた。
「これより山賊を捕縛しに行く。作戦名は、山鼠狩りだ」
山賊達は鼠のようにみすぼらしく、抜け目が無い。
だから、テツヤ殿は山賊達を山鼠と称したようだ。
「基本は罪人だが生かして捕まえろ。だが、手に余るなら殺せ。良いな？」
『レンジャー！！』
私たちは右手を右後頭部に当て叫んだ。
「では行くぞ！！者共、乗り込め」
私たちは直ぐにブラックホークに乗り込んだ。
テツヤ殿も乗り込み、ブラックホークを発進させる。
空高く飛び、山賊達が居る森へと向かった。
私を含めた１１人はブラックホークの中に居るが、残りはロープに

吊るされた状態で移動している。

私たちはブラックホークの中で初めての実戦で些か緊張していた。

別に戦うのは初めてではない。

それ所か天馬騎士団は何度も実戦を経験している兵揃いだ。

ただ、訓練された事を上手く実戦に活かせるのかは解からないので緊張している。

そこが問題だった。

「どれ、景気づけに曲でも掛けよう」

テツヤ殿は私たちを見て赤いボタンを押した。

すると左右から大きな音がした。

「何ですか？この曲は」

凄い音量なので、テツヤ殿の耳元で叫ぶようにして訊いた。

「ワルキューレの騎行と言う曲だ」

何でもワルキューレの物語で演奏される曲らしい。

口で言い表すならこうだ。

デゥーン、デゥーン！！

ドゥドゥドゥ・・・・ドゥドゥドゥ・・・・・・・・

ドゥドゥドゥ、ドゥドゥドゥ、ドゥドゥドゥ、ドゥドゥ！！

ドゥドゥドゥ！！ドゥドゥドゥ！！ドゥドゥ！！

これを聞くと力が漲る気がした。

戦乙女が励ましている錯覚さえ覚えるが、力が漲るのだから良い。

「着いたぞ。降下！！」

テツヤ殿はブラックホークを空中で止めると降下を命じた。

ロープにぶら下がっていた天馬騎士団が先に森の中に降下した。

そしてテツヤ殿は私たちに命令した。

「次はお前らだ。降下！！」

私たちはロープを伝い、森の中に降下した。

鬱蒼とした森林の中は昼間でも暗い。

よく見れば、私が山賊に襲われた場所だった。

過去にケリを着けるにはちょうど良い場所だ。

ＡＫＳ７４－Ｕのストックを肩に当て構えて周囲を警戒して森を進

む。

すると、前から大多数の足音と大声がが聞こえてきた。

「敵が近いわ。構えて！！」

リーザ様が天馬騎士団に命じた。

私もＡＫＳ７４－Ｕのレシーバーを引いて、セミオートにした。

ヘリの中でテツヤ殿は味方に当てないようにセミオート・・・１発ずつ撃てるようにしておけ、と命令したからだ。

ＡＫＳ７４－Ｕを構えて待っていると山賊達と思われるみすぼらしい格好をした男達が走ってきた。

「全員、動くな！！」

リーザ様がＡＫＳ７４－Ｕの引き金を引いて１発、地面に撃った。

山賊達は目の前に出くわした私たちに驚いて止まり、後ろから来た聖騎士団に挟まれる形となった。

「我々は天馬騎士団。貴様たちを捕縛する」

リーザ様はＡＫＳ７４－Ｕを構えたまま声を放った。

山賊達の中にはテツヤ殿に捨て台詞を言った頭も居た。

「うるせぇ！！てめぇら何かにやられる程、俺らは弱くないぜ！！」

頭は腰から剣を抜いた。

私はそれに狙いを付けて、引き金を引いた。

肩にＳＫＳカービンより重い反動が来た。

そして５．４５×３９ｍｍ弾が剣に当たり二つに折れた。

「動くと殺す！！全員、地面に膝を突いて両手を頭の上に置け！！速くしろ！？」

私はＡＫＳ７４－Ｕの銃口を頭に向けて厳命した。

「わ、分かった！！分かったから。だから、止めてくれ！！」

頭は泣きそうな声と顔をして懇願して地面に膝を突いた。

部下達もそれに倣った。

「確保しろ」

リーザ様が天馬騎士団に命令した。

しかし、私たちはＡＫＳ７４－Ｕを構えたままだ。

可笑しな真似をしないように数人は必ず銃を向けていろ、とテツヤ殿が言っていたからだ。

全員を捕縛してからリーザ様が頭に残りは居るか？と訊いた。

「い、居ないっ！！」

「怪我をしていた奴はどうした？」

私は頭に訊ねた。

テツヤ殿によって怪我を負わされた者は結構いた筈。

それなのに頭を含めて１０数人しか居ないのは可笑しい。

「あ、あいつらなら、俺が殺した」

「何だと？」

私は大切な部下を頭自身が殺した事に疑問を感じた。

「あ、あいつらはもう使い物にならない。だから、殺した」

頭の余りに非情な言葉に私たちは言葉を失い、憤りを覚えずにはいられなかった。

使い物にならないだと？

彼らだって人間だ。

それをさも物のように言う口ぶりが私には我慢できなかった。

いま直ぐにでも殺してやりたい気持ちだった。

「・・・糞ったれが」

私ではない別の声が背後から聞こえた。

振り向けばテツヤ殿が煙草を蒸かしていた。

右肩にはＡＫＭアサルトライフルが革の布で吊るされていた。

「お前、部下を単なる駒だと思っているのか？ああ？」

テツヤ殿は鋭い視線を頭に向けたまま近付いて訊ねた。

「てめぇみたいな奴を頭に持つとは部下も憐れだ。だが、それより憐れなのはお前みたいな下種が頭になっている事だ」

「て、てめぇが俺らの邪魔を・・・・・・・・・・」

頭は反論しようとしたが、最後まで言う前にテツヤ殿に殴られて駄目だった。

血を噴き出して地面に倒れる頭。

「黙れ。てめぇみたいな奴は、虫唾が走るんだよ。下種が」

テツヤ殿は殴り倒した頭に唾を吐いた。

そして聖騎士団に盗賊達を連れて行かせて私たちはブラックホークに乗り込んで城へと帰還した。

しかし、その間だがテツヤ殿は凄まじい怒りを顔に浮かび上がらせ

ており気軽に話しかける事が出来なかった。

第三十四章：運命の皮肉

私たちはエスカータ城への訓練場へと帰還した。

訓練場にブラックホークで降りると先に戻っていたプロイセン様が出迎えてくれた。

「見事に山賊どもを一網打尽にしたな」

プロイセン様の横には一網打尽にされた山賊達が縄で縛られた状態で居た。

その周りをワイド様を始めとした聖騎士団の面々が包囲している。

「こいつらが余りに弱過ぎるだけだ」

テツヤ殿は頭を見下したまま言った。

頭の頬にはテツヤ殿が殴った痕が鮮明に残されている。

「て、てめぇ・・・俺様にこんな真似をして無事でいられると思うなよ？」

「随分と強気な発言だな。呆気なく負けたくせに」

テツヤ殿は心底、馬鹿にしたように言い返した。

「あれは油断しただけだ。絶対にてめぇを殺してやる」

「・・・・俺を殺すか。なら、今の内にお前さんの息の根を止めておくか」

テツヤ殿はコルトＭ１９１１Ａ１をホルスターから抜いて頭の額に当てた。

「こいつを殺しても問題あるか？」

「いや。どうせ散々な悪事を重ねてきたんだ。縛り首か晒し首は免れない。殺すなら殺せ」

「同感だ」

プロイセン様とワイド様は冷たい声で声を放った。

「だそうだ。じゃあな。下種野郎」

テツヤ殿は親指で撃鉄を起こして引き金に指を掛けた。

「ま、待てっ。お、俺は、あんた等には貴重な情報があるんだ！！」

「情報？」

テツヤ殿は引き金を引きそうだった指を軽く離した。

「言え」

「あ、あんた、り、リカルド王子を知っているか？」

「先王の餓鬼だろ？」

「そうだ。そ、その王子が俺らに命令したんだよ」

王女を誘拐して連れて来い。

「・・・なるほど。前にお前の仲間がたんまりと報酬を貰えると言っていたのはそれだったか」

テツヤ殿は納得したように頷いた。

プロイセン様はリカルド王子がエリーナ様を誘拐しようとしていると知り、眉を顰めた。

「何故、エリーナ様を誘拐しようとしているんだ？」

頭に問い詰めるプロイセン様だが、頭は首を横に振った。

「お、俺らは、ただ金を貰ってやろうとしただけだ。それ以外は知らない」

「それじゃ別の質問だ。リカルド王子は、何処に居る？」

「そ、それは・・・・・・・・・」

「答えろ。さもないと吹き飛ばすぞ？」

テツヤ殿はプロイセン様を横にずらして、コルトの引き金に指を掛けた。

ま、まさか・・・・・・・・・

「や、止めろッ！！」

バッン

頭の懇願も虚しく1発の銃声がした。

「あ、ああ・・・・」

頭のズボンが内側から濡れ始めた。

弾は股の僅かに開いた隙間に当たっている。

「さぁ言え。今度は外さないぞ？」

テツヤ殿はコルトの引き金にまた指を掛けて呟いた。

「り、リカルド王子は、ヴィクター公爵の城に居る！！」

頭は泣き声で叫んだ。

「ヴィクター公爵・・・狼か」

テツヤ殿はコルトをホルスターに収めた。

頭は既に気絶していた。

「この者達を牢に入れておけ。追って処罰する」

プロイセン様は獅子頭の兵に命令して山賊達を連行させた。

「・・・ヴィクター公爵の城か。・・・・厄介な場所に居てくれたものだ」

プロイセン様は苦々しい顔で呟いた。

「そのヴィクター公爵ってのはどんな奴だ?」

テツヤ殿が煙草を銜えながら訊ねるとプロイセン様は渋面を浮かべたまま答え始めた。

「名前以外は殆ど分かっておらん。ただ、先王の下で活躍した兵士である事は確かだ」

類い稀なる力量をガルバー様に見込まれて一兵から公爵にまで登り詰めた男だと言う。

だが、その優れた力量が災いした。

その力量が恐ろしくなったガルバー様により王都から離れた辺境の地へ行かされた。

言わば左遷だ。

「なるほどな。一兵から公爵に出世とは大した奴だ」

煙草に火を点けながらテツヤ殿は、どうするんだ?とプロイセン様に訊いた。

「至急、サラ様達に報告して会議を開く」

「そうした方が良い」

テツヤ殿は煙を吐きながら言った。

プロイセン様はそれから直ぐにサラ様達へ報告をする為に訓練場を後にした。

「報告して会議を開くのは良いが、明確な答えは出ないだろうな」

テツヤ殿はプロイセン様が居なくなってから言葉に出した。

「どういう事です？」

「女王の性格からして幽閉された土地から移動しても大して罪には問わないだろうな。それに“骸骨”もそうだ」

「あの、骸骨って・・・ゲンハルト様、ですか？」

「当たりだ」

まぁ、骨と皮だけのような体格だから骸骨と言えなくないが、幾ら何でも酷い渾名であると思う。

「それをゲンハルト様の前で言ったら、お前は貴族侮辱罪で殺されるぞ」

ワイド様は呆れながらテツヤ殿を戒めた。

「今度から気を付ける。だが、女王も骸骨も武力を行使するのは躊

躊う筈だ」

サラ様は優しい故にゲンハルト様は極度な程に戦嫌いだから。

「・・・そうなると、最悪な状況になるな」

軍はサラ様の命令無くして動けない。

もしも命令無しに動けば国家反逆罪で処刑される。

「だろうな」

テツヤ殿はワイド様の言葉に頷きながら煙を吐いた。

そしてこれからの事を話し合おう、と言った。

俺らの間で何を話そうと意味などかもしれないが、それでも起こり得る最悪の状況に備えて考えるのが良いだろう、とテツヤ殿は言い続けた。

それにワイド様は頷いてリーザ様達も混ぜて話し合いを始めた。

— — — — — — — — —

―――――――――――――――

私はサラ様に山賊の頭が言った通りの事を報告した。

「・・・リカルドがヴィクター公爵の城に」

サラ様は何処かでそれを知っていたような口ぶりだった。

「失礼ですが、サラ様はリカルド王子がヴィクター公爵の城に居るのを知っていたのですか？」

「いいえ。ただ、ガルバーが生きていた頃からあの子がヴィクターと一緒に居る事は知っておりました」

まるで本物の兄弟のように仲が良く、ガルバー様より親子らしくも見えたとサラ様は言った。

確かに、ヴィクター公爵とリカルド王子の仲が良いのは知っていた。
恐らく何か強い気を感じて互いに近付いたのだろう。
現にリカルド王子もガルバー様に連れられて戦を駆けた身で、采配振りは良かったのを覚えている。
その采配振りはガルバー様より上手いと思ったが・・・兵を単なる駒としか考えていない冷酷とも言える部分が嫌だった。
指揮官たる者、兵と宿根を共にしてこそ指揮官だ。
そうする事で兵達も自ずと指揮官に付いて来るのが私の考えだった。
だが、その考えが兵たちを死なせたくないと思い、つい攻めなどを誤ってしまう時があった。
ガルバー様やリカルド王子はそんなヘマをした事が無い。
兵を単なる駒と思う・・・その冷酷な所が軍人には、特に指揮官などには必要なのだと痛感させられた。
だからこそ、ガルバーやリカルドの采配は私より上だと解かった。
「プロイセン」
サラ様が私の名を呼んだ。
「何でしょうか?」

「貴方としては、リカルドの行動をどう取ります？」

「・・・反乱を起こすと思います。そしてリカルド王子自身が新たに国王となりエリーナ様をヴィクター公爵に嫁がせて、国民を支配するかと」

サラ様のご息女であるエリーナ様が次期国王となるのは既に決定事項だ。

しかし、そのエリーナ様を人質に取れば王国は簡単に落ちるだろう。

だが、表だって動けば足が付くのは明白。

それを考えて山賊と言う使い捨てが容易な者を選んだと考えられる。

「リカルドをどうしたら止められるのでしょうか？」

「それは・・・・・・・」

私は次の言葉が言えずに黙った。

答えは簡単だ。

殺す事だ。

そしてリカルド王子に加担した者たちも残らず殺してしまえば王国は安泰だ。

しかし、この目の前に座る方は・・・そんな非情な判断を出来ない事は解かる。

地を歩く時も蟻を踏まないように気を付ける程にお優しいのだ。

それは良い事だが、国家を支配する者にとっては重要な決断をする時に邪魔な物でもある。

もしも、この方が国王でなければこんな目には遭わなかっただろう。

運命とは皮肉な物だ。

優しい者が国王となり、非情な者が反乱首謀者となっているのだから。

「プロイセン。どうしたら良いでしょうか?」

私はサラ様に再度、訊ねられてこう答えた。

「ここは一先ず臣下達を一同に集めて会議を開くのが先ずは先決かと思われます」

それでどうするか考えるのだ。

「では、直ぐにゲンハルト達を集めて下さい」

「御意に」

私は一礼してから玉座の間から出て行った。

胸騒ぎが止まらない。

こんな胸騒ぎが止まらない時は必ず嫌な事が起こる。

それも近い内に起こる確率が高い。

第三十五章：地獄の訓練２

「貴様、何だその反抗的な眼は？上官に逆らうのか？！」

「この○○○○○！！貴様のあれは○○○○○で○○○○だ！！」

「立て！！○○○は○○○か？それなら貴様は○○○○だ。死ね！！」

自主規制したくなるような罵詈雑言の嵐が私の横から飛んでくる。

私が以前、受けた罵詈雑言よりも更に酷くて荒い。

付け加えるなら訓練の内容も更に凄まじい。

何せ銃弾が飛び舞うのだから・・・・・・・・・・

現在、私とテツヤ殿もとい少佐、そしてリーザ様の３人は聖騎士団、獅子頭軍団の面々を訓練している所だ。

まぁ、私は訓練を教えられる立場では無い。

寧ろ扱かれている人たちと同じ立場に居るが、今日は嬉しい事に私は訓練に参加しなくて良いのだ！！

明日から、参加する事になるが途中途中で良いと言うから嬉しい限りだ。

話は戻るが、山賊どもを捕縛してから３日が経過した。

あれからプロイセン様達は会議を開いてどうするのか、話し合いをしたのだが明確な答えは出なかった。

プロイセン様としては一度でも良いからリカルド様を王都に呼んで事の事実を明白にしたかった様子だが、それに待ったを掛ける人物が出てきた。

少佐曰く“骸骨”ことゲンハルト様だ。

ゲンハルト様はリカルド様を下手に呼んで、面倒な事態になる事を恐れたのか視察団を派遣する事も禁じて「何も無かった」事にしようとした。

これにプロイセン様は怒り心頭だったが、サラ様を始めとした臣下はゲンハルト様の肩を持ちプロイセン様は仲間外れにされた形で終わりを告げた。

少佐曰く「臭い物には蓋をするの典型」らしい。

だが、転んでもただでは転ばないのが、プロイセン様だった。

その日の内に少佐を呼び出して「獅子頭軍団と聖騎士団を訓練させてくれ。さもないと面倒な事になる」と頼んだ。

どうやら嫌な予感がするらしく、その前に手を打とうと考えたようだ。

それを少佐は聞き入れて、リーザ様にも協力を仰いで獅子頭軍団と聖騎士団の面々を訓練する事にした。

そして先ほどの罵詈雑言の嵐と言う経緯だ。

現在、獅子頭軍団と聖騎士団から選ばれた面々は、私たちが着ていた迷彩服に身を包み６４式自動小銃を持ち“匍匐前進”をしている。

この匍匐前進は軍隊では基本らしく、身体を伏せる事で敵からの銃弾を避ける意味があるらしい。

簡単に匍匐前進を説明すると、第一匍匐から第五まである。

第一では小銃を右腰付近で保持し左ひざを地面に付けて右足を後方に伸ばし、左腕で上体を支える。

第二は第一匍匐の状態から左臀部を地面に付け、上体を支える左腕も肘が地面に付く位に下げて前進。

第三匍匐では、身体をかなり伏せた四つん這いとなり、小銃を前進するに従って逐次前方に置くようにする。

第四匍匐は、伏せた状態から両肘を前に出して右手で小銃の銃把を左手で被筒を握り、肘を交互に支点にして前に出す。

ここで出した肘と反対側の足を前方に曲げ、その足及び膝で体を推進させる。

第五匍匐とは、伏せた状態から両腕を前に出すと同時に左右どちらかの足を前方に出して曲げ、両肘を支点にして足を伸ばして前進する。

とまぁ、こんな形となる。

だが、口で説明するほど甘くない。

見ているだけで辛いと解かる。

しかし、これは歩兵の基本であり、色々と便利な事があるらしい。

隠密性や遮蔽性の効果があり、敵に発見され難い上に飛来してくる銃弾の被害を抑えるのだ。

狙撃手などはこの匍匐前進を特にしているとも聞いた。

少佐の話では「ある狙撃手は3日間、これを続けて1ｋｍ以上も進み、更に距離を縮めて敵将の頭をぶち抜いて、そしてまた戻ってきた」と言っていた。

その時、彼が口にしたのは僅かな水だけであったらしく、匍匐前進と虫刺され、更に糞尿などもズボンに垂れ下げたので、全身水ぶくれになったらしい。

何とも凄い人物だと思うと同時に、匍匐前進の凄さにも驚く。

私も明日からはこれをやらされるから、今の内に参考にしておこうと思う。

匍匐前進をする面々の前には木の杭が地面に刺されており、その周りには鋼の糸が結ばれている。

これにより上に行けないように制限しているのだ。

そしてその地面は泥水となっているから堪らない。

そこへ進む面々。

「帽子を落とすなよ?落とした者は腕立てと腹筋を１００回だ。こら、帽子を落とすなと言っただろ!!」

少佐は鋼の糸で帽子を落とした獅子頭軍団の一人の頭を上から蹴った。

その者は、泥水に顔を埋めて呻いた。

「さぁ、進め!!ノロノロするな!!敵は目前に迫っているんだぞ!?」

少佐は声を荒げた。

匍匐前進をする面々の頭上を機関銃の弾が掠める。

こうなると嫌でも頭を低くして進む以外に道は無い。

全員が匍匐前進を終えると少佐は泥だらけの面々を見て、こう言った。

「貴様等、大切な軍服を汚すとはどういう事だ?ええ?」

少佐は一列に並ばせた面々を見ながら、いや睨みながら言い続けた。

泥水の中を匍匐前進したのだから汚れて当たり前なのだが、少佐の

命令は絶対だから何も言えない。
そしてその中にはワイド様も居る。
ワイド様も前から少佐の訓練を受けたい、と考えていたので今回の訓練に参加した訳だが既に憔悴し切っている。
「おい、その木偶の坊。誰が疲れた顔をしろと言った？」
少佐はワイド様の前で足を止めて、これまた無茶苦茶な言葉を述べた。
「す、すいません・・・・・」
ワイド様は謝罪したが少佐は無情な言葉を投げた。
「罰だ。腕立てと腹筋を１００回やれ。バディ。お前もだ！！」
「レンジャー！！」
ワイド様とバディを組んだ相手はレンジャーと叫ぶと、腕立て伏せを始めた。
今にして思えば、よくあんな無理難題を私たちは素直に聞き入れた物だと思う。
だが、少佐が軍服に身を包んで声を荒げるとそれだけで従ってしまうのだ。
「他の者、お前等はこいつらが腕立て伏せをしている間は訓練場を

走っていろ」

『レンジャー！！』

他の面々は少佐の命令に敬礼して頷くと６４式自動小銃を両手で持ち走り出した。

「・・・あれって厳しいのよね」

リーザ様がポツリ、と呟いた。

「ですよね？」

私は小声で答えた。

「あのライフル、重い上に壊れ易いから酷いわよね？」

「はい。よくあれを正式採用していましたよね？」

今にして思えば、よくもまぁ、あれだけの欠陥銃を軍のライフルにしたものだと思う。

だが、少佐から聞かされた話だと「隣国の状況と自国のプライドの問題だ」との事だ。

隣国の状況が緊迫して来た事に焦りを感じた少佐の国は急ぎ、自国製ライフルを開発しようとしたらしい。

所がそこへ横槍を入れるかのように、同盟国が自国のライフルを正式採用しろ、と圧力を掛けきたらしいのだ。

しかし、それでは自国としての誇りが粉々に砕かれる。

それに万が一の事も考えて自国製のライフルを正式採用したいと考えるのも頷ける。

そして出来上がったのが６４式自動小銃なのだが、欠陥銃ではどうかと思う。

更に言えば直せない所を考えると、酷過ぎる話だ。

見れば走っていると、部品が落ちたりしていた。

どれだけ壊れ易いんだ？

「部品を落とすな！！」

少佐は部品を落とした兵の背中に蹴りを入れた。

「それが無いとそいつは駄目になるんだ。てめぇの大事な○○○だと思え！！」

これまた自主規制したくなる言葉を吐く少佐。

リーザ様は少佐の言葉に軽く顔を赤らめた。

女性の前だろうと、これだけ言うのだから凄いとしか言えない。

少佐に蹴られた兵は部品を拾うと走りを再開した。

ワイド様とバディは必死に腕立て伏せをやり続いて腹筋を始めた。

「お前等がヘマしたから、あいつ等は走ってるんだぞ?悪いと思わないか?!」

少佐はワイド様とバディを批難するような口調で叫んだ。

それに堪えたのか二人は速度を上げた。

そしてやっと二人が腕立てと腹筋を終わらせると少佐は5分の休憩を言い渡した。

それを聞いて兵たちはどっと地面に倒れ込んだ。

私はそれを見ながら、自分は耐えられるか些か不安な気持ちに襲われた。

リーザ・マクシリアン（前書き）

ここで再び登場人物を載せます。

リーザ・マクシリアン

名前：リーザ・マクシリアン

身長：１７５ｃｍ

体重：５９ｋｇ

年齢：２５歳→享年９０歳

職業：天馬騎士団団長→サルバーナ王国国王の第二王妃

階級：団長→中尉→大将

衣服：軽い軽鎧→迷彩服と薄緑のベレー帽

装備：ＡＫＳ７４－Ｕ、ベレッタＭ９３Ｒ、コンバット・ボウ

特技：偵察、裁縫、料理、弓での狙撃、サバイバル術

異名：ワルキューレ、サルバーナ王国の戦乙女

嗜好：酒、蛇

座右の銘：疾きこと風の如く

要約：サルバーナ王国の軍団、獅子頭軍団の中にある天馬騎士団を治める女騎士。

プロイセン・マクシリアンの実の娘であるが、実力で今の階級などを手に入れるなどその力量は誰もが認めている。

弓での狙撃が得意で、頭の上に乗せた林檎を射抜くなどその腕前は確かで、天馬騎士団の中でも随一と言われている。

サバイバル技術では鷹見徹夜の手ほどきも受けていたが、それ以前から経験しており生で蛇を食べるのも平気と言い、周囲を驚かせていた。

親衛騎士団が相手だろうと決して横暴は許さないなど潔癖な性格でも知られており内乱が勃発しそれが裏で手が引かれていたと知ると激怒したほど。

内乱が勃発してからは鷹見徹夜などと共に東のヴァイガーへと逃げ込み、鷹見徹夜の補佐役として内乱終結に全力を注いだ。

後に鷹見徹夜の軍に入り中尉という階級で迎えられて、最終階級は大将となった。

指揮する隊は天馬騎士団で内乱の折にも大いに活躍したが、内乱が終結した後は大々的な改革を行いその名を5大陸中に広げた。

主に偵察・斥候を任務としており、ランドルフのようなスナイパーと共に行動する時が多いとされている。

5大陸統一後は鷹見徹夜の第二王妃として暮らすようになるが、軍人として後継者を育てる事にも力を注いだと言われている。

ランドルフの史記では「華麗なる戦乙女」と書かれており後世では

戦乙女の代名詞として名を残す事になる。

第三十六章：傭兵王の仲間（前書き）

ここで鷹見徹夜の仲間を二人ほど紹介します。

下手な説明でしょうけど、どうかご勘弁下さい。（汗）

第三十六章：傭兵王の仲間

私は史記を書きながら、ここで徹夜様と４人の仲間達を思い出した。

ワイド様の妻になったミーシャ大尉と私と親友の兄貴分だったイーグル１等軍曹。

二人とも個性あふれる方で、よく私を可愛がって下さった。

特にミーシャ大尉には狙撃のイロハを叩き込んで下さった方だし、妻との仲も取り持ってくれた恩人でもある。

そしてイーグル１等軍曹は頼れる兄貴分として私に色々と為になる事などを教えて下さった。

言わば、徹夜様と並んで人生の師として仰げる方だ。

懐かしい過去を思い出しながら、私は史記を再び書き始めた。

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

5分休憩の後、今度は敵と交戦している時に移動テクニックだった。

先ず突進前に周囲を観察し、次に移動する場所を決める。

そして伏せから上半身を起こして次の場所に全力疾走するのだが、

この時の時間は3秒から5秒。

それが出来なければ出来るまで行うと言う過酷な内容だ。

次の場所に移動したら両膝を落とし、屈み小銃を利用し前に倒れ込むのだ。

倒れ込んだら伏せの状態から射撃体勢に入り射撃する。

兵たちの前には人型の的が置かれており、そこを狙えと少佐は言った。

兵たちは射撃を開始した。

しかし、トラブルが頻発した。

照準が倒れたり、引き金を引いても弾が出ない、部品が射撃と同時に飛ぶなど酷い有り様だった。

私が受けた訓練の時もそれは起きたが、中には難なく作動したのもあったから“当たり外れ”が多いのだろう。

少佐はそれを見ても何も言わずに続けさせた。

これぱかりは何も言えないし、言わないのだろう。

そして全員が射撃を終えた所で少佐は昼飯を食べろ、と言った。

私とリーザ様、少佐も昼食を取る事にした。

昼食は戦闘食だ。

それらを食べながら少佐に午後の訓練を訊ねた。

「午後は・・・そうだな。森に入って、軽く鬼ごっこをするか」

鬼ごっこと聞いて私は思わず顔を青くした。

何せ、貞操を奪われそうになったのだから良い思い出の訳が無い。

「そう青くなるな。今回はお前も鬼だ」

それを聞いて幾分か私は血の気が戻った。

「では天馬騎士団にも召集を掛けておきます」

リーザ様がスプーンで“米”と呼ばれる代物を食べながら言った。

「そうしてくれ。今回は、森を舞台にするから全員に迷彩服とフェイスペイントをさせておけ」

そうする事で偽装を効果的にして、逃げる側を精神的に追い詰めるようだ。

何ともやる事が徹底して、えげつない。

だが、やる方としては案外楽しいな、と私は思ってしまった。

私ってこんなに鬼畜だったのか？

などと思いながら私は昼食を取り続けた。

そして午後になった。

森へと皆で行ってから少佐は鬼ごっこを説明した。

「俺らから逃げ切れば勝ちだ。時間は日没まで」

その時間内に逃げ切れば勝ちだが、捕まったら終わり。

「暴力も振うが、お前等もして良い」

要は逃げ切れば勝ちだ、と少佐は再び言った。

「では、俺らは今から15分後に追いかける。逃げろ」

少佐の声に一同は一斉に森へと消えた。

「さて、あいつらが何人生き残れるか楽しみだな」

少佐は面白い状況だと言いながら煙草を銜えた。

そして煙草を1本、灰にして時間となった。

「では行くか。散開っ」

少佐は私たちに命令した。

私たちは散開して森の中へと入った。

森の中は暗くて昼間でも視界が制限される。

こんな所で戦うとなれば、罠を仕掛けるか狙撃などで相手を殺すのが良いだろう、と思う。

そしてもし、私が森の中に逃げた敵を追うならやはり散弾銃のように弾が飛び散る武器を選ぶだろう。

そんな事を思いながら森の中を歩いていると、私は背後から気配を感じた。

殺気に近い気配だ。

直ぐに離れようとしたが、相手はそれより速く私の口を抑えると首筋にナイフを当てた。

首筋にナイフを当てられたのに、怖いという感覚が無かった。

まるで他人事のように私はナイフの切っ先を見ていた。

「・・・動くなよ？坊や。さもないと可愛い喉仏から熱い液体が迸る事になるよ？」

堅い声で男の声にも聞こえたが、何だか背中に温かい感覚を覚えた。

何だか凄く柔らかい感触だった。

チラリと後ろを見れば、金色の髪を短く纏め空色のベレー帽を被った人物がいた。

年齢は少佐より少し若い位で、下を見れば柔らかい感触がした物が

二つある。

『・・・女』

思わず私は驚いた。

見るからに男なのに、山が二つあるから女だと判る。

「さて、坊や。騒がないと約束するならあんたを離すけど、約束できるかい？」

私は小さく頷いた。

自然と恐怖心が無いのが不思議だった。

「ＯＫ・・・・・」

ナイフが首筋から離れたので私は振り返った。

振り返るとそこにはナイフを持つ空色のベレー帽を被った女性と、緑色のベレー帽を被り、銃を向けている人物がいた。

服は迷彩服で、銃を向けている人物は顔にフェイスペイントを塗っていた。

そしてナイフを持つ人物の腰には大きな拳銃がぶら下がっており、肩にはこれまた大きなライフルがあった。

「質問しても良いですか？」

私は冷静な口調で、相手に訊ねた。

「何だい？」

ナイフを仕舞った相手は私に質問を許してくれた。

「貴方達は何者ですか？見るからに軍隊だとは解かりますが、少なくともサルバーナ王国の軍隊では無いですよね？」

「サルバーナ王国？この国かい？」

女性の質問に私は頷いた。

「はい。私はランドルフ・クリフと言います。現在、聖騎士団に所属しておりますが、今は少佐の下で訓練を積んでいます」

「少佐？誰だい？」

「タカミ・テツヤ殿ですが？」

私は少佐の名前を言うと、二人は驚いた顔を浮かべた。

「鷹見徹夜少佐だって？坊や、少佐が生きているのかい？」

「はい。居ますけど・・・貴方達は少佐とどういう関係で・・・・・・」

『部下だ』

二人は声を揃えて答えた。

「と言うと、ある作戦で生き残った個性豊かな４人の中の２人ですか？」

「あぁ。それで少佐は何処に居るんだい？」

「今は鬼ごっこをしているので・・・・・・・・」

「俺がどうかしたか？」

また背後から声がした。

少佐の声だ。

振り返れば、少佐が煙草を銜えながら立っていた。

「少佐！！生きていたのかい？！」

「だ、旦那！！」

二人は私を押し退けて、少佐に走り寄った。

「ミーシャにイーグルか」

少佐は二人の名を言った。

「死んだと聞いていたけど、生きていたのかい？」

女性が少佐に掴み掛る勢いで訊ねた。

「いや、死んだ。今は、この世界で生きているがな」

対して少佐は冷静な口調で答えた。

「旦那、ここは一体・・・・・・」

私に銃を向けていた人物が少佐に訊ねる。

「サルバーナ王国と言う国だ。ここは異世界だ」

少佐は二人に自分がここに来た経緯とこの国の事などを簡単に説明した。

「異世界なんて・・・・餓鬼の夢物語だと思っていたよ」

女性が大きく息を吐きながら呟いた。

その声は未だに信じられない口調だった。

「俺もだ。だけど、少佐がそんな冗談を言う訳無いし、本当なんだろうな」

私に銃を向けていた男が周りを見ながら言った。

「その通りだ。さて、そっちのもやしの名は知っているか？」

「あぁ。ランドルフとか言う坊やだろ？ナイフを首筋に当てられたのに、まるで冷静で居られるんだから大した坊やだよ」

女性は私を見ながら言った。

改めて見ると、やはり男に見えてしまう。
鍛えられた肉体に鋭い目。
そして軍服となれば、どう見ても男にしか見えない。

「あの、貴方達の名前は？」

「こいつは失礼したね。あたしはミーシャ。元ロシア空挺軍、“第４５独立親衛特殊任務連隊”に所属していた。階級は大尉。年齢とスリー・サイズは女の嗜みで秘密だよ」

ミーシャと名乗った女性は私にウィンクをしてきた。

「は、はぁ・・・・・・」

私は何とも言えずに曖昧に頷いた。
それにしても少佐が所属していた隊の名前より長い名前で覚えるのが大変だと私は思ってしまった。
随分と場違いな思いだ。

「相変わらず姐御は男口調だねぇ。では、次は俺だな」

隣の男がミーシャ大尉に呆れながらも自己紹介を始めた。

「俺はイーグル。元アメリカ陸軍特殊部隊コマンド“グリーン・ベレー”に所属していた。階級は１等軍曹で歳は２８歳の男盛りだ」

イーグル1等軍曹は自己紹介を終えると、私を上から下まで見てきた。

「中々鍛えているな。しかも、冷静な判断力を有しているし、鋭い眼を持っている所を見ると・・・・“リンクス”か？」

「りんくす？」

私は聞き慣れない単語に首を傾げた。

「ネコ科の動物でスナイパーの隠語だ」

少佐がイーグル1等軍曹の単語に説明してくれた。

何でもそのリンクスは眼がとても良いらしく、僅かな光でも見逃さないらしい。

その鋭い視力から、獲物を素早く捉える狙撃手に例えられたらしい。

「まぁ、狙撃の才能があると少佐は言っておりますが・・・・・・・・」

「やっぱりな。お前さんを見て一目でスナイパーだと判ったよ」

イーグル1等軍曹は納得したように頷いた。

「どうして解かるんですか？」

「勘だよ。少佐とまでは行かないが、これでも修羅場は潜り抜けて

いるんでな」

イーグル1等軍曹は人懐こい笑みを浮かべた。

「へぇ、もやしみたいに情けない体格の割には狙撃が出来るのかい」

ミーシャ大尉が私を見ながら呟いた。

「あの、そんなに私って体格が駄目・・・ですか？」

『あぁ』

三人は口を揃えて言い切った。

私は三人に言われて落ち込んだのは言うまでも無い。

これが私の二人との出会いだった。

第三十七章：狙撃手の種類（前書き）

ご指摘があったので、少々ですが手直しします。

第三十七章：狙撃手の種類

あれからミーシャ大尉とイーグル１等軍曹を皆に紹介した。

「あたしはミーシャ。元ロシア空挺軍、第４５独立親衛特殊任務連隊に所属していた。階級は少佐の一個下の大尉だ」

「親衛隊なのか？」

ワイド様がミーシャ大尉を見ながら訊ねた。

「いいや。親衛ってのは一種の名誉だ」

ミーシャ大尉はワイド様の質問に首を振って答えた。

ロシアと言う大国の軍隊の中でも最強と名高い事からその実力を買われて親衛と名付けられたらしい。

「そうなのか？」

「あぁ。軍人を目指す子供にとってこの空挺スペツナズに入るのが夢の頂点だ」

少佐が付け足すように言った。

「あたしは入りたくもなかったけどね」

ミーシャ大尉は何処か嫌な事を思い出したのか、ふてくされた口調で喋った。

「あの、ミーシャ大尉は入りたくないのにどうして空挺スペツナズに？」

「あたしの家は代々、軍人の家でね。男が欲しかったのにあたしが産まれてね」

親は悲しんだが、男として育てたらしい。

そして成長して一方的に入隊させられたようだ。

「お陰で出たくも無い戦争に駆り出された」

それに嫌気が差して除隊後に傭兵となったらしい。

同じ軍人家系のリーザ様とは対照的な方だと私は思った。

「少佐とは傭兵になってから直ぐに会ってね。この人の人柄に惚れ込んで部下になったんだよ」

ミーシャ大尉は少佐を見ながら言い、再会できた事に嬉しい様子だった。

「それを言うなら俺もだぜ。旦那に惚れ込んでいるのは」

イーグル1等軍曹がミーシャ大尉に対抗するように話し出した。

「少佐のワンマン・アーミー振りに惚れ込んだんだ」

「ワンマン・アーミー？」

私は聞き慣れない言葉に首を傾げた。

「一人の軍隊って意味で、要は一人で一軍に匹敵する戦力を持っていると言う事だぜ。坊や」

イーグル１等軍曹は私の質問に答えてから、坊やと言った。

「あの私にはランドルフと言う名前があるんですけど・・・・・・・・・」

「生憎だが女の名前は覚えるが、男の名前は覚えない主義なんだ」

何とも言えない主義だと私を含め、男性陣は思った。

それを聞いた天馬騎士団の面々は軽薄そうな男としてイーグル１等軍曹を見た。

「そんな軽蔑する眼で見ないでよー。お詫びに俺のスリー・サイズを教えるからさー」

『知りたくないです』

女性陣は口を揃えて言い切り、イーグル１等軍曹はガッカリした。

「見た目は軽薄そうな男だが、こいつの実力は高いぞ」

少佐は見かねたように言い始めた。

「こいつが所属していたグリーンベレーは“一人で２００人の歩兵

に値する”実力を持っているんだ」

皆はイーグル１等軍曹を見るが、とてもじゃないが２００人の歩兵に値する力を持っているようには見えなかった。

それを知られないように私は質問をした。

「グリーンベレーとは、そのベレー帽ですよね？」

私はイーグル１等軍曹の被るベレー帽を指差した。

「その通りだ。時の大統領から激励され、このベレー帽を被る事を認められた」

それからグリーンベレーと呼ばれるようになったらしい。

「このグリーンベレーは主にゲリラ戦で実力を発揮する。他の特徴と言えば、敵の中に味方を作る――ハーツ・アンド・マインズだ」

「何ですか？それは」

「人心獲得作戦と言って、敵の中に味方を作り、更にそいつ等を軍隊に訓練させる」

そんな作戦があるとは驚きだ。

「とまぁ、大まかに説明するとこうだ。続いて空挺スペツナズを説明する」

空挺スペツナズは陸軍の傘下にある空挺部隊とは違うらしく、独立した一つの軍隊として認められているらしい。

「主な作戦は“黒い作戦”だ」

「黒い作戦？」

「誘拐、潜入、破壊工作、果ては暗殺だ」

えげつない作戦ばかりやるので、冷酷無比の軍隊の代名詞として名を知られたらしい。

それを聞くとミーシャ大尉が怖い気が何となくだが、分かった気がした。

当のミーシャ大尉は少佐から渡された煙草を蒸かしている。

女の方が煙草を吸うのは初めて見るが、ミーシャ大尉が吸うと男にしか見えない。

『・・・性別を間違えた人物だ』

この人が男なら美女を侍らしていただろう。

だが、性別は女。

まったく性別を間違えていると思う。

「てめぇ、今・・・あたしを男に生まれた方が良かったと思っただろ？」

「え？い、いえ・・・・・・・・・」

私は視線を逸らしながら否定した。

「視線を逸らすのが嘘の証拠だ。よくも人が一番気にしている事を思ったね？」

ミーシャ大尉は煙草を銜えながらポキポキと拳を折りながら私に喋り続けた。

「ご、誤解です・・・・・・・・」

私は逃げ腰になりながらも弁解を続けた。

「・・・大事なタマを潰してやるよ」

ミーシャ大尉のドスの聞いた声に私は悲鳴を上げそうになった。

その言葉を聞いて男性陣は自分の大事な部分を抑えた。

情けないだろうが、誰だってこんな事を聞いたら抑えたくなると思う。

「おい。ミーシャ。もやしを虐めるな」

少佐が助け船を出してくれた。

「でも、少佐。こいつは・・・・・・・」

「お前が男に見えるのは仕方が無い事だ。好い加減、諦めろ」

グサリと心臓を抉るような一言を述べる少佐。

それを聞いてミーシャ大尉は、落ち込んでしまった。

だが、私にとっては有り難い事である。

「少佐は情け容赦が無いですねー」

イーグル1等軍曹は暢気な声で言いながら、ミーシャ大尉の肩を叩いた。

「まぁ、姐御。そう落ち込むなよ?落ち込むならいっそのこと男になれば?」

ブチっ

何かが切れる音がした。

「てめぇぇぇ!!」

ミーシャ大尉の大声と同時に・・・・・・・

「んぎゃぁぁぁぁぁぁ!!」

イーグル1等軍曹の断末魔の声が城中に響き渡った。

――――

――

「こいつはドラグノフＳＶＤと言って、オートマチック式の狙撃銃だ」

ミーシャ大尉は私たちに自分が持っている大きなライフルを掲げて説明した。

その横ではイーグル1等軍曹が地面に蹲っている。

「お、俺の・・・む、息子が・・・息子が・・・・ぐあう・・・・あっ」

何やらうわ言を呟いているが、敢えて見ないようにして声も聞かないようにした。

彼に何が遭ったのかは、彼自身の名誉を考えて言わない事にする。

「質問しても良いですか？」

私は挙手して質問した。

「何だい？坊や」

「そのドラグノフはどういうライフル何ですか？」

「良い質問だね。確か、坊やはＳＫＳカービンを使っているんだっけ？」

「はい。そうですが？」

「そいつとＡＫを参考にした狙撃銃で頑丈な上に軽量なんだ」

持ってみな、と言われてドラグノフを持ってみるが、見た目と違い軽い事に驚いた。

「軽いですね・・・・・・」

「だろ？それはストックを見れば一目瞭然だ」

言われてストックを見ると、中身が殆ど無いストックだった。

「通称、“スケルトンストック”と言って軽量化をする為に使われるのさ」

何でもこの狙撃銃は『最前線の戦前で戦う歩兵が使用する』と事を考えて行軍の支障にならないようにこのストックを採用したらしい。

「そうなんですか。それでこれの射程距離は？」

「最大射程距離は１５００ｍさ。まぁ、他の狙撃銃に比べて遠距離での命中精度は劣るし、実際は８００ｍが妥当だ」

だが、『目標の何処かに当たれば良い』と言う考えの為か大して問題ではないらしい。

「狙撃手の種類で表すなら、こいつを使う奴は“分隊狙撃手”だな」

「分隊狙撃手？」

「分隊は１０人程度で行動する隊の事だ。分隊狙撃手はその中に居る狙撃手の事だ」

つまり、ドラグノフは前線で戦う兵士が使用する思想から出来ている。

前線で戦う兵ともなれば何人かで行動する。

だから彼等をサポートする為の狙撃銃であり狙撃手であるそうだ。

「その他にも斥候、偵察、観測も任務とする“前哨狙撃兵”なんかもある」

坊やはどれに値するんだ?と訊かれた。

「まだ勉強中で何とも・・・・・・」

「そうかい。それなら今度からあたしが鍛えてやるよ」

「そいつは良い。ミーシャなら狙撃手としてピカイチだ」

少佐はミーシャ大尉の案に賛成した。

「ミーシャ大尉。今からもやしの教育官に任命する」

「了解」

ミーシャ大尉は敬礼して私に覚悟しろ、と言ってきた。

何だか凄く嫌な予感がしたのは気のせいでは・・・ない。

第三十八章：氷の女王

少佐の命令を受けたミーシャ大尉により私は狙撃の訓練を本格的に受ける事になった。

そして現在、私はミーシャ大尉と二人で少し離れた場所に居る。

「狙撃手は単独もしくは少人数で行動するのが基本だ」

ミーシャ大尉は煙草を蒸かしながら私に説明する。

「先ず狙撃手、それを補う観測手、狙撃手などを護る護衛、戦果を報告する通信手だ」

「この中でも観測手は絶対に必要だ」

観測手が風向きから湿度など様々な事を計算して、それを狙撃手に伝えるのが観測手の仕事だと説明された。

「具体的に観測手はどんな人が向いているんですか？」

「狙撃の技術を持っている人間だ」

何故なら意思疎通ができるからだそうだ。

「それで狙撃手に必要とされる技術とはどんな物でしょうか？」

少佐からは色々と説明されたが、狙撃の事ならミーシャ大尉に訊いた方が良いと言われたから改めて質問してみた。

「カモフラージュ技術、弾薬の調合、偵察能力、サバイバル技と求められるが一番求められるのは・・・忍耐力だ」

少佐と同じ回答が返ってきた。

「やはり・・・ひたすら相手が動くのを待つからですか？」

「その通り。だから、3日間位は平気で待てる奴が良いんだ。そして沈着冷静でいられて、自分を第三者に見る事が出来るのも必要だ」

だから、狙撃手になれる者は少数で早い内に訓練を受けるそうだ。

「少佐の話だと坊やは、射撃の腕が良いらしいね」

「まぁ、自分では分からないんですが・・・・・」

「少佐が上手いと言っているんだから上手いのさ」

「ミーシャ大尉は少佐を信頼しているんですね」

「当り前さ。少佐は、あたしの今まで雇われたどの上官より信頼できるよ」

特に前の上官とは雲泥の差があるらしい。

前の上官と言う事は・・・・・・・・

「確か、4人を残して全員が死亡した作戦を指揮した指揮官ですよね？」

「あれは作戦なんて言えない。あいつの虚栄心と驕りが産み出した“必然的な悲劇”だ」

「必然的な悲劇ですか？」

どういう事だ？

「あいつはさっき言った通り、虚栄心と驕りというバターで凝り固まった奴だった」

だから、自分の誇りと絶対的な自信を持っており、その作戦でもそれが出たらしい。

「まぁ、あいつの作戦は良い作戦もあったが、少佐がやれば被害を最小限に抑える事も出来た。それに少佐なら万が一の事も考えて“保険を掛ける”筈だからね」

「保険と言うと？」

「単純に言えば、それが駄目なら別の手で補う事だよ。だが、あいつにはそれが無かった」

だから、その作戦で失敗して大敗北を招いたらしい。

「あの男のせいでどれだけ仲間が死んだ事か・・・思い出すだけで腸が煮え繰り返るぜ」

ミーシャ大尉はギリッ、と唇を噛んだ。

「でも、確かゲリラに食い殺されたのでは？」

「そうだ。あいつに相応しい死に様だ。まぁ、それを食べたゲリラが腹を壊さなければ良いが」

あいつは煮て食おうと焼いて食おうと腹を壊す、とミーシャ大尉は口端を上げて皮肉気に言った。

どれだけ嫌われているんだ？と私は思ったが、気にしない事にした。

どうせ会う事は無いのだから気にしても仕方が無い。

そしてミーシャ大尉は狙撃銃の選び方に付いて説明をしてくれた。

「坊やがどの狙撃に向いているかは分からないけど、基本的にボルトアクション式が望ましいね」

「ボルトアクション式と言うと弾を1発ずつ排出して撃つライフルですよね？」

「そうだ。そいつは大口径で尚且つ射程距離も長いし頑丈だ」

だから、狙撃手などは主にボルトアクション式のライフルを愛用するらしい。

「まぁ、大体の国は既にオートマチック式になっているけどね」

何故なら弾を装填するのに時間が掛るからだ。

第一射で仕留められないと第二射で仕留めなければならない。

そうなると手動より自動で弾が装填されるライフルの方が良いのも頷ける。

「で、坊やが使用しているＳＫＳカービンだと４００ｍ以下の距離、つまり・・・・・・・・・」

「近距離から中距離がベストで、それ以上の距離となると難しいですか？」

「Ｙｅｓ。だから、坊やにはこれからボルトアクション式の物からオートマチックにも慣れてもらうよ」

ただ、やはりスナイパーとなればボルトアクションがベターであり、理想とミーシャ大尉は言った。

「私に出来るでしょうか？」

「出来るか？それはドが付く素人の言う台詞だ。出来るように様々な手を考えて実行し成功させる。それがプロってもんだよ」

私はプロ――玄人ではないがミーシャ大尉の言葉には玄人になれ、と言っているように聞こえた。

「まぁ、ここでの戦いがどんな戦いは知らないけど、これから坊やを皆で一人前にしてやるよ」

少佐、イーグル１等軍曹、そしてあたしでとミーシャ大尉は言い、屈託の無い笑顔になった。

笑顔になると、女らしい部分が見えた気がした。

「・・・ミーシャ大尉は、笑顔だと女性に見えます」

とても綺麗な笑顔だと私は言うと、ミーシャ大尉は少し驚いた顔をした。

「少佐と同じ事を言うね。だが、まだ地に足が付いてない。まだまだ若いね」

将来が楽しみだとミーシャ大尉は言ってから私に煙草を勧めてきた。

「少佐と同じ煙草、ですか？」

「いいや。こいつは“氷の女王”と言ってメンソール味だ」

「めんそーる？」

「ドライ、つまり味が冷たいんだ」

どういう味なのかは吸ってみろ、と言われた。

私は氷の女王を銜えた。

それを見てからミーシャ大尉が火を点けてくれた。

吸って見たが、直ぐに吐き出した。

「げほっ、げほっ・・・・な、何ですか？この味は・・・・・？」

口の中では冷たい、氷を口の中に放り込まれたような味が広がっていて、余り良い味ではない。

「名前の通り氷の女王みたいに冷たい味だろ？」

確かにそうだが、こんな煙草をよく吸えると思う。

「女は男と違ってメンソールな味が好みなんだよ。坊っちゃん」

顔を上げるとイーグル１等軍曹が煙草を銜えていた。

「おや？誰かと思えば“弾無し”じゃないか」

ミーシャ大尉は皮肉気にイーグル１等軍曹を見た。

「弾無しとは酷いぜ。ちゃんと弾はあるぜ。４５口径がね」

「２５口径の間違いだろ？」

「酷いなー。それはそうと、大丈夫か？坊ちゃん」

イーグル１等軍曹は私の肩を叩きながら水を差し出してくれた。

「な、何とか・・・・・・・」

私は乾いた口の中を水で潤してから答えた。

だが、まだ味が口の中に残って嫌な味だ。

「姐御。メンソールを吸ったことの無い相手にそれは無いぜ？」

「そうか？少佐は平気だったけど」

「それは少佐が異常なんだよ」

「そうかい。所で、何でここに？」

「少佐に追い出されたんだよ」

ナンパばかりして話にならないから、私の相手をしろと言われたらしい。

「自業自得だね。よくグリーンベレーに入れたもんだ」

「ほっといてくれ。それはそうと、坊ちゃんに何を教えてたんだ？」

「狙撃さ。坊やはＳＫＳカービンを愛用しているから、ボルトアクションを使わせようと思ってね」

「ボルトアクションならモーゼルが良いんじゃねぇの？」

「“亡霊”が使用していたのを？」

「亡霊？」

私は訊き返した。

「あたし等の世界で、ナチス・ドイツと言う組織が居てね」

何でも世界を相手に戦いを挑んだらしいが、敢え無く敗北したらし

い。

そして、その組織が使用していたボルトアクション式ライフルがモーゼルと呼ばれている物らしい。

「あれは今でも作られているし、紛争地帯などでも使用されている」

それだけ良いライフルと言う証拠だ、とミーシャ大尉は言った。

「だな。それはそうと、坊ちゃん。ここには春を売る女は居るのかい？」

「・・・・売春宿ですか」

「そんな気難しい顔をするなよ。男なら女を抱いて初めて一人前だぜ？」

「あんたは女なら誰だって引き金を引くだろ。この子はあんたみたいに無節操じゃないのさ」

「それは坊ちゃんだからだよ」

まだ女を知らないから、無節操じゃない。

だが、女を知れば無節操になる、とイーグル１等軍曹は確信めいた口調で言い切った。

「男が全員あんたみたいな奴らだったら、あたしが全員の弾を潰してやるよ」

煙草をイーグル1等軍曹に吐くミーシャ大尉。

イーグル1等軍曹はそれを指で止めた。

至近距離で吐かれた煙草を手で受け止める彼の俊敏性に私は思わず驚いた。

だが、次の瞬間には・・・・・・・・・・

「あじゃあ!!」

短い煙草を掴んだ為に自分で指を焦がして、絶叫を上げた。

先ほどの俊敏性が嘘のように見えてしまい、私は先ほどまで驚いていた彼に大して幻滅した。

第三十九章：命がけの追いかけっこ（前書き）

えー、この度、私ことドラキュラと「何でも屋ローランド」様のブレイズ様とコラボする事になりました！！

イエーイ！！

まぁ、まだ書いておらず頭の中で描いている所ですが、予定としては４５章から５０章の間位には投稿できたら良いかな？と思いますので、お願いします。

第三十九章：命がけの追いかけっこ

夕方になり今日の訓練は終わった。

そして夕食を取ろうとした所で、プロイセン様とゲンハルト様が訪れた。

犬猿の仲と言われる二人が肩を並べて来るから皆は驚く。

「おい、傭兵」

ゲンハルト様は煙草を吸っていた少佐に歩み寄った。

その足取りは少なからず怒っていると解かる。

「何だ？」

「貴様、どういう積りだ？」

「どういう積りとは？」

「そこの二人は何者だ？何故、連れて来た！！」

ゲンハルト様は骨と皮だけの身体からは思えない大声を上げた。

「俺の部下だ。寝床が無いから連れて来た」

「部下だと？貴様のような下種な輩に部下が・・・・・・・・ひぃ！！」

「てめぇ、いま少佐を下種と言ったな?殺されてぇのか?」

ミーシャ大尉がゲンハルト様の胸倉を掴み、ドスの効いた口調で喋った。

「ちょっと姐御。もう少し紳士に行こうぜ。だから、男女って言われるんだよ」

「餓鬼は黙ってな。あたしはこの糞ったれをどう料理するか考えているんだ」

「おい、ミーシャ。止めろ」

少佐が煙草を吸いながらミーシャ大尉を止めた。

「でも少佐・・・・・・」

「ミーシャ大尉、命令だ。今すぐゲンハルト閣下から手を離せ」

ミーシャ大尉はゲンハルト様から手を離した。

「申し訳ありません。ゲンハルト閣下。彼女は、私の部下でミーシャ大尉と言います。何分、感情が爆発し易い性質なので、このような暴挙に出たのです」

少佐は流れるような口調でゲンハルト様に謝罪を始めた。

その腰を折った態度にワイド様を始めとした面々は驚愕していた。

いつも唯我独尊で誰が相手でも腰を折った態度を取らない少佐が、こんな風に喋るのだから驚くのも無理は無い。

「ですが、彼女も私を思ってこその行動です。どうか、ここはこの下種な傭兵の為にその寛大なお心でお許し願いませんか？」

「ふ、ふんっ。そこまで言うなら、不問にする」

ゲンハルト様は気持ち良くなったように、服の乱れを直しながら言った。

・・・・単純な性格だ。

失礼にも私は思ってしまった。

「ありがとうございます。それと彼女とイーグル1等軍曹の身元は私が保証します。どうか、彼等二人をこの城に住まわせる事を女王陛下に伝えてもらえませんか？」

「良かろう。ただし、変な真似をすれば容赦せんぞ。それは分かっているな？」

「勿論です。では、お願いします」

少佐は帽子を取り、一礼した。

「分かった。では、伝えてくる」

そう言ってゲンハルト様は悠々とした足取りで去って行った。

「ああ言った連中は煽てれば気を良くするから扱い易いぜ」

少佐は肩を叩きながら呟いた。

「流石は旦那だ。姐御ももう少し大人になりなよ？」

「てめぇは黙ってろ」

ミーシャ大尉はイーグル１等軍曹を睨み据えた。

「そんな怖い顔をしないでよ。よけい男に見えるよ・・・・って、ちょっと！！」

イーグル１等軍曹は悲鳴を上げミーシャ大尉に背を向けて走り出した。

ミーシャ大尉の手には腰のホルスターから抜いた大型の拳銃が握られていた。

コルトと同じ位の大きな銃でグリップの上、銃身の後ろにレシーバーがある。

それを前に動かして、引き金を引いた。

撃鉄を起こしていないからダブルアクション式かもしれない。

引き金を引くと連続で銃声がする。

弾が何発も連続で撃ち出されて、イーグル１等軍曹を掠める。

「あ、姐御!!俺を殺す気か!?」

「当たりだ。大人しく蜂の巣になりな」

ミーシャ大尉は走りながら拳銃を撃ち、イーグル1等軍曹は逃げ続けている。

命がけの追いかけっこの始まりだ。

「テツヤよ。あのミーシャが撃っている拳銃は何だ?」

プロイセン様がミーシャ大尉を指差しながら訊ねた。

「あれは“スチェッキンＡＰＳ”と言う拳銃でフルオートが可能な銃だ」

ＡＫＭなどと同じくソ連製らしい。

弾は９ｍｍマカロフ弾と言う弾でベレッタの９ｍｍパラベラム弾に相当するらしいが、威力では些か落ちるらしい。

「フルオートが可能か。良い銃だな」

「実際、拳銃でフルオートは余り良くない。至近距離なら良いが、弾を無駄に食うし距離が離れれば弾が散らばって当たらない」

ベレッタＭ９３Ｒと同じく“サブマシンガンもどきのはったり”であるらしいが、それでも扱えるようになれば頼もしい武器だと少佐は言った。

「ロシアの特殊部隊では今でもあれが使われている」

弾が手に入り易く、安い上に十分な威力があるのが理由だと言う。

やはりロシアと言う国は戦う者がどんな物を欲しいのか解かっていると思ってしまう。

そんな事を考えている間も命がけの追いかけっこは続いている。

だが、見る限りではミーシャ大尉に捕まるのも時間の問題だ。

「少佐。もし、イーグル1等軍曹が捕まったら、どうなります？」

「良くて半殺しか4、5発ほど撃たれるな。悪ければ全弾撃ち込まれて死ぬ」

「助けないんですか？」

「元はと言えばあいつの蒔いた種だ。自分で刈り取らせる」

それが大人の男だ、と少佐は言い私に煙草を差し出してきた。

私はそれを銜えて少佐が火を点けてくれた煙草を吸う。

「まぁ、俺らは飯にしよう」

少佐は私たちに夕食の準備をしろ、と言いプロイセン様に夕食を食べるか？と訊いた。

「頼む」

即答するプロイセン様に少佐は苦笑しながらも夕食を用意した。
その間も鬼ごっこは続いていた。
夕食を食べている間、プロイセン様は少佐に現状を訊いた。
「まだ始めたばかりで分からんが、まぁ元々戦う身だから吸収力は高いな」
「それは助かる。所で、テツヤよ」
「何だよ。その猫撫でするような声は。気持ち悪いな」
バッサリと言い切り要件があるなら言え、と少佐は続けた。
まぁ、確かにプロイセン様の声を聞くと何かあると直ぐに解かる。
それなのに要件を言わないのだから嫌気になるだろう。
「気持ち悪いとは心外だ。だが、要件を言わせてもらえるなら、私にもリーザ達が使用する拳銃をくれ」
何となく、そんな事だろうと私は大体の予想をしていた。
ドウタヌキを見た時も欲しがっていたのだから、拳銃を欲しがるのも無理は無い。
「最初からそう言えよ。何で猫撫でした声で言う必要がある」

「主には色々と世話になっている故な」

しかも二度もくれ、と言うのは些か体面が悪いと思ったのだろう。

「そんな事を気にするような男だったとは驚きだ。まぁ良いが。それじゃお前さんには特別の奴を渡すとするか」

「特別な奴？」

「あぁ。俺と同じだが、名前が中々だ」

少佐は携帯を取り出して掛けた。

『はーい。こちら呼ばれたら何処へでも届ける宅配人でーす！！』

「俺だが、コンバット・コマンダーを１丁ほどくれ。色はシルバーで、グリップは象牙。ホルスターはヒップだ。後はモーゼルｋａｒ９８ｋにギリー・スーツを頼む」

『了解でーす。では、少々お待ち下さい』

携帯を切ると、直ぐに品物が届いた。

少佐は拳銃を取り、プロイセン様に渡した。

コルトより小さいが、外見は同じだ。

違う点を言えば色が銀色でグリップが象牙と思われるグリップという事だろう。

「これは？主が使用しているコルトにも見えるが、小さいな」

「“コルト　コンバット・コマンダー”と言う拳銃で俺のガバメントを小型にした物だ」

ガバメントは大きいが、それ故に狭い場所で働く兵隊達には些か邪魔だったらしい。

その為、小さいガバメントを作ろうと思い立ったらしく、出来たのがコンバット・コマンダーのようだ。

「コマンダーは指揮官を表している。お前さんにはそれが似合うだろう」

プロイセン様は将軍だ。

それを考えた上で色とグリップなどを変えたらしい。

「これは嬉しい事をしてくれるな」

プロイセン様はコンバット・コマンダーを撫でながら礼を述べた。

「それからこっちは、もやし用だ」

今度は私にライフルと変な物を渡してきた。

「ライフルは“モーゼルｋａｒ９８ｋ”。そっちは“ギリー・スーツ”と言ってスナイパーが主に使用する物だ」

確か、モーゼルはミーシャ大尉が褒めていたな。

「そいつはカービンサイズだ。威力もあるから長距離狙撃で使え。そして森林・山岳地帯ではそれを着込め」

そうすれば周りと溶け込めると少佐は言った。

「ありがとうございます。少佐」

「良いさ。これからお前を一人前に育てるんだ」

これは投資であると少佐は言い、覚悟しておけと笑った。

私はそれに笑顔で答えた。

その一方でイーグル1等軍曹はミーシャ大尉に捕まって、半殺しにされたのは別の話である。

ワイド・リブロ（前書き）

ここで再び、キャラクターを紹介します。

毎度毎度、読んで下さる方には感謝しております。

まだまだ続きますので、宜しくお願いします。

ワイド・リブロ

名前：ワイド・リブロ

身長：１８５ｃｍ

体重：８５ｋｇ

年齢：３３歳→享年９０歳

職業：聖騎士団団長

階級：聖騎士団長→中尉

衣服：鋼色の鎧→迷彩服にブーニー・ハット

装備：クレイモア、コルトＭ１９１１Ａ１、ＲＰＫ軽機関銃

特技：剣術

異名：聖騎士、傭兵王の相棒

嗜好：煙草、酒

座右の銘：民と国を護り忠誠を誓う

要約：サルバーナ王国の教会を護る聖騎士団の長。

鷹見徹夜を当初は傭兵と蔑んでいたが、彼の人物を知るに連れて心

を許して何時しか背中を護れる間柄となる。

後に内乱が勃発すると民達を戦火から逃がし、大勢の命を救った事を評価されて聖人の一人に数えられた。

内乱を終える戦いで鷹見徹夜が一時行方不明となった時は率先して皆を纏める役となった。

五大陸統一後は鷹見徹夜の仲間の一人であるミーシャ大尉と結婚して１０人も子供を作るという大業を成し遂げ大家族となり良き父、良き夫だったと周囲からは言われていた。

鷹見徹夜より5年ほど先に死んだが最後の言葉は「先に行って状況を確認して来る」と言われており最後まで鷹見徹夜の良い友人であったと言われている。

鷹見徹夜とは酒を飲む事が多かったらしく、共に酒豪として知られており店を何店か潰して来た為か「酒店潰し」などという有り難くもない異名を頂戴した。

彼に対する逸話は聖人に相応しい逸話が多く、死去した後も彼を崇める人が後を絶たずまた子宝を授ける者として崇められている。

第四十章：高嶺の花

翌日から私はミーシャ大尉から狙撃の手ほどきを受けていた。

「お前さんは目が良い。だからスコープは無しで狙撃をやれ」

「スコープを付けないで狙撃できれば色々と有利になれる」

先ずスコープが光に反射して居場所が解かり辛い。

更に一々スコープの調節をしなくて済む。

「スコープって繊細なんですか？」

「あぁ。少し動くだけで微調整が必要だし、ライフルから外せばそれは毎回だ」

「では、潜入する時はどうするんですか？」

「それだと何処かで一度、試射してスコープを調節しないと駄目だな」

その半面で確実に相手を狙える点が良いと言う。

「だが、お前さんにはスコープ無しで上手くなってもらうよ」

「分かりました」

私はそれに頷いた。

その傍らでは少佐が天馬騎士団を鍛え、イーグル１等軍曹が聖騎士団と獅子頭軍団の面々を鍛えている。

最初イーグル１等軍曹は「えー、何で俺が野郎のお守役なんですかー！！」と不平不満を述べた。

しかし、ミーシャ大尉がスチェッキンＡＰＳを彼の鼻に押し当てて「てめぇ、少佐の命令が聞けないのか？」とドスの効いた声で言うと、あっさりと承諾した。

それを憐れに思うが、何とも変わり身の早い相手だと私は同時に思った。

「では、先ず伏射の構えを取り的を狙え」

ミーシャ大尉に言われて私は地面に寝転がり、モーゼルｋａｒ９８ｋを構えた。

ボルトアクション式だから、連続では撃てない。

それを自分に言い聞かせた。

「では、自分が撃ちたい時に撃て」

目の先には煙草の箱位の的が見える。

距離からして８００か。

風は些か右に強いし、砂煙も出てきた。

まったく悪状況だ。

だが、やるしかない。

私は息を吸い、引き金に指を掛けた。

そして風などの影響も考えながら微妙に調節して僅かに見えた的に狙いを定めて指を後ろに引いた。

ＳＫＳカービンより重い反動が肩に来るのを感じながら弾を見る。

弾は回転しながら飛び、的を仕留めた。

「ヒュー。大した腕前だね」

ミーシャ大尉が口笛を吹くのを聞きながら私はボルトを動かして弾を排出した。

このモーゼルはボルトの部分が通常の物とは違って逆Ｌに曲がっている。

これは布などに引っかからないようにする為の処置らしい。

そして手をかけ易い様に周囲のストックが四角く抉られているなど使う者の事を考えている作りだ。

だが、慣れないせいか些かやり辛かった。

「そいつは慣れるしかない。だが、慣れれば使い易いさ」

それで感想はどうだ?とミーシャ大尉は訊いてきた。

「反動は強いです。しかし、良いライフルだと思います」

「そいつは結構だ」

ミーシャ大尉は氷の女王を吸いながら呟き、今度は自分が狙撃をした。

ドラグノフを構える姿は、男にしか見えない。

引き金を引くと、モーゼルやＳＫＳ以上に金属音が聞こえる。

まぁ、二つに比べて金属製の外見が多いからかもしれないな。

ドラグノフから出た弾は的の中心に当たった。

私の弾は右上だ。

ミーシャ大尉は立て続けに2発、撃ち込んだ。

それも頭の部分に・・・・・・

あの2発で確実に的は死んでいる筈だ。

「さて、次は立射で撃て」

「はい」

私は頷いた。

そして狙撃の練習を続けた。

――

―――――――――

俺は天馬騎士団に格闘技を教えていた。

俺が教えるのはＣＱＣとＣＱＢだ。

ＣＱＣは分隊以上の人数が２５メートル以下の距離で敵と遭遇した時に使用する。

ライフルが使えない時、敵とどう戦うか？

素手、ナイフ、紐、スコップ、何かで敵を倒す。

俺の前では分隊に分けた天馬騎士団が戦っている。

相手がナイフを持っている時は、ナイフを持つ手を抑えて反撃する。

紐がある時は相手の背後を取り、首に縄を掛けて後ろに三回ほど揺らせば死ぬ。

素手なら相手の金的、目、鼻、脇腹、喉何かを狙うのが良いが、ボディ・アーマーを着ている可能性があるから目なんかが良いな。

それかボディ・アーマーの隙間を狙うか、だ。

俺が居た国だと介者剣法何かが有効だな。

介者、つまり鎧武者と戦うことを前提としているから鎧の隙間部分の喉・脇・手首・股などを狙うんだよ。

これが日本版ＣＱＣと言えるかもな。

鎧を着た相手と戦う事を想定しているんだからな。

刀の損傷を考えて突きと引き斬りが多いのも特徴だ。

敵兵に身体を寄せ、首や手や股を斬り、戦闘能力を奪うことを目的にしているから仕留めはしない。

だが、戦闘能力を奪えるなら仕留めたも同じだ。

戦えない相手は余り殺さないのも良い。

下手に殺して仲間が来る事もあるからな。

で、今度はＣＱＢだ。

ＣＱＢは市街戦などで人質救出、対テロ作戦で主に使用される技術だ。

これも覚えて損は無い。

人生何があるか分からないし、備えあれば憂いなしと言うだろ？

だから、覚えておける物は全て覚えて、自分の血肉にしろ。

そうすれば大丈夫だ。

そして俺はイーグルを見た。

向こうはグリーン・ベレー仕込みの訓練で苛烈だ。

俺より厳しいな。

だが、イーグルからは「少佐の扱きの方が辛い」と言っていたが。

今は奴の命令で射撃訓練だ。

とは言ってもあのポンコツじゃ命中精度以外は望める利点が無い。

まぁ、あるとすれば敵に奪われても下手に困らない、という点だな。

海外には出回らないし、分解すれば戻せないから敵が奪っても大して脅威じゃない。

しかし、今にして思えば俺もよくあんなポンコツを使っていたものだと思うぜ。

あれを戦場に持って行けば、どうなっていたか・・・・考えるだけで嫌になる。

尤もあれを実戦で使った事は無いが。

俺は煙草を銜えて火を点けようとしたが、気配を感じて振り返った。

遠くからでも誰か見ていると解かる。

特に女の視線は男なら直ぐに解かるさ。

俺が降り返って見た先には、女王が居た。

隣には王女も居る。

何しに来たんだ?

俺は訓練を続けるように言って、二人に近付いた。

「こんにちは。テツヤ殿」

女王は俺にドレスの裾を摘んで一礼してきた。

相変わらず品があって一目で高貴な女、だと解かる。

それと同時に自分には手の届かない“高嶺の花”だと思い知らされる。

隣では王女も同じようにしていた。

こちらはまだ幼いが、それでも将来は美人になると約束されたような容姿だ。

「あぁ。こんにちは。何か用かな?」

「テツヤ殿の顔が見たくなったので」

「俺の？そいつは嬉しいな」

俺は笑いながら言い煙草を仕舞った。

こんな至近距離では女王の髪に煙が付く。

それは駄目だ。

俺には高嶺の花だ。

その花は別の奴が手折るだろう。

それならそいつに変な勘ぐりを入れさせない為にも、下手に手を入れない方が妥当だ。

「テツヤ殿の格好、何時もと違いますね？」

王女が俺の格好を見て物珍しそうに言ってきた。

俺の格好はフランス外人部隊の格好だ。

何故かって？

ミーシャとイーグルから言われたんだよ。

『少佐は少佐らしく軍服で居て下さい』

とな。

「これは俺が二度目に入った軍の服だ。似合うかい？」

俺は適当なポーズを取って見た。

「はい。とても」

王女は笑顔で俺に言った。

「そりゃどうも。それじゃ、お嬢ちゃん。いや、王女様。少し彼等を励ましてくれないか？」

あいつ等も流石に疲れているだろう、と俺は言った。

だが、王女自ら激励すればきっと今まで以上にやる気を起こすのは間違いない。

「エリーナ。そうしなさい」

「はい。お母様」

王女は頷いて訓練をする連中に歩んで行った。

「テツヤ殿。少し歩きませんか？」

「ここをかい？」

「いいえ。中庭でもどうです？」

「中庭、か。良いだろう」

俺は女王と二人で中庭へと向かった。

幕間：貸し借り無し（前書き）

初めて幕間を挿入します。

後、もう少しコラボ企画は待っていて下さい。（汗）

幕間：貸し借り無し

俺は女王と肩を並べて中庭を目指していた。

訓練場から結構な距離だから俺は歩いたまま礼を述べる事にした。

「先ずはお礼を言わせてもらうよ」

あの二人を城に住まわせる事を許可してくれた事を、と俺は言った。

骸骨には礼など言わない。

何で？

あいつはただ女王に言っただけだからだよ。

「いいえ。テツヤ殿の部下なら迎えて当然です」

女王は俺の礼の言葉を聞きながらも、俺の部下なら大丈夫と言ってくれた。

「嬉しい事を言ってくれるな」

俺は茶化すような言い方をした。

中庭に着いた女王はベンチに腰を降ろした。

裾の長いドレスを丁寧に両手で皺が付かないようにして座る仕草から見ても上流階級の者だと一目で判別できる。

女王が座るのに対して俺は立ったままだ。

立ったままの方が、落ち着くからな。

女王とは距離を取っているが何かあれば壁になれる立ち位置だ。

武器はコルト・ガバメントと同田貫にＡＫＭアサルトライフルだから、大勢が来ても対処は可能だ。

「テツヤ殿はどうして傭兵になられたのですか？」

女王は俺を見上げる形で訊ねてきた。

二つのブルー・アイが俺を見上げる様は、画になるし綺麗だと素直に思う。

「突然の質問だな。まぁ、敢えて答えるなら極限の状況を楽しむ為だ」

「極限の状況を楽しむ？」

女王は可愛らしい仕草で首を傾げてみせた。

「そうだ。生か死か・・・極限の状況に陥った時、自分の力がどれだけ通じるのか試したいんだ」

これに嘘は無い。

元来、傭兵になる奴は大抵だが戦闘が好きな奴らだ。

だから血に飢えた狼なんて言われるんだろうがな。

「他にも理由があるのではないですか？」

「どうしてそう思うんだ？」

「貴方の眼を見ていると、何故かそう思うんです」

大した眼力だ、と俺は思いながら女王の視線を逸らした。

あの瞳に見られると、何もかも全て話しそうで怖いと思ったからだ。

「どうなのですか？」

女王はもう一度、俺に訊ねてきた。

「まぁ・・・何だ。俺は二親が居ない身でね」

「亡くなられたのですか？」

「いいや。捨てられていた」

「それでは・・・・・・」

女王が最後まで言う前に俺が続きを言った。

この女にこんな言葉を吐かせられない。

「あぁ。捨て子だ」

女王はそれを聞いて、何処か同情する眼差しを向けてきた。

「そんな顔をしないでくれ。世の中を探せば、俺以上に悲惨な出自を持つ奴等は大勢いる」

強姦されて孕まされた奴なんかはまだ良いかもな。

それ以上の酷い目に遭わされて世に生を受けた奴が居るんだから。

「誰に育てられたのですか？」

「孤児院で育ったが、俺は生来なのか暴れん坊だった」

とにかく戦う事が日常で、一度も喧嘩をしない日は無かった。

そんな俺でも、生きる為には職を探す必要がある。

しかし、学が無い。

となれば手っ取り早く職に在り付くには戦う事だ。

「それで軍隊に入ったのですか？」

「あぁ。いつの時代でも軍隊は来る者を拒まない」

相手が相当な悪でも無い限り、来る者は拒まない。

それが戦時中なら尚更だ。

「そこから2度ほど軍を変えて傭兵になった」

今にして思えば因果な商売だな、と自分で改めて気付かされる。

人を殺す為に生きてきたような俺の人生。

振り返れば死体の山と血の海だ。

それ以外は何も無い。

「・・・私は、そう思いません」

女王は何処か堅い声で呟いた。

「貴方は、決してそんな人生だけを歩んで来ただけでは無い筈です」

多くの悲しみを背中に背負いながらも毅然と前を見て歩いている方だ、と女王は言った。

「随分と俺の人生を買い被ってくれているようだが、俺はお前さんが思っているほど良い男じゃないさ」

俺はここで煙草を銜えて火を点けた。

空は青かった。

そう言えば・・・こんな空が青かった時も、あいつは俺に言ったな。

名前は忘れたが、春を売る女で俺を見ながらそんな事を言った。

場所は、ここみたいにロマンチックな場所ではなかった。

オンボロ宿の一室であいつはベッドの上で乱れた髪を直していた。

何をしていたかんてのは、餓鬼でも解かるだろ？

俺はその横で煙草を吸いながらそれを見ていた。

その時、あいつは俺に言ったんだ。

『貴方は多くの悲しみを背負いながらも生きている立派な男よ』

どういう根拠でそんな事を言ったのか知りたかった。

そして何でそんな事を言ったのかも。

まぁ、もう死んじまっているから分からず仕舞いだがな。

酒に酔った常連の客に３８口径で撃ち殺された上に死姦された。

何とも憐れな死に方だ。

そんな事を思い出しながら俺は煙を吐いた。

「テツヤ殿には娘の命と私の命を助けて下さった恩があります」

ですから、私に何かできる事があれば何でも言って下さい、と女王は意を決したように言ってきた。

「この城に住まわせてもらい、職も貰えた」

これが恩だ。

これで貸し借り無しだ。

「いいえ。私はそれだけで貴方に恩を返したとは思いません」

「いいや。返したさ」

あんたみたいな高嶺の花と僅かな時間でも一緒に居られるだけで十分に恩を返しているのさ。

俺はそれは言わずに煙草を吸い続けた。

それを女王は納得のいかない様子だったが、敢えて無視した。

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

私は空を見上げるテツヤ殿を黙って見ていた。

空を見上げるテツヤ殿の瞳は黒真珠のように濁りが無い。

だけど、とても哀しそうな色であると私は思った。

この方は自分の人生を人を殺す為だけに生きてきた、と自嘲した。

私はそれを否定した。

この方はそんな人生を歩んで来ていない。

きっと、それ以上の何か深い傷を負いながらも前を向いて歩いている方だ。

そう私は感じていた。

でも、テツヤ殿はこう言い返してきた。

『随分と俺の人生を買っているようだが、俺はあんたが思っているような良い人間じゃない』

私はそれに返そうとしたが、テツヤ殿は煙草を銜えて空を見上げた。

それによって話は一度、途切れてしまった。

いや、途切れさせられたと言った方が正しいのかもしれない。

この方は娘の命と私の命を助けてくれた恩がある。

どちらも山賊の魔の手から助けてくれた。

だから、私は何か出来る事があるなら言って下さい、と言った。

話を聞くだけでも、この方の苦痛が和らぐなら安い物だと思う。

でも、テツヤ殿は空を見上げながらこう言い返した。

『この城に住まわせてもらい、職も与えられた』

これで貸し借り無しだ。

その言葉は、自分に深く関わるなと言っているように聞こえた。

そして何かまた言おうとしたが、それ以上は何も言わなかった。

私はそれが気になると同時に、そんな事で貸し借り無しという自分勝手に終わりにしないで欲しいと思った。

だけど、テツヤ殿は私を見ないで、ずっと空を見上げていた。

まるで曇り一つない空が羨ましいように見ていると私は感じた。

やがてテツヤ殿は煙草を懐に仕舞った。

「さぁ、女王陛下。遊びの時間は終わりだ」

もう職務の時間だ、とテツヤ殿は言い私を部屋まで送り届けると、自分は訓練場へと帰って行った。

私は職務をする机に座りながらも、心は職務ではなくテツヤ殿に向かっていると自覚した。

第四十一章：燃える女

少佐が戻って来てから私たちは昼食を取る事にした。

その傍らではイーグル1等軍曹が逆さ吊りにされている。

「旦那ー！！姐御ー！！俺が悪かったです！？だから、降ろして下さいー！？」

「うるせぇな。少しは声を抑えろ」

ミーシャ大尉はスプーンを噛んだまま愚痴を零し、スチェッキンAPSでイーグル1等軍曹を見ないまま引き金を引いた。

「ひぃ！！」

イーグル1等軍曹は悲鳴を上げながら何発も撃ち込まれる弾を身体を動かして避けている。

よくもまぁ、縄でグルグル巻きにされているのにああも見事なまでに身体を動かせられると思う。

そして何で彼がこうなったか、と言えば・・・・エリーナ様に対する発言だ。

兵たちを激励しに来たエリーナ様を見てイーグル1等軍曹は近付くなり、いきなり両手を握りこう言った。

その言葉は・・・・・・

『へい、彼女。俺と一夜のアバンチュールを楽しまない？』

と人目も憚らずに言ったのだ。

それをミーシャ大尉が鋭い耳で聞いて、直ぐにイーグル１等軍曹を捕まえてこうしたのだ。

エリーナ様には「ただの戯言だから気にしないで」と言って誤魔化して帰した。

私はこの意味を聞いたが・・・王女に対して言う台詞ではない。

アバンチュール――恋の火遊び。

こんな事を言えば、即座に殺されても文句は言えない。

それ所か少佐にも害が及ぶ。

だから、ああしたのだ。

「ミーシャ。あいつを不能にしてやれ」

不能、この言葉を聞けば男なら自然と想像できる。

皆、少なからずイーグル１等軍曹に同情の眼差しを送ったが、自業自得と言えば自業自得だ。

だから、同情はしても助けない。

「良いんですか？」

「許可する」

少佐は昼食を食べながら頷いた。

「了解」

「ちょっ・・・旦那！！それだけは勘弁を！？」

「黙れ。これが骸骨の耳に入ってみろ。俺らの首は胴から跳ぶぞ」

少佐はイーグル１等軍曹の懇願を無下に断ると、撃てとミーシャ大尉に命令した。

「じゃあな。くそ餓鬼。今度は女になりな」

「や、止めてー！？」

１発の銃声がした。

そして・・・・・・・

「んぎゃあ！？」

イーグル１等軍曹が地面に落ちて蛙のような鳴き声をした。

ミーシャ大尉が撃った弾はイーグル１等軍曹を縛っていた縄に当たって千切れたのだ。

と言うか、私には縄を狙っているように見えた。

「イーグル。今度だけは大目に見るが・・・二度目は無いぞ」

少佐は静かな声で最後通告とも言える言葉を放った。

「りょ、了解・・・・・・・」

イーグル1等軍曹は頷いてから意識を手放した。

昼食を終えた後は再び狙撃の練習となったのだが、午後は少し実戦的だった。

『俺が森林の中から俺が置く的を狙え』

今回、観測手は少佐が務めてくれる。

その為、少佐も迷彩服にギリー・スーツを着込み、ＡＫＭアサルトライフルと観測用に使用する望遠鏡がある。

私と少佐は匍匐前進で進みながら小さな声で会話をする。

「ミーシャはここから８００メートルの距離に的を置いていると言った」

少佐は的の場所を私に教え、その周りを武装した者が護衛していると言い、本格的な訓練だと私に教えた。

「標的を仕留めたら、匍匐前進でそのまま逃げるぞ」

もし、外したら別の場所に移動して改めて仕留める。

匍匐前進をしながら私は汗を掻いた。

太陽が上から私たちを照らす上に、迷彩服の上にギリー・スーツを着るから暑い事この上ない。

必死に耐えながら匍匐前進をしていると少佐が止まるように言った。

「ここから狙撃をするぞ」

少佐は望遠鏡を覗き込み距離を測っている。

「距離８００。風速５・・・何時でも撃て」

私は伏射の構えを取り、スコープを付けていないモーゼルｋａｒ９８ｋのアイアンサイト越しに標的を見た。

確かに、距離からして８００だ。

そしてその周りを数人の武装した兵たちが回っている。

「・・・・・・・」

私は息を吸い込んで引き金に指を掛けた。

風向きなども計算に入れて、引き金を引いた。

弾丸が飛び出る音と肩に反動を感じる。

標的から視線を外さないで見ていると、標的が倒れるのを確認した。

「命中だ。引き上げるぞ」

「了解」

私達は匍匐前進をして元来た道を帰る。

所がここで問題が発生した。

「・・・敵が居る」

どうやらミーシャ大尉が追手を繰り出したようだ。

「どうします？」

「このままやり過ごすのが一番だが・・・やもえない場合はやるぞ」

出来るなら私は、やりたくないと思いながらも匍匐前進を止めて、その場で固まった。

モーゼルには薄汚れた布などを巻いて周囲に溶け込むようにしてあるから、簡単には分からない筈だ。

直ぐに数人の足音が地面越しに聞こえてきた。

足音で予想するなら４人だ。

重い足音からして男、しかも重武装と思われる。

私は地面から来る振動で胃がむせかえりそうになるが、口の前で止めて待ち続けた。

そして足音が私と少佐の前に出た。

人数は４人。

武器はアサルトライフルとショットガンだった。

『ショットガン・・・・・・・・・・・・・』

あれで撃たれると身体が蜂の巣になる。

顔に当たれば、二度と見れない顔になるから恐ろしい。

私は少佐にどうするか視線を送ろうとしたが、止めた。

ここで下手に動けば居場所を自分から教える事になる。

ここはあくまで動かずにやり過ごすのが良い。

私は４人が行くのを待ち続けた。

「この方角から狙撃されたと大尉は言っていた」

４人の１人がここから狙撃されたと言い、虱潰しに探せと命じる。

『今度からは、狙撃した場所とは別のルートで逃げよう』

私は頭の中でメモを取り、それを記録した。

４人たちの気配が散らばる。
そしてかなり距離が出た。
だが、まだ動かない。
敵が気配を消しているのかもしれない。
それにまだ距離があるとは言え、敵が居る事を考えれば下手に動かない方が妥当だと思ったからだ。
私は身動き一つ取らずに気配を探り続けた。
１時間ほどだろうか？
それ位してやっと動いた。
少佐はギリー・スーツを纏ったまま膝を着いて周りを警戒した。
「さぁて、これで訓練は終わりだ」
少佐は煙草を銜えて火を点けた。
訓練場へ戻るとそこにはミーシャ大尉とイーグル１等軍曹が煙草を吸い合っていた。
「ご苦労様。少佐」
ミーシャ大尉は氷の女王を地面に捨て、靴底で揉み消して少佐に労

わる言葉を投げた。

「あぁ。どうだった？もやしの腕前は」

「上出来だね。これが証拠」

ミーシャ大尉は箱を見せた。

その箱には1発の小さな穴が開いている。

「大したもんだよ。坊ちゃん。スコープ無しでど真ん中に命中させるんだから」

イーグル1等軍曹が私に近付いて煙草を勧めてきた。

「姐御のような煙草じゃないから安心してくれて良いぜ？」

イーグル1等軍曹は私を安心させるように笑った。

煙草を銜えて火を点けてもらう。

そして煙を吸うと、何だか凄く身体が熱くなった。

な、何だこの味は？

「どうだい？身体が燃えるように熱いだろ？」

「な、何ですか？この煙草は？」

「俺の国では“燃える女”と言ってな。激しく女と・・・ぎゃあ

！！」

説明をする途中でイーグル１等軍曹はミーシャ大尉に拳を打ち込まれ、強制的に気絶させられた。

「お前の説明だと坊やが駄目になるんだよ」

ミーシャ大尉は吐き捨てるように言うと私から煙草を奪い取り、イーグル１等軍曹の開いた口に放り込んだ。

「ふがあ！！」

当然か？

イーグル１等軍曹は口の中を抑えて走り回った。

「坊や。お前さんは少佐の煙草を吸いな」

それが私のような者には一番だ、とミーシャ大尉は言った。

私もそれに頷き、少佐から女神の抱擁を貰って吸った。

やはり、これが一番だと改めて思う私だった。

幕間：かつての戦友（前書き）

ブレイズさんとのコラボ小説です！！

ちゃんと出来たか心配です・・・・・

どうか寛大なお心で読んで下さい。

幕間：かつての戦友

私は史記を書いている途中で休憩を挟んだ。

空を見上げて少佐が話してくれた、かつての戦友・・・“猟犬”を思い出した。

何処までも追い掛けて獲物を確実に牙と爪で仕留める。

その者と少佐はかつて背を預け合い、戦を掛け抜けた仲だった。

私は会った事が無い。

だが、死後に会えると思う。

私は少佐が話してくれた時の事を思い出した。

その時の少佐は煙草を蒸かしながら、何だか遠い目をしていて何かを懐かしんでいるようにも見えた。

私は好奇心から少佐に尋ねた。

「少佐、何を考えているんですか？」

「あいつ・・・“猟犬”はどうしているかな？、と思ったんだ」

「猟犬？」

「あいつの異名だ」

狙った獲物は何処までも追い掛けて仕留め、その凄まじい実力から名付けられたらしい。

「まぁ、猟犬にも種類があるんだが・・・あいつを例えるならハウンドだな」

「はうんど？」

「そうだ。獲物を追跡する際や追い詰める際に用いられ、鳥を狩猟する時に用いる猟犬に比べて獲物の発見や回収に優れているんだ」

そしてそれを二つに別けると視覚と嗅覚らしい。

「あいつは両方を持ち合せた最高の猟犬だ」

「歳は幾つ何ですか？」

「俺より若い。まだ２０代だ。まぁ、俺より先に傭兵になった点で言えば先輩だな」

「どんな方だったんですか？」

私は興味が沸いて詳しく訊いた。

「簡単に説明するならオール・マイティーで、自分を客観視できた」

例え自分が傷つこうと、慌てずに冷静に判断できたようだ。

「その方とは何処で会ったんですか？」

「アジア方面の国でな。俺が傭兵になって、結構な年月を経た時だ」

少佐は昔を思い出すように話し始めた。

―

俺は鬱蒼とした密林の中を音を立てないように進んでいた。

ＡＫＭアサルトライフルのライフルスリングの金属部分には下手な音が出ないようにガムテープで止めている。

色が反射しないように鑢で削ったから音は出ないし、反射もしない。

今、俺は一人で敵を追跡している。

本当なら４人でチームを組むんだが、生憎と司令官の覚えが悪いのか俺には誰ひとりとして回されなかった。

お陰で寂しく追跡中だ。

煙草を無性に吸いたくなったが煙草なんか吸えば１キロ先の敵にも解かる。

だから、この任務が終わるまでは駄目だ。

ヘビー・スモーカーの俺には地獄だがな。

出来るだけ草木を折らないように進んでいると、何かを感じた。

「・・・・・・・・・・」

俺はそこで止まり、気配を探ってみた。

向こうも俺に気付いたのか或いは気付いていたのか気配を消した。

心の中で舌打ちしながら、相当な奴だと感じる。

気配を消すなんて並大抵じゃない。

となれば、プロだ。

大人数で無い事を祈りながら、俺はそこに座り待つ事にした。

下手に動けば、相手に自分の位置を探られる。

だから動かないで待つのが最良だ。

要は我慢比べだ。

密林の中は熱い上に蚊や蛇なんかもウジャウジャ居る。

そんな所で我慢比べなのだから運が無い。

俺は汗を掻きながらも待ち続ける。

相手の気配を感じないから向こうも待っているに違いない。

武器は何か？

この国なら中国製のＡＫ、ライセンス生産されたＭ１６の他にＨ＆ａｍｐ；Ｋなんかの高級品もある。

だが、Ｈ＆ａｍｐ；Ｋのライフルはここではｇ３位だ。

まぁ、伸縮式ストックなら話は別だが、少なくともこの国では伸縮

式ストックは無い筈だ。

今までは・・・・・・・・・・・・

相手がどんな武器なのか知る事が出来れば対処法も考えられる。

俺が持っているのはＡＫＭとコルトＭ１９１１Ａ１、それとナイフが１本。

手榴弾の類いは無い。

そして狙撃銃も持ち合わせていない。

こいつはＡＫ－４７に比べれば安定性がある。

４７だと反動が強過ぎて１発目を交わせば、後は鳥を撃つからだ。

だが、４７ではなくＡＫＭか７４だと不味いな。

こちらだと反動を抑える術が出来ているから、そう簡単にはやられない。

いや、プロなら例え４７だろうと上手く使いこなせるだろう。

俺はどれだけの力を持つプロなのか気になりながらも待ち続ける。

所が、運は向こうに行ってしまったようだ。

俺の眼の前に敵が現れた。

しかも４人も。

武器はＭ１６のカービン型でＸＭ１７７とＨ＆ａｍｐ；Ｋ　Ｇ３Ａ４だった。

伸縮式ストックのＧ３だ。

相手は俺を見ると銃口を向けてきた。

引き金に指が掛ろうとしていた。

糞ったれが！！

心の中で罵倒して俺は直ぐに横に移動した。

その間際に何発か相手に撃ちこんでやった。

相手が悲鳴を上げる。

俺は藪の中に入り、走り出した。

アジアの傭兵はアフリカに次いで余り質が良いほうではない。

厄介なのはそれを補佐する為にやって来る国の兵隊だ。

アフリカならキューバなどだ。

アジアなら中国辺りが妥当だろう。

現にこの国にも中国の兵隊が送られていると耳に入っている。

だが、恐らくは非公式の使い捨てだと思うが。
冷戦みたいに大ぴらに正規軍を送られないからな。
今の時代は。
そして先ほどの奴は中国の奴かもしれないな、と俺は思った。
密林の中を走り、相手を引き離してからギリー・スーツを着たまま俺は前に倒れ込み、動かなくようにした。
その上を奴らが通り過ぎる。
人数が3人に減っていた。
恐らく俺が撃った弾で一人は減らしたんだろう。
3人なら何とかなる。
一人一人・・・静かに確実に葬れば良い。
俺は相手が行くのを待っていたが、奴等は俺の前で後ろから血を噴き出して倒れた。
3人のうち1人が俺の眼の前に倒れた。
額には小さな穴が1個、空いている。
『“山猫”か』

山猫ってのは、この国ではスナイパーを表している。

だが、こいつらを殺ったって事は味方か？

俺は考えたが、確答する奴が居ない。

俺の居る軍には狙撃が出来る奴は居ても、それを専門にする奴は居ない筈だ。

となれば、新たに雇われた奴か或いは狙撃が出来る奴だな。

ただし、味方とは限らない。

敵を倒したからと言って味方なんて断言できる程、俺は甘くない。

味方でさえ信じられないのが戦場だ。

俺の経験上、味方によって“戦死”させられた奴なんて五万といるからな。

相手が使っているライフルは・・・弾が出る音が金属的な音から察して、ドラグノフＳＶＤを使っているな。

だとすれば、この距離から計算して８００メートル以内に居る。

そして弾の当たり具合からして木の上に居るな。

俺は視線を上にやり、見える範囲で確かめてみた。

だが、直ぐに止めた。

どうせ今頃は女でも抱きに行っている筈だ。

何時までも同じ場所に居るほど馬鹿じゃない。

ただし、女を抱きに行かずに何処かに居るかも捨てられない。

・・・・暫くは、ここに居るのが良いな。

俺は熱い中を何時間も同じ姿勢で待つ事にした。

――――――――――――――――――――

―　―　―　―　―　―　―　―

俺はＰＳＯ－１スコープから右目を逸らした。

「敵に追われている所を考えると味方か」

最初は偵察を任されて密林を進んでいたが、思わぬ敵兵との遭遇線で俺を抜いた奴らが死んだ。

仕方無く俺は一人で偵察を続けてきた訳だが、気配を感じ取り足を止めた。

誰だ？

敵か味方かは会わないと解からない。

特にこの密林では見つかる相手も簡単には見つからない。

まぁ、アジアだから密林がやたらと多いんだよな。

俺はそっと息を吐き、相手の気配を探ってみた。

だが、次の瞬間には相手の気配が消えた。

・・・どうやら相当な奴だな。

俺も気配を消した。

そしてそこで止まり、相手が動くのを待った。

こちらから動けば相手の照準に自分の“笑顔が撮られる”。

写真じゃないが、相手が狙撃手だとすればスコープ越しには獲物は笑顔で居るだろう。

俺は肩に掛けていたドラグノフＳＶＤを見て、もし相手が狙撃手ならカウンターが出来る距離まで近づかなければならないと思った。

ドラグノフは１５００ｍだが、実際は８００ｍ位が妥当だ。

もし、相手がドラグノフより精度が高いボルトアクション式だとすれば、かなり苦しい。

だが、相手がどんな武器を使用しているのか、そして狙撃手なのかも分からなければ話にならない。

俺はずっと相手が動くのを待ち続けた。

密林の中はサウナ並みに暑いから堪ったものじゃない。

それでも動けば殺られるのは必定だ。

まさに我慢比べだ。

どちらの我慢が勝つかで・・・生き残れる。

俺は相手が動くのを待ち続けた。

どれ位、待ったのかは分からない。

まだなのか？

俺は自身の苛立ちを叱咤しながら、待ち続けていると別の気配を感じた。

気配は４人。

ガチャガチャ、と煩いライフルスリングの音で分かった。

音を出す辺りからして二流か、正規軍だな。

プロなら音を出さないし、出さないように手を打つ。

こんな初心者コースもマスター出来ない奴なら二流か正規軍だ。

ここの国の状況を鑑みれば・・・中国辺りか。

だとすれば武器は、中国製のＡＫかこの国でライセンス生産されたＭ１６だろうな。

Ｈ＆ａｍｐ；Ｋなどもあると聞いたが、少なくともまだ前線には配備されていない筈だ。

４人の気配は俺の居る場所からかなり離れている。

その気配の先には、プロと思われる奴が居る方向だ。

俺は動かずに様子見をする事にした。

奴の気配がしたと同時に数発の銃声がした。

ＡＫの音だ。

そして断末魔の叫び声がした。

一人分で残りは３人。

・・・一人消したか。

味方か。

俺は木の上に登ってドラグノフＳＶＤを構えた。

太陽には背を向けている。

ギリー・スーツを着込み、ドラグノフＳＶＤ自身にも茶色の布などを巻いてカモフラージュしているから簡単には解からない筈だ。

ＰＳＯ－１スコープから音のした方角を覗き込むと、スコープ越しに中国兵と思われる格好をした３人組が見えた。

あの格好と情けない顔を見ると・・・Ｃ級部隊か。

中国の軍は世界的に見ても多い。

それをA、B、Cで別ける。

Aは言わずと知れたトップクラスだ。

装備も勿論だし、実力もな。

Cは大戦期の武器などで、実力もC級だ。

恐らくこの国は大して価値が無いのか、または実力を高める為に送り込まれたか・・・・・・・・・

どちらにせよ・・・今から死ぬ奴には関係の無い事、か。

俺は引き金に指を掛けて、軽く引いた。

耳元で金属音が3回する。

ドラグノフは他の狙撃銃の銃声に比べて金属音だ。

だから、音を聞けばドラグノフだと解かる。

3人の額に命中し、弾は頭を貫通し後ろをザクロのように弾けさせた。

俺は直ぐに木から下りて消える事にした。

今の狙撃で居場所が知られたし、今の内に消えるのが妥当だ。

無駄な戦いは極力しないのが生き残れるコツだ。

俺は密林の中に消えた。

幕間：戦友との出会い（前書き）

コラボの二段目ですので、宜しくお願いします！？

幕間：戦友との出会い

俺は野戦陣地へと戻った。

野戦陣地は塹壕で、上からは木の板などで補給されており更に草木などを被せて飛行機などからは解からないようにカモフラージュされている。

塹壕の入口で止まり、ここでのコード・ネームを名乗った。

「鷹だ。偵察から戻った」

すると入口が開いた。

入口に入り塹壕の中を進んで行き、自分に与えられたスペースへと行く。

塹壕の中は水が溜まり易いから日に何度もバケツなどで水を汲み取り外に捨てなければならない。

更に排泄物などもあるから、それ専用の穴もある。

だが、溜まると臭いが充満して耐えられるものじゃない。

だから、ここも水と一緒に定期的に土を被せて新しく掘らなくてはならない。

まったく面倒だ。

俺は木の板が付けられた地面に腰を降ろして煙草を取り出した。

女神の抱擁と呼ばれる煙草で何故か俺の行く所、必ずこれがある。

今ではこいつが一番だ。

俺が銜えて火を点けようとしたが、生憎とオイル切れだった。

舌打ちを漏らしながらも、塹壕の中で助かったと思う。

もし、偵察中に火を起こさなければならない事態に陥ったら、どうなっていた事か・・・・・・・・・

俺は誰かに火を貰おうとしたが、誰も火を持っていない。

これでは煙草が吸えない。

諦めようとした時だった。

「火だ」

横から火が差し出された。

俺はその火を煙草に点けながら煙を吐いた。

火を差し出した相手を見る。

相手は俺と同じ日本人と思われる容姿でまだ２０代と言った所だろう。

迷彩服に身を包み、ＡＫ－４７とドラグノフＳＶＤを持っていた。
それを見て俺は確信めいた口調で相手の異名を言った。
「・・・“猟犬”か」
「俺を知っているのか？」
奴は俺の言葉に驚いた顔もせずに訊き返した。
「あぁ。噂で聞いた事がある」
狙った獲物は逃がさず、何処までも追い掛けて仕留めた上で主人に届ける戦場の猟犬。
そいつの名は、ショウ。
ショウ・ローランド。
「どうだ？違うか」
「正解だ。俺もあんたの事は知っているぜ？“ノーライフ・キング”」
ノーライフ・キング・・・不死身の王と言う名を持つその傭兵は１匹狼で、死ぬと思われる攻撃にも生き残る男。
それが俺の渾名だ。
「どうだい？」

「・・・正解だ。だが、不死身なんてのはこの世に在りはしない」

誰だって死は訪れる。

それが平等だ。

だから、不死身の王なんてのは居ない。

「そりゃそうだ。まぁ、何はともあれ会えて嬉しいぜ。俺はショウだ。あんたの名は？」

「鷹見徹夜だ」

俺は自分で考えた名前を教えた。

外人部隊に居た時の名前もあるが、俺はこちらを使用している。

何故か？

こっちの方が俺は好きだからだ。

外人部隊から与えられた名前も気に入ってはいるが、やはり自分で考えた名前の方が俺は好きだ。

「鷹見徹夜か。良い名だな」

「そいつはどうも。それと火、ありがとよ」

「気にするな。俺も煙草を吸うんで差し出したまでさ」

猟犬・・・ショウは煙草を銜えながら笑った。

煙草の銘柄は“天国に一番近い煙草”だった。

まぁ、ちゃんとした名前はある。

ラッキー・ストライクだ。

何で天国に一番近い煙草なんて有り難くも無い名前を頂戴したかと言えば、癌になり易いと思われていたからだ。

今はそんな事は嘘だと解かっている。

と言うか、煙草自体が癌になり易いから別に天国に一番近くもなんともない。

「あんたが吸っているのは・・・女神の抱擁、か」

ショウは俺の吸う煙草を見て眼を細めた。

「あぁ。どうもこいつとは縁があってな」

「そうか。俺も一度だけ吸ったが、女神に抱き締められるってのはそういうものだろう、と錯覚するような味だな」

「こんな“パンツにデカイ物が溜まった”ような場所では女も居ないからな」

だから、これを吸えば女を抱いたと言う錯覚が覚えられて変な真似

をしない。

「パンツにデカイ物が溜まった、か・・・・中々洒落た言葉だな」

皮肉気に笑うショウ。

俺より若いくせに随分と暗い笑みを浮かべるな。

まぁ、傭兵なんていう職業なんだ。

大抵の奴等は碌な人生を歩んでいない奴等だ。

だから、こいつもそんな奴等の一人だろう、と俺は考えていた。

「所であんたは1匹狼として傭兵をしているが、仲間は居ないのかい？」

ショウが俺に問い掛けた。

「仲間、ねぇ・・・悪いが俺には無縁だ」

仲間は“居た”。

外人部隊の時だ。

だが、今は居ない。

傭兵になってからは誰とも組まず、組まされずに俺は生きてきた。

元々、孤独な俺だ。

仲間が居なくとも生きていける。

それに一人の方が気楽で良いし、万が一の事も考えると変に期待感や安心感も無いから良い。

「お前さんは、確か海兵隊の奴とコンビを組んでいたな？」

「あぁ。今はあんたと同じ一匹狼だがな」

「そうかい」

俺は煙草を銜えて塹壕の奥へと消えた。

別に何処に行こうという訳ではない。

ただ、ショウの後ろから俺を嫌っている司令官が来るのが見えたから奥へと消えるだけだ。

— — — — — — — — — — — — —

— — — — — — — — — — — — — — — —

俺は偵察から帰還して塹壕の中を歩いていた。

この塹壕は俺が雇われた反政府軍のゲリラが築いた前線基地だ。

俺ら傭兵は常に前線に立たされる。

そして背後からは味方の兵から銃口を向けられている。

酷い扱い方だと思うだろうが、これが傭兵の生活ライフだ。

塹壕の中を歩いていると一人の男が煙草を銜えて彷徨っているのを発見した。

誰だ？

俺は首を傾げたが、男のナイフを見て正体を知った。

フランス外人部隊出身の１匹狼の傭兵。

異名は不死身の王。

何とも大袈裟とも言える渾名だと俺は最初こそ思った。

噂では対戦車砲を基地に撃ち込まれて、その場の全員が死んだのに奴だけは生きている、なんて冗談とも言える噂ばかりだったからだ。

だが、実際に見てみると奴の気配などから噂も強ちではないと思う。

これでも修羅場は潜り抜けてきた身だ。

だから相手がどんな奴かは見て分かる。

奴は、間違いなく一流と言えるクラスに位置している。

俺は奴に近付いて火を差し出した。

奴は煙草に火を点けて俺を見てきた。

鷹のように鋭い視線が俺を射抜く。

そして口を開いた。

「・・・“猟犬”、か」

俺の渾名を奴は言い、煙を吐いた。

「あぁ。あんたは“ノーライフ・キング”だろ？」

俺は奴の渾名を言った。

奴は煙を吐きながら固定した。

お互いこれが初対面だが、サラリーマンみたいに名刺を交換したりしない。

ただ名乗り合い挨拶をするだけだ。

それだけで相手の力量などを知る事が出来る。

俺を鍛え上げた男は以前、こう言った。

『傭兵の真の実力ってのは相手の装備を見れば一目瞭然だ』

手榴弾、拳銃、ナイフ、などごっちゃごっちゃに凝り固めた奴は二流も良い所だ。

真のプロなら支給された物で満足し、足りない物は工夫して補う。

奴の格好は到って普通だ。

迷彩服に帽子、拳銃とナイフ、アサルトライフルは基本装備と言える。

武器はＡＫＭとコルト。

この国では割と高級品だ。

ライセンス生産されたＭ１６や中国製のＡＫは本場に比べて質が落ちる。

だが、闇市などで売買されているのは中国製が大半だ。

本場の物は簡単には出回らない。

仮に出回ったとしても、高い。

奴の持っているＡＫＭは何と本場の製品だ。

どうやったら手に入れられたんだか・・・・・・・・・・

まぁ、俺の場合は海が近かったから別々に輸送して持って来たが。

コルトもまた本場の製品だ。

かなり使い古されていたから、前任者が居たんだろうな。

そんな事を考えていると奴は俺の名を訊ねてきた。

俺は自身の名を名乗り、相手の名を問うた。

「鷹見徹夜だ」

煙を吐いて、溜まった灰を指で落とすノーライフ・キングこと鷹見徹夜。

随分とドスの効いた名前だと思う。

そして良い名だとも思ったが。

俺は煙草を銜えて火を点けた。

奴の煙草は何か？と思い、見てみると・・・・・・・・・・・・

女神の抱擁だった。

何処で作られ、どれ位で売られているのか、全てが謎に包まれた煙草だ。

どう言う訳か戦場ではよく見る煙草だ。

俺も吸ったが、どうもしっくりと来ない。

それに俺には「天国に一番近い煙草」という異名をとる煙草の方が性に合う。

そして奴はこう言った。

『こんなパンツにデカイ物が溜まった場所にはちょうど良い』

洒落た言葉であり、的を射た言葉だと思う。

戦場だと血生臭いイメージを持つだろうが、戦いが無い所だと本当に退屈以外の何でも無い。

だから、“暇つぶし”に人間的当てや強姦なんかが起こるんだよ。

それらは傭兵ではなく正規軍がよくやる事だ。

傭兵は嫌われ者だ。

それを更に嫌われるような事をするほど馬鹿じゃない。

それなのに俺らばかり悪者扱いされるんだから酷い話だ。

まぁ、それが傭兵というものだが。

俺はそれとは別の質問をした。

「あんた、仲間は居ないのか？」

俺が知る限り、こいつは仲間や相棒と言った奴が居ないと聞いている。

誰とも組まず、常に一人で動き、戦っている。

普通なら最低でも４人１組で行動する筈なのに。

「生憎だが・・・俺には無縁だ」

奴は灰を捨てながら答えた。

そして奴は俺に背を向けた。

「じゃあな。猟犬」

「あぁ。お互い死なないように気を付けようぜ？」

「そうだな」

そう言って奴は塹壕の奥に消えて行った。

俺は煙草を吸いながら背後から近付いて来る男の気配を感じた。

「何を突っ立っている。傭兵が」

酒臭い声を出して俺を見るのはビール腹の中年男だ。

俺の雇い主の部下で、ここを指揮する男だ。

階級は大佐と聞いているが、どうせ金で買った地位だろうと思う。

もし、一兵卒として戦場に出れば下士官にもなれないような男だ。

俺ら傭兵を侮蔑の眼差しで見ては扱き使う。

そして自分は後方で酒を飲み、女を飽きるほど抱く。

大した大佐殿だ。

俺は横に移動した。

奴は鼻で笑って塹壕の隙間から外を見た。

「あまり近くで見ない方が良いぜ？」

俺は煙草を吸いながら忠告した。

恐らく俺が仕留めた４人の敵討ちとばかりに敵は攻撃を仕掛けてくるだろう。

だから、下手に覗かない方が身の為だ。

だが、その忠告は徒労に終わった。

何せ、忠告した時点で奴は頭から血を噴き出して倒れたんだからな。

「・・・だから言ったろ?近くで見ない方が良いと大佐殿」

俺は吸い掛けの煙草を赤い水の中に放り込んで死体となった大佐に呟いた。

答えはもちろん無い。

まぁ、答えを期待した訳ではないが、な。

幕間：縁があれば（前書き）

コラボ3話を更新します。

無難にまとめた積りですが、何かあればメールを下さい。

一応、番外編で改めて書く積りなので、ご勘弁の程をお願い致します。

幕間：縁があれば

私はそこまで聞いて息を吐いた。

何とも凄い話だ、というのが正直な感想だ。

そして続きが猛烈に気になった。

「それから少佐と猟犬殿はどうしたんですか？」

「1匹狼だった俺には珍しくコンビを組んだ」

短い間だが、少佐は良い相棒だったと語った。

「俺が突っ込み、奴がドラグノフで狙撃する。或いは逆もあった」

そして二人で数々の任務をこなしてきたらしい。

「だが、それも短い間だ」

その国で少佐と猟犬殿が居た反政府軍が敗れそうになったらしい。

そこから少佐は話し始めた。

――――――

「ちっ。ここも駄目か」

俺は塹壕からＡＫＭを乱射してぼやいた。

この国の内戦も終わりを迎えようとしている。

しかも負け戦だ。

まぁ、勝った所で俺らはお払い箱だが。

戦が終われば俺らみたいな奴等は要らない。

所が負け戦となれば話は別だ。

そんなお払い箱も使い道がある。

使い捨ての殿だ。

殿は死ぬ確率が高い。

だから、ここは俺らみたいな使い捨てを使用するのが一番だ。

その為か俺らは奴等が逃げるまでここで足止めをしている。

いや、させられていると言った方が正しいな。

もう殿をやって小一時間は経過した。

そろそろ俺らも良い頃合いだ。

「どうする？徹夜」

俺の隣でショウがドラグノフの引き金を引きながら訊いてきた。

ドラグノフから発射された弾丸が相手の眉間を撃ち抜いた。

地面に伏せる相手を踏み付けて敵は迫ってくる。

大した根性だ。

「どうするもこうするも俺らは使い捨てだ。だが、別に死ねとは言われていないだろ？」

殿をしろ、とは言われた。

だが、死ねとは言われていない。

要は自分達が逃げ切るまで時間を稼いで、後は好きにしろと言う事だ。

「まぁな。俺ら以外にもそれを考えている奴等は居るようだ」

ショウがチラリと横を見る。

俺も釣られて見るともう既に退却準備を始めた奴等が居る。

俺らも逃げる準備をしようとした時だった。

「お前と猟犬はここに残って殿をしろ」

傭兵を束ねていた男が俺とショウにここで殿をしろと言ってきた。

冗談きついね。

殿をやったのに、またやれと言うのか？

「俺らを残しててめぇらは逃げるのか？」

ショウが侮蔑の眼差しを男に向けた。

「当たり前だ。お前等は俺の部下じゃない」

確かにそうだ。

男の率いる傭兵部隊は男の部下だ。

だが、俺とショウは余所から来た者たち。

どうせ殿を使うなら、俺らみたいな余所者を使うのが効率的には良い。

「お前等ならあいつらを食い止められるだろ？この化け物どもが」

化物、か・・・よく言われるぜ。

俺は煙草を銜えながら自嘲してみせた。

どうしてか知らないが、俺の身体は常人より頑丈だった。

瀕死の重傷を何度も受けた事がある。

それなのに翌日には不思議と回復していたなんて冗談とも思える事があるからだ。

お陰で周りからは「化物」、「不死身男」、「人間兵器」なんて有り難くも無い名を頂戴していたからな。

だから、こいつが化物と言っても俺は微動だにしなかった。

「てめぇ、俺と相棒を化物呼ばわりするのか？」

ショウはヒップ・ホルスターから大柄な拳銃・・・デザート・イーグルを抜いて男の眉間に当てた。

男は軽く悲鳴を上げた。

そして部下達はライフルの銃口をショウに向ける。

「止めろよ。ショウ。そんな男に大事な弾を無駄にするな」

「徹夜。お前は化物呼ばわりされて嫌じゃないのか？」

「慣れているからな。それよりお客様が来ているぞ」

俺はＡＫＭアサルトライフルのマガジンを抜いて残弾数を確認した。

残り１０発。

マガジンの残りが３個、か・・・・・・

「俺を残すなら弾を寄こせ。どうせ使わないだろ？」

俺は煙草を吸いながら男に弾を寄こせ、と言った。

これだけでは殿をしろと言われても無理な話だ。

「弾くらいくれてやる。その代わり、俺らが逃げるまで足止めしろ」

死んでも守れ、と無茶な言葉を吐く男に俺は煙を吐いて答えた。

「好きにするさ」

男から弾を貰い、俺はマガジンに装填を始めた。

敵はもう直ぐだ。

だが、不思議と焦りは無い。

焦っても碌な頃は起こらない。

人生・・・なるようになれさ。

俺はマガジンに弾を込めてＡＫＭに戻し、レシーバーを引いた。

「さぁて、丁重にお客様を迎えるか」

俺は引き金を引いてお客様を出迎えた。

その横では男が部下達を率いて逃げて行った。

ショウは舌打ちをしながらもドラグノフを構えてお客様を出迎える。

―――――――

俺は徹夜と共に塹壕の中で徹夜の言うお客様を鉛玉でお持て成ししていた。

奴等に鉛玉を喰らわしても、屍を越えて突っ込んで来る。

まさに狂戦士とでも言えば良いだろうか？

死を恐れない奴ほど怖いものはない。

だが、逆に死を怖がるからこそ生き残れられるのも事実だが。

俺はドラグノフの弾が切れたので、ＡＫ－４７を地面に押し付け、その上から手で抑えて引き金を引いた。

ＡＫ－４７は反動が強いから１発目を除けば後は上に行く。

だからそれを抑える為に壁に押し付けたり、こうして手で抑えて反動を殺すんだ。

７．６２×３９弾が相手を蜂の巣にする。

しかし、敵は怯まずに撃ち返してくる。

塹壕に身を隠してやり過ごす。

「おい、徹夜。俺らはどうする？」

「どうするかねぇ・・・まぁ、なるようになれだ」

徹夜は煙草を吸いながら曖昧に答えた。

俺はそれを聞きながら射撃を続けた。

そして夜になった。

塹壕の外は屍と血の海で歩く場所も間々ならない。

俺と徹夜は煙草を蒸かし合っていた。

もう弾が無い。

あるのは拳銃とナイフだけだ。

最後の1発は自決用だ。

傭兵が捕まれば悲惨な末路しかない。

だから、皆1発は自決用にと多目に持っている。

「ショウ。お前、逃げろ」

徹夜は煙草を吸いながら俺に言った。

「お前は？」

「殿をする」

「相棒を見捨てて俺だけ逃げろと？馬鹿言うな。逃げる時は一緒だ」

「青臭い事言うな。一人で逃げる方が効率良いだろ？」

考えろよ、と徹夜は言った。

確かに一人で逃げる方が効率は良い。

だが、俺はライフルの弾が無い。

「弾ならある」

徹夜は最後の１個と思われるマガジンを俺に渡してきた。

「隠してたのかよ」

「持っていたんだよ」

徹夜は煙草を地面に捨て、靴底で踏み消した。

「どれどれ・・・おやおや、またお客様が来るぜ」

徹夜の言葉に俺は反応し、塹壕から見てみると・・・敵がこちらに近付いて来ているのが分かる。

「お前さんの命令とも言える言葉を聞くのは嫌だが、お言葉に甘え

させてもらう」

「そうしろ。その代わりと言っては何だが、お前の“彼女”を貸してくれないか？」

俺は渋面を浮かべた。

「お前に貸すと必ず傷つくんだけどな」

こいつとコンビを組んで短いが、一つだけ分かる事がある。

必ずと言って良い程、何かしらを壊すんだ。

俺のドラグノフに取り付けていたＰＳＯ－１スコープもこいつに貸して壊れた。

噂だと直ぐに物を壊す事から「テツヤ・デストロイヤー」なんて酷い渾名を頂戴したらしい。

強ち間違いではないが。

「堅い事を言うなよ。俺とお前の仲だろ？」

徹夜は道化染みた笑みを浮かべて俺に頼む、と言った。

ちっ・・・仕方無いな。

俺はホルスターからデザート・イーグルを抜いた。

「手荒く扱うなよ？愛しているんだからな」

デザート・イーグルを徹夜に渡す。

「優しくするさ。俺はベッド以外で女は泣かせない主義で知られているんだ」

「言ってろ・・・死ぬなよ？」

俺は徹夜にこんな糞貯めの場所には不似合いな言葉を言ってやった。

「縁があったら戦場で会おうぜ」

「あぁ。じゃあな。相棒」

「あぁ」

徹夜は短い返答をした。

そして俺は塹壕から抜け出して戦場から離れた。

その後、徹夜の消息は不明だった。

だが、何処かでまた会えると俺は思っていた。

俺らみたいな奴等は何処かで必ず会えるんだよ。

それが戦場の腐れ縁と言うものだ。

第四十二章：鷲ＶＳ小熊

私と訓練を受けている面々はイーグル１等軍曹と共に射撃訓練をしている。

今回は狙撃ではなくアサルトライフルで、だ。

私もアサルトライフルを撃っている。

山賊どもを一網打尽にした時に使用していたＡＫ－７４－Ｕだ。

折り畳みストックを伸ばして、射撃をしているとイーグル１等軍曹が口を開いた。

「アサルトライフルってのは中途半端なライフルだ」

イーグル１等軍曹は煙草を蒸かしながら私にアサルトライフルの事を説明した。

「イーグル１等軍曹が持っているアサルトライフルは何ですか？」

「そんな軍曹なんて付けないでくれ。ただのイーグルで良い」

「ですが、年上の方を呼び捨てでは・・・・・・」

「そうか？それなら好きなように呼んでくれ」

「じゃあ、イーグル殿」

「堅苦しいな。まぁ良い。で質問に答えると、俺のアサルトライフルは“コルトM727”通称、アブダビ・カービンだ」

「アブダビ？」

私たちは聞いた事の無い言葉に首を傾げるしかない。

「あぁ。噂ではアラブって言う国が特注で作らせた、と聞いている」

グリーン・ベレーに入隊して配属された場所が中東の国で、そこでこれを至急されたらしい。

「そうなんですか」

「あぁ。こいつはＡＫに比べて繊細だ」

確か、少佐もそれを言っていたな。

「ちょっとした汚れであっという間に作動不慮を起こす」

これを最初に使用して行った戦争ではジャムを起こして多くの兵が死んだらしい。

「噂だと安い火薬を使用したから、そうなったと言われている」

要は兵の命より火薬を取ったのだ。

「それが本当なら酷い話ですね」

私以外の面々も同感だ、と思っているのか憤りの顔を浮かべている。

「まったくだ。おまけに分解も面倒で新兵の頃は泣かされたぜ」

女を泣かせる事はあっても自分が泣く事はなかった、とイーグル１等軍曹は語った。

「別にそこまで言わなくても良いのでは？」

「酷いなー。もう少し人生を楽しめよ？その若さで爺になるつもりかい？」

「そんな気はないですよ」

私はイーグル１等軍曹の言葉に苦笑しながら、気になった事を訊いた。

「そんなに泣かされるようならライフルを何で使用しているんですか？」

「俺の好みだからだ」

何とも単純な理由だと思った。

「それにこいつはＡＫに比べて軽いし、集弾率も高い。だから、少佐の援護には向いていると思ったんだ」

私はこれには納得し、ＡＫ７４－Ｕの射撃を続けた。

イーグル１等軍曹はアブダビ・カービンを射撃し始めた。

思わず私たちはイーグル1等軍曹の射撃を見てしまう。

ストックを肩に当て、両手で保持して撃っている。

銃口の下には細長い物があり、銃身の上にはスコープが取り付けられている。

だが、ドラグノフに付けられているようなスコープではない。

一体、何だ?

コルトM727はAKより安定した射撃と命中率だ。

確かに見ていると、援護射撃などには向いていると思う。

デザインもAKより芸術性が高いように見える。

イーグル1等軍曹の背中には散弾銃がある。

徐にアブダビ・カービンから手を離すと、今度は散弾銃を背中から両手で持って引き金を引いた。

ストックは折り畳み式ストックだが、それを銃身の上に置いてある。

至近距離で撃たれた的は蜂の巣になった。

それを見てイーグル1等軍曹はスライドを引いて弾を排出した。

「・・・やっぱり、散弾銃では撃たれたくないです」

私は的を見て呟いた。

「俺もだ。だが、至近距離でならこいつに勝てる銃は無いぜ？」

イーグル1等軍曹は口端を上げて笑ってみせた。

笑うと2枚目の顔が更に輝いて見える。

少佐に比べれば男前だ。

だが、あの性格を知れば恐らく直ぐに女性は離れてしまう、と私は思った。

「いま俺の性格を思っただろ？」

「・・・何の事です？」

私はトボケた振りをしたが、イーグル1等軍曹は私に散弾銃の銃口を向けて続けた。

「その間が証拠だ。この野郎・・・・・・」

私は冷や汗を掻きながら、どうしようと思った。

その時だ。

イーグル1等軍曹の口に煙草の火が入ったのは・・・・・・・・・・

「むがっ！！」

二度目の体験にも関わらずイーグル1等軍曹は両手で口の中を抑えて走り出した。

「味方に銃口を向けるんじゃねぇよ。餓鬼が」

ミーシャ大尉が新しい煙草に火を点けながらイーグル1等軍曹を叱りつける。

だが、イーグル1等軍曹は聞こえないように走り回っている。

ミーシャ大尉の後ろではワイド様達が射撃訓練をしている最中だった。

使用しているライフルは64式自動小銃だけではなく、私たちが使用しているライフルだったり、サブマシンガンだったり、様々な種類だ。

「あ、ありがとうございます。ミーシャ大尉」

「良いって事よ。それよりあたしの事はミーシャって呼びな。大尉は作戦中で良いよ」

「では、ミーシャ殿で良いですか？」

「あぁ。坊やは礼儀正しくて良いね」

ミーシャ大尉は笑顔を浮かべた。

やはり笑顔は女性的で素敵だ。

「それはそうと、どうだい？コルトの射撃を見て」

「ＡＫに比べて命中精度と安定性がありますね」

「良い眼をしているね。だが、お前さんの持っているＡＫだって負けてないぜ？」

「確かにそうだぜ。坊ちゃん。しかし、姐御。少佐はまだ来ないんですか？」

イーグル１等軍曹は煙草の火から立ち直ったのか、少佐の事を訊いた。

「あぁ。プロイセンのおっさんと何やら話し込んでいてまだ帰って来ない」

「男二人で何を話しているんだか。俺には男より美女と仲良く話している方が楽しいぜ」

「そんな性格だから女が逃げるんだよ」

ミーシャ大尉は冷たい言葉を吐きながら、イーグル１等軍曹を殴り付けた。

「何するんだよっ」

「お前の顔を見ていて、ぶん殴りたくなっただけさ」

何とも酷い理由だ。

「あの、イーグル殿がコルトに装着している物は何ですか？」
私は彼を助ける積りで話題を変えた。
「あぁ。これは“フラッシュライト”と“ダットサイト”っていう物だ」
イーグル1等軍曹は私に視線で「サンキュ」と礼を言ってきた。
『いいえ。それより早く答えた方が良いですよ？』
私は視線で答えた。
「フラッシュライトってのは、懐中電灯を意味している」
「かいちゅうでんとう？」
「そうだ。暗闇でも光を当てられるから便利だ」
「だが、敵に発見され易い点があるがな」
ミーシャ大尉がここで欠点を述べた。
「姐御。少し黙っていてくれよ」
「本当の事を言ったまでだ。お前くらいだよ。銃にそんな昔の“思い出”を付けているのは」
「放っておいてくれ。それじゃ続きをするぞ」

イーグル1等軍曹はミーシャ大尉から視線を逸らして説明を続けた。

「こっちはダットサイトと言って、狙撃銃に装着するスコープではなく、小火器に使用するんだ」

アサルトライフルに最初から付けられている照準器よりも素早く狙いを定められるのが長所だと説明された。

「だが、高価だし物によれば壊れ易いなどの欠点もある」

ここでまたミーシャ大尉が欠点を言った。

「姐御。俺の説明を邪魔して楽しい？」

「楽しい」

即効で返答するミーシャ大尉。

イーグル1等軍曹はこれには頭に来たのか、睨んだ。

「・・・女に手を上げるのは、俺の主義に反するんだが・・・・“男”なら問題ないな」

「てめぇ、良い度胸じゃねぇか。このあたしにそんな台詞を言えるとは」

バチバチバチッ

と火花が散る音が聞こえてきた。

一発触発・・・・・・・・・・・・

まさにこんな状況の事を言うのだろう。

「今までは紳士として我慢して来たが・・・・もう我慢できねぇ」

「随分と短気だね。そんなんだから女の尻を追い掛けては馬に蹴られているのさ」

怒り心頭のイーグル1等軍曹に対してミーシャ大尉は到って冷静だった。

だが、瞳が冷たく、纏う気も氷のように冷たい。

先に仕掛けたのはイーグル1等軍曹だった。

蹴りをミーシャ大尉の顔にやったが、ミーシャ大尉はそれを右手で受け止めると、左手で蹴りを入れた足に拳を打ち込んだ。

諸に拳を打ち込まれたイーグル1等軍曹は呻き声を上げて離れたが、ミーシャ大尉はそれを見逃さずに突っ込んだ。

しかし、それを彼は予想していたようだ。

口端を上げて笑うとナイフを腰から抜いて、ミーシャ大尉の顔面を切ろうとした。

「甘いな」

ミーシャ大尉はまたもや右手で受け止めてみせた。

ガキッ

という鈍い音がする。

右手からは血が出て来ない。

どう言う事だ？

イーグル1等軍曹は舌打ちをして距離を取ろうとしたが、それを見逃さずにミーシャ大尉は喉仏に拳を打ち込んだ上に脇腹にも手刀を入れた。

「ガハッ・・・・・・・・！！」

口から泡を噴き出した。

その頭に肘打ちを入れて止めを刺した。

情け容赦ない・・・冷血冷酷の化身と謳われた空挺スペツナズに所属していたと本人は語っていた。

それが今、本当だと私は何だか納得した。

地面に伏せるイーグル1等軍曹を見下しながらミーシャ大尉はこう吐き捨てた。

「今度、あたしにデカイ口を叩いてみな・・・・命を取るぜ」

私たちはそれを聞いて、「この人を敵に回してはいけない」と思う

のだった。

第四十三章：将軍達の教育

少佐が戻って来たのは夕方になった頃だ。

「少佐。プロイセンのおっさんと何を話していたんだい？」

ミーシャ大尉が少佐を出迎えて質問した。

「兵たちの状況だ。後は将軍達の教育も頼まれた」

「将軍達の？」

ミーシャ大尉は首を傾げた。

プロイセン様は軍を治める将軍だが、その下にも何人もの将軍が大勢いる。

その将軍達の教育とはどういう事だろう？

「教育とは言った物だが、単に俺らのいた場所での戦闘などを聞きたいだけだ」

それで新たな知識を得たいという考えのようだ。

これはエドリアス様にも通じる。

訓練が始まってからはエドリアス様とは会っていないが、これを機にまた話し合いをしたいと少佐は言った。

まぁ、エドリアス様なら軍人たちの場だろうと喜んで行くと私は思う。

ミーシャ大尉はエドリアス様の事を聞いて「大した司教様だ」と言っていた。

傍から見ればそうだろう。

酒は飲む、煙草は吸う、おまけに知識欲が半端ではない。

良く言えば知りたがり、悪く言ってしまえば欲丸出しだ。

だが、私はそれを悪いとは思わない。

人間、何か欲しい物があると貪欲になるものだ。

私の場合なら狙撃をもっと極めたい。

だから、何時もこうして訓練に勤しんでいるのだ。

「なるほどねぇ。それで何時から?」

「明日からだ。俺はそちらに行くが、お前とイーグルでやってくれないか?」

「了解。坊やは二人で教えて良いですか?」

「あぁ。頼む」

そこで会話は終わった。

夕食の時間となった。

少佐は夕食の折りに珍しく酒を振る舞ってくれた。

コップ一杯分だが、兵たちは久し振りの酒を飲んで満足していた。

私は何故、酒を振る舞ったのか気になり訊いてみた。

「偶には酒でも飲ませないと鬱憤が溜まる」

それを解消する為に少佐は酒を振る舞ったらしい。

確かに、そうだと思い少佐は兵たちの事をよく見ているな、と思った。

ミーシャ大尉やイーグル１等軍曹は少佐のこういった所に魅力を感じて付いて来たのかもしれないな。

そして翌日から少佐は将軍達の教育に向かい、私たちの訓練はミーシャ大尉とイーグル１等軍曹が行う事になった。

とは言っても私と天馬騎士団の方はミーシャ大尉が見て、イーグル１等軍曹は獅子頭軍団と聖騎士団の方を見ている。

イーグル１等軍曹は不平不満を言いつつもちゃんと訓練をさせていた。

その一方で私たちはミーシャ大尉から偵察・斥候の説明を受けていた。

天馬騎士団の任務は偵察・斥候、そして連絡係であるが、ミーシャ大尉の説明には興味津々だった。

「あんた等は空からの偵察などが任務らしいが、地上での偵察・斥候も覚えて損は無い」

ミーシャ大尉は煙草を吸いながら説明を始めた。

「先ず少人数で動く事が大前提だ」

「質問しても良いですか？」

私は挙手した。

「何だい？坊や」

「はい。具体的にどれ位の人数で装備はどの程度でしょうか？」

「そうだね・・・４人がベストだ。まぁ、他国に潜入するなら現地人などを共にしても５人位が妥当だな」

装備についてはその地形に合った迷彩服を着込み、武器なども出来る限りは小型などが望ましいようだ。

私はその説明に納得した。

「あんた等は蛇などを食べた事があるらしいから、分かると思うが偵察・斥候は味方の援護が殆ど望めない」

何故なら敵陣に密かに潜り込むから味方の援護が望めないのだ。

「そういった所ではサバイバル技術が力を発揮する」

覚えておけ、とミーシャ大尉は言い私たちは頷いた。

「サバイバル技術で必要なのは知識と根性だな」

知識があればそれらを活かせる。

根性は例え一人になろうと絶対に諦めない不屈の精神だ。

「まだ訓練終了日まで3日ほどある」

その1日を使ってサバイバル技術を仕込む、とミーシャ大尉は言った。

私はそれに僅かに不安だった。

私だけが蛇を食べた事が無い。

だから、食べられるか不安であるし、誰も居ない森の中で一人で1日を過ごせるのかも不安だった。

「坊や。不安な気持ちは解かる。だが、そうなる事も考えな」

ミーシャ大尉は優しい声で私に語り掛けた。

国内の火種も考えると、いつ内乱が起きても不思議ではない。

そして内乱が起これば、私だってどうなるか分からない。
それこそ森の中などで一人、過ごす事になるかもしれない。
そうなってからでは遅い。
そうなる前に多くの知識や体験をして自分の血肉にしなければならないのだ。

「・・・やってみせます」

私は彼女の瞳を見て言ってみせた。

「良い顔だ。男の顔だ」

惚れそうだよ、とミーシャ大尉は言い、私は思わず顔を伏せた。
それを見た女性達が私を揉みくちゃにし始めた。
変な所まで触れられたので、私は思わず悲鳴を上げそうになった。
それをミーシャ大尉は笑いながら見ていた。
それとは逆にイーグル1等軍曹を始めとした男性陣の刺すような視線が背中に来る。
どうしてこんな状況にあるのに私にそんな視線を送るのか知りたい。
そして出来るなら代わって欲しい。

それが私の本心だった。

――――――――――――――――――――――――――

俺はプロイセンのおっさんを始めとした将軍達の前で自分が経験した事を話していた。

「・・・・・とまぁ、大体がこんなものだ」

話を終えた俺は煙草を銜えた。

「そうか。それでテツヤよ。どうだ？我が兵は」

プロイセンのおっさんが訊ねてきた。

「元が良いから吸収力がある。それに俺の訓練は2週間で一人前にする事を前提としている」

だから、元が良ければ直ぐに物に出来る。

そうでなくても、使えるようにはなる。

「そうか。そろそろ向こうも腰を上げる頃だ」

「火種が、か」

「あぁ。どんな手を使うかは分からないが、それでも用心に越した事は無い」

プロイセンのおっさんが言うと将軍達も頷いた。

「まったくですな。しかし、ゲンハルト殿を始めとした者たちは我らを“戦好きの乱暴者”と決めつけている」

「仕方あるまい。ガルバー様が起こした戦を我らは抑止する所か付き合ったのだから」

「しかし、国王の命令は絶対だ。それを拒否すれば我らは反逆者になるんだぞ？」

それを鑑みれば従わざる得ないのも同意できる。

だが、骸骨達から言わせれば先王に加担した者たちとして目の敵にされるのも無理はない。

そんな事を思いながら俺は無線を取り出して、ミーシャに連絡をしてみた。

「こちら鷹。どうぞ」

『こちら小熊。どうしました？』

「そちらの状況は？」

『もやしを皆で可愛がっております』

ランドルフを皆で可愛がっている・・・揉みくちゃにされているな。

俺は予感した。

あいつは女受けが良いからな。

煙草を指で挟んで口から離して煙を吐く。

「あまり虐めるなよ？」

ああいった年頃の男は傷つき易いからな。

『虐めてないですよ。ただ、触ったりしているだけです』

「そういうのをセクハラと言うんだぞ」

『女のセクハラは男にとっては嬉しい事だと思いますよ』

大した屁理屈だ。

だが、実際そうなのだから屁理屈でもないか。

「まぁ良い。俺も少ししたら行く」

『了解。では、これにて通信を終えます。オーバー（以上）』

「オーバー」

無線を切り、俺は戻した。

「便利な物だな。主のいた世界の道具は」

プロイセンのおっさんは俺の無線機を見て呟く。

「まぁな。だが、あんた等の世界では魔法があるだろ」

「そうだが、魔術師は簡単には育たん。それに時間が掛り過ぎるのだ」

「それはこっちも同じ事だ。特殊部隊・・・イーグルみたいな奴を育てるのには金と時間が掛る」

「そうなのか？」

「あぁ。俺のいた国には特殊部隊は居なかった。まぁ、それを匂わせる部隊は居たが」

「主が所属していた第一空挺団がそれか？」

「あぁ。だが、特殊部隊ではない。大体の特殊部隊なら空挺降下の資格は当然のように持っているからな」

「うーむ。それを作るとなると・・・金と時間が必要だな」

「時は金なり、と言うからな。だが、今はどちらも欠けている」

では、どうするか？

手っ取り早く兵を少し弄くり回して即応能力を持たせる以外に道は無い。

それこそ怪我は当たり前のように出るだろうが、怪我だけで済むならまだマシと言えるだろう。

「そうか。で、訓練は後どれ位だ？」

「2、3日だな。1日は外でサバイバルを仕込む」

「と言うと、蛇を食べさせたりするのか？」

「そうだ。駄目か？」

「いいや。しかし、兵たちが素直に蛇を食べるか・・・・・・・」

プロイセンのおっさんが言う言葉に将軍達も納得していた。

まぁ、大体の人間は蛇を食べたりしないから当然と言えば当然だな。

「なぁに。ナイフを1本だけ持たせて後は何も持たせない」

そうなれば嫌でも食べる、と俺は言ってやった。

食べるのを躊躇うなら食べるしかないような状況に追い詰めれば良いんだよ。

俺はそう心の中で言ってから煙草を携帯の灰皿に仕舞った。

第四十四章：サバイバル訓練

私は鬱蒼と生い茂る森林の中を歩いている。

現在、私は森林の中でサバイバル訓練を行っている最中だ。

明朝に起こされてブラック・ホークに乗せられてここに連れて来られた。

そして渡されたのはナイフが1本だけ。

後は無い。

少佐はこう言った。

『今から1日をここで過ごせ。ナイフがあれば事は足りる。明日、また迎えに来る。Ｇｏｏｄ　Ｌｕｃｋ』

そう言ってヘリで飛び去って行った。

これが最後の訓練だ。

きっと何かあるに違いないと思う。

今まで培ってきた事を全て出し切ってこの日を過ごさなければならない。

私はナイフを鞘に収めたまま道なき道を歩いては何か腹を満たしてくれそうな物は無いかと探していた。

だが、何が何だかさっぱり分からないので、困り果てている。

腹の虫が情けない音を立て鳴った。

今にして思えば朝から何も食べていない。

まさか、自分の足などを食う訳にもいかないから、食料となる物を探しているのだが見つからない。

どうすれば良いのだろう・・・・・・・・・・・・・・・

私は溜め息を零しながらも歩き続けた。

1時間ほど森の中を彷徨い歩いていると、地面に残された足跡を発見した。

かなり大きな足跡で猪だと解かった。

この近くに猪が居る・・・・・・・・・・

私は冷たい汗を掻いた。

猪の肉は美味いと聞くが、一人で仕留めるのは容易ではない。

しかも、この時期だと気が立っているとも聞く。

そんな猪と鉢合わせしたらどんな目に遭うか・・・・考えるだけで背筋が寒くなる。

生憎と私は猪を仕留めて美味しく食べるなんて、事をする勇気は持ち合わせていない。

だから、蛇など比較的小さな獲物を探したい所だ。

だが、それは徒労に終わる。

荒い鼻息が後ろから聞こえてきた。

ま、まさか・・・・・・・・・・

私は冷や汗を掻きながら背後を振り返る。

見れば猪が居るではないか！？

しかも、前足で土を蹴り何時でも突進は可能という有り難くも無い準備をしている。

ああ、どうして私はこんなに運が無いのだろう。

そんな事を嘆いている内に猪が突っ込んできた。

私は急いで避けたが、猪は横に曲がって私を狙ってきた。

思わない動きに私は驚きながらも避けようとした。

だが、腕を牙で抉られた。

「ぎゃあ！！」

私は悲鳴を上げて倒れそうになったが、左手でナイフを抜いて猪の眼にナイフを突き立てた。

猪は悲鳴を上げて私から離れ、森の中に消えて行った。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・た、助かった・・・・・・・・・」

何とか助かった事に安堵しながらも私は傷ついた右腕を見た。

迷彩服を破り血が滴り落ちる。

このままだと出血したままだ。

それに血の臭いを嗅いで狼なども来る。

私は何とかして傷口を塞ごうとした。

幸い、バンダナを巻いていたからそれを使う事にした。

バンダナを傷ついたに強く巻き付けた。

これで血を止める事が出来る。

それから右腕から滴る血を飲んだ。

自分の血を飲むなど考えられないが、今は喉が渇いてしょうがない。

だから自分の血を飲むしかないのだ。

自然とそれを考えると抵抗感は無くなり、指を舐めるまで血を飲ん

だ。

腕に巻いたバンダナを見て、取り敢えず応急手当は大丈夫だ。

しかし、定期的に緩めないと駄目だ。

私は血の付いたナイフを木の上に付いた葉で拭い取った。

そして鞘に収めて、血が飛び散った場所に土などを掛けて消した。

痛い右腕を抑えながら、また猪に会わない事を願った。

だが、まだ日は登っているからどうなるか分からない。

猪は夜行性だと聞く。

今は昼だ。

何で猪が昼間、行動しているのかは分からない。

夜になれば恐らく本格的に行動するに違いない。

私は痛い右腕を気にしないようにしながら、森の中を進んだ。

訓練は始まったばかりだ。

こんな傷で弱気を吐いては駄目だ。

それより先ずは新たな血肉となる物を探して食さなければならない。

右腕が鉛のように重たく感じて、ぶらんと垂れ下げる。

血が地面に落ちていないか下を見たが、落ちていない。

これで誰かに見つかる事は簡単には出来ない筈だ。

ふとここでワイド様達はどうしているのかな?と思った。

私は一緒に来ているワイド様達は大丈夫か?

私は気になりながら食料を探す為に森の中を歩き続けた。

ー ー

―――――――――――――――――――

私は一人、森の中を散策しながら食料となる物を探していた。

テツヤもとい少佐はここで1日を過ごせと言った。

『ナイフ1本あれば事は足りる』

つまりナイフ1本でここを生き抜け、と言う事だ。

だが、あのお男の言葉を真正面から取れば、ナイフ“だけ”で生き残れと言う事だ。

しかし、あの男の性格だ。

何か裏が在る筈。

例えばナイフに何か仕掛けがあるかもしれない。

私はナイフを抜いて上から下まで弄ってみた。

すると下の部分が回転させると取れる事に気付いた。

回転させて取ってみると、中から釣り糸、釣り針、マッチなどが最小限の数であった。

「・・・やはりな」

どうせこんな事だろうと思った。

あの皮肉屋で天の邪鬼な男の事だ。

ナイフに何かしらの仕掛けを施したとは思っていたが、こんな物を仕掛けていたとは。

まぁ、これで傷口を縫えるし、火も起こせる。

それを考えると有り難い事だ。

ナイフに出した物を仕舞い、歩きを再開した。

ナイフの事は解決した。

だが、きっとまだ何かある筈だ。

つまり例えば・・・・・・・・・・・・

私の後ろから縄が首に巻かれた。

こう言う事だ！！

私は縄を掴んで力任せに前に倒した。

迷彩服を着込んだ相手は前に倒れたが、直ぐに横からナイフを繰り出す相手が出てきた。

私は逃げる事にした。

２対１では分が悪い。

ここは逃げるが得策だ。

前なら戦っていただろうが、訓練を受けてからは逃げるのも手だと思う。

少佐は訓練の時からこう言っていた。

『相手が大勢いて勝てる見込みが無い場合は逃げろ。別に敵前逃亡は罪じゃない。勝つ為に、次なる戦いの為・・・生きて戦う為だ』

逃げる。

しかも敵を目の前にして・・・・・・・・・

これは騎士としてあるまじき事だ。

だが、少佐は無駄死にせずに戦い続けろと言った。

死は逃亡だ。

それは戦う事から逃げる事を意味している。

そう少佐は言い、何があろうと生き続けて戦うこそが本当の騎士であり戦士なのだ。

それを言われるようになってからは私は逃げるのも一つの手だと思う様になった。

だから、今回も逃げる事にした。

ナイフがあれば反撃も出来るだろう。

しかし、2対1では分が悪い。

それに仲間が来るかもしれない。

それを考えれば逃げるのが得策だ。

後ろから追い掛ける者の怒声と罵声が聞こえてくる。

私は走りながら何処かに身を隠せる場所が無いか探した。

いや、その前に追手を上手く撒かなければならない。

追手の足音は二人。

何とか撒けなくはない。

私は茂みの中などを走り回って追手を撒こうとした。

だが、追っ手もやり手だ。

私が撒こうとするのを分かっているのか簡単には撒かれない。

くそっ。

どうすれば良いんだ？

私は舌打ちをしながら走り続けた。

所が急に身体が宙に浮いた。

何だ?!

足から上に掬い上げられる形で宙に浮いたままだ。

足を見れば、草木などでカモフラージュされた縄が足に付いていた。

くそっ、まさか罠が仕掛けられていたとは・・・・・・・・・・・・・・・

不覚だ。

私は降ろされて拘束された。

第四十五章：尋問訓練（前書き）

尋問の内容はＴＶドラマ「Ｓ．Ａ．Ｓ．　英国特殊部隊」を見て描きました。（汗）
それから指摘がありましたので、多少の手直しをしました。

また何かあればメールを下さい。

第四十五章：尋問訓練

私は夜になってからやっと食事にあり付く事が出来た。

食べ物は蛇だ。

森の中を彷徨い歩いている内に蛇を見つけた。

食べるという事に些か抵抗感があったのは否めない。

だが、空腹の方が勝って蛇を食べる事にした。

蛇を捕まえて急いでナイフを抜いてで首を落とした。

それでも動いていたから怖い事この上ない。

考えてもみてくれ。

首を切り落としたのに、未だに尾がニョロニョロ動く所を・・・・・・

私は未だに動く、蛇の身体を見ないように目を瞑った。

息を吸って思い切り歯を立て蛇を噛んだ。

そして勢いに任せて引き千切り口にした。

口の中に強烈な臭いが来る。

だが、味は鶏肉で見なければ美味い。

空腹だったからではなく、本当に鶏肉の味で美味いのだ。

もし、こんな風に出されたら恐ろしくて食べられないだろう。

しかし、知らないで出されたら鶏肉だと思いそのまま食する事が出来るだろう。

蛇を食べる時に火は起こしていない。

つまり生で食べたのだ。

本当なら欲しい所だが、火を起こす道具などもないから仕方が無い。

蛇を食べた後は、何処か眠れる所を探す。

出来るなら上が良いと少佐は言っていた。

上なら変な害虫や害獣などに襲われる危険が余り無いし、敵にも見つかり難いからしい。

適当な場所を探していると、何か呻き声が聞こえてきた。

何だろう?

私は身を屈めて、そちらに行き茂みの中から覗いてみる。

木がある場所には裸でワイド様が括り付けられていた。

その傍にも何人かの兵たちが括りつけられていた。

捕まるとああなるのか・・・・・・・・・・・・

私は寒気がした。

誰かが来る気配を感じたので、身を屈める。

ミーシャ大尉が数人の天馬騎士団を連れて現れた。

そして捕まった者たちの前で止まると、尋問を開始した。

「・・・随分と小さな銃だな。それで女が抱けるのか？」

ミーシャ大尉はワイド様の・・・を見て冷たい声で呟いた。

ワイド様はそれを赤面して答えない。

・・・を女性に馬鹿にされては男として威厳も何も無くなる。

しかも精神的に追い詰める事が出来るだろう。

というか、少佐はそれを予測して敢えて尋問をミーシャ大尉に任せたのかもしれないな。

などと思いながら私は覗き続けた。

「名前は？」

「わ、ワイド・リブロ。聖騎士団・・・・・・・・・・・・！！」

最後まで言う前にミーシャ大尉がワイド様の頬を殴り、更に・・・を蹴り上げた。

ワイド様は呻き声を上げた。

そこへミーシャ大尉が頭を掴んで無理やり顔を上げさせた。

「誰が職名まで言えと訊いた?てめぇの口は○○○か?!」

聞きたくもない言葉を穿き散らし、更にワイド様を殴るミーシャ大尉。

ワイド様の口から血が溢れている。

見るに耐えない言葉と暴力を振うミーシャ大尉。

あ、あれが・・・尋問なのか?

殆ど拷問ではないか・・・・・・・・

何度も殴られたワイド様を見て、これ位で良いだろうと思ったのかミーシャ大尉は殴るのを止めて職名と階級を訊ねた。

「せ、聖騎士団に所属している・・・階級は団長だ・・・・・・」

ワイド様は顔を血で染めながらも答えた。

「結構だ」

ミーシャ大尉は煙草を銜えながら頷き、次の質問をした。

「ここには何しに来たんだ？人数は？」

「く、訓練をしに。人数は・・・ざっと３０人程度だ」

３０人・・・ワイド様は嘘を吐いたな。

実の所、ここに連れて来られたのは２０人程だ。

残りは別の場所に連れて行かれた。

だが、それをミーシャ大尉は恐らく知らないだろう。

となれば、敢えてここで嘘を吐いて人数を多くみせる事により牽制したのかもしれない。

「３０人の居場所は？」

「知らない・・・皆、別行動だ」

「そうか。お前等は捕虜だ。大人しくすれば寝床と飯は保障する。ただし、逆らえば命は無い」

冷たい声で断言したミーシャ大尉は同じように他の兵達に尋問をした。

捕虜になれば、あんな目に遭う。

しかも、尋問もされる。

少佐が確か言っていたな。

『捕まって拷問に掛けられたらどんな奴でも吐く。では、どうするか？』

“嘘と真実を織り交ぜて話して時間を稼ぐ”

この訓練はサバイバルだけでなく尋問の訓練もあるのか、と私は思いながら急いで離れた。

ワイド様には悪いが、一人で助けるにも装備が無いし、あの人を相手に勝てる見込みが無い。

今は、悔しいが我慢して逃げるしかない。

私は茂みから姿を消して森の中へ入り、どうするか考えた。

相手は私が見た限りでは5人。

しかもアサルトライフルなどを装備している。

ナイフ1本では勝てる見込みが無い。

それに恐らくまだ尋問を続ける事だろう。

先ずは様子を見てから考えるしかない。

私は茂みの中を進みながらそう思った。

一歩、前に足を出した途端に私は宙に浮いた。

足を見れば縄が結ばれていた。

罠か！！

私は急いでナイフで縄を切った。

腰から地面に落ちた。

い、痛い・・・・・・・・・・・

呻き声を我慢しながら急いでその場を離れようとした。

「居たわ！！」

こ、この声は・・・・・・・・・・

私は恐る恐る振り返ると、鬼ごっこで私を捕まえて連行した天馬騎士団の兵が居た。

「今日は逃がさないわよ。たっぷりと可愛がって上げるわ・・・・・・」

うっすらと唇を舌で舐める女性騎士。

私は直ぐに走り出した。

「待ちなさい！！坊やが居たわよー！？」

女性騎士は大声で私の存在を森中に知らせた。

私は走りながら何処か隠れられる場所を探したが、見つからない。

後ろを振り返れば5人に増えていた。

ひ、ひぃ！！助けて！？

私は悲鳴を上げながら夜の森を走り回った。

ー ー

――――――――――――――――

私は追手に捕まってから衣服などを剥ぎ取られた。

裸にされたのだ。

文字通り下着も無しで、連行されて木に括り付けられた。

寒い上に羞恥心で一杯だった。

暫くすると私と同じように数人の者が連れて来られた。

同じように木に括り付けられる。

そして私たちは寒い中、夜になるまで同じ形で強要された。

少しでも動くと何処からともなく現れた者が私たちを叩くからだ。

夜になると更に寒気がする。

火が欲しい所だ。

そこへミーシャという女性が天馬騎士団の数名を連れてきた。

恐らく尋問だろうな。

私はそれを直感した。

予想通り彼女は私たちに尋問を始めた。

『・・・随分と小さな銃だな。それで女が抱けるのか?』

ミーシャは私の下を見て、冷たい声で詰ってきた。

裸にされた上にこんな侮蔑を受けるとは・・・・・・・・・

精神的に追い詰められるのは確実だ。

『名前は?』

彼女は下から視線を上げて私を見ながら訊いてきた。

「わ、ワイド・リブロ。聖騎士団・・・・・・・・・・・!!」

私は正直に名前を答えて、職名も答えようとした。

少佐の説明で先ず“氏名、所属、階級、認識番号”などを答えろと

言われたからだ。

しかし、それを途中で途切れさせられた。

ミーシャ大尉に殴られたからだ。

更に大事な所を蹴られた。

強烈な圧迫感に襲われて、私は息も満足に出来ない。

そこへ更に殴られた上に罵倒された。

『誰が職名まで名乗れと言った。貴様の口は○○○か?その○○○を切られたいのか?!」

声を荒げて彼女は暴力と罵倒を繰り返して来る。

屈辱感よりも苦痛の方が強く、私は何も出来ずにされるがままにされていた。

ある程度、やったのか彼女は殴るのを止めて職名と階級を訊いてきた。

「せ、聖騎士団・・・階級は、団長だ・・・・・・」

言葉を選びつつ私は答えた。

それを聞いた彼女は煙草を銜えながら次の事を質問して来た。

『ここには何しに来たんだ?人数は?』

「く、訓練をしに。人数は・・・ざっと３０人程度だ」

私はここで嘘を吐いた。

本当は３０人ではない。

だが、ここは敢えて嘘を混ぜて敵に大勢いるように思わせた。

『３０人の居場所は？』

「知らない・・・・皆、別行動だ」

これは正直に答えた。

『そうか・・・・お前等は捕虜だ。大人しくすれば寝床と飯は保障する。ただし、逆らえば命は無い』

冷たい声で断言した彼女は同じように他の兵達に尋問をした。

こんな目に遭うとは・・・・思いもしなかった。

しかし、戦争ともなればこんな目に遭うのだろう。

そうなるとこの訓練は良い訓練だ。

などと考えながら寒さと屈辱感を誤魔化した。

ミーシャ達が消えてから私たちは息を吐いた。

「何時までも、この状態なんだろうな？」

一人の兵が小声で呟いた。

「少佐の事だから、１日中じゃないのか？」

『・・・・・・・・・・・・』

私たちは無言になった。

あの男の事だ。

恐らく１日中、というか迎えに来るまでこの状態を続けさせるだろう。

そう考えると何とかしてここから抜け出さなくてはならない。

私は後ろ手に縛られた両手を何とかして縄から抜けだそうとしたが、きつくて抜けそうにない。

足も縛られているから殆ど無理に近い。

溜め息を零すと、「坊やが居たわよ！？」という女の声がした。

坊や・・・ランドルフか！？

あいつ、見つかったのか。

それと同時にランドルフも悲鳴も聞こえてくる。

恐らく追い回されているのだろうな。

天馬騎士団の間ではランドルフはどうやら可愛がられてる様子だ。

それを思うと、捕まれば何をされるか・・・・・・想像できなくはない。

私は心の中で無事に逃げ切る事を祈りながらも自分も誰かに助けて欲しいと願わずにはいられなかった。

第四十五章：尋問訓練（後書き）

実際、敵に捕まり拷問を受けた事がある元ＳＡＳの隊員の回顧録では「尋問耐久訓練が多少なりとも役立った」と書かれています。

更に”ＢＩＧ　４”（氏名、所属、階級、認識番号の４項目。国際法で戦争捕虜が喋るべき内容として規定されている）のみを喋り、途中から一部真実を織り交ぜたウソ話をでっち上げて時間を稼いだ、とも言われておりましたので参考にしました。

第四十六章：臆病な男

翌日、迎えに来た少佐を見た私は急いで駆け寄って助けを求めた。

「少佐。助けて下さい！！」

少佐の後ろに隠れて叫んだ。

「何だよ？いきなり・・・・・って、なるほど」

少佐は驚きながら目の前に立つ天馬騎士団を見て納得した。

天馬騎士団の女性騎士は私をこちらに渡せ、と目で言ってきたのだから。

あれから私は夜通し天馬騎士団に追いかけ回されて眠っていない。

「訓練は終了だ。残念だが、もやしは保護するぞ」

「で、ですが、少佐。この坊やをまだ尋問を・・・・・」

「別に尋問を絶対にしろ、とは言っていない。尋問所かそれ以上の事をするだろ？」

少佐の指摘に女性騎士たちは言葉を濁した。

「お前ら訓練に私情を挟むな。今回は大目に見てやるが」

少佐、ここで変な仏心を見せないで厳罰を！！

私は目で訴えた。

「もやし。お前の気持ちも解かるが、少しは女に免疫を付ける面で言えば良い経験になると思うぞ？」

そ、そんなー！！

私は悲鳴を上げるしか出来ない。

そこへミーシャ大尉がワイド様達を連れてきた。

布を腰の部分に巻いているが、それ以外は何も無い。

惨めな姿だと思いながらも、もし自分があの状態だったら・・・・・何をされるか分からないと思った。

「さて、今日でサバイバルの訓練は終わりだ。これから城に戻り残りを過ごす」

それで訓練は終了だと少佐は言った。

私たちはヘリに乗り込み、城へと帰還した。

城へと帰還した私たちに少佐は嬉しい事を言ってくれた。

「今日は、お前等の事を考えて休みにしてやる」

今日は休みと言われて皆は歓喜した。

「ただし、明日にはまた訓練をするからその積りでな。余り嵌めを外すなよ?」

歓喜する私たちだが、少佐の言葉を聞き直ぐに頷いて敬礼をした。

そして思い思いの時間を過ごす事にした。

私はと言えば、先ず寝る事だ。

昨日は一睡も出来ずにいたのだから眠りたい。

だが、それは少佐もといテツヤ殿が許さなかった。

「ランドルフ。お前は俺と来い」

私は眠いんです。

お願いですから、眠らせて下さい。

と言いたかったが、そんな事を言っても無駄である事は解かっている。

だから、仕方無くテツヤ殿に付き合う・・・付き合わされる事になった。

酷い話だ。

私はテツヤ殿に連れられて、城の外に出た。

何処に行くのかと言えば・・・言いたくないが、売春宿だ。

以前、女を抱きたいとテツヤ殿が言っていたが色々とあり行けなかった。

だが、今日は行くようだ。

そこへイーグル1等軍曹も加わり3人で行く事になった。

「久し振りの女か。旦那。明日の朝までに帰れば問題ないんですよね？」

「あぁ。どうせお前の事だ。朝まで居る積りだろ？」

「正解です。だって、久し振りの女なんですから」

私はそれを横で聞いていたが、敢えて聞こえない振りをした。

こんな話、好き好んで聞きたくない。

「どうだい？坊ちゃんも」

「・・・私は、そんなふしだらな男ではありません」

「お堅い言葉だなー。それに女を抱く時は男がリードしないと駄目だぞ？」

これには私も些か興味が沸いた。

「あの、もし、出来なければ・・・・・・」

「まぁ、嫌われるは言い過ぎかもしれないが、余り好まれないんじゃないか？」

「まぁ強ち間違いではないのかもしれないな」

テツヤ殿もそれに同意した。

私はそうなのか、と思いながらもどうしようと悩んだ。

だが、結果を言えば・・・行かなかったと言っておこう。

今は眠いから寝る事を優先したかった。

宿に案内したら私は自由で、後は好きなようにしろと言われた。

私はテツヤ殿とイーグル１等軍曹を売春宿に案内した。

その宿は街の裏の方にあり、昼間でも如何わしい場所だ。

そこへ案内した私だが、見るからに・・・娼婦と思われる女性達に囲まれて揉みくちゃにされた。

口々に「可愛い」と連発された。

そんなに私は男として駄目なのだろうか？と思うほどだ。

危うく連れて行かれそうになったが、テツヤ殿に助けられて危機一発で助かった。

「お前は早く帰って寝ろ」

テツヤ殿に追い出されるように私は宿を出て、真っ直ぐに寮へと戻った。

そして泥のように眠った。

このまま寝ていたい所だ。

――――――――――――――――――――――――

―――――――――――――

俺はベッドに仰向けになり煙草を蒸かしていた。

久し振りの女は良かった。

イーグルは気に入った女に声を掛けたが、この店では女の気持ちも考えてくれるのか断られていた。

理由を上げるなら如何にも軽薄そうな感じなのが女の癇に障るのだろう。

そして仕舞いには追い出されて、別の宿に行った。

まぁ・・・多分、駄目だろうな。

俺はと言えば、この店の・・・いや、こういった仕事を営む女たちの中でも最高と謳われる女を抱けた。

何で分かるのか？

その女が現れると周りの女たちが傅き、敬うようにするからだよ。

何より身体から放たれる気がただの商売女ではない、と判断できた。

現れた女を見て俺は思わず煙草を落としそうになった。

何故か？

・・・・似ているんだよ。

背格好から年齢まで全てが似ているんだよ。

いや、似ているというより思わず本人では？と思ったほどだ。

身体から放たれる気も似ていた。

衣装は紺色の胸元と肩が露出したドレスを纏っていて、清楚な感じではなく・・・・妖艶な感じがした。

それは髪と瞳も同じだった。

花の髪が金なのに対して、こちらは銀だ。

銀と言えば、金以上に高潔であり清楚なイメージを浮かべるだろう。

しかし、この銀は高潔さも清楚も無い。

いや、あるにはあるがそれでいて男を惑わせる魔性の銀糸だ。

瞳の色もそうだ。

花が青い瞳なのに対して、こちらは紫だ。

青が清楚なのに対して紫は妖艶な印象を受ける。

まるで清楚な花が・・・・妖艶な花に生まれ変わったように俺には見えた。

固まっている俺に女は近づいて来て、こう言った。

「私を買って下さらないかしら?」

流れるような声で俺を誘うように手を差し出す女。

俺はこれを了承して手を取り中に入った。

白い肌に銀の髪、紫色の瞳には何の抵抗も出来ない。

寧ろ惹かれてしまう。

だが、何よりも貴族の出とも言える品格に俺は惹かれていた。

それが決め手だったのかもしれない。

その女は俺の隣に居る。

女は俺を横で見ていたが、ふいに口を開いた。

「ねぇ、貴方・・・誰かと私を重ねてなかった?」
女は俺の胸板を指で弄りながら問い掛けてきた。
微かに擽ったさを感じた。
「何でそう思うんだ?」
俺は煙草を蒸かしながら訊ねた。
「貴方の顔を見ている時が、私じゃない女を見ていると思ったのよ」
会った瞬間からそう思った、と女は続けた。
「女の勘、か?」
「えぇ。どうかしら?」
「失礼だと思うが・・・・当たりだ」
俺は嘘を吐かずに正直に答えた。
この女に嘘は通じないと思ったからだ。
「やっぱりね。別の女と重ねて見るなんて失礼にも程があるわよ」
「悪かった。だが、お前さんが似ているんだよ」
俺は女の銀糸を指で弄びながら謝罪した。

銀糸は流れるように俺の指から逃げてしまった。

きっと・・・花の髪もこんな風に俺が指で掴んでも逃げてしまうのだろうな。

掴んでみたいという願望はある。

だが俺には手の届かない花だと思い直す。

「ねぇ、私を重ねて見ていた女ってどんな女なの？」

女が興味を示したかのように俺に訊いてきた。

「気品に満ち溢れて、誰に対しても優しい。その上・・・瞳が濁っていない」

「貴方にとっては・・・手の届かない高嶺の花なのね」

女は整えられた唇から流れるような口調で断言した。

「・・・あぁ。俺みたいな・・・全身を血で染めた薄汚れた男では汚くて触れられないんだ」

「顔に似合わず臆病な事を言うのね」

女は俺の言葉を小馬鹿にするように嘲笑した。

「欲しい女性を目の前に何もしないなんて臆病ね」

女は二度も断言した。

臆病、か・・・確かに俺は臆病者だ。

この女の言う通り・・・好きな女一人の眼もまともに見れない程にな。

しかし、それとは別の事を言った。

「事実を言ったまでだ。俺には過ぎた女なんだよ」

俺は煙草を揉み消して灰皿に仕舞った。

「そうかしら?私を重ねて見ているほど貴方はその女に恋焦がれているのに・・・その女は気付いているの?」

「気付いてないだろうな」

そんな素振りを見せていないから当たり前だが。

「そうなの?でも、私がその女の立場なら夫が居ようと居まいと、そしてどんな身分だろうと貴方に付いて行くでしょうね」

貴方が来い、と言えば迷わず手を取り行くと女は断言した。

「嬉しい事を言ってくれるな」

「本当の事よ。だって、貴方を見ていると何だか全てを任せたい気持ちになるんだもの」

「俺にそれだけの魅力があるのか甚だ疑問だ」

「それは自分を過小評価しているからよ。もっと自分に自信を持ったら？」

女は俺の胸元に抱き付いてきた。

俺の胸に大きな二つの膨らみが来る。

温かくて心地よく・・・・そして正常に動いている鼓動も聞こえてきた。

「自信、ね・・・まぁ、持てるように努力する」

「そうしなさい・・・・それが出来ないなら、私が貴方を慰め続けるわ」

そして女は抱き付く腕に力を込めてきた。

俺は女を抱き締め返して、そっと唇に口付けを落とした。

幕間：暗闇の中で

1本の蝋燭が灯された薄暗い部屋の中で二人の男が会談をしていた。
うっすらと部屋を灯す中で、二人の男は小さな、しかし背筋が凍るような声で喋っている。

「そろそろ時期だな」

「はい。いよいよ決行の時です」

暗い部屋の中でも爛々と輝く緑色の瞳をした20代になる位の青年の言葉に、同じく薄暗い瞳をした男が頷く。

こちらは年齢が30代くらいで薄暗い瞳だが、底奥にはとてつもない狡猾な色が見え隠れしている。

ただし、決して目の前の青年に対して見せている狡猾ではない。
別の誰かに見せている。

「“奴等”はどうしている？」

「既に行動を開始しております」

「そうか。では、奴等の情報が入り次第・・・決行だな」

「はい。奴等が行動を開始したら我らが一同に決起します」

そして一気に首都へと攻め込み占領する。

「その時に、女王並びに王女などを亡き者にして、貴方様が正式に王位を継承するのです」

「その後、“奴等”を始末する手筈か」

「はい。事が成功したらもう用無しですし、“彼等”もあの者たちを疎ましく思っていますからね」

「あの者たち・・・底が計り知れん。元々、あの者たちが先に接触をして来たが・・・信用できると思うか？」

「正直に申し上げれば・・・信用できません」

素性もさることながら、あの者たちの眼が気に入らないと狡猾な色を見え隠れさせている男が断言した。

「あの者たち・・・“彼の国”からの使いと仰っておりました。それが本当だとしても、どうも胡散臭いです」

彼等が接触して来たのは数ヶ月前だ。

決起の準備を急がせている時に現れた彼等は見た事も無い装備をしており、自分達を前にこう言った。

『俺らがあんた等の夢を叶えてやるよ』

初対面である自分達に対して大柄な態度を取りながら言った。

「仮に彼の国の使いだとしても、なぜ彼の国が我々に力を貸すのか・・・・・・・・・・」

「恐らく、我らに恩を売る積りだろうな」

彼の国が前々からとてつもない野望を見せているのは知っていた。

きっと今回の件で恩を売り、これからの事に対して力を貸すように言うだろう。

「そしてその後に我々も殺す、ですか・・・・・・」

「恐らくな。まったく・・・舐められたものだ」

青年が怒りの表情を浮かべた。

「仰る通りです。ですが、如何に大国と言っても、ここまでの距離などを考えれば十分に対処は可能です」

彼の国からここまで来るのには船で来る筈。

どんなに速い船でも最低でも数ヶ月は掛る。

だが、その先には同盟を結んでいる国などもある。

それを鑑みれば、そう簡単には攻めて来ないだろう。

「そうだな。それにお前が居れば事は足りる」

「ありがとうございます。王子様・・・いえ、“国王陛下”」

「まだ国王ではない。・・・あの席に座ってこそ私は真の国王になるのだ」

あの選ばれた者だけが座る事が許される座に座ってこそ、自分は初めてこの国を治める者になれるのだ。

今は・・・まだその座に腰を降ろしていない。

そう、“今は”・・・・・・・・・・

だが、直ぐに座る事になる。

「失礼しました。ですが、私にとっては貴方様こそ真の国王です」

あんなお人好しでしかない女が国王の地位に居ること自体が我慢できない。

あの女では、国を治め切れないし、これから起こる事にも対処できないだろう。

しかし、貴方様は違う。

貴方様なら絶対にこんな事が起きても対処できると男は断言してみせた。

「お前だけだ。私をそのように見てくれるのは」

周りは何時も自分を蔑んで、疎んじていた。

そしてこの才能などを認めようとしなかった。

だが、目の前に居るこの男だけは自分を評価してくれた。

「この身は・・・貴方様の為だけにあるのです」

男は青年の手を取って言い続けた。

私は貴方様の為だけに生をなし、この日の為だけに生きて来たのだ。

青年も男の手を取り重ねてきた。

「頼りにしているぞ・・・ウルフよ」

「お任せ下さい。・・・リカルド様」

薄暗い部屋の中で二人は互いの名を呼び合った。

第四十七章：実戦訓練

サバイバル訓練が終了した翌日、私は十分な睡眠を取った為か身体が軽かった。

お陰で残りの訓練を耐えられそうだ。

訓練場に行くと、既に少佐達は来ていた。

「おはようございます。少佐」

私は敬礼をして挨拶をする。

「おはよう。よく眠れたか？」

「はい。あの、それで、少佐達の方は・・・・・・・？」

私は気になっていたので訊いてみた。

「俺は良かったぜ。イーグルはどうだ？」

「・・・最悪ですよ」

清々しい様子の少佐とは対照的にイーグル１等軍曹は酷い顔だった。

「あれから他の店を回って好みの女を誘ったのに皆、駄目の一点張りでした」

「それでどうしたんだ？」

「抱きましたよ。だけど、高い金を払った割には損が大きいです」

「そうか。まぁ、次があるさ」

「そう願いたいです」

イーグル1等軍曹は溜め息を吐きながら煙草を銜えた。

「もやし。お前も吸うか？」

少佐が煙草を勧めてきたので、私はそれを受け取った。

そして火を点けてもらい吸った。

ミーシャ大尉と少佐も煙草を吸い出して4人で皆が来るのを待った。

暫くすると天馬騎士団が先に集まった。

「おはようございます。少佐」

リーザ様が少佐の前に行き、敬礼をして挨拶をした。

「あぁ。おはよう。相変わらず美人だな」

少佐は軽口を叩いたが、リーザ様は顔を赤くさせた。

「可愛いなー。ねぇ、リーザちゃん。俺と一夜の・・・・ぐえっ」

イーグル1等軍曹がリーザ様の手を掴もうとしたが、リーザ様が先

にイーグル1等軍曹の手を掴んで捻り上げた。

「イーグル1等軍曹。私は貴方を“教官として”は買いますが“男として”は買っておりません。ですから、私を口説くのは止めて頂けませんか？」

「い、痛い痛い痛い！！」

「私の願いを聞いてくれるなら、離します」

「そ、それは・・・・・痛ってぇー！？」

イーグル1等軍曹は呻き声を上げている。

見た限りイーグル1等軍曹なら如何に軍人であるリーザ様でも勝てると思うのだが・・・・・・・・・

「あたしが仕込んだ技で、解放できないんだ」

ミーシャ大尉が私の疑問を読んだ如く答えてくれた。

「そうなんですか？」

「あぁ。もし、解放するなら関節を外すしかない」

これはこういう男に対する対処法として教えたらしい。

「相変わらず良い事を教えるな。ミーシャ」

「ありがとうございます。少佐」

ミーシャ大尉は少佐に礼を言った。
その一方でイーグル1等軍曹はリーザ様に腕を捻り上げられたままだ。
「お、お願いだから、手を離して・・・・・・」
「私の願いを聞いてくれるなら離します」
「お、俺に、女を口説くな、なんて殺生な・・・・・・・・・」
「イーグル。諦めろ」
そろそろ皆が来るんだ、と少佐は煙草を灰皿に捨てながらイーグル1等軍曹を急かした。
「で、でも、少佐・・・・・」
「リーシャ。こいつの腕を折っても良いぞ」
「では・・・・・・・・・」
リーザ様がイーグル1等軍曹の腕を折ろうとした。
「わ、分かった!!分かったから・・・もう口説かないから離して!?」
泣きそうな声でイーグル1等軍曹は言い、腕を離してくれと願った。

「本当ですね？」

「や、約束します！！」

「では、離します」

リーザ様がイーグル1等軍曹の腕を離した。

「い、痛かったー」

イーグル1等軍曹は腕を擦りながら、リーザ様を涙眼で睨んだ。

そんな泣きそうな程に痛かったのか、と思う。

だが、私がもしされたら泣くだろうなとも思った。

それから暫くしてワイド様達の聖騎士団と獅子頭軍団が到着した。

「皆そろったな。では、これより訓練を開始する」

今日は模擬戦闘をする、と少佐は言った。

「武器は支給された武器、または俺らから奪った武器だ」

場所は城の中で行われる。

「女王陛下には許しを得ている」

皆が懸念していた事を予想したかのように少佐は言った。

「戦う相手は天馬騎士団だ。後はミーシャ、イーグル、そしてもやしだ」

「わ、私もですか？」

「当たり前だ。先輩だからと言って手加減するなよ？相手を殺す気で戦え」

「こ、殺す気って・・・・・・・」

「昨日の友は今日の敵、なんて言うからね。味方だろうと容赦しないのが鉄則だよ」

ミーシャ大尉が私を納得させるように言い、そしてこうも言った。

「訓練だからと言って手を抜いては、いざと言う時に困る。だから、あんたも実戦だと思って戦いな」

そうする事が自他共に良いのだ、とミーシャ大尉は言った。

「・・・分かりました」

私はそれに頷いた。

「良い子だ。大丈夫。別に本当に殺す訳じゃないんだから」

ただ、少し痛い思いはする事になる、とミーシャ大尉は言って笑った。

「では武器を支給する」

少佐は皆に武器を支給した。

武器はマチマチだった。

「こいつは実弾を使わない。当たったら色が付くペイント弾だ」

だが、当たればそれなりに痛いらしい。

「ペイント弾を撃たれたら、訓練から退場だ。生き残った者が勝ちだ」

それから城に居る者たちに被害を与えた者も退場と言われた。

そして少佐も武器を持った。

「少佐もやるんですか？」

「あぁ。今日はプロイセンのおっさん達は会議だからな」

私は納得しながら与えられた武器を見た。

武器はモーゼルｋａｒ９８ｋだった。

更に無線機も手渡された。

これで相手を狙撃する事が出来る。

無線機で互いに連絡を取る事も出来る。

ワイド様たちには与えられていない。
だが、これを奪えば無線を傍受できる筈だ。
「では、これより訓練を開始する」
全員、散開！！
少佐が命令すると全員がその場から離れた。
私もその場から離れて、高い場所を探し始めた。
城の中を移動して探していると、エリーナ様と鉢合わせした。
「え、エリーナ様っ」
私は思わない人物と鉢合わせして慌てた。
「ランドルフ。どうしたんですか？」
エリーナ様は私に問い掛けてきた。
「あ、いえ。ちょっと訓練を」
「訓練ですか」
「はい。では、私はこれで」
私は一礼して立ち去ろうとしたが、エリーナ様に呼び止められた。

「興味があります。私も参加させて下さい」

「エリーナ様。これは遊びではないのです」

私は興味本位で言ってきた、と思って厳しい口調で喋ってしまった。

王女相手にこんな口調で言うのは駄目だと思うが、この時ばかりは真剣だった。

「それは解かっております。ですが、私も一国の王女として兵たちの訓練内容を知りたいのです」

決して迷惑を掛けない、とエリーナ様は言って私の瞳を真剣に見た。

その瞳には嘘や偽りが感じられなかった。

「・・・分かりました。では、私の傍から離れないで下さい」

私は頷いて、エリーナ様を伴い高い場所へと移動した。

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

私はランドルフと共に塔の上に居る。

偶々、一人で廊下を歩いているとランドルフと出くわしたのが切っ掛けだった。

ランドルフはテツヤ殿が着ていた「迷彩服」を着こんで手には長い物を持っていた。

「え、エリーナ様」

ランドルフは私に驚きながらも挨拶をした。

私は挨拶を返しながら、彼に何をしているの？と訊ねた。

ランドルフは訓練だ、と答えた。

お母様から訓練が行われると言われたけど、これなのね。

そう思うと興味が沸いた。

「私も参加させて下さい」

思わず好奇心から口に出した。

だけど、その瞬間にランドルフの目が鋭くなった。

「エリーナ様、これは遊びではないのですよ」

ランドルフは何処か怒った口調で私に言ってきた。

明らかに興味本位で参加するな、と言っていると私は思った。

そしてこれほど真剣なランドルフを見た事がない、と感じた。

彼とはあの時・・・テツヤ殿と初めて会った時に一緒に居た。

後は本の数回程度だ。

その時の彼は何処か情けない所もあると思っていたけど、今はそれが微塵も感じられない。

寧ろ怖いとさえ思った。

そして、彼の瞳に吸い込まれる気持ちに襲われた。

立ち去ろうとする彼を呼び止め私は謝罪した。

興味本位でなく、兵たちの活動を知りたい。

私も王族。

それなら兵たちが日ごろどんな訓練をしているのか知りたい。

そう言って彼の瞳を見た。

彼は私を真っ直ぐに見ていた。

あの瞳をずっと見ていたい、とさえ私は思った。

そして彼は言った。

「分かりました。では、私に付いて来て下さい」

彼は私に背を向けて歩き出した。

私もそれに続いた。

彼の後姿は以前に見た時とは違って、とても逞しい背中だった。

第四十八章：実戦訓練２

私はエリーナ様を伴って塔の上に来ていた。

ここからなら城の中を一望できる。

私は窓の下にモーゼルの銃身を置き標的を探した。

「エリーナ様。私に話し掛けないで下さいね」

予めエリーナ様に断りを入れてから狙撃体制を取る。

狙撃の態勢は膝射の構えだ。

スコープ無しでも、私にはよく見える。

右から獅子頭軍団の一人が壁伝いに移動する所を発見した。

「・・・・・・・・・」

私は息を吸い、引き金に人差し指を掛けた。

風速、湿気、風向きなどを計算して狙いを心臓部に定める。

そして一呼吸してから引き金を躊躇いなく引いた。

弾が１発、銃口から飛び出て兵の心臓部に命中した。

ペイントが飛び散り、彼の心臓部を赤く染めた。

私はボルトを動かして弾を排出した。
そして直ぐに場所を移動した。
一度の場所で狙撃するのは原則的に駄目だ。
場所を割られるからだ。
だから、直ぐに別の場所に移動した。
私の後をエリーナ様は付いて来る。
何時まで付いて来るのかは知らない。
今は実戦さながらの訓練なのだから。
塔を降りていると銃撃の音がした。
誰かが撃ち合いをしているな。
しかし、直ぐに止んだ。
私は気にせずに塔から別の場所へと移動した。
次なる場所に移動した私は周囲を警戒しながら狙撃の態勢を取ろうとした。
そこへエリナーナ様が控え目に肩を叩いてきた。

「何でしょうか？」

視線をエリーナ様に移す。

「先ほどの音は一体・・・・・・・・」

「銃を撃った音です。実戦さながらの訓練ですので」

私は簡潔に説明をして狙撃の態勢を取る。

相手の気配を探りながら周囲を警戒する。

暫く待っていると今度は聖騎士団の先輩が見えた。

「・・・・・・・・」

私は引き金に指を掛ける。

そして呼吸をしてから引き金を引こうとした。

だが、そこでエリーナ様がくしゃみをしてしまった。

その瞬間に引き金を引いてしまった。

弾は先輩から外れて上に命中した。

先輩がこちらを見る。

そしてライフルの銃口を向けてきた。

引き金には指が掛っている。

不味い！！

私は身を屈めて弾を避けた。

そして呆然とするエリーナ様の手を取って私は走り出した。

「ら、ランドルフっ」

エリーナ様の驚く声が耳に入るが気にしてはいられない。

「走って下さい！！」

私はエリーナ様の手を強く握り走り続けた。

彼女のくしゃみで狙いを外してしまった。

これは彼女のせいでもある。

だが、私の集中力が欠けていたのも原因である。

不覚・・・・・・

私は狙撃を外した場所からかなり離れた場所まで走り続けてから隠れた。

エリーナ様は荒い息をしていた。

走り慣れていないし、見るからに動き辛いドレスでは走るのも辛い

だろう。

それとは対照的に私は静かに息をしていた。

そこへ足音が聞こえてきた。

私は彼女の口を抑えて壁に張り付く。

「くそっ。逃がしたか・・・・・」

狙いを外した先輩の声だった。

どうやら私の後を追ってきたようだ。

「・・・・・・・」

私はエリーナ様の口を抑えながら息を殺した。

ここはやり過ごすのが良い。

一人なら何とか出来るだろうが、エリーナ様が一緒では無理がある。

先輩は周囲を探していたが、別の方へと走り去った。

「・・・・ふぅ」

私は呼吸をしてからエリーナ様から手を離した。

「ら、ランドルフ・・・・・・」

「申し訳ありません。ですが、あのままだと私も貴方様もやられていました」

それは駄目だ。

そして先ほども失礼だとは思ったが、口を抑えさせてもらったと謝罪した。

「い、いえ。わ、私も、くしゃみをしてしまって・・・・・・・・・・」

「貴方様のせいではありません。私の集中力が欠けていただけです」

私は到って冷静な口調で彼女の謝罪を遮り、次の場所へと移動した。

まだ彼女は付いてきた。

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

私はランドルフの傍で彼の様子を見ていた。

ランドルフはライフルを構えている。

その姿が妙に様になっていて、見惚れてしまった程だ。

彼は呼吸をしてから引き金に指を掛けて引いた。

大きな音がして彼は何かを動かして長細い物を出した。

そして塔から降りた。

私もそれに続いた。

塔から降りる途中で大きな音がした。

彼はずっと何も話さずにいて、怖いとさえ思った。

あの時・・・ランドルフが引き金を引いた時の顔・・・まるで獲物を捕えた獣のような眼で怖いと思ってしまった。

次の場所に着いた彼は、また狙撃の態勢を取り構えた。

だけど、先ほどの音が気になって私は彼の肩を控えめに叩いた。

「何ですか？」

彼は瞳を動かして私を見た。

もう片方の眼は前を向いている。

「先ほどの音は・・・・・・・」

「銃撃戦の音です。実戦さながらの訓練ですので」

ランドルフは簡潔に説明をすると、再び構えた。

私は息を殺してそれを見守る。

だけど、思わずくしゃみをしてしまった。

それと同時にランドルフの引き金が引かれた。

当たったのか分からない。

ランドルフは頭を下げた。

すると間も無く頭上を掠めて壁に当たり、色が飛び散った。

彼は私の手を取ると走り出した。

「ランドルフっ」

私は思わず声を上げたが、彼は気にしなかった。

「走って下さいっ」

私は手を強く握られて彼に引っ張られるようにして走り出した。

靴が走っている最中、痛いと感じた。

ドレスも動き辛い。

転びそうになるが、ランドルフは構わず走り続けている。

走り続けた彼だがやがて止まった。

私はこんなに走った事はなかったから荒い息をして、何とか息を整

えようとした。

でも、彼は直ぐに私の口を抑えて壁に張り付いた。

彼の手はとても大きくて、温かい感触だった。

そして彼の胸板が必要以上に密接して、彼の鼓動が聞こえてくる。

均等な音で焦り一つ感じられない。

それが怖いと思うより頼もしいとさえ私には思えた。

私は思わずその温かさに身動きが取れなかった。

そこへ誰かの足音が聞こえてきた。

私には聞こえなかったけど、彼にはこれが聞こえていたのだろうか？

足音が近づいて来る。

彼の小さな吐息が私の頭に掛る。

とても小さな吐息だけど、熱い吐息だった。

「くそっ。逃がしたか・・・・・・・・・」

彼と私は息を殺して、相手が消えるのを待った。

やがて相手が何処かへと去って行った。

彼は私から手を離した。

私は息を整える時間もなく彼の名を言った。

「ら、ランドルフっ」

「申し訳ありません。ですが、ああしなければ私も貴方様もやられておりました」

彼は謝罪しながら状況を説明した。

そして私の口を抑えた事なども謝罪してくれた。

だけど、それは私もだ。

私がくしゃみなどしなければ、彼もあんな目に遭わなかった。

「貴方様のせいではありません。私の集中力が欠けていただけです」

彼は冷たいとも取れるほど冷静な口調で言い、歩き出した。

私はそれを追うか一瞬だけ迷ったが、追う事にした。

何故かは解からないけど、彼の後を追いたいと思ったのは確かだ。

第四十九章：恋愛の極意（前書き）

今日は大みそかと言う事もあり奮発して結構アップしちゃいます。
（笑）

第四十九章：恋愛の極意

私は高い場所から狙撃をしていた。

エリーナ様はまだ居る。

何故、彼女がここまで付き合っているのかは分からない。

私は無防備にも現れた最後の一兵に狙いを定めた。

無線で彼が最後の一兵だと分かっている。

彼を仕留めれば終わりだ。

最後の一兵の心臓に狙いを定めて引き金を引いた。

彼の胸元に赤い塗料が散らばる。

私は無線を取り、連絡をした。

「こちら、もやし。無事に仕留めました」

『ご苦労。ただちに帰還せよ』

「了解」

私は無線を切り、モーゼルを肩に掛けた。

そして訓練場へと戻る。

だが、エリーナ様はまだ付いて来ていた。

訓練場に戻ると少佐達が居た。

ワイド様達の胸には塗料が付着していた。

リーザ様率いる天馬騎士団の中には塗料が付着している者もいたが、どちらかと言えば軽傷に当たる部分に命中していた。

少佐、ミーシャ大尉、イーグル1等軍曹は無傷だ。

「お帰り。坊や・・・あれ、王女様を連れてデートかい？」

ミーシャ大尉が付いて来たエリーナ様を見て訊いてきた。

「い、いえっ。別にただ訓練の途中で・・・・・・・・・」

「戸惑う所が怪しいね？」

ミーシャ大尉は笑みを浮かべたままだ。

「王女様も満更ではないようだしね」

イーグル1等軍曹がエリーナ様を指差して言うので見れば、エリーナ様は顔を赤くしていた。

「え、エリーナ様・・・・・・・・・」

私は彼女の思わぬ反応に面食らう。

「おやおや、早くもカップル誕生か？」

ミーシャ大尉が笑うとイーグル１等軍曹も笑った。

「じょ、冗談言わないで下さい。エリーナ様は王女ですよ？私ごとき、見習い騎士風情とでは身分の差が違います」

私の発言にワイド様達は頷いた。

騎士たちならば王女と結婚など身分違いだと思うのは当然だ。

「身分？そんなもの糞喰らえだろ？」

イーグル１等軍曹は鼻で笑った。

「欲しい女か男は力づくで奪う。これが恋愛だ」

力説するイーグル１等軍曹。

「あんたと坊やは違うんだよ」

ミーシャ大尉が呆れた口調で言った。

「そりゃそうだ」

少佐はこの話は打ち切って、別の事を言い始めた。

「今回の訓練はあくまで模擬戦だ。だが、実戦で行われたらお前等は全員、死んでいた」

それを忘れるな、と少佐は言い私たちは頷いた。

「それからもやし。お前、一度だけ狙撃を外したらしいな？」

「はい。集中力が足りませんでした」

私はエリーナ様が何かを言う前に口を開いた。

少佐が何で知っているのかは不明だが、きっと少佐なら何かしらの手を使って知ったのだろうと思う。

「そうか。だが、その1発のミスで誰かが犠牲になる。そしてお前自身の命も短くなる事を肝に銘じておけ」

「了解です」

私は敬礼をして答えた。

「宜しい。では、そろそろ時間だ。各自、テントを張り休め」

『了解』

ワイド様達は敬礼をしてテントを張り始めた。

「もやし。お前は王女様を部屋まで送り届けろ」

「了解です」

私は少佐の命令に頷いてエリーナ様を見た。

「エリーナ様。今日は大変ご迷惑を掛けました」

「いいえ。貴方達がどのような訓練をしているのか垣間見えたので、為になりました」

「ありがとうございます。では、お部屋まで行きましょう」

「はい」

エリーナ様と私は訓練場を出た。

エリーナ様は私の隣を歩いていた。

言葉は発していない。

「どうして、私がくしゃみをしたと言わなかったのですか？」

とつぜん彼女は言葉を発した。

「あれは貴方様のせいではありません。私の集中力が無かったから狙いを外しただけです」

「でも、あの時、私がくしゃみをしなければ・・・・・・・・」

「いいえ。私のせいです」

私は彼女の言葉を遮った。

「ランドルフ・・・・・」

エリーナ様が私を見る。

だが、そこで終わりだ。

彼女の部屋に到着したからだ。

「では、エリーナ様。私はこれで」

「ランドルフ、あの・・・・・・」

彼女が何かを言おうとした。

しかし、それを私は無視して立ち去った。

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

ー ー

私はランドルフと共に訓練場に戻った。

そこにはテツヤ殿達が居た。

ワイド達、聖騎士団には赤い塗料が付着していた。

あれが血だとすれば・・・大勢の者たちが死んでいる。

『実戦並みの訓練ですので』

ランドルフの言葉が頭を過った。

これが実戦だったら・・・・・・・・・・・

私は身震いした。

ランドルフは戻って来ていた少佐達に帰還した事を伝えた。

「お帰り。ランドルフ・・・・・あれ、王女を連れてデートかい？」

テツヤ殿の仲間であるミーシャ殿が私とランドルフを指差して笑った。

「い、いえっ。別にただ訓練の途中で・・・・・・・・・・」

ランドルフはミーシャ殿の問いを慌てて否定した。

「戸惑う所が怪しいね？」

ミーシャ殿は笑みを浮かべたまま、更に攻めるように言ってきた。

「王女様も満更ではないようだしね」

ミーシャ殿と同じくテツヤ殿の仲間であるイーグル殿が私を指差した。

私はきっと顔を赤くさせているだろう。

ランドルフに口を抑えられたり、手を握られたり、身体を密着させたりした事が頭に浮かんだから・・・・・・・・・

「え、エリーナ様・・・・・・・・」

ランドルフは私の思わぬ反応に面食らった。

「おやおや、早くもカップル誕生か？」

ミーシ殿が笑うとイーグル１等軍曹も笑った。

「じょ、冗談言わないで下さい。エリーナ様は王女ですよ？私ごとき、見習い騎士風情とでは身分の差が違います」

ランドルフは私と身分が違うと発言した。

その発言にワイド達は頷いた。

騎士たちならば王女と結婚など身分違いだと思うのは当然だろう。

「身分？そんなもの糞喰らえだろ？」

イーグル殿は鼻で笑った。

「欲しい女か男は力づくで奪う。これが恋愛だ」

力説するイーグル殿。

それは私にとって新鮮な言葉だった。

私は王女。

何れは、何処かの国もしくは貴族と政略結婚をしなければならない、と思っていた。

お母様も亡きお父様とは政略結婚に近い結婚だと聞いている。

私の祖父であった先々王がお父様の実力を見込んでお母様の夫にした。

お母様の意思は関係なく・・・・・・・・・・・・

だから、私も何れはそうなるだろうと思っていた。

だけど、イーグル殿が力説した言葉は私にとっては新鮮だった。

「身分が問題なら駆け落ちでも、それに担う実力を身に付けて身分を買えば良い」

そして結婚する。

これが恋愛というものだ、とイーグル殿は続けた。

確かにそれは言えていると思った。

身分が違うなら、その身分に匹敵する実力を身に付ければ良い。

そうすれば自ずと身分は付いて来るのだから。

それか駆け落ちをすれば良い。

何処か誰も知らない所へ、二人で逃げる。

私もそんな体験をしてみたいと思うし、憧れもある。

もし、それをやる人物を上げるとすれば・・・・・・・・・・・・

ランドルフだ。

見習い騎士だと彼は言ったけど、彼となら身分を捨てても良いと私は思った。

あの時、手を握られて走った時がそうだ。

あの時の彼の手・・・・温かくて強かった。

だから、もし彼が手を差し伸ばしたら私はそれを取るかもしれない。

そんな事を考えている内に、話は進んで私は彼に送られて部屋へと帰る事になった。

私はここで先ほどのくしゃみを謝罪しようとしたが、彼はそれを遮った。

そして私が何か言う前に部屋に到着し、彼は背を向けて歩き出した。

私はそれを呼び止めようとしたが、彼はそのまま消えてしまった。

まるで幽霊のように音も無く立ち去って行った。

第五十章：訓練終了

私と天馬騎士団の面々はワイド様が指揮する聖騎士団と獅子頭軍団の者たちが一列に並んでいる。

「今日で貴様等の訓練は終了する。皆、よくこの訓練に耐えて来たな。貴様等のような戦士たちを鍛えられて俺は誇りに思う」

少佐は私たちを前に喋り続けていた。

「この訓練を決して忘れるな」

『・・・・・・・・・』

私たちはそれを黙って聞いている。

「それでは貴様らに訓練を終えた事に敬意を表して装備一式を与える」

少佐がミーシャ大尉とイーグル1等軍曹に命令を出した。

二人は装備一式をワイド様達の前に置いた。

「もやしと天馬騎士団には既に与えている。お前等には別の物を用意した。受け取れ」

ワイド様達はそれを受け取った。

「では、これにて訓練を終了する。以上」

『訓練ありがとうございました。少佐』

皆で敬礼をして少佐達もそれに返した。

そして訓練は終わった。

訓練が終了した後、ワイド様はテツヤ殿と話し合っていた。

「少佐。貴方の訓練とても為になりました」

ワイド様がテツヤ殿に敬礼をした。

「もう訓練は終わりだ。もうテツヤで良い」

テツヤ殿は苦笑しながらワイド様に煙草を勧めてきた。

「そうか。では、テツヤ」

「何だ？」

「改めて礼を言うぞ」

「なぁに俺のような男が力になれたなら嬉しいぜ。それで“彼女”はどうかな？」

テツヤ殿はワイド様に渡したＰＫＭを見た。

ＰＫＭとは軽機関銃の名前らしい。

製造した国は、これまた旧ソ連だ。

テツヤ殿が使用しているＡＫＭをベースとしているため、弾の互換性がある事が強みの一つであり、更にＡＫシリーズには当たり前のように堅牢で頑丈が強みの一つだ。

マガジンは３０連発から４０連発のマガジンになっている。

だが、互換性があるためＡＫＭのマガジンを使用可能となっている。

更に簡単だが2脚を付けている為、地面に2脚を付けて陣地確保や援護射撃などにも向いているらしい。

ストックは折り畳み式だが、ワイド様の物はドラグノフと同じくスケルトンストックに変更されている。

「お前のＡＫＭと同じ感覚で撃てるから良いな」

ワイド様はＲＰＫを撫でながら答えた。

テツヤ殿の世界ではＡＫと並んで世界中で使用されている為か弾の補充が容易である事とアサルトライフルのように使用できる事から愛用されているらしい。

確かに見た目はＡＫＭを少し改造したようにしか見えないから納得できる。

ワイド様は体格が良い事からテツヤ殿はこれを渡したらしい。

拳銃はテツヤ殿と同じくコルト・ガバメントだ。

他の方々にもそれぞれの武器を与えられた。

「お前からは色々な事を教えられたし、与えられた。私に何か出来る事があれば言ってくれ」

「そうだな・・・それじゃ酒でも飲もうぜ。皆で」

訓練終了祝いだ、とテツヤ殿は言った。

「良いだろう。では、皆に伝えてくる」

ワイド様はＲＰＫを持ったまま、聖騎士団の先輩たちの方へと行き、宴をする事を伝えに向かった。

獅子頭軍団の面々は訪れたプロイセン様と将軍達から労いの言葉を掛けられていた。

獅子頭軍団の面々の様子を見たプロイセン様はテツヤ殿を見た。

「流石は私の見込んだ男だ。兵たちの顔つきが以前より良くなった」

「俺だけの力じゃない。こいつらも居たかさ」

イーグル１等軍曹とミーシャ大尉を指差してテツヤ殿は言い返した。

「そうか。貴殿ら二人にも礼を言う」

「止してくれよ。俺は何もしてないぜ」

「だな。女の尻ばかり追い掛けて蹴られていたもんな」

「姐御。幾ら何でも酷過ぎでしょ？」

「酷くない。事実だろ？」

今日もリーザ様を口説こうとしただろ？とミーシャ大尉は言った。

「何と、リーシャを口説こうとしたのか？」

プロイセン様が軍人から父親の顔つきとなった。

「あ、いえ、ちょっと、その・・・・・・・・」

イーグル１等軍曹はプロイセン様の眼をまともに見れずに途切れ途切れの口調で言い訳をしようとした。

「悪いがリーシャの夫は既に決定している。それにそなたでは私の目に適わん」

実力は買うが、女にだらしない所が駄目だ、とプロイセン様は続けた。

剣こそ抜かなかったが、言葉という剣でイーグル１等軍曹を滅多斬りにプロイセン様はした。

滅多斬りにされたイーグル１等軍曹は、既に地面に崩れ落ちていた。

それを誰も助けないから酷いと思うが、自業自得と言えばそうなのだろう。

「お前さんも情け容赦ないな。こいつをこんなにするなんて」
テツヤ殿はイーグル１等軍曹を見ながら呆れた口調でプロイセン様に言った。
「これでも手加減したほうだぞ」
「手加減ね・・・・それなら感謝する」
テツヤ殿はイーグル１等軍曹を肩に掛けると背を向けた。
「じゃあ、俺らは帰る。行くぞ、ランドルフ、ミーシャ」
「了解。少佐」
「はい。では、失礼します」
私とミーシャ大尉はプロイセン様達に一礼してから訓練場を去った。
「そう言えば、リーザ様の夫になる人って誰ですかね？」
私はプロイセン様の言った言葉が気になり、口にした。
「さぁな。恐らく軍の誰かだろう」
テツヤ殿はイーグル１等軍曹を担いだまま興味が無い様子で答えた。
「案外、それが少佐だったりして」

ミーシャ大尉がふざけた口調でテツヤ殿を指差す。

「俺が冗談言うな。俺が家庭を持つ柄かよ」

テツヤ殿は否定する発言をした。

「だけど、少佐って女に結婚を申し込まれたじゃないですか？」

「そうなんですか？ミーシャ殿」

「あぁ。色んな女から結婚を申し込まれたんだよ」

私は一瞬だけ信じられなかった。

テツヤ殿に求婚する女性が居るとは・・・・・・・・・・・・

寧ろ少佐が求婚する立場だろうと思った。

何より女性から男性に求婚するのが向こうでは当たり前なのか？

「だけど、少佐の返事は何時も同じＮＯの一点張りだった」

「当たり前だ。皆、俺なんかには手が届かない存在なんだからな」

それがテツヤ殿には信じられないと同時に怖かったらしい。

その女性を幸せに出来るかと・・・・・・・・・・・・・・・

「あたしは少佐なら良い家庭を作れると思いますけどね。坊やはどう思う？」

「私は・・・出来ると思います」

暫く考えてから私は答えた。

テツヤ殿なら人の気持ちを組んでくれるし、人を納得させられる。

更に言えばテツヤ殿なら人の温かみという物をきっと大事にすると

私は感じていた。

だから、それを考えて出来ると答えたのだ。

「坊やも言ってるよ」

「どうだかな。まぁ、今はイーグルをベッドに寝かす事が先決だ」

テツヤ殿はイーグル1等軍曹を担いで寮へと急いだ。

寮へと着いたテツヤ殿はイーグル1等軍曹をベッドに寝かした。

「さて、俺らは風呂にでも入るか」

「はい」

「あたしは夜にでも入ります」

そこら辺は女らしい事をミーシャ大尉は言った。

私とテツヤ殿は浴室場へと行き、久し振りの湯に浸かった。

周りは訓練をした聖騎士団の先輩たちで溢れ返っている程だ。

「はー、久し振りの風呂は良いなー」

テツヤ殿は湯に浸かりながら心地よい、と呟いた。

「テツヤ。お前の訓練は地獄だったぜ？」

先輩の一人がテツヤ殿に話し掛けてきた。

「俺の訓練が地獄か？イーグルが居たグリーン・ベレーの選抜試験の方が地獄だぞ」

「そんなに厳しいんですか？」

「あぁ。先ず志願者で国籍がアメリカ国籍でないと駄目だ」

先ずこれが第一条件だ。

更に伍長以上の階級で空挺資格を有する者。

親族の中に自殺者、または精神的に何か病気を持っていないか。

などなど数えれば切りが無い程、多くの条件や資格が求められるらしい。

「それらをクリアして初めて訓練を受けられる」

何かしら一つでも満たせない物があれば、訓練を受ける事も出来ないらしい。

そこから訓練に入るが、それを全部やるのに1年以上は掛ると言う。
何とも時間と金が掛る育成だと私を含め全員が思った。
「だが、俺はお前等を2週間である程度、物に出来るようにした」
だから、厳しいのだろうとテツヤ殿は言った。
確かに、1年以上も掛る訓練内容を短縮したのだから厳しくもあり、内容が濃いのも無理はない。
「まぁ、それで死なないなら良いだろ?」
テツヤ殿の問いに私たちは頷いた。
そして皆で風呂から上がって衣服を着た。
皆、テツヤ殿が着ている軍服を着た。
迷彩服の他にこれも渡されたのだ。
皆で軍服を着て外に出た。
外に出るとミーシャ大尉がワイド様と一緒に居た。
ミーシャ大尉は白地に青の横縞のシャツと青いベレー帽を被っていた。
シャツだけなので、膨らんだ胸が見えて女だと判る。

「おやおや、全員が軍服かい」

ミーシャ大尉は私たちの格好に驚きながらも笑ってくれた。

「さて、行くか」

全員そろったとテツヤ殿は言い、歩き始めようとした所だった。

「少佐。俺達を置いて行かないで下さいよ」

声がしてそちらを向けば、獅子頭軍団の方々が軍服を着て立っていた。

「俺たちも混ぜて下さいよ」

獅子頭軍団の一人が言うと他の方々も頷いていた。

「そうだったな。忘れていた」

では、皆そろった所で改めて行こう、とテツヤ殿は言った。

私たちはそれに頷いて街へと繰り出した。

だが、誰か一人を忘れていないか？

私は頭を回転させたが、誰も思い付かない。

誰も居ないな。

私は自分の記憶違いだと思い直してテツヤ殿達の後を追いかけた。

ここで私は記憶違いだと思っていたが、実はイーグル1等軍曹を忘れていた、と酒場に着いてから思い出した。

しかし、テツヤ殿とミーシャ大尉が「あいつは放っておけ」と言うので、後ろ髪を引かれる思いながらも酒飲みに集中した。

酒飲みは深夜近くまで続いたが、私たちは結局、朝まで飲み明かす事になった。

お陰で次の日は二日酔いだ。

私はまだこんな日が続くと思っていたが、それは違っていた。

既に内乱の火種は静かに燃え出していたのだ。

傭兵の国

盗り物語サルバーナ王国編　完

第五十章：訓練終了（後書き）

これにてサルバーナ王国編は終わりです。

次は内乱編に入ります。

まぁ、内乱を続けて書けと仰ると思いますが、些かネタ切れなどもありますので、この辺で先ずは一度打ち止めという形にしておきます。（汗）

でも、皆さま私を見捨てずにどうかまだ長い作品にお付き合い下さいませ。

ミーシャ大尉（前書き）

ここで今まで登場させてきたキャラクターを少しずつ紹介させていきます。

特に親衛騎士団長と王女、更に司教はまだ紹介していなかったので、ここで載せて置きます。（汗）

ミーシャ大尉

名前：ミーシャ

身長：１８０ｃｍ

体重：７０ｋｇ

年齢：３０歳→享年９０歳

職業：第４５独立親衛特殊任務連隊→傭兵

階級：大尉

衣服：迷彩服に青色のベレー帽にジャングル・ブーツ

装備：ドラグノフＳＶＤ、ＡＫＳ－７４Ｕ、スチェッキンＡＰＳ

特技：狙撃、玉潰し、料理、サバイバル技術、空挺降下

異名：姐御、男女、怪力女

嗜好：煙草、酒、料理

座右の銘：最強の者が勝つ

要約：第４５独立親衛特殊任務連隊に所属していた女性隊員で、分隊狙撃手を務めていた事もある。

鷹見徹夜の部下であり皆を纏める姐御的な存在としても知られているが、その性格と強さから男であるとよく勘違いされる。

それが本人には我慢できない事である為か、それを言えば大事な弾を潰されるという悲惨な目に遭うと言われている。

内乱が勃発すると鷹見徹夜と共にヴァイガーへと逃れて軍の立て直しを図り抵抗に転じて内戦を終結に導いた。

鷹見徹夜が行方不明となった時は大尉としてワイドと共に皆を纏めて捜索に力を注いだ。

５大陸統一後はワイドと結婚し、１０人もの子を作り大家族となって良い妻、良い母として皆には知られていた。

しかし、軍人としても活躍し続けランドルフと共に狙撃手育成などに力を注ぎ多くの狙撃手を育て上げた。

イーグル１等軍曹が「特殊部隊の親」と言われるのに対して彼女は「狙撃手の母」として後世に名を残した。

座右の銘はかつて所属していた隊の標語で、常にそれを部下達に叩き込んでいると言われている。

ランドルフの史記によれば「狙撃のイロハを叩き込んでくれた方」と書かれており敬愛していた模様である。

またワイドとの夫婦仲は「お互いに信頼し合い家族を愛し合っていた。だが、喧嘩をすれば何時もワイド様を泣かせていた」と書かれており、ゲンハルト同様にかかあ天下だったらしい。

イーグル1等軍曹（前書き）

続いてイーグル1等軍曹です。

彼が情けないとコメントをよく友人から言われますが、これから彼を活躍させたいと思います。

イーグル1等軍曹

名前：イーグル

身長：１８２ｃｍ

体重：７５ｋｇ

年齢：２８歳→享年９３歳

職業：第７５レンジャー連隊→グリーン・ベレー隊員→傭兵

階級：１等軍曹

衣服：迷彩服に緑色のベレー帽

装備：コルトＭ７２７カービン、レミントンＭ８７０フォールディングストック、ベレッタＭ９２ＦＳ

特技：ナンパ、女性のスリー・サイズを見破る事、人身獲得術、射撃

異名：ナンパ男、女好きの権化、性欲の化身、サルバーナ王国の光源氏、未亡人殺し、ロリコン、イーグル、グリーン・ベレー、軽薄を画に描いた男

嗜好：煙草、酒、女、ギャンブル

座右の銘：抑圧からの解放

要約：元グリーン・ベレーに所属していた男で中東で出会った鷹見徹夜の強さに惚れ込んで傭兵となった。

元第７５レンジャー部隊に所属し、かの有名なソマリア内戦にも参加した兵で後にグリーン・ベレーに入隊した。

本人曰く「容姿端麗で頭脳明晰、女性に優しいジェントルマン」と公言しているが周りからは「軽薄で好い加減おまけに好色の塊で救いようが無い」と言われている。

また仲間達からは「こいつに惚れる女が居たら不幸になる」とまで言われているなど女に関してだらしなさ過ぎる面がある様子だった。

しかし、戦闘においては「一騎当千を具現化した男」と言われており、戦闘力に関しては文句の付け様が無かったようだ。

ランドルフに「人生を楽しむコツ」と「女性に対する接し方」を教え込んだ人物でランドルフの史記では「人生の師」として書かれており兄貴分として慕われていた様子。

内戦が勃発するとヴァイガーで民衆を訓練させ、鷹見徹夜の片腕として戦い内乱を終結させる事に成功した。

その後はサルバーナ王国の軍事改革に乗り出して特殊部隊育成に力を注ぎ「特殊部隊の父」として皆に愛された。

生涯、独身だったがランドルフの史記によれば「大勢の女性達に囲まれて暮らしていたし、その内の一人は特別だった」と書かれており結婚はしていないが、一人とは事実婚はしていたと思われる模様。

女性の好みは「美人」であれば誰でも良いらしく、その辺が嫌われていた要因とランドルフの史記には書かれているが彼と暮らした女性達の証言では「満ち足り過ぎる生活」を送れたと言われている。

主に彼と暮らした女性達は未亡人か幼い少女だったらしく、自分好みに娘を育てる事が得意だったらしい。

この事から「サルバーナ王国の光源氏」という有り難くもない名を頂戴したが、本人は誇りにしているらしい。

座右の銘はミーシャ同様にかつて所属していた隊の標語を座右の銘としている。

また第７５レンジャー連隊の標語であるＲａｎｇｅｒｓ　ｌｅａｄ　ｔｈｅ　ｗａｙは、鉄腕ヴィルヘルムが指揮する撃剣隊の標語とされた。

エドリアス・モンド（前書き）

続いて司教です。

後二人ですので、もう少しお付き合い下さい。

エドリアス・モンド

名前：エドリアス・モンド

身長：１７９ｃｍ

体重：５５ｋｇ

年齢：３０歳→享年９２歳

職業：司教、従軍牧師、参謀

階級：司教→大司教、大尉→参謀長

衣服：白いローブ→迷彩服にブーニーハットとサングラスにジャングル・ブーツ

装備：Ｍ２カービン、ベレッタＭ９２ＦＳ

特技：回復魔法、知識

異名：傭兵王の懐刀、名参謀、賢者、従軍牧師

嗜好：煙草、酒、読書

座右の銘：無駄な血は流さない

要約：サルバーナ王国の教会で司教を務める男。

元は学者を志した経緯から未だにその知識欲は計り知れず常に新たな発見と体験を求めている。

鷹見徹夜の人柄を鋭く見抜くなど人物を見る眼は間違いなくあり、知識の面でも引けを取らない事から外交などにも長けている。

内乱の折りは鷹見徹夜と共にヴァイガーに逃げて、そこで戦闘指揮官に任命された鷹見徹夜の参謀となり内乱を終結へと導いた影の存在と言われている。

また交渉の時も相手の意を突くなどして心理的攻撃などにも長けており、回復魔法も使いこなせている。

後に連合軍の大参謀として抜擢され「傭兵王の懐刀」と渾名された。

彼の立てる作戦は「敵が攻撃せざる得ない状況に持ち込む」、「敵が降伏するしかない」、「敵を味方にする」の3つに別けられており、未だにその作戦内容は研究対象にされるほど完成度が高い。

煙草と酒が好きと言うおよそ司教には似合わない物を好むなど破天荒な性格であるが、戦が終結した後は戦死した者達に祈りを捧げるなどしている。

5大陸統一後は司教に復帰するが、参謀と外交官の任務も兼ねており後継者の育てにも力を注いだ。

生涯を独身で通したが、ランドルフの史記によれば「女とは決して無縁では無かった」と書かれている。

更に司教なのに滅法強いとも言われている。

彼に対する逸話はワイド同様に血生臭い逸話より、その高潔な身分などからか心温まる逸話が多く残されている。

フィーナ・マレル

名前：フィーナ・マレル

身長：１７５ｃｍ

体重：５８ｋｇ

年齢：２４歳→８９歳

職業：サルバーナ王国の親衛隊騎士団長→サルバーナ王国国王の第三王妃、侯爵

階級：親衛騎士団団長→中尉→大将

衣服：鋼色の鎧→迷彩服とベレー帽

装備：バスターソード、ＡＫ－７４（ＧＰ－３０グレネードランチャー及びライフルパットを装着）、ドラグノフＳＶＤ、コルト　コンバットコマンダー、ワルサーＰＫＫ

特技：剣術、乗馬

異名：偏見の塊、高飛車女、下種女、要らない荷物、親衛騎士団長、お下劣の権化、フィン

嗜好：乗馬、読書、鍛錬

座右の銘：最後の一兵となろうと任務を遂行する

要約：サルバーナ王国の親衛隊騎士団の団長を務める女傑だが、自分は「選ばれた人物」という先入観から他者を愚弄する面がある。

聖騎士団を「選ばれた組織」と見ているが、内心では蔑んでおり民などにも高圧的な態度で臨むなどしている。

徹夜の事は「下種な傭兵」と称しているが、一度目は負け、二度目は市街で戦うも今度は腕の骨の関節を外されるという目に遭う。

更に三度目は地面に叩きつけられた上に刃を突き付けられるという醜態を民達の前に晒される事になった。

これにかなり激怒しているが、女王からきついお叱りを受けて出来るだけ会わないようにしている。

徹夜からは「高飛車で傲慢で偏見の眼を持つ小生意気な馬鹿娘」と称されており周囲もある程度は認めている。

後に貴族の裏切りでサルバーナ王国で内乱が起こると真っ先に鷹見徹夜徹夜を「スパイ」と断言して糾弾しようとするなど女々しい所がある。

更に見習い騎士で可愛がっていたレオン・ルソーが辞めた理由を鷹見徹夜のせいにするなど支離滅裂な部分がある。

これが経緯となったのか親衛隊騎士団の中で彼女に反発する者が多発し鷹見徹夜に浸透する者が続出するなどジレンマに悩む事になる。

女王であるサラからは「真面目だけど、融通が効かない」と評され

ており実力は高く買われているが性格面では買われていない。

徹夜を目の敵にしていたが、戦で敵の罠に嵌り窮地に陥った所を徹夜に背負われて味方陣営に戻ってから考えを改めるようになる。

更に亡き父と共に戦った鉄腕ヴィルヘルムから騎士の心得なども教えられて騎士として成長していき敵であった叔父であったと思われたが実は本当の父親であったヴィールングとも和解する事になった。

後にレオン・ルソーとも和解して徹夜の妻の一人となり軍事面で活躍して5大陸にその名を轟かせる事になった。

騎士としての性格を持ち合せながらも合理的な考えも持ち合わせるようになったらしく「騎士であり軍人」であると周りからは言われていたらしい。

また鷹見徹夜より先に病に伏せて亡くなるが、生前の罪を償う言葉を言っていたらしい。

最後を見取ったのは鷹見徹夜だけなのでどんな内容かは不明だが、鷹見徹夜はそれを許しそれを聞いてから死亡したと言われている。

ランドルフの史記によれば当初のフィーナに対する感情は悪感情しかなかった、と書かれており彼自身は「下種女」と最初は書いていたが、後には「要らない荷物」と更に悪感情を持っていた事が窺える。

理由として彼女の石頭が過ぎる事と更に言えば傲慢な性格が災いした事が理由として上げられる。

しかし、少しずつ彼女の環境や人柄、成長などを見て来てからはその感情を改め始めた、と書かれており最終的には「偏見の塊だったが、最終的には良い人間になった」と書き記している。

逸話に関しては最初の方こそ酷過ぎると思えるほどボロクソに詰っているが徐々に逸話は良い物に変わって来ている。

夫である鷹見徹夜から渡されたコルト・ガバメントの小型バージョンであるコンバット　コマンダーを生涯の宝として愛用していたとも言われている。

また腹違いの妹であるマーズとは事あるごとに喧嘩をしては鷹見徹夜を困らせたらしいが戦時においては喧嘩をしながらも共に戦っていたと史記には書かれている。

エリーナ・ロクシャーナ

名前：エリーナ・ロクシャーナ

身長：１６３ｃｍ

体重：４９ｋｇ

年齢：１５歳→享年９２歳

職業：サルバーナ王国の王女

衣服：青を主体にしたドレス

装備：ワルサーＰＰＫ

特技：歌、裁縫

異名：心を射止められた王女、山猫の姫

嗜好：読書

座右の銘：民がより良い生活を出来るように

要約：サルバーナ王国第１２代目国王、ガルバーと妻であるサラとの間に生まれた王女。

ガルバーよりサラの性格や容姿を受け継いでおり、王国内では彼女を愛して止まない声が上げられているほど国民には愛されている。

ランドルフと一緒に鷹見徹夜と最初に出会った人物で鷹見徹夜を恩人として、父親として見ている節があった。

母親の血を深く受け継いでいる為か、好奇心旺盛で訓練を見たりするのが事の他多かった、とランドルフの史記には書かれている。

ランドルフと後に夫婦となり、子宝にも恵まれるなど幸せな人生を送ったと本人の日記には書かれている。

彼女の日記には内乱の事は書かれていないが、腹違いの兄であるリカルドを「憐れな方」と書いている事が判明した。

またランドルフについては「とても優しくて逞しい方。この方の妻として一生涯を終えられる事が最高の幸せ」と書かれていた。

ＡＫＳ－７４Ｕ

製造年：１９７４年

製造国：旧ソ連

全長：７３０ｍｍ

重量：３．２ｋｇ

口径：５．４５ｍｍ×３９

装弾数：３０連発

１９７４年に開発されたＡＫ７４の改良型で、天馬騎士団が正式採用しているアサルトライフルとして知られている。

鷹見徹夜のＡＫＭと同じ国の設計であるが、口径が小さい為に射程距離などが大幅に広がった上に小口径ながらストッピング・パワーも申し分ない。

更にギリギリまで銃身などを切り詰めた上にストックを折り畳み式にしている為、驚くほどコンパクトな形となっている。

主に天馬騎士団など小型で軽量の物を必要とする部隊などから愛用されている。

また鷹見徹夜の妻であるリーザ・マクシリアンの愛銃としても知られており、これを持つ事は「空挺部隊の証」として民達の間では言

われている。

モーゼルｋａｒ９８ｋ

製造年：１９３５年

製造国：ナチス・ドイツ

全長：１１０５ｍｍ

重量：　４．０９ｋｇ

口径：７．９２ｘ５７ｍｍ

装弾数：５発

１９３５年にナチス・ドイツが正式採用したボルトアクション式ライフルでランドルフの愛用ライフルでもある。

ランドルフの史記によれば「ＳＫＳカービンと並び我が人生において最愛の恋人」と称して愛情を注いでいた。

ランドルフはこれとＳＫＳカービンの二つを使用して５大陸統一に役立てたと言われており、彼の宿敵であった敵狙撃手も「最高のライフル」と称していたと書かれている。

また草原の国であるクリーズ皇国の皇帝もこれを愛用していた、と知られて一躍有名となり多くの者たちがこれを欲するようになったと言われている。

コルトM727

製造年：１９８５年

製造国：アメリカ

全長：７５５（８４０）ｍｍ

重量：２．６ｋｇ

口径：５．５６ｍｍｘ４５

装弾数：３０連発

１９８５年にアラブ首長国連邦の要請で作られたＭ１６Ａ２のカービンモデルでこの事から「アブダビ・カービン」とも呼ばれている。

イーグル１等軍曹が愛用しているアサルトライフルとして知られており彼が創設し指揮する「グリーン・イーグル」のアサルトライフルとしても知られている。

特にこのライフルはＡＫに比べてアクセサリーが豊富に取り付け可能な事で知られているが、メンテナンス面では「新兵泣かせ」と有り難くもない異名を頂戴している。

しかし、命中精度などはＡＫ以上と言われており、どちらも長所短所があると言われているが大半の兵たちはこちらよりＡＫが良いと言っている。

レミントンM870

製造年：１９５０年

製造国：アメリカ

全長：１０６０ｍｍ

重量：３．６ｋｇ

口径：１２ゲージ

装弾数：６連発

１９５０年にアメリカでレミントンＭ３１の後継機として開発されたポンプアクション式の散弾銃。

イーグル１等軍曹が愛用している物で、彼の場合はストックを折り畳み式のストックにする事で全長を短くする事で取り回しを良くしている。

主に狩猟用として扱われているが、近接戦闘ではこれ以上の物は無いと言っている。

それは他の者達も同じで、主に近接戦闘とドアなどを破壊する時に使用していると言われている。

ドラグノフSVD

製造年：１９６３年

製造国：旧ソ連

全長：１２２５ｍｍ

重量：４．３１ｋｇ

口径：７．６２ｍｍ×５４Ｒ

装弾数：１０連発

１９６３年に旧ソ連で正式採用されたオートマチック式狙撃銃でミーシャ大尉とフィーナが使用していたライフルとしても知られている。

『戦場で、最前線で戦う歩兵が使用する』の運用思想の下、行軍の支障にならないよう軽量かつ、耐久性に優れているのが特徴であり分隊に１丁を持たせるのが良いと言われている。

その為、サルバーナ王国の軍団では分隊に１丁は必ずこれを持たせるようにしてアサルトライフルでは届かない距離などをこれで補わせている。

命中率はランドルフのモーゼルに比べれば劣るが、それでも「身体の何処かしらに当たれば良い」という事なので然して問題ではないらしい。

スチェッキンＡＰＳ

製造年：１９５１年

製造国：旧ソ連

全長：２２５ｍｍ

重量：１０２０ｇ

口径：９ｍｍマカロフ

装弾数：２０＋１

１９５１年に旧ソ連が開発したオートマチック式拳銃でフルオートが可能な“機関拳銃”として知られている。

大柄な設計で取り回しは決して良いとは言えないが、９ｍｍマカロフを使用しているためフルオートでも制御が可能で未だにロシアの対テロ部隊などでは愛用されている。

ミーシャ大尉の愛銃として知られており、サルバーナ王国の対テロ部隊などではこれを愛用しているとも言われている。

またストックを取り付ける事により制御が可能とされている。

ベレッタM93R

製造年：１９７７年

製造国：イタリア

全長：２４０ｍｍ

重量：１１７０ｇ

口径：９ｍｍ×１９

装弾数：２０＋１

１９７７年にイタリアでベレッタＭ９２Ｆをベースに開発された拳銃でスチェッキンと同じく“機関拳銃”と知られている。

スチェッキンがフルオートであるのに対してこちらは3点バーストを採用しており弾の無駄使いを減らしつつコントロールを容易にしている。

また銃身の下に折り畳み式のフォアグリップを取り付けているため更に制御を容易にしていると言われている。

リーザの愛銃と知られており、リーザは「生涯の宝物」と称して終生、大事にしていたと言われている。

作者から新年のあいさつ（前書き）

この小説に少し作者の新年の挨拶を載せたいと思います。

小説とはまったく関係ありませんが、何とぞご了承ください。

作者から新年のあいさつ

えー、皆さま新年明けましておめでとうございます。

傭兵の国盗り物語を執筆している作者、ドラキュラと言います。

今回、このような場をお借りしまして、皆さま方にはお礼の言葉を言いたいと思います。

傭兵の国盗り物語、お陰様をもちまして何とかやっていける状態です。

これも全て私の拙い文章を読んで下さる心優しき読者様達のお陰さまです。

これに尽きます。

これからも皆さま方を飽きさせないようにしつつ、物語を勧めて行きたいと思う所存です。

皆さま方も身体には気を付けて今年1年を過ごして下さい。

私も身体を気を付けて頑張りたいと思います。

では、これにて失礼いたします。

第一章：青天の霹靂（前書き）

ここから内乱編に入ります。

今年も宜しくお願い致します。

第一章：青天の霹靂

私は史記を書きながら内乱を思い出していた。

内乱・・・同国同士で戦う事。

あれは内乱と言えば内乱だ。

だが、他国が裏で手を引いていた内乱だ。

要は、仕組まれた内乱と言える。

あの内乱で多くの者たちが命を落とし、家を失い、財産なども奪われた。

そして首都、ヴァエリエとエスカータ城は敵の手に落ちてしまった。

だが徹夜様達の手により内乱は急速に縮小して無事に治まった。

まぁ、そこから私が5大陸統一に巻き込まれる事になるのだが。

現在、サルバーナ王国の首都は第一首都であるこのヴァイガーであり、本城はリブリーブス城だ。

周りは森林や山、谷などで囲まれた天然の要塞として名高く兵たちの実力も折り紙つきである。

ここならまた内乱が起きたとしても問題なく対処できる筈だ。

『サルバーナ王国歴、１０９２年。“青天の霹靂”が起きる』

史記の途中で私はこれを書いた。

青天の霹靂とは徹夜様の国にある言葉で晴れ渡った空に突然起こる雷と言う意味だ。

まさにあれは急に起きたのだ。

いや、前々からその予行は出ていたが、それに対して何もしなかったと言った方が正しいのかもしれない。

あの内乱をゲンハルト様やサラ様は生涯、自分のせいだ、と思っていた。

強ち間違いではない。

内乱を起こし得る者を野放しにしておいたのだから、起きたとしても仕方が無い。

だが、私はそうでないと思う。

あれは起こりべくして起こった事なのだ。

何れは火種というのは燃えるものだ。

それが何時か分からないだけの事である。

偶々とは言い方が酷いかもしれないが、その時に燃えたのだ。

だから、あれは誰のせいでもない。

もし、誰かのせいにしろと言うのなら・・・・“あの男”のせいだろう。

徹夜様の宿敵であり、この5大陸を動乱の渦に巻き込んだ張本人。

あの男が全ての元凶と言えば元凶だ。

徹夜様は誰のせいでもないと言っていたが、誰かのせいにするなら私は迷う事なくあの男を指す。

私はそう思いながら史記を書き始めた。

地獄の訓練が終了して既に1週間が経過していた。

私とテツヤ殿は何時も通り聖騎士団の仕事をしていた。

ミーシャ大尉とイーグル1等軍曹も似たような物で、聖騎士団の先輩たちと共に市内を巡回していた。

空は青い空でとても良い天気だ。

「良い天気ですね」

私は馬に乗りながら能天気に呟いた。

だが、テツヤ殿は妙に渋面を浮かべていた。

「どうしたんですか？」

私はテツヤ殿に訊ねた。

「・・・嫌な予感がする」

ポツリとテツヤ殿は言った。

「嫌な予感？」

私はその言葉の意味が分からずに首を傾げた。

「こんな青い空・・・雲が一つも無い時は嫌な事が起こるんだよ」

テツヤ殿の経験した中で雲が一つも無い日は大抵、嫌な事が起きたらしい。

だから、何かが起こるかもしれない、とテツヤ殿は言いたいのだ。

「そんな事を言わないで下さいよ」

私は苦笑したが、テツヤ殿は到って真剣だった。

「どうも嫌な予感がする・・・・・・」

テツヤ殿は無線を取り出すと、ミーシャ大尉に連絡を取った。

『どうしたんですか？少佐』

「・・・嫌な予感がする」

その一言だけをテツヤ殿は言った。

『了解。出来るだけ目を光らせて置きます』

「頼む。俺も気を付ける」

無線を切ったテツヤ殿はＡＫＭアサルトライフルを右手に持ち、レシーバーを引いた。

まさか、ここでこれを使うとでも言うのか？

だが、テツヤ殿の顔を見る限り用心に越した事は無い、という顔つきだった。

それを考えると私も備えた方が良いと思った。

ＳＫＳカービンのレシーバーを引いて、馬に結えつけているモーゼルを見た。

馬に乗りながら市街を巡回していたが、テツヤ殿のレシーバーから音が聞こえてきた。

「どうした？」

『こちらミーシャ。“鼠”が入り込んでいます』

鼠・・・フィリップ男爵か？

鼠と渾名されているから、私は直感的にそう考えた。

しかし、まさか男爵自身がこちらに来るとは思えない。

となれば、別の誰かだ。

「その鼠はどうした？」

『現在、捜索中です』

「俺らも気を付ける。それと他の奴等にも警戒を強めさせろ」

『了解』

テツヤ殿は無線を切り、私に周囲を警戒しろ、と言った。

私はそれに頷いて目を光らせた。

だが、言われてみると誰もが怪しく見えてしまう。

「自分の直感を信じろ。その鋭い目で、だ」

テツヤ殿は私にアドバイスをしてくれた。

私は目を鋭くさせて周りを見る。

そして遥か前方にローブを被り歩いている男を見つけた。

何故かは知らないが、怪しい気配を感じた。

「・・・あの男が怪しいか」

テツヤ殿は私に訊いてきた。

「はい。何だか怪しいです」

「よし、行ってみるぞ」

私とテツヤ殿は男の方に向かって行く。

そして目と鼻の先まで近付いた所で、男が走り出した。

「ランドルフ。追うぞ！！」

「了解！！」

私とテツヤ殿は馬の腹を蹴り、男の後を追い始めた。

男は民衆を押し退けて巧みに逃げて行く。

「こちら鷹。鼠を発見。追跡中。繰り返す。鼠を発見し追跡中だ！！」

『了解』

ミーシャ大尉の声が無線越しに聞こえてくる。

「ランドルフ。左右に別れるぞ」

「はいっ」

私とテツヤ殿は左右に別れた。

左右に別れて鼠を追い掛ける。
男は巧みに逃げているが、地の利はこちらにある。
だから、男を壁際に追い込む事に成功した。
「さぁ、ローブを外せ」
テツヤ殿は馬からＡＫＭアサルトライフルを構えて鼠に命令した。
「・・・・・・・・・」
それに対して鼠は無言だった。
「・・・」
テツヤ殿は威嚇射撃で足元を撃った。
だが、鼠はそれでも外そうとしない。
「・・・ランドルフ。その男のローブを取れ」
「はい」
私は馬から降りて近づこうとした。
そこで鼠が行動を起こした。
ローブの中からナイフを取り出したのだ。

私は繰り出されたナイフをストックで振り払い、鼠の顔面にストックをぶつけた。

血が吹き出る音がしてローブが外れる。

それでも相手は私の腹に蹴りを入れてきた。

私はそれを諸に喰らった。

重い蹴りだ。

「がはっ」

私は呻いたが、鼠にタックルをして押し倒そうとした。

だが、鼠はそれを避けて手を掲げた。

すると手から細い糸が出て近くの木に当たり、一気に伸びて鼠を壁の上へと上げて消えた。

「・・・逃がしたな」

テツヤ殿は消えた鼠の方角を睨んでいた。

「何者でしょうか？」

私は蹴られた場所を抑えながら訊ねた。

「国内の火種、だろうな」

「となると・・・・・・」

「あぁ。向こうが行動に出た、と言う事だ」

私は恐れていた事が現実と化した気がした。

国内の火種が燃え始めた。

となれば戦になるのは必定と言う他ない。

「直ぐに戻って報告するぞ」

「はい」

私とテツヤ殿は直ぐに城へと帰還した。

城へと帰還するとプロイセン様が私たちを出迎えてくれた。

「鼠が入り込んだようだな？」

プロイセン様が馬から降りたテツヤ殿に訊いてきた。

「あぁ。取り逃がしたが、な」

「そうか。だが、恐らくはリカルド様達の手の者だろうな」

「あぁ。女王には報告したのか？」

「いや、まだだ」

直ぐに報告する積りだ、とプロイセン様は言った。

だが、その表情は渋面だった。

「どうしたんだ？」

「いや、仮に私が報告したとしても女王が何と答えるか、と思ってな」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

私とテツヤ殿は何も言えなかった。

サラ様やゲンハルト様の事を考えれば、確たる証拠も無しにリカルド様の手の者だとは断言しないだろう。

そして言った所で、真剣に受け取るか怪しい所だ。

「だが、報告しておく義務はある」

プロイセン様は自分に言い聞かせるように呟いて城の中へと戻って行った。

「・・・あのおっさんも歯痒いだろうな」

軍人として国を護りたいのに、それが出来ない状況にいるのだから、とテツヤ殿は言う。

「確かにそうですが、王の許可なく兵を動かせば反逆罪に問われます」

「だろうな。だがな、時には王の意向を無視してでも行動するのも真の臣下というものだ」

特にこんな状況ではそれが吉と出る可能性が十分に高い、と言われた。

だが、私はプロイセン様の事を考えると恐らくはしない、と思った。

あの方はガルバー様と共に戦場を駆けた身だ。

だから、負い目を感じている。

幾ら王国に危機が迫っていようと、行動を起こせないだろう。

もし、ガルバー様があんな事をしなければプロイセン様は即座に行動を起こしただろう。

例え反逆罪に問われようとも、だ。

私はこれからどうなるか気になったが何も出来ずにいた。

仕事を交代して寮に戻るとエドリアス様が待っていた。

「何だ、司教様じゃねぇか」

テツヤ殿はエドリアス様を見ながら煙草を吸っている。

「偵察の者が来たようですね」

エドリアス様はテツヤ殿を見ながら訊いた。

「あぁ。恐らくあいつはこの城の内部を探索して今頃、報告しているだろうな」

この城の弱点などを伝えている。

それを聞いて私は自分なりにエスカータ城の欠点を考えてみた。

『城壁と堀で外は守られている。内部は民家や商店などでごちゃごちゃしている。屋根は木製が多い。となれば・・・・・・・・・・』

火だ。

火を起こせば城下町はパニックとなる。

防火対策など取っていない。

もし、火など多数で起こされたら手の打ちようが無い。

それかテツヤ殿が前に言っていた通り内部に密通している者がいればどうだ?

内部に精通している者がこちら側に居れば容易に敵を入れる事が可能だ。

だが、その者を見つける方法が分からない。

私は暫くどう出るか考えていた。

幕間：惨めな男

私は女王陛下、サラ様に鼠の件を報告した。

「それで、その者は・・・・・・・」

「残念ながら取り逃がしました・・・」

「これだから聖騎士団は困る。大事な所でミスをするのだから」

サラ様の近くに居たフィーナ殿が聖騎士団を馬鹿にする発言をした。

「あの下種な傭兵と仲間が何やら訓練をさせていたようだが、いやはやまったく役に立たないようですね」

「・・・お言葉を返すようだが、フィーナ殿が指揮する親衛騎士団なら見事に鼠を捕える事が出来るのですか？」

「無論。私の親衛騎士団は“寄せ集め”如きとは格が違います」

「フィーナ。貴方は口を慎みなさい」

サラ様が玉座に腰を降ろしたままフィーナ殿を制した。

「失礼しました」

フィーナ殿は畏まったが、瞳は私を・・・いや、“我々”を小馬鹿にしていた。

親衛騎士団・・・・・・・

初代国王フォン・ベルト閣下を護る為に出来上がった選り抜きの精鋭たち。

ガルバーの時もそれは遺憾なく発揮された。

私の指揮する軍団よりもそれは明らかだ。

もうその時の者たちは当の昔に戦死している。

あの者たちなら今回の件を見事に捕縛できただろう。

だが、今の親衛騎士団はどうか？

はっきり言えば、経験の無い者たちだ。

昔は引退した者たちを教官に招き、指導されていたが今はそれが無い。

ガルバーの時にいた者たちは戦死したから指導されたくても出来ない。

それは当たり前だが、それでも何かしらの手はある筈だ。

それをしないで日々、怠惰に過ごしているような存在の親衛騎士団。

リーシャの話でも明らかに質が低下している。

そんな輩に我々を侮辱する権利があるのか？

否、断じて否!!

もし、この場で許しさえあれば私はこの跳ねっ返り娘の性根を叩き直してやりたい。

だが、そんな事は出来ない。

私は甘んじてこの小娘の眼差しを受けるしか出来なかった。

「プロイセン。貴方としては、その潜入した者をどう思いますか?」

サラ様は私に訊いてきた。

「恐らくは、リカルド王子の手の者かと・・・・・・・・・・・・・・」

「それを証明できる証拠があるのか?」

ここでゲンハルトが出てきた。

毎度毎度の事だが、この男は何時もこういった所で必ず顔を出して来る。

実に腹立たしい奴だ。

だが、この者の政治手腕は認めている。

ガルバーが起こした“あの件”なども見事に帳消しにしたし、他国との交流などでも決して悪影響を与えていない。

それでいてサルバーナ王国の基盤を護っているのだから、その手腕は恐らくガルバーやサラ様を超えているだろう。

だからと言って、好意を持てるかと問われたら否だ。

何から何まで政治で解決できたら我々は失業だ。

戦が起こらないにこした事は無い。

しかし、この状況では必要だ。

「どうなのだ？プロイセン」

「・・・無い」

奴は如何にもやはり、という顔を浮かべてきた。

くそっ。

実に腹立たしい。

「そうであろうな。その者がリカルド王子の手の者だという証拠が無い。それでは簡単に決めつけられない」

よってこの話は単なる浮浪者、という形で治まると奴は言った。

「だが、もし逃げた奴がリカルド王子の部下だったらどうするのだ？奴は恐らくこの城の内部を調べていたのだぞ」

「その証拠が無い。それで下手に事を荒立てる必要もあるまい」

「それで事が起きたらどうするのだっ」

私は声を荒げた。

しかし、奴は涼しい顔で言い切った。

「私の手腕で解決させてみせる」

「ふざけるな！！」

私はついに頂点に達した。

「貴様の手腕で、政治であの者たちを抑える事が出来るだと？自惚れるな！！奴等はエリーナ様を殺そうとしていたのだぞ！！」

奴等に話し合いは出来ない。

仮に我々が話し合いをする場を設けたとしても、向こうはそれを蹴るか乗ると見せ掛けて騙し討ちをするは目に見えている。

この男にはそれが分からないのか？

「あれは山賊だ。既に奴等は処刑した。もうその話は終わりだ」

「終わりじゃない！！これは始まりだ！？」

これから起こり得るだろう最悪の事態に対する始まりなのだ。

「黙れっ。野蛮な軍人ごときが。貴様等のせいで国費は嵩んだんだ

ぞ！！」

「それは知っている。しかし、主が山賊の件は終わったと言うならば我等がした事もまたもう終わった筈だ」

「貴様等の所業は違う。あの無類の戦好きの王に付き従った野蛮な軍人だ！！」

「私の息子たちを野蛮だと言うのか！！」

私は思わず剣を手に掛けた。

「剣を抜くのか？だから、貴様等は野蛮なんだ！！」

「貴様ッ！？」

「止めなさい！！」

サラ様が声を荒げて私たちを止めた。

「二人とも。無用な争いは控えなさい」

「・・・失礼しました」

私は剣に掛けていた手を抑えて、謝罪した。

「この話は議会で改めて話し合います。プロイセン。それまでは大人しくしていなさい」

「・・・・・御意に」

私は女王の命令に大人しく従うしかなかった。

何と惨めだろうか・・・・・・・・・・・・・・・

第二章：兵たちの気持ち

「・・・プロイセン様が謹慎・・・・・・・・」

私はエドリアス様から聞いた事に唖然とした。

先ほどエドリアス様は急用が出来て城に向かったが、直ぐに戻ってきた。

帰って来るなりエドリアス様からプロイセン様の謹慎処分を聞かされて私は唖然とするしか出来なかった。

軍の頂点に立つプロイセン様を謹慎処分にするなど・・・・・・・・・・・・

「やれやれ。この国の中枢に位置する輩は頭のネジが2、3本ないのか？」

テツヤ殿は半ば呆れ返った口調でエドリアス様に言う。

「酷な言い方ですが、一種の拒否症に陥っているのでしょうね」

先の王、ガルバー様の所業により要らぬ血が流れたし、金が消えて行った。

それで得た物は何か？

自国兵の血と湯水の如く出された金。

そして他国の信用失墜だ。

何一つとっても良い事は無かった。

サラ様の尽力で今は元の鞘に収まっているが、果たしてどうだろうか？

以前の私なら元の鞘に収まっている、と思っただろうがテツヤ殿達と触れ合って、そんな考えはしないようになった。

その事が原因で民達の間、というかゲンハルト様を始めとした臣下たちの間では戦などに対する拒否症候群なるものが出ているとエドリアス様は指摘した。

「まぁ、確かにそうだが・・・ここまで来ると、もはや末期状態だな」

あんな事を仕出かしたのに、ただの浮浪者が変な行動を起こした、と言うのだから強ち間違いとは言えない。

「はい。城の中でプロイセン様と出会いましたが、明らかに怒りと絶望を宿した瞳をしておりました」

あれではいつ爆発するか分からない、とエドリアス様は言った。

「そんなに酷かったのですか？」

「えぇ。あんな姿は初めてです」

エドリアス様が言うのだから想像以上にプロイセン様は怒りと絶望

を味わったのだろう。

この前の件もあるから、それが頂点に達したのかもしれない。

「まぁ、俺らにはどうする事も出来ないが・・・兵たちの様子を見に行ってみるか」

テツヤ殿は壁から背を離した。

何かを予想しているように私には思えた。

「では私も同行します。何か役に立つかもしれませんしね」

「頼む。行くぞ、ランドルフ」

「は、はいっ」

私は頷いて椅子から立ち上がった。

獅子頭軍団の寮へと行くと、前に進もうとする兵たちを将軍達が必死に抑えていた。

兵たちは口々に「我らが親父殿に無礼を働いたゲンハルトを叩き潰せ」と危ない発言をしていた。

「おい、お前等。何をしている」

テツヤ殿が兵達に声を掛けると兵たちは一同に敬礼をした。

訓練での教えがきっちりと刷り込まれている証拠だ。

そして先ほどテツヤ殿が何かを予想していたように見えたのはこの事だったのかもしれない。

「聞こえなかったか。何をしているんだ?」

テツヤ殿はもう一度、訊ねた。

「は、はっ。ぷ、プロイセン様に無礼を働いたゲンハルトを・・・・・」

「叩き潰しに行くのか?」

「は、はいっ」

「・・・この愚か者共が!!」

テツヤ殿は暫し沈黙してから大声を立てた。

その怒鳴り声は凄まじく、窓が揺れる程だ。

近くに居た私は思わず蹲って耳を抑える程だった。

将軍達とエドリアス様も驚きを隠せなかった。

それを気にせずにテツヤ殿は怒鳴り続けた。

「貴様等は馬鹿か?ここで事を荒立ててどうする?如何にプロイセン殿を想う為とは言え、貴様等の行為は明らかに軍人として王に反逆しているぞ!!」

王に忠誠を誓う軍人がそんな事をして良いと思っているのか、とテツヤ殿もとい少佐は続けた。

「し、しかし・・・・・」

兵の一人が何かを言おうとした。

「貴様等の気持ちは理解できる。だが、プロイセン殿を想う気持ちがあるならば、耐えろ。それが出来ないなら俺の前に出ろ」

手加減なしで叩きのめす、と少佐は言った。

これに兵たちは怖気づいたのか、または少佐の言う事が正しいからか沈黙した。

「貴様等の気持ちは繰り返すが理解できる。しかし、ここで事を荒立てては元も子も無い。ここは我慢しろ」

幾ら女王でもプロイセン殿を無下にはしない、と少佐は言った。

「テツヤ殿の言う通りですよ」

エドリアス様がここで口を開いた。

「貴方達はプロイセン様を父のように慕っている気持ちは私にも解かります。ですが、ここは我慢しなさい。女王もちゃんと貴方達の気持ちは組んでくれますよ」

『・・・・・・・・・』

兵たちは沈黙したままだった。

だが、エドリアス様と少佐の言葉を聞いて、兵たちは納得したのか項垂れたまま寮へと戻って行った。

「・・・可哀そうだが、こうするのが一番だ」

少佐もといテツヤ殿は静かに兵たちの後ろ姿を見たまま言った。

「えぇ。兵たちの気持ちは痛いほど理解できます。父のように慕っている人物が、不毛な理由から謹慎処分を受けたのだから許せないのは当たり前です」

しかし、ここで何かを起こしてはプロイセン様を始めとした将軍達の首が跳ぶし、兵たちもただでは済まない。

だから、ここは心を鬼にしてああも厳しく言い戒めたのだ。

「すまないな。テツヤ」

将軍の一人がテツヤ殿に頭を下げた。

将軍が一人の男に頭を下げるなど前代未聞だが、私はあの状況を止めたテツヤ殿に礼を言うのは当然だとも思った。

「いや、俺の方こそ怒鳴って悪かったな」

「あれは良い。ああでもしなければ、あの者たちは抑えられない」

将軍は我々にもう少し力があれば、と言った。

「その時が来れば、必ず力が出るさ」

こうしている間にも向こうは既に侵略を開始しているだろう、とテツヤ殿は言った。

「動いているのに、何も出来ない。・・・我々は無力だな」

「いいや。無力じゃないさ」

俺らに出来る事はある、とテツヤ殿は言った。

「出来る事？」

「あぁ。兵たちを抑えながら来るべき時に備える事だ」

民達を安全に避難させる手立て、防衛線を決める、貴族たちに激を飛ばすなど考えれば幾らでもある。

「そうだな。何も戦うだけが我等の取り得では無い」

「その通りだ」

テツヤ殿の言葉に将軍達は頷いて早速、とばかりに行動を開始した。

「テツヤ殿は、人を纏める力をお持ちですね」

エドリアス様がテツヤ殿を見ながら言った。

「一応、少佐だからな」

大勢の部下達を纏めなければならなかった、とテツヤ殿は返答した。

まぁ、事実は４人だが。

それでも訓練中は大勢の者達を鍛えて従えたのだから纏める力はある、と言えるだろう。

「そうですか。では、私たちも何か考えましょうか」

「そうだな」

テツヤ殿は頷き、私たちは寮へと戻った。

寮へと戻るミーシャ大尉とイーグル１等軍曹、更にワイド様が居た。

「お帰りなさい。少佐」

「旦那。あの髭が格好良いおっさんが謹慎って本当ですか？」

「テツヤ。不味い状況になったな」

口々にテツヤ殿に話し掛ける３人。

「俺は人の話を１０人分も聞けない」

テツヤ殿は１人ずつ話せ、と言った。

３人は謝りながら順番に話し始めた。

「取り敢えずお前等の言いたい事は解かった」

テツヤ殿は3人を見ながら言った。

「ワイド。お前としてはこの状況をどう思う?」

「不味い状況の一言だ。あれが敵の間者だったら、どうしようもない」

「どれだけこの国は馬鹿なんだい?少佐の国じゃあるまいし」

ミーシャ大尉は呆れ返った口調で言い切った。

私はテツヤ殿の国もこんな状況なのか?と気になったが、今はそれ所じゃないと思い口を開かなかった。

「しかし、旦那。軍のトップを謹慎処分にするなんて・・・兵たちが騒ぎませんか?」

「もう騒いでいた」

イーグル1等軍曹の指摘にテツヤ殿は答えて、抑えたとも言った。

「何だか、雷みたいに大きな声がしたと思っていたが、お前だったか」

ワイド様がテツヤ殿から渡された女神の抱擁を銜えながら言った。

「あぁ。あいつらの気持ちも解かるが、ここは断固として止めない

と駄目だと思ってな」

「それは良い事だ。ここで下手に行動を起こせばそれこそ一大事だ」

こちらが先に動いてはもう軍の信用は宮廷内では完全に地に落ちる、と言えるだろう。

それだけは絶対に避けなくてはならない。

「あぁ。さて、俺らで出来る事を考えるしようぜ」

先ず聖騎士団を一同に集めて話し合おう、とテツヤ殿は言った。

ワイド様はそれに頷いた。

私は嫌な胸騒ぎが前々からしていたが、これの事だったのかと今更になって気付かされた気分になった。

第三章：対策会議

聖騎士団の一同を集めたワイド様はテツヤ殿と共に先ほどの件を話した。

とはいっても全員が無線を持っていたからそれは大して意味を成さなかったが、改めて皆に知らしめる事に関しては良いと言える。

「と言う訳で、これから皆で然るべき時に備える為に意見を出し合ってもらう」

ワイド様が言い終えると聖騎士団はどうするかと意見を出し始めた。

ある騎士は「敵が来るのなら打って出るべし」と言った。

しかし、別の騎士から「下手に出るより立て籠った方が良い」と言う意見が出た。

「先ず戦う事より民達をどうやったら最小限の被害で抑えられるかを考えようぜ」

テツヤ殿がここで口を挟んだ。

「骸骨を始めとした奴等は戦になる事を極端なほど恐れている。だから、恐らくこちらは相当、向こうに遅れを取るだろう」

それでは遅いのだが、仕方が無い。

「では、どうするかだが、先ず女王を始めとした者達を無事に逃が

す事。そして民達の安全を保護する事だ」

そうする事で最小限の被害を抑える事が出来る筈だ、とテツヤ殿は言った。

「それか、もし骸骨達が兵を出せと言った場合だ」

もしゲンハルト様達が兵を出せ、と言うのなら兵を出すしかない。

だが、下手に兵を出して王国から遠ざかっては逆に敵に狙われ易い、ともテツヤ殿は言った。

「俺の考えでは、内部に密通している者が居る可能性が高い」

ああいった者たちを上手く城の中に入れるのは難しい。

しかし、聞いた話によれば怪しまれずに入れた、と言う。

となれば誰かが裏で手を引いている可能性が極めて高い。

「内部に裏切り者が・・・・・・・・・・・」

兵たちはどよめいた。

王国に忠誠を誓う者の中に裏切り者が居るなど信じられない、という気持なのだろう。

「裏切りってのは、進んでなる者と拒否できずに強制されてなる者が居る」

片方は国の在り方や境遇などに反発を抱いてなる。
だが、もう片方は家族などを人質に取られたか弱みを握られてなる者が居る。

「どっちかは分からない。だが、裏切り者が居るとすれば・・・・少なくとも相当な権限を与えられた者だろうな」

この城に入れるとなれば、よほど権力のある者が渡りを付けて中に入れた、と考えるのが妥当と言える。

「では、その者を捕えるのですか？」

「いいや。きっと無理だ。俺らが行動を起こしたとなれば骸骨達が煩い。だから、敢えて無視する」

敢えて無視する事で油断を誘う。
だが、それだけでなく自分達は裏切り者がいる、と情報を流すのだ。
そうすればボロが出る。

「良いか？俺らはあくまで戦う事を旨とするが、今は備える事に徹しよう」

テツヤ殿の言葉に皆は一同に頷いた。

「では、これから何をするか具体的に話し合おう」

テツヤ殿はエドリアス様を招き寄せた。

「司教。この城が、もし攻められるとなればどうなる？」

「確実な事を述べますと、先ず火の手が真っ先に上がります」

民達家や商家の屋根は木製だ。

直ぐに燃えてしまう。

それ以外には空からの攻撃に何も対処できない。

ドラゴン・ナイト、ワイバーン・ライダーなどの空を飛べる敵から何も身を護る術が無い。

「他国や地方領主の中には魔法陣を張って攻撃を避けるか、迎撃部隊が居ります」

だが、私たちにはそれが無い。

確実に空から攻め込まれたら確実に終わりだ。

「その他には逃げ道が少ない事です」

万が一、攻め込まれたら逃げる道が正門以外に逃げる道が無いのだ。

ある意味、敵がそこからしか攻め込まれないように考えたのだろうが、逃げる事を想定するなら不味いとしか言えない。

「・・・先ずは火事に備える手筈と逃げ道を確保する事だな」

それが先だ、とテツヤ殿は言った。

―――――――

俺は煙草を吸いながら、広げられた地図を見下していた。

この城の中が描かれている地図で非常に解かり易い。

「先ずこの正門だ。ここからしか逃げられないのは失点だ」

俺は正門の部分を指差した。

「ここをもし、落とされたら逃げる道が無い」

よくもまぁ、こんな城にしたものだと俺は思った。

逃げ道が一つしかないなどどうかしている。

秘密の抜け穴、なんて気の利いた物があるとは到底思えない。

あったとしても誰も知らないだろう。

「先ず民達を逃がすには東西南北の４つに民達だけが知っている秘密の抜け穴を作る事だ」

それさえあれば敵が攻めてきたら直ぐにそこから抜けて逃げる事が可能だ。

「ですが、テツヤ殿。抜け穴を作る時間が果たしてあるでしょうか？」

ランドルフが尤もな意見を述べてきた。

こいつも頭が回るようになったな。

以前なら馬鹿とも思える発言をしていたが。

そんな成長を見せるランドルフが俺には嬉しかった。

「無いと考えるのが良いだろう。だが、出来る限りの事をしなくては駄目だ」

こんな言葉は敗者の言葉だが、俺の考えが正しければこの戦は・・・・戦が起こっている訳ではないが、もう既に王手だ。

こちら側に何の打つ手も無い事を予想している。

だから、負けだ。

負けは負けだが、まだ確実とは決まっていない。

勝てる見込みはまるでしないが、“負けない見込み”はまだ辛うじて希望的観測ではあるがある。

希望的観測など糞以下の将校が考えるもんだが、まだ大丈夫な筈だ、と俺は思う。

相手が俺らみたいな近代戦術や火器などを擁していてもある程度は何とかなる。

「先ず、この城に住居を構えている者達はどれ位だ？」

「そうですね・・・・ざっと数えても万単位です」

司教が俺の質問に答えた。

万単位、か。

そうなると一同に逃がすのは無理だな。

となれば先に女子供を逃がすのが先決だ。

男には申し訳ないが、残ってもらい消火活動などをしてもらうしかない。

「それからここには井戸がどれ位ある？」

「それぞれに別けた移住区に2、3つほどですね」

「それでは少ない。最低でも5つは欲しいな。更に各家に消火用の水を貯める場所を設置しなくては駄目だ」

後は火が移るのを避ける為にも壊すしかない。

「分かりました。私の方から各区長に伝えて置きます」

「頼む。他の奴等は、民達の安全を確保しつつ逃げるようにしろ」

集合場所は、衰退から栄光へ。

俺彼の地に与えられた意味を述べた。

「て、テツヤ殿・・・・・・・」

ランドルフが俺を見た。

「ランドルフ。こいつらには言っても良い。獅子頭軍団の奴等にも後で言うが、先ずはこいつらに説明しよう」

俺はランドルフに説明した。

それに対してランドルフは頷いた。

「衰退から栄光へ・・・なるほど」

ワイドは俺を見て頷いた。

「そういう事か」

「そういう事だ」

俺と奴は頷き合った。

こいつには俺の言葉が理解できたようだ。

他の奴等は首を傾げているが、今は教えない方が良い。

そう、今は・・・・・・・・

この国が動乱に包まれた時、初めて彼の地は衰退と言う殻を破り、再び光り輝く栄光になる。

その時が来るまでは、この言葉で表した方が良いだろう。

俺はそう思いながら煙草を灰皿に捨てた。

私たちは具体的な案を出し合いながらその日を終えた。

「さて、時間も時間だし飯にするか」

テツヤ殿の言葉に皆が頷いて席から立とうとした時だった。

「テツヤ様」

聞き覚えのある声がして振り返ると外人部隊の軍服を纏ったリーザ様が居た。

「おぉ！！リーザちゃん。相も変わらずお美・・・・んぎゃ！？」

イーグル1等軍曹がリーザ様に駆け寄ろうとしたが、ミーシャ大尉が拳を打ち込んだ上に羽交い絞めして抑えた。

前に口説くな、と言ったのにそれを忘れたかのように口説こうとするから自業自得だな。

などと私は思った。

何より実父が謹慎処分にされたばかりの女性を口説こうとする事自体が常識を大きく反している。

「どうした？リーシャ」

テツヤ殿は後ろで羽交い締めされて呻くイーグル1等軍曹無視しな

がら煙草を銜えながら訊ねた。

「実は父、プロイセンから言付けを頼まれまして」

「言付け？」

テツヤ殿は首を傾げた。

何だろう？

私も内心で気になった。

「実は貴方様が指揮する少数精鋭の隊を作り上げて欲しいと言われました」

「俺の指揮で？」

テツヤ殿は些か驚いた顔をしたが、それは私たちも同じ事だ。

「はい。貴方様なら下手な指揮官より兵たちを纏められると考えているのです」

確かに訓練の事を考えてもテツヤ殿なら下手な指揮官より兵たちを纏められると私は思った。

恐怖ではなく人望とか魅力で相手を纏められる方なのだ。

テツヤ殿は・・・・・・・・

それを見越して恐らくプロイセン様はテツヤ殿を指名したのだろう、

とも私は思った。

「別に構わないが、具体的にどうしろと言うんだ？」

「それはまだ言っておりませんでした。ただ、今回の件でよほど、腹に来たようですし絶望もしたようです」

「だろうな」

テツヤ殿は煙草に火を点けながら頷いた。

確かに、ゲンハルト様の言動などには我慢の限界もあるだろうし、サラ様から謹慎処分を言い渡されたのも腹に来たと思う。

しかし、それでも何か手を打とうと思いこうしてリーザ様に頼んだのだろう。

「どうでしょうか？」

リーザ様がテツヤ殿に再び訊いた。

「引き受けよう。あのおっさんからの頼みだ」

煙を吐きながらテツヤ殿は了承した。

「ありがとうございます。では、今からでもどういった組織にするか考えましょう」

「いや、お前さんは天馬騎士団があるだろ」

テツヤ殿はリーザ様には天馬騎士団があるから、自分が指揮する隊には入れないだろうと思って口にしたのだろうが、リーザ様は首を横に振った。

「いいえ。父からこうも言付かっております」

『テツヤの補佐官となり傍で支えろ』

「テツヤ様を支えろ、と私は仰せつかりました」

二度、同じ言葉を言い周りにそれを思わせるように私は感じた。

それに私自身が貴方様を傍で支えたい、とリーザ様は言いながら天馬騎士団は副団長が指揮すると続けた。

「分かった」

テツヤ殿はそれに頷いて、礼を述べた。

「ありがとよ」

リーザ様はそれに対して首を横に振ったが、顔は何処か嬉しそうだった。

テツヤ殿は煙草に火を点けて質問をした。

「それで人数は大体どれほど与えられるんだ?」

「テツヤ殿の世界では少数精鋭となるとどれ位の規模ですか?」

「国によってマチマチだが、俺の居た外人部隊の空挺部隊だと１２００人だが、そんなには駄目だろ？」

「はい。最高でも５００かと・・・・・・」

リーザ様は申し訳ない、と謝った。

５００人・・・余りに少なすぎると私は思ってしまった。

「あんたが謝る必要はない。・・・５００か。まぁ、その内の中に俺が訓練した奴が何人入るかにもよるな」

それによって問題がある、とテツヤ殿は呟いた。

だが、これは大した問題にはならなかった。

『それなら安心して下さい』

声がする方向を見ればテツヤ殿の訓練を受けた獅子頭軍団と天馬騎士団の面々が立っていた。

『我々は少佐の指揮する隊に志願します』

声を揃えて志願する一同に私たちは唖然とした。

「お、俺も志願する」

聖騎士団の一人が、テツヤ殿の訓練を受けた先輩が志願を表明した。

すると他の先輩たちも志願を始めた。

「私も志願しよう」

ここでワイド様まで志願した。

「あんたは聖騎士団の長だろ」

「そうだ。だが、私が居なくとも代わりの者は居る。それに私だってお前の訓練を受けたんだ」

だから、志願できる身であるし私はお前と共に戦いたい、とワイド様は言った。

「あたしは元から少佐の下で戦う覚悟だよ」

ミーシャ大尉が氷の女王を吸いながら呟いた。

「俺もだぜ。旦那」

イーグル1等軍曹も回復したのか、挙手した。

「坊ちゃんはどうする？」

イーグル1等軍曹が私に訊いてきた。

「私だって志願します」

私は迷わず言った。

あれだけの事を訓練させられたのだ。

それを活用しないで何の意味がある？

何よりこの人の傍で戦いたい、という気持ちが私にはあった。

「よぉし。では、今からお前等は俺の指揮下に入る。明日から訓練をする」

前以上の訓練だから覚悟しろ、とテツヤ殿は言った。

『了解しました。少佐』

私たちは声を揃えて敬礼をした。

第四章：コマンド部隊

私達は翌日、訓練場の中で一列に整列していた。

少佐、大尉、軍曹は私たちを前に立っている。

「今日から我々は獅子頭軍団から独立した軍、コマンド部隊として行動を開始する」

「少佐。コマンド部隊とは何でしょうか？」

私は気になって挙手をして質問をした。

「コマンド部隊ってのは少数で敵後方に潜入し、破壊工作、斥候・偵察、後方支援などをする部隊の事だ」

その他にも国内の火種など反乱軍などを撃滅する為の対反乱部隊などとしても運用されるようだ。

「良いか？俺たちは存在を出来る限り知られてはいけない」

元来、そういった特殊な任務を受け持つ隊というのは存在は余り知られてはいけない。

だから、自分達も出来る限り姿を見せないようにする、と少佐は続けた。

「訓練もここではなく森林などで行う」

今まで以上に本格的な訓練をする、と少佐は言った。

「だが、今日はこの隊の軍紀、階級などを決める」

先ず軍紀を決める事にした。

「先ず我々は任務を達成する事を第一にする」

復唱しろ、と命令されて私たちは復唱した。

『我々は任務を達成する事を第一にする』

「我々は少数精鋭の隊であり、決して仲間を見捨てない」

『我々は少数精鋭の隊であり、決して仲間を見捨てない』

「我々は任務達成の為には如何なる犠牲も厭わない」

『我々は任務達成の為には如何なる犠牲も厭わない』

「我々は捕虜になろうと決して諦めない不屈の精神を持ち続ける」

『我々は捕虜になろうと決して諦めない不屈の精神を持ち続ける』

「我々は民間人に対して理不尽な暴力を振ってはいけない」

『我々は民間人に対して理不尽な暴力を振ってはいけない』

「これが軍紀だ。分かったな?」

『了解』

私たちは声を揃えて頷いた。

「宜しい。では、これより階級を決める」

俺たちの居た軍隊の階級だ、と少佐は言った。

少佐の居た軍隊の階級ではこうなるらしい。

先ず少佐の居た軍隊での階級は士官・下士官・兵の3つに分類されるらしい。

そして兵は下士官の下で最下位に位置する。

少佐と大尉は3つの内、士官に相当するらしく軍曹は下士官に当たる。

リーザ様とワイド様は団長だった実歴を考えて士官にされた。

階級は二人とも中尉という階級で大尉の下に位置する。

軍曹よりは階級が上である。

軍曹は「何で俺より階級が上なんですかー」と不平不満を漏らしたのだが、「お前より使える」と大尉に言われた揚句「お前は下士官が上等だ」と少佐にまで言われて意気消沈した。

憐れと言えば憐れだが。

「お前等の階級は最初は兵の中にある2等兵から始まる」

それから実力で階級を決める、と少佐は言った。

「では、これより手始めに今までやってきた事を総洗いするぞ」

『了解』

私たちは敬礼をして準備に取り掛った。

「イーグル軍曹」

「はい。少佐」

私たちが準備を終えると少佐は軍曹を呼んだ。

「お前が指揮を取り訓練をさせろ」

「了解。おい、てめぇら!!駆け足だ!?」

軍曹は怒鳴り声を上げながら私たちの先頭に立って走り始めた。

私たちもそれに続いた。

この軍曹という階級だが、別名を「鬼軍曹」と言うらしい。

何でも兵の教練役や分隊長を務め叱咤激励し、部隊の士気と秩序維持を担っていた為に自他ともに厳しいとの事だ。

確かに訓練をする軍曹は何時もみたいにヘラヘラして情けない様子

を見せていない。

まさしく「鬼軍曹」と言う名が相応しい。

私たちは走りながら「レンジャー」と呼応して走り続ける。

時々、駆け足をしたりまたは突然、軍曹が「敵襲!!」と叫ぶと銃を四方に向けて構えるなどした。

「おらおら!!もっと気合いを入れて叫べ!!」

軍曹が声の小さい者に対して容赦なく叱り付ける。

「おい、仲間がへばっているぞ!!見捨てるな!?」

へばった者を支えて走り続けさせる。

その間、少佐、大尉、中尉の二人は何かを話し合っていた。

だが、今は訓練に集中しよう。

走り終えた後は障害物を交えて時間を計る。

目の前には木の板があり、更に先には溝がある。

そして更に行けば鉄の糸が頭上にある場所と障害物が嫌というほどある。

「もやし。お前は俺とだ」

「レンジャー！！」

私は声を腹から絞り出して叫んだ。

「よし。では、俺ともやしが先にやる。行くぞ！！」

軍曹はコルトＭ７２７を背中に掛け、私もモーゼルを背中に掛けた。

そして走り出した。

最初の板を跳び越え、溝に入り素早く上がり走る。

鉄の糸が張り巡らされた場所は匍匐前進で素早く進んだ。

途中で帽子が脱げたが、それ所ではない。

走り抜けると次の者が続いた。

全員が終えると次はラペリングの訓練だ。

これまた私と軍曹が最初だ。

だが、前に比べると既に２度、いや実戦も入れると３度か？

回数を重ねたお陰でコツが掴めて容易にクリアできた。

その他にも様々な訓練をしてウォーミング・アップは終えた。

「よし。では、これより森林地帯に移動する」

しかし、正門からではない。

各自、自分とバディで話し合い、何処から行くかを決めるらしい。

「少佐達は既に森林地帯に向かっている」

音がして空を見れば既にブラック・ホークが飛び上がっていた。

その下にはジープが釣り下げられていた。

「時間は今から1時間だ。先に着いた少佐達は敵として俺らを迎え撃つ算段だ」

つまり、ここからどう少佐達に分からないように抜けるかが問われるらしい。

「では、バディと話し合い決めろ」

私は軍曹とどうするか考えた。

「もやし。この城でどうやったら上手く抜け出せる?」

「正直な話・・・相手にスナイパーが居るので何処からどう抜けようとしても難しいと思うんです」

「確かにな。姐御の狙撃はスコープ無しでも百発百中だ」

ドラグノフの射程距離は１５００。

そして８００が妥当だが、大尉の腕ならそれを１５００でも可能だ

ろう。

「となれば・・・私が大尉を探して軍曹を援護する」

それから下に降りた軍曹が援護して私が降りるのが妥当かもしれない。

「その通りだ。お前さんはまだモーゼルで連続射撃は無理だろ？」

「はい。正直・・・1発うってから2発撃つのに時間が掛ります」

「だろうな。しかし、1発でも姐御の近くに撃てば問題ない」

1発でも掠れば姐御は怯む筈だ、と軍曹は言った。

「分かりました。必ず軍曹を森林に導いてみせます」

私の言葉に軍曹は驚いた顔をしたが、直ぐに笑った。

「その言葉、信じるぜ。ランドルフ」

初めて軍曹は私の名を呼んでくれた。

私はそれだけで何としても軍曹を森林に導かなければならないと思った。

私たちは行動を開始した。

出来る限り見え難い場所に移動して、城壁の上から鉤爪が付いたロープを下に垂らした。

私はその間、モーゼルを構えて相手を探す。

森林地帯なので見つけるのは難しかった。

しかし、その間も銃声が聞こえてきた。

音がする方向からどちらに移動するかを私なりに計算してみる。

東から最初はした。

では次はどちらからだ。

私は必死に考えながら少佐達が居る事も忘れずに四方八方を警戒した。

だが、一人では流石に無理だな、とも思った。

「おい。降りろ」

軍曹が下から小声で私に言ってきた。

私は頷いて、ロープを掴もうとした時だ。

左前方に光る物を発見した。

私は直ぐにモーゼルを構えて引き金を躊躇なく引いた。

ほぼ反射的にだ。

お陰で狙いもまったく出来なかった。

だが、それによって軍曹に敵の居場所を教える事が出来たのか軍曹はコルトＭ７２７を構えて撃ち始めた。

私は急いでロープを伝い、下に降りた。

「このまま森へ直進だ！！」

「レンジャー！！」

私と軍曹は急いで森林へと走る。

それを狙ったかのように別方角から銃声が聞こえてくる。

少佐達も狙撃しているのか！！

私は大尉以外に狙撃が出来るのか、と知り焦り始めた。

何とか森林へと入った私と軍曹。

「流石だな。ランドルフ」

軍曹は軽く荒い息をしながら私に話し掛けてきた。

「・・・何が、です？」

私は息を整えながら訊き返した。

「咄嗟に光る物を見つけて撃っただろ？」

「はい。お陰で狙いも出来ませんでした」

「それで良いんだよ。咄嗟でも相手に攻撃して俺に方角を教えた」

それだけでも十分な働き振りだ、と軍曹は言ってくれた。

「・・・ありがとうございます」

「礼を言うのはこっちだ」

軍曹は軽く笑いながらベレー帽を被り直して立ち上がった。

「さぁ、少佐達の元へ行くぞ」

「はい」

私は頷いてモーゼルを片手に森林の奥地へと消えて行った。

第五章：尊敬に値する男

私と軍曹は少佐達を探しながら森林地帯を歩いていた。

「ランドルフ。お前は少佐をどう思う？」

軍曹は休憩をしている最中、私に少佐の事を訊いてきた。

「どうとは？」

私は意味が解からずに訊き返した。

「男としてどう思うか、だな」

「・・・最初は薄汚い傭兵で、先輩騎士を土にただ埋めただけの冷酷な人だと思っていました」

だけど、それは大きな間違いだった。

先輩の墓に行き、酒を注いでくれた上に労いの言葉を掛けてくれた。

それに私に色々と為になる事を教えて下さった方だ。

「少佐は・・・尊敬に値する人物です」

尊敬どころか父として兄として、私は親近感さえ覚えている程だ。

「そうか。まぁ、俺も少佐のそういった所が好きなんだがな」

軍曹は自分が傭兵になった経緯を語り始めた。

「俺が最初に入った部隊は“第７５レンジャー連隊”という隊だった」

その隊は主に空挺降下して後方支援、破壊工作、隠密偵察、味方部隊の援護、目標回収任務などらしい。

「そこに入った奴等は大抵もっと上の特殊部隊に行くんだ」

最近ではグリーン・ベレーに入隊する事が多い事から「グリーン・ベレー養成機関」などと言われているようだ。

「凄い所に居たんですね」

「あぁ。だが、俺らは・・・酷い話だが、よく軽んじられた」

「どうしてですか？」

「特殊部隊ってのは自分達の隊こそＮＯ．１という考えがあるんだ」

それゆえ「養成機関」などと言われる隊は実力が無い、と言われているらしい。

更にその上に特殊部隊が何個もあるため軽んじられると言う。

私から言わせればそんな事を言う方が可笑しな話だ。

何処の隊が一番かは分からない。

それぞれの任務内容なども違うのだ。
それを軽んじる方が寧ろ恥べき事だ。

「俺が出兵した国の内戦で“モガディッシュの戦闘”ってのがあった」

何でもソマリアという国の内戦に介入していたが、そこから撤退するきっかけとなった戦闘のようだ。

「俺はその時、レンジャー連隊に居た。そしてその作戦に参加したんだ」

軍本部はその作戦を３０分で片付けられると思っていたらしい。

「俺らもそう考えていた。たかが訓練されていない民兵に俺らが負ける筈ない、と侮っていた」

しかし、実際は３０分どころか１５時間と言う長い時間が掛ったらしい。

更にブラック・ホークが２機もＲＰＧで撃ち落とされて、墜落したパイロットなどを救出するのに１８名も兵を失ったらしい。

その他にも負傷者が７３名も出たようだ。

「俺も傷を負って死ぬ思いをした」

最初は信じられなかったらしい。

自分たち精鋭が訓練をまともに受けていない筈の民兵にやられたのだから。

しかし、作戦は成功した。

「だが、な。・・・・３０分で終わる筈の作戦が１５時間も掛った上に戦死者が１８名も出た事は無視できない」

確かにそうだ。

３０分と言う短い時間で終わらせる事が出来ると予想していたのに１５時間も掛った上に１８名も死者を出したのだから。

「失礼ですが、どうしてそのような事態に陥ったのですか？」

「・・・最悪のシナリオを想定しなかった事。他国には作戦自体を教えなかった事・・・・・様々な原因がある」

命からがら帰国した軍曹は先ず自分を恥じたらしい。

「俺は精鋭の一員だと思っていた。だが、怖くて相手が銃を向けても撃てなかった」

そして自分が撃たれてから反撃に出たらしい。

「仲間もそうだった。俺らは支援をする筈なのに怖くて出来なかった」

そこへ特殊部隊が出て、相手を撃って支援を始めたらしい。

「・・・それが無性に腹に来た」

レンジャー連隊は仲間を支援し勝利へと導くのが役割。

それなのにそれが出来なかった。

それは軍曹だけの問題ではないのだが、軍曹にとってみれば自分一人でもそれが出来ていればもっと被害は抑えられた筈だと思っているらしい。

「それからグリーン・ベレーに入隊したんだ」

レンジャー連隊以上に苛烈な訓練だったらしいが、見事に入隊し階級も上がったようだ。

「グリーン・ベレーになってからも俺は悪夢に魘された」

血を流しながら自分を見つめる仲間が立ってこう言う。

どうして支援をしてくれないんだ？

どうして勝利へと導いてくれない？

と言い続けては軍曹を悩ませたらしい。

「一時は酒に溺れた。もう酒に溺れて死ぬのが俺の人生だとさえ思った」

しかし・・・・・・・・・・・・

「そこへ傭兵になった少佐と会ったんだ」

自分が出た極秘作戦で敵と戦っていた時に少佐は一人で現れて敵を滅ぼしたらしい。

「あの時の少佐の姿を見て、俺は思ったんだ」

俺もこの男のように一人で敵を打ち滅ぼせるようになりたい、と。

「作戦を終えてから俺は直ぐに少佐に仲間に加えてくれ、と頼み込んだ」

その時、少佐はこう言ったらしい。

『俺らはあんた等のように国から金も貰えないし、葬式も出してもらえない。おまけに裏切られる事もある。そんな仕事をしたいのか？』

「俺はそれを聞かされて一度は諦めかけた」

意思の弱い自分だ、と自嘲する軍曹。

「だが、少佐達の姿を見て思ったんだよ」

どの傭兵達も挫折を味わっている。

しかし、その挫折に挫けずに戦場を駆け巡っている。

「あの姿を見た時、俺は決意したんだ」

例え異国の地に埋葬されようとも、この挫折から立ち上がれるのなら構わない、と。

「そして少佐の仲間に加えてもらったんだ」

とは言っても、少佐は別の仕事で直ぐに居なくなってしまい別の人物が上官となったらしい。

「・・・４人を残して全滅させた上官ですか」

「あぁ。少佐と同じ階級だが、魅力は天と地の差があるほどだがな」

その男は少佐と違い、ちゃんと士官学校を出て正規軍でも着実に経歴を重ねてきたらしい。

所謂、親衛騎士団のような男らしい。

「確かにあいつは頭が切れるし強い。だが、部下達をあくまでも自分が指揮する作戦の駒としてか考えていない」

それは指揮官としては利点でもあるが、行き過ぎる面があったらしい。

「自分の経歴に泥を塗られるのが一番嫌いでな」

少しでもヘマをすれば容赦なく殴り、蹴るの暴行を加えたらしい。

「しかも、自分の立てた作戦は完ぺきだと思っている」

だから、自分達が意見を出しても聞き入れずに強引に作戦を行った

事もあるようだ。

「俺らの世界ではそんな奴は直ぐにでも袋叩きにして追い出すんだが、どういう訳か雇い主には豪く気に入られていてな」

そのためやりたくても出来なかったらしい。

「だが、俺と姐御。後の2人を残して全滅した」

これには雇い主も激怒したようで即刻、契約は打ち切り。

代わりに少佐が雇われたらしい。

「あいつは俺らがちゃんと動かないから作戦は失敗したんだ、と最後まで言っていた」

そしてあろうことか後釜に座る事になった少佐にまで文句を言って来たらしい。

お前のような野蛮人が将校な訳ない。

お前では作戦を立案する事も無理だ。

などと少佐を知りもしないくせに徹底的に侮辱したようだ。

「少佐も最初は契約を破棄された憐れな男として取り合わなかったんだが、流石にしつこいと思ったのか1発顔を殴ったんだ」

少佐の拳は破壊力がある。

その拳を諸に喰らった男は歯が何本か折れた上に鼻が曲がったらしい。

「あの時の顔と悲鳴は忘れられないぜ」

粘土細工のように潰れた上に豚のような悲鳴を上げたらしい。

「それで素直に消えれば良いのに奴は少佐にこう言ったんだ」

いつかその胸に風穴を開けてやる!!

「・・・随分と陳腐な捨て台詞ですね」

こんな台詞、何処の世界の悪役も今は使わない筈だ。

「だろ?俺たちはそれを鼻で嗤ったぜ」

愉快そうに軍曹は笑った。

そして立ち上がった。

「そろそろ行くか」

「はい」

私は頷いて立ち上がった。

そして少佐達を探しに再び奥へと進んだ。

第六章：モット・アンド・ベーリー

私と軍曹が“野戦陣地”を築く少佐達を見つけたのは夕方になってからだ。

大きな乗り物に乗って土などを掘り、それを上に被せては大きな山を作ろうとしている。

「来たか、イーグル。もやし」

顔を土で汚した少佐は私たちを見ると煙草を投げてきた。

私たちはそれを受け取り口に銜えた。

軍曹が私の煙草に火を点けてくれた。

私は礼を言いながら煙を吐き、少佐達の方へと近づいた。

「お前はやはり見込み通りだ」

少佐が煙草を吸いながら私に呟いた。

「どういう事です？」

私は無意識に撃ったのに見込み通りとはどういう事か分からなかった。

「お前は無意識に撃ったようだが、ミーシャはこう言っていた」

『あの坊やは天性の才覚を持っている』

「？」

私は解からずに首を傾げた。

「お前の撃った弾はミーシャの頬を掠めた」

あと少し狙いが良ければ目を撃ち抜いていた、と少佐は続けた。

「あの、それで大尉は・・・・・・・・・」

「女の顔に傷を付けられて激怒していた。だが、お前さんの腕前を自分の事のように褒めていた」

今は他の奴等を探しに行っている、と言われてほっとした。

あの人を怒らせて、ただで済むとは思えない。

だから、ここに居ない事に安堵を隠せなかった。

「イーグル。どうだった？」

「こいつは良い男になります。まぁ、まだ青いですが、ね」

軍曹は笑いながら煙草を吸った。

「そうか。それじゃ、お前等も手伝ってくれ」

「あの少佐。これは野戦陣地ですよね？」

「あぁ。それがどうした？」

「今まで要塞や陣地は見てきましたが、これは何ですか？」

「これは“モット・アンド・ベーリー”と言うんだ」

モット・アンド・ベーリー？

何だそれは？

「後で詳しく教えてやる。今は掘った土を固める。それを手伝ってくれ」

「了解」

私は頷いて渡されたスコップで積み上げられた土を固めた。

土を固めながら皆の帰りを待っていると大尉と中尉の二人が仲間達を連れて帰ってきた。

「おや、坊や。その歳で土遊びかい？」

大尉が私に微笑んできた。

右頬にはうっすらと掠り傷が見えた。

「その傷は・・・・・・」

「坊やが付けた傷だよ。嫁入り前なのに酷い事をするね」

「・・・すいません」

私は思わず謝った。

「もやし。謝る事ないぜ。姐御なら逆に男前が・・・・・・・ぎゃあ！！」

軍曹が最後まで言う前に大尉の鉄拳が私の真横を飛び、軍曹が後ろに吹っ飛び重ねた土に当たった。

「おぉ、これで土が固まったぜ」

少佐は良くやったぞ、と軍曹を褒めた。

しかし、ちょっと酷い褒め方だとも私は思った。

「で、少佐。何をしているんだい？」

「モット・アンド・ベーリーを作っている」

「あれを？」

「あぁ。ここなら比較的、周りを森林に囲まれているからそんなに目立たない。それにいざ、という時はここで時間を稼ぐ」

ここの方角は東で城とも間近だが、簡単には見つからない。

つまりヴァイガーへ逃げる通路となる。

そこへこれを作り、殿的な役割を担う事を考えたようだ。

「なるほどね。それじゃ、私たちも手伝うか」

大尉は他の者達に命令して土を掘らせ始めた。

皆で掘り続ける事数時間。

円形状に掘った深さは３０から４０メートルに達し、その掘った土を掘った土の内側に被せた。

その高さは１５メートルにまで達している。

「よし。今日はここまでだ」

少佐は土で汚れた顔を拭きながら今日はこれでお終い、と言った。

「明日もまたこれの続きだ」

「どれ位で出来るんですか？」

「これは手っ取り早く作る事が出来る要塞で８日間で出来た、という記録もある」

だが、明日までにそれを作り上げぞ、と少佐は言った。

『了解』

私たちはそれに頷いた。

それでは飯の時間だ、と少佐は言った。

夕食は少佐が仕留めた鹿で、それを焼いて皆で食べた。

そして眠る時間となった。

「先ず各分隊毎に別れて周囲を警戒しろ。４時間ごとに交代するように」

そう言って少佐は木の上にハンモックを吊るした。

他の者達もそれに倣う。

ハンモックで寝るのは毒蛇、毒虫などが来ないようにする為の対処法だ。

更に紐などに防虫剤などを塗り付けておく。

私たちはハンモックの上に上がりライフルなどを胸の上に置いた。

そして眠りに着いた。

皆が眠る中で私だけなかなか寝付けなかった。

初めて参加するかもしれない戦。

それが内乱だとなれば、余り良い気持ちはしない。

しかも、相手は前国王の息子であるリカルド様だ。

話に聞く内容ではリカルド様は戦上手で政に関しても優秀らしい。
だが、その余りに出来過ぎた才能と側室の子という事もあり冷遇された。
それが本人の性格などに陰りを落としたのは言うまでもない。
しかし、それだからと言って内乱を起こして良いのかと聞かれたら否だ。
もし、彼が首都に攻め込んできたら私は迎え撃つ側に立つ。
前王の子であるリカルド様に銃口を向ける事が出来るのだろうか？
私はそれを考えて寝付けない。
それでも寝ようとした時だ。
何か物音が聞こえてきた。
誰かがハンモックから転げ落ちる音がする。
私は、暗闇の中で目を開けて音がした方角を見ると、少佐達が寝ている兵たちに夜襲を仕掛けていた。
『・・・・これも訓練か』
私は起きていて正解だった、と思いながら静かにハンモックから降りて茂みに隠れた。

茂みから様子を窺うと少佐達が近付いてきた。

「・・・もやしの奴、気付いたか」

「案外、鋭いですね」

「流石は少佐の見込んだ坊やだね」

私は茂みの中からベレッタを出した。

「・・・動くな」

私は静かな声で少佐達に言った。

「・・・ほぉう。俺らの後ろを取るとはやるな」

少佐は面白そうに笑い声を上げた。

二人も同じだった。

私は茂みから出ようとした。

そこで後ろから縄が首に掛るのを感じ取り、急いで片手を縄の間に入れた。

ワイド様が縄を掛けようとしていた。

そちらに気が行ったため、少佐達にベレッタを取り上げられた。

そしてベレッタの銃口を向けられた。

「だが、甘いな」

少佐は笑みを浮かべたまま私に告げる。

「俺らだけが敵とは限らない。常に四方に目を光らせろ」

「れ、レンジャー・・・・・・」

私は薄れ行く意識の中でもレンジャーと言った。

そして少佐に拳を打ち込まれて、そこで意識を失った。

気が付いたら私は逆さまにされた状態で木に吊るされていた。

日はもう昇る手前だ。

「よぉ、お目覚めかい？」

少佐が煙草を吸いながら私に話し掛けてきた。

「お、おはようございます・・・・・・・・」

私は逆さまにされた状態で挨拶をした。

「おはよう。で、気分はどうだ？」

「頭に血が上って気持ち悪いです」

「それなら降ろしてやる」

少佐がコルトを抜いて私を吊るしていた縄を撃った。
私は頭から落ちそうになったが、寸での所で受け身を取れた。
まぁ、落ちた事に代わりはなく痛い思いをしたが。
「さっさと朝飯を食べて作業をするぞ」
「は、はい・・・・・・」
私は縄を自力で外して、少佐の後を追いかけた。
早目の朝食を皆で食べながら今日の事を少佐は説明した。
「今日までにこれを完成させる」
少佐は親指で固められた土の山を指した。
「だが、訓練も続けるぞ」
作業をしながらチームに別けて攻守訓練を行うようだ。
「実弾を使うから痛い思いは覚悟しろ。だが、お前等も実弾を使う」
お前らなら相手を殺さない個所を知り尽くしているから撃っても平気だろ?と少佐は笑った。
つまり自分達を信頼しているという事だ。

私たちはそれが嬉しいと同時に緊張した。

一歩間違えれば死だ。

しかし、こういった実戦訓練だからこそ成長するとも思う。

食事を済ませた後は再び作業を開始した。

第七章：親衛騎士団の見習い騎士（前書き）

ここで新キャラを登場させます。

何だか変な方向に行く気がして心配です。（汗）

第七章：親衛騎士団の見習い騎士

私は茂みの中から相手の様子を見ていた。

「・・・距離、５００。風速１、湿度３０％」

その隣で軍曹が双眼鏡と地図を片手に観測を行っている。

「後はお前さんの自由だ。何時でも撃て」

私は深呼吸をしてその地形に合った色をした布を巻いてカモフラージュしてあるモーゼルの引き金に指を掛けた。

そして引き金を引いた。

肩に思い反動が来た。

弾は真っ直ぐに飛んで固まった土に命中した。

作業をしていた者たちが一斉にこちらを見た。

「敵襲！！」

一人が声を上げて叫び、掘ってある掘の中に素早く身を隠した。

他の者たちも同じようにした。

そして銃を出して撃ち始めた。

「おわっ」

軍曹の頭をライフルの弾が掠めた。

「誰だよ。俺の頭を狙ったのは・・・・げっ！！姐御！？」

軍曹は双眼鏡で狙撃された場所に居る大尉を見て呻き声を上げた。

そして直ぐに双眼鏡を離した。

双眼鏡はライフルの弾が貫通したのか粉々に砕け散ってしまった。

それから立て続けにライフルの弾が襲い掛かる。

擦れ擦れで怖い事この上ない。

主に軍曹に狙いを定められているのだが、私にも流れ弾が当たりそうで怖い。

「やばっ。逃げるぞっ」

私と軍曹は匍匐前進で後退した。

「来たな。よし、後退だ！！」

少佐達の方まで行くと、援護射撃をしながら私たちは逃げた。

食事の後はこれの繰り返しだ。

時々は静かににじり寄って相手に締め技をしたり、石などを詰めた

布――ブラックジャックで相手を殴ったりした。

その他には弓矢などでも攻撃をした。

とにかく様々な方法で攻撃をしたり防御をする。

その間に作業を進めた。

そんな事をしながらも作業は順調に進んで行った。

先ず木材などは例の宅配人に頼んで届けさせる。

これで先ず木を切らずに済む。

後は少佐の居た世界で使われた土木作業の道具で作業が捗った。

最初は慣れない道具などで手間取ったが、慣れると速いものだ。

あっと言う間に土の山と堀が完成した。

そこから先を尖らせた木の杭を何重にも打ち込んで、一番天辺まで打ち込み続けた。

一番天辺は見張り台となっている。

だが、木などで上手くカモフラージュしているから簡単には解からないようにしてある。

後は私達が済む住居などを作って入口も作った。

逃げ道として2つの入口も偽装した状態で作り上げて正午には完成した。

「よぉし。これで完成だ」

少佐は私たちに労いの言葉を言いながら休憩をするように伝えた。

私たちは休憩を取りながらも交代で見張りをする事にした。

私は大尉と今回は見張りをする事になった。

塔の上から双眼鏡などで周りを警戒する。

「坊や、そっちは異状はない？」

「無いです。今の所は」

「それなら良い。それにしても・・・随分と親衛騎士団ってのは嫌われているようだね」

大尉は城下町の方を見ながら呟いた。

私も気になってそちらを覗いてみた。

双眼鏡から覗けば、後ろ姿で立ち去る親衛騎士団に民達が舌を出していた。

それに親衛騎士団は気付いていない。

「坊や、前々から思ってたけどあいつ等は嫌われ者と見て良いのか

い？」

「まぁ・・・正直な話ですが」

「やっぱりね。ん？」

「どうしたんですか？」

「何だか一人だけ坊やみたいな子が居るね」

「私に似ている？」

私は再び双眼鏡で覗いてみた。

確かに私みたいに些か騎士としては貧弱な体格をした騎士が居た。

年齢は私より同じ位で重たそうに鎧を着込んでいる。

「誰か知っている？」

「分かりません。見た事もありません」

私は誰なのか気になった。

「そう。おやー？彼女かしら？」

大尉が口笛を吹いた。

再び見ると親衛騎士団長のフィーナ様がその騎士の肩を優しく叩いた。

初めて見る女性の顔だった。

私たちに、と言うか少佐に向ける薄汚い物で見るような眼差しではない。

母か姉のように優しい眼差しで騎士に向けている。

あの人にもあんな顔が出来るんだ、と私は思った。

「あの女は？」

「フィーナ様と言って、親衛騎士団の長です」

「少佐を薄汚いとか言って三度も負けた女か」

「はい。一度目は首を折られそうになり、二度目は関節を外されました。そして三度目は剣を首筋に当てられました」

まだ四度目は無い。

だが、少佐に四度も挑んだら今度こそ殺されるだろう、と私は思った。

流石に四度も見逃す訳にはいかない。

「少佐も優しいね。あたしだったら一度目で首をへし折ってるよ」

大尉はくっくっくっ、と口端を上げて笑った。

この人も少佐と同じく悪役が似合う、と思ってしまったが慌てて消した。

知られたら何をされるか分かったものじゃない。

「おっと、時間だ。交代だよ」

「了解」

私は頷いて階段から降りて交代の者と入れ替わった。

階段を降りてもまだ私は気になった。

何でこんなに気になるのか自分でも分からない。

「どうしたんだ?もやし」

少佐が私の様子にいち早く気が付いて声を掛けてきた。

「実は・・・・・・・」

私は見張り台での事を話した。

「・・・なるほど。あの高飛車で傲慢な偏屈の塊の小娘が、ね」

随分と長い侮蔑の言葉を言いながら少佐は目を細めた。

「その者なら私が知っている」

ワイド様もとい中尉が知っていると言った。

「誰だ？」

少佐が中尉に訊ねた。

「レオン・ルソーと言う見習い騎士だ」

何でも子爵の位を持つ次男坊らしい。

長男が子爵の位を継ぐ事になっているためこのレオンは何処かに養子として出されるか、何か別の役職を探すしかなかった。

だが、やはり子爵という事もあり立派な役職でないと駄目だ、ということで親衛騎士団に入隊させられたようだ。

「本人は余り乗り気ではなかったらしい」

本当は聖騎士団に入りたかったようだ。

「おやおや、随分と謙虚な子だね」

大尉が氷の女王を蒸かしながら言う。

「あぁ。だが、親が親衛騎士団にコネがあって、そちらに入隊したんだ」

そして見習い騎士としてやっているらしいのだが・・・・・・・・・・・・

「お世辞にも剣の腕が良いかと聞かれると、駄目らしい」

そう言って私を見る中尉。

何だか私を重ねているように見えてしまう。

「おいおい。もやしとその餓鬼を一緒にするな。こいつは狙撃の腕があるんだ」

「そうだが、ついランドルフと重ねてしまったんだ」

中尉はすまない、と謝っていたが何だか釈然としない。

「それで、あの小娘とはどういう関係だ？これか？」

少佐が小指を立てた。

何だろう？

「いいや。フィーナ殿が歳の離れた弟のように一方的に可愛がっているだけだ」

「ほぉう。あの小娘にそんな母性があるとは知らなかった」

少佐は物珍しいというように呟く。

まぁ、いつも侮蔑の眼差ししか向けられなかったのだから当たり前と言えば当たり前か？

「だが、レオン自身は余り良い気持ちではないようだ」

親がそれを知り、婚約させようとしているらしい。

「なーる。それじゃ嫌がるわな」

大尉が納得するように頷いた。

貴族なら愛なき結婚は当たり前。

長男でなくとも貴族の子なら政略結婚などは当たり前だし、養子も当たり前だ。

それに反発する者も居ると聞くが、片手で数える程しか居ない。

「あぁ。私としてはランドルフ同様に面倒をみたいと思っていたんだがな」

「そう落ち込むな。俺らにはこいつが居る」

皆で徹底的に面倒を見れば良い、と少佐は言った。

「そうだな。では、早速だが面倒を見てもらうか」

「そうだな」

二人が口端を上げて笑った。

いや、このわらうは嗤うだ。

そして背後から冷たい視線を感じて振り返ると・・・・・・・・・・

・・

天馬騎士団の方々が居た。

「実はな、少し買い物を頼みたいんだ。お前とお嬢さん方で」

つまり・・・・・・・・・・・・

「私を捨てるんですかっ」

「女みたいに言うなよ。お前も大人の階段を登れ」

「わ、私は、ま、まだ・・・・・・・・・・・・」

「この際、色々と経験は重ねろ」

中尉まで非情な言葉を述べた。

そして・・・・・・・・・・

「さぁー、お姉さん達と買い物に行きましょうねー?坊や」

「い、嫌ですっ。だ、誰か、助けてー!?」

私は周囲に助けを求めたが、誰も助けてくれない。

それ所か手を振っている始末だ!?

『頑張れよー』

少佐達は手を振って私を見送っている。

私は何が起こるか分からない恐怖で発狂しそうだった。

第八章：山猫ＶＳ親衛騎士団

私と天馬騎士団の・・・お姉さま達は城下で必要な物を買い込んでいた。

お姉さま達は・・・もう嫌だ。

「坊や。これもお願い」

私に・・・し、下着を、持たせた。

ああ、もう嫌だ！！

私は顔を赤くしながら下着を見ないで袋に詰めた。

現在、私と天馬騎士団の方々は女性の・・・着る物を買っている最中だ。

しかも、買い物をする間は、お姉さまと呼ばないと駄目なんて事まで言われた。

どうして？と聞けば「いいから呼びなさい」と言うのだから酷い話だ。

着る物を売っている店員は私を面白そうに見ている。

「そんなに赤くなって・・・食べちゃいたいわ」

「ちょっと少佐から言われてるでしょ？」

一人が怖い発言をしたが、別のお姉さまが止めた。

『もやしに女性を慣れさせろ。ただし、おいたは禁止だ』

そう少佐に予め釘を刺されたらしい。

ただし、それ以外は何をしても構わない。

つまり身体を密着させたり触れたりするのは自由と言う事だ。

どうせならそれも禁止して欲しかった。

なんて考えているとまた別の物を渡された。

「・・・あとどれ位ですか？」

私は耐え切れずに訊ねた。

「もう直ぐよ。その後は食料を購入してちょっとお茶でも飲んで帰りましょう」

「・・・・はい」

私としては速く帰りたいのだが、お姉さま達はそうではない。

こんな時間は滅多に無いし、少佐自身が少し羽を伸ばせと言ったのも理由かもしれない。

そんな事を考えながら私は溜め息を零さずにはいられなかった。

そうでもしないと、身が持たない。

それから1時間後に私は店から出れた。

まだ時間が掛りそうなので私は別の買い物をして来いと言われた。

それのお陰で私は自由になれたのだが。

「はぁ・・・もう嫌だ」

だが、私は極度の疲労感で一杯だった。

これなら訓練をした方が遥かにマシだ。

このまま帰りたい気分だ。

私は溜め息を再び吐きながら買い物に行こうとした。

「おやー？誰かと思えば、薄汚い傭兵と一緒の見習い騎士じゃないか？」

声がして振り返れば、馬上から私を見下す親衛騎士団が居た。

「・・・・・・」

私は無言で彼等を見た。

その中にはフィーナ様とレオンという見習い騎士も居た。

「下着店？おやおや、随分と聖騎士団は暇なんだな」

ゲラゲラと、およそ親衛騎士団とは思えない下種な笑い声を上げる騎士。

・・・・耳障りだ。

先輩騎士を侮辱された事もあるし、私は余り良い感情は持てなかった。

と言うか、持てるのならその秘訣とやらを教えて欲しいものだ。

「・・・・・・・・」

私は無言で居たが、直ぐに背を向けた。

こんな人たちに付き合っているほど時間は無い。

寧ろ付き合う方が時間の無駄だ。

「おい。何とか言えよ」

「・・・何の用ですか？」

私は振り返らずに訊ねた。

「何だ、その態度は？見習い騎士風情が」

「・・・貴方に言われる筋合いはありません。それに私は買い出しで忙しいんです」

「何だと?!」

騎士が激怒した。

「聞こえませんでしたか?私は忙しいんです」

「たかが見習い騎士の分際で親衛騎士団である俺を侮辱するのか!!」

「侮辱と取るなら取って下さって結構です。それは貴方の勝手な被害妄想ですから」

「随分と強気な発言だな」

今にも剣を抜きそうな男を制してフィーナ様が馬から降りて私に近付いてきた。

「何時もあの下種な男と一緒に居るが・・・今日は違うようだな」

「テツヤ殿は下種な男ではありません。ちゃんとした軍人で階級も将校である少佐です」

「ふんっ。少佐か何だか知らんが、金で雇われて戦う犬ではないか」

「・・・貴方みたいに傲慢で民達を大事にしない“下種な女”と一緒にしないで下さい」

私は自分の口から出た言葉に驚いた。

だが、口は勝手に動いていた。

「貴方は少佐を傭兵と蔑んでおりますが、少佐はこの国を・・・民達を護りたいと願っております」

フィーナ様が剣を抜いて私に向けてきた。

「貴様・・・先ほどの言葉を取り消せ」

「少佐を侮辱した事を取り消さないと嫌です」

「私は本当の事を言ったまでだ。プロイセン様はあの男を気に入っているようだが・・・所詮あの方も戦好きな男でしかなかった」

城の中で剣を抜こうとした、とフィーナ様は言った。

「ゲンハルト様が野蛮人と言ったのが頭に来たらしいが、剣を抜こうとした時点で野蛮人確定だ」

「・・・プロイセン様を侮辱できるほど貴方は野蛮ではないのですか？」

三度も街中で剣を抜き、少佐に剣を向けた挙句に負けた貴方如きに。

「・・・良い度胸だ。少し教育してやる」

「やれるものならどうぞ。私だって弱くないです」

私はドウダヌキを呼び出し鞘から抜いた。

そして正眼に構えた。

「ふんっ。剣で私に勝てると思っているのか？」

「・・・“剣”では、ですね」

私は嘲笑を浮かべ挑発した。

もう私はこの下種な女を叩き伏せたい、という気持ちで一杯だった。

それがフィーナ様には火が点いたようだ。

剣を振り降ろしてきた。

私はドウダヌキを流れる動作で剣を裁いた。

ドウダヌキを左手に持ち替えて右手をベレッタに向けて素早く抜いた。

撃鉄は起こさなくても撃てるからそのまま銃口を向ける。

フィーナ様の驚愕する顔が見えた。

だが、私はそれを無表情で返した。

引き金に指を掛けて引こうとした所だった。

「・・・あらー。これはこれは親衛騎士団の方々ではないですか」

店から天馬騎士団のお姉さま方が出てきた。

「坊や。それは仕舞いなさい。こんな女に使うなんて駄目よ」

お姉さまの一人が私のベレッタに手を掛けて下に押した。

「・・・・・・」

ベレッタを下げられながら私は無言でフィーナ様を睨んだ。

フィーナ様も私を睨んでいる。

「フィーナ様。店の中からも聞こえましたけど、貴方様は獅子頭軍団の傘下に居る身ですよ？」

傘下に居るのに司令官であるプロイセン様を侮辱するのは些か問題がある、とお姉さまは言った。

「それにこんな可愛い坊やに剣を向けるなんて・・・女として恥ずかしいと思わないんですか？」

「・・・・私を侮辱するか」

「いいえ。本当の事を言っただけですよ。それに我が団長であるリーザ様からもきつくお叱りを受けたでしょ？」

親衛騎士団たる者がむやみやたらと剣を抜くのは恥さらしも良い所だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

フィーナ様は渋面を浮かべた。

顔を渋めると確かに皺がある。

あれでは早く老婆になってしまう、と少佐が前に言っていたがその通りだな。

私はベレッタをホルスターに仕舞った。

そしてドウダヌキも鞘に収めて消した。

「お姉さま。そろそろ買い物の続きをしましょう」

私はお姉さま達に買い物の続きをしよう、と言いこの場から離れようとした。

これ以上ここに居ると面倒だ、と思ったからだ。

「そうね。こんな恥さらしと居るとこっちまで恥になるものね」

お姉さま達は私の髪を撫でながらフィーナ様達に背を向けた。

「それでは“誇り高き親衛騎士団”の皆様。せいぜい恥さらしをしないように」

思い切り皮肉を込めて言い、私たちは買い物を再開した。

背中に殺気を感じたが、私たちは無視して歩き続けた。

そして買い物を終えて茶を飲んだ。

私を囲むようにしてお姉さま方は座っている。

傍から見れば、私だけが男で一種のハーレムに見えるのか男性客の視線が痛い。

私は敢えて無視して茶を飲んだ。

「坊やがまさか、あんな言葉を吐いた上に喧嘩を売るとはね」

お姉さま方は私に軽く驚いたと言った。

「まったくだわ。でも、格好良かったわよ」

私はお姉さま方に揉みくちゃにされたが、嫌な気分はなかった。

寧ろあの下種共を見返せた気がして気分は良かった。

幕間：選ばれた者

私は苛立ったまま市街を巡回していた。

あの見習い騎士・・・ランドルフとかいう奴、あの下種な男と同じような武器を持っていた。

そしてそれを私に向けてきた。

あの時のあの男の顔・・・まったく表情が無かった。

まるで、無意識にやっているような感じだ。

剣の師であった亡き父の言葉がこう言っていたのを思い出した。

『その道を極めた者は無意識に身体が動く』

あの男が、そんな事を起こしたとは信じられない。

私だってまだそこまで極めていない。

それなのにあんな見習い騎士風情が極められる訳がない。

私はそう信じた。

「・・・あの、団長」

私は小声で呼ばれて意識を戻した。

「何かしら？レオン」

私は親衛騎士団に配属されたレオン・ルソー。

子爵の次男坊で私より８つも年下で身体も騎士として情けない。

だけど、それでも私はこの子を可愛がって面倒を見ている。

一人っ子だった私にとっては歳の離れた弟のような存在だ。

それに可愛い。

周りからはレオンに甘い、と言われるけど団長である私に意見する者は殆ど居ない。

まったく情けないものだ。

そんな事を思いながら私はレオンにどうしたの？と訊いた。

「さっきの騎士の名前は何ですか？」

「ランドルフとかいうが、どうしたの？」

「いえ。私と同い年なのに、まるでそんな気がしなくて」

「それはそうよ。貴方は子爵家の次男だけど、向こうは平民だもの」

聖騎士団は主に平民の出が多い。

平民が生意気にも騎士になるなど私には我慢できない。

騎士というのは選ばれた高潔な血を持つ者のみがなれる職業だ。

それを平民ごときが騎士になるなど私には我慢できなかった。

最近では、あんな下種な傭兵を一員に迎えて訓練を受けるのだから気が知れない。

あんな金の為なら平気で裏切ったりするような傭兵ごときを騎士にするなど・・・・・・・・・・・・・・

思い出すだけで腹が立つ。

タカミ・テツヤ・・・・私を三度も打ち負かした。

一度目は唾を吐いた上に私の首を絞めた。

二度目は私の関節を外した。

三度目・・・これは醜態以上の屈辱だ。

私を地面に叩き付け、刃を喉仏に当てたのだから。

あの時の表情は忘れない。

私を見下し、笑みを浮かべる姿。

まさしく血に飢えた狂犬。

あんな男はこの国に・・・いや、この大陸に居てはならない。

それなのに女王陛下はあの男を庇い立てする。
私には理解できないが、お優しい方だからきっと憐みの積りで“飼っている”のだろう。
だが、いつ牙を向くか分からない。
何とかして排除せねば・・・・・・・・・・
「あ、あの団長・・・どうしたんですか?」
レオンが私の様子を見て、少し怯えた声で話し掛けてきた。
「あ、いいえ。何でもないわ」
私は安心させるようにレオンに笑った。
でも、レオンは表情を曇らせたままだ。
「あの、この後は寮に戻るんですよね?」
「えぇ。それがどうしたの?」
「少し気晴らしに散歩してきます」
「一人では危ないわ」
私は同行しようとした。

だけど、レオンは大丈夫と言って馬を走らせて行ってしまった。

私はそれを見つめるしか出来なかった。

僕は馬を駆りながら、ランドルフ君達を探した。

探す理由は謝る為だ。

あれはどう見ても僕たちが悪い。

だけど、先輩に言った所で謝りに行ったりはしない。

だから僕が謝りに行くんだ。

フィーナお姉さまには悪いけど、僕は謝らないと駄目だと思った。

親衛騎士団が民達から嫌われているのは解かっていた。

城下を巡回していた時から浴びる侮蔑の眼差し。

あれは私たちに向けていると初めての巡回で解かった。

最初はどうして向けるか解からなかったけど、今なら解かる。

だって、先輩たちの傲慢な態度を見れば嫌でも解かる。

自分達は選ばれた者たちであり、民達は傅く存在だと思っているんだ。

僕はそんな選ばれた者たちだとは思わない。

もし、僕が選ばれた者ならこんな軟弱な訳が無い。

僕は子爵家では浮いていた。

お兄様は立派な体格と頭脳を持っているし、父上達もそうだ。

僕だけがこんな体格なんだ。

だから、僕は選ばれた者じゃない。

本当は親衛騎士団より聖騎士団に入りたかった。

それか詩人とか学者になりたかった。

昔から読書は好きだったのが理由だ。

でも、父上が無理やり私を親衛騎士団に入隊させた。

私は嫌だ、と言いたかった。

だけど、父上に怒られるのが怖かったし、今まで育ててくれた事を思うと言えなかった。

親衛騎士団に入隊した時は先輩たちから「軟弱だな」と言われた。

私は否定できなかった。

唯一私を庇ってくれたのはフィーナお姉さまだ。

親衛騎士団の長にして伯爵家の後取り娘。

初めて会った時は女神と思ったほど高潔さを兼ね備えていた。

フィーナお姉さまは私を色々と面倒を見てくれた。

でも、何時からかそれが嫌になってきた。

何時もフィーナお姉さまは言うんだ。

『貴方は選ばれた者の一員よ』

何時もこれを言う。

私は好きで入った訳ではない。

選ばれた民でも無い。

それなのにお姉さまは何時も選ばれた者だと言い続ける。

何時しかそれが私には重しとなっていた。

そして押し潰されそうになっている。

そんな事を思っていると何時の間にか城の外に出て森林に入っていた。

昼間でも暗くて怖い場所だ。

この前まで山賊が横行していた。

しかし、獅子頭軍団と聖騎士団、更に天馬騎士団の連携で見事に山賊は一網打尽にされた。

でも、噂では一人の傭兵が活躍した、と聞いている。
名前はタカミ・テツヤ、と聞き慣れない名前を持つ傭兵だ。
会った事はないけど、お姉さまを3度も打ち負かしたらしい。
お姉さまは強い。
強くなくては親衛騎士団の長にはなれない。
そのお姉さまを倒すんだからそれ以上に強いと思う。
私は興味で会ってみたい、と思った。
だが、今は森林から出ようと思う。
馬を反転させようとした時だ。
急に馬が暴走した。
「ど、どうしたんだ?」
私は慌てて馬を宥めようとしたが、馬は前足を上げて立ち上がった。
私は思わず手綱を離して後ろから倒れた。
「あうっ」
私は頭から地面に落ちた。

そして薄れ行く意識の中で誰かが近付いて来る気配を感じながら意識を手放した。

第九章：親衛騎士団の小言

私はベッドで眠るレオン・ルソーを見ていた。

あれから陣地に戻り事の顛末を報告した。

本当は怒られるんじゃないかと内心は怖がっていた。

だけど、少佐は「お前も変わったな」と言うだけで怒ったりしなかった。

これは有り難かった。

この人に怒られたら、大尉より怖い目に遭うと私はもう確信していたからだ。

そして夕食の準備をしようとした時だ。

外で馬の鳴き声が聞こえてきた。

少佐と一緒に行ってみると、レオン・ルソーが馬を宥めようとして謝って転倒する所を目撃した。

周りを見たが、誰も居なかった。

急いで駆け付けると彼は気絶していた。

私は少佐にどうするか、訊ねた。

「放っておく訳にはいかない。連れて来い」

私は頷いて彼を担いで陣地へと戻り、ベッドに寝かした。

既に夜になったが、彼は目を覚まさない。

「起きたか？」

少佐が私の隣に立って訊ねる。

「いいえ。まだです」

「随分と気絶する時間が長いな」

少佐は煙草に火を点けながら呟き、レオン・ルソーの胸倉を掴むと平手打ちを始めた。

「こら、起きろ」

パンパンパン、と手加減した様子で打ち続ける。

私の時より手加減しているのは何故か？

恐らくフィーナ様と揉め事を起こすのが面倒だからだろう。

でも、やはり私の時もあれ位の加減でして欲しかったと思わずにはいられない。

平手打ちを何発もすると、レオン・ルソーが目を覚ました。

「起きたか？」

少佐がレオン・ルソーを見ながら訊ねる。

「こ、ここは・・・・・・・・」

「お前さん、小娘が可愛がっているレオン・ルソーだろ？」

少佐は質問を無視して訊ねた。

「は、はい。レオン・ルソーです。あの、貴方は・・・・」

「お前さんの上司を3度ほど叩き潰した男だ」

「では、タカミ・テツヤ殿ですか？」

「あぁ」

少佐はそれにただ頷いただけだった。

「あの、ここは一体・・・・・・・」

「俺らの訓練場だ。それより早く帰った方が良いぞ。もう夜だ」

レオンは外を見て、不味いと叫んだ。

「あ、あの、このお礼は必ず・・・・・・・・」

「別に要らん。それより此処の事は誰にも話すな。それだけを守れ」

少佐はレオンにそれだけ守れば良い、と言ってレオンはそれに頷いた。

「あの、私の馬は・・・・・」

「知らん。歩いて帰れ。城の近くだから問題ない」

レオンは肩を落としながら一礼して出て行った。

まるで剣を無くして落ち込む私のようだ。

あの時、私も剣を無くして落ち込んだからそれが余計に重なって見えてしまう。

「どれ、俺らは夜の警備をするか」

「はい」

私は頷いてＳＫＳカービンを持ち少佐の後に続いた。

見張り台に行き、交代して双眼鏡などで周囲を見渡す。

「あの餓鬼、何でこんな所に居たんだろうな？」

「さぁ？何か用事でもあったんですかね？」

「まぁ、俺らには関係ない」

忘れる事にしよう、と少佐は言い私も頷いた。

「あーあ、あの餓鬼も運が無いな」

「え？」

私は少佐が見ている方向を覗いてみると、レオンがフィーナ様に怒られている場面を見た。

「あの様子だと可愛い弟が夜になっても帰って来ないから心配して探していたって所だな」

「ですね。それにしても運が無いですね」

「まったくだ・・・・いいや、どうやら天は見捨ててないらしい」

「エドリアス様じゃないですか」

私は双眼鏡に映るエドリアス様の様子を見守った。

「・・・彼は私の手伝いをしていたのです。叱るなら私を叱って下さい、か。人が良いな」

少佐は唇の動きで何を話しているのか、分かったのか独白を始めた。

「そうなのですか？それは失礼しました」

今度はフィーナ様の言葉を言う。

「いいえ。では、レオン。ご苦労様でした」

と言って少佐は独白を止めた。

「やれやれ。あの様子だと、今度は小言を叩かれるな」

それならそうと連絡くらいしろなど、延々と言うに違いない。

そう少佐は言った。

その口ぶりは何処か面白そうな口ぶりだ。

「少佐。面白いんですか？」

「面白いね。あの小娘にあんな所があるなんて、な」

「はぁ・・・・・・・・・」

私は些か呆れながら周りを警戒した。

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

―――――――――――――

僕は顔を叩かれて目を覚ました。

目の前には凄く強面の男の顔があった。

「起きたか？」

男は鉄の錆ついた声で私に訊ねてきた。

「こ、ここは・・・・・・・」

私は山賊の生き残りか？と思いながら場所を訊ねた。

しかし、男はそれに答えなかった。

「お前さん、小娘が溺愛しているレオン・ルソーだろ？」

男は私の名を言った。

そして小娘とも言った。

小娘って・・・お姉さまの事だろうか？

「あの、貴方は・・・・・・・・」

「お前さんの上司を3度ほど叩きのめした男だ」

名前を言わずに倒した回数を男は言ったが、私にはそれで名前は解かった。

「もしかして、タカミ・テツヤ殿ですか？」

「あぁ」

やはり、と私は思った。

想像以上に強面の人だな、と思いながら私は再びここは何処か？と訊ねた。

「俺らの訓練場だ。それより早く帰った方が良いぞ？」

もう夜だ、と言われて私は窓から見た。

もう日が暮れて夜になっていた。

ま、不味いっ。

無断で夜に帰ると、お姉さまが怒るんだ！！

私は慌ててベッドから起き上がった。

「あ、あの、このお礼は必ず・・・・・・・・」

「別に要らん。それより此処の事は誰にも話すな。それだけを守れ」

テツヤ殿は私の言葉を遮り、鋭い視線を寄こした。

有無を言わせない眼であると同時に人に言う事を聞かせるだけの力がある。

テツヤ殿は私にそれだけ守れば良い、と言った。

私はそれに頷いた。

「あの、私の馬は・・・・・」

「知らん。歩いて帰れ。城の近くだから問題ない」

私は振り落とされた馬は知らない、とぶっきら棒に言われて落ち込んだ。

あの馬、初めて親衛騎士団に入隊した時に貰った馬なのに・・・・・・

私は一礼して部屋を出た。

部屋を出ると、周りは木の杭で囲まれた森の中だと分かった。

そしてその周りには見た事も無い衣装に身を包んだ男女が居る。

何だか私だけが酷く場違いだと思って、急いで入口から出た。

暗い森の中を歩くが、城壁が見えたから城の近くだという事は本当だと思った。

城門まで行き、身分を名乗り入れてもらう。

そして寮へと向かっていたが・・・・・・・・・

「レオン！！」

前方からフィーナお姉さまが私を見つけて駆け寄ってきた。

ああ、やっぱり来たんだ。

お姉さまは私がこんなに遅いと必ず探しに来る。

そして説教をする。

だから、今回もそうだろうと思い覚悟した。

案の定か私の前まで来たお姉さまは怒りの表情で私を見下していた。

「レオン。今まで何処に行ってたの？」

「え、ええ、と、その・・・・・・・」

私はテツヤ殿から言うな、と言われたので答えに窮屈した。

だけど、嘘を吐いてもお姉さまは見逃す筈ない。
どうしたら良いだろう・・・・・・・・・・・・
私は何とか手を考えていた。
そこへ思わぬ人が現れた。
天の助けと言えば良いだろうか？
「これはレオン。まだ居たのですか？」
サルバーナ王国の司教であるエドリアス様が私に話し掛けてきた。
「これは司教様。あの、レオンと一緒だったのですか？」
フィーナお姉さまはエドリアス様に一礼しながら私の事を訊ねた。
「はい。実は少し森に薬草を取りに行く所でして、レオンが護衛として付いて行くと言ってくれましてね」
エドリアス様は私をチラリと見て、話を合わせろと言った。
「は、はい。それで帰りが遅くなりまして・・・・・・・・・」
「フィーナ殿。この青年を可愛がるのも解かります。しかし、もう少し信頼しては如何ですか？」
「は、はい・・・・・・」

お姉さまは項垂れながら頷いた。

「では、私はこれで」

エドリアス様は一礼して去って行った。

助かった、と私は思ったが実はそうではなかった。

寮に帰るまでお姉さまは私に小言を言ってきたのだ。

だが、説教よりはマシだ。

寮に着くまで私はそれを甘んじて聞くしかなかった。

第十章：自分の人生

レオン・ルソーが訪れてから2日が経過した。

あれから特に変わった様子はない。

だが、警戒はしている。

私は砦の中でベレッタを撃っていた。

塔の上からラペリングしてから前に走る。

走りながらホルスターからベレッタを抜いて、両手で構えて前の的に当てる。

的は身体に当たった。

それから直ぐにナイフに持ち替えて相手の喉元に突き刺す。

他の者たちもそれぞれの訓練を行っている。

「よぉし。ここらで少し休憩だ」

少佐の声に私たちは頷いて武器に安全装置を掛けた。

そして少佐から渡された煙草に火を点けて一服しようとした時だ。

「少佐。お客さまです」

大尉が敬礼をして少佐に客が来た事を伝えた。

「客？誰だ」

「司教と親衛騎士団の坊やです」

レオン・ルソーとエドリアス様が？

私は何で二人が一緒に来たのかが気になった。

「随分と変な組み合わせだな。まぁ良い。通せ」

「了解」

大尉は敬礼して元来た道を戻って行った。

「何の用、ですかね？」

「さぁな。それはこれから聞こうじゃないか」

少佐の言葉に私は頷いた。

間も無く大尉の後ろからエドリアス様とレオン・ルソーが付いてきた。

「よぉ、司教。それから坊主。この前は司教に助けられたようだな？」

「え？どうしてそれを・・・・・・・」

レオン・ルソーは動揺を隠せなかった。

「俺には見えない物はない」

少佐はふざけたように笑った。

そしてエドリアス様に眼を向けた。

「で、何か用かい？」

「はい。貴方様から言われた通り各区長に言っておきました」

井戸を増やした上に避難訓練や消火訓練なども実施しているようだ。

「皆、何処かで感づいていたようです」

「だろうな。民ほど危険に敏感な奴等は居ない」

傭兵時代も戦いが起こる前に民達は我先にと逃げたり、何らかの対処を取ったようだ。

「そうですか。それと今日、来た理由は失礼とは思いますが興味です」

「やはりな。あんたは相当な好奇心の塊だな」

「はい。いけませんでしたか？」

「あんたなら別に問題ない。寧ろ歓迎する」

「ありがとうございます。それとレオンは、貴方様にどうしても礼を言いたくて来たそうです」

少佐はレオン・ルソーに視線をやり、溜め息を吐いた。

「礼は要らない、と言っただろ？」

「すいません。でも、どうしても言いたかったんです」

レオン・ルソーは謝りながらも自分の意志を伝えた。

「分かった。礼の言葉、受け取っておく」

「ありがとうございます。それから・・・これは司教様からも言われたんですけど、言わせてもらいます」

私の先輩達が失礼な真似をしてすいませんでした、とレオン・ルソーは謝った。

彼が謝る必要は無い、とエドリアス様は言ったらしい。

だが、それでも謝らずにはいられなかったようだ。

「お前さんは相当な律儀者だな」

「よく言われます。あの、それであれは何をしているんですか？」

レオン・ルソーが指差す方向にはラペリング訓練を行う兵たちの姿がある。

「ラペリングと言ってロープを伝って降下する訓練だ」

「そんな訓練があるんですか？」

「あぁ。俺の居た所では良くやった」

お前もやるか？と少佐は彼に聞いた。

レオン・ルソーは一瞬、恐怖で顔を強張らせた。

しかし、彼とは逆にエドリアス様が是非ともやらせてくれと言ってきた。

「別に構わないが、その格好だと無理だな」

エドリアス様の格好はローブだ。

これではラペリング所か、私たちが行っている訓練も出来ない。

「では、衣服を貸して下さい」

「分かった。おーい、司教に服を貸してやれ」

少佐は他の者たちに予備の衣服を貸してやるように命令し、兵の一人が衣服を渡した。

エドリアス様は急いでローブなどを脱ぎ出した。

上半身を露もなくエドリアス様は曝したが、私は司教には不釣り合いなほどに鍛えられた肉体に驚いた。

「相当、鍛えているな」

少佐は驚きもせずにエドリアス様を見た。

「学者を目指していましたから、体力などには自信があるのです」

学者と言えば、教鞭を取る印象を受けるが結構体力も必要な職業らしい。

その他にも地方に出張などをしているため山賊などに対して護身術などを覚えているらしい。

「大した司教様だ。まるで従軍牧師だな」

「何ですか？それは」

私の問いに少佐は煙草を銜えながら答え始めた。

「名前の通り戦争などで軍人に付いて行き、死者に祈りを捧げたり兵たちの精神的な安定を保たせる役目を担っている」

一応、軍人らしいが非戦闘員として扱われるらしい。

階級は士官として少佐や大尉クラスに任命されるようだ。

「そんな物があるんですか」

私とレオン・ルソーは驚き、エドリアス様はまたしても新しい知識を得られた、と喜んだ。

本当に知識欲の塊だ、と私は思った。

エドリアス様は直ぐに着替えて何時でもどうぞ、と言った。

「じゃあ、もやし。見本を見せてやれ」

「レンジャー」

私は敬礼をして駆け足で塔に向かった。

そしてロープを身体に巻き付けて、背中を向けた。

床を蹴り壁を伝って一気に降りた。

「どうだ？」

「なるほど。あれなら高い場所からでも容易に降りる事が可能ですね」

エドリアス様は納得するように頷いた。

そして塔に登ってロープを身体に巻き付けると直ぐに降下した。

初めてなのに随分と慣れた様子だった。

「大した司教だ。聖職者より冒険家とか軍人としてやった方が良かったんじゃないか？」

「私もそう思います。ただ、家柄とでも言えば良いでしょうか？」

皆が聖職者として生きてきたので、自分もそれに倣うしか出来なかった、とエドリアス様は語った。

「なるほどな。あんたの考えも尤もだ。だが、一度切りの人生だ。それに人生は自分の物だぞ」

他人の意見に従ってやりたくもない職業に就くか、それとも身を投げる覚悟で自分の決めた人生を歩むか。

要は後悔するような人生は送らない方が良い、と言う事だろう。

天涯孤独の身である少佐だからこそ、言える言葉とも私は思った。

だが、それはエドリアス様にとっては神からの言葉にでも聞こえたのだろうか？

「私を貴方の軍に入れさせて下さい」

私はエドリアス様の発言に耳を疑った。

軍に入る？

それがどういう事か分かっているのだろうか？

「本気なのか？」

少佐もやはり私と同じ考えなのか、エドリアス様に訊いた。

「勿論です。貴方は先ほど“人生は自分の物”だと言いました」

エドリアス様自身、今の自分に疑問を感じていたらしい。

自分の人生なのに親が決めた職に就いて生きている。

自分がやりたい仕事は別にあるのに・・・・・・・・・・

自分の人生なのに親が全てを決めるのか？

「貴方の言葉を聞いて私は決めたのです」

自分の人生は自分の物。

なら、これから遅いかもしれないが自分の人生を自分で決めて歩もうではないか。

「・・・死ぬほど厳しいぞ」

「覚悟の上です。ですが、きっと後に役立つ事と思いますし、後悔したくないのです」

「・・・・分かった。ただし、俺の頼みを聞いてくれ」

「何でしょう？」

「あんたには悪いが、今の役職を続けてくれ」

エドリアス様の役職は司教だ。

だから、色々な所にコネがあるし顔も効く。

今の状況を鑑みればそれは役立つ、と少佐は言いたいようだ。

「その代わりに訓練を受けさせてもらえるんですね？」

「あぁ。どうだ？」

「構いません。元はと言えば私が突然、言い出した事ですから」

エドリアス様は幾分か走り過ぎた、と言って謝った。

そして、交換条件ですね？と続けた。

「あぁ。あんたの暇な時に来てくれ」

私たちに比べて時間に余裕が無いエドリアス様。

その分、扱きが厳しいから覚悟しろと少佐は言うがエドリアス様は笑みを浮かべて返した。

「では、明日にでもまた参ります」

迷彩服の上からローブを被り失礼します、と言って帰って行った。

レオン・ルソーは何処か生き生きとした背中で帰って行くエドリアス様をじっと見つめていた。

その瞳には何処か羨望と憎悪が入り混じっている気がした。

砦紹介：モット・アンド・ベーリー（前書き）

ここで徹夜が作った砦を軽く紹介します。

画像はネットで検索した物を載せました。

本当は自分で描きたかったのですが・・・才能が無いんです。（涙）

だから、我慢して下さい！！

それからブレイズさんから軍事的アドバイスをいただいたので少し手直しします。

砦紹介：モット・アンド・ベーリー

名前：モット・アンド・ベーリー

＞ｉ１６４９８―１６２３＜　＞ｉ１６４９９―１６２３＜

形態：木と土、または石で作られる2種類。

時代：１０世紀から１２世紀

場所：フランス、イングランド、アイルランド

概要：１０世紀から１２世紀に渡り、フランス北西部ノルマンディー地方、イングランド、ウェールズ、アイルランドで作られた築城形式の１種類。

種類として木と土か石で作られる2種類に分類されている。

モットは小山を意味し、プリン型に土を盛り上げた見張り塔で底辺の直径３０～４０メートル、高さ１５メートル程度。

そして周りを濠で囲んで頂上に木の櫓を立て濠と櫓の周囲は木の柵で囲むようにする。

ベーリーは外壁を意味し、モットに隣接した居住区で濠と木の柵で囲まれている。

濠には水を流す場合もあれば無い時もある。

モット・アンド・ベーリーの特徴として安価である事が上げられる。溝を掘った土をそのまま材料として使い、石を使用せずに木を使う事が上げられる。

そして高度な測量も必要なく、農器具や家を建てるのに必要な道具さえあれば良いと言うのも特徴の一つである。

だが、これより最大の特徴点を上げるならば工期が短いと言う事である。

ベイリーも含めて数週間あれば完成するが、ある記録によれば8日間で完成したともある。

鷹見徹夜がサルバーナ王国で初めてこれを作り上げたと史記には書かれている。

彼の場合は、馬防柵と銃眼を取り付けて敵を迎え撃つ算段となっており、更に熱湯や糞尿、丸太などを投げるなどもされたとされている。

初戦で騎馬隊の包囲網と機動力に圧倒されたが、この砦により敵側にも多大な被害を及ぼしたとも書かれている。

ただし、城が落城すると燃やしたため現存はしていない。

第十一章：銃剣術と徒手格闘技

エドリアス様が訓練を受けてから3日が経過したのだが、驚く事に私たちが2週間かけて習ってきた事をもう半分以上も習得した。

私たちより時間が限られている為、かなり厳しいのだがエドリアス様は泣き事一つ言わずにそれを全て習得するのだから驚きを越えて感心してしまう。

現在、エドリアス様は少佐が渡したウィンチェスターM2カービンをセミ・オートで射撃をしている。

右手で引き金を引き、左手で銃身を支えつつ木製ストックの銃床を肩に押し当てて反動を受け止めている。

このライフルは前線に赴く士官・下士官の護身用として開発されたらしい。

これを作り上げた人物は何と牢の中で作り上げたと言うから凄い。

弾丸は拳銃弾の薬莢を延長した7．62mm×33弾を使用している。

そしてM2カービンはセミとフルの両方が出来ると言う優れ物だ。

おまけに軽い事もあってか大絶賛されたらしい。

エドリアス様もこれを大層気に入っている様子だ。

エドリアス様は慣れた手つきでM2カービンをセミ・オートで撃っており、人型の的に何発も風穴を開けている。

大体は胸などの上半身に命中しており、あれが人ならば確実に殺す事が出来るような場所だ。

司教でありながら、人殺しの才能もあるとは恐れ入ると思う。

「どうだい？司教。それは」

「最高です。これほどのライフルを与えられるとは嬉しい限りです」

エドリアス様は射撃を止めて笑顔で話し掛けた少佐に答えた。

「それは何よりだ。しかし・・・よく似合ってるぞ」

私はエドリアス様の格好を見た。

迷彩服にブーニー・ハットを被った上にサングラスを掛けている。

誰もが兵士として見てしまうほど様になっている。

「ありがとうございます。それで、今日は何を訓練するのですか？」

「そうだな・・・銃剣術を教える」

銃剣術・・・確か・・・・・・・・・・

「ライフルの先に剣を付けて、戦う術でしたっけ？」

私は思い出しながら少佐に訊ねた。

「そうだ。昔に比べて銃剣術は余り意味をなさない」

しかし、それでも「最後の切り札」として何処の国でも重宝されているようだ。

それに剣を付けただけで「威圧効果と緊張を持たせる」事が出来るらしい。

それを考えると馬鹿にも出来ない。

「なるほど。それは勉強になります」

エドリアス様は頷きながら、ではやりましょうと言った。

午後は司教の仕事が待っているもで時間が無いらしい。

よくもまぁ、司教の仕事をしながら訓練を受けられると私は思う。

普通ならこんな事は出来ないのに。

だが、エドリアス様は「知識の為」と言うに違いないし、それが原動力となっているのだろう。

少佐は皆を集めて銃剣術を教え始めた。

銃剣術は名前の通り銃の先端に剣を取り付けて戦う術だ。

私が持っているＳＫＳカービンなどは最初から取り付けられている

から一々、剣を抜かずにそのまま利用できる利点がある。
主な攻撃方法として刺突、斬撃、銃床での打撃がある。
私が鼠に対してストックで顔面を殴打した事も銃剣術の攻撃に入る。
あの時、鼠は血を噴き出した。
それでも怯まずに私の腹を蹴ってきた所を考えるなら並大抵の相手ではない。
顔は急所の一つだし、何よりストックで力いっぱい殴ったのだから骨が幾つか折れていても可笑しくないのに・・・・・・・・・
そんな事を考えながら私は軍曹と対峙していた。
軍曹は縄を持ち、それに対して私はＳＫＳカービンを使用している。
「坊や。何時でも来な」
軍曹は縄を弄びながら挑発的に笑った。
Ｍ７２７アブダビ・カービンの銃床は銃剣術に対して余り向いていないらしい。
何でもアメリカ軍では銃剣術は廃止の傾向にあるようだ。
理由は様々あるようだ。
だが、それでも塹壕に隠れている敵や森林地帯に隠れた敵を一掃す

る手段で使われているらしい。

その他にも死体を確認する為に突き刺したり、占領した捕虜たちや住民たちに威圧感を与える為によく使われるようだ。

確かにライフルの先端に剣を付けると、威圧感がある。

そんな事を考えながら私は腰を低く構えて、軍曹に刺突を繰り出した。

ここで大事なのは相手を刺す事により銃身が曲がる事がある事だ。

更に銃を撃つと、その汚れで銃剣が駄目になり易いという欠点もある。

私が繰り出した刺突を軍曹は横に移動して避けると一気に私の背後に回って縄を首に掛けた。

反射的に手を入れようとしたが、間に合わなかった。

首に縄が掛った所で軍曹は後ろを向いて私の足を地面から浮かせた。

「ぐあ！！」

私は足が地面に着かない上に首を圧迫された事により、呻き声を上げた。

縄が首を圧迫するため意識が遠のく気がした。

そして同時に息苦しさを感じる。

それとは別に頭は冷静でどうすれば良いか、と急いで考えていた。

『ナイフだ!!ナイフで軍曹の脇腹を刺せ!!』

私は腰に収めたナイフを抜いて、軍曹の脇腹を刺そうとしたが刺せない。

なら・・・・・・・・

これでどうだ!?

「ぎゃああ!!」

軍曹は悲鳴を上げて私から離れた。

私は縄を首から離して、軍曹の尻に蹴りを入れた。

刺した場所は尻だ。

そこへ更に蹴りを入れてやった。

軍曹は呻き声を上げて、前のめりになる。

今度は顔面に蹴りを入れようとしたが、軍曹が反撃に出た。

「こっの・・・ファッキング!!」

拳が私の顔面に打ち込まれた。

重い衝撃が頬に感じると共に口の中に鉄の味が広がる。

そして何本か歯が折れた気がした。

私は前のめりになったが倒れずに軍曹の身体にタックルをした。

軍曹の腰に両手を回して押し倒そうとしたが、上から拳が、下からは蹴りが来た。

背中、腰、腹、顔すべてが痛い。

血が吹き出るし、胃の中が戻りそうな苦痛を感じる。

だが、私は離さない。

以前、あの鼠を掴まれられなかった。

しかし、今度は離さない。

軍曹を押し倒して、馬乗りになり首を絞めるが軍曹も私の首を絞めてくる。

互いに首を両手で絞め合い、どちらが先に倒れるか・・・・・・・・・・・・

これは我慢比べだ。

「ぐっ・・・あっぐ・・・」

「ごが・・・ぎやあぁあ」

互いにギリギリまで首を絞め合ったが、私の方が先に意識を手放した。

くそっ・・・・・・・・・・

私は心の中で舌打ちをしながら、完全に意識を失った。

どれ位、意識を失ったのかは分からない。

だが、頭から水を被せられて強制的に意識を戻した。

「起きたか？」

少佐が私を上から見下していた。

「は、はい・・・・いっつぅ・・・・・・」

私は口の中に激痛が走り、顔を顰めた。

口の中では未だに鉄の味が広がり続けており、身体中はミシミシと音を立てて痛い。

だが、この程度なら我慢できる痛さだし、立ち上がれる。

私は自分に言い聞かせた。

「お前もやるようになったな。イーグルの尻を刺した上に蹴りを入れるとは」

少佐は私を立ち上がらせながら言った。

「軍曹は、どうしました？」

「あそこだ」

少佐が指差す方向には軍曹が逆さ吊りにされて、狙い撃ちされていた。

「止めてくれー！！俺が何をしたんだ！！俺は無実だ！！」

「何で軍曹が？」

また女性に何かしたのか？

「お前さんの顔をぶん殴ったからだと」

私は気絶したから分からないが、それから直ぐに軍曹は取り囲まれて袋叩きにされたらしい。

そして今の状況だ、と少佐は言った。

「お前さんは女に可愛がれているからな」

顔を殴った上に歯を折ったのだから極刑物らしい。

私自身としては訓練なのだから怪我などは当たり前と受け取るが、女性陣はそれが許せないようだ。

「どうする？あのままだと半殺し所か全殺しにされるぞ」

自分の部下なのに何処か無頓着のような発言をする少佐。
傍から見れば薄情な男と思えるだろうが、私の性格を知っているからこんな言葉を言えるのだ。
私は軍曹目掛けて撃っている女性陣の所へ歩み寄った。
「お姉さま方・・・・・・」
「坊や。大丈夫だった?ああ、こんなに腫らしちゃって」
女性陣の一人が私に駆け寄って、濡れたタオルを顔に当ててくれた。
「大丈夫です。それより軍曹を降ろして下さい」
「だって、あの男ったら坊やの顔を殴った上に歯を折ったのよ?」
許せない、と怒る表情を浮かべた。
「あれは訓練ですから。実戦なら私は殺されていました」
この程度で済むのは軍曹の優しさからだ、と私は言った。
「坊やは優しいわね。で・も、後もう少しだけやらせて?」
少しストレスを解消したいらしい。
殺しはしない、と言った。

「じゃあ、良いです」

「もやし！！てめぇ！？」

軍曹が私の言葉を聞いて怒鳴ってきた。

「ちょっと、坊やに汚い唾を吐かないでよ！！」

「ぎゃあ！！」

お姉さまは石を掴むと、軍曹の・・・に当てた。

軍曹は脂汗を出して、ついには泣いた。

泣きたくもなる。

それから立て続けに石を投げられたのだから。

私は見るに耐えずに少佐の所まで逃げた。

「あれなら殺された方が良かったかもな」

「・・・言わないで下さい」

何だか私は自分は酷い事をした気がして、罪悪感に苛まされた。

第十二章：女王の願い

エドリアス様が帰ってから私達は訓練を続けていた。

銃剣術から徒手格闘技、射撃、隠密行動などを繰り返していた。

何度もやればやるほど身体に馴染み、やがてはそれをどうやったら更に効率よく出来るかを自分なりに考えて実践するようになる。

私の場合は射撃で、目以外で相手を狙うなら何処を狙うかなどを考えたりもした。

しかし、少佐自身はもっと別な訓練もさせたいらしい。

だが、そうなると骸骨なども煩いだろう、と漏らしていた。

確かに、これを作った時もゲンハルト様が「何をしているんだ！！」と声を荒げてきたと聞いた。

となれば、火事が起こる可能性だって高い物を使用できないだろう。

仮に使用しようものなら、私たちを縛り首にでもする事だろう。

あの方は少佐を目の敵にしているからな。

身元不詳の傭兵でおまけに自分を敬わないし、サラ様に対しても尊大な態度を取る・・・・などなど上げれば切りが無いような事をしているからな・・・少佐は。

そんな事を想いながら私は塔の上から双眼鏡を使用して四方を見まわしていた。

城の外は特に異常は無い。

城下街も見てみるが民達は何時も通りの生活を送っている。

現在、少佐は城に向かって居ない。

何でもサラ様に呼び出されたらしい。

最初は一人で行こうとしたが、護衛が二人は必要と言う事で護衛が付いた。

護衛は大尉とリーザ中尉。

軍曹は「片手に美しい百合の花で、もう片方は・・・・うげっ！！」と最後まで言う前に大尉の鉄拳が当たり言えなかった。

毎度毎度の事だが、この方に学習能力は無いのか？と思ってしまう。

そして何を言おうとしたのか気になって後で訊くと「サボテンという全身棘だらけの花と言おうとした」と答えてくれた。

現在は気絶中で、中尉が皆を纏めている。

とは言っても中尉は聖騎士団の団長であるから何も教える事が無い。

酷い言い方だが、そうなのだから仕方ない。

中尉は少佐が言い渡したメニューを言われた通りやらせている。

しかし、簡単なメニューなので終わるのも早い。

それが終わったら中尉が得意とする事を教えてやれ、と言われたらしい。

そして最後の訓練を終えた。

「よぉし。では、これより剣術と徒手格闘技を教える」

私は思わず首を傾げた。

聖騎士団では剣術や馬術、槍術などは教えるが徒手格闘技などは教えていない筈だ。

「剣術から徒手格闘技に移るのは教えていない。だが、実際の戦場では徒手格闘技に近い事を行う時もある」

相手が自分より体格が上なら剣術などでは負ける確率が高い。

負けないようにするためには足払いなどをして相手を自分のペースに持ち込む。

これに尽きる。

「では、始めるぞ」

中尉は適当に二人組に別れさせた。

いや、ちゃんと体格の差が明確に出ている二人に別けている。

私が良い例だ。

何せ中尉と対峙する事になったのだから。

中尉の身長は少佐と同じ位で体格も良い。

それに対して私は、もやし、坊や何て渾名が付けられている事を考えれば、解かる筈だ。

体格の差が歴然としている。

中尉は“クレイモア”を構えた。

鍔が斜め上になった状態で柄の下には丸い物が付いている。

両手剣と言うのは、大きくて重いから振り回すのは不便と思うだろう。

しかし、このクレイモアは違う。

小振りで素早い上が強みだ。

ハッキリ言って、この手の剣とは出来るだけ渡り合いたいとは思わない。

大体、騎士が使う剣は大柄な両手剣を愛用するのだが、中尉の場合は実戦的な物を愛用している。

戦に出た事があるとは言っていたが、剣まで実用的な物を愛用していたとは・・・・・・・・・・・・

「私も少佐同様に手加減はしておこう。だが、怪我の一つは覚悟しろ」

「それは私もですよ」

私はドウダヌキを抜いて答えた。

ああ、何故か知らないが何処か気分は昂ぶる。

どういう訳かは知らないが・・・・・・・・・・

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

―――――――――――――――――――――――――――――――

俺はリーシャとミーシャを連れて城に来ていた。

どんな理由かは知らない。

まぁ、どうせプロイセンのおっさんの件だろうな。

まだ謹慎処分を受けているらしいが、一生を謹慎ではないと思っている。

あの女王の事だ。

きっとプロイセンのおっさんを解放する事だろう。

「一体、何の用だろうね。女王は」

俺の左側に居るミーシャが鋭い眼で辺りを見回しながら訊いた。

とは言っても素人みたいに辺りを見回したりはしない。

気を張って、適当に見るだけだ。

それだけでも違う物だ。

「プロイセンのおっさんだろうな」

それか俺を追放するか・・・・・・・・・

「少佐。それは・・・・・・・・・」

リーシャが俺の言葉に幾分か驚いた。

「考えられなくはない」

何せ、俺を快く思わない連中は城の中を探れば五万と居る。

生来の性格だから、直せないだろうが敵を作り易い性格だとは解かっている。

だが、俺は自分の行動には責任を持つ。

仮に追放されたとしても、それは俺の起こした行動だ。

だから、責任は俺にある。

その責任を持てないなら、とっくに死んでいるさ。

「ですが、今の状況を鑑みれば・・・・・・・」

「あの頭のネジが2、3本所か全部ないような連中には解からないのさ」

ミーシャが馬鹿にする口調で言い切った。

確かに、それは言えている。

俺の国でもそうだ。

怖い物は信じない。

臭い物には蓋をしろ。

出る杭は打て。

などなど色々と馬鹿げた事を考えて実行する奴等が大勢いる。

俺が居た自衛隊だってそうだ。

“軍隊ごっこ”などと揶揄されるほど俺らは馬鹿にされた。

確かに否定できない。

海外派遣でも、他の国が自国兵を送り出し血を流しているのに対して俺らはそれが無い。

俺が海外派遣された時、他の国の兵に言われた。

『お前等は軍隊じゃない。軍隊なら血を流す筈だ。それなのにお前等は金だけを渡してお前等を戦わせない。お前等を護る為に俺らは死んでいるのに！！』

これは俺に対して言う台詞ではない。

だが、親友が俺らを護って死んだ事を鑑みれば言いたくもなる。

俺は“自衛”隊だ。

自衛すなわち自分の身は自分で護る事が前提だ。

それなのに他国兵に護られている。

これは自衛なんて言葉ではない。

ただの餓鬼だ。

だが、国の連中はこう言う。

『我が国の自衛隊は他国軍に護られていない』

何処の世界でもこんな言葉を言う奴は居ない。

情けない限りだ。

まぁ、前の大戦で敗北し、軍が起こした不祥事を考えれば戦争アレルギーに悩まされるのは解かる。

今は国民からは好意的に受け止められているようだが、建前だけはご立派な糞共は俺らを馬鹿にするし、装備も貶す。

装備は確かに欠点だらけだから、言い返せない点もあるがな。

そんな事を考えながら俺らは城に到着した。

城の中に入り進む。

謁見の間に着くと自動的にドアが開いた。

目の前には女王と小娘と骸骨が居る。

やれやれ、相変わらず敵意むき出しの歓迎だな。

俺は溜め息を吐きながら中に入った。

「何か用かい？」

俺はまどろっこしい事はせずに要件だけを訊いた。

「おい、貴様。女王に対して挨拶をせんか！？」

骸骨が俺を睨みながら怒ってきた。

「ゲンハルト様。こんな強要も無い野蛮人にそれは酷な言い方です

よ」

小娘が俺を馬鹿にしたように笑った。

相変わらず意地悪な笑みが似合うな。

ドラマで言うなら酷い継母的な存在だ。

「二人ともテツヤ殿を悪く言うのは止めなさい」

女王が俺を擁護した。

「女王陛下。失礼ながら、この男は野蛮人です。そして何時、牙をこちらに向けるか分からない狂犬です」

小娘がここぞ、とばかりに俺を蔑んだ。

狂犬、ね・・・・・・・・

何時だって傭兵は嫌われ者だから、気にしないがミーシャは違った。

「てめぇ、少佐を狂犬呼ばわりとは良い度胸だね。そのへらず口を黙らしてやるよ」

ボキボキ、と拳を折りミーシャが歩み寄ろうとした。

「ミーシャ。止めろ」

「・・・了解」

ミーシャは俺の命令に素直に従った。

「ふん。自分の子分はちゃんと手綱を握っているようだな」

「まぁな。それで女王陛下。今日は何の用ですか？」

俺は再び要件を訊ねた。

「今日はプロイセンの事に関してです」

「そうかい」

俺は予想が当たったな、と思いながら続きを訊ねた。

「プロイセンのおっさんがどうした？」

「議会を開いた結果、あの件は浮浪者という事にしました」

そしておっさんの謹慎は解く事になったようだ。

「それで？」

俺にそれだけを伝える為に呼び出した訳ではない筈だ。

「その前に貴方様の意見を聞きたいのです」

「俺の意見を？冗談言うなよ。俺は一端の兵だぜ？」

それに浮浪者という事で決着は着いた筈だ。

「ですが、貴方様をプロイセンを始め、軍は高く評価しております」
その貴方からの意見を聞きたい、と女王は言った。
「ハッキリ言えば証拠は無い。だが、明らかに敵情視察を目的とした奴だ」
「そうですか。貴方としては、どう思います？」
「捕まえられなかった点は不味かった。お陰で敵に城の内部と弱点を知られた」
「それで何が予想できますか？」
「確実にここを攻める場合の目標地点、逃亡手段などを思案する事だろう」
「ふん。逃亡など有り得ない。我々が居るんだぞ？」
小娘が胸を張り、俺を見下した。
「お前さんが居るから女王は逃亡しなくて良いと言うのか？」
小娘は当たり前の事を言うな、という顔を浮かべながら言い続けた。
「そうだ。貴様等のような下種とは違う。私たち親衛騎士団は選ばれた者たちだ」
「では訊くが、その選ばれた者の根拠は何だ？」

「良い家柄に生まれて最高の教育を受けた者たちだ」

「・・・そうかい」

俺は呆れながら女王に視線を戻した。

こんな小娘に視線を移すのでさえ憂鬱な気分になると思ったからだ。

「続きを話しても良いか？」

「はい。どうなります？」

「それで敵に弱点を知られたとなれば、答えは一つ。確実にこちらが負ける要素が濃厚と言う事だ」

「・・・確実、ですか？」

「あぁ。戦では戦力などが多ければ多い程良い。だが、それでも負ける時は負ける」

例えば情報が筒抜けだった、なんて事はよくある。

それ以外だと兵站を疎かにした、なんて事もある。

どちらも・・・俺の国が先の大戦で負けた原因だが。

「だから、先ずは相手より情報をより多く掴む事だ。そうすれば自ずと対策は掴める」

まぁ、本当は情報の質よりもそれを上手く利用する政治的決定を行

える人物が必要だ。

しかし、上層部にはそれが出来ないだろう。

俺はそう思いながら他にあるか？と訊いた。

「はい。ですが、先ずは人払いをしたいのですが・・・・・・・・・」

「ミーシャ、リーシャ。出ろ」

「了解」

「分かりました」

二人は直ぐに部屋の外に出た。

そして女王も小娘と骸骨に出ろ、と言った。

二人は何かを言ったが、女王は出ろとしか言わなかった。

ここ等辺は威厳があるな。

二人は俺を睨んだまま出て行った。

「それで女王陛下。続きは？」

「実は・・・貴方様達の受けている訓練を見たいのです」

「あんたが？」

俺は突然、話が変わった事に驚きながら訊ねた。

「はい。私は戦が嫌いです」

絶え間なく血が流れる戦ほど嫌いな物は無い、と女王は言った。

しかし、貴方はこの国を護る為に備えている。

それを自分も知りたい、と女王は続けた。

「あんたが戦を嫌うのも解かる。それに付け足すなら軍人たちも同じだ」

例外はあるが、戦が起これば最前線に送られる兵ほど戦いは嫌いだ。

ただ、戦が起これば誰かを護りたいから出る。

それだけだ。

「それは私もそれなりに解かっている積りです。プロイセンも戦は嫌いです」

軍人だが平和を愛する心優しき人物であり国を想う気持ちは誰にも負けない筈だ、と女王は言った。

「だろうな」

「それで訓練は見せてもらえますか？」

「構わない。何時だ？」

「明日にでも見たいのですが」

「急だが良いだろう。では、迎えを寄こす」

「出来るなら、貴方様が迎えに来て欲しいのですが」

「俺が？」

「はい。貴方様なら私を護り切れると私は思っているのです」

「・・・・随分と買っているな。まぁ、否定はしない」

仮に襲われても女王を護り安全な場所に逃がす自信はある。

まぁ、そんな状況になれば俺は死ぬ事になるだろうが。

「お願い出来ますか？」

「分かった。では、明日のどれ位に行けば良い？」

「午前中にでも」

「分かった」

俺は頷いて部屋から出た。

そして二人を連れて城から出た。

第十三章：大尉の手料理

城から戻った少佐は私たちを集めてサラ様が明日、ここに来る事を伝えた。

「何時も通りやれ。だが、イーグル。もし女王に変な真似をしてみろ。俺の手でお前のナニを潰すからな」

「そんな旦那。おっかない事を・・・・・・・・・ひぃ！！」

軍曹は冗談だと思ったのだろうが、少佐は真面目だった。

「俺は解かったのか訊いているんだ。どうなんだ？」

コルトを軍曹の・・・部分に当てて問う少佐。

私たちは思わずまた自分の部分を抑えて前かがみになった。

訳は・・・訊かないでくれ。

「い、イエッサー！！」

軍曹は脂汗を流しながら敬礼をして叫んだ。

「最初からそう言えば良いんだよ」

少佐はコルトを仕舞うと、少し寝ると言って居住区の中に入って行った。

「何か遭ったんですか？」

私は少佐の様子に疑問を感じたので大尉に訊ねた。

「いいや。ただ、親衛騎士団の小娘が少佐を狂犬呼ばわりしやがった・・・・・・・・・・・・・」

今度そんな事を言えば、少佐が止めようと殺す、と大尉は告げた。

「私も手伝います」

リーザ中尉が賛同の声を上げた。

「あの女・・・あそこまで性根が腐っていたとは・・・許せません」

何時もとは違い、怒りを露わにして渋面を浮かべるリーザ中尉。

これは城で相当な事が起こった、と私は感じた。

「まぁ、この話はここで終わりだ。さぁ、訓練を続けるよ」

大尉が私たちに訓練を続けるように言った。

私たちはそれに頷いた。

夕方になってから訓練は終了した。

私たちは居住区の中に入った。

ある者は湯に浸かり、ある者は夕飯まで寝る、ある者は武器の手入

れを。

それぞれの時間を過ごす事になった。

私は自室に行き、ベッドに腰を降ろした。

「今日もハードな一日だったな・・・・・」

私は軽く息を吐きながら、ベレッタ、ＳＫＳ、モーゼルの掃除をした。

ブラシで汚れを綺麗に落としてから油を塗り布で綺麗にした。

私の大切な・・・恋人たちだ。

ちゃんと言う事を聞いてくれるが、いつ臍を曲げるか分からない。

だから、ちゃんと可愛がらなければ駄目だ。

掃除をしながら今日の夕飯係は誰だっか、と思い出す。

確か・・・大尉達だ。

最初に驚いたのは大尉の趣味が料理と言う事だ。

見かけは男で、性格は男顔負けなのに料理が趣味とは驚きだ。

失礼だと思うが、最初は味は期待できないと思っていた。

だが、食べてみれば味がこれまた美味いので驚きである。

お陰で大尉が夕飯係の日は大量に作らないと不平不満が起こるほどだ。

そんな事を考えながら私は掃除を続けた。

掃除を終えた後は元通りにしてベレッタをホルスターに仕舞った。

掃除を終えたベレッタは輝きを出し、漆黒の貴婦人のようにさえ私には思える。

ＳＫＳカービンとモーゼルはベレッタより年上で品格が更に上がった貴婦人と言った所だ。

「明日も頼むよ」

私は二人の恋人たちに挨拶をした。

ここで煙草を吸いたいが、少佐しか持っていない。

だから、少佐の部屋に向かおうと思った。

少佐の部屋まで行き、ノックをした。

「誰だ？」

部屋越しから低い声が返ってきた。

「ランドルフです」

「入れ」

私は断りを入れてから中に入った。

中に入ると少佐は窓を眺めながら煙草を吸っていた。

「どうした？」

「煙草が欲しくて・・・・・・」

「ほら」

少佐は私に煙草を渡しながら火を点けてくれた。

「何を見ていたんです？」

「特に無い。ただ、奴等がどんな手を使って来るか、考えていた」

「・・・リカルド様達ですか」

「あぁ。恐らく、既に城の内部などを調べ上げて作戦を立て終えた頃だろう」

後は仲間たちに伝えて、軍を起こすだけだ。

「どれ位で来ますかね？」

「ここまで来るのには数ヶ月は掛ると言った。俺らが持っている兵器が向こうにあったとしても、最低でも数週間は掛る筈だ」

幾らヘリなどがあってもそれを動かせる者の体力などが続かない、と少佐は言った。

「確かに。あの、それでプロイセン様はどうでした？」

「謹慎は解かれた。これで何時も通りだ」

「それは良かったです」

「あぁ。これで獅子頭軍団の奴等も安堵するだろう」

もし、プロイセン様が獅子頭軍団の行動を聞けば怒るだろうが、嬉しくもあるだろう。

自分の為にそんなに激怒する兵たちが居ると分かれば嬉しい筈だ。

私は煙草を吸いながら少佐と他愛ない世間話をした。

そして夕飯の時間になった。

私と少佐は食卓の場に向かった。

そこには皆が待っていた。

「旦那ー。早く食べようぜ。腹ペコだよー」

軍曹が子供のようにナイフとフォークでテーブルを叩いた。

図体は大人だが、心は子供と言った所で思わず私は笑ってしまった。

「そんな真似をするなよ。ランドルフにも笑われてるぞ？」

少佐は苦笑しながら席に着き私も着いた。

「では、頂きます」

『頂きます』

私たちは少佐が食べ始めてから食べた。

まるで大家族に居る感じだが、それが私には楽しかった。

夕飯の時間は皆で酒を飲んだり、話し合ったりして楽しい時間だった。

今日のメニューは大尉の故郷では“ボルシチ”と呼ばれるスープとパンに干し肉だ。

このボルシチは様々な国でも作られており、材料は特に決まっていないらしい。

だが、共通点としてテーブルビートとスメタナを使用する事が上げられるらしい。

味は好みに合わせて香辛料などを使って食べる。

私の場合は何も掛けずに味わうのが好きだ。

「どうだい？坊や」

大尉が私に味を訊いてきた。

「美味しいです。身体が温まって今日の夜警も頑張れます」

「ありがとう。本当に坊やは良い男だねー。あたしが食べたい位だよ」

「姐御は“食べる”じゃなくて、“喰べる”の間違いじゃ・・・・・・あじゃあ！！」

軍曹がまた何かを言おうとした。

だが、顔にボルシチを掛けられて大声を上げた。

「あんたは一言多いんだよ。たっく・・・せっかくの料理を台無しにしやがって」

自分で掛けておきながらそれは無いだろう、と思うが私は気にしない事にした。

下手に干渉してトバッチリを受けるのは御免だ。

軍曹は未だに暴れていたが、皆は気にしないで食事を続けた。

まぁ、自業自得だ。

夕飯の後、私はリーザ中尉と塔に上がり見張りをした。

リーザ中尉は双眼鏡で周りを見ながら私に話し掛けてきた。

「ねぇ、ランドルフ君。テツヤ様に恋人とかは居るの？」

リーザ中尉を始め、私はよく君付けで呼ばれる。

まぁ、一番年少だからかもしれないが、君付けは何となく恥ずかしいと思う。

「少佐・・・テツヤ殿に恋人、ですか？」

私は思わぬ質問に驚いたが、居ない筈だと答えた。

前にヴァイガーでドラゴンから妻子は居るのか？と訊かれた時も居ないと答えたからだ。

「そう。やっぱり、傭兵だからなのかしら？」

「はい。本人は因果な商売だから家庭を持てる訳ない、と言っておりました」

別に傭兵だから妻子を持てる訳ない、とは思わない。

だが、いつ死ぬか分からない商売だし、何年も家に帰れない事を考えると妻子を持ちたくても持てないのだろう。

「因果な商売、ね。確かにそれは言えてるわ」

人を殺して金を貰うのだから因果な商売だ。

「でも、私はあの方を狂犬だなんて思わないわ」

「私もです」

親衛騎士団は狂犬、下種、傭兵、と蔑んでいるが、あの方はそんな方じゃない。

あの組織は自分達の生まれた家柄などでしか相手を見れない偏見者の集まりだ。

だから、テツヤ殿を馬鹿にするのだ。

「ランドルフ君はテツヤ殿をどう思う？」

「尊敬できる相手です。私に色々な事を教えてくれましたし・・・・まぁ、意地悪な所はありますけど」

ちょっと意地悪な所は玉に瑕だが、それでも尊敬できる事に変わりは無い。

「それは貴方が可愛いからよ」

「・・・余り嬉しい褒め言葉じゃないです」

男に可愛いなど良い褒め言葉ではない。

「そんなに落ち込まないの。所で、テツヤ殿って・・・・夜の方は、どうなの？」

「夜の方と言いますと・・・・・・・・・・・」

「その、女を・・・買ったりしたの？」

「まぁ・・・以前・・・一度だけ」

何でこんな話になったのか解からない。

だが、私は取り敢えず真面目に答える事にした。

その時は軍曹も一緒で私も危うい目に遭ったが、今では過去の話だ。

・・・・思い出したくはないが。

「そう・・・やっぱり、男だから仕方ないわよね」

リーザ中尉はそんな事を言いながら、何か聞き取れない言葉を言った。

「何と言ったんですか?」

「な、何でも無いわ。そ、それより見張りを続けましょう!!」

私は頷いて見張りを続けた。

下手に勘ぐりは入れない方が良い、と直感的に感じたからだ。

私の横ではリーザ中尉が顔を赤くしながら見張りをしていた。

第十四章：最高の幸せ（前書き）

何だか妙に長ったらしい感じになりますが、暫くこういう感じで続きそうです。（汗）

そして妙に甘い感じにもなりつつあるので、少し不安です。

ですが、どうかお付き合い下さい。（必死）

第十四章：最高の幸せ

翌日、少佐はジープではなく馬でサラ様を迎えに行った。

何で馬なのかと訊かれたらジープが壊れた為だ。

どうして壊れたのかと訊かれたら・・・・・・・・・・

「ぼ、ぼう・・・・ぶるじゅでぇー」

目の前にはボコボコにされた軍曹が居る。

ジープを壊したのは軍曹なのだ。

昨夜、軍曹は春を売る女性に会いに向かったらしい。

だが、会うには会ったが顔を紅葉で赤くして帰ってきた。

それを聞けば解かる筈だ。

それが頭に来たのかジープで行こうとした所を運の悪い所で大尉に見つかった。

軍曹の紅葉を見て大尉は直ぐに察し・・・・・・ジープごとＲＰＧ－７で吹き飛ばすと言う暴挙に出たのだ。

直撃したジープは粉々になり、後ろに居た私などは軍服が焼けてしまった上に軽く火傷も負った。

ＲＰＧはバックブラスト――後方噴射が激しい。

射程距離は３００メートルでそこから後方３０メートルはバックブラストだから危険区域だ。

だから、援護者が居るなら左側で後ろには何が遭っても立たないのが良い。

だが、運悪く私はその場面に出くわしてしまい、トバッチリを被った訳だ。

それが軍曹には追い風となり、大尉には爆発する切っ掛けとなった。

そして・・・ああいう状態にされたのだ。

これを聞けば本当はジープを壊したのは大尉となる。

だが、元を正せば断られた上にそれに逆上して向かおうとした軍曹が悪い。

そのため軍曹は徹底的に大尉に叩きのめされた・・・・・いや、まだ続いているのだ。

まぁ、かなり私的な、というか恐らくは殆どが私的な理由からあんな状態にしているのだろうが。

軍曹はもう瀕死の重傷と言える程の身体だ。

あのまま行くと死んでしまう。

だが、大尉が怖くて誰も声を掛けない。
しかし、私は意を決して向かった。
「大尉。もうそろそろ止めた方が良いと思うんですが・・・・・・」
「坊や。この男に優しさを見せちゃ駄目だよ。こんな顔だが、ちゃんと急所をこいつは外させているんだ」
つまり殴られてはいるが、急所を軍曹が外させていると言う事か？
大尉は答えながらも軍曹を殴り続けている。
こ、怖いっ！！
「こいつだって腐っているが、特殊部隊の一員だ。あたしの攻撃をちゃんと致命的にならないようにしているのさ」
だったら、あんな傷だらけにならない筈だと思うが、そこはやはり大尉の方が上手と言う事だろうか？
「坊やの優しさは良い事だ。だけど、こいつの直接的な上司はあたしだ。悪いけど、口は出さないでくれ」
私は大尉が怖い事と軍曹も殴られているが、そんなに傷ついてないなら良いと私は思った。
まぁ・・・トバッチリに遭いたくないから逃げるのだが。

「分かりました。ですが、一言言わせてもらうと、ここでやると女王陛下の目に入るので別な場所でやった方が良いと思います」

「ありがと。そうするよ」

「ふぉ、ふぉぉし！！」

軍曹が何かを言ったが、私には理解できないから無視した。

大尉は軍曹を引き摺って何処かへと消えて行った。

後の事は・・・気にしないでおこう。

私は背を向けて少佐から箱ごと頂いた女神の抱擁を口に銜えて、大尉から貰ったマッチで火を点けた。

少佐・・・まだかな。

などと私は軍曹を殴る音を聞かないようにした。

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

俺は城の外で待っていた、女王の前で馬を止めた。

女王は地面に着きそうなドレスから足が辛うじて見えるドレスで俺を待っていた。

太陽を背にして立つ女王は神々しい程に眩しかった。

太陽が眩しかったからじゃない。

女王から放たれる気品が光となり眩しかったんだ。

俺はサングラスを取り出して掛けた。

これで辛うじて光が抑えられる。

それでも眩しいのに変わりはないが。

こんな事をするのはモンマルトルに居る筈の・・・・“あの娘”位だ、と俺は思った。

「おはようございます。テツヤ殿」

「おはようございます。女王陛下」

俺は女王にケピ帽を外してから一礼した。

「今日は私のような男の為に時間を割って頂き大変恐悦至極に存じ上げます」

「て、テツヤ殿？」

女王は俺の態度に些か面食らった様子だった。

まぁ、後ろに控えている骸骨と小娘が煩そうだから敢えてしたんだが、な。

「今日は女王陛下の御目が汚れないようにするので、ご安心ください」

俺は女王に馬に乗るように言い、膝を着いて背中を前に出した。

「あ、あの・・・・・・・」

「失礼ながら女王陛下のお召しになさっている衣服では乗れないでしょうから、私の背中を踏み台にして下さい」

「そ、それは・・・・・・」

「陛下。私は、貴方の単なる、いえ・・・野良犬です。ですが、今は貴方に飼われている犬です」

それでも野良犬だった過去は拭えない、と俺は続けてこう言った。

「元野良犬には野良犬なりの忠誠の見せ方があるのです」

だから、俺の背中を踏み台にしてくれ、と言った。

「・・・では、失礼します」

軽く背中に重みを感じたが、大した重さではない。

一体、どんな生活をすればあんな重さになるのか知りたいな。

あれでは軽い強風が吹いただけで、よろめきそうな重さだ。

俺は背中を起こして馬には乗らずに手綱を握った。

「では・・・参りましょうか？女王陛下」

「は、はい・・・・・」

女王は些か困った顔をしながらも頷いた。

「おい、野良犬」

小娘が背中越しに声を掛けてきた。

「・・・何でしょうか？」

「野良犬には野良犬の忠誠心があると言ったな？」

「えぇ」

「なら、さっさとこの国から出て行け」

貴様のような野良犬は要らない、と小娘は言った。

人が下手に出れば付け上がる・・・・典型的なタイプだ。

だが、俺は怒りもせずに微笑を浮かべた。

まぁ、俺が微笑を浮かべると周りからは「嘲笑の間違いだろ？」と言われるが。

そして俺は歩き出した。

小娘が後ろから何かを叫んでいるが、知った事か。
馬の手綱を握りながら女王は俺に話し掛けてきた。
「あの、テツヤ殿・・・・・・・・」
「何でしょうか？女王陛下」
「その言葉使いは・・・止めて下さい」
言葉使いを止めろ？
これまた変な発言だな。
「何時もの、私を・・・女王として扱わない言い方をして下さい」
そちらの方が慣れている、と女王は続けた。
結構、これでも頑張ったんだが・・・駄目か。
俺は嘆息しながら元の喋り方にした。
「これで良いか？」
「はいっ」
女王は途端に笑顔になった。
女は猫に例えられているが、女王の顔を見ると満更でもないと思っ

てしまった。

まぁ、そんな事は置いておいて。

「で、プロイセンのおっさんは？」

「今日から職務に復帰する予定です」

「それを聞いて安心した」

俺に親は居ない。

だが、もし誰かを上げるなら・・・・・プロイセンのおっさんを一人に上げるな。

俺を対等に扱って、俺に温かい眼差しを送ってくれる。

ああいう男が最近はメッキリ減ってしまった。

皆、自分の事しか考えないようになった。

それは前から変わらないが、それが今は露骨な程に現れている。

・・・・哀しいな。

人間ってのは、良い暮らしが出来るに連れて心が荒んで行く物なんだろうな。

俺は無性に煙草を吸いたい気分になった。

例えるなら砂漠のど真ん中に放り出されて、照りつく太陽に喘ぎながら水を欲しがる気持ちと同じだ。

だが、女王の手前だ。

煙草は吸えない。

我慢するしかないな。

俺は出来るだけ速く、しかし、女王が落ちないように細心の注意を払いながら足を進めた。

あんなに軽いんだ・・・・・・

ちょっと乱暴に動いただけで、簡単に倒れてしまうだろう。

そうしたら、折れるし汚れてしまう。

正に・・・・高嶺の花だ。

俺には・・・絶対に、手に入れる事が出来ない花。

だが、それでも良い。

僅かな時間でもこうして二人で過ごせるのが幸せだ。

ちっぽけな幸せと笑われるだろうが、俺にとっては・・・・・最高の幸せなんだよ。

幕間：傭兵と女王（前書き）

これまた甘い展開で口から砂糖が出そうな勢いです。（おえっ）

とはいえ、まだ続くので我慢して下さい。（汗）

幕間：傭兵と女王

俺は女王を馬に乗せたまま城下街を歩いている。

歩けば女王を見たいが為に人だかりが出来る。

これを見れば、どれだけ民に愛されているか解る。

民達は花を投げたり、手を振り女王に声を掛ける。

それに女王は微笑んで返した。

やはり画になるな。

俺は歩きながら身分違いだと今更になってから改めて痛感させられた。

分かっていたし、手に入れたいとは思ってない。

だが、改めて痛感させられただけの事だ。

俺はそれに苦笑を覚えながら周りに気を配った。

同時に塔にも合図を送る事を忘れない。

要人警護で気を付けないといけないのは人だかりと狙撃、爆破だ。

人だかりの中から拳銃で狙撃。

または長距離からの狙撃。

前者はどちらかと言えば使い捨て。

まぁ、長距離からの狙撃も使い捨てだってあるが。

“偽善者”が良い例だ。

人の為にする事と書いて偽善と言うが、あの男はまさにその典型的な例と言える。

頂点に立つ為には手段を選ばない。

それは別に悪くないのだが、そこからがいけないな。

利用した挙句に捨て去り、切り捨てる。

あんな事をやれば嫌でも命を狙われる。

しかも、敵の本拠地とも言える場所でオープンカーに乗り込み、手を振るなんて言う馬鹿げた事をするんだからな。

だから、頭が破裂する目に遭うんだよ。

女王はそんなに怨まれる・・・いや、王族なんだから亡き者にしようとする輩は多いな。

それこそ今の状況なら尚更だ。

長距離からの狙撃ほど対処が難しい。

逃亡され易い上に何処に居るのか分からない。

だから、狙撃手を配備して置くんだ。

塔から狙撃手を配備して置いてあるから身の安全はある程度なら保証できる。

幸いにも城下街では何も起こらなかった。

城の外に出た後は更に注意深く警戒しながらも無事に砦の中に入る事が出来た。

「さぁ、女王陛下。俺の背中を踏んでくれ」

「また、ですか」

女王は余り良い気持ちではないように訊ねた。

「あんたは女王だ。そして俺は兵隊。身分はそちらが上だ」

それにあんたになら膝を着いても良い、と俺は心の中で呟いた。

「・・・私は、身分など必要ないと思っています」

「良い事だが、降りれないだろ？」

「貴方が抱き上げてくれれば降りれます」

何とまぁ・・・男を刺激する言葉を言ってくれるな。

俺じゃなければ狼になってるぞ。

だが、女王は俺を信頼しているのか・・・男として見ていないのか動かない。

「・・・分かったよ」

俺は失礼と断ってから女王を抱き上げて降ろした。

周りのどよめいた声が聞こえてくる。

俺はそれを一睨みで黙らせた。

女王の身体からは香水の匂いがした。

綺麗な匂いだ。

花の匂いだな。

まるで女王の性格を表わしているような匂いで、心地よくて離したくない気持ちになる。

そして、女王の軽さに改めて驚く。

こんな体重でよく身体を支えられると思うし、少しでも力を入れたら折れてしまう気もした。

俺は細心の注意を払いながら女王を地面に降ろした。

女王は俺を見上げてきた。

綺麗な瞳で思わず、宝石が埋め込まれているのではないか?と思うほどに綺麗な瞳だ。

この瞳を自分だけの物にしたいとさえ思う。

だが、俺はそれを抑え込んで離れた。

「ようこそ。我が砦へ」

俺は帽子を取り、女王に一礼した。

道化のように茶らけた感じでやってみせる。

それが女王には面白くなかったのか、渋い顔を浮かべた。

不味かったな。

「テツヤ殿・・・自分をそんな風に見せて楽しいですか?」

女王は何故か凄く怒っています、という顔を浮かべながら俺を睨んできた。

美人が睨むのも画になるな。

まぁ・・・怖くないが。

だが、やはり花には美しい笑顔が似合うな、と思う。

「いいや。ただ俺なりにあんたを歓迎した積りだが、駄目だったようだな」

俺は失礼した、と謝りながら皆を集めた。

「女王陛下が我等の訓練を見に来た。だからと言って、変な真似はするな。何時も通りの訓練をしろ」

『レンジャー』

皆は敬礼をして訓練を始めた。

「じゃあ、俺が案内するから付いて来てくれ」

「はい」

俺は前を歩き始め女王が付いて来る。

直ぐに盾になれるような近さであり、女王の足取りに合わせた距離だ。

女王は目に入る全てが新しいのかあれこれ訊ねてくる。

俺はそれに丁寧に答えながらも周囲を警戒し続けた。

― ― ― ― ― ―

私は馬に揺られながら城下を進んでいた。

馬の手綱はテツヤ殿が握っている。

私としてはこの方も馬に乗れば良いのにと思うが、城での事も考えて言わない事にした。

フィーナはテツヤ殿を狂犬と呼び蔑んでいた。

私はそれを内心で怒りを覚えた。

この方をそんな風に蔑むのは許さない。

そう言いたかった。

だが、テツヤ殿は気にしないで進み出したため怒りは空回りした。

そして今の状況に到る。

私が城下を進んでいると民達が声を掛けたり、花を投げてきた。

「サラ様っ」

「女王陛下っ」

と私に笑顔で手を振る民達に私は笑顔で答えた。

この者達を・・・悲惨しか生まない戦争に巻き込みたくない。

私の夫・・・いえ、夫などと呼ぶには相応しくない男、ガルバー

の生きていた時代に戻したくない。

あの男は戦の事しか頭に無かった。

王としてより軍人としてあの男は生きてきた。

そしてそれを民達にも強要し、税を上げた上に強制徴兵まで行った。

それが民達にどれだけ負担であったか・・・・・・・・・

私はそれを思うと胸が酷く痛む。

心臓を真綿で静かに締め付けられて、胸が張り裂けそうな程に痛い。

それを忘れるように手を振り、笑顔を見せ続けた。

その間、テツヤ殿は一言も話さずにいた。

この方は傭兵。

金で雇われる兵であり、狂犬とフィーナは言っている。

いや、フィーナだけでなく皆がテツヤ殿を毛嫌いしている。

テツヤ殿は娘の恩人であり、私の恩人でもある。

そして・・・私を女王としてではなく、一人の女として接してくれている。

女王である私に対しても物怖じせずに言葉を言い、私を命がけで護

ってくれる。

私はテツヤ殿の事をもっと知りたいし、もっと接したい。

だから、こうして訓練を見たいという名目で、この方と出掛けたのだ。

でも、今はそんな時ではない。

あの子が・・・・リカルドが反乱を起こそうとしている。

それは前々から解かっていた。

私では力不足で他国からは女という事で蔑まされている。

そしてムガリム帝国の脅威もある。

それを考えればあの子が、王になろうとする気持ちも解かる。

だが、それでは再びこの国を戦争で汚してしまう。

それだけは避けたかった。

プロイセンの言葉は尤もだけど、下手に刺激してあの子に反乱を起こさせたくない。

何れ私は身を引く。

そうなればエリーナが王座を継ぐ事になるかもしれないけど、あの子には自由に生きて欲しい。

私には出来なかった自由な生き方・・・・・・・

あの子には自由に生きて欲しい。

だから、リカルドに王の座を明け渡したい。

それまではリカルドが変な真似をしないように、刺激させたくなかった。

そんな事を考えている内に砦に着いた。

砦は城の東側にある森の中に建っていた。

テツヤ殿は門を開けさせて私を中に入れた。

「さぁ、女王陛下。俺の背中を踏んでくれ」

テツヤ殿は城の時のように地面に膝を着いて、私に背中を踏めと言ってきた。

「また、ですか」

私は余り良い気持ちではなかった。

城の時も、この方の背中を踏んだ。

とても逞しい背中で、私が踏んでもビクともしない。

それでもこの方の背中を踏みたくはなかった。

だから、別な方法で降りたかった。

「あんたは女王だ。そして俺は兵隊。身分はそちらが上だ」

テツヤ殿は私に身分を口にした。

「・・・私は、身分など必要ないと思っています」

本心から私は身分など必要ないと思っている。

身分など誰が考えたか分からないが、どうして作り上げた必要があるのか知りたい。

人は生まれながら平等だ。

それなのに身分があるから全てを抑制される。

それが私には我慢できなかった。

「良い事だが、降りれないだろ？」

テツヤ殿は私の考えに賛同しながらも馬から降りれない事を言ってきた。

「貴方が抱き上げてくれれば降りれます」

私は意を決して宣言した。

「・・・分かったよ」

テツヤ殿は少し間を置いてから私を抱き上げてくれた。

大木のように太い両腕を私の腰に回して、優しく抱き上げた。

私が上からテツヤ殿を見つめる形になる。

とても綺麗な黒真珠の瞳で、純粋な色だと思うし神秘的だった。

見つめていると、吸い込まれそうな錯覚さえ覚えてしまう。

だけど、吸い込まれても良いと思う。

でも、テツヤ殿は兵達に視線を向けて私を降ろした。

私は残念な気持ちになった。

何時までも見つめてもらいたかった・・・・・・・・・・・・・・

そして腕も私から離して、テツヤ殿は道化のようにこう言った。

「ようこそ、我が砦へ」

私は、それが無性に腹に来た。

この方はそんな性格ではないのに、どうしてそんな事をするのか分からない。

だから、渋面を浮かべこう言った。

「テツヤ殿・・・自分をそんな風に見せて楽しいですか？」

テツヤ殿は自分なりの歓迎だ、と弁明したが私にはふざけているようにしか見えなかった。

テツヤ殿は謝罪しながら兵たちを集めて、今日の事を説明した。

そして兵たちはレンジャー、と聞き慣れない言葉を放ち訓練を始めた。

テツヤ殿は自分が案内するから来てくれ、と言い私は頷いた。

私はテツヤ殿の背中を追い掛けながら、訓練を見た。

ある兵は塔の上から前向きにロープを伝って降りる訓練を。

またある兵は数人を相手に戦っている。

全て初めて見る訓練であり、とてもじゃないが真似できる訓練ではない。

これほどまでに厳しい訓練を皆、泣き言も言わずによくやっていると思ってしまう。

「どうだい？女王陛下。感想は」

テツヤ殿が前を歩きながら訊ねてきた。

「正直、こんなに過酷な訓練だとは想像していませんでした」

「だろうな。だが、これだけ過酷だからこそ実戦で命を落とさないんだ」

落とす時は落とすが、それでも生き残れる確率は高いとテツヤ殿は言い続けた。

私はこの方は人を殺す訓練ではなく、生き残れる訓練をしているんだと実感した。

幕間：傭兵と女王２

俺は女王を案内していたが休憩をする事にした。

今にして思えば、女王を休ませていなかった。

俺は別に問題ないが、女王はもう疲れている筈だ。

チラリと後ろを向けば既に女王は疲れている様に見えた。

「少し休憩しよう」

俺は女王に詫びながら、休憩をする準備をした。

と言っても生憎と椅子なんて品は無いから俺が巻いている青い布で我慢してもらう事にした。

だが、女王は嫌だと拒んできた。

「テツヤ殿の御召し物を敷物にするのは嫌です」

きっぱりと言い切る女王に俺は苦笑しながら別の物なら良いか？と訊いた。

俺の物じゃないならと女王は言った。

こりゃ・・・完全に嫌われているな。

俺の物じゃないなら・・・俺の着ているのは嫌。

嫌われているな証拠だ。

俺は携帯で宅配人にテーブルなどを頼んだ。

直ぐに品は届いた。

女王を座らせて俺は立ち続ける。

「何か飲物を用意しよう」

俺は近くに居た兵に護衛を頼もうとした。

だが、女王はそれを拒んだ。

「貴方は私の傍に居て下さい」

「分かった」

俺は頷いて兵にコーヒーを頼んだ。

「少佐はどうしますか？」

「俺は要らん。それより女王には・・・砂糖とミルクはいるのかい？」

「そうですね・・・出来るならミルクを」

「だそうだ」

「了解」

兵は敬礼をして去って行った。

「さて、女王陛下。訓練の感想は如何かな？」

「正直、よく兵たちが耐えられると思っております」

「だろうな。だが、こいつらには護りたい物があるんだ」

それは別々であり、同じ物である。

一つ言える事は皆、国を護りたいという純粋な気持ちだ。

俺には祖国を護りたい、なんて大義名分とも言える気持ちは無い。

ただ、この女を護りたいという気持ちは持っている。

何かを護りたい、という気持ちは誰にだってある。

戦争ほど惨めな物は無いだろう。

だが、その戦争を起こしてでも護りたいと思う物が無い奴はもっと惨めだ。

そして俺達を愚弄する奴ほど下種な者も居ないだろう。

「テツヤ殿には護りたい存在はありますか？」

女王が俺に質問をした。

とても綺麗な声で真摯な眼差しで俺を見てくる。
俺はその眼差しが眩しくて目を背けたまま答えた。
「あるさ」
「それは何ですか？」
あんたさ。
あんたを・・・あんたが愛するこの国を護りたい。
あんたが笑顔で居られるのなら命だって掛けてやる。
それが俺の護りたい物だ。
だが、それは言わなかった。
「悪いが答えられない」
俺は煙草を取り出して銜えた。
「どうして、ですか」
「・・・どうしてもだ」
俺は答えられない、と二度言い煙草に火を点けながら空を見た。
空は雲が幾つもあり、ゆっくりと時間を掛けて移動している。

女王は俺に視線を向けたままだった。

答えるまで見続ける気だろうか？

それならそれで良い。

あんたに見続けられるのもまた、一つの幸せだ。

俺はまた心の中で言い、火が点いた煙草を吸いながら煙を吐いた。

— —

— — — — — — — — — — — — — — — —

私は空を見上げながら煙草を吸うテツヤ殿を見続けた。

あれから訓練を見ていたが、私は少し疲れていた。

このように動き辛いドレスのせいだろう。

重い上に動き難いしコルセットで腰をきつく結ばれているから意識を保つのもやっとだ。

だけど、兵たちの訓練に比べれば私の疲れなど大した事ではない。

何より休みたい、などとテツヤ殿には言えなかった。

無理を言って案内をしてもらっているのだから。

でも、テツヤ殿は急に休憩を取ろう、と言った。

どうしてか分からなかった。

そしてテツヤ殿は椅子が無いから自分が腹に巻いていた布で我慢してくれと言ってきた。

私はそれを拒んだ。

この方が身に付けている物を尻に敷くのはある意味、この方の背中を踏むと同じほど罪悪感がある。

それは嫌だった。

テツヤ殿は苦笑しながら、別の物なら良いか？と訊ねてきた。

この方が苦笑すると僅かに幼く見える。

とても可愛い、とさえ思えた。

私はテツヤ殿が身に付けている物でないなら、と答えた。

この方が身に付けている物でないなら、私は腰を降ろす。

だけど、この方が身に付けている物を敷き物にするのは嫌だ。

テツヤ殿はジープに置かれていた携帯、という物を取り出して宅配人という声がやたら大きな方にテーブル一式を頼んだ。

すると直ぐにテーブル一式が用意された。

テツヤ殿は私の為に椅子を引いてくれた。

私はそれに座り、テツヤ殿も座るだろうと思っていた。

でも、テツヤ殿は椅子に座らず立っている。

座れば良いのに、と思うがテツヤ殿は座らずに何か飲物を用意すると言って離れようとした。

私はそれを止めた。

行かないで。

私の傍から離れないで下さい。

心の中で私の想いが出てきた。

口には出さなかったが、私の心はこの方から離れたくない気持ちで一杯だった。

テツヤ殿は了承して部下に飲物を頼んだ。

「少佐はどうします？」

「俺は要らん。女王陛下、砂糖とミルクは？」

私は暫く考えてからミルクを入れて下さい、と頼んだ。

それに兵は頷いて建物の中に入って行った。
また二人だけになる。
「訓練の感想は如何かな？」
テツヤ殿は兵たちの訓練を見ながら私に訊ねた。
「正直、よく耐えられると思います」
訓練を見た私は正直な感想を述べた。
あんな訓練に私は耐えられない。
きっと何人も同じ事を言うだろう。
それを耐える兵たちは凄いと素直に感じる。
「あいつらには護りたい物があるからな」
何か護りたい物があるからあんな訓練にも耐えられる、とテツヤ殿は断言した。
テツヤ殿の言葉に私は護りたい物は何か？と自問自答した。
私は女王。
女王はこの国と民達の安全を護り栄えさせるのが責務。
でも、国や民達より大事なのは・・・・・・エリーナだ。

あの娘は何があろうと護りたい。

この国が無くなろうとエリーナだけは護りたかった。

女王として失格だろうが、母として娘を想う親の気持ちの方が私は強いと思う。

そして例え国が滅び、私が死んでも民達が居れば国は必ず復活するだろう。

国とは人の集まりで出来ている。

その人たちが生き続ける限り、国はあり続ける。

エリーナと民達が私の護りたい物。

私はテツヤ殿はどうか、と訊ねた。

「あるさ」

テツヤ殿は短い言葉で返してきた。

その護りたい物とは何ですか?と訊ねるが、テツヤ殿は首を横に振った。

「残念だが答えられないな」

「どうしてですか?」

私の問いにテツヤ殿は僅かに沈黙して、どうしてもだと返した。

テツヤ殿が護りたい物とは何なのか私は知りたかった。

だけど、テツヤ殿はそれに答えようとしない。

だから、私は彼を見続けた。

彼が答えるまで私はずっと見続ける。

いや、このまま答えなくても良いから、ずっと彼を見続けたい。

この両の眼にずっと・・・・・この方だけを映していたい。

テツヤ殿は空を見上げ続けている。

私はそのテツヤ殿をずっと見続けた。

第十五章：新たなる入隊者（前書き）

えー、かなりグダグダと話が進んでおりますが、まだ１０話から２０話はこんな状況が進む可能性大です。（爆）

一応、皆様を退屈させない為にリカルド側の視点などもこれから入れたいと思いますのでお付き合い下さい。

第十五章：新たなる入隊者

少佐とサラ様が休憩している最中、私は訓練を続けていた。

何時も通りラペリング降下した。

前方から複数の射撃を受けた。

アサルトライフルの中に狙撃銃が１丁含まれていた。

『・・・大尉か』

私を擦れ擦れに狙える相手は少佐達位だ。

そして少佐はサラ様と、軍曹は中尉達と共に訓練をやっている。

それなら大尉しか居ない。

私は急いで近くの遮蔽物に隠れた。

武器はベレッタＭ９２ＦＳとＳＫＳカービン。

距離がどれ位か分からないが、ドラグノフの有効射程距離を考えると８００メートル内に居る筈だ。

私のＳＫＳでは難しい距離だ。

遮蔽物の隙間から覗いてみると向こうも遮蔽物に身を隠している。

大尉も一緒だった。

距離はギリギリで届く距離だな。

私はＳＫＳカービンを肩から取り、レシーバーを引いて隙間から狙い撃ちした。

大尉達が遮蔽物に隠れた。

続けて撃ちながらベストに吊るしていたＭ２６破片手榴弾の安全ピンを抜いてから投げつけた。

そして撃ち続けて投げ返されないようにした。

大尉達が声を上げて遮蔽物から逃げ出す。

Ｍ２６破片手榴弾が爆発して、破片が無数に散らばり何人かが怪我をした。

私は遮蔽物から出て一服したい気持ちになった。

「坊やもやるね」

大尉がベレー帽に付いた汚れを叩き落としながら私を見てきた。

「どうも。だけど、大尉の狙撃も怖かったです」

「当たり前だよ。だって擦れ擦れに狙ってたんだからね」

恐ろしい事を口にするが、大尉なら当てずに狙える事を私は知って

いたからさして恐怖を感じたりしなかった。
射撃をしていた私は視線を感じて振り返った。
「・・・ぷ、プロイセン様、エリーナ様、エドリアス様！！」
あとレオン・ルソーが一緒に居た。
何だかおまけみたいだが、この3人に比べてどうしても影が薄いから仕方ない。
その証拠に3人より少し後ろに控え目に立っているのが証拠だ。
「やぁ、ランドルフ。いやいや、最後に会った時より逞しくなったな」
プロイセン様は私に近付いてクシャクシャと髪を撫でてきた。
「ありがとうございます」
私は礼を言いながら謹慎処分が解放された事に対して祝いの言葉を述べた。
「いやはや、どうも家にずっと居るのは性に合わん」
やはり外で動くのが一番だ、とプロイセン様は笑った。
「それはそうとランドルフよ。テツヤはどうした？」
「サラ様と一緒です」

「女王と？」

「母は前からテツヤ殿の訓練に興味があったんですよ」

エリーナ様がプロイセン様の疑問に答えた。

相変わらず美しい方だ、と私は思うと同時にこの方の手を握り走ったと思うと些かとんでもない事をしたな、と思う。

あの時は訓練で全てを考えていなかったから改めて失礼な事をしたな、と思ってしまった。

エリーナ様は私の視線に気づいたのか、こちらを見てきた。

澄んだ瞳で私を見てくるエリーナ様には、何処か熱が籠っている気がした。

私は慌てて視線を逸らして少佐から渡された女神の抱擁を銜えてマッチで火を点けた。

煙を吐きながら明後日の方角を見ているが、エリーナ様は視線を逸らす気が無かった。

「何だ。来たのか」

少佐がサラ様を連れて私たちの元へと歩み寄ってきた。

「プロイセン。謹慎ご苦労でした」

「いいえ。何でもありません」

プロイセン様はサラ様に会釈して、周りを見回した。

「ここが主の建てた砦、か」

「あぁ。どうだい？」

「・・・私が見てきた砦の中でも五指に入るな」

先ず東側に隣接しているため、森林地帯が多い上に鬱蒼としているため隠れる為にも東側はちょうど良い。

「その他にも何か理由がありそうな気がするが、今は言わないでくれ」

「ありがとう。今、行っている訓練以外の事もしたいが骸骨が煩くてな」

「ゲンハルトか。骸骨が渾名とは・・・お前も的を射ているな」

「どうも。それで司教。今日はその餓鬼も連れてどうした？」

「テツヤ殿に直接言いたいと仰っております」

レオン・ルソーを私は見てみた。

何処か覚悟を決めた顔つきだった。

一体どうしたんだろう？

「俺に何の用かな？親衛騎士団見習い騎士様」

少佐はレオン・ルソーに煙草を吸いながら話し掛けてきた。

私はこの点が可笑しい、と思った。

何でサラ様の前では吸わないのに、レオン・ルソーや私たちの前では煙草を吸うのだろう？

しかし、その疑問はプロイセン様の怒鳴り声で消された。

声のする方向を見ればプロイセン様が獅子頭軍団の兵たちを集めて叱りつけていた。

「謹慎処分を受けて、兵たちがゲンハルト殿を叩こうとするのを知ったのですよ」

エドリアス様が私の疑問を打ち消すように答えてくれた。

「なるほど。そうでしたか」

私は納得しながらもプロイセン様の怒鳴り声を聞いて、本当に謹慎処分が解けたんだと改めて実感した。

そして少佐の方に目をやると、レオン・ルソーと共に部屋の方へと消えて行く所だった。

「何を話すんですかね？」

「恐らく訓練を受けたいのでしょう」

エドリアス様は私に煙草が欲しい、と言いながら何処か確信したような口調で告げた。

「訓練を？」

「はい。実は彼、今日で親衛騎士団を辞めて来たんです」

「え？親衛騎士団を」

私は思わず訊き返した。

彼は子爵家の次男坊だ。

何れは何処かに養子か親衛騎士団から更に上の役職にでも就くと思っていた。

その彼が親衛騎士団を辞めるとは・・・・・・・・・・・・・・

これにはサラ様やエリーナ様も驚いていた。

「彼も私同様に・・・自分の人生をやり直したいのでしょう」

エドリアス様はレオン・ルソーもまた、自分のように自分の人生は自分の物。

だから、親の決めた職業に就きたくない。

そして全てを投げ出す覚悟で来た、と言った。

「昨夜、彼が私の所に来たんです」

懺悔ではなく、決意を聞いてもらいたかったそうだ。

「彼自身、私が訓練を受けているのを見た事とテツヤ殿の言葉がずっと頭から離れなかったそうなんです」

自分の人生なのに、自分が何一つ決められない事に対して酷く疑問を感じていたらしい。

そこへ少佐の言葉とエドリアス様の決意を見て、自分もやり直したいと思ったようだ。

私は平民出身だから彼の気持ちは解からない。

だが、もし同じ立場に居て考えれば、やはり彼と同じ行動を取るだろうと思った。

「少佐は許可しますかね？」

「しますとも。あの方は人を見る目がありますし、何より彼の眼を見ればその決意がどれだけ堅いかも解かります」

何でも親衛騎士団を辞めて更に実家からも縁を切って欲しいと頼んだらしい。

そこまで自分を追い詰めて決意したと思うと感心さえ覚えてしまう。

「ランドルフ。貴方は彼をどう思いますか？」

煙草に火を点けたエドリアス様は私に質問をしてきた。

「どうと言いましても・・・・ただ、彼の決意は本当でしょうし、少佐ならそれを受け止めてくれると思います」

まだ短い付き合いだが、少佐は決意や信念などを持つ者に対しては何処か優しいと私は常々ながら感じていた。

まぁ、ゲンハルト様とフィーナ様は別だが。

「そうですか。では、私たちは訓練に戻りますか」

「はい」

私とエドリアス様は頷いて訓練を再開する事にした。

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

―――――――――――――――――――――――――――――――

「私を・・・貴方の軍に入隊させて下さい」

俺の前で餓鬼・・・・いや、レオン・ルソーは真剣な顔で頼み込んできた。

餓鬼なんて言う言葉は自分の考えや信念も持たずに環境に甘えて育った奴等を言うんだ。

こいつはそんな奴じゃない。

自分の考えをしっかりと持ち、尚且つそれを実行しようとしている“男”の眼だ。

前に会った時とは豪い違いだが・・・男が変わる理由、変わらなければならない理由なんてのは極簡単な物ばかりだ。

まぁ、敢えてそれは訊かないでおく。

「俺の軍に入りたい、と言うが親衛騎士団はどうした？あの小娘が煩くないのか？」

「昨夜の内に親衛騎士団は辞めました。そして実家とも縁を切りました」

もう子爵家の次男兼親衛騎士団の見習い騎士レオン・ルソーは居ない。

今日からはただのレオン・ルソーだ、とこいつは言った。

「なぜ辞めたんだ？どうして俺の軍に入りたいんだ？俺はあいつらか見れば薄汚くて血に飢えた狂犬だぞ？」

疑問符を幾つも付けてこいつに問い掛けた。

「貴方様は血に飢えた狂犬ではありません」

「どうしてそんな事が言える？」

「それはハッキリとは言えないんですが・・・貴方を見ていると何処か品格のある方に思えるのです」

俺に品格があるなんて言った奴はお前が初めてだ。

皆、俺に向ける眼差しは蔑視だ。

それなのにこいつはそんな事を言う物だから、思わず笑ってしまった。

「な、何が可笑しいんですか？」

こいつには馬鹿にしたように取られたのか些か怒った顔つきをした。

「いや、お前さんが俺に品格があるなんて言う物だからな」

俺は謝罪しながらも礼を述べた。

そして何故、俺の軍に入りたいのかも訊いてみた。

「エドリアス様の言葉と貴方の言葉を聞いて・・・自分に対して疑問と怒りを覚えたんです」

自分は貴族の家に生まれて何一つ不自由な生活は送らなかった。

そして親の敷いたレールをただ走っていただけ。

それは司教も同じだった。

だが、司教は俺の言葉を聞いて自分の人生をやり直したい、と思い

訓練を受けている。

それが自分には強烈に映ったらしい。

そして自分に対しての疑問がやがて怒りへと変わり今に至ったらしい。

「お願いです。私を入隊させて下さい」

今は駄目でも必ず役立つ人材になる、とこいつは頭を下げながら頼んできた。

「・・・誰もお前さんに期待はしていない」

レオン・ルソーは落胆の顔を浮かべてきた。

「勘違いするなよ？誰も最初からお前さんに全て何でもこなせる、とは期待していないと言う事だ」

まだ見習いなのだ。

そんな奴に狙撃をしろ、斥候をしろ、爆破工作をしろ、なんて求めるのは度台無理な話だ。

「お前さんみたいな新兵はこれから時間を掛けて育てる」

時間を掛けて皆で新兵を一人前にするのだ。

だから、そんな役立つ人材になるとか言わずに自分を徹底的に鍛えてくれ、と言えば良いんだよ。

俺はそう言った。

そしてレオン・ルソーの頭に手を置いて言った。

「ようこそ。レオン・ルソー新兵。今日からお前を徹底的に鍛えてやる」

血の小便が出る位、厳しい訓練だから覚悟しろよ？

俺の言葉を聞いてこいつは怯える所か目を輝かせて大きく頷いてみせた。

「は、はいっ。覚悟します！！」

元気のある声で返事をするレオン・ルソーを俺は笑いながら見つめた。

幕間：見習い騎士の決意

私は一人、訓練場で剣を振っていた。

何度も行っているが未だに慣れない。

両手で構えても、重さに腕が負けてしまい前のめりになる。

更に鎧も着ると素早い動きなどはまったく望めない。

これでは満足に戦う事など何年先か分からない。

そして・・・心ここに在らずなので更に意味がない。

「・・・・・人生は自分の物、か」

私はタカミ・テツヤ殿が言った言葉を自分で口にした。

あの方は自分の人生は自分だけの物だと仰った。

誰の人生でもない。

自分の人生なのだから、自分で全てを決めそして行動する。

それを聞いたエドリアス様は自分の人生とする為に、訓練を受けたいと申し込んだ。

そしてそれは受理された。

あの方もまた自分と同じように自分の人生なのに他人の決めた道を歩いていただけだった。

それに疑問を感じていたのは私も同じ事だ。

だが、決定的に違うのはエドリアス様は自分の人生を物にした、と言う事だ。

それに対して私は・・・・・・・・・・・・・・・

私は剣を鞘に戻した。

これ以上、剣を振っても意味が無い。

気分転換に何処かに出掛けようと思った矢先だった。

「レオンっ」

フィーナお姉さまが私に駆け寄ってきた。

「何か用ですか？」

私は塞ぎ込んでいた気持ちを隠しながらお姉さまに要件を訊ねた。

「剣の修業をしていたの？」

お姉さまは私の問いを無視して私に訊ねてきた。

「はい。一応・・・・・・」

「流石ね。それでこそ選ばれた者の一員だわ」

常日頃から訓練をして有事に備える。

それこそ選ばれた者だ、とお姉さまは言った。

私にはそれが無性に腹に来た。

どうしてか分からないが、無性に腹に来た。

私は選ばれた者じゃない。

それに選ばれた者だから偉い訳じゃない。

それなのにさも自分達は偉いと思っているこの方に無性に腹が来た。

「あんな血に飢えた狂犬なんかとは違うわね」

「・・・・黙って下さい」

「レオン？」

「テツヤ殿は狂犬なんかじゃありません。それに私は選ばれた者じゃない」

二度とそんな言葉を言わないで下さい。

「レオン、どうした？」

お姉さまが私に触れようとした。

私はそれを振り払った。

「放っておいて下さい」

私は背を向けて走り出した。

お姉さまの呼び声が聞こえてきたが、私は走り続けた。

そしてどうやって来たのか分からないまま教会に来ていた。

私はどうしてここに来たのか、分からなかった。

帰ろうと思った時だ。

「レオン君じゃないですか」

司教であるエドリアス様が私の後ろに立っていた。

「エドリアス様・・・・・」

「何かありましたか？」

私の様子に何かを感じたエドリアス様は問い掛けてきた。

「まぁ・・・・・・・・・」

「取り敢えず立話もなんですからどうぞ中へ」

エドリアス様に促されて私は教会の中へと入った。

私はエドリアス様が出してくれた茶を飲みながら、事の顛末を話した。

「そうですか」

エドリアス様はただ頷いた。

それから「フィーナ様にも困った物ですね」と言った。

「はい。テツヤ殿の事は詳しく知りません。でも、気絶した私を助けてくれました」

単純だが、助けてくれた方がそんな血に飢えた狂犬ではない、と私は思う。

「そうですか。私はテツヤ殿と何度か話をしましたが面白い方ですよ」

「面白い？」

「えぇ。あの方は私に様々な事を話してくれます」

自分が知らない事や人生論などを話すらしい。

「宮廷内ではあの方を快く思う方は居ないです」

それは身元不明の傭兵であり、態度が尊大で顔などが美しくないからだろう。

そんな理由で快く思われないのでは酷過ぎる話だが。

「しかし、私を始めあの方を気に入っている方は居ります」

貴方はどうですか?と訊かれた。

「私は・・・少なくとも良い方だと思います」

「そうですか」

「はい。あの、エドリアス様はテツヤ殿の訓練を受けてどうですか?」

「厳しいですね。ですが、充実感はあります」

自分で選んだ道であり、それを歩んでいる。

だから、どんな厳しい訓練でも耐えられるし充実している。

それを聞いて私はやはり、自分で選んだ人生であり道だから充実感が得られるのかと思った。

「エドリアス様・・・・私にもその道は歩めるでしょうか?」

「それは答えられません」

私は貴方ではない。

全ては貴方の心次第で決まる。

エドリアス様の言葉に私は耳を傾ける事しか出来なかった。

寮へと帰り、私は自室で自問自答していた。

充実する人生か、安定した人生か・・・・・・・・・・・・

今の生活は不自由が無い。

このまま行けば、私はきっと何処かに養子に出されるか婿養子に行かされる。

そして役職に就いて子を作って死ぬだろう。

そんな人生で良いのか？

自分の人生なのに他人が決めた道を歩む人生で・・・・・・・・・・・・・・・

『自分の人生は自分の物だ。他人の物じゃない』

『貴方の心次第で決まる』

私は椅子から腰を上げた。

もう決めた。

もう迷わない。

後悔もしない。

私は部屋を出て、長であるフィーナ様の元へと向かった。

フィーナ様は自室で書類の整理をしていた。

「レオンっ。今まで何処に居たの？心配したのよっ」

フィーナ様は書類を離して私に近付こうとした。

私はその前に自分の思いを・・・決意を言った。

「レオン・ルソー。本日ただ今を持って・・・親衛騎士団を辞めさせて頂きます」

「れ、レオン？」

フィーナ様は面食らった顔をしたが、知った事ではない。

「今までありがとうございました」

私は一礼して部屋を出た。

そして実家へと足を運んで両親にも絶縁を言った。

両親は気でも狂ったのか？と言ってきたが、私は狂ってなどいない。

自分の人生を自分で歩みたいだけだ。

それを言い残して実家を後にした。

そしてエドリアス様の元へと向かい、自分の決意を告げた。

「そうですか」

エドリアス様はただ頷いて、私に明日にでもテツヤ殿の元へと行きましょうと言ってくれた。

その日は、エドリアス様の家に泊った。

その翌日、私はエドリアス様と共にテツヤ殿の元へと行った。

テツヤ殿は私を部屋の中に入れて要件を訊ねてきた。

私はそれに答えた。

テツヤ殿はそれをただ聞いていた。

やがて終わりが近づいたと感じて最後の足掻きとばかりに私はこう言った。

「お願いです。私を入隊させて下さい」

今は駄目でも必ず役立つ人材になる、と私は頭を下げながら頼んだ。

「・・・誰もお前さんに期待はしていない」

私はテツヤ殿から放たれた言葉に落胆の顔を浮かべた。

やはり、私では・・・・駄目なのか？

全てを投げ出して頼み込んでも駄目なのか？

「勘違いするなよ?誰も最初からお前さんに全て何でもこなせる、とは期待していないと言う事だ」

テツヤ殿は私の様子を見て、言葉を素直に取るなと言いながら説明を始めた。

私はまだ見習いなのだ。

そんな奴に狙撃をしろ、斥候をしろ、爆破工作をしろ、なんて求めるのは度台無理な話だ。

「お前さんみたいな新兵は・・・これから時間を掛けて育てる」

時間を掛けて皆で新兵を一人前にするのだ。

だから、そんな役立つ人材になるとか言わずに自分を徹底的に鍛えてくれ、と言えば良いんだよ。

テツヤ殿はそう言いながら、私の頭に手を置いてくれた。

とても温かくて・・・力強い感じだった。

「ようこそ。レオン・ルソー新兵。今日からお前を徹底的に鍛えてやる」

血の小便が出る位、厳しい訓練だから覚悟しろよ?

脅しの言葉に普通なら聞こえるだろう。

だが、私はテツヤ殿の言葉を聞いても怯える事はしなかった。

寧ろ充実感さえ覚える程だった。

こんな気持ちになるのは初めてだ。

そしてエドリアス様が自分で選んだ道だから充実感が得られると言っていた言葉も頷ける。

「は、はいっ。覚悟します！！」

私はテツヤ殿に何度も頭を下げて礼を述べた。

ここから私の人生・・・自分で選んだ道を・・・・本当の人生を歩む始まりの場所となった。

第十六章：亡き親友（前書き）

えー、本当は１０話くらいは訓練などを書こうと思っておりましたが、そろそろ内乱を本格的に進めようと思います。

とはいえ、後３話位はこんな状況ですが・・・我慢して下さい。
お願いです。

第十六章：亡き親友

史記を書いている途中で私は彼を・・・亡き親友であるレオン・ルソーの事を思い出した。

子爵家の次男坊であった彼は自分の人生に疑問を感じていた。

親のコネで親衛騎士団に入隊したが、本人の意思ではなかった。

本人は聖騎士団に入隊したかったのだ。

だが、彼は親に逆らわずに親衛騎士団に入隊した。

それが自分の人生だと諦めていたのだ。

しかし、徹夜様の言葉を聞いてそれに疑問を抱き始めた。

私は平民の出だが、彼の気持ちは何となくだが理解できた。

そして自分の人生を見つめ直して徹夜様が指揮していた軍に入隊した。

そのために彼は全てを捨てた。

だが、それを本人は生涯を通して後悔などしていないと公言していた。

訓練を積んで行き、やがて自分の指揮する部隊を与えられた。

あの時の彼の顔は忘れない。

いや、忘れられないと言った方が正しい。

『お前らを隊長に任命する』

私と彼は同時に別の隊を与えられた。

私は狙撃部隊を彼は徹夜様の敵であったが後に部下になった方の指揮していた部隊を与えられた。

いや、それと同じ部隊を与えられたと言った方が正しい。

あの方の部隊は少数精鋭と常に忠誠をモットーにしていた。

現にあの方は死ぬまで徹夜様に忠誠を誓い、戦でも少数精鋭のモットーに恥じぬ戦い振りを見せた。

その方と同じ部隊を与えられるのだから名誉と言えるだろう。

私は初めて自分が指揮する部隊を与えられて嬉しかったが、彼は私以上だった。

生まれて初めて自分の力で得た役職であり結果なのだから。

徹夜様の言葉を聞いて最初は茫然としていたが、やがて涙を流し始めた。

大粒の涙を流す彼に私は驚いたが、徹夜様と部下達をそれを黙ってみていた。

そして彼は涙を流しながら、こう言った。

『あ、ありがとうございます！！』

何度も礼を述べて彼は泣き続けた。

きっと初めて自分の力が身を結んだと実感が沸いたからだろう。

それを徹夜様は苦笑しながら頑張れ、と肩を叩いた。

それから彼と私は5大陸統一の任務に当たり見事に任務を達成できた。

5大陸統一後は私と彼は共に若くして中将になり、徹夜様の片腕として働き続けた。

そして徹夜様が亡くなってから1年後に彼も後を追う様に亡くなってしまった。

死ぬ間際に彼は最後に私にこう言い残した。

『私が先に行って陣地を確保してくる。だから、君はもう少し待っていてくれ』

きっと今頃は陣地を確保して徹夜様達と共に私たちが行くのを待っている事だろう。

そして徹夜様と一緒に親子のように戯れているかもしれない。

彼にしてみれば、本当の父親以上に徹夜様は父親的な存在だったのかもしれない。

彼が話すには実の父親は自分を息子と言うより政略道具としか見ていなかったらしい。

それが本人には当たり前と思う反面で哀しさもあったようだ。

それはそうだろう。

何処の世界に自分を道具としか見ていない父親に嬉しさを覚えるというのだ？

だが、徹夜様と出会ってから本当の父親とはどういう物かと学んだ。

背中で語り、時に厳しく時に優しくして子を支え続ける。

それが本当の父親だと。

レオンや私だけでなく、歳若い者たちにとって徹夜様は父親であり、兄であり、教師だった。

色々な事を教えてくれた上に、励ましてくれて、面倒を見てくれた。

あの方は魅力あふれる方だ。

だからこそ、他国からも支持を受けてムガリム帝国を打倒して5大陸も統一出来たのだ。

その点では“あの男”には・・・その魅力が欠けていた。

才能はあったが、人間として根本的な物が全て欠けていた。

あの男の部下達は“恐怖と報酬”で付き合っていただけだ。

あの男を命がけで守ろうとか、地獄の底まで付いて行く、なんて気持ちは無かった。

ただ、怖くて従っただけであり金回りが良かったから付いて来ただけだ。

そして部下を大切にしない・・・ただの駒としか見ていなかった。

徹夜様も作戦で部下を切り捨てる時もあった。

情に厚い方だが、絶対に勝たなければならない状況なら自分の命さえ切り捨てられる非情さを持ち合せていた。

しかし、切り捨てた部下達が無事かどうかも気にしていたし、連絡があった時は一人で涙を流した。

そんな所が部下達には信頼されていたし愛されていた。

あの男にはそれが足りなかった。

本当にただの駒としてしか見ていなかった。

そして自分の顔に泥が塗られる事をこの上なく嫌っていた。

捕虜になった部下が無事に帰還しても自殺を強要した程だ。

理由は簡単。

捕虜になって任務も全うできずにオメオメと帰ってきたからだ。

そんな男に部下達が命を預ける訳がない。

だから、圧倒的な戦力を持ち合せていながらも最後は身を滅ぼしたのだ。

私は“あの男”を思い出すのを止めた。

思い出すだけでも腸が煮え繰り返るからだ。

それを忘れる為に女神の抱擁を銜えてライターで火を点けながらレオン・ルソーと共に訓練をした頃を思い出した。

レオン・ルソーがテツヤ殿の軍に入隊して1週間が経過した。

あれから彼はテツヤ殿が言った通り血の小便を流すほど凄まじい訓練を受けた。

私たちより遅く入隊した上に内乱が何時、起こるか分からない状況だ。

その為、エドリアス様同様に私たち以上に厳しい訓練を施された。

現在、私は塔の上から森林を双眼鏡で覗いていた。

鬱蒼と生い茂っている森林の中を一人、歩く人影を発見した。

「大尉。見つけました」

私は横で別方角を探していた大尉に彼を発見したと伝えた。

「どれどれ？・・・・へぇ、結構やるじゃない」

大尉は彼の格好などを見て口笛を吹いた。

私も彼の居る方角を見る。

彼は迷彩服に身を包み、頭にブーニー・ハットを被っている。

それだけでも周囲と溶け込める。

そして顔には泥などを塗りカモフラージュも施している。

あれなら素人には何処に居るのか分からないだろう。

彼、レオン・ルソーは一人でここに来ようとしている。

2~3k離れた場所に小銃とナイフを渡された彼はここまで来る訓練を受けているのだ。

しかし、ここまで来るのには簡単じゃない。

数々の罠に砦から放たれた敵などが待ち構えているのだから。

「おや、右に行くのかい。そっちは少佐が仕掛けた落とし穴があるのにね」

「どんな落とし穴ですか？」

「大した落とし穴じゃないよ。ただ穴が掘られているだけさ」

本当なら下に木の杭などをやりたいが、それでは死んでしまう事から敢えてただの落とし穴にしたらしい。

「さぁて・・・・どう出るのかな？」

大尉と私は彼の行動を一瞬も見逃さないように双眼鏡から目を離さなかった。

——————————————————

―――――――――――――――――――

私は迷彩服に身を包み鬱蒼と草木が生い茂る道なき道を歩いていた。

テツヤ殿もとい少佐の軍に入隊してから既に1週間近く時間が過ぎて行った。

1週間・・・長いようで短い時間だ。

その1週間で私は1年で教える事を纏めて教えられた。

本当はもっと時間を掛けて教えたい所らしいが、ランドルフ君達に比べて私は入隊した日が遅い。

だから、皆に追い付けるように訓練期間を短縮し、そこへ更に纏めて教えるという事になったのだ。

入隊した翌日から私はその厳しい訓練を受けた。

先ず寝ている所へ催涙ガスという物を打ち込まれて半日以上も涙が止まらずに喉が痛かった。

あれは今でも忘れられない痛さだ。

だが、そんな状況だろうと訓練は行われた。

鎧１０個分もある重りを担がされて、更にライフルと呼ばれる物を持ち延々と砦の周りを走らされる。

時々、ライフルを上下に振り、匍匐前進をしたりした。

この匍匐前進がかなりきつかった。

何せ鎧１０個分もある重りを担がされて走っている為、重さに負けてしまう。

最初、倒れてしまったが少佐の部下である軍曹が「誰が倒れて良いと言った?立て!!」と叱咤してきた。

何とか立ち上がり再び走る。

それを繰り返して、今度は重りを担いだまま腕立て伏せや水面を泳ぐ訓練などをやらされた。

足が着かない程に深い水の中を重りを担いで泳ぐのは想像を絶する程に厳しかった。

更に後方からは追手がライフルなどを撃って来るから嫌でも潜らなければならないし、速く泳がないと駄目だ。

幾度となく沈み掛けたが、それでも自分の選んだ道だ。

こんな事でへこたれてどうすると自分を叱咤してやり続けた。

それからサバイバル術なども教えられた。

森林、砂漠、密林など様々な状況で生き抜く術を実際に砦の外で教えられた。

そこで蛇や鼠、リスなどを食べた。

最初こそ抵抗を覚えたが、何も食べさせてもらえないとなれば話は別だ。

嫌でも目の前にある物が御馳走に見える。

一度でも食べてしまうと慣れてしまうものだ。

そして訓練もやっていると慣れていき、どうすればより効率良く出来るかなども考えられる余裕が持てるようになった。

基本的な事を1週間で学ばされた私は砦から離れた場所に運ばれた。

少佐は私にナイフと小銃を渡し説明をした。

「ここから砦を目指して来い。期日は3日だ」

自分で方角を定めて、自分で食料を手に入れて、自分で警戒する。

砦まで罠などが沢山あるから3日の時間を私に与えたようだ。

「1週間お前を教育した。その1週間の成果が試される」

つまりテストだ。

これが上手く出来れば、私は成長するだろう。

そう思うと俄然とやる気が出てきた。

「了解。必ず砦に着いてみせます」

「良い言葉だ。では頑張れよ」

少佐は私に笑みを見せてから元来た道を去って行った。

それを見送ってから私は道なき道を進み始めた。

道なき道を進みながら私は周囲を警戒して進んだ。

出来るだけ枝などは折らずに、尚且つ揺れないようにした。

先ず折れば敵にここを進んだと分からせてしまう。

揺らしているのも同じだ。

後は足跡なども出来るだけ残さないようにして、苔なども踏まないようにした。

苔などは踏めば鮮明に足跡が残ってしまうからだ。

道なき道を進みながら私は砦を目指していたが、左右に道が二つに別れている場面に直面した。

左側を目指せば確実に砦には近い。

右側は遠回りで恐らく1日位は行くのに掛る道だろう。

しかし、私は敢えて遠回りをする事にした。

下手に近道を行って危ない目に遭いたくない。

ここは遠くても良いから確実に安全と思われる道を選ぶのが良い。

私は右側の道を進んだ。

だが、それが結果的に危険な道だったと後々に思い知らされることになる。

第十七章：将来は夫婦

私と大尉は双眼鏡で右側を選んだレオン・ルソーがどうなったか見守っていた。

彼が持っているライフルは私が最初に持たされたＳＫＳカービンとベレッタＭ９２ＦＳだった。

銃剣が取り付けられているから訓練用としてはちょうど良いらしい。

彼は進んでいたが足を止めて銃剣を前に出した。

そして地面を突き刺して安全だと確認してから慎重に進み始めた。

「へぇ、どうやら罠があると感づいたようだね」

大尉は氷の女王を吸いながら彼の罠を感づく、その才能に感心していた。

「坊やは狙撃に才能があるけど、あっちの坊やには罠を見抜く才能があるね」

罠を見抜く・・・・野生の動物が直感で敵が居るとか、縄張りに誰かが入ったと感じる、あれだ。

その才能を彼は持っている、と大尉は言った。

「左側は中尉達が待ち構えているし罠もある」

だが、右側は罠だけだ。

それでどちらが危険かと言えば、左側だろう。

まぁ、罠を仕掛けたのは少佐達だ。

それを考えれば右も危険だが、罠の他に敵がいる事も考えれば彼の選んだ道はまだ比較的だが危険ではない。

双眼鏡を覗いていると彼は進んでいた。

だが、直ぐに後方に跳んだ。

すると銃剣を刺した場所の土が下へと落ちた。

「落とし穴ですね」

「もし、あれをしていなかったら落ちていたね」

大尉の言葉に私は頷いた。

「例の新兵はどうだ？」

プロイセン様が塔の上に登りながら私たちにレオン・ルソーの様子を訊いてきた。

謹慎が解かれたプロイセン様だが、未だにゲンハルト様を始めとした者たちからは目の敵にされている上に在らぬ誹謗中傷を受けている。

それを蚊に刺された程度と称して相手にしないのはこの方の器の大きさと言う物だろう。

「はっ。少佐が仕掛けた罠を巧みにすり抜けております」

大尉がプロイセン様に敬礼をしてから答えた。

「そうか。しかし、あの青年・・・子爵家と絶縁したとはな」

「はい。あの、プロイセン様。子爵家は何か動きをしていましたか？」

「いいや。子爵と会ったがこう言っておったわ」

『親の命に逆らう子など私の子ではない。野に死んで腐ってしまえ』

「・・・そう言ったのですか？」

「あぁ。それで思わずこう言い返した」

『貴様は息子を道具と思っているのか？あの子はあの子の考えがあるんだ。それを命令に反したから絶縁とは貴様には熱い血は流れていないのか！！』

「それで子爵は？」

「ズボンから黄色い液体を流して震えた」

私は思わず想像して笑ってしまった。

「しかし、問題はフィーナ殿だ」

「あのアバズレかい」

大尉が氷の女王を塔の上から捨てた。

そして下から「あじゃ！！」と言う悲鳴が聞こえてきた。

下を見れば軍曹が背中を抑えて走り回っていた。

どうやら軍曹の背中に入ったようだ。

つくづく運が無いな。

そんな事を思いながら私はフィーナ様がどうしたのか、と訊いた。

「あれから私の所に来て、レオン・ルソーを返せと言ってきた」

どうやらプロイセン様と少佐が彼を無理やり引き摺りこんだ、と考えているらしい。

甚だ迷惑な話だ。

彼は自分で選んだのに、それを他人のせいにするのだから。

「それでどうしました？」

「別に相手にせん。あんな小娘、その気になれば首をへし折れるからな」

何時でも、とプロイセン様は付け足した。

確かにプロイセン様がその気になればフィーナ殿みたいな女など簡単に殺せるだろう。

「そりゃそうだ。何せ坊やにも負けるんだからね」

「何？ランドルフ。フィーナ殿と戦ったのか？」

プロイセンは些か驚いた顔で私を見てきた。

「まぁ・・・・・・」

私は歯切れが悪い感じで答えた。

「坊や。隠す事ないよ。元はと言えばあの小娘が悪いんだから」

大尉が私を軽く叩きながらプロイセンに説明を始めた。

「なるほど。主は骨があるな。いや、骨が付き始めた、と言った方が正しいな」

以前は渾名の通りもやしみたいに気骨が無かった。

だが、今は渾名とは違い気骨がある、とプロイセンは仰った。

「これもテツヤと出会ったからか？」

「はい」

私は迷わずに頷いた。

少佐と出会ったからこそ私は変われたのだ。

「良い答えだ。所でテツヤはどうした？」

「リーザ中尉と一緒で城下に行っております」

「そうか。リーシャも中々やりおるな」

「何がですか？」

私はプロイセン様の言葉に何かを感じたので訊き返した。

「ん？まぁ、何だ。いや、今は言わないでおこう」

何れ分かる事だ、とプロイセン様は言った。

私と大尉は首を傾げながらレオン・ルソーの様子を見る事を再開した。

だが、頭からはプロイセン様の言葉が離れなかった。

― ― ― ― ― ― ― ―

私は上官である少佐もといタカミ・テツヤ様と城下を歩いていた。

理由は買い出しだ。

城下から外に出ているため食料から衣類などはこちらに行かないと手に入らない。

テツヤ様が持っている携帯で必要な物は手に入るが、自力で手に入るなら自力で手に入れるのが望ましい。

ただ、流石に獣の肉ばかりでは飽きるから敢えて、買い出しをしているのだ。

私が食料などを買い、テツヤ様が荷物を持つ。

傍から見れば使用人と主人に見えるかもしれない。

でも、それは違う。

何れは・・・夫婦になるんだから。

父がプロイセンが謹慎を解かれてから、私は初めて父と再会した。

砦の中に入ってきた父は変わりなくそれに安堵する。

そして父に呼ばれてこう言われた。

『タカミ・テツヤを夫に迎える気はあるか?』

敢えて訊いてくる父。

普通なら結婚しろ、と命令するが父は私の意見を聞いてくれる。

『お前も良い歳だ。そろそろ結婚しても良い頃だろ?』

確かに私も良い歳だ。

いや、それ以前に貴族の間では２０を越えても独身なのは「行かず後家」などと言われる。

私自身、家柄は申し分ない。

だから、求婚はあった。

でも、私自身自分より強い相手でないと夫にはしたくなかった。

そのため誰も夫に相応しくなかった。

それで未だに結婚できずにいた。

しかし、今は違う。

私より強くて、父も認めてくれる殿方が居る。

・・・・タカミ・テツヤ様。

異世界から来た傭兵と言う人物で、私と同じく空の兵として活躍した人物。

周りは血生臭くて、みすぼらしい傭兵と毛嫌いしているようだけど私は違う。

初めてこの方を見た時から違うと分かっていた。

虐げられた民達を護る為に多勢を相手に奮闘した。

しかも、多勢に勝っているという強さ。

そして苦しんでいる民を医者の元へと連れて行く優しさ。

この方になら一生を捧げても良いと思っている。

だって、格好良いんだもの。

今も袋一杯に入った荷物を片手で持ちながら立っている。

それだけでも画になる。

「俺の顔に何か付いているのか？」

テツヤ様は私の顔を見てきた。

ああ、何て逞しい顔立ち！！

逞しい肉体！！

全てが私の思い描いて求めていた男性像！！

「おい、どうしたんだ？」

テツヤ様は私の様子に目を細めた。

ああ、その目を細める所も獲物を見つけた鷹のように鋭くて素敵・・・・・・・・・・・

などと私は見惚れながら何でも無いです、と言い買い物を続けた。

そこへ会いたくもない女が来た。

「そこに居たか！！」

「何だ。誰かと思えば傲慢で偏見おまけに雑魚の親衛騎士団長じゃねぇか」

テツヤ様は現れたフィーナ殿を見ても軽口を叩いてみせた。

この余裕も魅力的だわ。

対するフィーナ殿は髪が逆立っていて異形の者に見える。

民達はそれを見て恐れたのか逃げ始めた。

「今日は貴様の軽口に付き合う暇は無い」

フィーナ殿は荒い息をしながら近づいてきた。

「だったら何の用だ？」

「よくもレオンを誑かしたな！！」

「レオンを誑かした？馬鹿言うな。俺は男に興味ない」

「黙れ。貴様がレオンを誑かして貴様の軍に入れたのだろ？そうに違いない！！」

でなければ栄えある親衛騎士団を辞めたりしない、と彼女は言い続けた。

・・・本当に偏見の塊ね。

私は呆れて物が言えなかった。

「どう思おうとお前の勝手だ。だが、あいつを連れ戻そうとするならあいつの意見をちゃんと聞け」

それが出来ないなら連れ戻す事は許さない、とテツヤ様は言った。

「煩い！！貴様が悪いんだ。貴様がレオンを奪ったんだ！！」

フィーナ殿は剣を抜いてテツヤ様に斬り掛った。

テツヤ殿は荷物を持ったまま大ぶりに振り降ろしてきた剣を避けると前足で彼女を前に押し倒した。

かなり乱暴だけど、この女にはそれ位がちょうど良い。

3度も戦いを挑んで負けているんだから。

「この・・・・・・・！！」

フィーナ殿は立ち上がろうとしたが、その前にテツヤ殿はホルスターからコルトを抜いて引き金を引いていた。

弾はフィーナ殿の髪を何本か掠め取り地面に当たった。

「好い加減にしろ。俺は忙しいんだ」

コルトを向けたままテツヤ殿はフィーナ殿を睨み据えた。

「き、貴様っ」

「また俺に戦いを挑むなら今度は・・・その綺麗な顔が血で染まるぞ」

コルトの撃鉄を親指で起こし、低すぎるとも言える声で断言するテツヤ殿。

その声を聞いて本気だと私には解かった。

この方は今度こそ本当にフィーナ殿を殺す。

それに気付いたのかフィーナ殿は立ち上がれなかった。

「行くぞ。リーシャ」

「はい」

私は歩き出したテツヤ様の後を追いかけた。

フィーナ様は動かないが、私の知った事ではない。

第十八章：反逆者の影

私と大尉、そしてプロイセン様は塔の上からレオン・ルソーを見続けていた。

罠を潜り抜けた彼だが、どうやら今日は夜なので休むようだ。

私も周りを見回して辺りが暗い事に初めて気付いた。

「どれ、あたしたちも交代するか」

「ですね」

大尉の言葉に私は頷いた。

私たちは塔から降りて夜の見張りと交代した。

塔から降りるとテツヤ殿とリーザ様が帰ってきた所だった。

「お帰りなさい。テツヤ殿」

「おう。どうだ？レオンの様子は」

「今日は休むようです」

それから罠を見抜く所なども伝えた。

テツヤ殿はある程度は予想していたのか驚かずにそうか、と頷いただけだった。

「その様子だと主、あの青年が罠を見抜くと知っていたのか？」

プロイセン様がテツヤ殿の様子を見て訊ねた。

「あぁ。１週間の訓練の中には罠を見抜く訓練もあったからな」

その成果が出ただけだ、とテツヤ殿は言いながらフィーナ様に襲われた、と言った。

「どうやら俺があいつを誑かしたと思っているようだな」

「甚だ迷惑な話です」

リーザ様が自分の事のように憤慨していた。

どうもリーザ様はテツヤ殿に関する事だと感情が爆発し易いな、と思う。

「そう怒るな。リーシャ。怒りに任せて行動するほどお前は軽率なのか？」

「いいえ。私はフィーナ殿のように激情に駆られて、街中であんな醜態は晒しません」

「それが良い」

テツヤ殿は頷き、煙草を吸い始めた。

「さて、今度は俺とリーシャが塔に立つ。お前等はプロイセンのお

っさんに砦の中を案内してやれ」

この前は獅子頭軍団を怒って出来なかっただろ?とテツヤ殿は言い、プロイセン様は恥ずかしそうに頭を掻いた。

「行くぞ、リーシャ中尉」

「はい。少佐」

既に二人は作戦態勢に入っていた。

変わり身の早い所は実に見事で勉強になると私は思った。

そんな事を思いながら私と大尉・・・いやもう仕事は終わったからミーシャ殿と言い直そう。

ミーシャ殿と私はプロイセン様を連れて砦の中を案内した。

ある程度、中身を教えるとプロイセン様はあれこれ一気に質問をしてきた。

どの程度、防御力があるのか、籠城はどれくらい持つのか、逃げ道はあるのか、などなど・・・・・・・・

そんな一気に質問しないで所々で質問すれば良いのに、と私は失礼にも思ってしまった。

それはミーシャ殿も同じだったようで「一気に訊かないでくれ」と苦言を漏らした。

テツヤ殿同様に誰であろうとズケズケと物を言う方だ。

「主もテツヤ同様に真正面から物事を言うな」

「下手に湾曲した言い方をして間違った取り方をされたくないからね」

確かに言えてるが、余りにズケズケ言うと敵を作り易い、とプロイセン様は指摘した。

「テツヤもあの性格だ。更にフィーナ殿の件などもあって宮廷内では国外追放などが叫ばれている」

「そんな事をすれば、自分達は胴から首が跳ぶのを知らないのかね？」

いや、それ位ならまだマシな死に方と言えるだろう。

もっと悲惨な殺され方をするかもしれない。

リカルド様達に・・・・・・・・・・・・・・・

ここを築いてからだが、私は何だか無性にリカルド様達が来るのではないか、という恐怖がヒシヒシと感じていた。

あの偵察の者はあれから来ていない筈だが、内部に通じる者がいるとなれば解かったものじゃない。

「宮廷の者たちは戦を知らないし嫌っているのだ」

プロイセン様は何処か諦めた感じで言い切った。

ゲンハルト様達にどちらかと言えば肩入れしている。

まぁ、中にはプロイセン様に味方する者も居るが、それは代々軍人や騎士の家柄だ。

「そうかい。まぁ、少佐が国外追放になったらあたしも出るよ」

少佐が出て行くのに、自分が残る理由は無い。

ミーシャ殿はある意味では無責任とも取れる発言をした。

だが、もし私が同じ立場に立たされたら恐らく同じ事を言うな、と思った。

「そう言うな。そんな事は私がさせない。何より女王陛下が許さない」

プロイセン様の言葉に私は納得した。

あの方はテツヤ殿を事の他、気に入っているからだ。

どういう理由かは私には不明だが。

「あの女王がね・・・お人好し以外は取り得の無い女だと思っていたけど、部下達を纏める才能はあるようだね」

「み、ミーシャ殿、それは・・・・・・・」

「言い過ぎじゃないよ。あたしは女王には失礼だと思うけど、お人好しで美人だと言う事以外は無力だと思っていたよ」

何とも苛烈な評価だ。

まぁ、そんなにサラ様を知らないから言えるのかもしれないが・・・・・・・・

「お人好しなのはあの方の性格とガルバーの起こした事が原因だ」

「他国に侵略した事かい？」

「あぁ。あの戦は侵略であり、友好な関係を築いていた国の信頼を失墜させただけだ」

プロイセン様はガルバー様の行った事に関して手痛い評価をした。

「まぁ、そんな物だろうね。司教の話によれば、唯一手に入れた島も民の反乱が起こって公国として認めるしかなかったらしいね？」

「あぁ。私は別にそれで構わないと思った。だが、ガルバーは死ぬまで悔いていた」

犠牲を払って手に入れた領土をみすみす別の者に譲ったのだから。

「あたしは先王がどんな男か知らないけど、好きになれそうにない事は断言できるね」

「主がガルバーと出会っていれば、即座に殺すだろうな」

あの男はそれだけ嫌われていた、とプロイセン様は語り今度はそっちが質問に答えてくれ、と言ってきた。

私とミーシャ殿は肩を落としながら説明を一つずつした。

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

私は梟が鳴く暗い森の中でハンモックの上で寝ていた。

夜の森を歩くのは危険極まりない。

昼間は罠などを探すのに時間を費やしてしまったが、砦までもう少しだ。

そして今は休める時だ。

休める時に休んで動ける時に動く。

これが戦場で生き残れる方法だ、と教えられた。

そしてハンモックで寝るのは毒虫などから身を護るためだ。

タカミ・テツヤ殿こと少佐はそれを二度目の軍隊経験で学んだらしい。

地面で寝ていたら毒虫に噛まれて熱病に犯されて生死を彷徨ったが何とか生きる事に成功した。

それからハンモックを張って寝る事にしたようだ。

それを私たちにも教えてくれた。

お陰で毒虫などには襲われずに済む。

私はハンモックで寝ながら、胸の上に置いたＳＫＳカービンを見た。

見た事もない武器だが、少佐がいた世界では使われていたらしい。

初めて与えられたライフルで、先に銃剣と呼ばれる短剣が装着されている。

これのお陰で新兵を教育する時間が短縮するらしく、豊かではない国では採用されているようだ。

比較的、反動なども小さく取り回しも良い事も好まれている。

私もこれを使用して１週間になるが、剣以上に自分の身体に馴染んでいる。

昼間も銃剣を前に出して、地面を突き刺していった。

そのお陰で落とし穴に落ちる、という事は無かった。

だが、この先・・・落とし穴だけではないような気がした。

それを考えると少し難しいな、と思うが同時に今まで習ってきた事を発揮すれば事は足りる筈だとも思った。

1週間で習った事は今まで受けた事も無い訓練だった。

もっとも剣の修行もあるが、ライフルなどの訓練の方が身体に馴染んでいるのは驚きだ。

少佐が言うには「自分で覚えたい、という気持ちが強いからだろう」と言っていた。

確かに、これを使えるようになりたい、という気持ちが剣以上に強いのは否定できない。

私はこれからの事を考えてみた。

先ず夜明け前に行動は開始する。

出来るだけ食事などは制限し、移動も迅速に証拠も残さないのが望ましい。

これは偵察・斥候などでは必須条件らしい。

私は特にこれをしたい、という希望は無い。

自分が得意と思えるまたは思われる技術を身に付けたいだけだ。

まだそれが解からない。

始めて間もないから仕方ないかも知れない。

しかし、必ずその技術を身に付けてみせると誓った。

そして体力を回復させる為に眠った。

第十九章：渾名はチャレンジャー

翌日、私は少佐達と共に森林に入っていた。

恐らくもう既に目と鼻の先まで来た筈のレオン・ルソーを攻撃する為だ。

ここで敵役として私たちを相手にどう彼が戦うか・・・・・私自身、大変興味を持っていた。

「さぁて、あいつはどんな手を使うんだろうな？」

少佐はＡＫＭアサルトライフルを右手で持ちながら女神の抱擁を銜えて楽しそうに笑った。

煙草の臭いは遠くでも分かる。

それを敢えてしていると言う事は彼に対して自分達が来ていると知らせているのだろう。

きっと、こうする事でどう出るのか試すのだ。

私はモーゼルｋａｒ９８ｋのボルトを引いて弾を装填した。

そして更に進んで行くと少佐達が足を止めた。

「もやし。お前は単独行動を取れ」

レオン・ルソーことチャレンジャーを追い詰めろと命令された。

チャレンジャーとは挑戦者という意味らしく全てを捨てた彼に対して少佐が名付けた渾名だ。

彼には似合う渾名だと思う。

それに言い方からしても格好良い。

もやしが渾名である私より断然格好良い。

どうせなら私にもそれ位、格好良い名前を与えて欲しいとさえ思う。

だが、それを心の底に仕舞って静かに、しかし、速足で茂みの中に入り少佐達から離れた。

茂みの中を進んで行くと、かなり遠いが物音がした。

その場で膝立ちをして目を細めてみる。

「・・・・・いた」

チャレンジャーは茂みの中を進んでいた。

しかし、顔は緊張している顔立ちで少佐達が居る事を知っていると思われる。

私は無線でチャレンジャーを発見した、と少佐達に伝えた。

『挨拶代わりに1発お見舞してやれ』

無線機から狙撃の許しを得た私はモーゼルを構えた。

視線の先にはチャレンジャーが進んでいる。

「・・・・・・・・」

私は深呼吸をしてから引き金に指を掛けて狙いを彼の被っているブーニー・ハットに定めた。

『挨拶代わりだ。受け取ってくれ』

私は躊躇わずに引き金に掛けた指を引いた。

８ｍｍモーゼル弾の強い反動が肩に来るが、気にせずにボルトを動かして弾を排出させた。

弾は彼のブーニー・ハットに当たり、宙を舞ってゆっくりと落ちて行く。

彼は一瞬、狙撃されたと分からない顔をしたがブーニー・ハットが地に落ちたのを見て慌てて地面に伏せた。

私なら3発は身体に撃てた。

だが、少佐達なら5発以上は少なくとも撃てただろう。

そう思うとまだ修業の身だな、と思う。

「・・・1発お見舞しました」

無線で狙撃をした事を伝えた。

『そこから背後に回れ。俺らは前から行く』

つまり挟み打ちという訳だ。

私は了解、と言って無線を切り彼の背後へと回った。

背後に回って音を立てないように近付いて行くと、チャレンジャーは地面に伏せたまま動こうとしなかった。

狙撃されたから、それが原因で動けないのだろうか？

私は警戒しながら近づいて行った。

そこへ少佐達も近付く。

四方八方を取り囲まれたチャレンジャーだが、まったくそれに気付いていない。

もし、これが戦場なら彼はもう包囲されて殺されている所だろう。

やがてチャレンジャーは意を決したように身体を起こした。

しかし、そこで少佐が目の前にＡＫＭアサルトライフルの銃口を構えて現れた。

チャレンジャーは行き成り現れた少佐に驚いたが、直ぐに周りを囲まれたと知った。

左右から大尉と軍曹が現れ、背後から私が現れたのだから。

「これで終わりだ」

少佐の言葉を聞いて、彼は項垂れた。

――――――――――――――――――――――――――

―――――――――――

私は夜が明ける前に目を覚ました。

まだ日が昇っていない。

ハンモックから降りて急いで荷物を纏めて歩き始める。

今日中には砦に行きたいが、何故か嫌な予感がする。

そしてそれは現実と化す。

日が昇り周囲を明るく照らし始めた位だ。

かなり離れた場所から嗅ぎ慣れた臭いがした。

臭いは少佐が吸っている煙草という物の臭いだ。

しかも、段々と近づいて来ている。

『・・・・少佐達が来た』

私はきっと敵役として少佐達が来たんだ、と直感した。

そしてどうするか考えた。。

偵察や斥候は敵を見つけても戦いは出来るだけ避けるのが望ましい。

下手に戦って自分の居場所を敵に知られたくないし、仲間が来る可能性も捨て切れないからだ。

人数は不明だが、恐らく４人から１０人くらいで行動している可能性が高いと見て良いだろう。

それに対して私は一人。

どう頑張っても勝ち目は薄い。

そうなれば上手く隠れてやり過ごすのが一番だ。

私は何処から来るのか予想しながら進んだ。

煙草の臭いが段々、近付いてくる。

私はここ等辺でやり過ごそうと思った時だ。

被っていたブーニー・ハットが宙を舞った。

風は吹いていないのに、どうしてだろう？

私は何で宙を舞ったのか解からなかった。

だが、地面に落ちたブーニー・ハットを見て理解した。

穴が1個空いている。

・・・・・狙撃されたと解かった。

急いで身体を地面に伏せた。

狙撃手が居る。

それが解かり怖くなった。

少佐から狙撃手の恐ろしさは教えられていたが、身を持って狙撃されると本当に怖い、という感情が出てくる。

私は暫く、その場から動けなかった。

少しでも動くとそれだけで狙撃されるかもしれない、という怖さがあったからだ。

どれ位、地面に伏せていたかは解からない。

だが、ここに居れば敵が来る。

それでは駄目だ。

私は砦まで行かなければならないのだ。

私は震える足を叱咤して、立ち上がった。

立ち上がった両の足は未だに震えている。

しかし、何とか歩ける力はある。

一歩前に出ようとした時だった。

前方からＡＫＭアサルトライフルを持った少佐が出てきた。

銃口は真っ直ぐに私の胸を狙っている。

左右からは少佐の部下であるミーシャ大尉とイーグル軍曹が出てきた。

二人ともライフルの銃口を私に向けている。

そして背後からも・・・・・・・・・・

背後にはランドルフ“１等兵”が私を狙っていた。

彼は元々2等兵という最下位の階級だったが、私が入隊した事と腕を上げた事から1等兵に格上げとなった。

彼とは同い年だが、彼の方が上の階級であるため上官である。

だから、ランドルフ1等兵と呼ばせてもらっている。

恐らく彼が狙撃したのだろう。

少佐達のライフルはアサルトライフルで狙撃には余り向かない。

ランドルフ1等兵が持っているライフルはボルトアクション式のモーゼルｋａｒ９８ｋ、と言うライフルだ。

狙撃に適したライフルであり、彼は射撃が上手い。

少佐の話では「天性の才を持っている」と言われている程だ。

だから、きっと彼が私のブーニー・ハットを狙撃したんだ。

これは確信だった。

そして私はブーニー・ハットが狙撃されてから暫くの間だが茫然としていた。

もし、彼が本気なら私は既に何発も撃ち込まれて死んでいただろう。

そう思うと再び恐怖で足がブルブルと震え出した。

それを少佐達は少し笑いながら見ていた。

何だか無性に情けない気持ちになった。

今まで辛い思いをしてあんなに耐えたのに、こんな所で・・・・後もう少しという所で終わるのだ。

それが悔しかった。

少佐は私にこう言った。

「残念だが、ここでお終いだ」

私はそれを聞いて、砦まで後もう少しだったのに・・・・・・・・と内心で嘆きながらも大人しくするしか出来なかった。

両手を背中に回されて縄で縛られて砦へと連れて行かれた私は縛られた上に更に縄で縛られた。

そして木の上に吊るされた。

「暫くそうしていろ」

少佐に言われて私は頷くしか出来なかった。

情けない気持ちだったが、今度は失敗しないと新たに誓う。

だが、この誓いは直ぐに実戦で味わう事になる。

幕間：決行の日は近し（前書き）

えー、ここから急展開で物語を進めます。

かなり、違和感がある可能性が高いので、ご覚悟下さい。

そして、どうかこの情けない作者を許して下さい・・・・・・・

幕間：決行の日は近し

巨大な石で作られた塔の上に立つ一人の青年が居た。

金の髪を肩の辺りで切り揃えて、緑色の瞳は温和な気は微塵もなかった。

何処までも厳しい自然を表現しているように見える。

その青年はただ、ずっと一点に目を向けていた。

その先には目では確認できないが、長年夢にまで見ていた王の椅子がある。

「・・・もう直ぐだ。もう直ぐ、あの椅子に座れる」

あの女ではこれからの事に対してまともに動く事は出来ない。

それではこの国が危うい。

“彼の国”がこの国を・・・・この5大陸を我が物にしてしまう。

それだけは避けなければならない。

そうなってはこの国は滅び、民達は奴隷にされてしまう。

それは何としても避けなければならない。

何があろうと阻止しなければならないのだ。

例え義理の母子を・・・この手で惨殺しようと。

苦渋の表情を青年は一瞬だけ浮かべたが、直ぐに消し去った。

背後に人の気配を感じたからだ。

青年の背後には薄暗い・・・計り知れない狡猾な色を持った薄暗い瞳を持った３０代の男が立っていた。

黒い甲冑に身を包んだ彼は肩膝を着き、前を向く青年に話し掛けた。

「我が主。ただ今、両国から援軍が駆け付けました」

「数と装備は？」

青年は前を向いたまま男に訊ねた。

「“砂”からは戦像が８０と“戦車”が１００です。“草”からは騎兵が３００ほどです」

“彼の国”の者たちに我が軍達を合わせても数は圧倒的に少ないと男は言った。

だが、実力でならこちらの方が上だと自負する。

砂も草の兵たちも少なくとも実力はある。

何より敵側はまさか親しくしている国から敵が送られてくるなど夢にも思っていないだろう。

そして戦の時に驚愕と絶望を味わうのだ。

“彼の国”から送られてきた使いの者たちは少数精鋭と謳われる者たちで、その実力は買っている。

ただし、実力は買うが信頼はしていない。

あの国の使いを信用する事は出来ない。

最初に会った瞬間から胡散臭いと思ったのだ。

これは直感であるが、その直感で命拾いした事が過去に何度もある。

自分達に尊大な口調で喋り立てた“あの男”・・・・そしてその周りに立つ者たち。

どれもこれも奥底には欲望が渦巻いており、信用しろと言う方が無理だ。

ただ、少数精鋭を指揮する者の眼は違っていた。

欲望などとは縁が遠いような色をした眼であった。

どうしてあんな眼をした男があんな男達に混ざっているのか不思議だった。

そして少なくとも自分達に対して尊大な態度を取ってきた“あの男”に比べれば信用できそうだ。

今も敵陣近くに陣を取り情報収集している。

本当は国を掌握したら直ぐに消す予定だったが、もう少し考えてみようと思い直した。

そんな事を男は思いながら、どうなさいますか?と目の前に立つ“国王”に訊ねた。

彼の中では既に青年は国王となっているのだ。

「戦力が大きいからと言ってもそれを指揮する者が、それを上手く使いこなせなければ烏合の衆だ」

戦では素人目からも数が多い方が有利に立てる。

だが、それを指揮する者が数を上手く使いこなせなければ烏合の衆であり、直ぐに蹴散らせる。

これは彼と彼が実戦で学んだ経験から来ている。

彼と彼は戦を少なくとも１０回以上は経験している。

先王に着き従い他国を攻め込んだ。

その時の経験がまさかこんな状況で役立つとは・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・お前は、どう思う?」

「どう思うとは?」

青年の問いに男はその真意が解からずに訊ね返した。

「私が行う事は、正しいと思うか？」

「正しいですとも」

男は断言した。

青年は周りから先王の血を濃く受け継いだ粗暴な者と見られている。だが、それは大きな誤りだ。

この青年は誰よりも心優しい。

彼の居た地では彼を敬意を込めて“陛下”と呼んでいる程だ。

玉座に座るあの女に比べれば、こちらの方がずっと王として相応しい。

そして誰よりもこの国の現状を嘆いている。

他国に舐められており、本当に国を護ろうと願っている者たちを糾弾しようとしているのだから。

「国王陛下。正義は我々にあります」

私利私欲に溺れ切った者たちには、今の状況が解からないのだ。

このまま行けば、この国は・・・・いや、この大陸は全て“彼の国”の奴隷に成り下がる。

それは駄目だ。

我々が私利私欲に溺れ切って国情を蔑ろにしている者達に鉄槌を下す。

「・・・・鉄槌か。その尖った先を・・・・・母上と妹に向けるしかない、か」

「・・・貴方様の御心は解かります。ですが、あの二人を・・・・・・亡き者にしない限り、この国は治りません」

もし、あの二人が生きていれば・・・きっとまた自分達を辺境へと追い立てる事だろう。

そしてその時には既に手遅れだ。

荒治療であるが、それ以外に道は無い。

「・・・運命とは、かくも虚しく残酷な物だな」

「・・・それが運命というものです」

男は青年の言葉に頭を垂れて受け入れて下さい、と暗に言った。

「・・・・他の者たちの準備は？」

青年は前を向いたまま彼の腹心である3人の男達の事を訊ねた。

「はっ。既に準備は整っております。後は貴方様の号令を待つ身です」

男は答えながら、３人の男達もどれだけ信用できるか分からないと思っていた。

３人を束ねる男は先王の戦の時も参加していたが、どうも胡散臭い。

そして狡猾な部分が見え隠れしており、目の前の青年に取り繕う所も見た事がある。

『・・・・もし、この方を陥れようとしたらこの手で首を切り落としてやる』

男は目の前の主が危険な目に遭わないように注意しようと、心に改めて言い聞かせた。

それを知らない青年は男に命令を告げた。

「・・・あの男達に連絡を取れ」

最後の情報収集を行い私に報告せよ。

「御意に」

男は一礼して塔から降りて行った。

一人、残った青年は風に揺れる金の髪を撫でながら緑色の瞳を閉じた。

瞳を閉じれば幼い頃の懐かしい思い出が浮かんで消えて行く。

『貴方はこれからお兄様になるのよ。どうか、妹をお願いね？』

『例え血が繋がってなくても貴方は私の息子よ』

『大丈夫？しっかりして！！』

「・・・母上」

青年はここには居ない母の名を呼んだ。

自分をこの世に産み落とした女の名ではない。

あの女はただ自分を産み落としただけの存在だ。

自分が高熱を出した時でさえ博打と男に明け暮れた薄情な女ではない。

血が繋がっていないのに自分を息子として見てくれた一人の美しい女性。

その女性と自分と腹違いの妹に当たる娘をこの手に掛ける・・・・・・

自分達の行おうとしている事は明らかに聖書の教えに反している。

だが、青年は誓ったのだ。

反逆者という汚名を被ろうと、この国を護ろうと。

それが自分の運命なのだ。

そして何が何でも勝たなければならない。

自分を愛してくれた・・・・女性を殺そうとも。

「・・・・私は、地獄行き決定だな」

自分の行う事を考えれば十分にそれは有り得る。

しかし、それで国が生き残れるなら喜んで地獄へと落ちようではないか。

青年は風に吹かれながら自嘲して背を向けた。

彼の名はリカルド。

リカルド・ウェスビー。

サルバーナ王国第１２代目国王、ガルバーと側室であったウェスビー公爵夫人の間に出来た男子。

サルバーナ王国、青天の霹靂を起こした反逆者として後世に名を残す者である。

第二十章：国外追放

史記を書いていた私は再びここでボールペンを止めて、ある人物を思い出した。

リカルド様・・・・・・・・・・

先王ガルバー様と側室の間に産まれた方で・・・青天の霹靂を起こした反逆者。

だが、私は反逆者ではないと思っている。

彼には王としての器があった。

戦の采配も見事だったし、政に関しても彼が居た地方では今でも彼の墓に献花を備えている事から人望があったと窺える。

徹夜様もリカルド様の実力を高く評価しており、晩年私にこう漏らしていた。

『・・・惜しい男だった』

あの方があんな言葉を言ったのは後にも先にもリカルド様だけだ。

それだけあの方は、敵でありながらも尊敬に値する敵だった。

最後も武人として相応しい死に様だったと言えるだろう。

柱に縛られた身でありながらも眼は生きており、私たちに銃口を向

けられてもまったく怖気づいていなかった。

そしてまだ人を殺していなかったレオン・ルソーに向かってこう言った。

『落ち着け。お前は今一人の人間を殺すんだ。それは軍人として避けては通れない道なのだ』

だから、私を殺してその道を進むのだ。

だから、落ち着いて私の心臓を狙え。

そのライフルから放たれる1発の銃弾で私を絶命させろ。

それが私に対する慈悲だと思え。

それが軍人である貴様の使命だと思え。

そうリカルド様は仰った。

今から殺される身なので、凄い言い方だと思うが本当だ。

それだけあの方は誇りが高く同時に覚悟を決めていたのだ。

前首都のヴァエリエでは反逆者として、重税を課した悪王として忌み嫌われていた。

しかし、首都を占拠したがそこで政を行っていたのはリカルド様達を影で操っていた・・・・スネークだ。

スネークとは徹夜様の居た世界で蛇を意味する。

まさしくその名が相応しい男だった。

“あの男”に比べれば、まだ可愛気がある方だがそれでも十分に嫌われていた。

狡猾にして残忍で分が悪ければ平気な顔で他人を裏切る男。

そのスネークがリカルド様の名を騙り好き勝手に暴れていただけだ。

それをリカルド様のせいにするのだから怒りを通り越して呆れ果ててしまう。

だが、そんな男の最後は憐れなものだ。

最初はリカルド様に味方していたが、戦況が不利だと分かればこちらに鞍替えをしようとしてきた。

その証としてリカルド様を捕えてきたのだから。

しかし、そんな男を徹夜様は許す筈も無い。

いや、寧ろ憎悪を宿していた。

最終的に生きたまま焼き殺された。

あんな狡猾な男には相応しい最後だ。

そんな事を思い返しながら私は史記を書き続ける事にした。

リカルド様が兵を起こしたのは、砦を築きレオン・ルソーの訓練が一通り終わりを迎えた頃だった。

その日、私たちは何時も通りの訓練をしていた。

そこへ何時になく真剣な顔でプロイセン様が訪れた。

「どうした?プロイセンのおっさん」

テツヤ殿こと少佐は煙草を蒸かしながらプロイセン様に話し掛けた。

「これを見てくれ」

プロイセン様は無造作に一枚の紙を少佐に渡した。

少佐はプロイセン様の様子に何かを感じ取ったのか手紙に目を通し始めた。

そして顔が驚愕へと変わったが、直ぐに無表情となりこう呟いた。

「・・・タカミ・テツヤを国外追放に処する」

私は思わずプロイセン様を見た。

いや、その場に居た者達は一同に耳を疑い、プロイセン様を見ずにはいられなかった。

少佐を国外追放に処する?

そんな馬鹿な！！

「今朝・・・宮廷の者が渡してきた」

最初は何の用だろう、と思っていたが渡された手紙を見て驚愕した。

そしてその署名にも驚きを隠せなかったらしい。

署名には・・・サラ・ロクシャーナと書かれていた。

そんな・・・・・・サラ様が少佐を国外追放にするなんて・・・・・・・・・・・・

あの方は少佐を気に入っていたのに、どうして・・・・・・・・・！！

「私も疑った。だが、その文字は・・・女王の署名に間違いない」

プロイセン様は未だに信じられないと呟いた。

「女王には確認したのか？」

少佐はプロイセン様に確認したか訪ねたが、別の声が返ってきた。

「その必要は無い」

見ればゲンハルト様とフィーナ様が立っていた。

二人揃って居るのが妙な感じを私は覚えたが、今はそれ所ではない。

「プロイセンが言った通り署名は女王陛下の物だ」

確認の必要性は無い、と断言するゲンハルト様。
その口調は勝ち誇っている感じに聞こえて私の神経を逆なでさせた。
「野良犬。一日だけ時間を与える」
それまでに荷物を纏めて消えろ、とフィーナ様が言ってきた。
胸糞悪い。
腹から食べた物が出てきそうなほど胸糞悪く、この場でこの下種女を殺してやりたい程だ。
しかし、それを抑え込み冷静になろうと努めた。
こんな相手に怒りをぶつけては駄目だ。
それに狙撃手は・・・誰よりも冷静でなくては駄目なのだから。
少佐はフィーナ様に・・・下種女を見ながら手紙に書かれていた事を訊ねた。
「俺だけが国外追放、と書かれているがミーシャとイーグルはどうするんだ？」
「その二人は問題ない。いや、問題あるが、今回は不問にする。だが、不問に出来ないほど問題なのは貴様だ」
貴様が行ってきた数々の悪行を女王はもう許せないと仰った、とフ

ィーナ様は言った。

「悪行ねぇ・・・・・・」

少佐は目を細めて二人を見つめていた。

「旦那。やっぱり女王に確認した方が良いんじゃないですか？」

軍曹が少佐に確認をした方が良いと、助言した。

確かにそれは言えている。

どうも怪しい。

だが、二人はそれを予想していたかのようにこう言ってきた。

「女王に会おうとするなら、貴様も国外追放だ」

「・・・イーグル。ミーシャ。お前等はここに残れ」

出るのは俺一人で十分だ、と少佐は言った。

「少佐！！」

大尉が叫び声を上げた。

それを少佐は後ろ眼で見てからウィンクをした。

大尉はそれを見て押し黙り、頷いた。

「明日の夜明けには出る。俺が出るんだ。二人はここに住まわせてくれるんだろうな?」

「あぁ。約束する」

ゲンハルト様が約束、と言ったがプロイセン様は怪しいと睨んだのか、こう言った。

「口約束では信用できん。書類を書いてもらおう」

「私の言葉が信用できないと言うのか?」

「あぁ。貴様は口約束をしてはそれを無下にする所がある。だからだ。・・・それにこの書類が本当なら別に問題ないだろ?」

それを言われてゲンハルト様の眼が僅かにうろたえた。

・・・・・・・怪しい。

私はこれに裏がある、と直感した。

「どうした?出来ないのか?」

プロイセン様は更に挑発するように喋り続けた。

それがゲンハルト様には我慢できなかったのか、書いてやると言った。

ゲンハルト様はプロイセン様が渡した紙に契約書を書き、判を押した。

これで成立して同時に証拠品となる。

「良いか？明日の夜明けまでに出るのだぞ？」

「一度聞けば解かる」

少佐はゲンハルト様の言葉に頷いた。

二人は少佐を一瞥して出て行った。

二人が出て行ってから一同は少佐を囲んだ。

「少佐。あいつらのあれは嘘ですよ」

「あんな奴等の言う事は信じてはいけません」

「女王がそんな事をする訳ないです」

口々に少佐を思い留めようと喋ったが、少佐はこう言って断った。

女王に忠誠を誓う軍人が、女王の言葉を無下には出来ない。

それを口ずさむ少佐の表情はとても哀しい表情だった。

大尉と軍曹はそれを見て何も言わなかった。

だが、ワイド中尉とリーザ中尉は少佐を何とか思い留めようとさせていた。

「少佐いや、テツヤよ。サラ様の署名であるか確かめよう。どうせ、あの二人が考えた陰謀だ！！」

「そうですよ。あの二人が考えた陰謀に決まってます！！だから、テツヤ様・・・どうか行かないで下さい！！」

リーザ中尉は少佐・・・テツヤ殿の肩に両手を置いて、必死な声で言った。

まるで大切な人が遠くに行ってしまうのを阻止しようとしているように・・・・・・・・・・・・

「お前等の気持ちは嬉しい。だが、俺が行けばイーグルとミーシャが残れる。もし、俺が行かなければ3人とも追い出される」

それでは事が起きた時に困る。

だから、自分だけが消える。

それが一番良いのだ。

自己犠牲・・・とも取れる発言だが、テツヤ殿はそんな行動は取らない。

いや、それと同じだが敢えてそんな陳腐な言葉は使わない。

冷静に考えて自分だけが犠牲になれば、二人は残れて有事の際に活躍できる。

それを考えれば自分が居なくなれば問題ない。

つまり、先の事を考えての行動だ。

二人は尚も何かを言おうとしたが、プロイセン様がそれを止めた。

「すまん。テツヤ。私が無力なばかりに・・・・・・・・・・・」

プロイセン様は震える口を必死に動かして、言葉を紡ぎまた自分の無力さを痛感させられて泣きそうな顔になった。

「あんたが謝る必要はないさ。まぁ、ここを出ても何かあれば必ず戻って来る」

例えサラ様が何か言おうと、下種女達に殺されようとも王国の危機には必ず戻って来る、とテツヤ殿は言った。

「・・・・ありがとう」

「礼は要らない。俺自身がこの国を気に入っているからするだけだ」

それじゃ俺は出掛けてくる、とテツヤ殿は言い残して砦から出て行った。

残された私たちは何も出来ない無力さに怒りつつ、あれの絶対に陰謀だと確信した。

そして・・・・・必ずこの報いはしてやる、と誓うのだった。

幕間：雨という名の涙　（前書き）

幕間を何度も入れてすいません。（汗）

でも、これはどうしても幕間で入れたいと思っておりまして・・・・

はい。

す、すいません！！

幕間：雨という名の涙

俺は一人で城下街を歩いていた。

ここも見納め。

出来るだけ目に焼き付かせていた。

以前なら、もうお払い箱かと思い次の国へと直ぐにでも向かっただろう。

だが、今は少しでも良いからこの国を目に焼き付かせて置きたかった。

この国は俺にとって心地よい国だ。

俺の見ても怖がらずに皆が温かい眼差しで見てくれるし、雰囲気も良い。

それに・・・花が居るからでもある。

しかし、ここを明日には出なければならない。

『・・・タカミ・テツヤを国外追放処分に処する・・・・・・サラ・ロクシャーナ』

俺が読んだ手紙には、ハッキリと花の名前が書かれていた。

最初は信じられなかったが、今は信じられる。

現実なんだ。

これが現実なんだ、と信じられる。

どういう理由で俺を国外追放にするかは解からない。

まぁ、検討をするなら小娘や骸骨達が俺の事を言って裏で手を回して女王にサインをさせたんだろうな。

ああいう奴等は裏で姑息な手段を取るからな。

俺が確認をさせようとして阻止したのが良い例だ。

別に姑息な手段が悪いとは思わない。

それが普通なのだ。

俺は手紙を忘れて、風景などを焼き付けて国を出たらどうするか考えてみた。

別に何処に行く当てがある訳ではない。

この世界の住人でない俺に行く当てなど無い。

それは向こうの世界でも同じだ。

戦が終われば追い出されて次の職が見つかるまでは、ただ風のようにあっちへこっちへ気が向くままに旅をした。

今回もそれが良いだろう。

そんな事を考えながら城下を歩いている時だった。

「あら、誰かと思えばこの前の殿方ではないですか」

聞き覚えのある声に振り向くと・・・・妖艶な花が居た。

衣装こそ地味だが、女の色気が嫌というほど出ているから直ぐにその手の商売女だと解かる。

女は俺を見て妖艶に微笑みながら近づいてきた。

「今まで何処に行っておりましたの？あれからまったく来ないから気になっていましたわ」

「仕事だ。まぁ、その仕事も今日で終わりだ」

明日の夜明けにはこの国を出る、と俺は言った。

「そうなんですの？それなら私の宿へ来て下さいな」

貴方とお話がしたい、と女は言い俺の手を掴み引っ張り出した。

まるで花に引っ張られる錯覚を覚えたが、俺は自嘲した。

俺を追放する花がそんな事をする訳がない。

それは俺の錯覚であり妄想なのだ。

下らない・・・・・・・・・・・・

女は俺を宿まで引っ張って行き、部屋に入れた。

「適当な所に座っていて下さい」

直ぐに飲物を用意する、と女は言った。

「出来るなら酒を頼む」

まだ昼間だが酒を飲みたい気分なんだ。

「分かりました」

女は頷くと直ぐにここで働く男に酒を用意するように命令した。

そして俺の直ぐ隣に腰を降ろした。

「で、話とは何だ?」

俺は懐から煙草を取り出して銜えながら訊ねた。

「それはお酒を飲みながらお話します。それより貴方様の名前を聞いていませんわ」

前に抱いた時は互いに名乗らずに居たから、と女は言った。

「鷹見徹夜だ」

「タカミ・テツヤ・・・・良い名前ですね」

「自分で考えた。それであんたは?」

「私はミレーネ。ミレーネ・ルシアン」

「良い名だ」

「ありがとうございます。ちなみにミレーネの意味は夜。ルシアンは女神と言うんです」

「夜の女神か・・・・相応しい名前だな」

この女・・・ミレーネは夜の女神に相応しいと思う。

妖艶にして品があり、誰にも膝を折らない気高き白銀の月。

そして何者にも干渉をさせない絶対的な地位を保ち万人を従わさせる魅力に溢れる夜。

ミレーネにはそんな雰囲気が漂っていたから相応しい名だ。

「ありがとうございます。所でテツヤ様は一人旅ですか?」

ミレーネは男が持って来た酒を受け取り男を外に追い出してから訊ねてきた。

「あぁ。俺は一匹狼な性質でね」

元々俺は一匹狼だ。

仲間は居たが・・・今は居ない。

あいつ等とはもう一緒に居れない。

だから、また一人だ。

「そうですか。確かに孤高な雰囲気を持っていますからね」

ミレーネは2つのグラスに琥珀色の液体を注ぎながら言った。

「孤高？俺にそんな高貴な物は無い」

俺は渡されたグラスを持ちながら鼻で笑った。

ふと外から音が聞こえて見ると・・・雨が降っていた。

雨、か。

あまり良い物じゃないな。

俺が泣いていた時も雨が降っていた、と聞いている。

そして俺が初めて愛した女に裏切られ殺され掛けた時も雨が降っていた。

その他にも初めての戦友を・・・親友と思っていた男を、この手で殺さなければならない時も雨が降っていた。

つくづく俺は雨と縁が無いと思う。

雨は良い物でないが、良い物でもある。

嫌な過去も全てを流してくれるし、良い過去も同時洗い流す。

俺は銜えた煙草に火を点けながら煙を吐いた。

ミレーネは窓から見える雨をずっと見ていたが、不意に俺に視線を向けてきた。

紫色の瞳は何処か哀しそうに歪んでいた。

「雨が嫌いか？」

俺の問いにミレーネは頷いた。

「私、親の顔を知らないんです」

俺は無言で聞いた。

この手の商売をする女達は大抵だが、親の顔を知らないか、または知っていても敢えて忘れようとする。

俺が今まで見てきた女たちは親に捨てられたか、親に売られたかの二通りしかなかった。

自分を売る、というのは滅多に見た事がない。

まぁ、俺自身の行く所が大体そんな場所だったからかもしれないが。

ミレーネもそのどっちかだと俺は思っていた。

「産まれた時、森に居たんです」

白い布に包まれて雨で濡れて泣いている所を見つけられたらしい。

そしてここで育てられた。

初めての時はまだ１０歳だ、と言う。

「育ての親は別に良い、と言っていたんです」

私が歩みたい道を歩め、と言ったらしい。

随分と優しい育ての親だ。

こんな商売を生業としているんだから、何れは家業を告げとか言うと思っていたが。

ミレーネは喋り続けた。

「でも、育ててくれた恩もありますから自分でこの道に入ったんです」

「そうか」

俺はそれに頷いて煙草を吸い、ミレーネはグラスを傾けた。

白い手・・・雪のように白い手に持たれているグラスは琥珀色の液体が見えているが、その色が白を染めてミレーネの妖艶な美しさを更に強調しているように見えた。

「テツヤ様はどうですか？」

「俺も親は知らない。俺も捨て子でね」

俺は正直に答えながら携帯灰皿に灰を捨てた。

「そうですか。私・・・雨を見ると、捨てられたと気を思い出して嫌なんです」

そして自分の過去が雨で全て流される気がして嬉しいと思うと同時に嫌だ、とも言った。

どんなに嫌な過去もそれは自分の中にある大切な思い出だ。

それが全て消されると思うと嫌になるのも無理は無い。

「俺もだ」

俺はこの時、初めてグラスを傾けた。

喉に微かに焼けるような熱い感覚が来る。

だが、気にせずグラスを傾け続けた。

「私たち似た者同士ですね」

「いいや違う。お前さんは高貴な女だ」

その身体から放たれる気が高貴であり、声から肉体まで全てが高貴

な存在だ。

それに対して俺は・・・・・・・・・・・

「全てが泥と血で作られた存在だ。そして・・・血を求めて野を彷徨う薄汚れた野良犬だ」

「野良犬？・・・傭兵ですか」

「あぁ。今までこの方、血を見なかった日が無かった」

「だから、私に似ている女を“高嶺の花”と称して手を出せずにいたんですね」

ミレーネは納得するように頷きグラスを傾けた。

「あぁ。自信を持て、と前に言ったな？」

「はい」

ミレーネはグラスを傾けながら頷いた。

「自信を持って花に少し自分を・・・良く見せようとしたが、失敗した」

「・・・・・・・・・」

ミレーネはグラスを弄ぶのを止めて黙って俺を見た。

紫色の瞳がとても綺麗で、俺を見続ける。

花に見続けられている時とは違う。

だが、とても似ており何処か花を連想させてしまう。

俺は視線を避けて煙草を口に銜えた。

煙を吸い、そして中で燻っていた全てを息と共に吐き出した。

暫く黙っていたが、口を開いてこう言った。

「花は・・・俺にはやはり届かない存在だった」

国外追放が・・・それの答えと言えるだろう。

どう頑張っても俺では届かない存在なのだ。

そして向こうは俺を必要としていないし、見てくれない。

短くなった煙草を灰皿に捨てて噛った。

だが、眼元から微かに熱い物が零れ落ちている事に気付いた。

何だ?

手をやってみれば、透明な液体だった。

涙・・・・・・涙なんて当の昔に流すのも忘れていた。

それが今になってどうして流しているのか?

解からない。

しかし、俺は涙をミレーネに見せないようにした。

男が涙を流して良いのは、親か女が死んだ時だけ。

今はどちらも当て嵌まらない。

ただ自分には余りにも過ぎ過ぎた夢を追い求めて・・・愚かにも身を滅ぼした憐れな男が流している。

胸糞悪い。

こんな時に涙は流してはいけない。

俺は必死に止めようとしたが、余計に溢れ出す。

ちくしょう・・・何で涙なんかが流れるんだよ。

俺は流れる涙を止められずに苛立った。

しかし、背中に温かい感覚を覚えた。

ミレーネの白い手が俺の胸に回って来た、と解かった。

「言った筈ですよ・・・・・・私が慰めて上げると」

貴方は泣いている。

だけど、それを見せないようにしている。

なら、見ないようにする。

見ないで慰めて上げる。

男を慰めるのは女の役目。

私が貴方の涙を受け止めて、慰めて上げる。

だから、もう泣かないで。

ミレーネは背中越しに語り掛けて俺の背中に顔を埋めた。

温かい鼓動とミレーネの吐息が背中に感じる。

それがどうやら俺には薬だったようだ。

涙が一時的だが止まった。

また流れ始めたが。

それでも俺は良い、と思った。

そして振り返りミレーネの胸に顔を埋めた。

「・・・慰めてくれ」

この憐れな男を・・・・・・・・・・・・どうか、あんたが慰めてくれ。

ミレーネが俺の頭を抱き締めて耳元で囁いた。

「何時までも・・・・貴方を慰めて上げます」

この胸は貴方だけに。

そして何時までも貴方の傍に控えて慰めると誓いましょう。

ミレーネは雨が降る中・・・・・・俺をずっと慰めてくれた。

そしてベッドで横になる俺の胸板にミレーネは顔を埋めていたが、顔を起こしてこう言った。

「私を貴方と一緒に連れて行って下さい」

俺がこの国を出ると言うのなら私も貴方に付いて行きたい。

まだ2度しか会っていないし、恋愛をした訳でもない。

そんな男に連れて行ってくれ、とミレーネは頼んできた。

どうしてそんな事を言うのか俺が訊くと彼女はこう答えた。

「貴方は孤高な存在です。でも・・・その孤高である貴方の隣に一人くらいが隣に居ても良いではないですか？」

「・・・・何処に行く当ても無いし危険が伴うぞ」

俺に安楽の地は無い。

何処かに定住する事など出来ない、と先ほど痛感させられた。

ここではそれほど怨みは買っていないが、俺の事だ。

どうせ買う事だろう。

そんな男に付いて行くのか？と訊ねた。

「当てが無いのは構いません。それに危険があっても貴方となら大丈夫です」

こんな商売をしているからか自分の身は自分で守れる、とミレーネは語った。

そしてまた連れて行って下さい、と頼んできた。

「・・・分かった」

俺はもう二度と言わないと思っていた・・・言葉を口にした。

「ありがとうございます。テツヤ様」

ミレーネは俺の胸に顔を埋めて寝た。

俺も一緒に眠りの世界に旅立った。

とても心地よい眠りへの旅立ちだった。

その後、夜明け前に俺とミレーネは2頭の馬に乗り城を出た。

行き先？

そんな事は風にでも訊いてくれ。

俺は馬の手綱を握りながら隣で馬に颯爽と乗るミレーネを見た。

ミレーネの衣装は男物の衣装に身を纏い、腰まで伸びた銀髪を真後ろで纏めていた。

それが妙に画になり、男装の麗人という言葉が俺の頭を過った。

「馬には乗れるんです。地方へも出張に行っていたので」

「そうか。てっきり馬車かと思った」

「馬車より自分で手綱を握った方が好きなんです」

「勇ましい女だな。で、ミレーネ。先ずは何処に行くべきだ？」

「そうですね・・・・・あ、風がこっちに吹いたからこちらへ行きましょう」

風が吹いた方角は・・・・・・・・・・・・・・・・

第二十一章：親友からの励まし

テツヤ殿が国を出てから丸3日が経過した。

外出に行ってからテツヤ殿は二度と帰って来なかった。

きっと、そのまま出て行ったんだ。

せめて別れの挨拶くらいはして欲しかったと思う。

短い間だが、私とあの方はコンビを組んでいたのだ。

だから、私にだけでも別れの言葉を言ってから出て行って欲しかった。

私はその日から何をする気も起きずにただ、ずっと空を見上げていた。

空は昨日が雨だったのを忘れる程に青い空だった。

私の気持ちはそれとは裏腹に暗い気持ちだ。

いや、私以外の者達も何処か暗かった。

特にリーザ中尉はあれから食事も取らずに部屋に籠ったまま未だに出て来ない。

大尉と軍曹は平静を装っていたが、それでも内に激しい怒りを宿していた、と私には解かった。

敬愛する上官があんな目に遭わされて自分達は何も出来なかったのだから怒りを宿すのも無理はない。

だが、それを抑えている力量はやはり軍人として一流だからだろう。

その二人はプロイセン様の元へと行き、ワイド中尉は一人で剣の鍛錬をしている。

しかし、剣の鍛錬も何処か覇気が無い。

それだけテツヤ殿が居なくなった事が大きいのだ。

「・・・ランドルフ君」

私は自分の名を呼ばれて、空から下へと視線を戻した。

そこには私の後輩であり友達となったレオンが立っていた。

「先ほどから空を見上げていたけど、どうしたんだい？」

「いや、テツヤ殿はどうしているのかな、と思ってね」

「・・・・・・・・・」

レオンはそれに黙った。

テツヤ殿が国外追放を言い渡されたその日の内に彼の所へフィーナ様が訊ねてきた。

フィーナ様は彼にこう言った。

『レオン。親衛騎士団に帰りましょ？もうあんな男に振り回される事は無いのよ？』

彼はフィーナ様を睨み据えて差し出された手を振り払った。

『私は・・・貴方を・・・・・貴方達を許さない！！』

振り払われた上に怒鳴られたフィーナ様はその場で茫然としたが、直ぐに我を取り戻して彼を宥めようとした。

だが、彼は叫び続けた。

『テツヤ殿を国外追放した貴方達を末代まで呪ってやる！？』

そして今にも拳銃を抜かんばかりの彼を私が抑えて大尉がフィーナ様を強制的に追い出した。

それから彼は、テツヤ殿が城を出た事に何も出来なかった自分を恥じたのか泣き出した。

それを皆は困り果てながらも見ているしか出来なかった。

「・・・テツヤ殿ならきっとまた私たちの前に現れるよ」

レオンが空を見上げたまま呟いた。

「何だかそんな気がするんだ。だから、私たちもテツヤ殿が現れた時に恥ずかしくないように頑張ろうよ？」

そうしないと怒られる、と彼は言った。

「・・・そうだね。あの方の事だから、きっと拳骨を落として来る」

「あれは痛いよね」

「うん。痛い痛い」

私と彼はテツヤ殿の拳骨を思い出して頭を撫でた。

頭を撫でると何だか今にも拳骨が来そうな気がした。

そして私は彼に視線を合わせて訓練をやろう、と言った。

そうだ。

ここで何時までもウジウジしていた所でテツヤ殿が帰って来る訳じゃない。

それに今はリカルド様の事もある。

なら、訓練に励もう。

そして有事に備えようではないか。

「じゃあ、軽く走ってウォーミング・アップしよう」

「そうだね」

私と彼は走り出した。

軽く走りながらも今まで受けてきた訓練を復習し直す。

私の場合はモーゼルとＳＫＳの両方を使って長距離から中距離、近距離の狙撃をした。

何度もやって既に身体に馴染んでいる。

肩にストックを当て、照準で狙いを定めて引き金を引く動作を繰り返す。

身体が馴染んでいるため無意識にボルトに手が行き、ボルトを後ろに引いて弾を排出した。

それの繰り返しだった。

レオンの方も私と同じようにＳＫＳカービンで狙撃をしている。

僅かな時間で良くここまで出来るようになったと思えるほど身体に馴染んでいる。

それだけテツヤ殿の訓練が良かった、という証拠と言えるだろう。

それを思うと無性にテツヤ殿が居なくなったんだ、と改めて痛感させられた気がした。

午後まで訓練を続けていたが、その思いは消える事が無かった。

食事を取った後、私とレオンは気晴らしに街に行った。

別に何処に行く訳ではなく、本当に気晴らしだ。

街は活気に満ちており、私たちの事など誰も知らないという感じを受ける。

だが、ちゃんと見れば井戸が幾つもあり更に消火訓練から避難訓練などもされている。

ちゃんとテツヤ殿の対策が活かされている証拠だ。

私とレオンは近くの店で茶を飲む事にした。

私は懐からテツヤ殿に渡された女神の抱擁をレオンにも渡して銜えた。

そして火を点けて煙を吐く。

煙は風に乗って東の地へと飛んで行く。

『・・・そう言えば、ガリシャ達はどうしているかな』

東の地に何千年もの間、影に隠れて初代国王の遺言を頑なに守り抜いている影の親衛隊。

そこで私の胸を時めかせた赤い髪に草原色の瞳を宿した・・・・・ガリシャ。

あの娘はどうしているのか、非常に気になった。

そしてテツヤ殿が助けたドラゴン。

あのドラゴンは内乱が起こると宣言した。

前なら信じられないが、今ならそれは信じられる。

だが、そんな時にテツヤ殿は居ない。

国外追放などと言う馬鹿げた事をした奴等のせいだ。

女王の署名があったが、果たしてあれが本物かどうか怪しいと私は思っていた。

ゲンハルト様・・・骸骨の様子などを見れば、胡散臭いと思うのが普通だ。

それに私は誓ったのだ。

必ずあの報いを受けさせてやる、と。

その為にはどうすれば良い？

私は茶を飲みながら考えた。

そこへ背後から気配を感じた。

店の者の気配ではない。

誰か、別な者の気配だ。

私は静かにベレッタに手をやり、何時でも反撃が可能な態勢を取りつつ気付かない振りを続けた。

後一歩という所で気配が止まった。

私がチラリと向けば、そこには・・・・・・・・・・

「・・・・エリーナ様」

私の背後に立っていたのは、街娘の格好をしていたエリーナ様だった。

しかし、街娘の格好をしていようと身体から放たれる気配で身分の高い娘だと解かる。

エリーナ様は私の声に驚きながら、軽く頭を下げてきた。

レオンもエリーナ様の存在に気付いて慌てたが、直ぐに周りを気にして平静を装った。

「こんな所へどうしたのですか？」

私は彼女の方に顔を向けて理由を訊ねた。

「テツヤ殿にお話がありまして」

「・・・・・残念ですが、テツヤ殿は居ません」

私はエリーナ様を見て、ある案が浮かんだ。

彼女なら母親である女王陛下と会う。
それなら彼女を通じて骸骨共がやった事が本当かどうか確かめようと思った。

「どういう事ですか？」

「貴方様の母上にお訊き下さい。さすれば、理由が解かる筈です」

私は冷静な口調で言葉を紡いだ。

エリーナ様は私の言葉に戸惑いを覚えたのかレオンに視線を寄こした。

しかし、そのレオンも私の意図に気付いたのか私と同じ事を言った。

「どういう事か、教えて下さい」

「それは女王陛下にお訊き下さい。私どもは貴方様に答える事は出来ませんので」

では、失礼しますと断って私とレオンは飲み代を払い店を後にした。

「・・・君も中々の悪だね」

レオンは歩きながら私に軽く皮肉を言った。

確かにそうだ。

何も知らないエリーナ様を使い、事の審理を確かめようとしているのだから。

「否定しないよ。でも、テツヤ殿の言葉を使うならこうだよ」

“どんな手を使おうと勝てば良し”

「確かにね。負ければ、幾ら正しくてもただの遠吠えだ」

「その通り。エリーナ様には悪いけど、私は負けたくないし狙撃手として減点物だが・・・少し感情が入ってね」

「まぁ、それは僕も同じ事だから何も言わないよ。・・・・・・で、どうなると思う？」

「少なくとも、エリーナ様からサラ様の耳に入ってゲンハルト様達を吊るし上げる事は可能になる」

それから色々と調べられる。

そこへ私たちの手に有る証拠品を見せる。

そうすれば首が跳ぶだろう。

文字通り首が胴から跳ぶ。

別に構わない。

あいつらがした事はそれだけの価値に値するのだから。

「ふっ・・・・それもそうだね」

レオンは口端を上げて笑った。

テツヤ殿に似ているが、まだまだ地に付いていない。

それは私も同じ事だが。

第二十二章：ロマンチストで臆病

私とレオンが砦の中に戻ると大尉と軍曹が戻って来ていた。

「お帰りなさい。大尉、軍曹」

私が二人に声を掛けると二人は頷いて、何処に行っていたかと訊ねてきた。

素直に答えて、それからエリーナ様の事も話した。

軍曹は驚いた顔で私を見たが、こう言った。

「坊っちゃんも意外と悪だね」

何も知らない王女をそんな風に利用するのだから、当たり前と言えるだろう。

しかし、大尉は違った。

「非情な狙撃手らしいね」

そして良くやった、と褒めてくれた。

「あたしたちも何か手は無いかと考えていたけど、坊やに負けたよ」

「でも姐御。何も知らない王女をそんな風に利用するなんて酷いじゃないですか？」

「はっ。何を言っているんだい。あんたは少佐が追い出された事に怒りを感じないのかい？」

「冗談。俺だって直ぐにでもあの骸骨を殺したいですよ」

軍曹は大尉に心外だとばかりに怒りを込めた口調で言い返した。

「だったら坊やを悪だなんて言うな。あたし達はあいつ等に報いを受けさせる権利がある」

その権利を行使する者にはどんな手を使う事も許される。

そして立ちはだかる人・物すべてを容赦なく奪い付くし討ち滅ぼす。

「良いか？あいつ等は姑息な手段を講じたんだ。なら、あたし達もそれと同じそれ以上の手段を講じても問題ない」

少佐の言葉を、座右の銘とも言える言葉を大尉は口にした。

どんな手段を講じようとも勝てば良い。

大尉の言葉に軍曹はグウの音も出ないのか、暫く黙っていたがやがて頷いた。

「・・・ですね。しかし、坊ちゃん。女の子を利用したんだ。後でしっかりとアフター・ケアはしろよ？」

「何ですか？それは」

「んー、簡単に説明すれば後治療。言うなれば、利用したからそれ

に対する恩返しとか謝礼をしろ、という事だ」

なるほど。

確かにそれはやった方が良いな、と私とレオンは思い頷いた。

「所で大尉と軍曹はプロイセン様の元へ何しに行ったんですか？」

レオンが二人にプロイセン様の所へ行った理由を訊ねた。

「少佐の行方を捜索できないか？と言われた」

大尉と軍曹なら少佐を探せる、とプロイセン様は思ったらしい。

それにまだそんなに遠くへは行っていない筈だ、とも考えたようだ。

「それで答えは・・・・・・」

『無理だ』

声を揃えて二人は断言してみせた。

「少佐はあたし達４人の中でも２番目に軍歴が長いんだ」

「２番目ですか？」

「あぁ。一番は外人部隊からの部下で年齢は４５歳。階級はこの馬鹿より上の曹長だ」

「と言うと軍曹の上官ですか」

曹長は伍長・軍曹などの下士官の最高位に値する階級だ。

まぁ、伍長と軍曹に比べて些か影が薄いように私には思えるが。

「あぁ。少佐からも信頼されていて、若かった頃は少佐を殴り飛ばしたらしい」

あの少佐を殴り飛ばした・・・・・・・・

どんな人だろうと私とレオンは想像した。

「まぁ、その話は置いておいて、少佐は色々と怨みも買っているんだ」

色々と・・・・まぁ、あの性格だから要らぬ怨みも買ったのだろう。

「だから、常に一つの場所に3日以上は留まらない。運が悪ければ小一時間もすれば別の場所に移動するし、住居も構えていない」

同じ場所に3日以上は居ない上に運が悪いと小一時間で消える。

そんな相手を二人で見つけろ、と言われても確かに無理だ。

そして止めの一撃とばかりに証拠も髪の毛一本でさえも残さない、と言い切られた。

「髪の毛一本と思うだろうが、プロなら髪の毛一本で相手の行方は探せるからね」

私とレオンはプロの凄さを垣間見た気がした。

「だから、少佐を探せと言われても無理だ。それにあたし達はここの住人じゃない」

右も左も解からないのだから探しようがない。

私とレオンはそれを聞いて二人でも駄目か、と落ち込んだ。

だが、私たち以上に落ち込んだのはリーザ中尉だ。

3日振りに部屋から出た中尉だが、私たちの会話を聞いて声を上げて泣き出した。

そしてまた部屋に戻って行った。

「・・・あれは重症だね」

大尉は氷の女王を銜えながら溜め息を吐いた。

「・・・旦那にお熱だったからね。リーザちゃんは」

軍曹は何処か憐れんだ表情を浮かべながら燃える女を銜えた。

「・・・見てられないです」

「僕もです・・・・」

私とレオンは忘れる為に訓練に励む事にした。

だが、それでもリーザ中尉が泣いた所が頭から離れなかった。
その日の夜、私とレオンは塔の上で夜警をしていた。
「リーザ中尉、少佐の事が好きだったんじゃないのかな？」
レオンは煙草を蒸かしながら隣でモーゼルを抱いていた私に呟いてきた。
「確かにそれは言えてるね。でも、少佐はどうかな」
「少佐って結婚とかしてたの？」
「いいや。傭兵だからしてないんだ」
いつ死ぬか分からない上に犯罪者呼ばわりされる傭兵稼業をしている男は所帯など持たない方が良い、と少佐は前に語っていた。
だから、結婚はしていない。
「そうなんだ。だけど、少佐って何て言うか、女性の扱いに慣れているよね？」
レオンはこの前、少佐と城下に行った時に女性を扱う所を見てそう感じたようだ。
「まぁ・・・軍曹よりは好かれていたね」
「顔は軍曹の方が上だけどね」

「確かに」

私とレオンは微かに口端を上げて笑い合った。

そこへ、コーヒーを持った軍曹が現れた。

数は3つだ。

「よう。何か異常はあったか？」

「いえ。特にありません」

私が答えると軍曹は頷いてコーヒーを差し出してくれた。

『ありがとうございます』

私とレオンは礼を言ってからコーヒーを口に入れた。

「二人で何を話していたんだ？」

「少佐は結婚しているのか、という事です」

「結婚か。少佐は結婚してないな」

求婚された事はあったらしいが。

それも何度も。

「そんなに少佐は好かれていたのですか」

「あぁ。俺から見たら逆玉の輿もあったのによ」

「逆玉の輿？」

「女が貴族などと結婚すると玉の輿と言う。その逆が男だ」

男が女の貴族や金持ちと結婚するのが逆玉の輿と言うらしい。

「と言うと、少佐は貴族の方に求婚された事があるのですか？」

「貴族じゃなくて王族だ」

私とレオンは王族と聞いて驚いた。

まさか、王族の方に求婚されたとは・・・・・・・・・

そしてそれを断るのだから更に驚く。

「どうして断ったんでしょうか？」

「旦那は顔に似合わずロマンチストで臆病なんだ」

ロマンチストとはどうやら夢物語のように甘美な空想を好む意味らしい。

私は少佐がそんな物を好むのか疑問だった。

少佐ならガチガチの現実主義者で相手にもそれを求めそうな所があると思っている。

それはレオンも同じだった。

「旦那は顔に似合わずロマンチストなんだよ。それでいて自分で求婚するのは怖いし、逆に求婚されても幸せに出来るか解からないから怖いんだ」

だから、ロマンチストであり臆病らしい。

何だか少佐ではない気がした。

だが、それは色恋沙汰だからなのかもしれない。

そこは私もレオンも未だに経験をしていないから、解からないのかもしれない。

「そうだ。明日にでもお前等を連れて行こう」

「もしかして・・・・・・・・・」

私は何だか非常に嫌な予感がした。

それはレオンも同じだった。

どうも少佐と言い軍曹と言い、こういった時は必ず私たちから言わせれば嫌な事をする。

そんな気がするのだ。

そしてそれは当たりだった。

「お前さんの予想通りだ。だが、安心しろ。俺がちゃんと責任を持ってやるよ」

旦那みたいに大船に乗った気で居ろ、と軍曹は言うが正直言って・・・・・・・・・・・・

『沈み掛けた船に乗らされた気分だし、それで安心しろと言われても出来る訳ない』

私とレオンは互いに視線を合わせて、内心で溜め息を零しながらも断れない事に対して諦めを抱かずにはいられなかった。

第二十三章：初めての女性（前書き）

えー、ここで軽く大人の表現を入れるので、自己責任でお願いします！！

第二十三章：初めての女性

私とレオン、そして軍曹の3人は宿に向かおうとしていた。
ただの宿ではないが、そこら辺は察してもらいたい。

「そんな沈むなよ。楽しい一時が待っているんだぞ？」

「そんなこと言ってもね・・・」

「だよね・・・・・」

私とレオンは顔を見てから互いに肩を落とし合った。

「そう言うな。大丈夫だ。お前等二人なら初めてだから優しくされるさ」

私とレオンはそんな物だろうか？と思いながら軍曹に肩を掴まれて連れて行かれそうになった。

そんな私たちの所へエドリアス様とプロイセン様が訪れた。

どうしてこの二人が来たのか？

答えは簡単だ。

サラ様の耳に少佐ことテツヤ殿の国外追放の件が耳に入ったからだ。

私の予想通り、エリーナ様はその日の内にサラ様に城下街での事を

包み隠さず話した。

サラ様は当初、訳が解からない話だったが女の勘か又は女王としての勘か・・・・・・・・

どちらなのかは不明だが、テツヤ殿の身に何か遭ったと感づいてプロイセン様を呼び出して事情を訊いた。

プロイセン様はこの時かなり怒り狂ったらしい。

『ご自分で署名したのにお忘れになったのか?!』

女王を前に大声で叱咤したらしい。

まぁ、従兄弟同士であり尚且つプロイセン様の方が年上と言う事もあってかサラ様は完全に押された。

そしてプロイセン様は一気に話した。

最後まで聞き終えたサラ様は自分はそんな物を署名した覚えは無い、と答えた。

これにプロイセン様はまた怒りそうになったが、冷静になって行くに連れて・・・骸骨達の陰謀だったのか、と解かったようだ。

そして骸骨ことゲンハルト様と下種女ことフィーナ様は直ちにサラ様に呼び出されて、きつくお叱りを受けた上で謹慎処分を言い渡された。

もっと重い罰を与えると踏んでいたが・・・軽い罰だった事に些か

不満を抱かずにはいられない。

しかし、プロイセン様の話によれば「謹慎処分中は外部との接触は一切禁止だ」と言う。

つまり仕事は出来ない、親しい友人は呼べない、外に出られない、という事を考えるとそれはそれで結構な重い罰だ。

それでもテツヤ殿をこの国から追放した件は許せない。

大尉などは「あいつ等を的当てにしよう」とか「屋敷ごとＲＰＧと迫撃砲で粉々に吹き飛ばそう」とか些か危ない発言をした。

しかし、それを止める者は居らず寧ろ『やってしまおう』という雰囲気を醸し出していたから堪らない。

私もその中の一人なのだが。

結局はそれはやらずに事なきを得た。

そして私たちは宿へと連れて行かれた。

軍曹が現れると女性達は軽蔑の眼差しを向けた。

一体どんな事をやったらこんな眼を向けられるのか知りたい、と思考を逸らした。

そうでもしないとこの場から逃げたくなってしまうからだ。

「そんな怖い顔しないでよー。今日は飛び切りに新鮮な男子を二人

連れてきたからさー」

軍曹は私とレオンを前に押し出した。

すると女性達は軍曹を押し退けて私とレオンを揉みくちゃにし始めた。

だから、嫌だったんだ！！

私は心の中で悲鳴を上げながら何とか抜け出して初めての経験で戸惑うレオンを助け出した。

「こいつらまだ女を知らないんだ。だから、あんた達の誰かが教えてやってくれ」

それを聞いて女性達は自分達が、と言い合いを始めて取っ組み合いを始めようとした程だ。

しかし、それを一人の女性が止めた。

黒い妖艶な衣装に身を包んだ２０代の女性だった。

肩まで伸びた黒髪を綺麗に揃えている女性は私を見てきた。

瞳の色はガリシャと同じく緑の瞳で温和な気を感じるが、大人の女性という魅力が溢れている。

何だか凄く綺麗な瞳で私は虜にされそうになった。

その女性は私に近付くと綺麗な手で頬を撫でながらこう言った。

「私が女を教えて上げるわ」

「・・・お願いします」

私は瞳に吸い寄せられながら頼んだ。

彼女はそれを聞いて妖艶に微笑むと私の手を掴んで宿の一室へと連れて行った。

「貴方、名前は？」

女性はグラスに酒を注ぎながら私に訊ねてきた。

「ら、ランドルフです」

緊張した声で返事をすると彼女は笑みを浮かべながら私を見つめてきた。

「そんなに緊張しないで。大丈夫よ。貴方を一人前の男にして上げるわ」

グラスを私に渡して彼女もグラスを持った。

そして乾杯をして口に運ぶ。

昼間から酒を飲むなど問題だが、この場では飲まないとやっていけない気がした。

酒は辛くて喉が焼け爛れるような味だ。

咳き込みそうになるのを抑えるのが精一杯だった私に対して彼女は水を飲むようにガブガブと飲んでいる。

かなり酒豪なのだろう。

「貴方が名乗ったから私も名乗るわ。私はオリガ。歳は２２歳よ」

彼女、オリガさんは空になったグラスにまた酒を注ぎながら私に次の事を訊いてきた。

「所で貴方、前に一緒に居た傭兵さんとはどうしたの？」

「テツヤ殿の事ですか？」

「テツヤと言うの？えぇ、そう。その人よ」

「あの、どうしてテツヤ殿が傭兵だと解かったんですか？」

「前に一度だけああいう男を見たの。ミレーネ姉がゾッコンだったわね」

「誰ですか？その方は」

「私たちの姉的存在な方よ。元は捨て子でここを取り仕切る方に拾われて育てられたの」

しかし、テツヤ殿と一緒に居なくなったらしい。

「テツヤ殿と一緒に居なくなった？」

「えぇ。その人を連れて来て、夜明け前に消えたわ」

話によると城下街でテツヤ殿を見つけてそのまま宿に連れて帰り、夜明け前に消えたらしい。

「どうして一緒に消えたんでしょうね」

「それは好きな男だからよ」

「テツヤ殿が好きだった？」

「えぇ。ミレーネ姉って意外と一目惚れする性質でね」

まだ2度しか会っていないのに、好きになったのはそれが理由か。

しかし、好きだからと言って一緒に付いて行くという理由には些か薄い気がした。

「その顔だと、一目惚れだけで付いて行くとは考えられないという顔ね」

オリガさんは私を見て、図星でしょ？と言ってきた。

私は素直に頷いた。

「でしょうね。でも、ミレーネ姉は人を見る目があるの」

以前、彼女を妾にしたいと申し込んだ男がいるらしい。

だが、ミレーネ殿は何かを感じたのかそれを断った。

その男は後に“塩の密輸”で処罰されたようだ。

家族は国外追放の上に財産は全て没収という重い罪に処された。

この国は山国だから、塩などが極めて高価で取り引きされている。

だから、それを考えるとどうしても重罪に問われるのだ。

私は過去の記憶を穿り返してそんな男が居たな、と思い出した。

「普通なら喜ぶ筈なのにそれを感じ取った。だから、人を見る目があるのよ」

なるほど、と私は感心しながらテツヤ殿はミレーネ殿にはどう映ったのか訊いてみた。

「そうね・・・話によると、孤高の男でとても寂しがり屋と言っていたわ」

寂しがり屋・・・これまたロマンチストと同じく私には解からない。

そんな私を無視してオリガさんは続けた。

「で、その人は自分と似ている女に恋をしているの」

だけど、自分に自信が無いから怖くて何も出来ない。

だから、自分が代わりに慰めて上げようとしたらしい。

「私から言わせれば、自己犠牲も良い所だけど・・・惚れた男の為なら、と思えばやるわね」

女は惚れた男の頼みなら何でもするとオリガさんは言った。

そして・・・テツヤ殿は恐らく自分はこの国を出ると言ったのだろう。

それを聞いたミレーネ殿は自分も付いて行く、と言いテツヤ殿はそれを許した。

と考えるのが妥当と言えるだろう。

何にせよ、これは良い事を聞いた、と私は思った。

「まぁ、この話はこれで終わり」

オリガさんは私からグラスを取り上げると、私をベッドへと誘った。

「私が貴方に天国を見せて上げる。最初は私に任せて」

その後は私がオリガさんを天国へ連れて行く事となった。

その日、私は初めて女性を知った。

第二十四章：裏切り者と城の見取り図

私とレオンと軍曹が宿を後にしたのは既に日も暮れた頃だった。

あれから私はオリガさんに何度も天国へと導かれた。

最初はかなり苦痛だった。

・・・が真綿で思い切り締め付けられて悲鳴を上げそうになったほどだ。

そしてオリガさんに導かれて天国へと行った。

それから今度は私がオリガさんを天国へと連れて行くのだが、何せ初心者だからまるで駄目だ。

だが、オリガさんは私に色々と手解きをして最後は彼女を天国へと連れて行けた。

そして去り際にこう言われた。

『貴方って女を天国へと導く天使だわ』

いま思い出すだけでも恥ずかしい。

それはレオンも同じ様子で、些か顔が赤かった。

宿を出ると軍曹は既に宿の外で待っていたのだが、その両頬には真っ赤な紅葉が咲いていた。

これを見て私とレオンは何も言わなかった。

いや、言えなかった。

前の事もあるが、この方には学習能力は無いのか？と問いたくなる。

軍曹は私たちを見て半ば拗ねた顔で「何でお前らばっかり・・・・・」とぼやいた。

そして徒歩で帰り始めた。

もう夜になるので露店などは店を閉め、他の店なども看板を降ろし始めた。

酒場と宿だけは明かりが灯されるという寂しい雰囲気にガラリと変わったのだ。

「あーあ、お前等を連れて来ない方が良かったかなー」

私とレオンは軍曹の愚痴を甘んじて聞く事に徹した。

下手に何か言うよりただ黙って聞いた方がこの場は良いと少なからず感じたからだ。

軍曹の愚痴はまだ続いている。

正直、男の愚痴を聞き続けるのは余り良い気持ちではないが、仕方無い。

門までもう少しの距離でレオンが足を止めた。

「どうした？」

軍曹がレオンに訊ねた。

レオンは路地裏の方を見たまま静かに口を開いた。

「先ほど、ゲンハルト様に仕える大臣の一人が見えました」

ゲンハルト様に仕える大臣が何で、夜しかも路地裏を歩いていたのか・・・・・・・・・・

「・・・少し様子を見てみるか」

軍曹は一気に軍人の顔になった。

私たちは頷いた。

「お前等はこっちへ行け。俺は別方角から行く」

『了解』

私とレオンは頷いて足音を立てないようにして、路地裏に入った。

路地裏は昼間でも暗いが、夜になると更に暗い。

だが、身を隠すには持って来いの場所だし・・・何か良からぬ事をしたい、という時にも持って来いの場所だ。

テツヤ殿は・・・少佐は以前、内部に通じる裏切り者が居ると言っていた。

もし、それが本当なら先ほどの大臣は裏切り者の可能性が高い。

どうして大臣がこんな所へ来ているのか？

理由は解からないが、何となく臭いし探ってみる意味はありそうだ。

路地裏を進みながら壁伝いに張り付いて、僅かに眼を見せる。

その先には大臣が挙動不審な状態で辺りを見回しながら進んでいた。

『・・・一体、何をそんなに挙動不審にしているのか』

これはもう何か良からぬ事をしようとしている、と解かる。

大臣は更に奥へと進んで行った。

そこには黒いローブに身を包んだ誰かが居た。

二人組だ。

『・・・軍隊か？』

二人組はローブで身体ごと隠しているが、立つ位置からは敵からの狙撃などを阻止しているし、大臣を直ぐに殺せる位置に立っている。

その上、逃亡道も確保している所を見れば、軍隊かそれに通じる職業に居る者たちだ。

大臣は男達の前で足を止めると震える声で喋り出した。

「こ、これが・・・・城の見取り図だっ」

「・・・・本物だな？」

「そ、そうだっ。こ、これで、私と家族に危害は加えないんだな？」

「あぁ。もうこれからあんた等の前には現れないし、リカルド様が王になっても今の役職に居る筈だ」

『リカルド様の手先か』

先王と側室の間に産まれて内乱を引き起こそうとしているリカルド様。

その方の名を呼んだ事を考えると・・・・手先と考える他ない。

そしてあの大臣は家族を人質に取られている、か。

だとすれば、まだ助ける見込みはある。

もし、これが進んでなったとなればその場で殺すが。

男達は城の見取り図をローブの中に仕舞った。

あれが手には入っては、完全にこちらの劣勢だ。

城の見取り図は逃亡道などが書かれているし、城下の事も書かれて

いる。

それを取られては対策が難しい。

私とレオンは頷いて飛び出した。

「動くなっ」

私とレオンは腰からベレッタＭ９２ＦＳを抜いて両手で構えながら大臣たちに黒い銃口を向けた。

大臣は悲鳴を上げて身体を地面に伏せたが、二人組は逃亡した。

だが・・・・・・・・・

「おっと、ここは生憎と通行止めだ」

軍曹の声が逃亡道から聞こえてきた。

顔が見える所まで現れた。

その手にはベレッタが握られている。

「悪いが、その見取り図は返してもらうぞ」

軍曹が左手を出して、見取り図を返せと手を振った。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

二人組は無言だったが、ローブから何かを取り出そうとした。

見取り図ではない。

短筒の長さだ。

あれは・・・・・・・・・・

「眼を塞げ!!」

私は左手で顔を塞いだ。

それと同時に辺りが明かりに包まれた。

くそっ、閃光筒を使うとは!!

私は強烈な光の為に視界が封じられているせいで前が見えない。

それはレオンも同じだ。

やがて何か上に飛び乗る音が聞こえてきた。

「上だ!上に逃げたぞ!!」

軍曹の叫び声が聞こえた。

私たちは薄眼で上を見上げるとローブを着た男二人が屋根伝いに走っている所を見た。

それと同時に狙撃の音が聞こえてくる。

金属音が私の耳に入って来る。

あれはドラグノフＳＶＤの金属音・・・という事は大尉か。

それとは別にアサルトライフルの音が聞こえる。

コルトのアサルトライフル音だ。

砦からは聞こえてこない。

となれば、敵が撃って来ているという事。

なぜ敵がアサルトライフルや閃光筒を持っているのか？

だが、今はそんな事より敵を捕える事だ。

私とレオン、軍曹は急いで屋根に登り追い掛けようとしたが、一人が銃をこちらに向けて撃ってきた。

私たちも反撃するが、アサルトライフルと拳銃では威力から射程距離まで全てが違う。

３人も居るのに屋根から動けない。

「お前等、援護しろ」

軍曹はベレッタを右手で構えながら私たちに援護を命令した。

『レンジャー！！』

私とレオンは屋根から顔を出してベレッタの引き金を立て続けに引いた。

銃身が後退して空薬莢が排出されて、９ｍｍパラベラム弾が何発も前の二人組を狙う。

そこへ軍曹が走り二人を追う。

軍曹は走りながらベレッタを撃ち、何とか仕留めようとした。

ドラグノフの狙撃も続けられる。

「チャレンジャー！！私たちも追うぞ！？」

「レンジャー！！」

私とチャレンジャーも躍り出て追い掛ける。

慣れない屋根の上でバランスを何度も崩しそうになるが、それでも転ばずに追い掛け続ける。

しかし、後もう一歩という所で彼等は城の外に出て闇の中に消えた。

闇の中からは馬の蹄が聞こえてきた。

予め馬を用意していたのだろう。

「くそっ！！」

私は舌打ちを漏らして二人組が逃げた方角を睨んだ。

「あいつらリカルドと言っていたな。となれば・・・・この戦、ほぼこっちの負けじゃねぇか」

軍曹は厳しい眼差しを向けたまま呟き、大臣の所へ戻るぞと言った。

私たちは屋根から降りて大臣の所へ行ったが、既に大臣の姿は無かった。

「ちっ。逃がしたか」

軍曹は舌打ちをして、あいつも逃がしたから締め上げる事も出来ないと言った。

確かにそうだ。

もし、これが知られたら向こうの首は跳ぶし、家族にも重罪が掛けられる。

そんな事を誰が進んで行うだろうか？

となれば、私たちが行った所で知らぬ存ぜぬの一言で片づけられてしまう。

何よりあの大臣はゲンハルト様の部下だ。

あの骸骨の部下なら、私たちの手の届かない位置に居る。

今は謹慎中でも直ぐにでも解かれるだろう。

何から何まで悪い事だ。

胸糞悪い。

「どうしますか？軍曹」

チャレンジャー・・・レオンが軍曹に訊ねた。

その表情は、初めて人間に向かって狙いを定めて撃った事と実戦とも言える行動を取った事で些か疲労していた。

私の方も訓練で慣れているとはいえ、やはり人に向かって引き金を引いた事に対して些か疲労を感じていた。

「先ずは帰って姐御に報告だ。そしてプロイセンのおっさんに報告をする」

後は何も出来ない、と軍曹は言った。

その顔は苦渋に満ち溢れていた。

第二十五章：内部に巣食う敵

私たちは砦に戻り大尉に事の顛末を伝えた。

「そうかい・・・・この勝負、かなり苦しい戦いになるね」

大尉は氷の女王を吸いながら呟いた。

「敵に城の見取り図を取られた揚句、それが骸骨の手先となればそいつ以外にも内部に通じている奴等は居るね」

だが、あの大臣はそれを知らない筈、と大尉は言った。

「どうしてですか？」

「下手に知られるより知らない方が良いんだよ。それにそいつも恐らく自分からは言わない」

万が一の事を考えてその罪を大臣一人に押し付けられるのだから。

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

私とレオンは無言になりながら大尉の言葉を待った。

「とにかく明日にでもプロイセンのおっさんに伝えて対策を練るしかないね」

大尉は短くなった氷の女王を灰皿に捨てて、この話は終わりと言った。

その後、私は住居区の外に出て煙草を銜えた。

またしても逃がしてしまった。

一度だけでなく二度も。

同じ相手かは知らないが、それでも二度も偵察しに来た者を取り逃がしたのは痛い。

「・・・・くそっ」

私は火を点けながら無性に腹に来た。

何で、取り逃がしたんだ?

3人も居たのにだ!!

相手が全身ローブに包まれていたから、何を持っていたか分からない。

だが、そういう事を想定して様々な対策を練るのだ。

私はそれをしていなかった。

これが原因と言えるだろう。

『失敗からは多くの事を学べるわ。でも、成功からは殆ど学べない

の』

幼い頃に母に言われた言葉が私の頭を過った。

よく失敗をして落ち込んだ私に母は何時もこう言っては励ましてくれた。

それを考えると、先ほど失敗した事は私の対策が出来ていなかったからだ。

なら、今度はそれが起きないように心がけよう。

そうだ、落ち込んでばかりでは駄目だ。

この失敗を教訓とし、次は失敗しないようにしよう。

私は亡き母に感謝しながら、これからの事を考えた。

城の見取り図を取られた。

先ず城の広さや重要な場所などが書かれており、素材なども書かれている事だろう。

井戸、逃亡道、演習場・・・・様々な所がある。

その中でも重要な場所を上げるとすれば、逃亡道とサラ様や重臣達が居る場所を狙うだろう。

向こうがどんな手段を講じてくるかは解からない。

内部に通じる者を利用して少人数をここに送り込んで占拠する、私たちを誘き寄せてその手薄を狙い攻撃する、空からドラゴン・ナイトなどを利用して攻撃する・・・・・・・・・・・・・・

考えれば考える程に対策が難しい。

その全てを考えて対策を練るのは先ず無理、と言える。

なら、その中からどれが一番か有効的な手段かを考える。

恐らく敵は私たちを城の外に出して、自分達の力が存分に発揮できる場所に誘い込み勝負をする事だろう。

では、敵はどんな軍団か？

リカルド様が指揮する軍団は、確か・・・・・・・・・騎馬隊だ。

先王が生きていた時に戦に出て、騎馬隊の機動力などを見て騎馬隊を組織したと聞いている。

確かに騎馬隊は機動力がある。

５大陸の中でも騎馬隊が最強と謳われる国はクリーズ皇国だ。

草原の国と呼ばれる国だけあって草地が一面に海のように広がっており牧畜などが盛んな国。

そして軍隊はそんな草原で伸び伸びと育てられ厳しい環境でも戦う事が出来る駿馬達で構成された騎馬隊。

馬の骨と皮などで作り上げられた短弓、いや合成弓は馬上でも扱い易く、威力も私たちが使用している弓矢などより強力だ。

どうやったらあんなに優れた物が作られるのかは不明だ。

リカルド様の騎馬隊はどんな騎馬隊かは知らない。

だが、もしクリーズ皇国の騎馬隊を使用している、またはそれを模倣した騎馬隊と考えれば明らかに我が軍は壊滅させられる可能性が高い。

獅子頭軍団は重装歩兵だ。

だから、俊敏な行動などはまったく望めない。

どう考えても分が悪い。

獅子頭軍団が苦戦する軍は他に何だ？

砂の国と言われるアガリスタ共和国には戦象と“戦車”がある。

戦像は文字通り像を武装させて戦に持ち込む。

巨大な身体だから、俊敏な動きはまったく望めないと思うだろうが、アガリスタ共和国の戦象は小型の象も飼育していると聞く。

まぁ、小型と言って人から見れば十分に大きいが。

戦象には手綱を握る者、弓兵、槍兵が乗り込む。

身体が大きい象に乗り込んだ弓兵は狙撃に適していたと聞くし、槍兵の投げる槍は確実に相手を刺すとも聞く。

騎馬隊と違って、戦象を歩兵で防ぐのは無理だ。

それは戦車も同じだ。

アガリスタ共和国が誇る戦車は、２頭から４頭の馬を皮製の紐などで固定した馬車だ。

向こうではグランダーと呼ばれている。

グランダーとは向こうでは戦車という言葉だ。

まさしくあれはその名が相応しい。

車輪に先の尖った杭を取り付けて歩兵などの足を切って負傷させる。

もしくは馬車に乗った弓兵や槍兵などで足を切られて屈んだ相手に屈んだ所へ槍や矢をお見舞する。

こちらも機動力が高いから獅子頭軍団には厳しい戦いが予想される。

では、リカルド様に付き従う４人の貴族たちはどうだ？

狼・・・ヴィクター公爵は騎馬隊と剣士だけを集めた剣隊、長槍などを持たせて突撃した騎馬などを迎撃する槍隊、後は弓より強力な矢を放つ事が出来る弩隊、魔法を駆使する魔術隊が居る。

どれも全て先王に従って出た時の戦で培って構成したと聞いている。

豚・・・モリスン侯爵はモーニングスターと呼ばれる球状の物に何本もの棘を備えた殴打用の棍棒を使用する兵と槍を改造し、斧などを装着した矛兵が居る。

モーニングスターの中には、柄頭と棒を鎖で止めて盾で防御した相手の頭などを狙えるように改造した物もある。

ただし、これだと自分も傷つく可能性が高くかなり熟練した者でないと扱えないと聞いている。

矛兵は重装歩兵に比べれば俊敏な動きがまだ望めるし単独でも下手な歩兵より強い。

更に槍兵と組めば防御陣を組めて、強靭な盾にもなる。

鼠・・・フィリップ男爵は槍兵と弓兵で構成されている。

槍を持った兵たちを一列に並べて突撃させて長さを活かした攻撃をして陣形を乱れさせる。

陣形が乱れた所へ弓兵が矢の雨を降り注ぎ、更に進軍をする事で相手を押す。

そして最後は蛇・・・蛇がライアンナル伯爵。

彼の指揮する軍団はまったくと言って良い程・・・不明だ。

何故か彼の指揮する軍団は分からないのだ。

だから、彼がどんな軍を使用するのか皆目、見当も付かない。

人物に関しても不明な点が多く謎の多い人物だ。

彼がどんな軍を指揮するのかは解からない。

だが、リカルド様に従う人物だ。

それを考えるとかなり厄介な相手と考えられる。

しかし、それよりも厄介な相手が居る。

それは・・・・この王国の者たちだ。

彼等は先王の事もあり、戦類は嫌がっている。

何より偏見の塊でテツヤ殿を国外追放に処した愚か者たちだ。

ここでハンニバルの予言が浮かんだ。

『いかなる超大国といえども、長期にわたって安泰であり続けることは出来ない。国外に敵を持たなくなっても、国内に敵を持つようになる。外からの敵は寄せ付けない頑健そのものの肉体でも、身体の内部の疾患に苦しまされることがあるのと似ている』

まさにそれだ。

だが、今はそれ以上と言える。

敵側と内部に巣食う敵。

どちらが強敵だ、と問われたら間違いなく内部に巣食う敵と私は答えるだろう。

テツヤ殿を国外追放に処した骸骨や下種女だが、たった二人だけが裏で糸を引いたとは思えない。

恐らく彼等の手足が何人も連携して裏で糸を引いたに違いない。

そしてあの二人の謹慎もそいつらがまた裏で手を引いて直ぐに解かせる事だろう。

「・・・胸糞悪い」

どうしてテツヤ殿が国外追放にされたのに、あの二人が国外追放にされずに謹慎なのだ？

あの二人は王国に何も貢献していない。

テツヤ殿の方が王国に貢献している。

テツヤ殿はこの王国を護ろうとしているのに・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！

「・・・・テツヤ殿。貴方は何処に居るんですか？」

私はここには居ないテツヤ殿の名を呼びながら煙を吐いた。

煙草はもう、短くなっていた。

そして、私を包み込むような優しさを残して勝手に消えてしまった。

第二十六章：もっと大きな・・・・・・

昨夜の予想は見事に当たった。

嫌な予想ほどよく当たると皮肉にも感心さえ覚えてしまう程だ。

その日、砦を訪れたプロイセン様から骸骨と下種女の謹慎が解かれたと聞かされた。

まだ謹慎処分を受けて間もないのに直ぐに解かれるとは・・・・・・・・・・・・

「・・・・つくづくこの国は救いようがないね」

大尉はもう呆れを通り越して絶望した、と言いながら煙草を吸った。

それに対してプロイセン様は何も言わなかった。

いや、何も言えなかったと言った方が正しい。

この方自身もそれを薄々は感づいていたのかもしれない。

「それでは昨夜の事を詳しく話してくれ」

プロイセン様は話を変えたいのか、昨夜の事を話してくれ、と大尉に頼んだ。

「あいよ」

大尉は私たちに昨夜の事について説明を始めさせた。
最後まで聞き終えたプロイセン様は直ぐにその大臣の所へ向かうと言い、砦を後にした。
そして入れ替わるようにエドリアス様が入ってきた。
「プロイセン様はどうしたのですか？」
エドリアス様がプロイセン様の様子を見てきたのか訊いてきた。
「実は・・・・・・・・・」
私はエドリアス様にそれを言うとエドリアス様は「不味いですね」と言った。
「城の見取り図を取られたとは・・・これでは城壁も何も無い丸裸にされたのと同じです」
城の見取り図の中には今は使われていない逃亡の道なども書かれている。
それを敵に取られたとなっては手の打ちようが無い。
しかし、唯一の救いを上げるならこの砦の存在と、民達が逃げる為に作った逃亡口だ。
これが敵に知られていないならまだ救いはある。
まぁ、かなり小さな救いでその代償は余りに大き過ぎるが。

「なぁ、司教様。先王が側室に孕ませた餓鬼はどんな奴なんだい？」

大尉が卑猥な言葉を躊躇せずに言い、エドリアス様にリカルド様の事に関して詳しく聞かせてくれ、と言ってきた。

「はい。リカルド様は・・・・・・・・・」

エドリアス様はリカルド様達の事を話し始めた。

「なるほどね。今の“お人好し”に比べればまだ王としての器がありそうだね」

大尉は煙草を吸いながらリカルド様を王の器がある、と評した。

「俺もだ。野心があるのは問題だが、誰にだって野心はある。そしてそのリカルドとかいう餓鬼なら仮に今の状況に陥ろうと俺らより良い結果を出すだろうな」

軍曹もまたリカルド様に対して好意的な評価を下した。

「でも、玉座を奪うのは反逆ですよ？」

レオンが軍曹の言葉に食い下がった。

「坊ちゃん2号。玉座ってもんは歴史を振り返れば・・・夥しい血で薄汚れている物だぜ？」

歴史を振り返れば数多と起きた戦により、王は何度も入れ替わっている。

そしてその者が付いた玉座は血で汚れている。
それを隠す為に金銀宝石などで煌びやかに見せて誤魔化しているのだ。

「それに今の状況を考えると、どうせ骸骨は浮浪者の起こした騒ぎと片付けるだろうよ。そして俺らを容赦なく叩く」

確かに・・・やりそうな事だ。

昨夜の事を聞けばきっと私たちの所へ来てこう言うだろう。

『貴様等は野蛮人だ!!何で話し合いで済ませられずに武力で語るのだ!!』

あの場に居たら話し合いで済む相手ではないと解かる筈だ。

そして向こうが先に仕掛けてきたのだ。

それに対して私たちは応戦して、騎士として軍人として正しい行動を取っただけの事だ。

だが、それを骸骨は解からないし、解かろうとしないだろう。

あそこまで行くと感心するし、どうやったらあんな性格になるのか知りたい程だ。

「まぁ、国外追放するならしろってんだ。俺は旦那と違って、この国を護りたいという気は余り無いんだ」

軍曹は仮に骸骨がまた前みたいにやるならそれで構わないと言い切った。

それはテツヤ殿を追い出した国だからだろう。

卑劣な手を使い、親愛なるテツヤ殿を追い出したのだからそれも仕方無い。

「あたしも同感だ。だが、少佐の命令だから居座らせてもらうよ」

大尉も軍曹と同じ意見だったが、それでもテツヤ殿の命令を守るようだ。

「姐御は旦那に従順だねー」

「あんたは少佐の命令が聞けないのかい？」

「いいや。聞くさ。ただ、そのリカルドって餓鬼が来たらおっかなくて逃げ出すかもね」

「安心しな。逃げたら・・・その馬鹿面に風通しが良い穴を開けてやるよ」

軍曹は怖い怖い、と言いながら兵たちに訓練をするぞ、と言い訓練を始めさせた。

「坊やたちは司教様と一緒に射撃訓練をしな。あたしは少しワイドと一緒に出掛けてくるよ」

私たちは頷いて射撃訓練を始めた。
射撃訓練をしていると、背後に気配を感じて振り返った。
そこにはリーザ中尉が立っていた。
顔に隈が浮かんでおり、髪なども乱れており一瞬だが幽霊に見えてしまった。
「リーザ中尉。大丈夫ですか？」
私は見てられずにリーザ中尉に声を掛けた。
「昨夜、リカルド様の手の者が来たとは本当ですか？」
リーザ中尉は真っ直ぐに私を見て訊ねてきた。
「はい。残念ながら取り逃がしました」
「そうですか。それで父は何と？」
「その事を伝えに行きました」
「そうですか・・・・・・」
リーザ中尉はただ頷いた。
「あの、大丈夫ですか？」
「えぇ。もう、自分を抑えられました」

リーザ中尉は笑顔で私の質問に答えてくれた。

「テツヤ様はこの国を出ました。ですが、こう言ったではないですか」

王国の危機には必ず戻って来る。

「テツヤ様はまた戻って来ます。そしてこの国を護ります」

「・・・・・・・」

リーザ中尉の言葉を私は聞き続けた。

「そして戦いが終わったら私、その時はあの方に言うんです」

私は貴方を慕っております。

ですから、私を貴方の妻にして下さい。

貴方がこの国を再び出る、と言うのであれば私も共に行きます。

これを聞いたレオンとエドリアス様、そして私は唖然とした。

まさか、そこまでテツヤ殿を慕っていたとは思っていなかったからだ。

だが、リーザ中尉は何処か肩の荷が下りたように満足していた。

「それでは私、これから湯に浸かって食事をしてから訓練に入りま

す」

リーザ中尉は一礼して住居区に戻って行った。

私たちは暫く唖然としていたが、リーザ中尉が元気になって良かったと思った。

今まで暗い出来事ばかりだったが、リーザ中尉の事で幾分か場が明るくなったと思う。

1時間くらいしてリーザ中尉は訓練に参加して来た。

そして昼になった。

食事をしようとした時、プロイセン様が再び訪れてきた。

「あの骸骨が!!胸糞悪い!?」

プロイセン様は一人で怒鳴りながら歩いてきた。

「どうなさいました?」

エドリアス様がプロイセン様の元へ歩み寄り怒っている理由を訊ねた。

「どうもこうもありません!!あの骸骨、私が大臣に詰問したらこう言ったんです」

『貴様のような野蛮人が近づくな。私の部下達は優秀だ。そして裏切らない』

寧ろ私たちの方が王国を裏切るのでは?と言ってきたらしい。

これでは怒るのも無理はない。

「その上だ!その上だぞ!!あいつは私に将軍の座を降りろと言ってきた!!」

もはやプロイセン様の叫び声は野獣の叫び声だ。

野獣の雄叫びのように咆哮するプロイセン様。

骸骨はプロイセン様を将軍から降ろさせる、と今日にでもサラ様に進言するらしい。

「では、プロイセン様の代わりに将軍の座は誰がなるのですか?」

「あの小生意気な小娘を推挙すると言っていた!!」

あの下種女が将軍、か。

どう頑張っても分隊を指揮するのが精一杯だろう。

自分の配下させまともに統率できない者に大勢の者を統率できる訳がない。

「まぁまぁ、そう怒らないで下さい」

エドリアス様は温和な笑みを浮かべたままプロイセン様を抑えた。

「サラ様もそこまで馬鹿ではありませんよ」

如何にサラ様と言えど、そこまで馬鹿な真似はしない。

仮にしたとしても、他の将軍達がそれを許す訳ないし兵達も従う事はない。

あくまで骸骨がプロイセン様に対して言った戯言だ。

私もこれは同意見だ。

あの下種女を将軍に推挙した所でそんな話は罷り通らない。

エドリアス様の言葉を聞いたプロイセン様は幾分か落ち着きを見せ始めた。

そして軽率な態度だった、と言い私たちに謝罪した。

私たちはその謝罪を受け取りプロイセン様を安堵させた。

だが、私は何故か無性に嫌な予感が胸の中で燻っていた。

プロイセン様の事ではない。

もっと大きな・・・嫌な予感だ。

そしてこの嫌な予感は的中し、しかも近い内に起こるとも何となくしていた。

この予感は的中した。

リカルド様が・・・・・・軍を起こしたのだ。

幕間：反逆者から英雄へ

青い空が広がる中、地面を覆い尽くす兵たちが並んで立っていた。

彼等はそれぞれの武器を手に、その隊に合った色の鎧を身に纏っていた。

微塵も動かずに武器を持ち立っている彼等はまるで石造のようだ。

その中に“異色”とも言える色をした者達が居た。

他の兵たちが一色に染められた鎧を着ているのに対して彼等の着ている鎧、いや鎧は着ていない。

衣服を着ているだけだ。

その衣服は様々な色を織り交ぜて地に溶け込める衣服だった。

そして武器もまた見た事がない物ばかりだった。

彼等は一列に並びながら鋭い視線を前に向けていた。

やがて、彼等の前に一人の青年が現れた。

肩で切り揃えた髪に緑色の瞳をした２０代の青年で、煌びやかな鎧ではなく些か地味な色の鎧を纏っていた。

これは彼が戦で学んだ経験から着ている。

下手に煌びやかな鎧を着ると狙われ易い。

だから、敢えて地味な色の鎧を選んだのだ。

色の他に彼が重視したのは軽量で動き易い鎧だった。

無駄な飾りは二の次、三の次だ。

鎧が彼の性格をそのまま表現している、と言っても過言ではないだろう。

彼は兵たちの前に立つと低い声で、しかし、遠くまでハッキリと聞こえる声で話し始めた。

「皆、今日までこの私に従って来てくれて先ずは礼を言いたい」

ありがとう。

ただ一言だけ礼を述べる青年。

しかし、それだけで涙を流す兵も居た。

彼等にとってこの目の前で頭を下げる青年は、己が命を投げ打ってでも救わなければならない人物だ。

そして何としても玉座の席に座らせなければならない人物である。

その為に悪魔に魂を売っても良いとさえ思っている。

青年は下げていた頭を上げて言葉を放ち始めた。

「今まで散々、我々は虐げられてきた。そして何度も我々は国に、首都に対して助けを求めて、訴えた」

だが、全て揉み消された。

それ所か、手痛い事もされた。

「もはや我慢の限界だ。そして、王国は今、存亡の危機に扮している」

それを知ってか、知らずか首都は何の対策も講じようとしない。

我々の事も敢えて知らない振りをしている。

「断言する。このままでは王国は・・・サルバーナ王国を含めた5大陸は“彼の国”に滅ぼされて我々、我々の子、我々の孫たちは奴隷に成り下がるだろう」

それは何としても阻止しなければならない。

「その為には・・・血を流さざる得ない」

青年の声と顔が苦渋に満ちた。

兵たちはそれを見て青年の気持ちを察した。

青年がどれだけ家族を愛し国を愛したか・・・・・・・・・

その青年に対して家族は、国は何もしていない。

「正義は我々の手に・・・・・・・」

一人の兵が声を放ち、持っていた武器を地面に向けて叩いた。

すると連鎖反応を起こしたように皆が一同に口にし、行動に出した。

『正義は我々の手に!!』

『正義は我々の手に!!』

『正義は我々の手に!!』

ダンッダンッダンッ

リズムカルに地面が叩かれる音と兵たちの連呼。

青年はそれを聞いて幾分か顔が和らいだ。

すると兵たちは声を放つのを止め、地面を叩くのを止めた。

「・・・そこに居る彼等の国の初代王は最初、属していた国から“反逆者”の烙印を押された」

青年は異色の存在である男達に目を向けた。

男達は青年を見返した。

とても純粋な瞳で、まるで産まれたばかりの子供を思い浮かばせる。

「反逆者として烙印を押された王だが・・・今は英雄として祀られている」

我々もそうなろう。

今は我々を反逆者と言い、乏しめることだろう。

だが、何れは・・・遠き未来では我々は英雄として祀られる事だろう。

我々が首都で腐り果て現状を見ないばかりか国を重んじない者共に鉄槌を下すのだ!?

我々がこの愛しい国を護るのだ!?

正義は我々にある。

私に続け!!

首都を目指せ!!

王国を救うのだ!?

青年は叫び続けた。

「リカルド様万歳!!」

『リカルド様万歳!!』

『リカルド様万歳!!』

『リカルド様万歳！！』

兵たちは武器を天に掲げて目の前に立つ青年の名を呼び続けた。

その声は山を越えて、遠い先の首都にも届きそうな勢いだ。

青年はそれを聞いてから剣を抜いた。

スラリ、と音を立て鞘から抜かれた剣に汚れは無い。

だが、その剣は大量の血を吸おうとしている。

自らが愛した国の血を・・・・・・・・・

民の血を・・・・・・・・・・・・・・・

それを想うと青年の心は真綿で締め付けられる想いだった。

しかし、それを出さずに青年は剣を振り降ろした。

「目指すは王国首都・・・ヴァエリエ！！行進！？」

兵たちは背を向けて足を進めた。

青年は剣を鞘に収めた。

そして異色の存在である男達に歩み寄った。

「偵察ご苦労であった」

「いえ。ただ、向こうに些か気になる者たちが居りました」

男達の中心に立っている壮年の男は被っていた帽子を取ると、青年に軽く会釈してから言葉を紡いだ。

「気になる者？」

青年は眉を顰めた。

「はい。向こうにも我々と同じ装備を持った者達が居りました」

そしてその一人は自分達と同じ国の者であり軍こそ違えど精鋭の者である、と言った。

「何者だ？」

「分かりません。ですが、我々が必ず貴方様を玉座の元へと導いてみせます」

例え全滅しようとも味方の為に血路を開くのが任務だ。

そして皆が少数精鋭である。

青年は壮年の男の言葉は嘘でないと解かっていた。

目の前の男が指揮する軍は少人数だが、確かに少数精鋭をモットーにしているだけあって例え一兵でも侮れない。

そして目の前に立つ壮年の男からもそれが窺えるし、自分を産み落

とした女を孕ませた男以上に優れた軍人であると解かっている。

“彼の国”からの使いであるため最初は疑惑の眼差しを向けていたが、今はこの男は信用できる、と青年は思っていた。

「分かった。では、帰って来て早々に悪いが斥候を頼む」

「何処へ行けば良いでしょうか？」

「首都からさほど離れていない場所にカルナンという湖畔がある」

そこで先ず相手を“出迎える”と青年・・・リカルドは壮年の男に告げた。

「了解しました」

「あぁ。頼む。この初戦が我々にとっては第一歩となり、勝たなければならない」

初戦で勝てば相手は怯む。

そこを更に進軍し首都へと後退させるのだ。

そして首都の前で奴等を一気に殲滅させて、無条件降伏をさせる。

戦とは常に迅速に行動し、相手より多くの情報を手に入れて、相手より有利に立てる状況を作り上げて勝てる。

だから、先ず相手を誘き出させてこちらに有利な場所へ持ち込む事が望ましいのだ。

その為には斥候を放ち、場所を調べさせてそこを陣地にする必要がある。

その任務は、この男が指揮する軍が一番理に適っているのだ。

「それではリカルド国王陛下。行って参ります」

男は青年・・・リカルドを国王陛下と呼び敬礼をした。

それにリカルドは力強く頷き、答えた。

「皆、行くぞ!!」

『イエッサー!?』

壮年の男の命に控えていた男達は頷き行動を開始した。

リカルドは彼等の背中を見ながら背後から近付いてきた男に話し掛けた。

「ウルフよ。これで・・・・賽は投げられたな」

「はい」

ウルフと呼ばれた男は頷いた。

もう軍を出撃させたから後戻りは出来ない。

勝利か敗北か。

生か死か・・・・・・・・・

どちらかが倒れるまで終わる事は無いだろう。

だが、リカルドは早期決着をやってみせると誓っていた。

内乱を続けていれば国が疲労して他国に干渉され易い。

それでは駄目だ。

長くても1年・・・それ以上は続けられない。

何よりもう直ぐ冬が到来する。

冬は慣れているが、出来るなら冬が来る前に決着を着けたかった。

この国の冬は、山国だけあってそう簡単には解けないし、身動きが取れない。

そうなっては戦に支障を来たす。

何としても冬が到来する前に、そして1年以内に決着を着けなくてはならない。

「リカルド様。この勝負は我々の勝ちです」

ウルフはリカルドの横に並びまだ戦っていないのに勝利宣言をした。

「向こうは我々の情報は皆無に等しいです。更に言えば向こうは“

獅子に首輪”を付けております」

獅子は首輪を付けられるような動物ではない。

その獅子に首輪を取り付ければ、ただの飼い猫に成り下がる。

それを知らない相手に我々が負ける筈はない、とウルフは言い続けた。

「そうだな・・・プロイセンは良い軍人だ。ガルバーなどよりも兵に好かれていたな」

「はい。ですが、その優しさが今回は仇となりえましょう」

「・・・我々も行くぞ」

「御意に」

リカルドは従者が用意した馬に跨った。

ウルフもそれに並び馬の腹を蹴り、歩を進ませた。

その後ろには黒い鎧に身を包んだ屈強な兵たちが続いていた。

まるで黒い軍隊蟻だ。

『・・・・母上、エリーナ。どうか、この愚かな私を怨んでくれ』

リカルドは馬の手綱を握りながら愛する者に自分を怨め、と呟いた。

第二十七章：宣戦布告

その日、私たちは一同に集められた。

空気はピリピリしており、いつ爆発するか分からない程だ。

何でこんな空気なのか？

それは今から数時間前に戻る。

何時も通り私たちは訓練をしていたが、そこへプロイセン様が訪れて重い声でこう言った。

『リカルド様が宣戦布告をしてきた』

これを聞いても私たちは余りの事に漠然とするしかなかった。

だが、プロイセン様は大尉に一通の手紙を見せた。

大尉はそれを見て静かに言葉に出した。

『サルバーナ王国女王、サラ・ロクシャーナに宣戦布告を申し渡す。
そして王国を食い物にする豚共にも宣告する。
我々は正義の槍を手に貴様等を討伐しに行く。
民を重んじず、我々の訴えを踏み潰したばかりか、我々を糾弾しようとした事に関しては我慢の限界である。
降参するなら今の内だ。命だけは保障しよう。
だが、もし戦うというのであれば、我々は全力で貴様等を殲滅する。

貴様等の四肢を八つ裂きにして晒しにしてやろうではないか。
返事は3日まで待つ。
降伏か、戦いか。
その二つ以外の返事は一切受け付けない。
使者に手は出さないが、余りに無礼であればその場で首を切り落とすから覚悟しろ。

サルバーナ王国新国王　リカルド・ウェスビー』

これを聞いた私はついに来たんだ、と改めて実感した。

ついにリカルド様が兵を起こしたのだ！！

「で、どうするんだい？」

大尉は氷の女王に火を点けながらプロイセン様に訊ねた。

「女王を始め、議会を開いている最中だ」

「おっさんは何で居るんだい？」

大尉の質問は尤もだ。

プロイセン様を始めとした将軍達も議会の一員だ。

それなのにどうしてここに居るのだろう？

「私を始めとした軍人は参加するな、と言われた」

我々は議会に出ると必ず戦だ、と喚き散らす。

そう言われたらしい・・・・・・

「当たり前だよ。あたし等は国を護る為の存在だよ?その軍人が戦だと言って何が悪いんだよ」

「それがこの国では・・・悪なのだ」

プロイセン様はどうする事も出来ない、と身体で答えていた。

大尉はそれを見て何も言わずに煙草を吸った。

プロイセン様は用が済んだので戻る、と言って背を向けた。

私はその背中がとても小さくて弱々しいように見えた。

あんなに強靭な肉体を持っている方の背中がどうして、あんな風に見えるのだろう・・・・・・・・・

だが、その背中はテツヤ殿に似ていた。

『きっと全てにおいて何も出来ずに従うしかない自分が嫌なんだろうな』

テツヤ殿も国外追放を言い渡された時、きっとこんな気持ちだったに違いない。

私は何だかそう思えた。

大尉は煙草を吸いながらワイド中尉とリーザ中尉を呼び、どう思う

か訊ねた。

「恐らく話し合いで解決する事を先ずするだろう」

「私も同意見です」

二人は先ず話し合いで解決させようとする、と答えた。

そしてそれから・・・・・・・・・・・・

『話し合いは一笑された上に挑発されて軍を起こす』

と付け加えた。

骸骨達の性格からして舐められるのを何よりも嫌う。

だから、仮に話し合いに来たとしても手紙に書かれた事を解からないのか？などと書かれて、馬鹿にされるのが関の山だ。

そしてそれに頭に来て、我々を差し向ける事だろう。

自分達は安全な場所に居ながら・・・・・・・・・

「あたしも同じ考えだね。まぁ、そうなるかどうかは、上が決める。あたしらはそれに従うだけだ」

大尉は短くなった煙草を地面に捨て、靴底で押し潰した。

それがまるで私たちの人生を表わしているように見えてしまった。

私達はプロイセン様が来るまで砦の中で時間を潰す事にした。

ただし、訓練はしていない。

下手に訓練をして怪我をしてはいけない。

今は体力を温存させて有事に備えるのが良いというのだ。

私は塔の上で煙草をレオンと共に蒸かしていた。

「リカルド様が・・・兵を起こした。ランドルフ君。君としてはどう思う？」

レオンは煙を吐きながら私に問い掛けてきた。

「どう思うもこうも、リカルド様は兵を起こしたんだ。私たちはそれを迎え撃つしかないよ」

「それはそうだけど・・・私に人を殺せるのか、と思ってね・・・・・」

「・・・・・・」

私は口を閉じるしか出来なかった。

彼の言う通りだ。

彼も私もまだ人を殺した事が無い。

人に向かって撃った経験はあっても、人を殺した経験が無い。

軍人として、国を護る為なら、血を浴びる覚悟が無くてはならない。
私も騎士として、軍人として、血を浴びる覚悟は持っている積りだ。
ただし、それがいざという時に出来るかと問われたら・・・分からない。

テツヤ殿達は最初に人を殺した時・・・どんな気持ちだったんだろうか？

そこへ軍曹が来た。

「どうした？浮かない顔で」

「実は・・・・・・・・・」

私は軍曹に先ほどの件を打ち明けた。

「・・・なるほど。初めて殺しを経験した時か」

軍曹は煙草を吸いながら私たちを見て、こう言った。

「俺の時は何も考えていなかった」

ただ、勝手に身体が動いて相手の喉元にナイフを突き刺していた、と軍曹は語った。

「俺が受けてきた訓練ではこう教えられていた」

“相手を敵と思うな。ただの案山子だと思え”

「ようは相手を人だと思うな。ただの案山子だと思って引き金を引けば、楽に殺せる」

そして別に何の感情も出ない、と軍曹は語った。

それは初めて人を殺した時、そうだったらしい。

「だが、殺してから死体を見て、俺は吐いた」

ああ、俺はこいつの人生を強制的に幕引きをさせたんだ。

自分でこいつを殺したんだ・・・・・・・・・・・・・

それが解かると、嗚咽感に襲われて何度も吐いたらしい。

「人を殺すのに覚悟は居る。だが、死にたくない、という感情が勝れば相手を躊躇いなく殺す」

どんな手を使おうと、自分が生き残れるなら・・・・・・・・・・・・

それを考えると、相手を殺せるらしい。

「お前さん達は、この前の奴らに向かってどういう感じで引き金を引いた?」

「分かりません。ただ、相手の動きを止めようと・・・軍曹を助けようと・・・」

「私もです・・・・・・・」

「だろうな。皆、そんなものだ」

しかし、それがやがては慣れていく。

それ所か今度はもっと正確に静かに、殺そうと思う様になると言った。

「・・・あいつらが俺らを野蛮だ、というのも仕方無い。何せ俺らは人殺しの集団だからな」

人を殺す術を私たちは身に付けているし、それをする為に訓練を行っている。

だから、嫌われても仕方ない。

「まぁ、今はそんな事を言っている場合じゃないがな。しかし、旦那がいたらどうするかね？」

軍曹は煙草を携帯灰皿に捨てながら空を見て呟いた。

私もレオンもテツヤ殿でないから何と言うか分からない。

ただし、テツヤ殿なら先ず女王や民達を第一に考える筈だ。

そうなると・・・・・・・・・

「女王や民達、特に女、子供、老人などを先ずは逃がす筈です」

恐らく戦いが起きない今だからこそ逃がす筈だ。

そうする事で被害を最小限に抑える筈だと私は思った。

「確かに旦那ならそうする可能性が高い。しかし、あの骸骨共が何と言うかな？」

骸骨共ならこう言うだろう。

『誇り高き我々が戦う前に逃げろだと？愚かな事をほざくな！！』

『こうなった時の為に貴様らが居るのだ。四の五の言わずに戦え！！』

「大方そんな物だろうな。はぁ、何であんな奴等を護らないとならないんだよ」

俺は女専門だ、と軍曹はぼやきながら新しい煙草を銜えて火を点けた。

そして、その日の夕方に議会の答えは出た。

先ずは話し合い。

降伏も戦いもしない。

どうにか兵を治めてくれ、と頼む事に決まった。

私はそれを聞いて、もう戦になると何処かで確信していた。

第二十八章：交渉は決裂・・・・・・

議会が話し合いで解決させると、決まった翌日。

城から馬車が一台、出た。

煌びやかに飾られた馬車にはゲンハルト様達が乗っている。

護衛は付けていない。

リカルド様達と話し合いをする為だから、わざわざ相手を刺激するような真似はしない方が良いと言っていたのだ。

まぁ、仮に頼まれたとしても正直、御免被りたい。

何が哀しくて、あんな男の護衛をしなければならないのだ？と自問自答したくなる。

現在、リカルド様達は辺境の地から首都からさほど離れていないカルナン湖畔に陣を構えている。

ここは巨大な湖、通称カルナン湖がある。

更に霧などもよく出るので視界が利き難い。

もし、あそこで戦をやると考えてみる。

あそこは迎撃と埋伏に最適な地形だ。

北岸を通る街道は丘陵の間を通る隘路で、その兵陵には隠れる場所もある。

それを考えると、リカルド様達はあそこで戦をする事を前提としている可能性が高い。

元々、話し合いなど微塵も考えていない事は手紙で解かっている。

そして、きっと骸骨共が行く事も解かっているだろう。

私は塔の上から馬車を見送り、これからどうなるのか気になった。

馬車がカルナンへ行ってから数時間が経過していた。

その間、プロイセン様とエドリアス様が砦を訪れては大尉達と話し合いをしていた。

プロイセン様は何時でも戦に臨める準備をさせている、と大尉に伝えた。

「既に獅子頭軍団は何時でも出陣出来る」

聖騎士団もそれは同じ事らしいのだが、一つだけ問題がある。

・・・・親衛騎士団だ。

「あ奴等、私の命令に従おうとしない」

何でもフィーナ様がプロイセン様の言う事は聞くな、と言った上にゲンハルト様も親衛騎士団“だけ”は首都に残すように命令したら

しい。

本来、親衛騎士団は獅子頭軍団の傘下に入っているから、獅子頭軍団の指揮官であるプロイセン様の命令は絶対の筈だ。

だが、先王の時代は独立した騎士団だった事もあるし、その時に従っていた者達は既に居ない。

だから、プロイセン様の言う事を聞け、と言われても従う気にならないらしい。

まったく理由になっていないが、向こうではこれが常識のようだ。

「何ならあたしがそいつ等を全員、叩きのめして連れて来ようか？」

大尉なら相手が何人だろうと、全員を連れて来れると私は確信していた。

この方の実力なら、全員を連れて来る事は可能だ。

まぁ、かなり荒っぽいやり方で、死者が出るかもしれないが。

「いや、大丈夫だ。私が責任を持って連れて来る。何でもそなた達に任せていたら私の沽券に係わるだろ？」

プロイセン様は笑いながら言った。

それはまるで私たちを安心させるように笑っているように見えた。

「そうだね。それじゃ、頑張りなよ」

「あぁ。ではな」

プロイセン様は背を向けて砦を後にした。

続いてエドリアス様が大尉に話し始めた。

エドリアス様の話によると民達には何時でも脱出できるように準備をさせている、と話した。

その中には既に首都を出て行く者も居ると言う。

「民達はそれぞれ親戚の地方に逃げると仰っておりました。後は・・・首都に残る者も居ます」

例え死んでも、自分はここから離れないと言う者もいるらしい。

中には我々が負ける筈ないと言っている者もいれば、戦にはならず話し合いで解決できると言う者も居る。

誰が正しいかと問われたら、その人の考え方次第としか言えない。

まぁ、話し合いで解決できるというのは、情報を正確に取っていない者の発言だと解かる。

しかし、情報とは不確定であり、１０の内１が本当で９が嘘と言う。

情報に質を求めてはいけない。

いや、質を求めるのは悪くない。

誰だって質が良い物を欲しがるのが普通なのだ。

だが、情報は先ほども言った通り１０の内１が本当で９が嘘なのだ。

だから、質ではなくそれを有効に利用できる政治的決定を持つ事が望まれる。

今はその政治的決定が望ましいのだが、生憎と我が国にそんな事を出来る者は居ない。

やれやれ、と溜め息を私は吐かずにはいられなかった。

「最悪の事も考えて、首都に残る奴等にはそれなりに覚悟をしろと言っておきな」

大尉はエドリアス様に非情な言葉を投げた。

「あたしは少佐みたいに自分で残った奴を助けるほど優しくない。ここに残るなら女を犯されようが、財産を奪われようが、自分が殺されようが“自己責任”だ、と言っておきな」

「・・・解かりました」

エドリアス様は大尉から言われた非情な言葉に暫し沈黙しながら頷いた。

その表情は何処か苦しそうだった。

従軍牧師となったエドリアス様だが、本職は司教だ。

出来ることなら話し合いで解決したい、とこの方も思っている事だろう。

いや、誰もが話し合いで済むのならそれが良いと思う筈だ。

平和は誰もが願って止まないもの・・・・・・・・・・・・

しかし、その為には最悪の結末も想定して備えておかなくてはならない。

それが平和を欲する者たちの使命であり、義務なのだ。

私は骸骨共が帰って来るまで煙草を蒸かして時間を潰した。

その数時間後、骸骨共が帰ってきた。

馬車に乗ってきた骸骨共はそのまま城に向かった。

「どうなったんだろうね？」

レオンが双眼鏡で馬車を覗きながら私に訊ねてきた。

「君の考えと同じだと思うよ」

「やっぱり、失敗したよね？」

「だろうね」

私とレオンはお互いの意見が同じで、諦めるしかなかった。

馬車に乗っていた従者は何処となく疲れていた。

そして怯えていた。

あれを見る限り、話し合いは失敗したと考えるのが妥当と言える。

最初から無理な話だが、やはり何処かで解決できる、と甘い考えを持っていた事は否定できない。

こんな考えは溝にでも捨てた方が良いと私は自分の甘い考えに自嘲を隠せなかった。

そしてそれから更に1時間が経過した。

プロイセン様が私たちの元へ来た。

その顔はいつになく険しく、気もピリピリしていた。

ああ、これが戦に臨む時の気なのか？

と私は頭の片隅でそれを感じて身体が震えた。

手が、足が、全部が震えて煙草を銜えている口も震えていて、煙草を落とさないようにするのが精一杯だった。

この震えには覚えがある。

幼い頃に見世物小屋を訪れた時に初めて見た獅子を見て震えた時と同じだ。

・・・から小便がちびりそうに震えたのを鮮明に覚えている。

まさにこれがそうだ。

プロイセン様は震える私を尻目に皆を一同に呼び寄せた。

プロイセン様の身体から放たれる気に皆は気を引き締めていた。

ただ、そんな中でも大尉と軍曹は煙草を蒸かして何処か余裕を見せていた。

「・・・話し合いは決裂だ。いや・・・一笑された」

プロイセン様は重い声で告げた。

やっぱりな、と私たちは思った。

手紙には話し合いは応じない、と書かれていた。

それなのに話し合いに行ったのだから笑われても仕方ないだろう。

「ゲンハルト様達は何と言っておられました？」

リーザ中尉が軍人の顔でプロイセン様に訊ねた。

「あいつらはこう漏らしていた」

『あの野蛮人、我々が穏便に事を片付けようとわざわざ足を運んだのに、我々を通さないばかりか矢を射ってきた！！そして我々にこ

う言ったのだ！？』

話し合いはしないと言ったのに、なぜ来るのだ？貴様等の知能は赤子以下か？！

まだ優しい言葉だし、行動だと私は思っていた。

もし、テツヤ殿達ならこれ以上の事をするだろう。

ＲＰＧを撃つとか、ライフルで車輪を壊した上で素っ裸にして帰らせるとか・・・・・・・・・・・・・・

言葉ももっと卑猥で屈辱的な言葉を投げるだろう。

話し合いで済ませられるなら、こんな真似はしない。それを解からないお前等の脳みそは猿以下だ。

こんな言葉を言うに違いない。

そんな事を私は考えながら、プロイセン様の言葉を聞き続けた。

「そしてあ奴等は私にこう言った」

直ぐにあの野蛮人どもを血祭りに上げて来い！！

先ほど話し合いで解決してみせる、と大声を言っておきながら今度は討伐、か。

感情に動くとは宰相として失格と言える。

よくもまぁ、宰相になれたと思うが貴族だからか？
そんな事を私はつい思ってしまった。
「女王の命ではないのですか？」
リーザ中尉が確認をするように訊ねた。
「サラ様は体調を崩して寝込んでいるそうだ」
「肝心な時に役に立たない女だね。それなら小娘の方がまだマシだよ」
大尉はここで辛辣な言葉を述べながら、プロイセン様にどうするんだ？と訊ねた。
「・・・女王の命ではない。だが、このままここに居れば、ここが戦場になる」
それだけは避けなければならない。
もし、やるとするなら民達を安全な場所に逃がしてから、とプロイセン様は言った。
そして・・・・・・・・・・
「・・・出陣だ。リカルド王子を討つ」
と皆に告げた。

第二十九章：運命とは・・・・・・

私たちは砦の中からプロイセン様が指揮する獅子頭軍団達が出陣する所を見ていた。

赤い鎧に身を纏い、大きな円形の盾と槍、そして刀剣などで武装している獅子頭軍団。

まさに獅子という名に恥じない姿であり、格好だ。

そしてそれに付き従う弓兵、魔術師、聖騎士団が居る。

親衛騎士団は・・・結局、駄目だった。

初戦で勝てば士気も上がるし、相手を怯ませられる。

だから、初戦で持てる限りの力を出すのが望ましい。

親衛騎士団は王国の中でも屈指の腕前を持つ者達が集まった騎士団というのが民衆の間では言われている。

だからこそ、彼等が行けば必ず勝てる、と思うのだ。

それなのに彼等を残して他の者たちだけを行かせる。

これでは内部から「親衛騎士団は臆病者」、「王国はまともに兵を統率できないのか？」と言われる事だろう。

それが解からないのか？

解からないから、そんな事をしているのだろうが・・・・・・・・・
やるせない。

そして私たちも本来なら出陣する筈だった・・・・・・・

所がプロイセン様は私たちにこう言ってきた。

『貴殿らはここを護ってくれ。我々が留守の間・・・敵がこちらを狙う可能性も少なくない筈だ』

確かにそれは言えている。

我々を誘き寄せて、手薄な城を攻め落とす。

もし、私がリカルド様の立場ならそうするし、テツヤ殿もそうすると思う。

しかし、しかしだ。

私たちだってこうなる時の為に戦う訓練を積んでいたのだ。

そして今がこうなる時だ。

だから、私は最初ついに初陣だと思っていた。

それなのに留守を護れと言うのはあんまりだ、と最初は思ってしまった。

私だけでなくレオンも同じだった。

彼だって初陣だと思い、緊張しながらも準備をしていた。

それを留守番を言い渡されて落ち込み、怒っていた。

だが、軍曹は私たち二人にこう言い聞かせた。

『おっさんは俺らを頼りにしているんだよ。だから、敢えて俺らを残したんだ』

私たちの装備は獅子頭軍団には無い。

そして戦術なども、だ。

だから、それを相手に知られたくないし、下手に消耗したくない。

それを考えて留守番を言い渡したのだ。

軍曹に言われるとまるで兄に説き伏せられた気がすると同時に納得してしまう。

まぁ、テツヤ殿に比べれば些か力不足な気がするが。

そんな事もあり、私たちは砦の中で悶々とした状態で砦の中で待っているしか出来なかった。

煙草を蒸かしながら私は空を見上げている。

今頃、プロイセン様はリカルド様の居るカルナンへ向かっている所だろうか？

プロイセン様は今まで何度も戦を経験しているから、采配は間違いない筈だ。

だが、リカルド様も戦には出ている。

更にプロイセン様が言うにはリカルド様の采配は「天才」と言われる程に出来ているらしい。

それを考えると、嫌な予想もする。

最悪の結末も予想しなくてはならないのだが、出来るならそんな事は起きて欲しくない。

私の中で最悪の結末・・・・・・・・・・

獅子頭軍団が敗北し、プロイセン様は戦死。

そして一気にリカルド様達が雪崩れ込む事だ。

そうなれば、我々に勝ち目は無い。

もし、私の想定した最悪の結末が現実と化したら・・・・・・・・・・・・

プロイセン様が戦死したら、ここに居る兵たちの士気も低下する。

そしてプロイセン様以外に彼等を指揮できる者も居ない。

そうなれば雪崩のように敵に押し流されて負ける事だろう。

それは避けたい。

だが、どうする事も出来ない。

ただ、そうならないように願うだけだ。

そしてテツヤ殿がこんな時に居てくれたら、と思ってしまう。

あの方は王国の危機の時には必ず戻ると言った。

今がその時だ。

それなのにテツヤ殿は現れない。

『テツヤ殿。王国の危機には戻って来るのではなかったのですか？』

早く来て、私たちを指揮して下さい。

貴方が指揮するならどんな窮地に陥り様とも泣きごとを言わずに戦い抜いてみせる。

私は空を眺めながら、テツヤ殿が来てくれるのを願った。

昼になってからサラ様とエリーナ様がエドリアス様を連れて訊ねてきた。

「おやおや、体調不慮でまともに命令を出せなかった女王様が何の用ですか？」

大尉は嫌みをタップリと言いながらサラ様を見た。
口調はふざけていたが、目は笑っていない。
とても鋭くて、冷たい眼差しだ。
それはこんな状況を作り上げたのはあんたのせいだ、と暗に言っているように私は見えた。
「大尉。幾ら何でも、そこまで言うのは・・・・・・」
サラ様は大尉に詰られて、何も言えずにいた。
それを見かねてワイド中尉が大尉を戒めるように口を挟んできた。
「あんたは黙ってな。あたしはこの女王に訊いているんだ」
大尉はワイド中尉の言葉を一掃して、サラ様にもう一度だけ訊ねた。
「・・・テツヤ殿から、何か連絡はありましたか・・・・？」
「あの人は無線を置いて行っちまった」
だから、ある訳ないと大尉は言い、そんな事も推測できないのか？と無茶ぶりを言ってのけた。
だが、それは言い過ぎだと思ったのか、または更に意地悪な事を考えたのか、私を見てこう言った。
「まぁ、連れが居るというのは坊やから聞かされたけどね」

サラ様が私を見てきた。

瞳は弱々しくて、身体も何処か何時になく頼りなかった。

エドリアス様とエリーナ様に支えられてやっと立っているように見えてしまうほどに衰弱している。

「ランドルフ、テツヤ殿はどなたと一緒に出たのですか？」

「それは残念ながら女王とはいえ・・・教える事はできません」

まさか娼婦と一緒に出て行きました、なんて馬鹿正直に言ってしまえばこの方は倒れてしまうだろう。

そんな気がしたから私は言葉を濁した。

「坊や。正直に言った方が良いんじゃないのかい？」

「でも、大尉。こればかりはテツヤ殿の名誉も考えて・・・・・・」

「あの人がそんな紙以下の代物に気を遣うと思うのかい？」

「いいえ。思いません」

私は即答で断言した。

テツヤ殿なら名誉など紙切れ以下、と断言するだろう。

だが、私はサラ様の事を考えて言えないのだ。

それを大尉は解かったのか、坊やが言わないなら教えられない、と言ってくれた。

「どうして、私に教えてくれないのですか？」

「あんたに教えてこっちに何かあるなら教えてやるよ」

だけど、何も無い。

だったら、なぜ教える必要があるのだ？

あたしはあんたに仕えた気は毛頭ない。

ただ、少佐からここに残って護れと命令されたから居るだけだと大尉は言い続けた。

「・・・・・・・・・」

サラ様は何も言えずに黙るしかなかった。

「あたしは少佐みたいに優しくないよ。相手が女だろうが餓鬼だろうが、容赦しない」

そしてあんたはあたしの敵だ、と大尉は言い切ってしまった。

「少佐が国外追放にされたのはあんたの責任でもある」

部下を統率出来ずに身勝手な行動を許したのだから当たり前と言えば当たり前だ。

しかし、あんまりな言い方である。

「・・・・・・・」

サラ様は何も言えずに黙っていた。

エリーナ様は大尉は親の仇とばかりに睨んだ。

実の母親をこんなにも目の前で貶されたのだから怒りたくもなる。

「おやおや、どうやらあたしはお嬢ちゃんには嫌われたようだ」

「お母様は、テツヤ様を心配しているのです。そして、今回の件でも心が痛んでいるのです」

「心が痛いから体調を崩すのかい?そんな理由であの馬鹿宰相に全てを任せたと言うのかい?」

身内がこんな暴挙をしたから体調を崩す・・・人として当然だが、国家を担う者なら私情は持たず、挟まないのが鉄則だ。

それを解かっているのか?と大尉は言い続けた。

「そ、それは・・・・・・」

「何も言えない、か。なら、お嬢ちゃん。その小綺麗な口を閉じてな。お子様が入って良い話じゃないんだ」

城に帰ってお人形さん遊びでもしていろ、と大尉は言った。

「・・・・・・」

エリーナ様は泣きそうな顔をした。

泣きそうな顔なのだが、綺麗で・・・・もっと泣かせた顔にしたいなんて・・・・・酷い事を私は場違いにも思ってしまった。

だが、それは微塵も出さずにエリーナ様に近付いて、溢れ出そうとしていた涙を拭った。

「ランドルフ・・・・・・・」

「エリーナ様。少し塔の上に行きましょう。あそこは眺めが綺麗ですから」

私はエリーナ様を連れて塔へと足を運んだ。

大尉は擦れ違い様に「しっかりと慰めてやんな」と言った。

これがアフター・ケアーというものなのだろうか？

本来なら大尉がする筈だが、私がする事になるとは・・・・・・・・・・

塔へと連れて行ったエリーナ様の隣に私は立ち、大尉の事について話し始めた。

「大尉は少佐を・・・テツヤ殿を誰よりも想っているんです」

だから、こんな状況になった怒りを誰かにぶつけたかったんです、と私は少し大尉の本音を変えてエリーナ様に説明した。

「分かっています。あの方の言い分は尤もです。それはお母様も自覚しています」

自分は人の上に立ち、非情な決断は出来ない。

それを自覚しながらも、王位を降りなかったのは・・・・・・・・・・・・・・・

「お兄様に王位を譲る為だったんです」

私はこれを聞いて驚いた。

サラ様がリカルド様に王位を譲る事を考えていたとは・・・・・・・・・・・・・

「お兄様は、私の父・・・ガルバーと側室の間に出来た子。だから、周りからは余り良い目で見られていませんでした」

しかし、サラ様は血は繋がっていなくとも息子として可愛がり、リカルド様もそれを理解していた。

所が、骸骨達が要らぬ節介・・・いや、ガルバー様の血を引き粗暴な性格であるリカルド様に謀反の疑いがあると言い辺境の地へと追いやった。

「ですが、母はお兄様を愛していました。私もそうです」

幼い頃はよく一緒に遊んだし、ベッドの中でも寝た、とエリーナ様は語った。

それが今は敵対同士。

「・・・運命って、残酷ね」

「・・・・・・・・・・・・・」

私は何も言えずに黙るしかなかった。

運命は残酷。

運命ほど、予測不可能でありながら結末が既に決まっているような物はこの世に存在しないだろう。

確かに運命は残酷だ。

義理とは言え、親子が殺し合うのだから。

だが、それが運命というものだろう。

そうとしか今の私には言えなかった。

第三十章：血に染まった伝令

私は史記を書きながら青天の霹靂で激戦区となったカルナン湖畔を思い出した。

青天の霹靂、初戦・・・通称“カルナン湖畔の虐殺”と言われている。

徹夜様達が居た世界でも似たような戦いはあったらしい。

この戦いでサルバーナ王国の獅子頭軍団が一方的にやられた。

生き残った者たちの言葉で「あれは戦いではない。虐殺だ」と言わしめた程の凄惨な戦いだった。

私はそこで戦っていない。

だが、プロイセン様の話では「一方的に嬲り殺された」と言われる程に圧倒的な負けだったらしい。

そこで獅子頭軍団は五万から一気に三万に減ってしまった。

獅子頭軍団は王国の中でも精鋭だし、「一兵が数十人の兵に及ぶ」と言われるほど実力が高かった。

その軍団を三万に減らした。

それほどリカルド様が指揮した軍団は強く、彼の編み出した戦術は類い稀なる物だったと解かる。

そして続く“ザンビアの戦い”でも、リカルド様は完ぺきに近い包囲網戦術を編み出して獅子頭軍団を壊滅に追い遣ろうとしていた。

そこでの指揮は、ゲンハルト様がした。

カルナン湖畔でプロイセン様は敵兵に矢を5本も撃たれて重傷を負い指揮が執れなかった。

更に有能な将軍達も討ち死か重傷を負い指揮が出来なかった。

そのため軍を指揮した事のないゲンハルト様が指揮をする事になった。

しかし、これが決め手・・・いや、元々あれは負けが前提だった。

その上で軍を指揮した経験が無いゲンハルト様が総司令官で前の戦いで疲労し切った獅子頭軍団で戦ったから仕方ない。

間一髪で助かったが、兵たちの損害は大きかった。

武器・装備の代えは幾らでもきくが、それを扱える兵の代わりは簡単ではない。

それをプロイセン様は知っていたしリカルド様も知っていた。

その前の話を書く事にする。

大尉に辛辣な言葉を浴びせられたサラ様とエリーナ様はその日の夜になってから帰って行き、エドリアス様はここに残った。

大尉はあれからワイド中尉に叱られたが逆にワイド中尉を言い負かして、かなり怒っていた。

軍曹曰く「今の姐御に近付いたら命の保証は無い」と言う。

だから、皆は出来るだけ近づかないようにしていた。

私はレオンと一緒に塔の上で見張っている。

「プロイセン様はもうカルナンに到着したころかな?」

レオンが私に問い掛けた。

「多分。だとすれば、夜明け前に攻撃かな?」

「だろうね。だけど、リカルド様の軍団はどんな軍団なんだろうね?」

「それが解からないんだよね。ゲンハルト様は何も見えなかったと言うし・・・・・・・」

「口が悪いけど、せめて何かしら見て欲しかったね」

レオンの言葉に私も頷いた。

幾らリカルド様に会えないばかりか矢を射かけられたとは言え、せめて相手の人数とか装備とか、何かしら一つでも見えた筈だ。

それなのに何も見えなかった、というのだからお粗末な話だ。

いっそのこと、そんな眼は無い方が良いとさえ私は思ってしまった。

それはレオンも同じだったようで「いっそのこと、目が無い方が良いかもね」と危ない発言をした。

その日は何事も起こらずに終わった。

だが、その翌日から事態は急変した。

城に早馬が一頭向かってきた。

獅子頭軍団の鎧を身に纏った兵は城門を潜ると一気に進み、城へと向かった。

まるで赤い炎を連想させる程に全身が赤かった。

あれは血だ。

あんなに全身を血まみれにするとは・・・・・・・・・・・・・・・・

私はその様子を塔の上から見て余程、凄惨な戦いだったのだな、と理解した。

そしてあの様子からして、決して戦況が芳しくないとも理解できた。

エドリアス様は早馬を見て城に行くと言って城へと急いで向かった。

「あの様子だと、負け戦かもね」

大尉が塔の上に登りながら私に告げた。

「プロイセン様は無事でしょうか？」

私とレオンはプロイセン様や他の将軍達が無事かどうか心配だった。

負け戦ともなれば、こちらの被害は大きいだろう。

そしてプロイセン様達も失えば更にその被害は大きくなる。

「分からないね。しかし、兵たちがどれ位、減ったのかも問題だよ」

それによっては、これからの戦いで大きく支障が来たすと大尉は言った。

「坊や。カルナンっていう所はどんな所だい？」

「確か、霧が発生し易くて大きなカルナン湖があります」

その他には北岸を通る街道がある。

そこは丘陵の間を通る隘路があり、迎撃と埋伏に最適な地形だ。

「まるで“トラシメヌス湖畔の戦い”の場所だね」

「トラシメヌス湖畔の戦い？」

私は大尉に訊き返した。

「あぁ。ハンニバルとローマが戦ったんだけど、湖と言い場所と言

い、何だか似ているんだよ」

「勝敗はどちらに？」

レオンが大尉に訊いた。

「ハンニバル側だ」

大尉は簡潔に答えて被害などを教えてくれた。

ハンニバル側の戦力は５００００から６００００なのに対してローマ側は半分の２５０００。

被害はハンニバル側が１５００から２０００に対して１５０００と言う大損害をローマ側はした。

「圧倒的な勝利ですね・・・・・・」

私とレオンはそれほど圧倒的に勝利した事に対して感心を覚えた。

どうやったら、そこまで圧倒的に勝てるのか知りたい。

「敵の情報を掴み、その上で相手を迎え撃つ場所を選んだ」

更に兵たちを置く場所なども考えたらしい。

「戦で勝つには、先ず相手の情報を掴んで自分に有利な立場で戦える状況を作り上げる事だよ」

ハンニバルはそれを実行した。

だから、そこまで圧倒的な勝利を掴む事が出来たのだ。

その上、自分の弱点を補える方法を考えたのに対してローマ側は敗北した理由を分析しようとしなかった。

その結果は次の戦いで明らかになったらしい。

あたし等の場合はそうなりたくない、と大尉は語った。

だが、私はそれが現実と化す気がした。

そしてそれは現実と化した。

エドリアス様が砦を訪れたのは早馬が来てから1時間も経たない内だ。

私とレオンは塔から降りてエドリアス様にどうなったのか訊ねた。

エドリアス様は真剣な顔で私たちにこう告げた。

『獅子頭軍団は負けました』

今は生き残った軍達を編成して戻って来ている所らしい。

「プロイセンのおっさんたちの安否は？」

「分かりません。ただ、かなりの損害を被った事は確かです」

エドリアス様は不味い状況になった、と言った。

「伝令の話ですと、濃霧で視界は利かずだったそうです」

そしてリカルド様の軍が襲い掛かって来るまで気付かなかったらしい。

「女王を始めとした者達は、敗北と聞いてどよめいておりました」

特に骸骨達は唖然として嘘だと思いたかったらしい。

「司教様。あんたとしてはどう思う？」

「正直、リカルド様はガルバー様以上に戦の心得を持っております。それに向こうは予めこちらが行く事を想定して陣を張ったのでしょう」

カルナンの場所や地形、更には霧が発生する事も予想していた筈、とエドリアス様は推測して恐ろしい方だと言った。

「それで、女王たちは何と？」

「民達に避難命令は出さずに敗北した事も教えない事にしました」

下手に教えて騒動になる事を避けようと考えたらしいが、民達は伝令の姿を見て直感したようだ。

塔から見れば急いで出て行く民達の姿が見えた。

「で、リカルド王子はどうしたんだい？」

「ここに向けて進軍を続けているとの事です」

「どの程度、掛ると見積もる？」

「およそ5日程かと」

恐らく敗走中の獅子頭軍団と何度も戦いを繰り広げて少しずつこちらに来る。

だから、5日とエドリアス様は見積もったようだ。

「坊や。塔の上から目を離さないで見ていてくれ」

何か少しでも可笑しな事があったら、連絡しろと大尉は言った。

それに私とレオンは頷いて急いで塔の上へと登った。

幕間：カルナン湖畔の虐殺（前書き）

えー、ハンニバルの“トラシメヌス湖畔の戦い”を私的に考えて書いてみました。

変な所がありましたら、是非ともメールを下さい。

幕間：カルナン湖畔の虐殺

サルバーナ王国の首都ヴァエリエからさほど離れていない位置にあるカルナン湖。

大きな湖、カルナン湖の北岸には街道がある。

その街道は丘陵の間を通る隘路であり、迎撃と埋伏に最適な地形だ。

その入口を埋め尽くすように黒い鎧を纏った重装歩兵が配備されている。

彼等は微動だに動かず、静かに、来るであろう相手をじっと待っていた。

いや、相手ではない。

檻に自ら飛び込む馬鹿な獲物だ。

彼等はきっと自分達以外の者たちが配備されていると気付かないだろう。

丘陵の陰には“草”の騎馬隊と彼等が仕える主の騎馬隊、鉄鎚兵、槍兵などが隠れている。

騎馬隊などは最後の方に居る。

彼等の仕える主は騎馬隊を使用して退路を断つ積りだ。

自分達は正面から獲物を抑える役割を担い、鉄鎚兵と槍兵などで敵を直ぐ横にあるカルナン湖へ落とす作戦だ。

そして現在、カルナンは今まで見た事がないほど濃い霧で覆われている。

これでは来る相手はこちらの存在に気付かないだろう。

気付いた頃には既に退路は断たれて逃げ場は無い。

完璧とも言える作戦だ。

時刻は既に朝を迎えようとしていた。

今か今かと待ち続けていると、霧の中から斥候を主から頼まれていた偵察兵が戻ってきた。

「敵はもう直ぐこちらに来る」

簡潔に述べる偵察兵。

だが、彼らにはこれで良かった。

下手に説明より簡潔に言われた方が理解し易い。

彼等は槍と盾を持った手に力を込めた。

自分達が負ければ、この作戦は失敗に終わる。

何よりこの戦い、負けられない。

同じ重装歩兵である獅子頭軍団に負けたくない気持ちもあるが、何より主の為ならこの命、捨てられると皆は思っていた。

そこへガシャガシャと物音を立てて近づく足音が聞こえてきた。

『来たな』

彼等はもう一度、槍と盾を持つ手に力を込めた。

恐らく先頭は獅子頭軍団だ。

そしてその次に聖騎士団、弓兵、魔術師と続いている事だろう。

陣列は一列だから、これほど迎え撃つ側から言わせれば格好な陣列は無い。

この地形を考えれば縦列で行くしか方法が無いのだから仕方が無いと言えるかもしれないが、もう少し頭を使えばもう少し別な方法があるだろう。

弓兵、魔術師は騎馬隊などが担当する。

自分達は目の前の敵を屠る事に全力を注ぐのだ。

緊張して汗が滲み出る。

そこへ

ドンッ!!ドンッ!!ドンッ!!

と戦鼓の打ち鳴らされる音が響き渡る。

合図だ！！

「・・・・・突撃！！敵を葬れ！！勝利は我々の手に！？」

『勝利は我々の手に！！リカルド王子万歳！？』

重装歩兵の長が突撃の声を上げて槍を前に突き出して盾で全身を隠した。

それに続いて兵たちは声を上げて主の名を呼び、濃い霧の中を突撃した。

目の前に赤い鎧を纏った獅子頭軍団が見えた。

兵たちは突然とも言えるほど目の前に現れた敵に成す術もなく槍で貫かれた。

迸る鮮血がカルナンの湖を赤く染めた。

そして青天の霹靂、初戦・・・カルナン湖の虐殺の火ぶたが切って落とされたのだ。

獅子頭軍団は最初こそ慌てたが、直ぐに態勢を維持して自分達を押し戻してきた。

だが、自分達は負けられない。

ここで出鼻を挫き一気に王都へと進むのだ！？

「我らが主、リカルド様が見ているぞ！！皆の者、一歩も引くな！？」

『おぉ！！』

長の叱咤激励に重装歩兵は更に進んだ。

獅子頭軍団も奮戦するが、気迫の違いで押され気味となっている。

そこへ後方に配置された弓兵の攻撃で更に押され、鉄鎚兵と矛兵が雪崩れ込んで、カルナン湖に追い込まれて水没する兵たちが続出した。

その様子を遠くから見ていた青年、リカルド・ウェスビー。

彼は愛馬に跨り戦況を見ていた。

その背後には４人の男達が控えていた。

一人は黒髪に黒い瞳を持った年齢３０代の男。

リカルドの片腕にして公爵であるヴィクター公爵。

彼の指揮する軍団は未だに戦闘に参加していない。

何故か？

この戦いで彼は残り３人の意図を読もうとしているのだ。

だから、彼等の兵を配備した。

彼自身の体験に「人は容易に信じるな。必ず試す機会を与えろ」がある。

そのためここでその真意を探ろうとしたのだ。

彼の後ろには3人の男達が控えている。

肥え太った体格に髪の毛が一本も無い髪型をした男が通称“豚”モリスン侯爵。

侯爵というより山賊の頭と言った方が納得される風格などを醸し出しているモリスン侯爵。

彼が指揮するのは鉄鎚兵と矛兵などという攻撃的な兵士たちが特徴だ。

本人も豚が渾名とは思えないほど攻撃的な性格であるが、大の付く暴食家として知られている。

そしてその横に居るのが左目を眼帯で隠し顎鬚を生やした男が通称“蛇”ライアンナル伯爵だ。

元は中央貴族だが、何を仕出かしたのか辺境の地へと追いやられた。

蛇と言う渾名の通り極めて狡猾的な性格で残酷な性格でもある。

彼が指揮する軍団はヴィクターでさえ解からない。

何度か演習を見てきたが、それでも解からない事が沢山ある。

それでも解かる事は、この男のパイプが重要と言う事だ。

“草と砂”の援軍も彼が連れてきた。

どうやったのかは不明だが、よほど中央に強いパイプがある人物だと解かる。

それと同時にいつ裏切るか分からない要注意人物として見ている。

そして最後の男は他の2人に比べて貧弱な身体付きで出っ歯がトレードマークという情けない男を画に描いたような風格だ。

通称“鼠”フィリップ男爵だ。

元々辺境の男爵家の男で危険を感じるのが上手い事を抜けば他に何の取り柄も無いと言う情けない男だ。

だが、ヴィクターは少なくとも他の2人に比べれば危険価値は極めて少ないと思っている。

鼠が渾名の通り、とにかく情けない事この上ないから彼自身から言わせれば「道端にある小石」の存在でしかない。

それは兵達にも値する。

彼が指揮するのは弓兵と槍兵。

ハッキリ言えば使い捨て以外の何でもない。

だからヴィクター自身は万が一の事が起きたら彼を真っ先に“戦死させる”と決めていた。

しかし、彼の主であるリカルドはこの鼠を事の他気に入っている。

何でこんな男を気に入っているのか長年、仕えている彼も解からない。

鼠自身もリカルドに気に入られている理由が皆目見当も付かない様子だった。

だが、気に入られて色々と世話をされたからかせめて戦で恩返しをしようとしているのは解かっている。

『そう言った性格が、リカルド様に気に入られているのかもしれないな』

情けないの一言に尽きる男だが、それでもそういった所がリカルドに気に入られている。

それならそれで構わない。

裏切らなければ良いのだ。

そうヴィクターは思った。

そして馬上で戦の行方を見ているリカルドに近付いた。

「リカルド様。どうですか？」

「・・・上出来だ。だが、時間が惜しい。“チェック・メイト”にしよう」

「畏まりました」

ヴィクターは西に控えていた騎馬隊に命令を下した。

騎馬隊が一気に獅子頭軍団の背後へと回り込み退路を断った。

そこで先ず弓兵と魔術師が戦死した。

『騎馬隊が後方に出現！！退路が絶たれました！？』

敵の叫び声がこちらにも聞こえてきた。

『迎撃しろ！！何としてもこの戦場から抜け出すのだ！！』

「・・・プロイセン殿か」

ヴィクターは獅子頭軍団の長であり有能な将軍であるプロイセンの名を呼んだ。

彼とは先王の時代から戦を駆けたから彼の人なり戦術などは解かっている。

そして彼自身を失いたくはなかった。

有能な将軍であり、幼い頃は自分を鍛え上げてくれた男だ。

言わば師と仰げる人物である。

その男を殺すのは惜しい。

だが、生かしてもきっと自分達には従わないだろう。

彼は一本気な男だ。

軍の善悪を理解しており、その善を限りなく実行する。

だから、自分達の行動を非難するのは解かり切っている。

だが・・・・・・・・・

『プロイセン殿。こうするしかこの国を・・・いや、５大陸を救う事は出来ないのです』

ヴィクターは心の中で詫びを入れて、鼠に弓兵でプロイセンを射ろと命令した。

鼠は頷いて弓兵に将軍を狙え、と命令した。

そして矢の雨が放たれた・・・・・・・・・

『プロイセン様ッ！！』

獅子頭軍団の悲鳴が、血飛沫が迸る音、斬られた悲鳴、貫かれた悲鳴と罵声が湖畔に響き渡った。

一列に並んだ敵軍はもはや壊滅するのも時間の問題だ。

これで初戦はこちらの勝ち。

そうすれば後は一気に勢いに乗って首都へと攻め込んで勝ちだ。

『・・・呆気ないな』

ヴィクターは心の中でこれ程までに簡単な戦だったとは、と呟いた。

だが、それは直ぐに打ち消された。

「た、大変ですっ。き、騎馬隊の後方に別の軍が出現しました!!」

偵察兵の一人がヴィクター達の前に立つと、思わぬ出来事を報告して来た。

「焦るな。何処の軍だ?」

「分かりません。ただ、こちらを攻撃しております!!」

「・・・伏兵か」

ヴィクターは思わぬ出来事に眉を顰めたが、問題ではないと思った。

所が、続いて別の偵察兵が来た。

「報告!!カルナン湖を渡り船で別の軍が我々に攻撃を・・・グゲっ!!」

最後まで報告する前に偵察兵は息絶えた。

湖の方角から飛んできた矢に刺さり死んだのだ！！

「リカルド様っ」

ヴィクターは直ぐにリカルドを後ろへと下がらせた。

それに鼠も続く。

残りの2人は急いで動揺を見せた兵たちを抑える事に徹した。

『誰だ？一体・・・・・・・・・』

ヴィクターは後方に下がりながら、誰の軍団なのか？

そして一体、何者なのか気になった。

しかし、その間にも矢の雨がこちらに来る。

更に騎馬隊の悲鳴も聞こえてきた。

『退路が出来たぞ！！皆、引けー！？』

獅子頭軍団の叫び声がヴィクター達の耳に入った。

「逃がすな！！敵を皆殺しに・・・・・・・・ちぃ！！」

ヴィクターは味方に追撃をさせようとしたが、降り落ちてくる矢の雨を防ぐので精一杯だった。

そして獅子頭軍団は退却していった。

それを見計らったようにして謎の軍団も音を立てずに消えて行った。

「・・・・・・・」

ヴィクターは敵が居なくなった事を確認してから街道に降りた。

既に濃かった霧は跡かたもなく消え去っていた。

街道・・・いや、辺り一面は血の海だった。

だが、こちらの被害は極めて少ない。

血の海に沈んでいるのは獅子頭軍団の屍達。

湖にも溺死した獅子頭軍団の屍がある。

『全滅こそ出来なかったが、まずまずの勝利、だな』

この人数からして2万は下らない。

こちらの被害はせいぜい１０００単位だ。

劇的な勝利と言えるが、完璧な勝利とは言えない。

それでも向こうには大打撃を与えられたから良しとせねばならない。

「ウルフよ。こちらの被害は？」

リカルドが鼠を引き連れて訊ねてきた。

「ざっと１０００単位かと。敵は万単位です」

「そうか・・・一体、何者だろうな？」

突如、現れた謎の軍団・・・・・・・・・

「分かりません。ただ、言える事は我々の敵、と言う事です」

「そうだな。しかし、我々は負ける訳にはいかん」

戦死者達を埋葬して直ぐに首都へと前進する。

「御意に」

ヴィクターはリカルドの命に頷きながらも謎の軍団が誰なのか気になった。

幕間：カルナン湖畔の虐殺（後書き）

この戦いでハンニバルは自分の歩兵が混成部隊だった事から戦列の耐久力が低かったと知ります。

トレビアでもトラシメヌスでも、ローマ軍の重装歩兵はカルタゴ軍戦列の突破に成功していた事が良い例です。

それをハンニバルは学び取って自軍の弱い部分を補う方法を考えました。

この辺が未だに戦術家として高く評価されている点でしょうね。

それに対してローマは、二度の大敗を喫したにもかかわらず、敗因の分析を怠るという甚だしい行動を取りました。

そしてこの差が、次のカンナエの戦いで明白な結果となって表れます。

いやはや何とも・・・・・・・

第三十一章：最悪の指揮官

砦に居た私たちの元へエドリアス様が来たのは夕方になった頃だった。

あれからまた別の早馬が来て報告をした。

それを聞きにエドリアス様も城へと向かったのだ。

話によれば獅子頭軍団は二万の兵を失った。

更に悪い事にプロイセン様は敵の矢を5本も受けて重傷を負い、将軍達も討ち死にか重傷を負ってしまっている事。

最悪の状況だ・・・・・・・・・・

この上に追い打ちを掛けるように生き残った獅子頭軍団と聖騎士団だが、大半が重傷を負い使い物にならない。

「冷静な判断をしてまともに戦えるのは2万弱です」

エドリアス様の言葉を聞いた兵たちはどよめいた。

獅子頭軍団がそこまで壊滅的打撃を受けるなど考えても見なかったのだろう。

だが、大尉は極めて冷静だった。

「2万弱、か。それであたしらに親衛騎士団を合わせてどれ位にな

る？」

「それでも2万中かと・・・・・・・・・」

「そうかい。それで上は何だって？」

「まともに機能しておりません」

今も議会をしているが、まともな対策は出ておらず降伏だ、戦いだの言い合いしかしていないようだ。

「やれやれだね。それで司教様。あんたとしてはどう思う？」

「正直、ここで戦った所で負けは確実と見て良いでしょう」

軍を指揮する者が居ないのだ。

軍は兵の個人の強さ、数、質など様々な物が集まって優劣が決まる。

だが、全てが優れていてもそれを指揮する者が無能なら勝てる戦も勝てない。

プロイセン様はその優秀な指揮官だ。

そしてその下に居る将軍達も。

それが一気に使えない上に数も下がった。

これでは負けはほぼ確実としか言えない。

「・・・どうなるのかね」

大尉は氷の女王を銜えて空を見上げた。

本当にどうなることか私も知りたかった。

そして獅子頭軍団と聖騎士団が続々と帰ってきた。

誰もが血だらけで槍を杖にして歩いているのがやっとの状態だ。

あんな姿になるなんて・・・・・・・・・

私はレオンと共にその姿を見て震えるしか出来なかった。

あんな姿になるのが戦場・・・・・・・・・

私たちも何れあんな姿になって戻って来るのか、または死んでいくのか・・・・・・・・・

震える身体を叱咤して目に焼き付ける。

『私たちが・・・仇を取らなくては・・・』

自分に言い聞かせて恐怖を押し殺した。

そうしないと震えて地面に座りそうだったからだ・・・・・・・・・・

その中でプロイセン様と将軍達が兵達に護衛されているのを発見した。

プロイセン様は矢が身体に突き刺さったまま護送されていた。
矢を抜けば出血が酷くなる。
だから、抜かない方が良い。
護送されていたプロイセン様だが私を見つけると手招いた。
私は震える足を動かして、プロイセン様の元へ向かった。
「・・・ランドルフよ。すまんな」
プロイセン様は微かに荒い息をしながら謝罪してきた。
「いいえ。それより傷の具合はどうですか？」
必死に声を平静に保ちながら訊ねた。
「5本も撃たれたが、下手くそだ。1本で私を仕留められないのだからな」
プロイセン様は笑みを浮かべながら私を安心させた。
それを獅子頭軍団の者たちは苦渋の表情で見つめた。
「あの、リカルド様の軍団はどんな軍団でした？」
「霧で見分けられなかったが、騎馬隊、槍兵、重装歩兵、更に鉄鎚兵と矛兵も居た」

そこまで揃えていたのか・・・・・・・・・・

「そして我々が一列で進む場所を見抜いて、待ち伏せていた」

後方を騎馬隊で遮断して前を重装歩兵で遮断する。

一列になり、陣形を組めない所へ鉄鎚兵と矛兵を差し向けて少しずつ分断して殲滅する。

「リカルド王子は・・・私より優れた戦術家だ」

敵にそんな賛美を送るとは・・・・・・・・・・

だが、それだけリカルド様が優れている方だと解かる。

「もう駄目だ、と思った。だが、誰かは知らんが我々を助けた」

そのお陰で退路が出来て逃げる事に成功したらしい。

「その方たちは何処に？」

「分からん。ただ、何となくだがテツヤの気がした」

「テツヤ殿の？」

「あぁ。あ奴は王国の危機には必ず来る、と言っていた」

だから、我々が危機に陥った所を助けてくれたのだと言った。

「ですが、ならどうして姿を現さないのでしょう」

「それは解からん。だが、私にはテツヤの気がするんだ」

プロイセン様は確信した口調で言い切り、私にこう言った。

『心して掛れ』

「・・・はい」

私はそれに頷いた。

そしてプロイセン様は城の中へと護送された。

砦へと戻った私は早速、大尉にプロイセン様から聞いた内容を話した。

「なるほどね。これは・・・かなり手こずる相手だね」

大尉は煙草を吸いながら断言した。

「そのリカルドっていう餓鬼、大した戦術家だ。敵ながら天晴れと言えるな」

軍曹もリカルド様の戦術に拍手をした。

敵であるが、そこまでやれると称賛する。

不謹慎と思うかもしれないが、話を聞くと称賛してしまう。

「しかし、おっさんたちを助けたのは誰なんだかね」

「旦那だとしても、それなら姿を見せないのが疑問だね」

「あぁ。考えられるのは・・・・・・・・・」

1、テツヤ殿は別行動を取っている。

2、テツヤ殿ではない別の誰か。

私としては後者だ。

もし、テツヤ殿ならそのまま一緒に来る筈だ。

それをしないと考えると別の人物だろう。

だが、どうして助けたのかと聞かれると答えられない。

一体、誰なのか・・・・・・・・

私は非常に気になりながらもこれからどうなるのかと考えた。

その夜、再び城へと向かったエドリアス様が戻ってきた。

「議会でリカルド様を迎え撃つ事になりました」

場所は城からさほど離れていない場所、ザンビア。

地形は平地で隠れる場所はさほど無いから前のような事は起こらないと考えられる。

しかし、兵力の差などを考えると厳しい戦いを強いられる事だろう。

「指揮官は誰なんだい？」

「・・・ゲンハルト様です」

私たちは耳を疑った。

ゲンハルト様が指揮を？

あの骸骨が？

宰相は軍を指揮する事も出来る。

だが、私の知る限りゲンハルト様の専門は政治だ。

軍を指揮した事は無い筈だ。

どうしてそんな男を指揮官に任命したんだ？

「本人も唖然としておりました。ですが、大臣たちが宰相であるゲンハルト様が指揮を取れば、皆も付いて行くだろうと言っておりました」

未だに貴族たちは王国に味方をしているが、恐らく既に何人かはリカルド様に味方をすると決めている筈。

それを打破する為に最高職にある宰相のゲンハルト様が指揮を取る事で他の貴族たちにアピールをしようと考えたのだろう。

または、内部に通じる裏切り者の手引きでされた、か・・・・・・・・

私なら後者だ。

指揮所か戦を嫌う骸骨を指揮官に任命すれば兵たちの士気は下がる一方だ。

それを考えれば、骸骨を指揮官に任命する。

「それで骸骨は何て？」

「本人は戦が嫌いですので断っておりました。しかし、プロイセン様と同格である方はゲンハルト様を抜いて他におりません」

「なるほどね。それで副官は？」

「フィーナ様です。私たちは留守を護れとの事です」

「またかい。好い加減にして欲しいね」

大尉は煙草を地面に捨てながら愚痴を零した。

「仕方ありません。しかし、これではもう負けは確定したようなものですね」

「随分と辛口なコメントだね？」

「本当の事です。もはや・・・・この戦は負けです」

エドリアス様は何処か沈痛そうな声で告げた。

それを私たちは黙って聞くしか出来なかった。

その次の日、甲冑に身を包んだ骸骨が獅子頭軍団で動ける者たちと親衛騎士団を引き連れザンビアへと向かった。

骸骨は甲冑が重いのか馬上から何度も転げ落ちそうになっていた。

それを下種女が支えている。

あれでは味方の士気は下がる一方だ。

それでも国を護る為に行かなければならない。

それを想うと何も出来ずに此処に居る私たちは・・・何と惨めだろうか？

第三十二章：情報収集と対策

私達は傷ついたプロイセン様達を見舞いに向かっていた。

重傷者達はそれぞれ軍の演習場へと護送されて治療を受けていた。

回復魔法や薬草などで治療をしているが、それでもやはり重症には変わらない。

私たちは重症者たちを励ましながらもし、敵がここまで攻めてきたらどうなるか不安だった。

彼等を残して逃げるのは忍びない。

だが、彼等を連れて無事に逃げ切れる自信も無い。

一体どうすれば良いのだ？

私は自問自答したが、答えは出なかった。

見舞いをしている最中も呻き声や殺してくれと叫ぶ声が聞こえてくる。

私はそれを聞かないようにしながら、重傷を負った兵たちを励ましながら状況、兵たちの装備などを詳しく訊いた。

兵たちは重傷を負い、答えるのも苦しい筈なのに私の質問に答えてくれた。

そして解かった事が幾つかある。

敵は装備が豊富な上に兵たちの士気も極めて高い。

それだけリカルド様を慕っているからだろうか？

それともただ単に負ければ極刑が待っている故に必死なのか？

それは解からない。

だが、士気が高いという事は下手に刺激すると痛い目を見るという事だ。

それならその士気を上回る攻撃を仕掛けて立ち上がれない程に傷めつけるしかない。

しかし、我々の状況を考えるとそれは無理に近いだろう。

では、どうするべきか？

『東へと逃げて、態勢を整えてから舞い戻る』

これが私の中では一番良いと思える。

東の地には影の親衛隊が居る。

だから、敢えて城の東側に砦を建てたのだ。

東の地に逃げれば彼等が居る。

彼等はこの状況に対応出来る筈だし、私たちにはあそこ以外に逃げる道が無い。

国外に逃げる手も一つだが、それでは他国に干渉され易いし民達の心も離れてしまう危険性もある。

しかし、それ以前に問題が幾つもある。

先ず国を治める者たちだ。

彼等が素直に首都を捨てて逃げるとは思えない。

いや、きっと我先にと逃げ出す事だろう。

それよりも気になるのは裏切り者だ。

骸骨の部下である大臣。

あの男に関しては何も聞いていない。

城に来ているとも聞いていない。

それを考えると・・・逃げた可能性もある。

一人だけ、いや家族だけ助かろうとは見下げたものだが、彼は家族を人質に取られていた。

それでも国を裏切った事に変わりはない。

だから、怖くなって逃げ出した事も責められない。

あの大臣の他にも裏切り者は恐らくいる。

そして、きっと私たちが逃げると知ればリカルド様達を内部に入れて徹底的に叩きのめす事だろう。

それは避けたい所だ。

そして第二の問題。

どちらかと言えば、こちらの方が重要な問題と言えるかもしれない。

・・・・重傷者だ。

彼等を全員、連れて東まで逃げるのは難しい。

歩けば、しかもこれだけの重傷者を連れて行くとなれば丸４、５日は掛る筈だ。

それを見す見す敵が見逃す訳が無い。

追撃をして弱い者たちから殺す事だろう。

そうなれば元も子もない。

それを阻止するなら・・・・・・重傷者を置き去りにして動ける者たちだけで逃げる。

これは出来るならやりたくない。

彼等は国の為に戦い傷ついた。

そんな彼等を見殺しにするのは、私の気持ちが許さない。

それでも、もし・・・大尉が命令すれば従うしかない。

私は騎士であり軍人だ。

騎士も軍人も自分の上官の命令を蔑ろにする事は許されない。

だが、私は重傷者を置き去りにしたくなかった。

彼等を見捨てれば、我々は自分に呪詛を吐き、後悔し、態勢を立て直す所ではなくなる。

『・・・どうするべきか』

私は自問自答したが、答えは出る事は無かった。

昼過ぎに私は休憩を取った。

中庭へと向かい、そこで煙草を取り出して銜えた。

火を点けて煙を吐きながら、ザンビアで戦う予定の骸骨達を思い浮かべた。

『骸骨は軍事経験が無い。ただ宰相という肩書を持っているから軍の総司令官に任命されただけ』

それを考えると事実上は飾り物と考えるのが妥当だ。

では誰が指揮を執るのか？

下種女以外は居ないな。

宰相である骸骨が指揮できないなら、親衛騎士団の長である下種女が指揮を執る筈だ。

だが、あの女に指揮が取れるか甚だ疑問だ。

偏見の塊でしかないあの女に従う兵たちが居るのか？

いや、この際そんな事は敢えて気にしないで考えてみる。

偏見の塊だろうが、下種女だろうが、今は戦時中だ。

そしてここは負けられない。

それを考えると従わざる得ないと言える。

だが、リカルド様には強力な騎馬隊が居る。

親衛騎士団の馬術戦闘ではとてもじゃないが、それを専門とする騎馬隊には勝てる見込みは低すぎる。

親衛騎士団と専門の騎馬隊の違いは幾つもある。

その中でも決定的に違う点を上げるなら、“人馬一体”だろう。

騎士たちも馬には愛着を寄せているが、大抵は従者が世話などを行

う。

それは騎馬隊も同じではあるが、彼等は馬を何よりも大切にすると聞くし、馬の特徴なども詳しく知っている。

そして馬に対して絶対的に信頼を寄せているかどうか。

恐らく親衛騎士団は馬は乗り物と見ているだろうが、騎馬隊は馬を友人として家族として見るだろう。

だから、それに対して馬も答える。

それが人馬一体だ。

それを考えると先ず騎馬戦では負ける。

しかし、場所は平野であるザンビア。

何も障害物が無いザンビアだと騎馬隊の力が遺憾なく発揮される。

騎馬隊を迎撃する方法は柵を作るか落とし穴を設置する、または弓矢などで攻撃する。

だが、弓兵と魔術師も前の戦いで大半を失ってしまった。

それに・・・どうもリカルド様にはその他にも強力な切り札があるような気がして仕方が無い。

根拠は無い。

だが、私の勘とでも言えば良いだろうか・・・そう告げているのだ。

ベンチに肩を預けて煙草を吸っていると、背後に気配を感じて咄嗟にベレッタをホルスターから抜いた。

撃鉄は既に起こしていた。

そして無意識に引き金に指をかけて銃口を気配のした方向に向けた。

そこに立っていたのは・・・エリーナ様だった。

彼女は私の動作に驚いて、銃口を向けられた事に恐怖した。

「・・・失礼しました」

私は平静な声を装いながらもここまで気配に怯える自分を恥じた。

狙撃手は臆病でなくてはならない。

だが、この方にまで銃口を向けてしまった。

殆ど無意識にだ。

そんな自分が怖いと感じてしまった。

「ランドルフ・・・・・・・」

エリーナ様は私の名を呼んだ。

「・・・何でしょうか」

私はベレッタを仕舞い、彼女と距離をおいて訊ねた。

そうでもしないと、今度は手で彼女に何かしそうで怖かったからだ。

「私たちは、どうなるのでしょうか？」

「・・・・・分かりません。ですが、もし、この城が落ちるような事態になったら、私は命を捨ててでも貴方様達をお守り致します」

「そんな・・・・・・・・・」

エリーナ様は命を捨てると言った私に沈痛な声を向けた。

「姫様。私は騎士であり軍人です。この身は貴方様や民達、ひいては国を護る為に存在している身」

そんな私が命を惜しんで何になろう。

私たちは国を護る為に戦うのだ。

そして貴方達を護れて死ねるならそれは本望と言える。

だが、その前に先ずは貴方達を安全な場所へと逃がす。

それが最優先だ。

「・・・こんな時にテツヤ殿が居てくれたら、とお母様は言っておりました」

「・・・・・・・」

私はこれに答えずに黙った。

サラ様は使用人たちを城から出るように促している、と言う。

「お母様は、少しでも使用人や民達に被害が及ばないようにしています」

何も出来ない女、と大尉は罵っていた。

それに対する抵抗なのだろうか？

そんな下らない事を私は考えてしまった。

そしてサラ様が呟いた言葉が頭から離れない。

テツヤ殿が居てくれたら・・・・・・

これは私も同じだ。

もし、あの方が居ればきっとプロイセン様の代わりに指揮を執る事だろう。

それが一番だ。

あの方ならきっと負けが確定した戦いでも“負けない”戦いをみせた筈だ。

エリーナ様の言葉を聞いて私は、負けない戦いをすれば良いと思った。

負けが前提な戦い。

勝つ事は出来なくても負けない戦いなら出来るかもしれない。

希望的とも言えるが、それでも僅かに思えた。

幕間：ザンビア平野の戦い（前書き）

これまたハンニバルの“カンネーの戦い”をモチーフにしました。（汗）

上手く出来たかは不明ですので、ご勘弁下さい。（涙）

幕間：ザンビア平野の戦い

サルバーナ王国の首都、ヴァエリエからさほど離れていない所にある平野ザンビア。

元は山だったが、水路を引く為に長い年月を掛けて平野に作り上げた。

その他にも先王が軍の演習場にしようと考えていたとも言われている。

だが、ここで演習が行われた事は一度も無いが。

そのザンビア平野では赤い鎧を纏った兵たちが一列に並んでいた。

サルバーナ王国の主軍である獅子頭軍団だ。

カルナン湖畔で万体の損害を被ったが、まだ3万は居る。

そしてその傍らには生き残った聖騎士団と弓兵、魔術師などがおり更に親衛騎士団も居た。

親衛騎士団は王国でも精鋭中の精鋭と謳われる騎士団だが、先王に付き従っていた騎士たちは既に戦死か病死をしており誰も参加していない。

つまり、戦を経験した事の無い騎士たちで構成されているのだ。

親衛騎士団の者たちは自信に満ち溢れていた顔つきだった。

その表情からは「我々が敵をまとめて打ち倒して見せる」という傲慢とも言える自信が見え隠れしている。

その中で一際目立つ騎士が居た。

流れるような黒髪に金色の瞳をした２０代前半から半ばの女性騎士だ。

白銀の鎧が黒髪とは対照的に神々しく輝いている。

親衛騎士団を指揮する騎士団長フィーナ・マレル。

御歳２５歳でありながら親衛騎士団の長となった彼女。

彼女の父もまた親衛騎士団の長を務めた兵だった。

その父から戦の手解きなどを教えられた彼女が総司令官であるゲンハルトに代わり指揮を執っていた。

「敵が来る前に陣形を整える！！」

兵達に大声で命令をするフィーナ。

彼女は数が多い獅子頭軍団を中央に陣を取らせ３つに別けた。

弓兵と魔術師はその後ろに配備させて後方支援にした。

聖騎士団は右翼にし、親衛騎士団は左翼に陣を取らせた。

きっと相手はこちらと同じく重装歩兵で構成されている筈。

そして弓兵と魔術師を後方にやり、自分達のような騎士を両翼に置く筈だと踏んでいた。

これは先王に付き従った父から教えられた陣形だった。

だが、戦とは常に変わる物だ。

以前の戦術や陣形が成功したからと言って、今も通用するとは限らないのだが彼女はそれを知らなかった。

『ここで反逆者どもを打ち倒せば、私は英雄として迎えられる筈だわ』

敵の首を片手に悠々と城門を潜り抜ける画が浮かび上がる。

民達は流石は親衛騎士団と我々を褒め称え無能な獅子頭軍団を乏しめる事だろう。

そして自分に歯向かった、あの小生意気な見習い騎士・・・・・・・・・・・・

自分を3度も叩き伏せた忌々しい血に飢えた狂犬に付き従った見習い騎士を剣の錆にした所で女王は何も言うまい。

『先ずはあの見習い騎士を剣の錆にして上げるわ』

それだけの功績を自分は上げる事になるのだから・・・・・・・・・・・・・・

内心で最早、勝利はこちらの物だとフィーナは思っていた。

だが、そんな傲慢で後世に名を残す馬鹿な妄想は直ぐに打ち消される事になる。

ドシンッ!!ドシンッ!!ドシンッ!!

と地面が揺れる程に巨大な音が平野のザンビアに響き、獅子頭軍団達の足元を小刻みに揺らした。

「な、何だ・・・・・・？」

一人の兵士が呟くと周りが連鎖反応を起こしたようにザワザワした。

それは親衛騎士団も同じだった。

先ず馬たちがその巨大な音に怯え始めた。

馬は極めて臆病な生き物だ。

だから、僅かな物音や気配でも怯えてしまう。

戦でもそれは同じである為、馬を連れて行く時は予め馬を物音などに慣らさせる必要がある。

聖騎士団の馬はまだ良かったが、親衛騎士団の馬は怯えて何度も騎士たちを振り落として逃げようとした。

それを抑えるのに必死だった。

「どうどうどう、落ち着け」

何度も馬に言い聞かせるが馬はそれに従おうとしない。

そしてザンビアに巨大な物音を立てる存在が姿を現わした。

「そ、そんな・・・・・そんな馬鹿な!!」

一人の兵士が叫んだ!!

甲高い声でザンビアに響き渡る。

彼が驚くのも無理は無い。

目の前には砂漠の国であるアガリスタ共和国が使役している戦象と戦車が前に居るのだから無理も無い。

更に草原の国であるクリーズ皇国の騎馬隊も居る。

それに従うように重装歩兵、槍兵、弓兵、鉄鎚兵、矛兵、騎士が従っていた。

この二つの国とは友好関係を築いていた。

過去の遺恨はあるが、もう無い筈だ。

それなのに目の前には二つの国の兵たちが居る。

「ば、馬鹿な・・・・・・・」

総司令官のゲンハルトは目の前の光景に目を疑い、嘘だ。これは夢だとうわ言のように呟き始めた。

完全に現実逃避を始めたと傍目でも解かる。

フィーナも何故、二つの国が反逆者に味方しているのか解からなかった。

だが、これは現実だと認めるしか無い。

そして陣形を変えるかどうか迷ったが、変えない方向にした。

敵が来て陣形を変えるのは自殺行為に等しい。

それに向こうは反逆者だ。

所詮は寄せ集めの軍団で先の戦いも奇襲でしかない。

正面から戦えばこちらが勝つに決まっている、と思った。

そして敵は止まった。

中央から馬に乗った男達がこちらに向かってきた。

遠目では解からないが、近くで見てこの戦いの首謀者達だと解かった。

リカルド・ウェスビー。

先王と側室の間に産まれた男子ながらも、謀反の疑いがあるとして辺境の地へと追い遣られた青年だ。

その青年がわざわざこちらに来る理由とは何だ？

フィーナは解からなかった。

そして目と鼻の先まで近付いた彼等は止まった。

「・・・・・」

フィーナはゲンハルトに近付いて、共に行きましょうと告げた。

『向こうは我々に降伏を促す筈です。しかし、ここで負けてはいけません。ここは強気に行くのです』

『う、うむ・・・・』

ゲンハルトは耳元でフィーナに忠告されて頷いた。

そして二人はリカルド達に近付いた。

「久し振りだな。ゲンハルト」

中央の馬に乗るリカルドがゲンハルトを鋭い緑色の眼差しで見た。

「・・・反逆者が」

ゲンハルトは現実逃避をあっさりと消して強気な声でリカルドを罵った。

「反逆者、か・・・確かに私は反逆者だ。だが、貴様等のように王国を蔑ろにした挙句、話し合いで解決すると言っていたのに、一回で前言を撤回し戦と喚き散らすような“子供”よりはマシだと思うが？」

リカルドの言葉にゲンハルトとフィーナは何故、それを知っているのだ？と思った。

フィーナはここである一人の男が頭に浮かんだ。

『あの傭兵が・・・やはり裏切ったか！！』

彼女の頭に浮かんだのは国外追放に処した傭兵・・・タカミ・テツヤ。

国外追放に処した彼だが、その行方は知らない。

となれば、リカルド側に最初から通じていたと考えられる。

元から謎の多い人物だから、彼女が裏切り者と考えるのも無理は無い。

「だ、黙れっ。貴様等は、我々が辺境の地へと追い遣っただけで済ませたのに恩を仇で返すような真似をしおって！！」

「ふざけるな！？」

リカルドはゲンハルトの声以上の声で押し返してきた。

「恩を仇で返すだと?我々は貴様等中央貴族たちにどれだけ煮え湯を飲まされた事か・・・・・・」

リカルドは歯軋りをしながらゲンハルトを瞳で射抜いた。

「貴様等は無理難題を地方に押し付けた上に民達には重税を敷いた。その挙句に馬車馬の如く働かせて労おうとしない」

私が反逆者なら貴様等は下種だとリカルドは断言した。

「貴族や王族が民を蔑ろにすることほど惨い事は無い。さらに貴様等は先の戦に負けた事を民達に知らせないという事をした」

それで何も知らない民達が犠牲になる。

貴様等は直ぐに逃げられるだろうが、民達は違う。

その民達に真実を教えない貴様らに我々を愚弄する権利は無い。

貴様らこそ愚弄されるのだ!!

リカルドは更に叫び続けていたが、徐に剣を抜くとゲンハルトの鼻先で止めた。

「ひ、ひぃ!!ああ!?」

ゲンハルトは悲鳴を上げて馬から転げ落ちた。

それを見たリカルドに従う者たちは薄笑いを浮かべた。

「総司令官が事もあろうに・・・馬上から転落とは情けない。さらに偏見の塊でしかない愚かな女が指揮を執るとはな」

「私を愚弄するか！！」

フィーナがリカルドを睨み据えた。

「愚弄？私は事実を言ったまでだ。貴様より優秀な戦士は“居た”筈だ。それを貴様はあろうことか追い出した。貴様ほど騎士として軍人として恥知らずな者は居ない」

きっと後世では愚かな騎士として名を残す事だろう。

父とは豪い違いだ、とリカルドは更に罵り背を向けた。

フィーナは今にでもこの男の背中を斬りたかった。

だが、それでは騎士として正道に反する。

だから、この戦で勝ったら・・・・・・斬り殺そうと決めた。

「必ず貴様を殺してやる・・・・・・・」

「やれるものならやってみろ。逆に私が貴様の首を切り落としてやる」

薄汚い傭兵と同じ言葉をリカルドは放ち、陣へと戻って行った。

そして戦鼓の叩かれる音と角笛が吹かれる音がした。

開戦の合図だ。

「良いか？ここで負ければ我々は終わりだ！？何としても勝つぞ！？」

フィーナは剣を抜いて、兵たちを激励した。

その横ではゲンハルトが怯え切った小動物のように小刻みに震えている。

フィーナは敢えてそれを見ないようにした。

リカルド達は陣に戻る直ぐに命令を放った。

彼等の後ろには既に敵が行進を始めていた。

先手必勝という事だろうが、彼等から言わせれば象の足よりも遅いことこの上ない。

余裕で迎え撃てる。

「戦象は敵中央を突破しろ。重装歩兵ならびに他の兵たちは前方に付け！！」

リカルドは兵たちに命令をすると万単位の兵たちは迅速に行動して陣を構成し始めた。

直ぐに陣形は構成された。

中央を一番貧弱と言われる槍兵が担当し、その背後を重装歩兵が担

当する。

左を鉄鎚兵が、右を矛兵が担った。

陣形は槍兵を弓なりに薄く配置した。

槍兵は青い鎧を身に纏い槍を両手で構えた。

鉄鎚兵はモーニング・スターを手に持ち片手に皮製の盾を持った。

矛兵は矛を両手で持ち兜や鎧の点検などをした。

弓なりとなった中央の両左翼には騎馬隊が配置された。

クリーズ皇国の騎馬隊とリカルド達が指揮する騎馬隊だ。

そこには戦象と戦車が配置された。

リカルドは剣を引き抜いて青く空一つない天に向かって振り降ろした。

「戦象と戦車を前に！敵を蹴散らせ！？」

戦象が猛々しく鳴いて鼻を天に向けて走り出した。

戦車が剣が付いた車輪を回しながら突撃を敢行する。

戦車に比べて戦象の速度は遅いが、それでも小さな地震のように地面を揺らすから相手にとっては恐怖を与えられる。

先ず戦車が中央に向かうと思っていたが、戦車は両翼に陣を取っていた聖騎士団と親衛騎士団に向かった。

戦車の上から弓矢が放たれる。

通常の弓とは違う“複合弓”と言われる弓矢で強力な弓矢だ。

その弓から放たれる矢は鎧を貫き、何人もの聖騎士団と親衛騎士団の命を奪い、近付けば剣の付いた車輪で馬の足を斬られた所へ槍を繰り出されて命を取られた。

続いて戦象が中央に陣を構えている獅子頭軍団に突撃した。

獅子頭軍団は迎え撃つが、人が幾ら大勢いようと象の巨大さと破壊力には負ける。

戦象が獅子頭軍団とその後方に居る弓兵、魔術師を一気に鼻と手足で踏み躙り進んでいく。

ある者は鼻で天高く舞い上がらされて地面に落ちた。

その者は内臓を地面に巻き散らす味方を赤く染めた。

またある者は巨大な足に踏まれて平らになり地面を赤く染めた。

そして乱れた陣形を直すのは簡単な物ではない。

重装歩兵の強みは陣形で構成され一糸乱れぬ攻防だ。

その陣形を乱されては強みを奪われたも同然だった。

乱れた陣形に槍兵を先頭にした歩兵が向かっていく。

「怯むな!!敵は脆弱な槍兵だ。恐れるに足りん!!」

フィーナは剣を抜いて獅子頭軍団を叱咤した。

その叱咤が功を煮やしたのか、どうかは解からない。

しかし、脆弱な槍兵は重装歩兵に蹴散らされていく。

だが、その背後には重装歩兵が存在する。

重装歩兵同士が再びぶつかり合う。

そこへ見計らったように右翼から鉄鎚兵が、左翼から矛兵が回り込んだ。

そこには蹴散らされた槍兵が混ざった。

獅子頭軍団だけが孤立してしまう!?

それを見てフィーナは急ぎ、戦車を片付けて向かおうとした。

しかし、そこへ騎馬隊が突入して来た。

戦車に続いて騎馬隊まで突入されては堪らない。

ここは・・・・・・・・・

「皆の者！迎え撃て！？」

フィーナは剣を抜き、馬の腹を蹴り上げた。

馬は蹄の音を立て、騎馬隊に向かった。

聖騎士団は右翼の騎馬隊に向かった。

だが、右翼は騎馬隊では右に出る者は居ないとされているクリーズ皇国の誇る騎馬隊。

とても勝てる相手ではない。

圧倒いう間に蹴散らされて落馬する者が続出した。

それは親衛騎士団も同じだった。

最初、如何に騎馬隊と言えどもクリーズ皇国の騎馬隊でなければ恐れるに足りないと高を括っていた。

しかし、それは大きな間違いだった。

クリーズ皇国の騎馬隊は自分達のような騎士とは違い、本当に馬と共に戦っており自分達を翻弄し始末していった。

それに恐れを成したのか親衛騎士団の何人かは敗走を始めた。

「ま、待て！誰が逃げろと命令した！？」

フィーナは大声で逃げる部下達に戻るように言ったが部下達は逃げ

ようとした。

だが、そこへ騎馬隊だけでなく戦車も背後から攻めて来て押し戻される形になった。

そして皆がやがて一堂に“集められた”。

四方八方と全てを敵に塞がれ始めた。

前方を重装歩兵と槍兵が、両翼を鉄鎚兵と矛兵が、そして後方を騎馬隊が回り込み始めた。

完璧とも言える包囲網殲滅だった。

「だ、誰か助けてくれー!?」

敵騎馬隊が間近に迫りゲンハルトが悲鳴を上げた。

『く、くそっ。私は親衛騎士団の長、フィーナ・マレルだ!!英雄と称される騎士なのに、反逆者に負ける訳には・・・・・・・・・・・・・・・!?』

フィーナは敵を斬り殺しながら何とか退路を築こうとするが出来なかった。

もう駄目か、と皆が思った時だ。

「敵を屠れ!!我らが主へ御印を届けるのだ!?」

『おぉぉぉ!?』

騎馬隊の背後から誰かの叫び声と大勢の者たちの声が聞こえてきた。

それは馬に跨った者たちだった。

黒い鎧に身を纏った彼等は剣を掲げて騎馬隊に突っ込んだ。

戦象と戦車がそれを阻止しようとしたが、弓矢の雨により身動きが取れなくなった。

特に戦象はその巨体のため俊敏な身動きが取れない。

そしてその巨体ゆえに格好の的になった。

戦象が悲鳴を上げて倒れ込む。

そこに運悪く居た戦車は紙切れのように潰れた。

戦象、戦車を葬った者達はそのまま騎馬隊に突っ込んだ。

それを騎馬隊は迎え撃たなければならなず包囲網に亀裂が入った。

更に三方から矢が飛んで来て重装歩兵、槍兵、鉄鎚隊、矛兵などの背後を貫き始めた。

それを見たリカルドは明らかに渋面を浮かべた。

「・・・どうやらまた現れたようだな」

「はい。どうなさいますか?」

「愚問。ここまで来て見す見す敵を逃がす訳にはいかん。皆の者、我等も続き奴等を殲滅するぞ！！」

リカルドは剣を抜き馬の腹を蹴ろうとした。

だが、そこへ・・・・・・・・・・・・

幾つ物の短筒が放り込まれてきた。

そして強烈な光と共に煙が周りを囲んだ。

強烈な光で馬と人は悲鳴を上げ、そこへ煙が来たから堪らない。

しかも、その煙は目から涙が出る程に強烈な臭いだった。

「ゲホッ・・・おのれ、煙幕とは小癪な真似を・・・・・・・」

リカルドは咳き込みながら敵の攻撃に憤りを感じた。

だが、彼に従う“少数精鋭部隊”は既に首都へと向かっている。

カルナン、ザンビアでの偵察を命令したらそのまま首都へ偵察しに行け、と命令したのだが、今はそれを後悔している。

『あの者たちが居れば・・・・・・・・』

そして煙が消えて目を何とか開けて見れば、そこには死体だけが残されていた。

聖騎士団、親衛騎士団、獅子頭軍団の死体が夥しい数で転がっている。

しかし、それとは別に自分に従っていた兵たちの死体も山のように転がっていた。

戦象、戦車は今の戦いで半分が無くなった。

更に騎馬隊なども大多数を失い痛い損害だ。

「・・・おのれ」

ギリッと唇を噛むリカルド。

だが、内心ではこう思っていた。

『まだこの国にもこんな力がある、か』

幕間：ザンビア平野の戦い（後書き）

この戦いでハンニバルは騎兵を巧みに利用した包囲殲滅戦術。これは現代の陸軍士官学校でも必ず教材として使われるほど完成度の高いものであるとされています。

彼が師と仰いだアレキサンダー、ピュロスも騎兵を巧みに利用しましたが、今では師匠筋よりハンニバルの方が上とされています。

この戦いで使用された騎兵はヌミディア騎兵と言い、“ガリア戦記”でもヌミディア騎兵は書かれており後のカエサルと元老院派の内戦でもヌミディア騎兵は重要な役回りを果たしました。

第三十三章：騎士として軍人として

ザンビアで行われた戦い・・・・完全な敗北とエドリアス様から私は昨夜、聞かされた。

そして驚くべき事に向こうには・・・リカルド様の方には友好国として信じていたアガリスタ共和国とクリーズ皇国の軍が居た、という事。

特にクリーズ皇国は親戚関係の筈だ。

まぁ、殆ど血縁は途絶えたに等しいだろうが、それでも親戚と言えたし友好国だ。

アガリスタ共和国も同じだ。

貿易を重ねて友好関係を築いていた。

その2つの国がどうしてリカルド様に味方したのか？

考えたが何も思い当たらない。

そしてザンビアで敗北した獅子頭軍団、聖騎士団、親衛騎士団は傷ついた身体を引き摺りながら城へと戻ってきたのが夜明け前だ。

骸骨ことゲンハルト様はうわ言のように「そんな馬鹿な・・・」と呟いていた。

フィーナ様は憮然としていたが、親衛騎士団の大半は既に気力が無

いように見えた。

彼等にとっては初めての戦場だった。

しかも、それが負けなのだから気力を失うのも仕方が無いと思えてしまう。

帰って来たゲンハルト様に味方していた大臣たちは我先にと逃げ出して行った。

ゲンハルト様が戻ってきた頃には誰も居らず貴族などもリカルド様に味方すると言い始めた。

何人かの貴族は遠縁を頼ると言い残して城から出て行った。

そして城の中は最早、もぬけの殻に等しかった。

未だに城に居るのはサラ様とエリーナ様。後は数名の使用人だけだ。

私たちはと言えば未だに戦っていないので無傷だ。

そのため私たちが“最後の砦”と言えるだろう。

だが、ここで気になる事がある。

聖騎士団の先輩からこんな話を聞いた。

『誰か知らないが、我々を助けてくれた』

一体、何者なのか？

それは先輩も気になっていたようだ。

しかし、その者たちは先輩たちを安全な場所に逃がすと姿を消したらしい。

まるで幽霊だ。

そんな事を考えながら私はこれからの事を考えてみた。

エドリアス様の推測では敵もそれなりの損害を被っている筈だ。

そしてその戦没者を埋葬するなどして時間が掛る。

それまでに何としてでも対策を考えなければならない。

だが、どうしても思い付かなかった。

それでも考えていると何時の間にか夕方になっていた。

夕食の時間になり、皆が居住区の中へ入ろうとした時にサラ様達が訪れた。

「皆さん。聞いて下さい」

サラ様は私たちを集めると、口を開いた。

「我が王国はもはや滅び去る運命にあります」

サラ様は静かな声で語り始めた。

主軍を壊滅状態に追い遣られ孤立無援。

そして重傷者も居る。

これでは戦えない。

だから、皆さんは逃げて下さい。

私は女王として、この地で死にます。

そうサラ様は告げた。

エリーナ様も王女としてここに残り最後を遂げると言った。

「嫌だ、と言ったら？」

ここで大尉がサラ様に質問をした。

「ミーシャ殿。貴方はこの国の者ではありません。命は粗末にするのは・・・・・・」

「あんたはあたしの母親か？それとも上官かい？」

いや、どちらでもない。

言わば他人。

その他人がどうして自分に命令をする。

どうして自分に命令を下せるのだろうか？

「あたしの上官はテツヤ、タカミ・テツヤ少佐だ。その少佐はこの国を護れ、とあたしに厳命した」

上官の命令は絶対。

その命令を無視するのは軍人として恥以外の何でもない。

「あんたには悪いけど、あたしはここを護るよ。仮に殺されても少佐の命を護れるなら構わない」

「俺もだ」

軍曹が大尉の言葉に続いて頷いた。

「美人の言う事は正しい。そしてそれに従うべきだ。だが、時と場合によっては従わない時もある」

そして少佐ならこう言うだろう、と付け加えた。

『女を残して逃げろ？そんな言葉はどうにもならなくなった時に言え』

「・・・・・・・・・」

サラ様は無言で言葉を聞き続けた。

「俺は旦那じゃない。それに、この国に愛国心がある訳でもない。愛国心なんて傭兵になった時点で溝の中に捨てた。だが、少佐の命

令だ。ここに残るぜ」

「私もです」

私も二人に続いた。

「ランドルフ・・・・・・」

エリーナ様が私の名を呼び見つめてきた。

「エリーナ様。私は言いましたよね？この命を捨て去ろうとも貴方達を護り抜くと」

その護るべき存在の貴方を残して私に逃げろというのは侮辱以外の何でも無い。

「貴方が残るなら私も残ります。そして貴方を護り抜きます」

エリーナ様の前まで行き、両手を包み込むようにして握り視線を合わせた。

微かに手が震えている事に気付いた。

やはり、王女とはいえまだ幼いな。

「貴方は王女としての責務を果たすと仰いました。なら私も騎士として軍人としてその責務を果たさせて頂きます」

「僕もです」

レオンが私に続いて声を出した。

「僕もこの国を護る為に残ります。親友を置いて逃げるなんて真似できません」

レオンに続いて他の兵たちも残ると言い出した。

「貴方達・・・・・・」

サラ様は私たちを見つめていたが、やがて小さく頭を下げて呟いた。

ありがとうございます・・・・・・・・・・・・

静かに礼を述べるサラ様。

それを見て何としてでも護らなければと思う。

そしてその夜・・・・・・

私とレオンは城に来ていた。

重傷者を見に行く為だ。

演習場に行くと呻き声が聞こえてくる。

それを看病する者は、私とレオン、そしてテツヤ殿と軍曹が行った売春宿の女性達だ。

どういう訳か彼女達はここに残り重傷者たちを看病していた。

誰も看病する者たちが居ないだけに有り難い。

「あら、ランドルフ君じゃない」

聞き慣れた声と淡い香りが私の鼻に付いた。

夜に溶け込むような漆黒の髪を持つオリガさんだ。

「どうもこんばんわ。オリガさん」

「こんばんわ。それで何か用？」

「どうですか？皆さんの状態は」

「やっぱり軍人ね。皆、重傷だけど動けるわ」

これなら逃げる事も出来るとオリガさんは語った。

「そうですか。ありがとうございます」

私は一礼した。

「あら、どうしてお礼を言うの？」

「オリガさん達は看病をしてくれているからです」

「そんな事でお礼は要らないわ。傷ついた男を看病するのは女の役目よ」

それにこんな人たちを置いて自分達だけ逃げるのは私の誇りが許さ

ない、とオリガさんは続けた。

「オリガさんは誇り高いんですね」

「まぁね。それはそうと、あの“骨と皮”だけの奴は何なの？」

オリガさんが親指で指す方向には・・・・・・・・・・

「どうしてだ・・・どうして・・・・・私の何が・・・・・・」

うわ言を呟いている骸骨ことゲンハルト様の姿が見えた。

それにしても骨と皮だけの奴とは・・・・・・・・・・・・

テツヤ殿と同じく辛口な方だ。

「あの方がどうしたんですか？」

そんな事を思いながら私は訊ねた。

「ここに着く前からあんな風に言ってるのよ。まぁ、ご飯は食べるんだけどね」

何があったの？とオリガさんは訊ねた。

「実は・・・・・・・」

私は素直に話した。

「なるほどね・・・・・」

オリガさんは最後まで聞いて唇に長く伸びた爪を当てていたが、やがて口を開いた。

「これは勘だけど、２つの国は恐らく完全に敵になってはいないわ」

「どういう事です？」

私は訳が解からず訊き返した。

「アガリスタ共和国もクリーズ皇国も一つの“国”として統一されているわ。だけど、私たちの国みたいに“民族”は統一されていないわ」

国としては統一されていても、民族としては統一されていない。

つまり・・・・・・・・・

「何処かの部族がリカルド様に味方をしているだけで国全体が味方した、という訳ではない」

「そういう事。元々２つの国は多数の部族が集まって構成された“多民族国家”よ」

確かにそうだ。

クリーズ皇国は元々大多数の遊牧民が存在している。

そしてそれを皇帝が支配しているだけだ。

アガリスタ共和国も同じく大多数の部族が入り混じった多民族国家。
代表者は居るが、それに従わない者も居る。
「恐らくそいつらが味方しているのよ」
その見返りとして自分達が内乱を起こした時は味方しろとでも約束を交わしたのだろう。
「それが本当なら、まだ救いはありますね」
「まぁね。だけど、それは望まない方が良いわね」
信じているから救われるという訳ではない。
それに下手にそんな考えを持っていては危険だ。
だから、敢えて考えないようにした方が良いとオリガさんは言った。
「分かりました」
「良い子ね。今夜は相手が出来ないから・・・これはお詫びよ」
チュッ
オリガさんの甘い唇が私の唇に重なった。
そして重傷者達の痛い視線が私に来る。
「・・・これだけ痛い視線を送れるなら大丈夫ですね」

「えぇ。貴方は貴方の仕事を頑張りなさい」

「はい」

私は一礼してレオンを連れて城を出た。

まだ後ろから痛い視線が来るのだが。

第三十四章：敵と帰還

私とレオンは二人で森林を進んでいた。

私とレオンは迷彩服に身を包み、武器を手に進んでいる。

二人ともＳＫＳカービンとベレッタＭ９２ＦＳだ。

ただ音がしないようにライフルスリングの鉄製の部分にはガムテープや布を巻いて音がしないように工夫している。

そして顔にはフェイス・ペイントを塗りカモフラージュも忘れない。

昨夜、砦に戻ると大尉から敵が来たと報告を受けた。

この前、銃撃戦を繰り広げた相手だと解かった。

何故、解かったのか？

相手が前に使った武器を使用したからだ。

そしてその夜から私たちは探索を始めた。

二人一組で行動を開始しているが、未だに発見できない。

私とレオンはコンビを組み敵を探すが見つからない。

私たち以外も探索しているにも関わらず見つからないのはどういう事だ？

もう逃げたのか？

有り得なくはない。

大尉の推測では恐らく偵察の者だ。

２度の戦いで負けた理由は幾つかあるが、どちらも同じ理由がある。

情報だ。

カルナン湖畔で相手は迎撃する陣と退路を断つ陣を張っていた。

先にカルナン湖畔へと行き、地形などを詳しく調べた結果だ。

それはザンビアでも同じだ。

きっとザンビアでも同じように情報収集をしたに違いない。

今度はこの首都だ。

もはや敵は居ないと考えているだろう。

だが、私たちが居る。

向こうも恐らくそれは知っているだろうが、明確な情報が欠けている。

だから、昨夜来たのだ。

そしてもう既に偵察を終えて戻っているのかもしれない。

そうなると不味い。

そのまま返せば今度も負ける。

そうなったらもうこちらに勝ち目はない。

何としてでも、帰る前に仕留めなければならない。

私はＳＫＳカービンを強く握り締めた。

暫く進んでいるとレオンが私の肩を叩いてきた。

『・・・誰かいる』

彼が指差した方角には確かに誰かが居た。

木から僅かに出ている服の袖で確認できた。

『・・・挟み打ちにする。着いたら同時に出る』

『了解』

私たちは頷いて左右に別れた。

物音を立てずに進み、挟み内が出来る距離まで近づけた。

そして・・・３・・・２・・・１・・・・

同時に茂みから出て銃口を向けた。

だが・・・・・・・・

そこに居たのは服を着た丸太だった。

こ、これは・・・・・・・・

「動くな」

頭に冷たい感覚が来た。

拳銃の銃口だと直ぐに解かった。

相手の吐息が傍で感じる事が出来たからだ。

恐らくライフルなどでは取り回しが難しいと考えて拳銃にしたのだろう。

しかし、ナイフが腰からぶら下がっていた。

『ナイフの方が殺す時には静かなのに』

そんな事を私は思いながらレオンを見た。

レオンも同じ状況だった。

「大人しく武器を捨てれば命は助けてやる」

「・・・・・・・」

私とレオンは頷き武器を捨てた。

「お利口さんだな。じゃあ、ゆっくりと振り向け」

銃口が僅かに離れた。

今だ！！

私は振り向き様に背後の人物に拳を打ち込んだ。

レオンも同じく拳を打ち込む。

相手は拳を打ち込まれて怯んで拳銃を落とした。

それを蹴って遠ざける。

その隙に地面に落ちているベレッタを拾い上げて撃とうとしたが、相手も負けじと蹴りを繰り出して私の持っていたベレッタを遠ざけた。

くそっ！！

私は組み合いをした。

相手は私たちと同じ迷彩服を着込みフェイス・ペイントをしていた。

肩には部隊を表す紋章がある。

見た事もない紋章だ。

そしてどうしてこいつらが迷彩服と銃を持っているのかも疑問だった。

しかし、今は目の前の敵を倒す事だ！！

私は相手の腹に何度も拳を打ち込んで怯ませようとしたが、相手も負けじと私の腹などに拳を打ち込んで来る。

私より重い拳で何度も胃から食べた物を戻しそうになる。

身体も僅かに浮く感じを覚えた。

だが、私はそれでも相手と組み合いを続けた。

相手の顔面に拳を打ち込み、急所を蹴り上げる。

前のめりになった相手の後頭部に肘を打ち込んだ。

相手は倒れた。

そしてレオンを見れば・・・・・・・・・

「動くな」

レオンの右頭部に銃口を押し付けて薄らと笑いを浮かべる男が居た。

くそっ。

私は動けずに立ち直った男の拳を甘んじて受け入れるしか出来なか

った。

口の中から鉄の味がして頭がクラクラした。

そこへ更に何度も蹴りと拳を打ち込まれる。

やがて意識が遠のいた。

そしてレオンもまた地面に倒れ込んだ。

く、くそっ！！

私は歯軋りをしながらも、意識を失ってしまった。

――――――――――――――――

―――

「手間取らせやがって」

ランドルフとレオンを気絶させた男二人は僅かに汗を掻きながら落とした銃を拾い上げた。

「ＳＫＳカービンとベレッタか。何者だろうな？」

「さぁな。あいつの説明ではこの国を始め、俺ら以外の奴等はこの大陸に居ないと聞いていたが」

男の相方が乱れたブーニー・ハットを被り直しながら答えた。

「あんな男の言葉は信用できねぇな。俺らが居た戦場なら“疑わしきは殺せ”だったのに・・・・・・」

「仕方ねぇよ。あいつは向こうじゃ“英雄”だ」

「何が英雄だ。一人で王女を護ったというが俺には信用できねぇ」

なおも男は続けて、気絶している二人を見下した。

「で、どうする？」

「少佐の所まで連れて行くのは無理だ。かと言ってこのままにしておいたらやがて仲間が来るだろう」

「だな。それじゃ・・・・・」

「あぁ・・・・」

二人はランドルフとレオンのベレッタＭ９２ＦＳを拾い撃鉄を起こした。

撃鉄を起こしたベレッタＭ９２ＦＳの銃口を気絶している二人の後頭部に狙いを定めた。

そして引き金に指を掛けようとした時だ。

ヒュン

空を切る鋭い音が森林に響いた。

だが、それを聞いた者は居ない。

何故ならその二人は頭を貫かれて死んでいるからだ。

1本の矢で二人の頭を貫通させたのだ。

「悪いが・・・そいつらは俺の大事な部下だ。死なせる訳にはいかない」

バタリと音を立てて地面に倒れる2つの死体に向かって鉄が錆びたような声を出しながら茂みから一人の男が姿を見せた。

迷彩服を着込み、ブーニー・ハットを被った男。

無精髭を生やした男の口には火の点いた煙草が銜えられている。

微かに甘い香りで、それを吸うとまるで女神に抱き締められた錯覚を覚えてしまう。

茂みから出てきた男の手には黒い弓が握られていた。

通常の弓矢とは違う。

それは矢も同じだ。

黒色に染められた矢だが、所々に丸い線が僅かに見えるから折り畳み式の矢だろう。

弓も矢と同じ黒色で艶やかな色を放っている。

上下の先には丸い車輪が取り付けられている。

そして本来なら弓1本に張る弦は1本の筈なのに、男が持っている弓には3本も弦が張られている。

見た事もない弓矢だ。

男の腰には黒い色に塗られた鞘に収まった鉈とナイフが1本ずつぶら下がっている。

その横にはこれまた黒い矢筒がある。

男は死体に近付いて矢を抜いた。

夥しい血が男を染めて地面を赤くする。

しかし、男は意も関せずに煙草を吸い続けていた。

「やれやれ。世話が焼ける餓鬼共だ。まぁ、こいつら相手に奮戦したから赤点は免除してやるか」

男は気絶している二人を見下しながら屈託の無い笑みを浮かべた。

そして死体を見ていたが、徐に膝を付いて死体を物色し始めた。

こういった者達は身元を確認できる品物は極力持たないようにしている。

しかし、一つだけある筈だ。

男は2つの死体の首の部分から小さな物を取り出した。

「・・・ジョージ・マックとジャック・ギリー。・・・・・・所属は“ジャー・ヘッド”か」

しかも厄介な所に所属しているな、と男は呟いた。

男の手にはシルバー色に光る物が握られていた。

ドッグ・タグと呼ばれる軍隊の認識票だ。

氏名、生年月日、性別、血液型、所属軍、認識番号、信仰する宗教等が打刻され例え原型が留めない死体だろうが、これさえあれば認識は可能だ。

何故、ドッグ・タグかと言えば犬の鑑札に似ているからだ。

それが自分達の姿を表現していると称して皮肉に名付けたのだ。

「・・・厄介な敵さんだな。やれやれ・・・面倒になったな」

ここに帰って来て見れば戦の真っ最中。

そして負けの負け続き。

しかも、その原因を分析しないで次の戦いに臨むと言う不手際とくれば呆れて物が言えない。

「まぁ、何時もの事だから良いか」

男から言わせればこんな状況は慣れっこだ。

いつも自分の赴く戦場は決まって最悪に近い状況だ。

だから、これもその内の一つと思えば何でもない。

「我が主。どうかなさいましたか？」

ガサガサと音を立てて黒い巨大な獣が姿を見せた。

２足歩行で立つ狼・・・狼人だった。

５大陸には獣人と呼ばれる者が居る。

魔物とは違い、獣でありながら人語を理解するのだ。

召喚獣とも違い、特定の主を持たずに獣同様に野山で暮らしているのが普通だ。

その獣人が煙草を吸う男を「我が主」と呼んだ。

獣人の中でも極めて誇り高いのが狼人だ。

彼等は森の王者と言われる狼の化身だけあって戦闘力から追跡能力までもがトップクラスに位置する。

何度も様々な国や組織が狼人を使役出来ないか？と考えて手を打ったが、どれもこれも無駄に終わった。

それ所か彼等を怒らせて手痛いしっぺ返しを受ける程だ。
そんな狼人が男を主と言うのだから驚きだ。
「いや。どうやら俺は・・・戦の女神に好かれているようだ」
何処へ行っても争い事に巻き込まれるからだ、と男は言った。
「それはそうでしょう。我が主は私を始め、大勢の者たちから好かれております故に」
戦の女神に好かれても当然だ、と狼人は続けた。
「その女神が筋肉質のゴリラみたいな女ではなく美人である事を願うばかりだ」
そんな男の言葉に狼人は声を上げて笑い、死体をどうなさいますか？と訊いた。
「お前が処理しろ」
下手に残すと碌な目に遭わない、と男は言った。
「では地面深くに埋めましょう」
「口から涎を垂らして言うなよ。説得力に欠けるぞ」
狼人は口から出ている涎を指摘されて慌てて黒い体毛の生えた丸太のような腕で拭き取った。

そんな仕草が実に人間臭く見える。

「それを処理し終えたら来い。俺の臭いは解かるだろ？」

「勿論です。我が主」

何せ貴方様の身体からは女神の匂いがするのですから、と狼人は続けた。

「女神、ね・・・まぁ、そうだろうな」

男は僅かに沈黙していたが、やがて肩を竦めて弓を肩に掛けると気絶している二人の襟首を掴んで引き摺り始めた。

その背中を狼人は黙ってみていたが、直ぐに視線を二つの死体に向けた。

「美味そうだな・・・・・・だけど、主の命だ。我慢して埋めよう」

自分に言い聞かせるように言って狼人は地面を掘り出した。

その姿は狼というより犬に見えた。

第三十五章：新たなる仲間（前書き）

えー、大変申し訳ありません。

この度、手違いで第３５章を消してしまいました。（涙）

お陰で最初から書き直す事になり、まったく違うと思います。

大変、本当に申し訳ありません！！（大涙）

それと、ここでリクエストがありましたので、「メタル・ギア」の名言を載せておきます。

第三十五章：新たなる仲間

私とレオンは額に冷たい感覚を覚えて目を覚ました。

「こ、ここは・・・・」

私は自分がベッドの上で寝ていたと知って、辺りを見回した。

そこは住み慣れた居住区の中だった。

「ランドルフ君。ここって居住区の中、だよね？」

レオンが起き上り私に確認するように訊ねてきた。

「うん。だけど、私たちって敵と戦って・・・・」

「負けたんだ」

レオンが私の言葉を引き継いだ。

そう・・・私とレオンは敵と戦い気絶したんだ。

それなのにどうして、こんな所に居るんだろう？

私が敵なら間違いなく気絶させた後は直ぐに殺している。

いや、殺しはしなくても暫くは動けないように縄で縛ったりするのに、一体どうしてここに居るのか？

考えてみて思い付いた答えは大尉達が助けてくれた、という答えだった。

急いで部屋から出ようとしたら、勝手にドアが開いた。

「よぉ、目が覚めたか？お二人さん」

部屋の中に嗅ぎ慣れた煙草の臭いが広がってきた。

・・・女神の抱擁。

この煙草を吸うのは私とレオン、そして・・・・・・・・・

『テツヤ殿！！』

私とレオンはドアを開けて中に入ってきた男性・・・テツヤ殿の名を呼んだ。

暫く会っていなかったが、テツヤ殿は変わっておらず元気そうだった。

服装は迷彩服にブーニー・ハットだった。

変わった所と言えば、髭が生えた位だ。

それも手入れをしていない無精髭。

それが豪く様になっている。

「相変わらず世話を焼かせるな」

「あの、ということはテツヤ殿があの二人を・・・・・・」

「あぁ。始末した」

こいつで、とテツヤ殿は右手に持った黒い弓矢を見せた。

弓矢なのだが、弦が3本もあるという変わった弓矢だ。

「それは何と言う弓矢ですか？」

「“コンバット・ボウ”という弓矢で折り畳みが可能な弓矢だ」

「何でライフルではなくそれを？」

テツヤ殿が使用しているＡＫＭやコルトはサプレッサーを取り付ける事が出来ないのか？

「こいつの方が音を最小限に抑える事が出来るからだ」

音を小さく抑えるサプレッサーなどは使えば使うほどその効力が無くなるらしい。

それに音を小さくしたと言っても実際はかなり大きな音だ。

テツヤ殿が言うには私たちを見つけたのは良いが、他に敵の仲間が居る事も考えたらしい。

それで最小限な音しか出ない弓矢を使用したと説明してくれた。

「それにこいつの鏃は爆薬を仕込んだ矢も使用できる」

ライフルなどでそういった物を使用するならグレネードランチャーなどを取り付けるか、もしくは銃口にそれを取り付けて撃つ“ライフルグレネード”しかない。

だが、このコンバット・ボウは鏃を交換するだけでそれが可能になる。

「便利な物ですね」

「まぁな。それはそうと・・・・“待たせたな”」

テツヤ殿は女神の抱擁を銜えながら私たちに帰還した事を伝えた。

私は思わず涙ぐんだ。

テツヤ殿が国外追放にされた日からどれ位経ったのだろう？

長くはないが、私にとってはとても長い時間に感じた。

しかし、こうしてテツヤ殿は私たちの前に返って来てくれた。

それを思うとどうしても涙が溢れてきそうだった。

「泣くなよ？男の涙なんて見ても嬉しくない」

相変わらず毒舌な方だと思いつつも、テツヤ殿らしいと思う。

私は涙ぐんだ瞳を抑えてレオンと共に立ち上がり敬礼をした。

『お帰りなさい。テツヤ少佐』

声を揃えてテツヤ殿・・・少佐の帰還を祝った。

「あぁ。さぁ、外に出ろ」

会わせたい奴が居る、と少佐は言った。

会わせたい奴？

一体誰だろう？

私とレオンは首を傾げながらも少佐の後を追い、外に出た。

外に出ると既に大尉達は一列に並んでいた。

そして私たちに速く並べと言ってきた。

急いで列の中に入った。

大尉が一歩前に出て少佐に敬礼をした。

「テツヤ少佐。お帰りなさいませ」

『お帰りなさいませ。少佐』

皆が敬礼をして少佐の帰還を祝う言葉を述べた。

私たちは先ほどやったが、二度目をやった。

少佐も敬礼を返してただいま、と述べた。

「俺が留守の間に大変な事になっていたらしいな？」

「はい。説明すると長くなるので省略してお答えします」

大尉は敬礼を解いて、一言だけ述べた。

大敗中です。

幾ら説明すると長くても、一言だけでこう説明されても困る。

だが、そこは少佐。

その一言だけで解かったようだ。

「そうか。まぁ、それは解かっていた」

「あの、どうして解かっていたんですか？」

私は気になって少佐に質問をした。

「簡単だ。仲間から報告を受けていたからな」

仲間？

というと・・・・・・・・・・

「先ほど会わせたい奴が居る、と言っていた方ですか？」

「そいつも居る。だが、別な奴だ」

その方達はカルナン、ザンビアで獅子頭軍団達を助けたという。

「では、あの方たちは少佐の」

「あぁ。本当は俺も行きたかったんだが、周りが止めてな」

傷が完治したばかりで動くのは駄目だと言われたらしい。

「怪我をしたんですか？」

「あぁ。少し“犬に爪で切り裂かれた”」

犬？

切り裂かれた？

私たちは首を傾げた。

そこへ・・・・・・・

「我が主。私は犬ではありませんっ」

太い声でテツヤ殿に文句を言う人物・・・いや動物が出てきた。

がっちりとした体格だが、２本の足の膝は少し曲がっている。

身体全体を黒い体毛が覆っている。

両手足からは鋭く研ぎ澄まされた鋭利なナイフを連想させる爪が見える。

顔は前に向いて長く、これまた鋭く尖った犬歯が見える。

ぜんぶ犬歯だ。

そして極めつけに頭に耳が2つに尻に尻尾がある。

こ、これは・・・・・・・・・・・・

「・・・・・獣人」

私は目の前に現れた者の名を口にした。

獣人。

読んで字の如く、獣の人だ。

正確に言えば獣が2足歩行で歩き、言語を話せる獣の化身だ。

サルバーナ王国を始め、獣人は多く生存している。

しかし、獣人達は人間より獣と一緒に暮らす事が多くその姿を見た者は殆ど居ない。

そして目の前に居る獣人は獣の中でもトップ・クラスに位置する狼人。

狼人とは狼の化身で森の王とも渾名されている。
とても誇り高く誰にも膝を屈しない。
まさに王と言う名が相応しい。
それ以外にも王としての実力は極めて高い。
五体全てが優れているが、中でも優れているのがどんな微かな臭いでも感知する事が出来る嗅覚と獲物を何処までも追いかけられる体力だ。
噂では1週間も休まずに獲物を追えるとも聞いている。
戦闘能力に置いても半端ではない。
その鋭い爪で鉄の鎧もバターのように切り裂く事が出来るし、牙は丸太も噛み砕くという。
出来るなら戦いたくはない相手だ。
その狼人がテツヤ殿を“我が主”と言っている。
我が主・・・つまり・・・・・・・・・・
「少佐の仲間とは、もしかして・・・・・・・・・」
「あぁ。こいつだ。名は“ガルム”という」
ガルム挨拶をしろ、と少佐は命令した。

ガルムは一礼して私たちに向き直った。

「狼人のガルムだ。我が主、タカミ・テツヤ様の忠実なる下僕にして第一の部下だ」

宜しく頼む、とガルムは挨拶をした。

そして私とレオンを見つめてきた。

金色の瞳は正しく王者の証に思える程に誇り高く威厳に満ち溢れていた。

「主らか。あの者達と戦ったのは」

あの者達とは、少佐が殺した敵の事だろう。

「は、はい」

私とレオンは緊張しながらも頷いた。

「我が主が助けなければ、主らは死んでいた。主に感謝しろよ?」

「あ、はい・・・・・」

別にそんな事を言われなくても感謝するのだが、狼人に言われて私たちは頷いた。

そして少佐にどうやって狼人を仲間に出来たのか訊ねた。

狼人は決して人に従わないと聞いていたからだ。

「我が負けたからだ」

狼人ことガルムが私の質問に答えた。

「我が主と会ったのは東の地だ」

「・・・ヴァイガーですか」

「あぁ。本来、狼人も普通の狼と同じく群れで行動を取る。だが、我は逸れ者でな。当てもなく旅をしていたのだが偶々来たのだ」

そこへ少佐と“美味しそうな女性”を発見したらしい。

その言葉に私はこの“美味しそう”とは変な意味ではなく純粋に食べ物として“美味しそう”だ、と思った。

現にガルムの口からは涎がダラダラと零れ落ちている。

「おい、ガルム。お前は赤ん坊か？人前で涎を垂らすなとあれほど言っているだろ」

少佐は呆れながらもガルムの口元をハンカチで拭ってやった。

「すいません・・・・・・・」

ガルムは頭の上に付いた耳と尻尾を垂れ下げた。

うわぁ・・・本当にあんな事をやるなんて・・・・・・・・・・・

『犬みたい』

と私たちは心の中で思った。

「それでこいつから護る為に俺は戦った」

死ぬ思いだった、と少佐は語った。

「そりゃ主は言い方が悪いですけど・・・・“不味そう”だったので・・・・・・・」

まぁ、確かに不味そうな感じはする。

などと私は思った。

「悪かったな。まぁ、それで何とか俺が勝ってな」

それで“飼い犬”にしたようだ。

「我が主。私は狼です。断じて、あのような“大飯喰らいで役立たず”の犬と一緒には・・・・・」

「大飯喰らいは当たっているだろ?」

「うっ・・・・・」

ガルムは何とも言えずに黙った。

「それにお前、俺に言ったよな?」

“犬でも何でもなるからどうぞ貴方の下僕にして下さい”

何だか傍から聞いたらとんでもない言葉だ。

「そ、それは・・・・・・・」

「だったら、チンケな事で一々怒るな。解かったか？」

「・・・はい」

耳と尻尾を垂れ下げたままガルムは頷いた。

「それはそうと、ガルム。死体は処理したのか？」

「勿論です。決して、“摘み食い”はしておりませんぞ」

「別にそこまで訊いてないぞ。その口ぶりから察するに・・・摘み食いをしたな？」

ガルムは首を大きく振り、していない、と言った。

「どうだかな。この前なんて俺が来るまで骨までしゃぶっていただろ？」

「あ、あれは、あれです。今回はしておりません」

「まぁ、そういう事にしておいてやる」

少佐の言葉にガルムは、耳と尻尾を垂れ下げて落ち込んだ。

うわぁ・・・こんな図体であんな事をするなんて・・・・・・・・・・・・・・・

『似合わない』

私たちは心の中で同時に思った。

これが私とガルムの初めての出会いだった。

第三十六章：最高の猟犬

青天の霹靂を書き続けていた私はここで妻と共に戦場を駆け巡ったガルムを思い出した。

ガルム・・・北欧神話に出てくる魔犬にして「猟犬の中でも最高の猟犬」と言われる程の実力を誇っていた。

これの他にもう一つ名前がある。

徹夜様がかつて短い間だが、相棒をした事のある男・・・猟犬だ。

名前は知らないが、ガルムの真名はこの男の名が付けられた、と聞いている。

猟犬の中でも最高の猟犬と言われたガルムだが、まさしくその通りだ。

最高の猟犬だ。

彼は私と妻と共に狙撃の任務を幾つもこなした。

私が狙撃を、妻が観測を、そしてガルムが通信手兼護衛だ。

これが狙撃では最高の形とされている。

狙撃手は単独で行う任務も多いが、私は3人で行う任務がとても良かったと思っている。

3人なら心強いし、精神的にも安定した。

敵でもあった私の妻は主に単独での任務をやらされていたと聞いている。

向こうでは狙撃手は「卑怯者であり疫病神であり消耗品」として見られていた。

だが、私の場合は「味方を援護し殿を務める守り神」として扱われた。

そして現在でも狙撃手はサルバーナ王国では重要視されている。

これが決定打の一つに数えられるだろう。

5大陸統一後、ガルムは私と共に中将へと昇格し軍の育成に力を注ぎ徹夜様が崩御した日に殉死して後を追った。

誇り高い彼だから徹夜様の護衛をする為に後を追ったのだろう。

私ももう直ぐ君の元へ妻たちを連れて行く。

それまでは徹夜様を護っていてくれ。

私は心の中でかつて戦場を駆けた戦友に告げて史記を再び書き始めた。

少佐が戻って来てから1日が経過した。

その日から私達は目も回るように働いていた。

「速くその柵を組み立てろ！！」

「おい、それは慎重に埋めろよ！！」

大尉と軍曹が声を張り上げて私たちに命令を下している。

砦の前に馬の侵入を防ぐ馬防柵を作り上げた。

リカルド様は騎馬隊を所有している。

クリーズ皇国の騎馬隊とアガリスタ共和国の戦車までである。

だが、この馬防柵を建てれば少なからず進軍は阻止できる。

これを2重3重に構えて効果を更に上げるのだ。

戦象については狙撃などで対応する。

そして馬防柵の他にも落とし穴を掘り、更に“地雷”も設置した。

通称、“悪魔の兵器”と言われる地雷は人か物がそこを踏んで離れたら爆発する兵器だ。

何で悪魔の兵器などと言われるのかと言えば、長い年月が経っても壊れない事だ。

そのため“完全な兵”とも言われるが、傍から見れば何年も地中深くそんな物が埋まっていれば恐ろしい事この上ない。

しかも爆発するので扱いは慎重だ。

慎重に敵が来るであろう進路に設置した。

更に木の杭に穴を開けて“銃眼”を作った。

ここから狙撃などをするのだ。

これで相手を食い止めてサラ様達を逃がす算段だ。

それらを皆に命令して少佐は城へと向かった。

プロイセン様達を見舞う為だ。

それにはリーザ中尉も同行している。

リーザ中尉は少佐を愛している。

だから、また挨拶も無しに消えてしまうのが怖いのだ。

そのため付いて行ったのだろう。

だが、何となく私は嫌な予感がした。

城には確か・・・・・・・・・・・・

『下種女が居るな』

あの女の事だ。

この戦が負けたのは少佐のせいだと支離滅裂な言葉を言って斬り掛る事だろう。

ガルムの話では「我が主は傷ついている」と言っていた。

昨夜も傷を負っていたと発言をしていた。

その傷はガルムが付けたらしい。

何でもガルムと戦った時に受けた傷らしい。

獣人の攻撃力は計り知れない。

まともに喰らえば一撃で死んでしまうし、仮に助かっても重傷だと思う。

少佐自身も死ぬ思いをした、と言っていたからよほど重傷に違いない。

それなのにそんな素振りを見せていなかった。

それを考えると私は何だか落ち付かなくなった。

そして私の作業が終わると私は大尉に城に行きたいと伝えた。

「大人にしてくれた女性に会いに行くのかい？」

大尉は少佐が帰ってきた事もあり、余裕をみせた口調で言ってきた。

「違いますよ。少佐が心配なんです」

「ガルムに傷つけられたからかい？」

「はい」

私の言葉を聞いても大尉は何処か余裕だった。

「少佐ならもう傷は回復していると思うよ？」

「どうしてそんな事が言えるんですか？」

「前に少佐の傷を見た事があるんだ」

何でも砲弾の破片が腹を突き破り、死ぬ事が予想されていたらしい。

所が翌日で動けるという驚異的な回復を見せたのだ。

「本人も言ってたね」

どう言う訳か自分はどんな傷でも回復が早い、と言っていたらしい。

「そのお陰とでも言えば良いのかな？向こうじゃ不死身の王とか生態化物、人間破壊兵器なんて渾名を頂戴したんだ」

どれもこれも碌でもない渾名ばかりだ。

まぁ、狼人を下僕にしたのだからそれらの渾名に頷けなくもない。

だが、私はどうしても行きたいと言った。

「分かったよ。それじゃレオンも連れて行きな」

「ありがとうございます」

私は大尉に礼を述べてレオンを伴い城へと向かった。

馬に跨り城下街を駆けるが、前のような活気は見えない。

やはり人が少ない事も影響しているだろう。

特に商人や露店を開いていた者たちは城に着くまで1度も見なかった。

城に着いた私とレオンは急いで馬から降りて中へと入った。

少佐はプロイセン様の元へ行っていると聞いている。

そこへ急ぐと・・・・・・・・・

「この犬が!!」

剣を抜いた下種女が少佐に斬り掛る所だった。

そこには重傷者とオリガさん達も居たが、構わず剣を抜く下種女。

やっぱりこうなるか!!

私とレオンはベレッタを抜いて構えようとした。

しかし、少佐は私たちを見て軽く笑った。

「傷が治った所だ。少しウォーミング・アップの相手としてやる」

少佐は振り降ろされた剣を避けると、下種女の喉に手刀を打ち込んで怯んだ所へ平手打ちを何度も喰らわした。

しかも手加減無しというから堪らない。

５発・・・１０発と回を重ねたが、１０発で終わった。

普通と言うか以前ならあれで終わった筈だが、下種女はまだ諦めた様子を見せない。

「この・・・裏切り者が!!」

「俺が裏切ったという確たる証拠はあるのか?」

少佐は呆れた眼差しを下種女に向けていた。

確かに、確固たる証拠は無い。

それで裏切り者と断言するのは甚だ迷惑であり、早過ぎるとしか言えない。

「黙れ!!我が親衛騎士団が、あんな惨めな敗北をしたのは貴様のせいだ!?」

「・・・・・・」

少佐の表情が無表情に変化した。

そして纏う空気も冷たくなった。

まるで大尉だ。

だが、私には大尉以上に冷たく感じた。

下種女は渾身の力を振り絞るように剣を振り上げたが、そこで終わりだ。

少佐はそれより速く距離を縮めるや否や下種女の腹に拳を打ち込んだ。

鎧を着ているのに、下種女は遠くへと飛ばされて倒れた。

「・・・好い加減にしろ。いつまで現実を逃避している積りだ」

私とレオンは急いで少佐に近付いて下種女を見たが気絶していた。

「気絶しています」

「そいつを縛り上げて何処かの部屋にでも放り込んでおけ。負傷者に迷惑だ」

自分もこんな所で戦ったではないか、と私は思うがそれ以上に悪いのはこの女だ。

だから、直ぐに縄で縛り上げて近くの部屋に放り込んだ。

「あら、ランドルフ君にレオン君。いらっしゃい」

オリガさんは私とレオンを見て微笑んだ。

「どうも」

私はオリガさんに挨拶をしてレオンは“初めて”をもらってくれた女性に挨拶をした。

「何だ。お前等、卒業したのか？」

少佐はここで敢えて“童貞”という些か品の無い言葉は使わなかった。

それは有り難い。

「えぇ・・・まぁ・・・・・」

「はい・・・・・」

私とレオンは何とも言えずに黙った。

それを少佐は面白そうに見ている。

それは重傷者も同じだった。

ああ、何だか来ない方が良かったかな？

と私は思った。

「所で傭兵さん。貴方テツヤという名前かしら？」

オリガさんが少佐に名前を訊ねた。

「あぁ。そうだ。そういうあんたはミレーネの言っていた妹分のオリガか」

「えぇ。ミレーネ姉は元気？」

「あぁ。元気だ。それとお前さんに伝言を頼まれていた」

もう直ぐまた会えるわ。それまで身体には気をつけなさい。

「・・・やっぱりミレーネ姉は女神ね。私を気遣ってくれるんだから」

「あぁ。本当に“良い女であり男を良い道へと導く”存在だ」

少佐は何やら意味深気な言葉を投げた。

「あの、少佐。そのミレーネと言う方は一体・・・・・・・」

リーザ中尉が少佐に訊ねた。

うわぁ、そう言えばリーザ中尉にも相手が娼婦って言わなかったんだ。

しかも少佐に好意を抱いている。

それを考えると不味い所へ来たな、と私は思ってしまった。

「俺と共にここを出た連れだ。まぁ、今は“あいつ”と一緒に留守を守っているが」

「あいつ・・・誰ですか？」

「それはまだ言えない。だが、俺らの味方だ」

「そういう事じゃなくて、少佐とはどういう関係ですか？」

「どういう関係と言われると困るな」

何となく私とレオンはそれを聞いて理解した。

しかし、下手に口は挟まない方が良いから口を閉じた。

それは他の皆も同じだった。

「リーシャ。テツヤを困らせるな」

そこへプロイセン様が身体を起こして娘であるリーザ中尉を軽く叱った。

「でも、父上・・・・・・・」

リーザ中尉が何か言う前にプロイセン様は少佐にリーザ中尉の気持ちを伝えた。

「テツヤよ。リーシャはお前に好意を抱いている。ゆくゆくはお前と夫婦にさせたかったんだ」

その気持ちは今でもあるから、相手が誰なのか気になっていると付け足した。

「俺と？馬鹿言うなよ。俺と夫婦なんてやってみろ三日と言わず５分で離婚だ」

「そんな物は分からんだろ？それはそうと、どうだ？テツヤよ。リーシャを妻にしてくれんか？」

「こんな時に言う事じゃないだろ」

少佐は呆れながら煙草を銜えた。

「そう言うな。それで返事はどうだ？」

他に好きな女が居るならそれでも良い、とプロイセン様は続けた。

どうやら本気で少佐をリーザ中尉の夫にしたいようだ。

「まぁ・・・考えておく」

少佐はジッポで煙草に火を点けながら答えた。

私には何となくだが、一先ず保留という形にするようにしか見えなかった。

「まぁ突然だから仕方無いな。リーシャよ。お前も良いな？」

「はい。でも、テツヤ様。私は例え、貴方に好きな女性が居ようと妻になりたいと思っております」

それだけは分かって下さい、とリーザ中尉は言った。

「分かった。それじゃ帰るか」

帰るぞ、と私たちは言われてベレッタを仕舞い、皆に一礼して少佐に付いて行った。

第三十七章：少数精鋭の正体（前書き）

まぁ、ある程度の方は徹夜の発言で何となく敵の正体に解かった、と思いますが一応は解からなかった、と思って置いて下さい。（汗）

第三十七章：少数精鋭の正体

私とレオンいやチャレンジャー、そして少佐とリーザ中尉の４人は茂みの中からリカルド様達の様子を遠くから覗いていた。

現在、私たちはリカルド様たちが進軍している所を偵察しに来ていた。

私とチャレンジャーは初めての偵察任務に些か緊張していたが、少佐が傍に居ると自然と落ち着いて訓練通りに動けた。

なぜ偵察をしているかと言えば相手の戦力や経路などを調べる為だ。

それを調べるか調べないかで大きく戦況に影響する。

それを2度も情報収集をしなかったが、今回はちゃんとしている。

失敗からは多くの事を学べると母は言っていたが、正しくその通りだ。

「戦象、戦車、騎馬隊、槍隊、矛隊、鉄鎚隊、弓隊、弩隊・・・随分と揃えているな」

少佐は双眼鏡でリカルド様達の軍勢を覗きながら戦力を言い続けた。

流石に2度も連続で勝っただけの事はある、と少佐は言いながら私とレオンを倒した相手が居ないか探し始めた。

少佐の勘では恐らくその相手は少佐がザンビアで骸骨達を逃がした

から、恐らくリカルド様は警戒して彼等を呼び戻したと予想した。
まだ相手がどんな者か分からない。
少佐はそれを知っているが、まだ教えてくれないから後で訊こうと思う。

「・・・見つけた」

少佐は静かに呟いた。
私たちも少佐の覗いている方角を見た。
ブーニー・ハットに迷彩服を着込んでいる彼等はリカルド様達とは少し離れて行動していた。
顔にはフェイス・ペイントを塗っていた。
武器は軍曹が使用しているコルトＭ７２７だろうか？
見た目は同じだが、違う物かもしれない。
人数は大体４０名という所だろうか？
だが、あれだけが人数とは思えない。
きっと何処かに隠れている筈だとも思い、周囲を警戒した。

「コルトＸＭ１７７Ｅ２、Ｍ１４、イサカＭ３７、Ｍ２０３グレネードランチャー、Ｍ６０Ｅ３、Ｍ７２ＬＡＷ、イングラムＭ１０・・

・・・中々の装備だな」

少佐は相手の装備などを言い、チャレンジャーはそれをメモした。

暫くは偵察を続けていたが、少佐は双眼鏡を離して私たちに言った。

「引き上げだ。長くいると気付かれる」

少佐は双眼鏡を仕舞い、ＡＫＭアサルトライフルを持つと静かに下がり始めた。

私たちも急いでその場を離れた。

もちろん来た道とは違う道を選んでだ。

「少佐。私とチャレンジャーを倒した相手は誰なんですか？」

私は帰り道、少佐に気になった事を訊ねた。

「あいつ等はアメリカ合衆国の海兵隊だ」

「海兵隊というと通称“殴り込み部隊”ですか」

あぁ、と少佐は頷いた。

「１等兵。その海兵隊とはどんな物なんですか？」

チャレンジャーが私に質問をした。

私はそれに答えてチャレンジャーは納得した。

「だが、あいつらはただの海兵隊じゃない」

「と言うと？」

「海兵隊には幾つかの種類がある」

その規模の大きさなどで種類があるらしい。

そして彼等は・・・・・・・・・

「海兵隊の中でも最小規模の部隊であるＭ．Ｅ．Ｕに所属している・・・・・・」

Ｆｏｒｃｅ　Ｒｅｃｏｎ――フォース・リーコン。

少佐の居た国の言葉に訳すなら“強行武装偵察部隊”だ。

主な任務として強行偵察、重要人物の監視、味方の上陸支援、船舶からの奇襲、敵基地の破壊、人質救出などおよそ偵察部隊とは思えない任務もあるらしい。

少佐と大尉が所属していた空挺部隊と同じく緊急展開即応部隊として重宝されているようだ。

だが、空挺部隊と決定的に違う所がある。

空挺部隊の装備が軽量を旨としているため装備が貧弱だが、こちらは艦艇で移動する事が多い為に重武装で望める利点がある。

その海兵隊の中でも更に精鋭を選り抜いて構成されたのが、フォース・リーコンだと言う。

傍から見れば立派な特殊部隊なのだが・・・・・・

「海兵隊はこれを特殊部隊として認めていない」

「どうしてですか？」

「海兵隊のモットーは“誇り高き少数精鋭”だ」

それ以外にも何個かあるらしいが。

そしてそのモットーの下、独自の万能部隊思想に基づいた「精鋭部隊」であるという強い自負心があるという。

それから「特殊部隊」という存在を害悪とすら考えている点があるらしい。

「まぁ、俺から言わせれば糞以下のプライドの問題だろうな」

少佐はそう言い切った。

「恐らくカルナン、ザンビアで情報収集をしたのは奴らだ」

リカルド様達より先に赴き陣地を確保するほか情報を収集して味方を勝利へと導いたのだ。

そしてこの前の件も全て彼等の行動だとも少佐は言った。

「厄介な相手だ。俺らと同じく近代兵器を持ち、更に戦闘力も高い」

下手に大人数で来られるより遥かに強敵だと少佐は語った。

「少佐は戦った事があるのですか？」

「4、5回はある」

戦場以外つまり街で戦った事があるらしい。

「殴り込み部隊と言われる通り荒っぽい連中が五万と居る。まぁ、全てがそうだとは言わないが俺が会った奴等はみな荒っぽくて俺なんかより“血に飢えた狂犬”に見えた」

少佐にしてこんな言葉を言わせるとは・・・・・・・・・・

「どういう経緯で戦ったんですか？」

「ただ酒を飲んでいた時に絡んできただけだ」

それ以外だと馴染みの女を取られた腹いせ、人種差別など碌な理由が無い。

これを聞くと、どうやっても荒っぽい連中としか思えないが、双眼鏡で覗く限り皆・・・誇り高き少数精鋭だった。

とてもじゃないが、血に飢えた狂犬には見えない。

そして彼等を相手にすると考えると些か怖いと言う気持ちが出てくる。

「そんな奴等を相手にお前等は奮闘したんだ。満点はやれないが赤点でもない」

中途半端な点は俺の世界には無い。

だが、敢えて点数を付けるならそれしかないと少佐は言った。

褒めてるんだか貶してるんだか分からない。

まぁ、褒め言葉として受け取っておこう。

しかし、解せない。

どうして彼等がこの世界に居るのか？

それを少佐に聞けば「俺が解かる訳ないだろ」とぶっきら棒に言われてしまったが、確かにその通りだと思う。

少佐自身も訳も解からずこの世界に送り込まれたのだから理由など解かる訳が無い。

ただ一つだけ断言できる事は彼等が敵であり、私はそれを打ち倒すという事実だけだ。

そんな事を思いながら砦へと戻った私たちをまた新たな人物と出会った。

「お帰りなさいませ。我が王」

年齢は少佐より僅かに上に見えるが髭などを生やしてそれ以上の年齢に見えてしまう。

声は太くてまるで熊のような声だった。

着ている黒い鎧には小さな傷痕が幾つも見られる。

腰には巨大な剣がぶら下がっていた。

髪は黒髪で瞳の色は赤が混ざった焦げ茶色だ。

「よぉ、来たか。ヴィルヘルム」

「はい。“シュヴァルツフント騎士団団長、ヴィルヘルム・ブリュッヘル。ただ今、帰還しました」

黒髪の騎士、ヴィルヘルムは太い声を更に太くさせた声で少佐に挨拶をした。

「ランドルフ達には紹介がまだだったが、ここで紹介する。俺の仲間になったヴィルヘルムだ」

少佐はヴィルヘルムを私たちの前に出して紹介した。

「よう。俺はヴィルヘルム。シュヴァルツフント通称“黒犬”騎士団の団長を務める。一応、元は・・・・・・・・」

「サルバーナ王国で“撃剣騎士団長”を務めた中央伯爵」

リーザ中尉がヴィルヘルムを見ながら言った。

「おや、俺を知っているのかい？」

「えぇ。貴方様の事は父、プロイセンから聞いておりました」

「プロイセン将軍閣下の？という事は君が愛娘のリーザか。亡き母君に似て美しいね」

ヴィルヘルムはリーザ中尉を見ながらゴッツイ顔を柔らかくした。

だが・・・お世辞にも褒められるような顔ではない。

寧ろ幼子が見たら泣き出すような顔だ。

「あの、中尉。撃剣騎士団とは・・・・・・・」

私は敢えてその顔を見ないようにリーザ中尉に質問をした。

「先王、ガルバー様が選り抜きの剣士を集めて作り上げた騎士団さ」

ヴィルヘルムが私の質問に答え始めた。

笑みは浮かべていないから助かった。

撃剣騎士団とは何でも親衛騎士団、聖騎士団以外に新たなる３つ目の騎士団を作ろうと先王は考えたらしい。

そこで選り抜きの剣士たちを集めて作られたのが撃剣騎士団らしい。

「俺はそこで伯爵と言う事もあって団長を務めたんだが、いかんせ

ん先王は戦好きだが世辞にも采配は余り宜しくなかった」

勝てる戦でなら良い采配を振るうが、勝てない戦だともう全滅するような采配を振るったらしい。

「それを俺は進言したんだが、俺は伯爵の地位は剥奪されて国外追放をされた」

王の怒りを買ったのか・・・・・・

正しい事を進言したのに、こんな目に遭わされるとは酷い話だ。

「その揚句に部下達も被害を受けて職を失った」

そのため元部下達を率いて撃剣騎士団を改めてシュヴァルツフント――黒犬騎士団、と名を変えて傭兵として活動を始めたらしい。

「テツヤ様とは会って間もないんだが、狼人と戦っている所を見て思ったんだ」

この男に従ってみたい、と。

「まぁ、言うなれば一目惚れだ」

男が男に一目惚れなど考えたくもない。

だが、それが戦士としての感覚なのだろう。

そして現在の状況を知り駆け付けたらしい。

「国を追われた身だが、国の存亡を見て見ぬ振りをするほど俺は薄情じゃない」

だから、危機に陥った獅子頭軍団達を助けたのだと言う。

「では、カルナン、ザンビアで助けたのは」

「俺らだ。まぁ、そのまま城に行っても良かったんだが、まだあの骨と皮の宰相が居るだろ？」

この方の言っている人物はゲンハルト様だ、と私は確信した。

あんな脂肪の欠片も無い身体を持っている者はあの男しか居ないからだ。

それに私は頷いた。

「あいつとは仲が悪くてな。まぁ、あいつ自身、軍人になれなかった事も理由の一つだろうが」

え？あの戦嫌いで有名な骸骨が軍人を目指していた！？

信じられないと私を含めた者たちはヴィルヘルム元伯爵を見た。

「信じられないだろうが、あいつは軍人志望だった」

しかし、あの体格だから軍人にはなれなかった。

それが反動となったのか戦嫌いになったらしい。

「そいつが宰相を務めているから、どうせ俺が行っても『何しに来た?!』とか怒鳴り散らすと思ったんだよ」

だから敢えて消えたらしい。

「ですが、ゲンハルト様は、廃人同然です」

「そうなのか?」

それを訊かれて私は頷き、説明をした。

「なるほどな。やれやれ、骨はあると思っていたんだが、駄目だったか」

ヴィルヘルム元伯爵は呆れ返っていた。

「初戦の経験ってのはそんな物だろ?」

少佐は自分も初めての実戦では怖かった、と話した。

「何と。我が王も怖かったのですか?」

「俺だって完璧じゃないからな。それでヴィルヘルム。リカルドをどう見る?」

「先王とは比べ物にならないほど優れた軍人です。それに地方では敬意を込めて“陛下”と呼んでおります」

「なるほどな。俺も遠くから見たが、良い眼だ」

あいつは王としての器がある、と少佐は言ったがこう付け足した。

「まぁ、敵となった以上は潰すしかない」

「仰る通りです。虚しいですが、仕方ありませんね」

それに少佐は頷きながら、ヴィルヘルム元伯爵に命令を与えた。

「今から東へ重傷者を護送しろ」

本来なら先ずは女王たちを護送するのだが、女王の性格からして先ずは民達や重傷者を行かせろと言うに違いない。

そのため先に彼等を連れて行けと少佐は言った。

「畏まりました。必ず連れて行きます」

「頼む。俺はここで奴等を“出迎える”」

熱烈な、と少佐は言い続けた。

何となくだが、その熱烈なという意味に私は怖い気持ちを覚えた。

幕間：誇り高き少数精鋭

獅子頭軍団を2度に渡り破ったリカルド・ウェスビーの軍団は険しい顔つきで道を進んでいた。

2度も獅子頭軍団を破ったが、その2度も思わぬ敵により完全に討ち滅ぼす事は出来なかった。

正体は不明だが、敵である事は確かだ。

そしてリカルドはこれを脅威と見なして首都へ偵察を命令した少数精鋭の者たちを呼び戻した。

馬に跨り進むリカルドに一人の男が徒歩で近付いてきた。

壮年の男性で周囲に溶け込める服を纏った上で帽子を被り、顔にはカモフラージュの泥などを塗っているため素顔は完全には確認できない。

その男はリカルドに静かながらも力の籠った声で話し掛けた。

「陛下。偵察に向かわせた2人の隊員が戻ってきておりません」

「・・・やられたか」

リカルドは静かに男に告げた。

「・・・恐らく」

男は極めて事務的な口調で答えたが、肩が小刻みに震えている所を見ると激怒しているようにも見える。

「・・・戦が終わり、死体を見つけたらその者たちの国葬を開こう」

いや、この戦いで命を落とした兵たち全てを国葬で埋葬しよう。

男はリカルドの発言に顔を上げた。

水色の瞳がリカルドを射抜くが、それをリカルドは受け止めた。

「貴殿らは、“彼の国”から送られた者たちだが今は私の大切な部下だ」

本当なら本国で国葬をやるのが良いだろうが、我慢してくれ。

リカルドの言葉を聞いた男は帽子を深く被り直した。

「・・・・大変なお心遣い感謝します」

「気にするな。私も戦を駆けた身。貴殿らの気持ちは解かっている積りだ」

騎士も軍人も戦が起これば最前線に立ち命を落とす。

だが、その中で国葬をされるのは極僅かだ。

殆ど何人もの同僚または敵の屍と一緒に巨大な穴に放り込まれて土を被せられるだけだ。

極僅かな者たちだけが国葬として葬られ英雄として祀られる。
特にこの貴殿らのような特殊な任務を受け持つ者たちは更に酷い目に遭っただろう。

「・・・・否定できません。国に裏切られた事もあります」

任務を達成し迎えに来る筈だったのに、間近で見捨てられた事もある。

逆に殺され掛けた事もある。

と男は言い続けた。

「・・・酷い話だ」

「仰る通りです。ですが、仮に私は死んでも国を怨みません」

自分は敢えてその様な最後を遂げようとも、それは自分が選び進んできた道だ。

何より私は国を愛しております。

命を捧げます。

「ですが、部下だけは盛大な葬儀で葬って欲しいと思います」

それが上に立つ者の義務なのだ。

「・・・貴殿は立派だ。部下もまた貴殿のその器の大きさに心服し

ているのだろうな」

リカルドは少し離れた場所を歩く男の部下達を見つめた。

彼等は周囲を警戒しながら進んでおり頼もしい限りだ。

「一つ訊いても良いか？」

リカルドの言葉に男は「何でしょうか？」と訊き返した。

「主は私の行いをどう思う？」

自分は明らかに国家を転覆させようと考えている。

それは道徳的に見ても正しい行為とは言えない。

「私は・・・この国を・・・民を愛している」

だが、この国は病気で言うなら末期の状況だ。

国を愛さず、私利私欲に溺れた者たちが続出し、国を護る軍人を蔑み、国を支える民達を蔑ろにしている。

更に・・・・・・・・・

「“彼の国”の影ですね」

男は自分が送られた国を上げた。

これにリカルドを含めた周囲は驚いた。

まさか自分の居た国を口にするのだから。

なぜ送られて来たのか？

貴方様の力になり、今の国家を転覆させるように命令されたのだ。

どうしてかは男は理由を訊ねなかった。

自分は軍人だ。

軍人とは命令された事を忠実に守り実行するのが任務だと教えられたからであり、自分もそう思っていたからだ。

「私は一人の軍人として戦っております」

だから、全力で貴方様を援助します、と男は言いリカルドの行いをどう思うか、という答えを出した。

「貴方様は出陣前に、私の国の初代王の事を言いました」

最初は反逆者の烙印を押された彼だが、今では英雄として祀られている。

「貴方様も何れ英雄として祀られる事でしょう」

今は違うかもしれないが、闇に埋められた歴史にも何時かは光が差す時が来る。

そして国とは民で成り立っているのだ。

民が居るからこそ王たちが存在し国が成り立っている。
その民達を疎かにする者たちはそれが解からない。
貴方様は民を救おうとなさっている。
道徳的に見れば間違っているかもしれない。
しかし、民達はきっと貴方を歓迎してくれる事でしょう。
自分達を護ってくれた素晴らしい王として・・・・・・・・
「リカルド陛下。貴方の行いは良い事です」
そう思って良いのです。
そう思い続ける事で兵たちを安心させて下さい。
指揮官である貴方が弱気を吐いては兵たちの士気も下がります。
兵たちは指揮官である貴方様を敬愛しております。
だから、自分に自信を持って下さい。
「・・・ありがとう」
リカルドは男に礼を述べた。
「一兵の指揮官である私に礼は要りません」

私は貴方のように兵たちを愛している指揮官の下で戦える事に嬉しさを持っている。

これ以上の事は何も望みません。

礼の言葉など勿体ない、と男は言い切りながらも礼を述べて部下達の元へと向かった。

それをリカルドは見続けていた。

そんなリカルドと男を見ている誰かが心の中で呟いた。

『・・・やはり、あの男は・・・・・リカルド同様に始末しなければならないな』

第三十八章：良い薬

私たちが砦の外から重傷者達とそれを看護していた“お姉様達”が東へと護送されていく所を見ていた。

お姉様たちは、娼婦だがそんな言葉は使いたくないので敢えてお姉様と言わせてもらう。

護送するのは少佐の仲間（本人は部下と言っている）であるシュヴァルツフント騎士団がやる。

人数は全員で３００名で親衛騎士団、聖騎士団に比べれば数は少ないが実力は上だ。

背後からの奇襲しか知らないが、傭兵として活躍していた事もあり“その筋”では有名である事を考えれば実力は高いと私は思える。

そして少なくとも下種女に比べてヴィルヘルム元伯爵は十分に指揮官として有能な分類に入る。

重傷者と民達はシュヴァルツフント騎士団に護送されながら東へと向かっている。

獅子頭軍団や聖騎士団の中には彼等が助けたという事を知り礼を述べたりしていた。

プロイセン様はヴィルヘルム元伯爵を見て「すまんな」と一言謝罪した。

先王の行いを止められなかった事を悔いているようだった。

だが、ヴィルヘルム元伯爵は「閣下。貴方のせいではございません」と言いプロイセン様を自ら護送した。

少佐はこの事をサラ様に報告する為に準備をしている。

護衛はリーザ中尉と私にレオンだ。

また昨日みたいになるのでは？と私は不安だった。

まぁ、昨日の様子を見れば問題ないと思うが。

重傷者達以外にも民達を本来なら連れて行く予定だった。

昨夜の内にエドリアス様は城に残る民達に説明して直ぐに用意をするように言った。

しかし、誰も行かないという答えが返ってきた。

エドリアス様は最初こそ驚いたが、民達の眼を見て「誰かが裏で皆の意見を一致させている」と思ったらしい。

つまり、誰かが無理やり残らせているという事。

なぜそんな事をするのか不明だが、何となく臭いと私は思った。

少佐はそれを聞いてエドリアス様に調べるように命令を下し、エドリアス様は頷いた。

重傷者達を全員、城から連れ出したシュヴァルツフント騎士団は東の地へと向かって行った。

それを見送った私たちは砦へと戻った。

砦へと戻った私たちを軍服に身を包んだ少佐が迎えてくれた。

迷彩服でないのは、サラ様に会うからだ。

だが、それなのに髭は剃っていない。

何で髭を剃らないのかは不明だが。

少佐は前に被っていたケピ帽ではなく緑色のベレー帽を被っていた。

軍曹と同じだが、紋章が違うから何処の部隊の出身か解かる。

「ベレー帽を被るのも久し振りだな」

少佐はベレー帽を被ったまま煙草を吸い呟いた。

「そうなんですか？」

「あぁ。まぁ、最初はこれを被っていたんだが、ブーニー・ハットの方が好きになった」

だが、今回はこちらの方が良いと考えて被ったらしい。

そしてリーザ中尉と私とレオンに行くぞ、と促してきた。

『了解』

私たちは敬礼をして直ぐに準備に掛った。

直ぐに軍服に着替えて武器を手に外に出たが、そこで唖然とした。

少佐をサラ様が抱き締めていたのだから。

いや、サラ様が少佐を抱き締めているのだ。

その傍らにはエリーナ様も居た。

私を含めて皆は唖然とするしか出来なかった。

サラ様の口が動いた。

だが、聞き取れない。

少佐はサラ様を身体から引き離して、ベレー帽を取り一礼した。

「・・・お久し振りです。女王陛下。相変わらずお美しいですね」

ですが、と少佐はここで区切りを入れてから言葉を紡いだ。

「暫く見ない内に少し痩せましたか？」

少佐は流れるように口を動かしてサラ様に訊ねた。

「テツヤ殿・・・・」

サラ様は涙ぐんだ眼で少佐を見た。

まるで真珠が出ているように光を放ち見る者を虜にしている。

それを少佐には気にせずにまた頭を下げた。

「女王陛下。このような場所で無闇に男に抱き付くのはいけません。御自重して下さい」

少佐はそう言うと私たちに女王と王女を中に入れろ、と命令した。

「あの、少佐は？」

私が訊くと少佐はやる事があると言って携帯を取り出して、例の宅配人に電話をかけ始めた。

「テツヤ殿・・・・！！」

サラ様が少佐の名を呼ぶが、少佐はそれを聞かずに歩き続けた。

一体、何があったのやら・・・・・・・・・・

だが、それは敢えて気にしない事にして私たちはサラ様とエリーナ様を居住区の中へ入れた。

居住区の中に入った私たちはサラ様とエリーナ様を椅子に座らせて急ぎコーヒーを用意した。

「どうして、テツヤ殿が帰ってきた事を教えなかったのですか？」

サラ様は私を見て訊ねてきた。

何で大尉ではなく私に訊くのだ、と思うが私は答える事にした。

「いや、あの、もう知っているかと思いまして・・・・・・・」

「私は今朝、プロイセンから教えられました」

サラ様は怒った口調で私に言ってきた。

そんな怒った口調で私に言われても困るんですが。

「えーと、その、まぁ、色々と込み入った事情がありまして・・・・・」

では、その込み入った事情とは何ですか?とサラ様は立て続けに訊いてきた。

お陰で返す暇も無い。

私は困り果てた末に大尉に助けを求めた。

『助けて下さい。大尉』

『それ位は自分で乗り切ってこそ男だよ?』

大尉は視線で私に自分でやれ、と言ってきた。

『私はまだ経験不足なんですっ』

『まったく困った坊やだ』

大尉は苦笑しながらも私を助けるようにサラ様に話し掛けた。

「少佐も色々と忙しいんだよ。何せ来たばかりでこの状況だ」

あんたに帰還を伝える時間は無かった、と大尉は説明した。

サラ様は私から大尉に視線を移した。

お陰で私は解放された。

助かった、と言えるだろう。

「それはそうですが・・・・・・」

サラ様は言葉に詰まった。

そこへ大尉は追い打ちをかけた。

「それともあんたは、自分から物事を訊く事は出来ないような駄目女かい？」

大尉はここで馬鹿にするように言ってきた。

仮にも女王なのによくもまぁ、こんな台詞を軽々と言える物だと毎度の如く驚くし感心さえ覚えてしまう。

しかし、そういった所が流石は少佐の部下と言えるかもしれないが。

「・・・違います」

サラ様は幾分か怒った顔で大尉に言い返した。

「だろうね？人目も憚らずに抱き付くんだから」

妬けるよ、と大尉は言いリーザ中尉を見た。

リーザ中尉は幾分か顔を赤くさせて下を向いた。

まぁ、昨日の今日であんな状況を見たのだから、仕方の無い反応かもしれない。

「あれは、本当にテツヤ殿だという事を確かめたくてやった事です」

「そうかい。まぁ、少佐も満更ではなかったようだしね」

「だって姐御。こんな美人に抱き付かれたら男なら迷わずは・・・・・ぎゃあ！！」

軍曹がまた何かを言おうとしたが、大尉がスチェッキンＡＰＳを抜くや否や引き金を引いたので悲鳴を上げて屈んだ。

立っていた壁には小さな穴が空いていた。

もし、そのまま立っていたら眉間に風穴が空いていたな。

「節操の無い男は口を閉じてな」

それを少佐が聞けば命は無いよ？と大尉は言った。

「は、はい・・・・」

軍曹は縮み上がりながらも頷いた。

「で、今日は少佐に会いたいだけで来たのかい？」

大尉は軍曹から視線を外してサラ様に再び向けた。

「そうです・・・・」

サラ様は迷うことなく頷いた。

「そうかい。まぁ、少佐も少し経てば時間が空く筈だ」

それまでここに居な、と大尉は言うと部屋を出た。

私も出ようとしたがエリーナ様に呼び止められた。

「ランドルフ。少し、お話をしませんか？」

「え？えぇ、いいですけど」

私は戸惑いながらも頷いた。

そしてエリーナ様を連れて外に出た。

「塔の上でお話をしますか？」

「えぇ。お願いします」

私は彼女を伴い塔へと登った。

だが、長いドレスなので私が僭越ながら彼女の手を取り、塔の上へと連れて行った。

「綺麗な眺めですね」

エリーナ様は塔の上から見える景色に眼を奪われた感じで喋った。

「私も好きです」

それに相槌を打ちながら私は煙草を吸おうとしたが止めた。

エリーナ様に煙草の臭いを染み込ませたくなかったからだ。

「どうして煙草を吸わないんですか？」

「いえ。ただ、何となく吸いたくなくなったのです」

私は曖昧に答えた。

塔の上から下を見れば、少佐が宅配人に頼んで届けさせた物が見えた。

それらを少佐は部下に命じて設置させていた。

「テツヤ殿は今まで何処に居たんですか？」

「さぁ、それは解かりません。ただ、元気そうで何よりです」

「そうですね。お母様もテツヤ殿が帰って来て安堵していました」

プロイセン様から少佐が帰還した事を訊くと、下種女が制止するのも聞かずに来たらしい。

行動力がある方だと私は思った。

「お母様は、テツヤ殿の事を話す時は楽しそうなんです」

エリーナ様は城の中で少佐の事を話す事に楽しみを見出しているという。

私はそれに相槌を打つ事に徹した。

だが・・・・・・・・

「ランドルフ。貴方は、私と話すのが嫌ですか?」

エリーナ様が頬を膨らませて私を上目遣いで睨んできた。

まったく怖くない。

寧ろ可愛らしくて・・・笑ってしまう。

しかし、それでは火に油を注ぐ事になるから私は首を横に振った。

「いいえ。とんでもない」

「でも、私の話に相槌ばかり打つだけで話をしないじゃないですか」

「貴方にどんな話をすれば良いか考えていたんです」

今でも考えていると私は言った。

まったくの口から出まかせだが、彼女は納得してくれた。

「そうですか。では、貴方が何か言うまで待ちます」

そう言うとエリーナ様は私を見つめてきた。

それに私は焦ったが、殺伐とした雰囲気しか味わっていなかった私には良い薬となった。

第三十九章：王女との約束

史記を書いている私の背後に人の気配を感じた。
とても穏やかな気配で、昔とちっとも変らない。
妻の中では一番、穏やかな気配だ。
「どうですか？」
妻は私の隣に立って史記を覗き込んだ。
「だいぶ進んだよ」
「私が貴方様と約束を交わした時の所を書く途中でしたんですね」
妻は私の隣で史記を覗きながら訊ねてきた。
もう昔のように金糸ではないが、私にはそんな事は小さな事だ。
「あぁ。君と初めて交わした約束だったね？」
「えぇ。貴方様は「男に二言は無い」と仰いました」
そしてその言葉は私を妻にする時も使用したと妻は語った。
「覚えていますか？私の告白を聞いた貴方様が返した言葉を？」
「あぁ。一字一句間違いなく覚えているよ」

『必ず戻って貴方を幸せにしてみせます』

「えぇ。そして私は本当ですか?と訊ねましたね」

そしたら貴方は男に二言は無い、と言い切り私を抱き締めたと妻は語った。

「あぁ。君は幸せかい?」

「勿論です。こうして可愛い孫たちに囲まれて幸せですよ」

そして何時か皆の元へ私たちは行く。

可愛い孫たちと別れるのは辛いが、それでも皆が居ると思うと嬉しくもあると妻は語った。

「そうだね」

「はい。何か御飲物をお持ちしましょうか?」

「そうだね・・・では、コーヒーをミルク入りで頼むよ」

「分かりました。あの、それと私も少し一緒に居て宜しいですか?」

控え目に訊ねてくる彼女に私は頷いた。

昔と変わらず少し控え目に訊ねてくる彼女に私は笑いながら頷いた。

「あぁ。構わないよ」

それに彼女は笑顔で頷いて部屋を一度、出て行った。
それを見送ってから私は史記を書き始めた。
少佐が居住区へと入ったのはサラ様を中に入れてから1時間後だった。
それを見計らって大尉達が入れ換わるように外に出てきた。
私とエリーナ様も気になって塔から降りて行ってみた。
「おや?デートからお帰りかい?」
大尉が茶化すように俺に言ってきた。
「違いますよ」
私はそれに返して、大尉に少佐が届けさせた物は何なんですか?と訊ねた。
「迫撃砲と重機関銃だよ」
迫撃砲というと確か・・・・・・・・
「少人数で運用可能な火砲ですよね?」
「あぁ。これで遠くに居る奴等にも攻撃が出来る」
大尉は迫撃砲を撫でた。

これは確か・・・・・・

「“Ｌ１６　８１ｍｍ迫撃砲”でしたっけ？」

生産国はイギリスという国で分解可能で歩兵だけで運用可能な代物な筈だ。

少佐の居た陸上自衛隊でもこれを装備していたと聞いている。

「その通り。それじゃこれは何かな？」

大尉は今度は重機関銃を指した。

「こっちは・・・“ブローニングＭ２”ですね」

天才銃技師ジョン・ブローニングが開発した重機関銃で７０年も経過した今でも使われているという非常に息のある銃だと聞いている。

これの破壊力は聞いた話によれば人間を真っ二つに出来るほどと聞いている。

間違っても撃たれたくない銃の一つだ。

「正解だ。これを何台か注文した」

これで敵が来ても何日か食い止められると大尉は言った。

「ランドルフ達は逃げないのですか？」

エリーナ様が私を見て訊ねた。

「私は・・・貴方達が逃げるまで足止めをします」

「そんな!!」

エリーナ様は声を上げて私の肩を掴んだ。

「どうして残るのですか?私たちと共に」

「それは出来ません」

エリーナ様が続きを言う前に私は遮った。

「私たちは獅子頭軍団達の仇を討たなければなりません」

リカルド様達の軍勢を全滅させる事は出来ないだろう。

しかし、ここで被害を与えれば少なからずこれからの戦いに影響があるのは確かだ。

「で、でもっ」

「エリーナ様。約束します」

私はエリーナ様の手を掴み、静かに握った。

「必ず生きて貴方様の元へ行きます」

約束します、と私は二度いった。

「・・・約束ですよ」

エリーナ様は私を見ながら言った。

「男に二言はありません」

約束です、と私は三度も言ってからエリーナ様の手を離した。

しかし、エリーナ様が逆に私の手を掴んできた。

「では、私も約束します」

貴方が私の前に帰って来るまで待ち続けます。

「エリーナ様・・・・・」

「ランドルフ。貴方は男に二言は無いと言いました。私も二言はありません」

エリーナ様の言葉に私は唖然としたが、周りはそれを冷やかすように口笛などを吹いた。

「妬けるねー」

大尉はそれだけ言い煙草を吸った。

―　―　―　―

―　―

俺は壁に背を預けながら腕を組み、見つめてくる“花”の視線を受け流していた。

未だに“花の香り”が俺に染み付いている。

とても心地よい香りで、それに釣られて虫たちが寄って来るだろう。

「テツヤ殿」

花が俺の名を呼んだ。

「何でしょうか？女王陛下」

俺は丁寧な口調で花に訊ねた。

「どうして、そのような言葉遣いをするのですか」

私は貴方にそんな言葉遣いをして欲しくない、と花は言ってきた。

「今まで身の程を知らなかった故に横暴な態度を取って参りました」

故に態度を改めただけです。

俺はそう答えた。

「貴方は横暴な態度を取っておりません。どうか、前のような言葉遣いをして下さい」

「それは承服しかねます」

「どうしてですか？」

「周りに示しが付きません」

なら、せめて二人だけの時は・・・・・と花は続けた。

些か瞳が潤んできている。

さっきまで決めていた俺の意志は脆くも崩れ去った。

女を泣かせるのはベッドの中だけ、と俺は決めている。

だから、こんな所で泣かれるのは御免被りたい。

そんな自分に溜め息をしてから俺は前の口調で喋った。

「そんな潤んだ顔をしないでくれ。女の流す白真珠ほど男を困らせる物はない」

それを聞いて花は潤んだ瞳を隠して笑顔になった。

やれやれ。女ってのはどうしてこうも変わり身が速いんだか・・・・・

恐らく“夜の花”ならこう言うだろうな。

『長い年月を掛けて本能が赴くままに生きてきたからでしょう』

長い年月を掛けて本能の赴くままに生きてきたから、か・・・・・・

俺には些か理解できないが、あいつが言うんだからそうだろうな。

そんな事を思いながら俺は花を見た。

前にも言ったが、少し痩せているな。

会った時から細い身体だとは思っていたが、更に細くなって大丈夫か？と思ったほどだ。

抱き付かれた時にその痩せた身体に驚いたが、同時に温もりを感じて心地よかった。

夜の花が静かに俺を心地よくさせるのに対して花はどちらかと言えば、激しく俺を心地よくさせた。

今でも花の鼓動が聞こえる。

速い鼓動で同時にとても熱いと思った。

しかし、今はそれを思い出すのを止めた。

下手に思い出して変な行動を取るとも限らないからだ。

「テツヤ殿。一つお伺いしても良いですか？」

「何だ」

花は俺を見つめながら訊ねてきた。

「この戦いを終わらせる方法はありますか？」

「敵を殲滅する事以外でか？」

「・・・はい」

出来るならリカルドには生きていて欲しい、と花は呟いた。

「それは・・・無理だ」

俺は残念だが、無理と言った。

内乱ってのは難しい問題だ。

国に不平不満を持つ奴等が、兵を起こし現在の政府を破壊するんだ。

話し合いで解決出来る可能性は極めて低い。

内乱を起こす理由は様々で一概にこれだ、と言える物は無いと言って良いだろうな。

で、この国で起きた内乱の原因は何かと言えば・・・・・・・・・・

「あんた地方をどう見ている？」

「地方、ですか？」

「あぁ。首都の外にある地方だ」

国が存在するのは首都があるから、なんて事は無い。
首都ってのはそこに都を築き、そこで政治などを行う為にあるようなものだ。
「私としては、中央の周りを囲む、という考えです」
「それで地方の者たちをどう見ている？」
「どう、と言われても・・・同じ国に住む大切な民です」
「それはあんたの考えだ。周りはどうだ？」
「・・・田舎者、と見ている向きがありますね」
やはりな・・・・・・・
「それが恐らくは原因だろうな」
「どういう事です？」
花は可愛らしい顔に？マークを上げながら首を傾げた。
それに苦笑しながら俺は説明を始めた。
「この国はあんた、つまり王を柱とした中央政権だ」
中央政権で欠点を上げるなら俺は２つだ。
１、中央と地方の格差が激しい。

2、大から小への考えから地方の考えなどが無視されるまたは聞かれない事が多い。

どちらも地方から言わせれば、中央しか良い夢を見ないと言える。

だから、中央へ引っ越したりする者が多い。

そして政治家たちは挙って中央の奴らに取り入ろうとする。

恐らくリカルドは地方の声を聞いて兵を起こしたとも考えられる。

まぁ、自分が王になるという考えもあるだろう。

しかし、俺が見る限り・・・あいつは欲望だけの為に兵を起こした奴じゃない。

寧ろ、何か大切な物を守りたいが為に兵を起こしたと思えてならない。

何故か？

眼がそう告げていた。

双眼鏡から見えた奴の眼は欲望だけの為に戦っている奴の眼じゃないと解かった。

だから、そう思えてならない。

「つまり、リカルドは地方の声を叶える為に兵を起こしたというの

ですか？」

「あぁ。まぁ、その前に中央へ色々と手を回しただろうな」

手紙を書いたり、誰かを派遣したり、と色々と。

それを恐らく中央は握り潰したんだろうな。

自分達が甘い蜜を吸い続ける為に。

それに業を煮やして、或いは周りの奴らに焚き付けられて兵を起こしたか・・・・・・

その他に理由を上げるなら、この国を守りたいからだろうな。

花から説明された５つの国。

その中でも脅威と見られる帝国。

恐らく何らかの形で帝国の考えや行動を知り、それを阻止しようと考えた。

しかし、どうせ握り潰されるのが落ちだと考えて自分が王となる、と思いついたんだろうな。

謀反の疑いがある、と聞いたが・・・どうやらそれは下種共の陰謀だな。

「この内乱の原因は、私たちにあったのですね・・・・・・・・・」

花はさも自分のせいとばかりに顔を曇らせた。

強ち間違いとは言えない。

だが、全てが花のせいかと問うなら否だ。

この国に巣食う下種共が元はと言えば悪い。

まぁ、俺から言わせれば王なんてお飾り物でしかないが。

だからと言ってそれを軽んじたり、蔑ろにして良いという訳ではない。

中央に集権を構えようと、地方の声を聞き、全てに平等な権利が与えられる事が望ましい。

恐らくリカルドは中央に集権を構えるだろうが、地方の声を聞き入れて政治を行うだろうな。

辺境の地で住んでいた奴の事だ。

地方の力があるからこそ中央は成り立っている、と身に染みている筈だ。

ミーシャやイーグルが王の器があると褒めていたが、正しくその通りだ。

しかし、花を殺させたりはしない。

それにどうも臭い。

リカルド自身は国を思うが為に内乱を引き起こしたんだろうが、その周りの奴等は果たしてどうかな？

どうも臭いと思う奴が2、3人は居るし兵たちの中にもそんな感じの奴等が居た。

そいつ等を取り除けば問題ないだろうが、難しいだろうな。

そんな事を思いながら俺は花にこれからの事を説明した。

「先ずあんたと王女、それから骸骨達は城を出てもらう」

「何処へ行くのですか？」

「東の地、ヴァイガーだ」

「ヴァイガーへ？」

花はどうして元首都である場所へ行くのか疑問を浮かべていた。

「詳しい事は追々説明する。今は俺の指示に従ってくれ」

「分かりました」

「良い子だ。では先ず、必要最低限の物だけを準備しろ」

例えば衣服、食料だな。

「その他にはありますか？」

「あんたが一番、大事と思う物を持って行けば良い」

後は諦めろ、と俺は言った。

「構いません。元々こんな状況を招いたのは私たちなのですから」

それで不平不満を漏らす訳にはいかない、と花は言い続けた。

「それを聞いて安心した。では、今から用意しよう」

まだ来る時間はあると思うが、善は急げだ。

それに花は頷いて俺と共に居住区を出た。

隣を歩く花は相変わらず良い香りがするなどと場違いな事を俺は思ってしまった。

第四十章：不味そうな女と宰相

私とレオン、テツヤ殿とガルム、そしてサラ様にエリーナ様の６人は城へと向かっていた。

城に行き、必要最低限の物を持って来る為だ。

城には恐らく骸骨と下種女、その他にもまだ戦える者達が居る。

「少佐・・・じゃなかった。テツヤ殿、あの二人には何と説明するんですか？」

今は作戦中でも無い為、テツヤ殿と呼べと言われたので私はテツヤ殿と呼んで、あの二人に何と説明をするのか訊ねた。

いきなり城へ来て、必要最低限の物を用意しろなどと言った所であの二人の事だ。

当然の如く反対するだろうし理由を問い質す筈だ。

「逃げる為。そうとしか言えないだろ」

テツヤ殿は当たり前のような言葉を返してきたが、それであの二人が納得するとは思えない。

骸骨ことゲンハルト様はふ抜けた状態になっているがテツヤ殿が来たとなれば、前みたいに噛み付くだろう。

下種女はこの前の事もあるから、会うなり剣を抜きそうだ。

「それなら心配するな。小僧」

ガルムが私の心配を一笑した。

初めサラ様とエリーナ様は狼人を見て驚いたが、ガルムがテツヤ殿の下僕と答えるとすんなり納得してしまった。

何だかテツヤ殿なら相手が怪物だろうと下僕にしそうだと言っているように私には見えた。

まぁ、実際そうなのだから仕方ないが。

そして私はガルムがどうしてそんな風に言うのか気になった。

「何をするつもりですか？」

「そいつ等を頭から食べるだけだ」

「それは駄目ですよッ」

私はガルムの余りに単純な解決策に頭を悩ませた。

「何故だ？どうせ生きていても碌な事をしないのだろ？」

聞けば我が主に対して無礼千万を行ってきたのだろ？と質問をされた。

「まぁ・・・・されましたよね？テツヤ殿」

「国外追放、誹謗中傷、傷害沙汰なんかだ」

テツヤ殿はサラ様を乗せた馬に乗りながら隣を歩くガルムに教えた。

「何と!?我が主。どうかこの下僕に一言ご命令を」

奴等を喰え、と命令してくれたら即刻その二人を骨も残さず喰ってみせる、とガルムは宣言した。

「止めとけ。あいつ等は喰っても美味くないぞ?」

寧ろ腹を壊す、とテツヤ殿は言った。

まぁ、的を射ているような気がする。

実際、私がガルムの立場なら食べる気にはなれない。

見るからにゲンハルト様は肉が無いし、下種女に関しては腹を壊しそうだ。

レオンも私と同じ事を考えていたのか私を見て頷いてきた。

「ランドルフ。城はもう直ぐですか?」

私の後ろに座るエリーナ様が話し掛けてきた。

テツヤ殿が乗る馬にはサラ様が座り、私の乗る馬にエリーナ様は乗った。

最初はレオンの方が良いと思い、私は彼を推したのだが彼は首を横

に振りエリーナ様も私の方が良いと言ったので、私の馬に乗っている。

後ろから私の腰に腕を回すエリーナ様。

微かに背中に温かい二つの感覚が来る。

オリガさんと会う前なら鼻血を出している所だろうが、今はそんな真似はしないから助かったと思う。

「はい。もう少しですが、辛いですか？」

エリーナ様は馬車に乗る事が専らだ。

だから、尻が痛くなったのかと思う。

「いいえ。そうではありません」

おや、違うのか。

では何だろう？

だが、それを訊く前に前方から馬に乗ってやってくる一同に目が行った。

・・・・・親衛騎士団、か。

女王と王女が消えたのを今になって気付くとは・・・・いやはや情けない。

私はベレッタを何時でも抜けるようにしておいた。

レオンはＳＫＳカービンを右手に持ち何時でも撃てるようにしつつ、テツヤ殿を護るように立った。

そしてガルムは「不味そうな奴らだ」と呟いて唾を吐いた。

どうやら彼には不味そうと見られたようだ。

獣にも嫌われるとは相当だな。

などと思っている内に親衛騎士団がテツヤ殿の前で止まった。

その中には下種女が居た。

相変わらずテツヤ殿を敵視している。

「・・・狂犬。今すぐ女王から離れろ」

下種女はテツヤ殿を睨み据えながらサラ様を解放しろと言ったが、この言い方は間違いだ。

サラ様は自分でテツヤ殿の馬に乗っているのだから。

「それは俺ではなく女王に言え」

テツヤ殿は前に座るサラ様にどうするんだ？と訊ねた。

「フィーナ。テツヤ殿を愚弄する事は許しません」

「しかし、女王陛下」

「私は自分の意志でテツヤ殿と一緒に居るのです」

「そいつは反逆者と密通しているのですよッ」

「証拠があるのかよ？」

テツヤ殿が下種女に訊ねた。

「黙れっ。貴様の存在自体が動かぬ証拠・・・・ぐわっ！！」

下種女は最後まで言う前に馬から転げ落ちた。

ガルムの唸り声を聞いて、馬が怯えたのだ。

それは他の馬達にも影響し、親衛騎士団達を振り落とした。

「さぁて、行くか」

テツヤ殿は馬の腹を蹴り進めた。

私たちはそれに続いた。

ガルムもそれに続くが、下種女を一目見て「不味そうな女だ」と一言のべた。

それを聞いて下種女はガルムを睨むが、ガルムの姿に怯えているのが解かる。

それに嘲笑を浮かべながら私たちは城へと向かい続けた。

城に着いたサラ様とエリーナ様は使用人たちに必要最低限の物を用意するように命令した。

私たちはそれを手伝った。

夕方になる頃に用意は終わった。

城を出ようとした時に骸骨が出てきた。

「女王陛下、私は、何がいけなかったんでしょうか？」

骸骨ことゲンハルトがサラ様に虚ろな眼差しを向けて訊ねた。

「ゲンハルト・・・・・・・・」

サラ様は骸骨の変わり様に些か驚いていたが、同時に憐みの眼差しを向けた。

私の横でガルムは小さく「肉が一つも無い。食べる気も出ないな」と場違いな言葉を呟いた。

それが骸骨には聞こえないのか、サラ様に詰問を続けた。

「私は、国の為に、尽くしました。それなのに、何がいけなかったのですか？」

私を残して皆、逃げてしまったと骸骨は続けた。

「自分で考えたのか？」

テツヤ殿が骸骨に訊ねた。

「お前は・・・・・・」

骸骨はテツヤ殿を見ると一気に目が覚めたように虚ろな目を消した。

また何か言うんじゃないかと気が気でなかったが、テツヤ殿は再び訊ねた。

「聞こえなかったのか？自分で考えたのか？」

何がいけなかったのか？

どうして、彼等が反乱を起こしたのか？

どうして信じていた者たちが逃げたのか？

「・・・それは、リカルド様がこの国を乗っ取ろうと・・・・・・」

「そんな事しか言えないなら一生かかっても解からないな」

仮に誰かに教えられてもお前はそれを否定するだろう。

「では、お前には解かるのか？」

ゲンハルト様は馬鹿にされたと思ったのか棘のある声で訊ねた。

「予想の範囲だがな」

「聞かせてくれ」

私は思わず目を見張った。

この男が、テツヤ殿にこんな事を訊くなんて思いもしなかったからだ。

だが、彼の様子を見る限り予想の範囲だろうと、理由が解かるなら教えて欲しいという気持ちが解かった。

「先ずこの国は中央集権だ。中央がどちらかと言えば決定権がある」

そして地方はどちらかと言えば蔑ろにされる。

「・・・否定できない」

私を含め皆は地方を田舎者として見ていた、とゲンハルトは答えた。

「だろうな。そして地方の声は握り潰しただろ?」

「・・・・あぁ」

年貢を少なくして欲しい、災害の時に助けて欲しい・・・・様々な声をゲンハルト様は握り潰したと言って息を吐いた。

「地方の声を全部聞いていたら、政は出来なかった」

「だろうな。だが、少しでも聞いて叶える事は出来たんじゃないのか?」

「・・・そうだ。それを疎かにしていた」

部下達からも地方より先ずは首都を栄えさせるように言われたし、自分もそれに賛同していたと語る。

「で、その肝心の部下は逃げた。なぜ逃げたと思う？」

「・・・戦に負けたからだ」

強ち間違いではない。

誰だって2度も負けたら、頃合いだと思って逃げる物だ。

「それもある。だが、まだあるんじゃないのか？」

テツヤ殿の意味を含めた言葉にゲンハルト様は暫く考えてから、こう答えた。

「・・・・リカルド様と密通していた事を知られるから、か」

「その通りだ」

「なぜ、裏切ったのだ？私は彼等を不当に扱った覚えは無い。怨まれる事はしていないっ」

「裏切りにも理由は様々だ。前に城の見取り図を渡した大臣は家族を人質に取られたから協力せざる得なかった。だが、残りは恐らくあんたに成り代わり宰相になろうとした腹だろうな」

その他にも理由はあると思うが、テツヤ殿の述べた2つの理由が多いと私は思った。

「そんな・・・・・・では、私は、裏切り者を庇っていたのか・・・・・・・」

ゲンハルト様はまたしても空虚の眼差しになり始めた。

「そうだ。まぁ、裏切りなんて何処にでもあるものだし、裏切られるのもまた仕方が無い」

最初から裏切られると思う訳が無いからだ、とテツヤ殿は慰めるような言葉を言いながら今は落ち込んでいる暇は無いと言った。

「逃げるぞ」

ここに居ては殺されるが落ちだ、とテツヤ殿は続けて言った。

「何処に逃げるのだ?」

「それは後で教えてやる。今は必要最低限の物を用意しろ」

「何を用意すれば良いのだ?こんな事は初めてで解からん」

「食料、衣服なんかだ」

それから大事な物を1つだけ持て、とテツヤ殿は言い用意するならしろ、と言った。

「・・・直ぐにやる」

「そうしろ。終わったら、門の前で待ってろ」

「分かった」

そう言ってゲンハルト様は去って行った。

「ゲンハルト様が、テツヤ殿にあんな事を訊くなんて以外です」

正直あんな話を出来るのか、と私たちは驚きを隠せなかった。

「俺もだ。だが、あいつ自身、責任とかを感じていたんだろうな」

宰相なのにまるで役に立たずの上に、上にだ。

戦では満足に指揮も執れずに大敗を喫したばかりか、裏切り者を庇ったという事を知ったのだから。

それに責任を少なからず感じていても可笑しくない。

いや、もしそれで責任を欠片も感じていなかった方が問題だな。

「まぁ、それはあいつだけの責任だけではないがな」

テツヤ殿はそう言ってから私たちに行くぞ、と言い歩きだした。

第四十一章：覚悟と対策

私たちが城の外に出てゲンハルト様の到着を待っている事1時間。

ゲンハルト様は必要最低限の物を用意するように言われたのに随分と掛るな、と思った。

もう直ぐ夜になるという所でゲンハルト様が来た。

手には茶色の布袋が一つだけあり、後は無い。

その顔は煤で汚れていた。

何で汚れているんだ?と思ったがテツヤ殿はそれを見て「書類を処分したな?」と言った。

「あぁ。全て、な」

国庫の金額を記した書類、他国の交流を記した書類、軍の予算額を記した書類など必要な書類を燃やすのに時間が掛ったようだ。

これらは全てリカルド様の手に渡れば色々と面倒な事になる恐れがある。

だから、全てを灰にしたのだ。

「そこら辺は出来ているようだな。しかし、さっきの態度は驚いたぞ」

この前まで俺を軽蔑していたのに、とテツヤ殿は皮肉気に言った。

こんな言葉を言わなければ、波風を立てないと思うのだが、この場合は皮肉だろうと言うのは正しいのかもしれない。

「・・・今でも軽蔑はしている。貴様は身元不明の傭兵だ」

その発言にガルムは唸り声を上げたが、テツヤ殿が抑えて事なきを得た。

「軽蔑されているのは慣れている。しかし、そんな俺に対して何であんな態度を取ったんだ?」

進んで俺の話を訊き、それを受け入れた訳が知りたい、とテツヤ殿は続けた。

「今の状況を鑑みれば例え貴様が悪魔だろうと頭を下げる」

そうゲンハルト様は質問に答えた。

皮肉を述べたテツヤ殿に対する意趣返しかもしれないな。

「そりゃどうも。だが、俺は悪魔じゃない。まぁ、悪魔と同じ位の所業をやってきたがな」

「それは貴様が傭兵だからだろ?」

「あぁ。金を貰い人を殺す因果な商売だ」

「そんな職業に身を置くのは何故だ?」

どうして正規軍に所属しないと質問を浴びせるゲンハルト様。

「別に最初から傭兵だった訳じゃない。二度ほど居た」

「二度？軍を変えたのか？」

「あぁ」

「では、どうして二度も軍を辞めて傭兵になったんだ？」

「戦う事でしか生きる道を選べないんだよ。・・・俺は」

テツヤ殿は自嘲を浮かべてから行くぞ、と言った。

あまり話したくないからか、またはただ時間が惜しいからか。

それは解からないが、それにゲンハルト様は頷いて私たちは城を出た。

城を出る所で聖騎士団と獅子頭軍団の生き残りが待っていた。

その中には親衛騎士団も居たが、下種女の姿は見えない。

どう言う事だ？

「テツヤ。俺らはどうすれば良いんだ？」

聖騎士団の一人がテツヤ殿に訊ねた。

プロイセン様も将軍達も居ない。
下種女とゲンハルト様、サラ様達は論外。
となれば頼れるのはテツヤ殿だけだ。
だから、テツヤ殿に助けを求めるのも無理はない。
「先ず女王たちを逃がす」
その役目は親衛騎士団が良いだろう、とテツヤ殿は皮肉な眼差しで見た。
それに親衛騎士団は幾分か怒りを覚えたようだが頷いた。
「だが、親衛騎士団だけでは心もとない。聖騎士団と獅子頭軍団から何人か行ってくれ」
そして残った者たちは女王たちを逃がすまで時間を稼ぐ、とテツヤ殿は説明をした。
「分かった。他に出来る事は無いか？」
「3日後に敵が来る。その時、民達がパニックになる可能性がある」
そうなってからでは遅い。
その前に予め対策を取らなければならない。
「あんた等で民達を逃がしてくれ」

「分かった。テツヤ、頼りにしているぜ？」

「それはこっちの台詞だ」

あんた等は2度も戦い疲れ果てているのに休ませずに戦わせるのだから。

「俺らはこうなった時の為に存在するんだ」

そしてそれで死んでも悔いはない。

国を護り死ねるなら本望だ、と口を揃えて言う聖騎士団と獅子頭軍団。

だが、親衛騎士団は言わなかった。

言えなかった、と言った方が正しいかもしれない。

実際、彼等を見るとまた戦うという事に恐怖を感じている。

そして聖騎士団や獅子頭軍団のような言葉を吐けない自分達に怒りを覚えているようにも見えた。

ゲンハルト様は兵たちの言葉を黙って聞いていた。

散々戦う者達を毛嫌いしていたが、ここで彼等の本心を聞かされてどう思ったのか興味が湧く。

だが、それは敢えて口には出さなかった。

聖騎士の言葉を聞いたテツヤ殿はこう言った。

「あんた等は立派だ。だが、死に急ぐなよ？」

これからもっと戦ってもらうんだ、とテツヤ殿は言った。

「そっちもな」

それに対してテツヤ殿は頷いた。

城を出た後は砦へと行き東へと通じる道をテツヤ殿は指差した。

「ここから東へ行け。ガルム。お前は女王たちを先導して東へ行け」

お前なら女王たちを無事に東へと連れて行き、その足で帰って来れるだろ？と訊くテツヤ殿にガルムは頷いた。

「勿論です。必ず戻ってきます」

「頼むぞ」

「お任せを。さぁ、行くぞ！！」

ガルムは遠吠えを上げて、歩き出した。

サラ様とエリーナ様を護るように親衛騎士団と聖騎士団、獅子頭軍団から選ばれた者たちが取り囲んだ。

「テツヤ殿・・・どうか、無事に私の所へ来て下さいね？」

サラ様がテツヤ殿を見て懇願した。

「女と交わした約束は破らないから安心しろ」

それを聞いたサラ様はうっすらと潤んだ瞳を伏せて頷いた。

エリーナ様は私を見つめながら呟いた。

「ランドルフ。約束ですからね？」

「約束は守ります」

私はエリーナ様を安心させるように笑った。

ゲンハルト様は無言でテツヤ殿を見ていたが小さくこう言った。

「・・・礼を言う」

それをテツヤ殿は聞いたのか、小さく頷いた。

そしてガルムを先頭に東へと向かって行った。

「さぁて、俺らは敵さんをお出迎えする準備をするか？」

テツヤ殿の言葉に私とレオンは頷いて砦の中に入って行った。

砦の中に入った私たちは皆を集めてこれからの事を話し合った。

「先ず奴等は二度の邪魔が入った事を考えて警戒するだろう」

そして最後の警告をこちらにする筈だ。

しかし、それを聞き入れたりはしないが。

「ワイド。現在残っている聖騎士団で民達を逃がすのにどれ位掛る？」

「そうだな・・・軽く見積もっても1時間以上は掛るな」

未だに城に残る民達をエドリアス様は説得しつつ、裏で手を引いている者を調べている。

一体、どういう理由で彼等をここに残しているのか私も知りたい。

仮に敵がこちらに来たら、何人かは逃げる筈だが恐らく何人かは拒むだろう。

その者達も逃がすとなればもっと掛るかもしれない、とワイド中尉は続けた。

「拒む奴は放っておけ。逃げたい奴だけ逃がせ」

後は放っておけと少佐は言い切った。

酷い話だが、言いたい事は解かる。

そんな奴に構う暇があるなら一人でも多くの民達を逃がすのが優先だ。

ワイド中尉もそれを理解しているが、何処かで皆を逃がしたいと思っている顔だった。

しかし、直ぐに打ち消して頷いた。

「では次だ。現在、俺らの他に聖騎士団と獅子頭軍団が残っている」

そいつらには野戦をしてもらい、敵を迎撃させると少佐は言った。

「しかし、向こうには戦象が居るのだぞ？」

「戦象なら対策は出来ている。ついでに言えば戦車もな」

「どんな手だ？」

「簡単だ。あいつは巨大で破壊力はあるが、速さは余り望めない上に巨大ゆえに狙い撃ちが容易だ」

これはハンニバルを破ったスキピオがやった手段だが、戦象が突撃して来ると予め兵を移動させて戦象を通過させる。

そこへ槍や弓で乗り手などを仕留めて倒すのだ。

それか足を狙って転倒させるか。

「なるほど。では戦車はどうだ？」

「あれは車輪が弱点だ」

車輪自体に機動力は無い。

それを動かすのはあくまで馬だ。
なら馬を狙うか、もしくは車輪を狙い脱輪させるのが望ましい。
問題は騎馬隊や歩兵だ。
ハッキリ言って騎馬隊を相手にするのは重装歩兵や騎士では力不足だ。
「そちらも既に策は練っている」
後で教えるとテツヤ殿は言ってそれより問題の部隊を言った。
「フォース・リーコンが問題だ」
「何だそれは？」
少佐はフォース・リーコンについて説明を開始した。
「ジャー・ヘッドか。ふんっ。散々俺らを馬鹿にしやがって」
軍曹は唾を吐きながら呟いた。
「軍曹は海兵隊に余り良い思いが無いのですか？」
「ハッキリ言えば、あいつらは俺らみたいな特殊部隊を嫌悪をしている」
それは前に聞いた事があるが、改めて聞かされると相当仲が悪いん

だ、と思える。

「それはそうと少佐。あたし等はどれくらいここに留まります？」

「民達を逃がし、ある程度敵を叩き潰してからだ。その時はここを壊すぞ」

敵にここを使われたくない、と少佐は言った。

その時を考えて今の内に処分できる物は全て処分しろ、と少佐は私たちに命令をしてそれに頷いた。

第四十二章：初めての戦い

妻がコーヒーを淹れに出て行ってから私は史記を書いていたが、ここで軽く一息いれた。

どうも歳を取ったのか近頃は一息いれる事が多くなったと思う。

昔ならこんなに一息いれたりはしなかったのだが・・・・・・

しかし、同時にこう思う。

『私も・・・もう直ぐ皆の所へ行けるんだ』

今にして思えば長く生き続けていた気がする。

もう私と妻たちだけが生きている。

皆はもう行ってしまった。

私たちだけが取り残された気分になるが、改めて思えばこれは・・・・・・・

「“殿”だな」

殿とは味方が退く時に退路を護る役目だ。

私が初陣を飾った時もそれだった。

リカルド様達がヴァエリエに来た時、既に重傷者達とサラ様達は東

へと逃げて行った後だ。

残っているのは民達が僅かだった。

それを考えると私の初陣はもっとも危険だが、名誉ある殿だ。

今もその任務を任されたんだ、と思えばやる気も出る。

そして昔を思い出しながら軽く目を閉じた。

私は装備を整えて銃眼から遠くからも見える軍団を見ていた。

初めて自分で見る軍団は一歩も乱れずに列を整えて進んで来ている。

既に5日が経過し、リカルド様達が来る日となった。

少佐の読みでは3日だったが、どうやら内部で何かあったらしく2日ほど時間が掛ったらしい。

まぁ、それのお陰で緊張を解せたが。

そしてリカルド様達の様子を軍曹達が偵察に行って確認して来るとこう言ってきた。

『敵は警戒しながら進んでいます』

それを聞いた少佐は「熱烈な歓迎で迎えてやる」と口端を上げて笑った。

これを見れば悪役は少佐だ、と思えるような笑いだった。

まぁ、実際性格が悪役に等しいからそう思われても仕方ないが。

そして少佐の傍らには狼人のガルムが居るから余計に様になる。

「全員。銃眼に付け。だが、撃つな。先ずは獅子頭軍団達が迎える」

少佐は煙草を吸いながら私たちに命令をした。

こんな非常事態に関わらず煙草を吸う少佐。

だが、それだけの余裕を感じさせる。

そんな事を思いながら私はリカルド様の方に視線を向けた。

リカルド様は馬に乗ったまま城の手前で軍を止めて城中に聞こえる声で叫んだ。

「サルバーナ王国、サラ・ロクシャーナ。もはや我々の勝利は決定だ。潔く無条件降伏をしろ！？」

「居ない相手に向かって話し掛けるのは寂しいもんだ」

確かに、と私は頷いた。

その答えとばかりに獅子頭軍団が城から出てきた。

死者・重傷者を合わせて２８０００人が居ないから、２２０００人だ。

それに指揮を執る者も居ない。

しかし、少佐に予め命令を下されているから問題は無い筈だ。

それを見てリカルド様は手を上げて戦象と戦車を繰り出した。

「やはり読み通りだな」

少佐は煙草を吸いながら言った。

少佐の読みでは、恐らく我々は降伏しないと向こうは考えている。

それを完全に叩きのめす為に、ザンビア平野の戦いで使用した戦象と戦車を出したのだ。

戦象は言うまでもなく巨大だ。

その巨大さを兵達に見せて動揺を誘う。

そこへ戦車を繰り出して陣形を乱れさせてからザンビア平野での戦いをまたする。

だが、これは私たちが仕掛けた罠。

この戦いで戦象と戦車を一気に消滅させるのが狙いなのだから。

そしてリカルド様は手を降ろし、戦象と戦車を突進させた。

獅子頭軍団は横に並んでいたが、象が通る道を空けて戦車に対しては盾を置き構えた。

これにリカルド様は驚いた顔をするのが私には見えた。

戦象は空いた道を通り抜けて行く。

そこへ最後の列に居た兵たちが槍を投げて戦象を刺殺し乗り手を殺した。

戦象の鳴き声が虚しく響き、ドシンッと音を立てて地面に倒れる。

そして戦車もまた車輪に槍などを突っ込まれて横転し、そこへ止めを刺された。

これにリカルド様達は些か動揺をしたが、直ぐに騎馬隊と歩兵を同時に出してきた。

「内心は動揺しているな・・・・・・・」

少佐は煙草を指で挟み煙を吐いた。

私はまたザンビアで行われた戦術をするのか?と思った。

ザンビアでの行われた包囲網戦術。

あれを破るのは至難の業だ。

騎兵が先ず陣を突破し背後に回り込んで前方を歩兵たちで取り囲み殲滅する。

だが、その片方が逆に包囲されたどうだろう?

それを今から行うのだ。

騎馬隊が風のように重装歩兵に突進していき、それに続いて歩兵が続くが明らかに距離がある。

少佐は指をパチン、と鳴らした。

すると城壁の影に潜んでいた弓兵が火矢を地面に射た。

あっという間に騎馬と歩兵の間を横一列に炎の壁が立ち上がった。

予め地面に油を染み込ませて燃え易くしておいたのだ。

そして騎馬が獅子頭軍団の手前に来たら射ろ、と命令した。

これにより炎の壁を作り上げて歩兵と騎馬隊を孤立させて叩くのだ。

騎馬隊は背後を炎の壁に阻まれて前に進むしかない。

しかし、重装歩兵は横一列に並び、以前使用していた槍よりも更に長い槍を繰り出してきた。

騎馬隊を相手にするには、長い槍などを一列に並べて迎え撃つのが望ましいと少佐が言って長い槍を用意したのだ。

騎馬隊は一列に並んだ重装歩兵に前を挟まれて後ろは炎の壁に挟まれて逃げられない。

そうなると憐れだ。

あっという間に串刺しにされた揚句に炎に追い遣られたのだから。

騎馬隊の断末魔の叫び声が響き渡る。

そこへ炎の壁を擦り抜けて別の騎馬隊が果敢にも突進して来たが、先ほどの騎馬隊と同じ末路を辿った。

そこから休まずに攻撃を続けた。

生き残った弓兵たちは矢を歩兵たちに狙い射続け、重装歩兵なども投げ槍を投げては敵兵を串刺しにしていく。

「防御しろ！！騎馬隊は迂回しろ！？」

リカルド様の叫び声が聞こえてくる。

それと同時に馬の蹄の音が聞こえてきた。

蹄の音は炎の壁を迂回し、私たちの方に来た。

だが、そこには馬防柵が2重3重と備えてある。

騎馬隊は馬防柵に動きを封じられた。

そこへ弓兵の半分が騎馬隊を狙い撃ちした。

騎馬隊は飛躍してくる矢を払い落すが、次から次へと矢が来て何人も刺さって行く。

しかし、騎馬隊を潜り抜けて槍兵と鉄鎚兵が柵を越えて進んで来る。
柵を潜り抜けて槍兵と鉄鎚兵は砦を見つけると雄叫びを上げて突撃をしてきた。

「罠に自分から跳び込んで来る獲物だな」

少佐は口端を上げて嗤った。

その嗤い方が、如何にも悪役だからどっちが悪者なのか分からなくなる。

槍兵と鉄鎚兵は砦に突撃してきたが爆発で後方へと吹き飛ばされた。
地雷を踏んだのだ。

地雷は砦の前に埋められており、更に“Ｍ１８クレイモア”が設置されている。

クレイモアは対人地雷でリモコン式とワイヤー式の２種類があるのだが、私たちの方はリモコン式を採用している。

彼等は地雷がある事に気付いたのか、慎重に行動をしようとしたがそこへ弓兵の矢が降り注ぐから堪らない。

彼等もまた立ち往生して騎馬隊同様に矢の的にされた。

「８１ｍｍ迫撃砲を敵本隊へ向けて撃て」

少佐は迫撃砲に付いていた部下に命令した。

弓兵で生き残ったのは僅かだ。

だから、如何に上から相手を狙うという有利な立場でも量では確実に負けてしまうし、半分をこちらに向けているから本体を攻撃するのが疎かになる。

それを迫撃砲でカバーするのだ。

迫撃砲に着いていた兵は直ぐに“榴弾”を筒に入れた。

榴弾とは迫撃砲などでは一般的に使用される砲弾だ。

榴弾を入れると直ぐに発射されて、天に向かって登ったかと思えば直ぐに落下した。

落下すると爆発を起こし、悲鳴と爆音が響き渡った。

「そのまま撃ち続けろ」

少佐は攻撃を続けるように命令しつつ、周囲を警戒するように更に命令した。

そこへ無線の音が鳴った。

『少佐。ジャー・ヘッドがこちらを狙っています』

無線で大尉の声が聞こえてきた。

銃眼から視線をやると、森林を進んでいたフォース・リーコンの者

たちが見えた。

彼等は遮蔽物に身を隠すと戦闘態勢を整えてきた。

「奴等より先に撃て！！」

少佐が右手を前に突き出した。

私たちは一斉射撃をした。

ブローニングＭ２の乱射音とＬ１６　８１ｍｍ迫撃砲の発射音が木霊する。

ブローニングＭ２の威力は凄まじく、たった1発の弾で当たった槍兵の身体が真っ二つに折れてしまった。

やはりあれで撃たれたくないと私は思う。

フォース・リーコンは直ぐに散開し、Ｍ６０Ｅ３を装備していた兵は地面に伏せると銃身の下に付いている2脚を地面に立て、射撃体勢を取り一気に撃って来た。

「我々が援護する。君等は迂回して攻めろ！！」

７．６２ｍｍＮＡＴＯ弾は軍曹の使用する５．５６ｍｍＮＡＴＯ弾よりも威力がある。

Ｍ６０Ｅ３の弾が銃眼の間をすり抜けて何発か砦に当たるが、大半は木の杭に当たった。

そのＭ６０を乱射しながらフォース・リーコンの隊員が他の兵に命令をした。

それに彼等は頷いて迂回しようとした。

私たちも負けてはいられない。

「ワイド。あの“豚”を黙らせろ！？」

「了解っ」

ワイド中尉はＲＰＫ軽機関銃の２脚を地面に当て、伏せ撃ちでＭ６０目掛けて撃ち始めた。

豚とはＭ６０の蔑称で、その重量と外見から名付けられたらしい。

Ｍ６０Ｅ３を撃っていた相手はワイド中尉の撃つＲＰＫに怯んだが、撃ち返してきた。

私はモーゼルで見える敵を撃ち続けていたが、そこへ砦を破壊しようと一人がＭ７２ロケットランチャーを背中から降ろし構えてきた。

あれを撃たれては不味い！！

私はモーゼルに付いている銃眼でＭ７２ロケットランチャーに狙いを定めて引き金を引いた。

肩に強い反動が来るが、もう慣れっこだ。

１発撃ってはボルトを後ろにやり弾を排出しボルトを前に押し出し

て次弾を装填した。

M72が爆発する音と共に炎がその周りを包み込んだ。

兵たちの断末魔の声、爆音と銃声・・・・・まさに地獄絵図だ。

だが、私の心は自然と・・・冷静だった。

これが戦争だ。

これが軍隊の仕事なのだ。

そして私は生きてエリーナ様の元へ行く。

敵を倒してエリーナ様の元へ行くと約束したのだ。

男に二言は無い、と私は言った。

それならその約束を守らなければならない。

そう思いながら私はモーゼルを撃ち続けた。

幕間：戦火の脱出

城の外から銃声と断末魔の叫び声が聞こえてくる。

始まったか。

私は左肩に掛けたウィンチェスターM2のレシーバーを引いた。

これで何時でも撃てる。

「さぁ、皆さん。この音を聞いてもまだ城に残りますか？」

城の外から聞こえる銃声と断末魔の叫び声を間近で聞いた民達は急いで逃げなくては、と慌てふためいた。

「沈まれ！！あれは我が軍が勝っている証拠だ！？」

私の前に一人の男が出てきた。

この男は確か・・・区を1つ纏める区長だったな。

しかし、余り良い話は聞かない。

男は私を親の敵とばかりに私を睨み据えた。

「貴方は私たちをここから追い出して路頭に迷わせる気か？！」

「私は一刻も早くここを逃げた方が良いと言っているんです。貴方は区長ですが、この方達の意志を決める決定権は無い筈です」

「黙れ！！貴様も司教だ。司教に彼等の意志を決める権利は無い筈だ！？」

確かにそうだが、民達の中には逃げたいと顔で答えている者たちが多い。

そこへ獣の鳴き声が聞こえた。

1匹だけではない。

数匹・・・いや数十匹だ！！

私は部屋を出て空を見上げた。

空を覆うようにして飛ぶ漆黒の翼。

あれは・・・ワイバーン！！

ワイバーンとはドラゴンの子分とも言える種類でドラゴンが両手足がある4足に対してワイバーンは2足しかない。

体格もドラゴンに比べれば格段と劣る。

故にこれを乗る者たちをワイバーン・ナイトと呼び、ドラゴンに乗る者をドラゴン・ナイトと呼ぶ。

ワイバーン・ナイト達は一斉にヴァエリエに向かって急降下すると炎を吐いてきた。

私はそれを追う様に見ると、家々が燃えていた。

これに民達は恐怖した。

恐怖は伝染する。

皆が騒ぎ立てるのを男は抑えようとするが、恐怖で周りを見る事が出来ない民達を抑える事は出来なかった。

そして私に助けを求めてきた。

「皆さん。落ち着いて下さい。以前に準備した入口から逃げて下さい。必要な物は最低限に抑えて先ずは女子供年寄りを逃がしなさい。男は消火活動をしなさい！！」

民達は頷いて我先にと自分の家へと向かおうとした。

それをまたこの男は止めた。

「逃げるな！！リカルド様だって我々を殺しはしない。寧ろここに残れば私たちは安定な生活を送れるんだぞ！？」

それを聞かないで逃げる民達に代わって私が訊ねた。

「どうしてその様な事を言えるのですか？」

この男の言葉を聞くと、まるでそれは予め約束していたという風に聞こえる。

「そ、それは・・・・・・」

男は口をもごもごさせた。

・・・・・・この男、か。

「貴方は・・・どうやら自分の利益の為に他人を踏み台にしようとしているようですね」

この男は何かしらの密約を結んだに違いない。

恐らくは城を占拠したは良いが、民達が居なければ首都の政が滞る。

それを考えてこの男に民達を残すように言ったのだろう。

胸糞悪い・・・・・・

「貴方は悪魔に魂を売ったようですね」

「だ、黙れ!!き、貴様のような聖職者に・・・ぎゃあ!?」

私は男の顔に力を込めて拳を打ち込んだ。

「そんなに残りたいなら貴方だけ残りなさい」

私は鼻血を出す男に向かって言うと急いで女子供年寄りを先導して脱出口へと導いた。

森の方も火の手が上がっている。

だが、直ぐに消火活動を始める兵たちが居た。

更にそこには聖騎士団達が待っていて、民達を受け取った。

「先ずはこの方たちを逃がしてください。私はまだ残っている民達を逃がします」

『はっ！！』

聖騎士団は頷いて民達を東へと逃がした。

東へは徒歩でも数日は掛る。

だが、少しでもこの・・・地獄の業火から逃げられるなら良いだろう。

民達は聖騎士団に護られながら東へと走り去って行く。

それを最後まで見送らずに私は城へと引き返し、まだ残っている民達を逃がし始めた。

城に残る民達はわらわらと家裁道具などを背中などに背負い、火の手から逃れようとしている。

男達は井戸から水を組み上げては火を消そうとしている。

しかし、そこへワイバーンの炎が襲って来る。

くそっ。何とか出来ないのか？

私は舌打ちをしながらも民達を脱出口へと逃がす。

そこへ・・・・・・・・・・・・

「司教様っ」

振り返ればワイドが息を切らしながら来ていた。

「ワイド。急いで民達を逃がすんです！！」

「少佐からも言われました。司教様は近くの民を逃がして下さい。私は奥まで行き逃げ遅れた民達を探します」

「分かりました」

私は頷いて民達を逃がし続けた。

しかし、まさか敵がワイバーンまで繰り出して来るとは・・・・・・・・・

少佐の話ではワイバーンは見ていないと言っていた。

となれば援軍か？

ワイバーンなどなら辺境の地でもここまで来るのに時間は掛らない筈だ。

私は思案したが、今はそれ所ではないと思い転んだ女の子を抱き上げて、脱出口まで運んだ。

「落ち着いて行動しなさい。先ずは女子供年寄りが順です！！」

私は声を張り上げて混乱と恐怖で騒ぐ民達を逃がし続けた。

何としてでも彼等を戦火から逃がさなければならない。

それが私の・・・聖職者としての役割なのだから。

第四十三章：おめでたい女

「ワイバーンを繰り出すとは・・・・援軍か？」

少佐は空を見上げながら愚痴を零した。

先ほどまで私たちは敵を殲滅していたが、いきなりワイバーンが何匹も現れてきた。

リカルド様は援軍だ！！と歓喜の声を上げたが私たちには恐怖の権化でしかない。

ワイバーン相手に勝てるのはドラゴンかワイバーンだけ。

天馬では分が悪い。

しかも、こちらには対空装備が皆無だ。

ブラック・ホークは既に東へと移動させた後だから使えない。

何か手は無いか？

「リーシャ。あいつ等は何とか出来ないのか？」

少佐は私の近くでＡＫ７４Ｓ－Ｕを乱射していたリーザ中尉に訊ねた。

「残念ですが出来ません。私たちの乗る天馬では勝てないのです」

リーザ中尉の答えを聞いた少佐はどうするかね？と煙草を吸いながら考え始めた。

よくもまぁ、こんな時に煙草を吸えると思う。

「伏せろ！！」

しかし、いきなり煙草を捨てると私とリーザ中尉を抱き抱えて横に飛んだ。

そして爆発がした。

私たちが居た場所はワイバーンの吐いた火で地面に大きな穴が空いていた。

あれを喰らっていたら、と思うと身震いする。

「大丈夫か？」

少佐はＡＫＭアサルトライフルを手に銃眼から近付いてくる敵を撃ち殺し、私たちに訊ねてきた。

「は、はいっ」

「大丈夫です」

私とリーザ中尉はそれに答えながら、銃眼に張り付いて撃ち始めた。

「高が蜥蜴の分際で生意気だな」

少佐はブーニー・ハットを被り直しながら愚痴を零し無線機で塔に居る大尉に命令をした。

「ミーシャ。あの蜥蜴を狙撃しろ。乗り手でも良い」

『了解』

大尉の声が無線機越しに聞こえる。

塔には大尉とチャレンジャーが居る。

塔は狙撃などには便利だが、一歩間違えれば死ぬ確率が高い。

私は親友でもあり部下であるチャレンジャーの無事を祈りながらも近付く敵を葬る事に集中した。

フォース・リーコンは援護射撃をしながら傷ついた兵たちを後方へと護送していた。

・・・なるほど。

傷ついた兵たちは後方へと護送する。

確かに死者はそのままに出来るが、負傷者は後方に護送して傷の手当てをしなければならない。

それなら死者より傷ついた者達を増やした方が良いな。

私は頭の中で冷静にそれを感じ取った。

そして指揮官を探し始めた。

指揮を執る者は下っ端の兵たちには頼れる相手。

カルナンでプロイセン様達がやられた時、兵たちは混乱したと聞いている。

それから察するに指揮官を狙うのも良いだろう。

だが、指揮官は何処にも居ない。

隠れたか？

そんな事を思いながら、私は突撃してきた槍兵の足を狙い狙撃した。

槍兵は地面に倒れ、血の湧き出る足を抑えて泣き喚いていた。

しかし、痛いという事は生きているという証だ。

その者は後方へと護送された。

その次も私は負傷者を出す事にした。

そして気が付けば夜になっていた。

夜になると傷ついた者たちの呻き声などが聞こえてくる。

こちらも傷ついた者たちも居るが幸いにも死者は出ていない。

私は銃眼から顔を僅かに出して敵が来ていないかどうかを確認して

いた。

夜襲を掛けてくるかもしれないと思っていたが、どうやら敵は我々の攻撃に対して恐れたのか慎重にしている。

だが、逆にその慎重さが私には圧力になっていた。

「どうだ？敵の様子は」

少佐が私の隣に座り、銃眼を覗きながら訊ねてきた。

「今の所は来ていません。ですが、逆に怖いです」

「お前もだんだん解かってきたようだな」

少佐は愉快な笑い声を上げながら敵がこれからどうするか、と私に訊いてきた。

「私が敵なら・・・ここを攻めるよりも先ず城を攻略します」

私たちも厄介だが、先ずは城を占領する事が大事だろうと思う。

要は城を抑えれば向こうの勝ちなのだから。

「その通りだ。それに城には民達も居る」

民達を人質に取れば簡単に私たちは負ける事だろう。

そして向こうには城の見取り図があるから、秘密の通路なども恐らくは描いてある筈だ。

それを考えると、ここで戦うよりは逃げた方が良いかもしれないと思う。

「それで民達はどうですか？」

「まだ逃げている途中だ」

しかし、ここもいつまで持つか解からない。

しかも、中には強制的に残されている者も居るという。

エドリアス様の話によればリカルド様と密約を結んだ者が裏で手を引いているようだ。

「何とかなりませんかね？」

「司教の話では難しいようだ」

その者を黙らせても民達は残ると言っているらしい。

「ここで死ぬ気ですかね？」

「いや違うな」

「では何です？」

「リカルド側と密約を交わしているか、火事場泥棒でもする積りだろう」

火事場泥棒・・・・つまり、人が居ない事を利用して盗みを働く積りか。

「こんな時によく出来ますね」

「こんな時だからこそ出来るんだよ」

少佐の言葉に私は納得してしまった。

非常事態だからこそ、皆は必要最低限の物しか持たずに逃げる。

それなら、そこを狙えば良い。

何とも悪知恵が働く奴らだと思いながらも、胸糞悪くて仕方が無かった。

「しかし、流石は海兵隊だな」

少佐は敵ながらも大した奴らだ、と称賛の言葉を投げた。

銃弾の嵐を掻い潜りながらも負傷者を後方に護送する。

前線に立つ兵と同じ位、危険な任務であり称賛される任務だ。

「誇り高き少数精鋭・・・まさに具現化された奴らだな」

「はい」

それに私は頷いた。

そして交代の者が来て私は交代した。

やっと休めると思うと身体が一気に疲れた。

鉛のように身体が重い。

それに対して少佐はまるで疲れを感じていない様子だった。

私はそれに少し羨望を抱きながらズルズルと足を引き摺りながら歩いていると・・・・・・・・・

「私を置いて皆が行っただと!?」

こんな夜中に大声で叫ぶ奴が居るとは・・・しかも、知っている人物だ。

声のする方向に行くとチャレンジャーと下種女が居た。

「こんな夜中に声を出さないで下さい」

私は呆れながら下種女に話し掛けた。

「何だ・・・ぐがっ」

下種女はまた声を出そうとしたが少佐が口を片手で抑えて止めさせた。

「黙れ。敵は音で場所を確認できるんだ」

何より夜中だ。

静かにするのがルール――規則だろ？

少佐は人差し指を口に当て、下種女に告げた。

少佐がやると、何だか変に奇妙だと私は思う。

しかし、下種女は暴れてしょうがない。

その下種女を強引に居住区の中に入れて、今まで何処に行っていたのか？と訊ねた。

「なぜ貴様のような男にそれを・・・・・・」

「言わないと力づくで喋らせるぞ」

少佐はコルトの撃鉄を起こした。

それに恐怖を感じたのか下種女は口を開いた。

「・・・援軍を頼みに行っていた」

「誰にだ？」

「私の叔父だ」

下種女の親戚も中央貴族からしく、軍部に関わる仕事に携わっていたらしい。

そこで援軍を他国に頼めないかと屋敷に向かったらしいが、誰も居

なかったと話した。
その他にも懇意にしていた貴族たちの屋敷を当たったが誰も居ない。
「おおかた逃げたんだろうな」
少佐の言葉に下種女は何も言えなかった。
そして帰って来てみたら親衛騎士団は居ないという事態に陥っていたらしい。
というか、貴族たちは既に逃げたのをこの女は知らなかったのか？
それを少佐が訊けば逃げない筈だと思っていたらしい。
「おめでたい女だな」
そんな確証もない事を考えていたのだから、確かにおめでたい女だと思う。
それに下種女は怒りを覚えたようだ。
「黙れっ。貴様のような傭兵風情に言われたくない！！」
「本当の事だ。それよりさっさとここから出て行け」
あんたが居ると邪魔以外の何でも無い、と少佐は語った。
「何だと！！」

「ここは俺が指揮を委ねられた場所だ。お前が居ると邪魔でしょうがない」

これに完全に切れた下種女が剣を抜いた。

「今の言葉を取り消せ！！」

「嫌だね。それから大声を出すな、と言った筈だ」

「黙れ！！私は、誇り高きし・・・・・・・・・」

これまた最後まで言う前に少佐の鉄拳を腹に打たれて気絶させられた。

「煩い女だ。こいつの口を針で縫った方が良いかもな」

などと少佐は恐ろしい事を言ったが、私たちはこれに笑ってしまった。

そこへガルムが現れた。

「我が主。好い加減、この不味そうな女を始末しませんか？」

煩くて眠れない、とガルムは愚痴を零した。

「そう言うな。こいつも一端の指揮官だ。所で、また民達を連れて行っていくれ」

この女も、と少佐は付け加えた。

「この不味そうな女も、ですか？」

ガルムはこれに難色を示した。

まぁ、安眠を妨害された女を民達と一緒に連れて行け、と言われて難色を示すのも無理は無い。

「連れて行け。ここに居ると邪魔だ」

「・・・分かりました」

ガルムは嫌だと言いながらも結局は従い下種女を肩に掛けると逃げてきた民達と共に東へと向かった。

「無駄な時間だったな」

それに私とチャレンジャーは頷いた。

まったく無駄な時間だ。

お陰で休める時間が短くなってしまった。

第四十四章：名誉ある殿

朝が昇る前に敵は攻撃を開始して来た。

フォース・リーコンとワイバーンの攻撃だ。

残りの軍団は城を攻撃している。

獅子頭軍団は奮戦するが相手が大人数では勝ち目が薄い。

聖騎士団は民達を逃がすので援軍には出せないし、私たちも砦に釘付けで動けない。

彼等にとって幸いなのが背後を城壁で覆われている事だろう。

城壁を背後にしているから後方から攻撃をされる事は無いのだから。

フォース・リーコンの攻撃はアサルトライフルやＭ６０での攻撃で迫撃砲などの攻撃は無い。

どうやら向こうには迫撃砲などが無いようだ。

私は銃眼からモーゼルを出して敵兵を撃つ。

敵は血を噴き出しながら倒れるが、それでも向かって来る勇敢な敵も居た。

敵ながら天晴れだと思いながらボルトを動かして弾を排出し新たな弾を装填した。

「空中からワイバーンが急降下！！」

塔に居るチャレンジャーが私たちに向かって叫んだ。

私は上を見上げるとワイバーンが火を吐く所だった。

急いでその場を離れて地面に身体を伏せた。

爆発音と熱さが砦の中に広まる。

振り返れば木の杭が燃やされていた。

不味い！？

「急いで消火をしろ！！」

少佐の怒鳴り声が砦に響き渡り急ぎ消火活動をする兵たち。

ワイバーンはまた急降下をする為に上昇しようとしている。

私には乗り手が見える。

おのれ！？

私はモーゼルを乗り手に向けた。

距離５００・・・風速２・・・・・・・・

呼吸を整えて、引き金に指を掛けて・・・引いた。

空を切るような音を立てて８ｍｍモーゼル弾が銃口から飛び出て乗り手に向かって行く。

だが、狙いは外れてワイバーンの尻尾に命中した。

くそっ。

私は舌打ちをしながらボルトを動かして弾を排出し新たな弾を装填した。

直ぐに狙いを定めようとしたが、ワイバーンは上昇してしまった。

再び狙いを定めようとした私の頬を弾丸が掠めた。

ピッ、と音を立てて生温かい感覚が頬を伝った。

撃たれたのだ、と直ぐに気付いた。

急いで伏せて匍匐前進で銃眼に進み、撃った方角に居る敵を探した。

相手はＭ１４を構えて、銃眼の僅かな隙間を狙っては引き金を引いていた。

狙撃手か。

Ｍ１４は７．６２ｍｍＮＡＴＯ弾を使用するセミ・オートライフルだ。

大口径で威力もあり自動的に弾が排出される。

それにスコープを付けて狙撃に使用する者も居ると聞いた。

つまり彼は狙撃手か。

私は自分と同じ相手と戦うと知って、些か緊張した。

だが、ここは冷静になって相手を仕留めなければならない。

モーゼルを再び構えて、相手に狙いを定める。

相手は私に気付いていない。

今がチャンスだ。

私は引き金に指を掛けて、呼吸を整え相手に狙いを定めた。

そして・・・引き金を引いた。

相手は右手を撃たれて、後ろに倒れる。

そこへ間を置かずに第二射を撃ったが、突撃した槍兵に当たり駄目だった。

くそっ。

私は舌打ちをしながら、目の前まで迫ってきた相手に今頃になってから気付き腰のベレッタを抜いて応戦した。

一人の狙撃は難しい、とこんな時に私は痛感した。

戦いは夜まで続いた。

夜になり、敵は再び静かになったかに見えた。

しかし、リモコン式ではないワイヤー・トラップ式のクレイモアの爆発音がするから夜襲を仕掛けているのは丸分かりだ。

私は銃眼から目を逸らし、砦の中を見た。

砦はワイバーンの攻撃とフォースリーコンの攻撃でボロボロだ。

ワイバーンの火によって杭は燃え黒く染まっている。

地面なども抉られたりしているし、フォース・リーコンの銃痕もある。

そしてこちらも負傷者が続出している。

もはやここまでか。

このまま行けば我々は確実に死んでしまう。

ここ等辺が潮時かもしれないな。

そんな事を思っていると少佐が私の元へと来た。

「もやし。ここ等で終わりだ」

という事は・・・・・・・・・

「撤退ですか？」

「あぁ。民達もあらかた逃げた。後は俺らだけだ」

しかし、負傷者を先に逃がすと告げた。

「では、私たちは“殿”ですか」

殿・・・戦前離脱する味方の後方を追撃する敵を阻止する役目だ。

だが、味方からの援護は望めない。

ある限りの戦力で対応しなければならない危険な任務だ。

危険な任務だが無事に達成すれば名誉を得られる。

「あぁ。危険だが名誉な仕事だ」

それを聞くと俄然とやる気が起こる。

その日の内に負傷者は聖騎士団と獅子頭軍団達と共に東へと向かった。

「俺らはここで出来るだけ相手を止めるぞ」

少佐は残った私たちに向かって殿を務める事を伝えた。

殿をして敵を食い止め少しでも味方を逃がすのだ。

「そして頃合いを見計らって俺らも逃げる」

その時は既に設置しておいたＣ４プラスチック爆弾を爆破させて逃げる。

これで敵に使用されないし、敵に最後の打撃を与えられる。

負傷者を除いて殿を務める兵は全員で３００人。

たった３００人でどれだけ持つかは解からないが、出来る限り時間を稼がなければならないと私は思った。

そしてその中には私、チャレンジャー、少佐、軍曹、大尉、リーザ中尉とワイド中尉、そしてエドリアス大尉が居る。

最初エドリアス大尉は逃がす予定だったが、「私も戦います」と言って残る事になった。

従軍牧師は非戦闘員なのだが、エドリアス大尉も訓練を受けた身であるし、私たちの仲間だ。

きっと傷ついても居ないのに逃げるのは忍びないと思ったに違いない。

「司教。出来る限り負傷者を出してくれ」

ここは倒すよりも負傷者を出した方が良い、と少佐は語った。

「了解」

エドリアス大尉はそれに敬礼をして頷いた。

そして翌日、私たちの任務は始まった。

敵は城からの攻撃が無いから、砦に集中攻撃を開始した。

フォース・リーコンが援護射撃をして敵兵が突撃を繰り返す。

私たちはそれを迎撃する。

だが、向こうもワイバーンを繰り出しては空中から攻撃をして負けていない。

私は銃眼から狙撃を繰り返しながら、負傷者を出し続けた。

彼等の足を中心に狙った。

足を狙えばまず動けないからだ。

私の隣にはチャレンジャーが着いた。

チャレンジャーはＳＫＳカービンを使い私と同じように足を狙っている。

「１等兵ッ。敵が左から来ます！！」

私は左から来た兵の足を狙い引き金を引いた。

弾は敵の足を右足を貫通した。

敵兵は地面に倒れ、武器を手放して泣き叫んだ。
その敵兵を跳び越えて敵が槍を投げてきた。
私は咄嗟に後ろに倒れて槍を避けた。
槍は銃眼を抜け、地面に刺さった。
後少しでも遅ければ私は貫かれていた。
それを思うと怖いと思うが、それを必死に抑えて起き上り攻撃を再開した。
「ワイバーン2匹が左翼から急降下中!!伏せろ!!」
塔の上から2匹のワイバーンの攻撃が来ると聞こえた。
私とチャレンジャーは急いで伏せた。
そこへ炎が来て、杭を燃やし地面を大きく抉った。
急いでそれを消化し、ワイバーンに乗る乗り手を攻撃する。
その間を別の兵がカバーする。
だが、ワイバーンの吐いた炎は消すのが難しい。
その上に敵からの攻撃で思う様に消火活動が出来ない。
何とかしてワイバーンを黙らせる方法は無いのか?

私は対策を考えつつ、消火を急いだ。

―　―　―　―　―　―　―　―

私はランドルフ1等兵と共に燃える杭に水を掛けて消火活動を急いだ。

しかし、その間も敵のフォース・リーコンの射撃と弓兵、弩兵の矢の雨が降り注いで来るから上手いように水を掛けられない。

「負傷者が2名続出!!」

くそっ。また負傷者が出たか。

私は舌打ちをしながら水を掛けて杭を燃やす炎を消した。

だが、その杭の間を抜けて敵兵が踊り込んできた。

急いでベレッタを抜こうとしたが、間に合わない!!

その敵兵は額に銃弾を1発撃ちこまれて、杭に垂れ下がって息絶えた。

振り返れば少佐がＡＫＭアサルトライフルを構えていた。

「水を掛け続けろ!!俺が援護する!?」

少佐は杭の間からＡＫＭをフル・オートで乱射して近づく敵兵を撃ち殺した。

私たちは急いで炎に水を掛けて消した。

そして直ぐに銃眼に着いて敵兵を撃った。

初めての実戦で私は緊張していたが、今はそんな気持ちは微塵も無い。

いや、感じないのではなく感じる暇も無いのだ。

そんな暇があるのなら1発でも多く相手を撃つ事に集中した方が良い。

そう思いながら私は消火活動を続けた。

第四十五章：ピュロスの勝利（前書き）

ここでピュロスの勝利を載せます。

まぁ、割に合うかどうかは皆様のご想像にお任せするという無責任ですが、お任せします。（爆）

第四十五章：ピュロスの勝利

殿を続ける事3日が経過した。

敵の血を流し続けたが、私たちもまた血を流した。

負傷者が続出し、もう持たない。

その上、城が敵の手に落ちてしまった。

敵は城の見取り図に書かれていた脱出口から城へと潜入して城を落としたのだ。

「そろそろ引き際だな」

少佐はＡＫＭアサルトライフルを撃ちながら呟いた。

銃眼からモーゼルを撃っていた私は少佐の呟きに頷いた。

城も敵の手に落ちたし、味方が逃げる時間も稼げた。

そろそろ私たちが逃げても問題無いだろう。

夜になり、敵の攻撃が止むのを見計らって少佐は私たちに撤退する事を伝えた。

「先ず何人かでチームを組み、バラバラに逃げる」

しかし、行く先は東である事に変わりは無い。

ただ下手に大人数で動くよりも少数のチームに別れて移動した方が敵の錯乱になると思ったからだ。

私たちはそれに頷きチームを決めた。

私は軍曹、ワイド中尉、天馬騎士団の４人だった。

「俺らは西から逃げるぞ」

南から遠回りをして東へと向かう。

恐らく3日以上だが、５日以内には着く事が可能だと思う。

少佐はチャレンジャー、エドリアス大尉、リーザ中尉だった。

大尉の方は聖騎士団、獅子頭軍団、天馬騎士団の４人でチームを組んだ。

ブローニングＭ２とＬ１Ａ１　８０ｍｍ迫撃砲は分解して持ち運ぶ事にした。

私はビニール・テープを金属部分に巻いておいたライフルスリングにＳＫＳカービンを取り付けて肩に掛けた。

モーゼルは手で持つ事にした。

背中には数日分の食料などを入れておいたバック・パックを背負った。

軍曹達も同じように準備を行い、皆の準備が終わると少佐は言葉を放った。

「これより別々に移動して東へと進む。良いか？どんなに辛い環境だろうと諦めずに来い。さもないと俺が来ない奴等の首根っこを掴んで連れて行くからな？」

少佐の言葉に私たちは微かに笑った。

少佐なりの励ましの言葉なのだろう。

湾曲した言い方で、何時もみたいにぶっきら棒に言わないのは励ましの言葉だと私は思っている。

少佐は皆が笑ったのを見てから最後の言葉を放った。

「直ぐに行動開始だ。全員、生きて東で会おう」

散開しろ、と少佐は言い私たちはバラバラに砦を出た。

軍曹が先頭でワイド中尉が後方を担当した。

先頭と後方は強い者が担当するからだ。

ワイド中尉はＲＰＫ軽機関銃だから、いざという時には私たちより役立つという事で後方を担当するのだ。

私たちは夜の森を走りながら敵の気配が無いか探った。

今の所は無いが、いつ追撃されるか分からない。

だから、１秒でも早くこの場から離れなくてはならない。

私たちがある程度まで離れた、その時だった。

巨大な爆発音が背後からした。

振り返れば城を明るく照らしていた。

砦を爆破させたのだ、と直ぐに解かった。

軍曹は燃える砦を見ながら微かに笑ったが、直ぐに笑みを取り消して行くぞ、と言った。

「これで奴等に砦を使われずに済む」

休まず逃げ続けろ。

生きて皆に会うのだ、と軍曹は語り続けてコルトＭ７２７のコッキングレバーを引いた。

それに私たちは頷き、燃え盛る砦を後にして夜の森を走り続けた。

遠くからでも炎は盛りを明るく照らす。

だから、その明かりを頼りに追撃される恐れがある。

だからこそ急がなくてはならない。

夜の森は静かだ。

獣の雄叫びさえも聞こえない。

静寂の世界で目の前以外は暗い。

正に一寸先は闇、だ。

だが、その闇が我々には味方だと解かる。

闇のお陰で私たちは敵の追撃から上手く逃げる事が出来る。

今の所は敵の気配を感じていないが、フォース・リーコンの存在が私たちを緊張させる。

彼らなら闇夜だろうと、私たちを追撃する事は可能だ、と私は確信していた。

証拠なんて物は無い。

ただの勘としか言えないのだが、私には確信できた。

どれ位、進んだのかは分からない。

そして何処なのかも分からない。

軍曹がここで休憩と言い、私たちは休憩を取った。

地面に腰を降ろし息を吐きながらも四方を警戒する。

「少佐達は無事でしょうか?」

私は軍曹に訊ねた。

「少佐なら安心だ。あの人に勝てる奴はそう居ない」

相手がフォース・リーコンだろうと、だ。

「それにこれは俺の勘だが奴等は追撃を朝にならないとしない筈だ」

「ワイバーンが夜は動けないからですか？」

ワイバーンは夜は飛べない。

だから、もし追撃をするならワイバーンの援護は望めない。

人海戦術で我々を追うしかない。

だが、向こうにもかなりの打撃を与えた筈だ。

その負傷者を置いて行き、いつ追い付けるか分からない我々を追い掛けるだろうか？

それに向こうは城を占拠したのだ。

サラ様達を殺す事は出来なかったが、城を落とす事には成功した。

つまる所、今回の勝負は向こうの勝ちだ。

だが、割に合う勝利かと問われたら私なら否と答える。

現国王であるサラ様を殺さない限り、城を落としてもこの国はリカルド様の手に入らない。

それに首都を落としても、既に大半の民達は逃げた後だ。

残った者の数など高が知れている。

更に付け加えるなら国庫の予算や他国との交流などを記した書類も全て灰にした。

だから、一から全て自分達でやらなければならないのだ。

そして私たちとの戦いで戦象と戦車、更に騎馬隊なども失い新たに構成し直す必要がある。

割に合わないにも程があると思う。

「こういうのを“ピュロスの勝利”って言うんでしょうね」

「何だ、お前知ってるのか？」

軍曹が私の言葉に驚いた声を出した。

「少佐に教えられました。割に合わない勝利をピュロスの勝利だ、と」

ピュロスとは古代ギリシア時代に活躍した天才的戦術家の名前だ。

名将ハンニバルも彼の戦術を高く評価し、研究していたと少佐に教えられた。

そしてこのピュロスという人物はハンニバルも戦ったローマと戦争を起こした。

勝ち続けたのだが、勝利する事に兵たちを失うという目に遭った。

更にローマが講和に応じない事も災いした。

この言葉が出来たのは“アスクルムの戦い”と呼ばれる戦いだと記憶している。

ピュロス側の勢力は４００００に戦象が２０頭。

それに対してローマは４００００で歩兵の戦力で言うならば互角だったが、地形を活かした戦いで苦戦をピュロス側は強いられた。

何とかピュロスが勝利したが、代償に３５５０人の兵を失った。

ローマ側は６０００人だが、ピュロス側は幹部である将軍や友人たちを失った。

それを知らない部下が勝利を祝う言葉を述べたが、それに対してピュロスはこう語ったと言われている。

『もう一度ローマ軍と戦って勝ったとしても、我々は壊滅するだろう』

この言葉から払った犠牲の割に勝利して得たものが釣り合わないこと即ち割りに合わない勝利のことをピュロスの勝利と言う様になったらしい。

「まぁ、強ちリカルドの餓鬼から言わせれば割に合わない勝利だろうな」

3度も戦に勝ったが、完全な勝利は得てない。

その上、首都戦では多大な被害を被ったばかりか女王陛下を始めとした主要な人物たちも取り逃がした。

労働力も求めていたのだろうが、民達は大半が逃げてしまった。

割に合わない勝利――ピュロスの勝利だな、と軍曹は語った。

そして朝日が昇り始めようとしている事に今更に私は気付いた。

「朝になるな。もっと奥まで進むぞ」

朝になれば敵が追撃して来る、と軍曹は言い私たちも頷いて立ち上がった。

そして東へと向かい続けた。

何としても生きて東の地を踏まなければならない。

エリーナ様と約束したのだ。

生きて再びエリーナ様と会うと・・・・・・・・

男に二言は無い、と私は言い切った。

なら、それを証明しなければならない。

第四十六章：再び東の地へ

東を目指す事5日が経過した。

あれから敵からの追撃は一度も来なかった。

私たちはそれに安堵しながらも尾行されていないか細心の注意を払いながら東の地をついに踏んだ。

東の地はサルバーナ王国を建設した伝説の王であるフォン・ベルト閣下が最初に居を構えた土地である。

だが、第二の首都であるヴァエリエに移動してからは誰も住み着かずに今では寂れた土地となっているがそれは表向きだ。

この地にはフォン・ベルト閣下の命令を忠実に何千年にも渡って守り続けている者たちが居る。

影の親衛隊だ。

彼等はフォン・ベルト閣下の命令を忠実に守り、いつかこの地が再び栄光ある首都になる事を信じている。

そして内乱が起こった時はここに来ると私と少佐は約束した。

その約束が本当に実現するとは・・・・・・・・

私は心の中で運命と言う見えない力に恐れずにはいられなかった。

東の地へと足を踏み入れた私たちだが、この土地を訪れたのは私と少佐だけだ。

だから、私は道案内をする事になった。

「このまま進んで下さい。そうすれば、村がある筈です」

「こんな辺鄙な所に村があるとは信じられないな」

軍曹は如何にも辺境の地だと言った。

「軍曹。お言葉ですが、この土地は由緒ある土地ですし、私たちの力になってくれる者たちが居ります」

今までずっと影に潜みながら生きてきた誇り高き者たちが居るのだ。

「誰だい？そいつらは」

「親衛隊です」

影の、と私は言った。

「影の親衛隊か。何か訳ありのようだな」

「それは村に着けば解かると思います」

軍曹はそれに頷いて進み始めた。

進んで行くと、私は誰かに見られている気配を感じた。

一人・・・二人・・・・・いや、四人か。

敵か？

いや違うな。

殺気がまるで感じない。

軍曹も気付いているだろうが、殺気を感じないから素知らぬ振りをしているのかもしれない。

そんな事を思いながら進んでいると・・・・・殺気を感じた。

左からだ。

私はここでも無意識に身体が動いていた。

刷り込みとは恐ろしい物だ。

モーゼルで突き出されたナイフを防御して相手の腹を蹴り地面に倒れさせた。

そしてそのままベレッタを抜いて銃口を向けた。

狭い場所、もしくはこんな場合ならライフルより拳銃の方が有利だと身体が告げていたのだ。

だが、引き金は引かなかった。

倒れた相手には見覚えがある。

赤銅色の頭髪は癖っ毛で所々で跳ね返っている。
その癖っ毛を額に付けた鷲色の布で止めている。
肌の色は健康的な小麦色で瞳は森林を思わせる緑の色だ。
その姿を見て私は名を口にした。
「ガリシャ・・・・・・・・」
「ど、どうして、あたしの名を?」
「私だよ。ランドルフだよ」
どうやら私を覚えていないようだ、と知り些か傷つきながらも私は自分の名を言った。
「え?あの、情けない男を画に描いたような坊ちゃんなの?」
「情けない男で悪かったね」
私はこれには怒りを覚えながらも、倒れたガリシャに手を差し出して起こした。
「久し振りだね。ガリシャ」
「え?あ、ああ、う、うん・・・・・・」
ガリシャは私を見ながら、どういう訳か視線を逸らした。

何で逸らすんだ?と思いながらも私はもう一度、久し振りと言った。
それにガリシャは視線を逸らしたまま頷いた。
「ロンガーム殿は元気かい?」
「う、うん。元気だよ。所で・・・ついに内乱が勃発したんだね」
ガリシャの言葉に私は静かに頷いた。
「テツヤ殿は来ている?」
「いや、まだだよ。ただ、旦那の部下達はもう来ているよ」
私たちで最後らしい。
「それで君は偵察にでも来たのかい?」
「まぁね。それはそうと、久し振りだね。ランドルフ」
ガリシャはやっと私の瞳を見て笑った。
前みたいに胸の時めきは起こらないが、それでも心が温まる気がするのを覚えた。
「それにしても会わなかった間に逞しくなったね?別人かと思ったよ」
「そうかな?身体は別に変化ないと思うけど」

「身体は情けないけど、何て言うのかな？何だか、男に見えるよ」

では前までは男に見えなかったのか？と私は訊きたいが、今はそれよりも村に行こうと思った。

「じゃあ、村に連れて行ってくれないかな？」

「良いよ。付いて来て」

ガリシャは私たちに背を向けて歩き出した。

歩くと、背中に背負った弓矢が見える。

左肩にはライフルスリングが付けられたイングラムＭ１０がある事に気付いた。

「それは使用していた？」

ガリシャのイングラムを見ながら訊ねた。

「うん。けっこう使いこなせるようになったけど、まだ完璧ではないんだ」

「そりゃそうだ。そいつを使いこなすには並大抵では無理だからな」

軍曹がイングラムを、いや・・・正確にはガリシャの身体を舐めるように見ながら呟いた。

「軍曹。貴方は節操という概念が無いのですか？」

私は思わず軍曹を窘めるように言った。

「失礼だな。これでも貞操観念は堅いんだぜ？」

『嘘ですね』

私たちは口を揃えて断言した。

貞操観念が堅いなら毎日のように両頬を赤く染めたりしない。

それを私たちが告げれば「傷は男の勲章だ」と開き直ってきた。

まぁ、何度もあんな目に遭わされながらもやるのだから、開き直りも立ち直りも速いのは分かっていた。

しかし、こうも直ぐに開き直ると改めて凄いと思う。

「ランドルフ。この見るからにチャランポランなおっさんは何？」

「お、おっさんって俺はまだ２８歳だぞ」

「旦那より５つも年下なの？その割には老けて見えるけど？」

ガリシャは前を歩きながら軍曹に毒を吐いた。

「ふ、老けて・・・・い、今までそんなこと言われた事ないのにー！？」

軍曹は誰かの真似をしたような口調で叫んだ。

「軍曹。煩いですから、口を抑えて下さい」

「もやし。てめぇ上官に指図する気か?!」

「違います。本当の事を述べただけです」

「そういうのを指図と言うんだよ!!」

ボカリ、と私は頭を殴られた。

「ちょっとなに内の坊やを殴ってんのよ!?この3枚目!!」

一緒に行動した天馬騎士団のお姉様は軍曹を殴り倒した。

ゴキャ、と変な音がして軍曹の鼻から血が滴り落ちた。

その外見が余りに可笑しくて私は笑ってしまった。

それに軍曹はまた殴ろうとしたが、ワイド中尉にも嗜まれて軍曹は諦めた。

「な、なんで俺ばっかり・・・・・・・」

軍曹は泣きながらも歩き続けた。

情けないというか、経験から学ばないというか・・・・・・・

そんな事を思いながら私たちはガリシャの住む村、ヴィルップに向かった。

だが、そこで私は驚愕した。

村全体が要塞と化していたのだから。

私が訪れた時は目立たない村だったが、今はその村を覆い隠すように城壁で囲まれていた。

そして更に驚いたのは既に城壁跡しかなかったリブリース城が目の前に建っている事だ。

前までは城壁跡がお粗末に残されていただけなのに、どう言う事だ？

「あれは“メジュリーヌ”さんが造ったんだよ」

「誰だい？その方は」

「あのドラゴンだよ」

「ドラゴンと言うと傷を負っていたドラゴンだよね？」

この地を訪れた時に助けたドラゴン。

名前はメジュリーヌと言うのか？

しかし、どうしてドラゴンがこの城を建てたのだろう？

「それは追々説明するよ。とにかく中に入って」

ガリシャは城壁まで近づくと何も無いと思っていた壁が動いた。

「凄い仕組みだね・・・・・・・・」

私は目の前の仕組みに驚愕を覚えた。

それは軍曹達も同じだったが。

「まぁね」

ガリシャは短く答えて私たちを城壁の中へと入れた。

中に入ると、そこには訪れた村ーーーヴィルップがあった。

「女王たちは城の中に居るよ。それはそうと、ようこそ。衰退から栄光の村ヴィルップへ」

ガリシャは振り返り私たちに一礼した。

「おぉ、来たか。ランドルフ君」

ガリシャの後ろからロンガーム殿が出てきた。

「お久し振りです。ロンガーム殿」

そしてやっと私の名前を間違えずに言ってくれましたね、と付け加えた。

「これは痛い事を言うな。それはそうと逞しくなったな」

前に見た時より色々な経験を積んだ男の顔だ、とロンガーム殿は言

ってくれた。

「えぇ。色々と経験を積みました」

「そうか。所でそちらはイーグル殿かな？」

軍曹を指差すロンガーム殿。

「はい。テツヤ殿の部下でイーグル軍曹と言います」

「そうか。なるほど。話に聞いていたが見た目通り軽薄を画に描いたような男だな」

「初対面でそれは無いんじゃないのかい？爺さん」

「そうかな？テツヤ殿も言っておったぞ。「あいつは戦いでは頼りになる。だが、女に関しては頼りにならない。寧ろ厄介事を起こす」と」

軍曹は少佐の余りな言葉にガクッ、と膝を折ってしまった。

「所でランドルフ君。テツヤ殿はまだ来ていないのかい？」

「はい。ですが、テツヤ殿なら無事に来ると思います」

あの方なら無事に着ける、と私は確信していた。

「そうだな。取り敢えずわしの家に来なさい。そこで身体を休めた方が良い」

疲れているだろ?と言われて確かに疲れている、と私は答えた。

だが、やる事がある。

「王女様はどちらに居ますか?」

「女王と一緒に城だ。何か用かい?」

「はい。無事に戻ってきた事を伝えたいと思いまして」

あの方との約束だから。

「そうかそうか。いやはや、なるほどなるほど。男らしくなったと思っていたが、既に王女を虜にしたのか」

流石はテツヤ殿の見込んだ男、とロンガーム殿は笑った。

「別に虜にした訳ではありません。ただ、約束をしたので・・・・・・」

「そういう事にしておこう。では、わしが連れて行こう。ガリシャ、お前は軍曹達を家に案内しなさい」

ガリシャは自分も行く、と言ったがロンガーム殿に2度も言われて大人しく軍曹達を家へと案内をした。

しかし、私を見てこう言った。

「ランドルフ。ちゃんと家に来なさいよ?」

「分かってるよ」

流石に城に泊る訳にはいかない、と私は思っていたのでそう答えた。

それを聞いたガリシャは笑顔になった。

元気な性格だが、笑顔もまた元気に満ち溢れていた。

それをロンガーム殿は面白そうな顔で見つめていた。

第四十七章：王女との再会

史記を書いているとドアが叩かれる音がした。

「どうぞ」

失礼します、と断りを入れてから妻が入ってきた。

盆には二人分のカップが置いてある。

妻は私にコーヒーを差し出して、自分は椅子に座り紅茶を飲んだ。

「順調ですか？」

「あぁ。今は君と東の地で再会した所を書いている」

「あの時、私は貴方ともっとお話がしたくて茶に誘いましたね」

「だけど、私はそれに気付かず去って行った」

若い頃は鈍感だったな、と私は思い軽く苦笑した。

「えぇ。でも、後でちゃんと茶に付き合って下さりましたわ」

「軍曹に言われたんだ。ちゃんとアフター・ケアはしろ、とね」

「あの方ですか」

妻は笑いながら紅茶を飲んだ。

私も淹れ立てのコーヒーを一口のんで再び書き始めた。

私とロンガーム殿は城に通じる道を歩きながら、今の状況を説明した。

「初陣が殿とは大したものだ」

ロンガーム殿は私の初陣を祝う言葉を述べてくれた。

「いいえ。私自身、ちゃんと出来たのか不安でした」

「いいや。出来たとも。最初の戦は皆、震えて何も出来ないのが普通だ」

それを訓練通り行えるのは稀だ。

それを私が出来たのはその稀に入る。

「一応、山賊と剣を交えたので実戦は経験した積りです」

「なるほど。しかし、たかが山賊と訓練された兵とでは質が違い過ぎる。それを怖がらずに出来たのは君の力だ」

誇りに持ちなさい、とロンガーム殿は言ってくれた。

それに私は頷いた。

「それはそうと、親衛騎士団の長を名乗る小娘が居たがあの女は何様だ？」

ここに来た途端に「貴様等は山賊か?!」と言ったらしい。

よくもまぁ、そんな態度を取れる物だと感心さえする。

そして色々と説明をしたらしいが、「こんな寂れた場所に住む者たちで何ができる」と鼻で嗤ったらしい。

テツヤ殿も波風を立てるが、下種女の方はもっと上だし救いの欠片も無い。

そんな事を私は思いながら、どうしました?と訊ねた。

「わしらが手を下す前にメジュリーヌ様が叩き伏せた」

「テツヤ殿が助けたドラゴンですよね?」

「うむ。あれから傷を治すとここに居座ってな」

何処からともなく持って来た材料などでこの城を建てたらしい。

「流石はドラゴンだと思った。そしてその親衛騎士団の長を見るなりこう言った」

『外だけでしか物事を判断できない愚かな娘が愚弄するな』

そう言って指1本で下種女を倒したらしい。

「わしらから見れば当然の敗北だった」

基本形でそれに何らかの工夫を凝らさない。

つまり保守主義。

悪く言えば頑固だ。

そんな話をしている内に城に到着した。

城の城門の前には獅子頭軍団が居た。

「来たか」

獅子頭軍団の者は私を見るなり、殿ありがとう、と礼を述べてくれた。

私は些か照れながらも頷いて城の中に入った。

城の中は広く何処が何処なのかまったく見当もつかない。

しかし、剣と剣が交り合う音が聞こえてきた。

「誰かが剣を合わせていますね」

「ほぉ、聞こえるのか」

「えぇ。あっちですね」

私は音がする方角を指差した。

「その通り。恐らくそのフィーナとヴィルヘルム殿だろうな」

「ヴィルヘルム殿が？」

「あぁ。どれ、先にそちらに行ってみるか？」

「はい」

私は頷いて、音のする方角へと足を向けた。

音のする方角に行くと、シュヴァルツフントの面々と親衛騎士団の面々が居た。

そして剣を合わせているのはヴィルヘルム元伯爵と下種女ことフィーナ様だった。

いや、剣を合わせているというのは可笑しい。

ヴィルヘルム元伯爵が遊んでいるのだ。

「どうしたどうした。その程度の実力か？」

ヴィルヘルム元伯爵は大剣を片手に下種女を馬鹿にするように嗤った。

「ま、まだだ！！」

下種女は息も絶え絶えになりながら、剣を両手で構えた。

「大した女だ。だが、実力はとてもじゃないが良いとは言えないな」

ヴィルヘルム元伯爵はそう告げると、大剣を右肩に掛けて左手でクイクイとした。

「これで最後だ。好い加減遊びにも飽きたんでな」

全力で来い、という彼に対して下種女は声を荒げて突っ込んだ。

「・・・・甘いな」

ポツリ、と呟いたヴィルヘルム元伯爵は大剣を素早く振り降ろして下種女を地面に叩き付けた。

しかし、刃の方ではなく水平にした状態で。

つまり殺してはいない、という事だ。

下種女は気絶した。

「よぉ。ランドルフ。来たのか？」

ヴィルヘルム元伯爵は私を見て幼子が泣く笑みを向けてきた。

「え、えぇ。所で何をしてたんですか？」

「ん？剣術ごっこだ」

ごっこ・・・こんな言葉をこの人が述べても違和感しか感じない。

そんな事を思いながら私は下種女を見下した。

気絶してピクリとも動かない下種女。

このまま気絶していた方が色々と面倒な事は起こらない・・・・殺すべき。

私は恐ろしい事を思った。

だが、本心だ。

この女が出てくると碌な事にならないし、テツヤ殿にも迷惑だ。

テツヤ殿は殺す機会が何度もあったのにそれをやろうとしない。

どう言う事か分からないが、やってしまった方が良いと私は思い始めていた。

「坊や。そんな無愛想な顔だと王女が怖がるぞ」

ヴィルヘルム元伯爵の声に私は意識を戻した。

「あ、いえ。すいません・・・・・・・・」

「謝る事は無い。俺自身、この小娘をここで斬り殺したいと思っていた」

お前もだろ?と図星を指されて私は言えなかった。

「やはりな。お前さんの気持ちは解かる。まったく父親に比べて明らかに劣っているな」

「フィーナ様の父君を知っているのですか？」

「あぁ。俺より年下だが、親衛騎士団の長として申し分ない実力を持ち人格者だった」

剣術から槍術、馬術など騎士として恥じぬ武芸達者だったらしい。

その上に人格者としても優れていたようだ。

例え貴族でない者に対しても優しく扱い、敵にも寛大だったと語った。

「先王に何度も意見を申し渡した俺をよく庇ってくれたもんだ」

そして最後は敵と相討ちという凄まじい戦死を遂げたらしい。

「そんな親父から英才教育を受けたのに、どうしたらこんな性格になるんだか」

「まったくです」

私は同感だ、と頷いた。

そんな偉大な父からどうやってこんな偏見で傲慢の塊が産み出されるのか・・・・・・・・・

まったくの不明だ。

「しかも、剣術は基本が出来ているが応用がまるで出来ていない」

これでは敵に直ぐに破られると語り、変形技にも弱いと語った。

「それはテツヤ殿に3度、いや4度も剣を振りかざして実証されました」

4度も人目も憚らずに挑んで、その度に変形技を繰り出されてぼろ負けした。

普通ならそれで解かる筈なのに変化ないのだから呆れ果てて物が言えない。

「4度もかよ。我が王は寛大だな。それはそうと・・・この根性は親父譲りだな」

この女の父も根性があったらしい。

どうやら根性以外は全て昔に置き忘れたようだ。

「それで我が王はまだ来ないのか？」

「はい。ですが、来ます。必ず」

「そうだな。王女はここから先の部屋に居る」

これを持って行け、とヴィルヘルム元伯爵は私に1本の花を手渡した。

こんな可憐な花を言っては何だが・・・・・・強面の男が持つと凄く違和感を感じるし・・・・気持ち悪い。

「いま俺を気持ち悪いと思っただろ？」

「いいえ！！」

私は急いで否定した。

だが、直ぐにばれて軽く頭を殴られた。

軽くと言ってもこの人が殴ると痛い。

「気にしている事を言うな」

別に言ってないのに・・・・・・・・・

私は痛い頭を抑えながらロンガーム殿と共にヴィルヘルム元伯爵の元を去った。

ああ、何でこんな目に遭うんだ？

何て事を思いながら王女の部屋に向かった。

「では、わしは先に家に戻る」

ゆっくりと王女と話せ、とロンガーム殿は言った。

「別にゆっくりと話しません。ただ、来た事を伝えるだけです」

「逞しくなったが、どうやらまだ女に関しては未熟のようだな」

まぁ、これからおいおい経験を積む事だろうて、と言ってロンガー

ム殿は立ち去って行った。

私はその後ろ姿を見送り、ドアを控え目に叩いた。

「誰です？」

ドア越しに幼い印象を受ける声が聞こえてきた。

「ランドルフです」

自分の名を名乗ると部屋の中でバタバタ、と音が聞こえてきた。

何の音だろう？

気になったが、勝手にドアを開けるのは気が引けるので待つ事にした。

ドアが開いた。

「ランドルフ・・・・・・」

ドアの前にはエリーナ様が居た。

「約束通り無事に貴方様に会いに来ました」

これをどうぞ、とヴィルヘルム元伯爵から渡された花を渡した。

「ありがとう。ランドルフ。本当に男に二言は無かったですね」

「約束は守るためにありますから」

私はそう告げて背を向けた。

「あ、あの、中で茶でもどうですか？」

「せっかくですが、これから行く所があるので」

では、と言って私は立ち去った。

第四十八章：夜の散歩

私はロンガーム殿の家に向かった。

ロンガーム殿の家は村の中でも大きいから直ぐに行けた。

ドアを控え目に叩くと直ぐに開いた。

「お久し振りです。ランドルフ殿」

ドアを開けて私を出迎えてくれたのは品のある老婦人だった。

控え目な色をした衣服を着ているが、その控え目な色が逆に本人の品格を出している。

ロンガーム殿が愛して止まないレイリア様だ。

「お久し振りです。レイリア様。以前よりもお美しいですね」

「まぁ」

レイリア様は軽く頬に手を当てて照れた様子を見せる。

それだけで下手な女よりとても綺麗で惹かれる。

「さぁ、中にどうぞ。ガリシャが首を長くして貴方を待っています」

「女性を待たせてしまいましたか」

エリーナ様もそうだが、私は女性を待たせる事が多いと思う。

余り褒められた事ではない。

「女性を待たせるのも男の特権です。男は多少、女を待たせた方が良いのです」

私はレイリア様にそう言われて幾分か元気付けられた。

そして中に招き入れられた私は食卓で食事をする軍曹達を見つけた。

「随分と早かったな。もっと時間が掛ると思ってたぜ」

軍曹は果実酒を飲みながら私に話し掛けてきた。

「いえ、ただ帰還したと報告をするだけでしたので」

「その割には遅かったじゃない」

ガリシャが何処か拗ねた目で私を見てきた。

「ごめん。城が広くてね」

言い訳だが、私は言った。

「言い訳だね」

バッサリと切り捨てられた私だが、落ち込んではいなかった。

寧ろ怒られて当たり前だと思う。

「ガリシャ。ランドルフ殿に失礼よ」
レイリア様がガリシャを軽く窘めた。
「だって遅かったんだもの」
「男を待つのも女の仕事よ」
「お婆ちゃんは古臭いのよ。今の時代、女だって働くし戦うわ」
「でも、最終的に男を癒せるのは女よ」
「それが古いの！！」
ガリシャは怒鳴ったが、ロンガーム殿に頭を叩かれて沈黙した。
「わしの妻に罵声を浴びせるな」
「でも、お爺ちゃん」
「でもじゃない。そんな事を言っているから浮ついた話の１つも出て来ないのだ」
ぶつぶつとロンガーム殿は文句を垂れながらも私に椅子を勧めてくれた。
その椅子に腰を降ろす私。
「さて、ランドルフ。改めてようこそ我が家へ」

「またお世話になります」

「いいんだよ。君のような男子なら大歓迎だ」

ロンガーム殿は私に果実酒を差し出してきた。

「先ずは飲みなさい。疲れた時には酒が一番だ」

「頂きます」

私はそれに礼を述べてから口にした。

口の中に果実独特の甘さと酸っぱさが広がり、身体が癒される。

女性に癒される時とは違う。

まるで空を飛んでいる感覚だ。

以前飲んだ時よりも酒の味が解かった気がした。

そんな事を思いながら再び飲んだ。

やはり以前よりも酒の味が解かった気がした。

食事を済ませた後は入浴した。

久し振りの湯に肩まで浸かり、身体の汚れを隅々まで洗い落した。

「しかし、少佐達はどうしたんでしょうか？」

ワイド中尉が身体を洗いながら軍曹に訊ねた。

「恐らく今日中には来るだろう」

軍曹は外から見える星空を眺めながら答えた。

「所で坊ちゃん。この村人達はどういう奴ら何だ？」

「彼等は初代国王であるフォン・ベルト閣下の命令を忠実に守っている者たちです」

私はこの村の事をありのままに説明した。

最後まで聞いた軍曹は「大した忠誠心だ」と述べた。

「いつ来るか分からない奴等の為にこの地で暮らす。並大抵のことじゃない」

それを全員がやっているのだから凄いと言える。

「所で坊ちゃん。あのガリシャとはどういう関係だい？」

「どういう関係と言っても、ただの知り合いとしか言えません」

「その割にはお嬢ちゃんの方はお前さんに気があるように見えたぞ？」

私はそうなのだろうか？と首を傾げた。

それを軍曹と中尉は顔を見合わせて「まだ未熟だな」、「まったくです」と言った。

私はどういう事なのか、まったく分からずに首を傾げるしか出来なかった。

入浴の後は部屋で身体を休める事にした。

私は簡素ながらも清潔感のあるベッドに腰を降ろして息を吐いた。

ここにいつ敵が来るかは分からないが、恐らくこの地で戦うとなればゲリラ戦が主流になる事だろう。

少佐も森林地帯ではゲリラ戦か狙撃が力を発揮する、と言っていた。なら、ここで私の本領は発揮される事だろう。

砦では余り力を発揮できなかったが、ここでなら発揮できる。

何よりここで負ければもう後が無い。

何としてもここで勝って押し返さなければならないのだ。

それを思うと俄然とやる気も起こる。

しかし、先ずは一休みだ。

戦いで疲れた身体をゆっくりとベッドに横たえた。

モーゼルとＳＫＳはベッドのすぐ脇に置き、ベレッタは枕の下に入

れた。

そして蝋燭を消した。

辺りは暗闇に包まれる。

私は瞳を閉じた。

果実酒を飲んだ事もあってか睡魔が直ぐに襲ってきた。

心地よい睡魔で私は吸い込まれるように闇の世界に意識を落として行った。

どれくらい寝ていたのか分からない。

しかし、目が覚めた。

気配を感じたのではない。

人を撃った時の夢を見た訳ではない。

ただ忽然と目を覚ましたのだ。

冴えた目は暗闇でも光っているように全てを見渡せた。

ベッドから起き上がり、ベレッタをズボンの間に仕舞った。

そして窓から顔を出して煙草を取り出して銜えた。

マッチで火を点けて熱い息を吐いた。

辺りは暗かった。

だが、私には良く見えた。

「・・・散歩でもするかな」

私は眠る事も出来ないので、気分転換に外に出る事にした。

モーゼルとベレッタを持った。

ＳＫＳには申し訳ないが、こちらの方が良いと思いこちらを選ぶ事にした。

ドアから出ないで窓から出た。

なぜドアから出ないかと問われたら、音がして他の人を起こすからだ。

外に出た私は煙草を吸いながら歩き続けた。

何処に行く訳でもなくただ歩いているだけだが、何故かそれが心地よい。

女神の抱擁を吸っているからなのか？

それとも殺伐とした戦場から抜け出して静かな森林を歩いているからなのか？

どちらでもないかもしれない。

そんな事を思いながら私は歩いていた。

そこへ城壁が目に入った。

城壁には階段がある。

そこを登って行くと闇夜でも直立不動で立つ兵を見つけた。

「お疲れ様です」

私は兵に労いの言葉を掛けた。

「お疲れ。こんな夜中にどうしたんだ？」

「眠れなくて・・・・・」

「そうか。それはそうと殿ありがとな」

お陰でプロイセン様達を無事に連れて来れた、と兵は言った。

「プロイセン様は城ですか？」

「あぁ。傷の具合は回復している。だが、まだ指揮は執れない」

「そうですか」

私は相槌を打ち、煙草の灰を捨てた。

「プロイセン様が指揮を執れないとなれば、宰相か親衛騎士団の長

が指揮を執るが・・・俺は嫌だな」

兵は私に呟いているのか、または独白なのか分からない言葉を吐いた。

確かにあの二人では荷が重すぎる。

もし、指揮を執れる者を上げるなら少佐以外に居ない。

まだ来ないのだろうか？

私は早く少佐に来て欲しかった。

だが、まだ来ない。

しかし、今日中には来ると軍曹は予想した。

そして今になって私が目を覚ましたのも少佐が来るかもしれない、と思ったからでは？と考えた。

もし目が覚めた理由がそうなら、私は遅く帰って来る父を待つ子供だな。

この歳でそんな事をするとは些か情けないと思った。

そんな事を思い苦笑すると背後に気配を感じた。

振り返る私は銜えていた煙草を落としそうになった。

私の背後には一人の女性が立っていた。

年齢はサラ様と同じ位の年齢で気も何処か似ていたが、容姿は異なっている。

闇夜の中でも光を放つ月のように輝く白銀の髪に、その月を妖しく見せる紫色の瞳。

夜の女神・・・・私は目の前に立つ人物に向かって無意識に呟いた。

「あら、私あなたとお会いしたかしら?」

女性は面白そうに私を見つめながら言ってきた。

「あ、いえ。あの、その、わ、私はランドルフと言います」

私は慌てて自分の名を名乗った。

「貴方がランドルフ君?“寂しがり屋”さんの言う通りの男の子ね」

「寂しがり屋さん?もしかして、テツヤ殿の事ですか?」

「えぇ。孤高を気取っているけど一人だと寂し過ぎて死んでしまう寂しがり屋さんよ」

だから、愛しくて堪らないの。

あまりに赤裸々で恥ずかしくなるような台詞を述べる女性に私は顔を赤くした。

「可愛いわね。私はミシーネ・ルシアン」

「ミレーネ・・・では、オリガさんの姉的存在の方ですか」

私の初めての相手であるオリガさんから聞かされた事を思い出して私は訊ねた。

「えぇ。オリガが言ってたわ」

可愛いけど、芯がしっかりしていて男らしい。

でも、まだ未熟。

だから、これからもっと成長する。

「オリガさんがそう言ってたのですか」

「えぇ。貴方に会いたがってたわよ？」

明日にでも会いに行って、と言われて私は頷いた。

「それでどうしてこんな夜中に起きてるの？」

「実は、テツヤ殿が来る気がしまして」

「私もよ。きっと寂しくて堪らないでしょうね」

だから、会ったら抱き締めて上げるの。

ミレーネさんはこれまた恥ずかしい台詞を言った。

それに私はまた赤面した。

そしてミレーネさんと共に待っていると、微かに人の気配を感じた。

その気配は少しずつ近づいて来ている。

私は目を凝らして見ていると、城壁の前で止まった。

「よぉ、もやし」

見下せば少佐達が立っていた。

皆、無事の様子だった。

「遅かったですね」

私は煙草を捨てながらテツヤ殿に笑い掛けた。

ふと隣を見たが、ミレーネさんの姿が無い事に気付いた。

何処に行ったのか、と思えば門が勝手に開いた。

そこを通ったテツヤ殿達。

急いで下に降りるとミレーネさんがテツヤ殿を抱き締めていた。

「お帰りなさい。私の寂しがり屋さん」

「あぁ。ただいま」

テツヤ殿はミレーネさんを抱き締め返しながら帰還した事を伝えた。
その背後ではリーザ中尉が嫉妬丸出しの視線で居た。
うわぁ・・・よく嫉妬丸出しの視線を受けながら抱き締められるな、と私は思った。
テツヤ殿はミレーネさんから身体を離すと私に視線を向けた。
「無事で何よりです」
私は無事で来た事を嬉しく思いながらテツヤ殿に話し掛けた。
「お前もな。所で他の奴等は無事か？」
「はい。皆、テツヤ殿達の事を心配していました」
「そうか。まぁ、明日にでも言おう」
少佐はそう言って煙草を銜えた。
「もやし。火をくれ」
私はマッチを出そうとしたが、今になって火の点いた煙草があるではないかと気付いた。
煙草で少佐の煙草に火を点けた。
「・・・フゥー。久し振りの煙草は美味いな」

「砦で吸ってたじゃないですか」

「生意気な事を言うな」

少佐は笑いながら煙草を吸い続けた。

それを見ながら私もまた煙草を吸った。

しかし、その横ではリーザ中尉がミレーネさんを敵視している光景がある。

だが、敢えてそれを無視して私は煙草を吸い続けた。

第四十九章：寂しがり屋の家

小鳥が囀る音と微かな光からやがて大きな光へと変化し辺りを明るくしていく。

東の地に朝が来たのだ。

私はベッドの上に腰を降ろしながら煙草を吸っていた。

あれから私はロンガーム殿の家に戻り再び寝た。

テツヤ殿達はミレーネさんが住む家に泊った。

確か首都に暮らしていた筈なのに何でこの地に家があるのか疑問だった。

それを訊こうとしたが、もう遅いので明日になった。

そんなこんなで私は朝を迎えた訳だ。

煙草を1本ほど灰にするとドアが叩かれる音がした。

「誰だい？」

私はベレッタをドアに向けて訊ねた。

「ガリシャだよ。朝飯が用意できたよ」

「直ぐに行くよ」

私はベレッタをホルスターに仕舞ってモーゼルとＳＫＳを持ち、ドアを開けた。

ドアから出るとガリシャが待っていた。

「待ってたの？」

「そうだよ。悪い？」

別に悪くはないが、何で待っていたのか疑問だった。

しかし、それを考えるのは止めて下へと降りた。

下に降りると軍曹達が待っていた。

「お嬢ちゃんに朝のキスでもされたのかい？」

目が冴えてる、と軍曹は言った。

「いえ、そうではないんです」

昨夜の事を私が話すと軍曹達は納得した。

「なるほどな。じゃあ、後で俺らも行こうか」

「はい」

私はそれに頷いて席に腰を降ろした。

手短に食事を済ませた私たちはロンガーム殿達に礼を述べてテツヤ殿達の居る家へと向かう事にした。

案内人はガリシャだ。

ガリシャの話によればテツヤ殿とミレーネさんがここに来たのはちょうど国外追放を言い渡された5日後だったらしい。

「最初に来た時は驚いたよ。だけど、理由を聞かされると頭に来たね」

根も葉もない理由をこじつけて国外追放に処するのだから頭に来ても仕方が無い。

「それでこの地に留まったんだよ」

そこでこの土地を改造したとガリシャは説明した。

「所でフォン・ベルト閣下は異世界から来たと言っていたでしょ？」

「うん。何処の国から来たのか解かったの？」

「日本って言う国で、元は陸上自衛隊“北部方面隊冬季戦技教育隊”だったらしいよ」

「テツヤ殿と同じ自衛隊だったんだ」

フォン・ベルト閣下がまさか陸上自衛隊出身だった事に私は驚いた。

そしてその冬季戦技教育隊がどういう隊なのか気になった。

「その隊なら知ってるぜ」

軍曹が口を開いた。

「自衛隊の中でも老舗の隊だ。特に雪中戦での腕は俺の居たアメリカ軍の上を行く」

何でもその隊がある場所は豪雪地帯であり、敵の国とも近い事から精鋭と武器が揃っているらしい。

「旦那の空挺も強いが、こっちも負けていない」

「そうなんですか」

私はそれを聞いて頷いた。

テツヤ殿が居る家は村の外れにあった。

質素な造りの民家で何の変哲もない。

目と鼻の先まで行きドアを叩いた。

「ランドルフです。テツヤ殿、居ますか?」

するとドアが直ぐに開いた。

「あら、ランドルフ君じゃない。いらっしゃい」

紺色のスカートに薄い紫色のブラウスを着たミレーネさんが私たち

を出迎えてくれた。

「お嬢さん。どうです？こんな朝は、この私と一緒・・・・・ひぃ！！」

軍曹はミレーネさんの手を掴もうとしたが、鼻先に小型の拳銃を突き付けられて悲鳴を上げた。

全体的に丸みを帯びた感じで撃鉄が無い。

そして銃眼なども見えない。

いや、僅かに先っぽが小さく凹にされているから、あれで狙えという事か。

そういう事も考えると極めて小さくて抜くのに適している銃だ。

ああいった銃は主に護身用などに適しているな。

などと私は思った。

ミレーネさんはその銃を軍曹の鼻先に突き付けながら流れる声で喋り始めた。

「貴方はイーグル軍曹ですね？噂通り女好きな方のようですね。だけど、私に気安く障らないで下さらない？」

私の肌はただの一人の殿方に委ねているのです、とミレーネさんは言った。

「や、やだなー。ただのスキンシップとして・・・・・・・・」

「慣れ合いなら話す事で良いでしょ？それに貴方に触れると汚れるんです」

うわぁ、テツヤ殿や大尉同様に初めて会うのに凄い毒を吐くな・・・・・・

「おい、イーグル。俺の連れに変な真似はするな」

ミレーネさんの後ろからテツヤ殿が出てきた。

相変わらず煙草を蒸かしている。

「だ、旦那ー。助けて下さいー！？」

軍曹は情けない声を出しながらテツヤ殿に助けを求めた。

「ミレーネ。止めとけ」

テツヤ殿は煙草を口から離してミレーネさんに言った。

「でも、寂しがり屋さん。この人がまた獣のように私を襲うかもしれないのよ？」

貴方は私がこの獣に襲われても良いのですか？と訊ねるミレーネさん。

「いいや。そんな事になった俺が“死んだ方がマシ”と思える苦痛をこいつに味あわせてやる」

まぁ、その前に指一本触れさせないと述べてから、軍曹にミレーネさんに近づかない事を約束させた。

「や、約束します。約束します！？」

軍曹は泣き声で断言した。

「なら良い。ミレーネ」

「分かりました」

ミレーネさんは拳銃を軍曹の鼻先から遠ざけてからスカートを捲り上げた。

黒いストッキングを履いた妖艶で生々しい白い足が太腿まで見えてくる。

私は反射的に目を逸らし、ワイド中尉も目を逸らした。

だが、軍曹は舐めるような視線を向けようとした。

それを私とワイド中尉で無理やり顔を逸らせた。

ゴキャ、という嫌な音がしたが気にしない事にした。

ストッキングを止めるガーター・ベルトに銃を仕舞い、スカートを戻したミレーネさんは私たちを家の中に入れてくれた。

中に入ると、チャレンジャー、エドリアス大尉、リーザ中尉が座っ

ていた。

「ランドルフ1等兵。おはようございます」

チャレンジャーが私に敬礼をしてきた。

「今は作戦中じゃない。普通にやれ」

テツヤ殿はチャレンジャーもといレオンにそう言った。

「では、おはよう。ランドルフ君」

「おはよう。レオン」

私とレオンは挨拶を交わした。

「では、改めていらっしゃい。私と寂しがり屋さんの家に」

ミレーネさんはスカートの裾を持ち上げて優雅に腰を折って一礼した。

それだけで画になると思い見惚れてしまう。

「適当な所に腰を降ろせ。ミレーネ。コーヒーを出してやってくれ」

「はい」

テツヤ殿の一礼したミレーネさんは厨房へと向かった。

何だか美女と野獣の夫婦にしか見えない、なんて事を私は思った。

その様子をリーザ中尉が昨日と同じく嫉妬丸出しの視線で見ていた。

まぁ、テツヤ殿に告白をしてその好きな人物が別の女性と仲慎ましくしているのだから面白い訳が無い。

それをテツヤ殿は知っている筈なのに敢えて無視して楽しんでいる節がある。

『私生活でも意地悪な人だ』

今更になって私は思った。

「はい。どうぞ」

私たちにコーヒーを差し出すミレーネさん。

「ありがとうございます」

私は礼を言いながらコーヒーを飲んだ。

「で、旦那。リカルドの奴等どう来ますかね？」

軍曹はコーヒーを飲みながらテツヤ殿に訊ねた。

「恐らく軍の再構成に取り掛るだろうな」

打撃を与えたのだから、恐らく先ず動ける者を新たに再編成する事だろう。

そして城で政を行う筈。

「だが、俺らを根絶やしにするのは間違いない」

現在の王はサラ様だ。

幾ら城を落としたと言っても玉座の席に座っているのはサラ様であるから、サラ様を亡き者にしない限り真の王にはなれない。

「ですね。しかし、何時頃来ますかね？」

「お前ならどうだ？」

「そうですね・・・・フォース・リーコンを偵察に行かせ情報を先ずは得ます」

その間に軍を再構成するのだ。

「ここの地形を考えると騎兵などの機動力を活かした戦いは望めません。となれば、ワイバーンなどの空中での攻撃と大人数で挑むしかないですね」

ワイバーンは無傷だ。

となれば、ワイバーンがここでの戦闘では向こうの切り札となる。

「ワイバーン如き小物なら妾が何とかする」

窓が勝手に開いて一人の女性が入ってきた。

濡れ鴉のような漆黒の髪は足まであり、艶やかな光沢を放っている。

まるで黒真珠を思わせる艶だ。

髪だけじゃない。

全てが金銀宝石で造られた芸術品と私は思ってしまった。

スラリとした体形だが、引き締められている所は引き締められているし、出る所は出ているという抜群のプロポーションだ。

回りくどい言い方だが、要は男が望む体型であり女が理想とするバランスの取れた体型なのだ。

瞳の色は宝石を埋め込んだように輝いている。

右目はダイアモンドで、左目はガーネットという贅沢な宝石を2つも使用している。

しかし、通常の瞳の形と言えば良いのだろうか？

肌は褐色でミレーネさんとは別に妖艶な気を感じる。

普通が横に長いのに対してこちらは爬虫類のように縦長で剃刀のように鋭い切れ目だ。

口元も何処か肉食獣を思わせる。

着ている服は黒を主体としたドレスでスカートの部分が二つに切られて生足が見えてしまう。

「久し振りじゃのう。ランドルフよ」

美女が私を見て微かに笑った。

え？私、会った事があるのか？

いや、しかし、こんな美人なら忘れる訳が無い筈だ。

しかし、思い当たらない。

「分からない？」

ガリシャが私を見て訊いてきた。

ん？待てよ。

あの瞳には覚えがある。

まさか・・・・・・・・

「ドラゴン・・・メジュリーヌさん、ですか？」

「そうじゃ。名前は教えられているようじゃな？」

「えぇ。しかし、人間にもなれるんですね」

「妾はドラゴンじゃぞ？この程度は出来て当たり前じゃ」

ドラゴン・・・メジュリーヌさんは自慢気に語った。

「お姉さん。初めまして。私は・・・ぎゃあ!!」

ここでまた最早、習慣とも言える行動を起こした軍曹だが、直ぐにメジュリーヌさんに頭を踏み付けられた。

「何じゃ?この頭の湧いた獣は?」

グリグリとヒールの高い靴の底で軍曹の頭を弄るメジュリーヌさん。

それが妙に板に付いている気がした。

「俺の部下でイーグル軍曹だ。おい、イーグル。お前は節操を持て。さもないと何時か背中からブスッと刺されるぞ?」

「お、女に刺されるなら男の本望・・・ああ、そんなに強く踏まないで下さいっ。女王様と呼びますから!!」

何かとても危ない発言をしたように私には聞こえた。

現に軍曹の顔は苦痛より快楽の方が強いように見えた。

「軍曹って、まさか・・・・・・」

「ち、違うぞ!!俺は正常だ!!」

軍曹は頭を踏み付けられながらも必死に弁論を続けた。

「黙れ。この性欲の塊が」

ゴンッ、と靴底を軍曹の頭に叩き付けるメジュリーヌさん。

軍曹は沈黙した。

「はー。この男に節操を持てというのは無理かもな」

テツヤ殿は頭が痛いとばかりに額を抑えて溜め息を吐いた。

第五十章：ドラゴンと城へ（前書き）

少々、手直しをします。

第五十章：ドラゴンと城へ

ミレーネさんの家でコーヒーを頂いた私たちは城へと向かっていた。

城に赴き、サラ様に着いた事を伝えるのだ。

徒歩で向かうが、ミレーネさんは家で留守番をすると言って来なかった。

どういう訳かは知らないが、何となく行きたくないように思えた。

メジュリーヌさんはテツヤ殿の左側を歩きながらテツヤ殿の腕に自分の腕を絡めていた。

「余りくっ付くな。歩き難い」

テツヤ殿は横を歩くメジュリーヌさんに苦言を漏らした。

こんな美女を伴っているのによくもまぁそんな言葉が言えるな、と思う。

「何を言う。妾はミレーネから頼まれたのじゃ」

私の代わりに寂しがり屋さんをお願い。

確かにミレーネさんはそう言った。

それを聞いてリーザ中尉は渋面を浮かべたのを横眼で見た事も覚えているが。

「まるで保護者だな」

「生憎と子を産んだ事は無い。だが、主の子なら喜んで産もう」

私たちはメジュリーヌさんの思わぬ発言に驚きを隠せなかった。

ドラゴンが人の子を産む・・・・御伽話でもそんな話は聞かない。

「俺とお前の子だと、どうなるんだ？」

「そうじゃな・・・半人半龍となるな」

「止めとけ。迫害されるだけだ」

人間というのは自分と異なる者が居るとそれを徹底的に排除する傾向がある。

そしてその不満をその者に向けさせる事で原因から遠ざけようとする。

そうテツヤ殿は言った。

「流石は傭兵。言う事に現実味があるのう」

「言ってろ。それに俺は結婚する気は今の所は無い」

今はそんな状況下ではないからだ、とテツヤ殿は言った。

「まぁ、そうであろう。だが・・・女を可愛いがる位は良いであ

ろう？」

メジュリーヌさんがテツヤ殿の耳元で囁いた。

主が出て行ってから枕を毎夜の如く涙で濡らした。

だが、それも男を待つ女に与えられた使命。

男は帰ってきたら、それを出迎える女を可愛がる義務があるとメジュリーヌさんは囁いた。

「考えておく」

テツヤ殿はメジュリーヌさんを引き離して答えた。

「楽しみにしておるぞ」

メジュリーヌさんは妖艶な微笑を浮かべながら言い、歩いていては日が暮れると言って妾に乗れ、と言ってきた。

「少し離れろ」

テツヤ殿は私たちを離した。

するとメジュリーヌさんはＧＲＡＡＡと鳴き始めた。

背中から黒い翼が出て来て、尻からも尻尾が出てきた。

そして口元が長くなり手足も黒く変色し、大きくなり始めた。

私たちはそれを黙ってみていた。

いや、黙って見つめているしか出来なかった。

巨大な龍の姿になったメジュリーヌさん。

腹と翼の傷はもう痕も残っていなかった。

『さぁ、乗れ』

メジュリーヌさんは巨体を地面に着けて命令してきた。

テツヤ殿は慣れた感じに乗ったが、私たちは些か怖い気持ちで乗った。

『しっかりと掴まっておれよ？落ちても知らんからな』

メジュリーヌさんの言葉に私たちは急いでしがみ付いた。

それを確認してからメジュリーヌさんは空高く飛び上がって城へと真っ直ぐに飛んだ。

風が直接頬を打って来る。

しかし、嫌な気分はまるで感じない。

寧ろ心地よい気分だった。

城には直ぐに到着したが、メジュリーヌさんは何を思ったのか行き成り急上昇を始めた。

そして急降下を始めた。

『ぎゃああ！！』

私たちは一斉に悲鳴を上げた。

だが、それでも必死にしがみ付いて落ちないようにした。

メジュリーヌさんから見れば大した時間ではなかっただろうが、私たちにとっては永遠とも言える長さだった。

『着いたぞ。降りろ』

メジュリーヌさんは私たちを乱暴に振り降ろした。

「うっぷ・・・・」

私たちは口から出そうな物を抑えて何とか立ち上がった。

それを傍目にテツヤ殿は煙草を吸っていた。

「あれ位で吐きそうになるとは情けないな。おい、イーグル。仮にもグリーン・ベレーだろ？何だその醜態は」

「お、俺だって、あんな目に遭うのは初めてですっ！！」

軍曹は何とか出そうな物を抑えてテツヤ殿に言い返した。

「情けねぇ。それより早く行くぞ」

時間が勿体ない、とテツヤ殿は言った。

私たちは必死に気持ち悪いのを我慢して立ち上がり後を追った。

「で、メジュリーヌ。お前はワイバーンにどんな手で対策を練るんだ？」

テツヤ殿は歩きながらメジュリーヌさんに質問をした。

「ワイバーンはドラゴンなどを始めとした“者”の中でも最弱じゃ。だが、数で攻めてくるし狡猾じゃ」

最弱だからこそ、狡猾で数で攻めてくるとメジュリーヌさんは語った。

「それに我等も奴等を蔑んでおる。あ奴等には前足が無いし炎しか吐けない」

ワイバーン以上なら炎以外にも氷、水、雪、雷など様々な物を吐ける。

そういう事もあって彼等はワイバーンを蔑んでいるようだ。

「さも自分達は選ばれた者、という言い方だな」

「何を言う。妾はそのような人間の下らん思想は持たん。ただ、強き者が勝つ。それだけを思想としているだけじゃ」

「まぁ、俺もその思想には賛成だ。この世は弱肉強食だ。それは自

然の摂理であり避けられない」

「主は傭兵としてその思想を尤も理解している筈じゃ。それなのに、どうしてその思想の最下位にある者達の為に戦う？」

「・・・自分の為だ」

誰の為でもない。

ただ自分がやりたいから戦うだけだ。

そうテツヤ殿は言った。

「まぁ、今はその答えで満足しておこう」

何れは教えてもらう、とメジュリーヌさんは言った。

暫く歩き続けているとまたもや剣の交わる音が聞こえてきた。

「どうやらまたあの“小娘”で遊んでいるようじゃな」

ヴィルヘルムは、とメジュリーヌさんは言った。

「あの、またという事は何度もあるんですか？」

私は気になって訊ねてみた。

「ここに来てからほぼ毎日じゃ。あの小娘と親衛騎士団とか偉そうな名前を持つ小僧共を皆で可愛がっておる」

先の戦いで負けた上に敬愛しているテツヤ殿を蔑んだ報いを受けさせている、とメジュリーヌさんは言った。

「それで今の所、どうなっているんですか？」

レオンが私に続いて質問をした。

「今の所、小娘共は負け続きじゃ」

一度も勝って無いらしい。

仮にも王国一の騎士たちが集まった精鋭部隊が負け続きとレオンは教えられて幾分か驚いていた。

「実戦経験豊富な上に剣の腕もある集団と若さだけが取り得の素人集団では勝ち目なんて最初から無いから仕方ないさ」

テツヤ殿の言う事は尤もだ、と私は思った。

確かに若さは武器の１つだ。

だが、ただ若いだけ。

それだけが取り得で経験などは無い。

その経験が無い分、余計な知識などは無いからある意味では良いとは言える。

しかし、実戦経験が豊富であればやはり生き残れる確率は高い。

仮に勝てたとしてもそれは偶然の産物でしかない。

勝ちは勝ちだろうが、それきりで次もそうなるとは限らない。

だから、この場合は負け続きでも仕方無いと思う。

「あいつ等の事だ。経験から何も学ばないだろうな」

失敗からは多くの事を学べるが、成功からは殆ど学べない。

ここで母の言葉が頭に浮かんだ。

確かにその通りだ。

失敗したらその失敗から学んで次に活かすのが良い。

親衛騎士団はそれをしないだろう。

あの者たちなら「選ばれた者たちが負けるなんて・・・・・」と考えてそこから何も学ばないのは明白だ。

きっとこれからも負け続ける事だろう。

そして死ぬだろうが私の知った事ではない。

そんな事を思いながら城の中を進んで行くと、前方から誰かが走ってきた。

親衛騎士団の一人だった。

「た、助けてくれ！！」

親衛騎士団の一人はテツヤ殿にしがみ付いて助けを求めてきた。

「逃げるなよ。坊や。まだまだ“お楽しみはこれからだぞ”」

更にその前方からシュヴァルツフントの一人が剣を抜いたままゆっくりと歩み寄ってきた。

「よぉ。また遊んでいたのか？」

テツヤ殿はしがみ付いている親衛騎士団を引き離しながらシュヴァルツフントの者に訊ねた。

「はい。昨夜、団長が小娘に夜襲を仕掛けたんです」

「ほぉう。それで小娘は答えるまでもなく負けた。そして卑怯だ何だの言ったんだろ？」

「その通りです。ですが、負けは負け。しかも団長が戦っているのに部下は援護する所か逃げる始末です。故に連帯責任です」

確かにそうだ。

私が受けた訓練でも相棒がしくじれば自分も罰を受ける。

それ所か相棒を置いて逃げるなど言語道断だ。

相棒の罰は自分の罰であり、何があろうと相棒は助けなければならない。

これにより協力関係などを強化するのだ。

だが、この親衛騎士団を見る限りそんな気持ちは更々ないようだ。

何で自分も、という顔だ。

・・・反吐が出る。

「テツヤ殿。ここはお返しするのが筋ではないでしょうか？」

私たちはただ通り縋っただけ。

そして話を聞く限り悪いのは親衛騎士団だ。

それを考えればシュヴァルツフントに渡すのが筋というものだ。

「そうだな。おい、連れて行け」

程々にな、とテツヤ殿は言った。

「大丈夫。殺しはしませんよ。まぁ、痛い思いは多少しますがね」

それで良い、とテツヤ殿は言い煙草を銜えた。

親衛騎士団は泣き叫びながら後ろ髪を掴まれて連れて行かれた。

「お前も言う様になったな」

テツヤ殿は私に2本の煙草を差し出しながら呟いた。

その1本をレオンに渡してから私は答えた。

「いえ。ただ本当の事を言っただけです」

「そうか」

テツヤ殿は頷いてから煙草に火を点けてくれた。

3人で煙を吐いてから歩きを再開した。

第五十一章：背水の陣と欠落宰相

更に城の奥へと進んで行くと、何やら怒鳴り声が聞こえてきた。

『あんた生意気言ってんじゃないわよ！！』

一人は女の声だと解かった。

声の高さから考えても２０代前半だろうか？

『だ、黙れ！！わ、私を誰だと思って・・・・ぎゃあ！！』

男の声は聞き覚えがある。

どうやら女に負けたようだ。

声のする方へと行くと、骸骨ことゲンハルト様が一人の女性に馬乗りにされて殴られている場面に出くわした。

一国の宰相に馬乗りになって殴る女性など見た事が無い。

裾の長いドレスからは健康的な足が太腿の部分まで見える。

だが、女性は気にもせず馬乗りを続けて、ゲンハルト様の頭を殴り付けている。

ゲンハルト様は頭を抑えながら呻いていたが、テツヤ殿を見つけると天の助けとばかりに声を上げて助けを求めてきた。

「よ、傭兵っ。た、助けてくれ！！」

「俺はテツヤだ。傭兵なんて名前じゃない」

テツヤ殿は煙を吐きながら言い返し、馬乗りになっている女性に目を向けた。

「あんた何でこの骸骨を殴ってるんだ？」

「この男が我儘を言うからです！！」

女はゲンハルト様の髪を掴んで顔を無理やり向けさせた。

「ちょっと“骨と皮”。あんたねぇ、あたしに何て言った？」

この人たちに言え、と命令する女性にゲンハルト様は苦しい声で言った。

『女、茶を淹れて来い』

とゲンハルト様は言ったらしい。

「あたしはあんたの召使いじゃないんだよ。よくもそんな台詞を言えるね？」

「ひぐっ・・・た、たまたま居たから頼んだだけだろ？！」

「頼むってのはね、「お願いします」とか「淹れて下さい」と言うんだよ。淹れて来いは命令形なんだよ！！分かるかい？」

「わ、分かりました！！」

ゲンハルト様は泣き声で助けてくれと叫んだ。

「分かれば良いんだよ。待ってな。直ぐに淹れて来てやるよ」

バンッ、と床に顔を叩きつけた女性はゲンハルト様から離れてドレスの裾を叩いて直した。

ドレスの質と香水の香りなどから見て・・・お姉様の一員だと分かった。

「あら、オリガの天使君じゃない」

女性は私を見て先ほどまで怒鳴っていた声とは思えない優しい声で私に話し掛けてきた。

年齢はオリガさんより3つ4つほど年上だ。

腰まで伸びた茶色の髪を櫛で撫で下しており、とても艶があり“荒んだ野”というより“澄んだ野”を思わせる。

瞳は勝ち気な色が見え隠れしているが、今は温和な色が全面的に出ている。

「オリガさんの知り合いですか？」

「えぇ。ミレーネ姉の妹分でオリガの姉を自負するイザベラよ歳は２６歳。初めて見るけどオリガの言う通り可愛らしいわね」

そっちの坊やも可愛いし二人そろって食べちゃいたい、と私とレオンを見て言うイザベラさん。

「モテモテだな」

テツヤ殿は面白そうな声で笑った。

「ま、まぁ・・・痛ッ」

私は曖昧に答えたがガリシャに足を踏まれた。

「あ、ごめん。間違って踏んじゃったわ」

ガリシャは平淡な・・・いや、冷たい声で私に謝罪した。

何でそんな冷たい声で謝るのか理解できない。

その様子を見てテツヤ殿は「まだまだ未熟だな」と一言だけ言った。

そしてゲンハルト様に歩み寄って立たせた。

「大丈夫か？」

ゲンハルト様の鼻からは鼻血が出ており、妙にそれが笑えた。

「だ、大丈夫な訳ないだろっ。な、何なんだ。あの野蛮な女は！？」

ゲンハルト様は鼻血を布で拭きながら乱れた髪を整え始めた。

そんなに髪の毛はある方ではないし、しかも先ほど髪を掴まれて数

本は抜けてしまっていた。

『あれではもう直ぐ無くなるな』

私はそんな事を思い、自分の将来が不安になった。

しかし、それは敢えて考えずに二人の会話に耳を傾けた。

「お前さんが高圧的な態度を取るからいけないんだよ」

女性は優しく扱え、とテツヤ殿は言った。

「あんな野蛮な女に対してか？」

「そうだ。女ってのは優しく扱えばそれに答えてくれる」

お前さんの態度では怒られても仕方ない、とテツヤ殿は言い煙草を手渡した。

「何だ？これは」

「煙草だ。少しは気分を落ち着かせろ」

仮にも宰相が感情的になっては駄目だろ？と言いテツヤ殿はジッポで煙草に火を点けてやった。

ゲンハルト様は初めてなのに慣れた感じで煙草を吸いながら無言になった。

「・・・リカルド様にもそう言われた」

ザンビア平野での戦いでリカルド様はこう言ったらしい。

『戦を起こさない為に交渉しに来たのに矢をやられたから戦と喚くとは子供だな』

「中々的を射ているな」

あんたは戦を嫌い軍の予算を少なくしている。

それは戦が嫌だからだ。

それで交渉しに行ったと思えば矢を射られた。

だが、それでも2度、3度と粘り強く行けば相手も考えた筈だ。

それをたった1度で戦と喚くのは明らかに子供のする事、とテツヤ殿は言い続けた。

「・・・・殺されると思ったんだ。それに使者に矢を射るなど戦の規則に反する」

「それだけ向こうは切羽詰まってるんだろう」

内乱が長引けば他国の干渉を受け易くなるし、国力も衰える。

それを阻止する為に短期決戦を行い無条件降伏をさせようとしたんだ、と説明した。

「なら、どうして使者を追い返したんだ?」

「完全に抵抗力を無くす為だろうな」

仮に降伏したとしても、それに従わない者は必ず出る筈だ。

それを阻止する為に敢えて2度目の戦いを行わせた。

「若しくはあんたの力量を試したんじゃないのか？」

本当に戦を嫌い平和を願っているのか？

それなら1度では挫けずに2度、3度と来る筈だ。

「・・・・私は力不足だと向こうに教えてしまったのか」

「だろうな。だが、まだ負けていない」

ここから巻き返しを図り草の根1本残さず滅ぼさなければならない。

「出来るのか？」

「出来るのか？じゃない。やるしかないんだよ」

ここで負ければもう後が無い。

「“背水の陣”なんだよ。俺らは」

「何だ。その言葉は」

「俺の居た世界の言葉だ」

何でもテツヤ殿の居た世界にある兵法書に「之れを往く所無きに投ずれば、諸・歳の勇なり」と書いてあるらしい。

何が何だかチンプンカンプンだ。

だが、これにメジュリーヌさんだけは答えられた。

「兵士たちをどこにも行き場のない窮地に置けば自ずと専諸や曹？のように勇戦力闘するという事じゃろ？」

メジュリーヌさんの説明にテツヤ殿は頷いた。

「今、俺らは背後を谷にして逃げ場が無い。もう後が無い」

こういう状況になれば嫌でも兵たちは奮戦するという事らしい。

だったら、最初からそういう風に書けば良いのに何でそんな解かり難い言葉にするのか理解できない。

「つまりこの状況になれば、自ずと力が出るという事か」

「その通り。ただし、それには兵だけでなくあんたの力も必要だ」

あんたは最高指揮官だ。

そのあんたが動かなければ誰も付いて来ない。

ここがあんたにとって最後の戦場となる。

ここで男を見せろ。

さもないと一生を後悔する羽目になる、とテツヤ殿は言って煙草を携帯灰皿に捨てた。

「だが、私は戦の経験が無い」

ザンビアでの戦いが初めての戦いで、まともな指揮は執れなかったとゲンハルト様は言った。

「それなら経験のある奴を前線指揮官にしろ。総大将というのは腰を降ろして腕を組んでいれば良い」

飾りだけでも構えていれば兵たちは落ち付く、とテツヤ殿は言った。

「それから悲観な考えは捨てろよ。表情にも出すな。総大将がそんな考えや表情をしたら兵たちに伝染する」

ジョージ・マーシャルという人物は「上司の悲観論は部下に感染する」と述べたらしい。

そして厳しい戦況においても前方を見据えて傲然と仁王立ちして兵たちの士気を鼓舞するのが望ましいと述べたようだ。

「・・・分かった。だが、誰が前線指揮官になるのだ?プロイセンも将軍達もまだ動けん」

「小娘はどうだ?」

「フィーナ殿は・・・駄目だ」

あの女では大軍を指揮できない、とゲンハルト様は言った。

「ザンビアの戦いで分かった。あの女では親衛騎士団もまともに指揮できない」

ザンビアの戦いではゲンハルト様に代わり下種女が総指揮を執ったらしい。

だが、最初に敗走を始めようとしたのは親衛騎士団だったらしく、その者たちを留めるのに一苦労で他の兵たちを指揮できなかったようだ。

聞けば聞くほど情けなくなる。

「ならば主が執れば良かろう」

メジュリーヌさんがテツヤ殿を指差して告げた。

「主は少佐という階級で大人数を指揮する事には長けている筈じゃ。それに他の者達の人望も高い」

少なくとも下種女よりは遥かに優れた指揮官だ、と私たちは思う。

「確かに、貴様ならフィーナ殿より指揮官としては申し分ないだろう」

聖騎士団の先輩達の言葉を聞けば頼られている、と取れるだろう。

「だが、お前さんや小娘は俺を軽蔑しているだろ？」

「そうだ。だが、前に言った通り貴様が悪魔だろうと頭を下げる・・・・あちっ！？」

ゲンハルト様に茶が掛けられた。

ゲンハルト様は熱さに呻いたが、更にその上から盆を叩きつけられるという2重の痛みを与えられた。

まるで喜劇みたいで思わず笑える。

「あんたねぇ、それが人様に物事を頼む態度？！」

イザベルさんが仁王立ちになってゲンハルト様を睨み据えた。

何だかイザベルさんの方が総大将としては相応しい貫禄さえ見えてしまう。

「テツヤさんが悪魔だろうと頭を下げるですって？この人はあたしが尊敬しているミレーネ姉の連れ添いだよ？その人を軽蔑しているとはどういう事だい！？」

「き、貴様は何様だ！？私は宰相だぞ！？」

「宰相だから何よ。あんたは人間として根本的に欠落しているのよ」

言わば欠落宰相だ、とイザベルさんは言い切った。

「け、けけけけけけけ」

「何を言ってるのよ。気持ち悪い」

バシッと頭を叩くイザベルさん。

そしてゲンハルト様の髪を掴むとテツヤ殿に向き直った。

「テツヤさん。この馬鹿はあたしが良く言って聞かせます。だから、どうか前線指揮官になって下さい」

ほら、あんたもやりなさいとイザベルさんはゲンハルト様の髪を掴み頭を下げさせた。

まるで悪い事をした子を連れて来て謝らせる母親だ。

実際はゲンハルト様の方が２０も年上なのだが、これでは逆だ。

「か、髪を掴むな!!髪の毛が抜ける!?」

「こんな薄毛なら無い方がマシよ」

酷過ぎる事を言いながらイザベルさんは早くやれ、と言った。

「た、頼むっ。前線指揮官をやってくれ!?」

「やってくれじゃないでしょ?やって下さいでしょ!?」

「や、やって下さい!?」

「お願いします、テツヤ殿は?!」

「お願いします!?テツヤ殿!?」

「分かった分かった。分かったから、離してやれ」

余りの様子にテツヤ殿はイザベルさんにゲンハルト様を解放するように言った。

イザベルさんは直ぐにゲンハルト様を離した。

「き、貴様っ。お、覚えておけよ!?」

「あんたみたいな男の言葉を覚えていたらね」

これにゲンハルト様は怒りを募らせたが、テツヤ殿が前線指揮官になる事をサラ様に言うから行こうと言い事なきを得た。

そしてゲンハルト様とイザベルさんを伴い進む事にした。

第五十二章：前線指揮官

私たちはサラ様の居る部屋の前に居た。

ゲンハルト様は乱れた髪を直していた。

ここまで来る間にゲンハルト様はイザベルさんと言い争いを始めて何度も取っ組み合いの喧嘩に発展した。

勝敗は前の様子を見れば分かるようにゲンハルト様が全敗中だ。

口喧嘩でも相手の気圧に負けて腕っ節でも負けた。

それを見て軍曹は「かかあ天下の典型」と呟いた。

かかあ・・・妻を表す言葉らしく妻の尻に敷かれるという事らしい。

確かにゲンハルト様とイザベルさんが結婚したら確実にイザベルさんが家を支配するだろう。

それが良いかどうかは知らないが。

そんな事を思っていると、ゲンハルト様は髪の手入れを終えた。

「そんなに髪の毛が大事なの？」

「煩いっ。私にとって髪は大事なんだ」

「でも、その様子だと直ぐに禿げるわよ」

怒ってばかりでは頭に血が上って髪の毛が無くなる、とイザベルさんは無情にも宣告した。

「そ、そうなのか？」

「確かにそんな事を聞いたな」

短気な奴は男女を問わず髪の毛が薄くなる、とテツヤ殿は言った。

しかし、よく見れば瞳が笑っている。

『遊んでいる・・・・・・・・』

私とレオンは意地悪なテツヤ殿に嘆息した。

そして倒れそうになるゲンハルト様を支えた。

「が・・・ゲンハルト様。しっかりして下さい」

「そうですよ。ほ・・・ゲンハルト様」

二人揃って勝手に名付けた骸骨と骨と皮、と言いそうになるのを抑えて支え続けた。

ゲンハルト様は何とか立ち上がり、コホンと咳払いをしてからドアを軽くノックした。

『誰です？』

サラ様の声がドア越しに聞こえてくる。
とても綺麗な声だった。
「ゲンハルトです。少しお話があるのですが、宜しいでしょうか？」
『どうぞ』
失礼します、と言ってドアを開けて中に入るゲンハルト様に続いてゾロゾロと中に入る。
「テツヤ殿！！」
サラ様は座っていた椅子から立ち上がった。
その衝撃で椅子が後ろに倒れるから、その衝撃の強さが窺える。
「鷹見徹夜少佐。ただ今、女王陛下と交わした約束通り貴方様の元へ参上仕りました」
テツヤ殿は被っていたブーニー・ハットを取り軽く一礼した。
ゲンハルト様はテツヤ殿の態度に些か面食らっていた。
確か前に一度見た筈なのに。
やはり粗暴な態度を日ごろから取っているので以外だったのかもしれないな。
サラ様は長いドレスの裾を摘んで小走りに近寄ってきた。

「本当にテツヤ殿ですね？」

「あぁ。女と交わした約束は守ると言っただろ？」

ニヤリ、とテツヤ殿は口端を上げて笑ってみせた。

また直ぐに元の口調に戻りゲンハルト様は渋面を浮かべたが何も言わなかった。

「よくぞ・・・ご無事で・・・・・・」

サラ様は薄らと白くて綺麗な真珠を流そうとしていた。

「おっと。泣かないでくれ」

テツヤ殿はサラ様の真珠を掬い取りながらこう言った。

女を泣かせるのはベッドの中だけなんだ。

「おい貴様。女王に対して何だその・・・ぎゃあ！？」

ゲンハルト様はこれには怒ったがイザベルさんに羽交い絞めにされて出来なかった。

「あんたは男女の事を坊やたちに教えてもらいなさい」

ギリギリ、と音を立てて絞め上げるイザベルさん。

「ぎぃ、ぎぃざまぁぁ」

変な声を出しながらも抜け出そうとするゲンハルト様。
だが、勝てずに・・・沈んだ。
「プロレスならイザベルちゃんの勝ちだな」
と軍曹は漏らした。
そんな事は片隅に置いるのかサラ様は私たちを椅子に座らせた。
だが、テツヤ殿は立ったまま壁に背を預けた。
「テツヤ殿。そんなに離れなくても」
「悪いが習慣なんだ」
テツヤ殿は腕を組んだまま言い、沈んでいるゲンハルト様を起こすように軍曹に命令した。
「どうせなら眠る美女が良いんですけど」
「ナマ言ってんじゃねぇ。速く起こせ」
女を待たせる気か？と言うテツヤ殿に軍曹は仕方無いとばかりに立ち上がって沈んだゲンハルト様を起こしに掛った。
「おい、起きろ。骸骨。女を待たせんじゃねぇ」
しかし、幾らやっても起きない。

「退いて」

イザベルさんが軍曹を退かしてゲンハルト様の胸倉を掴むと・・・・・・・・

パンッ!!パンッ!!

強烈な音が部屋の中に響き渡った。

「な、何をする?!」

ゲンハルト様は両の頬を紅葉に染めてイザベルさんを怒鳴った。

「女王陛下を待たせるのかい?」

それを言われてゲンハルト様は急いで立ち上がった。

「こりゃもう決定だな」

軍曹は肩を竦めて言った。

ゲンハルト様は立ち上がるとサラ様に一礼した。

「女王陛下に尽きましては、今日もまた変わらぬ御美しさで・・・・・・」

「要件を言いなさい」

サラ様はゲンハルト様の社交辞令を遮った。

「はっ。これからの事でお話があります」

「これからの事？」

「左様です。それにつきましては」

コンコン、とドアが叩かれる音がした。

私たちは一斉に銃を抜き構えた。

テツヤ殿はサラ様を護るように立ってＡＫＭアサルトライフルを構えた。

「誰だ？」

テツヤ殿は軍曹と私にドアに行け、と目で命令した。

それに頷いた私と軍曹は静かにドアの左右に行き、拳銃を構えた。

『プロイセンだ』

プロイセン様の声だが、用心のためにドアは開けなかった。

「入りな」

テツヤ殿はＡＫＭの銃口を向けたまま言った。

失礼する、と言ってドアが開いた。

私はベレッタを相手の頭のある部分に向けた。
ゆっくりとした動作で中に入ってきたのはプロイセン様だった。
「よぉ、久し振りだな」
テツヤ殿は銃口を上に向けて再び壁に戻った。
「あぁ。聞いたぞ？殿を務めたそうだな？」
プロイセン様は軍服に身を包んでいるが、様子を見ればまだ歩いてはいけない様子だと解かる。
「あぁ。それで何か用か？」
「お前とサラ様に用があるんだ」
「女王に？」
「あぁ。サラ様。お身体は大丈夫ですか？」
「えぇ。貴方は？」
「何とか大丈夫です」
ただし、指揮は未だに執れませんとプロイセン様は語った。
「そうですか・・・・」
サラ様は何処か哀しそうな表情を浮かべた。

「そこで提案があるのですが宜しいですか？」

「提案？」

「はい。ゲンハルトが今は最高指揮官です。ですが、お世辞にも指揮を執れるかと問われたら無理です」

ゲンハルト様はブスッとした顔だった。

犬猿の仲である二人だ。

相手にこう言われては腹に来るのも仕方が無い。

だが、堪えているのは当たっているからだろう。

「そこで総指揮官の下に当たる前線指揮官を新たに任命したいと思います」

プロイセン様はテツヤ殿を見た。

「このタカミ・テツヤに前線指揮官を任せたいと思うのです」

「女王陛下」

ゲンハルト様がここで口を開いた。

「ゲンハルト。貴様はまた私の意見を否定する気か？」

プロイセン様がゲンハルト様を睨んだ。

傷を負っているが、それでも迫力のある睨みだ。

「馬鹿を言うな。私もそれを女王に進言しようと思っていたんだ」

ゲンハルト様の言葉を聞いてプロイセン様は面食らった顔をした。

「主が？あれほどテツヤを毛嫌いしていたではないか」

「今も変わら・・・痛ッ！！」

ゲンハルト様の頭をイザベルさんが叩いた。

「あんた、あたしが言った事を忘れたの？」

腕を組んだイザベルさんにゲンハルト様はグウの音も出ない様子だった。

もはや完全に尻に敷かれた夫だ。

結婚はしていないが、既に夫婦の域に達しているように思える。

「私もよう・・・痛ッ・・・・テツヤに前線指揮官を任せたいと思う」

傭兵と言おうとしたので、またイザベルさんに頭を叩かれてテツヤと言い直すゲンハルト様。

「お前の“飼い犬”であるあの小娘はどうした？」

プロイセン様はテツヤ殿のように皮肉を込めて訊いた。

「フィーナ殿では無理だ。自分の騎士団もまともに指揮できん」

ザンビアでの戦いを繊細に語ったゲンハルト様。

それを聞いたプロイセン様は嘆息をしてからこう呟いた。

「父があれほど偉大だったのに、どうしてあんな性格になったんだ？」

「そういった家庭には反逆者が居るんだよ」

テツヤ殿はエドリアス様と私、ワイド様に言った言葉を述べた。

「厳格な家庭や優れた家には誰かしら一人は全く違う・・・子供が一人くらいは出来るもんだ」

テツヤ殿は腕を組んだまま言い、サラ様を見た。

「で、女王陛下。どうするんだ？」

これを決定するのはサラ様だ。

しかし、それを決定するということは義理の息子を殺す戦いを引き起こす事になる。

「・・・・・・・・・」

サラ様は無言でテツヤ殿を見つめた。

「リカルドを・・・殺すしか、無いんですね」

「あぁ。もう賽は投げられた。向こうも殺される覚悟がある筈だ」

それが無ければ内乱など起こす訳が無い。

それだけ追い詰められているのだ。

そしてそこまで追い詰めたのは私たちだ。

それを止められるのも私たちであり、課せられた義務なのだ。

サラ様は目を閉じて、軽く息を吸った。

息を吐いて目を開けた。

もうそこには迷いが一寸もなかった。

「タカミ・テツヤ殿。貴方を対内乱の前線指揮官に任命します」

この内乱を・・・リカルドを止めて下さい。

サラ様はそう言った。

こちらも賽は投げられた瞬間だった。

「分かった。全力でリカルドを止めよう」

「お願いします。私には、あの子を止める事が出来ません・・・・・

・・」

サラ様は再び薄らと白真珠を流そうとしていた。

それをテツヤ殿は近づいて拭ってやった。

「お前さんに罪は無い。悪いのは・・・・・・民を食い物にする下種共さ」

悪党にも劣る下種共だ。

そいつ等は目先の利益と自分さえ良ければ誰が死のうと、どんな被害が出ようと知った事ではない。

そいつ等がこんな事を起こしたんだ。

だから、お前のせいではない。

テツヤ殿はそう言った。

「テツヤ殿・・・・・・・」

サラ様はテツヤ殿にしがみ付いて静かに泣き出した。

私たちは黙ってそれを見続けた。

第五十三章：胸躍る気持ち

前線指揮官に任命されたテツヤ殿はこれからの事を話し合おうと言った。

「先ず前線指揮官に任命される訳だが、俺にはどんな権限が与えられるんだ？」

前線指揮官ともなればその名の通り前線で指揮を執るのが任務だ。

だが、その前にどの程度の権限が与えられるのかは分からない。

それをテツヤ殿はゲンハルト様に訊ねた。

「貴様の世界では、前線指揮官はどのような権限を与えられたんだ？」

ゲンハルト様は答える前にテツヤ殿にあっちの世界ではどの程度の権限が与えられたのか訊ねた。

「国によって違う」

「では、貴様の階級はどんな権限を与えられたんだ？」

「一つの作戦を任される位の権限は与えられた」

「つまりかなり高い地位に居たのか？」

「そうだ」

ここでテツヤ殿は少佐の事について説明をした。

それを聞き終えたゲンハルト様はテツヤ殿にそんな地位に居るとは信じられないという顔をした。

「よく貴様のような男がそんな地位に就けたな」

「まぁな。自分でも驚いている」

殆ど教育は受けていない。

ただし、実戦で多くを学んだ。

そして戦果を上げた事により教育無しで出世するという形になったようだ。

要は習うより慣れろを地で行ったのだ。

「そうか。では、この場合はどうすれば良い？」

「ここの地形を考えればゲリラ戦と狙撃、トラップなどで相手を精神的に追い詰めるのが良い」

森林を利用して相手を精神的に追い詰めるのだ。

そうする事で先ず兵たちの士気を下げる。

士気が高いか低いかでは戦に臨む気持ちが自然と変わる物だ。

「そのゲリラ戦とはどんな物だ？」

「少人数で敵を倒す戦法だ」

具体的に説明をするなら奇襲・待ち伏せ・後方錯乱などだ。

要は騎士たちの考えから言わせれば

「卑怯ではないか！？」

ゲンハルト様は甲高い声で叫んだ。

とこういう事を言われるのだ。

「あぁ。卑怯だ。だが、戦争というのは非情だ」

どんな手を使おうと最終的に勝てば良いのだ。

「幾ら俺らに大義があろうと負ければそれで終わりだ」

それにこちらはもう後が無い。

手段を選んでいたら負けだ。

「だ、だが、兵たちがそんな作戦に賛成するのか？」

「そこは問題ない」

プロイセン様がゲンハルト様の心配を打ち砕くように口を開いた。

「先ほど我が兵たちに訊ねた」

テツヤ殿の指揮でどんな作戦にも従うか？

「それで兵たちは何と答えたのだ？」

「全員一致でこう答えた」

従います。

「ぜ、全員がか？」

「あぁ。全員だ」

テツヤ殿なら信じられるし命を預けられる、と兵たちは言ったらしい。

「テツヤよ。そのゲリラ戦以外で狙撃とトラップが有効と言ったが、狙撃はどんな事をするのだ？」

「あんたみたいな指揮官を遠くから1撃で殺す」

指揮官を失えば兵たちは烏合の衆となり、バラバラに行動を取る事になる。

そこを個々に撃滅していくのだ。

「後は罠を仕掛ける。例えば落とし穴、ワイヤーに手榴弾を仕掛ける、矢を飛ばす」

更には後方支援を遮り孤立させる。

「如何に強靭な兵と言えども味方の援護も食料も得られなければ脆くなる」

そこを突けば倒せるが、捨て身の覚悟が向こうには出来るから迅速に確実に殺すのが望ましいとテツヤ殿は続けた。

「貴様はエゲツナイ事しか考えられないのか？」

ゲンハルト様はテツヤ殿の考えた戦法に呆れ果てていた。

「俺が戦場で経験した戦法をただ言っただけだが？」

テツヤ殿の世界では正規軍同士が真正面から戦う事は殆ど無いらしい。

現在はゲリラ戦などと言った“不正規戦”が主流になっていると言う。

「そしてこの戦法で大切なのは土地に住む者たちの協力だ」

ゲリラ戦などは農民たちなどの協力を得られてこそ初めて力を発揮できるのだ。

もし、それが出来なければ負ける。

「ガリシャ。ここの人たちはどうなの？」

私はガリシャにここの人たちはテツヤ殿に協力するか訊ねた。

「するさ。だって、旦那はフォン・ベルト閣下の居た同じ軍に居たし、ここであたし等を訓練したのも旦那だからね」

そう言えば、テツヤ殿はミレーネさんとこの地に来たんだ、と思い出した。

「旦那があたし達にフォン・ベルト閣下が習った戦い方を教えてくれたんだ。それに旦那は信用できる男だって皆認めているんだ。だから、あたし等は旦那に協力するよ」

「ちょっと待て」

ここでゲンハルト様がガリシャの言葉に疑問を抱いたようだ。

「お前、先ほど初代国王フォン・ベルト閣下が居た軍にこの男が居たと言ったな？」

「そうだよ。それがどうかしたのかい？」

「フォン・ベルト閣下はこの男と同じように異世界から来たというのか？」

「そうメジュリーヌさんが言っているんだよ」

ゲンハルト様はメジュリーヌさんを見た。

「妾は物知りでな。フォン・ベルトを見た事もある」

「どのような人物だったのだ？」

ゲンハルト様は興味津々の様子で訊ねた。

「そうさな・・・この男同様に寂しがり屋だったな」

ゲンハルト様は、いや殆どの者たちがテツヤ殿を見た。

「寂しがり屋・・・見えないな」

「まったくだ」

ゲンハルト様の言葉にテツヤ殿は同感だと言った。

その態度にゲンハルト様は面食らいながら、フォン・ベルト閣下はどんな軍に所属していたのかとガリシャに訊ねた。

「陸上自衛隊っていう軍に居たらしいよ。隊は違うらしいけどね」

ゲンハルト様はテツヤ殿に確認するように訊いてきた。

「俺も陸上自衛隊に在籍していた」

まさか初代国王と同じ軍に在籍していたとは信じられないとゲンハルト様は思っていたらしい。

しかし、プロイセン様はテツヤ殿の話をある程度は聞いていたから大して驚いたりはしなかった。

テツヤ殿はガリシャに向き直り礼を述べた。

「先ずこれでここの民達からの協力は得られた訳だ」

後は少しずつ相手を押し返して周辺の民達を味方にしていき、正規戦に持ち込むと言った。

「正規戦は獅子頭軍団達に任せる」

俺らはあくまで裏で行動する、とテツヤ殿は言いゲンハルト様は了承するように頷いた。

「それで今からどうすれば良いのだ?」

「先ず斥候を放ち相手の出方を探る。それからどんな手を使って来るか予想し対策を取るのが一番だ」

テツヤ殿はエドリアス様を見て、お前ならどうする?と訊ねた。

「先ずこの地域を考えると騎馬隊は使えませんね。クリーズ皇国の騎馬隊などは草原などの平野での戦いでこそ本領を発揮できます」

しかし、ここは山岳地帯であり森林地帯だ。

馬の機動力は望めない。

更に平野で育った馬に山岳地帯で行動をしろと言っても無理だろう。

「象や戦車も駄目ですね」

象も戦車もこんな山岳地帯の森林地帯では思う様に動けないと言い、残るのはワイバーンと歩兵だと言った。

「わ、ワイバーンも居るのか？」

ゲンハルト様はワイバーンが居るという発言に驚いた。

「えぇ。恐らく傭兵だと思います」

ワイバーンなどと言った魔物を使役する国は先ず居ない。

天馬以上に維持費が掛るし、乱暴者の印象が強いからだ。

そのためどの国でも傭兵として採用する事が多い。

「なるほど。で、そいつ等の弱点は何だ？」

「先ほど言ったが妾に比べて知能も低いし防御力も低い。さらに言えば高高度の飛行が出来ない事じゃ」

メジュリーヌさんがエドリアス様より早く答えた。

「お前さんは高高度の飛行も可能なのか？」

「あぁ。それから知能も防御力も妾の方が上じゃ」

ワイバーン如きなら弓矢でも倒せる、とメジュリーヌさんは言い切った。

「1本でか？」

「当たり所が良ければな。ただし、数で攻めてくるし、飛んでいる

事も考えれば難しいのう」

「となれば・・・・対空兵器を注文するか」

テツヤ殿は携帯を取り出して宅配人に掛けた。

『はーい。こちら超特急でお客様に品物をお届けする宅配人の美しいお姉さんでーす！？』

ゲンハルト様は宅配人の言葉と携帯に驚いて声を上げたが、イザベルさんに叩かれて沈黙した。

憐れだ。

「相変わらず口やかましいな」

『お客様も相変わらずの毒舌ぶりですねー。それはそうと内乱が起きてしまいましたねー』

何で知っているかなんて事は聞かない。

聞いた所で教えないし、向こうはどういう事か知っている。

それだけは確かだからだ。

「あぁ。それで注文をしたいんだが良いか？」

『勿論です。貴方様にはもっともっと働いてもらうんですから』

こんな所で死んでもらっては困ります、と宅配人は言った。

「そうかい。だが、あまり男を働かせるな。過労死するぜ？」

『わぉう。貴方様からそんな言葉が出るとは驚きですね。ですが、肝に銘じて置きます』

「そうしておけ。それじゃ、品物を頼むぞ？」

『どうぞー』

気の抜けるような声で返事をする宅配人。

「ＦＩＭ９２とそうだな・・・Ｍ５１　７５ｍｍ高射砲に５２－Ｋ　８５ｍｍ高射砲を頼む」

『ワイバーン戦で使用するのですね？了解です。それから“骸骨”の為に防弾チョッキも付けますね』

宅配人の言葉に私たちは自然とゲンハルト様に視線を移した。

「何で私を見る」

ブスっとした顔でゲンハルト様は喋ったが、自分の体格をある程度は解かっていたのだろう。

否定しなかった。

「分かった」

テツヤ殿は携帯を仕舞うと私たちに行くぞと言ってきた。

『了解』

私たちは頷いてテツヤ殿の後に続いた。

プロイセン様とゲンハルト様も興味があるのか付いてきた。

城の外に出ると巨大な品物が幾つも置かれていた。

ただし、どういう訳かその品物の実力を発揮できる場所に設置されていた。

「また要らぬ節介をしやがって」

「少佐。そんな事を言っては可哀そうじゃないですか」

「お前、声が女だからそんな事を言うんだろ？」

「勿論です。誰が好き好んで男を庇いますか」

胸を張って断言する軍曹を私たちは呆れた眼差しで見た。

この人は本当に女好きだと改めて思い知らされる。

だが、そんな軍曹の顔に石がぶつけられた。

軍曹は蛙が踏まれたような声を出して倒れた。

「相変わらず女の事しか頭にない男だね」

「ミーシャ大尉」

私はミーシャ大尉の声がする方向に目をやった。

大尉は氷の女王を吸いながら軍曹に呆れた眼差しを送ってからテツヤ殿に敬礼をした。

「少佐。お帰りなさい」

「ただいま。無事で何よりだ」

「えぇ。しかし、また大変ですね」

ここから敵を退き押し返さなければならないのだから。

「まぁな。だが、逆転ホームランを打つさ」

「そこから、一気に我々の土壇場にして敵を切り切り舞にして上げましょう」

「頼りにしているぞ？」

「お任せを」

ミーシャ大尉は敬礼をして頷いた。

ここから我々の反撃が開始されるのだ。

それを思うと私は何処か胸が躍る気持ちだった。

第五十四章：自覚と反省（前書き）

誤字脱字の指摘がありまして、修正をし直します。

皆様には大変不快な思いをさせてしまい、とても申し訳ありません。

第五十四章：自覚と反省

私たちを含めた兵たちは城の演習場に一同に集められた。

獅子頭軍団、聖騎士団、親衛騎士団、そして私たちだ。

「皆、話がある」

プロイセン様は獅子頭軍団の数人に身体を支えられながら用意された台座の上に立ち声を発した。

その様子が未だに完治していないと解かるので、皆の表情は芳しくない。

「我々はカルナン、ザンビアで2度も負けた」

1度目は奇襲で2度目は正面切って負けた。

「2度の戦いにおいて被害は重大だ。だが、諦めてはいけない」

ここで諦めたら我々は終わりだ。

王国を反逆者達の物にされてしまう。

それはどうしても避けなくてはならない。

「皆の者。ここが正面場であり我々に与えられた最後の戦場だ」

ここで負ければもう後が無い。

何としてもここで勝たなくてはいけない。

プロイセン様の言葉に兵たちは頷いた。

「先ほど女王陛下とゲンハルト宰相と話し合った結果、この内乱に当たらせる前線指揮官を決めた」

私は指揮が執れない。

ゲンハルト様は論外だ。

そこで新たに指揮官を任命すると言い、プロイセン様はテツヤ殿を前に出した。

「皆、今日よりタカミ・テツヤが前線指揮官となり皆を指揮する」

獅子頭軍団、聖騎士団、シュヴァルツフント達は何も言わなかったが、親衛騎士団だけは違っていた。

「なぜ、その男が指揮を執るのですか?!」

下種女が親衛騎士団を代表するかのように大声でプロイセン様に訴えた。

「フィーナ。これは決定事項だ」

「お言葉ですがプロイセン様。この男の素性は未だに不明です。ただ唯一解かる事は薄汚い傭兵という事だけです!?」

そんな男にどうしてこのような重大な局面で指揮官に任命するのだ、と下種女は言い続けた。

「そなたでは大軍を指揮できる能力が無いからだ」

自分の軍さえまともに指揮できない者では、とプロイセン様は言い切った。

それに援護するようにゲンハルト様が口を開いた。

前まで着ていた鎧は付けておらず代わりにテツヤ殿が渡した防弾チョッキを着ている。

色は黒で一見ただの服に見えるが、銃弾を貫通させずに受け止める事が出来る。

しかも、鎧に比べて軽いし身動きが取り易い。

そして防刃の効果も備え付けられた上に魔法防御も可能と言う凄過ぎるサービスも付けられている。

それを身に付けたゲンハルト様はこう言った。

「プロイセンが負傷して私が総指揮官となったが、私もフィーナではなくテツヤを前線指揮官に任命するとここに誓う」

「ゲンハルト様ッ」

下種女は仲間だと思っていたゲンハルト様にまで裏切られたと思ったのか甲高い声で叫んだ。

「そなたの父は偉大な騎士だ。そしてそなたにもその才能があると私は信じている。だが、今の状況は時間が無い。故に実戦を何度も経験したテツヤを前線指揮官に任命する」

「しかし、この男は傭兵ですよ！？」

2度も同じ言葉を言う必要があるのか？と思うがそれ以外でこの方を陥れる事が出来ないからだ、と思い直した。

下種女の言葉にゲンハルト様は頷いた。

「確かにこの男は傭兵だ。だが、我々をこの地に逃がし敵に被害を与えた上に見事に帰ってきた。その手腕は認めるべきだ」

殿を務め全員を死なせずに帰還させた。

誰にも真似できる事ではない、とゲンハルト様は言いこう言い続けた。

「それにこの男は傭兵だが、2度ほど正規の軍に所属していた。初代国王であらせられたフォン・ベルト閣下の所属していた軍に在籍していたとも聞いている」

陸上自衛隊という軍に所属していた、とゲンハルト様は皆に説明を開始した。

陸上自衛隊とは日本と呼ばれる国を護る軍である。

そしてフォン・ベルト閣下はその軍の“冬季戦技教育隊”に所属し

ていた、と説明を続けた。

「このテツヤも同じく陸上自衛隊に所属していたが、別の隊に所属していた。名は・・・何と言うのだ？」

「今までスラスラと言えてたのに、肝心な所で忘れるのかよ」

テツヤ殿は呆れながら自分が居た隊の名を言った。

「俺は陸上自衛隊東部方面隊第一空挺団という所に3年間いた」

その隊は陸上自衛隊唯一の空挺部隊にして数ある部隊の中でも最強と謳われる実力を保持している。

「そこから別の軍に5年ほど在籍し傭兵となった」

説明を聞き終えた兵たちはテツヤ殿の過去の事を知り、だから強いんだと納得していた。

親衛騎士団もそこは同じだったが、下種女だけは断固とした態度を取り続けていた。

「貴様の説明には何の証拠も無い。それを信じろと言うのか？！」

「煩い女だな。そんなんだと速く皺くちゃの婆になるぞ？それとも婆になりたいのか？」

こんな時でも軽口を叩いて見せるテツヤ殿と何時まで経っても喚き散らすしか出来ない下種女の対話を兵たちは聞いて笑い合った。

それを知らない下種女はテツヤ殿の態度にますます怒りを覚えていた。

「黙れっ。私は親衛騎士団の長だ。貴様のような男は違う！！」

「分かった分かった。お前は親衛騎士団の長で立派な家柄に産まれたお嬢さんだ」

テツヤ殿は下種女の相手をするのも面倒なのか視線を兵たちに向けた。

「ゲンハルト宰相閣下からも言われた通り俺が前戦で指揮を執る」

つまりお前等は俺の部下だ。

俺の指示通りに動いてもらう。

「勝手な行動を取った者はその場で処罰する」

生かすも殺すも俺次第。

生殺与奪の権は俺が持つ。

これはゲンハルト様達と話し合って得た権利の一つだ。

この言葉を聞いて皆は緊張した顔を浮かべて強張らせたが、テツヤ殿はこう付け加えた。

「だが、命令に従い勝利すれば俺も最大限の賛美を送り労う」

そして命を掛けて自分達を護る、とテツヤ殿は言い続けた。

「異議はあるか？」

『ありません』

兵たちは口を揃えて断言した。

「宜しい。では、貴様らに言う。俺らはこの内乱を終結させる。そして女王を王国に返り咲かせるぞ！？」

テツヤ殿はＡＫＭアサルトライフルを天に向けて掲げた。

兵たちもそれに剣を抜いて天に向けて声を放った。

その中には親衛騎士団の数人も混ざっていた。

それに少なからず驚いたが、親衛騎士団にもまともな奴は居たんだと思った。

そして私も遅れまいと、モーゼルを掲げて声を張り上げた。

「首都を取り返すぞ！？」

『おぉ！？』

東の地に幾千、幾万の雄叫びが木霊し山々へと響き渡った。

暫く叫び声を上げていたが、テツヤ殿は唐突に止めると最初の命令を口にした。

「これからの事は追って指示する。今は体力を温存し、武器の手入れをしろ」

解散、とテツヤ殿は言い兵たちに命令した。

兵たちはテツヤ殿に一礼してからそれぞれ散って行った。

親衛騎士団も去って行ったが下種女だけは残り帰ろうとしていたゲンハルト様を呼び止めて事の次第を改めて訊く為に詰め寄った。

「ゲンハルト様。どうしてあの男を指揮官に任命するのですか？」

私の方が家柄も血筋も上です、と下種女は言った。

何度も言って飽きないのか？と思うほどだ。

「確かにそなたの家柄も血筋も申し分ない」

だが、実戦での指揮を任せられる実力は無い。

「ザンビア平野での戦いで、そなたは私に代わり指揮を執った」

最初こそ兵たちを纏められたが、苦戦を始めると指揮ができずに居たではないか、とゲンハルト様に言われた下種女は口を閉じた。

「更に親衛騎士団が逃げるのを止められずにいた」

自分が指揮する騎士団をまともに指揮できないで、大軍を指揮できる訳が無いとゲンハルト様は言い続けた。

それに下種女は何かを言おうとしたが、ゲンハルト様は口を動かし続けた。

「もちろん私は総大将として失格だと自覚している」

ザンビア平野での戦いでは馬から落ちて指揮権を放棄した。

そしてあろうことか泣き叫んだ。

「私は総大将として・・・失格だ。だが、それを私自覚しているし反省もしている」

その証としてテツヤ殿を前線指揮官にしたと言い、下種女にこう質問した。

「そなたは自覚しているのか？」

そなたの父君は自分の行いに対して必ず責任を持っていたし、悪ければ反省をした。

そなたはどうだ？

自らの行いに反省をしているのか？

責任を持っているのか？

よくそこまで立て続けに喋り続けて唇が乾かないものだと私は思いながら耳を傾けていた。

下種女は唇を噛み、何も言わなかった。

いや、言えなかったのだろうか？

「私はそなたの実力は買っている。亡き父君の才能を受け継ぎ跡取りとして申し分ない努力をしている事も知っている。しかし、そなたでは力不足なのだ。荷が重すぎるのだ」

それは私にも値する、とゲンハルト様は言い続けた。

「今はテツヤの補佐をしてこの内乱を終結させる事に全力を注いでくれ」

「・・・・・・・・」

下種女は無言で下を見ていたが、直ぐに背を向けると去って行った。

「ありゃ完全に頭に来ているな」

テツヤ殿が煙草を銜えながら下種女の背中を見て呟いた。

「まぁ、テツヤ殿には何度も煮え湯を飲まされているから尚更でしょう」

私はしたくもないが、思っていた事を言った。

「いいや、それだけじゃないぞ」

私の背後からヴィルヘルム元伯爵が姿を見せた。

「あのお嬢ちゃんは気に入らないんだよ」

「テツヤ殿がですか？」

「いや。今の軍に対してさ」

今の軍に？

私は首を傾げたがテツヤ殿は分かった様子だった。

「そう言えば、元々親衛騎士団は一つの軍として独立していたんだな」

「はい。ですが、先王の起こした“戦争ごっこ”で一度は壊滅してしまいました」

それが原因で獅子頭軍団の傘下に入った経緯である。

一度は独立した組織だったのに、別の組織の傘下に入る。

これは組織としては最大の屈辱と言えるかもしれない。

何より彼等は王を護る直属の護衛騎士団だ。

それが独立した組織から他の組織の傘下に入るのだから屈辱以外を感じない訳が無い。

「独立した組織なら指揮官が別でもある程度の自由や意見は言える」

だが、傘下に入った組織ではそれが難しい。

今の親衛騎士団は傘下に入った時に設立された物だが、それでも伝統や歴史は受け継がれている。

それを考えれば反発心を抱くのも無理はない。

その他にも・・・・・・・・

「俺みたいな素性不明の正規兵崩れが由緒ある自分を差し置いて指揮官に任命されたのが気に入らないんだろうな」

「その通りです。まぁ、実力はゲンハルトが言う様に実力はそれほど無いですが、それでも“鉱石”としては逸材です」

まだ誰も手を付けていない。

いや、手は付けられたが、本の少しだから然して問題ではない。

「これから磨き上げれば見事なまでの宝石となりましょう」

私は疑問が浮かんだ。

あの女にそんな才能があるのか？

基本は出来ているから、それなりに手を加えれば何とかなると思うが・・・・・・・

「ランドルフ。あいつには血筋ではない物がある」

ヴィルヘルム元伯爵が私の名を呼び、私の疑問に答えた。

「あいつは負けず嫌いだろ？」

「はい。ですが、それだけではないでしょうか？」

「まぁな。だが、それだけでも強みだ。それを刺激すれば伸びる物だ」

多少の難や伸び縮みはあるが、とヴィルヘルム元伯爵は言い続けた。

「あの小娘はお前に任せる」

「宜しいのですか？」

「お前はあいつの父親を知っているんだろ？」

だったら自分よりお前の方が下種女の教育者としては打って付けだ、とテツヤ殿は言った。

「分かりました。ですが、多少の仕置きは覚悟して下さいよ？」

年月が経った為に堅くなり過ぎた鉱石を宝石にするのは骨が折れるとヴィルヘルム元伯爵は言った。

つまりテツヤ殿に多少の荒さは容認して欲しいと頼んでいるのだ。

「別に良いぜ。お前もそう思うだろ？骸骨」

テツヤ殿に話を振られたゲンハルト様は面食らったが、直ぐに答えた。

「それでフィーナ殿が成長するのなら構わない。ただし、やり過ぎるなよ？」

貴様は些か力を入れ過ぎる面がある、とゲンハルト様は言いヴィルヘルム元伯爵を睨んだ。

「そんな怖い顔するなよ。本当に骸骨に見えるぞ？」

「煩いッ」

「怒るな怒るな。怒るとその今にも吹き飛びそうな髪の毛無くなるぞ？」

これを言われたゲンハルト様は急いで髪を両手で抑えた。

それをヴィルヘルム元伯爵は笑い、テツヤ殿も釣られるように笑いだした。

『二人揃って性格が意地悪だな』

私はそんな事を思いながら、煙草を吸い始めた。

第五十四章：自覚と反省（後書き）

誤字があったので訂正しました。

幕間：かつての首都（前書き）

これまた誤字の指摘がありまして、修正させていただきます。

本当にすいません・・・・・・・・・・

幕間：かつての首都

サルバーナ王国の首都、ヴァエリエ。

この地は初代国王であるフォン・ベルトが築き上げた第二の首都である。

かつては東の地に首都を構えていたが更に奥へと進み、この地に居を構えた。

しかし、現在では元首都が何処であるのか、また名前などを知る者も殆ど居ない。

ヴァエリエは平地であるため交通から貿易なども盛んに行われており、首都としての機能は申し分ない。

だが、国防としての意識がまるで感じられない城で簡単に攻め落とせると他国だけでなく内部にも言われていた。

そしてその通りヴァエリエは敵の手に陥った。

ヴァエリエの中にあるエスカータ城。

その城の中で一人の青年が椅子に腰を降ろしていた。

場所は議会をする場所だった。

その部屋の中にある中央の席に腰を降ろしている青年、リカルド・ウェスビー。

彼は腕を組んだまま無言で目を閉じていた。

兵を起こし、2度に渡って戦いで勝利し勢いに乗り一気に首都へと雪崩れ込む事に成功した。

彼としてはここで最後の戦いを行い王国を手に入れようと考えていた。

だが、大きな誤算が発生し未だに王国は我が物に出来なかった。

敵が思わぬ反撃に打って出たのだ。

しかし、リカルド側は何とか首都を占領し城を落とした。

勝利したと言えるかもしれないが、彼から言わせれば勝利とは程遠い。

首都を占領したから勝利などというのはもはや時代遅れだ。

首都だけでなく国家を全て手中に入れてこそ本当に勝利するのだ。

首都を占領する事には成功したが、肝心の女王と王女は行方が解からない。

その上、手を打っていた筈の民達の大半は逃げてしまった。

残っているのは極僅かでとてもじゃないが、首都としての機能は半ば麻痺していると言っても過言ではない。

目を瞑るリカルドだったが、何かを感じ取ったのか鋭い視線をドアに注いだ。

『ウルフです。宜しいですか？』

ドア越しに彼の信頼する部下の声が聞こえてきた。

「入れ」

リカルドは目を開けて許可をした。

失礼します、と言いドアを開けて中に入って来る一人の男。

リカルドに忠誠を誓い片腕でもあるヴィクター公爵・・・通称ウルフだ。

「どうだった？」

リカルドは腕を組んだままウルフに訊ねた。

「はっ。首都の機能は半ば麻痺した状態ですが、何とかなりそうです」

中央貴族の何人かがこちらに来て援助を申し込んできたようだ。

「そうか。それで兵たちはどうだ？」

「はっ。あの戦いで戦象、戦車の大半は失いました。生き残った物などは怯えて暫く使い物になりません」

「残るのはワイバーンと歩兵、フォース・リーコンの面々か」

「はい。幸いワイバーンは無傷です。フォース・リーコンも被害は受けておりますが、然して問題ではないと言っております」

「そうか。で、ウルフよ。そなたとしてはどう思う？」

先の戦いを、とリカルドは後付けをした。

「正直に申し上げれば敵ながら見事な手腕です」

森林に砦を築き更に罠を設置した。

そして我々を足止めして逃げる時間を稼いだ。

その上で砦を破壊し、我々が使用する事を避けると言う徹底さだ。

「誰がやったと思う？」

「プロイセン様を始めとした将軍達はカルナン湖畔で損傷を与えました。ゲンハルト閣下と親衛騎士団ではあれほどの戦い振りは出来ない事でしょう」

となれば、別の誰かだ。

しかも、その相手はかなり腕が立つ。

「ガルバーの時代に居た親衛騎士団は立派だったのに、どうしてあのような体たらくになるのだろうな？」

「仰るとおりです。かつてはその名を轟かせた騎士団でしたが、ザンビアでは最初に逃げましたからね」

かつての親衛騎士団なら逃げるとしても殿を務めた筈。

それなのに今の親衛騎士団は誰よりも先に逃げ始めた。

総大将である宰相を差し置いて・・・・・・・・・・・・

「あれでは死んだ兵たちが浮かばれないな」

「はい。それで先ほど中央貴族が援助しに来たのですが・・・・・・」

「何だ？」

リカルドは続きを上手く言い出せないウルフに訊ねた。

「正直言って、喜ばしいと言うより嘆かわしいと言えば良いでしょうか？」

その中には何と親衛騎士団の長であるフィーナ・マレルの叔父がおります、とウルフは告げた。

何処か情けない口調に聞こえる。

「フィーナの叔父が？」

リカルドはこれには驚いた様子だった。

親衛騎士団の長だったフィーナの父に比べれば明らかに劣るが、そ

れでも強さはリカルドも認めていた。

そんな彼が裏切るとは・・・・・・・・・・

「是非とも新国王の力になりたいと仰っております」

「・・・ここまで腐り果てていると教えられると嘆かわしいとしか言えないな」

目の前の男が嘆くのも理解できるとリカルドは思った。

自分を含めた者たちが反乱を起こしながら、何処かでは国が自分達を止めてくれる事を願っていた。

これは無意識だと思う。

リカルドとしては貴族たちは自分に屈せず戦う、と何処かで思っていたし期待していた。

それなのにその貴族が自分に媚びを売って来るのだから、嬉しい半面で嘆かわしいとさえ思ってしまったのも無理はない。

「尤もです。ですが、彼は中央貴族の中でも有力です。少なくとも彼を殺すのは後回しにしても良いと思います」

利用価値が亡くなるまでは存分に利用しましょうとウルフは言った。

リカルドには見せない狡猾さを見せた。

それをリカルドは見たが何も言わずに別の事を告げた。

「それでウルフよ。女王たちは何処に逃げたと思う？」

「砦の位置から察するにかつての首都へ逃げたと思います」

「ヴァイガーか。初代国王フォン・ベルトが築き上げた首都だが、今ではただの荒れ地と聞いているが？」

「その通りです。ですが、これは私の直感ですが申し上げても宜しいですか？」

「構わん」

「ありがとうございます。私の直感では東の地には“何か”あります」

その何かとは分からないが、速い内に片付けるべきですと言った。

「では誰が適任だ？」

「東の地は我々も未経験ですが・・・フォース・リーコンが妥当かと思います」

彼らを上げる理由として自分達には無い装備と戦術を持っている事を上げた。

敵も同じ装備を持っている事を考えれば、彼等を向かわせるのが妥当だ。

何より先ずは偵察を向かわせるのであるなら彼等が妥当と付け加え

た。

「では、彼等に偵察を命令しろ。残りの者たちには各地方に檄を飛ばして私に味方するように貴族たちに伝えさせろ。兵たちにはくれぐれも民達に乱暴をするな、と厳命しておけ」

「御意に」

ウルフは一礼して部屋を後にしようとした。

それをリカルドは止めた。

「彼等に・・・働かせ続けて、すまないと言っておいてくれ」

「畏まりました」

ウルフはリカルドの言葉を胸に留めて改めて部屋を出た。

一人となったリカルドは椅子から腰を上げて窓から東の方角を見た。

ヴァイガー・・・かつて首都として繁栄していたが、今では名も忘れ去られた首都。

そこに女王たちが逃げたとなれば討ち取らねばならない。

「かつて繁栄した首都が・・・墓場となるか」

だが、そんな気がリカルドにはしなかった。

寧ろ嫌な予感がしていた。

2度の戦いで思わぬ邪魔が入った上に3度目の戦いでは手痛い反撃を受けた。

きっと東の地でもそうなる可能性が高い。

そんな気をリカルドは感じていた。

一方、部屋を後にしたウルフはフォース・リーコンが休息を取っている演習場へと足を運んだ。

戦った兵たちはそれぞれ割り当てられた場所で休息を取っており、演習場は彼等が当てられた。

自分が持っている兵はリカルドの近くに割り当て護衛としている。

それに対して残りの3人は分からないように離しつつ何時でも一網打尽に出来るようにしてある。

鼠・・・フリップ男爵には酷いが、時間稼ぎという名目で2人の監視役を任せている。

文字通り“時間稼ぎ”としてだ。

ウルフが現れるとフォース・リーコンの面々は急いで立ち上がり、直立不動になった。

『大した者たちだ』

先の戦いでも率先して傷ついた兵たちを後方へと連れて行き命を救

った。

もちろん彼等も傷ついたが、それでも怯まずに反撃をしていた。

あの戦いで最も功績を上げたのは彼らだ。

向こうも彼等と同じ装備をしていたから、彼等が奮戦するのは当たり前であるがそれだけでなく味方を救出した事も考えると彼等の功績は多大だ。

「マイ・ロード・ヴィクター。何か用ですか？」

彼の前に壮年の男が現れた。

男は自分をマイ・ロードと先に付けて名を呼んだ。

このロードとは、彼等の世界では爵位を持つ者を表す卿と言う意味らしく自分に敬意を込めて言っているのだ、と後で知った。

灰色を主体とした服を纏った壮年の男で髪は極限に短く切られており、無駄な脂肪がまるで無い。

眼光も鋭いが濁り一つない真摯な眼差しである。

「戦ったばかりですまないが、新たな任務だ」

ウルフは謝りを入れてから任務を伝えた。

まだ戦いから間もない彼等を動かすのは忍びなかったが、ウルフは命令した。

「東の地へ偵察しに向かってくれ」

「東へ？」

男は訊き返した。

「東の地はかつて初代国王が築いた首都がある」

今では荒れ果てた地で誰も住んでいないと思われる土地だ。

周囲を森林と山、谷などで囲まれた場所であるとウルフは説明した。

「そこへ女王たちが逃げ込んだというのですか？」

「砦の配置からしてもそうだと思う。これは私の直感だ」

男はウルフを暫し見ていたが、直ぐに東の方角に目をやった。

険しい山々と森林で先がまるで見えない方角を見ていた男だが、直ぐに視線を逸らした。

「・・・ハンヴィ軍曹」

男は背後に控えていた男に声を掛けた。

彼より数歳ほど年上である彼は無精髭に白髪が少し混ざっていた。

「はい、大佐」

ハンヴィ軍曹と呼ばれた男は、壮年の男・・・大佐の前に出て両手を爪先まで伸ばして、直立不動となった。

大佐とはこの男が居た世界での階級らしく、かなり高い階級だと教えられた。

大佐と呼ばれた男は、ハンヴィ軍曹という男に命令を下した。

「直ぐに東へ偵察に向かえ。人数と装備は君の判断に任せる」

「イエッサー！！」

ハンヴィ軍曹は腹から声を出すように発した。

そして何人かの兵たちを選ぶと装備を整えろと命じた。

「これでよろしいでしょうか？マイ・ロード・ヴィクター」

男はウルフに向き直り訊ねた。

「あぁ。くれぐれも頼むぞ」

「お任せを。我々は貴方達を勝利へと導くために存在しているのですから」

「そう言ってもらえると助かる。それからリカルド様からそなた達に伝言だ」

“働かせ続けて・・・すまない”

「それをリカルド様が？」

「あぁ。我が主の言葉、確かに届けたぞ」

「・・・ありがとうございます」

男は右手をこめかみに当てた。

彼の世界ではこれが敬礼らしい。

それにウルフも返した。

第五十五章：3人でお茶会

私とレオンは演習場で射撃訓練を繰り返していた。

私はモーゼルをもっと速く撃てるように何度も撃ち続けていたが、同時に集中力も高めるように努めた。

照星ー一ーフロント・サイトと呼ばれる先っぽに銅貨を置いている。

これを落とさないようにしつつ連続射撃を繰り返せるように練習を繰り返す。

しかし、これが難しい事この上ない。

撃てば反動が来るし、ボルトを動かすだけでも先が動く。

銅貨を落とさないように撃ちボルトを動かす。

何度もこれを繰り返すのだが、どうしても落としてしまう。

そして銅貨がグラグラ揺れては集中力も乱れるのだが、これを物にすれば・・・もっと上の高みへと行けると私は確信していた。

いつリカルド様達が来るか分からない。

付け刃だろうが、何だろうが今はそれでも高みへと行きたかった。

何度も失敗を繰り返すが、それでも私はやり続けた。

その傍らではレオンがＳＫＳカービンを立射をしていた。

レオンはＳＫＳカービンを両手で構えて引き金を引き続ける。

弾は回転しながら人型の的に命中している。

自動小銃という事もあり、ボルトアクションよりも速く次の弾を撃てる。

私はつい負けないようにとばかりに集中力が欠けた状態で引き金を引いてしまった。

狙いはもちろん外れた。

銅貨も落ちてしまった。

・・・やってしまった。

私は自分が酷く情けない気持ちに襲われた。

「若いね」

背後から声が聞こえて振り返ればミーシャ大尉とワイド中尉が立っていた。

私とレオンは射撃を一時的に止めて敬礼をした。

「坊や。いま隣の坊やに負けたくないと思って引き金を引いたね？」

地面に落ちた銅貨を拾い私に渡しながら大尉は指摘して来た。

「・・・はい」

私は情けない気持ちを身体中から溢れ出した状態で頷いた。

「やっぱりね」

大尉は図星だと知り笑みを浮かべた。

狙撃手は誰よりも冷静でなくてはならない・・・・・・大尉はそう私に教えた。

今の私はどうだ?

冷静ではない。

親友に負けたくないという浅はかな感情が勝手に走り、集中力も無しに撃ってしまった。

これでは狙撃手として失格だ。

私は一気に頭を冷却した。

そして大尉から渡された銅貨を握って宣言した。

「・・・次は外しません」

「良い眼だ。よし、やってみな」

「はい」

私は銅貨を照星に銅貨を置き、ゆっくりと落とさないようにストックを肩に当て左手を銃身の下に滑りこませて優しく支えて揺れないように保持した。

そしてゆっくりと人差し指を引き金に掛けて狙いを定めた。

風は無い。

湿気が多少ある。

心の中で環境を詳しく調べてから人差し指を静かに引き金に力を込めた。

乾いた音が1発した。

銅貨は揺れているが、落ちる気配はない。

まだ行ける。

いや、行くんだ！！

私は一瞬、乱れそうになった精神を落ち着かせて直ぐにボルトを動かして弾を排出し引き金を引いた。

2発の弾は人型の右目と口に命中した。

「右目で相手の戦闘力を失わせて、眼底奥の脳幹や脊髄を破壊する。
そればかりか口を狙い完全に相手を殺しているね」

大尉は何時の間にか煙草を口に銜えていた。

火を点ける音と同時に冷たい乾いた香りが私の鼻に来る。

「見事だね。坊や」

「いえ。これはあくまで訓練であり、動かない的を狙ったからです」

実戦では相手が動く上に攻撃をしてくる。

それを狙うのは至難の技だと言い続けた。

「謙虚な性格だね。でも、１の実戦より１０の訓練と言うんだ。訓練を疎かにしてはいけないし、馬鹿にしては駄目だ」

大尉は煙を吐きながら私に言った。

「そうだぞ。ランドルフ。継続は力と言うだろ?続けていればやがて絶対的な自信となる」

それを忘れるな、とワイド中尉も言ってきた。

私はそれに頷いた。

幾分か心が軽くなった気分だった。

午後になり昼食の時間になった。

私とレオンはその場で携帯食料を二人で食べていたが、そこへガリシャとオリガさんが現れた。

「こんにちは。ランドルフ君」

オリガさんは質素な衣服を身に纏いながらも気品さを失わずにいた。

その一方でガリシャは男物の衣服を着て右肩にはライフルスリングを取り付けたイングラムＭ１０をぶら下げていた。

「こんにちは。オリガさん。何か用ですか？」

「酷い言い草ね・・・貴方が会いに来てくれないから私から来たのに」

そう言えば・・・忘れていた。

「すいません・・・・・・」

私は頭を垂れた。

女性との約束をすっぽかしてしまった・・・・・・・・・

男としてやってはいけない事だ。

「良いのよ。何かに夢中になっている男を待つのも女の仕事だからね。それにそういう男を見るのも楽しいわ」

オリガさんは屈託の無い笑みを浮かべてくれた。

それが私には幾分か薬となり安らかになった。

「・・・なにニヤニヤしてるのよ。気持ち悪いわね」

ガリシャが険しい顔で私を睨み据えてきた。

「そんな顔を浮かべてるとランドルフ君に嫌われるわよ?」

「だって、本当の事じゃないの」

ブスっとした表情でガリシャは答えたが、オリガさんは笑みを浮かべたまま耳元で何かを囁いた。

それにガリシャは顔を赤くした。

「何を言ったんですか?」

「女だけの秘密よ」

人差し指で口元を当ててウィンクをするオリガさんに私は聞く事を止めた。

女性が言う事は何時も正しい、とテツヤ殿は言っていた。

なら、これは正しい事であり黙って従うべきだ。

「それはそうとレオン君。貴方の“愛人”も貴方に会いたがっていたわよ?」

今は洗濯をしている筈、とオリガさんは言った。

愛人・・・あまり聞こえが良い言葉ではない。

だが、オリガさんが言うと本当に愛している人と言う意味に取れるから不思議だと感じる。

レオンは直ぐに立ち上がり私に行って来る、と目で言ってきた。

『頑張りなよ？』

『そっちもね』

私とレオンは互いにウィンクで返した。

レオンは急いで走り去って行った。

「うふふふ。あの子も良い男になるわね」

でも、貴方も良い男になるわよ、とオリガさんは言ってくれた。

「そうなれるように努力します」

「楽しみにしているわ」

「はい」

私は頷いた。

「で、ランドルフ君。この後お時間はあるかしら？」

「え？まぁありますけど何か？」

「集中しているのも良いけど、少し休憩としてお茶でも飲まない？」

3人で、とオリガさんは言った。

「あ、あたしは別に・・・・・・」

ガリシャは顔を赤くしたままそっぽを向いた。

「あらそう？それなら私とランドルフ君の二人だけでやろうかしら？」

クスクス、と笑いながらオリガさんはガリシャに語り掛けた。

「や、やっぱりあたしも出る！？」

ガリシャは怒鳴るように出ると言った。

何でそんなに怒鳴るような声を出すんだ、と思いながら私は頷いた。

決まりね、とオリガさんは言い私達は演習場を出てオリガさんが住んでいる家へと向かった。

オリガさんの家は城からさほど離れていない場所にある小さな家だ。

「さぁ、どうぞ」

ドアを開けて中に入れてくれたオリガさんは直ぐに茶を用意し始めた。

「ランドルフ君は砂糖とかはいる？」

「いえ。大丈夫です」

「ガリシャちゃんは？」

「砂糖を5杯ほど入れて下さい」

「そんなに入れると健康に悪いよ？」

敢えて太るとは言わずに健康に悪いと言った。

太る・・・これは女性に言ってはいけない単語だ。

女性はこと身体などには男には想像も出来ないほど繊細なものだと軍曹とオリガさんから言われた。

だから、敢えて健康に悪いと言った。

「煩い！！」

だが、ガリシャは怒鳴り返してきた。

健康に悪いと言うのも駄目なのか？

そんな事を思いながら私は煙草を銜えた。

ガリシャは憮然とした様子で私を睨んでいたが、オリガさんの渡してきた茶を飲んで幾分か顔を和らげた。

「そっちの顔の方が良いね」

怒っている顔より和らげな顔の方が良いと私は言いながら煙草を吸い続けた。

だから、ガリシャを見ていなかったが、その時のガリシャは果実のように真っ赤だったと後でオリガさんに教えられた。

第五十六章：夕食と兵站

オリガさんの家で茶を御馳走になった後で私は再び演習場へと足を運んだ。

後は夕食まで訓練に励む。

夕食はオリガさんの家で御馳走になる予定だ。

「今日は私の手料理を御馳走して上げるわ」

これに私は喜んで頷いたが、一緒に居たガリシャは憮然としていた。

その原因は分からない。

そして今彼女は私の隣を歩いている。

ガリシャは私の視線に気づいたのか、こちらを見たが直ぐに視線を逸らした。

私が何をしたんだ・・・・・・・・

原因が分からないまま私は演習場へと着いてしまった。

私はモーゼルを構えた。

「どうしてＳＫＳカービンを使わないの？」

ガリシャが横に立ったまま私に訊ねてきた。

「こっちの方が精密射撃に向いているし長距離でも狙えるからだよ」

ＳＫＳでは中距離が限界だ。

それを考えて敢えてモーゼルを選んで使用しているのだ。

「それを使わないならあたしに貸してよ」

イングラムだけでは心もとないとガリシャは言った。

「貸すだけだよ？」

「分かってるよ」

ガリシャは元気よく頷いた。

やはり彼女は元気あのが似合うと思いながらＳＫＳカービンを渡した。

彼女は慣れた手つきでＳＫＳカービンのレシーバーを引いて構えた。

そして引き金を無造作に引いた。

弾は人型の左胸下に命中した。

およそ心臓の部分と言っても良いだろう。

立て続けに撃ち続けるガリシャ。

狙いは額か心臓など急所を狙っている。

狩猟をしている彼女だから、相手を一撃で仕留める事に関しては彼女の方が上かもしれないと思いながらモーゼルを構え直した。

静かに呼吸を整え、照星に銅貨が乗っている感覚を思い出す。

「・・・・・・・・」

横ではガリシャがＳＫＳカービンを撃ち続けているが、まるで煩いと感じない。

心も頭も全て冷たい感覚だ。

私は狙いを定めて引き金を引いた。

反動が肩に来る。

だが、銅貨は落ちていない。

揺れているだけだ。

そのままボルトを動かして弾を排出して次弾を装填し、また撃った。

弾は右目と額に命中した。

それを何度も繰り返しては感覚を掴む。

頭は冷静、心も冷静。

言い聞かせるように呟き続けて引き金を引き、ボルトを引いて弾を出した。

何度も何度も繰り返して自分の物にしようと努めた。

気が付けばいつの間にか夕方になっていた。

「ねぇ、ランドルフ。これあたしに頂戴」

ガリシャが帰り道で私のＳＫＳカービンを抱き締めながら猫撫での声で強請っていた。

「残念だけど・・・それはくれる訳にはいかない」

ただし、貸す事は出来ると言った。

「じゃあ貸して」

「良いよ。ただし、ただで貸す気はないよ」

これにガリシャは驚いたが、直ぐに何が望みと訊いてきた。

「それは後で話すよ。これは私の一存では決められないんだ」

「そうなの？」

「うん。まぁ、それはそうと早く行こう。オリガさんが待っているんだ」

女性を待たせる訳にはいかないと私は言った。

そして少し早歩きで進んだ。

「ちょ、ま、待ってよ」

ガリシャが慌てて追いかけてくる。

その足に合わせて私は歩き続けた。

オリガさんの家に行くと既に煙突から白い煙がモクモクと出ていた。

それと同時に美味しそうな匂いもしてくる。

ドアを開けて中に入るとエプロン姿のオリガさんが私とガリシャを出迎えてくれた。

「お帰り。もう直ぐだから手を洗って座ってて」

「いえ、せめて皿を出す位はやらせて下さい」

「優しいのね。やっぱり貴方は良い男になれるわ」

オリガさんは笑いながらそれじゃお願い、と言ってきた。

それに頷いてガリシャと協力して皿などを出してテーブルの上に置いた。

それから間もなくしてオリガさんが大きな鍋の取っ手を布で持って中央に置いた。

「今日はシチューよ」

特性クリームを入れた事で味がまろやかで、しつこくない味だが濃くがあるらしい。

それと焼き立てのパンに猪の肉がテーブルに並べられた。

オリガさんはエプロンを解いて椅子に座ったオリガさんは「まるで家族ね」と微笑した。

「懐かしいです」

私はオリガさんの言葉に同意した。

「ランドルフ君の家族はどうしたの？」

「父は幼い頃に死に、母も私が聖騎士団に入隊した時に亡くなりました」

兄弟も独立して今は手紙のやり取りもしていないと、付け加えた。

「テツヤ殿に手紙位は出せと言われて、出そうと思っていたんですけど忙しくて・・・・・・・・・」

今頃はどうしているか？

ただ、一つだけ言えるのは無事に首都を脱出できた筈、という事だ。

兄弟が居る店は直ぐに出て行った。

だから恐らくそれに付いて行ったに違いない。

それが私の言える事だった。

「そう・・・大丈夫よ。その人たちも無事に生きてるわ」

貴方が信じていればそうだ、とオリガさんは言ってくれた。

「そうだよ。ランドルフ。あんたの兄弟はちゃんと生きてるよ」

ガリシャも私に励ましの言葉を掛けてくれた。

それが嬉しくて私は礼を述べた。

そして夕食を開始した。

シチューは特性クリームの濃くがあってまろやかな味わいだった。

それにパンを付けて食べるとまた別の味がして美味い。

ガリシャは私よりバクバク食べているが、まったく衰えていない。

よくあんなに食べて太らないな、と思うがやはり山育ちだから身体を動かすので太らないと思った。

そして食事をしていてふと頭に浮かんだ。

兵站は大丈夫だろうか？

兵站とは軍の食料から衛生、施設、整備、展開など様々な物がある。

私の場合の兵站は食料の事だ。

ここで戦いが起きれば食料は持つだろうか?

特に大事なのは塩だ。

塩は人間が生きる為にも必要不可欠だ。

特にサルバーナ王国は山国だから塩が貿易でないと手に入らない。

一体どうすれば良いのか・・・・・・・・・・・

携帯で宅配人に頼めば塩が届く筈だが、もしそれが使えないとなればどうすれば良いのだ?

食事の手を止めた私を不審に思ったオリガさんがどうしたの?と訊ねてきた。

「あ、いえ・・・少し戦の事について気になる事がありまして・・・・・・・」

「何かしら?」

「兵站です」

「兵站と言うと食料の事?」

「えぇ。ここに籠城すると考えてどの程度の備蓄があるのか?また怪我人などを癒す薬や包帯などは十分か・・・・・・・・」

数えれば切りが無いと私は言ったが、直ぐに謝罪した。

「すいません。食事中にこんな話をして」

「良いのよ。今は戦時中だし貴方は戦う者だもの。食事中でもそれ位の考えを持たないと駄目よ」

ガリシャの方は食事中くらいは食事に集中しろと言って来て、私は苦笑するしか出来なかった。

夕食の後、私はここに泊る事になった。

ガリシャも残る気だったらしいが、ロンガーム殿が訪れて「お前は来い」と言い首根っこを掴んで連れて行かれた。

今は私とオリガさんだけだ。

で今は二人で・・・その・・・あの・・・に・・・にゅ・・・よ、く・・・ちゅう・・・だ。

「逞しい背中ね」

オリガさんは泡を立てた布で私の背中をゴシゴシと擦りながら耳元で囁いた。

「え、えぇ・・・まぁ・・・」

私は曖昧に頷いた。

「それにしても男の人の背中って改めて見ると大きいわね」

前に見た時よりもっと大きい、とオリガさんは言い背中に湯を掛けた。

「今度は私を洗って」

「え！？」

「良いでしょ？お互い知らぬ仲じゃないんだから」

寧ろ身体の隅々まで知り尽くした仲である。

だが、それを言わずに私は赤くしながらオリガさんの背中を擦り始めた。

白い肌が生々しくて・・・ゴクリ、と思わず生唾を飲み込んでしまった。

「そんなに慌てないの。お風呂から上がったら・・・ね？」

「・・・はい」

私は酷く自分が情けなくなった。

これでは軍曹と同じではないか！？

あの方が女性を見る眼・・・飢えた野獣の眼だ。

ある意味、男としては本能に従っているだけだろうが、軽蔑される

事である。

その軽蔑している事を私はしているのだから情けなくもなる。

「何を落ち込んでいるのかしら?」

「・・・軍曹と同じだと思いまして」

「あの人?あの人と貴方とでは天と地も違うわ」

貴方の見る眼は女を虜にする眼差しであるのに対して軍曹の場合は嫌悪感しか湧かないらしい。

「あの、どうして軍曹には嫌悪しか湧かないんですか?」

「一言で言うなら“軽い”のよ」

軽い?

「あの人って美人なら誰でも良いっていう感じでしょ?」

まぁ・・・確かに。

美人なら誰にでも飛びかかる人だからな・・・軍曹は。

「でも、貴方は“重い”眼差しで見ているわ」

まるで自分だけを見つめている、という錯覚を覚える眼差しらしく、それが女にとっては嬉しい事らしい。

「だから、貴方もレオン君も好かれるのよ」

可愛いけど、芯がしっかりしていて、良い男になる可能性を高く持っているから。

「その為にもしっかりと私を可愛がってね？」

「・・・・はい」

私は真剣な顔で頷いた。

場違いかもしれないが。

その後は・・・聞かないでくれ。

第五十七章：暖かく迎える

史記を書いている途中でドアが叩かれる音がした。

「誰だい？」

私が声を掛けると「私よ」と透き通るような声が帰ってきた。

私の妻の一人であり「初めて」の女性だった。

私はどうぞ、と言うとドアが開いて妻が入ってきた。

「こんばんは」

妻は同じく部屋に居た妻に話し掛けた。

「こんばんは」

妻もそれに返した。

そして妻はドアを閉めて私の隣に腰を降ろした。

「どう？調子は」

「今の所は順調です。今は東の地で貴方と共に暮らしていた所を書いている所です」

「あの時の光景がまさか現実になるとは思っていなかったわ」

妻は笑みを浮かべながら、あの時と変わらず私を優しく見つめてくれた。

あれから既に数十年以上も経つが、色あせない光景だ。

変わった事もある。

それは二人だったのが何時の間にか大人数になっていた、という事だ。

別に嫌な気持ちは無い。

寧ろ大家族で幸せだというのが私の気持ちだった。

「他の皆はどうしたんですか？」

「孫たちを寝かしてつけてるわ」

私も先ほどまで孫を寝かしつけていた、と妻は語りもう直ぐ皆も来ると言った。

「もう直ぐ全員が揃いますね」

私の右隣に座っていた妻がコーヒーの入ったカップを置いて静かに語り掛けた。

今にして思えば全員が揃うのも久し振りだ。

何時も孫たちが居たからだ。

嫌な気持ちは無い。

ただし、久し振りだと思う。

「そうだね。これからは大人の時間だ」

「そうね」

左隣に座る妻が笑いながら頷いた。

そして皆が来るまで私は史記を書き続けた。

私はトントントン、とリズムカルに包丁が叩かれる音で目を覚ました。

ベッドから起き上がり、自分が裸である事に気付いた。

そう言えば昨日は・・・・・・・・

「オリガさんと・・・・・・・・・」

今にして思えば少しやり過ぎた感があった、と思う。

別に身体が痛いとか疲れたとかは感じないのだが、何となくやり過ぎた感があると思った。

下着を付けて衣服を纏い部屋を出た。

居間に行くとエプロン姿のオリガさんが朝食を作っている最中だった。

「おはよう。お寝坊さん」

オリガさんは笑みを浮かべて振り返った。

「すいません」

私は髪の毛を掻きながら平謝りした。

「良いのよ。貴方の寝顔を見れたから」

可愛いかったわ、とオリガさんは言い顔を洗って来なさいと言ってきた。

それに頷いて洗面所で顔を洗って戻った。

戻って来るとオリガさんが料理を皿に載せてテーブルに並べていた。

「今日はどうするの？」

「今日も訓練をします。ですが、その前にテツヤ殿の家に行きます」

「それならミレーネ姉に茶でも飲まない？と訊いてくれない？」

「分かりました」

私はそれに頷いて食事を始めた。

二人で向き合って食事をしていると何だか夫婦に思えてしまう。

まぁ、彼女とは5歳も年齢が違う。

だが、5歳ならまだ問題は無いと思う。

先王とサラ様を比べればまだマシだ。

そんな失礼な事を思いながら私は朝食を済ませてテツヤ殿の家へと向かった。

テツヤ殿の家に行き、ドアを叩こうとしたが何やら大声で怒鳴り合う声が聞こえてきた。

『そんな破廉恥な!?』

『破廉恥かしら?』

『別に破廉恥とは思わないがのう』

『破廉恥極まりないです!?』

『そうかしら?』

『理解できん』

声の主はリーザ中尉とミレーネさんにメジュリーヌさんだ。

怒鳴るリーザ中尉と静かに柳のようにして言葉を巧みに言っては矛先を変えようとするミレーネさんとメジュリーヌさん。

一体なんで揉めているんだか・・・・・

私は意を決してドアを叩いた。

『誰だ？』

テツヤ殿の声が聞こえたので「ランドルフです」と答えた。

すると入れ、と言われたのでドアを開けた。

中を見ればリーザ中尉とミレーネさんにメジュリーヌさんがテツヤ殿を挟んで口喧嘩をしている最中だった。

「・・・・お邪魔でしたか？」

「いいや。寧ろ有り難い」

テツヤ殿は煙草を銜えながら軽く息を吐いた。

煙草にミレーネさんが慣れた手つきで火を点けた。

「いらっしゃい。ランドルフ君」

「よう来たの。ランドルフ」

ミレーネさんは見る者を虜にする微笑を私に向けてきた。

そしてメジュリーヌさんも生々しい太腿を見せながら挨拶をしてくる。

「あ、はい。おはようございます・・・・・・・」

私は面食らいながら二人に挨拶をした。

リーザ中尉を見れば険しい顔つきでミレーネさんとメジュリーヌさんを睨んでいた。

「あの、何があったんですか？」

「聞いてよ。ランドルフ君!?」

リーザ中尉は私に詰め寄るとこう言ってきた。

「この女たち、テツヤ様の・・・をく、口や手で、ほ、奉仕するのよ!!しかも、毎夜の如く!!」

「・・・・・・・・」

私は無言だった。

いや、別に何か言えと言うなら言えるが、これはどう答えて良いか迷う。

「お前、昨日はオリガという娘の家に泊ったんだろ？」

どうしてテツヤ殿が知っているのかは訊かずに頷いた。

「で、昨日はしたんだろ？」

「えぇ・・・まぁ・・・・・」

「奉仕はされたか？」

「・・・されましたし・・・・しました」

昨日は、まぁ・・・テツヤ殿の言う奉仕はされたし、した。

詳しい事は言えないが。

これを聞いたリーザ中尉は「裏切り者！？」と私に罵声を浴びせてきた。

何で裏切り者なんだ？と思うが、リーザ中尉は泣き出してしまい困り果てた。

「泣くほどの事かしら？」

「別にそれほどの事でもないと思うがのう」

ミレーネさんとメジュリーヌさんは何でも無いような口調で言い、テツヤ殿を見た。

「まぁ、潔癖なんだろうな」

「寂しがり屋さんとしてはどうかしら？」

「潔癖は悪くない。まぁ、少しくらいは汚れていた方が俺は好みだ」

そうでないなら一から順に仕込む、とテツヤ殿は言った。

それを聞いたリーザ中尉は涙を拭くと「なら仕込んで下さい！？」

と大声で叫んだ。

朝からこんな卑猥な話が出てくるのはどうかと思うが、敢えて言わずにテツヤ殿に昨夜の事を話した。

「なるほど・・・お前、戦略眼があるな」

「私が、ですか？」

「あぁ。兵站は重要だ」

テツヤ殿の世界ではこんな言葉があるらしい。

“戦争のプロは兵站を語り戦争の素人は戦術を語る”

「こんな言葉がある通り兵站は戦術・戦略と並んで重要だが、その2つよりある意味ではより重要だ」

戦士たちは戦いで死ぬ事は覚悟できる。

だからこそ死に物狂いで戦うのだ。

しかし、腹が減っては戦が出来ぬの通り腹を満たさなければ満足に戦う事など出来ないし望めない。

それをやれ、という指揮官は指揮官ではない。

ただの馬鹿で愚かな奴だ。

過去にその馬鹿な事を仕出かした者たちがテツヤ殿の世界では居た

らしく結果は見るも無残な末路だったらしい。

「俺の居た国の旧軍は兵站を軽視していた」

“輜重輸卒が兵隊ならば　蝶々トンボも鳥のうち　焼いた魚が泳ぎだし　絵に描くダルマにゃ手足出て　電信柱に花が咲く”

などチンプンカンプンだが聞き様によっては相当酷い言葉を言われていたらしい。

だが、この輜重輸卒とは金で雇われた雑卒である。

輜重兵は兵卒から下士官である。

彼等は一番下の者たちを現場で監督するからその実力が大変重要視されたが、その半面で将校は傷ついた兵や素行に問題がある者、成績が悪い者などとにかく居ない方が良いと思われる者たちだったらしいから酷い話だ。

その兵站が重要なのに軽視した事から歴史に名を残す戦いでは殆どの者たちが餓死や病死で死んだと聞いた。

「酷過ぎる話ですね」

「あぁ。傭兵時代もそんな奴が居た」

前に話した４人だけを残して全滅させた男ではなく、別な男らしい。

その男も兵站を軽視して餓死者や病死した者たちを続出させたらしく最後は味方に殺されたと教えられた。

「当然の報いであり、将校でありながら兵站を知らない愚かな奴だった」

その男に比べて私は将校でもないのに気付いた。

これは満点に等しい点数のようだ。

「で、お前としてはどう思う？」

ここの状況を考えて、とテツヤ殿は訊ねてきた。

「先ずここは山です。だから、ある程度の“食べられる物”はあると思われます」

この食べられる物とは文字通り腹に入る物だ。

蛇、熊、猪、栗鼠、山鼠、蜥蜴、山猫、木の実、木の皮、木の根など様々な物がある。

「しかし、それも直ぐに無くなるでしょうし、敵に包囲されればお終いです」

何より塩が無い、と私は言った。

「サルバーナ王国は山国です。ですので塩は必需品であり何としても手に入れなければなりません」

だが、サルバーナ王国は山国で塩は取れない。

山で塩が取れた話は聞いた事がない。

「中々鋭いな。だが、塩の代わりは火薬で補える」

「そうなんですか？」

「あぁ。火薬は塩の代わりになる」

それ以外でも山でも塩は取れるらしい。

「岩塩と言う塩が取れる筈だ」

そこら辺はロンガーム殿やメジュリーヌさんに訊け、と言われてメジュリーヌさんに訊ねた。

「岩塩なら取れる筈じゃ。城の底にある」

食料から包帯なども十分に保管してある、とメジュリーヌさんは答えてくれた。

「と言う事は籠城する点では今の所の問題は、無いという事ですか」

「あぁ。だが、何時までも籠城している訳にもいかない」

しかし、もう直ぐ冬が来るとテツヤ殿は言った。

「向こうは冬が来る前にケリをつけようと思っている筈だが、俺は冬が来るのを待っていたい」

冬になればこちらに来る事も容易ではない。

仮に攻めて来ても“暖かく”迎えてやるつもりだと述べた。

「・・・何か思い付いたんですね？」

私は何となくだが、それを感じ取り訊いてみた。

「その通りだ。お前も分かるようになったな」

「えぇ」

私は笑みを浮かべてテツヤ殿に渡された女神の抱擁を銜えてみせた。

第五十八章：作戦会議

その日の内にテツヤ殿は私たちを一同に集めて作戦会議を開く事にした。

場所は城の議会室だ。

その議会室のテーブルは円卓だった。

ヴァエリエでは階級に因んだテーブルだったのに、ここでは円卓。

メジュリーヌさんに訊けば「フォン・ベルトは身分に関係なく意見を出せると称して円卓にした」と教えてくれた。

確かに円卓なら皆が平等だと思える。

円卓の席に座るのはテツヤ殿、ゲンハルト様、プロイセン様、ヴィルヘルム元伯爵、リーザ中尉、ワイド中尉、そして下種女だ。

そして私とレオンが居る。

サラ様は戦の事は口出ししない、と言い参加して居ない。

軍曹と大尉は他の用事で居ない事から私とレオンがテツヤ殿のサポートを仰せつかった次第だ。

サラ様は仮にも女王なのに議会に参加しないのは些か無責任にも思えるが、この状況を考えて敢えて参加しない方が良いと考えたと思う。

「それでテツヤよ。主としてはどう考える？」

ゲンハルト様がテツヤ殿から渡された煙草を吸いながら訊ねてきた。

どうやら煙草が好きになったようだ。

「先ず敵偵察が来るのは予想済みだ。むろん俺らも向かわせる。いや、もう向かわせている」

「誰だ？」

「ガルムだ」

そう、狼人ガルムを偵察に向かわせているのだ。

ガルムは狼人だから、私たちより強い。

更に言えば言語を話さずに４足歩行で動けば身体が大きな狼に見えるから、上手い具合にカモフラージュ出来る。

それらを考えてガルムを偵察に向かわせたのだ。

しかし、戦いはしない。

ただ、相手にこちらの存在を教えてどう出るか試す、と答えた。

「なるほど。それで敵はどんな手で攻めてくると思う？」

「俺に訊くのも良いが先ずは自分で答えを見つけてみろ」

そうする事で勉強になる、とテツヤ殿は言った。

「本当は答えられないのではないか？」

下種女が場の雰囲気をぶち壊すように要らぬ口を挟んできた。

しかし、テツヤ殿はそれを無視して他の皆も無視した。

もはや相手にするのも煩わしいという感じだった。

「・・・皆に無視されてるね」

レオンが小声で私に話し掛けてきた。

「うんざりしてるんじゃないかな？」

私ならそうする、と言うとレオンも「僕もだ」と言った。

そんな事を話し合いながらテツヤ殿達の話に耳を傾ける。

「私が敵なら食料が尽きるまで待つほど時間は無いと考える」

「何故だ？」

「他国の介入がある。それに自国の経済なども疲労するのは目に見えている」

それらを考えると・・・・・・・・

「・・・ワイバーンがあると言っていたから、ワイバーンで攻める」

もしくは歩兵の数で押す、とゲンハルト様は続けた。

「中々の答えだ。確かにワイバーンを使えば上から有利に攻撃できる」

だが、山の天気は変わり易い。

如何にワイバーンとは言え、簡単には近付けないし近づいたとしても対空砲の餌食になる。

それに、だ。

「奴等の腹は極めて弱いと聞いている。そして飛んでいる時は腹が無防備だ」

下からの攻撃には弱い、とテツヤ殿は言い、溜まった灰を灰皿に捨てた。

「なるほど。だとすれば、歩兵の数で押して来るか・・・・・・・・」

「もし、そうだとしても恐らくは簡単には来られまい」

プロイセン様が初めて口を開いた。

「険しい山に谷がある上に道が安定していないし狭いからか？」

「その通りだ。なかなか頭が冴えてるな」

「貴様に言われても嬉しくない」

「私も貴様を褒めても嬉しくない」

子供じみた喧嘩を始める二人。

だが、何となく笑える。

「おいおい、お二人さん。喧嘩も良いけど今は作戦会議中だぜ？」

ヴィルヘルム元伯爵が苦笑しながら二人を戒めて自分の案を述べた。

「俺ならワイバーンを使用して炎で周辺を焼き払いますね」

焼き払えば一気に進み易くなるとヴィルヘルム元伯爵は言ったが、こうも言った。

「しかし、仮にも前首都ですし何より後始末の事を鑑みればそれは余り有効な手段とは言えません」

ならばどうするか？

ワイバーンで城を重点に攻めつつ、その隙に歩兵の数で殲滅する。

「だとすれば、ワイバーンが先ずは仕留めるべきだな」

「ですね。しかし、我々も籠城している訳ではありますまい？」

籠城と言うのは味方が来るまでの時間稼ぎのような物だ。

だが、生憎と我々には援軍は居ないと考えざる得ない。
となれば、我々も隙を見ては打って出て敵に打撃を与えるのが望ましい。
城の中に籠っているだけでも敵には傷を負わせる事が可能ではあるが、打って出る事によって敵に更なる傷を負わせるのだ。
「勿論だ。城の外に何人か班を組ませて攻撃させる」
雪が降った山での行動は難しい。
そこで役立つのが“スキー”と呼ばれる代物だ。
この代物は平べったく長細い板に細長い2本の棒で出来上がっている。
板を両足に取り付けて、2本の棒で地面を押して進むのだ。
元は猟師が雪道で獲物を追う為に使用された事が始まりらしく、ヴァイガーでもこれはある。
これを使用して雪の中でも迅速に行動できるようだ。
「後は寒い中を苦労して来た奴等を“暖かく”迎える」
「暖かくですか・・・なるほど、流石は我が王。お優しいですね」
ヴィルヘルム元伯爵は口端を上げて悪役が様になる笑みを浮かべた。

「知らなかったのか？俺は優しいんだぜ？」

「お前が？意地悪な間違いだろ」

ゲンハルト様は煙草を灰皿に捨ててテツヤ殿に言った。

「酷い言い草だな」

「本当の事だろ？」

ゲンハルト様は吐き捨てるように言い切ったが、目は笑っていた。

あれほど軽蔑していたのにどうしてこんな態度を取れるのか？

恐らくイザベルさんにきつく言い聞かされたからだろう。

あの方はあれから常にゲンハルト様の面倒を見ていると聞いている。

だから、きっと言う事を聞かなければ前みたいな事をする筈。

それを身を持って教えられたからゲンハルト様はこんな態度を取っていると思える。

または私的には有り得ないが、テツヤ殿を認め始めたのか。

今でも軽蔑していると発言したゲンハルト様だ。

テツヤ殿を認めるなど私的には有り得ないと思っているが、様子を見ていると認め始めているようにも見えてしまう。

これもイザベルさんのお陰なのだろうか？と思う。

そんなゲンハルト様とテツヤ殿の会話に対して下種女は憮然としており、我々はどうするのだ？と嫌々という感じで訊いてきた。

誰も自分を見向きもしないし、訊かないから嫌になったのだろう。

それともヴィルヘルム元伯爵の教育が早くも出たのだろうか？

「お前としてはどうなんだ？」

「親衛騎士団の名に恥じぬ為にも正面から敵を倒す。それ以外に何がある？」

「ヴィルヘルム。まだこいつの教育は途中のようだな」

「この若さで俺らより頭が堅いんです」

お陰で骨が折れる事この上ないとヴィルヘルム元伯爵は述べた。

正面から戦う以外には何も考えない。

普通、若い方が考えが柔軟と思えるが、この女の場合は真逆のようだ。

こんな女がよく親衛騎士団の長になれたと思うが、それは家柄や血筋などが原因だろうか？

なら、家柄や血筋が良いからと言って当たりとは言えないな、と思

った。

「お前さんの親父は戦では柔軟な頭が必要だと言わなかったか？」

「・・・父上は関係ない」

下種女は堅い声で返してきた。

あまり父君について話したくないような気がした。

この女なら踏ん反り返って自分の事のように褒め称えるとばかり思っていたのに、どうやら違うようだ。

「そうかい。では言い方を変える。お前さんは俺のやり方が嫌いか？」

「大が付くほど嫌いだ。遠くから指揮官を狙うばかりか、奇襲を繰り返し罠を仕掛けるなど卑怯以外の何でもない」

「それはそうだ。誰だってこんな戦法を称賛したりはしない筈だ。お前が俺を嫌うのも理解できるが今は俺が指揮官だ。そしてお前は俺の部下だ。嫌とは言わせない」

お前の部下もまた俺の部下だ。

だから、俺が動けと言えば動け。

嫌なら強制的にでも動かす、とテツヤ殿は言った。

「高が傭兵風情の貴様に果たして兵たちが従うのかな？」

「従わないなら力づくで従わせるまでだ」

「それが貴様のやり方か?だから貴様は野蛮な傭兵なのだ!!」

「以前から思っていたが、お前は俺を傭兵だからとしか馬鹿に出来ないのか?」

「そ、それは・・・・・・・・」

下種女は口をモゴモゴさせて何も言えない様子だった。

どうやらテツヤ殿を傭兵という事でしか馬鹿に出来ないようだ。

まぁ、それ位しか知らないからかもしれないが。

「更に言えば言い訳しか出来ないばかりか、同じ事を繰り返し挙句の果てに現状も把握できないような女に言われる筋合いは無い」

テツヤ殿はバッサリと言い捨てると、煙草を灰皿に押し付けた。

今まで以上に饒舌で辛辣な台詞だと私は思い、この後で起こり得るであろう事態にレオンと共に備えた。

「貴様!!今の言葉を取り消せ!?」

「嫌だね」

「何だ・・・・・!!」

下種女は剣を抜こうとしたが、それを私とレオンで止めた。

やはり・・・こうなったか。

実に読み易い。

単純明確で有り難いと内心で思いながら私とレオンは

「動かないで下さい」

ホルスターから抜いたベレッタＭ９２ＦＳの銃口を下種女に向けて言い放った。

大尉と軍曹はこうなる事を予め予想していたから私とレオンをここに居させたのだ。

特にレオンを置いたのはきっと下種女のお気に入りだからかもしれない。

「フィーナ殿。ここは議会を開く所であり決闘をする場所ではありません」

それをするという事は敵を意味する。

そうレオンは言い続けた。

「れ、レオン。貴方、どうしたの?前まではそんな事を言う子じゃなかった筈よ」

「私は変わったんです。貴方も変わって下さい」

そうしないと私自身が貴方を許せない、とレオンは言った。

「今でも私は貴方を許せないでいるんです。テツヤ殿を国外追放に処した貴方を、ね」

それのお陰でこんな状況になったのだから許せないのも解かる。

「ゲンハルト様は自分の無力さと過ちを認めました」

だから、私はそれを理解し許した。

それにゲンハルト様は無言でレオンを見た。

レオンはそれに気付かずに喋り続けた。

しかし、貴方はまだだ。

まだ反省もしていないし自覚もしていない。

それぱかりか同じ事を繰り返すばかりで進歩の過程がまるでない。

「もし、またテツヤ殿に危害を加えるなら私は貴方を殺させて頂きます」

これ以上、事態を悪い方向へと持っていく事しか出来ない貴方を生かす価値は無いとレオンは非情な口調で言い切った。

「れ、レオン・・・・」

下種女は弟のように可愛がっていたレオンの豹変ぶりに唖然とするしかなかった。

「私の言いたい事を理解しましたか？理解できないならここから消えて下さい」

大事な議会の邪魔をしないで下さい、とレオンは言った。

「どうするんだ？」

テツヤ殿が新しい煙草を銜えながら訊ねた。

下種女は暫し無言だったが、剣を収めると無言で部屋を出て行った。

「やれやれ。あんなに頑固な娘とは、な」

「教師として非常に骨が折れます」

テツヤ殿の発言にヴィルヘルム元伯爵は頭を抱えた。

私とレオンもどうして、あんなに頭が堅いんだと思わずにはいられなかった。

第五十九章：男の顔

議会が終わった後は皆で訓練をする事になった。

その中には不似合いと思えるだろうが、ゲンハルト様も居る。

議会が終わった後でゲンハルト様は訓練に参加したいと驚く言葉を言い出した。

理由を訊けば「自分の身は自分で守りたいのだ」と尤もな事を述べた。

当たり前の事と言えば当たり前だが、ゲンハルト様が言うと天変地異の前触れと思ってしまう。

現にプロイセン様は「縁起でもない事を言うな」と言い出したほどだ。

それで喧嘩が始まったのは言うまでもないが、そこへイザベルさんが現れて否応なく叩きのめして治まった。

現在はイザベルさんも一緒だ。

イザベルさんも銃を持っているが、片手で撃っている。

ゲンハルト様が持っているのは“スタームルガーＭＫ?”と言う自動式拳銃でイザベルさんは”Ｓ＆amp;Ｗ　Ｍ３６”という小型のリボルバーを撃っている。

スタームルガーＭＫ?は軍曹の故郷であるアメリカにあるスタームルガーという会社が作り上げた銃で弾は“２２ＬＲ弾”という小型の弾を使用する。

この弾は小型の上に安価で９９発分で青銅貨１枚分という驚くべき安さを誇る。

このスタームルガー自身も安いらしい。

しかし、安い上に頑丈で確実に弾を撃つ事から市民には愛されているが、同時に犯罪者にも使用されるという面もある。

軍曹の話では「アメリカの警察が負傷する弾丸は２２ＬＲ弾が一番多い」と言われる程だ。

理由を上げるとすれば２２ＬＲ弾は威力こそ弱いが手に入り易く使い勝手も良い。

命中率も申し分なく田舎では子供が使用しては蛇や栗鼠などを撃つ為のサバイバル用品として使われているようだ。

２２ＬＲ弾は拳銃からライフルまで多岐に渡り使用できるのも利点の一つだ。

その２２ＬＲ弾を使用するスタームルガーＭＫ?をゲンハルト様は使用して撃っていた。

「驚くほどに当たるな」

ゲンハルト様は初めて扱う拳銃に最初こそ不慣れだったが、今では

慣れた手つきで撃ち続けている。

随分と速いが、それがこの銃の良い所だと思う。

「初心者向けだ。だが、人を殺す威力はある」

だから、護身用としては申し分ないとテツヤ殿は煙草を吸いながら説明した。

「その細い腕で良く撃てるわね」

イザベルさんがゲンハルト様の横で拳銃を撃ちながら詰るように笑った。

彼女が使用しているのはS&W　M３６。

これもアメリカのS&W社が開発した銃だ。

ただし、こちらはオートではなく“リボルバー”という物だ。

リボルバーとは回転式弾倉を使用するのが特徴で装弾数は5発から6発多くて7発が限界らしい。

大抵は5発から6発で弾は３８口径だ。

３８口径は護身用としては申し分ないらしく婦人などのか弱い者でも扱い易い弾だと聞いた。

イザベルさんが持っているS&W　M３６はリボルバーの定番とも言える代物で弾は5発。

これは限界まで小型化する過程で6発を5発にしたからしい。

かなり年月が経った未だに護身用としては代表格とされており模造品が出回っていると聞くから大した物だ。

それもその筈。

何せこのS&W社はコルト社と並びアメリカを代表する会社らしく互いに宿敵として認め合っているのだから。

そして護身用でオートとリボルバーのどちらを選ぶなら良いかと言うなら、リボルバーの方が良いらしい。

オートに比べて簡単な設計だし故障も少ないし、初心者でも扱い易い点だ。

だが、ゲンハルト様の場合は38スペシャル弾（M36の弾丸でありリボルバーの殆どが使用可能な弾の事らしい）でもまともに扱えなさそうなので、こちらにしたらしい。

まぁ、確かに見た目からしても羽ペン位しかまともに持てないように見えるから仕方ないかもしれない。

そんな事を思いながらイザベルさんを見た。

イザベルさんはこのS&W M36を直ぐにマスターしてしまい、一人で撃っている。

順応性が高い事は良い事だ。

というか凄過ぎると言える。

だが、ゲンハルト様は憮然とした態度でイザベルさんを睨んでいた。

女性がこんな物を持つ事が許せないのか、または自分より大きな弾を使用する銃を楽々と扱う事に腹立たしいのか？

「貴様のような野蛮な女にはお似合いな銃だな」

ゲンハルト様はイザベルさんを睨みながら、失礼な言葉を述べた。

「そういうあんたにもその小さくて細長い銃がお似合いよ」

ゲンハルト様の小言にイザベルさんも小言で返した。

しかし、イザベルさんの方が毒舌だと思う。

何せそこからこう続けたのだから・・・・・・・・

「その銃はあんたの“腰の間にぶら下がった”奴を表しているように見えるからね」

これは男として言われたくない言葉だ。

私の場合は、そうでないと思う。

ゲンハルト様の場合は・・・・・当たっているかもしれないと失礼にも思ってしまった。

「何を言う!!この銃の弾は多岐に渡り使用されていると言うではないか!?」

つまり凡庸性が高いと言う事だ。

凡庸性が高いのは良い事だが、ゲンハルト様が言うと負け犬の遠吠えにしか聞こえないのが哀しい所だ。

「私の物も凡庸性が高いのだ!?」

「証拠があるの?」

「ならば見せてやる!?」

とゲンハルト様は徐にズボンを脱ごうとした。

「ちょっとゲンハルト様っ。ここは城ですよ?そんな破廉恥な真似は止めて下さいっ」

私は慌てて止めに入った。

「そうですよ。宰相がそんな軽はずみな真似は駄目ですよっ」

レオンも止めに入り、二人掛りで止めた。

感情に走り過ぎるきらいがあるとは思っていたが、ここまで感情に走り過ぎるのは些か、いやかなり問題ありだ。

「ええい離せ!!この女に私の凄さを証明しようとしているだけではないか!?」

何がいけない！！と怒鳴るゲンハルト様。

『その証明を行おうとしているのがいけないんです！！』

二人で負けじと怒鳴り、何とか抑える。

そんなやり取りをテツヤ殿達は笑いながら見ていた。

何とかしてゲンハルト様を思い留まらせる事に成功した私は狙撃の態勢を取った。

伏射の構えでモーゼルを構えた。

狙いを定めて風や湿気、距離などを計った。

「何をしているのだ？」

ゲンハルト様の言葉が耳に入ったが、気にせずに打ち込んだ。

狙いが定まり、息を整えた。

引き金を引いた。

ズシリ、と重たい反動が肩に来るが気にせずボルトを動かし弾を排出した。

弾は相手の目に当たった。

「前にましても腕が上がったな」

テツヤ殿は煙草を銜えながら私に言った。

「だといいんですけど・・・・・」

「いや、上がったさ。これで観測手が付けばもっと良い」

「その観測手の事で話があるんです」

「何だ?」

「ガリシャを観測手に出来ませんか?」

「あのお嬢ちゃんを?」

はい、と私は頷いてガリシャの事を話した。

最後まで聞いたテツヤ殿は「お嬢ちゃんに話してそれで試して良ければ構わない」と言ってくれた。

私は礼を言い、今日にでもガリシャに伝えようと思った。

「テツヤよ。観測手とは何だ?」

「狙撃手を補助する奴の事で、狙撃手と同じく狙撃の腕などが必要だ」

詳しい事は私に訊け、と言われたゲンハルト様は私に質問をしてきた。

私は狙撃の事を丹念に紙に菓子を包み込むようにして説明をした。
何せ相手は初心者の上に感情に走り易い方だ。
だから、優しく丁寧に教えないと怒られる。
「なるほど」
ゲンハルト様は納得のいく説明を聞いたので怒りもせずに頷いた。
「もし、そなたがザンビアに居たらリカルド王子を殺せたか？」
「・・・分かりません」
私は正直な気持ちを述べた。
「人を“撃った”事はありますが、“殺した”事はまだないので・・・・・・・」
砦の攻防戦で人を撃った事はあるが、まだ確実に殺したという意識を持っていない。
自分が殺した者の死体を見ていないからそうなのかもしれない。
しかし、もし、そのような状況になったら私は平然と人を殺せるだろうか？
その答えを見つける事は出来なかった。
「・・・・そうか」

ゲンハルト様はそれに頷いた。

「でも、これだけは言えます」

この地を汚すなら殺す。

「私はこの国を愛しております」

自分が産声を上げた国であり育った国だ。

だから、愛国心を持つのは当たり前かもしれない。

しかし、それだけではない。

「リカルド様のお気持ちは何となくですが理解できます」

虐げられた地方民達の訴えを叶える為に軍を起こした。

だが・・・・・・・・・・

「筋が通っておりません」

幾ら向こうの気持ちが理解できようとも筋が通らなければ駄目だ。

世の中、筋が通らないのは当たり前だが、それでも・・・例え世界を敵に回して一人になろうとも筋だけは通さなければならない。

私はそう言った。

「・・・・・・・」

ゲンハルト様は無言で私を見つめていた。

テツヤ殿達も何も言わずに聞いていたが徐にこう言った。

「男の顔だな」

「え？」

「お前は男の顔だと言ったんだ」

どういう事か私には分からなかった。

「お前は相手に同情しながらも、感情に流されずに断言してみせた」

それは男として良い事であり、同時に成長した証だと続けた。

「最近はそういう奴等がメッキリと減ったが、お前は違うな」

テツヤ殿は私の頭をポンっと叩いた。

「安心しろ。お前だけで戦う訳じゃない」

俺達も戦う、とテツヤ殿は言った。

「狙撃手は孤独と言うが、お前には俺らが居る」

だから、自分の意志を持ち戦えとテツヤ殿は言ってくれた。

私はそれに対して頷いた。

第六十章：王女と傷の手当て

私は狙撃の訓練を続けていた。

しかし、何時もみたいに的を狙っている訳ではない。

テツヤ殿達が無造作に投げる的を狙っているのだ。

相手は動く。

それこそ素早く動き私の狙いを避ける者も居る筈だ。

そういう時はどうしたら良いかということでこの訓練をやっている。

“見越し射撃”と言う技だ。

相手が何処に移動するか、それに伴い狙いを定めて撃つ。

これは難しいの一言に尽きる。

現にテツヤ殿達は私の読みとは違う方向に的を投げては翻弄して来る。

しかも、的が小さいから狙うのは至難の技だ。

散弾銃で空を飛ぶ的を狙う“クレー射撃”という物があるらしいが、散弾銃なら弾が散らばるから然して問題ではないと思う。

私の場合は1発だ。

1発で的を狙わなければならないから難しい。

何度やっても当たらないし、読みが違う。

どうすれば良いのだ・・・・・・・・・・

何発目か分からなくなってきた。

そして肩が痛くなり始めたし、銃身も熱くなり始めた。

気が付けばもう夕方になり掛けていた。

「ランドルフ。今日はもう終わりだ」

テツヤ殿は私に的を見せた。

「これで最後だ」

あれで最後・・・・・・・・・

となればせめて最後は決めたい。

私は呼吸を深くしてから構えた。

皆が沈黙する。

よく見ろ。

テツヤ殿の目線、仕草を細かく見て分析するんだ。

何処かに手掛かりがある筈だ。

私は目を凝らしてテツヤ殿を見た。

テツヤ殿は的を少し後ろに向けた。

あれからすれば前に飛ばす可能性がある。

いや、テツヤ殿ならそんな単純な事はしない筈だ。

となれば、故意に見せている可能性もある。

もっと見るんだ。

相手になって考えろ。

自分ならどうする・・・・・・・・・？

私は必死に自問自答した。

テツヤ殿の腕が動いた。

空を切るような鋭い音と共に的が空を舞う。

左斜め方向だ。

私は直ぐにモーゼルを向けた。

的は勢いよく地面に落下している。

落ち着け。

落ち着いて慎重に狙え。

しかし、急げ。

急ぎながらも慎重に狙え。

さもないと外すぞ。

ここで仕留めるんだ。

もう失敗は許されない。

心の中でそう言い聞かせて、狙いを定めた。

モーゼルの照星が的を捕えた。

今だ!!

私はモーゼルの引き金を引いた。

同時に・・・・・・・・・・

パンッ

小さく割れた音と乾いた音が同時にした。

当たった。

的は空中で割れて粉々に散らばった。
私はボルトを動かして弾を排出した。
足元には既に何発もの空の薬莢が落ちている。
「どうやら最後は決めた様だな」
テツヤ殿は笑みを浮かべた。
私はそれを見て一気に脱力感に襲われた。
今にして思えば休み無しでやっていたから疲れるのも当然か？
いや、実戦ならこんな事は日常なのかもしれないと思い直す。
「最後は決まったな」
テツヤ殿は私の肩を叩きながら起こしてくれた。
「最後は決めたかったんです」
「良かったな。今日はこれで終わりだ。ゆっくりと休め」
「はい」
私は頷いて引き摺るようにして背を向けて歩き出した。
城の中を歩いていると肩に鈍い痛みを感じた。

やはり何度も連続で撃っていると痛くなる。

これは私の身体がまだ完全に成長し切っていないからだ、と言われた。

だから、あまり無理は出来ないとも言うがそんな事を言える状況ではない。

どうやった肩の痛みを和らげられるだろうか？

そんな事を考えて進んで行くと背後に気配を感じた。

「・・・ランドルフ」

聞き慣れた声で名を呼ばれて振り返ればエリーナ様が立っていた。

「エリーナ様」

私は帽子を取りエリーナ様に一礼した。

そして何か用ですか？と訊ねた。

「たまたま姿を見たので声を掛けただけですが、どうかしましたか？」

動きがぎこちないと言われて、訓練で肩が少し痛いとだけ答えた。

「大丈夫ですか？」

「まぁ何とか」

「出来るなら、傷の手当てを」

「大丈夫です。帰ってからやりますので」

私はエリーナ様の提案を謝辞して背を向けた。

だが、服を掴まれて振り返る。

エリーナ様が服を掴んでいたのだ。

「駄目です・・・早い内に手当てをしないと駄目です」

「ですが・・・・・・」

「では命令をします。傷の手当てを受けなさい」

いま直ぐに、とエリーナ様は断固とした意志を宿した眼差しで私に告げた。

王女の命令ともなれば断る事は出来ない。

私は仕方無くそれに頷いた。

エリーナ様は私を自分の部屋へと通すと鈴で使用人を呼び寄せた。

「湿布薬などを用意して下さい」

「畏まりました」

使用人は頷き、何か御飲物は用意なさいますか？と訊ねてきた。

「茶を用意して下さい」

「エリーナ様。私は」

「お茶位、付き合って下さい」

エリーナ様に頼まれた私は仕方無いとばかりに頷いた。

使用人は私を見て僅かに苦笑を浮かべて部屋を出て行った。

「肩は大丈夫ですか？」

エリーナ様は椅子に腰を降ろしたまま立っている私の肩を訊いてきた。

「少し痛いですね。“彼女”は些か気が強い方なので」

私は右肩から左肩へと移したモーゼルを見ながら答えた。

「彼女、ですか？」

「えぇ。私にとってこれは女性と同じです」

故に誰よりも彼女を知り尽くし丹念に掃除などをして機嫌を取っている、と付け加えた。

銃と言うのは女性と一緒だ。

女性を愛するように銃も愛して機嫌を取らないと、機嫌を損ねて痛い目に遭う。

そう私は言った。

エリーナ様は分からない顔をしていたが、それで良いと思う。

この方にはこんな物を持たせてはいけないのだから。

それから間もなくして使用人が湿布薬と茶のセットを持って部屋に入ってきた。

私は湿布薬などを受け取り、何処か身を隠せる場所を探した。

エリーナ様の前で裸になる訳にはいかないからだ。

しかし、エリーナ様は自分がやると言い出した。

「エリーナ様。それは止めて下さい」

貴方は王女だ。

私みたいな者の身体に触れるなど駄目だ。

「私はやりたいのです」

断固として譲らないエリーナ様。

そしてもう一度、命令と口にした。

これを口に出されては私は従わざる得ない。

「・・・・分かりました」

私は仕方無く上着などを脱ぎ始めた。

それをエリーナ様は黙って見ている。

上半身を裸にした私は腰を降ろして、鈍い痛みを感じる部分を指差して湿布薬を張ってくれ、と頼んだ。

エリーナ様は慣れない手つきで湿布薬を貼ってくれた。

湿布薬で右肩にひんやりと冷たい感覚が伝わって来るが、慣れると何でもない。

私は上着を着た。

それからエリーナ様は自分で茶を淹れて私に渡してきた。

「ありがとうございます」

私は礼を述べてから茶の香りを楽しんだ。

エリーナ様は茶を飲みながら私に今は何処に住んでいるのか?と訊いてきた。

「友人の家です」

「友人の家？」

「はい。年上の女性の家です」

これを聞いたエリーナ様は幾分か顔を硬直させた。

何でそんな顔をするのか私は解からない。

そしてエリーナ様は確認するように再び訊き返してきた。

「女性、の家にですか？」

「はい。姉のように優しくて母のような方です」

オリガさんは私にとって「初めて」の相手であり姉のように母のように安らぎを与えてくれて、道を示してくれる方だ。

それが言葉に出ていた。

エリーナ様はそれを聞いて更に顔を強張らせた。

「どうかなさいましたか？」

「い、いえ・・・別に・・・」

エリーナ様は私から視線を逸らすと茶で誤魔化すように飲んだ。

私には理由が解からないが、敢えて訊ねようとはしなかった。

そして茶を飲んでから私は礼を述べて部屋を出ようとしたが、また

呼び止められた。

「あの、夕食を一緒にどうですか？」

「すいませんが、向こうを待たせているので」

これだけは譲れないと述べて謝ってから私は部屋を出て行った。

背中にエリーナ様の視線を感じるが、敢えて無視して足早に部屋を出てオリガさんの家へと向かった。

第六十一章：尽くす女（前書き）

えー、ここ等辺で少し大人の描写を書きます。

自己責任でお願いします。（爆）

それからもう少しで幕間を挿入し、そこから戦闘編なども書きたいと思いますので宜しくお願いします。

第六十一章：尽くす女

城を出てオリガさんの家に着いたのは夜になったばかりの頃だ。

煙突から白い煙が出ているのを確認してドアを開けると、オリガさんは夕食の準備をしていた。

「お帰りさない」

オリガさんは私に蕩けるような笑顔を見せてくれた。

「ただいま帰りました」

私は帽子を取り、中へと入った。

「湿布薬の臭いに右肩がギコチナイ気がするけど、怪我でもしたの？」

オリガさんは料理を載せた皿をテーブルに置きながら私の身体から放たれる臭いを敏感に察して訊いてきた。

僅かな動作と臭いで識別してくるとは恐ろしい推察能力だ。

差し詰め浮気を疑われた夫みたいに私は驚いた。

まぁ、浮気なんてしてないが。

だが、今の心境というか状況を考えれば先ほどの言葉の通りだ。

「訓練で少し肩を痛めたんです」

そして王女に貼ってもらったと話した。

「流石は私が見込んだ男ね。王女も虜にしたんだ」

「別に虜にした覚えはありませんよ」

「それは貴方に自覚が無いだけよ」

そうでなければただの騎士であり一兵である私に王女自らが湿布薬を貼る訳が無いとオリガさんは言った。

確かにそうだ。

如何にエリーナ様が優しい方でも、こんな真似はしない筈だ。

それをしたのだから好意を抱かれていても可笑しくないと言える。

だが、どうしてエリーナ様が私に好意を抱いているのか不明だった。

しかし、先ずは出来たての夕食を頂きたいというのが正直な気持ちだ。

私は手を洗ってから腰を降ろした。

今日のメニューは干し肉とライ麦パン、野菜サラダに果実酒だった。

オリガさんは木の杯に果実酒を注いで私に渡してきた。

それを私は受け取りオリガさんと乾杯した。

食事をしながら私はイザベルさんの事をオリガさんに訊ねてみた。

「イザベル姉が宰相さんを?」

「はい。傍から見れば夫婦です」

まぁ、かなり凄い夫婦だと思うが。

何せ誰が居ようと喧嘩をするし、ゲンハルト様を殴る蹴るは当たり前で誹謗中傷などは普通にするのだから。

これにゲンハルト様も負けじとやり返す。

とてもじゃないが、宰相とは思えない卑猥な言葉も述べる上に感情的に走る。

「イザベル姉はそうなのよ」

男顔負けの性格と腕っ節で揉め事を解決する役割を担っていたようだ。

「前に貴族の人を袋叩きにした上に簀巻きにした事もあるわ」

そんな事を知られては恥だからその貴族は何も言わなかったらしい。

オリガさんの説明を聞くとイザベルさんの態度にも納得できる。

「でも、ちゃんと男を支える時は支えるわ。それにああ見えて意外

と優しいのよ？」

不器用過ぎるが、とオリガさんは続けた。

「それにイザベル姉って尽くすタイプなのよ」

好きな男にはとことん尽くすらしい。

言われて見れば、最初に会った時も文句を言いながらも茶を淹れて来たなと思う。

「きっと宰相様がイザベル姉から見れば尽くしたい男なんでしょうね」

私はゲンハルト様を思い描いた。

骨と皮だけで構成された体格で肉がまるで無い。

しかも髪の毛は寂しい限りで、いつ消えるか分からない。

性格は傲慢で偏見の塊。

おまけに感情的で癇癪持ちと来たもんだ。

城での事を考えれば如何にあの方が感情的か解かると思う。

しかし反省と自覚は持ち合せているから人としてはまだ救いはあると思える。

まぁ、かなり危うい状況であるが。

だが、それでも反省と自覚をしているのだから良い。

下種女に比べれば遥かに良いと思う。

私は果実酒を飲み、ミレーネさんと茶はしたのか？と訊ねた。

「したわ。もう惚気話でクタクタよ」

ミレーネさんが惚気るのはテツヤ殿の事だろう。

傍から見れば美女と野獣だが、とても仲の良い夫婦に見えるのだから不思議だ。

「まぁ、私も貴方の話をして対抗したわ」

昨夜はお互いに激しく燃え上がったんだ、とミレーネさんに言えば「私も昨日はメジュリーヌさんと二人で寂しがり屋さんを楽しませたわ」と倍返しをされたらしい。

何を楽しんだのかは敢えて訊かない。

果実酒を再び飲んだ私はオリガさんと食事をしながら他愛ない話をしては時間を潰した。

夕食が終わった後、私は風呂に入り湿布薬を貼った肩を撫でた。

モーゼルの反動は何度もやっていると肩が痛くなる。

いや、モーゼルだけではなく肩で反動を受け止めていると痛くなる

のだ。

どうすれば肩に来る反動を和らげる事が出来るだろうか？

明日にでもテツヤ殿に訊こうと思い風呂から上がった。

風呂から上がった私はモーゼルとベレッタを分解して掃除を始めた。

銃身の裏側をブラシで擦って煤を払い、バネや銃口の部分にオイルを塗って滑り易くした。

それらをしているとオリガさんが入ってきた。

薔薇の香りがする。

オリガさんを始めとしたお姉様方はよく香水を付けている、と聞いている。

オリガさんからは独特の淡い香りがするが、薔薇の香りもまた悪くないと思う。

「銃の手入れ？」

「はい。毎日しないと落ち着かなくて」

いざという時に作動しなければ意味が無い。

そしてそれは自分の死に直結する。

だから、私は訓練が終わったら必ず手入れをするように心がけてい

る。

「立派ね。所で、私にもそれは扱える？」

「銃、をですか？」

「えぇ。イザベル姉もミレーネ姉も銃を持っていると聞いたの。もちろん自分の身を護るために欲しいとオリガさんは言った。

自分も身を護るために、ね」

「では、明日にでもテツヤ殿に言っておきます」

「お願い。それと、貴方が私に教えてね？」

貴方は私を隅々まで知っているんだから、と耳元で囁くオリガさん。

微かに濡れた髪が耳に当たり、生温かい感触が来る。

「貴方さえ良ければ・・・・・・・・」

「貴方でなければ頼まないわ。・・・ランドルフ」

オリガさんは君を付けずに私の名を口にした。

そして私は解かりました、と頷いて掃除を終えたベレッタとモーゼルを組み立て始めた。

それからオリガさんと一緒にベッドに入る。

生憎とこの家にベッドは一つしかない。

部屋は3つほどあるが、ベッドはない。

だから、二人で同じベッドに寝るしかないのだ。

まぁ、床で寝るのも良いがオリガさんはそれを良しとしないだろう。

オリガさんは白い寝巻姿ーーーネグリージェを着てベッドに滑り込んだ。

私は服を着たままベッドに入りベレッタを枕元に入れ、モーゼルを直ぐ横に置いた。

「用心深いのね」

「狙撃手は誰よりも臆病でなくてはならない・・・そう教えられましたから」

「狙撃手というと猟師みたいなもの？」

ベッドに入り天井を見上げる私にオリガさんは顔を横に向けて訊ねてきた。

「えぇ。ただ、獲物は獣ではなく・・・人です」

姿を見せずに相手を遠くから1発で仕留めるのが狙撃手だ。

だから、味方からも敵からも忌み嫌われている。

捕まればどんな手で殺されても可笑しくない。

そして常に怯えて警戒をしなければならない。

それが狙撃手だと私は説明した。

何で彼女がこんな事を訊くんだろう？

それを訊けば彼女はこう答えた。

「貴方の仕事に興味があるの」

オリガさんはそう答えて私を抱き締めた。

「貴方はそんな嫌がる仕事をやるのね」

「はい。でも、テツヤ殿達は自分達も共に戦うと言ってくれました」

狙撃手は嫌われると言うが、私の場合は例外だと言える。

「貴方は良い人たちに囲まれているわ」

その中に私も入って良いかしら？

オリガさんの問いかけに私は顔を上げてこう告げた。

「何を言っているんですか。もう既に貴方は入っています」

既にオリガさんはその輪の中に入っている。

今さら何を言うんだ。

そう言えばオリガさんは笑みを浮かべて私に口付けを落とした。

「ありがと。今夜も可愛がってね？」

「はい・・・・・・・」

私は頷いてオリガさんに口付けを返した。

第六十一章：尽くす女（後書き）

訂正して気がありまして一部を訂正しました。

大変申し訳ありませんでした・・・・・・・・トホホホホ

第六十二章：観測手へと（前書き）

えー、少しややっこしいかもしれません。

先ず一回目の視点は年老いたランドルフの妻であり観測手の視点。

続いてランドルフで最後は若い頃の妻という三つの視点になります。

ここ等辺がややっこしいと思いますので、宜しくお願いします。（汗）

第六十二章：観測手へと

あたしは史記を書く夫であるランドルフを見つめていた。

孫を寝かしつけて部屋に行けば、既に二人が居た。

またしても負けたと思う。

この二人の方が先にランドルフと関係を持ったんだから・・・・・・

だけど、それでもランドルフは待っていたんだと変に思ってしまい嬉しかった。

戦を共にしたのはあたしがまだ１７歳の時。

ランドルフが狙撃するのを助ける観測手として初めて戦に出た。

場所はここヴァイガー。

私とランドルフは外に出て敵を迎え撃つ役割で何回も戦功を上げた。

それから内乱を終結した後は旦那こと鷹見徹夜様達と協力して５大陸を統一する任務に当たった。

そこでもあたしはランドルフと共に活躍した。

そして夫婦になった。

あれからもう何十年も経つけど、ランドルフは変わっていない。

容姿は変わったけど、それでも心は変わらない。

優しくて何時も他人の痛みを考える。

鈍感で少しおっちょこちょいな所もあるけど、そこもあたしには良い。

ランドルフは私を招いて2人の間に座らせた。

「今は君が私とコンビを組んだ所を書いているよ」

ランドルフは史記を書くのを止めて振り返ってあたしに言った。

あたしはそれが何だか嬉しくて笑った。

それを見てからランドルフは史記を書き始めた。

— — — — — — — — — — — — —

翌日から私は昨夜の訓練を繰り返していた。

昨夜、最後の1発である程度のコツと言えば良いだろうか？

何と言ったら解からないが、それを掴む事に成功しある程度の見越し射撃は物に出来るようになった。

と言っても掠める程度の事だが、私には良い傾向だしテツヤ殿達も僅か1日でコツを掴めるのだから十分だと言われて良かったと思う。

そしてガリシャの観測手の件についてだが、現在テツヤ殿とミーシャ大尉がガリシャに狙撃手としての適性があるかどうかを調べている。

話によれば狙撃手の大半が狩猟を嗜んでいる、という興味深い事を聞いた。

歴史に名を残す者たちの大半が狩猟を嗜んでいたらしく、ある国では狙撃手の大半が猟師で生計を立てていたらしい。

私が思うに彼等は丸1日、いやそれ以上の時間を獲物を追う為に費やして工夫を凝らし経験を積んだから狙撃手に向いていると思う。

狩猟と言っても熊、猪、鳥、果ては爬虫類など様々な分野に別れるのだがどれも獲物の生態からサバイバル技術、忍耐力などを培わなければならない。

これらが狙撃手としての適性に叶っているのではないだろうか？

それを考えるとガリシャもまた狙撃手であり観測手に向いているか

もしれない。

そんな事を片隅で思いながら私はレオンが投げた的を狙い撃った。

今度は当たった。

だが、掠っただけの的の方が圧倒的に多いのは否定できない。

しかし、レオンは自分の事のように私を褒め称えてくれた。

「凄いね。僅か1日でコツを掴むんだから」

「そうでもないよ」

「いいや、君は凄いよ。僕なら幾らやっても出来ないからね」

レオンは何処か自嘲するように笑みを浮かべた。

私が狙撃の腕を持つのに対してレオンは自分には特質した物がないと思っている。

だが、それは彼自身の性格でそれを知らないだけだ。

「大尉が言っていたよ。君は罠・・・仕掛けを見つける事に適しているって」

その他に上げるなら彼は偽装して潜り込む事や銃剣術にも長けている。

彼には私には無い物を持っている。

「ありがとう。それはそうと続きをしようか？」

レオンはテツヤ殿みたいに口端を上げて的を上げた。

「うん」

私はレオンに笑い掛けてボルトを動かして弾を排出し新たに装填し構えた。

― ―

ー ー

あたしは旦那ことテツヤ殿と旦那の部下であるミーシャ大尉という人が見ている横でＳＫＳカービンを使用して射撃をしていた。

立ったまま撃つ立射、伏せた状態の伏射、片膝を着いて撃つ膝射。

特に大事なのは伏射と膝射の２つだと教えられた。

あたしの場合は弓矢を使用するから立射が普通だった。

だけど、旦那の訓練を受けてからは伏射や膝射の方が狙撃などでは大事だと教えられた。

ランドルフはこれを貸す代わりに代償が要ると言っていた。

それはあたしがあいつの観測手をするという事。

観測手っていうのは狙撃をする時に距離や風などを計るだけでなく狙撃の指示や射弾の修正量の計算なんかもやるらしい。

それ以外では狙撃手の代わりに狙撃をしたり、近づいてくる敵を排除する役割も担っているようで経験を積んだ狙撃手が良いらしい。

生憎とあたしは狙撃の経験は無い。

ただ狩猟をやっていただけ。

でも旦那とミーシャ大尉はこう言った。

『狙撃手などは主に猟師がなっていた』

旦那達の世界でも戦争はあったらしくて、狙撃なども行われていたと聞く。

で、その狙撃手の大半が・・・と言っても歴史に名を残すほど知られた狙撃手の大半は猟師だったと言う。

まぁ、あたしも狩猟をやっているから何となく解かる気がする。

猟師は山に入れば2、3日は丸々山の中で生活する事が多いから結

構、堪えるんだよね。

その他にもずっと獲物を待ち続ける時もある。

その時はずっとただ座って待つだけ。

酒も駄目、話も駄目、用を足すのも駄目な時もある。

あたしもそれは経験している。

いや、ここに住む人たちは全員が経験していると言っても過言ではないかもしれない。

だから、旦那が初めてあたし達に訓練をした時は「全員が狙撃手になれる」という事を言ったんだ。

狙撃手は単独もしくは2人から3人と言う少人数で行動する上に忍耐力から精神力なども求められると聞いた。

それらを持っている職業と言えば猟師だ。

獲物は違っても何日も来るのを待ち続けて相手を1発で仕留める所は似ていると思う。

そこら辺がやはり向き不向きを決定しているのかもしれないと思った。

そんな事を考えながらあたしはＳＫＳカービンで４００メートルほど離れた小さな的に照星で狙いを定めて風や湿気、銃弾の着弾時間などを計算して引き金を引いた。

弾は的に当たり地面に倒れた。

「大した腕だ。流石は猟師だな」

旦那は煙草を吸いながら呟いた。

「これなら観測手としても申し分ないね」

ミーシャ大尉も煙草を吸いながらあたしを評価した。

最初に見た時は男と思っていたけど、女だと知り驚いたのは記憶に新しい。

だって、本当に男みたいな性格と顔立ちなんだもの。

まぁ、それを言えばどうなるかはイーグルとか言う男の末路を見て分かっているから言わないけど。

「と言う事は、あたしをランドルフの観測手にするの？」

「お前さんが望むなら、な。どうする？」

旦那はあたしが望むなら、と言っているけど顔を見ればもう既に答えは決まっていると言っていた。

「なるよ」

そう、あたしの答えは既に決まっていた。

ランドルフと再会した時、あいつは前みたいな情けない男じゃなかった。

何だか、こう、心と身体が熱くなるほど格好良い男になっていた。

お爺ちゃんも褒めていたからそうなんだと思った。

だけど、格好良くなったと同時に・・・周りに“牝”が集まり出して気に入らない。

オリガと言う女が良い例だ。

商売女と一目で解かったけど、ただの商売女でもないと解かった。

ランドルフと仲睦ましい姿を見ている内に無性に腹が立った。

理由は解からないけど、どうしても腹が立って我慢できなかった。

思わずランドルフに八つ当たりをしたけど、あいつはそれを物ともしないし逆に自分が酷く情けなくなった。

そしてこうも思った。

どの牝共にも負けない位あいつの力になれる女になると。

だから、この話は嬉しかった。

まぁ、こんな状況で嬉しいなんて感情は正直に言えば不要であり下種な気持ちかもしれないけど。

それでもあたしには嬉しかった。

これであいつの・・・ランドルフの役に立てる。

それを思うと大物を仕留めた時のような感覚が芽生えてくる。

第六十三章：白い結晶

昼食の時間となり私とレオンは訓練を一時的にだが終了した。

昼食はオリガさんが作ってくれたパンと野菜に干し肉を挟んで食べレオンの方は愛しい人が作ってくれた料理を出した。

「では頂きます」

「頂きます」

私たちの糧となる穀物とこれを作ってくれた方に感謝してから食べ始める。

食事を二人で取っているとヴィルヘルム元伯爵様が現れた。

「よぉ、良い歳した男子二人が女っ気もなく寂しく食事かい？」

ヴィルヘルム元伯爵はドシリと音を立てて腰を降ろした。

「どうですか？親衛騎士団の様子は？」

私は気になっていた事を訊ねた。

「小娘は相変わらずダイアモンドより堅い頭で力づくで言う事を聞かせている」

あの若さでヴィルヘルム元伯爵達より頭が堅いとは恐れ入る。

後の連中は根性がまるで無いらしい。

「ついさっきも鎧を装着して走らせたが、直ぐに疲れたとか言った」

そしてヴィルヘルム元伯爵はレオンにどんな訓練を受けていたんだ？と訊ねた。

「騎士として必要な事は学んだ筈です」

剣術、馬術などは当たり前。

舞踏会に出る時の礼儀作法、王族の警護の仕方、市内巡回の手順など色々な事を学ぶが、私から言わせれば余り必要な事ではないと思えるのが多い気がした。

「そんな暇があるなら過去に起きた戦の事を調べて教えろよ」

レオンの説明を聞いたヴィルヘルム元伯爵は呆れ返った口調で呟いた。

以前、先王に従っていた親衛騎士団は皆、病死したり戦死したから教師として迎えられない。

しかし、過去の戦を調べて研究する事は可能な筈だ。

それを行わないのはどうかと思うのは私だけではあるまい。

「そうなんですけど、下種女が・・・フィーナ様がどういう訳か禁止していたんです」

「なに？あいつは確か親父から英才教育を受けていた筈だぞ。それにあいつの叔父だって父親には劣るが騎士としての腕前はあった筈だ」

父君亡き後はその叔父が後継人となり英才教育をしたらしい。

その父君には劣るが騎士としての腕前はあったとヴィルヘルム元伯爵は言った。

そんな二人に育てられたのだから、前の親衛騎士団が居なくても過去の戦史を研究するなりプロイセン様達に教育を求めるなり何かしらの手は打てた筈だ。

それが出来なくても自分で教える事は出来ると思う。

「そうなんですけど、どういう訳か戦史やプロイセン様達に教育を求めるのを禁止していたんです」

「どういう事でしょうか？」

私の問いかけにヴィルヘルム元伯爵は顎に手を置いて思案する顔をした。

「もしかしたら・・・親父に対して劣等感でも抱いていたのかもしれないな」

それを聞いた私とレオンは何となく納得できた。

あの女は根性と負けず嫌いでここまで生きてきたような女だ。

きっと、亡き父君が偉大すぎてそれに対して劣等感を抱いていても可笑しくない。

だから父君などが参加した戦を研究したくなかったのかもしれない。

調べれば父君たちの働きが解かり更に劣等感を抱く筈だ。

プロイセン様に教えを問うのもまた同じような考えから来たのだろう。

そんな考えを持っているとすれば騎士として失格以外の何でも無い。

戦が起こらないのは良い事ではあるが、万が一の事を考えれば戦史を研究したり他の組織と連携し自分達を更に高みへと登ろうとするのは必然的だと思う。

それなのに高が一個人の劣等感でそれを組織ごと禁止するのだから甚だ迷惑であり愚かでしかない。

だが、何となくだが父君に対しての劣等感だけが決め手とは言えない気がした。

「・・・後で訊いてみるか」

素直に吐くとは思えないから恐らく力づくで話すだろうな、と私とレオンは思った。

ヴィルヘルムは早速とばかりに立ち上がると私たちに別れを告げて去って行った。

それを見送った私とレオンは食事を続けた。
そして昼食を終えて再び訓練を始めようとした時だ。
テツヤ殿がガリシャを伴い訪れたのは。
「ランドルフ。お嬢ちゃんをお前の観測手にする」
テツヤ殿は徐に私に告げた。
「では彼女にはその才能があったのですね？」
「才能もあるが、ここに居る奴等は狩猟を嗜んでいるのも上げられる」
やはりそこもあったか、と私は思いながらガリシャを見た。
ガリシャはＳＫＳカービンを右肩に掛けながら私にこう言ってきた。
「あたしがあんたをサポートするから宜しくね？」
「こちらこそ」
私とガリシャは互いに手を握り合った。
「そうそう。それからこいつをやる」
テツヤ殿は私に茶色の物を手渡した。
「何ですか？これは」

手触りで革製の物だとは分かったが、これをどう使用するのかまでは分からなかった。

「こいつは“ライフルパット”と言ってライフルの反動を和らげる効果があるんだよ」

昨夜、訓練で肩を痛めたんだろ？と訊ねてくるテツヤ殿に私は頷いた。

「だから、これをやる。お嬢ちゃんには既に渡してある」

それとレオンにも、とテツヤ殿は同じ物を渡した。

私とレオンは直ぐにライフルパットを取り付けた。

そして試しに1発だが撃ってみた。

確かにこれを取り付けた後と前では反動の感覚が違う。

これは優れ物だな。

これを取り付けていれば少なくとも昨日みたいに肩を余り傷めないと思った。

「ありがとうございます。テツヤ殿」

「いいさ。これからお前等には働いてもらうんだ。肩を痛めてもらっては困るんだ」

テツヤ殿は笑いながら私たちに告げた。

それから私とガリシャは訓練を始めた。

ガリシャが望遠鏡で距離や風速などを計り、私に狙撃の指示を出す。

それに頷いて私が撃つ。

これを何度も繰り返して互いに意思疎通をした。

ガリシャは驚くほどに距離から風速を正確に計り私に狙撃の指示を出して来る。

それのお陰で一人でやっていた時よりも何だかタイミングが取り易くなったと思う。

「どうやってそれだけ正確に計れるんだい？」

私は思わずガリシャに訊ねた。

「狩猟をやっている時は風向きから距離、そして相手を何処で仕留めるのかも考えてるんだ」

だから自然とそういった物が身に付いたと言われた。

なるほど、と思った。

テツヤ殿は別の用事があると言いレオンを伴い立ち去り、私とガリシャだけが残った。

ガリシャは伏せた状態から双眼鏡で遠くに置かれた的を覗いた。

「距離３００・・・風向きはやや右・・・強さは中・・・何時でも撃ちな」

私は呼吸を整えてから人差し指を引き金に掛けた。

照星から的を捕えた。

引き金を引いた。

的の右目に命中した。

直ぐにボルトを動かし弾を排出して次弾を装填した。

そして再びガリシャの指示を待とうとした時だ。

手に何か冷たい物を感じたのは・・・・・・

一瞬だが白い物体が手に掛ったのが見えた。

思わず空を見上げると天から白い物体が幾つも落ちてきた。

「雪か・・・・・・」

私は思わず口に出した。

「この分だと直ぐに積り出すね」

ガリシャは空を見上げながらこの雪は早く積ると言った。

「どうしてそこまで分かるんだい？」

「あたしはこの土地に１０年以上も住んでいるんだよ？これ位は一番下の弟でも分かるよ」

一番下の弟の年齢は確か・・・５歳だ。

５歳児もそんな事が分かるとは・・・・・・・・・

私は驚いて何も言えなかったが、この雪が早く積るという事はリカルド様達の思惑は裏切られる形となる。

テツヤ殿の予想では相手は雪が来る前に勝負を着ける気だ。

だが、雪は早く積ると言う。

となればこちらに利がある。

天は私たちに味方したのか？

などと思ったが直ぐに首を横に振った。

偶々、雪がタイミングよく降ったのだ。

しかし、この雪は私たちの力になる。

雪が止む事なく降る中で再び訓練を続けた。

そして訓練を終えた頃には足元を埋め尽くす程に雪が積もっていた。

幕間：偵察同士（前書き）

地震で被害に遭った皆様には大変苦労な思いをしていると存じ上げます。

私も地震の被害は多少ですが受けました。

ですが、諦めずに頑張って下さい。

余りに短絡的な言葉と思いますが、私みたいな男にはこれが精一杯の励ましの言葉です。

そしてこんな時だからこそ、娯楽が大事と思い更新させて頂きます。

幕間：偵察同士

目の前を鬱蒼と生い茂る森林の中を徒歩で進む者たちが居た。

服装は緑、茶、黒、褐色を混ぜ合せた形で周囲と溶け込めるようにされており傍から見ても直ぐには分からない程に周囲に溶け込んでいた。

人数は１０人程度であるが、皆の表情は険しく歴戦の勇士を表しているような顔つきだった。

先頭を歩く男は服と同じ色の唾広の帽子を被り両手で小型の長細い物を握っていた。

その背後に続く者もまた同じ物を持っていた。

彼等は服装だけが場所に溶け込めるようにしているだけでなく自分の顔にも泥などを塗り込んでいた。

一言も彼等は声を発さなかったが、先頭を歩く者が足を止めて小声で「休憩だ」と述べた。

後ろを歩いていた者たちは先頭を歩く者の命令に従い腰を降ろした。

しかし、四方を囲むようにして座り警戒をしていた。

「東まで後どの位でしょうか？」

四方の１つを警戒していた歳若い男が口を開いた。

「こんな道だ。となれば後2、3日は掛るだろうな」

歳若い男の言葉に壮年の男が答えた。

年齢は30代後半でこの中では一番年上であろうか。

顔立ちは極めて武骨な鑿で削られた顔立ちで如何にも戦う男という印象が強い。

「しかし、その前に罠や待ち伏せが居るとも限りませんね」

「あぁ。まったく敵はどんな奴なんだか」

男は舌打ちをした。

彼はサルバーナ王国の首都ヴァエリエに居る自分の上官から東の地へ偵察しに行けと命令を受けて部下を選び出発した。

東の地に女王たちが居る、と言っていた。

「初代国王が建設した首都があると言っていましたが、もう何百年も前の話ですよね?そんな所に逃げて何かあるんでしょうか?」

「さぁな。ただしこれは俺の勘だが東の地には俺らと戦った奴等が居るだろう」

砦で戦った名も知らぬ敵。

しかし、これだけは言える。

強敵。

彼等は2度の戦いに参加していない。

ただ偵察を命令されて行っただけだ。

ただし、城に潜入した時は戦った。

自分達と同じ武器を使用する者たちだ。

その内の1人、いや2人はまだ20にもなっていない少年だった。

彼等が戦った地では年端もいかない子、果ては女や老人なども戦ったから然して驚く事ではないのだが2人は違っていた。

よほど訓練されているのだろう。

自分達を相手に果敢に戦っていた。

城の見取り図を取りに行った時も2人と戦ったが、彼等は恐らく上官と思われる男を拳銃で援護しながらも自身も躍り出て追ってきた。

何度も転びそうになっていたが、それでも自分達を追う姿には何処か感銘を受けた。

砦の戦いでも確認できた。

必死に訓練を受けてきた事を活かそうとしている姿を。

同じ兵士として彼等は称賛に値する。

もし、敵でなければ自分達のように誇りに思えただろう。

「一体、何者なんだ？」

男は小さく呟いた。

彼等の上官の更に上官である“彼の男”は自分達以外は誰も居ない、と言っていた。

だが、現実はどうだ？

男が言った言葉は嘘ではないか。

「まぁ、あいつは最初から鼻もちならない男だったから信用はしていないが」

「あいつを信用できる奴なんて居るんですかね？」

「少なくとも俺はあいつを信用してないし嫌いだ」

自分達を“誇り高き少数精鋭”を・・・・・“野蛮人”と言う奴を信用しろと言う方が無理な話だ。

“あの男”だけではない。

“他の奴等”も自分達を蔑み忌み嫌っている。

「この戦が終われば俺たちは本国に帰る事になりますが、俺はここ

に残りたいです」

あんな国よりもここの方が居心地が良い、と歳若い男は語った。

「それは皆、同じだ」

壮年の男の言葉に皆は頷いた。

どうやら彼等は本国よりもこの国の方が居心地が良い様だ。

「それにリカルド様の志にも感服する」

虐げられた民達を救う為に、ひいてはこの国を他国から護るために進軍した。

道徳的に言えば国家反逆罪に値する行動だが、歴史を振り返れば反逆者と烙印を押された自分達の居た国の初代大統領でさえ今では英雄だ。

何れはリカルドも英雄として祀られる事であろう。

彼等はその他国から派遣されて来た身だが、リカルドの人柄などに惹かれている事実は覆せないしこの国の居心地も考えればここに残りたいという気持ちもある。

自分達は命令には絶対だ。

しかし、自分達は国に忠誠を誓ってはいない。

ただ一人・・・自分達を指揮する男に忠誠を誓っている。

だから、彼がここに残ると言えば残る気で居る。
そんな事を思っていると歳若い男がこう言った。
「俺らもまた歴史に名を残しますかね？」
その声には残したいとも残したくないとも取れる口調でどちらか判別できなかった。
「どうだろうな。少なくとも俺は歴史に名を残したいとは思わない」
寧ろリカルドという光の背後を護る影でありたいと男は続けた。
「軍曹は謙虚ですね」
「そうか？それはそうとそろそろ行くぞ」
まだ先は長い。
軍曹と呼ばれた壮年の男は警戒しながら立ち上がろうとした。
しかし、前方から何かが居ると察して細長い物を構えた。
「誰だっ」
軍曹の声に皆がそちらを振り返る。
ガサガサ、と音を立てて茂みから出てきたのは1匹の黒く巨大な狼だった。

牛ほどに大きな狼でこちらをじっと見つめていた。

「どうやらここはこいつの縄張りだったようだな」

軍曹は狼の縄張りで休憩したと思い苦笑しながら狼に謝罪した。

「お前さんの縄張りを貶したりして悪かったな。だが、安心してくれ。別に俺らは何も悪さをしようとなんて事は考えていない」

動物が相手なのに真摯に謝罪を続ける軍曹に皆は笑いながら見ていた。

狼は軍曹達を見ていたが、直ぐに視線を逸らすと茂みの中に消えて行った。

「さぁて、狼が戻る前に行くぞ。何時までも居ると噛み付かれる」

軍曹は細長い物を天に向けて歩き出した。

それに皆は続いた。

軍曹達が森林の中を進んで行く後ろ姿を狼は見ていた。

『・・・人数は１０人で我が主と同じ武具を纏っている。臭いからしてもかなりの修羅場は潜り抜けてきたようだな』

狼は後ろ姿の男達を見ながら心の中でこのまま進めば後2、３日で到着するなと予想した。

『その前に急いで報告せねば』

狼は4足から人と同じように後ろの2足で立ち上がった。

立ち上がると更に巨大に見える。

そして男達とは別の方角に足を進めた。

しかし、ふと冷たい感覚がして空を見上げた。

空から小さな白い物が幾つも降ってきていた。

「・・・雪か」

狼は空から降って来る雪を見ながら呟いた。

自分が仕える男は雪が来るのを待ち望んでいる。

今の時期を考えればまだ雪が来るのは些か早いとも取れるがこれは良い事だ。

「やはり我が主は愛されておりますね」

自然をも味方にするのだから・・・・・・・・

狼は自分が仕える男がそこまで愛されていると感じたのか愉快そうに笑い茂みの奥へと消えて行った。

第六十四章：無形の位

私とテツヤ殿は城の中を歩き、ある場所に向かっていた。

この城は演習場が幾つかに別けられている。

先ず剣術などを学ぶ演習場に魔術などを教える演習場、そして私たちが訓練をする演習場だ。

その3つの内の剣術を学ぶ演習場に向かっている。

そこにはヴィルヘルム元伯爵が指揮するシュヴァルツフントこと黒犬騎士団と下種女が指揮する親衛騎士団が戦っている筈だ。

いや、戦うなんて言葉は向かない。

ヴィルヘルム元伯爵の言葉を借りるなら「剣術ごっこ」だ。

いやはや、自ら所属していた騎士団があそこまで腑抜けだと知ると恥ずかしくなる。

しかし、そんな事は微塵も素顔に出さずテツヤ殿に付いて行く。

「どうして行くんですか？」

私は思わずテツヤ殿に訊ねてみた。

「お前の話を聞いて気になったんだよ。小娘がどうして部下にも戦術などを調べるのを禁止したのか」

確かにそれは私も気にはなっていた。

どうしてそんな馬鹿な真似をしたのか興味深い。

それを敢えて自分から訊きに行くのもテツヤ殿らしいと思う。

演習場に行くと親衛騎士団がシュヴァルツフントを相手に戦っていた。

シュヴァルツフントは剣を手に突撃をして親衛騎士団はそれを迎え撃っていた。

だが、錬度の違いとでも言えば良いだろうか？

あっという間に蹴散らされて行く。

敗走をしようとする者たちを一人残らず捕えるシュヴァルツフントの者たちの姿は正しく黒犬だ。

差し詰め親衛騎士団は獲物と言った所か。

下種女はヴィルヘルム元伯爵と対峙していたが大人と子供みたいに軽くあしらわれていた。

体格なども違うが、決定的に違う点を上げるなら腕と技術だ。

下種女は正攻法でか攻めて来ない。

それに対してヴィルヘルム元伯爵は時には相手の足を払うし、殴っ

たりもする。

彼等の剣術は間違いなく“相手を確実に仕留める”剣術なのだ。

剣術自体がそうなのだが、正攻法だけでなく時には卑怯とも言える方法を使う事で相手を倒すのもまた一つの答えであると私は思っている。

負け犬の遠吠えなど誰も聞かない。

それが世の中だ。

それをあの女は理解しているのだろうか？

いや、理解していないだろう。

理解していれば、あんな無様な醜態は曝したりしない。

そんな事を思いながら私はテツヤ殿に付いて行った。

「どうだ？調子は」

テツヤ殿は地面に倒れる下種女に訊ねた。

「貴様ッ！！」

下種女はテツヤ殿を見るなり直ぐに立ち上がろうとした。

「おおお、へばっていない様だな。どれ、少し俺が相手をしてやろう」

テツヤ殿の言葉に下種女は猛然と立ち上がり、睨み据えた。

「貴様、この私を相手にして勝てると思っているのか！！」

「勝っただろ？４回も」

「黙れ！！あんな卑怯な手を使って何が勝利だ！！」

「ほぉう。そうかい・・・なら卑怯な手は使わずに正攻法で戦ってやろう」

「なにっ」

「聞こえなかったのか？正攻法で戦ってやる、と言ったんだよ」

「・・・信用できるか」

「お言葉ですが、親衛騎士団長殿。テツヤ殿は決して約束を反故するような真似はしません」

貴方みたいに越権行為をするような無礼者ではない、と私は言い続けた。

「もし、テツヤ殿が卑怯な手を使ったと私が判断したらその場でこの方を撃ちます」

これで良いか？と訊ねた。

「傭兵。それで良いか？」

「俺の名は鷹見徹夜だ。間違っても傭兵なんて名前ではない。好い加減に覚えろ」

「・・・・・・・・・・タカミ・・・・・・・・・・テツヤ。それで、良いか？」

随分と長い間を空けてから下種女は確認するように訊いた。

「やっと名前で呼んでくれたな。あぁ。良いぜ。では、親衛騎士団長フィーナ・マレル。貴殿と一対一での戦いを申し込む。如何かな？」

テツヤ殿は丁寧な口調で下種女に訊ねた。

その様子に皆は唖然とする。

まぁ、いつも尊大な言い方しかしないから新鮮だと解かるが、唖然とする程なのだろうかと疑問に思うが。

「良かろう。その勝負、受けて立つ」

下種女は気分良い声で了承した。

下手に出れば付け上がる、か。

士気が高い場合なら追撃とかをして良い戦功を上げそうだが、この女にどれだけ兵が従うか疑問形だ。

「ヴィルヘルム様。私と共に立会人になって下さいませんか？」

「良いだろう」

ヴィルヘルム元伯爵は鷹揚に頷くと兵たちを下がらせた。

下種女は自身の身長より僅かに短い剣を構えた。

刃は私たちが使用する剣では当たり前の両刃だ。

“バスター・ソード”という剣だ。

通常の剣は成人男性の腕くらいの長さであるが、この剣はそれより長い上に重いのが特徴的だ。

この剣は斬る事と突く事に適した剣で更に刃が狭い事も特徴的であるが同時に幾つか欠点がある。

先ず長く重い。

これが利点であると同時に欠点である。

この剣を扱うには専門の訓練と慣れるまでに時間が掛る。

だから、余程の者でもない限りこの剣を使用する者は居ない。

「それがお前さんの剣か」

テツヤ殿はドウダヌキと言う片刃の剣を、いやカタナを取り出しながら下種女に言った。

「そうだ。亡き父上の形見だ」

「形見を使用するか。悪くないが果たしてお前はそれを使いこなせているのか？」

テツヤ殿は挑発とも取れる発言をした。

卑怯な手は使用しないと約束したが、言葉までは規制していないから特に私は咎めなかった。

それはヴィルヘルム元伯爵様も一緒だ。

「煩いっ。私は親衛騎士団長だ。このくらいの剣は使える！！」

激怒を隠さずに下種女は表して返答した。

「そうかい。なら・・・始めるか」

テツヤ殿はドウダヌキの鞘にベルトを吊るし、刀身を抜いた。

青白く輝く片刃は、綺麗だが何処か妖しい光を伴っており魔剣の一種のように見える。

「それが貴様の愛剣か。見るからに武骨だな」

「実戦向けに造られたんだ。鑑賞は二の次だ」

テツヤ殿はドウダヌキを右手に携えていたが、構えようとはせずにブラリと刀身を下に向けた。

構えていないのだ。

「何の真似だ？」

「見ての通りだ。何時でも来な」

テツヤ殿は微動だにせず言葉だけを投げた。

まったく構える様子が見えない。

だが、何かあると私は思った。

テツヤ殿が何もせずに居る訳が無い。

きっと何か手があると私は確信していた。

下種女は構えようとしないテツヤ殿とは対照的にバスターソードを構えた。

下種女は気合を込めて声を上げた。

声を大きくする事で相手を怯ませつつ自分にも気迫を込めるのだが、テツヤ殿は微動だにしない。

何度も繰り返すが、テツヤ殿は微動だにせずにずっと立っている。

まるで石像と思えるように動かず声も出さない。

ある意味では不気味だ。

下種女は痺れを切らしたのか、または先手必勝なのか剣を右肩上に構えると突進した。

「気が短い女だ」

ヴィルヘルム元伯爵はやれやれ、と呆れていた。

テツヤ殿は目の前に迫って来ても微動だにしないが、剣が振り降ろされると動いた。

素早くて見えなかった。

勝負は一瞬で着いた。

前のめりになった下種女の首筋にドウダヌキの刃が当てられていたのだから。

まったく見えなかった。

下種女の剣は右側の地面に下向きに突き刺さっていた。

あの様子からして恐らく右に裁いて剣を突き刺して、そこからドウダヌキを当てたという所か？

「勝負あり」

ヴィルヘルム元伯爵が一声発した。

テツヤ殿は下種女の首筋にドウダヌキを当てたまま言葉を発した。

「負けを認めるか？」

「そんな・・・私が・・・・負けるなんて・・・・・・・・・」

下種女は茫然としていた。

正攻法でなら勝てると思っていたのに、負けたのだから茫然としたくもなる。

「・・・・・・・・」

テツヤ殿は下種女の首筋からドウダヌキを離して、距離を開けるとゆっくりと鞘に収めた。

ヴィルヘルム元伯爵と私はテツヤ殿に近付いた。

「お見事です。我が王」

ヴィルヘルム元伯爵はポンポンと手を叩いてテツヤ殿を称賛した。

「まぁな」

それに対してテツヤ殿は素っ気なく頷いた。

「あのテツヤ殿。先ほどの構えは何ですか？」

「“無形の位”だ」

「むぎゅうのくらい？」

私を含めた全員が聞き慣れない言葉に首を傾げた。

「あぁ。俺に剣術を教えた男が齧っていた流派では、そう言うんだ」

何でもその流派では相手の仕懸に対して転じて勝つという考えがあるらしく、それがこれらしい。

つまり敢えて構えずに相手が仕掛けてくるのを待ち、それを裁き攻撃する「後手の先」という方法を取る訳である。

「流石は我が王だ。剣でも中々の腕前ですね」

「教師が良かっただけだ」

「それもあるでしょうが、覚える気があるからこそそこまで上達したとも言えるのではないですか？」

如何に教師が良くても生徒に覚える気が無くては駄目だ。

テツヤ殿に覚える気があるからこそ、あんな芸当ができたんだとヴィルヘルム元伯爵は述べた。

私も同意見だ。

現にシュヴァルツフントの面々は優れた教師だ。

だが、親衛騎士団はまるで覚える気が無いからこそ成長しない。

身近に良い例が居るではないか。

「だと良いな。所で小娘。質問をしても良いか？」

テツヤ殿は未だに呆然とする下種女に質問を浴びせた。

それに対して下種女は茫然として答えようとしない。

「おい、聞いているのか？」

テツヤ殿は下種女に訊ねたが、答えない。

テツヤ殿は平手打ちをしようと身体を屈ませた所に城壁を越えて狼人ガルムが颯爽と現れた。

「我が主ッ。ただいま帰還しました！！」

「何だ。来たのか」

テツヤ殿は下種女から視線をガルムに向けた。

「そのような態度を取らないで下さいッ」

ガルムは傷ついた顔をしながら、偵察の報告を始めた。

それを聞き終えたテツヤ殿は「直ぐに会議を開く」と言い他の者たちを呼べ、と私に命令した。

私は頷いてその場を離れた。

第六十五章：偵察の報告

私とガリシャはレオンと共に会議を開く部屋に来ていた。

訓練をしているとレオンが走って来て「作戦会議を開く事になった」と言ったので急いで来た次第だ。

部屋にはテツヤ殿、ヴィルヘルム元伯爵、ゲンハルト様、プロイセン様、ミーシャ大尉、イーグル軍曹という面々がいる。

そしてその中に親衛騎士団の副団長である男が居た。

年齢は下種女より5つほど年上でテツヤ殿より3つほど年下と見る。

容姿は金髪にアーモンド色の瞳で騎士らしく逞しい肉体を保持していた。

下種女はレオンの話によれば先ほどテツヤ殿と一対一でしかも、卑怯な手は使わずに戦って負けたらしい。

それが原因で些か腑抜けとなっておりまったく役に立たないとらしい。

まぁ元から役に立つ事を何一つしていないから居なくて良い。

その男は初めて参加する会議に緊張していた。

「おい、そんなに緊張するな」

テツヤ殿は親衛騎士団の副団長に話し掛けた。

「は、初めてで、き、緊張しているんだっ」

男は顔を強張らせながら、必死に言葉を紡いだ。

「それは理解できる。だが、戦う訳じゃないんだ。ただ話をする。そう考えれば幾分か落ち着くぞ？」

テツヤ殿に説き伏せられるように言われた男はただの話し合い、と思うようになったのか顔を柔らかくした。

それを見てからテツヤ殿が口を開いた。

「さて、偵察に行かせていたガルムから報告を先ずは言おう」

テツヤ殿は煙草を吸いながらガルムの報告を簡単に説明した。

敵は後2、3日で来るという内容だった。

「ど、どうするのだ？テツヤよ」

ゲンハルト様は泡を喰った声を出しながらテツヤ殿に訊ねた。

前線指揮官をテツヤ殿にしても総大将である事に変わりはない。

だから、慌てふためくのも無理はないと思える。

「慌てるなよ。言っただろ？総大将はドッシリと構えてろって？」

テツヤ殿はゲンハルト様に煙草を差し出して微かに笑った。

「し、しかし」

「相手は１０人だし、あくまで任務は偵察だ。まぁ厄介な相手であるのに変わりはないが」

「どの程度厄介なのだ？」

プロイセン様がテツヤ殿に訊ねた。

「俺らと同じ武器を持ち、更に実戦経験も豊富だ」

大人数で来られるより厄介だとテツヤ殿は答えた。

「その者たちは何と言う名前だ？」

「アメリカ合衆国海兵隊、武装威力偵察部隊――フォース・リーコンだ」

「どういう部隊だ？」

プロイセン様がそれを訊ねるとテツヤ殿はそれに対して答えた。

最後まで聞き終えたプロイセン様達は無言だったが、直ぐにテツヤ殿にこう言った。

「確かに厄介な相手だ。しかし、どうして彼等がリカルド様に居るのだ？」

「俺にも分からん。ただ、言える事は俺みたいに向こうで死んで、この世界に送られたという事だろうな」

それだけは恐らく事実だ、とテツヤ殿は言った。

「そうか。偵察ともなれば二通り考えられるが、そなたとしてはどちらだと思う？」

「恐らく隠密偵察だ」

偵察には2通りがある。

1つは隠密偵察と呼ばれる物で気付かれずに潜入する事。

もう1つは威力偵察だ。

こちらは小規模な攻撃をして敵情を調べる事だ。

「向こうはまだ準備が整っていない。それにまだ俺らがここに居る事も確認できていない筈だ」

それらを鑑みれば隠密偵察だろう。

「どうするのだ？」

「相手をする」

こちらも向こうの事を知りたい、とテツヤ殿は述べた。

「では、ゲンハルトよ」

プロイセン様はゲンハルト様を見た。

ゲンハルト様は煙草を吸っていたが、灰皿に灰を捨てた。

この人なりに総大将として貫禄を見せたいように見える。

「テツヤ少佐」

ゲンハルト様はテツヤ殿の階級を付けてからこう命令した。

「直ちにその者達を倒せ」

「了解した」

テツヤ殿は椅子から立ち上がり、敬礼をした。

これで決定したが、そこへ親衛騎士団の副団長が口を挟んだ。

「あの、少し良いか？」

「何だ？」

テツヤ殿が視線を男に向ける。

男はテツヤ殿の視線に怯えた顔をして再び緊張した顔を浮かべた。

「そんなに怖がるなよ。俺は男を食ったりはしない」

この発言に私とレオンは軽く吹いた。

テツヤ殿なりに緊張している彼の気持ちを解そうとしているのだと解かったのだ。

だが、彼には馬鹿にされていると思ったのか顔を強張らせた。

「怒るな。別に馬鹿にしている訳じゃない」

ただ、あまりに緊張した顔だから解しただけだ、と弁明してから再びどうしたんだ?と訊く。

「お、俺もそれに参加させてくれ」

「どういう意味だ?」

「そのままの意味だ。俺も・・・その戦いに参加させてくれ」

「その理由は?」

テツヤ殿は煙草を取り出して銜えながら訊ねた。

「俺だって、騎士だ。あんたたちだけを戦わせるのは・・・騎士としての沽券に関わる」

「沽券ねぇ・・・・・・・・」

テツヤ殿は火を点けながら眼を細めた。

この方から言わせれば沽券や誇りなど糞尿以下の価値だと思っているだろう。

だから、この男が騎士としての沽券に関わると言った事に対して何処か馬鹿にしているのかもしれない。

「お願いだっ。俺も参加させてくれっ」

テツヤ殿の様子を見て不味いと感じたのか男は必死に頭を下げた。

親衛騎士団の者がテツヤ殿に頭を下げて懇願するなど見た事が無い。

いや、テツヤ殿だけでなく他の者に頭を下げるなど見た事が無いと言い直そう。

彼等は選ばれた者だと思っている節がある。

そのため他人を自分より下、と見ている所がある。

そしてこの男は下種女の補佐をする副団長と言う高い地位に居るのに頭を下げている。

彼の本心を見た気がした。

だからと言って私たちみたいに訓練を受けていない彼を参加させて良い物かと思う。

ハッキリ言えば足手まといだ。

彼がヘマをすればそれは私たちの命にかかわる事だ。

それを思うと参加させたい気持ちと下手に参加して欲しくない、と

いう気持ちがぶつかり合って迷う。

「テツヤよ。私としても頼む」

ゲンハルト様がテツヤ殿に頼みこんだ。

「彼自身、組織を抜きにして何も出来ない事に歯痒さを覚えているのだ。だが、彼は戦場でも逃げずに戦った」

親衛騎士団の者たちが我先にと逃げる時に彼は最後まで留まり戦っていた。

何より彼にも私と同じように一度だけでも助けると思って、参加させてくれと頼んだ。

「こいつは確かに骨がありますよ」

ヴィルヘルム元伯爵もゲンハルト様を助けるように口を開いた。

「こいつは親衛騎士団の中でも骨がありますし、少なくともフィーナよりマシです」

二人の言葉を聞いてからテツヤ殿は男に訊ねた。

「一つ訊く。それはお前の意志か？それとも下種女の命令か？」

「俺の意志だ」

男は顔を上げて自分の意志だと告げた。

「俺は今まで親衛騎士団として誇りと自信に満ち溢れて生きてきた」

自分達は選ばれた者たちであり、それに誇りと自信を持っていた。

「戦の経験は無かったが、我々なら一人だけでも敵を倒せると思っていた」

「傲慢の一言だぜ」

軍曹がポツリと漏らした。

「お前等は選ばれた者たち、と考えているようだが高が一人で戦局を挽回できるほど甘くないんだよ」

英雄なら話は別だが、世の中に英雄と呼べる者は居ない。

いや、英雄と呼ばれる者たちの周りにはそれを支える者たちが居る。

だから、戦局を挽回できるんだと軍曹は語った。

「だが、お前等は違う。お前等は驕りと虚栄心のという汚物の塊で他の奴等を軽んじて連携を取らなかった」

そんな事では勝てる戦も勝てないし、仲間割れを起こして自滅するのが関の山だと続けて言い煙草を吸った。

何で軍曹がここまで辛口なコメントを言うのか？

分からないが、彼自身の経験から来ているのかもしれないと思う。

「それにお前を連れて行ってヘマをしたらどうするんだ？一人のヘマで全員が死ぬ事だってあるんだ」

そうなったらどう責任を取る？

いや、お前に自分で自分の墓穴を掘れるのか？

出来るのか？

と捲し立てるように訊き続ける軍曹。

「・・・俺には自分で自分の墓を掘るなんて事は出来ない。だから、俺がヘマをするようなら殺してくれ」

それで責任が取れるなら殺してくれて構わないと男は言い続けた。

「良い覚悟だな」

軍曹が煙草を吸いながら言った。

「いけすかない奴等とばかり思っていたけど、あんたは別格のようだ」

ミーシャ大尉も軍曹の言葉に同意するように頷くとテツヤ殿を見た。

「少佐。あたしの意見を言っても宜しいですか？」

「何だ？」

「この男の意志は恐らく本物でしょう。それに宰相閣下やヴィルヘ

ルム殿の言葉も一理あります。どうでしょうか？」

この男を連れて行っては？とミーシャ大尉はテツヤ殿に言い答えを待った。

「・・・良いだろう。イーグル１等軍曹」

テツヤ殿は鋭い視線を軍曹に向けた。

「はい。少佐」

軍曹は椅子から立ち上がり直立不動になって言葉を待った。

「この男とお前が選んだ奴を連れて敵を迎え撃て。もし、この男が足手まといと判断したら殺せ」

「イエッサー。ランドルフ、レオン、ガリシャ。テメェラ３人も来い。演習場に集合だ」

『レンジャー！！』

私とレオン、そしてガリシャは直立不動になり声を揃えて頷いた。

第六十六章：迎撃任務

私とレオン、そしてガリシャは雪が積もった演習場で準備をしていた。

既に時刻は正午過ぎとなったが、もう夕方と思える程に暗かった。

そんな中で私たちと軍曹が選んだ２０人も一緒に準備をしていた。

迷彩服の上から白いギリースーツを身に纏った。

外は雪で周りは白化粧一色だから通常の迷彩服では目立つ。

だから、その上から白いギリースーツを着るのだ。

そしてモーゼルなどにも白い布などを巻き付けてカモフラージュをして偽装した。

準備が終わると親衛騎士団の副団長を連れた軍曹と大尉、そしてテツヤ殿・・・少佐が現れた。

親衛騎士団の男も私たちと同じ格好をしていた。

テツヤ殿は皆を集めるとこう言った。

「これより敵偵察を迎え撃つ」

まだ2、3日は掛る距離に居るが我々が先に行き彼等を出迎えるのだ。

「敵偵察は全員で１０人。俺らと同じ武器を持つ誇り高き少数精鋭だ。奴等を侮るなよ？」

『勿論です。少佐』

私たちは１列に並んで答えた。

「そしてこの男を参加させるが、足手まといと判断すれば殺せ」

こいつもそれを望んでいる、と少佐は続けた。

「私は・・・君等のような訓練は受けていないし偵察の経験も無い。だから、足でまといになると判断したら殺してくれ」

死体は遺棄して構わない。

そんな時間があるなら逃げてくれ、と男は言い続けた。

彼は鎧を脱いで私たちが着ている服装だった。

武器は剣だけだが。

「指揮はイーグル１等軍曹が執る。良いか？必ず戻って来い」

『レンジャー！！』

私たちは敬礼をすると少佐は返してくれた。

そして私たちは城を出た。

城を出ると森林地帯は雪で白く染まっており同じ景色に見える。

「４人１組で行動する。連絡は逐次に取れ。敵を見つけたら近くの奴と連絡を取ってから攻撃しろ」

軍曹は私たちに命令をした。

４人１組で行動する事になったが、私はガリシャと親衛騎士団の男、そして獅子頭軍団の１人だった。

武器は私がモーゼルｋａｒ９８ｋとベレッタＭ９２ＦＳ。

ガリシャがＳＫＳカービンとイングラムＭ１０。

獅子頭軍団の１人がワイド中尉と同じＲＰＫ軽機関銃に少佐と同じ拳銃のコルト・ガバメントだ。

その他には医療器具などの物を背嚢（はいのう）に入れて背負っている。

「お荷物を押し付けられたな」

獅子頭軍団の者が親衛騎士団の男を見ながら嘆息してみせた。

彼が一番年上であり階級も上の為に班長となった。

彼からしてみれば親衛騎士団は敵前で直ぐに逃亡した臆病者と見えるのだろう。

言葉の到る所に棘が含まれている。

男は何も答えずにいたが幾分か気を悪くしていると解かる。

「喧嘩は止めましょうよ。敵は直ぐ近くに居るかもしれないんです」

私はモーゼルのボルトを動かして弾を装填しながら言った。

大の男が餓鬼みたいに喧嘩なんて大人気ない、とガリシャも続いた。

「これは失礼した。いやはや、若い二人に説教されちゃ俺も終わりだな」

男は笑いながらも行くぞ、と言いＲＰＫのレシーバーを引いた。

先頭はこの土地に詳しいガリシャが歩く事になり、私が2番で親衛騎士団の男が3番目、そして最後が獅子頭軍団の男で構成された。

雪の道は思っていた以上に深いし滑り易くて苦戦した。

だが、ガリシャだけは慣れた足で歩いている。

「雪道を歩くのにはコツがあるんだ」

後ろに体重を掛けずに前足に体重を掛けて素早く移動する事で深く入らずに済むと言う。

なるほど。

と私たちは頷き言われた通りに歩き始めた。。

親衛騎士団の男は少佐の事について訊き始めた。

主に受け答えをするのは私だ。

少佐と付き合いが長いのは私だから仕方が無い。

「少佐は皮肉屋で尊大で冷たい所もありますが、意外と優しい所もあるんです」

私は少佐の事を少しでも知ってもらいたい一心で彼に説明をした。

男はそれを聞いて驚いたりしたが、納得もしていた。

「フォン・ベルト閣下と同じ軍に居たと言っていたが、どう違うのだ？」

「少佐が居た第一空挺団は天馬騎士団のように空から後方を遮断したりするのが役目です」

訓練は苛烈の一言で生で蛇を食べる訓練もすると告げた。

「へ、蛇を、しかも生で・・・・・・・・」

「私も食べましたが、鶏肉の味でしたよ？」

私は意地悪な笑みを浮かべてみせた。

「あたしも食べたけど、確かに鶏肉の味がしたね」

ガリシャが同意するように頷いてみせた。

「俺も食べたが、確かに鶏肉の味がしたな。あれは病み付きになるぜ」

獅子頭軍団の男も頷いて、親衛騎士団の男は仲間外れにされた気分に陥った様に見えた。

「訓練は厳しいのか？」

「地獄ですね。一言で言えば」

「確かにな。俺らが受けている訓練なんて学校の体育みたいなもんだ」

それを聞いた男は顔を青くさせた。

「しかし、少佐は俺らに確実に生き残らせるために訓練をさせているんだ。それに訓練の休み何かの時は俺らを励ますし冗談を言うんだ」

傭兵と蔑まされているが、一人の男としてはあれほど出来た方は居ないし尊敬できる方だと私と獅子頭軍団の者は告げた。

それを聞き終えた男が、何かを決心したような顔つきになった。

それが気になり後で訊いてみようと思った。

どのくらい歩いたのか分からないが既に辺りは暗闇になっており視界が効かない。

だが、暗闇での訓練をしてきたからある程度は慣れているから然して問題は無かった。

夜道を歩いていると獣の鳴き声が聞こえてきた。

「狼だね」

ガリシャが小さく音のする方向を見ながら呟いた。

「だ、大丈夫なのか？」

親衛騎士団の男が怯えたように訊いてきた。

「狼は怖くないよ。ちゃんと真摯に付き合えば優しい生き物なんだ」

あんたたち都に住む奴等は狼をさも悪い動物と言うが、狼はそんな生き物ではないとガリシャは続けた。

「あたし等が耕した畑を食い散らかす猪や鹿から護ってくれているんだ」

そんな彼等に対して自分達も礼を尽くす事で仲を取り持っている、とガリシャは言った。

親衛騎士団の男はそういうものなのか、と声を出して頷いた。

それから更に進み、休憩を挟んだ。

私たちは4方を護るようにして円陣を組み休憩を始めた。

「煙草が無性に吸いたいぜ」

獅子頭軍団の男が嘆息しながら煙草を吸いたいと零した。

「私もです。ですが、今は駄目ですね」

「あぁ。しかし、少佐の持っている煙草は本当に女神に抱き締められている感覚がするよな？」

「はい。戦場に行くと必ずあると言いますし何だか戦の女神みたいですよね」

「まったくだ。少佐の話によれば、その戦女神は美人なんだろ？」

「はい。天馬に跨り鎧を身に纏って槍を持っているそうです」

少佐に以前聞かされた戦乙女と呼ばれるワルキューレ。

彼女達は勇敢に戦った戦士を迎える為に空から降りてくるらしい。

もし、彼女達が本当に居るならば戦死した者たちはきっと彼女達に迎えに来てもらったに違いないと思った。

「その煙草とは何だ？」

親衛騎士団の男が訊ねてきた。

「一種の娯楽品です。少佐と軍曹、大尉が持っているんですが３人揃って別物なんです」

少佐は淡い味がする女神の抱擁。

軍曹は熱い味の燃える女。

大尉は冷えた味の氷の女王。

3人とも別々の煙草だが、名前に必ず女が付く所は共通している。

「あの傭兵・・・・いや、タカミ・テツヤは、どうして2度も軍を変えたんだ?」

男は初めてテツヤ殿の名を言い、2度も軍を変えた理由を訊ねてきた。

「強くなりたいから。そして、戦いでしか自分の価値を見出す事が出来ないからです」

私はここでテツヤ殿が居た世界での傭兵を詳しく説明した。

大金を掴めるのは本当に極僅か。

大抵の傭兵は貰える金の割には低金額で危険な地域に行かされた上に切り捨てられる事もある。

そして誰もが一度は挫折を味わっておりその過去を詮索する事は暗黙の了解で禁止されていると言う事。

などなどだ。

「・・・俺が知っている傭兵とは違うんだな」

「えぇ。そして少佐は・・・・私の勘ですが、自分の為だけでなく他人の為に戦っている方、と思います」

本当にこれは勘だ。

しかし、少佐は・・・テツヤ殿は決して自分の為だけに戦っている訳ではないと思っている。

それはロンガーム殿を始めとした方たちも指摘している。

「そうか・・・・・・」

男は私の説明を聞き終えると無言になった。

そして休憩を終えた私たちは暗い道を歩き始めた。

第六十七章：危機一発

城を出て進んでかなり時間が経っていつの間にか朝になっていた。

「どれ、少し朝飯にするか」

獅子頭軍団が朝飯にしようと告げた。

今にして思えば何も食べていなかったと気付かされる。

そして親衛騎士団を見れば腹が減って動けない顔をしていた。

「大丈夫ですか？」

私が訊ねると彼は「腹が減った」と一言だけ告げた。

「お前さんの分も背中に背負っている背嚢にある」

獅子頭軍団は背中から背嚢を降ろしながら言い、自分の食料を出した。

私とガリシャも取り出す。

「これが食料か？」

男は背嚢から出した袋に入った物を取り出して見せた。

茶色の紙に包まれた物が3、４つある。

これは初めて見た者から言わせれば食べ物か？と首を傾げるのも無理はない。

「はい。通称を戦闘糧食（せんとうりょうしょく）と言います」

他には戦闘食、野戦食、レーションなどと様々な名前で呼ばれているが、戦闘中に食べられ保存も出来る上に軽い事などは共通している。

「俺らが持っているのとは違うんだな」

私たちが前まで持っていた戦闘食はガラスの瓶に入れてコルクで蓋をして蝋で封をした物だ。

携帯は出来るのだが、割れ易い事が欠点だ。

テツヤ殿達が居た世界でも最初はこれだったらしいが、後に別の国が金属製の瓶を開発してからはこちらを利用したらしい。

そして更に改良が加えられているらしい。

私たちが渡されたのは皆、同じだ。

これはこういった場所でも動けるようにエネルギー補給に特化した物だった。

「先ず封を切ってから手で切った場所を抑えて振るんです」

私たちは封を切り、そこを手で抑えて振った。

男もそれに倣い振ってみる。

それを数分もすれば温かい香りが鼻に来て見れば温かい食べ物が出来上がっていた。

「す、凄いな・・・・・・」

男はたったこれだけで出来る食べ物に唖然としていた。

「私もです。後は、付いているスプーンで掬って食べるんです。ですが、余り食べ過ぎるといざ、という時には動けませんから腹八分目にした方が良いんです」

「なるほど。君は俺より年下だが、詳しいんだな」

「テツヤ殿と付き合いが長いのは私ですから」

そう私は答えスプーンで食べ物を掬って食べた。

ただし、食べている間も四方を警戒しながら、だ。

男は初めて食べる物の味が何時も食べている携帯食料より美味い事に驚きながらも私の言葉を聞いて腹八分目に抑えていた。

短い食事を済ませた後は少し眠り、体力を僅かでも回復させた。

交代で見張り寝てからまた動き出した。

暫く歩いていると無線から声が聞こえてきた。

『こちらイーグル。ただ今、敵を捜索しているがそちらはどうだ？』

軍曹の声が無線越しに聞こえてきた。

「こちらもやし。こちらは食事を済ませて探索中だが、未だに発見できていません」

『気を付けろ。奴等は俺らみたいに白いギリースーツは纏っていない筈だが、隠れる事には長けている』

「了解。では、これで通信を終わります。オーバー（以上）」

『オーバー』

無線の通信は終わった。

「まだ向こうも敵を発見できないか」

「はい。何処に居るんでしょうね？」

「俺なら突然の雪で、どうするか考えるな」

先ず雪が降り、それなりに積った。

持って来た装備では如何に2、3日の距離とはいえ厳しい筈だからどうするか考える筈だ。

そんな事を考えながら進んで行くと、ガリシャが止まった。

私は眼を凝らして前方を見た。

それなりに離れた距離に迷彩服を着込んだ男達が見えた。
人数は１０人。
フォース・リーコンの奴らだ。
獅子頭軍団の男は隠れろ、と命令した。
私は親衛騎士団の男を同じように隠れさせた。
隙間から覗くと彼等は何かを感じたのか警戒していた。
私は無線機で軍曹に敵を発見した、と告げた。
軍曹は直ぐに行くと言った。
「軍曹達が間も無く来ます。それまでは待機しましょう」
「あぁ。それが良い」
親衛騎士団の男は何も言わずにフォース・リーコンの奴等を見ていた。
「あれが少数精鋭と言われる敵、か・・・・・本当に少数精鋭と思える」
「分かるんですか？」
「これでも騎士だ。あいつ等の眼を見ていると、そう感じる」

私の質問に些か怒った顔になりながらも彼は答えてくれた。

暫くすると軍曹達が来た。

「おおお、来たな。ジャー・ヘッドが・・・・目に物見せてやる」

「軍曹。感情的にならないで下さいよ」

「分かってる。だが、あいつらをどう料理しようかと考えるだけで胸が沸くんだよ」

どれだけ海兵隊に嫌な思い出があるのか、と思い知らされる言葉だ。

「もやし。奴等を狙え」

「了解」

私はガリシャと頷き合い構えた。

伏射の構えを取り、ガリシャが距離を計った。

「距離６００、風速１、湿気が少し」

私は調整してから狙いを定めた。

「何時でも撃ちな」

私は深呼吸をして引き金に指を掛けた。

先頭の者が1歩踏み出した。

乾いた音と共に肩に反動が来た。

先頭を歩いていた男は右肩を撃たれて後ろに倒れ込んだ。

「よぉし、撃て！！」

軍曹が躍り出てコルトＭ７２７アブダビ・カービンを連射した。

他の者たちも一斉に射撃を始めた。

フォース・リーコンの者たちは待ち伏せだ！！と叫ぶと急いで木などに隠れて応戦して来た。

私とガリシャが居た所にも弾丸が飛んでくる。

急いで木に隠れてやり過ごし、弾丸を避けた。

そして直ぐに射撃をする準備をした。

「右側にＭ６０がある。先ずはあいつだよ」

「了解」

私はモーゼルを構えて頷いた。

Ｍ６０（正確にはＭ６０Ｅ３だが）を撃って来る男は一人で撃っていた。

Ｍ６０はベルト給弾式で一人が撃ち、もう一人が弾薬手をする筈だが彼は違っていた。

銃身の下に取り付けたフォアグリップを掴んで立ったまま撃っていた。

関部左側面に装着する弾薬ボックスが存在しており、そこに弾を入れて一人で撃っている。

彼に狙いを定めるが、彼が私の存在に気付き撃って来た。

弾が、７．６２ｍｍ弾が木を突き破り破片が飛び散る。

急いで他の木に移動するがしつこく撃って来る。

「もやしを援護しろ！！」

軍曹がコルトＭ７２７を撃ちながら数人に命令する。

獅子頭軍団の男がＲＰＫで援護してくれた。

相手は怯み、木に隠れた。

私とガリシャは急いで構えて距離などを計った。

ＲＰＫが他の者に狙いを定めたのを見計らったようにＭ６０が木から顔を出した。

それに狙いを定めると引き金を引いた。

カンッ、と金属に当たる音がした。

銃撃の中から僅かに「シット」という舌打ちが聞こえてきた。

彼等は1歩も引かずに撃ち返してきた。

私は狙撃を続けながらも、ふと疑問が起きた。

最初は10人居たのに、4人ほど減っている。

これは・・・・・・・・・

「危ない!!」

親衛騎士団の男の声がすると同時に身体が倒れた。

彼にガリシャと一緒に押し倒されたのだ。

彼の肩から鮮血が迸って白い地を赤く染めた。

奴等は迂回してこちらを来たのだ、と何となく感づいたが当たりだったようだ。

彼等は近くの雪が掛った岩に身を隠しながら撃って来た。

彼は私たちに覆い被さったまま銃弾から護り抜いてくれた。

彼の肩や足に血が迸り続けて行く。

「大丈夫ですかっ」

私は庇ってくれた男に声を掛ける。

「な、何とかな・・・・ぐぁ・・・・・・」

呻き声を僅かに上げる男。

くそっ。

もっと速く気付いていれば、と舌打ちをしながら他の者と一緒に岩の奴等を攻撃する。

私は男を何とか退かして木に隠れると胸に付けていたＭ６７破片手榴弾を掴んだ。

球体の物体で林檎を連想させるが、破壊力はある。

Ｍ６７のピンを抜き、しっかりと握ってから岩に向かって投げた。

岩の直ぐ近くに落ちたＭ６７破片手榴弾。

岩に隠れていた者たちは「手榴弾!!」と叫ぶと岩から飛ぶように離れた。

そして直ぐに爆発した。

細かい破片が散らばるのを確認でき、何人かが当たったのも確認できた。

空薬莢と鮮血に叫び声が山々に木霊する。

まるで演奏のように聞こえるのは錯覚だろうか？

戦いは1時間ほど続いたが終盤に近付いている。

敵は傷ついた身体に鞭を打ち傷ついた仲間を背負いながら後退していった。

「てめぇら逃がすなよ！！」

『おぉ！！』

私たちは軍曹の声に頷いて攻撃を緩めなかった。

そして彼等は消えた。

「へっ。屁でもねぇな」

軍曹は唾を吐きながら傷ついた者たちを見た。

私たちも負傷した。

1番の負傷者は親衛騎士団の男だ。

私とガリシャを庇った彼は背中を大きく抉られていたのだから。

だが、意識はある。

「大丈夫ですか？」

私は傷ついた彼に訊ねた。

「ぐっ・・・痛いが、何とか大丈夫だ」

男は汗を掻きながら答えてくれた。

私とガリシャは頷き合い、彼の両肩に手を回して立ち上がらせた。

「貴方は私とガリシャの命を助けてくれた恩人です」

「いや・・・俺は、戦わずにただ敵が君等を狙っていたから覆い被さっただけだ」

「いいえ。それだけでも十分に戦いましたよ」

「そうだよ。あんたが居なかったらあたしとランドルフは撃たれていたもん」

ガリシャも私に続き男の行動を褒めた。

「足手まといではなかったな」

軍曹は男を見ながら微笑み城に戻る、と言った。

私とガリシャは彼を支えながら進んだ。

そして四方を警戒しながら城へと帰還した。

支えられている彼は私たち二人に何度も礼を述べたが、礼を言うのは私たちだと思う。

それと同時に下種娘に対する評価は変わらないが、彼みたいな男が居る親衛騎士団は捨てたもんじゃない、と思い直した。

幕間：名誉戦傷章

俺は雪が積もった演習場から無線でイーグルから敵を撃退した、という報告を受けた。

あいつ等が寒い中を進んでいるのに俺らが温まる訳にはいかないからな。

そして無線で足手まといになるなら殺せ、と命令した男はどうやら生き残ったらしいという報告も受けた。

それ所かランドルフとガリシャを庇って傷を負ったと聞いた時は驚きを隠せなかったし、よく護ってくれたとさえ俺は思った。

親衛騎士団にもそれだけ骨がある奴が居るとは、な。

それと同時にイーグルから頼まれた事を思い出す。

『あの男に是非とも何かしらの褒美をやって下さい』

あいつがこんな事を言うのは余り無い。

どんな褒美にするか・・・・・・・・

報告によればあいつが一番の傷を負ったらしい。

ランドルフとガリシャを庇って出来た傷・・・・・勲章を与えても俺的には良いな。

煙草を銜えながら俺は携帯で宅配人に勲章を一つ頼んだ。

国はアメリカだ。

イーグルの指揮下で働いたんだから、あいつの国の勲章を渡すべきだと判断したからだ。

直ぐに持って来ると、相変わらず呆れるほどの元気な声で告げてきた。

携帯を仕舞い、煙草に火を吐けて煙を吐き隣に立つゲンハルトに言った。

「ゲンハルト。奴等は撃退した」

「本当かっ」

ゲンハルトが俺を喜々とした眼で見つめてきた。

「あぁ。親衛騎士団の男は傷を負ったが無事だ」

「そうか」

ゲンハルトは負傷はしたが生きているという事を聞いて安堵した。

「だが、奴等は恐らく帰ったら直ぐに態勢を整えて来る。覚悟しておけよ?」

「・・・そなたに全て任せているが、私も総大将としてドンッと構えていよう」

ほぉう・・・言うようになったな、と思う。

あのお嬢ちゃん・・・イザベルという娘のお陰だと俺は思いながら直ぐに出迎えの準備をした。

俺、ゲンハルト、プロイセンのおっさん、そして生き残った将軍達、ヴィルヘルムだ。

下種女は未だに腑抜け状態で使い物にならないし、女王にはこんな血生臭い光景を見せたくない為に敢えて呼ばなかった。

しかし、あんな女が指揮官では心もとないし恐らく今後も役立たずだろうな、と俺は思った。

剣の筋は悪くないが、如何せん相手が正攻法でしか攻めて来ないと考えている節がある。

更に言えば現実逃避の癖もある所が駄目過ぎる。

親父の事を話すと誇らし気に言う時もあるが、何処か触れて欲しくないという時もある。

親父と何かしら遭ったんだな、と何となくだが考えられる。

そんな奴に指揮を任せる訳にはいかないな。

となれば誰か別の者を指揮官に任命すべきだな、と俺は思いながら門を通り入ってきたイーグル達を出迎えた。

イーグルは俺に近付くと敬礼をしてこう報告した。

「ただ今、敵偵察と交戦し撃退しました」

「ご苦労だったな」

「いいえ。それはそうと先ほどの話は、どうですか？」

「ちゃんと用意してある」

俺はランドルフとガリシャに支えられている男に眼をやり二人に連れて来いと命令した。

二人に支えられながら男は来た。

「一番の負傷らしいな」

「はい。私とガリシャを庇い銃弾を一手に受けてくれました」

見れば包帯などが手足や胴体に巻かれている。

「傷は男の勲章だ」

「だが、背中にも傷を負ってしまった」

背中に傷を負うのは恥だ、と男は言ってきた。

巻かれている包帯からは血が滲み出ているが俺には見なれた光景でしかない。

そのまま言葉を紡いだ。

「何を言うんだ。背中だろうが何処だろうが、傷は傷だ」

俺は懐から小さな勲章を取り出した。

金の枠が嵌められた紫色のハート型の勲章だ。

「これは・・・・・・？」

「“パープル・ハート章”――名誉戦傷章だ」

こいつはアメリカ初代大統領であるワシントンの時代から存在する古参の勲章だ。

かの日系アメリカ人で組織された“第４４２連隊戦闘団”は９，４８６個もの名誉負傷勲章を授与されたらしく、それから名誉戦傷戦闘団と渾名されたらしい。

こいつはそれだけの働きをした、と俺とイーグルは判断した。

だから、これを渡す。

「お前の名は？」

今にして思えば、こいつの名をまだ知らなかった為に訊いた。

「お、俺はヘンだ。ヘン・ロビンソン」

「ヘン・ロビンソン。貴殿は戦いにおいて危険を顧みず味方を庇い

傷を負った。これは名誉な事である」

俺はかつて外人部隊で勲章を授与された時に言われた言葉を思い出して適当に混ぜて言った。

「お、俺は、別に・・・・・・・・」

「謙遜するな。よって、貴殿に名誉勲章を授与する」

受け取ってくれ、と言いヘンの左肩に名誉戦傷章を付けてやった。

「良かったな?そいつは俺の国じゃ古参の勲章なんだ」

勲章だからそう簡単には貰えない。

大事にしろよ?

とイーグルは言いヘンに煙草を勧めたが、ヘンは俺の煙草が良いと言ってきた。

「あんたの煙草は女神に抱き締められる感覚だと聞いている。なら、俺にもその感覚を味わ合わせてくれないか?」

「良いぜ」

俺は女神の抱擁をヘンの口に運び、ジッポーで火を点けてやった。

ヘンはランドルフに吸い方を教えてもらい煙を微かに吐いた。

「あー、美味い。これが女神の抱擁か・・・・・・良い感じだ」

「そう言ってもらえると助かる。イーグル、負傷者の傷をしっかりと司教に見せてやれ」

司教は傷の手当ても出来るから俺の指揮する奴等の治療は主にあいつに見せている。

「了解」

イーグルは敬礼をして負傷者を運んで行った。

「テツヤよ。礼を言うぞ」

ゲンハルトが俺にいきなり礼を言ってきた。

「何の事だ？」

俺は分からずに首を傾げた。

「そなたはヘンに勲章を与えた事だ。私としても何かしら褒美を与えたいと思っていたのだが、いかんせん何も無い」

だから、俺が代わりに与えたのが嬉しいらしい。

「止せよ。俺はイーグルが言った事を実行しただけだ」

あいつは下士官だ。

下士官は最前線で軍を指揮し鼓舞するのが役目。

だからこそあいつにあれを渡す事で士気を上げたのかもしれないな。

いや、違うな。

あいつは自分の眼であの男になら勲章を与えても良いと判断したんだ。

男嫌いのあいつに認められたヘンなら良い男なのだろう、と俺は思い煙を吐いた。

幕間：名誉戦傷章（後書き）

謙虚の所を謙遜の方が良いと言われたので、直しました。

もう少し次話はお待ちください。

今月中には出すというのは断言できるんですが、まだ進んでいないもので・・・・

第六十八章：伝言と驚愕

私とガリシャはヘン・ロビンソンを肩に担いでエドリアス大尉が居る場所に赴いた。

少佐から・・・テツヤ殿から負傷者を運べと命令されたからだ。

エドリアス大尉は先ず1番に傷を受けたヘン・ロビンソンの治療を始めた。

「かなりやられましたね」

エドリアス大尉はヘン・ロビンソンの傷を見ながら呟いた。

「司教様、おれは・・・まだ戦えますか？」

ヘン・ロビンソンは傷が痛むのか顔を歪めながら訊ねた。

「幸い急所は外れてあります。弾も全部摘出されており手当ても万全です。まだ大丈夫ですよ。ただし、ちゃんとここで治療を受けて回復しないといけませんがね」

「それでも良いです。また戦えるならそれで良いんです」

ヘン・ロビンソンは女神の抱擁に溜まった灰を地面に捨てながら言い続けた。

「ランドルフ、と言ったかな？」

ヘン・ロビンソンが私を見た。

「はい。ランドルフ・クリフ1等兵です」

私は名前と階級を述べた。

「1等兵？」

「テツヤ殿達が居た世界にある軍の階級です。最下位はレオン・ルソーの2等兵です。そして私はその上にあります」

早い話が下っ端、という事だ。

「そうか。君は見事な戦い振りだったね」

敵の肩を撃ったし果敢に攻撃をした、と彼は言ってくれた。

「いいえ。確実に仕留められなかった、という点では駄目です」

狙撃手は1発で相手を仕留めなければならないのに私はそれが出来なかった。

恐らく無意識に狙いを肩にしたのだろう。

頭を狙っていたのに・・・・・・殺したくない、という気持ちが出たのかもしれない。

「しかし、君は勇敢だよ」

「ありがとうございます」

「それからタカミ・テツヤ殿に伝えてくれ」

俺にあんたの持っている技術を仕込んでくれ、と。

「それは・・・・・・」

「俺も君等のようになりたいんだ」

今の戦闘技術だけではああいう奴等とは戦えない。

だから、テツヤ殿が持っている技術を身につけたいとヘン・ロビンソンは言い続けた。

「まぁ、先ずはシュヴァルツフントの面々を倒してからの話だがな」

「分かりました。そう伝えて置きます」

頼むよ、と言ってヘン・ロビンソンはエドリアス大尉の治療を受けた。

部屋を出た私とガリシャは軍曹から今日は休め、と言われたので休む事にしたが先ずはテツヤ殿にヘン・ロビンソンの事を伝えようと思う。

私はガリシャと別れて一人で探す事にした。

テツヤ殿は何処かと城の中を探しているとそれほど離れていない所から声が聞こえてきた。

『申し訳ないが、食事は出来ない』

『どうしてですか？』

片方はテツヤ殿の声だと直ぐに分かった。

鉄が錆ついたようで、酷く低い声だからだ。

何より女神の抱擁の香りが鼻に付くからだ。

もう片方はサラ様の声だと分かった。

綺麗な声でまるで歌を歌っているように聞こえる。

だが、何だか切羽詰まったというか、懇願するような声に聞こえてくる。

そちらに行ってみるとテツヤ殿とサラ様が二人だけで話し合っていた。

「よぉ、ランドルフ」

テツヤ殿は私を見るなり例の悪役の笑みを浮かべてみせた。

どうしてこの人はこんな笑みしか浮かべないのか不明だと思いながら私は歩み寄った。

「何か用か？」

「はい。先ほど名誉戦傷章を貰ったヘン・ロビンソン殿から伝言を

頼まれました」

「伝言？」

「はい。“あんたの技術を俺に教えてくれ”だそうです」

「あいつが？」

テツヤ殿は驚いた表情を浮かべてみせた。

「はい。まぁ、先にヴィルヘルム殿の訓練を終えてから、と言っておりましたが」

「そうか。分かった。あいつがそれを望むなら教えてやる」

「ありがとうございます。あの、所で何を揉めていたんですか？」

話の内容を聞いていれば、食事がどうこうとは聞こえたが。

「ああ・・・この麗しき天上に住む女神はこの俺に食事をしないか、と言って来ているんだ」

テツヤ殿は道化染みた口調で喋り出した。

何でこんな真似をするのかは不明だが、サラ様を見れば明らかに怒っている顔付きだった。

「テツヤ殿。私は、貴方と食事がしたいと述べているのにどうしてそんな風な態度を取るんですか？」

「殺伐とした雰囲気が出てきたからやったんだが、駄目だったか」

失敗した、とテツヤ殿は苦笑しながらこう答えた。

「色々とやる事があるんだ。だから、あんたとの食事は出来ないんだよ」

だったら最初からそう言えば良いのに、何であんな事を言うのか本当に疑問だ。

「では、せめて茶でも一緒に」

「それも無理だ」

テツヤ殿はサラ様の懇願を無情にも切り捨てた。

そして私に行くぞ、と言うと歩き出した。

サラ様はテツヤ殿っ、と叫んだがテツヤ殿は無視して歩き続けた。

「テツヤ殿。何でサラ様にあんな態度を取るんですか？」

私はテツヤ殿に理由を訊ねた。

サラ様の声を聞くと何だか私も悪いように思えてしまう。

「女王と食事をしたらミレーネの手料理が冷めっちまう。それに今は忙しいんだよ」

これからゲンハルト様達を集めて会議を開く、と言った。

「何処でですか？」

「俺の家だ。何ならお前も来るか？」

「良いんですか？」

「あぁ。ついでにオリガも呼べ」

皆で食事をしよう、とテツヤ殿は続けた。

「分かりました」

「じゃあ、ここで別れるぞ」

俺はゲンハルトを迎えに行く、と言いテツヤ殿と別れた。

オリガさんの家に戻るとオリガさんが優しい声で「お帰りなさい」と言ってきた。

何の変哲もない言葉だが、心地よくて本当に生きて帰れたんだと言う気持ちになる。

「ただいま帰りました」

私はオリガさんに帰還を報告し、テツヤ殿と話した事を伝えた。

「それならちょうど良いわ。私もさっきミレーネ姉から誘われたの」

どうやら彼女達は彼女達の方で取り決められていたようだ。

それなら話は早い。

直ぐに家を出てテツヤ殿の家に向かう事にした。

家に向かう途中途中で聖騎士団や獅子頭軍団の方達と会っては先の戦いを褒めてくれた。

そしてオリガさんと一緒の私を見ては冷やかした。

それに私は笑顔で答えテツヤ殿の家へと向かい続けた。

家に着くとミレーネさんとメジュリーヌさん、そして二人に対抗意識を剥き出しにするリーザ中尉が出迎えてくれた。

どうやらテツヤ殿より先に着いたらしい。

私とオリガさんは家に入り、茶を貰いながらテツヤ殿達が来るのを待った。

茶を飲んで待っていると外から声が聞こえてきた。

『貴様まで何で来るのだ!?』

『あんたが一人だと何を仕出かすか分からないからよ』

『私は子供ではない!!』

『立派な子供よ。癇癪持ちのね』

『何だと!!』

『ゲンハルト。抑えろっ』

『女性に乱暴はいけません!!』

『やれやれ。つくづく喧嘩が絶えないな』

『まったくです。ですが、喧嘩するほど仲が良いと言いますしね』

『そうなのですか？我が主』

『そうなんですよ。ガルム』

テツヤ殿達の声だ。

どうやらイザベルさんも一緒だが、喧嘩をしていたらしい。

そしてそれをプロイセン様とワイド中尉が止め、テツヤ殿、ヴィルヘルム元伯爵は二人の様子に呆れ返り、ガルムはテツヤ殿にヴィルヘルム元伯爵の言葉を訊ね、それにレオンが答えた。

大人数でゴチャゴチャしているが、大体こんな所だろうと思う。

やれやれだ。

そんな事を思いながら来るのを待っていると直ぐにドアが開いた。

「ただいま」

テツヤ殿はドアを開けて中に入った。

「お帰りなさい。寂しがり屋さん」

「おぉ、来たか。テツヤよ」

「お帰りなさいませ。テツヤ様」

3人はそれぞれにテツヤ殿の帰宅を迎えた。

続いてゲンハルト様、プロイセン様、イザベルさん、ヴィルヘルム元伯爵、ワイド中尉、レオンが入ってきた。

「ここが、そなたの家か中々の・・・・・・・・・・・・！！」

ゲンハルト様は家の中を見回していたが、ミレーネさんを見るなり言葉を言わなくなった。

唖然としているのが解かる。

それはプロイセン様も同じだった。

どういう事だ？

サラ様と似ているから思わずサラ様だと勘違いしたのかと思うが、そうではないと直ぐに分かった。

二人揃って、まさか・・・・・という信じられないような眼差しを向けているのだから。

あの目は・・・・既に死んでいる者が生きていると知り驚いている眼差しだった。

やがてゲンハルト様の口が動いた。

「・・・・レナ様」

第六十九章：過ぎ去った昔話（前書き）

ここで双子の話を入れます。

元々双子が産まれたら“畜生腹”と有り難くも無い異名を受け取り、不吉という伝承はありませんが敢えて使用させて頂きます。

第六十九章：過ぎ去った昔話

テツヤ殿が住む家の中の空気はどんよりとしていた。

重い空気で息をするのも簡単ではないほどに重くて暗い空気だ。

何でこんな空気なのか？

それはゲンハルト様とプロイセン様が原因を知っている。

ゲンハルト様はミレーネさんを見てこう呟いた。

『・・・・・・レナ様』

レナ・・・サルバーナ王国では余り使用されない名前だ。

余りというか、名前にする者は先ず居ない。

このレナとはただの名前と思うだろうが、サルバーナ王国では“不吉”という意味合いを持つ。

どういう経緯でそういう意味が付いたのかは不明だが、不吉という意味を持つ名前を自分や子に付ける者は先ず居ないだろう。

ゲンハルト様はミレーネさんを見て、レナと言った。

しかも、様付けで、だ。

これは何かある。

それは誰もが確信していた。

テツヤ殿はそれをゲンハルト様に訊ねた。

ゲンハルト様は私たちを見てからこう訊ねた。

『秘密を守れるか？』

これに私たちは頷いた。

それからゲンハルト様はプロイセン様を見てプロイセン様が頷くと重い息を吐いた。

そして話し始めた。

「そこに居られる女性は、・・・・・・・サルバーナ王国第１１代目国王で在らせられたバイバー様のご息女だ」

「という事は・・・・・・・」

サラ様の姉妹、か。

バイバー様はサルバーナ王国の第１１代目国王でサラ様の父君だった方だ。

ガルバー様に比べて戦より政治に関して力を発揮した方で首都を更に発展させた方だと聞いている。

奥方様とも仲が良く家族を愛していたと聞いているが、どういうこ

とだ？

まさか、どこぞの女性に産ませたのか？

「レナ様は、サラ様の双子の姉君だ」

双子・・・・・・・・

文字通り一度に二人産まれた子を指す言葉だ。

だが、双子は何処の国や家庭でも忌み嫌われている。

女性が産める子は一度に一人が大体だと皆は思っている。

それ以上を一度に産むのは動物と同じであり“畜生腹”などと有り難くも無い異名を与えられる。

そして双子は前世で心中した男女の生まれ変わりという言い伝えがあり、不吉な存在として忌み嫌われている。

特に貴族や王族ともなれば世継ぎである子が二人も一気に産まれたともなれば不吉と思うのは難しくない。

何より同時に産まれたとは言え、どちらが先に産声を上げたかによって世継ぎの継承順位が違くなるから要らぬ争い事の原因とも考えられる。

ゲンハルト様はここで話を区切った。

「バイバー殿下は・・・・・・貴方様を見るなり、不吉な子と言

いました」

サラ様とは違い、銀髪に紫の瞳。

これは両親のどちらとも似ていない。

何より紫は不吉の色。

その色を両の眼にしている事から不吉な子・・・・『レナ』と断言したらしい。

「そしてプロイセンを呼び直ぐに手討ちにしろと仰いました」

それを聞いていたミレーネさんは眉ひとつ動かさずにただずっと無感情で居た。

それが逆に哀しかった。

普通ならこんな話を聞けば、嘔吐したくなるのに無感情で聞いているのだから。

ワイド中尉やリーザ中尉は青白い顔だったが、ヴィルヘルム元伯爵とガルムは平然としていた。

私とレオンもワイド中尉達と同じく顔を青くしている。

「私は貴方を殺せ、と最初に言われた時は理解できませんでした」

プロイセン様は沈痛な表情を浮かべてミレーネさんに言った。

「こんなまだ産まれて間もない娘を・・・・・・殺せ、などと命令する陛下の考えが理解できませんでした」

そして貴方を産んだ母君・・・バイバー様の后様でさえ殺せ、と言った事が理解できなかったらしい。

腹を痛めて産んだ我が子を殺せ、と命令するのだから理解できないと言うのも頷ける。

「王の命令には絶対に従わなくてはならない。だが、結局は殺す事も出来ずに捨てたんだろ？」

テツヤ殿が煙草を吸いながら二人に訊ねた。

テツヤ殿も平然としており平坦な声だった。

「・・・・・あぁ。私とプロイセンで協力して人知れず城の外に行き、森に置いて行った」

如何に王の命令で赤子を殺せなどと命令されても簡単にできる訳ではない。

何より二人ともミレーネさんが余り憐れで出来なかったと言い続けた。

「やれやれ・・・ここもこんな馬鹿げた伝承があるのか」

テツヤ殿は煙草を銜えながら呟いた。

「あの、テツヤ殿の世界でもあったんですか？」

私はテツヤ殿に訊ねた。

「あぁ。何処にそんな根拠があるのか知りたい程に言い伝えられていた。最近でもこんな事があった」

「どんな事です？」

「ある王には男だけが居ると言われていたが、その４人の内の子の一人に双子の妹が居たんだよ。あくまで噂の類いだがな」

だが、実際にそれと思われる人物が居たと言う。

その人物は双子という事もあり産まれて直ぐに修道院に入れられて外部との接触はさせられずに一生を過ごしたらしい。

「惨い話じゃ。まったく・・・・これだから人間は嫌いじゃ」

メジュリーヌさんは吐き捨てるように言い放った。

「産まれた我が子を根拠もない言い伝えで殺すなど言語道断じゃ」

主らが崇めている神とやらは、そんな事を言ったのか？

若しくはそれをやれ、と言ったのか？

とメジュリーヌさんは立て続けに言い捲った。

「その王も王じゃ。如何に王とは言え、そのような所業を許されると思っていたのか？」

「・・・・・・思っておられた」

ゲンハルト様は沈黙してから答えた。

「私とプロイセンが帰って・・・“処理”したと言ったら、バイバー様はこう言いなされた」

『よくやった。これで忌まわしき不吉な子は居なくなり王国は末長く安泰だ。神も私の行いをお喜びになっているだろう』

そしてサラ様だけを唯一の娘として育てたらしい。

二人には、いやそれに関わった人間には厳重な緘口令が敷かれたらしい。

そして闇へと葬られたようだ。

「私たちが貴方様にした所業は許される事ではありません」

ゲンハルト様とプロイセン様は土下座してミレーネさんに謝罪した。

「・・・知らないわ」

ミレーネさんはポツリと漏らした。

「私の名はミレーネ・ルシアン。両親は娼婦街を仕切っていた者よ。そんなレナなんて言う名前は知らないわ」

「で、ですが・・・・・・・・」

「私は知らない、と言ったのよ?それにそれが事実だとして何だと言うの?今の私には関係ないわ」

今の私はミレーネ・ルシアンであり元娼婦で今はタカミ・テツヤという一人の男の傍に居る女性。

ただそれだけの女性だ。

断じて現国王の姉ではない。

とミレーネさんは言い続けた。

「そうだな。お前はミレーネ・ルシアン・・・・気高き夜の女王だ。断じて不吉なんて糞みたいな名前の女じゃない」

テツヤ殿は煙草を吸いながらミレーネさんに優しい声で語り掛けた。

「それで、お前等としてはどうするんだ?」

テツヤ殿は二人に訊いた。

だが、もし変な真似をしようものなら即座に二人を始末する旨だと私には理解できた。

「・・・どうもしない」

ゲンハルト様は静かに言った。

「私もプロイセンも何もしない。この方は先ほどご自分の名をミレ

ーネと断じた。この方はレナ様ではない。あの方は・・・・もう居ないのだ」

「・・・あぁ。レナ様は居ない・・・ここに居るのはミレーネ様だ」

「・・・・ありがとう」

ミレーネさんは静かに二人に礼を述べた。

「さぁ、こんな辛気臭い話は止めて食事にしましょ」

ミレーネさんは明るい声でポンポンと手を叩いた。

「そうだな。こんな空気じゃ腹を壊す」

テツヤ殿も同意するように言うと席に腰を降ろした。

それにヴィルヘルム元伯爵とガルムも続いた。

私たちは二人のやり取りに唖然としたが、メジュリーヌさんがこう言ってきた。

「ミレーネは“過ぎ去った昔話”だと既に自己完結させているのじゃ」

第七十章：死の十字路（前書き）

ここでブレイズさんからアドバイスされた戦術を載せたいと思います。

第七十章：死の十字路

私たちは食事を終えて皆で煙草を蒸かし合っていた。

あれから重い雰囲気をテツヤ殿とミレーネさんが壊して食事をしたのだが、ゲンハルト様は未だにミレーネさんに懺悔の気持ちを持っていた。

まぁ、無くなる方が難しいのだが。

しかし、二人はそれを止めろ、と言ったがゲンハルト様は止められなかった。

そんなゲンハルト様をイザベルさんが「あんたにも良心があるのね」と言い何時もと違い優しく慰めた。

何時もなら引っ叩いたりするのだが今回は特別と言った所か。

ゲンハルト様もイザベルさんに慰められて幾分か治まった。

プロイセン様はリーザ中尉が慰めて、何とか事が治まったように思える。

そして食事をして煙草を吸いながら私たちは会議を開いた。

「先ずイーグルが偵察隊を倒した事で敵に俺らの存在を知られた訳だ」

テツヤ殿は煙草を灰皿に捨てながら断言した。

「だが、それはそなたとしては想定内の話だろ？」

ゲンハルト様が煙草を吸いながら訊ねてきた。

「勿論だ。以前は奴等が俺らを誘き寄せたが、今度は逆だ」

俺らが奴等を誘き寄せる。

これによって地形などでは有利に立てる。

「私の考えではリカルド様は直ぐに軍を向かわせようとはしない筈だ」

先ず雪が降った事により装備を変えなくてはならない事が上げられる。

「だが、彼等の動きからして恐らく短時間で済ませるだろう」

プロイセン様はゲンハルト様の考えに付け足すように呟いた。

「どの程度だと思う？」

テツヤ殿がそれに訊ねた。

「短くて７日から１０日。長くても２０日間以内には出来るだろう」

恐らく向こうもある程度の事は予測していた可能性もあるし、臨機応変に対応するだろうとプロイセン様は言った。

「確かにそうですね。リカルド王子なら先王みたいに頑なに突撃命令しか出来ないような指揮官じゃない」

ヴィルヘルム元伯爵が腕を組んだまま頷いた。

「我が主。いっそのこと我々から仕掛けてはどうですか？」

ガルムがテツヤ殿に膝を着いた状態で進言した。

「今なら奴等もまともに対処出来ない筈です」

「いや駄目だ。果敢な攻撃精神も必要だが、この場合は相手が動くのを待つのが良い」

わざわざ動いて自分達に有利な状況を壊す必要はない、とテツヤ殿は言った。

「確かにそうだ。果敢な攻撃も大事だが今の状況と地形を考えれば迎え撃つ方が利に適っている」

ワイド中尉がこれまた煙草を吸いながら頷いた。

「では先ず奴等をどう迎えるか改めて考えるぞ」

テツヤ殿は何本目かの煙草を灰皿に捨てて言い、それに私たちは頷いた。

この地形から考えれば少人数を幾つかの場所に配置して一度ならず二度、三度としつこい程に奇襲などをして相手を疲労させる。

そいて孤立させて壊滅させていくのが望ましい。

恐らく敵は空からワイバーンで攻撃し、陸からはフォース・リーコンと槍兵、弓兵、鉄鎚兵、矛兵などで構成された部隊で進軍してくる事だろう。

騎兵、戦象、戦車は地形からして使い物にならないから首都に残し私たちが来たら迎撃する構えを取ること思われる。

「ここで戦うとなれば平地とは違って“色”が重要になる」

派手な色ほど雪のように白い場所では嫌でも目立つ。

フォース・リーコンが良い例だ。

雪が降っていなければ目立たなかったが、雪が降った事で目立った。

だが、彼等の失敗をリカルド様は気付き改める事だろう。

「今頃は俺らと同じように白い服を用意しているだろうな」

テツヤ殿はそう言って、要塞に籠り敵を迎え撃つに辺り外に出す兵たちと中に居る兵たちを別けると言った。

「要塞の奴らには“八の末広がりを更に広げた形”にさせる」

「それがどういう意味を成すんですか？」

私はテツヤ殿に訊ねた。

「弾丸は回転するが、真っ直ぐに飛ぶだろ？」

テツヤ殿は私に弾丸の事を言ってきた。

私は八の末広がりを更に広げた形の状態から射撃したら、どうなるか考えてみた。

弾丸は真っ直ぐに飛ぶ。

横一列に配列するよりは逆に八の末広がりにしたら・・・・・・・・・・・・

「“X”になりますね」

「あ、そうかっ。つまり八の末広がりに陣を構えさせて撃てばXになって敵は身動きが取れなくなるんだ！！」

レオンが私に続いて言葉を発した。

つまり、八の末広がりに兵を配置してやれば、こうなる。

□（リブリーブス城）

1　6

2　7

3　敵　8

4　敵　9

5　敵　10

こういう風に敵を迎え撃てば弾は敵に当たり倒す事が可能だ。

更に地雷や迫撃砲などもあれば効果は倍増で敵に大打撃を与えられる筈だ。

「その通り。二人とも賢いな」

テツヤ殿は笑みを浮かべて言ってくれた。

ここまで真正面から褒められた事はそんなに無い。

だから、無性に嬉しくて私とレオンは拳をぶつけ合い笑い合った。

「その戦術は何と言うのだ？」

プロイセン様が訊ねた。

「Ｃｒｏｓｓｒｏａｄｓ　ｏｆ　ｄｅａｔｈ。俺の国の言葉で言えば死の十字路だ」

死の十字路・・・・怖い名前だ。

テツヤ殿の言う通り弾丸というのは右や左に飛んだりしない。

真っ直ぐに飛ぶ。

これを利用するのだ。

八の末広がり状の布陣から発砲すると“×”を描くように弾丸が飛来して敵には逃げ場がなくなってしまうという寸法だ。

更に迫撃砲や地雷も付け加えれば効果絶大と言える。

「ランドルフ。お前としてはどう思う？」

「良い戦術だと思います。しかし、この戦術は防御側が出来る戦術ですね。攻撃側には向きません」

「その通りだ。あくまでこれは迎え撃つ側としての利点を利用して編み出された戦術だからな」

だから、これを攻撃側でやっても意味は成さない。

これをテツヤ殿は知っていたからガルムの進言を退けたのだろう。

「そして奴等には問題がある」

「兵站ですね」

私の言葉にテツヤ殿は頷いた。

「その通りだ。兵站つまり食料だ」

腹が減っては戦が出来ぬ、という言葉がテツヤ殿の国にはあるらしいがその通りだ。

食料で腹を満たしてこそ兵たちは戦えるのだ。

その食料が無ければ空腹の状況で戦わなければならない。

季節は冬だしもう雪も積っている。

このため蛇たちは冬眠しているし、大半の動物も寝床に入る事だろう。

そしてここ等辺には民家などは無いから首都から持てる分だけの食料が彼等の命綱となる。

いや、後方から食料などは輸送されるだろうが、その後方を遮断してしまえば降伏するか全滅するか若しくは退却するかのどれかしか道は残されていない。

「相変わらずエゲツナイ事ばかり考える男だな」

ゲンハルト様は煙草を銜えながらテツヤ殿を見た。

「それを言うならランドルフとレオンも同じだ」

俺が言った事を理解した。

即ちその才があると言うことだ。

これは・・・・・・・・・・・・

「余り嬉しくないです」

「同じく」

私とレオンは出来るならそんな才能は無い方が良いと口を揃えて言った。

「何を言う。主らは才能を持っていると言われたのだぞ?それをど

うして嫌がる」

メジュリーヌさんがさも自分が貶されたように怒り私とレオンを問い質してきた。

「いえ、だって・・・・・・ね？」

「うん。正直・・・・・・・・」

「青臭いのう。女を抱いて少しは成長したと思っていたが、まだまだ尻の青い餓鬼か」

メジュリーヌさんは外見からは思えないほどの言葉を吐いた。

「そう言うなよ。こいつ等の意見も尤もだ」

「主がそう言うなら妾としては構わん」

メジュリーヌさんはテツヤ殿の言葉を聞くと素直に引き下がった。

そして会議は続き、終わったのは深夜になった頃だ。

私たちはテツヤ殿の家を後にしそれぞれの家へと帰る事にした。

帰り道、オリガさんは私と並び歩いている。

「ミレーネ姉が、女王の姉とは驚いたわ」

オリガさんは前を向いたまま独り言のように呟いた。

「私もです。あの、オリガさんとしてはどう思いますか？」

「ハッキリ言って国王と后に馬鹿？と言いたくなるし殴りたいわ」

そんな根拠の無い理由で我が子を殺そうとしたのだからやりたくもなる。

「だけど、ミレーネ姉が過去の事だと割り切ったんだから何もしないわ」

「ミレーネさんは強いですね」

普通なら気が動転したりするのにあそこまで冷静で居られるのだから。

「昔からそうなのよ。自分のことなのに客観的に見るの」

「テツヤ殿も同じです。自分の事を何処か他人事のように見るのは・・・・・」

「そうなの？そう言えば、テツヤさんに両親は？」

「居ません。捨て子だったんです」

私はテツヤ殿の誕生から歩んできた道を話した。

「そう。あの人も暗い過去があるのね」

オリガさんは傭兵になる人物は何かしら暗い過去・・・人には言えない、または言いたくない過去を持っていると言った。

「私が相手をした男もそうだったわ。自分の過去を極端に話さないのわ」

それでいて自分の事を他人事のように見えると続けて言い、こうも言った。

「恐らく何処かで諦めているのね」

何かしらの挫折を味わっているからこそ自分をそこまで客観的に見えるのだ、とオリガさんは言った。

ある意味では良い事ではあるが・・・・・・・・哀しいことだ。

そんな感傷を持ちながら私とオリガさんは家へと帰って行った。

第七十一章：女王からの呼び出し

翌日、私とテツヤ殿は一緒に城へと向かっていた。

何故か、と言えば女王から呼び出しを受けたからだ。

昨夜、女王であるサラ様はテツヤ殿を食事に誘ったが敢え無く断られた。

だが、今日なら大丈夫だろうと思ったのだろうか？

私の方も王女であるエリーナ様から呼び出しを受けて向かっている。

「良いんですかね？こんな時に食事するなんて」

現在は戦時中で、こんな事をしていて良いのだろうか？と疑問符が頭に浮かぶ。

「別に戦いが起きている訳じゃない。俺らも敵が来ない時はのんびりと構えていたものだ」

寧ろ常にピリピリした神経をさせている方が疲れて役に立たない。

だから、休める時に休むのが良いんだとテツヤ殿は言った。

そして城に到着した私たちはサラ様達の元へ行く前にヴィルヘルム元伯爵の方へと足を運んだ。

恐らくヘン・ロビンソンの事は親衛騎士団にも知られている筈。

一人だけ偵察に行ったという事実を聞いて果たして奴等がどう出るか、という事をテツヤ殿は知りたいようだ。

「私の考えでは別に大して何もしないと思います」

我先にと敵を目の前に逃げ出した奴らだ。

そんな奴等が果たして簡単に変われるのか疑問だ。

いや、奴等に変わる気が無いというのが私の考えだった。

「俺もそう思うが、目で見なければ分からない」

確かにテツヤ殿の言葉は一理ある。

行けば奴等の姿が見えるのだから、行って確かめるべきだ。

ただ、思っているだけでは意味が無い。

それにヘン・ロビンソンを始め数人、本当に片手で数える程度の者たちは骨があると聞いている。

となれば、その者たちは変わった・・・いや、更に精進しているかもしれない。

テツヤ殿と共に行ってみると、私は我が目を疑った。

目の前ではシュヴァルツフント達とまともに戦っているのだ。

誰かと言えば、親衛騎士団だ。

敵前を逃亡した挙句に根性の欠片も無い親衛騎士団がだ！！

これは夢だ、と思いたくなるような光景だった。

失礼かもしれないが、本当にそうなのだ。

「ほぉう。随分と頑張っているな」

「あぁ。俺のお陰で頑張ってるんだぜ？タカミ・テツヤ殿」

聞き慣れた声がして振り返れば、そこにはヘン・ロビンソンが立っていた。

包帯を巻き松葉杖をしていた彼の胸元には名誉戦傷章が紫色に輝いていた。

「よぉ、大丈夫か？」

テツヤ殿はヘン・ロビンソンを見ながら傷の具合を訊ねた。

「あぁ。まぁ、完全に治るのはまだ先だが、それでも身体に支障はない」

だから、まだ戦えると彼は続けた。

「そうか。それはそうと自分のお陰と言ったが、どういうことだ？」

「俺が一人でランドルフ君達に付いて行って傷を負っただろ？そし

てあんたから勲章を貰った」

その事が奴等に微かに、それこそ滓位しか残っていなかった何かを奮い立たせたらしい。

「それでああいう状況になった訳か」

「あぁ。流石に身内一人がこんな状況になったんだ。嫌でもそうなるさ」

まだ俺らも捨てたもんじゃないだろ？と彼は訊ねてきた。

「まぁな。だが、もう少し早く出して欲しかったと思うぜ」

「辛口な野郎だ。それはそうとランドルフ君から何か言われなかったか？」

「言われた。俺の技術を教えて欲しいんだろ？」

「あぁ。ランドルフ君達の戦いを見ていて、今の力だけではあいつらには勝てないと痛感させられた」

彼等は遠い距離でも攻撃できる武器を備えているし、地形に馴染む服を纏っていた。

雪が無ければ自分は気付かなかった、と彼は言いテツヤ殿に教えてくれと頼んできた。

「死ぬほど辛いが・・・・生き残れる技術を教えてやるよ」

「素直に教えてやると言ってくれよ」

回りくどいと愚痴を零したヘン・ロビンソンに私も同意する。

「生憎と地なんだ」

「そういう性格だから団長と要らぬ喧嘩が起こるんだよ」

「まぁ、気をつけておく」

「そうしろ。あれから団長はお前を何時か斬ると毎日のように言っているらしいぜ？」

「素直に負けを認められないのか？あいつは」

「そういう方なのだ。父も叔父も優秀な騎士として名を馳せている。だから、自分も何時かはそうなりたいと思っていたのさ」

そして運が悪い・・・下種女としては名を轟かせる好機なのだが、戦が起きた。

ここで名を馳せるチャンスな訳だが、生憎と運はあの女に向いていない。

寧ろそっぽを向かれた上に平手打ちを喰らわされたと言える。

身元不明の傭兵でありながら前線指揮官に任命されたテツヤ殿。

そんなあんたを目の敵にしているとヘン・ロビンソンは言った。

「親父と叔父に才能はあるようだが、あの女に素質があるとは思えないな。なぁ？ランドルフ」

「そうですね」

私はハッキリと頷いた。

「いや、ちゃんと素質はあるんだ」

「本当かよ？」

「あぁ。幼少のころから剣術と馬術は優秀だし父君の教えも忠実にこなしていたと聞いている」

「それからどうなったんだ？」

「母君が病床に臥せってからは、いやそれ以前からどう言う訳か父君とギクシャクしたらしい」

そして父君が戦死してから何かと父君の教えに反するようになったと聞いた。

更に言えば、親衛騎士団に入隊してからも何か立て続けにあったと話した。

「俺はまだその頃は別の仕事をしていたんだが、噂で何かあると聞いている」

「お前さんの言う通り何かあるな」

テツヤ殿の言葉に私は頷いた。

一体何があったのかは不明だが、何かあるのは確かだろう。

ヘン・ロビンソンも頷いたが、直ぐに煙草をくれと言ってきた。

「ほれ」

テツヤ殿は女神の抱擁を彼の口に入れて、火を点けてやった。

彼は美味しそうに吸いながらテツヤ殿の事を詳しく聞きたいと言ってきた。

「どんなことだ?」

「あんたが歩んできた道のりを教えてくれ。あんたは俺の師になるんだ。少しくらいはあんたを知りたいんだよ」

あんたの口から、と彼は言った。

「女みたいに言うな。気色悪い」

「本当に毒を吐くな。お前は」

私もそう思いながら彼を近くのベンチに腰を降ろさせた。

「では、俺が最初の軍隊に入ってから話すか」

「あぁ。確か、陸上自衛隊という所だったんだろ?」

「あぁ。自衛・・・つまり専守防衛が原則だ」

相手が攻撃するまでこちらかは手を出してはいけないという事だ。

「だから、味方が攻撃されるのをただ指を銜えて見てろ、ということだ」

とてもじゃないが我慢できる物じゃない、とテツヤ殿は言った。

「酷い話だ。味方を助けずに殺されるのを見ていろなんて俺には出来ないぜ」

「それはあんたの行動を聞けば分かる。あんたは自分より他人を優先する」

その傷が証拠だ、とテツヤ殿は指摘した。

「俺より若い子が戦っている。それなのに俺は見ているだけなんて、騎士として・・・いや、男として我慢できる訳ないだろ？」

「そうだな・・・・・・」

テツヤ殿は静かに頷くと煙草に火を点けて、続きを話した。

「自衛隊に入った経緯はそれ位しか俺が出来る仕事が無かった事と強くなりたかったのが理由だ」

第一空挺団に配属されてからは磨きを掛けてきたが、自衛隊では限界を感じたのだろう。

フランス外人部隊に入隊したと話す。

「その外人部隊とはどういう物なんだ?」

「フランスという国はある戦争で自国民の血を流し過ぎた」

それゆえ民から批難を浴びたらしい。

そのため自国民ではない者たちを金で雇い始めたらしい。

「つまり傭兵か?」

「最初はそうだった。だが、今は外人部隊はフランスの正規軍として扱われている」

ただし、やる事は“フランス国民が犠牲になるのをフランス国民とその世論が許さないダーティな任務”だと言う。

要するに汚れ仕事だ。

だが、そんな部隊だがフランス人だけで構成された隊よりも勇敢で誇り高い隊だと説明した。

「こんな逸話がある」

ある戦争で伝令の兵が将軍に情報を伝えたらしい。

全身を血で染め、手傷を負っていたらしく情報を聞き終えた将軍はその兵に休めと言ったらしいが

『将軍、私はもう死んでいます』
と言い残して絶命したらしい。
「つまり、伝令を将軍に伝えるまで生きていたというのか？」
「あぁ。信じられない話だがな」
だが、それだけ外人部隊の勇敢さと誇り高さを知る事が出来る。
「俺はそこで空挺団と同じ空挺部隊に配属された」
そこは自衛隊より更に厳しいらしい。
「そこで学んだ事は仲間を見捨てない事だ」
外人部隊は他国の者達で構成されているため自然と仲間意識が強くなる。
そのため仲間意識を強くし、何があろうと仲間を見捨てるなと教えているようだ。
「なるほどな。で、そこから傭兵になったと言うことか？」
「あぁ。とまぁ、こんな所だが良いか？」
「あぁ。もう少し訊きたいが、そろそろ帰らないと司教様に叱られる」
「そうか。まぁ、急がず傷の治療に専念しろ。まだ宴は始まったば

かりだ」

まだまだ続く。

とテツヤ殿は言い、ヘン・ロビンソンはこう言い返した。

「女を待たせるのは性に合わないんだよ。それにお前らだけに良い子は取らせないぜ？」

「安心しろ。お前さんの方が色男だ」

ヘン・ロビンソンは笑みを浮かべて立ち去った。

「さて、俺らも行くか。あいつにも言われたが、女を待たせるのは性に合わん」

言われて思い出したが、サラ様達を待たせている途中だった。

私は頷いて少し速く歩いてサラ様達の所へ急いだ。

第七十二章：良からぬ噂

私とテツヤ殿はサラ様とエリーナ様が居る部屋の前で足を止めた。

先ほども言ったと思うが、サラ様とエリーナ様と茶を飲むためだ。

私としては平常心で居られるか分からない。

テツヤ様と共に暮らすミレーネさん・・・いや、ミレーネ様はサラ様の双子の姉。

つまり王族の血を受け継いでいる方だ。

それが娼婦とは・・・・・・・世の中というのは非情な物だと思うし、何も知らずにすくすくと育ったサラ様が・・・憎いとさえ思えてしまう。

まだ心の準備が出来ていないから、どうなるか私自身分からない。

「ランドルフ。分かっていると思うが、ミレーネの事は口に出すなよ？」

テツヤ殿は私に小声で言ってきた。

「分かっております」

だが、自信が無いと答えた。

「何も考えるな。何時も通りやれ。あの二人は何も知らない。だが、

俺らは知っている」

それを敢えて言う必要は無いし答える必要もない。

死ぬまで私たちの腹に入れておけば良いのだ。

「・・・分かりました」

「そうしろ。まぁ、あの二人の事だ。酷な言い方だが・・・・・・・・人を疑うことを知らないだろ」

「確かに・・・・・・」

「だろ?だから、何時も通りやれ。まぁ、俺の判断で頃合いを見計らって逃げるがな」

三十六計逃げろ、と言う言葉がある。

もしもの時は逃げるに限る。

それに私は頷きテツヤ殿は重厚な扉を目の前に軽く呼吸を置いてからドアを叩いた。

『どなた?』

ドア越しに綺麗な・・・ソプラノの声が帰ってきた。

「鷹見徹夜だ。女王、約束通り来たんだ。開けてくれ」

テツヤ殿は何時もの口調で名乗った。

するとドアが静かに開いた。

サラ様がドアから出てきて、テツヤ殿を上目遣いで見てきた。

「どうぞ」

サラ様は自らドアを開き、私とテツヤ殿を中に入れてくれた。

中に入るとエリーナ様も一緒で、私を見るなり花が満開したような笑顔で私を見つめてきた。

「いらっしゃい。ランドルフ」

何処か嬉しそうな声を出すエリーナ様。

「今日は何か用か？」

テツヤ殿は何時も通り壁に背を預けながらサラ様に質問した。

「少し茶でも飲みたいと思いました」

今なら大丈夫でしょ？と訊ねるサラ様にテツヤ殿は「まぁな」と言い頷いた。

「どうぞ」

サラ様は私とテツヤ殿を中に入れて、椅子に勧めたが私とテツヤ殿は断り壁に背を預けある程度の距離を保った。

テツヤ殿の場合は習慣だろうが、私の場合は二人に近付いていると気が気でないのが理由だ。

二人はどうして壁に背を預けるのか、と訊いてきたが声を揃えて「習慣」と口裏を合わせて納得させた。

二人は仕方無いとばかりに諦めた。

そしてサラ様が手を叩くと直ぐに使用人が現れて４人分の茶を淹れてくれた。

それが終わると直ぐに退室して４人だけとなった。

「テツヤ殿とこうして茶を飲むのは初めてですね？」

サラ様はテツヤ殿の近くに腰を降ろし茶を飲むのは初めてだと言った。

数回はあるが誰かしら・・・言い方が悪いが余計な人物がいた。

私は余計な人物かと言えば違う。

エリーナ様直々に呼ばれたのだから。

「そうだな」

サラ様の言葉に対してテツヤ殿はぶっきら棒に答えて茶を飲んだ。

私の方はエリーナ様と近い距離で向かい合っていた。

「ランドルフ。傷の具合はどうですか？」

「もう大丈夫です。テツヤ殿から渡された物もありますから」

私は当たり前のように言ったが、エリーナ様は何処か膨れた顔をした。

何でそんな顔をするんだ？と思うが理由はまったく分からない。

「ランドルフ。少しは戦以外にも女の事に向けろ」

テツヤ殿は私に呆れながらも助言してくれた。

だが、私には皆目見当も付かないから哀しいことだ。

「所で女王。一つ質問だ」

テツヤ殿が茶を飲み干してテーブルに置くとサラ様に質問があると告げた。

「何でしょうか？」

「親衛騎士団のことだ」

「親衛騎士団がどうかなさいましたか？」

「前の親衛騎士団長であったフィーナの父親はどんな男だった？」

「ロックスの事ですか？」

「ロックスと言うのか？あの女の親父は」

「はい。ロックス・マレルと言います。彼の祖父は獅子頭軍団に所属しておりましたが、その才能から私の父に認められ親衛騎士団の団長に任命されました」

「つまり親子三代続きで親衛騎士団の団長になった訳か」

テツヤ殿は確認するように訊ねた。

この国を始め、親がその地位または職に就いていれば子は必然的にその地位や爵位を継承する事になっている。

要は世襲雇用制だ。

これは高い地位や力のある職位に就いている者ならば願ってもない雇用制度ではある。

だが、それ以外の者から言わせれば自分の人生を産まれた時から決められた人生という理不尽な物と忌み嫌う。

「はい。それがどうかなさいましたか？」

「いいや。それでそのロックスという男はどんな奴だ？」

「ガルバーに直接進言できる男でしたし兵たちの訓練などにも力を注ぎました」

その弟君、つまり下種女の叔父に当たる方も騎士だとサラ様は付け加えた。

「弟の方も親衛騎士団だったのか？」

「いえ。弟の方はロックスに比べると明らかに劣っておりましたし、自身もそれを認めておりました」

そして兄弟で親衛騎士団に入隊する事を良しとせず若い頃は修行に出ていたと言う。

地方を始め他国にも足を運び勉強し腕を磨いた後は獅子頭軍団に入隊してからは親衛騎士団の長である兄とは距離を置いたと言う。

「なるほど。それで親父の人格はどうだ？」

「プロイセンと同じく兵たちには敬愛されておりましたし、貴族の覚えも良かったです」

更に付け加えるなら淑女たちからも求愛されていたというから大した人物だ。

およそあんな下種女の父親とは思えない非の打ちどころが無い人物と言えるだろう。

「まるで画に描いた様な騎士だな」

「えぇ。私も彼には色々と助けてもらいました」

そんなテツヤ殿と言う通り“完璧”とも言える人物から一体どうやったら、あんな出来そこないが産まれるのか知りたい所だ。

「それで、フィーナに対しての教育はどうだ？」

「ロックスは・・・正直な話ですが、フィーナが男として産まれた方が良いと漏らしておりました」

テツヤ殿は目を細めて「やはりな」と言った。

だが、それに気付いたのは私だけで二人は気付かなかった。

私はここでテツヤ殿が、やはりという目で言った事について考えてみた。

騎士や軍人の者の家系に産まれて来る子・・・即ち跡取りは男女のどちらが良いと問うならば男子だろう。

男なら騎士や軍人の跡取りとして申し分ないという単純明快で根拠の無い理由である。

しかし、逆に女性が産まれた場合はどうだ？

プロイセン様の娘であるリーザ様は父親であるプロイセン様の柔軟な考えから女でも跡取りとして問題は無かったように思える。

逆にミーシャ大尉は女でありながらも跡取りとして男として育てられたと聞いている。

となれば下種女の場合もまた、そんな感じではないだろうか？と推測した。

「それで次の子を奥方に産ませようとしたか？」

テツヤ殿は次なる質問をサラ様に浴びせた。

かなり直球だが、サラ様は物ともせずに答え始めた。

「いえ、プロイセンがリーザを跡取りとして問題ないと考えて育てたのを知りフィーナもそうしようと思った様です」

「だが、その男には弟が居る。なら、その弟を逆に当主に任命した方が良いと周囲の誰かしらは言わなかったのか？」

確かにテツヤ殿の指摘の通りだ。

現当主に弟などが居るなら逆に弟を当主に迎えても良いかもしれない。

その弟が結婚して産まれたのが男子ならその子を跡取りにした方が良い筈だ。

「それは弟自身が謝辞しました」

自分はあくまで弟であり兄に劣る身である。

何より兄の子を蔑ろにして自分が当主になるのは後の世に要らぬ厄介事を残す可能性が高い。

と言ったらしい。

「良い考えだな。それで結局はフィーナが当主になったということか」

「はい。フィーナを跡取りとして育てました」

幼い頃から実戦向けの剣術と馬術を教えたらしい。

「ですが、ロックスはフィーナが１５歳の時に戦死しました」

奥方もその前から体調を崩していたため後を追う様にして亡くなったらしい。

「それから叔父が後継人となった、か」

「はい。フィーナはロックスより寧ろ叔父の方に懐いておりました」

ロックス様が本当の父親だが、寧ろ師弟関係の方が正しいらしい。

逆にその叔父の方が下種女とは本当の親子に見えたと言う。

「更に言えば、ガルバーの戦で立て続けに家に居ないロックスより叔父の方にロックスの妻も懇意にしておりました」

まぁ、確かに強ち責められる事ではない。

毎日のように戦や仕事で家を出る夫よりも、身近でそのような人物がいるのなら懇意にするのは当たり前だ。

「それで夫婦仲に亀裂が入ったとかは無いのか？」

「特にそのような話は聞いておりませんが・・・ただ、少し噂なら聞いております」

「どんな噂だ？」

「本の取るに足らない些細な噂ですが・・・・・・」

「良いから話してくれ」

どう言う訳か有無を言わさない態度を示すテツヤ殿にサラ様は幾分か驚きながら話し始めた。

ロックス様と弟であるヴィールング様は兄の妻であるローラ様を愛していた。

またローラ様もヴィールング様を愛しており相思相愛の仲であった。

結婚後もそれは変わらずに夫が戦で留守の間に愛を育み産まれたのが・・・・・・・・・・・・

「フィーナ、という事か」

「はい。ですが先ほども言った通り根拠の無いただ噂です。ですから、ロックスも気にしておりませんでした」

「フィーナの方はどうなんだ？」

「フィーナも気にしておりませんでした」

テツヤ殿は目を細めたまま、何かを考えていた。

もし、これが本当ならば所謂・・・横恋慕・・・いや、この言い

方は違うな。

本当に愛し合っていたが結婚できなかった。

恐らくヴィールング様の方がロックス様の奥方と恋に落ちたのだろう。

だが、親がロックス様の方が兄であり親衛騎士団の長という事も考えて奥方の意思とは関係なく嫁がせたのだろう。

しかし、ヴィールング様も奥方様も諦め切れずに忍んで会う・・・・忍び愛を続けていた。

そして産まれたのが下種女という所か？

「騎士道物語に出て来そうなロマンチックな話だが、傍から見れば格好の攻撃手段だな」

女であるということ。

これ自体でも軍や騎士の間、いやそれ以外の職でもそうだが軽んじられる。

そして女が上司で先ほどの事実とも言えない噂話の類いだろうがそんな噂がある。

相手からすれば格好の攻撃方法だ。

特にロックス様は画に描いた様な完璧な騎士というから色々と妬まれたり怨まれる事は多かっただろう。

それを考えれば、こんな手段で攻撃しても可笑しくない。

こんな姑息な手段は俺でも使わないとテツヤ殿は言った。

テツヤ殿でさえこんな手は使いたくないと言うのだからエゲツナイにも程がある。

「あんたは先ほどフィーナは気にしていないと言ったが、周りはどうなんだ？」

屋敷に仕える者たちから親類縁者、そして職場の上司から同僚などなど。

「・・・正直な話を申し上げれば、その噂を半ば信じておりました」

そして下種女が女であると言う事もありよくその噂を使って詰っていたと話すサラ様にテツヤ殿は鼻で嗤った。

「だろうな。それから親衛騎士団では過去の戦術を研究したりする事と他の組織と連携する事も禁止しているようだが、これはあんたらの圧力か？」

親衛騎士団はあくまでも王族とその縁者を護衛するのが役目であり前線に立つ事は極めて稀だ。

先王の場合が本当に稀な状態と言えるだろう。

そして一度は壊滅した為に新しく作られた親衛騎士団。

ここで再び考えてみる。

この国の上層部達もといゲンハルト様達は先の戦で国庫が無くなっている事に対して憤りを覚えていた。

だから、軍の予算も削り出しているのだ。

その矛先は先王に付き従っていた親衛騎士団も例外ではない筈だ。

新しく創設された親衛騎士団は実力よりも家柄と容姿を重んじていると聞いている。

となれば、ゲンハルト様を始めとした上層部から政治的な圧力が与えられたという考えが妥当だろう。

もっと冷静に・・・それこそ氷のように冷たい客観的な姿勢でもっと考えてみよう。

下種女が父君に劣等感を感じていたのは強ち間違いではあるまい。

しかし、それだけで全員にそれを禁じるのは難しい理由だ。

となればその上層部の圧力で全員に禁じたと言うのが妥当な線か。

女であり、尚且つそんな噂もあると考えれば屈するしかなかったと考えられる。

それを思えば些か同情できる範疇ではあるがこれまでの行いを考えると同情できないな。

などと私は思った。

「私は別にフィーナに圧力を掛けた積りはありませんが・・・・・」

「それは“あんただけ”だろ？周りはそうではない。それにあんたは酷な言い方だが、時に相手を無意識に傷め付ける事がある」

サラ様はえ？という顔を浮かべた。

「言っただろ？無意識に傷め付ける、と。つまりあんたには悪気が無くても言われた方から見れば傷め付けられたんだよ」

何となく私は理解できた。

この方もエリーナ様も人を疑わないという純粋な心を持っており優しい。

だが、無意識に相手を傷つけることがある。

そしてその純粋さに付け込まれて利用される事もある。

「あんたはフィーナが初めて親衛騎士団の長として謁見した時、何て言った？」

「確か・・・こう言いました」

先王の時とは時代が違いこれからは平和を築き上げる時代です。ですから、貴方達もそれに倣いなさい。

「それだな」

テツヤ殿はその言葉が下種女を傷め付けた理由だと指摘した。

「騎士や軍人だって平和を愛する。何せ非常事態が起これば否応なしに前線に出向くのはそいつらだ」

だが、同時に名を上げる好機でもある。

誰しもそんな考えはあるものだからそれを批判する事は出来ない。

そしてサラ様が言った言葉は良い言葉ではあるが、騎士や軍人にとっては耳が痛い言葉でもある。

下種女もきっと最初は親衛騎士団の長として恥じぬ働きをしてくれ、とかそんな言葉を言われると思っていたに違いない。

しかし、行ってみて言われた言葉は違う。

寧ろ今まで教えられた全てを否定するような言葉だ。

何かあれば直ぐに戦える為に教えられた事をサラ様は無情にも真正面から粉々に砕いたのだ。

それも無意識に。

これほど性質が悪く相手を傷つける事は無いだろう。

そしてこういう言葉ほど敵にとっては利用し易い物はない。

恐らくゲンハルト様に味方もとい取り付いていた上層部は女であり、良からぬ噂がある下種女を最初から疎ましく思っていたに違いない。

そしてサラ様が言った言葉を上手く・・・もとい狡賢く利用して、政治的な圧力を掛けたに違いない。

「では、フィーナをああしたのは私にも原因があるということですか？」

「当たらずとも遠からずと言えるな。俺の世界でも女は軽んじられた」

未だにそうだ、とテツヤ殿は言った。

だから、下種女がああも頑な・・・愚かにも程がある性格なのも一方的に批判は出来ない。

「テツヤ殿は、フィーナをどう思われますか？」

「ハッキリ言って女という性別を省いても今の所は役に立たない。寧ろ要らない荷物以外の何でもない」

ハッキリと前置きをしたが、言い過ぎとも言える。

だが、実際そうなのだから仕方が無い。

「ヴィルヘルムに教育をさせているが、あれを鉱石にするのは時間が掛る」

いっそのこと一度、粉々に砕いた方が良いかもな、とテツヤ殿は言

った。

「前の件では足りませんか？」

私は正攻法で叩きのめした件を口に出したが、テツヤ殿はこう言ってきた。

「ヘンの話を聞いただろ？俺を斬り殺すと意気込んでいると」

確かにそれを考えると足りないな。

しかし、どうやって粉々に砕けば良いのやら・・・・・・・

普通、自分が絶対に勝てると思っていた自信を粉々に砕けばもう問題ないと思えるのだがあの女にはそれが通用しない。

これではどうやったら良いのか分からない。

まったくお荷物以外の何でも無いとやはり思えてしまう。

「そうですか・・・・・」

サラ様はそれに頷くしか出来なかった。

「おっと時間だ。ランドルフ、帰るぞ」

テツヤ殿は腕に嵌めている時計を見て私に帰るぞ、と言ってきた。

どうやらここ等辺が頃合いのようだ。

サラ様は仕方無いと諦めているが、下種女の事しか話せない事に対して何処か憤りを感じている様にも私には見えた。

「ランドルフも帰るのですか？」

エリーナ様が私を見つめてきた。

「はい。少し野暮用があるので」

「どんな用ですか？」

「色々とあるんです」

私は咄嗟に色々、と答えたがエリーナ様は「では、その色々とは何ですか？」と訊いてきた。

「色々は色々です。それに貴方様には少し言い難い事なので」

「何故です？」

またもやエリーナ様はしつこく訊いてきた。

どうしてこうしつこいのか分からない。

だが、怒る訳にもいかないから私は「どうぞ、お許し下さい」と頭を下げるしかなかった。

「お嬢ちゃん。男を物にしたいなら、しつこく質問しない方が無難だ」

男には言えない事がある、とテツヤ殿はエリーナ様に助言した。

「女にも言えない事はあります」

それに対してエリーナ様は挑むようにテツヤ殿を見て言い返してきた。

「そうだな。だが、今は勘弁してくれ。そうすれば今度こいつに暇を与えてお嬢ちゃんに貸してやるよ」

あの・・・私の意見は？

というか、貸すとか私は物か何かですか？

だが、私の意見などは欠片も反映されずに終わった。

テツヤ殿の言葉を聞いたエリーナ様は「では、訊きません」と頷いてしまったのだ。

この方から見れば私はテツヤ殿の物か何かなのだろう。

そしてそれに対して私の意見などは反映されない。

実に都合の良い思考であり、甚だ迷惑以外の何でもない。

まぁ、テツヤ殿とコンビを組んでいるし、上官でもあるから仕方ないのは分かる。

それにこの方と・・・エリーナ様と一緒に居るのが煩わしいなんて事はない。

寧ろ光栄にも思える。

光栄に思えるのだが・・・・・・・・・・

『・・・少し位は私の意見を反映してくれても、良いじゃないですか』

というか、して欲しいと私は切に願ってしまう。

第七十三章：哀し過ぎる話（前書き）

そろそろフィーナを何とかしないと思い立ち、書かせて頂きました。

皆さんも私もこの女に対して悪感情しか恐らく無い、と思います。

まぁ、彼女の行いを見ればそうなんですが、ある人から「フィーナには何かしらの信念が感じられるし、実力もある」との指摘を受け更に「彼女の練り込み」が足りないとも指摘されました。

確かに、彼女の描写が極端に少ないからのも上げられます。

だから、これからは彼女の描写も書きたいと思います。

それから私生活なども忙しく更新できませんでしたが、この女の練り込みもやっていたので遅れたと書き記して置きます。

第七十三章：哀し過ぎる話

私とテツヤ殿は部屋を出た後、下種女を探していた。

何でわざわざ自分を殺そうと躍起になっている女を探すのか私には理解できない。

だが、テツヤ殿のことだ。

何かしら考えがあっての事だろうと思う。

探し始めて時間が過ぎ去って行くが、向こうも私たちを探していた様子で見つける事に成功した。

「見つけたぞ！！」

相も変わらず耳触りで迷惑以外の何でもなく無駄に大き過ぎる声を出す下種女。

いや、もう下種女なんて言葉でなくて良い。

ただの“要らない荷物”で良い。

サラ様の話を聞いて幾分か同情できるし責める事が出来ないと思い始めていたが、この声を聞いてあっという間に消えて無くなった。

それ所か悪感情が余計に倍増した。

「よぉ、そこに居たか」

テツヤ殿は下種女もとい要らない荷物を見るなり向こうに歩き始めた。

「探したぞ。まったく手の掛る女だ」

今まで手の掛る女はごまんと見て来たし付き合って来たが、お前が今の所は断トツで1番だとテツヤ殿は付け加えた。

ヘン・ロビンソンの言葉が頭を過った。

『そういう態度だから、団長と喧嘩をするんだ』

確かにこんな言う必要の無い、というか言わない方が良い事も言うのだから要らぬ揉め事を起こすんだ、と私は思った。

「煩いっ。それより私を探していたとはどういう事だ」

要らない荷物は怒りながらも、テツヤ殿の言葉に疑問を感じたのか何時もみたいに剣を抜かずに訊き返した。

「話がある」

「私に話があるだと?」

「あぁ。今にして思えば、あんたと面と向かって話をした事が無い。どうだ?今回は話をしても良いだろ?もし、それで納得できないなら話が終わった後で相手をしてやる」

珍しく譲歩するテツヤ殿に要らない荷物は考え込んだ・・・怪し

んでいたが、頷いてみせた。

「サンキュ。では、何処かに行こうか。ランドルフは同席させても良いか？」

「良かろう。その“もやし”にも話がある」

うわぁ・・・こんな女にまでもやしと言われてしまった・・・・・・・・

私はこの女にだけは言われたくなかった言葉を言われて落ち込んでしまう。

「落ち込むな。本当の事だ」

落ち込むな、と言いながら更に落ち込むような事を言わないで下さい！！

私は内心で激怒しながらも二人に付いて行った。

テツヤ殿は要らない荷物の左側を歩いていた。

ああする事で、相手が剣を抜き難い状態にするのだ。

剣を差す方向は利き手とは違う方に差すものだ。

要らない荷物は大抵の人間と同じく右利きであるから左腰に剣を差している。

それに対してテツヤ殿は左側に立っている。

だから、要らない荷物が剣を抜いても直ぐに反撃できるようにしているのだ。

テツヤ殿の実力なら真正面から戦っても勝てると思うが、こう言う風にさり気なく相手の動きを封じる用心深さが何とも勉強になると思う。

要らない荷物はそれに気付いているのか、どうして左側に立つんだと言ってきた。

・・・・どうやらそこまで馬鹿ではないようだな。

などと失礼・・・いや、私はそれに驚いた。

行き着いた先は城の中にある噴水がある庭園だった。

武骨な城とばかり思っていたが、こういう風な所もあるんだと私は思った。

要らない荷物は円形型の噴水に腰を降ろした。

私とテツヤ殿は壁に背を預け狙撃されないポイントに着いた。

「それで話とは何だ?」

「先にお前さんの方から良いぜ」

俺を斬る以外に何か言いたい事があるんだろ?とテツヤ殿は言った。

「・・・・ヘン・ロビンソンの事だ」

「あいつがどうかしたか？」

テツヤ殿はある程度の予想をしていた様子で頷いて続きを訊ねた。

「あの男は私にこう言ってきた」

『団長。あの男と仲良くして下さい。傭兵と蔑んでおりますが、それだけで蔑むのはお角違いです。それに今はそんな事を起こしている場合ではない筈です』

「部下に説教をされたか」

「う、煩いっ」

要らない荷物は図星を指されて怒鳴ってきた。

「本当の事だろ？まぁ、こんな話は置いておくとして・・・お前はあいつをどう思う？」

「ヘン・ロビンソンを、か？」

「あぁ。あんたが使い物にならなくなった時、ランドルフと共に敵と戦った」

それをどう思う？とテツヤ殿は訊ねた。

「・・・団長の許しを得ずした行動は許せない」

「だが、あんたは俺に負けて呆けていた。この場合はあんたが寧ろ責められるべきだ」

要らない荷物は、グッと拳を握り締めた。

私は何時でもベレッタを抜けるようにしておき、右手を開いたり閉じたりして手を温めておいた。

この女が取る行動は極めて単純明快にして底が浅い。

だから、次の行動は手に取るように分かるからこそ手を温めておくのだ。

「あいつはこいつを護り手傷を負った。これに対してどう思う?」

「・・・戦わずに手傷を負った。これは騎士として失格だ」

「騎士としては、な。だが、あいつのお陰でこいつとガリシャは無事だった」

戦わずとも味方を護り負傷した事は寧ろ称賛できる。

だから、彼に勲章を与えたとテツヤ殿は言った。

「勲章?ああ、あの不吉な色をした小さな物か」

要らない荷物は由緒ある名誉戦傷章を馬鹿にしたように言った。

「不吉とは酷い言い方だな。それにあれはイーグルの居た国では最古参に入る勲章だ。あれを貰える奴等は皆、勇敢や奴らだ」

それを馬鹿にするのはどうなんだ?とテツヤ殿は言い煙草を銜えた。

「あの軽薄を画に描いた様な男の国など所詮は成り上がりの国だろ?」

軽薄を画に描いた・・・これは当たっているからテツヤ殿は何も言わなかった。

「軽薄なのは当たっている。それに成り上がり、というのも強ちではない」

「そうなんですか?」

私は思わずテツヤ殿に訊いた。

「あぁ。あの国は、かつてはイギリスと言う国の植民地だった」

だが、初代国王・・・向こうでは王とは言わずに大統領と言うらしい。

その初代大統領になったワシントン・ジェファーソンという人物はイギリスという国に反旗を翻した為に“反逆者”の烙印を押されたらしい。

「しかし、今では英雄だ」

国を独立させたのだ。

つまり、反逆を成功させたと言うことだ。

もし、これがリカルド様ならきっとあの方も英雄として後世では称えられる事だろう。

「それから色々な戦争を経験し、今では大国として世界の覇者と忌み嫌われている」

だから、成り上がりと言われても否定できない面がある。

それでもそんな国だろうが、勲章は勲章だ。

その国の誇りと言えば良いだろうか？

その勲章を愚弄するのは人としてどうかと思うぞ、とテツヤ殿は言った。

要らない荷物は更に拳を握り締めた。

そろそろ爆発するだろうか？

そんな事を思っていたが、テツヤ殿もそれを分かったのだろうそれ以上は言わないで別の事を言い始めた。

「話は変わるが、お前さんとしては敵をどう思う？」

「リカルドを、か？」

「反逆者とは言え仮にも王子だぞ？様は付けないのか」

「反逆者であり妾の産んだ奴に様など要らない」

強ち的外れではないが、どうかと私は思った。

「そうか。では、改めて訊くがあいつの戦術や人柄をどう見る？」

「一度目の戦いは奇襲だ。卑怯以外の何でもない」

「だが、場所を選び、更に自軍の配置にまで配慮するという力量を持っている」

その力量でプロイセン様を始めとした将軍達を打ち負かしたのだ。

「それにザンビア平野では戦象と戦車、更に騎馬隊を巧みに利用し後方から挟み打ちにするという包囲網戦術を編み出した」

正に稀代の戦術家として名を馳せているハンニバルの再来だ、とテツヤ殿は称賛した。

ハンニバルもリカルド様がザンビア平野で行った包囲網戦術を開発した。

リカルド様がハンニバルの事を知る訳が無い。

つまり自分で考えて実行したのだ。

正にハンニバルの再来と言っても可笑しくない。

「敵を称賛するか・・・・・貴様はやはり傭兵だな」

要らない荷物は鼻で嗤ったが、テツヤ殿はこう言い返してきた。

「“軽蔑すべき敵より尊敬できる敵を見よ”」

「何だ、その言葉は？」

「そのままの意味だ。軽蔑すべき敵より尊敬できる敵を見た方が良いんだよ」

尊敬できる敵の方が相手にすると厄介だが、彼の手腕などは称賛できるし参考になるとテツヤ殿は説明した。

「俺は少なくともリカルドを称賛できる敵、と見ている」

偵察で見たが、良い目をしておりとてもじゃないが私利私欲に駆られて兵を起こした者ではない。

「寧ろ、あいつに従う4人・・・いや5人の内2人が私利私欲に満ちている」

「誰ですか？」

「肥え太った身体にスキンヘッド――丸坊主の奴と眼帯に髭を生やしていた性悪そうな男だ」

「モリスン侯爵とライアンナル伯爵ですね」

モリスン侯爵は確か、豚が紋章でライアンナル伯爵は蛇が紋章だった筈だ。

どちらも紋章に相応しい性格であり体格だと思う。

「ライアンナル伯爵か・・・・叔父上が懇意にしておられた」

「そいつとあんたの叔父が？」

要らない荷物は、口走ってしまったと思ったのだろうか口を抑えたが直ぐに頷いた。

珍しく素直だな。

「・・・あぁ。どういう訳か知らないが、な」

「どんな奴だ？」

「蛇だ」

一言だけ要らない荷物は述べた。

「蛇か。となると性格は残酷で冷酷か？」

「あぁ。これは噂だが、軽い罪を犯した領民に対して牛裂きの刑をしたらしい」

「両手足を牛の尻尾に縛らせて、４方から引き裂くあれか」

想像するだけで身の毛がよだつ処刑方法だ。

「あぁ。それを見ながら奴は酒の肴にしたらしい」

「なるほど。で、そいつと懇意にしている叔父だがあんたは実の父

親のように慕っているようだな」

要らない荷物はどうして知っている、という顔をした。

「女王から聞いたんだよ」

「それだけか？」

「他に何かあるのか？」

テツヤ殿は敢えてそれ以外は聞いていないと答えた。

ここで下手にそれを言うのは良くないと判断したのだろう。

要らない荷物はそれを聞いて何処か安堵した表情を浮かべた。

「・・・父上は、私を一人前の騎士とするのが自分に課せられた使命だと思っていた」

だから親としてより寧ろ師として自分に接する事の方が多いと言ってきた。

「私と同じ年頃の娘達は父親に甘えていたりしていた。だが、私は甘えられなかった」

甘えるなどという事は出来なかったらしい。

母親もそれに対して何も言えずに黙認していたようだ。

「我が家では父上が・・・王であり神であった」

王であり神とさえ言うのだから、どれだけロックス様が屋敷では力を持っていた人物か解かる。

そしてロックス様が要らない荷物へ取る態度は周囲にも伝染した様子で誰も味方は居なかったようだ。

「そんな私に唯一優しくしてくれたのは・・・叔父上だけだった」

叔父であるヴィールング様だけが要らない荷物に優しくして甘えさせてくれたと言う。

「母上も叔父上と仲が良かった」

寧ろ父上より夫婦に見えたと要らない荷物は言った。

豪く素直に吐くな、と私は思っていたが、それはこの女自身が思っていたようだ。

どうしてここまで素直に話せる自分に不思議そうだった。

それが嫌になったのか話を切り上げて来た。

「話す事はそれだけか？」

「あぁ」

「今日は止めた。後日、貴様を斬る」

では帰る、と言って要らない荷物は去って行った。

「どういう風の吹き回しですかね?」

私はテツヤ殿に訊いた。

「さぁな。だが、あの女の口ぶりから察するに・・・ただの噂とは思えないな」

あの女の話からすれば、噂は事実と思える。

「もし、そうなら・・・哀しい話です」

愛していたが結ばれずに、自分の子として育てる事も出来ない。

余りに哀し過ぎる。

「別に哀し過ぎる話じゃない。こんな話は酒の肴として何処の酒場にも転がっている」

テツヤ殿は平常心で・・・いや、平然を越えて冷たい口調で言った。

まるで、それは自分も経験もしくは経験する予定だと言っているようにも聞こえた。

幕間：自問自答と独白（前書き）

ここでフィーナの独白を入れます。

何だか長過ぎたようにも思えますが、これ位は書いた方が良いとも思えました。

多分・・・またこれ位、まとめて書きそうな勢いです。（汗）

幕間：自問自答と独白

私は一人、与えられた部屋に戻り先ほど自分が話した事に対して自問自答していた。

『何であんな事を話したんだ？』

先ほど私は傭兵・・・タカミ・テツヤと話をした。

金を貰い忠義など無いに等しい“戦争の犬”と話すなど有り得ないと私は思っていたし決意していた。

だが、先ほど話をした。

私の部下であり副団長を務めるヘン・ロビンソンの見舞いに行った時を思い出す。

彼は私より5つも年上で騎士としての経験も豊富だ。

女である私より団長として相応しいという声も聞いたことがある。

彼は前は叔父上の下で働いていたが、前副団長の代わりに私の指揮下に入った。

女・・・・これだけで私はどれだけ苦労したことか。

ただ性別が女。

本当にそれだけ。

ただそれだけの為に私は周りから蔑まされたし軽蔑された。

父上は私が男だったら、とどれだけ嘆いた事か・・・・・・・・・

私の家柄は祖父の代から続く親衛騎士団であり長を務めている。

本来なら男子が望ましい家柄において私は産声を上げてしまった。

何の因果か、または運命の悪戯か。

どちらにせよ、私はそこに産まれた。

そして育てられた。

プロイセン殿の娘であるリーザ殿もまた女性でありながらも軍人の道を歩んだ。

それを見て父上もまた私にそれを求め、私もそれに応えた。

プロイセン殿の娘に出来て、私に出来ない訳がない。

そういう法則とも言える感じだった。

幼い頃から剣術と馬術を始め色々な事を学び培った。

戦術、鎧の着こなし、部下の統率、王族の警護方法・・・・・・・・・・・・

幼い私には分からない物ばかりだが、それが普通だと思っていた。

だけど、宴の席などに行けば私と同じような娘たちは父と仲良く戯れており甘えていた。

それを見て私はどうだ?と思った。

甘えも許されず戯れる事も許されなかった。

日々、鍛錬に身を費やし続けるという毎日を送った。

それを思うと、何故か無性に哀しくなった。

私は、どうして男として産まれて来なかったのだろう?

どうして父に甘える事が出来ないのだろう?

それを思い始めたある日、私は意を決して父上に甘えてみた。

だが、父上はそれに平手打ちで答えた。

『騎士になるそなたが甘えるなど言語道断!!』

鼻血を出し、赤く染まった頬を押さえる私に父上は冷徹に戒めてきた。

それから私は父に甘えようとは思わなかった。

そして誰よりも騎士として輝けるように努めようと思った。

それは私の出生に対する理由もある。

私は・・・父上の本当の子ではないという噂。

ただの噂だと父上は思っていた。

いや、思っているように見えた。

私の本当の父は・・・叔父上。

私の父には弟がいる。

つまり、私の叔父に当たる人物だ。

名はヴィールング。

サルバーナ王国では「影なる者」という名で知られている。

あの方は父上が居た為に家を継ぐ事は出来ずに影・・・即ち日陰者として生きる事になった。

それをあの方は素直に受け入れて生きてきた。

あの方だけが私に優しくしてくれたし甘えさせてくれた。

父上に何時ものように完膚なきまで、それこそ足腰が立たず血だらけにされて一人で泣いていた時だ。

あの方は私を抱き締めてこう言ってくれた。

『当主になるとはいえ君はまだ幼いんだ。私が・・・父君に代わ

り慰めて上げるよ』

あの方だけが私にそんな優しい言葉を投げて下さったのは・・・・・・・・・

父上が先王に付き従い戦に出る毎日を送る中で叔父上は何時も私と母上の安否を気にして来てくれた。

その時は何時も手土産として人形や菓子を私にくれたし、母上には香水やドレスを与えてくれた。

父上は私や母上にそんな事はしてくれなかった。

ただの妻と跡取り。

これが私と母上、そして父上の関係だった。

屋敷でも父上と母上は“赤の他人”ではないが、“他人”と思える程に互いに無関心だった。

いや、父上が母上に対して“男を産めなかった卑しい女”という見方をして相手にしなかった。

母上もそんな父上を何処か侮蔑していた事を幼い頃から知っていた。

そして叔父上に対して何処か・・・・・・愛しい気持ちを持っていた事も知っていた。

私は母上が叔父上と夫婦なら良かったと思う。

叔父上は母上に対して優しかったし、丁寧な物腰で本当に騎士道物語に出て来そうな態度を取っていた。

そんな叔父上を母上も頼りにしていたのも頷ける。

それに対して父上は、・・・・あの男は・・・・母上が病床に伏せていた時も戦や仕事で見舞いには一度も来てくれなかった。

同じ屋敷に住んでいるのに、だ。

そんな父上に代わって叔父上が見舞いに来てくれた。

そして私が１５歳の時に父上は敵と相討ちで戦死した。

別に哀しいとは思わなかった。

寧ろ騎士として誇りに思っていた。

だが、同時に母上を蔑ろにした罰とも思わずにはいられなかった。

母上の最後を見取ったのは叔父上で、私はその時サラ様の元へ親衛騎士団の長として初めて謁見する為に城へ向かっていた。

そのため母上の死を看取る事が出来なかった。

母上の死を看取る事が出来なかった事、これが第一の不幸と言える。

そして第二は直ぐに来た。

逃げる私に追撃するように降り注ぐ矢の如く。

初めてサラ様に謁見した時、私は親衛騎士団の長として亡き父上に劣らぬように働いてみせると言った。

だが、サラ様は私の決意を真正面から粉々に砕いてしまった。

『もう戦の時代は終わりました。これからは平和を築く時代です。ですから、貴方もそれに倣いなさい』

先王が崩御しサラ様が王になった。

だから、もう戦は無いと分かっていた。

分かっていたが、平時だろうと非常事態に備えて我々は存在すると思っていた。

だからこそ幼い頃から厳しい鍛錬をしてきたのだ。

何時か来るであろう非常事態に備えて・・・・・・・・・・・・・・・

それなのにサラ様はその決意を粉々に砕いた。

もう・・・私たちのような者は必要ないと。

つまり、今まで学んできた事は全て要らないと言われたのだ。

無言で居る私を見ていたサラ様だが、やがて部屋を出て行った。

そして打ちひしがれた私は捕えられた。

宰相であるゲンハルト様に仕える者たち・・・・大臣たちだ。

大臣と言っても名ばかりの存在で軽蔑すべき下種共だ。

奴等は、私にこう言ってきた。

『そなたの父君は立派な騎士だが、もうあのような者達は必要ない。これからは寧ろそなたのような者が必要だ』

どういうことか私には理解できなかった。

それが奴らには分かったのだろう。

『やれやれ。これだから女は駄目なのだ。我々、男が言う事をまるで理解できないのだから』

呆れた口調と眼差しを送る奴等は私に噛み砕くようにしてこう告げた。

『そなたは女だ。女は戦場を走り回ったりはしない。見てくれは良いそなただ。新しい“飾り物”としては申し分ない』

飾り物・・・・・・・・・・・・・・・

つまりは・・・・・・・・・・・・・・

「私に飾り物の指揮官になれと言うのですか?!」

私は我慢できずに声を上げた。

『やっと理解したか。小娘よ』

奴等は馬鹿にしたように嘲笑い、こう言ってきた。

『女王陛下は最早、兵士を必要としていない。ただし国としての面子もある。だから、そなたのような女の指揮官が選ばれたのだ』

女であり見てくれも悪くないし家柄も申し分ない私なら・・・飾り物としてちょうど良い。

だから私は選ばれたのだ、と言われた。

『光栄に思えよ？本来なら“不浄な愛の末に出来た女”であるそなたが“選ばれた民達で構成された”栄えある親衛騎士団の長になれるなど有り得ないのだからな』

また女と言われた。

しかも、不浄な愛の末に産まれた、とまで言われた。

では、男なら親衛騎士団の長として問題ないと仰るのか？

不浄な愛の末に産まれた女である私はただの飾り物としてなら良いと言うのか！？

私は剣を抜いて、目の前に居る奴等を斬り殺したかった。

こんな屈辱は初めてだ。

だが、飾り物の指揮官とはいえ私が指揮を執れる騎士団だ。

なら、私が幼い頃から培ってきた戦術などを彼等に教えて鍛えても問題ない筈だ。

それを思えば剣を抜かないでいられる。

しかし、奴等はそれを見越したようにこう告げて来た。

『飾り物であるそなたの指揮する騎士団には剣と馬さえあれば良い。後は宴の席で恥を掻かない礼儀作法を覚えろ』

もし、それが出来ないなら私は即刻、親衛騎士団の長という地位を剥奪された上に爵位も没収と言われた。

そうなれば私以外にも叔父上たちにも迷惑が被る。

それを思うと今にもこいつらを斬りたい衝動を抑えられた。

私は俯いて、膝を着いて頭を垂れた。

「・・・・・謹んで、・・・・・・・お受け致します」

唇から血が滴り落ちるのを感じた。

そして眼元が熱くなるのも感じた。

こんな事が・・・・・・・こんな現実が・・・・・・・・・在って良いのか？

私は・・・何のために産まれ、何のために鍛錬を積んできたのだ？

それが分からなくなった。

そして屋敷に帰れば母上は既に亡くなっていた。

叔父上だけが私の肉親となった。

帰ってきた私を見て叔父上は何か遭った、と思ったのか訊ねて来た。

そんな叔父上にだけは正直に申し上げた。

誰かに、この想いを打ち明けて慰めて欲しかったのかもしれない。

それを聞いた叔父上は歯軋りをしながら、私を幼い時のように抱き締めてこう言ってくれた。

『大丈夫だ。・・・・何時の日か必ず真の親衛騎士団の長として認められる時が来る』

今は耐える時間なのだ。

耐えて、耐えて、耐え忍んでいかなくてはならない試練の時間なのだ。

そう叔父上に説き伏せられた。

不思議と叔父上に言われるとどう言う訳か落ち着きを取り戻して素直になれた。

それから私は上層部の圧力と部下である騎士たちからの侮蔑の眼差

しに耐え続けた。

特に副団長の男は何かと私を「女」と蔑み詰り尽くした。

だが、これは耐えるしかないと思い苦渋の日々を送り続けた。

叔父上は日陰者として生きて来たが、それでも軍の役職に就いて居られた。

そんな叔父上には全てを話した。

それから数日して副団長が栄転し、ヘン・ロビンソンが副団長に任命された。

私が親衛騎士団の長になってからも暇さえあれば叔父上は私の元へ訪れては食事をしたりした。

父上が生きておられたとしても、こんな事はしないだろう。

ある日、私は叔父上との食事の最中にこう言った。

「もし、叔父上が私の父上だったらどんなに良かったでしょうか？」

それを聞いた叔父上は驚いた顔をしたが、直ぐに笑った。

『私も君が本当の娘なら、と思う時があるよ』

その時、叔父上が薄らと涙を流しているように私には見えた。

それから月日が経ち、ついに来るべき時が来た。

先王の妾で辺境の地に幽閉されていたリカルド王子が反逆したのだ。

これは私にとって待ちに待って待ち焦がれていた瞬間だった。

この戦いを見事に終結させれば私は英雄として迎えられる。

もう女という事で馬鹿にされない、と思っていた。

だが、初めての戦は・・・・私が想像していた以上に本物の戦は厳しく・・・・非情だった。

二度目の戦いが私にとって初陣だった。

一度目の戦いに本来なら親衛騎士団も出る筈だったが、上層部が・・・・正確に言えばゲンハルト様の部下達が「飾り物は大人しくしていろ」と言い行かせなかった。

その為、二度目の戦いで私たちは出陣する事になった。

総大将は宰相であるゲンハルト様だが、この方は戦の心得が無い為に私が事実的に指揮官として任命された。

私は直ぐに兵たちを纏め上げ陣を敷いた。

そして迎え撃つ事になったが、最初は我が目を疑った。

サルバーナ王国と不戦停条約を結び、国交をも結んでいた筈のアガリスタ共和国とクリーズ皇国の軍が居たのだ。

ゲンハルト様もどうしてなのか理解できない顔だった。

しかし、戦闘は直ぐに始まりそんな事は脇へと追いやる事になった。

私は指揮を執り相手を迎え撃ったが、戦象と騎馬隊の攻撃により味方は総崩れとなった。

最初に逃げ出したのは・・・私が指揮する親衛騎士団だった。

飾り物とは言え騎士団である親衛騎士団が我先にと逃げ出したのだ。

それを私は止めようとしたが、聞こえないのか逃げて行った。

そして私は敗走し王城へと逃げ帰った。

そこには国外追放した筈のタカミ・テツヤが居り指揮を執っていた。

どうしてこの男が居るんだ、と思うと同時に他の奴等が私よりその男に従うことに対して激しく憤りを感じた。

なぜ私の方ではなくそちらに従うのだ!!

男だからか？

私は女だから従わないのか？

そう訊きたかったが、今はそれより叔父上の元へ行き安否を確認すると共に援軍を頼めないか訊こうと思った。

屋敷へと行ったが、そこに叔父上の姿は無かった。

ただ一枚だけ手紙が置かれていた。

『この内乱を引いては女王陛下の命を救う為に去る。そなたも決して死ぬな。私にとってそなたは娘同然。だから、どんな目に遭おうとも死せず再び会おう』

そう書かれていた。

そして私はかつて首都として繁栄していたヴァイガーへ向かった。

そこには民達が居た。

彼等は、初代国王であらさされるフォン・ベルト閣下の遺言に従い数百年、数千年もの長い間に渡りこの地に住み守り続けていた“影の親衛騎士団”と言ってきた。

まるで自分達の方が本当の親衛騎士団だと言っているように思えた。

そして彼等はタカミ・テツヤを慕っていた。

それに私は「どうせ山賊の類いだろ。類は友を呼ぶと言うからな」と言ってしまった。

その言葉を聞いた一人の女・・・名をメジュリーヌという女が目の前に現れるとこう言ってきた。

『高が数十年しか生きておらず見た目だけで判断する小娘がテツヤを愚弄するな』

たった指一本で私は負かされた。

それからタカミ・テツヤ達が帰ってきた。

奴等は敗走する私たちを護るために城に残り戦ってきたと言う。

退却したが、それでも奴等は敵に大打撃を与えて来たと言うのだから勝ちと言える。

だが、私は認めたくなかった。

こんな身元不明の傭兵である男が私を打ち負かすなど信じたくなかった。

それから私たちは一同に集められると、この内乱を終結させるために前線指揮官を新たに任命すると言われた。

その人物は・・・タカミ・テツヤ。

私はゲンハルト様にどうして自分ではないのか、と詰問を浴びせた。

それに対してゲンハルト様はこう言ってきた。

『私はそなたの実力を買っている。亡き父君に劣らぬ立派な騎士だ。きっとそなたも立派な騎士となろう。だが、今はそんな事を言っている暇は無いのだ』

もう後が無い。

だから、身元不明の傭兵でも実戦経験が豊富なタカミ・テツヤを前

線指揮官に任命すると言われた。

そして私は、父上と共に先王に仕えていたと言うヴィルヘルム元伯爵が指揮するシュヴァルツフント――黒犬騎士団の“教育”を受ける事になった。

ヴィルヘルム元伯爵は先王が居た頃、親衛騎士団、聖騎士団以外に第三の騎士団として創立された撃剣騎士団の長だと言う。

先王の怒りを買ってからは傭兵となり各地を転戦していたと言い、タカミ・テツヤに従っている。

奴を「我が王」と称し常に奴に従っている。

ヴィルヘルム元伯爵だけではない。

プロイセン殿、リーザ殿、サラ様、エリーナ様、そしてゲンハルト様までもが、あいつに従っている。

なぜ、私ではなくあの男なのか理解できなかった。

叔父上は耐えて、耐え忍んでいれば何時の日か認められる日が来ると言っていたが、あれは嘘なのか？

それともまだ先なのか？

そう言いたくなった。

そして親衛騎士団と私はヴィルヘルム元伯爵の教育を受けたが、彼の、彼等が教える方法は卑怯と言う以外の何でも無かった。

相手を押し倒し、相手の金的を蹴り、相手の脛や顔を殴ったり、唾を吐いたり、とにかく勝てば良いという方法であった。

私は父上からそんな真似はするな、と常に教えられていた。

それは他の者たちも同じだ。

だが、教育をやられている内にこうも思った。

『叔父上も修行でこういう事を学んだと言っていたな』

叔父上は父上には騎士として劣っていると周囲からは見られていたが、実力から見れば叔父上の方が数段も上だった。

とにかく叔父上は相手を倒す為だけに編み出した剣術を駆使していた。

剣術以外にも一端の兵が使用する槍や弓、戦斧など多岐に渡る武器を使いこなしていた。

騎士は馬と剣さえ使えれば良いと思われている。

これは父上も同じ考えだった。

だから、そんな叔父上を「邪道極まりない恥知らず」と忌み嫌って私にも剣術と馬術以外は教えたりしなかったし叔父上にも教えさせようとはしなかった。

でも、シュヴァルツフント達の戦い振りを見れば卑怯とはいえ勝っ

ていた。

タカミ・テツヤと初めて戦った時もあいつはこう言っていた。

『どんな汚い手段を取ろうと勝てば良いんだよ。戦場では、な』

勝った方が正義なのだ。

戦場では大義など何の役にも立ちはしない。

あるのは生か死か。

勝利か敗北か。

この2つしか存在しないのだ。

それは私も常々、理解していたし初陣で理解した。

だが、受け入れたくなかった。

それを受け入れるという事は私の全てを、今までやってきた事、学んできた事を全部否定するという事になる。

それが嫌で頑なに教育を拒否していた。

タカミ・テツヤと再び戦った時、奴は正攻法・・・・正々堂々と勝負すると言ってきた。

何度も戦ってきたが何時も必ず卑怯な手を使い勝利を治めて来た奴がそれを禁じると言ってきた事に驚いたが、正攻法なら勝てると私

は思った。

卑怯な手を使うほど正攻法には弱い物だ、と聞いていたからだ。

だが、結果は見るも無残な敗北に終わった。

私は父上の形見であるバスター・ソードを構えていたが、奴は構えなかった。

武骨な片刃をしたカタナ、と呼ばれる剣を右手に持ちそれを垂れ下げているという感じだった。

私は構えろ、と言ったが挑発するように掛って来いと言われた。

斬り掛り奴の脳天を叩き割る積りで剣を振り降ろしたが、どういう訳か剣は地面を突き刺し私は前のめりになっていた。

その喉元には薄らと血を吸い、今にも私の血を吸おうとしている冷たい刃が当てられていた。

どういう事か分からなかった。

卑怯な手は使っていないという事は分かっていた。

嘘だ、これは現実ではないと思いたかった。

正攻法では勝てると信じていた。

それを無情にも砕かれたのだから。

私はその現実が受け入れられずに呆けた。

その間に私の補佐をする副団長のヘン・ロビンソンがタカミ・テツヤの子分と思われるランドルフと共に敵と戦ったと聞いた。

そして負傷した、とも。

私は慌てて彼の元へと行った。

彼はベッドに寝ながらタカミ・テツヤとその子分たちが口にしている細長い物を銜えながら胸に付けている紫色の小さな物を愛でていた。

彼は私を見ると立ち上がろうとしたが、私はそれを止めて傷の具合を訊ねた。

『剣で斬られるよりも身体の中が蝕まれる感じがして痛いです』

その傷はタカミ・テツヤと同じ装備を持つ敵だと言う。

名はフォース・リーコンと言う。

何でもイーグルとかいう軽薄で女好きの男が居た国の海兵隊と呼ばれる組織にある部隊らしい。

任務は偵察、潜入、襲撃などで裏方としての任務が主らしく二度の戦いに置いて敵が勝利を収めたのも彼等が先に向かい偵察をして陣を構えていたからだと言う。

父上は偵察を「下っ端がやる事で然して意味は無い」と言っていた

が逆に叔父上は「偵察ほど戦において大事な事はない」と言っていた事を思い出した。

偵察は敵の陣地や装備などを調べ味方に報告するのが任務だ。

軽んじられるが考えて見れば相手の事を調べて戦うのと何も知らずに戦うのでは色々と違うと思った。

だから、二度の戦いでも敵は勝利を収めたのだと確信した。

そして今回も奴等はこの地に偵察しに来たらしい。

それをタカミ・テツヤは事前に知り迎え撃ったと言う。

どうやらあいつが飼っている狼人のガルムが偵察に行ったらしくそれで知ったらしい。

それから敵を迎え撃ったと言い、彼はランドルフともう一人、ガリシャと言う小娘を庇って傷を負った。

イーグルが指揮した隊の中で彼が一番負傷したらしく、そんな彼にタカミ・テツヤは勲章を与えた。

彼が胸に付けている紫色の物が、それだと言う。

『名誉戦傷章と言うんです』

イーグルの居た国では最古参の勲章らしく、戦で味方の為に手傷を負いそれでも勇敢に戦った者に対して与えられる勲章だと彼は言った。

『俺は戦っていません。奴等は遠くからでも相手を攻撃できる武器を持っていたんです』

そのため剣しか無かった自分は戦えなかったと彼は話した。

タカミ・テツヤ達もそんな武器を使っていたな。

私も一度だけあれで撃たれた事がある。

短剣ほどの小さな物で、武骨な印象が強い。

それを奴は私に向けた。

先っぽから小さな炎が出ると同時に大きな音がして地面に小さな黒い穴を空けた。

それを私は見て、あれで撃たれたらあんな風な傷が残るのかと思った。

実際、彼の傷痕は小さいがそれでも傷痕で生々しかった。

そして彼は細長い物を銜えながらこう言った。

『団長。俺、あの男の訓練を受けたいんです』

自分達が習ってきた物だけでは今の敵とは戦えない。

ならばあの男の持っている技術を学び戦に役立てこの内乱を終わらせたい。

『そして団長。あの男を傭兵と言って蔑んでいますが、あの男は二度も軍を変えましたがそれでも正規の軍に所属していました』

確かに奴は2度ほど軍を変えたと言っていた。

つまり元が最初に付くが2カ国の正規軍に所属していたと言う事になる。

父上なら「2度も軍を変える奴に忠誠心など無い」と言い切るだろうが、叔父上なら「2度も変えるという事は何かしらの理由があると同時に実力が高いという事だ」と柔軟に考えて答えるだろう。

私の場合は、どちらが正解なのかは分からないから答えられない。

しかし、どうして2度も軍を変えたのちに傭兵になったのか？

傭兵など誰が聞いても碌な奴ではないと口を揃えて言う。

そんな傭兵にどうしてなったのだ？

やはり金の為か？

傭兵ともなれば多額の金が貰えると聞いている。

それを考えれば金で動いたのか？

だが、それをヘン・ロビンソンは否定した。

『あの男の話だと傭兵の報酬は雀の涙ほどしか貰えないようです』

傭兵ともなれば多額の金を貰えると思っていたが、そうではないらしい。

稀に大金を貰えるようだが、それは極僅かな人数であると言う。

その他にも私たちが思っていた傭兵の実像と想像がまったく違うと教えられた。

『中には私たちが想像している傭兵も居ります。ですが、あの男は私たちが思っているような傭兵ではありません』

だから、あの男と仲良くして共に内乱を終わらせるように尽力を尽くしましょう。

私はそれに対して何も言えなかった。

この男は私を女として蔑んだりしなかった。

寧ろ女の身で指揮官をしている私を陰で支えてくれた・・・味方だと思っていた。

だが、この男もまたタカミ・テツヤに従うと言い始めた。

あの男は・・・私から、全てを奪い取る気なのか？と思い斬り殺したいと憎悪した。

そして探していると、向こうも私を探していると言ってきた。

『今にして思えばまともに話し合った事が一度も無い。だから、今

回は話し合おう』

それが嫌なら話を聞いてから戦ってやる、と奴は言った。

私はヘン・ロビンソンから言われた事もあり頷いた。

そしてランドルフと共に城の中にある噴水の前で話す事にした。

そこまで行く間に奴は私の左側を歩いた。

私の剣は左腰にある。

私が右利きだから剣はそれとは別の方に差すのだが、奴は左側に立つ事で私の行動を制限した。

これで私が剣を抜こうとしても奴はそれを抑える事が容易だ。

私はなぜ左側を歩くんだ、と敢えて訊いた。

それに対して奴は鉄が赤く錆びたような低い声でこう答えた。

『誰が相手だろうと油断はしない。一瞬の油断が命取りになると戦場で学んだ』

これを聞くだけで奴がどれだけ戦場を駆けたのか分かった気がした。

噴水に到着すると奴とランドルフは壁に背を預けた。

これも恐らく戦場で学んだ事だろうと思いながら私は噴水に腰を降ろした。

そして何の用だ、と訊ねるが奴は私の方から話せと言ってきた。

私はそれに対して答えると今度は奴がヘン・ロビンソンの事について訊いてきた。

あの男が取った行動は騎士としては失格だ。

だが、本心を言えば褒めてやりたかった。

戦わずとも逃げずに戦場に残り、その上で味方を護り傷ついた彼の行動は称賛に値する。

でも、それが言えずに真逆の事を言ってしまった。

そしてそれから敵であるリカルド王子の事について戦術や人柄をどう思うのか訊いてきた。

リカルド王子は先王の妾が産んだ男子。

本来なら彼の方に妾だろうが、王を継ぐ資格はあるのだが謀反の疑いがあるという事で辺境の地へと追い遣られた。

二度目の戦いでリカルド王子と対峙したが、純粋な目をしていると思った。

ゲンハルト様の言葉に激怒した時はゲンハルト様だけでなく中央に住む者たちに対しての怒りのように見えた。

それはタカミ・テツヤも同じだったようで、リカルド王子は私利私

欲の為に兵を起こしたのではないと断言してみせた。

ただし、その彼に従う4人、だが奴は5人と言い直し内の2人は私利私欲があると言ってみせた。

モリスン侯爵とライアンナル伯爵だった。

モリスン侯爵については何も知らないが、ライアンナル伯爵については知っている。

元中央貴族で何を仕出かしたのか辺境の地へと追い立てられた。

左目を戦で失ったと公言しているが、本当は女に刺されたとも言われている。

その上、素性などは何も分からないという謎に包まれた男だ。

そんな男と叔父上は懇意にしている。

どうして叔父上のような方があんな男と懇意にしているのか今だに謎だ。

そんな男とモリスン侯爵は私利私欲に満ちた目をしているとタカミ・テツヤは言った。

そして奴は私の叔父上をどう思うかとも訊いてきた。

奴はサラ様から私が叔父上を実の父親以上に慕っていると聞いて、どう思うのか？と訊いてきたのだ。

サラ様は噂を知っている・・・・・・・だから、噂もこの男に話したのでは?と思ったがそれは話さなかったようだ。

その事に対して安堵しながら私は正直な気持ちを伝えた。

どうしてだろうか?

軽蔑していた・・・未だに軽蔑しているこの男にどうしてここまで素直になれるのか疑問だった。

だが、この男を前にすると叔父上のように素直になれる気持ちに襲われて勝手に口が動いていた。

それが何だか嫌で私は話を一方的に切り上げた。

奴には今度は斬る、と言ったが奴は「楽しみにしている」と言い私を送り返した。

何だか今日は変な日だ。

こんな日は余り好きではない。

今日は何もしないで休もうと思った。

第七十四章：コツと真剣

要らない荷物と別れた私とテツヤ殿は雪が降る中、演習場へと足を運んだ。

演習場に行くと村人たちの何人かがそこにいた兵たちにスキーの事を教えている最中だった。

その中にはレオンとゲンハルト様、リーザ中尉、ワイド中尉も居り皆して足には2本の細くて長い板を取り付けており、両手には細長い棒を握っていた。

「先ずこの2本の棒で地面を刺して前に押すんだ」

村人の一人が棒を地面に刺して前に押した。

すると身体が前に進み、動き出した。

それから板を軽く浮かせて蹴り上げて進んで行く。

なるほど・・・あれなら動き辛い雪道だろうと容易に俊敏な移動が可能だと思う。

棒も板も銃で言うならカービンサイズであるから持ち運びなども容易だ。

そういう所も考えて作ったのかもしれないと思うと凄いと感心さえ覚えてしまう。

「これを使用すれば相手より早く動ける。止まる時は身体を斜めにするか、八の字にすれば止まる」

プロなら斜めにすれば止められるが初心者は八の字にするのが望ましいようだ。

「懐かしいぜ」

テツヤ殿はスキーを見ながら呟いた。

「テツヤ殿もやった事があるんですか？」

「あぁ。俺が居た所は寒い所だったんだ」

産まれた時の場所は首都から離れた場所らしい。

そしてその地は、雪がよく降る地方で周辺を山々に囲まれている地形だとも聞いた。

つまりここと同じような地形の産まれということだ。

「と言う事は、あれを使った事も？」

「ある。戦闘ではないが、それでも訓練は受けたし趣味でもやった」

あれを付けたままヘリから降下したりする訓練らしく、どのような環境にでも対応できるようにフォン・ベルト閣下が所属していた冬季戦技教育隊に指導を乞うていたらしい。

「そうですか」

「あぁ。お前にも練習させるが、コツを掴めば簡単だ」

コツさえ掴んでしまえば後は思いのままだと言う。

私も試しに付けてやってみるが、難しいと最初に思った。

少し急斜面の上から降りて見たがまったく止められずに転んで止めた程だ。

だが、私より酷かったのはゲンハルト様だ。

あの方は運動音痴なのか、急斜面でもない平坦な場所でも転んでいるのだから。

何度も癇癪を起こしながらも繰り返しやる姿勢は感心するのだが、見ていると運動音痴だと見えて憐れに思ってしまう。

かく言う私も転んでばかりで上達しない身である。

ここまで難しいとは驚きだが、村人たちは手足のようにそれを使用して素早く動いている。

それはテツヤ殿も同じ事で慣れた感じに滑って行く。

それを私たちは見て上手い人のやり方を見てどうやったらあんな風に出来るのかと思い立ち見てみた。

見始めてから最初に気付いたのが棒だった。

棒はあくまで最初に動かす為の道具で後はバランスを取るだけの物だと先ず気付いた。

後は板を使って足を交互に動かして移動している。

つまり棒より板の方に力を入れろと、言う事か。

それに今にして思えば棒を2本も持っていたらライフルなどが撃てない。

テツヤ殿などは棒を使わずに板だけで滑ってライフルを撃っていた。

私達は上手い人たちの真似をしながらコツを掴む事に集中した。

だが、気が付けば夕方になっておりもう少しで夜になる所だ。

「今日はこれ位で終わりだ」

ただし、家に帰っても頭の中で練習する事も可能だとテツヤ殿は助言した。

それに私たちは頷いて城を出た。

城を出て歩いている最中も私は頭の中でイメージを浮かべてはコツを掴む時間に費やした。

家に帰りオリガさんに迎えられた後もコツを掴む時間に費やし、オリガさんから「どうしたの?」と訊かれるまでそれは続いていた。

私はオリガさんにスキーの事を話した。

するとオリガさんは「簡単よ」と答えた。

「貴方って初めての事だと緊張して力が入るでしょ？」

私を初めて抱いた時もそうだった、とオリガさんは言い私はそれに対して頷いた。

何でもそうだが、私は真剣に取り組み過ぎるきらいがあると今更ながらに思った。

「やっぱりね。きっとスキーを始めた時も力を全体に入れてたでしょ？」

これまた図星で私は頷くしか出来なかった。

「貴方の良い所は何でも真剣に取り組む所。でも、逆にそれが貴方の中にある物を止めてしまっているのよ」

つまり何事にも真剣に取り組むが、その真剣さが時として本来なら出せる力まで止めていると言う事か。

「何でも真剣に取り組むのは良いけど、身体の力を抜いてから始めないと最初から疲れちゃうわよ」

確かにその通りだ。

だとすれば力を抜きながらも真剣に取り組めばコツを掴むのは簡単なのかもしれない。

「オリガさんはまるで教師ですね」

私に色々と教えて導いてくれるのだから。

その言葉を聞いたオリガさんは何処か面白そうに笑いだして、こう言った。

「本当は学校の先生になりたかったのよ。私」

「そうなんですか？」

では、何で春を売る女性になったのか、と思うがそれをオリガさんは話し始めた。

「死んだ両親が有り難くもないのに残した借金を返す為に娼婦になったのよ」

まだ１５歳の時に身を売ったと話すオリガさん。

１５歳・・・エリーナ様と同い年の時ではないか。

そんな歳に自分の人生を諦めたと言うのか・・・・・・・・・

「娼婦になったけど、教師になる夢が諦め切れなくて密かに勉強したの」

暇を見つけては読書をして学問をやり続けたらしい。

それによって娼婦街では学の無い・・・もとい学べる機会が少なかったお姉さま達に対して教え始めたと言う。

それのお陰で皆は教養を持て産まれた子たちにも勉強を教える事が出来たらしい。

「つまり娼婦だけど教師でもあるのよ」

「夢が叶ったんですね」

回り道こそしたが、それでも教師になれたのだから結果オーライという奴だ。

「えぇ。そして娼婦も続けている事で・・・・貴方みたいに素敵な男とも出会えたしね」

オリガさんは私を抱き締めて優しく耳元で囁いてきた。

「最初は年下の可愛い弟って感じだったけど、2度目に抱かれてからはすっかり貴方の虜よ」

貴方は女殺しの天才だと言われてしまった。

「私は、別に女殺しになりたい訳では・・・・・・・・・」

というか、出来るならそんな天才にはなりたくないのが本心だ。

「そういう事も役に立つと気が来るわ。それこそ学んだり経験する事に得こそあれ損は無いわ」

だから、私の女性を虜にする能力（余り嬉しい能力ではないが）も何れ、何処かで役立つ時が来ると言われた。

「そういう物ですかね？」

「そういう物なのよ。世の中って」

オリガさんもまだ２０代で人生をそれほど長く生きた方ではないが、それでも経験値で言えば私などより遥かに上だ。

誰か知らないがこんな言葉を言っていたな、と思い出す。

『人生とはどれだけ長く生きたかで、その経験値が決まる訳ではない。どれだけ濃く生きたかによりその経験値が決まるのだ』

確か、こんな言葉だった筈だ。

それを思えばオリガさんの経験値は高い筈だ。

そんな事を考えていた私をオリガさんは優しく抱き締めたままベッドに寝かし付けた。

そして蝋燭の火を息で消し暗くする。

「今夜は私がスキーで疲れた貴方を癒してあげるわ」

別にそれほど疲れた訳ではないのだが、この場はオリガさんの言葉に甘えさせてもらう事にした。

それと同時に今頃はレオン達もこんな風に癒されているのかな？とつい思ってしまった。

レオンの愛しい人と会った事はないが、きっと心優しい方なのだろうとある程度の想像は浮かべられる。

ただし、ゲンハルト様に至ってはイザベルさんが相手だ。

となれば癒される所か更に疲れるもとい傷め付けられているだろうな、と思わずにはいられなかった。

幕間：愛しい人（前書き）

ここでレオンと愛しい人の話を入れます。

ランドルフはオリガですが、レオンの方は未だに教えていませんでしたのでここで教えます。

幕間：愛しい人

僕は“愛しい人”が帰りを待っている筈の家へと帰宅の道を歩いていた。

僕が愛しい人と初めて出会ったのは、軍曹曰く「春を売る女の宿」だった。

これを聞けば大抵の人たちは解かると思う場所に僕と親友のランドルフ君は軍曹に連れて行かれた。

そして愛しい人と出会った。

ランドルフ君はオリガさんだ。

気が付けば家のドアまで来ている事に気が着いた。

そしてドアの取っ手に手を掛けようとした所でドアの方が勝手に開いた。

「お帰り。レオン」

ドアの前に立っていたのはランドルフ君と同居しているオリガさんと同い年位の女性だ。

容姿は黒髪を男っぽく切った感じにトパーズ色の勝ち気そうな瞳で服装も男物を官能的に作らせた衣装を身に纏っている。

腕には赤いバンダナを巻いており洒落っ気を出しているようにも思

える。

そして足元にパフッと小さな、だけど暖かい感覚を覚えて下を見れば目の前の女性そっくりな可愛らしい娘が足元に絡み付いていた。

「お帰りなさいー。レオンお兄ちゃん」

娘は僕の足元に顔を埋めていたが、直ぐに起こしてトパーズ色の瞳を惜し気もなく輝かせて見つめて来た。

「ただいま。レイテさん。そしてローズちゃん」

僕はこの家に住む愛しい人と娘の名を言ってから帰宅した事を伝えた。

僕の愛しい人はレイテさんと言う方で、足元に絡み付いていた娘ローズちゃんの母親だ。

まだ２２歳だが、これでも一児の母親だ。

夫は何処ぞの男らしく自分に子が出来ると知ると雲隠れしたという男として腹立たしい事この上ない下種野郎だ。

子が出来たと知るなり雲隠れとは良い度胸だ。

もし、目の前に現れたら僕は即座に一発殴るだろう。

軍曹も言っていた。

『女を泣かせても、その腹に居る天使を泣かせるのは許されない』

その口ぶりの割には大尉曰く「結婚を迫られて逃げてたじゃねぇか」という事だ。

まぁ、あの人の性格らかして何だかそんな気がしなくもないが、僕としては冗談だろうと思う事にしている。

僕の左手をローズちゃんが握ってきた。

「冷たいー。早く温めないと風邪ひいちゃうよ？」

ローズちゃんは僕を急いで暖炉に連れて行き、冷えた手を温め出した。

「ありがとう。ローズちゃん」

僕はローズちゃんを抱き上げて一緒に暖炉で温まった。

「本当にローズはあんたに懐いているわね」

レイテさんは僕とローズちゃんを見て微笑んだ。

僕は最初、レイテさんに子供がいる事に驚いたが別に嫌な気持ちはしなかった。

寧ろ女手一つでここまで育て上げたレイテさんを尊敬する。

ランドルフ君の母上も早くに夫を亡くしてからはランドルフ君と弟達を女手一つで育てたから大した物だ。

オリガさん同様にレイテさん達もヴァイガーへと逃げ込んで家を構えた。

そして僕はその家に泊めてもらっている。

実家はどうなのかは知らない。

別に知りたいとは然して思わないから調べようとはしない。

僕は元子爵家の次男坊だとここに来て初めてレイテさんに言った。

初めて出会った時は敢えて言わなかったが、泊めてもらうなら正直に言った方が良いと判断したからだ。

そしたらレイテさんは「貴族の坊ちゃんの筆下しが出来たなんて女のロマンを達成できたわ！！」と何だか分からない言葉を言ったのを思い出す。

だけど、もう実家とは縁を切ったと後付けで言ったが「それでも良いの」と言われた。

どうやら軍曹曰く「お姉さま」達にとっては可愛い、貴族、初めて、この3つがどうやら好まれるらしい。

逆に軍曹みたいな男は「害虫」と断罪されて憚らないというから酷過ぎる話だ。

まぁ、軍曹の女好きは些か問題だと常々ながら思っていたけど。

そんな事を考えているとレイテさんが食事だと言ったので、ローズ

ちゃんを伴い食卓に着いた。

「今日はどんな事をしたんだい？」

レイテさんは果実酒を私の杯に注ぎながら訊いてきた。

「はい。スキーと言われる物を体験してきました」

私は果実酒を飲みながらスキーについて説明した。

するとローズちゃんが「ローズもやりたいー」と言ったので今度やろう、と言った。

「あんたって本当に貴族の坊やかと時々思うわ」

レイテさんは果実酒を飲みながらポツリと呟いた。

「どうしてですか？」

「だって普通、貴族の坊やなら子供って煩わしいと思うでしょ？」

「僕は思いません。寧ろ子供は好きです」

まぁ、兄上達は子供が大嫌いだと公言して憚らなかったが。

「そう。そう言えば、この前ミレーネ姉の家に行ったんでしょ？」

「はい。それが？」

「ミレーネ姉が首ったけの色男はどんな人？」

「テツヤ殿、ですか・・・・・・・・」

僕はテツヤ殿について思い浮かべ始めた。

最初は・・・・まぁ、酷い言い方だけど山賊の頭だと思ってしまった。

いや、だって傍から見ればそうなんだ。

性格は尊大の皮肉屋で誰だろうと毒を吐くという敵を作り易い性格だ。

だけど、物事の筋は通すし面倒見は良いし女性などにも優しい。

ランドルフ君を始め僕たちみたいな歳若い者たちにとっては父兄みたいな方だ。

逆にワイド中尉などの同い年からは頼れる友人であり、プロイセン様達から見れば性格に難があるけど仕事が出来る男という感じだ。

「へぇ、そうなんだ。あたしも会ってみたいわ」

「家に行けば会えますよ？」

「だけど、家にはミレーネ姉以外の女が2人居るって聞いてるわよ？」

「確かに居ます。だけど、3人とも良い方ですよ」

現在、テツヤ殿の家には3人の女性が住んでいる。

1人はオリガさん、レイテさんが姉として慕っているミレーネ様だ。

元はさん付けで呼んでいたけど、あの方がサラ様の父上の子、つまり王族の血を引いていると知ってからは様付けで呼んでいる。

どうしてそんな方が春を売る女性なのかは余り話したくないから省かせてもらう。

2人目はメジュリーヌさんという女性でドラゴンだ。

何でもギルドから依頼を受けた件で知り合ったらしくテツヤ殿が助けたらしい。

そこからテツヤ殿と色々とあったらしく同居していて色々と為になる話を私たちにして下さる。

本人曰く「伊達に数百年以上は長生きしておらん」との事で普段は絶世の美女という単語が似合う容姿で官能的なドレスに身を包んでいる。

軍曹からは「女王様」と言われているが、何だかあの口ぶりからは・・・・変な意味がありそうだ。

3人目はプロイセン様の一人娘でリーザ中尉だ。

天馬騎士団の長であるリーザ中尉はテツヤ殿に恋心を抱いておりプロイセン様もテツヤ殿を気に入っているため「将来は夫婦」になろうとしている。

そのためと言えば良いだろうか？

ミレーネ様とメジュリーヌさんに対して並々ならぬ対抗意識を持っており何かと2人に対抗していると聞いている。

それをテツヤ殿は面白可笑しく見ているというから意地悪な方だ。

とまぁ、こんな感じの3人がテツヤ殿の家に住んでいる。

「随分と個性豊かな女性ね」

「はい。3人揃ってテツヤ殿を好いているんです」

お世辞にもテツヤ殿は顔が格好良いとは言えない。

軍曹の方が寧ろ顔は格好良いのだが、性格があれでは女性に好かれる所か嫌われて当然だ。

それに対してテツヤ殿は顔の方は良い訳ではないが、人柄などは良いし女性の扱いも慣れている。

軍曹の話によれば王族から求婚された過去もあると言われている程に女性に好かれているらしい。

確かに私が女性ならテツヤ殿を好くだろうと思う。

それだけテツヤ殿は良い男なのだ。

「そう言う物よ。まぁ、最初こそ顔で判断するけど付き合えば好き

になるなんて良くある話だもの」

レイテさんは経験から分かっているのか、そういう物だと言い果実酒を飲んだ。

食後はローズちゃんを風呂に入れて3人で同じベッドで寝るのが毎日だ。

ローズちゃんを中央にして私とレイテさんで挟む形だが何だか親子みたいで私にとっては新鮮だし心地よい。

「レオンが子供好きで助かるわ」

レイテさんは寝ているローズちゃんを撫でながら私に言ってきた。

「子供は可愛いですから」

「ありがとう。この子もあんたに懐いて手間が省けるわ」

首都に居た頃は友人に預かってもらっていたらしい。

まぁ、商売が商売だから致し方がないと言うしかない。

「僕もローズちゃんが妹・・・・娘みたいに思えて良いんです」

娘という発言にレイテさんは驚いたが直ぐに微笑んだ。

「血は繋がっていないし私は身体を売る女なのよ?」

とてもじゃないが貴族とは合わないと彼女は言ったが私は首を横に

振るった。

「もう貴族ではありません。それに貴方の商売も関係ありません。私はレイテという名を持つ一人の女性である貴方とローズちゃんが好きです」

血は繋がっていなくても私にとってローズちゃんは可愛い妹であり娘だ。

「・・・・貴方と出会えて幸せよ」

「僕もです」

貴方のような素晴らしい女性と出会えた事に対して幸福を感じると私は言い眠るローズちゃんの頭を撫でた。

幕間：宰相の独白（前書き）

２話目の幕間はゲンハルトとイザベルです。

こちらはもう・・・尻に敷かれた夫という感じになりますが、それでも優しい話に仕上げた積りです。

幕間：宰相の独白

家へと帰った私は食事の後、ベッドで俯けになった。

スキーと呼ばれる物のせいで節々が痛くて堪らなかった。

特に腰が痛い。

細長くて平べったい板を2枚足に付けて細長い棒で雪の道を滑るのだが、難しい事この上ない。

これでも軍人を目指していた私だ。

だから、体力的にも自信はあったしああいう物でも直ぐにやれると高を括っていたが何度も何度も転んでしまった。

宰相である私としては赤っ恥を掻いた訳だが、それは他の者も同じ事であり私だけでないと知ると何となくだが嬉しかった。

こんな感情を持つから人としてどうかと言われるが素直な気持ちに嘘は無いし出来ない物だ。

そして何としても滑れるようになると思い何度も何度も挑戦したが、転ぶばかりで全く駄目だ。

つい癇癪を起したが、それでもまた明日挑戦したいと思う。

そんな決意をする私の背中にバシッ、と力を込めて湿布薬を張る・・・・イザベルを睨んだ。

「もう少し優しく張れないのか？」

私は既に言っても無駄というか寧ろ更に痛い目に遭うであろう言葉をイザベルに投げた。

「人が好意でやっているのにその態度は何？」

イザベルは腕を組み私を睨み据えた。

ここはイザベルが構える家だ。

前まではただの小屋だったらしいが、それをイザベルが見つけて自宅に改装したのだ。

女の身でありながら、こいつは何でもこなす。

炊事洗濯から始まり大工、ダンス、資料作成など様々だ。

それに腕っ節もある。

訊けば娼婦街・・・男性を癒す宿（間違っても売春宿などと蔑称で呼んではいけない。こう言わないと拳が飛んでくるのだ）では揉め事を解決する役目を担っていたらしい。

それに幼い頃から喧嘩に明け暮れたというから筋金入りだという。

そして相手が誰であろうと情け容赦なく毒を吐く上に拳を突き出すという有り様だ。

これを聞けばどれだけ凶暴な女か分かる筈だ。

だが・・・まぁ・・・何だ。

見てくれは悪くないのだ。

そう、こんな凶暴な女だが・・・見てくれは悪くないのだ。

今でこそ地味な衣装を纏っているが、ドレスを着せればそれなりに栄える容姿だ。

いや、地味な衣装だろうとこの女は栄える。

そして何だかんだと文句を垂れて拳を繰り出すが、私の事を案じているとも解かっている。

初めて会った時は凶暴で教養の無い野蛮な女だと思っていた。

だが、ちゃんと私の為に茶を淹れてくれた・・・・・・・・・まぁ、その茶は直ぐに私の顔に掛けられたが。

それでも淹れてくれた。

そしてここに来て住む所が無い私に「三食付きでしかも風呂と寝床もバーゲンセールで付けて上げる」と言い私を住まわせてくれた。

それから私がテツヤとどのように付き合えば良いかもさり気なく助言してくれた。

テツヤを私は忌み嫌っていた。

素性が不明で横暴な態度を取る傭兵。

これがテツヤに対して持っていた最初の印象だった。

傭兵ともなれば忠誠は金であり平気で味方を裏切るという印象が私の中ではあった。

だが、ちゃんと一人の人間として付き合えば蔑んだりした私の方が寧ろ忌み嫌われると思い直した。

あの男は口こそ悪いが、筋は通っているし面倒見も良い。

それはランドルフの話や他の者達の態度で解かった。

あの男は2度ほど軍を変えたと私に話した。

2度も軍を変えた理由を私は訊ねたが、あいつは「戦いでしか自分を見出せないんだよ」と答えた。

つまり自分の為に傭兵になったとあいつは答えたのだが、私にはそれだけではない気がした。

漠然としているが、これでも宰相だ。

相手の心理位は多少だが読み取れる。

あの男は自分の為だけに戦っているのではない。

寧ろ誰かの為に戦っている。

それこそ今の状況がそうだ。

この国とは何の縁も所縁も無い。

そんな国にあの男は命を掛けて護ろうとしている。

これが良い例だ。

それに散々、酷い事をしてきた私に対しても面と向き合い対応している。

あの男が居なければ、私は恐らく腑抜けの宰相として後世に名を残していた事だろう。

しかし、あの男と出会えたからこそ初心に帰れた。

だから、あの男には全面的に信頼を寄せている。

まぁ・・・性格なのだろうな。

素直になれない所はあるが。

それはイザベルに対しても同じ事だ。

この女ほど私に今まで尽くしてくれた者は居ない。

信頼していた部下達に裏切られた上に敵であるリカルド王子からも馬鹿にされ腑抜けの状態だった私をテツヤ同様に元に戻してくれた。

そして助言をしたりした上に私に食事と寝床を与えてくれた。

今もこうしてスキーで腰を痛めた私の為に湿布薬を張ってくれている。

ここまで尽くしてくれる女は居なかった。

皆、私を癇癪持ちで肉が殆ど無い骨と皮で構成された身体の上に髪の毛が無いという体格と性格を嫌っていたのは解かる。

だが、宰相という高い地位に居るから利用できると思っていた奴らは煩わしい程に群がっていたのも解かる。

私の周りにはそういった欲の皮が突っ張った奴等ばかりだった。

それは女性も同じだ。

私に近付いてくる女性はこれまで何人かは居たが、腹に一物ありそうな女ばかりで私を苛立たせた。

・・・・・・イザベル位だ。

損得関係無しに癇癪持ちの私に尽くしてくれる女は・・・・・・・・・・

最初こそ何かあると思っていたが、この女にはそんな芸当は出来ないし、しない女だと今では解かる。

ミレーネ様の時も・・・この女は私を慰めてくれた。

サラ様の双子の姉であるミレーネ様。

元の名はレナだが、今はミレーネが本名だ。

私は良い名を育ての親から授けられたと思う。

レナなどという不吉な名は子に相応しくない。

産まれたばかりの赤子に対してこんな名を与えると共に私とプロイセンに“これ”を処理しろなどと命令した王を怨みたくなる。

高貴な品格を備えたあの方にはミレーネ・ルシアン・・・・夜の女神という名が相応しい。

願わくば・・・・このまま平凡だが幸せな余生をテツヤと共に過ごして欲しい物だと思わずにはいられない。

王族の血を引いているから表舞台に出るという事も出来るが、それはあの方も望まないだろうし、私も望んでいない。

サラ様には申し訳ないが言わないでおく。

この秘密は私が死ぬまで墓まで持っていく積りだ。

こんな事をサラ様が聞けば心を痛めるのは明白だし、要らぬ厄介事を巻き起こすだけだ。

だから、他の者達にも言わないように伝えた。

イザベルにも同じ事をさせたが。

そんなイザベルは私の腰に最後の湿布薬を張るとベッドから起き上がった。

「終わったわよ。まったく、まだ４５なのに情けないわね。耄碌した爺じゃないんだから腰が痛いとか情けない事は言わないでよ」

「ふんっ。私はプロイセンのように身体を鍛えていないのだ」

「偉そうに言える言葉じゃないでしょ！！」

バンッ、とイザベルは私の腰を叩いた。

「ぎゃあ！！」

私は思わず悲鳴を上げて腰を両手で抑えようとしたが、イザベルが掴んで抑えて来た。

「な、何をする！！」

「身体を鍛えていないあんたの為に身体を鍛えて上げるわ」

気持ち良い、というおまけ付きだとイザベルは続けた。

この時、イザベルは獲物を捕まえた獣のように口端を上げて笑った。

それに対して私は冷や汗を掻いたが、強気に言ってみせた。

「ふんっ。逆に私がそなたを鍛えてやる」

まぁ・・・かなり腰を痛めるのは覚悟の上だが。

そんな空威張りとも言える言葉を吐いてみせた私にイザベルは楽しみだわ、と言い蝋燭の火を消した。

その後は・・・・・・まぁ、鍛えられたと言っておこう。

そして腰が更に痛くなったとも、言っておこうではないか。

第七十五章：無線の相手は・・・・・・・・・

スキーを習い始めて翌日、私たちは再びスキーを足に付けて滑る練習を繰り返していた。

オリガさんの助言通り力を抜いてやってみると何とかコツを掴む事に成功した。

と言ってもまだまだの状態だがコツさえ掴んでしまえばこっちの物だ。

後はそれほど時間的な余裕は無いが出来る限り急いで慣れる事に時間を費やした。

今日も朝からスキーをやっている最中だが、軍曹が現れた。

「おい、作戦会議を開くぞ」

軍曹の言葉に私たちは一同に頷いて直ぐに城の中へと入った。

城の中に入って会議を開く場所に行けば既にテツヤ殿とメジュリーヌさん、そして要らない荷物が居た。

要らない荷物の顔には僅かながら雪が付着していた。

テツヤ殿の方を見ればメジュリーヌさんに護られるような形で座っていた。

『・・・・予告通り挑んだのか』

そして返り討ちになった、というのが私の予想でテツヤ殿に訊けばやはりその通りだった。

「予告通りこいつは俺に斬り掛った」

結果は言うに及ばず要らない荷物の負け、という形に終わったらしい。

まぁ・・・ある程度の予想はしていたが、まさか本当にするとは・・・・・・・・・・

私は呆れながらもレオンと一緒に壁の片隅に移動し立った。

そして皆が座るとテツヤ殿が「会議を始める」と言い会議は始まった。

「ガルムの偵察の報告を先ずは伝える」

テツヤ殿は煙草を銜えながらガルムが偵察に行ってきた報告を私たちに伝え始めた。

ガルムの偵察によればリカルド様は首都で白い服を調達し始めたらしい。

やはり先の偵察で学んだらしい。

それから有力な貴族たちに自分に味方しろと檄を飛ばしているようだ。

既に何人かの貴族たちは我先にとリカルド様に自ら売り込みを開始したようだ。

「ある程度の予想はしていたが、改めて聞くと情けなくなる」

ゲンハルト様は信頼していた筈の貴族たちが余りに変わり身の早い事に対して嘆かずにはいられなかった。

「そう言うな。まだ全員がリカルド側に味方した、という訳ではないんだ」

テツヤ殿は慰めるように言った。

「で、偵察の続きを話すとリカルド側は民達に対して税を出すように言ったらしい」

先ず軍資金を稼ぎ態勢を整える事に力を注いでいるようだ。

民達には既に手を打っているのか、ある程度の協力はあるようだがそれはリカルド様と手を結んでいた者だけであって無理やり残された民達から言わせれば酷い話以外の何でも無い。

「言う事を聞かない奴には罰を与えるらしい」

鞭打ちは軽い方で悪いとその場で斬死の刑というから恐ろしい。

その上、リカルド様に敵対する、しようと考えている者、不平を漏らす者、首都を脱出しようとする者などを取り締まる秘密警察という組織まで出ていると言う。

そのため民達は毎日を地獄のように過ごしていると聞かされた。

「そんな事では民達が従わないだろうな」

軍曹が煙草を吸いながらリカルド様の政策を評した。

確かに、こんな真似をすれば民達は従う所か逆らうのは目に見えている。

だが、私にはリカルド様がこんな手を使うとは思えない。

「リカルド様ではないな」

プロイセン様が軍曹の言葉を否定する言葉を投げた。

「どういう事だよ?髭のおっさん」

軍曹がプロイセン様に訊ねた。

「リカルド様は民達にそのような真似をすれば協力所か逆らう事を知っている筈だ」

つまり別の誰かが行っているという事だ。

「それにリカルド様は総大将だ。恐らくそちらは部下に任せて自分は我々をどう倒すか、また他国とどう向き合うのか考えている筈だ」

その他にも協力を申し込んできた貴族達と面会などをしているから出来ないと続けた。

「・・・・恐らくそちらの方はライアナル伯爵が担っている事だろう」

ここで要らない荷物がポツリと告げた。

「ライアンナル伯爵って奴はどんな奴なんだ?」

軍曹が要らない荷物に訊ねたが、要らない荷物はテツヤ殿に訊けと言ってきた。

何で自分で説明しないんだ、と訊く軍曹に対して「貴様のような女好きの男とは一言も話したくない」と要らない荷物は答えた。

「酷いなー。俺は君みたいな美人なら1日中だって、お話できるぜ?それこそ暖かい・・・・・ぎゃあ!!」

また余計な事を言おうとした軍曹の顔に煙草を押し付ける大尉。

「あんたは節操を持ちな」

何度同じ言葉を言ったのか、と思いたくなる。

軍曹は呻き声を上げながらも直ぐに回復してテツヤ殿に訊ねた。

「旦那、どういう奴なんです?あっついなー」

「こいつの話によれば蛇だ」

紋章が蛇であり、性格も蛇のように残酷で冷淡だとテツヤ殿は説明した。

そして何故、それが解かるんだ?と要らない荷物に訊ねた。

「あの男は、戦より主に政治的な面で力を発揮すると聞いている」

つまりリカルド様の政治を補佐する役割が本分で戦はあくまで他のメンバーに任せているという事か。

それにしても豪く今日もまた素直に受け答えをしているな、と私とレオンは思った。

「なるほどな。それからフォース・リーコンの奴らだが、どうやら何処かと連絡を取っているようだ」

無線で誰かと話しているのをガルムは聞いたらしいが誰かは解からないと言う。

「しかし、あいつら以外に戦っていませんよ」

軍曹はフォース・リーコン以外の者とは戦っていないと言いテツヤ殿も偵察に行った時も見ていないと言った。

「って事は、まだ居るという事でしょうか?」

大尉が新たな煙草を吸いながらテツヤ殿に訊いた。

「恐らくそう考えても良いかもな。詳しい事は解からないが、そうであると考えて良いだろう」

「どうするのだ?テツヤよ」

ゲンハルト様がまた新たな敵が来るかもしれないと厄介だぞ、と言ってきたがテツヤ殿は何とも言えないと答えた。

「無線で話していた相手が誰なのか分かれば手の打ちようはあるんだがな」

ここでテツヤ殿は煙草の灰を灰皿に捨てた。

「だが、今は目の前に居る敵を葬り去る事に全力を注ごう」

下手に他の事に目をやるより今は目の前に居る、知っている敵を倒す事に全力を注いだ方が良い。

確かにそうだ。

どんな相手が解からない。

だが、何れは戦うだろう。

それは何時なのかは分からない。

なら、今はフォース・リーコンをどうするか考えるべきだ。

「今度もまた奴等が先頭に立つだろう」

先の戦いで負傷した者が何人か居るが、まだ大半は無傷と見て良い。

となれば彼等を先頭にして援護させつつ槍兵などで攻めて来るだろう。

更に空からはワイバーンで攻撃させる。

「メジュリーヌ。ワイバーンは冬とかでも動けるのか？」

テツヤ殿は傍らで腕を組むメジュリーヌさんに訊いた。

「主の言葉を借りれば蜥蜴じゃ。だが、冬でも動ける」

蜥蜴も蛇も爬虫類や両生類の類いだから冬眠はする。

しかし、どうやらワイバーンなどは問題無いらしい。

「とは言え、恐らく前のようにはいかんな」

1年中、雪に囲まれた場所で産まれて育てられたなら話は別だが、この5大陸では1年中を雪に囲まれた場所など無い。

「と言う事は、前のように活発に動けないということか」

「うむ。妾は別じゃが、奴らならそうなるであろう」

ワイバーンには特に何かを施せる訳ではない。

それは他の乗り物も同じ事であるが。

「そうか。よし、では前に話した死の十字路をどうやって完成させるか考えるとしよう」

「何だ？それは」

要らない荷物がテツヤ殿に質問を浴びせて来た。
これにはヴィルヘルム元伯爵を始め皆は驚いたが、テツヤ殿は気にせず答え始めた。

「死の十字路は防御戦で威力を発揮する戦術だ」

それからテツヤ殿は要らない荷物に丁寧に教えた。

「・・・なるほど。つまり、貴様が持っている武器は矢などと同じく飛ぶ距離によって威力も落ちるなど欠点があるという事か」

「その通り。だが、それは色々な方法で補える」

要らない荷物はなるほどと頷いて口を閉じた。

『・・・どういう風の吹き回しかな?』

レオンが私に小声で質問を浴びせて来た。

『分からない。でも、このまま良い方に行ってくれると嬉しいんだけどね』

私の返答にレオンも頷いた。

それからテツヤ殿は奴等を縦陣に進ませるように、また城を目指すしか出来ないような方法を考え始めた。

とは言え、これは前の会議でも話し合った事だ。

ここで御復習いとして一言で言えば、要は敵を孤立させるのだ。

恐らく敵は補給なども気にしながら来る事だろう。

「先ず奴等の補給線を狙う」

然して離れていない距離だが、雪が降った事で通常よりも進軍が困難になるのは目に見えている。

恐らく1人辺りが持てる食料は大体だが最高で3日から4日と見て良い。

後は補給を頼りに攻めて来るだろう。

だから、一度でもその補給線を壊してしまえば敵は一時的だが孤立する事になる。

それからゲリラ戦や罠などで敵を精神的にも肉体的にも追い詰めて行くのだ。

エゲツナイ方法だが、これが戦争と言う物だと私は自分に言い聞かせた。

「補給線を狙うのにあたって、奴等の主力が来たら狙う」

主力と補給線を遮断すれば如何に主力とは言え空きっ腹で戦う羽目になる。

そうなればこちらに有利に事は運べるという事だ。

「なるほど。で、我々も打って出ると以前話していたが、スキーを使いゲリラ戦を行うのか？」

「それも一つの手として考えている。だが、簡素ながら砦を築きそこを拠点にやるのも良いと思う」

万が一敵に追い込まれたらそこに籠り戦うのだ。

「だが、ただ立て籠っていたら数で負ける。だから、頃合いを見計らって逃げる」

予め脱出口を作り、更に砦は破壊する事で敵に利用されない。

これがベストだ。

「なるほど。では、先ずは砦と罠を仕掛けるのが先決か」

「あぁ。ガルムの報告ではまだこちらに来るのには１０日以上時間が掛るらしい」

その間にこちらも準備をし、スキーを物にしなければならない。

余り時間は残されていない。

だが・・・・・・・

「逆に時間が残り少ない方が皆、上達も早いだろ？」

テツヤ殿の意地悪な言い方だが、的を射ている言葉だと思うし頷く

しか出来なかった。

1988

第七十六章：幸運の女神

スキーを始めて7日間が経過した。

オリガさんの助言が功を奏したのか私は驚くべき速さでコツを覚えて物にする事に成功した。

お陰で長細い棒ーーーストック無しでも滑る事が可能となりライフルでの狙撃が出来るようになった。

今はガリシャと共にスキーを付けたまま移動して狙撃をしていた。

と言ってもストックは持ちつつ、止まりそこで狙撃をするスタイルだが。

ガリシャは距離や風速を計り私に伝え、私はそれを聞いて調節し引き金を引いた。

弾は空を切り白い地面の上から僅かに顔を出した顔に命中した。

顔と言っても人型の的だ。

だが、実戦なら確実に相手を仕留めていた事だろう。

私達がスキーを習い始めてから7日が経過したと先ほど書いたが、その間にもリカルド様達は準備を整えている筈だ。

テツヤ殿の予想では恐らく後3日から4日で進軍を開始する筈だと言っていた。

私達もただスキーを習っていた訳ではない。

スキーを習いつつ相手が来るであろう進路に掛けて罠を仕掛け地雷を埋めた。

その他にも簡素ながら砦を築き、そこで相手を迎え撃ち真っ直ぐに城に向かうようにするようにも準備を整えた。

砦は“トーチカ”もしくは“バンカー”と呼ばれる物だ。

具体的に説明すると一般に円形や方形などの単純な外形で、全長が数メートルから十数メートル程度、銃眼となる開口部を除いて壁で保護された防御施設だ。

だが、そんな物を悠長に作る暇は無い事から麻の袋に土を入れた一一土嚢で作った壁の上に丸太類を渡して土を盛り天蓋とするだけという手軽なトーチカにした。

トーチカ以外では地面に掘った塹壕だ。

これは連絡壕としても使用する。

塹壕はテツヤ殿の国では「蛸壺」などと言われているらしい。

ただし塹壕にも多少の手は加えてある。

掘った塹壕の上に板を敷き端に棒を付けた事により相手はここを通っても分からないように工夫してある。

それから脱出口も確保し準備を整える。
そしてこれは私にとっては嬉しい事だ。
親衛騎士団で私とガリシャの命を救ってくれたヘン・ロビンソンが回復したのだ。
エドリアス大尉の話によれば弾は応急処置の時に摘出した上で傷口なども消毒し治療した事が良かったらしい。
私は途中でスキーを取り外してガリシャと共にヘン・ロビンソンの元へと向かった。
行けばヘン・ロビンソンは私服を着てもう立っていた。
「よぉ、お二人さん」
彼は笑顔で私とガリシャを迎えてくれた。
「傷が治って良かったですね」
「あぁ。しかし、1週間も身体を動かさなかったから鈍っちまった。今からヴィルヘルム元伯爵の元へ行ってくる」
「なら、お供します。そこにテツヤ殿も居るので」
「そうか。なら行こうか」
3人で肩を並べて歩き始めたが、ヘン・ロビンソンは私とガリシャの装備についてあれこれ訊いてきた。

「てことは、そのモーゼルというのは弓や弩みたいに手動で動かすのか」

彼は私のモーゼルを指差して訊ねた。

「はい。ガリシャのＳＫＳは引き金を引けば撃てます。ただし、レシーバーを引いて弾を装填しないといけません」

「ということは全てが自動という訳ではないという事か」

「はい」

ヘン・ロビンソンは口元をモゴモゴさせ始めた。

「女神の抱擁が欲しいんですか？」

私が訊ねると、彼は頷いて持っているのか？と詰め寄ってきた。

「はい、どうぞ」

私は女神の抱擁を渡して自分も銜えた。

そしてマッチで火を点けて煙を吸った。

「あー、美味いなー」

ヘン・ロビンソンは煙草を美味しそうに吸いながら、今度はベレッタとイングラムについて質問して来た。

「拳銃はあくまで護身用であり最後の切り札という事か。そしてサブマシンガンはその拳銃の弾を使用する銃か」

「はい。私のベレッタは９ｍｍですが、イングラムは４５Ａ．Ｃ．Ｐ弾ですが」

だから弾の互換性は無いという事だ。

「その９ｍｍと４５Ａ．Ｃ．Ｐ弾ではどちらが上なんだ？」

「４５口径の方が弾の速さが遅いため人体に対しての威力が高いそうです」

ただし、反面で反動が強いことなどが上げられる為にこれを作ったアメリカと一部の機関でしか余り採用されていないと聞いている。

「９ｍｍの方が一般的だそうです」

「なるほどな。俺も君等と同じ物を持ちたいよ」

「テツヤ殿なら用意できると思いますが、先ずは」

「あぁ。ヴィルヘルム元伯爵達を倒してからだ」

その壁を越えないと先には行けない、と彼は言った。

恐らく彼としてはヴィルヘルム元伯爵が率いるシュヴァルツフントを倒さないとテツヤ殿の訓練は受けられないという考えなのだろう。

「ロビンソン殿は」

「ヘンで良いよ」

「しかし、年上の方を呼び捨てには」

「じゃあ、さん付けでも良いよ」

「それではヘンさんは、フィーナ様の叔父上を知っておりますか？」

「あぁ。何せ俺を親衛騎士団に入れたのはヴィールング様だからな」

「最初から親衛騎士団に居たんじゃないんですか？」

「あぁ。元はヴィールング様の下で働いていたんだが、どういう経緯かあの人から親衛騎士団に行ってくれと頼まれたんだ」

前の副団長は別の所へ行かされたらしい。

親衛騎士団よりも高い役職らしいが、その実態は名ばかりの管理職だという。

つまり・・・・・・・・・

「姪御可愛さに左遷、ですか？」

「多分な。だが、あの男は前々から良からぬ噂もあったし団員の覚えは良くなかった」

だから、姪御可愛さだけではないらしい。

「まぁ、団長を目に入れても可愛がっているとは分かっていたが」
7日間に2度は必ず報告しろと厳命されたらしい。
「やらないと減給処分だった」
うわぁ・・・そこまで徹底しているとは・・・・・・・・・
「その叔父さんってかなり凄いね」
ガリシャもヴィールング様の事を凄いと褒めた。
「あぁ。今は、何処に居るのか分からないがあの人なら無事だろうな」
「そんなに強いんですか？」
「あぁ。団長の父上であるロックス様は一言で言えば“根っからの騎士”だった」
彼は何度か仕事で会った事があるらしい。
「確かに非の打ち所が無いとサラ様も言っていましたね」
「だろ？だが、根っからの騎士だから何かと頑固で体裁も気にしていた」
敵の追撃も騎士としての誇りが許さないとか、剣以外で戦う事に強い抵抗を持っていたとか様々あると言う。

更に言えば偵察を軽視していたとも言う。

「偵察は役に立たない、と言い切っていたんだ」

「でも、その割には武功がありますよね？それに敵は偵察をしていたんではないですか？」

「あぁ。していた。だが、ヴィールング様も偵察に向かわせていた」

だから、それほど苦しい目には遭わなかったらしいが、ロックス様はヴィールング様の偵察を最後まで軽視していたと言うからそこら辺は要らない荷物も受け継いでいるな、と思う。

「最後は敵兵と相討ちと言っただろ？あの戦いでヴィールング様を始めとした俺らは出ていない」

そのためロックス様は偵察を行わずに兵を進軍させたらしく、そこで待ち伏せを受けて戦死したらしい。

「つまり自業自得、ですか」

「あぁ。だが、最後まで先王を護ったという点が強調いや、美化されたんだ」

なるほど・・・噂と事実とは異なる、いや異なり過ぎるな。

そんな事を思いながら私はロックス様が根っからの騎士というなら、ヴィールング様はどうなのか？と訊ねた。

「ヴィールング様は騎士と言うより“軍人”だったな」

騎士なら正々堂々と戦ったりするが、軍人は勝つ事が前提だとヘン・ロビンソンは言った。

「あの人は家を継げないから若い頃は武者修行に出ていて様々な人物と戦ったらしい」

そのため剣から槍、弓、鎚、矛、など様々な武器を扱えるし格闘技も出来るらしい。

「そんなヴィールング様をロックス様は忌み嫌い、団長にも教えようとしなかった」

もし、それを教えられていれば恐らくテツヤ殿とも変に喧嘩をしなかった筈だと私は思った。

しかし、どういう訳か会議の時は豪く素直に話し合いをしていたと彼に話した。

「本当かよ？」

彼は信じられないという顔をしていた。

部下にまでこんな風に驚かれるとは・・・・・・・・・

「はい。まぁ、その前に予告通り戦ったようです」

ただし、結果は言うに及ばず

「団長の負け、か」

「はい」

私は頷くと彼はやっぱり、と嘆息した。

「しかし、普通に話し合いが出来たという事は大きな進歩だよな？」

「ですね。前なんて顔を合わせれば問答無用で剣を抜く始末でしたから」

それを考えれば大きな進歩だと言える。

かなり遅い進歩だが、良いことだ。

そんな事を話し合っているとヴィルヘルム元伯爵達が居る演習場に到着した。

そこに行くとテツヤ殿と親衛騎士団の一人が対峙していた。

テツヤ殿は素手で相手は剣を構えていた。

だが、様子からして訓練だと思われる。

「どうした？来ないのか？」

テツヤ殿は相手を挑発するように言ってきたが、相手は動じずにこう言い返した。

「あんたは後手の先だろ？なら待つさ」

「そうかい。なら、俺から動くとしよう」

テツヤ殿は言うが早いか一気に距離を縮めた。

相手は驚くと同時に直ぐに防御態勢を取ろうとしたが、遅くテツヤ殿に腕を掴まれて投げられた。

そこへ間髪入れずにテツヤ殿は相手に向けてコルトを抜いて構えた。

「バンッ」

声で発砲する真似をしたテツヤ殿。

「今のが実戦ならお前は死んでいたぞ」

親衛騎士団の男は悔しそうに立ち上がりながら、ああいう時はどうすれば良いんだ？と訊ねた。

「受け身を取り直ぐに離れろ」

そして自分が勝てると思える場所に移動するのがベストだとテツヤ殿は答えた。

それに対して男は頷いてみせた。

「よぉ、テツヤ」

ヘン・ロビンソン・・・ヘンさんはテツヤ殿に片手を上げてみせた。

「身体は大丈夫か？」

「あぁ。所でどうして戦っていたんだ？」

「簡単だ。こいつはヴィルヘルムの仲間に勝ったからさ」

これに私は驚いたが、その続きを聞いて納得した。

「こいつ等の誰かに勝てば俺が相手をする。そして俺に技一つか手傷を負わせたら訓練を受けさせるんだよ」

テツヤ殿に技を決めるか、手傷を負わせる・・・・・どちらも難しいと思う。

だが、それが彼等を刺激したのか数人はテツヤ殿と戦える所まで漕ぎ付けた様子だった。

「お前に技か手傷を負わせる、か。難しいの一言だが・・・面白そうじゃねぇか」

「お前もやるか？」

「あぁ。だが、先ずはヴィルヘルム元伯爵達を倒してからだろ？」

順番は守る物だ、とヘンさんは言い腰に差していた剣を引き抜いた。

「そこまで言うなら、回復したかどうか俺直々に見てやろう」

ヴィルヘルム元伯爵が身の丈もある大剣ーーー“ツヴァイハンダー”を抜いた。

身の丈もあるこの剣は槍を一列に並べた槍兵に対して、同じくこの剣を構えた者たちを突入させて陣形を崩すのが一般的な使用方法である。

だが、ヴィルヘルム元伯爵はそれを片手で軽々と使いこなしており一人でも事足りると思える。

「・・・またベッドに逆戻りしそうな気がして来た」

ヘンさんは早くも弱気を見せたが、直ぐに打ち消した。

「悪いが・・・俺はベッドには女を抱く為にしか帰らないんだ」

「言うようになったな・・・・・若造が！？」

ヴィルヘルム元伯爵は一気に大剣を振り降ろしてきた。

私とガリシャは慌てて避けたが、ヘンさんはそれを受け止めてみせた。

「あ、危ないじゃないですか！！」

私はヴィルヘルム元伯爵に抗議したが、ヴィルヘルム元伯爵は「居る方が悪い」と開き直ってきた。

「お二人さん。早く離れな・・・・余り長くは持たない」

ヘンさんは脂汗を掻きながら大剣を受け止めていたが、手が震えているから耐えられるのも時間の問題だ。

直ぐに私とガリシャは離れた。

それを見計らってヘンさんはヴィルヘルム元伯爵の攻撃を横に避けて態勢を整えようとした。

だが、ヴィルヘルム元伯爵は大剣を自分の腕のように軽やかな動きで俊敏に攻撃を続けて行き相手に隙を与えない。

ヘンさんは防戦一方で壁際に追い込まれてしまった。

「さぁて・・・もう一度ベッドに戻ってもらうぜ」

ヴィルヘルム元伯爵は大剣を握り直すと口端を上げて笑ってみせた。

「生憎だが俺は・・・あんたを倒して俺はテツヤと戦う」

そして更なる高みへと行くんだ、と彼は言った。

「生きが良い台詞だが、何処まで持つかな！！」

ヴィルヘルム元伯爵は大剣を横に、水平に構えて突きを繰り出した。

水平に構えれば、しかも両刃なら左右どちらに逃げようとも横に払えば切れる。

これではヘンさんに勝ち目は無い、と私もガリシャも思った。

しかし、それは違っていた。

ヘンさんは左右ではなく、下に身を屈めたのだ！！

あれなら避けられる。

それに既に大剣は壁に突き刺さってしまい、直ぐには動けない。

ヴィルヘルム元伯爵は驚いて直ぐに回避しようとしたが、遅くヘンさんの剣が首筋に当てられた。

「俺の勝ち、だな？」

ヘンさんは確認するように言った。

「・・・どうかな？」

ヴィルヘルム元伯爵はニヤリと笑うや否やヘンさんに足払いをして態勢を崩した彼の胸に拳を打ち込んで見せた。

「うげっ」

ヘンさんは蛙が踏み潰されたような悲鳴を上げて気絶した。

「中々の腕だが、まだまだだな。だが、俺に手傷を負わせたのも確かだ」

見ればヴィルヘルム元伯爵の喉には僅かながらに掠り傷があった。

『でも、あれって自分で動いたから出来たんだよね？』

『そうだけど、あの人なりに見せた優しさじゃないの？』

私とガリシャはヴィルヘルム元伯爵の行動をそのように取る事にした。

何はともあれヘンさんはテツヤ殿と戦う権利を得た訳だ。

気絶しているが。

「ランドルフ。水を掛けてやれ」

私は直ぐに頷いて、こんな寒い中で悪いがヘンさんに水を掛けさせてもらった。

直ぐに彼は目を覚まし、寒い！！と第一声を上げた。

「お前はヴィルヘルムに手傷を負わせた。俺と戦う権利を得た」

これを聞いたヘンさんは直ぐに立ち上がった。

「それじゃあ・・・・・・・・・・」

「あぁ・・・やってやるぜ！！」

テツヤ殿は言うが早いか拳を打ち込んできた。

明らかに不意打ちであるが、戦闘においては先手必勝だ。

ヘンさんはそれを両手で受け止めてテツヤ殿に蹴りを入れたが、テツヤ殿も蹴りで防いだ。

「格闘技を齧っているようだな」

「あぁ。これでも元は騎士ではなく軍人だったんだ」

「なるほど。なら、少し本気を出させてもらうぜ」

テツヤ殿は更に攻撃を激しくさせたが、ヘンさんも負け時とやり返した。

互いに拳と拳をぶつけ合い、攻防するがテツヤ殿の方が有利に見える。

「これでどうだ！！」

ヘンさんがテツヤ殿に拳を打ち込んだ。

それを寸での所で避けたテツヤ殿はその腕を掴みヘンさんの背後に回り込むと絞め技を決めて来た。

「うぐっ・・・・・し、絞め技か・・・・・・迂闊だったぜ」

ヘンさんは技を決められて呻いた。

「甘いな。だが、俺の髪を掠め数本は切った腕は凄いぜ」

あんたは合格だな、とテツヤ殿は告げた。

「じ、じゃあ・・・・・・・」

「あぁ。お前さんを鍛えてやる」

ただし、そんなに時間が無いから取り敢えずは2、3日で覚えられる事だけを教えるとテツヤ殿は続けた。

「ど、どんな事を・・・やるんだ?・・・・・痛ッ・・・・・・」

技を決められたままだからヘンさんは呻き声を上げながらテツヤ殿に訊ねた。

「お前さんは剣術以外にも格闘技も齧っているようだ。それ以外だと何を学んだ?」

「そ、その前に・・・・技を解いてくれ!!」

もはや涙声で叫ぶヘンさんにテツヤ殿は今頃になってから気付いたのか技を解いた。

「あー、いってー。もっと速く技を解いてくれよ」

ヘンさんは腕を解しながらテツヤ殿に文句を垂れた。

「そう言われても忘れていた」

『嘘だね』

『あたしも思う』

私とガリシャはテツヤ殿の態度を見て嘘だと思った。

「で、剣と格闘技以外だと何を学んだ?」

「まぁ、最初に言うと俺は軍人だったが獅子頭軍団に在籍していた訳じゃないんだ」

「じゃあ、何処だ?」

「団長の叔父であるヴィールング様が指揮していた個人的な軍に居た」

その軍は小規模な組織でやる事と言えば、雑用が主だと言う。

「だが、それでもちゃんと仕事はあった」

金が無い、もしくは使いたくない貴族の要請に従い護衛をしていたとヘンさんは話した。

「まぁ、軍なんてこんな事態で無ければ金食い虫だからな」

それは騎士も同じではあるが、民達から見れば軍人の方が金食い虫に見えるだろう。

そして貴族なども金持ちなら見栄えを大事にする為に大勢の騎士たちを抱える。

だが、金が無い貴族たちと金はあるが平時は要らないと考えている貴族たちも居る。

それを考えてヴィールング様はこのような組織を作ったのだろう。

「差し詰めパートタイムだな」

「何だ、その言葉は？」

「ある一定の期間まで雇われて働く奴等を言うんだ」

ヘンさんがいた組織もそういう物だ、とテツヤ殿は言いたいのかもしれない。

「当たっているな。まぁ、そんな所に俺は居た」

そこでは剣以外にも格闘技、槍、槌、果ては弓なども教えていたと言う。

「なるほどな。だから、お前さんだけは骨があった訳だ」

ヴィルヘルム元伯爵は納得するように頷いた。

「てことは、ある程度の事は学んだとみて良い訳だな？」

「あぁ。ただし、蛇を食べたりするような事は教えられていないぞ」

「だろうな。まぁ、それは追々教えるとして今は俺が使う武器を教えてやるよ」

これを聞いた親衛騎士団の面々は羨ましいと声を上げた。

「生憎だが、俺は“幸運の女神”が付いているのさ」

ヘンさんは私が予備として渡した女神の抱擁を掲げて銜えた。

「幸運の女神か。まぁ、本性は死者をまた戦わせる女神だがな」

「何言ってんだよ。美女の為にこそ戦うものだろ？」

「イーグルみたいに言う奴だ。まぁ、お前の方が節操はあるとみるがな」

確かに、軍曹と同じ位に節操が無かったら困る。

しかし、この方ならそんなに無いと思う。

「あそこまで女に節操が無いと逆に嫌われるだろ？」

「あぁ。お陰であいつも女に泣かされている」

そうテツヤ殿は言ってヘンさんの煙草に火を点けてやった。

「それで俺はどんな武器を持たせてくれるんだ？少佐殿」

ヘンさんは煙を吐きながらテツヤ殿の階級を口にして訊ねた。

「お前さんに幾つかの武器を持たせて自分がこれだ、と思える奴を持たせる」

だが、時間が無い以上は操作も簡単で分解や掃除も容易な物を持たせるかもしれないと付け加えた。

「良いさ。持たせてもらえてそれで戦うノウハウさえ教えてもらえるなら」

それで足手まといにならないなら構わない、とヘンさんは言い続け

た。

「殊勝な心がけだ。よし、付いて来い」

「了解。少佐殿」

「まだ少佐とは呼ばなくて良い。訓練を始めたら少佐と呼べ」

「では、テツヤ。早く行こうぜ？」

「ランドルフ、お嬢ちゃん。お前等も付いて来い」

「はい」

「あいよ」

私とガリシャは頷いて二人の後を追い掛けた。

後に残された親衛騎士団は歯軋りしながらもシュヴァルツフント達と戦い続けたと後日、知った。

幕間：ハゲタカに借りを（前書き）

ここでフォース・リーコンの一人の独白を入れます。

2011

幕間：ハゲタカに借りを

東の地へ偵察に行った隊に居た俺は治療を終えて愛煙草であるアメリカン・スピリットを降り積もる雪の中で蒸かしていた。

俺は肩に受けた傷を撫でながら雪が降る中を歩き始めた。

俺は数日前に東の地へ行き、敵と戦い傷を負った。

その偵察中に雪が降り始めた。

雪が降れば俺たちが着ている迷彩服の役割は殆どない。

一度、戻って装備を整えてから行くべきか、またはこのまま行くべきか。

俺らの中でも最古参である軍曹に決定権は委ねられた。

軍曹は厳つい顔で一言だけ告げた。

『大佐の命令は絶対遂行だ』

俺たちの上官で１９６８年の“テト攻勢”を始めとしパナマ、グレナダの作戦に従事した海兵隊の中では知らぬ者は居ないとされている伝説の英雄である“大佐”・・・その人が俺の上官だ。

俺が海兵隊に入隊したのもあの人が居る隊で、あの人の下で戦いたいという気持ちからだ。

海兵隊に入隊し更にフォース・リーコンに入隊して、ついに念願の大佐の下で働く事になった。

その偵察任務での指揮官は大佐の部下で隊の中でも最古参の兵である軍曹だ。

大佐より海兵隊に居る機関が長い軍曹はいつも厳つい顔で周りからは「デビル・フェイス」なんて言われている。

だが、軍人として任務を絶対遂行する意志は本物であり尊敬できる。

軍曹はこのまま偵察をすると言い先に進んだわけだが、向こうは俺らが来ていると知っていた。

白いギリー・スーツに身を包んだ奴らは俺らを待ち伏せしていた。

軍曹は直ぐに迎撃態勢を取り戦いは始まった。

敵の中には隊の中では最年少である俺より更に若い男が居た。

まだ１０代で情けない体格をしているがボルトアクション式ライフルと一緒に同年代の女の子を伴い狙撃していた。

あの男が俺らを最初に攻撃した。

故意なのか或いは外れたのか、弾は仲間の腕に当たった。

それから俺は他の仲間と共に別れて反対側から反撃をした。

狙うは坊やだ。

回り込んで狙ったが、別の男が二人を庇い銃弾を一身に受けた。
そして坊やは俺たちを憤怒の眼差しで睨み据え手榴弾を投げ付けてきた。
幸い死者は出なかったが、散々な目に遭いながら命からがら逃げ返った訳だ。
傷ついた俺たちをリカルド様は責めもせず「無事で良かった」と言ってくれた。
あんな言葉を言ってくれたのはあの人だけだ。
俺らは国の・・・政府の・・・議員の・・・操り人形であり代わりは幾らでもいる捨て駒。
だが、リカルド様は俺たちに労いの言葉を掛けながら、また行ってくれと頼んできた。
この人の為なら命は惜しくない、と俺はその時思った物だ。
そんな事を思い出しながらアメリカン・スピリットの灰を叩き落すと目の前で軍曹がＭ６０Ｅ３の試射をしている場面に出くわした。
前の戦いでＭ６０Ｅ３は坊やによって破損されたが、予備があったからそれに変えたばかりだ。
「どうですか？軍曹」

俺は軍曹に話しかけた。

軍曹は俺を一瞥し直ぐにＭ６０Ｅ３に目を向けた。

「上出来だ。・・・しかし、あの少年・・・・敵ながら天賦の才を持っているな」

「あの坊や、砦の戦いでも味方の手足を狙って負傷者を増やしてましたからね」

坊やは殺すよりも負傷者を増やす方があの場では良いと判断したんだ。

あの若さなら初陣だと思うが、ああも冷静に現状を把握できるとは恐れ入る。

「敵に回すのが痛いですね」

「あぁ。・・・お前としては、敵指揮官をどう考える？」

「さぁ、まだ一度も会っていませんから何とも。ただし、かなりの軍人だと思います」

カルナン、ザンビアで2度ほど俺たちはリカルド様の戦い振りを見たが、酷い物だ。

1度目はまだ良かったが、2度目はお粗末にも程があるほど情けない戦いだった。

だが、砦の戦いでは１８０℃も違っており2度の戦い以上の奮戦振

りだ。

それを見たリカルド様は「指揮官が変わった」と言った。

優秀な指揮官が指揮を執れば兵は立派になると言うから、恐らく優秀な指揮官が指揮を執ったんだろうな。

そして偵察の戦いでも恐らくその優秀な指揮官が指揮を執ったのだろう、と思う。

となれば敵の指揮官は優秀だと思うしかないだろ?

「まだ会った事の無い指揮官だが優秀だ。だが・・・次の戦いでも苦しい戦いを余儀なくされるな」

恐らく敵は2度の戦いの挽回をする事だろう。

それを考えれば持てる限りの力を出して来る筈・・・・・・・・

しかし、だ・・・・・・・・・

「俺らが出た戦いで苦しくない戦いなんてありましたか?」

自惚れかもしれないが、俺たちが出た戦いはどれも苦しくない戦いなんて無かった。

俺たちは“殴り込み部隊”だ。

だから、誰よりも戦場に先駆けて行くから苦しい戦いを強いられてきた。

今回も苦しい戦いになるだろうが、だから何だと言うんだ。

向こうには向こうの信念や思想があるだろうが、俺達にも俺達の信念や思想があるんだ。

誰かがこんな事を言ったな。

確か・・・日本のアニメで「戦いなんてものはな、本の些細な行き違いや思い違いで起こるもんさ」こんな感じの言葉だ。

確かにその通りだ。

今がその通りだからな。

そんな事を考えてから軍曹を見た。

「・・・無いな」

軍曹は僅かに苦笑した。

「それで大佐は何処です？」

俺は何気なく訊いた積りだった。

しかし、軍曹は苦笑から直ぐに表情を消すと何時もの厳しい顔になった。

「大佐は・・・・奴らに“ハゲタカ”に援軍を要請する積りだ」

「・・・冗談ですか？」

俺はアメリカン・スピリットを銜えたまま笑って見せた。

だが、ちゃんと笑えたのか疑問だ。

「私が冗談でこんな戯言を言うか？」

軍曹は厳しい顔のまま訊き返した。

「・・・本当なんですね」

「・・・あぁ。時期早々と思うかもしれないが、備えあれば憂いなしと言うからな」

「しかし、あいつ等は俺らを蔑んでいるんですよ？」

あいつ等は俺らを蔑んでいる。

いや、あいつ等だけでない。

あの国に居るのは俺らを「野蛮人しか相手に出来ない無能な集団」という古臭いにも程がある考え方をしている奴等だ。

そんな奴等の中でも俺らを忌み嫌う“ハゲタカ”に協力を要請するなど・・・・・・・・・

「だが、あの土地を攻略するには空からの援護も必要だ」

軍曹はあの土地を攻略するには空からの援護も必要だと納得せざる

得ない言葉を投げて来た。

確かに、あそこを叩くには地上だけでなく空かも援護が必要だ。

ワイバーンも居るが奴らだけでは足りない・・・・・・・・

だが、だからと言って・・・・・・・・・・・・

「貴様の気持ちも解かる。日ごろ我々を侮蔑し続けた奴等に“借りを作る”など許せる訳が無い」

「あいつ等に借りを作れば・・・・どんな事を言って来るか・・・・・」

「あぁ。だが、借りを作っても“相手が望む方法で借りを返す”義務は無い」

俺はこの言葉の意味が分からなかった。

それを知ってか知らずか軍曹は言葉を続けた。

この場合は一刻も早く戦を終わらせる事が第一条件であり個々の意思は二の次だと軍曹は言ってきた。

その通りだ。

その通りなのだが・・・・・・・・・・・・・・

「やるせないです・・・・・・俺たちは、あんな奴等の力を借りないと何も出来ないのかと自分で思ってしまいます」

「私もだ・・・・・・・・・」

俺の言葉に軍曹も頷いた。

それから暫くして俺たちは再び東の地ヴァイガーへと進軍した。

この前の戦いから白い戦闘服に身を包んで、だ。

先ず俺たちが先頭に立ち進むが、どうもやるせない気持ちだ。

軍曹の言う通り俺たちの考えは二の次、三の次だ。

しかし、出来るなら俺達の力でこの戦を終わらせたいとも思ってしまう。

あんな奴等に借りを作れば、どんな目に遭うか分かった物じゃない。

今だって良からぬ者が二人も居るんだ。

豚と蛇だ。

あの二人は占領した首都で傍若無人な事をやっている。

リカルド様としてはあの二人に政を任せたいとは思わなかったようだ。

だが、味方をしてきた貴族たちの相手や他国との交流を記した書類から国庫の書類など全て燃やされてしまった事が原因で一から調べ直さなくてはならない。

これが原因で首都の政を出来ないでいる。

ヴィクター公爵とフィリップ男爵もリカルド様の手伝いで忙しく出来ないからあの二人に任せるしかない。

それを思うとやるせない気持ちが更に重く圧し掛かって来る。

俺は前を見た。

聳え立つ山々に囲まれた城・・・あそこを落とせばこちらの勝ち。

そうすればリカルド様は王になる。

俺はその姿を見たい。

そして・・・ずっと傍に居て護りたい。

だから・・・何としても勝たなければ。

やるせない気持ちを俺は押し殺して前を向き歩く足に力を込めた。

2021

第七十七章：訓練開始（前書き）

ヘン・ロビンソンの拳銃を変えさせてもらいます。

と言っても口径は４５口径で同じくＳＩＧ何ですがね。（汗）

第七十七章：訓練開始

演習場に到着してから直ぐにテツヤ殿は携帯で取り敢えず何でも良いから届けてくれ、と頼んだ。

まぁ、あの宅配人なら文句ひとつ言わずに「じゃあ、私の考えで送りまーす」とか何とか言って届ける事だろうな。

それから間もなくして目の前に大量の銃器が届けられた。

「すっげーな。どうやったんだ？」

ヘンさんは驚きを隠さずにテツヤ殿に訊ねた。

「後で教えてやる。それより今は目の前にある奴を全部撃て」

取り敢えずヘンさんが自分で撃って相性がある銃を持たせると言う。

それを選んだら残りの時間でミッチリと教え込むと言う算段のようで、直ぐにそれから実戦へと放り込む。

「もし、それで死んだら自分が覚えられなかったという事だから自己責任だぞ」

「あぁ・・・解かっている」

ヘンさんは真剣な顔で頷いた。

「よし、ではやり方を教える」

テツヤ殿は全銃器の基本的な操作を教えた。

操作を教えてもらったヘンさんは目の前にある銃器に手を出し撃ち始めた。

雪が積もった演習場に幾つもの銃声がしては山々に木霊する。

ヘンさんは幾つもの銃器を撃ちながらどれが自分に合うのか模索していた。

暗闇で恋人を探すように私には見えた。

その内、彼は恋人を探し当てる事に成功した。

「こいつだ・・・こいつが良い！！」

ヘンさんは声を上げて自分に合った物をやっと見つけられたと喜んだ。

「・・・・“ステアーＡＵＧ”か」

テツヤ殿はヘンさんが述べた銃－－－ブルパップ式アサルトライフルの名を告げた。

「こいつを手にした瞬間に俺の心が時めきを覚えた。まるで初めての恋人に会った時のような時めきだ」

ヘンさんは過去の恋愛を思い出したのか懐かしむような口調で言い続けた。

「ロマンチックな言い方だな。で、そいつを説明すると“ブルパップ”式アサルトライフルだ」

「ブルパップ？お前さん達のとは違うのか？」

「同じアサルトライフルという点では同じだ。だが、そいつはマガジンが後ろにある」

ヘンさんは言われてステアーＡＵＧのマガジンを見た。

テツヤ殿のマガジンは前にあるのに対してステアーＡＵＧは後ろにある。

「マガジンが後ろにある銃をブルパップと言う。利点は幾つかある」

先ずブルパップの最大の特徴はマガジンが後方にあるという事だ。

通常のライフルは前にあるが、これの場合は後方にあるというのが最大の特徴と言える。

マガジンを後ろにやる事により全長を短くする事が出来、携帯性に優れている。

ただし、欠点もある。

先ず全長が短いためフロントサイト・リアサイト間の距離が十分に取れない。

これによって正確に狙いを付けられないという問題が出来る。

更にレシーバーの位置が射手の頬に当たる為に空薬莢が直接頬に当たったりするし、作動音や火薬などが顔に掛り健康を害するなどという欠点がある。

もう一つ付け加えるなら高額と言う点だ。

テツヤ殿や私たちが持っている銃よりステアーＡＵＧは最新式の技術などが組み込まれている為、軍曹のコルトＭ７２７カービンよりも高額だと聞いている。

ここまで来るとブルパップ式アサルトライフルは良い事が無い、寧ろ悪い事の方が多いと思うだろう。

「だが、そいつは“１．５倍率オプティカルスコープ”を標準装備している」

テツヤ殿はヘンさんが持つステアーＡＵＧの銃身の上に装着されてあるスコープを指差した。

「それのお陰で照準精度を確保している。それに部品の向きを入れ替える事で薬莢の排出方向を変えたり出来るんだよ」

それでも欠点はあるが、ブルパップ式アサルトライフルの中では一番成功した代物だとテツヤ殿は言った。

「外人部隊のあるフランスの“ＧＩＧＮ”やイギリスの“ＳＡＳ”、ドイツの“ＧＳＧ－９”、イタリアの“ＣＩＳ”、オーストリラの“Ｃｏｂｒａ”という名高い部隊でも使用されているのが良い例だ」

テツヤ殿が上げの５つの隊はどれも世界的に有名らしくその筋の世界では上位クラスに入ると言う。

「つまり俺はそんな隊の奴等も愛用しているアサルトライフルと相性が良いという事か」

「その通りだ。ただし、それ以外にも色々な武器を教えるぞ」

時間は少ないが何でも覚えさせる、とテツヤ殿は言った。

「勿論だ。で、次は拳銃か？」

「あぁ。拳銃はライフル以上に難しいが、持っているだけでも良い」

「それじゃあ、要望があるんだが良いか？」

「何だ」

「あんたは４５口径を使用しているだろ？」

「あぁ。ランドルフ達は９ｍｍだが。それがどうかしたのか？」

「俺も４５口径が良いんだ。何か無いか？」

「それならある」

テツヤ殿は銃器の中から無造作に１丁の拳銃を取り出した。

「世界でも最高と言われるＳＩＧ社の作り上げた“ＳＩＧ　ＧＳＲ”だ」

これは世界でも指折りの銃器店と言われるＳＩＧ社がコルト・ガバメントの模造品として作り上げた拳銃で口径のバリエーションが多岐に渡っている。

そしてシングルアクション――撃鉄を一度起こして撃つ方法とダブルアクション――引き金を引くだけで撃てる方法、両方を合わせ持っている。

口径に関してはガバメントの模造品でもあるので４５口径と２２ＬＲ弾の２通りしかない。

これとは別にテツヤ殿が居た自衛隊の拳銃もこの会社が作った９ｍｍ拳銃を採用している。

「こいつは俺のガバメントより重いが、それを補うだけの性能がある」

何でもＳＩＧ社のモットーと言えば良いだろうか？

全ての銃器に関して「高品質で高精度」という事らしい。

例え模造品であろうともそのモットーに従い、自社の拘りに満ちた作りをしている。

それで高性能が保てるのだが、その半面で高額であるというのが痛い所だ。

だが、高額という欠点を差し引いても高品質で高精度というのは捨て難い。

量より質を旨とする自衛隊なら、高品質で高成度がモットーのＳＩＧ社の拳銃を採用したのも頷けなくはないと思う。

「何だか俺って金が掛る女としか相性が良くないのか？」

二つとも高額と言う武器と相性が良い事に些か疑問符をヘンさんは浮かべた。

「そんな細かい事は放っておけ。それよりこいつを持ってみな」

テツヤ殿はヘンさんにＳＩＧ　ＧＳＲを持たせた。

「あんたの持っているのより俺的には持ち易いな」

「それならお前さんと相性が良いんだろうよ」

ヘンさんは試し撃ちをして感覚を掴んだのか「これにする」と決めた。

「よし、決まりだ。じゃあ、今度はそれを分解して組み立てる事を教える」

それにヘンさんは頷いた。

「それはそうとヘン。お前としては2度目の戦いで友好関係だった国がリカルド側に味方した事をどう思う？」

テツヤ殿は演習場に設けたテントの中に入ってからヘンさんに訊ねた。

テツヤ殿の質問は私も前から疑問だった。

どちらも友好国として関係を築いていたのに、どうしてリカルド様に味方をしたのか？

オリガさんから多民族国家であるから、と言われたが果たしてそれだけだろうか？

「アガリスタ共和国とクリーズ皇国の事か。あれは恐らく国全体の思惑ではないな」

ヘンさんは椅子に腰を降ろすとステアーＡＵＧとＳＩＧ　ＧＳＲの分解を始めた。

「どうしてそう思う？」

「司教様から聞かされたと思うが、向こうは多数の民族で構成された国だ」

「つまり多民族国家か」

「あぁ。シャインス公国も海を渡って来た移民たちと元から居る民達で構成された島国だ」

「サルバーナ王国は違うのか？」

「まぁ多少の移民は居るが、３つに比べれば大した数じゃない」

話を戻すと、アガリスタ共和国もクリーズ皇国も多民族国家である

という事がヘンさんは今回の戦いに関係あると答えた。

「俺はアガリスタ共和国に行った事があるんだが、あの国はこの国以上に火種が燻っている」

向こうは共和制を取り、そこから共和将を選び出して国を治めているがやはりそれでも不平不満はあるらしい。

少数民族の差別から宗教問題など様々な物が問題で何度か小さな争いが起きたとも聞かされた。

多民族国家はこうした問題が山のようにあり、直ぐに解決させる事は難しい。

「クリーズ皇国はどうだ？」

「向こうはアガリスタ共和国に比べれば遥かに良い」

皇帝となった者は弱小民族の出らしく弱者の味方をしているため民達からの覚えは良いらしい。

「だが、後継者問題が今はある」

現皇帝には1番目の后が産んだ男子４人と2番、3番目の后が産んだ子女など合わせると１０数人の子たちが居ると言う。

「まぁ、向こうは男子が４人も皇后の息子としているから残りの子息は有力部族に嫁がせたり婿に行かせている」

つまり４人の男子が事実上、皇帝を継ぐ権利を持っていると言う事

だ。

「だが、向こうは遊牧民の国家だ。となれば、末っ子を後継者にするんじゃないのか？」

「そこまで知ってるのかよ」

ヘンさんはテツヤ殿の発言に驚いていた。

「俺の国も似たような国があるんだ。そこも遊牧民で出来た国で後継者は末っ子がなった」

「どうして長男ではないのですか？」

私には分からない為に理由を訊ねた。

「遊牧民ってのは末っ子に相続させる所がある」

何でも農耕社会では経験を積んだ長男が必然と跡取りとなるのに対して遊牧民の方は子供が成人すると家畜の一部を子供に譲って独立させるらしい。

これは家畜の数が過剰になることを防ぐ為でありその為、最後まで残った親の遺産を受け継ぐのは最後まで親の手元に残る末子だからだそうだ。

「テツヤの言う通りだ」

ヘンさんもこれに頷いた。

「旦那って物知りだね」

ガリシャがここでテツヤ殿の博識に驚いた。

「傭兵でも1年中、戦場に居る訳じゃない。契約が切れるか、所属していた所が負けたり勝てば用無しだ」

そこで言葉は悪いが、お払い箱となる。

そして次の仕事を見つけるまでは他の仕事に就いたり、旅をしているらしい。

そのため様々な国を渡り歩いていると言う。

「まぁ、そんなんでクリーズ皇国の後継ぎなんかも分ったのさ」

テツヤ殿はそこで話を終え、ヘンさんに続きを促した。

「テツヤの言う通り向こうは末っ子が後継ぎな訳だ。だが、すんなりと決まる訳じゃない」

皇帝とそれに仕える家臣たちで話し合い誰が後継者に相応しいかを決めるようだ。

「だから、長男だろうと次男だろうと実力があるなら後継者になれる」

そして現皇帝の息子である4人の男子たちだが・・・・・・・・・・

「長男は皇帝の本当の息子ではなく、皇后が弱小部族だった頃に攫

われて孕まされた子という噂がある」

「それが原因で他の兄弟たちと仲が悪いか？」

「あぁ。まぁ、まだ皇帝が健在だからそこまで仲が悪いとは言えない」

ただし、皇帝が亡くなれば一気に仲が悪くなるだろうとヘンさんは言った。

そして今回の戦で2ヶ国がどうしてリカルド様に味方したのか、と話し始めた。

「恐らく皇帝や共和将の力が及んでいない地方の奴らだろう」

どちらの国もまだ完全に国を治めている訳ではない。

いや、治めているが地方の有力者の方がまだ力を持っているという事だ。

だから、リカルド様に味方したのはその地方の有力者だろうというのがヘンさんの読みで恐らく当たっている可能性が高い。

「まぁ何であれ、敵である事に変わりは無い。俺は前線指揮官として奴等が盾つくなら滅ぼすだけだ」

「だろうな。俺も賛成だ」

その為にも今、この時間も無駄にしたくないから訓練を続けようとヘンさんは言った。

「そうだな」

テツヤ殿は頷き分解された銃器の部品などを説明してヘンさんに教え始めた。

第七十八章：備えあれば憂いなし

ヘンさんはステアーＡＵＧとＳＩＧ　Ｐ２２０の分解と組み立て、操作方法などの基本を先ずは完璧に覚えた。

まだ1日も経っていないのだが、これはヘンさん自身が覚えたいと言う気持ちが強い事と二つとも比較的、分解などが簡単という事もある。

現在、ヘンさんはステアーＡＵＧを右手に構え、左手を銃身の下にあるフォアグリップを握って撃っている。

「そいつはセミ・フルを変える為のレバーが無い。引き金を引く事で変えられるから“慣れ”が必要だ」

ステアーＡＵＧはセミ・フルを変えるレバーが付いておらず、引き金を浅く引くとセミ・オートに、深く引くとフル・オートになると言う。

これには一種の慣れが必要なため身体に何回も教え込む必要があると言う。

ヘンさんは引き金を浅く引きセミ・オートで撃っていたが、直ぐに深く引いてフル・オートで乱射した。

ＡＫＳ－７４Ｕに比べ集弾性が高く的にも纏まって当たっている。

「やっぱりそれは集弾性がＡＫに比べると高いですね」

「あぁ。お前もＡＫよりあっちが良いのか？」

「いいえ。私はＡＫの方が好きです」

言っては何だが、私はコルトやステアーよりＡＫが好きだ。

武骨な形で些か難があるのはあるが、私にはＡＫが一番だと思う。

ヘンさんはステアーＡＵＧを乱射していたが、一度撃つのを止めた。

「気に入ったぜ。この武器」

ヘンさんはステアーＡＵＧの銃口から出る白い煙を息で吹き消しながら呟いた。

「それは良かった。所でヘン。お前はモリスン侯爵とライアンナル伯爵のどちらかを知っているか？」

「“豚”の方なら知ってるぜ。テツヤ」

「どんな奴だ？」

「元山賊の頭なんて噂がある奴でチーズと肉をこよなく愛する暴食家。兵は鉄鎚兵と矛兵など攻撃力が高い兵を好んでいるな」

と言う事は、鉄鎚兵と矛兵はモリスン侯爵の兵と考えるべきか。

「ライアンナル伯爵は分からないのか？」

「あの男に関してはまったく分からない。ただ元中央の貴族とは聞

いている」

それ以外は何も分からない、と彼は言いそれがどうかしたのか？と訊ねた。

「いや、どうもこの2人は胡散臭い」

リカルド様に仕える身の中でも私利私欲な面がある、とテツヤ殿は言った。

「確かにあの二人ならそうかもな。ヴィクター公爵とフィリップ男爵はそうでないが」

「その二人は知っているのか？」

「ヴィクター公爵はリカルド王子の片腕で守役だった」

辺境の地に追い立てられる前にリカルド様は先王に従い戦に出た事がある。

そこでヴィクター公爵と出会い、直ぐに先王は彼をリカルド様の守役にした上で1軍を任せたらしい。

リカルド様が辺境に追われると自身も後を追う様に付いて行ったと言うから忠義深い人物とみて良いだろう。

「フィリップ男爵は渾名が鼠だ」

紋章も鼠だが、外見も出っ歯がトレード・マークとも言われており民衆からも“鼠男爵”と言われているらしい。

「性格も臆病として知られているが、民達からは愛されているらしいぜ」

これはヴィクター公爵も同じ事でこの二人はリカルド様を裏切る事は無いだろう、とヘンさんは言った。

「そうか。となると、そいつらをこちらの味方にするのは出来ないか」

「かと言って、先の二人を味方にするのも問題だな」

私利私欲に塗れた者をこちらの味方にするのは些か問題あり過ぎでデメリットの方が高い。

「所でテツヤ。フォース・リーコンの奴等は、どうしてリカルド王子に味方していると思う？」

「さぁな。だが、あいつ等は敵として厄介だが先陣を斬る筈と考えれば真っ先に除外できる」

「と言う事はそいつ等を先ずは倒す事が前提か」

「あぁ。お前もそれを持たせた以上は奴等と戦う事になるが、気を付けろよ？」

「なぁにお前が居るんだ。心配ない」

ヘンさんはテツヤ殿を信じている、と言い切った。

それにテツヤ殿は驚きながらも分かった、と頷いてみせた。

それから再び射撃練習を開始するヘンさん。

私とガリシャも狙撃の練習を始めた。

その間、テツヤ殿はこちらに来たリーザ中尉とワイド中尉、軍曹、大尉と共に何かを話していたが私にはそれが聞こえなかった。

――――――――――――――――――――――

— — — — — — — — — — — — — —

俺は演習場に来たイーグル達と共にテントの中に敷いたテーブルの上に地図を置いて会議を開いていた。

ヘンとランドルフ、お嬢ちゃんは射撃訓練をしているから混ぜない方が良いと思い言わなかった。

「先ず、ここ等辺にバンカーを作りました」

イーグルが指差した所は城から半分の距離に当たる場所で岩などが多い所だった。

ここから城へと続く道沿いにバンカーを築き、それとは別な場所にも築いたとイーグルは説明した。

「後はクレイモアに原始的な落とし穴などを仕掛けました」

「そこへ迫撃砲も加えればもっと良いな」

俺は煙草を吸いながらイーグルの言葉に付け足した。

これで大抵の奴等は潰せる。

だが・・・フォース・リーコンの奴等が無線で連絡を取っていた奴等が気掛かりだった。

奴等も馬鹿じゃない。

恐らく俺の考えをある程度は予想し対抗策を練っているだろう。

となれば、どんな対抗策を取るか・・・・・・・・・・・・

バンカーなどを築いていた敵を倒すには艦砲射撃などが有効だが、山国のここでは無理だ。

戦車もこんな急斜面が多い場所では無理だ。

高射砲、対戦車砲も戦車同様にこんな地形では持って行くのは不可能と見て良いだろう。

・・・となれば空からの攻撃が妥当だな。

急降下爆撃機か空挺部隊を空中から降ろし叩く・・・となればヘリコプターから降下するヘリ・ボーンか。

ザンビア平野はカッソーロではないが、それでも平野で飛行機が走れる距離はある。

ヘリならザンビア平野でなくても発進出来る。
どちらを繰り出すのかは不明だが、こちらも新たに別な物を注文すべきだな。

「どうしました？少佐」

ミーシャが俺の思案顔を見て何かあると感じたのか訊ねて来た。

「フォース・リーコンの奴等は無線で誰かと連絡を取っていたと言う。そしてここを制圧するとなれば、どうする？」

「・・・空挺部隊ですね」

ミーシャはかつての戦場で自分達が行った経験から答えを見出したようだ。

「あぁ。ここは背後を谷にして相手を寄せ付けない。だが、空中から来られたらどうする？」

「なるほど。だとすれば、飛行機よりこの国の地形を考えればヘリからの降下ーーーヘリ・ボーンの可能性が高いですね」

「その通り。では、そいつらを叩く有効な方法はなんだ？」

「・・・“毒針”が有効ですね」

獲物を一撃の下に仕留める事が出来る強力な毒針が・・・・・・・・・

「そうだ」

俺はそれに頷き煙草の灰を灰皿に落とした。

「毒針ってなるとアフガンで活躍したあれですか」

イーグルが思い出したように口を開いた。

「へぇ、あんたでも解かるのかい？」

そのイーグルにミーシャは軽口を叩いて見せる。

この二人は険悪に見えるが、これがこの二人にとっては普通の会話なんだよ。

傍から見れば喧嘩みたいに見える会話でも、な。

「当たり前ですよー。何せそれを提供したのは俺の国で・・・叩かれたのは姐御の国だからね」

「ふん。口が減らない奴だ」

「そりゃどうも」

そんなじゃれ合いをした二人は最終判断は少佐に委ねると言ってきた。

ワイド、リーシャも同じだった。

「あった事にこした事は無いからな。注文しよう。それとミーシャ。ドラグノフを分隊に1丁ずつ持たせて城にも配備させておけ」

万が一の事を考えればそれ位の保険は必要だ。

何が起こるか予測不可能・・・これが戦場だ。

そして万全に対応する為に備えておくのもまた勝つ方法の1つだ。

「了解」

ミーシャは俺に敬礼して頷いた。

これで会議は終了し、それから直ぐに宅配人に毒針、RPG、ドラグノフ、迫撃砲なども注文した。

第七十九章：二度目の約束

雪が止み、朝日が地面に積った雪に光を当て幻想的な光を見せている中で私たちは白いギリー・スーツに身を包み演習場に直立不動で立っていた。

なぜ立っているのかと言えば、テツヤ殿・・・少佐が私たちを招集したからだ。

その少佐はゲンハルト様達と会議をしていてまだ来ていないが直に来る筈だ。

暫く待っていると少佐達が来た。

「敵が進軍を開始した」

少佐は用意された台の上に立つと一言だけ口にした。

ついに来たか・・・・・・

私は口を覆うようにして装着した白い布を付けた状態で息をして、ある程度は予想していたが少佐の口から言われると改めて実感した。

この口を覆う布だが、熱くて息がし辛い。

しかし、慣れればそれ程でもないしスキーで滑る時などはこれが口などを護ってくれるため有り難い。

少佐は私たちに敵を迎撃する、と述べこうも言った。

「ここで負ければ俺たちはもはや逃げる道は無い。だが、俺たちは勝ち敵を追い返して首都を奪還する」

そう俺は信じている、と少佐は言ってくれた。

「それぞれ各分隊に別れて陣地に着け。何かあれば直ぐ俺に連絡しろ。そして何があろうと生き残り帰って来い」

良いな？と少佐は訊いてきてそれに対して私たちは

『レンジャー！！』

声を揃えて返事をした。

それを聞いた少佐は満足そうに笑い最後にこう言って出陣と叫んだ。

『てめぇらのドデカイ一物を宴に参加してきた淑女達の尻に打ち込んでヒィヒィ言わせてやれ！！』

これはかなり卑猥な言葉だが、逆に卑猥過ぎて私たちは笑い出した。

そして私たちはスキーを装着し背嚢とライフルなどを背中に背負い演習場から滑り出した。

それを少佐、ゲンハルト様、プロイセン様、将軍達が送り出してくれた。

ゲンハルト様は私たち一人一人に「頑張ってくれ」と月並みだが、励ましの言葉を送って下さった。

この方は飾り物の総大将だが、それでも総大将らしく憮然と構え私たちに威厳を見せているのだと分かる。

演習場から城に出た時だ。

上から視線を感じて振り返れば、エリーナ様がドレスの上からストールを掛けた寒そうな格好で私を見つめていた。

なぜエリーナ様が居るのか疑問だったが、私を見つめていると知り止まって見上げた。

「どうしたんだい？」

ガリシャが私に訊ねて来た。

「先に行っていてくれないかな？」

私は上を見上げたまま言った。

私の様子に何かを感じたガリシャは追う様に上を見上げてエリーナ様を見た。

しかし、直ぐに私に向き直り「余り待たせないでよ」と言い残し先へと進んだ。

他の者たちもそれぞれの陣地へ行く中で私とエリーナ様だが見つめ合っていた。

まるで私とエリーナ様だけの時間が止まっているように静寂だった。

エリーナ様は私を見つめていたが、やがて口を開いた。

吐息が白く目で解かる。

それほど寒い中で、あんな格好でどうして外に居るんだ?

そんな下らない事を考えながら私はエリーナ様が声を発するのを待った。

「・・・ランドルフ」

エリーナ様が私の名を呼んだ。

「何でしょうか?」

私は訊ねた。

「・・・無事に帰って来て下さい」

貴方とは茶を飲む約束があります、とエリーナ様は告げた。

茶を飲む約束?

一瞬、分からなかったが思い出した。

そうだ・・・この前テツヤ殿と一緒にサラ様とエリーナ様の４人で茶を飲んだ時だ。

あの時、エリーナ様はテツヤ殿に「では、理由は訊かないので今度、

ランドルフと二人切りで茶を飲ませて下さい」と頼んだのだ。

そしてテツヤ殿は私の意思など訊かずに「ＯＫ。約束しよう」と勝手に言ったのだ。

まぁ、私も嫌じゃないからその場で了承したのだが・・・・・・・・

それを思い出して、どうしてエリーナ様がこんな寒い中をあんな格好で出ていたのか分かった。

エリーナ様はその約束を破るな、と言いたいのだ。

手間取ったが、やっと私は理解した。

「ご安心ください。必ず戻って貴方様と茶を飲みましょう」

私は布を外して口を見せて答えた。

「約束ですよ？」

エリーナ様は確認するように訊いてきた。

「勿論です。男に二言はありませんし、貴方様との約束は私の絶対です」

王女との約束は何があろうと守らなければならない。

これが私の中にあった。

それを聞いたエリーナ様は笑顔になったが、直ぐに真剣な顔になっ

た。

幼さが残る真剣な顔でエリーナ様はこう言った。

『ご武運を』

私は頷いて布を口に戻し、一礼してエリーナ様に背を向けた。

そして振り返らずに軍曹の後を追った。

スキーを装着して森林などで埋め尽くされた山道を滑るが、だいぶ慣れた為か身体が自由に動き楽だった。

私が所属する分隊は以下の通りだ。

私、ガリシャ、ヘンさん、獅子頭軍団、天馬騎士団が4、ガルム、軍曹だ。

つい数日前だがガルムは私とガリシャの通信手兼護衛となった。

これが狙撃手の理想的な組み合わせだ。

ガルムは素手でも戦えるが、少佐から渡された“ＰＫＭ機関銃”を装備している。

これはＲＰＫと同じ機関銃に分類されるが、こちらは狙撃中隊の機関銃として配備されＲＰＫやＲＰＤでは射程・威力に不十分であるとされて配備されたようだ。

私とガリシャの今の実力などを考えてＰＫＭ機関銃を持たせたガル

ムを通信手兼護衛としたのだろうな、と思う。

そして私たちが行くバンカーは敵の後方を断つ為に敢えて隠れた、そして離れた場所に作られている事も関係あるだろう。

ここから狙撃やゲリラ戦などをして後方を断つのだ。

そのため私以外の者の装備も遠距離を狙える物を持っている人員だ。

バンカーに到着した私は急いでスキーを外して中に入った。

そこには銃眼から銃口だけを出して警戒している軍曹達がいた。

「よぉ、遅かったじゃねぇか。色男さんよ。王女との別れは済んだか？」

軍曹が私を見るなり悪戯を思い付いた子供のように笑ってみせた。

「別に、私はエリーナ様とは・・・・・・」

私は軍曹の言葉に言い返そうとしたが、ガリシャが遮るように口を開いた。

「へぇー、あたしに先に行ってろって言って二人切りになったくせに・・・・・しかも来るのが遅いし・・・・・・・」

ガリシャが私を冷たい眼つきで見て来た。

「そんなに待たせた積りはなかったんだけど・・・・・・・」

「待たせたわよ。まったく、女の子を待たせるなんて男として最低だわ」

「ご、ごめん」

私は最低と言われて慌てて謝罪した。

「何言ってんだよ。少し位は女を待たせるのも良い男の特権だ。特に俺なんかは、な」

軍曹はガリシャとは正反対の言葉を言い最後は自画自賛したが、天馬騎士団のお姉様から「あんたは違うでしょ」と集中砲火を浴びて撃沈された。

しかし、直ぐに立ち直って私たちに真剣な顔で言ってきた。

「俺らはここで敵後方を断つ。ここはかなり危険だ」

前方の敵を倒しつつ、後方から来る敵も倒さなければならないのだから・・・・・・・・・

「だが、それだけ俺らは頼りにされている証拠だし重要な任務を任されたという事だ」

これは名誉なことだ、と軍曹は言い私たちを奮い立たせた。

「特にヘン。お前は初めての・・・これらを使用した戦いは初めてだ。あまり気を張り詰めるなよ？」

ヘンさんはこれらを使用した戦闘は初めてだ。

だから、あまり緊張し過ぎるなと軍曹は言った。

「安心してくれ。テツヤ少佐にミッチリと教え込まれたんだ。もう足手纏いにはならない」

ヘンさんはステアーＡＵＧを右手で掲げてみせた。

「威勢が良い言葉だ。よし、なら安心だ。さぁ、てめぇら奴等！！宴は間も無く始まる。選り取り見取りの淑女たちを喰らい尽くそうぜ！！」

『おぉ！！』

私たちは軍曹の言葉に頷き、迎撃態勢を取った。

それから敵が来るのをじっと待ち続けた。

まるで獲物が来るのを待ち続ける狩人になった気分だが、ある意味では当たっている気もした。

それからここで数日間、敵が来るのをじっと待ち続けた。

第八十章：迎撃開始

私は史記の中で太い文字でこう書き記した。

“血に塗られた十字路”

これはリカルド様の部下だったが後に徹夜様の部下になった方が言った言葉だ。

あの戦いの初戦にあの方は参加していなかったが、部下の窮地を救う為に戦地へと足を運んだのだ。

そして目の前の惨状を見て「血に塗られた十字路」と漏らしたのだ。

私もここでの戦いが終わり一度城へと戻った時に見たが正にその言葉が当たっていると思った。

いつの間にかこの言葉がこの地で起きた最初の大規模な戦いを呼ぶようになった。

この戦いから私たちの本格的な反撃が始まったと言っても過言ではない。

そしてこの戦いから私、妻、ガルムの3人で狙撃チームを組み始めたのだ。

この戦いでは後に“フォックス”と渾名されるヘン・ロビンソン殿も活躍したな、と昔を思い出しながら史記の執筆を進めた。

バンカーで敵を待ち続ける事、数日間が経過した。

その間、敵が来る気配はまったく無かった。

だが、何となく敵がもう直ぐ来ると私には分かっていた。

銃眼から銃口を僅かに出して待っていると・・・・・・・来た。

敵が来た。

白い戦闘服に身を包んだ敵が来た。

銃眼から目を出して見ると先頭はフォース・リーコンの面々だった。

「・・・偵察に来た奴らだな」

軍曹が小さく漏らした。

と言う事は、名誉挽回の為に来たという所か・・・・・・・・

フォース・リーコンに続いて槍兵、槌兵、矛兵、弓兵などが続々と続いて行く。

「まだだ。奴等が完全に俺らのテリトリーに入ってからだ」

軍曹は落ち着いた声で言い私たちを待機させた。

それからも続々と軍団の“線”は続いて行く。

しかし、その兵たちよりかなり遅れて追う者たちが見えた。

背に荷を載せた馬を引く者たちで、戦う者には見えない。

「あれは・・・・・・・・・」

私は目を凝らして見てみた。

手綱を引くのは兵だが、馬が背に載せているのは何だ?

焦げ茶色の荷物を載せており、それが重いのかしきりに手綱を引く者の手を煩わせている。

「あれは、食料だな」

ガルムが私の疑問を打ち消すように言った。

「分かるのかい?」

私が訊ねるとガルムは鼻を指して「臭いだ」と答えた。

「あの袋の中からは瓶を閉じる時に使われた蝋の臭いがする。中には完璧に閉じられていない物もあるな」

つまり・・・兵站か。

ここまで来るのには雪が無くても2、3日以上は掛る。

雪が降れば4、5日から倍以上と見て良いだろう。

となれば兵たちに食わせる食料などを運ぶのにも時間が掛る。

だから、恐らく今の内に運べるだけ運んでいるのかもしれないな。

「あれが兵站か・・・見る限りざっと見ても馬1頭辺りが背負える食料は1週間から2週間という所か」

軍曹は馬の背に積まれた袋を見てどの程度の兵站が推測した。

馬1頭が背負える食料が大体1週間から2週間でそれを全兵に与えるとなるとかなりの量になるし列になる。

となれば、恐らくまだ続く筈だ。

「てめぇら、射撃準備だ」

私たちは頷いてライフルのレシーバーやボルトを引いて弾を装填した。

ここで兵站を遮断すれば敵は飢えに苦しめられる。

かなり辛いが・・・勝つ為だ。

私はそう自分に言い聞かせた。

ガルムの無線機が小さくノイズ音を出し始めた。

『・・・ら・・・・た・・・か・・・応答しろ』

少佐の声だった。

軍曹がガルムの通信機から受信機を取った。

「こちらイーグル。どうぞ」

『イーグル。今、敵はどうなっている？』

「ただいま兵站が通っておりますが、やっても宜しいですか？」

『許可する。お前等の攻撃を合図にこちらも行う』

皆、準備は出来ているようだ。

「了解。では通信を終わる。オーバー」

『オーバー』

受信機を戻した軍曹はヘンさんに「グレネード」と命令した。

「了解。軍曹」

ヘンさんは頷いて、ステアーＡＵＧに取り付けたライフルスリングを首に掛け背中に背負っていたグレネードランチャーを取り出した。

グレネードランチャーは幾つかの種類に分ける事が出来る。

ただし、主に使用される種類として上げるなら“アンダーバレル式”と“小銃擲弾”であろう。

アンダーバレル式はアサルトライフルやサブマシンガンのオプションとして銃身の下に取り付ける物だ。

軍曹が持っているコルトのアサルトライフルや少佐のＡＫなどもこちらを採用している。

これを装着すれば小銃を撃ったままグレネードランチャーを撃てる利点がある。

しかし、この場合だと撃つ者が限定されてしまう。

アンダーバレル式グレネードランチャーは1個分隊もしくは1個班に1つくらしか支給されないらしい。

つまりこれを支給された擲弾手（てきだんしゅ）が負傷または戦死して戦線離脱したらその隊の火力が極端に低下する恐れがある。

逆に小銃擲弾――ライフル・グレネードは小銃の銃口に榴弾を取り付けて撃てる為、撃つ者が限定されない利点がある。

これは少佐の国が使用していた６４式自動小銃や外人部隊が採用しているＦＡＭＡＳなどが採用している。

これを使えば撃つ者が限定されないから擲弾手は限定されないし、ライフルがあれば撃てる利点もある。

だが、こちらは専用の空包を装着するため敵と出会った時に直ぐに撃てない欠点ある。

では、ヘンさんのグレネードランチャーは2種類のどちらかと言えばどちらでもない。

ヘンさんが持っているグレネードランチャーはリボルバー型のグレネードランチャーで名前は“アームスコーMGL”だ。

これは南アフリカ共和国のアームスコー社が開発した物で“４０×４６mm 擲弾（あちらの世界では一般的な口径らしい）”を使用するため殺傷能力は高い。

４０×４６mm擲弾以外にも対人榴弾から対戦車榴弾、催涙弾、発煙弾などが撃てる優れ物だ。

装弾数は6発のダブルアクション式だから引き金を引けば撃てる仕組みだ。

この分隊の中では、ヘンさんが擲弾手を務めるが万が一ヘンさんが戦線離脱した場合の事も考えて小型のグレネードランチャーは各自持っているから問題は無い。

ヘンさんはアームスコーMGLの折り畳んでいたストックを後ろに倒して肩に当てた。

そして銃身の下に取り付けられたグリップを握り、弾倉上部取り付けられた光学サイトで狙いを定めた。

「何時でも撃てます」

ヘンさんは準備完了だと述べた。

「よし、撃て」

兵站と奴らを遮断せよ、と軍曹は命令しヘンさんはアームスコーM

ＧＬの引き金を立て続けに引いた。

引いたのは3発分だ。

立て続けに４０×４６ｍｍ　擲弾が雪の積もった地面に当たり爆発を起こした。

その爆発を目の前で受けた馬たちは恐怖の悲鳴を上げて手綱を握っていた者達を振り払うと森の中などに逃げて行った。

それを追う者と何事かと戻って来る兵たち。

「よぉし、撃て！！」

軍曹が射撃命令を下した。

私たちは一斉に射撃を開始した。

ヘンさんはアームスコーＭＧＬを撃ち続けた。

空中に登り直ぐに落下する４０×４６ｍｍ擲弾は地面に当たると爆発を起こし火を出した。

そこへ私たちが射撃をする。

ガリシャが観測を始めた。

「・・・・あの男が指揮官だね」

ガリシャが双眼鏡で見ている相手は兵站を管理する指揮官であろう。

白い戦闘服に身を包んでいるが、腰に差している剣が贅沢だ。

そして大声で身を伏せていた男達に命令している。

「・・・風速3、横向きに微風・・・距離３００・・・・何時でも撃ちな」

私は息を整えてから引き金に人差し指を掛けた。

今回は、“負傷”させるのではない・・・・・・一撃で殺すんだ。

ああいう者は負傷させるより殺した方が良い。

恐らく彼を殺せば兵站の方は混乱に陥り簡単に収束しない筈だ。

私は初めて人を殺すんだ。

だが、これは戦争だ。

そして私は狙撃手だ。

狙撃手は・・・・ワン・ショット・キル・・・・・一撃で相手を殺すんだ。

そうする事で相手に苦痛を与えず安らかに眠らせる事が出来る。

私は自分に言い聞かせて、狙いを頭部に定めた。

「・・・・・・・・・・」

私は引き金を引いた。

・・・・・初陣の時よりも引き金は軽かった。

第八十一章：戦場の慈悲

既に辺りは闇に包まれて一寸先はまるで見えない。

だが、私にはハッキリと目の前に広がる光景が見える。

辺り一面が・・・・血で、血で、血で、血で埋め尽くされていた。

夥しい血を流すのは幾つも折り重なるようにして息絶えている“生きていた人達”・・・・・・・

ある者は弾丸を無数に撃たれて“蜂の巣”のように殺されていた。

またある者は足を撃たれ、膝を着いた所を撃たれたのだろう・・・

顔をグシャグシャにして息絶えている。

こんな所は一秒も居たくない場所だ。

だが、私はガリシャ、ガルムを伴いこんな一秒も居たくない場所に来ていた。

あれから敵は後方に出なくなった。

これを少佐に報告すると「直ぐに偵察を向かわせる」と言い向こうに居る天馬騎士団に偵察をさせた。

それによると敵は雪道でトラブルに見舞われており来るのは数日後という事だ。

そのため私たちはここで敵が逃げて来ないか待つ事になった訳だが、私はどうしても確認しておきたい事があった。

あの指揮官を完璧に・・・一撃で殺せたのか、という事だ。

指揮官の頭を狙い、モーゼルの引き金を引いた。

弾は真っ直ぐに回転し前に進んだ。

そして弾は相手の頭に当たった。

相手は頭から血を噴き出して倒れたが、完璧に頭に当てたか分からない。

いや、当てたのだが完全に殺したのか分からなかった。

狙撃手が標的を仕留めたのか最終確認する観測手であるガリシャもそれが分からなかった様子で軍曹に確認したいと頼んでみた。

軍曹は暫く考えてから了承してくれた。

そして「自分で他人の人生を強制的に終わらせたんだ、という事を頭に入れておけ」と言い含めた。

そう・・・私はこの手で、あの男の人生を強制的に終わらせた。

私があの男を撃たなければ・・・・・・・・・・

まだあの男は生きていたかもしれない。

この戦いで生き残り故郷に帰れば妻子が居たのかもしれない。

もし、妻子が居たらと考えれば私は罪人だ。

愛する夫であり父親を遠くから隠れて殺した卑怯な罪人だ。

罵られ石を投げられ棒で叩かれ首を斬り落とされても文句は言えない。

だが、これは戦争だ。

殺される前に殺せ。

これが戦場で生き残れる規則――ルールであり1撃で苦しみ無く相手を殺す事もまた戦場における唯一の慈悲だ。

ガルムが前方を警戒し私とガリシャに「確認しろ」と言った。

私は倒れている一人の男を仰向けにさせた。

頭を撃たれた彼は・・・生きていた。

いや、もう直ぐ死ぬ所だ。

私の弾は当たっていた。

だが、彼の被っていた兜が原因で狙いが外れていた・・・ずれたのだろう。

そのため彼は生きている。

血を口から出しながら彼は私を見つめていた。

空虚な瞳で、私を見つめる男は何も考えていなかった。

憎悪を宿していない。

ただ・・・・・・慈悲を乞うていた。

空虚な目で私に訴えている。

『・・・はやく・・・楽にしてくれ』

『この苦しみから一刻も早く解き放ってくれ』

こう訴えていた。

恐らく彼は私を待っていたのだろう。

私が一撃で殺していれば、彼はこんな目に遭わずに済んだ。

だが、私はミスを犯し彼の命を悪戯に長引かせて苦しませてしまった。

これは明らかに私のミスであり覚悟の無かった故に犯した愚かしい結果だ。

私はベレッタをホルスターから抜いた。

親指で撃鉄を起こした。

そしてガリシャを見た。

ガリシャは私を見て驚いた顔をした。

私はどんな表情をしていたのだろうか？

優越感に浸っている顔か？

罪悪感に見舞われて泣きそうな顔か？

それとも道化師のように笑っている顔か？

私は驚いているガリシャにこう言った。

「・・・見ない方が良い」

しかし、ガリシャは首を横に振った。

「見るよ・・・あたしはあんたの観測手だ。観測手は狙撃手の行動を最後まで見届ける義務があるんだ」

「・・・“傷”が残るよ」

「・・・それでも、“戦果を見届ける義務”があるんだ」

ガリシャは私を強い力を宿した緑色の瞳で見つめてきた。

私は頷いた。

そして男の頭に狙いを定めた。

「私を怨んでくれて良い。一撃で楽に眠らせる事が出来なかった私を・・・・・・・・・・・」

男の空虚な眼差しが私を見つめて来る。

『さぁ・・・・早く・・・・・・・』

私はベレッタの引き金を引いた。

２発続けて９ｍｍパラベラム弾を男の頭部に撃った。

２発の９ｍｍが男の頭部を貫き、吹き出た血が私の顔に飛び散った。

頭を撃たれた男は、漸く息絶えた。

空虚だった目は安らかに閉じられていた。

私は白い煙を出すベレッタをホルスターに仕舞った。

そしてバンカーまで戻った。

バンカーに戻ってから私は激しい嘔吐感に見舞われた。

ガリシャも同じだった。

急いで外に出て、何も無い所に行き吐いた。

何度、吐いても止まなかった。

今日食べた物、昨日食べた物、その前の日食べた物・・・・今まで食べた物を全て・・・・内臓までも吐き出すかと思うほどに私は吐き続けた。

「・・・・大丈夫か？」

軍曹が私にハンカチを差し出しながら訊いてきた。

「・・・・すいません」

私はハンカチで口を拭い、水筒の水を飲んで口を潤わせた。

「良いさ。俺も最初そうだった」

軍曹は煙草に火を点けて前に話した事を話し始めた。

「言っただろ？俺も最初、人を殺した時・・・吐いたと」

「・・・はい」

私はそれに頷いた。

「みんなそうさ。旦那も姐御も俺も、皆・・・そうやって生きて来た」

だが、次からは相手を静かに、確実に、素早く殺す事を考えるようになったらしい。

「・・・私もそう思います」

もう嘔吐感は無くなった。

あの男に対する罪悪感も無い。

今は戦時中だ。

そして私は騎士であり軍人・・・そして敵を一撃で葬る狙撃手だ。

狙撃手なのに、あんな醜態を曝した・・・これは駄目だ。

次からは一撃で相手を楽にしなければならない。

そう早くも思い始めていた。

「そうか」

「はい。あの男・・・私が一撃で仕留められなかったら、今まで寒い中あんな身体のまま生きていたんです」

戦場に唯一ある慈悲・・・楽に死なせる事。

狙撃手はそれをする役目だ。

「軍曹・・・次は一撃で楽に相手を仕留めます」

それが戦場の慈悲であり私の役目だ。

そして何があろうと軍曹達を護るとも言った。

「・・・・良い言葉だ。そして良い覚悟だ」

軍曹は私の頭をポンッと叩いてくれた。

それから私に煙草を差し出して背を向けた。

私は火の点いた煙草一一一燃える女を銜えながら暗い中を見つめていた。

こんな暗い所でも狙撃手なら私の火を見て狙えるだろうと他人事のように思いながら煙草を吸った。

そこへガリシャが現れた。

彼女もまた吐いた。

幾分か憔悴した顔だった。

「大丈夫?」

私が訊くとガリシャは「少し気持ち悪いけど大丈夫」と答えた。

私の横に立ったガリシャは無言だったが、小さく呟いた。

「・・・・ごめん」

ガリシャは私に謝罪した、と少し経ってから分かりどうして?と訊ねた。

「あたしがしっかりと、もっと観測していれば、あんたはあの男を

一撃で仕留められた筈だった」

でも、あたしがミスをしたからあんたは狙いを外した。

そしてあんな事をした。

「君のせいでも無いよ。私の責任でもある」

私はまだあの時、あの男を殺す覚悟が欠けていた。

自分に言い聞かせていたが、それでも殺す覚悟が僅かに・・・一瞬だが欠けた。

だから、ガリシャだけのせいではない。

「・・・ガリシャ。私はこれから一撃で人を眠らせる」

相手の人生と言う劇の幕を強制的に下ろさせる。

「それは私が騎士であり軍人だからだ。でも、君は違う」

まだ今なら後戻りは出来ると私は言った。

恐らく彼女にはこんな血生臭い事をして欲しくないと馬鹿馬鹿しくも考えていたのだろう。

「・・・嫌よ」

ガリシャは私の言葉に首を振った。

「あたしは後戻りしたくない。そしてあんただけにそんな道を歩ませたくない」

あたしはあんたの力になると決めたんだ。

そしてこの地を護る為なら命も掛けると自分に誓った。

その誓いは破らない。

「あんたの気持ちは嬉しい。でも、あたしはあんたの観測手として最後まで付き合うよ」

ガリシャは強い力を宿した眼差しで私を射抜いた。

差し詰め私は狩人に仕留められた獲物と言った所だ。

「・・・・分かった」

私は煙草の灰を地面に捨てた。

「今度は正確に観測してくれ」

「あんたも正確に相手を仕留めてよ」

私とガリシャは頷いた。

そしてバンカーへと戻った。

第八十二章：偵察任務

敵と戦いを始めて1日が経過した。

バンカーの中で温かい朝食を取りながら敵が来ないかどうか銃眼から見ていると軍曹がバンカーに戻って来た。

その手には焦げ茶色の袋が握られている。

「いやー、敵さんから食料を分捕って来たぜ」

軍曹は焦げ茶色の袋を掲げてみせた。

「分捕って来たというより馬が捨てた荷物を乞食みたいに拾っただけなんだがな」

その後ろから狐ことヘンさんが漏らした。

「おい、人を乞食と言うな!!」

軍曹は怒りながら焦げ茶色の袋を片隅に置いた。

兵站を攻撃し遮断したが、食料は馬たちが持っているし探せばそこら辺に捨てられている。

これでは敵に食べられてしまうという事で隙を見てはこうして拾いに行っているのだ。

「しかし、俺たちは暇だな」

軍曹は煙草を銜えながら愚痴を零した。

私たちが居るバンカーは他のバンカーに比べて離れている。

その理由は敵後方を遮断する為だ。

だが、敵はトラブルで来ないし前方に居る敵は少佐達が引き受けている為こちらには来ない。

だから、暇・・・不謹慎かもしれないが、これしか思い付く言葉が無い。

「もやし、山犬、猟犬、狐。お前等、偵察して来い」

軍曹は今、思い付いたとばかりに私たちに命令した。

敵がいつ来るか分からない。

なら、こちらから偵察に行くのが良いと軍曹は言った。

ちなみに、もやしは私で、山犬はガリシャ、猟犬はガルム、狐はヘンさんだ。

しかし、どうしても思う。

『何で私の渾名だけが格好悪いんだ』

私だけがもやし、などという酷い渾名だ。

レオンは挑戦者という意味のチャレンジャーだし、ガリシャは山犬、ガルムは猟犬、ヘンさんだって狐という渾名だ。

私だけが、どうしてこんな情けない渾名なんだ!!と叫びたくなる。

そんな私の思いを軍曹は感づいたのか、「後で新しい名前を考えてやる」と慰めてくれた。

「出来るなら格好良い渾名でお願いします」

もやしなんてもう嫌だ、と私は思いながらも気を取り直してガリシャ、ガルム、ヘンさんと共にバンカーを出た。

「それじゃ何処から行こうか?」

ヘンさんが私たちの中では実戦経験もあるから臨時的に指揮を執る事になった。

しかし、この地はヘンさんも不慣れだ。

そのため案内役はガリシャがやる。

昨夜の出来事でガリシャは些か憔悴した顔をしていたが、仲間たちが居たから今ではそれほどでもない。

たった1日で人を殺した事を忘れられるのか?と思うだろうが、仲間が居るだけでもその気持ちは心の底へと仕舞う事が出来る。

何より今の状況ではそんな事をしている時間は無い。

私の方もそうだ。

だが、それは出来る限り思い出さない様にする。

「ここからだと・・・・端の方を進めば上手い具合に敵の方を偵察できるよ」

ガリシャはバンカーから更に端の道を指で示して説明をした。

それからスキーを装着して先頭に立った。

私たちもスキーを装着しガリシャに続いた。

ガルムはスキーより足で走った方が速い事から装着していない。

私たちはスキーで山を滑りながら敵偵察に向かった。

「少佐達はどうしましたかね？」

私は少佐達の事が気になりヘンさんに訊ねた。

「恐らく問題ないだろ。未だに銃声と爆発音がするという事は、敵はまだ生きているという証拠だ」

つまり彼等とまだ戦っている。

「しかし、あの戦術を打破するのは難しいのでは？」

「あぁ。だが、少佐の話だとフォース・リーコンは誰かと無線で連絡を取っていたらしい」

「何処と連絡を取っていたのでしょうか？」

「さぁな。ただ、少佐の話だと空挺部隊かもしくはそれに値する力を持つ部隊と言っていたな」

「空挺部隊と？」

確かに、無線で連絡を取るのだから彼等と同じような奴等が居るとは思っていたが、なぜ空挺なのだ？

「バンカーを破壊するのは幾つか方法があるが、その中でもここの地形を考えると空挺部隊を空から降下させて攻撃する手段が良いらしい」

この地形を考えると確かに空からパラシュートかヘリから降下して倒すのが望ましい。

「と言う事は・・・・・・・・・」

「あぁ。恐らく敵はヘリコプターとかいう乗り物に乗ってやってくる」

その為の対策は既に出来ているらしい。

だが、私はそれを聞いていない。

「だって、お前さんは俺と訓練してただろ？」

そう言えば、そうだが何でヘンさんは知っているんだ？と思う。

「ん？俺は少佐に訊いたんだ」

だから、知っていると自慢気に笑うヘンさん。

今度からは気を付けようと思いながらスキーで先を進んで行く。

スキーを滑り始めてから数時間は経過した。

ガリシャが少し休憩にしようと述べたので、私たちは小休憩を挟む事にした。

「フゥー。流石に数時間も動くとキツイな」

ヘンさんは腰を降ろしながら息を吐いた。

「おっさん情けないね。旦那は愚痴一つ零さなかったよ？」

ガリシャは大して疲れていない様子でヘンさんを見た。

「どうも身体が鈍っていたようだ。まぁ、軍時代に比べて騎士は楽だからね」

「貴族の臨時護衛以外はどんな事をしていたんですか？」

前は雑用と言っていたが、その雑用が気になったので訊ねてみた。

「先王が生きていた時は戦に駆り出されていたんだ。まぁ、俺らの場合は人員も少なかったから裏方だったがね」

「裏方と言いますと偵察とか兵站、伝令ですか？」

戦の花形と言えば、馬に颯爽と跨り指揮を取ったりする騎士などだろう。

逆に裏方と言えば偵察、兵站、伝令という一見地味な仕事だが、どちらかと言えば裏方の方が重要だ。

ヘンさん達はそんな仕事をしていたようだ。

「あぁ。ロックス様は前にも言ったけど、根っからの騎士だった」

だから、奇襲は嫌うし偵察も嫌うという性格だったらしい。

「まぁ、個人的な戦闘力は高かったし指揮能力も高かったよ。それに先王に意見できたのもあの人だけだ」

「ヴィールング様やプロイセン様は駄目だったんですか？」

「プロイセン様は何度も意見を出したが、その度に怒鳴られて終わりだった。あの人は・・・ヴィールング様は元から表より裏で活躍する方が良かったんだ。いや、裏で動くしかなかったと言った方が正しいかな？」

「ロックス様の事ですか？」

「それもあるね。あの人はロックス様が嫌っていた偵察を進んでやった」

ヴィールング様は偵察などの重要性を見出していたようで、兄が嫌

がるのならそれを自分がやろうと思い立ったらしい。

「後はロックス様が嫌がっていた奇襲もしたし破壊工作なんかもした。それに兵站も俺らがやっていた」

全部、裏方の仕事ばかりだ。

「しかも、それをロックス様の手柄にさせたんだ」

「何故ですか？」

普通なら自らの手柄とする筈なのに・・・・・・・・

「欲が無いんだよ。あの人は」

そして下手に自分が兄以上に手柄を立てると兄と要らぬ軋みが生じる事も考えたらしい。

「そうなんですか」

何とも頭が良い方だと私は思った。

「でも、そのヴィールングっていう小父さんはそれで良かったの？」

ガリシャは如何に兄弟の仲を保つ為とは言え、そこまでやるのか？と疑問だった。

「まぁ、これは俺の推測だけど、自分の為でもあった筈だね」

自分の為？

「あの人は次男坊だ。それは爵位を持つ家では日陰者を意味する」

「ですが、それだけ手柄を立てれば新たに爵位を得られるか、何処ぞの貴族に婿養子として迎えられるのではないですか？」

「そうなんだが、それをやるとまた要らぬ所から怨みを買うだろ？」

ロックス様は他方から要らぬ怨みを買っていたと聞いている。

そこへ弟であるヴィールング様まで目立てば、マレル家は中央の中で孤立する事になる。

それを阻止する為にヴィールング様は自身を犠牲にしたのだろう。

そこまで自分を犠牲にしてまで家を護りたかったのか、と私は思った。

私は貴族ではないから、そういう所は分からない。

「家を護るというよりは自分とロックス様の奥方であった、マリー様の為だろうな」

と言う事は・・・・・・・・・・

「ヘンさんも、あの・・・・・・・・・」

「あぁ。知っているよ」

私は言い難い事なので、言えなかったがヘンさんは分かっていたの

だろう頷いてくれた。

「何なの？」

ガリシャが興味深そうに訊いてきたが、私は何も言わなかった。

これはおいそれと他人に言える事ではない。

あの女は胸糞悪いが、それでも言ってはいけない事だから口を閉じる。

「ねぇ、教えてよ」

「止めておけ」

ガルムがしつこく訊いてくるガリシャを止めた。

「何でよ」

「ランドルフは言いたくないのだ。言いたくないのを無理に訊いてそなたは満足か？」

ガルムの言葉を聞いてガリシャは無言で諦めた。

私はガルムに礼を言いながら、ヘンさんに向き直った。

「ヘンさんは・・・・どう思います？」

「恐らく事実・・・だと“思いたい”な」

「思いたい？」

「あぁ。俺は、マリー様と会った事があるんだ」

「どんな方でした？」

「美しい御婦人だった。だが、瞳は哀しい色でな」

その瞳は何時までも“止まない雨”の色だったらしい。

「ロックス様と居る時はその色だったが、ヴィールング様と居る時は“雨が止み晴れた”色になった」

「・・・・・・」

「それを見て・・・思ったね。俺は」

この方は僅かな時しか会えない人を雨が降る中で待ち続けている、と。

そしてそんな方をヴィールング様は愛して止まなかった。

「傍から見れば非の打ち所が無い奴ほど裏の顔はとんでもないからな」

確かに、そうだ。

それを考えると私の周りは一見、非の打ち所があり過ぎる者たちで一杯だが裏の顔はそうでもない気がする。

そしてヴィールング様は恐らく・・・・・・・・・・・・

「兄弟そろって怨みを買えばマリー様にまで累が及ぶし、兄より目立てばマリー様がロックス様に八つ当たりされると思ったんだろう」

それを阻止する為にヴィールング様はそうしたのだ。

いや、そうせざるえなかったのだ。

「・・・しみったれた話になっちまったな」

「すいません・・・・・・」

「良いんだよ。さぁ、それより早く行こうぜ」

ヘンさんは腰を上げた。

私もそれに頷いてガリシャに先を急ごう、と言った。

そしてまた足を進めた。

第八十三章：敵の援軍（前書き）

えー、八十二章と八十三章がまったく同じだったのに気付かず更新してしまい、申し訳ありませんでした！！

こちらが、新しい話です。

この度は不快な思いをさせてしまい、申し訳ありませんでした。

第八十三章：敵の援軍

更に足を進めて行く。

ヘンさん曰く「しみったれた話」をしてからは無言で足を進めた。

会話をすれば敵に知られる事もあるが、やはり先ほどの話が原因であると思う。

私はロックス様の奥方であるマリー様と会った事は無い。

だが、ヘンさんの話を聞く限り結婚生活は良くなかったのだろう。

ロックス様は毎日のように戦に出て家に居ない。

そして要らない荷物の話から察するに家に居たとしてもかなり粗暴と思われる生活をしていたのだろう。

周りもそんな生活を戦で荒んだと思い、敢えてそれを止めようとはせず寧ろ自分に被害が及ばないようにマリー様に押し付けたと思われる。

そんな生活をしていれば嫌気も差す。

何より愛した男とは違う・・・別な男と結婚させられたのならそれ以上に苦痛だっただろう。

そしてああいう家庭では男子が望まれる。

しかし、産まれて来たのは女。

恐らくロックス様は今まで以上に荒んだ生活をしてマリー様を責め、周りも助長したのだろう。

これを考えればあの女もまた被害者という事になる。

マリー様はヴィールング様が居たからこそ、耐えて来れたのだろう。

もし、ヴィールング様が居なければ恐らく直ぐにでも死にたかったと思う。

ヘンさんは噂を事実だと“思いたい”と言った。

それはマリー様が余りに憐れだから、噂でも事実と思いたいのだろう。

マレル家を快く思わぬ輩から言わせれば格好の攻撃手段だが、ヘンさんみたいな方にはその噂も“救済”と取れる。

『噂も人によって良くも悪くもなるな』

などと私は思いながら、スキーを進めた。

だが、ふと遠くからヘリの音が聞こえて来た。

城からではない。

前からだ。

ガルムやガリシャも分かったのだろう。

隠れようと言った。

私たちは急いで森林に隠れた。

段々、音が近づいてくる。

しかも一機だけではない。

・・・・2機以上だ。

「何だ?」

ヘンさんが音について訊ねた。

「ヘリコプターの音ですね。でも、これはブラック・ホークではないですし方向も違います」

「てことは・・・・・・・・」

敵だ。

「・・・このままやり過ごせると思うかい?」

ヘンさんは上を見上げながら訊ねて来た。

「ここなら恐らく見つからないと思います。ですが、もし見つかれば勝ち目はありません」

ヘリコプターを倒すには地対空ミサイルで撃ち落とす事が出来る。
軍曹が参加したソマリア内戦においてもブラック・ホークをＲＰＧで撃ち落とした過去がある。
だが、私たちにはそれが無い。
戦っても勝ち目は無い。
「・・・山犬。ここに隠れる場所はあるかい？」
ヘンさんはガリシャに訊ねた。
「無いよ」
ガリシャは即効で答えた。
「・・・このままやり過ごそう」
ヘンさんは暫し悩んでから答えを出した。
私たちはヘンさんの言葉に頷いてやり過ごす事にした。
そして上を見上げているとヘリコプターが姿を現わした。
迷彩色を施されたヘリコプターが３機。
機種は３つとも違う。
先頭を飛んでいるヘリコプターは卵のように丸い形をしている。

あれは確か・・・・・・・・・

「“空飛ぶ卵”だ」

私はあのヘリコプターの渾名を口にしたが、３人はそのままじゃないかと言う顔をしてきた。

「あれは“ＯＨ－６”というヘリコプターです」

アメリカが開発した小型ヘリコプターで、あの丸い形から空飛ぶ卵――フライング・エッグと呼ばれている。

小型のため軽量でその小型と軽量を活かした飛行性能、優れた信頼性と安全性を備えているヘリコプターでかなり年月を経っているが色々な国で愛用されていると聞いている。

あれは非武装と聞いていたが、見る限り武装をしている。

確か武装させたあれは別な名前だった筈だ。

「あれは“ＡＨ－６　リトル・バード”です」

こちらは陸軍の特殊部隊が改造させた物でＭ１３４ミニガンやハイドラ７０ロケット弾ポッド、ＴＯＷ対戦車ミサイルを装着させる事が出来る。

そして２番目に飛んでいるヘリコプターはリトル・バードに比べれば大きくてスマートな体型をしていた。

先の下には細長３つの筒状の物三角形で付けられており、両側面には僅かに出た場所に４つの筒がある。

「“ＡＨ－１コブラ”ですね。しかもあれは改良された“Ｓ型”です」

こちらもアメリカが開発したヘリコプターだが、これは「世界初の攻撃ヘリコプター」として知られている。

少佐の国でも自衛隊が採用しているし他の国でも現役だと聞いている。

武装は２０ｍｍ×１０２ｍｍ弾を発射するＭ１９７三砲身ガトリングガンにリトル・バードも搭載しているＴＯＷ対戦車ミサイル、ＡＩＭ－９Ｌ対空ミサイル、ＧＰＵ‐２機関砲パックなどが搭載可能だ。

少佐も確か、あれを運転した事があると言っていたな。

そしてあれほど運転がし易い物は無いとも言っていたし、上手い乗り手なら性能を限界まで引き出せると言っていた。

『頼むからあれを運転する者が下手な奴であってくれ』

そう私は願いながら３つ目のヘリコプターを見た。

最後のヘリコプターは他の２機比べて細長い体型をしているし、２つあるプロペラが２つとも上にあるのが特徴だった。

見る限り武装はしていない。

いや、あれはあの大きさなどから推測するに輸送ヘリと見て良いだろう。

名前は・・・・・・・・・・

「“ＣＨ－４７チヌーク”ですね」

「そのチヌークってのはなんだ？」

「アメリカだと先住民の名前をヘリに付けるんです」

そしてあれは他の2機と違い輸送ヘリだと教えた。

「あれは“榴弾砲”とそれを運用する兵たちを乗せたり出来るんです」

榴弾砲は“加農砲”と呼ばれる物に比べて砲身（ライフルで言う銃身）が短く低初速で短射程だ。

だが、その分軽量でコンパクトだと聞いている。

もし、あのヘリに榴弾砲を積んでいるとなればかなり厄介だ。

ここまで運ぶのは人力などでは無理だが、あれなら簡単に運べる。

榴弾砲でないなら空挺部隊などを乗せている筈だ。

私の説明を聞いたヘンさんはなるほど、と頷きながら頼むから見つけないでくれと願った。

私もそれを願う。

もし3機のどれかに見つかれば私たちに勝ち目は無い。

ここはやり過ごすのが一番だ。

私たちは息を殺しヘリが頭上を過ぎ去るのを今か今かと待ち続けた。

3機のヘリコプターは巨大な音を立てながら悠々と私たちの前を過ぎ去って行った。

「・・・どうやら行ったようだな」

ヘンさんはフゥー、と息を吐きながら急いで連絡しようと言った。

直ぐに頷き、ガルムの無線機で連絡を取り始めた。

「こちら狐。聞こえるか？」

ヘンさんが無線機で少佐に呼び掛けた。

『・・・な・・・・だ・・・・・・』

少佐の声がノイズ越しに聞こえて来るが、何を言っているのか分からない。

「こちら狐っ。3機のヘリがそちらに向かっている」

ヘンさんは必死に少佐にヘリの存在を知らせようとした。

『・・・だ・・・・き・・・・ない』

だが、上手くいかない。

恐らくこの雪などで上手く伝わらないのだろう。

いや、ヘリコプターが原因かもしれない。

だが、今はそれよりもどうやったら少佐にヘリの存在を知らせるかだ。

ヘンさんはそれでもやり続けたが、次第に声が聞こえなくなって来る。

不味いな・・・・・・・・

このままでは少佐達に教える事が出来ない。

対策はあると聞いたが、それでも教えておいた方が良い筈だ。

ヘンさんは何度もやったが結果は変わらない。

「あー!!このくそったれが!?」

ヘンさんは怒って乱暴にも拳で無線機を叩いた。

「壊れてしまいますよ!!」

私は慌ててヘンさんを止めた。

だが、ヘンさんが乱暴に叩いた無線機は壊れる所か嘘のように少佐の声が聞こえて来た。

意外と・・・何とかなる物だな。

と私は思った。

『誰がくそったれだ?』

少佐は何処か怒った口調で無線機越しに言ってきた。

うわぁ、聞こえていたんだ。

「あ、いや、違うんだ。少佐。あんたに言ったんじゃない」

ヘンさんは慌てて少佐に謝りながらヘリの存在を教えた。

『3機のヘリが来るか。・・・分かった。お前等はそのまま偵察に行け』

「了解。大丈夫だと思うが・・・・・気を付けろよ」

2機は武装しているし、1機は輸送ヘリで空挺部隊か榴弾砲を運んでいる筈だとヘンさんは私が教えた事を伝えた。

『大丈夫だ。それよりお前等も気を付けろよな。では、通信を終わる。オーバー』

「オーバー」

ヘンさんは無線を切り戻した。

「このまま俺たちは偵察を続けるぞ」

ヘンさんの言葉に私たちは頷いた。

そして少佐達の無事を祈りつつ偵察の任務へと戻った。

第八十四章：毒針とヘリ（前書き）

昨夜は間違えた物を更新してしまい、申し訳ありませんでした。（汗）

それからかなり無茶な設定をこの後・・・いや、幕間でやるのですが読者の皆様には寛大な心と温かい眼差しを作者は期待してしまいます。（爆）

第八十四章：毒針とヘリ

少佐達にヘリの事を知らせてから私たちは更に足を進めた。

そしてかなり離れた所でまた小休憩を挟んだが、遠方から爆発音が聞こえて来た。

「・・・始まったのか」

ヘンさんは小さく戦いが始まったと言った。

少佐たちは大丈夫か？と思うと同時にヘリが来たという事はワイバーンも直に来ると思う。

しかし、解せない。

「・・・可笑しいですね」

私は思わず口が動いた。

「何がだ？」

ヘンさんが私の言葉に首を傾げ訊いてきた。

「普通ならワイバーンを先にやりそこから歩兵を送り出す筈なのに、私たちが見る限り歩兵だけを送り出しました」

「確かにそうだな。普通ならワイバーンを送り空から偵察するなり攻撃をする筈だ」

それから歩兵を送り出す筈だ。

一体どういう事だ？

「そのリカルドって王子、ひょっとして兵を見殺しにする気かな？」

「いや、それは無いと思うよ」

私はガリシャの言葉を即座に否定した。

「何でよ」

ガリシャは私が理由も言わずに否定したので何処か機嫌が悪くなった。

「少佐も言っていたけど、内乱は自国同士で争うから他国と争うより余計に国家その物が疲労するんだ」

だから、それを他国に付け入れられる危険性がある。

それをリカルド様は知っている筈だ。

となれば解決策は持てる限りの力を注ぎ、根こそぎ早急に滅ぼす事が良い。

そしてこの地形を考えればワイバーンを先に送り、空から地上を攻撃してある程度弱らせてから歩兵で攻めるのが良い筈だ。

それなのにどうしてヘリ3機だけを送ったんだ？

ヘリ3機は確かに強力と思う。

だが、数で言うならワイバーンの方が上だ。

それにヘリだけではやはり心もとない事を考えればワイバーンを投入する筈だ。

それをしないというのは私にはどうしても解せなかった。

「ワイバーンは恐らく傭兵だろうな」

ヘンさんはワイバーンの乗り手の職業を推測した。

「多分そうですね。ワイバーンは平時では恐怖の権化でしかありませんから」

ワイバーンはドラゴンに比べれば劣る生き物だが、天馬に比べれば遥かに強い。

戦になれば天馬よりワイバーンは活躍するのは目に見えている。

だが、平時では恐怖の権化であり乱暴狼藉者という印象が民達の間では強い。

だから、何処の国もワイバーンを国の正規軍の一員として入れるのを拒んでいるためワイバーンに乗る者たちは傭兵として戦場を渡り歩いている。

恐らくリカルド様に味方しているのも傭兵と見て良いだろう。

となれば・・・・・・・・・・

「何か揉めているんですかね？」

傭兵は契約で仕事をする。

少佐達もそれは同じだったが、何か違うと思う。

リカルド様の兵隊は恐らく正規軍と見て良い。

ワイバーンは傭兵。

恐らく契約で結ばれている仲と見て良いだろう。

そうなると、契約で何か揉めているのかもしれないと思うしかない。

「金か、もしくは対人関係か、それとも作戦の一部か・・・・・」

ヘンさんは頭に浮かんだ事を口にした。

金、対人関係、作戦の一部、この３つでないなら何だ？

どれも何だか当て嵌まりそうな気がして私には見当もつかなかった。

「まぁ、偵察に行けば分かるかもしれないから慌てずに行こう」

ヘンさんは悩む私を見て苦笑しながら焦らずに考えようと言ってくれた。

焦りは隙を生む。

それを考えればヘンさんの言葉は正しい。

私は頷いて先を進んだ。

――――――――――――――――――――――――――

―――――――――――

「2機か」

俺は空を飛ぶリトルバードとヒューイ・コブラを見た。

ランドルフ達の報告によれば敵は3機のヘリという報告だった。

だが、目の前に現れたのは2機だけ。

消えた1機は何処に行ったか？

ランドルフ達は確かに3機を見た筈だ。

・・・二手に別れたのか。

攻撃ヘリで前にあるトーチカを壊しつつ後方から輸送ヘリで城を攻めようという考えか？

無線が鳴った。

「誰だ？」

『ミーシャです。後方から輸送ヘリが来ております』

どうやら予想的中か。

ミーシャは撃墜して宜しいですか？と訊いてきた。

「許可する」

『了解』

無線を切った俺は改めて攻撃ヘリを見た。

２機のヘリは地上に攻撃を行っている最中だった。

まぁ、ワイバーン用に城とトーチカに防御魔術を施しているからそれほどでもない。

２０ｍｍと対戦車ミサイルを撃ち込んでいるが、それほど効果が得られない事に奴等は驚いているだろうな。

それでも司教の説明によれば「耐えられるのにも時間があります」と言っていた。

ワイバーンは連続で攻撃出来ないらしく、その間に撃墜は可能だと言う。

だが、攻撃ヘリは連続で攻撃するから恐らくワイバーン数匹・・・・数十匹分の攻撃に値するだろう。

となれば時間はそれほど無いな。

それにしても随分と無茶な攻撃をしているものだと俺は思った。

対戦車ミサイルの威力は高い。

いや、２０ｍｍも高いが。

その２つを惜し気も無く使用するのは別に悪くは無い。

金は掛るが、勝つ為なら仕方無いだろう。

話を戻すがヘリは地上に居る味方も巻き添えにする攻撃をしている。

どちらかと言うと味方を殺しているように思える程の苛烈な攻撃だった。

味方が死んでも敵がやられるなら良いと言う事か。

何年前だったか・・・・味方が突撃をしているのに迫撃砲を撃ち込んだ敵が居たな。

味方が下がろうとすると重機関銃で味方を撃って、進めとほざいていた。

奴等は正規軍で“懲罰隊”じゃないのに随分と酷い事をするな、と思った物だ。

これはリカルドの策か？

あいつの眼は純粋だが、軍人としても出来る眼をしていた。

恐らく味方が多少犠牲になるのは戦争として当たり前と取るだろう。

しかし、ここまで無茶な命令しない筈だ。

あれでは敵も殺せるが味方まで全滅させる。

俺は双眼鏡でヘリの操縦をする奴を覗いてみた。

「・・・あいつは」

見た事がある顔だな。

ヒューイ・コブラに乗る操縦手の顔はヘルメットに取り付けられた濃色のシールドでよく見えないが、頬まである縫い針の痕は見える。

あの縫い針のある奴は傭兵の世界では一人しか居ない。

性格は胸糞悪いの一言に尽きるような男だ。

弟が居て、そいつも負けず劣らずの糞野郎だ。

名前は覚えていない。

生憎と“戦死”させた奴の名前は忘れるようにしているんだ。

それでもあの傷痕は覚えている。

何せ俺が付けたからな。

鼻血を出して倒れるあいつに弟は駆け寄って「てめぇを殺してやる！！」と喚いていたな。

まぁ、兄弟仲良く共に地獄へ行ったが。

もし、あいつがヘリを操縦しているなら、こんな真似をしている理由も理解できる。

あいつは海兵隊と平和が大嫌いな奴だからな。

海兵隊が下に居るなら任務より奴等を殺す程あいつは海兵隊を嫌っている。

理由は知らないが。

そしてヒューイ・コブラが俺を見たような気がした。

いや、こちらを明らかに見ている。

奴はシールドを上げて、俺を見た。

「・・・てめぇか」

俺は奴を見た。

奴もまた俺を見てニヤリと笑ってみせた。

どうやら奴もまた、この世界に来たと言う訳か。

俺を見つめる奴の口元が動いた。

『会いたかったぜ・・・・タカミ・テツヤ』

口元の動きで俺は奴の言葉が分かった。

「生憎だが俺はてめぇの顔を二度と見たくなかったぜ」

俺は唾を地面に吐きながら奴に言い返した。

『相変わらずムカつく顔だな。本当ならてめぇを直ぐにでも木っ端微塵にしてやりたい所だが、今はジャー・ヘッドを殺す方が先決だ。そこで待ってな』

奴は再びヘリで地上を攻撃した。

「テツヤよ。そなた、あの男を知っているのか?」

ゲンハルトが訊ねてきた。

「あぁ。知りたくもないし覚えたくもなかった男だ」

それだけでゲンハルトは何も訊かなかった。

俺は煙草を銜えて火を点けながら、無線で「毒針をお見舞いしてやれ」と命令した。

来て早々に悪いが、生憎とお前さんはパーティーにお呼びじゃないんだ。

さっさと退席してもらうぜ。

地上を攻撃している奴が俺を見て来た。

「・・・地獄に逝きな。ベイビー」

俺は奴に向かって親指を下に向けてやった。

それと同時に2発同時に毒針が発射される音がした。

第八十五章：勇敢であり非情

私たちは更に進んでいた。

ガリシャは明日には着けると言っていたが、今日中に辿り着けると言い直した。

それならそれで良いと思いながら足を進めて行くとガルムが足を止めた。

「・・・血の臭いだ」

しかも大量で近い、とガルムは付け足した。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

私たちは棒に付けられている輪を手に入れて武器を手にした。

そして静かに足を進めて行く。

ガルムは狼だから遠くからでも臭いを嗅ぎ取る事が出来る。

近いと言ったが、どの程度なのか？

それをガルムに訊けば「こちらに近付いて来ている」と述べた。

こちらに近付いて来ている？

となれば、敵か？

私たちは武器を手に警戒しながら進んで行くが、私は立ち止った。

離れていたが、私には見えた。

血塗れで槍を棒にしながら足を引き摺る兵の姿を・・・・・・・・・

あれはリカルド様に仕えていた槍兵だ。

しかし、どうしてあんな血だらけ何だ？

私たちは攻撃していないし、前方から逃げたという事も考えられない。

前方から逃げたなら軍曹達が仕留めている筈だし、何であんな身体でわざわざ逃げた道を戻って来る必要があるんだ？

・・・罠かもしれない。

私は直感的に思った。

ヘンさんも同じなのか「隠れるぞ」と言い雪が積もった茂みの中に隠れた。

足音が段々、近づいてくる。

それと同時にポタポタ、と血が雪に落ちる音と臭いが鼻を突く。

「はぁ、はぁ・・・お、おのれ・・・裏切り者が・・・・・・」

槍兵は息も絶え絶えでありながら、憎しみに満ちた声を出した。

『裏切り者？・・・・内部に裏切り者が居るという事か』

一体誰だ？と私は思う。

「い、急いで、皆に知らせないと・・・・・ぎゃあ！！」

槍兵の悲鳴が山に響き渡ると同時に銃声がした。

何発もした。

私は僅かに視線を上げた。

槍兵が倒れる瞬間だった。

身体を蜂の巣にされた槍兵だが、それでも生きていた。

そして暫くして足音が聞こえて来た。

御遊びの狩りも終わりか、と男の声がした。

虫の息をする槍兵に近付いてきたのは、フォース・リーコンが偵察の時に着ていた迷彩服を纏った男で年齢は軍曹と同じ位だ。

頭にはベレー帽を被っており、右手にはコルトＭ７２７と同じよう

に見える物を持っていた。
色は紫が掛った赤ー――マルーンだった。
『確かマルーンは空挺部隊だった筈・・・・・・・・・』
ベレー帽の色によって所属する隊がどんな隊かある程度は予測できると少佐は言っていたのを思い出した。
緑のベレーはどちらかと言えば特殊部隊や精鋭部隊が被る色のベレー帽だった筈だ。
例外はあるとしても、だ。
そしてマルーン・ベレーはどんな隊だった?
マルーンは・・・エアボーン・・・空挺部隊だ!!
と言う事は空挺部隊か。
だが、なぜ味方である筈の空挺部隊が、槍兵をこんな目にするのだ?
私たちは息を殺して相手を見続けた。
「こ、の・・・・・う、裏切り、者が・・・・・・・」
「裏切り者?はっ。俺はお前達に味方した覚えは無いぜ。俺は“ジャー・ヘッド”共が野蛮人どもに嬲り殺される所を見に来ただけだ」
お前等はたまたま目に入ったから御遊びとして“狩り”をしただけ

だ、と男は言った。

ジャー・ヘッド・・・確か、これは海兵隊に対する蔑称だったな。

「貴様は、じ、地獄に、落ちて、永遠に焼かれてしまえ・・・・・・」

「ほぉう。それだけの言葉が言えるとは良い度胸だな。どれ、御望み通り焼いてやるよ」

“人間の丸焼きだ”と男は言いながら、変な臭いがする液体を槍兵に注いだ。

そして煙草を口に銜えて一服すると槍兵に煙草を落とした。

たちまち槍兵は炎に包まれた。

「あ、あああああああ!!」

槍兵は悲鳴を上げた。

それを男はゲラゲラと笑い出した。

「はっはははははは!!ああ、最高だぜ!?この臭い・・・・人間が焼かれる臭い・・・・そして“バージンを犯された女みたいに泣き叫ぶ声”ってのはよ!?あはははははは!!」

もっと燃えて泣き叫べ、と言いながら男は笑い続け、槍兵が焼かれる様を見ていた。

『・・・狂ってる』

こんな真似をして笑みを浮かべるなんて頭がイカレテいるとしか思えない。

私以外の者も同じ気持ちなのか、手が震えている。

・・・・・胸糞悪い。

人を殺した自分に対する時よりも胸糞悪い。

この場でこの男を、槍兵と同じように蜂の巣にして焼き殺してやりたい。

いや、それ以上の苦痛を男に味あわせてから時間を掛けて・・・・“タップリと殺してやりたい”・・・・・・・・・・・・

しかし、仲間が居る筈だと思い直す。

この男を殺せば仲間が来て戦わなくてはならない。

４人だけで大人数（と思われる）を相手にするのは不利だ。

ここは我慢だ。

私達は槍兵の悲鳴と肉が焼け爛れる臭い、そして胸糞悪い男の笑い声を我慢し続けた。

槍兵は時間を掛けて・・・・殺された。

男は丸焦げとなった「肉の塊」に唾を吐いた上に小便まで掛けると言う冒涜をした。

そして極めつけに「今度はもう少しコンガリと焼かれろ」と言い残して背を向けた。

男が去ったのを確認して、私たちは茂みから姿を出した。

黒い肉の塊・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・」

私は、“元”人間だった肉の塊を見た。

熱くて、顔を守ったのだろう。

顔の部分を両手で覆っていた。

そして足が左右に別れており、異臭が鼻を突く。

「・・・何が狩りだよ」

ガリシャが静かに口を開いた。

微かに声が震えており、見れば身体全体が震えていた。

熱病に掛ったように震え続け、俯いた顔は強張っていた。

「狩りは・・・・・・動物との“決闘”だよ・・・何が“御遊び”だ。・・・ふざけるなよ」

「そなたの言う通りだ。あの男は狩猟を侮辱している」

ガルムは肉の塊を一瞥してから呟いた。

「・・・死体を埋めよう」

先ほどまで激昂していたガリシャは落ち着いた・・・自分を落ち着けさせるように言った。

「それは駄目だよ」

私はこれを否定した。

「もし、死体を埋めれば敵に勘づかれる。このままにしておこう」

「あんた・・・平気なのかい?」

ガリシャが私に訊ねた。

「こんな・・・目の前で泣き叫んで、生きたまま焼き殺された、この人をこのままにしておくなんて・・・・・・・・・」

正気じゃない、とガリシャは言ったが、私の顔を見ていない。

「私の顔は・・・平気な顔に見えるかい?」

私はガリシャに静かに・・・氷のように冷たい声で訊ねた。

ガリシャは私を見ないで言葉を続けた。

「だって、この人だって、敵だけど生きていたんだよ?それを目の前で、何もせずに、ただ焼き殺される所を見ているだけだったんだよ・・・・・・・・・・」

そうだ。

私たちは口を歯で噛み、血が落ちるまで我慢して見続けた。

そうする事が最良の選択であり、それしか出来なかったのだ。

「あのまま私たちが出ていれば、男に見つかって仲間を呼ばれていた可能性が高い。仮に男を殺してもそれで敵に知られる。私たちは・・・任務中だ」

任務は絶対に遂行するのが掟。

それを破る事は許されない。

「でも・・・・・・」

尚もガリシャは何かを言おうとした。

それを私は遮った。

そしてガリシャの肩を掴んで無理やり自分を見るようにさせた。

ヘンさんもガルムも口を閉じていた。

ガリシャは私を見た。

「君の気持ちは理解できる。だけど、君が死体を埋めて、それを敵に発見されたらどうする？」

一瞬の憐みから最悪の状況を作り出すケースはある。

「君のせいで私たち全員が死ねばどう責任を取る積りだい？」

泣き叫んで私達に許しを乞うのかい？

それで私たちが生き返るのかい？

戦況が挽回できるのかい？

任務ができるのかい？

何が出来る？

答えてくれ。

私は立て続けにガリシャに質問を浴びせた。

「・・・・分かったよ」

ガリシャは僅かに間をおいてから頷いた。

その声に震えは無かった。

だが、涙声だった。

見れば、ガリシャは元気な筈だった緑色の瞳を歪ませて、大粒の涙を流していた。

「でも・・・・・・・・・余りに可哀そうだよ」

私はガリシャの涙を手で拭ってやった。

それをガリシャは拒否しなかった。

それ所か私に抱き付いて泣き出した。

声は、嗚咽となった。

やがて泣き出すだろう。

しかし、私が抱き締めて胸に押し付けたから押し殺せた。

別に彼女が余りに憐れだから、抱き締めた訳じゃない。

いや、それもある。

それもあるが、いま大声で泣き叫んでしまえば敵に見つかる恐れがあるからそれを阻止する方が理由として大きい。

私は、自分でここまで冷静・・・冷たい人間だったのかと驚いた。

しかし、それは違っていた。

少しずつ嗚咽が小さくなったのを確認してガリシャを離し、緑色の瞳を見つめて言った。

「・・・任務を終えたら、この方を埋葬しよう」

任務を終え、戻ってきたらこの方を土に還そう。

土は土に。

灰は灰に。

自然へと還すのだ。

私たち４人で彼を埋葬し、鎮魂の祈りを捧げ彼の魂が天に迎えられるようにしよう。

それが終わったら・・・・・・・・・・

「あの頭のイカレタ糞野郎の“腰にぶら下がった情けない息子”を切り落とし、それで奴の尻を犯して許しを乞わせてやるんだ」

それだけではない。

「あの“腐った木”で出来上がった四肢を四つ裂きにして、その部分を焼くんだ」

この方がやられた以上に。

「最後は獣の餌にしよう」

あんな奴を土に還す必要は無い。

獣の餌にでもして胃で消化され、汚物と共に吐き出されれば良いんだ。

汚物として吐き出された“奴”の頭に唾を吐き、小便を掛けてやるんだ。

いや、もっとだ。

もっと、もっと、あの男に屈辱と汚物を織り交ぜた罰を与えよう。

「私は、あの男を・・・この手で殺してやりたい・・・いや、殺す」

初めてだ。

初めて自分の意思で、人を殺したいと思ったのは。

それだけ怒っている証拠だ、と頭の片隅で思う。

だが、今は任務遂行を第一に考えなければならない。

それを思うと自然と怒りは頭の片隅に、心の底へと置く事が出来た。

「俺も賛成だ」

ヘンさんが私を見て言った。

「あの男に、それだけの報復をやる“使命”が俺らにはある。そしてあいつにはその報復を受ける“義務”がある」

私たちはただ、見ているだけしか出来なかった。

殺された槍兵の無念は計りしれない。

ただ、見ているだけしか出来なかった私たちが、その無念を代わりに晴らす使命がある。

そして、あの男にはその無念を、使命を、報復を受ける義務がある。

とヘンさんは言い、私の肩を叩いた。

「君は勇敢と同時に非情だ」

「・・・狙撃手は非情でなければいけません。ですが、完全に血が流れていない訳ではありません」

「あぁ。知っているよ。君の眼を見れば、それが分かる」

ヘンさんは私の肩をまた叩いた。

私を見つめる瞳には侮蔑も偏見も無かった。

ただ、事実を受け止め、行動を起こす決意をした“戦友”を見つめる瞳だった。

第八十六章：唯一の生存者

私たちは更に雪道を進んだ。

ガリシャはあれから口を閉じて、後方を歩く事にした。

いや、させた。

今のガリシャでは案内役は出来ない。

任務中にそんな真似は許されないが、敢えて私はヘンさんに言って後方に下がらせてガルムを先頭に立たせた。

私はガリシャの前を歩く。

「・・・ねぇ、ランドルフ」

ガリシャが私に声を掛けた。

「何だい」

私は前を向いたまま訊ねた。

「・・・やっぱり何でも無い」

ガリシャは口を閉じた。

「私を・・・血が凍った・・・最初から流れていない、ただの非情な人間だと思ったかい？」

私はガリシャが考えていそうな事を言ってみた。

ガリシャから言わせれば、先ほどの行動をした私は任務を第一に考える非情な男と見えるだろう。

事実、今は任務が最優先だと私は思っている。

だから、そのような男と見られても仕方が無いと諦めていた。

「違うよっ」

ガリシャは少し声を荒げて否定した。

「あんたは、強いと思ってるんだよ」

私は振り返った。

「あんたは、強いよ。あんな光景を見たのに、任務を第一に考えて、それであの男に報復をすると決めたんだ」

あたしは怖い、とガリシャは言った。

「あんな、人を、嬲り殺しにする奴を・・・・・・あたしは怖い」

「私も怖いよ。でも、それ以上に腸が煮え繰り返って物を吐きそうな程に怒っている」

あそこまで人間を乏しめる事が出来る奴を、私は人間と認めない。

戦争は人間を狂気へと誘い、破滅させると聞いている。

あの男は、それを具現化したような男だ。

だが、許されないし許さない。

「私は怖い。だけど、何もせずに傍観していた自分が腹立たしい。だからケジメを着けるんだ」

自分の行いは自分で片付けるのが男。

あの男はそれをしないから私たちが代わりにやるんだ。

「・・・あたしも、男として産まれたらそんな風に考えられるかな？」

「これは性別の問題じゃないよ。要は、覚悟だ」

君は私の観測手として戦果を見届けると言った。

その覚悟を決めたようにすれば、私の考えを出来ると私は言った。

根拠など欠片も無い。

だが、そうだと言えばガリシャは満足すると勝手に思った。

「・・・・・・分かったよ」

ガリシャは頷き、緑色の瞳に強さが戻って来た。

「・・・決まったようだね」

「うん。もう、大丈夫だよ」

「君の良い所は直ぐに状況を受け入れ、それを打破する為に行動をする事だ」

これだけ立ち直りが早いのは君の良い所だ、と私は続けた。

ガリシャは、ありがとうと礼を言い案内役をやると言った。

ヘンさんは「そうしてくれ」と言いガルムと交代させた。

ガリシャは先ほどとは違い、足取りに迷いが無かった。

怯えも無かった。

「女ってのは男より打たれ強いし立ち直りも早いな」

「・・・ですね」

私とヘンさんは安堵の息を吐きながらガリシャの後を追った。

だが、直ぐに足を止めた。

ヘリの音が後方からしたからだ。

私たちは直ぐに隠れて上を見上げた。

2機のヘリが空中を飛んでいた。

しかし、ヒューイ・コブラからは白い煙が出ていたしチヌークは見当たらない。

「・・・1機は片付けられた様ですね。もう1機は仕留め損ねたようだが」

「のようだな。しかし、あの男達をどうやって回収するんだろうな？」

チヌークに乗っていたと思われるあの下種な男。

恐らく仲間も一緒と見て良いだろう。

となれば、チヌークは無いから徒歩で帰って来いと言う所か？

「さて、どうするべきか」

ヘンさんは私達に訊ねた。

4人で大人数かもしれない相手と戦うのは決して褒められた事ではない。

私たちの任務は偵察であって戦いは二の次だ。

だから、この場合は戦わずに行動を見るのが良いだろう。

私の意見にガリシャも賛成したが、ガルムは「我なら皆、腹に収められるぞ」と言ってきた。

「あんな奴等を食べたら腹を壊して死ぬよ」

獣の餌にすると言ったが、ガルムに食べさせる事は止めた方が良いと私は考えて思い留まらせた。

ガルムは仕方無い、と諦めてくれた。

ヘリはさっさと頭上を越えて私たちから遠ざかった。

そしてヘリが行ったのを確認してから私たちは足を進めた。

やっとの思いで敵がトラブルにあった場所に到着した。

その頃には既に夜となっており、真っ暗だ。

その暗闇の中に敵は居た。

・・・死体となって。

「・・・酷いな」

ヘンさんは死に絶えた敵兵を見て呟いた。

敵兵の数は１００から２００人位だが、まだ居るかもしれない。

血が一面に広がっており、ガルムは「四方から血の臭いがする」と言ったからだ。

皆、腹などを撃たれたりして死んでいた。

しかし、中には首を切り落とされて自身の・・・を銜えさせられていた。

それか４つ裂きにされたり、丸焦げにされていた。

こんな真似をするのはあの男だと直ぐに分かった。

だが、これだけの人数をやるという事は恐らく仲間が大勢いたと見て良い。

奴等の姿は無い。

歩いて帰ったのか？

それともヘリに乗せる事が出来たのか？

ガリシャは無言で死体を見ていたが、瞳は激しく燃えていた。

「・・・こんな真似をするなんて・・・・・獣以下だよ」

確かにそうだ。

ここまでやるのだから獣以下と考えて良いだろう。

私はガルムの無線機で軍曹に連絡をした。

「こちらもやし」

『こちらイーグル。どうした？』

「偵察を終えました。敵兵は死んでいます」

『死んでいる？どういう事だ？』

「詳しい事はまだ何とも言えません」

『分かった。敵兵の死因などを調べろ』

「死体はどうすれば良いですか？」

『・・・土に還してやれ』

本来なら教会などで葬儀をしたい所だが、そんな暇は無い。

だが、それでもせめて土に埋めて、武器を十字架の代わりにしてやれと軍曹は言ってくれた。

『それが終わり次第、帰って来い』

「了解」

私は無線を切った。

「軍曹が死因を調べろ、と」

「分かった。山犬、君は死体を調べなくても良い」

「・・・いや、やるよ。あたしだって、戦っているんだ」

自分だけ特別扱いはしないで、とガリシャは言った。

「・・・分かった。では、死体を調べろ。ただし、離れ過ぎるな。そして敵が居るかもしれないから四方を警戒しろ」

私たちは頷いて死体を調べ始めた。

しかし、余り良い気持ちはしなかった。

何度も吐き気を堪えて調べる。

かなり時間は掛ったし、何度も吐き気が襲い掛かって来る。

それでも調べ続けた。

死体は私たちが使用するライフルの弾でやられていた。

口径は５．５６ｍｍＮＡＴＯ弾と７．６２ｍｍＮＡＴＯ弾、４５口径、９ｍｍの４つ。

それ以外の口径は見つからなかった。

私が次の死体を調べようとした時だった。

まだ息がある者を発見した。

発見者はガリシャだ。

私たちは急いで、そこへ行った。

生き残りは槍兵だった。

幸い、傷の具合は致命傷を免れている。
まだ助かる。
私は急いで傷の手当てをした。
そして軍曹に連絡をした。
「軍曹。生存者が居ます。助かる見込みがあります」
『本当か？そいつを動かせるか？』
「傷の具合からしても大丈夫だと思います。ですが、なるべく急いだ方が良いかと」
『分かった。少佐に連絡しておく』
直ぐに死体を埋めてその場から離れろ、と軍曹は命令し無線を切った。
私たちは生存者一人を残し土に埋めてやった。
そして武器を十字架の代わりに突き立て祈りを捧げた。
『神よ。どうか、この憐れな子羊たちを楽園へ誘って下さい』
私たちは全員を埋葬してから来た道とは別の道を戻った。
まだ、一人残っていた。

しかし、来た道とは別の道を戻る方が安全だ。

だが、ガリシャと約束を交わした。

任務を終えたら埋葬する、と。

私は一人で来た道を戻る、と言ったがヘンさんは許さなかった。

「一人で行くのは危険だ」

「しかし、私はガリシャと約束しました」

「知っている。だが、君を失う事は出来ない。酷な言い方だが・・・死体と君どちらを取るかと言えば俺は迷わず君を取るよ。それに今は生存者も居る」

「ですが、彼等を埋葬したのに・・・あの方だけを埋葬しないのは」

「不公平なのは分かる。だが、もし来た道を戻って敵と遭遇したり待ち伏せされたらどうする?」

「それは・・・・・・」

私は何も言えなかった。

ガリシャに立て続けに質問したが、今度は私がされる番だった。

「君の気持ちは解かる。約束は守らなければならない。だが、今の状況を考えろ。今だって刻々と時間は過ぎて行く」

このままでは敵に発見される可能性もある。

「ランドルフ。ここは、ヘンさんの意見に従おうよ」

ガリシャが私の肩を叩いてきた。

「だけど、君と約束したじゃないか。君だってあの方を埋葬したいだろ？」

「うん。でも、あたしはあんたを・・・死なせたくない。ううん。皆を死なせたくないんだ」

あの人には悪いけど、あたしもあんたとあの人のどちらを取ると訊かれたら迷わずあんたを取るし、まだ生きている人を助けたい。

ガリシャの瞳は私を心から心配してくれている瞳で、今の状況を考えて最良の選択をした瞳だった。

「・・・・・・・・・」

私は何も言えずに項垂れた。

それは了承の証だった。

ヘンさんは私の肩を叩いて「後でちゃんと埋めよう。必ず・・・だ」と言ってくれた。

第八十七章：戦の狂気

私たちは生存者を急ごしらえで作った担架に乗せて進んだ。

私とガリシャが担架を担当しヘンさんとガルムが前方と後方を護衛する。

生存者は意識を失っていたが、それでもまだ息はしていた。

私たちは出来る限り急いだ。

この人を死なせてはならない。

敵とは言え彼は傷を負っている。

それにあの状況を見ていた筈だ。

だから、傷の手当てをして話してもらうんだ。

その後の事は分からないが、今は少しでも城へと行く為に急いだ。

夜の道を必死に進んだ。

疲れたが休む暇など今は無い。

一刻も早くこの人を城に連れて行き、ちゃんと治療をしなければ訊けない。

だから、必死に急いだ。

しかし、足を止めた。

「・・・・何か聞こえないか？」

ヘンさんが小さな声で私達に訊ねた。

耳を澄ませてみると、確かに聞こえる。

何だ？

何か大きな音がこちらに近付いて来ている。

しかも上からだ。

ヘリの音ではない。

私たちは上を見上げた。

星も無い夜なのに一部だけは光っていた。

七色の宝石を身に纏い空を駆け巡る女神と一瞬だけ錯覚した。

だが、蹄の音が聞こえた。

蹄の音・・・この音は・・・・・・・・その音はやがて私たちの頭上で止まった。

「ランドルフ君っ」

「リーザ中尉」

私たちの頭上には天馬に跨ったリーザ中尉と天馬騎士団のお姉様達が居た。

「少佐の命令で迎えに来たわ。生存者は大丈夫？」

「まだ息はしています」

まだ生存者は生きている。

だが、息が弱くなり始めて来た。

くそっ。

この寒さでやられたのか？

「急いで負傷者とランドルフ君達を乗せなさい」

『了解』

天馬騎士団のお姉様たちは私たちと生存者を天馬に乗せると夜の森を飛び上がった。

私は天馬騎士団のお姉様の腰にしがみ付いた。

「あんっ。もうランドルフ君たら、こんな人目も憚らずに私を抱き締めてくれちゃって・・・・・・」

天馬騎士団のお姉様はふざけた口調で呟いた。

前なら顔を赤くしていただろうが、オリガさんと生活して免疫が付いたし、今の状況を考えると逆に怒りたくなる。

「馬鹿な事を言ってないで急いで下さい」

「冷たいわね。でも・・・そんな所もクールで格好良いわよ」

惚れ直しそう、とお姉様は言いながら天馬の腹を蹴った。

天馬は一鳴きして夜の空を飛んだ。

真っ暗な夜だが、天馬だけは白く輝いておりまるで天使・・・いや、戦乙女だ。

死者を迎える戦乙女。

だが、生憎と私たちは死んでないし、まだ死ぬ気も無い。

私は考えるのを止めて城に着くまで生存者が持つ事を祈った。

軍曹達が居るバンカーを越えて城へと向かう。

その下では幾多の血で染められていた。

そして傍らには撃ち落とされたチヌークの残骸が見えた。

「チヌークは落とせたんですね」

「えぇ。でも、ヒューイ・コブラは仕留め損ねたわ」

本当なら仕留められたのだが、チヌークには施されていなかった防御魔法が施されていたらしい。

そして何とか逃げ切ったようだ。

「それにしても、敵の攻撃は散々だわ。私たちを含めて味方まで殺す位の苛烈な攻撃だったわ」

「そうなんですか？」

「えぇ。味方が「俺らを殺す気か！！」と叫んだけど、その人すぐに殺されたの」

「・・・・・・・・」

恐らくヘリを見た時は援軍だ、とワイバーンのように舞い踊るほど喜んだ事だろう。

しかし、ワイバーンとは違い自分達まで巻き添えにする形で攻撃を敢行したから一気に絶望へと変わった。

それを思うとやるせないが、戦争であり敵だから無闇に感情は入れないようにした。

城に到着した私たちを少佐達が出迎えてくれた。

そこにはエドリアス大尉も居た。

「生存者は何処です？」

エドリアス大尉はお姉様二人が肩に抱えた生存者を見て、直ぐに「急いで部屋に運んで下さい」と命令し自身もそれを追った。

私たちは少佐に敬礼をして偵察の報告をした。

本来なら軍曹にするのが先だが、今は仕方無い。

私達の報告を聞いたゲンハルト様は「身の毛も弥立つ」と言い、嫌悪感を露わにした。

プロイセン様を始めとした将軍達も「我々が参加した戦でもそこまでは無かった」と言ってみせた。

そして最後まで訊き終えた少佐は「・・・・・空挺の面汚しが」と呟いた。

何時もなら冷たいとも言える口調だったが、この時だけは激しく嫌悪し激怒しているように聞こえた。

「今日はここで休め。それから衣服は変えの物を用意しておくから湯に浸かって血を洗い流せ。明日、イーグルの所へ戻れ」

私たちは少佐の命令に素直に従った。

そして与えられた各部屋に入った。

私は温かい部屋の中で煙草を取り出して銜えマッチで火を点けた。

久し振りの煙草だ、と変に錯覚しながら私は煙を吐いた。

目を閉じれば目の前に・・・・・・あの下種が居た。

奴は火を見ながら笑い声を上げていた。

目障りだ・・・・・・

私の前から消えろ。

いや、私がこの世から消し去ってやる。

「・・・何時か、その脳天に風通しが良い穴を開けてやる」

1発だ。

1発で貴様を仕留めてやる。

本当なら狙いを外して無様に泣き叫ぶ所を見てやりたいが、生憎と貴様を殺すのには1発の弾丸で十分だ。

何より弾が勿体ない。

貴様には1発で十分だ。

1発分が貴様の命の重さだ。

それを分からせてやる。

私はいつの間にか煙草の火を手で揉み消していた。

熱いという感覚は無かった。
それ以上に心が熱かった。
まるでマグマだ。
マグマのようにドロドロとした感覚が私の中で燻り始めていた。
しかし、直ぐに消火しようと努めた。
冷静になれ・・・ランドルフ。
いま居ない相手に怒りをぶつけてどうするんだ？
それに私は狙撃手だぞ。
そして今は休めと命令されたんだ。
なら、命令通り風呂に入り血を洗い流して休め。
明日からはまた厳しい戦いが待っているんだ。
自分に言い聞かせながら私はベッドから腰を上げて湯に浸かろうと思い部屋を出た。
そこでヘンさんと出くわした。
「君も湯に浸かるのかい？」
「はい。少佐からも休めと言われましたから」

「確かにね。では、一緒に行こうか」

私は頷いて共に歩き始めた。

城にある風呂に入った私とヘンさん。

湯に浸かりながら私はヘンさんに訊ねた。

「ヘンさんは戦に出た事があるのですよね？」

「あぁ。それがどうかしたかい？」

「ヘンさんが参加した戦場で、ああいう事はありましたか？」

「・・・あったね」

ヘンさんは思い出したくないような口調だった。

「話したくないなら無理に話さなくても・・・・・・」

「いや。これからもああいう光景を目の前にする可能性もある。だから君に教えておくよ」

俺はある程度、“慣れている”けど君はまだ若い。

だから、辛いだろうが話を聞いてある程度の免疫は付けておけ、とヘンさんは言った。

「・・・分かりました」

私は覚悟するように頷いてみせた。

ヘンさんは湯に浸かりながら話し始めた。

「戦争は戦う相手にも大義名分などがある」

リカルド様は地方を助ける為に兵を起こした。

これが向こうの大義名分だ。

私たちの方も国を護りたいという大義名分がある。

「先王の時も言い訳だろうが、国をより豊かにしたいという大義名分があった」

いや、そう思わないと従えなかった、とヘンさんは言った。

「ヴィールング様はこう言っていた」

『この戦いに大義名分は無い。ただ、王の欲望を満たす為の戦いであり汚すぎる戦いだ』

戦いに汚いも綺麗も無いと私は一瞬だが思った。

しかし、ヴィールング様もそれは知っていただろう。

それでも先の戦いを汚いと言いたかったのだろう。

「そこでも、似たような事はあった」

先王は捕虜を捕まえると矢の練習と称して新兵に狙わせたり、自分で行ったりした。

更に剣で斬ったり火で炙るなどの行為をしたらしい。

それは他の兵達も同じだった、と言う。

「皆、疲れていた。何時まで経っても国に帰れず、妻子とも会えない。そしていつ来るか分からない敵の影に・・・・・・・・・・」

そんな事もあり兵たちの心は荒んで行ったらしい。

戦の狂気という言葉が一瞬だが頭を過った。

「・・・・・・・」

私は何も言えなかった。

いや、何を言えば良いのか分からなかったと言った方が正しい。

私みたいな若造に何を言えと言うのだ?

そしてヘンさんも私が何か言うのを待っている訳ではなかった。

「決して許される事ではない。だが、皆が自分もそうなるかもしれないと怯えていた」

ヘンさん自身もそれに怯えていたらしい。

「あの男も恐らくそんな感じだろう」

あの男の事は何も知らない。

知らないが、やった事は目の前で見た。

たった一度だけだ。

だが、その一度だけの行動が目に焼き付いて離れない。

「ランドルフ君。俺はあの男が憎い。殺された兵と同じ報いを受けさせてやりたいとさえ思うよ」

しかし、それでは奴と同類に成り下がる。

「君も俺も、奴と同類にはなっちゃいけないんだ」

いや、俺はまだ良いが君はまだ若い。

その若さで奴と同類になっては駄目だ。

ヘンさんは私にそう言った。

「・・・肝に命じて置きます」

ヘンさんは頷いてこれでこの話は終わりだ、と言った。

第八十八章：ハゲタカの兄弟

風呂から上がった私は既に用意された衣服に身を包み、ベレッタなどをホルスターに収めた。

「俺は少佐と会って来る。君は先に行っていてくれ」

私も一緒にと思ったがヘンさんは私の為に敢えて一人で行くと言ったのだと直ぐに分かり頷いた。

そして自分の部屋まで行こうとした。

城の中を歩きながら私は出来るだけ休む事を考えるようにした。

角を曲がろうとした所である人物と出会った。

「ランドルフ」

角を曲がり立っていたのはエリーナ様と侍女だった。

「・・・こんばんは」

私は間をおいてから挨拶をした。

「無事だったのですね？」

エリーナ様は私の五体を見て安堵の息を吐いた。

「えぇ。まぁ・・・・・・・」

五体満足だが、色々と苦い経験もした。

敢えてそれは言わなかったが。

「どうかなさいましたか？」

エリーナ様は私の様子を見て訊いてきた。

「いえ。何でもありません。ではこれで」

また明日には戻る予定なので、と私は言った。

エリーナ様はえ？と私を見て、また戦場に行くのですか？と訊いてきた。

「はい。その通りです」

私は平然と答えた。

「ど、どうしてですか？」

エリーナ様は私の行動が理解できない顔だった。

侍女は何となく私の行動に理解できた顔で私を見つめた。

「・・・まだ敵は倒していません。そして城の外には戦友達も居ます。私だけが行かない訳にはいきません」

そう、まだ敵は倒していない。

そしてまだ戦友たちが戦っている。

あんな寒い中でまだ敵と戦っているんだ。

それを思えば今すぐにでも戦地へと行きたい気持ちだが、少佐の命令だから今は休む事にしているのだ。

「ランドルフ・・・・・・」

エリーナ様は私を切なそうに見つめて来た。

今は五体満足で生きているが、運が悪ければ私は明日には五体が欠けているか、死んでいるかもしれない。

エリーナ様はそれを恐れているのだろう、と頭の中で冷静に取り安心させるように私は言った。

「ですが、私は貴方との約束があります。その約束を破る事はしませんからご安心を」

それだけ言うと頭を下げて横切った。

「あ、あの・・・・・・・・・」

「・・・何か？」

私は背を向けたまま訊ねた。

失礼とは思うが、今はこの方と顔を合わせたくなかった。

「貴方に何が遭ったのか私には見当も付きません」

「・・・・・・・・・」

エリーナ様は私の様子が変だとどうやら分かっていたようだ。

「ですが、私は・・・・・貴方の無事を祈っております。いえ、兵たちの無事を祈っております」

皆、国の為に戦っている。

そんな皆に何も出来ない自分を恥じながらも祈りだけはしている、とエリーナ様は言った。

「いいえ。貴方様は私達の無事を祈っているではありませんか」

それだけで兵たちがどれだけ耐えられる事か。

貴方は自分を恥じる必要などありません、と私は言い背を向けた。

だが、またエリーナ様が止めて最後の言葉を述べた。

「・・・どうか、無事に帰って来て下さい」

エリーナ様は私に頭を下げて来た。

「御意に」

私は会釈してから再び歩き出した。

そして部屋に行くとガリシャが私を待っていた。

「何か用かい？」

私がガリシャに近付いて話し掛けた。

「・・・何だか一人だと広過ぎて落ち着かないんだ」

だから、私の所へ来たらしい。

「部屋で話そう」

私はガリシャを中に入れた。

ガリシャは椅子に腰かけると、息を吐いた。

「・・・何だかここに居ると戦争なんて無い気がするよ」

「私もだ。でも、外に出れば少佐達が居る」

少佐達は城の中で比較的安全な所で指揮を執っている。

だが、それでも砲撃や銃声は聞こえて来る。

そんな中でも少佐は指揮を執っているし、敢えて城の外で休んでいるのも兵たちの苦楽を味わう為だろう。

そんな事を私は思った。

「ランドルフ。明日もまた戦場に行くけど、大丈夫？」

「私より君の方が心配だ」

「大丈夫。あたしはあんたの観測手だ。だから、あんたの傍に居る」

「それは私もだ。大丈夫。ガルムも居る。そして私たちは首都に行くんだ」

「ねぇ、ヴァエリエってどんな所？」

「そうだね・・・平地で皆が笑顔で暮らしている所だよ。でも、今は泣き叫んで苦しんでいる」

かつて笑顔で満ち溢れていた首都ではない。

「私は、必ず首都を奪回してまた皆が笑顔で暮らせる場所を取り戻したい」

「あたしも行ってみたいな」

「なら、一緒に行こう。寮だけど、それでも良いかい？」

「あんたとなら何処でも良いさ」

こんな状況で無ければ恐らく私は唖然としていた事だろう。

それだけガリシャが言った言葉は衝撃的だった。

それから暫くガリシャと話し込んだが、ガリシャは部屋へと戻って

行った。

―――――――

俺は野営陣に張ったテントの中でヘンから改めて報告を受けていた。

そこにはゲンハルトとプロイセンのおっさんたちも居る。

槍兵を生きたまま焼き殺した空挺の面汚し野郎の外見を訊くと、そいつの眼は血走っており正気の眼では無いらしい。

「あんな奴は初めて見た。戦場では血の気の多いと言えば良いのか？酒を浴びるほど飲んで荒んだ心を惑わす奴等は居た。だが、あんな奴は初めてだ」

「・・・恐らくそいつはコカインかヘロインを覚えているな」

「何だ、それは？」

「麻薬だよ」

ヘンの後ろからミーシャが現れた。

「麻薬？と言うと、薬か」

ヘンがミーシャに訊き返した。

「あぁ。薬は薬でも、あれは身体を壊す。そして人格までも破滅させる最低の薬だよ」

過去を思い出したのかミーシャは吐き捨てるように言い切った。

「・・・アフガニスタンで見たか」

俺が訊ねるとミーシャは頷いた。

他の奴等はアフガン?と首を傾げたが、それをミーシャが説明した。

「あたしはかつてアフガニスタンという国に兵として赴いた。そこが最初の戦場で、そこは麻薬の生産地でもあるんだ」

そこで作られた麻薬を兵たちに投与し痛みなどを和らげさせ戦闘で支障をきたさないように施した。

だが、それには副作用があり依存症が起こる。

「そして武器を麻薬と交換したりする者まで現れたんだ」

中には味方を殺してまで手に入れる奴まで居た。

「アフガンから帰還した後も兵たちは「もう一度アフガンに行かせてくれ」と牢に入れられながら叫んでいたよ」

「そんな薬を、あの男はやっているのか?」

ヘンはミーシャの話を訊いてゴクリと生唾を飲みながら訊ねた。

ゲンハルト、プロイセンに到っては声を失って何も言えなかった。

「あぁ。恐らくそいつはヘリに乗っていた男の弟だ」

「ヘリに？というとヒューイ・コブラにか？」

「あぁ。奴には弟が居るんだ。兄弟揃って空挺部隊だ」

ただし、別の部隊に所属したが。

「どんな奴ら何だ？」

「戦争を理由に人殺しを楽しむ糞野郎で海兵隊と平和が大嫌いな奴らさ」

二人とも死んだ筈だが、いまここに居る。

恐らく俺らみたいに何かしらの理由で送られたんだろうな。

「少佐。その弟はどんな奴だ？」

「兄貴に比べて遥かに厄介だ」

兄貴は薬でラリッテ（薬の影響で舌が回らない状況だ）ない分まだマシだが、あいつはラリッテいるから手の施しようが無い。

そして兄貴以上に残酷に殺す事を常に頭の中で模索している。

「・・・俺は、あいつを殺したい」

あんな目の前で生きたまま焼かれた槍兵を思うと我慢できない、とヘンは言った。

「俺もだ。だが、まだ始まったばかりだ。何れ会うさ」

その時は躊躇わずに殺せ、と俺は言ってやった。

「そうする」

「あぁ。それからあの二人を頼むぞ」

「任せておけ。ランドルフ君はまだ若い。死なせて堪るかよ」

そう言い残しヘンはテントを出て行った。

俺は煙草を銜えてジッポーで火を点けると煙を吐き出した。

第八十九章：魔女の釜茹

翌日、私たちは少佐達と共に朝食を取った。

少佐達はずっとテントの中で寝起きしているらしくゲンハルト様も一緒だった。

唯一生き残った生存者は未だに意識不明でいつ目覚めるか分からない、とエドリアス大尉は言っているらしい。

「生存者をどうしますか？」

「まぁ、戦ってはいないが捕虜と言う扱いになるだろう」

騎士ともなれば捕虜となっても人道的に扱い、和平などをする時の材料として使われる。

有能な者ほど敵からすれば返して欲しいから多額の金を支払って取り戻す時もあるが、彼は一般の槍兵だ。

だから、捕虜として扱うが人道的なのかは私には分からなかったが、出来る事なら人道的に扱って欲しいいう願いはあった。

あの人を助けたのは私たちだから、その後の事も考えるとやはり人道的に扱って欲しいと思いたくなる。

私の思いを少佐は分かっていたのか「捕虜に差別しない」と発言し、人道的に扱うと約束してくれた。

それに安堵しながら、ヴィルヘルム元伯爵と要らない荷物はどうしたのか?と訊いた。

少佐はヴィルヘルム元伯爵と要らない荷物は訓練を続けている、と説明した。

「フィーナ自身は戦に出たいと言っていたが、あの様子ではまだ駄目だ」

少佐は戦闘食を食べながら言った。

相変わらず正攻法でしか相手を倒す事が出来ない（しようとしないの方が正しいかもしれない）のが理由であり、いま行った所で話にならないから訓練をやらせているらしい。

「まぁ、相変わらず石頭だがそれでも進歩していると言っていたな」

何処がどう進歩したのか知りたいと私は思いながら戦闘食を口にした。

「所でテツヤよ。そなたはこれから敵がどう出ると思う?」

ゲンハルト様はインスタント・コーヒーを飲みながら訊ねた。

前方に居る敵は最早壊滅状態だが、士気は衰えておらず脱出しようとしているらしい。

「恐らく無線で援軍もとい救出部隊を寄こせ、と頼んでいる筈だ」

その部隊には残りのフォース・リーコンと新たな兵が来るとテツヤ

殿は予想しワイバーンも来るだろうと言った。

「ワイバーンでバンカーなどがある場所を攻撃させつつ、負傷者ならびに死体全てを連れて帰る筈だ」

「となると、今以上に厳しい戦いが予想されるな」

「あぁ。だが、ここで叩ける奴等は全て叩く」

それで少しでも奴等に被害を与えるのだ、と少佐は言った。

食事を終えて一段落した所で少佐の無線が鳴った。

「誰だ？」

『イーグルです。少佐』

無線の相手は軍曹だった。

「何か用か？」

『もやし達はまだですか？』

「もう直ぐ行かせる。それで後方はどうだ？」

『今の所異常はありません。そちらはどうですか？』

「未だに敵は粘り強く抵抗している。負傷者も出ているが、敵に比べればまだマシだ」

『そうですか。しかし、こちらは暇でしょうがないですよ』

誰も来なくて寂し過ぎる、と軍曹は愚痴を零した。

「なぁにもう直ぐ敵さんは来るさ。救援にな」

それを聞いた軍曹は楽しみだ、と言い無線を切った。

食事を終えた私たちは武器を取り立ち上がった。

「では、少佐。行って参ります」

ヘンさんが敬礼をすると私達も敬礼をした。

それに少佐達は敬礼で返して送ってくれた。

スキーを装着して城を出た。

後方を進んで行くが、敵はまだ生きており反撃をしていた。

もう数日間は経っているのに戦っている彼等は敵ながら凄いと思う。

フォース・リーコンは陣形を整え、必死に攻撃をして味方を護っていた。

無闇に突っ込ませても無駄、と分かっているから彼が必死に護っているのだろう。

だが、彼等は十字砲火を浴び、迫撃砲などの集中砲火を浴びている。

これが戦争。

悲惨な光景だ。

こんな事は一刻も早く終結させなければならない。

私は決意を新たに軍曹の居るバンカーへと戻った。

「来たか」

バンカーに行くと軍曹達は健在だった。

「羨ましいぜ。お前等だけ城で風呂に入れて」

軍曹はわざとらしく私たちを詰って来た。

「ですが、少佐の命令でしたので」

「ちっ。少佐に可愛がられやがって」

「嘘・・・ランドルフ君、貴方まさか・・・・・・・・」

お姉様が私を見つめて来た。

「い、いえ。私は健全な男子で、女性とも・・・・・その・・・・・あの・・・・・・」

「同棲してるもんね」

ガリシャが意地悪な口調で言ってしまった。

それを聞いたお姉様は私をどういう事！！と問い詰めて来た。

それに対して私は落ち着くように言い説明しようとしたが、お姉様は聞かなかった。

そんなやり取りでバンカーの中は賑わった。

賑わいが静まってから軍曹は態度を改めて私に言った。

「それでは報告を聞かせてくれ」

「はっ」

ヘンさんが軍曹に偵察の報告を伝えた。

「・・・なるほど。少佐の言う通り空挺の面汚しだな。そいつらは」

軍曹は唾を吐きながら言い切った。

そして恐らく敵は援軍である地上軍とワイバーンを繰り出す筈だと予想した。

「攻撃兵ヘリだけじゃもう駄目だ。恐らくフォース・リーコンが全員来るだろう」

攻撃ヘリとフォース・リーコン、そしてワイバーンなどを出して少佐の言う通り全員を連れて帰る事だろう。

それを考えると更に厳しい戦いになる、と思う。

「良いか？相手は誇り高き少数精鋭部隊だ。そして奴等はこの“魔女の釜茹”に煮詰れている戦友たちを助けに来る。心して掛るぞ」

私たちは頷いた。

そしてまた敵が来ないか警戒した。

―――――――――――――――――――――――

―――――――――――――

俺はバンカー目掛けてライフルを連射した。

こんな物でどれだけ役に立つか分からないが、それでも何もやらないよりはマシと思った。

だが、直ぐそこへ迫撃砲が来たので伏せた。

近くで爆発と同時に雪が俺らの頭に飛び散る。

「くそっ。5人死亡!!繰り返す5人死亡!!」

俺の隣で無線機を握った通信兵が犠牲になった兵の数を本部に伝えた。

そしてこれで何度目かと忘れたほど「救援はまだか!!」と叫んだ。

その間も敵は攻撃を休まず続けて来る。

くそったれが。

俺は心の中で罵声を言いながら銃弾から身を護るために頭を下げた。

俺たちはヴァイガーへと再び来た。

今度は味方も多く心強かったが、果たして敵はどんな手を使って来るのか不安だった。

俺らが先頭を切った。

敵は何処に居るのか皆目見当も付かない。

そして静かだった。

ただ木から雪が落ちる音だけが支配していた。

それが逆に怖かった。

暫く進んで行くと城が見えた。

あれが城・・・リブリーブス城。

話によれば既に誰も住んでいないと聞いていたし、城も既に朽ち果てているとも聞いた。

だが、目の前には間違いなく城が建っていた。

俺らが唖然としていると、後方から爆発音がした。

後方は兵站がある。

くそったれ！兵站をやられたか！？

俺らは直ぐに引き返そうとしたが、直ぐに四方から銃弾の雨が襲い掛かって来た。

俺らは反射的に身を伏せたが何人かは直ぐにやられた。

軍曹はＭ６０Ｅ３の２脚を立て、銃撃された場所目掛けて撃ち始めた。

俺らもそれをやり、味方に伏せろと叫んだ。

そこからは敵の攻撃で俺らは成す術も無かった。

俺らしか相手と同じ武器を持っていないから、必然的に俺らが戦うしかない。

中には勇敢にも槍で突撃をした者も居たが呆気なく死んだ。

俺らは後退も出来ずに閉じ込められたんだ。

だが、数日分の食料はあるからそれまで持ち堪えれば味方が来る筈だと自分に言い聞かせた。

しかし、幾ら待っても味方は来ない。

その間にも負傷者と戦死者が増えて行き食料も無くなって行く。

無線で何度も大佐に応援を頼んだがまだ来ない。

いや、その前に最初からこの作戦の意図が俺には分からなかった。

歩兵だけで城を奪い取るなど有り得ない。

リカルド様は「ワイバーンで空から援護しつつ歩兵で城を攻める」と言っていた。

それなのに出陣の日になった時、俺らだけが行く事になった。

どういう事か訊く暇も与えられずに追い立てられた。

くそっ、あの時点で訊いておけばこうなったりはしなかったもしれない、と今更ながら後悔した。

援軍を待ち続けていたが、やっと来た。

ヘリが2機。

ヒューイ・コブラとリトル・バードだ。

味方は援軍だ!!と喜び俺もまた助かった、と思ったがそうじゃなかった。

奴等は俺らが居るのにお構いなしに攻撃を仕掛けて来た。

いや、まるで俺らを殺すと思えるほど俺らの間近に攻撃をしてきた。

無線で俺らの位置を知らせた筈なのに・・・・・・・・・・・・・・・

無線で連絡を取ろうとしたが、ノイズばかりで駄目だった。

そしてヒューイ・コブラは対空火器で破損されてリトル・バードも逃げた。

あいつらは何のために来たんだ？と俺は思った。

あいつ等はただ俺らを殺す為だけに来たのか？と思うほど味方の死体が並んでいたからだ。

『・・・・俺らは見捨てられたのか？』

俺は一瞬だが、リカルド様を疑ってしまった。

その罰なのか？

俺らの頭上に迫撃砲が降って来た。

幕間：救援とハゲタカ

私はテト攻勢以来共に戦ってきた戦友であり上官でもある大佐と共に味方の救出準備をしていた。

「良いか？我々はこれより敵の猛火を浴びている援軍を助けに行く。誰一人として、例え死体だろうと誰も残さず連れて帰るぞ」

大佐は準備をしながら私たちに改めて任務を伝えた。

私たちはそれに頷いた。

持てる物は全て持った。

爆弾、銃、ナイフ、食料、無線機・・・とにかく自分で持てる物は全て持ち臨機応変に対応できるようにした。

荷物が詰め込まれた背嚢を背負った大佐はコルトＸＭ１７７Ｅ２のコッキング・レバーを引き、準備を終えた我々を見て「行くぞ」と言い先頭を切った。

本来なら大佐は行かなくて良い。

少佐である私が行けば良いのだが大佐は昔から「部下だけを行かせるのは上官ではない」と言って聞かない。

それ以上に今回の事も偵察を出来ずに、そのまま行かせた事への責任感から来ている。

大佐と言う地位に居る身で言えば、どうかと思うがそれでも部下思いな方であると同時に思う。

先頭を切り歩く大佐の後を我々は追い、は泊っていた部屋から出た。

城の中にある演習場に行くとリカルド様達が居た。

「リカルド様。これより孤立した味方を救援に向かいます」

大佐はリカルド様に敬礼した。

「頼む。彼等は私達の救援を待ちながら今も戦っている。必ず彼等を助けてやってくれ」

「はっ！！」

大佐は直立不動のまま敬礼を再びした。

「おぉぉ、ご立派だな」

「まったくだぜ。ホント情けない部下を持つと大変だぜ」

聞きたくもない声が二つした。

私がそちらを向けば、右から斜めに掛けて縫い針の痕がある３０代の男と２０代後半の男が居た。

大佐が無線で連絡を取った“ハゲタカ”の二人だ。

こいつらも元は我々と同じアメリカ合衆国の軍隊に所属していた。

二人とも空挺部隊に所属した猛者であるが、我々を軽蔑しているのは分かっている。

まさか、そんな奴等の助けを借りる事になるとは・・・・・・・・・

我々にはヘリが無い。

そのため大佐はこいつらに連絡を取りヘリを頼んだのだ。

だが、奴等はヘリだけではなく部下である空挺部隊まで連れて来た。

そして我々が救援に向かう筈だったのに、こいつらがそれを横取りした。

まさにハゲタカだ。

この名前を持つ鳥は存在しないし、自然界では彼等は腐肉を喰らい衛生面でバランスを取る“掃除屋”だ。

だが、こいつ等は違う。

こいつ等は弱った獲物を仕留め、それを嬲り殺し手柄を横取りする奴らだ。

こんな奴等が我々の居た国には蔓延っており国を食い物にしている。

そして奴等は一国だけでは飽き足らず残りの国も食い物にしようとした。

最初の獲物はこの国だ。

なぜこの国なのか分からない。

分からないが、我々は命令を受けた。

『内部に反乱を起こす奴等が居る。そいつらを助けてやれ』

だが、助けても何れは殺す事になる、と我々は知っていたがリカルド様を殺す事など出来ないし、させない積りだった。

しかし、目の前に居るこの二人ならリカルド様を躊躇いも無く殺す事だろう。

『・・・戦が終わった時、“戦死”させるか』

私は冷たい眼で二人を見ながら決意した。

この二人はこの国・・・ひいては我々やリカルド様に対して悪影響しか与えないのは目に見えている。

こういう奴らは早々に死んでくれた方が良いのだ。

そんな事を考えている私の横で大佐は二人にヘリを用意してくれ、と丁寧に腰を折って頼んだ。

階級で言えば大佐の方が上だが、ここは敢えて腰を折り頼んでいる。

そんな大佐の態度を見て二人は良い気持ちなのだろう。

鷹揚に頷いてみせた。

「俺って優しいよな？野蛮人しか相手に出来ない海兵隊の為にヘリを動かすんだからな？」

「本当だぜ。兄貴。まったく兄貴は神だぜ。こんな奴等の為に貴重なヘリを動かすんだかな」

大尉である兄の発言に我々の内何人かは眉を顰めた。

そして弟である中尉の発言に顰めていた眉は青筋へと変化した。

だが、大佐とリカルド様が居る。

何よりここで内輪揉めなどしている時ではない。

一刻も早く仲間を救援しなければならない時なのだ。

・・・・・・何時か、その態度を改めさせてやる。

私は拳を握り締めながらハゲタカの一人が操縦するヘリに乗り込んだ。

第九十章：毒針の名は

バンカーへと戻った私たちだが、直ぐに出て一人だけ埋葬できなかった槍兵を埋葬した。

黒焦げにされているため慎重に持たないと崩れ落ちてしまう。

だから、細心の注意を払いながら彼を土へと埋めた。

そして雪を被った土を被せた。

「貴方だけ埋葬できずにすいませんでした」

私は折り畳み式の剣先スコップで土を被せながら謝った。

「あんたの怨みは俺らが晴らす」

ヘンさんは謝罪ではなく報復の決意を遺体にした。

ガリシャは何も言わず土を被せ続けた。

遺体を埋めた後は槍を被せた土に刺した。

そして祈りの言葉をしてバンカーに帰ろうとした矢先だった。

「・・・ヘリだ」

ガルムが空を見上げながらヘリが来ると告げた。

恐らく救援部隊だろう。

私たちは急いでバンカーへと戻るが、無線で軍曹にヘリが来ると伝えておいた。

そしてバンカーへと急いで向かうが先にヘリの方が私たちを越えて行った。

「今度は5機か」

ヒューイ・コブラ1機、リトル・バードが1機、チヌークが2機、ブラック・ホークが1機という構成だった。

「前みたいな状態になりますかね？」

「いや、向こうも馬鹿じゃない。恐らく3機でバンカーなどを攻撃しつつチヌークに居る味方を降ろす事だろう」

そして彼等を乗せて退却する。

というのがヘンさんの予想だった。

「敵も新たな援軍だけでは歯が立たないと知った筈だから一時退却だろうな」

そこで新たに態勢を整えつつ、戦ってきた兵たちの情報をまとめまた来ると筈だ。

「万が一にも奴等を残して退却はしない筈だ」

ただでさえ、寒いのに敵は水・食料が最早無いに等しい。
そんな彼等にここで戦えなど言わないし、させない筈だ。
もし、やらせたら死ぬのは目に見えているのだから。
「それはそうと早く行こう。俺らだけパーティーから締め出される」
それは勘弁してもらいたい、と私たちは言い更に急いだ。
バンカーに着いた私たちは軍曹に報告し状況を訊ねた。
「敵さんはこの前と同じだ」
ヒューイ・コブラなどで攻撃しつつその間にブラック・ホークに乗せていた分隊１０人を降ろした。
そしてチヌークを地上に降ろし、彼等を素早く乗せて退却するらしい。
「しかし、敵も馬鹿だな。ワイバーンを繰り出さないんだからな」
軍曹はこれでは先の二の舞だ、と鼻で嗤ってみせた。
確かにワイバーンがあるならワイバーンも繰り出して救出するのが望ましい。
いや、そうしないと更に被害が多くなる一方だと思う。
それなのにヘリだけで来たという事は、何かあるのか？

私はどうしてなのか気になった。

だが、今はそれ所ではない。

「軍曹。我々はただ奴等が逃げるのを見ているだけですか？」

私の問いに軍曹は笑みを浮かべたまま首を横に振った。

「まさか。俺達も好い加減、待つのは飽きた。そろそろ・・・こちらから頂こうじゃねぇか」

軍曹は毒針、と言った。

ヘンさんはバンカーの中に置いてあった布を剥ぎ取った。

布から顔を出したのは縦長の代物で、前の部分が四角形になっており後方の部分は若干だが膨らんで輪っかをしている。

下の方には黒い線が付いた小さな箱が取り付けられている。

これが本体だ。

それからこれまた細長い円筒を取り出し装填し、それを右肩に担いでみせた。

“ＦＩＭ－９２スティンガー”。

アメリカが開発した携行式地対空ミサイルでスティンガーは「毒針」を意味する。

これは低速で飛行をするヘリ、飛行機などを撃ち落とす為に使われる物で数ある携行式地対空ミサイルの中でも命中率が良い事で知られている。

この利点を言うと軽量で小型のため一人でも運用可能という事だ。

黒い線が付いた箱は“ＩＦＦ”という敵味方識別装置と言われる物で、敵か味方かを自動的に識別する装置の事だ。

これにより味方への誤射を無くしている。

更に言えばこれには“赤外線・紫外線シーカー”と呼ばれる物を搭載しており相手が避けても自動的に追う事が出来る優れ物だ。

その反面で充電する時間が４５秒掛り、肉眼で敵を捕捉しなければならないため天候などの自然環境に左右される点があるのだ。

少佐の策はこれだ。

この前もこれでチヌークを仕留め、ヒューイ・コブラに手傷を負わせる事に成功した。

私達のバンカーにもこれを渡されたので奴等を狙える。

そして今の天候を考えれば撃てる。

ヘンさんがスティンガーを持ち外に出て私たちも護衛として付いて行く。

ヘンさんはステアーＡＵＧを首に吊るすとスティンガーを右肩に置き取り付けられたスコープで狙いを定めた。

私たちは四方を警戒しながらヘンさんが撃つのを待った。

「捉えた」

ヘンさんは一言だけ述べた。

そして引き金を引こうとした所で、ガリシャが声を上げた。

「ワイバーンが来たよ！！」

私たちも後ろを振り向くとワイバーンの群れが空中を飛びながら来たではないか！！

ワイバーンの一匹が私たちを見た。

そして急降下をしてきた。

不味い！！

私たちは一斉に走り出したが、ワイバーンは口から炎を吐き出した。

まるで唾のように吐き出された炎は真っ直ぐに私たちに向かって来る。

このままでは直撃だ！？

「捕まってろ！！」

ガルムが私たち3人を掴むと一気に跳躍した。
それのお陰で炎は回避できた。
炎が直撃した地面は雪が解け、丸く抉られていた。
私は腰からベレッタを抜いてワイバーンを撃った。
だが、硬い鱗では歯が立たずに終わった。
ワイバーンは再び上空へと飛び、城へと向かった。
ガルムから解放された私は直ぐに無線機で城へと連絡した。
「こちらもやし。ワイバーンが来た。繰り返す。ワイバーンが来た!!」
『落ち着け。もやし。それで無事か?』
少佐は私に落ち着くように言ってから怪我は無いかと訊ねて来た。
私は3人にも訊いて皆は無事だ、と答えた。
『分かった。もやし、ワイバーンを狙えるか?』
上空を飛翔するワイバーンの数はかなり多い。
そして速い。

あの炎を受ければ一瞬で丸焼けとなり灰も残らないだろう。

怖いと言う気持ちはあった。

だが、私はやってみせますと答えた。

『良い答えだ。1匹でも良いから仕留めろ』

「了解ッ」

私は無線を切りガルムとガリシャにワイバーンを狙撃する、と伝えた。

「ヘンさん。貴方はスティンガーでヘリを狙って下さい」

「分かった。君等も頼むよ?」

「勿論です」

私はヘンさんに頷いて見せて3人で行動を開始した。

バンカーとは反対側の方へと行き、木の影に隠れて空を飛ぶワイバーンを見た。

奴等は地上に炎を吐きながらヘリを援護していた。

ヒューイ・コブラとリトル・バードにブラック・ホークは城を中心に攻撃を繰り返しチヌークは下へと降下して負傷者と戦死した者たちを中へと入れていた。

ワイバーンが吐く炎は森を赤く包んで行く。
それでバンカーなども火に包まれ爆発をする。
こうしている間にも負傷者や戦死者が続出して行く。
だが、焦らず私はじっと奴等の特徴を見た。
良く見ろ。
何か特徴がある筈だ。
奴等の弱点は腹だ。
その腹を動いている時、どうやったら狙える？
じっと見続けて、ある事に気付いた。
炎を吐くとき腹を大きく膨らませている。
恐らく体内に蓄積されている炎を押し出しているのだろう。
そして炎を吐く瞬間、速さが僅かだが落ちている。
奴等は急降下をして攻撃を繰り返しているのは下に向かう事で腹を膨らませる時間を短くしているに違いない。
それでも腹は膨らみ、速度は落ちる。
その瞬間を狙えば・・・・・・・・・

「ガリシャ。観測をしてくれ」

ワイバーンを狙う、と私はガリシャに告げた。

「あいつらが急降下している所を狙うんだね？」

奴等の特徴をどうやらガリシャは理解したようだ。

私が説明しなくても彼女は自力で理解した事に感心しながら心強く感じた。

「頼むよ。恐らく腹を撃てば炎が飛び散る筈だ」

それによって他の奴等にも被害を与えられる可能性がある、と私は言った。

「了解」

ガリシャは観測を始めた。

そしてガルムがそれを護衛する。

ガルムはＲＫＭ機関銃のレシーバーを引き、腰だめに持ち警戒をしている。

「先ずはヘリの近くに居る奴を狙うよ」

私はヘリの上空を飛行するワイバーンを見た。

急降下を始めた。

「距離７００、風速４、風向きやや右」

私はライフル・パットを取り付けたモーゼルのストックを肩に当て構えた。

爆音、悲鳴、ワイバーンの雄叫び、ヘリのプロペラが回る音。

喧しい音がする中で私は冷静で、私達の周りもまた静かに思えた。

私が狙いを定めた頃にワイバーンは急降下を始めた。

私から見れば背を向けて腹を見せている。

「・・・・・・」

息を整え、奴がヘリと隣接する瞬間を計算し引き金を引いた。

弾はワイバーンの腹に当たった。

そしてワイバーンは悲鳴を上げたが直ぐに腹が弾け、炎がヘリを包み込んだ。

乗り手も巻き込んだ炎は別のワイバーンにも飛び火した。

そのワイバーンは翼が燃えて悲鳴を上げながら無茶苦茶に暴れ回り乗り手を振り落とさんとしていた。

その乗り手は必死に宥めようとしたが、無理で振り落とされた。

やはり・・・体内で蓄積した炎は周囲に散らばるか。

私は更に狙撃を続けた。

しかし、敵も馬鹿じゃない。

私たちの居場所を探しては徹底的に炎を吐いてくる。

しかし、一度狙撃したら別な場所に移動して狙撃するから然して問題は無かった。

ヘンさんはスティンガーを撃ったが、敵も対抗手段を取って当たらなかった。

その間にも敵は負傷者や戦死者をチヌークに運び入れて行く。

そしてついには最後の一人を入れたのかチヌークは空へと飛び上がった。

そのチヌーク目掛けて再びスティンガーをヘンさんは撃とうとしたがワイバーンが攻撃した為、出来なかった。

だが、前方のバンカーから発射されたスティンガーによってチヌークの後ろの部分に命中した。

白い煙を上げながらもチヌークは飛び続けていた。

一瞬だが、当たる瞬間に光が見えたから恐らく防御魔法を施しているのだろう。

前回は施していなかった為に撃墜されたが今回は違うようだ。

もう1発撃とうとしたが、ワイバーンが森林中に炎をまき散らした為に断念せざるえなかった。

敵は退散して行き、我々と焼かれた森だけが残った。

敵を逃がしたのは惜しかったが、先ず先ずの勝利だろうと私は思った。

第九十一章：悲痛な叫び

敵が去ってから少し間をおいて軍曹は城へ呼び出された。

恐らくこれからの事についての話し合いだろう。

本来なら敵を追撃するのが望ましいのだが、相手はヘリとワイバーンで構成されているから下手な追撃は返って危険だし、“手負いの獅子”ほど怖い物もまた無い。

何より今は我々の被害状況なども把握できていないからここは敢えて追撃しない事になると私は思った。

私たちはバンカーの中で警戒をしながらも一服する許しを軍曹から得たので煙草を蒸かし合った。

とは言え、女性が居るから吸う者は外に出ている。

「あー、美味い」

ヘンさんは女神の抱擁を吸いながら城を見た。

「今頃、少佐達はまだ会議中だろうな」

「ですね。我々はそれまでここで待機です」

「あーあ、暇だぜ」

獅子頭軍団の男が腕を伸ばした。

「それはそうと、敵はまたここを攻めて来ますかね？」

私は煙草の先に溜まった灰を指で叩き落としながら訊いてみた。

「俺なら来ない。こっちの方に地の利があるのは明白だ。なら、前みたく迎え撃つ方を選ぶだろう」

「でも、エスカータ城は立て籠っても無意味に等しいですよ？」

エスカータ城は平地に築かれ城――“平城”と呼ばれる種類に当たる。

平城とは対照に山に築く城を“山城”と呼び、平野の中にある山に築く城を“平山城”と呼ぶ。

昔は山に城を築いてその下に街を築き戦が起これば城に籠る方法を取っていたが、今では山城がある所は殆ど無い。

あったとしても簡素な砦などだし、城だが事実上は砦という形になる。

平山城もまた似たような物で今では何処でもほぼ平城を築いている。

平城というのは民達に支配者の威光を示す役割の方が強いのだ。

しかし、ただ威光を示すだけでなく敵の来襲などにも備えて堀や柵などを築き防衛手段を取っている。

所がエスカータ城はそれらが欠落している。

堀は浅いし一個だけの上に防御魔法も施していないという体たらくとも言えるお粗末な城だ。

「そうは言っても俺らが築いたモット・アンド・ベーリみたいな物を作れば割と持つんじゃないか？」

それに平地なら戦象や戦車、騎馬隊も活用できる。

確かにそれを言われるとそうだ。

「まぁ、俺らが考えても無駄だ。向こうでも恐らく似たような事を話し合っているさ」

ヘンさんは再び城を見て言った。

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

俺はテントの中でこれからの事について会議をしていた。

「先ずは敵を追い払う事に成功したな」

敵は負傷者や戦死した者たちを全てヘリに乗せて逃げ帰った。

最初はヘリだけだったが、後からワイバーンが来た事には驚いた。

だが、そいつらも何匹か仕留める事に成功したから先ず先ずだ。

「で、これからどうするのだ？」

ワイドが俺に質問して来た。

「お前が敵ならどうする？またここを攻めるか？」

俺は逆に質問をした。

「どうかな・・・私ならまたここを攻めるにしても前以上に準備をする。だが、それだと時間が掛る上に攻め落とせなかったらと思うと直ぐには決断できない」

そう、ここは攻めようとすれば簡単には落とせない難攻不落な城だ。

だから、攻めるなら相当な時間と準備が必要だ。

またここを攻めるなら前以上の時間と準備が必要とされるのを向こうは分かっている筈だ。

「となれば、向こうは我々を誘き寄せるか？」

ゲンハルトが俺の考えと同じ事を口にした。

「それもあるな。向こうなら戦象などを活用できるが、防御に関して言えばどうだ？」

「半日と持たず落城だ」

プロイセンのおっさんがゲンハルトに代わり答えた。

「あの城は政や交通面で言えば文句無しに良い。だが、その半面で防御に関してはまるで無い」

そんな所に立て籠った所で直ぐに落とされるのは目に見えている。

それをやるほど向こうも馬鹿じゃない。

しかし、だからと言ってせっかく落として占領した城を見す見す手放すのも忍びない筈だ。

また古巣へと帰り新たに力を蓄えるなんて時間は無い事を鑑みれば、再び攻めるかまたはあの城をここみたいに強固な城にするかだ。

それを阻止する為に追撃するのが本来なら良いが、こちらも手傷を負っているから直ぐには動けない。

どうするべきかと考えている所へ司教が現れた。

「負傷者が目を覚ましました」

「話せる状態か？」

俺が訊ねると司教は頷き、来て下さいと言ってきた。

俺は椅子から立ち上がりゲンハルトも行くと言った。

「私もその者と話をしたい。あの者から地方の・・・訴えを聞きたいのだ」

敵が反乱を起こした理由は地方を救済する為に起こした物だ。
それを直に聞いてゲンハルトは自分を戒めるのかもしれないな。
俺とゲンハルトを司教は負傷者が居る部屋へと案内した。
清潔な雰囲気を保たれた部屋の外では2名の兵が立っている。
負傷者ではあるが捕虜だ。
だから、万が一の事を考えて待機している。
俺は2人に敬礼をして中に入った。
負傷者はベッドに仰向けに寝ていたが、俺らを見るなりギョッとした。
「俺は鷹見徹夜だ。お前さんの名は？」
「・・・・プレス・ハートだ」
槍兵は緊張もとい怯えた顔で言葉を紡いだ。
「そんなに怖がるな。別にあんたを殺したりはしない」
捕虜は出来る限り丁重に扱う。
傭兵なら拷問しようと文句は言われない。
だが、こいつは正規兵だし何であんな状況になったのか知っている

唯一の生存者だ。

上手く利用すれば向こうを仲違いさせられる。

「・・・本当か？」

槍兵・・・プレス・ハートは信じられない顔で訊いてきた。

「司教が保証人だ。こいつなら信用できるだろ？」

俺らの世界でもそうだったが、ここでも宗教者は医者であり仲介人だ。

和睦を結びたい時や降伏する時などは使者として宗教者を扱う事があり、その者を無下にするのは出来ない。

だから、何処の国でも司教みたいな人間は大切にされ信頼される。

「大丈夫。この方は見た目こそ恐ろしい方ですが、仁義には厚い方です」

司教は安心して下さい、とプレス・ハートに告げた。

それを聞いたプレス・ハートは信じようと思ったのか頷き何の用か訊いてきた。

「お前さんを俺の部下が発見した時、辺りは血の海だったらしい」

お前さんだけ残し全員が死亡していた。

俺らがやったんじゃない。

では、誰がやったんだ？

俺はある程度、予想はしていたが敢えて訊いた。

「分からない。我々が進軍をしていたら空から音が聞こえて来て上を向けば巨大な鳥が飛んでいた」

その鳥から人間たちが降りて来るや我々に向かい攻撃をしてきた。

「奴等はどんな格好をしていたんだ？」

「リカルド様に仕えている“大佐”という人物と似たような格好だった。確か頭には赤紫の帽子を被っていた」

・・・やはり奴等か。

そしてフォース・リーコンの指揮官が大佐という事も分かった。

大佐ともなれば俺より2階級も上だ。

大佐ともなれば恐らく一兵卒ではなく士官学校を出た将校だろうな。

俺みたいに一兵卒から少佐になるのは極めて稀だからな。

「で、奴等はお前等を片っ端から殺したのか？」

プレス・ハートは苦渋に満ちた顔で頷いた。

「奴等は、俺達を“獲物”と称して攻撃して来た」

そして何人かは逃げたが、恐らく殺されたとプレス・ハートは答えた。

「では、別の質問だ。リカルドは王になる為に軍を起こしただけか？」

「違うっ。あの方は・・・俺たちを、地方を助ける為に兵を起こしたんだ!!」

プレス・ハートはゲンハルトを見た。

「あんたたち中央は俺たち地方に住む者を働き蟻のように働かせて税を絞り取った。それなのにあんた等は俺達に何の見返しもしなかった!!」

5年前に起きた事を覚えているか?とプレス・ハートは言った。

「・・・・地方を襲った疫病だな」

ゲンハルトは静かに答えた。

俺はこれを知らないが司教が説明をしてくれた。

5年前に地方では疫病が蔓延したらしく大勢の者が死に絶えたらしい。

更にその数年前は自然災害が起きここでも大勢の者が死んだ。

「あれのせいで俺の家族は皆死んだ。他の奴等もそうだ」

自然災害の時、地方は首都に助けを求めた。

薬、衣服、食料を運搬してくれ。

崩れ落ちた家や壊れた道を直す為に人員を出してくれ。

だが、首都はそれを知らん振りして聞こうとしなかった。

そして疫病の時も同じだったらしいが、こちらの方が遥かに厄介だったらしい。

「首都には疫病を治す為の薬がありました」

それから疫病の原因は民達が貧しい生活をしていた事から来る栄養失調が原因だったようだ。

「あんたら中央の奴等が食料と薬をくれれば俺の家族は・・・ローラ様は助かったんだ!!」

「ローラ様ってのは誰だ?」

俺はプレス・ハートに訊ねた。

「リカルド様の奥方様だ」

まだ２０になったばかりだと言うのに、その若い灯火は消えた。

いや、消されたんだとプレス・ハートは言い直した。

「ローラ様はご自身が食べる分なども我々に与えて下さり出来る限りの手を打って下さった・・・・・」

だが、それが原因で自分が疫病に掛り若くして亡くなられた。

「その時リカルド様は誓ったんだ」

私が必ず地方にも光を灯してみせると・・・・・・・・・・

その為には自分が王にならなければならない。

例え義理の母子を殺そうとしても、だ。

「あんた等が悪いんだ!!あんた等が俺らをここまで追い詰めたんだ!!」

プレス・ハートは傷を負った身にも係わらずゲンハルトに掴み掛って来た。

ゲンハルトは胸倉を掴まれて揺さぶられたがさせたいようにさせた。

いや、そうする事でこいつが満足するなら良いと考えたのかもしれない。

ゲンハルトはギュッと拳を握り締めた。

そして一言だけ呟いた。

「・・・・・すまない」

プレス・ハートはこれを聞き「謝っても遅いんだよ」と叫び泣き出した。

司教はプレス・ハートを慰めながら俺達に退室を促した。

俺たちは素直に従い出て行った。

第九十二章：肉が付いてきた（前書き）

ここは徹夜の独白です。

ゲンハルト・・・嫌いでしたが、何だか好きになりました。（爆）

作者なのに、キャラクターが嫌いとか可笑しな話でしょうが、好きになりました。

とは言え、男として好きになるので、男色家ではありませんから！！

まぁ、それはさておき・・・どうぞ。

第九十二章：肉が付いてきた

俺とゲンハルトは部屋を出て、テントには戻らず城の外に出た。
今はこいつを慰めてくれる女の家に送るのが良い、と判断したからだ。

「・・・・・・」

ゲンハルトは俺の隣を歩いていたが無言だった。
拳は握り締められ続け、何時の間にか血が滴り落ちていた。
俺はそれを黙って歩き続ける。
こいつの心は今きっと懺悔の気持ちで一杯だろう。
俺としてもリカルドが兵を起こした気持ちは理解できるし、地方の状態を僅かながらに聞いたが同情する。
だからと言って協力はしないし、リカルド達の行動を称賛したりはしないが。
ただ、奴等を追い詰めたのは間違いなくこちらに原因がある、と言う事だ。
恐らく俺たちが勝てばリカルドは反逆者として、そしてそれに協力した者たちは一人残さず皆殺しにされるだろう。

それが一番、後腐れが無くて良い方法だ。

だが、これでは余りに酷過ぎる話だ。

それに、この出来事が何で起きたのか?を考えその原因を根元から直さないと駄目だ。

直さなければ何時かまたこんな状況になる可能性は極めて高いと言える。

無言だったゲンハルトだが口を開いた。

「テツヤよ。私は、あの男にどんな事をすれば良かったのだろうな?」

ゲンハルトはプレス・ハートの口から地方の現状を改めて聞かされて自分の、自分達がしてきた事に深く罪悪を感じている様子だった。

宰相は国の政を司る役職だ。

それは中央だけが栄えるだけではなく、地方を・・・国全体を潤して民達が幸せにするのが役目。

最初こそそれをやり遂げようとこいつはした。

だが、それは歳を重ねて行く内にその志は薄れて行き、何時しか周りに飲み込まれて行った。

その“ツケ”が今、回って来た。

これはこいつだけが原因ではない。

こいつにも原因はあるが、それ以上にこいつに群がり蝕み、国を食い物にした下種共に原因がある。

奴等は私利私欲に溺れ、この事態を招くという“糞”をした。

だが、尻拭いをせず我先にと逃げて俺達に尻拭いをさせている。

腹立たしい事この上ないが、今はこれからの事だ。

「戦が終わったら、お前さんは地方をどうする？」

俺は煙草を銜えながらゲンハルトに訊いた。

ゲンハルトにも差し出すと奴はそれを銜えて立ち止った。

「この内乱は、我々・・・中央が地方を政治に参加させずに働かせ続けた事に原因がある」

「それで？」

煙草に火を点けた俺は奴に続きを訊ねながら奴の煙草に火を点けてやった。

「この内乱が終わった暁には・・・・・地方に赴きたい」

「殺されるかもしれないぞ？」

地方はリカルドに味方している、と考えて良い。

仮に奴等が倒れても泣き寝入りなどせず寧ろ報復の決意をする事だろう。

そんな火中に自ら殺されに行くのか？と俺は訊いた。

「本心を言えば殺されたくない。だが、殺されても私は怨まん」

いや、怨めないし文句も言えない。

「我々が彼等をあそこまで苦しめて追い詰めたのだ。我々、中央に住む者たちにはその報いを受ける義務がある」

そしてその苦しみを取り除く義務がある、とゲンハルトは続けた。

「地方へと赴き、謝りたい」

謝った所で死んだ奴が生き返るなんて夢みたいな話はないし、家族を失った者たちの傷が癒える訳でもない。

それでも地方に行き、謝り、償いをしたいとゲンハルトは言った。

「その償いはどんな事をするんだ？」

「地方の声を聞く為にも根本から政をやり直す」

「先ず何をするんだ？」

「地方出身者を新たに採用したい」

「前は居なかったのか？」

「いや、居た。だが、何らかの理由で地方に飛ばされた者たちだったし、金などを握らせて中央に返り咲いた奴らばかりだ」

そういう奴らではなく本当に地方の為に働く者を採用するらしい。

その条件は身分に関係なく実力や見込みがある者を採用するとゲンハルトは続けた。

「身分など関係ない。今までは身分などで役職が決められていたが、これからは身分に関係なく実力で役職に就けるようにする」

更に定期的に地方とも連絡を取り何か不具合は無いか？などを聞く為のシステムを作る、とも言った。

だが、それをするという事は・・・・・・・

「今度は中央の怨みを買うぞ」

片方に肩入れをすればもう片方は当然のように怒る。

恐らく我先にと逃げた奴等は内乱が終われば舞い戻って来て、再び地方から絞り取れるだけの税を絞り贅沢をするだろう。

そしてまた内乱が起これば俺達に全てを任せて自分は逃げる。

それを死ぬまで繰り返す。

奴等は女王やゲンハルトなどに収めるべき税とは別に自分の肥太っ

た身体を満たす為の税を徴収している筈だ。

それに今まで身分が高かった連中は実力に関係なく高い地位の役職に就く事が出来たからこそ贅沢が出来たんだ。

いや、違うな。

奴等は徒党を組んだ。

地位に高い奴等はその下に居る奴等を利用し、地方から税を絞り取った。

それを分配し合い懐に入れたんだろう。

それが地方の民達を苦しめ追い詰めた原因の一つに数えられると思う。

恐らくリカルド側は何回も首都に向けて使者や手紙を送ったに違いない。

その内容は救済だけではない筈だ。

収める以上の税が徴収されている、またそれを命令した奴等の事などもある筈だ。

そんな事を知られては自分達の身が危ないから全て握り潰され闇に葬られたのは言うまでもない。

そんな事が出来たのも地方出身者を採用しなかった事。

採用された奴等は金を握らせて中央に栄転した奴らばかり。

だから、私利私欲に溺れ切った奴等ばかりだと考えて良い。

身分が高い奴等も大半は同類と考えて良いだろう。

そんな奴らが地方の為に働くなんて事は万に一つも考えられないし、身分に関係なく実力で役職に就けるシステムを受け入れる訳が無い。

地方の声を聞くシステムなどは論外と考えるだろう。

そんな事をされれば、自分達の悪事は露見され首が胴からスッパリ離れるのは明白だからな。

ゲンハルトの考えたシステムは画期的だが、こんな真似をすれば奴等は怒るのは目に見えているし何らかの手立てをして来る筈だ。

こいつを亡き者にするかまたは宰相の地位から落とそうと狡猾に考えるだろう。

その事を俺は懸念した。

「安心しろ。実戦は苦手だが・・・・泥のように混沌とした渦の中を生きて来た」

奴は口端を上げて笑みを浮かべた。

「・・・なるほど。あんたにはあんたの“戦場”がある訳か」

政治に関しては疎い俺だが、政界もまた銃弾が跳び舞う戦場がある

のは分かっていた。

いや、政界は銃弾が跳び舞うようなド派手な戦場じゃない。

謀略と策略が渦巻き、裏切りと疑惑が日常茶飯事のように起こり続ける泥のように混沌とした戦場だ。

こちらの方がドロドロで人の本性が曝け出されるからエゲツナイな。

こいつの家系は政界関係の仕事をして来た家だと聞いている。

となれば、こいつも幼い頃からそういう戦場を泳いで来たと言う事だ。

それを考えると、こいつにはこいつなりの戦い方があるという事だと分かった。

「あんたは骨と皮の体格で肉がまるで無い」

奴は俺の言う言葉に意味が分からない、という顔を浮かべた。

「だが、肉が付いてきたな」

それだけの覚悟・・・気骨があんたにはある。

普通なら骨がある、と言うんだがあんたの場合は“肉がある”と言った方が良いと俺は言った。

ゲンハルトはこれを聞いて何も言わずに火が点いた煙草を口から離すと煙を吐いた。

いつの間にか雪が降っていた。

そしてまた歩き出した。

イザベルの家に到着した俺はドアを軽く叩いた。

するとイザベルが顔を出してきた。

「あら、テツヤさん。何か用ですか？」

イザベルは俺を見て少し驚いた顔をしたが、直ぐ隣に立つゲンハルトに顔を向けた。

ゲンハルトは何時も通りの顔をしていたがイザベルには何か遭ったんだ、と直ぐに分かったようだ。

「後は頼む。じゃあな、ゲンハルト。また明日」

俺はイザベルに後を任せて歩き出した。

歩いている最中も雪は降り続けていたが、俺は構わず歩き続けた。

幕間：宰相の決意と連れ添い（前書き）

こちらはゲンハルトの独白です。

前にフィーナの話も書くと言いましたが、ただ今、執筆中なのでお待ち下さい！！

それから読者の方には、毎度のように読んで下さると思うと感謝の念が絶えません。

些か私生活で混乱がある作者ですが、読者の方に満足していただけるように頑張りたいと思います。

幕間・宰相の決意と連れ添い

イザベルは私を中に入れると、直ぐにタオルで私の髪を乱暴に拭いてきた。

お陰で髪の毛が抜け落ちて堪らない。

「おい、もう少し優しく拭け。髪の毛が抜ける」

私は思わずイザベルに文句を言ってしまった。

きっと私の髪の毛を掴み、抜くと思ったがイザベルは「気を付けるわ」と言うと優しく拭き始めた。

「ど、どういう了見だ？」

私は面食らいイザベルに訊ねた。

イザベルは髪の毛を拭きながら小さく答えた。

「今のあんたを見ていると、優しくしないと駄目な気がしたのよ」

それだけイザベルは言うと黙ってタオルで拭き続けた。

「・・・今、私の顔はどんな顔なのだ？」

「見ているのが辛い程に酷い顔よ」

「・・・何が遭ったのか、訊かないのか？」

この女なら直ぐに訊くと思い口にしたが、イザベルはしないと答えた。

「あんたが話してくれるのを待つわ」

無理に訊いてもそれは私が話したくない事を直接、訊いたから後味が悪いらしい。

「・・・敵の負傷者が一人居る」

私は息を整えてから話し始めた。

イザベルには聞いてもらいたい、という気持ちがあったしテツヤ以外の・・・身近に居る者の意見を聞きたかったからかもしれない。

「それで？」

イザベルはタオルを退けると、私と向き合うように椅子を引いて腰を降ろしてきた。

「その者と話をした」

リカルド様は・・・・ご自身が王となり地方を救済するのだ。

「地方を救済？」

「あぁ。地方は中央の高い税で毎日・・・生きて行くのに必死だった」

我々が満足するまで食べられるのに対して、地方は満足に食べられなかった。

そして自然災害と疫病が起こった。

その時、中央に救いを求めた。

「でも、あんたを始めとした中央は何もせずに訴えを握り潰したのね？」

イザベルは私の言葉を聞いて推測した。

「・・・・あぁ」

私は間をおいてから頷き、拳を握り締めた。

また血が出たが知った事ではない。

この程度の痛みは何でも無い。

地方の民達が受けた痛みに比べればこんな痛みは蚊に刺された程度だ。

「疫病の時、リカルド様の奥方であらせられたローラ様という娘も亡くなられた」

会った事は無いし、名前も初めて聞いた。

だが、きっと素晴らしい女性だったのだろうと勝手に推測した。

「彼は、私に掴みかかった」

負傷者・・・プレス・ハートは私の胸倉を掴むとこう叫んだ。

今でも耳に残って、あの悲痛な叫びは離れない。

『あんた等が俺らをここまで苦しめ追い詰めたんだ!!あんた等が悪いんだ!?』

私は何も出来ず、ただ一言だけ謝った。

しかし、そんな事をしても無意味でしかなかった。

「彼は今さら謝っても遅い、と叫び泣き出した」

大の男が子供のように大声を上げて泣き出したのだ。

あんな光景は初めて見たが、胸が苦しくなった。

彼の気持ちは、訴えは、瞳は、私の心臓に太い杭を打ち込んだ。

それから私はテツヤに連れられてここに来た。

その間、私は考えた。

そしてその考えをテツヤに言った。

「地方に赴き謝りたい」

それを先ず私は言った。

だが、テツヤは「死ぬかもしれないぞ?」と言ってきた。

イザベルも当然だ、という顔を一瞬だけしたが直ぐに消して私に続きを促してきた。

「謝った所で死んだ者たちが生き返る訳は無い。傷を負った者たちの傷が癒える訳では無い」

それでも地方へと赴いて彼等に頭を地面に当てて謝りたいのだ。

すまなかった。

どんな報復も受ける覚悟だ。

例え殺されても良い、と私は思っている。

「ゲンハルト・・・・・・・・」

初めてイザベルが私の名を呼んだ。

何時も骨と皮、骸骨、癇癪親父などと言い決して名を呼ばないイザベルが初めて私の名を呼んでくれた。

「何だ」

私はイザベルに訊ねた。

「あんたが地方に赴く時は、あたしも行くわ」

「どうして、そなたまで」

「あんた一人行かせるのは女としてどうかと思ったのよ」

それにあんただけ死んだら、一人であの世に行く事になる。

それでは余りに哀し過ぎるだろう。

だから・・・・・・・・・・

「あたしがあんたの連れ添いになって上げるわ」

「・・・死ぬかもしれないのだぞ？」

テツヤの言った言葉を私は言った。

「その時はその時よ。人生なんて何時かは死んで終わるんだから」

仮に殺されたら私の人生はそれでお終い、とイザベルは言い私を正面から優しく抱き締めてくれた。

フワリ、とイザベルの香りが私の鼻を突くが良い香りだ。

「あんたの連れ添いになって上げるわ」

もう一度だけイザベルは私に言ってくれた。

そして更に強く私を抱き締めてくれた。

まるで女神の抱擁を吸った時と同じ感覚だ。

あれを吸うとまるで女神に抱き締められた感じになる。

イザベルは私を抱き締めているが、それがまるで女神の抱擁を吸った時と同じ感覚・・・・・いや、こちらの方が直に感じる。

とても落ち着く・・・・・・・・・・・

私は躊躇いながらもイザベルを抱き締めた。

イザベルはそれに対して振り解こうとしなかった。

「・・・私の連れ添いになってくれ」

私はイザベルが言った言葉を今度は私が言って頼んだ。

それに対してイザベルは「最初からその積りよ」と言い返してきた。

私は無言で頷いた。

それからイザベルは暫し私を抱き締め続けてくれた。

九十三章：王女に報告

私たちは夜になってから城に来るように無線で命令された。

敵は去ったから一先ず被害状況などを調べ、これからの事などを詳しく説明するからだ。

私たちはバンカーを出て雪が降る中、進み始めた。

進んで行くと血の臭いが風に乗り私達の鼻を刺激して来る。

ふと血の臭いがする方を見れば、夥しい血が地面に広がっており戦闘の激しさを物語っている。

ただし、死体は無い。

全てヘリに収容されて連れて行かれたようだ。

「ベトナムでも海兵隊が最後に撤退したがここでもそのようだな」

軍曹はポツリと呟いた。

「ベトナムとは？」

「ベトナム戦争と呼ばれる物で俺の国が初めて負けた、と言われる戦争だ」

アメリカは“資本主義”と呼ばれる主義を取っているらしい。

この資本主義とは極端な言い方で説明すると金が一番偉いらしい。

つまり身分に関係なく金を持つ者が一番偉いという事だ。

この主義だと働いて自分の価値を無限に追求する事が出来る。

それとは対照的な主義が“社会主義”と呼ばれる主義だと言う。

こちらは国が一番偉く皆、平等らしい。

こちらの場合は一定の給金を貰えるが、自分の財産は無く全て国の財産という形になっている。

どちらが正しいかは私には断言出来ない。

どちらも両方の良い所があると思うからだ。

話を戻すと、ベトナム戦争は資本主義と社会主義の戦いだったらしい。

資本主義の本柱とも言える国はアメリカで、社会主義はＡＫなどを開発した旧ソ連だ。

そしてその戦争で国は二つに別れたらしい。

アメリカの資本主義を旨とする“南ベトナム”と旧ソ連の社会主義を旨とする“北ベトナム”に別れて戦いは始まった。

アメリカと同盟を結んでいる日本は直接的には参加していないが、同じく同盟を結んでいる韓国と呼ばれる国は参加したらしい。

その戦いには海兵隊も参加しており、もちろんフォース・リーコンも参加したらしい。

彼等は長距離偵察を敢行し、更に陸軍が撤退した時も死体などを全て回収するため最後まで残ったと説明された。

ここの戦いでも死体も全て回収されている。

ベトナムでもここでも同じ、と軍曹は言った。

私は改めて彼等を凄いな、と感心すると同時にまだ残っているから厄介とも思った。

城へと到着した私たちを少佐が出迎えてくれた。

ゲンハルト様の姿はない。

「ゲンハルト様はどうさなったんですか？」

私がそれを訊くと「少し身体を休ませる為に帰した」と少佐は答えた。

直感的に何かある、と感じたがそれは訊かない事にした。

私たちは城の演習場へと進んだ。

そこに行くと皆が待っていた。

だが、傍らには黒い布に包まれた・・・・・死体袋もあった。

戦争だから互いに損害はある。

それが多いか少ないかの違いだ。

言葉で言うなら簡単だが私は辛かった。

皆、共に戦ってきた戦友だから当たり前だ。

死体袋から視線を逸らして少佐に視線を向けた。

少佐は台の上に立ち、私たちに話し始めた。

「先ずはご苦労、と言っておく」

敵を撃退した事は勝利だ。

「だが、敵はまだ生きている。そして奴等を倒さない限り俺達の戦いもまた終わらない」

これからも厳しい戦いを強いられる事だろうが、俺はお前たちならやれると信じている。

そして自分もまた戦う、と少佐は言った。

「また何時、敵が来るか分からないから警戒はする。各自、交代で警戒に当たれ。残りの者は家や部屋に帰り身体を休めろ」

少佐はまたご苦労だった、と言った。

「では、解散」

私たちが敬礼をしてから少佐はゆっくりと敬礼をした。

そして皆は去って行った。

少佐・・・テツヤ殿は私達に近付いてきた。

「もやし・・・いや、ランドルフ。ご苦労だったな」

テツヤ殿は私の肩に手を置き、労いの言葉を掛けてくれた。

「いえ。大丈夫です」

私はテツヤ殿の眼を見つめながら答えた。

「そうか。皆もご苦労だったな」

軍曹達は礼を述べた。

「それから負傷者だが、意識を戻した」

これを聞いた私たちは嬉しかったが、ゲンハルト様が居ない事と何か関係があるのでは?と思った。

リカルド様は地方を助ける為に兵を起こした、と聞いた。

その理由は中央が地方を顧みない事から来ている。

中央の頂点、正確には女王陛下であるサラ様が中央の頂点に立って

いるが政を行うのは宰相であるゲンハルト様だ。
そのゲンハルト様はここには居ない。
「・・・ゲンハルト様は、負傷者と会ったんですか？」
私はテツヤ殿に訊ねるとテツヤ殿は頷いてから煙草を銜えた。
「負傷者はゲンハルトにリカルドが兵を起こした理由と地方の現状を訴えた」
テツヤ殿は詳しく言わなかったが、何となく理解できた。
きっとゲンハルト様は改めて理由を聞かされて悔いているのだろう。
テツヤ殿はそのためゲンハルト様を一足早く家へと帰したに違いない。
「お前等、負傷者と会うか？」
テツヤ殿の問い掛けに私たちは少し悩んだが頷いた。
あの方に直に訊きたかった。
あの男の事などについて。
テツヤ殿に案内されて行くと、２名の兵が立っていた。
「負傷者は大丈夫か？」

「今の所、問題ありません」

では、入るとテツヤ殿は言い私達も続いた。

清潔な白いベッドに寝かされている負傷者とそこに居るエドリアス大尉。

負傷者はテツヤ殿を見てから私たちを見た。

「お前さんを助けた者たちだ」

お前さんに質問がある、とテツヤ殿は説明した。

「分かった。だが、その前に礼を言わせてもらう」

負傷者はベッドから上半身を起き上らせると私たちに頭を下げて礼を述べた。

それから私が代表として質問をした。

負傷者は思い出すのも嫌なのか、間を置きながら答えてくれた。

「俺以外に、助かった奴は居ないのか？」

負傷者は私に訊ねて来た。

その声には自分以外の誰かが一人でも助かっていて欲しいという願望があった。

それと同時に自分以外の者は助かっていない、という推測も含まれ

ていた。

「貴方だけしか・・・・助けられませんでした」

後一人、助けられたかもしれない人を私たちは見殺しにしてしまった、と正直に答えた。

負傷者はそれを聞いて怨めしそうに私たちを睨んだが、直ぐに止めた。

敵である私達にそれを求めるのは酷と判断したのか、または兵として私達の行動を良いと判断したのだろうか？

「君等の判断は・・・兵として正しい」

あの時、私たちは他にも仲間が居るのでは？と考えて槍兵が焼かれるのを黙って見ているしか出来なかった。

だが、それは兵として正しいと負傷者は言い「仲間を埋葬してくれた」とも続けて言った。

その間、テツヤ殿とエドリアス大尉は何も言わなかった。

「あのまま放っておけば獣の餌になると思いましたので」

それは出来るなら見たくなかったし、助けられなかった槍兵の事も考えてせめて埋める事くらいは、と思ったのだ。

「・・・ありがとう。本当にありがとう・・・・・・・・・」

負傷者は二度も礼を述べて涙を流し始めた。

「男が二度も人前で泣くな」

テツヤ殿はハンカチを取り出して、負傷者に差し出した。

それを負傷者は受け取り、涙を拭いた。

「お前さんは捕虜だが人道的に扱う。もし、部下の誰かが乱暴狼藉を働いたら司教に言え。俺が処罰する」

そして傷が治ったら、リカルド様の元へ帰すとテツヤ殿は言い背を向けた。

それに私達も続き部屋を出た。

部屋を出た私たちをテツヤ殿は解散しろ、ともう一度言った。

「テツヤ殿はどうするんですか？」

「俺は女王に報告して来る」

「私もお供して良いですか？」

恐らくエリーナ様もサラ様と一緒だと判断したからだった。

先ずあの方に無事を伝えなければならない。

「分かった。では、お前等は帰っていてくれ」

軍曹達は頷いて帰ったが、ガリシャは私をチラリチラリと見ながら歩き去って行くのを私は気付かなかった。

第九十四章：少しずつ成長（前書き）

更新が1週間も遅くなりすいませんでした。

私生活がゴタゴタで色々と忙しかったんですが、今日からまた更新するのでよろしくお願いします。

第九十四章：少しずつ成長

私とテツヤ殿は城の中を進んでいた。

テツヤ殿は黙々と歩き続け、私はそれを追い掛ける。

「そう言えば、レオンはどうしました？」

親友であるレオンは無事か気になったので私はテツヤ殿に訊ねた。

「生きている。お前の方を心配していた。時間があれば会いに行け」

「そうします。あ、所でミレーネ様とイザベルさんには銃を渡しましたよね？」

「あぁ。それがどうした？」

「実はオリガさんにも渡して欲しいんです」

すっかり忘れていたが、今思い出したのでここで言った。

「分かった。まぁ、オートの方が良いだろうからオートで良いか？」

「はい。その辺はテツヤ殿にお任せします」

分かった、とテツヤ殿は頷き足を更に進める。

そしてサラ様が居る部屋に着いた。

「鷹見徹夜だ。女王、居るかい？」

テツヤ殿が声を掛けると、どうぞと声が帰って来た。

「失礼する」

テツヤ殿はドアを開けた。

だが、中に入ろうとはしなかった。

開けられたドアの前には重厚なソファーに腰を降ろしたサラ様とエリーナ様が座っている。

直ぐに入ろうとしないテツヤ殿に私は首を傾げるしかない。

「おい、殺気が丸見えだぞ」

テツヤ殿は開いていない方のドアに向かって声を掛けた。

すると、開いていないドアから抜き身の剣を持つ・・・要らない荷物が出て来た。

「正攻法でしか戦えないと思っていたが、どういう心境だ？」

テツヤ殿の質問は私も考えていたことだ。

目の前で憮然と・・・物凄く悔しそうに顔を歪めながらバスター・ソードを仕舞う要らない荷物ことフィーナ・マレル親衛騎士団長は、今までただの一度もこんな待ち伏せはした事が無い。

もう数えるのも飽きたが、少なくとも私が知っている限り正攻法でしか戦った事が無い。

それは騎士の鑑と謳われた父君の教育から来ており、この女自身の性格だろう。

他人の指図は受けない・聞かない。

この2つを頑なに守り通してきたのに、どういう心境でこんな待ち伏せをしたのだ？

話では進歩していると聞いていたが、これがそれなのか？

別に悪いとは私も思わないしテツヤ殿も思わないだろう。

これで相手を仕留められるなら勝ちなのだから。

要らない荷物は悔しそうな顔をしていたが、それでもテツヤ殿の質問に答えた。

「・・・・ヴィルヘルム・・・・・・師匠から・・・・・・お前を待ち伏せで倒してみろ、と命令されたんだ」

かなり間を置きながら要らない荷物は答えたが、その様子から察するにかなり抵抗があったのだろう。

それでも毛嫌いしていたヴィルヘルム元伯爵を師匠と呼び、その命令に従ったのだから良い進歩だ。

「お前も少しずつだが成長しているな」

テツヤ殿は何処か嬉しそうに笑ってみせた。

前なら侮蔑の眼差しを向けたのに、どういう心境だろうか？

まぁ、それはさておきテツヤ殿は要らない荷物に退けろ、と言った。

「・・・・私も、居させてもらうぞ」

「好きにしろ」

要らない荷物はそれを聞いて横に退けた。

そしてテツヤ殿と私は部屋の中に入った。

「お久し振りかな？女王陛下」

「ご無事で何よりです・・・・・・・」

サラ様はテツヤ殿に駆け寄りそうな勢いでソファーから立ち上がり、近づいてきたがテツヤ殿は止めた。

「余り近づかないでくれ。近づかれるとフィーナに斬られるんだ」

ふざけた口調で言うが、後ろでは要らない荷物が剣の鍔に手を掛けているから満更でもない。

まぁ、仮にやろうとしたら私が止めるし、止められなくてもテツヤ殿が止める。

だから、然して心配は無いと思うが念の為、この女を仕留められる距離に私は位置を取った。

それからエリーナ様に視線をやった。

彼女は静かにソファーから立ち上がり私に歩み寄って来た。

そして、私の頬に手を当てた。

「・・・ご無事で何よりです」

「男に二言は無いと前にも言いましたよ?」

「お前も言う様になったな」

テツヤ殿は愉快そうに笑いながら、サラ様に敵を撃退したと告げた。

「だが、敵はまた来るだろう。だから油断は出来ない。それを言いたかった」

サラ様はそれを聞いて少し哀しそうな顔をしたが、この問題はテツヤ殿に任せたから何も言いませんと間を置いてから言った。

まだ、リカルド様を助けられないのか?と思っているのだろう。

しかし、それは無駄な願いとしか言えない。

それをサラ様も分かっている筈だが、それでも思わずにはいられないのだろう。

「今日はそれだけを伝えに来た」

テツヤ殿はサラ様が何か言う前に背を向けた。

要件を済ませたのでドアに向かった。

私もエリーナ様から離れて後を追いかけようとしたが、エリーナ様に止められた。

「あの、お茶の件は・・・・・・・・・」

「今日はもう遅いですし、また後日にしましょう」

「では、せめて今日は城で・・・・・・・・・」

サラ様もテツヤ殿にそれを進言したが、二人で断らせてもらった。

「申し訳ありませんが、家に帰りを待っている方が居るんです」

俺も、とテツヤ殿は答えて要らない荷物に視線を向けた。

「ヴィルヘルムの教えをちゃんと聞けよ?親父さんから教えられた事を大事にするのも良いが、新たな知識を得たりするのは悪い事じゃない」

「・・・・・頭の片隅にでも置いておく」

やはり進歩したんだな、と私は思う。

前ならあんな傭兵崩れの言う事など聞くか!!と剣を抜いて怒鳴っ

ただろうが、それをしないで頷いたのだから進歩した証拠だ。

「では、女王陛下。お休み」

「お休みなさい。エリーナ様」

私とテツヤ殿は二人に別れの挨拶をして部屋を出た。

部屋を出る時、要らない荷物も付いて来た。

「お前さんが俺らと肩を並べて歩くとは珍しいな」

テツヤ殿はさも面白そうな物を見つけたように要らない荷物を上から見下ろした。

「別に・・・ただ、行く道が同じの上に時間が時間だからだ」

淡泊な口調で答える要らない荷物にテツヤ殿は頷くだけに留めた。

雪は既に止んで空を覆っていた雲も無くなり、月が出ていた。

その様子をテツヤ殿は見上げた。

「月の女神も顔を出したな」

「そうですね」

私はその言葉に頷いた。

きっと戦が終わったから月の女神も私たちを見る為に顔を出したの

だろう、と勝手に思う。

「・・・・・・タカミ・・・・・・・テツヤ」

要らない荷物はテツヤ殿の名をフル・ネームで、また長い間をおいて呼んだ。

「何だ？」

テツヤ殿は月から視線を外して、要らない荷物に視線を向けた。

「お前は、リカルド王子を敵ながら尊敬に値する、と言っていたな」

前はリカルド、と呼び捨てだったのに今回は王子と付けたな、と私は細かい事を思った。

「あぁ。だが、今回の攻め方は可笑しいな」

「ワイバーンを先に繰り出さなかった事か？」

「ほぉう。お前さんも分かるようになったか」

「・・・・・・ヴィルヘルム・・・・・・師匠が言っていた」

と言う事は、この女自身ではそれを分かっていなかったのか？

私の思いをテツヤ殿が代わりに訊いた。

「私は・・・・・・・・・・・・分からなかった」

ここでまたしても私は驚いてしまった。

こんな正直に言う要らない荷物を知らない。

偽物か？

それとも悪い物でも食べたのか？

と色々と考えるが、テツヤ殿と要らない荷物の会話に耳を傾ける事にした。

「そうか。まぁ、俺がここを攻める立場なら偵察をする。向こうもそれはしたが、出来なかっただろ？」

「撃退したからな」

「その通り。だが、ワイバーンを使えば空から出来た。それをしなかった。そして歩兵だけを先に行かせたのも腑に落ちない」

ここを攻めるならワイバーンなど空から攻撃できる物を繰り出してある程度、弱らせてから歩兵で攻める筈。

それをリカルド様が分からなかった筈はない。

それをしなかったのは何かある、と前々から私たちは思っていた。

「お前としては、どうしてだと思う・・・・・・・・・」

「聞く所によればワイバーンなどを操る者は傭兵と聞いている。それなら契約か対人関係で揉めている可能性が高い。作戦の一部、と

も考えられるが俺としては先に言ったどちらかと思う」

しかし、救出の時は遅れながら参戦して来た。

となれば、やはりテツヤ殿の言う通り契約か対人関係で揉めていたと考えるのが妥当かもしれない。

「それで・・・・・敵はどう出ると思う？」

「お前ならどうする？」

要らない荷物の質問に対してテツヤ殿は逆に訊き返した。

ゲンハルト様の時もそうだが、この方は先ず相手に考えさせる。

「・・・また攻めるにしても、前の時とは違う形を取る」

火攻め、水攻め、兵糧攻めを要らない荷物は上げたが、その中でも有効的な攻撃方法はと言えば

「空からの攻撃だ。だが、それも危険を伴うがそれでも有効な手段だと思う」

「そこまで分かるなら上出来だな。しかし、本当に変わったな。お前は」

テツヤ殿は改めて要らない荷物を見ながら告げた。

「・・・別に、貴様には関係ないだろ・・・・・・・・・・・・・・・」

「いいや。お前さんが成長するという事は部下も成長するという事だ」

それは良い傾向だ、とテツヤ殿は言い煙草を銜えた。

道が左右に別れている。

「じゃあな」

火を点けながらテツヤ殿は要らない荷物に手を振り私はせずに立ち去った。

幕間：親衛騎士団長の独白（前書き）

ここでフィーナの独白を入れます。

内乱編は恐らく・・・後１００話以上、続くと思われます。

それまで皆様に退屈させないように心がける積りですが、何かあれば気兼ねなくメールを下さい。

幕間：親衛騎士団長の独白

私は立ち去って行く、タカミ・テツヤとランドルフ・クリフを見送っていた。

どうしてか知らないが、前よりあの男に対して嫌悪感が無くなり始めていた。

一度、あの男と話をちゃんとしてからそうだ。

敵が攻めて来た時、私はヴィルヘルム元伯爵・・・・・・・・師匠（どうも、慣れない）と剣を交えていたが直ぐに戦おうとした。

しかし、ヴィルヘルム師匠からは「お前が行っても足手纏いだ」と無情にも言い切られ強制的に留められた。

足手纏い・・・これは性別の問題ではなく、私がタカミ・テツヤの武器や戦術を持っていないから足手纏いなのだと思った。

歯軋りをする私の横では部下である親衛騎士団の何人かがシュヴァルツフント達を倒していた。

以前なら、逃げるだけだったのに今は猛然と戦い時には勝っていた。

これには理由がある。

タカミ・テツヤに技を一つでも決めれば、あの男の訓練を受ける事が出来るのだ。

前の彼らなら私同様に下種な傭兵と忌み嫌っていた事だろう。

だが、今は違う。

あの男は傭兵だ。

金で動く薄汚い一匹狼の傭兵に違いないが、それでもこの国の為に戦っている事は確かだと認めざるえない。

いや、もう認めるしかなかった。

そして手段を選ばない戦い方しかせず、正攻法では弱いと勝手に思っていたが、これは勝っ手な思い込みで正攻法でも奴は強い。

これが部下達の心に火を点けたのだろう。

ザンビア平野では我先にと逃げた彼らだが、今では違う。

逃げる事はあるが、自分が勝てる見込みとなる場所に逃げたりするなどの行為だ。

私では彼等を変える事が出来なかったが、あの男はそれをやってのけた。

悔しかったが、素直に認めるしかないと思い始めている。

演習場で剣を交えている間も、爆発音とあの男達が持っているライフルと呼ばれる武器の音が聞こえて来る。

それを聞いて何度も戦いに出たいと思い立った事か・・・・・・・・

・

その度に師匠に強制的に止められたのは言うまでも無い。

あの男達が戦っている間も私たちはシュヴァルツフント達を相手に戦い続けた。

私の相手は専らヴィルヘルム師匠だ。

父上と叔父上、そしてプロイセン様、先王と共に戦を掛けた中央伯爵にして撃剣隊と呼ばれる第三の騎士団を纏めていた男。

武器は身の丈もある大剣――ツヴァイハンダー。

この武器は長槍などで防御した槍兵や獅子頭軍団のような重装歩兵を相手に力を発揮する剣だ。

槍を何本も並べた陣形にこれを持たせた物を行かせ、槍を切り活路を開くのが役割であるからこれは集団で持たせてこそ役に立つのだ。

これを一人で扱うのはかなり難しい。

どの剣よりも重量が半端では無い上に身の丈もあるため振り回しが容易ではないし懐に入られ易い。

だが、この剣には根元に“リカッソ”と呼ばれる刃を付けていない部分がある。

これを掴めばある程度の長さは調節できる上に懐に入られてもまだ対処できる。

この剣をヴィルヘルム師匠は愛用している。

シュヴァルツフントの話によれば「団長はこれで馬に乗った騎士をそのまま一刀両断した事がある」と言う。

身長なども高いヴィルヘルム師匠なら可能だと思う。

そして、こんな剣を軽々と扱う大男が私の相手なので毎日が死ぬ思いだ。

今日も剣を避けて、懐に入ったまでは良かったがそこから膝蹴りをやられて胸倉を掴まれ乱暴に地面に叩き付けられた。

そんな事が１０数回もあったから身体は鉛のように重くて言う事を聞かない。

正直、休みたいと思ったが私が休めば部下に示しも付かないし、師匠に馬鹿にされるのは明白だった。

それが嫌で身体に鞭打って戦い続けた。

それを見たヴィルヘルム師匠は「根性は大した物だ」と褒めた。

女として舐められたくない。

その一心で私は耐え続ける事が出来たのだ。

そしてやっとの思いで、師匠の髪を掠める事に成功した。

高が数本だが、それでも初めて私の剣が師匠の髪を掠められたのだ。
前までは幾らやっても駄目だったが、それが出来た！！
正攻法で髪を掠めた訳ではなかったが、それでも出来た事に変わりはなかった。
地面に叩き付けられた私は気を失った振りをして、師匠の油断を誘った。
師匠は私を見て「水を持って来い」と部下に命じた。
そこで一瞬の隙が出来た。
それを見逃さず目を開き、愛剣であるバスター・ソードで突きを繰り出した。
顔を狙ったが、左手に填めた小手により狙いは逸らされ髪を掠める事しかできなかった。
それでもヴィルヘルム師匠は「良くやった」と褒めてくれた。
父上に教えられた事を成功させた時も父上は何も言わなかった。
寧ろ「出来て当たり前。それなのに何度も失敗するのは言語道断」と断罪したものだ。
しかし、ヴィルヘルム師匠は私を褒めてくれた。
それが素直に嬉しかった。

だが、その喜びを感じられたのは僅かだけだ。
時間は既に夜になろうとしていた。
今日は終わりだと思ったが、私だけはヴィルヘルム師匠から命令された。
『我が王・・・タカミ・テツヤ様を闇討ちにしろ』
一瞬、何を言っているのか分からなかったが、直ぐにそれを理解して何故するんだ?と訊ねた。
『知っているだろ?俺らに手傷を負わせたら、あの方と戦う権利が得られるんだ』
つまり私も師匠の髪を掠める事が出来た。
それでも手傷の内に入るから、私にもタカミ・テツヤと戦う権利が得られたという事だ。
それはそれで良い。
では、なぜ闇討ちなのだ?
『お前さんは正攻法でしか戦いを知らないからだ。だが、逆にそれしかしない、と相手は思っている。そこを突くんだよ』
私にそれを説明するヴィルヘルム師匠は何処か面白そうな物を見つけた顔だった。

恐らく私が闇討ちをした所で返り討ちに遭う、と既に予測していたのだろう。

それが悔しかった。

同時に騎士として闇討ちはやってはいけない、という気持ちだった。

だが、叔父上・・・・・・・ヴィールング殿ならどうする？と考えた。

ヴィールング殿なら迷わずやるだろう。

勝つ為なら・・・・・・・・・・・・

『言っておくが、我が王は正々堂々なんて言葉は稀にしか通用しないぜ。それともお前さんは負け続きで良いのかな？』

ヴィルヘルム師匠は私を焚き付けるように言ってきた。

それが何だか悔しくて気が付いたら、私は勇み足でタカミ・テツヤを探していた。

何処に居るのか？と探していたら、演習場に居るという話を聞き急いで向かった。

演習場には奴に従う者が居り、奴は演説をしていた。

『また敵は来るだろう。だが、俺たちは勝ち首都を奪回する』

そして自分も戦う、と言った。

その時の顔が・・・何だかヴィールング殿に似ていると錯覚にも思ってしまった。

不覚にも、だ。

ヴィールング殿とは似ても似つかぬ容姿と性格。

黒髪は似ている。

ヴィールング殿も艶のある黒髪だったが、あの男の黒髪は艶より剛の方が強い気がする。

顔立ちもヴィールング殿は端正な彫刻家が彫った顔立ちであるのに対して、あちらは荒い彫刻家が彫った顔立ちだ。

性格は何一つ似ていない。

ヴィールング殿は誰に対しても分け隔たれなく優しかった。

それに対してあの男は粗野で粗暴で尊大だ。

一体何処をどう間違えたら、似ている?などと思うのか自分でも不思議だった。

だが、何となく似ていると思ってしまった。

演説を終えたあの男は「女王に報告する」と言った。

これを聞いた私は先回りをしてサラ様達の部屋へと向かった。

突然、現れた私にサラ様と一緒に居たエリーナ様は驚いたが、訳を話すとすんなりと受け入れてくれた。

何だかこの二人も私が負けると、予想しているように感じたが敢えて気にしない事にした。

ドアの直ぐ横にある壁に張り付いて剣を抜く。

奴は壁に背を向けて常に立っている。

今にして思えば、壁を背に向ければ先ず背後は護られる方式だ。

それだけ場数を踏んできているというのは前々から話で分かっていたが、こんな初歩的な事も分からないとは・・・情けない。

そして待ち続けていると、ドアが叩かれた。

『女王陛下。タカミ・テツヤだ』

ドア越しから鉄が錆びたような乾いた声が聞こえてきた。

それと同時に・・・女を抱いたような臭いがしてくる。

奴が常に口にしているタバコ、とかいう物の臭いだ。

サラ様はどうぞ、と開ける事を許した。

それと同時に剣を振り上げて奴が来るのを待った。

ドアが開いたが、奴は居ない。
どういう事だ？と疑問に思ったが直ぐに声がした。
『殺気が丸見えだぜ』
「！！」
私はドア越しから言われて驚きを隠せなかった。
まさか、私が居る事に気付いていたとは・・・・・・・・・・・・
そして勝手に身体が動いて奴の前に姿を見せた。
奴はもやしと言われているランドルフと一緒だった。
ランドルフの服装は白を強調した服装であるのに対して奴はかつて所属していた軍服を着ていた。
左胸には幾つもの勲章が取り付けられている。
これを見る限り奴はそれだけの武功を立てた、と分かる。
階級も少佐と言う作戦一つを任せられる権利を与えられているというから、それからも窺える。
奴は私を見るなり何処か面白そうな顔をして話し掛けてきた。
『闇討ちとは随分と珍しい事をするな？』

前の私なら絶対しない事だから、奴も驚いていても無理は無い。

だが、決して非難するような眼差しではなかった。

そして奴は「お前も進歩したな」と言ってきて、退けろとも言ってきた。

私は剣を鞘に収めながら「私も居るぞ」と言い返した。

それに対して奴は「好きにしろ」と言いながら中に入り、ランドルフが続いた。

ランドルフは私を確実に仕留められる距離であり、タカミ・テツヤを護れる位置に立った。

奴はサラ様に戦に勝った事を報告しようとしたが、その前にサラ様がソファーから立ち上がりタカミ・テツヤに走り寄って来た。

まるで、愛しい男の無事を確かめるような感じだった。

後もう少しで手が届きそうな所で奴はサラ様を留めさせた。

サラ様は拒絶されたと思ったのか、瞳を潤ませた。

女の私だが、サラ様の瞳は澄んでおりとても綺麗だと思う。

思わず見惚れてしまったが、タカミ・テツヤは淡々と言葉を述べた。

『悪いが、そこまでだ。フィーナに斬り殺される』

私は自分の右手を見つめた。

無意識に・・・剣の鍔に手を掛けていた。

この男に対して、未だに良い感情は抱いていない。

だが、前に比べればまだマシになってきたが、身体はそうではないらしい。

そして再び視線を起こすと、エリーナ様はランドルフに近付いて頬に手を当てていた。

王女が、高が見習い騎士にここまでするなど有り得ない。

本来なら止めるべきなのだが、その前にエリーナ様が口を開いた。

『ご無事でしたのね・・・・・・・・・』

エリーナ様の言葉に対してランドルフは「男に二言は無い、と言いましたよ?」と言った。

それを聞いたタカミ・テツヤは愉快そうに笑い、サラ様に戦に勝った事を報告した。

そして背を向けた。

これだけを言う為に来たらしい。

しかし、お二人は止めた。

今夜は城で、と言ってきたが二人揃って断った。

王族の頼みを無下に断るなど言語道断だが、この二人は城に泊る事も駄目な気がする。

私の考えなどお構い無しに二人は部屋を後にしたが、私ももう用は済んだので出て行く事にした。

部屋を出た二人に追い付くように歩いた。

そして二人と・・・タカミ・テツヤの右隣を歩く。

『お前が俺らと肩を並べて歩くとは珍しいな』

奴は私を上から見下ろしながら話し掛けて来た。

私より背が高いから当然見下す形になのだが・・・・・・余り良い気持ちはしなかった。

それに対して私は途中まで同じ道だからだ、と答えた。

奴は肩を竦めて視線を別に向けた。

私も釣られてみると月が出ていた。

先ほどまで雪が降り雲で覆われていたが、今は月が顔を出している。

月を見ながら奴は「月の女神が顔を出したな」と呟いた。

この男の口からこんな言葉が出る事に正直、驚いたが敢えて言わずに別の事を口にした。

「お前は、リカルド王子を敵ながら尊敬に値する、と言っていたな」

この前、この男は敵であるリカルド王子を敵ながら尊敬する、と口にしていた。

それがどういう事かもっと知りたくて訊いた。

奴は私の言葉に頷いたが、「今回の攻め方は可笑しい」と言った。

「ワイバーンを先に繰り出さなかった事か？」

私は考えていた事を奴に訊いてみた。

それに対してこの男はさも意外そうな顔と声で私を見て、言った。

『ほぉう。お前さんも分かるようになったか』

「・・・・・ヴィルヘルム・・・・・師匠が言っていた」

この態度に怒りを覚えたが、自分を抑えてヴィルヘルム師匠が言った、と答えた。

なぜ、自分でも考えていたと答えなかったのか分からない。

タカミ・テツヤに代わりランドルフが、その事を訊いてきた。

「私は・・・・・・・・・分からなかった」

ここでまたしても私は、自分の口なのに自分ではない誰かが答えたような錯覚を覚えた。

どうして、自分の口なのに・・・自分でない誰かが話しているのだろう・・・・・・・・

『そうか。まぁ、俺がここを攻める立場なら偵察をする。向こうもそれはしたが、出来なかっただろ?』

タカミ・テツヤは私を批判せずに自分の意見を言い始めた。

「撃退したからな」

そう・・・この男がランドルフ達に命令し偵察に来た敵を撃退したから偵察は途中で断念するしか出来なかった。

『その通り。だが、ワイバーンを使えば空から出来た。それをしなかった。そして歩兵だけを先に行かせたのも腑に落ちない』

確かにその通りだ。

何も歩兵だけが偵察をやる訳ではない。

天馬騎士団などの任務は偵察もある。

それをワイバーンにやらせる事も出来る筈だ。

いや、ワイバーンなら偵察をしつつこちらを攻撃出来た筈だ。

それなのにそれをせずに、あろうことか歩兵だけを進軍させた事が腑に落ちない。

リカルド王子ならそんな事はしない筈だ、と私は思う。

恐らく、タカミ・テツヤも同じ事を考えていると思い訊いてみた。

「お前としては、どうしてだと思う・・・・・・・・・・？」

『聞く所によればワイバーンなどを操る者は傭兵と聞いている。それなら契約か対人関係で揉めている可能性が高い。作戦の一部、とも考えられるが俺としては先に言った2つの内どちらかと思う』

ワイバーンを始めとした獰猛な物を操る者は5大陸では傭兵として活躍しているが正規軍としては活躍していない。

そこから契約か対人関係で揉めているという考えが高い、とタカミ・テツヤは言いながらも作戦の一部、とも考えられると付け加えた。

だが、やはり考えられるのは契約か対人関係が妥当とも言った。

私もこれには妥当だと思った。

作戦の一部・・・考えられない。

リカルド王子ならこの戦いを早期決着させるべき、と考えている筈だ。

仮に私がリカルド王子の立場でも、有効な攻撃を与えられる物は躊躇なく繰り出す。

それによって損害は出るだろうが、早期決着が出来るなら良い。

「それで・・・・・敵はどう出ると思う？」

私は続きが気になり訊き続けたが、奴は「お前ならどうする？」と逆に質問をしてきた。

今にして私は訊いてばかりだなと思い、自分でも考えてみた。

先ほどの戦いで敵は相当な損害を被った筈。

そして我々が居る城の事もある程度は学んだ筈だ、と考えると・・・・・・・・・・

「・・・また攻めるにしても、前の時とは違う形を取る」

また同じ手は使わない。

火攻め、水攻め、兵糧攻めなど色々な攻め方がある。

あるが、その中でも有効的な攻撃方法はと言えば・・・・・・・・・・・・・・・

「空からの攻撃だ。だが、それも危険を伴う」

やはり、ここは空から地上を攻撃するのが妥当だ。

それ以外だと更に傷口を大きくさせる可能性が高い気がする。

『そこまで分かるなら上出来だな。しかし、本当に変わったな。お前は』

また、タカミ・テツヤは私を見下して言ってきた。

ここまで同じ言葉を言われると腹がまた立って来る。

私はこの男からどんな眼で見られて来たのか嫌でも分からせられるのだから。

「・・・別に、貴様には関係ないだろ・・・・・・・・・・・・・・・」

私は必死に怒りを抑えて言い返した。

『いいや。お前さんが成長するという事は部下も成長するという事だ』

私が成長するという事は部下もまた成長する、と奴は言ったがそれは逆だ。

部下達が成長して行き、私だけが取り残される気がしたから私も置いて行かれまいと成長しているだけだ。

タカミ・テツヤは懐から細長い棒を取り出して口に銜えた。

毎度毎度のことだが、この男はこれを口に銜えないと落ち着かないのか？と思うほどよく銜えている。

そんな事を思っている内に道が左右に別れている所まで来た。

ここが別れ目だった。

『じゃあな』

細長い棒に火を点けながらタカミ・テツヤは私に手を振りながら去って行った。

それを見送った私もまた自分の部屋に向かった。

どうも、あの男とまともに話をすると自分が自分で無い気がする。

しかし、それが悪いのかと言うとそうでもない。

かと言って良いという訳でもない。

・・・・・分からない。

私は自分の部屋に向かいながら、どうしてあの男と話をすると気が狂うのか考え続けた。

第九十五章：心地よい眠り

私とテツヤ殿は城の外に出た。

月が辺りを照らす中で城壁を見れば兵たちが寒い中、仁王立ちで周りを警戒していた。

「こんな寒い中で大変ですね」

「あぁ。まぁ、俺らもするんだ。今の内に体力は回復させておけよ？」

テツヤ殿の言葉に私は頷いた。

「それにしてもあの女・・・本当に成長しましたね」

頑固だったが、やっと柔軟に、社交的になったと思う。

「まぁな。ヴィルヘルムも今頃は涙でも流してるだろうな」

やっとの思いで柔軟にさせる事が出来たのだから涙を流しても可笑しくない、と私は思うがあの顔で泣いたら気持ち悪いと失礼にも思ってしまった。

「所でランドルフ。オリガ嬢にやる拳銃だが、明日でも良いか？」

「はい。拳銃さえ渡してくれたら、私が教えます」

「ほぉう。手取り足とり教えるのか」

何となく変な意味が含まれている感じで少しだけ顔が引き攣った。

「ま、まぁ・・・・・・・・・・」

「程々にしておけよ？お前さんを好いているのはオリガ嬢だけじゃないんだからな？」

え？オリガさん以外の女性も？

「誰です？」

「知らないのか？」

テツヤ殿は意外そうに私を見てきた。

「はい。正直、オリガさん位しか私を好いていないんじゃないのかな？と思います」

天馬騎士団のお姉様達は、私を可愛い弟と見ていると思う。

まぁ・・・貞操を奪われそうになったが、今にして思えばただの悪戯と考えられる。

「前に言ったと思うが、少しは女の事に関しても神経を使え」

そうしないと、いつか後ろからブスっと刺されるぞ？と怖い発言をするテツヤ殿に私は戸惑った。

「そう言われましても・・・・・・思い付かないんです」

正直な話・・・私みたいな男を本当に好いている女性がオリガさん以外に居るのなら教えて欲しい。

「まだまだ甘いな。なら、今度イーグルにでも訊け」

「はぁ・・・・・・・・・」

あの人はテツヤ殿に比べれば劣るが尊敬できる面もあるし、頼れる面もまたあるのだがこういう事では疑問を抱かずにはいられない。

この世の者とは思えないほどの女好き。

あの人には貞操観念とか、特定の年齢位までは口説かないとかそういう所は無いのか?と思ってしまう。

私よりあの人の方がいつか背中から刺される・・・いや、この世界の女性達に袋叩きにされるのでは?と逆に心配する。

「軍曹って美人なら誰でも良いんです、よね?」

もはや、これは確信していたが敢えて疑問符を付けてテツヤ殿に訊いてみた。

まぁ・・・確信していたのに敢えて疑問符を付けたのかと言えば軍曹の名誉を考えての事だが。

「あぁ。どうやったら、あそこまで女好きなのか知りたいな」

逆にそれだから嫌われているんだ、ともテツヤ殿は言った。

確かに・・・・・・・・・

くどいが、軍曹の顔立ちは悪くない。

寧ろ良い分類に入る。

それなのにあの性格が災いして、ああも女性に「害虫」の如く嫌われているのだ。

もし、あの性格を少しでも治せば女性に好かれると思う。

そしてあの人にこんな話をしても良い話を聞く所か「てめぇ！俺に自慢しているのか？！」と掴み掛れそうな気がする。

「まぁ、あいつに訊くのが嫌ならミーシャとか他の奴に訊け」

分からないで悩むより誰かに訊いてでも答えを見つけるのもまた良い、とテツヤ殿は言ってくれた。

それに私は頷き、テツヤ殿と別れた。

雪道を歩きながら私はオリガさんの家へと向かう。

オリガさんと会うのは数日振りだろうか？

戦に出る時、オリガさんはまるで仕事に出掛ける家族を送るように「いってらっしゃい」と言った。

死ぬかもしれないのに、そんな態度で良いのか？と思うだろうが下

手に辛気臭い態度を取られるのもまた考え物だ。

私にとってはあの程度で良いと思う。

そんな事を考えている内にオリガさんの家に着いた。

ドアの前で私は止まり深呼吸をしてからドアを控え目に叩いた。

「ランドルフです」

自分の名を名乗ると直ぐにドアは開いた。

「お帰りなさい。ランドルフ君」

白いエプロンを腰に巻いたオリガさんが私を優しい声で出迎えてくれた。

この人を見て、声を聞くと自分は生きて帰って来れたんだ、と改めて思える。

それと同時に身体の底から“何か”が沸き起こり熱くなり始めた。

初めての感覚でどうしてなるのか分からずに困ったが、それを無視してオリガさんを見て私は帰宅した事を伝えた。

「ただいま帰りました。オリガさん」

私はオリガさんに微笑み中に入った。

家の中は以前と変わらない。

温かくて、癒される雰囲気だ。

「戦は勝ちで良かったわね？」

まるで何か試合で勝ったような口調でオリガさんは話し、それに私は頷いてみせた。

「ですが、まだ終わってはいません」

まだ敵は倒していない。

ただ、撤退しただけだ。

だから、まだ戦いは続くし何時また敵が何処から来るか分からないから油断は出来ない。

一瞬の油断が命取りとなるのが戦場だ。

「そうね。でも、今は勝利の余韻に少し位は浸っても罰は当たらないわよ？」

オリガさんは私に果実酒を差し出してくれた。

私はそれを一口で飲み干した。

久し振りの酒は身体を更に熱くさせたが、冷えていたのでちょうど良い熱さになったとも言える。

「お腹は減ってる？」

「はい」

「それじゃご飯を食べてからお風呂に入りましょう」

オリガさんは私に服を脱いで寛いでいなさい、と言うと台所に向かった。

私は服を脱いで、ライフルなどをテーブルに斜めに置いて椅子に腰を降ろした。

椅子に腰を降ろすとドッと疲れが来て、眠気が襲って来る。

しかし、それを我慢しようとしたが直ぐに寝てしまった。

どれ位寝ていたのだろう？

それは分からないが、肩を揺さぶられて目を覚ました。

「起きた？」

オリガさんの顔が私の間近に居り、私は驚いた。

「料理を運んできたら貴方、寝てたわよ？」

起こすのもまだ早いと思ったので料理を並べるまで待っていたらしい。

「す、すいません」

私は謝りながらオリガさんと共に食事を開始した。

温かいシチューとパンという質素な食事だが、それでも美味しかったしこの人の料理だから熱とは違う、別の熱があった。

「疲れているのね」

オリガさんは果実酒を飲みながら私に話し掛けて来た。

「色々とありまして・・・・・・・・・」

私は言葉を濁しながらも答えた。

「そう。詳しい事は訊かないけど、私で疲れが取れるなら話してね？」

貴方は私の大切な人だから、とオリガさんは言いそれに私は頷いた。

食事を終えた後は腹も満たされたので、更に眠気が強くなったが風呂に入るとそれが一気に覚めた。

その代わり、身体の底から湧き起こる熱さは更に加熱した。

一体なんなんだろう・・・・・・・・・・

結局分からないまま、二人でベッドに入った。

オリガさんはネグリージェを着て私は迷彩服を着ている。

ライフルなども傍に置いて何時でも撃てるようにしてあるのを確認

してから私は上を見た。

「ランドルフ君・・・・・・・」

オリガさんが私の名を呼んだので振り返れば、オリガさんは私の唇を奪い取った。

一瞬だったので驚いたが、直ぐに我に返った。

暗い中でオリガさんは薄らと眼元を熱くさせている事に気付いた私はオリガさんを抱き締めた。

「・・・心配させて、すいませんでした」

今になってオリガさんもまたエリーナ様と同じように私を心配していたんだ、と気付いた。

こういう所がまだまだ、と改めて思い知らされる。

「良いのよ。無事で帰って来たんだから・・・・・・・・」

オリガさんは私を抱き締めて、耳元で囁いてきた。

それが引き金となったのか、私はオリガさんを抱き締める腕に力を込めて唇を貪っていた。

オリガさんは私を抱き締める腕に力を込めて自分の唇を更に強く押し付けて来た。

互いに強く抱き締め合い唇を貪り合う。

暫くして唇を離すとオリガさんは私にこう言った。

「戦の後は、気が高ぶるのよ」

そう言えば・・・・・ヘンさんも言っていたな。

つまり、これがそうなのだ。

「気が高ぶったら、女を抱くのが大抵なの。だから、私でそれを沈めて」

私も気が高ぶっているのよ、とオリガさんは言い私は頷いた。

蝋燭の火は既に消えている。

それから私はオリガさんと自分の気を沈め合い、最後は抱き締め合って深い眠りに落ちて行った。

だが、決して悪い眠りではない。

とても心地よい眠りだった。

第九十六章：朝寝坊と馬

翌日、私はオリガさんが起こすまで眠っていた。

オリガさんに起こされたのは朝になってからかなり時間が経っていた。

明らかに・・・・・寝坊だ。

「どうしてもっと速く起こしてくれなかったんですかっ」

私はオリガさんに学校に遅れる子供のように捲し立てたが、オリガさんは到って冷静で「だって気持ち良さそうに寝てたんだもの」と言ってきた。

これには何も言えず私は後味が悪い感じで朝食を済ませた。

そしてテツヤ殿の所へ行ってきます、と言って家を出た。

朝になって外に出たが雪は止んでいた。

雪道を進んで行くと、家から少し離れた別の家からレオンが出て来た。

ドアの前にはオリガさんより2つ、3つ上の女性と小さな女の子が居る。

あの女性がレオンの“愛しい人”か。

しかし、あの小さな女の子は誰だ？

レオンは私を見ると小走りに走り寄って来た。

「ランドルフ君。無事だったんだね？」

「そちらも無事で何よりだね。所で、そちらの女性と女の子は？」

私が二人を見ながら訊ねるとレオンは二人を紹介してくれた。

「こちらがレイテさん。そしてこの小さな女の子がローズちゃんだよ」

レイテという女性はイザベルさんのように男っぽい容姿だが、服装を見れば色々な所でお洒落な所もあり決して男っぽさを強調している訳ではないと分かる。

ローズちゃんという子はレイテさんの容姿を受け継いでいるが可愛らしい印象が強い。

「こんにちは。貴方がランドルフ君？」

レイテさんは私をトパーズ色の瞳で見つめて来た。

「はい。ランドルフ・クリフです。オリガさんの家に今は居候しております」

「オリガの？そう、貴方がオリガにとって天使なのね」

私にとってはレオンが天使とレイテさんは言いローズちゃんに挨拶

をしなさい、と言った。

「こんにちは。ローズです」

ローズちゃんはスカートの裾を持ち上げて一礼してきた。

こんな幼いのに良く出来るな、と感心する。

これもレイテさんの教育の賜物と言えるだろう。

「こんにちは。僕はランドルフ。レオンの友達だよ」

私はローズちゃんと視線を合わせるように屈んで挨拶をした。

「レオンお兄ちゃんの友達なんだ。ねぇ、ランドルフお兄ちゃんも貴族なの？」

「ううん。僕は市民だよ。でも、レオンとは身分関係なく友達と思っているよ」

ローズちゃんはレオンを見て「良い友達だね」と言った。

「そうだね。僕にとって掛け替えの無い友達だよ」

レオンはローズちゃんの頭を撫でながら私に城に行くのかい？と訊ねた。

「テツヤ殿に会いに行くんだ。君は？」

「僕もだよ」

「それじゃ一緒に行くかい？」

「そうしよう」

私とレオンは二人に挨拶をしてテツヤ殿の家へと向かおうとしたが、前方から蹄の音が３つほど聞こえた。

馬？

ここに馬が居るのか？と私とレオンは思った。

「馬ってこういう所は余り向かないよね？」

「うん。そうだけど、この音ってどう考えても馬だよね？」

私は頷いた。

蹄の音が段々近づいてくる。

そして姿を現した。

私たちが乗っている馬に比べると小さめな身体でロバのようだ。

しかし、身体付きは逞しく、あれくらい体格が良いと山道でも軽快に走れるな、と私は思った。

馬は４頭で乗っているのはテツヤ殿、ミレーネ殿、メジュリーヌ殿、リーザ中尉だった。

「よぉ、ランドルフ、レオン」

テツヤ殿は全身真っ黒の最も黒い毛色---“青毛”の馬に乗っていた。

ミレーネ殿は栗毛よりもやや暗い毛色---“栃栗毛”の馬で、メジュリーヌ殿とリーザ中尉は灰色の毛色---“葦毛”の馬だった。

「わー、お馬さんだー」

ローズちゃんはテツヤ殿が乗る馬に近付いた。

馬はローズちゃんを見ると首を屈めてローズちゃんの手が届くようにすると言う気が利いた行動を取って見せた。

「フサフサで気持ち良いー」

ローズちゃんは馬の蹄冠を撫でながら頬ずりをして馬はそれが気持ち良いのか優しく鳴いた。

「テツヤ殿。この馬は？」

私はテツヤ殿に近付いて馬の事を訊ねた。

「こいつはここで育った馬だ」

「ここで、ですか？」

こんな所で育つのか？と私とレオンは思った。

「別に馬は平地で育つ訳ではない。山でも馬は育つ」

ここで育った馬は山・・・つまり山岳地帯でも軽快に動ける事だ。

だが、馬は登りに強いが下りは脚を突っ張って動かなくなってしまう。

山の斜面に弱い筈なのだが、この馬の体格を見る限り斜面でも問題ないと思える。

「こいつを使えばここでの戦闘でもかなり有利に立てる」

テツヤ殿は馬から降りた。

そしてレイテさんに目を向けた。

「あんたはレイテさんかい？」

「えぇ。そういう貴方がミレーネ姉の連れ添いさんね？」

「えぇ。そうよ。レイテ。私の可愛い寂しがり屋さんよ」

ミレーネさんは馬から降りてレイテさんに微笑でみせた。

相変わらずサラ様と同じく美しい笑顔だ、と私とレオンは思いながらリーザ中尉に視線を向けた。

やっぱり、と言えば良いだろうか？

かなり、いや、もう爆破数秒前と言う程の怒りに満ちた顔だった。

その一方でメジュリーヌさんは何処吹く風という感じで余裕を見せている。

まぁ、長生きしているから嫉妬などそう簡単に出さないのだろうと私は思いながら爆発しないでくれ、と切に願った。

「所で、ここの馬は随分と大人しいですね」

レオンはリーザ中尉の怒りを出来るだけ逸らす為に馬の方を見ながらテツヤ殿に話し掛けた。

「ここの馬は比較的、温厚なんだ」

テツヤ殿は煙草を銜えながら答えた。

温厚と言う事は、乗り手は余り選ばないという事か。

これも良いことだと私は思いながらここで馬での戦闘を考えてみた。

馬は平地など平らな場所で行われる戦闘で、その機動力の高さを武器に敵陣を荒らし回り後方から攻め込めるのだ。

風林火山の言葉を旗に使用した武田信玄という武将の国は、ここと同じく山国だったらしいがそこは馬の名産地だったらしい。

そこで育った馬は山育ちという事もあり無尽蔵とも言える体力と山でも軽快に行動が出来たという。

それを利用して戦を勝利してきた、と言う。

ここで育ったと言われる馬。

それをここで使用すれば前以上に敵を苦しめられる、と私は思った。

だが、同時に銃声などは大丈夫だろうか？と疑問も湧き起こった。

馬は臆病な生き物だ。

そのため大きな音の迫撃砲やライフルの音を耳にすれば嫌でも怖がる、と思う。

それを見抜いたのかテツヤ殿はこう言った。

「ここで育った馬は予め銃声の音を怖がらせないようにしている」

ヴァイガーで民達を訓練している時には馬も銃声を怖がらせないようにしたらしく、ここでの戦闘の時も馬を外に出して間近で迫撃砲などの音を聞かせて慣れさせたようだ。

更に馬に乗ったままでの射撃から偵察と警戒、物資の輸送など様々な訓練を施した、とテツヤ殿は説明してくれた。

「お嬢ちゃん。少し、大きな音がするから離れてな」

テツヤ殿はローズちゃんに離れるように言うとローズちゃんは頷いて離れた。

そしてコルトをホルスターから抜くと、撃鉄を起こし馬の耳元で空に向かって引き金を引いた。

だが、馬たちは微動だにしなかった。

「どうだ？」

私とレオンはこれなら使えると思った。

「すごーい音だった」

ローズちゃんは耳を抑えていた手を離してテツヤ殿に言った。

「大丈夫だったかい？」

テツヤ殿はローズちゃんに訊ねるとうん、とローズちゃんは頷いた。

「そうか。さぁ、またお馬さんと遊びな」

テツヤ殿はローズちゃんを馬に乗せ、リーザ中尉に頼んだ。

リーザ中尉は愛するテツヤ殿から頼まれて喜々として頷くと颯爽と馬に跨りゆっくりと走らせた。

私とレオンはテツヤ殿が子供に対して、あんな優しい声で話し掛ける事に些か面食らったが、ローズちゃんもテツヤ殿を怖がらずに居る事に驚いた。

『テツヤ殿って、子供から見たら怖いよね？』

レオンが小声で私に訊いてきて、私はそれに頷いた。

小声だったから聞かれていない筈だと思っていたのだが・・・・・・・

「悪かったな。強面で」

ゴツン、と二人揃って拳骨を喰らい、朝から痛い思いをしてしまった。

「で、俺に何の用だ？」

テツヤ殿は既に要件は分かっている筈なのに敢えて私達に訊ねた。

当て付けなのか？と私とレオンは未だに痛々しくて、瘤が出来た頭を摩りながら要件を伝えた。

『（オリガ、レイテ）さんに渡す銃です』

「用意している。メジュリーヌ」

「うむ」

メジュリーヌさんは鷹揚に頷いて馬から降りた。

馬に乗る時もドレス姿で、不似合いな上に横乗りではなく前乗りだから生々しい足が見えて目のやり場に困る。

軍曹なら“頭の湧いた獣”のように飛び掛かる事だろうが、私たちはそこまで落ちこぼれていない。

メジュリーヌさんは私とレオンに同じ小型の拳銃を渡した。

「そなた達が使用しているベレッタの小型版じゃ」

私緒レオンもベレッタＭ９２ＦＳを使用しているが、確かにこれは小型版と言って良いかもしれない。

色は黒でベレッタのように洗練された芸術的な色合いが強いし到る所が似ている。

「それは“ベレッタＭ８４ＦＳ”という小型・・・正確には中型拳銃だ」

口径は９ｍｍより小さな３８口径で癖が無い事から初心者には打って付けらしい。

「後はお前さん方で手取り足とり教えてやれ」

『ありがとうございます。テツヤ殿』

私とレオンはテツヤ殿に礼を言った。

「気にするな。俺は少し城に行って来るが、お前等はどうする？」

私とレオンは顔を見合わせてオリガさんとレイテさんを伴い行きます、と答えた。

テツヤ殿は先に行っている、と言い残してメジュリーヌさんを伴い城へと向かった。

ミレーネ様は城には行かず家で待っている、と言い家へと戻った。

私とレオンはその姿を見ながら沈黙を守った。

それから暫くしてリーザ中尉が戻って来て、事情を聞くと自分も行くと言い馬を走らせて行った。

「ローズ、あんたも城に行く？」

「うんっ。行きたーい」

ローズちゃんはレイテさんの質問に元気いっぱいに答えた。

「それじゃ行こう。ランドルフ君。待ってるからオリガさんを呼んで来て良いよ」

レオンに言われた私は直ぐに家へと向かった。

第九十七章：親友の決意

オリガさん、レイテさん、ローズちゃん、レオン、そして私の5人は徒歩で城まで向かった。

レイテさんとローズちゃんは左右からレオンを挟み両手を掴み合い歩いている。

それが何処か幼い頃の自分と重なった。

私の父は弟たちがまだ物心付く前に死んでしまい、私だけが父の記憶が残っている。

幼い頃、私も母と父を左右から掴んで歩いた、と思い出して懐かしいと同時に羨ましいとも思った。

「羨ましい？」

オリガさんが私の左側を歩きながら訊ねてきた。

「・・・昔を思い出してしまいまして」

「そう。大丈夫よ。・・・何時か貴方と子供の3人で歩けるわ」

「オリガさん・・・・・・・・」

私はオリガさんを見た。

「男の子と女の子どっちが良いかしら？」

「どちらでも構いません。男だろうと女だろうと、私の子に違いはありませんから」

「貴方との子なら良い子になるわ」

オリガさんはクスクス、と笑いながら私の左腕に腕を絡ませて優しく抱き締めた。

そして更に足を進めて行くとロンガーム殿の家を通り過ぎた。

「ランドルフっ！！」

上から声がして顔を上げると、2階からガリシャがこちらを見下していた。

「やぁ、ガリシャ」

私は笑ったが、ガリシャは何処か危機に扮したような顔をしていた。

「何処に行くんだいっ？」

「城だよ。これからオリガさん達に拳銃の扱いを教えるんだ」

「あ、あたしも行くよッ」

「？別に良いけど・・・・・・・・」

何で彼女まで行こうとしているのかまったく分からないが、下手な事を言って面倒な事になるのは御免被りたいので言わなかった。

ガリシャは待ってて、と言うと武器などを掴むと2階から飛び降りた。

私は驚くと同時に急いで走り寄り彼女を受け止めた。

一瞬だけガリシャを横抱きにしたから「御姫様抱っこ」をした。

まぁ・・・多少、“重い石”を持たされた気がしたが、それは落下したから速さが伴ったと思う事にした。

それと同時に微かに胸が顔に当たったが今はそれ所ではない。

「危ないじゃないか！！」

私は思わず大声で彼女に怒鳴った。

「だ、大丈夫だよ。いつもやってる事・・・・・・・」

「何時もやっているからと言って無事とは限らない。今度からはドアから出てくれ」

心配で堪らない、と私はガリシャにきつく言った。

ガリシャは暫し私を見ていたが、視線を逸らすと「・・・・ごめん」と謝罪した。

それを聞いてから私は「気を付けてくれ」とまた言ってからガリシャを降ろした。

そしてオリガさんの方へと行き歩き出した。

「ま、待ってよ！！」

ガリシャは慌てて私の後を追いかけて来た。

彼女は私の右に立ち、また私に謝った。

「二度も謝らないでくれ。反省しているなら謝罪はもう要らない」

前を見たまま私は言ったが、ガリシャはそれをまだ怒っていると取ったのか更に落ち込みながら「だって・・・・・」と何か言おうとした。

それを見てオリガさんは「厳しいけど仕方無いわよ」と言いガリシャを慰めながら私に「貴方もまだ青いわね」と言ってきた。

これには意味不明だが、私は敢えて訊かずに歩き続けた。

城に到着した私たちは真っ直ぐに演習場へと向かうが、そこにはテツヤ殿は居なかった。

代わりにヘンさんとワイド中尉、ミーシャ大尉が居り銃の練習をしていた。

「おやー？誰かと思えば坊や達じゃないか」

ミーシャ大尉は私たちを見て射撃を止めた。

「おはようございます。大尉」

私とレオンはミーシャ大尉達に敬礼した。

「おはよう。所で、あんた等二人に付き添っている女性はこれかい？」

小指を立てるミーシャ大尉。

「ねぇ、お姉ちゃん。それなぁに？」

ローズちゃんが大尉を「お姉ちゃん」と言った。

「今、なんて、言った？」

ミーシャ大尉は途切れ途切れにローズちゃんに訊ねた。

「ん？お姉ちゃんだけど？」

ローズちゃんは可愛らしく首を傾げながら言い返した。

ミーシャ大尉は沈黙し肩を震わせた。

な、何だ・・・・・・・・・

私たちが固唾を飲んでいると・・・・・・・・・・・・・・・

「いいいいいやぁぁぁぁたぁぁぁぁ！？」

物凄い・・・差し詰め熊の雄叫びと言っても信じられる程の大声が演習場に響き渡った。

声の主は大尉だ。

「やったやったやったやった!!初めてお姉ちゃんって言われた!?女って最初から見られた!!」

大尉は子供のように大声で喜んでいる。

『・・・初めてだったんだ』

幼い頃から男として育てられたから、きっと周りからも男と見られていたのだろう。

しかし、ローズちゃんは大尉を最初から女として見た。

これが嬉しかったに違いない。

何とも・・・可哀そうな方だ、と私は思う。

大尉は走り回りながらワイド中尉とヘンさんを抱き締めて、首に手を回した。

そして二人を軽々と持ち上げて振り回し始めた。

二人は「助けて!!」と叫んだが、誰も助けず・・・正確には助けられなかったと言った方が正しいが・・・・まぁ、最終的に壁に投げ飛ばされたと言っておこう。

大尉がはしゃぐ中で私とレオンはオリガさんとレイテさんに射撃を教えていた。

その間、ローズちゃんはリーザ中尉とガリシャが面倒を見ているから問題ない。

その傍らで大尉が未だにはしゃいでいるが敢えて気にしない。

「先ず両手で構えます」

私はオリガさんにベレッタＭ８４ＦＳを持たせながら説明を開始した。

Ｍ９２ＦＳに比べれば小型だが、それでも大きい。

これ位なら小さな人物でも扱い易い作りに思える気がした。

オリガさんは右手でベレッタを持ち左手をマガジンの部分に当てている。

両腕を真っ直ぐに伸ばして凹んだ部分から眼で的を狙っているが、片眼は閉じている。

「片眼は瞑らないで下さい。横から敵が来るかもしれないので」

オリガさんは分かったわ、と頷いて両目を開けた。

「狙いを定めたら引き金を引いて下さい。反動が来ますが、それを肩で受け止めて、手を曲げたりしないで下さい」

傷めるから、と付け加える。

狙いが定まったのかオリガさんは引き金を引いた。

ベレッタに比べると反動が弱いように見えた。

弾は心臓部から少し離れた方に当たったが、あれでも相手を怯ませる事が出来るだろう、と思った。

そして立て続けに引き金を引くオリガさんの横ではレイテさんも引き金を引いている。

「どうだい？そっちは」

レオンに訊くと「まぁまぁかな」と答えた。

二人から離れて遠目で見てみると、どちらも中々様になっていた。

そしてローズちゃんに眼をやるとガリシャに肩車されて笑っていた。

「ローズちゃんは元気だね」

レオンは頷いてから「あんな可愛い子を捨てる男が居る何て同じ男として許せない」と小声で呟いた。

「・・・なるほどね」

私は皆まで訊かなくても分かった。

レイテさんにローズちゃんが出来たと知った名も知らない男は直ぐに逃げた。

そしてレイテさんは女手一つでローズちゃんを育てた、という事だ。

「ローズちゃんは父親が居なくても良いと言っていたよ」

レイテさんはローズちゃんに「あんたの父親はあたしとあんたを置いて逃げたの」とぶっきら棒に、そして直球で言ったらしい。

普通なら死んだ、とか何とか言うが何れは分かる事だと考えたのだろう。

正面から言ったようだが、ローズちゃんはそれを受け入れ「そんなお父さんいらない」と言ったらしい。

「母子揃ってきついというか、現実的だね」

私の感想にレオンは頷いたが「でも、可愛いんだ」と言った。

それは彼の様子を見ていれば解かるから頷くだけにした。

「もし、この戦いが終わったら・・・結婚しようと思っているんだ」

これには驚いたが、今にして思えばレオンは元貴族だ。

貴族の結婚は早ければ5歳から始まる、とも言われている。

まぁ、なんだ・・・夫婦の営みをするまでは花嫁修業をするが、とにかく早い。

だから、彼が結婚を口にして驚いたが直ぐに消えた。

驚きは消えたが、それだけ愛していると分かり嬉しかった。

私の親友には、ここまで愛した女性が居るという事が親友として嬉しいのだ。

「君なら二人を幸せに出来るよ」

私は彼に煙草を渡した。

彼はそれを受け取り一緒にマッチで火を点けて煙を吐いた。

第九十八章：王女の来訪

射撃の訓練をオリガさんとレイテさんに施していると、テツヤ殿とメジュリーヌさんが現れた。

「何処に行ってたんですか？」

私が訊ねると別の演習場でシュヴァルツフントと親衛騎士団の方を見ていたらしい。

「あいつら日に日に強くなっている」

正攻法と剣だけでなく槍、鎚、弓、矛、徒手空拳など様々な物を学び取っているらしい。

「まぁ、まだ板に付いていないのは玉に瑕だがな」

それでも学んで成長しているならまだ良い、と私は思い要らない荷物はどうでしたか？と訊ねた。

「まだ頑固だが、少しずつ受け入れ始めた」

部下達が受け入れているのに、自分だけが受け入れないのはどうだ？と思っているのだろうか。

「何にせよ万々歳だ」

今の所は、とテツヤ殿は言い私たちは明日から馬の訓練もやると言ってきた。

「ここで育った馬に乗り、奴等を偵察する」

敵がどんな手を使うのかは不明だ。

だが、偵察をすればそれが分かると言う事だ。

そして馬の機動力を活かして後方を再び攻撃して相手を弱まらせ、ザンビア平野での戦いのように今度は我々が奴等を包囲して殲滅する。

「それから夜警は今日だ」

俺も今夜、とテツヤ殿は言い一緒にやるぞと言った。

それに私は頷いた。

それから昼食の時間になって皆で食事を取る事にした。

メジュリーヌさんは何処からともなく温かそうな布を取り出すと床に敷いた。

座ってみると不思議と冷たくない。

それ所か尻が温かくて気持ち良かった。

「あの、これは一体?」

私はこれが気になって訊ねてみた。

「妾が編んだ布じゃ。特別な魔法を掛けた故、寒い所だろうと温かいのじゃ」

メジュリーヌさんは何処か自慢気に語った。

「メジュリーヌさんは何でも出来るんですね」

私が感心するように言うとメジュリーヌさんは薄らと微笑を浮かべてテツヤ殿にもたれ掛った。

「愛する男の為じゃよ」

「抱き付くな。暑苦しい」

テツヤ殿はローズちゃんが居る事もあってか、ぶっきら棒にメジュリーヌさんを引き剥がした。

「酷いのう。まぁ冷たい男も魅力的じゃがの」

メジュリーヌさんは楽しそうに笑うとこれまた何処からともなくバスケットを取り出して中身を出した。

ハムとチーズ、野菜が挟まれたパンに肉の燻製、後は鉄製の瓶だった。

「何ですか？それ」

「“魔法の瓶”じゃよ」

魔法の瓶？

私たちは首を傾げたがテツヤ殿が説明してくれた。

「中身をある程度の時間だが温度を保てる優れ物だ」

なるほど、と私たちは納得する。

そしてメジュリーヌさんは全員に温かいコーヒーを渡してくれた。

「そなたはまだ幼いから砂糖を入れておいたぞ」

ローズちゃんには砂糖を入れて渡すメジュリーヌさん。

「ありがと。お姉ちゃん」

「可愛いのう。じゃが、妾はそなたの母君より年上なのじゃぞ？」

「そうなの？お母さんより若く見えたよ」

うわぁ・・・実の母親を前によくこんな事を・・・・・・・・・

だが、レイテさんは別に怒った顔もしないで、レオンに耳元で囁きレオンは「覚悟して下さい」と言った。

まぁ・・・これで大体の察しは付くだろう。

そんなこんなで私たちは昼食を開始した。

ガリシャは相変わらずよく食べるな、と思いながらも私も食べる。

口の中に材料の味が素で広がり後味が極めて良い。

食べる人物を考えて後味が良い風に仕上げたのだろう、と評論家のように思いながら食べ続ける。

しかし、ふいに視線を感じたので、壁の方を見るとエリーナ様が壁に隠れて見ていた。

顔の部分だけ出して隠れているように思っているのだろうが、ドレスの裾が長くて見え見えだ。

「王女か。ランドルフ、呼んで来たらどうだ？」

テツヤ殿はコーヒーを飲みながら私に言ってきて、私は頷いてエリーナ様の方へと歩き始めた。

「エリーナ様。どうなさいましたか？」

私は壁に急いで隠れたエリーナ様に声を掛けた。

エリーナ様は暫し無言だったが、直ぐに出て来た。

「どうして、分かったんですか？」

どうやら本人はあれで隠れていた積りらしく、私が正確には私たちが気付いた事に驚いているようだ。

「失礼ながら、エリーナ様は隠れんぼをした経験はおありですか？」

「リカルドお兄様と一緒にやりました」

いつも上手く隠れた積りだが、リカルド様は直ぐに見つけ出したらしい。

だが、それだと余りに可哀そうだと思ったのだろう。

分からない振りをしていた、ともエリーナ様は語ってくれた。

『幼い頃から隠れるのは下手だったか』

まぁ、そんな事は隅にでも置いておこう。

今は別な事を訊くのが先決だ。

「それでどうして壁などに隠れていたのですか？」

「い、いえ。特に他意は無いんです。ただ・・・何となく行くのを躊躇ってしまったんです」

何故？と一瞬だが思った。

しかし、あれだけ大人数だと行くのも躊躇うな、と私は思った。

「皆、気心の知れた者たちばかりですから宜しければどうぞ」

エリーナ様は一度だけ皆を見て、何かを決意したように「では」と言った。

私はエリーナ様に背を向けて歩き出しそれに彼女は付いて来た。

「よぉ、王女さん」

テツヤ殿はエリーナ様に手を上げて挨拶をした。

ミーシャ大尉の方は「坊やが他の女と一緒だと知って来たのかい？」と意味不明な事を言ってきた。

その言葉にエリーナ様は顔を赤くして更に私は訳が分からなくなったので大尉に訊ねてみた。

「あの大尉。どうして、私が他の女性と一緒だから来たのですか？」

「知らないのかい？まだまだ青いね。まぁ、後で教えてやるよ」

「お願いします」

私は頼んでからエリーナ様を座らせた。

「貴方が王女様？やっぱり王女様となると将来は美人決定みたいな容姿ね」

オリガさんはエリーナ様を上から下まで見ながら話し掛けた。

「あの、貴方は・・・・・・・」

「私はオリガ。ランドルフ君が住んでいる家の主よ」

「では、貴方が・・・・・・・・・」

「前に話した母のような方であり姉のような方です」

私がエリーナ様に説明をすると、エリーナ様はオリガさんを見つめ返した。

「初めまして、私はエリーナ・ロクシャーナです」

「初めまして。こっちは会ったかもしれないけど、ガリシャちゃんよ」

オリガさんは自分の自己紹介を終えたからか今度はガリシャを紹介した。

「あたしはガリシャ。ランドルフの観測手を務めていてランドルフと同年輩だよ」

性格なのだろう。

サバサバした感じで喋るガリシャにエリーナ様は些か面食らった顔をしたが、直ぐに挨拶をした。

そしてエリーナ様はローズちゃんを見た。

「貴方、名前は何と言うのですか？」

「ローズです。初めまして」

「初めまして。私はエリーナと言います。私を見ていたけど、どうかしました？」

「ううん。綺麗でお人形さんみたいと思ったの」

「お嬢ちゃん。王女が人形に見えるのかい？」

テツヤ殿が訊くとローズちゃんは頷いた。

「そうかそうか」

テツヤ殿はローズちゃんの頭を優しく撫でてからエリーナ様に「居たいだけ居ろ」と言った。

昼食を終えた後はオリガさんにまた拳銃の撃ち方を教え始めたが、隣にはガリシャも一緒だった。

ガリシャはサブマシンガンとライフルはあるが、拳銃は持っていない。

それをテツヤ殿に話すと「ランドルフと同じで良いか？」と問うとそれで良いと言ったのでベレッタを渡された。

二人は両手でベレッタを構えながら引き金を引いている。

テツヤ殿はメジュリーヌさん達と何かを話しているが聞き取れなかった。

後で訊いてみようと思いながら二人に射撃を教えているが、後ろからエリーナ様の視線を感じる。

彼女はずっと私を見つめていたが、その間一言も言葉を発しなかった。

幕間：ずっと見続けて欲しい（前書き）

ここで王女の独白を入れます。

しかし、ランドルフ・・・鈍すぎる。

まぁ、更に鈍すぎると痛感させる場面を載せますが、ここでも鈍すぎるのに更に鈍いとなれば救いようがある意味では無いかもしれませんね・・・・・・タハハハハハ・・・・・・・・

幕間：ずっと見続けて欲しい

私はサルバーナ王国の創設者である初代国王であるフォン・ベルト王が建てたリブリーブス城の一室に一人で居た。

ここが最初の首都であったが、子孫が今の首都ヴァエリエに移して忘れ去られていた。

だけど、リカルドお兄様が兵を起こしてここに逃げ込んだ。

忘れ去られた都に何があるのだろう、と思っていたがリブリーブス城が聳え立ち城壁などもあった事に私は驚きを隠せなかった。

そしてここに住む者たちはフォン・ベルト閣下の遺言で今まで護って来た人たちであると説明を受けた時も更に驚いた。

こんな・・・失礼な言い方だけど、こんな所でずっと暮らしてきたという事が信じられなかった。

でも、それのお陰でここに逃げ込めたんだとも思う。

私とお母様達はリブリーブス城に案内された。

そこには黒髪で褐色の肌を持つ綺麗な女性が居た。

名前はメジュリーヌ。

テツヤ殿とランドルフがここに来た時に出会ったドラゴンだと言われ、それからここの城を建てたのも自分だと説明された。

『別にそなた達の為ではない。妾はテツヤを助ける為に建てただけだ』

それを聞いたお母様は何処か毅然とした顔をしていたのが鮮明だった。

そしてここに住んでいる。

それから幾日か経って敵が攻め込んできた。

それをテツヤ殿達は迎え撃ち撃退して私とお母様に報告してくれた。

敵を撃退した事をテツヤ殿とランドルフは伝えに来た時、私は彼にお茶の件を話した。

彼とはお茶の約束をしていたから、今ならと思い言ってみたが夜なのでと断られた。

そしたら彼はまたあの赤髪の少し年上の女の子と会うかもしれない。

居候している女性の家に行くかもしれない。

それが嫌だった。

私を置いてランドルフが別の女性の元へ行ってしまう！！

それが嫌で嫌で、堪らなかった。

だから、それを思い留まらせようとした。

お母様もテツヤ殿を止めたが、二人は無理と言って無情にも出て行った。

それから彼とは会っていない。

私はランドルフに無性に会いたくて堪らなかった。

でも、彼の家が何処にあるのか分からないから行くに行けない。

はぁ、と何度目かの溜め息を吐いた。

そこへドアが控え目に叩かれる音がした。

ランドルフかもしれない、と思い急いで「どなた?」と訊ねた。

本当なら直ぐにでもドアに行き、自分で開けたかったけど・・・ランドルフじゃないという可能性も捨て切れなくて出来なかった。

使用人の声が返って来て、私は落胆しながらも要件を訊ねてみた。

使用人は「ランドルフ殿が演習場に居ります」と一言だけ言った。

私はそれを聞くと使用人の脇をすり抜け部屋を出て走り出した。

ドレスが長いけど、そんなの関係なかった。

ランドルフが居る!!

これだけが私を走らせ続けた。

何度も転びそうになったが、何とか態勢を整えて走り続けた。

演習場に着いた私は壁に手を付いて息を整えた。

走ったから息が途切れ途切れだったし、髪なども少し乱れてしまった。

彼と会う時はどんな小さな事にも気を使う。

そうしないと、彼に恥ずかしい所を見られる気がしたから・・・・・・・・・・・

息と髪などを整えて出ようとした所だった。

楽し気な声が聞こえて来る。

ランドルフ達と・・・・知らない女性達の声・・・・・・・・・・

私は壁から顔を少しだけ出して覗いてみた。

ランドルフは赤い絨毯の上に腰を降ろして大勢の人たちと食事をしていた。

左右には女性が居る。

赤髪の私より少し年上の女の子と黒髪で赤髪の子より更に年上の女性。

二人はランドルフを左右から挟んで食事をしている。

ランドルフは笑顔で楽しそうな顔だった。

私の時は何処か毅然として厳しい顔つきや曖昧な表情や困った顔が多いのに・・・・・・・

私もあそこに混ざりたい。

いえ・・・ランドルフを独占したいとさえ思った。

壁からずっと除いていると不意にランドルフがこちらを見た。

ああ・・・私を見つめてくれた。

それだけで私は嬉しかった。

そしてランドルフは一人で私に歩み寄って来た。

私の前に来たランドルフは、どうして壁に隠れているのか?と訊ねたが私はどう答えたら良いか分からずに曖昧に答えた。

それに納得したランドルフは私を伴い皆の元へと向かった。

私の為に席を開けてくれたランドルフ。

そこに腰を降ろした私に女性3人と1人の女の子が自己紹介を始めた。

先ず一番年上の女性はレイテさんという名で歳は25歳。

女の子はローズちゃんでレイテさんの娘。

可愛くて私を「お人形さん」と呼んでくれてまるで妹みたいな印象を受けた。

そしてランドルフの隣に居る女性。

黒髪の女性はオリガさんで歳は２２歳。

赤髪の女の子はガリシャさんで歳は１７歳。

オリガさんは私より大人の体格をしていて、性格も優しかった。

ガリシャさんは元気に溢れていて活発な性格に思える。

私は反射的にオリガさんがランドルフの家に住んでいる方だと思った。

この方が・・・・・・・・・

私は無性に悔しかった。

どうして私ではなくランドルフはオリガさんの家に居るのか・・・・・・・・・

私が、私たちが住む城にどうして住まないのか・・・・・・・・・・・

悔しくて悔しくて、堪らなかった。

“命令”

この一言で私はランドルフを拘束できるし、城に住まわせる事も可能。

でも、それはランドルフの自由を奪う事。

それは嫌だった。

だから、それも言えないで黙るしか出来なかった。

昼食の後はオリガさんとガリシャさんに射撃を教えている。

レオンの方はレイテさんに射撃を教えているが、私はランドルフの方に視線を向けて離さなかった。

二人の中型の拳銃と呼ばれる物を両手で構えて撃っている。

少し離れた的に小さな穴が空き、それが立て続けに空く。

偶にランドルフは二人に身体を密着させて耳元で囁いて教える。

私も・・・・・そうやって欲しかった。

いいえ、正面から抱き締めて欲しい。

ランドルフはあれから私に眼を向けてくれないし、話し掛けてもくれない。

・・・もっと、見て欲しい。

ずっと見て欲しいし、もっと話したい。

それなのにランドルフは私を見てくれない。

私はランドルフをずっと見続ける。

そうする事で彼に私を見つめて欲しかったのかもしれない。

ずっと、私はランドルフの背中を見続けた。

このままずっと見ていても私は飽きないとさえ思えるほど、ランドルフの背中を見続けた。

第九十九章：私の獲物

夕方になった頃に訓練は終わった。

「今日はここまでだ」

テツヤ殿は煙草を吸いながら私達に告げた。

ローズちゃんは遊び疲れたのか既に寝ておりレオンが背負っている。

「一足早く帰るね」

レオンとレイテさんは寝ているローズちゃんを抱いて演習場を後にした。

そしてオリガさん、ガリシャも家へと帰って行くが私は夜警があるのでここに残る事になった。

大尉、ワイド中尉、ヘンさんは夜警ではないので帰る事になった。

メジュリーヌさんとリーザ中尉はと言いテツヤ殿の傍に居り、エリーナ様は私の方に居る。

「エリーナ様。そろそろ夕食の時間ではないんですか？」

去る気配が無いエリーナ様に私が質問すると彼女は何故か怒った顔をして私を下から睨み据えた。

「あの、わたし・・・何かしましたか？」

別に何も悪い事をした覚えはない。
それなのにこうも睨まれると余り良い気持ちはしないのは明白であろう。

「お前は本当に未熟だな」

テツヤ殿は呆れながらミーシャに教えられてなかったから仕方ないか、と言った。

そうだ・・・ミーシャ大尉に教えてもらう筈だった!!

それを聞いていれば、エリーナ様に睨まれる事もなかったと思うと口惜しい。

「ランドルフ・・・・・・・・・」

エリーナ様が私の名を呼んだ。

何だか地獄の底から蘇った亡者の様で怖い。

逃げたかったが、足が竦んで逃げられない。

いや、足だけではない。

身体全体が動かない。

だが、口だけは動くので私は、「な、何でしょうか?」と訊ねた。

エリーナ様は可憐な唇を僅かに開いて言葉を紡ぎ出した。

「貴方は、私を・・・・・・・・」

エリーナ様が最後まで言う前に使用人が来て食事の準備が出来た、と告げた。

正に危機一発、または天の助けとでも言えば良いだろうか？

とにかく私は使用人に助けられた訳だ。

エリーナ様を使用人は早く、と急かして背中を掴むと回れ右にして押し始めた。

エリーナ様は文句を言ったが、幼い頃から仕えている使用人なのだろう。

はいはい、と言いながら使用人はエリーナ様の背中を押し続ける。

私をチラリと見ると「もう少しお勉強下さい」と眼で言ってきた。

『・・・努力します』

そう、私は答えてエリーナ様を見送った。

エリーナ様が居なくなってから身体は動くようになった。

何だか喉が無性に乾いて水が飲みたい気分に襲われた。

それを予想したようにテツヤ殿が水筒を差し出してきた。

私はそれを受け取り、水を全て飲み干した。

「大丈夫か？」

私は頷いたが、何だか凄く身体が重い気がした。

「な、何がいけないんでしょうか？」

私は皆に訊いたが、皆は口を揃えて「勉強しろ」としか言わなかった。

ああ、これから夜警なのにドッと疲れが来て、まともに出来るかどうか分からなくなった・・・・・・・・・・・・・・・

しかし、時間は無情にも過ぎ去りあっという間に夜になった。

「左側以上なし」

私は夜、暗視能力を備えた双眼鏡で覗きながら誰も居ない事を確認した。

あれから私はテツヤ殿と二人で西側にある塔の上から夜警をしている。

塔は石で出来ている為、頑丈なのだが木に比べて冷たい上に風がそのまま入り込んで来るから寒い。

だが、温かい物を着た上に魔法の瓶を持っているからそれほどでもない。

テツヤ殿は塔の中に設置されている簡素なベッドの上で煙草を蒸かしている。

何かを考えている表情だった。

「何を考えているんですか？」

私は双眼鏡から視線を外してテツヤ殿に訊ねた。

「ここをヘリで襲いに来た奴等の内2人は俺の知っている人物だと知っているだろ？」

テツヤ殿は天井を見上げながら私に訊ねた。

ヘンさんが先にそれを知り、後に私達にも教えられた。

「確か、海兵隊と平和を毛嫌いしている奴で二人合わせて・・・・・・」

ハゲタカと呼ばれている筈だ。

何でも弱っている者たちなどを狙ったり、相手の獲物を横取りする者を例えて言っているらしい。

自然界のハゲタカはかなり違うらしいが。

「奴等は元フォース・リーコンと同じアメリカの兵士だった」

所属していた軍は陸軍で兄弟そろって空挺部隊に所属していたらし

い。

そして私が見たワッペン――紋章はどんな物かと訊いてきたので思い返してみた。

「私が見た男のワッペンは、確か・・・赤色の四角に青の丸あって、その中に白で図が描かれていました」

それから・・・・・・・・

「白い文字で“ＡＩＲＢＯＲＮＥ”と書かれていました」

「そいつはアメリカ陸軍、“第８２空挺師団”のワッペンだ」

この師団は別名“オールアメリカン”と呼ばれているらしく、その由来は創設時の出身者が４８州全て居たからしい。

この師団は飛行機から降下するエア・ボーン作戦を重点に置き数々の戦争にも出陣して戦果を上げていたらしい。

「お前さんが見た男はここに所属していた」

「兄の方は？」

見た事は無いが、あの鬼畜のような弟に勝るとも劣らない鬼畜だと確信していた。

「兄貴の方はヘリ・ボーンを重点に置いている“スクリーミングイーグル”に所属していた」

こちらは“第１０１空挺師団”と言う名前でテツヤ殿が言ったのは別名で「叫ぶ鷲」を意味しているらしくワッペンでは鷲が描かれているらしい。

元々は歩兵の部隊だったらしいが、そこからパラシュート部隊に改編され、更に軍曹が話していたベトナム戦争以降では空中強襲部隊となったらしい。

そしてこちらもまた全ての州に招集を掛けて兵を集めた為、オールアメリカンと知られていると言う。

「どちらも精鋭部隊として知られている」

そんな所にあの兄弟は居たらしいが、傭兵へと身分を変えた。

そして非道の限りを尽くして挙句はテツヤ殿に“戦死”させられたと言う。

「名前は覚えていないんですか？」

「生憎と戦死させた奴の名前は忘れる事にしているんだ」

戦死させた・・・つまり、テツヤ殿が殺したという事だ。

別に責めたりはしない。

あの兄弟の事だ。

きっとテツヤ殿達が居た世界でも極悪非道な事をしてきたに違いない。

それを考えれば殺されて当たり前だ。

それにしてもなぜ殺した相手の名前を忘れるのか気になり訊ねてみた。

「あいつ等を覚えていても碌な目に合わないからな。それに自分で殺した奴の名前を一々覚えていられない」

殺した筈の二人だが、またここで再会を果たした。

余り良い・・・寧ろ会いたくないのに再会を果たしてしまった。

「まさかここでも再会するとは思っていなかったが・・・また地獄に戻してやるさ」

あいつ等は害しか産み出さない奴らだし、これからの事も考えると早々に消えてもらうのが望ましいとテツヤ殿は言った。

「失礼ですが、弟の方は・・・私の獲物ですから盗らないで下さいね？」

あの男は私が仕留める、とテツヤ殿に言ってみせた。

あの男は私の獲物だ。

誰にも渡さない。

私自身の手で地獄へと落としてやる。

それを心に誓っているのだ。

「安心しろ。誰もお前さんの獲物を横取りするような真似はしない。しっかりと付け狙えよ？」

その口調には私が仕留め損なう、という声は入っていなかった。

つまり私が確実に仕留める事が出来るとテツヤ殿は確信しているのだ。

「勿論です。本当は何発もお見舞したい所ですが、弾も勿体ないですから1発で仕留めます」

それを聞いたテツヤ殿は頼もしい、と言い私と交代した。

交代した私はエリーナ様が言い掛けた言葉を考えてみた。

『貴方は、私を・・・・・・・・・』

ここで言葉は途切れた。

一体、何を言おうとしていたのだろう？

「王女の事を考えているのか？」

テツヤ殿は双眼鏡を覗きながら私に問うてきた。

「はい。エリーナ様は何を言いたかったのか気になりまして」

「まぁ、ただ勉強しろと言っても分からないだろうからヒントをく

れてやる」

ヒント？

「女ってのは男が鈍感過ぎると痺れを切らす」

これがヒントだ、とテツヤ殿は言った。

私にはまったく分からない。

「もうヒントは無しだ。後は自分で考えろ」

私はそれに頷いたが、考えてもまったく答えは思い付かなかった。

幕間：底が知れない男

サルバーナ王国の首都、ヴァエリエに聳え立つエスカータ城。

ヴァエリエは笑顔の都と謳われた程、かつては民達の笑みや声が途切れる事は無かったが今は笑みも声も途切れている。

城下を練り歩くのは柄の悪い兵士たちばかりで、門などを護る兵達もまた酒を飲み頬を赤く染めていた。

何処からともなく悲鳴が聞こえて来た。

しかし、兵たちはそちらに行こうともせず、市場に出されている果物を鷲掴みにすると無造作に口の中に放り込んだ。

それを止める者は居なかった。

皆、何処かで諦めている顔つきで絶望を宿していた。

彼等はここを攻めて占領した先王ガルバーの妾が産んだ第一王子であり反逆者であるリカルド・ウェスビーに仕える兵士たちだ。

そして自分達は囚われの者たちであり労働者。

最初こそ反抗的な態度を取ったが、直ぐに態度を改める事になった。

逆らう者は老若男女問わずに死刑。

しかも、牛の尾に縄を縛り付けて四肢を引き裂く四つ裂きの刑や生

きたまま火あぶりにする火刑、生きたまま土に埋める生き埋め、巨大な釜で茹でる釜茹でなど身の毛もよだつような方法で殺されるのだ。

更に毎夜の如く各家々のドアを叩いては容赦なく家に土足で入り込んでは家具を引っ繰り返して「反乱分子」である証拠を探す。

無くてもその家の者を捕まえて拷問にかけて自白に追い込んで見せしめの為に殺す。

こんな事を数回も繰り返せば嫌でも皆は従うしかなかった。

だが、内心ではリカルドを罵り、呪い続けた。

そんな民達の怨み辛みの視線はエスカータ城へと向いている。

場所は変わりエスカータ城の中では軍議が開かれている最中だった。

軍議には反逆者であるリカルドを始めとした部下達が居る。

リカルドが上座の位置に座り、それから実力を持つ者たちが続くように座っている。

リカルドが反乱を起こす前から従っている4人の貴族たちとフォース・リーコンの指揮官、そして新たに部下になった貴族たちが居る。

その貴族たちの中に一際目立つ存在を醸し出す男が居た。

年齢は壮年で艶やかな黒髪の中には数本の白い毛が混ざっているが逆にそれが貫禄を持っており黒真珠の瞳もまた同じである。

格好は軍服で勲章は一つも付けていないが、見る者が見れば「出来る」と思われる男だった。

「敵も中々やるな」

上座に座るリカルドが静かに開口した。

最初の言葉が敵に対する称賛の言葉である事に貴族たちは驚くと同時に何を馬鹿な事を言い始めた。

「何を言います。まだ一度しか負けておりません。どうせ、敵はもう直ぐ死ぬ運命です」

「左様。あんな城も我らが力を合わせれば、直ぐに落とせますとも」

「我々を退き、浮足立った今こそ攻め込んで滅ぼしましょう」

貴族たちは挙ってリカルドに媚びを売る。

その貴族たちをリカルドは冷たい瞳で見つめていた。

『私を罵っていた奴等が今は私を称賛している、か。・・・・・皮肉な物だ』

それと同時にこの者たちは実際に、東の地に行ってないのに直ぐに落とせると豪語した。

直ぐにでも斬り殺したい衝動に駆られたが、一時の迷いで行動する程リカルドは愚かではない。

『この者たちは利用できる。勝つまでは利用させてもらおう』

事が済めば直ぐにでも血祭りに上げる積りだった。

リカルドの冷たい瞳を貴族たちは気付かずに更に話し続けた。

しかし、リカルドは既に貴族たちの話は耳には入っておらず視線を一人の男に向けていた。

貴族たちの中に混ざっている壮年の男は無言で腕を組み何かを考えていた。

「・・・ヴィールング。そなた、何を考えている？」

リカルドは壮年の男、ヴィールングに話し掛けた。

ヴィールングはサルバーナ王国の言葉で「影なる者」を意味しており俗に貴族の次男坊つまり日陰者を表している。

実際、リカルドもこの男の事は余り知らなかったし、情報も持っていなかった。

だから、親衛騎士団の長を務め自分の父親である先王ガルバーに進言できたロックスに比べれば明らかに劣っていると思っていた。

それは彼の片腕であるヴィクター公爵も同じだった。

だが、それは会って早々に撤回した。

この男はロックス以上に出来る男であり底が見えない。

初めこそ我が身可愛さで自分に媚びを売りに来た輩の一人と思っていたが、眼を見て違うと確信した。

そして密かに調べるとこの男はロックス以上に勲章を貰える実力を持っていたし戦果も上げていた事が判明した。

だが、勲章は持っていないし表彰もされていない。

これに疑問を抱いていたが、日陰者である自分が兄より輝いては駄目だと考えたのだろうと思う事にした。

ヴィールングは黒真珠の瞳をリカルドに向けた。

神秘的な輝きを秘めているが、暗黒のように暗く引き摺り込まれたら二度と出られない気さえある。

「ヴィールングよ。何を考えていた？」

リカルドはもう一度、問い掛けた。

自分に対して、問い掛けているように聞こえる。

ヴィールングは静かに口を開いた。

「敵の事です」

一言だけヴィールングは答えた。

「敵は我々を退きました。今頃は浮き足だっている事と思いますが私は違うと思います」

「何故だ？」

「まだ首都は奪回しておりませんし、敵の司令官はそこまで馬鹿ではない筈です」

まだ我々を完全に倒していない。

それだけで敵の司令官は勝利の余韻に浸っては居ない筈だ、とヴィールングは断言した。

「いま下手にまた攻め込んでは返ってこちらの被害は増すだけ。ならば、向こうにも時間を与える事になりますが敢えて時間を掛けましょう」

出来る限りの情報を手に入れて、考えて準備をするのだ。

最初は突然の雪で満足な装備は出来なかったが、時間を掛ければ何とかなるとヴィールングは言った。

「・・・・・・・・・」

リカルドは無言になった。

ヴィールングの言葉は尤もだが、何か腑に落ちない。

『この男、何か考えているな』

自分に味方すると言ってきたが何か別の考えがある筈、とリカルドは思っている。

ヴィールングは貴族たちからの批判的な眼差しを受け止めている。

「リカルド様。私もヴィールング殿の意見に賛成です」

片腕であるヴィクター公爵がヴィールングの意見に賛成を示した。

「敵に時間を与えるのは面倒ですが、我々の兵もまた進軍と戦いにより些か疲労しております。ここは暫し時間を置いて英気を養い準備を整えるべきかと」

「へっ。俺の兵は別に問題ないぜ？まぁ、そこの鼠の弱っちい槍兵共は疲れ切っているがな」

スキンヘッドで肥え太った豚のような体格をしている男、モリスン侯爵は軍議だと言うのに骨付き肉を齧りながら自軍は問題ないと豪語し、５人の中で一番端に座る出っ歯が特徴なフィリップ男爵を罵った。

フィリップ男爵は無言だったが、肩が小刻みに震えている。

男爵の軍は槍兵と弓兵で構成されており、東の地へ進軍した最初の軍でもある。

彼の部下は大半が死に生き残った者達も息を引き取り続けている。

その部下を罵られたため肩が震えているのだ。

「どうした?何も言えないのか?だから、てめぇは臆病で雑魚何だよ」

モリスン侯爵は更にフィリップ男爵を詰ったが、それでも彼は無言だった。

「モリスン侯爵。それ以上フィリップ男爵を愚弄するのは止めろ」

リカルドがモリスン侯爵を戒めた。

「お言葉ですがリカルド様。俺は本当の事を言っただけですぜ?」

ブチっ、と音を立てて骨付き肉を食い千切るモリスン侯爵にリカルドは渋面を浮かべた。

「モリスン侯爵。リカルド様はお優しい方。例え雑魚であるフィリップ男爵にも慈悲を掛けているのですよ」

モリスン侯爵を優しい声で戒めたのは左目に眼帯をして顎鬚を生やした男、ライアンナル伯爵だった。

「でもよ、ライアンナル伯爵。この男爵、部下が馬鹿にされているのに言い返せないんだぜ?」

「モリスン侯爵。ここは軍議を開く場所であり罵り合う場所ではありません。だから、フィリップ男爵は敢えて反論しないのですよ」

さぁ、軍議を続けましょう、とライアンナル伯爵は言った。

それにモリスン侯爵は素直に従った。

爵位の高さで言えばモリスン侯爵の方が上なのだが、どう言う訳かライアンナル伯爵には素直に従っていた。

「リカルド様。私もヴィールング殿とヴィクター公爵の意見に賛成です」

モリスン侯爵も賛成で良いですね？とライアンナル伯爵は訊ねると、モリスン侯爵は仕方無いと頷いた。

「大佐。そなたはどうだ？」

フィリップ男爵と向き合う形で座っているフォース・リーコンの指揮官である大佐にリカルドは訊ねた。

「私も賛成です。残念ながら、私の部下達も先の戦いで疲労困憊しており直ぐには動けません」

大佐は悔しそうに顔を歪めて言った。

「分かった。では、ここは時間を置いて兵たちの英気を養い準備に注ぐ。良いな？」

リカルドは皆を見まわして訊ねた。

皆は頷き、決定した。

第百章：口が辛い女

夜警が終わった次の日から私達はここで育った馬に乗り訓練を始めた。

馬に乗るのは初めてではないが、山道を走ったりするのは初めてだ。

山道は斜面の上、岩や木など障害物が多い。

それらの障害物を潜り抜けて馬を走らせたり、馬に乗ったまま銃を撃つのは至難の技だった。

私の場合はボルトアクション式なので更に難しい。

モーゼル以外にもベレッタとＡＫＳ－７４Ｕを撃つが、どちらもやはり難しい事に変わりはない。

しかも、的は動いて時に後ろや頭上から出て来るからそれに瞬時に狙いを定めて仕留めるなど至難の技だ。

ライフルを撃ちつつ馬の手綱をコントロールしなければならないのもまた追い打ちとなる。

もし、気が荒い馬なら直ぐに落馬するのだが、幸いにもここの馬は気が大人しく私の言う事を聞いてくれる。

それは他の者達も同じ事だがやはり皆、障害物に当たり落馬したり銃の反動に負ける者も居た。

立ったままや走ったままなら反動には負けないが、馬に乗って撃つというのは思った以上に難しいのだ。

しかし、テツヤ殿達は馬に乗ったままライフルを撃っている。

馬は乗り主が何をやりたいのかを既に予想し、それをし易いようにしているからああも簡単に見えるほど出来ると私は思った。

これは馬の信頼を得なければ出来ない芸当だ。

『今にして思えば、自分の馬も碌に世話をしていなかったな』

騎士は馬に乗るが、馬の世話は下男や小姓の役目だから自分達で世話などしていない。

こんな事では馬と心を通わせるなど出来る訳もない。

ああいう風にするには馬の世話は自分でして愛情を掛けなくては駄目なのだ、と今更になって私は気付いた。

「今日から君の世話は私がするよ」

私は乗っている馬に語り掛けた。

馬は私の言葉を理解したのか、了承したように鳴いた。

それから訓練を再開した。

馬に乗り続けている内に昼食の時間となったので一度、城へと戻る事になった。

私たちは演習場に行き、用意された干し草などを馬に与え自分達の食事を取った。

そこにはゲンハルト様も居るのだが・・・・・・・・・・・・

「こ、こらっ。私の髪は干し草じゃない!!止めろ!髪の毛を噛むな!?」

馬はゲンハルト様の薄毛を干し草だと思っているのか頭に齧りついてはゲンハルト様に怒られている。

だが、まったく気にした様子は見せておらずそれ所か余計に噛んでいる。

何とも滑稽だが、思わず笑える光景だ。

昼食を食べながら私は乗っていた馬の毛を撫でた。

「君とはこれから長い付き合いになるだろう。宜しく頼むよ」

馬は干し草を食べ終えて水を飲んでいたが、私の言葉を聞いて顔を上げて見つめてきた。

純粋な瞳で素朴さを持っている。

それを見つめ返しながら私はもう一度、毛を撫でてやった。

昼食を終えた後は再び訓練をやるがテツヤ殿は親衛騎士団の相手をする事で居なかった。

しかし、テツヤ殿に技を一つ決めるなど難し過ぎる。

正々堂々でも強いのに変則技を頻繁に使う相手に技を決めるなど少し酷だと思うが、それを決めれば確実に強くなれるとも思えるのは確かだ。

そんな事を思いながら私は馬を走らせてライフルの射撃を続けた。

―――――――――――――

「どうした？来ないのか？」

俺は目の前でバスター・ソードを構えるフィーナを挑発してみせた。

構えはドイツ剣術で言えばオクス――雄牛。

こいつは頭の左右どちらかに剣を構えて切っ先を牛の角のように相手の顔に向けるんだ。

如何にも切っ先を前に出す姿は攻撃旺盛と思える。

これはフィーナにも値するが、な。

「来ないのか？来ないなら俺から行くぞ」

俺は黒漆が塗られた鞘に収めていた同田貫をスラリと抜いた。

武骨一直線を地で行く刀で芸術的な評価は低いとされているが、俺にとって戦う武器に芸術的な要素を求めるの事態がナンセンスだ。

武器なんて物は人を殺してナンボだ。

だから、芸術なんて求めてはいけないんだよ。

そんな事を思いながらも柄を両手で握り正眼に構える。

正眼は剣術の基本的な５つの構え――五行の構えの中でも最も一般的な構え方だ。

こいつの特徴は残り４つの構えをスムーズにできる事と攻防共に隙が少ない事だ。

俺が正眼で構えているとフィーナは瞬きもせずに俺を見ている。

見ている、と言うよりは睨んでいると言った方が正しいが。

「美人に見られるのは嬉しいが・・・そう睨まれると萎えるぜ」

俺は挑発からふざけた口調に変えた。

こいつの性格からして挑発すれば簡単に乗る。

カルシウムが足りないが、俺にとっては実に戦い易い相手ではある。

俺の挑発を聞いたヴィルヘルムたちはゲラゲラと笑い出したが、フィーナは更に眉を顰めた。

しかし、攻撃はして来ない。

「お前さんもお気に召さないか・・・昔から女を喜ばせるのは下手なんだよな。俺」

などと言っている内にフィーナが突きを繰り出してきた。

突きは鋭い音を立てながら空を切り、俺の右眼に迫る。

俺はそれを後ろに下がり同田貫を横に振う事で突きを逸らし、一気に距離を縮めて体当たりを喰らわした。

フィーナは後ろへと後退したが、それでも足を踏ん張って耐えてみせたが俺は更に攻撃を続けた。

蹴りをお見舞いして態勢を整えさせなかった。

防戦一方に見えるフィーナだが、隙を窺っているのは明白だった。

そして僅かな隙を見るや突進して来た。

同田貫でそれを防ぐ。

刃をぶつけ合い、押し問答に入った。

「・・・相変わらず根性はあるな」

俺は間近にあるフィーナに声を掛けた。

「貴様を倒して・・・私は更に高みへと行くのだっ」

フィーナは叫ぶや否や俺に唾を吐き掛けてきた。

思わず俺は眼を背けた。

まさか、こいつが唾を吐くとは思いもしなかった。

お陰で腹に重い一撃を与えられた。

胃から食べた物が戻りそうになったが、耐えられる。

屈み込んだ俺にフィーナは締め技を掛けて来ようとしたが、俺はそれより速く態勢を整えて逆にフィーナの腕を掴み捩じり上げた。

「ぐがっ！！」

フィーナの呻き声が俺の耳に入って来るが、それでも諦めない気持ちもまた伝わって来る。

「やるようになったな。不意打ちを喰らうなんて久し振りだ」

俺は唾を拭きながら片手でフィーナの腕を掴んだまま言った。

「しかし・・・惜しかったな。後もう少しで俺に技を決められたのにな」

「だ、だが、貴様に一撃を喰らわせたぞっ」

「あぁ。そうだな。合格だ」

おめでとうと俺は言ったが、「貴様に言われても嬉しくないっ」と言われてしまった。

「まぁ、大目に見てやる。さぁ、てめぇら。団長が合格したんだぞ？てめぇらはどうなんだ？このままシュヴァルツフント達と戯れている気か？」

俺は親衛騎士団に叫べば奴等は「団長に続く！！」と叫んだ。

良い感じだな。

「ヴィルヘルム。お前の成果がやっと実を結んだな」

「はい。苦節云十年・・・手の掛る師弟たちでしたが・・・やっと、やっと、成長しました・・・・ふっくぅ・・・・・」

さも演技だと分かる位に馬鹿らしく泣いてみせるヴィルヘルム。

「お前が泣いても気色悪いぞ」

と俺が言えば、ドッと笑い声が上がって来た。

そしてフィーナを見れば、俺を下から見上げていた。

眼が合うのは当たり前だ。

「何だ？人の顔を見て。俺の色男振りに惚れたか？」

などと言ってみたが、自分でも色男なんて顔じゃないと分かってい

る。

案の定、フィーナは「どの顔で言っている」とバッサリ言い捨ててきた。

「口が辛い女だ。お前と付き合う男はその辛口に毎度付き合わされるんだろうな」

その男は身体を壊すな、と俺は言いながら煙草を取り出して銜えた。

第百一章：花言葉は求婚

史記を書いていると、私の隣で妻がこう呟いた。

「あの時は酷かったわね・・・・・・・・・・」

「確かにね。ファミレスの意味を私は知らずに持って行き、君に渡したんだから」

ファミレスとは初代国王、フォン・ベルト閣下が亡き奥方様に渡した花だ。

その事から花言葉は「求婚」とされている。

私はそれを知らずに妻に渡してしまい、妻はそれを求婚だと思ったのだ。

「それに私が貴方を好いていたからどれだけ気を引こうとしたか・・・・・・・」

それなのに貴方は一人だけに視線を向けており、他には向けていなかったと妻は語り続けた。

その横に居る妻の一人が同感だと頷き、もう横に居た妻はクスクスと笑っている。

「それでも貴方はちゃんと私を妻にしてくれたから良かったけど」

もし、妻にしてくれなかったら貴方を殺していた、などと危ない発

言をする妻に私は苦笑を浮かべた。

今、書いている史記の部分はそれに当たるから偶然なのかまたは運命なのか分からない。

そんな事を考えながら史記を書く事を再開する。

今日も馬に乗ったままライフルを撃ち続けていたが、ふとガルムが居ないなと私は思った。

何時もテツヤ殿の傍に居るガルムが居ない。

また偵察か？と思っている矢先に鹿の鳴き声が聞こえた。

「何だろう？」

レオンが私の傍に来て訊ねてきた。

「分からない。行ってみる？」

私がレオンに訊ねればレオンは頷きＳＫＳカービンのレシーバーを引いた。

私もＡＫＳ－７４Ｕのレシーバーを引き、馬の腹を蹴り悲鳴がした方向に向かった。

音を立てないように茂みの中を進んで行くに連れて、肉と骨を齧る音が強くなってきた。

そして最後の茂みを進み終えると白眼を剥いた鹿を齧る巨大な狼が

居た。

「ガルムじゃないか」

私とレオンは巨大な狼に声を掛けた。

「ん？もふぁし、ふぁふぇんばー」

「食べ終えてから言ってくれないと分からないよ」

私とレオンは嘆息しながら言うとガルムはゴクリ、と肉の塊を飲んだ。

「何だ、貴様等か」

「姿を見て居なかったけど、どうしていたんだい？」

「狩りと情報を収集していた」

「情報？偵察に行っていたのかい？」

「いいや。この近くに住む狼たちに訊いて回っていた」

「獣人の特権だね」

ガルムは獣人だから、狼などの動物たちとも対話が出来る。

これは獣人だけが出来る情報収集だと私とレオンは思った。

「あぁ。それで情報を訊いてみると、どうやらリカルドという若造

はかなり嫌われているようだ」

「反逆者だから？」

「いや。都での政に関してだ」

詳しい事はテツヤ殿と一緒に話す、と言いガルムは再び鹿を食べ始めた。

動物が動物を食べる。

私たちみたいに焼いたり蒸したりしないし皮を剥いだりもしない。

そのまま齧りつく。

その光景が余りに凄過ぎて私とレオンは急いで元来た道を辿り始めた。

あのまま最後まで見ていたら、暫く肉は食べれないと思ったからだ。

茂みを抜けて戻ると横を一風吹いた。

いや、風ではない。

風が吹いたという錯覚を覚えたのだ。

その風は赤い色だった。

横切った風を追えば赤い髪をしたガリシャが馬に跨り弓矢を握っていた。

障害物を越えて行き、馬に乗ったまま巨大な弓を構えて矢を番えて引き絞った。

上から下に向けて引き絞るのではなく、下から上に向かって引き絞っている。

あれなら木の枝などがあるこういう所ではやり易いな、と私は思いながら感心した。

そしてあの様子からして狩りをしに行くのだろう、とも思った。

「凄いね」

私は素直に凄いと口にした。

「うん。僕達も早くああなりたいね」

レオンの言葉に私は頷いた。

それから馬上に乗りライフルを撃つ練習を続けていたが、そろそろ夕方になるので今日は終わりとなった。

城へと戻ろうとした所でガリシャが戻って来た。

弓矢を握りながら手綱を握っているガリシャ。

鞍の脇には数匹の兎が逆さまになって縛られていた。

「今日の晩御飯？」

私が訊ねればガリシャは頷いた。

「今日は兎のパイだよ」

「美味しそうだね」

私が相槌を打てば、ガリシャは少し戸惑った感じになった。

何だ？

首を傾げてみせるとモゴモゴと口を動かしながらガリシャは喋り出した。

「・・・今日、・・・あの・・・・・・家に来て・・・・・」

と私に言ってきた。

何でそれだけを言うのにそんなに間をおいた上に小さな声で喋るのか分からなかった。

「だけど、オリガさんが居るから」

「お、オリガさんにはあたしが言っておいたよっ」

だから、家に来てとガリシャは強く私に言ってきた。

「でも・・・・・・・」

オリガさんの事を考えると、余り行く気がしない。

「た、偶には、あ、あああ、あたしの所へも来てよ！！」

更に声を大きくするガリシャに私は戸惑い、その力強さに些か押されて頷いてしまった。

それを見たガリシャは嬉しそうな顔になったが、顔が赤い気がした。

「熱でもあるのかい？」

私はガリシャの額に手を当ててみた。

ボンッ

ガリシャの顔が爆発して真っ赤になった。

ただ手を当てただけで、何で顔が赤くなるんだ？

「ど・・・・・・・・・・・・」

「あああ、あたしっ、さ、さ、さ、先に帰る！！」

ガリシャは馬の腹を蹴るなり私から逃げるように去って行った。

それを茫然と見送る私とレオン。

「・・・何なんだろうね？」

「・・・分からないね」

私とレオンは未だに経験不足からか、彼女の行動が理解できずにいた。

暫く呆然としていたが、気を取り直して城へと戻る。

レオンと別れた私はオリガさんの家に帰った。

馬は近くの馬小屋に預けた。

そこで夕食と水を与えた。

「明日、毛繕いをして上げるよ」

馬は分かった、と鳴いて夕食を始めた。

オリガさんの家に行くとオリガさんが外出準備をしていた。

「出掛けるんですか？」

私が訊ねれば「ミレーネ姉に呼ばれたの」とオリガさんは答えた。

「ガリシャちゃんの家に行くんでしょ？だから、私も出掛けるの」

一人で食事は味気ないからね、とオリガさんは言ってくれたが私は少し罪悪感に襲われた。

「すいません・・・」

「謝らなくて良いのよ。ガリシャちゃんも貴方の気を引きたいからね」

オリガさんは何処か面白そうな口調で断言してみせた。

「ガリシャが？」

「えぇ。因みに私が知る限り貴方の気を取りたいと思っている相手は二人。一人はガリシャちゃん。もう一人は貴方を何時も遠目から見ているわ」

遠目から見ている？

「スナイパーですか？」

などと呆けた返答をする私にオリガさんは苦笑しながら「鈍い人ね」と言ってきた。

「努力します」

苦しい言い訳だが、そうとしか私は言えなかった。

「そうしなさい。じゃあ、私は先に行くわ」

ドアの鍵は掛けて置いて、とオリガさんは言い残すと家を後にしようとしたが、振り返ると私にこう言った。

「女の子の家に行くんだから花くらいは持って行かないと駄目よ？」

「花、ですか？」

こんな寒い季節に花が咲いているのか？と思う私を尻目にオリガさ

んは出て行ってしまった。

残された私は先に湯に浸かってからガリシャの家に向かう事にした。

ガリシャの家に行く途中で、道端に埋まっている花が眼に止まった。

「冬なのに咲いているんだ」

花の色は紫色。

不吉な色を意味しており殆ど首都には来ない花だから名前は知らない。

だが、不吉な色などとは思えなかった。

寧ろ・・・とても綺麗な花だ、と思う。

私は手折る事に躊躇いを感じて、急いで家へと戻り空いている鉢を持って来て土ごと鉢に移した。

それを持ってガリシャの家まで行き、ドアの前でコンコンと叩いた。

「ランドルフです。開けて下さい」

すると、「あたしが行くっ」とガリシャの大声と走って来る音が聞こえてきた。

なぜ、そんなに急ぐのかは不明だ。

そしてドアが開いた。

「い、い、・・・い、いらっしゃい・・・・・・・」

ガリシャは視線を僅かに下に向けながらもチラチラと私を見ている。

「スカート姿は初めて見るね」

私はガリシャのスカート姿を初めて見た。

ガリシャはロングスカート姿でズボン姿ではない。

それが妙に新鮮で癖っ毛のある髪も艶がある。

櫛で梳かしたんだ、と直ぐに分かった。

顔も僅かに化粧しているのが分かり、こちらも新鮮な印象を受けた。

「に、似合う、かな？」

ガリシャはスカートの裾を摘んで訊いてきた。

「似合うと思うよ。何時もとは違う面が見えて新鮮だ」

もう少しマシな言葉を言えないのか？と我ながら思う。

しかし、ガリシャは嬉しそうだったから良いと思い直し持って来た鉢を渡した。

「こ、これは？！」

ガリシャは私の渡した鉢の中にある花を見て驚愕した。

「道端で見つけたんだ。手折るのは嫌だったから土ごと持って来たんだけど、それがどうかし・・・・」

「あ、あああああ、あたしは、まだこ、心の準備が！！で、・・・・・・・でも、あ、あんたとなら・・・・・・・・その・・・・・・・・・・」

最後はまったく聞き取れない声でモゴモゴと喋るガリシャに私は首を傾げるしか出来なかった。

そして私は最後まで言えなかった。

ただ1輪の花を渡しただけで、どうしてそうまでなるんだ？

そんな私を尻目にガリシャは鉢を大事そうに持ち私を中に入れてくれた。

中に入ると軍曹とヘンさんが居た。

どうやら二人はここに居候させて貰っているらしい。

「よぉ、ランドルフ。あの黒髪が似合う姉ちゃんは一緒じゃないのか？」

「えぇ。テツヤ殿の家に行きました」

「何だよー。お前は来なくて良いから、あっちの姉ちゃんに来て欲しかったぜ」

「おい、イーグル。そんな風に言うなよ」

ヘンさんが軍曹を軽く窘めた。

「いらっしゃい。ランドルフ君」

ロンガーム殿の妻であるレイリア様が私に話し掛けてきた。

「こんばんは。レイリア殿。相変わらず美しくて何よりです」

「ふふふふ。ありがとうございます。それはそうと、その花はファミレスですね」

ガリシャの持つ花を指差すレイリア殿。

「ファミレスと言うんですか。この花は」

私は初めて聞く花の名前だと思ったが、ここでは常識らしい。

「フォン・ベルト閣下はこの花を奥方様に差し出して求婚したのですよ」

そして奥方様が亡き後はその花を墓前に捧げ続けた、と言う。

だから、ガリシャがあんなに驚いていたのかと今更になって気が付いた。

「そうなんですか?私は知らなかったので・・・・・・・・・・・・」

「ここ以外の地方でもフォン・ベルト閣下が居た頃の習わしなどは残っているが、首都には無いのか？」

ロンガーム殿が私に訊ねてきたので「私が知る限りは無いです」と答えた。

「哀しい事よ。初代国王が居た頃の習わしが首都に無いとは」

仰る通りです、と私は相槌を打った。

「だが、ここに首都が戻ればそれも無くなる」

何れここに首都が戻る、とロンガーム殿は断言した。

何故かは知らないが、そんな予感が私にもした。

第百二章：初めての手料理

夕食はガリシャが獲った兎のパイだった。

とは言っても兎自体の身体が小さいから大きな料理ではない。

特にここは大家族だから兎丸ごと1匹を一人に振り分ける事は出来ない。

身体の一部をそれぞれの皿に盛り、そこへ野菜などを添えるのだ。

私は兎のパイをナイフとフォークで切り分けて一口食べてみた。

「あ、あたしの、て、手料理だけど・・・ど、どうかな？」

ガリシャは私にチラチラと視線を向けながら控え目に訊いてきた。

中がまだ完全に焼かれていない気がした。

これは・・・正直に言った方が良いだろうか？

それとも敢えて美味いと言うべきだろうか？

自問自答をしている私にロンガーム殿が「正直に言ってくれ。初めて料理をしたので恐らく下手だろう。ここで辛口に評価してくれ」と言ってきた。

実の孫なのに、しかもこれだけ大勢の人たちが居る前で良くもまぁ言えるな、と変に感心しながら私は感想を述べた。

私以外は手を付けていないから必然と私だけが評価する事になる。

「・・・中身がまだ焼けてないよ」

「え?嘘っ」

ガリシャは自分でも食べてみたが、直ぐに「これ位なら大丈夫でしょ?」と開き直った。

だが、そこにロンガーム殿の拳骨が落ちた。

「人様に出す料理なのに、そのような事を言う娘が居るか」

情け容赦なくロンガーム殿はガリシャを叱り付けるロンガーム殿は更に追い打ちを掛けた。

「まったく・・・そんな事ではランドルフ君の妻になれんぞ?」

「!!」

ガリシャは私を見つめた。

「ランドルフ君よ。そなた、オリガさんという女性と住んでおるのだろ?」

ロンガーム殿が私に訊いてきた。

「えぇ。まぁ」

「料理はオリガさんが作るのかな？」

「ですね。まぁ、私も手伝い位はしますが」

「では訊くが、炊事洗濯ができる女性と何一つ出来ない女性。どちらが好みだ？」

「そりゃ・・・炊事洗濯ができる女性の方が・・・好み、ですけど・・・・」

縋りつくようにガリシャは私を見つめて来る。

しかも、涙眼であるため余計に強烈で、視線を外さないから言い難い感じだった。

それでもちゃんと答えたが。

「どうだ？ガリシャ。何一つ出来ないお前ではランドルフ君を仕留め切れんぞ？」

ロンガーム殿はこれ見よがしにガリシャに語り掛けた。

「ま、まだ時間はあるもん！これから覚える！？」

ガリシャは声を荒げると私に詰め寄って来た。

「ランドルフ。あたし、頑張るから。頑張って炊事洗濯を覚えるから！！」

「べ、別に私の為に覚えなくても・・・・・・・」

というかなぜ、私の為に覚えるのだと思うのだが・・・・・・・・

「あんたの為に覚えるの！それで良いの！！分かった?!」

ゴォ！！、とまるでドラゴンの息吹を浴びせるように怒気を孕んで喋り続けるガリシャに私は頷くしか出来なかった。

だが、何で私の為にそこまでするのかは不明だ。

「・・・ここまで鈍感な奴は居ないな」

「まったくだ。これじゃ先が思いやられるぜ」

「まぁ、若いんだ。これから学んで行くさ」

軍曹達は何やら話し合っていたが、うんうん、と自分達の中で納得していた。

夕食の後は軍曹達と一緒に風呂に入った。

「はー。良い湯だ」

軍曹は湯船に浸かりながら外を眺めた。

「最初は辺鄙な場所だと思っていたが、良い場所だな」

攻めるにしても守るにしてもここは良い場所だ、と軍曹は言い「住めば都と言うが、本当にそうだな」と独り言を漏らした。

「しかし、ここが首都だったと言うがどうやって街を築いたんだろうな？」

ヘンさんが疑問を口にした。

確かに、ここは攻守のバランスが取れた場所ではあるが政や交通面を考えると疑問だ。

「さぁな。だが、もしここに首都が移るなら俺たちで前以上に良い都にしないとな」

獅子頭軍団の方が言った言葉に私たちは頷いた。

「それはそうと姐御とワイドはどうしてるかな？」

「どうとは？」

私には分からない事なのでそれを訊ねた。

「知らないのか？姐御とワイドは同居してるんだぞ」

え！！

ミーシャ大尉とワイド中尉が同居！！

信じられない言葉に私は言葉を失った。

「まぁ、俺も最初こそ驚いた。どうしてあの二人が？と思うぜ」

しかし、女と男と言うのはちょっとした事でくっ付いたり離れたり

するもんだ、と軍曹は断言してみせた。

「だが、あの男勝りな姐御の事だ。・・・今頃、ワイドは泣かされてるだろうな」

色々、と軍曹は含みのある声で言って私たちも想像したが・・・・・・

『確かに』

と口を揃えて断言した。

こんな所をミーシャ大尉に見られたら全員、玉を潰されるだろうな・・・・・・・・・

などと私は思いながら湯船で顔を洗った。

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

私は小さな台所で食べ終えた食器を鼻歌交じりに歌うミーシャの背中を眺めていた。

今、私はミーシャと共に住んでいる。

建物は我々の為に作られた家の内の１つでどう言う訳かミーシャから「あたしの家に来な」と言われて来たのだ。

正確に言えば「首根っこを掴まれた上に拳銃を腹に向けられて連れて来られた」のだが・・・・・・・・・・

だが、別に嫌な気持ちはない。

ミーシャは良い女性だ、と思う。

初めこそ「男勝りな女」と思っていたが、炊事洗濯は出来るし細かい所にも眼が利く。

髪こそ短く切っているが、艶があり長くすれば綺麗な髪になるだろう。

そのミーシャの背中は逞しい背中だ。

訊けば軍人家計の家なので否応なく軍人として育てられたようだ。

その為、ああいう体格と性格になったらしい。

それでも母君が「将来の為に」と言う事で密かに教えたため炊事洗濯は出来ると教えられた。

名も知らないし顔も知らない母君に感謝する。

もし、それが無ければ本当に男だと思ってしまう。

「はー。終わった」

ミーシャは食器を台の上に置くと手ぬぐいで手を拭きながらこちらに歩み寄って来た。

白いエプロン姿のミーシャは最初こそ・・・失礼だが違和感があり過ぎた。

お陰で殴られるし蹴られるは当たり前だった。

まぁ、今ではそれはないが。

ミーシャは私と向き合うように腰を降ろすと果実酒をグラスに注いだ。

「ねぇ、ワイド」

男口調から何処か女性らしい口調に変わった。

何時もなら「なぁ」とか「おい」とかなのだが、何故か私と2人だけの時はこういう口調になるのだ。

「何だ？」

「城で壁にぶつかったけど・・・大丈夫？」

「瘤は出来たがそれ程でもない」

私は城で頭に瘤を作った。

レオン・ルソー2等兵の連れであるレイテという女性の子であるローズがミーシャに「お姉ちゃん」と言ったのが原因もとい理由だ。

どうやらミーシャは今まで男として見られていたらしく、最初から

女として見たのはローズだけだったらしい。

これが嬉しかったのか半狂乱となり私とヘンを回して壁にぶつけた・・・・・・・・・・

それをミーシャは気にしているのだ。

「そう・・・ごめん」

ミーシャは安堵した表情になった。

その表情が実に女性らしいと思う。

「私の顔に何か付いてるの？」

ミーシャがマジマジと見つめる私に問い掛けてきた。

「い、いや・・・女性らしい表情が・・・・・・・・・」

最後まで言う前に私は自分で爆弾を投下した、と自覚した。

「・・・・女性・・・“らしい”だって・・・・・・・・・」

ミーシャの身体がプルプル、と震え始めた。

ま、不味い・・・・・・・・

「あ、い、いや・・・・・そ、そうでは・・・・・・・・・」

「・・・・・・んの・・・・・・・・馬鹿が！！」

「ぐべぇ！！」

私はミーシャの強烈な右パンチを諸に顔面に喰らい後ろに倒れた。

そこへミーシャがテーブルを持ち上げて・・・・・・・・・・・・

「よ、止せ！ミーシャ！？」

「こっの・・・浮気者！！」

どうして浮気者、などという言葉が出て来るのかは不明だった。

だが、確実な事はただ一つ。

ミーシャの前で女性「らしい」などという言葉は二度と言ってはいけない事。

そしてその日、私は素っ裸で雪が降る寒い外に放り出されたという真実だ。

第百三章：あたしの獲物

風呂から上がった私は家に帰ろうとしたが、ガリシャが「今日は泊って」と服の裾を掴んで止めてきた。

「でも・・・・・・」

「今日くらい・・・あたしの傍に居てよ」

何処か切なそうな声と儚げな顔で言うガリシャ。

いつもは元気で勝ち気な色を宿した緑色の瞳だが、今日は潤んでいる。

やけに今日は調子が違うな、と頭の片隅で思う。

ガリシャはもう一度、同じ言葉を言って私を引き止めようとした。

それでも私は断ろうとした。

「おい、ランドルフ。その度が過ぎる鈍感はこの際大目に見てやる」

軍曹が燃える女を吸いながら私に話し掛けてきた。

「私って、そんなに鈍感なんですか？」

まったく分からない私は軍曹に訊ねた。

すると軍曹はこう答えた。

「それを人に訊く時点で鈍感だ。もし、鈍感王ランキング、なんて物があればお前は断トツで1位になれるぞ」

そんなランキングは聞いた事が無いが、もしあるなら私は周囲を越えて1位になれるようだ。

1位になって嬉しくも何ともない。

逆に酷く恥ずかしい1位だと思う。

「お前さんがあの姉ちゃんを想って帰ろうとするのは理解できるが、目の前に居る女の頼みも聞いてやれ」

さもないと後ろからズブッ、と刺されるぞと更に続ける軍曹。

「は、はぁ・・・・・」

私は何とも言えなかった。

先ほどの言葉は寧ろ軍曹がそんな目に遭う気がする。

その間もガリシャは私の服を掴んで離さない。

振り解こうと思えば振り解けるだろうが、それをやると私は自分が嫌になる気がした。

それにガリシャとの仲も悪くなる、と思い「分かったよ」と頷いた。

ガリシャはそれを聞くと満足そうな顔を浮かべた。

先ほどの儚げな顔は嘘のように消えている。

女性とはどうしてこうも表情が簡単に変わるのだろう？と思わずにはいられなかった。

まぁ、そんなこんなでロンガーム殿の家に泊る事になった。

そして現在、私はガリシャと同じ部屋に居る。

私が以前、使っていた部屋は獅子頭軍団の方が使用しているので使えない。

他の部屋も同様だ、と言われた。

では私は何処に？と思ったのだがガリシャが「あたしの部屋で寝て良いよ」と言ってきた。

ある意味、爆弾発言だ。

いや、爆弾発言に変わりはないがそれより更に強力な爆弾発言だ。

幾ら私でもこの発言には面食らった。

しかし、直ぐに断った。

「未婚の女性と、しかも付き合ってないのに一緒の部屋に寝る何て出来ないよ」

「じゃあ、何処で寝るの？」

「床がある所なら何処でも寝れるよ。それか軍曹達と相部屋で・・・・・・」

『断る』

私の提案は軍曹達から即刻、拒否された。

「誰が好き好んで野郎と同部屋なんてするか」

「悪いな。ランドルフ君。流石に俺もこればかりは断らせてもらうよ」

軍曹は本能的とも言える感じで断りヘンさんは申し訳なさそうに断った。

獅子頭軍団の方もヘンさんと同様に断って来た。

では、リビングにでもと更に提案するがロンガーム殿がこれを拒否した。

「大事な客人をそんな所に寝させられるか」

これではどうしようもない、と私は頭を悩ませた。

何とかガリシャと違う部屋に寝れないだろうか？

「・・・駄目なの？」

と涙声でガリシャに言われた。

「い、いや・・・駄目とかそういう以前にだね・・・・・・」

泣き止まない子供を諭す父親のように私はガリシャを説得しようと試みたが駄目だった。

揚句の果てに軍曹達から「女を泣かせるのは男として最低だ」とまで言われてしまった。

不本意ながらもこんな事を言われては寝るしかない。

そして現在、ガリシャの部屋に居るのだ。

ガリシャの部屋は2階にある。

窓と簡素なベッドにテーブルと椅子など必要最低限の物しかない。

人形や本などは一つも無く、花なども無いから女性らしさがまるで感じられない。

だが、香は良かった。

ガリシャは薄い寝巻姿でベッドに腰を降ろしている。

私の方は椅子に座って煙草を吸っている。

以前なら女性と二人だけで寝るなど緊張していただろうが、やはりオリガさんとの生活で免疫が付いたのかまったく何時も通りだ。

ガリシャは先ほど風呂から上がったばかりなので、髪などはまだ濡

れている。

頬は蒸気しており何処となく赤い。

それに薄い寝巻姿だから、その・・・あの・・・身体の線などが鮮明に出ているから些か目のやり場に困る。

同年代の女性の体格がどんな物か知らないが、ガリシャは少なくとも同年代の女性から見れば「良い」と映る体格とだけは言える。

蒸気した顔で私を見つめて来るガリシャは何となくだが・・・可愛い、と思う。

「そ、そろそろ、ね、寝る？」

緊張した声でガリシャは私に訊ねてきた。

やはり抵抗があるのだろう、と思い別な部屋で寝ようと思い立ったが、それを言った所でガリシャは駄目と言うだろうし、先ほど寝ると言ってしまった以上は覆せないと思い敢えて言わなかった。

その代わりガリシャの問いに答えた。

「それも良いね」

私は頷き、椅子をテーブルに戻して床に腰を降ろそうとした。

「な、何でベッドじゃないのさっ」

ここでガリシャが何処か咎める口調で言ってきた。

「一緒の部屋では寝るけど、同じベッドで寝る訳にはいかないだろ？」

私は同じ部屋で寝る、とは言ったが同じベッドで寝るとまでは言っていない。

だから、これ位は良いだろうと勝手に思う。

「あ、あたしはっ、別に・・・良いんだよっ」

ガリシャは私の意図が読めたのか更に口調を強くして言った。

「君が良くても私が駄目なんだよ」

「ど、どうして・・・・・・？」

「どうしても」

理由になってない、とガリシャは言ってきたが私はそれに答えず蝋燭を勝手に消して寝る事にした。

そうでもしないとガリシャは理由を聞いて納得するまで喋り続けると思ったからだ。

床はゴツゴツしているが、慣れれば何でもない。

毛布に包まりベレッタを枕の下に入れてモーゼルを直ぐ傍に置き眼を閉じる。

だが、モゾモゾとガリシャが動いて中々、寝付けないがそれを言わないで眠る事に時間を費やした。

―　―　―　―　―　―　―　―

あたしはベッドの中で必死に眠るようにした。

でも、意識は冴えていて眼を瞑っても寝付けない。

理由は解かる。

直ぐ隣の・・・床の上で寝息を立てるランドルフ。

食事を終えたランドルフは家に帰ろうとした。

家に帰ればオリガさんが居る。

そしてい、い、い、一緒に、べ、べ、ベッドで、あの・・・その・・・す、する訳で、それがあたしには嫌だった。

だから、一世一代の勇気を出して自分の部屋で寝ようと言った。

あたしは同じベッドで寝る積りだった。

それなのにこいつは床で寝ている。

何だか無性に馬鹿にされた気分だった。

あたしが精一杯・・・自分を見せているのに、こいつはまったく気付こうとしない。

どうやったら、そこまで気付かないんだ?と思えるほど鈍過ぎる。

差し詰め、目の前まで近付いたのに気付かない獲物と一緒。

憂さ晴らしに一発、殴りたいほど鈍い男。

でも、そんなランドルフがあたしは・・・・・・・・・・・・・・・

好き。

何時からこんな気持ちになったのかは分からない。

ただ、好きなのは確か。

だから、必死に自分を見てくれるように努力した。

それなのにこいつは気付かない。

今も寝ているのが良い証拠。

自分で言うのも何だけど、あたしは女として・・・身体付きは・・・良いと思う。

ここに住む同年代の友達からも「羨ましい位、良い身体」と言われていたから自信はあったけど男から見たらどうなのかは分からなかった。

あの見るからに軽薄そうなイーグルとか言うおっさんはあたしの身体を「最高の肉だ」と言った。

嬉しい所か、あんな軽薄そうなおっさんに言われると嫌悪感で一杯になった。

だけど、それだけの身体ならランドルフもあたしを・・・抱いてくれると思った。

でも、まったくそんな素振りは見せない。

オリガさんには敵わないの？と弱気になったが、まだ時間はある。

これからランドルフにあたしという女の良さを教え込んで追いかけて物にしてやるんだ。

こいつはあたしの獲物だ。

誰にも渡したりしない。

それを決意すると、どういう訳か眠くなった。

あたしは寝る前に暗い地面を見た。

ランドルフは天井を見上げる形で寝ている。

「・・・お休み。ランドルフ」

あたしは眠るランドルフにお休みと言って自分も寝た。

第百四章：城と会議

翌日、私はガリシャより先に目を覚ました。

ガリシャはまだ寝ている。

彼女を起こさないように身繕いをして部屋を出て階段を下り始めた。

1階に下りると既にロンガーム殿とレイリア殿が居て共に茶を飲んでいた。

「おはよう。ランドルフ君」

「おはようございます」

私は二人に挨拶をした。

「で、どうだったかな？昨夜は？」

「別に特に何もありませんが？」

何だか変な意味が含まれていたが気にせず答えた。

「何？ガリシャに指一本触れていないのか？」

「当たり前です。私は軍曹みたいな方ではありません」

些かピキッ、と来る台詞だったので思わず強い口調で言い返してしまった。

「貴方。ランドルフ君は誠実な方なのですよ。その言い方は余りに失礼です」

ロンガーム殿を窘めるレイリア殿。

「しかしな、レイリアよ。ガリシャは祖父のわしから見ても良い女子だ。それなのに何もせんのは・・・・・・・・・・」

「それだけランドルフ君は誠実なのです。貴方はもう少し物事を考えてから喋り行動して下さい」

レイリア殿はロンガーム殿に説教を続けた。

ロンガーム殿はレイリア殿を愛して止まないと言っていた。

だから、レイリア殿の説教を甘んじてもとい聞き続けるしか出来ない。

私は何となく入らない方が良いと思い、「帰ります」とだけ言い残して家を出て行った。

雪が積もった道を歩きながら煙草を取り出して銜えた。

マッチで火を点けて煙を肺に入れてから吐き出した。

「やっぱり良い味だな」

女神の抱擁を吸いながら私はオリガさんの家へ向かい歩き続ける。

オリガさんの家に着いたが、鍵は掛っておりまだ帰って来ていないんだと分かった。

私はテツヤ殿の家へと向かった。

テツヤ殿の家に向かい、ドアを叩いた。

するとドア越しに「誰だ？」とテツヤ殿の声が返って来た。

「ランドルフです」

「入れ」

私はドアを開けて中に入った。

中に入るとテツヤ殿を囲む様にして麗しい女性陣が座っていた。

ミレーネ様、メジュリーヌさん、リーザ中尉、そしてオリガさんだ。

「やっぱり当たったな」

テツヤ殿は私を見て呟いた。

「何が当たったんですか？」

「お前は朝、ここに来るという予想だ」

何でもオリガさんは昨夜の内に「ランドルフ君はここに来ます」と断言したらしい。

何で分かったんですか？と訊ねれば「貴方の事は隅々まで知っているからよ」と言われてしまった。

「それよりこれから朝飯だが、食べるか？」

「はい。頂きます」

私はテーブルに腰を降ろして朝食を頂く事にした。

朝食を始めるとテツヤ殿は「会議を開く」と私に告げた。

「ガルムの事ですね？」

私が訊ねればテツヤ殿は頷いた。

朝食を食べた後、私とテツヤ殿、リーザ中尉、メジュリーヌさんは城へと向かう事になった。

ミレーネ様はテツヤ殿に「行ってらっしゃい。寂しがり屋さん」と言って頬にキスをした。

私はオリガさんを見た。

「おねだり？」

オリガさんは何処かふざけた口調で訊いてきた。

私が頷けばオリガさんの唇が私の頬に近付いて来て・・・・・・・・・・

チュッ

小さな、しかし温かい感覚が頬に来た。

「行ってらっしゃい。私の天使さん」

「行ってきます」

私は一気に疲れた吹き飛んだ。

そして城へと向かう。

残りのメンバーは無線で連絡を取り城で落ち合う事になった。

「で、昨日はお嬢ちゃんとどうだったんだ？」

テツヤ殿が煙草を吸いながら私に訊ねてきた。

「はい。実は・・・・・・・・・」

私は全てを話した。

最後まで聞き終えたテツヤ殿は「お嬢ちゃんも憐れだな」と一言だけ漏らした。

それがどういう意味なのか、訊こうとしたが自分で考えろとこの前言われたのを思い出し自分で考えるしかない。

とは言っても答えは見つかる筈も無かった。

そして気が付けば城に到着して会議室に来ていた。

会議室はまだ誰も居なかった。

私は皆が来るまで壁に背を預けて待つ。

それから暫くしてレオン、プロイセン様とゲンハルト様、要らない荷物が来た。

ヴィルヘルム元伯爵は居ない。

「ヴィルヘルムはどうした？」

テツヤ殿が要らない荷物に訊ねた。

「・・・・ヴィルヘルム、師匠は、私に命令した」

自分が行って会議でヴィルヘルム元伯爵の案を言いつつ自分の案も言って結果を報告しろ、と命令されたらしい。

これを聞けばある意味では弟子を成長させる為に送り出すと見える。

だが、別の視点から見れば要は面倒だから弟子を行かせる・・・・使い走りにされただけと思える。

「お前も大変だな。あんな男を師に持って」

まったく感情が込められていない口調ながらテツヤ殿は要らない荷物を慰めた。

だが、最早この女の十八番とも言える行動を取った。

「貴様に慰められるなど気色悪い」

「相変わらず辛口だな。そんな辛口だと男は逃げるぞ？」

「ふんっ。この程度で逃げる男など私は欲しくない」

こう言えばああ言うといった感じだった。

それからまた暫くしてリーザ中尉、軍曹、ミーシャ大尉とエドリアス大尉、ヘンさん、ワイド中尉が入って来て最後にガリシャが怒った顔で入って来た。

緑色の瞳は憤怒に燃えており、その矛先は言うまでも無く私に向いている。

「何で、あたしに何も言わず帰るのよ！！」

「い、いや・・・あ、あまりに可愛い寝顔で、起こすのも忍びないと思ってね」

だから、起こさないで帰ったんだよ、と私は努めて冷静で説得する声でガリシャに説明した。

可愛い寝顔、と言われたガリシャは一気に顔を赤く染めた。

「・・・・・・・・・」

ガリシャは聞こえない位、小さな声で何かを喋っていたが直ぐ私を

見た。

「・・・こ、今度は、・・・・・ちゃんと、挨拶してから帰ってよっ」

「分かったよ」

どう言う訳か怒りが治まって来たので安堵しながらもそれは表さずに私は頷いた。

そしてふと、ワイド中尉を見た。

ワイド中尉は何処か顔が赤かった。

「風邪でも引いたか？」

テツヤ殿が訊ねればワイド中尉は「一晩中・・・外に放り出された」とだけ答えた。

それだけで何となく私は理解できた。

『・・・泣かされたんだ』

何か言ってはいけない事をワイド中尉はミーシャ大尉の前で口にした為に・・・素っ裸であの寒い中、外に放り出されたのだろう。

よくもまぁ、それで生きてられると思うし同情するが助けたりはしない。

誰だって自分の身は可愛い物だ。

大尉に逆らうような命知らずな真似は私には出来ない。

心の中でワイド中尉に謝罪した。

皆が揃った所でテツヤ殿は会議を始めた。

「先ずガルムが得た情報を話そう」

テツヤ殿はガルムが話した情報を皆に教えた。

それによると首都ではリカルド様は重税と反乱分子の摘発をしておりそれが民達を苦しませているらしい。

「だが、これは恐らく蛇の仕業と見て良いだろう」

蛇とはライアンナル伯爵の事で、皆は知っている。

テツヤ殿は要らない荷物を見て「お前はどうだ？」と訊ねると要らない荷物は「・・・同感だ」と答えた。

「その他に分かった事は貴族たちが続々とリカルドに味方し始めている、という事だ」

テツヤ殿は煙草を銜えながら言った。

「その中には私の“元”部下も居るのだろうな」

ゲンハルト様がポツリと呟いた。

「情けない物だ。お前に大口を叩いてみせたのに、実際は部下達の掌で踊らされていたのだからな」

自嘲気味に笑うゲンハルト様。

しかし、直ぐに消して「だが、今度は私が奴等を息も絶え絶えになるまで踊らせてやる」と言ってみせた。

「頼もしい言葉だ」

テツヤ殿は愉快そうに笑いながらプロイセン様とゲンハルト様に煙草を差し出した。

二人はそれを銜えて火を点けて吐き出した。

「それでテツヤよ。その他に分かった事は何だ?」

「その他に分かった事は、敵はまたここを攻めるという事だ」

どうやら敵はまたここを攻めるようだが、この前以上に時間を掛けて準備を万端にすると言う。

「なるほど。では、こちらも前以上に奴等に損害を出す為に策を練らねばならないな」

ゲンハルト様は右手の人差指と中指で煙草を挟むと口から離して煙を吐いてみせた。

何だか骸骨が白い煙を吐いているようにしか見えない。

それが何だか可笑しくてレオンと共に笑いを必死に抑えた。

「その通り。前の手は通用しないと考えて良いだろう」

今度はワイバーンを先に繰り出す筈だ、とテツヤ殿は言いではどうするか？と続けた。

「メジュリーヌ。ワイバーンはここまで来るのに休んだり、食事をしたりするのか？」

「この程度の距離なら問題ない。ただし、夜は完全に無防備じゃ」

そこを突くしか無い、とメジュリーヌさんは言った。

「そうか」

テツヤ殿は相槌を打つと煙を吐いた。

それから会議は続き、あれこれ案が出ては消えたり出たりした。

私とレオンも案を出させてもらい、会議に参加した。

数時間ほど経過したので「一息入れる」とテツヤ殿は言い休憩を挟む事にした。

メジュリーヌさんが用意してくれたコーヒーを皆で飲みながら息を吐く。

「それにしてもまさかミーシャとワイドが同居しているとは驚きだ」

テツヤ殿はコーヒーを片手にミーシャ大尉とワイド中尉を見た。

「俺もです。どうして姐御とあんたが同居しているんだ?」

軍曹がワイド中尉に訊ねるとワイド中尉は言葉を濁した。

それに対してミーシャ大尉は「あんたに教える義務は無い」とバッサリ言い捨てた。

そして軍曹に「ここでは節操を守っているのか?」と訊ねてきた。

「俺の辞書に節操という言葉なんて無い!!」

と軍曹は大声で断言した。

それを聞いたミーシャ大尉にぶん殴られて鼻血を出したのは言わなくても分かるだろう。

「そなたは学習能力が無いのか?」

ゲンハルト様が軍曹を呆れた眼差しで見つめる。

「うるせぇ!あんただってイザベルちゃんの尻に敷かれている癖に!!」

「ばっ・・・馬鹿を申せ!誰があんな暴力女の尻に敷かれているか!?逆に私が尻に敷いているのだ!!」

ゲンハルト様は激昂して怒鳴り返したが、嘘だと私たちは確信している。

ゲンハルト様はイザベルさんの尻に敷かれている。
これは確信している。

「その割には腰が痛いと先ほど申していたではないか？」

プロイセン様がニヤニヤと笑いながらゲンハルト様が言っていた言葉を漏らす。

「あ、あれはイザベルが昨夜は激しくてだな・・・・・・」

「くー羨ましい！！どうしてあんたみたいな骨と皮で禿げ親父に美女が居て俺には居ないんだよー！？」

軍曹はゲンハルト様の惚気話とも取れる言葉に涙を流しながら怒った。

「誰が禿げ親父だ！！まだ髪の毛はある！？」

「そんな髪の毛無い方が良いんだよ！！」

「何だと！！この軽薄な男が！？」

「軽薄じゃねぇ！！」

違う、違わないと互いに言い合いを始める二人。

子供の喧嘩だ。

「ゲンハルト様って、誰とでも子供みたいな喧嘩をするよね？」

「だよね。というか、それ以上の喧嘩が出来ないんじゃないのかな？」

私とレオンはコーヒーを飲みながらゲンハルト様の事について話しをして時間を潰した。

その一方でヘンさんとエドリアス大尉はプロイセン様と話をしてミーシャ大尉とワイド中尉と話をしている。

テツヤ殿はメジュリーヌさんとリーザ中尉と話をしており要らない荷物だけが一人だけ蚊帳の外だ。

しかし、視線はテツヤ殿に注がれていたのを私は知らなかった。

幕間：親衛騎士団の独白2

私は・・・・・・何故か知らないが・・・・・・一人の男に視線を注いでいた。

黒髪に黒眼の地味な容姿に思えるが、見る者を惹き付けて止まない力がある。

私より8つも年上の男で職業は傭兵。

名は・・・・・タカミ・・・・・・・テツヤ・・・・・・・・・・・・

見た目は醜いが、何故か私は眼を離せなかった。

以前なら見るのも憚る男であり話さえもしたくなかったのに、どういう訳か最近は話をするようになった。

私はつい先日、この男と戦った。

一対一で戦った。

こいつはカタナ、と呼ばれる刀剣を手にしていた。

名はドウダヌキと呼ばれているらしく実戦向けに作られたらしく、通常の物より重いらしい。

確かに見る限り武骨で田舎臭い代物だった。

何の飾りも無い。

それは鞘も同じでただ黒く塗られただけだ。

こいつの性格をそのまま表したような武器だ、と思いながら私はバスター・ソードを構えた。

奴はドウダヌキを鞘に収めて私を挑発してきたが、ここで攻めては奴の手の内に入る事になるから我慢した。

今にも斬り掛りそうな腕を抑えるのにかなり精神を使ったが。

私が耐えてみせると奴は自分から攻めてきた。

ドウダヌキを抜いて中段に構えた。

剣先は私の眼に当てている。

私はそれを逸らさずに見続ける。

『美人に見られるのは嬉しいが・・・そう睨まれると萎えるぜ』

奴は挑発の口調から馬鹿にするような口調に変わった。

それを聞いたヴィルヘルム・・・師匠たちは笑い出したが私は更に眉を顰めた。

これだから皺が出来て老婆になるなどと奴に言われるのだ、と思いながらも剣は構え続ける。

それを見た奴はこう漏らした。

『お前さんもお気に召さないか・・・昔から女を喜ばせるのは下手なんだよな。俺』

こんな容姿でありながら女に好かれるとは驚きだ。

だが、思い返せばこの男の周りは美女が多くいる。

なぜそこまで好かれるのか私には理解できないが、今はそれ所ではない。

この男を倒し、私は更に高みへと行く。

そうする事で部下達に見本を見せるのだ！！

私はバスター・ソードの剣先を縦にして突きを繰り出した。

空を切って奴の黒い瞳に迫る。

奴は突きを後ろに下がる事で避けながら、ドウダヌキを上に上げて逸らした。

そこから私に身体を当ててきた。

肩を前に出す形でまるで、牛に突進されたように身体が宙を浮いた。

それを踏み止まったが態勢を整える時間も与えず奴は攻撃を連続で打ち込んできた。

もはや、この男の十八番とも言える汚い手を使ってきた。

殴打などは当たり前だった。

私はそれを何とか避けたり、防御しながら隙を窺い続けた。

ここは焦らず機会を待つのだ。

奴のドウダヌキが間近に迫りバスター・ソードをぶつけた。

奴の顔が間近に来た。

黒い真珠は綺麗で、汚れていない。

『・・・相変わらず根性はあるな』

ドウダヌキを押しながら奴が話し掛けてきた。

鉄が錆びたように乾いた声でしゃがれていた。

私は力負けしそうな身体を叱咤して押し返し、言い返した。

「貴様を倒して私は更に高みへと行くのだっ」

そして私は・・・・・・・・初めて汚い手を使った。

唾を吐いたのだ。

初めて戦った時、奴は私に唾を吐いて眼を瞑らせた。

それを奴に返しただけだ。

騎士としてこんな真似はしたくなかったが、こいつを倒したい一心で・・・・勝ちたいと思う一心でやった。

もし、父上が生きてここに居れば直ぐにでも殺されるだろう、と思った。

父上は・・・あの男は何時もこう口ずさんでいた。

『騎士はどんな相手だろうと正々堂々と戦うのだ。奇襲や剣以外で戦うなど言語道断。そんな奴は騎士ではない。ただの野蛮人だ！！』

この言葉を私は幼い頃から叩き込まれ、今までそれを頑なに貫いてきた。

それは刷り込みでもあった。

だが、私はそれを初めて破った。

私の唾を諸に受けた奴は案の定、眼を背けた。

そこへ膝蹴りを喰らわしてやった。

奴が前のめりになる。

絞め技を掛けようとしたが、奴は直ぐに態勢を整えて私の腕を捩じり上げてきた。

思わず悲鳴を上げるが諦めない。

ここで諦めたら、また負けだ。

嫌だ。

この男に何としても一矢報いなければ！！

必死に逃れようとする私の腕を捩じり上げながら奴が喋り出した。

鉄が錆びて、喉が枯れた声色だった。

『・・・やるようになったな。不意打ちを喰らうなんて久し振りだ』

何よりお前がそんな手を使うのが予想できなかった、と奴は言いこうも付け足した。

『しかし・・・惜しかったな。後もう少しで俺に技を決められたのにな』

そう・・・後もう少しで私はこいつに技を決められた。

こいつに技を1回でも決めれば訓練を受けさせてもらえる。

「だ・・・だが、貴様に一撃を喰らわせたぞっ。それでも訓練は受けられる筈だ！！」

技を決めなくても髪の毛を掠る程度でも良いからこいつに攻撃できれば訓練は受けられる筈だ。

それを思い出し口にすると奴は頷いてこう言った。

『そうだな。よし、合格だ』

捩じり上げていた腕を解放した奴は私に「おめでとう」と言った。

素直にこいつは私を褒めてくれた。

本当ならもう少しマシな事を言えば良かったのに私の口は別な事を口にしていた。

「貴様に言われても嬉しくないッ」

どうしてこんな言葉が出たのか分からない。

分からないが無性に自分に腹が立った。

こんなに自分に腹が立ったのは久し振りだった。

こいつは私の事を褒めてくれたのに、それに対して私は嬉しくないと怒鳴ってしまった。

どうして、こんな言葉を言ったのか分からない自分に心底腹が立つ。

しかし、奴は私の言葉に然して怒りもせずにいた。

そんな事は慣れているのかもしれないほど平然としていた。

そして戦いを見ていたヴィルヘルム・・・師匠と部下達に奴はこう言った。

『てめぇら。団長が合格したんだぞ?てめぇらはどうなんだ?この

ままシュヴァルツフント達と戯れている気か？』

挑発の言葉だが、この場面では部下達に振いを掛けているように聞こえる。

奴の言葉に部下達は「団長に続く！！」と叫んでくれた。

嬉しかった。

ザンビア平野での戦いの時は我先にと逃げた部下達が、私に続くと言ってくれた。

それが嬉しかった。

それから奴はヴィルヘルム・・・師匠に話し掛けた。

『ヴィルヘルム。お前の成果がやっと実を結んだな』

『はい。苦節云十年・・・手の掛る師弟たちでしたが・・・やっと、やっと、成長しました・・・・ふっくぅ・・・・・』

ヴィルヘルム・・・師匠は私を見てから掠れた声で泣く真似をした。

しかし、世辞にも様になっていないし見るだけで吐き気がするほど気味が悪い。

それはタカミ・・・・・・テツヤも同じだったようで「お前が泣いても気色悪いぞ」と言った。

それを皆は笑い声を上げて受け止めた。

それから奴が私を見てきた。

私もまた奴を見つめた。

『俺の色男振りに惚れたか？』

どうやったらこんな台詞が出て来るのだ？と思える。

私の口は思っていた言葉を今度は口にした。

「どの顔で言っている」

それを聞いた奴はこう言い返してきた。

「口が辛い女だ。お前と付き合う男はその辛口に毎度付き合わされるんだろうな」

その男は身体を壊すな、と更に奴は続けた。

勝手に推測するな、と私は思ったが否定できない面があったのも事実だった。

そしてその日は終わった。

それから次の日、私はあいつから訓練を受けようと探していたがプロイセン様が現れて「会議を開くそうだ」と言われ後を追った。

部屋に行けば、既に奴等は居た。

口には細長い棒を銜えており火が点いていた。

何時もそれを口にしているが、それが無いと生きていけないのか？と思えるほど常に銜えている。

そんな事を思いながら私は腰を降ろした。

ここのテーブルは丸い円を描いた円卓。

タカミ・テツヤの傍から離れないメジュリーヌという女が言うには「フォン・ベルトは身分に関係なく平等に意見を言い合える事からこれを採用した」と言う。

身分に関係なく平等に・・・・・・・・・・

親衛騎士団の長として言わせてもらえば、身分はある程度必要だと思う。

だが、同時に平等に意見を言い合えるというのには賛成だった。

男女関係なく意見を言い合える。

恐らくフォン・ベルト閣下はそれを考えてこれにしたのだろう。

それを考えると、やはり建国の王として名を馳せただけの事はあると感じる。

それから続々と他の者も入って来て会議は始まった。

こいつに仕える狼人ガルムが狼たちから得た情報を伝える。

狼人は誰にも従わない、と聞いていたがこの男には従っていた。

どうして、こんな男に仕えるのか甚だ疑問だがガルム自身はこの男に仕える事を誇りとしている。

話を戻すと、ガルムの報告によれば敵は時間を置きながらも、またこちらを攻めると言う。

私はここで自問自答してみた。

『私が敵ならどんな準備をする？』

以前なら今こそ攻める時、と断言しただろうが今は先ず敵側の位置に立ってから考えるようになった。

私が敵ならやはり以前、言ったようにワイバーンで攻撃するのが妥当だった。

それも下から攻撃される危険性がある。

それでもワイバーンで攻撃するのが今の所は妥当だと思う。

前のように歩兵だけで攻めても悪戯に死者を増やすだけだ。

それを考えるとやはり、ワイバーンで攻撃するのが妥当だし現実的かつ合理的だ。

それからも報告は続いた。

リカルド王子は首都では嫌われているという事。

これはただ単純に反逆者という事ではない。

反逆者とは言え、ちゃんと政をすれば民達はそちらに好意を抱く筈だ。

では、なぜ嫌われているのか？

首都の政が非道だからだ。

サラ様が課していた税より更に重い税を課した上に重労働を行わせていると言う。

その理由として多くの民達が逃げたからだ。

首都は国の柱とも言える場所だから人は多い。

その者たちが多ければ多いほど労働力はあるが、それが少なければ一人の人間に課せられる仕事の量は増大する。

しかし、大半の民達は逃げているから残った者達にその分が加算されるのだ。

更に反乱分子を見付けだす為に、毎日のように行われる反乱分子摘発と残酷な処刑。

兵たちの乱暴狼藉などが上げられる。

タカミ・テツヤはこれをリカルド王子が行っているのではなく、蛇

が行っていると断言した。

確かに、と私も思う。

蛇・・・ライアンナル伯爵。

元中央貴族だったが、今は辺境伯爵に封じられリカルド王子に加担する者であり、私の叔父・・・ヴィールング殿とも懇意な男。

この男がリカルド王子に代わり政をしていると言うのなら納得だ。

紋章は蛇で奴もまた蛇のような性格を持ち合せている。

だから、これはリカルド王子のせいではない。

それからも報告は続いた。

貴族たちが次々とリカルド王子に味方していると言う。

初めこそ我々に味方していた貴族だが二度も負けた頃には逃げたり陰でリカルド王子に味方していたのだろう。

いや、違う。

この男は前々からリカルド王子に加担する者たちは居た、と言っていた。

だが、それを私もゲンハルト様も信じなかった。

貴族が王を裏切るなど有り得ない、という証拠も根拠もない事を勝

手に思い描いていただけだ。

実際はタカミ・テツヤの言う通りになった。

その事を聞いたゲンハルト様は「その中には私の“元”部下も居るだろうな」と漏らした。

元部下、とこの方は言った。

もうこの方の中では既に裏切り者となっているのだ。

しかし、直ぐに自嘲して「私は今まで奴等の掌で踊らされた人形だった」と言った。

自分が上司で、部下を管理していたと思っていたのにそれが逆で自分が管理されていた。

それを思えば自嘲したくもなるが、直ぐに打ち消すと「今度は私が奴等を踊らさせてやる」
と言ってみせた。

それを聞いたタカミ・テツヤは「頼もしいな」と言いプロイセン様とゲンハルト様に細長い棒を差し出して火を点けた。

ゲンハルト様はタカミ・テツヤを毛嫌いしていた。

その証拠にこいつを一度は国外追放に処したのだから。

だが、ここに来てからは態度を改めて良好な関係を結んでいる。

それはこの方が自覚と反省をしているからだろう。

この方は自分がこのような状況を巻き起こしたと自覚し、その事実を受け止めて反省し事態の収束に力を注いでいる。

それがこの男には分かり、今までの事を水に流して良好な関係を築いているのだろう、と私は推測した。

会議では幾つもの案が出ては消えて行き、時間が過ぎ去って行く。

数時間ほど会議は続いたが、明確な答えは出ないままなので「一息入れるぞ」と奴は言った。

ここで一息入れて自分達で案を纏めようとする算段だろう。

皆はそれぞれの時間を潰し始めた。

私は誰とも話さず一人でタカミ・テツヤを見続ける。

タカミ・テツヤはリーザ殿、メジュリーヌと話をしている。

メジュリーヌは妖艶な黒いドレスを着ており、タカミ・テツヤにもたれ掛っている。

リーザ殿は負けじと同じ事をやっていて普通の男なら鼻の下を伸ばすだろうが、奴はそれをせずにいた。

・・・・・・・・・何だか、無性に腹が立つ。

何故かは分からない。

分からないが・・・気に入らない。

今すぐにでも二人から引き離したい気分だ。

だが、それをすれば何でそれをするんだ?と訊かれるのは明白。

それを答えられる事は出来ない。

だから、私は見続けるしか出来なかった。

ただし、腸は煮え繰り返り、いつ剣を抜くのか自分でも分からない。

無意識に剣を抜くかもしれない。

それを思い、必死に自分の腕を抑えた。

第百五章：1角のワイバーン

一息入れた後で再び会議は始まった。

ここに籠っていても味方が来ない以上、こちらも討って出るのが良い。

しかし、下手に出て戦っても損害が悪戯に大きくなるだけだ。

それを無くしながらも敵に損害を与えるにはどうすれば良いか？

「ここでの戦闘で役立つのはゲリラ戦だ」

テツヤ殿は以前にも言った言葉を口にした。

ゲリラ戦とはテツヤ殿達が居た世界ではスペインと呼ばれる国が契機となったらしい。

軍事の天才と言われたナポレオンに対抗するスペイン軍と民間人が取った戦法の事だ。

内容は予め攻撃する敵を定めず、戦線外において小規模な部隊を運用し臨機に奇襲・待ち伏せ・後方支援破壊等の攪乱や攻撃を行う戦法または戦闘を表すらしい。

「このゲリラ戦術で大事なのは7つある。通称“七つの黄金律”と言われている」

「七つの黄金律とは？」

皆チンプンカンプンな顔をしたので、私が何故か代表者となり訊ねる事になった。

「“チェ・ゲバラ”という男が書いた著作に書かれている」

その人物はゲリラ戦を駆使する時に必要な事を7つに纏めて本にしたらしい。

彼の他にも歴史に名を残す人物達の多くがゲリラ戦に関する著作を書いたと言われている。

その7つとは以下の通りになる。

1、負ける戦いはしない事。

2、常に動き続けること。「ヒットアンドラン」、攻撃して撤退する事。

3、敵は武器の主力供給元であると考える事。

4、動きを隠す事。

5、軍事行動では奇襲を活用する事。

6、余力があれば新しい縦隊を作る事。

7、一般論として、三つの事に留意しつつ進める事。即ち、戦術的防衛、敵の行動とゲリラ行動のバランス、そして敵の壊滅。

「これが七つの黄金律だ」

テツヤ殿は煙草を吸いながら説明を終えた。

このゲリラ戦術はテツヤ殿が居た世界では有効的な攻撃方法だったらしく、独立を勝ち取った国もある程だ。

「今でも敵の方が数では上だ。だから、この戦術を使い奴等の戦力を少しずつ削って行く」

そうすれば敵も追い詰められる、とテツヤ殿は言い続けた。

この戦術で重要なのは機動力だ。

敵よりも速く動き背後などを取り攻撃をして素早く逃げる。

これなら最低限の被害で抑える事が可能だ。

そして機動力と同じ位重要なのは住民の協力が何よりも必要だと言う。

ゲリラ戦を行う為には食料、武器弾薬、情報など様々な物が必要だ。

7つの黄金律でも敵を武器の主力供給元と考えよ、と言う言葉から窺える。

ゲリラの装備は正規軍に比べれば遥かに劣るらしく弾薬なども少ない。

だから敵から奪った武器弾薬を利用する。

食料なども同じだが、それが難しい時もある。

それをどうやったら補給できるか、となれば地域の住民と密接な関係を作り協力を求める事だ。

住民と密接な関係を結べば、食料などを工面してもらえる。

機動力と住民の協力・・・この2つが何よりも必要だと私は改めて思い直した。

その間にもテツヤ殿は話し続けていたので、それを聞く。

「敵は恐らく徒歩で来るだろう。だが、俺らはそれよりも速い足で動き、足より速い動物に乗り奴等の後方などに回り込んで倒す」

敵を倒したら素早く身を隠して再び攻撃して身を隠す。

これを繰り返し敵に休む暇を与えない。

7つの黄金律以外にもゲリラ戦に置いて必要な事をチェ・ゲバラは著作に書き残したらしい。

この戦闘で役立つのは取り回しが良く遠距離から攻撃が出来る武器が望ましく3脚などを使用する重火器類は平坦な地に添え付けて、攻撃用ではなく防御用として活用するのが望ましいようだ。

更に陣地構成などにも詳しく書かれている事から勉強になる。

話を戻すと、ゲリラ戦の特徴は機動性。

だが、これはその土地で暮らし慣れた者たちだからこそ出来るものだ。

それを補う為に今我々にここで育った馬を乗せて訓練をさせているのだ、とテツヤ殿は改めて説明した。

「しかし、テツヤよ。空からの攻撃はどうする？空からの攻撃は厄介だぞ」

ゲンハルト様がワイバーンとヘリの事を口にした。

地上の敵はこれで何とかなると言っても、空からの敵は簡単にはいかない。

毒針ことスティンガーや対空火器などで応戦は出来るが数で押されると厄介な上に動きな俊敏ともなれば狙いも付け難い。

「ワイバーンだって弱点はあるさ。夜の間は動けないだろ？ヘリに関しても弱点はある」

ゲンハルト様の質問に答えたテツヤ殿はリーザ中尉にこう訊ねた。

「天馬は夜でも動けるだろ？」

「勿論です。夜、ワイバーンに夜襲を掛けるのも容易いですわ」

リーザ中尉はテツヤ殿の意図が読めたのか、先に答えを言った。

「と言う訳だ。どうだ？ゲンハルト総大将」

テツヤ殿がゲンハルト様に訊ねるとゲンハルト様は鷹揚に頷いた。

それからも会議は続いた。

敵をゲリラ戦で迎え撃つ算段になり、今度は防衛地点と敵が来るであろうルートを考える事になった。

「敵はこの前と同じ道は使わない筈だ。となれば・・・何処から来る？」

テーブルの上に広げられた地図を見る。

山と谷で囲まれたリブリーブス城が赤い点で描かれている。

周りは山で囲まれており近くに民家などは無いし何処も険しい山道で行軍するには厳しい道のりだ。

「ここまで行くのに最短ルートは東から行くのが望ましい」

テツヤ殿はリブリーブス城から東側に真っ直ぐ指で線を辿った。

その先には今の首都、ヴァエリエがありエスカータ城がある。

テツヤ殿が辿った線が最短でここまで来れるが、前の事を考えるとこのルートではない別のルートを辿り来る可能性が高い。

だが、絶対にここから来ないとも言い切れない。

背後から来る可能性も捨て切れないな、と私は思った。

背後は谷だが、ここを登れば背後から一撃を喰らわす事が出来るから城を無防備にする事も出来ない。

難しい所だ、と私は思いながら無性に煙草を吸いたいと感じた。

その時、メジュリーヌさんが空を見上げた。

「どうやら客が来たようじゃ」

一瞬、何を言っているのか分からなかったが直ぐにそれは分かった。

ＧＲＡＡＡ！！

ドラゴンの遠吠えに聞こえた。

いや、ドラゴンの遠吠えではない。

ドラゴンの遠吠えに似ているが、明らかにワイバーンの遠吠えだ。

ワイバーンが来たのだ、と私たちはやっと気付いた。

「行くぞ」

テツヤ殿はＡＫＭアサルトライフルを掴むと会議室から走り出た。

ミーシャ大尉、イーグル軍曹なども続いている。

私達も慌てて武器を持ち後を追い掛けた。

会議室を走り、演習場に行き空を見上げると1匹のワイバーンが空を舞っていた。

通常のワイバーンと違い、角が額に1本だけあるという希少種だった色は黒で蝙蝠翼には幾つもの傷痕が鮮明に残っており幾多の修羅場を潜り抜けてきたと一目で分かる。

「ほぉ・・・一角のワイバーンとは珍しいのう」

メジュリーヌさんは縦目を更に細くしながら呟いた。

「そんなに珍しいのか？」

テツヤ殿が訊ねるとメジュリーヌさんは「昔は大勢いた」と答えた。

「あの角はどんな毒も浄化すると言われている。その上、あの蜥蜴から作られた鎧兜は最高の品じゃ」

「・・・なるほど。それを目的とした下種共に乱獲されて絶滅した訳か」

テツヤ殿の言葉にメジュリーヌさんは頷いた。

「その通りじゃ。お陰で最近はまったく見なくなったが・・・どうやらまだ生きて居る者も居るようじゃな」

メジュリーヌさんはそれだけ呟くとワイバーンを見続けた。

私も改めて見る。

１角のワイバーンに乗る者は顔半分まで隠した兜を被り両肩をワイバーンの爪がそのまま付いた肩当てがある鎧を着ていた。

腰には長剣を差し、手には槍が握られている。

乗り手は我々が攻撃しないと思っているのか悠々と空を舞っていたが、やがて宙返りをしてみせた。

しかも６回も、だ。

６回も宙返りをしてみせるワイバーンを私たちは唖然と・・・感動して見ていた。

７回目もやるのか？と思ったが、それはせずに１角のワイバーンは飛び去って行った。

「味方の鼓舞か・・・それともこちらを挑発しているんだか・・・・」

テツヤ殿は女神の抱擁を銜えながら小さく漏らした。

私の方は６回も宙返りしたワイバーンに乗る者を素直に

「格好良い・・・・・・・・・・・・」

と呟いた。

お陰で天馬騎士団のお姉様達から「浮気者」のレッテルを貼られた揚句、一緒に・・・・・・・・まぁ、皆まで言うのは止めておこう。

幕間：憎しみと決意（前書き）

ここでフィーナの叔父の独白を載せます。

まだ伏せている部分がありますが、鋭い読者の方なら直ぐに察しが付くと思います。

ですが、敢えて気付かないで下さい！！（汗）

幕間：憎しみと決意

サルバーナ王国の首都、ヴァエリエ。

そのヴァエリエに誇り高く建っているエスカータ城。

そしてその中にある軍の演習場には何百匹もの巨大な翼の生えた蜥蜴が居た。

蜥蜴なのだが、その大きさは馬より大きく牙は剥き出しで僅かに肉がこびり付いていて恐怖を周りに吹き巻いている。

蜥蜴の名はワイバーン。

蜥蜴が巨大化したような体型をしているが、前足は無く代わりに翼が生えている。

尻尾には毒が仕込まれていてそれで刺されれば人間など一溜まりも無い。

性格は好戦的とも言われているがそれは個体によって違う。

だが、その恐ろしい形相から5大陸の間では「恐怖」の権化として知られており民達からは嫌われている。

それでも戦になれば遺憾なくその力を発揮し、敵を壊滅させる事が出来る為に正規軍にはしないが傭兵として臨時に雇う事が多い。

このワイバーンに跨り空を掛ける傭兵をワイバーン・ライダーまた

はワイバーン・ナイトと呼ぶ。

逆にそれより上、つまりドラゴンなど知能が高い物に乗る兵をドラゴン・ライダーなどと呼び区別している。

ここエスカータ城に居るワイバーン・ライダーも他の者達と変わらず身分は傭兵で臨時で雇われた助っ人である。

彼等は自分が乗るワイバーンの背中などをブラシで擦ったり食事を与えたりしていた。

天馬騎士などもそうだが彼等は皆、自分が乗る動物に対して深い愛情を注いでいる。

それは信頼関係を築く為である。

特にワイバーンは天馬に比べて気性が荒い為、卵の時やまだ産まれ立ての頃から育てなくてはならない。

彼等は黒い鎧などに身を纏い、腰には長剣が差してある。

数は凡そ数百くらいだ。

その演習場には黒色に染められた軍旗が風に揺られていた。

旗にはワイバーンが描かれていたが、頭上に1角生えていた。

ワイバーンにも角はある。

あるにはあるが、左右両方が基本で頭上に1角だけというのは無い。

ただし、稀にだがそういう新種とも貴種が居るため恐らくそれを捩って旗印にしたのかもしれない。

演習場の頭上に1匹のワイバーンの鳴き声が響いた。

ＧＲＡＡＡ！！

ドラゴンに近い鳴き声で通常のワイバーンではないと分かる。

だが、演習場に居るワイバーン・ライダーたちは気にする事もなく自分が乗るワイバーン達の手綱を握り、距離を開けて整列した。

一番手前に1匹のワイバーンが降り立った。

色は黒で蝙蝠の翼は所々に傷痕があり、縫い直した痕もある。

頭上には1角が生えており軍旗のワイバーンと同じだった。

そのワイバーンに跨るのは黒い鎧を身に纏い、顔の上半分をまで覆うように作られた兜を被っていた。

悠々と飛んでいた1角のワイバーンだが、急降下して地面まで後もう少しという所でワイバーンの手綱を引き、水平に着地してみせた。

天馬より扱いが難しいと言われているワイバーンをここまで自在に操るという事はかなりの腕前という証拠だった。

ワイバーンから降りた者に対してライダー達は敬礼をした。

どうやらこの者がこの軍を指揮する者らしい。

「先ほど東の地を下見に言ってきた」

透き通った水のような声を出し、何処か凛としている。

声色から判断すると女性だ。

「奴等、私を見るなり茫然としていた」

自分が一人で来た事に驚いていたのだろう、と女は言うと高笑いをした。

だが、直ぐに止めた。

「あそこを落とせば我々の勝ちだ。そうすれば報酬は思いのまま。皆、仲間の仇を取ると同時にこの国に我々の夢を実現させるぞ！！」

自分達は傭兵だ。

今まで何処の国からも正規軍として自分達は扱われず、あくまで助っ人として扱われた。

自分達の方が天馬より強いのに、だ。

そして戦が終われればお払い箱となり次なる戦場を求め旅に出る。

その繰り返しだった。

しかし、この戦いに勝利した暁にはここの正規兵へと・・・長年夢

に描き続けていた王の近衛兵となる。

自分達は歴史に名を残すのだ。

歴史上、初めてワイバーンの近衛兵として・・・・・・・・・・・・・

「必ずや我々はこの地で近衛兵となるぞ!!」

女性は槍を掲げてみせた。

『おぉ!!』

女性の演説とも言える言葉を聞いたワイバーン・ライダー達は槍を掲げ、ワイバーン達は乗り手に従うように遠吠えを上げてみせた。

その姿を見つめる一人の男が居た。

壁の影に隠れて見えないが、性別は男だと判別くらいは出来た。

『・・・1角のワイバーン。まさかと思っていたが“彼女”だったとは』

男は暗闇の中から眼を細める気配を見せたが、直ぐに姿を消した。

『今回ばかりは些か不味いな』

自分が味方すると偽りここに来てから事態は急変した。

リカルド王子に仕える者が応援を要請した。

その者たちは見るからに戦の狂気に取り付かれた二人。

恐らくこちらの掌では踊らないだろう。

かと言って無闇に葬り去る事も出来ない。

ただでさえ厄介なのが2人も居るのに、更に2人・・・3人も加わった。

『まったく・・・兄上は何時も私に厄介事を押し付けるのだから』

男は嘆息し肩を竦めた。

自分の兄だった男は騎士の鑑と言われた男だが、騎士と言う物に対して余りに固まり過ぎていたきらいがある。

奇襲は騎士として有るまじき行為であくまでも正面から敵を叩き伏せるこそが戦争だと思っていた。

更に言えば兵站・情報などの後方支援はまるで頭に無い上に蔑んでさえいた。

しかし、そのような欠点を踏まえても男はまだ許せた。

幼い頃から兄の姿を見ていたし、“日陰者”の自分に対しても寛大に接していたからだ。

その欠点は許せるが・・・・・・・・・・

『・・・奥方様を・・・・・あの人を哀しませた事だけは許せな

い』

自分が恋焦がれていた愛しい女性。

向こうもまた自分を愛してくれた。

それを横から掻っ攫った兄。

一度は諦めた。

欠点はあるが、それでも兄は尊敬できる面もあるからだ。

自分のような日陰者より幸せに出来る、と自分に言い聞かせて必死に想いを・・・・愛しい女性を諦めようとした。

だが、それは出来なかった。

どうしても、愛しい女性を諦める事は出来なかった。

それは自分の気持ちを抑える事が出来なかった事もあるが、愛しい女性が啜り泣いている所を目撃したからだ。

今でも忘れられない。

雨に濡れながら一人、木の陰で泣いている愛しい女性の姿を・・・・・・・・・

『あの人は・・・・ロックスは・・・・・・・・・・』

雨に濡れた自分に抱き付き、涙声で喋る愛しい女性。

最後まで聞き終えた自分は肩が震えていた。

自分は、自分は、目の前で泣いている愛しい女性の幸せを願い、敢えて身を引いた。

兄なら・・・幸せに出来ると思っていた。

勝手な思いであり、兄に対する逆恨みと思えるだろう。

それでも良かった。

自分はこの女性が幸せならそれで良いのだ。

逆恨みだろうと、何だろうと、この女性を哀しませる全ての存在は憎むべき敵とさえ思っている。

だから、兄を激しく憎んだ。

これだけ美しく優しい女性に手を上げるだけでは飽き足らず余所で女を作るなど・・・・・・・・・・・・

騎士は婦人に奉仕するのが当たり前だ。

兄の行いもまた騎士として当たり前の行為と見えるが、それでも許せない。

その日・・・自分は愛しい女性と初めて結ばれた。

兄は先王に従い戦に出ていた上に、余所の女に首ったけでまるで家

には寄り付かない。

その上に愛しい女性に対して興味が無かった。

それでも気紛れで抱く時はあったらしい。

自分は弟で、元この屋敷に住んでいた事も幸いして変な眼は向けられなかった。

そしてついに・・・・・・・・・・・・・・

『貴方の子が出来ました』

自分に子が出来た、と言われた時・・・嬉しかった。

だが、同時に自分の子だと言えない哀しさを覚えた。

体制上、自分の子だと言えなかった。

そんな自分の気持ちを愛しい女性は察したのか腹を撫でながらこう言った。

『大丈夫です。貴女との子ですもの。私達の味方です』

そして貴方は誰がどう言おうとこの子の父親。

それから愛しい女性は子を出産した。

自分の髪の色などを受け継いだ可愛らしい天使だった。

兄は男子ではない事に憤怒していたが、自分にとっては男だろうが女だろうが関係ない。

自分の子を性別で差別するなど親として恥ずべき行為だからだ。

自分が父親だと名乗れなかったが、それでも戦などで家を留守にする兄に代わり様子を見に行く、という事を理由に頻繁に足を向けた。

子の名はフィーナ。

サルバーナ王国の言葉で「愛の結晶」を意味する。

愛しい女性は眠る我が子を見ながら自分にこう言ってきた。

『この子は私と貴方の愛の結晶。だから、フィーナ。良い名でしょ？』

それに対して自分は頷いた。

例え、自分が父親と名乗れなくてもこの子が無事に育ってくれるなら良いと思った。

それから月日は経ち、愛しい女性は・・・病に倒れた。

最後を看取ったのは自分だけだった。

成長した我が子は城に行き居なかったし、兄は戦で居なかった。

愛しい女性は震える手で自分の手を握って来た。

それを握り返す自分。

『あの子を・・・お願い』

自分は涙を流しながら了承し、自分が情けないばかりに君を不幸にした事を詫びたが愛しい女性は首を弱くだが振った。

『私は幸せでした。貴方と出会い、子を儲けられた事を・・・・・・・愛しております』

それが最後だった。

それから兄は戦で戦死したと聞いた。

偵察を疎かにして敵の伏兵と戦い相討ちとなった。

明らかに偵察を疎かにしたツケが回ったのだ。

それと同時に兄の遺言を受け取る事になった。

その内容は遺言というよりもむしろ命令に近い内容だった。

遺言の中には何一つ二人の事は書かれていなかった。

今にして思えばあの男はそういう面もあった、と思い出し同時に激しく憤りを感じた。

死んで殺す事も出来ない相手だが、もし生き返ったと言うなら直ぐにでも駆け付けて首を切り落としたい気持ちだ。

しかし幸いとでも言えば良いだろうか？

この遺言は自分しか読んでいない。

つまり、内容を知る者はこの世で自分だけという事を意味している。

だから、直ぐに燃やして灰にした。

こんな遺言は最初から無いのだ、と自分に言い聞かせた。

そして遺言に書かれたある人物とは会わずに放っておいた。

どうせ、直ぐに忘れるだろう、と思っていたし愛しい女性の葬儀もあったからだ。

だが・・・・それは失敗だった。

あのワイバーンに乗っていた女性。

1角のワイバーンは兄が抱いた女が乗っていたワイバーンと同じだ。

つまり・・・・・・・・・・・・あの女性が・・・・・・・・・・・

「・・・何とかせねば」

男はポツリと呟いた。

このまま行けば不味い事になる。

それは自分と子、そしてこの王国の存亡に係わる。

それは阻止しなければならない。

日陰者として辛酸を舐めた自分だが、この国を愛する気持ちは変わらない。

何よりここは愛しい女性との思い出が詰まっている。

それを私利私欲に溺れたあいつ等に蹂躙されて堪る物か。

何として護らなければならない。

自分の子・・・フィーナを。

第百六章：視察と訓練（前書き）

今回はランドルフとフィーナの視点を入れます。

何だかブランクに陥り、皆様を満足できる文章が出来たか心配です。

（汗）

こんな作者ですが、どうか見捨てないで下さい！！

第百六章：視察と訓練

浮気者のレッテルを貼られた翌日、私はガリシャ、ガルム、ヘンさんの４人で山を馬に乗り進んでいた。

先ずこの地に慣れる為と敵が何処から来るか、また何処に陣を築くか調べる為だ。

ゲリラ戦は一定の場所に陣を築くのは余り無いと聞いているが、ここを護らなければならないという場所はある。

だからそれを調べるのだ。

馬に乗り雪が積もった山道を進んで行く。

ガルムが隣に居るから怯えると思ったが、狼には慣れているのか平然としている。

「しかし、この前のあのワイバーン・・・見事な宙返りだったな」

ヘンさんが１角のワイバーンを口にした。

「確かにそうですね。でも、撃墜されるとは思わなかったのでしょうか？」

「それを回避できる自信があったんだろうな。それに俺らは唖然としていただろ？」

確かに・・・・・・

敵陣の真上であんな事をやられたら攻撃する前に唖然とする。

そんな事を思いガリシャを見た。

ガリシャはあれから怒りを沈めたが、どう言う訳か私の眼を見ようとしない。

ただ、私が見ていない時に限りこちらを見る。

それを訊いたが、答えは返って来ない。

それの繰り返しだから、今は答えを待つ事にした。

馬には食料なども載せてある。

今日から2、3日は探索などをするから一々城に帰るより野宿した方が良いと思ったからだ。

馬はノソノソ、と歩いているがちゃんと見れば、私たちの事を考えてゆっくり歩いていると分かるし自分が傷つかない道を選んでいると分かる。

「君は賢いね」

私は馬を褒めた。

すると馬は「当たり前だ」と言ったように鳴いた。

「それはそうと、あいつ等は頑張っているかな?」

ヘンさんは城に視線を向けた。

要らない荷物こと親衛騎士団長フィーナ・マレル。

彼女はこの前、テツヤ殿と戦い見事一撃を喰らわせる事に成功した。

あれほど毛嫌いしていた卑怯な手を使って、だ。

だが、実戦では勝ちは勝ちだし一撃を与えた事に変わりはない。

だから、テツヤ殿の訓練を受けるのだが・・・・・・・・・・・・・・

「果たして団長が従うかな？」

ヘンさんはあの女の性格からして素直にテツヤ殿に従うのか疑問のようだ。

確かにそれは言えている。

正直言って、訓練だろうがテツヤ殿に頭を下げたり素直に言う事を聞くような女ではない。

寧ろ掴み掛る勢いとさえ思える。

「しかし、話によるとテツヤは訓練になると何時もみたいな感じではないんだろ？」

ヘンさんは訓練を受けていないからテツヤ殿の・・・・・少佐の事を知らない。

だからこそ、こんな言葉を言えるのだと思う。

「正直言って・・・怖いですよ。訓練時のテツヤ殿・・・・“少佐”は」

あれは正に恐怖の権化だ。

幾らあの女でも少佐の前では赤子同然。

まぁ、テツヤ殿の時も赤子同然だが、少佐になれば反論さえ許さないだろう。

「恐らく・・・今頃は泣いているかもしれませんね」

あの女が泣くなど想像できないが、何となく泣くだろうな?と思わずにはいられない。

「・・・そんなにきついのか?」

私の言葉を聞いたヘンさんはゴクリ、と唾を飲み込んでから訊いてきた。

「えぇ・・・本当にきつくて地獄です」

今まで受けてきた訓練が子供の御遊びに思えるほど厳しいのだ。

しかし、それのお陰で生きてられるのだが・・・・・・・・・・・・

「団長・・・大丈夫かね?」

誰に言う訳でも無くヘンさんは呟き、私は無言で“この場だけ”は激しく無事かどうか気になり、また無事を祈らずにはいられなかった。

— —

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「おらおら！何だ？そのへっぴり腰は？そんな腰で男を満足にできるのか？下の口で男の○○○をしゃぶれるのか！？どうなんだ？！」

地面に這い蹲る形をさせられた私は匍匐前進という物をやらされている。

一緒にやってるのはバディと呼ばれ相棒を意味している。

私の相棒はリーザ殿だ。

私の部下はまだこの目の前で卑猥な言語を叫び、唾を吐く男・・・タカミ・テツヤ・・・少佐に一本を取っていないので居ない。

しかし、誰か一人は居なくては駄目なのでリーザ殿がバディを務める。

今日の朝、私は少佐（訓練を始める時にこう呼べ、と命令された）に呼び出され訓練を受ける事になった。

初めに渡されたのは迷彩服と呼ばれる服だ。

これは地形に溶け込めるように作られた物らしく実際雪が降っていないここでなら十分に溶け込める優れ物だ。

少佐の居た世界では派手な色の服は体の良い的となるので、これが作られたと説明された。

これを着込み、背中に背負う物ーーー背嚢を背負わされた。

最初に感じたのは重いだ。

少佐に訊いたが、「誰が質問して良いと言った!!」と怒鳴られた揚句に殴られた。

反論しようとしたが「上官の命令は絶対だ!質問があるなら、質問がありますが宜しいでしょうか?少佐と言え!?」と言われた。

殴り掛りたい気分だったが、訓練を受ける身である以上は向こうが上だ。

それに今のこの男に下手に逆らえばどんな目に遭うか分からない、という恐怖もあった。

改めて訊けば「鎧１０個分の重さを入れてあるからな」と言われた。

鎧１０個分・・・どうりで重い訳だ、と思うと同時にこんな重い物を背中に背負い走れるわけがないと思ってしまった。

だが、それをやらなければならない。

鎧１０個分もある背嚢を背負わされた挙句に直ぐに部品などが落ちる上に重いという欠陥品を持たされた。

何でも少佐の国が正式採用していた物らしいが、こんな欠陥品をよく採用したな？と思う。

それを持ち延々と雪が積もった道を走らされる。

背中の重りが圧し掛かると同時に雪が膝までめり込んで上手い具合に走れない。

更に途中で上下にライフルを動かす。

これを何度も繰り返すし、匍匐前進を行う。

これが訓練なのか？と疑問を抱いた。

私が思っていた訓練はこの男が培ってきた技術を盗む訓練だ。

しかし、これは何だ？

ただの嫌がらせか？と思いたくなる。

私の気持ちを察したのかリーザ殿は小声で「これも訓練です」と説明してくれたが、少佐にそれを聞かれて「誰が喋って良いと言った？」と言われた。

罰として腕立て伏せをやらされた。

私も一緒だ。

バディの失敗は組んでいる者の失敗だ、と言う。

つまりリーザ殿の失敗は私の失敗。

逆もまたしかり。

そのため私は失敗をしないように心がけた。

自分の為でもあるが、私の為に時間を割いてバディを務めるリーザ殿に申し訳ない気持ちもある。

どちらかと言えば・・・そちらの方が強い。

この方もまた女性の身でありながら軍に在籍している。

プロイセン様は私の父より柔軟な発想を持っていたのか女性でもなれると考えた。

それを見て父も私にそれをさせた。

だが、違う点を上げるならプロイセン様の方は自分だけでなく他の者にも教えさせていた事だ。

私の方は父だけに教えられた。

だから、父から教えられた事以外は・・・・・・・・・まるで知らない。

それを補う為に・・・もっと高みへと行く為に少佐の訓練を受けて

いるのだ。

腕立てが終わったら、また繰り返し走り出す。

それは午前中まで続いた。

「どうだ?疲れたか?」

私に膝を着いて、細長い棒を口に銜える少佐・・・タカミ・テツヤを私は下から睨んだ。

今は休憩中なので少佐ではなく名前で呼ぶ。

「ま、まだだ。こんな事では疲れないっ」

本当は疲れてもう動けない。

それを押し隠して強気に言ってみせた。

「ほぉう・・・それなら午後はもっと厳しい訓練にするか」

奴は面白そうに口端を上げて笑った。

その笑みが実に悪の権化みたいな笑みだった。

私の発言を聞いたリーザ殿は「余計な事を」と眼で言ってきた。

この方はこの男の訓練を受けたから、午後の訓練がどれだけ厳しいか分かったのだろう。

だから、私を睨んでいるのだ。

だが、もう後には引けなかった。

そして午後の訓練は更に厳しさを増した・・・・・・・・・・・・・・・

第百七章：視察と訓練2

私達は山の南側に来ていた。

ここは森林が４方の中でも一番隣接しているとガリシャに説明を受けて改めて見渡して見る。

確かに木などが間近に隣接しており、枝などが交互になっている事からそれが窺える。

「ここを敵は迂回しますかね？」

私はこの地形を考えると敵は南側から行かずに迂回して来ると思ったが、逆に敢えて困難な道を選ぶ事も考えられる。

「敵はこちらが予想だにしない所から来るからどうかな？」

ヘンさんは煙草を銜えながら私の疑問に答えた。

「俺が敵ならここを通り抜ける。３方の中でも一番進み難い場所だからこそ、こちらは兵の配置を少なくする。そこを突けば終わりだ」

「だとすると、兵の配置を少なくするにしてもトラップなどは多く仕掛けるべきですね」

「あぁ。お嬢ちゃん。ここは人間が通れるかい？」

ヘンさんはガリシャに訊ねた。

「通れなくはないよ。ただ、一列に並んで行くのが望ましいね。並列に来ると枝とかが邪魔して進み難いんだ」

それに並列で行くと体の良い的になるし、こちらに数などを教える事になるでしょ？とガリシャは続けた。

「ヒュー。凄いね。それが分かるとは」

ヘンさんは口笛を吹きながらガリシャを褒め、私にここから狙撃できるか？と訊ねてきた。

「木などが遮蔽物となりますが・・・何とか出来ます」

「それなら安心だ。もし、ここに配置されても狙撃が出来ないなんて事になったら困るからね」

「安心して下さい。どんな手を使おうと完遂するのがプロです。まぁ、私は完璧なプロとは言えない身ですが・・・やります」

「頼もしい言葉だ。さぁて、もう少し調べてから休憩にしようぜ」

ヘンさんの言葉に私たちは頷き、馬の腹を蹴って足を進めた。

それから数時間ほど更に南側の地形を見てはメモをし図形などを書き記した。

『南側は東・西・北に比べて木が密接している上に光なども余り来ない事から視界は頼りにならない』

メモの中でも重要と思われる部分を太字で書いた。

『木が密接しているため馬などでの行進は不可能と思われる。しかし、逆にこの密接している地形では罠などや伏兵を配置できる』

この地形を考えれば、恐らく出会い頭で戦う“遭遇戦”が多いと思われる。

遭遇戦とは文字通り敵部隊と前進していた時に戦う事だ。

どちらも動いている最中なので、最初の展開によって大きく左右されるし、上級指揮官から命令を待つのではなくその場で対処しなければならない。

この戦いで必要なのは、迅速な判断であり決心。

そして柔軟に物事に対処できる頭だ。

『・・・間違っても要らない荷物には向かないな』

あの女の頭の固さはダイヤモンドより上だ。

変化しているのは分かるが、今の状況などを考えるとどう頑張っても無理だ。

そんな事を考えながら更にメモを書く。

『この地形は一見、迂回して別の道から来そうだが敢えてここを通る可能性も捨て切れない。そのため罠は落とし穴などだけではなく地雷と迫撃砲も必要と思われる』

これを書き記してから私たちは休憩を挟む事にした。

馬から降りた私たちは手近にある岩などに腰を降ろした。

馬は雪の中にある草などを見つけては食べており、何処にも行く気配は無い。

「他の方はどうかな？」

ヘンさんは煙草を吸いながら残り3方の事を口にした。

3方の内、一つは私の親友であるレオン・ルソー通称「チャレンジャー」が行っている。

テツヤ殿は要らない荷物を訓練しているから行けないし、軍曹達も似たような物だ。

「残り3方はどうなの？ガリシャ」

私も煙草を銜えて火を点けながらガリシャに訊ねた。

「え？あ、え、と・・・その・・・だ、大丈夫なんじゃない？」

答えになっていないし、ガリシャは私の方を見ようとしない。

「前から気になってたんだけど、私なにかしたかい？」

特に何もしていない、と思うのだが・・・・・・・・・・・・・・・

「べ、別に何もしてないよ」

「だけど、何だか私を気にしている気がするんだけど？」

「そ、それは、あ、あんたの気のせいだよ」

明らかに動揺していると分かるが、それでも嘘を突き通すガリシャ。

「本当？」

私はガリシャの肩を掴み、こちらに向かせた。

「ッ！！」

ガリシャは私に肩を掴まれて動転しているように見えたが、それでも視線を背けようとする。

「何で避けるんだい？」

私はガリシャの視線を追い無理やり視線を合わせた。

ガリシャの緑色の瞳と私の瞳が合わさる。

「・・・綺麗な瞳だね」

吸い込まれそうだ、と私は口にした。

ガリシャの頬が赤くなった。

「熱でもあるのかい？」

私はガリシャの額に自分の額を当てた。

「○△▽□◇×！！」

意味不明な言葉を叫びガリシャは爆発した。

顔が蒸気して、口から泡を噴き出し後ろに倒れ込んだ。

「が、ガリシャっ」

私は急いで彼女を抱き支えた。

「あ、あたし・・・・もう駄目・・・・・・・・」

これを最後にガリシャは気絶してしまった。

「ガリシャっ。しっかりして！！」

私は気絶したガリシャを揺さぶり起こそうとした。

「・・・何時か刺されるな」

「それでこの鈍感が治れば良いだろう」

その横でヘンさんとガルムが何かを言ったが、私には聞き取れなかった。

― ― ― ―

―　―

私は全身を縛られて逆さ吊りにされていた。

頭に血が昇って気持ち悪い・・・・・・・まるで最初に乗った馬から振り落とされた時と似ている。

なぜ、こんな状況になったのかは昨夜・・・正確には今日の夜と言えば良いだろうか？

私とリーザ殿は演習場に築いた天幕（向こうではテントと呼ぶらしい）で寝ていた。

二人揃って寝ていた。

これはやってはいけない事だ。

どちらかが寝るならもうどちらかは起きて見張りをしなければならないのだ。

そしてこの時の見張り役は・・・・私だった。

言い訳をするなら昨夜は私の軽はずみな発言により更に厳しい訓練を受けた。

それが原因で身体が重く、心地よい焚火に当たった事で睡魔が襲い掛かって来た。

必死に眠らないようにした。

だが、睡魔に勝てず寝てしまった。

それがいけなかった。

私が起きていればこんな目には遭わなかったのだから。

私が寝たのを見計らって少佐は足音を立てずに忍び寄って来た。

泥のように眠った私は間近に迫った少佐に気付かずにいた。

本当に間近だった。

唇が合わさる位まで近付いた少佐に私は気付かなかった。

少佐が揺さぶった事で目を覚ましたのだ。

そして反撃をする所か思わず悲鳴を上げてしまった。

リーザ殿は幸い逃げる事が出来たが私は出来ずに捕まってしまった。

そしてこの様だ。

周りを武装した兵たちが４人ほど四方を警戒している。

私が逃げられないようにする為と助けるに来るリーザ殿を警戒しての事だ。

頭に血が上り続けて気持ちが悪くて、縄を抜ける状態ではない。

だが、恐らくリーザ殿が来るのは夜だ。

夜まで持つ自信は無い。

かと言って、この状況を打破する事が出来るのか、私自身が疑問を抱かずにはいられなかった。

武器は取り上げられているから反撃も出来ない。

ではどうすれば良いのだ？

何度も自問自答していると、少佐が現れた。

「よぉ、生きてるか？」

少佐は私を見上げながら細長い棒・・・煙草を燻らせて訊ねてきた。

その口振りは人を逆なでする口調だった。

「こ、このっ、降ろせ！！」

頭に血が上った状態で叫んだため、余計に体力が消耗された上に気持ち悪さが悪化した。

「それだけの口がきけるならまだ大丈夫のようだな。おい、仲間がもう一人居る。こいつを助けに来る可能性がある。警戒を強化しろ」

「はっ」

見張りをしていた兵たちに少佐は命令すると私を一瞥して去って行った。

私は去って行く少佐を睨みながらも自分の軽はずみな行動に自己嫌悪を抱かずにはいられなかった。

幕間：捕虜の尋問

私は負傷者であり捕虜であるプレス・ハートの部屋で彼と話をしていた。

彼の話によればリカルド王子は地方を救う為に軍を起こしたのが理由。

これは前に聞いたが、改めて彼の口から詳しく聞いたが地方はもう風前の灯とも言えるほど追い詰められていた。

「食べる物が無くて体力が無い奴等から死んで行きました・・・・・・・」

プレス・ハートは一息入れるように溜め息を吐いた。

「そうですか」

私は彼の為に作った茶を渡した。

「すいません。司教様」

プレス・ハートは礼を述べてから茶を受け取った。

「良いのですよ。貴方は敵でありますが、人道的に扱う様にテツヤ殿から言われておりますからね」

私は微笑みを浮かべながら答えた。

「あの、質問してもよろしいですか？」

プレス・ハートが私に訊いてきた。

「何でしょうか？」

「あの、男・・・タカミ・テツヤは何者です？」

「本人は傭兵と言っておられました」

「傭兵、ですか？」

「はい。ですが、金の為にこの国を護っている訳ではありませんよ」

何か別な・・・金よりも大切な物を護る為に戦っている、と私は言った。

金よりも大切な物・・・偽善的な・・・もっと直訳的に言うなら綺麗事だ。

金が無ければ人は生きていけない。

物が買えないからだ。

神の教えでは「金は人を不幸にする物。故に全て神に捧げよ」とあるが、それは教会が自分達の懐を温かくする為に言った事でしかない。

司教である私だが、神が居るのか？と問われたら直ぐには答えられない。

仮に神が居たとしても、私は敬う気持ちは余り持ち合せていないとだけ言える。

もし、神が居るのならどうして地方を助けなかったのですか?と訊ねたい。

彼等は善良な民達だ。

そんな彼らが死ぬのに、罪深き者達はのうのうと今でも生きている。

こんな奴等を生かす神を私は敬えない。

話を戻すと、テツヤ殿は恐らくこれまでも金の為だけに戦った事は無い、と私は思っている。

あの方は、綺麗事・・・理想を追ってそれを叶えようとしているように見えた。

それを何度も挫折し、理不尽な現実を見てきた。

それでも追い求めている感じに私は見えたのだ。

恐らく今回の戦も、そういう理由だろうと思う。

傭兵は何処の国でも余り良い眼で見られていない。

リカルド王子の方でも恐らくそれは同じ事。

それでもせめて、このプレス・ハートにだけはそうではないと知っ

てもらいたかった。

「貴方の質問に答えたので今度は私の質問に答えて頂けますか？」

私の問いにプレス・ハートは頷いた。

「では、します。ザンビア平野で現れた戦象と戦車、そして騎馬隊あれは・・・アガリスタ共和国とクリーズ皇国からの援軍ですか？」

アガリスタ共和国もクリーズ皇国も過去の遺恨はあるが、それでも友好関係を築いてきた国だ。

その国がリカルド王子に味方するというのはどうも解せない。

幾ら過去の遺恨があろうとも頂けない。

「・・・その通りです」

プレス・ハートは暫し迷った顔をしていたが、私が質問に答えたからそれを返そうと思ったのか答えてくれた。

「ライアンナル伯爵が連れて来たのです」

「ライアンナル伯爵が？」

ライアンナル伯爵・・・元中央貴族であったが、辺境に追放された男とは聞いているがそれ以外は謎に包まれた男だ。

その男が連れて来たとはどういう事だ？

「リカルド王子様は胡散臭いと思っておりましたが戦に勝つ為、と仰っていました」

恐らくリカルド王子は直感で他国に干渉されるのは良くないと判断したのだろう。

それでも勝つ為、と割り切った。

これが妥当だろう。

「それでライアンナル伯爵はその軍を両国からの援軍と仰ったのですか？」

「はい。友好国の現状を聞いて義憤に駆られて応援に来たと・・・・・」

明らかに嘘だ。

もし、それが本当なら今頃はここに国交断絶、そして宣戦布告を言い渡して更に軍を派遣して来る筈だ。

それをしない、という事は何処かの部族などが独断で軍を派遣したと言う事だ。

どちらも国としては統一されているが民族は統一されていない。

そして地方を治める部族の方に力がある。

それを考えればプレス・ハートが説明した事は明らかにライアンナ

ル伯爵の嘘だ。

「分かりました。私は少し用があるので出掛けますが、何か用があれば鈴を鳴らして下さい。直ぐに来ます」

プレス・ハートは礼を述べて茶を飲み干した。

部屋を出た私は少佐・・・テツヤ殿を探した。

どうもこれは臭い。

私の予想が正しければこれは・・・・・・・・・・・・

仕組まれた内乱に他ならない。

『間違いであれば良いが、もし当たっているのなら不味過ぎる』

出来るなら間違い・・・ただの思い過ごしであって欲しいと思う。

しかし、万が一の事も考えるとテツヤ殿に相談すべきだ。

私は急いでテツヤ殿を探した。

第百八章：野望と帝国

俺はフィーナの元を去りヴィルヘルムの所へ来ていた。

場所はフィーナを逆さ吊りにした場所から離れた所にある演習場。

ここには演習場が幾つか存在し、それぞれ別々の種目で演習が可能だ。

ヴィルヘルム達が居る演習場は主に剣などの原始的な武器で戦う為の演習場だ。

ここに来た理由は親衛騎士団の相手をする為だ。

フィーナは俺に一撃を喰らわせる事に成功したから訓練を受けている。

しかし、他の奴等はまだだ。

だが、団長に続く為、俺に1本取る事に執念を燃やしており、こうして定期的に足を運ぶようにしている。

最初からそれだけの根性を持っていれば、俺ももう少し優しくしてやったものを・・・・・・・・・・

などと俺は思いながら煙草を懐から取り出して銜えた。

女神の抱擁を銜えて歩きながらジッポで火を点けて僅かに息を吸い吐いた。

煙草を1本ほど灰にするとヴィルヘルムの居る演習場に到着した。

演習場ではシュヴァルツフントと親衛騎士団の面々が戦っている最中で、ヴィルヘルムはそれを腕を組んで見ていた。

俺はヴィルヘルムの所へ行こうと、一歩前に出た。

横から殺気を感じた。

「貰った！！」

殺気と共に既に勝利したという言葉が聞こえてきた。

直ぐに後ろに身体を動かして避けた。

すると、さっきまで居た場所に剣が振り降ろされた。

もし、あのまま進んでいれば頭がザクロみたいに裂けて血を噴き出していただろうな、と他人事のように思う。

髪の毛は切れていない。

やれやれ・・・まだまだだな。

俺はヒップ・ホルスターに収めていたコルトＭ１９１１Ａ１を抜いた。

撃鉄を親指で起こし、グリップをしっかりと握った。

そして銃口を剣を振り降ろし、また振り上げようとした親衛騎士団の若造に向けた。

「惜しかったな？後もう少しで髪の毛を掠める所だったのに」

俺は左手でまた煙草を取り出して銜えた。

「く、くそっ」

若造は悔しそうに顔を歪めた。

「中々の動きだった。だが、もう少し工夫をしろ」

そうすれば掠める、と俺は言い再び親指でコルトの撃鉄を戻した。

それからホルスターにコルトを仕舞い、改めてヴィルヘルムの所へ歩こうとした時だった。

「テツヤ殿っ」

司教の声がした。

振り返れば司教が俺に走り寄って来ていた。

表情は険しく何かある、と直ぐに感じた。

「どうかしたか？」

「実は、先ほどプレス・ハートと話をしたんですが・・・・・・・・・」

司教はその場で俺に話した。

司教の話す内容をその場に居た者たちは黙って、固唾を飲んで聞いていた。

「・・・なるほどな」

俺は最後まで聞き終えてから銜えていた煙草を口から離して溜まった灰を指で叩き落とした。

地面に落ちた灰は音も立てずに塵となった。

「どう思われますか？」

司教は俺に意見を求めてきた。

「恐らくお前さんと同じ考えだ」

俺は司教と恐らく同じ考えだ、と言ってみせた。

「と言う事は・・・・・・・・」

「蛇はこの国を乗っ取ろうとしている」

新しい煙草に火を点け吸いながら俺は断言した。

「恐らく奴はリカルドに貸しを作る事によって自分の安全を保障したかったんだろう」

リカルドの性格を熟知している筈の奴は、リカルドに貸しを作る事でこの戦いが終わるまでは自分に危害を加えさないようにと考えたのだろう。

もし、自分の身に何かあれば他国の援軍などは全て無かった事にするとか、言葉に含みを入れて。

「以前から良からぬ噂は聞いておりましたが、まさかこの国を乗っ取ろうとは・・・・・」

司教は自分の予想が半ば当たっている可能性が高いと知り些か戸惑っていた。

「国を乗っ取る面ではリカルドも同じだが、向こうは虐げられた民の為だ。だが、あいつの場合は違うだろうな」

俺は蛇の顔を思い浮かべた。

片方の眼はドス黒く如何にも野望に満ち溢れている眼だった。

自分さえ良ければ他人は幾らでも殺すし、死んで良いと思っているような眼で、いま直ぐにでも抉り出したい気分だったのを覚えている。

しかし、それは言わずに別の事を口にした。

「きっと奴はその援軍と称する奴等と手を組み何かしらの密約を結んでいるな」

どんな密約かは知らないが。

そして内乱が終結したら、リカルド達を亡き者にして自分がこの国を治める・・・という魂胆だろうな。

「恐らくリカルド様もそれを知っていながら敢えて利用しているのでしょうね」

「だろうな。向こうも一枚岩ではないらしい」

俺から言わせればそれは都合が良いが、俺らの中でそれを話し合っても仕方は無い。

「今はランドルフ達が帰るのを待つだけだ」

今、ランドルフ達は城から4方を視察し何処に砦を築いたり敵が何処から来るかなどを調べている最中だ。

そこにはミーシャ達も居る。

だから、会議はあいつらが戻って来てからやるほかない。

「そうですが・・・急いでこの内乱を終わらせないと不味いですね」

司教の言葉にはリカルド達以外の脅威が迫っている、と暗に言っていた。

「・・・帝国か」

司教は以前、5カ国のうち危険な国が1国だけある、と俺に言った。

ムガリム帝国と呼ばれる国だ。

どういう国なのかは知らないが、この大陸を統一しようとしている所を考えれば“覇権主義”的な考えを持っていると聞いている。

以前は別の国の領土だった所を占領し「我々の領土」と言うのが良い証拠だ。

司教は蛇が他2ヶ国だけでなく、その帝国とも通じているのでは？と考えているのだろう。

余りに突拍子過ぎ、と思うだろうが考えて置いて損は無い。

いや、この場合はそんな国が居るという事も考えると考え過ぎではないと俺は思う。

「で、司教。もし、帝国がこの内乱に裏で暗躍していたとしたらどうなる？」

「恐らく我々双方を疲労させてからゆっくりと料理する事でしょう」

この世界は5つの国に別れている。

1つはサルバーナ王国。

1つはアガリスタ共和国。

1つはクリーズ皇国。

1つはシャインス公国。

最後がムガリム帝国だ。

ムガリム帝国は４つの国から離れた場所に位置している。

そしてサルバーナ王国と他２ヶ国を攻める為には海を渡らなければならない。

その海を通り、来るにはシャインス公国を抑えなければならない。

ムガリム帝国と１番近い位置にあるのがシャインス公国だ。

この国は他２ヶ国とこの国を護る為の“防波堤”な役割を担っていると考えて良いだろうな。

先ずはこの防波堤を壊してからここに来る事だろう。

いや、逆に敢えて防波堤を跳び越えてこちらに来る可能性も捨て切れない。

第二次世界大戦でも“ラバウル”を包囲したが攻撃はせず他の場所を攻撃した例がある。

シャインス公国は海に囲まれて島が幾つもありそれで構成されている国。

俺の居た国と同じだ。

島国の利点は隣国と地面で繋がっていない、という利点だ。

これにより敵は海を越えて来なければならない。

そこを突けば敵は海の藻屑と消えて、仮に上陸で来ても高が知れているから向こうでどう料理しようと思いのままだ。

これが利点だ。

その半面でシー・レーン――海上交通路を抑えられたら物資が抑えられて何も出来ない。

それを考えるとサルバーナ王国と残り2ヶ国を抑えてしまえばシャインス公国は孤立して自然的に破滅する。

それを抑えてしまえば・・・・・・この大陸は帝国の支配される事になる。

どんな国か知らないが冗談じゃない。

国はその国に住む者達の物。

その国を土足で踏み躙り挙句に「今日からここは我々の家だ。貴様らはその家に住む使用人だ」などと言うような奴等に渡して堪るか。

この国は・・・誰にも渡さない。

この国は民達の物だ。

俺は煙草を捨て、靴底で踏み潰した。

その時、強い風が吹き被っていたブーニー・ハットが飛んだ。

まるで、これから起こる事態の波乱を表しているように俺には感じられた。

第百九章：鈍感と自覚（前書き）

ランドルフ！貴様は何でそこまで鈍感なのだ?!と書いていて、つい憤ってしまいましたドラキュラです。ｗｗｗ

まぁ、読者の方からも「周囲がフォローしているから刺されていない」と言われましたが・・・ここ等辺で一度、・・・・・・・・・刺された方が良いかな？

いや、刺されてしまえ!!と思わず思ってしまいました。（爆）

まぁ、それは置いておくとして、本編どうぞ!!

第百九章：鈍感と自覚

ガリシャは気絶して動けない為、私たちは二手に別れる事になった。

ガルムが残りガリシャの手当てをし、私とヘンさんの二人で視察を続ける。

現在は更に南側を進んで、地図に描かれている個所を調べて回っている所だ。

どうやら南側は敵が侵入し難い形をしていると分かった。

それ以外にも良く見れば、昔・・・つまりフォン・ベルト閣下が築き上げた頃の跡が残っているのが確認できる。

「これは・・・“土塁”の跡ですかね？」

私はヘンさんに訊ねた。

土塁とは敵や動物の侵入を防ぐために連続して築き上げられた土盛りの事だ。

主に堀などと一組で作られる事が多く、堀を掘った土で築き上げる。

私達がエスカータ城の東側に築いたモット・アンド・ベーリーの土塁なども空堀を掘った土で築き上げた物だ。

「・・・そうだな。これは土塁の跡だ」

間違いない、とヘンさんは馬から降りて土塁の跡と思われる部分に手をやった。

そして土塁の下から降りた。

人が約2人分ほども高さがあるからほぼ間違いないと見て良いだろう。

「鎧を着ている上にこの高さだ。フォン・ベルト閣下は、かなり要塞造りに長けているのかもしれないな」

「テツヤ殿の居た世界でも要塞造りの天才が居ましたね」

「そうなのか？まぁ、あの男が居た世界はフォン・ベルト閣下が居た世界でもあるが」

「えぇ。確か、名前は・・・・・・・・“ヴォーバン”と言う人でしたね」

ヴォーバン・・・ヴォーバン領主セバスティアン・ル・プレストル。

テツヤ殿が二度目に入った軍隊であるフランス外人部隊の国、フランスの軍人、建設技術者、技術将校だったらしい。

１５０の要塞を建設あるいは修理し、５３の城塞包囲攻撃を指揮したと言われており「落ちない城は無い」とまで言われた要塞攻城の名手と知られている。

「そのヴォーバンに近い素質を持っていたのかもしれないな。フォン・ベルト閣下は・・・・・・・」

ヘンさんはそう言うと、土塁の上に戻った。

鎧を着ていないが、それでもかなり高いからジャンプしてやっとの思いで登った。

「恐らくここ以外にも幾つか城跡が残っているな」

「という事は、そこを直せば・・・・・・・・」

「あぁ。敵の侵入は防げる。しかし、昔の形をそのまま復元してもそうはいかない。今の時代に合った形にするんだ」

そうすれば敵は防げる。

「それに今の主は・・・テツヤ少佐だろ？」

本当はサラ様が城の主だ。

しかし、ヘンさんは敢えて戦闘指揮官であるテツヤ殿を主と称した。

「ですね。では、テツヤ殿に後で説明しますか？」

「あぁ。少佐もこれを聞けば、俺と同じ意見を出すだろう」

ヘンさんは私の言葉に頷くと馬に乗り、また視察を再開した。

馬に乗り視察を続けていたが、私はふと気になった事があってのでヘンさんに訊ねた。

「そう言えば何で、ガリシャ気絶したんですかね？」

訊ねながらも私は煙草を銜えた。

「自分で理由が分からないのかい？」

ヘンさんは呆れた口調で私に訊き返した。

「分からないです。私は、ただガリシャの頬が熱いので額を合わせただけですよ？」

それだけで気絶するのか？と思う。

「その前に言った言葉を覚えているかい？」

「その前・・・確か・・・・・・・・・」

瞳が綺麗だね・・・吸い込まれそうだ。

「そう、言いましたね」

「それを自分で言って、どう思う？」

「どうって・・・ただ事実を言っただけとしか」

「君みたいな男を何て言うか知っているかい？」

「何です？」

煙草に火を点けながら訊ねた。

「“女殺し”または“たらし”と言うんだよ」

「ぶっ！！」

火を点けた煙草の煙を思い切り吸い込んでしまった為、私は咳き込んだ。

「ゲホッ、ゲホッ、ゲホッ・・・お、女殺しって・・・・・・・・・・・」

「言い過ぎじゃないし間違っていないと俺は思っている。君は天性の女殺しだ」

差し詰め乙女のハートを射止める狩人、だとまで言われてしまった。

「そ、そんなば・・・・・・・」

私は馬鹿な、と言おうとしたがヘンさんの表情は真剣で、更に続きを言い続けた。

「君みたいな男ほど女を傷つけて最終的には・・・・・・・・・・・・・」

「さ、最終的には・・・・・・・・・・・・・」

私はヘンさんに続きを促した。

「泣かした挙句、刺されるんだよ」

「わ、私は、別に・・・・・・」

余りに酷過ぎる末路だと私は思いながら、何とか言葉を言おうとしたがヘンさんはそれを遮るように言い続ける。

「言っただろ?君は自分の言動にどれだけ女が揺さぶられるのか分かっていないんだ」

それが一番厄介だとヘンさんは言った。

「お嬢ちゃんの事もそうだ。綺麗な瞳だね・・・吸い込まれそうだ、なんて言われてみろ。大抵の女ならクラッと来るぜ?」

「軍曹が言ったら駄目じゃないんですか?」

そんな言葉を言えばどうなるか簡単に想像できてしまうのは・・・哀しい事だろう、と他人事ながら思う。

「あの男は論外だ。外して置いた方が良い」

同じ男だが、“あれ”は論外だとヘンさんは断言した。

階級が上である軍曹を物呼ばわりとは・・・まぁ、実際、普段は物みたいな人だから構わないか。

「軍曹が言えば大概の女は鉄拳を繰り出す。だが、君みたいに可愛らしい男性に言われたらクラッと来る」

それが好意を抱いている相手からなら尚更、とヘンさんは続けた。

「え?が、ガリシャが私に好意を抱いているというんですか?」

「当たりだ。と言うか俺は他人に言われるまで知らなかった君の鈍感さを逆に驚くよ」

どうやったらそこまで鈍感になれるんだ?と訊かれてしまった。

「別に私は何も・・・・・・・・」

「小さい頃、近所に気になる娘とか居なかったのかい?」

「居ませんでした。それに母だけを働かせる訳にはいかないので、私も手伝いなどをしていたので・・・・・・・」

「じゃあ、騎士になってからはどうだ?」

「特に何も・・・・・・・・・」

「女性と接点も無いのに・・・・どうやったら、そんな風に女を虜に出来るのか伝授してもらいたいぜ」

羨ましい、とヘンさんは呟いた。

「あの、失礼ですがヘンさんはどうなんですか?」

ヘンさんの容姿は悪くない。

かと言ってそれほど良いと言う訳でもない。

良く言えば平凡その物で、悪く言えば特徴が無い。

「まぁ、付き合った女性は何人か居たな」

だが、振られたと言ってから煙草を銜えた。

「どうしてですか？」

「色々とあるな。まぁ、仕事も理由の一つだ」

先王に従い戦に出た事もあるがヘンさんが以前、在職していた所は雑用が主な仕事なので毎日が忙しかったらしい。

「お陰でデートする時間も無い時なんて日常茶飯事だ。そして決まり文句とも言える言葉を何時も投げられて終わった」

仕事と私、どっちが大切なの？

「ある意味、究極の選択ですよね？」

仕事が無くては食べていけない。

かと言って好きな女性も大事だ。

この二つを天秤に掛けさせられたのだから、究極の選択だ。

「まぁな。お陰で何時も女に振られた次の日は頬を赤く染めたもんだ」

「・・・・・・・・・」

何と答えたら分からずに私は無言でいると、ヘンさんは更に続けた。

「だが、俺の同僚なんかは仕事と女。両方を取ったな」

その人はヘンさんにこう言ったらしい。

仕事と女の両方を物にしてこそ真の男だ、と。

「・・・それが出来る人が果たして何人居ますかね？」

少なくとも私は片方しか取れない、という情けない自信がある。

「数えるほどしか居ないな」

テツヤ殿も恐らくそういう経験がある筈だ、とヘンさんは言いながら煙草に火を点けた。

「そう言えば、テツヤ殿の恋愛過去って殆ど聞いていないな」

と私は独り言を漏らしながら煙草の灰を捨てた。

「失礼な言い方だが、あの顔と性格で女にモテたのか？」

「そうらしいです。何でも王族から求婚された過去もあるとか・・・・・・・・」

「お、王族から求婚？」

これにはヘンさんも驚いた。

「俄かに信じられません。ですが、何となく本当のような気がしま

す」

ミレーネ様やメジュリーヌさん、リーザ中尉など様々な女性がテツヤ殿に好意を抱いている。

それを鑑みれば王族から求婚されても頷ける。

「まぁな。帰ったら、訊いてみるかい？」

テツヤ殿の恋愛過去を、とヘンさんは言ってきた。

「そうですね。私も・・・何とかしたいので」

「まぁ、あの男ならこう言うだろうな」

刺されるのを覚悟で自分の力で何とかしろ、と・・・・・・・・・・・・・・・

それを言われたら元も子も無いが、それでも訊いてみようと私は思い煙草を吸った。

第百十章：二人切りで（前書き）

彼女と茶を飲みながらランドルフの事を話していたんですが

「お人形さん（エリーナの事です）はランドルフの素肌に触って茶を飲んでいるのにガリシャは、どうなの？このままだとガリシャが可哀そうだわ」

と言われました。

まぁ、確かに、ガリシャは損な役割が多いな、と思い今回はガリシャに良い思いをさせます。

とは言え、元はと言えばリンクスの異名を取るくせに、ここまで鈍感なランドルフが元凶と言えば元凶ですが。

ブレイズさんのショウと良い勝負とこの前、メールで話し合いましたが・・・ランドルフの方が明らかに性質が悪い、と勝手に思ってしまいました。ｗｗｗ

それでは本編をどうぞ！！

第百十章：二人切りで

それからも南側の視察は続いたが、何とか今日中に回る事は成功した。

ガリシャが案内役だが、念の為地図をもっていた事が幸いしたと言えるだろう。

視察が終わったのはもう夜になって数時間ほど経った頃だ。

ガリシャの所へ戻ると、既にガリシャの姿は無かった。

「ガリシャは？」

私がガルムに訊ねるとガルムは城の方を指差した。

「既に帰った。まったく主という男は乙女心をまるで理解していないな」

鈍感にも程があると言われた。

「君から乙女心なんて台詞が出て来るとは驚きだよ」

ガルムみたいな食べる事しか能が無い・・・失礼な言い方だが、そんな者からも言われてしまうとはどれだけ自分は鈍感なんだ？と思ってしまう。

「それでお嬢ちゃんはランドルフ君に何か言って無かったか？」

ヘンさんがガルムに訊ねるとガルムはこう答えた。

「特に何も。ただ、小さな声で“鈍感”と漏らしていた」

「・・・・・・・・」

私は何にも言えなかった。

正確に言えば、何と言えば良いか分からなかったと言った方が正しい。

「まぁ、あのお嬢ちゃんは気丈な子だ。明日は休みだろ?」

ヘンさんは私を慰めながら訊いてきた。

「はい。そうですが?」

「だったら、お嬢ちゃんと二人だけで茶を飲んだり話したりしろ。それか馬に乗ってここに来れば良い」

明日は確認の為に行こう、とか何とか理由を適当に付けろ、とヘンさんはアドバイスしてくれた。

「すいません・・・・・」

「俺に謝らないでくれ。あまり女の子を泣かせるなよ?色男君」

「・・・・努力します」

もはやこの言葉は私の言い訳もといその場凌ぎの言葉になり掛けて

いた。

城に帰った私は今日の所はもう遅いから明日にしようと思った。

だが、ヘンさんに「まだ起きている筈だ。それに夜中、忍んで行くのも一興だろ?」と言ってきた。

何故か、その言葉が酷く面白がっているように聞こえた。

ヘンさんの性格からして、そんな意地悪な性格・・・・・だとは思わない。

だから、その言葉に従い私はガリシャの家に向かった。

既にガリシャの家の火は消えていたが、微かにカーテン越しからガリシャの部屋が明るいのを確認できた。

私は鞍に立って、手すりに届くかどうかを確認してからジャンプした。

何とか掴まれた。

そしてドアが開いた。

「ら、ランド・・・・・・・・・」

ガリシャは私の名を言おうとしたが、私は人差し指で口を抑えてみせた。

『入れてくれるかい?話があるんだ』

『は、話？』

ガリシャが小声で訊き返すが、返事をする代わりに手すりを乗り越えて部屋に入った。

「こんばんは。ガリシャ」

私はガリシャに小声で夜の挨拶をした。

背中に月の光が当たる気を感じ、ガリシャは眩しそうに瞳を細めた。

着ているのは前と同じだった。

「は、話って、何？」

ガリシャは何処か緊張した声で訊ねてきた。

「明日、暇かい？」

「え？ああ、う、うん。暇だけど・・・・・・？」

「明日、二人で出掛けよう」

その後で茶を飲もう、と私は言った。

「ふ、二人でっ」

ガリシャが大きな声を出したので、私は慌てて口を抑えた。

「シッ・・・今は夜だよ?静かにしないと、ね?」

人差し指を唇に当て、片目を閉じてみせた。

それにガリシャは頷いた。

「今日で南側の視察は終わったんだけど、夜の間も見たから分からない個所もあるんだ。だから明日、君と二人で回りたいんだ」

その後で、何処かでお茶を飲もうと私は再び言って同意を求めた。

「どうかな?」

「へ、ヘンさんとが、ガルムは?」

「二人とも別の仕事で駄目なんだ。だから、君と二人だけだよ」

これを聞いたガリシャの瞳が大きく見開かれたのを私は見逃さなかった。

「い、良いよ。行くよっ」

「ありがとう。それじゃ、今日の所は帰るよ」

じゃあね、と言い私は窓から降りた。

下には既に馬が行ける準備をしていたので、すんなりと鞍に降りる事が出来た。

そして腹を蹴りオリガさんの家へと向かった。

「今回は言葉を選んだから大丈夫だろう」

一人で私は先ほどの言動に満足していたが、馬は「阿呆」と言っているように鳴いてみせた。

ガリシャの家を後にした私はオリガさんに夜遅く辿り着いた。

私は馬を小屋へと連れて行き、水と干し草を渡してから家へと向かった。

ドアは開いており、中に入るとオリガさんが待っていた。

「お帰りなさい」

「ただ今、帰りました。・・・起きてたんですか?」

私はテーブルに並べられた夕食が手つかずの状態である事に疑問を感じて訊いてみた。

「えぇ。いけなかった?」

「とんでもない。嬉しいですが、大丈夫でしたか?」

こんな遅くまで私の帰りを待っていたオリガさんを思うと自分が酷く悪い男だと思う。

「えぇ。さっきまでミレーネ姉の家でお喋りしていたわ」

「そうですか。所で、ゲンハルト様とは会いました?」

「いいえ。イザベル姉だけが来たわ」

何でもその日はゲンハルト様が食事当番だと言う。

「・・・出来るんですか？」

あの方が手料理・・・・・・想像できないし、仮に食べたら腹を壊しそうだ。

万が一、食べられたとしても外見と同じく骨と皮だけで中身は無いのでは？と思ってしまう。

「出来るらしいわ。もう、イザベル姉ったらゲンハルト様をべた褒めしてるのよ？」

「どんな事を褒めてたんですか？」

「数えれば切りが無いわ。でも、ゲンハルト様の事を話す時のイザベル姉はとても嬉しそうだったわ」

だったら、それをゲンハルト様の居る前でも見せたり言えば良いのに、と思うが口には出さなかった。

他人の色恋沙汰に口を出せる程、私は恋愛を経験していないからだ。

「それはそうと、食べるでしょ？」

冷めちゃったけど、とオリガさんは言うが私は「冷めていません」と答えた。

「貴方が作った料理には温もりがあります。だから、冷めていません」

オリガさんは「ありがとう」と礼を言ってから私に手を洗って来い、と言った。

言われた通り手を洗ってから食卓について二人で遅めの夕食を頂いた。

料理自体は冷めていたが、温もりがあって心は温かかった。

――――――――――――――――――

―――――――――――――――――――

あたしは自分のベッドの中で眠ろうとしたが、眠れなかった。

まだ興奮している。

初めて仕留めた大物の時よりも鼓動が速いし、身体が熱い・・・・・・・・

理由は分かっている。

鈍感で天然の女たらし・・・ランドルフだ。

今日、あいつとあたし、ヘンさん、ガルムの４人で南側を視察した。

その途中で、あいつはあたしの瞳を褒めた。

『・・・・綺麗な瞳だね。吸い込まれそうな程に綺麗だよ』

この言葉を言われたあたしは思わず顔を赤くした。

そしたらこいつは追い打ちを掛けて来た。

『熱でもあるのかい？』

優しい言葉を掛けながら、あたしの額に自分の額を押し付けて来た。

間近に迫るランドルフの唇。

そして吐息。

嗚呼、良い香りと温かい吐息・・・・・・・・・

額に来る温かさも重なりあたしは頭が爆発して気絶した。

気が付いたらガルムだけが居た。

ランドルフは何処？と訊けば、あたしを置いて視察を続けに行ったと言われた。

置いて行かれた、と思ってしまった。

あたしはランドルフの観測手。

言わば相棒。

それなのに、ランドルフはあたしを置いて行った・・・・・・・・・・・・

無性に腹が立ったけど、同時に置いて行かれたという気持ちで哀しかった。

そんなあたしをガルムは理解したのか先に帰れ、と言ってきた。

これにあたしは素直に受け入れた。

ここで待ってランドルフと会っても、まともに話せる自信が無かったからだ。

家に帰ったあたしはそのまま何時も通り食事をして風呂に入った。

だけど、心はランドルフで一杯だった。

部屋に入り寝ようと思ったが、寝れないのは分かっていたから明かりを点けて眠くなるまで起きていた。

外から音が聞こえたのは時間がかなり経ってからだ。

窓を開けて見るとランドルフが手すりに掴まっている所を発見した。

「ら、ランド・・・・・・・・・・」

あたしは思わずランドルフ、と言おうとした。

だけど、あいつは人差し指で自分の口を抑えた。

『入れてくれるかい？話があるんだ』

『は、話？』

あいつは小声で訊いてきたが、あたしは返事をする代わりランドルフの手を掴んで中に入れた。

『こんばんは。ガリシャ』

ランドルフはあたしに小声で夜の挨拶をした。

ランドルフの背中に月の光が当たってあたしは眩しくて瞳を細めた。

ランドルフが月から来たように思えたのは錯覚だと思いたい。

月から来たらランドルフは何れ帰ってしまう。

それは嫌だった。

もし、帰るならあたしも連れて行って欲しいと思う。

「は、話って、何？」

あたしは緊張した声で訊ねてきた。

こいつと話す時は緊張する。

好きだと自覚し始めてから。

『明日、暇かい？』

対してランドルフは普通に話し掛けて来る。

「え？ああ、う、うん。暇だけど・・・・・・？」

あたしは答えたが、どういう意味があるのか？訊ねた。

『明日、二人で出掛けよう』

その後で茶を飲もう、とあいつは言った。

「ふ、二人でっ」

あたしは思わず大きな声を出した。

それをランドルフが慌てた様子で口を抑えた。

ランドルフの手があたしの口を抑える。

そして人差し指を口にやり、片目を瞑ってこう言ってきた。

『シッ・・・今は夜だよ？静かにしないと、ね？』

あたしは頷いた。

ランドルフはまだあたしの口を抑えながら言葉を続けた。

『今日で南側の視察は終わったんだけど、夜の間も見たから分からない個所もあるんだ。だから明日、君と二人で回りたいんだ』

その後で、何処かでお茶を飲もうと言ってあたしに同意を求めた。

『どうかな？』

「へ、ヘンさんと、が、ガルムは？」

何時もならあの二人が一緒なのに、どういう事なのか訊いた。

別に居ないなら居ないで良い。

寧ろランドルフと二人切りになれると思うと・・・・・・・・・居ない方が良いと思ってしまった。

『二人とも別の仕事で駄目なんだ。だから、君と二人だけだよ』

あたしは自分の眼が大きく見開く感じを覚えた。

同時に鼓動が速くなるのも感じた。

二人切り・・・・ランドルフと二人切りで出掛けてその後で茶を飲む。

「い、良いよ。行くよっ」

あたしは一にも二にもなく頷いた。

こんなチャンス二度と来ないと思い、何度も何度も頷いた。

『ありがとう。それじゃ、今日の所は帰るよ』

じゃあね、とランドルフは言うと窓から降りて行った。

そしてあたしはベッドに入ったんだけど、興奮して眠れない。

『ランドルフと二人きりで出掛ける・・・・・ああ、どうしよう！あたし！？』

あたしは明日の事を思うと興奮を抑えられず中々寝付けなかった。

第百十一章：二人で視察

翌日、私は馬の手入れを終えた頃を見計らってガリシャの所へ向かった。

「今日も頼むよ」

私は馬に話し掛けた。

馬は構わないと言うように鳴いた。

ガリシャの家に行き、ガリシャと呼んだ。

すると・・・・・・

ドタドタドタバタ！！

ガッシャアアン！！

凄い音が中からして来た。

そして・・・・・・・・・

バッン！！

と勢いよくドアが開いた。

「お、おは、おはよう。ら、ランドルフ・・・・・・・・・・」

ガリシャは蒸気した頬で私に挨拶をしてきた。
何故か髪の毛が濡れている。
そして何か良い香りがするのにも気付いた。
「湯に浸かっていたの？」
私が訊ねるとガリシャは、頷いた。
「き、昨日は、ちょ、ちょっと風呂に入れなくて、さ・・・・・・・・・」
『・・・姉ちゃん、確か昨日、風呂に・・・・・・・・・・・モガモガ』
『余計な事は言わないの。あの子は真剣なんだから』
奥を見ればガリシャの弟たちの口をその上の兄や姉達に抑えられていた。
何を言っているのかは小さ過ぎて聞き取れなかった。
「あ、あの、も、もう行くの？」
「こっちは準備ができたからどうかな？と思って来たんだ。だけど、まだのようだね？」
「う、うん。あ、あの、な、中で待って、なよ」
「それじゃあ、お言葉に甘えるよ」

私は馬から降りてガリシャの家に入った。
家の中には軍曹達が居たが、朝から酒を飲んでいた。
「軍曹。朝から酒なんて駄目ですよ」
「良いんだよ。今日は。それより・・・お嬢ちゃんとデートだってな？」
軍曹はニヤニヤと笑いながら私を見てきた。
「デート・・・二人切りで行くとそう言うんですかね？」
「あぁ。特に親しい間柄の男女ともなれば・・・・・・・・・・・・・・・」
ヒヒヒヒヒヒ、と下駄な笑みを零す軍曹を私は冷めた眼つきで見つめた。
「そんなんだから“害虫”と言われるんですよ」
「が、害虫？誰がよ」
「軍曹です。昨夜、オリガさんから軍曹の渾名は“獣”から“害虫”に格下げだそうです」
ガーン、と軍曹は沈んだ。
「豪く毒を吐くね？今日は」

獅子頭軍団の方が私を見た。

「そうですかね？強いて言うなら・・・休みだから羽目を外したいのかもしれませんね」

『・・・意味が違うと思うが』

などと獅子頭軍団の方が思っている事など私は知らなかった。

そして暫く待つとガリシャが来た。

何時も通りの格好なのだが、良い香りがする。

「良い香りだね」

元気に溢れたガリシャには些か似合わない、とも思ったが敢えて言わない。

「あ、ありがとう・・・・・・・・・・」

ガリシャは礼を述べると速く行こうと言ってきた。

「では、ロンガーム殿。行ってきます」

私は現れたロンガーム殿に言った。

「あぁ。行って来なさい。ガリシャ、ランドルフ君にしっかり自分を魅せるのだぞ？」

ガリシャはそれに頷き、私とガリシャは城を出た。
城を出た私は煙草を銜えた。
「ね、ねぇ・・・ランドルフ」
ガリシャが珍しく私に話し掛けてきた。
何時もなら私が話し掛けてそれに対して彼女はどもりながら答えるのに、だ。
「何だい？」
私は煙草にマッチで火を点けながら訊ねた。
「あ、あんたの、お、お母さんって、どんな人だったの？」
「私の母かい？」
私は煙を吐きながら昔を穿り返した。
私の母・・・・・・・・・・・・
「とても優しくて綺麗な方だったよ」
今でも覚えている。
私の母はとても綺麗だった。
サラ様のように綺麗な金糸の髪を持っており、瞳もまた澄んだ水の

色。

父とは恋愛関係で身を結んだらしい。

しかし、母は大変モテテいたらしく貴族にも求婚されたと聞いた事がある。

それを母は断り父と結婚した。

そして私と弟たちが産まれた。

「でも、父が亡くなってからは夜遅くまで働いて私たちを女手一つで育ててくれたんだ」

そんな母だが、決して弱気な所を見せた事が無かった。

死ぬ時もそうだった。

私が聖騎士に入隊した時、母はベッドで寝ていた。

本当なら苦しくて堪らないのに、母は私を優しく抱き締めてこう言った。

『頑張って王国に仕えなさい。私はいつまでも貴方達兄弟を空から見守っているから』

「・・・優しいお母さんだったんだ」

「うん。今でも、母は私の心に生きているし大半を占めている」

オリガさんも居るが、それでも母の存在は大きいと思う。

別に母に首ったけではない。

だが、母が美しくてほぼ完ぺきな人物だったから・・・他の女性に目が行かなかったのかもしれないな、と今更になって思う。

「会ってみたかったな・・・あんたのお母さんに」

「君と会えば、きっと母も気に入ってくれたと思うよ」

君なら母と気が合うから、と私は言い南を目指した。

ふと、その時、要らない荷物はどうしたんだろう?と頭が過った。

確か噂では夜、少佐の奇襲を受けて逆さ吊りにされたとは聞いている。

あれから1夜は経過したが、どうしたんだろう?

バディ役という運の悪い役目を請け負ったリーザ中尉に助けられたのか?

それとも警戒が強過ぎて朝方になってから助けられたのか?

・・・助けなかったのか?

まぁ、少佐の事でかなり確執があったから有り得なくはない、と思うが流石にリーザ中尉が公私混同はしない筈だと思い直す。

仮に助けなかったとしても、それはある意味では要らない荷物の自業自得。

自分で蒔いた種なのだから自分で刈り取ってもらおう。

そんな事を思いながら私とガリシャは馬を進めた。

――――――――――――――――――――――――

―――――――――――――

捕まってから夜を過ごした。

夜、リーザ中尉は助けに来たと思ったのだが来なかった。

最初は助けに来なかったリーザ中尉を怨んだが、夜の警戒は昼間の時より更に厳しくとてもじゃないが助けに来れない。

仮に私がリーザ中尉の立場なら朝方など警戒が緩む時を狙う。

それを思うと怨みは直ぐに消えた。

そして朝方になると警戒していた兵達も疲れ始めて、うたた寝を始めた。

そこへリーザ中尉が静かに現れて兵たちを布の中に堅い物を入れた“ブラック・ジャック”と呼ばれる物で気絶させて行った。

相手の背後から後頭部目掛けてブラック・ジャックを振り降ろすと

相手は僅かに呻き声を上げて倒れた。

これは主に用心棒などが携帯する武器らしく手軽な物でも作れる優れ物だ。

その上、攻撃力もある程度はあるので相手を気絶させる程度は出来る。

ブラック・ジャックで相手の後頭部を殴り気絶させたリーザ中尉は私を下に降ろした。

そしてそのままリーザ中尉と共に逃げた。

今は少佐の前に二人して立っている。

「どうだ?眠れたか?」

あんな状況で眠れる分けないのに・・・・この男は意地悪にも訊いて来る。

しかし、私もまた意地を張り「良く眠れました」と答えてしまった。

「そうかそうか。それなら良い。さぁ、今日もまた同じように走ってもらおうか?」

ニヤリ、と少佐は笑う。

だが、直ぐに笑みを消してこう言い直した。

「ただ走るだけでは面白くないな。・・・・よし、嗜好を変えて

今日は実弾が飛び舞う所を走ってもらおう」

私は唖然とした。

実弾・・・つまり本物の矢などが飛び舞う所を走れ、と言うのか！！

「で・・・・・・・・」

「出来る訳ない、なんて言うなよ？言ったらお前だけを走らせるぞ」

出来る訳ない、と私は言おうとしたが少佐はそれを阻止した。

「リーザ中尉はもう経験している。そして無事だ」

お前も同じ団長の身。

そのお前が出来ない、なんて言わないよな？

いや、言える訳ないよな？

誇り高き親衛騎士団の団長様なら、な・・・・・・・・・・・・？

とこの男は私の神経を逆なでする言葉を紡ぎ出す。

この男は私を逆上させて、私だけを走らせる気だと直ぐに分かる。

露骨にそう言っているのだ！！

ここは自分を抑えるべきなのだが・・・・・・・・・・・・駄目だった。

「この下種・・・・・・・・・がぁ！！」

私は寝不足の身体の何処からともなく力が満ち溢れて少佐に殴り掛ったが、逆に殴られた。

「上官に逆らうとは・・・良い度胸だ。罰だ。お前一人で走ってもらうぞ？」

まんまと少佐の罠に落ちてしまった私は薄れ行く意識の中でリーザ中尉が何か少佐に言っているのを見ながら気絶した。

第百十二章：観測手の家系

私とガリシャは南側を進みながら夜で余り見る事が出来なかった個所を1つずつ確認した。

「こうして見ると色々な個所にあるね。フォン・ベルト閣下が築いた城の跡が」

今は城だけだが、何れはこういう所も作り直したいと私は思う。

「あたしも狩りに行くけど、あまり気付かなかったな・・・・・・・・」

ガリシャも私の意見に同意ながらここに住んでいるのに気付かなかった、と続けた。

その声には羞恥が含まれていた。

「だけど、もうかなり年月が経っているから周辺の草木と一緒で分からないんじゃないかな？」

「そうだけど、ここに暮らしていながら何もフォン・ベルト閣下の事が分からないとなると・・・少し情けないかな」

「ここでもフォン・ベルト閣下の事は分からないのかい？」

ここに住んでいるなら何か言い伝えや本などがあると思っていたが無いのか？

「うん。普通なら、何かあると思うんだけど無いんだ」

ただ、一つだけ分かる事があるとガリシャは言った。

「何だい？」

「あたしの家計はフォン・ベルト閣下と親戚関係という事だよ」

「そうなの？」

これには驚きだ。

フォン・ベルト閣下の血筋を受け継ぐ者が居るとは驚かずにはいられない。

「うん。フォン・ベルト閣下の奥方様はあたしの先祖の姉だったらしいの」

という事はガリシャの祖先はフォン・ベルト閣下の奥方様とは兄弟だった、と言う訳か。

「その姉がフォン・ベルト閣下と結婚して、あたしの先祖は閣下の義理だけど弟になったの」

「なるほど。となれば、何か言い伝えとを書いた本とかは無いの？」

他の所には無くても、そんな家系なら何かしらあると思うのだが。

しかし、ガリシャは首を横に振った。

「無いんだよね。ただ、一つだけ言い伝えというか、村全体に対して言い残した事はあるよ」

「どんなの？」

私は気になり、ついガリシャに身を寄せてしまった。

『フォン・ベルト閣下を始め、我々の事は何も書き記すな。我々はただ遺言に従いこの地に根を降ろし来たるべき日に備えて戦の準備と心構えを怠らない事』

というのが言い伝えらしい。

そしてそれ以外の事は何も無い。

言い伝えも本も・・・何もだ。

ただ、風習などが受け継がれている、というだけ。

「その人はかなり真面目だったんだね」

それ以外にも何かある、とは思うが詮索はしない。

こんな言い伝えを残す位だ。

何か詮索されたくない事があるのかもしれない。

それならそれは詮索せずこのままにした方が良い。

そう思ってから私はガリシャから離れようとしたが、目の前に木の

枝がある事に気付いた。

だが、時すでに遅く見事なまでに当たって馬から落ちてしまった。

「だ、大丈夫？」

ガリシャが馬から降りて私を抱き起こしてくれた。

「だ、大丈夫だよ・・・油断した」

これが戦場なら命取りだ。

つい話に夢中になり過ぎた、と私は思う。

「少し休憩しよう」

ガリシャは馬の背に結んでいた布などを降ろした。

布はメジュリーヌさんが編んだ布だった

これを敷いた所に座れば温かいという優れ物だ。

「メジュリーヌさんに頼んで貰ったんだ」

そうガリシャは言うと敷いた布の上に私を抱き起こして自身の膝の上に頭を寝かせた。

俗に言う・・・・・・膝枕だ。

「あ、あの、こ、これは・・・・・・？」

私は思ってもいなかったガリシャの行動に面喰らって動揺した。

「少し横になりなよ」

ガリシャは恥ずかし気もなく喋っている。

この前なら恥ずかしそうに喋るのに、どういう事だ？

と思うが、ガリシャの膝は気持ち良いとも思う。

馬たちも布に身体を降ろし休み始めた。

「じゃあ・・・お言葉に甘えて休むね」

私は眼を閉じた。

何だかこうしていると・・・・・・幼い頃を思い出す。

よく母に膝枕をさせてもらった。

遊び疲れた私と弟達を母は怒りもせずにこうして膝枕をしてくれた・・・・・・・・・・・・・・

温かくて眠気を誘う最高の枕だった。

それが今はガリシャが代わりにしている。

そして何時しか私は眠っていた。

―

―　―　―　―　―

激しい銃弾が飛び舞う中、私とリーザ殿は匍匐前進を進んでいた。

下の地面は雪で直ぐに濡れて寒い事この上ない。

それに泥で汚れる。

服も、髪も、肌も・・・全てだ。

不快感極まりない。

しかし、実弾に当たるよりもマシだ。

何せ少し頭を上に動かせば実弾に当たり怪我をする。

運が悪ければ死ぬ。

だから、顔が地面に擦れるほど低くして進まなければならない。

それ以外にも頭上には有刺鉄線が張り巡らされているから上げたくても上げられないが。

では、どうやってこんな銃弾が来ておまけに頭を上げられない中を進むか？

それを行うには匍匐前進が役に立つ。

まさか、こんなに早くこの匍匐前進を実戦に限りなく近い訓練で行うとは思ってみなかった。

少佐に殴り掛るも、敢え無く敗れて気絶した私だが直ぐに訓練を行う事になった。

一人だと覚悟していたが、そうではなかった。

リーザ殿も訓練に付き合う事になったのだ。

罰として私一人が行う筈だったのにどういう事か？と少佐に訊ねればこう答えてきた。

『リーザ中尉が自ら志願して来たんだよ』

自分は私のバディだ。

バディは絶対にバディを見捨てない。

何が何でも助けるし苦楽を共にする。

私が罰を受けるなら自分もまた受ける、とリーザ殿は言ったらしい。

それを少佐は受け入れたのだ。

私は何も言えなかった。

少佐の事もあり、私とは余り仲が良いとは言えなかった。

いや、この方だけではない。

皆と私は仲が悪かった。

それは・・・・・・私が意固地だから。

原因は私にある。

私が皆から、自分から孤独するような真似をしたからだ。

そんな私をリーザ殿はバディだ、と言って訓練を共にしてくれている。

それが無性に嬉しかった。

「フィーナ殿。このまま匍匐前進して進み前方にある機関銃を制圧しますよ？」

リーザ殿が匍匐前進しながら私に言った。

「了解ッ」

私は銃弾に負けないように声を荒げて頷いた。

有刺鉄線を越えても匍匐前進で進む。

前方には有刺鉄線と杭で塞がれている。

そしてその更に後方に麻袋が積まれた陣地に3脚を構えた重機関銃が乱射していた。

匍匐前進したまま私は腰に差したナイフと鞘を抜き、鞘とナイフを合わせた。

ナイフは片刃だが、峰の部分は鋸状になっている。

これを鞘と合わせる事で有刺鉄線を切る事ーーー“ワイヤー・カッター”が出来る。

それで有刺鉄線を切り匍匐前進で進んだ。

それから上着に付けていたM67破片手榴弾を手に取り安全ピンを抜いて麻袋の向こうに投げた。

「手榴弾!!」

敵の声がすると同時に走り去る音がした。

そして爆発した。

雪が混ざった土などが頭に掛るが気にしてはいられない。

一気に立ち上がり64式自動小銃を持ち、前方と後方から占領した事を確認した。

「クリア!!」

「クリア!!」

二人同時に声を上げる。

「よし、一先ず終了だ」

少佐の声がした。

振り返れば少佐が細長い棒ーーー煙草を銜えながら近づいてきた。

帽子はベレー帽と呼ばれる帽子だった。

緑色の帽子で所属していた軍の紋章が描かれている。

「僅か短期間で匍匐前進を物にするとは流石だな」

「・・・・ありがとうございます」

まさか、少佐から称賛の言葉を浴びるとは思ってもみなかったから驚きを隠せなかった。

そして・・・・・どうも気に食わなくて、私は間をおいてから喋った。

「匍匐前進を覚えれば色々と役立つ。これからも行うが、今の感覚を忘れるな?今のは良かったぞ」

少佐は私にそう言うと煙草を口から離して指で先に溜まった灰を叩き落とした。

その仕草がどうしてか眼に焼き付いて離れなかった。

第百十二章：観測手の家系（後書き）

誤字脱字報告があったので、修正しました。

大変申し訳ありませんでした。（涙）

第百十三章：天国から地獄へ（前書き）

くくくくく・・・・・・・・んふふふふふふ・・・・・・・・ふははは

はっははははは！！

ざまあみろ！！ランドルフ！モゲテしまえ！！

あははっははははっははは！！

・・・・・・・・はぁ、失礼しました。どうも、ドラキュラです。

やっとの思いでランドルフの修羅場を描きました。

と言っても、私から言わせれば本の序の口。

この程度で泣き喚く彼には片腹痛い。

もっともっと修羅場を書いてランドルフを苦しませてみせます。（危）

まぁ、そんな事で本編をどうぞ！！

第百十三章：天国から地獄へ

どれ位、寝ていたのだろう？

私は冷たい風が頬に当たって目を覚ました。

もちろんガリシャの膝の上で、だ。

「もう大丈夫？」

ガリシャが私を真っ直ぐに見ながら訊いてきた。

「え？あ、う、うん」

私は身体を起こして試しに動いてみた。

特に問題ない。

手を握っては離すを繰り返し身体を温めた。

それからベレッタをホルスターから抜いてみたが問題なかった。

続いてモーゼルを構えたが両手も肩も大丈夫だった。

ベレッタとモーゼルの中身も点検してみたが、どちらも無事だった。

「うん。大丈夫だよ」

問題無いのを確認してから私はガリシャに告げた。

「良かった」

ガリシャはホッと自分のように安堵した。

「ねぇ、お腹空いてない？」

「少し減ってるけど、どうして？」

「今日は、その・・・料理を作って来たんだ」

簡単な料理だけど、とガリシャは言いながら立ち上がって自分が乗る馬に近付いた。

馬の背には麻袋などが縛られていた。

背に縛っていたバスケットを取り、私の所へ戻って来た。

そしてバスケットを開けて中身を取り出す。

私の前に野菜などを挟んだパンと干し肉、更に魔法の瓶を並べた。

パンはコンガリと焼かれていて香ばしい匂いがして食欲をそそる。

それを私と二人で分けて軽めの食事を頂く事になった。

ガリシャは私に野菜と肉を挟んだパンを渡してきた。

「た、食べてみて・・・・・・あ、味見はしたんだけど、まだ人には食べてもらって無いんだ」

それは味見と言って良いのか？と思うが、前の事を教訓としているだろう、と思い直して一口食べてみた。

口の中に香ばしいパンの味、肉のジューシーな味、野菜の新鮮な味が広がる。

「ど、どう、かな？」

ガリシャは私に訊いてみた。

また中身が焼けていないのでは？とか辛口なコメントが飛んで来るのかとビクビクしているように見えた。

まぁ・・・そこもまた可愛くて意地悪な事を言ってしまいそうな自分が居る。

それを抑えるのに必死なのをガリシャに悟られないように感想を述べた。

「うん。美味しいよ」

どうしてこう淡泊な感想しか言えないんだ？と自分でも呆れてしまう。

しかし、ガリシャはそれだけで笑顔になった。

「今度はちゃんと肉を中まで焼いたよ」

「それは食べて分かったよ。ちゃんと中まで焼けていて味がジュー

シーだったよ」

それなら最初からそれを言えば、下手に勘ぐったりしなかったのだがここでそれを言う必要も無いと思い言わなかった。

「ありがとう。ランドルフ」

私に礼を言ってからガリシャも自分の分を食べ始めた。

簡単な食事を済ませた後は魔法の瓶に入れていたコーヒーを飲んだ。

「何時も飲んでいるのと違うように感じるけど何かした？」

どうも何時も飲んでいるインスタント・コーヒーとは全てが違うと感じたのでガリシャに訊いてみた。

「旦那に頼んで貰った豆を使用していたんだけど、確か・・・・・“ブルーマウンテン”っていう最高級の豆らしいの」

「だから、これだけ香りが良いんだ」

などと納得しながら私はコーヒーを飲み続けた。

そして一息入れてからまた馬に乗って出発した。

暫く行くと妙な物を発見した。

木の上に作られた物だが、もう原型は留めていない。

ただ、良く見れば人工的に縦長に切られた部分が名残として残って

いる。

「これは、見張り台だったのかな？」

私は馬から見上げながらガリシャに訊ねた。

「少し登ってみるよ」

ガリシャは馬から降りて縄を取り出した。

先には鉤爪がある。

それを回しながら木に投げて、引っ張った。

ちゃんと食い込んでいるのを確認したガリシャは木に登り始めた。

「どうだい？」

私は訊くとガリシャは四方を見回しながら答えた。

「見張り台だね。もう原型は留めていないけど、平らにされている。しかも人工的に、ね」

となれば、ここから敵が来るのを見張っていた、と言う訳か・・・・・・・・

ここは夜になってから調べたから見落としていたな。

「きっとここ以外にも沢山あるね」

夜、調べたから見落とした事もあるが、もう数百年も経っているから原型を留めていない事もある。

「何だか面白そうな顔だね？」

ガリシャが私の顔を見ながら言ってきた。

「先人たちが建てた物を見つけて行くんだ。ある意味・・・宝探し、とも言えるね」

何より、ここがどんな所だったのかを知る面でも面白い。

「良い顔だね」

ガリシャは私の顔を見ながら呟いた。

「そう、かな？」

「うん。何て言えば良いか分からないけど・・・・良い顔だよ」

それだけ言うとガリシャは縄を戻して馬に乗った。

そして行こう、と私に言った。

私は頷いてまた進んだ。

それから午前中一杯は南側の再確認で時間を潰す事になった。

城に戻ったのは夕方になり掛けた頃だ。

「それじゃ、何処でお茶しようか？」

私とガリシャは馬から降りた。

場所は城の直ぐ傍にある馬小屋だ。

「んー、何処でも良いよ」

ガリシャは何処かウキウキした感じだった。

そんなに私と茶を飲むのが嬉しいのか？

それならそれで構わないが・・・嬉し過ぎるのでは？と思ってしまった。

そこへ・・・・・・・・・・

「ランドルフっ！！」

大きな声を出す人物に私とガリシャは声のする方向に眼をやった。

そこにはエリーナ様が立っていた。

ドレス姿だが寒くないように長い上着を着て手袋をしている。

「これはエリーナ様」

私は急いで頭を下げた。

その間もエリーナ様は歩み寄って来た。

「何処に行っていたのですか？」

「南側を視察に。昨夜は確認できなかった部分も今日は確認できました」

それでこれからガリシャと茶を飲む、と告げた。

「・・・・・・私との約束を、忘れたのですか？」

「約束？・・・・・・・・・・・・・・あ」

私は約束と言われても分からなかったが、直ぐに思い出した。

エリーナ様と二人だけで茶を飲む約束をしていたのだ。

だが、色々とあって駄目だった。

そして忘れていたのだ。

・・・・・・・・薄情者とは私の為に用意されたのか？

一瞬、それを思ってしまった。

「・・・・忘れていたのですね？」

「・・・・・・・・・はい」

エリーナ様は私を責める眼差しで見つめてきた。

差し詰め私は妻に浮気現場を見られた夫だ。

「私との約束は放っておいて・・・・そちらの娘と茶を飲むのですか？」

「・・・・・・・・」

エリーナ様は王女。

そして私は元見習い騎士（現在はテツヤ殿の下で動いているから1等兵）だ。

どちらも身分的に言えばエリーナ様の方が上。

更に王女と約束を交わし「男に二言は無い」などと格好付けて言いながら忘れていた愚か者。

責められても文句一つ言えない。

「ランドルフ。あたしとの約束はどうなるの？」

ガリシャが私に詰め寄って来た。

今はガリシャの約束もある。

しかし、エリーナ様との約束の方が先だし・・・・・・・・・・身分的にも上だ。

ガリシャの家もフォン・ベルト閣下の血筋を受け継いでいる事に代わりは無いが、現時点ではエリーナ様の方が血筋では上だ。

どちらとも約束をした私。

『・・・どうすれば良いんだ?』

迷っている間に二人から左右を挟まれた。

「ランドルフ、私との約束を守って下さい・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・あたしとの約束をすっぽかすの?」

二人して私の服を掴み引っ張り始める。

いや、服越しに腕を掴んで来る。

しかも、どちらも強い。

「い、痛たたたたたたたたたたっ!!ちょ、ひっぱら・・・・・・痛い!!」

私は離してくれ、と懇願するも二人揃って無視して更に力を込めてきた。

「つ、爪が、食い込んで・・・・・・・・・・・・・・・!!」

「ランドルフ。約束を守って下さい!!」

「ランドルフ。あたしとの約束は!?」

どちらも爪を食い込ませて更に力を込めて左右から引っ張って来る

！！

「う、腕が、も、モゲる！モゲテしまうから離して！！」

『約束を守って！！』

どちらも口を揃えて私の懇願を無視した。

『誰か、誰でも良いから助けて！？』

私は助けを求めずにはいられなかった。

第百十三章：天国から地獄へ（後書き）

タイトルを天国から地獄へ、に変えました。

最初こそ天国ですが・・・・後に地獄へと、叩き落とす旨を読者の皆様にも知ってもらいたかったので。

いや、もうこれは読者の皆様の気持ちと言っても良いでしょうか？

この鈍感王を奈落へと付き落とすのです！！

第百十四章：親子揃って（前書き）

ランドルフ・・・親子揃って天然の女たらしとは・・・・うらや・・・ゴッホン。

けしからん！！

しかし、まだランドルフの方が救いがあるのかもしれませんね。

これもイーグルの教育の賜物と言えるのでしょうかね？

まぁ、それは片隅に置いておくとして本編どうぞ。

第百十四章：親子揃って

私は目の前でガリシャが包帯を巻いてくれるのを黙って見ていた。

いや、話し掛ける話題が無いと言えば良いだろうか？

あれから私はガリシャとエリーナ様に血が出るほど左右から引っ張られて腕が千切れると思った。

それほど痛かったんだ・・・・・・・・・・・・

原因は私にあるが、もう少し優しくして欲しかったと言うのが正直な気持ちだ。

本当に手が千切れると思い、最早これまでと覚悟した時だ。

天に私の願いが届いた、とでも言えば良いだろうか？

エリーナ様の使用人が来て「お母様がお呼びです」と言ったのだ。

最初こそエリーナ様は使用人を疑った。

どうやら何度も騙された事があるのかもしれないな。

しかし、本当なら不味いと思ったのだろう。

渋々ながらも私の手を離してくれた。

そして私にこう言って去って行った。

『・・・約束は今度、必ず守って下さいね』

私はそれに頷こうとしたが、ガリシャに手を引かれて言えなかった。

行き先はロンガーム殿の家だ。

部屋に通された私はガリシャに衣服を脱がされて傷の手当てを受けているのだが、その間ガリシャは一言も言葉を発していない。

黙々と私の腕に傷薬を塗り、包帯を巻いているのだ。

だが、傷薬が異常な程に染みる。

それに苦言を漏らせば「我慢しなさい」の一言で一掃された。

それ以上、言うと何かあると思い言えなかった。

「・・・・・・・王女と私、どっちを取る気だったの？」

包帯を巻きながらガリシャは私に訊いてきた。

静かな、しかし、答えないと駄目という有無を言わせない力を込めた声で。

「分からないとしか言えない」

もし、エリーナ様が現れなければ私は君と茶を飲んでいた、と付け足す。

それからこう言った。

「約束を先にしたのはエリーナ様だ。恐らくエリーナ様と茶をしたと思うんだ」

そう、とガリシャは頷いた。

「でも、君との約束もある。だから、エリーナ様と茶をしてから・・・君と茶を飲んだ筈だ」

それにガリシャは頷きも答えず包帯を巻き終えた。

「今日は・・・茶を飲まないでおこうよ」

え?と私は訊き返した。

「だって、王女様と先に約束したんでしょ?なら、王女様と先に茶を飲んでからあたしと飲んで」

約束を先にしたのはエリーナ様だ。

なら、エリーナ様と茶を飲んでからあたしと飲むのが道理、とガリシャは続けた。

「でも・・・・・・・」

「良いよ。だって、あたしはあんたと一緒に二人でコーヒーを飲んだんだ。今日はそれだけで良いよ」

欲張りはしない、とガリシャは言って私を部屋から出すと王女様の

所へ行って、と背中を押してきた。

私は後ろ髪を引っ張られる思いで城へと向かった。

何故か釈然としない。

何故だ？

その理由は分かる。

私だ。

私自身の不甲斐ない行動が原因でガリシャを哀しませた。

これが釈然としない理由だ。

私は馬に乗って城に向かおうとしたが、前と同じく手すりに飛び移りガリシャの部屋の窓を叩いた。

直ぐに窓は開けられた。

眼元が僅かに赤い・・・・・・・・・・

泣いていた、と直ぐに分かった。

「今日の夜・・・また君の所へ行く」

必ず、だ。

必ず夜、君の所へ行くと私はガリシャに言った。

ガリシャは驚いた顔をしているが、私は続けて口を動かした。

「茶を飲もう。いや、飲みたいんだ。私は君と二人だけで夜に」

「・・・でも、王女様とあんたは」

「言った筈だよ？夜だ。夜は君に私を独占させる時間を与える」

エリーナ様は茶を飲む時だけ私を独占させる、と言い続けた。

約束だ、と私は小指をガリシャの前に突き出した。

「小指は何？」

「約束をする為に互いに小指を結ぶんだ」

幼い頃、よく母としたと説明する。

ガリシャは自分の小指を出して私の小指と結び合った。

「約束だよ？」

「あぁ。約束だ。今夜、君の部屋に茶を飲みに行く」

互いに小指を上下に振り私は飛び降りた。

そして馬に跨りリブリーブス城へと向かった。

リブリーブス城は斜面だから徒歩で行くとかなり厳しいが、ここで

育った馬は難なく進んで行く。

城に着いた私は近くの馬小屋に手綱を結び中に入り、エリーナ様を探し始めた。

しかし、この広さだ。

何処をどう探せば良いのかまるで見当が付かない。

それでも探し始める。

暫く探していると先ほどの使用人と会った。

「あら、ランドルフ殿ではないですか？」

使用人は私の名前を覚えていたのか、私の名を言いながらどうなさいましたか？と訊いてきた。

「エリーナ様は何処ですか？」

「エリーナ様なら女王様とお話し中ですが？」

「そうですか。実は、茶を飲む約束があったので」

「ですが、もう一人の娘とはどうなさいましたか？」

「・・・・彼女が先に約束したエリーナ様と茶を飲んでくれ、と言いまして」

使用人は私の態度を見て何かを悟ったのだろう。

少し話をしましょう、と言って歩き始めた。

「・・・そうでしたか」

使用人は前を歩きながら私の説明に相槌を打った。

「私は、愚か者です。王女との約束を忘れていたばかりか、ガリシャと約束をしてしまいました」

両方の女性に酷い事をした。

今になってそれが痛烈なほど分かった。

「そうですね。貴方は酷い方です」

使用人は私を責めるように言ってきた。

私はそれを無言で受け止める。

「王女との約束を忘れるなど騎士云々ではなく男として恥ずべき行為。それでは飽き足らず他の娘とも同じ約束をするのも頂けないですね」

「・・・・はい」

「その娘は、きっと貴方の事を・・・・・・殺したい、と思った筈ですよ？」

自分と約束しておきながら他の娘と約束した酷い男だ、と思ってい

る筈。

確かにそうだ。

私は酷い男だ。

「ですが・・・・貴方の話を聞きますと、夜に茶を飲むと約束したのですね？」

「・・・はい」

「それなら良いでしょう」

使用人は足を止めて私を見た。

「女性に鈍感なのも父君と同じですね」

「父を知っているのですか？」

私が訊けば使用人は懐かしい昔を思い出すように私を見つめてきた。

「貴方の父君も女性に人気がありましたからね」

「あの父が？」

私は自分の父を思い出した。

元は獅子頭軍団に所属していたが、戦の傷が元で引退してからは城の警護番をする事になった。

性格は真面目で謙虚で同僚の信頼も厚かったが・・・・・女性に好かれていたとは知らなかった。

「貴方の父君は城では大変、私達から好かれていました」

困っていたら何処ともなく現れて助けてくれたし、さり気なく優しさを見せてくれた。

その上、容姿も良かったと使用人は続けた。

確かに容姿は良かった。

母とも釣り合いが取れている程だ。

「ですが、今の貴方と同じく鈍感で女性との約束を忘れる事が多かったです」

そういう所は父に似ていると思うと、些か情けない。

「私も彼と約束をしましたが彼は忘れてしまいました」

死ぬまで忘れていたらしい。

何と酷い父だ。

「でも、貴方様はちゃんと思い出した上に、両方を何とかしようとしております」

些か危ないし、好い加減ではあるがそれでも良いと使用人は続けた。

「もうそろそろお話も終わっているでしょう。私が案内しますから、どうぞ付いて来て下さい」

「は、はいっ」

私は頷いた。

そして使用人はまた歩き出した。

――――――――――――――――――――――

―――――――――――――

『・・・本当に父君に似ているわね。でも、女性を哀しませない点で言うなら・・・・・あの人よりは上ね』

私は後ろを歩いて来る亡き想い人の息子、ランドルフ殿を見ながら思った。

あの人もランドルフ殿も女性を泣かせる所は一緒。

でも、あの人より女性を泣かせないようにしている点で言えばランドルフ殿の方が上だわ。

あの日・・・私と茶を飲む約束をしたのに、あの人はランドルフ殿の母と茶を飲んだ。

そしてそのまま結婚。

あの時、私も結婚を言おうとしていた。

だけど、それを言う前に終わってしまった。

それからずっと独身を通しているけど・・・・もし、あの世で再会したら今度こそ自分の想いを伝えようと思う。

ランドルフ殿を見ていると、もう若くもないのに年頃の娘みたいに胸が時めいてしまうのよね。

顔立ちも体格も似ている。

初めて見た時はあの人が若返った、と思ったけど違う。

『私の愛しい人。貴方の息子もまた貴方と同じで女性を泣かせているわ』

親子揃って女泣かせね、と私は言いながらも生ある限りこの青年の行く末を陰で見てみようと思う。

私が産んだ子ではないけど、あの人の息子なら・・・・私の息子だったとも思える。

だから・・・良いでしょ？

私は愛しい人に問いを投げた。

第百十五章：王女と茶会（前書き）

えー、この度、またもや同じ過ちをしてしまったドラキュラです。
（汗）

戦闘を進めていない、と指摘されてしまいました。

前も似たような指摘をされたのに、また同じてつを踏んでしまいました。

ですが、直ぐには書けないので、もう少しお待ちください。

後こんな甘くて口から砂糖が出そうな話が５話から１０ほど続きます。

それからまぁ、情報収集編を書きながら、リカルド側の視点を書きます。

もう少し、この甘い話に付き合って下さい。

お願いします・・・・・・・・・

第百十五章：王女と茶会

私は使用人に案内されてエリーナ様の居る部屋に着ていた。

しかし、そこにはテツヤ殿も居た。

「テツヤ殿。どうしたんですか？」

「女王に呼び出しを受けた」

要らない荷物の訓練を一先ず終えた所だったらしく、休憩を挟もうとした時に呼び出しを受けたようだ。

「お前は？」

私が答えようとした時に使用人が答えた。

「気を付けろよ？さもないと本当に刺されるぞ」

テツヤ殿は驚きもせずに平常心な態度と声で私に言ってきた。

「・・・もう刺されました」

私の心臓に・・・・・深く、抉るようにして・・・・・・・・・・・

「・・・なるほど。良い教訓になっただろ？」

「はい」

「では、行きますか？」

使用人の言葉に私とテツヤ殿は頷いた。

そしてドアが開いた。

中にはサラ様とエリーナ様が居た。

「テツヤ殿ッ」

「ランドルフっ」

二人揃って私とテツヤ殿の名前を呼んだ。

「言われた通り来たぜ？女王陛下」

「エリーナ様。約束を果たしに来ました」

私とテツヤ殿はそれぞれに来た旨を伝えた。

「ランドルフ。私の部屋に行きましょう？」

エリーナ様はソファーから立ち上がると私の手を取り部屋を出た。

後ろ眼でテツヤ殿を見ればテツヤ殿はテツヤ殿でサラ様と何か話をしていたが聞き取れない。

しかし、こちらを見たテツヤ殿は眼でこう言った。

『刺されないように気を付けろ』

『テツヤ殿も気を付けて下さいね』

互いに眼で言った。

そして私はエリーナ様に手を引かれて部屋を出た。

その後を使用人が付いて来る。

「どうして貴方まで付いて来るのですか？」

付いて来る使用人にエリーナ様は咎めるような口調で話し掛けてきた。

「お茶を用意したりするのに必要ですから」

使用人はエリーナ様を軽くあしらうと私を見た。

『私が居た方が良いでしょ？』

と訊いてきたのだ。

『お願いします』

私は眼で頼みエリーナ様に勘付かれないように気を使った。

エリーナ様の部屋はサラ様の部屋から少し離れた場所にあった。

「どうぞ」

ドアを自ら開けたエリーナ様は私と使用人を中に入れた。
中は王族らしい格式張った家具で一杯だが、人形などもあり可愛らしい一面もまた見えた気がした。
「どうぞ、お掛けになって下さい」
「では、失礼します」
私は断ってから壁に背を預けたが、それをエリーナ様は咎めた。
「どうして壁に背を預けるのですか？」
「習慣なんです」
「では命令を下します。ソファーに腰を降ろして下さい」
「・・・・了解しました」
私は些か不承できない感じで頷きながらもソファーに腰を降ろした。
こんな事で一々命令されては堪らない、という気持ちだった。
「では、エリーナ様。私、茶を持って参ります。茶葉は何が宜しいですか？」
「そうですね・・・・ランドルフはどうですか？」
「何でも良いです」

ソファーに腰を降ろしながら私は使用人を見て答えた。

「少々お待ち下さい」

使用人は一礼すると部屋を辞して私とエリーナ様だけが残された。

エリーナ様は私の隣に腰を降ろしてきた。

「ランドルフとこうして二人きりになるのは・・・・・初めてですね」

「そうですね」

私は些か淡泊な声で返事をしながら改めて中を見回しながらソファーから立ち上がった。

「この壁とか家具は全てメジュリーヌさんが？」

「はい。そうですが、どうかなさいましたか？」

「いえ。ただ、やはりメジュリーヌさんは凄いと思ったんです」

二人だけ、という事もあり私はエリーナ様と距離を取り話題を出し続ける事で変な事にならないように気を使った。

「ランドルフ。今夜は、夕食を共にしてくれますか？」

しかし、エリーナ様は直ぐ様私の話題を切り変えてきた。

「お母様もテツヤ殿と夕食を共にしたい、と言っておりました」

だから、親子そって夕食に誘っているのかと私は考えたがテツヤ殿は恐らく断るな、と思った。

ミレーネ様の事も考えると、やはり断るだろう。

なら、私もまた断る事にする。

まぁ、その前にガリシャとの約束があるのだから断るのは必然だが。

「申し訳ありませんが、既に約束があるので無理です」

「その方との約束を、次の機会には・・・・・・・・・」

「出来ません。約束は守る物。貴方様との約束は果たします。今度は、その方との約束を果たすのが礼儀であり私の中で決めた掟のような物です」

これぱかりは譲れない、と私は断言した。

「・・・命令、と言ってもですか?」

「・・・・・・・・・」

エリーナ様の言葉に私は暫し固まった。

今、何と言ったんだ?

命令?

命令と言ったのか？

このお人形のように可愛らしい娘は？

「どうですか？ランドルフ」

エリーナ様は私に訊いてきたが、私は答えなかった。

私はこの方を些か過大評価していたのだろうか？と思った。

エリーナ様は権利を決してこんな自己欲を満たす為に使用する方ではない、と思っていた。

だが、これを聞くと自己欲を満たそうとしているとしか思えない。

王族たるもの自己の欲望を満たす為に権利を使用するなど言語道断。

それをこの方はしようとしている。

「貴方様は・・・・・・・・・」

私は言葉を放とうとした。

どんな言葉なのかは自分でも分からない。

ただ一つ言える事はこの方を泣かすような言葉を放とうとしている事だけだ。

しかし、放とうとした所でドアが開いた。

「お茶をお持ちしました」

使用人がトレイを持って入って来た。

「・・・・・・・・」

私は言葉を放つのを止めた。

使用人の登場で言うタイミングを失った、と言えば良いだろうか？

もし、居なければ私はきっと言葉を放っていた事だろう。

そして改めて思う。

私は何だ？

この国を護る者だ。

そしてエリーナ様はこの国の王女。

私はその王女にどんな言葉を放とうとしていたのだ？

それは王国を護る者が王女に対して放つ言葉ではない。

・・・・・いけないな。

どうも、感情に走ってしまう。

だから、私は2流なんだと思い自分を叱咤した。

言葉を放とうとしたが、途中で止めた私をエリーナ様は見つめてきたが、それを私は無視した。

顔を合わせれば、またどんな事を言うか分からなかったからだ。

暫く二人の間に嫌な空気が流れた。

「はい、どうぞ」

それを吹き消すように使用人が私に紅茶を渡してきた。

心地よい香りで嫌な空気は消し飛んだ。

「ありがとうございます」

礼を言ってから私はカップを受け取った。

エリーナ様にも渡した使用人は静かに壁に張り付き、微動だにしなくなった。

『・・・壁になる訳か』

あくまで自分は壁でここには居ない。

だから、好きなようにどうぞ、と言う事だと勝手に解釈した私は紅茶を口にした。

「良い香りですね。エリーナ様。これは何の葉か分かりますか？」

私は気を取り直してエリーナ様に質問した。

「これは・・・・・“コール”と言う葉です。心地よい香りと後味が良くて疲れが吹き飛びます」

少し考えてからエリーナ様は答えた。

「そうですか。私には手が届かない葉なのでしょうか？」

「そういう訳ではありませんが、どうしてですか？」

「いえ。ただ気に入った葉だと思っただけです」

私はそれだけ言うとまた紅茶を口にした。

コーヒーも良いが、こちらもまた良いなと思う私にエリーナ様が話し掛けてきた。

「あの、ランドルフ」

「何か？」

私は香りを楽しむのを一時的に中断してエリーナ様を見た。

「先ほどの、お話・・・どうですか？」

「誠に残念ですが約束があるので・・・申し訳ありません」

エリーナ様は落ち込んだ顔を浮かべた。

使用人も「仕方ありませんよ」と耳元で囁くのを聞いた。

それから数時間ほど・・・夜になるまで私はエリーナ様と茶を飲んだ。

去ろうとした私にエリーナ様が最後とばかりにこう言ってきた。

「今度、夕食を一緒にして下さい」

「今度は忘れないようにしておきます」

私はこんな目には二度と遭わない事を胸に誓いながらエリーナ様に背を向けた。

私の背中をエリーナ様がずっと見続けているのを感じながら。

幕間：柄じゃない（前書き）

今回は徹夜の独白です。

またショウを少し出しますが、ランドルフと良い勝負です。ｗｗｗ

幕間：柄じゃない

俺は女王・・・花と二人だけで茶を飲んでいた。

花は俺と会っているのが楽しいのか終始笑顔を絶やさない。

この笑顔を見るだけでも・・・心が、身体が、癒される。

それと同時にどす黒い気持ちが底から湧きあがって来る。

『ちっ・・・ミレーネだけじゃ足りないってか』

自分の底なしの欲望に我ながら呆れ果てる。

こういう時は煙草を吸って酒を飲んで憂さ晴らしをするのが良いんだが、生憎と酒も煙草も花の前ではやれない。

だから、蛇の生殺しだ。

「テツヤ殿。どうかなさいましたか？」

花が俺の様子を敏感に感じ取り訊ねてきた。

「いや。何でも無い」

俺は極めて平然と答えたが内心は苦しくて堪らなかった。

まるで拷問に掛けられているようだ。

傭兵である俺は拷問に掛けられた事がある。

いや、正規兵の時も特殊作戦に参加した時はやられた。

特殊作戦に参加する者は存在自体を抹消される事がある。

外人部隊は諸にそれが来る。

フランスの為に汚れ仕事をするのが外人部隊の仕事だからな。

今の状況を拷問で表すなら鞭で引っ叩かれた上に塩を塗られた感じだ。

まだ序の口と言えるが、それでも並みの者なら失神する位の痛みだ。

それだけ花と居るだけで・・・・拷問だ。

前は幸福を感じていたが・・・・ミレーネが花の姉と知ってからは痛みを感じるようになった。

理由は分かる。

俺自身の願い・・・欲望と言った方が正しいか。

花を自ら手折りたい。

そんな欲望が沸き起こっている。

だから、敢えて色々と理由を付けて会わないようにしていたんだが、今日ばかりは“命令”と言われて従うしか出来なかった。

この言葉を言われては駄目だ。

自己欲を満たすような女ではないと思っていたが・・・そういう所もまた味が合って良いが、な。

花は俺に色々と話し掛けて来る。

戦の事は口にしない。

俺もまたしない。

花には血生臭い話は無用だ。

だから、俺は敢えてしないし花もまた自分が口出ししても意味が無い、と分かっているからしない。

今は俺の国について話をしている。

「俺の国は幾つもの島で形成された島国だった。ここで言うならシャインス公国だ」

5大陸の中にあるシャインス公国。

ここに一度は占領されるも民衆の抵抗から公国として独立を果たした。

そして同盟を結んでいる訳だ。

その国が俺の国と似ている。

「そうなのですか。それでテツヤ殿はその島国の何処に居たのですか？」

「そこまで覚えていない」

「では、フランスという国はどうですか？」

「あの国は外人部隊の時に居た。だが、実際は部隊の本拠地だった島に居た」

第二外人落下傘連隊に最初から配属された訳ではないが、何時の間にかそこに配属されたんだよな？

今にして思えば。

第二外人落下傘連隊の本拠地はフランスの領土であるコルシカ島だ。

長靴を履いた猫を地で行く体格をしていたナポレオンの出生地でもある。

そこで俺は暮らして傭兵になった後も気紛れで訪れた物だ。

「その島の後は・・・・首都のパリで暫く暮らした」

芸術とお洒落の都と言われているパリだが、俺から言わせれば凝り固まった糞が溜まった排泄所みたいな所だ。

表向きは立派でも裏では薄汚いもんだ。

そして俺が居た場所はパリ1卑猥な街と言われるモンマントル。
そこで俺はかつての相棒と暮らし厄介な仕事をしていた。
傭兵だからって1年中を戦場で暮らしている訳じゃない。
暇な時は・・・まぁ、金が足りない時などはこういう所で金を稼いでいる。

『そう言えば・・・・・あっちにも可憐な花が居たな』

いや、あれは花というより女神だな。
小麦など作物を豊作に導く豊穣の女神。
どういう因果か俺と知り合って危ない目にも合わせたが・・・今頃、どうしているかな?
妹の方は妹の方で・・・あの鈍感男に夢中だった。
一番下の坊やは喧嘩に強くなったか?
いじめられっ子だったのを俺と相棒で鍛えたが・・・道を踏み外していないか?

「・・・柄じゃねぇな」

俺は苦笑した。
もう会う事もない人物にここまで気を使うなどどうかしている。

「どうなさいました？」

花が俺の様子を見て訊ねてきた。

その綺麗な声は俺みたいな男まで誘う甘い蜜。

まったく自覚しているのか怪しいものだ。

「いや、何でも無い」

俺は頭を振って誤魔化した。

そして窓を眺めた。

もう夜になろうとしている。

そろそろ時間だな。

俺は茶を一気に飲み干した。

既に温くなってあまり美味しいとは思えなかったが、乾いた喉を潤すには十分だ。

「では女王陛下。時間だから帰る」

俺はテーブルにカップを置いて、傍らのＡＫＭアサルトライフルを持ち壁から離れた。

「あ、あの、テツヤ殿・・・・・・・」

花が去ろうとする俺を止めた。

少し、おどおどしている感じで先を言おうと必死だった。

「何だ？」

俺は花が言うのを待った。

「今日、夕食を・・・ご一緒にどうですか？」

花は一生懸命な様子で俺を誘ってきた。

以前も誘われたが、今回は俺と二人だけ。

それが緊張の原因だろう、と俺は勝手に推測した。

「夕食ね・・・悪いが、既に出来ているんだ」

家にはミレーネ、メジュリーヌが居る。

リーシャは訓練の為、フィーナと演習場で寝泊まりをしている。

2人が夕食を作って居るから俺は断った。

「そうですか・・・・・・」

花は明らかに落胆の顔を浮かべた。

「そんな顔するなよ。まぁ、何時になるかは分からないが、今度食

べようぜ？」

あんたさえ良ければ、な。

それを聞いた花は落ち込んでいた顔を上げて頷いた。

「約束、ですよ？」

「二度目の約束だな。だが、安心しろ。女と交わした約束は破らないんだ」

俺はじゃあな、と言って今度こそドアを開けて出た。

部屋から出て少し歩いてから女神の抱擁を銜えて火を点けた。

煙を吐いてからまた歩き出した。

「さぁて・・・帰るか」

今日の所は夜襲も無しにしておこう。

フィーナの奴も疲れているだろうしな。

まぁ、顔を見に行くにしても飯が先だ。

それからリーシャの所へ行くとしよう。

それに親衛騎士団の相手もある。

忙しくて目が回るぜ。

暗い闇の中を歩きながら俺は城を出た。

城を出て直ぐ傍にある馬小屋に行き、自分が乗る馬の手綱を引こうとした時だ。

「テツヤ殿」

振り返ればランドルフが立っていた。

「よぉ。色男。王女の茶は美味かったか？」

こいつほど鈍感な男は相棒位だ、と俺は思った。

同じ狙撃を得意とし女の気持ちをまるで理解していないし気付かない。

本当に刺されても文句は言えないほど鈍感だ。

「まぁ、美味しかったと言えば美味しかったんですが・・・・・・・・・」

何か遭ったな、と俺は直感した。

「泣かせたのか？」

「いえ、そうではないんです。ただ・・・・・・・・・・・・・・・」

茶を飲んだ出来事を話すランドルフ。

「なるほど」

俺は馬に飛び乗って頷いた。

王女が命令を行使した、か。

そしてこいつは王女に些か幻滅した。

「王族なら権利を無闇に行使するなど言語道断、と知っている筈なのに・・・・・・・・・」

「そりゃそうだ。王族は指一つ動かすだけで人を殺せるだけの権利を持っている。だが、その程度なら可愛らしいじゃないか」

王女はこいつを引き止めたい故に命令という権利を行使した。

何ともまぁ・・・甘い恋愛だ。

まぁ、俺も経験しているから何とも言えないが。

「はぁ・・・・・」

ランドルフは俺の言葉を聞いて何とも言えない顔をした。

「オリガ嬢に夢中なのも分かるが、もう少し他の女にも目をやれ。別に手を出したりしないんだ。円滑に物事を進めるには周りと付き合うのも大事だ」

俺もあいつもそれは欠けているが、必要最低限の付き合いはしていた。

こいつには些かそれが欠けている。

こいつには俺らみたいになって欲しくない。

「俺の相棒もお前みたいに超が付く鈍感男だった」

「相棒と言うと“猟犬”殿、ですか？」

「あぁ」

相棒の名はランドルフには伏せている。

傭兵ってのは二つ以上、偽名を持っているし名刺交換みたいに自分の正式名を教えたりはしない。

一応、また会うかもしれないから敢えて教えていない。

まぁ、それ以外にも敢えて教えない方が・・・ミステリアスで良いと思ってもいるが。

「あいつも女心にはとことん鈍感だった。お前のような状況もあった」

「それで、その猟犬殿はどうしたんですか？」

「どうもしない。ただ・・・猟犬よりも更に周囲の臭いを嗅ぎ分けておけ」

そして聡くなれ。

機敏に周囲に気を配れ。

私生活でもそれ位は必要だ。

さもないと猟犬みたいになるぞ？と俺は言うとランドルフは頷いた。

「会っていませんが・・・かなり女を泣かせたんですよね？」

「あぁ。両手で数え切れない。両足合わせても足りないな」

「・・・そこまで鈍感にはなりたくないので頑張ります」

「そうしておけ」

それから城門を潜って俺はミレーネ達の居る家へと行き、ランドルフは観測手を務めるお嬢ちゃんの元へと向かった。

第百十六章：夜に茶会

私は暗くなった雪道を馬に乗りながら進んでいた。

雪は止んでここ暫く降っていないが、まだまだ解ける兆しも無いし寒い。

テツヤ殿はまた夕飯を食べたら要らない荷物の元へ行くらしい。

様子見と言っていたが、夜襲を掛けるんじゃないか？と思ってしまった。

私達が受けた訓練では夜襲もあった。

夜、物音を立てずに忍び寄って攻撃をするのだがあれほど怖い物は無い。

狙撃と同じ位、私は怖かった。

特にテツヤ殿はそういう変則技に掛けては右に出る者は居ないくらい得意だ。

あの方の夜襲を掛けられた時を思い出すと怖くて眠れない気がする。

そんな事を考えている内にガリシャの家に着いた。

「じゃあ、少し行って来るよ」

馬に言いながら私はまた手すりに飛び付いた。

それを合図にしたように窓が開いた。

「来てくれたんだ・・・・・・・・・」

ガリシャはまるで夢でも見ているように私を見つめてきた。

「約束は守るよ。それより中に入れてくれないか？」

ガリシャは頷いて私の腕を掴み、中に入れてくれた。

「ロンガーム殿達は？」

「今は居間に皆居るよ」

つまり2階にはガリシャだけという事だ。

既に部屋には茶の用意がされていた。

「適当に座ってて」

私は頷いて椅子に腰を降ろした。

もちろんカーテンはちゃんと戻した。

「明日からは何をやるのかな？」

ガリシャは二人分コーヒーを淹れながら私に訊ねてきた。

「そうだね・・・先ずは四方を視察した結果を報告してそれで話し

合いをすると思うんだ」

南側は昔の名残が数多くあった。

恐らく他の三方も同じだろう。

それをテツヤ殿達に報告してからどうするか決める筈だ。

「私の考えではかつて築かれた場所に色々と築くだろうね」

昔のまま使える部分もあるが、何かしら手を加えるだろうと私は思っていた。

私がテツヤ殿の立場ならそうするからだ。

「ふぅん。ねぇ、ランドルフ。あんたの兄弟ってどんな人たちなの？」

「私の兄弟？私の兄弟は・・・・・・・・・・」

3人兄弟で弟と妹が居る。

「弟は昔から物を作るのが上手くてね。今は大工の頭に弟子入りして居る筈だよ」

私の弟は昔から物を作ったり、それを作る過程を見るのが好きだった。

だから、幼い頃からよく大工職人の所へ行っては一日中眺めているのを覚えている。

「妹は？」

「妹は読書が好きなんだ。それからよく医者の真似事をしていた」

弟に比べて妹は本を読むのが好きだった。

本は哲学から医学などおよそ子供が読むような代物ではない本ばかり。

だが、今にして思えば薬剤師や医者になりたいと思い勉強していたのだろう、と思っている。

「妹は薬剤師の所へ奉公に言って今では自分で薬を調合していると聞いているよ」

そして私が聖騎士になった時、母が死にその時だ。

兄弟が顔を合わせた時は・・・・・・・・・・・・

「それからは会ってないの？」

「そうだね。弟も妹も忙しい身だし私も聖騎士として仕事があった」

だから、会っていないし手紙のやり取りもしていない。

「ただ言える事は元気にしていたし、首都が陥落した時も無事と言う事だよ」

首都が陥落する前、双眼鏡で覗いたが二人とも職場の同僚と思われ

る者達と一緒に首都を逃げるのが見えた。
今頃は何処かに避難している筈だ。
「ふぅん。あたしの兄弟とは大違いだ」
「どうして？皆、家の為に働いているじゃないか」
「そうだけど、姉であるあたしを何時も馬鹿にしているんだ」
「それは君が一番元気だから遊び相手になって欲しいんじゃないかな？」
ガリシャの取り得は元気な所。
だから、弟たちにとっては格好の遊び相手という事だ。
「そうだけど疲れる時があるんだよね」
お陰で肩が凝る、と些か歳が速いと思う事を言うガリシャ。
「それなら肩でも揉んで上げようか？」
「え？出来るの？」
「あぁ。よく母の肩を揉んでいたからね」
私はガリシャを椅子に座らせて肩を試しに揉んでみた。
「結構、凝ってるね？これはやりがいがある」

昔のコツを戻す為に最初はゆっくりとやっていた。

しかし、徐々に慣れ始めると少し速くした。

「ああ、気持ち良い・・・・あんた、肩揉みの天才だね・・・・・・」

心地よい声でガリシャは喋った。

「ありがとう」

礼を述べながら私は肩を揉み続ける。

そして何時の間にかガリシャの寝息が聞こえてきた。

「ガリシャ？」

私が声を掛けても返って来るのは寝息だけ。

「眠った、か」

私は苦笑しながらガリシャを横抱きにしてベッドに寝かしつけた。

掛け布団を肩まで掛けて暫くの間、ガリシャの寝顔を見続けた。

―　―　―　―　―

―
「たっく・・・何やってんだよ。そこは男として眠る女の唇を奪えっ」

「そうだ。まったく、何と情けない」

「寝顔を見るだけとは・・・欲の無い若者じゃな」

「好い加減止めろよ。こんな覗きは・・・・・・・・はぁ」

俺はドアの隙間から覗く3人に溜め息を吐きながらこの馬鹿らしい事を止めさせようとした。

俺、イーグル、ロンガーム、獅子頭の男は居間で寛いで居たんだが、2階から物音がして行ってみた。

運良く（悪いと言った方がこの場合は正しいか?）ドアが僅かに開いていた。

その隙間から覗けばランドルフ君が窓から入って来ている所が見えた訳だ。

イーグル達は「夜這いか!!」と思ったのか・・・思春期の餓鬼みたいにはしゃいだ。

夜這い・・・あまり子供には言えない言葉だし、公言できない言葉だ。

で、俺らがやっている事もまた同じ事だ。

どうやらランドルフ君はガリシャちゃんと茶を飲む為に来たらしい。

だったら、窓からではなくドアから堂々と入ってくれば良いのに、と思うだろうがそこはそこ。

年頃の男女だ。

こういう少しロマンチックな事をしたいんだろうな、と俺は推測する。

俺も昔はそんな真似をしたもんだ。

それからどうなったか？

彼女の父親に見つかって窓から付き落とされた上に槍で追いかけ回された。

最後の仕上げとばかりに尻を刺されて終わった。

まぁ、昔の事だが・・・・・・・・・・

話を戻そう。

今、３人はドアノブに齧りついて二人の様子を見ている。

大人のする事ではない。

それとは打って変わって二人は違う。

茶を飲みながらそれぞれの家族を話し合っている。

到って健康そのものだ。

俺らより若い二人が健康なのに・・・どうしてこうも違うんだか。

溜め息を吐かずにはいられない。

その内、ランドルフ君はガリシャちゃんの肩揉みを始めた。

イーグルなどは「肩から徐々に下へ行け！！」と言ってしまう始末だ。

本当にそんなんだから女に嫌われるんだ、と思うぜ。

やがてガリシャちゃんは寝てしまった。

ランドルフ君はガリシャちゃんをベッドに寝かすと、それを眺め始めた。

それをこの3人は「愚か者が」と罵った。

この3人から言わせれば“据え膳”だ。

据え膳とは・・・まぁ・・・あれだ。

台の上に寝かされた食材を頭に浮かべば分かり易いだろう。

あれが、それだ。

他の男から見れば正にそれだ。

まぁ、そこは他の男と違う。

ランドルフ君は極めて紳士的な態度を取っている。

それをこの3人は我が身のように歯軋りして見ている。

傍から見れば変質者だ。

俺はと言えば他人の色恋沙汰には足を踏み入れないがモットーだ。

ランドルフ君は俺から見れば弟みたいな物だから、助言こそするがこんな真似はしない。

だから、3人を何とか引き離そうとしているんだが・・・・まるで駄目だ。

「おい、好い加減止めろよ。良い歳した男3人が馬鹿馬鹿しいぞ」

最後の言葉とばかりに俺は言ったが、3人は聞く耳持たない。

「もう知らん」

俺は諦めて自分の部屋に行く事にした。

ふと見れば静かに階段を登って来る女性陣が見えた。

ああ・・・終わりだな。

俺は早々にドアを開け中に入った。

これから起こる災難に巻き込まれたくないからな。

そしてドア越しに小さな悲鳴が聞こえたが、俺は無視した。

自業自得だ。

俺は煙草を取り出して火を点けた。

「せいぜい熱めの灸を据えられるんだな」

良い歳した男が馬鹿らしい事をした罰だ。

第百十七章：偵察と狙撃

翌日、私はオリガさんの家で朝食を取っていた。

「そんな事が遭ったの。まったく本当に鈍感ね」

オリガさんは昨夜の事を聞いても驚きもせず、また責めもせずに笑っただけだった。

あれからガリシャは朝方まで寝ていたが、私も途中で寝てしまい共にレイリア殿が起こすまで同じ部屋で寝ていた。

そして居間に降りたが、ロンガーム殿達の姿が無くヘンさんだけが居た。

行方を訊けば「さぁな・・・何処かで寝てるんじゃないか？」と言われて終わった。

朝食を共にしようと言われたが、オリガさんの事も考えて謝辞した。

オリガさんの家に急いで戻ると朝食の準備中のオリガさんと会い、昨夜の事を包み隠さず話し夕食を取らなかった事を詫びた。

だが、オリガさんは先ほども言った通り笑って事なきを得た訳だ。

朝食を済ませた後はオリガさんと一緒に食器を洗ってからテツヤ殿の居る演習場へと向かった。

恐らく既に演習場に居ると判断したからだ。

城へと行く途中でレオンと会った。

「おはよう。レオン」

「おはよう。ランドルフ君」

私とレオンは互いに挨拶をしてそれぞれ視察した方角について話し合った。

「僕の視察した北側も同じだったよ」

北側は谷だ。

谷の方は絶壁で到底、人力で上り下りする事は出来ない。

ただ視察した結果、地下がある事が判明した。

地下はトーチカのようになっており砲台や対空兵器を取り付ける事が出来る。

他にも色々とあるらしい、とレオンは語り二人でテツヤ殿に会いに行く事にした。

演習場に行くとテツヤ殿は煙草を蒸かしながら親衛騎士団を相手に大立ち回りを演じていた。

人数は要らない荷物を纏め7人。

全員が剣を持ち対峙している中で要らない荷物だけが銃剣を取り付

けた６４式自動小銃を持っていた。

「さぁ・・・掛って来な」

テツヤ殿はニヤリ、と笑って相手を挑発した。

「掛れ！！」

要らない荷物の叫びを合図に7人が一斉に襲い掛かった。

ふとテツヤ殿がこちらを見た。

それだけで私とレオンは理解した。

「レオン」

「了解」

私はモーゼルに銃剣を取り付けた。

レオンはＳＫＳカービンの銃身下に取り付けられた銃剣を押し上げて銃口に取り付けた。

そして静かに歩み寄り背後から奇襲を掛けた。

「背後から敵襲！！」

親衛騎士団の一人が私たちに気付いて声を上げた。

だが、時すでに遅く私たちは1人ずつ片付けた。

前からテツヤ殿がそして後ろから私とレオンが挟み打ちにして7人を蹴散らした。

しかし、前に比べれば確実に実力が高いと分かった。

特に要らない荷物は銃剣を取り付けた６４式自動小銃を使用しているので、中々に手強かった。

重い上に木製ストックを使用しているため当たるとかなり痛い。

その６４式自動小銃を武器に形振り構わず戦う要らない荷物だが、テツヤ殿の敵ではなかった。

「良い所に来たな。お前等」

テツヤ殿は私とレオンに笑みを浮かべてきた。

「おはようございます。テツヤ殿」

私とレオンはテツヤ殿に挨拶しながら、要らない荷物のアサルトライフルを見た。

「懐かしいですね・・・・そのライフルは」

「あぁ。俺も久し振りに持ったが、いやはや良くこんなライフルを使ったと思っているぜ」

「・・・・少佐。このライフルは、一体何ですか？」

要らない荷物はテツヤ殿を少佐と呼び、６４式自動小銃について説明した。

「最初に言っただろ？俺の国が開発し正式採用したライフルだと」

「こんな欠陥だらけの物を、なぜですか？」

「ランドルフ。説明してやれ」

「はっ」

私は要らない荷物に説明した。

「・・・そのような経緯があったのですか」

要らない荷物を始めとした親衛騎士団はそんなライフルだったのか、と納得した。

「それを最初に持たせたのは、それが細かい部品で作られているからだ」

これを最初に覚えればある程度は慣れる。

そうすればある程度のライフルの分解などは容易と考えたのだ。

「まぁ、それを使用するのも終わりだ」

今日の訓練で別の武器を与える、とテツヤ殿は言った。

「失礼ですが、どの程度鍛えたんですか？」

「お前とレオンが受けた訓練を更に短くした。その分、濃厚だし苛烈だ」

私とレオンが受けた訓練期間を更に短くした上に苛烈とは恐れ入る。

「だが、短いから間を見ては定期的に教え続ける」

その時は私達も参加のようだ。

「お前等も少しはやっておかないと忘れるだろ？」

特に降下訓練は、とテツヤ殿は言った。

『・・・・・・・』

私とレオンは無言になった。

あの訓練は余りやりたくない。

「その降下訓練とは何だ？」

要らない荷物が私に訊いてきた。

「・・・・文字通り降下するんです」

まぁ、実際は塔の上からロープを伝い降りるのだが。

他にもヘリから降下したりもする。

飛行機からパラシュートを付けて飛び降りるのはまだやった事が無い。

しかし、ヘリから降下するのでも怖いのに飛行機から降下するなど考えたくもない。

「そうだ。お前等、今やるか」

午後から会議を開くから午前中は訓練、という事になるらしい。

「わ、私、少し用事が・・・・・・・・・」

「ぼ、僕も・・・・・・・・・・・・・」

急いで立ち去ろうとしたが、リーザ中尉が背後に現れて止められた。

「二人とも。私と共に訓練を受けましょう？」

笑顔でリーザ中尉は言うが、眼は笑っていない。

『・・・了解』

私とレオンは運が悪かった、と諦めるしか道が無かった。

それから暫くしてガリシャが来て事の顛末を聞くと「あたしもやる」と言ってきた。

最初こそ止めようとした。

ガリシャは私達が受けた訓練をしていないから軽い気持ちで言って

いるのだ、と思ったのだ。

だが、そうではなかった。

前に話を聞いたが、テツヤ殿・・・少佐はここに来て皆を鍛えた。

それはガリシャも同じだったらしく、その中には降下訓練もあったらしい。

その後、私達は午後まで降下訓練などをお浚いした。

それから午後、会議を開いた訳だが・・・・疲れてまるで身が入らなかった。

それでも会議は始まった。

私達は四方を視察した結果をテツヤ殿達に報告した。

「なるほど。未だにその名残があるか」

テツヤ殿は煙草を蒸かしながら私たちの報告を聞いて頷いた。

「で、テツヤよ。これからどうするのだ?」

ゲンハルト様がテツヤ殿にこれからの事を訊ねた。

「その名残は今も役に立つ。それを改築して備える」

敵はまたここに来ると言う。

それならその名残を利用するのだ。
その他にも偵察も行わせる、とテツヤ殿は言い私たちを見た。
「ランドルフ1等兵、レオン2等兵。お前等に偵察任務を与える」
「私とレオンだけ、ですか？」
「アホ言うな。ちゃんと数人は付けて行かせる」
「分かりました。で、威力偵察ですか？それとも隠密偵察ですか？」
「隠密偵察だ。向こうの出方を調べて来い。それとも機会があれば・・・リカルドを狙撃しろ」
「・・・・・・・」
この言葉に私たちは無言になった。
私は狙撃手。
狙撃手の役目は主に指揮官などを狙撃し敵を混乱させる。
または無差別に狙撃して負傷者などを増やすかだ。
他にも色々あるがテツヤ殿はその内の一つを私に命令した。
リカルド様は総大将だ。
総大将を失えば烏合の衆とまでは行かなくとも、かなり混乱する筈

だ。

それを狙っているのだろう、と私は思った。

「どうだ?やれるか?」

テツヤ殿はやれるか?と訊いてきた。

先ほど命令と言ったのに可笑しいと思うが、それは私に意志があるかどうかを訊いているのだと思う。

「・・・やります」

私は間をおいてから答えた。

「出発は明日の朝だ。それまでに準備をしておけ」

私とレオンは敬礼をした。

そして私とレオン、ガリシャは部屋を後にした。

第百十八章：それぞれの決意（前書き）

これまた厄介な物になりました。

えーと、先ずランドルフ、次にレオン、最後がガリシャという3人の視点です。

頭が混乱するかもしれませんが、どうか頑張って下さい！！（阿呆丸出し）

第百十八章：それぞれの決意

部屋を出た私達は廊下を歩いた。

リカルド様を狙撃しろ・・・・・テツヤ殿・・・いや、少佐はそう言った。

だが、それは機会があればだ。

だから、そこで必ず殺せという訳ではない。

ではないのだが・・・・・もし、その機会があれば私はリカルド様を狙撃出来るのか？

最初、初めて人を狙撃した時・・・私はミスを犯した。

あのミスで誰かが犠牲になったかもしれないと自然と身体が震える。

リカルド様を狙撃する機会があれば、私は狙撃をするしかない。

いや、やるのだ。

やらねばならない。

やらねばならないが、リカルド様を狙撃出来るのか？とまた私は自問自答した。

「ランドルフ君。どうしたんだい？」

レオンが私の様子を見て何かあったのか、と訊いてきた。

「私は・・・リカルド様を狙撃出来るのか、と自問自答していたんだ」

私はレオンに初めて人を殺した時の事を話した。

レオンはまだ人を殺していないのか、動揺を隠せなかった。

ガリシャは無言だった。

「私は狙撃手だ。確実に相手を殺す事が任務だ。だけど・・・・・・・・」

自分が出来るのか、どうか心配だった。

それにリカルド様は敵ではあるが、理由が理由だけに殺す事に躊躇いを感じてしまう。

レオンは何と言えば良いのか分からない顔をしていた。

ガリシャもまた同じだった。

結局、答えが出ないまま私たちはそれぞれの家に帰る事になった。

家へと戻った私をオリガさんが出迎えてくれた。

私はオリガさんに明日の朝、偵察に行く旨を伝えた。

リカルド様を狙撃する事は伝えなかった。

「そう・・・どれ位、掛るの？」

「恐らく出発して着くまで5日から１０日掛ると思います」

雪が降っていなければ４日から5日で付ける距離だが、雪が降っている上に敵もこちらに来る事も考えるとそれ位は掛る筈だ。

そしてそこから偵察をして行くともっと掛るだろう。

「そう・・・・・・」

オリガさんはただ頷くだけだった。

しかし、眼が哀しんでいるのは分かったし私が伝えていない事もあると確信している眼だった。

「私は貴方がどんな任務を受けるかどうかは知らないわ。貴方も言いたくないんでしょ？」

「・・・はい」

私はそれに頷いた。

「だから訊かないわ。でも、約束して」

「約束？」

「えぇ。ちゃんと無事に戻って来て」

それだけは約束して欲しい、とオリガさんは言ってきた。

「安心して下さい。生きて戻ります」

私はオリガさんの手を掴んで言った。

「生きて戻ります。ですから、待っていて下さい」

「・・・分かったわ。でも、仕事の方もしっかりとやるのよ?」

「はい」

まるで母に言われる感じだったが、私はそれが嬉しくて頷いた。

それだけで悩みが吹き飛んでしまった。

機会があるかどうかなど分からない。

なら、その時になるまでに気持ちを整理させておくべきだ。

そう私は思った。

一時的な逃げだと分かっているが、今だけはそうしたかった。

それからオリガさんと早めの夕食を頂いてから準備を済ませて休む事にした。

— — — —

―
―
僕はレイテさんとローズちゃんが居る家へと戻り、二人に暫く留守にする事を伝えた。

「レオンお兄ちゃん。また、帰って来る？」

ローズちゃんが僕の膝に抱き付きながら上目遣いで見上げてきた。

「勿論だ。僕が帰って来るのはここだからね」

だから、ちゃんとレイテさんの言う事を聞いて待っていて、と僕は言った。

「うん。分かった」

私はローズちゃんの髪を撫でた。

任務は偵察だが無事に戻れるという保証は何処にも無い。

これが見納めかもしれないな、と危険な事を考えてしまう僕が居た。

「さぁ、ローズ。少し早いけどお風呂に入りなさい」

レイテさんがローズちゃんに言うと彼女は頷いて浴室へ消えた。

「何か遭ったの？」

ローズちゃんが居なくなったのを確認してからレイテさんは僕に訊いてきた。

「分かりますか？」

これでも上手く隠していた積りなのだが・・・・・・・・・・・・・・・

「分かるわよ。それで、どうなの？」

「実は・・・・・・・」

僕は正直に話した。

敵が最初に来た時、僕は正面から迎え撃った。

ＳＫＳカービンで負傷者を出し続けたが、殺してはいない。

いや、殺したかもしれないが自分で確認していなかったから分からないのだ。

その点、ランドルフ君とガリシャさんは・・・・・狙撃した。

だが、狙いが外れていたのかその人物は夜になっても生きており止めをランドルフ君が刺した。

それをガリシャさんも見届けた。

二人にとっては初めての・・・“戦果”であり“確認”だった。

ランドルフ君が狙撃をして、ガリシャさんがそれを確認する。

言葉では単純明快だが、実際にやる事は人を殺してそれを確認する

作業だ。

とてもじゃないが神経が強くなければ持たない仕事だ。

話によれば二人はそれから直ぐに吐いたらしい。

所が二度目になるとそれをせずに淡々とこなせるようになったと言う。

そして偵察に赴き、機会があればリカルド様を狙撃しろと少佐は言った。

つまり殺せ、と言う事だ。

ランドルフ君は経験があるが、それでもやはり怖いと言っていた。

僕は親友として何かを言わなければならなかったが、何も言えなかった。

これで親友とは片腹痛いと自分でも思う。

親友が苦しんでいるのに何も出来ない自分が酷く悔しかった。

「・・・大丈夫よ」

レイテさんが私の肩に手を置いて耳元で囁いてきた。

「貴方は親友として立派よ。ランドルフ君もそれを理解しているわ」

だから、そのままランドルフ君を支えなさい、とレイテさんは言っ

た。

「本当は女の子が支えるけど、男の子もまた支えるのよ」

私はその言葉を重く感じた。

しかし、それをシッカリと受け止めた。

――――――――――――――――――――――――

―――――――――――――

あたしは自分の部屋でＳＫＳカービン、イングラムＭ１０、ベレッタＭ９２ＦＳの手入れをしていた。

明日の朝にはここを出る。

理由は偵察を命令されたから。

行くのはあたし、ランドルフ、レオン。

それから数人程。

その中にはガルムも居るとあたしは思う。

いや、入れる筈。

あたしとランドルフは偵察以外に任務を受けているから。

反乱の首謀者で現王のサラ様とは腹違いの息子、リカルド・ウェスビー王子を・・・狙撃する事。

それが与えられた任務。

だけど、これは機会があれば、の話。

でも、もし機会があれば・・・・あたしはやらなければならない。

あたしがリカルド王子との距離を計り風向きなども計算してランドルフに狙撃させる。

そして弾が当たって、リカルド王子を仕留めたのかを確認する。

それがあたし・・・観測手の仕事。

出来るならやりたいとは思わない。

誰だってこんな役目はやりたくないのが普通。

それでも誰かがやらなければならない。

ランドルフはあたしより苦しい筈だと思う。

リカルド王子の事に関してはランドルフの方が知っている。

何より直接、手を下すのはランドルフ。

だから、苦しいし重圧が来るのは明白。

帰り道、ランドルフはレオンに初めて人を殺した事を話した。

それをレオンは聞いて何と言えば良いのか分からないで結局、答えられずに終わった。

あたしも同じ。

本当ならあたしが、あそこで何かを言わなければならなかった。

それなのにあたしは何も言えなかった。

これからもずっとそうなのかしら?と思ってしまった。

直ぐに首を振って否定した。

そしてこう決意する。

あたしは観測手だ。

観測手は狙撃手を手助けし戦果を確認するのが任務。

それならその任務を全うしなければならない。

これは戦だ。

そしてリカルド王子を仕留めれば内乱は収束に向かう筈。

なら・・・やらないといけないんだ。

やらないと・・・いけないんだ。

あたしは二度も同じ事を決意した。

第百十九章：新しい異名

史記を書きながら私はリカルド様を思い出した。

現在、書いている所は偵察任務を受けた所だ。

この時の任務で私は“リンクス”とい名を与えられた。

リンクス・・・狙撃手の例えに用いられる山猫の一種で私の渾名とされた。

そしてこの時、私はリカルド様を機会があれば狙撃しろ、という命令を受けた。

結局は機会を得ることは出来なかったが。

そのリカルド様は処刑された時、毅然としていた。

死んだ時でさえ毅然としていた。

そんな死に様でさえも立派なリカルド様の死を偲んで献花が絶えないのも頷ける。

その点、リカルド様に味方していた中央貴族は惨めと言えるほど滑稽だった。

リカルド様を辺境の地へ追いやったが、勢いを戻して来るなり掌を返した如く味方した。

そしてリカルド様に近寄り甘い蜜を吸おうとしたが、リカルド様が負けるとこれまた掌を返した如く蔑み、こちらに擦り寄って来た。

そんな奴等は首都を奪回して一時行方不明になりながらも帰還した徹夜様を祝う為に開かれた宴で徹夜様をこう蔑んだ。

『貴様は醜悪で薄汚い傭兵だな。幾ら綺麗な服を身に纏い高い香水を付けようとも我々のような高貴な者とは釣り合わん』

あの時、徹夜様はフランス外人部隊の礼服を着ておりとても様になっていた。

それをあいつ等は蔑んだ。

この国の為に戦ってきた徹夜様を・・・・・・・・・・

まだ若かった私とレオンは、その場であの者達を殺したい衝動に駆られた。

父のように尊敬して止まない徹夜様を侮辱されたのだから仕方ないと言えるかもしれない。

実際、私達以外の者もその場で殺したい衝動だったのだから。

しかし、蔑まされた当の本人である徹夜様は怒りもせず他人事のように冷静でこう言った。

『あんた等の言う通り俺は金を貰い他人の命を奪う薄汚い野良犬だ。だが、あんた等は“真田虫”だ。人に集って食い潰す薄汚い真田虫だ』

真田虫とは徹夜様がいた世界の寄生虫だ。

正に奴等は寄生虫でリカルド様を・・・いや、この国を食い潰そうとしていた。

しかし、徹夜様の手により奴等は“除去”された・・・いや、除去ではなく“駆除”されたのだ。

ゲンハルト様がサルバーナ王国と言う体内から追い出して我々が駆除した。

作戦名は「害虫駆除」という名前だ。

これは後で書く事にしようと思い、偵察任務の所を書く事を再開した。

翌朝、私達は演習場に来ていた。

まだ朝日が昇るか昇らない位なので寒い。

そんな中、演習場に私、レオン、ガリシャ、ガルム、ヘンさん、獅子頭軍団、軍曹の計7人が居る。

この7人で敵に占領された首都、ヴァエリエへ偵察に行く。

本来なら4人がベストなのだが、万が一の事も考えてこの7人で行動を行う事になった。

ガルムを除き私達は白いギリー・スーツに身を包んで顔半分を白い

布で覆っている。
武器も雪などと同化できるように白い布を巻いたりしてカモフラージュも忘れない。
「貴様らに任務を与える。首都、ヴァエリエへ赴いて偵察をしろ」
敵の人数、装備、状況、民達の様子などを細かに調べろ、と少佐は言い私に視線を向けた。
「ランドルフ一等兵。もし、機会があれば・・・分かっているな？」
「もちろんです・・・・・・」
私は重い口で頷いた。
「よし。ただし、狙撃はあくまで機会があれば、だ。もし、出来ないなら直ぐに帰って来い。敵との交戦は出来るだけ控えろ。また痕跡も残すな」
弾丸から焚火の跡、糞尿、食料・・・全て残すな、と少佐はもう一度だけ言った。
そして私達に理解したか訊いてきた。
『レンジャー』
私達は敬礼をした。
それが理解した意味を含めている。

「よし、では行って来い」

少佐は敬礼を返してから私達に出発を命じた。

私達は直ぐに馬に跨った。

馬の背には１０日分と少し大目の食料を乗せている。

そしてスキー板と棒もある。

近くまで付いたら馬から降りてスキーで移動する為だ。

馬に跨った私達を少佐、ゲンハルト様、プロイセン様、ヴィルヘルム元伯爵達が出迎えてくれる。

「ランドルフよ。生きて戻って来い。必ずしも、その場で仕留める事はない。自分が確実に相手を仕留められる時に引き金を引けば良いのだ」

命令は絶対だが、無理はするなとプロイセン様らしい言葉を言われた。

「はい」

「ランドルフ。そなたのような歳若い者が戦に出て私のような男が出れず・・・・・すまない」

ゲンハルト様は沈痛な顔で謝罪を口にした。

以前からは想像できない台詞だが、それだけ人間として変わったという証拠だ。

良い意味で変わったのだから万々歳だ。

「何を言います。ゲンハルト様は総大将ではありませんか？総大将はドッシリと腰を据えて私たちが無事に帰って来る事を信じて下さい」

出来るなら酒が欲しいです、とらしくない言葉を私は言ってみた。

それを聞いたゲンハルト様は一瞬だけ驚いたが、直ぐに笑った。

「テツヤのように言う様になったな。分かった。出来るだけ上級な物を用意する」

お願いします、と私は言った。

続いてヴィルヘルム元伯爵が私に話し掛けてきた。

「坊ちゃん。獲物の生態をちゃんと調べて置いてくれよ？俺の師弟たちが残らず“喰う”からな」

師弟とは親衛騎士団を言っているのだろう。

更に喰う、という言葉。

もうこの方の前では敵は獲物と化しているようだ。

「失礼ながら・・・大丈夫ですか？」

私は念のため訊いてみた。

「あぁ。俺たちに比べればまだ甘い面がある。しかし、十分な力を得ている」

勝負では勝っているがやはりまだ経験不足という所だろう、と私は判断した。

「分かりました」

そして私達は少佐達に敬礼をして城を出た。

城壁の上からは見張りの兵たちが私達に「無事に戻って来い」と言って来る。

何としても生きて帰らなければならない。

オリガさんとの約束もある。

しかし、この戦いに勝つには私たちの偵察が肝心だ。

正確に調べてこちらに有利に運ばなければならない。

その為にも無事に帰って来なくてはならない。

改めて私は思った。

城から出て雪が積もった山道を馬に乗りながら進んで行く。

「先ず馬で出来る限り近づくが中までは入らない」

軍曹は馬の手綱を掴みながら偵察の内容を話し始めた。

「流石に中まで入ると危険だからですね？」

私が軍曹に訊ねると軍曹は頷いた。

「そうだ。それに中には民間人も居る。俺らを見たら助けてくれ、とか言うだろ？」

そうなったら敵に気付かれる。

それでは駄目だ。

だから敢えて中に入らないのだ。

「“リンクス”、山犬、猟犬は機会を見付けたらやれ」

リンクス・・・狙撃手に例えられる山猫。

これが私の新しい異名だ。

やっと格好良い渾名を貰えたと思うが・・・この渾名をくれると言う事は私を真の狙撃手として認めてくれた、と言う事だ。

それが分かるとどういう訳かプレッシャーが嘘のように消えた。

跡形も無く消えたのだ。

「お前さん・・・リカルドを仕留められるか不安だったろ？」

軍曹が私に近付いて小声で訊いてきた。

「・・・知ってたんですか」

「お前さんより軍歴は長いんでね。まぁ、気持ちは分かるぜ。狙撃手ほど・・・敵味方の両方から嫌われる奴はそう居ない」

「・・・・・・・・」

「だが、お前さんには俺らが居る。だから、そう自分だけの胸に仕舞い込むな。苦しみも共に味わってこその戦友だぜ？」

「・・・ありがとうございます」

軍曹をここまでまともに・・・格好良いと思えた事は今まで無かったが、今はとても格好良いと見える。

「さぁて、さっさと偵察を終えて可愛い女の子をナンパするか」

前言撤回。

軍曹はやはり軍曹だ。

この一言を言わずに「さぁ、偵察を終わらせてゲンハルトが用意した酒を飲もうぜ」とかもう少しマシな言葉を言えば良かったのに。

それを自分で壊すのだから呆れ果てる。

だが、そういう所もまた軍曹らしいと思う。

そんな事を思いながら進んで行く。

「所で軍曹。リカルド様は一体、どんな手を次はして来ますかね？」

レオン・・・チャレンジャーが軍曹に質問した。

「恐らく前みたいに正面から来たりはしないな。同じ轍は二度踏まない奴だろう」

「では、どんな手を？」

「向こうの兵力がどれ位、残っているのかでどう攻めるかは方法が変わる」

と言っても、ここを攻める方法はある程度だが絞れると軍曹は付け足した。

「まぁ、これからその事を調べるが・・・貴族の連中は全員リカルド側に味方している、と考えて良い」

つまり敵と思え、という事か。

となれば前以上に兵力は増大していると考えて良いだろう。

増大していなくとも補強は出来たと見て良い。

「そうなると厄介ですね・・・・・・・」

ある程度は損害を与えたのに、また元に戻ってしまうのだから。

「尤もだ。しかし、貴族のお坊ちゃん共が果たしてまともに戦えるのか、また地方の民達と仲良く出来るかな？」

軍曹の言葉は的を射ている。

兵力が増大または補強で来たとしても、戦を経験した者は殆ど居ないと考えて良い。

更に中央貴族とその兵たちが地方の兵たちと仲良く出来るか？と問われたら無理だ、と私は答える。

向こうは地方を助ける為に戦を起こしたのだ。

その矛先は中央に住む者・・・貴族に向けられているだろう。

となれば仲良くなど出来る訳ない。

寧ろ要らぬ争いを生み出し統率が取れなくなる危険性がある。

それはこちらとしては嬉しい事だ。

だが、リカルド様なら上手く統率出来るかもしれない。

「ですが、軍曹。リカルド様の力なら仲を取り持つ事は可能ではないでしょうか？」

私は思っていた事を口にした。

「仲を取り持つとは違うな」

「と言うと・・・利用、ですか？」

考えてみれば別に仲を取り持つ必要はない。

取り敢えず兵士を出さなくても金などを出すだけという手もある。

寧ろ、その方がリカルド様にとっては好都合なのかもしれないな。

「それにあいつ等は最初こそ王国の味方をしていたが、裏では恐らくリカルド側に味方する算段をしていただろう」

前から手を結んでいた貴族は例外だが、他の貴族たちは自己保身を図る為に戦況を見て算段を考えていた、と言う事か。

「そんな奴を果たしてリカルドが本当に味方と思うか？」

「私ならしません。いや、表向きは友好的な態度を取ります。それで戦に勝てば理由を付けて処罰するか、闇に葬り去るかです」

私の言葉にチャレンジャーを始めとした者達も同意した。

「その通り。恐らく疑惑がある蛇と豚も同じように葬るだろう」

しかし、向こうもそれを知りながら何かを考えて行動している筈。

つまり誰もが利用し利用されているという・・・・・騙し合いのような、方法をやりあっているのだ。

その中の中心はリカルド様。

恐らく幼い頃からそういう世界で生きて来た筈。

昔も、今も、これからも・・・・・・・・・

「・・・何だかリカルド様が憐れです」

チャレンジャーがポツリと漏らした。

かつては妾の子・・・暴君の血を引く者として地方に幽閉された。

それは中央貴族が係わっている事だろう。

それが今では掌を返した如く自分に味方している・・・・・・・・・・・

憐れと言えば憐れだ。

「仕方無いさ。それよりペースを進めるぞ」

軍曹は馬の腹を蹴り速度を上げた。

第百十九章：新しい異名（後書き）

誤字報告があったので、直しました。

まだ心の整理が付かないので、もう少しお待ちください。

これまた誤字脱字があったので、修正しました。

ご指摘の通り、誤字脱字が非常に多い気がします。

私なりに気をつけているのですが、何度も誤字をしてしまい読者の方には気を悪くさせていると思うと情けない気持ちでいっぱいです。

これからも気をつけていく積りですが、何かあればまたメールお願いします。

第百二十章：始末すべき相手（前書き）

長らく休養もとい整理をしていましたが、やっと出来ました。

これからもよろしくお願いします。

第百二十章：始末すべき相手

私達は馬に揺られながら縦列で進んでいた。

距離は５メートル。

余りに近過ぎると攻撃された時、一気にやられる可能性があるからだ。

城を出てから数時間は経過したが休まず進み続ける。

休憩は夜で出発は夜明け前。

それ以外は進んで進み続ける。

ヴァエリエまで恐らく６、７日掛ると見ていたがこの速度で何も無ければ恐らくは４、５日で着くだろう。

先頭はガルムで後方は軍曹が務める。

ガルムは馬に乗らず歩いているが、さほど問題ではない。

進んで行く内に何時の間にか夜になった。

「今日はここまでだな」

軍曹は休憩と言って馬から降りるように命じた。

私達は馬から降りてテントを張り円陣を囲んだ。

円陣を囲む事で四方を警戒するのだ。

「交代で休憩をする」

先ず私、ガリシャ、ガルム、ヘンさんが警戒する事になった。

「煙草を吸っても良いが、風に気を付けろ」

風に乗せられて臭いが敵の方角に行くのから気を付けろ、という意味だ。

軍曹達はテントの中に入って行った。

「このまま行けば4、5日で着きますね」

私はヘンさんに話し掛けた。

「そうだな。だが、向こうがまた偵察をしてくるかもしれないから油断は出来ないな」

そうですね、と私は頷いた。

「それにしてもフォース・リーコンの指揮官は大佐って男はどんな奴なんだか」

「私達は見ていないから何とも言えませんね」

「あぁ。だが、あの少数精鋭部隊を指揮しているんだ。かなり手強い相手と思って良いだろうな」

そして仲間思いでもある、とヘンさんは続けた。

「俺が知っている軍人は部下の死体が敵陣にあると知ると、その死体は“無かった”事にした」

「それでその軍人はどうなったんですか？」

ある程度は予想できた。

こんな事をした奴は大抵が碌な死に方をしないからだ。

「その3日目に発狂して死んだ」

死ぬ間際に「許してくれ」と叫んでいたというから恐らく死体を取り戻そうとしない軍人に怨み事を漏らしたのだろう、と皆で言ったようだ。

「まぁ、敵陣に死体を取り戻しに行くってのはかなりきつい」

更に被害が増大するからだ。

「それでも死体を取り戻した。しかも全員を、な」

こんな芸当は誰にでも出来る物じゃない、とヘンさんは言った。

「確かにそうですね。となると、その指揮官に従う部下は」

「あぁ。その指揮官に命を捨てても従う事だろう」

リカルド様に従う兵もまた同じ。

「改めて言うが・・・心して掛らないといけないな」

私はその言葉に頷いた。

「それと、あの“下種野郎”の正体は分かったのか？」

「えぇ。少佐に教えられました」

「何者なんだ？」

「“オールアメリカン”の異名を持つ空挺部隊だそうです」

「オールアメリカン？」

聞き慣れない言葉にヘンさんは首を傾げた。

「はい」

私はオールアメリカンの意味とあの“ハゲタカ”の二人が所属していた空挺部隊の事を説明した。

「なるほど。てことは、弟の方はエア・ボーンの方が得意な訳か」

「はい。階級は兄が大尉で弟は中尉だそうです」

「で、肝心の名前は？」

「名前は忘れたそうです」

少佐は以前、戦死させた者の名前は忘れるようにしている事も話した。

「そうか」

「驚いたりしないんですか？」

「俺だって一々戦死させた奴の名前を覚えたりしない」

だから、少佐が名前だけ覚えていないのも頷けるとヘンさんは言った。

それからヘンさんは煙草を銜え私にも差し出して来た。

マッチで2本に火を点けながら、風に気を付けて息を吐く。

「所でヘンさん。親衛騎士団はいら・・・・フィーナ殿をどう思っているんですかね？」

危うく要らない荷物と言おうとしたので、慌てて正式名を言った。

あの女の事など然して興味は無かった。

ただし、少佐の話を聞いていると団長として“それなり”に見られている節があるから気になっただけだ。

「そうだな・・・まぁ、騎士の鑑と謳われた男の“娘”と言う見方はあったな」

「つまり、フィーナ殿自身を見ていた訳では無かった、と？」

「あぁ。まぁ、俺はそんな眼で見た事は無いが歳若い奴等は団長を見る眼はそんな眼だった」

要らない荷物の父親・・・・ロックス様は騎士の鑑として謳われていた。

最後もまた壮絶な死に様が追い打ちを掛けている、と言える。

しかし、実際の所は「騎士」という物に固執していた面があるし家庭的にも些か問題がある。

それでもやはり英雄として見られていたのだろう。

そんな男の血を引く娘。

否応なく“そういう眼”で見るのは明白だ。

自分ではなく父親を見ている・・・・これは自分を認めてくれない・・・否定されている、と取って良いだろう。

「憐れ、ですね」

それは子としては両親が有名と言う事なので誇らしいだろう。

だが、ある意味では両親を見る眼で自分を見る・・・引いては自分として認めてくれないという事だ。

人としてそれはとても傷つく物だ、と私は思った。

「あぁ。そういう所も団長をああいう性格にしたんだと俺は思っている」

ヘンさんは煙草の先に溜まった灰を落とした。

確かにそれは有り得る。

以前の話も考えると、少なからずそういう眼で見られる事で、あんな性格になったと思えなくはない。

「まぁ、今は自分達の団長として見ているだろう」

男である自分達よりも根性がある、という眼で。

「それはそれで女として、どうなんですかね？」

正直言って私が女の立場なら余り嬉しい事ではない。

「まぁ、嬉しいとは余り思わない物だろうな」

本人は別だが、とヘンさんは言い煙を吐いた。

尤もな事だ、と私もまた思う。

「所で少佐達は今頃どうしていますかね？」

「恐らく四方にどんな物を建てるか考えているだろう」

それからは無駄な話はせずに警戒を続けた。

夜は寒い。

更に山なので余計に寒い。

焚き火をすれば済むと言う話だが、火を起こせば敵に位置を知られるから出来る限りはしないように心がけている。

数時間ほど夜警を続けていたが交代の時間となった。

「交代だ」

軍曹達がテントから出てきた。

「ハゲタカの二人を話していたが、少佐が戦死させたのか」

「はい。あの二人を知っていましたか？」

「会った事はないが、噂でなら聞いている」

碌でもない噂のオンパレードだったらしく、傭兵達からも忌み嫌われていたらしい。

「まったく。どうしてあんな二人が精鋭の空挺部隊に所属できたのか分からないぜ」

軍曹は呆れた口調で言いながら、私達にテントに戻れと言ってきた。

私達はテントの中に入る前に馬から食料を降ろしてからテントに入った。

ガルムは外で寝る、と言い外に出て行った。

私達は戦闘食を取り出して食べ始めた。

ずっと飲まず食わずだったから、戦闘食が何時も以上に美味しく感じられた。

そして食べ終えた頃には眠気が来て横になると直ぐに眠ってしまった。

――――――――――――――――――――

―――――――――――――――――――

「どうやら寝たようですね」

僕はテントの中から聞こえる寝息を耳にしたのを確認してから軍曹に話し掛けた。

「そうだな。まぁ、今の内に体力を温存させるから良いだろう」

軍曹は煙草を取り出して銜えながら言った。

「軍曹。ハゲタカの二人とは一体・・・・・・・・・」

僕はランドルフ君達が話したハゲタカと呼ばれる二人が気になり訊いてみた。

「奴等は俺が居た国の軍隊に所属していた。会った事は無いが、悪名は聞いていた」

話によれば根っからの悪だったらしく、何度も“ＭＰ”ーーー憲兵に捕えられて軍法会議に掛けられたようだ。

そして軍を追い出されてからは傭兵となり兄弟二人で戦場を荒らし回ったようだ。

「兄貴がヘリで陣地を攻撃し、弟が降下して止めを刺すのが基本だった」

兄の方より弟の方が遥かに厄介な相手らしく行ってきた悪行も数え切れないようだ。

「まぁ、そんな奴等も旦那に戦死させられた。俺が傭兵になる前だ」

どういう経緯かは知らないらしいが、少佐はその二人を戦死させた。

だが、再びこの地で会った。

「あいつ等二人はある意味じゃリカルドより先に始末すべき相手だ」

軍曹はそれだけ言うと、夜警を続けるぞと言い話を打ち切った。

幕間：蛇のような笑み

ブチっ、と音を立ててバリバリと“何か”を食べる音が部屋に聞こえる。

「あー、美味いっ。やっぱり“成熟した太腿”は最高だぜ」

下駄な笑い声を上げながら肉に齧りつく男。

コンガリと焼けて脂が流れ出るその肉は一見、何の変哲もないただの肉だ。

しかし、何故か“妙な感じ”がするのは気のせいだろうか？

「・・・相変わらず“良い趣味”をしているな。そなたは」

もう一人の声が部屋に響いた。

肉を食べる男より若い声で冷静であったが、何処か侮蔑の色が含まれていた。

それに気付かない男は肉を齧りながらその男に訊ねた。

「で、計画の方はどうなんだ？」

「余り芳しくないな。向こうも色々と面倒な自体が起きているようだ」

舌打ちを漏らす男は顎に手を当てた。

ジョリ、という音が聞こえたから顎鬚を生やしている、と推測できる。

「おいおい、大丈夫なのか？」

肉を齧っていた音が止み、動揺の声がした。

「最初は7日間でこの国を制圧する予定だった。だから、向こうもそれに合わせて動き出したんだぞ？」

「そうだ。だが、計画と言うのは必ず何処かで狂う物だ」

動揺する男に対してもう一人の男は極めて冷静な口調で言い返した。

「け、けどよ・・・・・・」

「問題ない。向こうは向こうの問題だ。我々はこちらの問題を対処すれば良いのだ」

別に向こうが仮に失敗したとしても、この国を物にすれば直ぐに軍を派遣して制圧すれば良いだけの話だ、と男は続けた。

「そうだけどよ・・・こっちに気付かれていないのか？」

あの坊主には鼻が良い“忠犬”が居るんだぞ？と男は言いながら、止めていた手を口に運び肉を食べた。

「恐らく気付いているだろう。しかし、今ここで我々を殺せば大幅に戦力が不足する。それは向こうとしては手痛い筈だ」

私とお前、そしてあの二人の力が今は必要なのだから。

「そうだな。となれば、暫くは安全と見て良いわけだな？」

「うむ。だが、油断はするなよ？」

「分かった。で、何時やるんだ？」

「そうだな・・・また前線に立たせる必要があるな」

「そこで一気にやるんだな？」

「あぁ。あの二人が居なくなれば後は烏合の衆に等しい」

志が如何に同じだろうと、それを統率する者が居なくなれば後は限りなく烏合の衆に近い。

それを一網打尽にするも、時間を掛けて潰すもこちらの思うがままだ、とも言った。

「所で、二人と言ったがもう一匹居るんじゃないのか？」

小さくて臆病で情けない動物が。

「お前は、あの男を危惧しているか？」

「いいや。あんな男、取るに足らない。配下の兵だって雑魚ばかりだ」

兄弟の内一人に嬲り殺しにされたのだから、と再び肉を食い千切りながら男は言った。

「その通り。あの男はそなたの言う通り取るに足らん。だから、そこで殺さなくても良い。まぁ、出来るなら纏めて殺すのが一番だが・・・一人位は、ゆっくりと料理するのも良いだろう？」

私もお前も、長い時間を掛けて痛ぶり弄ぶのが趣味だろ？と顎鬚を撫でながら男は問い掛けた。

「あぁ。足から火で炙ってコンガリと焼くぜ。俺は」

そして足からバリバリ、と食べると付け足した。

「私なら真綿で作った縄を首に掛けて吊るし上げるな」

真綿で作られた縄は通常よりも締め付けが遅いから、時間を掛けて喉を圧迫する。

その間、もがき苦しむ姿は最高の肴だ。

「紋章と同じ性格だな？」

「それはそなたも同じ事。所で“野蛮人”の方はどうだ？」

「特に何もしていないなぜ。あいつ等はどうする？」

「2人と一緒に葬り去るのが一番だ。だが、その前に葬り去るのも良いな」

あの者たちの仕事は偵察。
なら偵察中に敵と交戦し全員死亡・・・・という筋書きが望ましい。
「となれば、あの兄弟は使えないか」
男は無言で頷きながらも内心では「食う事と戦う事しか頭に無かった」と思っていた男が珍しい事を言うなと思った。
「あぁ。そこで役立つのは・・・・・・・・・」
「俺の兵、って訳か」
「その通り。お前の兵なら遠くから極力小さな音で獲物を仕留められるだろ？」
仮に出来なくても俊敏でありながら強力な力を持つ兵が居る。
「あぁ。で、何時やる？」
「気が早いな。しかし、そうだな・・・近い内に会議で恐らくまた偵察任務が出るだろう」
「だけど、今回はワイバーンを使うと言ってなかったか？」
あの地で最初に偵察を行ったが手痛い反撃を受けた。
だから、今回は空から偵察を行う。
「あぁ。だが、あの者達を雇ったのはこの私だ」

幾ら向こうが総司令官とは言え、雇い主の意向を無視する事は礼儀に反する。

「やっぱり坊やだな。そんなとこまで気にするなんて」

「妾の子とは言え仮にも王族の血を引いているのだ。その点は抜かりない、という事だ」

我々にとっては好都合だ、と男は喉を鳴らして嗤った。

「分かった。それじゃ、次の会議で奴等に偵察の任務が来れば・・・・やれば良いんだな？」

「あぁ。それらしく見せろよ？」

「任せておけ。で・・・・一人や二人位は・・・・・・良いだろ？」

「好きにしろ。ただし、気付かれないようにしろよ？」

「安心しろ。骨まで残さず食べるさ」

それを聞いた男は残酷な・・・蛇のような笑みを浮かべた。

第百二十一章：傭兵王の思想

私は史記を書きながら徹夜様が言った言葉を思い出していた。

今から書く場面は徹夜様の思想を垣間見える所だから、前書きとも言える。

徹夜様は生前こう言っていた。

『国とは民達で構成されている。一握りの者たちが国ではない。民達が生きていれば、国は成り立っていく。そしてその民達を虐げる存在は害以外の何でも無い』

あの方が5大陸を統一したのは自分の為ではない。

虐げられた民達を救う為に立ち上がったのだ。

“あの男”は自分が歴史に名を残したいが故・・・自分の為にだけ生きて戦った。

徹夜様はそれを「ある意味では奴の思想だ」と言ったが、私から言わせれば思想でも何でもない。

ただ自分の欲望を満たす為だけにこの大陸を動乱に巻き込んだだけの事だ。

なぜあんな下種にも劣る男に“天使”が最後まで付き合い、運命を共にしたのか理解できない。

何れは、あの男の事も書かなければならないが、今は徹夜様の思想が垣間見える所を書く事に専念しよう。

そして史記をまた書き始めた。

朝早く私達は寝泊りをした場所を出発した。

焚き火の跡は土を掘り埋めた上から雪を被せて上手い具合にカモフラージュしておくのも忘れない。

「あーあー、今頃少佐達は温かいベッドで寝てるんだろうな」

軍曹は欠伸をしながら愚痴を零した。

「ちくしょう。何で俺って下士官なんだろうな?下士官なんて、あの“おっさん”だけで十分なのによ」

「おっさん、とは?」

軍曹だって後2歳で三十路に突入するのだから、おっさんと言える身なのか、と私は思いながら訊ねた。

「少佐の部下だ。まぁ、軍歴は少佐より上だが、な」

「と言うと、年齢45歳で軍曹より上の上級曹長ですか?」

前聞いた話を思い出したので、私は訊いてみた。

「あぁ。あのおっさんが一人いれば事足りる」

「どんな人だったんですか？」

「融通が利かない上に頑固一徹で有言実行者。おまけに扱きが半端じゃない」

どうやら少佐を訓練したのもその方らしく、少佐はその方の訓練方法を学び自分でアレンジしたようだ。

だから、あれだけ厳しいのだと今さら納得した。

「しかも自国に対する誇りが半端でなくてな。ちょっと悪口を言うだけで鉄拳が飛ぶんだ」

そこまで愛国心が強いのも些か問題だな、と思う。

「逆に少佐は愛国心なんて物は無いと公言して憚らなくてな。そのおっさんによく叱られた物だ」

軍人として愛国心を持たぬとは何事だ！！と怒られたらしいが、その上級曹長もまた自分の国ではない軍隊に入ったのだから、怒れるのかどうか甚だ疑問ではあるが。

「愛国心が無いって軍隊に所属する者として・・・どうなんですかね？」

何も軍隊に所属する者でなくてもそうだが、愛国心とは極めて重要な物だと私は思う。

愛国心があるから皆、国の為に戦うし生きるのだ。

それが無いという事は・・・どうなのだろうか？

「まぁ、必要と言えば必要だ。国を愛していないのに国の為に戦って死ね、と言われても無理な話だからな」

「ですよね」

「特に少佐の国は奇跡、とでも言えば良いかな？珍しい位、敵対国家に囲まれている」

そんな国ばかりに囲まれているなら自然と芽生える筈なのだが、前に少佐が言った通り長い平和が続いた為に頭が些か呆けているらしい。

「だが、何も愛国心が無くても戦える」

理由は様々だが、生きる為、死にたくない、復讐をしたい、家族の為に戦うなど色々とある。

そしてふと少佐もそういう想いがあるのでは？と考えた。

「少佐の場合は国より、そこに住む民達を護る為に戦っているんだろうな」

「どういう事です？」

「俺が最初、少佐と会った時に少佐はこう言った」

『国とは人が作り上げて行く物だ。一握りの権力者どもじゃない。皆が国を作り上げて行くんだ』

そういう者達の為なら戦うが、一握りの権力者の為には戦わないと少佐は言ったらしい。

「まぁ、実際そうだろうな、と思っている」

軍曹はベレー帽を取りエンブレムを眺めた。

「グリーン・ベレーのモットーは“抑圧からの解放”だ」

虐げられた民達を解放するのがグリーン・ベレーのモットー。

「だが、実の所はアメリカに都合が悪くならないように行動するのが俺らの役目だ」

モットーというのは目標のような物であり、それを行うのは殆ど無理だと軍曹は自嘲気味に笑った。

「少佐も恐らくそういう経験があるだろう」

自衛隊、外人部隊と少佐は軍を変えたが、何処も似たような物だと痛感している筈。

傭兵となってもそれは変わらないだろう。

「それでも虐げられた民達を救う心は変わっていない」

少佐と初めて会った戦場。

そこは少数民族が多数民族に虐げられていた場所だったらしい。

その少数民族は他の民族と違い独自の文化などがあったらしく、それが他の民族から見れば異端と見られていた。

だから、虐げられた。

「少数民族の方に少佐は付いていた。俺らも少数民族の方だ」

それは少数民族がアメリカと親しい関係を結んでおり、その民族が国の政を行えばアメリカに有効と判断したからに過ぎない。

「俺らより少佐の方がグリーン・ベレーのモットーを貫いていると思えたぜ」

損得勘定無しに虐げられた民達を救う為に少佐は戦った、と軍曹は見たようだ。

そういう所を見て軍曹は少佐に惹かれたようだ。

私も同意見だが。

それから軍曹はベレー帽を被り直して馬の腹を蹴り更に速度を上げた。

黙々と私達は進んだ。

まだ少し寝足りない、という気持ちはあったが少しでも速く進み偵察を行わなければならないという気持ちの方が強かった。

進んで行くが周囲に警戒するのは怠らない。

敵も偵察部隊を送り出している可能性が捨て切れないからだ。

そしてまた夜になった。

今回は軍曹達が先に夜警をする事になった。

食事は昨夜と同じ戦闘食。

戦闘食にも色々とあり、いま私たちが食している戦闘食は非常に栄養価値が高い物だ。

それは寒冷地帯など必要以上に体力を消耗する所では食事などにも気を遣っている。

ここは山で更に雪も積り通常より体力を消耗する。

その為、栄養価値が高い戦闘食を持たされたのだ。

それらを食べながら私は今頃、少佐達はどうしているか？と思った。

— — — — — — — — — —

――

「これなら問題ないな」

俺は地図で描かれた場所を見ながら満足した。

ランドルフ達が偵察に向かっている間、俺は四方に簡単な前線基地などを作り敵を待ち伏せ出来るようにした。

リカルド達はここを攻め落とすまで攻撃を続けるかどうか怪しい物だ、と思う。

俺たちを根絶やしにすれば終わりだが、ここで戦うと言う事は俺らのフィールドで不利な状況で戦うという事だ。

それは余り良い手ではない。

となれば一時的に退却したと見せかけて来た所を狙うか？

それとも俺たちを誘き寄せて叩くか？

色々と考えるがどれも確証がまだ得られない。

まぁ、どちらにせよ俺らもまたここだけで戦って行く訳にはいかない。

ただ籠っているだけでは駄目だ。

攻めこそ最強の防御。

何て言うからな。

あいつも「常に前進。常に果敢に攻撃せよ。一歩も引くな。迷わず戦え」が口癖で、攻撃こそ最強の防御と疑わなかったからな。

だが、先ずはランドルフ達の偵察で得られる情報がどれだけか、を

知らなくてはならない。

攻撃は大事だが、それより大事なのは情報だ。

どれだけ相手より情報を多く持ち、正確な情報かによって戦況は左右されるんだ。

だから、あいつらには無事に、確実な情報を持って帰ってもらいたい。

「テツヤよ。ランドルフ達は無事だろうか？」

ゲンハルトが寒そうな顔をしながら訊いてきた。

現在いるのは城の中にある野営陣。

大型のテントを張り、そこで寝起きしているが寒い事この上ない。

ゲンハルトのような身体の者なら尚更だ。

しかし、こいつは家にも城にも帰ろうとしない。

それは総大将としての立場だから、と俺は思っている。

兵たちが寒い中いるのなら自分もまた寒い中、いるべきと考えている。

本当に良い奴になったもんだ。

「さぁな。だが、あいつらなら余程の事でもない限り無事だ」

あいつらには俺が仕込んだ技術がある。
死ぬ時は死ぬが、そう簡単には死なないと俺は踏んでいる。

「それより酒は用意出来たのか？」

あいつはこいつに酒を用意してくれ、と頼みこいつは出来るだけ上級な物を用意すると言った。

「イザベルが作っている」

「あのお嬢ちゃんが？」

「あぁ。果実酒などここで手に入る酒を混ぜ合せて作る酒らしい」

「まるでカクテルだな」

「何だそれは？」

「色々な酒をブレンドして作る酒だ。弱い酒から強い酒まで多種に渡る」

あっちの世界ではよく飲んだ物だ、と俺は続けた。

「主の世界はこちらには無い物が沢山あるな」

「だが、こちらには俺らの世界には無い物が沢山あるさ」

俺は煙草を銜えてランドルフ達の連絡を待った。

第百二十二章：伝説の英雄

城を出て既に5日が経過し、私達は目的地の場所に到着した。

馬は数キロ後の木に手綱を結び付けて待機させている。

そこからスキーで移動して敵から気付かれ難い距離と思われる所で止まった。

「あれがヴァエリエ・・・・・・・」

ガリシャは初めて見る首都に眼を奪われたが、直ぐに「何か綺麗だけで味気ない」と評した。

私達は伏せてから双眼鏡で城を覗いた。

「・・・酷いな」

ヘンさんはポツリと漏らした。

双眼鏡で覗く城の中は酷い有り様だった。

兵たちが乱暴狼藉を働いており、市民たちは怯えていた。

別の方角を見れば生きたまま市民が火に焼かれている場面が見えたし、その隣では既に死体となった市民を吊るし上げて晒していた。

ここまで酷いとは・・・・・・・・・・・・・

私は目を背けたくなったが、背けずに演習場の方に双眼鏡をやった。

演習場には2機のヘリが見えた。

ヴァイガーに来たヘリだ。

どちらも武装されているが、以前と変わっていない。

ヘリから視線を外して別の方角を見ようとした時に、あの下種野郎が居る事に気付いた。

下種野郎は数人の男達・・・恐らく部下と思われる者達と話しており、傍らには顔に大きな傷を持った男がいた。

ベレー帽を被っているが下種野郎とは違う紋章。

少佐の言っていた兄だろうか？

そいつ等は何やらゲラゲラと笑い合っている。

見ているだけで胸糞悪くなる。

「・・・・・・・」

今なら殺せる、と私は思った。

だが、それは作戦の内に入っていない。

そしてそれを行えば皆が危険に遭う。

必死に自分の欲望とも願望とも言える感情を抑えた。

「戦闘ヘリ２機・・・戦象１０頭・・・戦車２０機・・・騎馬２０騎」

私は下種野郎から視線を逸らし、双眼鏡で演習場に居るヘリなどを数えて傍らに居るガリシャにメモを取らせた。

前に比べれば遥かに少なくなっているし、冬と言う慣れない環境で弱っているようにも見えた。

私は更に双眼鏡を覗き続けた。

レオンことチャレンジャー、ヘンさんことフォックス、軍曹なども双眼鏡で様々な方角から覗いては敵の人数や装備を見てメモを取った。

見る限り敵はまたここを攻める為に準備をしている様子だった。

そしてそろそろ準備を終えそうな感じだ。

食料が山積みにされておりそれを馬などに乗せているし武器などの手入れをしている事からそれが窺える。

それから私はリカルド様を探した。

リカルド様を機会さえあれば狙撃するのが任務だ。

しかし、何処を探してもリカルド様は発見できない。

「城の中かな？」

ガリシャが双眼鏡を覗きながら私に訊いてくる。

「多分。・・・ん？」

私は頷こうとしたが、双眼鏡から見えた人物に両眼を注いだ。

ヘリから離れた場所にフォース・リーコン達が居りそこへ一人の男が現れた。

「フォース・リーコンの指揮官か」

私は双眼鏡から見えた壮年の男を指揮官と判断した。

その場にいたフォース・リーコンの隊員たちがその男を見るなり直立不動をして先に敬礼をしているからだ。

年齢は少佐より上で金の髪に碧の眼を持っており名彫刻家が彫り上げた如く端正な顔立ちをしていた。

見るだけで「英雄」と言われても可笑しくない気がした。

「どれどれ・・・あいつは・・・・・・・・・」

軍曹は私の言葉を聞いて、こちらに双眼鏡を向けて何かを言おうとした。

「知っているんですか？」

私が訊けば軍曹は、無言で頷いた。

「厄介な相手だぞ。あの男は・・・・・・・・・」

「誰なんです?」

「海兵隊の中では“伝説の英雄”と言われている男だ」

伝説の英雄・・・・・・・・・・・・

「ベトナム戦争を皮切りに数々の特殊作戦に従事して勲章を得た兵中の兵だ」

勲章も多く貰っているらしい。

ヘンさんが貰った戦傷章を3つ。

これを3つも貰えるだけでも凄いのに、この人物はこれ以外にも色々な勲章を授与されている。

銀星勲章（戦いで特筆する功績を上げた者に授与される物らしい）2つ、青銅星章（作戦において英雄的、且つ名誉ある奉仕を行ない、成果を挙げた者が授与される）2つ、海軍十字章（戦闘において比類ない英雄的行為をした者が授与される）1つ、そしてアメリカの最高勲章である名誉勲章。

この名誉勲章は誰からも尊敬されるらしく、相手が自分より階級が上の者でも名誉勲章を持った者だと先に敬礼をするそうだ。

これだけの勲章を持っている、という事は相当な人物だと言う証拠

と言うほかない。

「そんな方が指揮官だったとは・・・・・・・・」

私は凄過ぎる・・・正に英雄という言葉が相応しい相手が敵と知り唖然とした。

「やれやれ。こりゃ思っていた以上に骨が折れるな」

軍曹も話には聞いていた人物が敵と知り憂鬱そうだった。

「そいつだけじゃないぞ。厄介な相手は」

ヘンさんが双眼鏡を離してこちらを見た。

「どういう事です？」

「ヘリの直ぐ隣を見てみろ」

私は双眼鏡で言われた場所を覗いてみた。

黒髪が似合う壮年の男がいた。

下種野郎たちとは話さずに、ヘリをじっと見つめている。

こちらも端正な顔立ちだが、何処かで見たような気がする。

あの顔立ち・・・・まさか・・・・・・・・・・

「俺の元上司だった男・・・ヴィールング様だ」

ヘンさんは平静な声で男の名を言った。

「ヴィールング？誰だ、そいつは」

軍曹がヘンさんに訊ねた。

「団長・・・フィーナ殿の叔父上だ」

だが、実は父親では？とあらぬ噂を掛けられている人物でもある。

「あの姉ちゃんの？敵に味方したのか？」

普通に考えるなら、あの場に居る時点で敵と判断するがヘンさんは首を傾げた。

「分からないな」

元部下であるヘンさんはヴィールング様の性格などを知っているから、本当に味方したのか疑問らしい。

「だが、もし敵側に付いたとなれば厄介だぞ」

あの方はロックス様より切れ者だと、とヘンさんは言った。

「あの方は裏方の仕事を知り抜いているし、勝つ為なら手段は問わない。言わば少佐みたいなもんだ」

「なるほどね。この事は、あの姉ちゃんには言わない方が良いな」

軍曹は納得しながら、要らない荷物には何も言わない事に決めた。

「確かにそうだな。下手に教えて内輪揉めは御免だ」

ヘンさんは軍曹の言葉に頷いた。

ここであの女にこの事を報告すれば、「叔父上がそんな事する訳ない！！」と言うだろう。

私が同じ立場でもそうだ。

身内がそんな嫌疑を掛けられて平然としていられる訳ないし、あの女は過度な程感情的だから尚更だ。

ヴィールング様の事は詳しくは知らないが、あの女の親戚と考えると敵に味方するとは考え難い。

あの女の良い所は、根性と裏切らない所だ。

こんな状況になれば誰もが寝返る確率が高いのに、それをしないのが良い証拠だ。

だが、周りはそうではないし、前々から仲が悪いのだからこれみよがしに疑いの眼差しを向けるのは必然だ。

しかし、それをすれば内輪揉めは必然で士気から作戦などに影響がある事を考えると、これは言わない方が良い。

少佐に報告しても恐らくは他言するな、と言うだろう。

私もそれに頷き、ワイバーンは居ないか探した。

しかし、何処を探してもワイバーンは居ない。

待ち伏せ。

という単語が頭を過った。

そしてそれは命中した。

空から鳴き声が聞こえてきた。

嫌な予感は当たると言うが、これは出来るなら当たって欲しくなかった。

「逃げるぞっ」

軍曹は急いで立ち上がるとスキーを力任せに押した。

私達もそれに倣った。

私達がさっきまで居た場所が炎で燃え上がり地面が大きく抉れた。

ワイバーンが吐いた火だと直ぐに分かった。

待ち伏せされていたのだ。

「すんなりと事が運び過ぎたな」

軍曹は滑りながら舌打ちを漏らした。

ワイバーンの鳴き声が空中に響き渡り、兵たちの怒声が聞こえてきた。

此処に居れば直ぐに追っ手は来る。

「急いで逃げるぞ」

軍曹の言葉に私達は頷いて急いでその場を離れた。

ワイバーンの遠吠えが聞こえるが、無闇に炎を吐いて来ないのは幸いだ。

何故かは知らないが。

急いで私達は馬の所まで戻り、跨ると腹を蹴り走らせた。

馬を走らせて逃げるがワイバーンの遠吠えは聞こえるし追っ手の気配もする。

距離はあるが何処までも追い掛けて来る気がする。

見れば革鎧を着た鉄槌兵と弩兵だった。

共に革の鎧だから比較的、軽快な動きが出来る。

彼らは山を登りながら追い掛けて来た。

弩兵は膝を付いて、こちらに狙いを定めて撃ってくる。

それを避けながら逃げ続けるが、何時まで経っても追いかけて来る。

「しつこいな。性質の悪い女じゃあるまいし・・・・おい、手榴弾だ」

私とガリシャは頷き、手榴弾を取り出した。

Ｍ６７破片手榴弾ではなく薄い水色の逆六角形をしている。

“Ｍ３４白燐手榴弾”だ。

ベトナム戦争時代から未だに現役で使用されている物で、煙幕効果と焼夷効果がある。

半径３５ｍが危害と焼夷半径になる。

私とガリシャはピンを抜いて投げた。

数秒間を置いてから爆発した。

敵は煙幕と白燐が燃焼しながら飛び散り衣服が燃え始めたので慌てふためいた。

その間に私達は距離を空けて逃げる事に成功した。

第百二十三章：居心地が良い

私達は何とか追手から逃げる事に成功した。

逃げてきた道は勿論、別な道だ。

かなり逃げたので大丈夫と踏んだ軍曹は休憩をする、と言い地面に腰を降ろした。

「ここまで来れば大丈夫だろう」

軍曹は馬から降りて煙草を銜えながら後方を見た。

「偵察の結果は中途半端だが、良い収穫ではあったな」

「確かにそうですね。民達の生活から装備など細かな点が分かりましたから」

「そうだ。それに鉄鎚兵と弩兵は雪道でも行軍に支障が無いって事も分かったしな」

確かにそうだ。

彼等は雪道をしかも、上り坂なのにまるで意に介さないくらいの速度で追い掛けて来た。

何か特別な訓練でも受けているのか？と思うほどだ。

「あいつ等の指揮官は誰だ？」

軍曹がヘンさんに訊ねた。

「あいつ等は頭がツルツルだっただろ？」

「そう言えば、そうだな。全員がスキンヘッドで気持ち悪かった」

全員がツルツルの頭で同じ鎧に同じ武器を持ち、一斉に襲い掛かって来たのだから気持ち悪いと思ってもいいだろう。

実際、私も気持ち悪いと思ったのだから。

「あいつ等のあれは、指揮官にやらされているんだ」

「指揮官に？ていうと、指揮官もスキンヘッドか？」

「あぁ。豚を紋章に持つモリスン侯爵だ」

モリスン侯爵・・・・・・・・

「どんな奴か分かるか？」

「噂だと元山賊の頭だ。チーズと肉が好物で、豚みたいな体格だが俊敏な動きが出来るし力も半端じゃない」

「なるほど。弩兵もそいつの兵隊か？」

「あぁ。弓より強力な矢を放てる。反面で次の矢を射るのに時間が掛るが」

「だろうな。一度、射たら片膝を着いて巻き上げ機を使用していたのを見た」

この二つがモリスン侯爵の兵隊。

どちらも攻撃的な色合いが強いな、と思った。

「さぁて、急いでこの事を少佐に報告するか。敵もこちらが偵察に来たと知って今頃対策を練っている事だろうからな」

軍曹は煙草に火を点けながら私達に行くぞ、と言った。

私達は頷いて、再び馬に乗りまた進んだ。

馬に乗りながら私は煙草を吸いながら、奴等がどう出るか考えてみた。

『偵察に来た、と考えると攻撃を仕掛けてくるか、若しくは様子を見に来たと考える筈だ』

では、どうする？

攻撃を仕掛けに来るも様子を見に来たと考えても、迎え撃つだろう。

だが、以前のような目に遭う事は当たり前と考える。

戦象、戦車、騎馬は使えないとなれば空からの攻撃だ。

ヘリは２機でワイバーンは未確認だが、１００は越えていると考えて良いだろう。

これらを使用して空から攻撃する。

しかし、空からの攻撃では致命打に欠ける。

かと言って下手に陸から攻めても前のような事になるのは捨て切れないが、ヘリから降下すれば背後を取れる。

となればワイバーンで攻撃しつつヘリで後方に降下してこちらを攻撃し更に前から攻撃する。

・・・挟み打ちか。

これが私の考えた結論だったが、ヘリは2機でそんなに大勢は乗せられない。

どう出るのか・・・・・・・・・・

結局、私は自分で考えても分からなかった。

その日の夜、私達は無線で少佐に事の顛末を先ず教える事にした。

『そうか。・・・・まぁ、何はともあれ無事で良かったな』

少佐は私たちの無事に安堵してくれた。

『急いで戻って来い。ゲンハルトが酒を用意して待っている』

「了解」

それで無線を終えた。

「あの骨と皮だけのおっさんが酒を用意しているか・・・どんな酒かね？」

「それは分かりませんが、良い酒だと思いますよ？」

出来るだけ良い酒を用意する、とゲンハルト様は言った。

それに嘘は無いと思う。

「まぁ、俺は期待しないで待って置くぜ」

「その言葉、後悔しないで下さいよ？」

「おぉ、言ってくれるぜ」

軍曹は愉快そうに笑いながら行くぞ、と言った。

私達は頷いて再び馬を進めた。

― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

ゲンハルトが無線で待ち伏せを聞いたと知り俺に訊いてきた。

「テツヤよ。ランドルフ達は無事だったのか？」

ー ー

「全員無事だ。安心しろ」

俺はゲンハルトに煙草を勧めた。

「そうか。せっかく用意した酒を台無しにしてはイザベルに怒られるので心配だった」

「相変わらず尻に敷かれてるんだな？」

「まぁな。だが・・・悪くない、と思っている」

今、テントに居るのは俺とこいつだけ。

だから、こいつは本音を言ったのだろう、と思った。

「イザベルが居るお陰で全て事足りる。あの女なら・・・私の留守を守ってくれる」

「それをイザベル嬢本人に言えば喜ぶぜ？」

「馬鹿を言うな。それを言えば今以上に頭が上がらないではないか」

それだけは避けなくてはならない、とゲンハルトは言いながら俺の差し出した火で煙草に火を点けた。

「それにしてもこれは実に美味いな。何処で作られているのだ？」

「さぁな。戦場では常にお目に掛っていたから苦労せず手に入ったんだ」

「そうか。所で、そなたは二度ほど軍を変えたと言っていたが・・・・どうして変えたのだ？」

前に答えた内容だけではあるまい、とゲンハルトは言ってきた。

「そんな昔の事は覚えていない。どうしてそんな事を訊いてくるんだ？」

「そなたはこの国に縁も所縁も無い。それなのに、命を張って戦っている。その理由が知りたいのだ」

まぁ、訊きたくなるのも道理か。

「強いて言うなら・・・居心地が良いからだろうな」

この国ほど居心地が良い場所は無い、と俺は断言した。

「今まで色々な国を歩いてきたが、ここほど居心地は良くなかった。これじゃ答えにならないか？」

「・・・いいや。それだけで十分だ」

ゲンハルトは煙を吐いて満足気に頷いてみせた。

「ありがとよ。所で・・・ヴィールングを知っているか？」

「ヴィールング殿か。ロックス殿の弟君で爵位こそ継承していないが軍の裏方として活躍していたな」

「ある程度は知っているようだな」

「あぁ。よく夜会で会った。兄であるロックス様に比べれば影が薄かったが、貴族たちの恨みを買っていたロックス殿に比べて仲は良かった」

「ヘンの説明だと、故意に自分を薄く見せていたらしい」

「故意に？まぁ、家を継げないから自棄になったのかとも思えるが、違うのか？」

「その前にマレル家は貴族たちから見てどんな家系だったか教えてくれ」

「マレル家は獅子頭軍団から親衛騎士団になり爵位も授与された家柄、つまり成り上がりと見られていたな」

以前は貴族の家から優れた者を選び出して親衛騎士団に任命していたらしいが、フィーナの祖父が団長に収まってからはマレル家が独占しているらしい。

「それはどういう訳だ？」

「強いて上げるなら親子そろって国王の信頼が厚かった事が上げられる。付け加えるなら“忠実な飼い犬”を1匹くらいは置いておきたい、という所だ」

「何かしらあった時、確実に自分達に味方する忠実な番犬を欲した訳か」

「うむ。その点、祖父も父も申し分なかった。だから、マレル家が

独占できたのだ」

「なるほど。てことは否応なくマレル家は他の貴族に恨みを買っていた訳か」

「左様。祖父の方はまだ良かったが、ロックス殿の代になってからは悪くなった」

「それだ。それが理由だ」

「？どういう事だ？」

「女の尻に敷かれ過ぎて頭が悪くなったのか？」

俺はふざけた口調で言うとゲンハルトは渋面を浮かべて考え始めた。

「・・・マレル家を護る為にヴィールング殿は影が薄い男を演じたのだな？」

「ご名答」

ロックスとか言う男は聞く話によればかなり付き合い辛い男で恨みを買い易い性質だったんだろう。

しかし、弟のヴィールングはそれを見て自分は兄のようになってはいけない。

寧ろ兄のためひいてはマレル家を護る為に貴族たちと仲を良くしようとした。

これが俺の考えだ。

「それを考えると、ヴィールング殿は今回もマレル家を護る為に向こうに付いたのだろうか？」

無線で聞く限り・・・あちら側に居るのだろ？とゲンハルトは小声で訊いてきた。

それに俺は頷いた。

「分かっていると思うが、この事はフィーナには言うなよ？」

ここで下手に教えては要らぬ内輪揉めが起こる。

仮に起こらなくてもあいつ自身の気持ちが萎えるのは明白だ。

何れは知る事になるだろうが、今は伏せておくべきと俺は思った。

「分かっておる。しかし、あれだけそなたを毛嫌いしていたフィーナ殿をよく手懐けたな？」

「手懐けたとは違う。あいつは俺を越えようとしているんだ」

尻尾を振り撒いて舌を出す犬じゃない。

瞳に力を宿し、隙あらば越えようとする狼の瞳だ。

「主を越えるか。それは父親であったロックス殿を抜くより難しいな」

「それはあいつ次第だ。まぁ、根性でやり通すと俺は踏んでいるが」

「私はもう少し様子見をさせてもらうぞ」

ゲンハルトは何処か面白そうな眼をしていた。

「お前も案外、良い性格をしているな？」

「知らなかったのか？私は性格が良いのだぞ」

「それは知らなかったぜ」

俺は喉で笑いながら煙草を吸い、灰を指で叩き落とした。

第百二十四章：無事に帰還

敵の追撃は無く、私達は悠々と、しかし急いで城へと帰還した。

帰り道では私達が偵察に向かっている間に作られた見張り台や前線基地が目に入った。

見張り台は私とガリシャが訪れた場所の他にも複数あり、前線基地は割と小さな物だ。

木の板で造られた屋根に４本の杭で立てた物。

だが、地下に通じている。

これは迫撃砲などから身を護る為であり、敵が来たら直ぐ様隠れられるようにしてあるのだ。

どれも上手くカモフラージュされている上に敵が侵入しそうな場所に作られている。

「流石は少佐だな」

軍曹は口笛を吹きながら少佐を称賛した。

そして城へ着いた私達は真っ直ぐ少佐達の居る演習場へと向かった。

演習場に行くと少佐達が私達を出迎えてくれた。

「イーグル１等軍曹。並びに部下６名。偵察より帰還しました。テ

ツヤ少佐」

軍曹は馬から降りると私達を一列に並べてから一歩前に出て少佐に敬礼をしながら報告した。

「ご苦労だった。では、偵察の報告を聞かせてくれ」

「はっ。敵の装備は・・・・・・・・・・・・」

軍曹は少佐達に偵察の報告を伝え、ワイバーンの待ち伏せにあった事と鉄鎚兵と弩兵による追撃も伝えた。

「鉄鎚兵と弩兵は雪道でも俊敏に動けるのか。・・・エドリアス大尉。これはどういう事か分かるか？」

少佐は隣に立ったエドリアス大尉に訊ねた。

「鉄鎚兵も弩兵もモリスン侯爵の兵です。侯爵の領土は辺境の地でも豊かな土地でした」

穀物が大量に作れる土地らしく兵たちもそれを育て食べていたので体力なども他の貴族が使役する兵に比べてあるらしい。

「それにモリスン侯爵はよく狩りをするのです。それに共として付いて回った事も考えれば山でも俊敏に動けるものと考えます」

確かに、狩猟を主が嗜むとあればそれに共は付く。

ただし、主は馬に乗れるが共は徒歩で移動する。

更に獲物を主の下へ追い詰めて行かなくてはならない事も考えると嫌でも俊敏に動けるのも道理と言える。

「なるほど。ありがとう」

少佐は納得したように頷くとエドリアス大尉に礼を述べた。

「ありがとうございます」

エドリアス大尉は敬礼をして口を閉じた。

「敵の待ち伏せにあった事・・・これは些か失点だ」

少佐は先ず私達に待ち伏せにあった事を口にして、失点と付け加えた。

確かにそうだ。

どんな手で敵が待ち受けているのか分からない。

それなのに私達は簡単に着いた事に安堵した所があり、待ち伏せなど攻撃を受ける少し前にやっと気付いた。

これを失点と言われても文句は言えない。

「しかし、無事に帰って報告をした事は良い」

少佐は失点を指摘しながらも私達が無事に偵察の任務を果たせた事を褒めてくれた。

飴と鞭を上手い具合に使い分けていると私は思う。

「恐らく敵は偵察に来たと知り、更に厳重に警戒するだろう。そしてまたこちらを攻めて来るだろう」

当たり前の事ではあるが、敢えて少佐はまたここを攻めて来ると言った。

「だが、俺は貴様らなら撃退できると信じている。出来るな？」

『勿論です』

私達は口を揃えて断言した。

「宜しい。何はともあれご苦労だった」

『はっ』

私達は敬礼をした。

「それから総大将であるゲンハルト閣下が貴様らに酒を授けるそうだ。有り難く受け取れ」

ゲンハルト様は直ぐ横に居たイザベルさんに眼をやった。

何時もなら拳か口が飛んでくるが、場所を弁えているのだろう。

イザベルさんは無言で頷き、私達にコップを渡し始めた。

そして瓶に入った酒を注いだ。

色は透明だ。

ホンノリと果実の香りが鼻を刺激し喉を潤してくれそうな気がする。

「では、頂きます」

軍曹が先ず酒を飲んだ。

「・・・う、うううううう・・・・・うまぁあああい！！」

軍曹は酒を飲み干すと天に向かって大声を上げた。

「何だ？この酒は？こんな美味い酒は飲んだ事が無いぜ！？」

私達も釣られて飲んでみると、確かに美味かった。

果実の香りがしたのは確かだが味は極めて冷たくて辛い味だ。

香りとはまったく違う味であるが逆に魅力的であり美味い。

「どうやら喜んでくれたようだな」

ゲンハルト様は胸を撫で降ろした。

「あたしが作った酒なんだから美味いに決まってるじゃないか」

イザベルさんは大きな胸を前に突き出して両腕を腰に当てた。

「それを言わなければ・・・もっと良い女なのに、な」

ポツリ、とゲンハルト様は漏らした。

私にも聞こえたのだから当然イザベルさんにも聞こえた筈なのにイザベルさんは文句を言わなかった。

「イザベルちゃん。これ、どんな酒をブレンドしたんだい？俺に教えてよ」

軍曹はイザベルさんに訊いてきたが、視線はもはや言うまでも無く胸元に注がれている。

「おい。眼元が下に向いているぞ」

ゲンハルト様がイザベルさんを庇うように前に立った。

「命からがら帰って来たんだぜ？少し位、ご褒美をくれたって罰は当たらないぜ？」

「その酒が褒美だ。まだあるが、そなたにはもうやらん。イザベル。この男にだけは注ぐな」

「勿論よ」

イザベルさんはゲンハルト様の耳元で何かを囁いてから私達に酒を注いだ。

軍曹は泣きそうな顔で「俺にも注いでー」と懇願したが、無駄に終わり仕舞いには私達に強請って来た。

まぁ、私達も断って最終的には一人で泣いたが。

報告を終えた私達はそれぞれの家へと帰った。

私はオリガさんの家へと戻った。

「ただいま帰りました」

私はドアを開けてオリガさんに無事に帰った事を伝えた。

「お帰りなさい。ランドルフ」

オリガさんは私を見て変わらない笑顔で出迎えてくれた。

「で、最初はどうする？何か食べる？それともお風呂に入る？寝る？」

「先ずは風呂に入りたいです」

「そう思って、湯は沸かしているわ」

「ありがとうございます」

礼を言ってから私は風呂がある場所に向かい、衣服を脱いだ。

そして湯に浸かり疲れを湯と共に洗い流した。

「・・・・・・・・」

私は湯に浸かりながらリカルド様を狙撃出来なかった、事を考えた。

見つからなかったから狙撃出来なかった。

だが、もし見つけて狙撃出来るチャンスがあったら私は出来たか？

「・・・出来ただろうな」

悩みはしたが、恐らく私はリカルド様を狙撃していた事だろう。

人を撃つ事に抵抗が消えた訳ではない。

しかし、リカルド様を狙撃して仕留めればこちらに有利になれるし、内乱を早く終わらせる事が出来る。

それを考えると私はしただろう。

そう思いながら湯で顔を洗った。

湯から上がると料理が用意されていた。

「お腹減ってるでしょ？」

オリガさんは私の心を読めるのか？と思うほど私の事を知っている。

こういう方を“出来た女”と言うのだろうな、と思いながら私は料理をオリガさんと共に食べて酒を飲んだ。

戦闘食も美味いが、やはりオリガさんの手料理が最高だと私は思った。

―

―　―　―　―　―

僕はローズちゃんが膝の上に座るのを見ながらレイテさんと酒を飲み交わしていた。

イザベルさんが作ったあの酒は美味しい、と断言できる。

しかし、それより美味しい酒が僕にはある。

レイテさんが注いでくれた果実酒だ。

それをレイテさんと一緒に飲むのが僕にとっては最高の酒だ。

「何はともあれ無事で良かったわ」

レイテさんは酒の入った杯を傾けながら僕の無事を喜んでくれた。

「ですが、また敵が来る事を考えると油断は出来ないです」

「でも、貴方が護ってくれるんでしょ？」

「勿論です。貴方とローズちゃんは僕が護ります」

「レオンお兄ちゃん、格好良いっ」

ローズちゃんが話に割り込むように言ってきた。

どうやら僕とレイテさんだけが話をしている事に仲間外れにされた気分になったようだ。

「ありがとう。ローズちゃん」

僕は苦笑しながらローズちゃんの髪を撫でた。

幕間：内輪揉め

「敵が偵察に来たか・・・・・・」

リカルドは会議室の上座の席に座りながら渋面を浮かべた。

「リカルド様。偵察に来る敵など恐れるに足りません。今こそ一網打尽にして皆殺しにすべしです」

貴族の一人がリカルドに意見を申し立てた。

今の内に自分の名を知ってもらおう、という算段なのは見え見えだった。

リカルド達から言わせれば戯言でしかなかった。

だが、その貴族に賛同の声を上げる者が現れた。

「俺も賛成だ。あんな奴等、城に籠っているだけの臆病者だ。いっそのこと、今すぐにでも攻め込んで滅ぼしてしまいましょうぜ」

スキンヘッドで豚のように肥え太った身体の男・・・モリスン侯爵も貴族の意見に賛同した。

「俺の兵はあいつ等のせいで火傷を負ったんだ。このままじゃ俺の気が治まらねぇ！！」

「モリスン侯爵。言葉を控えろ」

リカルドの直ぐ隣の席に座る男・・・ヴィクター公爵がモリスン侯爵を戒めた。

「てめぇの兵は無事だからそんな事が言えるんだよッ。俺の兵は・・・・・・・・・・」

「火傷を負ったのだろ？それはもう聞いた。同じ事を二度も言わなくて良い」

「てめぇ、俺を馬鹿にしているのか？」

「馬鹿になどしておらん。私は二度も言わなくて良い、と言っただけだ」

「それが俺を馬鹿にしているんだよ！！」

バッン

モリスン侯爵がテーブルを力任せに叩いた。

「私も二度同じ言葉を言うのは嫌いだが、敢えて言おう。馬鹿になどしておらん。それから会議を壊すな。壊すなら即刻ここから出て行け」

ヴィクター公爵はモリスン侯爵の怒気に怯えもせず淡々と口を動かした。

それがモリスン侯爵の癇に障り、今ここで剣を抜こうという一発触発の雰囲気になり始めた。

「まぁまぁ・・・お二人とも。ここは双方共に落ち着きましょう」

温和な笑みと声で場を和ませようとするライアンナル伯爵。

声は温和だが、眼帯を付けている為その効果は半減していると言える。

「モリスン侯爵。貴方が部下を思う気持ちは分かります。ヴィクター公爵もそれは解かっていますよ。ですが、ここで悪戯に内輪揉めしては敵の策略に嵌ります。ここは落ち着きましょう」

ライアンナル伯爵の言葉に二人は押し黙り、モリスン侯爵は黙って乱暴に椅子に腰を降ろした。

激怒しているが、それでもライアンナル伯爵の言葉に従ったようだ。

「で、リカルド様。これからどうなさいますか？」

「準備はどうだ？」

リカルドはライアンナル伯爵の質問を無視して逆に質問した。

ライアンナル伯爵は気分を害する様子も見せずに質問に答え始めた。

「傭兵達は取り逃がした者たちを今すぐにでも狩りに行くと言い準備は万端です。食料なども問題ありませんし、こちらの方達も兵たちの準備は出来ております」

貴族たちは当然だ、と頷いてみせた。

「しかし、敵は恐らく偵察を行うと同時に挑発している可能性は捨て切れない」

「確かにそうですが、既に準備は出来ております。仮に足りなくなっても直ぐに追い付きますよ」

この戦いは早く決着を付けなくてはいけない、とライアンナル伯爵は言った。

リカルドから言わせれば見え透いた嘘だったが、顔には出さなかった。

「だが、万が一の事も考えると完全に整えてから行くべきだと思うが？」

フォース・リーコンの指揮官がここで口を挟んだ。

「敵が偵察をしたのなら我々も偵察をして相手の情報を詳しく得るべきだ」

「また“彼等”の手を煩わせる積りですか？」

ライアンナル伯爵の言った彼等とはハゲタカの二人だ、と指揮官は直ぐに察した。

「敵に包囲された貴方達を救う為に、ヘリとワイバーンが何匹かやられました。あの土地を攻撃するのには必要な存在を。また同じように失う可能性があるのですよ？」

「それでも敵の情報をもっと詳しく知らなければ戦は・・・・・・

・・・」

「余所者はすっ込んでおれ!!」

貴族の一人が指揮官を怒鳴った。

「そなたらはただの兵隊だ。兵隊なら兵隊らしく我々の決めた事に従え。何よりそなたはこの国の住民ではない。余所者だ。その余所者が我々の会議に参加するとはどういう事だ?あの二人などは会議に参加せず準備をしているのだぞ?」

そなたとは雲泥の差だ、と貴族は続けた。

「私はリカルド様を国王にする為、ひいては兵たちを一兵たりとも無駄死にさせないためにも・・・・・・・・・・」

「黙れ!!兵など所詮、捨て駒にすぎん。そんな奴等が幾ら死のうと勝てば良いのだ!!」

「・・・兵たちを捨て駒と仰るか。貴方は」

指揮官の眼が座った。

鋭く剃刀のようになり貴族を睨み据えた。

「そうだっ。兵とは指揮官が考えた作戦を実行する者だ。言うなれば、働き蟻だ。そして我々貴族は、選ばれた者たちはその働き蟻が取って来た物を受け取るだけで良い」

その過程で何匹死のうが我々は痛くも痒くも無い。

代わりは幾らでもいるからだ。

「だが、我々に代わりは居ない。そこが違う所だ」

「・・・貴方は、指揮官としての能力所か人間として根元から間違っている」

差し詰め第二次世界大戦で敗北した“亡霊”と同じだ、と指揮官は述べた。

「貴様ッ・・・この私を侮辱するか！！」

「侮辱と取るか忠告と取るかは貴女の勝手だ。私は事実を述べただけだ」

貴族たちは一斉に指揮官を睨み据えた。

再び不穏な空気が部屋を支配する。

「二人とも。ここで面倒は起こすな」

リカルドは険悪な雰囲気を出始めたので戒めた。

「暫く休憩する。皆、部屋を出て頭を冷やせ」

このままではまたこのような事態になるとリカルドは思ったのか、一時中断と言った。

それに従い皆は部屋を出て行った。

一人残ったリカルドは貴族の発言に憤りながらも、一部だが的を射ている言葉に胸を痛めた。

第百二十五章：新しい仲間

私は徹夜様の王妃様の一人となったフィーナ・マレル様を思い出した。

今、書いている部分にフィーナ様が出て来るからだ。

親衛騎士団の長であったフィーナ様を最初は憧れていたが、後から悪感情を持ち始めた。

最初は下種女という渾名を私は勝手に付けた。

それから要らない荷物と言う渾名で更に悪感情を募らせた。

『あの頃は若かったな』

若いからあれだけの事が出来たのだ、と私は思い返した。

まぁ、実際フィーナ様の行動はかなり度が過ぎていたから仕方無いのかもしれないと思う。

しかし、フィーナ様の身の上などを聞いていくと何処かで憐みの感情が芽生えた。

実父から虐待とも言える訓練と女であるという事での誹謗中傷。

そして忍び愛の末に生を授かった事。

これらが混ざり合いフィーナ様をあのような性格にした、と今では

思っている。

それを思うと徹夜様と会うまでのフィーナ様は憐れな人生を送っていたと思うし、あのような行動を取ったりするのも強ち強くは責められないとさえ思ってしまう。

徹夜様と出会い訓練を受け共に戦場を駆けてからフィーナ様は良い方向へと変わられた。

騎士と言う職業に酷く固執していたが、徹夜様や師であるヴィルヘルム伯爵などの影響を受けてからは合理的な考えを持つようになられた。

それは親衛騎士団にも値する。

先ずフィーナ様が徹夜様と共に戦場を駆けてから、それを追う様に彼等もまた訓練を受けて戦場を駆けた。

通常、親衛騎士団は王を護る騎士団なのだが第一王妃であるサラ様から「徹夜様を護って下さい」と言われてからは共に5大陸統一を行った。

そしてフィーナ様は徹夜様の妻となられ、他の王妃様達と同じように子を儲けて国を護った。

そんなフィーナ様は徹夜様が亡くなる前に亡くなられた。

その時を看取ったのは徹夜様だけだ。

フィーナ様自身がそれを望み、徹夜様もそれに答えたのだ。

当然、私もその場には居なかったから何を話されたのかは分からないが恐らく徹夜様に対して懺悔をしたのだろうと想像できる。

あの方もゲンハルト様も徹夜様に対して負い目を感じていた。

ゲンハルト様もまた徹夜様に生前の罪を詫びたからフィーナ様もしたと想像できたのだ。

それは当たり前と言えば当たり前だが、徹夜様はそれを気にしてはいなかった。

心が広い方だと思うし、その心の広さがあの二人には痛いほど嬉しかったに違いない。

私はフィーナ様を思い出しながら史記をまた書き始めた。

翌朝、私達は少佐に呼び出されて演習場へと来た。

「今日から貴様らと共に戦う者を紹介する」

まだ一人だが、もう少しで大勢来るとテツヤ殿は言った。

これに私達は首を傾げたが直ぐに分かった。

「おい」

テツヤ殿が声を掛けると一人の兵士が現れた。

身長は私と同じ位だが、顔つきや身体つきは私より兵士として立派

だと思う。

服装はテツヤ殿が着ている迷彩服とブーニー・ハットを被り右腕にはバンダナが巻かれていた。

腰にはホルスターに収まった拳銃とナイフが1本ずつ吊るされており、背中にはミーシャ大尉が使っているドラグノフSVDが掛けられていた。

右手には少佐と同じくAKMアサルトライフルを・・・いや、少し違う点があるから恐らく多くある種類の一つと考えられる。

おまけに銃身の下には短くて小さな筒が付けられている。

恐らくアッド・オンタイプのグレネードランチャーだろう。

「今日から俺らと共に戦う親衛騎士団団長フィーナ・マレルだ。階級は中尉だ」

「失礼ですが、少佐。フィーナ殿に中尉などという階級を与えても良いのですか?」

私は思っていた事を口にした。

ワイド中尉、リーザ中尉は団長というだけでなく実力などもあるから中尉になったが、この女にそれだけの階級に相応しい働きが出来るのか疑問を抱かずにはいられなかった。

「私も同意見です」

レオンも私と同じだと口にし、要らない荷物を見た。

「この女は自分が指揮する騎士団の統率でさえまともに出来なかったと聞いております。そんな女を中尉に任命するなど些か問題があると思います」

私とレオンの発言に要らない荷物は眉を顰めてグッと拳を握り締めた。

・・・・以前なら直ぐに斬り掛る筈なのにそれを抑えるとは成長したなと私は感心した。

「お前等二人が言いたい事も一理ある。だから、中尉はあくまで肩書きだ」

暫くの間は俺の傍で戦わせて学ばせる、と少佐は言った。

「俺は士官学校を出ずに将校になった。だから、ちゃんとした将校と比べれば些か劣る点もあるだろう」

しかし、将校に必要な物は先輩達から、戦場から教わった。

「だから、こいつも俺のように成長させる」

その他にもリーザ中尉を共に居させる、と少佐は続けた。

「知っている奴も居ると思うが、リーザ中尉はこのフィーナ中尉とバディを組んだ」

リーザ中尉も共にさせる事で、更に磨きを掛けるようだ。

「異議はあるか？」

『ありません』

それなら問題ないだろう、と私とレオンは思い口を閉じた。

「宜しい。フィーナ中尉。貴様からも何かあれば言え」

これからここに居る奴らで戦うのだから、自分の思いなどを伝えろと少佐は言った。

「今日より貴方達と共に戦う身となったフィーナ・マレル中尉です。年齢は２４歳で独身です」

ここで爵位を言わない事に私は驚いた。

爵位を持っているからそれを言うと思っていたのだ。

だが、それを言わないという事は不必要と判断したのかもしれないな。

「私はまだ若輩者です。ですが、これから少佐と肩を並べられる位の実力をつけたいと思います」

以上です、と要らない荷物は少佐に言った。

「宜しい。皆、過去の遺恨が少なからずあるだろう。だが、今はそれを全て忘れろ。良いな？」

『レンジャー』

私達は敬礼をして答えた。

そして一時解散となった。

解散となったが私とレオンは少佐の元へと向かった。

少佐は煙草を吸いながら要らない荷物と話をしている最中だ。

「少佐。宜しいですか？」

「テツヤで良い」

「では、テツヤ殿。・・・フィーナ殿が持っている武器は何ですか？」

「フィーナ中尉。ランドルフ一等兵とレオンニ等兵に教えてやれ。全て、な」

「了解しました」

要らない荷物は滑らかな声で頷き、敬礼をした。

良くここまで変われた物だ、と私とレオンは感心する。

ヴィルヘルム元伯爵の力も大きいだろうがテツヤ殿の力もあるのだろうな、と思った。

「先ず私が持っているアサルトライフルは少佐のＡＫＭアサルトラ

イフルの小口径モデルだ」

「というと、ＡＫＳ－７４Ｕと同じ口径ですか？」

私が訊ねると要らない荷物は頷いた。

「名前は“ＡＫ－７４”だ」

ＡＫ－７４・・・ＡＫ－４７とＡＫＭより小口径の弾“５．４５ｍｍ×３９”弾を使用するモデルだった筈だ。

「確か、ストックは“合板”でマガジンもＡＫ４７とＡＫＭと区別する為に窪みが付けられているんですよね？」

「その通りだ。よく覚えているな？」

テツヤ殿は私とレオンに煙草を勧めてきた。

「ありがとうございます」

「頂きます」

私とレオンは煙草を受け取り口に銜えた。

「ではレオンニ等兵。この下に取り付けられている物は分かるか？」

「アド・オンタイプのグレネードランチャーなのは分かるんですが、見た事は無いですね」

「だろうな。フィーナ中尉。これを教えてやれ」

「はっ。これは旧ソ連で開発されたグレネードランチャーで名前は“ＧＰ－３０”だ」

何でも軍曹のアメリカがＭ２０３を作った事に対抗したのか、旧ソ連でも同じ物を作ろうとなったらしい。

それで出来上がったのが、これらしい。

最初はスペツナズの要望で、屋内突入時の事前準備を省略するためのドアや窓の破壊用火器として“ＧＰ－１５”が開発された。

それから塹壕や掩蔽壕、稜線に隠れた目標の攻撃用として、一般部隊にも配備されたのが“ＧＰ－２５”であり、改良を重ねられたのがＧＰ－３０という事だ。

テツヤ殿のＡＫＭにも装着可能でＭ２０３に比べるとより小型だ。

「ストックの後ろには衝撃を緩和する為に用意されたラバー製の“ショックパッド”を装着している」

要らない荷物はストックの後ろに付けたショック・パットを見せた。

確かにあれなら肩付けで撃っても然して衝撃は来ないな、と思った。

これでＡＫ－７４の説明は終わりだ、と要らない荷物は言った。

そして別の装備の説明を開始した。

第百二十六章：最後の好機（前書き）

誤字を発見したので訂正します。

それからまだ更新できないでおりますが・・・まだ掛りそうです。

恐らく・・・纏めて１０話以上、更新するのでは？と自分では思っております。

皆様には多大なご迷惑を掛けて申し訳ありません・・・・・・

第百二十六章：最後の好機

ＡＫ－７４の説明を終えた要らない荷物は今度は拳銃の説明を始めた。

ホルスターから抜かれた拳銃はテツヤ殿のガバメントより小さなモデルだ。

あれは・・・・・・・・・

「これは・・・・・・・」

「コンバット　コマンダーですね」

私は要らない荷物が言う前に名前を口にした。

それが癇に障ったのか睨まれた。

「ランドルフ。口を閉じてろ」

「す、すいません・・・・・・・・」

テツヤ殿に叱られた私は急いで口を閉じた。

「フィーナ中尉。続けろ」

「はっ・・・これは、ランドルフ一等兵が言った通りコンバットコマンダーというガバメントの小型モデルだ」

口径は４５口径なのはガバメントと同じだしプロイセン様に送られた物で説明は受けたから失礼と思いながらその説明は聞き流した。

そこはテツヤ殿も見逃してくれた。

ドラグノフもまた同じだった。

「で、最後はこれだ」

要らない荷物は腰に手を回すとコンバット　コマンダーより更に小型の物を取り出した。

銃本体と比べてグリップが大きい。

あれだと大きな手の持ち主でも持ち易いしマガジンが外に少しだけ出ているので、握り易さも考えられている。

「それは？」

「“ワルサー　ＰＰＫ”だ」

これはバック・アップ用として俺も持っている、とテツヤ殿は腰からワルサーＰＰＫを取り出してみせた。

「こいつは小型で隠し易いから潜入する時には打って付けだ」

だから持っているとテツヤ殿は説明した。

これを作った国はドイツ。

私が持っているモーゼルｋａｒ９８ｋを作った国だ。

ワルサーとはこれを作った会社だ。

これもモーゼルと並びナチスに使われていたらしいが、そのナチスの中でも一際目立ち悪名高い“ゲシュタポ”という秘密警察が使用していたと言われている。

このゲシュタポはヴァエリエで行われていたような事をやってきた組織で同国人からも恐れられていたというからある意味では凄い。

で、その組織が使っていたのがワルサーＰＰＫだ。

他にも色々と使用していたらしいが、この銃が優秀だった事もありワルサーＰＰＫ＝ゲシュタポとなったらしい。

戦後はその印象が強過ぎて、かなり嫌悪されていたらしいが今では人気が非常に高い小型拳銃となっているらしい。

イギリス、という国の陸軍特殊部隊“ＳＡＳ”もこれを使用しているが、これは万が一の事などを考えて持っているようだ。

口径は２２、２５、３２、３８と色々とあるが、３２か３８が大体だ。

そして３２か３８のどちらを女性に握らせるとしたら３２口径の方が良いらしい。

３８口径だと引き金が重く引けないようだ。

だが、オリガさんやレイテさんは軽々とベレッタＭ８４Ｆを引いていたが、そこら辺はどうなんだろうか？

と思っていたが私は改めて要らない荷物が持っている装備を頭に浮かばせてみた。

アサルトライフルが１丁、拳銃が２丁、狙撃銃１丁、ナイフ１本、手榴弾などなど・・・・・・・・・・・・

「随分と持ちますね」

これだけ持つとは些か異常とも思えてしまう。

何よりそれだけゴテゴテと装備で固めていたら動きが出来ないのではないのか？と思ってしまう。

「こいつには俺が経験した事を全て教えて吸収させる。だから、これだけ持たせたんだよ」

先ずは分隊狙撃手として行動させる、とテツヤ殿は言い重くて動けないならその場で死ぬだけと言い切った。

まぁ、確かにそうなのだが・・・・・・・・・

「所でテツヤ殿。テツヤ殿とフィーナ中尉、それにリーザ中尉の３人だけで行動するんですか？それとも後数人は付けるんですか？」

「これから決める。まぁ、何人か“補欠”として入れる可能性もあるが、な」

この言葉を私とレオンは何となく理解した。

「ですが、時間はそんなにありませんよね？」

「あぁ。だから、これはある意味ではラストチャンスだな」

最後の好機、か。

「・・・お言葉ですが、テツヤ少佐。親衛騎士団の団員は、そのチャンスを物にしますよ」

「ほぉう。随分と部下を信用しているんだな？」

意地悪な声色で要らない荷物に語り掛けるテツヤ殿。

前ならここで剣を抜くのだが・・・どうなるか。

私とレオンはその様子を見たが一向にその気配は見られない。

それ所か余裕さえ醸し出しているから逆に恐ろしい。

『どういう事かな？』

『分からない。分からないけど、何か気持ち悪いよね？』

『だよね。前までテツヤ殿を見れば剣を抜いて斬り掛ったのにさ・・・・・・』

私とレオンはチラリと要らない荷物を見たが、まるで意に介さないという感じだった。

『・・・分からないね』

『うん。まったく分からない』

二人でどうやったら、あれほど毛嫌いしていたテツヤ殿とこうも肩を並べるようにして喋られるようになったのか知りたい、と思わずにはいられなかった。

「少佐。失礼します」

ここでリーザ中尉が現れた。

要らない荷物と同じく迷彩服を着ていたが、帽子は薄緑のベレー帽だった。

何でも向こうの空挺部隊と同じ色は好きではないという理由から天馬騎士団のベレー帽は薄緑のベレー帽にしたのだ。

腰のホルスターにはベレッタＭ９３Ｒを収め、右肩にはストックを折り畳んだＡＫＳ７４－Ｕを携えていた。

「どうした？リーザ中尉」

「はっ。これからフィーナ中尉と共に親衛騎士団の様子を見に行くのですが、一緒にどうですか？」

「まぁ、良いだろう。おい、お前等も来い」

私とレオンは頷いてテツヤ殿の後を付いて行った。

恐らく親衛騎士団にとってテツヤ殿を倒す最後のチャンスだ。

これを逃せば、もう駄目だろうな。

果たして彼らが成功するかどうか・・・・・・見物だな。

私は何時の間にか笑っている事に気付いた。

この状況を楽しんでいるとは・・・・・・・・

『私もテツヤ殿の影響を受けているんだな』

改めて私は思った。

まぁ、悪い気はしないから良いが。

演習場に行くとシュヴァルツフント達の姿は見えたが、親衛騎士団の様子はまったく見えない。

気配はあるのだが、姿は見えない。

「・・・迎撃準備」

テツヤ殿はドウダヌキを取り出した。

私、レオン、リーザ中尉、要らない荷物も迎撃準備をした。

「・・・・掛れ!!」

ヴィルヘルム元伯爵がツヴァイハンダーを振り上げた。

すると一気に何処からともなく親衛騎士団が襲い掛かった。

「おぉ、中々のお熱い歓迎だな」

テツヤ殿は笑みを浮かべながら襲い掛かる親衛騎士団を振り払った。

「タカミ・テツヤを狙え！！後は捨てておけ！？」

そうは問屋が降ろさない。

私達はテツヤ殿を護るように親衛騎士団を打ち払ったが多勢に無勢の上、殺さないようにしなければならないから加減が難しい。

しかも、前以上に気合が入った感じで少しでも加減を誤るとこちらがやられる恐れがある。

そう思っている内に別の親衛騎士団が剣を振り翳してきた。

それをモーゼルのストックで打ち払うと別の親衛騎士団が現れて私を抱き抱えるようにしてタックルしてきた。

「こっの離せ！！」

私は親衛騎士団を退けようとするが、彼は離れない。

そうしている間にも一人一人とテツヤ殿から離れさせられていく。

テツヤ殿だけが残されてしまった。

「おおお、随分とやるようになったな。まったくどうしてどうして・・・逞しくなったな」

テツヤ殿は余裕たっぷりの笑みを浮かべながらも壁に背を預けていた。

「お前を倒して訓練を受けるんだ」

「大した根性だ。部下は上司に似る、というがお前等も団長仕込みの根性があるな？」

見直したぜ、とテツヤ殿は言いながらドウダヌキを構えた。

「・・・・・掛れ！！」

一斉に親衛騎士団がテツヤ殿に襲い掛かった。

テツヤ殿は壁伝いに逃げながら親衛騎士団を一撃で倒して行き走り出した。

私を抑えた騎士が僅かにそちらに眼を向けた。

私は親衛騎士団の鳩尾に蹴りを入れて立ち上がり背後から親衛騎士団を倒した。

レオン達もそれに続いた。

背後を取られた親衛騎士団は前と同じようにやられた。

「惜しかったな」

テツヤ殿は煙草を銜えながら地面に倒れる親衛騎士団達を見下した。

「く、くそっ。これが最後の好機だったのに・・・・・・・！！」

バンバン、と地面を叩いて悔しがる親衛騎士団に私は些か同情を禁じ得なかった。

「・・・・・・・・・」

要らない荷物も憐みの眼差しで見ていた。

「これが最後のチャンスだったが・・・まぁ、今回は大目に見てやるか」

テツヤ殿は火を点けた煙草を銜えながら呟いた。

「ほ、本当ですかっ？」

要らない荷物はテツヤ殿に詰め寄った。

「聞こえなかったのか？大目に見てやると言ったんだ」

「で、では・・・・・・・・」

「あぁ。訓練を仕込んでやる」

これを聞いた親衛騎士団は地面から飛び上がり歓声を上げた。

何処にそんな体力が残っているんだ？と思うが、それだけ疲れが吹き飛んだのだろうと私は思った。

要らない荷物はテツヤ殿に礼を述べた。

まぁ、そこからは見ない事にした・・・理由は言わないでおく。

幕間：親衛騎士団団長の独白

私はタカミ・テツヤ（訓練が終わると自然と名前で言えるようになった）、リーザ殿と共に廊下を歩いていた。

ランドルフとレオンは親衛騎士団に「基本的な事を先ず教えてやれ」とタカミ・テツヤに言われて教えている。

どうしてお前ではないと私が訊けば「基本的な事をあいつ等にも教えさせてやるのさ」と言われた。

つまり初心に帰れ、という事か。

「私が受けた事を教えるのか？」

「それは明日からだ。まぁ、今日は明日の為にもひたすら走らせる」

ただ走り続けさせる。

延々と・・・・・・・

「あれだけの事をさせておいてまた走らせるのか」

「あぁ。お前も経験しただろ？」

「・・・あぁ」

私はそれに頷いた。

「それにしても、どういう事だ？」

「何がだ？」

「お前は自分に技を決めるか、傷を負わせるかのどちらかをやれば訓練を受けさせると言った。それ以外は認めないと。部下達はそれが出来なかった」

それなのにどうして訓練を受けさせる？と私は訊いた。

この男の事だから同情や憐みは無い筈だと踏んでいたし、そんな答えは返って来ないとも解かっていた。

「確かにあいつ等は出来なかった。以前ならお前の言う通り認めなかった」

だが、とここで区切った。

「あいつ等は悔しがった。それに前に比べれば確実に成長している。あれなら俺の訓練にも耐えられると踏んだ」

決して同情や憐みからではなく、これからも成長していくだろうと踏んで訓練を受けさせると言った。

「お前もそう思っているんだろ？」

今度は私に質問を浴びせてきた。

鼻に煙草という細長い棒の臭いが来る。

「こちらに煙を向けるな」

何だか嫌な・・・他の女の香水を付けて帰って来た父上のように見えて私は顔を背けた。

そして母上も父上が他の女の香水を付けて帰って来た時は顔を背けていたものだ、と昔を思い出した。

「これは失礼。それでどうなんだ?」

「・・・思っていた」

私は少し間を置いてから答えた。

昔の部下達ならあそこまで出来なかった。

悔しがっただろうが、今はそれ以上に悔しがっていた。

それは見ていて分かった。

地面を何度も叩きながら歯を食い縛る部下達。

ある者は泣いていた。

以前は悔しがっても泣かなかった。

それが今は泣いている。

本当に悔しくて、壁を乗り越えられなかった事に悔しがっているんだと分かった。

団長として見ていて辛かった。

だが、仮に私がこいつに願ってもこいつが受け入れるとは思えなかったし、条件を満たしていないからやはり駄目だ、と何処かで思っていた。

団長なのに私は部下達が泣いて悔しがる所を黙って見るしか出来なかった。

私は訓練を受けた。

言わば勝者。

勝者が敗者に掛ける言葉など何も無い。

勝者が敗者に掛ける言葉など全てがただの慰めと侮蔑の言葉でしかない。

だから、声を掛けられず黙って見ていた。

所がこいつは自分が決めた事を自ら破った。

この男ならそんな真似は決してしない筈なのに、だ。

それを聞いた部下達は悔しい顔から一転して喜んだ。

新しい玩具を与えられた子供のように純粋に喜んでいた。

そして私はタカミ・テツヤに詰め寄った。

あの時、私はどんな顔をしていたのか自分でも分からない。

喜んでいたのか？

嬉しかったのか？

泣きそうだったのか？

・・・・・分からない。

分からないが、私はこの男に詰め寄り礼を述べていた。

『ありがとう・・・・・・・』

まさか、この男に礼を述べる日が来るなど思ってもみなかった。

そして私達は廊下を歩いている。

行く場所は私が訓練を受けた演習場。

「しかし、俺も外に出たいな。何時までもこう城に籠っていると身体が鈍るぜ」

タカミ・テツヤは首をコキコキ、と鳴らしながら不満を述べた。

この男とまともに付き合うようになって分かった事が幾つかある。

その内の一つは部下思いという事だ。

ランドルフ達が外で戦っている時、こいつとゲンハルト様は外に出ていた。

と言っても演習場だ。

そこに天幕を張り司令部をとして、そこで寝起きしていた。

普通なら城の中で温かい場所で行った方が良い筈なのにこの男は敢えて外でそれを行った。

それは指揮官として苦楽を兵たちと共にしたいという考えだと私は思い始めている。

だが、それでも限界があると知っている。

だから、この男は指揮官でありながら外に出て戦いたいと言っているのだ。

「ですが、少佐は指揮官ですよ？」

リーシャ殿は正論とも言える言葉を言った。

確かにその通りだ。

こんな男も少佐と言う階級を持っている。

こいつが居た世界にある軍の階級だ。

大雑把に説明すると一番下が“兵”という階級。

ランドルフ、レオンがこの階級で私も訓練を受けた時はそこから始まった。

そして次が“下士官”という階級だ。

あの下劣と下品を同化させたような男、イーグルがこの階級なのだがまったく信じられない。

この下士官とは兵から叩き上げの者たちを言い「鬼」、「作戦の神」などと言われており恐れられているが、同時に兵たちと常に一緒に居り士気を鼓舞するのが役目だ。

とてもじゃないが、あの男にそれだけの力があるのか甚だ疑問と言うしかない。

そしてイーグルより上の階級であるミーシャ。

“尉官”と呼ばれる階級にある大尉だ。

大尉の下が中尉。

つまり私、ワイド殿、リーザ殿だ。

大尉の役目は中隊長。

中隊長は歩兵を２００人ほど指揮できる権限を持つ。

中尉は３０人から５０人で構成された小隊長になる。

そして中尉より下・・・将校の最下級に位置するのが少尉だ。

この少尉から専門学校で教育を受け、卒業して与えられる階級が少尉だ。

だが、卒業しても実戦経験も無い者では下手な手を打つ事が有り得る。

それを防止する事も踏まえて軍曹が下に付き補佐などをするのだが、この場合は“教育”すると言った方が正しいのかもしれない。

先ほども言ったが、軍曹とは兵から叩き上げでなった者たちであるため実務経験などは少尉より上だ。

だから、少尉より軍曹の案を採用したという例もあるらしい。

しつこいが、あの男にそれだけの実力があるのか甚だ疑問だ。

話を戻す。

そしてその上、つまりミーシャ、イーグルより上の階級が少佐。

“佐官”という階級の一番下だ。

この佐官になる為には大尉の時、特別な教育を受けるらしい。

それは少佐クラスからは作戦の一つを任される程の権限を持つからだ。

佐官クラスになるには専門校を出る必要性があるのだが、この男は専門校も教育も受けていない。

現場一筋で少佐にまで上り詰めた叩き上げなのだ。

本来なら例外中の例外らしいが、この男はその例外を突破した男。

だから、あれだけ強いとも何となく理解できるが態度に些か問題が・・・いや、かなり問題があるのも頷けるというものだ。

しかし、何だかんだ言ってもこの男は指揮官だ。

その指揮官が前線に出ると言うのはどうか？とリーザ中尉は言っているのだ。

私もその意見に同意する。

リーザ中尉の言葉にこの男はこう言い返した。

「指揮官は常に前線に出て士気を鼓舞しろ。・・・俺を鍛えた男が言った言葉だ」

かと言って後方を疎かにはしていけない。

常に前線と後方を行き来しなければならないし兵たちとの意思疎通もしなければならない。

それをこの男を鍛えた男が言ったらしい。

「少佐を鍛えた方はどんな方だったんですか？」

「俺と同じく外人部隊出身の傭兵だった。今は引退しているがな」

その外人部隊に居た時も別の男に鍛えられたらしいが、傭兵になった時もその言葉を言った男に鍛えられたらしい。

「引退？もうお歳だったのですか？」

「傭兵のピークは２０代だ。３０から４０で消えて行く」

しかし、これはあくまで目安的な物で５０を過ぎても傭兵を続けていく者も居るらしいがそれは極稀だという。

「あの男も４０で引退した」

それから田舎で農場を営み妻子を作り幸せに暮らしているらしい。

「普通、引退した奴の所には現れないんだ」

過去の遺恨や戦場を離れたからなど様々な理由から行かないようにしているらしい。

「だが、あの男の周りには不思議と人が集まった」

まるで父親を慕う様子だった、とタカミ・テツヤは語った。

「俺も一度だけ行った事がある」

そして酒を飲んで話をしたようだ。

「他愛ない話だったが・・・・温かくて、幸せそうな家庭だった」

こいつと酒を飲む傍らで妻と子が夫に付き添い笑い合っている。

それがこいつには幸せそうな家庭に見えたらしい。

俺には得られない物だ、と小さな声でこいつは言った。

私には聞こえたが、リーザ中尉には聞こえなかったらしく訊き返したがこいつはそれをはぐらかした。

その時、こいつが呟いた時の表情がとても何だか・・・・・切ない気持ちになるほど可哀そうな顔だったのが印象的だった。

「そう言えば、お前に家族は居ないのか？」

私は先ほどの表情もあってか、つい家族の事を質問してしまった。

「私も訊いていないので知りたいです」

リーザ中尉も訊いてきた。

「生憎と天涯孤独の身でな。産まれてこの方、親兄弟と顔を合わせた事が無い」

ぶっきら棒な口調でタカミ・テツヤは言い、煙草を素手で揉み消した。

「さぁて、俺はゲンハルトとプロイセンのおっさんの所へ行くがお前等はどうする？」

まるで逃げるようにこいつは話題を変えた。

「私は家に帰って食事の準備をしておきます」

楽しみにしていて下さい、とリーザ中尉はこいつに言った。

どういう事だ？

「あぁ。楽しみにしている」

タカミ・テツヤは微かに笑うと私達と別れた。

「リーザ中尉。先ほどの言葉、どういう事ですか？」

私は気になって仕方ないので訊ねた。

「フィーナ中尉は知りませんでしたっけ？私・・・あの方と・・・・・タカミ・テツヤ様と“同棲”しているんです」

きゃあ、とリーザ中尉は顔を赤くして両手で顔を抑えた。

それを聞いた私は一瞬だが茫然とした。

同棲？

リーザ中尉があの男と？

「・・・失礼ですが、あの男と同棲して何の意味があるんですか？」

「意味？意味などありません。ただ、私があの方と共に暮らしたい

からそうしているだけです」

「それだけ、ですか？」

「そうです。それ以外に何がありますか？」

「それは・・・・・・・・・」

私は答えに困った。

何と言えば良いのか皆目見当が付かない。

「無い筈です。人を好きになる事に理由など無いですから」

「・・・・・・・・・」

これにも私は何も言えなかった。

「では、私もこれで」

リーザ中尉は私に一礼すると去って行った。

一人残された私は暫く呆然とするしか出来なかった。

第百二十七章：初めての交流（前書き）

少々、手直しをします。

それからまだ書き始めているので、もう少し時間が掛ります。

ですが、今月中には纏めて投降できると思いますので、長いですがお待ちください。

お願いします。（汗）

第百二十七章：初めての交流

史記を書きながら私は再び昔を思い出していた。

サルバーナ王国親衛騎士団。

王族を守護する騎士団であり、皆の憧れの的であった親衛騎士団は徹夜様とフィーナ様の娘が指揮官をしている。

徹夜様が王になってからは階級や家柄に関係なく実力で入隊が可能となった。

それは指揮官も同じ事だ。

あの方もまたフィーナ様同様に実力で指揮官に任命された。

私が若かったころの親衛騎士団は鼻持ちならない糞のような団体だったが、私とレオンが一度だけ訓練をしてから交流を深め合った。

今にして思えば、あの時が初めて人並みに会話が出来た時だったな。

そんな事を思いながら初めて彼等と人並みの会話ができた所を思い出した。

「おらおら！！もうこの程度でへばるのか？てめぇらの〇〇〇はその程度なのか？ああ！？」

嗚呼、自分の口なのに自分ではない誰かが言っている気がする。

私なら絶対にこんな卑猥な言葉は・・・・・・・・・・・・・・・

親衛騎士団の一人が倒れた。

「おい、誰が倒れて良いと言った?それはこの俺様にヤラレたいのか?ああ!?」

うわぁ、何で自分の口なのにこんな言葉が出るんだ!!

それはレオンも同じだった。

「おお、随分と可愛らしい“穴”をしているな?どれ・・・少し俺の○○○で味見してやろうか?」

レオンは私以上に凄かった・・・・・・・・・・・・

何で私とレオンがこんな卑猥な真似をしているのか?と問われたら、こう答えるしかない。

テツヤ殿に言われたから。

あれからテツヤ殿に私とレオンはこう言われた。

『明日から俺が鍛えるが、今日はお前とレオンでこいつらを鍛えろ』

別に何をやれ、とは言っていない。

ただ、延々と走らせるだけだ。

まぁ、辛いと言えば辛いが。

しかも、こう言われた。

『相手が年上だろうが関係ない。お前等が教官だ。俺がやったように・・・いや、以上にやれ。そうしないと舐められるぞ?』

これを言われてはやるしかない、と思いやってみたのだが・・・・・・・

自分でも驚くほど様になっているのでは?と思っている。

延々と走らせて行くが、私達も走り続ける。

流石に何か走り続ける以外に出来ないか?と考えてしまう。

教官である私の方がこうも早くやる気を無くすのはどうかと思うが・・・・・・・・・・・

その時、無線が鳴った。

「チャレンジャー。お前が指揮しろ」

「了解。おらおら、走れ走れ!!」

レオンが親衛騎士団を走らせている中で私は無線に出た。

『どうだ?調子は』

テツヤ殿の声だった。

「テツヤ殿。何かやっても構いませんか？」

『何だ。あいつらが飽きたのか？』

「私の方が飽きたんです」

『狙撃手のくせに忍耐弱い奴だな。・・・まぁ、匍匐前進をするなり話をするなりお前とレオンで決めろ』

「良いんですか？」

『今日はお前等が教官だ。お前らで決めろ』

「分かりました」

私は無線を切り、レオンを呼び寄せた。

「僕と君で決めろって言われても・・・・・」

レオンは当然の如く困惑していた。

「僕もだ。でも、僕らが教官と言われた。となれば、僕らで決めないと」

「そうだけど、何かある？」

「そう言われると困るな。夜遅くに銃の練習なんて出来ないし、かと言って何時までも走らせ続けるのも何だか嫌だし・・・・・・・・・」

んー、と二人で考えていると親衛騎士団の一人が近づいて来た。

「あ、あの、少し・・・良いですか？」

先ほどの事もあってか私達に敬語で話し掛けてきた。

「えぇ。どうぞ」

「・・・先ほどと態度が違うんじゃないですか？」

「今は取り敢えず休憩中ですので」

皆さんも休憩して下さい、と私達は言った。

するとドッと倒れる親衛騎士団の面々。

「で、話とは？」

「あ・・・あぁ。お前もレオンも、あの傭兵・・・タカミ・テツヤの訓練を受けたんだろ？」

「えぇ。受けましたよ」

「その話を聞かせてくれないか？」

「そうですね・・・そうしましょう」

「そうだね。それが良いね」

私とレオンは頷き合い、皆を集めて話を始めた。

「では、何から話しましょうか？」

「先ず訊きたいのは、あの男の事だ」

何者なんだ？と親衛騎士団は訊いてきた。

「フォン・ベルト閣下が所属していたという陸上自衛隊に居た、というがそれはどんな組織なんだ？」

私は質問に答えた。

「つまり、その陸上自衛隊っていうのは国防軍って事か」

「軍ではありません」

「軍ではない？だが、話を聞いているとどう考えても軍だろ？」

「それは向こうの憲法で禁じられているんです。ですから、軍ではありません」

海外からは立派な国防軍に見えるが日本という国では違うらしい。

それなのに任務は国防、災害など軍が役割とする任務ばかり。

これを軍ではない、と言う方がどうかしている。

日本と言う国ではそれが常識らしいが。

「そんな所にあいつは居たのか」

「えぇ。１８で入隊しそれから数年居たそうです」

「確か、第一空挺団だったか？」

「はい。陸上自衛隊唯一の空挺部隊にして最強と謳われる部隊です」

そして更にフランス外人部隊に入隊し、そこでも空挺部隊となり少佐となり傭兵となった。

「お前さんが一番、あいつと知り合って長いらしいがどう思っているんだ？」

「最初は、金に汚い冷酷な傭兵と思っていました」

だが、今は違うと言った。

「あの方は顔こそ悪役ですが、本当は優しい人なんです」

意地悪な所はあるが・・・・・・・・

「優しいね・・・今にして思えば、お前さんとまともに話すのもこれが初めてだな？」

前は要らない荷物と同じく敵対心剥き出しだったのだから。

「それで思い出したんですが、フィーナ殿をどう思いますか？」

「どうって・・・良い団長だと思うぜ。女の身でありながら俺らより根性があるし、何よりあの騎士の鑑と謳われたロックス様の“娘

”だからな」

「それは止めた方が良いですよ」

「どういう事だ？」

「考えてもみて下さい。貴方がもし、フィーナ殿の立場ならどう思いますか？」

自分ではなく他人を見ているとしたら？

「ロックス様は騎士の鑑と謳われた人物だったのでしょう。ですが、フィーナ殿はフィーナ殿です。ロックス様の娘ですが、その前にフィーナ・マレルという人物です」

どうか、娘ではなく一人の人物として付き合って下さい、と私は口にした。

どうしてあの女をこうも擁護とも取れる言葉を言っているのか分からない。

分からないが、口が勝手に動いていた。

「・・・分かった。それにしても驚きだ。あんなに団長を嫌っていたのにそんな言葉を言うとは」

「自分でも驚いています。今でもあの女は嫌いです。嫌いですが、あの根性は評価しております」

「毒を吐くな。まぁ、良いさ。所でお前さん等が持っている物は俺

らの分もあるのか？」

「あります。ただし、最初は・・・・・・」

「あの欠陥品か」

私の言葉を遮り親衛騎士団が口にした。

何となく要らない荷物が私を睨んだ理由が解かった。

自分が説明しようとしている所を邪魔されては誰でも嫌になる筈だ。

今度からは気を付けようと思ってから私は頷いた。

「えぇ。正式名称は６４式自動小銃。テツヤ殿の国が作り上げた国産品です。ですが、欠点がかなり多いので気を付けた方が良いですよ？」

「例えば何だ？」

「あれを持ったまま走るので部品が落ちます」

元々、部品の欠落が半端ではない確率で落ちるのがあの銃だ。

それを持って走り、上下左右に振うのだから落ちるのは当たり前。

落とせば否応なく殴られるか蹴られる。

そして罰を与えられる。

「その罰はバディ・・・相棒も行います」

「所謂、連帯責任ってやつか」

「その通りです。これによりお互い助け合い任務を達成するのです」

「なるほどな。それはそうと自己紹介がまだだったな」

言われてみればまだ自己紹介をしていなかった。

「俺はヴィンだ。ヴィン・ブルー。家は貴族だが、もう没落している」

親衛騎士団に入れたのも屋敷などを売り払い作った金を出して入隊したらしい。

渡した相手は害虫共。

所謂、袖の下――賄賂という奴だ。

「そうですか。私はランドルフ。ランドルフ・クリフ。階級は1等兵です」

「同じくレオン・ルソー。階級は1等兵より下、最下級の2等兵です」

「そうか。何だか不思議な感じがするが・・・これからよろしく頼むぜ？」

「えぇ。お願いします」

私とレオンはヴィン・ブルーに挨拶をした。

それからも他の親衛騎士団と挨拶を交わし合った。

これが私とレオン、そして親衛騎士団が初めて人並みに話し合った時だった。

第百二十八章：２つの騎士団（前書き）

えー、章を１個跳び越えている、と指摘があり確認した所・・・そうでしたので訂正します。

すいません・・・・・・・・

第百二十八章：2つの騎士団

親衛騎士団と初めてまともな話が出来た所を書き終えた私は煙草を吸った。

女神の抱擁・・・・・・徹夜様が吸っていた煙草。

名前の通り女神が抱き締めた錯覚を覚える味だ。

男性から言わせれば女神が抱き締めるから心地良いだろう。

反面で女性からは自分ではない女性が好きな男を抱き締めている気になる。

だから嫌な気持ちになる女性は多い。

フィーナ様もそうだった。

あの方も女神の抱擁を吸う徹夜様を嫌っていた。

徹夜様自身ではなく、女神の抱擁を嫌っていたのだ。

理由として彼女の父君・・・であったと思っていた男がよく妻ではない女の香水を身体に付けて帰って来た事が上げられるらしい。

外では仲慎ましい夫婦に見えるが、実際はそうではなかった。

こういう例は幾らか私も見てきた。

やれ、政略結婚だ、強奪だ、の碌な理由が無く大半が無理やり好きでもない男・・・いや、害虫共と結婚させられた。

酷い話だ、と若かった頃は思い苦虫を噛み締めた物だ。

だが、そんな奴等も前のページで書いた通り・・・駆除されたからもう居ない。

話を戻すと、女神の抱擁を嫌う者は私の妻の何人かも嫌いな者は居る。

しかし、くどいようだが男性には好まれる煙草だ。

特に親衛騎士団は全員が好んでいた。

現在サルバーナ王国の親衛騎士団は二つ在る。

一つはフィーナ様が指揮した親衛騎士団。

こちらがどちらかと言えば元祖だ。

もう一つは新たに出来た騎士団だが、こちらは親衛とは名乗らず”近衛”と名乗っている。

親衛騎士団と近衛騎士団が現在あるのだ。

何故、二つもあるのか？

それはこれから書いていく積りだ。

煙草を吸いながら私は史記をまた書き始めた。

テツヤ殿が演習場に来たのは朝になってからまだそれほど時間が経っていない頃だ。

「昨日はどうだった？」

開口一番にテツヤ殿は私とレオンに訊いてきた。

「昨夜は話をしました」

それで時間を潰した、と私が答えた。

「そうか。まぁ、昨日はお前等が教官だから文句は言わないがな」

それはそうと午後、会議を開くとテツヤ殿は言った。

「お前等の偵察を詳しく皆に聞かせる。それからどうするか決める」

敵が来ないならこちらから行くかもしれない、とだけテツヤ殿は述べた。

「では・・・・・・・・・」

「あぁ。まぁ、それは未定だ。だが、それも一つの選択だ」

その時はまた頼むぞ、とテツヤ殿は言ってきた。

私とレオンはそれに頷いた。

「それからお前等も今日は俺に付き合え」

特に用事は無いんだろ？と訊いてきたので頷いた。

「よし。それじゃレオン。お前は全員分の迷彩服を用意しろ。ランドルフは６４式自動小銃を用意だ」

『了解しました』

私とレオンは敬礼して直ぐに走り出した。

「さぁて・・・これから“泣きそうなほど楽しい事”を・・・貴様らに骨の髄まで徹底的に教えてやる」

血の涙を流して大感激しろ。

離れた場所からも聞こえてくる声に私とレオンは身を凍らせる思いだった。

『もう少佐になっている・・・・・・・・・』

そしてまた離れた所から悲鳴が聞こえてきたが敢えて無視して準備を急いだ。

準備を終えて戻って来るのに結構時間が掛った。

戻って見れば、親衛騎士団は白銀の鎧を付けたまま腕立て伏せをテツヤ殿・・・少佐とやっていた。

「おらおら！！てめぇらの腕は大根か？木偶の棒か？違うだろ！！

剣を持ち、銃を持ち、敵を絞殺し、ベッドの上で女を淫らにさせる腕だろうが！！」

「・・・少佐。お待たせしました」

私とレオンは少佐の前に立ち、６４式自動小銃と迷彩服を置いた。

「てめぇら、これを用意するのに１時間も掛るとはどういう事だ？」

「・・・・すいません」

「罰だ。腕立て５００回だ」

うわぁ、いきなりこれだ。

私とレオンは潔く諦めて腕立て伏せを始めた。

その間、親衛騎士団は迷彩服を着た。

その間に私達も腕立て伏せを終えた。

「では、これより改めて訓練を始める。俺を少佐と呼べ。口答えは許さん。弱音も吐くな。怠けるな。そして先輩であるランドルフ一等兵とレオンニ等兵だ。これより貴様らの手本をみせる。目ん玉を大きくして見ろ。瞬きしない程に見ろ」

親衛騎士団の面々が私とレオンに視線を向ける。

「今から障害物を二人が越える。お前等も直ぐにこれをやる。タイムは・・・そうだな。３０秒以内でやれ」

３０秒・・・前に比べると半分も無い。

だが、今の私とレオンなら出来るな。

チラリと少佐を見れば「簡単だろ？」と言っていた。

『勿論です。では、行きます』

『頼む』

「行くぞ。チャレンジャー！！」

「レンジャー！！」

私とチャレンジャーは一気に走り出した。

先ず有刺鉄線が張り巡らされた地点に到達した。

下は泥水だった。

私とチャレンジャーは肩膝を着いてライフルのストックを手で抑えた。

そして手と膝で進んだ。

これが結構、辛いのだが私とチャレンジャーは苦も無く進んだ。

そして次が人一人分ほどの深さがある堀だ。

ここに着地して走り、更に上に登り走る。

一見簡単に見えるが、慣れないと最初は辛い物だ。

ゴールすると、少佐は時計を見た。

「タイムは２８秒」

２秒ほど余裕を持ってゴールした。

「お前らには1分ほど時間を与える。もし、それを越えたら出来るまでやらせる。バディを見捨てても同じだ。バディを助けて時間内にゴールしろ。分かったな?」

「は、はい・・・・・」

「誰がはい、と返事をしろと言った?はいでもいいえでもレンジャーだ。分かったな?!」

『レンジャー!!』

半ばやけくそみたいな感じで親衛騎士団は声を荒げて返事をした。

「やれば出来るじゃねぇか。では、始め!!」

少佐はコルトをホルスターから抜くと引き金を引いた。

撃鉄は既に起きていたから直ぐに弾は空を切るように音を立てた。

空薬莢が雪の中に落ちる。

それが合図になったように一組の男性が走り出した。
全力疾走で有刺鉄線まで行くと私とレオンがやったようにストックを手で抑えて身体を前に屈めて進み始めた。
ぎこちないがそれでもしっかり見て真似ているのが分かった。
それから直ぐに堀に行って登りゴールした。
「タイムは1分と1秒。やり直しだ」
少佐は冷たい声でやり直しを命じた。
「嫌なら止めろ。ただし、これが出来なければ次には行けないからそう思え」
直ぐに戻った一組は「お願いします」と言った。
「よぉし。では・・・・・・」
少佐はまたコルトを空に向けて撃った。
それと同時に走り出す音が聞こえた。
全員がこれをクリアしたのは1時間後だった。
「1時間で全員クリア、か。まぁまぁだな」
私達は煙草を銜えながら息も絶え絶えの親衛騎士団を見ていた。

今は小休憩で何をするか考えている最中だ。

「次はどうしますか？」

「そうだな・・・降下訓練でもやらせるか」

「・・・また、私達が手本を？」

「あぁ。やれ」

『・・・・はい』

私とレオンは少佐の命令に従うしか出来なかった。

あれは何度やっても・・・・好きになれない。

好きだ、と言う人物が居るのならその良い所などを是非とも教えて欲しい。

溜め息と一緒に煙を吐きながら私とレオンは肩を落とした。

それから私とレオンは塔の上に立っていた。

塔の上だと余計に寒い風が来る。

下を見れば一面雪化粧で覆われている。

「はぁ、これは慣れないんだけどな」

「僕もだ」

私とレオンはまた溜め息を吐いてロープを握った。

それから前に身体の体重を向ける。

自然と前に倒れて、真正面から下を見下す形になる。

「・・・・・行くぞ!!」

「レンジャー!!」

私とレオンは同時にロープを伝い下に降りた。

厚めの手袋越しにロープを伝い、摩擦する音が聞こえる。

何度か壁に足を付けながら地面に着地してロープを外し背中に掛けていた銃を両手で持ち銃口を向けた。

「これが降下訓練だ。降下には幾つか種類がある。こいつらがやったのは塔の上から降りる訓練だ」

これにより速く下に降りる事が出来るし、窓を突き破り中に入る事も可能だ、と少佐は親衛騎士団に説明した。

「これは危険だ。だが、フィーナ中尉はこれをやり遂げた。そしてお前等はこれから銃弾が飛び舞う戦場へと赴き敵を倒す。この程度は出来て当然。出来なければ敵に首を差し出すだけだ」

死にたくないなら教える事を貪欲なまでに吸収し自分に血肉にしろ。

そうすれば死なない、と少佐は告げてやれと言った。

親衛騎士団の面々は塔の上へと登り出した。

幕間：ジャーヘッドＶＳハゲタカ

リカルドは図面を前に部下達と共に思案していた。

一度、会議を中断したが再び開かれた。

だが、そこにはフォース・リーコンの指揮官は居ない。

貴族の言葉が辛かったのかは定かではない。

定かではないが、貴族の顔はどれもこれも満足気だった。

「先ず東の地へ行くには、ここから行くのが最短です」

壁に掛けられた図面を指差す片腕のヴィクター公爵ことウルフ。

彼が指差す所は敵が築いた砦の跡だった。

そこから指でなぞると赤い点があった。

そこが敵の本拠地を意味する。

「ですが、前の事も考えると下手に正面から向かうのは愚策です」

「では、どうするのだ？」

リカルドが訊ねるとウルフはこう答えた。

「我々には向こうには無い物が二つあります」

ワイバーンとヘリだ。

「しかし、敵に撃墜されました。ですが、まだ居ります。ワイバーンは数と速さではヘリを圧倒しております」

逆にヘリはワイバーン以上に攻撃力が高い。

「ヘリで重点的に攻撃しつつワイバーンで無差別に城を攻撃させます」

その間に四方から攻撃する。

とウルフは簡単に説明した。

「兵站は前の事も考えると護衛を付けなければなりません」

その護衛は中央貴族の方に任せる、とウルフは言った。

「待て。なぜ我々が兵站なんぞの護衛をしなければならないのだ？そのような務めはあのフォース・リーコンとかいう奴等に任せれば良いだろ！！」

フォース・リーコンの指揮官を侮辱した貴族がウルフに噛み付いた。

それをウルフは眼を細めてみせた。

『獲物が罠に掛った』

内心でウルフは貴族の明らかに軽率な発言を嘲笑いながらも、その

軽率ぶりに感謝した。

自分達が目立つ事を何よりも好きな貴族たちだ。

だから、兵站の護衛など絶対にしないし反論して来るとウルフは予想しており的中した。

「では、貴方達はどうしたいのですか？」

「無論、正面から突入する」

私達とそなた達とでは日ごろの鍛え方が違う、と貴族は大口を叩いてみせた。

「そうですか。それは知りませんでした。では正面から突入という事にしておきましょう」

ウルフは内心で笑いが止まらなかった。

しかし、横槍が入って来た。

「失礼とは思いますが、ヴィクター公爵。そこはやはりフォース・リーコンの方が良いではないでしょうか？」

左目を眼帯で隠した男、ライアンナル伯爵ことスネークが異議を唱えた。

「中央貴族が私達と鍛え方が違うのは承知しております。ですから、正面から行くのも悪くはないと思います」

私達では破れなかったがこの方たちなら出来るかもしれません、と中央貴族の肩を持つような言い方をするライアンナル伯爵。

「ですが、ここは“保険を掛ける”とでも言えば良いでしょうか？フォース・リーコンも一緒に行かせるべきかと」

「つまり彼等をまた中央から攻めさせるという事か」

「はい。彼等は私達とは別に行動させた方が良いと思います」

その理由をウルフは直ぐに理解した。

フォース・リーコンは自分達には無い装備を持っている。

そのため強大だ。

彼等をやれば明らかにこちらの戦力は半減する、と敵は思っている筈。

それならば敢えて敵の注意をそちらに向けつつ、我々が四方から突入した方が良いと言っているのだ。

「・・・確かにそうだ」

ウルフはスネークを見て頷いた。

『相変わらず蛇のように狡猾な男だ。貴様の魂胆など見え見えだ』

スネークは恐らくフォース・リーコンを始末する気だ、とウルフは感づいていた。

彼等は“彼の国”から送られてきたが、今はリカルドに忠誠を誓っている。

それを内心で面白くない・・・・目障りと蛇が思っていた事は薄々感づいていた。

それは自分とリカルドも同じ事だ。

この男は得体が知れない。

それと同時に計り知れない野望を抱いている事も気付いていたが、利用価値がある事から未だに生かしているだけの事。

恐らくここで先ずはフォース・リーコンを始末する気だな、とウルフは思った。

目の前の男にとってはフォース・リーコンと同じく中央貴族も目障りと思っているのかもしれない。

先ほどの会議でこの男にとってはフォース・リーコンを密かに殺せる絶好の好機を貴族が潰した。

それを考えれば「利用価値が無い」と即座に判断したと思える。

ウルフとしてはまだ利用価値がある彼にはもう利用価値が無いと思っているに違いない。

「そなたの意見は参考になる。では、次は兵站だ。兵站はどうする？」

「それでしたらヴィールング殿が良いかと」

一人だけ腕を組んでいた男、ヴィールングをウルフは見た。

「ヴィールング殿。そなたに兵站を任せても良いか？」

「構いません」

一言だけヴィールングは言うと立ち上がった。

「私はこれから兵站の事で少し用事がありますので失礼します」

それだけ言うと部屋を辞した。

「では、次に四方を何処の兵が担当するか話し合いましょう」

ウルフは去ったヴィールングを尻目に会議を続けた。

しかし、内心では何を考えているか分からないヴィールングに疑惑を抱いていた。

― ― ― ― ― ― ― ― ―

俺は目の前に鼻血を倒れたハゲタカの一匹を睨み据えた。

「てめぇ・・・もう一度、言ってみろ・・・・言ってみろ！！」

俺は声を荒げて奴に向かって怒鳴った。

奴は俺を見て鼻血を親指で拭くと悠々と立ち上がって見せた。

大きな傷痕が印象的で如何にも傭兵らしいと思える風貌だ。

かつては同国に所属していた空挺部隊だが・・・・とんだ面汚しだし同国人として同じ軍人として恥ずかしく思える。

「へっ・・・聞こえなかったなら丁寧に一字一句間違いなく言い直してやるよ。ジャー・ヘッドの小僧」

奴は如何にも出来が悪い生徒に教える教師みたいな面をした。

「んだとっ」

「俺はこう言ったんだよ。“リカルドなんてただの木偶の坊だ。一人じゃ何も出来ない餓鬼”だとな。そしててめぇらはそのリカルドに従う“ベビー・シッターだ”ってな」

「こっの!!」

俺は腰に装着したホルスターに手を掛けようとした。

「止めろ」

そこへ軍曹が割って入り俺の手を止めた。

「でも、軍曹・・・・・・」

「止めろ。お前はこいつを殴った。もうそれ以上はするな」

いや、してはいけないと軍曹は言った。

「こんな・・・弱者しか相手に出来ない奴の血で汚れるな」

「てめぇ、たかが軍曹の分際で俺を侮辱するのか」

ハゲタカは軍曹を睨み据えた。

「私は事実を言っただけだ。貴様は弱者しか仕留められない情けない小僧だ。今後、リカルド様と我々を侮辱したら・・・私は貴様を殺す」

「上等だ。こっちも戦が終わったらてめぇを真っ先に殺してやるよ。あのイエロー・モンキーの次にな!!」

イエロー・モンキー・・・日本人か。

同盟国の奴とも遺恨を持っているとは・・・本当に恥さらし以外の何でもない。

「やれるものならやってみろ。貴様を殺す時は弟もまとめて殺しやるから安心しろ」

「その言葉、そっくり返してやるよ」

てめぇを含めて全員、殺してやる。

ハゲタカは俺と軍曹にそう言った。

「行くぞ」

軍曹は俺を促して背を向けた。

俺もそれに従うが一度、振り返って奴に中指を立て小声でこう言ってやった。

『ジャンキーの弟とファックでもしてろ。糞野郎』

第百二十九章：精神的攻撃

私達は会議室でこれからの事を話し合っていた。

午前の訓練は終わりに見えたが、課題を出されたからそうではない。

現在、親衛騎士団は少佐が出した課題をやっている事だろうと思いながら私とレオンは会議に耳を傾けた。

「俺らが偵察に行った事は敵も知っている筈。だが、このまま膠着状態が続くのはこちらとしても余り良くない」

かと言って下手に攻め込んでも向こうには民達が居るから大規模な攻撃は出来ない。

「テツヤよ。考えたのだが、奴等を精神的に攻撃する事は出来るか？」

ゲンハルト様が女神の抱擁を吸いながらテツヤ殿に話し掛けた。

「精神的に？何か案でもあるのか？」

「案と言えるかどうかは分からないが、偵察の話を聞く限りリカルド様の政は決して良いとは言えない。だが、それはライアンナル伯爵が行っているからだろ？」

「あぁ。フィーナの話によればそうだ。それがどうかしたのか？」

「これはリカルド様も知っているのか？と思ったのだ」

「そうだな・・・恐らく知っているだろう。知っていながら敢えて知らない振りをしているのか或いは知りながらも手が出せないのか、のどちらかだろう」

「となると、首都にライアンナル伯爵などの悪行を書いた紙をばら撒くのは無理か」

「だが、良い案だったぞ?ゲリラ戦を始め、そういう情報操作や心理攻撃は有効な手だ」

それにより士気を下げる事が出来ると言う。

「しかし、リカルド様は知っている可能性が高いのだろ?」

「あぁ。あの男の事だ。恐らく知っているだろう。だが、ばら撒くのは良い手だ」

知りながらも敵にそれを指摘される。

これは中々痛い手だ。

「それにこれを使えば奴等をこちらに誘き寄せられるかもしれない」

何人かはこの手に怒る。

怒りに任せて進んでそこを叩く、という事だ。

「よし。決まりだ。早速、ビラの準備をしよう」

流石は総大将。やはり凄い、とテツヤ殿は言うと皆も称賛した。

ゲンハルト様は顔を僅かに赤くさせながら照れていた。

そしてビラ作りとどうやって紙をばら撒くかなどを皆で考えた。

――――――――――――――――――――――――――

―――――――――――

私は皆に称賛されながらイザベルに感謝した。

何せ先ほど私が言ったビラをばら撒く事。

これはイザベルが話した事をそっくりそのまま話したのだから。

勿論、イザベルには了承を得ている。

得ていないまま言ってそれをイザベルが知れば・・・・・・・・・・・・・・・

どんな目に遭うか分かった物じゃない。

昨夜、久し振りに家に帰った。

なぜ帰ったのか？と言うのならテツヤに言われたからだ。

『偶には家に帰って英気を養え』

総大将がそんな事をして良いのか？と思ったが、テツヤはこう言ってきた。

『総大将だからだ。総大将は大事だ。それに敵さんはまだ来ない』

勘ではあるが、とテツヤは言った。

それでも食い下がる私にテツヤは背中を無理やり押して家へと送り出した。

家に帰った私をイザベルは出迎えてくれた。

何故か二人分用意して、だ。

理由を訊けば「あんたが帰って来る、と思ったから」とぶっきら棒に言われた。

そして共に食事をした。

久し振りにイザベルの料理だ、と思いながら「やはり美味しい」とも思った。

「で、そっちはどうなの？」

イザベルは果実酒を飲みながら私に訊いてきた。

「どうとは？」

「テツヤさんとよ。また傭兵とか言ってるんじゃないでしょうね？」

「そんな事は言っておらん！！今はこれからどうするか考えているのだ」

「そう。まぁ、私なら下手に動かないけどね」

「何故だ？」

「だってわざわざ自分に不利な場所に行ったりする？」

これは的を射ていた。

ここはフォン・ベルト閣下が築き上げた場所で護りに関して言うなら文句は無い。

ここに籠り敵を迎え討てば被害は最小限に抑える事が出来る。

それなのにわざわざ自分からそこを出る必要性は無い、とイザベルは言っているのだ。

「で、どうなの？」

「分からん。向こうは我々が偵察した事は知っている。・・・私なら直ぐに追い掛けるが、それでは被害を大きくする可能性も高い」

「それは私も同意見よ。それで総大将様としては何か解決案はあるのかしら？」

「・・・無い」

私は果実酒を飲み干してから断言した。

「私は軍事に疎い。宰相ではあるが、経験も無ければ学も無い。だ

から、テツヤ達が話し合い、それに対して言葉を述べて決めるだけだ」

「それでも良いじゃない。それにあんたはそれを自覚しているし恥じているわ」

「しかし、何も出来ないと思うと情けないのだ」

皆が話し合う中で私だけが蚊帳の外。

ただの飾り・・・本当にそうなのだから仕方が無いと言えば言えるが、それでも何かの役に立ちたいと思ったのだ。

「何か、良い案は無いだろうか・・・・・・？」

私は果実酒をまた注ぎながら呟いた。

「・・・そうね・・・それじゃ・・・精神的に攻撃するのはどうかしら？」

「精神的に？」

私は果実酒を今度はイザベルの杯に注ぎながら訊き返した。

「えぇ。私って、荒事もやっていたからそういう経験は少なからずあるの」

イザベルは注がれた杯を口元に運びながら言った。

「聞かせてくれ」

私は身を乗り出した。

「その前に食事を済ませましょう」

話をすると、集中するからとイザベルは言い私に食事を促した。

それに私は納得いかない気持ちだったが敢えて従い食事を続けた。

そして風呂に入り寝室に来てから私は改めて訊いた。

「で、その経験とはどんな事だ？」

「今から話すわ。そう焦らないでよ」

「焦ってなどおらん。ただ、テツヤの力になりたいだけだ！！」

「そういうのを焦っているって言うのよ・・・・・・・・まぁ、そういう焦っている所も好きだけどね」

最後の方は聞き取れなかったが、私は構わず話してくれと頼んだ。

「ある時、ミレーネ姉にゾッコンの貴族をぶちのめした事があったわ」

その者はかなりの女好きであるらしく、人妻を妾にした事もあるというから呆れ果てて物が言えない。

「まぁ、ミレーネ姉は見向きもしないで店にも入れなかったんだけど実力行使をしてきたの」

それをイザベルが叩きのめして終わりに見えたがそれでも諦めなかったらしい。

「・・・諦めが悪いのも問題だな」

「まぁね。で、ここからがあんたの聞きたい内容よ」

「それでどうしたのだ？」

煙草に火を点けながら私は訊ねた。

「それから実力で行使しても駄目だと分かったから、精神的に・・・まぁ、社会的に追い詰める事にしたの」

その貴族の女好きを嫌というほど書いて街中にばら撒いたらしい。

既に知られていた事だが、ビラなどを撒く事で余計に強調したようだ。

その他にも直接、その貴族の所へ送り付けるなどしたらしい。

「容赦ないな」

「喧嘩で勝つ方法は先手必勝と完膚なきまで相手を叩く事よ」

イザベルは何処か自慢気に言った。

最終的にその貴族は奥方と離婚されて（婿養子だったようだ）着ている服だけを渡されて追い出されたらしい。

何とも・・・・・・・・・

「最後に見た時は、もうズタボロだったわ」

その事からも察しが付くように、こういう事でも相手を精神的に攻撃する事は可能という事だ。

「そのリカルドって王子にも効くと思うわ」

特に我々・・・身分が高い者ほどこういう攻撃には弱い、とイザベルは断言してみせた。

「・・・お前を敵に回さんで良かった」

もし、この女を敵にでも回せばただでは済まない。

「大丈夫よ。あんたの敵にはならないわ」

話は終わり、とイザベルは言うと身体を起こした。

「すまんな。これをテツヤに言っても良いか？」

「えぇ。だって、その為に話したんだから。・・・じゃあ、今度は私の番ね」

「お前の？どういう事だ」

「こういう事よ」

イザベルは私を押し倒すと煙草を取り上げて、水が入った杯に捨ててしまった。

「私はあんたに話を聞かせたわ。でも、ただで話す、とは言って無いわよね？」

「確かに・・・それで？」

私はこれから起こる事を既に予想しながらも訊ねた。

「その見返りを払って貰うわ」

「・・・好きにしろ」

私は仕方無い、と諦めた。

まぁ、何処かで期待していた所もあるが。

「それじゃ・・・頂くわ」

蝋燭を消すイザベル。

そして夜は更けて行った。

第百三十章：ビラ作り（前書き）

すいません。少し手違いを起こしたので、別の話にします。（汗）

第百三十章：ビラ作り

私達は白い紙に赤いインクなどを使いペンで文字を書いていた。

中身は敵に対する誹謗中傷で・・・・要は嫌がらせだ。

文字色は黒より赤の方が相手には印象が強いという事らしいから赤のインクを使っている。

その他にも少し凝った文章体で書くのも良いと言う。

『リカルドは地方を救済すると言っていたが、首都は救わないという非道さを持ち合わせている。政は専ら蛇のスネークに任せて、彼が非道な政をしているのを知りながらもそれを無視している。地方を救済しようとしているのに首都を救えないとは甚だ愚かなり』

最初はこんな感じだ。

次は貴族の事を書いている。

リカルド様以外にも周りの者達にもこのような事をやり精神的に弱らせ、焦らせ、怒らせる。

そして墓穴を掘ったらそこを容赦なく叩くのだ。

『リカルドに加担する貴族は私利私欲という下劣な花に巣食う虫なり。奴等は害虫だ。害虫を自らの体内に受け入れるとはリカルドの眼は節穴だ。とてもじゃないが国家を担う器ではない。害虫もまた害虫だ。害虫は害虫らしく排泄所に集っていれば良いのだ』

この程度で驚いてはいけない。

次はもっと凄い。

凄過ぎて書けない位、凄いのだ。

よくもまぁこんな人の神経を逆なでするような言葉を書けるな、と私は少佐とゲンハルト様を思った。

文字は全て少佐とゲンハルト様が考えている。

どちらもまぁ、人として性格はかなり偏屈な感じなのでこれだけの事を考えられるんだろうな、と思うが。

その二人もペンで紙に書いているのだが、何だか妙な感じを覚えて私達は軽く笑い合った。

「よぉし。少しばかり休憩だ」

少佐は休憩だ、と言ったので私達は手を休めた。

「敵がこれを見たら、どうしますかね？」

私は少佐に訊ねてみた。

「リカルドは歯牙にも掛けないだろうが、民達は日頃の事と合わさって更に不満を募らせるだろう」

反抗はしないだろうが、それでも私達がちゃんとこちらを見ている

という事を知ってくれる。

それだけでも良い。

中央貴族の方はこれを見れば激怒するのは間違いない。

紙に書いた通り奴等は害虫だ。

当たり前の事を書いているが、向こうから言わせれば自分達は選ばれた民達であり私達の方が寧ろ害虫と思っている事だろう。

これを見れば直ぐにでも兵を起こしこちらに来ると少佐は予想した。

「叩きますか？」

答えなど分かり切っているが私は敢えて訊いた。

「叩くさ。そうすれば、奴等は逃げ腰になる。そうなればこっちの物だ」

無駄な事はしない、と少佐は言った。

「欲を言うならリカルドの兵たちが来ればもっと良いが」

中央貴族の兵たちより寧ろリカルド様の兵たちが来れば良い。

彼等の方が士気も高いから厄介だ。

だが、叩ける物は全て容赦なく叩く。

先ずは中央貴族の連中だな、と思った。

「そこら辺はどうなんですかね？」

中央貴族だけ来るとも考えられるが、リカルド様の兵たちも一緒に来るとも考えられる。

どちらが確率は高いのだろうか？

「さぁな。ただし、中央と地方の溝は大きい。来ないにしても・・・揉めるのは明白だ」

それは言えている、と私は思った。

中央はリカルド様に媚びを売り甘い汁を吸おうとしている。

自分達が無事なら構わない。

だから、地方がどうなろうと知った事ではない。

だが、地方は中央に虐げられた怨みがある。

双方共に利害が一致していない。

となれば、溝は大きい。

これから徐々にその溝が大きくなると同時に様々な事で揉めるだろう。

内輪揉めすれば弱くなる。

ハンニバルの予言のように奴等は内側から蝕まれて行くのだ。

「所で親衛騎士団はどうですか？」

レオンが煙草に火を点けながら少佐に訊ねた。

私も今になって親衛騎士団を思い出す。

私とレオンが担当したのは最初だけで、少佐もまた同じだ。

まぁ、訓練は受けさせると言ったが少佐が直々に鍛えるとは言っていないから然して問題ないだろう。

「今はイーグルとミーシャが教えている」

「あの二人が・・・・・・・・・・」

どちらも精鋭部隊に所属していたから訓練も苛烈だ。

「まぁ、問題ないだろ」

だと良いんですがね、と私は思いながら煙草を銜えた。

― ― ― ― ― ― ―

「おらおら、もっとしっかり腰を入れてやれ！そんなへっぴり腰で

相手を締め殺せると思うか！！」

俺らを前に声を荒げるのは緑の帽子を被った男、イーグル１等軍曹と青いベレー帽を被った女、ミーシャ大尉だ。

どちらも俺らを最初に鍛えたタカミ・テツヤ少佐の部下だ。

階級で言えば少佐、大尉、軍曹だ。

だが、大尉と軍曹の階級は４階級も違うらしい。

で、今俺を含めた数人を教えているのはイーグル１等軍曹だ。

元グリーン・ベレー（緑のベレー帽を被っている事からその時代の王から直々に名付けられたらしい）の隊員らしく俺達にロープ１本で武器を持った相手をどう殺すかを教えている。

ロープ１本で武器を持った相手を殺す。

普通に考えれば無理に等しい。

しかし、イーグル１等軍曹は俺らの前でそれを難なくこなしてみせた。

それから順番にやらせている。

残り半分を教えているのはミーシャ大尉。

こちらはナイフで相手を効率よく殺す方法を教えている。

「ナイフで相手の喉を掻き切れ。そうすれば、相手は物の5分であの世行きだ」

向こうでは剣は使わないで、このナイフで相手を殺すようだ。

銃で仕留める方が簡単と言えば簡単だが、銃は音がするし弾も節約しなければならない。

だから、ナイフやロープを使い近くまで行き相手を殺すのだ。

「相手の背後まで近付いたら口を抑えろ。声を出さなくさせるんだ。そしたらナイフで喉を切り裂く」

「質問です。大尉。もし、喉が駄目なら何処をやれば良いんですか？」

「喉が駄目なら相手の心臓を狙え。喉は一度で良いが、心臓などは数回に渡って刺せ。もし、ナイフが無ければその辺にある石などを加工して鋭くしろ」

特に良いのは黒い色をした“磨製石器”という物らしい。

これは他の石などで叩くように磨き凹凸を無くした物を指すらしいが、凹凸が無い分抜き取りし易く鋭くなるらしい。

少佐達が居た世界では大昔の人間たちはこれを狩猟用に使っていたらしい。

そして鉄で出来た矢より深く刺さったという話があるからその威力は保証済みだ。

俺たちには無い知識などをこの二人は持っている。

訓練は厳しいの一言に尽きるが、それ以上に俺たちは団長に続かなければならない、という気持ちがある。

団長一人だけが先に行き、俺たちだけ取り残される。

これは屈辱だし情けない。

何より俺たちはザンビア平野で我先にと逃げた。

味方が成す術も無くやられて死んでいく所を見て怖くなり逃げ出した。

団長は留まり戦っていたのに、だ。

騎士として、男として・・・全てにおいて失格だ。

もうあんな体験はしたくない。

一度だけで沢山だ。

いや、仮にまた経験したとしても団長を、味方を、置いて行ったりはしない。

逃げる時は団長や味方を先に逃がし俺たちは留まり戦ってから逃げる。

その為にも今、教えられている事をミッチリと身体に染み込ませな

ければならない。

敵は何時来るか分からない。

だから、速く覚えて次の知識を染み込ませなければならない。

そのためなら寝る間も惜しんでやる。

そして団長に追い付き、少佐達と共に戦いこの国を救ってみせる。

「よし。次、ヴィン・ルビー。やれっ！！」

イーグル1等軍曹が俺にさっきやった事をやれと命令してきた。

「レンジャー！！」

俺は声を張り上げ、投げられたロープを手に持ち相手に突進した。

第百三十一章：ビラ撒き（前書き）

ランドルフとフォース・リーコンの視点です。

どうも、最近、他のキャラの視点も入れる事が多いようでして・・・

はい。

混乱すると思いますが、頑張って下さい！！

第百三十一章：ビラ撒き

休憩を終えた私達はまたビラ作りに着手した。

午後から始まって出来上がったビラは合計で５０００枚。

暇な兵たちを集めて延々と作り続けたから結構な数だが、まだ足りない。

戦いはせずにこんな事をするのか、と中にはぼやく者も居たがこれも相手を攻撃する為であり次の戦いに備える為だ、と少佐が説明すると納得した。

何より総大将のゲンハルト様もやっているのだから、自分達もやらなければならないという感情もある。

何度も何度も同じ様な内容を書いて積み上げていく。

そして夜になった。

合計で２万枚できあがった。

これだけあれば先ずは問題ないだろう。

「では、今から撒きに行け」

「今からですか？」

「夜の方が敵の眼を欺けるからな」

なるほど、と私は納得してどうやってビラを撒くのか訊ねた。

少佐の説明によると天馬部隊で行くらしい。

天馬部隊ならヘリより音が小さいしヘリよりも小回りが利くからだ。

天馬部隊でヴァエリエに行き空からビラを撒き返る。

地味だが、やる価値はあるというものだ。

予め天馬には夜でも目立たないように黒や紺などの色を塗っておいた。

行くのはリーザ中尉と私達だ。

私達は天馬に乗り夜の空を舞い上がった。

「はー、ランドルフ君に後ろから抱き締められるなんて幸せだわ」

私を乗せた天馬の手綱を握るお姉様が心底、幸せそうな顔で呟いた。

「幸せに浸るのは良いですけど、手綱を誤らないで下さいね？落ちたくないんで」

対して私は冷静な口調で返した。

「変わったわね。前なら女に免疫が無くて初心だったのに」

「経験をそれなりに積んだんです。それより敵はどう来ますかね？」

「これを見れば中央の貴族は先ず来るわ。あいつらの誇り高さは天よりも高くて海よりも深いんだから」

「海、ですか。見た事があるんですか？」

私は地図上でしか海をいう物を見た事が無いので訊ねた。

「えぇ。青い色で魚が泳いでいるんだけど綺麗よ。今度、連れて行って上げる？」

「お願いします。ですが、二人切りでは遠慮します」

「釣れないわね。でも、そういう女を焦らす所も魅力的だわ」

などと軽口を叩いてみせるお姉様。

私はそれに対して苦笑で受け止めた。

ヴァエリエまで天馬なら数時間で行き来が出来る。

この調子なら朝日が昇る前には帰れると踏んでいる。

天馬に揺られながら進む事数時間。

ヴァエリエに到着した。

夜だから明かりは無い。

だが、城だけは明かりが点いていて賑やかだった。

城の明かりで演習場が見えた。

演習場にはヘリが2機あり、そこにはテントが張ってあった。

恐らくハゲタカの者たちだろう。

そして離れた場所・・・今は使われていない私が初めて狙撃の練習をした場所にワイバーンが居た。

ワイバーンの横にはそれに乗る者たちがいたが、私達には気付かず寝ていた。

改めて私は城を見た。

城の明かりは宴を開く場所から出ている。

しかも、歌声や笑い声が聞こえてくる。

「・・・宴を開いているんですかね？」

こんな時に宴を開くなんて頭がどうかしているのでは？と思ったが、中央貴族が開いているのではないか？と思い直した。

あの“蛆虫共”ならリカルド様の気をこちらに向けようとするだろう。

そして質素な生活など我慢できる訳ないから、毎夜の如く開いているに違いない。

それは自分の力を相手に見せつける意味合いもあるが、所詮は見かけ倒しも良い所だ。

そんな力はこんな時はまったく役に立たないのだから。

「まったくこんな状態でよく宴が開けると思うわ」

お姉様はあまりに不謹慎すぎる事に憤りを露わにした。

「仕方無いですよ。まぁ、直ぐに今度は私達が招待するのですから良いではありませんか」

「それもそうね。選り取り見取りなんだもの。楽しみだわ」

お姉様は笑みを浮かべながら言った。

「ここでビラをばら撒くわ」

リーザ中尉が小声で停止を促した。

全員が止まると私達はビラを撒く準備をした。

「飛びながら撒くわ。撒き終えたら直ぐに旋回して帰る。良いわね？」

『レンジャー』

私達は小声で頷いた。

私達はビラを撒き始めた。

後ろに乗る私達がビラの入った袋を逆さにする。

そして天馬は動き散らばらせる。

夜の空に白い紙がばら撒かれて薄暗い闇に包まれた首都を白く輝かせたように見えた。

撒き終えてから私達は悠々とヴァエリエへを後にした。

「さぁ、これをあいつらが見たらどう出るか見物だわ」

お姉様は楽しそうな笑みを浮かべながら天馬の手綱を握り続けた。

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

俺たちはハゲタカ達が居る場所とは違う場所にキャンプを築いていた。

そこで俺たちは城から聞こえる歌声などに呆れ返っていた。

「よくもまぁこんな非常時にパーティーなんて開けるもんだぜ」

俺はアメリカン・スピリットを吸いながら煙を吐いた。

「あいつらが考える事は理解不能だ」

俺の隣に座る相棒が同意してくれた。

俺と同じく海兵隊に入隊して共に幾多の戦場を駆けた相棒だ。

俺と相棒がこの隊の中では一番若い。

だから、不思議と俺と相棒になった訳だ。

「そんな所へ行く大佐も可哀そうだよな?」

相棒は白と赤が特徴のマールボロのソフトから1本取り出すと口に銜えた。

「あぁ。だが、仕方ないだろ。リカルド様の護衛をしなくてはいけないんだ」

俺らの指揮官である大佐は宴に参加している。

リカルド様も出ているからその護衛としてヴィクター公爵に頼まれて出ているんだ。

何度も宴に出ている大佐だが、帰って来る度に胸糞悪いほど強烈な香水臭を撒き散らして帰って来る。

大佐は容姿端麗という言葉が似合う男だからビッチ共が群がるのは無理もないが。

英雄色を好むと言うが、大佐に至ってはこの言葉は当て嵌まらない。

何でも俺らが産まれる前に一人の女性を愛したらしい。

しかし、その女性は運悪く事故死した。

婚約中に起きたらしい。

大佐はその女性を未だに愛しており指環を常に持ち運んでいる程だ。

だから、どんな女が来ても指一本出さない。

そういう所も大佐らしくて俺は好きだ。

それを思うと、あんな所に行く大佐は憐れでならない。

「それにしても何時になったら、俺たち行くんだろうな?」

相棒は東側を見つめた。

最初の進撃から1週間は経過しただろうか?

あの戦いで俺たちを始め多くの兵たちが死んで行った。

援軍の死体は回収できなかった。

何処に居るのか分からないからだ。

あの戦いが痛手となったのか、リカルド様は「暫く兵たちの英気を養い準備をする」と俺達に言った。

ここで俺は思った。

もし・・・もし、俺たちが偵察を成功させていればもう既にこの国はリカルド様の物になっていたのでは?と・・・・・・・

そうすればこんな事にはならなかった。

ハゲタカに借りを作る必要も無かったし大佐がパーティーに行く必要も無かった筈だ。

偵察が出来ていれば何も知らないまま行ったりはしなかった。

偵察が出来なかったから失敗したんだ。

それを考えると、また行くにしても準備も大事だが偵察も大事だと改めて思う。

「明日、大佐に偵察をもう一度できないか訊いてみるか」

「お前も考えていたのか?」

相棒がマールボロを口から離して訊いてきた。

「あぁ。もう一度、偵察をしてから攻めるべきだ、と俺は思うんだ」

情報が少しでも手に入るかもしれない。

僅かな情報だろうと、あるか無いかではかなり違うからな。

大佐もリカルド様も偵察の重要性を解かっているから、受け入れてくれる筈だと思った。

「その時は俺も行く」

二人で大佐に言ってみよう、と相棒は言った。

「そうだな。そうしよう」

俺と相棒は頷き合い煙草をもう一度、吸った。

第百三十二章：偵察と護衛（前書き）

これまたランドルフとフォース・リーコンの視点です。

暫く・・・続きそうです。（汗）

第百三十二章：偵察と護衛

ビラを撒き終えた翌日、私は北側に建てられた見張り台の１つにガリシャ、ヘンさん、ガルムの４人で来ていた。

ここが私達の受け持つ場所となったのだ。

見張り台は上手い具合にカモフラージュされている。

木の中・・・私達が立っている板の直ぐ下は空洞となっており緊急脱出口となっており万が一の事も忘れていない。

「敵さん、あのビラを見てどう出るかな？」

ヘンさんは煙草を吸いながら見張り台からヴァエリエの方角を見た。

雪一面で覆われた山と森。

そこを白い毛皮の兎が走った。

ガルムは兎を見て「美味そうだな」と呟いて今にも獲りに行こうとしていた。

食い意地が張っているな、と思うが下手な事を言って食われては堪らないので言わないでおく。

「少佐の予想ではリカルド様は動かず中央貴族たちが怒って来る、と予想しているそうです」

「俺も賛成だ。あいつら自分の顔に泥塗られるのが一番嫌いだからな」

だから、こんな事を書かれたビラを見ればその日の内に兵を出す、とヘンさんは断言してみせた。

「だとすれば、もう向かっている事も」

「あぁ。考えられる。ヴィールング様も恐らく止めはしないだろう」

あちら側に居るから味方、と思って良いかもしれないがヘンさんは何か考えがあっての事だろう、と思っている。

「ヴィールング様は貴族たちを恐らく役に立たない、と踏んでいる」

今まで戦も経験した事も無いまして甘い蜜を吸いたいという理由でリカルド様に従う者を役に立つと思う者はそういない。

ヴィールング様もそう考えており火の粉が来ないようにしている、とヘンさんは踏んでいるのだ。

「まぁ、どう出るかは俺たちには分からない。俺らは来たら奴等を叩くだけだ」

「ハゲタカ共は・・・来ますかね？」

「さぁな。ただ来たら・・・やるんだろ？」

「えぇ。奴の脳天に1発撃ち込んで始末します」

それで終わりだ、と私は言った。

「だいぶ心の整理が付いたようだね？」

まぁ、色々と忙しかったからね、と意地悪な口調で言われてしまい私は煙草を吸って誤魔化した。

「よぉ、そっちはどうだ？」

背後から声がして振り返れば少佐が梯子を登って立っていた。

私達は敬礼をしてどうして来たのか理由を訊ねた。

「偶には外の空気を味わいたいのさ」

少佐は煙草を吸いながら答えると横に退けた。

すると直ぐに梯子を登り終えた要らない荷物が現れた。

ＡＫ－７４を右肩に掛けドラグノフＳＶＤを背中に背負っていた。

「何時の間にこんな物を・・・・・・」

要らない荷物は見張り台を見まわしながら驚いていた。

「こいつ等が偵察に行っている間に築いたんだよ。まぁ、お前さんは居なかったからしょうがないが」

「・・・・・・」

要らない荷物は口を閉じて見張り台からヴァエリエの方角を見つめた。

「敵は何時、来ますかね？」

「さぁな。ただ、もし来るなら俺とお前も出るぞ」

「少佐も出る、とは戦うんですか？」

「そうだ。お前らだけ戦わせる訳にはいかないだろ？それに偶には暴れたいんだよ」

如何にも少佐らしいな、と私は思うと同時に士気を高める理由もあるんだろうな、とも思った。

覚悟は出来ているな？と少佐は要らない荷物に訊ねた。

それに対して要らない荷物は力強く頷いてみせた。

「勿論です。ザンビアでの屈辱・・・晴らしてみせます」

仲間の仇も取る、と要らない荷物は意気込んだが、来るのは中央貴族の可能性もあるという事を忘れているのか？

まぁ、相手が誰であれこの女なら敵となればやるだろうな、と私は思った。

「所で私の部下はどうですか？」

「良い調子だ」

少佐は要らない荷物の質問に淡泊に答えつつ今はイーグル軍曹とミーシャ大尉が教えているとも言った。

普段は自業自得の繰り返しを行い救いようが無いように思える（実際、救い様が今の所無いが）軍曹だが、こういう時はそんな顔が微塵も無くなる。

泣く子も黙る鬼軍曹となるのだ。

ミーシャ大尉の方はまぁ、普段からあんな感じなので然して変わらないと思う。

「嬉しいか？」

少佐は要らない荷物の表情を見て訊ねた。

要らない荷物の表情は何処か嬉しそうだった。

部下が成長しているのが嬉しいのだろう。

「当然です。彼等は私の部下。その部下が成長する事は団長として嬉しい事ですから」

「そうか。それなら良い」

少佐はそれだけ言うと煙草を吸いながらヴァエリエを見つめた。

— — —

―　―　―

俺と相棒はパーティーから帰った大佐に偵察の事を話そうとしたが、その前に大佐が全員を集めてこう言った。

「本日、我々は東に出発する」

開口一番に大佐は進軍すると俺達に言った。

「どう言う事です？暫くは準備をするという話だと聞いておりましたが・・・・・・？」

俺はどうしても気になり訊いた。

「これを見てくれ」

大佐は俺に1枚の紙を手渡した。

その紙にはリカルド様を貶めるような言葉が書かれていた。

「昨夜の内に撒かれたらしい」

昨夜の内・・・俺たちは築かなかった。

音が殆ど聞こえなかったしテントに入っていたのも理由だが。

「あの、これをリカルド様は・・・・・・・・」

「これを見てもリカルド様は何も言わなかった」

それは自分の事をよく理解しており自分の行動が間違いだと知っているからだろう。

だが、間違っていようとやるしかない所まで追い詰めたのは向こうだ。

それなのにこうも酷く書くとは・・・・胸糞悪い。

「リカルド様は何も言わなかったが、中央貴族が問題だ」

別の紙を大佐は渡してきた。

それには中央貴族の事が書かれていた。

これには怒りもせず的を射ているな、と俺は思った。

あいつ等はリカルド様に巣食う害虫だ。

そんな奴等を悪く言おうと俺の知った事ではないからな。

「中央貴族は直ぐに兵を出すと言って聞かない」

幾らリカルド様たちが宥めても餓鬼みたいに聞かないらしい。

「それがどうかしたんですか？俺たちには関係ないのでは？」

あいつ等が兵を出して敵に皆殺しにされようと俺らの知った事ではない。

寧ろ殺してもらいたい程だ。

いや、少し位は善戦して敵を苦しめて欲しいと思い直す。

「彼等は貴族でありリカルド様の協力者だ。下手に死なせてはこれからの事を考えると困る」

「確かにそうですが、まさか護衛を付けると？」

「その通りだ。そして、その護衛に我々が選ばれたのだ」

「何で俺たちが・・・・・・・・」

俺の問いに皆も同感だと頷いていた。

俺らはリカルド様に仕えている身。

あいつ等の子守り役じゃない。

あいつ等の護衛はハゲタカ共で十分だ。

「私もそれは気になったが、リカルド様の眼を見て理解した」

護衛とはあくまで立て前で本当の任務は偵察だ、と。

要はあいつ等が正面から馬鹿正直に突っ込んで行くのを尻目に俺たちは本来の任務である偵察をしろ、という事か。

大佐は俺と相棒を見た。

「君等・・・私に偵察をもう一度させてくれ、と頼みに行こうとしたんだろ？」

俺と相棒はどうして分かったのか？と思ったが、直ぐに理解した。

大佐は俺たちの性格を知り抜いているから俺たちがまた偵察をさせてくれ、と頼むのも分かっていたに違いない。

ここまで部下の性格を知り抜いている上官を俺は知らない。

そしてそれを誇りに思う。

「私も君等と同じ考えだ。今度はちゃんと偵察をする」

そしてそれをリカルド様に報告する。

「大佐・・・・・・・・・」

俺と相棒は大佐を見つめた。

「直ぐに出発の用意をしてくれ。我々が先頭に立つ」

『イエッサー！！』

俺たちは敬礼をして直ぐ準備に取り掛かった。

今度は失敗しない。

必ず偵察を成功させてリカルド様を王にしてみせる。

第百三十三章：開戦の一発

私、ガルム、ガリシャ、ヘンさんの４人は北側に築かれた見張り台の上から双眼鏡でこちらに向かって来る“虫”を見ていた。

虫の列はずっと続いており、もう既にこちらに来る手前だった。

「おお、随分と多いな。しかし、あんな鎧じゃ体の良い的だぜ」

なぁ？とヘンさんは煙草を吸いながら私に訊ねてきた。

虫こと中央貴族たちはここからも分かるほどキラキラに輝いた鎧を見に纏い進軍していた。

とは言っても先頭ではなく中央辺りに居る。

しかも、馬ではなく輿で。

この道を平地だけしか走った事のない馬では来れない。

かと言って歩兵と同じく歩くなど奴等の思考から言わせれば「愚の骨頂」とも言える行動だ。

だから、ああして輿で来ているのだろう。

しかも、あそこまで金を掛けて作り上げた鎧。

キラキラ光っているお陰で丸見えだし、狙撃手には体の良い的だ。

ヘンさんの言葉も強ち間違いとは言えない。

「ですね。それに比べてフォース・リーコンは見事なまでに同化していますよ」

虫たちから付かず離れずと言った距離にフォース・リーコンの面々は居た。

白い迷彩服に身を包み、銃なども塗っていた。

それにしても多いな。

前より多い気がするのは気のせいか？

「あの人物は・・・・・・・・・」

私は一人の男を眼に止めた。

少佐より年上の男で見覚えがある。

あの人物は・・・・確か・・・・・

「フォース・リーコンの指揮官か」

少佐が私の直ぐ横に顔を出した。

「はい。少佐」

「今回は全員、と見て良いな」

「どう出ますかね？」

「奴等は恐らく護衛、と見て良いだろう。だが、本当の目的は偵察。俺たちの陣地を偵察しつつ破壊するのが目的かもな」

俺も北側を担当するから頼むぞ、と少佐は私の肩を叩いた。

「勿論です。少佐も頑張って下さいね？」

「言う様になったな」

少佐は笑みを浮かべながら梯子を下りて行った。

「少佐も出るんだ。俺らも頑張るぞ？」

ヘンさんは煙草を携帯灰皿に捨てるとステアーＡＵＧのレシーバーを引き初弾を装填した。

「勿論です」

「当たり前だよ」

「任せておけ」

私、ガリシャ、ガルムは頷き合いヘンさんと同じく初弾を装填し敵に備えた。

虫どもがこちらに近づいてきた。

どうやら四方に別れた。

「ほぉう。敵さんも馬鹿じゃないのか？いや、違うな」

ヘンさんは直ぐに否定した。

「どうせ、四方から攻めて誰が一番乗りをするのか競い合うんだろうな」

「一番乗り、ですか・・・・・・・・」

「あぁ。戦に置いて一番乗りした者は名誉なことだからな」

だが、いちばん死ぬ確率も高い。

名誉か死か。

「しかも、貴族は一番乗りしない。兵たちがする」

つまり奴等は被害無しだが、部下の兵が一番乗りすれば名誉を手にする事が出来る。

兵が死んでも奴等は痛くも痒くも無い。

何とも・・・・・・・・・

「ランドルフ君・・・・いや、リンクス。あいつ等の脳天に撃ち込めるか？」

ヘンさん・・・フォックスが私に訊ねた。

「勿論です。あんなに輝かしいんですよ?眼を瞑っては言い過ぎかもしれませんが、ちゃんと狙えます」

「それなら景気付けにやってくれ。少佐も煩く言わないだろう」

「了解」

私はモーゼルの銃身を横にされた棒に置いた。

そしてガリシャ・・・山犬に観測を頼んだ。

「距離６００・・・微風で若干横。湿気は無し。何時でも撃ちな」

「・・・・・・・」

私は一番前を歩く虫に狙いを定めた。

前みたいに緊張したりしなかった。

『一番乗りを狙っているなら貴様が一番乗りだ』

死の国へ一番乗りだ。

一番の戦死だ。

おめでとう、と言っておこう。

私はモーゼルの引き金を引いた。

そして虫の胸・・・心臓部に命中した。

しかし、一発ではない。

２発だ。

誰が撃ったかは知らないが・・・・第２防衛戦の開幕だ。

２発の弾丸を撃たれた虫は血を噴き出して後ろに倒れた。

皆、最初は何が起きたのか分からない顔だった。

分かったのはフォース・リーコンだけだった。

彼等は即座に散開すると遮蔽物に隠れて、皆に散らばれと叫んだが皆は戸惑っていた。

「どれどれ・・・もう一発、景気付けにくれてやる。今度は大きいがな」

フォックスアームスコーＭＧＬを構えると引き金を立て続けに３発分、引いた。

弧を描き、落下する４０ｍｍ×４６擲弾。

輿の近くに落ちて炸裂した。

それが契機となったのか、虫たちばバラバラに散らばった。

「まだまだお楽しみはこれからだぜ」

フォックスは残酷な笑みを浮かべながら更にアームスコーMGLの引き金を引いた。

私は山犬に観測を頼み、別の獲物を探し始めた。

―――――――――――

「フィーナ。あいつを狙え」

私の横に立った少佐は双眼鏡で進軍して来る敵を見ながら私に命令した。

現在、私、少佐、リーザ中尉の３人は北側の幾つか建てられた見張り台の１つに居る。

少佐自身が今回は前線に出る事になった。

それは私が訓練を受けてから体験する実戦を積ませる理由もある。

ただし、どちらかと言えばこの男の性格がそうしている方が多いのかもしれない。

私は背中に背負っていたドラグノフＳＶＤを右手に持ち構えた。

少佐が扱うＡＫＭアサルトライフルの元祖であるＡＫ－４７をベースに作り上げた狙撃銃だ。

ミーシャ大尉が持っている物だが、私も同じ物を使用している。

これは分隊狙撃手と呼ばれる者が持つ物らしく命中精度は他の狙撃銃に比べれば悪いがどんな悪環境だろうと作動するし「身体の何処かに当たれば良い」という考えから然して問題ではないらしい。

私はドラグノフのストックを右肩に当てた。

スケルトン・ストックと呼ばれるストックで中身をくり抜いて軽量にされている。

ただし、私の場合はその空いている場所に医療器具などを入れて万が一に備えている。

ＰＳＯ－１と呼ばれるスコープに右目を当て標的に狙いを定める。

狙う相手は中央貴族の一人で私を何かと「女の身でありながら」と蔑んだ男だった。

その男は４人の従者が担いだ輿に乗り遠くからも分かるほど輝かしい鎧を纏っていた。

私がかつて着ていた白銀の鎧・・・今にして思えば、何と目立つ鎧を着ていたのだろうか。

あれでは敵に見つかり易いし体の良い的になるのは必定だ。

敵の鎧を見て私は改めて思った。

ＰＳＯ－１で見える敵との距離は５００ｍ。

ドラグノフの射程距離は１５００mだが、実際は８００m辺りが妥当だと言う。

この距離なら届く距離だ。

私は引き金に指を掛けて息を整えた。

『落ち着け。フィーナ。今まで受けてきた訓練をそのまま発揮すれば良いんだ。何も緊張する事はない』

私はまた息を整えて、狙いを定めた。

狙いは頭だ。

あの黄金色に輝く兜を狙うのだ。

私は最後の息を整えるとドラグノフの引き金を引いた。

空薬莢が排出される音がしたが、酷く金属的な音だった。

そして弾は相手の頭ではなく胸に当たった。

しかも、２発。

私は１発分しか引き金を引いていない。

つまり誰か他の者が同じ相手を狙ったという事になる。

誰だ？

「・・・リンクスか」

少佐はポツリ、と呟いた。

「誰です？」

私が訊ねると少佐は「ランドルフだ」と答えた。

リンクスがどんな動物かは知らないが、どうせあのもやしみたいな体格で軟弱な動物だろうと私は思った。

そして私とランドルフの狙撃が合図となり皆が攻撃を開始した。

弧を描き擲弾が3発ほど地面に落ちるのが見えた。

地面に落ちると炸裂して近くに居た兵たちを容赦なく攻撃した。

「何をボーとしている。撃て」

少佐はＡＫＭアサルトライフルを撃ちながら私に言ってきた。

私は慌ててドラグノフで近くに居る敵を狙撃する事にした。

第百三十四章：偵察と防衛（前書き）

えー、これまたかなり難しい事になりました。

最初がフィーナ、続いてランドルフ、そしてフォース・リーコンです。

混乱しないで読んで下さい。（お願いします）

第百三十四章：偵察と防衛

私はドラグノフで逃げ惑う指揮官を狙い撃った。

私とランドルフ・・・リンクスが仕留めた男は誰も担がなくなった輿で息絶えていた。

奴以外にも輿に乗っていた貴族は居たが、私とリンクスが放った銃弾とグレネードランチャーで輿を担いでいた者たちは一斉に逃げてしまい地面に放り出された。

そいつ等を片っ端から狙え、と少佐に命令された私は言われた通り奴等を狙った。

ただし、足などを狙った。

足などを狙い、身動きできなくなった奴等を助ける者たちが居る筈。

そいつらを纏めてやるのだ。

えげつないとはこの事だが、一人でも多く敵をやるという事でなら効率的だ。

私の横で少佐は塔に置かれていたワイド中尉が使っているＲＰＫの２脚を立て乱射していた。

リーザ中尉の方はＡＫＳ－７４Ｕを使用している。

「フォース・リーコンの奴等は何処に行ったんだか・・・まぁ、炙

り出してやるから良いか」

少佐は逃げようとした貴族の背中をＲＰＫで狙い撃った。

その者は背中から撃たれて前に血を噴き出して前のめりに倒れた。

それでもまだ生きていたが、更に後ろから逃げてきた兵たちに踏み付けられて息絶えた。

他の貴族などは「逃げるな。戦え」、「待て、置いて行くな！！」と泣き叫んだり罵声を上げていた。

そんな奴等を少佐はＲＰＫを乱射して葬り去って行く。

「誰も逃がさねぇぞ。・・・悪いが、これが戦場なんだよ」

少佐は冷たい声で一人漏らした。

何処か達観したように聞こえたのは私の幻聴だろうか？

そんな事を思ってしまった矢先だった。

チュッン

と鋭い風を切る音が頬を掠めた。

直ぐに撃たれたんだ、と分かった。

血は出ていないが、誰かがこちらを狙っていると瞬時に判断して撃たれた方角を見る。

森林に隠れた一人がこちらを狙っていた。

白い迷彩服に同じく白く色塗りされたライフルを持っている。

スコープが取り付けられているから狙撃銃。

我々と同じ武器を持つ者は・・・・・フォース・リーコンの奴等か。

彼等は少佐が居た世界の軍人らしく海兵隊と呼ばれる組織の者らしい。

殴り込み部隊と渾名されるほど攻撃力が特化しており士気なども高く少数精鋭をモットーとしている。

カルナン、ザンビアでも彼等が斥候として動き味方を勝利に導いたと聞いている。

ここにも来たが撃退されたが、また来たか。

その彼等を少佐は「目の上のたんこぶ」と称しており早々に排除しようとしている。

彼等は厄介だ、と私も解かった。

彼等だけが勇敢にもこちらに戦いを仕掛けている。

残りの奴等は逃げるか隠れるかのどちらか。

彼らこそ敵と言う名が相応しい。

他の奴等はただの虫だ。

いや、虫以下だ。

その虫以下の中にはかつては懇意にしていた者達もいたが私はそれを無情にも撃ち殺した。

別に罪悪感など感じたりはしなかった。

ただ、かつて自分が懇意にしていたという事に対して胸糞悪くなっただけだ。

あんな奴等と懇意にしていたと思うと・・・・虫唾が走る。

「そこに居たか」

少佐は私が見ていた方角を見るなりＲＰＫを乱射した。

しかし、彼は直ぐに遮蔽物に隠れてやり過ごした。

「フィーナ。グレネード」

「了解」

私はドラグノフからＡＫ－７４に持ち替えてＧＰ－３０の引き金を引いた。

下に向けて撃ったので、そのまま彼が居る遮蔽物に当たった。

遮蔽物は爆発して彼は火に包まれながら後方に飛ばされた。

「そのまま撃ち続けろ」

「了解」

私は言われた通りＧＰ－３０を撃ち続けた。

ＧＰ－３０を撃ち続けるが、他の方角からも銃声と爆音などが聞こえてくる。

向こうも敵と戦っていると分かる。

私は一緒に戦う仲間の無事を祈りながらもＧＰ－３０を敵がいる方角へと撃っては攻撃を続けた。

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

「しかし、幾ら撃っても減らねぇな」

フォックスは舌打ちを漏らしながらステアーＡＵＧに取り付けられているスコープを覗いて敵を撃ち殺していた。

私と山犬も手当たり次第に敵を撃ち殺しているが、幾ら撃っても敵は減らない。

いや、指揮官は最初の方こそ私達にやられていったが、今は瞬時に

状況を理解したのか森林などに隠れてやり過ごそうとしている。

そのくせ兵たちには「逃げずに戦え」と言っている、とガルムが言った。

自分は逃げて兵は戦わせるとは見上げた物だ。

そういう貴様らには私が鉛玉という報酬をくれてやる、と思う。

山犬は森林に上手く隠れた指揮官を見付けると私に位置などを教えた。

それを私が狙い撃つ。

一人の虫が山犬の眼に捕えられた。

「距離３００・・・風速１・・・何時でも撃ちな」

「・・・・・・」

私は息を整えて虫を撃った。

虫は逃げようとしたのだろう。

背中を撃たれて前のめりに倒れた。

そして次の獲物を探そうとした時だ。

私の頬に鋭い音が掠めた。

そちらを見ればフォース・リーコンがこちらを狙っていた。
Ｍ６０Ｅ３を一人で撃つ男だった。
直ぐに反撃しようとしたが、向こうの方がやはり速く私と山犬は頭を下げてやり過ごした。
「そこか！！」
ガルムがＰＫ機関銃をフォース・リーコンに向けた。
チラリと見ればＭ６０Ｅ３を持った男は瞬時に隠れてやり過ごしたが、ガルムは執拗に追い掛けた。
その間に私と山犬は狙撃を続けた。
他の方角からも銃声と爆音が聞こえてくる。
迫撃砲なども撃っている音が聞こえた。
ここでフォース・リーコンを何人か始末しておかなければならない。
彼等は偵察を恐らくする。
我々の居所などを調べてはそれを報告して、また攻める時に対策を講じて来るのは必定。
ならば、全員殺すのが望ましいのだが向こうも馬鹿ではないらしく森林を利用しては攻撃をやり過ごしている。

何とかならない物か・・・・・・・

私は一網打尽に出来る手立てが無いか考えながら、また逃げようとする虫を仕留めた。

――――――――――――――――――――――――――

―――――――――

「敵さんもやるな」

「あぁ。前以上に手強くなったぜ」

俺と相棒は遮蔽物に身を隠しながら銃弾をやり過ごしていた。

俺は南側から来たが、身動きが取れない。

それもその筈。

何せ敵は前以上に護りを強化していたのだから。

まったくただでさえここでの戦闘は厳しいというのに更に強固にされては堪った物じゃない。

だが、前に比べれば俺の心は落ち着いていた。

それは相棒も共に居るからだろう。

前は一緒ではなかった相棒がいる。

それだけで俺は心に余裕を持つ事が出来た。

「それにしてもあいつ等は本当に役立たずだな」

俺は直ぐ横を敗走する貴族を見た。

こいつ等の護衛もといお守を俺らは仰せつかった訳だが、勝手にこいつ等は逃げ出して話にならない。

俺らに向かって偉そう口ぶりをしていたくせに自分は逃げる。

まったくこんな奴がリカルド様を取り囲んでいると思うと胸糞悪くなる。

「で、相棒。これからどうする？」

俺の横で煙草を吸いながら相棒は訊ねてきた。

こんな時に煙草などよく吸えるな、と思うがそれがこいつの余裕を表している。

「取り敢えず北側にある建物を頭に叩き込みながら死なないようにするか？」

「そうだな。今回はあくまで偵察が任務だ。敵を倒すのは次で良い」

「それじゃ行くか」

「あぁ」

相棒は煙草を吐き出すとコルトＸＭ１７７Ｅ２を構えた。
俺は遮蔽物から躍り出て見張り台の数などを数える。
相棒は援護射撃をして俺を支える。
次の遮蔽物に着いた俺が今度は援護射撃をして相棒を支えた。
「北側にある見張り台は全部で・・・５つか」
「他の方はどうなんだか・・・・・・・・・」
考えるだけで憂鬱になるぜ。
無線が鳴った。
「こちら“シミター”」
俺はコード・ネームを口にした。
『こちらハンヴィ。そちらの状況はどうだ?』
「今の所は無事です。そちらは?」
『どうも芳しくないな。しかし、個人的には嬉しい』
「嬉しいとは?」
『あの少年とまた会えた事だ』

観測手と思われる娘と一緒で戦っているらしい。

無線の相手は軍曹だ。

Ｍ６０Ｅ３を操る古参兵士で例の少年が操るモーゼルで一度、壊された。

それから軍曹は少年に固執するようになった。

敵なのだが、称賛に値する敵という事だ。

軍曹みたいな男に執着されるとは・・・あの坊やも憐れだな。

どうせなら女の子に執着された方が男として嬉しいだろうに。

などと場違いにも俺は思いながらそちらの偵察はどうかと訊ねた。

『見張り台の他にも重機関銃が添え付けられていて身動きが取れない』

「応援に行きますか？」

『人の事より自分を心配しろ。私は貴様に心配されるほど弱くない』

「そりゃ失礼しました」

こんな事を言えるのだから問題ないな、と俺は判断して無線を切った。

「それじゃ偵察の続きをするか？」

「あぁ。何としても帰ってリカルド様に報告しないとな」

「あぁ。・・・俺たちがリカルド様を王にするんだ」

俺はコルトＸＭ１７７Ｅ２を握り直して銃弾が飛び舞う中を走り出した。

第百三十五章：見る目が無い

戦いは夜まで続くと思われたが、夕方には決着が着いた。

貴族たちは逃げ腰で兵たちもただ突っ込んでやられるばかりで話にならない。

厄介なのはフォース・リーコンだ。

フォース・リーコンは我々を攻撃しつつ見張り台などの場所を調べては逐一無線機で報告している。

厄介な事この上なかった。

何とか仕留めようとしたが、思う様にいかず結局は取り逃がしてしまった。

「取り逃がしたのは痛いが仕方無いな」

狐ことヘンさんは肩を竦めた。

「今なら追撃は出来るぞ？」

猟犬ことガルムがヘンさんに言ったがヘンさんは首を横に振った。

「下手に追撃すると痛手を食う。これは俺の経験だ」

ヘンさんは過去の経験から下手に追撃するのは止めた方が良い、とガルムに言った。

「つまらんな。今なら全員を喰えるのに・・・・・・」

ガルムは恐ろしい事を口にしながらもヘンさんの意見を尊重した。

「さぁて、少佐に報告するか」

ヘンさんは女神の抱擁を銜えて火を点けると煙を吐いた。

私達は無線で少佐に行く事を伝えてから見張り台を降りた。

そして見張り台に行くと左腕を曝した少佐に出会った。

素肌を曝した左腕には白い包帯が巻かれていた。

「怪我をしたんですか？」

「ただの掠り傷だ」

少佐は短く答えると左腕を袖に通した。

「少佐。あいつらをどう見る？」

ヘンさんが煙草を銜えたまま煙を吐きながら訊ねた。

上官に対して失礼だが、少佐は気にせずに答えた。

「役に立たないお荷物以外の何でも無いな。まぁ、俺らの眼をフォース・リーコンから背ける事には成功したがな」

「確かに。次は・・・本腰を入れて来るだろうな」

ヘンさんは厄介だな、と漏らした。

「あぁ。あいつ等は前座だ。俺たちの居場所を知る為の捨て駒だ」

次は本当の戦力が来る、と少佐は断言した。

「やれやれ。好い加減、諦めてくれないかねぇ？」

「そいつは無理な話だ。まぁ、俺らが降伏すれば話は別だが」

「そんな事は微塵も考えていないんだろ？」

「まぁな」

少佐はあっけらかんとした口調で頷くと煙草を銜えた。

そして私達は一度、城に戻った。

城に戻る間、要らない荷物は驚くべき事に私に話し掛けてきた。

明日は雨でも降るのか？と思ったほど驚いた。

「私が撃った相手をお前も狙ったのか？」

「えぇ。景気付けに。胸を狙いました」

「頭ではないのか？」

「いいえ。胸です。あの男の胸に戦死者第一号として鉛玉をくれてやりました」

「・・・・頭ではないのだな？」

「・・・しつこいですが、胸です」

何で二度も同じ事を訊くんだ？と思ったが、要らない荷物の顔が何処か落胆しているのが見えて分かった。

「・・・貴方は頭を狙ったんですね」

しかし、大きく狙いは外れて胸に命中した。

ドラグノフの命中精度はオートマチック狙撃銃の中ではかなり悪い方に入るが、狙撃手の腕も問題だ。

恐らくこの女の腕が問題だろう。

そして私は最初から胸を狙った。

なぜ頭ではないのだ？と訊かれたなら確実に当てられると思ったからだし、胸に当てた方が奴等に何が起きたのか知らせるには良いと思った。

「自惚れかもしれませんが、貴方より私の方が射撃に関しては上です」

「まぁ、強ち外れではないな」

少佐もといテツヤ殿が頷いた。

「リンクスは鋭い眼という意味合いを持つ山猫で遠くに居る獲物を捕える事が出来る」

そこから狙撃手の隠語になった。

「俺はそいつに合った渾名を与える。こいつの場合は狙撃手で射撃の腕があるからリンクスと名付けた」

だから、私の方がこの女より射撃に関しては上、とテツヤ殿は続けて言った。

「・・・・・・・・・・」

要らない荷物は悔しそうに唇を噛んだ。

良い気味だし、誇らしかった。

「まぁ、銃剣術などに関してはお前の方が上だ」

銃剣術が得意・・・・・・・・・もう既に廃れた銃剣術が得意とは・・・・・・・・

しかし、廃れたとは言え完全に必要が無くなった訳ではない。

事実、私も何度か訓練も含めてやったが役に立つ。

捨てた物ではないが、この女はどう言う訳か古いと言えば良いだろうか？

そういう物と縁があるな、と私は思わずにはいられなかった。

「俺も敵と銃剣術をやり合った事がある」

テツヤ殿は煙草を銜えながら唐突に呟いた。

「どんな状況でした？」

私は気になって続きを促した。

「ある戦場で俺はそこを防衛していた」

敵は迫撃砲を撃ちながらも突撃して来た。

「迫撃砲を撃っている時は突撃しない」

味方に被害が来るからだ。

だが、敵は味方が死のうと構わないかのように歩兵を突入させたらしい。

「案の定、敵の歩兵は迫撃砲で身体を吹き飛ばされたりした」

それでも何人かテツヤ殿が防衛していた場所に突撃を敢行し接近戦となったらしい。

「相手はＡＫのコピー品で粗悪品として有名な中国製を使っていた」

その模倣品には最初から銃剣が取り付けられているらしく、テツヤ

殿は銃剣無しで戦ったらしい。

「相手をストックで殴ったが、俺も刺された」

後もう少しで死ぬ所だったらしい。

「俺と一緒に護っていた奴は銃剣術なんて役に立たないと言って訓練を疎かにした」

その代償としてその男は馬鹿にしていた銃剣術で殺されたらしい。

「意外と起こるものだ。気を付けろよ？」

「肝に銘じて置きます」

私の言葉に他の者たちも頷いた。

その話を聞いた要らない荷物は何処か誇らし気だった。

後にこの要らない荷物ことフィーナ・マレル中尉は首都ヴァエリエにて銃剣術で戦う事を私は知る由も無かった。

城に戻った私達は演習場に向かった。

そこにはゲンハルト様とプロイセン様が居た。

「プロイセン様。怪我は大丈夫ですか？」

「あぁ。だが、まだ駄目と司教から言われた」

もう自分では大丈夫なのに、とプロイセン様は愚痴を漏らした。

「まぁ、お前さんは兵たちからも慕われているからな」

テツヤ殿は煙草を吸いながらプロイセン様を見た。

「それを言うならそなたもだろ？そなたは前線指揮官だ。そなたが死ねば士気に係わる」

「俺が仮に死んでもミーシャが執るだけだ」

「しかし、そなたを失うのは痛い。くれぐれも気を付けるのだぞ」

「あぁ。あんたも無理に身体を動かして傷口を開くなよ？」

「分かっておる。で、テツヤよ。敵はどうだ？」

「中央貴族は話にならない。奴等は言わば2軍だ。今度は1軍が来る」

「だろうな。まぁ、あの者たちが勇敢に戦えるなど微塵も思っていなかったがな」

「お前さんもか」

テツヤ殿の言葉にプロイセン様は髭を弄りながら頷いてみせた。

「奴等は戦の心得も知らんからな」

「先王には従わなかったのか？」

「従ったさ。従わなければ反逆罪に問われるからな」

「それでどうなった？」

「戦には出たが、後方で茶を飲んでいた。先王も一緒だ」

「戦好きの割には前線に出なかったのか？」

「私が止めたのさ。仮にも国王だ。死なれては困る。何よりあの男に兵たちの命を弄ばれたくない」

先王の采配は余り良い物ではない・・・となればプロイセン様の言葉も尤もだ。

「あんたは良い指揮官だな。それで先王とそいつらは仲良く茶を飲んで時間を過ごした訳か」

「あぁ。だから、戦に出たと言っても何もしていない」

だから、あれほどまでの醜態を晒したんだなと私は納得した。

「所でテツヤよ。フィーナ殿の調子はどうだ？」

プロイセン様はテツヤ殿から要らない荷物に視線を変えた。

「初めての実戦にしては上出来だ」

要らない荷物はテツヤ殿が褒めてくれたので嬉しそうな顔を一瞬だけしたが、直ぐに無愛想な顔に戻った。

私たちの視線があるからか？

それを気にしているというのならまだまだ未熟だ、と私は思った。

「ヴィルヘルムの教育もやっと成果を出したようだな」

「男泣きしていたぜ」

かなり芝居掛った泣き方だったが・・・・・・・・・

「そうかそうか。所でテツヤよ。リカルド様達をここで迎え撃つのは良いが、何時になったらヴァエリエを奪還するのだ？」

何時までもここに籠っていても仕方無いだろ？とプロイセン様は言った。

確かにその通りだ。

ここに籠っていれば敵を撃退できる。

しかし、殲滅は出来ない。

我々も討って出て戦わなければならない。

「まだ分からないな。ただ、ハゲタカを何とかしないと不味い」

「ハゲタカ？ああ、あのヘリに乗っていた男の事か」

「あぁ。空挺部隊の面汚しにしてステレオタイプの傭兵・・・あん

た等が思い描いていた傭兵その物だ」

確かに、あの二人は如何にも悪党な傭兵を地で表している。

「その言葉から察するに過去に遺恨があるようだな？」

「まぁな。まったく、こんな所でも再会するんだから運が悪いぜ」

昔からトラブルの女神に好かれているが、こればかりは酷過ぎるとテツヤ殿は珍しく愚痴を零した。

「女神に好かれているとは男冥利に尽きるではないか」

「どうかな？俺みたいな男を好きになっても待っているのは一人さびしく泣くだけだ」

「いいえ。私は一人さびしく泣いたりしません」

リーザ中尉がここで口を挟んだ。

「テツヤ様が地獄へ行くならば私も共に参ります。そしてテツヤ殿が死ぬのなら私も死にます」

決して貴方より先に死んだりはしない。

生ある限り私は貴方を護り続ける。

そして貴方に看取られて死にたい、とリーザ中尉は熱過ぎる台詞を言った。

「お前も憐れだな。俺みたいな男を好きになって」

「いいえ。私は誇らしいですわ。テツヤ様の様な素敵な方と出会えたんですから」

「男を見る目が無いな。お前さんは」

そう言ってテツヤ殿は短くなった煙草を素手で揉み消した。

第百三十六章：極上の酒

私達は演習場で食事をしていた。

ガルムは自分で獲りに行き、ガリシャも自分の家に戻っていない。

食事をしているのはいるのだが、ただの食事ではない。

驚いてはならない。

とは言え驚くなと言っても驚いてしまう。

天と地がひっくり返ったほど驚いてしまう。

何せ、その料理が・・・・・・テツヤ殿の作った料理。

つまり手料理なのだから・・・・驚くな、と言っても驚く事だろう。

テツヤ殿はエプロンを付けたまま煙草を吸っていた。

テツヤ殿のエプロン姿・・・・まさか、この眼で見るとは信じられなかった。

だが、今目の前にそのエプロンを付けた人物が居る。

『・・・何と言うか・・・・・・・・』

強面の料理人、と言えば良いだろうか？

「何をジロジロ見ている。さっさと食え」

冷めっちまう、とテツヤ殿は煙を吐きながら私たちを急かした。

『食べろと言われても・・・・・・・・』

私、レオン、ヘンさん、ワイド中尉、リーザ中尉、要らない荷物、プロイセン様、ゲンハルト様は目の前に差し出された物を見た。

モクモクと白い煙を出している物は茶色っぽい色をしたスープのような物だ。

その傍らには白い米があり、半分ほど茶色っぽい物が掛っている。

見た事も無い食べ物だ。

何よりテツヤ殿が作った手料理・・・味が保証されるのか心配だ。

「味に関してはもう保証済みだ」

「あの、誰がですか？」

「花の都と言われるが実際は糞溜めのような街に似つかわしくもなく住んでいた豊穣の女神だ」

これに私たちは首を傾げた。

一体、どんな所で、どんな人物なんだ？

「それより食え。俺の手料理なんて滅多な事では食えないぞ？」

確かにそうだ。

砦に住んでいた時もテツヤ殿は料理をした事が無い。

いや、した事はあるが何か料理を作った訳ではなくただ野菜や肉を切る役目をしていただけ。

だから、これが初めて食べる。

『お前が行け』

皆の視線が私の所へ来る。

何で私が？と思う。

『リーザ中尉。貴方はテツヤ殿と同棲しているんですよね？だったら、ここは一番に口をすべきです』

私は目線でリーザ中尉に話し掛けた。

『そうだけど、付き合いが長いのは貴方でしょ？だったら、貴方が』

『うむ。ここはそなたが一番だ』

ゲンハルト様までもが私が最初に食えと言ってきた。

「おら、さっさと食え」

いきなり私は口を無理やり開けさせられた。

言うまでもなくテツヤ殿が業を煮やして私の口を無理やり開けたのだ。

無理やり開けさせられた口の中にスプーンを捻じ込まれた。

そして口を閉じさせられると上下に揺らされた。

口の中に熱くて、そして辛い味が広がった。

「どうだ?味は」

テツヤ殿は私から手を離すと私に訊ねた。

改めて自分で中に入れられた物を食べてみると・・・・・・・・・

「辛いですけど、美味しいです」

「そうか。まぁ、女神が保証したんだ。問題は無い筈だ」

「あの、その女神ってどんな方なんですか?」

「そうだな・・・心優しくて良い家庭を築けると一時は思った女だ」

「つまり、結婚を一度は考えていた、と?」

「あぁ。まぁ、結局は別れも言わずに消えたがな」

「主にも結婚を考えた事があったのか」

ゲンハルト様が驚いた声でテツヤ殿に言った。

リーザ中尉は・・・まぁ、言わなくても分かるだろう。

「まぁな。今頃はどうしているか・・・・・・・・」

テツヤ殿は新しい煙草を銜えて火を点けた。

そして気を取り直したように私達に言った。

「俺の話よりそれを食え。熱い内に食べるのが良いんだよ」

私はそれを聞いて急いで食べ始めた。

食べるとやはり辛い味がする。

しかし、手が、口が、止まらないほどに美味い。

「美味しいです」

私はバクバクと食べる。

私の様子を見て、皆も続くように食べ始めた。

「むっ・・・辛いな。しかし、手が止まらん」

ゲンハルト様は辛いと言いながらも手を止めない。

「うむ。私には程良い辛さだ」

逆にプロイセン様は程良い辛さだと言いながら食べている。

「テツヤよ。これは何と言うのだ？」

「“カレー”だ。臭いがきつくて敵に気付かれ易いが、今は大丈夫だ」

テツヤ殿は煙草を吸いながら食べ物・・・カレーを説明した。

何でもインドと呼ばれる国が発祥の地らしいが、インド自体にはカレーと呼ばれる物が存在しない。

元々インドは多数の香辛料をふんだんに使った料理が多いらしく、カレーと呼ばれる物は無いという事だ。

テツヤ殿の国にはイギリスという国が伝えたらしく、それを日本風に米を使用したのがカレー・ライスという物だ。

辛い事に変わりはないが、その辛さが身体を熱くさせ食欲をそそらせる。

見た目で小食と思われるゲンハルト様だが、驚くべき事に私たちの中でも一番食べていた。

そしてお代りをした。

「見た目と違って食べるな」

テツヤ殿はゲンハルト様を見ながら少なからず驚いていた。

「こんな美味い物は食べた事が無い。所で、テツヤよ。これはどうやって作れるのだ？」

「何だ？イザベルに作るのか？」

「モゴッ」

ゲンハルト様は喉にカレーを詰まらせたのか、ドンドンと胸を叩いた。

急いで私が水を渡すと勢いよくそれを飲み干した。

「き、貴様ッ。ど、どうしてそれを？！」

「お前さんは顔に出やすいんだよ」

政治家ならポーカー・フェイスだろ？とテツヤ殿は茶化した。

「う、煩いっ。それよりどう作るのだ？」

ゲンハルト様は図星だったのか狼狽しながら作り方を教えろ、と叫んだ。

「後で教えてやるよ」

そんなゲンハルト様を尻目にテツヤ殿は煙草を吸った。

それから食事を済ませた私たちは酒を飲んだ。

とは言っても酔い潰れるまで飲んではいない。

本の2、3杯程度だ。

他の兵たちには申し訳ないが、今回は大目に見てもらおう。

酒を飲みながらプロイセン様はゲンハルト様に戦が終わったら、貴族たちをどうするか訊ねた。

「あの者たちは国家に巣食う害虫だ。戦が終わり次第、罰する。その時は私も罰を受ける」

あの害虫共を庇った事、そしてテツヤ殿を国外追放にした罰を受ける為とゲンハルト様は言った。

「俺を国外追放にした罰は謹慎で済んだだろ？」

「あの程度で罰とは言えない。そなたは怒っていないのか？」

国外追放されたのに、だ。

「別に痛くも痒くもない。傭兵の頃も国外追放にされた事はある」

ある戦でテツヤ殿が居た組織が勝利した。

この戦いでテツヤ殿は多大な戦果を上げたらしく、勲章を授与されても可笑しくなかったらしい。

本来ならテツヤ殿も一緒に戦った兵たちと共にパレードに出る筈だった。

だが、テツヤ殿だけはパレードに出る事も許されずその日の内に国外追放に処されたらしい。

「何故だ？そなたはその組織を勝利に導いたのだろ？」

「俺が傭兵だったからさ」

傭兵という理由で国外追放をされたというのは余りに酷過ぎる話だ。

「まぁ、それ以外にも余りに目立ち過ぎたからもあるな」

正規軍以上に戦果を上げた事が正規軍には屈辱と取れたのだろう。

実際、正規軍より傭兵の方が戦果を上げれば何処の国でも屈辱と取るだろうが・・・・・・

「その腹いせだ、と思っている」

「酷い話だ」

ゲンハルト様は酒の入ったグラスをクイッ、と煽った。

他の者たちも憤りを見せたがテツヤ殿はまったく気にしていなかった。

「いいや。もっと酷い話もあるぜ」

別の戦争では勝利へと導いた傭兵部隊が何と味方に捕えられて処刑されたらしい。

そこでも傭兵部隊が正規軍より活躍した。

『・・・・・・・・・』

私たちは無言になった。

いや、なるしかなかった。

何と酷過ぎる話だ、と皆は思っているのは同じだ。

「酒の肴に話す事じゃなかったな」

テツヤ殿は苦笑した。

「・・・戦が終わった暁には、そなたをパレードの先頭に立たせて勲章を与える」

ゲンハルト様はポツリと漏らした。

「私も賛成だ。そなたには戦が終わったら何れ名誉ある地位に就ける」

プロイセン様もまた言った。

「別にそんな事はしなくて良い。まぁ、敢えて言うなら極上の酒が飲みたいな」

それだけで十分だ、とテツヤ殿は返した。

「いいや。それでは私の気が治まらんのだ」

「私もだ」

「俺は良いんだよ。それだけで」

尚も食い下がる二人にテツヤ殿は苦笑してまた返した。

そして立ち上がると親衛騎士団の様子を見て来ると言って一人、消えて行った。

残された私たちは何も言わず無言で背中を見つめ続けた。

幕間：鬼札と約束

天上に吊るされた蝋燭が灯された部屋の中で一人の男がテーブルに広げられた地図を見下していた。

「・・・失敗か」

反乱首謀者のリカルド・ウェスビーの片腕であり忠実なる下僕であるヴィクター公爵ことウルフはは地図を見下しながら伝令の言葉を聞いて一言だけ漏らした。

「予想はしていましたが、呆気ないものですね」

伝令は予想済みだったらしいが、少なくとも2日は持つと思っていたのが僅か1日で失敗した事には呆れ返っていた。

「あぁ。だが、フォース・リーコンは見事に偵察の任務を遂行してくれた」

お陰で見張り台などが分かり助かった、とウルフは言った。

「確かにそうですね。お陰で次の手でチェック・メイトが出来るかと存じます」

伝令はそれだけ言うと部屋を辞した。

「・・・だと良いが」

ウルフは伝令が出て行ったのを見計らってポツリと漏らした。

誰にも聞こえない位の小さな声で、だ。

自分達にはワイバーンとヘリがある。

これを使えばあそこを落とす事も可能と言えるだろう。

だが、ヘリは最初3機あったが1機は敵に倒されてしまい2機しかない。

また落とされたら1機だ。

ワイバーンも何匹か倒されてしまった。

それを考えるとおいそれと出す訳にはいかないが、このまま膠着状態を続けて行くのも問題である。

当初の計画ではもうこの国をリカルドの物にしていた。

そして中央貴族などの蛆虫を排除して気心のある者たちを迎え入れる予定だった。

所が計画は大きく崩れ始めた。

敵の指揮官が優秀であるとはウルフも分かっていた。

見た事も無いがヴァエリエに潜入したフォース・リーコンの話によればかなり出来る人物だと言う。

その人物が国外追放にされたのを幸いに兵を起こしたが、どういう

訳か舞い戻り自分達の計画を破壊し始めた。

『・・・目障りだな』

何とかしてこの指揮官をどうにかしないと駄目だ、とウルフは考えた。

しかし、こうも思った。

『是非とも一度、会ってみたいな』

あそこまで見事な采配を見せたのだ。

戦う者として会ってみたい、という気持ちはあった。

「入っても宜しいでしょうか？」

思案しているウルフはドア越しに聞こえた声に思考を中断した。

そして壁に張り付いて剣を抜いて「誰だ？」と訊ねた。

「はっ。ヴィクター公爵に会いたいと仰る人物が来ておるのですが、どうなさいますか？」

「会いたい人物？」

ウルフは誰だ？と思いながら「入れ」と言った。

ドアが開かれて兵が入り、ウルフに敬礼をした。

「おい。入って来い」

兵がドアに向かって声を掛けると、一人の男が入って来た。

それなりに贅が凝らされた衣装を身に纏っており上から下まで一寸の隙も無かった。

ただし、眼はどす黒く腹に何か顰めている。

『・・・胡散臭い』

ウルフは直感で男を判断した。

「お初にお目に掛ります。私、この国でギルドを営んでおりました者で御座います」

「そのギルドを営んでいた者が何用だ」

いた・・・つまり元が最初に来る。

どうせ碌な事をしなかったに違いない。

今の身なりも、碌でもない事をして手に入れたいのだ、とウルフはもう勘づいていた。

「はい。貴方様は、敵指揮官を知りたいのですよね？」

「その口ぶりから察するに知っているのか？」

「まぁ、指揮官かどうかは不明ですが少なくとも役に立つ情報だと

思います。その他にも貴方様達には役立つ情報が幾つかあります」
その他にも武具や食料なども用意した、と男は続けた。
「その情報とやらを話せ」
「その前に・・・頂きたい物があるのですが、ね」
「頂きたい物だと？」
「はい。私は貴方様に役立つ情報を差し上げます。ですが、無償でやるには割に合わないのですよ」
「・・・なるほど。取り消されたギルドの資格を戻して欲しいのか？」
男は首を大きく振った。
如何にも「滅相もありません」と自分を小さく見せている感じだ。
「いいえ。私はギルドの資格より別な物が欲しいのです」
「何だ」
「尽きましては、これをお読み下さい」
男は懐から羊の皮で出来た用紙を取り出すとウルフに恭しく差し出した。
「・・・・・・・・」

ウルフは手紙を最後まで読み終えると男を見た。
男は人懐こい笑みを浮かべていたが、眼が笑っていない。
『・・・サルバーナ王国王室の専属商人になりたい、か』
差し出された手紙にはそれ以外にも様々な内容が書かれていた。
その他にも前金として金貨３００枚を頂戴したい、と厚かましいにも程がある事まで書かれていたから驚いてしまう。
こんな条件を突き出すのだから余程、自分の情報によほど自信があるのだろう。
「如何でしょうか?決して後悔させないと約束します」
「・・・良かろう」
ウルフは連れて来た兵に金貨を用意しろと命令した。
「宜しいのですか?リカルド様に言わず・・・・・・」
現在、リカルドは貴族たちの所へ行って居ない。
何もせず逃げ帰った貴族たちの所へ行って何になると思うが、労いの言葉などを掛けて今の内に飼い慣らしておくのだ。
そうすれば、向こうは更に自分達に懐いて働くだろう。

別に戦だけが働く場所ではない。
戦ではない別の場所で価値が無くなるまで働かせるのだ。
その為ならリカルドは苦にも思わない。
この場合もまた同じ事。
役に立つなら金は惜しみない。
もし、立たないと判断すれば直ぐに殺して奪い返せば良いだけの話だ。

「構わん。用意しろ」

「は、はっ」

兵は敬礼をすると急いで出て行った。

「ありがとうございます。それから紙に書いた内容ですが・・・・・・」

「それは情報が正しければ後日、叶える」

男は笑みを浮かべながら一礼したが内心ではウルフを憤った。

『・・・流石はリカルドの片腕。なかなか食えない男だ』

だが、と男は思った。

『金が手に入るだけでも儲け物か。金さえあれば、また立て直しは計れる』

まだ機会はある。

それにこの男だけに取り繕う必要は無い。

他にも居るのだ。

『まさか内乱が起こるとは・・・・嬉しい事だ』

国外追放をされた自分だが、またここに戻って来れた。

内乱が起きるとは前々から聞いていたが、単なる噂話と最初こそ思った。

しかし、内乱を起こす者とは密通を行って情報を得ていた。

もし、内乱が起これば儲けられる。

それを単なる噂話で切り捨て損をするのは商人ではない。

そのため保険を掛けたのだ。

密通をしている間に有り金と伝手を利用して掻き集めるだけ集めた。

ある程度、用意ができた時にこの国に絶滅した筈のドラゴンが居るという噂を耳にした。

ドラゴンの眼は希少価値が高い。

それを手にすれば莫大な金が手に入る。

商人として金が欲しいのは当然。

一度は自分が養っていた兵を差し向けたが、無駄に終わった。

二度目は聖騎士団を利用して行かせたのだがそこで嘘がばれてしまい、自分は国外追放にされた。

そのせいで財産は全部、没収されギルドの資格まで奪われた。

『・・・今こそ恨みを晴らしてやる』

あの醜い外見をした男に・・・・・・・

場所は変わって城の中の廊下。

本来なら多くの使用人たちが走り回っている筈なのだが、今は一人の兵士だけが走っていた。

「えーと、金庫・・・金庫は・・・・・何処だ？」

兵士は慣れない城の内部に苦戦して何処に金庫があるのか分からない様子だった。

リカルド達が持って来た金は全て城に設けられた金庫に収めている。

鍵は金庫番の者から借りたが、その金庫番は別の用事があると言い自分一人で行く羽目になった。

そして迷った。

「あー、くそっ。俺、方向音痴だからわかんねぇ！！」

一人、兵士は愚痴を零した。

「どうかしたのかい？」

そこへ天の助けとも呼べる人物が現れた。

「これはヴィールング様」

兵士は目の前に現れた壮年の男、ヴィールングに敬礼をした。

ヴィールング・マレル。

サルバーナ王国親衛騎士団団長のフィーナ・マレルの叔父である彼だが現在はリカルドの配下になっている。

自ら配下に加わり現在は兵站の任務に就いている。

「酷く慌てているけど、どうかしたのかい？」

「あ、はい。実はヴィクター公爵様から金貨３００枚を持って来るように言われまして」

「金貨３００枚？随分と多いな」

金貨３００枚とも言えば平民が１年以上は何もせずとも暮らしてい

ける額だ。

「はい。実は・・・・・・・・・」

兵士はヴィールングに先ほどの事を話した。

「・・・なるほど。それじゃ金庫に案内しよう」

「助かります」

ヴィールングは兵士を伴い歩き出した。

『・・・資格を剥奪されたギルドか』

兵の隣を歩きながらヴィールングは心当たりのある人物を思い出した。

裏では様々な違法行為を行っていた男だ。

しかし、その男を利用していた点も否定できない。

国外追放されたと聞いたが・・・・・・・・・

『どさくさに紛れて戻って来たか』

或いは追放されたのは計算の内か・・・・・・

どちらにしてもまずい状況だ。

あの男は利益に関しては犬のように鼻が効く。

そして情報を何よりも重宝している。

それもそのはず・・・何せ自分の下で働いていたのだから。

だからこそ余計に性質が悪い。

自分の手の内は見通されているかもしれない。

だからと言って負けた訳ではない。

まだ手札はある。

『ここからが勝負だな』

娘の様子を見守らせる為に送った部下から指揮官の事は聞いていた。

その男が自分にとっては“鬼札”だ。

使い方を誤ればお終いではあるが、引き当てれば間違いなく自分の勝利は約束される。

逆に向こうの鬼札はあのハゲタカという者たちだろう。

今頃は自分と同じ臭いがするハゲタカに近寄っているに違いない。

それを考えれば向こうの鬼札はハゲタカだ。

若しくはワイバーンの傭兵。

その中の隊長。

あの男が事実を知っているかどうかは知らないが、もし知っていれば向こうは鬼札を2枚持つ事になる。

あの女隊長が知れば、自分も娘も殺されるのは眼に見えている。

いや、彼女は既に知っているのではないか？

僅かな可能性は捨て切れない。

遺書こそ始末したが、母子は始末していない。

始末しておけばと後悔しても遅い。

ヴィールングは直ぐに考えた。

『・・・どうすれば鬼札を引けるだろうか』

そして、どうすれば鬼札2枚に一枚で勝てるか。

難しい局面だが負ける訳にはいかなかった。

『マリー。君との約束は必ず守るよ』

生ある限り娘を傍で護り続ける約束を。

幕間・手札は揃った

ヘリが2機配置された演習場に一人の男が現れた。
ウルフことヴィクター公爵の元へ現れた元ギルドを経営していた男だ。
その男は目の前で腕を組む男二人を見ていた。
『あの男が着ていた服と同じ・・・・間違いない』
自分が得た情報は間違いなかった、と男は内心で笑みを浮かべながら言葉を放った。
「お初にお目に掛りますね？」
「そうだな。で、何の用だ？」
顔に大きな傷を持った男が訊ねた。
年齢は自分を国外追放にした男と同じ位だ。
「実は、貴方様に訊きたい事があるのですよ」
「訊きたい事？」
「えぇ。敵の指揮官を御存じですか？」
「あぁ。あのイエロー・モンキーか」

「イエロー・モンキー？」

「黄色い猿って意味だぜ。おっさん」

横に立つ男が滑らかな声で説明した。

傷などはないが眼は狂気に満ちており、顔に傷を持つ男以上に危険な気がする。

「黄色い猿ですか。なるほど。で、その黄色い猿ですが特徴はありますか？」

「特徴ならあるな。胸糞悪いほど態度が傲慢って事だ」

たかが猿の分際で自分達より上の階級である事が気に入らない。

「名前は覚えておりますか？」

「覚えてるさ。タカミ・テツヤ。奴の名はタカミ・テツヤだ」

この俺に消える事のない傷を残したんだ。

忘れろと言っても忘れられる訳が無い。

「まったくだ。俺の兄貴にこんなでけぇ傷を付けやがって・・・許せねぇ」

隣の男が憤りを露わにした。

「そうですかそうですか。私もその男には煮え湯を飲まされましたので気持ちは解かります」

「おっさんも？」

「えぇ。どうですか？詳しくその男・・・・タカミ・テツヤについて教えて頂けませんか？」

「あぁ。良いぜ。おっさんもあいつを怨んでいる様だし気が合いそうだ」

「ありがとうございます。まぁ、立ち話も何ですし何処かの酒屋でどうですか？」

「気が利くね。あぁ、行こうぜ」

男三人は一緒に城を出て酒場へと向かった。

酒場には既に多くの客で賑わっていた。

客は血の臭いを嗅いで駆け付けて来た戦争の犬たち・・・・傭兵達だった。

腰を降ろすと直ぐに給水が来た。

「あそこが良いですね」

男は目ざとく奥の空いた席を見付けると、二人を伴い向かった。

しかし、何処かやつれており賑わっているというのに何処か嬉しそ

うでは無かった。

それもその筈。

この者たちは反乱軍だ。

かつては心優しき女王が統治していた王国も今では反乱軍の根城となり、人々は笑顔を無くし絶望に打ちのめされている。

だから、給水がやつれた顔をしていても仕方が無いし、彼等もまたそんな事は気にしない。

ただ酒さえ飲めれば良いのだ。

「では、先ずあの男の過去について詳しく聞かせてもらえませんか？」

男は出された酒を二人に渡しながら訊いた。

「分かった」

顔に傷が残る男が語り手となり、もう片方の男（恐らく弟だろう）は酒を飲んでいる。

男は黙ってそれを聞いた。

「以上が俺の知っている事だ」

最後まで話し終えた男は温くなった酒を飲んだ。

「ありがとうございます。で、これからの事なんですが貴方達の主人は誰ですか？」

「俺らに主人なんて品の良い奴は居ない。まぁ、強いて上げるなら・・・ライアンナルだな」

「やはりそうでしたか。実は私もその方と懇意にしておりまして」

「そうなのか？で、それがどうかしたのか？」

「あの方と会ったのですが、言伝を頼まれまして・・・・・・」

「言伝？」

「はい。私たちが怨む男であるタカミ・テツヤを捕えて来い、との命令です」

「どういう事だ？この前は皆殺しにしろと言っていたが」

「実は・・・・・・・・」

男は声を顰めて二人に言った。

「・・・なるほどな。確かに、そいつは良い案だ」

殆ど戦に出れなかったからちょうど良い機会だ、と男は呟いた。

「ですが、もう直ぐ出るという事です」

「そうか。なら、その時にやれば良いんだな？」

「えぇ。出来ますか？」

「出来るさ。あいつは傲慢だ。だから、前線に何時も出るんだ」

そこを狙えば良い事だ、と男は断言した。

「兄貴。直ぐに行こうぜっ」

弟と思われる男がいま直ぐにでも、という感じで立ち上がろうとした。

「そう焦るな。あいつは逃げないさ」

「でもよ、急がないと他の奴等に・・・・・・・・」

「俺らの渾名は何だ？」

「ハゲタカだろ？」

何でそんな事を訊くんだ？と男は意味不明の顔をした。

「その通り。俺らはハゲタカだ。だったら、焦るな」

仮に他の奴等が獲物を取ったとしても、そいつを殺して奪い取れば良いだけの話だ。

「そうか。そうだな・・・・流石、兄貴だ！！」

弟は男をまるで神でも見るかのように狂気に満ちた瞳から崇拝する

眼差しに変えた。

「そう褒めるな。さて、それじゃもう少し詳しい話をするか」

「えぇ。そうですね・・・・ん？」

男は頷こうとしたが、とある人物が眼に止まった。

横顔だが、かなり美人の類に入るほどの美貌を誇っている。

髪の色は金色だった。

本当に金で出来ているのでは？と思うほど神々しい輝きを放っており、白い肌とは真逆の印象を受ける。

年齢は２０代前半から半ばという所だ。

着ているのはワイバーンの傭兵達と同じく黒と朱色を主体とした甲冑で肩当てはドラゴンの爪を模倣されている。

顔立ちが非常に出来ており、一種の芸術品と思わせる。

『あの娘は確か・・・・・・』

ワイバーンの傭兵部隊を纏めている隊長だ。

現在の親衛騎士団団長である女と何処となく似ているが似ていない。

いや、あの女ではない。

彼女の父親だ。

一度だけ見た事があるが見た目は正義感に溢れた正に画に描いたような騎士だった。

裏の顔はとんでもないが。

その男に顔立ちが似ている。

『まさか・・・・・』

噂は聞いていた。

だが、単なる噂だと思っていた。

情報を集めてみて“それらしい”話は聞いたが確たる証拠は無い。

無いのだが、あの女性を見る限りその噂も強ち間違いではなかったのか、と思った。

『これは・・・使えるな』

男はニヤリ、と笑みを浮かべた。

あの憎きタカミ・テツヤにも怨みはあるがもう一人の男にも怨みはある。

かつて自分が軍に在籍していた時の上官であり、親衛騎士団の長である女の父親の弟。

その男によって自分は軍から追い出された。

まだ忘れない。

否・・・忘れる訳が無い。

『貴様は人間の屑だ！！』

自分を完膚なきまで叩き伏せて罵倒する声。

あの時、自分は偵察でたまたま見つけた集落を部下たち共に襲い、男達を皆殺しにした。

そして生き残った女たちを皆で分け飽きたら売り払った。

それを何度も繰り返したが、それが知られてしまい追い出されたのだ。

『・・・これは一石二鳥だな』

あの男は幸いにも自分の近くに居る。

逃がす事は無い。

あの男と一緒に二人まとめて積年の怨みを晴らす好機だ。

「おい、どうかしたのか？」

顔に大きな傷を持つ男が声を掛けて来た。

「少々、席を外しますので酒を飲んでいて下さいませんか？」

「構わねぇぜ。お前の驕りだろ？」

「えぇ。勿論です。貴方様には私に代わり働いてもらうんです。金は厭いません」

好きなだけ飲んでくれ、と男は言った。

「気前が良いな。もし、ライアンナルが駄目ならあんたに雇ってもらいたいぜ。なぁ？」

男は弟に訊いた。

「俺は兄貴が行くなら何処までも付き合うぜ」

「ありがとよ。やっぱりお前は自慢の弟だ」

「なに言ってんだよ。兄貴が居るからこそ俺は居るんだ」

『兄弟の絆はかなり強いようだな』

見た目からは血に飢えた戦争の犬だが、兄弟仲は良いと言う事に男は内心で驚きながらも席を立ち女の所へ向かった。

「失礼しますが、貴方様はワイバーンの隊長ですか？」

男は一人で酒を飲んでいた女に訊ねた。

「答える前に名乗りな」

女は顔を向けず男のような口調で突っぱねて来た。

「これは失礼しました。私、この国でギルドを営んでいた者です」

「その男が何の用？」

女は酒が入ったグラスを口元に運びながら訊ねた。

「失礼ですが、貴方様の父君は・・・様ですか？」

「・・・・・・・・」

女の手が止まり、口元まで近付いていたグラスが徐々にテーブルへと戻された。

「・・・あんた、親父を・・・父上を知っているのかい？」

顔は向けなかったが左目だけを女は向けてきた。

金色の瞳だったが、獲物を見つけた獣のように鋭く戦慄を覚える。

「えぇ。ギルドをやる前は軍人でしたので」

しかし、男はそれを気にせず淡々と答えた。

「・・・座りな」

「失礼します」

断ってから向き合うように座った。

改めて見るとやはり似ている。

ただし、右目だけは金色ではなく赤い瞳をしていた。

明らかに義眼と分かる眼であったが精巧な造りでよく見なければ判断できないだろう。

「で、あんたは何処まで知っているんだい？」

「噂程度に」

かつて親衛騎士団団長は一人の女傭兵と恋をした。

ある戦場で出会った二人は互いに一目惚れして結ばれた。

そして子を儲けた。

結婚しようと考えていたが、家の事情で別の女と結婚する事になった。

だが、それでも諦められずに何度も逢瀬を交わした。

そして団長は両親が亡くなったのを機に妻子を捨て、その女傭兵と結婚しようとしたがその矢先に戦死した。

女傭兵は哀しみながらも子を育て失意の内に亡くなった。

「・・・この程度ですが、如何ですか？」

「よく調べたね」

大した情報力だ、と女は男を褒めた。

褒めたが、その口ぶりからは侮蔑と怒りで満ち溢れていた。

自分の触れて欲しくない部分を触れたからだろう、と男は判断した。

「貴方が怒るのは解かります。それからこれは質問ですが・・・“姉”さんの存在は知っておりますよね？」

「姉？あんな女を姉だと思った事は一度も無い」

女は怒気を込めた声と殺気を込めた両の眼で男を射抜いた。

その殺気に男は自分の身体が震えるのを感じた。

『流石は女の身で荒れくれ共を指揮しているだけあるな』

頭では冷静でいながらも身体は震えている。

しかし、この女は使える。

この女を使えば、自分が考えている報復は更に完璧に近くなる。

何としても、こちらの手に乗せなくてはいけない。

「・・・そう怒らないで下さい」

男は苦笑してみせた。

「二度と話をするな。したら、殺す」

対して女は未だに怒っていた。

「申し訳ありません。ですが、私は貴方の力になりたいのですよ」

「あたしの力に？」

女は怒気を抑えて興味深そうに男を見つめてきた。

「はい。貴方様は、この国の近衛兵になりたいのですよね？」

「あぁ。あの女は親衛騎士団長をしているがとてもじゃないが務まらない」

「そうでしょうね。ザンビア平野では逃げる部下を止める事が出来なかったそうですから」

「だから、あたしが代わりになる。いや、取り戻すんだよ」

あの女は自分の父親の子ではない。

本来なら自分が爵位と親衛騎士団の団長をこの手に掴む筈だった。

「裏で何をしたのか知らないけど・・・許さない」

自分から父を奪ったばかりか、爵位と団長の位まで奪い取った。

許せる訳が無い。

「お気持ちは痛い程、分かります。で、どうでしょうか？私が力を貸して差し上げます」

「あんたが？」

「はい。実は、貴方様の人生を滅茶苦茶にした女の父親が居るのですよ」

この城に、と男は言った。

「本当？」

女は身を乗り出す勢いで訊ねてきた。

「はい。ですが、ただで教えるのは些か割に合わないのです」

「何が望みだい？」

「実は・・・・・・」

男は話し始めた。

最後まで聞き終えた女は酒が入ったグラスを勢いよく傾けた。

「分かった。あたしがその男を連れてくれば良いんだね？」

「はい。そうすれば、私もその人物の名を教えます」

それからは貴方の自由。

その男を煮て食おうと焼いて食おうと八つ裂きにしようと自分は関知しない。

「分かった。で、その男の名前と特徴は？」

「名はタカミ・テツヤ。特徴は常に細長い棒を銜えており顔は醜悪の極みです」

まさに戦争をする為だけに産まれたような男だ、と言った。

「そうかい・・・分かった。約束は守りなよ？」

「勿論です。嘘は言いません」

「その言葉、忘れないでいたほうが良いよ」

もし、忘れたなら強制的に思い出させると女は言った。

「肝に銘じて置きます。では、これで失礼します」

男は一礼して席を立った。

『これで手札は揃った。勝負は決まったな』

相手の手札がどんな物か知りもしないのに男は早くも勝利を確信していた。

後にそれを後悔する事になるが、男がそれを知ることなど有り得な

かった。

第百三十七章：翼の死作戦（前書き）

今回、ハゲタカの兄の視点を入れます。

若干グロが入るのでご了承ください。

最近、テンポが悪いな、と思い誤字が無いかを探しているのですが、自分で書いておいて見付けられないという情けない目に遭っています。

ですが、見つけては直して行きたいと思いますし、テンポも回復させていくようにするので何時まで続くのか分かりませんが・・・よろしくお願いします！！

第百三十七章：翼の死作戦

私は史書を書きながら太字で作戦名を書いた。

“翼の死作戦”

この作戦は敵に捕らえられてしまった徹夜様を救出する作戦だった。

だが、それ以外にもヘリコプターを破壊する内容があったから翼の死なのだ。

と言ってもこれはフィーナ様が単身で敵陣に乗り込みに行って決まった。

いや、フィーナ様だけではなくリーザ様も単身、徹夜様を助ける為に向かった。

お二人が単独で乗り込む前は徹夜様を見捨てようとしていたのだから。

それは徹夜様自身も分かっていた事だしミーシャ大尉やイーグル１等軍曹も戦いに勝てるのなら仕方無い、と割り切っていた。

しかし、お二人が単独で乗り込んで少し経ってからヴィールング殿の部下が来て徹夜様が捕らわれている場所を教えた。

それをゲンハルト様が聞いて救出命令を出したので結果的に助ける事になった経緯だ。

今も思っている事だがお二人とも無茶をなされたものだ。

だが、それだけ責任を感じていたのだろう。

特にフィーナ様は自分がミスを犯したせいで徹夜様が捕らえられた上に見捨てると決まった事に負い目を感じていた・・・・・・・・

それが許せず単身、城に潜入して救出した。

まぁ、後でコッテリと油を搾られたのは言うまでもないが。

そしてこの時、フィーナ様は実の父親が誰かを知る。

叔父だと思っていたヴィールング様が父だと言う事実を・・・・・・

最初こそ驚き、怒り、悲しみ、泣いた。

噂が事実だったのだから当たり前と言えば当たり前ではある。

しかし本人の衝撃は計り知れない。

そして敵側に付いていた点も上げられる。

それはフィーナ様を、この国を護る為だと後に知る事になる。

あの方が居たからこそ害虫共を駆除できたのだ。

そんな事を思い出しながらまた史記を書く。

中央貴族を撃退してから1週間が経過した。

あれから敵は何度か来たが、まるでこちらの力を試す・・・挑発するような攻撃しかして来なかった。

それも弓兵や槍兵ばかりで肝心のフォース・リーコンなどはまったく姿を見せない。

それが何だか私には不気味でしょうがなかった。

テツヤ殿・・・少佐もそれは同じだったらしく「何かある」と言っていた。

その何かは分からない。

分からないが、嫌な予感だけはする。

私は城の城壁に立ちながら煙草を吸って、その嫌な予感を払拭しようとした。

煙草を吸う事で僅かだが、嫌な予感を払拭する事が出来た。

「どうした?浮かない顔だな」

ふと声を掛けられて振り返れば少佐が立っていた。

「いえ・・・何か嫌な予感がして」

「嫌な予感か」

少佐は煙を吐きながら私の言葉を復唱した。

「はい。ただの予感で済むならそれで良いんですが・・・・今日も前線に出るのですよね？」

「あぁ。嫌な予感ほど良く当たるが、一々気にしていたら戦も出来ないからな」

「そうですが・・・・・・」

「お前にはガルム達が居る。心配するな」

「・・・・・はい」

私は頷いて煙草を消した。

少佐は持ち場に行くぞ、と言って私を伴い向かった。

自分の持ち場に向かったが・・・胸騒ぎは治まらない。

それ所か余計に酷くなっている。

「どうしたんだい？さっきから浮かない顔をしているけど」

ヘンさんことフォックスが私の様子を見て大丈夫か？と訊いてくる。

「嫌な予感がするんです」

私は少佐に言った言葉と同じようにヘンさんにも伝えた。

「嫌な予感ね・・・当たらない事を祈るしかないな」

フォックスは私の肩を叩いた。

「大丈夫だよ。あんたにはあたしが付いているよ」

ガリシャこと山犬が私の肩を叩きながら不安な私を安心させようとした。

「その通りだ。我が主の方も問題あるまい。仮に遭ったとしても主なら打開する」

ガルムこと猟犬は少佐に絶対的な信頼を持っている口調で言い切って見せた。

私はそれに頷いて身を引き締めた。

敵が来た。

槍兵と弓兵が何時も通り見えた。

しかし、今回は鉄鎚兵、弩兵が居たし、フォース・リーコンにおまけに魔術師まで居た。

今回は力を入れているな、と私は思った。

魔術師は恐らくライアンナル伯爵かヴィクター公爵の兵だろう。

ヴィクター公爵の兵・・・戦った事は無いが、見るだけでも相当な力があると何となく分かった。

「今回は敵も力を入れているな」

まぁ、そうでないと勝てないからだろうな、とフォックスは呟き先ず魔術師とフォース・リーコンを始末するべきだなと言った。

魔術師は魔術を使用するから厄介だ。

しかし、詠唱を唱えなければならなず立ち止まらなければならない。

その時は完全に無防備状態だ。

そこを狙えば問題は無いのだが、敵も馬鹿ではない。

フォース・リーコンが彼等を護衛しているのだ。

私達と同じ武器を持っているから下手に近付く事も出来ない。

まったく性質が悪い。

悪いが・・・・・・

「面白い」

恐らく少佐ならこう言うだろう。

そして私も無意識だが、それが出ていた。

面白い。

厄介な敵ほど戦いたいとは思わないが、同時に面白いのだ。

共に倒せば万々歳だ。

少佐は傭兵になった理由を「極限の状態を楽しむ為」と言っていたが、これもその極限状態に入るのかもしれないな。

ますます少佐の影響が強くなったな、と私は思わずにはいられなかった。

「さぁて、行くか」

フォックスがステアーＡＵＧを構えた。

それに倣い私たちも構えた。

そして向こうが角笛を鳴らした。

今度はあっちが開戦の合図をしたのだ。

「先ずは魔術師とフォース・リーコンを始末だ」

他は後回しだ。

私たちは一斉にフォース・リーコンと魔術師に銃口を向けた。

― ― ― ― ― ―

「ほぉう。こいつはすげぇや」

俺は目の前にある黒い翼を生やしたヘリを見た。

俺の国が開発したヘリで嘘は吐かないとか抜かして馬鹿を見た集団の酋長から名付けられた。

この前、撃墜されたチヌークの代わりという事で“あいつ”から送られたらしくそれをこの男が受け取り俺の前に出した。

「お前、ライアンナルと知り合いと言ったが、あいつとも知り合いなのか？」

「いいえ。私はライアンナル伯爵様より頼まれただけです」

「そうか」

「失礼ですが、あいつとは誰ですか？」

「それは知らない方が良い。今は、な」

何れ知るだろうが、それを今教える必要は無いし義務もない。

「では、いつか教えると？」

「あぁ。それでこれを渡す時、ライアンナルは何も言わなかったか？」

「一言だけ」

私の指示なしにこれを動かすな、と。

「分かった。で、東にはワイバーンだけ行かせるのか？」

「いいえ。貴方様にも行けとの事です」

ただし、これは使うなとの事だ。

「何だよ。せっかくあるんだ。使わない手は無いと思うが」

こいつは今ある2機より強力だ。

だから、勇猛な酋長の名を頂戴したんだよ。

「そうですが、これを使うのは・・・この国を治める時に使うとの事です」

「・・・なるほどね。分かった。じゃあ、これは取り敢えずここに置いておくか」

城に持って行ってはジャー・ヘッド共に知られてしまう。

先ほどの言葉は恐らく“そういう事”だと取れる。

となれば、暫くはここ・・・こいつのアジトに寝かせておく方が得策だな。

弟・・・ルディには教えても良いだろう。

あいつは俺の言う事は聞くし口も堅い。

今まであいつに隠しごとなんて無かったししなかった。

あいつと今まで二人だけで生きてきたんだ。

今もそしてこれからもそれは変わらないだろう。

「弟に話しても良いだろ？」

「えぇ。構いませんよ」

「そうか。それで他に用事は？」

「無いです。敢えて言うなら・・・死なない程度に連れて来て下さいね？」

私も怨みを晴らしたいので、とこいつは低い声で俺に伝えてきた。

やれやれ。俺も人の事はとやかく言えないが、あいつも・・・タカミ・テツヤも怨みを買っている様だな。

今でも顔が疼く。

あいつに殴られた痕が。

だが、同時に思う。

あいつとまた戦いたい、と。

今まで戦ってきた奴等は爺や女ばかりで話にもならない。

あいつ位が俺の心を満足させてくれる相手だ。

怨みもあるが、満足させてくれる相手でもある。

「まぁ、腕の1本程度は無くても良いんだろ?」

俺は胸ポケットから愛煙草のラッキー・ストライクのソフトを取り出して銜えた。

それから直ぐにジッポーで火を点けた。

「えぇ。あの男がその程度で死ぬとは思えませんので」

「結構だ。それじゃ行って来るぜ」

俺は煙をまた吐きながら歩き出した。

雪道を歩きながら俺は珍しく昔を思い出した。

「あの時も・・・こんな雪道だったな」

初めて殺人を犯した時だ。

相手は俺とルディの養い親とは名ばかりの飲んだくれ親父と俺らを外に放り出した牝犬。

ルディがあんな風になっちまったのもあの二人のせいだ。

あいつ等が何度も何度もルディを殴り蹴るを繰り返して、おつむを

空っぽにしちまった。

餓鬼だった俺は可愛い弟を護る為にあいつ等を殺した。

ナイフで後ろから心臓目掛けて刺してやった。

何度も何度も。

血の息を吐きながら奴等は死んじまった。

俺とルディは有り金を全て持ち逃げた。

それからは乞食みたいに生きてきたが、やがて軍隊に入った。

別に軍人になりたい訳じゃなかった。

ただ・・・忘れられないんだよ。

あの感触が・・・感覚が。

人を殺した時、俺は一種の高揚感に見舞われた。

酒より、薬より、女より・・・何よりも気が高ぶり気持ち良かった。

軍隊に入ればそれが出来ると思った。

運が良く俺らは入れた。

神なんて糞喰らえだが、その時は心から感謝したぜ。

そして互いに空挺部隊に配属された。

別々だが、それで良かった。

俺はヘリの操縦も覚えられたし、あいつは飛行機の操縦を覚えられた。

だが、退屈だった。

何時まで経っても同じ事の繰り返しで退屈極まりない。

ルディ何かは薬で日頃のストレスを発散させたが、俺の方は専ら訓練で相手を殴る事で発散させた。

それが原因でどちらもＭＰに捕まって豚箱に放り出されたが直ぐに出た。

それから傭兵になり、二人で数々の戦場を駆け巡った。

傭兵になってからは楽しかったな。

毎日毎日、人を殺し続けたからな。

金なんて他の奴等から奪い取れば良いだけだから問題じゃない。

そんな時にあいつと出会ったんだ。

タカミ・テツヤと。

平和ボケしたイエロー・モンキーが傭兵なんてお笑い草だ。

おまけにくだらねぇ糞溜めみたいな考えを持っているから腹を抱えっちまう。

だが、気に入らねぇ。

俺らと同じく空挺部隊に所属していた事も気に入らねぇが・・・俺らと同じくせに自分はそうではないと言い切った事が気に入らねぇ。

俺らは金を貰って生きる人種だ。

それは自分の為だ。

それを奴は否定して他人の為に戦っていると抜かしやがった。

それが偽善的に聞こえて頭に来た。

殺そうとしたが・・・逆に殺された。

あいつ一人で俺とルディが指揮する・・・“コンドル部隊”が壊滅された。

今でも忘れねぇ。

ルディを撃った銃で俺を狙った奴を。

『地獄に帰りな。ベイビー』

そして俺らは死んだ。

だが、今は生きている。

どうしてかは知らないが、俺らは生き返っている。

嬉しい事に奴もここに居る。

再会した時は油断したが、今度は違うぜ。

てめぇを捕まえたら最初に何をするかもう決まってるんだ。

「てめぇをぶん殴ってやる」

俺を殴った時と同じようにてめぇを殴ってやる。

それからは楽しい一時の始まりだ。

じっくりと可愛がってやる。

俺は煙草を指で挟んで煙を吐いた。

第百三十八章：捕らわれの身に

私たちはフォース・リーコンと魔術師を標的に攻撃を仕掛け、少佐達は弓兵と弩兵を中心に狙っていた。

「しかし、鉄鎚兵は豪く攻撃的だな」

フォックスは数人で突っ込んできた鉄鎚兵を撃ち殺しながら、その攻撃精神に驚いていた。

鉄鎚兵は“モーニング・スター”と呼ばれる打撃武器を使用しているが、こちらの鉄鎚兵は棍棒に鎖を取り付けて繋いでいる。

これにより盾で防御しても盾を通り越して相手に攻撃できる。

ただし、これにはかなり熟練した腕が求められるから素人が使えば誤って自分に返って来る。

これと皮の盾を持ち果敢にも突撃を敢行する彼らにはある種の恐怖を感じる。

仲間が攻撃される度に獣のような雄叫びを上げて突撃して来る。

仲間が死んでもその死体を踏み付けても前進して来るのだ。

それを支援するように弓兵と弩兵が援護射撃をしてくる。

弓兵はどちらかと言うと数に物を言わせて攻撃してくるのに対して弩兵は装填時間が長い分、狙いを定めて撃っている印象を受けた。

現に弩兵の狙いは正確だ。

しかも、威力がかなり高いから堪らない。

「ある意味、向こうのスナイパーだな」

私は感心しながらもこちらに狙いを定めて来る弩兵の一人を狙撃したが弩兵もまた狙撃して来た。

ヒュン

空を切り同時に着弾した。

彼が射た矢は私の頬を掠めたが、私の弾丸は彼の心臓を貫いた。

私はそれを無表情に眺めたのだろうな。

実際、顔がまるで動いていないのを感じているからだ。

自然な動作で逆Ｌ字のボルトを動かして空の弾を排出し次弾を装填した。

ツウ、と頬を伝い血が流れるのを感じるが、然して問題ではなかった。

そしてまたフォース・リーコン達を狙った。

私たちが狙いを定めると彼等は魔術師を後ろに下げながら後退した。

そして森林地帯に隠れようとする。

それをフォックスがグレネードで外に出そうとするが、短い詠唱で防御を張っているのか爆発はしても損害は無い。

しかし、詠唱を唱えて手を前に突き出す瞬間がある。

そこを狙っていき戦闘離脱をさせている。

暫くそんな攻防が続いていたが・・・・・・・・・

グラアアアアア！！

ドラゴンに近い鳴き声が空中から聞こえてきた。

同時にプロペラ音まで聞こえてくる。

まさか・・・・・・・

音がする方向を見ればヘリが2機いた。

そして上を見上げればワイバーンが何匹も上空から急降下して来るではないか！？

上空を高飛行で飛ぶ事によりこちらに気付かれないようにしていたのかもしれない。

いや、違う。

ヘリが到着するのに合わせて降下した。

つまり、ずっと上空で待っていたのだ。

そして私たちの居場所を確認した。

不味い。

私は緊急避難口を塞いでいた板を一撃で蹴り落とした。

「速く入って下さい！！」

私の叫びに急いで潜る。

そして私が最後に潜った。

直ぐに見張り台が爆発した音が上から聞こえてきた。

爆発は上と横に移動すると以前、少佐に教えられた。

だから、下に逃げればある程度は避けられる。

そのため見張り台の直ぐ下を緊急避難口にしたのだ。

お陰で助かった。

滑り台となっているためスルスルと下りる。

急いでドアを開けて外に出て周囲を確認する。

「このまま後方まで下がるぞっ」

フォックスはステアーＡＵＧを乱射しながら後ろに下がる。
私はモーゼルからＡＫ７４Ｓ－Ｕに持ち替えて後退した。
鉄鎚兵が私たちを見るなり雄叫びを上げた。
「敵が居たぞ！！」
ワァ、と声を上げて突撃して来る。
私たちはそれを撃つが怯む様子がまるで無い。
上からはワイバーンが急降下で見張り台などを破壊している。
ヘリはまだ来ていないが、飛びながら攻撃を仕掛けてきた。
ミサイルとバルカンで手当たり次第に攻撃をして破壊して行く。
まさしく翼の生えた悪魔と言えなくもなかった。
急いで後退していくが、押されて行く。
魔術師も詠唱を唱えて攻撃して来た。
炎が放たれては森を焼き尽くして行く。
くそっ。
何とかしないと・・・・・・・・・・

「行くぞ！野郎ども。敵を皆殺しにしろ！？」

『おぉ！！』

後退する私たちを抜き、馬に乗ったヴィルヘルム元伯爵が大剣ーーツヴァイハンダーを振り回しながら部下を率いて果敢にも突撃した。

これに鉄鎚兵と槍兵が応戦した。

「あいつ等を援護するぞっ」

フォックスが立ち止り遮蔽物に身を隠しながら援護射撃を始めた。

私達もそれに倣い援護射撃をする。

シュヴァルツフント達は槍兵を糸も容易く蹴散らすと鉄鎚兵と戦いを始めた。

それを弩兵と槍兵などが狙うが、そうはさせない。

私たちがそれを援護する。

魔術師たちも味方を巻き添えにする事は出来ないのか迷っている。

ただし、ヘリとワイバーンだけは例外で味方諸とも殺そうとしている。

こんな時に限ってＲＰＧもスティンガーも持っていない事を悔いる。

こういう事も考えておかなければならないのに・・・不覚。

猟犬が背負っていた無線機がノイズ音を出し始めた。

「こちらリンクス」

私は無線機から受話器を取り渾名を述べた。

『こちら鷹。そちらの現状は？』

「ただ今シュヴァルツフント達が敵兵と交戦中。私たちは援護中です」

『俺らの方も同じだ。そちらにフォース・リーコンの大半が集中している。直ぐに援軍を寄こす』

『少佐。しかし、それではこちらが・・・・・・・』

要らない荷物の声が聞こえてきた。

つまり、少佐は自分の方に居る兵を向かわせる気か。

『向こうの奴等を片付けられるなら構わん。・・・・伏せろ！！』

爆発音が同時にして通信が途絶えた。

「少佐？どうしました？少佐ッ」

私は何度も応答してくれと願った。

しかし、何も応答は・・・無かった。

「少佐に何か遭ったのか？」

フォックスが私に顔を近づけて訊いてきた。

「爆発音がして通信が途絶えたんです」

「そう言えば、あっちに一角のワイバーンが向かったな・・・ま
さか」

フォックスは最後まで言う前に言葉を閉じた。

「リンクス。君と山犬で少佐の所へ迎え」

ここは俺と猟犬で何とかする、とフォックスは言った。

「しかし・・・・・・」

「いいから行きな。俺の代わりに無事を確認して来てくれ」

「・・・分かりました。行くぞ、山犬」

「了解ッ」

山犬は銃弾を掻い潜り突進して来た鉄鎚兵の身体に４５Ａ．Ｃ．Ｐ
弾を２０発分お見舞してから私に続いた。

『テツヤ殿。無事でいて下さい』

私は無事を祈りながら嫌な予感が当たった事に誰にでもなく憤りを向けたくなった。

―　―　―　―　―　―　―　―　―

俺は見張り台に取り付けておいた緊急脱出口から脱出して直ぐに突っ込んで来る敵兵をＡＫＭアサルトライフルで撃ち殺した。

最初は歩兵だけと思っていたが、リンクス・・・ランドルフの嫌な予感が気になりスティンガーを持って来させようとした矢先にそれは起こった。

蜥蜴が空中から急降下さしずめ急降下爆撃機の如く見張り台を次々と破壊し始めたんだよ。

歩兵で見張り台の位置を再確認しヘリが来るのを合図に急降下して来た。

完全に敵の罠に嵌った。

直ぐに緊急脱出口で外に出ると、敵兵がこれ見よがしに突っ込んできた。

フォース・リーコンも何人か居るが、数が少ない所を見ると別れたと見て良いだろう。

俺たちは直ぐに遮蔽物に隠れて奴等と交戦を開始したが、そこへワイバーンの攻撃が来て後退も前進も出来ない。

厄介だな。

しかし、俺たちより厄介なのはリンクスたちの方だ。

向こうの方からは俺たちよりも爆音などが激しい。

直ぐにフォース・リーコン達の大半が居るのだと理解した。

この前の1発が効いたからかは不明だが、向こうの方に集中している。

リーシャによればそれは魔術師が居るからだろう、と説明された。

魔術師なんて会った事もないが、話によれば俺たちの世界で魔法と呼ばれた物を駆使する輩らしい。

しかし、呪文を唱える時は完全な無防備状態であるらしい。

それを考えるとフォース・リーコンの大半が居るのも頷ける。

護衛か。

だから、こっちはワイバーンの攻撃だけだと推測する。

となれば・・・・・・・・

「おい。無線を寄こせ」

俺は直ぐ横で無線機を背負っていた奴に言い無線機でリンクスたちの状況を訊ねた。

リーシャの読み通り魔術師が居るらしい。

更にヘリも向こうに集中している。

不味いな、と直ぐに理解すると同時に決断した。

「おい。何人か応援に行け」

ここにヘリは来ていないしフォース・リーコンも少ない。

ワイバーン位なら何とか出来る。

「しかし、少佐。それではこちらが」

俺の横でフィーナがそれではこちらが不味い、と言おうとした。

「構わん」

俺はフィーナの意見を遮り、速く行けと皆に眼で言った。

その時だった。

グラアアア！！

１匹の蜥蜴が甲高い叫び声を上げてこちらに向かってきた。

1角のワイバーンだ。

それに乗るのは黒い鎧に身を包んだ乗り手で手には1本槍が握られていた。

鋭く尖った槍を掲げてそいつは真っ直ぐに俺の方へと向かっていた。

ワイバーンの口が膨らむ。

「伏せろ!!」

俺は無線機を放り投げて叫んだ。

フィーナ達もそれに倣い伏せた。

直ぐ間近で爆発音がすると同時に灼熱の炎が周りを包み込む。

「くそっ」

フィーナがドラグノフを構えて狙いを定めて引き金を連続で引いた。

しかし、それを巧みに避けてみせる1角のワイバーン。

「ははははははっ。下手くそが!!フィーナ・マレル。その首、貰うよ!?」

相手はフィーナの名を言いながら槍を振り回しながら突撃してきた。

「撃て!!」

俺は他の奴等に命令してＡＫＭアサルトライフルの引き金を引いた。

一斉射撃を物ともせずに奴は突っ込んできた。

着弾しているにも関わらず迫って来る。

奴の瞳が僅かに見えた。

フィーナに対する殺気に満ち溢れているが、憎悪も宿されていた。

どういう関係か？

と考えたが今はそれ所ではない。

もう少しでフィーナがやられる。

フィーナは避けようともせず真正面からドラグノフを撃っている。

馬鹿が。

そういう時はアサルトライフルに持ち替えろ。

そして同じ所で撃ち捲るな。

そう教えた筈なのにこいつはしない。

相手が真正面から突っ込んで来るから、それを真正面から迎え撃つ積りか？

そんな騎士道精神は捨てろ、と教えた筈なのにこいつはそれをやろ

うとしている。

俺は舌打ちをして地を跳んでフィーナを抱えるように横に飛んだ。

だが、槍が俺の脇腹を刺し貫いた。

身体の中に鉄の感覚が広がり、風が入って来る気がした。

同時に力が一気に抜けるのも感じた。

俺を貫いた槍を高々と持ち上げて宙高く飛び上がった。

「少佐！！」

フィーナが地面に仰向けに倒れる形で俺に向かって叫んできた。

「ははははははっ。この男は貰って行くよ。フィーナ・マレル。今度はあんたの首を頂戴するからね！？首を洗って待ってな！！」

乗り手はフィーナを嘲りながら更に宙高く飛ぶ。

「テツヤ殿ッ！！」

リンクスの声がした。

見ればリンクスが山犬と共に来ていた。

馬鹿野郎。

お前等の方に援軍を送るのに何で来るんだよ。

しかも、作戦中は少佐と呼べと言っただろうが・・・・・・・

「やっぱりあんたがテツヤかい」

ワイバーンの乗り手が槍で貫かれたままの俺を見てきた。

身体から力が抜けて行くと同時に意識が朦朧としてくる。

血を流し過ぎた。

このままでは出血多量で死んじまうな、と頭の中で冷静に捉えていた。

「ふぅん・・・見るからに骨がありそうな男だね。楽しみだよ」

これからあんたを痛い目に遭わせてやる、と乗り手は言った。

声から判断して女か。

女の身でこんな蜥蜴を乗り回すとは恐れ入る。

「・・・寝言は寝て言え」

俺は血が混ざった唾を顔に吹き掛けてやった。

顔半分を隠す兜が俺の唾と血で汚れる。

直ぐに貫かれた脇腹を拳で殴って来た。

鈍い痛みが身体を走り、俺は顔を歪ませた。

「本当はあの女も一緒に連れて行って可愛がってやりたい所だけど、今はあんたを徹底的に可愛がってやるよ」

この高貴な産まれである自分の顔に唾を吐いたのだから、と女は言いまた俺の脇腹を殴った。

そこで俺は意識を失った。

第百三十九章：これからの事

私は硝煙などが未だに噴き出す銃を地面に降ろした。

1角のワイバーンが消えると同時にヘリとワイバーンは退却して行った。

まるでそれが合図と言わんばかりにだ。

どういうことだ？

あの状況なら私たちを倒す事は出来た筈なのに、それを行わずに逃げた。

他の敵も空中の援護が無いと不味いのか直ぐに退却して行った。

まったく理解できない。

なぜ逃げる？

私たちを追い込めたのに、だ。

私は暫し考えた。

目の前で少佐が・・・テツヤ殿が槍で貫かれて連れ去られたというのに酷く頭は冷静だった。

先ほどまで取り乱していたのに私はもう冷静さを取り戻していた。

私の視線の先には要らない荷物が呆然としていた。

走りながら見ていたが、テツヤ殿は要らない荷物を助ける為に捕まったのだ。

この女がドラグノフで突撃して来る1角のワイバーンを撃っていたが、あろうことかそこから移動しないで撃っていた。

本来なら避けるなどして攻撃する方が望ましい。

あの速さで突撃するのだから急に避けられたら回避などは難しい。

テツヤ殿ならそうする筈し、私達にもそう教えた。

この女もそれを教えられた筈なのに、どういう訳か真正面から受けて立った。

まだ正々堂々と敵を迎え撃つなどという馬鹿げた事に捉えられているのか？

もし、それに捉えられていると言うのなら私は迷わずこの女を殺す。

ベレッタで何度も撃ち込んで殺してやる積りだ。

身体が勝手に動いた。

そして呆然とする要らない荷物に近付いて、横っ面を引っ叩いた。

「何を呆然としているんですか？」

私は頬を抑えて倒れる要らない荷物を見下した。

「貴方のせいで少佐は捕まったんです」

「・・・・・・・・」

要らない荷物は何も言わずに黙っていた。

「貴女は敵を真正面からドラグノフで狙っていた。あれならＡＫで撃った方がまだマシです。そして避けるべきだったのに馬鹿正直に真正面から動かずに居た。貴方は最低で馬鹿で救いようのない愚か者だ」

辛辣な言葉を私は絶えず要らない荷物に吐き続けた。

「貴女みたいな女を護る為に少佐は犠牲になった。貴女みたいな女を助ける必要性があったのか甚だ疑問だ。まったく疑問で腹立たしい」

要らない荷物はゆっくりと立ち上がった。

「・・・言いたい事はそれだけか」

その言葉にはまるで罪悪感が無かった。

「貴方は自分が仕出かした事に責任を感じないのですか？」

「責任を感じたから私に死ねと言うのか？それとも少佐の代わりになれとでも言うのか？」

これに私は何も言えなかった。

「少佐は敵に捕まった。しかし、まだ死んでいない。後で死ぬかもしれない。だが、敵は撤退した。今は居なくなった少佐よりこれからの事を考える方が先決だ。違うか？」

「・・・・・・・・・」

私は何も言えなかった。

この女に口で言い負かされるとは思いもしなかったし、ここまで正論とも言える言葉を吐かれた事も無かった。

いつも感情を爆発させて剣を振り回していたのに・・・・・・・・・・・・・

「フィーナ中尉の言う通りだわ」

リーザ中尉が私と要らない荷物の間に割って入った。

「ランドルフ１等兵。貴方と山犬は直ぐに元の陣地に戻り仲間に報告しなさい。後で指示を出します」

それまでは待機、と言われた。

「・・・・了解しました」

私は間をおいてから頷いた。

そして山犬に連れられて元来た道を戻った。

山犬は私を落ち込んでいる又は怒っていると取ったのだろう。

私を慰めるように話し掛けてきた。

だが、私はその慰めを受け取らなかった。

いや、受け取れなかったのだ。

テツヤ殿が連れ去られる所を見ながら冷静で居る自分が居た。

要らない荷物を殴って辛辣な言葉を吐いた時でさえ冷静だった自分が居た。

私はここまで薄情な冷たい男だったのか?と自問自答したくなるほどだ。

何時の間にか陣地へと戻った私と山犬。

私に代わり山犬がテツヤ殿の事を伝えた。

皆どよめいたが、慌てたりはしなかった。

どうしてそんなに慌てないのだ?

そしてどうして要らない荷物に怒りを感じない?

そう思ったが、改めて思った。

要らない荷物は確かに正論を私に言った。

テツヤ殿は敵に連れて行かれたが、まだ死んでいない。

ミーシャ大尉の話を聞いた限りあれ位では死なないだろう。

それに敵も捕まえたからには簡単には殺さない筈。

それに今は居なくなったテツヤ殿には申し訳ないが・・・・いや、本人もそう望んでいる筈だ。

今は、これからの事を考えるべきだ。

それを思うと不思議と感情が戻って来る。

私は女神の抱擁を銜えて火を点けて感情が表に出るのを抑えた。

「坊や。大丈夫か？」

ヴィルヘルム元伯爵が身体中を血で染めた状態で私に訊いてきた。

少なくとも数人以上は殺しただろう、と思えるほど身体が返り血で汚れていた。

「何とか」

私は煙を吐きながら答えた。

「そうか。しかし、我が王も馬鹿な事をしたものだ」

指揮官が前線に出るのだから、とヴィルヘルム元伯爵は言ったが、

その声に侮蔑は込められていなかった。

「ですが、テツヤ殿が前線に出たからこそ士気は保てられたと思います」

「その通り。指揮官が前線に出れば自ずと士気は高まる。危険ではあるが、求められる要素だ」

「テツヤ殿は大丈夫ですかね？」

「敵もわざわざ我が王を捕えたんだ。何かしらの理由があるのは明白だ。直ぐに殺したりはしないだろう。それでも拷問されるかもしれないが、な」

「それは傭兵だから、ですか？」

「それもある。それに奴等は大勢の仲間を殺されたんだ。そのお返しもあるだろうな」

「・・・・・・・・」

私は口から離していた女神の抱擁を銜えた。

それから数分後、無線で「今すぐ帰って来い」との命令が来たので私たちは城へと帰還した。

帰還するとプロイセン様、ゲンハルト様、ミーシャ大尉、ワイド中尉、イーグル１等軍曹、エドリアス大尉、レオンが居た。

「少佐が敵に捕まったってのは本当かい？」

ミーシャ大尉が私たちの前に出て訊ねた。

「はい。1角のワイバーンの乗り手に槍で貫かれて・・・・・・・・・」

要らない荷物が代表として答えた。

「そうかい。それで被害は?」

ミーシャ大尉は眉ひとつ動かさずに淡々と質問を続けた。

それは要らない荷物も同じで淡々と答えた。

最後まで聞いたミーシャ大尉は「直ぐに見張り台を直し襲撃に備えろ」と命令を下すと解散させた。

去ろうとする私をミーシャ大尉が呼び止めた。

私は大尉と二人切りで話し合う事になった。

「あんた、あの女を殴ったんだってね?」

「はい。・・・呆然とするあの女のせいでテツヤ殿は敵に捕まった。それを思うと身体が勝手に動いたんです・・・・・・・・・・」

ギュッと私は拳を握り締めた。

大尉と二人だけという事もあり、感情が爆発しそうだった。

「あんたの気持ちも分かるよ。あたしだって腸が煮え繰り返る勢いだ。だが、あの女の言っている事は正しい。それは解かっているんだろ？」

「はい。でも・・・・・・・・」

私は瞼が熱くなってきた事に気が付いた。

涙が出るのを必死に拳を握り締めることで思い留まらせる。

見られないように俯く私の頭を大尉がポンポンと叩いた。

「あんたのせいじゃないよ。それに今は泣いている場合じゃない。気をしっかり持ちな。さっきから見ていたけど泣きそうだったよ」

だが、泣くな。

泣いては駄目だ。

泣いても何の解決にもならない。

なら、歯を食い縛りこれからの事を考えるのだ、と大尉は語り続けた。

「・・・はい・・・はい」

私は二度も頷いた。

既に涙声で泣くな、と言われたのに・・・涙は溢れ出して止まる事を知らなかった。

第百四十章：使い捨ての兵隊（前書き）

これまた面倒な事になりました。（汗）

ランドルフの視点、徹夜の視点、そしてハゲタカの視点です。

最近、私生活が忙しい上に些かネタが少なくなってきたので暫くは間をおいて更新するかもしれませんが、出来るだけ早く、そして皆さんを満足させられるように頑張りたいと思います。

第百四十章：使い捨ての兵隊

私はレオンと共に破壊された見張り台に来ていた。

下の部分は無事だが、見張り台は見る影もない。

「・・・テツヤ殿は大丈夫だよね？」

レオンは下から上げられてきた木材を持ちながら呟いた。

私に訊いているようにも聞こえたが、祈るようにも聞こえた。

「大丈夫だよ。狼人であるガルムと戦って生きているんだ。簡単には死なないよ」

私も自分に言い聞かせるように言葉を紡いだ。

テツヤ殿なら大丈夫。

そう思うことで弱気になる自分を叱咤したする意味もあった。

「そうだね。だけど、敵はどうしてテツヤ殿を捕まえたんだろ？」

レオンは笑顔になったが直ぐに真顔で私に訊ねてきた。

「私もそれを考えたんだけど・・・分からない」

テツヤ殿は前線指揮官だが、それを敵は知る筈が無い。

しかも、どうしてテツヤ殿が指揮官だと分かったんだ？

誰かに訊いたのか？

ゲンハルト様に仕えていた害虫共なら知っているかもしれないが、指揮官とは知らない筈。

ハゲタカ共か？

あいつらならテツヤ殿と面識があるから有り得なくは無い。

有り得なくは無いが、どうして連れ去る必要がある？

身代金を要求するのか？

交換条件でサラ様とエリーナ様を引き渡せる積りか？

それとも降伏させる気か？

情報を得る為か？

士気を下げる為か？

どれもこれも有り得そうな事だ。

そして気になる事は・・・拷問されないか、だ。

拷問は罪人などにしか行わないのが普通ではる。

捕虜に対しては人道的な対応が望まれるのだが、リカルド様は分か

らない。

あの方の気持ちは私としても理解できる。

となれば、勝つ為には手段を選ばない事だろう。

そうなるとテツヤ殿を拷問に掛けて否応なく要求を飲ませる可能性が極めて高い。

助けに行きたくても、今の状況を考えると簡単ではない。

悔しいが、待つしかない。

ミーシャ大尉達がこれからどうするか決めている最中だ。

私たちはそれを待つしかないのだ。

歯痒い・・・自分は何て無力なんだ、と私は痛感させられた。

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

ー ー

横向きにされた棒で両腕を固定された俺は身動きが取れない状態だった。

気絶した俺は直ぐに強制的に意識を目覚めさせられた。

貫かれて痛い脇腹を蹴られて、血を吐きながら目を覚ました俺が最

初に見たのは地獄へと送り返した筈の男だった。

「よぉ、気分はどうだい？イエロー・モンキー」

ラッキー・ストライクを蒸かしながら奴は俺を嘲った。

「はっ・・・最悪の気分だ。てめぇみたいな下種の面を目覚め一番に見たんだからな」

唾を吐きながら俺は言ってやった。

「相変わらず胸糞悪い奴だ」

奴は煙草を吸いながら跪く俺と視線を合わせた。

「覚えてるか？この傷を」

奴の顔には針で縫われた痕がある。

誰が付けたか？と言えば俺だ。

こいつがまだ年端もいかない少女を強姦しようとして俺が殴った。

そして出来た傷だ。

「まだ痛むんだよ。俺の色男を台無しにしやがって」

「色男振りを更に上げてやったんだ。感謝しろ」

「そうかい。なら、お礼をしなくちゃ・・・な！！」

奴の拳が俺の右頬を打った。

歯が何本か折れた上に口の中に鉄の味が染み渡る。

今度は左から来た。

頭が二日酔いになったようにグラングラン揺れ動く。

顔を下げてしまう俺の顎を蹴られて強制的に上を見せられる。

「痛いか?痛いだろうな。その脇腹も含めて」

奴は煙草を俺の脇腹に押し付けて来た。

「ぐぐぐぐ・・・・・・・・・」

傷口に熱い火が来て俺は呻き声を上げた。

「ははははっ。最高だぜ。てめぇが苦痛に歪む顔!!ずっと見ていたかった顔だ!?」

奴は呻く俺を見ながら嘲笑ってみせた。

くそったれが。

俺は内心で毒づきながら、ここは何処か?と思った。

エスカータ城ではない。

見れば周り森林だったからだ。
その前に小屋があるから、誰かの隠れ家か？
「いやー。よくやってくれましたね」
奴の背後から男が現れた。
あいつは・・・・・・・・・・・・
「私を覚えておいでですかな？タカミ・テツヤ殿」
男は俺を見ながら口端を上げて嗤った。
「あぁ。覚えているさ。ドラゴンを退治させようとしたギルドの頭目だろ？」
俺とランドルフにメジュリーヌの討伐を依頼したギルドの頭目がこいつだ。
国外追放されたというが、戻って来たのか。
「その通り。貴方様に捕まえられたお陰で財産は没収の上ギルドの資格は剥奪されて国外追放に処されました」
「殺されなかっただけマシと思え」
俺ならこんな奴は直ぐに殺す。
本来なら死刑だって有り得るのを女王が慈悲の積りで国外追放に処

したのだ。

それなのに舞い戻って来るとは呆れ果てるもんだ。

「マシ？どうやら貴方は私の気持ちが分からないよう・・・ですね！！」

今度はこいつが俺をしこたま殴ってきた。

「貴様のせいで私は全てを失ったんだ！貴様ごとき薄汚い傭兵のせいで私はギルドを追放されたんだ！！貴様のせいだ！？貴様のせいだ！？」

罵倒を浴びせながら俺を殴る。

殴られながらも拳がそれなりに鍛えられていると感じる。

素人が人を殴れば自分の方が痛い。

それなのにこいつは拳を傷めないコツを掴んでいるし、相手を不能にできる個所を知っている。

闇雲に殴っていない。

つまり、元は何処かに所属していた奴ということか。

しこたま殴った男は荒い息を整えながら俺から離れた。

「貴方にはまだ利用価値があるから殺しません。ですが・・・無事では済ましません」

これから痛い思いを沢山してもらう、と男は笑みを浮かべて言ってきた。

「へっ・・・甘いな」

「・・・何だと?」

男の声が本性を見せたように粗野になった。

「痛い思いをさせる前にさっさと殺しておけば良かった、と後悔させてやるよ」

「そんな身体で出来ますか?」

「今は出来ないが・・・必ずてめぇのその自慢に満ちた鼻をへし折ってやるよ」

覚悟しておけ、と俺は言ってやった。

「その言葉そっくりと返させてもらいますよ!!」

男がまた俺を殴った。

今度は堅い何かを握って頭を殴った為、俺は意識を手放した。

―――――

―
タカミ・テツヤをしこたま殴り終えた男は荒い息を整えてから俺を見た。
「さぁ、これからどうしますかね？」
「ライアンナルがもう直ぐ来るんだ。それまでは放っておこうぜ」
ラッキー・ストライクを吸いながら俺はタカミ・テツヤを見た。
血を流してはいるが、まだ死んではいない。
こいつはこの程度で死ぬほど弱くない。
この俺の心を昂ぶらせ満足させる男だ。
そう簡単に死なせてたまるか。
「で、俺の出番は何時だ？」
「まだそれは聞いておりません。ですが、時期に来る事でしょう」
「速くさせろよ？俺は待たされるのが嫌いなんだ」
「出来るだけ頼んでみます」
「あぁ。頼む。交渉はお前さんに任せる」
「分かりました。では、私はライアンナル伯爵を迎える前に用事があるので失礼します」

「分かった。こっちは任せておけ」

奴は一礼してから小屋を出て行った。

「さぁて、これからあちらがどう出るか見物だぜ」

こいつを助けるのかまたは見捨てるのか。

まぁ、見捨てるだろうな。

こいつは傭兵。

この国の正規兵じゃない。

俺たち傭兵は使い捨て。

敵に捕まれば拷問だって受けるしやる。

自由ではあるが、簡単に捨てられるし拾う事も出来る便利な商品だ。

だから、こいつも見捨てる事だろう。

わざわざこいつ一人を助けに行くのに人員を割いたりはしないだろうからな。

「災難だと諦めな」

気絶したタカミ・テツヤに言いながら俺はラッキー・ストライクを深く吸って肺に入れた。

第百四十一章：蛇と豚と禿鷹（前書き）

お待たせしました。

やっと更新です。

いやー、2か月もほったらかしですいません・・・・・・・・・

これからもどうぞよろしくお願いします！！

第百四十一章：蛇と豚と禿鷹

「おら、起きろ」

意識を手放していた俺だが、強制的に目を覚ませられた。

冷たい水を掛けられて目を覚まされたのだ。

上半身を裸にされているから、脇腹の傷に水が染みる。

痛みを我慢して薄らと眼を開けると、ハゲタカの二人組と例の男、そしてスキンヘッドに肥え太った身体の男に顎鬚と眼帯が特徴の男の５人が立っていた。

「誰だ？てめぇは」

「私はライアンナル。ライアンナル伯爵だ。貴様はタカミ・テツヤだろ？・・・見るからに醜い顔だな」

ライアンナルと名乗った男は俺を繁々と見てきた。

「“あの方”とは豪い違いだ。あの方が容姿端麗で頭脳明晰な英雄ならば、貴様はその英雄に殺される化物と言った所だな」

「ほざけ。リカルドを利用している下種野郎が」

あの方とは誰なのか気になるが、俺は別な事を言った。

「利用している事は認めよう」

ライアンナルはリカルドを利用していると素直に認めた。

「あの男は地方を救済しようと考えているが、そんな物は夢物語だ。地方など無くても中央さえあれば国と言うのは栄えるのだ」

それを知らないから自分に利用されている、とライアンナルは嗤った。

「てめぇはリカルドを殺し、この国を乗っ取る気か？」

「それも認めるとしよう。だが、乗っ取るとは言い方が違う」

あの方に捧げるだけ、と言い直した。

「あの方ってのは誰だ？」

ここで俺は奴に訊いた。

「それを貴様に教える義務は無いだろ？」

奴は話を変えた。

「貴様は私がリカルドを利用していると指摘したが、それは貴様も同じ事ではないのかな」

「どういう意味だ？」

「これで分からないとは、やはり貴様は顔も醜悪だが頭の中も無いようだな」

ライアンナルはやれやれ、と肩を落としながら答えた。

「貴様は傭兵だ。主君を持たずに生きる戦争の犬だ。この戦いを機に自分の地位を向上させようとしたのではないか？」

ワイバーンの傭兵部隊も今の戦いで地位を向上させる気だからな、とライアンナルは言った。

「見損なうな。俺はてめぇらみたいな“害虫”とは違うんだよ」

「ほぉう。では訊くが、なぜこの国の為に戦うのだ？」

聞けば縁も所縁も無いのだろ？とライアンナルは言ってきた。

「てめぇらみたいな奴らには一生かかっても理解できない理由さ」

実際にこいつらに言った所で理解できないに決まっている。

「言ってくれるな。まぁ良い。これから貴様には質問に答えてもらうぞ」

兵たちの数から指揮系列、城の内部、装備、など詳しく教えろと言われた。

「貴様が出過ぎた真似をしてくれたせいでこちらは計画が大幅に崩れたからな。埋め合わせをしてもらう」

「生憎と男の質問に答える気は無い。何より計画通りに行くほど世の中は甘くないと知りやがれ」

その歳になっても知らなかったのか？と俺は詰った。

だが、奴は涼しい顔で言い返してきた。

「せいぜい強がりを言っていろ。質問の前に貴様にはこれから煮え湯を飲まされた礼をタップリとさせてもらう」

そして計画を立て直す、とライアンナルは蛇のような残酷な笑みを浮かべると後ろに下がった。

そして肥え太った男に顎で命令した。

「あまり美味そうな“肉”じゃないが、ライアンナルの命令だ。我慢するか」

ガルムと似たような発言をしたな・・・嫌な予感がするぜ。

冷や汗を掻きそうになるのを抑えながら俺は声色を変えずに俺は敢えて訊ねた。

「誰だ？てめぇは」

恐らく豚を紋章に持つモリスン侯爵だと思うが、確認する為に訊ねた。

「俺はモリスン侯爵だ。この前は俺の可愛い子分を可愛がってくれたらしいな？」

「どういたしまして」

俺は道化師のように恭しく頭を下げてやった。

「今度は俺がお前を可愛がってやる」

モリスンは手始めとばかりに俺を殴り始めた。

手にはナックル・ダスターを付けていて、攻撃力を倍増させていた。

体格からは信じられないスピードでパンチを繰り出す豚。

太い上にスピードもあり更にナックル・ダスターも付けているから攻撃力は半端ではない。

あちらこちらを殴りつつ、特に脇腹を殴っては苦痛に歪む俺をライアンナル達は楽し気に見ていた。

「おらおら、まだへばるなよ？この程度でへばっては困るんだよ」

身体を蹲らせようとする俺を豚は休む事なく殴りながら言った。

「良い気味だな。イエロー・モンキー」

ハゲタカの一人でジャンキーでもある弟が俺に近付いてきて詰った。

年齢は２０代後半で金髪に碧眼だが、眼が血走っていて見ているだけで吐き気がする。

「・・・・・・・・」

俺は奴に唾を吐いてやった。

まともに喰らった奴は静かに手で顔を拭った。

「・・・汚ねぇ・・・な!?」

右膝を思い切り蹴られた。

片膝を着こうにも身体が固定されているので出来ない。

その間も豚は手を休めないから痛みは倍増・・・増え続けている。

「神聖な身体で作られた俺の顔に唾を吐きやがって」

「へっ・・・ジャンキー風情が神聖な身体、だと?・・・・馬鹿な事を言うんじゃねぇよ」

俺は間を見てはジャンキーに言い返した。

「てめぇ・・・殺してやるよ」

ジャンキーは腰に手を回して拳銃を取り出した。

「俺の女をてめぇみたいな餓鬼が持つな。汚れるだろ」

俺の愛銃を持つジャンキーを睨む。

「元はと言えば俺の国が作った拳銃だ。それを何でてめぇみたいな男が持つんだよ」

今日から俺の拳銃だ、とジャンキーは言いやがった。

「おいおい、止めておけ。そんな無愛想な奴は。女を持つならエレガントな女にしろ」

兄貴がジャンキーから俺の女を取り上げて乱暴に後ろに投げた。

ガシャン、と乱暴な音を立てたが俺の女は沈黙を守ったままだ。

「おい。優しく扱え」

「知るか。おい、持つならこういう奴を持て」

ホルスターからシルバー色のオートマチック拳銃を取り出した。

“ＡＭＴ４４オートマグナム”・・・通称「オートジャム」だ。

「エレガントなのは認めるが、そんな直ぐ臍を曲げる女を持つとは相変わらず女の趣味が最悪な奴だ」

こいつは当時まだ新しかったステンレス技術を施しオートマチックでもマグナム弾が撃てる銃として脚光を浴びた。

だが、未熟なステンレス技術と材料などが悪かった事もあり、いとも容易くジャムを起こす様になった。

だから、オートジャムなんて不名誉な渾名を持つ事になったんだ。

とてもじゃないが、実戦で使う物じゃない。

それを愛銃としているのだから最悪な趣味としか言えない。

「てめぇよりはマシだ」

４４オートマグナムの白い銃口が俺の額に当てられた。

「今すぐにでも俺は殺してやりたいぜ。仲間もてめぇを殺したいと言っているしな」

「だったら、殺せば良いだろ。それともてめぇは、女子供しか殺せないのか？」

こいつとこいつが指揮する部隊は、どこに行っても女子供、若しくは老人しか殺していない。

正規軍を相手にした事もあるが、それだって他の部隊が苦しめた後で戦ったから勝てたような物だ。

だから、俺はこいつを弱者しか相手にできない奴と詰った。

「生憎だが俺は優しいんだ。だから、直ぐに死ぬ奴等しか殺さないんだよ。てめぇは生かしてやる」

まだ質問は終わっていないからな、と奴は言い続けた。

そしてジャンキーに視線を戻した。

「あっちよりこっちの方が良いだろ？」

「うん。兄ちゃんの女の方が綺麗だ」

ジャンキーは言葉遣いが急に幼くなった。
前にも見たがオツムが完全にイカレテいるな。
「そうだろ?今度お前の分を用意してやるからこっちを使え」
「分かった。兄ちゃんの言う事は正しいからね」
「可愛い奴だ」
ジャンキーの頭を撫でながら奴はライアンナルに視線を向けた。
「で、今日はどうする?」
「今日はモリスンが行う。そなた達は・・・そうだな。酒でも飲んでいろ」
「了解だ。行くぞ、ルディ」
「うん。兄ちゃん」
俺に背を向けたライアンナル達はモリスン・・・豚を残して部屋から消えて行った。
「さぁて、何処から食べるか・・・迷うぜ」
豚は舌を出して唇を舐めながら鉄の棒を取り出すと松明に近付けた。
棒の先を火で炙りながら喋り出した。

「俺はな肉に眼が無いんだ。しかも、人間の肉ほど美味い物は無い。特に好みなのは女だ」

人間の肉が好きとは・・・こいつも頭がイカレテいる。

「てめぇは俺の好みから外れるが・・・たまには食べるのも悪くない」

「自分の足でも焼いて食べてろ。豚野郎が」

「その強気が何処まで持つか楽しみだぜ」

豚は焼いた鉄の棒を松明から離すと俺に近付いてきた。

第百四十一章：蛇と豚と禿鷹（後書き）

糸も容易くの糸が誤字でしたので訂正しました。

幕間：白い大地

城の廊下を一人の男が歩いていた。

年齢は壮年ーー４０代半ばといった所だ。

黒い髪は艶があり、琥珀色の瞳は温和な色を宿しているが、今は剣呑な色を宿しており身体からも只ならぬ雰囲気を出していた。

彼を知っている者が彼を見れば、何時もと様子が違うと直ぐに分かった事だろう。

しかし、擦れ違う者達は別に変わっていない、と思っているのか然して気にしていなかった。

『不味いな。もう、向こうは既に勝負をつける気だ』

男は誰にも分からない位の小さな舌打ちをした。

つい先ほど貴族たちの話で敵司令官を捕えた、という話を聞いた。

自分の鬼札である敵司令官を捕えたのだ。

だが、それをリカルド達は知らない。

あくまで一部で行った極秘の作戦ということだ。

何れは知る事になるだろうが、今は知る者は少ないし白を切られる可能性がある。

これでは勝負にならない。

いや、勝負をつけられないし、勝負した所で負けは確実と言える。

幸い自分はそれを知った。

これから対策を考えるのだが・・・・まったく思い付かない。

今まで絶体絶命の危機に陥った事は幾度となくあった。

それを幾度も打破してきたが、今回ばかりは・・・・・・・・・・・・

『手の打ちようが無い』

そう、今の状況を言えばこの言葉が一番合うだろう。

だからと言って、ただ事態を受け入れる気など毛頭ない。

何としても打破しなければならない。

恐らく敵は膠着状態に陥ったこの時を利用して自分達に有利な状況へと運ぶ魂胆だろう。

その他に上げるなら煮え湯を飲まされた腹いせであろう。

あの男は・・・男達はそういう性格だ。

自らが計画し立ち上げた物が僅か、本の僅かでも傷付けられる事を何よりも忌み嫌う。

そしてそれを何時までも引き摺りしつこく執拗に攻撃してくる。

性質が悪い事この上ない。

そんな奴等に近付く自分も自分だが、今はそれ所ではない。

何とかして事態を打開しなければ元も子もない。

幸い場所は分かっている。

ここに連れて来れたという情報は来ていない事を考えると、あの男が持つ小屋に連れて行ったのだろうと推測できる。

行った事はないが場所は知っている。

そこに行き、何とかして捕えられた男と接触しなければ・・・・・・

足を更に進めて行き、馬小屋へと向かった。

馬小屋には何頭もの馬が手綱を杭に縛られており自分の馬も居る筈だった。

だが、馬たちは妙に気が高ぶり暴れていた。

それに首を傾げながら自分の愛馬は何処かと探したが幾ら探しても見つからない。

『どういうことだ?』

首を傾げざるえなかった。

しかし、よく見てみると手綱が千切られていた。

近づいて見てみると、微かに血が付着しているのが確認できた。

「・・・・・・・」

触ってみたが、まだ血が乾いていない。

まだ新鮮なのだ。

つまり、つい先ごろに馬は何者かによって・・・・・・・殺された、ということだ。

なぜ殺されたと直ぐに分かったのかと言えば血の臭いが外から強烈な程までに強いからだ。

彼は腰に差した剣に手を掛けた。

通常の騎士などが使用する剣よりも短く、一般兵などや旅人などが護身用として持ち歩くショート・ソードだ。

彼の経験上、剣は長い物ほど扱い辛く慣れるには時間が掛る上に室内での乱戦の時は不便だ。

だから、通常の剣よりも短い剣を使用しているのだ。

これなら乱戦でも優位に立てるし持ち運びも便利である。

ショート・ソードの鍔に手を掛けながら、ゆっくりと外に出た。

血の跡が白い地面に1滴ずつ続いている。

まるで自分を誘い出しているような感じだ。

静かに足音を殺して行くと・・・・・・・・・・・・

1角のワイバーンに跨ったワイバーン傭兵の隊長が居た。

兜は被っておらず鎧だけを身に纏っていた。

兜が無いから顔がよく見える。

年齢は20代前半から半ばで白く雪のような肌が傭兵とは無縁のように思えるが鍛えられた身体は間違いなく戦う者の身体だった。

「やっと来たね。ヴィールング・マレル」

女傭兵は自分の名を口にして見つめる。

右目は義眼である赤い眼で左目は金色の瞳をしていた。

両の眼は自分を射抜く矢のように鋭く殺気立っていた。

1角のワイバーンも主人と同じように自分を見た。

口には・・・馬の手綱があった。

「あんたの馬、なかなか美味だったようだよ?」

美味い美味い、と言って食べていたと女は言いながらワイバーンの頭を撫でた。

「・・・そなた、私に何の用だ?」

男・・・ヴィールングは分かっていたが訊ねた。

ゆっくりと相手との間合いを取る為の時間稼ぎであり状況を把握する為だった。

「何の用?その歳で呆けたのかい?」

女はふざけた口調で言いながらも視線をヴィールングから外さない。

「生憎と私はそなたと面識は無いし怨まれる理由も知らない」

「知らない、か・・・・よく言えるね?」

自分と母を・・・父を見殺しにしたくせに・・・・・・・・

「・・・人違いではないのかな?私は、君とその母、父を知らない。まして見殺しにしたなど酷い濡れ衣だ」

「じゃあ、思い出させて上げるよ。その身体に、ね」

女は一気に跳躍して槍を繰り出してきた。

鋭く研ぎ澄まされた槍は空を切り鋭い音を出しながら自分に迫って

来た。

それに対してヴィールングはショート・ソードを抜かずに身を屈めて避けると一気に馬小屋へと走った。

馬小屋に逃げれば長物の槍は使い難いしワイバーンも入って来れない。

それを考えて馬小屋へと逃げ込もうとしたが、直ぐ上からワイバーンが2匹降りて退路を断った。

ワイバーンには2人の傭兵が乗り槍を持っていた。

ヴィールングはショート・ソードを抜いて2人を牽制した。

刃は黒く塗られており暗い場所でも気付かれないように施されている。

「逃がさないよ。あんたにはこれからあの男と一緒に苦しんでもらうんだ」

あの男には仲間を殺された怨みがある。

「あんたには・・・あたしの一生を滅茶苦茶にした怨みがある」

自分から父を奪い取った怨みが・・・・・・・・・

「父を奪った?私は・・・兄を殺した覚えは無い」

ヴィールングはショート・ソードを後ろのワイバーンに向けながら

女に眼を向けて言い返した。

「殺したも同然だよ・・・父上と母上は愛し合っていた。それなのに・・・あの“売女”のせいで出来なかった。だが、それでも父上はあたしと母上に遺産を残した」

それを奪ったんだ。

「あんたとその売女にあの女がね・・・・・・・」

「彼女を売女などと言うな。それにあの娘は関係ない」

「売女さ。あの女は父上じゃないあんたに抱かれたんだ。立派な売女さ。それに本来ならあたしが受け継ぐ筈だった爵位と団長を奪ったんだからね」

取り戻させてもらう、と女は言い一気に跳躍して槍を繰り出した。

それをヴィールングはショート・ソードで裁き間合いを詰めようとした。

だが、実戦慣れしているだけあってか女は直ぐに身を引いて間合いを取った。

「・・・・・・」

ヴィールングは自分に自問自答した。

このまま行けば自分が負けるのは確実だ。

歳を重ねた事もあるが、多数に無勢だし恐らく・・・ライアンナルもこの女を素性を知り自分を殺させる気という事も分かった。

だからと言って死ぬ訳にはいかない。

この国を、自分の娘を護る為にも死ねないのだ。

ヴィールングは剣を両手で改めて強く握り締めると雪が積もった道を走り出した。

「はっ！正面突破かい？受けて立つよ！！」

女はヴィールングの行動を正面突破と取ったのか槍を構え直した。

金属がぶつかり合う音とワイバーンの猛々しい雄叫びが響いた。

そして・・・・・・・・・・

白い大地を大量の赤い血が染めた。

第百四十二章：見捨てるしかない

私は一人、直された見張り台の上に立っていた。

冷たい風が頬に当たり僅かに痛い。

リンクス・・・ランドルフ・クリフ1等兵に殴られた頬が風に当たり痛いのだ。

『貴方のせいで少佐は捕まったんです』

あいつは私を殴り冷たい声で私を責め立てた。

「・・・・・・・・」

私は抵抗も出来ずに黙った。

まさか、こいつに殴られるとはとも思っていたし私自身がまだ現実を受け入れ切れなかった理由もある。

奴は私を冷たい眼差しで見下しながら言い続けた。

『貴女は敵を真正面からドラグノフで狙っていた。あれならＡＫで撃った方がまだマシです。そして避けるべきだったのに馬鹿正直に真正面から動かずに居た。貴方は最低で馬鹿で救いようのない愚か者だ』

そう・・・私は愚か者だ。

突っ込む敵を真正面から狙ったのだから。

1発で仕留められるなら問題ないが、私にはそんな芸当は無かった。

だから、何度も撃っては外し続けた。

そして間近に来て「逃げろ」と身体が発した時にはもう手遅れだった。

私を横に押し倒したタカミ・テツヤは私の代わりに槍で貫かれて、敵に連れ去られた。

本来なら私を貫く筈の槍はタカミ・テツヤを貫いた。

しかし、と思う。

あの状況でなら私と共に貫く事も出来た筈だ。

それなのに私からタカミ・テツヤに狙いを変えて連れ去った。

何故だ?

なぜ連れ去る必要がある。

そしてなぜ私の名を知っていたのだ。

・・・タカミ・テツヤを連れ去ったワイバーンの騎士・・・いや、傭兵。

声から察するに私より1つ2つ年下の女。

『フィーナ・マレル！その命、貰う！？』

私の名を呼び、真っ直ぐに私に突っ込んできた。

なぜ私の名を傭兵が知っている？

そしてなぜ私を狙うのだ？

私が親衛騎士団長だからか？

いや、違う。

あの声と僅かに見えた眼には、私自身を・・・マレル家その物に対して根強い怨みが宿されていた。

私の生家であるマレル家は祖父の代に国王から親衛騎士団の団長を任された家柄。

それまでは何の変哲も無い家柄だった。

俗に言えば“成り上がり者”の出・・・・・・

だから、周りからは怨まれているとは薄々だが感じていた。

あの傭兵もその口なのか？

もし、そうなら・・・タカミ・テツヤは私の問題に巻き込まれた形になる。

私が・・・悪いんだ。

ランドルフ・クリフは私を責め立てた。

私の責任であるのは否定できない。

責任を取れ、と言うのなら取ってやる。

しかし、今は取れない。

命が惜しい訳ではない。

タカミ・テツヤを助け出すまでは責任を取れない。

あの男を無事に助け出したら責任は取ってやる。

親衛騎士団長を辞めろ、というなら辞めてやるし死ねと言うのなら死んでやる。

それだけ私が犯した事は大きいのだ。

あの男のお陰で私は・・・今こうして生きていられるし戦っていられるのだ。

「・・・何としてもお前を助け出す」

私の手で必ずだ。

決意を固めた時に無線から声が聞こえてきた。

『ミーシャだ。今から会議を開くから戻って来い』

「了解」

私は答えてから無線を切り見張り台から降りて城へと戻った。

戻って見ると私以外の者は既に全員が揃っていた。

「遅くなりました」

私は謝罪してから席に着いた。

皆、表情が強張っており重い空気が場を支配している。

タカミ・テツヤが居た時は、敵が来ようと何処か気楽な雰囲気を出していたのに・・・・・・・・

ランドルフとレオンも居たが私とは視線も合わせようとしなかった。

それが私には強く苦しかった・・・・・・・・

「全員が揃った所で会議を始める」

ミーシャ大尉が口を開いた。

「前線指揮官であるタカミ・テツヤ少佐が敵に捕えられたのは知っているだろ?」

先ずタカミ・テツヤが捕えられた事実を確認するように私たちに訊ねたミーシャ大尉は煙草を取り出して銜えると火を点けた。

そして煙を吐き出してからまた喋り出した。

「・・・敵の狙いは分からない。分からないが、あたし達にとっては大きな痛手となった」

フォース・リーコン達も仕留め切れなかったのも痛いし損害も出た。

その上、指揮官が敵の手に渡った事も痛い。

痛い事だらけだ。

「これからの事だが、タカミ・テツヤ少佐には悪いが・・・・見捨てさせてもらう」

え？

あの男を・・・見捨てる？

私は我が耳を疑った。

それはランドルフ、レオン、ゲンハルト様、ワイド中尉、リーザ中尉、エドリアス大尉も同じだった。

プロイセン様、ヴィルヘルム師匠、イーグル１等軍曹は普通の顔をしていた。

「敵の狙いは分からないが、今のあたし達には少佐を助けるだけの力も無ければ金も無い。少佐を失うのは痛い事だが仕方無い」

「ま、待って下さいっ」

リーザ中尉が席を立ちミーシャ大尉に詰め寄った。

「大尉は、少佐の・・・テツヤ様の部下ですよね？部下が上官を見捨てるのですか？！」

「あたしが仮に少佐の立場になったら、少佐は迷うことなくあたしを見捨てるよ。こいつも同じだ」

ミーシャ大尉はイーグル１等軍曹を見た。

「・・・確かにね。救出チームを派遣できるほど俺達に力は無い。それに旦那が何処に居るのかも分からない。余りにもこちらに不利な条件が多過ぎる」

イーグル１等軍曹は淡々とした口調で語った。

救出するには綿密な作戦が必要だ。

それには何処に人質が居るのか？

建物の内部はどうなっているのか？

行く手段と脱出手段。

装備から人数。

様々な物が必要だ。

そして内部に通じる者ーーー間者を作る必要がある。

しかし、それが私たちには居ない。

不利な条件しか無い。

だから、見捨てるしかない。

それでも・・・・それでも・・・・・・

「何か手は無いのですか？」

私はミーシャ大尉に訊ねた。

訊ねなければいけない・・・訊ねるしか出来なかった。

「無いね。運が無かった、と諦めるしかないんだよ」

「そんな・・・・嫌です。私は嫌です！！」

リーザ中尉は涙声で叫ぶと部屋を出て行った。

「ランドルフ、レオン。リーシャを頼む」

プロイセン様が二人に頼んだ。

『・・・・了解しました』

二人は頷くと急いで後を追った。

「すまんな。ミーシャ。リーシャが取り乱して」
プロイセン様はミーシャ大尉に謝罪した。
「別に良いよ。少佐と結婚の約束をしていたんだろ？」
「正確に言えば、私がテツヤと結婚したいか？と訊ねた時に頷いたのだ」
「そうかい。しかし、大丈夫かね・・・・・・」
一人で救出に向かったりはしないか？とミーシャ大尉はプロイセン様に訊ねた。
「それを心配したからランドルフとレオンに頼んだのだ。しかし、問題あるまい」
家に帰ればもう二人居る。
その二人が止める筈、とプロイセン様は続けた。
その二人が誰なのか気になったが今はタカミ・テツヤの事だ。
「ミーシャよ。何とかテツヤを救出は出来ないのか？」
ゲンハルト様は縋るような声でミーシャ大尉に訊ねた。
「無理だね。場所も分からないしさっきも言ったけど、あたし達に少佐を助ける力が無いんだよ」

大尉は氷の女王を銜えてまた断言した。

そこへ・・・・・・・・・・・・・・・

「テツヤ殿を・・・見捨てるのですか・・・・・・・・・・・？」

開けられたドアにサラ様が立っていた。

私たちは眼を見張った。

なぜサラ様がここに来ている？

「ミーシャ殿・・・貴方は、テツヤ殿を見捨てるのですか・・・・・・？」

サラ様はミーシャ大尉にもう一度、訊ねた。

「あぁ。見捨てる・・・・見捨てるしか出来ないんだよ」

大尉は火を点けた煙草を口から離し断言した。

「・・・・・・・・・」

サラ様は倒れた。

ゆっくりと倒れる姿を私は茫然と見るしか出来ず行動が取れなかった。

しかし、直ぐに我を取り戻して急いでサラ様を抱き抱えた。

「急いで寝室に運んで下さい」

エドリアス大尉はサラ様の脈を取ってから私に言った。

私は頷いて直ぐにサラ様を寝室へと運んだ。

サラ様は気絶したままで、ベッドに寝かした時も気絶していた。

部屋を出た私は、一人、当ても無く歩き出した。

タカミ・テツヤを見捨てる・・・・・・・・・・・・・・・・・・

それは奴が殺されるのを黙って見ていろ、という事だ。

そんな事が許されて良いのか？

幾ら不利な状況だろうと・・・それが許されるのか？

それで良いのか？

廊下を歩きながら私は自問自答を繰り返したが、答えはずっと見つからなかった。

第百四十三章：詰めが甘い

俺は元ギルドのおっさんを伴い小屋に来ていた。

豚という渾名が似合うモリスン・・・通称「スキンヘッド・ピッグ」にタカミ・テツヤを任せて1日が経過した。

ライアンナルの予想ではもうゲロして食べられている、という事だ。

「人間の肉が好みとは怖い豚だねー」

幾ら戦闘狂の俺でも人間の肉を食べるほど物好きじゃねぇ。

「まぁ、それはライアンナル様も認識しているようですからね」

おっさんは俺の言葉に相槌を打った。

「で、お前さんの予想としてあいつはゲロしたと思うか？」

「どうですかね。実際、拷問を受けて吐かない者に私は会った事がありません」

「そう言えば軍に居たんだっけ？」

「えぇ。と言っても私の場合は後方支援から偵察などが任務。俗に言う裏方という奴です」

「だが、そういう裏方の方が戦争で勝つには重要じゃねぇのかな？」

「仰る通りです。ですが、生憎と先王は戦好きではありましたが采配が上手いという訳ではありません」

「一番指揮官になって欲しくないタイプだぜ。で、そいつに仕えていた将軍達はどうなんだ？」

「将軍達の方は馬鹿ではありません。ですが、親衛騎士団の団長は違いました」

「頭の中でもマッチョだったのか？」

「まっちょ？」

おっさんは聞き慣れない言葉に訊き返した。

「筋肉質という意味だ。で、どうなんだ？」

「その通りです。根っからの騎士でして、正面から敵を叩き伏せてこそ戦という考えの持ち主でした」

「そいつは戦場より競技場で戦った方が良かったな」

正々堂々となんて何でもありの戦場では糞以下の台詞だ。

そんな考えしか無い男は戦場に要らない。

せいぜい競技場で金メダルを貰ってはしゃいでいれば良いんだよ。

「ですが、その方の弟君・・・私の元上司に当たる方はそうではありませんでした」

兄貴がマッチョなのに対して弟の方は頭脳も良かったらしい。

「お陰で何度も命拾いをしましたよ」

ですが、とおっさんは言葉を区切った。

「些か理想・・・とでも言えば良いでしょうか？生温かったですね」

「あいつと同じだな」

タカミ・テツヤも理想なんて紙屑くらいの価値しかない物の為に戦っていた。

その男もまた似たようなものだ。

「だから、あの男と重なり・・・余計に怨みの炎が燃え上がったのかもしれませんね」

「とんだ逆恨みだな」

憐れだ、と俺は柄にもなく言った。

「そう言えますね・・・・ん？」

「おや？」

おっさんは小屋の少し前で足を止めた。

俺も足を止めて見てみると1角のワイバーンが居た。

「どうやら、もう一人も捕えたようですね」

「もう一人？」

俺は分からずに訊ねた。

「先ほどお話した私の元上司ですよ」

「なるほど。それでここに連れて来た、という訳か」

「はい。では、行きましょう」

どうなっているのか、確かめる為に・・・・・・・

俺はラッキー・ストライクを取り出して銜えた。

ジッポーで火を点けながら歩くのをまた始めた。

小屋に入るが、そこは一見何の変哲もない。

だが、暖炉の壁をちょっと横に動かせば地下へと通じる階段が見える。

階段を下りて行くと、スキンヘッド・ピッグが出て来た。

汗だらけで強烈な臭いが鼻を突く。

「吐いたのか？」

「いいや。あの野郎、口が堅いぜ。大事な“息子”にも火を点けたのに・・・吐きやしねぇ」

自分の名前、階級、性別、などしか言わないらしい。

ここ等辺は軍隊で習うことだ。

敵に捕まったら名前などしか言わない。

仮に言ったとしても・・・嘘を織り交ぜて言わなくてはならない。

「その他には？」

「俺らの悪口しか言わなかった」

今は別の奴・・・ワイバーンに乗って来た女が二人まとめて相手しているらしい。

「おぉ、二人も相手にするとは大した女だ」

俺は感心しながら煙草を吸った。

「あー、くそ！！俺は城に戻って飯を食べて来る！！」

豚は苛立ちを隠そうともせずドンドンと足音を立てながら消えて行った。

「・・・かなり口は堅いようですね」

おっさんは神妙な顔で呟いた。

「まぁ、俺たちは拷問しようがされようと問題ないからな」

吐いたら直ぐに殺す。

だから、嫌でも口を割らないんだよ。

まぁ、それも時間の問題だろうな。

さぁて・・・何時まで持つかな？

― ―

―――――――――――――――――

俺は目の前で荒い息をする豚に眼を向けた。

「どうした？息が荒いぞ・・・・・・・・」

「て、てめぇ・・・・・・・・」

豚は汗だらけの顔で俺を睨んだ。

こいつに拷問を受けてから1日が経過した。

焼いた鉄の棒で俺の身体中を刺したり、焼いたりの繰り返しだ。

人間ある程度の火傷を負うと死ぬ。

それを知ってか知らずか、こいつは適度な休みを入れては俺に質問を繰り返した。

兵力、兵站、装備などだ。

そして女王に投降するように言え、とも言われた。

こいつは頭が馬鹿か？と言いたくなる。

俺はあくまで前線指揮官だ。

総大将ではない。

代わりはまだ居るんだ。

そんな俺に女王へ投降を呼び掛けても無駄な時間だというのに分からないとは・・・・・・・・

「つくづくてめぇは頭が豚以下だな」

「んだと！！」

豚が焼いた鉄の棒を俺の傷口へと刺した。

ジュウ、と肉が焼ける音がする。

そして体内が焼かれる感覚も覚える。

肉が焼ける音を聞くと先ほどまでの怒りの表情からウットリとした表情になった。

「ああ・・・この臭い、この音・・・・最高だ」

豚は笑みを浮かべながら鉄棒を引っ掻き廻した。

それに俺は耐え続けて1時間が経過したが、豚は疲れたのか荒い息をしながら俺に唾を吐いた。

「今日はこれ位で済ませてやる」

豚は荒い息をしながら閉じられていた牢のドアを開けて外に出た。

それと変わる様に一人の女が現れた。

年齢はフィーナより僅かに年下で髪は金髪だった。

右目は明らかに義眼と判る作りの眼で色は赤で左目は金色だった。

フィーナのように勝気な色と傲慢な色が瞳越しに見え隠れしている。

傍らには血だらけの男が気を失っていた。

黒髪で、それなりに高そうな衣装を着ていたが顔は俯いているので分からない。

「はぁい。元気だった?」

女は無邪気な声で話し掛けて来た。

鎧に血が付着しているのに豪くアンバランスに感じる。

「まぁな」

俺は唾を地面に吐きながら頷いた。

「あらあら・・・大事な“息子”を焦がされちゃったの？」

女が俺の下半身を見てさも驚いた風に言った。

「あぁ。お陰で痛いぜ」

実際、大事な部分に火を掛けられた時は泣き叫んだし、今でも痛いのは変わらないが。

「そう。それは大変ね？それじゃ、とっておきの薬を塗って上げる」

女は鎧の中から貝殻で合わせた箱のような物を取り出した。

蓋の部分を退かすと赤い色をした塗り薬が見えた。

だが・・・辛い物の臭いがする。

「唐辛子か？」

こんな物を傷口に塗られては発狂しそうだ。

「唐辛子も使っているけど、それだけじゃ駄目からアガリスタ公国で耕されている甘い果実も混ぜているわ」

これにより強烈な辛さではなく程良い・・・悪く言えば長い間、苦

痛を与える事が出来るという。

「流石は蛇に仕える女傭兵だな。性格も蛇みたいに残忍だ」

「お褒めの言葉として受け取っておくわ」

女は俺の挑発を物ともせず俺の・・・に薬を塗り始めた。

女の手が冷たく最初こそ心地よかったが、次第に薬の効果が出て来て苦痛を感じ始めた。

「どう?気持ち良い?」

「・・・・・・・ぐっ」

俺は答えずに我慢した。

「私は気持ち良いか、と訊いているのよ?」

女は薬が塗られた手で俺の・・・を強く掴むと擦り出した。

余計に苦痛が強くなり熱さがまた戻って来る。

「どうなの?さっさと答えなさい」

「・・・気持ち良い訳ない、だろ?この・・・あばずれが」

俺は本心で言った。

「あばずれ・・・あばずれですって?・・・・・あんたに、・・・・・・

あんたみたいな男にあたしの何が分かるって言うのよ！！」

私からあたしとなり、女の手に力が更に込められた。

そして俺を蹴り始めた。

「あたしは侯爵家の娘よ。そのあたしがあばずれ？あばずれですって？！あんたみたいな生まれつき傭兵がほざくんじゃないよ！！」

女は自分を侯爵の娘だ、と言った。

侯爵と言えば5爵位の中でも2番目に位が高い。

その侯爵の娘がどうして傭兵に？と俺は疑問を抱いたが何となく察しが付いた。

よく見れば、顔立ちが何処となく・・・フィーナに似ている。

俺で憂さ晴らしをしたのか女は男を中に放り出すと牢から出て鍵を掛けた。

「精々その男と仲良くしな。後で改めてあんたを可愛がって上げるわ」

女は高笑いしながら消えて行った。

そしてまた別の者が現れた。

ハゲタカの一人と、もう一人は元ギルドの頭目だった。

「ほぉ、随分と可愛がられたな？」

ハゲタカはラッキー・ストライクを吹かしながら俺を見つめた。

「今日は随分と客の出入りが多くてウンザリだ」

俺は固定された腕を僅かに動かしながら言ってやった。

「好い加減、吐いたらどうだ？そうすれば楽に殺してやるぞ」

「てめぇにそんな慈悲の心があるのか？」

「俺は寛大なんだよ。で、どうなんだ？」

「断る。仮に吐いた所で楽に死なせてくれる証拠が無いからな」

「はっ。人の差し出した手に唾を吐くとは・・・やっぱりてめぇは猿以下だ」

「まぁまぁ。それはそうと、そこの男を起こしてくれませんか？」

ギルドの頭目だった男はハゲタカを宥めながら俺に言ってきた。

「自分で起こせば良いだろ？」

「生憎と私は臆病な性質でしてね。その男に近付くだけで身震いするんですよ」

そんな会話をしている内に男が勝手に目を覚ました。

「う、・・・・うぅぅ・・・・・・・・」

呻き声を上げながら男は目を開けて俺の方を先ず見た。

「そ、そなたは・・・・・・・・・・」

「タカミ・テツヤという傭兵ですよ。ヴィールング隊長」

ヴィールング・・・フィーナの叔父か。

改めて顔を見れば確かに・・・フィーナと似ている。

噂だという話だが・・・・満更でも無いのか？

などと俺は考えた。

「そなたは・・・・・・・・・」

ヴィールングは俺から視線を外し男に視線を向けた。

「覚えておりますか？私を」

ギルドの元頭目は自分の顔を指差しヴィールングに訊ねた

「・・・あぁ。覚えている。忘れる訳がないだろ・・・５０の村を焼き尽くした残酷な男・・・・ジルド・バーランド」

それが元ギルドの頭目の名前か。

「如何にも。しかし、残酷とは酷い言い掛かりだ」

私だけが、あんな事をしていた訳ではない。
他の者も似たり寄ったりの事をしていた、とジルド・バーランドは悪びれもせずに答えた。
「それなのに貴方は私だけを処罰した」
余りに理不尽だ、とジルド・バーランドはヴィールングを責めた。
「生憎だが貴様だけを処罰などしていない」
全員を会議に掛けて処罰した、とヴィールングは言い返した。
「では、なぜ私だけ会議に掛けなかったのですか？」
「他の奴等に比べて貴様の犯した所業が目に余るからだ」
「話に割り込んで悪いが、このおっさんは村で何をした？」
経験からある程度の予想は出来たが、今は少しでも苦痛から逃れたいと言う一心から話に割り込んだ。
「男と老人は皆殺し。女は強姦し食べ物は全て押収した挙句に子供たちを奴隷として売り払った」
ヴィールングは苦々しいとばかりに顔を歪めて俺の質問に答えた。
「ですが、そのお陰で我が軍は資金にも食料も困りませんでしたよ？」

「それは事実だ。だが、それのお陰で余計に攻撃を受けたのも事実だし我々に味方をしていた村まで敵に回ったのも事実だ」

どちらかと言えば損の方が大きいな。

他国に進軍した場合、心配なのは食料や資金だ。

で、それをどうやったら解消できるか？と言えばこの男・・・ジルド・バーランドがやったような事をすれば良い。

だが、それをやると痛い目に遭うのは明白。

ならば、村人たちと友好な関係を築き上げる事だ。

こちらの方は時間こそ掛るが、長い眼で見れば良い。

ヴィールングはそれを行ったが・・・それをこの男が自らの手で壊した。

俺なら直ぐに戦死させる所だ。

「お前さんも甘いな」

こんな男を生かしておくからこうなるんだ、と俺は口にした。

「後悔している。さっさと殺しておけば、こんな事にはならなかった」

ヴィールングは俺の言葉に重々しく頷いてみせた。

「貴方様には感謝していますよ。私を殺さなかったから今もこうして生きている」

その礼はこれからタップリとする、とジルド・バーランドは笑みを浮かべながら言った。

「ですが、今日はもう遅いです。ですから、明日にしましょう」

「じゃあな。イエロー・モンキー。せいぜいそこのおっさんと仲良くするんだな？」

ハゲタカの野郎はラッキー・ストライクを俺に投げてジルド・バーランドと共に消えた。

「おい、俺の縄が切れるか？」

俺はヴィールングに声を掛けた。

「出来る。・・・ぐぅ」

ヴィールングは身体を壁に預けながら立ち上がり俺の縄を解き始めた。

しかし、呻き声を僅かに漏らした。

「大丈夫か？」

「あぁ。何とか、な」

ヴィールングは汗だくの顔で頷くと懐からこれまた貝殻を合わせた物を取り出した。

「塗り薬だ。これを塗れば多少の痛みは回復できる」

そう言って俺の身体に塗ってから自分の身体に塗った。

「すまねぇ。所で、あんたはあの女にやられたのか？」

「あぁ。歳を考えもせず激昂したのだ」

お陰で捕えられたらしい。

「何に対して怒ったんだ？」

「私の愛しい方を・・・売女と蔑んだ事に対してだ」

ヴィールングは独白を始めた。

「あの方は・・・実に清らかで優しい方だった。そして打たれ弱い花だった・・・・・・」

少し吹いた風でも手折れてしまうほど弱々しい花だった、とヴィールングは区切った。

「私の兄は親衛騎士団の団長をしていた」

「先王に唯一進言でき、裏方の任務を軽視した挙句に討ち死にしたロックスの事か？」

「知っているのか？」

「あぁ。フィーナから聞いた」

本当はフィーナではないが、俺は敢えてフィーナだと答えた。

「フィーナは無事なのかっ」

ヴィールングは縄を解きながら俺に詰め寄った。

「あぁ。今の所は。で、あんたの事も聞いている」

「そうか。フィーナは、無事なのだな・・・・・・・・」

ヴィールングは安堵の息を吐いた。

その表情から・・・・・真実だ、と俺は確信した。

「・・・あんた、フィーナの父親だな」

ヴィールングは弾かれたように俺を見た。

「その表情は姪を心配する叔父以上の感情だ。それに・・・あんたが愛しい花を口にしている時もそうだ」

あれは叶わぬ恋をした男が・・・・する表情であり声だ。

「・・・その通りだ」

ヴィールングは誰も居ないからか、または俺に嘘を言っても仕方無

いと思ったのか頷いた。

「フィーナは私の・・・・・兄であるロックスの妻であったマリーとの間に出来た娘だ」

「聞く所によれば兄貴が横から掻っ攫ったと聞いているが？」

「・・・正確に言うなら、家の事情で兄と結婚を強要されたのだ」

「政略結婚か？これだから貴族は嫌いだ」

「私も嫌いだ。だが、同時に思った」

自分がもし長男として産まれていれば、マリーと結婚できたと・・・・・・・・・・・・・・・

「確かにな。しかし、ロックスは外面こそ良ったが裏の顔は悪かったんだろ？」

「あぁ。何時もマリーを泣かせていた」

そしてついには・・・他の女と寝た。

「それで産まれたのが、あの女か？」

「分かったのか？」

「あぁ。顔立ちが似ていたからな。で、どうなんだ？」

「その通りだ。あの女の母親は彼女が指揮するワイバーンの傭兵部

隊の隊長だった」

先王が他国に侵略した際、二人は出会い結ばれたらしい。

「それ位ならまだ許せた」

だが、許せなかったのは・・・・・・・・・

「あの女と娘にマレル家の爵位と全財産を全て残すという遺言書だった」

そしてマリーとフィーナは廃嫡する、と遺言には書かれていたらしい。

「それを読んでお前さんは遺言書を握り潰した、か」

「あぁ。許せなかった・・・・・あれだけマレル家に尽くしてくれたマリーを・・・あれだけ厳しく育てたフィーナを・・・・・要らない、と書かれていたのだ」

その他にもビタ一文与えないし国外から追放するとまで書かれていたらしい。

余りに酷過ぎる話だ。

「で、遺言書を握り潰したあんたはそれからどうした？」

「本来なら・・・直ぐにでも殺したかった」

しかし、それでは兄と同類に陥ると思ったのか放っておく事にした

らしい。

「私はつくづく詰めが甘い・・・・・・・」

あの時、殺しておけばこんな事にはならなかったのだから・・・・・・とヴィールングは苦渋に満ちた顔で断言した。

俺はそれを黙って見続けた。

第百四十四章：苦しい思い

私とレオンは走り続けるリーザ中尉を追い掛けていた。

「リーザ中尉。待って下さいっ」

私は声を掛けるが、リーザ中尉は止まらないで走り続ける。

それでも必死に追い掛けるが、リーザ中尉との距離は縮まる所か更に開くばかりだ。

そこへ運よくガルム、ガリシャ、ヘンさんが現れた。

「リーザ中尉を止めて下さい！！」

私が頼むと3人（正確には2人と1匹だが）はリーザ中尉を止めに入った。

と言っても、リーザ中尉も女だてらに団長をやっているだけあって強い。

ガリシャなどはあっさり倒されてしまい、ヘンさんも・・・な所を蹴られて悶絶してしまった。

ガルムだけは唯一例外でリーザ中尉を抑える事に成功した。

「大丈夫ですか？ヘンさん」

ヘンさんは大事な所を抑えて蹲っていたが顔だけ上げた。

脂汗が滲んでおり・・・見るのも辛い。

「な、何とか・・・ぐあ・・・・・・」

ヘンさんは脂汗を掻く顔で答えながら、どうしたんだ?と訊いてきた。

「実は・・・・・・・・・・・・・・」

私とレオンは話した。

「そんな!!」

ガリシャは予想していた通り信じられない、と声と身体で表した。

「旦那を見捨てるなんて酷いよ!!」

「だが、何処に居るのか分からないんだろ?」

それなら仕方無い、とヘンさんは痛みを我慢している顔で言った。

「で、でもっ」

「お嬢ちゃん。これは戦だ・・・だから犠牲は付きものだ」

ヘンさんは冷静な口調でガリシャを諭した。

「でも・・・・・・・・」

「救出するには情報が必要だ。だが、俺達にはその情報を専門とした収集家も居ないし金も出せない」

通常、捕虜を取り戻すには向こうが言ってきた金額を用意して出す必要がある。

それが無いなら力づくで奪い返すか見捨てるか。

テツヤ殿は我が軍の要とも言える。

前線指揮官を失うのは痛い事ではあるが、テツヤ殿一人で損害を抑える事が出来るならそれは仕方のない犠牲と割り切るしかない。

「まぁ、冷静に考えればそうであろうな」

ガルムは冷静に腕を組み頷いた。

「ガルム。あんたは旦那の下僕でしょ?下僕なら旦那を助けようとは思わないのっ?」

ガルムの冷静すぎる態度にガリシャは責めるような口調で言ってきた。

「助けたいのは山々だが、臭いが無い。あの戦いのせいで我が主の臭いが途絶えてしまったのだ」

如何に嗅覚が優れたガルムでも見つけるのは難しいようだ。

「そんな・・・・・・・・・」

ガリシャは両膝を着いた。

私は何を言えば良いか分からずに黙る。

・・・・こんな・・・・目の前で女性が茫然としているのに、私は言葉すら掛けられない。

そして命を助けてくれたテツヤ殿を助ける事も出来ない。

『・・・・・・くそっ』

私はまた自分が無力であると知らされて舌打ちをした。

そんな事をした所で何の意味も無いが、それでもした。

リーザ中尉は未だに泣き続けていた。

うわ言のように「テツヤ様・・・テツヤ様・・・テツヤ様・・・」と言っている。

ヘンさんは黙って女神の抱擁を銜えて火を点けた。

表情は無表情で何を考えているのかまったく分からない。

― ― ― ― ― ― ―

『見捨てる、か。仕方のない事ではあるが・・・やるせねぇな』

俺は煙草を吸いながら自分なりに考えてみた。

テツヤが何処に居るのか分からない。

先ずここで出鼻を挫かれた。

救出作戦はヴィールング隊長の下に居た時、参加した時はあるがあの時は相手が何処に居るのかが分かっていたし、交渉で長引かせている間に内通者を作れたから成功したようなものだ。

今回はそれが無い。

奴等の狙いは知らないが、蛇が一枚噛んでいるのは分かっている。

となれば、リカルド王子の耳には入っていない。

そうなると、城ではない別の何処かに隠している可能性がある。

何処に居る？

城からそれほど離れた場所ではない事は予想できるが、何処にあるというと見当も付かない。

これでは見捨てるしか他ない。

ミーシャ大尉も恐らく苦渋の選択をしたんだろうな。

表面こそ冷静だとランドルフ君は言ったが、それはあくまで皆に自分の感情を知られないようにする為だ。

本当はテツヤを助けたくてしょうがない筈だ。

プロイセン様達も恐らくそんな気持ちだろう。

あれだけこの国の為に戦ってきたテツヤを見捨てるなどしたくない筈だ。

だが、状況が状況だけに難しく・・・結局は見捨てるしかなかった。

リーザ殿の方は・・・・・・・・・見るに耐えない。

テツヤにゾッコンなのは見るだけで解かる。

女を泣かせるとは・・・あいつも罪な男だ。

などと俺は場違いな事を考えてしまった。

しかし・・・どうすれば良いか。

俺は溜まった灰を指で叩き落としながら考え続けた。

― ― ― ― ― ― ― ― ―

「・・・・・・・・・」

私は女神の抱擁を吸いながら隣で無表情のミーシャを横眼で見た。

プロイセン様達は部屋を出て行きここには居ない。

だから、居るのは私とミーシャだけだ。

彼女は煙草を吸いながら窓から見える景色を眺めていた。

彼女が吸っているのは氷の女王という冷たい味のする煙草だ。

これを吸うミーシャの表情は・・・・・まさしくこれのように・・・

冷たい表情だった。

眉一つ動かさない彼女は何を思って景色を眺めているのだろうか？

いや違う。

景色を眺めているのではなく、遥か彼方に居るテツヤの安否を気にしている事だろう。

その証拠に瞳はとても悲しい色をしていた。

「本当はテツヤを助けたいのだろ」

私は思わず彼女の本心を口にした。

「・・・助けたいに決まっているでしょ」

ミーシャは強い声で当たり前のように答えたが、声が震えていた。

私と彼女だけしかここには居ない。

だから、こんな声を出しているのだろう。

「あたしは、少佐の部下だ。部下が上官を見捨てるなんて糞以下のする事だ」

逆もまた然り。

彼女はまだ独白を続けた。

「でもね・・・・少佐ならこう言うよ」

勝てるのなら安い物だ。

「・・・・・・・・」

私はその言葉に無言で頷いた。

あの男は勝つ事に対して手段を選ばない。

卑怯と言えば卑怯だ。

だが、勝つしかないのだ。

負ければそこで終わりだ。

全てが終わる。

今まで積み重ねて来た物全てが微塵となり消えて無くなり・・・・無となるのだ。

それを分かっていたからこそ奴は勝つ為なら手段を選ばなかったのだろう。

そして今の状況もそうだ。

あいつを助ける余力が我々には無い。

それをあいつも私達も痛感している。

あいつを助ける事が出来ても、損害が大きければ駄目だ。

最小限の損害で抑えるにはあいつを切り捨てるしかない。

それを部下として戦ってきたミーシャもイーグルも理解している。

だからこそ、見捨てると言ったのだ。

それに従えない者も居ることだろう。

私も従えと言われても・・・・従えない。

あの男には恩もある。

共に酒を飲み、戦った仲だ。

その男を見捨てろと言われても無理な話だ。

しかし、それをすればどうなるか分からない。

運が悪ければ、リカルド王子たちの手にこの国は取られてしまう。

確かに向こうには向こうの大義が、信義が、信念があるだろう。

だが、それは私達もまた同じ事だ。

我々にもこの国を愛し、護りたいという気持ちはある。

それでも相容れないのが現実だ。

その事は今も同じだ。

テツヤを助けたいが、負ける訳にもいかない。

・・・・・難しい局面だ。

ミーシャは煙草を吸いながら自分が下した決断に迷いが生じているように見えた。

それは彼女が心からテツヤを信頼し慕っているからであろう。

私は肩に手を回そうとしたが、止めた。

こんな時は何も言わず黙っているのが良い。

そうすることで私自身もこの苦しい思いをひた隠しに出来るのだから。

幕間：無力な女

私は冷たい感覚を額に感じて目を覚ました。

「ここは・・・・・・・」

私は身体を起こして辺りを見回した。

私の寝室だった。

ここ東の地ヴァイガーは初代国王フォン・ベルトが築いた場所。

つまりサルバーナ王国の発祥地でもある。

私が以前まで住んでいた場所は祖先たちが更に奥へと進んで築き上げた場所。

現在の首都であるヴァエリエ。

ヴァエリエとはサルバーナ語で「光輝」という意味。

正しくその通りの場所だった。

太陽の光で輝いているだけでなく皆が明るい表情で暮らしていた。

そこに築かれたのがエスカータ城。

サルバーナ語の意味では「平和」という意味。

光輝に包まれた平和な国だった。

だけど、今は違う。

私の・・・腹違いの息子であるリカルドが支配している。

リカルド・・・どうして貴方は反乱などを起こしたの？

私は貴方を国王にする筈だったのよ。

だから反乱など起こさなくても良かった。

待っていれば国王になれたのに・・・・・どうしてこんな残酷な事をしたの？

リカルドが反乱を起こし二度の敗北をした。

だが、初代国王が築いた東の地へと送りそこで戦う事になった。

総大将は宰相であるゲンハルト。

そしてその下にある前線指揮官は異世界から来たという傭兵・・・タカミ・テツヤ殿。

あの方を前線指揮官に任命する時・・・私は彼に訊いた。

『あの子を・・・リカルドを止める手は・・・・もう無いのですね？』

出来る事ならあの子を殺さないで欲しかった。

何か手があると言って欲しかった。

でも、それは私の単なる希望でしかなかった。

『奴を・・・リカルドを殺すしか、もう手は残されていない』

テツヤ殿は平淡な声で私の希望を打ち砕いた。

腹違いとは言え、私にとってリカルドは息子。

その息子を殺す命令を・・・私は下した。

『タカミ・テツヤ殿。貴方を・・・前線指揮官に任命します』

テツヤ殿はそれを了承して指揮官になった。

私はその時、テツヤ殿に懇願した。

『あの子を・・・リカルドを止めて下さい・・・私には止められません・・・・・・・」

それに対してテツヤ殿はこう答えた。

『全力でリカルドを止めよう・・・・・』

私はそれに耐えられずにテツヤ殿に抱き付いて泣いた・・・・・・

それをテツヤ殿は抱き締めてくれた。

あの方を前線指揮官に任命してから直ぐにリカルドはここに兵を送ってきたが、その度に撃退していった。

私は戦に口を出さないようにしていたからどんな状況か分からない。

テツヤ殿と一緒に居る時にそれを訊けたが・・・訊かなかった。

リカルドが死んだ、という事を訊きたくなかった。

テツヤ殿もそれを知っているのか戦に関しては何も言わなかった。

テツヤ殿達が戦っている間・・・私は何も出来ずにただこの戦いが終わる事を・・・テツヤ殿の無事を祈る事しか出来なかった。

そして・・・・・・胸騒ぎが突如、起こった。

使用人が出してくれた紅茶を飲んでいた時・・・・カップが割れた。

落としてはいない。

勝手に割れた。

それにより何だか凄く不安な気持ちに襲われた。

テツヤ殿の身に何か起こった。

私は居ても立ってもいられず部屋を出て会議室に向かった。

会議室にテツヤ殿は居る筈。

そう思い向かった。

ドアが開いていたので、どうかしたのか?と思い更に足を進めた。

そこから聞こえたのだ。

『ミーシャよ。敵に捕えられたテツヤを助け出せないのか?』

ゲンハルトの言葉に私は漠然とした。

テツヤ殿が敵に捕えられた?

嘘だと思いたかった。

だって、あの方は強い方なんですもの。

そんな方が敵に捕らえられるなど有り得ない。

必死に自分に言い聞かせたが、それは直ぐに無残にも打ち砕かれた。

『無いね。場所も分からないしさっきも言ったけど、あたし達に少佐を助ける力が無いんだよ・・・・・・・・』

誰もその事に反論しようとはしなかった。

そして私は無意識にドアから中へと入って言葉を放っていた。

「テツヤ殿を・・・見捨てるのですか・・・・・・・・・?」

私を皆は驚いた顔で見つめていた。

どうして来ているのか?という顔だった。

私は皆の視線を無視してミーシャ殿に視線を注ぎ続けた。

そして、もう一度訊ねた。

「ミーシャ殿。答えて下さい・・・テツヤ殿を、見捨てるのですか?」

ミーシャ殿は細長い棒を銜えていたが、口から離して答えた。

『あぁ。見捨てる・・・見捨てるしかないんだよ』

それを聞いて私は意識を失った。

あの後、誰かが私をここに運んだのだろう。

でも、私は知っている。

覚えている。

テツヤ殿は敵に捕えられ、見捨てるということを・・・・・・・・・・・・

「テツヤ殿・・・・・・・・・」

眼元が熱くなり、潤み出した。

手を当てれば・・・・ツウ・・・・・・・・

・・・涙が出ていた。

何度も指で拭ったが、止まらない。

止まらないで流れ続けた。

それでも私は涙を指で拭い続けた。

テツヤ殿が指で拭ってくれると、直ぐに止まったのに・・・・・・・・・・・・

テツヤ殿・・・・・テツヤ殿・・・・・・テツヤ殿・・・・・・・・

私は何度もテツヤ殿の名を呼んだ。

それなのに、テツヤ殿は現れないし、声も聞こえない。

テツヤ殿、来て下さい。

私の前に現れて何時ものように喋って下さい・・・・・

私は泣いています。

どうか、私の涙をその厚い胸で受け止めて下さい・・・・・

何度も私はテツヤ殿を呼び続けた。

それでも駄目だった。

テツヤ殿は現れてくれない・・・・・・

ただ、私は泣くしか出来ない。

無力な女。

女王と言う肩書きを持ちながら何も出来ない。

・・・・愛しい男が捕えられたのに、助ける事も口を出す事も出来ないただの女。

その事実を突き付けられた私は、ただ涙を流す事しか出来なかった。

第百四十五章：拷問と鴉

ヒュン！！

空を鋭く切る音と共にビシッ！！と鈍い痛みが俺の身体を襲う。

更に同じ所を何度もやられた。

「ぐおおおおっ！！」

俺は耐えられずに悲鳴を上げた。

「ほら！さっさと吐きなさい！！味方の人数と装備を！！」

ビシッ！！

バシッ！！

と俺を打っていた鞭を持ち直した女傭兵・・・マーズが情報を吐けと言ってきた。

俺を拷問する際、こいつは自分の名を名乗った。

戦女神から名付けられたと自慢気に語りながらも持っていた鞭で俺を打ち始めた。

今の格好は黒のボンテージとも言える格好で靴はヒールが高い靴。

・・・・ＳＭの女王か？などと俺は馬鹿な事を考えながら少しで

も痛みから逃れようとした。

「へっ・・・俺の尻を舐めたら教えてやるよ。女王様」

皮肉を俺は言ったが、それに対してマーズは嘲笑で答えた。

「相変わらずのへらず口だね。でも・・・その強がりが何処まで持つか楽しみだし苦痛に歪む姿なんて最高だわ。特に貴方みたいに頑固な男ほど可愛がりがあるわ」

マーズは俺の傷口に鞭の握り手を当てて押してきた。

握り手はワイバーンの鱗で出来ているのか硬く出来ており殴られると結構痛い。

「・・・へっ。その前に俺がてめぇの喉を噛み千切ってやるよ」

首まで固定されてそんな事は出来ないのを承知でありながらマーズはさも怖がった素振りを見せた。

「あら怖い。それじゃもう少し離れて言う事を聞かない男を躾けるとしましょう」

貴族の令嬢風に品のある言葉遣いをするが、瞳はとてもじゃないが貴族の令嬢とは言い難い。

サディストの色が強い・・・フィーナもそうだが、姉妹揃って性格が悪いな。

俺から離れたマーズはまた鞭を撓らせて俺を打ち始めた。

その一方ではヴィールングがジルド・バーランドによって拷問されていた。

爪を剥がす拷問だ。

俺もこれをされた事はあるが、痛くて我慢できる物ではない。

しかも、ジルド・バーランドは爪をナイフで少しずつ食い込ませて剥がすという方法を取っているから痛さも半端じゃない。

類は友を呼ぶというが・・・まさしくその通りだ。

「ほら、どうですか?隊長。痛いですか?ですが、私はもっと痛かったですよ」

貴方に殴られた頬がまだ痛むんです。

ジルド・バーランドはそう言いながら爪をまた剥がした。

「ぐっ・・・き、貴様に殺された者達の痛みに比べればマシだろ?」

ヴィールングは呻き声を上げながらも俺と同じように強がりとも言える言葉を吐いた。

「どうですかね?私は少なくとも安楽な死を与えましたよ?直ぐに、ね。ですが・・・貴方の場合は安楽な死は与えません」

永遠とも言える苦痛を味あわせて、自ら死を与えてくれと懇願させてやると言いやがった。

何処まで性根が腐ってんだか・・・・・・・・

こんな事がもう丸2日も続いている。

あれから俺はヴィールングにここは何処なのか?と訊ねた。

ヴィールングはジルド・バーランドが所有する隠れ家の一つと答えたが、何処にあるのかまでは分からないと答えた。

そして所持品を確認し合った。

俺の方は何も無い。

ライフル、拳銃、ナイフ、手榴弾、携帯などは没収されているし、おまけに服も拷問のせいであちらこちら破けている有り様だ。

お陰で夜が寒くて眠れない。

一方、ヴィールングの方は隠し持っていた薬以外は無い。

これでは脱出も糞も無い。

いや、同田貫があったと思い出し念じてみたが出ない。

それをヴィールングに訊けば「恐らく対魔法術が施されている部屋なのだろう」と言われた。

この対魔法術と言うのは、ヴァイガーで城を護ったような物らしい。

手も足も出ない状態、という事だ。

救出チームが来るのを待つなんて事は最初から考えていない。

仮に俺ではない誰かがこんな状況になっても俺がしないからだ。

何処に居るのかも分からない相手を救出する余力は無い。

何より仮に見つけたとしても助け出すには人手も要るし運が悪ければドンパチだって起こる。

そうなれば余計な損害が出てしまう。

だから、それを考えると救出はしない。

ミーシャ達も恐らくそういう所を考えているだろう。

今頃は俺を捨てると皆に言ったかもしれないな。

まぁ、それで勝てるのなら良いだろう。

それにまだ望みが完全に断たれた訳ではない。

耐えていれば、必ず脱出できる機会がある。

今は無いが・・・必ず機会が来る。

その為にも今はひたすら耐えるしかない。

それはヴィールングも分かっている様子だ。

やがて二人は休憩を挟むのか、荒い息をしたまま牢から出て行った。

「・・・大丈夫か？」

俺は流れ出る血を我慢しながらヴィールングに訊ねた。

「あぁ・・・何とか、な」

ヴィールングは縛っていた縄を自ら関節を外して解いてみせた。

「縄抜けができるとは泥棒にも向いているな」

「余り褒められた物ではないが、捕虜になった時に覚えた」

「なるほどね」

「で、そちらは大丈夫か？」

「大丈夫とは言い難いが、あんたの塗り薬の効果もあるし元から傷の治りは早いんだ」

「それは羨ましい事だ。しかし、何とかして脱出せねば」

「フィーナが心配か？」

「それもある。だが、リカルド王子たちの事も気掛かりだ」

「お前さんはリカルドの方に付いたが、それはこの国を護る為か？」

「あぁ。そなた達の方に味方しても良かったが内部から敵を攻撃した方が効果的とも考えたのだ」

それでリカルド側に付いたのか。

「部下達はどうした？」

「部下達には待機を命じている。万が一の事を考えてな」

つまり無傷の状態で居るということか。

何処に居るのか教えない辺りは俺を疑っている可能性もある事を意味している。

「大した奴だ。で、どうなんだ？リカルド側は」

「強固だ。先ずリカルド王子自身のカリスマ性もあるし腹心のヴィクター公爵も侮れない。フィリップ男爵の方も気弱な性格だが部下思いだ」

「てっきり鼠みたいに姑息だと思ったぜ」

「それは違う。あの男はリカルド王子とヴィクター公爵や大佐と言う男に比べれば影こそ薄いが侮れない男だ」

その証拠に部下の兵たちはフィリップ男爵に従順らしく命を捨てる覚悟まであるらしい。

「それには驚くな。で、蛇と豚それに害虫共はどうだ？」

「ライアナルの方は表向きこそ貴族とリカルド王子の仲介役だ。しかし、裏では貴族たちと結託して何かを考えている。恐らく我々を捕まえた事を利用して自身の地位を更に高めようとする算段だろう」

だが、それはあくまで始めの一歩でしかない。

「この内乱を終わらせた暁には、リカルド王子たちを殺し自分が国を掌握するのが狙いだ」

「だろうな。ああいう奴が考えそうなことだ」

俺はコキコキと首を鳴らしながら頷いた。

「しかし、そなたも強いな。以前にも拷問された事は傷痕で分かるが」

「俺は傭兵なのは知っているだろ？」

「あぁ。異世界から来た傭兵、だったな？」

「その通り。俺が居た世界では“ジュネーブ条約”という物があった」

これは傷病者や捕虜の人道的扱いが取り決められた条約だ。

その第４７条が規定する「戦闘員」に俺たち傭兵は入っていない。

「その中の要約はこんなもんだ」

“主に金銭・利益を目的として雇用され、戦闘行為を行う第三国人、

及びその集団”

「つまり俺たち傭兵は仮に捕虜になっても拷問されようと文句一つ言えない。戦争が終わって国に帰っても殺人犯として捕えられる可能性もある」

だから、俺たちは“万が一”の事を考えて自殺用に1発弾を多く持ったり手榴弾を持つ。

「なるほど。それは良い条約だな。傭兵などが除け者にされるのは酷い話だが」

「いや、俺らに拷問を掛けるのは自由だが、逆に俺らが捕虜に拷問を掛けるのも自由だ」

「そういう見方もあるな」

ヴィールングは一理あると頷いた。

「それで話は変わるが、フィーナはどんな様子だ?」

ここからは父親としてフィーナを心配するか。

「元気が余り過ぎる程だ。毎日のように俺に斬り掛った」

そこら辺はヘンから聞いているだろ?と俺が言えばヴィールングは頷いた。

「ヘン・ロビンソンにはフィーナの護衛も含めているからな」

「そう言えば、前の副団長の代わりと言っていたが・・・左遷させたのか？」

「栄転だ。だが、何もしなくて良いただの飾り職だ」

ある意味では左遷より酷いな。

「エゲツナイな」

「あの男はフィーナを女という単純な理由で愚弄したからだ」

言葉では男女差別が許せないと言っているが瞳は明らかに娘を馬鹿にされて怒っている父親そのものだ。

「まぁ、そういう事にしておこう」

俺は敢えて言わないでおいた。

「で、そなたフィーナの関節を外したらしいな？それ以外にも何度も倒したとか」

「ヘンから聞いているんだろ？」

「確認の為だ」

「まぁ、片手で数える程度は倒した。正攻法しか取らないから実に読み易かった」

「それは兄の偏った教育のせいだ」

「根っからの騎士だったんだろ？」

「そうだ。私の場合は地方を旅したからそうではないが」

「見れば分かるさ。で、愛娘を傷めつけた俺を怒るか？」

「いいや。フィーナには少し強いがそなたと戦って良い経験となったのだろ？」

ただの親馬鹿と思っていたが、そうでもないか。

「まぁな。だが、部下と同じく頭が固くて骨が折れたぞ。ヴィルヘルムなんて男泣きした程だ」

「ヴィルヘルムも居るのか。あの男が師なら安心だ。性格こそ少々悪いが筋は通っているし面倒見も良いからな」

更に戦闘においても団長として相応しい、とヴィールングは褒め称えた。

「だが、先王の怒りを買い国を追われたんだろ？」

「あぁ。先王はこの国には海が無い、と仰った」

海があれば貿易で国も潤う。

そう考えての他国に戦争を仕掛けたと言うが・・・・・・・・・

「それは建前で本当は戦争をしたかったのだ」

「それに付き合わされた国民は良い迷惑だな」

「まったくだ。更に采配も良くない。それをヴィルヘルムは進言したのだが、後はそなたも知っての通りだ」

唯一手に入れた国も結局は公国として独立を認める羽目になった。

その上、他国とも険悪な関係となった。

良い事なんて何も無い。

寧ろ悪い事だけが残った、と言えるな。

「で、そのシャインス公国だが今回の事を知っていると思うか？」

「恐らく知っているだろう」

何故なら向こうには情報を収集する専門組織が居るからだ。

「“幽霊”か」

この手の組織は大抵、自らの正体を敵はおろか味方にも見せない。

煙のように消え去る事が得意だ。

だから、幽霊とか亡霊なんかと言われる。

「幽霊とは言わない。幽霊なら時には手を上げるだろうが、向こうは“鴉”だ」

「鴉？・・・なるほど。鴉か」

「そうだ。だから、情報収集こそするが手は出さない。今回の事も知ってはいるが動かないだろう」

同盟を結んでいても、援軍要請があった訳でもないし下手に他国の問題に首を突っ込んで痛い目に遭いたくないのも理由だろう。

「素晴らしい同盟国だな」

俺は皮肉を込めて言った。

「まったくだ」

ヴィールングは俺の皮肉に肯定とも取れる相槌を打った。

また別の話をしながら俺はフィーナが馬鹿な真似をしないか心配になった。

あいつ・・・結構、軽はずみな行動があるからな。

幕間：敵司令官と対面

自分が与えられた部屋で寛いでいたヴィクター公爵は目の前に現れた自分の部下から報告を聞き終えると頷いた。

「・・・そうか」

「どうなさいますか？」

「知れた事だ」

ヴィクター公爵は部下の問いを一笑した。

「直ぐに大佐とフィリップ男爵に報告しろ」

「リカルド様には？」

「私から連絡する」

「御意に」

部下は一礼すると部屋を辞した。

「・・・ふざけおって」

ヴィクター公爵はギリッ、と唇を噛んだ。

東の地を再び攻めた時、フォース・リーコンから敵司令官が捕えられたという情報を得た。

直ぐに確認したが、そのような情報は無いという答えが返って来た。
その答えをしたのが蛇の紋章を持つライアンナル伯爵だったから疑惑は深まるばかりだ。
それとなく調べさせたが中々、尻尾を出さずに居た。
しかし、諦めずに根気強く調べた結果・・・敵司令官はこちらの手に落ちたと確認できた。
そこには何と味方であるヴィールングまで居ると言う。
最初からヴィクター公爵自身、ヴィールングが「余りに優秀すぎる」点が気掛かりで怪しいとは思っていた。
恐らくライアンナルの方もそれを感づいて捕えた可能性が高い。
こんな命令を出した覚えはヴィクター公爵自身もリカルドもしていない。
まったく身に覚えが無いのだ。
要は自分達で勝手に捕えた、という事だ。
当たり前だがこちらに教えていない。
「舐めた真似をしてくれたな・・・・・・・・」
またしても歯軋りをした。

向こうは恐らく自分達の地位を更に高めようとする算段であろう。
若しくは自分達でこの内乱を終わらせて自分達を亡き者にするかだ。
だが、それ位はヴィクター公爵自身も分かっていたから然して驚かない。

ヴィクター公爵は腰を上げて主人であるリカルド・ウェスビーの元へと向かった。

恐らくもう既に命令をした部下は大佐達に連絡している事だろう、と思いながら。

リカルド・ウェスビーはかつて自分が使用していた部屋で執務をこなしていた。

「どうした？ヴィクター」

リカルドは羽ペンを止めて片腕であるヴィクター公爵に声を掛けた。

「執務中に申し訳ありません。つい先ほど部下が報告をして来ました」

「で、どうだった？」

リカルドは眼を細めながら訊ねた。

「はっ。やはり敵司令官を捕えたようです」

「やはりな。それでどうした？」

その言葉には「ただそれだけを伝えに来た訳ではないだろ？」と言う内容が暗に含まれていた。

「大佐達を向かわせました。恐らく今日中にはこちらに連れて来れると思います」

「そうか。・・・どんな男であろうな？」

敵司令官とは・・・・・・・・・・・・

「容姿などは分かりませんが、実力は折り紙つきと見て良いでしょう」

危険極まりない男、とヴィクター公爵は言った。

「そうだな。しかし、一度で良いから話してみたい」

ヴィクター公爵に言った訳ではなく独白だった。

「恐れながら言わせてもらうなら、早急に処刑するのが宜しいかと思います」

敵が奪い返す恐れもあるし自ら脱走する可能性も捨て切れないからだ。

「それはそうだ。しかし・・・話してみたいのだ」

リカルドは尚も食い下がった。

確かにヴィクター公爵も目障りな存在だが、話してみたいという気持ちはあった。

何故かと言うと答えに困るが、話してみたいのだ。

リカルドは窓を見た。

その後ろ姿をヴィクター公爵は何も言わずに見続けた。

その一方、城を出る数十人の男達が居た。

その内、二人は馬に乗っていた。

フォース・リーコンの指揮官である大佐と言う男と鼠のように出っ歯が特徴のフィリップ男爵だ。

つい先ほど二人の元へヴィクター公爵の部下が訪れてこう言った。

『敵司令官が捕えられた場所が分かりました』

これを聞いた二人は直ぐに出発した。

もう既に準備はしていたから今日中にはこの城へ連れて来れる筈だ。

しかし、向こうは勝手に行動しこちらに何も言って来ない。

・・・知られたくないのだ。

理由は分からないが、それを考えると武装した兵を配置している可

能性が高い。

それを考えて皆は武装している。

フォース・リーコンを連れて行くのもその為だ。

彼等が先頭に立ち周囲を警戒しながらフィリップ男爵の兵が二人を護るように進んで行く。

雪が降り白く染まった森の中を進んで行く。

暫く進んで行くと、小屋が見えた。

「あれですかね・・・・・？」

フィリップ男爵が確認するように大佐に訊いた。

「恐らく」

大佐は頷くと、フォース・リーコンに眼で合図した。

フォース・リーコン達は雪の上だと言うのに素早い動きで小屋を取り囲み二人がドアに近付いた。

左右からドアを挟み、少しドアを開けた。

そして数発ほど撃ち少し間を置いてからドアを蹴破り中に入った。

暫くしてから「クリア」と言う声がした。

それを合図に大佐達が中に入った。

中は別段、何の変哲もない部屋で捕えられた敵司令官の姿は見つからない。

「・・・・・・・・」

大佐は部屋を見回して、何かあると思ったのか周囲を探せと部下達に命令した。

フィリップ男爵も自ら探し始めた。

「男爵がする事は・・・・・・・」

控え目に大佐は言ったが、フィリップ男爵は首を横に振った。

「私は貴方みたいに戦場を駆け巡る勇気も無ければ力も無い」

「・・・・・・・・」

大佐は沈黙した。

フィリップ男爵は４人の貴族の中でも最下位の男爵の地位に居る上に容姿から兵なども劣っている。

それを男爵自身は自覚しているのだ。

これには何を言えば良いのか大佐は分からなかった。

「誤解しないで下さいね?私は何も貴方に嫉妬を抱いている訳では

ありません」

沈黙した大佐にフィリップ男爵は慌てもせず冷静な口調で言った。

「私は貴方にはなれない。しかし、リカルド王子はそんな私でも必要と仰ってくれた。ならば・・・せめてこの位でリカルド王子の役に立てるなら良いのですよ」

その声には自分は役立たずだ、という自覚が含まれていたがそれでも必死にリカルドの頼みを叶えようという心意気も含まれていた。

それに大佐は無言で頷き部下達も部屋を探し回り・・・見つけた。

見つけたのはフィリップ男爵だった。

「大佐。この壁、動きますよ」

フィリップ男爵は暖炉の壁を横にずらしてみせた。

すると下へと通じる階段があった。

「お見事です。男爵」

「まだ早いです。まだ敵司令官を見つけていません」

その者を城まで連れて行きリカルド王子に伝えるまで仕事は終わっていない、とフィリップ男爵は自らを戒めるように口にした。

「これは失礼しました」

直ぐに謝罪して大佐は部下に命令した。

部下が階段を降り「大丈夫です」という声を聞いてから降り始めた。

階段から降りると薄暗い牢があった。

牢の直ぐ横には木製のテーブルがあり、そこには武器が置いてあった。

「ＡＫＭアサルトライフル、コルトＭ１９１１Ａ１、ワルサーＰＫＫ、Ｍ６７破片手榴弾・・・・・・・・・・」

大佐は武器の名を言いながら確信した顔で牢に向かった。

牢の中を見ると二人の男が拘束されていた。

「ルーム・サービスを頼んだ覚えは無いぞ」

両腕を拘束され鞭で打たれた痕が生々しい男が口を開いた。

鉄が錆ついたような声でしゃがれていた。

「失礼だが、貴方の名前は？」

大佐は男に訊ねた。

「先に自分から名乗れ、とママに教わらなかったか？」

対して男は拘束されているというのに軽口を叩いてみせた。

「私はアメリカ合衆国海兵隊に所属“する”クルセイダー大佐という者だ」

「する？元が最初に付くんじゃないのか？」

男は馬鹿にするように喉で笑った。

「私は名乗った。次はそちらだ」

大佐は・・・クルセイダー大佐は気分を害する事もなく男に訊ねた。

「鷹見徹夜だ。階級は少佐で、あんたらが探している敵司令官だ」

「タカミ・テツヤ・・・日本人か？」

「生憎と国籍はベッドの中に置き忘れた」

何処までも人を食ったような態度と言葉を吐く鷹見徹夜にクルセイダー大佐は眉一つ動かさずに隣の男に視線を向けた。

「隣に居るのは誰だ？」

「あんた等のお仲間だったヴィールング・マレルだ」

「そうか」

クルセイダー大佐はフィリップ男爵に視線を向けた。

フィリップ男爵は頷くと前に出て口を開いた。

「私はリカルド国王陛下に仕えるフィリップ男爵だ。タカミ・テツヤ殿ならびにヴィールング・マレル殿。貴殿ら二人にはこれより首都ヴァエリエに来てもらう」

「お好きにどうぞ」

鷹見徹夜は欠伸をしながら答えた。

牢の鍵は無い。

仕方無くクルセイダーは自らの愛銃である“M．E．Uピストル”で鍵を破壊した。

鍵を破壊してフィリップ男爵の部下が二人を拘束した。

「・・・先ずは傷の手当てをしてくれ」

フィリップ男爵は二人の様子を見て部下達に命令した。

「敵である俺に随分と寛大だな」

「貴殿は確かに敵だ。だが、貴殿の実力はリカルド国王陛下も高く評価している。何よりその身体では城まで持つか心配なのだ」

それではリカルド王子の願いを叶えられない、とフィリップ男爵は言った。

「大した忠誠心だ。鼠が紋章と聞いているが・・・侮れないな」

「・・・・・・・」

この言葉にフィリップ男爵は黙った。
敵に褒められて困惑しているのだろうか？
「それから次いでと言っては何だが、俺の武器もとい“彼女”は優しく扱ってくれよ？」
横面を引っ叩いても付いて来る程健気だが、臍を曲げたら大変なんだと鷹見徹夜は言った。
「分かった。それからそれでは寒いだろう。これを着てくれ」
フィリップ男爵は自らの外套を脱いで鷹見徹夜の肩に乗せた。
「おいおい。幾ら何でもやり過ぎじゃないのか？」
「言った筈だ。そなたを城に届けてリカルド国王陛下に会わせるまでは、心配なのだと」
「そうかい。それじゃ有り難く受け取るぜ」
鷹見徹夜は口端を上げて礼を述べた。
それから二人は傷の手当てを受けてからヴァエリエへと護送される事になった。
腕を後ろ手に縛られた二人を武装した兵が囲む。
そして連れて行かれた。

だが、その様子を遠目から見る者が居た。

「・・・・・・やはり、こうなるか」

白い雪が動き音を立て地面に落ちる。

白い衣装を身に纏った者は眉を顰めながら遠く離れて行った一行を見つめていた。

「急いで他の者に連絡しなければ」

そう言ってその者は別方向へと走り出した。

第百四十六章：良い女と決意

私は自室で暫く何もせずにボーとしていた。

もう既に夜となり辺りは暗い。

窓から見えるのは城壁に立てられた松明の炎だけ。

その炎は遠くからでも見えるほど鮮明な色をしており、まるで今の状況を表しているようにも思えた。

今、この国は炎に包まれている。

内乱と言う炎に包まれており、何とかして消火しようとしている最中だ。

消火する水は、タカミ・テツヤだ。

あの男が活躍した事で炎は一時的にだが消えかかった。

だが、また燃え出した。

タカミ・テツヤと言う水を蒸発させる勢いだ。

あの男を見捨てる・・・それは勝つ為、とミーシャ大尉は言った。

プロイセン様達もそれを仕方のない事だと思っていた。

この戦は何としても勝たなければならない。

タカミ・テツヤという水を失うのは痛いが、最終的に勝つのならば良いという事。

だが・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・駄目だ」

私は拳を握り締めた。

あの男が居なければ、この炎は消火できない。

別にミーシャ大尉達の采配を疑っている訳ではない。

少なくとも私よりは遥かに優れている。

では、何が駄目なのか？と言うのならば私自身が駄目なのだ。

私自身があの男を助けないと駄目、という気持ちなのだ。

どうしてこんな気持ちになるのかは分からない。

分からないが、自分の気持ちに嘘は無い。

何としてもあの男を助け出さなくてはならない。

しかし、ミーシャ大尉達は見捨てると言った。

こうなっては仕方が無い。

「・・・・・私一人で助けに行くしかないな」

私一人でタカミ・テツヤを助けられるか分からない。

そして何処に居るのかも分からない。

何の手がかりも無い。

だが、それでも私は助けたいのだ。

助けると私は決めた。

仮に死んだとしても私はそこで終わりだ、とさえ思っていた。

決意をした私の行動は早かった。

直ぐに武器などを装備しバック・パックに携帯食料などを詰め込んで部屋を出た。

今からヴァエリエに向かえば恐らく１０日前後には着く筈だ。

それまであの男が何処に居るのかを調べて、どうやって助け出すかを考えなければならない。

難しい事だが・・・何故か顔はニヤケている。

この状況が楽しいのか?

もし、そうだとすれば私はどれだけ性格が悪いのだ?と思ってしまう。

何とか顔を戻そうとしたが、上手くいかない。

顔と格闘している内に城の外に出た。

外に出たは良いが・・・どうやって行く?

徒歩で行くなど論外だ。

ただでさえ険しい山道であるのに雪まで積って徒歩で行ったら１０日以上、日数が掛ってしまう。

スキーは・・・覚えていないから駄目だし天馬などは持っていない。

ヘリの操縦など論外だしヘリの音は大き過ぎて駄目だ。

どうすれば良いんだ・・・・・・・・・・・・・・・

決意して勇んで出たのに、こうも最初から挫けるとは・・・・・・・・・

その時だった。

馬の蹄の音が聞こえたのは。

馬・・・そうだ!!

馬だ!!

馬があった、と私は今さらになって思い出した。

生憎と私の馬は居ないが、誰かの馬はある。
それを借りようと思い急いで馬小屋へと走る。
馬小屋に行くと数頭の馬が手綱を柱に結ばれていた。
どれに乗るか暫し迷っていると1匹の馬が私を見つめて鳴いた。
瞳は何処か挑むような力を秘めている。
まるでタカミ・テツヤのようだ。
「お前の主は、タカミ・テツヤか?」
と私は思わず訊ねた。
馬は「そうだ」と言わんばかりにまた鳴いた。
「お前の主は・・・敵に捕えられた。私はお前の主を助けたい」
その為にはお前の力が必要だと私は言い続けた。
馬は「力を貸す」と言ったように私には聞こえた。
馬に人間の言葉が解かるのか?と思ったが、今はそれ所ではない。
力を貸してくれるというのなら、有り難く貸してもらおう。
私は結ばれていた手綱を解き静かに馬を小屋から出した。

今は夜で民家などは明かりが消えているから実に進み易かったし誰かに見られる心配も無かった。

城壁には松明を手に持ち兵士が配置されているが何とかなる。

見張りの眼を盗んで小さな門を空けて馬と共に城の外に出る事に成功した。

上手く外に出た私は見つからないように細心の注意を払いながら森の中に入ってから馬に跨がった。

そして腹を蹴った。

馬は鳴かずに歩き始めた。

斜面でおまえけに雪道の為か馬は慎重だった。

しかし、足取りは決して重くは無く寧ろ軽い印象を受けた。

「頼むぞ」

馬に頭を下げながら私はタカミ・テツヤの無事を祈った。

そして、皆に謝罪した。

『申し訳ない。だが、私は自分の事が許せない。仮に生きて帰って来れたら・・・どんな罰でも受け入れる』

命令違反は厳罰。

その命令を私は破ったのだから厳罰は必定と言える。

それでも良い。

あの男を助けられるなら・・・・・・

だが、既に殺されているかもしれない。

もし・・・死んでいたとしても、その亡骸に私が寄り添えるなら構わない。

あの男に一人くらい寄り添う女が居なくては寂し過ぎる。

何よりあの男が捕まったのは私の責任でもある。

なら、あの男に亡骸に寄り添うのは私の役目でもあると思う。

『有り難く思えよ。私のように“良い女”がお前の添い遂げ役になるのだから』

きっと女に好かれた事などないだろうし、仮にあったとしても美人な女は居ないだろう。

私なら自分で言うのもなんだが、美人に入る。

こんな美人を死出の旅に連れて行けるのだから男の本望と言えるだろう。

そんな事を考えた私は馬の手綱を握りながら小さく微笑した。

そんな私に馬は小さく鳴いて速度を上げた。

幾つか見張り台などがあり、暗くて分からないが人の気配は感じる。

聞こえたのでは？と一瞬だけ焦ったが馬は「大丈夫だ」と頷いてみせた。

暗くて殆ど私は見えないのに馬は見えているのか？と思った。

現に木などの障害物を避けて移動している。

暗くて見えない筈なのに、だ。

馬は賢い動物と聞いていたが、それは正解だと私は思わざる得ない。

大した動物だと思いながら私は初めて一人で行動するな、と思った。

今まで一人で行動した事は一度も無い。

何時も部下達が共に居た。

今回は一人。

全て一人でこなさなければならない。

重圧が凄いのだが、自然とそれを跳ね返している。

どういう訳か分からないが、良い傾向だと自分で思う。

―

―　―　―　―　―

私はテツヤから渡された女神の抱擁を吸いながら自分を責め続けた。

今いるのは司令塔となっているテントの中でもう既に夜となり辺りは暗い。

その暗さが先の事を表しているような気がしてならない。

『テツヤを見捨てると言われた時、なぜ黙った？なぜ諦めたのだ？』

何度も自問自答しては明確な答えは出せなかった。

あの男は、この国の為に命懸けで戦った。

本来なら勲章を与えて名誉あり活躍できる役職を与えても良い活躍をした。

そんな男を私は助ける事も出来ずに・・・見殺しにしてしまう。

くそっ。

あいつを助ける手立ては無いのか？

だが、場所が分からない。

そしてどれだけの兵力が必要なのか、無事に救出する事が出来るの

かも分からない状況だ。

こんな状況では下手に動かす事は出来ない。

だから、見捨てるしかないのだ。

そうミーシャは・・・言った。

ミーシャ自身も本当は見捨てたくない筈だ。

あの時の眼を見れば誰にだって解かる。

それに私は一度、あの女に締め上げられた経験がある。

テツヤを汚したからだ。

私の胸倉を掴み睨むミーシャの瞳は間違いなくテツヤを敬愛していた。

そんなテツヤをあの女は見捨てると言ったが本心ではない。

助けたい筈だ。

それでも・・・・この戦いを制する為には無駄な犠牲を出せない。

それを理解しているからこそ、見捨てるのだ。

プロイセンやヴィルヘルムもそれを理解し経験しているからこそ、

何も言わなかったのだろう。

しかし、私は我慢できない。

何とかしてテツヤを助け出せないのか?と思うし、飾り物である自分に苛立ちを隠せない。

「・・・・・くそっ」

私は短くなった煙草を地面に捨てた。

「ちゃんと消しなさいよ。馬鹿」

前から声がして顔を上げた。

そこにはイザベルが居た。

「なぜ、そなたが・・・・・・・・・」

「髭が格好良い小父さまに頼まれて来たのよ」

「・・・プロイセンか」

髭が似合う男と言えば、あの男位だ。

「えぇ。あんたが酷く塞ぎ込んでいるから何とかしろ、と言われたのよ」

「それで来たのか?」

「そうよ。他に何かある?」

「それは・・・・・・・・」

私は答えが言えずに黙った。

「話は聞いたわ。テツヤさんを見捨てるのね？」

「・・・あぁ」

私は後ろにある椅子に腰を降ろした。

「何処に居るのかも分からない。それに一人だけ救出するのに無駄な兵力を裂けないのが理由だ」

「そう。でも、あんたは納得できないんでしょ？」

「・・・あぁ。納得しろ、と言う方が無理だ」

私は手を組み額に当てた。

「あの男は、この国とは縁も所縁もない傭兵だ。それなのに、この国を愛し毛嫌いしていた私を立ててくれた。言わば恩人だ。そんな男を・・・私は・・・・助けられない」

それが悔しくて、哀しくて、情けない・・・・・・・・

「どうすれば良いんだ？私は・・・・・・・・・・」

「あんたはどうしたいの？」

「テツヤを助けたいに決まっているだろ！！」

私は分かり切った答えを訊くイザベルに私は怒気を込めて叫んだ。

「テツヤを助けられずにこの戦いに勝利しても私は生涯を悔いて腑抜けのように生きるだろう」

現実的に考えるならテツヤ一人の犠牲で済む。

それで勝てるのならば安い物だ、と思う事だろう。

「だが、それでは駄目なのだ。テツヤ一人を助ける事も出来ずにこの国を本当の意味で救う事など出来ん。私はテツヤを助けたい！そしてこの国を本当の意味で救いたいのだ。皆が笑顔で暮らせるような国にしたいのだ！！」

かつて・・・私が宰相になった頃、思い描いていた国にしたい。

それをテツヤにも見せたい。

あの男をここで死なせる訳にはいかないのだ。

「だったら、そうミーシャさんに言えば良いじゃない」

イザベルは荒い息をする私を冷静な眼差しで見ながら言ってきた。

「あんたは総大将でしょ？飾り物だけど変わりは無いわ。だったら、あたしに言った事をそのまま言えば良いじゃない」

本当に馬鹿ね、とイザベルは言ったが瞳は優しく私の背中を押してくれるようだった。

「私はこの国が滅びようがどうなろうが関係ないわ。でも、あんたに関しては別。あんたが生涯腑抜けになって生きるのは見たくないの」

自分の眼を潰してでも、ね・・・・・・・・

イザベルはそう言った。

「・・・あんたは腑抜けだったけど、今は違うわ。その状態を続けて。さもないと、私・・・自分の眼を潰すわ」

「ふんっ・・・安心しろ。貴様の眼が潰されては困るんでな」

私は不敵に笑ってみせた。

そして歩き出した。

ミーシャの所へ行く。

何としてもテツヤを救出しなければならない事を言わなければならない。

そうしないと駄目なのだ、という事をミーシャに伝えるのだ。

私の思いを・・・全て伝えるのだ。

幕間：初めての対峙（前書き）

ここでトーマス・ジェファーソンとオスカー・ワイルドの名言を載せておきます。

ですが・・・場面的に合っているのか、というか言葉を正確に私が意味を捉えているのか心配ですが。（汗）

幕間：初めての対峙

サルバーナ王国の首都ヴァエリエ。

城は今では当たり前の種類である平城。

名はエスカータ城。

周りを街を覆うようにして城壁で囲まれており、水堀が一個だけ掘られている。

しかし、それだけだ。

それ以外は何も無い。

塔はあるがあくまで飾りに等しいし対魔法防御なども施されていない上に水堀も底が浅いから直ぐに埋め立てられる。

そのため「無防備な城」と影で嘲笑されている。

そんな城だからこそ、いとも容易く落城したのだ。

しかし、その無防備な城にも牢屋はある。

牢屋には二人の男が収容されている。

一人は敵司令官。

もう一人は裏切った味方。

その二人が牢に繋がれている。

だが最初からここに居た訳ではない。

反乱軍に所属する数人が勝手にこの二人を捕えて城ではない別の所に幽閉していたのだ。

それを反乱軍の首謀者であるリカルド・ウェスビーが知り二人をここに移したのだ。

もちろん勝手にやった者達には何も言っていないし、後で厳しい仕置きをする予定だ。

牢屋は城の地下にある。

地下へと通じる階段を降りるのは反乱軍の指揮官であるリカルド・ウェスビーとその片腕と称されるウルフことヴィクター公爵の二人だった。

「それでどうなさいますか?リカルド様」

ヴィクター公爵は前を歩くリカルドに訊ねた。

本来ならヴィクター公爵が前を歩くのだが、リカルド自身が前を歩くと言うのでこの形となっている。

「敵司令官とヴィールングの事か?」

それとも・・・・・・・・

「どちらもです。どちらも我々にとっては眼の上の瘤と思いますが」

「そうだな。しかし・・・戦に勝てる見込みがあると思うか？」

リカルドは前を見ながら訊ねた。

「敵司令官を捕えた事で向こうの士気は少なからず下がったと考えられます」

今を叩けば勝てる可能性が高い、とヴィクター公爵は言った。

可能性が高い・・・普段のヴィクター公爵ならこんな言葉は言わない。

勝つか負けるか・・・この二通りしか彼の頭には存在しないのだ。

だが、可能性が高いと述べた事を考えると本当にそうなのだろう、とリカルドは思った。

この前の戦いでフォース・リーコンはほぼ無傷で任務を終えたしワイバーンの方も無傷だった。

ただし、中央貴族は一度の戦いでもう戦うのは嫌だ――厭戦状態になった。

高々、一回の戦でもう嫌だという彼等にヴィクター公爵は直ぐにでも処刑したい気分だった。

勇んで自分達が落としてみせると大口を叩いたくせにいとも容易く

撃退されて、挙句の果てにもう和睦しようと言う始末だ。

こんな奴等を生かす価値は無い、とヴィクター公爵は思っていた。

何より奴等こそ、自分達が兵を起こした元凶だ。

地方を食い物にしただひたすら自分達の腹を満たす為だけに生きて来た。

そんな奴等を当初は利用価値があるから、始末するのは早いと思っていたがここまで来るともう殺しても良いとさえ思っていた。

だが、とヴィクター公爵は自分の気持ちを押し殺した。

ここで殺すのは駄目だ。

もう少し彼らには働いてもらう。

そうしなければならないのだ。

必死に自分の気持ちを抑えながら、そんな状況にした男ともう直ぐ会えるのだと感じる。

牢に繋がれている二人の内一人は敵司令官だ。

自分達の計画を破壊し今の状況にした男。

「どんな男ですかね？敵司令官は」

「さぁな。だが、それももう直ぐ分かるさ」

仰る通りです、とヴィクター公爵は頷いた。

そう・・・もう直ぐ会えるのだ。

一体どんな人物なのか・・・・・・・・・

そして地下の牢に到着した。

そこには槍を持った二人の兵が直立不動で立っており、別の場所・・・椅子とテーブルが用意された所にはフォース・リーコンの指揮官であるクルセイダー大佐と鼠の渾名を持つフィリップ男爵が居た。

二人はリカルドとヴィクターを見ると椅子から立ち上がった。

「ご苦労だった」

リカルドは二人に労いの言葉を掛けながら、テーブルに置かれた品々を見た。

「これは？」

「敵司令官が所持していた物です」

「そなたと同じような武器だが・・・・・・・・」

「恐らく私たちと同じようにこの世界に来たのでしょう」

「そうか。名は？」

「タカミ・テツヤ。階級は私より2階級下の少佐です。性別は男で歳は３３歳」

それ以外は全て言わない、とクルセイダー大佐は言った。

「・・・・・・・」

リカルドは牢の方へと向かった。

槍兵は敬礼をしてリカルドの為に左右に移動した。

牢には肩膝に手を置いた一人の男が居た。

黒髪に黒い瞳で無精髭を生やしている。

容姿は・・・決して良いとは言えない。

だが、一度見れば忘れない強烈な・・・何かを秘めている。

上半身は裸で真新しい傷が鮮明に残っている。

肩にはそれなりに贅が凝らされたマントが掛けられていた。

「そなたが敵司令官のタカミ・テツヤか？」

「あぁ。そういうあんたはリカルド・ウェスビー王子様だろ？」

男・・・タカミ・テツヤはリカルドを見ながら訊ねた。

「如何にも。サルバーナ王国新国王リカルド・ウェスビーだ」

「まだ女王が居るのに国王様気取りか？」

タカミ・テツヤは小馬鹿にする口調でリカルドに言った。

その態度にヴィクター公爵は眉を顰めたが、黙ってタカミ・テツヤを見つめた。

『この男が敵司令官か。・・・なるほど。出来る男だな』

瞬時にヴィクター公爵はタカミ・テツヤの力量を認め生かしておけないと思った。

その傍らではリカルドがタカミ・テツヤの言葉に答えていた。

「確かに、まだ国王ではない。だが・・・その女王も近い内に殺す」

「ほぉう。そうかい・・・で、そっちの色男は誰だ？」

リカルドは隣に立つヴィクター公爵に視線を向けた。

「私の片腕であるヴィクター公爵だ」

リカルドに紹介されたヴィクター公爵は改めてタカミ・テツヤを見て名乗った。

「ヴィクター公爵だ。そなたの名はタカミ・テツヤと言うらしいが、テツヤが名前か？」

「あぁ。タカミが名字だ。大佐の方は名前を先に言ってから名字を

言うが俺の方は名字が先で名前が後だ」

「丁寧な説明感謝する」

「いえいえ。で、何の用だ？」

今度は道化のようにおどけてみせたがタカミ・テツヤだが、直ぐに要件を切り出してきた。

「そなたと一度、会ってみたくてな」

リカルドが要件を伝えた。

「俺もだ。偵察で一度だけ遠目からあんた等を見たが、直に話したいと思っていた」

「偵察に？」

「あぁ。あんた等はそこの大佐が指揮するフォース・リーコンを使いカルナン、ザンビアで偵察をさせて陣を敷いたんだろ？」

「その通りだ。戦に置いて陣を何処にするのかによって勝てる戦も負けるからな」

「その他にも城に潜入して内部を調べ、大臣の一人を脅して見取り図を手に入れた」

「そこまで知っていたとは驚きだ。だが・・・有効な手を打つのが遅すぎたな」

「まぁな。だが、それでもまだ挽回できるチャンスはある」

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

二人は無言になった。

いや、その場に居た者達は無言になった。

この男は自分の状況が理解できていないのか？と思えるほどふてぶてしい態度を取っている。

拷問されたと言うのに、痛さを見せていない。

いやそれ所か、もう傷が癒え始めているではないか。

「そなた人間か？」

思わずリカルドは訊ねた。

「あぁ。人間だ。ただ、ちょっとばかり諦めが悪くて性根がねじ曲がっているがな」

口端を上げてニヤリと笑うタカミ・テツヤ。

リカルドは興味を益々募らせたが、ヴィクター公爵は更に警戒心を強めた。

「今度は俺から質問しても良いかな？」

「何だ」

「二人組の男が居るだろ?顔に大きな傷痕がある男と眼が血走っている男だ」

「ハゲタカの二人か」

クルセイダー大佐が答えた。

「あぁ。あいつ等の名前は分かるか?」

一人は分かるが、もう一人は分からない。

「ディックだ。顔に傷痕がある男だろ?」

「あぁ。そうか・・・・ディックだったか。あいつの名は」

「知っているのか?」

「あぁ。何せあの二人を・・・いや、正確にはあの男達を戦死させたのは俺だからな」

生憎と戦死させた者の名は忘れるようにしているため忘れていた、とタカミ・テツヤは続けた。

「なるほど。だから、異状な程・・・君に執着していた訳か」

クルセイダー大佐は納得するように頷いた。

「しかし、お前さんも物好きだな。あんな奴等に援軍を頼むとは」

「・・・私たちはヘリを持っていないからだ」

「なるほど。それで自らハゲタカに腸を食わせているのか」

「・・・その通りだ」

苦しい表情をしながらクルセイダー大佐は頷いた。

「それからフィリップ男爵。あんたに言いたい事がある」

「何だ?」

タカミ・テツヤはフィリップ男爵に声を掛け、男爵は訊き返した。

「あんたの部下、プレス・ハート。あいつは俺らが預かっている」

「プレス・ハート・・・生きていたのか?!」

フィリップ男爵は牢に齧り付くように近づいて来て訊ねた。

「あぁ。生憎とあいつしか生き残らなかったが、それでも生きている」

「そうか・・・しかし、なぜ助けたのだ?彼はただの槍兵。私や大佐達のように身分が高い者ではない」

そして敵だ。

敵なら迷うことなく殺す筈だろ?とフィリップ男爵は言い続けた。

「別に他意はない。俺の部下が連れて来たんだ。殺す事も出来たが、色々とあんた等の事を知りたかったから助けた。怪我も順調だから問題無しの筈だ」

「・・・礼を言わせてもらう」

フィリップ男爵は牢から離れて静かに一礼した。

「あんたは傷の手当てとマントをくれた借りがある。それを返しただけだ」

タカミ・テツヤはぶっきら棒とも言える声で返した。

その様子を見ていたリカルドが声を発した。

「皆、すまないが・・・二人切りにさせてくれ」

「リカルド様。それは・・・・・・」

ヴィクター公爵を始めそこに居た者たちは動揺を隠せなかった。

武器は取り上げたとは言え、侮れない男と二人切りにするなど危険すぎる。

「命令だ。二人切りにさせてくれ」

「・・・分かりました。ただし、余り長くは許しませんよ」

「分かっている」

リカルドは頷きながら槍兵の一人に鍵を開けるように命令した。

槍兵は戸惑いながらも鍵を開けてリカルドを中に入れた。

そして皆は去って行った。

「これで二人切りになれたな」

「まぁ、ヴィールングのおっさんは2つ先の牢に居るがな」

「そうだな。・・・先ずは改めて名乗ろう。私はリカルド・ウェスビー。サルバーナ王国第12代目国王ガルバー・ロクシャーナの第一男子だ。母は愛妾のトレーシだ」

「ご丁寧にどうも。俺は鷹見徹夜。元傭兵で階級は少佐。両親は知らない」

「両親を知らない？」

「捨て子だったんでね」

「なるほど。では、訊く。そなたはこの国の人間か？」

「いいや。前の世界で死んでからここに来た」

「大佐達と同じだな」

「というと向こうも死んで来た、ということか」

「そう言っている。それにしても随分とやられたようだな？」

「あぁ。蛇に豚と女王様にハゲタカにやられた」

「女王様？」

「ワイバーンの女傭兵だ」

「ワイバーンの・・・やはり、ライアンナルの息が掛っていたか」

ワイバーンの傭兵・・・これもライアナル伯爵が連れて来た。

だから、息が掛っているのでは？と思っていたがどうやら的中らしい。

「どうやら蛇とは仲が悪いようだな？」

タカミ・テツヤの眼が鋭くなった。

「そなたはあの男を信じられるか？」

「いいや。あんな男を信じられるほどお人好しじゃない」

「そうであろうな。そなたを見ていると頷ける」

信じていた者に裏切られた経験がある、とリカルドは言った。

「大した眼だ。戦の技術もそうだがあんたは国王として器があるな」

「敵であるそなたに褒められるとは複雑だな」

リカルドは微かに苦笑した。

「本当の事を言ったまでだ。あんたなら、女王が出来ない汚れ仕事も出来るだろうからな」

「女王は・・・・母上は、優し過ぎるのだ」

リカルドは一瞬だけ昔を思い出したように眼を伏せた。

「誰に対しても分け隔たれなく優しくなさる慈愛の持ち主だ。そして・・・・人を疑う事を知らないし、私を産み落とした女の虐めにも黙って耐えていた」

「虐められていたのか？あんたの母親に」

「あんな女・・・・母親などではない。あの女は私をこの世に産み落とし好き勝手に生きて死んだ憐れな女でしかない。先王もそうだ。何一つ父らしい事をしなかった」

ただ戦の事しか頭に無く民達を苦しめた愚かな男だ、とリカルドは断罪した。

「辛口な評価だな。まぁ、話を聞いている限りただの戦争馬鹿と思えるがな」

「その通りだ。それで、そなた何故、この国の為に戦っているのだ？」

リカルドは真っ直ぐにタカミ・テツヤを見て訊ねた。

「金の為でも名誉の為でも無いのは分かる」

何故、何の縁も所縁も無い国の為に命を掛けて戦うのだ?

「じゃあ、訊くがお前さんは何故、反乱を起こしたんだ?」

「闇に包まれ暗い世界の地方にも光を・・・・灯火を灯す為だ」

リカルドはギュッ、と拳を握り締めた。

「その為には中央の民達を犠牲にしても良いと言う考えか?」

「中央は我々を・・・地方を傷付けた。その報いを中央は受ける義務がある」

「お門違いというもんだぜ?それは」

タカミ・テツヤは鼻で嗤うように言ってきた。

「その報いを受けるのはお前さんが体内に自ら招き入れた害虫共だ。それを民達に受けさせるのは酷い話だ」

「・・・・知っている。だから、この戦いが終わった暁には奴等を始末する」

「それまでは蛇達も好き勝手にさせておく訳か」

「そうだ。全ては未来の為。この王国だけではなく・・・・5大陸

を護る為だ」

「帝国からか？」

「・・・知っていたのか」

リカルドは少なからず驚いた。

帝国の事はある程度は皆、知っているが本当にそんな考えを実行するのか？と疑問を抱いていた。

だから、真面目に考えようとはしない。

特にこの国はそれが顕著な程に出ている節がある。

それを異世界から来たこの男は考えている。

それにリカルドは驚いた。

「エドリアス司教から聞いたのさ。帝国はこの５大陸を我が物にしようとしていると」

「司教か。あの方ならこの事態にも薄々は感づいていたのだろ？」

サルバーナ王国聖教の司教を務めるエドリアス・モンド。

彼とは面識があり、その知識と人格にはリカルドも一目は置いていた。

だから、彼なら自分達の事も薄々は感づいていただろうとリカルド

は思っていた。

「あぁ。お前さんを暗殺するのも仕方のない手、と言っていた」

「その通りだ。我々をさっさと殺しておけば、こんな目には遭わなかった。あの女は優し過ぎるのだ」

まるで自分の気持ちを押し殺すようにリカルドは言い続けた。

「そうだな。だが、その優しさがあるから民達は笑顔で暮らしていた。まぁ、その半面で害虫共をのさばらせる羽目になったが、な」

「その通り。そなた達は、我々を反乱軍と呼んでいるようだが我々の方にこそ正義がある」

虐げられた民達を救い、害を撒き散らす者共を成敗するという大義名分があるのだ。

故に正義なのだ。

「これはクルセイダー大佐から聞いた言葉だが、今の現状と似ていると思う・・・・・・・・・」

『自由の木は愛国者と暴君の流す血で生き生きと育つ』

「“トーマス・ジェファーソン”の言葉だな。まぁ、似ていると言えば似ているな。俺もあんた等に似合う言葉があるから言わせてもらう」

『愛国主義者とは暴力的な紳士である』

『これは“オスカー・ワイルド”という人物が言った言葉だ。あんた等には確かに大義名分がある。しかし、やっていることは反乱と言う名の暴力だ。まぁ、共感できる面はあるが』

「・・・そなたは不思議な男だ」

敵である私に同調する所もあるのだから。

「本当の事だ。あいつ等はこの国に巣食う害虫。何一つ良い事はしない。居るだけで害を与える虫でしかない。あんた等を倒したら・・・いや、首都を奪回したら真っ先に根絶やしにするさ」

「首都を奪回、か。この状況で出来るのか？」

捕らわれの身であるそなたに・・・・・・？

「今は無理だ。だが・・・必ず奪回する。そしてあんたには悪いが死んでもらう」

女王を再びこの地に来させるために・・・・・・・・・・・・この国を護る為に・・・・・・・

「では私は女王を殺し、かつて首都だった場所を滅ぼそう」

この国を救う為に・・・護る為に・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・」

お互いに瞳を合わせるだけで一言も二人は言葉を発しなかった。
だが、互いに共感できる面があると理解していたし、志もまた同じだと知っていた。
しかし・・・・どちらも譲れない部分がある。
そして決して相容れないのだと分かっている。
「・・・何かあれば私を呼べ。最低限の事は保障する」
「なら、酒と煙草をくれ。煙草は俺の荷物にある筈だ」
「直ぐに持って来させる」
リカルドは背を向けて牢から出た。
その背中をタカミ・テツヤは黙って見続けた。
牢から出たリカルドは槍兵を呼び、酒と煙草を用意しろと命令した。
「宜しいのですか？」
「あの男に最低限の事は保障する、と約束したのだ」
約束は守らなければならない、とリカルドは独白した。
それを聞いた槍兵は頷いて酒を取りに行った。

「どうでしたか？あの男は」

ヴィクター公爵がリカルドに訊ねた。

「・・・惜しい男だ」

それだけリカルドは述べた。

「そうですか」

ヴィクター公爵は頷くだけだった。

その時のリカルドの表情は・・・・・・とても苦しい表情だった。

そして一人、立ち去って行った。

幕間：初めての対峙（後書き）

また糸が誤字だったので直しました。（汗）

第百四十七章：恋する女は無敵

テツヤ殿が敵に捕えられてから1日が経過した。

その間・・・何も出来ずに呆けていた。

何処で寝たのかも分からないし、食事をしたのかも分からない。

何もする気が起きない・・・・・・・・・・・・

私はどうすれば良いか分からなかったが、それでも何かしなければならないと思い射撃の訓練をしようと思い立った。

射撃場に行こうと廊下を歩いているとエリーナ様と鉢合わせした。

「エリーナ様・・・・・・・・・」

「ランドルフ。どうなさったのですか?顔色が悪いですけど・・・・・」

目元も赤いですよ・・・エリーナ様は私に手を伸ばして来た。

「・・・何でもありません」

私は後ろに数歩後退した。

「ですが・・・・・・」

エリーナ様は後退した私に尚も何かを言おうとしたが、私はそれを

遮った。

「何でもありません。気にしないで下さい」

普段ならここで下がるエリーナ様なのだが、今回は違っていた。

「・・・そんな、泣きそうな顔で言わないで下さい」

強い眼差しで私を見ながらエリーナ様は断言した。

確かに・・・私の顔は泣きそうな顔だろう。

だが・・・・・・・・・・・・

「・・・貴方には関係無いです」

放っておいて下さい、と私は言った。

「いいえ。関係あります」

「私は平民で貴方は王女・・・・・・何の関係があります?答えは何も無いですよ」

「身分は関係ありません。目の前で泣きそうな顔をしている方を身分違いだから放っておけと言うのですか?」

「二度も同じ言葉を言うのは好きではありませんが、貴方には関係ない。私の問題です」

「貴方の問題であろうと、私はそれを知りたいのです」

「下手な好奇心は身を滅ぼしますよ」

「好奇心ではありません」

「では何ですか？」

エリーナ様が答えようとした所で無線が鳴った。

「こちらリンクス」

『イーグルだ。急いでフィーナ嬢の部屋に来てくれ』

「フィーナ殿の部屋に？」

『あぁ。詳しい事は来てから話す。５分以内だ』

軍曹の声は冷静だったが、どうも妙な感じがしたので私は急いで行こうと思った。

「エリーナ様。申し訳ありませんが失礼します」

断ってから私は背を向けて走り出した。

だが、エリーナ様の走る音まで聞こえてきた。

「どうして貴方まで付いて来るのですか？」

「私の自由です」

とエリーナ様はツンとした顔で答えた。

「・・・・・・」

私は何も言わずに走り続けた。

今にして思えばかなり気が立っていた、と思う。

王女相手にあんな言葉使いは不味過ぎる。

後で謝罪しようと思いながら私は・・・エリーナ様の走りに合わせた。

フィーナ殿もとい要らない荷物の部屋は城の一角にある塔だ。

プロイセン様などの部屋は客室なのに対して、あの女だけは敢えて塔を選択した。

選ばれた者だから誰よりも高い場所を選んだのか？

それとも無意識か？

どちらにせよ碌な理由は無いだろうな、などと私は思いながらドアを開けた。

そこには軍曹達が居た。

しかし、リーザ中尉の姿は居なかった。

以前より恐らく立ち直るのは遅いかもしれないな、と私は思った。

中尉の身分だが、テツヤ殿が目の前で攫われて見捨てると言われたのだからその心境は計りしれない。

「来たか・・・・って、何で“お人形ちゃん”まで居るんだ?」

軍曹は私の後ろに居るエリーナ様を見た。

お人形・・・まぁ、強ち間違いではない、と思いながら私は答えた。

「付いて来たんです。私の自由だ、と言って・・・・・・・・」

「まぁ、良いだろう。それにしても随分とご機嫌斜めだが泣かせたか?」

「そ・・・・・・・」

「泣かされそうになりました」

エリーナ様は私が言うのを遮り軍曹に言った。

「・・・もやし。お前は、この非常事態に何をしたんだ?」

軍曹は信じられない、という顔をして他の皆もそうだった。

「い、いえっ。私は別に・・・・・・・・」

慌てて弁解しようとしたが、それもエリーナ様に遮られてしまった。

「私が心配したのに、彼は氷のように冷たい顔で何でも無いと言い

ました。尚も心配する私を、彼は身分違いだし関係ないと言って去ろうとしました。私は、こんなにも心配しているのに・・・・・」

私の繊細な身体は深く・・・剣で貫かれるほど傷つきました。

「随分と酷い事を言うな。お前」

「ですから、それは・・・・・・」

「まぁ、状況が状況だから大目に見てやる。それはそうと問題発生だ」

軍曹は面白そうな顔から一気に真剣な顔つきに変わった。

私の弁解は結局、出来なかった。

だが、ここで落ち込んだりせずに気持ちを切り替える。

「その問題とは？」

テツヤ殿に続いて今度は何だ？と私は思った。

「ここに住んでいた奴は誰だ？」

「フィーナ殿ですね・・・・・まさか」

私は当たり前の事を答えたが、直ぐにその質問が解かった。

「そのまさかだ。あの嬢ちゃんは一人で旦那を助けに行ったんだよ」

手紙を見ろ、と言われて差し出された手紙を読んでみる。

『私ことフィーナ・マレル中尉は前線指揮官であるタカミ・テツヤ少佐を救出しに向かう。無事に戻る事が出来たら如何なる罰も受ける覚悟です。』

と簡潔に書かれていた。

しかし、続きがあった。

『なお私が死んだら、部下達の事をよろしくお願いします。ヴィルヘルム師匠にも宜しくと伝えておいて下さい。では』

「・・・・・・・・・」

「これを読んだ姐御はもう激怒して手が付けられない状態だ」

勝手な行動を取るとは良い度胸だ。銃殺だ!!と叫んだらしい・・・・・・・・

ミーシャ大尉なら本当に銃殺しそうな物だがそれは後だ。

今はこれからの事だ。

「・・・どうしますか?」

「それを話し合おうと思って呼んだ」

「あの、テツヤ殿は、捕えられたのですか?」

エリーナ様が控え目に訊ねてきた。

「あー、お嬢ちゃんは知らなかったんだな。あぁ、旦那は敵に捕えられた」

軍曹は見捨てる事を言わなかった。

「それでフィーナは助けに・・・・・・・・・・・・」

エリーナ様は信じられない顔をしたが事実だ。

私も信じられないし、信じたくない事実だった。

「そういう事。ランドルフ1等兵。王女殿下を部屋まで送れ」

「了解しました」

私は敬礼をしてからエリーナ様を連れて塔から降りた。

塔から降りた私とエリーナ様だが、話は一言も交わさなかった。

私も敢えて言葉を出さずに黙ってエリーナ様を部屋まで送り届ける事に集中した。

後もう少しで着く所で、また無線が鳴った。

嫌な予感が直感的にした。

「こちらリンクス」

『こちらワイドだ。今何処だ?』

「エリーナ様を部屋に送り届ける所ですが、また何か遭ったのですか?」

『また何か遭った?ということは何かそちらでも遭ったのか』

「えぇ。それでワイド中尉は今何処に?」

『ミーシャと共にミレーネ様の家なんだが・・・うわっ』

『こちらミーシャだ。坊や。今何処だい?何処に居るかは知らないが今から3分以内に来な。3分だよ?分かるね?』

ワイド中尉の声から察するにミーシャ大尉に無理やり奪われたんだろうな、と思いながら私は相手が居ないのに頷いた。

「はい。3分ですね。3分でそちらに行きます」

そう答えないとミーシャ大尉は何をするか分からないような声をしていた。

軍曹の話もあってか・・・恐らくもうかなり激怒しているのだろうな、と分かる。

『良い子だ。直ぐに来な』

「了解」

私は無線を切りエリーナ様を見た。

「エリーナ様。後はご自分で向かって下さい」

エリーナ様はまた何か言おうとしたが、私はそれを無視して急いで向かった。

3分以内に行かないと何をされるか分からない。

私の直感がそう言っていたからだ。

そして・・・・・・・・・・・・・・・

「2分と59秒・・・ギリギリ間に合ったね」

ミーシャ大尉は氷の女王を吸いながら腕時計を見て呟いた。

その奥にはワイド中尉、メジュリーヌさん、ミレーネ様の3人が居た。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・大尉。何が遭ったんですか?」

私は息も絶え絶えになりながらも訊ねた。

「その前にそっちで何が起きたのか聞かせてくれないか?」

「は、はい・・・・・・・・・」

息を整えてから私は言った。

「あぁ。その事か」

ミーシャ大尉は既に知っていたから頷くだけだったが、ワイド中尉の方は知らなかったのか驚いた顔をしていた。

「リーザ中尉に続いてフィーナ中尉まで・・・・・・・」

「リーザ中尉も、まさか・・・・・・・」

「あぁ。あの女同様に少佐を助けに行っちまったよ。・・・・・・たっく女ってのはどうしてこうも愚かなんだろうね？」

「あの、大尉も女ではないんでしょうか？」

「性別で言うならあたしは女だ。だが、今まで誰もこんな事をしたいと思った程、愛した男は居ないんでね」

「はぁ・・・それで、こちらには手紙はありましたか？」

「あったよ。これだ」

ミーシャ大尉は私に手紙を差し出した。

『拝啓、これを読む頃には私はもう城には居ないと思います。私は軍人として失格ですね。上官の命令を無視するのですから・・・・ですが、一人の女として愛する殿方を助けたいという気持ちに嘘は吐けません。どうか、この憐れな私を笑って下さい。

最後になりますが、父プロイセンの事は宜しくお願いします』

「・・・たっく、二人揃って単独で行くとは・・・しかも、内一人は同居人が居たのに」

ミーシャ大尉はミレーネ様とメジュリーヌさんを見た。

「最初は止めたぞ。しかし、あの娘の瞳を見て行かせた」

「へぇ・・・で、あんた達は何で行かなかったんだい？」

「あの男は妾が惚れた男じゃぞ？その男が簡単に死ぬ物か」

メジュリーヌさんはミーシャ大尉の睨みを物ともせず自信満々で答えてみせた。

「確かに寂しがり屋さんなら簡単には死なないわね。敵もそう簡単には殺さないでしょうし・・・いざとなれば自力で脱出するわ」

ミレーネ様もメジュリーヌさんの言葉に同意するかのように言った。

毎夜、枕元で話す昔話から二人は推測しテツヤ殿を信じている口調だった。

「やれやれ。恋する女は無敵と言うけど、あんた等の事を表しているようだよ」

「そなたも何れは妾らのようになるさ」

「そうなると良いんだけどね・・・・・・・・・」

ミーシャ大尉は肩を竦めながら溜め息を吐いた。

「さぁて、これからどうするか・・・・・・・・ね」

誰に言う訳でもなくミーシャ大尉は呟いた。

それに私たちは答えられなかった。

第百四十八章：相棒と共に

城を出てから一日が経過した。

夜通し馬は歩き続けているが、未だに体力は衰えていない。

私の方は、途中で眠ってしまいそうになりながらも今に至っているが・・・やはり眠い。

眠いが、あの男を・・・テツヤの事を考えると寝る間も惜しんで進まなければならないと思い直し鞭を打つ。

後9日も掛る。

それまでに何処にあの男が捕えられているのかを調べなければならない。

何処に居る？

私は馬に揺られながら考えた。

ワイバーンの傭兵は蛇ことライアンナル伯爵の手下と考えられる。

となれば、別な所に収容された確率が高い。

何処だ？

一体何処に収容された？

私が奴なら何処に収容する？

先ず簡単には見つからず城からそれほど離れていない場所に収容する。

もし、これが当たっていれば城からそれほど離れてはいない場所、しかも森林地帯だ。

エスカータ城は森に囲まれている。

東側にはテツヤが作った砦があったから、恐らく東側には無い筈・・・・・・

となれば残り3方の何処かにある可能性が高い。

何処だ・・・・・・・・

考え込んでいると馬が顔を上げている事に気付いた。

私も釣られて上を見ると、そこには一頭の白い天馬が居た。

後ろからも音がして振り返れば馬が2頭こちらに走って来た。

再び上を向くと天馬は少しずつ降りて行きある程度の距離になると乗り手は飛び降り・・・私の顔面に蹴りを入れて来た。

不意打ちに私は馬から崩れ落ち、雪の地面に倒れた。

間髪入れずに銃を抜かれる音がした。

慌てて立ち上がろうとしたが、目の前に黒い銃口が向けられて動けなかった。

銃は3点バーストが出来るマシン・ピストルのベレッタM93R。

右肩には私が使用しているAK－74のカービンモデルで限界まで短くしたAKS74－Uがあった。

服装は白の迷彩服で瞳は真紅で・・・冷たい怒りが宿っていた。

「実戦なら死んでいますよ?フィーナ・マレル中尉」

私より少し高い声で喋る相手は訓練中バディ――相棒だった・・・・・・

「リーザ中尉・・・・・・」

私は殴られた事を忘れて相手の名を言っていた。

テツヤを好きだと公言しあいつを見捨てると言った時は泣きながら出て行ったのに・・・今はそんな様子が微塵も無い。

「貴方は一人でテツヤ様を助けに行く積りですか?」

「そ、そうですっ」

私は頷きながら立ち上がろうとした。

しかし、リーザ中尉は銃口を退けずに私の胸倉を掴んで顔を寄せると唾を吐きながら罵声を浴びせて来た。

「貴方は英雄気取りですか？一人でテツヤ様を助けられると思っているのですか？それなら思い上がりも甚だしい。恥を知りなさい。貴方一人で助けられるものですかッ」

「で、ですが・・・・・・」

「黙りなさい。貴方は一体何のために訓練を受けたんですか？訓練内容を忘れたんですか？」

リーザ中尉は訓練で一番大事な事を口にした。

「バディは決して見捨てず共に行動する。それを忘れたのですか！！」

胸倉を掴みながら上下に揺らすリーザ中尉に私は何も言えなかった。

何と答えたら良いのか分からなかった。

相棒と共に行動し見捨てない。

訓練を受けていた間ずっと頭に叩き込まれた。

一人で行動しては死んだら任務が遂行できないし、窮地を脱出できない。

しかし・・・二人なら負担も軽減でき任務を遂行できる。

窮地も脱出できる。

だから、バディを組むのだ。

リーザ中尉は私の相棒。

その相棒であるリーザ中尉を置いて私は一人でテツヤを助けに向かおうとした。

それがリーザ中尉には我慢できなかったのか？

「私は貴方の相棒。その相棒を置いて行くなど、許せません！！」

「申し訳ない・・・・・・・」

私は謝った。

リーザ中尉の言葉は尤もだ。

「分かれば良いんです。ミーシャ大尉はテツヤ様を見捨てると言いましたが、私は見捨てません」

何故なら・・・・・・・・

「私はテツヤ様の横に立つ未来の妻。夫を見捨てるなど妻として失格。そんな妻など私は御免被ります。それにテツヤ様を無事に助け出したのが貴方一人だけだったら、テツヤ様は貴方を褒める。そんな良い所は持って行かせません！私がテツヤ様を助け出し妻になるんです！！」

・・・・後の方が何故か力が込められているのは気のせいか？

いや・・・気のせいだと思おう。

そう思わないと・・・謝ったのは何の為なのか分からなくなるからだ。

「さぁ、行きますよ？」

リーザ中尉はベレッタＭ９３Ｒを腰のホルスターに仕舞うと私に背を向けて天馬を呼び寄せた。

天馬は地上に降り立つとリーザ中尉の前に立った。

「これからテツヤ様を助けに行くわ。貴方はここで戻って」

天馬は最初こそ戸惑ったように鳴いたがリーザ中尉はこう言った。

「私は死ぬかもしれないけど、その時は父を宜しくね？」

天馬はそれに頷いた。

「ありがとう」

リーザ中尉は天馬の前髪を撫でた。

すると天馬は心地良さそうに鳴いてリーザ中尉に首を摺り寄せ愛咬をした。

・・・・・馬が乗り手にする最大の愛情表現だ。

私は自分が以前まで乗っていた馬の事を思い出した。

幼い頃に父から与えられてからずっと私の愛馬として活躍してくれた。

だが、手入れは従者にさせていた。

父もまた自分が乗る馬は従者に任せていて稀にしか手入れをしなかった。

私にもそれを教え込んだから、私も従者に任せていたが稀にやる事にした。

それでも馬は懐いていたが、普段から手入れをしていた従者の方には余計に懐いていた。

私にはしなかったが・・・従者にはリーザ中尉がしたように首を摺り寄せ愛咬をした。

それを見て何故、主人である私より懐くんだ?と長い間、疑問に思っていたが・・・今やっと分かった。

馬は乗り物ではない。

家族だ。

最大の愛情を掛ける事で馬はそれに答える。

天馬騎士団は自分が乗る天馬を自分で手入れをすると聞いていた。

だからこそ・・・ここまで懐き従うのだろう。

もし、私の愛馬とまた再会できたら今度は私が毎日手入れをしようと思う。

そうすれば、リーザ中尉のようになれると思ったし私自身が・・・大きく成長できると思ったからだ。

もっとも・・・生きて帰れたらの話だが・・・・・・・・・・・・

「フィーナ中尉。先を急ぐのは理解できますが、その身体ではヴァエリエまで持ちません」

私の身体を見てリーザ中尉は直ぐに寝ていないと分かったのか、休むように言ってきた。

「しかし・・・・・・・・・」

「テツヤ様だってただやられるばかりではないでしょうし敵も直ぐには殺さない筈です。ここは休みなさい」

「・・・分かりました」

私は素直に受け入れる事にした。

「それが懸命です」

リーザ中尉は天馬を城に戻させると、走って来た馬の2頭に休むように言い自身も腰を降ろした。

「2頭の内1頭は私が乗ります。もう1頭はテツヤ様に乗ってもら

います」

だから、馬を2頭連れて来たのか、と私は納得した。

「さて、二人でテツヤ様を助けに行く訳ですが、どんな手で助けましょうか？」

「先ず場所が分かりません。それが問題です」

「そうですね。貴方としてはどうですか？」

「ワイバーンの傭兵に連れ去られた事を考えるとライアンナル伯爵の手に渡った、と考えられます」

「父も詳しくは分からない、と言っておりましたが何者です？」

「私も詳しくは知りません。ただ、叔父上が懇意にしていたのである程度の事は分かります」

自分が知る限りの事をリーザ中尉に改めて教えた。

「そうですか。しかし、何も知らないよりはマシです」

その通りだ、と私は頷き仮にテツヤを見付けたらどうやって連れ出すかなどを話し合った。

リーザ中尉と話し合っていると不思議と緊張していた身体が・・・心が和らいだ。

一人だと負担は重くなるが二人だと軽い。

これが相棒が居るかどうかの違いか・・・・・・

改めて訓練で相棒と組まされ共に罰を受けて来たのか分かった気がする。

『大した男だよ。お前は・・・テツヤ』

私はテツヤを素直に心から褒め称えた。

そして・・・リーザ中尉のようにテツヤを心から慕ってみたいと思う自分が居る事に気付いた。

幕間：死しても骨を拾う者なし（前書き）

えー、この言葉・・・作者の時代劇好きが原因で決まったタイトルです。（汗）

知っている人は知っている筈・・・です。

幕間：死しても骨を拾う者なし

白い結晶が緑に溢れた森を支配している。

歩けば普段以上に音がするし、動き辛く足跡も鮮明に残るから追跡する者にとっては好都合な状況だ。

だが、その道を歩く者は違っていた。

一度、歩いた場所を後ろ向きに歩いてから別な道を歩き始めた。

これにより追跡者は先ず目の前の足跡を追う事だろう。

簡単には分からない森林の中に入った男は足音を出来るだけ立てないようにして先へと進んだ。

どれ位、歩いたのかは分からないが城から離れた、しかしそれ程は離れていない・・・中間とも言える距離まで歩いた男は何の変哲も無い森の中で唇を小さく合わせて口笛を吹き出した。

ただし、人が聞いても鳥か獣の鳴き声と判断するような声だった。

すると、何の変哲もない場所・・・前が動いた。

上に乗っていた雪が動いたのだ。

どうやら板が敷かれていたようだ。

その板に縦に棒を差し込んで、下がらないようにされたのを見て男

は素早く身体を滑り込ませて板を戻した。
そこには・・・もう誰も、何も無かった。
「どうだった?」
暗い中で、男の声がした。
「城へ連れて行かれた」
もう一人の男の声がした。
「城か。・・・取り敢えず皆に知らせよう」
「そうだな」
男二人は暗い中でも見えるのか、頷き合って足を進めた。
暗い中だというのに見えているかのように迷いなどはなく進んで行く。
暫く進むと、光が見えた。
オレンジ色の所を見ると蝋燭か何かだろうか?
その場所に行くと二人は下へと降りた。
下に通じる所は滑り台になっていたので、何もせず降りる事が出来た。

下に降りると、蝋燭の火と鋭く研ぎ澄まされた刃が突き出された。
他には室内でも取り回しが効き尚且つ鎧さえも貫通出来る合成弓に弓弩、鉄鎚や槍などもあった。
「我々は？」
刃を二人に突き出して、問いを掛ける男に二人は口を揃えてこう言った。
『死しても屍を拾う者なし』
「どうだった？」
男は刃を退けたが、蝋燭は離さずに訊ねてきた。
「“二人”は城に連れて行かれた」
「城か・・・厄介だな。城だと余計に警備が厳重だ」
男はやっと蝋燭をずらして壁に掛けてから溜め息を吐いた。
「もう少し早く動きべきだったか？」
別の男が合成弓に番えていた矢を矢筒に戻しながら訊ねた。
「そうかもしれん。だが、急いで失敗しては元も子もない」
「しかし、こうしている間にも隊長は拷問されているかもしれんぞ？」

「あの方はそう簡単に口を割ったりしない。仮に割ったとしても“真実と嘘”を混ぜて喋るし“喋る時期”を心得ている」

拷問を受けて絶対に口を割らない方法は一つしか無い。

死ぬ事だ。

舌を噛むのが一般的だが、舌を噛んだ所で直ぐには死ねない。

長い間、もがき苦しんで死ぬから拷問を受けるのと同じ事だ。

歯などに即効性の薬を仕込んでそれで自殺するのが一番楽に死ねる。

それも出来ずに拷問を受けたら、喋る時期を考え真実と嘘を織り交ぜて相手に話せば良い。

全て嘘ばかりでは相手に気付かれてしまうが、真実を少し混ぜる事で相手に信憑性を持たせながらも混乱させるのだ。

彼等も拷問を受けた事もあるし、した事もあるからそれは実証済みだ。

「後の一人は？」

「分からないな。傭兵と聞いているが、果たして本当に傭兵なのかも怪しい所だ」

傭兵という職業は極めて本当かどうかを判断するのが難しい職業だ。

しかも、金で契約が結ばれているから金の切れ目が縁の切れ目なんて事は良くある話だから信用できない。

「隊長を助ける時、どうする?」

「必要とあれば助けるが、無ければ殺す」

簡潔に結論を述べた男は壁に寄り掛かり、どうするか?と訊ねた。

「二人は恐らく牢に閉じ込められている筈だ。なら、直ぐに牢を襲おう」

「牢に閉じ込められているという確証が無い。それに助けて出してもどうやって、何処を通り外に連れ出すかも問題だ」

「その前に我々はこれからどうするのだ?」

隊長を助け出し、城の外に連れ出す事に成功した所でまた敵側に付くのはもう無理だ。

かと言って、女王の方へ行った所で信用されるのか?という疑問もある。

何せこの事は誰にも言っていないのだ。

『私たちは貴方達の味方です』

と言った所で「はい、そうですか」と直ぐに納得してもらえる訳が無い。

しかし、予め味方だと教えたら相手に気付かれるかもしれないし、密告される危険性もある。

だから自分達の隊長は誰にも言わずに独断で決めたのだと分かる。

「どうするべきか・・・・・・・・・」

男は腕を組んだまま思案したが、名案は浮かび上がらなかった。

「そう言えば・・・フィーナ様はどうしているかな？」

一人の男がポツリとある人物の名を漏らした。

「フィーナ様・・・ああ、隊長が可愛がっていた娘さんか」

男は思案するのを止めて思い出したように頷いた。

フィーナ・マレル。

自分達が仕える男のヴィールング・マレルの姪御に当たる。

幼い頃から見てきたが、芯の強い真っ直ぐな眼が忘れられない。

「フィーナ様なら女王の傍に居る事だろう。あの方は親衛騎士団の団長だからな。で、フィーナ様がどうかなさったのか？」

「いや、何故か嫌な予感がしたんだ」

「嫌な予感？・・・厄介だな」

嫌な予感ほど当たるから皆は眉を顰めた。

しかし、それは一瞬の事であった。

「では、これからの事を詳しく話し合おう。城に移動された事は確認済みか？」

「今、“モグラ”が潜入している。情報は次の夜だ」

「よし。情報が入り次第、これからの事を決める。以上だ」

それだけ言うと蝋燭の火は消されて辺りは暗闇に包まれた。

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

―――――――――――――――――――――

「一体、何をしていたんだ?!」

ライアンナル伯爵は机を握り締めた拳で力任せに叩きながらテーブルに腰を降ろす“手足”を見た。

「見張りを一人も付けないばかりかアッサリと奴等の手に渡す。これほど愚かな真似をするような者を私は知らなかったぞ!?」

「お、落ち着けよ。ライアンナル。誰も・・・フゲッ」

ライアンナル伯爵の直ぐ横に座っていたモリスン侯爵は脂汗を掻きながらライアンナルを説得しようと試みた。

しかし、直ぐに胸倉を掴まれて顔を突き合わされた。

「落ち着けだと?誰のせいで取り乱していると思っている?貴様等のせいだぞ!!」

「わ、悪かった。悪いと思っている。だ、だが・・・・・・・・・・」

「だが、何だ?言い訳は言うな。言えば、貴様の歯をもう二度と肉が食えない歯にするからな」

「あ、あぁ・・・・・・」

モリスン侯爵は首を上下に動かして頷いた。

ライアンナル伯爵は手を離すと、ハゲタカの二人に視線を移した。

「で、君等としてはどう思う?」

「俺らにはそんな先の事は考えられない。ただ、あんたが命令すれば動くさ」

リカルド達を全員、殺せと命令すれば。

「まだ早い。私たちはあくまで、リカルド達を表に出す必要がある」

「しかし、向こうはこれを機に俺らを締め上げるんじゃないか?」

「そうだろうな。今もあの二人を呼び出したのが良い例だ」

元ギルドの頭目とワイバーンの隊長はリカルド達に呼び出されてここには居ない。

恐らく尋問されているのだろうが、然して問題ではない。

「大丈夫なのかよ」

「案ずるな。その点は“保険”を掛けてある」

ライアンナル伯爵は顎鬚を弄りながら笑ってみせた。

先ほどまで激怒していたのが嘘のようだ。

「保険ね・・・まぁ、良いさ。それでこれからどうする？」

「何も心配は無い。少々誤算は起きたが何とか埋められる」

「そうか。どれ、俺は酒でも飲みに行くか。おい、ルディ。行くぞ」

「うん。兄ちゃん」

ハゲタカの二人は椅子から立ち上がると部屋を出て行った。

「さて、私達も行くか」

「お、おう」

モリスン侯爵はライアンナル伯爵の言葉に頷いて立ち上がった。

だが、身体が震えている。

『・・・本当に蛇みたいに怖いぜ』

自分の胸倉を掴んだライアンナルの顔・・・・・・・・・

あれは正しく蛇のような眼だった。

自分より体格は小さいのに、それでも自分を怖がらせるだけの力を持っている。

それがライアンナル伯爵だ。

『今度からは気を付けた方が良いな』

下手に怒らせたら今度こそ殺されるとモリスン侯爵は本能で感じ取っていた。

それを肝に銘じながらライアンナル伯爵の後を追い掛けた。

第百四十九章：総大将の願い

テツヤ殿が捕えられた事は皆に知れ渡ってしまい、皆の士気が下がってしまった。

当然と言えば当然と言えた。

見捨てる、という事は伏せられたがある程度の経験を積んだ者達などは自然とそれが分かっているのだろう。

他の者に比べて士気が低下している。

その者が指揮する者だから部下にも感染する。

ジョージ・マーシャルの格言とは些か違うかもしれないが、“上層部の悲壮感は部下にも感染する”という言葉は的を射ている。

しかし、今は違う。

フィーナ中尉とリーザ中尉の二人が居なくなってから1日が経過した。

その間、何処からともなく情報は漏れて勇敢な女性二人の行動に下がっていた士気は前以上に高まっていた。

何故高まっているのか？

理由として二人が単独でテツヤ殿を助けに向かった、という事が兵たちの士気を上げる要因となったと思う。

この事は私を含め少人数しか知らない筈だが、何処からか漏れたようだ。

これをエドリアス大尉は「情報というのは何処からともなく漏れる物ですから」と説明した。

どんなに規制した所で情報と言うのは人の耳に入り広まって行く。

正しくその通りだ。

良い事ではあるが、問題もまたある。

何故、二人だけが行って自分達は行かないのだ?という焦燥感とも言える感情と自分達もここに籠っているだけでなく迎え撃つべきだ、という思いだ。

特に親衛騎士団の者達は直訴までして来た。

今も来ておりミーシャ大尉にこう訴えている。

「団長一人が少佐を助けに行ったんだ。俺達もそれに続くべきだ。いや、続かせて下さい!!」

必死に代表者となったヴィン・ルビー2等兵はミーシャ大尉に頼み込んだ。

その一方でミーシャ大尉は氷の女王を吸いながら沈黙していた。

その様子をプロイセン様、イーグル1等軍曹、私、レオン、エドリ

アス大尉、ワイド中尉、ガリシャ、ガルム、ヘンさん、ヴィルヘルム元伯爵は黙って見ていた。

ゲンハルト様はイザベルさんの家に行ってから戻っていない。

「・・・一つ訊くけど、少佐が何処に居るのか知っているのかい？」

ミーシャ大尉は短くなった氷の女王を指で挟み、口から煙を吐きながら訊ねた。

「城に居る筈です」

「その根拠は？城じゃなかったら何処だい？助け出して逃げる時のルートは？侵入ルートは？どんな手段で潜入する？装備は？」

立て続けにミーシャ大尉はヴィン・ルビーに質問を浴びせた。

だが、決して嫌がらせではなく必要な事だと彼には分かっているのだろう。

何も言えずに拳を握り締めた。

「悪い言い方だが、あの二人は後先考えずに行動した軽率な女だ。それに続かせてくれ？冗談じゃないよ。あんた等をそんな後先考えない任務に就かせる為に鍛えたんじゃないんだよ」

「それは・・・分かっています。ですが」

「女みたいに「ですが」何て使うんじゃないよ。あんたのナニはちっぽけな物だと自分で公言しているようなものだ」

何で、ここでそんな言葉を言うんだ?と一瞬思ったがこうでも言わないと諦めないと思ったのかもしれない。

「分かったなら帰りな。まだ敵は倒していないんだ」

「分かりません。分かりたくないです・・・・・・」

「・・・・誰だって同じ気持ちだよ」

ミーシャ大尉はポツリと漏らした。

だが、ヴィン・ルビーには聞こえなかったのか拳を更に握り締めた。

「ミーシャ大尉。話があるっ」

突然ドアがら両方に開かれた。

ゲンハルト様の声だった。

「あの・・・どうしたんですか?」

私が何故か代表者となり訊ねる事になった。

ゲンハルト様の左頬には大きな紅葉が咲いていた。

軍曹じゃあるまいし誰かに手を出したのか?と失礼にも程があることを思ってしまった。

「私が景気付けに引っ叩いたのよ」

ゲンハルト様の後ろからイザベルさんが現れた。

「この人ったらミーシャさんに言いたい事があるからテントを出たの」

行こうとした途端に溜まっていた雪が大量に落ちて生き埋めになったらしい。

そして気絶して1日が経ち言うのが遅れたらしい。

「本当に情けないわ。あれだけ私に格好良い台詞を言ったのに・・・・お陰で惚れ直したのが台無しよ」

「何か言ったか？」

「言ってないわよ。耳が遠くなった？」

「馬鹿を申せ。そなたに殴られて耳鳴りはするが遠くはなっていない！！」

「それなら早く言いなさいよ。まだ雪の片づけは終わってないんだから」

それが終わるまで晩飯は無し、とイザベルさんは言った。

「・・・こんな時でも夫婦漫才が出来るあんた等が羨ましいよ。で、何の用だい？総大将さん」

ミーシャ大尉は二人に呆れながらも要件を訊ねた。

「私は飾り物の指揮官だ。だが、飾り物でも指揮官に変わりは無いのだろ？」

「そうだよ。あんたは飾り物ではあるが、総大将だ。最終的に決める権利はあんたにある。だけど、無茶な命令なら怒るよ？」

可愛らしい（失礼を通り越して冒涜かもしれない）口調でミーシャ大尉は言うので私たちは必死に唇を動かさないようにした。

もし、知れたら・・・殺される。

だが、一人だけは違っていた。

「ぶっ・・・ははははっははははっはは！！怒るよ？怒るよ？あ、姐御が怒るよ？なんて可愛らしい言葉似合わ・・・ぎゃあ！！」

言うまでもなく笑ったのはイーグル１等軍曹で殴られたのも彼だ。

本当に学習能力が無い、と思ってしまうが軍曹が殴られたお陰で助かったとも思う。

「つくづくあんたはあたしの逆鱗に触れるね？」

ミーシャ大尉はふんっと鼻を鳴らしてから煙草を銜えた。

「火」

「は、はい」

ミーシャ大尉の火という言葉にワイド中尉は怯えながらマッチで火を点けた。

何で殴られてもいないのに怖がるのかは、私達も肌で感じているから言わないでおこう。

「それで、話とは何だい？手短に頼むよ。あたしは今、ちょっとした事でも怒る」

何とも恐ろしい前置きだと思う。

しかし、ゲンハルト様は怯えもせずに真剣な顔でいた。

そして口を開いた。

「敵が占領している城にヘリコプターがあるだろ？」

「あぁ。あるね。それがどうかしたのかい？」

「そのヘリを破壊できないか？」

「出来るさ。だけど、それ以外にも何か魂胆があるんだろ？」

「あぁ。城に行きヘリを破壊する。そしてテツヤを救出してくれ」

「そこの女男の坊やにも言ったけど、城に居ると言う確証は？」

「そんな物は無い。だが、城からそれほど離れていない場所に軟禁されているとも思うが？」

「どうしてそう思うんだい？」

「では訊くが、そなたは何故テツヤは城ではない所に監禁されていると思うのだ？」

逆にゲンハルト様はミーシャ大尉に訊ねた。

「先ずワイバーンの女傭兵・・・あいつ等はリカルドではなく蛇に雇われていると聞いている。となれば、恐らく蛇の指図で別な所に監禁されていると思ったんだよ」

「なるほど。確かに私もそれを考えた。そして、一つの考えが浮かんだ」

仮に城ではない所に監禁されているとしてもそれ程離れていない場所に監禁されていると・・・・・

「奴等をリカルド王子は疑っているだろう。奴等もそれを知っている。だから、下手な行動はできないし遠くへも行けないと思った」

そうなると・・・・・・・・・・

「城で無くともさほど離れていない場所にテツヤ殿は入れられている、と仰るのですね？」

私が確認するように言うとゲンハルト様は頷いた。

「気絶している間、考えていた。城でないなら何処だ、と・・・東はここへ行く道だから外した。となれば北・南・西の3方のどちらかだ」

「でしたら、恐らくですが北でないかと思います」

エドリアス大尉がここで口を開いた。

「何故だい？司教様」

ミーシャ大尉が理由を訊ねるとエドリアス大尉は地図を取り出してテーブルに広げた。

私たちはそれを見下した。

「北には幾つか小屋があるんです。それは商人達が商品を入れる倉庫としているからです」

何故、北なのだ？と言えば北が四方の中でも森林が多いからだ。

倉庫などには鍵を掛けて見張りを置くのが普通ではあるが、見張りを雇う金が惜しいのだろう。

見張りを付けず、盗まれないようにする。

それを考えた商人たちは森林地帯が多い北側に倉庫を幾つも築いたのだ。

そうする事で昼間でも暗い森林に足を運ぶ者を遠ざける為、そして見つかり難いようにしたのだ。

「なるほどね。となると、北が有力だね。でも、確証が無い」

“博打”は禁物だ、とミーシャ大尉は尚も言った。

確かにその通りだ。

北にテツヤ殿が居る、という確証は何一つ無い。

それに仮に居たとしても何処に居るのかも分からないのでは探し様が無い。

ただヘリを破壊すると言う作戦なら問題ないが、テツヤ殿も共に救出するというのでは博打だ。

「しかし、ミーシャよ。そなたの力を侮る訳ではないがテツヤの代わりを務められるのか？」

ゲンハルト様がミーシャ大尉に訊ねた。

「リーザ殿とフィーナ殿。この二人をあろう事か行かせた上に兵たちを抑えられていないではないか？」

現にヴィン・ルビーがこうして直訴しているのが良い証拠だ、とゲンハルト様は焚き付けるように喋り続けた。

「言ってくれるね。まぁ、少佐と比べたら劣るのは認めるよ。でも、博打を打つのは嫌いだ」

「博打か。・・・確かにこれは博打だ。北という確証が無いのだからな。しかし、戦とはある意味では博打ではないのかな？」

勝てる状況でも負ける時はある。

それは装備などの差もあるが“運”という面もある。
戦に運を求めるのは酷な話だが、私自身その運に助けられた事がある。
テツヤ殿と出会えたのも運が良かったからだ。
狙撃手になれたのも運よく私に射撃の才能があったからだ。
運とは決して直ぐに頼れる物ではない。
だが、必要であり必然なのだ。
「そなたは運が強い方か？」
「どうかな？あたしもこいつも運はどちらかと言えば悪い方だ」
あんたは？とミーシャ大尉が訊ねるとゲンハルト様はこう答えた。
「ある。今こうして生きていられるのもテツヤと出会った運だ。イザベルと言う女に出会えたのも運だ。私は運が良い」
だから、命令する。
「タカミ・テツヤ少佐を救出しろ。それ以外にもヘリを破壊しろ。そして全員、帰って来い」
これが命令だ、とゲンハルト様はミーシャ大尉に告げた。

「やれやれ。随分と滅茶苦茶な命令だね。だが・・・良いね。面白いよ」

ミーシャ大尉は喉を震わせて笑った。

「最初に会った時は骨しか無い男と思っていたけど変わったね。それは分かっていたけど、ここまで変われるとは驚きだよ」

「テツヤのお陰だ。だから、テツヤを助け出したいのだ。あの男にはこれから・・・この国の未来を見せたいのだ」

民達が笑顔で暮らせる幸せなこの国の未来を・・・・・・・・

「勿論そなた達にも見せる。だから、私の命令・・・願いを叶えてくれないか？」

「あんたみたいな良い男から頼まれちゃ女は嫌でも叶えるさ」

ミーシャ大尉は椅子から立ち上がった。

「では、ゲンハルト総大将。私にご命令を」

「ミーシャ大尉。そなたに敵ヘリの破壊とタカミ・テツヤ少佐の救出を命令する」

「はっ。・・・エドリアス大尉。出来る限りの情報を集めてくれ。イーグル1等軍曹。あんたは出撃の準備をしな」

『レンジャー！！』

私たちは全員で敬礼をして部屋から走り出た。

第百四十九章：総大将の願い（後書き）

大無しの大が間違っていたので訂正しました。

第百五十章：救出準備

僕はランドルフ君と共に駆け足で廊下を走っていた。

テツヤ殿を助けられる。

その救出任務を命じられたのだ。

これを喜ばずにいられるか！！

これが僕の気持ちだった。

いや、皆の気持ちと言えるだろう。

皆、テツヤ殿を助けたいのだ。

ミーシャ大尉だって本当は助けたいと思っていた筈だ。

だが、この戦いの事を考えると敢えて自らの気持ちに蓋をして我慢したのだと思うがゲンハルト様の言葉もとい命令でテツヤ殿を助ける事になった。

きっとゲンハルト様は仮に失敗したら自分が責任を取る気持ちで居るのだろう、と私は思っている。

戦に関しては素人のゲンハルト様が我儘を言って行わせたと言えば、誰もが信じる事だろう。

そうなればゲンハルト様は叩かれるがミーシャ大尉達には被害が無

い。

そうなる事を考えて恐らくゲンハルト様は命令を出したのだと考えると頭が下がる勢いだ。

一体どうやったらあそこまで人が変わるのだ?と以前なら思っていただろう。

今なら分かる。

イザベルさんがゲンハルト様を変えたのだ。

良い方向へ・・・・・・・・・

『何としてでもテツヤ殿を助け出さなくては!!』

僕は改めて決意した。

風のように廊下を走っているとエリーナ様が現れたが、僕もランドルフ君もそれ所ではないので無視して走り続けた。

声が聞こえたが、そんな事は後回しだ。

王女に対して失礼だが、僕にはテツヤ殿の方が大事だ。

風のように・・・風よりも速く。

もっと速くだ。

僕とランドルフ君は城を出ると、その速度を維持したままそれぞれ

の家へと向かった。

バッン

勢いよくドアを開けた僕をレイテさんとローズちゃんは驚いた顔をして出迎えた。

テツヤ殿が捕えられてから落ち込んでいた僕を二人は優しく支えてくれた。

それに礼を言いたい所だが、今は準備が先だ。

一刻も早く準備をしてテツヤ殿を助けに行かなければならないという感情に駆られているからだ。

急いで自分の部屋から装備を持つとまたドアを出ようとした。

しかし、レイテさんが僕を呼び止めた。

足元にはローズちゃんも居る。

僕は急ぎながらも足を止めて振り返った。

「いってらっしゃい。レオン」

ただ一言だけ彼女は僕を送り出す言葉を言ってくれた。

何でそんなに慌てているの？などとは言わず、ただ行く僕を笑顔で送り出すレイテさんとローズちゃんに僕は・・・・・・

「行って来ます」

それだけ答えて家を出た。

彼女は本当に良い女性だと思い、何としてもテツヤ殿を無事に助け出して生きて帰らなければならないと思った。

――――――――――――――――――――――――

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

私はオリガさんの居る家へと向かい自分の部屋（オリガさんと同じ部屋だが）に行き装備などを持ち部屋を出た。

オリガさんはただ私を見つめるだけだったが、その瞳は何処までも優しく私を見つめている。

そしてドアを出ようとした時だ。

「頑張って任務を果たしてね？」

オリガさんの言葉に私は黙って頷いた。

「必ず果たして貴方の元へ帰って来ますよ」

私はオリガさんにそう言って家を後にした。

テツヤ殿を救出できる。

ヘリの破壊が第一目標ではあるが、それでもテツヤ殿を助ける事も任務の中に入っている事に変わりは無い。

それでも私は良かった。

家を出た私はその足で城には行かずガリシャの居る家へと向かった。

あれからガリシャは塞ぎ込んでしまい、会っていない。

ガルムの方は然して変わらない様子だが時々、城を出ては偵察に向かっている事は知っているし今日はガリシャの家に居る事は分かっていた。

私は窓に向かって叫んだ。

「山犬！出て来い。任務だ！！」

山犬はガリシャの異名。

これを言われたら直ぐに出て来ると私は確信していた。

この確信は当たっていた。

バッン

大きな音を立て窓が開いた。

「ら、ランドルフ・・・・・」

「何をモタモタしている。任務だ。準備をして来いっ」

「え・・・あの・・・」

「速くしろ!!」

私は大きな声でガリシャこと山犬に怒鳴った。

「れ、レンジャー!!」

山犬は頷くと慌てて窓を閉めた。

私はドアの前で煙草に火を点けて待つ事にした。

そして数分後、また窓が開く音がして同時に頭上から何かが落ちて来る音もした。

「・・・・・・・」

私は一度経験したので、両手を広げて待った。

直ぐに両腕に大きな・・・重い感覚が来た。

山犬が窓から飛び降りたのだ。

「二度も私に怒られたいのか?」

私は山犬を戒めるように口酸っぱい口調で言った。

「だって、あんたが急げって言うから急いで来たのに・・・・・・・・・」

山犬は叱られた子供のように頭を丸めた。

それが酷く・・・可愛らしいと私は思ってしまった。

だが、今はそれ所ではない。

「テツヤ殿を・・・少佐を救出する任務が出たんだ」

「ホント!!」

山犬は私に唾を吐く勢いで訊いてきた。

「本当に?本当に旦那を助けるの?!」

「嘘は吐かないよ。まぁ、ヘリを破壊するのが第一目標ではあるけどね」

「それでも旦那を助ける事に変わりは無いんでしょ?だったら、良いじゃん。行こうよ!速く!!」

「まぁまぁ、落ち着いて」

このままだと本気で行きそうな山犬に苦笑しながらも気持ちは理解できる。

だが、先ずは落ち着かせてからガルムの事を訊ねた。

「ガルムは何処だい?」

「ここだ」

私の前にガルムこと猟犬が現れた。

「我が主を救出する任務か・・・随分と突拍子が無いな。前までは見捨てると言っておったのに」

何処か責めるような声色だったが、私は敢えてそれを甘んじて受け止めた。

「まぁね。だけど、君としては嬉しいだろ？」

「当然だ。見捨てると言われた時は、我一人でも助けに行く積りだったからな」

「その前に偵察をして下調べを万全にしたのかい？」

「あぁ。北側に居るという事は分かったが、どうも“変な奴等”も居ると聞いた」

「変な奴等？」

「あぁ。お前等のように偽装効果が施された布などを被っていた。それに用心深い」

一度、来た道を戻り改めて別の場所を通って行くなどが例らしい。

「確かに怪しいね。何者かな？」

山犬が私に訊いてきたが、私に分かる訳が無い。

分かる訳ないが怪しいのは頷ける。

「これはミーシャ大尉に報告だね」

私たちは頷き合うと急いで城へと走り出した。

城へと向かった私たちは会議室ではなく演習場に向かった。

そこに行くと装備を整えたイーグル1等軍曹達が私たちを待っていた。

軍曹の他にはヘンさん、ワイド中尉、レオンが居てヴィン・ルビー達・・・親衛騎士団も居た。

彼等は私達と同じ武器を持ち真剣な顔だった。

彼等からしてみれば、これが訓練を受けてから初めての実戦という事になる。

緊張するのも無理は無いが余りに緊張し過ぎるとヘマをする。

それを言おうと思ったが先ずは軍曹にガルムが持って来た情報を伝えようと思う。

「軍曹。大尉は？」

「司教と話し中だが、何かあったのか？」

「ガルムが情報を持って来たんです」

「何だ？」

「実は・・・・・・」

私は軍曹にガルムが話した事を話すと軍曹は暫く無言になった。

周りの者達も同じだった。

さぁ、これから行こうという時にこんな話をするのだから。

しかし、ヘンさんだけは心当たりがある顔つきだったのを私は見逃さなかった。

「ヘンさんは心当たりがあるんですか？」

私が訊ねるとヘンさんは頷いた。

「恐らくだが、ヴィールング隊長の部下かもしれないな」

「というとヘンさんの元仲間ですか？」

「多分な。そんな偽装効果がある物を纏う奴なんて俺が知る限りあいつ等しか居ない」

「それが本当なら・・・・・・・・・」

ヴィールング殿も・・・・・・・・・

「可能性は高い」

最後まで言わずにヘンさんは頷き唾を吐いた。

「初っ端から出鼻を挫かれた気分だぜ。まぁ良い。俺は姐御に報告してくる。お前等は待機していろ」

軍曹は私達に命令すると身を翻した。

「あの、副団長。一体何の話を？」

「悪いがまだ教えられない。何れは分かる事だ」

ヘンさんはヴィン・ルビーの質問に答えなかった。

彼を疑う訳ではないが、念には念を入れろという事だろう。

「さて、これからどうなるんだか・・・・・・・・・・」

ヘンさんは誰に言う訳でも無く独白した。

その様子をヴィン・ルビー達は黙って見ていた。

自分達が除け者にされた気がしたのだろうか？

落胆している色があった。

一瞬だが彼等に言おうと思ったが、ヘンさんが言わなかったのに私が言うのはどうだ？という疑問が出て止めた。

何れ分かる事だ。

なら、ここで下手に不安や疑惑の種をまき散らすのは止めた方が良い。

そう私は思い、テツヤ殿の無事を祈る事にした。

第百五十一章：二人の決意

私とリーザ中尉は馬に揺られながら雪の森林を進んでいた。

城まで5日という距離になった。

交代で休みを取りながら進んで行く為、最初に比べて比較的身体は楽だった。

だが、テツヤが何処に居るのか？が分からないという根本的な問題は解決していなかった。

そしてどうやって連れ出すかも・・・・・・・

幾ら考えても思い浮かばない。

しかし、帰るという気持ちは無い。

テツヤを助け出すまでは帰らない、と決めたのだ。

仮に死んでいたとしても死体を持ち返るまで。

それも出来ないなら二人で死ぬだけだ。

自暴自棄になったか？と他人は言うかもしれないが、そんな物は言わせておけば良い。

私はテツヤを思い出した。

初めて会った時、私はランドルフと戦死した聖騎士達を侮辱した。

今にして思えば・・・何と愚かな真似をしたのだろうと悔いている。

彼等の任務は王女であるエリーナ様を城まで護り通す事。

山賊に襲われたが、それでも彼等は果敢にも戦い王女を護り抜いた。

そんな彼等を私は侮辱した。

その時、テツヤはこう言った。

『死んだ奴等は王女を護り抜いた。任務を全うした兵を侮辱するのは恥以外の何でも無い。まして兵を束ねる将校が兵を愚弄する・・・・あんたは指揮官失格だ』

その通りだ。

私は最低の指揮官だ。

だが、私はそれに逆上してテツヤに敗れた。

後もう少しあいつが力を込めれば私の首は嫌な音を立て折れていた事だろう。

そこへ運よく現れたサラ様に感謝する。

そこで素直に謝っておけば良かったのに、私は愚かにも何度も戦いを挑んだ。

その度に負け続けた。

何度も私を殺せたはずなのに、不思議とテツヤは私を殺そうとしなかった。

サラ様と約束したからか？

それとも私の為か？

どちからはあいつに訊かないと分からない。

それからあいつの訓練を受け会話をするようになったのはつい最近だが・・・もうその前からあいつに私は虜になっていた。

あいつの事しか頭に浮かんで来ないからだ。

倒す事しか頭に無かったが、それでもあいつだけで占められたのだ。

見た目は悪党だが、完璧に悪い奴ではない。

そんな事を私は何時の間にか思い始めた。

この想いが何なのかは分からないが、あいつと会えばそれが分かるかもしれないな。

そして奴を私の前で連れ去った・・・あの女とも決着を着けてやる。

私の前からテツヤを連れ去ったんだ。

あれは私に対する宣戦布告と取って良い。

覚悟しておけ。

この私に喧嘩を売ったのだ・・・その代償は高い事を骨の髄まで教えてやる。

しかし、その前にテツヤ以外にも安否が気掛かりな者が居る。

私の叔父・・・ヴィールング・マレル殿だ。

実の父親より父親らしかった叔父上の屋敷には手紙が一通あるだけで後は何も無かった。

あれからどうしているのか？

今にして思えば叔父上が軍でどんな役職に就いていたのかまるで知らなかった。

ただ、重要な役職に居たというのは分かるが内容が分からない。

しかし、もし叔父上が私の傍にいてくれたら・・・・・・・・と。

叔父上ならきっと良い考えを私に下さる筈だ。

未だに叔父上を頼ってしまうとは情けないとも思うが、この状況では誰かに頼りたいと思ってしまう。

それは弱い証拠だ、と言ってしまえばそれまでだが・・・・・・・・・

・

『叔父上。貴方様なら、どうなさいましたか？』

何処に居るのかも分からない叔父上に私は助けを乞わずにはいられなかった。

――――――――――――――――――――――――――

―――――――――――

私は隣で何やら決意しているフィーナ中尉を横目で見ていた。

私より先に単身でテツヤ様を助けに行くと見上げたものだ、と感心するが遅れてしまった自分を恥じる。

私はテツヤ様の妻になるのに、別の女に先を越されるなど許せなかった。

だが、最初はそんな事も考えられずに泣いていた。

その私の背中を押してくれたミレーネ様とメジュリーヌ殿に礼を述べた。

テツヤ様と私の“愛の巣”に住む女二人でライバルだ。

隙あらば何時でも蹴り落とす気だが、今は感謝する。

あの時・・・テツヤ様を見捨てる、と言われた時・・・目の前が真っ暗になった。

テツヤ様を見捨てる・・・それを皆は仕方無いと受け入れる事も私には我慢できなかった。

そして失意の内に家へと戻ると、お二人が私を出迎えてくれた。

私に何か遭ったんだ、とは直ぐに分かっていたのだろう。

何も言わなかった。

でも、それが私には耐えられない苦痛で、自分の傷口を見せるように二人に言った。

それを聞いた二人は然して驚きもせずいた。

それが私には酷く映った。

私はこんなに哀しんでいるのに何で貴方達二人はそんなに冷静で居られるの？

貴方達はテツヤ様を愛していたではないですか？

それなのにどうして見捨てると言われてもそんな平常心で居られるのですか！？

私は二人の平常心が理解できずに二人を罵った。

それでも二人は平然としていた。

尚も私は責めようとしたが、そこへミレーネ様は問いを投げてきた。

『私たちを責めているけど貴方は自分を責めているの？』

・・・私は、今になって自分を責めていない事に気がついた。

私はミレーネ様達を責めた。

逆恨みに近い言葉を投げた。

この二人には何の罪も無い。

あるのは私の方だ。

テツヤ様が消えたのに私は助けようともせず・・・ただ悲観して周囲に八つ当たりしているだけ。

『私は寂しがり屋さんを愛しているわ。それに捕まったのも悪い言い方だけど自業自得だわ。見捨てるのは仕方無いけど、あの人なら自力で脱出できるわ』

それを信じている、とミレーネ様は言った。

その瞳には一切の迷いも無かった。

私は指摘されて自己嫌悪に陥った。

しかし、それは直ぐにメジュリーヌ殿によって砕かれた。

『そなたは泣いて悲観して挙句の果てに八つ当たりして終わりか？テツヤを信じてもいない。なら、そなたはテツヤに愛される資格は

無いのう。まして妻になるなど傲慢にも程がある。愚かな女だ』

泣いて悲観する・・・私はテツヤ様が消えた時、誓った筈だ。

貴方より先には死なない。

どんな事態になろうと貴方を護り抜くと。

誓いを立てたのに私は、それを守ろうともせず周囲に八つ当たりをしている。

これではメジュリーヌ殿に馬鹿にされても仕方が無い・・・・・・・・・何も言えない。

何も言えなかった私を二人は何も言わなかった。

ただ、眼で言っていた。

自分達には出来ない事が私には出来る、と・・・・・・・・

二人には出来ず私には出来る事・・・・・・・・

私は二人には出来ない事を考えた。

・・・そうだ。

私は軍人でテツヤ様から訓練も受けた。

その私ならテツヤ様を助けられる可能性がある。

二人には無いが私にはそれがある。

それを二人は言いたかったのだ。

そして自分達は留守を預かるから私は言って来い、と・・・・・・・・・

私はそれが分かり急いで準備をして家を出た。

それからフィーナ殿が一人でテツヤ様を助けに行ったと知り遅れを取るまいとし追い付き共に行動する事になった。

しかし、テツヤ様が何処に居るのか分からない。

これが一番の難所。

これを何とかして解決しないといけないが明確な解決策は見つからない。

それでも私の心に諦念という気持ちは無かった。

諦めたらそこで終わりだ。

テツヤ様ならこう言うと思っている。

あの方は決して諦める事はしない。

例え一人になろうとも必ず好機を見逃さずに待ち続ける。

きっと捕えられても何か手を考えているに違いない。

妻となる私がこんな弱気ではいけない。

夫であるテツヤ様が諦めないなら私もまた・・・諦めない。

それが私の愛し方なのだ。

『待っていて下さい。テツヤ様。必ず貴方様を見付け出します』

そして貴方と式を上げてみせます！！

私もフィーナ中尉と同じく新たに決意を固めた。

幕間：モグラと下調べ

サルバーナ王国の首都、ヴァエリエの市場では残り少ない果実などが売り買いされており、それを何人かが買っている。

リカルド王子がここを占領してからというもの地方や他国からの物資が届かなくなった。

首都というのは地方や他国などから送られてきた物資などを売り買いして生活しており田畑を耕すのは極稀だ。

特にサルバーナ王国は周囲を山に囲まれているため田畑を耕すのは容易な事ではない。

だから、他国などの貿易が重要なのだが、反乱が起きてからは噂が広がったのか不明だが物資が来なくなった。

いや、その前に商人などは逸早く身の安全を計って店を畳んだから物資が売り買いされないのだ。

しかし、商人達が北側に倉庫を作りそこに品物を保管しているのを民達は知っていたしリカルド王子たちも知っていたからそこから物資などを取り出しては売り買いしている。

そのため辛うじて生活が出来ている。

とは言え、毎夜の如く行われる反乱分子の捜索や兵たちの乱暴狼藉には困り果てているが・・・・・・・・

そんな地獄とも言える首都で暮らしている者達は絶望していたが、かつて首都として繁栄していた場所で反乱軍を撃退した事は知っておりそれが唯一の希望となり慰めとなっていた。

何時か彼等がここを奪回し、かつて笑顔が絶えなかった都に戻してくれると・・・・・・

所がこんな噂が広まり始めた。

「おい、聞いたか？敵司令官が捕えられたそうだぞ？」

最後の果実を手に取りながら客は果実を売っていた店の主に話し掛けた。

「敵司令官というと、女王様の方か？」

店の主は声を顰めて男の質問を訊き返した。

こんな事を言っただけで何をされるのか分かった物ではないからだ。

「あぁ。何でも・・・“蛇”に雇われた傭兵に捕えられて拷問されたらしいぜ」

蛇とはライアンナル伯爵の紋章だ。

毎夜の如く行われる反乱分子の捜索などは彼が行っているという噂もある為か彼等は紋章で彼を口にしている。

「拷問？生きているのか？」

拷問と聞いて店の主は背筋が凍る思いをしながら訊ねた。

「あぁ。何でも幾ら拷問されても吐かないらしい。それ所か相手を挑発する位だ」

「大した司令官だ。誰なんだ？」

サルバーナ王国の軍を自室的に指揮するのは将軍であり現女王の従兄弟であるプロイセンだ。

だが、カルナン湖畔の戦いで負傷して指揮は執れない筈だ。

「聖騎士団に入隊した傭兵が居ただろ？」

「あぁ、確か王女様と聖騎士団の一人を助けて親衛騎士団長を何度も倒した人だな」

店の主は何度かその男を見ていたから思い出した。

黒髪に黒真珠の容姿で常に口には火の点いた細長い棒を銜えており見た事も無い武器などを身に付けている。

「その男が司令官らしい。東側で行われた戦いでも指揮したらしいぜ」

「大した男だな。で、今は何処に居るんだ？」

「最初は北の倉庫に入れられていたらしいが・・・・・・・・・・・・」

男は周囲を警戒してから耳元で小さく言った。

「何でも蛇の独断らしくて、今は城の牢に入れられているらしいぜ」

「城の牢か。もし、助けに来るとしても難しいな」

店の主は城を眺めて呟いた。

この城は防衛などの備えはまるで無い。

それはここで見た出来事から知っている。

だからと言って味方を助けに行き簡単に連れて行けるのか？と問われたら無理と答えるしかない。

リカルド王子がここを占領してからは到る所で武装した兵が周囲を警戒しているし、ワイバーンなども空を飛んでいる。

だから簡単には近付けない。

かと言って夜、忍び込んだとしても何処に捕えられているのか分からなくては救いようが無い。

「まったく・・・早く何とかして欲しい物だぜ」

軍が国を護るのは当然だし、自分達を護るのも当然だ。

それなのに何時まで経ってもここを奪回しようとしない。

それ所か司令官が捕えられたのだから先行きは怪しい。

「いっその事・・・リカルド王子が国王になった方が良いかもな」

何時までも戦いが続くよりはマシかもしれない、と男は呟いた。

「自分で何もしないのによく言えるな？」

店の主は男の言葉に少なからず軽蔑した。

だが、自分もまた目の前の男と同じく何もしていないので同類とも思った。

「・・・すまん。どうも、今日はあまり気分が良くないようだ」

男は直ぐに謝罪した。

こんな生活を長く送って行く内に心が蝕まれて行くんだ、と男は言い店の主も仕方無いと言った。

そして男は去って行き店主もまた売り尽くした自分の店を見て嘆息せずには居られなかった。

その一方で反乱軍を指揮するリカルドが滞在している城・・・エスカータ城。

ここに先ほどの2人が捕えられている牢がある。

牢に行くには地下へと通じる階段を降りて行かなければならないのだが、その地下へ通じるドアの前には屈強な武具で身を固めた兵が槍を片手に立っている。

ここを通るには二人の許可を得て降りなければならない。

その前にリカルド達の許可が必要なのだが今の所、面接で来たのはリカルド達だけだ。

その他の者達は如何なる理由があろうと誰も入れない。

これは友人や家族を殺された兵たちが怨みを晴らす行動を抑止する為であり人などの接触を極限まで遮断する事で孤独感を倍増させるのだ。

食事を運ぶ者も無言で置いて行くから徹底されている。

見張りは1日2交代で朝から昼に掛けてと夜から朝に掛けてだ。

それ以外は食事などもここで取る為、持ち場は離れないのが原則である。

時刻は正午過ぎ。

そろそろ昼飯の時間帯となったのか兵たちの小腹が鳴った。

「腹減ったな・・・・・」

「あぁ。まだかね・・・飯は」

二人は欠伸をしながら腹を撫でた。

ここの番は彼等が主であるフィリップ男爵の命で決まった。

本来ならば自分達のような槍兵でなくヴィクター公爵が指揮する兵隊に番はさせるべきだが生憎とヴィクター公爵はリカルド王子の護衛やその他諸々の事情で兵を裂く事が出来ない。

ライアンナル伯爵とモリスン侯爵に到っては独断で敵司令官を捕えたばかりか拷問をするなどしたから最初から外されている。

となれば、自分達に役目が回って来るのも時間の問題だった。

「男爵の“頼み”じゃなかったら断っているぜ」

「あぁ。だが、頼まれちゃやるしかないよな？」

二人は互いの意見が合ったので僅かに笑みを浮かべ合った。

自分達にフィリップ男爵はこう言った。

『連日の戦いで疲れている所すまないが、牢の番をしてくれないか？』

自分達に労いの言葉を掛けたばかりか頼む様に腰を折った態度。

とてもじゃないが貴族の態度でも指揮官の態度でも無い。

兵達に舐められても仕方ないのだが、自分達を含め皆は男爵を敬愛している。

それは男爵が誠実でリカルド王子に対して何があろうと忠誠を誓う所であり、細かな所にも眼を行き届かせる気遣いだ。

彼等が男爵を敬愛している理由がこれだ。

「にしても、腹減ったな・・・・・・・」

「あぁ。何時になったら来るんだ?飯は」

話を折るように片方の兵が呟くともう一人も頷くように腹を撫でた。

そこへトレーを押して来る女が見えた。

「おっ、やっと飯だ」

二人はトレーを見て食事だと分かったのか嬉しそうな顔を浮かべた。

女性の方は気にした顔もせずに黙って二人に食事を渡すと階段を折り始めた。

二人は床に腰を降ろしスプーンでスープを飲みパンなどを食べた。

そして直ぐに女性が出て来るとまた番を始めた。

その様子を影で見る誰かが居た。

壁から僅かに顔を出して見る者は静かに後ずさった。

『・・・人数は2名。武器は剣と槍。鎧は青銅。槍の長さからして室内で振り回す物ではないからあくまで威嚇の可能性があるな』

後ずさった男は頭の中で数日間に渡り何度も見てきた事をお浚いし

た。

『食事は正午過ぎに1回。用を足す時は大抵が正午から数時間経過した後。その間、代わりは来ない。夜の食事は少し遅めで1回。朝方まで警護するが数時間後には睡魔が襲い始め互いに起こし合う』

この内容から考えるに救出する時間帯は夜から朝方に掛けて行うのが良いだろう、と男は独自に分析した。

交代の者は時間ピッタリに来るが、その間は誰も来ない。

つまりこの交代までの時間・・・夜から朝方に掛けてが勝負だ。

何故、昼まではないのかと言うなら夜の方が闇に紛れて逃げられるからという合理的な考えに基づいている。

『急いで知らせなければ』

男は足を速め急いで城から出る事にした。

もう一刻の猶予も無いのだから・・・・・・

だが・・・下調べは万全になった。

第百五十二章：ポイントマン

私たちは軍曹が帰って来るまで演習場で待ち続けた。

ある者は何人かと話し合い打ち合わせをしていたし、またある者は武器の手入れなどをしていた。

私の場合は女神の抱擁を吸いながら武器の手入れをしている。

モーゼルとベレッタが私の装備ではあるが、今回は山賊退治でも用いたＡＫＳ７４－Ｕも装備している。

銃身などには白い布を巻いてカモフラージュも忘れない。

今回は狙撃でも偵察でも無い。

ヘリの破壊と救出が任務だ。

だから、私も皆と同じように行く可能性がある。

それを考えてＡＫも念の為に持つ事にしたのだ。

これは要らない荷物もといフィーナ・マレル中尉が使用していたＡＫ－７４の小型版だ。

銃身をギリギリまで切り詰めストックも折り畳みにしているからマントや外套に入れたらスッポリと隠せる。

命中率はコルトのＭ１６に比べれば劣るが、ＡＫの特徴である堅牢

性は生きている。

「それは団長と同じアサルトライフルか？」

武器の手入れをしている私にヴィン・ルビーが話し掛けてきた。

「えぇ。フィーナ中尉の所持しているＡＫ－７４のカービンサイズです」

「そのライフルもあるのに2挺も持つのか？」

「モーゼルはボルトアクション式なので装填に時間が掛かるんです」

「だからそいつを？」

「そいつとは失礼な言い方です。彼女と呼ばないと」

「彼女？」

「少佐に言われませんでしたか？自分が扱う銃は女のように扱えと」

「そう言えば・・・言われたな」

「でしょ？だったら、そんな言い方は止めた方が良いですよ。下手すれば怒って言う事を聞かなくなります」

「気を付ける。所で、それを使うという事は、狙撃が出来るのか？」

「えぇ。それが？」

「いや。君もレオンもそうだが・・・取り柄を持っているのが羨ましいと思ってな」

「取り柄と言っても、テツヤ殿が発見したんです。それまでは何もありませんでした」

「あいつが？」

「えぇ。それに私の取り柄である狙撃は忌み嫌われているんですよ」

「何故だ？」

「遠くから隠れて相手を仕留めるからです」

敵に捕まれば即座に殺された事例が幾つもあるらしいし、味方からも戦果確認を拒否された例もある事を私は言った。

「・・・酷い話だ」

「ですが、テツヤ殿はこう言ってくれました」

狙撃手は孤独だと言うが・・・お前には俺達が居る、と。

「だから、私は狙撃が出来るんです。もし、誰も居なければ・・・撃てないでしょう」

「・・・・・・」

ヴィン・ルビーは何も言わなかったが、何か私に訴えるような気持ちが込められている事は分かった。

私はそれを訊かずに煙草の灰を落としてＡＫのレシーバーを引いた。

これで手入れは終わりだ。

「ランドルフ君。軍曹が君と僕を呼んでいるよ」

レオンが私に話し掛けてきた。

「軍曹が？何だろう？」

普通ならワイド中尉を呼ぶ筈なのに、どう言う事だ？

「分からないけど無線で・・・・・・・・・」

初デートに行く気持ちで来い・・・・・

と言ったらしい。

「・・・益々、分からない」

初デートに行く気持ちで来い何て言われても理解できない。

「僕もだ。まぁ、軍曹の事だから気を紛らわせようとしたのかな？」

確かに軍曹ならこんな事を言って気を紛らわせようと考えるだろう。

しかし、もう少し別な言葉があるだろうに・・・・・・・

などと思いながら私とレオンは軍曹の下へ行った。

ヴィン・ルビーが後ろから私を見ている事を感じたが気にせず向かった。

軍曹は会議室に居た。

そこにはミーシャ大尉、エドリアス大尉、ヴィルヘルム元伯爵、ゲンハルト様、プロイセン様と将軍達が居た。

「ランドルフ1等兵、レオン2等兵。ただ今、参りました」

私とレオンは敬礼をした。

「ご苦労。まぁ、来な」

ミーシャ大尉は私とレオンを手で招いた。

私とレオンはテーブルに近付くと地図が広げられていて北側に赤い点がある事に気付いた。

「これは、倉庫の数ですか?」

ざっと見る限り50以上はある。

「その通りです。この何処かにテツヤ殿は居ると思われます。ですが、民達の情報などからこの部分が気になります」

エドリアス大尉が指差したのは城から少し離れた場所だ。

そこだけは黒い点だった。

「民達の話によれば、ここは木が一番隣接している上に武装した者達が行き来していたそうです」

「となると、そこが一番怪しいのですね？」

民達の情報はかなり前の話だろうが、武装した者達が行き来していたのはそこだけと考えると何か臭い。

「えぇ。距離的に考えてもそうですが。ただし、ここでない可能性もあります」

つまり博打だ。

「それからガルムの報告だが、狐は何か言ってなかったかい？」

ミーシャ大尉が私とレオンに氷の女王を差し出しながら訊ねてきた。

「恐らくヘンさんの元仲間ではないかと」

「元仲間？」

「はい」

私はヘンさんから聞いた話を説明した。

「なるほどね。て事は、そのヴィールングとかいうおっさんと少佐は一緒に捕えられている可能性が高いね」

「恐らく。どうしますか？」

私は氷の女王を吸いながら訊ねた。

女神の抱擁に比べれば冷たい味だが、今は心地よかった。

「そうだね・・・連れて来な」

ミーシャ大尉は僅かに考えてから連れて来いと命令した。

「分かりました。それで私とレオンを呼んだ理由は？」

「そうだった。忘れていたよ。あんたとレオン、それから狐、山犬、猟犬は親衛騎士団と行動を共にしてくれと言いたかったんだよ」

理由として私とレオンが彼等を一度は鍛えたし交流もある。

ヘンさんは元副団長だから要らない荷物が居ない間は代理として指揮を執る。

これが理由らしい。

「まぁ、狐が指揮を執るだろうけどあんた達も一緒なら尚更良いと思ったんだよ」

異議はあるか？とミーシャ大尉は訊いてきたが、異議など無いしあった所で言える訳ない。

『ありません』

「よしよし。良い子だ。あたしの言う事をまともに聞いてくれるな

んて可愛いよ。あんたも少しはこの二人を見て大人になりな」

「その二人を大人にしてやったの俺だぜ？なぁ？」

軍曹は私とレオンを見てきた。

「軍曹というよりは・・・・・・・・・」

「違うよね？」

「てめぇ！！俺はお前等のキューピッド役をしたんだぞ？感謝しろよ！！」

「感謝していますよ」

「僕もです」

「誠意が込められてない！！」

「餓鬼みたいに喚くんじゃないよ」

ゴンッ、とミーシャ大尉の鉄拳が軍曹の頭に落ちて軍曹は沈黙した。

「たっく。まぁ、そういう訳だ。あんた達すぐに伝えて来な」

『了解』

私とレオンは皆に敬礼をして部屋を後にした。

ヴィン・ルビーの所へ行き私達と一緒に行動する事を伝えた。

「君らが一緒なら、心強いよ」

彼は安心したように息を吐いた。

「出発はまだですが今の内に手入れなどをしておいて下さい」

「了解」

彼等は頷くと武器の手入れを始めた。

表情は一様に険しく汗を流している者もいた。

訓練を受け始めて実戦に出るのだから無理もないと私は感じた。

私自身がそうだったし、今でも緊張する。

だが私やレオンが出来たのだから彼等もまた出来ると思う。

彼等が持つ武器はマチマチだったが、どれも見覚えのある武器だった。

ヴィン・ルビーが持っているのはショットガンだった。

腰のホルスターには拳銃が下げられているが左腋にもホルスターがぶら下がっている。

左腋のホルスターの膨らみは自動拳銃よりも大きいからリボルバーだろうか？

「拳銃はリボルバーですか？」

「いや、オートマチックもある。だが、どうやらリボルバーとも相性が良くてな」

テツヤ殿の世界では犯罪者を取り締まる警察という組織では、このリボルバーが広く使われていたらしい。

しかし、犯罪が多発し武器なども強力になるに連れて今ではオートマチックが主流となっているようだ。

軍ではどうかと言うと、最初こそリボルバーだったがオートマチックが洗練されていくと弾数が多いオートマチックを愛用するようになったらしく現在、リボルバーを採用している軍は殆ど無いらしい。

そのリボルバーとヴィン・ルビーは相性が良いらしい。

「出来るならオートマチック一筋が良かったんだけどな。まぁ、こっちはこっちで良い所はあるんだ」

オートマチックでは撃てない強力な弾を撃てるというが・・・実際、オートマチックでもリボルバーと同じ位強力な弾を撃てる物はある。

しかし、それ以上にリボルバーの強みはオートマチック以上に堅牢と言う所だ。

それにリボルバーの場合はジャムを起こした場合も引き金をもう一度、引けば撃てる所だろう。

「オートマチックは“スターム・ルガーＫＰ８５”だ」

スターム・ルガーと言えばゲンハルト様が扱っている拳銃の会社名だ。

コルト社やS&W社などと肩を並べられるほど成長した会社で安価で堅牢が売りだった筈だ。

KP85はそのスターム・ルガーが開発した銃だから安くて堅牢なのは言うまでも無い。

口径は9mmで様々な実用性の高いシステムを搭載しているのだが、軍などからは既にベレッタが採用された事もあり大きな取引は無いと聞いている。

憐れと言えば憐れだ。

安くて頑丈・・・軍でなくても欲しがる物は居る。

しかし、企業から見れば軍ほど大量に買ってくれる所は無いから軍に売り込みをしたい気持ちも分からなくはない。

それなのに遅すぎたとは運が無い。

話を戻すとヴィン・ルビーのKP85はステンレス製だ。

P85はアルミ製だが、Kが付くモデルはステン製なので水に強い。

だが、彼の持っているKP85は光が反射しないように黒塗りだ。

続いて私は彼の持つショットガンに眼を向けた。

「そのショットガンは黒一色ですね」

彼の持つショットガンは黒一色だった。

ＫＰ８５同様にストックまで黒く塗られているから暗闇でも目立たずに済む。

「“モスバーグＭ５９０”・・・俺の愛銃だ」

彼はショットガンの名前を口にした。

モスバーグＭ５９０はイーグル１等軍曹が持っているレミントンＭ８７０と並ぶポンプアクション式ショットガンの代表作だ。

ショットガンでは当たり前の１２ゲージだが、モスバーグには他のショットガンと違う所がある。

それは銃身の上に激しい銃撃戦の際に過熱したバレルに手を触れて熱傷を負わないようにするための防護用兼放熱用の“アウターカバー”が装備されている所だ。

他にも工具無しで分解可能な所も捨て難い。

「それにこいつには銃剣が装備できるんだぜ」

彼は得意そうに言うと銃剣を取ると先に付けてみせた。

「しかもストックは合板だから銃剣術も出来るんだ」

「良いですね」

これなら接近戦でも問題ない、と私は思った。

「ちなみにもう一つの拳銃は、リボルバーの“スターム・ルガーレッドホーク”だ」

彼は左腋のホルスターからリボルバーの拳銃を取り出した。

色はこちらも黒でグリップの部分だけが木の色をしていた。

スターム・ルガー　レッドホークはＰ８５と同じくスターム・ルガー社が開発したリボルバーだ。

こちらはダブルアクション式でＳ＆ａｍｐ;Ｗ　Ｍ２９と同じく口径は４４マグナム弾を撃てる。

ただし、こちらの方が安い上に堅牢な為か多くの狩人達に愛用されたと聞いている。

４４マグナム弾を撃てるリボルバーは３５７マグナム弾を撃てるリボルバーが３８スペシャル弾が撃てるように４４スペシャル弾が撃てる。

弾数は６発で威力も３５７マグナムより上だが反動がキツイからあくまでも獣などにあった時の非常事態用としての意味合いが強いのだろう。

「ショットガンにリボルバーか。・・・なら、お前は“ポイントマン”だな」

ヘンさんことフォックスが間に入って来た。

「あ、副団長」

ヴィン・ルビーは敬礼をした。

それにフォックスも返した。

「お前はポイントマンだ」

「あの、ポイントマンって・・・一番前を歩くんですよね？」

ポイントマン・・・縦列で歩く時、一番前を歩く者の意味で敵と出会い頭に会う確率が高い。

そのためポイントマンにはショットガンが渡されるらしい。

ショットガンは散弾を発射するので、出会い頭に敵と会っても致命的なダメージを与えられるショットガンが重宝されるのだ。

「まぁ、いきなり前方を歩けと言うのも酷だが頑張れ」

何とも無責任な発言をするフォックスだが、ヴィン・ルビーはやってみせると頷いた。

それが頼もしく私には見えた。

第百五十三章：翼の死作戦発動

ヴィン・ルビーがポイントマンに決定してから1時間が経過した。

既に夜となって辺りは暗い上に寒い。

息を吐けば白い程だ。

そんな時間にミーシャ大尉達は来た。

「皆、準備は万端だね？」

ミーシャ大尉の確認に私たちは頷いた。

「これよりヘリの破壊作戦を実行する。作戦名は“翼の死”作戦だ」

向こうにとってヘリはワイバーンと同じく重要な位置にある。

いや、ヘリの方が寧ろ重要かもしれない。

奴等にとってここまで来る足・・・“翼”と言っても良いだろう。

その翼を死に至らしめるから翼の死作戦なのだ。

「ヘリは全て破壊しろ。もう二度と使えない位までにな」

ミーシャ大尉の言葉には氷のように冷たい感情が込められており聞く者の背筋を凍らせながらも緊張を与える。

「その他にも敵に捕えられたタカミ・テツヤ少佐を救出してもらう」

『・・・・・・・・・・・・』

私たちは無言でそれを聞き続けた。

「少佐は拷問されているだろう。運が悪ければ、死んでいるかもしれない。だが、仮に死んでいたとしても“身体”を持って来い」

ここの分は意地も含まれているように思えた。

ミーシャ大尉は賭け事は嫌いと言っていたが、もうこうなっては半ば意地なのだろうと思う。

「各員分隊に別れて行動を取れ」

分隊・・・１０名で行動か。

１０名とは少ないと思われるが、何処に居るのか分からないテツヤ殿を探す事も考えると分隊で行動させるのは良いかもしれない。

「それから最後の言葉だが・・・生きて帰って来い」

一度の任務で死なず第二、第三の任務を遂行するのだから生きて帰って来いとミーシャ大尉は言った。

『レンジャー！！』

私たちは敬礼をしてミーシャ大尉の言葉に返事をした。

そして分隊に別れた。

それぞれの分隊には実戦を重ねた者達が2名から3名ほど入っている。

私の分隊は以下の通りとなる。

私、山犬、猟犬、フォックス、ヴィン・ルビー、親衛騎士団が４人、獅子頭軍団が１人。

レオン、ワイド中尉、イーグル１等軍曹も同じだった。

「では、ゲンハルト総大将。行って参ります」

イーグル１等軍曹が皆を代表してゲンハルト様に出陣する事を伝えた。

「うむ。必ずテツヤを連れて帰って来てくれ」

これは女王の願いでもある、とゲンハルト様は言った。

「先ほど女王が直々に訪れてこう言われた」

どうか、テツヤ殿を無事に連れて帰って来て下さい・・・・・・・

切実に言って来るサラ様にゲンハルト様は頷いたらしい。

「美しい御婦人を泣かせるとは・・・罪な男だな。テツヤは」

何処か羨ましいという感情が込められている事に私は気付いた。

「知らないのか？少佐は女泣かせで有名なんだぜ？」

泣かせた女は俺より多い、と軍曹は言ったがゲンハルト様はそれを否定した。

「そなたの場合は泣かされる方が多かったのではないのか？」

これにドッと笑い声が上がった。

「う、うるせぇ！！俺は・・・俺は・・・うぉぉぉぉん！？」

軍曹は最後まで言う前に泣き始めた。

それに比例して私たちの笑い声は更に高まった。

だが、直ぐに軍曹は立ち上がってみせた。

もう泣いた顔ではない。

戦に行く顔つきだった。

早変わりは、もうこの人の十八番と言える。

見習える面ではある、と思いつつ私達も笑いを抑えて真剣な顔になった。

「では、改めて行って参ります」

「うむ。頼むぞ」

ゲンハルト様の言葉に軍曹は頷き「出陣」と叫んだ。

私たちはそれぞれ用意された馬に飛び乗った。

馬の背には背嚢以外の荷物などもあり私たちが乗ればそれなりに重いのだが、馬は大した重さではない様子だった。

馬の腹を蹴り勢いよく走らせ門を潜る。

先頭は私たちだった。

私は最後に門を出たが、門の上から視線を感じて振り返るとエリーナ様が立っていた。

以前と同じ背景だった。

「ランドルフ・・・・・・」

王女・・・エリーナ様が私の名を口にした。

そしてまた何か言おうとした。

しかし、今は彼女の言葉を聞く時間は無い。

「エリーナ様。必ずテツヤ殿は助けて参ります」

私はエリーナ様にそれだけ言うと背を向けて馬を走らせた。

エリーナ様の視線を背中に感じるがそれを黙って受け止める。

「またあんたを王女・・・見送ったね」

山犬ことガリシャが棘のある声で私に話し掛けてきた。

今頃になって気付いたが、どうも山犬は王女が絡むと機嫌が悪くなるようだ。

「・・・まぁ、ね」

私は何で棘を含んだ声で言って来るのか分からずにも曖昧に答え話題を変えた。

「それより山犬。この暗い中で観測は出来るかい？」

城の中でも暗かったが、今は完全に暗い中だ。

こんな中で狙撃をするとなると、観測手の正確な眼が必要となる。

それを確認する為に訊いた。

まぁ・・・逃げる為でもあったが。

「出来るよ。あんたは？」

「君がちゃんと観測してくれるなら出来るよ」

君を頼りにしている、と言ってみた。

「・・・頼りにしてなさい。バッチリと観測するわ」

山犬は先ほどの棘を無くして嬉しそうに言ってきた。
何となくだが、山犬に対しては煽てたり頼りにしているなどを匂わせたら機嫌が直ると実感した。
「成長したね。君」
フォックスことヘンさんが私に話し掛けてきた。
勿論、私の隣で鼻歌をする山犬に聞かれないように小声でだ。
「まぁ・・・それよりフォックス。私たちの任務は“鷹”の救出ですか？」
鷹とは言うまでもないがテツヤ殿の渾名だ。
「あぁ。“翼”の方は別の分隊がやる。俺達は他の分隊と一緒に北側の小屋を虱潰しに探す」
かなり多い、とフォックスは言ったが私はこう言い返した。
「・・・見つけてみせますよ。必ず」
「その意気だ。しかし、あの二人も急ぎ足をしたな」
「ですね。しかし、あの状況から考えれば仕方無いとも言えますが」
前まで見捨てると言っていたのだから。

「まぁな。だが、連絡は取れないし面倒だな」

二人とは連絡が取れない。

だから、この作戦を知らない訳で・・・どうなるか分からない。

「でも、あの二人なら大丈夫だと思います」

「ほぉう。随分と買っているね」

もう一人の方はボロクソに詰っていたのに、と意地悪な口調で言われた。

「今でも評価は変わりません。ですが・・・今回は心意気に免じて買います」

ミーシャ大尉は愚か、と断罪したが例え一人でもテツヤ殿を救おうとするその心意気は大した物だと素直に感心するし評価する。

「厳しい言葉だ。その言葉を後悔しないように気を付けなよ?」

「あの女に関して後悔などしない、と思っています」

あの女がどれだけ変わろうが私が後悔するような事は無いと自惚れかもしれないが・・・確信していた。

「どうかな? 女なんて男次第で変わるもんだし、おまけに時間も男より短いんだ」

「そうなんですか?」

「あぁ。男より女の方が人生を謳歌できるし楽しめる」

フォックスは経験上から言っているように私は感じた。

「あの、副団長。これからどうすれば良いんですか？」

先頭を馬に乗り走るヴィン・ルビーの声がした。

彼はポイントマンという事もあり前方に居るのだが、ペースを遅めにしてフォックスに近付いてきた。

表情からは不安が宿っており残りの3人も同じだった。

「作戦内容を忘れたのか？首都へ向かえ。ただし、前方全域はお前が護るんだ。俺らの陣地とは言え油断するなよ？」

まだ城を出て間もないのに敢えてプレッシャーを掛けるとは・・・意地悪な方だ。

この方もテツヤ殿と同じかもしれない、と私は思ったが敢えて言わなかった。

フォックスにプレッシャーを掛けられたヴィン・ルビーは前以上に緊張した顔つきで前方全域に気を配った。

残りの親衛騎士団団員も同じで四方に警戒を始めた。

私たちはそれに対して唇を震わせながらも見つめた。

第百五十三章：翼の死作戦発動（後書き）

首都へ“向かえ”が“迎え”になっていると指摘されたので訂正します。

第百五十四章：ワイバーンの見回り

私とリーザ中尉は休憩を何度も取りながら先を進み城まで後2日という所まで来る事に成功した。

後2日で城まで着く距離の為か空にはワイバーンが飛んでいるのが確認できた。

見回りか・・・厄介だな。

まるで我が物のように空を飛び回るワイバーン。

そのワイバーンに乗り手綱を操る傭兵。

片手で手綱を握りながら瓶を口に運んだ。

見回りしているのに、まるで見ていない気がした。

ワイバーンがあちらこちらを見ている感じだ。

あれならワイバーンだけで見回りした方が良いな、と私は他人事ながら思った。

ワイバーンは私たちの存在には気付かなかったのか・・・そのまま飛び去って行った。

「・・・夜、動いた方が良いですね」

リーザ中尉はワイバーンが夜、動けないのを知っているから今は下

手に動かずに夜になるのを待とうと言ってきた。

私もそれに賛成だ。

下手に動いて知られては今まで進んできた道を戻る羽目になる。

それならここは我慢して夜まで待つのが良い。

私とリーザ中尉は馬から降りて、折り畳み式の剣先スコップを取り出すと雪が積もった地面を掘り始めた。

塹壕を作る為だ。

最初はテントだけにしていたが、もう直ぐ敵陣に行くとなれば万が一という事も有り得る。

その為、塹壕を掘ってからテントを張るのだ。

塹壕を掘りながらも周囲を警戒する。

ワイバーンは居なくなったが、歩兵が見回りするかもしれない。

しかし、それは考え過ぎだった。

昼過ぎになってやっと塹壕を掘り終えたが、誰も見なかったし来なかった。

塹壕を掘り終えた私たちは少し休憩を挟む事にした。

寒冷地でも動ける衣服・・・便利なのだが、動くと汗も掻くし寒

冷地帯だから必要以上に体力が消耗される。

だから小まめに休憩を挟まなければならない。

「所でフィーナ殿。貴方の叔父上であるヴィールング殿はどうなさったのですか？」

リーザ中尉は水筒に入っていた水を飲みながら私に叔父上の事を訊ねてきた。

「居場所が分からないんです。ただ、叔父上の事だから何処かに身を隠して反乱勢力と戦える力を蓄えているのでは？と思うのです」

本当はまったく分からないのだが、リーザ中尉が納得しそうな事を出まかせに言った。

「そうですか・・・・・」

リーザ中尉は相槌を打ったが、信用しているようには見えなかった。

恐らく嘘だろうと思いながらも敢えて納得したのかもしれない。それが何故なのかは分からないが・・・・・・・・

― ― ― ― ― ― ― ―

私は隣で小休憩をしているフィーナ殿を見ながらヴィールング殿の事を思い返した。

会った事も無いし話した事も無いが、リンクス（ランドルフ君の異名）の報告によれば敵側・・・リカルド様の方に居ると言う。

敵になったのか？と考えたがフォックス（ヘン・ロビンソンの異名）ではそうではない。

何か裏があると言っていたから考えがあるのかもしれない。

何かは分からないが・・・・・・・・・・

これをフィーナ殿が聞けばどんな行動を取るのかは予想できない。

しかし、良い行動を取るとは考えられない。

私自身彼女の立場になったらそう取るだろう。それを懸念して今も言わないでいるが・・・・・・・・・何れは知る事になるだろう。

その時、彼女がどう行動を取るのか分からない。

隠していた事を怒るかもしれない。

泣いてヴィールング殿を非難するかもしれない。

どんな行動を取るのかは見当もつかない。

しかし、その時、誰かが彼女の傍に居る事が大切。

誰かが支えなければならない。

私が支えるしかない。

私は彼女の相棒だから。

訓練を受けて私は彼女の相棒となった。

なら、相棒が哀しんでいる時は相棒である私が支える。

・・・・・・・・・・・・・・・そうすれば、テツヤ様が「リーシャ。お前は優しいな」とか言ってくれそうだもの。

それに対して私はこう答えるの。

『いいえ。夫である貴方の気持ちを組んだだけです』

『お前は実に良く出来た女だ。他の二人よりも、な』

『そんな・・・・・・・・』

『お前は・・・俺の女だ』

そうしたら・・・・・・・きゃあ!!

「・・・リーザ中尉。さっきから何を一人で興奮しているんですか？」

フィーナ殿の言葉に私はあ、とした。

い、いけない!!

自分の妄想に入ってしまった!?

「い、いえ。何でもありません」

「そうですか・・・・それにしても不思議です」

「何がですか？」

私はこれ幸いにと訊いた。

「貴方は将軍の娘。引く手あまたに求婚者は居たでしょ？」

「えぇ。居ました。でも、それは貴方もでしょ？」

「否定しません。ですが・・・・どいつも私の眼鏡に敵いません」

この方の眼鏡に適う男性が果たしているのか？と私は思ったが敢えて言わないでおいた。

「私も同じです。先ず父の眼鏡に適わないので、そこで大半は終わりです」

私に求愛してくる殿方は大勢いた。

家柄、役職、容姿、学歴・・・全て申し分ない。

しかし、それだけだった。

どの殿方もそれを自慢する癖があった。

そして私に求愛したのも大半が将軍の娘という理由で近づいてきた。

将軍の娘である私を妻にすれば、軍部でも顔が利くという単純な理由だ。

それが父には我慢できなかったし私も我慢できなかった。

父は身内だろうと贔屓したりしない。

寧ろ身内だからこそ敢えて厳しく職場では接して来る。

それが上に立つ者の役目であり義務だと考えていた。

私も軍に入隊したが、テツヤ様の世界で言えば2等兵から始まり数年かけて今の地位を独力で手に入れた。

それを知らない殿方達は私と結婚すれば、上に行けると思っていた。

だから、全部断った。

まぁ、父の眼鏡に適っても私の眼鏡に適わなければそこで終わりだったけど。

でも、テツヤ様だけは例外。

あの方は決して自分を自慢したりはしない。

無駄な話もしない。

取り繕ったりもしない。

全てが今まで会ってきた殿方とは違う事をする。

そこが父の眼鏡に適ったのだと思っている。

私自身もテツヤ様の飾らない性格を好きになったが、それ以外にも・・・・・・・・・・

「テツヤ様を見て、一目で恋に落ちたんです」

「・・・失礼ですが、リーザ中尉の眼は飾りですか？」

「失礼ですね。ちゃんと見えます」

「では、どうしてあんな男に一目惚れをするのですか？」

フィーナ中尉は理解できない顔で言ってきた。

「あら、テツヤ様って男らしくて逞しい方ではないですか」

「まぁ、逞しい所は認めますが性格は最悪じゃないですか」

確かにテツヤ様の性格は決して褒められる物ではない。

敬語は先ず使わないし好戦的な態度も取るし相手の神経を逆撫でする。

攻撃してくれば女だろうと子供だろうと関係無しに情け容赦ない反撃が返って来る。

フィーナ殿などそれを何度も体験している。

まったく良い所が無い性格と思われるが、面倒見は良いし優しい。
それに誰かが困っていれば迷うことなく手を差し出す。
私が初めてあの方と会った時も、あの方は傷ついた民をリンクスと一緒に医者の所へ連れて行った。
普通なら誰かに任せて自分は帰るだろう。
でも、あの方は違う。
自分が係わったのだから最後まで見届ける義務があると思ったのだろう。
最後まで面倒を見た。
それがまた格好良かった。
軍服姿もまた格好良くて・・・鼻血を出しそうになった。
訓練をする時は厳しいが、そこもまた魅力的。
「・・・そういう物ですか」
フィーナ殿は些か納得できない顔をしたが、私はそれに対してこう答えた。
「私はテツヤ様を愛しております。愛する方なら、どんな所も好きになるんです」

私の言葉にフィーナ殿はこれまた納得のいかない顔をしたが何も言わずに黙った。

「さぁ、今度はテントを張りましょう」

テントを張ったら交代で見張りして、夜になったら行動を開始する。

そして城に着いたらテツヤ様を見付けだして救出するのだ。

「了解」

フィーナ殿は頷くとテントを張り始めた。

それに私も続いた。

幕間：英雄と対峙

俺はリカルドから差し出された酒を飲みながら連れて行かれたヴィールングがどうなったのか気になっていた。

ここに移されてからは拷問をされていない。

ただリカルド達が来て話をするだけだ。

ハゲタカ共達は来ない。

恐らく俺とヴィールングのおっさんを勝手に捕まえた挙句に拷問するという独断が原因で処罰でもされたんだろうな。

それならそれで構わないが。

話を戻すと、リカルド達は俺と話をするだけだ。

今度は情に付け込む気か？と思ったが、どうやらそうではないらしい。

さっきリカルド達、と言ったが話すのはリカルドだけ。

話の内容は別に何の価値も無い内容ばかりで何が狙いなのか分からない。

俺ならさっさと殺す。

目的も無いのに生かしておく理由はないし、下手に生かしておくと

味方が奪還しに来る恐れがあるからな。

俺の場合は見捨てているから関係ないと思うが・・・・・・・・・

まぁ、見捨てられても自力で脱出するまでだ。

『さぁて、どうやって脱出するかな？』

俺は煙草に火を点けながら思案した。

ここの牢は南京錠が１個だけ。

後は無いからこれさえ外してしまえばどうって事はない。

ただし、そこからが問題だ。

武器が何処にあるのか分からない。

少なくともここには無いという事は分かる。

それらを探して何処からどう出るかも考えるとなると・・・難しいんだよな。

急いで脱出しなければ直ぐに見つかってしまうからそんなに時間は掛けられない。

難しいぜ。

どうやって脱出しようかと煙草を蒸かしながら思案しているとドアが開いた音を聞き取った。

この靴音からして・・・フォース・リーコンの指揮官であるクルセイダー大佐だな。

クルセイダー大佐。

ベトナム戦争でも苛烈を極めた１９６８年の“テト攻勢”を皮切りにパナマ、グレナダなどの特殊作戦に従事した伝説の英雄。

俺も噂では聞いていたが、まさか実物と会えるとは思わなかった。

如何にも忠誠の塊みたいな男だが部下思いでもあると分かった。

こいつの下でならどんな絶望的な戦場でも諦めずに戦える・・・と思わせる指揮官だ。

狼を紋章に持つヴィクター公爵とクルセイダー大佐。

この２人がリカルドの両腕と言えるな。

差し詰め足はフィリップ男爵で残り２名は害虫だな。

しかし、可笑しいな。

俺は煙草を吸いながら疑問を感じた。

何時もならリカルドと一緒に来る筈なのに今回は一人・・・それが解せない。

コツコツと独特の軍靴の音が牢内に響く。

そして俺が居る牢の前で足音は止まった。

迷彩服を着て腰のホルスターに黒塗りの拳銃を一丁ぶら提げた壮年の男。

青い瞳は海を思わせるように透き通っているし白い肌もまた海と一緒になった空のようだ。

だが、身体付きは武骨で鍛え抜かれているからそこら辺のチンピラなら5秒で病院送りだろうな。

これに加えて顔立ちが端正と来れば世の女どもが黙っていないだろうな。

「よぉ、クルセイダー大佐。何か用か？」

俺は煙草を揉み消しながらクルセイダー大佐に要件を訊ねた。

「君と話がしたいと思って来たんだ。ミスター・テツヤ」

「そうかい。リカルドのお守り役は狼に任せているのか？」

「あぁ。部下も一緒だから不測の事態にも対処できるよ」

「そうかい。それで話とは？」

俺は新たな煙草を銜えながら訊ねた。

火はライターを返されたからそれで点けている。

「君は、この国に来てからどれ位になる？」

「そうだな・・・まぁ、半年は経っていないな」

「そうか。私は君よりは若干早くここに来た」

「差し支えが無いなら聞かせてくれ。どうしてここに来たんだ？いや、行かされたんだ？」

ここの世界に来た奴等は戦死した奴らばかり。

だが、どうして来たのかは不明だ。

「私にも分からない。ただ、気が付けば部下と共に来ていた」

あちらの世界では中東の作戦に従事していたが、待ち伏せに合い殺されたらしい。

そしてここに来た。

「装備は問題なかったし傷も無い。どういう事か？と考えたが答えはまだ見つからない」

話から察するに宅配人とは連絡が無いようだな。

「そうかい。それで俺の事をどうするんだ？」

「会議では専ら君を直ぐに処刑しろ、と口煩く貴族たちが叫んでいるよ」

見せしめのために処刑しヴァイガーに居る連中の士気を下げると言っているらしい。

「無駄な事だ。俺一人を殺した所で士気が低下する程・・・軟な連中は居ない」

「同感だ。多勢に無勢と言うのに士気は衰えていない。そして何度も撃退している。大した兵たちだよ」

「あんた等も同じ事だ。しつこいほど生き残りやがって・・・俺としては早々に死んで欲しいんだがね」

「それは無理な話だよ。私も部下もリカルド様を王にするまでは死なないと決めているんだ」

「リカルドに心服しているようだな?」

「君も私たちの立場なら心服していたのではないのかな?」

「生憎と俺は誰にも心服しない。ただし、あいつの為になら戦うだろうな」

俺の答えにクルセイダー大佐はただ頷いた。

「その通りだ。私は・・・国の為に戦ってきた」

どんな目に遭おうとも国に忠誠を誓い続ける事が自分の役目だと考えていたようだ。

決して個人に忠誠を誓ったりはしなかった。

「しかし、リカルド王子と出会いこの身をあの方に捧げようと思った」

それだけ魅力に溢れている、とクルセイダー大佐は語った。

「そうかい」

俺はそれに相槌を打った。

「さて、話は変わるがあのハゲタカ共と君はどういう関係なんだい？」

「前にも言ったが、あいつと部下達を戦死させた。それだけの関係だ」

「なぜ、殺したんだい？」

「おいおい。殺したんじゃない。戦死させただ」

「失礼した。なぜ戦死させたんだい？」

「あんたもベトナムを経験したなら知っているだろ？」

「・・・・民間人に対する殺傷および強姦などか」

あまり思い出したい過去ではないのか少し暗い声でクルセイダー大佐は答えた。

ベトナム以前にもこんな事はあったが全世界に生中継されたのは初めてだ。

お陰で色々と苦い思いをしたのは言うまでも無いだろ?

クルセイダー大佐もどうやらそれに当て嵌まるようだ。

「あいつ等はそれに加えて正規軍に対する攻撃もした。俺が奴等を戦死させなくても何れは誰かがやっていた」

「正規軍までも敵に回すか・・・やる事が何でもありだな」

「それがあいつ等さ。あんた・・・とんでもない相手に借りを作ったな?」

「覚悟はしていた。だが、予想以上だ」

「戦に予想外なんて付き物だろ?」

「君の言う通りだ。しかし、だからと言って彼等の好きにはさせない」

必ずリカルドを護り国を統一すると・・・・・・・・・・

「俺じゃなくてリカルドに言えよ」

何で敵である俺にそんな言葉を言うんだ?問い掛けた。

「さぁね。だが、君とは一度・・・戦場で戦いたかったよ」

「あんた見かけによらず好戦的な男か？」

「いや。しかし、軍人の性と言えば良いのかな？君のような男ともう一度・・・戦場で会いたい、と思ったのさ」

こんな所ではなく戦場で会いたい・・・・・・・

「会えば殺し合いになるのにか？」

「あぁ」

クルセイダー大佐は何故か微苦笑を浮かべてみせた。

そして言うだけ言うと去って行った。

俺はそれを黙って見送りながら短くなった煙草を口に銜えて白い煙を吐き出した。

何がしたかったんだか・・・・・・・・・・・・・・・

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

――――――――――――――――――――――――

私は目の前で酒を浴びるほど飲むワイバーンの女傭兵を見ていた。

「ちくしょう・・・何であたしが謹慎処分なんかに・・・・・・・」

ダンッ

青銅で作った杯を乱暴にテーブルに叩きつけながら女傭兵は愚痴を零した。

「仕方無いですよ」

私は取り敢えず相槌を打った。

私と女傭兵はリカルドに呼び出されタカミ・テツヤを勝手に捕まえた挙句に拷問した事について尋問を受けた。

なぜ私とこの目の前で愚痴を零す女なのか？と言えば立場が一番弱いからだろう。

処分は謹慎。

軽い罪なのはライアンナル伯爵様が裏で手を回したからだろう。

「あたしが何をしたんだよ。あたしは、ただ・・・怨みを晴らしたい一心で」

その私情が我が身を滅ぼすんですよ。

心の中でまだまだ甘い、と馬鹿にしながら酒を飲んだ。

しかし、この女を弁護する気はないが・・・口惜しいな。

あのままあの男を嬲り殺しに出来ない事に。

ヴィールング隊長も取り上げられて鬱憤を晴らせない。

あの男・・・2人には怨みがある。

まだ晴らし切れない。

それなのに取り上げられては蛇の生殺しも良い所だ。

何とかして取り戻せないものか・・・・・・・・・・

そんな事を考えている間も女傭兵は酒を飲み憂さ晴らしをしている。

私はそれを見ながらどうするかと思案しながら酒を口へ運んだ。

第百五十五章：緊張を解す

私が所属する分隊は夜の道を馬に乗り進んでいた。

夜も行進する事にヴィン・ルビーを始めとした親衛騎士団は慣れていないのか何処か不安そうに見えた。

「そんなに不安そうな気を出すな。こっちまで滅入る」

ヘンさんことフォックスが苦言を漏らした。

彼は分隊長を務める為、前方より後ろに居るが声は聞こえるようにしていた。

「で、でも、副団長」

「でもじゃない。お前等、最初の勢いは何処に行ったんだ？」

フォックスはかつての部下達の士気を高めるように言い続けた。

「お前等にとっては二度目の戦だ。初陣みたいに赤っ恥を掻きたいのか？」

ヴィン・ルビーを始めとした親衛騎士団はザンビア平野が初陣だったが、決して華やかな活躍はしていない。

彼を始め大多数は我先にと逃げ出した。

指揮官の命令ではなく恐怖心に負けて逃げた。

これほど戦う者達にとって恥は無いだろう。

しかし、初陣というのはそんな物だろうと私は頭の片隅で思っていた。

私の初陣は砦の攻防戦。

あの時は私たちが殿という事もありプレッシャーは強かったが、逃げたいという感情は無かった。

テツヤ殿達が一緒に居たからなのも理由と言えば理由だが、それ以外で言えば・・・・・・・

彼等が敗退してきたのが理由だ。

王国の精鋭と謳われる彼等が敗退して帰って来た。

それに衝撃を受けたが逆に彼等が出来なかったなら私たちがやってやるという気持ちが芽生えた。

それが私達を奮い立たせたのかもしれない。

そう考えている間もフォックスは喋り続けた。

「リンクスたちを見ろ。まだお前らより若いのに落ち着いているぞ」

「そ、それは、戦い慣れているから・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「慣れていませんよ。私は」

私はヴィン・ルビーの言葉を遮って口を挟んだ。

「未だに緊張しています。ですが、それで良いんです」

過度な緊張は駄目だし、緊張が無さ過ぎるのも駄目だ。

適度な緊張がちょうど良い。

「ですが、貴方達は度が過ぎます」

「度が過ぎると言ってもどうすれば良いんだ？」

「それは自分で考えて下さい」

無責任かもしれないが、これぱかりは自分で答えを見つけてもらうしかない。

「無責任だな」

案の定と言うべきか・・・ヴィン・ルビー達は当たり前のように言い返してきた。

「ですが、テツヤ殿が居たとしても同じ事を言うでしょう」

ヒントは与えるが答えは自分で探せ、と。

「悩んで答えを見つければ、それだけ貴方達は成長する。私はヒントも与えませんが」

「テツヤより酷いな」

フォックスはくっ、と声を震わせて笑った。

それを聞いたヴィン・ルビー達もまた笑い出した。

流石は元副団長、と私は感心した。

副団長は団長の補佐だが、言いかえれば軍曹みたいに兵達を鼓舞し士気を上げる役割もある。

だから、ある意味では団長を選ぶより副団長を選ぶ方が難しいと私は思うし、またそれになるのも難しい筈だ。

それをフォックスはやっているのだから凄い。

下士官・・・そうでなくても大尉くらいにはなれそうな感じだ。

今にして思えば、フォックスは階級が無い。

いや、他の者もそうだ。

まぁ、混乱していたのも理由として上げられるが。

しかし、それが後々面倒な事になりそうな予感がするから作戦が無事に終わった暁には進言してみようと思う。

「所でラ・・・リンクス。質問しても良いか？」

ヴィン・ルビーは私の名を呼ぼうとしたが、少し間をおいて私の渾

名に言い直した。

「何ですか？」

「お前さんは、俺らの団長をどう思う？」

「どうとは？」

「正直に言って、全てに対してどう思うって事だ」

「・・・正直に言って良いんですか？」

私は訊き返した。

「あぁ。頼む」

「では、言います。私は、あの女はただの要らない荷物だと思っております」

「要らない荷物？」

「はい。最初は下種女でしたが、色々とありまして要らない荷物に格下げしました」

「格下げ・・・それ以上、落とす気は？」

「また何か変な事をしたら落とします。それか実力行使で痛い思いをさせる積りです」

「厳しいコメントだな」

フォックスは苦笑し獅子頭軍団の一人もまた苦笑した。

「確かにそうだな。まぁ、我は遠慮しておくぞ。我が主からも言われたからな」

食べると腹を壊す、と・・・・・・・・・・

ガルムの言葉にヴィン・ルビー達もまた笑い出した。

「腹を壊す？いや、寧ろ口に運んだ時点でもう壊すだろ？」

「有り得るな。それ」

彼等はガルムの言葉に味付けをするように喋り出した。

慕ってはいるが、些か迷惑な・・・嫌いな所もあったと言う所か？

「要らない荷物はどんな団長だったんですか？」

私は気になり訊ねてみた。

「一言で表すなら・・・愚直かな？」

愚直・・・的を射ている気がした。

「何から何でも枠に嵌めようとしている所があったし、融通も効かない。おまけに高圧的な態度と来たもんだ」

欠点ばかりだが、良い所を上げるなら・・・・・・・・・

「負けず嫌い、根性、真っ正直、だな」

どれもこれも女としてはどうなんだ？と思うが、それがあの女の良い所なのだから仕方が無い。

「後もう一つ上げるなら容姿は良い事だな」

まぁ確かに・・・・・・

「容姿は良いですね。性格は私から言わせれば最悪ですが」

「本当に君は厳しい言葉を吐くな。鷹と付き合いが長いからそうなるのか？」

「まぁ・・・否定できません」

実際テツヤ殿と付き合うようになってからかなり性格が悪くなった、と自分でも思う。

あの女に関しては本当の言葉を吐いているだけだが・・・・・・・・・・・・

「気になっていたんだが、あの顔とあの性格で人に好かれていたのか？」

特に女に、と付け加えられた。

「長く付き合っていればあの方の人柄が分かると思いますよ？女性には好かれていましたね。軍曹よりも」

「あの男の場合は、あの色情狂とも言える部分を無くせば大丈夫と思うが・・・・・・・」

「学習能力が無いから無理ですよ」

「確かにそうだな。しかし、それでも精鋭部隊に所属していたんだろ？」

「はい。最初の部隊も精鋭でしたが、更に上の部隊もあるんです」

その部隊から更に上に行く者が多い為、特殊部隊の登竜門的な存在と言われている。

現在はグリーン・ベレー養成機関と言われているが。

「そんな所に居たのに、どうやってああなるんだろうな？」

「それは不明です。余り過去を話しませんから」

軍曹を始め、３人は極端に過去を話さない。

それは知られたくない事が多いからであろう。

特に軍曹の話は余りに酷い経験があるから尚更とも言える。

「３人とも過去は余り話さないのか。まぁ、触れて欲しくない部分があるからだろうな」

ヴィン・ルビーは私の考えを口に出した。

「そうですね」

私はそれに淡泊な相槌を打ちながら煙草を取り出して銜えた。

マッチで火を点けながら煙を肺に入れた。

「それは鷹が吸っている奴だな？」

ヴィン・ルビーは私が煙草を吸った事に気付いて訊ねて来た。

「えぇ。女神の抱擁と言われる煙草です。一口吸いますか？」

火を点けたままの女神の抱擁を差し出す。

と言っても彼だけが吸う訳ではなく親衛騎士団達が全員吸う。

皆、好奇心旺盛だ。

お陰で彼の所へ着いた時には、もう擦れ擦れだった。

それでも彼はそれを吸って煙を吐いた。

「・・・これが女神の抱擁か。良いな・・・本当に女神に抱き締められる気分だ」

緊張が嘘のように消えて無くなる、と彼は言い他の親衛騎士団も同じだった。

「なぁ、リンクス。これまだあるか？」

「ありますけど、多くは無いです。吸う人は多いので」

ゲンハルト様、プロイセン様、ワイド中尉、フォックス、私、チャレンジャー・・・などなど数えたら切りが無い。

「もっと早く出会いたかったぜ」

こんな良い女を放っておくなど男として恥だ、と彼は言った。

「まぁ、運が悪かったとしか言えないですね」

「まぁな。だが、出会えたんだ。見放されてはいないさ」

確かに、と私は頷いた。

女神の抱擁を吸ってから彼等の緊張は解れていた。

『大した煙草だ・・・・・・』

私は新しい煙草を銜えながら女神の抱擁という名は伊達ではないな、と改めて思った。

第百五十六章：叔父の部下

私とリーザ中尉は夜で暗くなった山道を最小限の音しかしないように細心の注意を払いながら進んでいた。

もう直ぐ・・・もう直ぐ着く・・・もう直ぐテツヤを助ける事が出来る。

それを考えると私の心は何故か高ぶりを覚えた。

もっと速く進みたいという気持ちもあるが・・・・・・焦っては駄目だ。

その気持ちを必死に抑え続ける。

「リーザ中尉。どうやって城に潜入しますか？」

恐らく敵が来る事を想定して作った緊急脱出口はもう敵によって塞がれているだろうと思う。

そうなると、何処から潜入するか・・・・・・・・

「そこは場所を見て考えるしかありません。ですが、必ず・・・何処かにある筈です」

そこを見付ければ中に入る事は出来る、とリーザ中尉は言った。

私はそれに頷きながらも、そこが何処なのか自分なりに考えようとした時だ。

「・・・・・・・」

誰かが近くに居る、と悟った。

人数は一人だ。

闇に上手く溶け込んでいるが、視線というのは感じるし近ければ尚更感じるというものだ。

自分に自信があるのか、それとも単なる素人か。

私はリーザ中尉を見た。

彼女も気付いており眼で合図してきた。

『敵意は無いですが、念の為調べてみましょう』

『それに賛成です。少なくとも・・・味方とは思えませんから』

ここに味方が居る・・・到底考えられなかった。

私達を仮に追って来た、としてもそう簡単に先回りできる物ではない。

だとすれば敵だが敵なら直ぐに私達を殺す筈。

それとも私たち2人だけなのか調べているのか？

どちらにせよ調べれば分かる事だ。

私とリーザ中尉は馬から降りた。

そして眼で合図をして互いに左右へと別れた。

二手に別れれば相手はどちらを追うかで迷う筈。

だが、そうではなかった。

相手は私を追って来た。

姿こそ見えないが気配で私を追っているのが分かる。

走っているのに、どう言う訳か音がまるでしない。

一体どうやってそんな風に走れるのか知りたいな。

しかし、解せない。

・・・狙いは私なのか？

私よりリーザ中尉の方が利用価値は高い筈なのに・・・・どういう事だ？

まぁ、それも訊けば分かる事か。

私は暗闇を走りながら何処か適当な所で取り押さえようと思った。

ん？

あれは・・・・・よし、あれでやろう。

私は暗闇の中でも確認できる大きな木に眼を付けた。

そこまで全速力で行き急いで後ろに隠れ研ぎ澄ましたナイフを抜いた。

近接戦闘では拳銃よりナイフの方が有利に立てる事もあるし、物音が余りしない方だから気付かれない。

相手の気配が来て私の横を通り越した。

私はそれを合図に動いた。

後ろから襲い掛かり、相手の口を抑えナイフを持った右手を喉仏に押し付けた。

「貴様は誰だ?何故、私とリーザ中尉を見ていた?」

低い声で・・・威圧的な態度で私は相手に訊ねた。

「捕まえましたか。フィーナ殿」

リーザ中尉が遅れて来た。

「えぇ。さぁ、言え。貴様は誰で何の目的があるんだ?」

相手は口をモゴモゴさせた。

「喋るか。しかし、変な素振りをしてみろ。貴様を殺す」

チラリとリーザ中尉を見れば、既にＡＫＳ７４－Ｕの銃口を男の腸に向けていた。

それを見てから私は相手を解放した。

「わたしは、ヴィールング・マレル様に仕えている者です」

男は一度だけ息を整えてから滑らかな口調で自分の主人の名を口にした。

「ヴィールング・・・叔父上の部下か？」

私は叔父であるヴィールング殿の部下と名乗った男に訊き返した。

「はい」

これに男は正直に頷いてみせた。

「叔父上は・・・無事なのか？」

私は気になっていた事を訊ねた。

手紙を見てから音沙汰が無かったので心配だった。

「・・・残念ながら、敵に捕えられております」

男は無念です、と言った。

「・・・そうか。で、そなたは何故、私達を見ていた？」

「それは・・・・・・・・」

男は言葉を言おうとしたが黙り込んだ。

「その続きは私がします」

背後から別の男の声がした。

私は反射的にコルト　コンバットコマンダーを抜いて撃鉄を抜くと同時に起こした。

コルトはシングルアクションだ。

だから、一度撃鉄を起こさなくてはならない。

そのため抜くと同時に撃鉄を起こす練習を徹底されたので反射的に起こしていたのだ。

暗闇の中から現れたのは暗闇と同化したような男だった。

白い服・・・雪が積もった森林と同化出来る服を纏った男には見覚えがあった。

幼い頃、一度だけ会った人物だ。

「貴様は確か・・・・・・・」

「ヴィールング殿にお仕えしているスリーと申します。私を、覚えておりましたか？」

「あぁ。叔父上に従い、私と一度だけ会っただろ?」

幼い頃、初めて叔父上が連れて来た部下だったので私は今でも覚えていた。

「はい。私のような男を覚えていて下さり光栄に思います」

「それでこの男が言おうとした事は何だ?」

私は続きを促した。

しかし、コルトの銃口は向けたままだ。

念には念を入れておけ、と身体が告げていたからだ。

「はい。実は、貴方様の上官である傭兵も一緒に捕えられております」

「テツヤもか。詳しい事を聞かせてくれるな?」

「はい。貴方様がこうして来た事は予想外でしたが、お話ししましょう」

話さないなら強制的に訊き出すでしょ?と訊いて来るスリーに私は頷いた。

「あぁ。包み隠さず話せ」

「分かりました」

スリーは頷くと私とリーザ中尉に事の顛末を話した。

「そうか。叔父上は・・・リカルド王子側に付いていたのか」

私は叔父上が敵側に付いていた事に衝撃を受けながらもそれを素直に受け取っていた。

それをリーザ中尉は驚いた顔で見ていた事に気付いた。

「リーザ中尉は、知っていたのですか？」

「・・・えぇ。知っていました」

私にそれを教えては取り乱すと思ったのか、テツヤが口止めしたらしい。

「・・・そうですか」

私は間を置いてから相槌を打った。

テツヤが口止めをした理由が頷ける。

「失礼ですが、フィーナ様。貴方様とリーザ様はどうしてここに来たのですか？」

スリーが私に理由を訊いてきた。

分かり切った顔をしていたが、確認の為だろう。

「テツヤを助けに行く為だ。無謀とは知っているが、それでも助けたいのだ」

「たった二人で、ですか？」

「あぁ。テツヤは見捨てる、と言われた」

それは傭兵だからではなくあいつ一人で被害が済むなら良いと言う合理的な考えからだ。

「確かに合理的です。でも、貴方様はそれを受け入れなかった」

「あぁ。時に、そなた達は叔父上をどうするのだ？」

「助け出します。あの方に我々は忠誠を誓っているのですから。それから失礼ですが、あの傭兵・・・テツヤという男は殺すつもりでした」

一人を助け出すのも大変なのにもう一人、助け出すのは無理だと判断した。

スリーは淡々とした口調で語った。

「生憎だが私はテツヤを助け出す。叔父上も一緒にな」

「ですが、運が悪ければ二人とも助けられずに死ぬかもしれないですよ？」

「それならそれで構わん。元から命令違反をしている身。運が悪ければ銃殺だろう。だが、テツヤと共に死ねるならそれもまた本望と

言える」

「・・・・・・・・・」

スリーは黙った。

何を考えているのかは黒い瞳から分からない。

長い間、沈黙していたスリーだが口を静かに開いた。

「分かりました。協力しましょう」

「本当か？」

「はい。私たちはヴィールング様を助けたい。そして貴方様はテツヤという傭兵を助けたい。しかし、お二人では厳しい。私たちの方は数が多いですが女性が居ない」

潜入する時は女性が居た方が良い、とスリーは語った。

「それも美しい女性なら男達の視線はそちらに釘付けです」

「つまり私達を囮にするという事か？」

「そうなりますね。ですが、調べによればヴィールング様は別の場所に移動されたという事です。ですから囮とも言えますが厳密に言えば違うとも言えます」

「分かった。私達も二人では心もとないと思っていたし、潜入方法も考えられなかった。そなたの申し出は嬉しい」

「それはこちらも同じ事です。では、詳しい話は私どもの基地で話し合いましょう」

「分かった」

私はリーザ中尉を見た。

リーザ中尉はスリーを見ていたが、信用できると踏んだのかまたは天に任せようと思ったのか・・・ただ頷いた。

天にこの身を任せるのは余りに大きな博打と言えるが、その博打に人生を賭けるのも悪くないと私は思った。

第百五十七章：獲物と口癖

私とリーザ中尉はスリー達のアジトで一息入れた。

ここは城からさほど離れていない場所だが、簡単には見つからない場所でもある。

地下にこんな場所を作るとは・・・・・・

叔父上・・・一体、貴方はどんな事をしていたのですか？

私はそう問いたくなった。

そしてその中には大勢の者達が居た。

皆、テツヤ達が居た国の迷彩服と似たような物を着込んだ上に狭い場所でも取り扱いがし易い武器を持っていた。

私とリーザ中尉を彼等は見て来たが、スリーが説明すると皆同じ顔でこう言っていた。

『たった2人で行くとは・・・愚かな』

この言葉は私とリーザ中尉にとって当たり前の事であったから気にしない事にした。

「何時の間にこんな場所を築いたのだ？」

私が訊ねるとスリーは澄ました顔でこう答えた。

「貴方様が産まれる前からありました」

「ここを知っている者は？」

「ヴィールング隊長に仕えている者だけです」

それ以外の者は誰も知らない・・・王にも知らせていないらしい。

「・・・王にも知られたくないから、ですか？」

リーザ中尉が意味ありげに言うとスリーは頷いた。

「もう先王は死んでおるので敢えて言いますが、ヴィールング隊長は先王を殺そうとしました」

「先王を殺すだと？それは国家反逆罪だぞ」

王を殺す・・・リカルド王子も国家反逆罪に問われる事だろう。

生き残り捕まれば、の話だが。

しかし、その国家反逆罪をまさか叔父上までしようとしていたとは思いもしなかった。

「えぇ。知っております。ですが、先王が行なった然して意味も無い戦争で我が国は怨みを買い続けました。もちろん内部からも」

先王が行なった遠征は、スリーの言う通り然して意味は無かった。

唯一手に入れた島国――シャインス公国も公国として半ば独立しているから領土とは言えない。

手に入れたのは自国民の血と膨大に膨れ上がった国家予算に他国の怨み・・・・・・・

しかも先王は更なる戦争を始めようと考えていたらしい。

このままでは国が滅んでしまう。

ならば、人知れず・・・事故死という形で葬り去ろうと叔父上は決めたらしい。

「暗殺はしておりません。あれは事故です」

私は先王が死んだ事を言おうとしたが、スリーはそれを遮り説明した。

後一歩で殺そうとしたが、どういう理由かは不明だが中止となったらしい。

しかし、先王は狩猟中に落馬して死亡した為その必要は無くなった。

「叔父上は・・・そんな事まで・・・・・・」

「はい。ですが、それも国を想うが故です」

ヴィルヘルム元伯爵が先王に戦を止めるように進言したが、聞き入れられず国外追放とされた。

それを契機に叔父上は決意したらしい。

「貴方様のお父上であらせられたロックス様は先王に唯一進言できました。ですが、戦を止めようとは考えなかった」

真の忠臣とは、王よりも国に忠誠を誓い、国を良い方向へと持って行くのが務め。

それが出来ないなら汚れ仕事だろうとやるしかない。

そうスリーは言った。

「ですが、一歩でも間違えれば国は乱れますね」

リーザ中尉はその忠誠心は見上げた物だが危険でもあると釘を刺すようスリーに告げた。

「そうヴィールング隊長も仰っておりました」

忠誠心だけでなく全ての心という名が付く物には一種の狂気が宿っている。

故にその狂気に踊らされてはならない。

それを叔父上は解かっていたから、止めたのかもしれないな。

「ヴィールング隊長は国が乱れるのを恐れていました。失礼ながら今の王・・・女王陛下ではこの国を護る事は出来ないでしょう」

確かにそれは言えている。

女王陛下であるサラ様は心優しく寛大な方。

これは美徳ではあるが、こんな非常事態の時は逆に仇となる。

だからこそリカルド王子を辺境の地へ幽閉するしか出来なかったのだ。

いや、あの場合はまだ良かったのかもしれないが、起きてしまったのなら情を捨て去り打ち倒すしかない。

その命令を下すのが遅すぎたからこそ、ここまで追い詰められたとも言える。

もし、叔父上が先王にしようとした事をリカルド王子にしていたなら事態はもう少しマシになっていたのかもしれない。

「ヴィールング隊長は新しい王を待っているのです」

この国だけではなく引いては5大陸を護るだけの力量を持ち合せた新しい王を・・・・・・

「5大陸を護るだと？・・・・それは帝国の事か？」

「その通りです。あの国は危険です。恐らくこの内乱に乗じて裏で準備をしている事でしょう」

それを阻止する為にも一刻も早くこの内乱を終わらせなければならない。

それにはヴィールング隊長が必要だ、とスリーは言い続けた。
冷静な口調ではあるが、瞳は燃えており熱く舌を動かす政治家のように見えてしまった。

「さて、これからの事ですが先ずはこれを見て下さい」

スリーはテーブルに一枚の地図を広げた。
城の見取り図だった。

「何故これを？」

城の見取り図は一枚しか無かった筈だし、その一枚はリカルド王子の手に渡った筈。
それなのに何故スリーが持っているのか私には分からなかった。

「万が一の事を考えて書き写して置いたんです」

「随分と用意周到だな」

まるでこうなる事を予想していたかのような手際の良さだ。

「“常に備えておけ”・・・隊長の口癖でした」

「良い言葉だな。それで今二人は何処に？」

「テツヤという傭兵は牢に居ります」

スリーは城の中にある牢を指差した。

「ここの警備は意外と緩いです。槍兵が2人で後は居りません」

「牢の中には居ないのか？」

外には2人だけだが、中には居ないか・・・・・・・・

「それは確認しましたが居りませんでした。問題はヴィールング隊長の方です」

今度は牢から離れた場所を指差した。

「・・・塔か」

スリーが指差した所は塔だった。

エスカータ城には4つの塔がある。

四方に眼を届かせる為だ。

その内の1つに叔父上は閉じ込められているらしい。

「窓はありますが、余りに高過ぎて登れませんし見つかる危険性が高いです。見張りも常に城壁には居ます」

「では、どうするのだ？」

「強行突破しか無いと思います」

テツヤの方は何とかなるが、叔父上の方は護りが堅過ぎるからそうはいかない。

「やはり叔父上の方が相手として不味いと判断したのか？」

「かもしれません。それに二人一緒にさせると共に脱出される恐れもありますからね」

何より叔父上に怨みを抱く者が近くに居る以上は隔離とも言える形でやらなければ駄目だとスリーは言った。

「ワイバーンの傭兵か？」

「・・・知っておられたのですか」

スリーは些か驚いた声で訊ねてきた。

「あぁ。そいつにやられそうになった・・・そしてテツヤが攫われた」

私のせいだ、と私は拳を握り締めて叫びたかった。

だが、叫んだ所で事態が回復する訳でも進展する訳でも無いからそれは言わない。

ただ黙って拳を握り締めるだけだ。

「そうですか。その者ともう一人・・・ヴィールング隊長に怨みを抱く者がおります」

「誰だ？」

スリーは話題を変えるかのように喋り私もそれに乗るようにして訊ねた。

「我が隊に所属していた者で、国外追放に処されたギルドの頭目です」

「というと、テツヤ様とランドルフ君にドラゴン退治を依頼した男ですか」

リーザ中尉が言うとスリーは頷いた。

「はい。その者はヴィールング隊長を怨んでおり・・・拷問も掛けました」

それでも叔父上は何も言わなかったらしい。

「話を戻しますと、その者達二人が叔父上を亡き者にしようと考えております」

「その者達をどうする？」

「機会があれば殺します。それがどうかしましたか？」

「ワイバーンの方は・・・私が殺す」

「しかし、相手は」

「言うな。私が殺すと決めた。誰にも渡さん。手出しするなら容赦

しない」

私はスリーを睨んだ。

スリーが言いたい事は分かっている。

相手はワイバーンに乗る傭兵で場数は上。

私は場数が足りないしワイバーンも天馬も無い。

勝ち目は薄いが、それでもやると決めたのだ。

あの女を殺す・・・・・・・・・・・・・・

私の前でテツヤを連れ去ったあの女は私の獲物だ。

スリーは黙って私を見つめていたが、直ぐに肩を落とした。

「分かりました。貴方様は幼い頃から言い出したら聞かない方でしたからね。ただし、先ずはヴィールング隊長とテツヤという傭兵を救い出すのが先決です」

その後で改めて勝負を挑んで下さい、とスリーはまるで兄のような口調で私に言って来た。

「分かっている。それでこれからどうするのだ？」

「私どもの考えとしましては・・・・・・・・・・・・」

私とリーザ中尉は地図を指差しながら説明するスリーの言葉に耳を

傾け続けた。

テツヤを助け出す第一歩の始まりとも言える気がした。

第百五十八章：私の獲物

私達は夜も通して先を急いだが、それなりに進んだので小休憩を挟む事になった。

円陣を作り四方八方を警戒しながら焚き火は点けずに戦闘食を食した。

「火を使わないで温かい飯が食えるなんて便利だな」

ヴィン・ルビーは戦闘食を食べながらこの火を使わずに温かく食べられる事に感動を覚えていた。

初めて食べる者は皆同じ反応だが。

「テツヤ殿の世界では食べ物は何処の国でも力が入れられていると言いますからね」

実際、この国でも兵達には美味しい食事を提供する事が求められている。

だが、テツヤ殿の居た世界の方が上を行っている。

「確かに食い物が不味いと嫌でも士気は下がるからな」

フォックスはもう食べ終えたのか煙草を吸いながら私の言葉に同意した。

「副団長は経験があるのですか？」

ヴィン・ルビーはフォックスの言葉に質問をした

「あぁ。ある任務でアガリスタ共和国に行ったんだが、飯は不味いしおまけに環境も最悪だった」

一体どんな任務で行ったのかは敢えて訊かなかったが最悪と言う所は訊ねた。

「砂漠だから、ですか？」

アガリスタ共和国は国土の殆どが砂漠でオアシスが所々に辛うじて残されているような印象を私は持っていた。

だから、その砂漠が最悪なのか？と思った。

「まぁ、それもあるな。昼間は暑いのに夜は昼間とは打って変わったかのように寒かった。それにやたら岩陰や山が多くて嫌になったぜ」

「山もあるんですか？」

てっきり砂漠しか無いと思っていたが、まさか岩や山まであるとは思いもしなかった。

「あるさ。植物は無いがな」

「それで先ほど昼間は暑いが、夜は寒いと言いましたがどれ位、寒いんですか？」

昼間が熱いなら夜も少しばかり熱いと思っていたが・・・・・・

「昼間は砂漠と日光で干からびる勢いだが、夜になれば一転して凍えるほど寒い」

これ以上に寒い、とフォックスは語った。

私達はその話に耳を傾け続けたが、ちゃんと警戒もしている。

「そのまま衣服を着ただけで寝ようものなら直ぐにお陀仏だ。おまけに夜行性の動物や虫がウジャウジャ居るからテントなんかで寝ている間も気を付けていたぜ」

何でも砂漠に住む動物達は基本的に夜行性らしい。

その理由として昼間は暑く必要以上に体力を消費するからだそうだ。

だから大抵の動物達は昼の間は地中深く潜り、夜になるのを待つと言う。

動物の他にも虫なども居るらしいが、高が虫だと侮ると痛い目に遭う、とフォックスは続けた。

「虫は靴なんかに入り込む。もし、それに気付かず履いたら刺されるんだ」

砂漠の動物や虫などの中でも気を付けなければならないのは蠍だ。

蠍は小さな生き物だが、その尾に染み込まされている毒は象でさえ殺せると言われるほど致死力が高いらしい。

その蠍が靴に入っているとも知らずに履いて刺され、それで命を落とした者も居るらしい。

「そんな中でも最悪なのは飯だ」

フォックスはアガリスタ共和国である任務をしていたらしいが、食事は昼間焼いたパンを夜になってから食べる為、せっかくの温かい食べ物も冷めた食べ物となり不味かったらしい。

「茶も温かいのは最初だけで後は温くなり冷たくなった」

茶と冷えた飯をたらふく食べて何とかやりくりしたらしいが、今度行く時はこれを持って行くと言ってみせた。

「それが懸命ですね」

私はフォックスの言葉に相槌を打ち見張りを続けようとした。

「副団長は今回の作戦をどう思っているんですか？」

ヴィン・ルビーは私が話し終えるのを待ってからフォックスに今回の作戦一一一翼の死作戦について質問をした。

「どうとは？」

「これで敵はどの程度弱体化できるか、という事です」

彼はこの作戦が初めてだ。

だから、自分がどれくらいこの作戦の役に立てるのか、どの程度貢献出来るのか知りたいと私は推測した。

「そうだな・・・ヘリを破壊するって事は奴等にとってヴァイガーを攻め落とす兵器を一つ無くすという事だ」

ここまでは分かるな?とフォックスは確認するように訊ね、ヴィン・ルビーは頷いた。

「ヘリを失うと言う事は、かなり痛い筈だ。ワイバーンだけでは荷が重いしかと言って力押しでは落とすのに時間が掛り過ぎる」

その事を考えるとヘリは失いたくない代物だ。

「これを全部破壊した挙句に鷹を救出されてみろ?奴等は穴があったら入りたい心境になる」

要は赤っ恥という事だ。

「鷹は・・・大丈夫ですかね?」

ヴィン・ルビーはテツヤ殿の安否を今度は訊いてきた。

「あいつの事だから今頃は酒でも飲んでどう脱出するか考えている事だろう」

フォックスの返答に確かにそれは言えている、と私は思った。

テツヤ殿の事だ。

拷問されても軽口を叩いて相手を怒らせているに違いない。

それでは飽き足らず酒を寄こせなどと無理難題を吹っ掛けている可能性だってある。

何から何まで常識から外れた人だからな・・・・テツヤ殿は。

「それはそうとリンクス。もし・・・目の前にあの“下種”が出てきたら君はどうする？」

フォックスは私を見て訊ねてきた。

山犬と猟犬は下種という単語に耳を立てたが、言葉を発しようとはしなかった。

下種とはハゲタカの一人で元アメリカの空挺部隊に居たが、後に傭兵となり悪行三昧をした上にテツヤ殿に戦死された男だ。

私が・・・初めて人をこの手で殺してやりたいと思わせた男。

もし、その男が現れたら私はどうする？

任務を忘れて男を殺すか？

奴の頭に弾を撃ち込んで血が噴き出すのを黙って見ているのか？

いや・・・何時かは殺すが今やった所で残るのは後味が悪い・・・・

例を上げるなら深酒をやり過ぎて次の日、頭を痛めるような感じだ。

それにあの男を殺すのは今の任務ではない。

任務でなくても・・・人を殺して爽快感を覚えたりはしない。

何より今回の任務はテツヤ殿の救出が掛っている。

これは私の問題で、テツヤ殿は関係ない。

どちらを取れと問われたら迷わず今の任務を取る。

今回の任務はヘリの破壊とテツヤ殿を救出するのが役目だ。

それならその任務に全力を注ぐべきだ。

全身全霊を掛けて任務を遂行する。

「・・・例えあの男を殺す機会があったとしてもそれは任務の中には入っておりません」

「それじゃあ、やらないのか？」

フォックスの言葉に私は首を横に振った。

「何れは奴の頭に1発お見舞する予定です。しかし、偶然にも出くわして戦い殺したならそれまでです」

もし、それで殺したらそれまで・・・私としては嫌な展開だがそれならそれで仕方無いと割り切るしかないと言い聞かせた。

「ですが・・・私が与えられた任務はヘリの破壊と鷹を救出する事。なら、それに全力を注ぐべきだと思います」

自分の気持ち――私心などは二の次で良い。

心の奥底に仕舞い込めば良いのだ。

フォックス、山犬、猟犬の3人は私の言葉を黙って聞いた。

「・・・確かに。まぁ、あいつは君の獲物だ。どう料理するかは君が決めろ」

俺はそれに協力するだけだ、と言ってくれた。

「あの男は君の獲物だ。だが、一人で仕留めるのは難しい」

頭がイカレテいようと元空挺部隊出身者だ。

私一人では経験不足で仕留め切れない恐れがある。

ならばどうするか？

仲間と協力して仕留める。

「そうだよ。リンクス。狩猟では一人猟は危険なんだ」

山犬が私に話し掛けてきた。

「あたしも一人猟は余りやらないようにしている。それに獲物を仕留めるには自分が仕留められる状況を作り上げないと駄目だよ」

「仕留められる状況を作る、とは？」

「それには我が答えよう」

猟犬が今度は口を開いた。

「簡単に言えば自分が一番、仕留め易い場所などを意味する。我々狼は集団で行動をする」

それは狩りを効率的に行う為だ。

「何匹かが獲物を追い込み、残りで待ち伏せなどをして仕留める」

よほどの事で無い限り一人では狩りをしないと猟犬は言った。

「つまり我々が奴を追い詰めるから、止めは貴様が刺せ」

あの男は私が仕留める事で意味がある、と猟犬は言い続けた。

「そなたはあの男を誰よりも仕留めたいと願っているからな。だが、覚えておけ」

焦るな。

「もし、その場で仕留められないなら別の機会を狙え。焦った所で仕留める事など出来ん」

分かったな?と猟犬は確認して来た。

「分かった。ありがとう」

私は3人に礼を述べた。

「その下種野郎とは何者なんだ?」

ヴィン・ルビーが質問してきた。

「頭のネジが抜け落ちた糞野郎です」

私は彼の質問に簡単だが答えた。

余り詳しくは話したくなかった。

話せば私心に囚われる・・・恐れていた。

「リンクスには・・・どうしても仕留めなければならない獲物が居る。そいつが獲物だ。見れば分かる筈だからお前等、手を出すなよ?」

手を出せば私に狙撃されるぞ、とフォックスは言ってみせた。

余り話したくない私に代わって彼は彼等に説明した。

もちろん中身は敢えて言っていないが大まかな事を言って皆を納得させた。

「分かりました」

ヴィン・ルビーを始めとした者達はそれに頷き食事を済ませると再び警戒を始めた。

第百五十九章：城へ潜入

私とリーザ中尉はスリーが手綱を握る馬車の荷台に乗り揺られていた。

目的地は言わずと知れたエスカータ城であり、テツヤと叔父上の救出だ。

スリー達の考えた案は真正面から城に潜入すると言う大胆な方法だった。

これには驚きを隠せなかったが、スリーの説明で納得した。

『敵は姑息に・・・静かに我々が潜入して来ると思うでしょう』

大半の敵はそう考えるだろうし、私達もまた同じ考えだった。

だからこそ、と言えるかもしれないが・・・それを逆手に取るのだ。

敢えて大胆にも真正面から行けば下手に怪しまれたりはしない、というのがスリーの持論だった。

確かに下手に静かに行くよりも堂々と行けば敵も面喰らい通す可能性が高い。

先ずスリーが私とリーザ中尉と一緒に門に行く。

彼の身分は旅商人という形で私とリーザ中尉は・・・そのあれだ。

か、か、身体を売る・・・・女という役割だ!!

これを最初に言われた時は破廉恥な気持ちで一杯だった。

幾らテツヤを助ける為とは言え、どうして私とリーザ中尉がそんな役目をしなければならないのだ?!と叫んだ。

しかし、スリーは顔色一つ変えずにこう言った。

『それが一番油断させられるのです』

戦場という荒んだ所では誰もが精神的に不安定となり温もりを求める。

時には男同士で・・・愛し合う事だってあるという。

だが、女が居れば女に温もりを求める。

『幸い貴方達二人は美人の分類に入ります。ですから、効果は抜群と言えます』

男共の注意を逸らすには絶好だ、と言われた・・・・・・

褒められているのか貶されているのか分からなくなる自分が居た。

そんな私に対してリーザ中尉はテツヤを助ける為なら、と割り切っている。

その割り切る性格に私は少なからず対抗意識を燃やした。

・・・性分なのだろうな。

誰にも負けたくないという気持ちは。

その性格が服装にも顕著なほどに現れている。

私が着ている服は白のブラウスに赤いスカートと別に普通に見えるだろう。

だが、胸元が大きく抉られたデザインで少し上から除けば・・・谷間が丸見えになる。

大きいかどうかは知らないが、これを見れば大抵の男は落ちるでしょうとスリーは淡々とした口調で語った。

・・・嬉しい言葉ではないが。

話を戻すとそんな格好をしているので武器などは大っぴらには持てない。

そして先ず私達は一番先に城へ潜入し敵を油断させるのが任務。

だから、持てるのは拳銃とナイフだけ。

アサルトライフルなどは城に入り次第、後から入って来るスリーの仲間から渡される予定だ。

私はワルサーをスカートの中に入れてコルトは足元に隠している。

ワルサーと一緒に“サプレッサー”もガーターベルトで抑えている

のだが・・・あまり良い気持ちはしない。

何故こんな破廉恥な真似を・・・・・・・・

こんな格好を叔父上が見たら卒倒してしまうだろうなどと思う。

「行きますよ」

スリーは未だに恥ずかしがる私を尻目に馬車を走らせた。

馬車に揺られながら私はテツヤの無事を祈りつつ叔父上の無事を祈った。

暫く進むと誰だ、と鋭い声が飛んできた。

門番だろう。

カンッ、と槍の石突きが夜の闇に鈍く響く。

「へぇ、あっしは旅の商人でありやす」

スリーは如何にも旅の証人と言えるような態度と口調で門番に話し掛けた。

「旅の商人？」

だが、門番は如何にも怪しそうな声を出した。

「へぇ。これが身分証明書です」

卑屈な態度を取りながらスリーは身分証明書を取り出して門番に見せた。

“段取り八分”

こんな言葉が在る。

よく家などを建てる大工などは段取りが8割で仕事は2割と言っているらしい。

段取り――下準備がちゃんと出来ていれば仕事は2割程度で簡単に楽にできるという事だ。

スリーの下準備を見ていると、正しくその通りだと思う。

彼等は馬車を用意し旅の商人と言う身分。

身分証明書から商品、地図、寝巻、など旅商人らしい代物を持ち格好もそれらしくしている。

ここまで念入りに下準備をして初めて計画は成功する、と彼は言った。

身分証明書だって、精巧な造りで簡単には偽物だと見抜けない代物だ。

「・・・アガリスタ共和国からの商人か」

門番は身分証明書を一瞥してスリーに返した。

「へぇ。元々はこの国の産まれ何ですが、ね。で噂では内乱が起きていると聞いております」

「その通りだ。という事は俺達が反乱軍だという事も知っているのか？」

「勿論です。ですが、そんな時だからこそあっしらは儲け時なんですよ。それに貴方様達の方が有利だとも聞いております」

ならば、今の内にコネを作るべきでしょ？と語るスリーに門番は尤もだと頷いた。

そして彼は門番に幾ばくかの金を渡した。

「これで通してもらえませんか？もし、それで足りないなら、こちらの若い女をどちらかお貸しします」

彼は私とリーザ中尉に前に出るように言い、私達は素直に従った。

「こいつは・・・美人だな」

門番は厭らしい眼差しを私とリーザ中尉に向けて来る。

胸糞悪くて今すぐこいつを叩き伏せたい気持ちに襲われるのを必死に抑え笑みを浮かべてみせた。

顔が引き攣っていないか心配だが、スリーはそれを知られないように喋り出した。

「あっしが連れている女ですが・・・飢えているんでしょ？」

「・・・あぁ。もうここに居るのは婆だけで萎える。まぁ、上の連中はそうではないが俺らは最悪だ」

「そうでしょうね。で、どうです?どちらか一人、お貸ししますよ?」

「良いのか?」

「はい。ですが、最後までは駄目です。この二人はリカルド様に献上する予定なので」

「んだよ。だったら、要らないな。その代わり酒と金を寄こせ」

それで我慢する、と門番は言うとスリーは喜んでとばかりに金と酒を渡した。

酒には睡眠薬と痺れ薬が混ざった薬が入っているから飲めば明日の朝までは痺れた上に眠っている。

「これで足りますか?」

「あぁ。さっさと行け。リカルド様達は城だ。もっとも対面できるかは保証できないぜ?」

いま荒れている、と門番は言った。

「どういう事です?」

「どうも内輪揉めがあって苛々しているそうだ」

「そうですか」

「あぁ。運が悪いと殺されるぞ？」

「なぁに・・・そういう方を相手にして物にしてこその商売人ですよ」

スリーは笑いながら言うと馬に鞭を打ち走らせた。

そして城の中に潜入した。

それから直ぐにまた後ろから別の馬車が来る。

恐らくあの門番はまたスリーのように金と酒を強請る事だろう。

あれが反乱軍の本性か？

いや、違う。

・・・荒んで行き、あのようになったのだろう。

「・・・憐れだな」

私は小さく独白した。

父上も恐らく戦が長引くに連れてああいう性格になったのだろうと勝手に想像してしまった。

だからと言って母上を悲しませた事に対して、仕方無いと思ったり

はしないが。

「憐れみは禁物ですよ」

スリーが私の独白を聞いて戒めるように言ってきた。

「敵に対して憐みや同情は油断を生みます。それで命を落とした者も居ります」

敵と会ったら速攻でケリを着けろ、とスリーは語った。

「分かっている。だが、あの姿を見ると・・・戦とは嫌な物だ、と思ったのだ」

「誰だって戦など望んではおりません。一部を除いては、ですがね」

そう言うスリーは何処か悲しそうな顔をしたが一瞬の出来事だった。

「では手筈を改めて確認します。先ず、このまま貴方達二人は牢へ向かって下さい」

途中でスリーの仲間が数人ほど来て共にテツヤを救出する。

「その間に私達はヴィールング隊長を救出します」

脱出方法は双方共にバラバラ。

これは共に脱出して一網打尽にされるのを恐れている事と敵を撹乱する為だ。

脱出したら一度、合流する。
それから共に逃げるという算段だ。
「分かった」
私とリーザ中尉は頷いた。
「・・・不味いですよ」
スリーは舌打ちをして前を見た。
私とリーザ中尉も前を見るが、前方から黒い鎧を纏った騎士達が来た。
「あの者達は？」
「ライアンナル伯爵が指揮する秘密警察と呼ばれる者達です」
噂だとかなり手荒な捜査で民達から嫌われていると聞いているが・・・・・・・・
「はい。あの者達相手では賄賂などは通用しません」
「どうするのだ？」
せっかく城に潜入したのにこのまま捕まるのか？
「・・・ここは私に任せて御二人は城へと行って下さい」

武器は城に入る手前で渡すとスリーは言って私達を速くと急かした。

「・・・大丈夫か？」

「ご安心を。さぁ、速く」

私とリーザ中尉は頷いて馬車から気付かれないように降りた。

そして路地裏に逃げ込み城へと向かった。

第百六十章：開口一番の言葉

私とリーザ中尉は路地裏を小走りながら城を目指していた。

スリーは大丈夫か？と思うが、今は城を目指す事に費やする事にした。

路地裏は誰も居ない。

いや・・・気配こそ感じるが誰の姿も見えないのだ。

城下町を少しだけ通ったが、まるで人の生気が感じられない。

かつては民達が笑顔で暮らす城と言われていたが・・・その面影はもう無い。

欠片も・・・微塵も感じられない。

リカルド王子・・・これが貴方の望んでいた国なのか？

笑顔を無くし日々を怯えて暮らす・・・そんな国が貴方の望んでいた、夢に描いていた国なのか？

私はリカルド王子に問いを投げたくなった。

しかし、今はそれ所ではない。

急いで城まで行かねば朝になる。

朝には脱出しなければならないのだから・・・・・・

夜は長いと誰かは言ったが今は短く感じる。

「それにしても大丈夫でしょうか？」

リーザ中尉は小声で私に喋り掛けてきた。

スリーは城で武器を渡すと言ったが、出来なければ拳銃とナイフだけで行く事になる。

城の中にはフォース・リーコンやハゲタカと呼ばれる者達も居る。

そいつらを相手に拳銃とナイフだけでは心細い・・・・・・・・

「ですが、その時はその時で覚悟を決めるしか無いですね」

「そうですね」

私の言葉にリーザ中尉は笑顔で頷いてみせた。

不思議な物だ・・・以前は殆ど接点も無く、あったとしても毛嫌いしていた仲だった私と彼女。

それがこうして肩を並べてテツヤという男を助ける為に行動をする。

世の中とは不思議な物だ。

悪い気はしないが。

私とリーザ中尉は路地裏を走りながら進んで行くと、足音が聞こえてきた。

後ろから・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

私とリーザ中尉は一瞬だけ見つめ合いスカートを託し上げてガーターベルトに挟んでいた拳銃とサプレッサーを取り出した。

サプレッサーとは銃の音を小さくする細長い筒だ。

これには2種類ある。

銃事態に内蔵されている“インテグラルタイプ”と後付けで装着する“マズルタイプ”の2種類だ。

私の場合は後付けで装着するマズルタイプだ。

コルトの銃口にサプレッサーの雌ネジを締めた。

些か重いのはサプレッサーを取り付けたからだろう。

リーザ中尉はワルサーＰＰＫを持ち下に銃口を向けており私もまた同じようにした。

音が壁を越えようとしたので、銃口を向けると・・・・・・・・・・・・

「・・・間に合いましたか」

スリーが息を切らしながら壁から現れた。

「無事だったか」

私は銃口を下に向けて安堵の息を吐いた。

「えぇ。しかし、不味いです。どうやら我々を怪しんでおります」

お陰で身分証明書などを徹底的に洗うと言われたらしい。

「どうするのだ？」

「ここまで来たからには強行するしかありません。しかし、仲間は付ける事が出来ませんので貴方達２人だけで傭兵を」

武器です、とスリーは袋に詰めた武器を渡してきた。

ドラグノフを背負いＡＫ－７４を私は両手で持った。

リーザ中尉はＡＫＳ－７４Ｕのストックを折り畳んだままだ。

「私はこれから隊長を助けに行きます。貴方達も上手くやって下さい」

「分かっている。では、そちらも」

スリーは頷くと再び走り去った。

私とリーザ中尉は頷き合い、二人で走り出した。
スカートが穿き慣れなくて些か動き難いと思うが、それ以外はそうでもなかった。
そして何とか無事に城まで到着した。
「何処から潜入しましょうか？」
「テツヤ様が居る牢の近くから潜入しましょう」
それに私は頷き、牢は何処にあったのか？と思い出した。
確か牢は・・・・・・・・・・
「北側にありましたね」
「では、北側から潜入しましょう」
私とリーザ中尉は北側へと移動した。
北側に到着した私とリーザ中尉は、辺りを見回して誰も居ない事を確認した。
鉤爪を取り出して上へと投げ上手い具合に掛ったのを確認してから静かに城壁を登った。
北側の城壁には誰も居ないが、恐らく巡回か交代しているのだろう。

急いで牢へ向かおうとすると声が近付いてきた。

「はー、寒いな。まったく何時になった俺達は金持ちになれるんだ？」

豚のように太い声だった。

「知るか。だが、お頭は約束を守る。問題ないさ」

2人・・・か。

2人程度なら何とか倒せるが、下手に殺すと面倒な事にもなる。

どうするべきか一瞬だけ考えた結果・・・逃げる事にした。

ここで面倒な事になるよりは逃げるのが得策と考えた。

昔なら敵を見つけたのなら殺す、というのが考えだったが・・・成長した物だ。

急いで城壁から降りて闇に紛れて城の中へと更に入ってみせた。

城の中は松明がある所もあれば無い所もあるという・・・全体的に薄暗い印象を受け不気味に見える。

「行きましょう」

私とリーザ中尉は足音を立てないように、しかし素早く廊下を走り出した。

こんな時、ドラグノフは長過ぎると思う。

野戦なら大した問題ではない気もするが、室内ではあまりに長過ぎて移動するのでさえ一苦労だ。

薄暗い廊下を進んで行きながらも何故か変な気持ちになった。

どういう訳か・・・敵の気配をまるで感じない。

敵を捕えたのだからもう少し厳重にしても良い筈なのに・・・・・・・

罠か？

幾ら叔父上の方が危険視されているとしてもこれは余りに酷過ぎる。

だが、罠としても今さら引き返す訳にはいかないが・・・・・・・・

更に奥へと進んで行くと、何やら声が聞こえてきた。

酒の臭いも同時にした。

「しかし、暇だよな？一体、どうしたんだ？」

「さぁな。敵の将軍を捕まえたんだ。さっさと殺すなり降伏する様に言うなり方法はあるだろうに」

「まったくだぜ。まぁ、俺は別に地方を救済するなんて“おめでたい”考えはないが」

おめでたい、か・・・・・・・

酒を飲んで馬鹿騒ぎをしている貴様等の方がおめでたいと私は言ってやった。

その騒ぎ声がする所を越えて更に進んで行き下へと通じる階段が見えた。

私が先頭になった。

リーザ中尉は後方を見張りながら下へと降りる。

下へ降りてドアを静かに開けてチラリと見る。

槍兵が2名いた。

室内でも振り回せる短槍を持って。

それ以外は居ない。

「リーザ殿。私が行きますから貴方はここを護って下さい」

「何で私が・・・・・・」

自分がテツヤを助け出す役目が欲しいとばかりに私を睨んできたが、私は頼むと言ってドラグノフとＡＫ－７４を渡してドアを開けて出て行った。

『ちょ、フィーナ殿っ』

リーザ中尉は小声で私を呼んだが、無視して先を進んだ。
先を進んで行くと、隣にテーブルがあった。
そこにはテツヤの私物が無造作に置かれている。
これなら直ぐにテツヤを助けたら逃げられる、と思った。
「ん？何だ、お前は？」
槍兵は突然、現れた私を不審そうな眼差しで見つめてきた。
だが、やはり・・・嫌だが、胸元に視線が向いている。
まったく・・・どうして男というのはこうも女の胸元など厭らしい所に眼が行くのだ。
本当なら直ぐにでも鼻っ面を殴りたいが、ここは我慢するしかない。
「はい。実は、捕えられている傭兵の相手をしろと言われました」
出来るだけ・・・艶のある声で言った。
「あいつの？俺らは聞いてないぞ」
これは不味い。
「そうなんですか？私は、行けと言われたので何とも・・・・・・・・」

「おい、どうする？」

「どうするって言ってもな・・・連絡してみるか？」

「そうだな」

槍兵の一人がドアへと向かって行く。

ドアにはリーザ中尉が居る・・・しかし、大丈夫だろう。

槍兵がドアに手を掛けると同時にドアが勢いよく開き槍兵は諸に衝突した。

顔に当たった槍兵は血を流し壁にぶつかったのが見えた。

「貴様ッ」

槍兵が私に叫ぶなり槍で私の腹を石突きで殴って来た。

重い一撃が腹に来て後ろへと倒れる。

倒れる私を上から突きが襲って来る。

それを間一髪で避け槍兵の股間を蹴り距離を取った。

直ぐに拳銃を抜こうとしたが、サプレッサーを取り付けた為・・・長くなり抜き辛い。

そして浅かったのか槍兵は直ぐに立ち直ると再び突きを繰り出してきた。

それを避け続けるが、これでは拳銃を抜けない。

「フィーナ殿！！」

リーザ中尉が私にＡＫ－７４を投げてきた。

突きを避けて槍を蹴った私は投げられたＡＫ－７４受け取った。

また突こうとした槍兵の懐に入り顎めがけて合板のストックをぶつけた。

ゴキャッ、と顎の骨が砕ける音がすると同時に僅かな血が壁に飛び散る。

砕かれた顎を抑え悲鳴を上げそうになる槍兵の頭にストックを叩き付け、もう一度顎にストックをぶつけた。

すると槍兵は気絶した。

私は気絶したのを確認してからリーザ中尉を見るともう一人の槍兵の腹に拳を打ち込んで気絶させていた。

ドアに顔をぶつけた事もあってか槍兵は抵抗らしい抵抗も出来ずに殴られて気絶した。

「急いで行きましょう」

リーザ中尉は気絶させた槍兵を縛り上げて私も同じく縛り上げた。

そして牢へと入る。

薄暗い上にジメジメした風が頬を打つ。

こんな所に閉じ込められていたのか・・・・・テツヤは。

牢を一つずつ探して行き・・・見つけた。

「何だ?ルーム・サービスを頼んだ覚えは・・・・・・・・・」

テツヤは石の地面に身体を寝かせて背を向けていたが振り返った。

眼が驚愕している。

しかし、それは一瞬だった。

そして開口一番にこう言ってきた。

「お前等は馬鹿か?」

第百六十一章：反撃開始

私は茫然とした。

こいつは何と言った？

お前等は馬鹿か？だと！！

開口一番に馬鹿と言われたのは初めてだ。

いや、それ以前にこの男は何様の積りだ！！

私とリーザ中尉が危険を犯して助けに来たのに馬鹿？とは何事だ！！

「テツヤ様。お叱りは後でシッカリと受けます。ですが、今はここを脱出しましょう」

リーザ中尉は鉄格子を掴みテツヤに語り掛けた。

「分かった」

テツヤは頷くと鍵を壊せ、と命令した。

私は不承不承ながらもコルトで鍵を壊した。

それを見てからテツヤは牢からゆっくりとした動作で出てきた。

上半身は裸で何処もかしこも傷だらけだ。

まだ真新しい傷痕もあるから拷問されていたのだろう・・・・・・

「やれやれ。やっと出れたぜ」

コキコキ、と首の節を折りながらこいつは息を吐いて歩き出した。

「俺の武器は？」

「直ぐそこのテーブルにある」

私はブスっとした声で答えた。

「そんなに怒るな。前にも言ったが早く婆になりたいのか？」

「貴様に言われる筋合いは無いっ」

私はつい声を荒げてしまった。

「おい、声を低くしろ」

誰のせいで声を荒げていると思っているんだ、と言いたかったが尤もなので素直に従う。

テツヤはテーブルに置かれた武器を見て確認を始めた。

「それでヴィールングのおっさんは何処だ？」

「塔に閉じ込められているが、スリーが助けに行っている」

「スリー？」

テツヤはコルトの弾などを確認してからホルスターに入れて腰に回しながら訊ねてきた。

「叔父上の部下だ。ここに来れたのもスリーの手引きだ」

「なるほど。まぁ、お前等2人だけでここまで来れるとは思っていなかったがな」

「どういう意味だ」

「リーシャはともかくお前だけなら先ず入れないだろ?」

それ以前に俺を助ける事ばかりに捉われて潜入方法から脱出方法まで何も考えていなかっただろ?と図星を指された。

「う、うるさいっ。それより速くしろ」

「はいはい」

「はいは、一回で良いっ」

何処までも人を馬鹿にするような口調で喋るこの目の前の馬鹿を思い切り引っ叩きたい衝動に襲われるがそれを必死に抑え怒るだけにする。

まったく・・・どうしてこうも人を怒らせるような態度しか取れないのだ。

もう少し・・・ちゃんと「お前等・・・馬鹿が。しかし、嬉しいぜ」

とか言えないのか?

言ってくれれば・・・もう少し私だって素直になれるのに。

「よぉし。それじゃ・・・行くか?」

テツヤは上半身裸の状態に武器などを装備した。

「はい」

「・・・あぁ」

私とリーザ中尉は頷いた。

テツヤは傷だらけ・・・まだ回復していない傷もあるのに関係ないとばかりに素早い動きをした。

牢から出た私達はそのまま階段を登る。

「逃げるついでだ。奴等に一泡吹かせるぞ」

「何をする気だ?」

「ヘリを頂戴して破壊する」

それから少しばかり暴れる、とテツヤは言った。

「この俺を直ぐに殺さなかったんだ・・・それを後悔させてやる」

えげつない性格だ、と思うが今になって始まった事ではないとも思

う。

「リーシャ。お前はヘリの操縦が出来るよな？」

「はい」

「俺とこの女で混乱させるからその間に奪え」

「了解」

「フィーナ。お前は俺と来い」

「・・・了解」

「よし。では、行くぞ」

テツヤが廊下を走り私もそれに続く。

リーザ中尉は別の方角へと向かう。

廊下を走って行くが、テツヤは壁に隠れた。

私もそれに続く。

見れば、敵がこちらに来ている。

「・・・お前もそんな格好をするんだな」

テツヤはチラリと私の格好を見て眼を細めた。

こんな時に何でそんな言葉を言うんだ?と思いながらも律儀に答えた。

「好き好んでこんな破廉恥な格好などしない」

「破廉恥?乙女みたいに言うんだな」

「貴様は私を何者だと思っているんだ」

これでも立派な女だと言うのに・・・・・・・・

「根性の塊だ」

「貴様・・・・・・・・・」

ここまで言われると我慢も限界だった。

「それより大丈夫か?」

「大丈夫とは?」

テツヤは急に話題を変えてきたので面食らいながらも私は訊ね返した。

「ここは敵のど真ん中だ。運が悪ければ死ぬ、という意味だ」

「・・・全力を尽くす」

私はワルサーのスライドを引きながら答えた。

「全力を尽くすだと？お前は負け犬か」

「なっ・・・・・」

テツヤの言葉に私は二の次が続けられなかった。

負け犬だと？

全力を尽くすと言ってなぜ負け犬なのだ？

「負け犬は何時も言い訳をする」

全力を尽くした、最善の努力はしたなどと・・・・・・・・・・

「俺から言わせれば情けない言葉だ。真の勝者とは生きて帰って美女を抱いて酒を浴びる程飲んだ奴だ」

だから、ここで死ぬなんて考えるな。

生きて帰ると思え。

・・・何故かこの男が言うと尤もだと頷いてしまう。

そしてこんな言葉を言いたくなる。

「では、生きて帰れたら・・・私を抱け」

自分の口からとんでもない言葉が出て来たのに私は平然としていた。

テツヤは私の発言に僅かに驚いたが直ぐにこう言ってきた。

「お前を?見た目は良いが性格がな・・・・・・・」

「貴様みたいな男が好き嫌いを言うな」

どの顔で言っているのだ。

「お前さんの気質は女王様気質だ。生憎と女王様は苦手なんだよ」

前の事もあってな、とテツヤはぼやいた。

前の事と言う言葉に何か引っ掛かるが私はそれを無視して言い返した。

「すべこべ言うな。それより速く行こうではないか」

胸が躍り止まらない自分に驚きながらも私はワルサーを構えた。

「それじゃ・・・行くか」

テツヤの言葉に私は頷き壁から躍り出た。

敵は突然、現れた私とテツヤに面食らったが、そこで息絶えた。

頭に2発ずつ撃つ方法――ダブル・タップで殺した。

サプレッサーを取り付けた拳銃で撃ったから最低限の音しか出なかったがテツヤの方はサプレッサーを付けていないから大きな音が聞こえた。

お陰で敵に気付かれただろうが、元から私達は囮。
目立てば良いと思い直す。
頭から血を流した敵兵は何があったのか分からない顔のまま死んでいた。
「さぁて、ここからはサプレッサーを外せ」
「分かった」
私はワルサーとコマンダーのサプレッサーを外した。
そしてＡＫ－７４に持ち直した。
「出来るだけ離れてやるぞ」
少しでもリーザ中尉の存在に気付かれない為だ。
「分かっている。それより先ほどの発言・・・嘘偽りは無いぞ」
あの発言は軽はずみな気持ちからではない。
ただし、思い付きと思う所はあるがだからと言って撤回などはしない。
「本気かよ?あれだけ俺を毛嫌いしていたくせに」
「ふんっ。今でも嫌いだ。だが、女に餓えているだろ?」

「どうかな?これでも我慢強いんだぜ」

「では、私から襲うとしよう」

「・・・お前は“あいつ”に似ているな」

テツヤは私を見ながら小さく言った。

「あいつとは?」

「知り合いの女だ。お前みたいに負けず嫌いで自己中心的な女だった」

そう言いながらテツヤは煙草を銜えた。

「その女とは・・・身体の関係があったのか?」

私は気になって訊いてみた。

「ある。お前さんと同じく襲ってきた」

そして襲われた、とテツヤは答えた。

「ベッドの中でも自己中心的でほとほと嫌になる。まぁ何処か良い点を上げると言うなら・・・・・・」

煙草に火を点けながらテツヤは続きを言おうとしたが音に気付き駆け付けてきた敵をＡＫＭアサルトライフルで撃ち殺した。

大きな音が城に響き渡ると同時に罵声が聞こえる。

そしてこちらに向かって走って来る音が聞こえてきた。

お陰で答えを聞きそびれた・・・・・・・・・

「さぁて、パーティーの始まりだ」

「続きが気になるが仕方無い。飽きるまで踊ってやる」

テツヤの言葉に私は同意するような言葉を述べてＧＰ－３０の引き金を引いた。

運よく敵がそこに現れ見事なまでにＧＰ－３０から発射された４０ｍｍグレネード弾が当たり爆発し木っ端微塵となった。

手足などが僅かに残る程度で原型は留めていない・・・・・

「お前も派手だな」

煙草を吸いながらテツヤは背後から襲ってきた敵をＡＫＭのフルオートで挽肉のように殺した。

こちらも原型を留めていないが、見た目で言えば私の方はまだマシと思える。

「お前も人の事が言えるのか？」

私よりある意味では酷い気がする。

「言えないな。それより行くぞ」

ある程度、距離を離さないと駄目だとテツヤは言った。

それに頷きながら叔父上の方はどうか？と私は気になった。

第百六十二章：悪役と英雄

私とテツヤは襲って来る片っ端から敵を攻撃して時間稼ぎを続けている。

敵は私とテツヤの2人だけと分かっているので数で押して来る。

私達の持っているライフルの弾は無限だが、撃ち過ぎると銃身が熱くなり使い物にならなくなる。

そのため1発ずつ撃つ――セミ・オートで撃ったり拳銃で撃ったりと苦心しながら戦っている。

だが、これでは埒が明かない。

リーザ中尉・・・まだですか？

ヘリがどの程度で発進可能なのかは知らないが、速くして欲しいと思う。

「・・・はんっ。ハゲタカ共が」

テツヤの声に私はそちらを見た。

そこには私達と同じ格好をした男達が居た。

ベレー帽は赤紫色――マルーン・ベレー帽だった。

という事は空挺部隊か。

「やっぱりてめぇか？イエロー・モンキーが！！」

ベレー帽を被った奴等の中から顔に大きな傷を持った男が現れテツヤを見るなり訳の分からない言葉を吐いた。

「あぁ。借りは返すぞ。下種が」

「やれるもんならやってみろ！！」

テツヤはＡＫＭアサルトライフルを撃った。

弾は男の頬を掠めた。

「てめぇ、よくも兄ちゃんの顔を！！」

顔に傷がある男とは別に血走った眼を宿した男が現れ、ライフルをフルオートで撃って来た。

私とテツヤは直ぐに壁に隠れてやり過ごす。

その隙を突いて他の敵兵が突っ込んで来るが、奴等は構わず撃ち殺した。

「味方を殺しているぞ」

「それがあいつ等のやる事だ。それにあいつ等は殺した奴等を仲間なんて思ってねぇさ」

テツヤは平淡な声で言うと、Ｍ６７破片手榴弾のピンを抜いてハゲ

タカと言った男に投げ付けた。

『ちぃ！！』

2人は舌打ちをすると近くの男を掴むと自分の前に突き出した。

爆発して周りに破片が飛び散るが、男は味方を盾にした事で無傷に等しかった。

・・・・・胸糞悪い。

私は壁から男を狙いフルオートで撃った。

「ははははは！！そこの姐ちゃんは良いな。気に入ったぜ！！」

男は死んだ部下を盾にしながらライフルを撃ち続けてきた。

壁に隠れて隙を見て撃ち返すが多勢に無勢で駄目だった。

「フィーナ。ここは引くぞ。そろそろリーザの方も出来ている筈だ」

「分かった」

テツヤは発煙筒を今度は投げ付けた。

爆発すると白い煙が周りを支配するが、咳き込んだ音も聞こえた。

「ゲホッゲホッ」

「くそったれが・・・・・！！」

「行くぞ」

テツヤは私と共にそこから離れた。

『イエロー・モンキー！！』

2人の叫び声が聞こえるが、構わず走り続けた。

「何をしたんだ？あれはただの発煙筒ではないのか？」

「催涙ガスが混ざった物だ」

催涙ガスとは元々暴徒鎮圧用に使われる物らしく、吸い込むと咳や嘔吐、涙が出て止まらないらしい。

「あれで暫くは大丈夫だ」

「念入りだな」

「念入りにしないといけない相手だからな」

そう言ってテツヤは煙草を吐き捨てた。

「所でヘリは何処にあるんだ？」

「演習場だ。あそこにしかヘリは入らないからな」

なるほど、と私は頷きながらあの女は何処だ？と思った。

あの女とは決着を着けなければならない・・・・・・・・・

だが、それを探す時間は無い。

今回は諦めるしかない、と私は思った。

演習場まで走り続けるが敵は出て来なかった。

私とテツヤが囮となったからだろうし、あの催涙ガスが混ざった発煙筒のお陰で追えないのかもしれないと思う。

このまま演習場まで行けると思ったが・・・そうではなかった。

パシュン

小さな音がしてテツヤの足元に当たり地面を抉った。

「動くな！！」

壁からアサルトライフルを構えた男達が現れた。

「・・・フォース・リーコンか」

テツヤはまた煙草を取り出して銜えた。

「果敢な戦闘・・・誠に素晴らしい。だが、それもここまでだ」

フォース・リーコンの一人が銃口を私とテツヤに向けて近付いてきた。

「あんた誰だい？」

テツヤは煙草に火を点けながら訊ねた。

まるで自分は殺されないとばかりに余裕たっぷりだった。

「私は“シャーマン”少佐だ。タカミ・テツヤ少佐。君の果敢な戦闘行為は敵ながら天晴れと褒める。だが、直ぐに牢へと戻りたまえ」

「嫌だね。またあんなジメジメした所に誰が戻るか」

「それでは君を殺すしかない」

「だったら、あの場で殺しておけば良かっただろ？それを警察みたいに動くなと叫んだ。馬鹿にも程がある」

確かに、と私は思った。

あの時ならテツヤを殺せたかもしれない。

それなのに敢えて動くな、と叫んだ。

馬鹿にされても仕方が無い。

「俺なら直ぐに殺す。それなのにそこの坊やは殺さなかった」

命令だとしても、だとテツヤは言った。

「命令だとしても害ある者は処罰されるのを覚悟で殺すべきだ。坊や・・・てめぇは甘ちゃんだな」

「・・・うるせぇ。くそ親父が」

テツヤに撃ったフォース・リーコンの隊員は銃口を向けながら小さく悪態を吐いた。

「俺は兵士だ。兵士は上官の命令が絶対。それを守って何が悪い」

「悪くない。だが、時と場合によっては破らなければならない」

この場合は・・・破るべき、とテツヤは言った。

「彼を悪く言わないでくれ。ミスター・テツヤ」

フォース・リーコンの間から一人の男が現れた。

年齢はテツヤより少し年上。

だが、顔立ちは比べる事もおこがましいほど整えられており英雄という言葉が頭に浮かぶ。

「あんたか・・・クルセイダー大佐」

テツヤは煙草を吐き捨てた。

大佐と言う事はテツヤより2階級上か。

「君が脱走するとは思っていたが、まさかこうも大胆不敵とも言える手段で来るとは驚きだよ」

「そうかい。で、どうして俺を殺さない？」

テツヤはクルセイダー大佐に質問を浴びせた。

「俺を殺せばこの戦いは有利に運べる。違うか？」

「違わない。しかし、私は君ともう一度・・・戦場で会いたいと言った筈だ」

そんな事を言ったのか・・・・・・

「言ったな。だが、それはリカルドの本心か？それともあんたの本心か？」

テツヤは頷きながらも、その本心は誰なのか？と訊ねた。

「あの方の本心でもあり私の本心でもある」

リカルド王子の本心でもある？

どういう事だ？

リカルド王子は自分が王になりたいのではないのか？

だったら、テツヤは殺すべきだ。

それなのにクルセイダー大佐は戦場で会いたい気持ちはリカルド王子の本心でもあると言った。

どういう意味なのだ？

「あいつの？・・・・なるほど。そういう事か」

私には理解できなかったがテツヤにはその言葉の真意が理解できたのか納得した。

「この場は見逃すよ。だが・・・戦場では見逃さない」

君を殺しリカルド様を王にする、とクルセイダー大佐は断言した。

「その台詞そっくり返す。今度会った時は、あんたの生首と対面するだろうな」

「楽しみにしているよ」

「俺は御免だ」

それだけ言うとテツヤは私を一瞥し走り出した。

私はクルセイダー大佐を見た。

彼は私を温和な笑みで見つめ返し、行けと指で指した。

それを見てから私はテツヤの後を追った。

「・・・変わった男だな。クルセイダー大佐と言う男は」

テツヤに追い付いた私はテツヤに向かって言った。

「軍人でありながらも武人として戦場で強敵と相見えたいんだろう

な」

愚かな考えだ、とテツヤは断言した。

しかし、私には何処かその気持ちに共感できる所があった。

元々私は騎士だ。

騎士は強敵と会えば心が躍る物、と父は語っていた。

軍人も同じだが、軍人は名誉よりも結果を取る。

だから、不意打ちだろうが結果が良ければそれで良い。

あの男の場合は軍人だが、武人としての心もあるのだろう。

そうでなければ私達をあの場で見逃したりはしない。

テツヤなら迷わず殺しているだろう。

それが正解なのだ。

・・・だが、大衆から見ればクルセイダー大佐は英雄として見えてテツヤは悪役として見える事だろう。

クルセイダー大佐がテツヤを敵として認め戦場で戦い討ち勝つ、と決意しているのに対してテツヤは戦場で無かろうと殺すと決めている。

もし、リカルド王子が勝てばクルセイダー大佐は英雄として歴史に

名を残すだろう。

それに対してテツヤは悪役として歴史に名を残し永遠に蔑まされ忌み嫌われる。

『貴様が悪役として歴史に名を残すなら・・・私もまたその悪役に従った女・・・娼婦として名を残そう』

貴様だけ蔑まされ忌み嫌われたりなどさせない。

その時は私もまた蔑まされ忌み嫌われようではないか。

・・・貴様だけだ。

このような想いを抱かせるのは・・・・・・・・・・・・・・・

第百六十三章：黒い翼の悪魔

私とテツヤが演習場に到着するとヘリが幾つもあり、その中の一機が既にプロペラを回し飛び立とうとしていた。

「行くぞ。フィーナ」

テツヤの言葉に私は頷きプロペラが回るヘリに飛び乗った。

「行け。リーシャ」

「了解」

リーザ中尉は頷き操縦桿を動かした。

ヘリが地面から離れて行く。

「っとその前にフィーナ。グレネードでヘリを片っ端から破壊しろ」

追えないようにする、とテツヤに言われ私はＧＰ－３０でヘリを片っ端から撃ち始めた。

テツヤも手榴弾と傍にあった機関銃を乱射してヘリを片っ端から破壊する。

もちろん安全な上空に飛んでからだ。

ヘリは爆発を起こしては城壁や廊下に当たり壊れて行き・・・燃えて行く。

「これで良し。さて、次はヴィールングのおっさんを助けに行くか」

テツヤの言葉に私は叔父上の事を思い出した。

心配していたのに戦いが始まって忘れていた。

「そうだな。スリー達も気になる」

「リーシャ。塔へ向かえ」

「了解」

リーザ中尉は塔へとヘリを向けた。

遠くからでも松明の火が目印となりよく見えた。

スリー達が塔に続く階段で敵と戦っていた・・・・・・・

上と下から敵に挟まれたスリー達は必死に戦っているが、多勢に無勢に見えたし城壁からも上から攻撃されている。

「フィーナ。ドラグノフで敵を狙え」

夜でも正確に狙える照準器――暗視スコープなどという代物は無い。

取り付けられているのはＰＳＯ－１スコープだ。

だが、松明のお陰で敵の姿は見える。

やれる・・・やってみせる。

私はドラグノフを構えた。

松明のお陰で敵とスリー達の判別が出来た。

「・・・・・・・」

風向きなどを計算し狙いを定めてから引き金を引いた。

弾は狙いから少し外れたが、敵に当たった。

敵は突然の攻撃に戸惑いを覚えていたが、その間に殺され城壁から真っ逆さまに落ちて行った。

私は落ちた敵に構わずドラグノフの引き金を引き続け敵を葬り続けた。

スリーが私を見た。

眼でこう言ってきた。

『ヴィールング隊長を・・・叔父上を助けに行って下さい』

「リーシャ。ヘリを塔に近づけろ」

ヘリが塔に近づいて城壁に届いた。

テツヤが飛び移ると私も続いた。

「何で貴様まで行くんだ?」

「あんたの・・・叔父様には借りがある」

それを返すだけ、とテツヤは簡潔に言うと城壁を走り堅そうな木の扉をＡＫＭで破壊し中に突入した。

そこには鎖で両腕を吊るされた叔父上が居た。

「叔父上っ」

私は叔父上に駆け付けて声を掛けた。

「ふ、フィーナ・・・ど、どうして・・・・」

叔父上は憔悴し切った顔で私を見つめた。

「助けに来たんです。それより歩けますか?」

私は叔父上を吊るしていた鎖を破壊して、倒れる叔父上を抱き締めた。

だが、倒れそうになる。

「何をしているんだ」

テツヤが私を支え、叔父上の左側に腕を回した。

「速く運ぶぞ」

私は反対側の腕に手を回して叔父上を支えて塔を後にした。
塔から出るとスリー達が城壁に居た。
「隊長。ご無事で」
スリーは階段を登り迫る敵を打ち倒しながら叔父上に語り掛けた。
「何とかな・・・・・」
叔父上はそれに何とか答えた。
「このまま東へ行く。お前等はここを突破して追って来い」
定員オーバーだ、とテツヤはスリーに言った。
「分かった。隊長を頼むぞ」
「あぁ。行くぞ」
テツヤは私を促しヘリに乗ろうとした。
「叔父上。もう少しで助かりますよ・・・・・・・」
ヴァイガーに行ったら傷の手当てをします。
そして私達と共に戦い首都を奪回しましょう・・・・・・・
「お、叔父上!!」

叔父上の胸に矢が突き刺さった。

何処から撃たれたのか分からない。

次の矢が撃たれるかもしれない・・・・・

だが、私は血を流し倒れそうになる叔父上を必死に支え自分が盾になった。

何かが飛んでくる音がした。

嗚呼、今度は私が・・・・・・・・

眼を瞑って来るのを覚悟した。

しかし、それは来なかった。

「て、テツヤ・・・・・・・」

見ればテツヤが自分の手で矢を防いでいた。

「・・・速く乗れ」

テツヤは私と叔父上をヘリに乗せると私からドラグノフを奪い取り構えた。

「遅いんだよ・・・・・・売女」

テツヤは誰かに向かって・・・恐らく矢を射た相手に向かって言っ

たのだろう。

ドラグノフの引き金を引いた。

1発の乾いた音がした静寂が一瞬だけ支配したが、また直ぐに罵声が入り混じった戦いに戻った。

「・・・行くぞ」

テツヤはヘリに乗り込んでリーザ中尉に命令した。

そしてヘリは飛び立った。

「叔父上っ」

私はヘリに寝かしつけた叔父上から矢を抜こうとした。

それをテツヤが止める。

「下手に抜くと出血が酷い。抜くな」

ただしナイフで矢を切り落とし、衣服を引き裂いて刺さっている部分を見た。

「リーシャ。急げ」

テツヤは淡々とした口調でリーザ中尉に命令した。

「了解」

リーザ中尉は頷きヘリの速度を上げた。

「テツヤ。売女、と言ったが相手は・・・・・・・」

私はテツヤの手に刺さった矢を抜こうとしたが、テツヤはそれを断り自分で矢を抜いて外に放り投げた。

抜くと同時に血が飛び散ったが、外に向かって抜いたから問題なかった。

だが、もし私が叔父上の矢を抜いたらきっと・・・・・・・・・・・・

それを考えるとテツヤには感謝しなければならない気がしたが、今は誰が矢を射たかを訊いてみた。

「テツヤ。矢を射た相手を知っているのか?」

改めてテツヤに訊ねた。

「俺を攫った女だ」

簡潔に答えたテツヤは私が差し出したバンダナを手に巻き付けた。

「あの女・・・・・・」

テツヤだけでなく叔父上まで私の目の前で・・・・・・・よくも・・・・・・

「頭に来るのは分かるが今は・・・あいつをどうするかだ」

不味い相手だ、とテツヤは言った。

私が視線の先を見れば・・・・・・・・・・

「何だ・・・あれは・・・・・」

後ろから追いかけて来るのは大きな翼を持つ鳥・・・いや、悪魔だ。

悪魔が黒い翼を出して追いかけて来た！！

「“ＡＨ－６４　アパッチ”攻撃ヘリだ」

テツヤは黒い翼の悪魔をそう言った。

「アパッチ？」

「アメリカの先住民の名で最も勇敢なる戦士だ」

その名を与えられるだけあって・・・とても強大だ、とテツヤは苦々しい口調で言った。

「リーシャ。何とかして逃げろ」

こいつでは分が悪い、とテツヤは言った。

「了解ッ」

リーザ中尉は少し焦った声で頷いた。

「ちくしょう。城以外に隠していたな」

忌々しいとばかりにテツヤは舌打ちを漏らした。

ヘリが急上昇した。

そして後ろから何かが発射されるのも分かった。

「急降下しろ！！」

テツヤが後ろを見ながら怒鳴った。

今度は急降下を始めた。

私は叔父上を抱き締め近くの器具を掴み落ちないように努めた。

後ろから発射された物は先ほどまで居た所で爆発した。

「右旋回！！」

テツヤはまた命令した。

リーザ中尉はそれを聞いて右へ旋回する。

今度は森が爆発し瞬く間に炎に包み込まれた。

まるで罪人を焼く地獄の業火に見えてしまった。

「くそったれが・・・弄びやがって」

「弄ぶだと？」

私はテツヤの言葉に疑問を感じて訊ねた。

「あいつならこいつを直ぐにやれる。“空飛ぶ戦車”って渾名がある通り重武装だ」

それなのに直ぐには殺さない辺りを考えると・・・弄んでいる。

実に弱者しか殺せないハゲタカらしい、とテツヤは罵った。

「ハゲタカが操縦しているのか？」

「あぁ。兄貴とその部下だ。どうやら弟は居ないな」

そう答えてテツヤはヘリの直ぐ横に取り付けられていた機関銃を後方に向けて乱射し始めた。

「どうするのだ？テツヤ」

「逃げ切れる相手じゃないが・・・何とかしてみせるさ」

テツヤはまた煙草を口に銜えた。

段々プロペラ音が近づいて来る。

そして私は見た。

黒い翼を生やした悪魔が斜めに出て来た。

悪魔は先端に取り付けられた三角形の細長い棒をこちらに向けて来

た。

「左旋回！！」

テツヤが罵声に近い叫び声を上げた。

ヘリが左へ旋回する。

それと同時に機関銃よりも速く弾丸が襲って来る。

「くっ・・・・」

私は叔父上を抱き締めながら身を縮ませて弾丸をやり過ごした。

だが、弾丸の嵐は止む事を知らず襲い掛かって来る。

そして焦げ臭い気がした。

「テツヤ様ッ。コントロールが利きません！！」

リーザ中尉が甲高い声でテツヤに叫んだ。

「くそったれが・・・掴まれ！！」

テツヤは機関銃から手を離し手近にあった器具を掴んだ。

私も改めて器具を力強く掴んだ。

「しっかり掴まって下さい！！強制着陸しますっ」

リーザ中尉は両手で操縦桿を握るとちょうどよく森が開かれた湖へと向かった。

段々速くなって来る・・・・・・・

そしてとても強い衝撃が来て器具などに身体がぶつかる。

それでも私は掴んでいた器具を離さず叔父上を離さなかった。

やがて衝撃が止んだ。

「・・・生きてるか?」

テツヤが私とリーザ中尉に訊いてきた。

「な、何とか・・・・・・・・」

「私もです・・・・・・・・」

私とリーザ中尉は同時に答え何とかヘリから降りた。

テツヤもまた降りた。

私達が乗っていたヘリは湖から少し離れた陸に着陸していた。

正確に言えば、陸に・・・地面に顔を擦り付けた、と言った方が正しい。

その間もヘリの音が近づいて来る。

「ちっ・・・お前等、ヴィールングのおっさんを連れて先に行け」
テツヤはよれよれになった煙草を銜えながら言った。
「お前はどうする？」
「あいつとケリを着ける」
「無茶ですっ。攻撃ヘリをどうやって相手に・・・・・・・」
リーザ中尉がテツヤも一緒にと言ったが、テツヤはこう言った。
「ヴァイガーで会おうぜ」
「・・・約束ですよ」
「安心しろ。女との約束は破らない」
テツヤは口端を上げて笑ってみせた。
「フィーナ殿。行きましょう」
「しかし、リーザ中尉」
「テツヤ様は約束しました・・・・行きましょう」
「ですが！！」
「フィーナ・・・・・」

テツヤが私の名を呼んだ。

「ヴィールングを助けろ。俺も後から追い付く」

必ず・・・とテツヤは言った。

「・・・約束だからな。破れば貴様を斬る」

私を抱くという約束は守れ、と私は言ってやった。

「誰も抱くなんて約束してないぞ」

「煩い。約束したぞ？したからな！！」

私は言うだけ言うとリーザ中尉と共に叔父上を左右から支えて森へと急いだ。

幕間：地獄へ道連れ

「ゲホッ・・・あのイエロー・モンキーが舐めやがって」

俺は催涙ガスから抜け出すと舌打ちを漏らした。

「に、兄ちゃん・・・痛いよ・・・・・・・・」

ルディは涙眼で俺を見てきた。

「大丈夫だ。ルディ。俺が必ずあいつを殺してやる」

あのヘリで、な・・・・・・・・・

俺はルディと数人の部下を引き連れ城を出た。

空を見ればヘリが飛んでいた。

「あの野郎・・・人のヘリを」

俺が新たに送らせたヘリを奪うとは良い度胸だ。

だが、そんなヘリで逃げる事を後悔させてやる。

俺達は城を出て北側にある倉庫の一つに向かった。

そしてドアを開けた。

中には一機の大きなヘリがある。

これならあんなヘリ一殺(いちころ)だぜ。

ヘリに乗り込もうとした矢先だった。

「お待ち下さいっ」

ちっ・・・誰だよ。

振り返ればギルドのおっさんが居た。

「それはライアンナル伯爵の許可無くは」

「あいつを逃がして良いのか？」

俺はおっさんに訊ねた。

「それはいけません。ですが、それは・・・・・・・・」

ああ・・・うぜぇ。

乾いた銃声が一発した。

おっさんは口から血を吐き出して前に倒れた。

雪がそこに降り積もるが知った事じゃない。

「そこで寝てろ」

俺は白い煙を吐くＡＭＴオートマグナムの銃口に息を吹きつけて消

した。

ホルスターに仕舞い部下の一人に乗れと命令した。

「兄ちゃん。俺は？」

「お前は留守番だ。待ってろよ？俺が必ずあいつを殺してやるからな」

「だったら、俺も・・・・・・・」

「ルディ。兄ちゃんが今までお前に嘘を吐いた事があるか？」

ルディはそれに対して首を横に振った。

「無いだろ？だったら、大人しく留守番してろ。帰って来たらパーティーだ」

イエロー・モンキーの首を肴に、な。

「うん。分かった」

ルディは満面の笑顔で頷いた。

「良い子だ」

俺はルディの頭を撫でてからヘリに乗り込んだ。

ヘルメットを被り前席に座り部下が後席に座った。

「大尉。あいつらをどうするんですか?」

部下が器具を弄りながら俺にイエロー・モンキーの事を聞いてきたが、何を馬鹿な事を俺は鼻で嗤った。

「決まってるだろ?殺す」

「ですが、ただでは殺さないんですよね?」

「当たり前だ。・・・たっぷりと傷めつけて殺すさ」

俺が答えると同時にヘリのプロペラが回り始め、脆かった小屋が音を立てて崩れ落ち始めた。

「さぁ・・・狩りの始まりだ!!」

俺は操縦桿を傾けて上へと上昇させた。

ヘリは東へと向かっている・・・・・・・

「逃がさねぇぞ。イエロー・モンキー。てめぇを血祭りに上げてからジャー・ヘッドを殺してやる」

俺は操縦桿を弄りヘリを追い掛けた。

ヘリには簡単に追い付いて俺が引き金を引けば直ぐに殺せた・・・・・・

だが・・・それでは面白くない。

「どれ、少し遊んでやるか」

俺はゆっくりと狙いを定め“ハイドラ７０ロケット弾”の引き金を引いた。

故意に狙いを外しているが、操縦士の腕も良いな。

そうでなければあんな風に避けたり出来ない。

「ヒュー。面白いぜ。獲物はそうでなくちゃ」

「大尉。楽しそうですね？俺もやりたいですよ」

「悪いな。こいつは俺の特権だ」

部下の言葉に俺は笑って答えると引き金を立て続けに引き奴等を弄んだ。

だが、奴等もただではやられないようだ。

カンカン、とガラスに当たる弾丸がそれを物語っている。

「はんっ。イエロー・モンキーが俺の国の武器を使いやがって」

イエロー・モンキーは添え付けられているＭ６０で反撃しやがった。

しかし、この重装甲には蚊が刺された程度。

「ジャップが生意気な」

部下が舌打ちを漏らした。

「そう言えば、お前はあいつに真っ先に殺されたんだな？」

あっちの世界でこいつはイエロー・モンキーによって真っ先に殺された。

ナイフで喉を切り裂かれ更に脇腹を刺された。

その挙句に糞尿が溜まった落とし穴に落とされたというから酷い話だぜ。

「大尉。あいつを殺すの俺に譲って下さいよ」

「駄目だ。だが、お前の怨みも纏めて晴らしてやるよ」

「流石は大尉だ」

部下はもっとやれ、と言って来る。

「あぁ。そろそろお遊びも飽きたしな」

俺は“３０ｍｍＭ２３０チェーンガン”の引き金を引いた。

これには堪らず奴も反撃を止めた。

「へっ・・・口ほどにもねぇな」

俺は笑みを浮かべながら引き金を引き続けた。

やがてヘリの後ろに当たり黒い煙が出た。

「これで墜落だ」

ヘリは急降下に近い形で下へと向かって行く。

それを見ながら俺はゆっくりと操縦桿を動かした。

ヘリがある場所へ行くと、そこには無様な態勢をしたヘリが見えた。

そしてそこには煙草に火を点けるイエロー・モンキーが・・・・・・

タカミ・テツヤが居た。

あの気が強そうな姐ちゃんは居ない。

ちっ・・・俺好みだったのにな。

だが、最初から獲物としていた男が居るから良しとしよう。

「へっ。相変わらず格好付けやがって」

俺はゆっくりと下へと降りた。

直ぐにでも殺せるのにまるであいつは怖がっていない。

それが無性に腹が立つがもう直ぐそんな気分ともおさらばだ。

後は城に帰って酒を飲んで女を抱いてジャー・ヘッド共を皆殺しにして終わりだ。

俺はあいつに向かって言い放った。

「これで終わりだ。イエロー・モンキー」

これでてめぇを殺せる。

だが、それは俺の昂ぶった気持ちを沈められる相手を自分で消す事を意味している。

こいつは煙を吐きながら俺を見上げた。

その余裕ぶった顔が気に入らねぇ・・・・・・・・・

お前は俺と同じだ。

戦いの場に居て初めて自分を見つけられるんだよ。

それなのにお前はそれを否定している。

お前は俺と同じなのに・・・・・・・・

しかし、それも終わりだ。

俺がお前を殺して・・・な。

所が奴は笑みを浮かべている。

『そいつはどうかな?』

俺は奴の言葉が気になり改めて奴の居る所を見た。

「！！」

ヘリから燃料が漏れていた。

そしてあいつは煙草を吸っている。

俺らは燃料が一番溜まっている所に居る。

奴は口から煙草を離すとこう言った。

「・・・あばよ」

炎がアパッチを包み込む。

「た、大尉！！」

部下が悲鳴を上げるが俺は・・・・・・・・・

「く・・・はははははははははははっ！！最高だぜ！タカミ・テツヤ！！」

俺をまた地獄へと戻すか・・・・・・・

しかも、ソドモの如く炎で俺を地獄へ戻すか！！

だが、てめぇも今度は道連れだ。

俺もお前も地獄行きだ。

地獄ではてめぇを殺してやるよ！！

そして光に包まれた。

――――――――――――――――――――――――――

―――――――――

「・・・来たか」

俺は女神の抱擁に火を点けながら現れたアパッチを見上げた。

フィーナ達はかなり離れただろうからこれからやる事には巻き込まれない筈だ。

“約束したからな”

あいつの言葉とリーシャの言葉が同時に頭に浮かんでくる。

女との約束は守る主義だが、今回ばかりは出来ないか？

せっかく俺を助けたのに悪い事をしたな。

だが、ヴィールングのおっさんが助かるならフィフティー・フィフティーだ。

『イエロー・モンキー。これでお終いだ』

ディックは俺を見ながらサディスティックな笑みを浮かべた。

あっちの世界で戦死させてやったのに、ここでもまた同じ事をやるとは・・・・・・・・・

だが、仕方が無い。

てめぇがここに居るんだ。

また俺がてめぇを・・・てめぇらを纏めて地獄へと送り返してやるよ。

「その言葉そっくり返すぜ」

俺は紫煙を吐きながら返答した。

『はんっ。何も出来ないくせにほざくな』

「出来るさ・・・・・・・・・」

『！！』

奴は俺の直ぐ脇にあるヘリを見た。

そう・・・ヘリからは燃料が漏れ出している。

そして俺は火が点いた女神の抱擁を銜えている上に奴はご丁寧にも燃料が一番ある真上に居る。

これを投げたら・・・どうなるかな？

如何に魔法防御を施した上に重装甲でもその下にあるチェーンガン

に引火すればただでは済まない。

俺も同じだがな。

『イエロー・モンキー！！』

機首下に搭載されている３０ｍｍＭ２３０チェーンガンが俺に狙いを定め発射されそうになる。

「・・・あばよ」

俺は女神の抱擁を投げた。

それと同時に周りは炎に包み込まれた。

第百六十四章：鷹の帰還

私とリーザ中尉は叔父上を左右から支えながら薄暗く雪が積もった山道を進んでいた。

だが、後ろから爆発がして振り返った。

巨大な炎がＡＨ－６４アパッチを包み・・・爆発した。

テツヤ・・・・・・・！！

私はテツヤが気になった。

「・・・行きましょう。フィーナ殿」

リーザ中尉は顔を背けて先を急ごうとした。

「しかし・・・・・・！！」

「テツヤ様は約束をしたじゃないですか」

リーザ中尉は笑顔で私に言ってきた。

「あの方は約束を必ず守ります。ですから、私達もそれを信じましょう」

それに今は貴方の叔父上を何とかしないと・・・・・・・・・・・・

そう・・・私には傷ついた叔父上が居る。

今は叔父上を速くヴァイガーへと運ばなければならない。

だが、徒歩では時間が掛る。

このままでは叔父上が・・・・・・・・・・・・

「フィーナ中尉！！」

声がして振り返るとそこには・・・・・・・・・・・・

「ランドルフ・・・・・」

ランドルフ達が馬に乗り私達の前に居た。

「叔父上を助けてくれっ」

私はランドルフ達に叔父上を助けるように頼んだ。

直ぐに彼等は来て馬から降りると叔父上に近付いた。

「隊長・・・・・・・」

ヘン・ロビンソンは叔父上を隊長と呼びながら、傷の具合を見て私の部下を呼び寄せた。

「応急手当をする。それから通信兵。今すぐ迎えを寄こせと言え」

的確に命令をしながらヘン・ロビンソンは私を見てきた。

「鷹は・・・テツヤ少佐は？」

「・・・あそこだ」

私は燃え上がる方角を指差した。

「・・・貴方と言う人は」

ランドルフがまた私の胸倉を掴んできた。

「またテツヤ殿に迷惑を！！」

「あいつは私と約束した！必ずヴァイガーで会おうと・・・・私を抱くと約束した！！」

私はランドルフが殴る前にテツヤとの約束を口にした。

誰もがポカーンという場違いな顔をしていた。

ランドルフも握っていた拳を止めて私を見ていた。

「何だ。あいつが私を抱くと約束したのに違和感を・・・感じるのか？」

最初こそ強気に言ったが最後の方は・・・自信が無かった。

「あります」

ランドルフは握り拳を降ろして答えた。

「貴方をテツヤ殿が抱くなんて・・・天変地異の前触れですよ」

テツヤ同様に私に対して遠慮なく毒を吐く男だ。

「煩い。テツヤは私と約束したんだ。だから、必ず来る!!分かったな?」

私はランドルフに唾を吐く勢いで言ってやった。

「分かりました。ただし、もしテツヤ殿が帰って来なかったら・・・・」

「その時は私を殺すなり犯すなり好きにしろ」

「・・・別に犯す積りはありません。殺しはしますが」

ランドルフは酷く罰が悪そうな顔をして私の言葉に頷いてきた。

「何だ。私を犯すのは嫌か?」

「・・・好みじゃないんです」

「テツヤもそう言った。貴様と言いテツヤと言い私を女として見ていないのか?」

「根性がある女とは見ています」

・・・何故か酷く傷つく言葉に聞こえた。

また何かを言おうとした時だ。

「お前等、何してるんだ？」

懐かしい・・・鉄が錆ついて掠れた声が聞こえた。

ああ・・・嗚呼・・・・

「テツヤ・・・・・・」

私は振り返った。

そこにはずぶ濡れのタカミ・テツヤが居た。

「て・・・・・・・・」

『テツヤ殿（様）！！』

私はテツヤに近づこうとしたがそれを押し退けるようにしてリーザ中尉とランドルフがテツヤに走り寄った。

リーザ中尉に到っては私の脇腹に肘鉄を打ち込んだ。

お陰で痛い・・・・・・

「テツヤ殿。生きていたんですね？」

ランドルフはテツヤに近付いてまるで・・・父親を見つけた子供のように泣きそうな顔でいた。

「あぁ。しかし、どうしてお前らまで居るんだ？」

テツヤはランドルフ達を見て眼を細めた。

「それは後で話す。それより少佐。もう直ぐ迎えが来る。すまないが、あんたと団長、それからリーザ中尉とヴィールング隊長は直ぐにヴァイガーへと向かってくれ」

ヘン・ロビンソンが説明をした。

「分かった。で、おっさんの状態は？」

「応急手当をしたから大丈夫だ。それよりさっきの爆発は何だ？」

「あれか・・・地獄へ戻してやったのさ」

「という事は始末できたのか？」

私はまだ痛む脇腹を抑えながらテツヤに訊ねた。

「あぁ。湖から顔を出したらアパッチの残骸が燃えていたからな」

「そうか」

「あの、テツヤ殿。一体・・・・・・・」

ランドルフが何かを聞こうとしたが、それは中断する事になった。

夜の空を駆ける美しい天馬達が現れたからだ。

「迎えが来たようだな」

ヘン・ロビンソンは天馬を見上げながら告げた。

「それじゃ先に行く」

テツヤと私、リーザ中尉、叔父上は迎えに来た天馬に乗り先にヴァイガーへと帰る事になった。

私は天馬の手綱を握る天馬騎士の背中に手を回しながら叔父上を見た。

グッタリとして眼を開けない・・・・・・・・

叔父上・・・・・・・・

私は叔父上が助かる事を祈るしか出来ない自分を恥じた。

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

――――――――――――――――――――――――――――――

私達は馬に乗りヴァエリエまで向かっている途中だった。

だが、そこで遠くからでも確認できるほど巨大な爆発と炎が見えた。

「な、何だ？」

フォックスは炎を見て驚いた。

彼だけではなく全員が驚いていたのだ。

しかし、直ぐに気を取り直して私達は先へと急いだ。

そしてそこで思わぬ人物と再会した。

要らない荷物ことフィーナ中尉とテツヤ殿の未来の妻を自負するリーザ中尉だ。

二人が支えている人物は・・・ヴィールング殿だった。

私達の存在に気付いた要らない荷物は叔父上を助けてくれと頼んできた。

直ぐにフォックスが親衛騎士団に応急手当と迎えを寄こすように命令する。

そして要らない荷物に視線を向けてテツヤ殿は何処か?と訊ねた。

この2人はテツヤ殿を助けに行った。

それなのにヴィールング殿だけとはどういう事だ?

「・・・あそこだ」

要らない荷物は未だに燃え続ける場所を指差した。

「貴方という女は・・・・・・・」

私はまたこの女のせいでテツヤ殿は犠牲になったんだ、と思い込み胸倉を掴んだ。

「またテツヤ殿に迷惑を！！」

この女は何度テツヤ殿に迷惑をかければ良いんだ？と思うと同時に怒りで我を忘れてしまう。

殴ろうと思い拳を握り締めた。

だが、要らない荷物は言い返してきた。

『あいつは私と約束した！必ずヴァイガーで会おうと・・・私を抱くと約束した！！』

私は要らない荷物の発言に開いた口が塞がらなかった。

テツヤ殿がこの女を・・・この容姿は良いが性格は最低最悪の要らない荷物を抱く？

・・・信じられない。

私の顔を見て要らない荷物は尚も言葉を投げて来た。

『何だ。あいつが私を抱くと約束したのに違和感を・・・感じるのか？』

最初こそ自信満々だったが、最後の方は無かった。

自覚しているという事にも些か驚いたが私は冷静さを取り戻し拳を降ろして答えた。

「感じます」

更に私は言葉を続けた。

「貴方をテツヤ殿が抱くなんて・・・天変地異の前触れですよ」

実際この女を抱いて妻にするという男が現れたら余程の物好きか、何も知らない男だと私は思う。

そして結婚したら泣きを見るとも思う。

思い過ぎではないのが、この女にとっては悲しい事かもしれないが。

『煩い。テツヤは私と約束したんだ。だから、必ず来る!!分かったな?』

私に唾を吐きながら要らない荷物は乱暴に私の手を引き離した。

「分かりました。ただし、もしテツヤ殿が帰って来なかったら・・・・」

気を取り直して私は冷静な声と冷徹な眼差しで要らない荷物を見て言った。

『その時は私を殺すなり犯すなり好きにしろ』

「・・・別に犯す積りはありません。殺しはしますが」

私は要らない荷物のある意味、爆発発言に戸惑いながらも返答した。

『何だ。私を犯すのは嫌か？』

「・・・好みじゃないんです」

正直に言ってこの女は私の好みではない。

憧れの気持ちは一時こそ持ったが、好みではない。

何より犯すなど私はしない。

軍曹なら喜んで犯すかもしれないが・・・・・・

『テツヤもそう言った。貴様と言いテツヤと言い私を女として見ていないのか？』

どうやらテツヤ殿も要らない荷物は好みではないと言ったらしい。

と言うか、この女が好みだという男が居るなら是非とも会ってみたいと私は思った。

「根性がある女とは見ています」

私は正直に自分の考えを伝えた。

そしてまた言おうとした時だ。

暗闇から出て来る一人の男性・・・・・・・・・・

ああ・・・・嗚呼・・・・・・・・！！

『お前等、何してるんだ?』

懐かしい・・・鉄が錆ついて掠れた声が聞こえた。

ずぶ濡れで暗闇から現れたのはテツヤ殿だった。

「て・・・・・・・」

『テツヤ殿（様）!!』

私は要らない荷物を押し退けてテツヤ殿に走り寄った。

リーザ中尉も同じだった。

テツヤ殿は私達を見て何故いると理由を訊ねて来た。

それに答え様としたがフォックスが割り込んできて事情を一通り説明した。

テツヤ殿はそれに納得しヴィールング殿の容態を訊ねた。

それにもフォックスが答え、あの爆発は何だ?と訊ねた。

『あれか・・・地獄へ戻してやったのさ』

テツヤ殿は一瞬だけ振り返り答えた。

『という事は始末できたのか?』

要らない荷物が何故かは脇腹を抑えながらテツヤ殿に訊ねた。

『あぁ。湖から顔を出したらアパッチの残骸が燃えていたからな』

『そうか』

2人が普通の会話をしている事に些か違和感を覚えながら私はどういう事なのか訊こうとした。

だが、そこへ天馬に乗ったお姉様たちが現れてテツヤ殿達は先に帰ってしまった。

残された私達は来た道を戻る訳だが・・・・・・・・・・・・・・・

私達って何の為にここまで来たんだ?

とは誰も考えないようにしたのは聞かなかった事にして欲しい。

第百六十五章：嫌いも嫌いも好きの内

私達はまた来た道を馬に乗り進んでいる。

まったくもって酷い話だ。

私達が勇んで助けに行こうとしたのに助ける筈の本人は自力で脱出した挙句に先に帰ってしまうのだから・・・・・・・・・・

「私達って何のために来たんでしょうね？」

私はポツリと苦言に近い言葉を漏らした。

誰もが同じ事を考えていたが、敢えて口にはしなかった。

「・・・骨折り損だ」

フォックスが仕方無いとばかりの声で答えてくれた。

「まぁ、俺はある程度の予想はしていた」

あいつなら自力で脱出するだろう、と。

「骨折り損だが、無事で良かったじゃねぇか」

それはそうだ。

拷問こそされたがテツヤ殿は無事。

それは良い。

それに戦いはしなかったが、こいつらにも良い経験だと言いながらフォックスは親衛騎士団達を見た。

確かに戦いこそしなかったがそれでもここまで来る事には経験となった事だろう。

分隊の構成から進み方、陣地の作り方から夜営の方法などなど・・・・・・・・

多少の不満は残るがそれでも得た物は彼等にとって大きい、と私はフォックスに言われて改めて思った。

「それにしてもまさかあの要らない荷物がテツヤ殿に抱かれるなんて・・・信じられません」

あの女はテツヤ殿に抱かれる、と約束したと言うが・・・・・・・・・・・・

本当かどうか怪しい物だし、何よりあの女が自分からそんな約束をするのか？とさえ思ってしまう。

テツヤ殿を目の敵にしていたのは周囲の事実。

訓練の時でさえそれは変わらなかった。

それなのにあの変わり様は何だ？

名字を抜いてテツヤ殿を名前で呼ぶようになったのはまだ良い。

だが、あの様子は何だ？

テツヤ殿を心配していたし、抱くと約束したなどとは・・・・・・・・・有り得ない。

何か悪い物でも食べたのか？

それとも何処かに頭をぶつけて狂ったのか？

「一体どうして、あんな風に豹変したんだか・・・・・・・・・・・・」

「言っただろ？女の成長は速い、と」

フォックスは先ほど私に言った言葉をまた口にした。

「そうですけど・・・・有り得ないですよ」

他の女性にはその言葉が当て嵌まるだろうが、あの女に関しては有り得ないというのが私の考えだ。

「そうか？俺としては有り得る、と思っていたが」

「どうしてですか？」

「そうだな・・・嫌いも嫌いも好きの内ってやつだ」

「何ですか？その言葉は」

「そのまんまの意味だ。団長はテツヤを毛嫌いしていた。だが、毎

度の様に突っ掛かって来ただろ？」

「えぇ。煩わしいと感じる程に」

偶然もあるだろうが、殆どあちらからこちらに喧嘩を売って来た。

「本当に嫌いならそんな事はしない。会わなければ良いだけの話」

「確かにそうですね」

本当に嫌っているならわざわざ会いに来る必要性は無い。

それなのにわざわざ会いに来るという事は・・・・・・・・・

「無意識だろうが、あいつに気が合ったんだよ」

「・・・それこそ天変地異の前触れです」

無意識にだと？

そちらの方が天変地異の前触れだ。

そしてあの女がテツヤ殿に抱かれたなんて事が起こったらこの世の終わりだ。

「団長に関しては評価が一向に変わらないな」

「以前の事を考えるとどうしても辛い評価になるんです」

以前の言動が余りに私の癇に障っているのか、どうも辛い評価一一

一変質的とも言える評価しか与えられない。

この若さであの女みたいに石頭とは呼ばれたくないから何とかしないと・・・・・・・・・

「まぁ、気持ちは分からんでもないが・・・ん？」

フォックスは何気なく後ろを振り返ると眼を細めた。

「どうしたんですか？」

「人が来る。散開」

私達は直ぐに馬から降りて近くの木や岩に隠れライフルの銃口を向けた。

敵か？

有り得なくは無い。

テツヤ殿達を追ってきたと考えられる。

味方という考えは無い。

敵なら迷う事は無い。

鉛玉を撃ち込んでやるだけの話だ。

ヴィン・ルビーをふと見れば震えていた。

「そんなに震えていては当たらないですよ」

私はモーゼルではなくＡＫＳ７４－Ｕを構えながら彼に話し掛けた。

「そ、そうだけど・・・・・・」

「大丈夫ですよ。貴方には私達が居ます」

一人では心細いだろう。

しかし、皆が付いている。

安心して背中を預けてくれ。

「・・・ありがとう」

「私の背中、頼みますよ」

「任せておけ」

私と彼は互いに拳をぶつけ合った。

さぁ、何時でも来い。

そう決心して、引き金に指を掛けようとした時だ。

無線が鳴った。

「こちらリンクス」

『ミーシャだ。ヴィールングの部下がそちらに向かっている。敵じゃないから攻撃するな』

「分かりました」

無線を切り私はフォックスに伝えた。

「分かった。お前等、攻撃するなよ」

フォックスの命令に全員が頷いた。

ヴィン・ルビーはそれを聞くと大きな息を吐いた。

やはり私達が居ると言っても緊張するようだ。

しかし、その緊張も何れは慣れてしまう。

いや、慣れてもらわなくては困るのだ。

慣れてもらい適度な緊張を保てる技を手にしこの内乱を終わらせる為に働いてもらうのだから。

引き金から指を放すと段々、足音が近づいて来る。

馬の蹄の音だ。

しかし、中には馬から降りて歩いて来る者も音で判断できた。

「おーい。スリーは居るか?」

フォックスはある程度の距離になったと見たのか暗闇の中に人物の名を投げた。

「ここに居る。その声は“狐”か」

フォックスと同じ位の声が返って来た。

狐？

「渾名ですか？」

私が訊ねると彼は頷いた。

「あぁ。狐みたいに他人を惑わすから渾名にされた」

こちらの場合も似たような物だ、と私は思いながらスリーという人物に声を投げた。

「私はランドルフと言います。スリー殿。貴方はヴィールング殿の部下ですか？」

「その通りだ。隊長は既に城へ行ったのか？」

「はい。応急手当はしましたので何とかなると思います」

「そうか」

闇の中から安堵の声がして皆が顔を出してきた。

全員、商人のような格好をしていた。

同時に血が服や顔に付着していたし中には手傷を負っている者も居た。

「大丈夫ですか？」

「あぁ。それより大きな鳥のような残骸が燃えていたがあれは何だ？」

「あれはヘリと言う乗り物です」

私は簡単にそれを説明した。

「そうか。それより狐。元気そうだな？」

スリーはフォックスに視線を向けた。

表情は変わっていないが声には親しみが込められている。

「あぁ。お前等も元気そうで何よりだ」

「まぁな。早速で悪いが私達を隊長の所へ連れて行ってくれるか？」

テツヤという人物とはもう話を着けてあるとスリーは語った。

「勿論だ。それじゃ行くか」

フォックスの言葉にスリーと名乗った男と他の者達は頷き合った。

そしてテツヤ殿達が居る城を目指した。

スリー達を加えた私達はまた来た道を戻っていく。
その帰り道、ヴィン・ルビーは私が渡した女神の抱擁を銜えながら私と話をした。
「お前さんの家族は良いな」
彼は煙を吐きながら羨ましそうに言ってきた。
「失礼ですが、そちらの家族は？」
「親父は俺が４歳の時に死んだしお袋は１５の時に死んだ」
そして親戚たちがあっという間に財産などを根こそぎ奪い合ったらしい。
「醜い物ですね」
貴族という人種はそういう物なのだろうと私は勝手に思い込んだ。
「まぁな。だが、中には良い奴も居た」
彼に親衛騎士団に入れるだけの金を渡したというのだ。
「あれが無ければ俺は落ちぶれた貴族の男として生きていただろうな」
「そうですか」

私はそれに相槌を打った。

「あぁ。しかし、テツヤ達と会ってなかったら俺は以前のまま生きていただろうな」

「後悔しているんですか？」

「まさか」

彼は微苦笑してから溜まった灰を指で叩き落とした。

「あいつに会えたから俺は変われたんだ。そして頼れる山猫も居る。後悔なんてしないさ」

そう言って彼はまた煙草を口に銜えて煙を吐いた。

第百六十六章：帰宅と罰

ヴァイガーへと到着した私達をミーシャ大尉達が出迎えてくれた。

ミーシャ大尉は腕を組んで私とリーザ中尉を感情が込められていない眼差しで見つめて来る。

覚悟は、出来ている。

命令違反をしたんだ。

どんな罰でも受ける覚悟。

「少佐。お帰りなさい」

ミーシャ大尉は私とリーザ中尉から視線を外すとテツヤに敬礼をした。

「あぁ。エドリアス大尉。ヴィールングの手当てを頼む」

「分かりました」

エドリアス大尉は叔父上を天馬騎士と共に連れて行った。

「フィーナ中尉。リーザ中尉」

ミーシャ大尉が私とリーザ中尉の名を呼ぶ。

『はっ』

私と彼女は一歩前に出た。

「貴様ら2人は命令を無視し単独でテツヤ少佐を助けに行った」

重大な命令違反とミーシャ大尉は告げてきた。

「どのような罰でも受ける覚悟です」

私はミーシャ大尉を見ながら答えた。

「良い度胸だ。だったら、歯を食い縛れ。足に力を入れろ」

何を言われたのか分からなかったが、言われた通りに歯を食い縛り足に力を込めた。

そして・・・殴られた。

口に血の味が広がり、足に力が入らない。

頭の中で火花が散りながらまるで回転されたように目眩さえする。

震える足を叱咤してそれでも立ち続けた。

「よく耐えたな。次はリーザ中尉。お前だ」

今度はリーザ中尉にミーシャ大尉は命令し私と同じように殴った。

リーザ中尉の方を見るとミーシャ大尉は殴る時に拳を回転させるようにしてリーザ中尉を殴った。

あれで攻撃力を上げるのか？

確かに私を殴った時も一瞬だが、拳が回転したように見えたが・・・・・・・

殴られたリーザ中尉は私と同じように立ち続けた。

「今日から一週間、便所掃除をしてもらう」

これが罰、とミーシャ大尉は2人分殴った拳に付いた血を舐めながら言った。

「それが・・・罰、ですか？」

余りに軽い罰だと私は思った。

失礼だが、この女の性格からして銃殺とばかり思っていたが・・・・・・

「何だい？もっと重い罰にして欲しいのかい？」

「そう言う訳では・・・・・・・・・」

「だったら、今から便所掃除をして来い。速くしろ！！」

怒鳴られて私とリーザ中尉は慌てて便所へと走った。

「一週間の便所掃除・・・フィーナ殿。どう思います？」

リーザ中尉は血の付着した唾を吐きながら私に訊ねてきた。

「何だか軽い罰だと思います」

私も同じように血の唾を吐きながら答えた。

「ですよね？便所掃除なんて・・・・・・・」

だが、私も彼女も知らなかった。

この便所掃除と言うのがどれだけ過酷なのかという事を・・・・・・・

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

―――――――――――――――――――

「お前にしては随分と優しい罰じゃないか？」

俺は氷の女王を銜えるミーシャを見た。

こいつの性格からして命令違反をしたら半殺しにでもしようと思っていた。

しかし、思いも寄らぬ罰に拍子抜けした。

「何だかんだ言ってあたしも一人の女ですから・・・当てられっちまいました」

ミーシャは自嘲に答えた。

一人の女、か。

・・・あいつも言っていたな。

『あんたはあたしを女として見ていないようだけど、これでも一人の女よ』

勝気と傲慢が混ざり合った瞳・・・フィーナそっくりだ。

約束もまた同じだが。

「それに良い男から“お願い”されましたしね」

そう言ってゲンハルトを見るミーシャに俺も釣られてゲンハルトを見た。

相も変わらず骨と皮だけで出来た身体の上に髪の毛は寂しい限り・・・・・・

「テツヤよ。よくぞ無事だったな」

ゲンハルトが俺に女神の抱擁を差し出してきた。

「まぁな。プロイセンのおっさん達にも心配掛けたな」

「まったくだ。大切な婿殿に死なれては孫の顔が拝めんからな」

らしくない冗談を言いながらプロイセンのおっさんは笑った。

「それよりミーシャがゲンハルトを良い男と言ったがどういう事だ？」

「この男がミーシャに“お願い”をしたのだ」

テツヤを助けてくれ。

テツヤにも、そなた達にもこの国が生まれ変って皆が笑顔で暮らす所を見せたいのだ・・・・・・

私の命令・・・願いを叶えてくれないか？

「それを言う時の顔が・・・格好良かったんです」

ミーシャがふざけたように言うとゲンハルトは顔を真っ赤にした。

「い、言うな！！」

「何でだい？あたしは女としてあんたを良い男と褒めてるんだよ？」

イザベルが居なければ自分が頂いていたとまでミーシャは言ってみせた。

それを聞くやゲンハルトは辺りを見回して冷や汗を掻き始めた。

「どうした？」

俺が訊けばゲンハルトは大丈夫と判断したのか一息入れて答えた。

「イザベルが聞くと怒るのだ」

何もしていないのに殴ったりするらしい。

「愛されてるじゃねぇか」

それなりに経験を積んだから簡単には嫉妬など見せないと思っていたが、どうやらそうではないらしい。

いや・・・本当に好きな男だからこそあから様に嫉妬しているのかもしれないな。

「・・・嬉しいが、髪の毛を抜かれるのは勘弁だ」

ただでさえ髪の毛が無いのにこれでは禿げてしまう、とゲンハルトは言った。

「いっその事丸坊主にしたらどうだ?」

ヴィルヘルムが茶化すように言ってみたが「断じて断る!!」と怒鳴った。

「悪かった悪かった。それはそうと・・・我が王よ。ヴィールングも一緒とはどういう事ですか?」

謝罪した後は直ぐに真顔でヴィルヘルムはヴィールングの事を訊いてきた。

「お前も知っているだろ?」

ゲンハルトが差し出したライターで煙草に火を点けながら俺はヴィ

ルヘルムに言った。
噂である事実を・・・・・・・
「・・・そうですか。その事をフィーナは」
「知らない。ここから先はあの2人の問題だ」
俺達が入り込んで良い場所ではない。
「そうですね。しかし、その事実を知り尚且つ割り込む者が居りますね」
「蛇の道は蛇か」
「はい。1角のワイバーンを聞いて思い出しました」
歳を取ると物忘れが激しくなると、ヴィルヘルムは自嘲しながら真剣な顔で俺を見た。
「厄介な相手です。あの女の母親は女だてらに傭兵の長をしている訳ではありません」
実力は折り紙付きだし、娘にもその血と力があると言った。
「フィーナには荷が重いか？」
訊かなくても分かっていたが、念の為に訊いておいた。
「はい。酷い言い方ですが・・・瞬殺です」

向こうは場数も上だしワイバーンも居るから空中戦もお手の物。
更に言えば母親の変則技と父親の正攻法の両方を併せ持つ。
逆立ちしてもフィーナが勝てる見込みはゼロとまでヴィルヘルムは断言した。

「どうする？」

「手の掛る弟子ほど可愛い物ですからね」

ヴィルヘルムはどうやらフィーナを可愛がっていたようだ。
まぁ、確かに出来の悪い餓鬼ほど親は可愛がると言うからな。
俺は経験もしていないが。
言葉から察するにフィーナがやられる前にこいつが殺すだろうな。
それが良いのかどうかは分からないが・・・・・・・・・・

「まぁ良い。それじゃ俺は帰って寝る」

明日はまた忙しい。

「暫くは休んだ方が良いのではないか？」

ゲンハルトが気を遣うように言ってきたが俺は鼻で嗤った。

「冗談言うな。これからが本当の意味で俺たちの反撃なんだ」

俺が休む訳にはいかない、と言い歩き始めた。

だが、また足を止めた。

「それからヴィールングの部下達がこちらに来る。ランドルフ達に連絡を入れておけ」

ミーシャは了解と言ったのを確認してから俺は今度こそ背を向けて歩き出した。

上半身は裸だから寒い事この上ない。

まぁ・・・家まで我慢だ。

城を後にした俺は雪が降る中、家を目指した。

見れば白い煙がモクモクと煙突から出ている。

「・・・・・・・・」

俺はその家のドアを叩いた。

直ぐにドアは開いた。

「あら、ずぶ濡れじゃない。寂しがり屋さん」

夜でも輝く銀糸を惜し気もなく見せつける女神ーーミレーネ。

「あぁ。ちょっと季節外れの水泳をしていた」
俺は煙草を素手で揉み消しながら答えた。
「そう。それじゃ先ずはお風呂にしましょうか？」
「そうだな。頼む」
俺は家の中に入り直ぐに風呂場へと向かった。
衣服を脱いで武器を手に入れば、白い煙が視界を塞いだ。
煙を物ともせず風呂に行き、桶で湯を掬い頭から熱い湯を被った。
微かに傷に染みるが、それ程ではない。
「・・・どうじゃ？久し振りの湯は」
煙の中から聞き慣れた声がした。
「メジュリーヌか。何か用か？」
「釣れない言葉を吐くな。せっかく我が直々にそなたの身体を洗おうと言うのに」
「あら、私もよ？」
背後からミレーネの声がした。
「おやおや、女神が直々に俺の背中を洗ってくれるのか？」

「えぇ。メジュリーヌさんには前を譲るわ」

「すまんのう。こんなにやれたのに・・・前以上に逞しくなったのう」

メジュリーヌの妖艶な声が下半身から聞こえ温かい感覚が背後に感じる。

「まぁ・・・良いか」

俺は2人に任せようと思い武器を横に置いて腰を降ろした。

第百六十七章：一時と一生の恥

小鳥の囀りで私は眼を覚ました。

ミーシャ大尉から便所掃除を罰として言われた私とリーザ中尉はその夜、長時間掛けて全ての便所を掃除した。

ただし、汚物は残してある。

なぜ残すのか？と言うとこれを畑にまき散らし肥料にする為だ。

それから敵が来たらこれを掛ける為。

想像するだけで酷い撃退方法だが、かなり効くというのは分かる。

全ての便所を掃除しなければならないためかなりの疲労が溜まった。

それでも何とか長時間掛けて便所掃除を終えた私とリーザ中尉はその場で寝てしまった。

場所は陣が敷かれているテントの中。

起き上ると寝袋の中に居るという事に気が付いた。

「誰か・・・やったのか？」

辺りを見回すが、誰も居ない。

「あ、起きましたか。フィーナ殿」

テントの外からリーザ中尉が現れた。
手には白い煙を出すカップが2つあった。
「これは、誰が？」
「分かりません。ですが、助かりましたね」
衣服だけでここに寝たのだから風邪を引いていた、とリーザ中尉は苦笑した。
「ですね。それはそうとテツヤは？」
「今頃は・・・家に居るでしょう」
「そう言えば、リーザ中尉はテツヤと同棲していたんですね」
今更になって思い出した。
「えぇ・・・“邪魔者”が居ますが」
邪魔者？
「誰ですか？」
「一人は知っていると思いますよ」
何せ貴方を倒した方ですから、とリーザ中尉は言った。

私を倒した・・・・あ・・・・・・

「メジュリーヌとかいう女ですか」

あの女・・・テツヤにベッタリと張り付いていたのを覚えている。

そして私を指一本で倒した女。

「はい。もう一人居ますがそれはご自分で確認して下さい」

「どういう意味ですか？」

何か意味あり気だったので訊いてみたがリーザ中尉は答えずカップを渡してきた。

「これを飲んだら家に行きましょう」

そうすれば答えは見つかる、とリーザ中尉は言った。

「その必要はないぞえ」

リーザ中尉の背後から声がして私はその先を見た。

濡れ鴉のような漆黒の髪を足まで垂れ下げており雪が降る中でも艶やかな光沢を放っている。

右目はダイアモンドで、左目はガーネットというオッド・アイだった。

肌は褐色でオッド・アイは私達とは違い縦に長かったのが特徴と私

は思ったし・・・身体もまた女の私から見ても素晴らしい身体と思う。

自分の容姿には自信がある方だが・・・この女の前では霞んでしまう・・・屈辱で胸が一杯だった。

容姿だけではない。

この女には指一本で負かされた過去がある。

ここに来た最初の時だ。

思い出すのも嫌な過去だ・・・・・・・・・

「久しいのう。要らない荷物」

「要らない荷物、だと？」

「ランドルフがそなたをそう称しておった。それに妾も弁上する形で言わせてもらった」

「・・・何の用だ。メジュリーヌ」

私は意地悪な笑みを浮かべながら黒い扇を弄ぶ龍女ーーーメジュリーヌに問いを投げた。

「そなたらテツヤに会いたいのじゃろ？」

「そうだ。だったら何だ？」

「相変わらずツンツンして可愛気が欠片も無いのう・・・褥の中でもそうなのか気になるのう」

「な、なぜ、き、貴様がテツヤと私の・・・し、褥に関係あるのだ!!」

朝っぱらからこんな台詞を聞いて私は顔を赤くして声を荒げた。

「関係ある。妾はテツヤの“妻”じゃ」

「つ、妻だと?!」

「嘘言わないで下さい。メジュリーヌさん」

リーザ中尉が振り返りメジュリーヌを戒めるように睨んだ。

「嘘など言っておらん。テツヤに抱かれた」

太くて猛々しく熱い剣で何度も貫かれ・・・出された、とメジュリーヌは艶を込めて話す。

私もリーザ中尉もその手の話には疎いので顔を赤くさせるしかない。

「初心じゃのう。テツヤの好みではないな」

「き、貴様に言われたくないっ」

何でこんな・・・見た目が良いだけの女にこうもとぼされなければならないのだ!!

「まぁ良い。さっさと参れ。テツヤは首を長くして待っておる」

言うだけ言うとメジュリーヌは背を向けて歩き出した。

私とリーザ中尉は頷き合い追う事にした。

「それでそなた何故、テツヤに抱かれたいのじゃ？」

メジュリーヌは歩きながら私に問いを投げてきた。

「なぜ貴様に・・・・・・・」

「言ったであろう？妾はテツヤの妻じゃ。妻である妾だが別にテツヤが何人も女子を抱こうと気にせん」

「嫉妬しないのか？」

普通なら嫉妬の一つや二つするだろうに。

「そんな下劣とも言える感情は当の昔に忘れ去った。だが、夫がどの女子と戯れるかは妻として知っておくべきと思うのは不自然か？」

確かに的を射ている・・・・・

他の女を抱くのは許すが、どんな女なのかを調べて把握するのは別に悪くないと思う。

「テツヤは良い男。あちらの世界でも何人もの女子を泣かせて来た」

・・・褥の中で毎夜のように聞かされる話から推測できた、とメジ

ユリーヌは語った。

「どんな事を、話すんだ?」

私はそれに興味を抱き訊ねてみた。

「そうさのう・・・パリと言う都の話をよく聞く」

パリ?

「何処だ?そこは」

「外人部隊がある国の都じゃ。そこで暫く暮らしたらしい」

花の都と謳われているが本人から言わせれば「糞が溜まった場所」らしい。

「そこでテツヤは相棒と暮らしていたらしいが、そこでも女子を泣かせてしまったと語っていた」

歳は１９歳でテツヤ曰く「女神」だと言う・・・・・・・・・・

「その女とは一時だが結婚を考えていたようじゃ」

結婚を考えるほどその娘を愛していたのか・・・・・・・・・・

会った事も無いがどんな女か一度会ってみたいと私は感じた。

あの傲慢かつ傲岸な上に人の神経を逆撫でにして情け容赦のないテツヤに結婚を考えさせた女に興味が湧くのは当たり前と言えるだろ

う。

「まぁ、傭兵と言う仕事上と自分が果たして幸せに出来るのか、という気持ちから別れも言わずに消えた」

メジュリーヌはその時、自嘲した。

「なぜ貴様がそんな笑みを浮かべる」

「テツヤが言っておったのじゃ」

俺は好きな女一人も幸せにできるか心配するほど情けない男だ。

「・・・・・・・・・・」

「ああ見えてあの男は繊細じゃ。だが、それを教えないし悟られないようにしている」

弱いと思われたくないから、とメジュリーヌは語った。

「まぁ、こんな話は終わりじゃ。所で主・・・1角のワイバーンと聞いて何を思う？」

「1角のワイバーン・・・・テツヤを私の前から連れ去り、叔父上を矢で射た女だ」

思い出すと腹底からどうしようもない怒りが込み上げて来る。

それと同時に私の手で始末してやるという気持ちもまた出る。

「それでそなた、あ奴が来たらどうする？」

「殺すに決まっている」

「そんな安直な答えなど聞いておらん」

ピシャリと扇を閉じたメジュリーヌは振り返り私を睨んできた。

「では、どんな答えを貴様は聞きたいのだ」

苛々な気持ちが募り始めてきたので私は訊ねた。

「そなたはテツヤを攫い叔父を射た1角のワイバーンを殺したい。だが、どうやって勝負する気じゃ？」

「それは・・・・・・・・・」

メジュリーヌに指摘されて私は答えに窮した。

1角のワイバーンをどうやって倒すか・・・・・・

考えてはいたが明確な方法は見つけられなかった。

「ワイバーンは群れで行動をする。単独では殆ど無いしおまけに単独でも人間相手なら無敵じゃ。尾には毒も仕込まれている」

その上、空を飛べる・・・・・・

私には翼が無い。

天馬も無い。

仮に天馬があったとしてもワイバーン相手では分が悪い・・・・・・・

「ヘリではあ奴を仕留める事は出来まい。ワイバーンの方が狡猾。しかも、自分の意思もある」

更に乗り手も場数が上の傭兵。

対して私はやっと実戦を経験した・・・・・素人に近い者。

勝てる見込みがまるで無い。

「そなたの師であるヴィルヘルムなどそなたなど瞬殺だ、と言っておった」

ヴィルヘルム師匠がそう言うのだから恐らくその通りの結果になるだろう・・・・・・・・

「だが、私は・・・・・・・・・」

「まだ最後まで言っておらん。話は最後まで聞け、と親に教えられなかったのかえ?」

メジュリーヌにまたもや説教をされた私は項垂れた。

「そなたの気持ちは解かる。妾もテツヤがそのような眼に遭われて些か機嫌が悪い」

かと言って闇雲に殺すと言って挑んでは勝てない。

「では、どうすれば良いのだ?」

また説教される覚悟で私は助言を乞うた。

「やっとそなたの口から聞けたのう」

自分の力ではどうしようもない。

ではどうすれば良いか?

他人に助けを乞う。

私には・・・それが出来なかった。

何でも女という理由で蔑まされたし、父からも「全て自力でやれ」と言われてきた。

何より助けを乞うなど・・・恥以外の何でも無いという考えが根元にはあったから・・・・・・

「テツヤの国にはこんな言葉がある」

メジュリーヌは扇を広げてこう口ずさんだ。

“聞くのは一時の恥、聞かぬは一生の恥”

「どちらも恥には変わりない。じゃが、一時の恥か一生の恥では余りに違いが過ぎるであろう?」

その通りだ、と私は思った。

「妾はそなたが恥を忍んで訊いてくるのを待っておった」

「・・・性格が悪いぞ」

「そなたに言われたくない。まぁ良い。それでは後はテツヤの家で話すとしよう」

そう言ってメジュリーヌはまた歩き出し私達もその後を追った。

幕間：記念品と偵察

東側へと通じる道の上――空を数頭の翼が生えた蜥蜴が飛んでいた。

ワイバーンだ。

その内の1匹には1本の角が頭の上にあった。

1角のワイバーンは遥か昔にはこの空を覆い尽くすほど生息していたと言われている。

だが、人間が1角のワイバーンを乱獲した事で瞬く間に空から居なくなってしまった・・・・・・・・

理由としてこの1角のワイバーンから取れる鱗などで作った鎧は最上級に値する物だったから、角は難病にも効く万能薬だったから・・・・・・・・

これが理由だった。

しかし、狩るにしても個体数などを考えてやらなければならない。

それなのに後先考えずに乱獲した結果・・・数は減り希少価値が高まった。

そんな1角のワイバーンに乗る傭兵。

半分まで隠した兜を被って両肩をワイバーンの爪がそのまま付いた

肩当てがある鎧を着ていた。

腰には長剣を差し、手には槍が握られている。

兜から金糸の髪が惜し気もなく外に出て風に乗って靡いているのがまた神々しい美しさを出していた。

「団長っ。あそこです」

右から部下と思われる者がワイバーンに乗って現れ、槍で方角を差した。

「全員、降下」

透き通るような声で団長と呼ばれた者ーーー女は命令し真っ先に方角へと降下し部下達もそれに倣った。

地面擦れ擦れで着地した女はワイバーンから降りて周りを見回した。

「何だい？これは」

目の前にあるのは黒い大きな残骸。

人は居なかった。

「あの空挺とか名乗っていた傭兵達の乗り物ですね」

部下の一人が地面に唾を吐きながら女の質問とも言える言葉に答えた。

「俺らが居れば事足りるっていうのに・・・馬鹿にしやがって」

自分達ワイバーンが居れば、こんな戦い直ぐに終われる。

それなのにあろう事か似たような者ーーー同業者を呼び出すのだから誇りは大きく傷付けられたと言って良いだろう。

「愚痴を零しても始まらないよ。それにあの傭兵が破壊してくれたからあたしらにとっては好都合さ」

これで自分達が活躍できる、と女は語り辺りを歩き始めた。

『見るからに爆発に巻き込まれた、という所ね。それにしてもあの男・・・やるわね』

自分が拷問した男・・・名はタカミ・テツヤ。

元正規軍に所属していた傭兵だと名乗り自分の拷問にも強がりを言ってみせた。

これまで何度となく拷問はしてきたが、大抵は直ぐに吐いた。

それなのにあの男はまったく口を割らなかった。

それだけでも興味が湧くというもの。

何よりあの男は自分に傷を付けた・・・・・・

ズキッ

微かに肩へ痛みが走る。

無意識にその肩を抑えた。

『あんな距離で、しかもこっちは暗闇なのによく矢ごとあたしを撃てたものだわ』

タカミ・テツヤとフィーナ・マレル、それにもう一人とヴィールング・マレルが脱出する際、自分はヴィールング・マレルに矢を射た。

見事に当たり止めを刺そうとした。

そこへフィーナ・マレルも重なったから好都合と思っていたが、それをあの男が止めた。

更に矢を射ろうとしたが、タカミ・テツヤによってそれは失敗した。

自分の肩を掠めたのは矢ではなかった。

矢より鋭く熱かった・・・・・・・・

夜目は良い方だがあの男はそれ以上だ。

『今度はあんたをタップリと虐めてから殺して上げる・・・・・・・・・』

残酷な笑みを浮かべながら何かないかと探していたが・・・光る物を発見した。

屈んで手に取って見ると白銀の色をした物だった。

「こいつは・・・・・・・・」

タカミ・テツヤが持っていた拳銃と呼ばれる物と同じだ。

やり方は以前空挺なんとかという奴等が使っているのを見ていたから分かる。

試しに使用して見た。

出っ張った部分を引くと、親指で起こす部分が同時に下へと傾いた。

後は丸い穴の部分を引けば出来る。

腕を伸ばし撃ってみると腕に強い衝撃が来たが、ワイバーンの手綱を握る自分から言わせればそれ程ではない。

「・・・記念にもらっておくよ」

彼女はそれを鎧のベルトに挟むと部下達に帰る事を伝えた。

ワイバーンに跨り再び空へと舞い上がる。

『今度はあんたら2人を殺してやる』

そしてタカミ・テツヤを殺す、と彼女は決意して城へと戻った。

だが、そんな姿を見つめる一匹の黒い狼が見えた。

サルバーナ王国に居る狼にしては嫌に大きい。

「・・・なるほど。確かに厄介な相手だな」

あの腹が壊れそうな女では勝ち目など万に一つも無い。

狼が人語を口にした。

そして後ろ足で立ち上がった。

「我が主に伝えるとするか。まったく我が主もお優しい方だ」

自分を４度も殺そうとした女に情を掛けるのだから・・・・・・・・・

だが・・・・・・・・・

「そんな性格だからこそ女神にも愛されているのであろうな」

狼は苦笑して背を向けて森の中へと消えて行った。

第百六十八章：日の女王と夜の女王

私、リーザ中尉、メジュリーヌの3人は城の外にある村「ヴィルップ」の一番端の家に到着した。

「ここがテツヤの家か」

私はあの男にしては随分と小奇麗な佇まいだと外の面を見て感じた。

「そうじゃ。妾とテツヤの“愛の巣”じゃ」

メジュリーヌはリーザ中尉を見てからほくそ笑んだ。

リーザ中尉はそれに対して対抗意識をメラメラと燃やしたのが眼で分かった・・・・・・

「さて、行くか」

メジュリーヌはドアを開けた。

続いて私達も中に入る。

中は外と同じく小奇麗にされていた・・・・・・私は我が眼を疑った。

私は眼が可笑しくなったか？

自分の両目をゴシゴシと擦り改めて見たが・・・変わらなかった。

「よぉ、来たか」

背後を振り返る男ーーーテツヤが居た。

何時も着ている迷彩服ではなく私服と思われる格好だった。

黒の革製の上着に濃紺色のズボン。

頭には赤いバンダナを巻いて口には煙草を銜えている・・・・・・・・・

それを見てリーザ中尉は鼻血を出していた。

「り、リーザ中尉・・・は、鼻血が・・・・・・」

私が指摘するとリーザ中尉にメジュリーヌがハンカチを渡した。

「この娘、テツヤの事になると何時もこうなのだ」

鼻血を出すか、または日記を書きながら妄想するか・・・・・・

これを聞いた私は重症だ、と勝手に思ってしまった。

「な、何をしているのだ?」

私は改めてテツヤに訊ねた。

「見て分からねぇか?掃除だ」

これでも綺麗好きだと言われたが・・・・・・・・・

「見た目からは想像できないぞ」

「うるせぇ。それよりお帰り。メジュリーヌ」

テツヤは煙草を灰皿に捨ててメジュリーヌに言った。

「ただいま。テツヤ」

そう言ってメジュリーヌはテツヤに近付くと口付けを交わした。

「・・・・・・・・・」

私はそれを見て拳を握り締めた。

何だか見ていて胸糞悪い・・・・・・・・

メジュリーヌは私の方を見て意地悪な笑みを浮かべる。

リーザ中尉もまた悔しそうに歯軋りしていた。

唇から離れたメジュリーヌはこう言ってきた。

「妾達の間で決めた事じゃよ。帰って来たら、お帰りと言い口付けを交わす。そして家事なども分担してやるとな」

今の内に知っておけと私は言われてそれに頷く事で怒りを抑え込んだ。

「あら、帰って来たの？メジュリーヌさん」

また声がした。

一流の職人が精魂込めて作り上げた楽器のように透き通った声で私は一瞬だが楽器が声を発しているのか？と思ったほどだ。

しかし、実際はそうではなく奥から出て来たのは女性だった。

だが、私はまたもや自分の眼を疑って擦った。

衣服こそ平民の格好だが、身体から放たれる高貴な気は平民の者ではない。

その上に銀色の髪と紫色の瞳となれば明らかに高貴な出だと推測してしまう。

私はこの方に見覚えがある。

「・・・サラ様」

「間違えないで。私は“日の女王”じゃないわ」

目の前に立つ女王は気分を害した様子も無い口調で軽く窘めてきた。

日の女王？

「私は“夜の女王”なの」

サラ様を日の女王と称し自分は夜の女王と称した目の前の女性は何者なのだ？

「そうか。そなたは知らなかったのじゃな」

メジュリーヌは私が戸惑うのを見て一人で納得した。

「まぁ、座れ」

テツヤは椅子に腰を降ろすと私も倣うように腰を降ろした。

「1角のワイバーンより先に教える事がある」

テツヤは私を黒い真珠の瞳で見ながら言ってきた。

初めてまともにこの男の眼を見るが・・・綺麗だ、と私は素直に思いながら頷き続きを促した。

「これを知っているのは、ゲンハルト、プロイセン、ランドルフ、レオン、俺、メジュリーヌ、リーシャ。そしてお前も知る」

女王陛下には何があろうと言うな、と言われた。

「それは、あの方にとって厄介な事だからか？」

「そうだ。それにこいつも知られたくない」

だが、私はここに呼ばれたから何れは教える積りだったのかもしれない。

「女王には言わないと約束できるか？」

テツヤは確認する様に私に訊ねてきた。

「・・・このフィーナ・マレル。何があろうと口を閉ざす」

私はテツヤの確認である問いに答えた。

「宜しい。ミレーネ、話して良いか？」

テツヤはミレーネと呼んだ女性に視線を向けた。

「えぇ。良いわ」

「では、話す」

テツヤは再び私に視線を戻し説明を始めた。

「そんな事が・・・・・・・・」

私は最後まで聞き終えてからも言葉が繋がらなかった。

許されるのか？

双子で銀色の髪と紫色の瞳を持つ子だから殺しても良いのか？

幾ら両親と容姿が違うと言って自分の腹に宿されていた赤ん坊を躊躇いもせず殺せるのか？

「人間と言うのは動物の中でも臆病で狡猾じゃからのう」

メジュリーヌはテツヤにもたれ掛りながら呟いた。

「自分達とは違う容姿、能力・・・とにかく自分には無い物や特殊な物を持っていると妬むし怖がる」

例え自分の子だろうと躊躇わないとメジュリーヌは淡々とした口調で語り続けた。

「もっとも世の中そういう輩だけではない」

現にこの方――ミレーネ様が生きているのもゲンハルト様とプロイセン様が森に捨てるだけだったから。

娼婦街の長が見つけて憐れに思い助けたから。

そういう人間も居るのだ。

「この事は女王陛下には言うな。言えば要らぬ厄介事が増えるだけだ」

ミレーネ様を神輿としてまたこんな状態になる可能性が極めて高い。

本人に気が無くても勝手に周りが騒ぎ出す・・・・・・・・・・・・

だから、誰も言わなかった。

「分かった」

私は何時も以上に重く感じる口を動かして頷いた。

「さぁ、ここからはお前さんの話だ」

テツヤは煙草に火を点けてから私に言った。

「一言だけ言う。お前ではあいつに勝てない」

「・・・相変わらずお前は人の神経を逆撫でするな」

助けに来た時もそうだが、この男は人の神経を逆撫でする事に関して天才だとさえ私は思い感動さえ覚えた。

「生まれつきだ」

テツヤは軽い口調で答えると煙を吐いてみせた。

「さぁて、ここからが本命だ。お前はあの女をどうしたい？」

「決まっている。落とし前を着ける」

「だが、一人では勝てない。ならどうする？」

「お前の力を借りたい」

私の言葉にテツヤは上出来だ、と言った。

「ヴィルヘルムの教育もやっと芽が出たな。今頃は涙ウルウルだろうな」

「茶化すな。それで貸してくれるのか？」

「貸すさ。だが、あいつだけを倒すのでは駄目だ」

根こそぎ倒さなければ、とテツヤは続けた。

「ここからはランドルフ達が帰ってから説明するが敵はまた来る」

「そうだな。ヘリを無くしたがワイバーンが居る。そいつらで攻めつつまた攻撃してくるか？」

「だろうな。ワイバーンがあいつらにとっては唯一空から攻撃できる切り札だ」

そいつらを倒せば奴等を追い出す事が出来る可能性が高い、とテツヤは言った。

首都を解放できる・・・・・・・・

我々の悲願と言えるかもしれない。

「まぁ、詳しい事はランドルフ達が帰り次第改めて説明する」

と言う訳で、この話は終わり帰れと言われた。

「な、なぜだ？わ、私は・・・・・・・・」

「抱くと言う約束か？」

「そ、そうだ！！」

顔が真っ赤になるのを感じながら私はテツヤの言葉に頷いた。

「今は昼間だぞ？」

「昼間だから抱けないとでも言うのかっ」

自分で何を言っているんだ？言いたくなる台詞が出て来る。

「いいや。後ろの女がお前等2人に用があるんだよ」

テツヤが指差し振り返ると・・・・・・・・・・・・

「便所掃除を放り出して少佐と逢引きとは・・・・良い度胸だね」

腕を組んだミーシャ大尉が立っていた。

「い、いえ、これには・・・・・・・・」

「言い訳は無用。追加だ。2週間に変更する」

これを言われて私とリーザ中尉は両膝を着いて項垂れた。

第百六十九章：これからが勝負（前書き）

どうも、やっと更新できました。

最近は忙しくてその日に更新できないです。（汗）

ですが、今日は会社が休みなので纏めて更新します！！

第百六十九章：これからが勝負

私達が城へと到着したのはテツヤ殿達が先に行ってから3日後だった。

帰る時の方がどちらかと言えば速い気がしたが、それはそれで良いと思う。

その間、敵が来なかった事に安堵こそしたが態勢を立て直しているのだろうと思い直す。

城へと到着した私達はゲンハルト様達に報告しに向かった。

と言っても何と言えば良いのやら・・・・・・・・・・

まぁ・・・ありのままに伝えるのが一番だな。

そう思い直し私、ヘンさん、ヴィン・ルビー、軍曹の4人はゲンハルト様の居るテントに向かった。

「おぉ、来たか」

ゲンハルト様はイザベルさんとチェスをしている最中だったが、私を見るなり椅子から立とうとした。

だが、それをイザベルさんが頭から抑えて止めた。

「逃げるなんて卑怯よ」

「誰が逃げるか！ランドルフ達が帰って来たんだ。出迎えるだけだ！！」

ゲンハルト様はイザベルさんの手を乱暴にではなく優しく退けてから私達と向き合う様に立った。

「ゲンハルト閣下。ただ今、帰還しました」

軍曹が敬礼をしてゲンハルト様に報告した。

「ご苦労だった。とは言え・・・無駄骨だったな」

「まったくだ。もっと速く脱出してくれたら良かったのに・・・・・・」

軍曹は愚痴をネチネチと言っているが、顔は苦笑していた。

「そう言うな。それでスリーと名乗る者は何処だ？」

「ここに」

私達の背後からスリーが現れた。

と言っても距離はあるが。

「そなたがスリーか？」

「はい。ヴィールング殿は何処に？」

「司教のエドリアス殿が看病をしている。意識は目覚めたから話す

事も出来る筈だ」

「ありがとうございます」

淡々とスリーは喋りながら礼を述べた。

「私の方こそ礼を言おう。テツヤを助けてくれたのだからな」

「厳密に言えば違います。私達はあの男を最初は殺す気でした」

これに私達は驚いたが、ヘンさんだけは平常だった。

「一人だけでも連れて行くのは大変。それなのにもう一人もは辛い。その上、傭兵と言う身分だから・・・だろ?」

「その通りだ。だが、そこへフィーナ様が来た。そしてあの男を助けると言われた」

だから、助けたとスリーは語った。

「団長に感謝だ。それでこれからどうするんだ?」

「我々の考えもといヴィールング隊長の考えを言えば、もはやあちらには戻れないからこちらに付く」

「だろうな。まぁそれはテツヤが来てから話すとして・・・行けよ」

「そうする」

スリーはそう言ってヘンさんが指差した方向へと足を向けた。

「あの男は感情が無いのか？」

ゲンハルト様がヘンさんに訊ねるとヘンさんは女神の抱擁を銜えながら答えた。

「あるさ。ただ、俺らの仕事は裏方だ。それにあいつは極端なほど感情が表に出ないんだ」

口調で感情を判断するしかない、とヘンさんは続けた。

「そうか。それにしても、まさかヴィールング殿があのような状態で帰って来るとは驚いたぞ」

「仕方無ねぇよ。それよりゲンハルト閣下。女王陛下にはテツヤが帰って来た事を伝えたのか？」

「まだだ。あれから床に臥せって会えない」

内乱からテツヤ殿の事・・・・・・色々な事が沢山来て疲れが出たのだろう、とエドリアス大尉は語ったようだ。

「それじゃ、旦那に見舞いでもさせないといけませんね」

「あぁ。テツヤは午後こちらに来る。それまでは休んでくれ」

「了解。おい、行くぞ」

軍曹は形だけの敬礼をすると私達を連れて去った。

「さぁて、旦那が来るまでどうするかね？」

「あの軍曹。出来るなら、軍曹の軍時代の話を聞きたいんですけど」

ヴィン・ルビーが丁寧な口調でイーグル軍曹に提案した。

「俺の？まぁ、良いぜ」

「すいません」

「そんな口調は作戦中でもするなよ。気色悪い。それじゃ演習場で話すか」

私達は演習場へと向かった。

演習場には誰も居らずちょうど良かった。

「さぁて、それじゃ俺が軍に入ろうとした切っ掛けから話すか」

私達は頷いた。

「俺の家は平凡な家庭だった。だが、頭の方は良かった」

父親は警察官の幹部、母親は検察官（犯罪者をどのような罪にするかを訴える役目）、兄は母親とは反対に罪人を弁護する弁護士になったらしい。

「弟は大学の研究員だが、将来は何処かの施設に入って研究をしたいと言っていた」

随分と凄い家庭に居たのだな、と私達は思った。

「まぁ、俺はその中で出来が悪いと言えば良いのかな？頭より体で勝負だった」

それ以前に父親も兄も軍隊を出てからそれぞれの職業に入ったらしいからちょうど良かったようだ。

「兄貴は空軍だったが、俺は親父と同じ陸軍に入隊した」

それから第７５レンジャー連隊へと入隊したらしい。

「そのレンジャー連隊ってのは具体的にどんな任務をするんですか？」

ヴィン・ルビーがここで質問した。

「空挺部隊とか偵察部隊の色合いが強いな。どちらかと言うとサポート役だ。ここを出た者たちはより上の特殊部隊に行くから育成機関的な所もある」

前に聞いた話だとグリーン・ベレーに入隊する者が多いからグリーン・ベレー養成機関と言われていた筈だ。

「そんな凄い所に居たんですか・・・・・・」

ヴィン・ルビーは見た目からは想像も出来ないのか心底驚いていた。

「あぁ。だが、親父に話したら怒られたぜ」

「どうしてですか？」

普通なら軍の精鋭に入れたともなれば手を上げて喜ぶ筈だ、と私は思ったしヴィン・ルビーも同じだった。

「お前では上に行けない、と言われた」

上とは階級の事だったらしい。

「准将とかに昇進できるなら手を叩いて喜ぶが、生憎と俺には見込みが無いと言いたかったようだ」

実際そうだが、と軍曹は笑ってみせた。

「まぁ、階級こそ軍曹だが、グリーン・ベレーに入隊したんだから上には行けたな」

確かにグリーン・ベレーの方が上だから行けた事に変わりは無い。

「そのグリーン・ベレーはどんな任務をするんですか？」

「敵対国家に潜入して敵の中に味方を作る。またゲリラ戦を行う」

ヘンさんが所属していた所を似ている所がある、と軍曹は語りヘンさんも頷いた。

「確かに。敵国に潜入して味方を作ったりはしたな」

それによって情報を収集したり食料などを手に入れた、とヘンさんは昔を思い出すように語った。

「この仕事に大事なのは語学力だ。そして相手を理解する気持ちだな」

グリーン・ベレーは「戦う外交官」と言われている、と軍曹は言った。

「味方を作るには彼等の文化や習慣を勉強しなければならない」

少人数で彼等と会い彼等と共に寝食を共にして力を貸すなど長い時間を掛けて信頼を得る。

それから初めて味方に出来ると軍曹は更に続けた。

「その辺は先王には無かったな」

ヘンさんは煙草に火を点けて呟いた。

「俺らがせっかく苦労して信頼を得た部族を攻撃した事もあった」

お陰で水の泡になった、とヘンさんは言い煙を吐いた。

「とことん先王は戦に向いてないな」

「まったくだ」

軍曹の言葉にヘンさんは頷いた。

軍曹は煙草一一一燃える女に火を点けて煙を吐きながら空を見上げた。

「さぁて、旦那も帰ってきた事だしこれからが勝負だ」

「これから敵はどんな手を使うと思いますか？」

私の問いに軍曹は空から私に顔を向けた。

「ヘリがやられたから先ずは軍の整理だな」

ヘリが無くては空挺部隊を運送出来ない。

それから被害を把握し整理する。

それにどれ位の時間が掛るのか？

「短く見積もって2、3日だな。それからまたここに来るのに凡そ7日から10日。ワイバーンならそれよりも速いだろう」

「その間に俺達も作戦を練って迎え撃つか？」

ヘンさんの言葉に軍曹は頷いて灰を指で叩き落とした。

だが、ここからはテツヤ殿が来て詳しく話し合う事になった。

「さぁて、今度は何を話す？」

「それじゃ・・・軍曹が振られた話を」

私がふざけて言うと軍曹は私を羽交い絞めにしてきた。

「良い度胸だな。もやし。自分がモテるからって調子こいてんじゃねぇぞ！！」

「く、苦しいですっ」

「ちょ、軍曹ッ」

「おい、やり過ぎだ」

ヘンさんとヴィン・ルビーが軍曹を止めに入る。

「うるせぇ！てめぇらもやしは今、女にモテモテなんだぞ？男として見過ごして良いのか？！」

『それとこれとは関係ない』

口を揃えて2人は言うと軍曹から私を放そうとした。

第百七十章：敵の動向

軍曹の羽交い絞めからやっと解放された私はその後、皆で昼食を頂き午後になってから会議室へと向かった。

会議室には既にゲンハルト様、プロイセン様、ヴィルヘルム元伯爵、ワイド中尉、ミーシャ大尉、エドリアス大尉が居た。

「テツヤ殿達はまだですか？」

私がミーシャ大尉に訊ねるとミーシャ大尉は頷いた。

「あぁ。だが、もう直ぐ来るさ」

「そう言えば、要らない・・・フィーナ中尉とリーザ中尉の罰は何ですか？」

あの2人を銃殺だ、と叫んでいたミーシャ大尉だがそんな事はしないと私は踏んでいた。

「便所掃除」

煙草を吸いながらミーシャ大尉は答えた。

「便所掃除ですか。全部、ですよね？」

「当たり前だよ。それに糞は全部溜めてある」

それを敵が来たら掛ける、とミーシャ大尉は言い私は想像するだけ

で嫌になった。

そんな物を掛けられては敵ながら同情してしまう。

「あいつらも時期に来るだろうが、湯に浸かる時間は与えてある」

そうでないと臭くて堪らない、とミーシャ大尉は笑った。

ある意味、銃殺よりも酷い罰だ。

便所掃除をしながら排泄物を溜めなければならないのだから・・・・・・・・

そんな罰を言い渡された2人に少なからず同情してしまう。

だからと言って代わりになろうなんて人の良い事は思わないが。

それから暫くしてレオン、ガリシャ、ガルムが来た。

「やぁ、ランドルフ君」

「やぁ、レオン」

私とレオンは挨拶を交わした。

「・・・馬鹿」

ガリシャは私を見るなり小さく呟いた。

「な、何かしたかい？」

私は身に覚えが無いので戸惑ってしまう。

「あたしを置いて勝手に一人で行くから馬鹿なのっ」

ふんっ、とガリシャは顔を横に向けてしまい拗ねた。

「い、いや、君は別に来なくても良いと・・・・・」

「あたしの意見を聞きもしないで勝手に決めないでよ!!」

あたしはあんたと一緒に行きたかった、と怒鳴られた私は直ぐに謝罪した。

「ご、ごめん。た、ただ、言い訳だけど君の身体を思って報告は私だけで良いと判断したんだ」

ここに帰るまでの間、寒いと言っていたのを私は口にした。

「風邪でも引かれたら大変だと思ったんだ。君は私の“大切”な観測手だからね」

大切という単語が効いたのかガリシャは幾分か機嫌が良くなり「今度はちゃんとあたしの意見を聞いて」と言って顔を向けてくれた。

「そうするよ。ごめん」

私は頷きながらもう一度、謝罪した。

「良いよ。もう」

「お二人さん。お熱いねー」

ヒューヒュー、と軍曹が左右の人差し指と中指を唇に当てて鳴らした。

「若いって良いね。それだけで十分だもの」

あたしの青春なんて、と珍しくミーシャ大尉は過去を思い出したかのように遠い眼をした。

まぁ、男として育てられたと言っていたから・・・余り良い青春を送れなかったんだろうと私は推測した。

「遅れて申し訳ない」

「遅れました」

そこへ要らない荷物ことフィーナ中尉とリーザ中尉が現れた。

2人も湯に浸かったのだろう、髪が少し濡れていた・・・・・

お陰で臭いがしないから良いが。

「さぁて、後は少佐だけだね」

ミーシャ大尉は煙草ーーー氷の女王を灰皿に捨てて腕を組んだ。

「あの、エドリアス大尉。叔父上の容態は・・・・・・・・」

要らない荷物はエドリアス大尉に叔父上であるヴィールング殿の容態を訊ねた。

やはり身内があのような状態であると心配なのだろう。

「応急手当てが迅速に行われたので問題ありません。お会いになられなかったのですか？」

「叔父より男の方へ会いに行ったからね」

「み、ミーシャ大尉っ」

要らない荷物は顔を赤くしながらミーシャ大尉に甲高い声で叫んだ。

「本当の事だろ？まぁそれは置いとくとして・・・あんた、叔父に矢を射た相手を知っているのかい？」

「・・・はい。1角のワイバーンに跨る女傭兵。私より場数・実力ともに上です」

要らない荷物は明らかに変わった、と私は改めて実感した。

以前ならこんな台詞を言ったりしない。

それを素直に認めたのだから変化したのだ。

ふとヴィルヘルム元伯爵を見ればハンカチで眼元を拭っていた・・・

・・・・・

「うぅぅぅ・・・やっと、やっと俺の教育が芽を出したか。ふぅぅ

うううう・・・・・・」

明らかに演技なのだが、言葉は満更でもなさそうだ。

まぁ、この女ほど石頭な女はそう居ない。

そんな女を教育したのだから演技だろうと泣きたくもなるだろう。

「で、あんたとしてはどうしたい？」

ミーシャ大尉の問いはどう倒すか、という意味合いが含まれている気がした。

「私一人では勝ち目が欠片もありません。ですから、何とぞ皆さんのお力を貸して下さい」

・・・・もはや別人だ。

しかし、本人だ。

私は一刻も早くこの偏屈な評価を変えないと不味いな、と実感した。

「本当に変わったね。やっぱりこれかい？」

ミーシャ大尉は親指を立てた。

「何ですか？それは」

「男って意味だよ」

女の場合は小指だ、とミーシャ大尉は説明した。

「そう・・・ですね」

これに要らない荷物は素直に頷いた。

「おやおや。おっと・・・どうやら来たようだよ」

私達は扉に眼を移した。

扉から入って来たのはテツヤ殿だった。

迷彩服にブーニー・ハット姿。

未だに髭は剃られていないが。

「よぉ、待たせたな」

テツヤ殿は片手を上げて私達に笑いかけた。

その隣にはメジュリーヌ殿が立ちテツヤ殿の腕に自身の腕を絡ませている。

それで大きな胸が・・・腕に来るのにまるでテツヤ殿は気にしていないから大した物だ。

「さぁて、では会議を始めるとするか」

テツヤ殿が席に座ると会議は始まった。

「先ず敵の方を俺から説明する」

テツヤ殿は簡潔に敵の状況を説明した。

「・・・あいつを地獄へ戻しましたか」

ミーシャ大尉はさすが少佐、と褒めながらこれで厄介な人物が一人消えたと言った。

「あぁ。ヘリも片付けたから痛手だ」

私達がする事をテツヤ殿がやった、と知り本当に無駄骨だと思い知らされる。

「では、今度はワイバーンを先行させるでしょうね」

「だが、夜は飛べない。かと言ってまた城に戻るのでは時間の無駄だ」

確かにその通りだ。

ワイバーンは強いが夜は飛べない。

だからと言って一々城に戻っては時間の無駄だし兵たちの体力も減るのは眼に見えている。

そうなると・・・・・・・・

「何処かに前線基地を作る積りですかね？」

そう・・・ここに来るまでの中間地点ーーー前線基地なる物を作れ
ばわざわざ城まで戻る必要も無いし、攻略に際しても役立つ。

「何処に建てるのか・・・エドリアス大尉。お前なら何処に建てる
？」

「そうですね・・・アパッチが墜落した場所ーーーここが良いかと
思います」

エドリアス大尉は地図でアパッチが墜落もとい撃墜した場所を差し
た。

「ここでしたらここまで然して離れておりませんし、湖もあるから
水の心配もありません」

城からは離れているが、ここに建てれば先ずは土台が出来るとエド
リアス大尉は説明した。

「そうか。他に候補はあるか？」

「ここ以外となりますと地形などを考えると難しいです。やはり、
ここが最良ですね」

敵にしても私達にしても・・・・・・・・

「と言うと、私達の前線基地としても最良という事ですか」

私の確認とも取れる言葉にエドリアス大尉は頷いた。

「私達も何時までもここに籠っている訳にはいきませんからね。た

だし、今は下手に出ない方が良いです」

敵が作った基地を頂くのです、とエドリアス大尉は言った。

「あんたは司教より別な職業に就いていた方が良いな」

テツヤ殿は心底面白いと笑った。

「自分でもそう思っておりますよ。ですが、代わりが居ませんから仕方ありません」

「だな。恐らく敵はここに前線基地を作りワイバーンを配備する」

そして朝になったら攻撃し夜になったら帰るを繰り返しながら味方が来るのを待つ事だろう、とテツヤ殿は予想した。

「恐らく歩兵も同時に出発させるだろうが、ワイバーンの方が速いから事実上ワイバーンの乗り手が基地を作るだろう」

そこで、とテツヤ殿は区切りリーザ中尉を見た。

「リーザ中尉。ワイバーン達が来たら天馬部隊を率いて夜襲しろ」

爆弾を落としたり糞尿を落としたり・・・とにかく徹底的に嫌がらせをしろ、とテツヤ殿は命令した。

「はっ。その為に溜めておりますからね」

奴等に眼に物を見せてみせます、とリーザ中尉は熱く語ってみせた。

「その意気だ」

テツヤ殿は笑いながら煙草を吸い煙を吐いた。

第百七十一章：変わり過ぎる

会議はそれからも続き、前線基地を敵から奪う算段に移った。

エドリアス大尉の考えでは、湖を中に入れる形で砦を築くという。

「湖は凍っておりませんしここから飲み水を確保できます」

更に言えばその水で堀などを作れるとも説明してくれた。

「大きさはワイバーンを全て中に収容できる位だと思います。そうでなければ半分程度かもしれませんね」

「ワイバーンを収容するにはどうするんだ？」

テツヤ殿がここで質問した。

「屋根付きの小屋が一番典型的です。ただし、直ぐに飛び立てるように敢えて屋根を付けない小屋もあります」

「なるほど。で、あの地形ではどんな砦があると思う？」

「そうですね・・・堀が先ずあり見張り台なども勿論あるでしょう。その他に上げるとすれば私達が立て籠った砦のように銃眼などを作る可能性も高いですね」

ワイバーンだけでなくフォース・リーコンや空挺部隊を配置すれば、の話だ。

だが、どちらにせよ彼等はヘリが無い。
そうなると移動は徒歩という事になるだろう。

「ワイバーンには乗れないのか？」

「乗れます。ただし、ワイバーンは基本的に乗り手以外の者を滅多に乗せません」

気に入らなければ噛み殺す、とエドリアス大尉は答えた。

「となると・・・乗せないという考えが妥当か」

「恐らく。そしてそうなると必然的に乗り手が砦作りをする羽目になります」

そこへ我々が嫌がらせをすれば、精神的にも肉体的にも追い詰められる・・・・・・

「ならワイバーンしか居ない間が勝負だな」

テツヤ殿は煙草一一一女神の抱擁を吸いながら断言した。

「奴等をこちらに引き寄せる。その間に砦を落とせ。夜になるまで迎撃準備をしておけば問題ない」

その任務は・・・・・・・・・・

「フィーナ中尉。貴様と親衛騎士団に任せる」

「わ、私ですか？」

いら・・・う、ううんっ・・・・フィーナ中尉は自分が任命された事に驚きを隠せなかった。

「そうだ。あいつ等は鍛えこそしたが、まだ肌で実戦と言う物を体験していない。お前は体験した上に団長だ」

なら、お前が指揮を取り体験させる事が使命だとテツヤ殿は煙を吐きながら続けた。

「し、しかし・・・・・・・」

何時に無く自信が無さそうな・・・う、ううんっ・・・フィーナ中尉に私は驚いたがテツヤ殿はまったく気にせずに言葉を続けた。

「何もお前等だけでやれとは言っていない。お前以外の者も出すが、あくまでサポート役だ」

つまり手助けはするが、最初と最後はいら・・・う、ううんっ・・・フィーナ中尉達でやれという事だ。

どうも要らない荷物と言ってしまうな。

などと私は嘆息しながらテツヤ殿に訊ねた。

「そのサポート役には誰が？」

「イーグル１等軍曹を指揮官にお前、レオン、ガリシャ、ガルム、ヘンで十分だろう」

「テツヤ殿は来ないんですか？」

「俺は“阿婆擦れ女”の相手をする」

鞭で引っ叩かれた借りがある、とテツヤ殿は言った。

「鞭で？旦那ー。ＳＭプレイをされたんですか？」

軍曹は卑猥な口調でテツヤ殿を詰ってきた。

「あぁ。まったく、あれは酷かったぜ。俺に気持ち良いか？なんて訊いてきたんだぞ」

「かー、もう殆ど女王・・・・ひぃ！！」

軍曹はメジュリーヌさんを見ながら言ったが、直ぐに言わなくても解かる展開となった・・・・・・・

「貴様、妾を下賤なワイバーンの乗り手と同格と見なすか？」

メジュリーヌさんは黒塗りのリボルバーを軍曹の鼻先に向けて問い掛けた。

「い、いやだなー。そんなつもりは・・・・・・・」

「妾はドラゴンじゃ。あのように翼を得る為に前足を捨てた蜥蜴と一緒にするな。そんな事をする女と一緒にするな」

心底気に入らないようだ。

「だ、だけど、あんただって、俺の頭をヒールで・・・・・ぎゃあ!!」

最後まで言う前にまた軍曹は最初の時と同じくメジュリーヌさんにヒールの高い靴の底でグリグリと踏み付けられた。

テーブルに乗って、軍曹の頭をテーブルに擦り付けるその様は・・・どう見ても女王様だ。

「これが望みか。貴様は変人じゃのう・・・・・・・」

縦眼のオッド・アイを細めてメジュリーヌさんはさも汚らしいとばかりに軍曹を詰ってみせた。

「あ、ああ・・・もっと、もっと踏んで下さい・・・・って違う!俺は正常だ!!」

最初こそ流されそうになっていたが、直ぐに持ち直した軍曹。

だが、私達の眼は何処までも冷たい・・・・・・・・

特に女性陣の眼差しは汚物でも見る様な勢いだ。

「な、何だよっ。俺をそんな眼差しで見るなよ!!」

軍曹は弁解するように言ってくるが、踏まれた状態でしかも顔がニヤケているからどうも説得力が無い。

「どうした、気持ち良くないのかえ?」

グリグリ、とメジュリーヌさんが靴底で軍曹の頭を詰ると軍曹はまたも恍惚な顔をする。

「メジュリーヌ。もう止めておけ。免疫が無い奴らには毒だ」

テツヤ殿が言うとメジュリーヌさんは軍曹の頭から靴を退けてテツヤ殿に寄り掛かった。

「のうテツヤ。今夜は、この性欲の塊が言ったSMというのをやらないか？」

「誰がするか。やるならイーグルにしろ」

「妾はそなたにして欲しいのじゃがのう・・・・・・・・」

そう言ってメジュリーヌさんは・・・・フィーナ中尉を見た。

今度はちゃんと言えたと安堵しながら私もフィーナ中尉を見るが、リーザ中尉と同じく険しい顔で睨んでいた。

2人も美人だから睨まれると怖い。

だが、メジュリーヌさんは何処吹く風でテツヤ殿に寄り掛かる。

いや、さっきよりも更に身体を密着させて豊満な胸を顔に押し付けている。

それなのにテツヤ殿は平常心を保っているから大した物だ。

「あー、テツヤよ。そろそろ会議の続きをせんか？」

もう直ぐ夕飯の時間だ、とゲンハルト様は言った。

「今日は時間通りに帰って来い、とイザベルに厳命されているのだ」

遅れたら飯は無し、と言われたらしい。

「なら、続きをやるか」

テツヤ殿がそう言うと皆はまた会議を再開した。

「イーグル達がサポートをするが、あくまでサポートだ。それに頼りに過ぎるなよ？」

自分達だけでやり遂げると思え、とテツヤ殿は・・・・フィーナ中尉に釘を刺すように言った。

「はっ。肝に命じておきます」

「そうしておけ。明日からお前と親衛騎士団はどうやって攻め落とすのかを考えろ。場所に行って下見して来ても良い」

敵はまだ来ない、とテツヤ殿は言い溜まった灰を灰皿に叩き落とした。

「分かりました。では、今日にでも彼等に説明しておきます」

「そうしろ。ただし、罰はちゃんとやれよ？」

そうでないと罰の意味が無いとテツヤ殿は言って・・・フィーナ中尉は残念そうに顔を項垂れた。

「そう落ち込むな。そうだな・・・もし、作戦を成功させたらご褒美に俺を好きにして良いぞ」

抱く約束は守るが、自分をどうしようと好きにしろとテツヤ殿は爆弾発言をした。

「な、なななななな・・・・・・・・・」

かなり動揺している・・・フィーナ中尉だが、逆にリーザ中尉は「何て羨ましい」と言ってみせた。

「どうした？嫌か？」

「と、とんでもない！必ずや落としてみせます！！」

・・・以前なら絶対に口が裂けても言わない台詞を目の前の女ーーフィーナ中尉は声を荒げて言った。

本当に・・・変わった。

変わり過ぎて気味が悪いと感じてしまうのは私だけではあるまい。

「・・・・変わり過ぎ、だよね？」

現にレオンが私に小声で話し掛けてきたのが良い証拠だ。

「だよね。何だか・・・気味が悪いよ」

以前の態度にも問題ありだが、今の態度もまた問題があると感じてしまう。

「まぁ、テツヤ殿に抱かれても・・・結婚なんてしない、よね？」

「この2人が結婚なんてしたら想像できないよ」

いや、テツヤ殿じゃなくてもこの女が結婚する事自体が想像できないのだ。

憐れと言えば良いだろうか？

間違っても私が結婚しようとなどとは・・・微塵も思わないが。

そんなこんなでゲンハルト様の要望通り何とか夕食の時間までには会議が終わった事だけは言っておこう。

第百七十二章：元気の源

会議が終了した後、ゲンハルト様は帰る前に女王陛下が床に臥せている事をテツヤ殿に伝えた。

「そなたの安否を気にしていた。そなたに会えば回復すると思う」

会ってくれ、とゲンハルト様はテツヤ殿に頼むと今度は私に話し掛けてきた。

「それからそなたは王女様と約束したのだろ？」

必ずテツヤ殿を助け出して帰る、と・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・忘れていました」

またしても私は忘れていた。

色々とゴタゴタして忘れていた・・・何てのは言い訳だが。

「そなたは見かけによらず女との約束を忘れるのか？」

「い、いえ。そうでは・・・・ないと思います・・・多分」

自信が無くて私は小声で最後は答えた。

「私も他人の事は言えないが、そなたはまだ若い。これから経験を積むだろうがくれぐれも気を付けろ」

私の様に毎日叩かれるぞ、とゲンハルト様は言い急いで走り去った。
急いで帰らないと不味い、というのを地で表している。
「かかあ天下の男に説教されたな」
テツヤ殿は面白そうに私を見てきた。
「・・・はい」
ゲンハルト様には説教されたくなかった・・・・・・・・・・
「まぁこれも経験だ。俺は女王、お前は王女。お互い頑張ろうぜ？」
「はい」
私は項垂れながら頷いた。
そして行こうとした時だ。
「ランドルフ」
ガリシャが私を呼び止めた。
「何だい？」
「今度、また家(うち)に来なよ」
またお茶を飲もうとガリシャは唐突に言ってきた。

「良いよ。今度はちゃんとドアから行くよ」

「そうして。じゃないとお爺ちゃん達が騒ぐから」

何をどう騒ぐのかは不明だが、それならちゃんとドアから行こうと思った。

そして私とテツヤ殿は改めて王女と女王陛下の居る部屋へと向かった。

廊下を歩きながら私はテツヤ殿に捕えられてからの事について訊ねた。

「では、テツヤ殿を捕えて拷問したのはあくまでもライアンナル伯爵の独断だった訳ですか」

「あぁ。モリスン侯爵――豚の方は爵位こそ上だが、ライアンナル伯爵――蛇の使い走りに見えた」

爵位は豚の方が上なのにどういう事だ？

「詳しい事は分らないが、少なくともあの2人はリカルドという体内を食い尽くそうとしている」

害虫共と一緒に・・・・・・・・・・・・

「そうですか。所で弟の方はどうですか？」

あの男は私が仕留めるのだから一応、安否は気になった。

「生きている。だが、兄貴を失ったから前以上にヤバイかもな」

テツヤ殿が戦死させた顔に傷がある男が兄か。

弟の方は薬物で頭がイカレテいるようだが、兄に対しては従順らしい。

その上、兄想いというから驚きだ。

「兄貴があいつにとって枷だった」

だが、その兄が居なくなったとなれば更に荒れている可能性が高い。

「気を付けろ。あいつは薬でちょっとの痛みは無視できる」

９ｍｍでは威力不足、とテツヤ殿は言った。

つまりベレッタでは駄目、という事。

狙撃が私のメインだが万が一接近戦に持ち込まれたら危険と言う事をテツヤ殿は言いたいのだろう。

「気を付けます。それはそうとフィーナ中尉はテツヤ殿と抱く約束を交わしたそうですが本当ですか？」

「正確にはあいつが勝手にしただけだ」

何となく予想していたが、やっぱりと私は思った。

「お前には先に言っておく・・・噂は真実だった」

突然言われた言葉だが、私には何を言っているのか理解できた。

「・・・・そうですか」

「あぁ。ヴィールングのおっさんから言われた」

つくづく自分は詰めが甘い・・・・・・・・・

「どういう事、ですか？」

「ワイバーンの女傭兵・・・あいつとフィーナは腹違いの姉妹だ」

ワイバーンの女傭兵とフィーナ中尉が腹違いの姉妹・・・・・・・・

「と言う事は、ロックス殿が」

「あぁ。女傭兵の母親と出来て孕ませたらしい」

そしてその2人に全遺産と侯爵の位を譲る、という遺言書をヴィールング殿が受け取ったらしい。

「その場で破り捨てた、とおっさんは言った」

その遺言書にはヴィールング殿が愛した女性――マリー様とフィーナ中尉の事は何一つ書かれていなかった・・・・・・

「要らないと書かれていた」

その上、国外追放にしろと止めとばかりに書かれていたらしい・・・

・・・・

「・・・酷過ぎる話ですね」

余りに理不尽な話だ。

それではフィーナ中尉が幼い頃からしてきた行為は全て水の泡と化すではないか。

何より国外追放にしろ、などと余りに酷過ぎるし貴方にそんな権限があるのか？と問いたくなる。

「余りの理不尽さにおっさんが遺言書を破り捨てるのも無理はないよな？」

まったくその通りだ、と私は同感する。

仮に私がその状況だったら同じ事をしていた、と断言できる。

「そこまでは良かったんだが、あの女は見逃したらしい」

どうせ直ぐに忘れるだろう、と思っていたようだが現実には違い未だに怨みを抱いている。

「あの時、フィーナの名を言い殺そうとしたのもその辺が理由だろう」

自分達が受け継ぐはずだった財産と爵位を奪った。

怨むには十分な理由だ。

「ですが、それもこれもロックス殿が元々は原因だと私は思います」

ロックス殿がそんな女と出会わなければ、あんな遺書を残さなければ、マリー様を少しでも労われば・・・・・・・・・

考えれば幾らでも出るが、やはり一番の原因がロックス殿自身にある。

死んだ人間を悪く言うのは私の主義ではないが・・・生き返ったのなら額に風穴を開けてやりたいと思う。

「まぁ、向こうには向こうの理由があるのは当たり前だが俺達にも俺たちの理由がある」

仕方無いが死んでもらう。

テツヤ殿はそう言って私もまた頷いた。

同情はするがそれだけの事。

敵だから悪いが死んでもらおう。

そんな決意をしている間に到着した。

コンコン、とテツヤ殿はドアを叩いた。

だが、返事は無い。

今度はドアノブに手を掛けてみると・・・開いた。

中に入るとベッドの上に眠るサラ様とそれを見守るエリーナ様が居た。

エリーナ様が後ろを振り返ってテツヤ殿を凝視する。

「よぉ、王女様」

テツヤ殿は片手を上げて中に入り私も続いた。

「て、テツヤ殿・・・お母様ッ。テツヤ殿です。テツヤ殿が帰って来ました！！」

エリーナ様は眠るサラ様を起こそうとしたが、テツヤ殿がそれを止めた。

「寝ているんだ。寝かせておけ」

「ですが、お母様は貴方様が帰って来るのを心待ちにしていたんです」

なら起こすべきですとエリーナ様は言いまたサラ様を起こそうとする。

「う、ううん・・・どうしたの？エリーナ」

サラ様は閉じていた瞳を開けてエリーナ様に訊ねた。

「テツヤ殿が帰って来ましたよっ」

エリーナ様に言われたサラ様は薄らと瞳をテツヤ殿に向けた。

「よぉ、女王陛下。前以上に痩せたか？顔色も悪いぜ」

「テツヤ殿・・・本当にテツヤ殿、ですか？」

サラ様はテツヤ殿を見ると直ぐに眼を見開き二度も訊ねた。

「足は2本ともあるぜ」

こんな冗談とも言える言葉を床に臥せる人間へ投げる者はテツヤ殿位だろう。

それはサラ様も理解しているのか、テツヤ殿と知るやベッドの上からテツヤ殿に手を差し出した。

「おいおい、お子様が居るんだぞ？誘うなら一人の時にしてくれ」

苦笑しながらテツヤ殿はサラ様を見て真剣な顔になった。

「タカミ・テツヤ少佐。女王陛下の前へ帰還いたしました事を伝えに参りました」

「よくぞ・・・ご無事で・・・・・」

「あぁ。ゲンハルト達も心配していた。早く元気になれ」

「・・・貴方様の無事が元気の源です」

本当に良かった、とサラ様はテツヤ殿にしがみ付いて泣き出した。

私は遅すぎたがエリーナ様を連れて部屋を出る事にした。

あそこからは2人の話。

私達が居て良い場所ではないのだから・・・・・・・・・・・・・・

第百七十三章：質問と相談

部屋を出た私とエリーナ様は当ても無く廊下を歩いていた。

テツヤ殿とサラ様が部屋でどんな会話をしているのかは想像できない。

だが、サラ様がテツヤ殿の帰還を誰よりも喜んでいるとは何となく見ていて分かった、とだけ言っておこう。

エリーナ様は私が連れて行ったからか機嫌は頗る良い。

理由は毎度の如く分からないが・・・・・・・・・・

「テツヤ殿がご無事で何よりですね」

エリーナ様は私の隣を歩きながら言った。

「はい。サラ様も元気になると良いのですが」

「テツヤ殿が居れば大丈夫ですよ」

お母様も言っていたでしょ?とエリーナ様は確認するように言ってきた。

『テツヤ殿が私にとって元気の源です』

そうサラ様は仰っていた。

テツヤ殿が元気の源・・・か。

「私にとっては貴方が元気の源です」

エリーナ様は足を止めて私を見上げてきた。

純粋な瞳は私を真っ直ぐに見つめて射抜いている。

こんな瞳で見られたら大抵の男は落ちるな、と失礼な事を思いながら私は何で私が？と訊ねた。

「貴方とはよく約束をするじゃないですか」

確かによく約束をする。

何度目したのかは忘れてしまったが。

「私は何時も不安なんです」

エリーナ様は私を真っ直ぐに見つめながら切実な声で喋り出した。

自分との約束を守れず・・・私が死んだら、と・・・・・・・・・・

「私にとって貴方と交わした約束は、どんな約束よりも大切なのです」

その約束を交わした貴方が約束を守れなかったら、と思うと胸がはち切れそう・・・・と彼女は言いながら私を見つめ続ける。

その瞳があまりに・・・綺麗で少しでも力を入れれば壊れてしまい

そうなほど繊細に思えた私は言おうとした。

だが、それを彼女は遮った。

「でも・・・貴方は私との約束をちゃんと守ってくれます」

生きて帰って来る。

それを見て安堵すると同時に元気になるらしい。

「だから、貴方が私にとっては元気の源なんです」

「有り難きお言葉です」

私は心から礼を述べた。

それと同時に私の元気の源は何だろうと?と考えてみた。

答えは自ずと見つかった。

私の元気の源はオリガさんだ。

あの女(ひと)に会うだけで疲れなど吹き飛びまた頑張ろうという気持ちになるのだから。

「では、今度は貴方の番です」

「私の?」

突然いわれた言葉に私は訊き返した。

「えぇ。貴方にとって元気の源は何ですか？」

これにはどう答えたら良いか迷った。

オリガさんが私にとっては元気の源だという答えは既に出ている。

だが、それを馬鹿正直に言えば目の前の可愛らしいお人形さん――エリーナ様は怒るのは眼に見えている。

何で怒るのかはまったく分からないが、王女を怒らせる気など毛頭ない。

かと言って嘘を言うのも何だか釈然としない。

「貴方にとって元気の源は何ですか？」

もう一度エリーナ様は私に訊ねてきた。

まるで速く答えが知りたいとばかりに催促された気分だ。

「そうですね・・・・・・」

答えなど当に決まっていたが、私は時間を引き延ばす事にした。

取り敢えず引き延ばして何とか納得してもらえる回答を見つけなくては。

しかし、幾ら考えても答えは見つからないから困った物だ。

私はエリーナ様に断ってから煙草を吸った。

エリーナ様はそれを黙って見て答えを待ち続ける。

煙草を吸いながら私は考えたが・・・やはり答えは見つからない。

どうしたものか、と思っていると雪がまた降っている事に気が付いた。

「雪ですね・・・・・」

私の言葉にエリーナ様は頷き、僅かに身体を動かした。

「寒いのですか?」

「えぇ・・・少しだけ」

私はエリーナ様を部屋へと戻そうと思い、部屋に行きましょうと言った。

その中には・・・答えが見つからないから、という気持ちも含まれている。

だが、エリーナ様はそれを拒否し私に抱き付いてきた。

「え、エリーナ様・・・・・・・」

突然の事に面食らい慌てる私に対してエリーナ様は小声でこう言ってきた。

「こうすれば温かいです。暫くの間・・・こうしていて下さい」

命令ではなくお願い、と言われた私は・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・分かりました」

頷いてエリーナ様の肩を優しく抱き2人で降り積もる雪を眺め続けた。

どれくらいエリーナ様の肩を抱いていたかは分からないが不意に無線が鳴った。

「こちらリンクス」

私はこれ幸いにとばかりに無線に出た。

『こちらヴィン・ルビー。ちょっと来てくれないか?』

無線の相手は親衛騎士団団員にしてポイントマンのヴィン・ルビーだった。

声からして助けを求めている声だと判った。

「今どこですか?」

『演習場だ。来れるか?』

「直ぐに行きます」

逃げられる、と私は思いエリーナ様に無線の内容を教えて失礼する

と言った。

だが、エリーナ様は付いて行くと言ってきたから私は断る訳にも行かず・・・連れて行く事になった。

逃げられると思っていた私の考えは無残にも打ち砕かれてしまった・・・・・・・・・・・・

演習場に到着した私とエリーナ様を・・・フィーナ中尉と親衛騎士団団員が迎えてくれた。

「ランドルフ1等兵。貴様に相談がある」

・・・フィーナ中尉は私の階級を述べてから相談があると言ってきたが、やはり何処か高圧的な言い方だ。

まぁ、部下達の前もあるからと思う事にする。

「何でしょうか?中尉」

「貴様は狙撃手だが偵察もした事はあるのだろ?」

「えぇ。何度かありますがそれが?」

「具体的に偵察で大事な要点などを教えてくれ」

私達もテツヤ殿に教えられたが、経験した者にも聞きたいと言われた。

「そう、ですね・・・・・・」

偵察において気を付けなければならない事・・・・・・・・

「敵に見つからない、足跡などを残さない、極力戦闘は控える・・・何かが大事ですね」

では、敵を殺さなければならない時に気を付ける事は?と訊かれて私はこう答えた。

「出来るだけ音を立てないように始末すべきですね」

音が大きいと敵に気付かれる恐れがある。

それから遺体を隠す事も忘れないように言った。

「となると、ナイフ、サプレッサー、紐、弓矢などでやるのが一番か」

・・・フィーナ中尉の言葉に私は頷いた。

「ですが、サプレッサーだと・・・・・・」

「使い続けている内に音が高く、と言いたいのだろ?」

「はい。だとすれば、ナイフなどが一番効率的に良いかと思います」

ナイフならサプレッサーを取り付けた銃より音が小さいし血を拭き取ればまた問題なく使える。

だとすればナイフが一番妥当だ。

敵の人数にもよるがそこは臨機応変に対応するべきだとも思う。

「そうか。所で貴様もサポート役らしいがどんなサポートをするのだ？」

「具体的に言えば援護射撃などですね」

実際に突入し基地を占領するのは貴方達の役目だと私は分かり切った事を言った。

「二度も言わないで良い」

予想では「貴様に言われなくても分かり切っている」と言われると思っていたが、前に比べれば丸くなった言葉を言われた。

やはり変わったんだ、と思いながら私は他に要件があるのか？と訊ねた。

「無い。礼を言う」

ありがとう・・・・フィーナ中尉は私に頭を下げてきた。

夢でも見ているのか？と酷い事を思いおまけに頬まで抓った私は相当重症だ。

だが、フィーナ中尉は頭を下げていたから分からない・・・団員は顔を震わせて耐えているので直ぐに知られてしまう・・・・・・・

「エリーナ様、今夜はこれで失礼します」

私はエリーナ様に挨拶をして一気に走り出した。

「ら、ランドルフ！！」

エリーナ様が私の名を呼ぶが今は急いでこの場から逃げるのが先決だ。

あの場に居たら・・・フィーナ中尉に半殺しにされてしまう気がしたからだ・・・・・・・

幕間：輝かしい未来

雪が降る空を無数の蜥蜴が飛んでいた。

ワイバーンだ。

それに乗る彼等は傭兵。

ワイバーンの背中には木材が積まれていた。

「・・・何が悲しくて“竜騎士団”の俺らが大工の真似事なんかをしなきゃならないんだ？」

ワイバーンの後ろに積んだ木材を見ながら傭兵の1人が愚痴を零した。

竜騎士団・・・彼等の名前だろうか？

竜・・・ドラゴンになれずはみ出た者達の皮肉が込められているのだろう。

「仕方ねぇよ。俺らしかここまで直ぐには来れねぇんだ」

別の傭兵が慰めるように話し掛けた。

ワイバーン乗りである自分達しか直ぐにここには来れない。

他の兵では徒歩でしか移動できないから日数が掛る。

だからこそ自分達が木材を運んでいるのだ。

「・・・気に入らねぇ」

仲間に慰められたが、やはり気に入らなかった。

自分達はワイバーン乗りだ。

戦場では遺憾無く力を発揮し敵を葬り去る。

だが、今まで何処の国や土地に行っても正規軍として迎えられた事は無い。

臨時の兵ーーー傭兵として迎えられ戦いが終われば金を渡されて追い出される。

それの繰り返しだったが、今度の戦いには自分達の未来が掛っている。

勝利すれば自分達は正規軍として迎えられるのだ。

だからこそ戦を・・・戦いたい。

どの兵よりも、どの将よりも勇敢に、鮮烈に、苛烈に、敵を、兵を、将を殺して手柄を立てる。

それなのに与えられた仕事は、前線基地を造れ。

自分達は大工ではない。

こんな仕事は内容に入っていないのだが、雇い主の命令であり自分達の長がそれを請け負った以上は従うしかない・・・・・・・・・・

「何で隊長はこんな仕事を受けたんだか・・・・・・」

「隊長の考えがあるんだろうぜ。それにここに基地を造れば俺達が一番に敵を殺せる」

基地を作ればそこは自分達の城だ。

後から来る者達は自分達が造った城に来る客のようなもの。

傭兵である自分達だが、城を作るのは自分達だ。

文句は言わせない。

「それを見越して隊長は請け負ったんだと思うぜ」

「そうだな・・・・・」

男は仲間から言われた言葉にやっと納得したのか頷いた。

そして自分達を纏める長を見る。

一番先頭を飛ぶ1角のワイバーンに乗る者が長だ。

兜から出ている金髪は風に靡いて漂っている。

そこがまた甲冑に身を包んでいるのにギャップを感じる。

手綱を握りながら長は雇い主から言われた言葉を思い出していた。

『ここに基地を造れ』

自分の依頼主は個室に自分を呼び出すなり地図を広げてある場所を指差した。

そこは例の空挺部隊の長が死んだ場所だ。

『ここに基地が出来れば前線基地となり何かと便利だ』

だが、徒歩では時間が掛る。

『そこで貴様らに材料を持って自分達で造ってもらう』

その言葉に自分は怒った。

なぜ自分達が大工の真似事をしなければならない、と言ったが依頼主は鼻で嗤った。

『何故？貴様等が役立たずだからだ』

捕まえた捕虜を取り逃がし、戦いでもそれほど戦果を上げていない。本来なら契約を解消しても良いのを優しさでしていない、とまで言われた。

直ぐに嘘だ、と判った。

この男は自分を挑発し行かせようとしている。

挑発と知りながらも自分はそれを受け入れた・・・・・・・・・・

『あたしもまだまだね。挑発に乗るんだから・・・・・・・・・・』

数多の戦場を駆け巡って来たが未だに挑発されると、つい身体が動いてしまう。

だからこそ、こうして愛竜であるワイバーンの背中に木材を載せているのだ。

「悪いね。こんな仕事を請け負っちゃって」

愛竜のワイバーンに謝罪するとワイバーンは軽く唸り声を上げた。

やはり不満らしい。

「だけど我慢して・・・この戦いが終われば、あたし達は正規軍になれるんだ」

もう当ても無く彷徨う必要は無い。

ちゃんと死ぬまで国に仕えて戦えるのだ。

戦で死ねば国葬される。

もう荒野に仲間の死体を埋める必要は無い。

もう彷徨う必要が無いのだ。

「その為にも・・・今はどんな仕事にも文句を言わずやるしかないんだ」

我慢してくれ、ともう一度言った。

ワイバーンは主の言葉にまた唸り声を上げたが、不満の色は含まれていなかった。

そして目的地が見えたのか急降下を始めた。

目的地へと到着したワイバーン乗り――傭兵達は直ぐにワイバーンから木材を降ろした。

更に基地を造るのに必要なスコップ、つるはし、斧を取り出し自分達が旅で使用していた携帯居住道具も出した。

「ここに前線基地を建てる。あたしらの仕事内容には入らないのは皆も知っているだろうし不満に思っているのも解かる」

長は部下達に自分も同じ思いだ、と言った。

「だが、ここに基地を建てればあたし達が敵陣に一番乗りだ。そしてあたしらが建てた基地に余所者が来てもデカイ面はさせない」

そうすれば自分達が手柄を立てられる。

「あたし達は近衛兵になるという夢がある。その為にもここは耐えるんだ。そうすれば未来はあたし達に輝きを齎してくれる」

『おぉ!!』

部下達はそれに叫びで答えた。

「では、これより基地造りを始める。掛れ！！」

直ぐに部下達は取り掛った。

そして東側を見る。

『待ってな。フィーナ・マレル・・・ヴィールング・マレル。親子共々あたしの愛竜が食べてやるよ』

もう一人は・・・・・・・・・・

『あんたはあたしが時間を掛けて殺して上げる。あたしに傷を付けたんだ。その代償は重いよ』

“傷物”にされたのだ。

自分は・・・・・・・

この高貴な身分の生まれである自分に対して傷を付けたのだ。

あの男は・・・・・・

しかし、と思う。

『あの暗さでよくあたしの肩を傷付けられたもんだ。おまけにあたしの攻めにも屈しなかった・・・面白い男だね』

骨があるとは思っていたが想像以上だった。

そういう男ほど膝を屈しさせたいと思う自分は頭がイカレているのか？

いや・・・違う。

『これも戦う者の性と言えば良いのかね？』

強者を屈服させる。

それは戦う者なら誰だって願うものだ。

特に頭はイカレテいないらしい。

だが、こうも思ってしまう。

あの男が膝を屈し自分を黒い真珠で見つめる姿を・・・・・・・・・・・・・・・

『あんな綺麗な瞳で見られたら・・・馬鹿馬鹿しい』

途中まで考えたが直ぐに止めて作業をする部下達を叱咤する。

第百七十四章：父親の頼み

史記を書きながら私はフィーナ様の叔父――実の父親であったヴィールング・マレル様を思い出した。

青天の霹靂は大勢の人間を混乱させ人生を狂わせた・・・・・・・・・

だが、この国に対して地方へ眼を向けるという事を皆に知らしめ同時に“膿”を全て排除する事にも出来たからどちらが良かったのかは分からない。

そんな大勢の人間が混乱した中にヴィールング様も居た。

フィーナ様の実の父親と生涯名乗らないと決めていたが、その誓いは破られ名乗る事になったが私はそれで良いと思っている。

最初こそ混乱したフィーナ様だが、戦いが終わった時にはヴィールング様の想いを受け入れて初めて父と娘として抱き合えたのだから。

あの方と初めて対面した時・・・フィーナ様の父親だ、と直感した。

徹夜様から言われたから分かっていた事だが、顔を見て声を聞いて仕草を見てフィーナ様の父親だと判った。

ヴィールング様は私を前にこう言った。

『君も知っているのだろ?』

事実を・・・・・・・・・・

私がなぜ知っている、と思ったのか訊ねると勘だと言われ当惑したがヴィールング様は至極落ち着いていた。

『君は私を軽蔑するかい？』

ヴィールング様は当惑する私に対して言葉を投げた。

軽蔑・・・・・・・・・・

兄の妻であるマリー様との間にフィーナ様を儲けた事。

道徳的に見れば明らかに軽蔑に値するだろう。

だが、元を正せばロックス様が原因であり愛し合う2人を引き裂いた者達に原因がある。

軽蔑などしていません、と私が答えればヴィールング様はそうか、とだけ言った。

私は続けて喋った。

『貴方とマリー様は互いに愛し合っていた。そしてその証に神が貴方様にフィーナ中尉を授けた。これを軽蔑するのは道理に反しています』

道理・・・道徳・・・どちらも人間が作り出し都合よく解釈する言葉だ。

何も知らない馬鹿者から見れば、ヴィールング様は兄の嫁と寝て子を儲けた男と映るだろう。

しかし、この方の瞳を見て声を聞けばそんな気持ちは無くなる。

この方は自分を悔いている。

兄の嫁を奪ったからではない。

大切な女性を護る事も出来ず、兄の暴走を止める事も出来なかった無力な自分に。

ヴィールング様は私の言葉を聞いたが、不意に視線を上に向けた。

『私は・・・あの娘に父親と名乗れる資格があるのか？と思うんだ』

今まで叔父と名乗り続けた負い目がある。

そして道徳的に見ればどうしても名乗れない。

だから、名乗るのが出来ないとヴィールング様は語った。

その気持ちは子を儲けた事がない私でも痛いほど共感でき何と言えば良いか・・・分からなかった。

何を言ってもこの方は悔いるとも思ったからだが。

ヴィールング様は天井を見上げていたが、また不意に視線を私に戻した。

『君はフィーナをどう思う？』

父親の眼であり軍人の眼であった。

私は根性があるし良い方向へと変わっていると言いながらも経験などが足りないと付け足した。

『そうだ。あの娘には経験が無い。だが、それは良い事でもある』

経験が無いならこれから積んで行けば良いだけの話なのだから。

しかし、戦場では一瞬の隙やミスで命を落とす。

まして隊長を務めるともなれば部下達の命を護らなければならないし指揮官としてのプレッシャーもある。

『あの娘は繊細なんだ。だが、決してそれを他人には見せない』

自分にさえ嘘を吐き大丈夫と答える気丈な娘とヴィールング様は語り私を見た。

『君はヘンとあの娘をサポートするのだろ？』

それに私は頷いた。

『ヘンにも言ってあるが、君もあの娘の力になってくれ』

本来なら徹夜様にそれを求めるのだが、指揮官である以上はそういかない。

だから、私に頼むとヴィールング様は言った。

『テツヤ殿とは先ほど話したが君を高く評価していたし信頼もしていた』

ヴィールング様は共に捕えられた徹夜様と会話をして人柄などを理解し信頼できると断言しその徹夜様が私を信頼しているのだから、と付け足した。

『あの娘を・・・フィーナを助けてやってくれ』

傷を負った自分は共に行けない。

私に頼むしかない・・・・・・・

相手に頼むしか出来ない自分を悔いながら頼むヴィールング様に私は了承した。

今から書く所はその場面に値する・・・・・・・・・・・・

・・・フィーナ中尉から礼を言われて半殺しにされる前に逃げてから数日が経過した。

私はその間、壊れた陣地などを見回し直せる所は直し強化する部分を手帳に書き記す仕事をしていた。

しかし、それから直ぐにテツヤ殿に呼ばれて城へと向かった。

城の中に入りテントに行くとテツヤ殿、ゲンハルト様、プロイセン様、ヴィルヘルム元伯爵が居た。

「任務だ」

テツヤ殿もとい少佐は煙草を吸いながら私に一言だけ述べた。

「明日フィーナ中尉ならび親衛騎士団が偵察に向かう」

前線基地を建てる予定の場所。

「ガルムの報告によれば既に敵は到着し着手している」

もう来たとは速いな・・・・・・・

だが、数日は経過したからもう準備は整ったと言えるのかもしれない。

「どの程度、出来あがっているのか、またどのような形にするのか調べて来る」

そのサポート役に私達も同行しろ、という事か。

「でも、何で私に？」

本当ならイーグル1等軍曹に言う筈なのに・・・・・・・・・・

「お前さんに会いたいと言っているんだ」

ヴィールング殿が・・・・・・・・・・

「私に？」

「あぁ。その前に命令を伝えた。後はヴィールングのおっさんと会ってイーグルに伝えろ」

「分かりました」

私は何でヴィールング殿が私と会いたいのか分からなかったが、会いたいのだから会おうと思った。

「何か言いたいようだが、それは本人から言うだろう」

「そうですか・・・・・」

一体なにを言いたいのだろうか？

「お前さんはフィーナに渾名を付けたからな。案外それを詰るかもな？」

ヴィルヘルム元伯爵が意地悪な笑みを浮かべて言ってきた。

そりゃ・・・渾名は付けた。

だが、２つだけだ。

下種女と要らない荷物。

碌な渾名ではないが、以前の言動を考えれば妥当な渾名だ。

今は・・・違うが。

「とにかく行って来い」

少佐に敬礼をして私は言われた通りヴィールング殿の居る部屋へと向かった。

ヴィールング殿の部屋に行くと僅かにドアが開いており会話が聞こえてきた。

『叔父上、怪我は大丈夫ですか？』

声の主はフィーナ中尉だ。

とても綺麗な声で別人かと思ってしまった。

それだけ・・・声色が違い過ぎたのだ。

『あぁ。だが、まだ動けない』

もう一人の声は男でヴィールング殿の声だろう。

『もう叔父上は十分に戦いました。後は私が引き継ぎます』

『だが、そなたはまだ若い』

『若いか年寄りかは関係ありません』

確かにその通りだが、ヴィールング殿の声には姪を・・・娘を心配する父親の気持ちが込められている。

どれだけこの会話をしている間も心苦しいだろうか？

そう思うと何故か胸が痛かった。

『私はこの内乱を・・・テツヤと共に終わらせたいんです』

そうする事が自分の成すべき事だと語りこう言い続けた。

『そして・・・叔父上とテツヤを傷めつけたあのワイバーンの傭兵とケリを着けます』

『ふ、フィーナ・・・・・・・・』

ヴィールング殿の態度から見てフィーナ中尉が殺されるともう確信しているようだ。

それと同時に・・・事実を知られるのを恐れている。

『ご安心ください。必ず倒します。そうしたら、2人で母上の墓参りに行きましょう』

亡き母上も叔父上と会いたがっているでしょうから・・・・・・・・・・・・

事実を知らないが、それでもヴィールング殿がマリーどのと親しかったのをフィーナ中尉は見ていたから言ったのだろう。

ヴィールング殿から言えば、娘と共に亡き母であり妻のマリー殿に会える。

嬉しくない筈が無い。

『・・・そうだな』

微かに声が私の存在に気付いている気がすると同時にフィーナ中尉がドアに近付く気配を感じた。

急いで壁に隠れてやり過ごすと案の定フィーナ中尉はドアから出て来て去って行った。

それを見てから私は閉められたドアを叩いた。

「ランドルフ・クリフ1等兵です。ヴィールング殿、入っても宜しいですか?」

『入ってくれ』

失礼します、と断ってから私はドアを開けて中に入った。

白いシーツを下半身まで掛けた壮年の男が私を見つめていた。

黒髪に金色の瞳をしている男の顔立ちは僅かにフィーナ中尉の面影があるし瞳の力強さもまた同じだ。

「貴方がヴィールング・マレル様ですか?」

私が確認の為、訊ねると男は頷いた。

「君がランドルフ・クリフか。テツヤの言っていた通り情けない体格だが・・・眼は鋭いね」

肉食獣のように険しい眼だ、と言われた。

「そうですか？」

「あぁ。と言っても僅かに、一瞬だけ見せる」

それで良いと彼は言いながら私を椅子に勧めた。

私は椅子に座り先ず言った。

「貴方様は・・・フィーナ中尉の父親、ですね？」

「テツヤに言われたのかい？」

「はい。しかし、私も貴方を見てそう思ったんです」

瞳の力強さがフィーナ中尉らしい。

「そうか。君は・・・私を軽蔑するかい？」

私は突然言われた言葉に驚いたが、直ぐに首を横に振った。

「いいえ。貴方は亡き奥方のマリー様を愛しておられた。それは貴方の眼を見れば判ります」

「だが、私は世間的に言えば兄の妻を寝盗った形になる」

「テツヤ殿の言葉を借りるならこうです」

世間の眼を気にしていたら何も出来ない。

「私も同感です。それに貴方様の兄であるロックス様は、かなり家庭では破綻擦れ擦れだったのでしょ？」

「擦れ擦れ所か崩壊していた」

苦虫を噛み潰すようにヴィールング殿は呟いた。

「そうですか。それで私をここへ呼んだ理由は？」

「君はレオン・ルソーと一緒にフィーナのサポートをする、予定なのだろ？」

「はい。私とレオン以外にも何人か居ますがね」

「君に・・・君とレオン・ルソーに頼みがある。フィーナを・・・助けてくれ」

サポートするのだから当たり前だと思ったが、別な意味があるのだと直感した。

「あの娘は気が強い。そして負けず嫌いだ」

そりぁ「根性の塊」なんて女として些か失礼な渾名を頂戴するほどだから何とも・・・・・・

「だが、実際は繊細なんだ。女として馬鹿にされたくない一心で男より強くなろうとしている」

その繊細一一一弱さを見せられない上に何でも一人で背負い込み愚

直なまでに真っ直ぐにしか進めない・・・・・・・・・

「さっきの会話でも解かっただろうが・・・あの娘は極親しい者にしかああいう態度が取れないんだ」

「気付いて、いたんですか・・・・・・・」

「あぁ。フィーナは気が付かなかったようだが」

私は失礼な事をした、と罪悪感を覚えたがヴィールング殿は責めもせずにいた。

「テツヤから君と彼の事は聞いている。まだ若いが頼りになる」

そんな事をテツヤ殿は言ったのか・・・・・・・・・・・・・・

「私がフィーナの事を言ったら、君とレオン・ルソーを頼れと言われた」

「なぜ私だけなんですか？」

それなら2人共に呼べば良いのに・・・・・・・・・・

「情報を伝えるのは1人で良い。2人も一緒に呼べば何かあると勘付かれる」

それならどちらか1人に情報を伝えもう1人に伝えた方が効率的と彼は言った。

「そうですか」

「あぁ。私の頼みを聞いてくれないか？」

その声には娘を心配する父親の声であり顔だった。

「・・・分かりました」

私は頷きヴィールング殿はまた礼を述べた。

そして部屋を出た私はレオン・ルソーに伝えようと思い彼を探し始めた。

第百七十五章：偵察へ出発

レオンは直ぐに見つかった。

演習場で親衛騎士団の団員と一緒に射撃訓練をしていたのだ。

ＳＫＳカービンを撃つレオンは私に気付くと小走りに近付いてきた。

「やぁ、ランドルフ君。どうしたんだい？」

「話があるんだ」

私の一言でレオンは何かあると直ぐに察してくれた。

２人で少し離れて煙草を吸い合いながらヴィールング殿に頼まれた事を伝えた。

「そう・・・ヴィールング殿が」

「うん」

レオンの言葉に私はただ相槌を打った。

「君としてはどうしたい？」

「頼まれたからやるよ。でも、私だけだと亀裂を入れそうな気がするんだ」

幾ら許しを得たからと言っても私だとどうしても些か強く物事を言

ってしまうし、フィーナ中尉もまたあの性格だ。
反論して亀裂が入るのは明白でしかない。
だが、そこへ仲介人とも言えるレオンが入れば問題ない。
そういう所を考えてテツヤ殿はヴィールング殿に言ったのかもしれないな。

「分かった。やるよ」

「ありがとう」

「君と僕は親友だ。親友が助けを求めてきたなら助けるのが親友だよ」

本当に私は良い親友に巡り会えたと思わずにはいられない。

「それで親衛騎士団の方はどうなんだい？」

「テツヤ殿を救出する件で少しは現場の空気に触れたからある程度は慣れたよ」

まだ些か緊張は残っているが、何とかなるとレオンは言った。

「そう。それでフィーナ中尉は？」

「テツヤ殿の所へ行っているよ」

「随分と熱を上げているね？」

以前なら毛虫の如く毛嫌いしていたのに。

「団員達もそんな風に言っていたよ。所で僕達も一緒に行くんだよね？」

「うん。後はイーグル軍曹に伝えるよ」

「軍曹は確か・・・お姉様達をナンパしに行くって言ってたね」

でも、顔を赤く散らして帰って来るというのが私とレオンの予想だった。

案の定・・・軍曹は顔を赤く散らして演習場に来た。

「くそー。何で俺みたいに良い男がこんな眼に・・・・・・・・・」

「軍曹。お話があります」

私は軍曹にテツヤ殿から言われた事を伝えた。

軍曹は振られた直後に任務の話で嫌そうな顔をしたが直ぐに消した。

「そうか。よし、俺達はサポート役だからあいつ等とは少し離れて行動を取るぞ」

別行動を取った方が敵に気付かれ難いし不測の事態にも対応できると軍曹は言い直ぐにこちらも準備だと言った。

私とレオンは直ぐに城を出て家へと戻った。

だが、私の場合はガリシャの家に立ち寄り明日、偵察に行く事を伝えておいた。

「分かったよ。ガルムにはあたしから伝えておくよ」

「頼むよ」

短い会話を済ませて私は今度こそ家へと向かった。

家へと帰った私をオリガさんが優しく抱き締めて迎えてくれた。

それから直ぐに食事を済ませ風呂に入って疲れを癒してから明日の準備に取り掛った。

「また任務？」

「はい。また家を開けてしまいます」

「いいのよ。貴方はそれがお仕事なんだから」

オリガさんはまったく不満を漏らさずにいた。

そんなオリガさんに私は些か悲しみも覚えてしまう。

不満を漏らさないのは良いが・・・少し位は「もう少し私の為に」とか言ってもらいたいなんて欲張りな事を考えてしまった。

そして眠る時間になった。

私と彼女は普段通り一緒のベッドに入って寝ている。

「聞いたわよ？親衛騎士団長のフィーナ様がテツヤさんに御熱なんだって？」

女性というのはどうしてこうも恋愛になると耳が鋭いのだろうか？

「まぁ、そうですね」

実際テツヤ殿がフィーナ中尉をどう想っているのかは分からない。

容姿と体格は文句なしだが、性格で全て台無し。

寧ろマイナス点が追加される。

そんなフィーナ中尉をテツヤ殿が好きになるのか？と言うと無いと思う。

テツヤ殿だけでなく大抵の男ならああいうキツイ女性は出来るなら「御免被りたい」と言うだろう。

私も同じだ。

「でも、テツヤさんの事だから女の子の気持ちを踏み躙ったりはしないと思うわ」

テツヤ殿がどんな恋愛をしたのかは知らないが、確かに女性の気持ちを踏み躙るような真似はしないだろう。

もし、していたならとっくに殺されているだろうから。

「ですね」

私はそれに頷いてから眼を閉じて眠った。

その翌日、私は早朝に眼を覚ましてベッドから起き上がり準備を始めた。

オリガさんは既に起きているのかベッドには居ない。

衣服を着て武器などを装備し寝室を出ると既に朝食の準備が出来あがっている。

「おはよう。天使さん」

「おはようございます」

私は挨拶をしてから朝食を食べた。

「それじゃ帰って来るのは1週間以上？」

「恐らく。場合によってはもう少し遅くなるかもしれませんね」

「そう。それじゃ、それまではミレーネ姉達と待っているわ」

「お願いします」

朝食を終えた後はオリガさんからの口付けをもらって城を目指した。

その途中でガリシャ、ガルムと会い3人で城へと向かった。

城の演習場には既にフィーナ中尉とイーグル1等軍曹、ヘンさん、親衛騎士団の団員が待っていた。

私達より少し遅れてレオンが来た。

「遅かったね？」

「ローズちゃんが中々離れなかったんだ」

また出掛けて来る、と言った為に彼女が起きるまで抱き付かれていたらしい。

「すっかり懐かれているね」

これなら結婚しても問題ない、と私は言った。

「うん」

それにレオンは頷いた。

「よし、全員揃ったな」

軍曹は私達を並ばせてから言葉を放った。

「これより敵が前線基地を建てている場所に偵察をしに行く。だが、俺、ヘン、ランドルフ、レオン、ガリシャ、ガルムは別行動を取る」

「イーグル1等軍曹。どのような別行動を取るのか教えてほしい」

フィーナ中尉が訊くと軍曹は向きを変えて答えた。

「はっ。我々は別行動を取りフィーナ中尉達を遠目からサポートします」

「そうか・・・顔がニヤケているぞ」

フィーナ中尉が指摘すると軍曹は真剣な顔を崩しデレーとした。

「いやー、美人と面と向き合うとついなー」

一気にデレデレと情けない顔をする軍曹に私達は溜め息を吐かずにはいられなかった。

どうしてこう真剣な顔が長く出来ないのだ・・・・・・・

「貴様に美人と言われても虫唾が走るだけだ」

フィーナ中尉は明らかに心底嫌いという顔と声をしてみせた。

「きっつい御言葉だな。旦那に「お前綺麗だな」なんて言われたらどう・・・へぶっ!!」

最後まで言う前に鼻血を出して軍曹は倒れた。

「き、貴様がて、テツヤの物真似をするな!!テツヤが汚れるだろ!!」

前まで汚らわしいとテツヤ殿を毛嫌いしていたのに、今度はテツヤ殿が清浄とばかりに弁護している。

変わり過ぎて本当に本人なのか?と何度も言いたくなる。

「いってー。で、でも、良いパンチだった・・・・・・・・・」

ガクッと軍曹はそれだけ言うと倒れてしまった。

「朝っぱらから元気だな」

テツヤ殿が不意に現れた。

「フィーナ。イーグルは階級こそ下だがお前より実戦経験はある」

だから、それ以上は止めておけとテツヤ殿は釘を刺した。

「・・・はい」

そう言ってフィーナ中尉は頷いたが渋々といった感じだ。

「おい、イーグル。起きろ」

テツヤ殿は軍曹の胸倉を掴むと平手打ちをお見舞いして強制的に起こさせた。

「・・・旦那の平手打ちは痛いんですけど」

鼻血を大量に出しながらも軍曹は眼を覚ました。

「お前が悪い」

テツヤ殿は軍曹を放り出すと私達を見回してから言葉を放った。

「お前等は実戦経験が極端に少ないが訓練は受けた。訓練で受けた事は身体が覚えている」

後は実戦で慣れるしかない、とテツヤ殿は続けた。

「お前らにはフィーナが居る。俺を助ける為にリーザ中尉と共に敵地へ乗り込んだ女傑だ」

お前等はその下に居るのだから自信を持て、とテツヤ殿は励ましの言葉を投げた。

「それにリンクスたちも居る。頼り過ぎるのは駄目だが、こいつらがお前等を援護する事は覚えておけ」

『レンジャー』

親衛騎士団の面々は敬礼をした。

「では、フィーナ中尉。行って来い」

「はっ」

フィーナ中尉はテツヤ殿・・・少佐に敬礼をすると親衛騎士団に乗馬を命じた。

自身も馬に跨ると颯爽と演習場を後にした。

「・・・じゃあ、俺達も行くか」

軍曹は鼻血をハンカチで拭いてから私達に言ったので私達は頷く。

そして乗馬し親衛騎士団とは別の方角から目的地を目指した。

第百七十六章：偵察道中（前書き）

ここで、少しだけ甘い面を出します。（汗）

お気に入り登録数が１４１５件になりました！！

いや、嬉しいです。

こんなにお気に入り登録して下さる読者には感謝してもし切れません。

これからもどうぞ宜しくお願いします！！

第百七十六章：偵察道中

馬に乗った私は部下を分隊に別けて行動を取らせる事にした。

下手に大人数で動くと敵に気付かれる恐れがあるし彼等にも少し勉強させようという考えからだ。

些か早過ぎると思うかもしれないが、彼らにはテツヤが言った通り訓練を受けた。

その訓練は彼等の血肉となり身体に染み着いている・・・・・・・

テツヤが私の立場に居てもこうしている筈だ。

あの男の場合、机上で学ぶより現場で学ぶという考えだからな。

現にあの男は本来なら専門学校に通わなければなれない少佐の位に居る。

つまり現場で学ぶべき事を全て学びなれた、という例外の男。

そんな男なら部下にもこうする。

私は部下を見た。

彼等はそれぞれの武器を持っている。

だが、口径は同じだから弾が無くなるという状況になった場合もマガジンを交換する事は出来ないが弾を抜いて装填は可能だ。

私の場合はＡＫ－７４、ドラグノフＳＶＤ、コルト・コンバットコマンダー、ワルサーＰＫＫの４つだ。

ハッキリ言えば持ち過ぎだ。

しかし、私が指揮する分隊にはドラグノフを持った者が居ないから良いだろう。

「・・・中尉。俺ら大丈夫ですかね？」

部下の１人が不安そうな顔で話し掛けてきた。

何かと不安がる男だ。

まったく男ならテツヤのようにドッシリと腰を据えて見せろ。

あの男は拷問されたというのに飄々としていたぞ。

「大丈夫などと言うな。我々は少佐から受けた訓練がある。それにリンクスたちも居る。何を不安がる？」

「そうなんですが・・・・・・・・」

「お前シッカリしろよ。俺達は少佐の訓練を受けてきたんだぞ？それに誓っただろ」

何があろうと任務を遂行する、と。

これはテツヤが考えた軍紀だ。

テツヤが最初に居た陸上自衛隊東部方面隊第一空挺団のモットー――標語の一つにある。

“最後の1兵になろうと任務を遂行する”

些か違うかもしれないが、こんな感じだった筈だ。

私もこれをモットーにしている。

「俺らが死んでもお前が残ったらやるんだ。まぁ、俺は死ぬつもりなんて無いが」

しかし、それだけの心構えを持てという事だ。

「・・・分かった」

仲間に励まされて部下は元に戻った。

「その意気だ」

私は部下を見て成長したな、と思った。

前ならこんな事を言ったりはしなかったのに。

これもヴィルヘルム師匠やテツヤのお陰だ。

テツヤは今頃どうしているだろうか？

不覚にも何故かテツヤの事しか考えられなくなった。

任務に支障を来たす程ではないが、それでもやはり何処かでテツヤを考えてしまう。

昨夜もテツヤはメジュリーヌと・・・ミレーネ様を抱いたのか？

あの男がどんな風に女を抱くのかは知らないが、メジュリーヌの様子を見る限りかなり気に入っている。

ミレーネ様とも仲慎ましい・・・・・・・

一体どんな生活を送っているのか・・・・・・・・

気になってリーザ中尉に訊いても「敵に教える訳にはいきません」と言われた。

敵・・・言葉の意味が違う気がする。

いや、す、好き、なお、男の事だと・・・敵、なのか？

リーザ中尉はプロイセン様の娘で、しかもテツヤは両人に好かれている。

婿にという話も聞いた。

私を・・・“捨てて”テツヤはリーザ中尉と結婚するのか？

そりゃ私では、最初の印象が互いに最悪すぎたから・・・可能性は、低いが・・・・・・

いや、まだ遅くはない。

あの様子からしてまだ・・・・・・リーザ中尉を抱いてはいない筈だ。

ならば、私が先に抱かれて“既成事実”を作ってしまえば良いのだ。

そうすればテツヤは“責任”を取る為に私を妻にする筈・・・・・・

いや、待て。

妻、だと？

私はいま妻にする、と言ったのか？

て、テツヤとけ、けけけけ、結婚？

いや、それ以前に私はテツヤに抱かれるという約束をした。

そしてテツヤは私がこれを無事に成功させたら自分を好きにして良いとさえ言った。

テツヤを好きに・・・私の思いのままに・・・・・・・・・・・・

「う、うわぁぁぁぁ！！」

私は思わず大声を出してしまい、部下達は何事だ？と言ってきた。

「あ、い、いや・・・何でも無い」

まさか、テツヤと結婚するなどと考えていたなど任務中に言えるか。

気を落ち着かせて先を急いだ。

しかし、顔は真っ赤になっているが・・・・・・・・・・・・・

――――――――――――――――――――――――

―――――――――――
「何をやっているんだ？あいつは」
軍曹は双眼鏡越しにぼやいた。
「フィーナ中尉、ですよね？」
あの大声は、フィーナ中尉だ。
一体なにが起こったんだ？と思い軍曹が双眼鏡で覗いてみると、顔を真っ赤にさせていたらしい。
「あのお嬢ちゃん・・・顔を真っ赤にしている。差し詰め旦那に抱かれる妄想でもしたんだろ」
やれやれ、と軍曹は肩を落とした。
「本当に少佐はフィーナ中尉を抱くんですかね？」
「抱くと約束事態があのお嬢ちゃんが勝手にしただけだからな」

俺なら喜んで頂くが、と軍曹は言った。

「軍曹はどうしてそう無節操なんですか？」

「あんな美人なら誰だって無節操になるだろ？」

「軍曹の場合は誰にだって無節操だと思います」

「いいや。俺にも決めている事がある」

これに私達は興味を示し訊ねた。

「１つ１５歳以下の子には手を出さない。２つブスには手を出さない。３つ男には手を出さない」

これだ、と自信満々に言ったが・・・・・・・・・・・・・・・

「エリーナ様を口説いたじゃないですか」

「１５歳だろ？１５歳なら守備範囲だ」

さっき１５歳以下には手を出さないと言ったではないか・・・・・・・・・・

「まぁ・・・しかし、随分と乙女だな。前なんて“鋼鉄の処女”みたいな感じだったのに」

私達の視線を感じたのか見事に話題を変えた。

逃げるのは上手いんだよな・・・・・・・

などと思いながら“鋼鉄の処女”・・・確かに言えていると思った。

心を許した者にしか親しい態度を取れない。

それ以外には堅く・・・それこそ鋼鉄のようにドアを閉じている。

ある意味、鋼鉄の処女というのは当たりだ。

「軍曹。質問しても良いですか？」

「何だ」

軍曹は双眼鏡を離して私を見た。

「少佐って女性の好みはあるんですか？」

「好み？んー、聞いた事がないな」

だが、どの女性も一級と言える女性ばかりだったと軍曹は付け足した。

「前にも話したが王族にも求婚されたんだ。一体どうして？と思うぜ」

俺の方が格好良いのに、と軍曹は愚痴を零すように言った。

「おっさんより旦那の方が格好良いもの」

山犬がさも当たり前のように言ってきた。

「俺の方が若くて格好良いだろ？」

「“顔”だけは、ね」

どうしてこう女性というのは・・・・平気で毒を吐くのだろうな。

「ひ、酷いっ・・・・・・・・・・」

軍曹は泣き出した。

と言っても演技だが。

「泣く男ってウザいし気持ち悪いわ」

止めとばかりに山犬は言ったが、それがいけなかった。

このいけなかったは・・・私にとってだ。

「だったら、ランドルフも嫌いだな」

軍曹は勝ち誇った笑みを浮かべた。

「どういう意味よ」

山犬は理解できないのか眉を顰めた。

「ランドルフはオリガ嬢を抱く時、泣いたんだぜ？」

そう・・・私は泣いた。

大声ではないが、軽く泣いたのは覚えている。

痛かったのもあるが・・・初めての・・・快感が凄過ぎて・・・泣いた。

チャレンジャーも同じだったのか俯いた。

山犬は私を見た。

しかし、私はそれを見なかった。

「ねぇ、ランドルフ。は、初めてって、その、痛い、の？お、オリガさんに“気持ち良く”されたの？どんな風に？」

「い、いや・・・これは、君には・・・・・・・」

「あ、あたし、も、き、興味があるんだ」

だから、教えてと言われた。

「い、今は任務、中だよ？言えないよ」

「お、教えてよ」

あんたをどう喜ばせるのか知りたいと爆弾発言をされてしまった。

だが、私は口を閉じて言わなかった。

言える訳が無い。

言ったら・・・どうなるか分からない。

だからこそ堅く口を閉じて言わなかった・・・・・・・・・・・・

第百七十七章：軍曹の役目（前書き）

お待たせしました。

どうも長居スランプに落ち込んでしまいましたが、やっと何とか回復できました！！

またもや大量更新となりますが、どうかご勘弁の程を・・・・・・・・

第百七十七章：軍曹の役目

私達は夕方まで進んでいた。

雪が積り山道であるため中々進めないと思っていたが、それなりに進めた。

やはりこの地形で生まれ育った馬だと足が頑丈だからだろう。

「今日はここまでだ」

私は部下達に伝え通信兵に他の部下にも伝えさせた。

馬から降りて陣を敷きテントを張らせた。

部下達は交代で休むように伝え私は1人、少し森を歩く事にした。

他の部下達の様子を見る為だ。

私が行くと部下達は敬礼をした。

私は不安かどうかを訊ねると「そうでもない」と答えてきた。

リンクスたちも居るし少佐の訓練を受けて来たからというのが理由だった。

「そうか・・・・・」

やはり彼等が居るか居ないかでかなり重圧が違うようだな。

「所で中尉。俺達の任務は今回に限っては偵察ですか？」

「そうだ。あそこは我々にとっても敵にとっても前線基地を建てる場所として申し分ない」

「ですが、俺達が建てるよりは向こうが建てたのをそのまま頂いてしまおうと言う方が効率的ですね」

「その通り。だから、今回は偵察だ」

相手がどれ位でどんな装備でどんな建物を造るのか・・・・・・・・・・・・・・・

それを調べて報告するのが今回の任務の目的だ。

「もし、敵と遭遇したら・・・・・・・・・・」

「時と場合による。少佐からも言われただろ？」

「はい。しかし、ワイバーンで追われたら」

「その時はこいつ等が居る」

部下の背後からイーグル１等軍曹達が音も無く現れた。

ランドルフ１等兵ーーーリンクスと観測手の山犬は白いギリースーツを着て顔半分を白い布で覆っていた。

銃にも迷彩を施しており、これで地面にでも伏せられたら判らない

ほど上手い偽装だった。

「こいつならワイバーンを仕留められる」

現に何匹か仕留めた、とイーグル1等軍曹は自分のように褒め称えた。

「本当かよ?」

部下がリンクスたちを見て訊ねた。

「ワイバーンは炎を吐く時に腹が膨らむ上に速度が一時的に遅くなります」

そこを狙い見越し射撃をした、とリンクスは語った。

見越し射撃とは相手がどんな風に移動するかなどを予測して射撃する事だ。

「ですが、ワイバーンを仕留められたのは観測手のお陰です」

狙撃手にとって観測手はとても大事だ。

風の向き方や力、湿度、温度など細かい部分を調べて相手を捕捉し狙撃をするのだから。

「つまり2人の力で倒したという事か?」

部下が確認するように訊ねた。

「はい。ですから、私一人ではありません」

部下達はその言葉を聞いて頼りになると言った。

「だが、頼り過ぎるな。出来るだけ見つからないように細心の注意を払え」

それでも見つかった時は俺達が居る、とイーグル1等軍曹は続けた。

・・・ただの女好きとばかり思っていたが、部下を褒め称え味方の士気を鼓舞する能力はあるか。

些か馬鹿にし過ぎたな。

「イーグル1等軍曹。貴様は軍曹だろ?」

「はい。そうですが」

イーグル1等軍曹は直立不動で立ち私の問いに答えた。

「軍曹の役割は何だ?」

「はっ。味方を鼓舞し貴方様のような“未熟者”を一人前にする事です」

未熟者、か・・・・・・・・

「では訊く。私は貴様から見てどんな感じだ?」

「・・・正直に言っても殴りませんか?」

何を言うつもりなのかは分からないが私は殴らないと約束した。

「では言います。ザンビア平野で初陣を飾るも兵達を纏める事も出来ずに敢えなく敗走。また普段から部下の統率がまるで出来ていない」

この時点で指揮官所か分隊指揮官でさえ無いと言われた。

「・・・・・・・・・」

「続きを言いますか？」

「・・・言え。全部言え」

「では・・・部下の統率が出来ないばかりか己の感情に任せて行動する所が多々あります。その上臨機応変に物事に対応できていない。そればかりか命令違反もした」

「・・・他には？」

「軍の総指揮官であるプロイセン様を馬鹿にする事もある上に私の上官であるテツヤ殿を罵倒し攻撃した。この時点で銃殺物です」

数えれば１０回は銃殺だと言いながらイーグル１等軍曹はここで区切った。

「しかし、訓練時は部下の手本となるように率先して先頭に立ち命令違反でありますがテツヤ少佐を救った功績があります」

「あれは私一人では出来なかった」

「結果的には成功させました。更に貴方は自分の非を遅いながらも認め他者と協調するようになられた」

「・・・・・・・・」

「総合的に見れば貴方はまだ指揮官としてはまだまだヨチヨチ歩きを始めた赤ん坊です。ですが将来的に見れば十分に指揮官としての才能は具えていると思います」

これから様々な事を経験し他人の言葉に耳を傾ければ十分に成長すると続けながら・・・・・・・・

「特に実戦経験豊富な上に女の扱いにも長け絶倫である俺に・・・・ふべ!!」

最後まで言う前に私は殴った。

「最後は余計だ。愚か者が」

「な、殴らないって約束しただろ?!」

「黙れっ。何が女の扱いに長けた上に絶倫だッ!!」

「まぁまぁ、中尉。そう怒らないで」

ヘン一一一フォックスが私を抑えてきた。

「・・・・・・・・」

私はこの鼻血を出す男が先ほど言った言葉を思い出して拳を下ろした。

「そ、そうそう・・・そうやって他人の言う事に耳を傾ければ良いんだよ。いってぇー」

イーグル1等軍曹は鼻血を拭きながら立ち上がった。

「まぁ、あんたはまだまだ未熟者だ。だが、ちゃんと旦那や俺達がお前さんを教育する」

そうすれば成長すると言われた。

「貴様には戦いの時は頼りにする。しかし、私生活では頼らんからな」

「えー、戦いだけでなくて私生活でも頼ってよー」

「断る。それで軍曹。どれ位の地点で馬から降りれば良い？」

私は話題を変えた。

このまま行くとまた拳を出しそうだったからだ。

「そうだな・・・ワイバーンは嗅覚が鋭いか？」

「いや。代わりに眼が良いぜ」

私に代わりフォックスが答えた。

鼻は良くないが眼が良いのか・・・ワイバーンは。

「眼か・・・だとすると、遠くからでも分かるな」

おまけに空から追跡でもされたらかなり厳しい。

「馬から降りて匍匐前進で近付くのが妥当かもしれないな」

「あれかよ・・・あれってキツイんダよな」

部下の一人が軽く愚痴を零した。

「おい、小僧。戦においてキツイなんて言葉は日常茶飯事だぞ」

イーグル１等軍曹はいきなり軍人の顔になると部下の胸倉を掴んだ。

「良いか?俺達は偵察だ。偵察の報告で味方の作戦内容が決まる。そして損害も少なくなる」

ただし、間違った報告だったら勝てる戦も負けてしまう。

「だから俺達は苦労するんだ。だが、それで味方が楽できるなら誇りに思え。それが出来ないなら・・・・・・・・」

イーグル１等軍曹はホルスターからリンクスたちも愛用しているベレッタＭ９２ＦＳを取り出した。

撃鉄は既に起きている・・・・・・・・狙いもまた定まっている。

「わ、分かりましたッ」

部下はドスの効いた声に慌てて頷いた。

「それで良い」

胸倉を放したイーグル1等軍曹はベレッタの撃鉄を親指で抑えてからゆっくりと引き金を引き戻した。

部下は地面に尻を着いて冷や汗を掻いていたが、そんな部下にイーグル1等軍曹は笑みを浮かべて言葉を放った。

「なぁに・・・偵察が終われば旦那達が巨乳で美人なネェちゃん達を出してくれる」

それがご褒美だと軍曹は言ってみせた。

「ほ、本当ですか?」

「あぁ。俺が旦那に話を着ける。どうだ?これならやる気も出るだろ?」

「勿論です!!」

そうだそうだ、と他の部下達も頷く。

私は呆れ果てた。

・・・男というのはどうしてこうも美人と言う単語に弱いのだろうか・・・・・・・・・?

ふと見れば山犬はリンクスの足を踏み付けていた。

リンクスはそれに対して怒るが山犬はそっぽを向いて答えない。

こちらはこちらで訳が分からない。

だが、これなら偵察を無事に行えそうだと私は安堵した。

そして心の中でイーグル1等軍曹に礼を述べておいた。

『貴様のお陰で無事に偵察を行えそうだ』

しかし、本人には絶対に言わない。

言えば調子付くだけだし、お礼を求められそうだからな。

「さぁ、各自陣へと戻れ。夜明け前には出発だ」

私は部下達を解散させて自分もまた陣へと戻った。

第百七十八章：他愛ない話

偵察に赴いてから3日が経過した。

後1～2日で目的地に到着する為か部下達の表情は険しくなり始めている。

私も同様だ。

これが訓練を受けた初めての任務だ。

いや、私は戦ったが彼等にとっては初めて。

何とかして彼等の余りに張り詰めた緊張を解す事は出来ないだろうか？

緊張は良い事だが過度な緊張はミスへと繋がる。

しかし、明確な答えは出せず私は自分が情けなかった・・・・・・・・・

テツヤ達なら部下達を上手く励ませただろうが私にはそれが出来ない・・・・・・

ふとテツヤが吸っている煙草――女神の抱擁の臭いがした。

臭いの方角を見ればヴィン・ルビーが吸っていた。

今年で21歳になる彼は男爵家の嫡男だが、既にその男爵家はもう

無い。

両親が相次いで死んでしまった上に親戚中に遺産などを取られたが、それでも親衛騎士団に入隊できた。

それからテツヤの訓練を受け今は2等兵の身分だ。

分隊での位置はポイントマン。

このポイントマンは先導兵や斥候の役割を担っているため出会い頭に敵と遭遇する確率が極めて高い。

そのためショットガンを彼は携帯している。

この位置は本来ならば一番経験がある者がやるのだが、生憎と私を含め親衛騎士団は経験がまだ殆ど無い。

彼がポイントマンになったのは偶々相性が良かったのがショットガンだったからという至極単純な理由だ。

彼は私達より少し先を行っているがまるで怖がった様子が無い・・・・・・

「お前らも吸えよ」

彼は火を点けた女神の抱擁を自分の分隊メンバーに渡した。

それを吸うと彼等は不思議と緊張が解れていくように見えた。

「テツヤが吸っている煙草だな？」

私が訊ねると彼は頷き、短くなった女神の抱擁を銜えてみせた。

「はい。これを吸うと本当に女神に抱き締められたような心地になるんです」

何でもテツヤが行く戦場には必ずあるらしく、それから愛煙草となったというのが経緯らしい。

テツヤはこれを「戦女神」と称しているとも教えられた。

向こうの世界ではワルキューレという戦女神が居るらしく戦場で勇敢に戦った戦士を神々が集うヴァルハラという宮殿へ連れて行くのが役目らしい。

それから彼等の生活を何でもこなし戦の時には共に戦うという。

「少佐は言っていましたね」

死んで迎えに来るなら美人であって欲しい、と・・・・・・・・・・・・

「あの顔でよく言えるな」

ハッキリ言ってテツヤは御世辞にも美男子ではない。

クルセイダー大佐が一流職人と一流の道具で作られた像であるのに対してテツヤは飲んだくれの職人が在り合せの道具で作った像だ。

そんな男がそんな言葉を言うのだからどの顔で言っていると思ってしまう。

だが・・・・・・・・

いや、止めておこう。

「まぁそうですけど、リンクスたちの話だと女には苦労しなかったそうですよ？」

あの顔と性格でありながら女には苦労せず一流と言われる女性達と付き合いがあったというから驚きだ。

「中には王族も居て求婚されたそうです」

「お、王族に求婚されただと？」

幾ら何でも嘘だろ？と言いたい所だがサラ様の事を考えると満更でも無い気がした。

「ですが断ったそうです」

イーグル1等軍曹から言わせれば「逆玉の輿を自分から振った」らしい。

しかし、それのお陰で私にも入れる隙があるから良い。

「そうか。それで緊張は解れたか？」

「はい。中尉・・・そんなに自分を責めるような顔をしては逆に士気が下がりますよ」

彼に言われて私は自分の顔を触ってみた。

確かに・・・少し・・・そういう表情をしていた。

「少佐達と中尉では経験の差があり過ぎます」

イーグル1等軍曹も述べた通り私はまだ赤ん坊クラスだ。

「そんな中尉なんですから、仕方のない事ですよ。もちろん俺達も同じです」

これから皆で成長して行きましょう、とヴィン・ルビーは語り煙草を灰皿に捨てた。

「さぁ、後もう少しで到着するんです。気合いを入れて行きましょう！！」

「・・・そうだな。まったく部下に励まされるとは私もまだまだだな」

私は苦笑してブーニー・ハットを深く被り馬の腹を蹴って少し速度を上げる。

それから更に進んで行き夜になった。

また陣を敷きそこで野宿するが焚き火は焚かない。

もう直ぐ着くから敵に見つからないようにするのだ。

だが、寒いのは我慢できない。

皆は焚き火を出さないようにしながら火を起こしてインスタント・コーヒを飲み合っている。

私もそれを飲みながらどの程度、敵が砦を造ったのか考えていると通信兵がこちらに来て本部から連絡がある、と言ってきた。

「こちらフィーナ」

通信兵から渡された受話器を片手にコーヒーを飲む。

『鷹だ』

テツヤの声だった。

名字に鳥の鷹を使用している為にコード・ネームも鷹を使用している。

「何か用か？」

『お前さんがプレッシャーに負けていないか確認の為に掛けたのさ』

「・・・危うく押し潰されそうになった」

だが、部下達のお陰で助かったと答える。

『そうか。それで後どの位で到着するんだ？』

「1日か2日という所だ」

『司教の予想では先ずワイバーンが寝られる場所を造っている筈だ』

ワイバーンは彼等にとって家族であり戦友だから一番にワイバーンが眠れる場所を造るというのがエドリアス大尉の予想らしい。

「今回は偵察だけなのだろ？」

『あぁ。下手に攻撃したら向こうの作業が遅くなるからな』

向こうには自分達の分までタップリと働いてもらう、とテツヤは笑いながら言った。

「性格が悪い男だな」

『司教に言え。司教が言い出しっぺだぞ』

「確かにそうだが、お前が相手なんだ。だから、お前に言う」

『お前も性格が悪いぜ』

下らない・・・他愛な台詞を互いに投げ合いながらも私の心はとても気持ち良かった。

『それで初めての任務はどうだ？』

まるで御使いの感想を訊いてくる感じだった。

「まだ途中だが、絶対に任務を達成し帰って来ると誓っている」

『それでその後はどうするんだ？』

答えを知りながらこいつは私の口から言わせたいのか・・・・・・・・・

「知れた事を・・・生きて帰り貴様に抱かれる」

そして浴びるほど酒を飲んで酔い潰れるのだ。

『素晴らしい答えだ。それじゃ酒と女を用意しておく』

「女は部下にか？」

『あぁ。イーグルから女を用意してくれと頼まれた』

「そう言えば、そう言っていたな」

素早いな・・・・・・・・・

『あいつはああ見えて部下の事を細かく見ている。まぁ、普段が普段だからただの変態に見えるだろうがな』

確かに・・・それさえ無ければマシだろうに。

だが、そういう所も含めてあいつなのだろう。

『そうそう・・・リーシャがお前の事を怨んでいるぞ』

「私がお前に抱かれるからか？」

『それもあるが、便所掃除を自分一人に押し付けて！！と言ってい

た』

「仕方あるまい。私は任務中だ」

『上手い口実だな。ヴィルヘルムにそっくりだ』

弟子は師に似るというがその通りだ、とテツヤは笑いながら言った。

「あまり似たくはない」

あんな性格には流石になりたくない。

『まったく今夜は面白い答えを連発するな』

その調子で任務を終えて帰って来い、と言われた。

「あぁ・・・必ず帰って来る」

そして貴様に抱かれる。

『楽しみにしているぞ。フィーナ・マレル中尉殿』

「楽しみにしていろ。決して後悔はさせない」

では、と言って無線を切った。

「少佐は何と?」

「無事に任務を終えて帰って来たら私とお前達に褒美を出す、と言われた」

通信兵はイーグル1等軍曹が言った言葉を思い出したのかそうですか、と簡単な相槌を打った。

しかし、顔がニヤケている。

まぁ・・・今回は見逃してやろう。

私も顔がニヤケているのだから。

それから私は交代の時間まで仮眠を取る事にした。

もう直ぐ敵が居る場所へ行くが、どんな事が遭っても私は生きて帰ると眠る前に再度誓った。

第百七十九章：偵察と援護

私達は小山がある所で馬から降りスキーを装着し静かに坂道を降りていた。

馬で行くと見つかり易いから、ここらかはスキーで移動だ。

もう直ぐ敵の所へ着く。

皆は緊張しながらも一言も言葉を話さず進んでいる。

また坂道に差し掛かったが、そこで一度止まった。

ここからでも敵の場所は見えるのだが、ここはもう少し近付いて偵察をする。

私はスキーを外すように合図した。

スキーを外しストックと共にその場に置き両膝を地面に着けて匍匐前進を始めた。

雪の上を匍匐前進で行くとかなり疲れるがこれが一番敵に発見されないのだ。

坂道で匍匐前進をするから、細心の注意を払い進んで行く。

暫く進んでからまた停止をした。

ここ等辺がちょうど良いだろう。

あまり近過ぎても駄目だし遠すぎても駄目だ。

それを考えると今の地点が妥当だと判断した。

背嚢から双眼鏡を取り出して覗いてみた。

敵は湖を囲む形で前線基地を造ろうとしているのが見えた。

傍らにはアパッチの残骸が雪を被り見えたが、直ぐに傭兵達に眼を向ける。

「・・・ワイバーンの数およそ３００・・・全員がワイバーンの鱗などで作り上げられた鎧・兜を身に纏い長剣と長槍を所持している」

私は隣に居る部下にメモを取るように命じた。

もう一人の部下には写真を撮らせた。

これを幾つもの方角からさせる事で相手の正確な人数から装備を知るのだ。

「現在、前線基地を築城中。ワイバーンが入る小屋が先に建てられているがまだ人数分は無い」

双眼鏡を覗きながら私は部下に眼で見える事を伝え続けた。

ワイバーンが入る小屋は棒を四角形に立てその上に屋根を掛けると言う簡素な物だった。

だが、これを人数分まで造るとなると時間が半端ではない。

それは敵も知っているのか半分は小屋を、もう半分は堀を掘る作業をしている。

湖を入れる形で前線基地は建てられている。

先の尖った杭を地面に突き立てその前に堀を掘って湖の水を流し込み水堀にしているようだ。

見張り台はまだ建てられていないが、恐らく2つから3つほど建てるだろう・・・・・・

私はそれを部下にメモを取らせ写真も撮らせた。

この写真と言うのはカメラと呼ばれる代物で出来あがる。

まるで一流の絵師が描いたように鮮明に描かれているため作戦などを立てる時に便利だ。

ただし、音が些か煩い上に光ーーーフラッシュと呼ばれる物を放つためそれを抑えている。

「・・・・・・・」

私は双眼鏡から眼が放せなくなった。

・・・居た・・・見つけた。

私の獲物。

私がこの手で仕留めると誓いを立てた・・・獲物が居た。

私の目の前でテツヤを攫い叔父上を矢で射た憎き1角ワイバーンの乗り手。

鎧を纏った奴は兜を掛けておらずその素顔が見えた。

歳は私より下で髪の色は金。

右目は義眼なのか――赤色で左が私と同じ金色だった。

部下達に命令をする女の腰のベルトには銀色に輝く拳銃が見えた。

なぜあの女が持っている？

疑問に思ったが、今はそれ所ではない。

「敵隊長を発見。特徴は右眼が赤い義眼である事・・・拳銃を所持している」

部下はその部分を強調するように二重に線を引いた。

私は・・・ずっと獲物から眼を離さずにいた。

今なら殺せる。

背負っているドラグノフＳＶＤを外し両手で持ちストックを肩に当てＰＳＯ－１スコープで覗き込め。

そして息を整えて引き金に指を掛けろ。

少し引けば弾が飛び出て・・・あの女の脳味噌を・・・心臓を・・・
白い大地を赤く染め上げる事が出来る。

脳味噌を貫通しグチャグチャに出来る・・・あの小奇麗な顔を二重
と見れない顔にできる。

心臓を撃ち抜けばワイバーン共の餌に出来る・・・あの鎧を貫けば
破片が飛び、仲間を傷付けられるかもしれない。

ドラグノフに手を掛けようとしていた私だが手を止めた。

・・・今回はあくまで偵察が任務だ。

もし、あの女をやれば忽ち場所が知られて全員を危険な眼に遭わせ
てしまう。

私は隊長だ。

私情を挟んではいけない。

テツヤの時は大目に見られたが、今度は見逃してもらえないだろう・
・・・・・・・・

それにイーグル軍曹も己の感情に流される節があると言われたばか
りではないか。

ここは諦めるしかない。

だが、今度会う時は必ず殺す。

それで良いのだ・・・今は。

私は女から視線を外し、他に見落とした点が無いか確認した。

それから暫くの間、奴等の動向を見ていたが十分に情報を集められたので引き揚げる事にした。

その時だ。

部下の一人が私を呼び止め「誰か来ます」と言ったのは。

私は振り返り双眼鏡でまた覗いてみた。

左眼を眼帯で隠し顎髭が特徴的な男・・・・・・・・・

「ライアンナル伯爵」

蛇を紋章に持つ伯爵でありテツヤ達に拷問をした男・・・・・・・・・・

女はライアンナル伯爵を見るなり、近付いて何かを喚き散らした。

だが、ライアンナル伯爵の態度は冷たく逆に挑発するような素振りを見せた。

それを部下達は殺気だった眼つきで睨むが、ただ睨むだけだった。

雇い主か？

もし、そうならワイバーンが何故あんなに繰り出されないのか納得したし、なぜ彼等だけなのかも凡その見当が付いた。

不意にライアンナル伯爵がこちらを見た気がした。

慌てて双眼鏡を隠しじっとする・・・・・・・・・

どれくらい時間が経過したのかは分からないが、長い時間だったと錯覚する。

しかし、ライアンナル伯爵は背を向けて帰る所だった。

思い過ごしだった、か・・・・・・？

どちらにせよもう長居は無用だな。

急いでこの場から離れなくては・・・・・・・・・・・・

私は全員に撤収を命令し静かに匍匐前進で元来た道を戻り始めた。

だが、その時だ。

ＧＲＡＡＡ！！

突然ワイバーンの鳴き声が空中からしたのは見ればワイバーンが数匹ほどこちらに向かって突進して来たではないか！！

気付かれたのか？

いや、それより今は・・・・・・・・・

「全員、応戦しながら撤退しろ！！」

私はＡＫ－７４に装着したＧＰ－３０の引き金を前線基地の方に向けて発射した。

部下の何人かもグレーネードランチャーなどを持っていたからそれで援護しながら仲間を後退させて行く。

私はＡＫ－７４をワイバーンに向けて乱射したがワイバーンは物ともせずに突っ込みブレスを吐こうとした。

急いでその場から離れようとしたが、ワイバーンが先に空で爆発した。

そう・・・爆発したのだ。

ブレスを吐こうとした所で爆発し肉の塊となったワイバーンは近くに居た仲間達を巻き込みながら地面へと落下して行く。

こんな事が出来る奴は・・・リンクスか。

あんな芸当ができるのはあいつしか居ない。

「中尉。軍曹からですっ」

通信兵が私に受話器を差し出してきた。

「こちらフィーナ」

『イーグルだ。俺らが援護するから逃げろ』

無線からイーグル1等軍曹の声がした。

「了解」

私は直ぐに無線を切り部下達を下がらせた。

山道を走りながら銃を撃ち続け少しでも仲間を後ろへと下がらせる。

その間もリンクスたちはワイバーン達を引き付けているのかこちらへの攻撃は少ない。

何とかスキーのある場所まで逃げ切る事に成功した。

「リンクスたちは大丈夫でしょうか？」

部下がリンクスたちの安否を口にした。

「少佐の部下達だ。少なくとも“今”の私達よりは頼りになる」

今の私達ではあいつ等のようになれない。

だが、必ずあいつらに追い付き追い越してみせる。

今は甘んじて任せよう。

「馬の所まで急いで行くぞ」

『了解ッ』

部下達は頷き、馬のある場所まで更に急いだ。

―　―　―　―　―　―　―　―

私達はフィーナ中尉達から少し離れた場所に居た。

「どれどれ・・・司教の予想は的中だな」

軍曹は双眼鏡を私に差し出して呟いた。

私も見てみると確かにワイバーンが眠る小屋が先に建てられているのが確認できた。

「ですが、同時に堀などもやっていますね」

半分に人数を別けて作業を行っている。

「・・・・ん？」

私は一人の傭兵に眼が止まった。

年齢はフィーナ中尉より年下だが、顔で場数は上だと判った。

右目は義眼で色は赤。

左眼は金色で髪の色も金という容姿だ。

・・・顔立ちがフィーナ中尉と似ている。

あの女が・・・・・・・・・・・・・・・・

同時にベルトに光る物が見えた。

拳銃だ。

だが、それ以外は持っていない。

「軍曹。あの拳銃は何ですか？」

私は軍曹に双眼鏡を渡し訊ねた。

「どれどれ・・・・おっ、美人だなー」

軍曹は私が訊いた事より女の方へ眼が行ったのか顔がニヤケている。

「あの乳は鎧越しでもDカップはあるか？んー鍛えられた肉体といいあの勝気そうな顔と言い良いなー」

「そんな事は訊いていません。拳銃を」

何時までも続きそうな感じなので私は急かした。

「わーてるよ。あれは“オートジャム”だ」

「オートジャム？」

ジャムの名前があるのだから碌な拳銃ではない気がする。

「本名はＡＭＴオートマグナム。ステンレス技術を施し強力なマグナム弾を撃てるんだが当時はまだ技術が未熟でな」

直ぐにジャム一一一弾詰まりを起こす事から「オートジャム」という不名誉な渾名を頂戴したらしい。

「ハゲタカの兄貴が使用していた銃だ」

少佐曰く「銃の趣味から女の趣味まで最悪」だというからかなり駄目な銃のようだ。

「何であの女が・・・・・・・」

「さぁな・・・しかし、顔立ちがあの勝気なお嬢ちゃんに似ているな」

「・・・・・・」

私はそれに対して無言で居た。

軍曹は私を見たが、直ぐにまた双眼鏡を覗き込んだ。

「フォックス。あの眼帯をした野郎は誰だ?」

軍曹はフォックスに双眼鏡を渡して訊ねた。

「あいつは・・・ライアンナル伯爵だ」

フォックスは軍曹が訊ねた眼帯の男をライアンナル伯爵だと告げた。

「蛇を紋章に持つ男か」

「あぁ。どうやらあの男が傭兵の雇い主のようだ」

「そうか。何だか胡散臭いな」

見るからに怪しさ満点と軍曹は言った。

「帰ったら隊長に訊いてみるか？」

「それが良い。引き上げだ」

『了解』

私達は静かに匍匐前進で元来た道を戻り始めた時だ。

空からワイバーンの鳴き声がして上を向けばフィーナ中尉達が居る場所へワイバーンが数匹ほど向かっていた。

「どうやら来た所を見付けられたようだな」

方角とワイバーンの背中に載せられた木材から推測するとヴァエリエから来て発見したと軍曹は言った。

「リンクス。あいつ等をやれ」

俺はフィーナ中尉に連絡すると言い猟犬に通信機を寄こせと命令した。

「了解。山犬」

「任せて」

山犬は直ぐに観測を始め私はモーゼルを構えた。

荷物を抱えている為か前に比べて速さが若干だが遅く見えた。

その上、ブレスを吐こうとしているから腹が膨らんでいる・・・・・・・・・

「風速1・・・湿気3・・・横向き」

私は引き金を引いた。

弾は腹に命中しワイバーンは空中で身体をバラバラにした。

近くに居たワイバーンの内数匹ほどが巻き込まれて地面に落下する。

そこをフォックスがアームスコーMGLで仕留める。

「俺達はあいつらを逃がすまで時間稼ぎだ」

軍曹がコルトM727アブダビ・カービンをセミ・オートで撃ちながら言ってきた。

『了解』

私達は頷き移動しながら攻撃した。

敵はワイバーンに乗ろうとしたが、それをフォックス、私、チャレンジャーで阻止する。

そして山犬、猟犬、軍曹が援護射撃をしながら私達は移動し続けた。

第百七十九章：偵察と援護（後書き）

誤字がありましたので訂正します。

第百八十章：青春を無駄にした女

私達は移動を続けながらワイバーン達を釘付けする事に成功し夜になってからフィーナ中尉達の後を追い掛けた。

「肝を冷やしたぜ」

軍曹は雪で白くなった山道を歩きながら愛煙草一一一燃える女に火を点けながら軽く息を吐いた。

「しかし、結果オーライですよね？」

「まぁな。写真も撮れたしメモも取れた。おまけに全員無事」

万々歳だと軍曹は言ってから煙を吐いた。

「それにしてもライアンナル伯爵は一体どうして来たんですかね？」

レオンが女神の抱擁を吸いながら軍曹に訊ねた。

もうここまで来れば敵は追って来ないと踏んで煙草を吸っているから然して問題は無い。

「俺が知る訳ないだろ。だが、揉めていたな」

確かにその通りだ。

女傭兵一一一マーズとライアンナル伯爵は言い争っていた。

どちらかと言えばライアンナル伯爵は冷静でマーズは激怒していたが。

何で揉めていたのかは不明だ。

「これは俺の推測だが、仕事外の仕事を任されたからじゃないのか？」

「それは言えるな」

フォックスの推測に軍曹は納得した。

「どういう事です？」

「あいつ等は戦う為にここに来た。だが、仕事は大工。仕事内容に無い」

天馬より強いワイバーンに乗る彼等だ。

プライドが高いに違いない。

そんな彼らなら不平不満を漏らすのも無理はないし、その不満を雇い主のライアンナル伯爵に言うのも頷ける。

「軍曹達はそんなこと無かったんですか？」

「毎度のようにあった。バンカーを作れとかなんて当たり前のようにあった。だが、戦なんてそんな物だ」

常に戦況は大きく変わる。

同じ戦況など有り得ない。

「旦那の国に居た“安達二十三（あだちはたぞう）”という軍人が居た」

階級は陸軍中将で家族も陸軍出身者と言う生粋の陸軍軍人家だったらしい。

性格は厳格だが細心でもあり困難に遭った時は率先して部下と共に立ち向かったという。

そんな人だからこそ部下からの信頼は絶大と言えた。

「その中将は口癖のようにこう語っていた」

“戦は一期一会（いちごいちえ）”

元々は茶に道を説く茶道から出てきた言葉だが、転じてどんな状況も一度切りという意味合いになる。

これを安達中将殿は戦に運用したのだ。

「同じ戦況は二度と来ない。戦は常に臨機応変に望まなければならない」

その言葉通り安達中将殿は部下と共に兵站などを遮断されながらも最後まで戦い抜き降伏したという。

「旦那もこの言葉を引用した」

自分達も臨機応変に求められた作戦を遂行しなければならない。

「だから、堀なんかも掘ったしバンカーも作った」

仕事外だが、こういう事もやって実績を上げるのがプロだと少佐は言い続けたらしい。

「俺もその通りだと思った。お陰で色々な事が出来る」

大工なんかお手の物だと軍曹は得意気に笑ってみせた。

「さぁ、俺達も急いでお嬢ちゃん達の後を追うぞ」

私達は頷き急いでスキーを装着して馬がいる場所まで向かった。

「しかし、フィーナ中尉は変わりましたね」

私はフィーナ中尉の事を口にした。

あの時フィーナ中尉は攻撃をしながら後退しろ、と命令を下した。

以前なら恐らく「突撃だ!!」と言って闇雲に敵陣へ突っ込んだだろうに・・・いや、偵察など疎かにして「敵が目の前に居るのだ。者共かかれ!!」と言いそうだな。

「まぁな。良い方向へ変わっているんだから良いだろ?」

「そうなんですけど、少佐に抱かれるというのがどうも気になって」

「あのお嬢ちゃん顔とスタイルは良いんだがな・・・・・・・・」

そう・・・フィーナ中尉はお世辞抜きにしても美人の分類に入るし身体も鍛えらており出る所は出て締まる所は締まっている。

要は女として魅力的なのだ。

だが、あの性格では大抵が嫌だと言う筈だ。

ヴィールング殿から繊細だと言われよく観察すればその通りだと判るのだが初対面であの態度だったら私みたいに偏見の考えを持つだろう。

「お姉様は一人っ子で次期当主と言われたからかなり厳しく育てられたんだよ」

チャレンジャーがフィーナ中尉の過去を軽く口にしてみせた。

「虐待に近い教育か？」

軍曹がそれに訊ねるとチャレンジャーは「それに近いです」と答えた。

「幼い頃から真剣を持たされて素振り１０００回できるまで家に入れてもらえなかったりなど当たり前だったようです」

その上甘える事など言語道断と言われて一度だけ甘えた事があったらしい。

しかし、言葉通り甘えるなど言語道断とばかりに平手打ちをされたというから酷い話だ。

「そんな教育じゃ成長する所か歪んじまうのも無理はない」

だからこそ、今頃になってから成長するようになったんだろうな、と軍曹は推測し私達も同感だった。

騎士の鑑と謳われたロックス・マレル侯爵。

表の顔こそ良いが裏の顔はとんでもない。

ヴィールング殿がもし、当主でマリー様と結婚なされていればフィーナ中尉ももう少し早く成長できただろうな・・・・・・・・・

それを思うとやはり悪いのはロックス・マレルと判断してしまう私は偏見だろうか？と自問自答しながら煙草を口に銜えた。

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

ー ー

私達は馬の居る地点まで無事に到着した。

既に夜となりワイバーンが来る事は無い。

「皆・・・無事か？」

息を整えながら私は部下達に訊ねた。

「無事です」

ヴィン・ルビーが汗を拭きながら答えると皆も無事だと答えた。

「よし。リンクスたちが戻るまでここで休憩を取る。各自で陣を敷き敵に備えろ」

直ぐに部下達は陣を構え敵に備えながら休憩を挟んだ。

私も腰を降ろしドラグノフＳＶＤを背中から降ろし軽く息を吐いた。

防寒服は便利だが動けば汗が出て体力が消耗する。

寒冷地帯や山岳地帯での戦いは体力が必要以上に無くなる事だ。

慣れるとそうでもないのだが、私も部下も慣れていないから大変である。

ふとヴィン・ルビーを見れば煙草――女神の抱擁を吸っていた。

ここまで来れば・・・ワイバーンは夜、飛べない故に追手は来ないと判断し煙草を吸っている。

臭いは遠くからでもするが、ワイバーンは来れないから問題ない。

寧ろリンクス達に居場所を教える事になるから良いだろう。

「何か？」

彼は私の視線に気づいたのか振り返った。

「いや・・・どうもそれは嫌な臭いだと思ってな」

この煙草の臭いは嫌いだ。

私の父であるロックスは何時も母上の匂いを付けていなかった。

知り合いの父などは何時も奥方の匂いを身体に染み込ませていたのに・・・・・・・・・・

毎日抱擁を交わして口付けをすれば自然と奥方の匂いが染み付く。

だが、ロックスは母上と抱擁を交わした所を私は見た事がない。

何時も・・・母上を罵ったり物扱いしたりした。

それなのにロックスの身体からは母上ではない別の女の臭いが何時もした。

母上ではない女性と抱擁したんだ、と幼いながらも感じて怒りを覚えたものだ。

しかし、母上からは何時も叔父上の匂いがした。

私もまた叔父上の匂いが染み付いている。

何時も叔父上は私と母上の元へ来ては抱擁をして口付けを交わし合った。

そして私には何時も人形や菓子を与えてくれたし、母上にもドレスや香水を与えてくれた。

幼い頃から何時も思っていたものだ・・・本当の父が叔父上ーーーヴィールング殿だったらどれだけ幸せだった・・・か。

・・・・話を戻そう。

テツヤがあれを・・・女神の抱擁を吸っていると・・・気に入らない。

まだあいつと抱擁を交わしていないからだが、私ではない・・・別の女の臭いがあいつに染み付いていると思うと胸糞悪くてならない。

あいつの身体には私の臭いが染み付けば良いのだ。

あんな何処の誰かも知らない女の臭いなど染み付けさせて堪るか。

『帰ったら進言してみるか』

私はテツヤに進言しようと決めた。

「どうしたんだ？中尉は」

「さぁ？でも、何だか少佐に抱かれるって約束してから変だよな？」

「確かにな。偵察に行く途中も顔を赤くして大声を出したし・・・・」

「あれじゃねぇの？初恋だからとか」

「初恋なんて餓鬼の頃に経験するもんだろ？」

「そうだけど中尉の周りに同い年とかの奴等なんて居なかっただろ？」

「確かに・・・まさか、本当に初恋・・・なのか？」

「もしそうなら随分と遅い初恋だな」

「今までずっと騎士道驀ら（まっしぐら）だったんだろうな・・・・・・」

「それにあの性格じゃ“自分を倒した男としか結婚しない”とか言ってたんじゃねぇのか？」

「有り得るな。男から見ればちょっと可愛らしい所を見せてくれた方が嬉しいんだがな・・・・・・」

結論・・・・・・・・・・

『・・・青春を無駄にした女』

私が決意している傍らでヴィン・ルビーと仲間が私の言動について話し合って失礼極まりない結論に至ったのを私は知らなかった。

第百八十一章：守護神という名前

リンクスたちを待っている間にもう直ぐ夜明けを迎えようとしていた。

部下達の中には徹夜をした者も居るため欠伸を噛み殺す者も居た。

「・・・遅いですね。あいつら」

ヴィン・ルビーは迷彩を施したモスバーグＭ５９０を持つ右手ではなく左手で女神の抱擁を吸いながら呟いた。

「あぁ・・・・・・」

私は彼の呟いた言葉に頷いた。

一体どうしたのだ？

ここまで来るのに然して時間は掛らない。

やられたのか？とも考えたがあいつ等なら大丈夫と思い直す。

あいつ等は私達より強い。

現に部下達は彼等が必ず来ると信じている顔だった。

なら・・・私も待つ。

「ん？中尉・・・来ましたよ」

部下が双眼鏡を覗きながら私に告げた。

「全員、警戒を続けろ」

私は前に出た。

彼等は馬に乗りこちらに近づいて来る。

まったくの無傷だった。

「待たせたな。ふぃ・・・ぎゃあ」

イーグル1等軍曹はテツヤの物真似をしたから、私が強制的に馬から引き摺り落としてやった。

「二度とテツヤの物真似をするな。胸糞悪い」

テツヤならもっと枯れた声だし・・・もっと格好良くて私の心臓を鷲掴みにする位の魅力に溢れている。

こんな男の声では耳が腐る所か身体全体が汚れる。

「や、やだなー。ちょっとした悪戯・・・・」

「二度は言わん。二度とテツヤの物真似をするな」

私はコマンダーの撃鉄を起こし奴の“息子”に銃口を向けた。

「テツヤは貴様とは雲泥の差がある。貴様など足元にも及ばん」

「ちょっ、前まで嫌ってたのに変わり過ぎだぞっ」

「煩い。解かったのか？解からないなら無理にでも解からせるぞ」

コマンダーの引き金に力を込めた。

後もう少しで弾は出る。

そうなれば・・・・・・・・・・・・

「わ、わかった。分かったから拳銃を退けてくれ！！」

「なら良い。物分かりが良いのは長生きできる証拠だ」

私はコマンダーをホルスターに戻しリンクスに視線を向けた。

「どうやら無事のようだな」

「はい。そちらも無事のようですね」

「あぁ。しかし、随分と長かったな」

「これでも急いで来たんです」

敵からの追撃をかわす為に方角とは別の道を辿るなどしたらしい。

これは偵察にも当て嵌まる事で来た道と帰る道は別々にする事。

何故なら二度も同じ道を使うと容易に待ち伏せなどをされるから。

それを考えれば彼のした行動は決して的外れではないし遅れても仕方無い。

だが・・・この青年には色々と自業自得だが煮え湯を飲まされた。

ここは・・・・・・・・・・

「言い訳だな」

「言い訳なのは理解しています。ですが」

「女に言い訳をする男は嫌われるぞ」

どんな理由だろうと言い訳は言い訳だと私は続けた。

「貴様、オリガという女と同棲しているのだろ?なら言い訳はしない方が良い」

私の父は言い訳さえせず公に「他に女が居る」と身体に染み付いた臭いで公表していたが、な。

「・・・以後気を付けます」

リンクスは私に説教されてかなり抵抗があるのか納得いかない顔だった。

その顔が実に面白い上に初めてこいつに説教で来たと思うと笑いが止まらない。

「ふふふふふ・・・心地よいな」

まさかこいつに説教が出来る日が来るとは・・・・・・・・・・

「ドSだなー」

イーグル1等軍曹が立ち上がり私に言ってきた。

「意味は何だ」

この男が言うのだから碌な意味ではないだろうが。

「相手を苛めたり焦らす事で快感を得る事。あんたの場合は・・・Sだ」

逆に苛められたり焦らされるので快感を得るのがMと言う。

人間どちらかと言うが、私の場合はSか。

「リンクス。今度からは気を付けた方が良いぞ」

下手に手出しすると手痛いしっぺ返しに遭う、とイーグル1等軍曹はリンクスに告げてきた。

「・・・そうします」

リンクスは私を見ずに少し落ち込んでいた。

その姿がまた心地よい。

「中尉。好い加減その表情止めた方が良いですよ」

テツヤより意地悪な顔だと言われたので、私は一先ず表情を元に戻した。

「ミレーネさんと言いメジュリーヌの姐御と言い、旦那の周りってSが多いんだよな」

「知った事か。それより速く行くぞ。時間が惜しい」

「愛しのマイ・ダーリンが待っているからか？」

茶化すように言って来るこいつを私は、ピシャリと叱り付けた。

「今は任務中だ。帰るまで任務だと言う事を忘れるな」

「へぇへぇ・・・これ以上あんたに説教されたんじゃ堪らないからな」

行くぞ、とイーグル1等軍曹は馬に乗りリンクスたちを伴って進み始めた。

「私達も行くぞ」

私は部下達に命じて片づけを命じてイーグル達の後を追った。

敵はこれからどうするのだろうか？

考えてみたが、あの様子ではまだ先はある。

私達が攻撃し被害が出たなら尚更だ。

『急いで働け。私達があそこは頂くのだからな』

そうすればご褒美として鉛玉をくれてやる。

そしてあの女・・・・・・・泥棒猫が。

『私からテツヤを一時とは奪い去ったのだ。その上テツヤをあんな眼に遭わせた』

その礼は必ず返してやる。

あの女が地べたに這い蹲り私に跪く姿を考えるとまた笑いが止まらない。

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

―――――――――――――――――――――――――――――

『また元に戻ったよ・・・・・・』

俺は煙草―――女神の抱擁を吸いながら仲間に小声で話し掛けた。

『あんな顔、初めて見たぞ』

仲間は驚いた顔をしながらどうしたものかと溜め息を吐いた。

『良い方向へ変わったけど別な意味でも変わったな』

確かにその通りだと俺は同感した。

『まったくだ。リンクスなんか相当落ち込んでるぞ』

先頭を進むリンクスなどはズーンと肩を落としている。

『あれだと暫く落ち込むな』

見る限り2、3日はあの状態だろうな。

『幾ら前の事があるからってやり過ぎだよな?』

『あぁ』

俺は頷いて中尉が振り向こうとしたので女神の抱擁を銜えて誤魔化した。

『しかし凄いよな?ワイバーンをライフルで撃ち落とすんだから』

仲間もそれを見越したかのように話題を変えてきた。

俺達を見つけたワイバーンは直ぐに向かってきた。

弾を撃ったのにそれを掻い潜り突っ込んで来る姿は敵ながら凄いと思った程だ。

怖いとさえ思ったし、もう駄目だとも思ったがリンクスが放った1発の弾丸で木っ端微塵に肉の欠片となった・・・・・・・・・

『あいつだから出来る芸当だろうぜ』

『俺達には出来もしないか』

それに俺は頷いた。

『あいつと山犬、猟犬の３人・・・２人と１匹だから出来たのさ』

リンクスが撃ち、山犬が観測を、猟犬が周囲を警戒する。

このチームだからこそあんな芸当が出来たんだ。

『確かに。リンクスのライフルだと長距離でも狙えるがボルトアクションだから連続は難しい』

だが、山犬が持つＳＫＳカービンだと連続でも撃てるし数が多ければ猟犬のＰＫＭで片付けられる。

しかも、猟犬は狼人だから近距離だろうと敵は居ないし追撃も可能だ。

正に理想的なチームと言える。

『俺達より若いのに大した男だぜ』

『あぁ。砦の時も少佐達と立て籠って殿を務めたんだからな』

殿ほど難しい任務は無い。

何故なら味方の援護は無いし限られた人数で戦うしかないからだ。

それをあいつはやってのけた。

今回もまたそうだ。

たった5人で敵を食い止め無事に戻ってきたんだ。

まさに・・・・・・・・・・

『あいつが俺達にとっては“守護神”だな』

仲間の言葉に俺は頷いた。

そう・・・あいつは守護神だ。

俺達の背中を護りながら援護してくれる守護神。

リンクスという名前も良いが、守護神という名前をあいつにくれよう。

『・・・あいつが俺たちの背中を護ってくれているんだ』

『なら、俺達は前へ進んで戦況を挽回させなくてはいけないな』

『そうだ。背中は心配ない。なら、俺達は前へと進むんだ』

『この戦い・・・何としても勝たないとな』

仲間の言葉に俺は頷いた。

首都に戻ったらあいつを誘って酒を飲み明かしたい、と俺は思いな

がら女神の抱擁を吸った。

第百八十二章：死ぬまで良き友

城へと無事に到着した私達を少佐――テツヤが迎えてくれた。

他にもプロイセン様やゲンハルト様達が居た。

だが、私にはテツヤしか眼に入らなかったのは誰にも言えない。

テツヤは何時もと同じ格好で煙草を口に銜えてこちらを見ていた。

黒い瞳は何処までも黒く底が見えないが・・・そこがまた素敵だと思ってしまう自分が居る。

「ご苦労だな。フィーナ中尉」

テツヤは私の名前の後に中尉と付けた。

忘れていた・・・ここでは少佐だった。

・・・まだ任務報告するまでこの目の前に立つ男は私の上官で少佐なのだ。

それを忘れて私はこの男を見てしまった。

「は、はい。フィーナ中尉ならびに親衛騎士団団員。無事に偵察を終えました」

慌てて私は直ぐに部下の立場となり答えた。

「ご苦労。イーグル1等軍曹。お前もご苦労だった・・・どうしたんだ?リンクスは」

少佐はイーグル1等軍曹を見てからリンクスを見た。

見ているだけで気が滅入りそうな程に落ち込んでいるリンクスを見れば誰だって気になる。

「私に説教されて落ち込んでいるんです」

「お前に?」

「はっ。実は・・・・・・・・・」

かくかくしかじか、と事の顛末を言うと少佐は静かにこう言った。

「お前はドが付くSだな」

「テツヤよ。そのSとは何だ?」

ゲンハルト様が興味深そうに訊いてきた。

「Sってのはサディズムの頭文字を取っている」

サディズムとはイーグル1等軍曹が私に説明した通りだ。

別に私はそんな相手を苛めて快感を得るような性格では・・・無い筈だ・・・多分だが。

「なるほど。という事は差し詰めイザベルはSだな」

ドの前に超が付く、とゲンハルト様は言った。

「昨日もやられたのか？」

「そうだ。まったく・・・腰が痛いと言ったのに駄目の一点張りで・・・・・・・・・」

そこからはゲンハルト様の愚痴が続いたので聞かない事にした。

その代わり私は少佐に訊ねた。

「少佐は私をドが付くSだと言いました・・・それは貴方様に抱かれる点においてはどうなのですか？」

この男がまさか鞭などで打たれて快感に浸る姿など想像できないから、敢えて私はSだと抱かれる時に何か不具合が無いか訊ねた。

「訊いてどうするんだ？お前は相手によって性格を変えるほど器用な女じゃないだろ」

「そうですが・・・・・・・」

確かに指摘された通りだが・・・出来る限りの事はしておきたいのが本心だった。

「出来ないなら素のままで居ろ」

「・・・はい」

私は少しばかり怒られた感じで項垂れた。

「それはそうと報告は？」

「は、はい」

項垂れていた顔を直ぐに上げて少佐に報告した。

「そうか。写真は明日までには現像しておけ。メモも一緒にな」

それが終わればご褒美が待っている、と少佐は言った。

「えー、旦那。いま下さいよー」

イーグル１等軍曹が子供のように駄々を捏ねてきた。

良い歳をした大人が子供のように駄々を捏ねるとは情けない。

「我慢しろ。そうすれば俺の口でお前にも用意するぞ」

「俺・・・居なかったんですか？」

イーグル１等軍曹は自分に用意されていない事に驚いていた。

「嫌がるんだよ。皆」

まぁ、この性格を考えれば誰だって嫌がるのも頷ける。

「おお、神よ！！」

こいつは頭が馬鹿だと私は思った。
こんな下らない事で神に叫ぶなど頭がどうかしている証拠だ。

「こいつは放っておいて早くやれ」

少佐はイーグル1等軍曹を見ずに命令し私達は頷き写真などを現像する事にした。

だが、私は残り少佐・・・テツヤに話し掛ける。

「さぁ、テツヤ。約束は払ってもらうぞ」

私は無事に任務を終えて帰って来たのだ。
次はそちらが約束を果たす番だ。

「まだだ」

「な、何だと?!」

こいつは帰って来たら私を抱くと約束したのに・・・・・・・・・・・・・・・

「や、約束を破る気か?!貴様は、女との約束は守ると言ったではないか!!」

「そう怒鳴るな。まだ罰が終わっていないからな」

「そ、それは・・・・・・・・・」

忘れていた・・・まだ2週間経っていない。

「だ、だが、貴様は私を抱くと・・・・・・・」

「そうなんだが、メジュリーヌに言われたんだよ」

あの小娘には煮え湯を飲まされた。

なら・・・焦らすだけ焦らさせよう。

「あっの・・・・女がっ」

何があろうと私がテツヤと・・・関係を結ぶのを阻止する気か!!

いや、それ以前にこの男は私を抱くのが遠のいても良いのか?

それを訊けば・・・・・・・

「別に。言っただろ?我慢強いと」

「そ、そうだが・・・・・・・・・」

「それにお前を焦らすのも楽しいからな」

これを言われては何も言えない。

いや、それ以前に・・・・性格が悪すぎる。

どうしてこんな男を私は・・・好きになったんだ?

「そうだな・・・罰を受けている間でも出来る事があるぞ」

私の様子を見ていたテツヤは不意に言ってきた。

「な、何だ?」

「女を磨け」

「お、女を?」

どういう事だ?

「お前は美人だ」

これに私は軽く俯いた。

まさか真正面からこんな言葉を言われるとは・・・・・・・・・・・・・・・

「おまけに身体付きも申し分ない。しかし、“それだけ”だ」

美人だがそれだけ・・・身体は申し分ないがそれだけ・・・・・・・・・・

女としてまだまだ未熟。

軍人も未熟で女でも未熟。

どれだけ私は未熟者なのだ・・・・・・・・・・・・

「女を磨けば・・・俺が我慢できずに抱くかもしれないぞ?」

面白がるテツヤを見て私は・・・・・・・・

「分かった」

頷いてみせた。

「貴様が私を襲うくらい女を磨く」

残り時間は少ないが、それでもやれるだけの事はやりこいつが襲わなくても罰が終われば抱いてくれる。

ならば、それまでに女を磨きテツヤに美人だけが取り柄ではない事を知らしめてやる。

「楽しみにしている」

そう言ってテツヤはプロイセン様達と共に去って行った。

私は溜め息を吐きながらリーザ中尉の所へ向かう事にした・・・・・・

今頃は一人で便所の臭いを身体に染み込ませながら黙々と作業をしているだろう。

城の排泄所は遠くからでも臭うほど強烈だ。

だから、行く時は必ずマスクをしなくてはいけない。

さもないと口の中に入って息まで臭くなる。

排泄所に行くとリーザ中尉が手袋にエプロンを付けて黙々と作業をしていた。

「リーザ中尉。お待たせしました」

私が声を掛けるとリーザ中尉は作業を止めてこちらを見た。

「・・・遅かったですね」

「すいません」

「別に良いですけど」

明らかに良くないと言っているのだが気にしないでおこう。

「それでどうでした？」

「どうも臭います」

分かっていると思うが、臭うとはここの事ではなく敵の方だ。

「というと？」

リーザ中尉は排泄物を桶に入れながら訊いてきた。

「ライアンナル伯爵が来たんです」

「あの男が？」

「えぇ。そしてテツヤを攫った女と会話をしたんですが揉めていたんです」

「ライアンナル伯爵がワイバーンを雇ったのでしょうか？」

「可能性は高いです。後で叔父上に詳しい事は訊いてみる積りですが」

「そうですか。それでバレなかったんですか？」

「いえ。たまたま材料を持って来た者に見つかり攻撃されました」

だが、そこをリンクス一一一ランドルフに助けられた。

「そうですか。ランドルフ君は射撃に関しては私達より上ですからね」

「確かに。空を飛ぶワイバーンを1発で仕留めたんですから」

私には出来ない芸当だ。

もし、私が出来ていればテツヤを攫われたりはしなかった・・・・・と思う時もある。

だが、私にはどう頑張っても・・・それこそ逆立ちしても出来ない。

「狙撃手には適性がありますからね」

私の独白にリーザ中尉は肯定するように言った。

狙撃手は誰にもなれる物ではない。

生まれ持った才能と適性があるか無いかで決まるのだ。

私の場合もリーザ中尉の場合もそれが無い。

ドラグノフＳＶＤは分隊狙撃銃だ。

これは歩兵なら誰でも使えるように設計されている。

つまり皆が使えるような設定だから私にも扱えるだけの話だ。

「ですが、貴方には銃剣術がありますがね」

「もう廃れていますがね」

テツヤ達が生まれた時代では既に銃剣術は過去の物になり掛けている。

理由としてライフルなどの銃器が発達した事にある。

私達が使うアサルトライフルの前はランドルフが使用するボルトアクション式が主体だった。

しかし、これでは単発式で連続が出来ない。

そこで拳銃弾を使用し連続射撃が可能なサブマシンガンが出た。

ボルトアクション式とサブマシンガンを組ませて戦ったが、サブマシンガンでは威力不足な事もあり更にアサルトライフルが出来たの

だ。

これらが混ざり合って銃剣術が廃る原因となった。

「でも、何も無いよりはマシですしテツヤ殿の知り合いなどは銃剣術を疎かにしたせいで死にました」

それを考えると無いよりはマシだし、そういう状況になる可能性も捨て切れない。

「それに現在でも銃剣術はちゃんと利用されております」

主に儀礼、威圧、白兵戦、死体を確認するためなどだ。

だが、それでも必要とされている。

「ですから、貴方には貴方の適性があるのですよ」

自分をそんなに卑下する事は無いとリーザ中尉は励ますように言ってくれた。

「そうですね」

私は頷いた。

リーザ中尉とは同じ男を好きになった訳だが・・・仮に私が選ばれなくても私はリーザ中尉を怨んだりはしない。

死ぬまで良き友として彼女の力になる積りだ。

「さぁ、速くこれを片付けましょう」

何時までもここに居たくない、とリーザ中尉は言い私も頷き2人で桶に排泄物を入れた。

第百八十三章：王女と夕食

私、レオン、ガリシャ、イーグル軍曹、ヘンさんは少佐ことテツヤ殿達と共に茶を飲んでいた。

テツヤ殿達は私達が偵察へ行っている間に前線基地を奪う算段を考えていたらしい。

「ワイバーンをこちらに引き付ける事は出来るが全匹できるかは分からない」

テツヤ殿は女神の抱擁を吸いながら私達に告げて来る。

確かにその通りだ。

ワイバーンをここに全匹引き付ける事は出来ない筈だ。

何故ならそうなれば私達がそちらへ行き奪うからだし、それ位は向こうも知っている筈だ。

「ワイバーンの他にもフォース・リーコン達が来る可能性も捨て切れませんね」

レオンはコーヒーを一口飲んでから彼等ーーーフォース・リーコンの存在を口にした。

「そうだな。空挺の奴等ーーーコンドル軍団かもしれんが」

「コンドル軍団？」

「奴等の名前だ」

傭兵部隊は自分達で名前などを決められる。

奴等は全員が空挺部隊出身という事もあり鳥の名前を付けたらしい。

「勇ましい名前だが、名前とは裏腹にやる事は下種な事ばかりだ」

私達が見たように自分達より弱い相手としか戦わないし略奪・暴行は当たり前という正に私が以前まで描いていた傭兵を地で行くというから呆れて物が言えない。

そのため何時しかハゲタカと呼ばれるようになったようだが、奴等に相応しい名前と言えるだろう。

「あいつらにはヘリが無いがフォース・リーコンよりは数が多い」

どちらを送るか分からないが、どちらも厄介な相手に変わりは無い。

しかし・・・・・・・・・・

「もし、コンドル軍団が来たなら・・・・・・・・」

「当然イカレタ弟も来るだろうな」

兄の仇を討つ為に。

「その時は・・・良いですか?」

「やれ」

一言だけしかも素っ気なく言われたが、私は頷いた。

了承を得た・・・・これであの男を殺せる。

これで無残にも焼き殺された兵の仇を討てるのだ。

そう思うと気持ちが昂ぶり始める。

「・・・焦るなよ」

テツヤ殿は私の様子を見て釘を刺すように言ってきた。

「あいつを仕留めたい気持ちは解かるが、焦って仲間を危険に曝したりはするな」

この言葉を聞いて私は昂ぶる心が不思議と沈んで行くのを感じた。

「はい。肝に命じておきます」

私はこの言葉をシッカリと心に刻み付けた。

そしてコーヒーを飲もうとした時だ。

「ランドルフっ」

聞き慣れた声がして振り返ると綺麗なコートを着たお人形ーーーエリーナ様が立っていた。

「これはエリーナ様」

私は慌てて立ち上がり一礼した。

「帰って来たなら連絡をして下さい」

無線で話した答えを聞いていないと言われて私はまだ答えを出していない事に気付いた。

「え、と・・・それは・・・・・・」

「私は答えを訊いているんです」

答えて下さい、と強い口調で迫られた私はテツヤ殿達に助けを求めたが無理だった。

「私を見て答えなさい」

何で後ろを見ると言われて私は助けを求める事を中断させられた。

「え、と・・・その・・・あの・・・」

「さぁ、答えて下さい」

両手を腰に当て私に迫るエリーナ様は私より小さいのに・・・王族と言う貫禄が出ている。

「あらあら、どうしたのかしら?私の天使ちゃん」

エリーナ様の後ろからオリガさんが現れた。

灰色のストールを肩に掛けているだけで見るからに寒そうだ。

「オリガさんっ」

私は助かったと思いながら駆け寄りオリガさんの為に自分の上着を脱いで肩に掛けてやった。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

エリーナ様とガリシャはオリガさんを無言で見たが、直ぐに私に短剣を突き刺すような視線を向けて来る。

「クスッ・・・相変わらず鈍い男(ひと)ね」

「何の事でしょうか？いや、その前にどうしてここへ？」

「貴方達が帰って来たと聞いて来たのよ。それと今日は私、出掛けるわ」

「そう、なんですか？」

「えぇ。ミレーネ姉に誘われたの。イザベル姉も一緒よ。だから、貴方も一人寂しく食事するより王女様とお食事をしたらどう？」

何で知っているんだ？と思ったが、それは訊かないでおく。

「王女様。私は今夜家を留守にします。この天使ちゃんも一人で食

事なんて味気ないでしょうから承諾しますわ」

「オリガさん・・・・」

「私の天使ちゃん。私を愛するのは解かるけど王女様にも騎士として奉仕しないと駄目よ？」

教師に説教された気分になった私だが的を射ているため何も言えずに項垂れた。

「それじゃ楽しんで来てね。私の天使ちゃん」

オリガさんは私の頬に口付けを落とし去って行った。

「・・・ランドルフは、私と食事をするのが嫌なのですか？」

オリガさんが去ってからエリーナ様は私の様子を見て何処か寂しそうな声を発してきた。

「そういう訳では・・・・・・」

俯いたまま私は否定しようとしたが、それを遮りエリーナ様は言葉を紡いだ。

「では、どうしてそんなに落ち込むのですか？」

「男ってのは色々と女と違って繊細な部分があるのさ」

テツヤ殿がやっと助け船を出してくれた。

「普通なら女の方が繊細と思うだろうが、男の方が繊細で臆病なのさ」

だから、私のこの様子もまたその繊細さ故だ、とテツヤ殿はエリーナ様に教えを説くように言ってみせた。

「そういう物、ですか？」

「あぁ。お前さんもランドルフもまだ１０代だから分からんだろうが何れ分かる」

確かに、と私より年上の男性は頷いた。

「では、ランドルフは私の誘いに嫌がっている訳では・・・・・・・・・」

「無い。戸惑っているのさ」

自分などにどうして？

まぁ・・・強ち的外れではないが、本心か？と問われるとそうでもない。

難しい所だが敢えて何も言わないでおこう。

下手に口を出してエリーナ様の怒りを買うのも嫌だしガリシャの怒りを買うのも嫌だ。

ここは口を出さずにいよう。

「そうなのですか？ランドルフ」

口は出さないと決めた瞬間にエリーナ様は私を見て訊いてくる。

「は、はい・・・そうです」

取り敢えず納得してもらえる言葉を選んでから頷いた。

「では、改めて言います。私と夕食を共にして下さい」

「・・・謹んでお受け致します」

仕方無い、と私は諦めて承諾した。

「では、夕方に来て下さい」

貴方も準備があるでしょうから、と言い残しエリーナ様は喜々と立ち去って行く。

後に残された私は溜め息を深く吐かずにはいられなかった・・・・・・

「さて、ゲンハルト、プロイセンのおっさん。俺たちは三人で晩酌でもするか？」

「そうだな。そなたとは一度で良いから酒を飲み交わしたいと思っていたのだ」

「私もだ」

私を置いてテツヤ殿、ゲンハルト様、プロイセン様の3人は何処で酒を飲むかなどを話し合う算段をしている。

出来るなら私もそちらに行きたいと思うのだが、そうもいかないのが悲しい所だ。

「・・・帰ろう」

私は肩を落としながらオリガさんの居ない家へと戻る事にした。

雪道をズシズシと音を立てながら家へ到着した私は先ず冷えた身体を温める為に風呂を沸かした。

その間、煙草を吸いながら武器の手入れをして待つ。

風呂が沸く頃には全ての武器が終わったのでそのまま湯に浸かり疲れと寒さを洗い流した。

湯から上がった後は部屋のクローゼットを開けてテツヤ殿に渡された外人部隊の軍服を纏った。

これを着るのはリーザ中尉と食事をした時だけで以降着ていないから2回目だ。

軍服を着てから私は白いケピ帽を被り拳銃などをホルスターに入れベルトに吊るす作業をした。

それで夕方となった。

「何だか早いな。今日は」

などと言いながら私は家を出てまた城へと向かった。
城へと向かい中に入ると親衛騎士団の団員とその内の一人であるヴィン・ルビーと会った。
「よぉ、リンクス。何だ?その格好は」
彼は私の格好を上から下まで見てきた。
「テツヤ殿が所属していた外人部隊の軍服です」
「それが?へぇ、格好良いな」
何だか照れ臭くなった私は煙草を銜えて誤魔化した。
「後で俺も頼んでみよう」
彼が言うと他の仲間達も同じように言った。
「所でどうしたんだ?」
「王女と夕食をするんです」
「王女と?凄いな。お前」
彼等から見れば私は王女と夕食を出来る英雄と見えるのだろうが、私から言わせれば重い気持ちでしかない。
何で私が?と思う。

「まぁ、楽しんで来い」

「出来るだけ努力します」

そう言って私は彼等と別れてエリーナ様の部屋へと向かった。

扉の前に立った私は一息入れて気持ちを切り替える。

『今から私は名誉ある夕食をするんだ。浮かない顔はするな』

そう心に言ってから扉を叩いた。

コンコン・・・・・・

小刻みな音が私の耳に心地よく入って来る・・・・・・・

『ランドルフですか？』

「はい。ランドルフ・クリフです」

こちらに走り寄って来る音がして扉が開いた。

「よく来てくれました」

開けられた扉から綺麗なドレスを纏ったエリーナ様が立っていた。

白と青を上手い具合に織り混ぜたドレスを纏ったエリーナ様は金色の髪を惜し気もなく曝している。

まるで人形だ。

生きた人形と思う程に綺麗だった。

「さぁ、中に入って下さい」

エリーナ様は花のような笑顔を浮かべながら私の腕を掴むと中へと導いた。

中には私と彼女以外誰も居ない。

以前助けてくれた使用人は何処に居るのだ？

「今夜は私と貴方だけです」

私の考えを見透かしたようにエリーナ様は言うと私と向き合うようにテーブルに回った。

「さぁ、掛けて下さい」

「失礼します」

私は断ってから腰を降ろした。

それに続いてエリーナ様が腰を降ろす。

既にテーブルには料理が並べられグラスにもワインが注がれていた。

手際が良い事だ・・・・・・

「では頂きましょう」

「そうですね」

私は頷きワインの注がれたグラスを持ちエリーナ様もまたグラスを持ち乾杯をしてから飲んでから料理を食べ始めた。

その夜はエリーナ様にとっても私にとっても忘れられない夜となった。

第百八十四章：居心地が良い

エリーナ様と夕食を終えた私は「今日はお泊りになって下さい」というエリーナ様の言葉を承諾し贅沢な装飾品で飾られた部屋に泊った。

感想はと言えば「何だか居心地悪いな」である。

どうも平民出身である私には居心地が悪くてならない。

お陰で眠るのに苦労した・・・・

そして翌日、まだエリーナ様が起きないであろう時間に私は部屋を辞した。

それからテツヤ殿達はどうしたのか？と思いテントが張られた所へ行くと強烈な酒の臭いが鼻を刺激した。

近くに行ってみると幾つもの空になった酒の瓶が転がっていた。

「よぉ、ランドルフ」

テントからテツヤ殿が出てきた。

「おはようございます。これ・・・全部飲んだんですよね？」

軽く見ても１０本以上。

それを３人で飲み明かしたのか？

「いいや。イーグル達も一緒だ」

テントの中を見ればゲンハルト様、プロイセン様、イーグル1等軍曹達がいた。

「久し振りに大人数で飲んだが楽しかったぜ」

「それは何よりです」

「お前の方はどうだ？」

「まぁ、楽しめました」

食事は美味かったしワインも良かった。

他にもエリーナ様との会話も楽しかったが。

「そうか。そう言えば、昨日親衛騎士団の奴等が来たぞ」

自分達にもお前と同じ物をくれ、と言われたらしい。

「そうですか」

「あぁ。まぁ、戦が終わり次第だがな」

今はそれ所じゃない、と言うテツヤ殿に私は同意した。

「あいつ等の写真が出来たから昼に会議をやる」

他の奴等にも伝えておけと言われた私は頷き先ずはガリシャの所へ行こうと思い城を後にした。

ガリシャの家は一番大きいからよく判る。

何度も来れば尚更だが。

前みたいに私は窓からではなくドアから入る事にした。

こちらのドアは叩くと堅い音がする。

頑丈そうなドアという証だろう。

すると直ぐにドアが開き歳を重ねて更に美しい女性を代表したような人物――レイリア殿が出迎えてくれた。

「あら、ランドルフ殿じゃないですか」

「おはようございます。レイリア殿」

私はケピ帽を取り軽く会釈した。

「ガリシャならまだ寝ていますよ？」

「そうですか」

「何でしたら起こして来ますか？」

「いえ。また時間を改めて」

「そのような事をするのでしたら、起きるまで待っていて下さい」

そう言われて私は家の中へと入った。

中に入ると温かい暖炉が見え朝食を取る所の場面に出くわした。

「おぉ、ランドルフ君ではないか。随分と決めておるな」

「エリーナ様と夕食を昨夜はしたので」

「そうかそうか。いやはや・・・我が孫娘であるガリシャとは雲泥の差であろうな？」

「いえ。ガリシャにはガリシャの良い所もありますし・・・緑の瞳がとても綺麗で見惚れてしまいます」

「それはガリシャに言ってくれ。あの娘、昨夜は脹れていたのでな」

「なぜ、ですか？」

「分からんのか？いやはや・・・君も中々の女泣かせだな」

「あまり好ましくないですね」

「そう言うな。所で朝食はまだかな？」

「はい」

「だったら、食べながら話でもしよう」

そう言われて私は空いている席へと腰を降ろした。

朝食はパン、鹿の肉、猪のシチューというボリューム満点なメニューだった。

「そう言えば、ここでパンはどうやって作るんですか？」

小麦などは山では作り辛い筈だ。

「山ばかりだが、ちゃんと作れる場所があるのだよ」

そこで作っているらしいが、ここまで大人数だとやはり足りない事もあり倉庫などから引っ張り出しているらしい。

「何とかしないといけませんね」

戦いが長引けば食料も減ってしまう。

獲物などは居るが乱獲は駄目だから、限りがあるという物だ。

「そうだな。だが、前線基地を奪い取ればそれももう直ぐ無くなる」

前線基地を奪い取ればそこから更に進み首都を奪回できるのだから。

「そうですね」

適当な相槌を打ちながら私は猪のシチューを食べた。

「所でランドルフ君。君はガリシャをどう想う？」

「どうとは？」

「まぁ、簡単に言えば女として魅力はあると思うかい？」

「あります。緑色の瞳はとても綺麗で何時までも見続けたいですし元気な所も行動的な女性らしくて良いです。それに癖毛のある赤髪もまた可愛らしいですね」

などと思い付く限りの事を言えば全員が呆れ果てていた。

「そこまで褒めるとは・・・本当に君は女たらしだね」

「嬉しくないです」

これに私はハッキリと言った。

「そうは言ってものう・・・おぉ、どうやら起きた様だぞ」

ロンガーム殿が階段に眼をやると私もまた眼をやった。

「ふぁーあ・・・おはよう」

ガリシャが寝ぼけた顔で降りてきた。

寝間着姿で癖毛は何時も以上にある。

おまけに足も覚束ない様子だ。

案の定か・・・階段を一段踏み外した。

私は急いで駆け付け倒れる彼女を抱き止めた。

「ん～・・・誰？・・・・ら、ランドルフ！！」

ガリシャは寝ぼけた顔だったが、私の顔を見るなり大声を出した。

「だ、大丈夫？」

耳がキーンと音がするのに堪えながら私は彼女に訊ねた。

「う、うん。あ、ありがとう・・・・・・・・」

「いや、それより怪我は？」

「な、無いよ。所でどうしたの？」

「テツヤ殿が昼に会議を開くというから伝えに来たんだ」

「そ、そうなんだ。それでこの後は？」

「特に無いから射撃訓練でもしようかな？と思うんだ」

「なら、あたしも行くよ」

「それじゃ朝食を食べてから・・・いや、お茶を飲んでから行こう」

淹れてくれる？と私が訊けば「うん」と答えが返って来た。

それを見たロンガーム殿達は「真に女たらしだ」と言ったが私には聞こえなかった。

朝食を食べた後、私はガリシャと二人で部屋に居た。

「やっぱりここの方が落ち着くよ」

エリーナ様の部屋より私にはこちらの方が良いと言いながらガリシャの淹れてくれた茶を飲む。

「そう、それは良かった」

ガリシャは笑顔で頷きながら自身もまた茶を飲む。

「所でランドルフ。前線基地が完成するまでどうするのかな？」

「基本は嫌がらせだけに留めておくと言っていたね。後は偵察とかこれからの事を考えると思うよ」

それも全て昼の会議で話し合う事だろうが、今の所で言える事はこの二つと思う。

「前線基地が出来ればそこから首都へ行けるから何としてでも奪わないといけないね」

「他にも敵の士気を下げる効果も狙いだよ。恐らく向こうの士気はテツヤ殿達が脱出した事でかなり低下していると思う。だから、ここで前線基地を奪えば更に落ちると思うんだ」

ガリシャの言葉に私は付け足すように言った。

「確かにそれもあるね。それで昨日はどうだったの？」

今度はエリーナ様との夕食を訊いてくるガリシャだが、視線が何処か棘が含まれているのは何時もの事だろうか？

「楽しかったよ。でも、さっきも言った通りこちらの方が良い」

「居心地が？」

「うん。向こうは平民の私には豪華すぎるんだ」

料理も美味いのだが、どうしても慣れない気がする。

「そ、そうなんだ・・・・・・」

「うん。だから、ここの方がもし住むなら良いね」

「そ、そう・・・・・・・・」

ガリシャは何だか落ち着かない様子だったが、敢えて何も言わずに私は茶を飲むだけにした。

それからガリシャの部屋で茶を飲みながら他愛ない話をしてから１時間前に城へと向かった。

「所でガルムは？」

「確か腹が減ったから狩りが出掛けたよ」

「そうなんだ」

一体どこに居るんだか分からないが、彼ならまた偵察でもして帰って来るだろう。

城へと到着した私とガリシャはテントへと向かったが、そこには既にテツヤ殿達が待っていた。

ただし、フィーナ中尉とリーザ中尉は居なかったからまだ便所掃除をしているか湯に浸かり臭いを落としている最中だろう。

「よぉ、お二人さん」

テツヤ殿は私達に微笑み2人は湯に浸かっていると説明してくれた。

それから私達は会議室へと向かった。

幕間：天使の為ならば

「くそっ。あいつらぶっ殺してやる!!」

サルバーナ王国の首都ヴァエリエに聳え立つエスカータ城の中にある演習場で一人の男が人目も憚らず罵声を上げていた。

年齢は二十代後半と言った所で眼が血走っており明らかに狂気一色に染まっている。

「よくも兄貴を・・・兄貴を・・・あの糞ジャップが!イエロー・モンキーが!!ぶっ殺してやる!!」

ガンガンと壁を素手で殴る男を慌てて一人の男が止めに入った。

「中尉。抑えて下さいっ」

男は暴れる方を中尉と呼んで羽交い締めにした。

「離せよ!!兄貴が殺されたんだぞ?!あの糞ジャップにな!!」

中尉と呼ばれた男は乱暴に男の羽交い締めを強引に振り解いた。

「俺はあいつを許さねぇ。八つ裂きにするだけでも飽き足りないぜ」

「それは分かっております。ですが、今の状況では我々には“足”がありません」

そう彼等には足が無い。

と言っても2本の足ではなく移動手段であり彼等にとっては必要不可欠な足であり翼であるヘリコプターが無いのだ。

全機が破壊されてしまいどうしようもない。

これでは忌み嫌うジャー・ヘッドと同じだ。

「ああ！くそったれが！！こうしている間もあのジャップは俺らと同じ空気を吸ってるんだぞ?!あいつが俺たちと同じ空気を吸ってる時点でムカつく！！」

中尉と呼ばれた男は手の付けられない状況だった。

彼の兄である大尉はつい先日、ここから脱出した敵司令官タカミ・テツヤによって乗っていたヘリ共々倒された。

この男はその弟なのだ。

薬物中毒者の上に頭のネジが何本も抜けているため一度でも怒らせたら誰にも止められない。

だが、その兄である大尉だけが唯一この男を制御できた。

その兄が居ない今・・・誰にも止める事は出来ない。

やれる事は怒りが治まるのを待つか、適当な人間を生贄として差し出し憂さ晴らしをさせるかのどちらかだ。

生憎と誰も自分が生贄にはなりたくないし誰も適当な人物が居ない

から怒りが治まるのを待つしかない。

触らぬ神に祟りなしの言葉通り男達はその場から離れた。

その間も中尉は一人どうしようもない怒りを壁に拳で当たり散らしている。

「はぁ・・・厄介な事になったな」

男の一人が薄暗い廊下を歩きながら溜め息を吐いた。

「あぁ。ただでさえ扱い難かったのに大尉が戦死したから余計にな」

もう一人の男が同意するように言いながら肩を落とした。

「しかし、どうするか・・・俺たちは空挺部隊だ。ヘリが無いんじゃただの歩兵と変わらないぞ」

「だよな。ヘリがあってこそ迅速に移動できるんだ」

自分達はただの歩兵ではない。

精鋭である空挺部隊だ。

だが、その空挺部隊もヘリや飛行機が無くてはまったく意味が無い。

これではただの歩兵と揶揄しても仕方のない事かもしれない・・・・・・

「それを今じゃワイバーン共に奪われちまった・・・ケッ、情け

ねぇぜ」

「まったくだ。たかが蜥蜴に乗る騎士の分際で俺らを馬鹿にしやがって・・・・・・・・」

ここを出る前にあの者たちは自分達にこう言ってきた。

『歩兵は地べたを這い蹲って来い。手柄は自分達の物だ』

あれを言われた時、全員を皆殺しにした衝動に襲われた。

向こうだってワイバーンが居なければただの歩兵ではないか。

しかも、自分達はあいつらより高度な技術を得ている。

同じ傭兵だが、自分達の方が“格上”だ。

それなのに馬鹿にされたのだから怒りたくもなる。

「ジャー・ヘッドもムカつくがあいつ等もムカつく。いっそのこと・・・纏めて殺っちまうか？」

あの時の衝動をそのままぶつければ良いだけの話だ。

以前にもこういう事はよくあった。

いや、自分達は結成時からこんな事しかして来なかった。

気に入らない連中は戦場で殺し雇い主には「戦死」と答えその分の働きをした上で報酬に上乗せさせて来たのだから。

「その為にもヘリが必要だ」

自分達を運ぶ輸送ヘリと攻撃ヘリ。

少なく見積もっても7機くらいは欲しい所だ。

「“本部”へ連絡するか？」

「してもここまで届くのにどれ位掛ると思ってるんだよ」

今から頼んでも届くのに丸々一月以上は掛る。

そんなに待てるほど自慢じゃないが我慢強くない。

それにそこまでこの戦いが続くのかも分からない。

運が悪ければもう決着するかもしれない・・・それが戦というものだ。

「どうするべきか・・・・・・・・」

「ヘリなら用意するぞ」

薄暗い廊下を歩いていた二人は足を止めて前方一一一真っ暗な先を見つめた。

静かに顔を出して来たのは左目を眼帯で隠し顎鬚を生やした男はライアンナル伯爵だった。

「ヘリを用意する？だけど、大尉が乗ったヘリも俺たちが乗って来たヘリも無いぞ」

もう全機を破壊されて無いのにどうやって用意するんだ？と男はライアンナル伯爵に問いを投げた。

「案ずるな。直ぐに用意できる。ただし、あの男のように勝手な行動は取るな」

あの男は私の許しを得ずにあろう事か部下を止めようとした男を殺した挙句に自分もまた無残に返り討ちにされたのだ。

「お陰で計画がパーだ。まったくまた一からやり直しだ」

ライアンナル伯爵は豪く不機嫌そうな顔でギリッと唇を噛みながら顎鬚を撫でた。

この男の癖なのだろう・・・・・・・・

「あんたも大変だな。で、ヘリはどんな物を用意できる？」

男は上官であり中尉の兄であった大尉の死を別段悲しいとは思わなかった。

戦場では誰が死ぬか分からないし、ライアンナル伯爵の言っている事も一理あるからだ。

もっともそんな事を中尉の前で言おうものなら直ぐにでも八つ裂きにされるだろうが・・・・・・・・・・

「貴様等が言った物を用意してやる。ただし、丁寧に扱え。間違ってもあの男のように“無駄遣い”はするな」

「分かってる。大尉ほど俺は馬鹿じゃない。それでその見返りに俺たちは何をすれば良いんだ?伯爵様」

「察しが良いな。見返りはジャー・ヘッドを殺せ。もうあの者たちは要らん。いや、邪魔だ」

ここまで計画が崩されては些か強引とも言える手段で掌握するしかないとライアンナル伯爵は言った。

「俺もあいつらは嫌いだから構わないが、ワイバーンはどうなんだ?」

「あの者たちはまだ生かしておけ。使い道はある」

「そうかい。で、お膳立てはそちらがしてくれるんだろ?」

「勿論だ。傭兵共は前線基地を造っている事は知っているな?」

「あぁ。毎日のように材料を持って行くからな。それがどうかしたか?」

「敵もあそこを狙うだろう。だが、あの者たちだけでは心もとない、と会議で私は言った」

出来るならジャー・ヘッドを護衛として行かせるべきだ、と・・・・・・・・・

「それであいつ等を行かせて少し遅れて俺たちが援軍として行く」
そこを・・・敵諸とも殺す。
「という感じか？」
「その通りだ。ワイバーン共が多少死んでも構わない。あの者達を失えばリカルドにとって痛手となる。そうすれば貴様らしか頼る相手が居ない」
近代的な装備を持つ自分達を頼るしかない状況を作り上げる。
「しかし、あの“お坊ちゃん”が黙ってそのままあんたの言う事を聞くか？」
「聞かないのなら聞くように仕向けるだけだ」
どんな手を使うのかは敢えて訊かず別の事を言った。
「まぁ、あんたにそこは任せる。それじゃヘリを用意してくれ」
男は必要なヘリの名を言った。
「分かった。くどいようだが・・・今度は無駄使いをするな」
「分かってる。それから適当な人間を一人くれ」
「何故だ？」
「中尉を治める為に必要なんだよ」

今の状態ではまともに何も出来ない、と男は溜め息まじりに伝えた。

「薬では駄目なのか？」

「薬なんてくれてやったら今以上に頭が月までぶっ飛んで使い物にならなくなる」

「分かった。モリスンに言って適当な奴を持って来させる」

肉の一部が無くても良いだろ？

「あぁ。焦げていようが喰われていようが“生きて”さえいれば良い。後は中尉が始末する」

「あの男と言い・・・どうして私の周りには頭が“出来あがった”者しか居ないのだろうな」

嫌気が差してくる、とライアンナルは珍しく愚痴を零し去って行った。

「あいつも大変そうだな」

「だな。しかし、“あいつ”と知り合いなのか？」

あいつとは自分達をこの地へと向かわせた本部に居る“彼の男”だ。

「だろうな。そうでなきゃヘリを直ぐに用意するなんて言わないさ」

「にしても、あいつは良い御身分だよな？自分は本部から一歩も出

ないで、城に居るんだからよ」

隣に“どえらい美人”を侍らせながら。

「まぁ、あいつは本国じゃ英雄だからな」

「英雄ね。中身は映画の三下以下なのにな」

あの男は確かに英雄と言う言葉を“表”では地で言っているだろう。

英雄と言えば容姿端麗を先ず思い浮かべる筈だから、あの男に関しては文句無しだ。

だが、中身はどうか？と言えば先ほども言った通り映画に出て来る三下以下でとてもじゃないが英雄ではない。

「まったくだ。よくもまぁ・・・“天使”はあんな男に寄り添っているよな？」

「あぁ・・・俺たちみたいにな野良犬にも分け隔たれなく接してくれるもんな」

自分達のような傭兵にも“彼の女”は本当に天使のように慈悲深く接して来る。

声は透き通っており歌を歌えばまるで本当の天使のように聴く者の耳を支配し歌の世界へと誘う。

国民からは「聖女」や「歌姫」などと言われているが、正しくその通りだ。

それを何処をどう間違えたらあんな見かけ倒しで中身は最悪な男と一緒に居るのか甚だ疑問である。

「本部の為に戦う気は毛頭ないし、あいつの為に戦うなんて事は万に一つも有り得ない。自分の為に戦うのが俺のモットーだが・・・・天使の為なら戦っても良いな」

何時の時代もそうだが、誰だって自分に優しくしてくれる美女の為なら戦いたいと思う物だ。

このハゲタカと異名を取る者達も例外ではないらしい。

「俺もだ。まぁ、天使はこんな事を・・・望んでいない、がな」

あの天使は本当に平和を愛している。

こんな侵略戦争など望んでいない。

だが・・・・・・・・・・

「周りはそうじゃないからな」

「あぁ。あの娘だけが一人だけ“はみ出し者”って感じで見られているからな」

実の親にまではみ出し者と言われるのだから酷い話だ。

「・・・さて、酒でも飲みに行こうぜ」

「そうだな。今は暇だ」

これから忙しくなるのだから今の内に飲めるだけ飲もうと言い二人は酒場へと向かった。

これ以上、自分達の気持ちを独白したくなかったのだ。

第百八十五章：墓まで持って行く

会議室へと到着した私達は席に座り、それぞれの事を話し合い２人が到着するのを待つ事にした。

「ゲンハルトがまさかあんなに酒が強いとは知らなかったぜ」

テツヤ殿は女神の抱擁を吸いながらゲンハルト様を見た。

昨夜は３人で飲む筈だったが、何時の間にか軍曹達も集まり大人数で飲む結果となったらしい。

そして何時しか飲み比べとなったようだ。

「酒には昔から強いのだ。よく父上の晩酌に付き合っていたのでな」

どうやらゲンハルト様の酒豪は父君との晩酌から来ているようだ。

「お前の父親はどんな男だったんだ？」

「私よりどちらかと言えばプロイセンのような男だった」

体格は似ても似つかないほど逞しかったらしく、軍事に関しても精通していたというから宰相として申し分ない。

「しかし、酒が好き過ぎて早死にした。まぁ、死ぬまで酒を飲んだのだから本望かもしれんが」

「そうか。それであんたは若くして宰相になった、と」

「あぁ。まだ数え17歳だ」

というと私、レオン、ガリシャと同じ歳の時にもうこの国の政務に取り組んでいたのか。

「最初は軍人になりたかったし父もまた宰相として政務と軍事の両方を担ってこそ宰相だと言っておられた」

だが、この体格ではまともに盾も槍も持てない事から諦めたと言う・・・・・・・・・

「所が拳銃は違う。体格など関係無しに戦う事が出来る」

そこが違う所、とゲンハルト様は言いながらヒップ・ホルスターに収めていたスターム・ルガーMK?を撫でた。

「そいつは競技用として使われているからお前さんの腕でも扱える代物だから余計に思うだろう」

「競技用なのか?」

「あぁ。しかし、弾が小さい分サプレッサーを取り付ければ音が最小限に抑えられるし反動も小さいから狙いも定め易い」

おまけに値段も安いし入手し易いから犯罪者などに愛用される所以と言える。

「なるほど。所で私にもライフルや散弾銃の類いは扱えるか?」

「出来なくはない。欲しいのか？」

テツヤ殿が煙を吐きながら訊ねるとゲンハルト様は頷いた。

「総大将である私はただの飾り物だ。しかし、万が一の事を考えるとライフルなども持って置きたい。何より・・・形だけでも軍人として居たいのだ」

亡き父君は自分が軍事も政務も両方こなせる宰相になって欲しいと願っていた。

現実はそうではないが、それでも形だけでもそうなりたいと願うゲンハルト様の気持ちは何となくだが理解できた。

「分かった。互換性を考えるならライフルが良いな。しかもオートマチックが良い」

「出来るならスターム・ルガー社の物が良い。拳銃がそうならライフルもまた同じ会社の生産した物が良い」

「分かってるじゃないか」

テツヤ殿は笑いながら後で用意すると言った。

「ならば、テツヤよ。私にもくれ」

今度はプロイセン様がテツヤ殿に強請って来た。

「あんたもかよ」

「うむ。恐らく私の場合は使わないだろうが、念の為だ」

また指揮が執れるとプロイセン様は言い将軍達も同じだと続けた。

「しかし、あんたの兵は重装歩兵だ。ここでは使い物にならないぞ？」

重装歩兵は草原や平地などの広い所で初めて力を発揮できるが、生憎と山では重い鎧と盾などで俊敏な動きが望めない。

「その通りだが、敵を首都から追い出せば必然的に来た道を逃げる筈だ」

そうなるとザンビア平野、カルナン湖畔での再戦となる可能性が極めて高い・・・・・・・・

「その前に殿を誰がやるかで揉めるかもしれないな」

「殿ともなればそなたらのような者にさせるかもしれんな」

「若しくは時間稼ぎの捨て駒にやらせるかもな」

フィリップ男爵が真っ先に上がりそうだ、とテツヤ殿は言った。

「あの男か。そなた会ってみたのだろ？」

「あぁ。見かけは鼠その物だが、兵たちからは敬愛されているしリカルドの信頼も厚い」

だが、兵たちは槍兵と弓兵で他の者に比べれば格段と実力が劣るの

は否定できない。

「殿をやるとすれば、あいつを捨て駒とする可能性が高い」

自分達が安全圏へ逃げ切るまでの間、戦い続け何れは死ぬ運命だろうとフィリップ男爵なら喜んで死ぬ、とテツヤ殿は断言した。

「あの男はそういう男だからな」

自分を客観的に評価しどんな相手にも自らを卑下し腰を折るが、肝心な所では引かない所がある、とプロイセン様は評価した。

「出来るなら殺したくはないな。プレス・ハートも帰さなくてはならない」

「そうだな」

何だか微妙な雰囲気になった所でリーザ中尉とフィーナ中尉が来た。

「遅れて申し訳ありません」

「ただ今到着しました」

2人は私達に謝罪してから席に腰を降ろした。

「では、これより会議を始める」

テツヤ殿が始めると口を開き会議は開かれた。

「先ずフィーナ中尉ならびに親衛騎士団が偵察に赴き撮ってきた写

真などを見てくれ」

私達は既に渡された資料を見た。

文字と一緒に写真が載せられており実に分かり易い。

「エドリアス大尉の予想通り敵はワイバーンが休める小屋を先に造った。だが、同時に堀なども掘っている」

写真で見る限り確認できる。

この感じで行くとどれ位で完成するのだろうか？

「エドリアス大尉。どれくらいで完成すると思う？」

「恐らく我々が何も手出しせず着実に進めば１０日前後と見て良いでしょう。それにしても顔を見る限り如何にも・・・・・・・・・」

私達やる気ありません、という顔ですね。

これに私達は吹き出しだ。

「司教様。あんた口が達者だね・・・・・・」

ミーシャ大尉が口元を押さえながらエドリアス大尉を見た。

「お褒めの言葉を預かり光栄です」

それに対してエドリアス大尉は微笑みで返した。

本当に多芸な方だと私は思いながら何時頃から嫌がらせをするのか？と訊ねた。

「完成した直後だ」

完成させたら味方の増援が来るまで大人しくしてろ、と言われている筈。

下手に攻撃して迎撃されては被害が増すだけ。

ヘリをやられて彼等にとってワイバーンは飛行できる大事な戦力。

例え傭兵だろうと重宝するのは眼に見えているし、前線基地に誰も居ないとあっては不味い。

そうなるとやはり増援が来るまで待てと命令を下すな。

しかし、そこへ我々が嫌がらせをしたらどうだ？

慣れない事と仕事外の事をやらされたのだから鬱憤は溜まっている筈だ。

そこへ糞尿を空から撒き散らされたら・・・嫌でも怒るだろう。

我慢しろと言う方が度台無理な話だ。

しかも、相手が自分達ーーーワイバーンより格下と見ている天馬からしかも夜間攻撃ともなれば激怒する事間違い無し、と見て良いだろう。

そうなればこっちの物。

夜の内に万全な迎撃態勢を整え翌日撃退と同時に基地を頂く。

と言うのが作戦内容なのだが・・・・・・・・・

「もし、失敗したらどうするんですか？」

これは敵がワイバーンしか居なかったら、を前提としている上に全匹をこちらに引き付けるのがまた前提だ。

もし、片方が出来なければ不味い。

「よく気付いたな」

テツヤ殿は私の言葉に唇を吹いてみせた。

「ランドルフの指摘した通りだ。これはワイバーンしか居らずまた全匹をこちらに引き付けて初めて出来る事だ」

「ではどうするんですか？」

「そこは“保険”を掛ける」

保険？

「もし、ワイバーン以外の敵が居るならそいつらを纏めて倒せば良い話だが、確実にはいかないし時間も掛ると考えるべきだ」

ならばどうするか？

そうなった時の事を想定して別の策も考えておく。

これが保険だ。

「どのような保険を掛けるんですか？」

「まだ言えないが、保険は使わないようにするべきだな」

あくまで万が一の為に使うのが保険だ。

それは頼らずに出来るだけ使わない方針で行くべきとテツヤ殿は言い私達は頷いた。

「さて、フィーナ中尉。親衛騎士団の連中はどうだ？」

「はっ。今はシュヴァルツフント相手に徒手空拳での訓練をしております」

「ヴィルヘルムも一緒にか？」

何時もなら会議に参加する筈のヴィルヘルム元伯爵が居ないのを気にしていたが、その為か？

「はい。師匠を相手にすると2～3人ほど必要です」

あの巨体でツヴァイハンダーを片手で振り回せる程の剛腕だ。

一人では荷が重いというのも仕方が無い。

「1人でも倒せるようにしろ。戦場ではああいう奴等を倒さなくてはならない状況だってあるんだ」

「分かりました」

フィーナ中尉はそれに頷き少しだけ遠い眼をした。

「・・・ヴィールングのおっさんが気になるのか？」

テツヤ殿が訊けば彼女は頷いた。

「ここに来てから話はしておりますが・・・何か後ろめたい物がある、と時々思うんです」

確証は無いが、自分も少なからず関係しているとフィーナ中尉は言った。

まさか・・・・・・・・・

「それが何なのかは訊かないのか？」

「訊いた所で素直に話す方ではありませんし、叔父上が自分から話すのを待ちます」

自分にはもう叔父しか身寄りが居ない。

無理に訊くよりも彼が自分から話すまで待つのが良いとフィーナ中尉は語ったが、私達は思っていた。

“墓まで持って行く積りだろう”

彼女が関係している、というのは噂と言われた真実だ。

それを恐らくヴィールング殿は・・・自分が死ぬまで話さない。

それが彼女にとって幸せなのか不幸なのかは分からないが・・・ヴィールング殿にとっては不幸だろうな、と私は思わずにはいられなかった。

第百八十六章：辛い罰と罪滅ぼし

会議は夕方まで続き様々な意見を出し合い対策を考えた。

その間フィーナ中尉はやはり気になるのか何処か上の空をしている事が何度かあり、その度に指摘されては落ち込んだりする。

夜になろうとした所で一時中断となった。

「フィーナ中尉。少し来い」

テツヤ殿はフィーナ中尉と共に部屋を出て行き、私達はその場から動かないで時間を潰す事にした。

私はレオンと共に女神の抱擁を吸いながらあの二人の事について話し合った。

「あの様子だと・・・勘付いているよね？」

「うん。だけど僕たちが入って良い話じゃないから何とも言えないね」

レオンの言葉に私は頷く。

フィーナ中尉の実の父親は叔父であるヴィールング・マレル殿。

ロックス殿は父親ではなく、ワイバーンの女傭兵一一一マーズの父親。

恐らくマーズは亡き母からロックス殿の事を聞かされていただろう。

いや、ロックス殿と戯れていたのかもしれない。

もし、そうならフィーナ中尉とヴィールング殿は自分が受け継ぐ筈だった侯爵の位を奪い取ったばかりか父親も奪い取った人物と見える筈だ。

実際には違う。

ロックス殿は戦死したのだ。

しかも、偵察を疎かにして待ち伏せされたという自業自得とも言える戦死だ。

それなのに二人を怨むのはお門違いとも言えるが、侯爵の位を持っているのはフィーナ中尉だから怨むのは道理と言えるのか？

分からない・・・・・・・・・・・・

分からないが言える事はある。

「ヴィールング殿は辛いだろうね」

レオンは灰を窓から落としながら独白した。

父親も母親も違う二人だが血の関係で言うなら姉妹だ。

その姉妹が敵味方に別れて殺し合うのだから皮肉としか言えない。

その原因を作ったのはロックス殿だが、ヴィールング殿は自分のせいでもあると思っている。

確かに彼がマリー様と・・・関係を結ばなければこんな事にはならなかった。

しかし、だ。

マリー様の事を考えるとヴィールング殿を責める事は出来ない。

寧ろ彼は自分で自分を責めているが、本当に責めるべき相手は二人を引き裂いた者達でありロックス殿だ。

しかし、自分を責めるヴィールング殿は罪滅ぼしとも言える行動を取っている。

自分が父親だと名乗らない。

これは辛い罰であり罪滅ぼしだ。

何とかしたいのだが、私達がおいそれと入れる問題ではない。

何ともむず痒い状態に私は苛立ちを隠せなかった。

― ― ― ― ― ― ―

私はテツヤと二人だけで廊下を歩いていた。

空を見れば小さな雪が降り窓を擦り抜けて足元に落ちては直ぐに消えて行く。

・・・雪、か。

雪は白くて好きだ。

幼い頃・・・父であるロックスに気絶するほど扱かれて泣いていた私を雪は慰めてくれた。

寒いとは思わなかった。

寧ろ温かいと思ってしまった・・・・・・・

空から降る雪は私を白く染め、優しく包み込むようにしてくれたのだから。

母上のように優しく・・・叔父上のように力強く私を励ましてくれる雪は好きだ。

「・・・雪が好きなのか？」

テツヤの言葉に私は隣に視線を向けた。

「あぁ。幼い頃の思い出だ」

「会議中も上の空だったのは雪の為か？」

「まさか・・・ただ、叔父上が何を隠しているのか気になったのだ」

「口ではおっさんが話すのを待つと言っていたのに気になるのか」

「叔父上が私の唯一の肉親だと言っただろ?」

「言ったな。お前さんのお袋は死んで親父もまた死んだ。まぁ、親父の戦死はどうでも良いんだろ?」

「なぜ分かる」

こいつは何時もそうだが、人の心を読めるのか?と問いたくなるほど鋭い。

今回もまたその内に入り私は少なからず驚いた。

「お前さんの眼が語っている」

母を蔑ろにした罰が当たったんだ、と・・・・・・・・・・・・・・

「・・・否定はしない」

私は視線を窓に移しながら頷いた。

「前にも話したと思うが、屋敷の中では父が王であり法だった」

父が言う事が全てであり決定権もまた父だけにある。

逆らう事は許されない・・・甘える事も許されない・・・言われた事をやり良い結果を出すのが全てだった。

「亭主関白所か独裁者の権化だな。だが、おっさんは違ったんだろ

？」

「あぁ。叔父上は何時も私と母を気にしていた。何時も思う・・・叔父上が私の父で母上の夫だったら・・・どんなに幸せな人生を送れただろうか？と」

ヴィールング殿が母の夫だったら、きっと毎日のように抱擁を交わし合い仕事を終えたら屋敷に真っ直ぐ帰って来てくれるだろう。

そして私にも優しくも厳しく接し教育してくれた筈だ。

ただ厳しく当たり散らし殴るだけの父とは違って・・・・・・・・・

「時にテツヤ。お前の両親はどんな方だったんだ？」

私はここでテツヤの両親を訊ねた。

「さぁな。捨て子だったから分からん」

「捨て子だったのか？」

「あぁ。まぁ、俺みたいな奴なんて世界には大勢居たしそれ以上に悲惨な奴も居たから悲観はしていない」

「・・・お前は強いな」

捨て子なのにそういう風に生きて居られるのだから。

「お前も強いさ」

テツヤは私の頭を軽く撫でてきた。

いきなりの事で驚いたが・・・・温かかった。

そして大きな手だと思った。

まるで叔父上のような手だ。

そんな事を思っていると・・・部屋に到着した。

叔父上の部屋だ。

「少し話せ。上の空で会議に参加しても無意味だ」

叔父上と話せば少しは気持ちが楽になると言われ私は頷いた。

「気持ちに整理が着いたら来い」

そう言ってテツヤは背を向けて来た道を戻って行った。

私はドアを控え目に叩いた。

『誰だい？』

ドア越しに柔らかい声が返って来て私は名乗った。

『フィーナか。入りなさい』

私はドアを控え目に開けて中に入った。

叔父上はベッドの上に腰を降ろし剣の手入れをしている最中だった・・・・・・・

「もう身体は大丈夫なのですか？」

「あぁ。毒を塗られていれば不味かったが大丈夫だ」

「そう、ですか」

「何か遭ったのか？」

私の様子を見て叔父上は剣を鞘に収めて私を見てくる。

「いえ、ただ・・・叔父上は、何か私に隠し事をしているのでは？と思いまして」

馬鹿正直に私は訊いた。

「確かに私は、お前には言えない事を沢山持っているからね」

誰にだって言えない事は抱えていると言われ私はある程度は納得してしまった。

私にだって人に言いたくない事は幾らでもある。

それが人なのだから。

「しかし、お前には嘘を吐きたくないな」

時に嘘を吐いていると胸が痛い、と叔父上は語ってくれた。

「そうですか。私も叔父上には嘘を吐きたくありません」

「ありがとう。そういう正直な所は母君であるマリーに似ているね」

叔父上は母を呼び捨てにしているが、私は気にしていない。

父・・・ロックスは母を呼び捨てにしない・・・名前で呼んだ事がないのだ。

“お前”・・・“貴様”・・・“女”・・・こんな言葉でしか母を呼ばなかった。

そんなロックスに母もまた決して夫とか旦那様とかは言おうとしなかった・・・・・・

だが、叔父上は母を呼び捨てにし母もまた叔父上を呼び捨てにした。

それだけ二人は信頼している証拠だと思っている。

「母は何時も・・・叔父上が夫で父ならどんなに良かっただろうか、と言っておりました」

私もまた叔父上が本当の父であったなら、と思いますと言った。

「私もだ。兄は・・・君たち2人に酷い事をしたからね」

それを止められなかった私も悪いが、と叔父上は自分を責めたが私は否定した。

「いいえ。叔父上は何時も私と母を助けてくれました。母も父ではなく叔父上に看取られて幸せでしたよ・・・きっと」

あんな夫とは名前だけの男より叔父上に最後を看取ってもらったんだ・・・幸せに決まっている。

「そう言ってもらえると嬉しいよ。所でテツヤとはどうだい？」

「はっ。以前の確執も今は忘れて共に頑張っております」

「そうか。あの男は傭兵と言っていたが、話によれば2度ほど軍を変えたらしいね？」

「はい。最初は自国の軍に入ったのですが、そこから別の国に入隊し国籍と名前を取得したようです」

「というと一種の傭兵かな？」

「ではありません。いえ、最初はそうでしたが、何時しか正規軍へと変わったそうです」

外人部隊の歴史は紐を解けば正規軍であるフランス軍よりもかなり凄い戦史だったらしく外人部隊を指揮できる事はフランス人にとって名誉とさえ言われている。

「そうか。我が軍もそういう制度をある意味・・・取り入れるべきかもしれないな」

「と言うと我が軍では力が足りない、と？」

「いや、そうじゃない。ただ、外人部隊のように他国の者も入れる事で他国にも精通するような軍を取り入れるのも良いと判断したのだよ」

「確か・・・外人部隊が出来た理由は、自国民の血が余りに流れ過ぎたからでした」

外人部隊が出来た理由は自国民の血が大量に流れたためそれを防ぐ為に造られたと言う。

叔父上は他国に精通する軍を造りたいと言ったが、そういう所も理由にあるのか？と疑問を覚えた。

「しかし、いま我が国はそれ所ではないな」

「はい。まさかアガリスタ共和国とクリーズ皇国から軍が派遣されるとは・・・・・・・・・」

「あれは国の思惑ではないよ」

「と言うと、誰かの思惑で派遣されたと？」

「そう考えるのが妥当だよ。２ヶ国が本気でこの国を潰そうと考えているなら直ぐにあれ以上の軍を出す筈だ」

そうする事で新国王になったリカルド王子に恩を売ると同時に我が国に対して干渉出来るから、と叔父上は続けた。

「それなのにそれをしないという事は一部の人間が独自で兵を派遣したというのですか」

「あぁ。どちらも皇帝と共和将が支配しているが、地方ではまだまだ豪族の方に力があるからね」

「失礼ながらヘン・ロビンソンから叔父上の仕事内容はある程度聞かされました。そこで質問です。叔父上としてはなぜ2ヶ国が軍を派遣したと思われますか？」

「クリーズ皇国は我々の国を建国したフォン・ベルト陛下の弟君が建国したという事は知っているね？」

叔父上は何時も先に前置きと言えば良いだろうか？

先ず理由からではなくそれまでの経緯を先に話す。

今回もそうだと思いながら私は答える。

「ですが、その血筋は・・・・・・」

「もう途切れている事だろう。だが、それでも友好国だった」

それを先王ガルバー様が滅茶苦茶にしたせいで一時は敵国となってしまったのだ。

「サラ様の尽力で何とか鞘に収まったが・・・未だに怨みを抱く者は居る」

“虐めをした者はそれを忘れるが虐められた者は生涯忘れない”

こんな言葉がある通り幾らこちらが謝った所で向こうから言わせれ

ば怨み続けるのも仕方が無い。

「アガリスタ共和国においても同じだ。彼等は怨みを未だに持っている」

それが今回軍を派遣した大方の理由だろう、と叔父上は教えてくれた。

「だが、他にも理由は幾つかあると思う」

それはまだ分からないが、と叔父上は言いベッドから立ち上がった。

「どれ・・・私も一緒に行こう」

「叔父上も、ですか？」

「あぁ。私も役立ちたいと思ってね」

「それは良い考えですね」

そう言って私は叔父上と共に会議室へと足を運ぶ事にした。

第百八十七章：新しい仲間

テツヤ殿が一人で帰って来た事に些か驚いたが、テツヤ殿自身は何も言わずに席に腰を降ろした。

「あのフィーナ中尉は？」

私が訊ねるとテツヤ殿は女神の抱擁に火を点けてから答えた。

「叔父様とお話中だ」

二人だけで話すのが良いだろうということでテツヤ殿は先に戻ったようだ。

「何を話すんですかね？」

「さぁな。ただ、唯一の肉親であるおっさんとなら分け隔たれなく腹を割って話せる」

確かにそれは言えている。

肉親なら・・・それもただ一人の肉親なら腹を割って何でも話せるだろう。

特にフィーナ中尉はヴィールング殿が私に言ったように繊細で自分の気持ちを他人には教えないし見せないようにしている。

だが、ヴィールング殿なら腹を割って話せるだろう。

私達はフィーナ中尉が来るまでただコーヒーなどを飲んで待つ事にした。

既に夜となったが、まだ会議は続いている・・・・・・・

些か腹が減った頃だった。

「はーい。天使ちゃん」

ドアが開き振り返ればオリガさん、イザベルさん、レイテさん、ローズちゃんが温かい食べ物を盆に載せて入って来た。

「お腹減ってるでしょ？だから夕食を持って来たわ」

オリガさんが私に話し掛けると・・・ガリシャが何故かまた眼を尖らせてきた。

「私なにもしてないよ」

「したわよ。馬鹿」

何をしたんだ？と言いたい所だが、そんな事もオリガさん達が差し出してくれた温かい食べ物の香りで忘れてしまった。

「さぁ、食べて」

私達は夕食を始めた。

テツヤ殿にはメジュリーヌさんとリーザ中尉が・・・本当ならミレーネ様も行きたかっただろうに、と思うがそれは敢えて考えないよ

うにした。

あの方がここに来れば否が応でも視線に入りサラ様の耳にも入る事だろう。

そうなれば・・・知られてしまう恐れがある。

だからこそ、こうして家で待っているのだろう。

レオンの方はレイテさんとローズちゃんと共に談笑を交わしながら食べゲンハルト様に到っては・・・・・・・・・・・・

「あぢっ・・・熱過ぎるぞ!!」

「人が誠意で作ったのにその態度は何よ!!」

案の定と言えば良いだろうか?

熱過ぎると苦言を漏らしたゲンハルト様の口を強引に開かせて・・・・・・・・・・

「もがっ!!もごっ!!」

皿ごと口の中に入れるイザベルさんの姿が見えた。

「はははははは。すっかり尻に敷かれているな?ゲンハルト」

プロイセン様は笑いながらヘンさん達と食べ、ミーシャ大尉とワイド中尉は仲良く食べている。

傍から見れば男前な女性と食べている、と見えるだろう。

髪をもう少し・・・肩まで伸ばして服装や化粧をすれば女性らしく見える筈だ。

まぁ、それは言わないでおこう。

私は食事を続けた。

「美味しい？」

「はい。とても」

「良かった。所でフィーナさんは？」

「叔父上とお話中です」

「叔父上？」

「えぇ。何だか上の空だったのでテツヤ殿が連れて行ったんです」

「そう。そういう細かい所にも眼を向けるのが“大人の男”よ」

「私はまだ違うんですか？」

何となくそんな言い方だったので訊ねればオリガさんはそうだと頷いた。

「こんな近くに貴方を想う女性が居るのに気持ちを理解できないんですもの・・・まだ子供よ。天使ちゃん」

私は誰が近くに居るんだ?と思う。

その間もガリシャが刺すような勢いで・・・フォークをこちらに向けながら食事をしているのを気にしながら私も食べた。

食事を終えた所でフィーナ中尉とヴィールング殿が来た。

『渋い叔父様だわ』

女性陣は口を揃えてヴィールング殿を褒めた。

確かにヴィールング殿は・・・渋いし落ち着いた物腰もまた格好良く映るだろう。

だからと言って、こんな私達が居る前で言わなくても良いだろうに。

『・・・・・・』

それに対して私達の表情が険しくなったのは当たり前と言えるだろう。

誰だって自分達が好きな女性から他の男を褒める言葉が出て来たら嫌な気持ちになる。

「やぁ、お嬢さん。テツヤよ。私も会議に参加させてくれ」

ヴィールング殿は女性陣に挨拶をしてから直ぐにテツヤ殿に要件を伝えた。

「構わない。さぁ、お嬢ちゃん。またおじちゃん達は仕事だから帰りな」

テツヤ殿はレオンに甘えていたローズちゃんに優しく語り掛けた。

「えー、もう少しレオンお兄ちゃんと居たい」

ローズちゃんは可愛らしく頬を膨らませてテツヤ殿に文句を言ってきたので、それをレイテさんが叱ろうとしたがテツヤ殿は眼で止めさせた。

「レオンも仕事なんだ。そうだな・・・君が寝るまでには帰らせるよ」

その時のテツヤ殿はまるで我が子に優しく語り掛ける父親のように見えた。

「約束だからね？」

「こう見えておじちゃんは女の子と約束を破った事は無いから大丈夫だよ」

そう言ってテツヤ殿はローズちゃんの頭を撫でて女性陣を部屋から出した。

「さぁて、続きを始めるか」

直ぐにテツヤ殿は何時もの顔と声になり会議は再開された。

「先ずは自己紹介をさせてもらうぞ。テツヤ」

ヴィールング殿はテツヤ殿に自己紹介をする旨を伝えテツヤ殿は頷いた。

「私はヴィールング・マレル。フィーナ・マレルの叔父だ。サルバーナ王国“ローブ”の隊長だ」

「ローブとは？」

テツヤ殿が質問した。

「表向きは雑用係だが、本業は他国に潜入して情報収集、味方作り、偵察などだ」

「なるほど。それに加えて兄貴の尻拭いもしていた訳か」

「そういう事だ」

ヴィールング殿は頷き自己紹介は終えたので座った。

「それじゃおっさんに説明する。ざっとこんな感じだ」

テツヤ殿はヴィールング殿に説明をし、それに対してヴィールング殿は頷いたりした。

そして説明を終えてから2、3個ほど質問して自身の経験などを話してくれた。

「なるほどな。で、おっさん。あんたとしてはリカルドをどう思っているんだ？」

「確実に王としての器はある。部下達の統率も問題ないし腹心のヴィクター公爵も居るから問題ないだろう。ただし、ライアンナル伯爵とモリスン伯爵に至っては危険だ」

「あんたライアンナルと懇意にしていたらしいな？」

「懇意という程ではない。ただ、奴とは仕事が似たような物だったから懇意にしていると見られただけだ」

「あいつの仕事は何だったんだ？」

「私と同じく他国の情報収集や後方支援などだ。だが、私の配下ではないしハッキリとした所は分からない」

調べようとしたが上手い具合に誤魔化したりしたらしく王への覚えも良かった為断念したようだ。

「だが、何で辺境に左遷されたんだ？」

「あの男は危険だ。ヴィクター公爵などに関してもそうだが、あの男とヴィクター公爵の危険は意味が違う」

そこを先王に進言して左遷させたようだ。

「モリスンに関しては？」

「あの男は山賊だ。たまたま侯爵が狩りに出ていた所を襲い入れ変わった」

知っている者達も秘密裏に殺して自分が侯爵だと言ったらしく、そこへライアンナル伯爵が力を貸した為・・・王達も欺いたらしい。

そんな簡単に物事が運べるのか？と思うがやはりそこは中央貴族たちに対する“袖の下”で万事上手くいったというから腹立たしい。

「差し詰めライアンナルは陰で糸を引く主犯格で実行者はモリスンって所か」

「大方はそんな物だ。だから、モリスンはライアンナルに頭が上がらないのだ」

「なるほど。あいつ等に対して何か出来る事はあるか？」

「滅多な事では2人も前線には出ないし一人にもならない。また狙撃などされないように窓や外にも出ない」

かなり用心深い性格、か・・・・・・

「厄介な相手だ。それから貴族たちの方はどうだ？」

「あの者たちなら問題ないな。一度の出撃でそなたらにやられてから和睦するべし、と言っている。若しくは宴ばかり開いているから向こうでも手を焼いている」

ただし、奴等の資金などは勿体ないから生かしているという。

それが無ければ即座に殺しているだろうな。

あの者たちは居るだけで害なのだから。

「向こうは向こうで大変だな。俺らにとってはその隙を突けるから良いが」

「そうだな。我々にとっては好都合だ。実に良い感じだ」

ヴィールング殿は薄笑いを浮かべてみせた。

・・・やはり笑うと何処かフィーナ殿と似ていると思わずにはいられない。

それから会議は暫く続いたが、ローズちゃんとの約束通り彼女が寝る前に会議は終了した。

第百八十八章：国旗と変な物

ヴィールング殿が会議に参加してから3日が経過したが、敵からの攻撃は今の所なかった。

前線基地を造る事に全力を注いでいるという事だろうか？

その間に我々も迎撃準備ができるから助かると言えば助かるのだが逆に何もして来ないのが不気味でしょうがなかった。

フィーナ中尉と親衛騎士団はその間、訓練に励みながらどうやって攻め落とすかなどをテツヤ殿達と相談している。

私の方も同じような物だが、前線基地をもし奪えなかった――フォース・リーコン達が来るのかなどを考えた時の“保険”がどんな物か気になってしょうがなかった。

「テツヤ殿の言っていた保険というのは一体何ですかね？」

私はベレッタを布で拭きながらヘンさんに訊ねた。

「そのままの意味だろう。俺が参加した作戦にもあったが第一手段が失敗したら第二手段を、というのがあった」

「と言うとテツヤ殿の頭の中では既に」

「考えられているのさ。まぁ、俺達は俺たちでどうサポートするかを考えるべきだ」

「そうですね」

その言葉に私は頷きながらベレッタを綺麗に拭き続けた。

「おい、リンクス」

バッと音を立て雪の地面に着地したのは狼人ガルムだった。

「狩りが終わったのかい？」

「うむ。すばしっこい奴でザンビア平野まで追いかけて仕留めて来た」

随分と追い掛けたんだな、と感心しながら私はベレッタを組み立て始める。

「そこで“変な物”を見つけた」

「変な物？」

「あぁ。地面に顔を埋める形で木や雪で埋もれていたのだが翼もあった」

翼もあった？

「しかも、乗る所もあったのだ」

食べ物かと思ったが臭いがしないらしい。

「そこで我が主へ伝えようと思い帰って来たのだ」

ついでに前線基地の事も伝えると言ってきた。

「前線基地はついでなのかい？」

普通なら前線基地が先だと思うのだが・・・・・・

「食べ物の方が大事だった」

腹が減っては戦が出来ぬというだろ？と言われては何も言えない。

「そうそう。翼に丸が描かれていたな」

ガルムは思い出したようにポンと手を叩いた。

「丸？」

「あぁ。ただ丸が描かれているだけだが、何処かの国の物かもしれんな」

「でも、５大陸に丸だけの国旗なんて無いよ」

失礼な言い方だが丸だけが描かれた安直な国旗は聞いた事が無い。

「だとすれば・・・我が主のようにここへ来たのかもしれんな」

ガルムの言葉は的を射ている。

ここにそんな国旗は無いとすれば・・・・テツヤ殿達の世界から来たという形になるだろう。

「ガリシャ。聞いた事ある？」

私が訊けばガリシャはＳＫＳカービンを拭いていた手を止めた。

「特に無いね。でも、ガルムの言う事が妥当じゃない？」

「確かに・・・これは報告した方が良いね」

私の言葉にヘンさん達は頷いた。

そして私が報告しに行こうとするとガリシャも一緒に行くという事になり２人で行く事になった。

「一体ガルムが言っていた物は何だったんだろうね？」

私は廊下を歩きながらガリシャに問い掛けた。

「分かんないよ。見てないんだから」

確かにその通りだ。

現物を見ていない以上は頭の中で想像するしかない。

「だけど、翼があるという事は空を飛べるって事だよね？」

「多分ね。人が乗れる場所もあるという事は天馬とかワイバーンみたいに空を飛ぶ乗り物の可能性が高いね」

ブラック・ホークなどのようなヘリかもしれない。

そう考えるのが妥当か？

「持って来れるのかな？」

「どうだろう。ザンビア平野にあるとすれば嫌でも首都を通らないと」

ザンビア平野は首都を通らないと行けない場所だ。

もちろん他にも道はあるが、敵が居る場所を素通りしてそこから持って来るのだから見つかる可能性が極めて高い。

「それ以前に誰か気付かなかったのかな？」

ガルムの話を聞く限りかなり大きい筈だ。

それなのに誰も気づかないとは解せない。

「確かに。でも、木とか雪が被されていたというから見つからなかったんじゃないかな？」

「んー・・・分からないね」

ここで話した所で答えなど見つかる訳ない。

だが、それでも話題としては良いから私とガリシャは話し続けた。

テツヤ殿は恐らくテントに居るだろうなと思い行ってみたが居ない。

ゲンハルト様とプロイセン様それに将軍達だ。

「テツヤ殿は？」

「テツヤなら女王陛下に呼び出されて行ったぞ」

「サラ様に？」

「うむ。女王自ら赴いて来て話があると言った」

テツヤ殿はそれを了承して2人だけで行ったそうだ。

「だとすると行かない方が良いですね」

「それが懸命だ。テツヤが戻るまでここに・・・待て。プロイセン！それは！！」

ゲンハルト様は話し合いに夢中だったが、チェス盤に眼を戻すや否や叫んだ。

「チェック・メイトだ。ゲンハルト」

「これで１０戦１０敗ですね」

ゲンハルト様とプロイセン様はチェスの最中だが、ゲンハルト様は負けた。

そして将軍の一人が１０敗目だと言ったから・・・・・・・・

「１０回も負けたんですか」

ここまで負けるとは・・・・憐れだ。

「う、煩い！まだ１０回だ。もう一度だ。プロイセン！！」

「またか？もう飽きたぞ」

「黙れ！イザベルにも負けたんだ。貴様にだけは断固として勝つ！！」

イザベルさんにも負けたのか・・・・・・・・・・

「やれやれ。負けず嫌いな男だな」

「諦めればそこで終わる。それを私に教えたのはテツヤだ」

なら勝つまで諦めたりはしない、と公言するゲンハルト様。

言葉は格好良いのだが・・・・流石に１０回も負けて言うと力も半減するという物だ。

「所でテツヤに何を言う気だったのだ？」

ゲンハルト様は怒りを抑えるように私に話しかけてきた。

「ガルムが変な物をザンビア平野で発見したそうです」

『変な物？』

皆が私の言葉を訊き返した。

「はい・・・・・・・」

私はガルムから聞いた事をそのまま伝えるとゲンハルト様は唸った。

「何も見ていないな。私は」

「それは初陣で何も見えなかったからだろ？」

「そうかもしれん。だが、乗る場所があるという事はそれなりに大きい物だろ？」

「確かに。しかし、草木が被されていたのでは余程でないかぎり気付くまい」

2人は駒を動かしながら喋り続ける。

「しかし、丸だけが描かれているとは・・・不思議だな」

「うむ。国旗ならもう少し味がある物を描く筈だ」

丸だけでは何とも・・・・・・・

かなり2人揃って毒を吐くなと思いながらも私もまた同じ考えなので何も言えなかった。

そしてゲンハルト様の言う通りテツヤ殿が帰って来るまでここに居ようと思い腰を降ろす事にした。

「女王様は旦那に何の用だろうね？」

ガリシャは私の隣に腰を降ろしながら訊ねてきた。

「さぁ・・・ただ、何時も夕食の誘いをして来るんだ」

「あんたが王女様に夕食を誘われるように？」

「うん。でも、テツヤ殿にはメジュリーヌさん達が居るだろ？」

「だから、行かないという事ね」

「まぁあの2人なら別に構わないと言いそうだけど・・・・」

オリガさんもそうだが、女性は好きな男が他の女と食事をしても怒らないのか？と思ってしまう。

「あたしはまだ若いから分かんないけど、お婆ちゃんが言うにはこうなんだ」

それ位で嫉妬する女は底が知れている。

「どういう意味？」

「分かんない。訊いても教えてくれないんだもの」

「それはその程度で嫉妬するという事はまだ若い証拠だと言いたいのだよ」

将軍の一人が私達の話に入って来て説明してくれた。

「そう、何ですか？」

「まぁ絶対とは言えないが、ガリシャ殿の祖母君から言わせれば腰を据えて構えろと言いたいのだよ」

流石は人生の先輩だ。

言う事に説得力があり重みがある。

「ありがとうございます」

「なぁに君たちはまだ若いんだ。私達から見れば息子・娘に見えるのだよ」

「失礼ですがご結婚は？」

「したさ。だが、妻も子も既に死んでしまった」

「失礼しました・・・・・」

「なぁに気にしてないよ。それに私には君等のような歳若い者達が私にとっては家族だ」

やはり将軍ともなると人間性も凄いな、と私は感動せずにはいられなかった。

「それはそうと君の父君は獅子頭軍団に所属していたマンティ・クリフではないかな？」

「父を御存じで？」

「あぁ。君とは違い体格的には申し分なかった」

そう・・・父の体格は私に比べれば逞しかった。

何で父に似なかったんだと言いたい位だ。

「だが、女性に関しては鈍感だったね」

そこは父と同じなので何とも言えない。

「あのランドルフのお父さんってどんな方だったんですか？」

ガリシャが興味を覚えたのか将軍に訊ねてきた。

「そうだね・・・一言で言うなら兎の皮を被った獅子だね」

「どういう意味ですか？」

「平常は兎のように大人しいが、戦場では獅子のように戦ってみせた」

そのギャップが凄い為か女性陣から人気が高い要因だったらしい。

「君もまたそうだと聞いているよ。テツヤからね」

普段は情けないが、戦では鋭い視線で相手を仕留める山猫になる。

「テツヤ殿がそんな風に？」

「あぁ。君とレオンを話す時はとても誇らし気に何時も言っている」

君とレオンはテツヤにとっては優秀な弟子なのだろうと将軍は言い私は何だか恥ずかしくなった。

それを見ては皆に笑われ私は速くテツヤ殿が来てくれる事を願わずにはいられなかった。

第百八十九章：飛行機の種類

テツヤ殿を待つ事数時間が経過した。

その間もゲンハルト様とプロイセン様はチェスをしているが・・・・・・・・・

「これで５０敗目ですよ？ゲンハルト様」

私は些か呆れた口調でゲンハルト様に言ったが、当のゲンハルト様は未だにやる気満々。

それに比べてプロイセン様は「もう嫌だ」と身体で言っている。

そりゃ５０回もやれば嫌気も差すというものだ・・・・・・・・・

私とガリシャもこれを見ているのに好い加減飽きてきた。

まだ来ないのか？と私とガリシャは待っている事さらに2時間が経過した所でテツヤ殿は帰って来た。

身体からはサラ様の香りがして癒される錯覚さえ覚える。

「何だ。来てたのか」

テツヤ殿は私とガリシャを見て訊ねてきた。

「はい。遅かったですね？」

「女王が珍しく駄々を捏ねたんだよ」

もう少し一緒に・・・・を繰り返して時間が過ぎたらしい。

特に何を話す訳でも無いのにテツヤ殿と一緒に居たかったようだ。

「女王陛下に信頼されているな」

プロイセン様はさすが私が見込んだ男だと言わんばかりに自慢の髭を撫でてみせた。

「あんな美人に信頼されるのは嬉しい半分・・・男として見られていない気がするぜ」

「何を言うか。そなたの周りには美女で溢れているではないか」

ゲンハルト様が茶化すように言えば皆はそうだと頷く。

「で、何の用だ?ランドルフ」

テツヤ殿は苦笑しながら私に要件を訊ねた。

「お話がありまして」

私はテツヤ殿にガルムから聞かされた内容をそのまま伝えた。

「丸だけの国旗か・・・・・」

「はい。失礼な言い方ですが、そんな単純とも言える国旗はこの大陸にはありませんから」

「俺の国かもしれないな」

「テツヤ殿の国ですか？」

だとすれば私はかなり酷い言葉を連発したなと思ってしまうが・・・ゲンハルト様もプロイセン様も毒を吐いたのだから問題ないと開き直る。

「俺の国の国旗は白い布に赤い丸が描かれている」

弁当に白い米と梅干しと呼ばれる酸っぱい物を載せれば「日の丸弁当」と言われている。

関係ない話だが。

「何で日の丸なんですか？」

「簡単だ。“太陽中心主義”だからさ」

「何ですか？その主義は」

「俺が居た国ーーー日本を創り上げた神は天照大神（あまてらすおおみかみ）という女神だった」

その女神は太陽だったらしく、そこから太陽が中心という考えになったらしい。

それから天照大神は太陽の化身だった事から赤い日の丸が国旗とされた。

それを聞くと本当に失礼な事を言ってしまった、と私は深く後悔したがテツヤ殿は気にした素振りも見せずにこう続けた。

「他にも月や星などを国旗にしている国もある。ＡＫが国旗にされる所もあるから面白いだろ？」

「そうなんですか・・・・・・」

ＡＫを国旗にする国もあるのだから本当に面白い物だと私は変に感動した。

「話は変わるがガルムが見た物は恐らく“飛行機”だ」

「飛行機？」

「ヘリと同じく空を飛べる。ただし、飛行機とヘリが戦えば飛行機が勝つ」

理由として飛行機の方が単純に力強いと言う理由だ。

「だが、飛行機はヘリと違って滑走路を使用する。だから、滑走路が無いと意味が無い」

「では、仮に使えたとしてもここでは駄目だと？」

「ザンビア平野なら可能だな」

ザンビア平野は先王が軍の演習をする目的として作り上げた人口平地だ。

真っ平・・・とまでは流石に言えないが、それでも平らであるから上手く行けば飛べる。

「どんな物かは見ていないから分からんな・・・ガルム」

「お呼びでしょうか？我が主」

ガルムが何処からともなくさっと現れた。

何処に居たのか分からないが、よく聞こえた物だが流石は狼人と言った所だ。

「今からザンビア平野へ行って写真を撮って来い。お前が見てきた物を知りたい」

テツヤ殿はカメラをポンっとガルムに放り投げ、ガルムは大き過ぎる手でカメラを大事そうに持った。

「大事に扱えよ？お前の力なら簡単に壊れるからな」

「御意に。数は結構ありますが全部撮りますか？」

「１機だけじゃないのか？」

「はい。少なく見ても１０以上は・・・・・・・」

「随分とあるな。全部撮って来い。それから持って帰れる物があるならそれも頼む」

「分かりました」

そう言ってガルムは風のように疾走すると城壁を飛び越えて消えて行った。

「テツヤよ。その飛行機という物・・・戦えるのか？」

ゲンハルト様が興味深そうに訊ねた。

「戦闘機か攻撃機か爆撃機か・・・海軍のか陸軍のかによって違いがあるから簡単には答えられないな」

「その3種類って何です？」

私がその3種類について質問した。

「戦闘機はそのままの意味で敵機と戦う飛行機だ」

飛行機やヘリコプター・・・要は空を飛ぶ乗り物を相手にする飛行機らしい。

戦闘機に求められるのは敵機と空中で戦う事を前提としているため速度と旋回能力だという。

他に上げるなら敵機を撃ち落とせる強力な武装と言った所か？

「次に攻撃機だが、陸軍と海軍によって使い方が違う」

テツヤ殿の国一一一日本では急降下爆撃機を出来る機体を爆撃機とし、水平爆撃と雷撃が出来る機体を攻撃機としたようだ。

この攻撃機だが2つに別けられる。

艦上攻撃機と陸上攻撃機だ。

艦上攻撃機は船から発進する。

それに対して陸上攻撃機は基地から発進する。

また魚雷と呼ばれる兵器を使用し敵艦を沈める飛行機を総称して“雷撃機”と呼ぶらしい。

この機体に求められるのは戦闘機が速度や旋回を求めているのに対して低空飛行で長時間飛ぶ為に安定性が求められている。

特に魚雷を積んだ雷撃機は魚雷などの重さで速度が落ちるため戦闘機と会ったら万に一つも助かる見込みは無い。

だからこそ戦闘機が護衛として付いて行くのが常らしい。

「最後に爆撃機だ。こいつは海軍の方では敵艦を陸軍では敵基地などを破壊する」

海軍の方では急降下爆撃で敵艦に爆弾を落とし速度を低下させたり主砲を破壊したりするらしく、陸軍でも基地などを破壊する為に使用されたようだ。

この機体は搭載する爆弾の量などを考慮し大抵だが旋回能力や速度などを犠牲にしているという。

更に戦闘機の攻撃にも弱いため攻撃機と同じく護衛が必要とされている。

しかし、これはテツヤ殿が生まれる前の話らしく今はかなり進歩して色々と変わったらしい。

先ずヘリにもあるプロペラだ。

テツヤ殿が生まれる前までは当たり前のように飛行機に装着されていたが、今ではジェットと呼ばれる物でプロペラは無いらしい。

ただし、完全に無くなった訳ではなくセスナと呼ばれる飛行機はプロペラを使用している。

「そこら辺は相棒に訊くのが一番なんだがな・・・・・」

「猟犬殿は飛行機を操縦できたのですか?」

狙撃手だと聞いていたが、まさか飛行機も操縦できるとは驚きだ。

「俺は陸軍だがあいつは空軍だからな。ヘリと飛行機の両方を操縦できる」

テツヤ殿も操縦は出来るらしいが、やはり本職の空軍には些か劣るという。

また猟犬殿の階級はテツヤ殿と同じく少佐だったらしい。

「そなたに相棒が居たのか?」

ゲンハルト様が訊ねるとテツヤ殿は頷いた。

「あぁ。俺より年下だが傭兵稼業では先輩だ。あいつには色々と助けられたぜ。パリでも一緒に仕事をしていたが・・・今頃はどうしているのか分からないが元気にやっているだろう」

猟犬殿の話をする時のテツヤ殿は何処か懐かしい物を思い出すかのような雰囲気を漂わせている。

やはり共に死線を潜り抜けてきた仲だからだろうか？

「そなたの背中を護った男だ。元気にやっておるさ」

「そうだな」

そう言ってテツヤ殿は女神の抱擁を銜えてジッポーで火を点けた。

それから私とガリシャはヘンさん達の所へと戻りテツヤ殿に伝えてきたと言った。

「そうか。それにしてもあいつの国旗とは驚きだな」

「はい。フォン・ベルト陛下と言いテツヤ殿と言い・・・何だか日本という国と係わりが深いなと思います」

「だな。しかし、その飛行機というのが使えるとしても訓練時間がどれ位なのか問題だな」

ヘンさんの言葉に私は頷いた。

確かにその通りだ。

飛行機なんて初めて聞く。

そのうえ操縦した事も無いのだからどれくらい訓練が必要なのか分からないのが現状だ。

「そこら辺も訊いておくべきでしたね」

「使えると分かった時に訊けば良いさ」

ヘンさんはそう言って親衛騎士団の様子を見に行くか？と訊いてきた。

私は頷き行く事にした。

第百九十章：親衛騎士団と交流

親衛騎士団はシュヴァルツフント達を相手に戦っている最中だった。

ある者はライフルに銃剣を取り付けた銃剣術で、ある者は拳銃とナイフ、ある者は素手で・・・とそれぞれ様々な状況や武器で戦いをしている。

その中には剣で戦う者も居た。

今にして思えばライフルなどでしか戦っていないが、剣などの戦闘も想定しておく必要がある。

しかも、私はテツヤ殿と同じく魔法剣であるドウダヌキを持っている。

まったく・・・ここ最近は使っていない。

ふと・・・背後から殺気を感じた私は即座に横へと飛んだ。

先ほどまで私が立っていた場所には剣が振り降ろされて地面を軽く抉っていた。

「ちっ・・・外したか」

親衛騎士団の一人が舌打ちを漏らす。

「背後から奇襲とは・・・良いですね」

私は中々の奇襲だと褒めながらちょうど良い相手だと思いドウダヌキを出した。

モーゼルはヘンさんに失礼だが投げて預ける。

「剣で勝負か。面白れぇ」

相手は剣ーーーバスター・ソードを両手で握り締めた。

私もまたドウダヌキを両手で構えテツヤ殿に散々なまでに仕込まれた正眼の構えをする。

「それがお前さんの剣か・・・俺たちのと違うな」

「えぇ。テツヤ殿の国が作った物ですから」

「行くぞ!!」

相手は剣を頭上に斜めに向けて突進してきた。

一気に勝負に持ち込む気か?

私は冷静な眼差しで相手との距離を計り・・・雪を顔にぶちまけてやった。

足で蹴り飛ばした雪は相手の眼に入り眼を塞ぎ、隙が出来る。

そこへ私は距離を縮めて足払いをした。

相手を仰向けにさせる事に成功した私はドウダヌキを相手の首筋へ

と当てる。

「勝負ありですね」

雪を退けた相手は悔しそうに顔を歪ませながらドウダヌキの刃を見た。

「す、すげぇ・・・見ているだけで・・・いや、触るだけで危ない気がするぜ」

「じっさい切れ味は凄いですよ?素手で触ろうものなら指が全て切れますから」

「すげぇー。なぁ、触らせてくれ」

彼は立ち上がると私にドウダヌキを触らせてくれと強請って来た。

「どうぞ」

私は彼にドウダヌキを渡した。

「すげぇ・・・しかし、重いな」

「実戦向きに打たれた物だから、重い作りだそうです」

ドウダヌキは実戦を想定してあるので通常のカタナより重いらしい。

更に刃も厚くされているので刃零れもそれほど酷くはないとも聞いている。

その重さ故に扱うのは苦労するが逆にその重さを利用して振り降ろせば斬る場所が良ければ相手は一撃で死ぬだろう。

「すげぇな。俺の剣より良いぜ」

彼の剣はバスター・ソードだ。

こちらも実戦向きの剣に変わりはないがどうやらこちらの方が気に入ったようだ。

「しかし、テツヤ殿が言うには“鉈をそのまま引き延ばした物”らしいので芸術性には欠けますよ？」

「そんな武器に芸術性を求めるなんてどうかしているぜ」

「まぁ、そうなんですけどもう少し他のカタナを見たり訊いたりしてから頼んだらどうですか？」

別に彼にドウダヌキを持たせたくない訳ではない。

ただ、これだけを見て決めるのは些か早急だと思い言ってみた。

「確かにそうだな。所で未だに団長の評価は辛いのか？」

「・・・何とか評価を変えている最中です」

「あれだけの事をやったんだからそう簡単に評価を良くしろと言っても無理か」

「えぇ。それはヴィルヘルム殿も同じだと思います」

「おいおい、それは違うぞ」

ヴィルヘルム元伯爵は私と彼の間に入って来た。

「俺は最初からフィーナを見込みある奴と見ていた」

「最初は父親とは豪い違いだと言ってたではありませんか」

「そんな事を言った覚えは無いぜ？俺は父親のロックスは最低最悪と言ったがフィーナは見込みある可愛い弟子と言った」

・・・・ここまで堂々と嘘を吐ける人物はそう居ない。

よくもまぁ・・・堂々と胸を張れるものだと私と彼は呆れ果てた。

「まぁ、それはおいておくとして・・・フィーナは我が主に抱かれたのか？」

明らかに面白そうな顔をする元伯爵であり現在は傭兵隊長のヴィルヘルム殿に私は何と言えば良いか分からなかった。

他の者達も興味津々の様子だ。

「あの、私に訊かれても・・・・・・・」

「お前が一番我が主と付き合いが長い。それならお前に訊くのが効率的だろ？」

フィーナ中尉自身に訊いた所で「はい、抱かれました」なんて素直

に答える訳が無い。

いや、それ以前に誰だってこんな恥ずかしい事を訊かれたら答えないだろう。

「で、どうなんだ？」

「知りませんよ」

それを聞くと「つまらない答えだな」と言われてしまった。

「私に言わないで下さい」

何で私がこんな事を言われなくてはならないんだ、と思いながらドウダヌキを返してもらい鞘に収めて消した。

そしてヘンさんに預けたモーゼルを返してもらう。

「やはりこちらの方が性に合うな」

私には剣よりこちらだと改めて思わずにはいられない。

「そう言えば我が主は剣術も使えるんだったな」

ヴィルヘルム殿は思い出したように言った。

「えぇ。自衛隊時代に先輩から色々と仕込まれたそうです」

「ほぉう。流石は我が主。貪欲なまでに吸収したのだろうな」

「恐らく。ですが、我流も入っているでしょう」

唾を吐いたり、足払いをするなど正当剣術には含まれていない筈だから。

「半分は当たりだ」

ヴィルヘルム殿の背後からテツヤ殿が現れた。

「これは我が主」

ヴィルヘルム殿はテツヤ殿に肩膝を着いた。

「訓練ご苦労だな」

「いいえ。敵が来ないので暇なのです。ですから良い暇つぶしですよ」

まだまだ若い者には負けないと豪語するヴィルヘルム殿。

しかし、それだけの実力が備われているのだから強ち間違いとは言えない。

「だろうな」

「あのテツヤ殿。私の言葉が半分は当たりと言いましたがあれはどういう意味ですか？」

「俺を鍛えた先輩は古流剣術の使い手だ。だから、足払いなんかも当たり前のようにある」

「そうなんですか？」

「あぁ。古流剣術は現在の剣術ーーー剣道とは違う」

剣道は一種のスポーツ的な面があり、ルールなどもある。

だが、古流剣術は実戦を想定しているため何でもありだ。

「しかし、剣道は元々真剣や木刀で稽古をして怪我人が続出するからそれを何とかする為に考えられたんだ」

木刀から竹刀へ更に防具なども考案されて木刀などでは危険な技や駆け引きを養う為に考えられた。

所が真剣での斬り合いが無くなった事から単に競技としての争うようになったらしい。

「テツヤ殿の先輩はどんな方だったんですか？」

「一言で言うなら武人だな」

自衛隊に入隊したのも自身を更に高める為というからその性格を表しているだろう。

「まぁ、そんな奴も病気でポックリと逝っちまった」

何とも呆気ない死に方だったとテツヤ殿は淡々とした口調で語った。

「仮にもあんたにとっては師に当たる人物が死んだ割には淡泊だな」

私の相手をした親衛騎士団の男がテツヤ殿に言った。

「人なんて何れは死ぬ。俺も向こうで一度死んだからな」

だから、死という物を怖がりもしないし悲しんだりもしないとテツヤ殿は答えた。

「貴様等はまだ若いから仕方無いだろうが、俺らのように歳を取るとある程度は理解できるんだ」

ヴィルヘルム殿は彼に対して諭すように説明した。

「まぁ、俺も我が主も傭兵だから色々と戦場は駆けて来た。そういう所も常人とは違い達観しているのかもしれないがな」

それに対してテツヤ殿は同意し、私もまた納得できた。

私は狙撃手だ。

相手を確実に殺す事が求められる。

その最後を見るのもまた求められる。

そういう者もまた何れは死という物に対して悟るのかもしれないな・・・・・・・・・

「それはそうとヴィルヘルム。フィーナの事だが余り騒ぐな」

後が怖いぞ?とテツヤ殿はヴィルヘルム殿達に言った。

「ですが、我が主。あの娘は私の弟子です。師として気になるのですよ」

「顔がニヤケているから説得力が無いぞ」

これを言われて私達は笑い出してヴィルヘルム殿が怒ったのは言うまでも無い。

幕間：狼人の偵察（前書き）

これで先月分は終わりです！！

大量更新ですいませんでした。

とは言え・・・これからも忙しくなりそうなので、大量更新になるかもしれません。

どうも彼女が・・・すっぱい物を食べたがっているので・・・まさか、とは思うんですが。

幕間：狼人の偵察

サルバーナ王国の首都ヴァエリエから離れた場所にザンビア平野と呼ばれる平野がある。

そこはかつてこの国の王であった第１２代目ガルバー・ロクシャーナが軍の演習を目的として人工的に平野にした。

他国へ戦争を仕掛けては領土を広げようとしたほどの野心家であり戦好きの王が演習目的にここを平野としたのだ。

もちろん将軍達は誰一人として賛成などしなかった。

ここを作るのも全ては国民の税金で賄うのだから無理も無い。

その上友好国だった２ヶ国にまで戦争を仕掛けて国費が嵩んだ。

そこへこんな物を作るのだから反対するのも無理はないが結局は王の権限で押し切られる結果となった・・・・・・・・・・

ただし、ここで演習が行われる事は一度も無い。

・・・ガルバーが狩猟中に落馬した事で死亡した事により計画していた侵略が中止となった。

そんな事もあり何の目的も無くただあるだけの平野だが、つい先日に反乱軍と獅子頭軍団の戦いが行われた。

反乱軍の指揮官はガルバーの妾が産み落としたリカルド・ウェスビ

ー。

対する獅子頭軍団の指揮官は実戦を一度も経験した事もないゲンハルト・デバンズ宰相。

宰相でありながら戦に関する知識はまるで無くそれ所か軍隊を毛嫌いしていた彼が指揮官では何の意味も無い。

そのため親衛騎士団団長フィーナ・マレル侯爵が代わりに指揮を執るもリカルド・ウェスビーの巧みな包囲網戦術により奮闘虚しく敗れた。

そんな戦が行われた場所だが、死体は既に土へ還り血もまた大地へと吸収され雪が積もった事で辺り一面雪化粧だ。

何も知らない者はここはただの平野だと思うだろう・・・・・・・

その平野を1匹の狼が疾走している。

狼にしては身体が大きく首にはカメラを提げている・・・・・・・

しかし、誰も居ないからその事に首を傾げたりはしない。

狼は雪の道を走っていたが、ある場所で足を止め辺りを見回してから・・・2足歩行へと変わった。

「・・・ここだったな」

人語を話す狼は獣人の中でも最強と謳われ王とも言われる狼人だった。

その狼人はまた辺りを見回し誰も居ない事を確認してから雪が積もった場所一一一森林の中へと入った。

ザンビアは平野だが、直ぐ隣は森林となっている。

その森林の中には雪が降り積もる中でも一際目立つ大きな物があった。

それも１０以上・・・・・・・・・・・

地面に顔から突っ込んだ物、木の枝に引っ掛かった物、背を地に向け腹を空に向けた物・・・とにかくどれもこれもまともな物は無い。

狼人はそれに近付いて雪をある程度払ってからカメラを手に持ち撮影を始めた。

「これが我が主の役に立つのか甚だ疑問だな」

写真を撮りながら狼人は独白した。

狼人が撮っている物はどれもこれも長い間・・・人目に付かず手入れもされていないため何処もかしこも錆つき原型を留めているのがやっとという状態だった。

こんな物が果たして役に立つのか?と思うのも無理は無い。

「命令だから仕方無いが・・・・・・・・・」

などと愚痴を零しながらも狼人は自身に命令を下した主の為に言わ

れた事をやり続ける。

それにしてもこれは何なのだ?と首を傾げたくなる。

翼はある。

左右に・・・しかもその翼の前方には何か細長い筒が出ている。

これは何だ?

乗る場所があるから何か人が乗る物だという事は判るが、それがどんな役割を担うのかは不明だ。

全体的に滑らかな物もあれば、ずんぐりむっくりな物もある。

ただし、どれも同じ一一一先端に付いている物は同じに見えた。

風車のような物だ。

だが、風車にしては小型だし形も変だから益々分からない。

その他にも車輪が2個あるが、小さくて本当に回るのかさえ怪しい物だ。

本当にこれは何だ?と狼人は言いたくなったが、独白せずに写真を撮り続ける。

何枚も写真を撮りこれ位で良いだろうと判断し狼人はカメラを首に提げた。

「・・・写真は終わったな。後は・・・持って行くか」

狼人は写真を撮るだけでなく別の任務も受けている。

何か持って来れる物があるなら持って来い。

これも主から受けた命令だ。

しかし、見る限り外の面では持って行けそうな物は無い。

何か無いか?と中などを探していると・・・・見つかった。

乗る場所は物によっては1個だけのもあるが無い物もある。

「これは・・・ライフルか?」

狼人が手に取ったのは黒く塗られた細長い棒のような物ーーーライフルだ。

しかし、見た事が無いし使えそうにも無い。

他に無いか?と前にある乗る場所も探してみると・・・・・・・

「スコープか?」

途中で折れてしまっているが、乗る場所にあったのはスコープだ。

「という事はこれで敵を狙ったというのか?」

狼人は一体どんな方法で戦ったのか?と考えたが直ぐに止めてスコ

ープを取り出した。

他も通信機などもあった。

「これは主の世界から来た物、と考えるべきか」

これだけの代物はこの世界に無い。

となれば主の世界から来たという事になる。

それが何なのかは狼人には分からない。

「まぁ何にせよ主に見せれば分かる事だな」

狼人は考えるのを止めて持って行ける物は全て物から剥ぎ取った。

写真も撮ったし持って行ける物も手に入れたから帰るだけだ。

狼人は平野ではなく森林の方をまた疾走し来た道を戻り始める。

狼の化身である狼人は1週間も獲物を追い掛ける事など造作も無い。

何処までも獲物を追い掛けて最後には仕留める。

更に嗅覚などは人間には足元も及ばないほど鋭いし、牙とは丸太を噛み砕き爪は鋼鉄をバターのように切り裂くと言われている。

それだけの戦闘力があるからこそ獣の王と言われるのだ。

故に荷物を持って居ようと1昼夜走る事も狼人にとっては朝飯前だ。

だから夜を通して狼人は走り続ける。

一刻も早く主の下へ帰還する為に・・・・・・

首都であるヴァエリエを通り過ぎたが、一度だけ足を止めて城下町を見る。

「・・・あれがリカルドとやらが思い描いていた国造りか？もし、それが思い描いていたと言うのなら甚だ愚かな者だな」

城下町では民達が生きる屍となり、兵たちが来る度に怯えたりドアを閉めたりしている。

リカルドは地方を助ける為に軍を起こしたと主は言っていたが、首都は蔑ろにするのか？

それとも地方を助けると言うのはあくまで建て前か？

どちらにせよ・・・これが彼の思い描いていた国造りというのなら甚だ愚かと言われても仕方が無いだろう。

「他の人間がどうなろうと知った事ではないが・・・主の願いだ。一刻も早く奪回せねばならんな」

更に先へと進み続ける。

向かう場所は東の地。

サルバーナ王国を建国した初代国王フォン・ベルトの居城がある場

所でありかつての首都だ。

しかし、今は逃げた現国王一一一女王サラ・ロクシャーナ達が立て籠る場所だ。

そこに狼人の主が居る。

だが、その前には敵が居り前線基地を建てている最中・・・・・・・・

そこに基地を建てれば攻撃する距離なども短い上に中間基地としても役立つからこそ建てたのだ。

その前線基地の状況も偵察しろと言われているため森林の中から覗き込んだ。

「・・・かなり進んでいるな」

現在前線基地は堀や柵などは既に完成しワイバーンが眠る小屋も全て造られていた。

見張り台などは未だに建造中だがあの様子なら後2~3日もあれば完成するだろう。

「あの不味そうな女と部下達の出番も直ぐだな」

狼人の主に何度も剣を向けその度に痛い眼に遭わされた不味そうな女だが、今はかなり良い方向へと変化している。

あれなら役に立てるという感じだ。

そんな女とその部下達は砦を奪う任務を与えられている。

そのため彼にここの偵察も命令したのだ。

「・・・1角のワイバーン・・・それの主か。なるほど・・・確かにあれでは勝てる見込みが無いな」

狼人の眼には1角のワイバーンとその主が見えた。

明らかに不味そうな女より場数を踏んでいるのが判る。

あれでは彼女の師が言った通り瞬殺だろう。

しかし逆に倒せば確実に強くなれる相手だ。

何よりあの女と1角のワイバーンの主とは浅からぬ因縁があると狼人の主は言っていた。

それを考えてあの女自身に片を着けさせようとしているのかもしれない。

狼人にとってはあの女が死のうが喰われようが知った事ではないのだが、主からの命令だ。

「・・・シッカリと援護せんとな」

嫌な役割だが、命令とあっては仕方が無い。

そう自分に言い聞かせてから狼人はまた東の地へと足を進めた。

第百九十一章：偵察報告（前書き）

えー、ここで戦闘機の名前を出します。

知っている方は居ると思います。

いや、寧ろ・・・有名です。

後ここでは2機ほど別な飛行機を出す予定です。

第百九十一章：偵察報告

ガルムがザンビア平野へ行ってから2日が経過した。

もうそろそろ帰って来ても良い筈だ。

ガルムは狼人。

狼人は文字通り狼の化身。

そのため体力が続く限り獲物を追い掛ける事も出来るし、人間並みに知能も発達している。

だから彼が例え不測の事態に陥ろうとも自力で帰って来れる筈だ。

彼の体力と足の速さから考えればザンビア平野まで行くのに1日。

写真を撮り持って帰れそうな物を持って来るとしても1日だろう。

だから、私は2日で帰って来ると予想し城に居る。

場所はテツヤ殿達が寝泊まりしているテントだ。

そこにはテツヤ殿、ゲンハルト様、プロイセン様、将軍達、そして私、ガリシャ、レオンが居る。

「そろそろですかね？」

私は煙草一一一女神の抱擁を吸うテツヤ殿に訊ねた。

「寄り道さえしなければそろそろだな」

「・・・・・・・・」

私は無言になった。

テツヤ殿の言った寄り道・・・これはガルムならやりそうな事だ。

幼い子供がお使いを頼まれて行ったとしよう。

だが、目の前に玩具などがあったらどうする？

大半はそのまま行くだろうが、少数は玩具を取り遊ぶ筈だ。

ガルムの場合はその少数に入る。

もちろん彼の場合は玩具などではなく食べ物だ。

狼人という事もありガルムは食い意地が張っている。

飛行機を見付けたのは獲物を追い掛けてザンビア平野まで行ったから。

それのお陰で今の状態なのだが・・・帰り道に獲物を見つけて追い掛けたりしないでくれよ？

私は寄り道しないでくれ、と願いながら女神の抱擁をレオンと共に吸い合った。

そこへ・・・・・・・・・

「少佐。ただいま、罰を終了しました」

リーザ中尉とフィーナ中尉が現れテツヤ殿に罰が終わった事を伝えてきた。

「そうか。今日で終わりか」

「はい。終わりました」

やっと終わりましたと2人は口を揃えて言った。

「それで・・・何の真似だ?」

テツヤ殿は灰を指で叩き落としながら訊ねた。

「・・・グッと来ないか?」

フィーナ中尉は腰を強調するように手を当ててポーズを取りながら訊いてくる。

リーザ中尉も同じようにポーズを取っているがプロイセン様は何も言わない。

何を言えば良いのか分からないという顔だった。

「グッと?ああ、誰かに吹き込まれたな」

テツヤ殿は合点が言ったように頷いた。

「誰かに男はそういうポーズに弱いとか言われたんだろ？」

『・・・ミーシャ大尉に言われました』

2人は口を揃えてテツヤ殿の指摘に答えた。

「アッサリ口を割るんじゃないよ」

そこへミーシャ大尉とワイド中尉が現れた。

「おはようございます。ミーシャ大尉、ワイド中尉」

私とレオンは2人に挨拶をした。

この2人と会うのは久し振りだ。

偵察の援護やらで忙しく会えなかったが、見る限り元気そうだ。

「おはよう。それで坊や。2人を見てどう思う？」

ミーシャ大尉はリーザ中尉とフィーナ中尉を親指で指して訊ねてくる。

「何のポーズかな？と思いました。それに着ている服が服だけに・・・・・・」

迷彩服であんなポーズを取られても困惑する。

「じゃあ、ドレス姿とかだったらどうだい？」

「・・・惹かれる、と思います」

実際こんな美女がドレス姿でこんなポーズを取ったら・・・惹かれるだろう。

「そうかいそうかい。あたしの言葉も捨てたもんじゃないだろ？」

ミーシャ大尉はここぞとばかりに2人へ言った。

「ですが、テツヤは私を襲わないじゃないですか」

フィーナ中尉はポツリと言った。

こんな言葉をヴィールング殿が聞いたら・・・どんな反応をするのか・・・・・・・・・・

「襲われたいのか？」

テツヤ殿が訊くとフィーナ中尉は俯きながら答えた。

「・・・約束は、果たすんだろ？」

「あぁ。果たすさ」

「だったら・・・き、き、き・・・今日・・・わ、わた、私を・・・・・だ、抱け・・・・抱いてくれ・・・・抱いて下さい・・・・・・」

「3回も言わなくても解かるぞ？」

「う、煩い！今日だ。今日、私を抱け！良いな？！」

「はいはい」

「はい、は1回で良い！！それから・・・・・・・・・」

「まだあるのか？」

「わ、私を・・・・ふ、フィンと呼べ！！」

「フィン？愛称か？」

「そうだ！私をフィンと呼べ！！」

「命令形かよ・・・とことんあいつに似ているな」

あいつ？

「誰ですか？」

「パリに居た頃に会った女だ。性格もこいつそっくりな奴だ」

フィーナ中尉とそっくりな女性・・・・・想像できない。

世の中にこれほどの石頭な女が2人も居るのか？と私は疑問に思う。

「そんな女の事はどうでも良い！フィンと呼べ！！」

フィーナ中尉は怒鳴り声に近い叫び声を上げる。

「分かった分かった・・・フィン」

テツヤ殿は椅子から立ち上がりフィーナ中尉に近付き頬を撫でた。

「！！」

ボンッと音を立てた気がする。

フィーナ中尉は顔を真っ赤にしながらも手を振り払わない。

「そこまで言ったんだ。今日・・・・・・・」

「お前を抱いて・・・ぎゃあ！！」

「・・・イーグル１等軍曹！！」

フィーナ中尉は一気に恐ろしい顔になり背後で鼻血を出すイーグル軍曹を睨み据えた。

お前を抱いて、はイーグル軍曹が言ったのだ。

ただし、最後まで言えずに殴られたのは分かる筈だ。

「貴様という男は学習能力が無いのか？！」

「ぎゃ！や、やめ・・・ぎゃあ！いってぇー！！」

フィーナ中尉はイーグル軍曹を肼胝殴りにしながら怒り続ける。

「貴様など・・・貴様など・・・貴様など・・・オカマにしてやる！！」

行き成りナイフを抜くフィーナ中尉に私達は慌てて止めに入った。

「そ、それはやり過ぎです！！」

「お姉様、それだけは止めて下さい！！」

私とレオンの2掛りで止めるが尚も暴れるフィーナ中尉。

「ええい離せ！！こんな奴は女の敵所か人間の敵だ！！いっそのことスッパリと切った方が良いんだ！！」

まぁ・・・一理あるのはあるのだが男として大事な所を切られる所なんて見たくない。

「・・・フィン」

テツヤ殿がフィーナ中尉の愛称を呼んだ。

「そう尖るな。それより何時に行けば良いんだ？」

「き、今日の・・・あの、ゆ、夕方に・・・・・」

「分かった。そいつは放っておけ。そんな奴の血で汚れたくないだろ？」

「・・・分かりました」

ナイフを仕舞いフィーナ中尉はイーグル軍曹から離れようとしたが・・・一発・・・を殴り離れた。

言うまでもなくイーグル軍曹は悶絶したが誰も気にしない。

自業自得だ。

「相変わらずだな。貴様は」

イーグル軍曹を呆れた眼差しで見るのはガルムだった。

「来たか。ガルム」

「はっ。ただいま帰りました。我が主」

ガルムは肩膝を着いて一礼した。

背中には持って来れる物がある。

「それか？」

「はい。写真もあります」

首に提げていたカメラをテツヤ殿に渡し背中に結んでいた物も地面に降ろす。

「どれどれ・・・こいつは」

テツヤ殿は地面に降ろされた物の１つを手に取る。

あれは・・・・・・・・・・

「ライフルですか？」

テツヤ殿が持っているのはライフルだ。

マガジンは上に装着されており円形型という珍しい物だ。

「それは確か・・・・・・・・」

「る、“ルイスＭＫ？”です・・・・ぐああう・・・・・・・」

大事な部分を抑えながらイーグル軍曹がライフルの名前を口にした。

「ルイス？人の名前ですか？」

「あ、あぁ・・・お、俺の国の・・・アイザックＮ．ルイス大佐が・・・・サミュエル・マクリーンの設計を元に開発したんだ」

しかし、当の自国――アメリカは採用せず軍を辞めてからベルギーという小国に売り込んだ末に採用されたらしい。

更にこれを開発する際に契約したイギリスもまた採用したと言う。

この鍋の蓋のような弾倉が特徴的だが、放熱装置と発射機構が脆弱だった為に故障が多かったという。

「テツヤ殿の国も採用したのですか？」

「正確にはこれを作る契約を結んだ」

それで模倣品を作ったらしく2人乗りなどの飛行機に使われたらしい。

「だが、こいつはイギリス製だ。模倣品じゃない」

という事は純正品を載せていたという事か。

「他にはあるか？」

「後はスコープがあります」

今度はスコープか。

テツヤ殿が持ったスコープはガラスを貫く形で装着されていたから、恐らくそのまま持って来たのだろう。

「“眼鏡式照準器”・・・こいつは“一式戦”に使われていた物だな」

眼鏡式照準器？

一式戦？

「というと“隼”ですか」

ミーシャ大尉が単語を口にする。

隼？

「あぁ。“加藤隼隊”で有名な隼だ」

加藤隼隊？

「エンジンの音から始まる軍歌で有名ですね」

イーグル軍曹はリズムカルに口ずさむ。

「あの、何の事ですか？」

私達にはサッパリ分からず仕舞いでミーシャ大尉とイーグル軍曹にテツヤ殿の３人だけは通じている。

「テツヤよ。一式戦とは何の事だ？隼とは何の事だ？私達にも説明してくれ」

ゲンハルト様が皆を代表するようにテツヤ殿に質問する。

「一式戦とは俺の国の陸軍が開発した戦闘機だ。そして隼とは愛称だ」

一式戦またの名を隼。

何でもテツヤ殿の国が作った戦闘機はそれに乗る者などが比喩表現として鳥などの名前を付けたらしい。

その他にも一般国民から応募したという。

「こいつは陸軍が開発した戦闘機では１位の生産数を誇る」

出来あがった当初はかなり強かったようだが、時代の流れで少しずつ押されて行ったらしい。

それでも生産され使われ続けた。

理由として比較的安定した性能を誇り信頼性も高い上に新人操縦者にも扱い易かったというのが理由らしい。

そして加藤隼隊とはその隼に乗り戦った“飛行第６４戦隊”の通称だという。

また眼鏡式照準器は飛行機に取り付けられる狙撃用のスコープのような物らしい。

説明を受けて私達はやっと納得した。

「それにしても何でそれがここにあるんですかね？」

「俺が知る訳ないだろ。だが・・・上手く行けば使えなくはないな」

先ずはザンビア平野まで敵を追い出す必要がある。

その上訓練もあるし、どんな状態で修理が可能かなど山のように問題はあるが、それでも使えるなら使うべきだ。

「ガルム。直ぐに写真を焼き回ししろ。それから偵察の報告も纏めろ」

「はっ」

ガルムは一礼するとその場を去って行った。

そしてその日は何事も無く終わりを遂げた。

第百九十二章：愛する男と（前書き）

どうも一ヶ月振りに更新するドラキュラです。

先月、足を骨折してしまいました。（汗）

まぁ回復は順調なのですが、足が片方不自由だと色々と面倒だなと痛感させられました。

まぁ、こんな話はさておいて当初のように毎日更新するようにこれからは頑張りたいと思いますが、他の作品も書かないといけませんし更にどうも最近はブランクに陥る事が多いのでこのような「纏めて更新」が多くなる可能性もある事をご了承ください。

それから大変ぶしつけとも言えますが、キャラの人気ランキングなる物をやりたいと思いまして・・・メールでも感想でも良いので、キャラに一票をしてくれませんか？

他の作者様もこうしたイベントのような物をやって読者の方と距離を縮めようとしているので、私もそれに倣いたいと思いまして・・・・・

何とぞ我儘とも言える私の言葉を聞いて下さい。

では改めまして、本編をどうぞ！！

第百九十二章：愛する男と

私は・・・もう一度、湯に浸かりテツヤが来るのをじっと・・・部屋で待っていた。

服は迷彩服ではなく・・・寝巻姿だ。

色は白で絹製・・・抱かれるのだから別に関係ないのだが、ランドルフの言葉を考えるとできるだけ女らしい服装にしようとした。

き、き、き、今日・・・わ、わた、私は・・・テツヤに抱かれる。

抱いてもらうのだ。

自分から言い出した事だが・・・どうも落ち着かない。

いや、何れは、私も侯爵だから後継ぎを得なくてはならないと思っていた。

だ、だが・・・いざ、となると尻込みしてしまう。

く、くそっ・・・どうすれば良いのだ？

母上がもし生きていれば、と思うがそんな事を思った所でどうにもならない。

コンコン、とドアが叩かれた。

「て、テツヤか？」

声が裏返った気がする。

『俺だ』

ぶっきら棒な声で来た事を告げる相手は・・・・・・・・・

「い、今、開ける・・・・・」

私は震える手を叱咤しながらドアを開けた。

「約束を果たしに来たぞ」

ドアの前にはテツヤが立っていた。

服装は迷彩服ではなく外人部隊の制服を着ている。

その格好が・・・とても、格好良く見えてしまって一瞬だが見惚れてしまった。

「どうした?俺の色男振りに酔ったか?」

茶化すようにテツヤは言ってきて、前なら「どの顔でそんな事を言うんだ」と言った所だが・・・・・・・・・

「そ、そうだ。わ、悪いかっ」

その言葉を肯定するように言い返した。

「別に悪くない。それより何時まで俺を立たせる気だ?」

「は、入れ・・・・・・」

私は慌ててテツヤを部屋に招き入れた。

テツヤは失礼すると断ってから部屋に足を踏み入れ被っていた帽子を脱いだ。

テツヤを見ながら私はソワソワして落ち着けなかった。

何も問題は無いな?

来るまでにちゃんと準備は終えて確認済みだ。

ちゃんと5回も部屋の掃除はした。

こいつは見た目と違って綺麗好きだと言っていたからちゃんと綺麗に・・・それこそ塵一つ無いほど掃除をやった。

掃除の他にも消臭をした。

髪も梳かしたしベッドだってキチンとしてある。

何処も問題ない・・・・・筈だ。

何度確認してもやはり何か見落としていないか?と気になってしょうがない。

「綺麗な部屋だな」

テツヤは部屋を見ながら勝手に椅子へと腰を下ろした。

「・・・・・・・・」

「どうした?座ったらどうだ?」

無言でテツヤを見ていた私だが、座ったらどうだ?と言われ慌ててベッドに腰を下ろす。

ま、不味いっ・・・シーツに皺が出来てしまった・・・・・・

だ、だが、ど、どうせ・・・う、動くんだからも、問題は無い・・・筈だ。

必死に自分を落ち着かせながらテツヤが話し掛けるのを待った。

だが、テツヤは何も言わずに黙っている。

何かを考えているようにも思えるが、そこまでは分からない。

寧ろ私の方が何か言わないといけない気がして話そうとするが話題が見つからない。

ああ・・・どうすれば良いんだ?

「そんなに緊張するなよ。まぁ、初めての相手に緊張するなと言っても無理か」

テツヤは私の様子を楽しんでいる。

「せ、性格が悪いぞ」

「生まれつきだ。しかし、本当に良いのか？相手が俺で」

テツヤは確認するように訊いてくる。

貞操を捧げるというのは女としてとても大事な事だ。

好きな男にそれは捧げたいと思うのが女心・・・・・・・・貴族だろうと女なら好きな男に最初は抱かれたいと思うのは当然と言える。

無論・・・私も・・・・・・・・

「も、勿論だ。わ、私は・・・お前が良いんだ」

初めこそ薄汚い傭兵と思い嫌っていた。

前線指揮官に任命された時は何で私ではない？と強い憤りを感じ本気で殺したいと思った。

だが、今は違う。

この男に抱かれたい。

この男に私の貞操を捧げたい。

一生を捧げても良い。

例え・・・私を選ばなくても構わない。

私以外の女を選んだとしても良い。

私を抱いてくれ。

そうすれば生涯を独身で生きたとしても悔いは無い。

好きな男に抱かれた女として・・・好きな男に一生を捧げた女として生きて行ける。

だから・・・・・・・・・・

「私を抱いてくれ・・・テツヤ」

私は名を呼び椅子に座るテツヤに抱き付いた。

「それじゃ・・・やるか」

テツヤは椅子から腰を上げて私の膝に手をやると抱き上げた。

俗に言う・・・お姫様抱っこという物だ。

まさか、いきなりこれをされるとは思いもしなかったため面食らった。

しかし、テツヤは気にした素振りも見せない。

そして私を抱き上げたテツヤは静かにベッドへと行き私を寝かせて上に伸し掛かる。

夕方だというのに辺りは暗く蝋燭に灯された小さな火だけが頼りだ。

蝋燭の火に照らされたテツヤの黒い瞳は夜よりも暗い――暗黒のような瞳だが吸い込まれる錯覚を覚えてしまう。

私は身を堅くしながら動かずに居る。

「・・・フィン」

テツヤが私の愛称を呼び頬に手を掛けた。

ビクッ、と私は震えた・・・・・・

ゴツゴツした手はまるで石みたいに硬いが温かい。

「て、テツヤ・・・・」

私は奴の名前を呼び上気する頬を撫でられながら眼を閉じ自身の唇を少し前に差し出した。

顔が近付いて来る・・・・・・・

吐息が顔に掛る距離まで近づきそして・・・・・・・

「失礼するぞえ」

窓から声がして私は閉じていた瞳を開けて見る。

声からして想像できるが・・・・出来るなら外れであって欲しいと願わずにはいられない。

だが、そんな願望は見るも無残に粉々に砕かれてしまった。

「何の用だ?メジュリーヌ」

テツヤは私と後・・・もう少しで口付けを交わせるという距離だったが、離れて行き窓から礼儀知らずにも入って来た龍女ーーーメジュリーヌを見た。

「そこの小娘に用があってな」

「私に、だと?」

私に何の用だ?

いや、それ以前にこのタイミングの良さは・・・・・・・・・・

「謀ったな?」

「謀る?何を言うか。妾はそなたの為を思い来たのじゃ」

「私の為だと?」

「そうじゃ。今のそなたは例えるなら台の上に寝かされた食材じゃ」

現に今の状態がそれだと言われた。

「・・・どういう意味だ」

テツヤは私から離れベッドから立ち上がった。

私もまた不承不承ながらも立ち上がりメジュリーヌを睨みながら訊ねる。

「テツヤは女を知り尽くしている。そんな男がそなたのような女を相手に満足できると思うか？」

「・・・・・・・・・」

これには何も言えなかった。

テツヤは話で聞く限り女慣れしている。

実際さき程の手慣れた様子を見る限り本当だ。

そんな男が私のような・・・生娘相手に満足できるのか？と言えば・・・・・・・・・

「生娘など面倒以外の何でもなかろうて」

決め付けるようにメジュリーヌは断言したが私は反論できなかった。

何から何まで一から教えるのだから面倒と言えば面倒だが・・・・・・

「なぜ貴様がそんな事を言う。私とテツヤの問題だ」

そう・・・これは私とテツヤの２人だけの問題だ。

それなのにどうしてこんな女が口を挟んで来る。

「言った筈じゃぞ?妾はテツヤの正妻。テツヤは真に良い男じゃ」

自分から行かなくても女の方から寄って来る、とメジュリーヌは語り私も否定しなかった。

「だからテツヤが何人女を抱こうと気にせん」

ただし、とこの女は区切った。

「テツヤが心地良くならないとなれば話は別じゃ」

正妻として夫が楽しくない事をさせるのは許せないとメジュリーヌは言ってみせた。

「そこで提案じゃ」

提案?

「家に来い。家に行けばミレーネもリーシャも居る。そして妾とそなた・・・皆でテツヤを楽しませようではないか」

それに色々と教えてやるとメジュリーヌは続けた。

「いきなりそれは厳しくないか?」

テツヤがここで口を挟んできた。

「じゃが、テツヤよ。そなたはこの女を抱いて満足か?ただ約束を果たす為だけでは味気が無さ過ぎるじゃろ?」

「だ、だが、さ、最初位は・・・・・・・・」

私はテツヤが言う前に口を挟んだ。

せめて最初位は・・・好きな男と2人だけで・・・・・・・・・

「最初位は?何じゃ二度、三度と抱かれる気じゃったのか?」

メジュリーヌは私の言葉に対して面白そうに質問してくる。

「そ、それは・・・・・・・」

「妾は一度だけでは飽き足らん。何度も何度もテツヤに抱かれて楽しんでおるぞえ?」

「・・・・・・・・」

「まぁ、最初位は好きな男と2人だけで楽しみたい気持ちは解かる。だが、提案を飲む気があるなら来い」

私は考えに考えた末・・・・・・・・・

「分かった。だが、最初は2人だけだ」

「良い良い。そなたもやはり女じゃのう」

「貴様と言いテツヤと言い私を何だと思っている」

同性にまで女として見られていないと分かり腹立たしい。

「根性の塊じゃ。だが、それが最初は役に立つ」

最初は痛いからのう・・・・・・

「そんなに、痛いのか?」

話では相当痛いとは聞いているが、やはりそんなに痛いのか?と訊ねる。

「そりゃ痛いとも。何せ処女膜を突き破られるのじゃからな。特にテツヤの一物は大きいぞ。もう泣き叫びたいほど大きくて痛い」

そ、そんなに大きいのか・・・・・・

「そこら辺の馬の骨ならただ力任せにやる所だが、そこはテツヤじゃ。痛みを和らげる術を知っておるから安心せい」

そして2回目は皆で和らげると言われて私は顔を赤くする。

「可愛いのう・・・その顔が褥の中ではどのようになるのか楽しみじゃ」

高笑いをするメジュリーヌに私は無言でテツヤを見た。

テツヤは頭が痛いとばかりに額に手を当てたが・・・何処か楽しんでいるように瞳は細められていた。

「さぁ、それでは参ろうか?」

メジュリーヌは手を差し出して来る。

私はテツヤを見た。

「・・・良いのか?」

確認するようにテツヤは訊いてきてそれに対して私は頷いた。

そしてメジュリーヌと共に家へ行き・・・私は愛する男に貞操を捧げた。

第百九十二章：愛する男と（後書き）

もう一つ、言い忘れました。

これの話の続きは短編集で載せる予定なので宜しければそちらをご覧ください！！

幕間：準備運動

サルバーナ王国の首都ヴァエリエから遠く離れ第一首都であるヴァイガーへと通じる道。

その途中に湖がある。

かつてはヴァイガーから移動する際に喉を潤せるという事から「癒しの湖」と言われていたがそれは先人たちが生きていた話。

今の者達は湖の名さえ知らないし、かつて東に首都があった事を知っている者も知らない。

そのためここはただの湖だ。

その湖を覆うようにして地面に突き刺さる木の杭は先端が尖っており威圧的な雰囲気を出している。

杭の前には湖の水を通し水堀にして攻める者を阻んだ造りだ。

ただし、一ヶ所だけ跳ね橋がある。

跳ね橋とは城門によくある可動橋の事だ。

城門防備ならびに治安維持のため橋を上げ下ろしする事で通行を制限する事が目的である。

木の橋には城壁に取り付けられたロープが釘で打ち止めされており、内側から橋を上げるという典型的な作りだった。

方角はサルバーナ王国の現首都ヴァエリエで城門の左右には見張り台が設置されている。

ヴァイガーへ行く方角には見張り台が４つ設置されており堀もヴァエリエの方角に比べて深い上に広く掘られていた。

砦の中には小屋がある。

ただし、２通りだ。

１つはワイバーンが眠る屋根だけが設置された小屋。

もう１つは乗り手達が寝起きする為の小屋だ。

乗り手達が寝起きする小屋は大きく皆が一緒に眠れる大きさとなっている。

しかし、小屋ではない――何か乗り物のような残骸が雪を被っているのが見えた。

縦に伸ばされた板は雪が重しとなっているのか、前方に些か屈んでいるが誰も雪を退かそうとはしないし片付けようともしない。

一体これは何なのか？

分からない。

その残骸の隣に建てられた小屋の中では会議が開かれていた。

「依頼人から連絡が先ほど入った」

テーブルを囲むのは全員で１２人。

服装は全員が黒い鎧を纏っている。

ワイバーンの鱗で作られた鎧であり、ワイバーン乗りの証でもある。

誰もが厳つい顔付きで歴戦の勇士であると一目で判るだけの貫禄が具わっていた。

「待たせたね」

ドアが開けられて声がした。

全員がドアの方向へ眼をやる。

ドアを開けて入って来たのは女だ。

年齢は２０代前半。

金色の髪は腰まで伸びているが櫛で梳かしていないから艶は無く粗い。

肌もまた雪のように白いのだが手入れを怠っているのかガサガサだ。

しかし、女は気にしていない様子でテーブルに向って歩く。

服装は軽装で全て黒一色に統一されているが逆に髪と瞳の色さらに身体のメリハリが強調されていた。

「団長、それで雇い主は何と？」

１２人を代表して一人の男が女ー一ー団長に訊ねた。

「待機しろだと」

女はペッと唾を地面に吐きながら答えた。

明らかに気に入らない様子だ。

テーブルを囲んでいた者たちも怒り一色だった。

「待機しろですと？冗談じゃない。団長。今から敵を倒しに行きましょう」

最初に質問した男が血気盛んな言葉を放つと残りの者も同調するように言い始める。

「そうですよ。援軍が来るまで時間が掛ります。その間に手柄を立てましょう」

「援軍が来たら俺たちの出番が減ります。それにあいつ等はここを乗っ取る気ですよ」

男達は考えていた事を出し切るように喋り続ける。

女はそれに対して無言で耳を傾け続けた。

彼等ー一ー部下達が言っている事はよく解かる。

自分だって同じ思いなのだから。

自分達を雇った男はここ前線基地を作れと命令した。

こんな仕事は仕事外だと突っ撥ねる事も出来たが、それをすれば契約は破棄となりお払い箱となる。

それは避けたいため仕方無くここを建てた訳だが・・・・・・・・・・・・

それから愚痴を零しながらも前線基地を建てそれを伝えに一時首都へと戻った。

首都では雇い主と貴族たちが何やら話し込んでいたが、自分を見るなり蜘蛛の子が散るように居なくなってしまった。

まるで自分には聞かれたくない――自分は仲間外れと言わんばかりの様子に腹が立ちながらも建てた事を伝える。

すると雇い主は「そうか」とだけ述べた。

労いの言葉が掛けられないのはもう慣れている。

幾ら戦果を挙げようと褒められた事も無い。

金で雇い雇われた兵。

それだけの関係。

そのためこんな態度にはもう慣れているが、この時だけははせめて労いの言葉位は掛けて欲しいと思わずにはいられなかった。

しかし、それを言う前に雇い主は次なる命令を下した。

『前線基地で待機していろ』

これには意見を申し出た。

自分達はワイバーン乗りだ。

数多の戦場を駆け巡り戦果を挙げて来た兵どもの集まりであるワイバーン乗り。

それなのに援軍が来るまで待機していろ？

冗談じゃない。

向こうには満足な対抗手段が無いではないか。

あったとしても偵察くらいしか出来ない天馬騎士団だ。

天馬騎士団など恐れずに足らず。

援軍など必要ないと断言したが、雇い主は首を縦には振らず「嫌なら契約は破棄する」と切り札を出してきた。

自分達を黙らせる唯一の手段だ。

それに対して自分は何も言えず・・・甘んじて受け入れるしか出来

なかった。

そして戻って来て部下に伝えた訳だが・・・・・・・・・

ここに戻ると契約など関係ないと思う。

向こうは自分達では戦果を挙げられないと踏んでいるようだが、逆に戦果を挙げれば契約は続行だし報酬も上乗せされる。

何より自分達が汗水垂らして仕事外だと愚痴を零しながら建てたこの砦――前線基地を我が物のように奪う気だという考えが根底にはあった。

いぜん参加した戦の時、自分達が割り当てられた砦を援軍と称してきた者共が「今日から我々が使う。お前等は出て行け」と言い追い出された経験がある。

今回もそうなのでは？と思うのも無理は無い。

いや、有り得なくはない。

自分達は傭兵だ。

向こうは正規軍。

どちらが格上か？というのなら正規軍ではある。

その正規軍が援軍として来るのだから追い出されるまたは我が物ように使われるのは眼に見えている。

確かに正規軍の方が格上となるが、実力は自分達の方が遥かに上だ。
優れているという自負がある。
自分達は荒々しいワイバーンを乗り回し空中で手綱を片手だけで操作し槍で戦う事が出来る。
地上戦しか経験した事が無い正規軍にはこんな芸当は出来ない。
それなのに向こうはこちらを傭兵として蔑み、こんな仕事外の事を命令して来る始末だ。
「団長ッ。仲間の仇を討ちましょう。そうじゃないと死んだ奴等に顔向けできませんよ」
「団長。やりましょう」
団長、と何度も言い彼等は女に訴えた。
「あたしも同じ気持ちだよ」
女は静かにハッキリと彼等の意見を受け止めた。
「あたしらは傭兵だが正規軍より強い。それなのにあいつ等はあたしらにこんな大工の真似事をさせているんだ」
頭に来る気持ちは解かる。
「だが、仕事は仕事だよ」

これを言われて男達は何も言えなかった。

「ただし・・・あいつ等が来る頃合いを見計らって行けば問題ないね」

奴等がここへ到着する頃に自分達も帰る。

手には・・・敵将の首を山ほど抱えて。

「そうすればあいつ等の鼻を明かせる。そうすればあたしらの未来は明るい」

確かに、と皆は頷く。

「しかし、まだ奴等が来るには時間がある。何にもせずに居るのは辛いね。明日にでも運動気分で行ってみるかい？」

向こうはここ最近攻撃をして来ないから呆けているだろう。

そこへ自分達が来れば慌てふためく筈だ。

こちらとしては準備運動にちょうど良い。

『勿論です』

皆は女の言葉に声を揃えて同意した。

「よし。それじゃ今日はもう寝るよ。明朝、奴等に朝飯を食わせてやるんだ」

『おぉ！！』

女の言葉に男達は雄叫びを上げて頷いた。

第百九十三章：敵を串刺しに

私は嫌な臭い－－－煙草の臭いで目を覚ました。

「ん・・・・・・・・」

起き上ろうとするとズキッ・・・下半身に鈍い痛みが走った。

そうだ・・・忘れていた。

ここはテツヤの家にある寝室だ。

私は昨夜テツヤに貞操を捧げたんだ・・・リーザ中尉と一緒に・・・・・・

最初は約束通りテツヤと2人だけ。

残りの3人は一先ず・・・寝室から退場してもらった。

リーザ中尉はかなり激怒していたが。

テツヤは塔の中でしようとした事を先ずはしてくれた。

唇を重ね合わせる。

テツヤの唇は石か何かで出来ているのか?と錯覚するほど硬かった。

しかし、その硬さが心地よく・・・・私は直ぐに酔ってしまった。

それをテツヤは見て「まだ早い」と言い、更に唇を重ねたのだ・・・・今度は舌も入れて来て。

最初は驚いて思わず噛んでしまったが・・・テツヤは血を私の方へ入れて更に酔わせた。

舌もまた硬かったが・・・足と足の間にぶら下がる一物の方が硬かった。

おまけに大きかったし・・・・・・・・・・・・

あれで貫かれた時は・・・痛くて泣いてしまった。

あんなに痛い物とは思いもしなかったし初めての経験で・・・もう大粒の涙を零してしまったのは記憶に新しい。

あれだけ泣いたのは久し振りだ。

だが、そんな私一一泣く姿を見てテツヤは笑いながらこう言った。

『言っただろ?ベッドの中でしか女は泣かせないと』

確かにそんな事を言った気がする。

だからと言ってそれを実践させなくても良いではないか。

まぁ・・・痛かったのは最初だけで後は・・・気持ち良かったが。

私を抱いた後はリーザ中尉が・・・抱かれた。

リーザ中尉もまた私と同じように泣いたが直ぐに私と同じく酔った。

その間、私はミレーネ様とメジュリーヌに・・・弄ばれ・・・いや

いや、色々と教えられて時間を過ごした。

色々とは・・・訊かないでくれ。

そしてその後は・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・ッ」

思い出すだけでも恥ずかしい。

顔を真っ赤にさせる私に・・・・・・

「何を赤くしているんだ？」

テツヤが煙草を吸いながら訊ねてくる。

椅子に座り足を組み煙草を吸うテツヤは迷彩服を着込んでいた。

ふと隣を見ればリーザ中尉が寝ている。

スヤスヤと寝息を立てるリーザ中尉。

昨夜は激しかったからな・・・だが、ミレーネ様とメジュリーヌの

姿は無い。

私とリーザ中尉以上に激しかった筈なのに何処へ行ったのだ？

「2人はどうしたんだ？」

未だに下半身から来る鈍い痛みに耐えながら私は訊ねた。

「とっくに起きて朝飯を作っている最中だ」

2人と同時テツヤも起きて準備をしていたらしい。

私とリーザ中尉だけが寝ていた、という訳か。

しかし、それは仕方のない事だろう。

あ、あんな・・・は、激しい夜だったのだから・・・・最初だってもう疲れたのに、それから・・・・・

「その様子では無理だ。お前等は休め」

動けないだろ？と言われて私は腰が動かない事に初めて気付いた。

「まぁ、敵は今日あたり来るかもしれんが我慢しろ」

「な、なぜ分かる」

腰が動かない事に憤りを覚えながら私は理由を訊ねた。

「メジュリーヌが言ったんだよ」

ワイバーンの雄叫びが聞こえた、と・・・・・・・・・・

ドラゴンであるため我々以上に五感が優れている。

そのため砦ーーー前線基地の様子も聞こえたらしい。

「そ、そんな時に休んでなど・・・・・」

「無理を通して怪我されたくない」

テツヤはぶっきら棒に言うと煙草を揉み消した。

「俺は朝飯を食ってメジュリーヌと出る」

じゃあな、と言ってテツヤは部屋を出て行ってしまった。

敵が来るかもしれないのに休んでなどおれん、と腰を上げようとするが動かない。

ああ・・・くそ!!

何でこんなになるまで抱いたんだ!!

去ってしまったテツヤに私は憤りを覚えずにはいられなかった。

ーーーーーーーーー

―――――――――――――――――――――――――――――――

部屋――寝室から出て来たテツヤを見て妾は椅子から立ち上がった。

「行くか？」

妾が問えばテツヤは頷いた。

「あの２人は私に任せて寂しがり屋さんは頑張って来て」

ミレーネが朝食の準備を中断してドアに立つテツヤに近付き唇に自身の唇を重ね合わせる。

３人で取り決めた内容にこれもある。

行く時と帰る時は互いに口付けを交わし合う事。

何故こんな事をするのか？

テツヤの世界では夫婦は必ずこうすると決まっていると教えられたからじゃ。

妾もミレーネもテツヤの妻じゃからな。

「・・・行って来る」

テツヤはミレーネの唇から離れて銀糸の髪を撫でてから妾を伴い家を出た。

「さぁて・・・メジュリーヌ。敵は何人だ？」

テツヤはブーニー・ハットを被り妾に敵の人数を訊ねてきた。

「・・・５０匹じゃ」

妾は眼を閉じ風に数を訊ねて返ってきた数を口にする。

ワイバーンには出来ない事を妾は出来る。

例えばこうやって人型になれる事がある。

そして風などと交信も出来る事じゃ。

ワイバーンたちは妾のように知性という物がまるで無い。

故に妾のように人型になれない。

人語は理解できるが覚えるのには時間が掛る。

それにこんな芸当も出来ない。

まったく仮にも妾等の血を引き継いでいる筈なのに・・・情けない。

しかも、その内の一匹は妾の愛する殿方ーーテツヤを連れ去った女の相棒。

1角の生き残りじゃ。

奴が来るのかどうかは知らんが・・・少々熱めの灸を据えるとしよう。

妾の愛しい殿方に手を出したのじゃ。

そのうえ自分達は最強と言わんばかりの態度も気に食わん。

上には上が・・・格の違いという物を押してやる。

そんな事を考えながら妾とテツヤは城門の上に登った。

城門の上では既に迎撃準備は出来ておりその中にはランドルフも居る。

テツヤと共にこの地へと来た青年で体格は情けないの一言に尽きるが人間性は申し分ない。

些か女子に対して配慮が足らん所は偶に傷じゃが何れはテツヤのように良い殿方になるじゃろうて。

そんなランドルフの隣にはガリシャと狼人のガルムが居る。

こいつ等は何時も3人（内1匹）で行動する。

遠距離をランドルフが担当し中距離をガリシャが近距離および更に長距離をガルムが担当する。

これが狙撃の理想とテツヤは語っていた。

ランドルフのライフルは単発式だから連射に劣る。

それをカバーするのがガリシャ。

それでも対応できない時にガルムがする。

正に理想の組み合わせじゃ。

「さぁて・・・準備は出来てるか？」

テツヤは無線で誰かに連絡を取った。

『勿論です。少佐』

返って来たのは女。

天馬騎士団に所属する女じゃ。

ワイバーンが来るのは事前に妾が知らせたから迎撃準備は既に整っている。

後は煮て食おうと焼いて食おうと刺身にしようと八つ裂きにしようとこちらの好みで行える。

「のうテツヤよ。あ奴等をどう料理するのじゃ？」

妾はテツヤに寄り掛かり耳元で訊ねた。

「それはお前の好みで良いぜ」

テツヤは珍しく妾の腰に手を回し同じく耳元で囁くように答えてくれた。

「嬉しいのう・・・では、串刺しにしてしまおう」

妾はテツヤの声に微笑を浮かべながら料理する方法を決めた。

あ奴等の肉は不味いが串刺しにして燃やしてしまえば味など無くて

も腹は満ちる。

うむ・・・串刺しの上に焼くのが良い。

「・・・来たぞ」

妾は遠く離れた前方を見て告げた。

ワイバーンと乗り手が空を飛びながら近づいて来るのが見える。

低空飛行とは愚かな・・・・・・

こちらが天馬以外は空中戦を行えないと思っているからじゃろうが甘いぞえ?

妾が居るし天馬には天馬の戦い方がある。

それを知らないのか或いは侮っているのかは知らんが・・・死んで後悔するのだな?

妾は直ぐに起きるであろう事に対して笑いが止まらなかった。

第百九十四章：初めての飛行

雪が少しだけ降る朝・・・私、ガリシャ、ガルムは城門の上にある城壁から膝を着いて狙いを定めていた。

今回は特別誰かを狙えとは言われていないから3人（内1匹）で手当たり次第に狙う事になった。

城壁にはブローニングM2重機関銃が配備されている。

中にはスコープを搭載した狙撃用の物もある。

・・・これには撃たれたくない銃の上位にブローニングはランクインしている。

ショットガンで撃たれたら身体が蜂の巣になる。

あれ以上に酷い死に方は無いだろうと思っていたが・・・上には上が居るというものだ。

こちら――ブローニングM2重機関銃で撃たれたら身体が真っ二つに“折れる”のだ。

引き裂くのではなく折れる。

近距離で撃たれようものなら・・・想像するだけで身の毛もよだつ。

私は気を引き締める事で想像しそうになった脳を叱咤した。

テツヤ殿はメジュリーヌさんと共に真正面に立ち前を見ている。

「・・・来たぞ」

メジュリーヌさんはポツリと言った。

ＧＲＡＡ！！

ドラゴンより些か甲高い雄叫びを上げてワイバーンが低空飛行で来た。

数は凡そ５０匹程度。

少ない気もするが、彼等から見れば私達の相手にはちょうど良いと言ったところか？

それともまだ砦－－－前線基地は建設の途中だから少ないのか？

どちらかは分からない。

今はそれを敢えて考えないようにしよう。

奴等は低空飛行で飛んでくる。

低空飛行と言っても私達から見れば高い位置だ。

しかし、腹は狙えない。

この前の事もあって警戒しているのか、低空飛行で飛びながらも腹を狙われないようにしている。

だが・・・乗り手は狙える。

それにその方がこちらにとっては都合が良い。

「よし・・・撃て！！」

テツヤ殿はＡＫＭアサルトライフルをフルオートで撃ち、それを合図に我々もまた射撃を開始した。

ワイバーンは銃弾の嵐を物ともせず突っ込んで来る。

そして飛びながらブレスを吐いてきた。

城全体に魔法防御を施してあるため意味は無いように思えるが、私達の攻撃を一時的にだが怯ませる効果はある。

私はモーゼルのボルトを動かし空薬莢を排出しながら些か残念に思った。

一気に来てくれたら一網打尽に出来るからだ。

フォース・リーコン、コンドル軍団、ワイバーン・・・この３つは厄介だ。

その内の１つを一気に片付けられたら良かったが、現実はそういかないらしい。

私は一人の乗り手に狙いを定めモーゼルの引き金を引いた。

弾は乗り手の肩を掠めたが、大して意味をなさない。

やはりブレスなどを吐こうとした瞬間に比べると狙いが定まらない気がする。

ガリシャの方も同じだったが、ガルムの方はＰＫＭを撃っては数で勝負だから私達に比べればそうでもない。

ワイバーンは私達の攻撃に怯んだ様子は見せない。

それ所か旋回した上に急降下してブレスを吐いて来るという強さを見せつけている。

・・・まだだ。

後もう少しだ。

もっと近付け・・・・・・・

今の距離ではまだ届かない。

いや、届くには届くが確実に仕留めるにはもっと近付いてもらわないといけない。

私達は囮だ。

今日の主役は別に居る。

だが、まだ出番ではない。

ワイバーンが近づいて来なくてはならない。
もっと近付いてくれ。
私の願いが届いたのか彼等は更に加速して突っ込んできた。
「・・・掛った」
テツヤ殿はニヤリと口端を上げて嗤った。
「ぎゃあ!!」
一人のワイバーンに乗った乗り手がワイバーン諸とも槍で串刺しにされ爆発した。
その下を白い翼が過ぎ去る。
「て、天馬騎士がワイバーンを殺しただと?!」
ワイバーンに乗る乗り手が信じられないと叫んだ。
その者も直ぐに槍で貫かれて爆発し・・・肉片と化した。
そう・・・今回の主役は天馬騎士団だ。
彼女達ーーーお姉様達が今回は主役を務める。
メジュリーヌさんの情報でワイバーン達が来る事は昨夜の内に知っていた。

そのため対策は既に練られている。

先ず私達が囮となり奴等を城近くにまで誘き寄せて足止めをする。

私達しか敵は居ないと思う彼等は上空を警戒しない。

天馬はワイバーンに比べて弱い。

ヘリコプターが飛行機に力負けするのと同じだ。

しかし、ヘリにはヘリの強みがあると同時に天馬にも天馬の強みがある。

天馬はワイバーンに比べて飛んでも音がそれほどしないし気配も察し難いという利点がある。

だから偵察や連絡などの任務を任せられるのだ。

他にも・・・奇襲など。

ワイバーンを迎撃する策とは奇襲だ。

私達に奴等を集中させる。

そこを遥か上空から天馬騎士団が槍で彼等を串刺しにする。

槍には爆薬が結ばれており衝撃を与えると爆発する仕組みだ。

高速で上空から襲い掛かり離脱する。

一撃離脱方法だ。

これは天馬騎士団にしか出来ない方法であるが効果は抜群と言えるだろう。

現にワイバーンは上空からの奇襲と私達の攻撃で立ち往生してしまっているのだから。

「ひ、引けー！！ここはひ・・・ぐが！！」

指揮官と思われる人物が退却を言おうとした。

だが、槍でワイバーン諸とも貫かれて爆死した。

指揮官がやられた事で彼等は各々の判断で退却を始めたが・・・・・・・・・

「逃がさねぇぞ。メジュリーヌ」

「おう、待っておったぞ」

メジュリーヌさんはテツヤ殿の言葉に頷くと直ぐにドラゴンの姿となり空中を飛んだ。

敵はドラゴンが居るとは知らなかったので驚くと同時に恐怖した。

ワイバーンより大きなドラゴン。

力、知能どちらもドラゴンの方が上。

数で攻めれば何とかなっただろうが、撃退され更に逃げる途中ではただやられるだけだった。

ドラゴンの姿となったメジュリーヌさんはあっという間にワイバーンに追い付き巨大な翼で一度に数匹を切断し噛み砕いていく。

ワイバーン達はかな切り声に近い雄叫びを上げて逃げようとするが、逃げられずに殲滅されて行く。

メジュリーヌさんの背中にテツヤ殿達はしがみ付きながら背を向ける乗り手を撃ち殺して行く。

その中にはヴィン・ルビーも居たが見事一人を倒した。

ワイバーンを殺され墜落する寸前に槍で突こうとしてきた敵をモスバーグＭ５９０で蜂の巣にしたのだ！！

乗り手とワイバーンは無残にも空中から地面へと落下して行く。

そして堅い地面に叩き付けられ・・・息絶えた。

僅かな時間で敵は一匹残らず殲滅された。

敵を全滅させたのだから大勝利と言えるだろう。

我々は大勝利に銃弾を空に向けて撃ち勝利の余韻に暫し浸った。

― ― ― ―

―

俺は城壁に取り付けられたブローニングＭ２重機関銃の銃手に就いていた。

俺の就いているブローニングＭ２重機関銃は対空用に背の高い三脚架が装着されている。

こいつを撃つのは初めてだ。

だが、俺のモスバーグＭ５９０では長距離は出来ないためこいつを撃つ事になった。

不思議と緊張感は無い。

ランドルフ――リンクス達が傍に居て城の中だからだろう。

チラリと上官であるテツヤを見る。

隣には絶世の美女という言葉が相応しい女――メジュリーヌが居る。

何者なのかは知らない。

ドラゴンだと聞いたが、ドラゴンなんて大昔に絶滅したと考えている俺には信じがたい。

にしても・・・あの顔と性格でよくあんな美女を横に侍らせる事が出来るなと思うのは俺だけではない筈だ。

しかし、こいつは魅力に溢れている。

男の俺が言うのも可笑しな話だが、もし俺が女で俺が居なければ惚れているだろうな。

特にリンクスたちみたいな歳若い奴等にとっては一種の憧れでもある。

ああいう男になりたいものだと俺は思いながらブローニングM2重機関銃のレシーバーを引いた。

「・・・来たぞ」

メジュリーヌが誰に言う訳でもなく独白する。

それから直ぐに甲高い雄叫びが聞こえてきた・・・・・・・・・・

俺はシッカリと後ろにある握り手を掴んで足を城壁に掛けた。

「撃て!!」

テツヤがAKMアサルトライフルを射撃するのを合図に俺達は一斉射撃した。

ブローニングM2重機関銃の反動はキツイが三脚と銃の重さで上手い具合にカバーできる。

俺のブローニングM2重機関銃にはスコープが搭載されているため狙いがし易い。

だからと言って簡単には当たらないが。

ワイバーンの一匹が俺の居る場所にブレスを吐いた。
だが、防御魔法で問題なかったが・・・・・・・・
「小便がチビリそうだっただろうが！！」
怖すぎて小便がチビリそうになった俺は旋回するワイバーンに向かってブローニングを撃ち続ける。
「この野郎・・・チョロチョロと飛びやがって。絶対に撃ち落としてやる」
あいつを俺は必ず仕留めると心に誓いながらブローニングM2重機関銃を撃ち続ける。
しかし、熱くなり過ぎるなと言い聞かせた。
俺らは囮だ。
今回の主役は別。
まぁ・・・未だに主役を担った事が無いのが現実だが。
何て事を考えていると・・・・・・・・
『ぎゃあ！！』
ワイバーンに乗っている者一一一乗り手が悲鳴を上げて爆発し肉片と化した

その下を飛行するのは白い翼を生やした馬ー一一天馬。

今回の主役は天馬騎士団。

天馬はワイバーンに比べれば力負けする。

だが、大人しいし音も静かだから奇襲が出来る。

ワイバーンの奇襲に比べれば天馬の奇襲は静かに出来る所が怖い所だ。

そしてテツヤはその利点を活かして天馬により一撃離脱戦法を取った。

俺たちがあいつ等を釘付けにしてその上空から爆薬を仕込んだ槍で上空から串刺しにする。

それがいま始まった。

奴等は迎撃しようとするが、俺達がそれをさせないと攻撃をして大した反撃もできずやられ続けて行く。

その内、退却を始めた。

「メジュリーヌ」

テツヤが名を呼ぶと彼女は・・・・・・・・

「嘘だろ・・・・・」

ドラゴンになった。

ワイバーンより遥かに大きな体格と翼を誇るドラゴンに・・・・・・・

まさかこの眼でドラゴンを拝めるとは思いもしなかった。

他の奴等も同じだ。

「おい、追撃するぞ。来い」

テツヤは言うと直ぐにメジュリーヌの背に飛び乗った。

「俺も行くぞ!!」

俺は急いでモスバーグＭ５９０を持つと走ってメジュリーヌの背中に飛び乗った。

他の奴等も続く。

そして追撃を開始した。

「こ、これが空を飛ぶってやつか?!」

メジュリーヌは遥か遠くへと飛んでいるワイバーンに追い付こうと速度を上げている。

振り落とされないようにシッカリと掴むが・・・心地よい。

これが空を飛ぶというやつか。

初めて空を飛んだ感覚ってのはこんな物かもしれないな、と考えている間に追い付いた。

メジュリーヌは翼でワイバーンを数匹ほどまとめて引き裂き巨大な顎で噛み砕く。

しかし、まだ居る。

そいつ等は反撃してきた。

その中には俺に小便をチビラせそうにした野郎も居た。

てめぇは俺が倒す!!

奴はワイバーンをメジュリーヌにやられ落ちようとしていたが、俺に槍を向けて来た。

「生憎と男と心中なんて・・・御免だぜ!!」

モスバーグＭ５９０の引き金を至近距離で引いた。

右手だけで撃ったため反動が右手に来て痛いが・・・それ所ではなかった。

弾はバック・ショットの“００Ｂ一一ダブルオーバック”だ。

鹿などの中型動物用の散弾で軍用にも使われている。

こいつを至近距離で喰らった相手は見るも無残な姿となり地面へと落ちて行く・・・・・・

あんな状態を至近距離で見て更に仕留めたという事もあり吐き気が込み上げて来た。

おまけに右手が痛いのなんの・・・・・・・・

「・・・・ぶっえあぁっ」

我慢できず空から俺は吐いた。

『妾の身体で吐くな!!』

メジュリーヌは怒鳴るが・・・あんな物を見て吐くなと言われても出来る訳ない。

敵は全滅させたが・・・俺はその後メジュリーヌにこっ酷く叱られたのは言うまでもない。

第百九十五章：死の臭いと意志

テツヤ殿達を乗せたメジュリーヌ殿は演習場へと降り立った。

下の方ではワイバーンの肉片や乗り手の死体を集め埋葬場所へと運んで行く様子が見えた。

敵ではあるが彼等もまた自分達の思想ー一仕事上私達と敵対しただけだ。

そして彼等は倒された。

敵だから死体はそのままという考えも根底にはあるが・・・死んだ者に鞭を打つ真似は出来ない。

例外は居るが少なくとも彼等は埋葬すべきだ。

そうテツヤ殿も考えているのだろう。

エドリアス大尉が先導して埋葬場所へと行くのだから。

私達は帰って来たテツヤ殿達と会う為すぐにその後を追い掛けて演習場へと赴く。

演習場には既にゲンハルト様達が来ておりテツヤ殿達を迎えている。

地面に足を着けたメジュリーヌ殿の背から直ぐにテツヤ殿達は降りたが一人だけは違っている。

メジュリーヌ殿に首根っこを銜えられて乱暴に地面へ叩き降ろされたのだ。

「痛っ」

尻もちを着きながら彼――ヴィン・ルビーは尻を撫でる。

「貴様よくも妾の背に乗りながら吐いたな？」

人間姿になったメジュリーヌ殿はヴィン・ルビーを睨み据えた。

「あ、あれは・・・・・」

「言い訳は無用じゃ。貴様の吐いた臭いが付くではないか！！」

「す、すいません」

彼は迫力あるメジュリーヌ殿に怯えながら謝罪の言葉を口にする。

「メジュリーヌ。そう怒るな。こいつだって好きで吐いた訳じゃない」

テツヤ殿がヴィン・ルビーを弁護するように言った。

「あの、戻したんですか？」

私は何となく判ったが敢えて訊ねた。

「そうじゃ。この小僧、敵を討ち果たした所までは良かったんじゃ」

問題はそこからしい。

「こ奴と来たらあろう事か妾の背に乗ったまま吐いたのじゃ！！」

女に吐いたと同じだとメジュリーヌ殿は憤った口調で叫ぶ。

それをゲンハルト様達は何と言えば良いか分からずに無言で聞く。

いや、それ以前にいま下手に何か言えばメジュリーヌ殿の怒りの矛先は自分達に向く。

だから敢えて口を閉じているのだろう。

「は、初めてそ、空を飛んでそれで・・・・・・・・・」

彼は初めて空を飛んだ為・・・気持ち悪くなったと言う。

それは当たり前と言えば当たり前だ。

しかも、あんなに速く飛んだのだから身体に掛る負担は私の想像以上だろう。

それに耐えて敵を一人倒したのだから寧ろ僥倖物だ。

まぁ、ここに来て人知れず吐いたらもっと良かっただろうが。

「初っ端からあんな速度で飛んだんだ。吐きたくもなるな」

テツヤ殿は彼の言い分は尤もだと頷くがメジュリーヌ殿に至っては怒り心頭で未だに彼を突き刺すように睨み据えているのが対称的だ。

「あ、あんたはあれ位の事は慣れているのか？」

彼は少しでも怒りの矛先から逃れたいのかテツヤ殿を見ながら質問した。

「あぁ。相棒が空軍出身でな。色々と仕事柄乗せてもらった事もある」

かなり危ない操縦もしたらしく・・・機体を壊す手前まであったという。

「だが俺の方が機体を壊す事に関しては上だった」

頑丈を取り柄とする車でさえ渡されたその日の内にお釈迦にしたというから酷い話だ。

「後で友人から怒られたぜ」

何で物を大切に扱わないんだ！！

言い分は解かるが、テツヤ殿の受ける仕事だ。

かなり危険な仕事だったのだろう。

それを考えるとその日の内に破壊しても仕方がないかもと私は関係ない事を思った。

しかし、その物を直ぐに壊す事から”テツヤ・デストロイヤー”なんて有り難くも無い渾名を頂戴したのだが。

「あんたって見かけに寄らずとんでもない渾名を持っているんだな」

「まぁな。で、話は変わるがどうだった？初めて空を飛んだ感想は」

「正直な話・・・気持ち良かった。あれが空を飛ぶというものかと思った」

メジュリーヌ殿の背中に乗って初めて空を飛んだ時・・・空気が刃のように頬に当たったらしい。

だが、それが心地よく周りも一望できる事が彼には心底良かったようだ。

そしてワイバーンや天馬に乗る者が羨ましいと彼は続ける。

「俺もあいつ等みたいに空で戦いたいと思ったんだ。こんな事を考えるのはいけないか？」

「いいや。ただ、空戦は四方八方から敵に狙われていると思わなくてはならない」

陸も似たようなものだが、空戦だと上から下からと両方から襲われる。

それを考えれば四方八方から狙われると考えるのも道理だ。

「それに色々と機体のメンテナンスとか気候とかも考えなくてはならないから面倒だ」

そこら辺は相棒に訊けば詳しく教えられるのだが、とテツヤ殿は言いながら彼に煙草を勧めた。

「それに人を最初に殺した時は誰だって吐く」

そうか・・・彼は初めて人を殺したんだと私は今更になって気付いた。

空中を飛んで更に敵を初めて仕留めたんだ・・・吐きたくなるのも頷ける。

「ましてショットガンを近距離で撃って相手を殺したんだ。嫌でも間近で見たんだろ？」

「あぁ。ほんの一瞬の出来事だったが、な。あんたの時もそうだったのか？」

彼は火を点けられた煙草を吸いながらテツヤ殿はどうなのかと訊ねた。

「俺の場合はナイフで滅多刺しだ。ナイフの方が人を殺した感覚は強いが」

その時、テツヤ殿もまた彼や私と同じように吐いたらしい。

「・・・まだ戦うか？」

テツヤ殿は自分の煙草に火を点けながら彼に対して戦う意思はあるのか訊ねる。

私も初めて人を仕留めた時・・・一瞬だがもう嫌だと思った。

だが、それではこの戦いに勝てないと思ったし何より逃げたくなかったのだ。

彼はどうだろうか？

私達は彼の言葉を待った。

「・・・勿論だ。あいつだって・・・殺されると何処かで分かっていた筈だ」

自分達は戦う身。

まして戦時中なのだからそれ位は誰だって持っている筈と彼は言い続ける。

確かにそれは当たっていると私は思った。

私だって・・・いつ死ぬか分からない。

どんな殺され方をするのかも、だ。

相手だってそう思っているだろう。

「その通りだ。だが、覚えておけ」

人間は何時か必ず死ぬ。

何処で、何時、どんな風にかは誰にも分からない。

「それでも自分は必ず生きるという強い意志を持て」

自分は絶対に死なない・・・必ず敵を殺す。

そういう強い意志を持たなくては・・・直ぐに死んでしまうとテツヤ殿は言った。

「俺らみたいな職に就いていると“死の臭い”に敏感になる」

死の臭い？

「ある仕事の時だ。戦友はこう言っていた」

俺みたいな者は戦場で死ぬのがお似合いだ・・・・・・・

「その数日後、敵にＲＰＧを陣に撃ち込まれて死んだ」

他にも色々とあるらしいが・・・誰にも当て嵌まる事がある。

「死を口癖のように言っている奴等だ」

そういう者達は不思議と死んでしまうらしい。

「逆に絶対に生き残ると言っている奴ほど不思議と生き残る」

だから、自分は絶対にという強い意志を保ち戦い続けろとテツヤ殿は煙草に火を点けながら断言した。

「話はそれだけだ。後は休憩でもしろ」

疲れただろ?と訊くテツヤ殿に彼は頷いた。

「そうする。それから・・・ありがとよ。少佐殿。少し身が軽くなったぜ」

ヴィン・ルビーはそう言って煙草を吸いながら去って行った。

「死の臭い、か・・・そなたに関しては安心じゃな」

メジュリーヌ殿はテツヤ殿にもたれ掛り口ずさんだ。

「妾等が待って居るのじゃ」

可愛い女子を置いて行ったりはせんじゃろ?と問うメジュリーヌ殿にテツヤ殿は頷く。

「当たり前だ」

そう言ってテツヤ殿は煙を吐いた。

その姿を私は見ながら自分もまた同じだと思った。

私にもオリガさんが居る。

オリガさんが居るから死ねない。

それを思うとテツヤ殿が言った言葉は私達全員に告げている気がした。

「午後会議を開く。全員、それまでは休憩でもしていろ」

テツヤ殿はメジュリーヌ殿を連れて戻って行き私達もまた自分達の場所へと戻る事にした。

第百九十六章：素晴らしい同盟国

ワイバーンを全て撃退した事はその日の内に城中に広まった。
皆は「このまま首都を解放するぞ！！」と士気を上げる。
よい傾向だ。

今までは敵の撃退と偵察などだったが、今度は全滅させたのだから喜ぶのも無理はない。
しかし、下手に楽観もしくは敵を侮る恐れもあるためテツヤ殿達は「気を抜くな」とシッカリ釘を刺したのは言うまでもなかった。
そして現在、私達は再び会議を開いていた。

「先ずは敵を全て撃滅した事。これは良かったな」

テツヤ殿の言葉に私達は頷く。

「今度は俺達が行く番だ」

「では・・・・・・・・」

私が言うとテツヤ殿は頷いた。

「そろそろ嫌がらせを始める。もう出来ている頃だ」

向こうは私達が仲間を皆殺しにしたのだから激怒し明日にでも敵討

ちをしに来る。
その前に嫌がらせをして更に神経を逆撫でさせて平常心を無くさせる。
そうすれば容易く・・・とはいかなくても有利に事は運べる筈だ。
「リーシャ。準備は？」
「出来ております。まぁ、余りの臭いに・・・天馬達は嫌がっております」
「まぁ仕方無いと言い聞かせろ」
「そうします。少佐」
リーザ中尉は部下の態度を取っているが・・・明らかに女の顔だった。
前に比べて遥かに女としての感じがする。
それはつまり・・・・・・・・・
『抱かれたんだな』
という事はフィーナ中尉もまたそうなのだが・・・・・・・・
「・・・・・・・」
当の本人は仏頂面で何も話さない。

一体どうしたんだ?

私が気にしても始まらないが、何となく肌に艶があるなとだけ言っておこう。

「テツヤよ。前線基地を我が物にした後の話だが良いか?」

ヴィールング殿がテツヤ殿に質問した。

「何だ?」

テツヤ殿は女神の抱擁に溜まった灰を指で叩き落としながら訊ねる。

「前線基地を取ればワイバーンは恐らく首都へと戻る。そこからどうやって首都を奪回する?」

首都に行く道はここ――東の道を真っ直ぐに進むのが最短距離だ。

だが、敵もそれ位は予想し手は打つ筈だ。

私達のように砦を造り地雷を設置するなど・・・・・・・・・・・・・・・

「下手に戦力を分散は出来ないが正面突破なんて馬鹿な真似はしない」

それはお前も考えているだろ?とテツヤ殿が問えばヴィールング殿は頷いた。

「あぁ。こちらは向こうに比べて数では劣る。ならば、ここは情報

を使うのが手だ」

「偽情報を流す、か？」

「それも考えた。だが、それ以外なら首都まで何処を通れば最短で行けるのか？敵に打撃を与えられるのか？を考えるべきだ」

「ヘリを使えば何処を通ろうが最短で行けなくもないが、ワイバーンなどが居る事を考えると難しい」

「天馬が護衛では些か力不足だな。それに向こうにはライアンナルが居る」

あいつならヘリをまた用意できるかもしれない、とヴィールング殿は言った。

一体何者なのだ？

ライアンナルとは・・・・・・・・・・

「首都までの道のりはまだ遠いな」

「あぁ。だが、そなたは諦めたりせんだろ？」

「あぁ。リカルドを止めると女王に頼まれたからな」

「そうか。所で・・・貴族たちをどうする？」

「あいつ等を生かす必要があるか？」

「無い。少なくとも今の所は、な。ただ奴等を皆殺しにしてしまえば領土が滅茶苦茶になる」

その事も念頭に置いて行動せねばならないとヴィールング殿は言った。

あんな居るだけで害しか振り撒かない連中でも一応は貴族だ。

貴族は王から任命された領土を治めている。

そんな奴等を一気に皆殺しにしたら領土は荒れてしまう恐れがある。

それを考えると何か手を考えなくてはならないな。

「色々と問題はありますね」

私は自分では考えもしなかった事を恥ながら言った。

「それが戦いってもんだ。まぁ、今は・・・今夜の事を決めるぞ」

先ずは目の前の問題を片付けるのが先決だとテツヤ殿は言い会議を続ける。

「リーシャには今夜天馬を率いて前線基地へ行ってもらう」

空から糞尿を撒き散らす。

夜ワイバーンは飛べないからそれほど問題ではない筈だ。

いや、フォース・リーコンやヘリが配置されている事も考えると何

か策を考えておかなくてはならない。

「テツヤ殿。ブラック・ホークを一緒に行かせる事は出来ませんか？」

ブラック・ホークが1機居るだけでも心強い筈だ。

反面で音が煩過ぎる所が偶に傷だが。

「それならメジュリーヌを連れて行く。あいつの方が良い」

ブラック・ホークは降下作戦などの時や援護の時に使用するのが良いとテツヤ殿は言い私の提案を退けた。

いや、提案とは呼べないか。

ただ思い付きで言ったのだから。

「すいません。思い付きで言ってしまいました・・・・・・」

「いや。思い付きが時には鍵となる。中々の意見だったぞ？」

「その通りだ。では、テツヤ。今宵の出陣には天馬騎士団とメジュリーヌ殿で決まりか？」

「そうだな。後は・・・フィーナ中尉。行くか？」

それまで無言だったフィーナ中尉にテツヤ殿は訊ねる。

「はっ・・・行かせて頂きます」

「分かった。後数人ほどお前が選んで連れて行け」

「了解しました。テツヤ少佐」

「よし。では、少し休憩だ」

テツヤ殿は女神の抱擁を灰皿に捨てて休憩を告げた。

休憩時間となるとフィーナ中尉はテツヤ殿を誘い部屋を出て行った。

リーザ中尉も続こうとしたが、プロイセン様に止められて質問を受け始める。

父親として気になるのだろうな・・・・・・・

ヴィールング殿の方は何とも言えない様子でいた。

「どれどれ可愛い弟子がどれくらい変わったのか見に行くか・・・グエッ」

ヴィルヘルム元伯爵は二人の様子を見に行こうと思い足を進めたが、ヴィールング殿が首根っこを掴んで抑えた。

自分より巨体を誇るヴィルヘルム元伯爵をヴィールング殿は苦も無く抑えている事に私達は驚きを隠せない。

「良い歳した大人が他人の色恋沙汰に首を突っ込むな」

ヴィールング殿はまるで子供を叱り付けるような口調でヴィルヘル

ム元伯爵を叱った。

「お、叔父として可愛い姪が気にならないのか？」

首根っこを掴まれながらヴィルヘルム元伯爵は尤もな事を訊ねる。

「気にならないと言えば嘘になる。だが、それはあの二人の問題だ」

フィーナ中尉も良い歳だ。

自分の事くらいは自分で管理できるとヴィールング殿は言ってみせたが・・・・・・・・

「その割には顔が厳ついじゃないか？」

「・・・生まれつきだ」

そう言ってヴィールング殿はヴィルヘルム元伯爵を強制的に抑えた。

「グッ・・・相変わらず捕縛術は上手いな」

「諸国を渡り歩いた事で培ったのだよ」

「ヴィールング殿は諸国を旅してどんな経験を積んだのですか？」

私は気になったので直ぐに訊ねた。

「そうだね・・・情報の大切さと利用価値、勝つためには手段を選ばない、などだね」

「その情報の大切さとは一体どういう事ですか？」

「情報ほど簡単に変わる物はないと私は思っているんだ」

旅をしていると色々な情報が入るらしいが、直ぐにそれは間違いだったり変わったりしたらしい。

「特に戦争では情報と後方支援は絶対的に大事だ」

敵が何処に居るのか、数はどれ位か、装備は何なのか、など細かに調べて報告する必要がある。

そうすれば対策を練り易いからだ。

それはテツヤ殿達から教えられたが改めて教えられて実感する。

「それに後方支援も同じだ。前線を維持するには後方から武器から人材を送らないと維持できないからね」

「その点は旦那の国は失礼な言い方だが疎かだったな」

イーグル軍曹がその言葉に口を挟んだ。

「テツヤの国が？」

「あぁ。後方支援というか兵站科ほど蔑まされた物はないと言っていた」

「そんな事では勝てる戦も勝てなかっただろ？」

「最初こそ快進撃だったが、俺の国の物量作戦であっという間に押された」

「そなたの国と戦ったのか？」

「あぁ。今じゃ同盟国だが、な」

「その口ぶりから察するに何かあるな」

「旦那の国――日本は俺の国――アメリカから見ればアジア圏内において最も良い場所にあるのさ」

日本はアジアという地方に分類されておりアメリカから見れば日本ほどアジアで活動する時において良い場所はないと言う。

「だから同盟を結んだと？」

「そういう見方もある、という事だ」

「なるほど。となればシャインス公国はそれに当たるな」

「先王が手に入れたが公国として独立を認める羽目になった島国か？」

「あぁ。日本がどんな島国かは知らんが、シャインス公国もまた大きな島と小さな島で形成された国だ」

そしてムガリム帝国からこの国を含めた3ヶ国を護る一種の“防波堤”として役立っている・・・というか、そういう場所に位置しているのだ。

「その国とは同盟を結んでいる割には何の音沙汰も無し、か」

「向こうは恐らくこちらの事情を知っている。ただし、向こうから手を出す事は無い」

要請も無いし元々は独立していたのを占領されて再び独立をしたのだから遺恨こそあれ助ける義理は無い。

「素晴らしい同盟国だな」

「テツヤと同じ言葉だ」

イーグル軍曹の言葉にヴィールング殿は自嘲とも苦笑とも取れる笑みを浮かべてみせた。

牢に捕まっていた時、テツヤ殿にこの事を話したら物凄く皮肉を込めて言ったらしい。

「本当の事だからな」

イーグル軍曹はそう言って足をドアへと向けたが・・・・・・・・・・

「あんたも行くんじゃないよ」

「グゲッ！！」

ミーシャ大尉に羽交い締めにされて阻止された。

どうしてこう良い歳した大人が2人してこうも他人の色恋沙汰に首

を突っ込みたいんだか・・・・・・・・・

私は溜め息を吐かずにはいられなかった。

第百九十七章：夜に出撃

テツヤ殿とフィーナ中尉は２０分ほど経ってから戻って来た。

手には写真が握られている・・・・・

「それは？」

私が訊ねるとテツヤ殿は１枚だけ投げて寄こしてきた。

それを受け取り眺める。

両方に翼があり胴は縦長だ。

後ろの方は細めで上と左右には何か小さな物が付いている。

些か丸みを帯びているのが特徴的だ。

前の方は太めでヘリのプロペラより小型の物が付いている。

胴の前に近い所に乗る場所があった。

なるほど。

ここに乗って操縦するのか・・・・・・・・

「そいつが一式戦闘機と呼ばれる隼だ」

テツヤ殿は自分の席に腰を下ろしながら答えた。

「これが隼・・・・・・」

私は改めて写真に映し出された一式戦闘機一一一隼を見た。

これがテツヤ殿の国が開発した戦闘機・・・・・・・

「武装は何処にあるんですか？」

見る限り武装らしき物は見えないが・・・・・・・・・

「プロペラがある場所がエンジンだ」

そこの中に機銃が２つ搭載されておりそれが武装だと言われた。

「他には無いんですか？」

「無い」

「あの、失礼な言い方ですがこの戦闘機って強かったんですか？」

「最初こそ強いが時が過ぎれば弱くなるのは人も物も同じだ」

という事は最初こそ強かったが、時が過ぎて行くに従い弱くなったという事か。

「そいつを開発した設計家はこう言った」

隼を設計した“小山梯”という方は「運用目的を対戦闘機戦闘に絞ることで武装の限定等の軽量化を可能とし低出力エンジンでも一定

の性能を確保する」という思想の元で開発したらしい。

「だから、武装も対戦闘機相手限定だ」

とは言ってもテツヤ殿の国はイーグル軍曹が言った通り最初こそ快進撃をしたが少しずつ物量に押されて行った。

更にアメリカを含めた連合軍は次々と強力な戦闘機などを出してきたという。

そして隼は格闘戦が得意とされているが、相手は一撃離脱戦法を駆使するようになり勝ち目が薄くなったらしい。

これは隼だけではなくテツヤ殿の国である日本は格闘戦――ドッグ・ファイトを旨としていた。

所が連合軍側は一撃離脱戦をどちらかと言えば旨としており、更に近代化していくとそちらが主流になったという。

「だが、格闘戦には強かった。それにこいつは優れた安定射撃が売りだ」

その他にも防弾装備がされており航続距離も陸軍機としてはあった。

それにテツヤ殿が言った通り命中率も高い上に整備もし易いし初心者にも極めて操縦し易い。

これが一式戦闘機の売りだ。

「まぁ、海軍に比べれば航続距離は劣るが、それは思想の違いだ」

「そうですか。それで残りの写真も同じですか？」

「いいや。イーグル、ミーシャ。お前等が先ずは見ろ」

テツヤ殿は2人に写真を渡した。

「えーと・・・疾風、鍾馗（しょうき）ですね」

「こっちは九九式襲撃機と屠龍、四式重爆撃機・・・五式戦までありますよ」

「あれが？随分と豊富だな」

「ですね。しっかし俺の国の飛行機が1機も無いなんて酷いなー」

「あんたの国は世界で嫌われ者だからね」

「姐御の国だって独立運動が起こってるじゃねぇか。それに姐御の国の飛行機だって無いじゃねぇか」

「あぁ。だが、あんた程ではないと思うけど？」

「はっん。民間人まで巻き込んだ皆殺し国家が良く言うね」

「否定しないよ。でも、それはあんたの国も同じ事だよ」

互いに国の言い争いを始め肝心な事である写真についてはまったく話の糸が掴めない。

「あの、何ですか?それは」

聞いた事も無い名前が一杯で分からない上に2人の口喧嘩は益々燃え上がって来たので私は打ち切るように割って入った。

「ぜんぶ俺の国が開発した飛行機ばかりだ」

煙草に火を点けて煙を吐きながらテツヤ殿が答えてくれた。

それを合図に2人もまた口喧嘩を止める。

はぁ・・・もう少し2人して大人になって欲しいと思わずにはいられない。

「疾風、鍾馗、屠龍、九九式襲撃機、五式戦・・・すべて陸軍機だ」

「そうなんですか」

「あぁ。しかし、五式戦まであるとは・・・驚いたぜ」

「その五式戦と九九式襲撃機はどんな飛行機何ですか?」

この2機だけ疾風などという名前が無い。

「九九式襲撃機は地上攻撃を任務とした飛行機だ。五式戦は戦闘機だが、疾風みたいに愛称は無い」

非公式ではあるが「飛燕改」という名前があったらしい。

疾風は四式戦闘機というのが正式名で五式戦と同じく大戦後期に出

て来た。

この疾風は速度・武装・防弾・航続距離・運動性・操縦性・生産性のバランスが取れた傑作機と言われたらしい。

しかし、大戦後期となると様々な物が不足し始め評価が別れると言われる機体だ。

五式戦闘機もまた同じ事だ。

鍾馗は二式単座戦闘機というのが本当の名前らしい。

またこの鍾馗とは厄除けや学業成就などを司る神から名付けられたようだ。

「この鍾馗は隼と違って“重戦”を重要視している」

「重戦とは何ですか？」

「隼は“軽戦”と言って戦闘機を相手にするのが主だ」

しかし、この鍾馗は爆撃機などを邀撃用ーー迎え撃つ事を目的としているし連合軍側の一撃離脱戦法を得意としていた。

だから隼より速度と武装が優先された作りとなっている。

「隼に比べて運動能力が低いし航続距離も短かった」

その他にも離着陸の難しさなど色々と欠点は多かった・・・・・

何よりも軽戦一一一格闘戦で慣れたベテラン・パイロットからは扱い難い代物として見られていたらしく不要とまで言われたらしいが一部では「高速重戦」と高評価されている。

戦争が終わった後で連合軍側がこれをテストした時は「日本の飛行機の中でも最高のインターセプター」と評した。

インターセプターとは邀撃機の事だ。

つまり連合軍から見ればこの飛行機は日本の飛行機の中でも最高の邀撃機という事を意味している。

その他にもこれを高く評価するベテラン・パイロットは居るしこれを扱える事自体が一種のステータス一一一社会的地位だったらしい。

扱い難い物を自在に扱えるとなれば確かに社会的に見ても高評価を受ける。

またこれを設計するのに携わったある技師はこう語った。

『隼は時宜(じぎ)を得て有名になったが最高の傑作だと思っているのは次に設計した鍾馗だ』

この言葉から察するに設計家から見ればこちらの方が優れていると自負しているのだろうな。

私は乗った事も無いから何とも言えないが。

「それから九九式襲撃は地上攻撃機と言いましたが具体的にはどんな事を?」

「砦に爆弾を落としたり機銃で敵を蹴散らしたりする。後は小型舟艇を攻撃したりするなど味方の援護などだな」

これが九九式襲撃機の役割らしい。

運動性能が良い事から戦闘機を撃墜した者も居り更には軍艦までも沈めた兵も居ると言うから驚きだ。

また偵察用に改造された物もあるらしく悪環境でもちゃんと動くし整備もし易い。

そのうえ操縦性も良かった事から練習機として重宝されたという。

「ガルムが持って来たルイスＭＫ?は九九式の物かもしれないな」

この九九式襲撃機は他の飛行機と違い２人乗りだ。

後部席にガルムが持って来たルイスＭＫ?を搭載しているが、本来なら日本で作られた物が搭載されている筈・・・・・・

それなのに純正産の物が搭載されている事を考えると研究用に買った物を取り付けた可能性があるとテツヤ殿は続けて煙を吐く。

「これを使えばワイバーン相手にも何とか出来る」

ただし、これを自在に乗り回すには訓練が必要だ。

仮に持って来てもこれを飛ばすには滑走路が必要だと教えられたからやはりここでは使えない。

そうなると・・・・・・・・・

「何としてもザンビア平野まで敵を追い出さなくてはならないな」

ザンビア平野は人工的に出来た平野だ。

あそこなら飛行機を飛ばせるだけの道はあるし多少の手を加えれば更によく出来る筈だと思う。

その為にも今夜の嫌がらせを頑張らなくてはならない。

そうすれば敵は怒りに我を忘れて襲ってくる筈だ。

「頼むぞ。リーシャ」

テツヤ殿はリーザ中尉を見る。

「勿論ですわ。旦那様」

リーザ中尉はテツヤ殿に対して飛び切りの笑顔を見せて答えた。

最後の方には・・・ハートが込められている気がした。

皆もう分かっているから敢えて何も言わないがガリシャだけは「ランドルフ。最後の方なんだか変じゃない？」と言ってきたが私は敢えて答えないでおいた。

そんな事がありながらも時間は刻々と過ぎて行き・・・夜となった。

その日は雪が降っていない。

月も出ておらず辺りは暗闇に包まれている。

正に絶好の機会だ。

行くのはリーザ中尉が指揮する天馬騎士団。

その護衛ともとい手伝いとして私達も同乗する。

天馬は臭い箱が腹の部分に紐で結ばれた事でかなり嫌がっているがここは我慢してもらおう。

それから後でシッカリと洗ってやろうと私は思った。

一応私も行くのだから手伝わなくては・・・・・・

「では、テツヤ少佐。行って参ります」

リーザ中尉は天馬騎士団が採用した薄緑のベレー帽を被りＡＫＳ－７４Ｕを装備していた。

他の騎士－－－お姉様も一緒の装備をしているが分隊支援火器なども装備している。

「あぁ。行って来い」

『はっ』

私達は敬礼をして天馬に跨り夜空へと飛び上がった。

「ふふふふん。私は天馬に跨る綺麗で格好良い戦乙女～」

私を乗せたお姉様は鼻歌を歌い出した。

「背中には可愛いけど格好良い坊やを乗せて～仕事が終われば一夜の火遊びを・・・・・・・」

「馬鹿な事を言わないで下さい」

私はここで口を挟んだ。

「あら？これが終われば一夜の火遊びをしてくれるんでしょ？」

「何を馬鹿な事を言っているんですか。軍曹じゃあるまいし」

「あんな男と坊やは同格なのかしら？」

「・・・少なくともあんな誰振り構わず手を出すような節操無しじゃありません」

あそこまで落ちたらもはや人ではない。

メジュリーヌさんの言葉を借りるなら「頭の湧いた獣」だ。

そこまでは人として落ちたくないし私にはオリガさんが居るんだ。

それなのにどうして一夜の火遊びなどやる必要がある？

無いではないか。

「王女と夕食を共にした時、言われたんじゃないの？」

貴婦人に対して騎士として奉仕を怠らない事・・・・・・

「確かに・・・言われましたけど・・・・・・・・・・」

「だったら私も貴婦人よ？騎士は女に奉仕するの」

そうでなければただ剣を振り回すだけでしょ？と言われては何も言えない。

「そうですけど・・・・・・・・・」

尚も食い下がる私にお姉様は決定打とも言える言葉を投げ付けて来た。

「オリガさんには許しを得ているわ」

「！！」

お、オリガさんが許した？

「私ばかり夢中になり過ぎて他の女の子を傷付けているから助けてやれ、とね」

後で訊いてみれば？と言われ私は頷くしか出来ない。

まさか・・・いや、オリガさんなら言いそうだが・・・・・・・・・

だが、今は作戦に集中しよう

そうしないといけないのだ。

無理やり私は自分の気持ちを抑え込みお姉様の背中にきつく両手を巻き付けた。

第百九十七章：夜に出撃（後書き）

誤字がありましたので修正しました。

幕間：宣戦布告

「・・・遅いね」

東側――ヴァイガーへ行く道に造られた前線基地の外で一人の女――ワイバーンの傭兵騎士団である「竜騎士団」の団長であるマーズは塔の上に立ち東側を見つめた。

今朝・・・部下達は城を攻撃する為に出て行った。

数は凡そ５０。

少ないようだがワイバーンに乗る彼等から見れば多い方だ。

向こうにはこちらに対して有効手段が何一つ無い。

天馬ごときにこちらは負けない。

逆立ちしても勝てる見込みが無いのだ。

勇んで行ったのに未だに誰ひとりとして戻って来ない・・・・・・

「どういう事かね？」

幾ら何でも遅すぎる。

夜に自分達は活動できない。

それなら夕方に帰って来る筈だ。

もう夜なのに・・・・・・・・・・

「団長、まさかとは思いますが・・・・・」

一緒に居た兵の一人が彼女に声を掛けた。

「何を言ってるんだい。あいつ等は修羅場を潜り抜けて来たんだよ？しかも、相手は天馬だ」

「で、ですが、こうも遅いと何か遭ったのでは?と考えてしまいます」

「・・・・・・」

彼の言う事は尤もだとマーズは解かっていた。

しかし、彼等は修羅場を幾つも潜り抜けて来た兵だ。

数で押して来たとしてもこちらに分がある。

とは言えやはり部下に言われると万が一の事を考えてしまう。

「・・・ちっ」

誰に漏らす訳でもなく舌打ちをした。

何か口に含める物があれば放り込んでしまいたい気分のマーズだが、

ふと何か音が聞こえて来た事に気付いた。

「・・・何か聞こえないかい？」

部下は直ぐに耳を澄ませたが・・・・・・・

「何も聞こえませんよ？」

「あたしの気のせいかもしれないね」

部下が気付かないなら自分の気のせいだとマーズは思い塔から降りて小屋へと向かった。

小屋には部下達が武器の手入れなどをしていたが、何処か浮かない顔をしている。

「どうしたんだい？あんた達」

部下達は仲間が帰って来ない事を心配している。

その気持ちは団長である彼女には嫌というほど解かる。

だが、ここは団長として皆の士気を落とさせないようにするのが責務だ。

「あんたたち何だい。その時化た面は？」

「団長・・・あいつらは帰って来ないんですか？」

「あぁ。恐らく・・・死んだと見て良いだろうね」

平淡な口調で断言するマーズに団員達は顔を沈めたが次の瞬間には

闘志を燃やしていた。

「ちくしょう・・・俺らの仲間をよくも!!」

「明日は俺達も出て奴等を血祭りにしてやる!!」

「その意気だよ。明日はあたしも出る。可愛い団員達を可愛がってくれたんだ・・・タップリと礼をしないとね」

そうだそうだ、と団員達は声を上げて同意する。

そこへ・・・・・・・・・・

ボタ・・・ボタ・・・ボタ・・・

何かが空から落ちてくる音が聞こえてくる。

粘着力があるのか屋根にぶつかると張り付いて落ちる気配が今の所は無い。

しかし、水のような物も落ちて来る音がするではないか。

『ぎゃあ!な、何だこれ・・・ウゲッ!!これ糞だぞ!!』

外に居る見張り達の声で空から降って来るのが糞だと知った彼女達はドアを開けて外に出た。

空を見上げると暗闇でも判る天馬が居た。

その背には天馬騎士団が居る。

「あいつら・・・・・・・・・・！！」

マーズがギリッと歯を食い縛る。

何人かは弓矢を手に狙おうとしたが・・・・・・・・

「ぎゃあ！！」

矢を射ろうとする前に撃たれてやられてしまう。

更に彼等は攻撃もとい嫌がらせを止めようとしない。

「こ、今度は何だ?！」

「わ、わからねぇ、か、勝手にば・・・あぎっ！！」

今度は糞と共に丸っこい物が投げ込まれた。

それは勝手に爆発するのだ。

しかも、破片が飛び散りその場に居る者達を容赦なく傷付ける。

「全員、隠れろ！！」

マーズは急いで命令を下して遮蔽物などに隠れた。

どれくらい経ったのかは分からない。

敵はもう無いのか引き返して行く。

「・・・天馬がッ」

自分達が夜行動できない事を知っているからこんな手の込んだ嫌がらせを・・・・・・・・

姑息過ぎる。

あれが騎士のやる事か？

「明日は奴等を皆殺しにしてやる・・・・・絶対に」

拳を握り締めながら彼女は決意する。

こんな真似をしてただではすまさない。

味方の敵討ちも兼ねて明日は奴等を皆殺しにしてやると二度誓った。

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

―――――――――――――――――――――――――――――――

『着いたな』

私を背に乗せたメジュリーヌは天馬より遥か上――高度から砦を見下していた。

初めてドラゴンに乗り空を飛ぶ私だが・・・こんな物とは思いもしなかった。

ヘリで空を飛んだ事はあるが、ヘリ以上に風などの気を感じる。
天馬騎士たちはこんな風に空を飛んでいるのか？と思うと羨ましく思う。
いや・・・違う。
私にもこんな風に空を飛べる馬やワイバーンが居れば・・・あの女とも互角・・・そうでなくても何とか戦えると思ってしまうのだ。
テツヤ達に力を貸してもらうが、やはり自分の力だけであの女を倒したいという気持ちは未だに残っている。
『・・・要らない荷物。下手な真似はするでないぞ』
メジュリーヌは下を見ながら私に釘を刺してきた。
「分かっている・・・今回はあくまで嫌がらせ、だろ？」
『その通りじゃ。明日の戦いの為にここは堪えるのじゃぞ』
「・・・あぁ」
私は頷く事でドラグノフに伸びていた手を抑えた。
こんな距離では狙えないが、それでも・・・あの砦に居る女にやりたかった。
私の男を傷付けた報いを・・・・・・・・・・・・

「さぁ、始めますよ」

リーザ中尉は天馬の腹に結んでいた紐をナイフで切った。

それに倣い部下達もナイフで紐を切る。

すると箱が落ち空中で分解して糞尿が落ちて行く。

同時に臭いもするが。

『臭いのう・・・・・・』

ここまで臭いが来る・・・確かに臭い。

これではテツヤに嫌われてしまうな。

後でシッカリと身体を清めなければと思いながら私は暗視ゴーグルで砦を見た。

見張り台に居た奴等が最初に糞尿の餌食となった。

頭から被ったのだ。

あれが私達で無くて助かったと思いながら奴等の動向を見続ける。

小屋から奴等が出て来た。

中に・・・居た。

あの女は上を見上げている。

殺す・・・必ず殺す。

貴様を殺して首を部下達の前に晒してやる。

『そうカリカリするな。褌の中でもそうだから困るのう・・・・・・』

「し、褌は関係ないだろっ」

『そうじゃな。どれ、そなたも少しやってやれ』

メジュリーヌは高度を落とした。

ここでの距離ならドラグノフでも狙える。

しかし、向こうには見えないから好都合だ。

メジュリーヌの背中越しに見れば向こうは弓矢でこちらを狙って来ている。

こんな暗さでも向こうは狙えるのか？と思ったが松明などを出して来たので狙える。

私はドラグノフのスケルトンストックを肩に当て狙いを定めた。

空中で狙うのは初めてだ。

メジュリーヌは出来る限り動かないでいるがそれでも風は陸に居る時より強い。

狙いを定めて引き金を引いた。

反動が肩に来るが構わず引き金を引き続け相手を選ばずに撃ち続ける。

だが先ずは松明だ。

松明を燃やし闇にする必要がある。

松明を持った兵を狙い松明を地面に落とせば雪などで消えてしまう。

それをやってから後は選ばず相手を撃ち続けた。

しかしお弾が風に流されて的外れな所に命中する事もあったからそこら辺も考慮する。

撃たれた奴等は血を流して呻き声を上げる。

殺しはしない。

今は・・・・・・・・・・

明日きさまらに来たその時は・・・迷わず殺してやる。

そんな決意をする私とは対照的にリーザ中尉は冷静に任務を遂行し続けていたが・・・・

「引き揚げます」

嫌がらせを終了したのかリーザ宙は天馬の手綱を引き東側へと戻り始めた。

私とメジュリーヌは最後まで残ったがやがては引き返す。

『・・・今度は貴様の額に風穴を開けてやる』

私は背を向けながらマーズに対して宣戦布告とも言える言葉を投げ付けた。

第百九十八章：お出迎え開始

嫌がらせを終えた翌日、私達は来る筈のワイバーンに対して迎撃態勢を整えている最中だった。

この前のワイバーンは皆殺しにしたが、奴等はどうやってやられたのかは分からない。

同じ手で行けるだろうか？

だが、相手が数で押して来るとなれば厳しいな。

あれは奇襲だからこそ成功したのだ。

数で押して来られたら何人かは気付く筈・・・そうなると奇襲も出来ない。

どうやって倒すのやら・・・・・・・・・

ふと、何か後ろに設置された音が聞こえたので私は城壁から振り返ってみた。

「あれは何だ？」

私は思わず独白するように訊ねていた。

後方に設置されたのは下が大きく上は細長い棒状の物だった。

大砲か？

しかし、その割には砲身が細いし砲口も小さい気がするな。

「行ってみる？」

ガリシャこと山犬が私に訊いてきたので私はヘンさんに視線を送った。

私、山犬、猟犬、チャレンジャー、フォックスの5人で城壁の左側に居る。

その中で年上なのは狐だ。

それ故かれに訊ねるのは道理と言える。

「行って来な。チャレンジャー。お前も行け」

「了解」

フォックスに勧められたチャレンジャーを伴い私たち3人は後ろへと一時移動した。

後方ーーー大砲と思われる所に行くとテツヤ殿ーーー少佐がミーシャ大尉と一緒に設置された物を見ていた。

この2人が組み合わせとは珍しいと思いながら声を掛けた。

「少佐。これは何ですか？」

「これは“対空機関砲”だ」

『対空機関砲？』

私達３人は口を揃えて少佐が言った言葉を訊き返した。

「ミーシャ大尉。説明をしてやれ」

「はっ。それじゃミーシャお姉さんが君たち可愛い青年少女に優しく説明して上げる」

・・・自分からお姉さんと言うとは・・・・・・・・・・・

物凄く違和感を覚えるが顔には出さずに耳を傾ける。

「対空機関砲ってのは空を飛ぶ奴等を狙い撃つ砲の事さ」

「というと飛行機、ヘリ、ワイバーン、天馬などですね？」

「Ｙｅｓ。で、メジュリーヌの話だとワイバーンは天馬より僅かに高く飛べると分かった」

しかし、その高度を維持し長い時間戦えるか？というと否である。

ワイバーンは高度で戦うよりもその速度と攻撃力で相手を打ち負かす方なのだ。

逆に天馬は高度から急降下での奇襲や偵察などが任務だ。

「で、この対空砲はそんな低空飛行で来る奴等を迎え撃つのに適しているのさ」

なるほど・・・だから、これを選んだ訳か。

「では、それより高度で来る物ーーー天馬等の時はどうするんですか？」

「それから数で押して来たら？」

私に続いてチャレンジャーと山犬が質問する。

「先ずレディ・ファーストで山犬の質問に答えるよ」

ミーシャ大尉は山犬の質問に先ず答えた。

「数で押して来るのなら弾を変えるか多砲身化した物もしくは機関銃で迎え撃つんだよ」

よく見れば他の場所にも設置されている。

その中には山犬が質問したように数で押して来る敵の対策として多砲身化した物や“機関銃”が設置されていた。

「次はチャレンジャーの質問だね」

今度はチャレンジャーの質問にミーシャ大尉は答える。

「天馬のように高度で来る奴等はこいつより大口径の“高射砲”で迎え撃つよ」

ここでミーシャ大尉は対空機関砲、高射砲、機関銃について説明し

てくれた。

「対空機関砲は低空で来る奴等などに対して撃つから小口径で連射が可能なやつが求められる」

次は高射砲だ。

「高射砲は高度で飛行する奴を撃つから大口径で射高と射撃速度が向上したやつが求められるんだ」

最後は機関銃だ。

「これは言うまでもないけど弾幕を張ったり数で勝負だ」

とまぁ大雑把な説明だが要点を抑えるとこんな風な感じとなるらしい。

「他にもスティンガーやＲＰＧでヘリなどは狙い撃てるが、ワイバーンならこちらの方が良いと思って注文した」

ここでテツヤ殿が話を締め括った。

「他に質問は？」

「いつ前線基地を奪うのですか？」

「今日だ。夜出発する」

だから、撃退したら用意しておけと言われた。

『了解しました』

私達は敬礼をして持ち場へと帰った。

「あれは何だったんだい？」

フォックスが私に訊ねた。

「あれは対空機関砲という物です」

私がミーシャ大尉の説明した事を丸々伝えると彼はなるほどと一言だけ言って頷いた。

「それはそうと前線基地は何時奪うんだ？」

「今日の夜出発です」

その間も嫌がらせなどをして彼等を誘き出す算段だ。

「なるほど。だが、奴等も馬鹿じゃない・・・どちらが出るかは知らんが気を付けないとな」

その通りだ。

向こうもある程度は予想している筈だからフォース・リーコンかコンドル軍団のどちらかを出してくる筈だと考えるべきだ。

だが、少佐の話だとコンドル軍団はフォース・リーコンを事の他毛嫌いしていると聞く。

ジャー・ヘッドなどと侮蔑の言葉を憚らず言っているのだから相当な物だろう。

それにコンドル軍団はライアンナル伯爵の手駒と考えられると言っていたから、リカルド様に味方する彼等は邪魔な存在と言える。

そうなると私達と彼等を戦わせて疲労した所を討つか、若しくは一緒に殺すかのどちらかだと考えるべきか？

だが、今は目の前の敵に対処するとしよう。

「さぁて・・・おいでなすったぜ」

フォックスは城壁に添え付けられたブローニングＭ２重機関銃のレシーバーを引いた。

ワイバーン達が来た。

朝日に照らされながら・・・・・・・・・・・・

先頭は１角のワイバーン。

となれば乗り手は団長のマーズだな。

団長自ら来るとは恐れ入るが、同時に彼女が死んだら統率は執れるのか？と思う。

しかし、先頭を切って来るのだから自分の腕に自信があるのだろう。

何より部下達の士気を上げている。

「よぉし・・・攻撃開始！！」

少佐は我々に射撃許可を出した。

私達は一斉に攻撃を開始した。

ワイバーン達は銃撃の嵐に怯む様子は無く真っ直ぐに突っ込んで来る・・・・と思われた。

急上昇と急降下をして二手に別れたのだ。

「対空砲、撃て！！」

少佐が命令すると対空砲が撃たれた。

下の方は我々が迎え撃つのだが、奴等は下からこちらへ急上昇してブレスを吐いて来るから思う様に反撃できない。

そこへ急降下してブレスを吐くからどうしようもない。

だが・・・対空砲の射撃で彼等は怯んだ。

見た事も無い攻撃に対して怯んでいる・・・しかし、そこは団長の実力が発揮される。

「怯むな！あの長筒を破壊しろ。一点集中だ。他は捨ておけ！！」

マーズは対空砲などが厄介な兵器だと一目で判断し部下に破壊を命じ私達の事は捨ておけと命じる。

流石は女だてらに団長を務めてはいない、か。

的確な命令で部下達を統率している。

だからと言ってこちらも負けてはいない。

「おらおら！てめぇら全員纏めてぶっ殺してやる！！」

フォックスがブローニングＭ２重機関銃を撃ちながら叫ぶ。

ブローニングＭ２重機関銃は「対物火器」と言って戦車や装甲車を攻撃目標とした火器に分類される。

そのため人間を撃つなんて事はしてはいけないのだが、少佐の話では「戦争にルールなんて無い」らしく平気で人を撃つらしい。

何度も言ってはいるが、これで撃たれると人間など真っ二つに折れるのだ。

至近距離で撃たれよう物なら肉片と化すのは当然と言える。

それを撃たれたら如何にワイバーンと言え・・・ただでは済まない。

所がワイバーンはブローニングＭ２重機関銃から発射される１２．７ｍｍ×９９弾一一一．５０口径をいとも容易く避けてしまう。

まぁ、当然と言えば当然と言えるが・・・・・・・・・・・・

しかし、ブローニングＭ２重機関銃は言わば“叩き”のような物だ。

取り敢えず近付いて来る敵を追い払うような物と考えて良い。

本命は後ろに設置された対空砲や機関銃だ。

「照準よし・・・撃て！！」

少佐が射撃命令を下すと巨大な音と共に砲弾が空中に飛び花火が散ったように幾つもの炎が飛び散る。

当たってもいないのに弾が炸裂し炎が飛び散るとはどういう事だ？

一種の散弾のような物だろうか？

散弾銃も弾が飛び散るから、あれもそういう類いの弾を使用しているのだろうと一先ず思う事にした。

第百九十九章：女からの提案

「・・・行きました、ね」

私は敵が見えなくなってからフォックスに話し掛けた。

「あぁ。状況から判断して逃げたんだ。女だてらに傭兵隊長を務めている訳じゃないな」

確かにそうだと私は思った。

撤退ほどハッキリ言って屈辱とも言える行動は無い。

敵に背を向けるのだから当然と言えば当然だ。

しかし、全滅を賭してまで戦い続けるか生き残って再起を賭けるかによって捉え方は違う。

全滅を賭してまで戦い続け死んでしまう。

これは戦う者から見れば最後まで果敢に戦い敵を倒した英雄と映り称賛する。

逆に生き残り再起に賭ける者は命欲しさに生き残った臆病者と映り蔑む。

だが、目的を達成せずに死んだか、目的を達成する為に生き残ったかによってその後の映りは変わる。

敵――彼等は仲間の仇を討つ為に引いたのだ。

このままでは全滅すると解かったから。

それを考えると屈辱だが引いた事になる。

つまり“出来る敵”なのだ。

テツヤ殿から見れば的確な判断で部下達の命を救ったと取る筈だ。

私も同じ考えだが、あのまま残って全滅して欲しかったとも思う。

出来る敵ほど厄介な者は居ない。

いっその事・・・馬鹿みたいに突っ込んでくれれば直ぐに皆殺しに出来た。

そうすれば強力な駒を一つ消せる事になるから有利なのに。

何はともあれ勝った事に代わりは無いのだが・・・・・・・・・・・・

「さて、夜には出発するんだ。今の内に準備して英気を養っておこう」

フォックスの言葉に私達は頷きその場から離れ少佐の所へと戻った。

「敵は退散したな」

テツヤ殿はミーシャ大尉と煙草を吸いながら敵が去った方向を見ている。

「はい。ですが、出来るなら全滅させたかったです」

撃墜した者は居たがまだ数で言えば圧倒している。

幾らこちらの方に分があるとしても油断は大敵だ。

となれば今のように有利な状況の時に殲滅しておきたいのが本心だった。

「まぁな。だが、明日もまたこちらに来させる。それに今日お前等も発つんだ」

そうなれば両方の面倒を見なければならないと言われ頷いた。

「しかし、そろそろ向こうも援軍を送っているのではないでしょうか？」

いや、もう来ているかもしれない。

「何はともあれご苦労だった。だが、夜にはまた出発してもらう。今の内に準備をして英気を養っておけ」

『了解』

私達は敬礼をしてそれぞれの家へと戻った。

その途中で親衛騎士団の面々と会った。

彼等も迎撃任務に就いていたらしいが、もう任務は終えたので出発

の準備をしている。

「よぉ、リンクス」

ヴィン・ルビーが銃剣――M7バヨネットを磨きながら私に話し掛けてくる。

M7バヨネットはフォース・リーコンとイーグル軍曹の国であるアメリカの採用した銃剣だ。

モスバーグはアメリカが開発したショットガン。

だから、彼がその銃剣を持つのもある意味では自然だ。

「どうも。準備ですか？」

「あぁ。そっちは今から？」

「えぇ。今夜には出発しますからね」

「朝は迎撃で夜は出発・・・俺らの上官殿は人使いが荒いな」

「そうですね。ですが、命令となれば仕方ありませんよ」

「まぁな。それじゃ俺は先に寝るぜ」

そう言って彼はM7バヨネットを鞘に収めると立ち上がり自分の寝床であるテントへ向かった。

私達もまた歩みを再開した。

私は自分の家へと帰るとオリガさんが何時も通り迎えてくれる。

しかし、これから直ぐ一一一夜には再び出ると伝えるがオリガさんは何も言わずに頷いた。

「あの、私、いつもこう・・・何と言うか・・・出掛ける事が多いですけど、何も言わないですよね？」

彼女の態度が余りにこう・・・淡泊とは言い過ぎだが何時もの事と言わんばかりなので私は思わず言った。

「えぇ。だって今は戦時中。そして貴方は戦う兵だもの。出掛ける事は当たり前だもの」

それとも泣いて縋って不平不満を言われたいの？と訊かれると何とも言えない。

「そうではないんです。ただ・・・私は、貴方に対して何かしているのか？貴方は満足しているのか？と思ってしまうんです」

「あらあら。そんな事を気にしていたの？」

「だめ、ですか？」

「いいえ。寧ろ女性を考えている点で言うなら満点を上げられるわ」

でも、と彼女はここで区切りを入れた。

「私は貴方より年上だし経験も豊富よ。そんな失礼な言い方だけど、

小娘みたいに我儘を言ったりしないわ」

そこまで甘やかされて育った者じゃないと暗に誰かを言っているように思えたのは気のせいか？

「誰かに、言われたんですか？」

「いいえ。でも、貴族の娘とかならそう言うかな？と思ったのよ」

確かに一理ありそうな事だと私は思う。

「貴方は私を気にしているけど大丈夫よ。私は貴方を置いて何処かに行ったりしないし他の男と仲良くしないわ」

貴方が無事に帰ってくれるのをここで待つ。

貴方は無事に帰って来てくれたらそれで良い。

そう彼女は言ってくれた。

「でも、敢えて難点を付けるなら・・・自分に自信を持てない所ね」

「あの、それで、お姉様に・・・・・・」

「えぇ。貴方と付き合っても良いと許可したわ」

本当に言ったんだ、とオリガさん自身から聞かされて私は雷に打たれた気分に陥った。

好きな女性からこんな事を言われるのだからそういう気分に陥って

も無理はない。

「貴方は正直困っているでしょうけど、若い内は何でも経験。恋愛なら尚更よ」

「そうですけど・・・・・・・・・」

「安心して。さっきも言ったけど貴方以外を好きになったりしないから」

だから、安心して他の女と経験を積んで更に良い男に成長しなさいと言われてしまい私は項垂れたが、オリガさんは気にせずに私を促してきた。

「さぁ、お風呂に入って寝なさい。夜には出発でしょ？」

「はい・・・そうします」

やはりオリガさんは良く出来た女だと思わずにはいられない。

そして私は・・・経験不足で何とも情けない男だと思わずにはいられなかった・・・・・・・

ふとレオンもまたこんな気持ちなのだろうか？と思った。

― ― ― ― ― ―

僕はベッドで一人寝ていた。

しかし、未だに眠気は来ない。

夜には出発する。

それなのに眠れないから困ったものだ。

「起きてるの？」

ベッドに居ながら眼を開けている僕にレイテさんが話し掛けてきた。

「えぇ。ローズちゃんは？」

「近所の子と雪遊びよ」

だから何時もなら来るのに来ない訳、か。

何となくそれに寂しさを覚えながら僕はレイテさんに話し掛ける。

「僕は・・・貴方に迷惑を掛けていませんか？」

「突然どうしたの？」

「何時も考えているんです。僕は兵士です。だから戦う事が仕事です。そして命令さえあれば直ぐに出動します」

家を何時も開けるし何時帰れるか分からない。

普通なら幾ら職業とは言え家庭を大事にしてくれとか何か言われるだろう。

だが、レイテさんは何も言わない。
それが何だか気になった。

「そうね・・・偶にだけど寂しいと思う時はあるわ」

「偶に、ですか？」

「えぇ。貴方は軍人だもの。そして今は戦時中。嫌でも出動するしかないでしょ？」

「まぁ・・・・・」

「それが仕事だから仕方ないわ。私だって経験を積んでいるもの。それにこんな職業に就いているから嫌でも男という生き物を理解できるわ」

ミレーネ様などはそれが自分より上だと言った。

「ミレーネ姉はテツヤさんを好きだけど、最初に出会ってから再会するまでテツヤさんから行く事は無かったわ」

普通なら不平不満くらいは身内に零すがあの方は何一つ言わなかったようだ。

「何故だか分かる？」

「分かりません」

「ミレーネ姉もテツヤさんもお互いに経験豊富だからよ」

だから、お互いに理解し合っている。

そう言われた・・・・・・・・・

「貴方もランドルフ君も若いし経験不足だもの。そう考えてしまうわ」

「・・・・・・・・・・・・」

「私以外にも女を抱いたらどう？」

「・・・冗談ですか？」

「本当よ」

一人の女に心を向け続けるのは悪くない。

しかし、自分に自信を持てず相手を信頼できないのなら悪い事だ。

それなら経験を積んでしまえば良い。

「勿論それで私より好きな娘が出来たら構わないわ。それでも私が好きだと言うならそれで良し。どう？」

「・・・・・・・」

何と答えたら良いか分からず僕は無言になった。

「まぁ、貴方にこんな事を言っても酷かもしれないわね。でも、貴方が自分に自信を持てる事を考えるとこれが一番だと思ったのよ」

それから、と彼女は言い僕に近付いて添い寝をしてくれた。

「貴方がもっと良い男になってくれる事を私は願っているわ」

「・・・努力します」

言い訳にしか聞こえない言葉を僕は言いながら眼を閉じて眠った。

レイテさんに添い寝されて眠ると嘘のように素直に眠れる・・・・・・

夢の世界へと旅立つ前にレイテさんの言葉を実行するのも悪くないと思った。

ただし、相手にも自分にもちゃんと理解してもらう必要があるし自分自身に対しても厳しく律しなければならないと思うが。

第二百章：ヘルメス作戦

夜になった。

時間は午前2時で虫も眠ると言われる時間だ。

テツヤ殿ーーー少佐の国ではこの時刻を“丑三つの時”と言われている。

正に今の時間はそれに合う。

全てが静かだ。

いや、私たちの居る場所だけは静かではないが。

私たちーーーフォックス、山犬、猟犬、チャレンジャー、イーグルの6人とフィーナ中尉と親衛騎士団、天馬騎士団のお姉様達は出撃準備をしている。

今から出撃する。

「今夜も嫌がらせを行う。しかし、同時に明日は前線基地を敵から強奪する」

強奪・・・あまり良い響きの言葉ではないが実際はそうなのだからこの場合は良いと思う事にする。

「この作戦名は“ヘルメス作戦”だ」

ヘルメスとは少佐達の居た世界の国――ギリシア神話に出てくる青年の守護神であるのだが・・・・・・

その守護の中に“泥棒”が入っている。

泥棒を守護する神など聞いた事も無い。

しかし、ギリシア神話はどの神話よりも神が人間臭いという特徴があるからこんな神もまた居ると思う。

何より相手が作った物を奪うのだから私たちは泥棒だ。

泥棒でなくとも守護を願う。

それならこんな作戦名にするのも悪くない。

もっとも少佐も私もこんな願掛けに近い事を願う程ではないが。

「先ず全員には天馬に乗って途中まで行ってもらう」

途中までとは言っても明日に攻撃を仕掛けるのだから近い場所だ。

「天馬が奴等に嫌がらせをして明日またここへ連れて来させる」

その間に私たちが奪う。

「それから猟犬の報告によれば敵はまだ来ていない」

だから、難なく奪える可能性が高い。

「しかし、情報なんてものは一瞬で変わるものだ。報告した時は相手が居なかったが、次の瞬間には居たなんて事もよくある」

そのため警戒する必要がある。

「もし、敵が居た場合は様子を見ろ。そしてイーグル達と相談して決めろ」

まだ浅いのだから経験豊富な者の意見を聞きそれに従う。

血気に逸るのは若さ故だが、こと実戦となればそうはいかない。

一歩間違えれば死あるのみ。

そのため私たちがサポート役に居るのだ。

「了解しました。テツヤ少佐」

フィーナ中尉が代表として頷いた。

「よし。では、行って来い」

『レンジャー』

私たちは少佐、プロイセン様、ゲンハルト様、将軍達に敬礼をして天馬に跨り闇夜の空で出陣した。

「さぁ・・・敵さんはどう出るかしらね？」

前と同じお姉様の天馬に跨る私にお姉様は訊ねてきた。

「恐らく来るでしょう。援軍が仮に来ていたら尚更だと思います」

「なるほどねー。それで援軍は来ていると思う？」

「どうでしょうか。猟犬の報告だとそうではないと言っておりましたが、少佐の言葉を借りるなら・・・・・・・」

「“情報なんて物は一瞬で変わる不適格な物”でしょ？」

些か違うが大まかな点は当たりだ。

「えぇ。お姉様としてはどうですか？」

「お姉様って呼ぶのも良いけど名前で呼んでよー」

「名前は何ですか？」

「あら。呼んでくれるの」

「まぁ・・・オリガさんから色々と他の女性と経験を積めと言われまして・・・・・・・・・」

この前言われた事は真実だった。

『私以外の女と付き合って経験を積みなさい』

まさか本当とは思いもしなかったが、逆にこうもハッキリ言われてはやるしかないと思ってしまう。

だから、ここは経験を積もうと思い立ち先ずはこの前も乗せてくれたお姉様と仲良くしようと行動を開始した。

「嬉しいわ。確か教師になりたかったのよね？」

「そう言っておりました」

「なら信じなさい。全てが正しいとは思わないけど、視野を広げるのは若い頃の方が良いのよ」

歳を取ってからだと色々と不便だとお姉様は語り名前を教えてくれた。

「グロリアよ。グロリア・シュナイダー。両親は既に没しているけど軍人家庭よ」

歳は２２歳でスリー・サイズまで言うがそこだけは聞き流した。

「では、グロリアさん。どう考えますか？」

「そうね・・・敵はヘリを使って移動する手段を失ったわ」

「えぇ。ですが、新たにもう仕入れている可能性も否定できません」

「そこよ。もし、相手がヘリに乗って基地へ行ったらかなりキツイわよ」

「そこを助けるのが私たちですから」

「頼もしい言葉ね。でも、血気に逸り過ぎちゃ駄目よ？」

「分かっています」

と言葉では頷いたが、もしあそこに・・・あの男が居たら果たして冷静で居られるかどうか自分自身でも分からないのが現状だった。

そんな中で前線基地まで1日と掛らない場所に到着した私たちはそこで降ろされた。

「じゃあ、行ってくるわ」

「気を付けて」

グロリアさん達を見送った私たちは静かに徒歩で移動を開始した。

装備は軽装備だが、対空装備もしている。

ブローニングM2、スティンガー、RPG、などでワイバーン相手に何処まで通用するかは甚だ疑問ではあるが夜まで持ち堪えれば何とかなる。

だが、援軍が来ていたらどうするか・・・・・・・・・

などと考えている間に天馬は既に嫌がらせを開始した事が分かった。

「始まったな。しかし、援軍はまだ来ていないようだな」

軍曹は暗視能力を備えた双眼鏡で覗きながら言った。

「というとまだ状況は変わっていない、という事でしょうか?」

「恐らくな。だが、分からないのが戦争ってもんだ」

軍曹はフィーナ中尉に双眼鏡を渡しながらアドバイスを送った。

「もう少し近付いて朝方に作戦を実施するべきかと思います。中尉殿」

「それはワイバーンが居るからか？」

「はい。夜だから飛べないですがそれでも居るだけで脅威ですから」

確かにその通りだと私は思う。

居るか居ないかによって重みが違うのだ。

それだけワイバーンは脅威と見なしているが、過大でも過小でもない所が最大のポイントと言える。

「そうだな。全員、これより更に進む。ただし、攻撃はワイバーンが出発してから。その間は待機ないし各自配置された場所で情報を収集しろ」

それから、と彼女は言った。

「私達には軍曹達が居る。頼るなとは言わないが依存はするな」

これは私たちの戦いだ。

ザンビア平野での屈辱をここで返すとフィーナ中尉は言い部下達も

頷いた。

「半径１５メートル間隔で横一列に行動しろ。罠が仕掛けられているかもしれないから注意しろ」

それに私たちは頷き行動を開始した。

私と軍曹達はフィーナ中尉が言った半径１５メートルに＋１５メートルの３０メートルほど間合いを取った。

これはサポート役である事と万が一の事を考えての保険だ。

モーゼルｋａｒ９８ｋ、ＳＫＳカービン、ＰＫＭ、コルトＭ７２７、ステアーＡＵＧ、アームスコーＭＧＬ、スティンガー・ミサイル、イングラムＭ１０、Ｍ６７破片手榴弾・・・・・・・・

これが私たちの持っている装備で援護に関しても問題は無い筈だ。

「どちらが来るか、だな」

軍曹はポツリと独白した。

フォース・リーコンは数が少ない分一人一人の戦闘能力が極めて高い。

逆にコンドル軍団はヘリからの攻撃しか私たちは知らないからその戦闘能力は不明だ。

だが、数で押して来る気もするし性根が腐っていようと元空挺部隊だ。

やはりここは空挺部隊という経歴を考えると厄介な敵と考えるべきか。

「軍曹はコンドル軍団と戦わなかったんですか？」

私は軍曹に訊ねてみた。

「無い。旦那が全員を殺したんでな」

「少佐一人で？」

「あぁ。と言っても正面からではなく罠を仕掛け一人一人確実に少なくしていった」

当然と言えば当然のやり方だ。

「だが、旦那の話ではやはり空挺部隊だからそれなりに強かったらしい」

ただし殆ど殺した相手は自分達より弱い相手だしその上ヘリから一方的な攻撃しかやらなかったという。

つまり腕が鈍ったという事だ。

「まぁ、そんな戦いしかやらなかったら鍛えた腕も直ぐに劣る」

「確かに・・・・・・」

「まぁ、居たら居たで殺せば良い。フォース・リーコンだろうが誰

だろうが俺たちは言われた事に全力を注ぐだけだ」

軍曹の言葉に私たちは頷き暗い雪道を静かに出来るだけ音を立てないようにして進んだ。

第二百章：ヘルメス作戦（後書き）

またあったので修正です・・・まだあるので勘弁して下さい。（汗）

第二百一章：ヘルメス作戦開始

暗い夜がやがて明るくなり始めた。

私たちは親衛騎士団より３０メートルほど離れた場所に臨時的な陣を構えている。

方角から言えばやや西寄りだ。

西ーーー私たちが居る方角からだとドアが見える位置で見張り台の後ろ側を見える。

ヴァエリエへ行く方角には見張り台が設置されていない事を考えると敵がこちらから来るとは考えていないという事か？

もし、そうなら敵を侮り過ぎだと言いたい所だ。

私は双眼鏡で覗いてみた。

「・・・昨夜の嫌がらせの跡を取り除いています」

見る限り彼等は屋根などに付着した糞尿をブラシなどで綺麗に片づけている最中だ。

それから行くのか？

「まぁ誰だって糞尿塗れの基地に住みたくはないからな」

軍曹はお湯を軽く飲みながら言い私も頷いて更に見ようとした時だ。

軍曹の無線機が鳴った。

「こちらイーグル」

『こちらフィーナ。そちらの状況は？』

「敵さんは掃除中だ。ここからだと中の様子は見えないが・・・ヘリなどが来た形跡は無い」

ヘリなどが来たなら風で雪が落ちたりなどとにかく何かしらの跡が残る。

それなのに無いと言う事は来ていない。

と言う事はフォース・リーコンか？

それともヘリは帰り援軍を置いて行ったのか？

どちらなのかは分からないが、何とかしないといけないな。

「こんな時にあいつが居てくれたらな・・・・・・・・」

軍曹は基地を見ながらまた独白した。

「あいつとは？」

「少佐が外人部隊に居た頃の部下で階級は“准尉”だ」

「というと下士官が士官に準じる待遇を受ける方だったんですか」

准尉とは元々軍隊の規模が大きくなり階級が少なくなったからと聞いている。

少尉から始まる士官ではなく下士官に属しているが、待遇は士官という極めて曖昧な階級だ。

「歳は曹長より5歳年下だから４０歳で“戦闘工兵”だ」

「戦闘工兵ですか・・・・」

これまた特徴的な兵科出身だなと思わずにはいられない。

戦闘工兵とは普通の兵士が工具を持ち行っていた事が始まりとされておりそこからやがて職人などを雇う様になり作業が専門化して行ったので独立兵科となった。

種類として3種類に分類される。

戦闘工兵、建築工兵、船舶工兵だ。

戦闘工兵の任務は陣地構築または破壊、地雷の設置から処理、上陸作戦の支援、化学兵器の使用などだ。

建築工兵は橋や道路の建設、坑道戦、測量や地図作成などだ。

船舶工兵は船舶の運用ーーー輸送船、特殊船、潜水船などの操縦、艦載兵器の運用ーーー対空砲、対空機銃、対戦迫撃砲、対戦爆雷、対戦魚雷などだ。

こういうのが工兵の役割と種類だ。

「元々は腕の良い大工だったんだ」

だから戦闘工兵でもあり建築工兵でもあると言う。

「それなのにどうして外人部隊へ？」

「話によると先輩が嫉妬して自分の罪を擦り付けたらしいぜ」

それが原因で大工の免許は剥奪された。

しかし、そこへ運よく少佐の上官が現れ無罪放免となったらしいが、元の仕事場には戻りたくない。

そこで外人部隊の工兵に入ったらしい。

「あいつは工兵としても大工としても一流の腕前だった」

爆弾を仕掛ければ爆発させたし橋を一時間で架けろと言われたら一時間ピッタリでやったし強力な陣地を構築しろと言われたら構築したと言う。

「お陰で何度も命を助けられたぜ」

その方が居れば、あの基地の突破口を開けろと命令されたら直ぐにでも開けるだろうなと軍曹は言った。

そこまで凄い人なら是非とも居て欲しいものだと思わずにはいられない。

「あの、それで少佐の上官ってどんな方だったんですか？」

その方も気になるが少佐の上官だった方も気になる。

何せあの少佐の上官だ。

どうやったらあの方の手綱をシッカリと握れたのか知りたいのは当たり前だ。

「話によればティー・タイムは必ず守る極度な映画好きらしい」

「映画？」

「映画ってのは・・・おっと、忘れていた」

軍曹は思い出したように無線機を見た。

そうか・・・忘れていた。

フィーナ中尉と無線中だったんだ。

『何時まで私を待たせる気だ？』

明らかに怒気が込められた口調で喋るフィーナ中尉に対して軍曹は苦笑していた。

「そんなに怒らないでくれ。それとも旦那の前でもそうなのかな？」

『下らん事を言っている暇があるなら謝罪の言葉を言え』

「ご尤もな事です。で、今の所現状に変化は無いな。だが、今は下手に動かない方が無難だと思われます」

『ワイバーンが消えてから動くべきか』

「えぇ。ですが、何人かは見張りとして残す可能性もありますし罠を設置している可能性も高いのをお忘れなく」

『了解した。通信を終わる。オーバー』

「オーバー」

無線を切った軍曹は双眼鏡を覗き込み何か変わりが無いか探り続けるが、やはりここからでは分からない。

「・・・リンクス、レンジャー、山犬、木に登って上から見てみろ」

『了解』

私たちは直ぐに登れそうな気に登り始めた。

と言って滑り易いのが当たり前だからナイフなどで切り口を入れてそこへ挟んだりしたが。

木の上に登り身体を密着させてカモフラージュをして双眼鏡を覗き込む。

『・・・今の所、援軍は来ていないか』

見る限りヘリは無い。

ワイバーンは居る。

数からしてまだ多い。

昨日みたいに全て行くのか何名か残るのか・・・そこが問題だ。

それにしても何と言うか・・・・・・・・

『やる気がまるで感じないな』

彼等を見ているとまったくやる気と言う物が感じられない。

そりゃ誰だって糞尿の掃除などしたくない。

しかし、ああもダラダラとやっていては日が暮れてしまう。

あんな所を依頼人にでも見られた暁には即解雇されるのが当たり前だ。

「どうだ?」

「ヘリは見当たりません」

「同じく」

「こっちも」

3人揃って降り軍曹に報告するが同じ結果だった。

「というとまだ来ていないとここは考えるべき、か・・・・・・」

軍曹は少し考えたが直ぐに無線を取り出した。

「こちらイーグル」

『こちらフィーナ。どうした?』

「現在、援軍は来ていない様子。ワイバーンが行ってから行くべきかと」

『どのような配置が良い?』

「分隊で行動するべきかと。下手に纏まって行動するよりは多方から攻め込んで相手を混乱させましょう」

そして中に入ったらもう少し纏まって行動するべき、と軍曹は付け加えた。

『分かった』

「俺たちは外から援護します。制圧後そちらと合流で宜しいですか?」

『あぁ。良い』

「ではグッド・ラック」

そう言って軍曹は無線を切った。

「グッド・ラックとは？」

「幸運を祈るという意味さ」

彼等にとっては初めて自分達で行う任務だ。

軍曹が幸運を祈るという言葉を放った意味も何となく理解できる。

「さぁて、お出かけの時間だな」

軍曹の言葉に私たちは前線基地を見た。

ここからでも届くほど大きな声が同時に聞こえてくる。

「野郎ども。今日こそ仲間の仇を取るよ。今日あの空挺部隊が来るんだ！！」

それまでに勝負を着けると彼女は高々に宣言した。

『おぉ！！』

それに対して部下達も頷き勇んでヴァイガーへと飛んで行ったのだが・・・・・・・・

「・・・・見た目とは裏腹に単細胞だな。いや、嫌がらせで頭に血が上ったのか？」

「恐らく嫌がらせで頭に来たのではないかと思います」

あの女は単細胞ではない。

ただの単細胞なら実力主義で生きる傭兵の世界では即刻追い出されるだろう。

少佐の話を聞くとそう思うし昨夜の戦術的な撤退も考えるとそれが妥当だ。

とは言っても・・・もう少し思慮深いか、と思ってはいた。

『血は争えないといった所か・・・・・』

フィーナ中尉もマーズも頭に血が上り易い気がする。

そこら辺はやはり姉妹なのだなと思わずにはいられないのは悲しい所か？

まぁ、この場合はその短気な所が助かる。

「どれ・・・お手並み拝見といくか」

「意味が違う気がしますけど・・・・・・」

「良いんだよ。俺たちはサポート役なんだ。腰を据えて見ていれば」

あいつらなら出来ると軍曹は断言してみせたので私たちは眼を合わせて遠目から見る事にした。

ただし、何かあれば直ぐに行けるように準備はしておくが。

「さぁ、始まるぞ」

軍曹の言葉が合図のように彼等は動き出した。

ヘルメス作戦の開始だ。

第二百二章：作戦は成功

私は分隊ごとに別れ多方角から攻めるように命令した。

私の分隊の装備をここで説明しておく。

ＡＫ－７４、ＧＰ－３０、ドラグノフＳＶＤ、ＲＰＫ－７４、アームスコーＭＧＬ、ＰＫＰ機関銃、という形だ。

ＡＫ－７４、ＧＰ－３０、ドラグノフＳＶＤは私が持ち残りは部下達が持つ。

私たちは真正面から行く事になったが、上には見張り台があり奴等は居る。

あいつ等を先に倒すのが先決だな。

サプレッサーを付けなくても向こうで相手をしているから聞こえない筈だ。

私はドラグノフＳＶＤを背中から下ろし肩に当て狙いを定める。

「・・・・・・・」

引き金を引き一人仕留める事に成功した。

弾は相手の胸に当たりそのまま下へと無情に落下する。

音と仲間が落ちた事でもう片方が私たちの存在に気付いたが・・・

直ぐに死んだ。

別の方角から行く部下に仕留められたからだ。

基地からは何も聞こえて来ない。

・・・見張りを残して行ったのか。

ならば安心だ。

急いで堀まで行き2人1組で堀を越え更にそこから人梯子で地面に刺さった木の杭を乗り越える。

「・・・誰も居ないな」

見る限り誰も居ないし罠も仕掛けられていない。

木の杭を越えて中に入る。

「急いでドアを開けて残りの者を中に入れろ」

『了解』

部下達は頷き四方を警戒しながら下へおりてドアの所へ近付く。

内側から簡素な鍵がかけられていたのを破壊してからドアを開け更に跳ね橋を下ろして橋を架けた。

そして残りの部下達も中へと入る。

「・・・後は小屋、だな」

私たちは小屋を囲んだ。

中に罠があるかもしれないから慎重にしなければ・・・・・・・・・

私とヴィン・ルビーが左右に立ち彼がドアを開けると眼で合図する。

それに私は頷き煙幕筒を取り出してピンを抜いた。

彼がドアを僅かに開ける。

そこへ煙幕筒を投げてドアを閉めた。

もし、中に誰かいるならこれで出てくる筈だ。

皆で小屋を囲み待つが・・・・出て来ない。

煙幕筒が切れた頃を狙ってドアを開けて中に入るが・・・誰も居なかったし罠も仕掛けられていなかった。

中を見ると空の酒瓶がゴロゴロ転がっており獣の肉なども骨に肉を付けておきながら地面に放り出されている感じだ。

「・・・汚いな」

よくこんな所で寝泊まりが出来た物だと呆れ果てる。

「まぁ、仲間を殺された上に撃退されたんだ。憂さ晴らしで酒でも飲んだんだろうな」

背後から声がして振り返ればイーグル1等軍曹達が立っていた。

「来たか」

「あぁ。それはそうと直ぐに迫撃砲とブローニングM2を配置させた方が良い。聞いただろ?」

「コンドル軍団か・・・・・・」

「ヘリがどうやら向こうは手に入ったようだな」

イーグル軍曹は奴等が来る事はヘリがあるとう意味だと言っているように喋った。

「しかし、少佐と私で全て破壊したのだぞ?」

少佐と私で手当たり次第にグレネードランチャーと機関銃に手榴弾で破壊したんだ。

直す事も出来ない程にまで破壊したんだ。

それをどうやって用意したのだ?

最初から隠していたなら直ぐに出してくる筈だ。

それなのにして来なかったという事は・・・無かったが手に入ったという事か。

「蛇が用意したのかもな」

イーグル軍曹は煙草に火を点けながらある一つの答えを口にした。

「蛇、か・・・何者かまったく分からんな」

蛇とは言わずと知れたライアンナル伯爵だ。

叔父上と似たような仕事をしていたと聞いているが、その伝手で手に入れたのか？

だとすればあの男の後ろにはもっと沢山の奴等が居るのか？と思うが殆ど素性が分からない以上はただの推論でしかない。

「何れ分かる。さぁ、今度はここを護る準備だ」

そう言ってイーグル軍曹は部下達に命令した。

何れ分かる、か・・・そうだな。

あの男を捕まえて口を割らせれば良いだけの話だ。

ならば今はここを護る準備に専念しよう。

いま我々にはスティンガーとブローニングでしか空中から来るであろう奴等を迎撃できないのだから。

魔法防御は無いから直接来る。

そこをどうするかも考えないといけないな・・・・・・・・・

ワイバーンは夜になれば問題ないだろうが、ヘリの方はそういかない。

寧ろヘリの方が危険だな。

私は小屋を出てイーグル軍曹に助言を求めた。

「ヘリが来たらどうすれば良いと思う？」

「ヘリが何機で来るか、どんな種類かによって迎撃が違いますからね・・・・ワイバーンの方はブローニングと手持ちの武器で何とかするしかありませんが」

「ヘリの種類と言ってもそんなには無いんだろ？」

「まぁそうなんですが、作った国が違うとその国の特徴が出ますし装備も違いますから」

「あのアパッチというヘリはどうだ？」

「あれは戦車と人を狩る為に造られたヘリです」

重装備で戦車も倒せるのだから人など狩り放題と言える。

「しかし、私が参加した作戦の一つで倒された経歴があります」

だから絶対に撃ち落とされないという保証は無い訳だ。

「ＲＰＧでも落とせるか？」

「出来ます。ただ、ＲＰＧの場合は後方噴射――バックブラストがあります」

ＲＰＧ－７はミーシャ大尉の祖国が開発した個人携帯可能な肩付け式対戦車・軽装甲火器の事だ。

堅牢な上に初心者でも扱い易いため金が無い国や組織にとってはＡＫと同じく必需品とも言える兵器だ。

所が、射程距離は３００ｍの上に後方の噴射が激しいから見つかり易い。

そのうえ命中率もそれほど良いとは言えないらしい。

「では、一発でヘリを撃ち落とせるのは難しいか？」

「どちらかと言えば。それに上に向けて撃つとそのままバックブラストが来ます」

「では、どうすれば良いのだ？」

「穴を掘ってそこへバックブラストを逃がすように工夫するんです。それから何人かに持たせて違う方角から撃たせるんです」

１発では仕留めるのが難しいのだが、何人かで撃てば“下手な鉄砲数撃ち当たる”という諺の通り当たる。

これは少佐の国にある諺らしいが正しくその通りと思う。

「片方が撃ったらもう片方が撃つ。そうすれば敵は的を絞れず次の

場所に移動できます」

「だが、1機ではないから難しいな」

「はい。しかし、スティンガーを持って来ているのは向こうも知っている筈です」

「つまりRPGは囮という意味もある訳か？」

「その通り。聡明な頭脳で助かります」

前の上官とは豪い違いだとイーグル軍曹は言ってみせた。

「前の上官？」

「俺と姐御あと2人を残して部隊を全滅に追いやった男の事です」

少佐が来る前の上官だったらしいが、自分の作戦は完璧と思っている上に責任を部下に擦り付けるという男だったらしい。

そんな男が指揮を執った作戦は成功した例もあるが、被害が大きかった・・・・・・

「しかし、雇い主の覚えは良い。顔も良かったからな」

「なるほど。だが、被害が余りに大き過ぎる今の少佐と交換されたか」

「交換というより首です」

もうその組織には要らないと言われて国外へ追い出されたから交換と言うよりは首と言えるな。

「それでその男は？」

「噂だと別の国に仕事で行って敵に食われたと聞いています」

食べられた・・・・訊かない方が良かったと私は思いながらブローニングなどを設置する部下達を見た。

彼等はこれから敵と戦うというのに何処か生き生きとしている。

自信を持ったのか？

しかし、相手は我々より経験があり数も上の傭兵団だ。

それなのに不安は無いのかと思ってしまう。

「お前等、俺らには“守護神”が居るんだ。安心して背中は任せられる。前だけを見て敵を倒すぞ！！」

『おぉ！！』

ヴィン・ルビーが皆に聞こえる声で言い皆はそれに頷いた。

「守護神？」

「リンクスの事です。何度も殿をした上に狙撃手ですから」

「なるほど。見た目とは豪い違いなのに、な」

「人間見た目だけでは判断できないもんですから」

少佐がその例でしょ？と訊かれて頷いた。

「見た目は最悪で性格も最悪だ。だが・・・良い男だ」

「男の俺が惚れるんですから当たり前ですよ」

男のこいつが惚れる、か。

確かにその通りだと思いながらヴィン・ルビーは仲間の士気を鼓舞する事が出来るなと感じた。

第二百三章：前線基地へと（前書き）

第二百三章：前線基地へと

昼頃になったが敵は未だに来ない。

奴等はまだ粘っているのか？

無線で連絡しようとも考えたが・・・下手に無線で連絡してこちらに勘付かれたくない。

しかし、ヘリはどうしたのだ？

向こうは今日来ると言っていた。

もう来ても良い筈。

別に来て欲しくないが、来るなら来いと思う自分も居る。

「そう言えば中尉。飛行機ってどんなのか分かったんですか？」

ヴィン・ルビーが暇つぶしとばかりに煙草を吸いながら訊いてきた。

もう戦いは一先ず終わったし、偵察でも無いから叱る理由は無い。

「あぁ。種類が幾つかあって全て少佐の国が使用していた物らしい」

「少佐の？」

「あぁ。ただし、修理する時間と訓練する時間が掛る。しかも滑走路を手に入れないと駄目だからザンビア平野まで敵を追い出す必要

がある」

「滑走路？」

「飛行機はヘリと違って助走と着地する為に平地が必要だ。ザンビア平野なら出来る」

「そういう事ですか。どんな物か見てみたいです」

「任務を終えたら少佐に頼んでみよう」

これが終わり帰ったら写真を見せると私は彼に告げた。

「ありがとうございます」

彼は礼を言い煙草を親指と人差し指で挟むと口から離し煙を吐きブローニングＭ２重機関銃の握り手をシッカリと握る。

そして敵が来るのをただひたすら待ち続けた・・・・・・

改めて私は砦に築いた装備を見る。

ブローニングＭ２重機関銃が四方に各５挺ずつ配備されている。

更に迫撃砲なども配置し歩兵などの攻撃にも備え基地の外ではＲＰＧとスティンガーが配置されている。

万全・・・とは言えないが、それでも出来る限りの対策だと私は考えているし指示をしたイーグル軍曹もまたそう思っている筈だ。

無い物を欲しがっても意味が無い。

私たちはここを奪い護り切る事が任務だ。

ただし決して無駄死にはしない。

もし、どうしても護り切れないなら一時引くと思っている。

一時の恥ではあるが、それでも再起を賭けて私は逃げて再びここを奪い取る。

そういう気持ちだ。

部下達もまた同じ気持ちであると思っている。

そして未だに来ない敵を待ち続けた。

— — — — — — — — — — — — — — —

―――――――――――――――――――――――――――――――

「今日は随分と粘るな」

俺は煙草を吸いながら上空を何度も飛んでは攻撃してくるワイバーン共を見た。

「まったくじゃ。いやはや諦めが悪いと言うか根性があると言うか・・・・・・」

俺の隣にメジュリーヌが立ち扇を弄びながら上空を飛び続けるワイ

バーンを見た。

「仲間を殺されて怒っているのか果ては嫌がらせで頭に来たのか・・・どちらじゃろうな？」

「どちらもだろうな」

煙を吐きながら俺は答える。

二日連続で嫌がらせを受けた上に仲間の仇を討つという意志があるから、こうも煩い程に攻撃を続けているんだろうな。

「で、フィーナの方はどうであろうな？」

「出来ただろう。だが・・・援軍が来るかもしれないな」

援軍が来る。

それを考えればこいつらがここまで粘るのも別な意味で納得できる。

「あの者たちで大丈夫であろうか？」

「俺が鍛え上げた奴らだ。簡単には死なない」

「そうであったな。それでテツヤよ。妾の出番はあるのかえ？」

「ある。夕方になれば奴等は基地へと帰る筈だ。それを追撃する」

「ほぉう・・・面白いのう」

メジュリーヌは扇を弄びながら笑った。

「奴等を追い掛けて基地から追い出す・・・まるで鬼ごっこじゃ」

どれくらい残れるのか・・・それを思うだけで笑いが止まらないとこいつは言った。

「お前もドが付くSだな」

夜の時もそうだが・・・どうしてこうも俺の周りにはSしか居ないんだ・・・・・・・

「それならば主は超が付くのう。何せフィーナを含め妾達を焦らすのだからな」

「そうか?そんなこと覚えが無い」

あるにはあるが敢えて否定した。

「冷たい男よのう・・・その割にはフィーナとリーザには優しかったが」

「初めての女相手に無茶は出来ないだろ」

実際フィンなど大泣きしたんだからな。

赤ん坊か?と思うほどでリーシャの方がまだ大人しかったのが記憶に新しい。

「そうかえ?それはそうと・・・どうやら援軍が先に着いてしまっ

たようじゃ」

メジュリーヌの声が僅かに殺気を帯びた。

「ハゲタカか？」

「うむ。ヘリが・・・・3機は来ておる」

「3機か・・・・・・・」

俺とフィーナで全て破壊した筈だがまた来るとは・・・・・・・・・

「それでフィン達は？」

「迎撃を開始した。どうする？」

「間も無く夕方になる。奴等が帰る時に打って出る」

ヘリが3機では分が悪い。

更にそこへワイバーン共が帰ったら袋叩きだ。

そうなる前に何とかしないとな。

「リーザ中尉。ブラック・ホークの準備をしろ」

俺は直ぐ横に控えていたリーシャにブラック・ホークの準備を命じた。

まだ1機しかないが、後で注文しておくか。

「了解。行くわよ」

リーシャは部下達を連れてブラック・ホークのある場所へと向かう。

「メジュリーヌ。お前も準備しろ」

俺は煙草を地面に落とし靴底で消しながらメジュリーヌに言った。

「分かった。それはそうと向こうも勇戦しておるぞ」

どうやらフィン達はヘリ3機を相手に勇戦しているらしい。

「被害は？」

「今の所無しじゃ。しかし、時間の問題であろうな」

3機の戦闘ヘリを相手に勇戦しても時間の問題は知っている。

「どれ・・・急ぐか」

俺は更に攻撃を苛烈にしろと命令してからメジュリーヌと共にブラック・ホークのある場所へと向かった。

既にブラック・ホークは発進準備が出来ているのかプロペラを回している。

中にはリーシャの他に入れるだけの人数が入っていた。

「どれ、俺らも行くとするか」

俺はメジュリーヌにドラゴン姿になるように言った。

「了解じゃ。それでどちらが先に出る？」

「俺とお前だ。それからブラック・ホークが続く」

「分かった。では・・・・・・・・」

そう言ってメジュリーヌはドラゴン姿へと変貌して行く。

爪が伸び始め顔が前に出て行くのが眼に見えて映画でも見ているようだ。

しかし、その場面は映画みたいに長くはなく直ぐにドラゴンへと変貌したのが違う所だな。

『さぁ、テツヤよ。乗れ』

俺は直ぐにメジュリーヌの背に飛び乗った。

ＡＫＭを背中に背負い持って来たＦＮ　ＦＡＬのレシーバーを引きセミ・オートのＳにした。

元々は小口径の次世代弾丸－－－５．５６ｍｍＮＡＴＯ弾に相当する弾を撃てるように設計されたがアメリカのゴリ押しで７．６２ｍｍＮＡＴＯ弾を無理やり撃てるように設計し直されたＦＡＬ。

お陰でフルオートでは半端じゃない反動が来るから殆どの国ではセミ・オートだけに限定されっちまった。

だが、俺の持つＦＡＬはフルオートも可能なモデルだ。
とは言え空中でフルオートなんて撃つ気は無い。
こいつはセミ・オートで撃てば抜群の命中率を誇るから奴等を狙い撃ち出来る。
だからこそこれを持つのさ。
『準備は良いか？』
「あぁ。何時でも良いぜ」
『では・・・行くぞ！！』
ＧＲＡＡＡ！！
メジュリーヌが巨大な遠吠えを上げる。
それを聞いたワイバーン共が一瞬だけ震える姿が遠目でも判った。
「まるで親に悪戯を見つけられた子供みたいだ」
例を上げるならこれが一番合うな。
『当たり前じゃ。妾から見ればあんな奴等・・・ヨチヨチ歩きからやっと立ち上がる事が出来た赤ん坊に等しい』
「それはお前の目線から見たらの話だ。俺らから見ればあれでも十

分に大人であり脅威だ」

『安心せい。あの餓鬼どもをタップリと仕置きをしてやる』

そう言ってメジュリーヌは巨大な翼を広げ一回だけ翼を上下に振っただけで空中へと舞い上がった。

『ど、ドラゴン・・・ドラゴンだと!!』

ワイバーンに乗る者たちはメジュリーヌの姿に唖然としワイバーン共は逆に怯えたかのように鳴き出した。

『んふふふふ・・・良い声で“泣く”のう。妾が現れて喜んでおるのじゃな?では、これからタップリと貴様等を教育してやろうではないか』

完全にSモードに入っているメジュリーヌに乗る俺は煙草に火を点けて1角のワイバーンに乗る女ーーーマーズを見た。

あの女もまた初めて見るドラゴンに驚いていたし1角のワイバーンも驚くと同時に震えていた。

「あいつも震えているな」

『あの者が一番歳若いから尚更じゃよ』

「あいつが一番若いのか?」

『うむ。あれが歳若い分反動も大きいようじゃ』

「景気付けだ。ブレスを吐いてやれ」

『分かった・・・・スゥッ』

メジュリーヌが息を吸う音が聞こえワイバーン共は何をするのか分かったから乗り手に構わず背を向けて飛び始めた。

動物の本能で、な・・・・・・

ＧＲＡＡＡＡ！！

遠吠えと同時にメジュリーヌは巨大な炎の玉を口から放った。

『旋回！！』

マーズが叫び旋回する部下達だが何人かは間に合わず跡形も残さず消えた。

数で見れば５００居た内の２００と言った所だな。

大した威力だと思いながら俺はメジュリーヌに言った。

「このままフィン達の所へ行け」

『了解じゃ』

メジュリーヌは翼を再び軽く動かして悠々と前進し、その後をブラック・ホークが追い掛けて来る。

さぁて、あいつらはどうしているのか・・・・・・・・

俺は煙草を銜えてフィン達がどうなっているのか空中の上で考え始めた。

第二百四章：ハゲタカＶＳ親衛騎士団

「ブローニングを撃ち続けろ！後の者は援護射撃だ！！」

私はヘリに向かってドラグノフＳＶＤの引き金を引き続けながら命令を下した。

とは言っても高空で飛行しているヘリに対して小銃などの攻撃では意味が無い。

それでも奴等に対して攻撃を続けさせる。

奴等は高度で地対空ミサイルやバルカン砲で一方的な攻撃をしてこちらへ近づこうとしない。

こちらの被害は今の所怪我人だけで砦が燃えていたりしているだけだ。

しかし、奴等がその気になればこんな砦木っ端微塵に出来るだろうに・・・・・・・・

何故かと思ったが元々ここに砦を建てたのは前線基地として運用する為だ。

ならば出来る限り壊さないようにしているという事か。

それにしても高度からしかも離れて攻撃してくるから厄介な事この上ない。

恐らくスティンガーなどの攻撃を予想して高高度からしかも離れて攻撃しているのだろうが。

あの男――ハゲタカの兄が戦死したから弟が指揮を執っているのかもしれないが、もしそうなら学習能力がある。

いや、弟ではない誰かが指揮を執っているのかもしれない。

あの様子を見る限りとてもじゃないが指揮を執れる訳ない。

それとも私のように下士官などが助言しているのかもしれないな。

どちらにせよ私たちから言わせれば厄介な事この上ないが。

ヘリが来ると言う情報は既に敵が愚かにも大声で公言してくれたお陰で分かっていた。

それが何時なのかは分からずに警戒を続けていた最中に敵は来た。

ヘリを3機引き連れて。

コンドル軍団の長をしていたあの男が操縦していたＡＨ－６４　アパッチ攻撃ヘリが2機。

この2機に護られるように後方にはＣＨ－４７チヌークが1機居る。

あそこには恐らく空挺部隊が乗っている筈だ。

アパッチ2機で攻撃をしながら頃合いを見計らってこちらへ降下するのか、または我々を全滅させてから降下するのかは分からない。

しかし、ここで負ける訳にはいかない。

『軍曹。まだか？』

私は無線機でイーグル軍曹に連絡を取った。

『今やる所だから待ってな』

「速くしろ。こちらだって限界があるんだぞ」

『へいへい。おい、撃て』

何処までも能天気そうな声で命令するイーグル軍曹。

何か秘策があるのか？と思ったがどうなのだろうか・・・・・・・

などと考えている内にＲＰＧが発射された。

ＲＰＧはイーグル軍曹が注意したように後方噴射－－－バックブラストが激しいから敵に発見され易い。

他にも風の強弱で弾が逸れるなど欠点はある。

だから、それを補う為に目標物に対して複数の方角から同時にまたは少し遅れて発射するのだ。

１発目が発射され３機はそれぞれ別方角へと移動する。

そこへまた別方角からＲＰＧが発射され攻撃を一時的にだが中断し

た。

これならスティンガーを撃てると思ったが、未だに撃たれていない。

何か遭ったのか？

それとも何か狙いがあるのか？

などと考えていると・・・・・・

ＧＲＡＡＡ！！

ワイバーンの遠吠えが聞こえてきた。

だが何時もと違う。

・・・まるで何かに追いかけられて泣いているように聞こえるのは錯覚か？

背後を振り返るとワイバーンが見えた。

こちらに飛んできているのが見えるが同時に背後から追う様に飛んでくる物が居る。

あれは・・・・・・・

「メジュリーヌか・・・・・・」

ドラゴン・・・騎士物語には必ずと言って良い程に出て来る悪役の定番と言える。

ドラゴンをこの眼で見る者はそう居ない。

何せドラゴンは疾うの昔に絶滅したというのがここ5大陸の中では常識として捉えられているのだから。

しかし、目の前――背後から飛んでくるのはドラゴンだ。

そのドラゴンの名はメジュリーヌ。

テツヤの正妻を名乗り私を指一本で打ち倒し・・・色々と教えてくれる女だ。

今はドラゴンの姿となりその背中には一人の男が乗っている。

「・・・テツヤ」

そう・・・ドラゴンになったメジュリーヌの背中に乗り大きなライフルを撃っている男はテツヤだ。

そしてその背後にはブラック・ホークが付いて来ている。

ワイバーンはメジュリーヌから逃げていたのか。

しかし、ここには私たちが居るし前方にはヘリも居る。

要は挟み打ちという形になる。

『団長っ。あいつら砦を乗っ取ってますよ!?』

ワイバーンに乗った傭兵の一人が私たちが前線基地に居る事に驚き声を荒げる。

『ちっ・・・おまけにハゲタカ共まで居るとは・・・全員、首都まで逃げろ。ここに居ても無理だ。態勢を立て直すぞ！！』

1角のワイバーンに乗った女傭兵一一一私の獲物は部下達に命令しヘリ達の間を抜けるようにして首都へと飛んで行く。

ヘリは突然ワイバーン達が帰って来た挙句に擦り抜けてきた事から混乱した。

そこへスティンガーを撃ち込まれるから堪らない。

1機のアパッチにスティンガーが撃ち込まれる・・・しかし、墜落はせずに黒い煙を出しながらも逃げ始めた。

残り2機も態勢を立て直す如く逃げ始め・・・消えて行った。

「・・・何とかなった、な」

私はドラグノフＳＶＤの銃口を下に向けて一息吐いた。

そして上を見上げる。

メジュリーヌが悠々と下へと降りて来る。

スンナリ着地すると直ぐに人型へとなった。

「ふぅ・・・良い仕置きが出来たのう」

と人型へ戻ったメジュリーヌは息を吐きテツヤ――少佐にもたれ掛る。

「貴様は、なぜ何時もそうやってテ・・・少佐にもたれ掛る」

何だか苛々して私はついテツヤと呼びそうになったのを抑えて少佐と言い直しながらメジュリーヌに話し掛けた。

「妾は疲れたのじゃ。だから、こうしてテツヤにもたれ掛っているだけじゃ」

それはそうと、とメジュリーヌは上を指差した。

「早く退かないと潰されるぞえ？」

ハッと上を向けばブラック・ホークが頭上に居て降りている途中だった。

慌てて移動する。

それを見計らってブラック・ホークは着地した。

「では、フィーナ中尉。報告を頼む」

少佐はもたれ掛るメジュリーヌを払うように退かすと私の前に立ち報告を求めてきた。

「はっ。無事に砦は奪い取れました。ですが、負傷者は多く援軍が必要かと存じます」

「他には？」

「また対魔法防御を施した上で対空・対地攻撃用の兵器なども増援願います」

「分かった。それでは直ぐに負傷者たちを手当てしろ。それから壊された部分などを確認し応急修理しろ」

「了解しました」

私は敬礼し直ぐに衛生兵に負傷者の手当てなどを命令してから壊された個所などを数人の部下と共に確認する。

地対空ミサイルで攻撃された部分は大きな穴が開きバルカン砲で破壊された壁の部分は新しくした方が良さそうだ。

「しかし、あれで攻撃されて誰も死人が出ないで助かりましたね」

部下の一人が安堵するように言った。

そう・・・私たちの内死者は誰も居ない。

重傷者などは居るが、それでも死者が居ないのは幸いだ。

「そうだな・・・恐らく我々を弄ぶ気だったのかもしれん」

ハゲタカ共の事だ。

我々を疲れさせた所で止めを刺すという手法を考えていたのかもし

れない。

もし、そうならば勝機を自ら逃がした事になるし後でシッカリとその“ツケ”を払ってもらう。

「奴等明日も来ますかね？」

「どうだろうな。態勢を立て直すと言ってはいたが、そうなればこちらにも時間を与える事になる。それは向こうとしては避けたい所だろう」

「となればヘリだけで攻撃も有り得ると考えているんですか？」

「それも有り得なくはない。ただし、ヘリはＲＰＧやスティンガーなどで狙われる。となれば空挺部隊などを下ろし地上戦もする可能性があるな」

「となれば、今日中に修理と対魔法防御は施さないといけませんね」

「あぁ。そうと分かれば直ぐにでも修理に取り掛かるぞ」

『はっ』

部下達は敬礼をして手が空いている者達に声を掛けて修理をすると言った。

それを見ている間に少佐達はイーグル軍曹達が合流する形で現れ何やら話し始めている。

気になってそちらへ足を運ぶ。

「どうしたんだ?フィーナ中尉」

「何を話していたんですか?」

「あぁ、ここへどれ位援軍を派遣するかだ」

「決まったのですか?」

「まだだ。それでそちらの方は?」

「はっ。バルカン砲などで破壊された個所は直ぐにでも新しくします。ミサイルで破壊された場所は埋めるしかないです。それから対魔法防御と対地・対空の兵器は今日中に配備したいです」

「分かった。対空砲とブローニングを更に注文しておく」

「ありがとうございます。それで少佐はお帰りになりますか?」

「一度帰る。お前等はここで警戒を続けろ。夜に増援を送る」

「了解しました」

私は敬礼をしたが、心の中では少佐ーーーテツヤが帰ってしまう事に対して若干の悲しみを覚えた。

だが、今の状況を考えるとそんな物は心の片隅にでも押しやるしかない。

第二百四章：ハゲタカＶＳ親衛騎士団（後書き）

誤字があったので訂正します。

第二百五章：お約束の展開

ブローニングM2重機関銃と対空砲などを注文してから少佐達を乗せて帰るメジュリーヌ殿を私は見送った。

もう夕方だが、もう直ぐ夜となる・・・・・・・

寒さも一段と厳しくなってきたので煙草を銜えて火を点けた。

手で火が消えないように覆い込むと僅かに温かい。

「さぁて、これからが勝負だな」

イーグル軍曹も私と同じように煙草を吸い独白した。

「ですね。夜襲は・・・あり得ますかね？」

「有り得なくはない。だが、被害は大きくなるだろうし態勢を立て直す可能性もある」

「ワイバーンの方は態勢を立て直す可能性が高いですね」

マーズ自身が態勢を立て直すと言ったのだから態勢を立て直す筈だ。

恐らく被害を先ず確認しそれから装備や作戦を変えるだろう。

いや、その前に何か言われるだろうな、と関係ない事を思う。

「さて、俺らは夜営の準備だ」

イーグル軍曹は話題を切り上げて夜営の準備を始めた。
小屋の方も被害が受けて屋根が半壊してしまった。
だから、外でテントを張りそこで寝る羽目になったのだ・・・・・・
テントを張り始めているとヴィン・ルビーと仲間達が話し掛けてきた。
「よぉ、守護神」
「守護神？」
彼の言葉に私は首を傾げた。
「お前さんの渾名さ」
「私の？」
守護神が私の渾名とはどういう事だ？
「お前さんは殿を何度も経験しているし、俺達の背中を護ってくれる。だから守護神なのさ」
そりゃ殿を経験したが、そんな守護神なんて偉そうな渾名は少し恥ずかしい。
「私はそんな大層な者じゃないですよ」

「いいや。お前は大した奴だよ。俺らをここまで成長させたんだ」

そう言って彼は煙草を銜えて火を点けた。

「所で飛行機というやつを知っているか？」

煙を吐いてから彼は訊ねてきた。

「えぇ。少佐の話で聞いた限りですが」

「どんな物だ？俺にも乗れるか？」

「飛行機には適性がある」

イーグル軍曹がテントを張りながら答える。

「戦闘機、爆撃機など色々と種類があってその適性に合う物に乗るのが基本だ」

しかし、志願制でもある。

つまり適性も大事だが問題は本人にやる気があるのか無いのかという違いだ。

やる気があればある程度の事はこなせるが、やる気が無ければ何も出来ない。

やる気が無いのなら幾ら適性が良かろうとこちらから要らないと言う。

そう言った事も考えると彼にも操縦できる確率は高い。

「そうか・・・俺にも操縦できる物があると良いが・・・・・・」

「数はそれ程ある訳じゃない。だが、飛行機の数より搭乗者の数は倍以上を確保するもんだ」

これには理由がある。

飛行機は物だ。

だから、失っても大して痛くは無い。

失礼な言い方だが、その通りなのだ。

所が人は代わりがそう居ない。

特に飛行機乗りを育てるには時間と金が掛る。

そのためベテランを失えばかなり痛い。

それを補う為に飛行機の数より人数は倍近く確保する。

そして練習を重ね全員が上手く乗りこなせるようにするのが望ましいようだ。

「なるほど。そういう事ですか」

ヴィン・ルビーと仲間達は軍曹の説明を聞いて納得した。

「それはそうと、大工仕事は出来るか？」

軍曹は彼等を見ずに訊ねた。

「いや、まったく」

ヴィン・ルビーと仲間達は首を横に振りなぜ訊くのか？と首を傾げた。

「今から覚えろ。あの屋根を直すんだ」

軍曹は半壊の屋根を指差した。

「あのヘリが半壊してくれたお陰で今夜は寒い中をテントで寝る羽目になりましたからね」

ヴィン・ルビーは半壊した屋根を見ながら嘆息した。

「そうだ。まったく半壊にするなら全壊にしろってんだ」

そうすれば最初から建て直すからある意味では気持ち的にも楽だ。

それが半壊となるとどうも気持ち的に嫌だ。

「まったくその通りだぜ。それはそうと少佐達は今夜中に来るよな？」

「旦那が来ると言ったんだ。必ず来る」

断言した軍曹はテントを張り終えると短くなった煙草を地面に捨て

靴底で揉み消した。

「それはそうと怪我人の状況はどうなんだ？」

「全員、命に別条は無いらしいぜ。よくもまぁあんな攻撃で死なずに済んだと口を揃えて言っていた」

「それはあいつ等が俺達を弄んでいたからだ」

軍曹はさも何でも無いとばかりに言ったが彼等にとっては重大だったらしく眉を顰めた。

「・・・死ぬ直前まで痛め続けて止めを刺す、って事か」

彼の言葉に軍曹は頷き、ある程度は想像できたが胸糞悪いと私は思いながら唾を吐いた。

「あぁ。アパッチは空飛ぶ戦車の異名を取る人狩りマシーンだ」

その気になればこんな砦一溜まりも無く破壊できる。

それなのにわざわざあして時間を掛けている事から相手を痛めつけている事が理解できる。

それ以外にもせっかく建てた砦をまた一から作り直したくないというのが理由でもあるだろうが。

「胸糞悪いと思う反面で助かったと思いますよ」

「俺もだ。しかし、あの様子からしてまだ有りそうだな」

「こちらもヘリを用意するべきですね」

「その点は旦那も考えているさ。しかし、先ずはここを直し更にもう少し手を加えないといけないな」

ここ更に拠点とし首都を奪回するのだから。

「どのように手を加えます？」

「もう少し広くする。ヘリが何機か――最低でも3機ほど入れる部分が欲しい。それに天馬等も入れる小屋を考えると尚更だな」

確かにその通りだ。

現在の大きさではヘリが1機ほど入ればもう一杯だ。

後もう少し欲しい所だ。

となれば直す部分を中心に広くするべきか？

どちらかと言えばそちらの方が効率的には良いかもしれないな。

「だったら、壊された個所を重点に広くする――改築した方が効率的には良いんじゃないか？」

ヴィン・ルビーは私の考えていた事を口にして私も同意した。

「やはり壊れた個所を重点にした方が効率的には良いです」

「しかし、材料を一から手に入れないと始まらないな」

新たな煙草を銜えて軍曹は言い、それがあったかと二人して肩を落とす。

「これは材料も後で注文しとかないと駄目だな」

その通りだと私と彼は思いながら煙草を銜えた。

煙草を2本ほど消費した所で再びドラゴン姿になったメジュリーヌ殿に乗った少佐が戻って来た。

「魔術師を連れてきた」

先ほどブローニングM2重機関銃などは注文し配備したが、まだ対魔法防御は施していない。

これは魔術師が居なければ出来ないから連れて来るためにどうやら少佐は戻ったようだ。

現にメジュリーヌ殿の背中には魔術師が何名か居た。

魔術師を見るのは初めてだ。

獅子頭軍団に所属する彼等だが殆ど面識は無い。

というのも彼等は殆ど顔を表に出さないし接触を避けるからだ。

何でも知識を求めるため日がな一日ずっと部屋に閉じ籠り部厚い本と格闘しているというのが噂で広まっているから。

まぁ実際の所は不明だ。

魔術師達は黒いローブを頭から被っており如何にも、という印象を受けてしまう。

夏でもあんな格好で暑くないのか？と問いたくなるのは私だけではあるまい。

魔術師達は無言でメジュリーヌ殿から降りると砦の四方に散って詠唱を唱え始めた。

何が何だかチンプンカンプンで理解不能だが、何か起きているのかは判る。

詠唱を唱えていると直ぐに砦を覆い尽くすように真空の光が包み込む。

これが結界一一一対魔法防御というやつなのだろう。

まさかこの眼でこんな所を見れるとは思いもしなかった私達は驚きを隠せない。

しかし、そんな中でイーグル軍曹が何故かソワソワし始め一人の魔術師をずっと見ていた。

・・・何だか凄く嫌な予感がする。

嫌な予感と言っても、この方の事だからどうせ碌な事をしないという感じの予感だ。

「ねぇ、ランドルフ君。軍曹なんか変だよね？」

チャレンジャーが小声で私に訊いてきた。

「うん。何だか変だよね？というか眼が獣の眼になってるよ・・・・・・・・・」

あんな眼差しをするという事は・・・・・・・・・・・・・

『あの魔術師が女という事』

この人がこんな眼差しをして一人の人物を見るなど戦の時以外は女性だ。

私とチャレンジャーは気付かれないように取り抑えられる位置に立つ。

少佐をふと見れば少佐もまた保険とも言える場所に立ち止める準備をしている。

『・・・上官にまでこんな風に予想されるとは』

つくづくこの世の者とは思えない女好きだと思ってしまう。

そして詠唱が終わるや否や・・・・・・・・・・

「お嬢さぁぁぁぁん！俺と一夜のアバンチュールをおおおおおお！！」

『予想通りだ』

私とチャレンジャーは口を揃えて言いながら軍曹を取り抑えに掛ったが、今回は向こうの方が一枚上手だった。

「甘いっ！！」

あっという間に私とチャレンジャーを捻るとそのまま突進する。

だが、そこには少佐が居る。

「旦那、今度ばかりは邪魔しな・・・・グゲッ！！」

蛙みたいな悲鳴を上げて軍曹は地面に倒れた。

上には大きな尻尾が乗っている。

『まったく・・・何と情けない獣か』

メジュリーヌ殿がドラゴン姿のまま嘆息した。

魔術師たちは軍曹の様子に唖然とし親衛騎士団の面々は「やっぱり」という感じだったのが印象的だ。

かく言う私とチャレンジャーも「お約束の展開」と思わずにはいられなかったが。

第二百六章：最悪の出会い

史記を書く私と妻の内3人が茶を飲んでいるとドアが叩かれる音がした。

「誰だい？」

「私よ・・・“坊や”」

坊や・・・この言葉を言う妻は一人しか居ない。

私は苦笑して「どうぞ」と言い入るように促した。

すると直ぐにドアが開き妻の1人が入って来るのが背中越しに確認できた。

孫も一緒だが寝ている。

「この子ったらしがみ付いて離れないのよ」

孫はスヤスヤと眠りながら妻の服に手を回し離そうとしない。

「甘えん坊だからね。その子は」

孫たちの中でも一番の甘えん坊かもしれないと私は言いながら差し出されたコーヒーを口にした。

「何処まで書いたの？」

「イーグル軍曹殿と奥方様の一人が出会った場面だよ」

徹夜様を始め４人一一一四獣の方々は皆結婚した。

特にその中でも目立ったと言えば良いだろうか？

イーグル１等軍曹は女性に関しては事の他目立った。

何せ徹夜様以上に大勢の女性を侍らせて暮らしていたのだから無理も無い。

正確な数は不明だが“一夜限りの妻”も入れると優に１００人以上は居ただろう。

あれだけ好色の塊、性欲の権化、飢えた獣、などと有り難くも無い渾名を１０以上は持っていて恐らく一生独身だろうなと思っていたが・・・・・・・

人生とは分からないものである。

一人目の奥方一一一ご本人は「第一妻」という事を自負しておりイーグル軍曹に「もっと女が欲しいなら抱いて物にしなさい」と諭し女好きを認めたのだ。

そこからはまるで火が点いたように妻を娶った経緯がある。

とは言え最初は物凄く最悪と言える出会いをした訳だが・・・・・・・

「あぁ、あれ？」

妻は思い出したように声を出す。

「あれは酷かったわね。イーグル軍曹ったら人前も憚らずに一夜の火遊びをなんて誘うんだから」

もう1人の妻――私の観測手を務めた妻もその場に居たからあの場面は目撃している。

「どんな場面だったんです？」

妻の2人はその場に居なかったから興味津々だった。

「今から書く内容だけど・・・・・・・・」

私はコーヒー・カップを持ちながら、史記を書く前に昔を思い出すように話し出した。

メジュリーヌ殿の尻尾で取り押さえられた軍曹は縄で縛られた末に首だけを残し埋められると言う状態にされた。

まるで生き埋めだがそれでも生きるだろうな・・・この方は、と思ってしまうほど回復力と生命力が半端ではない。

だからこの程度で死にはしないと確信している。

話を変えると襲われそうになった当の魔術師はと言うと・・・・・・・・

「は、離せ！離して！あいつを生きたまま焼き殺すのよ！！」

仲間に取り押さえられながらイーグル軍曹を睨んでいる。
フードを被ったままだが、声から察するに２０代前半から半ばと言った所か。
それにしても焼き殺すとは穏やかではない。
「お堅いなー。どうして堅いんだ？」
首だけの状態だと言うのにふざけた調子で喋るイーグル軍曹に私とチャレンジャーは心底呆れ果てた。
「あなたが異常なのよ！！この獣！！」
「獣は否定しないけど、人前なのに顔を見せない君はどうなんだい？」
そちらは失礼だと珍しく正論とも言える言葉を吐く軍曹に私たちは驚いた。
「・・・別に良いでしょ」
「良くないね。少なくとも初対面でそれは相手に不快感を与えるぜ。お嬢ちゃん」
首だけしか地面の上にない男にこうも正論をズバズバ言われる相手はどんな気持ちだろうか？と変に興味を抱いてしまう。
「う、煩いわね！それよりもう対魔法防御は施したわ。帰らせて」

魔術師はもう付き合い切れないとばかりに少佐へ帰ろうと言った。

「分かった、と言いたい所だがあんた等には残って貰うぞ」

ここで戦ってもらうと少佐は言った。

「どういう事ですか？」

「そのままの意味だ。向こうにはあんた等の仲間が居る。だが、ここには居ない。一々修復する度に呼んでは手間が掛る。だからここで戦ってもらう」

他の魔術師達はそれが普通だな、と思っているようだがこの人だけは違うらしい。

「何ですかそれは？！私は防御魔法を張れと言われたから来たんですよ。それなのにここで戦えなんて・・・・・・・」

「あんた等だって戦う身だろ？仲間の仇を取りたくないのか」

「そ、それは・・・・・・・」

少佐の言葉に魔術師は言葉を続けられなかったが、少佐は更に続けた。

「だったら部屋に籠って本ばかり読んでないで少しは汗水垂らして働け」

最後には説教に近い言葉となったが、本当の事だから皆は何も言わ

なかった。

「・・・分かりました。ただし、この男を厳重に処罰する事を要求します」

首だけの状態で居るイーグル軍曹を睨むように指差し要求する魔術師に少佐は頷いた。

「それは分かっている。今日一日はこの状態で放っておく」

「そ、そんな！！」

軍曹はあんまりだと訴えたが少佐は「半殺しにされるよりマシと思え」と言い話を打ち切った。

そして私たちはそれぞれのテントへと入り休む。

少佐とメジュリーヌ殿は半壊の小屋へと行きそこで魔術師と共に休む様だ。

「おーい、リンクスー、チャレンジャー、助けてくれー」

気の抜けるような声で私とチャレンジャーに助けを求めるイーグル軍曹に私たちは無視を決め込んだ。

テント越しだが、どうしても顔が浮かんでくる。

気を紛らわす為に銃などの手入れを始めたが、その間も「助けてくれー」という情けない声が聞こえてきた。

「煩い男だな・・・・・」

猟犬は自分の爪を丁寧に擦りながら犬耳を下ろした状態で眉を顰める。

実に犬みたいだ。

「自業自得なのに懲りないからいけないんだけどね・・・・・・」

私はモーゼルを布で拭きながら猟犬の言葉に相槌を打つ。

事実あの人には学習能力という者がまるで無いのだ。

学習能力さえあればもう少しマトモな男だろうに・・・・・

「しかし、あの男の鼻は女に関しては我より上だ」

「君より？」

「あぁ。我は奴が気付くまで女と知らなかった」

これに私たちは驚いた。

「何か性別を隠す薬品でも使用しているのかもしれんな」

だから、狼人である彼にも判らなかったという。

「女限定というのはどうかと思うけどね」

「そうだな。まぁ、あれでは女と添い遂げることなど出来ないだろ

うな」

『言えてるね』

私たちは口を揃えて断言した。

しかし、これが聞こえていたようで・・・・・・・・・・・・

「てめぇら！よくも俺を虚仮にする言葉を言ったな！覚えてろ！！」

とまぁ・・・少佐の言葉を借りるなら「今時の悪役でも使わない言葉」を叫んだ。

誰も気に止めないのが悲しい所と言えば悲しい所だが。

そんなこんなでヘルメス作戦は無事に遂行されて首都への道が近付いた。

一歩ずつだが確実に歩み必ず奪還してみせる。

そう私は決意しながらモーゼルの逆Ｌ字型のボルトを戻した。

銃の手入れを終えた後は携帯食料で夕食を取る。

猟犬の場合は生肉でそのまま齧るのだが、それを見ながら食べられるほど私たちは神経が太くないから見ないようにして食べた。

その間もイーグル軍曹は「腹減ったー」とか「飯より女を食わせろー」などと情けない声で不平不満を言い続ける。

しかし、誰も気にしない。

もう慣れてしまったのだ。

今回は潔く罰を受けてもらおうと思いながら私はフォークで肉を刺して口元へと運んだ。

交代の時間まで私たちは眠る事にしたのだが・・・・・・・・・・

「おーい、顔が痺れてきたー。何でも良いから温かい物をくれー」

頭を向かせた方角から声がするから中々寝付けない。

しかも、こうもしつこく言われると本当に夢で見そうだから怖い・・・・・・

とは言えそれも慣れてしまうと直ぐに眠れたのだが。

第二百七章：軍曹の愚痴

私は肌寒い雪の中で見張り台にチャレンジャーと共に立ち警戒していた。

雪こそ降っていないが、やはり冬である以上は寒いものだ。

「明日はどう出るかな？」

チャレンジャーは火を点けた煙草を手で覆い温めながら私に訊ねてきた。

「少なくとも2～3日は来ないと思うな」

ヘリは破壊していないが、手傷を負わせたから直ぐには来れないと見て良い。

となれば歩兵だけで攻めて来る可能性も捨て切れないな。

「ワイバーンの方は態勢を立て直すのに時間が掛るだろうね」

「そうだね。でも、その前に契約を破棄される可能性だってあるよ」

あいつ等は雇われ兵だ。

依頼人の考えに従う事が求められる。

もし、逆らえば即座に契約破棄を申し立てられても文句は言えないのだ。

あの男ーーー蛇が果たしてどう出るのかは不明だが、怒られる事は確実とは何となく分かる。

「敵も厄介だけど、この寒さも堪えるね」

「本当だよ。幾ら寒くないようにしてもずっとこうしていると風邪を引きそうだ」

「でも、風邪を引いたら引いたで看病してくれる女性(ひと)が居るよね」

「確かに・・・・・」

私はそれに頷いたが、オリガさんの言葉が頭をふと過った。

『私以外の女と付き合って自分を磨きなさい』

私が自分に自信が無いから心配だとオリガさんは言い自分以外の女性と付き合ってみろと言った。

一度はそれが良いとさえ思ったが、やはりどうも抵抗がある。

「オリガさんに何か言われた?」

チャレンジャーは私の様子が可笑しいと思ったのか訊ねてきた。

「実は・・・・・・」

私は彼にオリガさんの事を言うと彼もまたレイテさんから似たような事を言われた事を私に言ってきた。

「それで君としてはどう考えているんだい？」

「正直・・・困っているよ」

「私もだよ」

二人揃って同じ問題を抱えながら何も解決策が見つけられないから困り果てた。

そこへ・・・・・・・・

「よぉ、お二人さん」

イーグル軍曹の声がすると同時に首を羽交い締めされた。

『グゲッ』

2人揃って蛙のような悲鳴を上げて呻くが、腕は更に強まって逝く。

「さっきは随分と言ってくれたなー。おまけに返事もしないで・・・覚悟は出来てるんだろうな？」

『ググググ・・・・・・・・』

何とかして脱出しようとするが駄目だった。

「さぁて・・・どうするかな？」

軍曹はさも意地悪そうな声を出していたが唐突に解放してくれた。

「まぁ、冗談はこれ位にしておくか」

私とチャレンジャーは解放されて改めて軍曹を見た。

どうやって抜けたのかは知らないが、全身泥だらけだ。

「どうやって出たんですか？」

シッカリと固めたのに・・・・・・

「コツがあるんだよ。それはそうと可愛い魔術師ちゃんは？」

「小屋です」

「そうか。ローブで見えなかったが声から察するに知的な勤勉タイプだな」

しかも、男と付き合う事を極端なまでに嫌うほどの潔癖症で恐らく父親も毛嫌いしていたに違いないと推測してみせる。

「何でそれだけ推測できるんですか？」

「ああいうタイプの女子を何度か見たし声である程度は判断した」

これを聞いただけでどれだけナンパをしてきたのか分かる気がしたのは気のせいではないだろう。

「で、何か女の事で相談してたんだろ？」

「・・・聞こえてましたか」

「お嬢ちゃん達には聞こえてないないから安心しろ」

軍曹は私の言葉に笑みを浮かべて答え煙草を銜えた。

「あの、相談を聞いてもらえますか？」

「そうだな・・・魔術師のお嬢ちゃんと仲良くなる為に力を貸すという条件付きでなら聞いてやる」

『・・・お願いします』

私とチャレンジャーは顔を見合わせてから頭を下げた。

何だかんだと言っているが、この男は私たちより経験豊富だ・・・良い意味でも悪い意味でもだ。

だから、この場は相談する事にした。

「・・・なるほど。好きな女から他の女と付き合えと言われたか」

軍曹は煙を吐きながら頷き顔を天井に向けた。

「まぁ、お前等二人揃って年上の彼女だから、そう言われたのかもしれんな」

「どういう事ですか？」

「そのままの意味だ。お前等は男として未熟だ。だから自分に自信

を持てないんだよ」

ではどうするべきか？と言えば経験を積むしか道は無い。

「彼女達は了承してるんだろ？だったら、遠慮なく経験を積めば良い」

裏切る形に取れなくもないが、向こうが了承しているのなら然して問題ではない。

何よりそれを言われたという事はもっと自分に自信を持って魅力的になれという意味合いも含まれていると説明された。

「お前等二人は女から可愛がられているんだ。お前等が少しでも「異性」として見ている所を見せてみろ。直ぐに落ちるぞ」

あまり褒められた物ではない。

それでも私とチャレンジャーはそれを聞いて頷いた。

「特に天馬騎士のお姐ちゃん達なんてお前等を可愛がってるだろ？」

ならば、お姉様達を相手に経験を積むべきなのか？

「まぁ、俺が言えるのはこんな所だな。後はお前等と付き合う女の問題だ」

そう言われた私とチャレンジャーはどうするか未だに答えを見付けだす事が出来なかった。

しかし、軍曹の助言で少しだけだが答えを見つけるのに役だった気がする。

やはりこういう色恋沙汰は軍曹に訊くのが一番だと思う。

「さて、今度は俺の番だ」

約束は果たしてもらうぞ?と言われ私とチャレンジャーは頷く。

「具体的にどんな事をすれば良いですか?」

「そうだな・・・まぁ、俺の良い所をサラッと言え。あからさまに褒めるなよ?サラリと本当に流れる感じで言え」

その方が自然だと言われたが・・・・・・・・・

「だったら、今の言動を控えれば良いのではないですか?」

元々この女好きさえ抑えればマトモな女性付き合いは出来る筈だ。

「俺に女好きを抑えろだと?出来る訳ないだろ」

そんな自信満々に言える事ではないでしょうに、と思いながらも私とチャレンジャーは力になる約束をしたから出来る限りの事はしようと思った。

「あのお嬢ちゃん・・・顔は見ていないが、是非ともお近づきになりたいんだよ」

珍しく執着するような言葉に私とチャレンジャーは驚きを隠せなか

った。

何時もならこの女が駄目なら他の女へというのが当たり前なのに・・・・・・・

「軍曹って、ああいう女性がタイプなんですか？」

顔こそ見ていないが軍曹の推測が正しければ“落とすのが難しい”女性と言える。

「落とし甲斐のある女ほど燃えるんだよ」

そういう物かと私とチャレンジャーは思うが、軍曹が言うのだからそうなのだろう。

「ああいう女ほど落としたら後はこっちの物だ。どう調教しようと思いのままだ」

『・・・・・・・・』

私とチャレンジャーは変態発言に閉口したが、些か不謹慎だがその言葉に惹かれてしまった事は否定できない。

「まぁ、女の話は置くとして、だ。お前等は天馬に乗ってどう思った？」

いきなり天馬に乗った時の感想を訊かれ戸惑ったが、何かあると思い答えた。

「メジュリーヌ殿に乗った時よりはかなり楽でした」

一度切りだが、あれだけで十分過ぎる経験をしたと思っている。
いきなり急降下されてはもう乗りたくないと思うのが自然だ。
「だろうな。だが、お前等も飛行機とヘリの操縦は覚えてもらうぞ」
皆がそれを操縦できるようにするのが望ましいから、と軍曹は説明してくれた。
「難しいんですよね？」
「まぁ最初はな。だが、“オスカー”なら初心者でも扱い易いさ」
「オスカー？」
「隼のコード・ネームだ」
何でもアメリカは少佐の国が作った軍用機に男性と女性の名前を区別して名付けたらしい。
「あーあ、何で旦那の国ばかり出るんだよ・・・俺の国も出してくれよ」
そう言われても何でそれがここにあるのかさえ分からないのに言われても困る。
何と言えば良いか分からないまま私とチャレンジャーは軍曹の愚痴を黙って聞く事に徹した。

幕間：立て直し

『くそっ・・・くそっ・・・くそっ・・・くそったれが！！』

一角のワイバーンに乗った竜騎士団の団長を務める女傭兵マーズは舌打ちを漏らしながら後ろをチラリと振り返った。

部下達は傷だらけだしワイバーン達もまた傷だらけだ。

これで良く飛べるな、と感心する程の手傷を負っている。

『こんな負けは初めてだよ・・・・・・・』

ここまで完膚無き敗北は初めてだ。

今まで負け戦は経験した事はあるが、それは雇い主の兵が敗走したりするなどで直接的に負けた事は片手で数える位だ。

しかし、それでもここまで酷い負け方をした事はかつて一度も無い。

仲間の仇を討とうと思い勇んで行ったが、仇を討つ所か更に被害が出てしまった。

向こうは見た事もない武器でこちらを攻撃してきた上に雑魚と侮っていた天馬にもやられる始末だ。

その上・・・・・・・・・

『まさか、ドラゴンが居るとは・・・・・・・』

ドラゴン・・・ワイバーン達より遥かに巨大で強力な生き物。

ワイバーンは元々ドラゴンが小さくなり更に知能および力なども大きく衰えた生き物だ。

ドラゴンはその強大な力ゆえに数は少なく大昔に滅び去ったが、ワイバーンは扱いこそ些か難があるのだがそれでも強力な生き物として生存している。

五大陸で空を支配できるのはワイバーン位と思っていた。

だが、現実に自分は・・・自分達は見たのだ。

絶滅したと思っていたドラゴンを。

その巨大に先ず眼を奪われたが、その背に人が乗っている事にも驚いてしまう。

『あの男・・・ドラゴンに乗っていたね・・・・・』

自分が拷問した男――タカミ・テツヤ。

自分と同じく傭兵と言っていたが、詳しい事は知らない。

それでも修羅場を潜り抜けてきた男という事と腹違いの姉が豪く気に入っている事は分かっている。

その男がドラゴンの背に乗り逃げる自分達を追い掛けてきた・・・・・

ドラゴンが吐くブレス・・・ワイバーンが吐くブレスより遥かに大きかった。

恐らくワイバーン５０匹以上の威力はあるだろう。

直ぐに旋回するように命令したが、間に合わなかった・・・・・・

あんな物を受けてしまった部下達は跡かたも無く消え去った。

灰も残さず死んだのだ。

何も出来ない自分を恥じるよりも先にあのブレスに恐怖した。

そして砦まで逃げたが、そこには・・・・・・・・

『・・・フィーナ・マレル。父上だけでなく・・・・・・あたしが精魂込めて造った砦まで・・・奪うとは・・・・・・』

メキメキと歯を噛み合わせながら怒りで我を忘れそうになる。

自分から愛する父を奪ったばかりか、自分と部下が精魂込めて造り上げた砦まで奪った。

許せない・・・・・・

いま直ぐにでも八つ裂きにしたいという激情に駆られてしまう。

しかし、と思う。

『今の状況では無理だ。態勢を立て直さないといけないね』

そう・・・今はこの傷ついた部下達を養い態勢を立て直す必要がある。

『だけど、今度ばかりはあいつ等に先を越されっちまうかね・・・・』

部下達の更に後ろには大きな怪物が居る。

ヘリコプターという代物らしく、空挺部隊の奴等が乗る足と言えた。

『少ししか見ていないが、あれは確かにあたしらより強力だね』

あれは確かに強い。

自分達も負けては居ないと思っていたが、あちらの前では歯が立たないと思ってしまうが、それはあくまで火力が、だ。

『同じ態勢で飛び続ける事は出来るようだけど、案外脆い部分はあるようだし・・・・・・』

ヘリコプターは後ろの回転していた部分を当てられた途端に黒い煙を出して些か動きが変になった。

つまりあそこなどを狙ってしまえばどうとでもなると彼女は判断し使えるとも思う。

ハッキリ言って同業者同士だからと言って仲慎ましく出来るか？と言えば難しい。

気が合えば仲良くするが、気が合わなければ仲良くなど出来ない。
ただ、どちらも人殺しをするに掛けては優れているから出来る限り仲は大切にしようと努めている。
ただし、あの者達は別だ。

同業者ではあるが、自分達とは違う世界から来た様だしおまけに態度も甚だ頭に来る。

こんな奴等と仲良くしろと言われても土台無理な話だ。

しかもどちらも互いに嫌悪して手柄を立てる事に関して固執しているから情けない限りと言える。

「・・・団長。どうします?今ならあいつらを纏めて出来なくはないですよ?」

部下の一人がワイバーンを自分のワイバーンへ近付けて小声で話し掛けてきた。

「止めておきな。万が一の事も考えるとやらない方が良い」

「ですが・・・・・」

「安心しな。ちゃんと先の事は考えているよ」

そう言った彼女は口端を釣り上げて笑った。

それを見て部下は何も言わずに黙り込む。

この団長は性別では女だ。

しかし、彼女の母親ーーー先代もまた女伊達らに5大陸の中に居るワイバーンの傭兵団内では5指に入る実力を誇っていた。

自分は先代からこの傭兵団に居るから彼女の性格は熟知している。

他の者達も何人かは居るが昔より少ない。

怪我を理由に引退、妻子を娶り引退、病死、事故死、戦死などで数が減って行ったのだ。

自分もそろそろ引退する身だとは実感している。

この仕事を最後に引退する身だ。

ただ、今回の仕事はこの傭兵団の最後の仕事とでもある。

この仕事が終われば自分達は傭兵を引退し近衛兵になるのだ。

傭兵が名誉ある近衛兵になれるのか？と疑問に思うかもしれないが、実力もあるし彼女の母親は親衛騎士団の長だった。

だから、その娘である彼女が後を引き継ぐ事には問題など無い。

問題があるとすれば・・・・・・・・・

『今の親衛騎士団の長であるフィーナ・マレルの存在だな』

親衛騎士団の長だった彼女の父親と先代は互いに愛し合っていたが、向こうには妻が居た。

そして子が出来た。

こちらにも彼女が出来た訳だが、世間的に見ればこちらの方が不利の立場に居る。

何より約束を交わした男は蛇だ。

『あの男・・・果たして信用に値する男なのか・・・・・・・』

伯爵の地位にあるが、今の地位では満足していない。

寧ろ更なる高みへと行こうと言う野心が見え見えだ。

そんな男と約束を交わした訳だが、果たして約束を守るのかどうかと言えば疑問としか言えない。

『約束を守らないと考えるのが妥当か』

恐らく働かせるだけ働かせた後は首尾よく暗殺するか、または何らかの難癖を付けて国外退去を命じるか・・・・・・・・

「もしくは名ばかりの役職を与える、か・・・・・・・・」

近衛兵とは名ばかりで事実はただの雇われ兵と考えるのも有り得なくはない。

ただあの男の性格を考えると後腐れなく殺すのが本命と考えられる。

その事を彼女は考えているのか？

先ほどの様子から見ると微塵も考えていない。

若さ故かそれとも個人の感情の為か・・・・・

どちらにせよ厄介だ。

『ここは俺がシッカリしないと駄目だな』

まだ彼女は若い。

団長を務めるだけの実力と魅力は申し分ないが、思慮に些か欠けている。

ならば、それを自分が補い約束を守らせるしか道はない。

『・・・最後の仕事だ。シッカリと働かなくては、な』

引退した先の生活は考えていない。

この仕事を始めたのも親が偶々その仕事をしていたからだ。

ただ引退した親は実に退屈そうな毎日を送っていた事は覚えている。

それを見て自分はこんな生活を送らないと心に誓った物だ。

これが最後の仕事・・・後はあんな生活を送るかもしれない。

いや、それ以前に・・・・・・・・・

『死ぬかもしれないが、それはそれで良いな』

こんな仕事で死ぬのか？と思うだろうが、好きでもある仕事ならそれで死んでも悔いは無い。

シッカリと悔いが残らないように働こうと男は決めて傷ついた仲間達を叱咤し城まで連れて行く今の仕事に専念した。

第二百八章：ドが付く下手くそ

「・・・・とまぁ、これがイーグル軍曹と第一妻である方の出会いだよ」

これを聞いた2人の妻は茫然としたが、直ぐに笑い出した。

「如何にもあの方らしいわね」

「本当です。何せ当時15歳だった私も口説いたんですから」

そう・・・イーグル軍曹は当時15歳だった私の妻を口説いた。

しかし、結果は前のページで書いた通りミーシャ大尉にお仕置きをされて事無きを得たが。

「そこから坊やとチャレンジャー君の奮闘が始まったのよね？」

妻の一人が私に言ってきて私は頷いた。

「そうだよ。いや、あれは奮闘所か大奮闘だよ」

と私は味付けをして場を和ませる。

「そう言えばその翌日に貴方と彼は両頬を赤く染めてたわね？」

「確かにそうね。何が遭ったの？と訊いても教えてくれなかったし」

2人の妻に言われた私はもう昔の事とばかりに教えた。

それを言えば４人揃って「下手くそだったわね」と言われてしまったが、今の歳から言わせれば良い笑いの種だ。

そして笑い合うのだが未だに孫娘はスヤスヤと寝息を立て寝ている。

だが、それで良いと思う。

何れ私が書き上げた史書を読んで知るだろう。

その時、私が居るかは不明だが。

「さて、続きはまた今度だ」

「じゃあ、次は何処を書くの？」

「ヘルメス作戦を無事に達成した後の事――反撃を更に強める所からだよ」

「あそこからか。前線基地を奪った後、改築を始めたのよね」

「あぁ。強化して他の部分にもバンカーなどを造り偵察などを小まめにして敵方の動きを見たんだ」

「でも、可笑しな事に敵の方は暫く――ざっと１０日間程は何もして来なかったのよね」

「何で？とあの時は思ったけど、改めて思えばあそこからリカルド様はもう諦めていたのかもしれないね」

リカルド様は史書に書いた通り処刑された。

志半ばにして死んでしまった事になるが、その志は私たちが引き継ぐ事になったのだ。

だが、それまでは自分が王となりこの国を護ろうと考えていたが、前線基地を奪われた時点でもう諦めていたのかもしれない。

確証は無いのだが、サラ様の演説をヴァエリエで見て聞いて諦めたと思う。

サラ様はこの時点までは女王として欠けていた。

心優しい方だが、打たれ弱い方だった。

だから肝心な所で打たれ弱い体質が悪い方面へと出てしまった。

しかし、徹夜様に何かを言われたのだろう・・・・・・・・

前線基地で行った演説ではもう迷いが無く吹っ切れたように見えた。

実際は生涯を掛けて内乱を起こした負い目を感じていたが、表だって見せていない。

そこが違う所だと思いながらその場を史書に書き写す。

前線基地を敵から奪い取る作戦ーーーヘルメス作戦を無事に遂行した私たちは無事に翌日を迎えた。

「何とか1日目は無事だね」

私は隣で朝の一服をするチャレンジャーに語り掛けた。

「そうだね。でも、ここからがまた厳しいね」

敵はここを奪い返す為に大人数で攻めて来るだろう。

それを考えれば彼の言う事は尤もだ。

「あーあ・・・野郎と一緒に寝るなんて俺も落ちたもんだな」

イーグル軍曹は朝の一発目からこうもやる気ゼロとも取れる発言をした。

だが、もう私達には慣れたものだ。

「あらー、これはこれは・・・・・・何処かの獣じゃないですか」

嫌みタップリに味付けされた言葉を吐いたのは昨夜の魔術師だ。

昨日と同じくローブを頭から掛けて顔を見せないという軍曹曰く「失礼な方」だが。

「おはようございます。よく眠れましたか？」

私は取り敢えず先ずはこちらを向いてもらおうと話し掛けた。

「眠れたわ。ベッドは堅いし酒臭いというおまけ付きだけどね」

「そいつは贅沢というものだぜ。お嬢ちゃん」

イーグル軍曹は寝ていた板から立ち上がった。

「俺らなんて何処へ行っても屋根の無い所で寝たりしたんだ。それを屋根付きのベッドで眠れるんだからな」

「それは職業の違いというものでしょ？」

「かもな。で、朝からローブを外さないとは失礼だね」

「・・・このローブは貴方みたいに女なら誰でも飛び掛るような獣から身を護ってくれる代物なの」

「そうかい。で、何の用だい？」

イーグル軍曹は煙草ーーー燃える女を銜えて壁を背にしながら訊ねた。

「昨夜の態度を謝って欲しいの。それから私を城へ帰すようにあの男に頼んで」

「旦那に？それは無理だ。旦那の言う事は正しいんだ。それにあんたが帰れば仲間も帰りたがる。あんた一人が例外を作ればそれに続こうと例外が続く」

それは避けるべきだ、と軍曹は言った。

「一度帰って持って来たい物があるの」

「何だ？」

「本よ」

魔術の事が詳しく書かれた本で彼女達にとっては教科書らしい。

「それだけか？」

「・・・そうよ」

「だったら誰かに取りへ行かせるから駄目だ」

「貴方に何でそんな事を決められないといけないの」

噛み付く口調でイーグル軍曹に彼女は詰め寄るが軍曹の方は珍しく冷静だった。

「俺は軍曹だ。軍曹は部隊の士気を高めると同時に規律を守るのが任務だ」

だから、こういう時は自分が決めると言ってみせる。

「貴方みたいに体力勝負の男には解からないのよ！！」

「お言葉ですが軍曹は軍の精鋭部隊に所属しておりました」

私はここで口を挟んだ。

「軍曹が所属していた精鋭部隊は体力だけでなく精神力から語学力も必要とされる所です。体力勝負とは些か語弊です」

「確かにそうだよね。軍曹は女好きだけど僕たちの士気を上げる事に長けているし面倒見も良い。ここまで初対面とも言える女性に馬鹿にされる事はないね」

チャレンジャーが援護するように言ってきた。

『ここで軍曹の株を上げておこう』

『それが一番だね』

視線で会話をしてここで軍曹の株を上げる事が決定された。

「な、何ですかっ。寄って集って私を痛めつけるんですか?!」

「いいえ。私は本心で言っただけです」

「僕もです」

「・・・・・・・」

彼女は無言になった。

ローブ越しだから表情は判らない。

ただ言える事は肩が些か震えているという事だ。

「繰り返し言いますが、初対面の貴方にこうも軍曹を馬鹿にする権利はありません」

「寧ろ貴方の方が我儘な女と言えます」

止めとばかりに私とチャレンジャーは言ったが・・・それがいけなかった。

「・・・よ・・・馬鹿になんかしてないわよ!!」

バッチン!!

強烈な音と衝撃が頬に感じた。

続いてチャレンジャーの方からもした。

打たれた、と直ぐには理解できなかったが段々・・・頬が熱くなるのを感じて打たれたんだと理解した。

そして更に反対側を打たれると言う不意打ちを喰らった・・・・・・

茫然とする私とチャレンジャー・・・軍曹もまた茫然としていた。

まさか行き成り打たれるなど誰も考えないだろう。

そんな私たち3人に対して魔術師は叫んだ。

「ば、馬鹿になんかしてないわよっ。ただ、私は・・・・・・・・・・・う、うわあああん!!」

ローブ越しに涙声で訴えながら魔術師は泣き出した末に走り去ってしまった。

足元まで隠すローブなのにどうやったらそこまで速く・・・しかも

雪道を走れるんだ?と言いたい位の速さだった。

「お、おいっ・・・たっく。お前等2人揃って女の扱いが“ド”が付くほど下手くそだぞ」

軍曹は私とチャレンジャーを見て言うと魔術師を追い掛けて行く。

それを見ながら私とチャレンジャーは顔を見合わせてこう言った。

『何で私(ぼく)たちが打たれないといけなかったんだろう・・・・・・・・・?』

ハッキリ言って思い付かない。

私と彼はただ軍曹の良さを言いたいが為に言っただけなのに。

しかも、こんな二度も平手打ちをされるなんて・・・・・・・・

『酷い話だよね?』

と口を揃えて言いたい。

第二百九章：酷過ぎる話

両頬に大きな“赤い花”を咲かせる羽目となった私とチャレンジャーを見ては誰振り構わず「ついに・・・・・」という顔で見てきた。

私たち2人揃って普段からそんな眼で見られていたのか？と錯覚してしまう。

まぁ私は・・・「女たらし」という有り難くもない渾名を頂戴しているから何とも言えないが。

そして今、私はとても非常に困っている。

「ねぇ、誰にやられたの？言いなさい」

「そうだよ。誰にやられたの？ランドルフ」

2人の女性に私は詰め寄られて身動きが取れない。

天馬騎士団のお姉様ーーーグロリア・シュナイダーと観測手である山犬ーーーガリシャだ。

「・・・・・・・」

私は口を閉ざし何も言わない。

言った所で何になると思うし、言ってしまったら何か恐ろしい事が起こりそうな気がしたからだ。

本来なら少佐ことテツヤ殿に助けを求めたい所だが、生憎とテツヤ殿はメジュリーヌ殿と魔術師にイーグル軍曹を連れて城へと帰っているから居ない。

他の者も係わるのを恐れているのか避けている。

まさに孤立無援と言えた・・・・・

「大人しく吐きなさい。そうすればお姉さんが貴方を傷付けた奴に“お仕置き”をしてあげるから」

「そうだよ。素直に言いなよ？　そうすればあたしが“仕留めて”あげるから」

とまぁ2人揃って恐ろしい事を言うのだから嫌でも口を閉ざす。

言ってしまえば本当にこの2人はそれを実行するだろうという雰囲気が前面に押し出されていたのだから当然だ。

尚も黙る私に2人は口を揃えてこう言った。

『さぁ、吐いて楽になりなさい』

まるで犯行を自供しろと迫る尋問官みたいだ。

それでも口を閉ざす私は犯罪者といった所か・・・・・・・・・・

ふとレオンの方を見れば・・・・・・・・

『レオン。好い加減に吐きなさい』

『・・・嫌です』

フィーナ中尉に尋問されていた。

あちらはあちらで大変だ。

何せフィーナ中尉が尋問官なのだから口を割るまで絶対に解放しないだろう。

現にフィーナ中尉は一歩も引く気はない様子で強い口調から今度は優しい声で相手を落とそうとしてきた。

『どうして吐かないの。私は貴方を弟みたいに思っているのよ。その弟がこんな風になってるのよ。心配しない訳ないでしょ？』

『・・・何でもありません』

『何でもないなら全て洗いざらい吐きなさい。そうすれば私がシッカリと“落とし前”を着けて上げるから』

向こうも向こうで恐ろしい事を言われている。

私の方も同じだが。

どちらも互いに口を割らないがこのままでは時間の問題だ。

何か良い手は無いかと考えていると天の助けとも言える人物が現れた。

「好い加減にしておけよ」

フォックスことヘンさんが助け船を出してくれた。

嗚呼、ヘンさん・・・貴方が天の使い－－－天使に見える・・・・・・・・

「何よ。私は坊やが何でこんな花を咲かせているのか教えてほしいだけよ」

グロリアさんはヘンさんを片目で見ながら自身の行動を正当化しているように言った。

ガリシャも同じく「あたしは観測手として・・・・・・・・」と言い自分を正当化している。

しかし、眼がかなり怖いから脅すと言う形だ。

所がヘンさんは平然としながらこう返答した。

「だったらもう少しマシな訊き方があるだろ?」

これでは質問という名の尋問だとヘンさんは語り私を助けてくれた。

2人は如何にも「諦めない」といった顔で私の背中を見ていて私は背筋が凍る思いだ。

ふとその時、父もまたこんな気持ちになった時があるのか?と思う。

父もまた私と同じく女性を泣かせたと聞いているからこんな経験は

あった筈だ。

その時の経験を是非とも聞きたいと私は思いながらそしてその足でレオンを助け出す。

とは言え、こちらはかなり手こずったが何とかなった。

やはり年上であり信頼しているからだろう。

『ありがとうございます』

私とレオンは安全な場所に着いてからヘンさんに礼を述べた。

「良いよ。しかし、見事に咲いてるな。満開だよ」

「まぁ・・・色々とありまして」

言葉を濁しながらも答えると「イーグルだろ?」と指摘された。

「ど、どうして・・・・・・」

「君等とあいつが話し合っているのを見てもしや?と推測したんだ」

そこまで見ていたとは・・・・・・

「流石ですね」

「まぁね。で、あれからどうなったんだい?」

「僕とレオンは打たれてイーグル軍曹から“ド”が付くほど女の扱

いが下手くそと言われました」

「あいつに言われるとは・・・だけど、それを言われるという事は何か泣かせるような事をしたんだろ？」

正しくその通りだと頷いてしまう。

「ただイーグル軍曹の事を褒めると約束しまして・・・・・・・・・」

「それであの人が軍曹を乏しめるような事を言って・・・・・・・・・」

「で、それに反論しつつあいつの良い所を教えた」

ここからが問題点だ。

「しかし、彼女から見れば大の男3人が自分を寄って集って痛めつけていると捉えたんだろ？」

それに私たちが頷くと彼は更に推測する。

「そして彼女は泣いた末に平手打ちを二回もお見舞いして去った、という所か」

『そうです』

2人揃って頷いた。

「打たれ弱い娘なんだな・・・・・」

『・・・・・・』

私と彼はまた頷いた。

まだ会って日が経っていないからどんな性格なのか家庭で育ったのか何も知らないから彼女の事がよく解からなかった。

だが、そこで私と彼は強い口調で言ってしまったため泣かせた。

これでは平手打ちをお見舞いされても仕方無いかもしれないと自己嫌悪に陥った時だ。

「よぉ、お二人さん」

暢気とも言える言葉が耳に入って来て振り返った。

「どうした?その落ち込んだ顔は」

ははははは、と大声で笑う彼――イーグル軍曹とその横には・・・・・・・・・・・・

「・・・魔術師さん、ですよね?」

イーグル軍曹の直ぐ横には黒髪を惜し気もなく雪化粧の画に散りばめた見た目麗しい深窓の令嬢が寄り添っていた。

黒いローブを掛けているが、顔だけはちゃんと出している所が印象的だ。

髪の色は黒だが、瞳は対称的な色であると同時に印象深い薄灰色の瞳で肌の色は些か病気的な白。

年齢は軍曹の推測通り２０代前半から半ばで如何にも知的で勤勉そうなタイプだ。

まさかここまで当てるとは・・・・・・・

驚く私達を余所にイーグル軍曹は女性の肩に手を回しているが、女性は恥ずかしそうに俯いている。

以前ならあんな事をする前に平手打ちをお見舞いされるのが落ちだったのにどういう事だ？

「あ、あの、き、昨日は・・・ごめんなさい」

女性は消えそうな－－－か弱い声で私とレオンに謝罪の言葉を口にした。

「あ、い、いえ。私の方こそ厳しい言葉を言ってしまい申し訳ありません」

「ぼ、僕も・・・・・」

私とレオンは慌てて謝罪の言葉を口にした。

「いやー、お前等２人が真っ赤な花を咲かせてくれたお陰で万々歳だ！！」

私と彼から言わせればとんだ災難だが、軍曹から言わせれば万々歳らしいが・・・・・・・

『酷い話だよ』

私たちから言わせれば酷い話以外の何でも無い。

「どうやって物にしたんだ？」

ヘンさんは極めて冷静な顔で軍曹に訊ねた。

「それは言えないな。何せそれは俺の商売道具みたいなものだ」

「商売道具ね・・・まぁ、何にせよおめでとうと言っておくぜ」

「ありがとう。さぁ、姫。二人でバルコニーから雪化粧を見ましょうか？」

朝の雪化粧を上から見下すのは最高だと口から砂糖が出そうな台詞を吐きながら軍曹は肩に回していた手を腰へと自然に回し直す。

それだけで如何にも女の扱いが慣れていると思わずにはいられないが逆に勉強にもなると思ってしまう。

「・・・ッ・・・は、はい」

姫と呼ばれた彼女は顔を赤くしながら俯いて両手をモジモジとさせながら後ろを振り返る。

そして2人は去って行った。

残された私たちは何も言わずに煙草を取り出して銜え誰とも言わずに火を点けるだけだった・・・・・

第二百十章：女王の責務

テツヤ殿達が戻って来たのは正午になる３０分前だった。

その間に私たちは何処をどう改築するかなどを相談し合っていたが纏まったのでちょうど良かった。

しかし、サラ様も一緒だった事に気付いて慌てて整列して迎える。

「今日は女王が演説を首都へ向け行う」

「演説、ですか？」

私がどういう意味か分からずに訊ねるとサラ様が答えた。

「私は・・・これまで女王としての責務を半ば放棄していました」

戦はテツヤ殿に任せて自分はただ城に籠っていたとサラ様は話すが、私は何も言わなかった。

実際の所それが当たっていたのだ。

ただ戦に参加して指揮をしろと言っても無理な話だから寧ろ城に居てくれた方が安心していたのは否定できない。

だが、サラ様はそれを恥じている。

言葉から察するに女王として肝心な時に役立たなかった自分が腹立たしいという気持ちが窺える。

確かに肝心な時に、と思う時は多々あるし大尉から「役に立たない女」と言われたのも当然としか言えない。

そこがサラ様は嫌になったのだろう。

自分は女王なのに何一つ出来ない無力な自分に・・・・・・・・・・・・

「そこで女王は首都へ自ら演説を行いリカルドに対して改めて宣戦布告をすると同時に首都に残された民達を叱咤激励し必ず首都へ返り咲くと誓う」

そうする事が女王としての責務を果たそうと考えているとテツヤ殿は説明し私たちも納得した。

「それじゃマジシャン頼む」

魔術師をマジシャンと呼んで彼等に頼んだ。

イーグル軍曹と例の魔術師は別れ際にキスをした。

よくもまぁこんな時にそんな事が出来る物だと思えてしまうが、当の本人2人は周囲が眼中に無いのか自分達の世界に入っている。

「直ぐに終わるから・・・待っていて」

「あぁ。何時までも待つさ。姫」

一体どうやって短時間で物にしたんだか知りたい。

と思っている内に魔術師――マジシャンはサラ様を立たせて詠唱を唱える。

するとサラ様の映像が空中に映し出された。

あれで遠くに居る者に自分を映し出すのだが大した物だと思う。

映像が映し出されてからサラ様は語り出した。

「私はサルバーナ王国女王サラ・ロクシャーナです。現在、私は東の地に居ます。ここはかつて初代国王フォン・ベルトが築いた首都で外敵を寄せ付けません」

そして兵たちが反乱軍を倒す為に戦っており前線基地を奪い取ったと伝える。

「これにより首都奪回に一歩前進しました。現在の首都は反乱者に支配されていますがそれも時間の問題です・・・・」

ここで反乱軍の首謀者を口にした。

「反乱者はリカルド・ウェスビー。私の亡き夫であるガルバーと愛妾の間に出来た息子です。私から見れば腹違いの息子ですが今は反乱首謀者です」

そして首都に残る民達を不当に苦しめている。

「私は彼の行いを決して許しません。例え彼の反乱に理由があろうと反乱は反乱。これは国家反逆罪に問われる重罪です」

だから・・・・・・・・・・・・

「ここで宣言します。私はリカルド・ウェスビーを許しません。それと同時に改めて反乱軍を打倒し首都へ返り咲くと誓います。どうか首都で苦しめられている民よ。耐えて下さい。必ずや首都を奪回し元の生活を戻すと約束します」

短い演説を終わった。

そして映像が消えてからサラ様は息を吐いた。

「・・・これで良いんです・・・これで・・・・・」

誰に言う訳でもなくただ自分自身を納得させるように言うサラ様に私たちは何も言えなかった。

テツヤ殿は黙ってサラ様を見張り台へ行こうと言い連れて行った。

「・・・これで腹は決まったんですね」

私は魔術師の女性を横に侍らせたイーグル軍曹に言った。

「あぁ。これで女王も良いのさ」

軍曹の言葉に魔術師の女性は何も言わないが私の言いたい事を何となく理解できた表情(かお)だった。

「ですが、あの様子だとやはりかなり堪えているようですね」

見るのも痛々しい背中をチラリと見てから私は言った。

しかし、軍曹は平然としていたのが対照的だがそれはもうこんな状況は慣れているという証拠だろう。

「そりゃそうさ。腹違いとは言え息子を殺すと宣言したんだ」

しかも国民の前で。

「だが、それをする事で女王は責務を果たすんだ。何より女王は俺達にも負い目を感じている。だからここで自分を変えようとしたんだ」

「それで演説を行ったんですね」

「あぁ。そこ等辺は旦那にしか分からないが前から考えていたんだろうな」

あの様子からして、と軍曹は言いながら煙草を銜える。

「・・・大丈夫ですかね？」

私は前みたいに倒れたりしないか心配だった。

「後は旦那が上手くアフター・ケアーをする。俺たちは首都を奪回する事に専念すれば良いんだよ」

自分たち軍人は戦う事に対して全力を注ぎ政治はゲンハルト様達に任せるべきと軍曹は言い私の頭を軽く叩いた。

「頼りにしているぞ？」

「・・・はい」

私はそれに頷いた。

そして見張り台へと登って行ったテツヤ殿を見つめるフィーナ中尉とリーザ中尉をふと見る。

2人は何も言わずにいたが、何かを言いたそうな顔だった。

きっと同じ女性として少なからずサラ様に同情しているのかもしれないな。

後を追おうとした所にメジュリーヌ殿が来て何やら話し込むが私は敢えてそれを無視して一人で壊れた個所へと赴いた。

壊れた個所を見ながら私は考えた。

サラ様はもうリカルド様を敵として見ている。

これは母親としての気持ちを押し殺し女王としての責務を果たそうとしている表れだ。

他人である私がこんな事を言える資格など無いが・・・・・・・・・・・・

「運命とは残酷だな・・・・・・・」

運命とは残酷・・・エリーナ様が私に告げた言葉だがその通りだ。

あの時・・・エリーナ様は哀傷を秘めた眼差しで森を見ながら私に先ほどの言葉を言った。

義理とは言え親子が敵対するのだから残酷としか言えない。

そしてその人物――リカルド様を私たちが抹殺する。

これほど惨い事は無い。

しかし、それでもサラ様は女王としての責務を果たそうとしている。

ならば私はどうする？

私は軍人であり狙撃手だ。

ならリカルド様を討ちその死を見届けるのが責務だ。

「・・・リカルド様。貴方の母君もやっと女王としての責務を果たしましたよ」

届く事がないのに私は言葉にしていた。

それはきっと少なからずこの残酷な出来事を作り上げた運命というものに対して当てつけだったのかもしれない。

少し肌寒くなった気がする。

無意識に煙草へと手が伸びて口に銜えていた。

そして火を点けようと懐に手を入れた時だ。

「・・・火だよ」

隣から行き成り火が現れて驚いて見れば防水兼暴風マッチを持ったレオンが立っていた。

「・・・私もまだまだだね」

彼が隣に居るのも気付かなかったのだから。

「君が敵じゃなくて助かったよ」

もし、敵なら私は気付かずに喉を切られて鮮血を迸りながら死んでいただろう。

それに苦笑して出された火で煙草に点け軽く煙を吐いた。

「サラ様はテツヤ殿が支えるから大丈夫だよ」

彼は私が考えていた事を見抜くように口にした。

「そうだね」

私は相槌を打ちながら今度は深く煙を吸ってから吐いた。

空中で白く一瞬だが染まるも直ぐに消えてしまった。

「何を考えていたんだい？」

「運命とはかくも残酷だな、と思ったんだ」

「誰かの言葉？」

「エリーナ様が私に言った言葉だよ」

私は王女であるエリーナ様が言ったのだと答えるとレオンは少し驚きながら私が言った言葉を繰り返した。

「エリーナ様が・・・・・・」

「うん。幼い頃はリカルド様と遊んだりしたと聞いたんだけど、そんな人と今は敵同士という事態を嘆いていたよ」

「・・・それで運命は残酷だと言ったんだね」

「うん。本当にその通りと思ってしまうよ」

「僕もだ。だけど、僕たちは僕たちの責務を果たすだけだね」

リカルド様を討つ。

これが私達に与えられた任務であり責務だ。

ならばそれに全力を注ごう。

そう思いながら私は紫煙をまた吐いてみせた。

第二百十章：女王の責務（後書き）

誤字がありましたので訂正します。

幕間：諦めと賛美

サルバーナ王国の首都ヴァエリエに建つエスカータ城。

その城の内部に造られた会議室では反乱軍の首謀者であるリカルド・ウェスビーが腕を組み部下達を見ていた。

部下達と言っても厳密に言えば彼に媚を売って来た貴族たちだ。

鋭い眼差しを受け入れる勇気が無い貴族たちは皆・・・顔を伏せて見ようとしない。

それがリカルドの癇に障るのだが彼等は知らない。

「・・・何時まで貴様等は和睦などと馬鹿な事をほざく」

重い・・・覇気を込めた口調でリカルドは貴族たちに話し掛けた。

貴族たちはそれに答えない。

「聞こえなかったのか？私は何時まで和睦などとほざくのか、と訊いているのだ」

声の大きさも覇気も変えずにリカルドはもう一度、訊ねた。

「て、敵は未だに東の地へ籠ったままです・・・・・・・・」

貴族の一人――公爵が意を決して口を開いた。

「しかも、援軍は居ません。援軍無き籠城は自殺以外の何でもありません。何れは向こうから降伏するでしょう」

だが、向こうは好戦的な傭兵が内部を掌握しているから和睦の使者を出せないと続ける。

「好戦的な傭兵？」

「は、はい。名はタカミ・テツヤ。異世界から来た傭兵で顔も醜い塊です」

その人物を聞いた貴族たちは一斉に彼の悪口を言い出し、彼が東の地を掌握しているからいけないのだと断言してみせた。

「ですが、我々が和睦の使者を送り出せば内部からも反発の声が出て和睦する筈です」

ここで終わりとばかりに公爵は高々に言った。

しかし、リカルドは冷めた眼つきでこう言い放った。

「・・・愚か者が」

「え？あ、あの・・・・・・」

公爵は何を言われたのか分からなかった。

愚か者？

愚か者・・・・・・・・？

誰が？

「貴様だ。この愚か者が」

リカルドは未だに理解できないでいる公爵を指差し言った。

「あの男は確かに傭兵と認めた。だが、好戦的な態度は取っておらん。寧ろ女王を首都へ戻す事に対して全力を注いでいる」

そして仲間を決して裏切らない気持ちを持ち合せている、と付け足す。

「貴様等の眼は飾りか？耳と口はあるだけか？貴様等は愚か者だ。あの男の事を蔑んでいるが、誰がその男に完膚なきまでに叩かれたのだ」

「そ、それは・・・・・・・・」

「少なくとも貴様等より向こうの兵たちは勇敢だ。それに対して貴様等はどうだ？たった一度の攻撃に怯えたばかりか兵たちを置き去りに逃げ帰り即和睦などとほざく・・・・・」

段々と声が荒くなって来る事を彼の腹心であるヴィクター公爵は感じ取った。

『・・・少々感情が出て来たな』

リカルドは冷静だ。

それは指揮官としてとても大事な事だが、やはりまだ若い。

感情に流され始めている。

このままでは不味いと彼は思い口を挟んだ。

「リカルド様。ここは暫く休憩にしましょう」

「それが宜しいかと思います。ここは休憩しましょう」

ヴィクター公爵に便乗する形でライアンナル伯爵が言ってきた。

「リカルド様は最近お疲れ気味。ここは少し身体を休めるのが宜しいかと・・・・・・・・・」

「・・・休憩だ」

2人に説得される形でリカルドは休憩を挟む事にした。

貴族たちとライアンナル伯爵、モリスン侯爵は部屋を出て行き残ったのはリカルド、ヴィクター公爵、クルセイダー大佐、フィリップ男爵だった。

「リカルド様。お気持ちは存じ上げますが、ここは耐えて下さい」

ヴィクター公爵は息を大きく吐いたリカルドに語り掛けフィリップ男爵は水を淹れたコップを差し出した。

「・・・分かっている。ただ、あの男は貴族たちよりこの国を愛している」

それが彼には面会で解かったのだ。

故に貴族たちの蔑む言葉が許せなかった・・・・・・・・・

「私も彼の気持ちは解かります」

クルセイダー大佐がリカルドに同調するように頷いた。

「貴殿はあの男と面会してどう思った？」

ヴィクター公爵が訊ねるとクルセイダー大佐はこう答えた。

「見た目こそ傭兵ですが、一流の男と思えます」

という事は何が遭っても自分達を倒し女王を首都へ返り咲かせるだろうと大佐は推測した。

「そうか。だが、我々も引けない。何としても東の地を落とすのだ」

「今頃はワイバーンとハゲタカが合流している頃ですね」

フィリップ男爵が窓を見ながら言う。

つい先日だがハゲタカことコンドル軍団は東の地へ通じる中腹地点に建てた前線基地へ援軍として向かった。

ヘリは全て破壊されたのだが、ライアンナル伯爵が用意したのでそれに乗って行った。

どうやって用意したのか気になるが、それは追々“身体”に訊くから良い。

問題は前線基地を敵に奪われないか・・・ワイバーン達が勝手な行動を取らない、かだ。

ワイバーン達はライアンナル伯爵が雇った者たちだから彼等を動かすのはライアンナル伯爵しか居ない。

とは言え雇った彼自身も手に余る様子なのはここ数日で分かっていた。

調べによれば彼はワイバーン達に「近衛兵にしてやる」と口約束をしたらしい。

だが、リカルド自身がそれを了承しなければこれは出来ない。

まぁ彼自身これはあくまで彼等にやる気を出させる為の口約束なのだろうと思うが。

その彼等とコンドル軍団は傭兵同士だが互いに互いを憎み合って足を引っ張っている。

これでは連携が出来ない。

そして援軍が彼らだと向こうは知っているから勝手な行動を取る確率が極めて高いのだ。

そうなれば敵の思う壺だ。

どうなる事やら・・・・・・・と皆が思う。

時刻は正午になろうとしていた。

「た、大変です！！」

バンッとドアが開けられ一人の兵が血相を変えて入って来た。

「どうした？」

ヴィクター公爵が訊ねると兵は息を整えてから話し出した。

「ぜ、前線基地を奪われました。そ、それから女王が、出ています！！」

「何？」

彼はどういう意味か？と首を傾げたが、直ぐに理解した。

魔術師を使って遠くから自分を映し出したに違いない。

皆は急いで部屋を出て外に出た。

外に出て演習場へと向かうとワイバーンとヘリがあった。

ただし、ワイバーンは数が少ない上に傷だらけでヘリの一機は壊れている・・・・・・

『奪われたとは本当の事だったか』

ヴィクター公爵は不味いな、と思いながら空中に映し出された女王を見た。

『私はサルバーナ王国女王サラ・ロクシャーナです。現在、私は東の地に居ます。ここはかつて初代国王フォン・ベルトが築いた首都で外敵を寄せ付けません』

女王は澄ました顔で現在の状況を簡単に説明した後、前線基地を奪い取ったと伝えた。

これは恐らく国民にも知られている。

益々自分達は追い詰められていく・・・・・・

『これにより首都奪回に一歩前進しました。現在の首都は反乱者に支配されていますがそれも時間の問題です・・・・・』

確かにその通りだとヴィクター公爵は思いながら女王の演説に耳を傾けた。

『反乱者はリカルド・ウェスビー。私の亡き夫であるガルバーと愛妾の間に出来た息子です。私から見れば腹違いの息子ですが今は反乱首謀者です』

そして首都に残る民達を不当に苦しめていると女王は言い国民達はその通りだと頷いているだろう、と思った。

『私は彼の行いを決して許しません。例え彼の反乱に理由があろうと反乱は反乱。これは国家反逆罪に問われる重罪です』

だから・・・・・・・・・・・・・

『ここで宣言します。私はリカルド・ウェスビーを許しません。それと同時に改めて反乱軍を打倒し首都へ返り咲くと誓います。どうか首都で苦しめられている民よ。耐えて下さい。必ずや首都を奪回し元の生活を戻すと約束します』

そこで演説は終わった。

「・・・宣戦布告、だな」

ヴィクター公爵は改めて向こうから宣戦布告をされたと誰に言う訳でも無く言った。

「これで益々・・・我々は不味い状況に追い遣られましたね」

クルセイダー大佐はその言葉に続く形で言いフィリップ男爵は沈黙を続けた。

リカルドの方は何も言わなかったが、何かを言いたそうな顔をしている。

その一方でコンドル軍団とワイバーン達は・・・・・・・・・・・・・・・

「ふざけやがって・・・ぶっ殺してやる!!」

「必ず奪い返してやる・・・・・・・・・!!」

と言った憤りを口にしている。

リカルドは一人で部屋へ戻る事を告げ演習場を後にした。

『・・・母上』

彼は自分を我が子のように可愛がってくれた女王の顔を思い出した。

とても優しく笑顔が似合う女性であったが先ほどの顔は違う。

王としての威厳を持ち自分に対して宣戦布告を口にしたのだから。

しかし、と彼は思う。

『これで・・・良いのかもしれんな』

自分の志は地方に灯火を齎す事だ。

その為には自分が王にならなければならないと思い軍を起こした訳だが、今の女王ならそれが出来ると思う。

何より彼女の隣にはタカミ・テツヤが居る。

自分を倒し必ず首都を奪回すると誓い脱出した男だ。

『あの男なら・・・私の志を受け継いでくれるかもしれんな』

自分が軍を起こした理由を知っており似ている所があるのは会って話した時から解かっていた。

あの男なら自分の志を受け継いでくれるかもしれない。

だが・・・・・・・・・・

「・・・まだ無理だ」

自分にも意地というものがある。

このまま引き下がるのは死んだ者達に顔向けが出来ない。

何よりまだ首都は奪回されていない。

もし、首都を奪回したのなら・・・・・・・・・・・・・・

『その時こそ諦めの時、かもしれんな』

それまでは抗い続けようとリカルドは思いながらも王としての責務を果たした義理の母を心から賛美した。

第二百十一章：連絡を待つ

サラ様がテツヤ殿と見張り台に行ってから既に数時間が経過した。

私たちはいつ来るだろうか？と思いながら軍曹に壊れた個所を自分たちで考えた事を伝える。

とは言っても隣には例の女性を侍らせているから何とも言えないが・・・・・・・

「なるほどな。悪くない」

椅子に腰を下ろし自分の膝に魔術師の女性を乗せた格好で私たちの説明を聞く軍曹。

これをフィーナ中尉が見たら激怒すること間違いなしだ。

「これなら材料を揃えれば直ぐに出来るな」

「まぁ、そういう風に考えたんですけどね」

敵がいつ来るか分からない以上できるだけ早く改築できるようにと知恵を絞り合って考えたのだから当たり前だ。

「なぁ姫。改築して広くした部分も防御魔法を施せるか？」

軍曹は背中に回していた手をスリスリと上へ動かしながら女性に訊ねる。

「もちろん。それはそうと少し擽ったいわ」

「それは君の背中が滑らかな証拠だよ」

「もうっ・・・イーグルたら・・・・」

「姫は可愛いね」

何だかもう私の話は聞いていないように思えたので早々に小屋から出た。

こういう時にミーシャ大尉が居れば鉄拳の一発くらいくれてやり「デレデレしてるんじゃないよ!!」と叱るのに・・・・・・・・・・

などと思いながら私はもう一度、壊れた個所へ赴いた。

しかし、今度は私より先にヴィン・ルビー、レオン、ヘンさんが居る。

「どうしたんですか?」

私が声を掛けると3人は振り返った。

「いや、この個所に新たに銃眼を付け足せるか?と考えていたんだよ」

「銃眼ですか・・・確かに空だけでなく、陸からも来ますからね」

モット・アンド・ベリーにも銃眼を作ったが、あれはとても良い。

そこへ塹壕を掘ればなお良いかもしれないな。

後は外にバンカーなどを作り外からも攻撃できるようにするべきだ。

「で、軍曹はどうだった？」

「もう彼女に夢中で駄目です」

「幾ら久し振りの女とはいえ・・・こんな所をミーシャ大尉に見られたらどうなるかな？」

ヘンさんは煙草を吸いながら私が先ほど考えていた事を口にする。

「恐らく鉄拳をお見舞いするでしょう。いや、それ所か全殺しにするかもしれませんね」

「やりそうだな。ミーシャ大尉なら」

私とヘンさんは互いに頷き合った。

「それはそうと女王は少佐と何を話しているんだろうな？」

ヴィン・ルビーが親指で見張り台に立つサラ様とテツヤ殿を差した。

「さぁ。でも、サラ様を慰めてるんじゃないのかな？」

「僕もそう思う」

レオンが私の言葉に同意した。

「その割にはやけに楽しそうだぞ」

ヘンさんが眼を細めながら2人を見ながら言い私達も釣られて見た。

確かに慰めているというよりは談笑しているように見える。

そして何だか不穏な空気が出ていると思い出ている方角を見ると、

フィーナ中尉達がかなり怒った顔で見張り台の2人を見上げていた・・・・・・・

「中尉・・・かなり激怒してるな」

ヴィン・ルビーが些か呆れた口調で言ったが、その通りと思う私が居た。

女王に嫉妬するなど些か問題と思うがそれだけ好きなのだろうなとも思う。

「やれやれだ。それはそうと向こうはどうしているだろうな？」

ヘンさんは煙を吐きながら肩を落としヴァイガーの方角を見た。

そう言えばそうだ。

ヴァイガーでは今どうなっているのか気になる。

オリガさんはどうしているだろうか・・・・・・

―　―　―

―
―
「ハックション！！」

私の隣で煙草ーーー氷の女王を吸っていたミーシャが突然クシャミをした。

私はそれに驚くと同時に「何と男臭い」と思ってしまった・・・・・・

これだから男勝りと思ってしまうのだ。

しかし、絶対に口にも顔にも出さないが。

「誰かがあたしの噂でもしてるのかね？それともあの馬鹿が何か碌でもない事をしたのか・・・・・・」

あの馬鹿とは恐らくイーグル１等軍曹だ。

極度の・・・この世の者とは思えない女好き。

その女好きで一体なんど酷い眼に遭ったのか？と思える程だが一向に治る気配は無いから何とも言えない。

「イーグルは何故ああも女好きなのだろうな？」

ゲンハルト様がコーヒーを飲みながらミーシャに訊ねる。

「さぁね。ただ言える事は、あいつに惚れた女が居たら泣きを見るとだけは断言できるね」

「それを言うならテツヤもではないか？」

「確かに少佐も女を泣かせるね・・・・・」

「パリと言う都では結婚を考えていた女に何も言わず立ち去ったとか？」

「あったね。そんな話。でも、確か・・・結婚していた、とも聞いているよ」

結婚していただと？！

この発言に私たちは驚いた。

テツヤは結婚していないと言っていたのにどういう事だ？

「あいつは結婚した事があるのか？」

「酒の席で聞いたからよく覚えていないけど、確か1度だけあるね」

「どんな女性なのかは分かるか？」

「そこまでは知らないね。でも、あの少佐が結婚した女だよ？さぞかし出来た女だろうね・・・・・」

そうミーシャは言ったが、私達には想像が出来なかった。

「それはそうとこれからどうするかね？」

ミーシャは氷の女王を再び吸いながら前線基地のある方角を見ながら独白した。

「前線基地を奪い女王も演説を行った。後は首都を奪回するだけではないのか？」

ゲンハルト様は気持ちを切り替えた口調で訊ねる。

「首都を奪回するのは当然だよ。だけど、首都を奪い返すまでにどう行動するかが問題だよ」

「向こうはどう出ると考える？」

「前線基地を奪回すると思うよ。何せ自分達が建てた砦を奪われたんだからね」

「確かに。しかし、テツヤが何も行く事はなかったのではないか？」

そう・・・テツヤは少佐という佐官クラスだ。

本来なら尉官である大尉のミーシャが前線に出て佐官ある少佐のテツヤは後方に居るべきなのだ。

所が真逆だから困る。

「まぁね。でも、少佐は前線に立ってこそ本領を発揮するんだよ。まぁ、あたしらの場合だと少佐でも前線に放り出されたけどね」

「そうなのか？」

「あぁ。あたしら傭兵にも階級とかは与えられるよ。でも、大抵は前線に放り出されて現状を維持しろとか敵を殲滅せよとか命令されて動くんだ」

この場合だと後方にはプロイセン様達が居るから前線に出ても問題ないと判断したのだとミーシャは答えた。

「なるほど」

ゲンハルト様は頷いてコーヒーを飲んだ。

「ミーシャ殿。テツヤはそなたから見てどう思う？」

ヴィールング殿がミーシャに質問した。

「どう思うとは？」

「そのままの意味だ。軍人としてどう思う？」

「そうだね・・・現場から叩き上げで少佐に登り詰めた稀有な人物だと思うよ。部下思いだし頭も切れる。おまけに良い男・・・最高だよ」

「良い男か・・・・・」

「あぁ。フィーナが少佐を好きになるのも無理ないよ」

「そうか・・・・・」

「あんたとしてはどう思っているんだい？得体の知れない男に姪が

心奪われて」

「それは2人の問題だ。敢えて言うなら・・・寂しいな」

ヴィールング殿は微苦笑して答えた。

この方はフィーナ中尉の親代わりを自負しているから娘と思っているに違いない。

その娘とも思っていた姪が男を好きになったのだから心穏やかではないだろう。

「昔は甘えん坊で泣き虫だった・・・兄上の前ではそんな所は見せなかったが」

「あたしと同じだね」

なに？

ミーシャが甘えん坊で泣き虫？

この発言に私たちは唖然としたが、表情には出さなかった。

もし出したら・・・と思うと背筋が凍り付く。

「あたしも男として育てられたけど小さい頃はよく母親に甘えていたよ」

父君は男として育てたのだから甘えなど許さなかったという。

だからこんな男勝りに育ったのだろうなと思い同情する。

「フィーナも同じだよ。当主として育てられたが兄が居ない時は母君や私に甘えた」

「それが普通なんだよ。寧ろ甘えて来たら思い切り抱き締めて遊んでやるのが大人というものだよ」

「そうだな・・・・・・」

それを聞いたヴィールング殿はまた微苦笑を浮かべて黙った。

「さぁて・・・連絡が来るまで待つしかないね」

ミーシャは灰を指で叩き落としながら無線機を見て言い私はそれに頷いた。

第二百十一章：連絡を待つ（後書き）

誤字があったので訂正します。

第二百十二章：先の問題

「ここにバンカーを築くのが良いですね」

私は白紙に赤いペンで丸を描き隣に立つヘンさんに確認するように訊ねた。

「そうだな。先ずここに1個。後は少し離れた場所にも築くべきだな」

「どんな風に建てるんだ？」

「丸太などで組み立てて上から判らないようにカモフラージュするんです」

ヴィン・ルビーが私に質問してきたが、それをレオンが答える。

いま私たち4人は前線基地の外に出て何処にバンカーなどを建てるか下調べ中だ。

軍曹があれでは役に立たないしテツヤ殿はサラ様と一緒だから無理となれば私たちでやるしかない。

「なぁ、木の上に建てる事は出来ないか？」

ヴィン・ルビーが木の上を指差し訊ねてきた。

「出来なくはないと思いますが、それだと攻撃された時の事も考えて脱出口を作る必要がありますね」

「そうか・・・やっぱり止めた方が良いか？」

「いえ。寧ろ上からの攻撃は良いと思いますよ。狙撃などもやり易いです」

彼の落ち込む姿を見て私は励ますように言ったが、彼の言葉は頷ける部分があったから励ましとは言わないか？

「そう言ってもらえると助かるぜ。それはそうとどれ位造るんだ？」

「どれ位ですかね？ヘンさん」

これには答えられないのでヘンさんに質問を振った。

「そうだな・・・各バンカーを通じるようにする必要もあるし連絡壕と敵が来た時の為の擬装壕も必要だからかなり造る必要があるな」

「敵が来たら迎撃してその合間に造るから・・・けっこう大変だな」

「そうですね。しかも、前線基地の改築も考えると余計に大変です」

やる事が山のようにあるので溜め息を吐かずにはいられない。

などと考えていると無線が鳴った。

「こちらリンクス」

『よぉ、坊や。あたしだよ』

「これはミーシャ大尉・・・・・」

『連絡がぜんぜん来ないからどうしたもんかと思っていたよ』

「連絡？」

『聞いてないのかい？作戦を終了させたら連絡しろとあたしはあの馬鹿に言ったんだけどね』

「・・・・・・・・」

あの馬鹿とはイーグル軍曹の事だろう。

『どうします？』

私は眼でヘンさん達に訊ねた。

正直に言えば恐らく今にも来てイーグル軍曹を半殺し所か全殺しにするとは予想できる。

自業自得と言えば自業自得だが、ここでそんな状態にされては後々に響くので避けたい。

かと言って嘘を吐いてバレたらバレたで後が怖い・・・・・・

『正直に言え』

『その方が良いよ』

『巻き添えは御免だ』

3人そろって巻き添えが嫌なので正直に言えと眼で答えてきた。

「・・・軍曹は女性と戯れています」

『・・・そうかい。少佐は女王と一緒かい？』

「はい。あの、ミーシャ大尉・・・・・・・」

『今からそちらに行く。あんた達は・・・巻き添えを喰らいたくないなら離れてな』

ああ、もう駄目だ・・・・・・・・・

「・・・レンジャー」

私は無線を終えて3人に言った。

「今からミーシャ大尉が来ます。巻き添えを喰らいたくないなら離れていろ、だそうです」

『・・・・下見を続けよう』

口を揃えて結論を出す3人に私は頷きガリシャ、ガルム、グロリアさんを呼び寄せ巻き添えから救った。

「坊やに助けられるなんてお姉さん嬉しいわー」

グロリアさんは私を抱き締めようとしたが、それを避けて私は言った。

「馬鹿な事をやらないでバンカーを建てる場所を下見しますよ？ガリシャと貴方、それからガルムで他を見て下さい」

「えー！何で？お姉さんとは嫌なの？」

「もう一度だけ言います。下見をしてください」

「そんな怖い顔しないでー。それにそんな怖い顔だと女に嫌われるわよ？」

「・・・気を付けます」

私はそれだけ頷くとグロリアさん達と別れてヘンさん達と下見を続けた。

下見を続けているとバンカーなどを建てられる場所が幾つも見つける事が出来た。

「随分とあるな。これなら敵を少しずつ倒して首都へ行けるかもしれないな」

ヘンさんの言葉に私は頷いたが、一言のべた。

「ですが、どうやって首都を奪還するんでしょうか？」

正面から突破するなんて事は有り得ないが、だとすればどうやって奪還するのか・・・・・・

「空中から降下して奪うかもしれないな。だが、その前に敵が城を

出て・・・ザンビア平野で戦うかもしれないな」

「・・・あそこか」

ヴィン・ルビーが些か暗い顔で言った。

彼はヘンさんも同じだが、あの戦いを経験している。

だからこそ嫌な過去を思い出したのだろう・・・・・

「だが、これはあくまで一つの推測だ」

「他にも推測があるという事ですか」

ヘンさんの言葉に私は訊ねると彼は頷いた。

「知っての通りあの城は防備がまるで無い。あそこで戦おうものなら死ぬ覚悟だがザンビア平野などでならまだ勝ち目はある。もしくは残った民達を盾に使うか、殿を誰かに任せて逃亡するかだ」

「殿となればフォース・リーコン達でしょうか?」

「かもしれないな。それと誰かを残し援護させるか」

「誰が残されるでしょうか?」

「リカルド王子たちが逃げ切れる時間を稼げる位の実力と数を誇る者が選ばれる可能性が高い。だが、もっと最初から・・・捨てる気なら一番弱い奴等を案外選ぶかもな」

一番弱い者、か・・・・・・・

「それを任された将はどんな気持ちでしょうかね？」

「部下達と共に死ねと言われるんだ。想像し難い気持ちだろう」

私は何とも言えない気持ちとなったが、それもまた一つの推測だからどんな形になるのかは分からない。

今はこちらに力を注ごうと思い赤いペンで丸を描くと・・・・・・・・・・・・・

『んぎゃあああああああ！！』

前線基地から断末魔の悲鳴が聞こえてきた。

「・・・始まった、ようですね」

「だな。あの様子だと一発目から鉄拳か？」

「いや、それ所か腕を折られたんじゃ？」

「いきなりスチェッキンのフルオート制裁じゃないのか？」

私の言葉に3人はそれぞれ思い付く制裁を口にしたと同時に「自業自得」と言い私も納得する。

もう直ぐ夜になるがここは帰らずに下見を続けるとしよう。

下手に戻って巻き添えを喰らいたくない。

「今夜は野宿かもな・・・・・・・・・」

誰に言う訳でも無くヘンさんが言うと私たちはそれに頷く。

実際その通りになりそうだから、頷くしかないのだが・・・・・

そして夜となった。

「本当に野宿ですね・・・・・・」

ヘンさんの言った通り野宿となった。

その間も悲鳴は絶えず聞こえてくるから一種の嫌がらせに等しい。

仲間から嫌がらせを受けるなど前代未聞だが、巻き添えを喰らわないだけマシと思おう。

「明日もまた下見を続けるんですか？」

ヴィン・ルビーが焚き火に薪をくべながらヘンさんに訊ねた。

「あぁ。昼まで下見を続けて報告する。それから改築だ」

「出来るだけ急がないといけませんね」

「あぁ。敵も態勢を立て直すがそれより早く建てて迎え撃つ算段を立てないとな」

「ですね。それはそうとこの内乱が終わったら援軍を出して来た2

ヶ国には何か言いますかね？」

砂の国――アガリスタ共和国と草原の国――クリーズ皇国はリカルド様へ援軍と称して戦象と戦車、騎馬隊を送り出した。

これは明らかに我が国へ対する攻撃と取れなくはない。

「どうだろうな。知らぬ存ぜぬを言われたらそれまでだ。何せ俺らには証拠が無い。捕虜を捕まえたりすれば話は別と言えるが、それだって“蜥蜴の尻尾”みたいに切られて終わり。首謀者までは辿り付けない」

「ですが、密かに調べる事は出来ますよね？」

「出来なくはない。俺がかつてやったように、な。ただし、捕まっても下手に問題が起きないように助けは来ないがな」

ヘンさんが元所属していた所は諜報部員とも言える役割を担っていた。

敵国へ潜入し情報などを手に入れるが、捕まっても切られるから助けなど来ない。

これは正直な話・・・厳しいがそれでもやる価値はあると私は思っている。

何せ向こうはこちらへ軍を寄こして来たのだ。

ここでこれを無かった事にすればまた向こうはやる可能性が極めて高いのだから。

とは言え先ずは今の問題――内乱を一刻も早く終わらせる必要がある。

それを思いながら私は焚き火に手をかざして身体を温めた。

第二百十三章：活躍の場所

ヴィン・ルビー達と野宿をした翌日、私たちは朝になってから少し時間を置いて前線基地へ戻った。

「来たかい」

前線基地へ戻るともう屍と化したイーグル軍曹を足蹴にするミーシャ大尉と出くわした。

「おはようございます・・・随分とやりましたね」

もう虫の息だが生きている軍曹を見ながら私は言った。

「これでも手加減した方だよ？」

これで手加減したのか・・・・・・・・・

「もっと傷めつけようとしたんだけど、そこのお嬢ちゃんがこいつを庇ったんだよ」

大尉が親指で指した方角には例の魔術師が居た。

「だ、だって・・・それ以上やると・・・死んじゃいそうだから・・・・・・」

「この程度で死ぬ位ならもう死んでいるよ」

それ以前にここまでやられたら普通は死ぬ。

それなのに生きているのは軍曹が並外れた生命力を持つ証拠だ。
テツヤ殿も人並み外れた治癒力を持っているが、こちらはその上を行く様に思える。

「それにね。元を正せばこいつとあんたが人目も憚らずにイチャつくのがいけないんだよ」

「そ、それは・・・・・・・」

「良いかい？こいつに甘い顔をすると泣きを見るよ」

ミーシャ大尉の言葉に女性は口を閉じた。

「今は甘い顔だけど、そのうち浮気癖が出て捨てられるのが落ちだよ」

「・・・捨てられるんですか？」

女性は疑惑と恐れの２つが混ざり合った眼差しでミーシャ大尉を見た。

「恐らくね。この男が一人の女に熱を上げるなんて見た事ないよ」

「・・・・・・・」

「今なら間に合うよ？こいつを忘れな」

「・・・良いです」

「どういう意味だい？」

「私は彼に捨てられても良いです。いえ・・・捨てようとするならそれを阻止します」

「というと？」

「簡単です。この男が私でない女性に手を出すなら私はそれを後押しします」

何という言葉か・・・・・・・・

私たちは女性の放った言葉に唖然とした。

ここまでイーグル軍曹を好きとは・・・・・・

『一体どうやったら短期間でここまで出来たんだろう？』

改めて興味を抱くが、当の本人は虫の息で答えようがない。

「大した女だね。つくづくこいつには似合わないよ」

そう言ってミーシャ大尉は踏み付けていた靴底を上げて・・・思い切り下へと落とした。

止めの一撃だったのがイーグル軍曹は両手足を僅かに上げてピクリとも動かなくなった。

「ちょっ！！」

女性は慌てて近付いたがミーシャ大尉は足を退けて退いて背を向ける。

「せいぜいその男に尽くしな。ただし、何か遭ったらあたしに言いな。改めてそいつを教育するから」

そう言ってミーシャ大尉は去って行った。

私たちは暫く軍曹を見ていたが、もう終わった事だと思い去る事にする。

去った私たちの眼に入ったのはテツヤ殿とサラ様だ。

また見張り台に登っており何かを話している。

真剣な顔で話している所を見ると談笑ではないな。

「女王と話が終わったら話すか」

ヘンさんの言葉に頷きそれまでは食事をする事にした。

「そう言えばガリシャ達はどうしたんですかね？」

まだ彼女達とは会っていない。

恐らく私達と同じく野宿した筈だが未だに来ないのはどういう事だ？

「今も下見の続きだろうな」

彼女達が向かった方角はまだ下見をしていないのだから。

「そうですね。しかし、こうしていると平和ですね」

天気は晴れで敵は来ない。

静かで前のような気分だ。

「あぁ。だが、首都では・・・反乱軍が跋扈し民達を苦しめている」

ヘンさんは現実を引き戻すように言い私はそうですね、と頷いた。

それから暫くするとサラ様とテツヤ殿が降りてきた。

「後はメジュリーヌが送る。俺はここまでだ」

そう言ってテツヤ殿は既にドラゴンの姿となったメジュリーヌ殿の背中にサラ様を一人乗せた。

「それじゃ頼むぞ。メジュリーヌ」

『任せておけ。直ぐに戻る』

メジュリーヌ殿はそう言うと大きな翼を広げて一気に飛び上がると城に向かい飛んで行った。

「あのテツヤ殿。良いですか？」

「あぁ。何だ」

テツヤ殿は煙草を吸いながら私の説明を聞いた。

「分かった。それじゃ今からバンカー造りと改築班に別れろ」

二手に別れて別々の作業をする事が決定しテツヤ殿は携帯で宅配人に注文した。

相変わらず元気のある声でテツヤ殿を辟易させる。

「お前はもう少し静かに喋れないのか？」

『これが性格なんですー。それはそうとイーグル軍曹に恋人が出来たんですよね？おめでとうございまーす！！』

「ありがとよ」

素っ気ない返事をするテツヤ殿に宅配人は尚も話し続けた。

『それはそうと後もう少しで首都を奪還できますねー。ですが、まだまだ先は長いですから頑張って下さーい』

そして通話が切れると材料が届いた。

「口煩い女だしどうして知っているんだ？と思うぜ」

「確かに。でも、私達にとっては好都合ですけどね」

こうしてちゃんと用意してくれるのだから我々にとっては有り難い話だ。

「さて・・・始めるぞ」

『レンジャー』

私たちは頷き合い二手に別れて行動を開始した。

私、レオン、ヘンさん、ヴィン・ルビー、テツヤ殿、イーグル軍曹はバンカー造りの班になりミーシャ大尉とワイド中尉は改築班になった。

最初のバンカーは前線基地の左側に造る。

こちらには扉がありここと森まで迅速にかつ攻撃を受けないようにする必要性があった。

跳ね橋の部分には木製の杭を縦列に打ち込んで更に銃眼の穴を開ける。

そこから水濠にも杭を打ち込んだ。

そこからは土を掘り塹壕にした上で丸太を3重に横へ並べ固定してから屋根を造り土が入った麻袋を重ねて行く。

それから塹壕を掘って行き森まで進んで行った。

森の中に入ったら木の上にも狙撃できる簡素な建物を造るなどして更にＲＰＧなどを撃つ為の穴も掘る。

「はぁ・・・あいつが居ればこんな事をしなくて済むのに」

イーグル軍曹は嘆息しながら木の上で作業をした。

「愚痴を零している暇があるなら手を動かせ。まぁあいつが居れば
それに越したことはないが」

テツヤ殿は頑丈そうな枝にロープを引っ掛けて登り降り出来るよう
にしながら梯子などを架けて掛ける。

「そう言えば軍曹達と一緒ではなかったんですか？」

私が塹壕を掘りながら訊ねた。

「あぁ。あいつと曹長は2人で別の方を護る為に行った。俺と姐御
は2人で別の方を護ったんだ」

「それから軍曹達は・・・・・・・・」

「敵にやられた。そしてここに居る」

「と言う事は・・・・・・」

「まだ死んでいないって事だ」

あの2人なら足が1本千切れようと生き残れる、と軍曹は言う。

「それは軍曹も同じでは？」

私がそれを言えば軍曹はテツヤ殿が設置したロープを伝いスルスル
と降りてきた。

「どうかな?俺はこう見えて臆病なんだ。だから女が恋しいのさ」

何もかも忘れさせてくれる女性が恋しい・・・・・・・・

「酒も女も溺れるのは大概にしておけ」

テツヤ殿は休憩とばかりに煙草を銜えた。

「旦那が言えた義理ですか?」

「言えるさ。今だって溺れていないんだ」

「そりゃご立派な事で」

軍曹はその言葉に笑いながら燃える女を銜えた。

確かに・・・テツヤ殿はメジュリーヌ殿、ミレーネ様、フィーナ中尉、リーザ中尉、などと大勢の女性に好かれている。

だが、軍曹みたいに周囲も憚らない所か作戦中なのにじゃれ合ったりしない。

作戦中は作戦中でちゃんとやっている。

公私混同はしない＝溺れていない、という考えは可笑しいか?

しかし、テツヤ殿の言葉と軍曹の言葉を合わせて考えればそういう答えに行き着くのだ。

そう思いながら私達も煙草を銜えて小休憩を挟む事にした。

「そう言えば少佐。ヴィルヘルム師匠は元気ですか？」

ヴィン・ルビーが煙を吐きながらテツヤ殿に訊ねた。

「あぁ。元気を持て余し始めた」

「というと“俺らも暴れさせろ”とか言っているのか？」

「想像通りだ」

「そりゃ俺たちばかり戦って向こうは何もしてないんだから鬱憤も溜まるな」

「しかし、今の所はあいつらが戦う場所は無い」

その通り・・・今の所ヴィルヘルム殿達――シュヴァルツフント達が戦う場面は無い。

空は飛べないし我々のような重火器も無い。

しかもコンドル軍団などがここ最近は相手だから出た所でやられるだけだ。

酷い言い方だがそうなのだ。

「いっそのこと私たちみたいに重火器で武装させては？」

私は提案を出したが却下された。

「あいつらにはあいつらの戦い方がある。それに俺たちの武器だっていつ使えなくなるか分からない」

そんな時に彼等の技術が役に立つのだ。

「俺らの居た世界は技術が進歩して行き白兵戦なんて稀だから剣などを覚えたりする事は無い」

銃剣術も廃れて行ったのだからその通りなのだろう・・・・・・

「だがこの大陸は違う。魔術などが発展し剣などで戦うのが主流だ。これからもそういう戦いが続く筈だ。なら、あいつ等を始めとした奴等はその技術を次世代に受け継がせる必要があるんだよ」

だから私の提案は却下だと言われた。

「だがよ、何時までも城に閉じ込めていると終いには自分から出て行くぞ」

ヴィン・ルビーは師匠である彼等の性格を嫌と言うほど身体に叩き込まれたからか予想してみせた。

「それは分かる。しかし・・・ザンビア平野までは待たせろ」

「ザンビア平野では戦う機会があるというのか？」

「多分な。確信はまだないが、少なくともあいつ等にも活躍の場所が用意されているさ」

そこの部分は確信されておりそれに納得してしまうから不思議だと

思いつつ私たちは煙草を吸い続けた。

第二百十四章：バンカー造り

私たちのバンカー造りは夜まで続いたが、そろそろ夕食の時間なので夕食を取る事になった。

もちろん作業の合間を縫ってだ。

「あーあ。姫はどうしているかな？」

イーグル軍曹はフォークで食べながら恋人となった魔術師の女性を案じた。

「お前を忘れて本でも読んでるだろ」

テツヤ殿は意地悪な口調で言うがイーグル軍曹は自信満々に否定する。

「あの娘はそんな風に調教していません」

また変態発言をした軍曹に私たちは辟易した。

「そういう事を言っていると逃げられますよ？」

「おっ言うね。だが、お前等の場合は逃げられるよりも先に刺されるぞ」

『・・・・・・』

私とレオンは何も言えずに黙った。

「特にもやし。お前は本当に何時か刺されるぞ」

「・・・言わないで下さい」

「そうは言ってもな・・・って誰か来ます」

軍曹は鋭い視線を背後にやった。

直ぐに私たちは銃器を構える。

暗闇から出てきたのは・・・・・・・・・

「フィンか」

テツヤ殿はＡＫＭアサルトライフルの安全装置を掛けて銃口を上に向けた。

「テツヤ。そちらの状況はどうだ？」

「まぁボチボチと言った所だ。お前の方は？」

「同じだ。ただ、敵がいつ来るか分からないからそこを考えるともう少し人手が欲しい所だ」

「明日にでも何人か連れて来るか」

「頼む。それからパリに居た時の話を聞かせてくれないか？」

「パリに居た頃の？」

「あぁ。リーザ中尉はメジュリーヌと共に城へ少し帰っている」

何でこんな事を言うんだ？と思ったが直ぐに答えは見つかった。

『テツヤ殿と2人だ、と言いたい訳だ』

愛する男と2人切り（私たちは眼中に無い）なのだから昔話を聞きたいのだろう。

「パリに居た時の話か・・・何を聞きたい？」

「そうだな・・・お前が結婚を考えていたという女の事を聞きたい」

いきなりそこから訊くのかと些か驚きながらも私達も興味を抱く。

この偏屈で意地悪で横暴なテツヤ殿が結婚を考えた女性だ。

どんな女性なのか興味を抱くのは仕方ないだろう。

「・・・彼女か。まぁ良いだろう」

テツヤ殿は快く承諾すると話し始めた。

「彼女と初めて会ったのは傭兵になってから1年が経過した時だ」

テツヤ殿が居た国が分類される地域――“アジア”で仕事を終えて風が吹いたという単純な理由からパリへ行ったらしい。

「そこに長居する気は無かったんだが、久し振りの観光をしようと

思って当ても無く歩いていた」

そこで数人のチンピラに囲まれた彼女ーーー“女神”と会ったらしい。

「まるで本のような出会いだな」

珍しく揶揄を混ぜてフィーナ中尉は言うがテツヤ殿は苦笑するだけだった。

「それで助けて彼女の家まで送り届けた」

実家はパン屋で名前は「黒猫」を意味するＬｅ　Ｃｈａｔ　Ｎｏｉｒと言う。

「両親は既に死んで彼女が弟と妹を一人で育て店を切り盛りしていた」

「立派な娘さんなんですね」

私は大した方だと褒めるとテツヤ殿は頷いた。

「あぁ。自分の夢を諦めて両親の店と兄弟を養う為に他にも仕事を掛け持ちした」

それで身体が壊れないのか？と思うほどだという。

しかも借金もあるから酷い話だ。

「それでお前はその娘を好きになったのか」

フィーナ中尉は自分で聞きたいと言いながらも「私は嫉妬してます」という表情をしながら訊ねた。

「あぁ。あれだけ健気だが自分の足で立ち歩く女はそう居ない」

おんぶに抱っこなんて要求するような温室育ちの王女様や御令嬢はタイプじゃない。

寧ろ嫌いな方だとテツヤ殿は言った。

何故かその時エリーナ様が私の頭に思い浮かんだ・・・・・・

『おんぶに抱っこ・・・まぁ、強ち間違いではないな』

失礼かもしれないが実際そうなのだから仕方が無いし頭で思い浮かべるのだから良いだろうと・・・酷い考えをしてしまった。

その間にも話は進む。

「好きにはなったが色々と遭って別れも言わずに去った」

ただ手紙だけを残して・・・・・・・

「それからその女は？」

「さぁな。ただ金は渡したから・・・借金の方は返済した」

後は幸せになる事を祈るだけとテツヤ殿らしくない台詞を言い話は終わった。

「その女の事は大まかながらも解かった。もう一人の女ーーー私に似ている女とは誰だ？」

「ああ、あいつも居たな」

テツヤ殿は思い出したかのように頷いた。

「あいつとは相棒とパリで初めて仕事をした時に出会った」

その女性は依頼人の護衛と言ったらしいが、本当は彼女が依頼人だったらしい。

「何でそんな事を？」

「俺と相棒の実力が欲しかったからだ」

だが、そのために試すような真似をした事が許せなかったらしく高額の話も振った上にその女性を傷付けたらしい。

「右手を撃ったんだよ」

コインが下に落ちてから互いに拳銃で相手を仕留めるーーー決闘だったらしいが、そこは変則技を使うテツヤ殿だ。

落ちる前に抜いて女の右手を撃ったらしい。

しかも、コインが落ちてから「抜けよ」と言ったから悪役を完璧に演じている。

「・・・自分で決闘を申し込んでおきながら汚い男だな」

フィーナ中尉は呆れ果てた声と眼差しでテツヤ殿を見るが前に比べれば遥かに優しい。

「あの女に人生の厳しさを先輩として教えてやったのさ」

それで傷を残したのだから何とも・・・・・・・・・・・・

「まぁ、その後も一回限りの仕事限定で引き受けたりしたが、な」

時には共に戦ったらしい。

性格はフィーナ中尉と似ているというから石頭で自己中心。

おまけに他人を見下すタイプの上に外見で物事を判断すると言う救い難い性格だと言う。

「・・・私はそこまで酷い性格ではないぞ」

「どう思う？」

テツヤ殿は私達に訊ねてきたが私たちは何とも言えずに黙る。

「貴様等・・・ここは否定する所だろ」

そうは言っても否定できない性格だったんだから・・・・・・・・・

「どうやらこれで話は終わりだな」

テツヤ殿は煙草を素手で消すと灰皿に捨てた。

「な、何故だ？」

「・・・・・・」

無言で上を指すテツヤ殿に釣られて見上げると・・・・・・・・・・・・・・・

『抜け駆けとは良い身分じゃのう・・・・・・・・』

ドラゴン姿のメジュリーヌ殿とその背中に乗るリーザ中尉が見上げていた。

そして逃げようとするフィーナ中尉を器用に尻尾で捕えると背中に乗せてみせる。

『覚悟せい。これから・・・“お仕置き”をしてやる』

「あ、あれは・・・・・・・」

「フィーナ中尉。覚悟して下さいね？」

上では何やら変な会話が続いているが、私たちは敢えて聞かないで再び作業を始めた。

敵が来る前に何としてもここを完成させなければならない。

いや、もう既に敵はこちらへ向かっているかもしれない。

今までは空中から攻撃できる者たち――コンドル軍団とワイバーン達しか来ていない。

なら裏を掻くように歩兵を派遣して来るかもしれないな。

ならば余計に早く完成させないと・・・・・・

しかし、歩兵が来るなら相手は誰だ?

フォース・リーコンと槍兵・弓兵たちか?

前の時――ここで戦闘でも槍兵と彼らが主体となったから彼等が来るかもしれない。

彼等が遠くから援護して槍兵が突撃するかもしれないが弓兵はどちらかと言えば矢を上に構えて放つからそれを考えればこういう所では使用しないかもしれないな。

そうなると鉄鎚兵と弩兵かもしれない。

あちらは動きが見た目より俊敏で攻撃力もあるし弩なら弓のように上を向けなくても良い。

あるいは全てを混ぜた混成部隊かもしれない。

もし、そうならかなり手強い相手となるに違いないな。

全てが混ざった混成部隊となればそれぞれの欠点を補える。

そうなるとこちらも相当な被害が出る・・・・・・

となれば罠などを設置する必要もあるな。

落とし穴などを設置し彼等を精神的に追い詰めなくてはならない。

いや、ヘリなどでの攻撃も良い。

アパッチを注文すれば良いのだ。

空飛ぶ戦車という渾名を持つあれなら1機だけでもかなりの強みとなる。

そうなれば数で押して来る奴等を倒せる。

だが、その前に先ずは前線基地を大きくする必要があるからまだ早いな。

早いが敵がいつ来るか分からないから出来るだけ急がなくてはならないが。

「手が止まっているぞ」

テツヤ殿がポカっと私の頭をスコップの先で叩いた。

「すいません・・・・」

「何か考えていたのか?」

「敵はどんな攻撃を仕掛けてくるのか?と思いまして・・・・・・」

「お前の考えは？」

「空からの攻撃がここの所は続いておりましたが、私たちの攻撃で態勢を立て直すと言いました。となれば今度は陸からの攻撃では？と考えました」

「それで？」

テツヤ殿はスコップを動かしながら続きを促し私もスコップを動かして話し始めた。

「フォース・リーコンが恐らく主体となり他の兵達と共に攻撃して来ると考えます」

「お前としてはどうする？」

「罠を設置しヘリで上空から攻撃するのが妥当と思います。もしくはゲリラ戦を展開し彼等を精神的に追い詰めるのもありかと思いました」

「そこまで考えたのかよ」

ヴィン・ルビーが驚いた顔で私を見た。

「まぁ・・・どうも考えると止まらなくて」

「良いじゃねぇか。俺なんて今の作業に没頭して考えもしなかったぞ」

「お前もランドルフみたいに考えろ。身体は動かしても頭は別な事

を考える。それもまた良い事だ」

チェスなどは相手の心理を読み取り手駒を動かす。

これを戦場に変えれば敵がどう来るかと考えられる訳だ。

「チェスは苦手なんだけどな・・・・・・・」

「なら俺の国のチェスをやるか？」

「テツヤ殿の国にもチェスが？」

「俺の方は将棋と言って手駒も多いし取った駒を使えるから厳密には違う」

しかし、それが興味をそそり私たちは作業をしながらその将棋と言う話を聞き続けた。

第二百十五章：覚悟と迷い

バンカー造りを始めて1日が経過した。

大人数でやってはいるが、やはり数が多いし罠なども設置するから思う様に作業は進まない・・・・・

だが、前線基地の方はもう完成する間近だと聞きテツヤ殿達と共に作業を一時中断して行ってみた。

前線基地へ行くと既に完成していたように見えたのは気のせいだろうか？

「もう完成してるんじゃないのか？」

ヴィン・ルビーが前線基地を見て呟く。

「まだ内部が完成してないんだよ」

彼の言葉を否定したのはミーシャ大尉だ。

相変わらずの男前である。

その隣にはワイド中尉が居た。

「よぉ、ワイド」

テツヤ殿はワイド中尉に手を上げて挨拶をすると彼もまた手を上げて挨拶をした。

「あのミーシャ大尉。中がまだ完成していないとは？」
私はヴィン・ルビーの言葉に付け足すように訊ねた。
「内部にヘリを置くけど、そこの部分と天馬達が眠る小屋、後はあたしらが休む小屋が出来ていないんだよ」
なるほど・・・そこがまだ完成していなかった訳か。
「どれ位で完成しますか？」
「そうだね・・・2日あれば十分だね」
援軍が来るからとミーシャ大尉は付け足す。
「援軍？誰です」
「シュヴァルツフントと獅子頭軍団だよ」
力仕事は男の仕事と言いながら煙草をミーシャ大尉は銜えた。
「暇だから何かやらせろ、と言われたからやらせるのさ」
そりゃ今までずっと戦わないで居たのだから身体が鈍ると言われても仕方ない。
だからと言ってこんな事をやらせて良いのか？と思ってしまう。
「負傷者もリハビリ的な面で良いんだよ」

私の考えなどお見通しとばかりにミーシャ大尉は笑みを浮かべながら答えてくれた。

「そうですか」

「所で少佐。ゲンハルトがこちらに来たいと言っていますが」

「ゲンハルトが？」

「はい。少佐が前線に出ているなら自分も、と言っております」

「首都を奪回するまで待てと言え」

「駄々っ子みたいに聞かないんです。しかも、今回は話があると言って来ております」

良い歳した大人がするもんじゃないと言ってはいるがミーシャ大尉は笑っていた。

「嬉しそうじゃねぇか」

「初めて会った時に比べて良い男になってますからね。イザベルが居なかったらあたしが貰っている所です」

「色男だな。あいつも」

「そうですね。で、そちらの方はどうですか？」

笑みを浮かべていたが今度は真顔で訊ねてきた。

「罠などを設置するし数もあるから思う様に進まないな」

「イーグル。あんたシッカリしな」

「何で俺に言うんだよ」

当然のことだがミーシャ大尉の言葉にイーグル軍曹は食って掛った。

「あんたは軍曹だ。ならシッカリと部下達を叱咤激励して手本を見せな」

「やってるぜ。なぁ？」

私達に同意を求める軍曹に私たちは曖昧に頷く。

確かにやってはいるが、愚痴は零すし前の事も考えるとまだ足りないと思ってしまう。

「ほら見ろ。やってないじゃないか。シッカリやりな。さもないとあんたの彼女を連れて帰るよ」

「何で姐御がそんな事を決めるんだよ」

「あたしはあんたの姉みたいなもんだよ？出来の悪い弟を叩き直すのは姉の役目だ」

「出来るなら美人の上に巨乳で優しい姉貴が欲しかったなー」

などと軽口をたたけばどうなるか分かる筈なのに・・・・・・

「ほぉう・・・あんたこのあたしに意見する気かい」

ボキボキと拳の節を折りミーシャ大尉はイーグル軍曹に歩み寄る。

私たちは直ぐに離れて作業に戻る事にした。

「お、おいっ。お前等・・・・ひぃ！！」

『イーグル1等軍曹。貴方の事は忘れません』

もはや私たちの中では死んだ者としてイーグル軍曹は心に刻まれた・・・・・・

作業に戻りバンカー造りに勤しんでいると空から翼が羽ばたく音が聞こえてくる。

この音はドラゴンの翼だ。

メジュリーヌ殿が来たんだ、と直ぐに判る。

「行ってみるか」

テツヤ殿はスコップを動かしていた手を止めて私達に訊いてきた。

「行きましょう」

私が言えば他の人も頷き一先ず作業を終えて前線基地へ向かう。

前線基地へ行くと既にメジュリーヌ殿は人間の姿に戻っておりシュ

ヴァルツフントと獅子頭軍団にあれこれ命令していた。

「おぉ、テツヤ」

メジュリーヌ殿はテツヤ殿に気付くと抱き付いたが、直ぐにテツヤ殿が引き?がした。

「暑苦しいから止めろ」

「良いではないか。妾はそなたの為にあ奴等を連れて来たのじゃ。ご褒美じゃ」

「自分で褒美と言うな。それより何でゲンハルト達まで居るんだ」

テツヤ殿はチラリとゲンハルト様達を見た。

「私が連れて行ってくれと頼んだのだ」

ゲンハルト様がテツヤ殿の問いに答える。

「ここが前線基地か・・・些か糞の臭いがするのは嫌がらせの効果か?」

「あぁ。それで何か用か?」

「うむ。貴族共の事でな」

「貴族たちの?」

「うむ。それは中で話そう」

「分かった。ランドルフ。お前らは作業を続けろ」

「分かりました」

私たちは頷き再び前線基地を出た。

しかし、今度はシュヴァルツフントと獅子頭軍団の方々が居るから作業は早く進む。

作業をしながら私はワイバーン達が態勢を立て直すと言っていたがどんな風に立て直すのか気になった。

ワイバーンを育てるのには天馬以上に時間が掛るし乗り手を育てるのにも時間が掛る。

私が知る限りでは一人前にする時間は数年だ。

まさか、それまで待つなんて事は無いだろう。

となれば残兵力で戦える者達で来るのが妥当か。

数は正確には判らない。

しかし、少なくとも５０は倒したし他にも打撃を与えた。

精神的な面においても与えたから・・・士気を削げた筈だ。

そうなるとまともに戦えるのは僅かか？

と考えながら作業を続けて行く。

―　―　―　―　―　―

「貴族たちを一旦こちらに引き込む、か」

俺は煙草の灰を指で叩き落としてゲンハルトの言葉を言った。

ミーシャの言う通りこいつはヴィールングと一緒に来て現在は半壊した小屋の中で話し合いをしている。

「あぁ。向こうも恐らく我々が首都を奪回したとなれば、もうリカルド王子に味方する気は無い筈だ」

「その根拠は？」

「あ奴等は我が身が第一だ。しかし、流れを読む事に関しては優れている」

「だからアッサリと鞍替えするんだな」

「それが奴らだ。奴等は我々を迎えてリカルド王子に家族を取られ仕方なく我々に敵対したとでも弁解する」

「だろうな。実際何人かはそれをやられて仕方なく向こうに協力したんだ」

「そうか。私としては奴等を生かしておく気は無い。これからは家

柄などには関係なく職を与える積りだからな」

そうなるとどうしても旧世代とでも言える奴等が邪魔だ。

元々この内乱が起こったのはあいつらが原因なのもあるが。

だが、あいつらを一気に殺せばまた混乱する。

そこを何とかしないといけないんだよな。

「あんたとしては一度こちらに引き込んで土台を固めるか？」

「うむ。ヴィールング殿が協力してくれる」

俺はゲンハルトの隣に座るヴィールングのおっさんを見た。

「私の部下達を使い奴等の悪行を掴む。その間にゲンハルト様が奴等を失っても問題ないようにする」

「しかし、そう簡単には物事が運ばないぞ」

そんな風に進むなど有り得ない。

仮に進んだとしても何処かしらで問題は発生するのが世の常だ。

「その通りだ。だから、これには時間が掛る」

「どれ位だ？」

「少なく見積もっても一月だな」

「一月で出来るのか？」

「君は戦う事に関しては才能がある。私は情報と後方支援。ゲンハルト様は政治だ」

「確かにな。とは言え、それを実行するには地方の力が一番必要だな」

「・・・うむ。果たして、私の言葉に彼等が耳を傾けてくれるか・・・・・・・・」

ゲンハルトは暗い顔になって下を向いた。

こいつは負い目を感じているから尚更だ。

「あんたの覚悟を見せれば聞くさ」

ゲンハルトが顔を上げ俺を見た。

最初の時こいつは一度リカルドの所へ行き説得しようとしたが追い返された。

たった一度の失敗でこいつは逃げた。

だが何をされようと話を聞いてくれと言い続ければ聞く。

覚悟があるなら・・・聞いてくれる。

それを聞いたゲンハルトは顔を上げた。

「・・・もう迷いはない」

ゲンハルトは迷いを捨てた顔になった。

第二百十六章：真の臣下

私達がバンカー造りに勤しんでいるとヴィルヘルム元伯爵殿が現れた。

「はー、やっと身体が動かせるぜ」

ヴィルヘルム元伯爵殿は熊のように大きな巨体を動かし背伸びをした。

「さぁて・・・やるか」

ヴィルヘルム元伯爵殿はつるはしを振り上げて塹壕を掘り始めた。

えらく様になっているがやった事があるのか？

「塹壕を掘った事あるんですか？」

「あぁ。馬用の落とし穴を掘った」

他にも人用の落とし穴から自分達が隠れる壕を掘ったともヴィルヘルム元伯爵殿は答え続ける。

「そうですか。所でワイバーン達と戦った事はありますか？」

「いいや。無いな。ただ戦い方は知っている」

「どんな戦い方ですか？」

「質問が多い坊やだな。だが貪欲な所は良いぜ」

ヴィルヘルム元伯爵殿はそう言って答えてくれた。

「あいつ等は無敵に見えるが意外と弱点は多い事は判るだろ？」

「夜は飛べない、ブレスを吐く時に速度が遅くなる、腹が弱いなどですね」

「その通り。しかし、根本的な弱点がある」

根本的・・・・・・？

何だ・・・考えてみた。

根本的・・・という事は奴らが産まれた時から持っている事を意味している。

「傲慢、ですか？」

私は思い付いた答えを口にすると彼はテツヤ殿みたいに笑った。

「その通りだ。あいつらも産まれた頃は赤ん坊で少し力を加えれば死んじまうほど非力な存在なんだぜ。しかし、デカクなれば誰にも負けない。それがあいつらはこう思っているのさ」

自分達は産まれながらにして最強の生き物だと・・・・・・・・・・

「もし、産まれながら最強だと言うなら人間なんぞに扱われたりしない。それこそメジュリーヌの姐御みたいに誰にも膝を折ったりし

ない」

だが、ここで彼は言葉を訂正した。

「我が王には膝を折ったがそれでも知識などもあり立派な大人の年齢で、だ。しかも我が王から言わせれば膝を折っていない、という」

「ですが・・・・・」

「話は最後まで聞け。メジュリーヌの姐御は膝を折ったんじゃない。自ら望んで王の妻になったんだよ」

「どうして、でしょうか？」

「それは本人に訊かないと分からんな。俺もここに来て王と姐御が2人で話し合う時は居なかったんだ」

「そうですか・・・・・」

「まぁ、俺には関係ない話だ。俺は王がやる事を忠実に実行するだけだ。もっとも誤った行いをするならそれを進言するが」

「それが貴方にとっての信念みたいなものですか？」

「まぁな。王が間違いを犯すならそれを正す。例え殺されようとも、な。それが真の臣下というものさ」

それを聞いた私たちはそれが本当の臣下だと何となく思った。

王に進言し追放されたのにも係わらず危機が訪れたと知れば何処か

らともなく駆け付けたのは正に真の臣下と言える。

「お前さん方は若いんだ。人生これから、という時だが今の内に臣下とは何なのか良く考えろ」

それに私たちは頷いた。

「で話を戻すとワイバーン共は産まれながらにして最強の生き物と思っている。そこが弱点だ。根本的な」

「そこを我々もとい天馬騎士団は打ち破りましたね」

「あぁ。しかも姐御もまた出た。お陰で今頃はガタガタ尻尾を震えさせているだろうぜ」

「だと良いですが。それで戦い方とは一体どういうものですか？」

「夜なら夜襲。昼間なら弓矢での狙撃か数で勝負。または魔術師で幻覚を見せて攻撃とまぁこちらの損害は痛いが俺らにだって倒せなくはない」

「とは言え出来るなら損害は最小限に抑えるのが望ましいですね」

「その通りだ。古来から戦術家や戦略家は誰もが自陣の損害は最小限に抑えるのが大前提と言っている」

しかし、現実にはそれが難しいのだ。

「ならばどうするか？と言えば答えは簡単。徹底的に汚い手を使いまくって相手を打ちのめすだけだ。こちらが向こうより数が少ない

ともなれば尚更だ」

「勝てば良い、というやつですか」

「そうだ。その点なら我が王は誰よりも優れている」

「確かに。まぁ、騎士道精神にはかなり外れていますがね」

「まだ騎士道精神なんて甘ちょろい理想を思い描いているのか？」

「まさか。狙撃手である私にそんな騎士道精神なんて・・・必要ありませんよ」

狙撃手ほどこの世で卑怯者と揶揄される存在は居ないだろう。

その狙撃手である私にとって騎士道精神など必要ない。

騎士を目指していた私にとっては些か悲しい事だが。

「それなら良い。おっ、我が王のお帰りだ」

私たちはその言葉に視線を後方へ向ける。

テツヤ殿とワイド中尉が２人して来た。

「お帰りなさいませ。我が王」

ヴィルヘルム元伯爵殿はつるはしを置き丁寧に一礼した。

「あぁ。で、作業は順調か？」

「はい。やっと外に出れて部下達も勇んで働いておりますよ」

「ならまた新しい・・・今度はちゃんとした仕事を与える」

「と言うと戦いですか」

「あぁ。相手は歩兵共だ。馬に乗って奴等を蹴散らせ。一人残らず殺して良い。今回はお前等に獲物をくれてやる」

ただし、くれぐれも熱くなり過ぎて深追いはするなと釘をテツヤ殿は刺した。

「勿論です。しかし、我々だけでは・・・ないですね?その様子だと」

「あぁ。ワイド中尉が指揮する聖騎士団とプロイセン将軍が指揮する獅子頭軍団も一緒だ」

「ですが、獅子頭軍団はこういう場所では・・・・・・・・・・」

「心配するな。ちゃんと手は打ってある」

「と言うと・・・・・・」

「それは見てからのお楽しみだ」

ニヤリと口端を上げるテツヤ殿はもう悪の帝王だ。

「あんたが正義の味方と言っても誰もが悪の帝王の間違いだろと言

うだろうな」

ヴィン・ルビーの言葉に私たちは思わず頷いた。

「悪の帝王？それは俺にとって最高の褒め言葉だ。餓鬼の頃から正義の味方ほど嫌いな物は無かったんでな」

「何故ですか？」

「簡単だ。悪は町や人を破壊しようと人々に怒られるし恨まれる」

「それは悪だからですよ」

当たり前のことだと私は思うがテツヤ殿の事だからまた捻くれた言葉を吐くだろうと思っていた。

「対して正義の味方はどうだ？町や人を破壊したり殺そうとそれは仕方の無い事だし犠牲と言うだろう」

極端な話だがある意味そういう所もあるから否定できない。

「だから嫌いなんだよ。しかも、自分には正義があるとか大義名分があるとか・・・胸糞悪いんだよ。誰がそんな事を決めた？」

「それは・・・・・・・・・」

「答えは無い、だ。悪にだって向こうの大義や名分がある。それを物語では正義が必ず勝つと言う約束の展開になるから嫌いだった」

子供の頃からそれが嫌だと言うのだから筋金入りだ。

まぁ物語で悪が滅ぶのはそうしないと物語として破綻してしまう上に子供たちに悪影響を与えるからだがテツヤ殿の場合はそれが逆となったらしい。

「確かにそうですね。俺も傭兵として片方の陣へ入りましたが・・・どちらも大義名分・正義はこちらにあると常に言っておりました」

ヴィルヘルム元伯爵殿はうんうん、とテツヤ殿の言葉に頷く。

「これは戦い全てに値する。向こうには向こうに正義があると言っている」

それは解かっているだろ?と訊かれて私たちは頷いた。

「だから俺は正義なんて言葉が嫌いだ。正義の味方なんて虫唾が走る」

「相変わらず捻くれた男だな」

ワイド中尉は呆れた眼差しでテツヤ殿を見る。

「しかし尤もと頷けるから更に性質が悪い」

「そりゃどうも」

2人は口端を上げあって笑い出した。

まるで以前から知り合いのような仲に見えるから不思議だ。

などと思いながら私たちは作業を再開する。

しかし、そこへ獅子頭軍団とシュヴァルツフント達が来て塹壕は自分達が掘ると言い私たちは罠を設置する事になった。

罠はワイヤーなどを使うが半分はダミーでも構わない。

これで少しでも相手に精神的に嫌がらせを行えるからだ。

その他にもワイヤーなど直ぐに判ってしまうから木の蔓などと言った植物の物でも代用は可能である。

落とし穴、地雷、Ｍ１８クレイモア、弓矢などと言った罠を設置しながら私たちは来るべき敵の逆襲に備えた。

幕間：蛇の思惑（前書き）

マーズとスネークの視点を今回は書きました。

メタルギアのスネークとこちらのスネークとでは全然違うんですよね。

まぁ・・・ストロング・ホールドに出て来る方を描いたから仕方ないかもしれませんが。ｗｗｗ

幕間：蛇の思惑

あたしは演習場でワイバーンの手入れをしながら態勢をどう立て直すか考えた。

生き残った奴等はまだ居る。

８００居た内の１００・・・いや、２００は死んだし使い物にならない。

その内生き残った奴等もドラゴンを初めて見た上にあの強大なブレスに恐れている。

夢に出て来ると言い酒で気を紛らわす奴も居た。

女はここに居ないから酒でしか気を紛らわせられない。

お陰であたしにも発情した犬みたいに来る時もあるから困るよ・・・・・・・

「・・・タカミ・テツヤ、か」

あの男は一体何者だ？

ドラゴンの背に跨り命令した。

そして見た事も無い兵器を自在に操ったばかりか兵たちを手足のように扱っている。

拷問にも耐えた上にあたしに傷を付けた。

あの暗さで夜目が効くこのあたしの弓を破壊し頬から血を出させるなんて稀だ。

あれならあたしらの雇い主であるライアンナル伯爵に忌み嫌われ怨まれるのも無理は無い。

フィーナ・マレルが熱を上げているようだけど・・・まぁ納得するよ。

あの女は嫌いだ。

あたしから父上と母上を奪ったばかりかあたしが受け継ぐ筈だった侯爵家と親衛騎士団の団長の位を横から掻っ攫ったんだ。

しかし、顔と身体は良いから男なんて選り取り見取りだろうにどうしてあんな得体の知れない傭兵に熱を上げていたんだか最初は疑問だった。

だが、あの男の両足からぶら下がった“剣”は大した一一一絶品と言える。

恐らくあたしが今まで可愛がった男の誰よりも立派な物だね。

どうせその大きさと硬さに骨抜きにでもされたんだろう。

あいつの母親一一一売女もヴィールング・マレルに骨抜きにされたに違いない。

父上が女に手を上げるなんて有り得ない。

何せ母上に父上はただの一度も手を上げた事も無いし暴言を吐いた事も無いんだ。

理想の父親だよ。

おまけに敵とは真正面から戦いを挑む騎士で顔立ちも良い。

そんな父上の妻になれたくせにヴィールングみたいな“日陰者”と出来ちまったんだから理解不能だ。

あんな陰険な男の何処に惚れたんだか・・・・・・・・

さっきも考えた剣で骨抜きにされたのが妥当と言えるね。

そう思いながらあたしは愛馬――愛竜である1角のワイバーン「ヴィス」を見た。

ヴィスとはここサルバーナ王国の言葉で「強い竜」を意味する。

あたしの名前であるマーズは戦の女神から取られている。

つまり強い竜を操る戦女神になれ、と父上は願いを込めて付けたんだ。

それなのに今の状況はどうだ?

・・・・惨敗だ。

こんな所を亡き父上が見たらどう思う？

怒るか？

悲しむか？

どちらもだ。

どちらも父上はするだろう。

あたしが駄目だったんだ。

相手を余りに見くびり過ぎたから。

戦慣れした事への傲慢があったから。

正確に迅速な命令を下せなかったから。

思い浮かべれば幾らでも出て来る。

ちっ・・・胸糞悪い。

そんなあたしの様子に気付いたのかヴィスは小さく鳴いた。

「ありがとよ」

あたしはヴィスを撫でて礼を言った。

こいつと出会ってからもう十数年になる。

餓鬼だったあたしと同じくこいつもまだ餓鬼だった。

お互いに兄弟のように生きて行き共に数多の戦場を駆け巡って来た。

家族であり戦友。

だからあたしが落ち込んでいるとこいつはこうして慰めてくれる。

「・・・またあいつ等と戦うけど、大丈夫かい？」

ヴィスは純粋な瞳であたしを見た。

瞳の奥には恐怖が・・・あの時の戦慄が宿されていた。

こいつはこの中で一番若い。

若いが力はあるし頭も良い。

いや、こいつに限らずあたしらも含めて誰もドラゴンと言う生き物を見た事が無い。

それをあたしらは見た。

同族とも言えるこいつ等にとっては長老とも言える存在のドラゴンを。

そのドラゴンはまるで悪戯でもした餓鬼を仕置きするかのように余裕を持った動きであたしらを蹴散らした・・・・・・・・

こいつ等にとっては恐怖の産物・権化とも言える。

そしてあたしはまたあそこへ行くと言ったんだ。
怖がるのも無理は無い。
しかし、あたしは何としても夢を叶えたい。
何より負けっぱなしなんてこの竜騎士団の長であるあたしの沽券に係わるし部下達も納得しないだろう。
何としてもあいつ等を倒し仲間の仇を取り近衛兵になるんだ。
「・・・グゥ」
ヴィスはあたしの身体に鼻先を擦り付けた。
大丈夫と言う証だ。
「ありがとよ・・・必ず仲間の仇は取るよ」
そして近衛兵になる。
それが死んで行った奴等に対するあたしからの手向けだ。
ヴィスから離れたあたしは雇い主であるライアンナルの下へと向かった。
あいつと話すなんて嫌だが、この場合は仕方ない。
独断で逃げ帰った事を未だに責められていない事に疑問はある。

だが、あいつだって聞けば解かると何故か思っていた。
対して知らないのに。
金だけで結ばれた契約の下であたしとあいつは成り立っている。
それなのにこんな事を思うとは・・・・・・・・
「あたしも焼きが回ったね」
ここまで弱気な自分は初めてだ。
あそこまで惨敗に喫したのも初めてだ。
それが原因かもしれない。
そう思い蛇の所へ行くと奴は禿げ豚ことモリスン侯爵と一緒に居た。
どういう訳か爵位は禿げ豚の方が上なのに蛇の方にヘコヘコしているから驚きだよ。
「何の用だ。貴様には砦の防衛を命じた筈だ。なぜ来た?」
「・・・砦は奴等に奪われた。しかも、仲間達も死んじまったよ。ハゲタカ共から聞いてないのかい?」
「聞いていた」
「だったら何であたしに言わせたんだいっ」

こんな惨めな思いをしたというのに・・・・・・

「簡単だ。貴様の失態は貴様の口から聞くのが一番だ」

だからあたしに言わせたと答える奴の顔は笑顔だった。

ただし・・・弱い者を痛めつけて面白がる蛇の笑みだ。

あたしも似たような性格だがこいつには足元も及ばないと思い知らされたよ。

「で、貴様としてはどうした？」

「・・・態勢を立て直したいね。今のままでは勝てる戦いも勝てない」

「態勢を立て直す、か。貴様等は代えが効かない。そうなるとハゲタカ共に手柄を横取りされるが良いのか？」

「・・・この状態じゃ手柄なんて無理さ。それにあいつ等だって“事故”を起こすかもしれないしまた返り討ちにされるかもしれないんだ」

血気に逸るだけが戦じゃない。

「分かった。では、態勢を立て直せ。ただし猶予は7日間だ。それまでに態勢を立て直せ」

「分かったよ」

あたしはそれに頷いて背中を向けて歩き去った。

――――――――――――――――――――――――――――

―――――――

「七日間も与えて良いのか？」

私の隣でモリスンが訊ねてきた。

豚のように息苦しい。

「あまり近付くな。臭い」

「悪い。だが、良いのかよ？」

「構わん。コンドル軍団も居るんだ」

「しかしよ、あいつ等だって無敵じゃないんだぜ？しかも話によれば天候によっては出れない時もあるらしいし・・・・・・」

「確かにな。しかし、あの小娘・・・何かを考えているように思えるな」

事故が起こるかも・・・・・・

あの小娘の事だ。

何かを考えているな。

「手を打つ、か」

「相変わらず病気的な程に疑い深い性格だな」

「それが性分だ。それよりリカルドの方は？」

「今の所問題ないな。とは言えフォース・リーコンの方はどうも慌ただしい。出るのか？」

「かもしれん。その時は貴様の兵も行かせろ。ただし・・・見つかるなよ」

「わーてる。あいつらを・・・だろ？」

私にしか聞こえない声でモリスンは言い私は満足しながら頷いた。

「あぁ。仮にここを奪回された時の事も考えての処置だ。それから貴族たちにも抜かりなく運べと言っておけ」

「それならあいつ等自身が解かっているだろ」

確かに、と私は頷く。

貴族という名の害虫共は時の流れを読む事ーーつまり自分達が被害を被らないようにするにはどうするかという事に関しては頭の回転が速い。

それ以外はまるで役に立たないが。

それでも使える物は使うのが私の考えだ。

・・・使い物にならなくなるまで使わせてもらおう。

リカルドも同じだが、先ずはフォース・リーコンを排除するのが第一だ。

あの者たちは危険だ。

本国から使われたらしいが向こうでも手に余ったからここへ行かされたと見て良いかもしれないな。

ならば私があいつ等に引導を渡してやる。

ヴィクター公爵も邪魔だが先ずはあいつらを殺してから・・・時間を掛けて始末するとしよう。

まだ時間はある。

かと言って悪戯に長引かせるのも問題があるからやはり早く治めるべきだが。

そう思いながら私は笑みを浮かべたまま闇の中へと消えた。

第二百十七章：皆で食事

罠などを一通り設置し終えた私たちはテツヤ殿と共に前線基地へ戻った。

もう夜になる。

今夜は向こうに泊まれるから嬉しい限りだ。

とは言ってもテントだが、それでも何か建物の中に張れるから嬉しい。

前線基地へ行くとミーシャ大尉が夕食の準備をしている最中だった。

「今夜は特に冷え込むからあたしがボルシチを作るよ」

「ボルシチですか。ミーシャ大尉のボルシチは好きです」

「おや良い事を言うね。そのまま女心に聡くなれば満点だよ」

「努力します。それより何か手伝える事は？」

「気が利くね。そうだね・・・それじゃそこのニンジンを切ってくれないかい。残りは少佐達でお願いします」

『了解』

テツヤ殿達は頷いて汚れた手を水筒の水で洗ってから包丁を手に取った。

「ほぉう。今夜はミーシャが作るのか」

ゲンハルト様がプロイセン様と共に現れてミーシャ大尉に訊ねてきた。

「あぁ。母親から教わった中でも一番の自信作だよ」

「そうか。私にも作れるか？」

「出来るさ。イザベルにでも作るのかい？」

「そうだ。イザベルと決めた事がある」

炊事洗濯は交代で行うと言う事だ。

「良い事じゃないか。あたしらが居た世界は男だって家事が出来ないと女が出来なかったんだ」

「随分とそなたらの世界は進んでいるのだな」

「まぁね。だけど、未だに男尊女卑なんて時代遅れも甚だしい風習を持っている地域もあるからね」

「そうか。テツヤよ。そなたの居た国はどうなのだ？」

「俺の居た国？」

テツヤ殿は牛肉を切り分けながら訊ね返した。

「あぁ。どうなんだ？」

「昔は男が偉く女は家を守るのが普通だったな。今は女も働くが、それでもやはり男女差別はある」

「やはり何処も似たような物か？」

「そうだな。俺から言わせれば単なる男の思い込みに過ぎないが」

テツヤ殿から言わせれば男が働いて女は家を守る事が馬鹿げているらしい。

「女だって訓練さえ積めば男より強くなれる。女からの視点で良い物が生まれる時もある。それを女だからという理由だけで差別するのは男の下らない思い込みに過ぎない」

「誰かの言葉か？」

「よく分かったな」

「何となく誰かの言葉を借りていると思ったのだが当たりか」

「あぁ。外人部隊に居た頃の上官の孫娘が言った台詞だ」

「その女性とは付き合ったな」

「随分と今日は当てるな」

どうやらこれも当たりらしい。

「あぁ。付き合ったぜ。外人部隊同士だからな」

「何と。その孫娘も外人部隊だったのか」

「あぁ。外人部隊にはフランス人だけで構成された部隊もあるし女性も居る」

「その孫娘さんは何をしていたんですか？」

「衛生兵と兵隊を合わせた感じの仕事だ」

「？」

私たちはそれが解からなかった。

一体どんな仕事だ？

「衛生兵は武器を所持しないのが基本だ。まぁ良くて拳銃だ。だが、敵地へ残された負傷兵を救出しなければならない事もある」

そのため高い戦闘技術と医療技術が求められる。

「アメリカでは“パラレスキュー”という空軍所属の特殊部隊がある。その部隊が俺の言った両方を兼ね備えている」

「という事はその孫娘さんはフランス版のパラレスキューに居た訳ですか」

「いや。そいつが設立したんだよ」

「では隊長ですか？」

「いいや。設立はしたが入ってはいない。後方に残された」

女という理由らしい。

「差別は嫌いだが実際の所で言うと女が一緒だと男は良い所を見せたいと思うだろ？」

確かに、と私たちは頷く。

もし、女性が居るなら格好良い所を見せたいと思うだろう。

だが、それでヘマでもされたら堪らないし敵に捕まって強姦などをされる可能性が高い事を考えると比較的だが安全な後方へ配置するのが望ましいというのも頷けてしまう・・・・・・・・・・

「何だかその孫娘さんが可哀そうですね」

女という理由だけで自分が設立した隊に入れなかったのだから。

「まぁな。付き合っていた頃は酒を飲みながら愚痴を聞かされたもんだ」

「そうですか」

「あぁ。おまけに酔う度に“私と結婚して”と言うから面倒だった」

付き合った事があるのに面倒とは・・・・・・・・

いや、それ以前によく求婚されるなと思う。

「テツヤ殿はよく求婚されますが、今まで何回くらい振ったんですか？」

「さぁ覚えていない。ただ・・・自分で結婚したいと思わせた女は一人だけだ。向こうの世界ではな」

そう言ったが何故か・・・その言葉の前ーーー結婚したいと思わせた女の部分には深い悲しみが込められている気がした。

「そう言えば・・・そなた結婚していたのか？」

ゲンハルト様が思い出したかのように訊ねてきた。

「誰に聞いた？」

「ミーシャだ。で、どうなんだ？」

「さぁ・・・どうだったかな。それより手が止まっているぞ」

上手い具合に話をはぐらかすテツヤ殿に私たちは疑問を覚えながらも言われた通り止めていた手を動かし食材を調理した。

そしてボルシチが出来あがった。

とは言ってもかなり長い時間を要して出来あがった頃にはもう夜も更けた頃だ。

「さぁ、食べな。ただし残さず食べなよ。好き嫌いは許さないから

ね」

ミーシャ大尉はエプロンを解きながら私達に言い私たちは頷きながらボルシチを飲んで冷えた身体を温めながらパンなどで食事を取った。

「テツヤ殿。また首都へ偵察に行きますか？」

「いきなりだな。まぁ行くさ。ただ・・・今回はフォース・リーコンを片付けるのが第一目的だ」

「そうですか」

「あぁ。歩兵はヴィルヘルム達が相手をするが、あいつらも一緒に来る。その時が勝負だ」

「彼等を全員倒すとなるとかなり厳しいですね」

「まぁな。運にも恵まれているが、お前なら出来るさ」

相手を確実に1発で仕留める狙撃手である私になら・・・・・・・・・・

「やってみせます」

「その意気だ。だが、狙うのは下士官か士官を狙え」

「指揮系統を壊すんですね？」

「その通りだ。恐らくクルセイダー大佐は来ないだろう。何せ大佐だし更に少佐も居るんだからな」

「となればその少佐と軍曹などを重点に狙えば良いのですね」

「あぁ。後は俺たちが相手をする」

「分かりました」

私は頷いてからボルシチを口にした。

やはり美味しい。

そして懐かしい味だ。

「ミーシャ大尉のボルシチは・・・母の作ったシチューに似ています」

「坊やの母親に？」

ミーシャ大尉はパンを食べていた手を止めて私を見た。

「はい。よくシチューを作ってくれたんです。小さい頃はよく母に強請ったものです」

「そうかい。あんたの母親はどんな味のシチューを作ったんだい？」

「甘くて、でも程良い辛さもあった味です。美味しく作る秘訣に・・・緑の野菜を使用しました」

「どんな野菜だい？」

「それは分かりません。訊いても秘密と言われたので」

「そうかい。坊や、シチューが好きなんだね？」

「はい。そうですがどうしたんですか？」

「いいや。何でもないよ。坊やはシチューが好きね・・・・・・」

シチューが好きだとミーシャ大尉は強調した。

何でそこを強調するんだ？と思ったが結局は分からず仕舞いだった。

ただ私から離れた位置では・・・・・・・・

『へぇ・・・坊やはシチューが好きなのね。しかも緑の野菜が秘訣、と』

『ランドルフ・・・あたしにそんな事一言も言わなかったくせに』

『当たり前でしょ？だって貴方と坊やは狙撃手と観測手の関係なんだから』

『どういう意味よ。だからこそもっと親密に・・・・・・・』

『仕事関係をそのまま恋人へ昇華させるの？甘いわねー。仕事関係で恋愛なんてナンセンスだわ』

『その歳になるまで恋人が居ないでランドルフに首ったけの“おばさん”に言われたくないわ』

『・・・おばさんとは言ってくれるわね。元気が余り過ぎて坊やから女として見られない“小娘”が』

『・・・負けないから』

『私もよ』

と互いに睨み合い小声で話す2人の会話など私の耳には入らなかった。

第二百十八章：草原の国

夕食を食べ終えた私たちはそれぞれのテントに入り交代で眠り夜警をする事になった。

今は私が寝てレオンが夜警中だ。

フォース・リーコンをここで仕留める、か・・・・・・

テントの中で寝袋に入った私だが眠れずに天井を眺めながらテツヤ殿の言った言葉を思い出した。

彼等は確かに勇敢な兵たちだ。

テツヤ殿の話では殺せる状態でありながら敢えて逃がしたらしい。

クルセイダー大佐・・・彼の行動は武人として見れば満点を上げて良い行動だ。

しかし、テツヤ殿から見れば殺せる時に殺さなかった馬鹿と映る。

私から見てもそうだ。

以前なら尊敬しただろうが、戦いでこんな甘い事をやるのだから馬鹿だ。

とは言っても何処かではその武人的な行動に感動してしまうが。

その大佐の下に少佐が居る。

となれば恐らくその少佐が出るだろう。

クルセイダー大佐はリカルド王子の信頼も厚いとテツヤ殿は言っていた事も考えると前線には出さない筈だ。

大佐という階級もあるだろうが。

もし、来たとなれば尊敬しているが死んでもらう。

彼等をここで倒せばそれだけ向こうに打撃を与えられるのだから。

彼等の事はほどほどに考えるのを止めて別の事を考えた。

まだ眠くないが・・・ゆっくりと睡魔が来ている事は感じたからもう少しだ。

テツヤ殿は結婚していたのか？

これが頭に浮かんだ言葉だった。

ゲンハルト様の質問をテツヤ殿は上手くはぐらかした。

それは触れて欲しくないという事だと思う。

なぜ触れて欲しくなかったのだ？

別に結婚していたと知られても困らない・・・困るか。

フィーナ中尉とリーザ中尉がこれを知ったらどうなるか分かったも

んじゃない。

だが、と思った。

テツヤ殿なら2人が怒ろうと関係ないとばかりに相手にしない筈だ。

ミレーネ様もメジュリーヌ殿も2人みたいに嫉妬しない。

何故はぐらかしたんだ？

離婚したのか？

それとも・・・・・・・・

「死別したのか・・・・・」

死別・・・文字通り死んでしまったから別れてしまったのだろうか？

テツヤ殿なら例え相手が死んでも泣いたりはしない。

多くの死を見て来たテツヤ殿だから例え自分の妻が死んでも泣いたりはしないだろう。

かと言って冷たい訳ではない。

達観しているのだ。

多くの死を見続けて来たから死という概念に対して悟った、と私は考えている。

父と母が死んだ時に私は泣いた。

だが、時が経つと何処かで・・・・仕方ないと思うようになったのだ。

死は誰に対しても平等に訪れる。

それが遅いか早いかの違いであり死に方が違うだけだ。

ただ・・・あまりに早い死に対しては諦めなど着かないだろう。

特に親より先に子が死んだとなれば諦めるのには時間が掛る。

テツヤ殿の場合も死別と断定できないが、はぐらかした事を考えるとそうかもしれない。

テツヤ殿より年下で先に死んでしまったのなら達観しているとは言えやはり諦めるには時間が掛る。

もしかすると死別したのかもしれないな。

どんな方なのか非常に興味をそそられる。

テツヤ殿が妻にと選んだ方だ。

きっと素敵な女性だった筈と勝手に想像してしまう。

そうしている内に睡魔がまた来て私は深い眠りへ落ちた。

それから数時間してレオンが「交代だよ」と言って来て私はレオン

と交代した。

北側の見張り台へと行った私は寒さで一気に覚醒し用意されたコーヒーを飲んだ。

熱いコーヒーだが、直ぐにでも冷めてしまうから出来るだけ熱い内に飲む。

コーヒーを飲んでから私は息を吐いた。

「ふぅ・・・・・・」

息を吐くと白く寒さを表している気がする。

それから煙草を吸おうと思い懐へ手を入れた時だ。

「交代の時間かい」

声がして振り返るとヘンさんが立っていた。

もう既に女神の抱擁を銜えて火が点けられている。

「火だよ」

彼は私が銜えた女神の抱擁に自分の煙草を押し付けて火を点けてくれた。

「ありがとうございます」

私は礼を言ってから息を吸い煙を少し吐いた。

ヘンさんは煙草を銜え直し私の隣に立った。

「寒いですね」

「あぁ。クリーズ皇国も寒かったがな」

左手の人差し指と中指で女神の抱擁を挟むとヘンさんは煙を吐きながらクリーズ皇国の事を口にした。

「クリーズ皇国も寒いんですか？」

私はコーヒーをまた口に運んでから訊ねた。

「あぁ。君は行った事が無いから分からないだろうけど、向こうは砂漠もあるし山もある。おまけに冬も寒いんだ」

「草原だけしかないと思っていましたが違うんですね」

クリーズ皇国・・・サルバーナ王国初代国王陛下であるフォン・ベルト陛下の弟君がクリーズ皇国を建国したと言われている。

つまりサルバーナ王国とは親戚関係だがもう血縁関係は途絶えているだろう。

何せどちらも今の王位と皇位を継いでいる一族が違うのだから。

草原の国、草の国と言われるクリーズ皇国はその名の通り草原に囲まれている。

草原に囲まれているから馬や牛などを草原に放して育てる牧畜などが向こうの国は盛んだ。

そして農業は余り出来ないと聞いていたがヘンさんの話だとそうではないと思える。

「では、向こうでも農業は出来るのですか？」

「試した事はあるらしいが、どうやら牧畜の方が良いという理由から直ぐに止めたらしいぜ」

という事は出来たかもしれない事を放棄した訳か。

向こうは元々牧畜で生活を営む遊牧民だ。

だから一定の地に地に留まる事を知らない。

しかし、農業が出来るならそれを試し続けるべきだ。

他国の事に私が言うのもおこがましいが、それでももう少し試せるならやるべきだと思う。

農業の事を聞き終えてから私は別の事を質問した。

「クリーズ皇国には砂漠も山もあると言いましたが、ここと同じような山ですか？」

「まぁね。砂漠はアガリスタ共和国と似ているけど違う所もあるんだ。ただそこは当たり前と言えるが農業も牧畜も出来ない」

「ではどうやって生活を？」

「山で狩猟をするか盗賊のどちらかだ」

「そうですか」

「確か話によればそこの土地は長男が受け継いでいる筈だよ」

「敵対していた部族に汚されてから産み落としたと言われている皇子、ですか」

クリーズ皇国の現皇帝には４人の皇子が居る。

その内の１人である第一皇子は現皇帝がまだ弱小部族だった頃に妻を敵対部族に攫われた後に奪回した直後に産み落とした。

これが原因で敵部族の血を引いていると言う噂がある。

「皇帝が長男をどう思っているのかは知らないが、その皇子から言わせれば自分は皇帝の息子と思っているだろうな」

それはそうだろうと私は思うが、それはあくまで本人の気持ちで周りはそう思っていない可能性が高い。

しかも確か弟とは仲が悪いとも聞いている。

「その皇子はどんな気持ちなんですかね？」

弟からは嫌われて周りからも事実かどうか分からない噂を言われているのだから。

「少なくとも良い感情は無いだろうな。しかもそんな不毛な土地とでも言える場所を与えられたんだ」

それは確かに、と私は頷いた。

「その皇子が与えられた土地は何処にあるんですか？」

「俺らの直ぐ近くだ」

「というとサルバーナ王国の国境沿いという事ですか」

「その通りだ。だが、俺が知る限り今まで盗賊たちがこちらに来て悪さをした、という事は聞いていない」

「ではその皇子は良い政をしているのかもしれませんね」

「あぁ。そうでなければ今頃は国境を越えて難民や盗賊がこちらへ来ているだろうからな」

ですね、と私は頷きその皇子はどんな方なのか質問した。

「確か戦上手らしいぜ。実力は皇子の中でも一、二を争う腕前らしいよ」

「もし、その皇子と戦う羽目になったら厳しいですね」

そんな相手と戦いたくはないと素直に思う。

「だが、戦ってのはどれだけ自分に有利な地形などを選ぶか、また

は来させるかによっても左右されるから分からないよ」

「つまり私たちが得意としている森林などへ誘き寄せれば勝てる、と？」

「あぁ。まぁ、この内乱が終わったら2ヶ国に使者を送るだろうな」

「我々の国へ侵略した、反逆者に援軍を寄こした、という理由を訊くのですね？」

「その通り。そこはゲンハルト様が行うだろうが俺の勘では2ヶ国とも白を切るだろうぜ」

「私もそう思います。それにしても寒いですね」

会話をしている最中も冷たい風が頬を打つから痛いし寒い。

「あぁ。だが、向こうも同じ事さ。戦象や騎馬隊などは余計に堪えるだろうぜ」

「そうですね・・・・・」

相槌を打ちながら私はもう温くなったコーヒーを口へと運んだ。

第二百十九章：これからの事

翌日、私たちはまた罠などの設置に勤しんでいた。

偽物の罠が大半を占めるが、それが本当の意味で罠だ。

こちらへ引き込む為の。

また新しい罠を仕掛けようとした時だ。

「おーい。ランドルフ。上に来い」

上から声がして見上げるとザンビア平野で傷を負った聖騎士団の先輩が手を振っていた。

何であそこに居るんだ？と思ったが、行けば分かる事だ。

「行って来い」

テツヤ殿に言われて私は頷き先輩が居る木の上に行った。

木にはロープが吊るされておりそれを伝って登る。

木の上に登ると屋根が付いた小さな小屋が眼に入った。

上手い具合にカモフラージュされているし狙撃する面でも有利だ。

「ここで狙撃できるか？」

先輩は私に訊ねてきた。

「出来ます。しかも、上から狙えるのでやり易いです。後は魔法防御なども施しておけば最高ですね」

「注文が多いな。まぁ良い。ここはお前が使え。他にも幾つかあるから、ここを破壊されたら別の所へ行って狙撃しろ」

「ありがとうございます。所で先輩は歩兵を相手に？」

「あぁ。傷も癒えたからな。お礼参りと行く」

「そうですか。頑張って下さい」

「勿論だ。なぁに俺にはお前という守護神が居るんだ。背中は任せたぜ？」

「・・・私の渾名を知っているんですか」

「あぁ。親衛騎士団の奴等がお前を守護神と言っていたからな」

あまりこう広めて欲しくない。

恥ずかしいからだ。

まぁ・・・嫌ではないが。

「恥ずかしがるなよ。お前のやった事は十分に褒められる事なんだぞ？」

「そうなんですけど・・・やっぱり恥ずかしいです」

「相変わらずだな。まぁそこが女心を擽るんだろう。先輩として言っておくが程々にしろよ？」

「・・・そうします」

それに私は頷く事でしか答える事が出来なかった。

「それはそうとテツヤの方はどうなんだ？」

「どう、とは？」

「敵さんに捕まって拷問されたと聞いたがピンピンしてるからな」

「怪我の治りは早いそうです。以前も死ぬと思われていたのに翌日にはピンピンして出て来たと聞きましたから」

「化物かよ。まぁ、それなら納得なんだけどな」

「どういう事です？」

「ドラゴンと狼人に好かれているんだ。同類でなければ出来ないさ」

そのまま取るなら皮肉とも侮蔑とも取れるが、先輩は笑っていたし悪意は感じられない。

「あいつは化物だ。捻くれて卑怯な化物だが・・・良い奴だ。今度は俺たちがあいつを助ける番さ」

「その意気です」

「言う様になったな」

先輩は笑いながら私の肩を叩き私はそれに笑みで答えた。

そしてロープを伝い下におりてテツヤ殿達の所へ戻る。

「何だったんだ？」

「あそこから狙撃できると教えられたんです」

「そうか。確かに上からなら狙いはし易い。それからランドルフ。奴等が来て退却したら追撃しろ」

「追撃するんですか？」

「フォース・リーコンを全滅させるのが今回の目的の一つになる。だから、ここで撃ち漏らすな。来た奴は皆殺しだ」

私なら狙撃手だから逃げる敵を正確に仕留められるとテツヤ殿は踏んでいると思い頷いた。

「分かりました。必ず全員を仕留めます」

「頼りにしているぞ」

ポンッとテツヤ殿は私の頭を叩いて罠の設置を続けた。

それから少し経って昼飯の時間になり私たちは前線基地に戻らずそ

の場で昼食を食べる事になった。

食べている物は干し肉と昨夜のボルシチを淹れた水筒にテツヤ殿の国一一一日本が作った米で出来た“おにぎり”というものだ。

白い米を塩と水で握っただけの食べ物だが中に魚などが入っているなど色々と面白い種類があるらしい。

私の場合は“梅干し”という赤くて酸っぱい物が入っていた。

「すっ・・・酸っぱいです」

顔を顰めると皆に笑われた。

「そいつは酸っぱいんだ。しかし、保存性は高いから昔から保存食とされてきたんだ」

テツヤ殿はおにぎりを食べながら説明してくれたが、直ぐに無言になり顔を顰める。

「テツヤ殿も当たったんですね？」

私が問えばテツヤ殿は無言で私の顔を固定して強引に自分のおにぎりを積め込んできた。

「ゴガアア！！」

更に酸っぱさが増して私は悶えた。

それを更に皆が笑うから酷いものである。

とは言え酸っぱいのだが・・・美味しいのだ。

だから良しとしよう。

盛り上がったというか騒いだ後は皆で煙草一一一女神の抱擁を銜えて一服した。

特に話す事はなく、そのまま煙草を吸うだけだ。

だが、そういう静かな時間もまた必要だし心地よい。

一服し終えてからまた作業を始めようとした時だった。

「少佐。ヴィールングのおっさんが呼んでます」

ミーシャ大尉が現れてテツヤ殿を呼んだ。

「おっさんが？」

「はい。何だか険しい顔をしています」

険しい顔？

何だろうと思ったが、私は何となく答えを見付ける事が出来た。

フィーナ中尉の事だろう。

フィーナ中尉はテツヤ殿に抱かれた。

それを恐らく何かで知ってテツヤ殿に真意を訊ねる気だろう。
表は叔父と姪の関係だが本当は親子だ。
父親として娘に手を出した男の真意を訊ねたいと思うのは仕方の無い事だと納得する。
如何に非常事態中とは言えこればかりはやはり気になるものだと父親になった事もないのに私はヴィールング殿の気持ちが理解できた。
「分かった。お前等、作業を続けろ」
『了解』
私たちは頷いて作業を続けた。
「一体なにを話すんだか」
ヴィン・ルビーは気になる様子を隠しもせずにいた。
しかし、その間も手は動いている。
「フィーナ中尉の事じゃないんですかね？」
敢えて知らない振りをして私は言った。
「団長の？」
「はい。ヴィールング殿から見ればフィーナ中尉は娘みたいなものでしょうからね」

「確かにそうだな。そう言えば副団長はヴィールング殿から紹介されて親衛騎士団に来たんでしたよね？」

「あぁ。ヴィールング隊長から団長を警護しろと言われて送られたんだ」

ヘンさんはワイヤーにＭ１８クレイモアを結びながら答えた。

「ヴィールング殿って団長を可愛がっているんですか？」

「あぁ。７日間に必ず１度は連絡しろと言われた。やらなかったら給料から引かれた」

「・・・見た目とは想像できないです」

まぁ・・・確かに見た目からは公私混同はしない方と見えるが、これを聞けば公私混同をしていると思ってしまう。

「人間なんて見た目で判断できないもんさ」

「確かに。まぁ、中には見た目で判断できる奴はいますがね」

「例えば蛇と豚か？」

「えぇ。俺は見た事ないですけど、少佐の話じゃ紋章と同じ性格と言うじゃないですか」

「確かにな。リカルド王子もあの２人は手に余る様子とテツヤは見ているし・・・首都を奪回したらどうなるか分からないな」

「どういう事です？」

「その２人が独断で首都から早期撤退をするか、またはリカルド王子を裏切り暗殺するという事ですか？」

私が彼に代わって推測するとヘンさんは頷いた。

「その可能性は低くない。寧ろ貴族たちと暗躍している可能性もある」

「貴族たちか・・・我々が首都を奪回したらこちらへ靡くだろうが、それで元に戻れると思っているのか」

ワイド中尉が独白するように言った。

「戻れると思っている筈だ。何せ向こうは貴族という階級が如何に重大か知っているんだ」

その重大さを理解しているから地方を長い間に渡り苦しめ続けたのだ。

迷惑以外の何でも無いがどうせ死ぬ運命なのだからその迷惑も後もう少しで終わる。

「ゲンハルト様は地方の声を聞くと言っていたが、仮に我々がリカルド王子を倒したらどう出るか・・・・・・・・」

『・・・・・・・・・・』

これに私たちは答えられなかった。

リカルド王子を殺したらそれで終わり、という訳ではない。

地方を救済する事が向こうの正義であり大義名分だ。

我々もそれを理解した。

だが、それで互いに仲直りなんて事は出来ない。

どちらかが倒れるまで戦いは続く。

私たちがリカルド様を倒したらゲンハルト様は地方の声を聞くと言っていたが、果たして向こうは我々を受け入れてくれるだろうか？

ゲンハルト様は宰相だ。

つまり向こうから見れば「悪の権化」とも見える。

幾らこちらが誠意を見せて謝罪しようとそう簡単には溝は埋まらない。

場合によっては・・・運が悪ければ殺されてしまう。

そうなればまた血みどろの戦いに逆戻りで国土は荒れ政も出来なくなり他国に干渉される。

それだけは避けたい所だが現時点ではどうする事も我々には出来ない。

我々の役目は戦う事だ。

政はゲンハルト様に委ねるしかない。

ないのだが・・・・・・・・・・

「ゲンハルト様ただ一人を地方に赴かせる訳にはいかないな」

ワイド中尉の言葉に我々は頷いた。

ゲンハルト様だけを行かせる訳にはいかないし殺させる訳にもいかない。

これだけはハッキリと断言できた。

そしてまた私たちは無言で作業に没頭したのだった。

第二百二十章：誓いと安堵

罠などを設置してから１０日が経過した。

バンカーなどは半分以上完成し後も少しといった所だが、３日間はどういう訳か猛吹雪で作業が出来ずに徒に時間が過ぎ去ってしまった。

そして吹雪が去るのを見計らったように敵が来た。

猟犬が斥候として赴き歩兵が来ると少佐に報告する。

「距離は？」

「まだあります。敵は槍兵、弓兵、フォース・リーコンでした」

ただ、少し離れた場所には鉄鎚兵と弩兵が居たとらしいがどうも様子が変だと猟犬は付け加えた。

「どういう事だ」

「それがフォース・リーコン達をまるで狙っているかのような位置に居るんです」

「狙える位置、か・・・そうか、なるほどな」

「どういう事でしょうか？」

私は分からずに訊ねると少佐はこう答えた。

「向こうにとってもあいつ等は邪魔な存在という事だ」

簡潔に少佐は答えると前線基地に居た私達に各バンカーへ移動し迎撃態勢に入れと命令した。

『レンジャー！！』

私たちは少佐、ゲンハルト様、プロイセン様に敬礼をして各バンカーへ移動した。

私、山犬、猟犬は聖騎士団の先輩が教えてくれた木の上に登りうつ伏せの状態になる。

「山犬。問題は？」

「ないね。今の所は・・・ここからなら狙いも出来るよ」

山犬は双眼鏡で銃眼から覗き込んで確認し問題ないと言った。

「猟犬。脱出手筈は？」

「問題ない。直ぐに出れる」

猟犬はロープとは別の方に開けられた穴を見て答える。

こちらの穴を通れば滑り台状になって直ぐ下へ降りられる緊急避難口だ。

モーゼルの逆Ｌ字型のボルトを上に移動させて後ろに引き初弾を装

填してから無線機で連絡した。

「こちらリンクス。準備完了」

『こちら鷹。了解』

『こちらチャレンジャーとフォックス。準備完了です』

チャレンジャーとフォックスも完了したと少佐に報告する無線を聞いた。

頑張ってくれ、と私は2人に言いライフル・パットを取り付けたモーゼルのストックを右肩に当て狙いを定めた。

まだ敵は来ないが、猟犬の鼻でもう直ぐ来るという事は判っている。

「フォース・リーコンの数人が我等の所へ来る」

「では先ずそいつらを片付けるのが先決だね」

私たちの任務はフォース・リーコンを始末する事が第一目標だ。

だから、他の敵は仲間に任せて彼等にだけ全力を注ごう。

銃眼から覗くと猟犬の言った通り数人の敵兵が来た。

フォース・リーコンだ。

白い迷彩服をしており武器なども白い布などを巻いている。

人数は３人。

その内の１人が片手を上げて２人を停止させた。

周囲を確認している。

片手を上げて停止させた男が歳などを見ればあの中では１番上、だ・・・・

「山犬、観測」

「距離は・・・５００で風向きは・・・やや左。湿度は・・・５ある」

観測された距離などから狙いを定めた。

狙うは・・・眼だ。

この距離なら頭部へ確実に当てられる。

しかし一度に全員を仕留めるには私だけでは無理だ。

あの者だけを仕留めても残りが私たちの所を見付ける可能性もあるし、仲間を呼び寄せる可能性もある。

ここは纏めて始末するべきだと判断し私は山犬と猟犬にこう言った。

「山犬、猟犬・・・狙いを定めろ」

山犬は頷き右肩に掛けていたＳＫＳカービンを両手で持ちレシーバ

ーを静かに引いて狙いを定め猟犬はＰＫＭを構えた。

猟犬のＰＫＭはフルオートしか出来ないから“指切り”でやる様に指示する。

私が先に引き金を引いた。

弾は狙い通り標的の右眼を貫き、内部を目茶苦茶にして外に飛び出て背後の木と雪を赤く染めた・・・・・・・・・

不思議と罪悪感も嘔吐感も・・・覚えなかった。

ただ一発で楽に出来た安堵感が身体を支配する。

最初の時・・・一発で仕留められずに長い時間を寒い中で苦しませた名も知らぬ指揮官。

その人物に止めを刺した時に一発で相手を楽にすると誓ったのだ。

その誓いは守られた事に安堵しているのだろうと・・・客観的に私は判断しモーゼルの逆Ｌ字型のボルトを引いて弾を外へ出した。

それから立て続けに弾丸が空を切って肉を引き裂き内部を破壊する音がする。

山犬と猟犬が残り２人を仕留めたのだ。

２人は私が撃った相手が倒れるのを見て直ぐに自分も撃たれたと気付いていなかった。

撃たれた時には息絶える寸前だった・・・・・・

それでもコルトＸ１７７Ｅ２の引き金を引いた。

味方に危機を知らせるように弾丸は大きな音を立てて木と地面を抉った・・・・・・

直ぐに叫び声がすると同時に銃声が聞こえ始める。

攻撃－－－迎撃開始だ。

私達は別の銃眼に着き、そこに敵が居るか探した。

歩兵－－－槍兵がＭ１８クレイモアを仕掛けたワイヤーに足を引っ掛けて作動させた所が見える。

クレイモアは約７００個の鉄球がギッシリと詰まっており前面６０。の加害範囲に鉄球を撒き散らす。

最大加害範囲は２５０ｍだが有効加害は５０ｍだ。

約７００個の鉄球を諸に浴びた槍兵達は瞬く間に命を落とす。

身体を蜂の巣にされて悲鳴も上げられずに息絶えた槍兵に少なからず同情してしまう。

しかし、まだ辛うじて生きている者も居た。

その者を助けようと仲間が駆け付けるが、その者もまた死んだ。

槍で貫かれたのだ。
それも上から落ちて来た槍によって。
「獅子頭軍団か？」
少佐は今回の戦いに獅子頭軍団も参加させると言っていた。
なら獅子頭軍団がやったと考えるのが妥当だ。
聖騎士団は剣だが獅子頭軍団は槍だからだ。
だが獅子頭軍団は重装歩兵だからこういう場所では戦い難い筈だが・・・・・・・
「おい。これからどうするのだ？我等の任務はフォース・リーコンを殺す事だぞ」
猟犬に言われて私は思考を中断した。
「そうだったね・・・猟犬。奴等は何処に居る？」
私は猟犬の鼻を頼った。
「・・・ここより南へ移動中だ。人数は2から3人で行動している」
他にも居るが一番近い奴等は南らしい。
「それじゃそいつらを先ずは始末する。それから順に倒す」

確認すると山犬と猟犬は頷いた。

直ぐに私たちはロープを伝い下へおりて南へと向かった。

その間も戦闘はあちらこちらで繰り広げられている。

弓兵は弓を引き絞り前線基地へ狙いを定めようとしていた。

その傍らには槍兵が槍を手に護衛役として傍に居たが、矢を放つ前にシュヴァルツフント達によって突撃されて惨殺された。

槍兵が阻止しようとするが、騎馬したシュヴァルツフント達はまるで風のように疾走し彼等の首を切り落とすから弓兵と同じ運命を辿ってしまう。

別の方角では罠を潜り抜け前線基地まで辿り着いた敵を聖騎士団と獅子頭軍団が迎え撃っていた。

獅子頭軍団は数人単位で固まり短剣で槍兵の懐へ入り腹などを刺し聖騎士団がそこへ止めを刺すなど連携を見せている。

もしくは槍を投げて突撃して来る敵を串刺しにする。

なるほど・・・少佐が言っていた事とはこれの事か。

重装歩兵だから盾と槍で真正面から攻撃するとばかり思っていたが、ああいう風に槍を投げたり短剣で接近戦に持ち込むなど考えれば色々な攻撃の方法がある。

しかも元々が連携技を重んじていた軍だからこそ短期間でああも柔軟に対応出来たのだろう。

そう思いながら私たちは南へと急いだ。

南側にある先ほどの建物へ急いで登り猟犬にフォース・リーコンを探させた。

「敵は別の者と戦っている」

別の者？

「誰だい？」

「鉄鎚兵と弩兵だ。奴等の身体からは“美味しそうな臭い”がするから判る」

こんな時でも食い意地が張っているなと思いながら私はそれならそれで良いと思った。

向こうも彼等が邪魔だ。

だからこそ・・・この場で殺そうとしている。

それで彼等が殺されるのなら儲け物だ、と私は思った。

こんな性格だったか？と思うが本当の気持ちだった。

第二百二十章：誓いと安堵（後書き）

誤字脱字がありましたので修正します。

幕間・味方の攻撃

俺と相棒は南側から砦一一一敵攻略基地へ進んでいた。

雪の積った山道を装備持ちで進むのは幾ら訓練しても厳しいもんだ。

しかも俺と相棒はこの国で初めて雪中戦を経験するから何から何まで苦労尽くめなんだよな。

もっとも・・・やっと出番が回って来たんだと思うと身体が疼いて英気が漲るんだけどな。

俺と相棒は2人1組という基本で行動しているが、別方角からも俺達と同じ2人1組の仲間が向かっている。

今回は少人数で来ている。

というのも何か不穏な動きが貴族達の間であると情報が入ったからだ。

あいつ等が何を考えているかは知らないが、少なくとも俺達にとって＋になる事でないのは当たっている筈だ。

だからそっちにも人数を割らないといけなくなった為に少人数で来る事になったんだよ。

まぁ、少数精鋭が俺らのモットーだからそれはそれで良い。

来るなら来いと思えば恐怖なんてどうってことないんだ。

しかし・・・やっと出番だと改めて思うぜ。

タカミ・テツヤとかいう男が脱走してから俺達は何もしていない。

偵察もせずに煙草を灰にしていたんだよ。

専らワイバーンとハゲタカ共が出て行く。

それを見ながら何で俺達は・・・・・・

なんて歯軋りしたもんだ。

あいつらは金で雇われた傭兵でしかない。

タカミ・テツヤも傭兵だ。

だが、大佐もリカルド様もあの糞親父を評価している。

まぁ・・・あんな眼に遭わされたのに軽口を叩くし銃口を向けられたのに俺へ説教を垂れた時点でただ者ではないと判っていた。

あいつもハゲタカもワイバーンも傭兵で言うなら同じだ。

だが、ハゲタカ共は金と殺戮しか頭に無い。

そのうえ態度も最悪だ。

ワイバーン共も俺から言わせれば同じ事だ。

両方とも乗り物さえ無ければ普通の歩兵だと言うのに。

何よりあいつらはリカルド様を何れは消そうと考えている蛇の手先。

手柄なんて立てたら余計図に乗る。

それなのに何で俺達は餓鬼みたいに留守番をやらなきゃならないんだよ。

そう・・・歯軋りしたが、今は違う。

今回は俺たちが主役だ。

あいつらが占領できなかったあの基地を俺たちが奪い返してやる。

そしてあいつに・・・頭が出来上がっちまった奴にこう言ってやるんだ。

『てめぇの隊なんて大した事ねぇな。ジャンキー』

一日かけて考えた俺の名台詞。

これをあいつに言ってやる。

「何を笑ってるんだよ。気持ち悪いな・・・・・・」

相棒が笑っている俺を見て眉を顰めた。

「いや悪い。それはそうと後ろはどうだ?」

「今の所誰も居ない。蛇の野郎が何かするんじゃないかと思っていたが、問題ないようだな」

「あいつも連続で自分の手駒が失敗して頭がパンクしたんじゃねぇか？」

「かもな。しかし、こうしていると初めての任務を思い出すぜ」

最初の任務でも俺と相棒はこうして2人1組で行動していた。

そして敵と戦い見事に任務を達成したんだ・・・・・・

今回もそうなるだろうと思っていた。

「・・・・・・」

相棒が片手で俺の足を止めた。

相棒の睨む先を俺も見ると・・・ワイヤーが雪の中に埋もれているのが見えた。

正確に言えば埋もれるように隠してあった。

左右を見れば手榴弾が結ばれている。

典型的なトラップだ。

ワイヤーに足を引っ掛けたら手榴弾のピンが引っ張られて爆発する。

解除するには設置する時とは逆の順にやれば良い。

解除するのが妥当だな。

俺たちの後ろから仲間が来るかもしれない。

目印を付ければ良いだけの話でもあるが、なるべくこういうのは解除した方が後々の事を考えれば良い。

俺は手榴弾の方へ行き、ピンが抜けないように掴んだ。

相棒はワイヤーを切り解除する。

簡単に見えるが一歩でも間違えれば終わりだから緊張する。

軽く冷や汗を掻いたのが良い証拠だ。

さぁ、行こうと思った時だ・・・・・・

乾いた銃声が一発した。

それから2発同時に聞こえる。

最初に聞こえた銃声はモーゼルだ。

モーゼルを使用する敵を俺は一人しか知らない。

『・・・あの坊やか』

モーゼルを持ち首都の東側に設置された砦で撃って来た坊やだ。

それから偵察へ赴いた際に軍曹のＭ６０Ｅ３の銃身を破壊したのも坊やだ。

あの坊やが１発撃ったという事は誰かがやられたという事か。

しかし、２発遅れてしたから計３人だが・・・後の２発はどちらも違う銃声音だから別のライフルで仕留められたに違いない。

誰がやられたのかは知らないが不味いな。

まるでそれを合図のように残り３方角から銃声音がした。

敵の迎撃が始まったんだよ。

「ちっ・・・行くぞ。相棒」

「おうっ」

俺と相棒はコルトＸＭ１７７Ｅ２のコッキング・レバーを引いて銃声がする方角へ行こうとした時だった・・・・・・・・・

ヒュン

空を切る音がすると同時に頬を掠める１本の矢。

誰だ?!

直ぐに振り返ると雪の中でもテカテカと光るスキン・ヘッドが見えた。

「ホォォォォォ！！」

獣のような雄叫びをあげながらスキン・ヘッドが１０人ほど鉄鎚と皮盾を持ちこちらへ突っ込んで来る。

居たのか・・・俺らは気付かなかった。

こいつら見た目と違って隠れるのが上手いな、と思いながら俺と相棒は狙いを定めた。

こいつらの主人は豚ことモリスン侯爵だ。

蛇ことライアンナル伯爵より上だが、蛇に付いている男で元山賊と噂されている。

そして部下は鉄鎚兵と弩兵。

先ほどの矢は恐らく弩兵が射たんだ。

恐らく蛇辺りが俺らを殺せと命令したんだろうなと思いながら引き金を引いた。

セミ・オートにして、だ。

数発ずつ全員に撃ち込むが怯む所か距離を縮めて来る！！

「この・・・“モロ族”が！！」

俺と相棒はフルオートに変更して奴等をミンチにした。

弾倉1発分ほど撃ったから白い煙で前が見えない。
今の内に逃げるが一番だ。
「あいつら・・・蛇の差し金だよな?」
雪道を走りながら俺は相棒に訊ねた。
「だろうな。しかし、5．56mmを撃たれても怯まないなんてお前の言う通りモロ族だぜ」
「あっちは“38コルト”を撃たれたがこっちはライフル弾だぞ?」
「ソマリアでも5．56mmを撃たれて平気だったなんて奴が居るんだ。例外は居る」
「それがあいつらかよ・・・厄介だな・・・・って追い掛けて来たぞ!!」
「誰が好き好んでスキン・ヘッドに追われなきゃならないんだよ!!」
俺と相棒は雪道を走りながら胸のジャケットに掛けたM67破片手榴弾を取りピンを抜き投げた。
数秒後に爆発し奴等は破片を諸に浴びて呻いたが、後ろの奴等は仲間を助けずに突っ込んで来るから堪らない。
「知るかそんなの!!」

「くそったれが！！」

俺はコルトＸＭ１７７Ｅ２をフルオートで撃ちながら後退し続けた。

何で敵と戦う前にこいつらと戦わなければならないんだ。

こいつらも敵だがそれでも今の敵ではない。

俺らが倒す敵は女王の味方をする奴らだろうに・・・・・・・・・

「おい、相棒。早くここから脱出するぞっ」

「わーてるよっ。何処へ行く？」

「あいつらが追って来ない所だ。先ずは逃げて軍曹達と合流だ」

「了解ッ」

相棒は前方に見えた奴を撃ちながら移動を開始した。

俺もスキン・ヘッド族を撃ちながら相棒の移動した方角へ逃げる・・・足を撃たれた。

後ろからの矢で、だ。

「ああ・・・くそったれ！！」

俺は自分の足を貫いた矢を抜かないでズルズルと引き摺りながら相棒の所へ逃げ続けた。

「大丈夫か?」

「毒は、塗られていない・・・だが、骨が砕かれたかもしれねぇ・・・・・・・」

肉を貫き外へ飛び出た矢に毒は塗られていない。

そう思い込む事でまだ動けると身体に鞭を打つ。

だが、骨が砕かれる音が耳に聞こえたから骨をやられた可能性は高い。

ちくしょう・・・ドジったぜ。

相棒に肩を貸してもらいながら俺は激痛と寒さに耐え続ける事になった。

第二百二十一章：狙撃手の本心（前書き）

えー、活動報告にも書きましたがキャラの投票を始めました。

男女共に5人ずつキャラを選び理由を添えて1票下さい。

前と違うのですが、お願いします。

メールでも感想でも構いませんので、宜しくお願いします。

第二百二十一章：狙撃手の本心

「フォース・リーコンの前に奴等を殺す羽目になるとは・・・・・・・」

私は何とも言えない気分だった。

南側へ行くとフォース・リーコンが2人いたが歳が私より少し上くらいだ。

あんなに若い者が居たとは・・・・・・・・・・

「美味そうだな」

「君はこんな時でも腹が減るのか？」

猟犬の気が抜けるような発言に私は些か憤りを覚えたが当の彼はと言うと・・・・・・・

「我が主の国にこんな言葉があるぞ」

“腹が減っては戦が出来ぬ”

「この言葉は当たっていると思うが？」

今は空腹だと彼は言った。

「・・・分かったよ。もう良い」

これを言われては何も言えない。

私は山犬に観測を頼みモーゼルを肩から下ろし狙いを定めようとしたが・・・思わぬ所から味方とも敵とも言えない奴等が現れた。

ツルツルの禿げた頭が特徴的な兵隊ー ー ー鉄鎚兵だ。

そしてその後ろには木を横へ斜めにして縦の木と合わせた弓ー ー ー弩を構えた弩兵だった。

奴等は私が狙おうとしたフォース・リーコンを攻撃し向こうも応戦した。

5．５６ｍｍＮＡＴＯ弾を撃たれたというのに鉄鎚兵は怯みもせずフォース・リーコンへ襲い掛かる。

「撃たれたよね？」

山犬が私に訊ね私は頷いた。

「撃たれたよ。だけど・・・怯んだ様子ないね」

ふつう撃たれたなら怯んだり痛がる筈なのに・・・・・・・・・・

「一種の興奮状態だな」

「判るのかい？」

私は猟犬に訊ねると彼は頷いて説明してくれた。

「奴等は狩人だ。そしてあいつらは獲物。獲物を見て興奮しているのだ。現に見てみろ」

下半身を、と彼は指差す。

釣られて見れば・・・膨らんでいた。

「興奮している証だ。そなたも女を抱く時は興奮するだろ？」

「・・・コメントしないよ」

「賢明だ・・・なっ」

そう言うと彼はいきなり私と山犬を抱き伏せた。

弾丸が空を切り木に命中する音がした。

「見つかったな」

「・・・撃った方が良かったね」

と私は言いモーゼルを肩に掛けて一緒に持って来たＡＫＳ７４－Ｕの折り畳んだストックを広げて肩に当てた。

そしてフォース・リーコンではなく鉄鎚兵達を狙った。

奴等がこちらにも気付いて別れたからだ。

こちらの弾を喰らうと敵は悲鳴を上げて地面を転がる。

同じ小口径でもこちらの方が威力は高いらしい。

だが、彼等は仲間が撃たれようと構わず、それ所か仲間を踏み付けて襲ってくるから怖い。

しかも背後からは弩兵が正確な狙撃とも言える攻撃を仕掛けて来るから下手に動けないでいる。

「これじゃジリ貧だよ」

山犬が間近まで迫って来た鉄鎚兵をイングラムＭ１０で撃ち殺しながらぼやいた。

その通りなのだ。

向こうは幾ら撃っても怯もうとしないし猟犬を見ても怯まない上にドンドン応援は駆け付けて来るから幾ら猟犬のＰＫＭでも部が悪い。

このままでは何時かやられてしまう。

「・・・どれ、少し我の本領を発揮するか」

猟犬はＰＫＭのライフルスリングを右肩に掛けて左へと持っていき空いた右手の節を折った。

犬歯を剥き出しにして遠吠えすると突撃してきた鉄鎚兵を片手一本でバターのように爪で引き裂き強大な顎で上半身を噛み砕いた。

忽ち辺りが真っ赤な血で赤く染まるが猟犬はその血を美味そうに飲み干す。

私たちが水を飲む様な感じに血を飲み干し喉を潤した猟犬は自ら鉄鎚兵達へ突撃し一騎当千の戦闘力を発揮した。

何人かが猟犬の身体に棘が付いた鉄球を当てたが、まるで痛くないのか猟犬は鼻で嗤いＰＫＭの木製ストックで奴等を撲殺してしまった。

今度は弩の矢が突き刺さったがそれも構わずＰＫＭで弩兵を撃ち殺す。

その様子を私と山犬は見ているしか出来なかった・・・・・

「・・・あれが狼人の、力か」

それから猟犬の本領が発揮されたと言える。

爪と牙だけでも彼には十分過ぎる程の凶器だがＰＫＭも撃ちながら戦う姿は狼であり人でもあった・・・・・・・

少佐は猟犬と戦い下僕にしたと言うが、どうやって倒したのだろうか？

どう頑張っても人間では太刀打ち出来ない気がするし、少佐は手傷を負ったと言うが何でそれで死なないんだ？とさえ思う。

あんな攻撃を掠すっただけでも一溜まりがないだろうに・・・・・・・

しかし敵も敵だ。

狼人が相手だというのに鉄鎚兵も弩兵も怯む様子が無い。

何処まで攻撃精神があるんだ？と思えるほどだが、直ぐに猟犬の爪で切り裂かれ牙で骨も残さず食べられるから憐れだ。

というかこんな光景を見てしまったから暫くは肉を食べられないなと場違いな事を私は思ってしまった。

私と山犬が唖然とする中で勝負は猟犬の一方的な勝利となった。

勝負というよりは嬲り殺しと言えなくもないのは当たり前と言える。

狼人相手に勝てる人間が居るなら少佐位だ。

どんな風に勝利したのかは知らないが、それでも私は少佐位しか狼人に勝てないと断言する。

「さて・・・逃げた奴を追うか？それとも別の獲物を探すか？」

血が付いた爪をペロペロと舌で舐めながら猟犬は訊ねた。

「他の奴等を狙う。向こうも手傷を負っているからそう簡単には逃げられない筈だ」

如何にフォース・リーコンだろうと足を矢で射抜かれては逃げられないと私は踏んだ。

弩兵の1人がフォース・リーコンの1人に矢を射て見事に矢は足を貫通したのを目撃したからだ。

「この寒さであれだと凍傷になるかもしれんな。もしくは傷口から菌が入っての破傷風か熊などに食べられるかだ」

「相棒も居るけど、そこはどうだい？」

「さぁな。だが、１人は死ぬ確率が極めて高いと我は断言するぞ」

かなり血を出していた様子だし体力もこの寒さで落ちていくから持って２～３日の命だと猟犬は平淡な声で言い切る。

「まぁ我らには関係ない事だ。あいつらが死ぬならそれで儲け物だ。さぁ、行くぞ」

こっちだと猟犬は言いながらＰＫＭを右手に持ち直し私達を先導するように歩き出す。

それに続き私と山犬も後を追った。

「次は誰だい？」

「焦るな。まだ狩りは始まったばかりだ」

声から察するに先ほどの嬲り殺しで獣の本能が目覚めたのか？と思う。

「・・・理性はあるよね？」

「ある。心配するな。間違ってもそなた等を食い殺そうなどせん」

「そう願うよ」

「疑い深い男だな」

猟犬は笑いながら私達を先導し続けた。

そして更に進んで行くとフォース・リーコンが陣形を作り戦っている所が見えた。

相手はグロリアさん達ーーー天馬騎士団のお姉様達だが男顔負けの戦い振りをしているから凄い。

「敵を蹴散らせ！あいつ等を倒せば坊やは私達を褒めてキスしてくれるわ！！」

『おぉ！！』

何で私がそんな事をしなければならないんだと思いながら伏せてモーゼルを構えた。

敵は3人で内1人がＭ１４を狙撃銃に改造した“Ｍ２１”を使用し狙い撃とうとしている所が見える。

「・・・Ｍ２１の男を狙う」

山犬は直ぐにその男との距離などを観測し私はそれに合わせて狙いを定めた。

相手が私の居る方角を見て、気付いたのか銃口をこちらへ向ける。

しかし、その前に私が引き金を引いていた。

「・・・スコープを貫いて右目に命中したよ」

山犬が私に報告するが、私は直ぐに別の標的に狙いを定めた。

「距離５００・・・湿度１２％・・・風上向き・・・・・」

観測をしてからまた私は引き金を引く。

後はこれの繰り返しだった。

敵を倒したら、また次の敵を探して狙撃する・・・・・・

これの繰り返しだったが、私はある一つの事を胸に刻んでいた。

１発で相手を楽にする。

それが戦場の慈悲だと私は思っている。

最初の標的にはそれが出来なかった。

だからこそ１発で相手を楽にしてやりたい。

敵だが、それでも苦しませず楽に死なせたい。

それが私の本心だった・・・・・・

第二百二十一章：狙撃手の本心（後書き）

誤字が指摘されたので修正します。

これまた誤字もとい同じ文章があったので修正します。（汗）

第二百二十二章：生き残りを探せ

史記を書きながら私は捕虜となったフォース・リーコンの２人を思い出した。

名前はサーバルとイヴェコで階級はどちらも同じ上等兵だ。

どちらも２４歳という若さで海兵隊の同期であり共にフォース・リーコンに入隊した友人同士である。

その２人が初めてフォース・リーコンの捕虜となった。

正確に言うなら足を矢で射抜かれたイヴェコ上等兵が凍傷を起こし助けも来ないため彼を助ける為に私、ガリシャ、ガルムの捕虜となると言ってきたのだ。

『こいつを助けてくれ！！』

大の男が泣きながら私に懇願してきた時は驚いたが・・・それだけ彼にとってはイヴェコ上等兵が大切だったんだと思う。

例え敬愛している上官を裏切る形になろうと親友を助けたかった彼の気持ちは同性という事を差し引いても共感できる。

内乱が終結した後はリカルド様の菩提を弔う為に２人して地方へ残り首都と地方のパイプ役となり地方へ灯火を点ける事に成功した。

そして後輩たちを育ててから息を引き取ったのだ・・・・・・

どちらもリカルド様が埋葬された直ぐ隣ーーー左右に埋葬された。

リカルド様を死んでも護りたいと言っていた彼等の気持ちを酌んでの事だ。

その点・・・貴族共はまるで駄目だったな。

徹夜様が首都へ女王を連れて来るなり「貴様ごときが女王陛下に触るな!!」と言って斬り掛ったのを皮切りに何一つ良い事をした事が無い。

徹夜様の無事を祝う宴の時でさえそうだった。

『貴様などこの五大陸に居る意味など無い。戦うだけしか能が無い醜悪な傭兵が』

『他国に迷惑を掛けた愚か者を祝う宴など聞いた事も無い』

『帰って来ず死んでくれたら良いのに』

とまぁ思い出せばきりが無い程の言葉を徹夜様に投げ付けた。

他国に迷惑とある貴族は言ったが、徹夜様が一時的にだが治めた土地は他の土地より潤ったし治安も良かった。

自らが手本となり民達にそれを倣わせたのが理由と思われる。

王だからこそ民達の良い手本となる必要があるのだ。

それをあの方は実践したからこそ潤い治安が良かったに他ならない。

更に言えば戦うだけしか能が無いという言葉も甚だしいほどの言い掛かりだ。

戦いに関しては文句ないが、政に関してもエドリアス様の助言やゲンハルト様の助言などを聞いた。

かと言って自分の考えが無い訳ではなく自分の考えも持っておりちゃんと結果を出した。

ある意味「完璧」と言えるかもしれないが、それは結果論だ。

徹夜様は大勢の者が居たからこそ出来た業績と常に言っていたが、その通りだ。

1人で何もかも全てこなすなど無理な話だ。

特に国を治めるなんて1人では出来ない。

それを徹夜様は誰よりも理解していたから皆の協力を得られたのだ。

その点“あの男”と貴族たちは根本的な面から欠けていた。

だからこそ悲惨な末路を歩んだのだ・・・いや、あの男に関しては違うか？

あの男の末路は悲惨と言えるかどうか判らない。

だが、“天使”から言わせれば悲惨と言えただろう。

祖国を滅茶苦茶にされた上に利用されたのだから・・・・・・・・・・

話を貴族たちに戻そう。

あいつ等の事を知らないが、言える事はある。

国家にとって何一つ貢献せず寧ろ害毒を振り撒いた疫病神だ。

害虫以下とも言えるが、地方では奴等を疫病神と今でも言い嫌っている。

死体は誰も埋葬しなかったが、放っておくと疫病が発生するので全て灰も残さずに
燃やした。

屋敷などは使える物などを全て出してから跡形も無く射撃の的当てにし新しく建て直したが、その前に塩を振り撒いて消毒する事も忘れない。

あいつ等が係わった物は全て消毒などをしてから使わないといけない。

些か度が過ぎると言うかもしれないが、それだけの害毒を奴等は振り撒いたし嫌われていたのだと納得する筈だ。

これから書く部分は彼等が捕虜となる少し前になる。

戦いは2日間で決着が着いた。

些か早いと思うだろうが、今回は何故か知らないが彼等ーーーフォ

ース・リーコンの数が少なかった。

更に言えばワイバーン達もコンドル軍団も来なかったから割とすんなりと勝負が着いたのだ。

槍兵・弓兵合わせて５００人は全員がシュヴァルツフントと獅子頭軍団、聖騎士団の手により死亡。

鉄鎚兵・弩兵合わせて３００人も全員死亡。

フォース・リーコン１５人の内２人の遺体が確認不明。

奪った物資は１人分で７日分の食料と武器２００に寝袋などが３００程だった。

鉄鎚兵・弩兵はフォース・リーコンを仕留める為に送られた刺客だったらしく、前後から挟み打ちにされて殺された者が１５人の内７名と半分を占めている。

精鋭として知られている彼等だが、まさか刺客が送られたとは思いもしなかったのか？

それとも鉄鎚兵達の戦闘力が高かったのかは不明だ。

だが、攻撃されても怯まないで突っ込んで来るのを見れば幾ら精鋭でも怯むのは仕方ない。

それが少人数で行動していれば尚更だ。

今度は私たちの被害だ。

奇跡的とも言えるが死者は僅か５０名と少なめだった。

負傷者は４００名で殆どが鉄鎚兵達とフォース・リーコン達との戦いで受けた。

酷い言い方だが、槍兵と弓兵はシュヴァルツフント達から見れば「鴨」だったのかもしれない。

戦いが終わった後に少佐は私達を集めて戦果報告などを纏めてから私達に教えてくれた。

「先ずはご苦労だったと言いたい所だが、まだ2人ほど生き残りが居るかもしれない」

その辺は私たちが分かっていると少佐は私、山犬、猟犬を見た。

「片方の1人は足を負傷しているんだな?」

「はい。弩兵が射た矢で左足を貫通されて相棒に肩を貸してもらいながら逃げました」

「足ならそう簡単には逃げられない。この周囲に潜んでいる筈だ」

「片方は死んでいる可能性はありますか?」

「あるな。だが、応急処置が適切なら生き残れる可能性もある」

「助けを求めた可能性はあるでしょうか?」

彼等も無線を持っている筈だから、それを使い仲間に助けを求める筈だと思い私はまた少佐に質問した。

「それもあるな。しかし、今回の事を考えると向こうも亀裂が大きくなり始めた、と見て良いだろう」

「つまり蛇と豚が動き出した、という事ですか」

「その通りだ。エドリアス大尉の予想では首都で何かが起こったか、起こる前触れでもあったんだろう。それに人員を裂く必要が出来た」

「それで以前より少なく送った。だが、逆に蛇たちから見れば少人数で来たから好機となった・・・という事ですか」

「あぁ。お陰で奴等を皆殺しに出来たから感謝するぜ」

敵に感謝するのも皮肉な話だが、正しく感謝する事だから複雑な気持ちだ。

「残り2名のフォース・リーコンを探せ。お前等が仕留め損ねたんだ。シッカリ後始末は着けろよ」

『レンジャー』

私、山犬、猟犬は敬礼をした。

「残りの者は後片付けだ。以上、解散」

その言葉を聞いてから私たちは前線基地を出た。

「猟犬。彼等の臭いを探せるかい？」

「どうかな・・・血の臭いが多過ぎて特定できん」

「美味しそうな臭いがするんじゃなかったのかい？」

「する。だが、血の臭いが凄過ぎて特定が難しい」

「どうする？」

私は山犬に訊ねた。

「片方は足を射たれたから引き摺っている筈だよ」

つまりそれを探せという事か。

「だけど、向こうも馬鹿じゃないから引き摺った足を消しているかもね」

「かもしれん。しかし、血の臭いが離れた場所からなら我の鼻も使える」

「では射たれた場所から探そう。そして仕留める」

それがケジメだ。

私の言葉に山犬と猟犬は頷いた。

そして私たちは生き残った2人を仕留める為に再び森の中へ入った。

第二百二十二章：生き残りを探せ（後書き）

また誤字があったので修正します。（涙）

第二百二十三章：初めての捕虜

森の中に入り進んで行くが血の臭いが凄く猟犬ではないが鼻がもげそうだと思ってしまった。

誰の血か判らない程に辺り一面・・・血の海。

それだけ激戦が繰り広げられたんだと思わずにはいられない。

こんな光景を見たのはヴァイガーで初めて行った防衛線の時だと昔を思い出す。

そんな昔ではないが遥か昔に思えたのは気のせいか？と思いながらこれでは猟犬の鼻が効かないのも頷ける。

私たちは2人を見た場所に到着したが、そこにも死体がゴロゴロ石のように転がっておりとてもじゃないが遺族に見せれる死体は無い。

大半が猟犬の牙と爪で殺された悲惨な死体だ。

その中にはやはり彼等は居ない。

「・・・見つけた」

山犬が地面に片膝を着いて一つの足跡を見て言うので私も真似して彼女が見つめる方角を見た。

確かに2人分の足跡がある。

その片方は足を引き摺っているから間違いない。

「あっちだと何かあるかい？」

まだここ周辺を完全に熟知している訳ではないから山犬に訊ねた。

「確か・・・洞窟があったね。しかもご丁寧に2人くらいは入れる大きさだよ」

「・・・そこに居る可能性は高いね」

私はＡＫＳ－７４Ｕのレシーバーを引いて初弾を装填した。

「これより2人を探す。傷を負っているが油断はするな」

私の放った言葉に山犬と猟犬は頷いた。

それから足跡を追い掛けて進む。

どれくらい進んだかは不明だが猟犬が「そろそろ良い」と言ったので彼を先頭に立たせて臭いを嗅がせ始める。

彼は四つん這いになり犬のように鼻先を地面へ押し付けて、ゆっくりと臭いを追い掛けた。

それを私と山犬は追うが誰も言葉を放たない。

静寂が私達を包み込むが、その静寂がひどく心地よかった。

ふと猟犬の足が止まった。

「どうしたんだい？」

私が訊ねると猟犬は無言で指を前に指した。

そこには洞窟があり血が雪を赤く染めている・・・・・・

「あそこに居るのかな・・・・・？」

「臭いはする。それでどうする。我が乗り込んで殺すか？それとも手榴弾を投げ込んで生き埋めにするか？」

「・・・中に入って確認しよう」

「危険だぞ」

「知っているよ。それでも私が撃ち漏らしたんだ。なら、止めを刺しそれを確認するのも私の役目だ」

違うかい？と訊けば猟犬は「そうだな」と頷いた。

「私が先頭に立つ」

「猟犬を先頭にした方が・・・・・・・」

山犬が言ってきたが私は首を横に振った。

「あの時、私が撃たなかったからこんな状態になったんだ。だから私が先頭に立ち彼等が生きているなら私が止めを刺す」

そしてそれを見届ける。

それが私なりのケジメだ。

「・・・分かった。だけど、次はあたしだよ」

山犬は観測手だ。

本来なら観測手が狙撃手の戦果を確認するのが義務だ。

だから彼女が言いたい事も私は理解できた。

「分かった。だけど、決して危ない事はしないように」

「その言葉をそっくり返すよ」

これには苦笑してしまうが、直ぐに顔を引き締めて中へ入った。

猟犬は外で取り逃がした場合の事を考えて待機させておく。

洞窟の中は暗いがライトを点ければ問題ない。

とは言えやはりライトだけでは完全に全てを照らす事は出来ないがそれでも無いよりはマシだ。

洞窟の内部は1人が通れる位の狭さだった。

おまけにライトを点けても暗いから出会い頭で敵と鉢合わせになる可能性だってある。

こんな場所こそショットガンを持つヴィン・ルビーの出番だろうと思いつつ左手にライトを持ち右手でＡＫＳ－７４Ｕを持ち進んで行く。

進んで行くと声が聞こえてきた。

『寒いぜ・・・相棒』

『心配するな。必ず助けは来る。だから耐えろ』

どちらも男の声で年齢は２０代前半の声だが、片方の声は明らかに弱り切っている。

足をやられた男に違いない。

私はライトを消す前に山犬へ「敵が居る」と手で言った。

山犬は頷き音を最小限に抑えるのを確認してから私は歩みを再開したが、その間も会話は続いている。

『何だか手の感覚が感じなくなってきた・・・・・・』

『ちくしょう・・・あのスキン・ヘッドが。蛇の差し金だと判っているのに何も出来ないなんて・・・・・・』

『くそったれ・・・今度は眼が霞んできやがった』

『シッカリしろ。待ってろ。もう少し薪を取って来る』

声がこちらへ近づく気配を感じたので、私が先手を打った。

体当たりをしてこちらへ来ようとした男を中へ押し戻す。
そこへ山犬が駆け込みイングラムＭ１０の銃口を地面へ倒れた男へ向ける。
「動くな」
私も体勢を立て直してＡＫＳ－７４Ｕの銃口を男へ向けた。
「・・・俺らを探しに来た、か」
男は私と山犬を見て諦めた顔をする。
もう終わりと判断した気がするも油断は出来ない。
仮にも精鋭部隊の一員だ。
一瞬の油断が命取りとなる。
「フォース・リーコンですね」
私は疑問を付けず確信した声で訊ねた。
「そうだ。君等は女王側の兵士だよな?銃口を向けて来るんだから」
「そうです」
言葉に頷きながら私は荒い息をする片方の男を見た。

大量の汗を掻き身体を震わせており顔が青白い。
あの様子では傷口から菌が入ったのか？
それとも別か？
何故こんな事を考えるのか分からなかった。
ただ単純にこの2人を撃ち殺せばそれで終わりなのになぜ引き金を引かない。
「質問しても良いかな？」
両手を頭の上で組んだ男が私に話しかけてきた。
年齢は２０代前半で金糸の髪に緑色の瞳が特徴的だった。
「何ですか？」
「君等の方に衛生兵は居るかい？」
「今、ですか？」
「あぁ」
「居ません」
「・・・何処に行けば居る？」
「砦に行けば居ます」

何を言いたいのか理解できずに私は訊いた。

「何を考えているんですか」

「・・・俺は降伏する。君の捕虜となる」

「私の捕虜になる、とは・・・・・・・」

まったく理解できずに続きを促すと彼は先ほどまで流れるような口調から途切れ途切れに言い始めた。

「俺は、これまで海兵隊として、祖国の為に戦ってきた。それが国の為と思ってきたんだ」

それからも男は続ける。

「だが、ここに来てからはリカルド様の為に戦おうと決めたんだ。相棒も一緒だ・・・だが、相棒は蛇の手先にやられて死にそうだ」

応急手当はしたが、それはあくまで応急手当でしかない。

早く傷の手当てをしないと死んでしまう。

「リカルド様の為なら、死んでも良い・・・・だが、相棒も俺もまだ死にたくない」

リカルド様の願い・・・地方へ灯火を灯す為に。

「だから、俺は君の捕虜となる。だから・・・だから、相棒を助け

てくれ。その代わり君等が欲しいと願う情報を与える。頼むっ・・・・
相棒を助けてくれ!!」

最後の方は涙声で、涙を流して懇願してきた。

演技と思った。

何より私たちが欲しい情報を与えると言うのも信じられない。

傷の手当てをして逃げられる身体になれば脱走する可能性もある。

ここは殺すべきだ。

殺せと命令されているんだから殺すべきだ。

だが・・・・・・・

「・・・分かりました。山犬、猟犬を呼んで来てくれ」

「でも、少佐は・・・・・・」

「私から話をする。だから猟犬を呼んで来てくれ」

「・・・分かった」

私は山犬を行かせてから武器などを取り上げて両手を後ろ手に回し
拘束した。

何でこんな事をするんだ?

私は・・・私たちは殺せと命令されたのに・・・・・・・

捕虜にしろとは言われていない。

これは私の独断だ。

独断で捕虜を取って良いのか？

少佐に叱咤されるかもしれない。

いや・・・されるだろう。

命令を違反したのだから。

何故するんだ？

何度も自分に疑問を投げ付けて答えを見つけようとするが見つからない。

そこへ猟犬が現れて傷ついた方の男を背負い、もう1人を私と山犬で洞窟から出し少佐達が待つ前線基地へと戻った。

私が初めて捕虜にした瞬間だった。

第二百二十四章：御咎め無し

2人を前線基地へ連れて来た私たちを見て少佐は何も言わずに負傷している男を衛生兵に見せるように命令してからもう1人を見た。

「名前は？」

「・・・“サーバル”だ。サーバル上等兵。アメリカ合衆国海兵隊フォース・リーコンに所属している」

「居たの間違いだろ」

ここは俺らの居た世界ではないと少佐は言うが直ぐに訂正した。

「違うな・・・お前等は“死ぬまで海兵隊”だったな」

「その通りだ。タカミ・テツヤ少佐」

「また質問だ。何でお前等はリカルド王子に味方している」

「あの方の崇高な思いに同調したからだ」

「それ以外の理由もあるんじゃないのか？」

挑発するような声で少佐は言うがサーバル上等兵はそれを否定した。

「無い。全てはあの方を王とする為だ。あんた等が女王を首都へ返り咲かせるのが願いであるように俺らはあの方を王とする願いがある」

「地方を救済する為か」

「そうだ。リカルド様が王になれば地方も潤う。だから、女王を打倒しリカルド様を王にしたいんだよ」

「そうかい・・・お前と相棒はこれより拘束する。だが、捕虜の任務は脱走もある。したければしろ。もっともそうなればこいつはお前と相棒を今度こそ殺すがな」

少佐が私を指差し私は頷いた。

「・・・坊やか。見た目と違って勇敢な男だ」

「まぁな。ワイド中尉」

「はっ」

少佐はワイド中尉を呼んだ。

「こいつを拘束し監視を付けろ。何れ城に連れて行って牢にぶち込むが今日はここで拘束しておく」

「了解」

ワイド中尉は敬礼をして彼一一一サーバル上等兵を連れて去った。

それから少佐は私を見たが何も言わずに私達は自然と解散という形になった。

何で何も言わないんだ？

それを訊こうと思ったが私はそれが出来ずに1人で見張り台の一角へ向かう。

見張り台には誰も居なかったが、それが私には助かった。

もし、居れば何と言われるか分からないという恐怖があった・・・・・・

私は何で出来なかったんだ・・・・・・・

自分に疑問を投げ付けながら煙草一一一女神の抱擁を銜えた。

女神の抱擁に火を点けながら私は・・・自分で行った行動に何がいけなかったか考え出した。

何がいけなかったかは明白だ。

何で命令を違反したんだ？

狙撃しろと言われた時は出来たのに・・・・・・・

分からない・・・分からないが酷く情けない気持ちだった。

私は兵士として失格だ。

人間としては無意味な血を流さなかったと言える。

だが兵士としては失格なのだ・・・失格なんだ。

「何を落ち込んでんだ？」

聞き慣れた声がして振り返るとイーグル１等軍曹が立っていた。

「軍曹・・・・・・」

私は煙草を銜えたまま失礼にも軍曹を呼んだ。

「何に落ち込んでいるかは分かっているぜ」

軍曹は微苦笑しながら私の隣に立ち自分の愛煙草である燃える女を銜えて火を点けた。

「旦那の命令は皆殺し。それを守らず捕虜とした。それを後悔しているんだろ？」

「私は、少佐の命令を守れませんでした・・・・・・・・・・」

軍曹の言葉を私は頷き自分で言った。

「俺にもあるぜ。そういう時が」

「え？」

「俺にもあるんだよ。お前みたいに命令違反した事が、な」

それから軍曹は語り出した。

「ソマリアの作戦に参加した後、俺はグリーン・ベレーに入隊した

んだがその前にレンジャー連隊で最後の任務をしたんだ」

ある国に潜入する陸軍の特殊部隊を援護する事が軍曹の任務だったらしい。

「前みたいに二の舞になると思った。そして上官からは発砲する様子だったら撃てと言われた」

本来なら向こうが撃つのを待ってから撃つらしくソマリアでもそうだったようだ。

「相手は撃とうとした。ＡＫのレシーバーを引いてストックを肩に当て狙いを定めた。それだけで撃つと判断できるだろ?新兵でも、な」

私は頷き続きを無言で促した。

「だが、俺は撃てなかった・・・相手が女だったんだ」

「それで、軍曹は一体・・・・・」

「俺の相棒が撃った。女は死に俺は殴られた」

死にたいのか?と相棒に怒られたらしい。

「そして上官にも殴られた。命令違反するとは軍人として有るまじき行為だとな」

「・・・・・・」

「俺とお前の場合は違う。しかし、命令違反はした。それでも上官はそれっきり何も言わなかった」

どうしてか解かるか？と訊かれたが私は分からなかった。

「俺はもうお払い箱と言いたかったらしい。もっともその上に行ったからこっちからお払い箱にしたんだがな」

「・・・少佐は私をもう、要らないと思っているんでしょうか？」

「違うさ。ただ、旦那もそういう経験がある筈だ。それにあいつらから情報を聞き出せるという利点がある。そこを考えて十と一で０・・・御咎め無しだ」

「しかし・・・・・」

「何を気にしているんだ？」

また声がして振り返ると少佐が立っていた。

「少佐・・・・・・・」

「旦那の命令に違反した事を気にしているんです」

「あれか」

少佐は軍曹の言葉に忘れていたとでも言う風に頷いた。

「私は、少佐の命令を守れませんでした」

「確かに皆殺しにしろと俺は命令したのにお前は捕虜を2人連れて帰って来たな」

言い訳だと自分で思いながらも私は言い続けた。

「・・・自分でも分からないんです。皆殺しにしろ、と少佐は命令したのに・・・命令を破りました」

「確かにそうだが・・・良い」

え?

私は少佐を改めて見た。

「あいつから情報を聞き出せる。内部の状況などを、な」

イーグルに言われたろ?と訊かれて頷きながらも私は食い下がった。

「ですが、私は・・・・・・・・・」

「確かにお前は命令を違反したな。だが、捕虜を得るのも大事だ。よってこれは不問とする」

「しかし、それでは皆に示しが・・・・・・・・」

フィーナ中尉とリーザ中尉には罰を与えたんだから私にも何かしらの罰を与えないと示しがつかない。

「俺は不問と言ったんだ。もし、それが不服なら今度の任務でこの失態を補えるだけの戦果を上げろ。そして二度とそんな真似はしな

いように心掛けろ。良いな？」

「・・・分かりました」

私はこれに対して頷くしか出来なかった。

「下でお嬢ちゃんが待っている。行って来い」

そう言われて私は下へおりた。

――――――――――――――――――――――

―――――――――――――

「かなり落ち込んでいますね」

俺に火を差し出しながらイーグルは下へ行ったランドルフを見た。

「あいつにとって命令違反は重大な事なんだろうな」

「そりゃそうですよ。命令違反しての独断は旦那の国が散々やって来たんだから結末は判るでしょ？」

俺の国はＷＷ？時代に色々と命令違反をして独断専行した軍人が多い。

参謀が特に酷かった。

本来なら銃殺物なのに身内を庇い合う糞以下の体制で戦後を生き残ったんだ。

そいつらのせいで大勢の兵が何の意味も無く死んだんだから酷いもんだ。

「しかし、時には違反するのも良いと思うが？」

ある作戦では続行が不可能となり撤退を要求した現地司令官だが、中央はそれを却下しそれに怒った現地司令官は独断で撤退した。

これも命令違反で銃殺物だが、それのお陰で兵達が少ないながらも生き残れた事を考えると良い。

要は命令違反も時には良い方向へ行くという事だ。

だからと言って頻繁にやろうものなら即銃殺だがな。

「旦那の仲間に入った時に初めて参加した仕事でも俺らを捨て駒にして逃げる上官を吊るし上げにした過去がありましたね」

あれも命令違反だ。

俺らは雇われた身だから命令には従うしかない。

「だが、こんな言葉があるぜ」

“何時から将校が兵士より先に逃げて良い事になったんだ？”

“グラーフ・リットベルク中将”はウクライナ戦線でパニックに陥ろうとしていた味方をこの一言で正気に戻した。

俺らの場合は全然状況が異なるんだが・・・あの腐ったビール腹をした大佐は自分の腹心と共に俺らを含めた兵たちを捨て駒にし逃げようとした。

それに対して俺はさっきの言葉を言い皆で吊るし上げてから窮地を脱したんだ。

それからどうなったか？

おいおい、耳は飾りか？

“吊るし上げたんだよ”・・・木の上に「私は脱走兵です」と書いたカードを首に掛けて、な。

「確かにそう言いましたね。まぁ、あれは明らかに命令違反ですが、少佐のお陰で他の仲間も生き残り依頼も完遂できたから御の字ですね」

「あぁ。だからと言って命令違反をする奴は許せん。だが・・・あいつの場合は英断とも言えるだろ？」

あいつが2人を捕虜にした事で向こうへ打撃を与えられる。

捕虜にした写真を送りつければ向こうの立場は益々厳しくなるだろう。

如何にリカルドが庇おうとも風当たりは更に厳しくなり最後には・・・見捨てられる事だろうぜ。

リカルド自身がその気は無かろうと他の奴が見捨てる。

それでこちらに有利となるから笑えるぜ。

「相変わらず旦那は意地汚いやり方が好きですね。これじゃリカルドが正義の味方に見えますよ」

「実際むこうに正義と大義名分はあるんだから間違いじゃない。俺らは悪だ。だが、餓鬼の頃から正義の味方が嫌いなんでね・・・悪役は喜んで歓迎するぜ」

「本当に捻くれてますね。まぁ“勝てば官軍、負ければ賊軍”という言葉もありますから最終的に勝てば良いのが世の中ですから正義も悪も関係ないですが」

「その通りだ。その点クルセイダー大佐は愚かな奴だ」

俺を仕留められる状況だったにも関わらず見逃したんだから愚か者だ。

「その割には高く評価している声ですね？」

「人間としての部分だ。だが、軍人としては平均点かそれ以下だな」

「そういう話は聞きましたよ。ベトナムを生き抜いた英雄である半面で叩ける敵を叩かなかったとか色々と失点は多いようです」

「それでも英雄と言われるのはその人格の賜物か？」

「恐らく。それから容姿端麗で良家の出という事もあるでしょう」

「画に描いた英雄像だな」

それだけ完璧なら犯罪者としても英雄として崇められるだろうと思いながら俺は女神の抱擁を再び吸った。

「旦那とは豪い違いですよ。ですが・・・今度ばかりはその賜物が仇となるでしょうね」

何せ相手が勝つ為なら手段を選ばない旦那だから、とイーグルは言い煙草を捨てた。

第二百二十五章：王女から呼び出し

フォース・リーコンの2人を捕虜にしてから数日が経過したが敵が来る気配はまるで無い。

どういう事だ？

仲間が帰って来ないのに心配ではないのか？

いや、恐らく敵は仲間がもう殺されたんだと知っている。

だが、全員が戦死してしまったからどうするか考えているのかもしれない。

若しくは蛇たちの動きで何かあったのかもしれないな。

と私は見張り台に立ちながら考えていた。

あれから私は・・・肩の荷が下りた気がする。

捕虜をとった事に対して少佐は不問とした事を私は気にしていたが、他の方たちから励まされて今ではそう重くは考えていない。

いや、命令違反は違反だ。

だから今度は、必ず守る気持ちを持ち続ける。

そうしなければまた前のような事になってしまう。

それは何としても避けなくては・・・・・・・・・・

「おはよう。ランドルフ君」

チャレンジャーが私の隣に立ち朝の挨拶をしてきた。

「交代の時間になったのかい？」

「いや、まだ時間があるよ。でも起きたから来たんだ」

「そう。フォース・リーコンの方はどうだい？」

「今の所問題ないらしいよ。脱走を企てる様子も無いとエドリアス大尉は言っていたよ」

フォース・リーコンの2人――サーバルとイヴェコの上等兵はリブリーブス城に身柄を移された。

エドリアス大尉がプレス・ハートとこの2人の世話をしており少佐に逐一報告している。

今の所は問題ないらしいとの事だが、何れは脱走を企てるかもしれない。

もし、そうなれば私は今度こそ引き金を引く。

引かなければならないのだ。

「あんまり1人で深く考えないでくれ」

チャレンジャーは私を見ずに言い、私は彼を見た。

「僕は君の親友だ。親友が困っている時には手を差し伸ばすのが親友だよ。だから何か悩んでいるなら話してくれ」

「・・・ありがとう」

「良いよ。時間だ・・・ランドルフ1等兵、ただ今からこの場はレオン2等兵が交代します。ですからどうぞお休み下さい」

チャレンジャーは姿勢を正し私に敬礼をして交代の言葉を言った。

「ランドルフ1等兵。ただ今からレオン2等兵に交代をする。以上」

私も敬礼で返し見張り台を下りた。

下へ行くと私を少佐が話し掛けてきた。

「ランドルフ。少し城に付き合え」

「城ですか?」

「あぁ。王女様がお前を呼んでいる」

「私を?」

エリーナ様が呼んでいる?

また何か変な要求でもして来るのか?と失礼にも考えてしまった。

「あぁ。行きたくないだろうが来い」

「・・・別に行きたくないとは言ってないですよ」

「顔が如何にも“またか”という顔だ」

慌てて顔を直す私に少佐は意地悪な笑みを浮かべてから行くぞと言い背を向ける。

ヘリなどを置く場所には数日前に注文したヘリがあった。

ブラック・ホークが1機、ヒューイ・コブラが1機、ヒューイ・コブラのベースとなったＵＨ－１の3機がある。

そしてその傍らには天馬の小屋が設置されておりお姉様達が天馬の手入れをしている所が眼に入った。

「どれで行くんですか？」

「今回はＵＨ－１だ」

「これって少佐の国も採用しているんですよね？」

「あぁ。3機とも日本で運用されているしライセンス生産もされている機もある」

私の質問に少佐は答えてから私はＵＨ－１の後部座席に乗り少佐は操縦席に乗った。

そしてボタンなどを押しエンジンを始動させると上のプロペラが回

り始め雪が白い煙を出し始めるように見えた。

ゆっくりとヘリが上にあがり、やがて空高く舞い上がった。

「掴まってろ」

少佐が操縦桿を前に押しＵＨ－１は真っ直ぐにリブリーブス城を目指し飛んだ。

私は手すりに掴まりながらエリーナ様は何の用か考えてみた。

とは言っても碌な事じゃないと言う考えしか浮かんで来ないのは経験から来ている。

夕食の事もそうだが、あの方は私を困らせて楽しんでいるのか？とさえ勘ぐってしまう。

一体なにを私に今度は要求する気なのか・・・・・・

出来るならただ話すだけにして欲しい。

などと願いながら私は空から見える白い雪化粧で気を紛らわせた。

城の演習場へＵＨ－１を着陸させた少佐と私をゲンハルト様とプロイセン様の御両人が迎えてくれた。

「ランドルフ。王女が待っているぞ」

ゲンハルト様がエリーナ様の事を口にした。

「なぜ私を呼んだのか分かりますか？」

「いや。まぁ大した用ではないだろう。ただ、ここ最近は話し相手が居なくて寂しい思いをしていたからそなたと話をしたいのかもしれんな」

「それは言えてるな。この非常事態と言っても、あの方はまだ幼い。女王のように未だに心の整理が着いていないのだろう」

ゲンハルト様の言葉にプロイセン様は自慢の髭を撫でながら頷いた。

敵兵に矢を射られて重傷を負ったが今みる限りはそんな様子が感じられないと思いながら私は2人の言葉を頭に刻む。

サラ様はリカルド様を敵として討つともう決めているがエリーナ様はまだしていない。

いや、出来ないのかもしれないと思い直した。

サラ様は女王としても母親としても、もう独立していると言って良いのに対してエリーナ様はまだそのような経験は無い。

酷な言い方をするなら王女だからと言うが、私がもしあの方の立場になったらどうだ？と言われたら出来ないと言う他ない。

それを思うと2人の言葉は尤もだ。

少佐はもう1人でとばかりにミレーネ様とメジュリーヌ殿が待つ家へ向かってしまった。

私もオリガさんの待つ家へ行きたかったのに・・・身体はエリーナ様の部屋へ行く。

まるで頭と身体は別みたいな感覚だ。

それに悲しみながら私は向かい続ける。

頭はオリガさんの家へ向かうが。

そしてエリーナ様の部屋へ到着した。

ドアノブを控え目に叩くと「ランドルフですか？」ときかれたので「そうです」と返事をすると直ぐにドアは自動的に開き可愛いらしい容姿をした人形――エリーナ・ロクシャーナ様が迎えてくれた。

「よく来てくれました」

「お呼びになられたので」

出来るだけ当たり障りのない返事をして刺激しないように心掛ける。

下手に刺激するとまた前みたいに泣き出す可能性が捨て切れなかったのだ。

しかし、今回は私の父と知り合いである侍女の方がいるから多少は大丈夫だろう。

「さぁ、掛けて下さい」

「その前に何で私を呼んだのか教えて欲しいのですが」

酷い言い方だが、あまり良い理由ではないと確信していたがちゃんとこの方から聞きたいから敢えて訊いた。

「り、理由、ですか？」

「そうです・・・まさか、何もなく呼んだなんてことは・・・・・・・」

ゲンハルト様とプロイセン様の話を聞いてそうかとは思っていたが、やはり本人の口から言われると些か怒りを覚えてしまう。

「それは違いますよ。ランドルフ殿」

侍女が私に苦笑しながら話しかけてきた。

「違う？」

「えぇ。エリーナ様は自分も何か貴方様のお役に立てないか？と訊きたいのです」

「私の役に？」

どういう意味なのか理解できずに鸚鵡返しする。

「はい。先日女王陛下は首都へ演説を行いましたよね？」

「はい。テツヤ殿に自分も力になりたいと言っていたので」

「それをエリーナ様も知って自分もと思ったのですよ」

「でしたら私ではなくテツヤ殿に言うのが良いと思いますが」

「本当に父君と同じですね」

侍女は僅かに咎めるような視線を送り私は居心地が悪くなり視線を逸らした。

「・・・努力中です。話を戻しますが、やはりこれはテツヤ殿に言うべきです」

強引に話を戻し私は言った。

「確かにそうですが、先ずは年齢が近い貴方様に相談したいそうです」

「ですが、私はエリーナ様に何を言えば良いのか・・・・・・」

「だから茶を飲みながら考えるのですよ」

「・・・・・・」

だから茶を飲みながら、という答えに何で行くんだ?と疑問に思うがどうしてか侍女が言うと説得力があり納得してしまう。

「さぁ、お掛けになって下さい」

「いえ。壁で良いです」

私は習慣として壁に背を預けモーゼルとＡＫを直ぐ手に取れる場所

に置いた。

「ここは安全なのではないですか？」

侍女が言うも私はそれを否定した。

「安全です。ですが、何時いかなる時も油断するなと言う事をテツヤ殿に心身ともに刷り込まれたので」

実際の所はテツヤ殿の真似をしていただけだが、既に私も実戦を経験したから説得力はある筈だ。

「テツヤ様は用心深い方ですね。女王もそれを悲しんでおられました」

何時も壁に背を預けて自分との距離を縮めようとしていないと・・・・・

「そう言われてもあの方は私たちが想像している以上に過酷な道を歩いて来たんです。女王陛下には失礼ですが無理と思われます」

「本当に父君にそっくりですね。そういう強い口調などが特に・・・・・」

父にこんな所まで似たのかと思う私だが、視線を感じてそちらを見る。

「・・・・・・・・・」

エリーナ様が怒っていた。

何で怒っているんだと思うが泣かれるよりはマシだと思い何も言わないでおいた。

「それでは茶の用意をして来ます」

侍女は一礼して部屋から出て行き私とエリーナ様だけになった。

「ランドルフ。質問しても良いですか？」

エリーナ様は先ほどの怒った顔が嘘のように消えて天使のような笑顔を浮かべて私に話し掛けてくる。

「何でしょうか？」

「テツヤ殿の事で質問です」

「テツヤ殿の？」

「はい。あの方は、お母様をどう思っているんですか？」

「それは本人に訊かないと何とも・・・・・・」

「貴方の視点で答えて下さい」

何で私の視点なんだと言いたい衝動を抑えて私はあの2人を思い浮かべた。

傍から見れば美女と野獣か山賊と攫われた御婦人、といった感じにしか見えない。

まぁ、あの性格だから姫と騎士なんて画には絶対ならないしテツヤ殿自身も鼻で嗤うだろう。

正義の味方が大嫌いという捻くれた方なのだから。

となれば姫を攫う黒騎士と言った所か・・・物凄く画になると思ってしまうのは錯覚ではない。

話を戻そう。

テツヤ殿が女王であるサラ様をどう見ているか・・・・・・・・

最初サラ様の優しさに対してテツヤ殿は「聖母」と言ったが、あれは皮肉か？

先ほども言ったが正義の味方が大嫌いという捻くれた方なのだから一見ほめ言葉と取れるこれもある意味では皮肉だったのかもしれない。

とは言えそれを馬鹿正直に言うほど私は愚かではないから当たり障りの無い言葉を選んだ。

「そうですね・・・聖母、と見ているのではないでしょうか？」

「聖母、ですか？」

「はい。最初に言った言葉が聖母でしたから。きっと優しい方と見ている筈です」

「それは・・・・・・・・・・」

エリーナ様が何かを言おうとしたが、ドアが開かれた事で中断となった。

侍女は私とエリーナ様に紅茶を差し出してきたので私はそれを受け取りエリーナ様と侍女を混ぜて3人で話し合いを始めエリーナ様が何を言おうとしたのかは分からないで終わってしまった。

第二百二十六章：危険を犯す者

エリーナ様と会話を終えた後の時間は既に夕方になっていた。

夕方になったのだから帰ろうと思ったが、それを察したようにエリーナ様はこう切り出してきた。

「夕食をどうですか？」

エリーナ様は私をまた誘ってきた・・・・・・

また前みたいな状況になる可能性が極めて高いから断ろうとしたが、ここで断ると後が怖い。

最悪の場合この場で泣かれてしまう。

それを考えると断る事が直ぐに出来なかったのだが、ここで天の助けが来た。

「エリーナ様。ランドルフ殿は無理を通してここへ来たんです。夕食を取るのは無理と言えますよ」

侍女が私の様子を見て直ぐ様助け船を出してくれたから有り難い。

「ランドルフ殿、これからまた仕事があるのでしょ？」

侍女は私に顔を向けて訊ねてきたが瞳は「話を合わせて」と言っているので頷く。

「まぁ、これから夜警などもあるので夕食は無理、ですね」

実際、時間はあるのだが夕食をすれば泊ってと言われる可能性が極めて高いからこの場は嘘を吐く。

「そう、ですか・・・では今度お願いします」

「はい。“今度”ですね」

もう私の中では今度＝永遠という事になるが、それは言わないでおこう。

王女と夕食などもう一度経験したから結構なのだ。

正確に言えば神経が擦り減って身が持たないというのが正しいが。

「では、これで・・・・・・・」

私は一礼して部屋を辞した。

結局エリーナ様が私たちの役に立てる事は見つからなかった。

まぁ、私だけでは無理という事もあるだろうがテツヤ殿に話しておこうと思いつつ城を出て演習場へ向かった。

本当ならオリガさんの家に行きたいが、言った事を考えると少し用心しなければならない。

下手に行って見られたら泣かれる所か極刑物だと思えば自然と足は演習場へ向く。

演習場ではゲンハルト様、プロイセン様、ヴィールング殿、将軍達が居た。

「おお、ランドルフ。どうだった？エリーナ様とは」

プロイセン様がテツヤ殿から渡されたドウダヌキの手入れをしながら訊ねてきて私は何とも言えないと答えた。

「その様子からして疲れたのか？」

「・・・否定できません。神経が擦り減る思いです」

と私は答えるが皆にとっては笑いの種だったらしく笑われてしまったから揃いも揃って人が悪いと思う。

「所でテツヤ殿は？」

「まだ来ない。そなたも帰ったらどうだ？」

「いえ・・・エリーナ様に夕食を誘われたのに断ってオリガさんの家で食事を取ったなんて知られたら・・・・・・」

「まるで浮気を知られた夫だね」

ヴィールング殿はクスッと笑いながら言いそれに皆も笑い出す。

「その言い方は酷いですよ」

「それはすまないね。では話題を変えよう。ランドルフ君。君はこ

の後、敵はどうでると思う？」

いきなり真剣な顔つきで訊ねてくるヴィールング殿に私も慌てて気を取り直し答えた。

「恐らく無線で呼び出しても連絡が無い事を気にして戦死したと考えるでしょう。そして死体を取り戻しに来るか、前線基地を再び取り戻しに来るか、ですね」

「向こうはどう来ると思う？」

「吹雪などが無ければワイバーンとヘリで来るでしょう。それからまた前みたいに来ると思われます」

「そうだね。だが、我々もまた動こうと思うんだよ」

「と言うと？」

「スリー達を首都へ潜り込ませる」

「ですが、顔を知られているのでは？」

「勿論だ。だから、そこを利用するのさ」

顔を知られているから利用する・・・つまり・・・・・・・・・・

「スリー殿達を使い首都でも行動を起こして敵を分散させこちらへ来させないという事ですか」

「その通り。もちろん危険は伴うが、危険を犯す者こそ勝利の女神

は微笑んで下さるのだよ」

「まるで“ＳＡＳ”だな」

テツヤ殿の声がして振り返るとメジュリーヌ殿と共に居た。

「ＳＡＳとは何だね？」

ヴィールング殿はテツヤ殿に訊ねた。

「島国であるイギリスの特殊部隊で世界中の特殊部隊の元祖だ」

世界中の特殊部隊が模範としており対テロ戦闘の第一人者とも言える存在らしい。

そのＳＡＳのモットーはこれだ。

Ｗｈｏ　Ｄａｒｅｓ　Ｗｉｎｓ――危険を冒す者が勝利する。

「あんたの言葉はＳＡＳの言葉だ」

「それは光栄だね」

何だか言葉に棘があるのは気のせいか？と思ったが、フィーナ中尉を抱いた事を知ったんだから実親としてテツヤ殿に対して少しばかり敵意を見せるのも無理はないか。

「で、話を戻すがただ行動をするだけじゃないんだろ？」

「なぜ判るんだい？」

「簡単だ。あんたみたいな知り合いが向こうにも居てね。それに傭兵をしていたからそういう事にも係わりがある」

「どういう事ですか？」

私には分からないので訊ねた。

「ただ行動するだけなら良い。そこらのチンピラを使っても出来る。ただ、嘘と真を折り混ぜた情報を扱うには知識などが必要なんだよ」

「なぜ嘘では駄目なんですか？」

「向こうも頭が切れるんだ。嘘だけだと直ぐにバレテしまう。だから嘘と真を折り混ぜて流すんだ。教えた筈だぞ」

「・・・忘れていました」

すっかりそんな知識が頭の中から抜けてしまっていたから私は情けない気持ちに襲われた。

「戦時中でなかったらお前を1週間かけて教育し直した所だ」

1日中机に縛り付けて教え込むと言われたから、不謹慎だがこの状況に感謝する。

「で、いつ出発させるんだ？」

「もう準備は出来ている。君等が帰る時にヘリに乗せてくれ。そこからは彼等だけが行く」

「了解。それから首都の奴等に女王の事を伝えるように言っておけよ？」

分かっているだろと確信的な色が含まれていたがヴィールング殿は当然とばかりに頷いた。

「勿論だ。それではリカルド王子に従った者たちもついでに調べておこう。上手くやれば味方にできる」

「それで用が済んだら消すんだろ？」

「どうかな。改心したなら消さないが、していないなら・・・貴族たちのような奴なら迷わず消す。それで良いかな？前線指揮官殿」

最後はちゃらけた感じで訊くヴィールング殿にテツヤ殿もまた笑って頷いた。

「ＯＫ。それで良い。それじゃ呼んで来い。ランドルフ、お前は帰る準備をしろ」

「了解」

私は敬礼してヒューイＵＨ－１に荷物を持って乗り込んだ。

まだ彼等が来るまで煙草でも吸おうと思い懐から女神の抱擁を出して口に銜えた。

それからマッチで火を点けて息を吐いて気を楽にしながら煙を吐いていると・・・・・・・

「これがヘリか・・・・・・」

平淡な声がして振り返ると平凡と言える容姿をした男ーーースリー殿が現れた。

「えぇ。ヒューイＵＨ－１ヘリコプターです」

彼の後ろには数人の男が居るのだが皆はヘリに視線が注がれている。

「ヒューイ？」

「これを作った会社の名前です。テツヤ殿の国も採用しておりロープを下に吊るせば下りれるようになりますし、このように地面へ近付けて下りる事も出来ます」

「なるほど。ヴィールング隊長を救出する時も見たが便利な物だな」

「だが、天候に左右されるし攻撃にも弱いんだ」

テツヤ殿とメジュリーヌ殿、そしてヴィールング殿が現れヘリの弱点を教えた。

「そうか。完璧、ではないか」

「完璧な物なんて無いさ。それより乗れ」

スリー殿達は頷いてＵＨ－１に乗り込んだ。

メジュリーヌ殿はドラゴンの姿となり私たちの後を追い掛ける事に

なる。

「では、行って参ります。ヴィールング隊長」

スリー殿達はヴィールング隊長に敬礼をした。

「うむ。我等の任務に危険は付きものだが・・・危険を犯す者にこそ勝利の女神は訪れる」

『ハッ』

皆はヴィールング殿の言葉に頷いた。

そしてプロペラは回りゆっくりと地面から離れて飛び立ち前線基地へとまた戻る。

第二百二十七章：危険な賭け

ヘリで前線基地まで戻る間に私はスリー殿達と仲良く・・・までは
いかないが話をしていた。

「では、ヴィールング殿の方が当主になられた可能性があったんで
すか」

いま話している内容はヴィールング殿が当主になれたかもしれない
という話だ。

マレル家はフィーナ中尉の祖父から出来た新生貴族だから風当たり
は決して良いとは言えなかったらしい。

それは今でも変わらないと聞くが、出来たばかりの時はそれ以上ら
しかった。

「隊長の父君の代になってからは風当たりも幾分かは丸くなったが、
長男が居るのに次男に跡を継がせたとあってはまた叩かれる原因と
なる」

「だから、ヴィールング殿は当主になれなかった、と・・・・・」

「あぁ」

スリー殿は酷く平淡な声で頷き、そんなスリー殿を見ずに私は誰に
言う訳でも無く言った。

「・・・もし、ヴィールング殿が当主になられたなら、マリー様も

幸せでしたよね？」

「・・・知っていたのか」

スリー殿が言葉を聞いて私を見た。

「・・・ヴィールング殿から教えられました」

「俺もだ」

テツヤ殿がヘリを操縦しながら話に入ってきた。

「そなたとしてはどう思う」

「愛する男女が下らない世間によって結ばれなかった・・・悲劇と言えるな」

だが、とテツヤ殿は区切りを入れた。

「ヴィールングのおっさんがマリーって女を連れて逃げれば良かったとも言える。もしくは影で兄貴を陥れたら良かったんだ」

確かにそれは言えている。

手を取り合い何処へでも逃げれば良いのだ。

もしくはロックス殿を陥れてマリー殿を奪い返せば良いのだ。

「それをしなかった所はおっさんが・・・覚悟が足りなかったのさ。自分でマリーを幸せに出来るのか？という覚悟が、な」

「・・・そなたにもそういう経験があるようだな」

スリー殿は怒りもしないでテツヤ殿を見た。

「・・・・昔の事は覚えていない」

素っ気なくテツヤ殿は言うとヘリをゆっくりと前線基地へ下ろした。

しかし、この言葉でスリー殿には経験があると判ったようだ・・・

私には判らなかったが。

ヘリから降りた私たちをフィーナ中尉達が迎えてくれた。

「スリー。叔父上に変わりはないか？」

「はい。貴方様の事を気にしておりましたが、問題ないようですね」

「あぁ。それで何でそなた達がここへ？」

「私たちはこれより首都へ向かいます」

「首都へ？」

「はい。首都へ潜入し内情などを調べつつ工作活動を行い内部から攻撃し貴方達を援護します」

「つまり私たちが首都へ行く道のりを良くする為に行くと言う訳か？」

「そうです」

「危険ではないのか？いや、危険だ」

「それは覚悟の上です。ですが・・・危険を犯す者にこそ勝利の女神は微笑んで下さりますから」

それを言ったスリー殿と仲間達は前線基地を直ぐに出て行ってしまった。

「勝利の女神とは粋じゃのう。しかし、どうして人間というのはそういった事に関しては男神ではなく女神に例えるのじゃろうな？」

メジュリーヌ殿がスリー殿の言った言葉が気になったのか扇を弄びながらテツヤ殿に訊ねた。

「同性を例えるより異性に例えた方が良いからだろう。で、お前は何で来たんだ？」

「つれない言葉を言わんでおくれ。機嫌でも悪いのか？」

「そう見えるのか」

テツヤ殿は片眼でメジュリーヌ殿を見ながら煙草を銜えた。

「見えるの。触れて欲しくない事でも触れられたのかえ？」

「・・・知るか」

そう言ってテツヤ殿は火を点けた煙草を吸いながら去ってしまった。

そして・・・私にフィーナ中尉、リーザ中尉、メジュリーヌ殿の視線が来るのは明白と言えた。

何せ私が一緒のヘリに乗っていたのだから当たり前と言える。

「さぁ、ランドルフ。大人しく吐け」

メジュリーヌ殿が一歩歩むと私は一歩下がったが、フィーナ中尉とリーザ中尉が左右から距離を縮めて行くから余計に不味い。

「ランドルフ。大人しく吐けば手荒な真似はしない」

「そうね。素直に吐いてくれたら傷付けないわ」

その割にはワイヤーとナイフをチラつかせているな、と思ってしまうのはいけない事か？

誰も助けてくれない――とばっちりを受けたくない、面白い、興味がある、という私にとっては碌な感情が込められた顔で見ている。

孤立無援だ。

「い、いえ。私は何も・・・・・・」

「知らんとは言わせんぞ。さぁ、大人しく全てを吐け。そうすれば痛い思いなどせんですむ。じゃが・・・嫌と言うのならその身体に訊くがどうする？」

「だ、だから、本当に知らないんですっ。た、ただ、テツヤ殿にも

女性を幸せに出来ない過去があるんだという事だけしか知りません！！」

「何じゃ・・・そんな事か」

メジュリーヌ殿はつまらないと嘆息する。

「お、驚かないんですか？」

「何を驚く？テツヤの正妻じゃぞ。妾は。正妻は夫の全てを知っておる。テツヤもまた男じゃ・・・そういう苦い過去があるのも道理」

「メジュリーヌ。貴様はテツヤの過去を知っているのか？」

フィーナ中尉がメジュリーヌ殿に訊ねる。

「いいや。知らん」

「さっきの言葉と矛盾していますよ」

リーザ中尉が先ほどの言葉――正妻は夫の全てを知ってる、という言葉の矛盾を突いた。

「矛盾している？それは違う。妾はあの男を全て知っている。それは過去などではない。あの男が歩んだ道を知っているのじゃ。故に妾はタカミ・テツヤと言う男の全てを知っているのじゃ」

何だか意味深げな言葉に私は首を傾げる。

どういう意味だ？

「どういう意味だ」

フィーナ中尉がメジュリーヌ殿に訊ねるが彼女は扇で顔半分を隠しこう言った。

「それは自分で考えろ。そなたもまた言いたくない過去があるじゃろうが、妾やテツヤから見ればそれほどの過去ではあるまいて」

それだけ言うとメジュリーヌ殿はテツヤ殿の行った方角へ足を運んだ。

残された私達は何とも言えない気分だった。

しかし、私としては何とか危険な眼に遭わずに済んだのだから御の字としておこう。

直ぐに私はその場から離れて見張り台へ登った。

今ならスリー殿達が何処を歩いているか分かるかもしれない。

見張り台に登り双眼鏡で周囲を探すが見つからない事に疑問を覚えたが、今にして思えばあの方たちは私達と似たような訓練を受けて来たんだ。

味方にも判らないように進んでいると思い直す。

「内部と外部の両方から攻撃・・・敵を首都から追い出せる日も近い、か」

「強ち間違いじゃないよ」

ヘンさんが私の隣に立ち私の言葉に頷いた。

この方もまた突拍子も無く現れる所があるから恐れ入る。

「首都を敵から奪い返したらどうなるんでしょうか？」

「先ずは民達の状況を見てからだな。とは言え、逃げる敵を追撃するのに変わりはないけどね」

「ですが、追撃するという事は敵の支配する土地へ潜入する、という事ですよね？」

「あぁ。君の言いたい事は判っているよ。地方の者達が敵となり俺らを襲う可能性があるのでは？という事だろ」

「はい。私が考える限りそれは十分にある、と思いますが・・・・・」

「それはあるね。だけど、地方もまた一枚岩では出来ていないと蛇たちが証明しただろ？」

「そうですが・・・・・・」

「地方も軍を起こす事に反対した者も居ただろう。幾ら自分達を虐げたとは言え国に反旗を翻すのは並大抵の精神では出来ない。何より自分達が負けたら一家皆殺しなんて事も有り得なくは無いんだ」

「そうなると・・・・・・・」

「地方から離反者も出る可能性だってあるんだ。若しくはリカルド王子が手を打ち自分達が負けたら「自分は加担していない」と口裏を合わせろと言うかもしれない」

「・・・・・・」

「あるいは最初から女王側にもリカルド王子側にも加担しないで中立を保つ貴族も居る」

「中立、ですか・・・それって双方から叩かれる可能性が極めて高いんじゃ・・・・いや、叩かれるというより引き込もうとされる可能性があるのではないんですか」

私は最初に言った言葉を訂正してから言い直す。

中立とはどちらにも属さない立場だから非常に曖昧だ。

こんな国家の存亡が掛った状態では尚更でどちらも自陣へ引き込もうとするのが私の考えである。

「それもある。しかし、別の意味で言うなら中立と言うのはかなり“危険な賭け”に出たとも言える」

「危険な賭け、ですか・・・・・・？」

「あぁ。どちらにも属さない第三者的な存在が中立だ。しかし、俺らからもリカルド王子からも見れば敵でも味方でも無い中途半端な存在と言えるだろ？」

「確かに・・・・・」

「恐らく向こうの方に領土があるから何かしら手助けはしているかもしれない。しかし兵達を送ったり直接的に攻撃している訳ではない。だから、仮に向こうが負けても「自分の領土は中立で関与していない」と逃げられる」

「それって言い換えれば・・・・・・・・・」

「どちらにも良い顔をする奴と見える。そんな立場は内乱が終わっても残党から報復される可能性もあるし、俺たちから冷たくされても文句は言えない」

「それでも民達も領土も無事、なんですよね？今の所は」

「あぁ。もしくは互いに力を出し尽くして折り合いを着けようという事で中立派に和平の調停などを申し込む事も出来る訳だ」

「難しい立場、ですね」

「その通りだ。だから、これを決断するってのは生半可な気持ちじゃ出来ない。俺の知り合いに心当たりは1人居るが、そいつかもしれないな」

「ヘンさんの知り合い、ですか」

「あぁ。話せば長くなるんだが・・・おっと、少佐だ」

ヘンさんは続きを話そうとしたが、テツヤ殿が現れた事で中断となった。

「スリー達は見えたか？」

「まさか。あいつらは味方さえ姿を見せない。そして死体もまた見せない。“死して屍を拾う者無し”・・・俺が居た隊の合い言葉だった」

「死んでも、死体は誰にも拾わせないんですか・・・・・・・」

「そうだよ。しかし、それで国が潤うならば喜んで死ぬ。それがスリー達だ」

「お前は？」

「どうかな。俺は国家が潤う為なら喜んで死ねるなんて肝は据わってない。ただ言える事は自分と親しい奴等は助けて生き残る。それだけは言える」

あんたは？とヘンさんはテツヤ殿に訊ねた。

「俺も同じだ。傭兵になった時点で愛国心なんて物は溝に捨てた。だが、仲間と自分の身は何があろうと護り生き残る。それは変わらない」

「愛する女子はどうしたのじゃ？」

メジュリーヌ殿がテツヤ殿の背後から抱き着いて訊ねた。

「勿論はいっているぜ」

「それを聞いて安心したぞえ。それではそんな愛おしい殿方へ良い情報を与えよう」

「何だ。言え」

「急かせんでくれ。まぁ、そなたを褥の中で急かせるのも楽しいが」

「グダグダ言わずに言え」

「分かった分かった。敵は・・・貴族たちはこちらへ寝返る準備を始めた」

「それが何だ。良い情報でも何でもないだろ」

「そうかえ？あ奴等とスリー達を使えば内部から破壊し首都へ更に近付けるぞ」

「そうだな。しかし、リカルドも馬鹿じゃない。恐らくそれに対抗する対策は出来ている筈だ」

「敵を高く評価するとは良い将の証じゃな」

「“敵を知り己を知らば百戦危うからず”だ」

「敵を知り己を知れば何度戦おうと・・・百度戦おうと負けない、か」

「そうだ。逆に相手を知らずに過小評価して戦えば手痛い授業料を払う事になる」

「なるほど・・・貴族たちは敵所か己の置かれた現状も知らないで戦をしようとしているのう」

「そうだ。そんな状態で戦をすれば結末なんて歴史を見なくても判る事だろ？」

死あるのみ・・・・・・・・・・

そうテツヤ殿は言った。

その隣に立つメジュリーヌ殿・・・・どう見ても悪役とそれに仕える女と言った画にしか見えないのは私だけの秘密だ。

第二百二十八章：至高の華

スリー殿達が出て行ってから2日が経過した。

今回は吹雪なども無かった事から敵はワイバーンとヘリを繰り出して来たが、編隊がまるでバラバラだ。

何時もなら編隊を組んで来るのにどういう訳か飛んでいる高さが滅茶苦茶だった。

ワイバーンの数は正確には判らないが眼で確認できる限りざっと見積もって６００という所だが半分は低空でもう半分は高空で飛んでいる。

ヘリの方は８機でＡＨ－６４アパッチが５機にＣＨ－４７チヌークが３機と今までにない数で押し寄せて来た。

だが、こちらもまた低空と高空で飛んで来るからまったく分からない。

何を考えているんだ？と思わざるえないが少佐はまるで気にしていないのかプカプカと煙草を吸っている。

「おお、随分と来るな」

空を見上げながら少佐は女神の抱擁に溜まった灰を指で叩き落とす。

「少佐。奴等の狙いは何でしょうか？」

「考えられる事は幾つかある。しかし、低空と高空で別れて飛んでいるという事はここだけを攻撃するという訳じゃない」

「まさか・・・・・・・・・」

「リブリーブス城を狙う積りだ。チヌークから空挺共を下ろして占拠する腹だろうな」

こちらと両方を襲いどちらかを孤立させるというのが敵の狙いか。

「どうするんです？」

城にはオリガさんが居るし他の人たちも居るから直ぐにでも駆け付けたい衝動が底から来るのだが、それを必死に抑えて訊ねた。

「どうもしない。向こうにはミーシャとワイドが居るしプロイセンのおっさん達も居るんだ。そう簡単には落ちないさ」

「そうじゃな。まぁ、妾なら直ぐにでもあちらへ行けるがどうする？」

「先ずはこいつらを片付けてからだ」

「そうか。で、先ずはどちらをやれば良いのじゃ？」

「ヘリだ。あいつ等は地上を攻撃し俺達を足止めにして周囲を焼け野原にする積りだからな」

「では・・・先手必勝じゃ。餓鬼共よ・・・翼を？ぎ取られた小鳥のようにピィピィ悲鳴を上げよ。さすれば下で待つ妾の下僕共が美

味しく平らげて進ぜよう・・・・・・・・」

下僕とは私たちの事か？と思うが、こんな言葉を言っても画になるのだからやはり外見も大事だなと変に思う。

メジュリーヌ殿は指をパチンと鳴らし何処からともなく黒い鞭を取り出して右手で柄の部分を握りシュパッンと地面を軽く叩いてみせる。

通常の鞭より強靱に見えるし鴉の羽みたいに艶があるからただの鞭ではないな。

「おお、画になるなー・・・ぎゃあ！！」

イーグル軍曹がお約束の展開とも言える言葉を言うやパシンッと鋭い音がして鞭が軍曹を弾き飛ばした。

だが、距離があり届かない・・・筈なのに届いたという事は・・・・・・

「“魔法鞭”ですか？」

私はメジュリーヌ殿に訊ねると頷かれた。

魔法鞭とは魔法剣と同じ要領で魔法が使える鞭だ。

「じゃが、これはただの魔法鞭ではない。妾の髪で作り上げた鞭で伸び縮みは自由自在で頑丈じゃ」

「だから艶があるんですか」

と私は納得するがその傍らでは・・・・・・・・・

「イーグルっ」

魔術師の女性が軍曹に駆け寄るがメジュリーヌ殿は気にした素振りも見せないで細長い棒を取り出して銜えた。

煙草に見えるが茶色っぽくて香りも良い。

「んー、この香り・・・実に良い。流石は“至高の華”という銘柄じゃな」

「宅配人も言ってたぞ」

“女王様には至高の物がお勧めです!!”

「あの、注文したんですか?」

「あぁ。こいつが何かくれと言うからな。至高の華という葉巻をくれてやった」

少佐は答えてからメジュリーヌ殿の銜えた葉巻ーーー至高の華に火を点けてやった。

「・・・ふぅー。どれ“教育の時間”じゃ」

ヒュン・・・・・

空を切り鞭がしなやかに低空で飛んできた先頭のアパッチの右翼に

絡ませるといとも容易く?ぎ取った。

片翼を?がれたアパッチは見るも無残に急降下し地面と激突してから爆発した・・・・・・

流石はメジュリーヌ殿の髪で作られた魔法鞭だけあって威力は申し分ないな。

とは言え些か規格外とも言える強さだが。

「ふほほほほほ・・・良い音じゃ。もっとじゃ・・・もっともっと悲鳴を上げよ。小鳥共よ。そなたらの可愛らしい悲鳴は妾の耳を何処までも楽しませてくれる音じゃ」

「・・・完全にドS女王じゃねぇか」

軍曹が打たれた個所を摩りながら言い少佐に近付いた。

「旦那。今回、俺たちの出番はありますか?」

「あるさ。そら来た」

少佐は指差すと目の前にアパッチから発射された銃弾が襲い掛かってきた。

しかし、魔法防御で事無きを得ているから良いが・・・あれは怖い。

その間もアパッチは残った数で有りっ丈の攻撃をしてきた。

ワイバーンもまたそれに倣うように急降下で攻撃して来るのだが・・

・何だか変だ。

ヘリの近くを故意に飛んでいる気がする。

何故だ？

「・・・仲間割れが始まる・・・始まったのか」

軍曹が燃える女を銜えて言う。

「どういう事です？」

「簡単だ。あいつ等を見てみろ。味方が攻撃しているのに邪魔しているだろ？しかもぶつかるギリギリの距離で回避している」

その上に味方に被害を浴びるような攻撃もしているのだから仲間割れをしているように見える。

「所詮は寄せ集め、か・・・・・」

フィーナ中尉がドラグノフを背中に背負いＧＰ－３０を装着したＡＫ－７４を持ちながら独白する。

「それもある。しかし、どちらもプライドが高いから衝突するのさ」

少佐は座って椅子から腰を上げてフィーナ中尉を見た。

「メジュリーヌと出る。来い」

「ハッ」

少佐はメジュリーヌにドラゴン姿になれと命令した。

「任されよ」

そう言ってメジュリーヌ殿はドラゴンの姿となり少佐とフィーナ中尉はその背中に飛び乗った。

『さぁ・・・今度は貴様等の番じゃぞ・・・悪餓鬼共よ』

ワイバーンに狙いを定めたメジュリーヌ殿は一気に跳躍し一匹のワイバーンを巨大な口で乗り手も一緒に丸呑みした。

『不味いのう・・・やはり串刺しか丸焼きにしないと味が出ぬ』

などと大きな声で言い残りのワイバーン達を恐怖に陥れる。

「相変わらずの無敵振りだな」

「ですね。それで軍曹、私は前のように狙撃を？」

「焦るなよ。リンクス。焦るのはベッドの中では嫌われるんだぜ？」

「そう言う軍曹の方が焦るんではないんですか？」

「言ってくれるな。お前は山犬と猟犬を連れて狙撃しろ。狙いは前と同じだ。そいつらを仕留めたら後は片っ端から撃ち殺せ」

「レンジャー」

私は軍曹に敬礼し山犬と猟犬を呼んだ。

「今から来る歩兵を狙撃する。前と同じくやる。全員殺す。良いな？」

『了解』

山犬と猟犬は頷き私は前線基地を出て森へと走った。

上を見ればドラゴン姿となったメジュリーヌ殿の無敵振りが見える。

銃弾やブレスを物ともせずに避けて大空を飛び回る姿は正しく空の王者だ。

それに比べてワイバーンは蜘蛛の子みたいに逃げ回っているがそれはヘリも同じだった。

前線基地を攻撃していたヘリもメジュリーヌを攻撃する事に協力している・・・ように見えたが違う。

やはりワイバーンが攻撃されるような回避行動を取っているしワイバーンもまた同じような行動を取っている。

「こんな時くらい協力するべきなんだがな」

猟犬が「情けない」と肩を竦めた。

確かにその通りだと思う反面でこうも思う。

「どちらが死んでも構わないんだろ？敵なんだから」

「そうだな。しかし、敵ながら情けない。我が主の敵ならもう少し歯応えのある敵が相応しいのだ。これでは一方的な虐殺だ」

「まぁ・・・ね」

それなら君とメジュリーヌを従えている少佐は何なんだと言いたい気持ちを抑えて私たちは設置されたバンカーへ向かった。

バンカーにはグロリアさんが居た。

どういう訳か1人だが、別に大した理由じゃないから訊かなかった。

「坊やったら私に会いたくて来ちゃったの？」

「偶々来ただけです。それより敵に動きは？」

毎度毎度のことなので適当にあしらって敵の動向を訊ねるとグロリアさんも仕方なしとばかりに答えてくれる。

「まだ来てないわ。でも、来るのは確実よ」

足音が聞こえてくるとグロリアさんは言った。

「聞こえるんですか？」

「えぇ。ちゃんと耳を澄ませれば聞こえるわ」

そういうものかと私は思いながらモーゼルのボルトを動かして初弾を装填し来るべき敵に備えた。

第二百二十八章：至高の華（後書き）

ちょっと説明不足だったので付け足しました。（汗）

幕間：不義の子（前書き）

えー今回はフィーナ、ワイド、フィーナの視点になります。（汗）

面倒くさい・・・なんて言わないで読んで下さい。

それからキャラの投票も出来るならしつこいですが、お願いします！！

幕間：不義の子

『・・・ここには、居ないか・・・・・・』

私はＡＫ－７４を撃ちながら何処を探しても1角のワイバーンが居ない事に落胆した。

ここに居ないということはリブリーブス城に行ったと考えるのが妥当で一刻も早く行きあの女－－－マーズを殺したい。

「何を考えている。余計な事を考えていると振り降ろされるぞ」

横に乗る少佐はＡＫＭアサルトライフルをフルオートで撃ちながら私を見向きもせず叱った。

「・・・すいません」

私は謝罪して攻撃を再開する。

しかし、と思う。

・・・味方との連携がまるでなってない。

ワイバーンとヘリは互いに自分達がやられるように回避行動を取っているのだ。

寄せ集めだからこうなのか？と前線基地の中で私は言ったが少佐はこう言った。

『どちらもプライドが高いからだ』

ハゲタカことコンドル軍団は何処の国でも精鋭と言われる空挺部隊で構成された傭兵団でワイバーンもまたこの大陸では精鋭と言える。

どちらも精鋭と言われているからこそ誇り高い。

そんな奴らだからこそ互いに似たような存在を憎悪しているからこそああいう行動を取っているのだと少佐は言いたかったのだ。

確かにそれは言えているが、こういう時は手を取り合い互いに協力するのが普通と思う。

敵である私が思っているのだからこの状況を蛇こととライアンナル伯爵が見たらどうなる事やら・・・・・・・・・

ふと下を見ると銃撃戦が起こっているのが見えた。

「歩兵共も来たか。しかし、今回はフォース・リーコンも来たのか・・・・・・・・？」

「来たとしても前のように殺される可能性はあるんですよね？」

私は少佐に訊きながらＧＰ－３０の引き金に指を掛けてアパッチに狙いを定め引き金を引いたが、それはあっさりと避けられてしまった。

「あぁ。だが、来たのか分からないな」

首都でも何やら不穏な動きが起きているからそちらに人員を割いて

いるのだからこちらはハゲタカ共に任せるしかないとも考えられる。

しかし、今は目の前の敵を打ち倒しリブリーブス城へ行くのが先決だと改めて私は思う。

―――――――――

「二手に別れて来るとは・・・気付くのが遅いんだよ。間抜け」

私の隣で命令をあれこれ下すミーシャは煙草――氷の女王を吸いながら毒を吐いた。

敵は二手に別れて攻撃を開始したのだ。

私たちの方にはＡＨ－６４アパッチが２機にＣＨ－４７チヌークが３機来た。

アパッチが城へ攻撃を開始すると同時にチヌークが１機だけ地上へ下り残り２機は控えているのが城壁から見えた。

「何をする気だ？」

「大砲を使う気だね」

私の疑問をミーシャが答えた。

「それを使って城門を破壊する気か？」

「それが妥当かもしれないね。しかし、そうはさせないよ」

ＲＰＧとミーシャは言い私は直ぐにＲＰＫ軽機関銃の２脚を起こし城壁に掛けてからミーシャにＲＰＧを差し出す。

「援護を頼むよ」

「了解」

私はＲＰＫのストックを肩に当て左手を銃身の上に添えて引き金を引いた。

立て続けに銃声がしてチヌークの窓を攻撃する。

操縦士が後ろに何か叫んでいるが、こちらには当たり前のことだが聞こえない。

その間ミーシャはＲＰＧを右肩に掛けて狙いを定めている。

弾頭は“ＨＥＡＴ弾”という種類で対戦車成形炸薬弾を意味しておりこれに当たれば３００ｍｍ程の装甲であれば貫く威力を誇るらしい。

後方には誰も居ない事をミーシャは確認し私も左側に居る事を確認した。

それから耳栓を装着し私も耳栓をしてミーシャは引き金を引いた。

シュパッン！！

凄まじい轟音を鳴らしＲＰＧから発射されたＨＥＡＴ弾は真っ直ぐにチヌークへ飛んで行く。

横風などは無いから確実に命中しチヌークは爆発し後方で何かをしていた者も一緒に炎に巻き込まれて吹き飛んだ。

「まだ生き残りが居たのかい。しつこい男だね・・・・・・・」

よく見ればフラフラと立ち上がり逃げようとする男が見えた。

ミーシャは背中からドラグノフＳＶＤを取るとＰＳＯ－１スコープを右目に押し当て狙いを定める。

「悪いがあたしは坊やみたいに甘くないんだよ」

坊やとはランドルフの事だなと思いながらミーシャが相手を仕留める所を確認した。

「ミーシャ大尉。ランドルフは・・・・・・・」

「言わなくても解かるよ。あたしも坊やは好きだしあの選択はあれで正解だったよ」

そうミーシャは言い氷の女王を城壁の外に投げ捨てＲＰＧに新たな弾頭を装填して残りのチヌークへ狙いを定めた。

また引き金を引こうとした時だ。

ＧＲＡＡ！！

ワイバーンの雄叫びとは似ても似つかないほど強大な雄叫びにワイバーン達は身体を震わせる。

「どうやら向こうは片付いたようだね」

ミーシャは氷の女王を銜えたまま煙を吐き出して前線基地の方角を見た。

私も釣られて見ると巨大な翼を広げたドラゴンとヘリがこちらへ来るのが確認できた。

『ちっ。またあいつらかい。忌々しい！！』

1角のワイバーンに乗った傭兵がこちらに聞こえるくらいの舌打ちを漏らした。

『団長。どうしますか？』

1角のワイバーンの近くを飛んでいた者が傭兵を団長と言い訊ねる。

『あっちが終わったんだ。こっちも引き上げ・・・・・・・・・』

傭兵の言葉が途中で途切れたが、何だか様子が変だった。

震えている・・・身体全体を震わせている。

「生理かね？」

「何を馬鹿な事を言っているんです」

ミーシャの場を弁えない発言に私は軽く叱った。

「冗談が通じない男だね。しかし、様子が変だね」

やはりミーシャも気になる様子だったが・・・・・・・・・

『フィーナ・マレルぅぅぅぅぅ！父上の仇だ！！』

とつぜん大声を上げて傭兵はワイバーンの腹を蹴り１匹でドラゴンとなったメジュリーヌ殿へ突っ込んだ。

『団長！！』

仲間達は長の行動に驚きながらも後を追い掛けヘリ達の方はさっさと逃げようとしている。

それを阻止しようとミーシャを始めとした者たちがＲＰＧやスティンガーを発射するがフレアなどを逃げる前に発射された事で敢えなく取り逃がしてしまった。

とは言え向こうにもヘリがあるから何とかなるとも思ったが。

― ― ― ― ― ― ― ― ―

――――――――――――――――――――――――――

『ほぉう・・・これは良い。フィン。そなたの獲物が自ら仕留められに来たぞ』

ドラゴン姿となったメジュリーヌは縦眼を細めて私に告げた。

眼の前まで迫る相手は1角のドラゴンと乗り手。

金糸の髪と左右の眼が違う色を持つ女で私より僅かに年下だ。

あの女・・・私の獲物・・・私の獲物だ!!

「見つけたよ。フィーナ・マレル!!」

女ことマーズは槍を掲げて私達へ突っ込んで来る。

私はＡＫ－７４を持って狙いを定めて引き金を立て続けに引くがマーズはそれを物ともせず槍で突いてきた。

「くっ!!」

私は繰り出された槍を辛うじて避けて撃とうとしたが、もう1人の傭兵が来て私を突こうとする。

それをテツヤが何処からともなく出したドウダヌキで受け止めてくれた。

「おっと・・・邪魔はさせないぜ」

そう言ってテツヤは傭兵の槍を左手で掴むと引っ張り前屈みになった傭兵の頭を縦に斬った。

顔を真っ二つにされた傭兵は血しぶきを上げて後ろへ倒れる。

既に息は絶えていた。

「貴様ッ！！」

マーズがテツヤを睨み一瞬の隙が出来たのを私は見逃さずストックで脇腹を攻撃してやった。

マーズは悲鳴を上げて後ろに仰け反り一度離れたが、もう一匹のワイバーンは主人の仇とばかりにメジュリーヌに噛みつこうとする。

『妾に触るな。餓鬼が』

メジュリーヌがワイバーンを強大な顎で尻尾を噛み強引に下へと放り投げた。

最後は言うまでもなく落下した衝撃で死亡した・・・・・・・・・・

「ちっ・・・フィーナ・マレル！覚えておきな。あんたは必ずあたしが殺してやる！あたしの父上ーーーロックス・マレルの仇だからね！！」

マーズは落下したワイバーンに舌打ちをしながら逃げる構えを見せて捨て台詞とも言える台詞を投げてきた。

ＡＫ－７４の引き金を引こうとした私の指は止まった。

なんだと・・・・・・？

「どういう事だ？！」

私は父の仇と言われて思わず訊き返す・・・・・・・

何で私が父の仇なのだ?

いや、それ以前に私の父はロックス・マレルだ。

それなのに何で私が父を殺したと言うのだ?

「知らないのなら教えてやるよ。あんたの父親はヴィールング・マレルだよっ。あたしの父はロックスだ。あんたの母親は父上の弟と出来ていたんだよ。あんたは不倫の末に産まれた餓鬼なんだよ!!」

テツヤが撃ったAKMアサルトライフルの弾丸を避けながらマーズは怒鳴り返した。

「ふざけるな!私が不倫の末に産まれた娘である訳ない!!」

私は女に怒鳴り返し否定した。

「ふざけてなどいないさ。あんたはね叔父と思っていた男とその兄の嫁との間に出来た餓鬼。つまり本来ならあたしが受け継ぐはずだった物を横から掻っ攫った泥棒猫なんだよ!!この売女が!!」

「嘘だ!そんな嘘は信じない!!」

噂は・・・知っていた・・・しかし、根も葉もない単なる噂だと思っていた。

だが、この女が言うとそれが真実のように思えてしまう。

不思議な力がマーズの言葉には秘められていたのだ。

「だったらヴィールングに訊いてみな。きっと口ごもるよ！！」

言うだけ言うとマーズは逃げて行く。

私は狙おうとした。

ＡＫ－７４の銃身下に装着したＧＰ－３０で撃てば木っ端微塵に出来る。

出来るのだ・・・仕留められる・・・られるのに・・・・・・・・

出来なかった。

『あんたは不倫の末に出来た餓鬼なんだよ！！』

「嘘だ・・・嘘に決まっている・・・私の父が、叔父上な訳・・・ない・・・ないんだ」

逃げる獲物を仕留める事も出来ずに私は下を向いて言い続けた。

第二百二十九章：地龍と海龍

空では敵を撃退したと無線で情報が入った。

撃退した――取り逃がした奴等も居ると思われるが、こちらでそれを補えば良い事だと思い直す。

如何に空から攻撃したとしても最終的には歩兵が地上を占拠すると軍曹が言ったが、まったくもってその通りなのだ。

ヘリやワイバーンが空から攻撃しても歩兵が城を占拠し中を完全に掌握しない限り勝ちとは言えない。

ならば、地上で歩兵を皆殺しにして空で取り逃がした敵の分を補えば良いのだ。

「・・・来たわよ」

グロリアさんがバンカーに設置された“ＦＮ　ＭＡＧ”のレシーバーを引きストックを肩に当て私達に敵が来る事を伝えた。

このＦＮ　ＭＡＧはＦＮ　ＦＡＬを開発したＦＮ社の軽機関銃だ。

口径はフォース・リーコンとイーグル１等軍曹が装備しているコルトＭ１６のカービンの５．５６ｍｍよりも大きな７．６２ｍｍ×５１弾を使用する。

ＲＰＫもあるが、そこは配置される場所によって異なる故に互換性などを持たせる為にも部隊ごとに分けたりする必要があるなと思う。

直ぐに敵は来た。

敵はこの前と同じく槍兵と弓兵だったが、私たちが居る所ではの話で他の所には鉄鎚兵と弩兵、フォース・リーコンが居るかもしれない。

騎馬隊と戦象は元からこの地形では使い物にならないから来ないと思われる。

それ以前に寒さなどで死んだ可能性もあると思いながら私は山犬と猟犬に射撃体勢を命令した。

槍兵と歩兵は周りを警戒しながら進んで行くが、途中で止まり弓兵が矢を弓に番(つが)え始める。

「何をする気かしら？」

グロリアさんが小声で私に訊いてくるが私は分からないと首を横に振るが・・・火を点けた所で理解した。

「火矢を使って森を焼く積りです」

見れば槍兵が火打石を取り出して布が巻かれた矢に火を点けようとしている。

森を燃やす事で何処にあるのか判らないバンカーなどを焼き払う積りだが、そうはさせない。

「・・・矢に火を点けようとしている奴等を狙え。それからは眼に

入った奴等を狙うんだ」

『了解』

山犬、猟犬、グロリアさんは頷き私が一番手として撃つ事になり一番近い奴に狙いを定める。

モーゼルを床に置いて固定してから狙いを定めて引き金を引いた・・・以前よりも引き金が軽く感じた。

しかし、心の中の引き金は決して軽くはなく重かったのが印象的である。

銃口からオレンジ色の火が飛び出て肩に強い反動が来るのだが、ライフル・パッドのお陰で半減した。

そして弾は火打石を持つ相手の胸に命中したが、胸を貫通しグチャグチャにされた相手は口と胸から大量の血を吹き出し後ろへ倒れた。

その後ろに控えた者は押される形で倒れ込むが運悪く地雷の部分に尻もちを着いた事から爆発し肉の欠片となり他の者も同じような末路を辿ってしまった。

一体なんの地雷を埋めたんだ?

まさか対戦車地雷か?

だが、対戦車地雷は元々車などを爆破する為で人間が踏んだりしただけでは爆発しない筈だ・・・しかし、何かしらの仕掛けを施せば爆発するから仕掛けを施したのかもしれないな。

対戦車地雷なら全員を木っ端微塵にする事も頷ける。

「運が悪いわね・・・・・」

グロリアさんは呆気ない敵の最後に同情を禁じ得ない口調で言いながら「また来た」と告げる。

「今度は鉄鎚兵と弩兵だ」

猟犬が鼻をヒクヒクさせて誰なのか言い私がフォース・リーコンは？と訊ねると「臭いが無い」と返答された。

「今回は来ていないのか？」

向こうがどうなっているのかまったく分からないから何とも言えないが彼等が動けないという事は何かしら重大な事が起こっていると考えて良いだろう。

「少佐の言う通りもう内部分裂が始まっているのかもね」

グロリアさんが軽く欠伸をしながら言った。

「グロリアさんとしてはどう考えますか？」

「そうね・・・和睦か交戦かの二つに別れているかしら？だけど、裏では自分達は助かろうとリカルド王子に罪を全て擦り付けようと暗躍している、という所ね」

「・・・胸糞悪い」

私は唾を吐いてそんな事がもし、起きているなら直ぐにでも鉛の弾をくれてやりたい気持ちに襲われた。

「そう怒らないの。首都へ行ったら幾らでも害虫達に撃ち込めるわ。それこそ飽きるほどにね」

「そう願いますよ」

そう言って私はもう直ぐ来る敵に備えた。

――――――――――――――――――――

―――――――――――――――

私は前線基地へ戻ってから何をする気にもなれずに改築された小屋の中で1人黙って座っていた。

マーズの言葉が頭から離れず何も出来ない・・・・・・

だから、こうしてここに居る。

私は中尉だ。

外では私の部下達が戦っているのにその指揮官である私が指揮を執らない・・・なんと情けない事か。

『あんたは不倫の末に産まれた餓鬼なんだよ!!』

あの女は私に実の父親は叔父のヴィールング・マレルだと言った。

確かにそういう噂はある。

私の母マリー・マレルと叔父のヴィールング・マレルは互いに愛し合っており父が留守の間に逢瀬を重ねている、と・・・・・・・・・・

確かに傍から見れば2人は愛し合っていたように見える。

それだけ仲が良いんだと幼い時は思っていた。

しかし、もし・・・本当に愛し合っていたとしたら?

如何に両人が愛し合っていたとしても世間では不倫と取る。

妻や夫が居るのに他の男女と逢瀬を交わすなど・・・・・・・・・・

愛し合っていると言われても断罪される、べきだ。

べきなのだが・・・母上は何時も泣いていた・・・毎日・・・ロックスに罵倒され味方は居なかった。

叔父上もまた表だっては味方できなかったが母上の味方とは判っていた。

そんな2人なら愛し合っても不思議はない。

寧ろ叔父上と結ばれて欲しかった・・・叔父上となら仲が良い夫婦となれた・・・・・・

そしてそんな2人の娘として産まれたなら誇りと私は思う事だろう。

だが、それは2人が正式に結婚して夫婦となっていた場合だ。

2人が不倫の末に私が産まれたとなれば私は・・・不義の子となる。

いや、それ以前にあの女が言っていた事が本当なら?

本当なら私は何なのだ?

あの女が受け継ぐ筈だった侯爵と親衛騎士団の長を奪った事になる・・・・・・・・・・・・

『ヴィールングに訊いてみな。きっと口ごもるよ!!』

捨て台詞とばかりに言われた言葉だが・・・・・・・・・

「・・・訊いてみるしか、ないのか」

それで真実は明らかになる。

しかし、もし、あの女が言った言葉が本当だったら・・・・・・・・・・・・・・・

知りたい気持ちと知りたくない気持ちの両方が私の中でぶつかり合う。

「・・・私は・・・・・・・・・」

誰も居ない小屋の中で私は頭を抱えるしか出来なかった。

「何時までそうしている積りじゃ？」

ドアが開いてそこを向けば黒いドレスを着たメジュリーヌが立っていた。

「メジュリーヌ・・・・・」

「妾は訊いておるのじゃ。何時までそうしている」

「私は・・・・・・・・・」

「あのマーズとか言う小娘が言った言葉を気にしておるのか？」

「・・・そうだ」

私は否定せずに頷いた。

「主の母と叔父が逢瀬を交わした上でそなたが産まれた事の何が悪いのじゃ？」

「人ではない貴様には解らないだろうが、人間の世では不倫と言われて嫌われるんだ」

「たかが夫ではない男に抱かれたからか？」

「そうだ」

「なぜ人間と言うのは建て前などを気にする」

心から馬鹿にして理解できない表情を浮かべるメジュリーヌは言い

続けた。

「不倫の末にそなたが産まれたから何じゃと言うのだ？仮にそれが本当だとして何の問題がある？」

「・・叔父上は実の兄の嫁を奪った事になる。道徳的に見て悪い」

「道徳的に？馬鹿な事を。そんな横から奪われるような失態を犯す方が責められるべきじゃ。それにそなたの父親は母君を褥の外で泣かせていたのじゃろ？」

「・・・何時も泣かしていた。周りも被害を受けたくないから・・・誰も味方にならなかった」

「やはり人間は醜いのう。我が身可愛さに他人を平気で贄にするか」

「私の家では父が王であり法律だった。父に逆らうという事は王に反旗を翻すという事だったんだ」

「そのような男が王ではさぞかし母君も苦労したろうに・・・・・・」

「あぁ。母上の匂いではなく・・・別の女の臭いを付けて何時も帰ってきたのが良い証拠だ」

「正妻を蔑ろにして他の女に現を抜かすとは情けない。そなたの父親は親以前に男として最低最悪の分類に入るな」

メジュリーヌは何処までも辛口にロックスを蔑み続けながら至高の華を銜えた。

「それで仮にあの小生意気な小娘の言葉が真実だったら、そなたはどうする？」

「・・・分からない」

私は両手を顔に当て答えた。

「叔父上が父ならどんなに幸せだろうか・・・考えた事はある。しかし、それは正式な夫婦として、だ」

それが不倫だったら・・・・・・・・・・

「・・・分からない」

顔を手で覆い隠したまま私は呟いた。

「・・・そなたを見ていると“あ奴”にそっくりじゃと思う」

「あ奴？」

私は両手を退かして顔を上げてからメジュリーヌを見た。

とつぜん発言したこいつに些か驚いたが、今は興味の方が強かった。

「妾の同類じゃ」

「というと龍か」

「正確に言えば龍の前に“海”が付く」

龍の前に海が付く・・・・・つまり・・・・・・・・・

「“海龍”か」

海龍とは文字通り海の龍を意味する。

メジュリーヌ達は地面がある土地を住みかとする“地龍”に分類されており海龍とは違う。

詳しい本ではその特徴が書かれているらしいが私は読んだ事が無いので何とも言えない。

「そ奴も今のそなたみたいにウジウジと世間体という物を気にしておった。まったくあ奴ほど“人間のよう”な龍は居らんかったな・・・・・・」

「・・・・・・・・」

私はそれを聞きながらどんな物なのか興味が沸いた。

その事で少しばかりマーズの言った言葉から逃げられた気がする・・・・・・・

第二百三十章：逃げるに如かず

「弩兵の狙いは正確ね・・・きゃ！！」

グロリアさんはＦＮ　ＭＡＧを撃ち弾幕を張って敵を寄せ付けないようにしていたが、直ぐ横を矢が掠った事で撃つのを止めてしまった。

ＦＮ　ＭＡＧの弾幕は伊達でないのにその中を掻い潜り射るのだから正確としか言えない。

『ホォォォォォォ！！』

ＦＮ　ＭＡＧの弾幕が止むと獣の雄叫びみたいな奇声を上げて鉄鎚兵が皮の鎧に皮の盾と鉄鎚を持って突っ込んで来た。

横一列に並び僅かに空いた隙間から弩兵が弩を構え狙撃するという体制だが、猟犬のＰＫＭに一掃されて事無きを得た。

こんな攻防を繰り返すこと１０回・・・・・・

何処まで敵は学習能力が無いのだろうか？と思ってしまうが逆にそのしつこさが怖い。

「このまま続けば不味いね」

私はこの状態が続けば不味いと思った。

相手が何人なのか判らないしおまけにこうもしつこいと疲労が溜ま

り何処かが落とされる恐れもある。
もうこの時点で落とされた所も有る可能性だってあるのだ。
「確かにね。少佐に言ってみる？」
グロリアさんが私に訊いてきた。
「その方が良いかもしれませんね。猟犬、無線機を」
私は猟犬に無線機を貸してもらい少佐に連絡をした。
『どうした？』
無線越しに銃声が聞こえるから向こうも防衛している事が窺える。
「敵がしつこいほど来るんですが、どうすれば宜しいでしょうか？余りにしつこ過ぎて些か疲労が溜まって来ました」
『他の奴等も同じ事を言っている。どうも人海戦術で来ているのかもしれないな』
「数で押す、という事ですか・・・・・・」
『被害が多かろうと落とせば問題ない、と考えているんだろう。おまけに内部もゴチャゴチャし始めたから尚更だ』
「確かに・・・・・・・」
向こうも不穏な空気が漂い始めたのだから、何とか大ごとになる前

にこちらを落とそうと考えるのも妥当か。

『夜まで持ち堪えろ。夜になったら援軍を寄こす』

「了解」

私は無線を終えて夜まで持ち堪えさせるんだと伝えた。

「睡眠不足はお肌に悪いんだけどね・・・・・・」

「こんな非常事態に肌を気にするんですか？」

「あら、女は非常事態だろうと身体に気を遣うのよ。男が振り向くように、ね」

何で私を艶やかな眼差しで見るんですか？と訊きたい所だが、また鉄鎚兵が獣の雄叫びを上げて突っ込んできたら迎撃する事で止めた。

そんな事を繰り返して行く内に夜へ変わり周りは暗闇に包まれると同時に風が強くなり雪が棘のように鋭く来る者を拒み始めた・・・・・

これには敵も不味いと判断したのか「引き上げだ！！」という声が聞こえると同時に気配が消えた。

「取り敢えず何とかなった、わね」

グロリアさんはＦＮ　ＭＡＧの引き金から指を離して息を吐いた。

「ですね。それでは軽く休憩しますか」

ちょうどここに居るのは４人（内１匹だが）だから２人で交代できる。

「それじゃ坊やと私・・・・・」

「あたしとリンクスが先に取るわ」

グロリアさんの言葉を遮り山犬が私を勝手に座らせて自身も腰を下ろした。

「・・・・・・」

グロリアさんは僅かに眉を顰めたが、直ぐに猟犬に「そっちをお願い」と言い見張りを始めたので私は嘆息した。

また色々と変な方向へ行くのでは？と恐れたが問題ないようだ。

「はぁ、疲れた・・・・・・」

山犬は息を吐いて額に流れた汗を拭いた。

「確かにね。でも、ここで頑張らないと他の味方に迷惑が掛るからね」

「そうよね。そう言えばスリーさんだっけ？あの人たちはもう首都へ着いたのかな？」

「どうだろう・・・無事ならもう着いたかもしれないけど、そこから中へ入るのに苦労しているかもね」

前の事も考えると以前のようにはいかないだろう。

「でも、どんな強大な物ーーーここでは強固な護りだが“穴”があるんだよ」

「穴？」

「そう穴だよ。どんな物にも必ず弱点はある。そこが穴だ。そこを狙えば向こうに入れるし、ここもまた落とされる」

だから、どちらも必死なのだ。

「だけど、勝つのは私たちだ。あんな下劣な糞共に負けてたまるか」

「その意気よ。もう坊やったら格好いいんだから」

この場で襲いたいとグロリアさんは言うが私はそれを叱り付けた。

「こんな時に何を言うんですか。馬鹿な事を言わないで見張りをして下さい」

その間に私たちは食事などをすると言い準備を始めた。

「もう厳しいんだから。好きな相手にだけ優しくて他の女には厳しいなんて酷過ぎるわ」

「こんな時に冗談を言う方が悪いのよ。おばさん」

山犬が私に続いてグロリアさんを叱った。

「私がおばさんと言うなら貴方も何れはおばさんになるわよ」

「まだ先の話よ」

「どうかしら?肌の手入れとかしてないと直ぐに老けるわよ。それで好きな男からは見向きもされないで1人寂しく死ぬのよ」

憐れな死に方とグロリアさんは物凄く棘と毒を含んだ言い方をしてみせるから・・・もう後の事は言わなくても解かるだろう。

『・・・・・・・・・』

どちらも無言で睨み合い室内に重苦しい雰囲気が漂った・・・・・・

「ち、ちょっと他のバンカーを見て来るよ」

私は耐え切れないので武器を持ちバンカーを出て行く。

猟犬から「逃げるのか」と睨まれたがテツヤ殿の世界ではこんな都合の良い言葉がある。

“三十六計逃げるに如かず”

これほど都合の良い言葉は無いと私は思う。

実際の所は戦って不利となれば直ぐに逃げろという意味合いだが、この場合は口実として使わせてもらおうではないか。

バンカーを出た私は適当なバンカーへ行ってみる。

「おや、坊やじゃないか」

私が入ったバンカーにはミーシャ大尉、ワイド中尉、チャレンジャーが居た。

「どうしたんだい？」

「ちょっとありまして・・・・・・」

「ああ、これかい」

ミーシャ大尉は察しが着いたのか小指を立て私を見てきた。

「・・・私は、何もしていないんですが」

「そうかい。まぁ良い。暫くここに居な」

「すいません」

私は温かく迎え入れられた事に安堵しながらバンカーの中に用意されたもとい作った木の椅子に腰を下ろした。

椅子と言ってもただ土を盛って形を整えて板を置いただけだが座り心地は悪くない。

「そっちはどうだい？」

「しつこいほど数で押して来ています」

「こっちとは違うね」

「どういう事ですか？」

「こっちは弓矢で雨を降らせて来るんだ」

チャレンジャーが私の質問に答えた。

「敵は木とかに隠れて矢を射ながら距離を少しずつ縮めて行くんだ」

ある意味ではというか数で勝負の人海戦術よりこちらの方が遥かに合理的だ。

「鼠は賢いね。何処かの豚とは豪い違いだ」

ミーシャ大尉の言葉にその通りだと私たちは思う。

鼠はフィリップ男爵だがテツヤ殿も「侮れない」と言っていたから尚更だ。

「それはそうと首都はどうなっているのだろうな？」

ワイド中尉が銃眼から敵が来ないか確認してから私達に訊いた。

「どうでしょうね。話によれば前も厳重と聞いていますが・・・・・・」

聞いた話によれば毎夜――深夜に各家々を回り荒探しをしては難癖を付けて連行した上で拷問に掛けるなどしているらしい。

「まるで“深夜のスターリンロック”だね」

ミーシャ大尉が昔を思い出すかのように言い私たちはその言葉に耳を傾けた。

「あたしの国はイーグルとは違う思想主義の国で、その国を治めていた男は極度の人間不信だった」

そのため疑わしい者は片っ端から殺して民衆にも首都で行われるような事をしたらしい。

「今の話は正しくそれだよ」

まさかここでもそれを聞くとはとミーシャ大尉は呟いたが直ぐにこう言い直した。

「まぁ・・・独裁者なんて何処の世界でも似たようなものだからね」

リカルド様は独裁者ではないが蛇こととライアンナル伯爵が王になれば間違いなくこの国は独裁国家となる。

間違いなく奴も殺すべきだ・・・・・・・・・

「坊や。リカルド達も殺すけど、そいつの脳味噌もぶちまけな。白い大地を奴の血で赤く染めるんだ」

「・・・了解」

私はミーシャ大尉の命令とも言える言葉に重々しく頷いた。

第二百三十一章：残酷な真実（前書き）

とうとう・・・真実を知ってしまいます。

まぁ、明日も続きを投稿しますが、これからどうなる事やら・・・・・

第二百三十一章：残酷な真実

戦いは3日間ほど続いた末に敵は退却した。

残ったのは夥しい血と死体と臭いだけ。

いや、これは違う。

奴等の食料や装備なども回収したから違うのだ。

食料などを見ると槍兵と弓兵は余り栄養が無いと判るが反対に鉄鎚兵と弩兵の方は栄養満点の物だった。

同じ反乱軍でも差があり過ぎる・・・・・・・・・

どういう事だ？

私は部下が集めてきた物を見て思案してみるが明確な答えは見つからない。

「どうですか？フィーナ中尉」

リーザ中尉が私に話し掛けてきたが、私は首を横に振った。

「何でここまで差があるのか判りません。そちらはどうですか？」

「私もです。幾ら侯爵と男爵という爵位の差があろうとここまで差があるのか？と疑問ですね」

「私もです。ここは・・・・叔父上に訊くしかないですね」

嘘だ・・・・・・・

これは嘘だ・・・ただの理由でしかない。

城へ行く為の表向きの理由だ。

本当の理由は叔父上に真実を訊ねたいからだ。

マーズの言葉を・・・・・・・・・・・・・・

「どうしたのですか？」

リーザ中尉は私の様子を不審に思い訊いてきた。

「・・・いいえ。別に」

「嘘が下手ですね」

私は何でもないようにしたがリーザ中尉は嘘と見抜き真剣な顔で私を見つめた。

「フィーナ中尉。私は貴方と共に死線を掻い潜り共にテツヤ様に抱かれた女です。言わば友人と言えます。その友人が困っているのを見過ごせるほど私は冷たい女ではありません」

「・・・リーザ中尉」

「何かあるなら話して下さい。私に話すだけでも気分は変わります

よ」

「・・・では」

私はリーザ中尉を誰も居ない見張り台へと連れて行った。

今は交代の時間なのか誰も居ないから話せるのでここで話そう。

「マーズ・・・あの女傭兵にこう言われました」

あの女に言われた事を私は話し始めた。

「・・・そんな事を言われたのですか」

リーザ中尉は驚いたがそれは最初だけで後は極めて落ち着いた顔で聞いていた。

「はい・・・私はそれをどう取れば良いのか分からないんです」

「そうですか。私の意見を言っても宜しいですか？」

「何でしょうか・・・・・・」

「ハッキリ言ってロックス殿は貴方を子として育てたようには思えません。寧ろ後継ぎとして・・・もっと正確に言うならただの“道具”として育てたと思います。周りもそうです。マリー殿は貴方を育てようとしたが、ロックス殿は邪魔をした。ただし、ヴィールング殿だけは真面目に貴方を人間として育てた。あくまで補助的な面ですが」

「・・・・・・・・・」

「テツヤ様の世界ではこんな言葉があるらしいです」

“ネグレクト”

「どういう意味、ですか？」

「育児放棄という意味です。少なくともロックス殿にはこの言葉が当て嵌まると思いますし周りの者もまた同じ事ですが」

母上にだけ押し付けて知らぬ振りをしているのだから当たり前と言える。

父をここまで貶されているというのにまるで怒りと言う感情が沸き起こらない。

実際・・・それだけの事をされて育ったからとも思えるが・・・・・・・

「子供は夫婦2人で育ててこそ初めて成長するのです。それを片方にだけ任せては片寄ってしまいます。それなのにロックス殿は関わろうとしなかったし周りも助けなかったのは大きな重罪と言えますね」

「ですが、私は・・・・・」

「確かにそういう噂があるとは私も知っております。でも、元を正せばそうなる原因を作った者にこそ責任を問うのが常です。それにメジュリーヌ殿の言葉を借りる訳ではありませんが、だから何です

？」

テツヤもこう言っていたらしい・・・・・・・・・・

『不倫で産まれたから何だ？』

「あの方から言わせれば道徳という言葉は正義と同じく都合の良過ぎる言葉らしいです」

それは自分もまた同じ事だとリーザ中尉は言った。

「例え貴方が不倫の末に産まれたとしても私は関係ないです。貴方は貴方です。フィーナ・マレルという1人の女です。父母が誰だろうと私の掛け替えない戦友に変わらないですよ」

「・・・ありがとうございます」

私はこんなに良い友人に恵まれて幸せだと思わずにはいられなかった。

そこへテツヤこと少佐が来て「今から城へ行く」とちょうど良く言ってくれたので私も連れて行ってくれと頼んでみた。

「・・・おっさんに訊くのか」

疑問を付けずに言う少佐に私は頷いた。

「どんな真実でも私は受け止める・・・受け止めてみせる。何時までもこんな気分は出来ない。だから、聞きたいのだ」

真実を・・・・・・・・・・・・

「・・・来い」

少佐は私達に背を向けて歩き出した。

ヘリなどが停められている場所にはドラゴン姿となったメジュリーヌが居てダイヤモンドとガーネットの瞳で私を一瞥したが何も言わなかった・・・・・・・

ただ眼で言っていた。

『覚悟を決めたのじゃな?』

私は小さく頷きメジュリーヌの問いに答えた。

『あぁ・・・決めた』

そして背中に乗り少佐、私、リーザ中尉の3人でリブリーブス城へ向かった。

覚悟を決めた。

どんな真実だろうと私は受け入れる覚悟だ。

そう自分に言い聞かせる。

そうしないと覚悟が揺らぐからだ。

覚悟を決めた割には情けないと思うかもしれないが、これが正直な

気持ちだ。

私にとってそれだけ重要なのだから・・・・・・・・

城に行くまで私たちは誰も話さないで無言だった。

それが私には助かると同時に何か言って欲しいという気持ちもあった・・・・・・

特に少佐・・・テツヤは何も言わない。

私と一緒に居たから聞いた筈なのに何も言わない・・・それが酷く不安だった。

何か言って欲しい・・・私が助かる様な言葉を言って欲しい。

私はお前の言葉を待っている。

だから・・・何か言ってくれ・・・だが、テツヤは城に着いても何も言ってくれなかった。

そして私は重い足取りで叔父上が居る部屋まで一人向かう。

叔父上の部屋は城の中にあり周囲には誰も住んでいないから話を聞かれる恐れはない。

私はドアの前で立ち止まり叩こうとした・・・だが、中から声が聞こえてきた。

『マリー・・・私は、私は・・・君を幸せに出来なかった・・・す

まない』

叔父上・・・・・・・・・・

『私が覚悟を決めていたら・・・君を連れて一緒に逃げていれば、フィーナをちゃんと2人で育てられた。それなのに私が臆病だったばかりに君を不幸にしてしまった』

声からは激しい後悔が込められていた。

『私が兄をシッカリと止めていれば・・・あの女をちゃんと殺していれば、マーズなどという娘が今頃になって出て来る事も・・・・・・・・・』

私は無意識にドアを開けて中に入っていた。

「ふ、フィーナ・・・・・・・!?」

叔父上は私が現れた事に驚き床に着けていた膝を上げた。

ベッドには母上の似顔絵が懐に入る大きさの物が立てられている。

「叔父上・・・私は、貴方の娘、なのですか?そうなのですね?」

私は叔父上に近付かずに訊ねた。

酷く声が震えていて、まともに叔父上を見る事が出来なかった・・・・・・

それでも私は叔父上に訊ね真実を聞きたかったからその場から動か

ないでいる。

「何を言うんだ・・・君は、ロックス・マレルの子だ」

「・・・あの女ーーーマーズから、言われました」

『あんたの父親は叔父のヴィールング・マレルだ。母親は叔父と不倫してあんたを産んだんだ。あんたは不倫の末に出来た餓鬼なんだよ!!』

「!!」

叔父上は言葉を失い目の前が真っ暗になったように愕然とする・・・だが、私も同じだ。

あれを見れば言葉で言われなくても真実なんだと判る。

そうか・・・噂は・・・マーズが言っていた言葉は真実だったんだ・・・・・

「マーズは、こうも言っておりました・・・・・・・」

もう、駄目だ・・・もう、自分が分からない・・・止められない。

『あたしが受け継ぐ筈だった親衛隊と侯爵を奪った泥棒だよ。あんたの母親は叔父と寝た売女だよ!!』

「違う!彼女は、マリーは売女などではない!!」

叔父上は激しい怒りを露わにして否定するが直ぐに自分の言った言

葉に気付いたのか冷静になろうとする。

「フィーナ、私は・・・・・・・・・」

「・・・・・・・」

叔父上が歩もうとしてきたので私は足を一歩下げた。

叔父上に近付かれるのが怖い・・・触って欲しくない。

「フィーナ・・・・・・・・」

肩に触れようとする叔父上の手を・・・・・・・・・

・・・パッン

乾いた音がして叔父上の手は虚しく空を掴む。

「・・・叔父上なんて嫌いです」

私は背を向けて走り出した。

もう・・・誰も分からない。

何処か遠くへ逃げたい・・・・・・

幕間：この瞬間だけは（前書き）

これで取り敢えずフィーナの件は落着とは言い難いですが、区切りを入れました。

これから実の親と腹違いの妹という昼ドラみたいな泥沼になるのか、果てはテツヤに依存するのか？

殻に閉じこもるのか？

どれになるかは今の所、私でも分かりません。

と言うか、先ず徹夜に依存は無いですね・・・何せ徹夜がそれを拒否したんですから。

しかし、ちょっと冷た過ぎたかな？と思っています。（汗）

幕間：この瞬間だけは

私は走り去った姪・・・我が娘フィーナの背中に手を向けながらも掴む事は出来なかった。

離れて行ったのではない。

掴めなかった・・・・・・

真実を知られてしまった・・・・・・・

マリーと愛し合いフィーナが産まれたという事を・・・・・・

「・・・知られたな」

影から声がしてそちらを見れば火が点いた細長い棒を銜えた男――タカミ・テツヤが立っていた。

「・・・そなた、フィーナが真実を知ったと分かっていたのか？」

「俺も一緒に乗っていたからな。あの女に言われた事を気にしてまるで役に立たなかったぜ」

「・・・あの娘は繊細なんだ」

「知っている。だが、戦場でそんな脆い奴は必要ない。覚悟が足りない奴もな」

明らかに私を責めている言葉だった。

「・・・私が覚悟を決められなかった故に、こんな状況を生み出してしまったんだな」

「そうだな。あんたがマリーを連れて逃げていればこんな眼には遭わなかった。フィーナもまたあんな風にならなかった」

こんな下らない事は自分達の代で終わらせて子供たちには持ち込まないのが大人のする事だ。

それなのに私は出来ないで、フィーナの代まで持ち込んでしまった・・・・・・・

「私は・・・・・・・」

「身無し子の俺が言うのも何だが、あんたは父親として立派だと思うぜ。男としては失格とも言えるが」

そう言ってテツヤはフィーナの後を追い掛けて行った。

「・・・フィーナを頼む」

聞こえる訳もないのに私はテツヤに言い頭を下げる。

あの娘を・・・護ってくれ。

私ではもうフィーナを護れない。

マリーとの約束を果たせなくなった・・・・・・・・・

私はもう、生きる資格が無い・・・・・

死のうと思ったが出来なかった。

マリーとの約束は果たせなかった。

生ある限りフィーナを護る、と。

それなのに私は死ねなかった。

自分で命を断つ事が出来ない。

死ぬのが怖いからではない。

フィーナに・・・嫌われたまま死ぬのが怖いんだ。

フィーナに父上と呼ばれ抱かれて死にたい。

この願望が出てきた。

真実を知られたから父上を呼んで欲しい・・・私が本当の父上ならどんなに良かっただろうか？

そうフィーナは言った・・・だから、私を父上と呼んで欲しい。

孫を抱かせて欲しい。

あの娘の花嫁衣装を見て共に赤い絨毯を歩きたい・・・・・

そんな願望が出て来て私は死ねなかった。

テツヤは私に覚悟が無いと言い蔑んだ。

まさに今もその通りだ。

死ぬ覚悟が無いのだ・・・・・・・・

「私は何処まで・・・情けないんだ」

情けない自分に私は涙を流し両膝を着いて顔を手で覆った。

― ―

―――――――――――――――

何処をどう走ったのか分からない。

分からないが誰も居ない場所だという事は顔を上げた事で判った。

「・・・叔父上が、私の、本当の・・・父上・・・・・・・・・・」

マーズの言葉は真実。

私は叔父上と母上が人目を忍んだ末に産まれた不義の子。

マーズが受け継ぐべきだった親衛団長と侯爵を奪った泥棒・・・・・・

「私は、産まれて来るべきではなかったんだ・・・・・・」

何で産まれて来たんだ。

こんな悲しくて身も心も焼かれるような想いをする位なら産まれなければ良かったんだ!!

「・・・ここに居たか」

聞き慣れた声がして振り返るとテツヤが煙草ーーー女神の抱擁を銜えて立っていた。

「テツヤ・・・・・・」

「ここまで走った体力を戦場で出して欲しかったな」

「・・・・私は、産まれて来るべき子ではなかったのだ」

テツヤの言葉ーーー皮肉を無視して私は独白した。

「私は不義の子だ。道徳的に見ても産まれて来なければ良かったんだ・・・・・・」

「死ぬのか?」

女神の抱擁を銜えたまま煙を吐きながらテツヤは問い掛けた。

私が言いたい事を既に理解していたテツヤへ私は言葉を投げ返すが淡い期待を抱いてもいる・・・・・

「・・・私は・・・・・産まれてくるべきでは、なかったんだ。だから・・・・・」

慰めて欲しいと願ったがテツヤから投げられた言葉は余りに酷かった。

「死にたいなら勝手に死ね」

テツヤは私を冷たい眼で見て断言した。

「テツヤ・・・・・・・」

愛する男からこんな言葉を投げ掛けられて私は言葉を失った。

どうしてだ?

何でお前はそこまで冷たい・・・・・・

私はお前に抱かれお前を愛している。

それなのにどうしてそこまで私に冷たく死ねなどと言うのだ・・・・・・?

私の考えを見抜いたようにテツヤはこう言った。

「俺がベッドで可愛がったのは泣き虫だが根性があってリーシャと無理を承知で助けに来たサルバーナ王国親衛騎士団団長フィーナ・マレルだ」

今の私は違うのか?

そう問えばテツヤは頷いた。

「違うな。顔は似ているが中身がまるで違う。こんな不倫で産まれた子だから死にたいと言うような“弱い女”は俺の知っている女じゃない。あまつさえ慰めの言葉を求めるような女は嫌いだ。弱い女は戦場でも私生活でも欲しくないんだよ」

「私は、私は・・・・・・」

お前もロックスと同じなのか？

甘える事も許さず、こんなに打ちひしがれている私を慰めてもくれないのか？

「世間体、道徳・・・どちらも人間と言う薄汚れた生き物が自分に都合よく生み出した言葉だ。そんな事を気にしていては何も出来ない。それなのにお前は気にしている。だから何も出来ないんだよ。馬鹿が」

フゥーとテツヤは煙を吐きながら私へ辛辣な言葉を投げ続ける。

「・・・・・・・」

「世の中なお前以上に過酷な人生を送っている奴も居るんだよ。お前だけが世界中の不幸を背負い込んだ悲劇のヒロイン気取りか？おめでたい女だな」

「しかし、私は・・・・・」

「しかし何だ。少なくとも話だけで言うならおっさんはマリーを愛していた。そしてお前も愛していた。ただし、世間体を気にしてい

た上に覚悟も足りなかった。親としては合格だが男としては失格だ」

「叔父上は・・・ヴィールング殿は、後悔していたのか」

どうして後悔しているのか私には分からなかった。

違う・・・分かろうとしないのだ。

だから、答えを見つけられずにテツヤへ訊ねた。

「マリーを抱いたから後悔しているんじゃない。自分自身に対してだ」

「自分、自身に・・・・・？」

「自分が覚悟を決めてマリーを連れて逃げていればお前をこんな眼に遭わせないで済んだ。マーズとかいう小娘を生かしておかなければ知らないで済んだ。それを後悔しているのさ」

「・・・叔父上」

私はその答えを聞いて何も言えずにただ叔父上とだけ言った。

「で、どうするんだ？」

テツヤは短くなった煙草をまだ口に銜えたまま訊ねてきた。

「どう、とは？」

「自分で言った事をもう忘れるほど呆けたか？」

死ぬのか？
死なないのか？

「私は、不義の子だ」

「だから何だ、と言った筈だぞ」

「こんな私でも、お前は、部下は、私を・・・見捨てないか？」

お前は私を見捨てないか？
それとも・・・もう見捨てたのか？
こんな情けない私を・・・・・・・

「見捨てるっていうのはどうしようもない糞を指すんだよ。“今”のお前はその糞だから俺は見捨てる。死にたいなら勝手に銃で頭を吹っ飛ばすなり剣で腹を突き刺すなり好きに死ね」

「・・・・・・・・・」

「ただし、死んだら生涯かけて俺は現実から逃げた馬鹿で糞な女だと罵倒する」

何処までも冷たいテツヤ・・・・・・・・・・

しかし、それが私は良かった。

あの時――最初と同じだ。

私に対して冷たくもこちらを向いて一歩も引かずに自分の思いを伝える男・・・・・・・

そして甘える事を許さないが、決して私を見捨てないで自分の足で立ち現実に立ち向かえと暗に言うテツヤに私も応えた。

「・・・逃げない。私は、現実から逃げない。例え不義の子と言われようと逃げない」

もう・・・覚悟は決めた。

脆くも崩れ去った覚悟だが、今また覚悟を決める。

生涯・・・不義の子と蔑まされようと生きてやる。

罵倒されようと生きて、自分の足で立ち続けてお前の背中を護り続けてやるんだ。

何故なら・・・・・・・・・

「何故なら私はお前が可愛がった泣き虫だが根性のあるサルバーナ王国親衛騎士団団長フィーナ・マレルだからだ」

「・・・そうか」

テツヤは女神の抱擁を雪の地面に捨てて靴底で踏み潰して去ろうとした。

私は背を向け去ろうとするテツヤに走り寄って抱き着くが、テツヤはピクリとも動かずに立ち続ける。

こんな風にした時に父上ーーーロックスの時は平手打ちをされたがテツヤはしなかった。

ふと冷たい感覚がしたので僅かに眼を開ければ白い結晶が降っていた。

まるで私を包み込むように白い結晶は冷たい筈なのに温かい・・・・・

「・・・暫くお前の胸で温めてくれ」

今・・・この時だけは・・・この瞬間だけは・・・・・・

私を・・・私の流す涙を受け止めてくれ。

もうこれで・・・今回だけだ。

・・・だから、頼む。

「・・・女を1人くらい温める胸はあるからしてやるよ。それから今回だけだ。またこんな風に慰めて欲しいなんて言ってみろ。平手打ちじゃすまないからな」

何処までもテツヤは傲慢で冷たい口調だった。

それでも私には良かった・・・嬉しかった。

「ふっ・・・くっ・・・・」

私はもう既に溢れ出した真珠ー一ー涙を留め無く出してテツヤの胸に顔を埋めて声を押し殺した。

「ここなら誰も来ない。大声を出しても良いぜ」

テツヤは私の髪を撫でながら耳元で鉄が錆びた声で囁く。

ヴィールング殿とは違う声だが言葉は同じだった。

『今は大声で泣きなさい。私が全て受け止めよう・・・・・・』

「う、うわぁぁぁぁぁん!!」

テツヤの胸に顔を埋め直し私は・・・全てを吐き出した。

過去も現在も全て・・・・・・・・・

この胸に燻っていた全てを・・・・・・・・・・

全て吐き出して私は泣いた。

子供みたいに大声で泣き続けた。

幕間：この瞬間だけは（後書き）

見なし子だったので身無し子に修正します。

また足りない部分があったので付け足します。

第二百三十二章：油断と継続（前書き）

どうも、新潟から帰ってきたドラキュラです。

いやー、楽しかったですよ。新潟は。

競馬で5万も賭けて損得無しでしたが、大人が通うお店ではちょっと使ってしまいました。

でも、楽しかったから良いんですけど・・・代償は重いです。

彼女から「このシャネルかヴィトンのバッグ欲しいな。コーチの時計も良いなー」みたいに暗に「楽しい思いしたんだから代償を払いなさい」と言ってくるんです。

まぁ、それだけの想いをしたんだから、仕方ないんですけど・・・だったら、行くなとか言えば良いのに・・・・・・

第二百三十二章：油断と継続

敵を寄せ付けない激しい雪は１日中続いた。

一時的に弱まりはしたが再び強くなり動けなかったが私達から言わせれば助かったと言える。

お陰で疲労などを回復できたからだ。

敵の方は引き上げと言ったが恐らく何処かで陣を構えているに違いない。

そして恐らくもう直ぐ来る可能性が高い・・・・・・

「今度はあたし達が攻撃する番だ」

ミーシャ大尉はそう言うと小隊に別れ奴らを見つけ次第攻撃しろと無線で命令した。

小隊－－－つまり３０人から５０人で行動し攻撃するのだが私は猟犬と山犬だけだ。

「リンクス、頼むよ」

大尉は私の肩を叩いてドラグノフのレシーバーを引いてみせる。

「レンジャー」

大尉の言葉に頷き元のバンカーに戻った私は猟犬と山犬に「行くぞ」

と言い頷くのを見てからバンカーを出ようとした。

「私は置いて行くの？」

グロリアさんが酷いと茶化して来たが私は無視してバンカーを出るが山犬は立ち止まり・・・・・・

『ハンカチでも噛んで悔しがってな。おばさん』

・・・聞こえかった事にしよう。

「大変な女を観測手にしたな」

猟犬が面白がるように言うが私から言わせれば酷い話だと言わざるえない。

「それより奴等は何処か探してくれ」

「分かった」

猟犬は鼻をヒクヒクさせて「こっちだ」と私と猟犬を先導した。

出来る限り足音などは立てないようにして進みながら奴等がどんな陣を築いているのか興味を覚える。

雪で白く染まった森林を静かに進んで行きどれ位が経過しただろうか？

分からないが猟犬は足を止めて無言で指である方角を示し、そちらを見ると雪で固められた半円の建物が見えた。

「あれは何だ？」

「あれは“雪小屋”だね」

山犬が眼を細めて言い私は訊ねた。

「名前の通り雪を積み重ねた小屋だよ。でも、中はそれなりに温かいし材料は雪だから便利だよ」

春になれば自動的に溶けるから手間は掛らない。

「便利だね」

「まぁね。でも、あれだと直ぐに見つかるね」

確かにその通りと言えるが敵から言わせれば今まで防戦ばかりしていた私たちがまさか攻撃を仕掛けて来るとは思いもしない筈だ。

だから、ああも目立つ所に建てたのだと思うが。

「とは言え・・・油断はできないね」

人海戦術でしか攻撃して来ないなんて高を括っていると手痛いしっぺ返しを喰らうのは世の常だ。

常に疑って掛れ。

テツヤ殿ではないが戦いにおいてこれは普通だと思う。

「少し様子を見よう」

ここの距離ーーー５００mならいざという時に狙撃も出来るし確実に相手の頭へ当てる自信もあるからここは様子を見よう。

伏せた状態で様子を見るが特に変わった様子は無い。

と言うのも出て来ないので中に居るのかどうか判らないのだが、不意に山犬が肩を叩いてきた。

顔だけやると眼が横に動いたので釣られて見ると茂みに潜む鉄槌兵が見えたし、別方角には弩を構えた弩兵が居る。

・・・待ち伏せされていたか。

どうやら敵もそこまで馬鹿ではないらしいと思いながらやはり様子を見て正解だったと自分の判断に安堵した。

「どうする？」

猟犬が私に小声で訊いてきて私は直ぐに狙撃すると答える。

１人でも狙撃すれば向こうも混乱する筈だ。

それこそ何処から攻撃されたのか？と思い走り回り１人になる可能性が高い。

そうなればこちらの物だ・・・１人ずつ確実に消して行けば良いのだから。

寧ろ1人の方が集団で来られるより倒し易い。

個々で来るのも厄介だがまだ倒し易い方だ。

なら個々で倒し時間を掛けてでも確実に倒して行く。

私は観測を頼んだ。

あの集団はリーダーが居ないから誰を狙おうと良い。

恐らくだが、一斉に飛び掛かり敵を仕留める集団戦の筈だ。

リーダーが居ないのにどうやって一斉に飛び掛かるんだ?と思うが阿吽の呼吸で連携が取れている。

だからリーダーは居ない。

「・・・左の奴を狙う」

私は山犬に標的を定めさせた。

「目標まで距離５７０ｍ・・・風向き・・・やや右向きで中程度・・・湿度・温度は・・・だよ」

山犬に言われた数字などを頭の中に刻みながらモーゼルの銃口を標的に向けて引き金に指を掛け一呼吸する。

ヒュー・・・・・

風が僅かに吹いたが、その時には銃口から7．９２ｘ５７ｍｍ一一

―８ｍｍマウザー弾を撃っていた。

弾は回転し真っ直ぐに飛んで相手の脳味噌をグチャグチャに空中に散布させる・・・・・・

仲間達はそれを見て直ぐに撃たれた方角を見るが既に私たちは移動しているから無駄な動きだ。

私が撃ったのを合図のように色々な所で銃声が聞こえてくる。

その中には金属的な音も聞こえた・・・ドラグノフＳＶＤの銃声だからミーシャ大尉が撃っているな。

そんな事を思いながら足音を潜めて次の場所へ移動する。

その間も奴等は何処だ？と叫びながらあちらこちらを歩き回るが２人１人組という最低限の構成をしていた。

見た目からは筋肉で出来あがっているとしか思えないが、中身はそうでないらしい。

「どうする？」

猟犬が背後を警戒しながら訊いてきたが答えは変わらない。

「確実に消して行く。油断は禁物だから、ね」

「そうだな」

猟犬はそれに頷きながら私たちの背後を護衛するから私と山犬は安

心して狙撃に専念できた。

―――――

私はヴィン・ルビーを始めとした部下達を連れて敵兵を探していた。

あれから・・・少佐に慰められて私は落ち着きを取り戻せた・・・

だが、それはあくまで表で、だ。

本当は今も心の中では酷い。

叔父だと思っていたヴィールング・マレルが私の父親だったなんて・

・・・・・・・・・・

しかし、少佐に慰められて今は戦時中という事も考えるとこんな自

分の気持ちはそこにでも押し込まなければならない・・・・・・・

『中尉、南東の方角に人影あり』

ヴィン・ルビーが私に手で方角を指差し、2本指で歩く仕草をして

私に伝えた。

「・・・・・・・」

私はそれに頷き視線を向けると確かに人影が見えたが、肉眼で確認

するには遠い。

双眼鏡で覗いて見るとツルツルの禿げた頭――スキン・ヘッドが

特徴の鉄鎚兵が2人みえた。

『・・・銃は使うな。ナイフとワイヤーでやるんだ』

下手に大きな音を立てると知られてしまうからここは静かに殺すべきと私は思い手で合図した。

しかし、と思う・・・あいつらにナイフとワイヤーで勝てるのか？

訓練は受けたが実戦ではまだ試していない。

負けてしまうのではないか？と不安に思うが既に彼等は動き出している。

・・・くそっ・・・もう遅いか。

私は懐からナイフを抜いた。

折り畳み式ではなくちゃんと剣のように硬く切れ味も鋭い“シースナイフ”と呼ばれる物でこれを軍用にしたナイフだ。

それを抜いて静かに近付くがヴィン・ルビーが一番速く後ろから回り込むや片方の口を抑えて喉を横に切り裂いた。

ドッと血が吹き出て相手は切られた喉に手を当てるが既に彼はもう片方に視線を動かしている。

相手も気付いたから攻防が起こるも向こうは盾を持っており更に鎖で繋がられた鉄鎚を遣うから分は悪い。

直ぐに地面へ倒される彼だが直ぐに後ろからワイヤーが鉄鎚兵の首へ回り敵は足を宙に浮かされて3度ほど身体を動かすと息耐えた。

ワイヤーを首に回し前へ揺らせば敵は数回ほど揺らせば死ぬ。

私もこれをやったが、部下達はそれを初めてではないとばかりに慣れた動きで行っているから驚きだが・・・今にして思えば訓練を何度も行えば身体に染み付くと遅く理解した。

継続は力なり、と少佐の国では言うらしいが正にその通りだ。

どんな才能を持ってようがちゃんと鍛錬をしなければ直ぐに腕は鈍ってしまうが、鍛錬を続けていれば逆にその才能は伸び自分の欠点を見付けられる。

まさに継続は力だ。

それを彼等は行い物にしたのだ・・・きっと私が塞ぎ込んでいた時もこうして戦っていたに違いない。

何と情けない・・・今もまたふとした瞬間にヴィールング殿を思い出してしまう。

・・・少佐に・・・テツヤにまた慰めてもらいたいと思ってしまうが、そんな事をすれば平手打ち所かもっと酷い目に遭わされる。

そうあいつは言ったし甘える事は許さないとも言った。

そして私も誓ったのだ。

もう甘えたりはしない・・・私は泣き虫だが根性のある女フィーナ・マレルなのだから。

「・・・死体を隠し次の敵を探すぞ」

私はナイフを仕舞い部下に言い鋭い視線を雪で白くなった茂みへ向けた。

第二百三十二章：油断と継続（後書き）

雪が解けるを間違えました。

パソコンの辞書では解けるだったと思うんですが、私の解釈間違いでした。（汗）

第二百三十三章：それぞれの決意（前書き）

どうも、ドラキュラです。

彼女に追い出されたんですが、帰れました。

とは言え理由が皆目見当つかないんですよ・・・推理小説だと名探偵がパッと推理して解決ですが、現実は未解決です。

第二百三十三章：それぞれの決意

1人を狙ってから奴等は2人1組で行動を開始しているが、弩兵も加わり4人1組となった。

弩兵は矢を射るのに時間が掛る。

それを護衛するのが2人という訳だが、恐らくもう1人の弩兵は片方が矢を番える間に射るという所か。

これも最低限の組み合わせであり合理的である。

「・・・見た目からは想像できないね」

山犬は単眼鏡で観測をしながらポツリと口に出すがまったくその通りである。

「だけど今にして思えばあいつ等も狩猟をやっているんだ。経験上から来ているのかもしれないね」

「それは言えているね。最低でも数人で行動しないと不測の事態に対応できないもん」

特に熊などの大型獣を仕留めるには1人では難しく必ずチームを組んで構成されているらしい。

何人かが熊を仕留めるチームの所へ追い込み残りが仕留めるという方法らしいのだが実に合理的だ。

奴等もそれを経験しているからこそああいう合理的な対応を取っているのだろう・・・・・

厄介な半面で凄いと思う。

あそこまで連携が出来ている奴等は見た事がない・・・私たちもああいう風に阿吽の呼吸を行えるようになりたいものだと思いながら、また引き金を私は引いた。

弾を撃った引き金は軽いが・・・誰かを仕留めたんだという心の引き金はとても重かった。

如何に敵兵とは言え・・・それを仕留めて見るとなればやはり引き金は重いのだ。

しかし・・・任務となれば仕方ない。

幾ら心が痛もうとそれはあくまで私情なのだ。

私情を任務に挟んではいけない。

決して、だ。

私情を挟んではいけないが・・・せめて仕留めた者達に対する鎮魂と祈りは忘れてはならない。

そしてこんな戦いが起こった原因を糾弾しなければまた起こるとも私は思いながらボルトを動かし弾を出してから再び走り出した。

――

―　―　―

あたしは無言で走るランドルフことリンクスをチラリと見た。

まったく感情を出していない顔つきでお面みたいな印象を持つ奴は居るだろう。

何せリンクスは狙撃手。

遠くから姿を見せないで相手を殺すのが役目だから感情なんか無いと思われても仕方ない。

きっとあの“可愛らしいお人形”ちゃんが今のリンクスを見たら卒倒するかもね。

何せ城という名の“家”で手入れと言う名の育て方をされた人形だものリンクスのこんな顔は初めて見るに違いない。

あたしはこれまで何度か見てきたが未だに慣れない。

狙撃をする時のリンクスは何時も顔から感情を無くす。

さっきまで笑っていたのに狙撃するとなるや直ぐに感情を殺し、あたしが観測すると直ぐに引き金を引くんだ。

最初の頃に比べて素早くて無駄が無い。

もうあの事を忘れたのか？と問おうとした時もあるけど止めた。

だって、あたしは観測手だからね。

観測手は狙撃手の全てを見届ける義務がある。

始まりから終わりまで・・・・・・・

だから、あたしはこいつの全てを見届ける義務があるんだ。

こいつが感情を殺して狙撃するのだって何かしらの意味があるに違いない。

そしてこの素早くて無駄の無い動きもまた何れ・・・あいつを仕留める為に磨いているんだ。

あたしは、あいつを許さない。

狩猟を侮辱したあいつを許さない。

何より同じ人をあそこまで蹂躙できる奴を見た事が無い。

何であそこまで同じ人なのに出来るんだ?と思う。

でも、最近はこう思う様になった・・・・・・・

あいつもまた“被害者”なんだと。

この内乱であたし達を含めて国は乱れ多くの人がそれまでの生活を壊された。

全て戦争という事が原因で。

理由を考えれば中央の連中が地方を苦しめたのが原因であるから中央はその報いを受けるべきとも思う。

何かしらの行いをすれば、それに担う代償を払わなくてはならない。

狩猟だってそうだ。

あたし達は生きる為に動物たちを狩り食べる。

それで動物たちは死んでしまうが、あたしたちは生きられる。

その代償にあたし達は肉の欠片まで食べ尽くす事で相手に誠意を払うし仕留めた後はちゃんとその場で御祈りをするんだ。

それがあたし達の払う代償だから。

でも中央の奴等はその代償を支払わないで民達に払わせようとしている。

それが許せない。

あいつ等が理由何だから・・・だからこんな戦争が起きたんだ。

あいつもまた戦争か、そうじゃなくても何かしらが原因であんな風な性格になったんだと思う。

そうならあいつも被害者になるけど・・・代償は支払わなくてはならない。

あいつは狩猟と称して味方を嬲り殺しにした。

だから、その代償を支払わせるんだ。

リンクス・・・ランドルフが。

そしてそれをあたしは見届ける。

観測手だから・・・仕留めたらちゃんと御祈りをして上げよう。

幾らあいつでも、せめて土に帰さないといけない。

身体は土へ、魂は空へ、灰は自然へ。

フォン・ベルト陛下の遺体はそうやって葬られた、とは聞いている。

日記も言い伝えも無いけど、これだけは知られていてあたし達の間でも実行されている。

誰かが死んだら死体を焼いて土へ帰して灰を自然に、そして魂は空へ帰すんだ。

その為にもここを勝ち抜いて首都を取り戻さないといけない。

何としても首都を取り戻すんだ。

あたしは首都を見た事無いし行った事も無い。

ずっと今までここ“衰退から栄光へ”と言う名のヴァイガーに住んで護っていたから今の首都に思い入れなんて無い。

でも、あそこにだって人たちは住んでいてい笑顔で暮らしていたんだ。

勿論ここに居るランドルフも。

それなのにこんな事が起きたせいで、ここに来たんだ。

なら何としても首都を奪回しないといけない。

それに・・・約束したんだ。

こいつがあたしを首都へ連れて行ってくれるって・・・・・・・

こいつは忘れたかもしれない。

ううん・・・忘れている筈だ。

あたしとお人形同時に約束をした“前科”があるんだから忘れているに決まっている。

だから、あたしが思い出させてやるんだ。

そして2人で一緒に首都へ行き案内してもらうんだから。

「山犬・・・観測を」

リンクスがあたしに観測を命令した。

気がつけば既に狙撃地点に居た・・・・・・・・

あたしは単眼鏡で標的を見た。

弩兵が２人に鉄鎚兵が２人。

あたしが誰を狙うか決めて観測をするから、あたしが標的を決めるんだ。

「・・・・弩兵、左・・・・距離６９０ｍ、風やや左・・・・・」

手袋を外して指を軽く舐めて風向きを言って更に湿度と温度なども伝える。

それを訊いてからリンクスはモーゼルのストックを肩に当てて照準器から狙いを定め引き金を引いた。

感情が込められていない顔・・・に見えたけど一瞬だけ・・・瞳の奥がとても悲しそうな瞳だった事に気づく。

そうか・・・こいつは感情を殺す理由が解かった。

悲しんでいるんだ。

敵だろうと狙撃する事に・・・初めて仕留めた相手を思い出すんだ。

あたしも忘れられない・・・今でもあの眼は忘れる事が出来ない・・・あんな可哀そうな眼差しは、鹿みたいで見るのが絶えなかった。

それでも任務でありランドルフは止めを刺して、あたしは見届けたんだ。

でも、こいつはそれを悲しんでいる。

だから、敢えて私情を中に無理やり押し込んで隠してお面みたいに感情を出さないようにしている・・・・・・・・・・

あたしはこいつを見てこう思った。

こいつの心の中も見て自分が慰めたいと。

あたしは・・・こいつが好きだ。

最初はモヤモヤした気持ちだったけどいつの間にか理解した。

・・・それなのにこいつと来たら頭に来る。

何でそんなに気付かないの?と言いたい気付いてくれない所か他の女にデレデレしちゃって・・・・・・・・・・

いっその事・・・手足でも撃って憂さ晴らしをしたくてしょうがない。

それか手足を撃って動けなくなった所を縛り付けて一日を掛けてあたしの気持ちを伝えたい位だ。

それ位の事をしないと絶対にこいつは気付いてくれないともう確信している。

何でこんな奴を好きになったんだろうと思うが、好きになった以上は何としても仕留めないとね。

それは今も同じ。

あたしは単眼鏡で標的を定め隣に居るランドルフ・・・リンクスに目標までの距離などを伝えた。

そしてこいつが仕留める。

だけど・・・何時かはあたしがこいつを仕留めてやるんだと決意しながらまた次の場所へと走った。

第二百三十四章：真実と現実

敵を始末し終えた頃にはもう夕方になっていた。

しかし、まだ冬だからか夕日が出る時間は短く直ぐに暗くなって行く・・・・・・・・・・

「これで終わりだね」

ミーシャ大尉はドラグノフＳＶＤの銃口を上に向けて集結した私達に言った。

弩兵２００人に鉄鎚兵３００人の計５００人は戦死し、こちらは１０人が戦死で４０人が重軽傷を負う結果だった。

ここで何故、戦死または重軽傷が出たのか整理する。

戦死した１０人は弩兵の狙撃により死亡し重軽傷者などは助けようとした所を隠れていた敵に襲われた。

警戒不足が原因である。

特に私たちの場合は余計にそれが出てしまうだろう。

少佐から格闘技などは教えられたが、やはり苦手だから相手が鉄鎚兵などだったら危うい。

そうならないように気を付けないといけないが、もう少し鍛える必要もあると思う。

「こちらミーシャ。敵を掃討しました」

ミーシャ大尉は無線で前線基地に居る少佐に報告した。

『ご苦労。死体を埋めたら戻って来い』

「了解」

短い通話を終えたミーシャ大尉は直ぐに始めろと命令し私たちは頷いた。

私たちは先の尖った剣先スコップで穴を掘るが猟犬の足で掘った方が速く途中からは彼にだけ任せる。

あっという間に掘り終えた彼は死体を乱暴に無造作な手つきでポイポイと放り投げて行き全員を入れると直ぐに前線基地へと戻った。

基地には少佐とリーザ中尉が外に出て私たちを出迎えてくれたが、直ぐに空から音がして見上げるとドラゴン姿のメジュリーヌ殿が下りる所だった。

背中にはヴィールング殿とエドリアス大尉、プロイセン様、ゲンハルト様が居たがヴィールング殿の顔は浮かない顔だったのが印象的である。

何か遭ったのか?と思うが・・・直ぐに判った。

あの方があそこまで浮かない顔をするのは実の娘であるフィーナ中尉の事だ。

つまり・・・・・・・・・

『知られた、のか』

どんな経緯で知ったのかは知らないが、フィーナ中尉が真実を知ったとなればヴィールング殿が酷く浮かない顔をするのも頷ける。

私は少佐に近付いて訊ねた。

「・・・知られたのですか？」

「あぁ・・・知られた」

少佐は煙草を私に差し出しながら低過ぎる声で答えた。

リーザ中尉は敢えて何も訊かずにフィーナ中尉の所へ行き話し掛ける。

「・・・そうですか。だから、ヴィールング殿はあんなに落ち込んでいるのですね」

ヴィールング殿はメジュリーヌ殿の背中から降りても浮かない顔のままフィーナ中尉を見るがフィーナ中尉は故意に顔を逸らしていた。

それを見てヴィールング殿は肩を落としエドリアス大尉がそっと肩を叩く所が見え憐れに思ってしまう。

あの2人は愛し合っていたのに・・・結ばれなかっただけだ。

だが、それをフィーナ中尉は知らないで知っているのは叔父だと思っていた男が実は本当の父親と言う残酷な真実・・・・・・・

何とかならないものか？と思うが私ごときではどうしようもない。

「皆集まった所で会議を開くぞ」

少佐はそう言ってメジュリーヌ殿を伴い小屋へ行く私、山犬、猟犬、チャレンジャー、ヴィルヘルム元伯爵、ワイド中尉、ミーシャ大尉、イーグル1等軍曹、フォックスも続く。

そして少し遅れてヴィールング殿達も中に入るがフィーナ中尉はヴィールング殿より遅れて入り席も敢えて離れた席に下ろした。

「先ず敵は撃退した。しかし、そろそろ首都の奪回もしないとな」

「確かにそうだが、何か手はあるのか？」

ゲンハルト様が少佐に訊ねるがプロイセン様が何か思い付いたようにポンと手を叩いた。

「“桂馬”を使うのだな」

「その通り。飲み込みが速いな」

「これでも将軍だ。ゲンハルトよ。テツヤが私達に教えた将棋の駒を思い出せ」

「・・・そうかっ。あれか。なるほどなるほど」

「おいおい。俺等にも解かるように言ってくれよ」

イーグル軍曹が少しばかり怒った口調で2人に割って入ると2人は謝りながら説明を開始した。

城で2人は少佐が私達に話してくれたチェスの日本版と言える将棋を行ったらしい。

この将棋はチェスと同じだが違う点もあり相手から取った駒を自由に使えるという利点がある。

その中で“桂馬”という駒があるらしくチェスで言うならナイトの能力を持っているのがこれだ。

ただしナイトは後方へ下がれるがこちらは前にしか進めない。

話を戻すとその桂馬がポイントらしいがサッパリ判らないから困る。

「で、その“競馬”がどうしたんだ?」

「軍曹、競馬ではなく桂馬です」

私が訂正すると軽く叩かれてしまった。

「俺に恥を掻かせるなっ」

「あんたが間違えただけでしょ!!」

グロリアさんが鉄拳を打ち込んで倍返しに遭った軍曹は鼻を抑えながら改めて訊いた。

最初からそうすれば痛い思いをしないで済んだのに・・・・・・

「桂馬は前に進むしか出来ないが“成桂”になると後方にも進める」

ゲンハルト様が説明すると軍曹は頷いた。

「つまり後方から攻めるという事か」

「そうだ。こちらは私とヴィルヘルムが担当する」

プロイセン様が続きを言いヴィルヘルム元伯爵が自信満々に言った。

「安心しろ。俺と閣下が奴等を相手にするんだ。負けるかよ」

「そうだな。私も久し振りに暴れるか」

「それは良いですな。大陸一と言われた剣の腕は鈍っておりませんよね？」

「まさか。常に鍛錬をしているさ。敵兵の１０人くらいは一瞬で殺せる」

自信満々にプロイセン様は言いヴィルヘルム元伯爵は流石だと笑う。

そこへ少佐が締めとばかりにこう言った。

「２人にこちらは任せる。俺たちは城に居るスリー達の手引きで中に入り城を掌握する」

それによって首都を取り返す。

「ですが、どうやってスリー殿達に連絡を取るんですか？」

スリー殿達が城に潜入したのかもこちらは知らないのにどうやって手引きするのか・・・・・・・・・

「それはヴィールングのおっさんが分かっている」

少佐はヴィールング殿を見た。

「・・・先日、スリーから手紙が来た」

伝書鳩で送られたらしい。

「よく来ましたね」

「一度、城の外に出てから飛ばしたんだよ。城の中でやれば恐らく見つかっていたよ」

なるほどと私は頷いた。

「それで書かれた内容はこうだ」

『敵は２つに分類されており、和睦派と継続派である。和睦派は貴族で継続派はリカルド王子であるが数では貴族の方が多い。また砂と草の両国から送られてきた戦象ならびに騎馬隊は寒さの為に戦象は使い物にならず騎馬隊の方も慣れない土地ゆえか心身ともに疲れている。

ワイバーンならびにヘリは城の演習場に居るが、ワイバーンの方は

度重なる失態から白を追い出されており現在は倉庫に居る模様』

という事は直ぐに行動を起こす事は出来ないし夜ともなれば尚更だな。

「ここで終わりだ。で、どうするんだ?」

ヴィールング殿は少佐に訊ねた。

「倉庫の方に居るなら別の方角から潜入するべきだな。下手に叩いて相手に気付かれるのは御免だ」

「確かにそうだな。では詳しい事を・・・・・・」

ヴィールング殿は話を続けながら時節だがフィーナ中尉へ視線を向ける。

だが、フィーナ中尉は終始ヴィールング殿と視線を合わせようとしなかった。

それを見てヴィールング殿は悲しそうな顔をするが直ぐに消して説明を続ける。

「・・・・・・」

私はその様子を黙って見つめた。

真実を知られてからこの2人がどういう会話をしているのか知らないが見る限りフィーナ中尉は真実を受け入れがたいようだ。

ヴィールング殿が父だったら・・・・そうフィーナ中尉は言ったが、それはあくまで母君と正式に結婚していたらの過程があってこそである。

現実は不倫の末に産まれた、という事だから真実を受け入れがたいのも無理ない。

それは当たり前と言えばそうだが、このままでは支障が来たすと思わざるえないが私ごときではどうする事も出来ないと結局は思う。

幕間：竜騎士の兄弟分

あたしは城の外ーーー北に幾つも建てられた倉庫の中で苛立ちを麻袋にぶつけていた。

「くそ・・・くそ・・・くそが・・・くそったれが！！」

何度も麻袋に拳を打ち込むが逆にこっちが痛くなる。

中身が頑丈でこっちが痛くなるが止められない。

止めた所で何かに苛立ちをぶつけないと気が狂うんだよ。

それだけ苛立っているんだよ・・・あたしはね。

何で苛立っているのかと言えば・・・・・・・・

「何で・・・何であたし等が倉庫で寝泊まりしなきゃならないんだよ！！」

拳から蹴りへ変えてあたしは麻袋を蹴りながら声を張り上げた。

先日の戦いでもあたし等は惨めにも敗退し・・・おめおめと引き返して来たが、その追い打ちを掛けるように依頼人である蛇ーーーライアンナル伯爵はこう言い下した。

『そなた等は今日から別の所で暮らしてもらう』

その一言であたし等は城から追い出されて北の倉庫へ強制的に行か

される。

名前は忘れたけど、あたしにヴィールングの事を教えたおっさん達みたいな商人が使う倉庫でそこがあたし等の住み家と言われた・・・・・

何であたしにフィーナ・マレルが使用していた屋敷を与えない。

あそこはあたしが受け継ぐ屋敷だったんだ。

それに父上の剣だってあたしが受け継ぐんだ。

あの剣を持つ者が侯爵家をひいては親衛騎士団の長である、と父上は小さいあたしを膝に乗せて話してくれた。

温かくて格好良い声で喋る父上にあたしはこう言ったんだ。

『じゃあ、大きくなったら親衛騎士団の長になる。そして父上みたいになるんだ!!』

それを聞いて父上は頭を撫でて楽しみにしていると言ってくれた・・・・・・・・

「何であの女が・・・・・・・・・」

ギリッと唇を噛みあたしは怒りに震える。

何であいつが生きているんだよ・・・・・・・・

おまけにあの男一一一タカミ・テツヤとかいう傭兵も・・・・・・・・

・・・・・・

あたしの部下を真正面から変な剣で真っ二つにしやがって・・・・・・
許さない。

絶対にあいつを徹底的に痛めつけてやる。

殺さない・・・死ぬまであたしの奴隷として可愛がってやるんだ。

フィーナにあいつをあたしが可愛がる場面を見せるのも悪くないね。

自分の男が他人に可愛がられるんだ・・・さぞかし胸糞悪いだろうね・・・だけど、あたしはそれを味わったんだ。

次はあんたがそれを味わう番だ。

もう・・・それを味わっているか。

「あんたは不倫の末に産まれた餓鬼なんだからね・・・・・・・・・」

逃げる時にあいつへ言ってやった。

あの時のあいつの顔・・・良かったね。

嘘だと言っていたけど真実さ。

どうせヴィールングの事だから死ぬまで話さない積りだったようだけど・・・許さないよ。

それに父娘の感動的な再会なんだから、あたしは良い事をしたのさ。

もっとも・・・直ぐに2人そろってあの世へ送ってやるよ。

あたしの父を殺した挙句に母を見捨てた報いを地獄で受けるが良い・・・・・！！

しかしその前にやる事がある。

「どうやってあいつ等の鼻を空かすかね・・・・・？」

あいつ等とは言うまでもなく蛇どもだ。

あたし等を無能扱いしたんだからそれ相応な報いを向こうにも受けてもらう。

だが、今は少なくなった仲間達をどうやって励まし人材を補充するかだ。

あたしが指揮する竜騎士団は割とワイバーン乗り達の間では数が多く経験者が多い事で有名だったが今回の戦いでは半分も経験者が死んじまった・・・・・・・・

だからと言って簡単に補充できるほどワイバーン乗りになるのは甘くない。

大体最初からワイバーンの卵から出てきた赤ん坊から手元で育てないと人は乗せてくれない。

無理に乗ろうものなら手足を食い千切られる。

そして訓練をして信頼を勝ち得るのにざっと軽く見積もっても数年
―――3年から4年は掛るから困るんだよ。
天馬ならあたし等より弱くて大人しいから1年から2年だ。
「・・・どうするかね」
このままでは近衛兵になる前にあたし等が全滅してしまう。
かと言って簡単に補充できる訳ではない。
・・・どうする。
「団長。蛇が呼んでます」
ドアが開いて部下があたしに言った。
「何の用だって?」
無性に何かを噛みたい気分を覚えながらあたしは問うが部下は首を横に振った。
「来れば分かるそうです・・・ですが、嫌な予感がしますよ」
そりゃそうだろう。
誰だってあんな奴から呼び出されたら嫌な予感しかしないよ。
「団長、このままで良いんですか?」

「良くないに決まっている。だけど・・・今のあたし等では何も出来ない」

「いえ、そうじゃないんです」

「どう言う意味だい？」

あたしは理解できずに訊ねた。

「あいつは俺等を近衛兵に任命すると言いました。ですが、口約束だけで書類は無い。おまけに蛇ですよ？信用できますか」

確かにそうだ・・・・・・

あいつは蛇だ。

紋章が蛇だけど性格から容姿に到るまで蛇そっくりだ。

残酷で残忍にして狡猾で他人を平気で蹴落とすし利用する。

おまけに眼が蛇みたいに常に何か疑いの眼差しを秘めていると同時に相手をどう痛めつけようとか考えている。

あたしも性格は近いと思っているがあいつには負けるしあそこまでなりたくない。

そんなあいつが近衛兵にすると言ったが、今にして思えばあいつとあたしだけの口約束で紙などは書いていない。

戦いに勝っても口約束だからと言って破られる事は十分に考えられ

る。

「・・・もしもの時は、やりますか？」

声を顰めて部下が言うとあたしは頷いた。

「そうだね。あたし等は契約で結ばれているんだ。その契約を破ったら・・・どうなるかあいつに教えてやるよ」

それこそ戦場が遠足に思えるようなお仕置きをくれて上げるよ。

部下の肩を叩いてあたしは城へ徒歩で向かった。

ここは森で囲まれているからワイバーン達で飛び回るには難しい。

だから今は部下達に命じて斧で広くさせている最中だ。

ワイバーンはドラゴンと違い簡単に飛べるかと言えばそうじゃないんだよ。

助走をして頃合いを見計らって飛ぶからこんな森ばかりの場所では身動きが取れない。

天馬は小柄だから問題なけどワイバーンはそうじゃない。

・・・草の国に居る“あれ”なら問題ないかもしれないし水の国に居る“あれ”もまた問題ないかもしれない。

砂の国は逆に地中を進める“やつ”が居るからそれはそれで手強いからまた問題ないかもしれない。

「・・・止めた」

辛気臭い事は考えるな。

考えるだけで身体が腐る。

あたしは自分の考えを打ち消して城へ急いだ。

城へ行くと城門の前で槍に阻まれ自分の身分を言うが入れてもらえない。

「あたしはマーズ。マーズ・マレルだ！サルバーナ王国親衛騎士団団長のロックス・マレルの娘だ。何で入れない！！」

「ロックス・マレルの娘？それはフィーナ・マレルの事だ。お前は違う」

無愛想な男を殴りたい気持ちになりながらあたしは蛇に呼ばれたと伝えるとそいつは直ぐに呼びに行った。

ふん・・・ああ、無性に何かを噛みたい・・・・・・

肉とかではなく何かこう香りを楽しめるような・・・味は冷たくてスッキリする味が良いんだけどね。

なんて思っている内に蛇自らが来た。

・・・これはもう予感じゃない。

確信した。
嫌な事の前触れだ。
「来たか。随分と遅かったな」
「ワイバーンが飛べる場所を作っているからね」
精一杯の皮肉を言ったがこいつには蚊に刺された程度なのかまったく痛くない様子だったのが腹に来る。
「で、あたしに何の用だい？」
「知れた事だ。先日を始め貴様等の情けない醜態は眼に余る」
「・・・・・・・」
「おまけに人材も補充出来ないのだろ？」
「一人前にするのには数年以上かかるんだ。それを簡単に補充しろなんて言う方が無理だよ」
「ならば仕方あるまい。新たに雇った」
そなた等と同じだが、質は明らかに向こうの方が良いとこいつは言い切った。
「・・・あたし等以外の奴等を雇ったのかい」
これは屈辱だ・・・最大級の屈辱だ。

あたし等と同類ーーーつまりワイバーン乗りを雇った・・・・これほどあたし等にとって屈辱的な物は無い。

「あぁ。貴様等よりずっと強い奴らだ。名前は聞いておるだろ？」

猛龍団・・・・またの名を“爆龍”と言う。

「・・・あたし等にとっては兄弟分だからね」

この猛龍団はあたしの母親ーーーエレーズ・マレルが生きていた時代に出来た傭兵団で竜騎士団から独立した。

つまりあたしが受け継いだ竜騎士団とは兄弟分だ。

傭兵団から独立し自分の傭兵団を持つ事は別に珍しくない。

一人前と認められたら独立できるが、それまでは許さないのが暗黙の了解であるんだけどこの団を指揮する奴はあたしの母から追い出されて自分の団を作ったんだ。

だから、はみ出し者が作り上げた傭兵団で鼻つまみ者である。

向こうは向こうであたし等を馬鹿にしているし、あたし等もあたし等であいつ等は好かないと互いに嫌悪して一度も仕事を共にした事は無いけどね。

「そ奴等を雇った。言っておくが、くれぐれも仲間割れなどするなよ？すれば・・・例の話は無しにするぞ」

「・・・肝に命じていおくよ」

その言葉をそっくりあんたに返してやると言いたい所を抑えてあたしは建て前を言って背を向けた。

「出陣の時は追って連絡する。それまではワイバーンの手入れでもしていろ」

背中から馬鹿にする蛇の声を聞きながらあたしは無性に何かを噛みたい衝動にまた襲われた・・・・・・・・・

第二百三十五章：悪い知らせ

会議は夜を通しても続いており、どうやって敵の反対側に回り込むか、また敵をどうやって追い出すかなど事細かな条件を出し合った上で案を皆で考えた。

そろそろ休憩を挟もうとした時だった。

鳩の鳴き声が夜なのに聞こえてきたのは・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・」

ヴィールング殿は無言で立ち上がるとドアを開けた。

すると黒い鳩が中に入りヴィールング殿の手に止まる。

足には小さな筒があるが彼はそれを器用に取り中身を取り出して見た。

「・・・悪い知らせだ」

彼は顔を暗くさせたまま私達に手紙の内容を伝えた。

“新たなるワイバーン乗りが現れた”

そう書かれていたらしい。

「新たなワイバーン乗り？名前は」

少佐が訊くと彼は一度だけフィーナ中尉を見てから答えた。

「・・・猛龍団。またの名を爆龍で私達が戦っている竜騎士団から独立した傭兵団だ」

「爆龍ね・・・強いのか？」

「強いな。団長は先代の頃から従っていた男だが、先代の怒りに触れて追い出されたんだ」

それから直ぐに自分の団を持って竜騎士団とは商売敵となったようだ。

「なるほど。それで数は？」

「具体的な事は書かれていない「具体的な事は書かれていない・・・・・・」

「そいつらなら数は８００人だ」

ヴィルヘルム元伯爵がヴィールング殿の言葉を続けるように言った。

「知っているのか？なんて訊くのは野暮だったな」

少佐は自分で言った言葉を直ぐに否定した。

「そうですよ。まぁ、共戦した事はないですけどね」

「どんな奴らだ？」

「頭はヴィールングが言った通り先代に追い出された形で自分の団を作り上げた奴で“はみ出し者”です」

「はみ出し者か。俺達から見ればそれだけで軽蔑の対象であり信用に値しない輩だな」

「仰る通りです」

ヴィルヘルム元伯爵は鷹揚に頷いた。

「どういう事です？」

私は気になって訊ねる。

傭兵ともなれば少佐達みたいに正規軍から離脱してなった者で構成されていると思っていたが違うのか？

「俺たちは大雑把に言えば社会に馴染めなかった或いは自ら社会に溶け込まずに傭兵になった奴等が多い。そんな奴らなら平気で裏切ったりすると思うだろ？」

「まぁ・・・以前はそう思っていましたけど現実はそんなにないんですよね？」

「あぁ。まぁ一種の意地と取れるな。また裏切るのか？という考えがあるんだよ」

他に言えば――現実的な理由を上げるなら裏切ってばかりだと誰からも信用されずに廃業する、という恐れだ。

「で、そんな奴等で出来た俺たちにも暗黙の了解みたいな物が在る。しかし、稀にそれを破る奴が居るんだよ」

「その者はどうなるんですか？」

「その傭兵によって違うが俺の知っている奴は全員で裏切り者を私刑にして敵陣のど真ん中に柱で縛り付けて逃げた」

凄まじいやり方だが、そういう者も居るという事だと頭の片隅に置いておく。

「そなたの場合はどうなのだ？」

ゲンハルト様が問え少佐はこう答えた。

「何処までも追い掛けて息の根を止める。以前も作戦の途中で裏切られた。おまけに金も払われずに仲間は死んだ」

それで少佐は依頼人を追い掛けて金を受け取ってから殺したらしい。

「流石じゃのう。それでテツヤよ。続きは妾が言っても良いかえ？」

メジュリーヌ殿が少佐にもたれ掛りながら訊くと少佐は良いと了承し至高の華に火を点けてやった。

軽く煙を吐いてからメジュリーヌ殿は言った。

「そなた等の間にある暗黙の了解を破った者は恐らく仲間内でも忌み嫌われる存在じゃろう。例を上げるならハゲタカ共じゃな。そういう輩はそなた等の中でも忌み嫌われている・・・まぁ、これはそ

なたが言った言葉じゃが」

つまり追い出されたという事は裏切ったか何かしらの事をやったという証拠だ。

これが事実なら同業者からも忌み嫌われると思われる。

名前の通り猛龍らしい強さを誇っているらしい。

「そいつ等の戦術は？」

「聞いた話によれば単騎で中空度から攻撃する様です。相手が天馬なら1匹で数頭は撃破出来ますし人間相手なら単騎でも十分脅威ですからね」

確かにその通りだ。

ワイバーン1匹でも天馬を数頭は撃破できるし人間相手なら1匹だろうと脅威で倒すにはかなりの損害を覚悟しなければならない。

「なるほど。となれば・・・・リーシャ。部下に伝えておけ。奴等を相手にする時は4頭で1組となって奴等より高空度から降下して攻撃しろとな」

「了解です。奴等は中空度で戦う事が得意ですが私達は偵察も兼ねておりますので奴等より高く飛べます」

リーザ中尉は得意気に言い少佐を笑わせた。

しかし、それをフィーナ中尉は面白くなさそうな顔をするのが印象

的だった。

「龍を団の名前にするとは見上げた者じゃが・・・果たして本当の龍に勝てるのかどうか楽しみじゃ」

メジュリーヌ殿は少佐にもたれ掛りながら溜まった灰を指で叩き落として残酷な笑みを浮かべた。

もうこの時点でその猛龍団なる者たちの行く末は見えた気がする・・・・・・・

天馬にやられるよりもメジュリーヌ殿に一方的に嬲り殺しにされるだろうなと思い同情してしまう。

「一段落したから休憩だ」

少佐は女神の抱擁を銜えて休憩を言った。

私達はそれぞれの時間を過ごすがその中で2人の人物はちょっと違っていた。

フィーナ中尉とヴィールング殿の2人は外に出て行き私達は小屋に残る。

「テツヤよ。何か遭ったのか？」

ワイド中尉が少佐ーーーテツヤ殿に訊ねた。

「それは妾が教える」

メジュリーヌ殿がテツヤ殿にもたれ掛りながら言いテツヤ殿は無言で煙を吐いたが、私は少し違和感もとい言って良いのか疑問を覚えて割り込む。

「言って、良いんですか？」

私の言葉にテツヤ殿とメジュリーヌ殿以外の視線が集まるも私は戸惑わずにテツヤ殿に訊いた。

「真実なんてもんは何れ知られる事だ。特に噂がある以上尚更に、な」

「ですが、これは少々問題では・・・・・・」

「何の問題じゃ？ただ愛し合う男女が表では結ばれずに裏で結ばれフィーナという娘が出来ただけじゃろ」

メジュリーヌ殿は何ともないように言ってしまった。

「・・・噂が真実、だったか」

プロイセン様が僅かに低い声で言いゲンハルト様もまた「・・・本当だったのか」と言った。

噂を知っている者たちは噂が真実だったと分かり複雑な心境であると同時に先ほどからの態度に合点がいったようだ。

「何？どういう事？」

ただしガリシャだけは理解できず私に訊ねるも私には言い辛く言え

なかったが、メジュリーヌ殿が教えた。

「じゃあ、フィーナ中尉の父親は叔父だと思っていたヴィールング様、だったの？」

ガリシャは驚くと同時に何とも言えない複雑な表情で確認するようにメジュリーヌ殿に訊ねる。

「そうじゃ。そして1角のワイバーンに乗っている小娘がロックスとかいう馬鹿者の娘じゃ。まったく人間と言うのはつくづく愚かな生き物じゃ」

メジュリーヌ殿は灰をまた叩き落として言った。

その言葉からは心底人間と言う生き物を侮蔑している色が含まれていたが長い年月を生き続ける龍である彼女から見れば論理感などあって無いようなものだから当然と言えるだろう。

「・・・どうなるんでしょうか？」

レオンが誰に訊く訳でもないのに訊ねたが、誰も明確な答えは出せないで居る。

この問題は私達には解決できないもとい手が出せない複雑な問題だ。

誰が悪いのか・・・そういう問題ではないから逆に困り何も良い手が無い。

しかし、テツヤ殿とメジュリーヌ殿だけは到って冷静であった。

テツヤ殿は人間であるがメジュリーヌ殿同様に何処か達観している所があるから冷静なのだろう。

しかし、それでもフィーナ中尉を抱いた上に上官なのだから、もう少し感情を出しても良いと思ってしまうのは私の傲慢だろうか？

そう思ったが、テツヤ殿はこう言った。

「フィーナなら大丈夫だ。“今”のあいつなら乗り越えられる。出来ないなら出来ないでそこで終わる。だが・・・あいつはそれを拒否して乗り越えると誓った」

問題ないとテツヤ殿は断言した。

「あの、テツヤ様。テツヤ様はフィーナ中尉がヴィールング殿の娘だと知っていたのですか？」

「おっさんから聞かされたからな」

「あの、テツヤ様はどうなされる積り、ですか？」

「どうする積り？これはあいつとおっさんの問題だ。俺の問題じゃない。あいつを抱きはしたが、これはあいつの問題だ。あいつが解決する」

それが筋というものだとテツヤ殿は無責任に言うが的を射ているし言葉からはフィーナ中尉なら大丈夫と言う気持ちが込められている気がした。

「・・・分かりました」

リーザ中尉はテツヤ殿を見て何かを感じたのか納得し出て行った2人が気になるのかドアの方へ視線を向け続ける。

幕間：中腹地点

私は城の演習場に降り立ったワイバーンの群れを見ていた。

こいつらは傭兵だ。

金で雇われた兵隊であるから簡単に“尻尾切り”が可能と言う極めて便利な奴らだから有り難い。

しかも、こいつ等は実力があるし先に雇った“蜥蜴団”より私の言う事を聞いてくれる。

まったくあ奴等と来たらまるで役に立たない。

あれでよくワイバーン傭兵の中でも五指に入ると言われたものだ・・・・・・・

まぁ良い・・・どうせこの戦いが終わったら始末する積りだったからこ奴等を使い始末するのも手だな。

コンドル軍団は本国でも使えるから無駄に戦わせるなとお達しが来たからな。

ワイバーン達に視線を戻す。

奴等の数は正確には判らないがざっと見積もっても７００～８００位で装備は統一されていない。

見るからに敵から奪い取って気に入った物を身に着けているという

感じだから如何にも傭兵と思える。
その内の1人は槍に旗を巻いていた。
龍が炎を吐いた絵柄でこ奴等の個性を表していると思える。
まぁ・・・龍など居ないからどうでも良い話だ。
仮に龍が居たとしても人間には味方しない。
何故なら向こうは自分達が最強と自負しているから人間に係わらない。
否定はしない。
奴等の強さは人間の想像を遥かに超えている。
是非とも戦力に欲しい所だが高望みした所で手に入らないからこ奴等で我慢する他ないのだ。
「あんたがライアンナル伯爵様か？」
演習場へ降り立ったワイバーン乗りの1人が私に近付いてきた。
熊か？と思うほどの巨漢で額には剣で斬り付けられた痕があり威圧感を相手に与える。
「そうだ。そなたが猛龍団の長だな」
「あぁ。猛龍団団長ヴィール・ボッブだ」

男ーーーヴィール・ボッブはニヤリと口端を上げて笑うと私に視線を合わせた。

見た目と違ってそれなりに出来る奴か？

「俺等を雇ったのは正解だ。竜騎士団より優秀だからな」

「口は達者だな。それで・・・“あの方”から言伝はあるか？」

こ奴等は私が仕える方から使わされた者達で何か言伝があると思い訊ねた。

「あぁ。ある。言伝と言うよりは手紙だ」

手紙？

「読んだら燃やせとは言われた」

そう言って手紙を渡され私は読んでみたが・・・あまり良い事は書かれていない。

寧ろ叱咤の言葉が書かれていると同時に芳しくないとの事だ。

やはり・・・無理があったか？

我が国が反乱を起こすと同時に他の国でも反乱を起こし先に国を制圧した私達が援軍として駆け付ける手筈だったが・・・・・・・

いや違うな。

“ゴミ”が強がりを見せているだけだ。

ゴミは何をやってもゴミでしかないのにそれを良しとせず強がる・・・不愉快だな。

あの方を煩わせるのも不愉快だが、準備を万端にして臨んだのにこの体たらくな事にも不愉快である。

最後まで読み終えた私は手紙をクシャクシャにしてから燃やした。

「その様子だと余り芳しくない様子だな。だが、安心しろ。俺等が来た以上はもう大丈夫だ」

奴等を皆殺しにして終わりだ、とこいつは言い切ったが果たしてそうか？と疑問に思う。

こういう大口を叩く奴ほど実力は高が知れているのだ。

しかし、あの方が使わしたのだから実力はあるという証拠か？

「その言葉は戦場で証明しろ」

「へいへい。それで竜騎士の野郎たちはどうした？」

「気になるのか？」

「あぁ。この傷は前団長にやられたんだ。今は娘が指揮しているだろ？ちょっと“挨拶”に行こうと思ってな」

額に生々しく残る傷痕を撫でながらヴィール・ボッブは言う。

「女に傷を付けられたとは情けないな」

「あんたは女の怖さを知らないのさ。どうせ抵抗できない女しか抱いてないんだろ？」

「貴様の知った事か」

「確かに。で居場所は？」

もう一度だけ訊ねてくる奴に私は答えた。

「北の倉庫に居る。度重なる失敗を繰り返すから追い出した」

「おお怖っ。それなら気を付けるぜ」

「それが懸命だ。所で・・・他の国はどうなっているのか分かるか？」

私は気になっていた事――他国の現状を訊ねた。

「俺が知っている限りだと砂は・・・まぁ半ば順調だが内側が危うい。草の方も似ているな。だが、厄介なのは草の方だ。あっちは色々と面倒事が多い」

「どういう面倒事だ？」

「質問が多いな」

「知らない事ばかりでは対策を立てられないだろ？だから訊くのだ。そなたなら他国に精通しているだろ」

「まぁ、否定しない」

「それでどうなのだ？」

「知っている限りだとどうも内部で揉めているらしいぜ。草の方は順調だと言ったがどうも俺的には怪しい」

「それは傭兵としての勘、か？」

「そんな所だ。大体こんな大胆な作戦はそう簡単に通用しないぜ」

自国さえまだ抑え切れていないにも関わらず他国の方を先に抑える形になるからからだろうが・・・それは違う。

「大胆だからこそ通用するのだ。それに他国を制圧してみろ。それを見た者共はあの方の力にひれ伏す。それこそ靴でも舐めるだろう」

「そうかい？まぁ、俺が答えられる砂と草の現状はそんな所だ」

「そうか。“水”の方は？」

「また質問かよ。水は・・・分からないな。だが、“あの方”が直々に行くとか、“親衛隊”がやるとか聞いているぞ」

「親衛隊が・・・なるほど。そういう事か」

私は顎に手を当てて頷いた。

「何だよ。何か分かったのか？」

「まぁな。それはそうと挨拶をするなら速く行け。と言っても程々にしておけよ。ここでやると面倒だ」

「へいへい。おい、お前等・・・同僚に挨拶しに行くぞ」

ヴィール・ボッブは部下達に言うとまたワイバーンに跨り演習場を後にした。

「・・・自らか若しくは親衛隊がやる、か・・・あの方もまた優秀な上に容姿端麗だから敵は多いのだな」

あの方は優秀であると同時に容姿に優れているから他者に妬まれるのも当然だ。

だから本国の奴等を見返す為に水を自分の手で落とすのだろう。

あそこは言わば“中腹地点”だ。

本国からここまで来るにはどうしても広大な海を通らねばならない。

だが、何処かで必ず補給しなければどちらも行けない。

本国の力を持ってすれば簡単だろうと私は一瞬だけ思った時もあるが直ぐに止めた。

幾ら本国が他国一一一小国を侵略し国土を広げたとしても限界がある。

何より征服しても未だに反乱分子はあるからおいそれと大航海に行く訳にもいかないのだ。

そこを考えると水は実に良い場所にある。

・・・運良く或いは運悪く水は中腹とも言える場所にあるから助かるのだ。

あそこを落とせばここを含めた国に攻撃が可能になるのだ。

補給から軍艦などを寄こし港を占拠さえしてしまえばこちらの物だ。

もっともそうなる前に私を含めた者が制圧するのだが。

あそこを落とせばあの方の名誉は更に高くなる。

・・・それに従う私の名誉もまた同じ事。

「・・・流石です。流石はこの大陸を統一すると豪語する方だ。貴方様に従って正解でした」

こんな山国でも一国は一国だ。

その一国を私にくれると言ってくれたのだから流石だと褒め称えたい所だが先ずは目の前の邪魔なゴミ共を纏めて滅ぼさなければならないと思い直した。

リカルド達が裏で何をしているのかは知らないが、あの方が私に排除しろと命令したのだから死んでもらおう。

あの餓鬼が王になどさせるか。

地方を救済するなど子供じみた夢を見ている餓鬼に王など務まらない。

民は働き蟻だ。

代わりは幾らでも居るし怠けるなら鞭を打ち逆らうなら見せしめに村一つでも焼き払えば良いのだ。

人間という生き物は実に弱くて欲望に忠実な生き物なのだから“恐怖”や“報酬”というものをチラつかせればいとも容易く従う。

この国の場合は恐怖だ。

恐怖という布を広げれば簡単に従うから助かるし恐怖は私の得意分野とも言える。

見せしめなどその醍醐味と言えるな。

「ふふふふふ・・・楽しみだな」

私が王になった暁にはどんな恐怖で民達を跪かせようかと思うと笑いが止まらなかった。

第二百三十六章：小さい背中

私は叔父上と思っていた男――ヴィールング殿と一緒に暗い雪道を歩いていたが互いに無言だった。

・・・否。

私が彼と話し合おうとはしないんだ。

私は変わるとテツヤに約束した。

私は泣き虫だが根性のあるサルバーナ王国親衛騎士団団長フィーナ・マレルなのだと誓ったんだ。

誓ったからにはこの真実を・・・父の話を聞かなくてはならない。

何か言おうとしていたんだ。

ヴィールング殿は何かを言おうとしたのに私は聞こうとしない。

それは・・・いけない事だ。

『フィーナ。覚えておきなさい。人の話は最後まで精神誠意込めて聞きなさい。他人が貴方に語り掛けるという事は貴方を気にしている証拠なの』

幼い頃に母上は私にこう言って聞かせた。

そしてこう言った。

『もし、貴方を気にしていなかったら何も言わないわ。失敗しても貴方だけの責任になるからよ。でも、それは避けたいからこそ他人は貴方に語り掛けるの。もし、それを聞こうとしなかったらその時点で貴方はもう必要ないと言われたのよ』

そう言われた・・・ならばこれは聞かなくてはならない事だ。

弁解だろうと何だろうと私は聞かなくてはならない。

義務ではない。

自分の為だ・・・自分の・・・・・・・・・・

「フィーナ。私を軽蔑するか？」

ヴィールング殿は足を止めて私の背中に語り掛けた。

私は足を止めて前を向いたまま話に耳を傾ける。

「私は確かに兄の妻であるマリーとの間に君を儲けた。それは倫理的に見れば悪だ。しかし、これだけは言っておきたい」

「・・・何ですか」

私は意を決して振り向きヴィールング殿を見た。

「私はマリーを愛していた。いや、今でも彼女を愛している。誰よりも。そして君もまた愛している。後悔もしている」

後悔？

・・・テツヤが言っていた事か。

「それは・・・母を連れて逃げなかった、事ですか」

「・・・そうだ。マリーとは兄の妻になる前から付き合っていたんだよ」

ヴィールング殿は見張り台に登ってから話そうと言い梯子を登り始めた。

私はその背中を見つめたが・・・とても小さくて悲しそうな背中だったと記憶する。

あんなに小さくて悲しかったのか・・・・・？

幼い頃に見たヴィールング殿の背中は大きくて逞しかった。

それなのに今の背中はどうだ？

とても小さい。

後悔の表れか？

もし、そうなら・・・やらなければ良かったんだ。

とまた思ってしまう。

私は溜め息を吐いた。

どうしてこうなんだ?

ちゃんと人の話を聞こうと思い直したばかりなのに、何でこんな事を考えてしまう・・・・・・・

また溜め息を吐いてから私は梯子を登った。

見張り台に行くとヴィールング殿はヴァエリエの方角を見ていた。

「・・・ここから見える風景はマリーと初めて出会った時を思い出させる」

「・・・・・・母とはどんな出会いだったんです」

私は敢えて風景から視線を逸らし背中を向けて訊ねた。

「私は知っての通り次男だから家は継げない。かと言って何処ぞの養子にも行けなかった」

それはマレル家がまだ出来あがって間もない貴族であり親衛騎士団の地位を一人占めしたからだ。

もし、初代国王の時代から続いていればそんな事は無かった筈だ。

「兄が家を継ぐため私はそれを補佐しろと君の祖父には言われたんだ」

だが、ただ補佐するだけなら誰でも出来ると考えたのか猶予を貰い諸外国を旅したらしい。

「そこで色々と学んだのですか」

「あぁ。そして帰国する時にマリーと会ったんだ」

馬車が横転して困り果てている母を助けたのが慣れ染めらしく、そこで両親とも会い仲良くなった。

「そして行く行くは私を婿養子にしようと思ったんだ」

しかし、現実は違う。

ロックスが夫となったのだ。

「後でマリーの御両親にも言われた」

家を継げない者に娘はやれない、と・・・・・・・・・・・・

「悔しかった。私が長男だったらマリーを娶れたんだ。それなのに家が継げないという理由で、マリーを・・・この手に・・・・・・・・・」

ヴィールング殿は怒りに震えており今にも暴れ出しそうな勢いだった。

「兄に嫁いだマリーは私を諦めようとした」

しかし、直ぐに落ち着きを見せるとまた語り出す。

「私もまたそうだった。これは仕方ない、と思った。だが、兄はマ

リーを何時も蔑んだ」

「・・・理由は、何でしょうか」

あれだけ母を蔑んだからには理由がある筈だ。

戦で荒んだ心以外にも・・・・・・・・・・・

「無い、と言われたよ。ただ見ていて胸糞が悪い、とだけ言われた」

そんな馬鹿な理由があるものかと思いたい。

もっとちゃんとした理由がある筈だ。

これはこの男――ヴィールング殿の策略だ!!

「別な理由がある筈です。幾ら何でもそれはあんまりですっ」

「いや・・・本当に言ったんだよ。ただ見ていて・・・・・・・」

「止めて下さい!!」

私は叫んだ。

心の底から否定したい声を出して声を遮った。

「幾ら何でもあんまりです。そんなただ見ていて胸糞悪いだけで母は蔑まされた何て私は信じない。きっと別な理由がある筈です。そんな理由で蔑まされた母があんまりです!!」

「フィーナ。これが・・・・・・」

「貴方の策略は聞きたくない！！」

私は我慢できずに見張り台に新しく設置した橋を走って逃げ出した。

また・・・逃げ出したんだ！！

ー ー

―――――――――――――

「・・・また泣かせたな」

梯子を登りテツヤとエドリアス殿が現れた。

「ベッドの中でしか女は泣かせるもんじゃないぜ。おっさん」

「・・・そうだな」

私は嘆息した。

「あんたはフィーナに真実を話そうとしているんだ。あいつもそれを受け止めようとしている」

「・・・しかし、私は」

「ヴィールング殿」

エドリアス殿が私の言葉を遮った。

「貴方はマリー殿と結ばれてフィーナ殿を儲けた。それに何を後悔しているのですか？」

「私は兄の嫁を取った形になります。それは教会の教えで“淫売なる背徳”行為に当たります」

「そうでしょうか？私は神に仕える身にありますが・・・正直に言ってしまうと神とは私達が都合良く考え出したものだと思っているんです」

司教の身分であるエドリアス殿からは信じられない言葉だと頭の片隅で捉える。

「テツヤ殿の世界でも宗教は沢山あるそうで互いに憎しみ合う事があるそうです。ですが根元を辿れば同じ神を崇拝しております。それに聖書などに書かれた内容もどちらかと言えば男性的視点で書かれたとも聞いております」

「・・・それが一体」

「お前もフィーナ同様に人の話を最後まで聞かないな」

テツヤは皮肉を言いながら私に細長い棒ーーー女神の抱擁を差し出して来た。

「吸いな。ちょっとは気分を落ち着かせろ」

「・・・すまない」

私は女神の抱擁を受け取り口に銜えるとテツヤが火を点けてくれた。
軽く吸って吐くと・・・マリーに・・・私の女神が抱き締めてくれた錯覚を覚える。

『貴方、落ち着いて。貴方は興奮すると周りを無視する傾向があります。だから落ち着いて・・・・・・』

マリーの声が聞こえた気がする。

錯覚だ、とは思わない。

マリーだ・・・マリーが私を抱き締めて落ち着かせてくれたんだ。

「・・・落ち着いたようだな」

テツヤは自分の分に火を点けて私に言う。

「あぁ。落ち着いた」

「では、続きを話します」

エドリアス殿は話を続けた。

「何処の世界でもそうですが、宗教というのは人々の手助けをするものと私は考えております。しかし、現実では違います」

その地位を利用して悪徳を働く者もいれば聖書の内容を悪用する者も居る。

または自らを神として悪を働く者さえ居るのだ。

「私はそういう輩こそもっともこの世で軽蔑されるべき存在と思います。貴方様の場合は違います。マリー殿を愛しており娘であるフィーナ殿も愛している」

そして自分の行いに後悔している――罰している。

「神がお許しになるかどうかは神のみぞ知る事です。しかし、少なくとも私もテツヤ殿も貴方様を軽蔑する事は致しません」

「ですがフィーナは・・・・・・」

「まだ真実を受け止め切れないのですよ。しかし、必ず受け止めますよ。何せテツヤ殿が見染めた女性ですよ？貴方様とマリー様が愛し合って産まれた娘ですよ？ご自分の娘を信頼して下さい」

親は産まれた子を信頼し黙って背中を押してやれば良いのです。

そうエドリアス殿は言ってくれた。

「・・・はい」

私はまた女神の抱擁を吸って頷いた。

また・・・マリーに抱き締められた錯覚を覚える。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7722o/

傭兵の国盗り物語

2011年12月20日18時51分発行